甲骨文獻集成

第四十册

綜合・序跋與述評

四川大學出版社

◇中國古文字大系◇

甲骨文獻集成

第四十册

綜合・序跋與述評

四川大學出版社

本冊目録

綜合

序跋與述評

甲骨關係文獻序跋輯成（第四輯） 一
甲骨關係文獻序跋輯成（第五輯） 九七

論文資料

一九四九年以前

商三句兵跋 二三三
新獲卜辭寫本後記跋 二三四
商辭序 二四三
序甲骨文辨證 二四四

一九四九年—一九六五年

《小屯》自序（其一） 二四六
新瓶舊酒 二五〇
《小屯》自序（其二） 二五〇
甲骨學會成立の經緯 二五三
唐蘭の《古文字學導論》 二五四
戰後新獲甲骨集について 二五六
董作賓氏の甲骨文研究の一方向について 二五六
胡厚宣氏の商史研究（上）——甲骨學商史論叢 二五八
胡厚宣氏の商史研究（下）——甲骨學商史論叢 二六一
評陳夢家殷虛卜辭綜述 二六五

圖書評介・《殷虛文字丙編》上輯（一） 二六八
陳夢家氏《殷虛卜辭綜述》によせて 二六八
《殷代地理簡論》評介 二七〇
釋删
——関野、天野両氏の論争をめぐって 二七一
島氏《殷虛卜辭研究》を讀む（二）
——「貞人補正」の補正 二七一
殷虛文字乙編摹寫本示例 二七五
集契集自叙 二八二
甲骨文字研究の現狀——《京都大學人文科學研究所藏甲骨文字》の編集・執筆に参加して 二八五
《一九五八——一九五九年殷墟發掘簡報》について 二八八
貝塚茂樹氏著《京都大學人文科學研究所藏甲骨文字 本文篇》を讀んで 二九三
評饒宗頤著《殷代貞卜人物通考》 二九六

一九六六年——一九八〇年

讀池田末利君《釋衍——答嚴一萍先生》 二九七
《續甲骨年表》後記 二九八
讀《殷墟卜辭綜類》與島邦男博士商榷 二九九
重印殷虛書契前編序 三〇四
殷墟甲骨新書介紹
——明義士殷虛卜辭續編第一集 三〇五
麼些象形文字字典序 三〇七
貝塚茂樹著《中國の古代國家》 三一〇
安陽殷墟五號墓座談紀要 三一二
REMARKS ON THE MENZIES COLLECTION OF SHANG DYNASTY ORACLE BONES, VOL. II :THE TEXTS 三一四
REPLY TO PROFESSOR TAKASHIMA 三一六
一部大型的甲骨文資料匯編
——《甲骨文合集》 三一八
介紹著録明義士舊藏甲骨的新刊二書 三一九
《殷墟卜辭綜類》簡評 三二一
戴維・N・凱特利的《商史史料》 三二七
讀嚴著《甲骨學》後 三二八
讀嚴著甲骨學 三三〇
讀《美國所藏甲骨録》 三三四
讀《殷虛文字甲編考釋》 三三六
明義士舊藏甲骨を資料とする新刊二書の紹介 三三八

一九八一年——一九八五年

試評《從子卜辭試論商代家族形態》兼論卜辭的時代 三三九
《小屯南地甲骨》上册（第一、二分册） 三四四
SHANG CHINA IS COMING OF AGE
——A REVIEW ARTICLE 三四四
評《建國以來甲骨文研究》 三四六
讀赤冢忠著《中國古代的宗教和文化》 三四七
AKATSUKA KIYOSHI AND THE CULTURE OF EARLY CHINA: A STUDY IN HISTORICAL METHOD 三四八
《甲骨文合集》序 三六二
王襄復葉玉森書 三六三

李濟著《安陽》一書評介　三六三
《篁室殷契》跋　三六五
評介張光直著《商代文明》　三六六
《古文字學通論》序　三六七
觀堂書札遺録　三六九
讀嚴一萍著甲骨斷代問題　三七〇
安陽發掘——簡介李濟著《安陽》　三七三
《四方之極》一書的簡介　三七五
評《甲骨文合集》　三七六
讀《小屯南地甲骨》劄記　三七七
從恐龍化石看甲骨文　三八二

一九八六年——一九九〇年

《英國所藏甲骨集》序　三八二
甲骨還鄉之愿　三八三
評介《小屯南地甲骨》　三八四
試説郭沫若《殷契餘論》對甲骨學的貢獻　三八五
刻苦鑽研甲骨學，成功之路就在你的脚下——在安陽甲骨學會成立大會上的發言　三八六
《甲骨學通論》緒論　三八七
科學發掘甲骨文的最新成果——評《小屯南地甲骨》　三八九
談談孫詒讓的《契文舉例》　三九〇
殷商考古書評三篇　三九二
BOOK REVIEWS（《法國所藏甲骨録》介紹）　三九三
中國殷商文化國際討論會觀感　三九四
李濟《安陽》中譯本序言　三九六
ORACLE-BONE COLLECTIONS IN GREAT BRITAIN: A REVIEW ARTICLE　三九七
甲骨學的科學總結和系統開拓——評王宇信著《甲骨學通論》　三九九
評《法國所藏甲骨録》　四〇〇
讀《殷墟甲骨歷劫記》　四〇一
常玉芝著《商代周祭制度》　四〇二
一部有特色的商周甲骨學專著　四〇五
《周原與周文化》評介　四〇六
《甲骨文精萃選讀》評介　四〇七
評《甲骨學通論》　四〇七
評介新近出版的兩部甲骨學巨著　四〇八

一九九一年——一九九五年

胡厚宣氏的商史研究——甲骨學商史論叢　四〇九
《商代周祭制度》評介　四一九
讀乙辛祀譜述見　四二一
甲骨學與商周史研究的新進展——《甲骨學通論》評介　四二六
《英國所藏甲骨集》書評　四二七

簡論甲骨文合集 四二九
《商周研究之批判》駁議 四四三
評《殷墟甲骨刻辭類纂》（上） 四四四
評《殷墟甲骨刻辭類纂》（下） 四四七
讀《法國所藏甲骨録》 四四九
評《殷墟卜辭綜述》 四五〇
殷墟甲骨刻辭摹釋總集序 四五五
《甲骨卜辭》序言 四五七
《甲骨文與書法藝術》序 四五七
中國夏商文化國際學術研討會開幕詞 四五八
關於《小屯南地甲骨》的討論——答蕭楠同志 四五八
它們是假借字嗎——《甲骨文字典》讀後 四六一
《甲骨文字字釋總覽》介紹 四六二
《甲骨文字字釋總覽》概要 四六二
介紹一本甲骨學新著——《周原甲骨文綜述》讀後 四六三
讀《殷墟書契考釋》感想 四六三
《孟定生殷契》序 四六四
在「學習江澤民同志關於語言文字工作談話座談會」上的講話 四六五
讀《甲骨文所見商代的服飾》——與杜勇先生商榷 四六五
中國南方青銅器暨殷商文明國際研討會開幕詞 四六六
内容宏富的《卜辭通纂》 四六六
鄭州商城與殷商文明國際研討會開幕詞 四六八
殷墟文化研究的力作——譯著《安陽》評介 四六八
中國傳統文化溯源之作——讀《中國古代龜卜文化》 四六九
孫曉野著《古文字及古文字學論文集》序 四七〇
讀《古文字與殷周文明》 四七〇
評《夏商社會生活史》 四七一
對《商周研究之批判》的商榷 四七二
一部充滿探索精神和開拓性的著作——讀宋鎮豪《夏商社會生活史》 四七四
評《古文字與殷周文明》 四七四
宋鎮豪著《夏商社會生活史》 四七五

一九九六年—一九九九年

踏破鐵鞋無覓處——祝方輝博士整理明義士《甲骨研究》出版 四七七
近年日本新出版的幾部重要甲骨學著作 四七八
書評·《温故知新録——商周文化史管見》 四八〇
近年出版之甲骨資料簡介 四八二
甲骨文研究的歷史現狀與未來展望 四九四
甲骨文發現一百周年學術研討會紀要 五〇〇
「甲骨文發現一百周年學術研討會」在臺灣師大和史語所召開 五〇一
《甲骨文字編》芻議 五〇二

再讀胡厚宣先生《五種記事刻辭考》　五〇六
讀《甲骨文字典》兼論甲骨文工具書之編纂——爲紀念徐中舒先生百年誕辰而作　五〇七
就《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》淺議甲骨文的釋文諸問題　五〇九
徐中舒生誕100年記念國際學術討論會開く　五一三
讀《殷契粹編》劄記　五一四
河南大學與中國甲骨學研究　五一八
阿馬薩里・安東尼奥博士《中國古代文明》讀後　五一八
韓國出版的《通過文化解釋的漢字》評介　五一九
《甲骨文字典》における採字方法の檢討　五一九
《甲骨文編》における採字方法の檢討　五二三
《甲骨文合集》的反顧與《甲骨文合集補編》的編纂　五二五
讀《關於中島玉振舊藏甲骨》　五二七

玉田繼雄編著

甲骨關係文獻序跋輯成

第四輯

據日本京都立命館大學文學部中國文學研究室
一九七六年十一月版影印

目次

六五、殷虛文字甲編……一
六六、殷虛文字乙編……九〇
六七、殷契摭佚續編……一九〇
六八、甲骨綴合編……二〇一
六九、五十年甲骨文發現的總結……二二九
七〇、戰後寧滬新獲甲骨集……二四七
七一、殷契徵毉……二六四
七二、殷契拾掇……二七三
七三、戰後南北所見甲骨錄……二九七
七四、五十年甲骨學論著目……三一一
七五、殷虛刻辭的語法研究……三七三

六五　殷虛文字甲編〔二〕

「自序」

這總算是我生平最高興的一件事，雖然是第二次寫，第三次付印的。這一本殷墟文字甲編圖版的序文，說起來說長，又不能不說。從民國十七年十月第一次試掘殷墟，到現在整整的十九年了。經過這樣長的時間，我們發掘所得的甲骨文字，沒有能出版，無怪乎人家責難我們，說是"秘藏櫝中"，"包而不辦"。可是事實是足以替我們辯白的；十七年第一次發掘，得到了甲骨七八四片，在兩個月以內，我們就選出了三八一片，摹寫石印，出版一冊新獲卜辭寫本，公之於世。十八年接連着第二次，第三次發掘，每年春秋兩季田野工作，以至二十三年的第九次發掘。每次所得的甲骨文字，都需要慎重的經過整理，登記，編號，許多手續；腐朽的，尚需侵入膠液中使之堅牢，然後交給工匠，小屯傳拓，我們每片共拓四份，多了恐怕損傷原物。這傳拓的工作，從十八年起，由北平遷上海，遷南京，中間都沒有停頓過。第九次發掘，是二十三年的春季，這年的冬天，從一次至九次所得的甲骨文字，都已精拓完畢，而第十次發掘侯家莊西北岡，是殷代王室的陵墓，不出甲骨，於是我們決定把小屯村九次發掘出土的甲骨文字，編輯付印，作一小結束。

二十四年的春天，開始剪貼編選的工作，費了多半年工夫，完成了殷墟文字甲編圖版三百多張稿子；接着就商洽出版，在二十五年，和商務印書館訂定合同，由該館承印，把圖版上寫的文字及數碼，改排鉛字，一一黏貼，然後照像，製版。二十六年的春天，印成了八十葉樣張，送到南京，我曾寫了一篇短序文，也校對過序文的樣張，內外對面，都已擬就。這時，我們輕鬆的長吁了一口氣，眼見這一部分發掘出來的甲骨文字，不久就要問世了。這是第一次付印，也是我第一次寫序文。不幸的是我們的國難臨頭，七七事變突起，抗戰開始了。商務印書館這一批圖版，存在滬東的廠中，滬東被敵人侵佔，終於無法出版。八月中旬，敵人轟炸首都，為了保全發掘的古物，歷史語言研究所遷到長沙，二十七年的春天，又遷到昆明，二十八年，再與商務印書館訂約，把原稿拓本，寄到香港，重新照像，製版，趕於一年之內印成。我第一次寫的序文，手邊存有原稿，也寄去了。二十九年的秋天，殷墟文字甲編圖版可算真正出版了。有人告訴我，見到廣告，定價是每部一百二十元。那時候，如果用航空寄一部到昆明，郵費要三百元，所以我們始終沒有看見這本書。這是第二次付印。三十年的十二月，敵人侵入香港，商務印書館遭受重大的損失，這第二次出版的殷墟文字，也犧牲在第二次世界大戰的劫運之中。去年秋天，歷史語言研究所從四川的李莊，復員南京，當我到南京第一次會到傅孟真先生時，他首先告訴我，他打算第三次再印這部書。我應該補充一句：這部書的出版，始終是虧了傅孟真先生。自然，甲骨文字是他的寶貝，也是"國寶"，他常常是急如星火地督促着同人們整理，傳拓，編輯，屢次不憚煩難地接洽印刷，連印刷的紙張，都經他再三挑選過。現在是第三次付印果然能出版，也算是償了他老先生的一樁心願。外人不明真象和辦事人的苦衷，時加責難，我們只有忍受。不知道我們負有愛護保管的責任，對於這一批"國寶"，是如何的謹慎小心；每一片甲骨，登記，整理，上膠要費時間，傳拓剪貼，編排要費工夫，照像，製版，印刷要費手續，從採掘出來的一堆甲骨，到印成一本書，決不是可以咄嗟立就的。我們何嘗不想把這一批自己親手採掘的甲骨文字，早日發表？我們何嘗不是時時刻刻在積極地進行！可是直到現在，使我們這部書晚出了整理十年，又是誰的責任呢？

這部書的命名，是傅孟真先生的意思，本來我們是可以叫它作"甲骨文字"的，因為它是殷墟發掘總報告的一部分，我們計畫把殷墟出土的古物中，有文字的統同收入，並不只限於甲骨，凡是銅器，石器，陶器，骨角器，獸頭骨等銘刻，均在其內，所以用"殷墟文字"來賅括它。本編附有獸頭刻辭三件，鹿角器銘文一件，就是龜甲同牛胛骨以外的文字。我們打算分期編印，這是"甲編"，以後續出"乙編"，"丙編"，等等。我們計畫每一編都有"圖版"，"考釋"兩部分，為的先發表發掘所得的新材料起見，圖版部分，提前付印，考釋部分，以後續出；這也是傅孟真先生的主張。甲編的考釋，是胡厚宣君擔任的，胡君以為作考釋的工夫，應該從全部甲骨文字的研究入手，我也同意。他在研究所工作了七年，努力搜求材料，作各方面的研究，同時參證實物，寫本編釋文。二十九年冬，他被顧頡剛先生拉去齊魯教書時，把甲編的全部釋文交了卷，可是考釋還沒有着筆。後來李孝定，張秉權兩君，都會把釋文校對過一遍。現在也只好先印圖版，把考釋部分，留待以後出版了。

第二回の執筆で、第三回印刷のこの一冊の「殷虛文字甲編」圖版の序文であるけれども、これはともかくも我が生涯での最も興（よろこ）ぶべき一つのでき事と云えよう。説き起せば話は長くなるが、また云わねばならない。民國十七「一九二八」年十月第一回の殷虛試掘より、現在に至るまでまるまる十九年、このような長い時間を經過して、私達の發掘して得た甲骨文字は、出版出來ず、人々が私達を責めて、「箱の中に秘藏している」とか「包みこんだまゝで仕事をすゝめない」というのは無理ないことである。然し事實が私達に代って辨明してくれるだろう。十七年の第一回の發掘で、甲骨七八四片を得たが、二か月以内に、私たちはすぐ三八一片を選び出し、模寫し石印し、一冊の"新獲卜辭寫本"を出版して、これを世に公にした。十八「一九二九」年引き續いて第二回、第三回の發掘をし、毎年春秋の二季に野外作業し、二十三「一九三四」年の第九回の發掘に至った。毎回得た甲骨文字は、みな慎重な整理、登記、編號の多くの手續を經過する必要があった。發朽したものは、尚膠液（にかわだめ）の中に侵してこれを堅牢にすることが必要であった。しかるのちはじめて工匠にまかせ、小屯の傳拓には、私どもは各片ごとに四枚をいっしょに拓し、多くとれば原物の損傷を恐れた。この傳拓の作業は、十八年より起り、北平「北京」より上海に遷り、南京に遷ったが、この間停滞するということはなかった。第九回發掘は、二十三「一九三四」年の春季である。この年の冬に、一回より九回に至って得た甲骨文字は、みな已に精拓を完全におえた。而るに第十回發掘の侯家莊西北岡は、殷代王室の陵墓で甲骨は出土しなかった。こゝにおいて私達は小屯村の九回の發掘で出土した甲骨文字を、編輯に付して、一つの小さなまとめを作ることに決定した。二十四「一九三五」年の春、剪貼編選の作業を開始し、半年近くの日時を費して殷虛文字甲編圖版三百枚ちかくの原稿を完成した。引き續いてすなわち出版の交渉をした。二十五「一九三六」年には商務印書館と合同訂正し、館の承印に由って、圖版上にかいた文字と番號を活字に改め、ひとつひとつ貼りつけて、しかるのちに寫眞を撮り、製版した。二十六「一九三七」年の春、八十葉の校正刷の印刷ができこれを南京に送った。私は曾って一篇の短かい序文を書いた。また序文の見本刷も校正したことがある。みな已にできかけていた。この時わたくし達はやれやれと一服し、夢にみたあの表紙もこの一部分の發掘した甲骨文字が、間もなく世に出ることになった。これは第一回の印刷であり、また私の第一回に書いた序文である。不幸にして私達は國難がふりかゝり、七七事變が起り、抗戰が開始された。商務印書館のこの一圖版は、滬東「上海」の廠中に存在し、滬東は敵人に侵略され、終に出版のすべもなかった。八月中旬、

敵は首都を爆撃し、發掘の古物を保全するのに、歴史語言研究所は長沙に遷った。二十七〔一九三八〕年の春、また昆明に遷った。二十八〔一九三九〕年、再び商務印書館と約束をきめたし、原稿拓本を香港に送り、新たに寫眞、製版を重ねて、一年の内に急いで印刷が出來た。私が第一回に書いた序文は、手元に原稿があり、これも送った。二十九〔一九四〇〕年の秋、殷虛文字甲編の圖版は本當に出版できたと云える。ある人が私に告げていうのに、廣告を見つけ、定價は毎部一百二十元であるとしらせてくれた。あの時もし航空便で一部を昆明にとり寄せるには、郵費三百元を要したので、だから私達は終始この本書を見ることはなかった。これは第二回の印刷である。三十〔一九四一〕年十二月、敵人は香港に侵入した、商務印書館は重大な損失を受け、この第二回の出版の殷虛文字も、また第二次世界大戰の犠牲で劫運の中にあった。去年の秋、歴史語言研究所は四川〔省〕の李莊より、南京に到り、第一回目に傅孟眞(傅斯年・『甲骨學商史論叢初集』註〔三〕・第三輯二二七頁參見)先生に會った時、彼は首めまず私に三たびこの書を印刷するとつげられた。私はこゝで當然一句を補充すべきである、この書の出版は終始傅孟眞先生のおかげである。もとより甲骨文字は先生の寶であり、また「國寶」である。彼は常々に急なる星火のごとく同人たちの整理、傳拓、編輯を督促し、いつも煩いを憚からないでつづいて印刷の交渉をし、印刷の紙まで、みな彼が再三にわたる吟味をえた。今、思いがけなくも第三回の印刷が出版できたということは彼の老先生の一つの願いを償ったということが出來る。他の人には眞實と事情を語る人の苦衷を知らないので、時に責を加えるが、私達はたゞ堪え忍ぶだけである。私たちがだいじに保管する責任をもっており、この一つの「國寶」に對して、どれほどの謹愼小心を加えたろうか。一片ごとの甲骨に登記、整理、上膠（にかわがため）に時

間を費やさねばならない。傳拓、剪貼、編排に時間を費やさねばならない。照像、製版、印刷には手間がかかる。採掘して出來た一堆の甲骨より、一冊の書物の印刷が成るまで、決して咄嗟には出來ない。私達はこの一つの自分の親（みずか）らの手で採掘した甲骨文字をどおして、早日に發表されることを想はないことはないでしょうか。私はどおして、時々刻々と積極的に進めなかったことがあろうか。然しずっと今になって、私たちのこの一部の書物の整理に十年して晩出したのは、また誰れの責任であろうか。

本書の命名は傅孟眞先生の考へである。本來私たちはこれを「甲骨文字」と呼ぶつもりであった。というのはそれは殷墟發掘總報告の一部分であるから。私たちは殷虛出土の古物中で、文字のあるものは全部收め、決してたゞ甲骨に限らず、凡そ銅器、石器、陶器、骨角器、獸頭骨等の銘刻も、均しくその中にあるように計畫した、だから「殷虛文字」というのを用いてそれを総括した。本編に獸頭刻辭を三件、鹿角器銘文の一件〔三〕は附しているが、就ち龜甲や牛胛骨以外の文字である。私たちは分期で編印するつもりで、この「甲編」以後に「乙編」〔四〕「丙編」〔五〕等を續いて出すのである。私たちは一編ごとにみな「圖版」と同じく「考釋」の二つの部分があるように計畫した、先に發掘して得た新材料を發表する為に、圖版の部分は、前に印刷に提し、考釋の部分は、また續いて出す。これもまた傅孟眞先生の主張である。「甲編」の考釋は〔六〕胡厚宣(胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註〔八〕・第三輯一三四頁參見)君の擔任である。胡君は考釋をする時間は、當然全部の甲骨文字の研究から着手をすべきだと思っているが、私もまた同意見である。彼は研究所にあって作業することと七年、努力して材料を搜求し、各方面の研究をなし、同時に實物を參證して、本編の釋文を書いた。二十九〔一九四〇〕年冬、彼は顧頡剛(顧頡剛・『天壤閣甲骨文存』

註〔十四〕・第三輯八二頁參見)先生に齊魯〔大學〕へつれていかれ教職についていた時、甲編の全部の釋文の巻を提出したのであるから、考釋はまだ執筆していない。のちに李孝定(李孝定・『殷曆譜』註〔四十四〕・第三輯三四四頁參見)張秉權〔七〕兩君は、曾って釋文を一通り校合したことがあった。現在はたゞ先に圖版を印刷し、考釋の部分は留めて以後の出版を待たねばならない。

註〔一〕　一九二八年に中央研究院歴史語言研究所が成立して安陽殷虛を發掘した。この發掘は民國十七(一九二八)年から二十六(一九三七)年まで十五回ほど行われたが、この間の工作を董作賓氏は四段階に分けている。第一次から第三次までは小屯村と村の北地、甲骨が主として出土した。第四次から第九次までは小屯村と北地、その他に第四次には後岡、第九次には侯家莊南地が發掘され、宮殿の基址が調査された。第十次から第十二次までは侯家莊西北岡を發掘し、殷代の陵墓を調査した。第十三次から第十五次までは小屯村北地において宮室寶窖以外の宗廟建築が調査された。甲編は第一次より第九次までの發掘により得た甲骨を收録したものであるが、出土の字甲は四四一二片、字骨二一〇二片、あわせて六五一四片、そのうち三八六六片を整理拓印したものが甲編である。この著録は從來の古董商によって入手して著録したものではなく、これらの卜片が出土狀況の明らかな科學的調査發掘によって刊行されたものでは始めてで、その點においては從來にはない本書の特色であり、收録數においても最高の數量といえる。甲編の自序は從來の董氏の研究の線に沿うもので、とくに新見とす

べき點は述べられていない。收録の甲骨を通覽すると甲骨には綴合の可能なもの(丙編に試みられている)、董氏の貞人表にも見えない貞人、貞人によって貞卜の對象が定まる傾向や、また貞人の筆迹にも問題があるようである。出版は一九四八年四月、商務印書館影印本一冊。中央研究院歴史語言研究所報告集之二。

註〔二〕　胡厚宣氏の『殷墟發掘』によると十次の侯家莊について「龜版　本季雖然沒有發現刻有文字的甲骨，但在西區大墓中發現了多塊一面塗有朱色的龜版，其意義值得研究。」と記述されている。

註〔三〕　獸頭刻辭・鹿角器銘文については第二輯『殷契佚存』商承祚序參見。

註〔四〕　殷虛文字乙編序註〔二〕本輯九六頁參見。

註〔五〕　殷虛文字丙編序　註〔一〕第五輯參見。

註〔六〕　殷虛文字甲編考釋序　註〔一〕第五輯參見。

註〔七〕　張秉權(一九一九－)浙江省吳興の人。中央大學卒業。中央研究院歴史語言研究所研究員兼甲骨文研究室主任となる。著論文に『小屯第二本殷虛文字丙編』

『卜辭甲申月食考』『甲骨學簡說』『卜辭復甲的序數』『殷虛卜龜之卜兆及其有關問題』等三十餘種がある。

編輯的經過是如此，首先把九次甲骨拓本，挑選一次。本來是不應挑選的，每一殘片，都有它本身的價值，無論字的多少，將來拼合復原，都是有用的；可是全印出來，又為我們經濟所不允許。例如一個大片上只有一兩個殘餘的干支字，或小如指甲的碎塊上，一半個貞卜字，干支字等等，這些在發掘時所得的材料是涓滴歸公的，所以都編入登記號，對於研究上實在沒有多大用處；本編落選的，佔全數的約五分之二都屬於這一類。其次，排列的方法，並不是分期或分類，為的顯示這一批材料是經過科學發掘工作，所以依照着它們出土的先後次序排列的。每片有兩種號碼，大字是拓本號，小字是發掘時在實物上所編的登記號。拓本號的次序，完全依照着登記號的次序。登記時，先把甲與骨分為二類，再依據出土日期，抗位，層次，一一編排下去。現在既以登記號次序為主，剪貼拓本時就要受相當的限制，每片的大小不同，有時一片有兩張或三張拓本，而分配在一葉圖版上，次序不亂，又要勻襯，這也是頗費匠心的。我們的登記號，從左向右讀，第一位的數字，表示發掘次數，第二位的數字，表示出土物品的種類；0.是有字龜甲，1是無字龜甲，2.是有字骨版，3.是無字骨版。本編所收的只有0.和2.兩類；第三位以下的數字，是出土物品的號數。例如本編中圖版第〃壹捌〃葉，第一片拓本下有〃三八七，一.二.〇一三九〃兩種號碼，三八七是表示在甲編中的拓本，編為三百八十七號；一.二.〇一三九表示這一片實物，是第一次發掘（一）出土的有字骨版（二），第一百三十九（〇一三九）號。拓本號是有一拓片；即編列一號，與登記記號不完全相同，一塊龜甲，正面反面都有文字，則有兩拓本，有兩號；一塊骨版，正

反面，骨臼均有文字，則有三拓本，有三號，而實物則都是只有一個登記號。有的是實物二片原有兩個登記號，而編時拼合為一個拓本，編為一個號。因此，本編的拓本數目，並不是所收甲骨原片的數目。

本編中拓本和甲骨原片的關係是；

選入甲骨片數		編入拓本號數	
甲	二四六七	甲	二五一三
骨	一三九九	骨	一四二五
合計	三八六六		三九三八

拓本同實物的差數是七二號，這不是說只有七二張拓片是甲骨的反面或骨臼，同時還有拼合起來的甲骨，實物兩個或三個號數而拓本只有一個號數的。本編拓本號共有三九四二，除了上列甲骨文字以外，還有獸頭刻辭的拓本三件；牛頭刻辭一件，是三九三九號；鹿頭刻辭二件，是三九四〇，三九四一號；鹿角器一件，是三九四二號。

引用本編的拓片時，但寫拓本號即可，本編簡稱為〃甲〃。如上所舉的一片，可稱〃甲三八七〃。若研究出土情形，或與遺址遺物關係，則須查登記號。本來既列登記號，就應該有詳細的坑位層次，出土日期的各項圖表，這些將見於發掘報告的遺址部分，乃本編考釋部分，恕我不能同時發表。這裏只能將九次發掘的甲骨文字出土情形，對照拓本，作一簡表，以見梗概。

表如下：

九次發掘殷墟所得甲骨文字出土時期數量地點與甲編圖版拓本對照表

發掘	工作時期		甲骨實物登記號數			出土地	本編拓片號數				
次數	年	月、日至月、日	甲	骨	合計		甲	共	骨	共	甲骨合計
1	17	10.13—10.30	1.0.0001—0555	1.2.0001—0299	854	小屯村中 村北	1—296	296	297—447	151	447
2	18	3.7—5.10	2.0.0001—0055	2.2.0001—0685	740	小屯村中 村北	448—489	42	490—928	439	481
3	18	10.7—10.22 11.15—12.12	3.0.0001—2050	3.2.0001—0962	3012	小屯村北	929—2238	1310	2239—2940	702	2012
4	20	3.21—5.11	4.0.0001—0751	4.2.0001—0031	782	小屯村北	2941—3328	388	3329—3362	34	422
5	20	11.7—12.19	5.0.0001—0275	5.2.0001—0106	381	小屯村中 村北	3363—3576	214	3577—3658	82	296
6	21	4.1—5.31		6.2.0001	1	小屯村北			3659	1	1
7	21	10.19—12.15	7.0.0001—0023	7.2.0001—0006	29	小屯村北	3660—3684	25	3685—3690	6	31
8	22	10.20—12.25	8.0.0001—0256	8.2.0001	257	小屯村北	3691—3782	92	3783	1	93
9	23	3.9—5.31	9.0.0001—0446	9.2.0001—0011	457	小屯村北 侯家莊南	3784—3929	146	3930—3938	9	155
合計			4411	2102	6513			2513		1425	3938

這部書中的材料，如果單就文字學方面看去，自然和以前著錄的許多甲骨文字書籍，有同樣的價值，祇是讀者可以絕對地信任它沒有一片偽刻罷了。如果從考古學的眼光看法，就和以前的甲骨文字書籍大大的不相同了。它們每一片都有它們的出土小史，它們的環境和一切情形都是很清楚的。每一片都是經我們親手挖掘出來，而又經摩挲玩賞過的，因此，我們對於這批材料，有着很親密的感情。這固然是我們少數人的偏愛，可是也希望讀者們也能夠對於它們加以另眼看待。

編輯の經過は次の如くである。はじめに先づ九回の甲骨拓本を一度に選擇する。本來は選擇すべきでないが，一殘片ごとに，みなそれ自體の價值があり，字の多少に拘らず將來拼合復源をすれば，みな役に立つものであるが，全部印刷することはまた私達の經濟が許さない。例へば一個の大片の上にたゞ一，二個の殘餘の干支字があったり，或は小さくて指ほどの甲の碎塊上にでも，一半個の貞卜字，干支字等があり，これは發掘時に得た所の材料はほんのわずかでも公に歸するものである。だからみな編入し番號を登記した。研究上に對して實際に大して用徒のないものもある。本編に落選したのは，全數の約五分の二を佔めみなこの一類に屬する。其の次に排列の方法は，決して分期或は分類ではないのは，この一つの材料は科學發掘工作を經過したことを顯示する為である。だからその出土先後の順序にてらして排列した。各片毎には二種類の番號があり，大字は拓本番號であり，小字は發掘時に實物上編した登記番號である。拓本番號の順序は，完全に登記番號の順序によった。登記の時，まず甲と骨とを分けて二種類とし，再び出土の日時，抗位，層次によって，いちいち編して並べていった。現在は既に登記番號の順序を主とし，拓本を切り貼

りした時、就ち相當な制限を受けた。各片は毎に大小は同じでなく、時には一片に二張或は三張の拓本があり、而るに分配して一頁の圖版上にあり、順序は亂さず、また綺纜なのを要し、これはまた頗る技術者の心を費やすものであった。私の登記番號は、左より右に向って讀み、第一位の數字は、發掘回數を表示し、第二位の數字は出土物品の種類を表示する。0は龜甲に字の有るものである。1は龜甲に字の無いものである。2は骨版に字の有るものである。3は骨版に字の無いものである。本編に收めるものはたゞ0と2の二種類であり、第三位以下の數字は、出土物品の號數である。例へば本編中の圖版第十八頁の如く、第一片の拓本下に三八七一、二・〇一三九　二種類の番號があり、三八七は甲編中にある拓本を表示したものである。編は三百八十七號であり、一・二・〇一三九はこの一片の實物を表示している。第一回發掘は（1）である。出土の骨版に字の有るのが（2）、第一百三十九（〇一三九）號である。拓本の番號は一拓片にあるのである。卽ち編して一號を列し、登記記號とは完全でないことはあい同じで、一塊の龜甲は、正面反面にはみな文字がある。則ち兩拓本には二つの番號がある。一塊の骨版には、正反面、骨臼が均しく文字が、則ち三つの拓本があり、三號有り、而るに實物は則ちみなたゞの一個の登記番號である。あるのは實物二片の原（もと）の二個の登記番號があるのであり、編纂する時に拼合して一個の拓本とし、編纂して一つの番號とした。此れによって本編の拓本の數目は、決して甲骨原片の數目を所收しなかった。本編中の拓本と甲骨原片の關係は

選入した甲骨の片數	編入した拓本の號數
甲　二四六七	甲　二五一三
骨　一三九九	骨　一四二五
合計　三八六六	三九三八

拓本は實物と同じく差數は七二號である。これはたゞ七二張の拓片が、甲骨の反面とか或は骨臼だとは云うのではない。同時にまた拼合しはじめた甲骨には、實物は二つあるいは三つの號數を有するが、拓本はたゞ一つの號數があるだけである。本編拓本の番號はすべて三九四二あり、上列の甲骨文字を除いた以外は、また獸頭刻辭の拓本が三つある。牛頭刻辭の一つは、三九三九號である。鹿頭刻辭は二つ、三九四〇、三九四一號である。鹿角器の一つは、三九四二號である。

本編の拓片を引用する時は、たゞ拓本の番號だけを書けばよい。本編を簡稱して「甲」とする。上に擧るところの一片の如く〃甲三八七〃と稱する。出土情況の研究の若きは、或は遺址遺物と關係し、則ち須らくしらべて番號を登記した。本來は既に列して番號を登記したら、すなわち當然詳細な坑位、層次、出土の日時の各項を圖表にすべきであるが、これは將に發掘報告の遺址部分に見られる。そこで本編の考釋部分は、私には同時に發表することが出來ない。こゝでたゞ九回發掘の甲骨文字の出土情況を、拓本に照合して、一つの簡單な表を作り、その梗概を見る。表にすると下のようである。

九回殷墟を發掘して得た所の甲骨文字出土時期の數量地點と甲編圖版拓本對象表

發掘	工作時期		甲骨實物登記號數			出土地	本編拓片號數				
次數	年	月、日至月、日	甲	骨	合計		甲	共	骨	共	甲骨合計
1	17	10.13—10.30	1.0.0001—0555	1.2.0001—0299	854	小屯村中村北	1—296	296	297—447	151	447
2	18	3.7—5.10	2.0.0001—0055	2.2.0001—0685	740	小屯村中村北	448—489	42	490—928	439	481
3	18	10.7—10.22 11.15—12.12	3.0.0001—2050	3.2.0001—0962	3012	小屯村北	929—2238	1310	2239—2940	702	2012
4	20	3.21—5.11	4.0.0001—0751	4.2.0001—0031	782	小屯村北	2941—3328	388	3329—3362	34	422
5	20	11.7—12.19	5.0.0001—0275	5.2.0001—0106	381	小屯村中村北	3363—3576	214	3577—3658	82	296
6	21	4.1—5.31		6.2.0001	1	小屯村北			3659	1	1
7	21	10.19—12.15	7.0.0001—0023	7.2.0001—0006	29	小屯村北	3660—3684	25	3685—3690	6	31
8	22	10.20—12.25	8.0.0001—0256	8.2.0001	257	小屯村北	3691—3782	92	3783	1	93
9	23	3.9—5.31	9.0.0001—0446	9.2.0001—0011	457	小屯村北 侯家莊南	3784—3929	146	3930—3938	9	155
合計			4411	2102	6513			2518		1425	3938

本書中の材料は、もし單に文字學の方面から見れば、もとより以前に著錄した多くの甲骨文字の書籍と、同樣の價値がある。たゞ讀者は絕對に一片も僞刻がないことを信じてよいのである。もし考古學の眼光から見れば、就ち以前の甲骨文字の書籍と大いに同じではない。それらは一片毎にみなそれらの出土の小史があり、それらの環境と一切の情況はみな實にはっきりしているのである。一片ごとにみな私達が手づから掘り出したものであり、又なでさすりつゝ觀賞をへたものばかりである。此れに因って、私はこの材料に對して、實に親密な感情をいだいた。これは固より私達少數人の偏愛である。であるからまた讀者達に希望することはまた能くそれらに對して多く加えるに眼を持って接せられるように。

在這裏我需要略談一談它們在考古學上的貢獻。

第一、是斷代研究法的啓示。這是老話了、第一次試掘殷墟，是民國十七年的十月，開工的第一天，是十月十三日，在相距甚遠的四個地方，控了四個新坑，結果是大失所望，一片甲骨也沒有找到。第二天，乜依照村中工人的經驗，在村北靠近洹水南岸的朱姓地內，翻控會經控過多次的舊坑找到了許多破碎腐朽的甲骨文字，這就是我在斷代研究例中所稱的"第一區：第九坑。接着在朱地的西南，劉姓地內，也找到了舊坑，這是"第二區：第二十六坑。在小屯村由張姓菜園裏，又找到了一個未經控過的新坑，是"第三區：第二十四坑。（參看斷代例坑位圖，三五二—三五三葉圖五）在本編裏，上舉三個坑出土的甲骨文字，拓本號和登記號，對照如下：

拓本號	登記號
一—一〇九	一・〇・〇〇〇一—一・〇・〇〇一五一（甲）〜

二九七－三五二	一．二．○○○一－一．二．○一○二(骨)	第一區、第九坑、朱姓地。
一一○一－一七八	一．○．○一五二－一．○．○三八四(甲)	第二區、第二六坑、劉姓地
三六八－三七五	一．二．○一一八－一．二．○一二五(骨)	
三九一	一．二．○一四三(骨)	
三五三－三六七	一．二．○一○三－一．二．○一一七(骨)	第三區、第二四坑、張姓地。
三七八－三八七	一．二．○一二八－一．二．○一三九(骨)	
三九○	一．二．○一四二(骨)	

讀者可以按號翻閱以上所列的拓本，這三區三個坑中所出土的甲骨文字，便會感覺到它們是不相同的。這些都經我親手挖出，每片仔細觀察過，它們給我的印像，是三區各自成為一組，各有特異之點，比方說：在一區第九坑，有許多規整的小字（一．二．○○○一，二，二八，四五，九二，及一．○．○○一二，一七，三四，七四，八九）等片，皆登記號，下同）；有雄偉的大字（一．○．○○○一，八，七○，八七，及一．二．○三○五，二五，九三等片）；在二區第二六坑，無一塊小字的片，而又有一種細弱的書體（一．○．○二三五，二四○，二九五等片）；在三區第二四坑，"亡戈"的辭五見（一．二．○一○七，一○八，一一○，一四二，一八七），又有"癸口貞旬亡囚"的卜旬文例（一．二．○一○六，一三七），並且書體和一，二兩區的卜辭，大不相同。我在當時就疑心這是時代有先後的關係，在新獲卜辭寫本的後記裏，曾提到第三區"戈字之特見"一個問題。

現在，我們是可以明白的。一區九坑的卜辭，包涵着第一期的武丁時代，如上面所舉的大字及有貞人㱿，賓，史的各版（一．○．○五二七，一二○及一．二．○○○三，二二等片），第二期祖甲時有"卜王"，"父丁"，貞人行的各版（一．二．○○一六，二七，四一等

片）；第五期帝乙帝辛時規整的小字各版。我們須注意的，是在朱姓地內同附近一帶出土的甲骨文字，它們的時代，只有第一，二期和第五期。我們再看第二區二六坑，這一組卜辭，有第一期武丁時物，貞人㱿，岜及大字可證（一．○．○一七二，二三二，二四二），有第二期祖甲時物，貞人出可證，（一．○．○二○二，二七一）；有第四期文武丁時物，上舉的細弱書體及貞人狄可證。我們也要注意的是絕無一片第五期的卜辭。至於三區，包括所有在小屯村中出土的甲骨文字，是只有三，四期而絕無一片是一，二，五期的。在本編中，可以見到村中出土第三期廩辛康丁時的卜辭，稱祖己為父己（一．二．○一五三）；第四期武乙時的卜辭，稱廩辛康丁為父辛（一．○．○三九四），父丁（一．二．○一六九），稱康丁配為母辛（一．二．一四九）；文武丁時的卜辭，稱武乙為父乙（一．○．四四八）等。這些只是就第一次發掘的材料中，略舉幾個例子而已。

由於三個地方出土的甲骨文字的不同，給了我一個很大的啟示，使我時時刻刻在苦思冥索，要找出一個可以判別卜辭時代的方法。經過了三年之久，發掘四次，才從大龜四版裏找出貞人來。民國二十一年我發表斷代研究例一文，只有少數學者贊成這種方法，當時我的老友明義士（James Mallen Menzies）就是反對者之一，還有人寫貞人質疑一類的文章。直到我應用斷代方法寫定了殷曆譜，胡厚宣君也用分期方法發表了甲骨學商史論叢之後，我想不會再有人懷疑這種方法的了。可是這斷代分期的新研究法，追本溯源，不能說不是從發掘工作中得來的。

第一は、斷代研究法の啓示である。この話は古いが、第一回に殷墟を試掘したのは、民國十七（一九二八）年の十月であり、開工した第一日は、十月十三日である、あい距たる

こと甚だ遠い四地にあって、この四つの新坑を掘った、結果は大いに失望した、一片の甲骨すらなかった。第二日は、僅かに村中工人の經驗によって、村北に近い洹水南岸の朱氏の地内にあり、曾って數回掘った舊坑を掘り多くの破碎し腐朽した甲骨文字を採取した、これは就ち私の「斷代研究例」中に倫するところの「第一區」の第九坑である。續いて朱地の西南、劉氏の地内に、また舊坑をさがしあてた。これは「第二區」で、第二十六坑である。小屯村にあって張氏の菜園内にまた一個のまだ發掘していない新坑で「第三區」の第二十四坑である。（斷代例坑位圖を參照、三五二－三五三頁圖五）（坑位・『甲骨文斷代研究例』註〔五〕・第二輯六○頁參見）、本編では、上は三個の坑出土の甲骨文字を擧げ、拓本番號と登記番號で、對照すれば下のようである。

拓本番號	登記番號	
一－一○九	一．○．○○○一－一．○．○一五一(甲)	第一區、第九坑、朱姓の地
二九七－三五二	一．二．○○○一－一．二．○一○二(骨)	
一一○一－一七八	一．○．○一五二－一．○．○三八四(甲)	第二區、第二六坑、劉姓の地
三六八－三七五	一．二．○一一八－一．二．○一二五(骨)	
三九一	一．二．○一四三(骨)	
三五三－三六七	一．二．○一○三－一．二．○一一七(骨)	第三區、第二四坑、張姓の地
三七八－三八七	一．二．○一二八－一．二．○一三九(骨)	
三九○	一．二．○一四二(骨)	

讀者は上に列するところの拓本を翻閱して、この三區三個の坑中から出土する甲骨文字が便にそれらは相い同じでないことに感付かれるであろう。これらはみな私が身（みず）からの手で

發掘したもので、片ごとに仔細に觀察したことがある。それらが私にあたへた印象は、三區は各自成って一組となっており各々特異な點がある。方說を比べると、一區第九坑にあっては、多くの規整の小字（一．二．○○○一、二，二八，四五，九二及び一．○．○○一二，一七，三四，七四，八九）等の片がある、皆な登記番號は、下に同じ）；雄偉の大字あり、（一．○．○○○一，八，七○、八七及び一．二．○○○五、二五、九三等の片）；二區第二六坑にあり、一塊の小字の片はない。而るに又一種の細弱の書體がある。（一．○．○二三五、二四○、二九五等の片）第三區第二四坑である。"亡戈の辭は五見（一．二．○一○七，一○八，一一○、一四二、一八七），又「癸口貞旬亡囚」の卜旬文例あり，（一．二．○一○六、一三七），並に且つ書體と一、二兩區の卜辭は、大いに相い同じではない。私は當時就ちこれは時代に先後の關係があると心に疑った、『新獲卜辭寫本後記』（新獲卜辭寫本〔八〕・第一輯『甲骨文字研究』註〔十三〕・三七四頁參見）に、曾って第三區の"戈字の特見"の一つの問題を提出した。

現在、私達は明白に出來る。一區九坑の卜辭は、第一期の武丁時代を包涵し、上に擧げたところの大字及び貞人㱿、賓、史の各版の如く、（一．○．○○五二、七七、一二○及び一．二．○○○三、二二等の片）、第二期祖甲時には"卜王"父丁が有り、貞人行の各版（一．二．○○一六、二七、四一等の片）第五期帝乙帝辛時は規整で小字各版である。私は須らく注意し、朱氏地内附近一帶出土の甲骨文字である。それらの時代は、ただ第一、二期と第五期にある。私は再び第二區二六坑を見た、この一組の卜辭には、第一期武丁時の物があるのは、貞人㱿、岜及び大字に證することが出來る（一．○．○一七二、二一二、二四二），第二期祖甲時の物があるのは、貞人出で證することが出來る（一．○．○二○

二、二七一）；第四期文武丁時の物あり、上に擧げた細弱な書體及び貞人𠂤を證することが出來る。私達がまた注意しなくてはならないのは、第五期の卜辭がなにもないことである。三區に至っては、凡ゆる小屯村中出土の甲骨文字を包括してたゞ三つだけある。四期のものばかりで一、二、五期のものはない。本編中には、村中出土は第三期廩辛康丁時の卜辭、祖己を稱して父乙[九]となし（一・二・一五三）、第四期武乙時の卜辭は、廩辛康丁を稱して父辛[十]（一・〇・〇三九四），父丁[十一]（一・二・〇一六九）となし、康丁の配を稱して母辛[十二]となす（一・二・一四九）；文武丁時の卜辭は、武乙を稱して父乙と爲す[十三]（一・〇四四八）等のことがわかる。これはたゞ第一回發掘の材料で略ぼ幾らかの例を擧げただけである。

三地出土の甲骨文字の同じでないことによって、私は一つの寶に大きな啓示をあたへられた。私をして時時刻刻と苦思冥索せしめ、卜辭時代の一つの判別できる方法をさがしださせた。三年の久しい時を經て、四度發掘し、どおやら大龜四版（『甲骨文斷代研究例』註[一]・第二輯・二頁參見）より貞人をさがしだせた。民國二十一〔一九三二〕年、私は『甲骨文斷代研究例』（『甲骨文斷代研究例』註[一]・第二輯・二頁參見）の一文を發表した。たゞ少數學者だけが、この種の方法に贊成が有り、當時私の老友明義士（Menzies）（明義士・『殷契書錄』註[三]・第一輯三二二頁參見）は就ち反對者の一人[十四]であり、またある人は「貞人質疑」[十五]の一類の文章を書いた。すぐに私は斷代方法を應用して『殷曆譜』（『殷曆譜』註[三]・第三輯二八六頁參見）を書いた。胡厚宣君はまた分期方法を用いて『甲骨學商史論叢初集』（『甲骨學商史論叢初集』註[二]・第三輯二〇一頁參見）を發表してのち、私は再びもお何人もこの種の方法に懷疑がありえないと想った。この斷代分期

の新研究法は、（『甲骨文斷代研究例』註[一]・第二輯二頁參見）本を追って源に溯れば、この發掘の作業中より得たものではないとは言いきれない。

註[八]　𢦏字の特見　卜文に見える「壬辰卜貞王其田斿亾巛」や「戊戌卜貞王其田斿亾𢦏」（考釋下三十八葉）は巛、𢦏の二字並に田獵の辭に見える。董作賓氏はこれについて次のように述べている。「今所掘第三區第一系的二四、二七各坑所出之骨版、作「亾𢦏」者凡十見（卜辭一四六、一四七、一五六、二二〇、二二七、二四〇、二五七、二七九等）竊謂𢦏爲後起之字而巛爲初文、各爲一時之文字也。巛之字、亦作巛、≋、本象洪水汎濫之狀、上古因水患之烈而造爲巛害之字、已具如前述。此字由象形漸變而爲會意、加一於川作巛、以會川流壅塞潰決之意。又漸次變而爲巛、爲𡿧、爲𡿧、則从巛、从中、巛爲形而中爲聲、是又由會意變而爲形聲之途徑也。𢦏字作𢦏、从才、从中。說文𢦏、傷也、戈乃兵刃、足以傷人、又加中聲爲之、當爲尤後起之字。今第三區第一系所出卜田之辭、皆作「亾𢦏」、可斷爲一時代之用字、其時亦當較後歟」（董作賓撰『新獲卜辭寫本後記』〈安陽發掘報告第二期〉）。𢦏字については『古文聲系』註[一一三]・第二輯四三〇頁參見。

註[九]　戊口卜、父乙伐一。この父乙は武丁の子、祖庚の兄、所謂孝己なり。

註[十]　口戌、王貞、亡且以辛。父辛は廩辛。

註[十一]　口口卜：兄于以口？。父丁は康丁をいう。

註[十二]　口未卜：又[illegible]、口十？茲用。

註[十三]　𡆥于父乙、羊、不𡆥。父乙は小乙。

註[十四]　明義士の董作賓に對する批判論文。不明。

註[十五]　貞人質疑　陳宥憲撰　一九三三年十月刊。中山大學文史研究所月刊二卷一期所收。董作賓氏の說に對し詳細に詰難を加え、その例證を擧ぐ。

第二、是以前著錄的甲骨文字出土地、可借此推求。據我們發掘的經驗、參證村人的傳說、可以知道在我們第一次試掘殷墟以前、最早的小屯村村人挖掘甲骨文字、是在光緒二十五年（西元一八九九年），出土的地點、是在劉姓的二十畝地之內、我上節所說的第二區、二六坑的附近。其次、是在光緒三十年（一九〇四）挖掘地點、是在朱姓的三十畝地之內、我上節所說的第一區、九坑的附近。挖掘次數最多的是小屯村中、我所說的第三區、最早是在宣統元年（一九〇九）。這三區出土的甲骨文字、各有特點；包涵的時代不同、具見上述、由此可以推斷已著錄的材料、出土的時期和地點、列如下表：

甲骨文字出土地點	開始挖掘	繼續挖掘	著錄書	收藏者	特點
第一區（朱姓地、洹河）	光緒三十年（一九〇四）	民國九年（一九二〇）	前、後、續、庫、龜卜等	羅振玉、明義士等	一、二、五期
第二區（劉姓地、朱地西南）	光緒二十五年（一八九九）		鐵、戩、餘、拾等	劉鶚	一、二、四期
第三區（張姓菜園、小屯中）	宣統元年（一九〇九）	民國十二年至十七年（一九二三—一九二八）	粹、卜、後、佚等	明義士、劉體智等	三、四期

我們可以說：最早是劉鶚所得的甲骨文字、凡是鐵雲藏一系的書、沒有第五期的卜辭、出在第二區。次之是朱姓地內出土的一大批、包涵一、二、五期、羅振玉所得最多、分散也最廣。在村中挖掘的以前、是絕無第三期卜辭的、第四期的卜辭、也以村中出土爲最多。三期卜辭、在我們發掘的第三次、有一批出在"大連坑"、第九次、有一批甲骨出在侯家莊、這都是以後的事。所以以前著錄、除了佚存所收美國斯美士的一部分、粹編所收善齋的一部分之外、別的書都是沒有的。如果我們把每部書中材料收藏的年代同內容、加以考索、再對證上表、便可以知道它們的出土地點了。大概凡是在一九〇四年以前出土的、是劉姓地、無第五期卜辭；在一九〇九年以前出土的、有第五期卜辭、無村中的三、四期卜辭、是朱姓地。一九〇九年以後所得的、如果有三、四期物、必是村中出土無疑。在抗戰期間、上海流傳一批甲骨、

我曾為見摹本，都是第四期卜辭，可以知道是村中出土的。最有趣味的證明，是殘片的拚合，和一組史料的折散。殘片拚合，例如：一。我們第一次發掘第九坑，第一天得到的一塊骨片，本編拓本號二九七，登記號一・二・〇・〇・〇一。曾收入新獲卜辭寫本第一號。使我永遠忘不了的是這〃惟王八祀〃四個字，隹字只剩下了一隻鳥足，兩片羽毛。等到我寫帝乙祀譜時候，忽然靈機一動，才把它與庫方二氏所藏甲骨文字的一六六一片拚合起來，這一版現在倫敦的大英博物館。上面記載着四次卜旬，四個月名，但是四個都被方法斂博士（Dr. Frank Herring Chalfant 一八六五—一九一四）摹寫作〃三月〃。我懷疑這三月不會有四個癸日，於是寫信給老友吳金鼎博士，請他一查原片，結果是我對了，證明一個癸酉卜旬是二月，三個癸未癸巳，癸卯卜旬是三月，合起來〃惟王八祀〃，於是證明了帝乙八祀一組祭祀的系統（詳殷曆譜祀譜二，帝乙八祀）。這一塊骨版，就是一九〇四年朱姓大規模挖掘時打破了的，一小片遺落在土中，又埋下去，直待我再掘出；一大片卻輾轉賣到英國，三十年以後，它們才久別重逢，破鏡復圓了。二。也是第一次發掘，在小屯村前大路旁得到的一片龜甲，本編拓本號二六四，登記號一・〇・〇四八五，寫本號三六〇；這一片是十七年十月二十七日，在三六坑深六英尺處掘出來的。現在和殷契粹編的四二五號合起來了，所記的是第四期文武丁時，丁未日卜祭咸戊之辭，有貞人狄。在十七年試掘小屯報書附列第三十六坑東西剖面圖中，我曾有這樣一段記載〃此處自地面至六英尺，於民國十七年春，經村人掘過，故土層淩雜，在四尺之處，有鐵鑰匙；即其證也。〃（二四葉）我們發掘所得的一片，正在擾亂的土層的東邊。因此可以知道粹編二六四號是同出於一坑的，這是村中十七年春天挖出的一批甲骨，運到上海賣給劉善齋了。村中的卜辭，劉善齋之外，以明義士所得為最多，已編入他的殷墟卜辭中，尚未出版。三。民國十八年秋天，我們在張

姓十八畝地中發掘〃大連坑〃，是未經挖過的新坑，包涵的時代，從第一期到第五期，而以第三期卜辭為尤多。有一片編入本書拓本二二八二號，是四塊合成的，它們的登記號是三・二・〇五六，六三，七七，一二〇。這一片與殷契佚存的二五六一版可以相合，佚存中又把合起來的全片，列為九八六號。此版是第四期卜辭，有〃求雨自上甲，大乙，大丁，大甲，大庚，大戊，中丁，祖乙，祖辛，祖丁十示〃的記載，這十示都是大宗。佚存中這一批材料的來歷，我在序中曾講過的，不必再談了。以上的三個例子，都是真憑實據，足以證明以前著錄材料的出土地點，讀者以此類推，可也。

其次講一組史料的折散。這個我只能拿已經整理就緒的一批甲骨卜辭作例子，根據帝辛十祀十月至十一祀七月征人方的一組史料，我們至少可以知道殷代對於甲骨卜辭是如何的處理。在這十二個月之內，帝辛曾向東南方兜了一個大圈子，他是先到〃大邑商〃告祭祖廟，說要約會着攸侯喜去征人方；接着離開了大邑商向南行，經過了亳，鴻等許多地方到了攸國，同攸侯喜在淮河以南巡遊各地，又會到了齊；最後仍回到大邑商，再還殷都。帝辛這一次東征，隨地在打獵遊觀，似乎並未遭遇戰事，這也許是人方各國，因為天王的御駕親征而相率賓服了。我們試想，在當時，十二個月的旅途之中，王的行止要卜的，每逢癸日要卜旬，每夜要卜夕，應舉行的祭祀要卜，田獵要卜，所有的這些卜辭，現在都發現在小屯村裏，帝辛的都城。單只是卜行止，卜旬，卜夕的一部分殘片，已復原八個腹甲，二十五個骨版，這不及當時所用的十分之一，卜祭祀，田獵的甲骨，至少是倍之，這千數百塊龜甲牛骨，無疑的是用車載着，隨時隨地，供王占卜。大卜，大史，灼兆契辭之後，還須加意保存着，直待東征歸來，載回首都，再把這一組史料儲藏在窖穴之內，保留到三千年以後，才被朱姓從地下挖掘出來，這是一定的。這一組東征史料，儲藏也在一處，即有分散，相距並不太遠。如果我所

輯錄的材料不致大錯，我們可以作一個統計，統計這組卜辭見於各種著錄書中的殘片數目（書用簡名，原片引見殷曆譜閏譜五及日譜三）

前三二　後三　續八　菁二　卜二　明一　龜三　庫二　珠二　金五　甲（本編）五

見於各書的殘辭共約六十五片，復原甲骨三十三版。我們要注意的是劉鶚所得鐵雲藏龜一系的書，沒有一片。據甲編的五片推之，拓本號二五六二，二五七二，二六九一，出在大連坑，三三五五出在Ⅲ二一坑，這兩處，以前都不曾挖掘過；而五六一片是出在第九坑的，這正是朱姓曾經大舉挖掘之處，我們可以知道，以上各書中第五期的卜辭，都是出在小屯村北濱河之地，這是征人方一組史料，可以代為證明的。這一組史料的分散，是羅振玉四五片，明義士三片，日本五片，英國七片，中央研究院五片，這些只是我曾輯錄的殘存的一小部分。在這一組史料中，一塊甲骨的分散，也有同樣的情形。例如在帝辛十一祀，從正月四日庚子到二十五日辛巳卜王行止的一塊骨版，（圖見日譜三，骨十六）現在是破為四片，藏在三處：一片在英國的金璋氏（L. C. Hopkins）家，見金五四四；兩片在羅振玉家，見前二・一七・三又二・一七・五；一片在日本的聽冰閣，見龜二・五・七。這無疑的是朱姓挖出以前，本是一塊，挖出時打破了，無字部被棄去，有字的又分為三包，於是輾轉經古董商人之手，賣與三個不同的國度的收藏家了。凡是可以拚合的卜辭，大多數都是這樣的情形，其中也有在殷代已經打破了的，須看破痕的新舊而定。像我們所知，除了後岡的一片骨版，侯家莊的幾塊甲骨之外，其餘都是在小屯村出土的，而殷代又是有計畫的儲存着，所以如果能詳密的分期分類研究以後，自然而然的能各自成為一組史料，恢復殷代的舊觀，而甲骨的殘片，也會有大家團圓的一日。

第二は、以前に著錄された甲骨文字の出土地である。惜むべきは此の推求である。私の發掘の經驗により、村人の傳說を參照して、私達が第一回に殷墟を試掘する以前に、最も早く小屯村の村人が發掘した甲骨文字は、光緒二十五年（西元一八九九年）であることを知ることができる。出土の地點は、劉氏の二十畝の地所内にあり、私は上節に說いたところの第二區、二六坑の附近。其の次は、光緒三十年（一九〇四）にあって、發掘の地點は、朱氏の三十畝地の内に在り、私が上節に說いた第一區，九坑の附近は、發掘回數は最も多く小屯村中で、私の說いた第三區で、最も早いのは宣統元年（一九〇九）のことである。この三區出土の甲骨文字は、各々特點あって、包涵の時代は同じではないのは、具さに上述に見える。此れに由って已に著錄の材料の、出土の時期と地點を推斷することが出來る。列すると下表のようである。

甲骨文字の出土地點	挖掘開始	挖掘を繼續	著錄書	收藏者	特點
第一區（朱姓の地、濱河）	光緒三十年（一九〇四）	民國九年（一九二〇）	前、後、續、菁、庫、龜卜等	羅振玉、明義士等	一、二、五期
第二區（劉姓の地、朱地の西南）	光緒二十五年（一八九九）		鐵、戩、餘、拾等	劉鶚	一、二、四期
第三區（張姓の菜園、小屯村中）	宣統元年（一九〇九）	民國十二年より十七年に至る（一九二三—一九二八）	粹、卜、後、佚等	明義士、劉體智等	三、四期

私は次のように云うことが出来る、最も早いのは劉鶚の得た甲骨文字である。凡そ『鐵雲藏龜』一連の書では、第五期の卜辭はなく、第二區にあって出たものである。次はこれ朱氏の地内出土の大量は一・二・五期を包涵する。羅振玉が得たところ最も多く、分散していることも最も廣汎である。村中發掘の以前に、第三期の卜辭は絶無である。第四期の卜辭もやはり村中出土を最も多しとする。三期の卜辭は、第三回發掘でひとまとまりが「大連坑」[十六]から出たことがある。第九回に、ひとまとめの甲骨が侯家莊に出たのは、これはみな後の事である。だから以前の著録では『「殷契」佚存』(『殷契佚存』註[二]・第二輯一九八頁參見)に收める美國のスミスの一部分を除いて、『「殷契」粹編』(『殷契粹編』註[二]・第三輯一八頁ならびに序文一八頁參見)所收の「劉」善齋の一部分の外は、別の書にはみないものである。如し果して私達が各書中の材料の收藏と年代の内容を、以て考索を加え、再び上表を對證すれば、便にそれらの出土の地點を知ることが出來る。大概凡そ一九〇四年以前出土のものでは、劉氏の地であって、第五期の卜辭はない。一九〇九年以前出土は、第五期の卜辭である。村中には三・四期の卜辭がないのは朱氏の地であるからである。一九〇九年以後に得たものは、如し果して三・四期の物であったら、必ず村中出土であることは疑いないのである。抗戰期間には、上海にひとまとまりの甲骨が流傳して、私は會って摹本を見た。みな第四期の卜辭であり、村中出土であることがわかる。

最も興味ある證明は、殘片の拼合と一組の史料の分散である。殘片拼合は、例へば①私達が第一回に第九坑を發掘した、第一日に得た一塊の骨片は本編拓本番號二九七、登記番號は一・二・〇。〇一で、曾って『新獲卜辭寫本』第一號に收めた。私をして永遠に忘れさせないのはこの種の「惟王八祀」の四つの字で、「隹」字はたゞ一隻の鳥足と、兩片の羽毛を殘しただけである。私が「帝乙祀譜」を書いた時に至って、忽然として靈機が一動し、はじめてそれとその『庫方二氏所藏甲骨文字』[十七]の一六六一片とを拼合した。この一版は現在ロンドンの大英博物館にある。上面には四次卜旬と、四個の月名が記載されている。たゞ四個ともみな方法斂博士[十八](Dr. Frank Herring Chalfant 1865-1914)によって「三月」と横寫された。私はこの三月には四個の癸日はありえないと疑いを懷いた。是に於て老友吳金鼎博士[十九]に送った。彼に原片の一査を請ひ、結果は私の思った通りで一個の癸酉卜旬は二月であって、三個の癸未・癸巳・癸卯卜旬は三月であることを證明した、合せて「惟王八祀」の一片は、是に於て帝乙八祀一組の祭祀の系統であることを證明した。(殷曆譜祀譜二、帝乙八祀に詳らかなり)。この一塊の骨版は、就ち一九〇四年朱氏の大規模な發掘時に打ち破ったのである。一小片は土中に遺落し、ずっと私が再び掘り出すまでまた下に埋もれていた。一大片は輾轉として英國に賣られた。三十年以後、それらはやっと久しく別れていたのがめぐり逢い、別れ別れになったものが又めぐり逢ったのである。

②また第一回發掘で、小屯村前大路の旁に一片の龜甲を得た、本編拓本番號二六四、登記番號一・〇・〇四八五、寫本番號三六〇である。この一片は十七[一九二八]年十月二十七日、三六坑の深さ六フィートの處から掘り出したものである。現在『殷契粹編』の四二五號と綴合され、[二十]記しているところは第四期文武帝時である。丁日の日に咸戊を卜祭する辭には、貞人狄がある。『[民國]十七年[十月]試掘[安陽]小屯報[告]書』[二十一]に附列した第三十六坑東西剖面圖中に、私は會ってこの樣な一段の記載があった、「此の處は地面より六フィートに至る。民國十七年春に、村人の發掘を經て、故（もと）の土層は淩雜し、四尺のところに、鐵鍋の匙があり、即ち其の證であると。」(二四頁)私たちの發掘して得たところの一片は、正に擾亂した土層の東邊にあった。此れによって「『殷契』粹編』の二六四號は一坑の同出であることを知りうる、この村中は十七年春に發掘した一つの甲骨である。上海に運ばれて劉善齋に賣られた。已に彼の『殷虛卜辭』[二十二]中に編入し、村中の卜辭は劉善齋の外は、明義士の得たものを以て最も多いとされ、尚未だ出版していない。③民國十八[一九二九]年秋、私たちは張氏十八畝地中發掘の「大連坑」はまだ發表していない新坑である。包涵の時代は、第一期より第五期である。而して第三期の卜辭は以て尤も多い。一片有り本書に編入した、拓本は二二八二號、四塊を合成したものである。それらの登記番號は三・二・〇〇五六、六三、七七、一二〇。この一片は『殷契佚存』の二五六、一版と相い合せる（あわ）ことが出來る。『佚存』中また綴合した全片を列して九八六號とした。此の版は第四期卜辭である「求雨自上甲、大乙、大丁、大甲、大庚、大戊、中丁、祖乙、祖辛、祖丁、十示」の記載がある。この十示はみな大宗である。『佚存』中のこのひとまとまりの材料の來歷は、私が序中にあって曾って講じたことがあるので、する必要がない。以上の三つの例は、みな事實によっているのである。だから前著錄材料の出土地點を證明するに足るもので、讀者は此の類推をもってすればよい。

其の次には一組の史料の分散を講ずる。これについて私はたゞ能く已に整理したこのひとまとまりの甲骨卜辭をもって例とする。帝辛十祀十月から十一祀七月人方を征するの一組の史料にもとづき、私たちは少くとも殷代が甲骨卜辭に對してどのような整理であったかゞわかる。この十二ケ月の内には、帝辛は曾って東南方に向ってぐるっとひと周りした、彼は先づ「大邑商」にいたって祖廟に告祭し、攸侯喜は人方を征せんことを約束した。つゞいて大邑商を離れて南行に向い、亳・鴻ら多くの地方にゆき、經過して攸國に到り、攸侯喜と淮河以南にあって各地を巡遊して、また齊に到り、最後は仍ち大邑商にまわりついて、再び殷都に還った。帝辛はこの一度の東征で、至る所で狩獵遊觀したが、戰爭に遭遇したことは一度もなかったようである。これはまた人方の各國が天王の御駕親征によって相い率いて服從したのである。私たちは試みに想ふに、當時にあって、十二ケ月の遊行の中、王の行止に卜を要し、癸日に逢ふ毎に卜旬を要し、毎夜卜夕を要し、應に擧行すべき祭祀には卜を要し、田獵に卜を要し、有するところのこの卜辭は、現在みな小屯村で發見し、帝辛の都城である。單にたゞ卜行止、卜旬、卜夕の一部分の殘片で、已に八個の腹甲と二十五個の骨版が復原し、これは當時用いた十分の一に及ばない。祭祀、田獵を卜う甲骨は、少くもこれに倍する。この千數百塊の龜甲片骨は、疑いなく車を用いて載せてあり、時に隨い地に隨い、王の占卜に供している。大卜、太史の灼兆契辭の後ち、また須らく意を加えて保存している、ずっと東征から歸えるのを待って、首都に載せて歸った。再びこの一組の史料を窖穴の内に儲藏して、保留して三十年以後にいたり、はじめて朱氏によって地下が發掘された。これは確かなことである。この一組の東征史料の儲藏はまたひと處にあり、即ち分散があり、相い距ること決して太だ遠くはない。如し果して私の輯錄するところの材料に大きな錯り（あやま）を致さなければ、私たちは一個の統計を作りうる。この組の卜辭が各種の著錄の書中の殘片數目の中にみえるよう總計する。(書は簡明を用ふ。原片は『殷曆譜』閏譜五及び「日譜」三に引見)。

前三二　後三　續八　菁二　卜二　明一　龜三　庫二　珠二　金五　甲(本編)五。

各書に見える殘辭は共に約六十五片、復原の甲骨は三十三版。私たちは注意を要するのは劉鶚の得たところの『鐵雲藏龜』の一連の書であるが一片もない。『甲編』の五片に據っ

てこれを推せば、拓本番號は二五六二、二五七二、二六九一は、大連坑に出て、三三五五はE二一坑に出た。この二ヶ所は、以前はみな發掘したことなく、而して五六一片は第九坑に出た。これは正に朱氏の曾つての大學に發掘した處であることを、私たちは知ることが出來る。以上の各書中第五期の卜辭は、みな小屯村北濱河の地に出た。これは人方を征するの一組の史料であって、代りに證明することが出來る。この一組の史料の分散は、羅振玉の四五片、明義士の三片、日本の五片、英國の七片、中央研究院の五片である。これはただ私が曾って輯錄した殘存の一小部分である。この一組の史料の中にあって、一塊の甲骨の分散は、また同樣な實情である。例へば帝辛十一祀にあるように、正月四日庚子より二十五日に到って辛巳卜王行止の一塊の骨版である（圖、日譜三、骨十六に見える）、現在は壞れて四片となった。藏されて三ヶ處にある。一片は英國の金璋氏（L. C. Hopkins）の家にある。金五四四に見える。兩片は羅振玉家にあって、前二、一七・三　又二、一七・五に見える。一片は日本の聽冰閣（『龜甲獸骨文字』註【四】・第一輯一四七頁參見）にあり、龜二、五・七に見える。これは疑いもなく朱氏の發掘以前のもの、本は一塊であったのである。發掘の時は打破され、字のない部分は棄て去られた。字のあるのはまた分れて三つの包みとし、こゝにおいて古董商人の手を轉輾として、三つの同じでない國家の收藏家に賣られたのである。凡そ拼合可能な卜辭であれば、大多數はみなこの樣な事情である。私たちの知るところのものは、後岡の一片の骨版を除いて、侯家莊の幾く塊かの甲骨の外、其の餘りはみな小屯村出土のものである。而るに殷代にはまた計畫的に儲藏しているから、如し果して能く詳密に分期分類研究した以後に、自然にして然るべく各々自から成って一

組の史料となし、殷代の舊觀を恢復することができる。而して甲骨の殘片は、また曾って大家の圖々の一日となるのである。

註【十六】　大連坑　これは基準溝と基準溝との間の坑を連坑といゝ、さらに縱橫の數坑をつらねてその間を全面的に發掘したものを大連坑という。

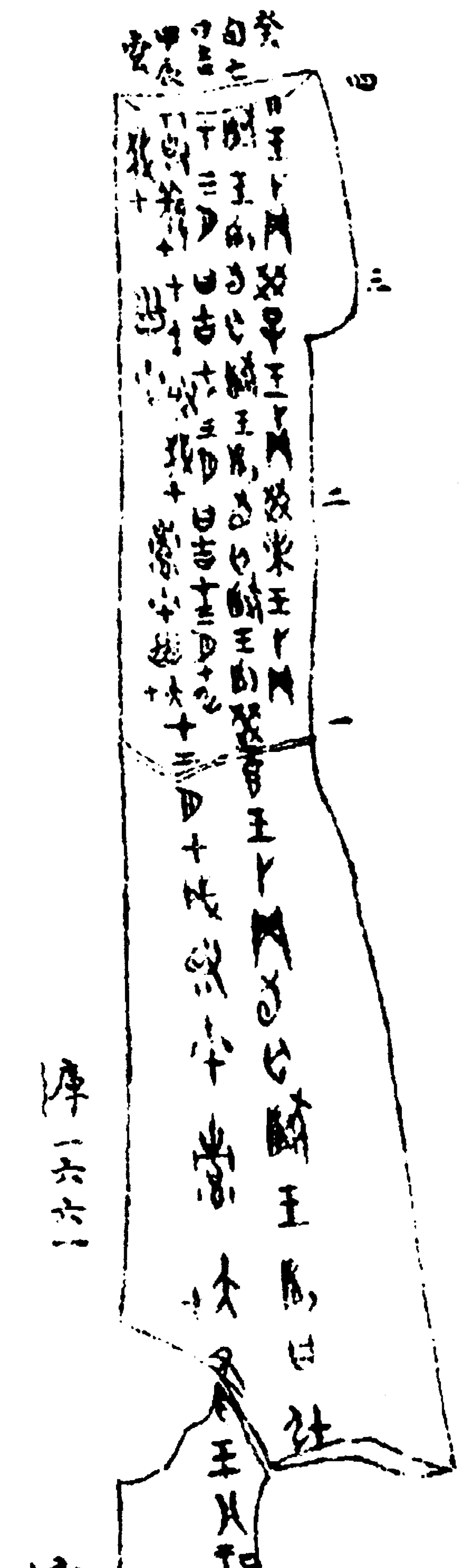
註【十七】　庫方二氏藏甲骨卜辭（The Couling - Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone）　本書は山東省濰縣の牧師であったイギリス人のSamuel Couling（庫壽齡）、アメリカ人のFrank H. Chalfant（方法斂）兩氏の蒐集によるものである。甲骨の入手は清の光緒三十年（一九〇四）から三十四年（一九〇八）の間に古董商より購入し、骨六七〇片、甲一〇一六片、鹿角一、合せて一六八七片を數へる。それらはイギリスのRoyal Scottish Museumの七六〇片、ロンドンのBritish Museumの四八四片、アメリカのCarnegie Museumの四三八片、シカゴのField Museumの四片をそれぞれ藏している。この書の圖版はFrank H. Chalfantの鉛筆による模寫、Roswell S. Brittonの校閲。甲骨の順次は購入の前後を以てし、博物館ごとに甲と骨とに分類している。陳夢家はこの書を次のように評している。

此集之出、予甲骨學者以材料上之便利、然摹寫不精、眞僞摻雜、實編輯者重大之過失。編校者于甲骨毫無所知、故開首數片及最後鹿角刻辭、顯然僞刻、而不知抉擇、使初讀此集者、將疑全集皆爲僞作矣。倫敦博物院一部份之獸骨、

尤多甚明顯之僞刻。集中之龜甲、僞刻較少。凡大片獸骨、類多大字、整齊匀行、文理不通、款式不對之僞辭、辭中好用曰字、似皆出于一人手筆。然如七十三頁之四旬三旬甲子表二骨、似非僞作、甚可貴也。集中所有僞刻之獸骨、其上每原有少數眞刻、商賈以字多索高價、故造爲僞辭。吾人甚願四博物院、先將所藏甲骨攝影、交中國學者考定之、然後抉擇原刻者拓印、其有一部份僞刻一部份原刻者亦選印其原刻、其花紋彫刻爲眞者但影其紋飾略其僞辭可也。（『燕京學報』第十九期・出版界消息より）

R氏の序文によると一九一四年頃に完成していたとあるが、出版は一九三五年（民國二十四年）十二月、商務印書館石印本一冊。

「惟王八祀」と庫方の一六六一片の綴合は左の卜片である



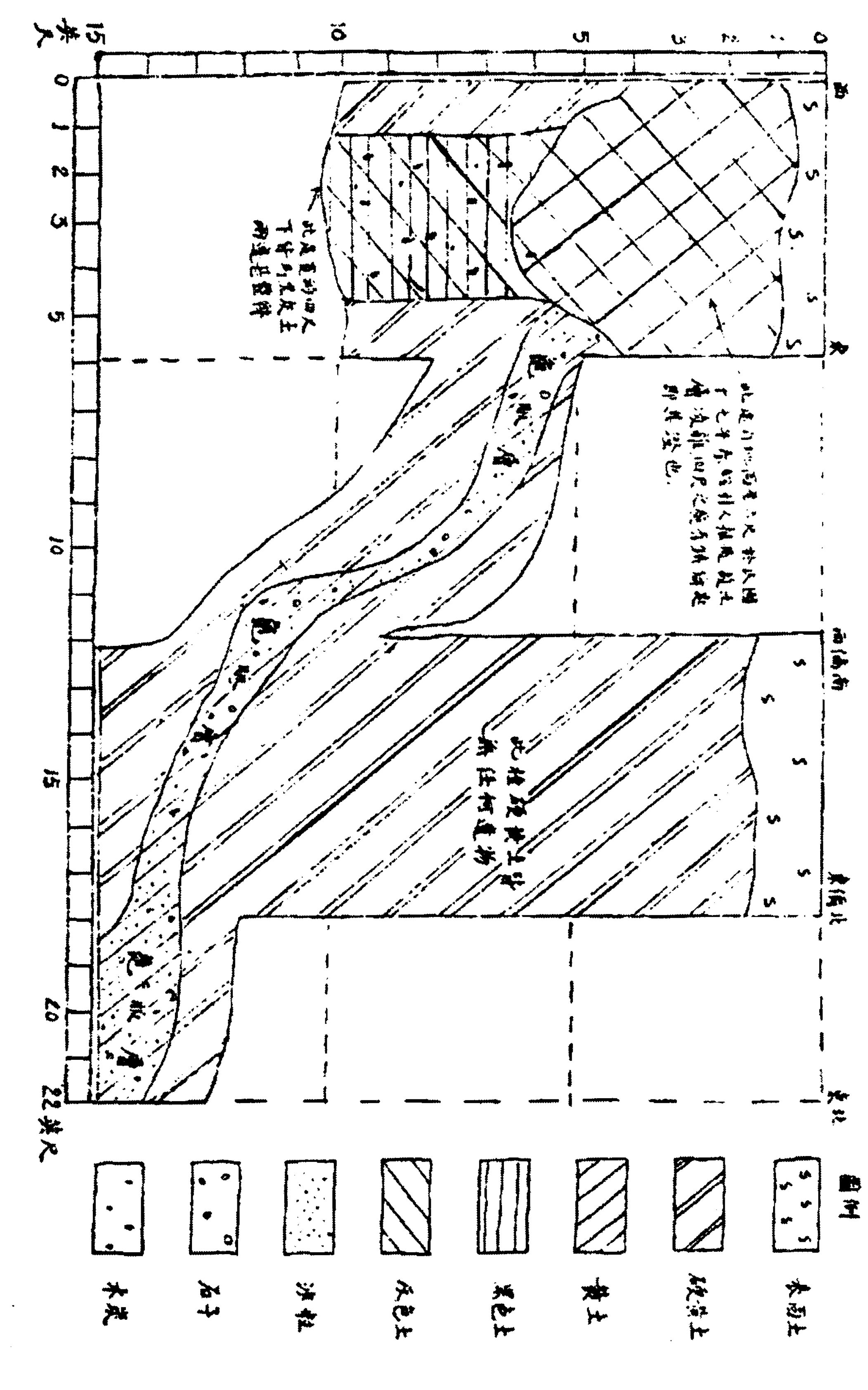
註【十八】　方法斂（Frank H. Chalfant）（一八六五～一九一四）アメリカ人。山東省濰縣に駐在する長老會の牧師。一九〇三年～一九一四年の十年間甲骨の蒐集に努力した人。方氏の研究は發表されていないが、自からの手で一片一片、摹寫したことにある。その方法は龜甲の齒縫、貿紋、骨版の邊縫、卜兆を精細に寫しそれを雕刻したのが、『庫方二氏藏甲骨卜辭』（The Couling - Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone）『甲骨卜辭七集』（Seven Collection of Inscribed Oracle Bone）『金璋所藏甲骨卜辭』（Hopkins Collection of the Inscribed Oracle Bone）等である。

註【十九】　吳金鼎（一九〇一～一九四八）字は禹銘。山東省安邱の人。齊魯大學卒業。つづいて清華大學研究院卒業。のち英國ロンドン大學に留學し考古學を專攻した。歸國後は中央研究院歷史語言研究所に入り李濟氏を師とし、第四次安陽小屯發掘から參加、その發掘報告や研究論文がある。特に彼の功績は山東龍山の黑陶文化の發見、城子崖の發掘があげられる。戰後は齊魯大學の教授に任じていた。

註【二十】
(1)　壬寅卜犬：司、亩羊不二？
(2)　丁未卜犬：屮咸戊
(3)　丁未、犬：屮咸戊、牛一不二？
(4)　丁未卜、犬：屮咸戊、學戊乎一？

註〔三十二〕 民國十七年十月試掘安陽小屯報告書（『安陽發掘報告』第一期所收） 董作賓撰。

民國十七年、董作賓は洛陽に赴き石經の出土地を調査、その歸途安陽殷墟によった時の報告で、發掘前後の詳細な經過がわかる。これは中央研究院歷史語言研究所からの派遣であるが、正式の殷虛發掘以前の試掘である。十八日間、參加工作人三十餘人。第三十六坑東西剖面圖を左に揭げておく。



註〔三十三〕『殷虛卜辭』（Oracle Records from the Waste of Yin） 明義士（James Mellon Menzies）撰。甲骨の纂刻本で明義士所藏の五萬片より選し、二三六九片を收錄する。自序によるとこの書は三回書き改め三年にして成ると。また著者の『史前の中國』は中國歷史の黎明とその文化の進展を論じたものであるが、本書はその一部、第二部は『殷虛卜辭字典』、第三部以後の諸書は、甲骨の諸片によって中華民族の古代宗教と、各種の古石骨瓦器を資料として中國古代の文化問題を論ずるとある。出版は一九一七年三月、上海別發洋行。石印本一冊。

第三、是甲骨文字在地下埋藏的情形。根據發掘的經驗，我們大致可以明白甲骨文字在地下埋藏的情形。這是很複雜的問題，應該在總報告遺址部分和我打算寫的〝甲骨文字與殷墟遺址〞中詳細地講述，在這裏只能約略的一談。首先我們須要知道的是殷墟的範圍有多大？這還是一個謎。但說殷代的宗廟宮室的範圍也不大清楚，至少是從小屯村起，北至洹水南岸，東至洹水的西岸，我們發掘過的地方，都是當時的宮禁所在。第一次發掘，我曾疑心殷墟曾被黃河淹沒過，後來已證明是錯了。但是洹水破壞殷墟的力量也相當的大。據最近石璋如君研究遺址的結果，殷代宮室原來是規模宏大，有計畫的一組建築物，雖然時期有先後，卻不是沒有系統。殷代的宮禁，大概是以中間的純粹黃土台基為中心，壁直向南有許多門，都在一條直線上，而兩旁的建築物，可能是東西對稱的。因此可以知道東邊有大部分已被洹水破壞過的。當時建築物，分為地上與地下兩種，地上的是宗廟宮室，現在只能看見些版築的基址，柱下的石礎。地下的是復穴竇窖，復穴是地下室，可以居住和工作，竇窖又是室內的井，用以存儲物品。在小屯村，我們十年發掘，也只是一小部分，共得到版築基址五十六座，復

穴竇窖六百一十七處，當時宮禁中建築物的繁複可想而知了。每一座版築，附近必有穴窖，甲骨文字，大部分是出土在穴窖之中的，埋藏的情形，可以分為四類：第一類是〝存儲〞，大連坑〝包涵一、二、三及五期，這兩個坑內，無疑的是在武丁時已用它存儲甲骨卜辭了，到祖庚祖甲時繼續使用，以後各王或者不在此坑存儲，可是到了帝乙帝辛時，又把卜辭存入了，所以這一、二、五期的甲骨文字，才能同出於一坑。這第九坑，大連坑，都是復穴而兼有竇窖，甲骨文字就是存儲其中的。有的竇窖不在復穴之中，直接由地面鑿土為之，如第四次發掘的E一六坑，這是一個圓井，應該叫作竇的，井中只有一、二期的卜辭，深至十公尺，下及水面，因為兩丈以下，全是沙土。在第二期祖甲時，此竇塌，也就廢而不用了。所以當時存儲的東西，也就保留到如今。有意的存儲，很顯明的是上節所舉征人方卜辭，從老遠攜帶回來，不是要保存是為什麼？在小屯村中，三、四期卜辭集中一個地方，在侯家莊，把六塊腹甲，半片背甲疊在一起，放在地下室裏，也許是預備帶回〝小屯〞存儲而又遺忘了。第二類是〝埋藏〞，這一類似乎是很少的，第十三次發掘，得到了一萬七千多片龜版，（已收入乙編）在H一二七一個灰土坑之中，據石璋如君的記載，H一二七坑的堆積，可分三層，上層為灰土，下層為綠灰土，中間一層是龜甲雜於灰土的堆積中。距地面一公尺七寸處發現坑口，坑口以下五公寸，發現龜版，至二公尺一寸為止，龜甲文字，厚約一公尺六寸。此坑乃是復穴中的一個竇窖，開鑿的時期很早，初存穀物，後來廢而不用了，就用它埋藏龜版。據石君觀察，這坑是將龜版從北面傾入的，同時發現一具人骨，而此人似是掌管龜甲者。因為龜甲既已埋了，掌管人也就殉了職。但是這種情形，在別的坑是沒有的。第三類是〝散佚〞，因為當在許多復穴內或者版築土中，灰土中，偶然發現幾片甲骨文字，都應該屬於這一類。因為當

時貞卜刻辭的甲骨太多了，搬運的時候，免不了隨處遺落，但這些都是少數，不能和存儲同埋藏相比。例如：第六次發掘在一個地下室一復穴的土階旁發現一塊骨版上面有第五期的卜辭，大概是無意中的遺落。有些小塊甲骨文字，雜入灰土中，後來建築新宮室，就被打入版築層裏了。凡是零星發現的甲骨文字，可以說都是當時偶然散佚的。第四類是〝廢棄〞，這種情形也不多，我們可以看見，一塊骨版被鋸去了文字的一半，改為他物的，有時把用過的骨版，拿來作練習書契之用的，許多干支表，就是如此。在本編中，拓本二六九二、二六九三、二八八〇、二八八一，四號，原是大胛骨一版，裂而為二，正反兩面均有文字。可是在正面只有十組卜辭伴着卜兆，是第三期貞人宁所記的，其餘的還有四十段卻都是初學的人仿抄貞人宁的卜辭，作為習字之用的。這樣的情形，與其說是廢棄，不如說是〝廢物利用〞。以上四類，只是我個人粗略的印象，至於詳細的研究，須待到將來寫〝甲骨文字與殷墟遺址〞一文的時候了。

第四，是可以確證遺址遺物的年代。在殷墟全部遺址中，能夠確定每一個建築物相當於某一王的時代的最好標準，就是相伴出土的甲骨文字。許多版築土中，夾雜着零星破碎卜辭，無論如何小，都可以發揮它們最大的效用。即如殘餘一半個干支字，除了甲、乙、己、壬、卯之外，都可以由字形判定相當的年代，別的字更不必說。例如上節所舉的E一六坑，是第二期祖甲時因塌陷而廢棄了的，E二一坑，會出有第五期征人方卜旬之辭（四、二、〇〇二五），同出的皆是帝辛之物，如一塊鯨魚的脊椎骨，一個象的下顎骨，一隻鹿頭刻辭，多少都和東夷有關係的。此坑出的陶器及其他遺物，也和E一六坑迥然有別。E一六坑可以證明是在祖甲以前，E二一坑可以證明是在帝辛時代，這兩坑的年代，相距在一百年以上，所以文物制作，便有相當的演變。又如居於中部的黃土台基，在它的北面，就是一個復穴，穴中又有竇

窖，即是〃大連坑〃、包涵着武丁以至帝辛時的卜辭可以由此推測這黄土台基的建築是相當早的，因為以後所有向南擴充的建築物，都以它為重心。又如小屯村中，侯家莊南地，所有建築物，地上的和地下的都不能早過第三期康辛康丁之世，這也是甲骨文字可以作證明的。這些都是本編材料在考古學上的另一貢獻，總報告中將詳細加以研討。

　第三は、甲骨文字の地下埋藏の情況である。發掘の經驗を根據として、私たちはおゝよそ甲骨文字の地下埋藏の情況をはっきり知ることができる。これは實に複雜な問題である、當然總報告の遺址部分と私の書こうとしている『甲骨文字與殷墟遺址』[三十三]の中で詳細に講述すべきであるから、こゝでただ要約を述べる。首めまず私たちは須らく殷墟の範圍の大きさを知ることが必要である。これはやはり謎である。ただ殷代の宗廟室の範圍は大だはっきりしていない。少くとも小屯村より起り、北は洹水の南岸に至り、東は洹水の西岸に至る、私たちの發掘したことのある地方は、みな當時の宮禁のあったところである。第一回發掘で、私は曾って殷墟は黄河によって水びたしになったことがあったのではないかと心に疑った[三十四]。のち已にこの誤っていることを證明した。ただ洹水が殷墟を破壊した力量はまた相當大きなものである。最近石璋如[三十五]君の遺址研究の結果に據って、殷代宮室のもとの規模は廣大で計畫的な一組の建築物である[三十六]。時期は先後有るといえども、卻って系統はないことはないのである。殷代の宮禁は大概中間の純粹な黄土の台基を以て中心となすのである、まっすぐに南に向い門が多く有り、みな一條の直線上にあって、兩旁の建築物は恐らく、東西對稱であった。此れに因って東邊に大部分已に洹水による破壊があったことが知られるのである。當時の建築物は、地上と地下の二種類にわけられ、地上のは宗廟宮室である、

現在ではただよくその版築の基址、柱下の石礎を見る。地下は[三十七]復穴竇窖[三十八]であり、復穴は地下室で、居住と工作場である。竇窖はまた室内の井である、もって物品を儲藏する。小屯村にあって、私たちは十年間發掘して、またただの一小部分で、合計版築基址五十六座、復た穴竇窖六百一十七處を得た。當時の宮禁中建築物の繁雜なことを思い知ることが出來る。一座の版築ごとに、附近は必ず穴窖がある。甲骨文字は、大部分穴窖の中から出土したのである。埋藏の情況は、分けて四種類とすることが出來る。

　第一類は「貯藏」である。貯藏とは、意味のある保存貯藏である。例へば第一回に發掘した第九坑の如く、一、二、五期を包涵し、第三回の發掘の「大連坑」は一、二、三及び五期を包涵し、この二個の坑内は、疑いなく武丁時にあり已にそれをもって甲骨卜辭を貯藏した。祖庚祖甲の時に到って繼續して使用しており、以後各王は此の坑に貯藏はなかったが、帝乙帝辛時に到って、また卜辭を存入した。この一、二、五期の甲骨文字がやはり能く一坑から同出したのである。この第九坑は、大連坑でみな復穴であって竇窖を兼有しており、甲骨文字は就ち其の中に貯藏されているのである。竇窖があるのは復穴の中にはなく、直接地面の鑿土に由ってこれが作られ、第四回發掘のE一六坑のごとく、これは一個の圓井である[三十九]ならば當然竇に作ると呼ぶべきである、井中にはただ一・二期の卜辭があるだけで、深さは十米に至り、下は水面に及び、因って二丈以下は、全て沙土で、第二期は祖甲の時に、此の竇は陷没し、また就ち癈てられ用いられなかった。だから當時の貯藏の物は、また就ち保留されて今に至る。意味の有る貯藏が、實にはっきりしているのは上節に擧げたところの人方を征するの卜辭である。ずっと遠くから攜帶し回り來たのは、保存の必要がなければ何の為であったろうか。小屯村中には、三・四期卜辭は一個の地方に集

中し、侯家莊には、六塊の腹甲と、半個の背甲は一かさねになって、放たれて地下室にあり[三十一]、またこれは〃小屯〃に持ち歸えろうとして貯藏してまた忘れ遺したのであろう。

　第二類は「埋藏」である、この一類は實に少ないように見える。第十三回發掘で、一萬七千近くの龜版（已に『乙編』に收入）H一二七一個の灰土坑の中にあり、石璋如君の記載[三十二]によれば、H一二七坑の推積は、三層に分けることが出來る、上層は灰土で、下層は縁灰土で、中間の一層は龜甲が灰土の推積中に雜っている。地面を距たること一米七十糎の處に坑口を發現した。坑口以下五米で、龜版を發現した。二米十糎に至って止まる。龜甲文字の厚さは約一米六十糎であった。此の坑は乃ち復穴中の一個の竇窖で、開鑿の時期は實に早く、初め穀物が存し、のち廢されて用いられず、就ちその龜版埋藏に用いられた。石君の觀察に據れば、この坑は將に龜版が北面より傾入して、同時に一組の人骨を發見した。而も此の人は龜甲を管理した人のようである。だから龜版は既に埋められて、管理人もまた殉職したのであろう。ただこの種の事情は別の坑にはないのである。

　第三類は「散佚」である。多くの復穴内あるいは版築の土中にあって、灰土中に、偶然に幾片かの甲骨文字を發見した、みな當然この一類に屬するものである。因って當時の貞卜刻辭の甲骨ははなはだ多く、運搬の時は、隨處に遺落は免れない。ただこれ等はみな少數である、貯藏と同じく埋藏には比較することが出來ない。例へば、第六回發掘は一個の地下室の一復穴の土階の旁にあって、一塊の骨版を發現した上面には第五期の卜辭があったが、大概は無意識の遺落である。ある小塊な甲骨文字で、灰土中に雜入し、のち新宮室を建築したとき就ち版築の層に入れられた。凡そ零細に發現された甲骨文字は、當時の偶然の散佚であるということが出來る。

　第四類は「廢棄」である。この種の情況はまた多くなく、私たちは見ることが出來る。一塊の骨版は文字の一半が鋸去され、改めて他の物となっている、時には用いられた骨版は、持ってきて書契の練習に用いられ、多くの干支表も就ち此のようである。本編中、拓本二六九二、二六九三、二八八〇、二八八一の四號は、もと大胛骨の一版である。裂れて二つとなり、正反兩面は均しく文字が有るが、正面にはただ十組の卜辭があり卜兆を伴っている。第三期貞人兇の記すところである。其の餘りはまた四十段であり卻ってみな初學の人の仿抄で貞人の字の卜辭である。習字の用途に供したものである。この樣な情況は、其れは廢棄というよりも〃廢物利用〃というのである。

　以上の四類は、ただ私個人の粗略な印象であるので、詳細な研究に至っては須らく將來に書かれる『甲骨文字與殷墟遺址』の一文の時に待たねばならない。

　第四は、遺址遺物の年代の確證である。殷墟全部の遺址中にあって、能く一個の建築物が某の一王の時代に相當するかの最も好い標準は、就ち相い伴っての出土の甲骨文字である。多くの版築土中には、零細な破碎の卜辭を夾雜し、どんなに小さなものであろうと、みなそれらの最尤の效用を發揮するものである。即ち殘餘の一半個の干支字の如きものでも、甲、乙、己、壬、卯の外を除いては、みな字形によって相當な年代を判定できる。（『甲骨文斷代研究例』補註〔三〕・第二輯五四頁參見）別の字には更に言うに及ばない。例へば上節に擧るところのE一六坑の如く、第二期祖甲時の陷没に因って廢棄したものである、E二一坑は、曾って第五期人方卜旬の辭が出土した（四・二・〇〇二五）[三十三]。同出のものは皆な帝辛の物で、一塊の鯨魚の脊椎骨の、一個の象の下顎骨、一隻の鹿頭刻辭の如く[三十三]、多少はみな東夷と關係がある。此の坑に出た陶器及び其の他の遺物は、また E一六坑と確然

として區別がある。E一六坑は以て證明したら祖甲以前にあるのである。この兩坑の年代は、相い距ること一百年以上にあり、だから文物制作は、便に相當な演變がある。又中部の黄土の台基における如く、その北面にあって、就ち一個の復穴であり、穴中にはまた竇窖があり、即ち「大連坑々」である。武丁より帝辛の卜辭を包涵している。此れに由ってこの黄土台基の建築は相當早いものであることが推測できる。因りて以後に有する南向きの擴充した建築物であって、みなそれをもって悳とする。また小屯村の如く、侯家莊の南地は、すべての建築物、地上のものと地下のものは、みな第三期康辛康丁の世より早いことはありえない。また甲骨文字を證明することが出来るものである。これらはみな本編資料の考古學上における別な一貢獻であって、總報告に詳細に研討を加えるであろう。

註[三十三]　遺址部分の總報告は部分的には發表されているが總報告書はない。『殷墟卜辭與遺址』は未發表。

註[三十四]　殷墟は黄河による淹沒説の訂正は、『甲骨文斷代研究例』坑位に記るされている。

註[三十五]　石璋如（一九一八－　）河南偃師の人。考古學者。河南大學卒業。小屯安陽第五次發掘では河南大學學生として發掘に參加している。のち中央研究院歷史語言研究所考古組所員となり、幾くたびか發掘工作の主持をした。その報告論文に『小屯第一遺址的發現與發掘』、『中國歷史地理』、『小屯的文化層』、『殷

代的鑄銅工藝』、『殷代的豆』、『周代兵制探源』、『殷代的車』等百餘種。戰後は台灣にうつり、引き續いて中央研究院歷史語言研究所所員。昭和三十五年、日本に遊學され、京都大學文學部において十二月二十二日から五回にわたって「安陽考古概觀」と題する特別講義をおこなった。

註[三十六]　中國考古報告集之二、『小屯』第一本、遺址的發現與發掘、乙編　殷墟建築遺存參見。

註[三十七]　復穴　地下の部屋。董作賓氏はこれについて次のようにいう。「地面下的房室、一種是復穴、也就是半穴居。小屯遺址中多大圓坑、直徑約四五公尺、深三四公尺、底平、有出入之口、有土階、在當時坑上必有圍牆、構木爲頂、覆以茅茨、現存着僅坑口而已。卜辭中的宮字、就像屋頂下有圓坑之形。詩經大雅所稱「陶復陶穴」、「復穴」即指此類地下室而言。復也寫作𥨊、廣韻：「𥨊、地下室也」。穴、說文「土室」也。圓坑本是一般社會的居室、小屯附近的殷代遺址中均有、但版築的基址、只見於王宮。這類復穴、在殷代當爲百工臣僕所居、或爲工作及儲藏之用。復穴的形式、有渾圓的、橢圓的、略呈方形或長方形的；口徑約由二公尺至四公尺；四壁微有陂度、故底徑略小；深度普通在二公尺左右。此類復穴中出土之物：有陶器、銅范、綠松石、煉渣、木炭、紅燒土、冶銅器、骨柶骨簇、獸骨、鹿角、紡輪、蚌珠、蚌飾、蚌殼、壁上的麥楷泥、坑底的席紋等、可以推知在殷代這種大圓坑必爲居住、鑄銅器、製作骨器蚌器的所在、也有的是積存龜

甲牛胛骨原料的地方。大圓坑中又有圓井或方井、則是專供儲存物品之用的。大圓坑有一部分應該屬於遷殷以前民間住居的復穴、大量的黑陶器、石簇、石斧、骨錐、蚌鋸之類、皆是在早期填入的；其中也有遷都以後仍然使用的。大部分則是殷代王室所作的、配合着地面上的建築、一直用到殷代末年。」（『甲骨學六十年』二、殷代文化寶庫的開發　三〇頁）

註[三十八]　竇窖。室内の井をいう。これについて董作賓氏は次のようにいう。「一種是竇窖、就是小屯遺址中常見的方井和圓井。禮記月令：「仲秋之月、可以築城郭、建都邑、穿竇窖、修囷倉」注云：「入地橢曰竇、方曰窖」。通俗文云：「藏麥穀曰窖」。竇同窖、都是儲藏穀物之用的地下倉庫。我們所發現的圓井方井就是殷代的地下倉庫。圓井的直徑、從一・五公尺、到二・一公尺井的上口、有在地面的、深至一一公尺；有在復穴中的、深度從一・四公尺到七・七公尺。方井每作長方形、從長一公尺、寬〇・六公尺到長三・二公尺寬三公尺、深度各異、略同圓井。這些竇窖、出土之物：有獸骨、鹿角、陶片、蚌殼、石器、骨器、龜甲、銅器、玉器、石刀等。其中有多量綠灰色土、又甚輕鬆的、大概是穀倉；多量的甲骨文字、也以竇窖爲專門存儲的倉庫。在小屯遺址中、此類復穴竇窖的遺蹟佔第一位、總計已發掘的有六百一十七處。有許多地下面的房屋倉庫、經過填塞、改造爲地上宮室宗廟的、而且改造不止一次、這是小屯遺址的複雜情形。」（『甲骨學六十年』二、殷代文化寶庫的開發　三一頁）

註[三十九]　E一六坑の圓井。第四次發掘のE一六坑については李濟氏が本書の董氏序末に「跋彥堂自序」と題して論述している。（本輯八〇頁參見）

註[三十]　侯家莊六塊の腹甲は、七版の大龜、乃ち六個の腹甲、半個の背甲をいう。詳細な報告論文は董作賓氏の「安陽侯家莊出土之甲骨文字」（『田野考古報告』第一冊所收）がある。

註[三十一]　H一二七坑の推積論（石璋如氏論述）は「小屯的文化層」（國立中央研究院歷史語言研究所集刊、外編三種）にあり。未見。

註[三十二]　第五期人方卜旬の辭、「王來征人方」（四・二・〇〇二五）の骨版。この骨版は『殷契佚存』二三五頁に圖を紹介しておいた。文は次のようである。

戊戌　王蒿田☒
文武丁祔☒
王來王征□方☒。

註〔三十三〕　鯨魚の脊骨、象下顎骨、鹿頭刻辭出土の圖（日甲骨文斷代研究例 p 三六九頁より）

再談一談我現在對於甲骨文字的看法。從我在北京大學研究所國學門讀書時起，開始鑽入甲骨堆中，到今天已足有二十五年，我對於甲骨文字的意見，隨時在改變，這也許和一般治此學者是同樣的。二十年以前看它是一個神秘之府，十年以前，看它是一座寶山，到今天我的意見卻又有些不同了。郭沫若氏自己批評他的古代社會研究說：〝其中有好些未成熟的甚至錯誤的判斷，一直到現在還留下相當深刻的影響。〞又說，〝有的朋友還沿用着我的錯誤；有的則沿用着我的錯誤的徵引而又引到另一錯誤的判斷，因此關於古代的面貌，引起了許多新的混亂。〞這自然不單指甲骨文字的部分，可是過去我們研究卜辭的結果，也難免不是如此的。十年前我曾誤解了〝冊六〞以爲甲骨就是殷代的簡冊，這毛病是過於〝尊題〞。我們現在固然應該特別的慎重，可是〝後之視今，亦猶今之視昔〞，現在是否沒有錯誤，也很難說。譬如我自以爲寫殷曆譜的方法是對的，偏有人說這方法完全錯了，如果他有更對的方法，我就應該認錯，應該向他合十：〝阿彌陀佛，善哉！善哉！吾過矣！吾過矣！〞不然，只好請他原諒我的〝執拗〞了。治學以求真理爲依歸，像郭氏那樣勇於認錯，是很可佩的。

我現把對於甲骨文字的看法，姑且寫在下面，是是非非，也留待以後反省罷。

第一、甲骨文字，不能代表殷代文化。這裏所謂代表，是指一般人的意見，以爲殷代的文化，只能從甲骨文字裏去尋找，只有甲骨文字中的記載，是整個的殷代文化。這是一種奢望，是一種不可能實現的企圖。我們需要明白甲骨文字的性質知它的內容，給它一個適當的估價，不要太看低了，也不要太看高了；然後我們才可以推想殷代文化的真象是什麼。1. 甲骨文字，只是殷代應用文字的一種，是一種專記貞卜事項的文字，有點像周易的卦爻辭，也有點像現在神廟中的籤文。我們知道殷代使用文字已很普遍，例如在各種器物上寫字或刻字，白色陶器，灰陶，骨角器，玉、石器，都常常記着銘文或人名的，而多量的銅器上又常有數十

字的刻辭。甲骨卜辭，也因爲是在不腐朽的東西上幸運地被保存到現在而已。殷代文字的應用，大部分應該是在典冊上，所惜的是典冊早已不存在了。可是在甲骨文字裏，還可以看見一些典冊的影子。例如〝王若曰云云〞是當時冊命文告的一種習用語，原是寫在簡冊上的文章，有時候史官把它抄入骨版中了，這見於本編拓本一五。四號，是文武丁時的人抄的。在祖甲時，有一個史官，刻了兩個月的日曆，是正月甲子到二月癸亥，我曾引入殷曆譜的朔譜一（後下一、五），我們如果看見過漢代的曆簡，那上面記着的是月名到每日的干支，就可以想像這是殷代的〝曆簡〞的一段抄本。在帝乙帝辛時，我們知道五種祀典的擧行，是如何的整肅，祭祀的開始，有一種禮節叫作〝工典〞，意思是獻上先祖先妣的譜牒，這典上記載的是某日以某種祭祀祭祀某人，我們也曾找到了兩個典的抄本，一個是從甲戌日翌祭上甲起，一個是從甲寅日起（粹一一三、一一四，說見殷曆譜祀譜）。在武丁時，也常見〝沚戠爯冊〞的記錄。這都是殷代〝有典有冊〞的證明。我們知道了甲骨文字，只是一種寫刻在甲骨上的卜辭，它在殷代文字的應用上，只佔一小部分，就不會再把它估價過高了。2. 殷代普通的文例，只有下行而又左行的一種，這是知現在一樣的。從許多較長的銘刻中，可以證明如此。我們發掘得到的，像本編拓本三九三九一三九四一號牛頭骨刻辭一件，鹿頭骨刻辭二件，小臣絲石毀銘文一件，佚存中骨器銘刻三件，都朗度（Toronto）博物院藏骨器銘刻一件，方藥雨藏小臣雍玉器一件，以上獸頭、骨器、玉器、石器、上的文字，共有九見，都是下行而左的，沒有一個是右行。銅器的銘文更多了，也沒例外。這是殷代普通的文例，不可見的典冊，也應該是如此的。至於甲骨卜辭的文例，也很簡單，只在左行之外多了一種右行。這原因是爲的對稱，爲的美觀。卜辭是跟着卜兆的，卜兆在一塊腹甲上，從中線分爲左右兩半，左右兩邊卜兆是相對的，於是文字也求其相對，遂有左行，有右行。龜背甲是剖分爲左右兩半的，

牛胛骨原有左右二骨，所以它們的關係也同腹甲一樣，卜兆分左右向，文例分左右行。這是爲了對稱的美，和塗飾硃墨以求美觀，是一樣的心理。又因爲文例可以對稱，寫字也求對稱，所以又有〝反文〞。問題很簡單，也不須再下功夫去研究甲骨文例了。3. 貞卜的事項是沒有一定的。固然這應該說是除了卜旬、卜夕等例行公事。在這裏，我應該先談一談新派、舊派的關係。原來殷代王朝的禮制，有新舊兩派的分野，舊派篤守成規，遵循古制以武丁爲代表；新派改革制度，祛除迷信，以祖甲爲代表，這兩派又可分爲四期；第一期是舊派，可以從盤庚遷殷算起，經過小辛、小乙、武丁、祖庚凡三世五王，可是武丁以前還不太清楚；第二期是新派，是祖甲創始的，經廩辛、康丁二世三王；第三期又是舊派，武乙、文武丁父子；第四期又是新派，帝乙、帝辛父子。這四期新舊兩派，更迭起伏，卻是一個很有趣味的問題。兩派的大別，我在殷曆譜上編卷一，曾有說明，茲擧其目，（一）祀典之異，（二）曆法之異，（三）文字之異，（四）卜事之異。這裏只談一談卜事之異。卜祭祀、征伐、田狩、游觀、卜夕、卜旬都是新舊兩派所共有的，不同的是祭祀的典禮，征伐的方國，田遊的地方，卜夕、卜旬的文法和附記的事項而已；至於卜行止，記每日所王經過的行程，只見於新派，而卜告、卜𦔻、卜匄、卜求年、受年、卜（或記載）日月食、卜夢、生育、疾病、有子、死亡、求雨、求啓各事，則只見於舊派，新派是很少見的。因此我們可以知道舊派的迷信相當深，而新派則許多迷信都破除了。例如王做了夢，王后有子，分娩或王子疾病死亡，新派是不去問卜的；新派不向天帝來求雨、求年、求啓；這都可以看出他們兩派對於人事和自然界的現象，觀念並不相同。反之，因爲舊派卜貞事項的繁夥，卻給我們留下更多的史實，因爲武丁、文武丁好卜王后的生育，王子的疾病等等，使我們多知道些他們的婦子之名，可是我們卻如知道了武丁是多婦多子的，不能說這是武丁一人如此，或者說到了他才實行多妻制。

這很明白的，新派不見得不是同樣的多婦多子，只不過是〃不占而已矣〃。知道了兩派卜事的不同，對於舊派的卜事，我們就應認爲這是殷代的一般現象，偶然遺留下來了，並不是一時一王的特殊現象。

再び私の現在の甲骨文字に對する見方を語ろう。私が北京大學研究所國學部で讀書した時より、甲骨の山積の中にもぐり込むことに開始して、今日に至って已に二十五年を越え、私の甲骨文字に對する意見に、隨時改變がある。これもまた多くの一般の此の學を治める者と同じであろう。二十年以前には、それを一つの神祕の府であったとみなしたが、十年以前は、それに一座の寶庫を見た、今日にいたって、私の意見はまたいささかそれは同じでないのである。郭沫若氏（『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁參見）は自分の『古代社會研究』を批評して[二十四]「其の中には好き未だ成熟していない、あるいは誤った判斷さえあったのであり、それはずっと現在に至るまでまだまだ相當に深刻な影響を發してきた」またいう「まだ私の誤りをそのまま用いている友人もあるし、またあるものは則ち私の誤った引用をそのまま用いて別の誤った判斷に導いてしまい、此れによって古代の様相に關して、多くの新しい混亂を引き起した」。これはもとより單に甲骨文字の部分を指すだけではないが、過去における私たちのト辭研究の結果も、またかくの如くでないことは免れ難い。十年前は私は曾って〃冊六〃（『殷契佚存』註[十七]・第二輯二〇頁參見）を誤解して甲骨は就ち殷代の簡冊であるとした、この失敗は〃尊題〃に過ぎないのである。私たちは現在固より當然特別に愼重にすべきであるから、「後の今を視るは、亦猶ほ今の昔を視るごとなし」である。現在誤りがあるかないかはやはり實に說き難い。譬へば私自身が『殷曆

譜』を書いた方法に、あいにく人の說がありこの方法は完全に誤りであると、如し果して彼が更に正しい、と思っている方法があれば、私は就ち當然誤りを認める。當然その人に「阿彌陀佛、善いかな善いかな、吾れ過てり吾れ過てり」と十度合唱する。そおでなければ、ただ彼に私の「執拗」を了解してもらうだけである。學を治めて眞理を求めるのは依歸であり、郭氏のあの様な誤りを認める勇氣があるのは、實に敬服すべきであろう。私の現甲骨文字に對する見方は、姑らく且つ下に書く、是は是、非は非として、また以後の反省に待つに留める。

第一、甲骨文字は、殷代文化を代表するものではない。ここで所謂代表とは、一般人の意見を指すものであって、殷代の文化は、ただ能く甲骨文字で尋ね捜すものであり、ただ甲骨文字中の記載が、全き殷代文化であると考へる。これは一種の欲くばった望みであり、一種の實現不可能な企畫である。私たちは甲骨文字の性質とその內容をはっきりすべきである。それに一個の適當な評價を與へることが必要で、餘り見下げてはいけない、高く見てもいけない。然る後ち私たちは少し殷代文化の眞象がどのようであるかを推想できる。

エ、甲骨文字はただ殷代の文字應用の一種で、一種貞卜事項を專記する文字で、少しく周易の卦爻辭に似ており、また少し現在の神廟中の籤文に似ている。私たちは殷代の文字使用は已に實に普遍していることを知った。例へば各種器物上にあって書かれた字或は刻んだ字のように、白色陶器、灰陶、骨角器、玉、石器は、みな常々銘文或は人名が記されている。而るに多量の銅器上にまた常に數十字の刻辭がある。甲骨卜辭は、また因って腐朽しない物であって、幸運にも現在にいたるまで保存されているのである。殷代文字の應用は、大部分當然典冊上にあるのであって、惜むところは典冊であって早く已に亡佚し

てしまった。しかし甲骨文字の中に、まだ幾くらかの典冊の影を見ることが出來る。例へば〃王若曰云云〃は當時冊命文の告で一種の習用語であって、原は簡冊上にあって書く文章である。時に史官がそれを骨版中に抄入した。これは本編の拓本一五〇四に見える。文武丁時の人の抄である。祖甲の時には或る史官が、二ケ月の日曆を刻し、正月甲子から二月癸亥に至っている。私は曾って『殷曆譜』の「朔譜」（後下・一・五）に引き入れた、私たちは如し果して漢代の曆簡を見れば、あの上面の記載は月名と毎日の干支であって、就ちこれは殷代の「曆簡」の一段抄本であることが想像される。帝乙帝辛時の時には、私たちは五種祀典の擧行を知った、如何に整齊であったかは、祭祀の開始には、一種の禮節があって、「工典」と呼ばれ、その意味は先祖先妣に獻上する譜牒である。この典上の記載は某の日に某種の祭祀や某人を祭祀されている。私たちはまた曾って二個の典冊の抄本を捜しえた。一個は甲戌の日からの翌祭で上甲から祭り、一個は甲寅の日より起る（粹一一三、一一四、說は「殷曆譜祀譜」に見える。）武丁時は、また常に〃沚馘爯冊〃が見える。これはみな殷代に〃典あり冊ある〃の證明である。私たちは甲骨文字が、ただ一種の甲骨上寫刻した卜辭にそれが殷代文字の應用上には、ただ一小部分を佔めていることを知った。就ち再びそれを過大評價はできない。

ろ、殷代の普通の文例は、ただ下行にしてまた左行の一種があり、これは現在のものと同じ。多くの比較的長い銘刻中より、此くの如きことを證明できる。私たちの發掘し得たのは、本編の拓本三九三九－三九四一號の牛頭骨刻辭の一件、鹿頭刻辭の二件、小臣絲石殷の銘文[三十五]の一件、『殷契佚存』中の骨器銘刻の三件（『殷契佚存』序・第二輯二三。一一二三八頁參見）、トロント博物院藏の鼎器銘刻[三十六]の一件、方藥雨（『鐵雲藏龜』註[二十三]

・第一輯二三頁參見）藏の小臣癕の玉器[三十七]の一件の如く、以上の獸頭、骨器、玉器上の文字は、共に九見する、みな下行にして左で、一個として右行はない。銅器の銘文は更に多く、また例外はない。これは殷代の普通の文例であって、見ることの出來ない典冊も、また當然此くの如きものである。甲骨卜辭の文例に至っては、また實に簡單で、ただ左行の外は一種の右行が多い。この原因は對稱の爲であり、美觀の爲である。卜辭は卜兆に附屬するものである。卜兆は一塊の腹甲上にあって、中線より分れて左右兩半となっている。左右兩邊の卜兆は相い對し、ここにおいて文字はまた其の相對を求め、遂に左行、右行があるのである。龜背甲は剖分して左右兩半で、牛胛骨は原は左右二骨あるので、だからそれ等の關係はまた腹甲と同じ、卜兆を左右向に分けて、文例は左右行に分ける。これは對稱の美の爲で、塗飾の硃墨は美觀を求めるのと同じ心理である。また因って文例を作って對稱とする、字を書くのはまた對稱を求める、だからまた「反文」があるのである。問題は簡單で、また須らく再び時間を使って甲骨文例を研究する必要はない。

3、貞卜の事項は一定のものはない。固から然してこれは當然卜旬卜夕等の例行の公事を除くというべきである。ここでは、私は當然先ず新派舊派の關係を說くべきである。（『甲骨文斷代研究例』序・各註參見。第二輯）もと殷代王朝の禮制は、新舊兩派の分野があり、舊派は成規を篤守し、古制を遵循して、武丁を以て代表としている。新派は制度を改革し、迷信を除いて、祖甲を以て代表としている。この兩派はまた分れて四期となすことが出來る、第一期は舊派であって、盤庚より殷に遷るのから數へて、小辛、小乙、武丁、祖庚の凡そ三世五王を經過する。然し武丁以前にはまたその餘ははっきりしていなかった。第二期は新派である。祖甲の創始で、廩辛・康丁の二世三王を經た。第三期はまた

武乙・文武丁父子の舊派である。第四期はまた新派で帝乙・帝辛父子である。この四期の新舊兩派は、更迭起伏し、なかなかどうして一個には實に興味のある問題である。兩派の大別は、私は『殷曆譜』上編巻一に、會って説明がある。茲に其の項目を擧げると、(一)祀典の異 (二)曆法の異 (三)文字の異 (四)卜事の異。ここではただ一談の卜事の異を語ろう。祭祀、征伐、田獵、遊觀、卜夕、卜旬はみな新舊兩派共有するところのものである。同じでないのは、祭祀の典禮である。征伐の方國、田遊の地方、卜夕、卜旬の文法と附記の事項があるだけである。行止を卜するに至っては、毎日王の經過するところの行程を記し、ただ新派に見える。而して告を卜し、享を卜し、旬を卜し、求年受年を卜し、日月食を卜し、夢、生育、疾病、有子、死亡、求雨を卜して、各事を求啓する。則ちただ舊派に見えて、新派は實に少見である。此れに因って私たちは舊派は迷信が相當深いことを知ることが出來、新派は則ち多くの迷信をみな打破している。例へば王の夢、王后の子育の如く、分娩或は王子疾病の死亡は、新派は問卜しないのである。新派は天帝の求雨、求年、求啓を問はず、これはみな彼等兩派が人事と自然界の現象に對して、考え方が決して相い同じでないことが分る。これに反して、舊派卜貞事項は繁多によって、いささか私たちに多くの史實をのこした。武丁・文武丁は王后の生育・王子の疾病等のことを卜することを好むによって、私たちをして多くその彼等の婦子の名を知らしめた。だから私たちは卽ち武丁は多婦多子であることを知ったとしても、これは武丁一人がこの様であるとは云えない。或は彼が始めて多妻制を實行したとは云えない。これは實に明白で、新派にも同様に多婦多子を見ることがもしれない、ただ『不占而已矣』に過ぎないのである。兩派卜事が同じでないことを知ったのは舊派の卜事に對して私たちが就ち當然これは殷代の一般

現象であることと認めるべきである。偶然遺留したからといって決して一時代一王の特殊現象ではない。

註〔三十四〕郭沫若氏の『十批判書』古代研究的自我批判、一、古代研究上的資料問題 一頁の文に據る。

註〔三十五〕小臣𦅫石毀の銘文。民國二十四年春、第二次河南安陽侯家莊西北岡殷代墓地の一〇〇三號（HPKM一〇〇三）の西墓道の北部より發見、石器の殘片四、銘文は「辛丑小臣𦅫入禽、俎在𠷎、以毀」とある。これについて高去尋氏の『小臣𦅫石毀的殘片與銘文』歷史語言研究所集刊二八下の論文がある。

註〔三十六〕トロント博物院藏の鼎器銘刻 この鼎器銘刻はいずれの書に錄されているか不明であるが、おそらくトロントとあるからカナダトロント大學の Royal Ontario Museum に藏しているのであろう。

註〔三十七〕方藥雨氏藏の小臣雍の玉器 小臣雍の玉器は未見であるが、『殷契佚存』董作賓序、第二輯二〇五頁六行目より九行にその文を錄している。

第二、甲骨文字不是原始的文字。這本來不必細講的，可是以前有些錯誤觀念，現在還是不少的人在承襲着。例如以殷代是中國文化的開始，文字是殷代才創造的，或者說中國文化誕生於殷代；許多的歷史書甚至不敢談殷代以前的史事；似乎除了甲骨文字之外，一切典籍的記載都不足信；至多承認堯舜禹都是神話中的人物。我們現在的看法，甲骨文字已經由圖畫演進成爲一種符號，距離原始的繪畫文字已是很久遠了；甲骨文字，在殷代後期二百七十三年之間，也在漸漸變化，可是不大顯著，可以知道在殷代前期，殷代之前，也必經過許多年的演進了。這裏可以分三項來説明它：1.世界上最初創造的文字，都是起原於圖畫的。遠之，像埃及的圖畫文字，據芝加哥大學東方學院的埃及學專家的研究，在西元前一千五百年到五百年間的埃及文字，仍然都是工整的圖畫，只有書寫體，有簡單化的趨勢。近之，像雲南麗江的麼些文也是圖畫文字，大約從宋朝創始，到現在仍然停滯在圖畫的階段而沒有變成符號。我們看甲骨文字，雖然有象形，可是距離圖畫已經很遠了，例如動物字馬、鹿、虎、象、犬、豕之類，會意字宿、疾、死之類，都由橫的變爲豎的，再看埃及同麼些文，就沒有這種情形，這是我們的文字，到殷代已演變進步成爲一種符號，所以動物字，可以頭上尾下，四足騰空，而睡覺的席，病人的牀，死者的棺木，都可以直立起來。許多的象形字，被借用爲另一個語言符號，鳳借爲風，亦借爲也，骨借爲禍，鼎借爲問之類，不勝枚擧，而二十二個干支字，都被借來作爲記日名的符號了。我們看埃及麼些文，很清楚知道他們是許多組的圖畫，而看甲骨文字除了少數象形字外，卻很難看懂它的意思；這就足以證明我們的文字，到殷代已有悠久的歷史了。2.殷代不是創造文字的時代，我們就不能根據甲骨文字來研究殷代的社會背景，譬如在遠古造字的時代，如字是男的俘虜兩手是背綁着的，女字是女俘虜兩手綁在前面，殷代男女囚犯的刑具，還保存着這種古風（見陶俑編着拷：陶俑見附圖）。

可是殷代用如字與若字同義已沒有俘虜之意，而女子在殷代的地位很高，王后生時有封地，死後與王享受同等的祭祀，也不能說女人都是俘虜。同樣的我們不能據字形説"民"是刺瞎眼睛，"臣"是俯首聽命，民與臣是奴隸，殷代的臣民也就是奴隸，因而斷定殷代是奴隸社會。這是很有問題的，臣、民兩字，創造時的用意是否就是如此？卽使如此，是否又經過了假借？而殷代的人民，也稱"人"，也稱"衆"，衆是一塊地方，下有三人，又何嘗又有奴隸的痕跡呢。3.我們的原始圖畫文字在殷代還使用着，卻不爲人們所注意，這就是殷代銅器銘文中的象形字，也稱爲"文字畫"的。我們知道從漢朝一直到現在，用的是隸書，可是印璽卻用篆文，篆文是我們的古字，是一種美術字。同樣的，圖畫文字在殷代也是他們的古字，美術字。有幾件銅器，銘文雜在花紋之間，看去都是圖畫。殷代人愛好美術，所以在銅器的滿身精緻花紋之間，刻上幾個圖畫文字，於是文字和圖案配合起來，更爲美觀了。所以我們要找原始文字，只有向殷代的金文中去找他們的古字。常見的鳥、獸、蟲、魚、人物的圖形，都是殷代的古字，都是原始圖畫文字。把殷代金文和甲骨文比一比，就知道甲骨文是殷代的今文，而金文中的圖畫文字，是殷代的古文了。

第二は、甲骨文字は原始文字ではない。これは本來必ずしも細かく講ずる必要はない、だが以前はその間違った觀念があった、現在もまた少なからざる人が繼承している。例へば殷代は中國文化の開始であるごとく、文字は殷代にはじめて創造された。或は中國文化は殷代に誕生したといひ、また多くの歷史書は甚だしきに至っては敢えて殷代以前の史實を説いていない、甲骨文字を除いた外は、一切典籍の記載はみな信ずることが出來かねない、せいぜい堯舜禹等はみな神話中の人物であることを承認するだけである。私たちの現在の見

方は甲骨文字は已に圖畫の演進に由って一種の符號を成し、原始の繪畫文字の距離は已に實に古く遠い、甲骨文字は、殷代後期二百七十三年の間には、また漸く變化があり、大だ顯著なものではないのである。だから殷代前期に於て、やはり必ず多年の演進を經過したことが分る。これは三項によって説明することが出來る。

1、世界上最初の創造文字は、みな圖畫に起源している。遠く埃及の圖畫文字（バビロン・エジプトの古代文書、『甲骨文字研究』註[七]・第一輯・三六一頁參見）の如く、シカゴ大學東方學院のエジプト學專攻の研究に據れば、西暦紀元前一千五百年間のエジプト文字にあり、仍ち然してみな手のこんだ圖畫であり、ただ或る書體のみが簡單化の趨勢にあった。近くは雲南「省」の麗江でその麼些文字もまた圖畫文字である。（『古文聲系』註[一三八]・[一三九]・[一四三]の麼些文字の解説を參見せよ。）大約は宋朝より創始され、現在に至っても仍ち依然として圖畫の段階に停滞し、符號となるものがない。私たちは甲骨文字を見るに、象形があるけれども圖畫を離なれること已に實に遠い、例へば動物字の馬・豸・虎・象・犬・豕の類[三十八]、會意字である宿・疾・死の類[三十九]の如きはみな横から竪ての變化によって整っている。再び埃及と同じ麼些文をみると、就ちこの種の事はない。これは私たちの文字であって、殷代に至って已に演變進歩して一種の符號となっている。だから動物字は、頭上尾下、四足が空にとび上るであり、而して睡覺の席、病人の牀、死者の棺木は、みな直立していても、多くの象形字は、借用されて一個の語言の符號がある、鳳を借りて風となし（『殷虚書契考釋小箋』註[十]・第一輯二三三頁參見）、亦を借りて也となし[四十一]、骨を借りて禍となし[四十二]、鼎を借りて問とする[四十三]の類、枚擧にいとまはない。二十二個の干支字は、みな假借して記日名の符號をなすのである。私たちはエジプト・麼些の文を見ると、實に

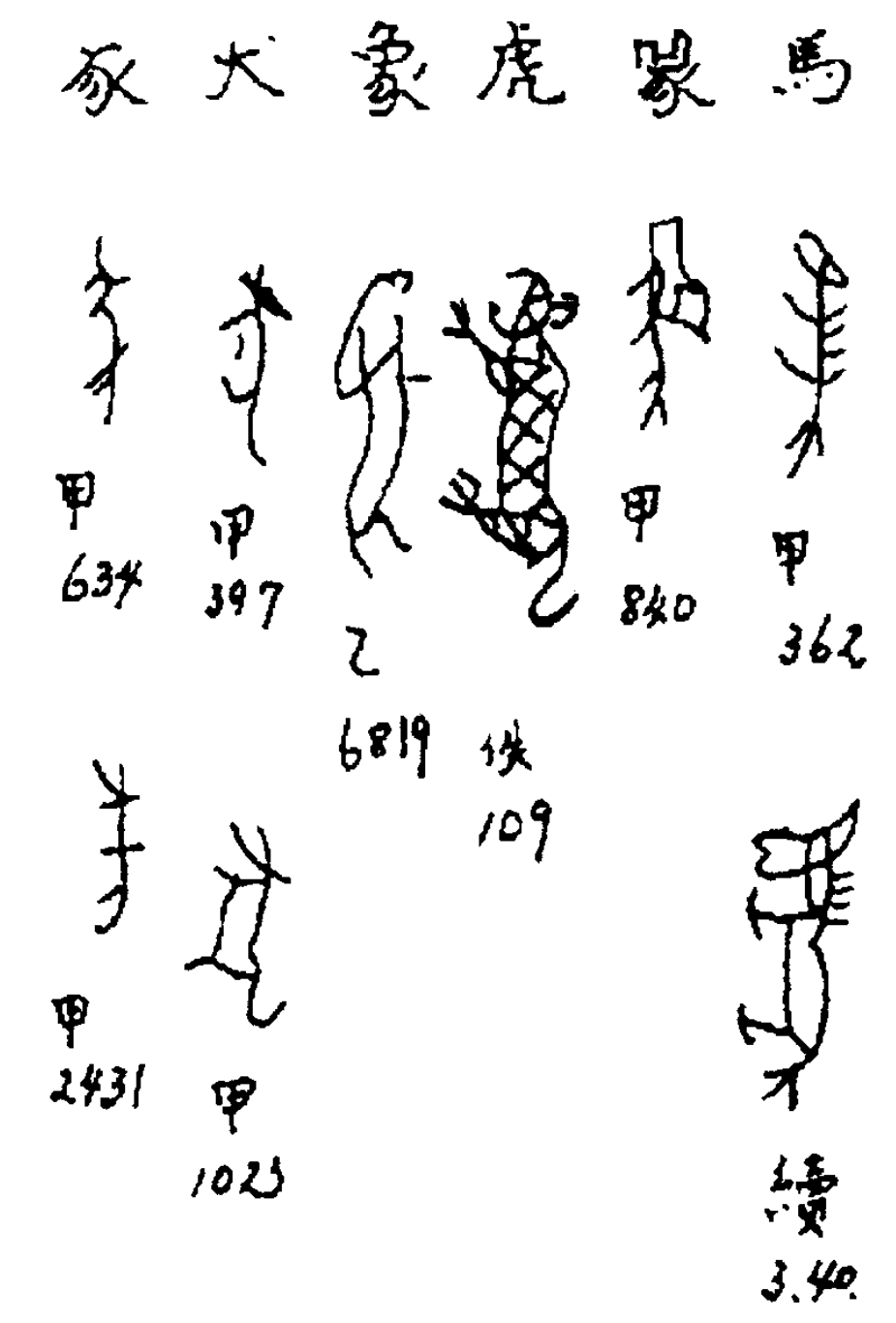
きれいで彼等の多くの組の圖畫を知った。而して甲骨文字を見るに、少數の象形字を除いた外は、卻って實にその意味が見わけがたい。これは就ち私たちの文字が、殷代に至っては已に悠久の歴史があることを證明している。

2、殷代は文字創造の時代ではない。私たちは就ち甲骨文字にもとづいて殷代の社會背景を研究することが出來ない、譬へば遠古造字の時代に〃如〃[四十三]の字は男の俘虜の兩手背綁に縛り、女の[四十四]字は女の俘虜であり、兩手は前にしばっており殷代の男女の囚犯の形具であり、またこの種の古風を保存している（陶俑に見える。）然し殷代の如字と若字（『古文聲系』註[五十八]・第二輯三九三頁參見）とは同義で已に俘虜の意がなくなっている。而るに女子は殷代では地位は實に高く、王后の生時には封地を有し、死後は王と同じ祭祀を受けた。また女人はみな俘虜であるということはない。同様に私たちは字形に據って「民」が目をさしつぶして、「臣」は首を垂れて命を聽くのであるという、民と臣とは奴隷[四十五]であって、殷代の臣民はまた就ち奴隷である。だから殷代は奴隷社會であると斷定することはできない。これは實に問題のあることである。臣・民兩字は、創造の時は意圖が就ちこのようなものであったかどうか、たとえ此の様であっても、假借を經過したかどうか、而して殷代の人民は、また〃人〃を稱し、また〃衆〃（『甲骨文字研究』註[三]・第一輯三五一頁參見）を稱す。衆は一つの場所の下に、三人有るのが、又どおしてまた奴隷の痕跡があるのであろうか。

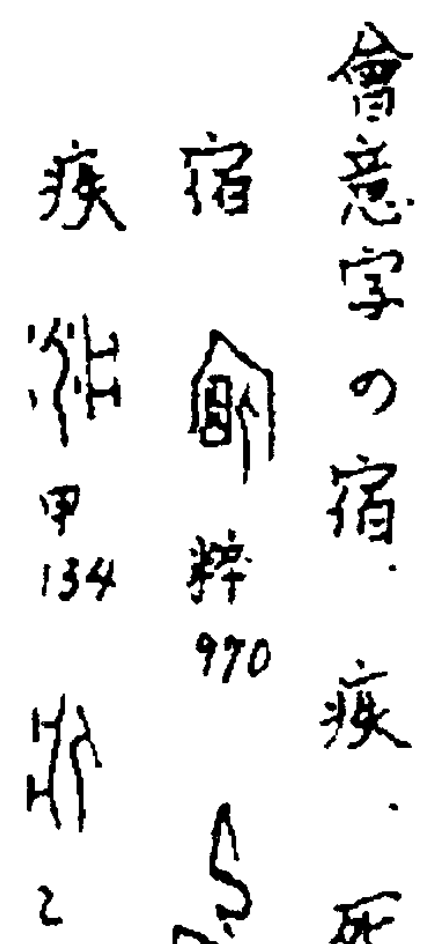
3、私たちの原始圖畫文字は、殷代にはまだ使用され、卻って人の注意するところとならないが、これは就ち殷代銅器銘文中の象形字は、また稱して「文字畫」とする。私たちは漢朝よりずっと現在にいたるまで、用いられているのは隸書であることを知っている。

しかし印璽はかえって篆文を用いている。篆は私たちの古字であって、一種の美術字である。同様に圖畫文字は、殷代にはまた彼等の古字であり、美術字である。幾件かの銅器の銘文は花紋の間に雜ってあり、見るとみな圖畫である。殷代人は美術を愛好した。だから銅器には滿身花紋の間に精緻す。上に幾らかの圖畫文字を刻している。ここに文字と圖案は配合して起き更に美觀をなしている。だから私たちは原始文字を捜そうと思えば、ただ殷代の金文中にそれらの古字を捜さねばならない。常に見る鳥獸、蟲魚、人物の圖形は、みな殷代の古字であって、みな原始圖畫文字である。殷代金文と甲骨文を比べてみると、就ち甲骨文は殷代の今文であり、金文中の圖畫文字は、殷代の古文であることが知られる。

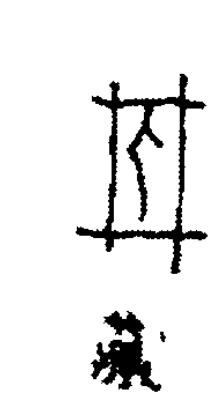
註[三十八]　甲骨文字の馬・豸・虎・象・犬・豕の類



註[三十九]　會意字の宿・疾・死の甲骨文字



註[四十一]



亦を借りて也となし。説文解字に「人之臂亦也、从大、象兩亦之形」という。卜文は㚒に作る。白川靜博士はこの亦字を次のように解されている。「金文にも重累の義に用いる例が多く、牧毀「迺多亂、不用先王作井、亦多虐庶民」・禹鼎「哀哉、用天降亦喪于四或、亦唯噩侯馭方、率南淮夷東夷、廣□南或東或、至于歷寒」のようにいう。禹鼎の上字は亦喪の意、字を兩用している。卜文にも又亦の義に用いるものがある。楊樹達の甲文説一三葉に「卜辭言亦、王襄讀爲夜、核之音理、固可通、而於事則未愜、愚謂、亦者大也、又者一事而再見之辭也」という。又・有・亦・或・隹など、音近くして用義の多い字である。手部一二上に「掖、以手持人臂、投地也、一曰、臂下也」とあり、動詞の解を加えている。扶掖の字である。」（『説文新義』卷十・一二〇頁）と。

註[四十二]　骨を借りて禍となし。骨は説文解字に「肉之覈也、从冎有肉」という。また禍を「害也」とする。白川靜博士はこの字を次のように解されている。「冎は骨立の象。卜辭には牲獸の肉を削ぐ用牲の法（綜錄・三〇二頁）があり、禍とは毀滅の禍を受けることをいう。釋名釋言語に「禍、毀也」というように、兩字の聲義には近いものがある。」（『説文新義』卷一・七三頁）と。

註[四十三]　鼎を借りて問とする。鼎を説文解字は「三足兩耳、和五味之寶器也。昔禹牧九

牧之金、鑄鼎荊山之下、入山林川澤、螭魅罔兩、莫能逢之、以協承天休、易卦、巽木於下者爲鼎、象析木以炊也、籀文以鼎爲貞字、古文以貞爲鼎、籀文以鼎爲貞」とする。白川靜博士はこの字を次のように解されている。「三足立耳とは器制をいう。段注に「非謂字形也」と斷っているのは、下體を析木の象とするゆえであるが、鼎には立耳三足のものが多い。下體を析木とするのは脚の形を誤り解したもので、古くは鼎の脚首に犧飾を付し、また鳥の形に作るなどのものがあり、それを字形化したものであろう。もし烹炊の義を加えるならば析木よりも火に從うべきである。「貞省聲」は字を象形とするのと矛盾し、衍文であろう。貞はむしろ鼎に從うて、上部に卜を加えた字形から出ている。卜文の貞字は鼎の省體に從うており、貞は假借の用法である。「昔者」以下は左傳宣三年の文による。鼎の輕重を問うよく知られている一條である。楚子伐陸渾之戎、遂至于雒、觀兵于周疆、定王使王孫滿勞楚子、楚子問鼎之大小輕重焉、對曰、在德、不在鼎、昔夏之方有德也、遠方圖物、貢金九牧、鑄鼎象物、百物而爲之備、使民知神姦、故民入川澤山林、不逢不若、螭魅罔兩、莫能逢之、用能協于上下、以承天休、桀有昏德、鼎遷于商、載祀六百、商紂暴虐、鼎遷于周、德之休明、雖小重也、其姦回昏亂、雖大輕也、天祚明德、有所底止、成王定鼎于郟鄏、卜世三十、卜年七百、天所命也、周德雖衰、天命未改、鼎之輕重、未可問也、鼎を荊山に鑄ることは傳の文にみえず、皇甫謐の帝王世紀や、水經注にその記述がある。荊山は左馮翊の懷德の南山下の地。青銅器は夏殷の際にはなおあらわれず、殷の鄭州期に至って、はじめて簡素な形式の彝器が作られて

いるのであるから、左傳等の記述はもとより歴史的事實ではないが、當時における彝器觀をみるべきものとして傳文を引いた。彝器は祭器にしてかつ寶器であったが、その文樣のもつ意味が特に強調されていることが注意される。百物の象を知り、不若罔兩を避ける意であるとするのは、彝器の文樣に呪的な意味があるとするものであろう。器は五味を和するというも、もと烹飪の器であったらしく、ときに器底になお燻痕を留めるものがある。また鼎鑊のことも行なわれ、わが國のくかだち、いわゆる探湯盟誓のような方法がとられたようである。鼎上に卜を加えた字が、あるいはその法であるらしく、おそらく貞の初文であろう。貞問の意である。卜文には貞卜の字をすべて鼎形に作る。貞三下字條に「卜問也、从卜、貝以爲贄、一曰、鼎省聲、京房所説」という。京房の學んだ易の文獻に、なお貞を鼎形に作るものがあったのであろう」（『説文新義』卷七・七四頁）と。

また問について説文解字には「訊也」とある。白川靜博士はこの字を説解されていう「「訊也」とあり、言部三上の「訊、問也」と互訓。倉頡玄應音義卷九引に「求也」という。「从口門聲」と門聲の字とされているが、口はおそらく祝告、門は廟門、あるいは金櫃の戸樞の象であろう。書の呂刑に「皇帝淸問下民」とあり、あるいは魯頌泮水「淑問如皐陶」のように、神意に關する淸問をいい、本來は神意を問う意であろう。卜文後・下・九・一。にもその字があり、辭は缺泐しているが、下文に若の字があり、神意を咨う語意であるらしい。咨・問はその原義を同じうする字である。のち求聘往問の義となる。詩の大雅緜「不隕

其問」・文王「宣昭義問」はみな聞の義であり、神聽にかなうことをいう。問・聞は聲義近く、通用の例が多い。聞は後起の形聲字で、卜文・金文は象形に近い字であるが、のち問を門口と解して門耳の字を作ったものであろう。問・聞はもと能動被動の二態を示す語であり、何れも神意を聽問する意である。門の形象の意については、下文の启字條にいう。また字を城門・家門と解しても、よく、城門には九門磔禳の禮が行なわれ、家門には北地では神桿を樹てて祀る風があった。門に祝册を設けて、媚蠱の侵すもののなきかを訊う意とも解しうる字であるが、詩書の例を以ていえば、やはり神廟に限定して考える方がよいようである。」（『説文新義』卷二・六〇頁）と。

註［四十三］"如"の字は男の俘虜の兩手背綁に縛り。如について説文解字は「从隨也、从女从口」とある。李孝定氏は「實則如字象一人面縛、而臨之以口、乃訊之初字」（『甲骨文字集釋』第一二）とする。白川靜博士はこの字を次のように解されている。「字の構造は若と同じく、若は巫女が惝怳の狀にあって神意を求める字、如は跪坐して祈るもので、字は何れも巫女と祝告の器である口に從う。ゆえに如・若は通用する訓義が多く、聲も近い。卜辭においては字を動詞に用い、「戊申卜貞、王其如」鐵・七二・四「貞、勿如」鐵一七九・三「婦好业如、省」鐵一六三・二「业如」佚存・五〇四などの例があり、祝告することをいう字であるらしく、なお省を併せいうものがある。また「其如、若」庫・五四四とは、祝告して神意の許諾を得る意であろう。如には訓義多く、字書にみえるものは十

數訓に及ぶが、字の初義は巫女が祝告して神意にはかるをいう。他の義は引伸もしくは假借とみてよい。」（『説文新義』卷一二・一一七頁）と。

註［四十四］女の字は女の俘虜であり、兩手は前にしばっており。女の字を「説文解字」は「婦人也、象形、王育説」とする。白川靜博士はこの字を次のように解されている。「字が象形であることは卜文・金文においては疑問の餘地のないものであるが、説文の當時、その字形解釋に疑義を生じており、それで王育説に引據したものであろう。字は交手斂衽の狀。疑疑に上部を衣衽の象とし、「六書故謂象其婉孌、精蘊謂象兩手相合端坐形、俱可疑」というのは、字の初形をえたものでない。三體石經の古文はすでに字の原形を失しているが、説文所收の小篆によっても、造字の意象はなお知ることができる。説文に王育説を引くもの五條、爲三下・禿八下字條などにみえる。なお田倩君に釋女中國文字・一二の一篇がある。」（『説文新義』卷一二・八一頁）と。

註［四十五］臣と民と奴隸。臣・民は奴隸であって殷代を奴隸社會とする學者は郭沫若、衛聚賢、呂振羽、鄧初民、吳澤の諸氏であるが、ここで董作賓の指す人は郭沫若氏である。彼の殷代を奴隸社會説とする根據は第一に殉葬の問題であり、第二は生産奴隸の問題である。郭氏はこの問題を『十批判書』『奴隸制時代』に於て董氏の説を批判している。奴隸社會説については第一輯所收の『甲骨文字研究』註［三］三五一頁に詳しく紹介しておいた。

第三、甲骨文字研究、現在仍是初步的。不要以為研究甲骨文字的人已經很多了，有著作的，中國、及英、美、法、俄、德、日各國的學者、共有一百八十七人；不要以為研究的著作已經很多了，專書論文、共有五百四十種，（胡厚宣君在民國三十三年的統計），我可以說這些研究並不是最後的定論，甲骨文字的研究、現在仍是初步、現在只是初入門徑。我們知道甲骨文字只是殷代文化的小部分，我們能見到的材料是甲骨文字的一小部分，我們能夠懂得的能夠研究的、又是所見材料中的一小部分、所以我們可以說甲骨文字的研究是前程遠大的。拿我作一個例子，我做過二十五年的工夫了，也嘗被稱為專家，但是翻開任何一本甲骨拓本，就會到處碰壁，遇着〃攔路虎〃，甚至對着一片卜辭，半晌目瞪口呆，完全莫名其妙。這固然足以證明我的譾陋，別人也許不至如此。可是在我想，如果從現在起，有三二十人，專力作各方面研究，也許三十或五十年之後，能研究出一個頭緒，得到正確的結果。十萬甲骨，在殷代文化中、固然代表不了什麼，但是這足以反映着殷代文化是如何的偉大、而我們的知識又加如何的渺小。研究既然仍是初步、方法也仍然幾句老話：1、首先應該把材料集中，把所得十萬甲骨，彙為一編。2、用分派、分期、分王的方法，整理全部材料。3、儘量拼合復原的工夫，把全部材料，化零為整。4、作成字典、辭典、類纂等索引，以便從事各方面的研究。5、要應用隅反的原則從一鱗一爪中去推測殷代的文化。別的不必細說了、這裏須要說明的是〃何謂隅反〃？因為殷代文化的偉大、遺留的史料只是吉光片羽，大海的一滴，太倉的一粟，所以我們要善於利用這難能可貴的史料，就是在管中所窺的一個斑紋去推測殷代文化的全豹。孔子說：〃舉一隅、不以三隅反，則不復也〃。舉一反三，就是我借來的隅反的意思。試舉二例：一是一個〃聞〃字。舊派以為日月有食，是一種災異，如果在卜旬時，〃王固曰有祟〃、史官們必要找出這一句中的不詳之事，記載在卜旬之後，證明王

所占的非常應驗。因此他們有時候記〃某某夕、月有食〃。有時候在殷都不見月食，而方國報告說某日有月食，他們便借此敷衍一下，寫上〃月有食、聞〃。只這一個聞字，關係殷代文化，是如何的大！原來在別處也可以看見，說〃王固曰：其有來聞〃？〃貞：有聞曰〃云云，都表示出〃聞〃是一種報告，書面報告；還有一種口頭報告，叫作〃告〃。記〃月有食，聞〃的兩見本編拓本號一二八九，絜六三二這決不是偶然的。我們知道了〃聞〃是一種公文程式、是方國諸侯、對王朝的一種書面報告，這裏邊牽涉的問題就多了。1、諸侯方國為何要報告月食？是不是王朝要他們這樣作，他們又不能不服從？2、諸侯方國怎樣能知道夜間的月食？他們是否有專人測候？3、王朝要方國報告月食有何用處？是專為記錄災象嗎，或者是用它對證曆法中的朔望？4、如果用月食校正曆法，是否王朝已設有專官司〃觀象授時〃的工作？5、王朝的命令、諸侯都服從着，是不是王朝的中央集權已相當的強大？6、漢書五行志於日食多志〃史官不見，郡國以聞〃一類的事，這種各地方向中央報聞日月食的辦法，何以上下一千多年，如出一轍，是不是一脈相承的制度？不然為什麼這種公文的專詞又都叫作〃聞〃？諸如此類，僅僅一個字，如果你輕輕地撇過去，可以說毫無關係，如果你加以考索，就會推想出許多問題。二，是一個日數。我們十三次發掘，得到一塊龜背甲殘片、只存着一個個卜辭的下半，是〃（上缺）行堅，五百四旬七日至丁亥，从。在六月〃。這裏面的〃五百四旬七日〃、是極有關係的，這是文武丁時的卜辭，是用舊派的紀日方法，但與武丁時小有不同。武丁時並計始卜之日，文武丁時不計始卜之日，所以此片的日數，應計入始卜之日，共為五四八日。由丁亥上推至五四八日，為庚辰，就是開始卜問此事之日為庚辰，庚辰以後的五四七日是丁亥。五四八日的關係是古四分曆一年半的〃歲實〃、四分曆一歲是三百六五日又四分日之一即三六五．二五日。半年是一百八十二日有零，即一八二．

六二五日，兩數相加，是三六五．二五十一八二．六二五＝五四七．八七五日，以整日計算，正是五百四十八日。數字不是可以隨便附會的，不計始日的辦法，是文武丁時的卜辭中別有證明的，一天都不能錯誤。因此我們可以知道殷代曆法，一個太陽年是365¼日。也就是古四分曆的歲實。再看〃行堅〃、是和耕田有關的；再看〃至〃、就是日至，冬至夏至，古代均稱日至，也可以省稱為至，在此片本當作〃五百四旬七日至丁亥〃、而省去一個日字；再看〃在六月〃、殷代是以建丑為正月的、冬至在建子月，是殷代的十二月，夏至在建午月，也正是殷代的六月。我曾在殷曆譜中推論到這許多問題，見日至譜二，這裏不必細講了。胡適之先生曾指示我們，做學問要〃大胆假設，小心求證〃。我是很小心向甲骨文字裏去求證，只能求到這一點點的證，於是乎就大胆假設了這許多問題，也許有人會罵我太大胆了。我在這裏只是提出兩個隅反研究法的例子，如果我們不用此法，我想甲骨文字是不必再研究了，因為它至多只能告訴你殷代文化的某一部分，四角形中的一隅而已，那其餘的三隅，是必須由你自己想出來的。

可以說是我太高興了，一篇序文寫得這樣長，還幸而甲編圖版不在我的手頭。本來秋季三個月我沒有開課，在休假中，平常很少有機會講話，所以得到夏鼐先生出給我這個好題目，就不免大談一陣，借此溫習我的國語，讀者也許會嫌我太嚕囌罷？好，到此為止。

最後，我在這本書出版的時候，不能不致謝所長傅斯年先生，和親手發掘的李濟、梁思永、郭寶鈞、吳金鼎諸先生，石璋如、劉燿、李光宇、尹煥章、王湘諸君。我對於細心傳拓的魏善臣君、王文林君，助我剪貼的朱俊英女士，同時也敬致謝意。我妻熊海平女士的不斷的鼓勵也是我最要感謝的。

民國三十六年十二月十八日董作賓序於美國芝加哥大學東方學院

第三、甲骨文字の研究は、現在は仍ち初步である。甲骨文字を研究する人は已に實に多いと思ってはならない。著作のあるのは中國、及びイギリス、アメリカ、フランス、ロシヤ、ドイツ、日本の各國の學者で、みなで百八十七人いる。研究の著作が已に實に多いと思ってはならない。專書論文は、みなで五百四十種（胡厚宣君の民國三十三（一九四四）の統計による）；（本輯、『五十年甲骨學論著目』序文參見）私はこの研究は決して最後の定論ではないと言いうる。甲骨文字の研究は、現在やっと初步であり、現在はただ初めて門徑に入ったのである。私たちは甲骨文字はただ殷代文化の小部分であることを知り、私たちは能く材料を見るのは甲骨文字の一つの小部分であることと、私たちはよく知り得てよく研究しうるものは、また所見の材料中の一つの小部分である。だから私たちの甲骨文字の研究の前程は遠大だと云いうる。今、私は一つの例をあげてみよう。私は過去二十五年の工夫をへて、また嘗って專門家と稱された。ただどんな甲骨拓本を開いてもすなわち至るところで壁にぶつかり、〃攔路虎〃にあった、甚だしきに至っては一片の卜辭に對し、しばし呆然として、全くぼんやりしてしまった。これは固より私のおろかさを證明するに足るもので、別の人はまたこのようでないかもしれない。然し私が考えるに、如し果して現在より、二三十人あって、專門で各方面の研究をなせば、三十あるいは五十年後に、一つの研究に目鼻を出し、正確な結果を得るであろう。十萬の甲骨は、殷代文化中では何も出來ないことは勿論であるが、ただこれは殷代文化が如何に偉大であったかを反映するものである。而るに私たちの知識はまたなんと微々たるものであるか。研究は依然として仍ち初步であって、方法はまた仍ち幾句かは云いふるされた話である。1、はじめにまず當然材料の集中をすべきであって、得るところの十萬の甲骨を彙めて

一編とする。
2、分派・分期・分王の方法を用ひて、全部の資料を整理する。
3、できる限り拼合復原する時は全部の資料を化零して整理する。
4、便に各方面の研究に從事する字典、辭典、類典等の索引を作る。
5、隅反の原則を應用しようと思えば一鱗一爪中より殷代の文化を推測する。

外のことは必ずしも細かく説明する必要はない。これは須らく説明を必要とするのは"何を隅反というか"であって、殷代の文化は偉大であって、遺留の史料はただ吉光片羽で、大海の一滴、太倉の一粟であるから、私たちは爲し難い貴重な資料を利用することにうまくなければならない。就ち管中に窺うところの一つの班紋によって殷代文化の全豹を推測することが出來る。孔子は云う「一隅を擧げて、［之に示して］三隅を以て反みざれば復た［教へ］ざるなり。」［『論語』述而篇］と。一を擧げて三を反す、就ち私の借りてきた隅反の意味である。試みに二例を擧げると、一、一つの"聞"字である。（『殷曆譜』註［三十七］・第三輯三二七－三二頁参見）舊派は日月の食がある、一種の災異で、如し果して卜旬の時にあれば、"王固曰有祟"、史官たちは必要によってこの一旬中の不詳のことを探し、卜旬のちに記載し、王がこう非常應驗を證明する。これによって彼等は時に「某某夕、月有食」と記す、時には殷都には月食を見ず、而るに方國の報告は某の日に月食有るという。彼等は便ち此れを借りて一度敷衍して"月有食聞"と書いた。ただこの一つの聞の字は、殷代文化に關係し、如何に大きいものであるか。もともと別の處でも、いう「王固曰、其有來聞」、「貞、有聞曰」と云っているのを見ることが出來る。"聞"は一種の報告であり、書面の報告であることを表示している。ほかに一種の口頭の報告があって呼んで"告"とする。"月有食聞"を記している兩つの本編の拓本番號一二八九、契六三二とに見えるのは、これは決して偶然なことではない。「聞」は一種の公文程式であり、方國諸侯の王朝に對する一種の書面報告であることが分った。この中に牽涉の問題が多い。

1、諸侯方國は何の爲に月食報告を必要としたか、王朝が彼等にこの様に作ることをさせたので、彼等は又服從せざるを得なかったのではないか。
2、諸侯方國はどの様に夜間の月食を知ったか、彼等は專門の測候者を有していたのかいないのか。
3、王朝は方國に月食を報告させてどのような用途があったのか、これは專ら災象を記錄するのであるか、或はそれを用いて曆法中に朔望を對證するのか。
4、如し果して月食を用いて曆法を校正していたならば、これは王朝が已に專官を設けて"觀象授時"の作業を司さどったのか。
5、王朝の命令は"諸侯はみな服從したのは王朝の中央集權が已に相當に強大であったのではないか。
6、漢書五行志は日食に"史官見ず、郡國以て聞く"の一類の事を認めることが多いが、この種の各地方が中央に向って日月食の報告の方法を、どおして上下一千年以上にわたって、同じであるのは、一脈相い承る制度であるからではないのか。

然らざればどおしてこの種の公文の專詞をまたみな「聞」と呼ぶのか、もろもろの此の類のように、僅かに一つの字は、もし輕々しくすて去るならばすこしも關係ないと云い得る。もしあなたが考索を加えるならば、どれも多くの問題を推想しうる。二、一つの日數である。

私たちは十三回の發掘で、一塊の龜背甲の殘片を得た、ただ一つの卜辭の下半にあって、"（上缺）行埜、五百四旬七日至丁亥、从在六月"。この中の"五百四旬七日"は極めて關係のあるものである。（『殷曆譜』註［三十八］・第三輯三三二－四頁参見）これは文武丁時の卜辭である。舊派の紀日方法を用いたもので、ただ武丁時と少しく同じでないものがある。武丁時は並に始卜の日を計える、文武丁の時は始卜の日を計えていない。だからこの片の日數は、應に始卜の日を計え入れて、合計五百八日とする。丁亥より上に五四八日を推至すると、庚辰である。就ち此の事を卜問し始めた日を庚辰とする。庚辰以後の五四七日は丁亥である。五四八日の關係は古への四分曆の一年半で「歲實」である。四分曆の一年は三百六十五日また四分の一日である。即ち三六五・二五日で、半年は一百八十二日の有零（餘）である。即ち一八二・六二五日である。兩數を相い加へると、三百六十五・二五＋一八二・六二五＝五四七・八七五日である。整日を以て計算すれば、正しくは五百四十八日である。數字とは勝手に附會することは出來ない、始日を計えない方法は、文武丁時の卜辭中には別に證明があるのである。一日でもみな間違うことが出來ない。此れによって私たちは殷代の曆法を知ることが出來る。一つの太陽年でんへの外日である。また就ち古への四分曆の歲實である。再び"行埜"を見ると、これは耕田に關係がある、再び"至"をみると就ちこれは日至である。冬至、夏至は、古代では均しく日至と稱しており、また省稱して至としている。この片は本當は"五百四旬七日日至丁亥"に作るべきで、一つの"日"字を省去したものであろう。再び"在六月"を見ると、殷代は建丑を以て正月としており、冬至は建子の月にあって、殷代の十二月である。夏至は建午の月にあり、また正しく殷代の六月である。私は曾って『殷曆譜』中にはこの多くの問題を推論した、日至譜二に見えるので、ここでは必ずしも細かく講ずる必要はない。

胡適之［四十六］先生は曾って私たちに指示された、學問には、"大胆に説を假し、小心に證を求む"ことが必要であると。私は實に小心に甲骨文字に向って證を求めた、ただこの僅かばかりの證を求め得た、ここに於て就ち大胆にこの多くの問題を假說したのである。或は或る人が私の太だ大胆さを非難されるかもしれない。私はこゝでただ二つの「隅反研究法」の例を提出した、もし私たちが此の法を用いなかったなら、私は甲骨文字は必ずしも再び研究するに及ばないと思う。因ってそれはせいぜいただその殷代文化の某の一部分を告げてくれるに過ぎないから。四角形中の一隅だけでその他の餘りの三隅は貴君ら自身で考へ出さねばならない。

私は興に乘り過ぎたと云える、一篇の序文をこの様に長く書き、その上、幸なことに甲編圖版が私の手元になかったからであるが、私には太だ興ぶべきことである。秋季三か月、私は講義がなく、休假中にあって平常實に話しする機會が少なかった。だから夏鼐［四十七］先生が私にこの様な題目を好んで與えられたので、就ち大いに一陣を論ずることを免れなかった。此れをかりて私は國語を練習した、讀者はまた多くの私の太だくどくどとしゃべるのに會って嫌氣を催されはなかっただろうか。よろしい、ここで止めよう。

最後に、私はこの本書の出版の時には、所長の傅斯年（傅斯年・『甲骨學商史論叢初集』註［三］・第三輯二二七頁参見）先生及び親からの手で發掘にあたられた李濟（李濟・『卜辭通纂』註［四十六］・第二輯一四九頁参見）、梁思永（梁思永・『殷曆譜』註［四十五］・第三輯三四四頁参見）、郭寶鈞［四十八］、吳金鼎（吳金鼎・本序註［十九］三六頁参見）の諸先生、石璋如（石璋如・本序註［二十五］四五頁参見）、劉燿［四十九］、李光宇［五十一］尹煥章［五十二］王湘［五十三］の諸君に感謝の意を表はさねばなりません。私は細心の傳拓を魏善臣君［五十三］、王文林［五十四］君に對し、私の剪り貼り

を朱俊英女士〔五十五〕に助けられた、同時にまた大いに感謝を捧げる。私の妻熊海平女士〔五十六〕の不断の激勵にも私の最も感謝するところのものである。

民國三十六〔一九四七〕年、十二月十八日、董作賓美國シカゴ大學東方學院に序す。

註〔四十六〕胡適（一八九一－一九六二）字は適之、安徽省績溪の人。幼名は嗣穈。上海震旦大學、呉淞中國公學に學び、一九一〇年、清華學校考選留學生として渡米し、コーネル大學、コロンビヤ大學を卒業。一九二八年歸國し、國立北京大學教授となる。五・四運動の頃から『新青年』に寄稿し白話文學運動を開始し、文學革命のきっかけを開いた。またヨーロッパの近代をそのまま中國に移植し、デューイに學んだプラグマチイズムを方法として、自國の歷史・學問・文學を研究し政治・社會の改革に應用しようとしたが、五・四運動の急速的な政治方向に恐れ、社會主義を空論と非難し、國故整理運動に努力した。二二年『努力週報』を創刊し、社會主義革命に反對した、二六年イギリス・アメリカにわたり、翌年上海光華大學、二八－三〇年中國公學校長、三〇－三七年北京大學文學部長、三八年駐米大使、四六年歸國して北京大學學長となった。四八年北京から脱出してアメリカに亡命、その後、台灣政府の外交部顧問となり『自由中國』の發行にあたった。著論文に『胡適思想批判』、『胡適文存』他數十點ある。

註〔四十七〕夏鼐（現代・生年不明－　）浙江永嘉の人。清華大學卒業。英國ロンドン大學に留學し考古學を研究。一九四一年頃中央研究院歷史語言研究所所員となり、この年の秋、豆芽房を最初に各所を發掘し、その報告や論文が發表されている。戰後は中國科學院考古研究所所員。

註〔四十八〕郭寶鈞（一八九三－　）字は子衡。河南南陽の人。北京高等師範學校國文部卒。のち河南省教育廳視學秘書、河南省政府秘書に任じた。郭氏は考古學者であるが一九二一年の安陽小屯試掘の時は教育廳秘書として參加している。一九三〇年には中央研究院歷史語言研究所考古組に入り、專任編輯員となり小屯の發掘に從事し、その報告論文がある。戰後は中國科學院考古研究所所員。

註〔四十九〕劉燿（現代・生年不明）考古學者。（字は虛谷、後ち姓名を改め尹達。）河南大學卒業。第五次安陽小屯發掘工作に參加、のち中央研究院歷史語言研究所所員となる。戰後は中華人民共和國にとどまり現在は東北人民大學教授。

註〔五十〕李光宇（一九一七－　）考古學者。湖北鍾祥の人。曾って中央研究院歷史語言研究所員。

註〔五十一〕尹煥章（現代・生年不明）考古學者。中央研究院歷史語言研究所所員。現在、中華人民共和國にあり、書に「從發現的文物中談華東區古文化概況」がある。

註〔五十二〕王湘（現代・生年不明）字は子湘。河南南陽の人。一九二八年の小屯試掘の時は臨時事務員として發掘工作に從ったが、一九三七年中央研究院歷史語言研究所考古組助理員となる。著書に『安徽壽縣史前遺址調查報告』がある。現在、中華人民共和國に在り。

註〔五十三〕魏善臣（現代・生年不明）抗戰期間に中央研究院史語所職員に任じ、本所甲骨文研究室の拓片工作者、現在中國科學院考古研究所所員。

註〔五十四〕王文林（現代・生年不明）曾って中央研究院史語所職員に任じ、現在は中華人民共和國に在り。

註〔五十五〕朱俊英（現代・生年不明）胡厚宣氏夫人。

註〔五十六〕熊海平（現代・生年不明）國立北平大學女子文理學院卒、董作賓氏夫人。

跋彥堂自序

殷墟文字甲編將出版，彥堂在美國芝加哥大學東方學院作了一篇自序寄回來；序中有一段說：——“如第四次發掘的E一六坑，這是一個圓井，應該叫作窖的，井中只有一、二期的卜辭，深至十公尺，下及水面；因為兩丈以下，全是沙土，第二期祖甲時，此窖塌陷，也就廢而不用了。所以當時存儲的東西，也就留到如今……”。

這段話說得有點過於簡略；既牽涉到了若干原始材料的時代問題，E一六坑又是我親自看守它發掘的，我覺得我該加點補充的說明，以免引起誤解。這坑的發掘開始於二十年四月十日上午八時，終結於五月二號，經過了三個禮拜的時間，中間因為下雨及禮拜日的停工，實際只工作了九天。這九天發掘一般的經過情形，見安陽發掘報告第四期，五六四－五六七頁，讀者可以參考。自序說：——“兩丈以下，全是沙土”，這一句話，大概是指原紀錄所說的：——四月十六日，上午；五．二〇－五．八〇M，“下層漸有粗沙”；同日，下午：五．六〇－六．〇〇M，……土色如上，漸夾沙土。但四月二十日上午的記載（坑深：六．〇〇－六．六〇M）卻是：——“壁旁仍為黃沙；數日前所見之黃沙，並非地下之沙層，確為淤入者”。以上均見安陽發掘報告第四期。我個人對於殷墟文化層的構成，也常因新的事實發現，而變更我的見解；但關於E一六坑的堆積情形，我始終沒有看出，有何種現象或事實，可以算作這坑在祖甲或其他時代塌陷的證據。到了將近最下層，誠然有石塊漸多的紀錄，但這只是最下一公尺上下的現象，也不能作塌陷說的根據。總結起來說，照當時的發掘紀錄，我們所知道的是：五米二到六米六深處，坑內有一段淤沙，但並非“地下之沙層”。在五米二以上，坑內已出有帶字的龜甲，及大宗銅器，淤沙的一段，曾掘出大量的獸骨，多數都是肋骨與腿骨；但大部份的甲骨，是七米以下，近坑底才出來的。彥堂說，“井中只有一、二

期的卜辭……〃，自然是一個代表長期研究，非常重要的結論，給我們解釋E一六坑文化層堆積一個最可靠的憑藉。讓我們看看E一六坑出土的甲骨，在坑內由上往下分佈的秩序：

(1)發掘日期	(2)坑深	(3)出土甲骨	(4)圖版編號
四月十四日	三・五M—四・五M	(甲)三	(甲)二九四一—二九四二
四月十五日	四・五M—五・二M	(甲)七	(甲)二九四三—二九四九
四月十六日	五・二M—六・〇M	(甲)一一	(甲)二九五〇—二九五九
四月二十日	六・〇M—七・一M	(甲)一八；(骨)一	(甲)二九六一—二九七七 (骨)三三三〇
四月二十一日	七・一M—八・〇M	(甲)二七；(骨)二	(甲)二九七八—二九九九；三三二四—三三二八。 (骨)三三六一—三三六二
四月二十二日	八・〇M—八・八M	(甲)一七三；(骨)一〇	(甲)三〇〇〇—三一四四；三三二二。 (骨)三三三一—三三四五
五月二日	八・八M—九・四M	(甲)四六；(骨)一	(骨)三一四五—三一七六。 (骨)三三四六

據上表，E一六坑出帶字的甲骨在四月十四日那一天就開始；那一天所掘的深度，自離地面三・五M起，到離地面四・五M止；離坑口在一・六M與二・六M之間；在這個深度以上，我們並沒找着任何可以作解釋這坑早期塌陷的物證。由離地面四米五向下掘，帶字的龜甲陸續地出現；與它們同出的，有帶釉的陶片（十五日），白陶片（十六日），黑陶及方格紋陶（十六，二十日），〃將軍盔〃式陶（二十一日）；大宗銅器（十五日），大堆蚌殼（十六日），大量肋骨（十六，十七日），成層蝸牛；土層的變遷，由灰褐色，灰黃色，而漸夾有木炭，粗沙，色漸變黑（十六日），而夾類似石灰質粒（十六日下午），而帶淤沙（二十日）及大塊木炭（二十一日），而成淤泥（二十一日）夾大量石塊（二十二日）直到水面（五月一日）。雖說是多數的帶字甲骨，均出在離地面七米深以下，但其他的重要出土品，均在較上的位置出現，並有少數的帶字龜甲在同一水準上，似乎可用作證明它們的時代。照董先生的論斷，凡是E一六，出土的器物，都屬于祖甲，或祖甲以前的時代；這條重要的論斷同時包含下列幾條必然的推論：

(1)見於E一六坑的各色各式陶器，——黑色陶，灰陶，紅陶，白陶，帶釉陶——都是祖甲或祖甲以前的陶器；

(2)見於E一六坑的各種銅器，——各式斧形器，各式句兵，刺矢，各樣銅矢，各種裝飾小件——都是祖甲或祖甲以前的銅器；

(3)見於E一六坑的其他各種實物：——朱砂，黃金，玉器，雕花骨器等——也都是祖甲或祖甲以前的實物。

假如我們確能證實E一六坑是在祖甲時封閉或塌陷的，上列的推論自然不會引起什麼疑問。若說照斷代的研究，這一坑所出的甲骨文字，沒有比祖甲時代更晚的，因此也就聯帶地斷定了，與甲骨同出的器物，也必然與它們同時：——這個〃必然〃，卻需要另外的證明。關於這一點，彥堂在他的自序內，卻沒詳細地說明；他只說：——〃甲骨文字〃是可以確證遺址遺物的年代〃的。在原則上，我們自然可以承認這話的正確性；但它的正確性也應該是有條件的。至於如何才能把這一原則運用得恰到好處，大半要看我們對於與甲骨同著的現象是否也作過同樣的，徹底的研究。若說，在一塊版築土中，找出一塊可以認為是祖甲時代的帶字龜版或獸骨，就斷定這片版築也是祖甲時代築的，這就可以引起大大的爭端；譬如，看一所專藏宋版書的現代圖書館書庫，我們不能因為書是宋朝的，也說庋書的書架，庫內用的棹椅，紙張筆墨，甚至連庫房的建築，都必定是宋朝的。同樣地，我們不能因為某一坑內出有某一時代的甲骨，也就斷定其他的實物與甲骨同時；甲骨的存在，若運用得適當，只能給同坑出土的實物一個最早時代的限制，至於最晚時代的限制，單靠甲骨文的聯繫，是不夠的。

E一六坑出過帶釉的陶，白陶，若干不同樣子的銅矢；——有些，我以為是較晚的形制，卻出現於最下層——，這些當然都可以早到祖甲時代，或以前；不過這一類的判斷是否能與這遺址內所有的現象相符，應該有我們的充分的注意。假如這些實物分類的與個別的研究所得的結論，能與甲骨文字研究所得的結論扣合起來，我們對於E一六坑全坑的堆積時代，自然可以接受董先生的意見，要是所得的結論證明，有若干實物不能早到祖甲的時代，我們也就不能單靠一方面證據，把E一六坑的最後堆積，強為提早。

好久沒與彥堂討論這些問題了；近日交通當局把郵費提高到一個數，簡直使我們發不起一封去外國的信——似乎有意地要沒收我們與在國外朋友的通信權。讀了他的自序，想起殷墟發掘的歷史，如作夢一般。這篇短跋，只算代替了與他通信，並誌想念之情。

中華民國三十七年，正月十七日　李濟跋於南京雞鳴寺路，史言所二樓。

殷虛文字甲編が出版されようとする時、彥堂が米國シカゴ大學東方學院にあって一篇の自序を作って送って來た。序中に一段あり、云う〃第四回發掘のE一六坑のごとく、これは一個の圓井であるなら、當然竇に作ると呼ぶべきである。井中にはただ一、二期の卜辭があるだけで、深さは十米に至り、下は水面に及び、因って二丈以下は、全て沙土で、第二期は祖甲の時に、此の竇は陷沒し、また廢てられ用いられなかった。だから當時の貯藏の物は、また就ち保留されて今に至る。〃この段の話は少し簡單に云い過ぎである。既に若干の原始資料の時代問題を巻きぞえにしたからといって、E一六坑はまた私親らも發掘するのを監視したので、誤解を引き起さないよう當然私は少しく補充の説明を加えねばならぬと覺った。この坑の發掘開始は二十年四月十日午前八時で、五月二日に終結した。三週間の時間を經過し、その間、雨降りの爲にまた日曜日は仕事を止めたので實際はただの九日作業した。この九日間の發掘一般の經過情狀は「安陽發掘報告」第四期に見える。五六四—四六七頁。讀者は參考とされよ。自序の說は〃二丈以下は、すべて沙土である〃この一句は、恐らくもとの記錄してとくところの、——四月十六日、午前、五二〇—五八〇M，〃下層は漸やく粗沙にあり、同日、午後、五、六〇—一〇〇M；……土色は上の如し、漸やく沙土を夾む〃などを指している。ただ四月二十日の午前の記載は（坑の深さ；六〇〇—六、六〇M）卻って，〃一壁の旁は仍ち黃沙なり〃數日前に見るところの黃沙は、決して地下の沙層ではない、確かに淤入である〃。以上は均しく『安陽發掘報告』第四期に見える。私個人の殷虛文化層の構成に對して、また常に新しい事實の發見によって、而して更に私の見解を變えた、ただE一六坑の堆積事項に關しては、どのような種類の現象或は事實があって、この坑が祖甲或は其の他の時代に陷没された證據であるとみなさるべ

きものを常に見出し得ない。將に最下層の近くにいたっては、誠然として石塊の漸く多くの記録がある。ただこれは最も下層の一米上下の現象であって、また陥沒説の根據となすことが出來ない。まとめて云えば、當時の發掘記録に照せば、私たちの知っているのは、五米三から六米六にいたる深い處で、坑内には一段の淤沙があり、但し決して「地下の沙層」ではない。五米二以上には、坑内には已に字をおびた龜甲及び大宗の銅器が出土している。淤沙の一段は、嘗って大量の獸骨を掘り出した。多數はみな助骨と腿骨である。ただ大部分の甲骨は、七米以下である。近坑の底からはじめて出て來た。彦堂はいう「井中にはただ一・二期の卜辭だけで……」と。もとより一つの長期研究を代表する、非常に重要な結論であって、私たちの解釋にE一六坑の文化層は一つの最も信ずるにたる憑籍をくわえられた。私たちがE一六坑出土の甲骨をみるなら坑内には上により下に往く分佈の秩序は、

(1)發掘の日時	(2)坑の深さ
四月十四日	三・五M―四・五M
四月十五日	四・五M―五・二M
四月十六日	五・二M―六・〇M
四月二十日	六・〇M―七・一M
四月二十一日	七・一M―八・〇M
四月二十二日	八・〇M―八・八M
五月二日	八・八M―九・四M

(3)出土の甲骨	(4)圖版の編號
(甲)三	(甲)二九四一―二九四二
(甲)七	(甲)二九四三―二九四九
(甲)十一	(甲)二九五〇―二九五九
(甲)十八 (骨)一	(甲)二九六一―二九七七 (骨)三三三〇
(甲)二七 (骨)二	(甲)二九七八―二九九九；三三二四―三三二八。(骨)三三六一―三三六二
(甲)一七三 (骨)十	(甲)三〇〇〇―三一四四；三三二二。(骨)三三三一―三三四五
(甲)四六 (骨)一	(甲)三一四五―三一七六。(骨)三三四六

上表に據れば、E一六坑の字を帶びた甲骨が出たのは四月十四日のあの日に就ち開始されたのである；あの一日に掘った深度は、地面を離れること三・五Mに起り、地面を離れること、四・五Mに止まる；坑口を離れること、一・六Mと二・六Mの間に在り；ここの深度より以上には、私たちは捜し出せなかった。この坑が早期に落ちたと解釋できるようなどんな物的證據も決して地面を離れること四米五より下に掘ること、字を帶びた龜甲は續々と出た。それらと一諸に出たのは、帶細の陶片（十五日）、白陶片（十六日）、黑陶及び方格紋陶（十六、二十日）、將軍盔式陶（二十一日）であった。大宗銅器（十五日）、大推蚌殼（十六日）、大量肋骨（十六、十七日）成層蝸牛，土層の變遷は、灰福色、灰黄色によって、漸く夾んだ木炭が有る。粗沙は、色漸く黑く變る（十六日）、夾類は石灰質の粒に似ている（十六日午后）、淤沙を帶たもの（二十日）、大量の石塊を夾む（二十二日）、すぐに水面に至る。（五月一日）。多數の帶字甲骨は、均しく地面より七米離れた

ところから出ていると云うけれどもただその他の重要出土品は、均しく上の位置に出現した、並に少數の帶字龜甲は同一水準上にあり、だからそれらの時代を證明することが出來るように思える。

董先生の論斷に照せば、凡そE一六坑出土の器物である、みな祖甲或は祖甲以前の時代に屬す。この條の重要な論斷は、同時に下列の幾條かの必然の推論を包含する。

(1) E一六坑にみえる各色各式陶器、―黑色陶、灰陶、白陶、帶細陶、――みな祖甲或は祖甲以前の陶器である。

(2) E一六坑にみえる各種の銅器、各式の斧形の器、各式の句兵、刺兵は、各々銅矢、各種の小件を裝飾している。みな祖甲或は祖甲以前の銅器である。

(3) E一六坑にみえる其の他各種の實物、朱砂、黄金、玉器、雕花骨器等―もやはりみな祖甲或は祖甲以前の實物である。

假に私たちがE一六坑が祖甲の時に封閉あるいは陥沒したことを確かに證明できるとしても、上列の推論はもとより何らの疑問も引き起しえない。若し斷代の研究に照して云えば、この一坑に出るところの甲骨文字は、祖甲時代より更におそいものはない。此れに因ってまた就ち聯帶的に斷定され、甲骨と同出の器物は、また必然とそれらと同時代である。然しこの〝必然〟にかえって外の證明を必要とする。この一點に關しては、彦堂は彼の自序の内で、「詳細な説明がない。彼はただいう；甲骨文字は〝遺址遺物の年代を確證するものである〟と。原則上では、私たちはもとより、この話の正確性を承認する。ただその正確性にはまた當然條件がなければならない。どのようになってはじめてこの一原則を正しいところに運用できるのかは、大半は、私たちが甲骨と同時に現われた現象に對して同

じことをしたかどうかを徹底的に研究してみなければならない。若し云うなれば一塊が版築の土中に一塊の祖甲時代の帶字龜版あるいは獸骨と認めるものを捜し出せるなら、就ちこの片の版築はまた祖甲時代の築である。と斷定する。これは就ち大きな爭端を引き起す。譬へば一所に宋版書を專藏するところの現在圖書館の書庫を見て、私たちは書が宋朝のものであるからといって、また書を收めてある書架が庫内に用いる机や椅子、紙や筆墨、甚だしきに至っては庫房の建築でさえもみな必ず宋朝のものと定めることはできない。同様に地は、私たちに某一坑内に某の一時代の甲骨が出たからといって、また就ち其の他の實物と甲骨とを同時代と斷定することはできない。甲骨の存在は、若し運用に適當なものを得れば、ただ同坑出土の實物に一個の最も早い時代の制限を與えるだけである。最もおそい時代の制限にいたっては、單に甲骨文の聯繫に賴ってはたらざるものがある。

E一六坑に出た帶細の陶、白陶は若干同じでない銅矢で或るものは私は比較的おそい形成とが、卻って最下層に出現していると思う。これは當然みな早くは祖甲時代、或はそれ以前である。だがこの一類の判斷は、この遺址内にある所の現象と相い符するかどうかということで當然私たちは充分に注意すべきである。假にこれが實物分類と個別の研究中で得た結論が、甲骨文字研究で得たところの結論と合うようならば、私たちはE一六坑の全坑の推積時代に對して、もとより董先生の意見を受けつぐことができる。要するに得るところの結論證明が、若干の實物は早くは祖甲の時代にすることは出來ないならば私たちはまた就ち單に一方面の證據だけに賴ることはできない。E一六坑の最後の推積を、むりに早期とすることはできない。

長い間彦堂とこの問題を討論することがなかった、最近交通當局は鄭黄をひとけた高く

あげ、全く私達をして一封を外國に送信させることができないようにしている。わざと私たちと國外の友人との通信權を沒收しようとしているかのようである。自序を讀んで、殷墟發掘の歷史を想い夢のごときことを書いた。篇の短い跋は、ただ彼との通信の代りで、並に想念の情を記す。

中華民國三十七［一九四八］年、正月十七日。

李濟（李濟・『卜辭通纂』註［四十六］・第二輯一四九頁參見）南京鶴鳴路史言所二樓で跋す。

六六、殷虛文字乙編序［二］

［董作賓序］

殷墟文字乙編，繼甲編而作，包括着殷墟發掘第十三次至第十五次所採獲的甲骨文字。這可以說是一個很自然的區劃；第一次至第九次，接連着在小屯村發掘，從民國十七年秋季到二十三年春季，這九次所得的甲骨文字，已全部收入甲編；第十次至第十二次，從二十三年秋季到二十四年秋季，這三次，工作重心轉到洹河北岸的侯家莊西北岡殷代陵墓的發掘，沒有得到甲骨文字，所得的全是金石陶器銘刻，將來打算收入丙編；第十三次至第十五次，從二十五年春季到二十六年春季，這三次發掘工作，又重新回到小屯村，並且集中在村北的B C兩區，所得的甲骨文字全部收入乙編；十五次發掘的陶、骨、石、銅器文字，將來也都要收入丙編的。

乙編所收材料，超過甲編約四倍以上；出土的坑位簡單明晰，內容新穎而且豐富；研究的價值，也遠在甲編之上；因此我們對於這批材料的整理，更加慎重。主持後三次發掘的石璋如君曾記述在C區的H一二七坑發現大批龜版的詳細情形，這是乙編一萬七千多塊龜版的出土地點（見六同別錄上冊，小屯後五次發掘的重要發現之八、又見中國考古學報第二冊，殷墟最近之重要發現第四一至四五頁。）H一二七這一坑甲骨文字，是帶着泥土瓦礫，裝入一個特製的大木箱中，由安陽到南京的。到京之後，箱子經過了翻轉，打開來時，是底朝天，於是一層層小心的把龜版取起，完整的一版裝一紙盒，這情形等於先從原坑的最下層作起，原來是龜甲的正面向下，現在都向上了。整理的期間我們為的要保留一個甲骨文字在地下埋藏的真象，所以曾聘請了一個石工，作了一個白石的標本（這標本在南京淪陷期間遺失了。）

經過三個多月的仔細工作，纔清理完竣這一坑甲骨文字，每一層，每一塊，都繪入圖中，誌其位置和方向。不幸的是還未及上膠，黏兌，編號，而抗戰開始，於是在匆忙之中，帶着紙盒，裝入木箱，首先運到長沙又運到桂林，轉到昆明，直待民國二十九年，研究所遷到龍頭村的時候，纔由高去尋、胡厚宣兩君把這後三次出土的甲骨文字一一編號登記。那時候限於工作地點的逼窄，局促在一個屋簷之下，實在無法作排列黏兌的工夫，於是把原在一盒的碎片編為一號，以便將來傳拓時再為黏兌；但是紙盒經過了三年的潮濕，萬里的震蕩，多已霉爛破壞，因而相互混雜，不易分辨。說起來真是罪過，在南京整理時那樣細心，每盒都是一個完整的龜版，至少有三百盒，現在經過屢次的搬運，已黏兌完好的，也都四分五裂，七零八落了；直到在四川李莊時拓印編輯，仍然不能恢復完整之舊；這使我極感不安！希望讀此書者原諒它是國家多難時的產兒，自己再下番拼合的工夫，好在所缺的只是無字部分，有字的殘片，已儘量收入乙編中了。

編輯的體例，一如甲編，仍以發掘時期坑位為次第。開始編輯時，我正在寫殷曆譜，所以把黏兌，剪貼，排列，督促傳拓等工作，都請屈萬里君擔任，後來李孝定，張秉權兩君繼之。屈君共編五二一葉，拓本號由一號至四五一四；李君共編一四〇葉，拓本號由四五一五至五二四六；自六六二葉，五二四七號以下，皆為張君所編。

乙編共分三冊，因為傳拓尚未完竣，所以分期出版，先印一二兩冊，這三冊的內容是：

分冊	葉數起訖	拓本號起訖	登記號起訖
第一冊	一—四〇〇	一—三四七二	一三・〇・一—一三・〇・七二七五
第二冊	四〇一—八〇〇	三四七三—六二七二	一三・〇・七二七六—一三・〇・一三三四九
第三冊	八〇一—一二〇〇(?)	六二七三—(?)	一三・〇一三三五〇—一五・二・五〇

也和甲編一樣，先把圖版部分發表，以後再續印考釋部分。後三次所得甲骨文字，第十三次佔最大多數，十三次以H一二七一坑出土的龜甲佔最大多數。十三、十四、十五次，的甲骨總數，列表如下；

次數	甲號	骨號	甲骨總數
第十三次	一三・〇・一—一三・〇・一七七五六	一三・二・一—一三・二・四八	一七八〇四
第十四次	一四・〇・一—一四・〇・二		二
第十五次	一五・〇・一—一五・〇・五四九	一五・二・一—一五・二・五〇	五九九
三次合計	一八三〇七	九八	一八四〇五

這一編裏，有許多無可如何的缺點，像第四期文武丁時的細小之字，拓本不能夠十分清楚，像書寫的字，年久色退，照片也很模糊；又且是朱書和墨書不分，原是一塊，拓本分散處，也有經我拼合的許多版，因為已按號貼入，無法重排，只好由它分散了，諸如此類，待寫考釋的時候再圖補救。

很慚愧，我對於乙編中的材料，太生疏了，這真是一塊尚未開發的新園地，這裏面奇花異葩，滿目琳瑯，足供研究甲骨文字的人們探討欣賞，可惜的是我不能為他們導遊。以前偶然抄存的一些材料，現在把它舉出為例，也算是一個簡略的介紹。下面兩篇短文便是。

『殷墟文字乙編』は『「殷虛文字」甲編』（本輯七頁參見）に繼いで作られ、殷墟發掘第十三回から第十五回に至って採獲した甲骨文字を包括している。これは一つの自然の區劃と云うべきであろう。第一回から第九回はつづけて小屯村を發掘し、民國十七〔一九

二八〕年秋から二十三〔一九三四〕年秋から二十四〔一九三五〕年の秋にいたる。この三回の作業の中心は轉じて洹河の北岸の侯家莊西北岡殷代陵墓の發掘に移った。甲骨文字は得ることが出來なかったけれども得たところのものはすべて金石陶器銘刻で將來『兩編』に收めるつもりである。第十三回から第十五回に至るものは二十〔一九三一〕年春より二十六〔一九三七〕年の春でこの三回の發掘作業はまた再び小屯村にもどり、並にかつ村北のB、C兩區に集中し、得たところの甲骨全部を乙編に收めた。十五回發掘して得たところの陶骨石銅器の銘刻は將來またみな『兩編』[三]に收めようと思う。

『乙編』に收めるところの材料は『甲編』を超過すること約四倍以上、出土の坑位は簡單明晰で、內容は新頴にして且つ豐富で、研究の價値はまた遠く『甲編』にまさっている。だから私共のこれらの材料の整理には更に愼重を加えた。あとの三回發掘を監督した石璋如（石璋如・『殷墟文字甲編』註[二十五]・本輯四五頁參見）君は曾ってC區のH一二七坑發見の大龜版の詳細な事情を記した。これは『乙編』一萬七阡ちかくの龜版の出土地點である（『六同別錄』上册、「小屯後五次發掘的重要發見」、また『中國考古學報』第二册、「殷虛最近の重要發見」第四一から四五頁に至る）H一二七坑の甲骨文字は泥土瓦礫を帶び、一つの特製の大きな木箱の中に裝入し、安陽から南京に運んだ。南京に到着してより、木箱はひっくりかへり、打ち開かれた時、坑の底は上に向かっていた。ここにおいて一つ一つ益々小心に龜版を取り起し、一版を一紙盒で裝い完整した。この事情は先ず原坑の最下層よりはじめ、本來は龜甲の正面が下に向っていたが、現在はみな上に向いている。整理の期間中は私共は一つの甲骨文字が地下埋藏の眞の姿で保留せんとした為に、一人の石工を請聘（やとい）して一つの白石の標本を作った。（この標本は南京の陷落期間によっ

て遺失した。）三ヶ月の仔細な工作を經てやっとこの一坑の甲骨文字を清理し完峻した。一層ごとに一塊ごとにみな圖中に繪を入れその位置と方向を誌した。不幸にこれらはまだ貼りつけ、粘兌、編號が終わらないで抗戰の開始となった。ここにおいて多忙の中で紙盒をもって、木箱に裝入した。先ず最初は長沙に運びまた桂林に運び、また昆明に轉じ、ずっと民國二十九〔一九四〇〕年にいたって、研究所が龍頭村に遷った時、高去尋（高去尋・『殷曆譜』註[四十三]・第三輯三四三頁參見）、胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）兩君によってこのうちあとの三回の出土の甲骨文字を一つ一つ編號し登記した。あの時は工作地點の狹隘な所に限られ局に促がされ一つの家の軒下にあったので實に排列粘兌の時間はなく、ここにおいて、もと一盒にあった碎片を編して一號にした。そしてさらに將來拓を傳える時、再び粘兌をする。ただ紙盒は三年の濕氣を經過し萬里に震蕩し、多く已に破壞すること霉（かび）腐くして、よって互いにまじりあって、分けがたい。言い出せば眞に過失である。南京で整理をしていた時はあのように細心で盒は毎に、みな一つの完整な龜版であった。少しく三百盒はあった、現在は何回もの運搬をへて、已に粘兌をなしたものもまたみな四分五裂し七零八落したので、ずっとして四川李莊にあって拓印編輯した時でさえ、依然として舊（もと）のように完整に恢復することは出來なかった。これは私をして極めて不安を感ぜしむるものである。讀者に希望することはこの書を國家が多難の產兒であることを諒され、自己に再び拼合の時間を下し缺する所のものはただ無字の部分であって有字の殘片は已に盡く『乙編』に收めた。

編輯の體例は一つは『甲編』のごとく仍ち發掘時期の坑位を以て順序とする。編輯を開始した時、私は丁度『殷曆譜』（『殷曆譜』註[一]・第三輯二八六頁參見）を書いたので

粘兌、剪り貼り、排列、傳拓などの督促はみな屈萬里君に擔任を請いのち李孝定（李孝定・『殷虛文字甲編』註[七]・本輯八頁參見）、張秉權（張秉權・『殷曆譜』註[四十四]・第三輯三四四頁參見）兩君がこれをついだ。屈君は全部で五二一頁を編した、六六二頁の五二四七號以下は皆な張君の編する所である、拓本の號は一號から四五一四號まで、李君は全部で一四〇頁を編した、拓本は四五一四より二四に至る。『乙編』は三冊にわけ、未だ傳拓が完成していないのでだから分期出版するのである、先ず一・二兩冊を印刷する、この三冊の內容は……

分冊	頁數	拓本番號	登記番號
第一冊	一—四〇〇	一—三四七二	一三・〇・一—一三・〇・七三七五
第二冊	四〇一—八〇〇	三四七三—六二七二	一三・〇・七三七六—一三・〇・一三三四九
第三冊	八〇一—一二〇〇(?)	六二七三—(?)	一三・〇・一三三五〇—一五・二・五〇

また『甲編』と同様に先ず圖版の部分を發表して以後再び續けて考釋の部分を印刷する。のちの三回に得た甲骨文字は、第十三回が最大多數をしめ、十三回はまたH一二七、一坑の出土の龜甲が最大多數をしめている。十三、十四、十五回の甲骨總數は下表の如し。

回數	甲番號	骨番號	甲骨總數
第十三回	一三・〇・一—一三・〇・一七七五六	一三・二・一—一三・二・四八	一七八〇四
第十四回	一四・〇・一—一四・〇・二		二
第十五回	一五・〇・一—一五・〇・五四九	一五・二・一—一五・二・五〇	五九九
三回合計	一八三〇七	九八	一八四〇五

この一編にはたくさんのどおしようもない缺點がある。第四期文武丁時の細小の字のように拓本は十分にはっきりさせることはできない。書寫の字のように年が經って色あせ、寫眞も大へんぼやけ、また朱書と墨書を分けず、もとは一塊で拓本の分散はたびたびでまた私が併合したものもたくさんある。拓本は既に號數によって貼り入れたので重排する方法がなかった。ただそれによって分散するに至った。この諸々の類のごときものは考釋を書く時をまって再び圖を補うであろう。

たいへん慚愧なことは、私が『乙編』中の材料に對して太だこれはうとかったということである。本當に一つの開發を待たねばならない新園地である。この中には、滿目の琳瑯として、甲骨文字を研究する人たちの探討欣賞に供するに足るであろう。惜むべきは私が彼等の為に導遊することができないことである。以前偶然に一つの材料を抄したが、現在はそれをあげて例となし、また一つの簡單な紹介をすることにする。下の方の二つの短文はすなわちこれである。

註[一]　本書は中央研究院歷史語言研究所の安陽小屯發掘第十三回より第十五回の間に得た甲骨卜片である、體裁はまったく『甲編』と同じで、上・中・下の三冊に分かれる。收錄數は一八四〇五片であり、その殆んどは一九三六年の春季におこなわれた第十三回發掘、C區H一二七坑の、直徑二米、深さ一米の坑から發見された約二百余の完全な龜甲大版を含み、この坑から出土したことから特別な意味を持っていると思はれる。この董作賓氏の序は論文の形をなし、一、刻畫上の問題。二、甲橋・背甲・骨臼の刻辭。三、文武丁期の復古的風潮の項目に亘

って論じている。二の問題については郭沫若、胡厚宣等にも論文がある。（『甲骨學商史論叢』註[二]・第三輯二二一—二二四頁參見）三の問題については『甲骨文斷代研究例』各註・第二輯參見。また本書の收錄卜辭には龜甲の全版を保つ例が多く、とくにその正反の刻辭に彼此比較して考へるべきものがある。その卜辭の種類は人身犧牲や、雄族、大龜版、多婦、多子、婦某、子卜貞形式の材料が多い。また綴合の可能な片は全體を通じて多い。出版は一九四八年三月、中央研究院歷史語言研究所專刊。

註[二]　『殷墟文字丙編』については『殷墟文字丙編』註[二]・第五輯參見。陶骨石銅器については『殷墟器物甲編』に收錄されている。

註[三]　屈萬里（一九一六—）字は翼鵬。山東省魚台の人。中央研究院歷史語言研究所所長兼台灣大學中文系主任。著書に『殷虛文字甲編考釋』、『尚書今註今譯』、『甲骨文从比二字辨』、『說奏石』等五十餘種。

一、請注意這裏面一坑所出的一萬七千零九十六版甲骨文字

這眞是應該大書特書的一件事，也是十五次發掘殷墟打破紀錄的一個奇蹟。民國二十三年的春季，工作回到小屯，採用徹底平翻的計劃，同時開掘B C兩區，這一季，從三月十八日到六月二十四日，工作了三個多月，清理出來的版築基址四處，墓葬一百八十一座，窖穴一百二十七個，就在這窖穴的最後一個，第一二七坑，發現這一大批甲骨文字。在乙編裏，一二七坑出土的甲骨，號數如下：

	拓本號	登記號	總數
龜版	四八六一（？未編完）	一三・〇・六二七—一三・〇・一七七一四	一七〇八八
骨版	（？）—（尚未編到）	一三・二・二八—一三・二・二八五	八
甲骨合計			一七〇九六

在一七〇九六版的大數目之下，骨版僅有八個，這一坑幾乎全是龜版了。坑位和這一批材料的特點，再分段記述在下面；

1、坑位和出土的情形。主持第十三次工作的石璋如君，記述的很詳細，他說：

窖的田野號數，叫做H一二七，它的附近地層頗為複雜，最上層是墓葬羣，單就它本身有關係的遺蹟說：最上層是M一五六；其次是H一一七，一個大而淺的灰土坑，當H一一七到底之後，才發現它的上口，它曾破壞了H一二七坑東邊的一部分，那麽H一二七，在這帶是資格最老的遺蹟了。上口距地面一公尺七寸，口徑約一公尺八寸，深距地面約六公尺，底徑約一公尺四寸。窖內的堆積，可分為三層：上層為灰土，下層綠灰土，中間一層是堆積灰土與龜甲；從坑口下五公

寸發現字甲起，到深二公尺一寸止，所佔的空間高約一公尺六寸。這個窖也是普通的圓窖，在字甲未放入之前，便有相當時間的堆積，就是下層的綠灰土和少數的陶片，獸骨。它呈現着北高南低的斜坡，在傾入字甲時，沿着舊日的方向，也呈現着北高南低的斜狀，因而北壁上貼許多整版和殘碎的甲片。在龜版堆積中，有一架拳曲倒置的人體骨骼，緊靠北壁，大部分壓在龜甲之上，只有頭及上軀在龜甲層以外，似乎在傾入龜甲之後，此人始入坑中。龜甲的排列，有的正面向上，有的向下，映在我們眼中的，盡是些卜兆，灼痕，和龜甲的輪廓；大版的，小版的，有字的，無字的，完整的，殘缺的，堅的，朽的，互相枕藉，排成了由北而南的斜坡，佈滿坑底；眞是沒有容足之地。（節錄小屯後五次發掘的重要發現）

這一段記載，是親手發掘這批材料的石君，當時目覩的實在情形，是一幅H一二七坑發見甲骨文字的寫眞；在十五次發掘殷墟的工作中，這算是唯一的最大的一個收穫。石君曾討論到坑中的人骨，以為他可能是掌管龜版的人，因埋藏龜甲而以身殉之；又以為甲骨可能是異地而藏，而這一坑則是專埋龜版，這是清理前代文物時有意的埋藏，他的推測，都很可以相信。

2、

這一坑龜版，大部分是搬到南京以後才整理出來的，如篇首所稱述，包涵的時代，根據我對於這一批材料的粗略觀察，大概不出於武丁和文武丁的時期；有些也許是武丁的早年或先世，但都包括在第一期之中。這裏面佔着最大多數的，是武丁時的卜辭，證據在有許多武丁時的貞人，稱謂，例如一三・〇・六五七有“殼貞：”“母庚”之類，其餘從字形，人物，書體，方國，事類，文法各種標準，都可以一望而知的。文武丁時的卜辭，比較的少，這是新近才確定的，證據就是在本編中找到的

許多材料（詳見次段），有第四期的貞人可證，例如乙四一七四　一三・〇・九五五四的貞人例，乙一〇〇一　一三・〇・一九二三的貞人歸，乙八三〇　一三・〇・一五六一的貞人史，乙四九四九　一三・〇・一一三三五五的貞人余、子，我等均是。

3、刻劃卜兆的龜版。卜兆本來是灼了之後，正面所現出的天然裂紋，由這種卜字形的裂紋來判定吉凶禍福，在殷代要算是種微妙高深的學問，非當時認為專家的"太卜"，是看不懂的。為的保存着卜兆的"神蹟"，史官們都是相當的敬重它書契卜辭必須避讓着卜兆，這是甲骨文中最普通的現象。這一坑裏卻發現一種例外，在卜兆之上，再用刀加以刻劃，這是武丁之世，一個時期的特殊風氣，以前大家所不知的。刻劃卜兆這件事，很明白是為的美觀，當太卜看過裂紋，判定吉凶，得到答案之後，太史們便把卜辭寫在上面，卜兆的號數亦寫了，然後用刀刻字，覺着裂紋細微，不甚醒豁，於是順手也在卜兆上加以刻劃。刻完了數字，卜辭，用朱墨分別塗飾，使它顯明，已刻劃的卜兆上，也便塗以朱墨，於是黑紅相映，看起來疏朗清晰，鮮豔悅目。例如參加第三次全國美術展覽會的一塊龜版，就是這樣，在乙編中是一三・〇・一三五三六號，這是一個小號的腹甲，正面的卜辭，數字均於契刻以後塗硃，而卜兆則於刻劃以後又塗墨，黑的兆紋，紅的文字，襯着牙黃色而又光滑晶瑩的龜版，三千年下的今天，仍不失為一件美術品，料想當年，也是如此。不過這辦法終於不甚合理，為了美觀而有損卜兆的神秘與尊嚴，所以在武丁時代行之不久，也就革除了。

在四川李莊時，我曾把乙編中刻劃卜兆的許多版，加以整理（那時拓本纔編到四千號，只不過此坑的小半）得到以下所述的幾種特徵：

(一)龜腹甲背甲上的卜兆，均有重加刻劃的。以腹甲為最多，如殷曆譜交食譜月食二

所舉甲午月食一版一三・〇・七〇六九，即是一例；背甲較少，如乙九三七（拓本號下同）有"賓貞"，乙九六〇有"古貞"。

(二)卜兆記數字，自一至十。記一、二、三次的，如一三・〇・七〇六九版；記四次的，乙五五九、乙一九一一，記五次的，乙七四九，乙五七〇；記六次的，乙七四九，乙一七二三；記七次的，乙一八八六；記八次的，乙六四五，記九次的，乙五〇七，乙九二一，乙一一六一，乙一九三七；記十次的，乙七九七，乙八三七，乙一二三一，乙一九三七。卜兆記數字的很多，這不過舉幾個例子。一件事，最多卜至十次為止，若反正兩面，各卜問十次，則一件事也可以說卜到二十次，最少的只卜一次。記數字的順序，是先上後下，先內後外。有的卜兆、數字，皆塗以硃，有的只記數字，刻劃卜兆，而不記卜辭。

(三)卜辭嘗有書契大字，作一直行，如乙四八七，乙六三〇，或作一橫行，如乙四九三。

(四)卜辭刻在卜兆上的。通常卜辭都避開卜兆，這一類的刻劃卜兆的龜版，卜辭往往刻在卜兆上面，例如乙八六七，乙一二七七，乙一四五五，乙一九四一等版。

(五)嘗刻卜辭於甲的反面。例如乙八一一，乙六七〇，乙一二六二，乙一九一二等版。

(六)好用曲線界畫卜辭同卜兆。例如乙八六一，乙一二二二，乙一九八八等版。

(七)同時記貢納龜版的人及數量於腹甲甲橋反面。例如乙六六一，乙一九〇六，乙七五四等版。別詳本篇六，甲橋刻辭。（節寫交食譜月食二）

以上七種特徵，一、三、四、七僅見於武丁時代，二各期雖記數字，但不盡相同，五、六也見於各期，但沒有第一期用的那樣多。

這一類刻劃卜兆的風氣是在武丁時代，又在早年，有些可在武丁以前。武丁時代的證據，自然是稱謂中的父乙（乙五二八，七四七，八六九）即小乙；母庚（乙四九六）即小乙配妣庚，父庚（乙七二一）即般庚；和貞人中的賓（乙一二七七，一二〇四，一七一四），㱿（乙七一八，五一九，一四七一），先（乙五七〇，六三〇，一〇五四，一九四一），古（乙五二六，八七三，一二七七，一七一四），永（乙七四九，九二〇），亘（乙九六五，一一六一，一四五五），內（乙九一八）等。至於武丁早年的證據，我的根據是所記王后生育的卜辭，武丁的年壽，相傳是一百歲，他在位五十九年，即位時已是四十二歲，所以假定他的王后生育，在他即位後的二十或三十年之內，至少可以說在此期間生育的子女比較的多。在這一類刻劃卜兆的卜辭裏，記婦媟娩的四次（乙五八六、二九七、一二二二，一二七七），記婦妌娩的一次（乙四九六），卜娩的二次（乙一二二六，一二五二），卜娟娶有子的各一次（乙一二〇一，一三七九），武丁的兒子很多，固然有在他即位以前所生的，但是當他壽高老耋之年，我們就不能相信他還要常常卜問生育子女之事了。

可能在武丁以前的話，證據只有一個月食。我作交食譜時，我曾把"月食二"列在小乙的八年，這也是一塊刻劃卜兆的龜版。當時我按交食週期推算，自然不太精確，我推算這是一個月偏食，西元前一三四二年二月一五日，上午二時一七分食甚，就是小乙八年二月十六日乙未，早上二時十七分，正當殷代二月十五日甲午之夜（殷代後半夜不屬於乙未，仍稱"甲午夕"），現在又經德效騫博士細算一編，證實這個月食是有的，他的推算是：

一三四一年（即一三一二），二月，十五日，干支三二（乙未），安陽時：初

虧一時一分，食甚一時五分，復圓二時三分。食象〇・一〇。

這和我的推算，只提早了一個鐘頭，不過食象太淺，只佔月徑的十分之一，時間太短，初虧至復圓，只有一點零二分，但是你不能說他不是"月食"，不能說這不算"甲午夕，有月食"。我覺得在短短一小時內，一線淺薄的月食，他們就不會忽略掉，正足見殷代測候人員的精細而且負責。如果不入於這一年，那麼，合於甲午夜的月食，早的要上至般庚的二十六年（一三七二年三月二七日，德表，下同，）晚的要下至康丁的六年（—一二二八年十二月十七日），距武丁的時代就太遠了。

一、この一坑に出た一萬七千九十六版の甲骨文字についての注意。

この眞の大書は特別とすべき一つの事であり、また十五回殷墟發掘の記錄を打ち破った一つの奇蹟である。民國二十五「一九三六」年の春、作業は小屯に變り、徹底した平翻的計劃を採用した、同時にBC兩區を開き發掘した。この期は、三月十八日より六月二十四日に至り、三ヶ月作業した、版築基址の四ヶ處を清理することができ、墓葬は一百八十一座、穴窖は一百二十七ヶ所であった。すなわちこの穴窖の最後の一坑は、第一二七坑で、こゝで一大の甲骨文字を發現した。乙編のこの一二七坑出土の甲骨の號數は下表の如くである。

	拓本番號	登記番號	總數
龜版	四八六—（？未完）	一三・〇・六二七—一三・〇・一七七一四	一七〇八八

骨版　（？）―（尚未完）　一三・二・二八―一三・二・八五　八
甲骨合計　一七〇九六

一七〇九六版の大數目の下、骨版は僅かに八片で、この一坑は殆んどすべて龜版であった。坑位とこの一批料の特點は、再び分段すれば下記の記述の如し。

1、坑位と出土の事情。第十三回の工作の受持の石璋如君は、たいへん詳細に記述している。氏はいう、

窖の田野番號はH一二七とよばれ、他の附近の地層は頗る復雜で、最上層は墓葬羣で、單に就ち他の本身と關係のある遺蹟をいうと、最上層にはM一五六であり、その次のH一一七は、ひとつ大きく淺い灰土坑で、またその次のH一二一灰土坑はH一一七にあたり、この底の後にあたる。他の上口に發見し、他はかつてH一二七坑の東邊の一部分を破壞した、そのH一二七坑の一帶は最も老いた遺蹟の資格があった。上口は地面をへだたること一尺七寸、口徑は約一尺八寸、深さは地面を距ること約六尺、底徑約一尺四寸であった。窖內の推積は、三層に分けることが出來る、上層は灰土、下層は綠灰土で、中間の一層は推積灰土と龜甲であった、坑口より下は五寸字甲を發見し、深さ三尺一寸にいたって止まった、佔めるところの空間の高さは約一尺六寸であった。この窖はまた普通の圓窖で、字甲は未だほうり入れない前のもので、すなわち相當な時間の推積があって、下層の綠灰土と少數の陶片と獸骨である。他は北高南低の斜狀を呈し、字甲を傾入した時、舊日の方向に沿ひ、また現に北高南低の斜狀を呈した、よって北壁上に多くの整版と殘碎の甲片を貼った。龜版の推積は、一架さかさで人體を曲げた骨骸があり、北壁にぴったりとよりかかっている。大部分は龜甲の上に壓し、ただ頭と上軀は龜甲層以外にあった、そして龜甲の後に傾入するのに、此の人は始めて坑中に入れられたようだ。龜甲の排列は、正面の上へ向にあり、下向きにあるのは、私共の眼中に映り、盡くこれト兆、灼痕と龜甲の輪廓である。大版、小版、有字、無字、完整、殘缺、堅朽、腹甲、背甲、互に枕藉し、北によって南の坂道に並べた。坑底滿面に散布し、眞に足を入れる地はない。（小屯後五次發掘の重要發現より節錄）

この一段の記載は、みずからの手でこの種の材料を發掘した石君が、當時目で見た實際の情形で、一幅のH一二七發見の甲骨文字の眞の姿を書いたものである、十五回殷墟發掘の工作中、これは唯一で最大の收穫であった。石君と曾って坑中の人骨について討論した、思うにかれは龜版を掌管する人であったというのは、龜甲を埋藏し身をこれに殉じたから、また思うに甲骨は地を異にして藏していた。この一坑は則ち龜版のみを埋藏するところで、これは前代文物を清理する時意味のある埋藏で、彼の推則は、みな大變信ずることの出來るものである。

この一坑の龜版の　大部分は南京に運んでから整理して出來たもので、篇首に稱述したごとくである。

2. 包涵の時代　私のこの一批料に對しての粗略な觀察を根據にすれば、大概武丁と文武丁の時期を出ない、これはまた武丁の早年あるいは先世のものである。ただみな第一期の中に包括している。この最大の數量を佔めているのは、武丁時のト辭で、證據は武丁期の貞人の稱謂にある、例へば一三・〇・六五七に「殼貞」「母庚」の類のごとく、その餘りは字形、人物、書體、方國、事類、文法各種の標準で、みな一望を以て知ることが出來る。文武丁時のト辭は、比較的少なく、これはちかぢかに確定したものである、就ち本編中にいくらかの材料を證據として（次段に詳見）、第四期の貞人を證すべきことがあり、例へば乙四一七四、一三・〇・九五五四の貞人俐、乙一〇〇一、一三・〇・一九二三の貞人歸、乙八三〇、一三・〇・一五六一の貞人史、乙四九四九、一三・〇・一一三三五の貞人余・子・我等である。

3. 刻劃ト兆の龜版　ト兆は本來これ灼の終りの後ち、正面に現はれるところの天然の龜裂紋である、この種のト字形の龜裂紋によって吉凶禍福の判定をするのは、殷代に於て一種の微妙で高深の學問であり、當時專門家の「太卜」を認めなかったのは、理解できなかったからである。ト兆の「神蹟」の保存の爲に、史官達はみな相當尊敬をしたのである、書契ト辭には必ずト兆を避讓したのは、甲骨文中で最も普通な現象である。この一坑でところが一種例外なものを發見し、ト兆の上に、再び刀を用いて刻劃していることで、これは武丁の世であり、一個の時期の特殊風習で、以前にはみんなの知らなかったものである。刻劃ト兆の事は、美觀を呈するためだということがはっきりしている、そして太卜の龜裂紋を見ると、吉凶が判定され、答えが解かってからのち、太史たちは、すなわちト辭の上に書いたのである、そしてト兆の番號を書き、然る後に刀を用いて字を刻んだのである。裂紋の細微なるは、甚だ人目を引きはっきりしていることを覺える。ここにおいて思うようにト兆の上に刻劃を加えていたのである。數字とト辭を刻みおわって硃墨で塗飾して、それをはつきりさせて、已にト兆の上に刻劃して、また便に硃墨を塗ると、黑紅がともに映えて、すっきりとしていて清晰となって、鮮豔して目を娛しませてくれる。例へば第三次全國美術展覽會に參加した一塊の龜版は、このようで乙編中の一三・〇・一一三五三六である、この一個の小號の腹甲の、正面のト辭、數字は均しく契刻してのちに硃を塗っており、ト兆は則ち刻劃してから墨を塗っている。墨の兆紋、紅の文字、牙黃色を浮きあがらせ、光滑は晶瑩のような龜版で、三千年降った今日においても、一美術品たることを失っていない。その年を予想するのに、またかくのごとくであっただろう。だがこの方法はついに甚だ合理的でないのは、美觀のためにト兆の神秘と尊嚴を損うからである。だから武丁時代にはこれを行うこと久しからずして、またすぐ除き改められた。

四川の李莊にあった時　私はかって『乙編』中の刻劃ト兆の多くの版に、整理を加えた、（その時の柘本の編は四千號に至ったが、ただ此の坑の半分にすぎない）以下述べるところの七種の特徵に到達した。

(一)龜腹甲　背上のト兆には、均しく刻劃を重加している。腹甲を以て最も多きとするのは、『殷曆譜』交食譜月食二にあげる甲午月食の一版一三・〇・七〇六九である、即ちこの一例は、背甲は少ない。乙九三七（柘本番號　下に同じ）に「賓貞」、乙九六〇に「古貞」がある。

(二)ト兆に數字を記す、一より十に至る。一・二・三回に記すのは、一三・〇・七〇六九版のごとくである、四回記すのは乙五九・乙一九一一、五回記すのは乙七四九、乙五七〇、六回記すのは乙七四九、乙一七二三；七回記すのは乙一一八

八六、八回記すのは乙六四五、九回記すのは乙五〇七、乙九二一、乙一一六一、乙一九三七；十回記すのは乙七九七、乙八三七、乙一二三一、乙一九三七である。卜兆に數字を記すことは大變多く、ここでは幾くらかの例を擧げるにすぎない。一件のことに、最も多い卜いは十回に至って止まっている、反正兩面のごとく、各々十回卜問し、就ち一件に二十回説卜しているもの、少いものは一回である。數字を記す順序は、先づ上のち下で、そして先づ内のち外である。卜兆と數字のあるものは皆な硃を塗り、ただ數字と卜兆刻劃を記すものは、卜辭を記していない。

(三)卜辭には嘗って大字に書契するものがある。一直（まっすぐ）行に作り、乙四八七、乙六三〇である、或は一横（まよこ）行に作るのは乙四九三である。

(四)卜辭が卜兆の上に刻んであるもの。通常卜辭はみな卜兆を避け、この一類の卜兆に刻劃した龜版は、卜辭は往往刻むに卜兆の上にある、例へば乙八六、乙一二七七、乙一四五五、乙一九四一等である。

(五)嘗って卜辭を甲の反面に刻したもの。例へば乙六七〇、乙一二六二、乙一九一二等の版である。

(六)曲線界劃を好んで用いる卜辭は卜兆に同じ。

(七)同時に龜版を貢納する人及び數量を腹甲橋の反面に記したもの。例へば乙六六一、乙一九〇六、乙七五四等の版。別に本篇六の甲橋刻辭で詳にする。（「交食譜月食二」より節寫す）

以上七種の特徴の、一、三、四、七は僅かに武丁時代に見える、二、各期に數字を

記るすと雖も、但盡く相い同じではない、五・六は各期に見え、ただ第一期ほど多く用いられていない。

この一類の刻劃卜兆の風習は、武丁時代のものである、また早年にあっては、更に武丁以前にあるものであろう。武丁時代の證據は、自然稱謂中の父乙（乙五二八、七四七、八六九、一五八八）即ち小乙、母庚（乙四九六）即ち小乙の配は妣庚、父庚（乙七二一）即ち盤庚、貞人中の賓（乙一二七七、一二〇四、一七一四）、殻（乙七一八、五一九、一四七一）岂（乙五七〇、六三〇、一〇五四、一九四一）宮（乙五二六、八七三、一二七七、一七一四）、永（乙七四九、九二〇）、亘（乙九六五、一一六一、一四五五）、内（乙九一八）等である。武丁早年の證據に至っては、私の根據は王后生育を記す卜辭である、武丁の年壽は相い傳へて一百歳である、彼の在位は五十九年、即位の時は已に四十二歳である。彼の王后生育を假定する所以は、彼の即位後の二十年或は三十年の内にあって、少しばかりこの期間に生育の子女が比較的多いことを説くべきに至った。この一類の刻劃卜兆の卜辭にあって、婦媟の分娩の四回の記載で（乙五八六、二九七、一二二二、一二七七）、婦姘分娩の一回（乙四九六）卜娩の二回（乙一二二六、一二五二）、卜娟、娶に子あり、各々一回武丁の子供は大變多く、固より彼れが即位する以前に生んだのであろう、ただこれは彼れの壽が高齢の年に當って、私共は就ち彼が常々子女を生育することを卜問したと信ずることは出來ない。

武丁以前の話である證據はただ一つの月食の記事である。私が「交食譜」を作った時、私はかって「月食二」を小乙の八年に列した。これはまた一塊の刻劃卜兆の

龜版である、當時私が交食の週期の推算を考えた時、もとより太だ精確でなく、私の推算ではこれは一個の月の偏食で、西暦紀元前一三四二年二月十五日、午前二時十七分食甚しい、すなわち小乙の八年二月十六日乙未である、午前二時十七分は、まさに殷代の二月十五日の甲午の夜（殷代後半夜は乙未に屬さず、仍ち「甲午の夕」と稱す）、現在また德效騫博士[四]の細かい一遍の計算をへて、この一ヶ月の偏食のあることを實證した。彼の推算によると

一三四一年（即ち一三四二年）二月、十五日、干支三三（乙未）安陽の時初めて虧く一時一分、食甚しい一時五分、復圓二時三分。食象〇、一〇分。これと私の推算では、ただ一時間多いだけである、だが食象ははなはだ淺い、ただ月經の十分の一をしめ、時間は太だ短く、初め欠けた時から復圓に至るまで、ただ一時間二分あっただけである、但それは月食ではないと説くことは出來ない、これは「甲午夕、月有食」に入れないということは出來ない。私は短い一小時間内に、一線の淺薄な月食に、彼等は就ち忽にとりおとすことはありえない、ほぼ正しくないことは殷代測候人は正しく精細にしてその上貢責するに足ることを見ることが出來る。この一年にはいらなければ、甲午の夜の月食に合するものが、早ければ上は般庚の二十六年（一三七二年三月二十七日德效騫氏の表下に同じ）、おそければ康丁の六年、（一二二八年十二月十七日）武丁の時代を距ること就ちはなはだ遠い。（この項については『殷曆譜』註[三十七]交食譜・第二輯三二七頁參見）。

註[四]　德效騫（生年不明）Homer. H. Dabs。米國人。天文學者。董作賓氏と月食に

就いての學問的な親交があった。彼は−1400（前一四〇一年）から−1000（前一〇〇一年）に至る月食表を作製した。それは A canon of lunar eclipses for An-Yang and China, −1400 to −1000, Harvard J. of Asiatic Studies 10, pp. 162-178, 1947 である。

4、

毛筆書寫的字跡。在甲骨中，但經書寫而沒有契刻的文字，甲編裏已著錄過三版，（甲八七〇、二六三六、二九四〇）因而我們可以推斷殷代已有毛筆的使用，甲骨文字是先寫後刻的（甲骨文斷代研究例十書體，四一七－四一九，中國藝術論叢殷人之書契七一－八三，可參閱）。現在，在乙編裏，又有許多顯著的例子，用毛筆書寫的情形，更爲清楚。甲編所收的三塊骨版現在知道是文武丁時的遺物，乙編裏所收，大部分是武丁時書寫的卜辭，這些分明是寫完之後，忘了契刻了。書寫是拓印不出的，所以編輯時，就改用照片了。記得在美術展覽會展覽過一塊背甲，在乙編的號數是一三・〇・一四〇四八，是背甲的右半，左邊稍有殘缺，正面：卜兆均經刻劃，左上角一辭"壬申卜，岂貞：帝命雨？"是刻過的，筆畫細而勁，反面，右上角與壬申一辭相對處，寫着"貞：帝不其命雨？"未經契刻，筆畫肥而柔，這分明仍是史臣岂的手蹟，可以看得出他用筆是由上而下，由左而右，直與現代寫字的筆順無異，而契刻的方法，則是先刻每字的直畫，後刻它們的橫畫，和書寫是迴然不同的。此版的背面，另有四段也是寫了未刻的，色作深褐，似是硃書而誤羼入墨，又有"貞乎"二字，書體甚粗，中有細畫契刻，尚未完成，這正是先寫後刻的一個實例。

又有腹甲一版，乙編中號數一三・〇・一三五三六，也曾展覽過。正面：卜兆細刻

5.

畫，又塗以墨色，卜兆記數字，均塗硃色，卜辭兩段，皆契而塗硃，文曰：“辛巳卜，㱿貞：戠不其受年？”“貞：蜀不其受年？”二月。反面：右邊甲橋有“雀入二百五十。”等字，刻後塗硃，中間有毛筆書寫的文字二行，作暗紅色，文曰：“貞：戠蜀受年？”王固曰：“缶眔蜀受年？”兩面為一人手筆，一書、一契而已。

毛筆書寫的字跡，在乙編中是很常見的，讀可以自去翻檢。這裏只是就我手邊有的材料，舉出兩個例子。

硃與墨。殷代寫字用硃與墨，契刻之後仍塗硃墨以為裝飾，硃和墨，在殷代是很普遍的應用着。上節所舉毛筆書寫的字，帶紅色或赭色，也正是硃墨羼雜的顏色。在乙編裏有硃墨都很純淨的書寫或裝飾的文字，就手頭的材料舉幾個例子。在昆明時，曾抄了十三次的龜版一千號，從六二七號以後，屬于H一二七坑，所以以下所列，是在這三七三版以內，並根據抄時的附註，若單看拓片或照片，是不易分辨的。

硃書的　一三・〇・六五〇

墨書的　一三・〇・六九〇　一三・〇・七〇二　一三・〇・八一六
　　　　一三・〇・八二九　一三・〇・九七七

書寫之後經過契刻，朱墨不存，所以契刻之後，再塗硃墨。

塗硃的　一三・〇・六八八　一三・〇・六九〇　一三・〇・七三九
　　　　一三・〇・八〇六　一三・〇・九八二

塗墨的　一三・〇・六三一　一三・〇・六九八　一三・〇・八〇七
　　　　一三・〇・八六六　一三・〇・八七一　一三・〇・九六六

一〇〇〇號以下，還有很多，將來當分別注明在考釋裏面。

6.

硃墨當然是殷代重要的文具，寫字是一定要用的，但是契刻之後，就沒有用的必要了。所以在別的王的時期，通常是刻過的卜辭，不加塗飾；武丁時，也以不塗硃墨的卜辭為多。所以我以為塗飾硃墨，完全是史官們愛美，為的好看，並不是一定的制度，也不是某類卜辭應該塗硃而某類應該塗墨。例如一三・〇・一四〇四七這一版是龜甲的上半，在正面有大字丙申一段卜辭，是㱿所寫的，卜的是乙巳日酒祭下乙，字畫中全部塗硃，而旁邊小字，也是㱿所寫的，記的是十天之後丙午所卜，甲寅日酒祭大甲，同是一人的書契同是酒祭先祖，而大字的塗硃小字的塗墨，這一版有三次卜祭之辭，也是塗墨。反面有追記的三段，大字的屬於丙申一辭，塗硃，餘塗墨。卜兆是刻劃過的。因此我以為塗飾硃墨，為的裝璜美觀，和卜辭本身是沒有甚麼關係的。

改製的背甲。殷代貞卜也用龜背甲，背甲從中間剖開，分為左右兩半，灼兆刻辭，一如牛胛骨的分別左右，對稱為之，這是各期都有的，在這一坑裏，發現一種改製過的背甲，卻是新例。石璋如君也會注意到這種特別的現象，他記述H一二七坑出土的情形說：

> 又有背甲製成如石刀的樣子，中間穿孔，上面刻辭的。但是其上的卜兆是向一個方向的。這些樣子，均為從前所未有。

其實所謂“石刀的樣子”，只是一種長而兩端橢圓不甚規則的形狀，這都是較小的背甲，由中間鋸開，又去其近脊甲處凹凸更甚之部分，削其兩端，使略成圓形，這是為的易於平放，中間有孔可以貫穿。所謂“卜兆是一個方向”，也正和普通的較大的背甲一樣，凡是右邊一半，卜兆一律向左，左邊一半則向右。

這種改製的背甲，在形制上是一個新的發現，在應用上，大致和普通背甲相同，例

7.

如在乙編中編號一三・〇・一一八四六｜版，拓本是五二七一號。此版是龜背甲的右半，所以卜兆一律向左，所記只是一件事，貞卜反面兩面，卜用九次，正面五卜，反面四卜，辭如下：

　庚戌卜㱿貞：“岳壱我”？一、二、三、四、五（在上左角）

　庚戌卜㱿貞：“岳不我壱”？一、二、三、四（在下端）

全版卜一事，灼九次，也有卜兆記數字，大略和一個小的腹甲相同，而卜兆的方向，又和在普通的背甲右半相同。這一類並不太多，橢圓形，中有孔，在乙編裏可以一望而知，不再舉例了。

武丁大龜。在這一坑裏，有一版是最大的龜腹甲，也是甲骨文字出土以來惟一的最大的龜版，我叫它“武丁大龜”，本編的號數是一三・〇・一〇一一〇，民國三十一年，會在重慶參加過第三次全國美術展覽。當時請動物研究所的伍獻文先生研究，他參考葛萊氏（Gray）大英博物館龜類志證明這類大龜，和現在產在馬來半島的龜類是同種。這一塊腹甲上面盾片的結構，雖與其他的普通腹甲有異，是我早經注意的。卜辭八段，皆橫列，左半左行，右半右行，文為：

　“叀于兕，一牛”。一　“叀小宰”？一　“宰”？一　“勿叀口”？一（在右半）

　“勿叀于兕”？一　“卅牛于黄尹”一　“屮于㑄”？一　“屮口口”？

　一（在左半）

以上各辭均在下半，近尾甲處，左右各有卜兆記數一、二、三，卜兆下注“上吉”者三。由於祀典及所祭之人，“上吉”字樣，均可證在武丁之世。全版形制：

龜腹甲，大部分完整，僅右邊殘缺的五分之一，全版之長，為四四〇公釐，寬約三五〇公釐。背面有鑿處（據對稱復原）共二〇四，灼用者僅下半五排，共五十處。

這樣大的龜版，在號稱十萬片甲骨中，是惟一的一個，又和普通的龜版絕非同種，所以我們應該特別加以注意。我們知道，安陽出土的龜版，都是諸侯方國進貢來的，不是產在安陽的（下一節論到），所以這一種龜版，也無疑的是來自遠方。古代貨貝而寶龜，南方常有貢納大龜的事，禹貢稱“九江納錫大龜”，九江的大龜又決沒有如此之大。在傳說中，帝王世紀稱“大戊時，重譯至者七十六國”；後漢書南蠻傳稱“交趾之南有越裳國，周公居攝，越裳以三象重譯而獻白雉”，據此傳說，是商周之世，當有越南遠方之國，重譯來獻方物的事實，而這惟一的產於馬來半島的大龜，也就可以得到解釋了。

4.

毛筆書寫の字跡。甲骨中にあって、ただ書寫を經て、契刻のない文字は、『甲編』では已に三版を著錄している（甲八七〇、二六三〇、二九四〇）、よって私共は殷代には已に毛筆の使用を推斷した、甲骨文字は先ず字を書いてからのち刻んだ（『甲骨文斷代研究例』十、書體四一七―四一九。『中國藝術論叢』殷人之書與契、七七―八三參閱せよ）現在、『乙編』では、またすこしばかりの顯著な例がある。毛筆を用いた書寫の情況は、更にはっきりしている。『甲編』に收めるところの三塊の骨版は、現在文武丁時の遺物であることを知った、『乙編』に收めるものは大部分これ武丁時に書寫された卜辭であり、この字を書きおわったのち、契刻を忘れ

たものであることは明らかである。書寫は拓本に出ないので、編輯した時、就ち改めて寫眞にした。美術展覽會にかって一塊の背甲を展覽することがあったのを覺えている。『乙編』の番號一三・〇・一四〇四八は、背甲の右半である。左邊はやゝ殘缺し、正面は、卜兆均しく刻劃をへて、左上の角一辭の「壬申卜、宍貞：帝命雨」これは刻んだものであり、筆劃は細かく勁い。反面は、右の上角一辭の相い對する處に、「貞帝不其命雨」と字を書きまだ契刻をへていない。筆劃は肥く柔かく、これは史臣宍の手蹟であることが明らかである。彼の筆の用い方がわかる。上より下へ、左より右へ、全く現在字を書く筆順と異なることはない。そして契刻の方法は、則ち先ず毎字直劃、刻してのちそれらの横畫に刻する書寫とは同じではない。此の版の背面は、四段でまだ未だ刻さずうつした。色は深赭に作り、これ硃書に誤って入墨したようだ。また「貞子」の二字あり、書體ははなはだ粗にして、中に細畫の契刻があり、なほまだ完成していない。これ正しく先ず字を書いてのち刻するの一つの實例である。

また腹甲一版あり、乙編中の番號一三・〇・一三五三六は、また曾って展覽した。正面には、卜兆、刻劃をへて、また墨色をぬり、卜兆に數字を記し、均しく硃色をぬり、卜辭の兩段には、皆な契して硃をぬり、文に曰う「辛巳卜，㱿貞、𢦏不其受年？貞蜀不其受年？二月」。反面は、右邊に甲橋の「雀入二百五十」等の字あり、刻してのち硃をぬっている。中間には毛筆書寫の文字二行あり、暗紅色に作り、文に曰う「貞：𢦏蜀受年？王固曰、缶眔蜀受年」兩面は一人の手筆、一書一契である。

5.

毛筆書寫の字跡は、『乙編』には常に見られ、讀者には自から翻檢されうる。ここではただ私の手許に現在ある材料から、二つの例をあげた。

硃と墨。殷代では字を書くには硃と墨を用いた。契刻の後仍ち硃墨を塗って装飾した、硃と墨は、殷代には普通に用いられたものである。上節にあげた毛筆書寫の字は暗紅色あるいは赭色を帶び、また正しく硃墨がごっちやに入りまじった顏色である。『乙編』の硃墨はみな大變純粹で書寫あるいは文字の裝飾に使われ、手許の材料で、幾らかの例をあげる。昆明にあるとき、かって十三回の龜版一千號を抄した、六二七號より以後はH一二七坑に屬し、以下に例するところのものは、これ三七三版以内にある。並に抄時の附註にもとづいて、單へに拓片と照片をみるごとく、これは見分けやすくはない。

硃書　一三・〇・六五〇

墨書　一三・〇・六九〇　一三・〇・七〇二　一三・〇・八一六
　一三・〇・八二九　一三・〇・九七七

書寫の後、契刻を經過すれば、硃墨は存していない。だから契刻の後に、再び硃墨を塗るのである。

硃を塗ったもの　一三・〇・六八八、一三・〇・六九〇　一三・〇・七三九
　一三・〇・八〇六　一三、〇・九八二

墨を塗ったもの　一三・〇・六三一　一三・〇・六九八　一三・〇・八〇七
　一三・〇・八六六　一三・〇・八七一　一三・〇・九六六

一〇〇〇號以下は、まだ大變多く、將来考釋の中で分別しはっきりさせよう。

硃墨は當然殷代の重要な文具である。字を書くことは必要なもので、ただ契刻ののちは、就ち必要がなくなる。だから別の王にあっては、通常刻みおわった卜辭は、塗飾しない。武帝の時は、また硃墨を塗らない卜辭が多い。だから私は硃墨を塗飾するのは、全く史官共の美を愛する為であり、目かせの為である。決してきまった制度ではなく、また某類の卜辭は應に硃を塗ることに該當し應に墨を塗ることに該當するということではない。例へば一三・〇・一四〇四七一版は、龜甲の上半分の版で、正面には大字があって丙申一段の卜辭がある。これは㱿の書いたもので、卜は乙巳の日で下乙に酒祭を行っている。字劃中全部に硃を塗っていて、旁邊の小字は、また㱿の書いたもので、記していることは十日の後丙午卜する所で、甲寅の日に大甲を酒祭しているのである。同じく一人の書契であり、先祖を酒祭しており、大字のは塗硃がしてあり、小字には塗墨、この一版はまた三回の卜祭の辭がある。また塗墨である。反面には追記の三段があり、大字は丙申の一辭に屬し、塗硃し、餘りは塗墨。卜兆は刻劃のあとである。此れによって私は硃墨や塗飾することは、美觀を裝飾するもので、卜辭の本身とは關係がないと思うのである。

6.

改製された背甲。殷代の貞卜にはまた龜背甲を用いる。背甲は中間より剖開され、分けて左右兩半となって、灼兆の刻辭をする。いつに牛胛骨の左右を分別する如く、對稱にしてこれをなしている。これは各期にみな有るものである。この一坑には、一種の改製された背甲を發見した。卻に新例がある。石璋如君はまた曾ってこの種の特別な現象に氣づき、彼はH一二七坑の模樣を記述している。

また背甲の製成は石刀の樣なもので、中間に孔を穿って、上面に刻辭したので

ある。ただその上の卜兆は一つの方向を向いているのである。この樣子は、均しく從前にはまだなかったものである。

其の實所謂「石刀の樣子」は、ただ一種長く兩端は橢圓で甚だ規則的でない形をし、これはみなやゝ小さい背甲である。中間より鋸り開き、またその近くの脊甲の處の凸凹の更に甚しい部分をとりさり、その兩端を削り、ほぼ圖形を呈せしめている。これは平にしやすくしたもので、中間には孔があって以て貫通することが出來る。凡そ所謂「卜兆は一つの方向がある」でまた正しく普通の較や大きな背甲と同じ。右邊一半であり、卜兆は一律に左に向い、左邊一半は則ち右に向っている。

この種の改製は背甲の、形製上一つの新しい發見である。應用上、だいたい普通の背甲と同じである。例へば『乙編』中編號一三・〇・一一八四六の一版、拓本五二七一號である。此の版は龜背甲の右半である。卜兆は一律に左に向っており、記すことは只一つのことで、貞卜は反面兩面で、卜いは九回し、正面は五卜、反面は四卜。辭は下の如し。

庚戌卜㱿貞：缶𡆥我？　一　二　三　四　五（上右角にあり）

庚戌卜㱿貞：缶不我𡆥？　一　二　三　四（下端にあり）

全版に一つの事を卜し、九回灼く。また卜兆に數字を記し、大略は一つの小さな腹甲と相い同じ。卜兆の方向は、又普通の背甲の右半と同じである。この一類は並に大だ多くはなく、橢圓形で中に孔がある。『乙編』には一望を以て知ることが出來る。再び例をあげない。

7.

武丁大龜　この一坑には、一版の最大の龜腹がある。また甲骨文字出土以來の惟一

の最大の龜版で、私は「武丁大龜」と呼んでいる、本編の番號は一三．〇．一〇二〇である。民國三十一〔一九四二〕年に、曾って重慶の第三次全國美術展覽會に出品したものである。當時動物研究所の伍獻文先生〔五〕に研究を依頼すると、氏は葛萊（Grag）〔六〕氏の『大英博物館龜類志』を參考して、この種の大龜は現在馬來（マレイ）半島の龜類と同種であることを證明した。この一塊の腹甲上面の盾片の結構は、確かにその他普通の腹甲と異なっていることを、私は早くから注意していた。卜辭は八段で、皆な横列で、左半は左行で、右半は右行で、文は

〝叓于兇一牛〟―叀小宰？―〝宰〟？―〝勿

〝勿叓于兇〟？―〝卅牛于黃尹〟―〝㞢于儀〟？―〝㞢口口〟？

―（左半にあり）

以上各辭は均しく下半にあり、尾甲の處に近く、左右は各〻卜兆の記數一、二、三があり、卜兆の下注には〝上吉〟が三つある。祀典と祭る所の人によって、「上吉」とし、均しく武丁の世のものであることを證することが出來る。全版の形制は、龜腹甲で、大部分は完整、僅かに右邊殘缺の部分は五分の一、全版の長さは四四糎、寛さ約三五糎、背面には鑽鑿あり、（對稱復原に據る）共に二〇四、灼に用いたのは僅かに下半五排、共に五十ケ處である。

このような大きな龜版は、十萬片の甲骨中にこの一版のみで、また普通の龜版とは絶對に同じ種類のものではない、だから私共は特に注意を加えるのである。私共は安陽出土の龜版はみな諸侯方國の貢ぎもので、安陽で產しないことを（下一節

で論ず）知っている。ゆえにこの一種の龜版は、遠方より來たものであることは疑いはない。古代の貨貝は寶龜で、南方は常に大龜を貢納したことを『禹貢』に「九江大龜を納錫す」と。九江の大龜はまた決してこのような大きさではなかった。傳說中にあっては、『帝王世紀』〔七〕「殷商第二」には「大戊の時譯を重ねて至る者七十六國」と。『後漢書』南蠻傳に〔八〕「交趾の南に越裳國有り、周公居攝六年に禮を制し、樂を作りて天下和平せり」越裳三象を以て、譯を重ねて白雉を獻ずる。」と。この傳說によって商周の世は、當に越南遠方の國にあって、譯を重ねて來獻方物の事實、このただ一つは馬來半島に產した大龜であることを、就ち以て解釋するに至った。

註〔五〕 伍獻文（一八九六―）浙江瑞安の人。民國十年南京高等師範農業專修科卒業し、廈門集美學校生物學教員となる、十一年廈門大學動物學助教、十六年に廈門大學理學士の學位を受け、十七年に中央大學動物學助教、十八年フランスに留學し、パリー博物館研究室で研究すること三年、パリー大學の理學博士、歸國して中央研究院自然歷史博物館技師兼動物學研究主任、二十三年に博物館は動植物研究所となり、その專任研究員となった。海產魚類の研究の著書が多い。伍氏の大龜について論じたものに『武丁大龜之腹甲提要』刊六學術團體聯合年會論文提要、讀書通迅七九、八十兩期合刊がある。（中國文化界人物總鑑）

註〔六〕 Grag 氏は Grag. John. Edward（一八〇〇―一八七五）イギリスのワルサ

ルに生る。傳未詳。『大英博物館龜類志』は原名 Catalogue of Tortoises。未見。

註〔七〕 『帝王世紀』、殷商第二による。

註〔八〕 『後漢書』卷七十六「南蠻傳」による。

8. 甲橋刻辭。龜腹甲和背甲相連的部分，叫作〝甲橋〟，背甲鋸下之後，甲橋留在腹甲的兩旁，這一類刻辭均在反面。以前著錄過很多，因為沒有完整的龜版，不容易看出這種刻辭在腹甲上的部位。胡厚宣君曾參加整理H一二七坑的大批武丁時完整的龜版，在腹甲反面甲橋部分，見到這一類刻辭，於是這一個秘密乃被他發現，以後他便作了一篇，武丁時五種紀事刻辭考〟（見商史論叢初集）。他把第四期的〝甲尾刻辭〟誤入於武丁時，其實武丁時只有四種之中所謂〝骨面刻辭〟又和〝骨臼刻辭〟相同，所以只可以說是武丁時有三種紀事刻辭：

第一種，甲橋的刻辭。這一種專刻在腹甲的反面，甲橋部分，因為這部分通常是不施鑽鑿的空間地方。刻辭的例子，如〝雀入二百五十〟（一三．〇．一四〇八）意思是雀國貢納腹甲，一次二百五十版。又如〝行取廿五〟，婦井示。㱿〟（一三．〇．一五三九七）意思是行去徵取龜取龜版廿五個，乃是婦井送交給他的。㱿是保管這批龜版的史官。

第二種，背甲刻辭。也在背甲的反面，近於脊甲部分，刻辭所記的是貢納背甲的

人和數量。保管人因為背甲是一塊中分為二，左右兩半，稱為一對，這和牛胛骨稱對是一樣的（舊釋為矛，郭說為包，胡釋為匹，于釋為屯，今按于釋可從，但借屯為對，一屯即一對）。例如〝吳入二，在茜。㱿〟（一三．〇．一四〇四八）意思是吳貢入二背甲，時王在茜。保管之者是史官㱿。又如〝丙寅，𠕋示四屯〟（甲二九九三 四．〇．〇〇五二）意思是丙寅日，𠕋禽致送背甲四對。

第三種，骨臼刻辭。多數是刻在骨臼部分，但也有不刻骨臼而刻於骨的反面近邊處的。這類刻辭因為一牛有左右兩肩胛骨，故以左右二骨為一對，不成對者稱骨，或稱骨片（從胡君說）。例如〝甲午，婦井示三屯。岳〟（甲三二四一．四二．〇〇〇八）意思是甲午日，婦井致送牛胛骨三對，保管者是史官岳。

以上三種刻辭，所記皆是貢納，徵去和保管龜骨的事情，通常用示、入、來、取、氏等字，前三者是貢納，後二者是徵取；或以示為祭祀龜骨，非是。

甲橋刻辭，在乙編所見甚多，由於這些完整的腹甲，發現這一類刻辭，更由這一類刻辭的文例，推求已著的各書中的殘片。上面所舉的〝雀入二百五十〟，在乙編共有七見，由於大小略等，知道是某地所產的同種的龜，而這七版乃是一次貢納的二百五十版中的一部分。這只是一次的貢納，而不是貢納七次每次二百五十，所以不能據以作統計。七版如下：

雀入二百五十。	一三．〇．一四〇八一	長一七二糎	寬九五糎

（據拓本量出、下同）

雀入二百五十。	一三．〇．一四七八六；九四	一七三	一〇五

（寬處剖製時可伸縮，故有差異。）

雀入二百五十。　一三・〇・一三五三六　一六七　九四
雀入二百五十。　一三・〇・一五〇二一｜二七　一六七　九三
　　　　　　　　一三・〇・一五〇二九｜四六
雀入二百五十。　一三・〇・一四九二八　一七三　一〇〇
雀入二百五十。婦羊來。一三・〇・一六二一二　一七五　・一〇〇
（此版婦羊貢來，列入雀國二百五十之內）
雀入二百五十。　一三・〇・一五八五二｜五七，
　　　　　　　　一三・〇・一五八八三，八五，　一六三　九四

由此七版看起來這是雀國一次貢納的數量，每版都同樣的記在甲橋，有一版（第七例）鑿處損及文字，可知貢來時已是刮治完好的腹甲，史官保管者，一一記之，然後鑿之備用。據腹甲的長度，不出一六三｜一七三糎之間，這是較小的一種龜版，可以知道這是雀國附近所產的同種的龜。這七版都是刻劃卜兆的，卜辭也多塗硃，可能是武丁早年之物。

龜的種類不同，也可以從貢納的由來看出，例如有一版是：

文入十屯　一三・〇・一四二五三，八六　長二二一糎　寬一四五糎

這是中號的龜版，是文所貢納的十版之一。文在何處，待考，但這種龜較雀國所貢的為大，又不是同種，大概是無問題的。

有時王亦派員向各處徵取龜版，記所得的總數，和其中貢納的人名數量，保管的史官。例如：

我氏一千。婦井示一百。殼。　一三・〇・一四〇六五　長一六〇糎　寬九六糎

我氏一千。婦井示四十。賓。　一三・〇・一四六一四　一八〇　一一〇
行取廿五。婦井示。殼。　一三・〇・一五三九二｜四五　一七〇　一〇三

以上三版，前二版是我一次徵取的一千版，現在只見這兩版，而第一版是一千版中，婦井所納的一百版之一，是史殼保管的。第二版是千版中婦井又一次納的四十版之一，是史賓保管的。第三例是行一次取了廿五版，皆婦井所納，這是廿五版中的一版，保管者是殼。這些都是小一號的龜版，和雀國貢納的差不多大小，又是同時卜兆皆經刻劃過的。

甲橋刻辭，在乙編中至少有三百餘條（胡君的統計），現在就手邊材料，示例而已。

這裏附帶着談一談骨臼刻辭。我們既知道雀入二百五十，是每一塊都記着同樣的刻辭的，我們把骨版比較，也是一樣，例如有一次在壬申這一天，邑送來三對牛胛骨，三對應該是三左三右，共有六版，現在我們幸運，可以看到三分之二；

壬申，邑示三屯。小受。粹一五二〇（左胛骨之臼）
壬申，邑示三屯。小受。庫一六〇四（右胛骨之臼，與上一骨為一對，一人保管，
　卜用時須成對）
壬申，邑示三屯。岳。卜二三五三（左胛骨之臼）
壬申，邑示三屯。受。佚一六〇（右胛骨之臼與上一骨非一對，因保管者非一
人）

六版當送到時，分給三人保管。每人保管一對骨版，這是很明白的。現在只是小受的一對完全在，而受同岳的兩對，現在只各有其一。而每版，都要有同樣記載，記着骨版的來歷，正和甲橋刻辭相同，因此我們也不能據此作統計，說這一共有十二對，二十四塊骨版。邑送的骨版，次數很多，至少是十次，又有一次，是送了二對，而現在還可以看見一對半：

辛丑，邑示二屯。受。龜一・一八・五（左胛骨之臼）
辛丑，邑示二屯。小受　粹一五〇一（右胛骨之臼）
辛丑，邑示　天二四乙（右胛骨之臼）

第三例未刻全，但是同日，可以說應該同受保管的是一對。三千年前一天所記的四塊骨版，現在可以看見三塊，也真算難得的機會了。別的不再贅述了，我打算再寫一篇骨臼刻辭的研究。

至於所謂骨面刻辭，不過換一個地方，而用意是一樣的。例如在甲編中一塊大骨版的反面，近邊處記着：

婦井來（甲二九一二）

三字。而〝婦羊示十屯〞（續六・二四・九）一語，也正和骨臼所記的一樣，所以我說這應入于骨臼刻辭一類，皆是要記載骨版的來歷的。

從這三種記事文字（甲橋，背甲，骨臼及骨面）看來，可以知道殷代王室貞卜所用的甲骨，都是諸侯方國王后同臣僚們貢獻來的，有時王室也遣派專員向各處提取，這些甲骨，都經製造過的，龜甲要分開腹背，背甲又要中分為二，以左右各一半為一對，骨版也須左右各一為一對，製造的方法，大致相同。因此，我們可以知道這三種記事刻辭，是武丁時代一種特殊的風氣。從這裏面，可以看出以下的事實。

1、武丁時代，占卜所用的龜腹甲，背甲，牛胛骨，大多數是由方國，諸侯，王后，臣僚們貢納來的。

2、貢納以前龜甲皆經製造過，龜甲分開腹背，背甲又中分為左右兩半；牛胛骨以左右二骨為一對；龜背甲亦以對計，均稱一對為一屯。甲骨刮磨平滑，製法有一定的式樣。

3、貢納以後，由史官收掌，每版記其來源，並簽名負責，這就是甲橋，背甲，骨臼刻辭的由來。

4、卜用之前，於甲骨反面，施以鑽鑿，以備灼用。

這些手續雖屬推測，在當時也必有一定的制度，不然便不會有這樣嚴肅的現象。單單這納貢龜骨一件小事，就如此的秩然有序，其他庶政的措施，便可推想而知了。H一二七坑中，新穎的材料太多了，以上八事，只是極少數的例子。以前胡君根據他清理這坑龜版時所見，曾寫過殷代焚田說，甲骨文四方風名考證，卜辭下乙說等文，也不過是一臠之嘗而已。

8、

甲橋刻辭。龜腹甲と背甲が相い連なった部分のものを、「甲橋」と呼んでいるのは背甲銘下の後、甲橋は腹甲の兩旁に留まり、この一類の刻辭は均しく反面にある。以前はたいへん多く著錄したことがあるが、完整な龜版はないので、この種の刻辭の腹甲上の部位にあるのを見つけ出すのは容易ではない。胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註［八］・第三輯一三四頁參見）君はかつてH一二七坑の武丁の完整な龜版の整理に參加した時、腹甲の反面、甲橋の部分で、この一類の刻辭に出くわした、ここにおいて一個の秘密は乃ち彼に發見されたのである。以後彼は更に『武丁時五種紀事刻辭考』（『商史論叢初集』に見ゆ）（『甲骨學商史論叢初集』註［一］二〇一

頁參見）を作った。そこで彼は第四期の「甲尾刻辭」を誤って武丁の時に入れ、その實武丁の時はただ四種ある。四種の中には所謂「骨面刻辭」があり、また「骨臼刻辭」に相い同じ、だからただこれ武丁の時には三種の記事刻辭があるということがいえる。

第一種、甲橋刻辭。この一種の專刻は腹甲の反面、甲橋の部にあり、よってこの部分は通常鑽鑿を施さない空間の所である。刻辭の例は、「雀入二百五十（一三・〇・一四八〇一）のごとし。意うに雀國が復甲を貢納したのであろう。一回に二百五十版である。また「行取廿五、婦井示。」のごとし。岜（一三・〇・一五三九七）意うに行が龜版廿五個を徵取したのであり、乃ち婦井は彼に送ったのであろう。岜はこの龜版の保管する史官である。

第二種、背甲刻辭。また背甲の反面にあり、脊甲の部分に近く、刻辭の記す所のものは背甲を貢納する人と數量と保管人である。因って背甲は一塊中を分けて二つとしている、左右兩半、稱して一對となし、これは牛胛骨と稱して同じである。（舊く釋いて矛となし、郭「沫若」説は包となし、胡「厚宣」は匹となし、于「省吾」は屯となし、今、按ずるに于「省吾」の釋に從う、ただ屯を借りて對となし、一屯は即ち一對）。例へば「吳入二、在曲。殸。」（一三・〇・一四〇四八）意うに吳は二背甲を貢入したのである、時に王は曲にあり。保管の者は史官の殸である。また「丙寅、冊示四屯」（甲二九九三・四・〇・〇五二）の如く、意うに丙寅の日に冊が背甲四對を送ったのである。

第三種、骨臼刻辭。多數骨臼の部分に刻まれている、ただまた骨臼に刻まない

で、骨の反面で近辺のところに刻んであるものもある。この類の刻辭は一牛の左右兩肩胛骨によってであるから、故に左右二骨を以て一對とするのであり、對をなさんものは骨と稱し、或は片と稱する。（胡君の説に從う。）例へば「甲午、婦井示三屯、岳。」（甲三三四一・四二、〇〇〇八）意味は甲午の日に、婦井牛胛骨三對を送った、保管者は史官の岳である。（帚矛説については『福氏所藏甲骨文字』註〔六〕・第二輯一〇六頁參見）

以上の三種の刻辭の、記す所は皆な貢納である。龜骨の取去と保管の事情は通常示、入、來、取、氏等の字を用いる、前三者は貢納である。後の二者は徵收である。或は示を以て龜骨を祭祀するのは、これではない。

甲橋刻辭は、乙編には甚だ多く見え、この完整な腹甲によって、この一類の刻辭を發見した、更にこの一類の刻辭の文例によって、已に各書中に著はされた殘片を推求した。上面に擧るところのものは「雀入二百五十」、乙編には共に七見あり、大龜版の小路等によって、某の地に產する所の同種の龜であることを知った、この七版は乃ち一回に二百五十版貢納したうちの一部分である。これはただ一回の貢納で、而して七回の貢納ではない、毎回二百五十。以て統計とすることのできない理由である。七版下の如し。

雀入二百五十　一三・〇・一四〇八一　長さ一七三糎　寬さ九五糎（拓本の量・出による、下に同じ）

雀入二百五十　一三・〇・一四七八六・九四。　一七三　一〇五（寬い處は削った時に伸縮するので、故に差異あり。）

雀入二百五十　一三・〇・一三五三六　一六七　九四

雀入二百五十　一三・〇・一五〇二一—二七　一六七　九三
　　　　　　　一三・〇・一五〇二九、四六

雀入二百五十　一三・〇・一四九二八　一七三　一〇〇

雀入二百五十婦羊來一三・〇・一六三二　一七五　一〇〇（此の版の婦羊貢來は雀國に二百五十列入す）

雀入二百五十　一三・〇・一五八五二—五七　一六三　九四
　　　　　　　一三・〇・一五八八三—八五

この七版を見ると、この雀國の一回の貢納の數量である、版毎にみな同樣に反面の甲橋に記載している、ある一版は（第七例）鑿つ處は文字が損ひ、貢いできた時は已にまったく欠けたところのない腹甲であり、史官の保管者は、いちいちこれを記して、然るのちにこれを鑿ち借用したことを知った。腹甲の長さは一六三—一七三糎の間を出ない、これは比較的小さい一種の龜版で、これは雀國附近に產する同種の龜であることを知る。この七版はみな刻劃の卜兆であり、卜辭はまた塗硃が多く、武丁早年の物である。

龜の種類は同じではなく、また貢物による由來を見い出すことができる、例へば一版あり、

文入十。岜　一三・〇・一四二五三、八六　長さ二二一糎　寬さ一四五糎。

これは中號の龜版である、文の貢納の十版の一つである。文は何れの處にあるか、考を待つ、ただこの種の龜は雀國の貢納するところのものに較べると大きい、また

同種ではない、大概問題は無いであろう。時の王は亦人を各處に派して龜版を徵取した、記し得たところの總數は、其の中の貢納の人名數量と、保管の史官である、例へば

我氏一千　婦井示一百　殸　一三・〇・一四〇六五　長さ一六〇糎　寬さ九一糎

我氏一千　婦井示四十　賓　一三・〇・一四六一四　一八〇　一一〇

行取廿五　婦井示　岜　一三・〇・一五三九七—四〇五　一七〇　一〇三

の如し。

以上の三版、前二版は、私が一回に一千版を徵收したものである、現在はただこの兩版を見るにすぎない、而るに第一版は一千版中にある、婦井の納めるものは一百版の一、史官殸が保管者である。第二版は千版中婦井がまた一回に納める四十版の一つで、保管者は賓である。第三例は行一回廿五版である、皆な婦井の納める所で、これは廿五版中の一版で、保管者は岜である。これはみな小一號の龜版である、雀國貢納の差は大小は多くはない、また同時であり、卜兆は皆な刻劃をへたものである。

甲橋刻辭は、乙編中には少くとも三百條ある（胡君の統計）、現在手もとの材料で、例を示す。

こゝでついでに骨臼刻辭の話をする。私共は雀入二百五十は、各一塊みな同樣な刻辭を記してあるのを知っている、私共は骨版を比較すると同じで、例へば一回には壬申の一日に、邑は三對の牛胛骨を送來し、三對は應に三左三右に當り、共に六版ある。現在私共はたいへん幸運にも、三分の二を見ることが出來る。

壬申、邑示三屯。小㱿、粹一五〇二（左胛骨の臼）
壬申、邑示三屯　小㱿。庫一六〇四（右胛骨の臼、上一骨と一對なり、一人の
　保管、卜用の時、須らく對と成る。）
壬申、邑示三屯、岳。卜二三五三（左胛骨の臼）
壬申、邑示三屯、㱿。佚一六〇（右胛骨の臼、上一骨と一對ではない、因って
　保管者は一人ではない。）

六版が當に送られて來た時、三人の保管者に分けられ、人ごとに一對の骨版を保管したことは明白である。現在ただ小㱿の一對が完全にあり、而るに㱿と岳とは二對で、現在はただ各〻其の一つがある。而してどの版もみな同様な記載がある。骨版の來歷を記せば、正しく甲橋刻辭と相い同じで、此れに因って私共は統計を作ることが出來ない、これは全部で十二對で、二十四塊の骨版である。邑が送った骨版は、回數は大變多く、少くとも十回である、また一回は二對を送ったものである、而して現在はその一對半を見ることが出來る。

辛丑、邑示二屯　㱿。龜一、一八・五（左胛骨の臼）
辛丑、邑示二屯　小㱿。粹一五〇一（右胛骨の臼）
辛丑、邑示。天二四一一乙（右胛骨の臼）

第三例はまだ完全に刻さず、ただ同じ日である、㱿の保管に該當する一對である。三千年前は一日の記す所の四塊の骨版には、現在三塊見ることが出來る、また眞に得がたい機會であると思われる。別に再び贅述しない、私は再び一篇の骨臼刻辭の研究を書いてみるつもりである。

所謂骨面刻辭に至っては一個の部分を換えるに過ぎず、用いる意は同じである。例へば『甲編』中の一塊の大骨版の反面の近邊の處には、次のように記してある。

　婦井來（甲二九一二）

三字は「婦羊示十屯」（續六・二四・九）の一語、また正しく骨臼と記すこと同じであるから私はこれが骨臼刻辭の一類に該當し、皆な骨版の來歷を記載してあると云うのである。

この三種の記事の文字より（甲橋、背甲、骨臼及び骨面）を見ると、殷代王室の貞卜に用いるところの甲骨は、みな諸侯方國王后同臣僚達の貢獻したものであることを知りうる、ある時は王室は專門の人が各處の提取「預けた物品を引き出すかとりもどすの意」に派遣され、この甲骨はみな製造をへて、龜甲は腹背を分開し、背甲はまた中心でわけて二つとなし、左右各〻一半を以て一對となし、骨版はまた須らく左右各〻一つを一對となし、製造の方法は、みな同じであることを知った。此れによって、私共はこの三種の刻辭が、武丁時代の一種特殊な風潮で、このことから、以下のような事實を知りうる。

1、武丁時代、占卜に用いるところの龜腹甲、背甲、牛胛骨で、大多數は方國、諸侯、王后、臣僚たちの貢納のものである。

2、貢納以前、龜甲は皆な製造をへて、龜甲は腹背を分開し、背甲はまた中分して左右兩半である。牛胛骨は左右二骨を以て一對とする、龜背甲も亦以て計算に對して、均しく一對と稱して一屯とする。甲骨は鋭い刃物で磨き平滑し、製法は一定の樣式がある。

3、貢納以後、史官によって收掌し、毎版その來源を記し、並びにサインして責任を負う、これは就ち甲橋・背甲・骨臼刻辭の由來である。

4、卜用の前、甲骨の反面において、鑽鑿を施し、以て灼用に備う。

この手續きは推則に屬するというけれども、當時にはまた必ず一定の制度があった、然らざればこのような整齊嚴肅の現象はありえない。單單としてここに龜骨を納貢する事は、就ち此のような秩序があり、その他は庶務的な處施で、便に推想して知ることが出來る。

H一二七坑中は、新しい材料がはなはだ多く、以上の八事は、ただ極めて少數の例である。以前胡「胡宣」君はこの坑の龜版を清理して見た時の事によって、『殷代焚田說』、『甲骨文四方風名考證』、『卜辭下乙說』（以上の論文は『甲骨學商史論叢初集』所收、第三輯二〇一頁參見）の文を書いた、これは一臠を嘗るに過ぎない。

二、揭穿了文武丁時代卜辭的謎

經過十八年的研究，現在纔可以談文武丁時代的卜辭了，這不能不歸功於乙編中一坑卜辭的貢獻。這是十三次發掘的B區一一九坑，共出土了二百九十六片甲骨文字，登記號是一三・〇・一至一三・〇二九三和一三・二・一至一三・二・三。

話須從頭說起。十八年前，曾把武乙、文武丁，列爲第四期，那時以小屯村中出土的甲骨爲標準，我的意見是：

丙、不錄貞人的時期。在前三期，也有許多卜辭是不錄貞人的，到了第四期，武乙、文武丁之世，便整個不錄貞人了。小屯村裏所出的卜辭，就屬此期，無貞人是它特點。（原文三四九葉）

在當時很呆板的只認定貞字上的一字是人名，是貞人；沒有注意到那些在卜字之下記有貞人而省去貞字之例。又因當時注意的只限於武乙時代的卜辭，所舉第四期之例，也只限於武乙之世。其實，村中出土的，以前著錄的，都有文武丁時代之物，都被我們大部分送給武丁了。斷代的十個標準，主要的法寶，不過是"稱謂"同"貞人"，其餘八項，除了世系之外，都是由稱謂，貞人推演出來的。貞人靠着稱謂，世系，例如一個貞人叫作狄的，他所卜的祭祀有父乙，母庚（甲二九〇七）於是我們就毫不遲疑的說狄是武丁時的史官。即如狄所寫的字不類第一期，可是我們無理由不承認母庚是小乙的配偶妣庚，而在武丁時稱母庚；父乙固然可以說是武乙，可是在戊辰彝中又明明白白是武乙爽妣戊，文武丁的母親，應該是母戊，不該是母庚，因此把貞人狄列入第一期，許多他的同僚，也都馬馬虎虎提早了八九十年，同時也不能不承認武丁時代有各種不同的書體，字形，文法，事類，方國與人物了。

寫殷曆譜時，因爲新舊派祀典的不同，我曾理淸楚一件事，就是在舊派中，武丁，祖庚時

代，稱大乙為唐，絕無例外，（前一·三·四祖乙、大甲，或誤讀為祖甲、太乙）至祖甲時代，改革祀典，（所謂新派）纔把唐定名為大乙，以後各王，便都稱大乙，不再稱唐。文武丁是主張復古的，從紀日法，月名，祀典各方面看，他都恢復了舊派的制度，只有一個唐的名稱沒有復活，仍然叫大乙，這是一個堅強的，惟一的證據。在殷曆譜中，也曾談到這些問題。來美國之前，在南京曾接到高景成君的信，他有一篇甲骨文斷代研究管見，也抄給我，他覺得武乙文武丁可以分為二期，並舉出𠂤，㣈，子等，是文武丁時的貞人，這見解很好。最近張秉權君抄來乙編中H一二七坑所出的許多卜辭，他認為是第四期文武丁時之物，也都很對。在這里，我們索性把文武丁時代卜辭之謎揭穿了罷。

我最初找到的證據，仍然是貞扶，根據甲編中的兩塊骨版，甲二三五六和甲二九〇七兩版的卜辭，摘抄於下：

丁巳卜：“㞢父戊”？　丁巳卜“㞢咸戊”？
“辛未福大乙”？　甲戌（卜），扶：“于來丁酉，父乙祝”？
乙亥卜：“求又大丁”？　丙子卜：“求又大乙”？（甲二九〇七）
口口（卜）“與母庚，兄史”？　丙子卜，扶“兄丁二牛”？
壬午卜，扶：“酒虎甲”？　丙戌卜，扶：“宰兄丁”？
丙戌卜扶：“一牛兄丁”？（甲二三五六）

以前我們只看見父乙，母庚，兄丁，王字作太，就斷定是武丁時，現在注意的卻是大乙這個稱呼，由於稱唐為大乙，可以斷定絕對不是武丁時，反過來，這裏的父乙就是武乙，也可以斷定這是屬於文武丁時的卜辭，因而文武丁也可以有一個母庚，一個兄丁，而他把王字，復了古體。從這個假定出發，請扶介紹他的同僚，於是找到了扶的同版貞人勺（後下二四·一

〇），貞人𠂤，和料頭的時王，文武丁（佚五八六）；𠂤又介紹了匧，（佚五〇二）王又介紹了余（甲二九〇七）；余又介紹了我，子（一三·〇·一三三五），㣈（一三·〇·一一八一七，一一八一八）；因而又找到了𦉼（一三·〇·一九四一等，十九見），車（一三·〇·一〇九三等二見）；史（一三·〇·一五六一，二見）；萬（一三·〇·四七二），𢆶（一三·〇·二九〇），㐭（乙一二四），等許多人。在乙編中，有兩個坑，幾乎完全是文武丁時的卜辭；

一是B一一九坑，共，出了二九八版，登記號是一三·〇·一至一三·〇·二九五，又一三·二·一至一三·二·三。龜甲中（骨版未抄，不在手頭）只有一版，是武丁時卜辭（一三·〇·二九四，二九五），原注說是地面上檢得的。

一是YH〇〇六坑，也在B區，共出了三二〇七版，登記號是一三·〇·三九三至一三·〇·五九六，又一三·二·二一至一三·二·二三，

龜甲中只有六版是武丁時物（一三·〇·五八四，五八五，五八九，五九四—五九六）。

除了以上兩坑之外，還有散見別的坑中的共一三版（一三·〇·三九一，三九二，六〇四，六〇七—六一五，六二〇）。有了這一大批文武丁時的卜辭，得到坑位的證明，除了極少數第一期武丁時卜辭外，可以說是清一色的文武丁之物了。由此便得許多新知識，分述在下面。

1　文武丁復古了。這話是扶能夠負責告訴我們的。就現在所知道的，扶要算文武丁時最重要的史臣之一。他曾占卜過四十一次（材料並未搜輯全），所見書如次：

乙編二〇次：一三·〇·一八—二〇，一三五，一四八，一四九，一五九，一八八，二〇三，二四二，二五〇，四二一，四二九，四九四，五〇一，

五二三，六〇四

甲編一三次：甲二九〇七，二三五六，二七七三，一·〇·〇二四〇，四二五—四四五，四二一，四六七，四七三，四六八，四八五，五一三。

前編四次：八·二·七，八·六·一，八·八·八，八·一二·五。

後編三次：下·二四·一〇，下·三五·二，下·四七·七。

佚存一次：五九九

從以上的材料中，可以看得出文武丁時復古的情形。我們已經知道的，祖甲改革先王的制度，重要的是文字，曆法和祀典，現在據扶所書契的卜辭，我們可以看出：

文字大部分復古了。首先，王字不寫上一橫畫，就是重要證據；其次，日常用的干支字，經過第二，三期，已多有變異，現在辛字上面不加一小橫，巳字兩臂平伸，午字不作兩點，酉字頸部只畫一橫，亥字重直，都是武丁時的古體，但是究竟積習難以盡革，所以一面雖勉强寫古字，一面卻於不知不覺中，又寫了許多俗體，干支字就是這樣。甚而至於文字詭變奇離，不可究詰，在各時王的卜辭中要算文武丁一世的字形，書體最為複雜了。武丁的㞢祭，祖甲改用又字，扶要復古，於是用㞢如“㞢父乙一牛”，（佚五九九）“㞢大乙母妣丙”，“㞢大丁”（新三三六）之類，但是扶也寫又，如“求又大乙，求又大丁”（甲二九〇七）之類。獸類字，祖甲以後不畫腹部，扶寫大字畫腹，是古體（一三·〇·一八八），寫獸字犬傍，也畫腹（新三〇八），而他寫虎甲的虎字，卻又用俗體，不畫腹（甲二三五六）扶寫干支字，可以規規矩矩寫古字，寫得與武丁時一樣，使你不能不相信那是道地的古體，一個子字，他寫的與一，二期無別（甲二三五六），同時他又寫出第三期以後的子字俗體，變本加厲，更寫出七種

不同的樣式（一·〇·四二一，三·二·八七三，一三·〇·二〇三，二四二，五八一，六〇四，後下五，一四），要算入他同時的史官所寫的，至少有十種不重樣的子字。干支字是天天必用的，隨便寫法，漫無標準，尚且如此，不常用的字，更可想而知了。在武丁世史官們都有很自由的風度，所以書法非常宏放，祖甲時的史官，就得嚴守紀律；文武丁的復古，把自由的精神也恢復了，我們看，不但字體可以繁簡隨意，雅俗兩便，這時的卜法文例，也都雜亂無章，而書體又是肥，纖，剛，柔，大，小，疏，密，無奇不有，史官們既有自由的精神，於是興之所至，以意為之，例如乙編中一五·〇·三二六，三二八兩版，原是同坑所出，記有文武丁王佑婦姼生育之事，婦姼省女旁作婦多，也省作婦殁，又作婦夕，多字本以兩塊肉會意為多，一塊肉就失去多的原義，何況又使人誤會把她們看着四位王后。文武丁時字形的複雜，以至於此。

曆法，經過祖甲的改定，重要之點在置閏不於年終，無“十三月”之名，同時也改革了紀時，紀日，紀月之法。紀時不用“大采，小采，大食，小食”等名；紀日不用數字，不以干支紀日為獨立之系統，而繫日於太陰月；紀月，於月名上加“在”字，不用“一月”而稱“正月”。這是新派曆法的特點，以後在帝乙帝辛兩世，就完全用新派的制度（說詳殷曆譜上編卷一，殷曆鳥瞰二章四—九葉）。現在我們看，扶所寫的“八月”（佚五九九），“九月”（一三·〇·一四五），“十月”（一三·〇·六〇四），皆不書“在”，而他同時的卜辭，均不稱“正月”而稱“一月”（一三·〇·一八一，二一七，五一五），又於“十一月”，“十二月”多作合文（一三·〇·三二，四八，五八，九五），也是舊派的辦法，只有一個例外稱“在六月”（一三·〇·一六），這和字形一樣，是偶然從俗未能完全革掉的一個痕跡。紀日數字，

也是恢復古制，如扶所寫的，〃辛卯卜〃而接着稱〃四日乙未〃（後下三五、二），〃壬寅卜〃而接着稱〃四日丙午〃（前八、一二、五），這是武丁時的舊法，不過微有不同的，就是不自卜之日起算，辛卯、壬寅而卜，若在武丁時，則稱爲〃五日乙未〃、〃五日丙午〃，而自辛卯，壬寅算起。這一點大同小異，也難怪他們，因爲他們的意思是又過了四天，而武丁時只是說第五天。本來，他們有從卜之日起算的一法，必用〃自今〃二字，例如說〃己丑卜，自今五日至癸巳，其雨〃？（一三、〇、九八）意思是〃從今天己丑，到第五天癸巳，將要下一場雨〃？這是很清楚的，不稱〃自今〃當然不從卜之日起算，而從卜之明日起算，也未嘗不合理。紀時法又用了大采、小采、大食、小食等名稱（乙一六三，乙一二，乙四七八），也是曆法復古的一證。

祀典，在文武丁時一復武丁舊制，這是可以從祀典不用祖甲的新制看得出來的。祖甲時彡、翌、祭、壹、劦五種祀典連續舉行的辦法，此時一點也沒有痕跡，所有的多是武丁時代的辦法。例如〃㞢〃祭，祖甲改爲〃又〃祭，在扶所記的卜辭裏，仍稱爲〃㞢〃（佚五九九、新三三六、三六〇），祖甲時先臣不入祀典，扶的卜辭有咸戊（新三六〇），咸戊是武丁的祀典中所常見的；他辭中的伊尹（後上二二、三），就是武丁時的黄尹。土（社）的祭祀（新三四〇），河、岳、洹等山川的祭祀，王亥、和夒，至上甲以前的先祖，御、夒的名稱，凡是不在新派祀典的，現在都恢復武丁之舊了。至於文武丁也有一個母庚，卻並不足奇，因他同時還有母丙（甲三〇四七），母癸，母壬，母己（甲二四二六），沒有母戊也許她還健在，到了帝乙，帝辛時纔死。總之，舊派的祀典，也是太自由了，時王可以從心所欲，致祭他的親人，不像新派那樣一定的規律而加以限制的。

二、文武丁時代の卜辭の謎を暴露する。[九]（『甲骨文斷代研究例』各註參見」

十八年間の研究の經過によって、現在やっと文武丁の時代の卜辭を談ずることが出來る。この功は『乙編』中に一坑の卜辭の貢獻に歸せざるを得ない。これ十三回發掘のB區一一九坑には、全部で二百九十六片の甲骨文字を出土した。登記號は一三・〇・一より一三・〇・二九三と一三・二・一から一三・二・三である。

話は始めから云わねばならない。十八年前、私は『甲骨文斷代研究例』を書いた時かって武乙・文武丁を列して第四期となした、あの時小屯村中の甲骨を以て標準とした。私の意見は、

丙、貞人を録さない時期。前三期にあっても、またたくさんの卜辭は貞人を録さないものがあった。第四期にいたり、武乙、文武丁の世は、便に貞人を録さないものを整えている。小屯村に出る卜辭は、就ち此の期に屬し、貞人がないのはその特點がある。（原文三四九頁）

當時はたいへん融通のきかない人はただ貞の字の上の一字が人名であること、そして貞人であること、その時卜の字の下に貞人と記してあり、貞の字を省略してあることに注意しなかった。また當時注意した人はただ武乙時代の卜辭に限ったこと、擧げる所の第四期の例、またただ武乙の世に限った。その實、村中出土の、以前に著録したのは、みな文武丁時代のものである。みな私共をして大部分武丁に定めた。斷代の十個の標準の、主要な珍寶は〃稱謂〃と〃貞人〃にすぎず、その餘りの八項は、世系を除いては、みな稱謂によって、貞人が推演せられた。貞人は稱謂、世系に依頼することは、例へば一人の貞人を扶とよび、彼のトする祭祀には父乙、母庚（甲二九〇七）があり、ここにおいて私共は就ち少しも疑いなく扶が武丁の史官であったと云える。即ち扶の書くところの字は第一期に類さない。しかし私共は母庚が小乙の配偶者妣庚であることを承認しない理由はない、而も武丁時代は母庚と稱し、父乙はもとより武乙であると云える。「戊辰彝」中には文明〃白〃で武乙の爽は妣戊、文武丁の母親、應に母戊に該當する母庚ではない。此れによって貞人扶を第一期に入れた、彼の多くの同僚も、またみなでたらめに八九十年をくり上げた、同時にまた武丁時代は各種同じでない書體、字形、文法、事類、方國と人物を承認しないわけにはいかなかった。

『殷曆譜』を書いた時、新舊派祀典が同じでないことによって、私は曾って一つの事をはっきり理解しえた。就ち舊派中の、武丁・祖甲の時代には、大乙は唐と稱し、絶對に例外はなかった。（前一、三、四祖乙、大甲、或は誤讀して祖甲大乙とする）祖甲時代にいたって、祀典を改革した（所謂新派）で、やっと唐を大乙であると名を定め、以後各王は、便にみな大乙と稱し、再び唐と稱していない。文武丁は復古調を主張し、紀日法、月名、祀典の各方面より見れば、彼はみな舊派の制度を恢復した、ただ一つ唐の名稱だけは復活しなかった。あいかわらず大乙とよび、これは一個の堅強であり、惟一の證據である。『殷曆譜』中にあっても、かってこの問題を談じたことがある。米國に來る前、南京にあって曾って高景成君[十一]の便りに接した、彼には『甲骨文斷代研究管見』[十二]がある。また抄して私に贈った、彼は武乙と文武丁の二期に分けた、並に耳っ白、㣇、子等をあげた、文武丁時代の貞人であり、これはいゝ見解である。最近張秉權君は乙編中Ｈ一二七坑に出たところの大澤山のト辭をうつし出した。彼は第四期文武丁時代の物であることを認めたのは、また大變正しい。ここにあって、私共はとうとう文武丁時代の卜辭の謎を發いたのである。

私は最初に捜し出した證據は、相い變らず貞人扶である。『甲編』中の兩塊の骨版甲二三五六と甲二九〇七が根據である。兩版の卜辭を、下に摘抄すると、

丁巳卜〃㞢父戊〃？丁巳卜〃㞢咸戊〃？
〃辛未福大乙〃？甲戌（卜）扶、〃于來丁酉父乙祝〃？
乙亥卜〃求又大乙〃？丙子卜：〃求又大乙〃？（甲二九〇七）
口口（卜）〃興母庚、兄史〃？丙子卜、扶〃兄丁二牛〃？
壬午卜扶：〃酒虎甲〃？丙戌卜、扶、〃宰兄丁〃？
丙戌卜，扶：〃一牛兄丁〃？（甲二三五六）

以前私共はただ父乙、母庚、兄丁を見ると、王字は太に作っているので、就ち武丁の時と斷定したのである。現在注意すると大乙のここの稱呼は、唐を大乙となす稱によって、以て絶對に武丁の時代でないことを斷定できる、ひるがえって、この中の父乙は武乙であることで、これが文武丁時のト辭であることを斷定できる、因って文武丁は一つの母庚であり、兄丁であり、彼れは王字を古體に復活せしめた。ここの假定から出發して、扶に（彼）の同僚を紹介させ、ここに扶の同版の貞人勺を選んだ。（後下、二四、一〇）貞人𠂤は、料頭「一連のもの」時の王文武丁（佚五八六）𠂤はまた匹に紹介した、（佚五〇二）；王はまた余（甲二九〇七）に紹介した。余はまた我と子（一三・〇・一三三五）と㣇（一三・〇・一一八一七，一一八一六）に紹介した。よってまた𡆥（一三・〇・一九四一等十九見）車（一三・〇・一〇九九三五二），徙（一三・〇・二九〇），𠧪（乙一二二四）等の多くの人を選んだ。『乙編』中にあっては、二つの坑があり、殆んど完全に文武丁時のト

辭である。

一つはB一一九坑で、二九八版出て、登記號は一三・〇・一より一三・〇・二九五に至る、また一三・二・一から一三・二・三に至る。龜甲の中（骨版に未だ抄さず、手もとにはない）ただ一版あるのみで武丁時の卜辭で（一三・〇・四）ある外に、二版あるのは武丁時の卜辭（一三・〇・二九四、二九五）で、原注に説くことは地面上で検得たものである。

一つはYH〇〇六坑である、これはB區にあり、二〇七版出土した。登記號は一三・〇・三九三から一三・〇・五九六に至る、また一三・二・二一から一三・二・二三に至る。

龜甲中ただ六版のみは武丁時代のものである。（一三・〇・五八四、五八五、五八九、五九四―五九六）

以上の二坑の外を除けば、また別の坑中に散見するものは一三版ある（一三・〇・三九一、三九二、六〇四、六〇七―六一五、六二〇）。こゝに一大の文武丁時の卜辭があれば、坑位の證明ができる。極く少數の第一期の武丁時の卜辭を除いた外は、すべて文武丁時代の物一色である。此れによって澤山の新知識をえたので、下の方に分述する。

I 文武丁の復活。この話は扶が責任をもって私共に話してくれた話である。就ち現在の知るところでは、扶は文武丁時の最も重要なる史臣の一人で、他は曾って四十一回の占卜をしており（材料は並に未だ全て捜集していない）見るところの書は次の如し。

乙編二〇回：一三・〇・一八一二〇、一三五、一四八、一四九、一五九、一八八、二〇三、二四二、二五〇、四二一、四二九、四九四、五〇一、五二三、六〇四。

甲編一三回：甲二九〇七、二三五六、二三七三、一・〇・〇二四〇、四二五―四四五、四二一、四六七、四七三、四六八、四八五、五一三、

前編四回：八・二・七、八六一、八・八・八、八・三・五。

後編三回：下・二四・一〇、下・三五・二、下・四七・七。

佚存一回：五九九

以上の材料中より、文武丁時復古の事情を見い出すことができる。私共は已に祖甲が先王の制度を改革したことを知りうる。重要なのは、文字、暦法、祀典で、現在扶によって書契された卜辭で、私共は見い出すことが出来る。

文字は、大部分復古した。まずはじめに、王の字上の一横はかかない。就ちこれは重要なる證據で、其の次は日常に用いるところの干支字は第二期、三期を經過して、已に多くの變異があり、現在辛の字の上面には一小横を加えず、巳の字は両臂は平伸で、午の字は二點を作らず、酉字は頸部にただ一横を書き、亥字は垂直、みな武丁時の古體である。ただ研究にきわめ、習を積めどもすべてを改め難い、一面むりに古字を書くと雖ども、一面しらずしらずのうちに、また澤山の俗體を書いた、干支字は就ちこの樣である。甚だ文字に至っては詭變奇離にして、徹底的に詰問しない、各王の卜辭中には、文武丁一世の字形を要し、書體は最も復雜である。武丁時の㞢祭は、祖甲の又字を改め用い、扶は復古を要し、ここにおいて㞢を用い、「㞢父乙一牛」（佚五九九）、「㞢大乙母妣丙」、「㞢大丁」（新三三六）の類のご

とし、ただ扶はまたまた「求又大乙、求又大丁」（甲二九〇七）の類である。獸類の字は、祖庚以後は腹部をえがかず、扶は犬の字をかき、腹に畫く、これは古體である（三・〇・一八八）獸字は犬の傍に書き、また腹に畫く（新三〇八）而して彼れは虎甲の虎の字を、かえってまた俗體を用いている、腹には畫かない。（甲二三五六）、扶は干支字を書くのに、はっきりと古字を書いていて、武丁の時と同じように書いている、あなたをしてそれがまじりけのない古體であることを信じさせずにはおかない、一つの子の字は、彼れが書いたので一・二期とは別なく書いた、同時に彼は又第三期以後の子の字の俗體をかいた、本を變えて嚴しくし、更に七種の同じでない樣式をかき出した（一・〇・四二一、三・二・八七八、一三・〇・二〇三、二四二、五八一、六〇四、後下・五・一四）、彼と同時の史官の書く所を數えるならば、少くなくとも十種の同じでない子の字がある。干支の字は毎回必ず用いる、隨って便利に書き、漫として標準がなく、尚かつ此くの如くである、常に使用しない字では、更に想像にかたくない。武丁の世には史官共はみな大變自由な風格がある。だから書法は非常に廣放である。祖甲の時の史官は、紀律を嚴守した。文武丁の復活は、自由の精神をも恢復した、私共は見た、ただ字體は繁簡隨意ではなく、雅俗双方ともに都合のよいようにし、この時の卜法、文例は、またみな雜亂として章法はなく、而して書體はまた肥、纖、剛、柔、大、小、疏、密であり、奇、ないものはない、史官共は既に自由の精神があり、ここにおいて興の至るところ、意を以てこれをなし、例へば乙編中の一五・〇・三二六、三二八の二版のごときは、原は同坑に出づる所のものである、文武丁の王后婦姼生育の事を記すことがあり、

婦姼は女旁を省略して婦多に作り、また婦夕に作る、多の字の本は二塊の、肉の會意を以て多とする、一塊の肉では多いの原義を失った、何きか況んやまた人をして、彼女達に會して四位の王后を作った。文武丁の時の字形は復雜で、以て此に至る。

暦法は、祖甲で改定を經過して、重要な點は置閏を年の終りにせず、「十三月」の名はなく、同時にまた紀時、紀日、紀月の法を改革した。紀時には「大采、小采、大食、小食」等の名を用いず、紀日は數字を用いず、干支の紀日を以て獨立の系統とせず、大陰月に日を繫ぎ、紀月は、月名の上に在の字を加えた、一月を用いないので正月と稱した。この新派の暦法の特點は、以後帝乙帝辛の兩世にあり、就ち完全に新派の制度を用いた（殷暦譜上編卷一、殷暦鳥瞰二章四―九頁）。現在私共は扶の書くところの「八月」（佚五九九）、「九月」（一三・〇・一四五）、「十月」（三・〇・六〇四）は皆な「在」を書かず、而して彼と同時の卜辭である、均しく「正月」を稱さないで「一月」を稱している（一三・〇・一八一、二一七、五一五）、また「十一月」、「十二月」においては、多く合文に作る（一三・〇・三二・四八、五八、九五）、また舊派の方法である。ただ一つだけ例外があり「在六月」（一三・〇・一六）、これと字形同じで、これは偶然俗に從ったまだ完全にすっかり改めることが出來なかった痕跡がある。紀日には數字を用い、また古制を恢復した、扶の書くところは、「辛卯卜」、而して「四日乙未」（後下三五・二）につけられるごとく「壬寅卜」は「四日丙午」（前八・三・五）がつけられる。これは武丁時の舊法であり、少しく同じでないのがある、就ち自から卜する日は計算せず、辛卯、壬寅に而卜し、武丁の時のごとく、則ち「五日乙未」、「五日丙午」と

稱し、而して辛卯、壬寅より計算する。この一點は大同小異で、やはり彼等を怪しむにたりないというのは、彼等の意味はまた四日過ぎたということである。而して武丁の時にはただ五日目を云う。本来、彼等にはトの日に從って計算する一方法があり、必ず「自今」の二字を用う。例へば「乙丑卜、自今五日至癸巳、其雨？」（一三・〇・九八）のごとし、思うに「今日乙丑より第三日の癸巳に至る將に一場の雨降らん」これは大變はっきりしている。「自今」を稱さず當然トの日に從って計算しない、而るにトの明日に從って計算する、また未だかって不合理としない。紀時の法はまた大采、小采、大食、小食等の名稱を用いた（乙一六三、乙一二、乙四七八）、また曆法の復活の一つの一證である。

祀典は、文武丁の時に一度武丁の舊制が復活した、これは祀典が祖甲を用いない新制によって見ることが出來る。祖甲の時は彡、翌、祭、壹、劦の五種の祀典が連續に擧行された方法は、此の時には少しも痕跡がない、有する所は多く武丁の時の方法である。例へば「㞢」祭の如く、祖甲改めて「又」祭となし、扶の記すところのト辭は、仍ち「㞢」（佚五九九、新三三六、三六〇）を偁し、祖甲の時の先臣には祀典は入れず、扶のト辭には咸戊（新三六〇）があり、咸戊は武丁の祀典中には常に見られるものである。他の辭中の伊尹は（後上・二二・三）、就ち武丁時の黄尹。土（社）の祭祀（新三四〇）河・岳・洹等の山川の祭祀、王亥と夔、上甲以前の先祖、御、賣の名稱、凡そ新派祀典にはない、現在はみな武丁の舊制が恢復した。文武丁に至って一人の母庚があるが、一つも奇とするに足らない、というのは彼には同時にまた母丙（甲三〇四七）、母癸、母壬、母己（甲二四二六）があって、母

戊はなくまた妣は健在であり、帝乙帝辛の時になってはじめて死んだ。これをまとめて云うと、舊派の祀典はやはり大だ自由であった、一定の規律があり制限を加えられることはなかった。

註〔九〕 文武丁の時代の謎を解く。こゝに載せる董作賓の一文は『殷曆譜』を作成するにあたっての骨子で、こゝに概略を紹介しよう。㈠文武丁の復古。殷墟時代の各期にわたる祭祀制度の變遷を研究し、そこに改革と復古との跡をみ、新舊兩派との交替を考えたことが大きな原因であり、干支卜王貞と干支子卜貞兩形式ト辭の貞人を一括第四期文武丁時代の貞人とした新しい説を出した論である。㈡文武丁時代の貞人。この貞人には次のものを揭げる。扶、𠂤、余、子、㣈、[illegible]、史、幸、卣、叶、勹、㔽、我、車、萬、𢆶、取。董氏がこの十七人の貞人を揭げるきっかけとなった一つは、一期の武丁及び二期の祖庚時代には成湯を唐と稱したが、それ以外の時期には大乙と書いたことで、甲編二九〇七版に由來する。また同版の他のト辭にあらわれる王字が一期獨得の太に作られているが、當然一期以外のト辭と考えざるを得なくなった。從って一期以外に父王を稱して父乙とすることの出來るのは、第四期後半の文武丁時代以外になくこの骨版は第四期のト辭と決定された。しかしてこの骨版にあらわれる扶は、貞字を省略した形式のト辭を特色とするこの文武丁時代の貞人としたのである。更にこのような決定に對して一つの根據を與へたのは、小屯の發掘に際して、B區一一九坑とYH六坑との二坑出土の甲骨であった。B一一九坑からは總數二九八

版、うち一期武丁に屬するもの二版を除き、他はすべてこの一羣のものであり、YH六坑は、二〇七版のうちに六版の一期卜辭をのぞき、同じくこの一群獨自のものである。㈢文武丁時の卜貞例。卜貞例をあげ、他の期にくらべ省略する簡稱形式であることを述べている。㈣文武丁時卜貞の事類。一期の武丁時代のト辭の內容は次の二十種に分類する。1卜祭祀、2卜征伐、3卜田狩、4卜游、5卜享、6卜行止、7卜旬、8卜夕、9卜告、10卜匃、11卜求年、12卜受年、13卜日月食、14卜有子、15卜娩、16卜夢、17卜疾、18卜死、19卜求雨、20卜求啓。これに對し祖甲にはじまる新派では、卜貞の事類にも嚴格な規律が施され、1より8までの寧ろ定例的な事柄が中心となり、九以下のことに關するト占は多く癈止された。董氏の説によれば、文武丁時代には、一期に復古して、雜多な事類が卜貞の對象とされた。然しこの時代と一期との差異は王后の娩孕と疾病の文例における字體の差に求める。有字に㞢と又とを用い、疾字においても古體の[illegible]と共に[illegible]を併用する。一期㞢の祭りは祖甲以後又と書き、文武丁に至って㞢に復歸したとする。また當時安陽地方の氣候は現在と變らなかったとする。㈤三代一癸と五世四戊。「三代一癸」とは即ち康丁、武乙、文武丁の三代にわたって癸の日を生日とする一人の人物が祭祀の對象としてあらわれ、世系表に一人補充された。「五世四戊」は即ち武丁より文武丁の五世にわたり、世系に殘らない四人の生日が戊の日である人物が存在したということである。以上が董氏の文武丁期の特色とするものであり、この序文の論旨でもある。

この論説に對し我が國の貝塚茂樹、伊藤道治兩博士は貞人、扶、𠂤、叶、勹、

𢆶、取、王の王族卜辭、一つは多子族卜辭をあげ、董氏の揭げる文武丁期貞人を細密に檢討した結果、董氏が卜辭に見える鼎形の貞字を文武丁期と定めたが、貞の異形字には別に[illegible]・[illegible]のように書いたものがあり、これらはその內容から推して王族・多子族の卜辭と考えられるから王族卜辭、多子族卜辭と命名した。このように文武丁卜辭貞人十七名は約三分の一は人名でないことが確かとなった。この文武丁卜辭はB一一九坑とYH六坑出土であるが、B一一九坑出土のものには、第一期の貞人である古、[illegible]の卜辭があり、またYH六坑出土のものにはB一一九坑と同名の第一期の貞人の名が見出される。こおゆう坑位關係、貞人共存の事實から、その出土卜辭は第一期に屬すべきものであり、だいたい武丁晩期とするのである。（「甲骨文斷代研究法の再檢討」東方學報第二三冊）

註〔十一〕 高景成とあるが史景成の誤り、山東の人。現在カナダ大學教授。中國歷史專攻、著書に『六卿湖源』等がある。

註〔十二〕 『甲骨文斷代研究管見』未見。

2、文武丁時代的貞人。除了扶之外，像前節所擧，可以確知為文武丁時的貞人的，列表如下，以供參證。（材料尚未搜輯完備，將來或須增訂）。

扶（見上節所擧）　勹（前四・二〇・五，後下二四・一〇與扶同版）

𠂤（佚五八六與扶同版）　㔽（前八・六・一與扶同版，一三・〇・六四）

余（前八・九・三等）　我（前八・三・三等）
子（前八・一三・一，乙四九四九與余，我，同版）
𢓊（續一・三・八，乙四七五八與余，我，子三人同版）
歸（前八・九・一等）　車（一三・〇・一〇九三）
史（一三・〇・一五六一與我同版）　萬（一三・〇・四七〇）
幸（一三・〇・五二）　㱐（新三五一等）
由（後下一六・一六等）　取（前八・五・七）
叶（續三・四三・二）

以上共十七人，史和叶，與第一期的貞人史小臣叶同名，但未必就是一個人，因相去已有六七十年之久。有許貞人以前已見著錄，何以未能找到，這就是因為文法的不同，這時大都不書貞字，所以未能確定卜下一字即是人名，又不能確定此人是在文武丁之世。因此我們不能不看一看文武丁時的文法，是如何的繁難與複雜。揭示略例於次。

3、文武丁時的卜貞例。這只是文例的一部分，可見此時對於卜貞的用法，而鼎也借用為貞。舉例如下：

甲、但稱卜的：

丁丑卜，〃今日命匠〃？一三・〇・七八

卜夕簡稱夕的：

乙酉卜：〃夕〃？丙戌卜：〃夕〃一三・〇・二二。

卜旬簡稱的：

癸丑卜：〃旬〃？九月。一三・〇・四二六

乙、但稱卜而記貞人的：

丁酉卜旬：〃自丁酉至于辛丑，口〃一三・〇・一。

此類最易把貞人的名字，讀入下一句，因而不知道許多貞人，自在別處也兼

寫貞字（後下・四二・九）可以確定他是貞人。其餘仿此。

丙、但稱卜而記卜人的：

丙午𢓊卜：〃巳不入商〃？一三・〇・九五一五。

𢓊本是貞人，在此辭則為卜人，是自卜自貞的。

丁、但稱貞的：

戊寅貞：〃翌己雨〃？一三・〇・一九〇

卜旬也簡稱貞旬：

癸巳貞：〃旬〃？一三・〇・九六｜九七

戊、以鼎為貞的：

庚辰鼎：〃由從𢀛𡍬亡囚〃？四月　一三・〇・一四二。

卜旬也稱鼎旬，

癸未鼎：〃旬〃？一月。一三・〇・五一五。

己、稱卜貞而不記貞人的：

戊申卜貞：〃翌己酉又大庚父癸〃？十月。一三・〇・一四五。

卜旬也稱卜貞旬，

癸酉卜，貞：〃旬〃？二月。一三・〇・一二。

這一類各期都有，最為常見。

庚、稱卜貞，不記貞人，而又以鼎為貞的，

癸亥卜鼎：〃旬〃？三月。一三・〇・二〇六。

這也是卜旬的又一例。

辛、稱卜貞而記貞人的：

癸卯卜，自貞：〃克妥𡨦口日〃？一三・〇・五二〇

卜夕也有沿舊例不省字的：

戊辰卜，我貞：〃今夕亡囚〃？一三・〇・三七九八。

這是各期常例，但在文武丁時少見，史臣都喜歡省字之故。

壬、稱卜貞而記貞人的：

己巳，余卜貞：〃亞雀象口〃？前八・九・三，

凡人名在貞字上的，其人必是親卜親貞，如第五期之〃王卜貞〃，即帝乙或帝辛親自卜貞。

以上九例，在一、二、三、五各期，以己、辛二例為最習見，武乙時，已有甲、丁二例，如卜旬但用一貞字，田獵稱卜貞，也有但稱卜的。文武丁復古，史臣們極其自由，一面可以用古法，兼寫卜貞而又題名，一面可以只用一個卜字或貞字，也可以以鼎代貞，卜人貞人，書名與否，各聽其便，於是形成一種極混亂的文例。甚至於一塊腹甲上的四段卜辭，互相倒置（一三・〇・五二〇）真可謂無奇不有了。

卜夕與卜旬，是各期都有的例行公事，在前三期，照例是稱〃旬亡囚〃？第五期卻又大書特書，加上一個王字，稱〃王旬亡猷〃？〃王今夕亡猷〃？在四期，武乙時只省了一個卜字，普通是〃癸口貞：旬亡囚〃？文武丁時竟有省文省到只用一個夕字，真可謂損之又損，前無古人後無來者的了。全部甲骨文字中，文武丁時代的卜辭，確實是像一個趣味雋永而又不易猜測的謎。

4、文武丁時卜貞的事類。從大體上看，這時候卜貞的事類，也恢復到武丁時代的舊觀。例如卜生育這件事，新派是不甚讚成的，所以祖甲以後就不見了，只有帝辛時曾卜過一次他的王后叫妌的生產之事（前二・一一・三）文武丁時，學着武丁，連王后受孕

也要問卜的。文武丁同武丁時卜辭的分別，只在一個字，稍一粗心，就會把曾孫的王后，配給他的高祖。我們可以比較一下。

武丁時：

庚子卜，㱿貞：〃婦好㞢子〃？三月　鐵一二七・一
貞：〃婦妹㞢子〃？前三・三三・八
口卯卜，〃婦耑㞢子〃？粹一二四三
〃婦姘㞢子〃？拾三・一一

文武丁時：

癸酉余卜貞：〃婦霰又子〃？後下四二・七
乙巳卜貞：〃婦妟又子〃？前八・二・一
戊子卜貞：〃婦𢓊又子〃？一三・〇・一〇五二三
戊子卜貞：〃婦壴又子〃？同上
戊子卜貞，〃婦桼又子〃？同上

武丁時，讀㞢為有無之有；文武丁時，沿用祖甲所改之字，以又為有無之有，所以同是卜王后有子，而區別只在㞢與又之間。又如武丁時，田獵稱獸，即是狩字，不稱為田，把田專用在耕種農作之事，例如說〃乎田于朱，受年〃？（後上四〇・一四）和常見的〃𢆶田，其受年〃？（續二・二八・五）〃壂田〃（前二・三七・六）等。祖甲改狩為田，從此不見狩字，到武乙時，普通稱田，（如村中出土習見的〃王其田亡𢦔〃，皆是）。偶然用過狩，帝乙、帝辛也用田，只有文武丁時，專用狩而不用田，這也足是他們的復古情緒。我曾把甲骨文中所有的獸字統計一下，計甲骨文編共收了四

一字、其中除了武乙時的2字外，武丁時有28字，文武丁時有11字。在甲編同乙編中（手頭一部分材料），又找到了16個獸字，屬于武丁時的4字，文武丁時的12字。原號如下：

時期	字數	拓本號	登記號
武丁	二	乙四六四	一三・〇・六一九二
	二		一三・〇・一四六、一六七、一八六、一九七、
文武丁	六		四七五・五〇六
	一	甲二二八	一・〇・〇四四五
	二		一三・〇・二八六
	三		一三・〇・五〇二

這不過一字之例，可以看出新舊兩派，同屬田獵之事，而用字不同如此。祖甲以後獸類字不畫腹部，文武丁時仍沿這種習慣，在文武丁時23獸字偏旁之犬，只有一個是犾寫的畫了腹部（一、〇、〇四二五｜四四五合），其餘22個都不畫腹部。

文武丁時代占卜風雨，注意紀錄氣象，這也和武丁時一樣。武丁時卜風雨有卜今明，三日或五日的雨的習慣，文武丁時也有：

丙午卜貞：〃今日其雨〃？大采，雨，自北，延口小雨。一三・〇・一七

戊寅卜：〃翌己雨〃？一三・〇・一九〇

丙戌卜：〃三日雨〃？丁亥，惟大食，雨。一三・〇・四一二

己丑：〃自今五日至癸巳，其雨〃？不雨。一三・〇・九八

在卜旬之後，附記一旬內之氣象，是武丁世常見的，文武丁時，附記更爲詳細：

癸卯貞：〃旬〃？甲辰，雨。乙巳，霧。丙（午）口啓。一三・〇・一九九

癸亥卜鼎：〃旬〃？三月。乙丑夕，雨。丁卯，明，雨。戊，小采日，雨。己明啓。壬申，大風自北。一三・〇・二〇六｜二二二

這些占卜記載氣象的文辭，在新派祖甲，帝乙，帝辛時代，是看不見的，因爲武丁時好卜風雨，好記載一旬內的氣象，反而給我們留下很多寶貴的史料，我曾在殷曆譜中引用了一部分乙編中的材料，作一篇文武丁日譜，證明在文武丁六年十二月，至七年四月間的氣候。這是兩塊殘破了的背甲，一塊是

乙一二　一三・〇・一二　乙一六三　一三・〇・二〇六｜二二二

乙三〇三　一三・〇・三九八　乙四七八　一三・〇・六〇八

拼合以上四殘片而成。又一塊背甲是

乙一九九　一三・〇・二五一

根據這些材料，所記的一月二月雨霰，三月大風，四月卜雪，討論氣候，實與近代的安陽，並無大異，不像有些人所說殷代黃河流域氣候遠較今日爲熱。（詳見殷曆譜下、九，日譜二，四五｜四七葉）

新派所絕對不見貞卜的，是關於疾病死亡之事，文武丁時也有了。這在武丁時是常見的，無論何種病痛，都要卜，向先祖妣去祈禱着降福免災，因而有疾首，齒，耳，口，舌，鼻，身，趾的卜辭，患病者是時王武丁同世王后，王子，臣僚。文武丁時也恢復了卜問之事，例如：

〃婦[illegible]子疾，不延〃？一五・〇・三二六

辛卯卜貞：〃且妾因凡疾〃？四日（乙）未，夕啓老。後下三五・二

癸未卜貞：〃医井疾〃？㞢疾因凡。前八・六・一

辛亥卜貞：〃犬因凡疾？及〃一月　一三・〇・四九一

癸酉卜鼎：〃方吼因凡又疾〃？十二月　一三・〇・四八｜一六四｜一六五

戊戌卜鼎：〃丁未，疾目不喪明〃？六月。〃其喪明〃？一三・〇・八七

武丁時的疾字，从人臥牀上，身上發汗之形，這是古字，文武丁時也寫古字，上擧一、二、三例的疾，是古字，同時也寫俗字，从大，腋下着一矢之形，有疾速同痛苦二義，這裏用作疾病之疾，四、五、六例的疾，是新字。三、五兩例的㞢，又二字，也是古今字並用的證據。

文武丁時卜死亡之例，如

庚戌卜犾貞：〃陖不死〃？前八・八・一

死字从井，爲棺木，从人在棺木中，此字周圍又多了四點，更表示着棺木埋入土中。

總之文武丁時貞卜的事類甚多，不是這里可悉擧的。這時候凡是新派所改革廢除的，一切都恢復了古制，不過時經百年，文字制度，變易已久，雖此時極力仿古，總還有線索可尋，書體，字形，文例，不免表現出許多特異之點，有了乙編裏這一批材料，更參考甲編和已著錄的各書，作一次全部的整理，比較新舊派一切禮制的異同，當不是太難的事，希望有人先我而下這一番工夫。

2、

文武丁時代の貞人。犾を除いた外は、前節にあげたように、文武丁時の貞人であることができる。列表すれば下の如く、以て參證に供す。（材料は尚未だ搜輯に完

備していない、將來或は須く增訂する）

犾（上節に擧げたところに見える）

台（佚五八六の犾と同版）

余（前八・九・三等）

子（前八・一三・一，乙四九四九と余，我は同版）

歸（前八・九・一等）

史（一三・〇、一五六一と我は同版）

幸（一三・〇・五二）

卣（後下一六・一六等）

叶（續三、四三・二）

勹（前二・二四・五、後下・二四・一〇と犾同版。）

医（前八・六、一犾と同版、一三・〇・六四）。

我（前八・三・三等）

扶（續一・三・八、乙四七五八と余、我、子三人は同版）。

車（一三・〇・一〇九九三）

萬（一三・〇・四七〇）

㞢（新三五一等）

取（前八・五・七）

以上共に十七人、史と叶は、第一期の貞人史、小臣叶とは同名、ただまだこれを一人としない、というのは、相い去ること已に六七十年の間がある。多くの貞人以前に已に著錄に出ていたのに、どうしてまだ捜すことが出來ないのか、これは就ち文法の不同によるのである、この時大體貞字を書かなかったし、だから卜の下の一字が即ち人名であることを確定することが出來なかったし、また此の人が文武丁の世にあったことを確定することが出來ない。これによって私共は文武丁時の文法が如何に繁雜と複雜であるかを見ないわけにはいかない。略例を次に揭示する。

3.

文武丁時の卜貞例。これはただ文例の一部分である。此の時の卜貞字に對する用法を知ることが出來る、而して鼎はまた借用して貞となす。例を擧げれば下の如し。

甲、但だ卜を稱する。　丁丑卜、〝今日命逐〟？　一三・〇・七八

卜夕を夕と簡稱する　乙酉卜：〝夕〟？　丙戌卜：〝夕〟？　一三・〇・二二。

乙、卜旬を旬と簡稱する。　癸丑卜：〝旬〟？九月　一三・〇・四二六

但だ卜を稱して又貞人を記す。　丁酉卜、𠂤：〝自丁酉至于辛丑、口〟　一三・〇・一

此の類は最も貞人の名前と字を把（とら）え易く、下一句を讀み入れ、因って多くの貞人を知ることが出來ない、𠂤は別の處にあってまた兼ねて貞字を書く、（後下、四二・九）以て他の貞人であることを確定することができる。其の餘はこれに傚う。

丙　但だ卜を稱して卜人を記す。　丙午彳卜：〝乙不入商〟？　一三・〇・九五。

彳はもと貞人である、此の辭にあっては卜人であり、自から卜し自から貞うのである。

丁　但だ貞を稱す、　戊寅貞、〝翌己雨〟？　一三・〇・一九〇。

卜旬はまた貞旬と簡稱す、　癸巳貞：〝旬〟？　一三・〇・九六－九七

戊　鼎を以て貞と爲す、　庚辰鼎：〝㞢從糸費亡囚〟？　四月。一三・〇・一四。

己　卜旬はまた鼎旬と稱す、　癸未鼎：〝旬〟？一月。一三・〇・五一五

卜貞を稱して貞人を記さない、　戊申卜貞：〝翌乙酉又大庚父癸〟？十月。一三・〇・一四五。

卜旬はまた卜貞旬と稱す。　癸酉卜、貞：〝旬〟？二月。一三・〇・一二。

この一類は各期にみなあり、最も常見する。

庚　卜貞を稱し、貞人を記さず、而してまた鼎を以て貞となす。　癸亥卜鼎：〝旬〟？三月。一三・〇・二〇六。

これまた卜旬のまた一例である。

辛　卜貞を稱して貞人を記さない。　癸卯卜、𠂤貞：〝克妾宰口日〟？一三・〇・五二〇。

卜夕はまた舊例に沿って字を省略しない。　戊辰卜我貞：〝今夕亡囚〟？　一三・〇・三七九八。

これは各期に常例し、但だ文武丁時に在って少見し、史臣はみな省字の故を好む。

壬、卜貞を稱して卜人を記す、　乙巳、余卜貞：〝亞雀眔口〟？　前、八・九・八。

凡そ人名は卜貞字の上にあり、其の人は必ず親ら卜し親ら貞う。第五期の「王卜貞」の如く、即ち帝乙或は帝辛は親から卜貞をする。

以上の九例には、一、二、三、五の各期があり、己・辛の二例は最も習見する、武乙の時は、已に甲、丁の二例がある。卜旬はただ一貞の字を用い、田獵には卜貞を稱し、またただ卜を稱するが如き適がある。文武丁の復活は、史官たちはその自由を極め、一面、以て古法を用い、併せて卜貞を書き而してまた署名する。一面、以てただ一個の卜字あるいは貞字を用い、また鼎を以て貞に代えうる。卜人と貞人、書名を記すや否やは、各〻その便を聽き、ここにおいて一種の極めて混亂の文例を形成した。甚だしきは一塊の腹甲上の四段卜辭である。互に相いさかさに置き（一三・〇・五二〇。）眞に奇なるものがある。

卜夕と卜旬は、各期にはみな有する公例の行事である、前三期は、例に照らすと「旬亡囚」？「今夕亡囚」？であって第五期は卻って大書特書であって、上に一つの王字を加え、「王旬亡畎」？「王今夕亡畎」と稱し第四期、武乙の時はただ一つのトの字を省略し、普通は「癸口貞：旬亡囚」？である、文武丁の時は文を省いてただ一つの夕の字を用いることがあった。一つの旬の字は眞に減（へら）してまた減し、前には古人はなく、後に來る者はなかったというべきである。全部の甲骨文字中、文武丁時代の卜辭は、確實に一つの趣味と雋永のようで推測しがたい謎のようである。

4.

文武丁時の卜貞の事類・大雜把に見ると、この時の卜貞の事類は、また武丁の時代の舊觀を恢復した。例へば生育を卜することは、新派は甚だ贊成せず、だから祖甲以後には見えないのである。ただ帝辛の時は嘗って卜には彼の王后を娩と稱する生產の事を卜したことがある。（前二、二・三）。文武丁の時、武丁は王后でさえ子を受けるのを問卜しようと感じた。文武丁と武丁時の卜辭の分別は、ただ一つの

字である。やゝ不注意にも、就ち曾孫の王后を、彼の高祖に妻はせた。次に比較することができる。

武丁時。

庚子卜殻貞：〝婦好㞢子〟？三月。鐵一二七・一

貞：〝婦妹㞢子〟？　前三、三三・八

口卯卜〝婦𫹚㞢子〟　拵一二四三

〝婦井㞢子〟？　拾三・一一

文武丁時

癸酉余卜貞：〝婦霰又子〟？　後下・四二・七

乙巳卜貞：〝婦妟又子〟？　前八・二・一

戊子卜貞：〝婦𡛷又子〟？　一三・〇・一〇五二三

戊子卜貞：〝婦壴又子〟？　同上

戊子卜貞：〝婦桼又子〟？　同上

武丁の時は、㞢を讀んで有無の有とした。文武丁の時は、祖甲の改制した字に沿用し、以てまた有無の有とした、だから同じく王后に子有るかを卜ったのである。そして區別はただ㞢と又の間にある。文武丁の時のごとく、田獵には獸を稱し、即ち狩の字である、田を稱さず、田字は專ら耕種農作の事に用い、例へば「爭田于朱、受年」（後上、四〇・一〇）と「𡕥田、其受年」？（續二・二八・五）「坙田」（前二、三七・六）等のごとし。祖甲は狩を改めて田となし、これより狩の字は見（あら）はれない、武乙の時に至って、普通田と稱す（村中出土に習見する「王其田亡𢦔」の

ごとく皆な是れなり）。偶然に狩を用いたことがある、帝乙、帝辛はまた田を用いた、ただ文武丁の時には、專ら狩を用いたことがある、帝乙、帝辛はまた田を用いた、ただ文武丁の時には、專ら狩を用いて田を用いなかった、これは彼の復古の情緒を見るに足るものである。私は曾って一度甲骨文中に有る獸の字を統計したところ、合計して『甲骨文編』には四一字、そのうち武乙時の二字を除いた外は、武丁時に二十八字あり、文武丁時に十一字あった。『甲編』と『乙編』には（手頭一部分の材料）、また一六個の獸字をえた、武丁時に屬するもの四字、文武丁時十二字。原號は下の如し。

時期	字數	拓本番號	登記番號
武丁	二	乙四六四	
	二		一三・〇、六一九二
文武丁	六		一三・〇・一四六、一六七、一八六、一九七、四七五、五〇六。
	一	甲二二八	一・〇・〇四四五
	二		一三、〇、二八六
	三		一三・〇・五〇二

これは一字の例に過ぎないが、新舊兩派が同じく田獵の事に關しながら、字が同じでないのはかくのごとくであるのがわかる。祖甲以後獸の類の字は腹部に畫かず、文武丁の時は仍ちこの種の習慣を沿用した、文武丁時は二三の獸字の偏旁は犬、ただ一つの豕が腹部に書かれた（一・〇、〇四二五—四四五）、その餘はみな腹部に

は書かれていない。

文武丁時代の占卜風雨は、氣象の記録に注意し、これは武丁時代と同じ。武丁時は風雨を卜して今、明、三日或は五日の雨を卜する習慣がある、文武丁の時にもまたある。

丙午卜貞：〝今日其雨〟？大采、雨、自北、延□小雨。一三・〇・一七
戊寅卜：〝翌己雨〟？一三・〇、一九〇
丙戌卜：〝三日雨〟？丁亥、惟大食，雨。一三・〇・四一二
乙丑：〝自今五日至癸巳，其雨〟？不雨。一三、〇・九八

卜旬の後に一旬内の氣象を附記し、武丁の世には常に見られる、文武丁時は、附記して更に詳細である。

癸卯貞：〝旬〟？甲辰、雨。乙巳，霧。丙（午）□啓。一三・〇、一九九
癸亥卜鼎：〝旬〟？三月。乙丑夕、雨。丁卯、明、雨。戊、小采日、雨。己明啓。壬申、大風自北。一三・〇、二〇六—二二二

この占卜の氣象を記載した文辭は、新派は祖甲、帝乙、帝辛の時代に於ては見つからない、というのは武丁・文武丁時は好く風雨を卜し、好んで一旬の内の氣象を記載した、反って私共に大變多くの寶貴な史料を殘した、私は曾って『殷曆譜』中『乙編』中の材料を一部分引用した　そして文武丁の日譜を作り、文武丁六年十二月から七年四月の間の氣候を證明した。これは二塊の殘破した背甲で、一塊は

乙一二　一三・〇、一二　乙一六三　一三・〇・二〇六—二二二
乙三〇三　一三・〇、三九八　乙四七八　一三、〇・六〇八

である。

以上四殘片を拼合して成った、又一塊甲は

乙一九九　一三・〇、二五一

この材料を根據として、記すところの一月、二月は雨霰、三月は大風、四月は雪を、卜う、殷代の氣候を討論するに、實に近代の安陽と、あまり大きな差異はない、或る人たちが殷代の黄河流域の氣候は今日と較べるとはるかに熱いというわけではない。

（『殷曆譜』下、九、日譜二・四五—七四頁）

新派が絶對に貞卜に現われないのは、疾病死亡の事に關して、文武丁の時にもやはりあった。これは武丁の時に常に見られる、どのような種類の病痛であろうと、みな問卜を要した、先祖妣に向って祈禱し福を降し災を免ぬがらしめ、よって首、齒、耳、口、舌、鼻、身、趾を疾む卜辭がある、病に患った者はこれ時の王、武丁で彼の王后、王子、臣僚である。文武丁の時はまた疾病を卜問することを恢復している、例へば、

〝婦婺子疾、不延〟？一五・〇・三二六
辛卯卜貞：〝且安因凡疾〟？四日（乙）未、夕啓老。後下三五・二
癸未卜貞：〝逐井疾〟？㞢疾因凡。前八・六一
辛亥卜貞：〝犬因凡疾〟？反〟一月。一三・〇・四九一
癸酉卜鼎：〝方呪因凡又疾〟？十二月　一三・〇・四八一—一六四一—一六五
戊戌卜鼎：〝丁未、疾目不喪明〟？六月。〝其喪明〟一三、〇・八七

武丁の時の疾字は、人が牀上に臥するに从い、身上發汗の形、これ古字である、文

武丁の時はまた古字をかく、上にあげた一、二、三例の疾は、古字である。同時にまた俗字を書く、大に从い、腋下に一矢の形をつけ、疾速と痛苦の二義がある、これは疾病の疾を用う、四、五、六の例の疾は、新字である。二、五の兩例は㞢、又の二字、また古今の字並用の證據である。

文武丁時の死亡を卜うの例は

庚戌卜扶貞：〝陂不死〟？前八・八・一

のごとし。

死の字は井に从い、棺木であり、人棺木中にあるのに从ふ、此の字の周圍はまた四點多い、更に棺木を土中に埋沒することを表示している。

これをまとめていうと、文武丁時の貞卜の事類は甚だ多く、こゝに悉くあげることが出來ない。この時は凡そ新改革を廢除するもので、一切はみな古制を恢復した、時に百年を經ずして文字制度、變易已に久しく、此の時極力古へに仿ふと雖ども、總じてまた線索に尋ぬべきものがあり、書體、字形、文例、多くの特異な點を表現することを免れない、『乙編』の材料には、更に『甲編』でそれ以外の著錄を參考して、一度全部整理して、新舊兩派の一切の禮制の異同を比較することは、決して大變なことではない。誰か私より先に一度このことに時間をさかれることを希望する。

5、

三代一癸和五世四戊。證明文武丁時代卜辭的另一個方法，是在小大宗世系以外的稱謂問題，這裏也只是擧出兩個例子，一個是父癸，一個是祖戊、父戊和兄戊。

三代一癸，乙編有一塊背甲，卜辭云：

戊申卜貞：「翌日己酉，又大庚　父癸」？十月　一三・〇・一四五

這一個卜辭，不錄貞人，竟把又字反寫，在各期卜辭中，為了對稱的美，多書反文，但又字絕不反寫，因為反寫便成ナ（左）字，又是祭名，（下兩辭可證）絕無祭名稱左或佐的，這足見文武丁世史臣的不學無術。這卜辭中的父癸可以證明時代。文武丁有一伯父名癸，乃是武乙之兄，所以在武乙時就有以下的卜辭：

壬辰卜：「其又兄癸，叀羊」？「王受（又）」？明丁八

「桒兄癸，叀又壽，王受又」？後上七・一二

武乙的兄，即文武丁的父輩，自無問題。同時武乙的兄，即康丁的長子，但是他在康丁時已死了，所以康丁也祭祀他，稱為子癸。卜辭如下：

壬申卜：「毋戊歲叀牛」？「子癸歲　王賓祭」？「从賓祭」？粹三八一

「叀毋巳及子癸酒」？「叀兄辛及子癸先」？大吉　粹三四〇

壬申卜：「其桒子癸，叀豕」？「叀牛」？「叀牢」？明乙二五

康丁對於他的愛子，親自致祭，並用牢、牛、豕、酒這在他期祀典中是很少見的。例如祖己也是武丁的愛子，且立為太子，不幸短命而死，直待祖庚即位後才祭祀他，稱為兄己或小王兄己，武丁時並沒有祭過子己。所以父祭其子，在殷代可以說是康丁的創舉。辭中的毋戊是祖甲配妣戊，兄辛是廩辛，都可以確定這是康丁時的卜辭。

以上三代一癸，很明白表現着致祭者父子祖孫的關係，因為名癸的不多，名戊的就比較麻煩了。

五世四戊。在乙編中，有祖、父、兄三世名戊的：

「余㞢歲于祖戊，三牛」？一三・〇・一〇九六一

「乙巳又祖戊」？一三・〇・六〇

丁卯卜狄：「王即父戊」？一三・〇・五二三

丁卯卜「王即兄戊」？同上

乙巳，豕：「祖弘求父戊」？一三・〇・四六

戊申卜：「午桒于父戊」？一三・〇・七二七九

口口卜：「帝御，子自祖庚至于父戊」一三・〇・一八七〇

他處也見文武丁世祭兄戊的卜辭：

丙子卜：「乇勿祖丁」？「叀羊兄戊」？前一・四〇・三

口口卜：「乇口兄戊」？「叀大兄戊」？庫二三四

這些兄戊、父戊、祖戊，三世名戊的，都在文武丁時代，推而上之，在武乙時，必有一個兄戊或有一個父戊了，但是現在還沒有見到，也未找全。祖戊，可以是曾祖或高祖，但父戊必是武乙同輩，所以說武乙時必有一個兄戊。再推而上之，在康丁時代也有父戊，祖戊而沒有兄戊。

「父己父戊歲，王賓」？粹三一一

（戊）子卜：「父戊歲，叀羊」？「又于父戊」？粹三七八

口亥卜，「又伐祖戊」？粹二・六

「于多妣，祖戊」？前一・二三・一

戊戌卜，旅貞，「祖戊歲　叀羊」？前一・二三・二

以上各辭，父己為祖己，康丁之父，可知此父戊在康丁時，旅是祖甲時人，可以供職

在康丁時，是康丁也有祖戊。因而上推，康丁的父戊，在祖甲時必是兄戊，他的祖戊，在祖甲時必是父戊，可是祖甲時不見兄戊，只有父戊。

戊申（卜旅）：貞：「王賓父戊口，亡口」？粹三七七

戊寅卜，即貞，「叀父戊歲，先酒」？後上・五・一一

祖甲的父，是武丁的兄，在武丁的卜辭中，果有兄戊，

「御，衛兄戊」？前一・四〇・二

乙亥口口兄戊？前一・四〇・二

兄戊　前一・四〇・四

辛未卜，㱿貞：「王夢兄戊何從，不隹囚」？佚六二

「不隹兄戊巷」？鐵一五七・一

從武丁到文武丁的五世之中，至少須有四個兄戊。祖可以包括高曾，所以文武丁的祖戊，不一定要與康丁同輩，一即康丁有兄戊，但是文武丁有父戊，武乙必有兄戊，同樣的康丁有父戊，祖甲也必有兄戊。所以在這五世之中，一定得有四個兄戊。現在把三代一癸，五世四戊，共為一表：

世代	三代一癸	五世四戊：
1. 武丁		兄戊
2. 祖甲		父戊（兄戊）（必有）
3. 康丁	子癸	祖戊　父戊
4. 武乙	兄癸	祖戊　（兄戊）（必有）
5. 文武丁	父癸	祖戊（高）父戊　兄戊

這樣，文武丁時的父癸，祖戊、父戊、兄戊，便都可以得到解釋了。要在分期分王能弄得清楚，便可以知道他們的淵源。如果我們能下一番整理的工夫，研究祀典，稱謂，必能在大宗小宗系統之外找到許多殷王親屬的關係，以補史記之闕文。

以上五事，只是研究文武丁時代卜辭的一點線索，一些輪廓，讀者據此加以推尋，在乙編裏必能得到更多的新異可貴的材料，有些是我此刻還說不上來的。

乙編這塊新園地的介紹，至此為止，我實在未盡導遊之責。最後，我須要把坑位抄在這裏，以供讀者參檢。本來，坑位須要伴着圖的，但是沒有圖仍然有用。張秉權君從國內把坑位抄來，我檢查手頭抄本，發現了B一一二、一二三、一二五、一二六、一三〇各坑，皆是純粹第一期卜辭，而YH〇一七坑，純粹是第五期卜辭，這是很可以幫助我們作分期斷代的研究，等待石璋如君的小屯遺址坑位全圖發表之後，讀者再去按驥索圖，也未嘗不可。

本編登記號與坑位對照表：

一三・〇・一—一三・〇・二九五　B一一九　一三・〇・二九六—一三・〇・三六二　B一一二
一三・〇・三六三—一三・〇・三六七　B一二三　一三・〇・三六八—一三・〇・三八二　B一五
一三・〇・三八三—一三・〇・三八七　B一二六　一三・〇・三八八—一三・〇・三八九　B一三〇
一三・〇・三九〇　B一三六　一三・〇・三九一—一三・〇・三九二　YH〇〇五
一三・〇・三九三—一三・〇・五九六　YH〇〇六　一三・〇・五九七—一三・〇・六〇三　YH〇〇七
一三・〇・六〇四　YH〇三六　一三・〇・六〇五—一三・〇・六〇六　YH〇三八
一三・〇・六〇七—一三・〇・六一五　YH〇四四　一三・〇・六一六　YH〇七六
一三・〇・六一七—一三・〇・六二〇　YH〇八三　一三・〇・六二一　YH〇九〇

一三・〇・六二二｜一三・〇・六二六　YH〇九六　一三・〇・六二七　YH一二六
一三・〇・六二八｜一三・〇・一七七四　YH一二七　一三・〇・一七七五｜一三・〇・一七七七　B一二五
一三・〇・一七七八｜一三・〇・一七七五六　YH〇〇六
以上十三次發掘所得有字龜版一七七五六號
一三・二・一｜一三・二・三　B一一九　一三・二・四｜一三・二・一四　B一二三
一三・二・一五｜　B一二五　一三・二・一六　B一二八
一三・二・一七　C七五　一三・二・一八｜一三・二・二〇　YH〇〇五
一三・二・二一｜一三・二・二三　YH〇〇六　一三・二・二四｜一三・二・二六　YH〇三六
一三・二・二七　B一一九　一三・二・二八｜一三・二・三五　YH一二七
一三・二・三六　B一一九　一三・二・三七｜一三・二・四二　B一二三
一三・二・四三　B一二二　一三・二・四四　C七五
一三・二・四五｜一三・二・四八　YH〇三六
以上十三次發掘所得有字骨版四八號

一四・〇・一　YH二二八　一四・〇・二　C一二八
以上十四次發掘所得有字龜版二號
一五・〇・一｜一五・〇・三二七　YH二五一　一五・〇・三二八｜一五・〇・三七四　YH二五三
一五・〇・三七五｜一五・〇・三八二　YH二六五　一五・〇・三八三　YH二八八
一五・〇・三八四｜一五・〇・三八八　YH三〇九　一五・〇・三八九｜一五・〇・四六五　YH三三〇
一五・〇・四六六｜一五・〇・四六七　YH三三八　一五・〇・四六八｜一五・〇・五〇三　YH三四四

一五・〇・五〇四　YH三六二　一五・〇・五〇五　YH三七〇
一五・〇・五〇六｜一五・〇・五一五　YH三七一　一五・〇・五一六｜一五・〇・五一七　YH三九三
一五・〇・五一八　YH四〇九　一五・〇・五一九｜一五・〇・五二三　YH四四八
一五・〇・五二四｜一五・〇・五二五　C一七〇　一五・〇・五二六｜一五・〇・五四七　C一七一
一五・〇・五四八｜一五・〇・五四九　C一七二
以上十五次發掘所得有字龜版五四九號
一五・二・一　C一七三　一五・二・二　C三二九　一五・二・三　C三三三
一五・二・四　C三三四　一五・二・五　YH二四四　一五・二・六｜一五・二・一一　YH二五三
一五・二・一二　YH二五八　一五・二・一三　YH二七九　一五・二・一四｜一五・二・二八　YH三四四
一五・二・二九｜一五・二・三五　YH三四七　一五・二・三六　YH三五四　一五・二・三七　YH三五九
一五・二・三八　YH三六四　一五・二・三九　YH三五九　一五・二・四〇　YH三六四
一五・二・四一　YH三六七　一五・二・四二　YH四二三　一五・二・四三｜一五・二・四五　YH四二七
一五・二・四六　YM三三一　一五・二・四七　YM三六二　一五・二・四八　(?)
一五・二・四九　YM二五三　一五・二・五〇　YH三四四
以上十五次發掘所得有字骨版五〇號

中華民國三十七年七月十一日揮汗寫訖，于美國芝加哥大學東方學院。董作賓。

5、

三代一癸と五世四戊。文武丁時代の卜辭のもお一つの方法が、小大宗の世系以外の稱謂の問題であることを證明している。ここでもやはりただ二つの例をあげる、一つは父癸で、一つは祖戊で父戊と兄戊。

三代一癸、乙編ᴮに一塊の背甲があり、卜辭に云う、

戊申卜貞、〝翌日乙酉、又大庚、父癸〟？十月。一三・〇・一四五

この一つの卜辭は、貞人を録さず、ただ又の字を逆に書いている、各期卜辭中にあって、對稱の美をなした、多くの書は反文で、ただ又の字は絕對に逆に書かず、因って逆に書いて便にナ（左）字となる、又は祭名である。（下の二つの辭で證することが出來る）絕對に祭名で左或は佐を稱することはない、これは文武丁の世の史匠の學ばずして術なきを見るに足るものである。この卜辭中の父癸は時代を證明するものであるのは、文武丁には一個父名癸あり、乃ち武乙の兄である、だから武乙の時には以下の卜辭がある。

壬辰卜：〝其又兄癸、叀羊〟？王受（又）〟？明丁八

秦兄癸：〝叀又遘、王受又〟？後上・七・一二

武乙の兄は、即ち文武丁の父輩、自から問題はない。同時に武乙の兄は、即ち康丁の長男、ただ彼は康丁の時に已に死んだ、だから康丁は彼を祭祀する、稱して子癸と為す、卜辭は下の如し。

壬申卜：〝母戊歲叀牛〟？〝子癸歲、王賓祭〟？〝从賓祭〟？粹三八一

〝叀母己及子癸酒〟？〝叀兄辛及子癸先〟？大吉。粹三四〇

壬申卜：〝其桒子癸、叀豕〟？〝叀牛〟？〝叀牢〟？明乙二五

康丁は彼の愛する子に對して、親から祭をし、並に宰、牛、豕、酒を用いた、これは彼の時期の祀典中は大變少見である。例へば祖己の如きはまた武丁の愛する子である、且つ立てゝ太子となし、不幸に短命にして死に、直ちに祖庚即位してのちに彼れに祭祀している、兄己は或は小王兄己を稱し、武丁の時は並に子巳を祭ることはない。だから父はその子を祭る、殷代には以て康丁の最初の擧行とするのである。辭中の母戊は祖甲の配妣戊である、兄辛は廩辛、みな康丁時の卜辭であることを確定できる。

以上は三代の一癸であることは、大變明白に祭をする者父子祖孫の關係を表現している、よって癸と名づけるのは多くはなく、戊と名ずけるのは就ち比較的めんどうである。

五世四戊。乙編中には祖、父、兄の三世戊を名とするものがある。

〝余㞢歲于祖戊、三牛〟？一三・〇・一〇九六一

〝乙巳又祖戊〟一三・〇・六〇

丁卯卜扶：〝王耶父戊〟？一三・〇・五二三

丁卯卜〝王耶兄戊〟？同上

乙巳、豕：〝祖弘求父戊〟？一三・〇・四六

戊申卜：〝午彙于父戊〟？一三・〇・七二七九

口口卜：〝帝御、子自祖庚至于父戊〟一三・〇・一八七〇

外の處にもまた文武丁の世に兄戊を祭る卜辭が見える。

丙子卜：〝乇勿祖丁〟？〝叀羊兄戊〟？前一・四〇・三

ロロト：〃乇口兄戊＝？〃叀犬兄戊。？　庫二三四

これらの兄戊、父戊、　祖戊の三世は戊を名とする、みな文武丁時代にあり、推して之を上とす、武乙の時に、必ず一つの兄戊あるいは一つの父戊があった、ただ現在のところまだ見ることが出來ない、またまだ捜すことに全うせず、祖戊は曾祖あるいは高祖である、ただ父戊は必ず武乙の同輩である、だから武乙を云う時は必ず一人の兄戊があるのである。再び推してこれにさかのぼれば、康丁の時代は、また父戊、祖戊があって兄戊はない。

〃父己父戊歳、王賓＝？　粹三一一

（戊）子ト：〃父戊歳、叀羊＝？〃又于父戊＝？　粹三七八

口亥ト、〃又伐祖戊＝？　粹二、六

〃于多妣、祖戊＝？　前一、二三、一

戊戌ト、旅貞：〃祖戊歳、叀羊＝？　前一、二三、二

以上の各辭は、父己を祖己となし、康丁の父であり、此の父戊は康丁にある時、旅は祖甲の時の人である、だから康丁の時に供職していた、康丁にはまた祖戊がある。因って上推すれば、康丁の父戊は、祖甲の時には必ず兄戊である。他の祖戊、祖甲の時には必ず父戊である、祖甲の時は兄戊は見えず ただ父戊である。

戊申（卜旅）：貞：〃王賓父戊口、亡囗＝？　粹三七七

戊寅ト、即貞〃叀父戊歳、先酒＝？　後上、五、一一

祖甲の父は、武丁の兄である、武丁の卜辭中には、果して兄戊がある。

〃御、衛兄戊。？　前一、四〇、二

乙亥口口兄戊？　前一、四〇、二

兄戊　前・一・四〇・四

辛未ト、㱿貞：〃王夢兄戊荷從、不佳囚〃？　佚六二

〃不佳兄戊告〃？　鐵一五七・一

武丁より文武丁に至る五世の中、少くとも四個の兄戊があるにちがいない。祖は高曾を包括しうる、だから文武丁の祖戊は、必ずしも康丁の同輩とは限らない、一に即ち康丁には兄戊があり、ただ文武丁には父戊があり、武乙には必ず兄戊がある、同様に康丁には父戊があり、祖甲にはまた必ず兄戊がある。だからこの五世の名に於て、必ず四個の兄戊があらねばならない。今再び三代の一癸と、五世四戊を、共に一表とすれば、

世代	三代一癸	五世四戊
1.武丁		兄戊
2.祖甲		父戊（兄戊）（必ず有り）
3.康丁	子癸	祖戊　父戊
4.武乙	兄癸	祖戊（兄戊）（必ず有り）
5.文武丁	父癸	祖戊（高）父戊　兄戊

この様に文武丁時の父癸、祖戊、父戊、兄戊は、すなわちみな解釋をすることが出來た、少しくは分期分王をはっきりさせようと思えば、便に彼等の淵源を知ることが出來る。はたして私達が能く全部整理の時間についやし、祀典の稱謂を研究すれば必ず大字小字の系統の外、殷王親屬の關係をさがすに至って、以て『史記』の闕

文を補うものである。

以上の五事は、ただ文武丁時代の卜辭の研究に於ては一點の線索で、ちょっとした輪廓で、讀者はこれによって以て推尋を加へ、『乙編』下に必ず更に多くの新異で貴重な材料を得ることが出來るであろう、或るものは未だ私が今の所云いえないものである。

『乙編』のこの塊は新園地の紹介を、此れに至ってとどめとする。私は本當のところ未だよく案内者を導くことの責任を果していない。最後に、私は須く坑位をここに抄して、以て讀者の參檢に供する。本來坑位は須く圖を要する、ただ圖がなくても依然として役に立つ。張秉權君國内より坑位を抄束し、私は手はじめに抄本を檢査して、B一一二、一二三、一二五、一二六、一三〇の各坑を發現した、皆な純粹に第一期の卜辭である、而るにYH〇一七坑は、純粹の第五期卜辭でこれらは大變私の分期斷代研究に役立った。石璋如君の『小屯遺跡坑位全圖』の發表の後を待って、讀者に再び圖って、また未だ嘗って可とすることが出來ないものを索めんことを驥ふ。

本編登記番號と坑位對照表：

一三・〇・一—一三・〇・二九五	B一一九	一三・〇・二九六—一三・〇・三六二	B一一二
一三・〇・三六三—一三・〇・三六七	B一二三	一三・〇・三六八—一三・〇・三八二	B一二五
一三・〇・三八三—一三・〇・三八七	B一二六	一三・〇・三八八—一三・〇・三八九	B一三〇
一三・〇・三九〇	B一三六	一三・〇・三九一—一三・〇・三九二	YH〇〇五
一三・〇・三九三—一三・〇・五九六	YH〇〇六	一三・〇・五九七—一三・〇・六〇三	YH〇一七

一三・〇・六〇四	YH〇三六	一三・〇・六〇五—一三・〇・六〇六	YH〇三八
一三・〇・六〇七—一三・〇・六一五	YH〇四四	一三・〇・六一六	YH〇七六
一三・〇・六一七—一三・〇・六二〇	YH〇八三	一三・〇・六二一	YH〇九〇
一三・〇・六二二—一三・〇・六二六	YH〇九六	一三・〇・六二七	YH一三六
一三・〇・六二八—一三・〇・一七七一四	YH一二七	一三・〇・一七七一五—一三・〇・一七七一七	B一三五
一三・〇・一七七一八—一三・〇・一七七五六	YH〇〇六		

以上は十三回に發掘して得た所の有字龜版は一七七五六號

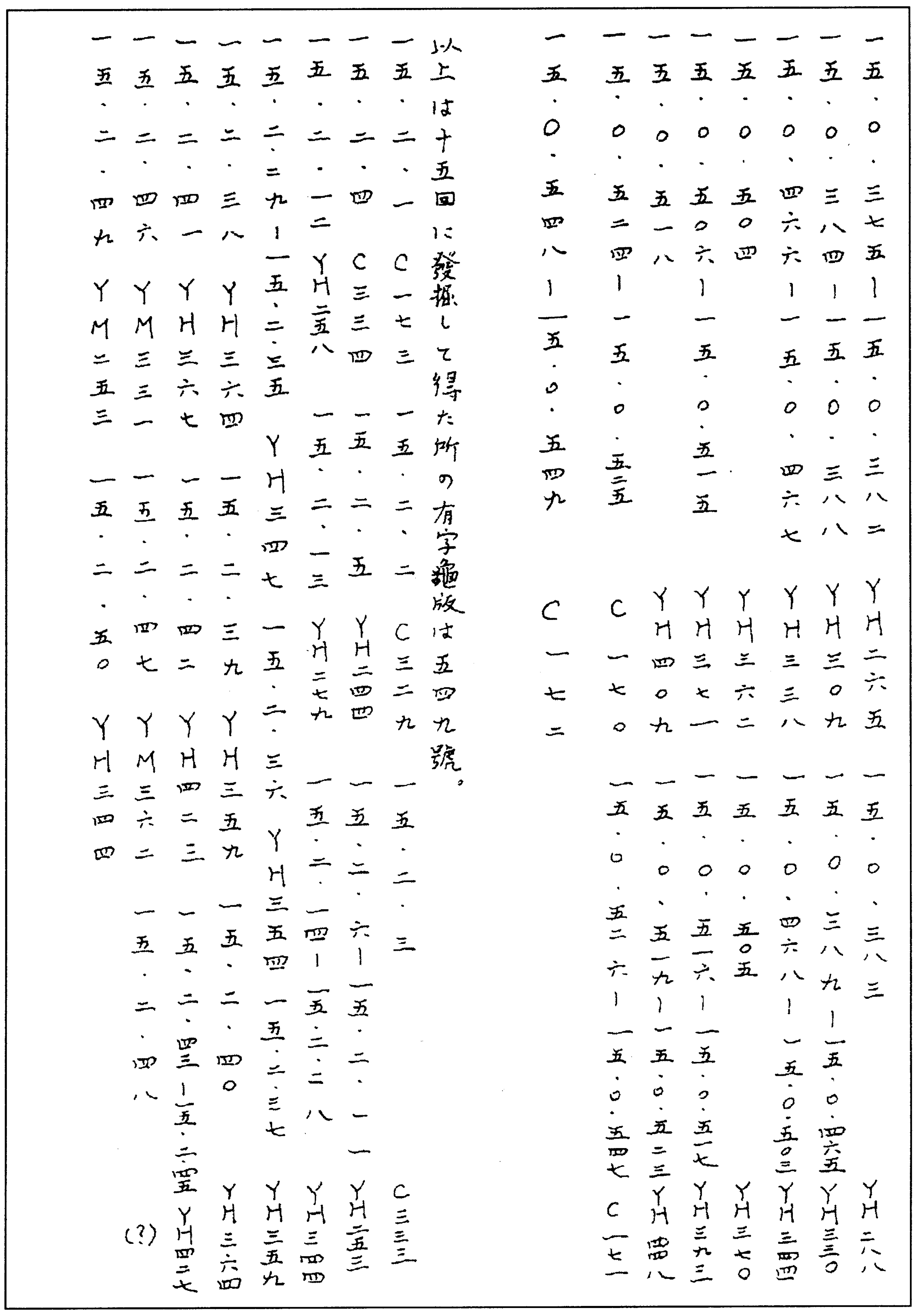
一三・二・一—一三・二・三	B一一九	一三・二・四—一三・二・一四	B一一三
一三・二・一五	B一二五	一三・二・一六	B一二八
一三・二・一七	C七五	一三・二・一八—一三・二・二〇	YH〇〇五
一三・二・二一—一三・二・二三	YH〇〇六	一三・二・二四—一三・二・二六	YH〇三六
一三・二・二七	B一一九	一三・二・二八—一三・二・三五	YH一二七
一三・二・三六	B一一九	一三・二・三七—一三・二・四二	B一二三
一三・二・四三	B一二二	一三・二・四四	C七五
一三・二・四五—一三・二・四八	YH〇三六		

以上は十三回に發掘して得た所の有字骨版は四八號

一四・〇・一	YH二二八	一四・〇・二	C一二八

以上は十四回に發掘して得た所の有字龜版は二號

一五・〇・一—一五・〇・三二七	YH二五一	一五・〇・三二八—一五・〇・三七四	YH二五三

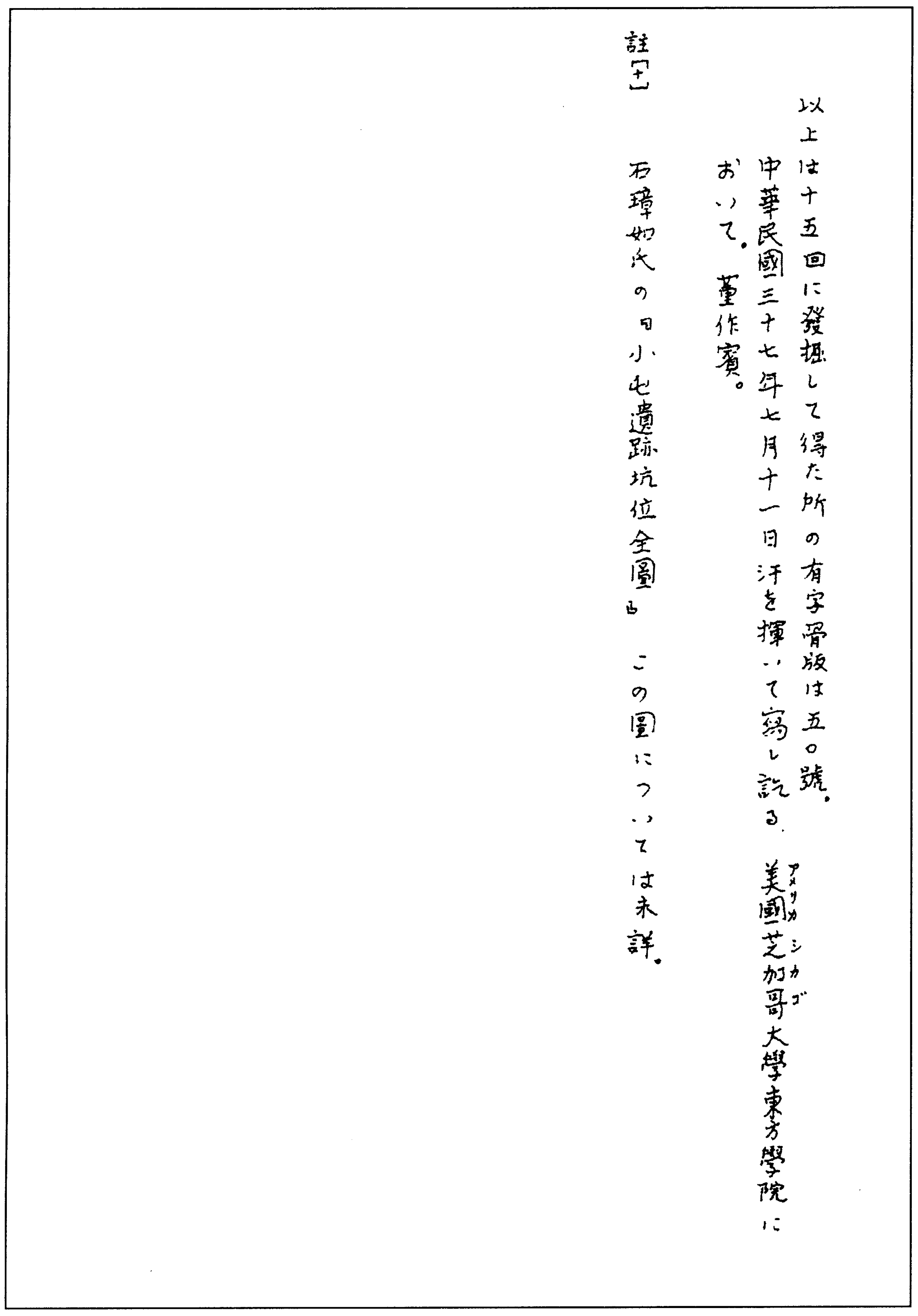


一五・〇・三七五－一五・〇・三八二　YH二六五　一五・〇・三八三　YH二八八
一五・〇・三八四－一五・〇・三八八　YH三〇九　一五・〇・三八九－一五・〇・四六五　YH三三〇
一五・〇・四六六－一五・〇・四六七　YH三三八　一五・〇・四六八－一五・〇・五〇三　YH三四四
一五・〇・五〇四　YH三六二　一五・〇・五〇五　YH三七〇
一五・〇・五〇六－一五・〇・五一五　YH三七一　一五・〇・五一六－一五・〇・五一七　YH三九三
一五・〇・五一八　YH四〇九　一五・〇・五一九－一五・〇・五二三　YH四四八
一五・〇・五二四－一五・〇・五二五　C一七〇　一五・〇・五二六－一五・〇・五四七　C一七一
一五・〇・五四八－一五・〇・五四九　C一七二

以上は十五回に發掘して得た所の有字龜版は五四九號。

一五・二・一　C一七三　一五・二・二　C三二九　一五・二・三　C三三三
一五・二・四　C三三四　一五・二・五　YH二四四　一五・二・六－一五・二・一一　YH二五三
一五・二・一二　YH二五八　一五・二・一三　YH二七九　一五・二・一四－一五・二・二八　YH三四四
一五・二・二九－一五・二・三五　YH三四七　一五・二・三六　YH三五四　一五・二・三七　YH三五九
一五・二・三八　YH三六四　一五・二・三九　YH三五九　一五・二・四〇　YH三六四
一五・二・四一　YH三六七　一五・二・四二　YH四二三　一五・二・四三－一五・二・四五　YH四二七
一五・二・四六　YM三三一　一五・二・四七　YM三六二　一五・二・四八　(?)
一五・二・四九　YM二五三　一五・二・五〇　YH三四四

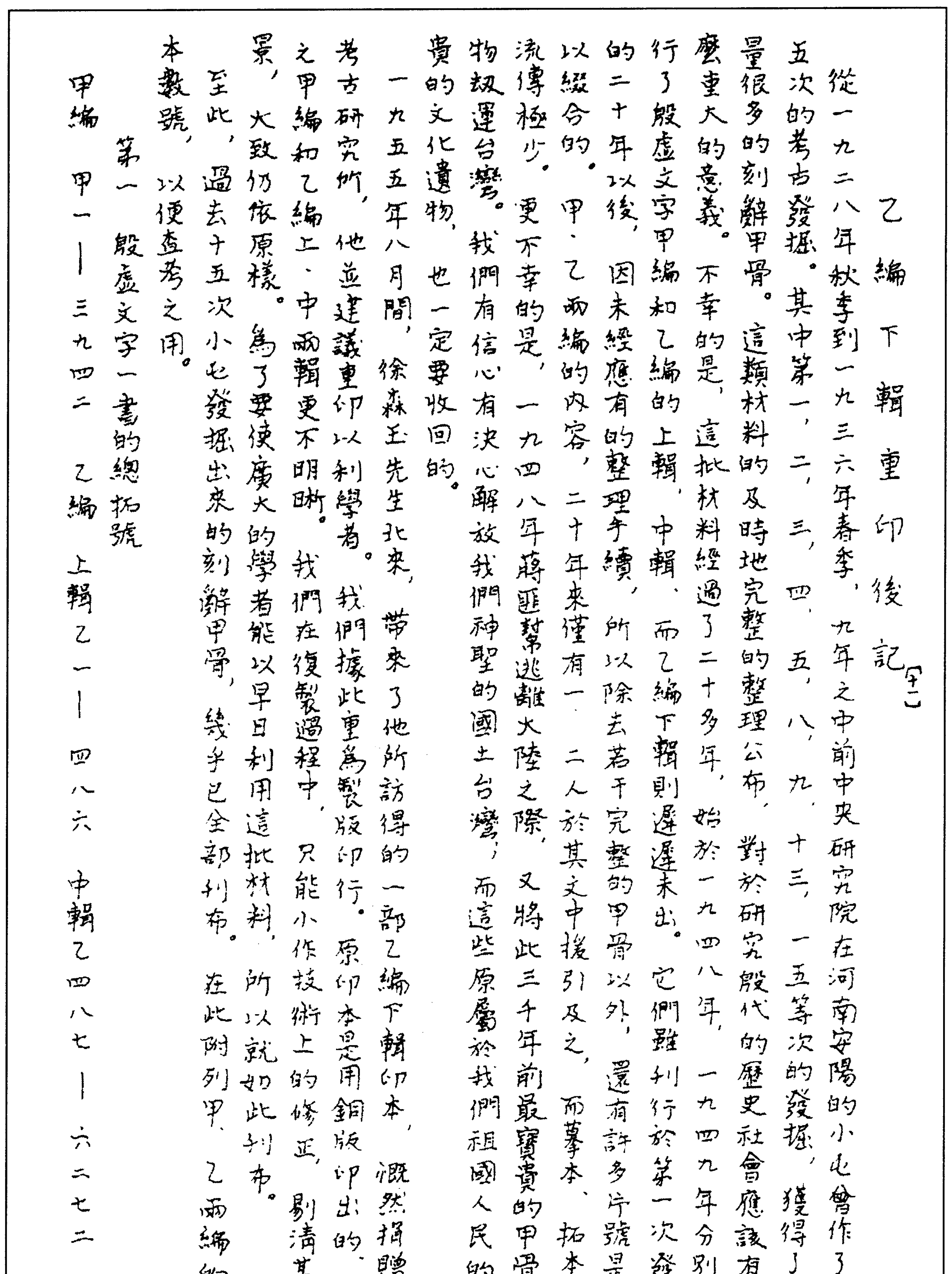
180



以上は十五回に發掘して得た所の有字骨版は五〇號。
中華民國三十七年七月十一日汗を揮いて寫し訖る。美國（アメリカ）芝加哥（シカゴ）大學東方學院において。董作賓。

註〔十〕　石璋如氏の「小屯遺跡坑位全圖」　この圖については未詳。

181



乙編下輯重印後記〔十二〕

從一九二八年秋季到一九三六年春季，九年之中前中央研究院在河南安陽的小屯曾作了十五次的考古發掘。其中第一，二，三，四，五，八，九，十三，一五等次的發掘，獲得了數量很多的刻辭甲骨。這類材料的及時地完整的整理公布，對於研究殷代的歷史社會應該有多麼重大的意義。不幸的是，這批材料經過了二十多年，始於一九四八年，一九四九年分別刊行了殷虛文字甲編和乙編的上輯、中輯、而乙編下輯則遲遲未出。它們雖刊行於第一次發掘的二十年以後，因未經應有的整理手續，所以除去若干完整的甲骨以外，還有許多片號是可以綴合的。甲、乙兩編的內容，二十年來僅有一二人於其文中援引及之，而摹本、拓本則流傳極少。更不幸的是，一九四八年蔣匪幫逃離大陸之際，又將此三千年前最寶貴的甲骨原物刧運台灣。我們有信心有決心解放我們神聖的國土台灣，而這些原屬於我們祖國人民的珍貴的文化遺物，也一定要收回的。

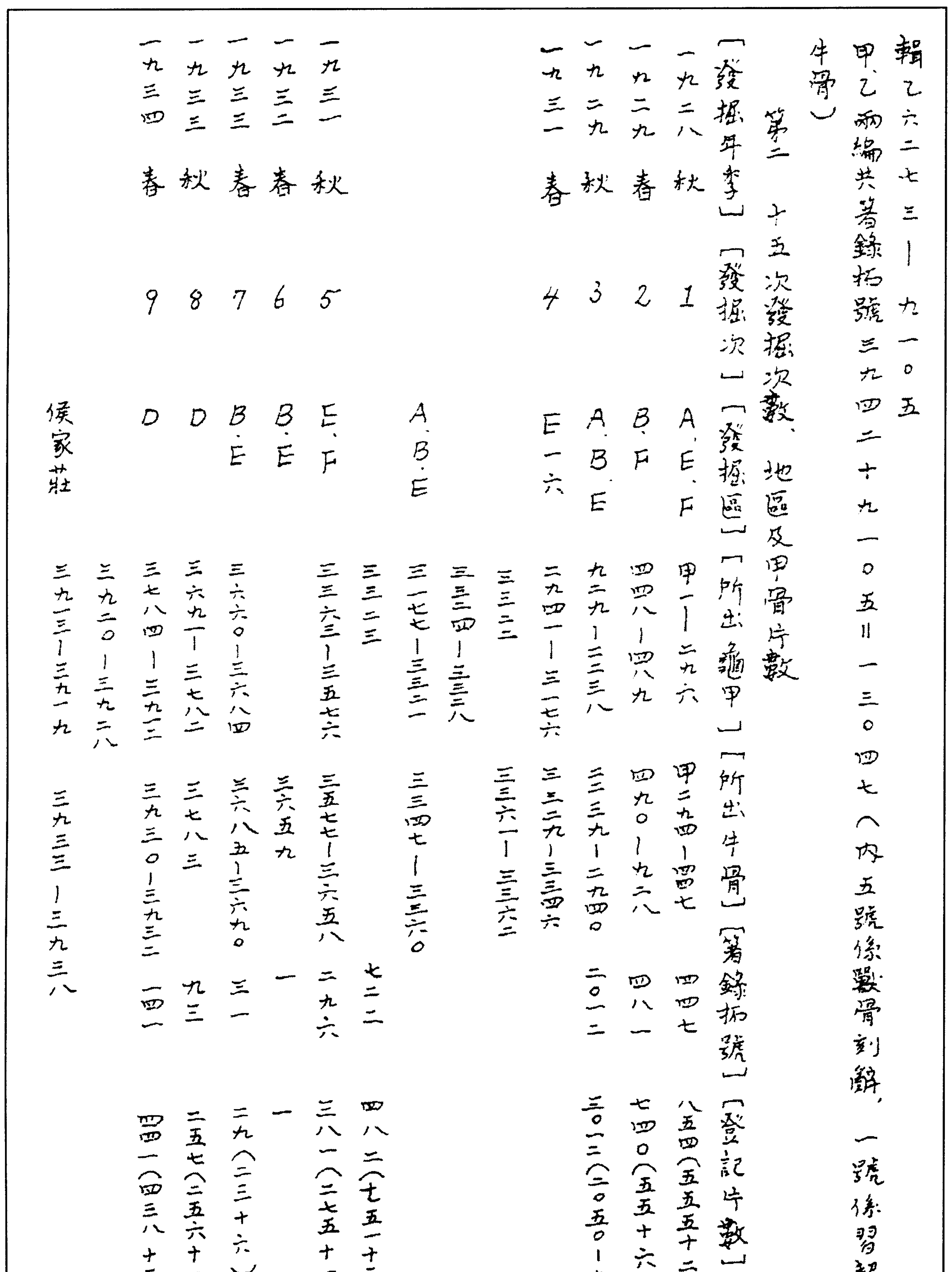
一九五五年八月間，徐森玉先生北來，帶來了他所訪得的一部乙編下輯印本，慨然捐贈於考古研究所，他並建議重印以利學者。我們據此重為製版印行。原印本是用銅版印出的，較之甲編和乙編上、中兩輯更不明晰。我們在復製過程中，只能小作技術上的修正，剔清其背景，大致仍依原樣。為了要使廣大的學者能以早日利用這批材料，所以就如此刊布。

至此，過去十五次小屯發掘出來的刻辭甲骨，幾乎已全部刊布。在此附列甲、乙兩編的拓本數號，以便查考之用。

第一　殷虛文字一書的總拓號

甲編　甲一－三九四二　乙編　上輯乙一－四八六　中輯乙四八七－六二七二　下

182



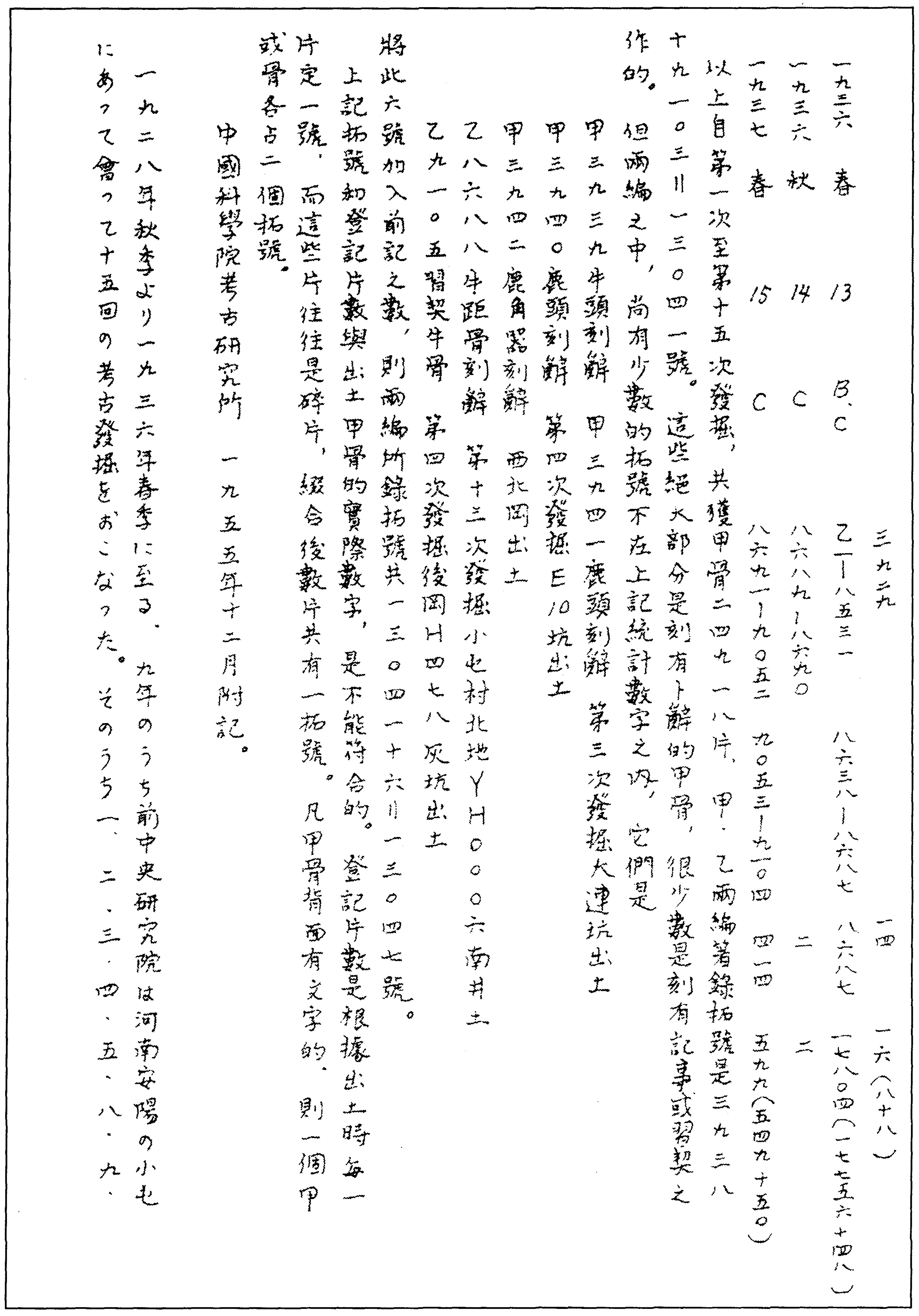
輯乙六二七三－九一〇五

甲、乙兩編共著錄拓號三九四二十九一〇五＝一三〇四七（內五號係獸骨刻辭，一號係習契牛骨）

第二　十五次發掘次數、地區及甲骨片數

〔發掘年季〕		〔發掘次〕	〔發掘區〕	〔所出龜甲〕	〔所出牛骨〕	〔著錄拓號〕	〔登記片數〕
一九二八	秋	1	A、E、F	甲一－二九六	甲二九四－四四七	四四七	八五四（五五五十二九九）
一九二九	春	2	B、F	四四八－四八九	四九〇－九二八	四八一	七四〇（五五十六八五）
一九二九	秋	3	A、B、E	九二九－二三三八	二三三九－二九四〇	二〇一二	三〇一三（二〇五〇－九六三）
一九三一	春	4	E一六	二九四一－三一七六	三三二九－三三四六		
				三三三二	三三六一－三三六二		
				三三三四－三三三八			
			A、B、E	三一七七－三三三一	三三四七－三三六〇		
				三三三三		七二二	四八二（七五一十三一）
一九三一	秋	5	E、F	三三六三－三五七六	三五七七－三六五八	二九六	三八一（二七五十一〇六）
一九三二	春	6	B、E		三六五九	一	一
一九三三	春	7	B、E	三六六〇－三六八四	三六八五－三六九〇	三一	二九（二三十六）
一九三三	秋	8	D	三六九一－三七八二	三七八三	九三	二五七（二五六十一）
一九三四	春	9	D	三七八四－三九一二	三九三〇－三九三二	一四一	四四一（四三八十三）
				三九二〇－三九二八			
			侯家莊	三九一三－三九一九	三九三三－三九三八		

183



				三九二九		一四	一六（八十八）
一九三六	春	13	B、C	乙一―八五三一	八六三八―八六八七	八六八七	一七八〇四（一七七五六十四八）
一九三六	秋	14	C	八六八九―八六九〇		二	二
一九三七	春	15	C	八六九一―九〇五二	九〇五三―九一〇四	四一四	五九九（五四九十五〇）

以上自第一次至第十五次發掘，共獲甲骨二四九一八片，甲、乙兩編著錄拓號是三九三八十九一〇三＝一三〇四一號。這些絕大部分是刻有卜辭的甲骨，很少數是刻有記事或習契之作的。

但兩編之中，尚有少數的拓號不在上記統計數字之內，它們是

甲三九三九牛頭刻辭 甲三九四一鹿頭刻辭 第三次發掘大連坑出土

甲三九四〇鹿頭刻辭 第四次發掘E10坑出土

甲三九四二鹿角器刻辭 西北岡出土

乙八六八八牛距骨刻辭 第十三次發掘小屯村北地YH〇〇六南井土

乙九一〇五習契牛骨 第四次發掘後岡H四七八灰坑出土

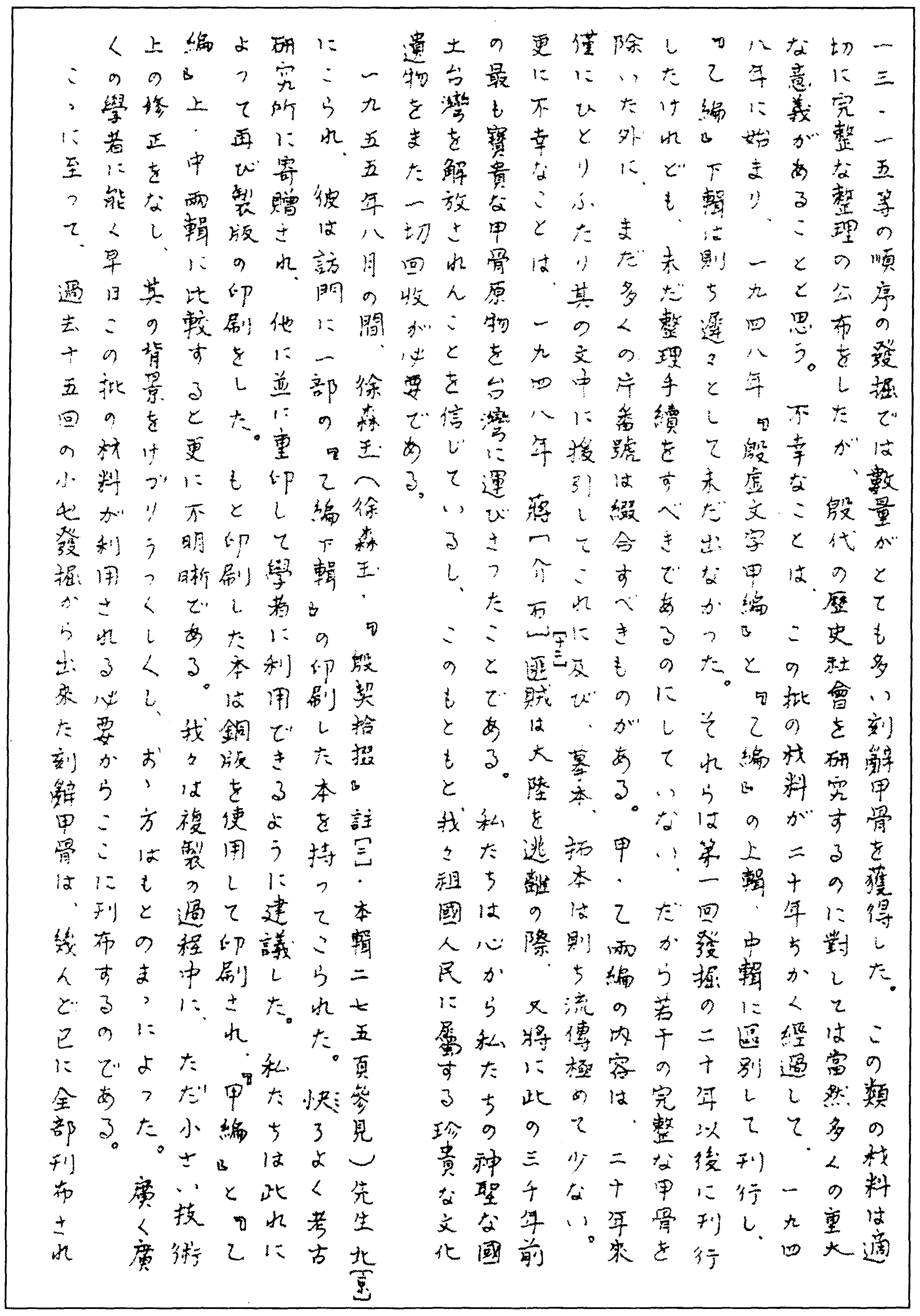
將此六號加入前記之數，則兩編所錄拓號共一三〇四一十六＝一三〇四七號。

上記拓號和登記片數與出土甲骨的實際數字，是不能符合的。登記片數是根據出土時每一片定一號，而這些片往往是碎片，綴合後數片共有一拓號。凡甲骨背面有文字的，則一個甲或骨各占二個拓號。

中國科學院考古研究所 一九五五年十二月附記。

一九二八年秋季より一九三六年春季に至る、九年のうち前中央研究院は河南安陽の小屯にあって會って十五回の考古發掘をおこなった。そのうち一、二、三、四、五、八、九、

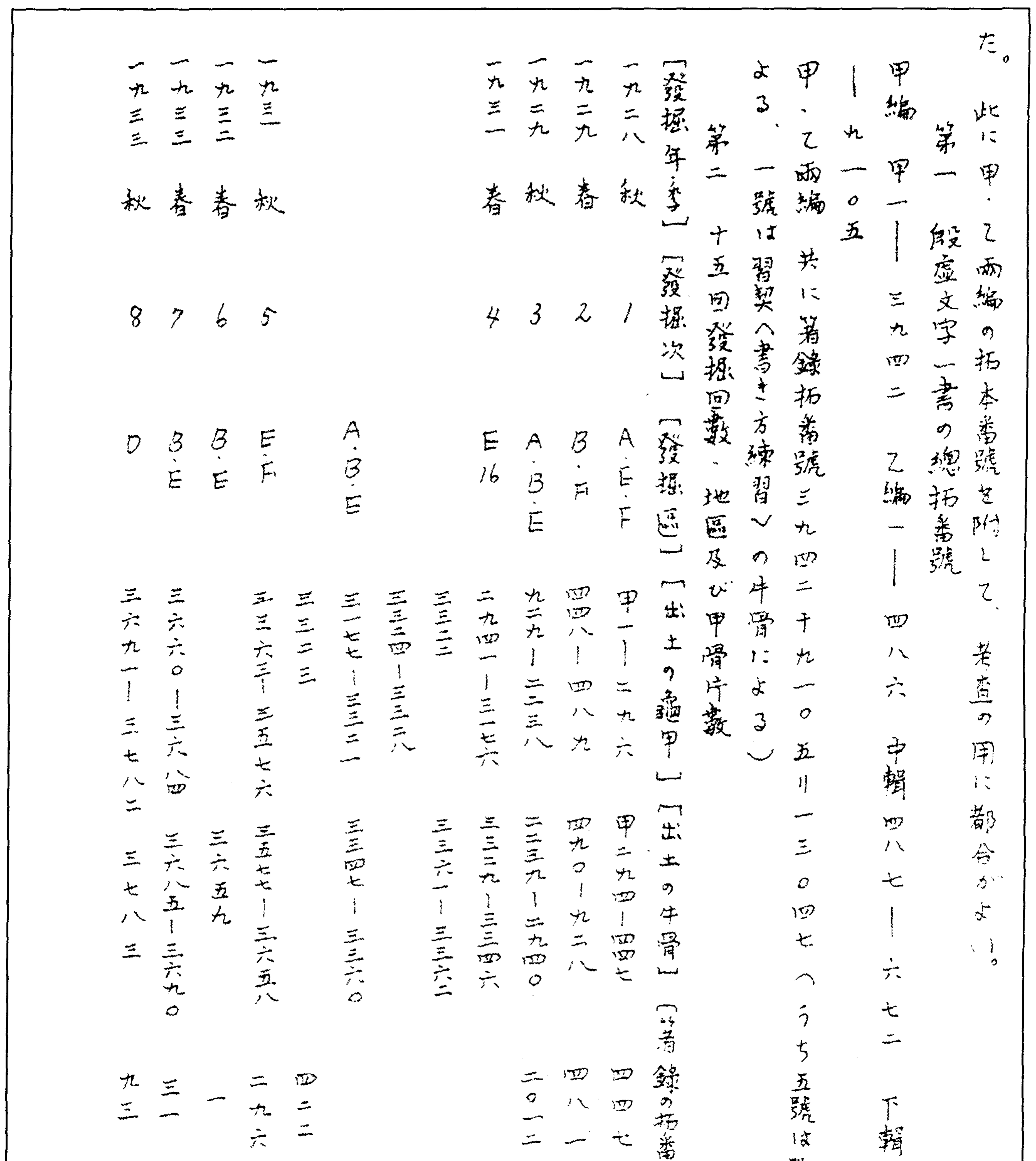
184



一三・一五等の順序の發掘では數量がとても多い刻辭甲骨を獲得した。この類の材料は適切に完整な整理の公布をしたが、殷代の歷史社會を研究するのに對しては當然多くの重大な意義があることと思う。不幸なことは、この批の材料が二十年ちかく經過して、一九四八年に始まり、一九四八年『殷虛文字甲編』と『乙編』の上輯、中輯に區別して刊行し、『乙編』下輯は則ち遲々として未だ出なかった。それらは第一回發掘の二十年以後に刊行したけれども、未だ整理手續をすべきであるのにしていない。だから若干の完整な甲骨を除いた外に、まだ多くの片番號は綴合すべきものがある。甲、乙兩編の內容は、二十年來僅にひとりふたり其の文中に援引してこれに及び、墓本、拓本は則ち流傳極めて少ない。更に不幸なことは、一九四八年蔣「介石」[十三]匪賊は大陸を逃離の際、又將に此の三千年前の最も寶貴な甲骨原物を台灣に運びさったことである。私たちは心から私たちの神聖な國土台灣を解放されんことを信じているし、このもともと我々祖國人民に屬する珍貴な文化遺物をまた一切回收が必要である。

一九五五年八月の間、徐森玉（徐森玉、『殷契拾掇』註[三]・本輯二七五頁參見）先生北[京]にこられ、彼は訪問に一部の『乙編下輯』の印刷した本を持ってこられた。快ろよく考古研究所に寄贈され、他に並に重印して學者に利用できるように建議した。私たちは此れによって再び製版の印刷をした。もと印刷した本は銅版を使用して印刷され、『甲編』と『乙編』上・中兩輯に比較すると更に不明晰である。我々は複製の過程中に、ただ小さい技術上の修正をなし、其の背景をけづりうつくしくし、おゝ方はもとのまゝによった。廣く廣くの學者に能く早日この批の材料が利用される必要からここに列布するのである。こゝに至って、過去十五回の小屯發掘から出來た刻辭甲骨は、殆んど已に全部刊布され

185



た。此に甲・乙兩編の拓本番號を附して、考査の用に都合がよい。

第一 殷虛文字一書の總拓番號

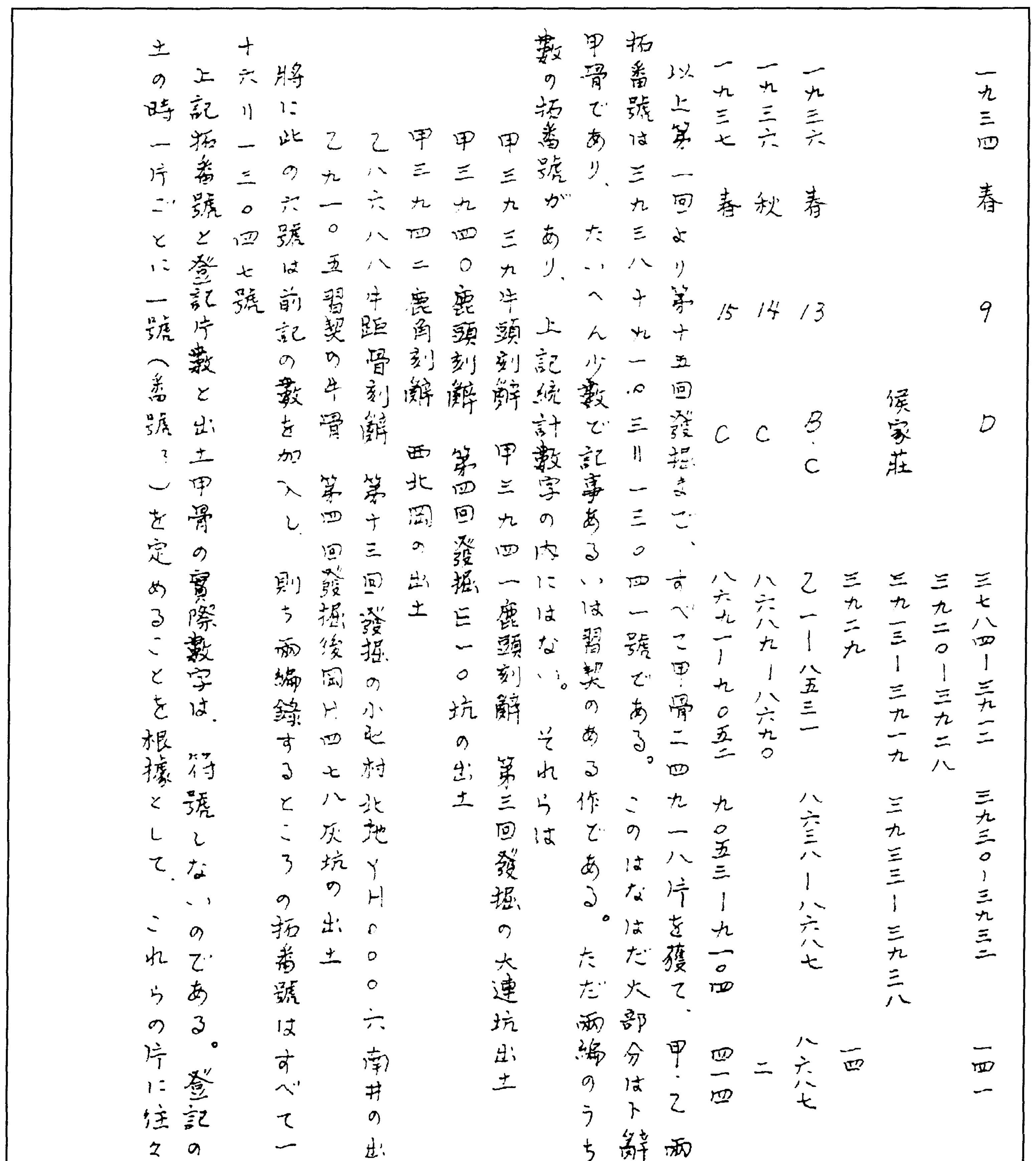
甲編 甲一―三九四二 乙編一―四八六 中輯四八七―六七二 下輯乙六二七七―九一〇五

甲・乙兩編 共に著錄拓番號三九四二十九一〇五＝一三〇四七（うち五號は獸骨刻辭による、一號は習契〈書き方練習〉の牛骨による）

第二 十五回發掘回數・地區及び甲骨片數

〔發掘年季〕		〔發掘次〕	〔發掘區〕	〔出土の龜甲〕	〔出土の牛骨〕	〔著錄の拓番號〕	〔登錄の片數〕
一九二八	秋	1	A.E.F	甲一―二九六	甲二九四―四四七	四四七	八五四（五五五十二九九）
一九二九	春	2	B.F	四四八―四八九	四九〇―九二八	四八一	七四〇（五五十六八五）
一九二九	秋	3	A.B.E	九二九―二二三八	二二三九―二九四〇	二〇一二	三〇一三（二〇五〇十九六三）
一九三一	春	4	E16	二九四一―三一七六	三三三九―三三四六		
				三三三三	三三六一―三三六二		
				三三三四―三三三八			
			A.B.E	三一七七―三三二一	三三四七―三三六〇		
				三三二三		四二二	七八二（七五一十三一）
一九三一	秋	5	E.F	三三六三―三五七六	三五七七―三六五八	二九六	三八一（二七五十一〇六）
一九三二	春	6	B.E		三六五九	一	一
一九三三	春	7	B.E	三六六〇―三六八四	三六八五―三六九〇	三一	二九（二三十六）
一九三三	秋	8	D	三六九一―三七八二	三七八三	九三	二五七（二五六十一）

186



一九三四	春	9	D	三七八四―三九一二	三九三〇―三九三二	一四一	四四一（四三八十三）
				三九二〇―三九二八			
			侯家莊	三九一三―三九一九	三九三三―三九三八		
				三九二九		一四	一六（八十八）
一九三六	春	13	B.C	乙一―八五三一	八六三八―八六八七	八六八七	一七八〇四（一七七五六十四八）
一九三六	秋	14	C	八六八九―八六九〇		二	二
一九三七	春	15	C	八六九一―九〇五二	九〇五三―九一〇四	四一四	五九九（五四九十五〇）

以上第一回より第十五回發掘まで、すべて甲骨二四九一八片を獲て、甲・乙兩編著錄の拓番號は三九三八十九一〇三＝一三〇四一號である。このはなはだ大部分は卜辭を刻んだ甲骨であり、たいへん少數で記事あるいは習契のある作である。ただ兩編のうち、なほ少數の拓番號があり、上記統計數字の內にはない。それらは

甲三九三九牛頭刻辭 甲三九四一鹿頭刻辭 第三回發掘の大連坑出土

甲三九四〇鹿頭刻辭 第四回發掘E一〇坑の出土

甲三九四二鹿角刻辭 西北岡の出土

乙八六八八牛距骨刻辭 第十三回發掘の小屯村北地YH〇〇六南井の出土

乙九一〇五習契の牛骨 第四回發掘後岡H四七八灰坑の出土

將に此の六號は前記の數を加入し、則ち兩編錄するところの拓番號はすべて一三〇四一十六＝一三〇四七號

上記拓番號と登記片數と出土甲骨の實際數字は、符號しないのである。登記の片數は出土の時一片ごとに一號（番號〻）を定めることを根據として、これらの片に往々碎片があ

187

る。凡そ甲骨の背面には文字があり、則ち一個の甲或は骨は各々二個の拓本番號が占めている。

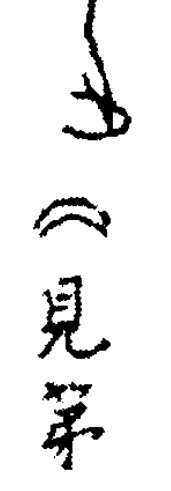
中國科學院考古研究所　一九五五年十二月　記を附す。

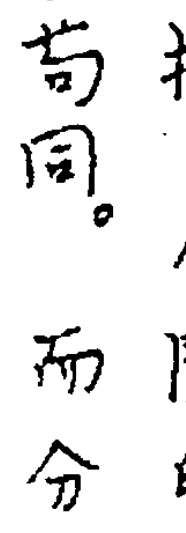
註[十一]　この乙編下輯の後記は一九五五年、徐森玉氏が乙編下輯の一部を台灣（か香港か）より入手し、考古學研究所が復製したものであるが、復製にさいして「我々は複製の過程中に、ただ小さい技術上の修正をなし、其の背景をけづりうつくしくし、おゝ方はもとのまゝによったし」と述べているように圖版はもとのまゝであるが、圖版はもとのものより鮮明な感じがする。裝幀はもとのまゝである。この後記には小屯發掘から出土した刻辭甲骨を收錄した甲乙兩編の發掘次と地區及び甲骨片數を表にしており檢索に便である。出版は一九五五年、科學出版社。

註[十二]　蔣介石（一八八七―一九七五）字は中正。浙江省奉化縣の人。軍人、政治家。一九〇六年保定軍官學校入學。一九〇七年日本陸軍士官學校に留學。留學中浙江財閥の政治的代表者陳其美と會い、その紹介で中國革命同盟會に加入。一九一一年の辛亥革命に參加し、その後第一革命勃發と共に上海に歸り、陳其美の下に滬東第五團長。第二革命失敗後は孫文と上海に潛り、一九一七年參謀長許崇智の下に入る。同年孫文はヨッフエを通じてソ聯と握手し、赤軍にならって國民黨軍を編成せんとして彼をモスコーに特派し勞農赤軍の編成訓練の實際を視察研究させた。滯露一年にして歸國。翌年黃埔軍官學校を創設し自ら校長に

任じ國民革命軍の中堅幹部の育成に努めた。一九二六年國民黨第二中全會に黨中央執行委員會に當選して實力派の首領となった。同年に孫文急逝後自ら國民革命軍總司令に任じ、同年中山艦事件の陰謀を起し、革命的左派分子を逮捕・追放して革命の指導權を握るため、第一次北伐戰を開始。一九二八年第二次北伐を遂行し、同年末南京政府のもとに滿洲全土を統一したかに見えたが、各軍閥の反蔣運動となり內戰を釀成した。またこの年國民革命軍總司令に復任、第三次北伐を開始し北京を占領、爾來抗日をもって國內統一の政治示標とし、その後滿洲事變、廣東國民政府の獨立、福建革命、綏東戰爭、西安事件など幾多の政治的難關をきりぬけ、一九三七年七月支那事變に至った。事變勃發にあたって日本政府の現地解決主義を無視し擴大抗日決戰を採り、共產黨と結び英・佛・米・ソの支援を頼んで抗日戰を行った。一九四三年政府主席となり、國民黨總統、軍事委員会主席、最高國防會議議長などの要職を兼ね、獨裁を強化。日本軍は降服しアメリカの熱心な斡旋にもかゝわらず國共分裂は表面化した。幹部の墮落、戰術の拙さ、いろいろ重なり、わずか三年で大陸を追れ、一九四九年十二月台灣に逃れた。その年の二月に台灣へ五〇万オンスの金塊を運び出の年、これまで殷墟發掘以來、行動を共にしたものが袂を分ち、李濟、石璋如、董作賓、高去尋らは、國民政府に從ひ、殷墟の出土品や多數の發掘資料や北京の故宮博物館の銅器、繪畫、書蹟、陶磁などの名品を驅逐艦に積まれて台灣にはこんだ。

六七、殷契攈佚續編[]

今世之考釋甲金文字者。輒以分析偏傍爲言。夫分析偏傍之法。倡自瑞安孫氏。誠爲科學的方法。然止可施之於標音文字及一部份表意文字。（即六書之所謂會意乃合二字。或數字而成一字者。）而未必能適用於象形文字及另一部份表意文字。（即六書之所謂指事字。王筠氏謂其字非合他字而成。或合他字而其中仍有不成字者。）儐 祀 卯 从等字。雖有偏傍可加分析。然而 犬 羊 上 下等字不知其有何偏傍。可資分析也。是以標音文字之考釋較易。而考釋之結果亦易於辨別其是非。象形文字及非合他字而成之表意文字。則考釋甚而考釋之結果更不易於判斷其碻否。如（見第三百零二片。）字本蜘蛛之象形。乃今人多釋爲黽。不但今人釋之爲黽。古人早已誤釋爲黽矣。試觀龜字。从黽。即古人誤釋之鐵證。龜本金文之隷變。所肖者爲蜘蛛之狀。以其形近於黽不易辨認故。金文時代之書家。乃附一聲符。米 朱 字以資識別。其後隷化之際蜘蛛居然。變爲蝦蟆矣。又如 （見第二百十六片）字下體从止。上體所从者。則不知其爲何偏傍也。而余釋之爲鳳。凡（見第二片）字外部从冂。內部从冂。內外兩部之所从並不知其爲何偏傍也。而余釋之爲衅。（說文云。衅牲血塗器祭也。）論者或將病其遊離而不的。然竊以爲對於此種象形文字及表意文字。除依據吾人所獲之印象加以考釋而外實無他途。聞宥氏雖欲藉語言考古學之力。以濟古文字學之窮。謂治古文字學而得古語言爲據。則無以爲立說之本。又謂即以相形態論。有時亦須了然於其根據。始能瑩澈。而此所謂根據者即語言。果無此語。亦必無表此語之文也。（與孫海波氏書載古文聲系）設無此語。誠無此文。然吾人倘不先識其文。何由知其聲。不知其聲。又何由知其爲古代之何語。是識字爲語言考古

學之前提。今聞氏反欲以古代言語爲考釋文字之根據。其無乃顚倒本末乎。聞氏之說。吾人既未能苟同。而分析偏傍之法。對於  凡 一類文字。又無所施其威力。則吾人惟有依據個人所獲之印象而釋之爲鳳。爲衅耳。如謂不然願聞明教。

辛巳秋　江津李亞農序於上海。

今世の甲金文字を考釋する者は、輒ち偏傍を分析するを以て言と爲す。夫れ偏傍を分析するの法は、倡うること瑞安「浙江省」の孫「詒讓」（孫詒讓・『契文擧例』註[十七]・第一輯四九頁參見）氏よりす、誠に科學的方法爲り、然れどもこれを標音文字及び一部份の表意文字に施す可きに止む。（即ち六書の所謂會意字は乃ち二字、或は數字を合せて一字を成す者。（六書・『殷虛文字存眞』・註[六]・第一輯三三六頁參見））而して未だ必ずしも象形文字および另の一部份の表意文字に適用する能はざるなり、（即ち六書の所謂指事字なり、王筠（王筠・『殷契鈎沈』註[三十八]・第一輯二〇四頁參見）氏謂へらく「其の字は他の字を合せて成るに非ず、或は他の字を合せて而も其の中仍字を成さざる者有り」[三]と。賓[三] 祀 祀 卯[五] 从[六] 等の字は、偏傍ありて分析を加ふ可しと雖も、然れども[七] 犬 羊[八] 上 下（下・『古文聲系』註[七十八]・第二輯四〇八頁參見）（下・『古文聲系』註[七十九]・第二輯四〇九頁參見）等の字は其の何の偏傍有りて、分析に資す可きか知らざるなり。是ここを以て標音文字の考釋は較易くして、考釋の結果も亦其の是非を辨別し易すし。象形文字及び他の字を合して成るに非るの表意文字は、則ち考釋甚だ難くして考釋の結果は更に其の碻否を判斷し易すからず。（第三百零二片に見ゆ）字の如きは、（『甲骨文例』註[八一]・第一輯三〇三頁參見）蜘蛛の象形に本づくも、乃ち今人多く釋し

て黽と為す。但に今人これを釋して黽と為すのみならず、古人も早く已に誤り釋きて黽と為せり。試みに鼄字を觀るに、黽に从ふ、即ち古人誤釋の鐵證なり。鼄は本と金文に の[五]隷變 に作る所の者は蜘蛛の狀為り、其の形黽に近く辨認し易すからざるの故を以て金文時代の書家は、乃ち一の聲符、朱字を附して以て識別に資（たす）く、その後隷化の際に蜘蛛は居然として、變じて蝦蟆と為る。又 （第二百十六片に見ゆ。）（夒と釋されるものである。『古史新證』註[六]・第一輯二五三頁參見）の字の如きは下體止に从ひ、上體从ふ所ろは、則ち其の何の偏傍為るかを知らざる也。而して余これを釋して凰と為す。冂（第二片に見ゆ。）字の外部は冂に从ひ、内部は冂に从う、内外兩部の从ふ所は並に其の何の偏傍為るかを知らざる也。而して余これを釋して卹と為す。（『說文解字』に云く、卹は牲の血を器に塗るの祭り也。）論者或は將（もっ）て其の遊離して的ならざるを病（うれ）へう、然れども竊かに以為らく此の種の象形文字及び表意文字に對して、吾人獲る所の印象に依據し、加ふるに考釋を以てするを除くの外、實に他の途無からんと。聞宥（聞宥、『殷契書錄』註[五一]・第一輯三二五頁參見）は語言考古學の力を藉りて、以て古文字學の窮を濟（すく）わんと欲すと雖も、謂へらく「古文字學を治めて古語言を據と為すを得ずんば、則ち以て說を立つるの本と為す無し」と。又謂へらく「即（つ）くに形態を相（み）るの論を以てせば時有りて亦須らく了然として其の根據に於て、始めて能く瑩澈すべし。而して此の所謂る根據とは、即ち語言なり、果して此の語無きを（以てすれば則ち）亦必ず此の語を表わすの文無き也」と。（孫海波（孫海波、『鐵雲藏龜』註[四十]・第一輯三十八頁參見）氏に與ふるの『古文聲系』に載す。）（『古文聲系』聞宥氏の跋、第二輯四四八―四六七頁參見）設（も）し此の語無くんば誠に此の文（字）無し。然れども吾人備し先にその文を識らざれば、何に由りて其

の聲を知らん。其の聲を知らざれば、又何に由りて其の古代の何の語為るかを知らん、是れ字を識るは語言考古學の前提為り。今、聞氏は反って古代言語を以て文字を考釋するの根據と為さんと欲す、其れ乃ち本末を顚倒すること無きや。聞氏の說は、吾人既に未だ苟しくも同じうする能はず。而して偏傍を分析するの法は、 冂の一類の文字に對して、又其の威力を施す所無し、則ち吾人は惟だ個人の獲る所の印象に依據してこれを釋して凰と為し、卹と為すこと有るのみ。もし然からずと謂はば願くば明教を聞かん。

辛巳（一九四一年）秋、江津（四川省）の李亞農註[二]上海に序す。

註[一]　本書は李亞農氏の編纂による。拓片は畫家顧青瑤氏珍藏の一九八片で、一九四九年頃孔德研究所へ入ったもので、一九三十年以前に出土したものであるらしい。またあとの半分は著者が上海の古董商より一五一片を買い近年出土のものと記している。この書には合計甲骨三四三片、彫骨六片を收錄し、そのうち大獸骨三片を收める。本片の配列は卷首の大獸骨三片を除いた外は、分類は一、祭祀、二、用牲、三、食貨、四、田遊、五、征伐、六、天象、七、貞夕貞旬、八、雜卜の順に配列している。そして圖錄の後に李亞農氏の釋文を附す。釋文は隸釋上問題となる字は卜辭例をあげ釋字を行ひ、方法は序文のごとくである。出版は一九五〇年、九月、中國科學院考古研究所特刊、一冊、商務印書館印行。

註[二]　「其の字は他の字を合せて成るに非ず……」は典據未詳。

註[三]　 儐　說文解字に「導也、从人賓聲。」と解す。白川靜博士はこの字を解して次のようにいう「段注に聘禮等にみえる賓禮を詳述するが、賓・儐は通用の

例が多い。詩の周頌絲衣「繹賓尸也」、儀禮有司徹「賓尸」など、神靈を賓迎するのが字の原義。卜辭には、祭のとき王が祖靈を賓することをいう。金文において、儐導のことを右という。賓は賓客、あるいは賓賜の義に用い、儐・擯の義なし。賓の多義化により分岐した字である。」（『說文新義』卷八・三六頁）と。

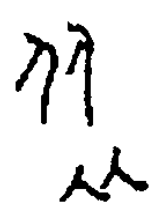
註[四]

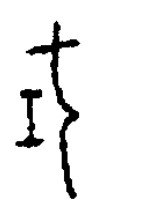
祀　祀　說文解字に「祭無已也」とある。白川靜博士はこの字を說解していう「『祭無已也』は、上文「禩、以眞受福也」と同じく聲字の義をとるもので、亦聲の解である。古籀篇に「字从巳、取于無已、此為反義、會意之字、往往此例、要取于反義者、其意殊重、然祀字形聲兼會意」と論じ、反訓の法をここに摘用しているが、訓詁上反訓というべきものは實際にはありえず、まして反訓の義を以て字を構成することはない。卜文の干支の巳は子字形に書かれており、巳は胞子の象。郭氏が「象人跽於生殖神象之前」とし、李氏集釋に示前に人の跪拜する象とするも、巳は成人の象ではない。「無已也」の訓は、公羊傳定八年の解詁に「言祀者無已、長久之辭」と同樣の音義說である。爾雅釋詁の舍人注に「祀、地祭也」とあり、周禮司服「祭群小祀」の注に「林澤墳衍四方百物之屬」という。殷では祖祭を祀と稱した。殷末には、祖祭の體系である五祀の祭祀を一巡するにほぼ一年を要したので、祀はまた年歲の意となる。」（『說文新義』卷一・四二頁）と。

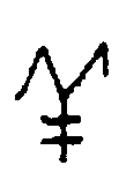
註[五]

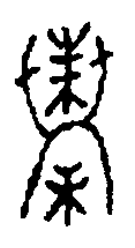
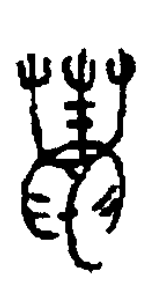
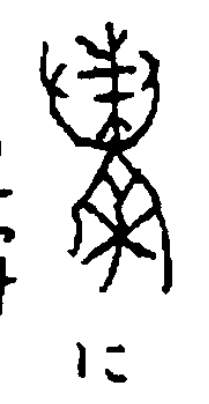
 印『說文解字』は「執政所持信也。从爪卩。凡印之屬皆从印。 按也」とする。白川靜博士はこの字を解していう「印信は疊韻の訓。初學記卷二六に引くところは同じく、玄應音義卷七には「王信也」に作る。古本考に、あるいは一曰の義であろうかとするが、凡そ官守あるものはみな印璽を用いた。印璽のことは左傳・周禮以後にみえ、釋例に「特周禮謂之璽節、不謂之印、是知古義失傳、許君但以秦漢義說之也」というように、璽節は印の初義ではないと思われる。淵源にも「竊謂印信之印、先秦唯稱璽、尊卑同名、未聞有印者、其有之、蓋秦漢間耳」とし、「古文不拘正反」として字を抑の初文とする。次に印の反文をあげ、重文として抑をあげる。その關係からいうと、印は抑と對待の義をもつ字であろう。文源に印抑雙聲對轉、印もまた抑の義とする。羅氏の考釋中・五四にもその說がみえる。印と思われる字が金文にみえており、毛公鼎に「告余先王若德、用印卲皇天、䌛恪大命」という。徐同柏・高鴻縉の釋に字を抑卲とし、高氏は詩の大雅文王「於昭于天」の於の義を以て解するが、上に用の字がおかれており、印卲二字連文の動詞である。曾伯簠にも「印燮繁湯」という語があり、印卲・印燮は字義の近い語とみられ、「印卲皇天」とは詩の大雅下武「昭事上帝」というのに近い。印の卩を女におきかえると妟、すなわち綏の字となる。このことからいえば、印には抑壓・綏安の義があると考えられる。これを璽印の意に用いるのは、おそらくその義を承けるところがあろう。古く天子の璽書は、その墨付きの部分の全部に璽印を施した。先秦の古印には封泥に用いたものが多く、これも封檢のためのものである。印刻・押捺の意は、

むしろ字の轉義であろう。」（『說文新義』巻九・六七頁）と。

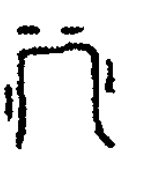
註「六」 从　說文解字は「相聽也、从二人」とある。金文にはみな從に作り、人名。

註「七」 犬　說文解字は「狗之有縣蹏者也、象形。孔子曰、視犬之字、如畫狗也」と解する。白川靜博士はこの字を說解していう「說解中の孔子說には、殊に俗說が多い。繫傳に字形を說いて、「蹏足趾高、象犬之長體垂耳」とするが、卜文・金文には垂耳の象はない。段注にいう。有縣蹏、謂之犬、叩氣吠、謂之狗、皆於音得義、此與後蹄廢、謂之彘、三毛聚居、謂之豬、竭尾謂之豕同、明一物異名之所由也、莊子天下篇曰、狗非犬、司馬彪曰、同實異名、夫異名必由實異、君子必貴游藝也。徐箋に犬を獵犬の通名とし、周禮小宗伯「司寇主犬」を證とするが、卜辭には犬人の職のほか、多く犬牲のことがみえている。殷・宋の犬人・迹人は狩獵の職、周禮の犬人は犬牲を掌るものである。徐箋にまた「縣蹏蓋指獵犬言、南海曾氏釗曰、相犬之法、必先驗其蹏、凡犬蹏四趾、惟獵犬足上有一趾、不履地、此所謂縣蹏歟」というのは、傅玄の走狗賦に「懸足鉤爪」というものであろう。釋例に「字象蹲踞形」とするも、卜文・金文の字は象形に過ぎず、「如畫狗」という通りである。犬・狗は大小の稱。狗もまた通名に用いる。殷代犬人のことは、楊氏の甲文說「釋从犬」一九頁に詳しい。」（『說文新義』巻一〇・四〇頁）と。

註「八」 羊　說文解字は「祥也。从丫。象四足尾之形。孔子曰。牛羊之字。以形擧也。凡羊之屬。皆从羊。」と解する。白川靜博士はこの字を說解されていう「漢代の瓦塼や鏡銘には、多く羊を祥字に假借して用いている。古くから通用した字で、周禮考工記車人注にも「羊、善也」とみえる。「从丫、象頭角足尾之形」とあり、類聚巻九四・御覽巻九〇二に引いて何れも「象四足角尾之形」に作り、五經文字にも「象四足尾之形」に作る。古本には四足に作っているらしく、横二畫を四足の象とするものであろう。說文はなお「孔子曰、牛羊之字、以形擧也」と孔子の語を引くが、特に引證の要もない語である。おそらく緯書說などにみえるものであろう。卜文・金文の字形は羊頭の正面形とみられる。「祥也」とは羊を神事に用いることが多く、これを神判に用いて、祥・不祥を定めたからであろう。善は兩造詛盟してその前に神羊をおく象であり、また義は、これを犧牲として供する意で、その犧牲の狀によって吉凶を卜したのである。羅釋中・二八葉に羊字として揭出している諸字は概ね羌と釋すべき字である。羌は牧羊種であり、ゆえに羊頭の字に作る。金文圖象金文編・二〇六にも羊頭の字があり、羊の初文である。金祥恒氏の「釋羊」中國文字・四に、初期字形の統說がある。」（『說文新義』巻四・六四頁）と。

註「九」 　邾公牼鐘に、杞伯壺にに作る。說文解字は「蜘鼄也。从黽。朱聲」とする。白川靜博士はこの字を說解されていう「前條に知黽に從う字があり、蜘の初文。いま蜘蛛に作る。列國期の邾國の金文にその字が多くみえる

が、その字は黽に從うというよりも、蜘蛛の多足の象に朱を加えている。朱の形も味の象ともみえ、金文の朱と必ずしも同じでない。あるいは全體象形ともみえる字である。」（『說文新義』巻一三・一〇五頁）と。

註「十」 　李亞農氏は「 商承祚氏釋祭。非。今按字當釋衅。說文云。衅牲血塗器祭也。八象血滴。几象器物。器上遍塗牲血。當是衅字。經傳多假釁爲之。如禮月令孟冬之月命太史釁龜筴雜記成廟。則釁之等是也。」と牲の血を器に塗る祭とする。卜文例では上甲の祭祀に見える語である。

註「十一」 李亞農（　未詳　）李氏については詳しいことは不明であるが、戰前日本京都帝國大學に留學。一九五四年六月まで華東軍政委員會文化教育委員會委員。五五年六月、中國科學院哲學社會科學學部委員を歷す。李氏の學は殷周社會史が專門、その論著數點は『欣然齋史論集』一冊に收められている。

本編完稿於八九年前。因抗日戰爭。日趨緊張。太平洋事變繼之暴發。遂無法付印。乃託友人。代爲保存。今年春。上海解放。余隨軍重來於友人家。中尋得舊稿。經此長期戰禍。居然未毀於兵燹。豈非厚幸。編中拓片。精品頗多。亟應付印以供契林之研究。惟是羈於公務。於舊稿雖多不滿之處。終未遑執筆。重寫僅增損數字而已。糾正乖謬。請俟異日。其中考釋文字。曾請夏鼐胡厚宣兩先生費心校閱一過。此則應向兩先生致謝者也。

一九四九年冬。補記於上海楓林橋畔。

本編は稿を八、九年前に完（おわ）れり。抗日戰爭に、日びに緊張に趨り、太平洋事變これに繼いで暴發するに因り、遂に付印に法無し、乃ち友人に託し、代りて保存を爲す。今年の春、上海解放す、余軍に隨って重（ふたたび）友人の家に來り、中に尋ねて舊稿を得、此の長期の戰禍を經て、居然として未だ兵燹に毀（こぼ）たれず、豈に厚幸に非ざらんや。編中に拓片、精品頗る多し。亟に應に付印して、以て契林の研究に供すべし。惟だ是に公務に羈（つなが）る「十二」。舊稿に於て不滿の處多きと雖も、終に未だ執筆に遑まあらず、重寫して僅かに數字を增損するのみ。糾正乖謬は、請ふ異日に俟ん、其の中にて文字を考釋することは、曾って夏鼐（夏鼐・『殷虛文字甲編』註「四七」・本輯七七頁參見）・胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註「八」・第三輯一三四頁參見）に心を費やして校閱一過に請ふ。此れ則ち應に兩先生に向って謝を致すべき者也。

一九四九年冬、上海楓林橋畔に補記す。

註「十二」 李氏は「公務に羈る」とあるのは、註「十一」で紹介したように華東軍政委員會

文化教育委員會委員の役にあったことを指すのであろう。

六八、甲骨綴合編〔二〕

「陳夢家序」

甲骨霾藏地下，經三千年之久，既受所載重的地土的傾壓，以至折損腐蝕。于農民掘獲時，又遭鋤鏟的敲擊，而至分裂破碎。既出土後，歷經搬運，亦至易再度斷壞。及到了古玩商手中，又被折羣分售數家，其幸而仍歸于一家收藏者，往往因經攪亂，而不復綴合歸復原狀。所以一家收藏，而着錄于一書者，仍散見于異頁；其一坑所出分在各家者，雖經着錄，而一片已分為數部。為求文例的研究，及窺見卜辭的完整記載，甲骨綴合實為最急切最基本的工作。一九三三年春，郭沫若氏作卜辭通纂，既已綴合了三十餘事。同年秋，于其古代銘刻彙考中又補刊了斷片綴合八例，以後在殷契萃編，亦有增加。但最早留意及此事者，則為明義士氏。氏于一九三三年在齊大季刊第二期，曾發表一部分。此後董作賓氏，在甲骨叢編，（成稿未印成）殷曆譜更多有所綴合。其有用于學者，自不待言。然集合成專書，而更多創獲者，則為曾毅公氏的甲骨叕存。出版于一九三九年。我往歲在昆明，獲讀此書，頗以為喜。一九四七年至四八年，先後為清華大學購致海域于氏，及望都胡氏甲骨共千餘片，于整理之際，重為分期的工作，乃大感斷片綴合之急需。一九四八年秋，于旅行敦煌之前，因審定馮氏銅器，始識曾氏于北京城中。當時即以此事相詢，承告以增訂本已將付印，其已綴合者，視初本增多四五倍，當時渴望它日出版。日前接獲增訂本已印各頁，展讀之餘，極為快慰。承曾氏的厚意，欲我附綴數語于其書後，只能略寫一點意見於下：

甲骨の地下に霾「大風が砂塵を吹きあげて降らす」藏されること、三千年の久しきをへ

て、既に載積する所の土地の傾壓を受け、欠損し腐蝕に至った。掘り獲た時に、また鋤鏟（すきせんな）の敲擊に遭ひ、分裂破粹に至った。既に出土の後、運搬をへて、また再度破壞せ中斷されやすいようになった。古玩商の手中に至るに及んで、また羣がばらばらになり數家に分賣し、其の幸にして仍ち一家の收藏に戻る　者は、往往にして攪亂をへてより、而るに綴合は復た原狀に戻ることができない。であるから一家が收藏して、一書に錄するものは、仍ちべつの頁に散見する；その一坑に出づるところ分れて各家にあり、錄をへると雖も、一片は已に分れて數部となる。文例を求める研究をして、卜辭の完整な記載を窺い見るに及び、甲骨綴合は實に急切であり最も基本の作業である。一九三三年の春、郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）氏は『卜辭通纂』（『卜辭通纂』註〔二〕・第二輯一一二頁參見）を作り、既に三十餘事を綴合した。同年「一九三三年」秋、その『古代銘刻彙考』（『古代銘刻彙考』註〔二〕・第二輯二五三頁參見）中にまた斷片の綴合八例を補刊し、以後『殷契粹編』（『殷契粹編』註〔一〕・第三輯一一八頁參見）では、また增加がある。ただ最も早く此の事に留意したものは則ち明義士（明義士・『殷契書錄』註〔二〕・第一輯三二二頁參見）である。氏は一九三三年『齊大季刊』〔三〕第二期には、曾つて一部分を發表した。此ののち董作賓（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）は『甲骨叢編』〔三〕では（編成り未だ印行成らず）『殷曆譜』（『殷曆譜』註〔一〕・第三輯二八六頁參見）は更に多く綴合するところがある。其の學者に役に立つことは、自から言を待たない。然れども集合して專書を成し、更に創獲の多いのは、則ち曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註〔三〕・第三輯一一〇頁參見）氏の『甲骨叕存』（『甲骨叕存』註〔一〕・第三輯一〇九頁參見）である。一九三九年に出版された。　私は往歲昆明にあって、此の書を獲て讀み、頗

る以て喜びとした。一九四七年より四八年に至って、先後して清華大學の為に海城（奉天省）の于「省吾」（于省吾・『殷契佚存』註[三十五]、第二輯二三〇頁參見）氏、及び望都「河北省」の胡「厚宣」（胡厚宣・『雙劍誃殷契騈枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）氏の甲骨とすべて千餘片を買った。整理の際に、分期の工作に重きを置き、乃ち大いに斷片の至急の需用を感じた。一九四八年秋、敦煌に旅行する前に、馮氏[四]の銅器を審定することに因って、始めて曾「毅公」氏を北京城中で識った。當時は即ち此の事を以て概に相談した、以て増訂本は已に將に印刷する知らせをうけ、其の已に綴合するものは、初本に増すこと四五倍の多くを覩い、當時はそれが早日に出版されんことを渇望した。先日増訂本已に各頁を印刷したものに接し獲た、拜讀の餘に、極めて快慰をえた。曾「毅公」氏の厚意を承けて、私は數語を綴ってその書後に附そうと欲して、只よく一點の意見を下に略述する。

註[二]　曾毅公氏の甲骨叕合の編輯。一九三九年出版の『甲骨叕存』瓦數十片録す、の増訂本で、本書は約四百片を録し、拓片の配列は一、王號、二、方國、三、地名、四、天象、五、田狩、六、卜年、七、卜旬、八、卜日、甲子表を前後としている。序は曾毅公氏の自序、孫海波氏の序（二家の序は『甲骨叕存』に收めた、第三輯一〇七—一一六頁參見）、陳夢家氏序、容庚氏序を録す。全二冊、一九五〇年、修文堂、石印本。

註[三]　「殷虛書契に關する羅振玉の著書の新舊兩版の比較研究、並に新發見史料の綜合記」と題する論文である。齊大季刊第二號、一九三三・一一八—一三二頁所

收。

註[三]　甲骨叢編　董作賓撰　未刊。

註[四]　馮氏　不明

今舉實例，表示綴合的重要及其當注意之點，以求正于綴合編的作者。研究甲骨分期，最足依據者，自屬稱謂。但稱謂還需準確的商世系表作依據，才可以憑稱謂定時代。殷本紀世系，只限先王，其間又稍有錯誤。幸而當祖甲和帝乙帝辛時，舉行一種有系統的祀典，按照先王先妣的世次，逐旬致祭的。由此種卜辭，可以尋到完整的先王先妣的世次。董作賓氏在殷曆譜上編卷二，列有帝乙帝辛時，五種祀典，祖妣祭日表，實為重要的創獲。但對于此表的所以構成，引證與解說，尚欠詳晰。我根據祖甲及乙辛卜辭，連綴各有關甲骨，重譜周祭祀譜，而後董表的所由來，並其正確可貴之處。有些地方，也小有增補訂正，如祖丁三配偶之一名妣己者，董表列其祭祀于第八旬，今改訂在第七旬，證據如下：

一、據庫方一二二一片，祖甲卜辭，庚戌王賓示壬配妣庚。己亥王賓祖丁配妣己，據董表祭妣庚在第二旬。依干支下推祭妣己當在第七旬。

二、據前編一・一七・二片，乙辛卜辭，記彡日之祭，乙丑王賓四祖丁（即祖丁）配妣己，庚戌王賓小乙配妣庚，據董表祭妣庚在第九旬，依干支上推祭妣己當在第七旬。

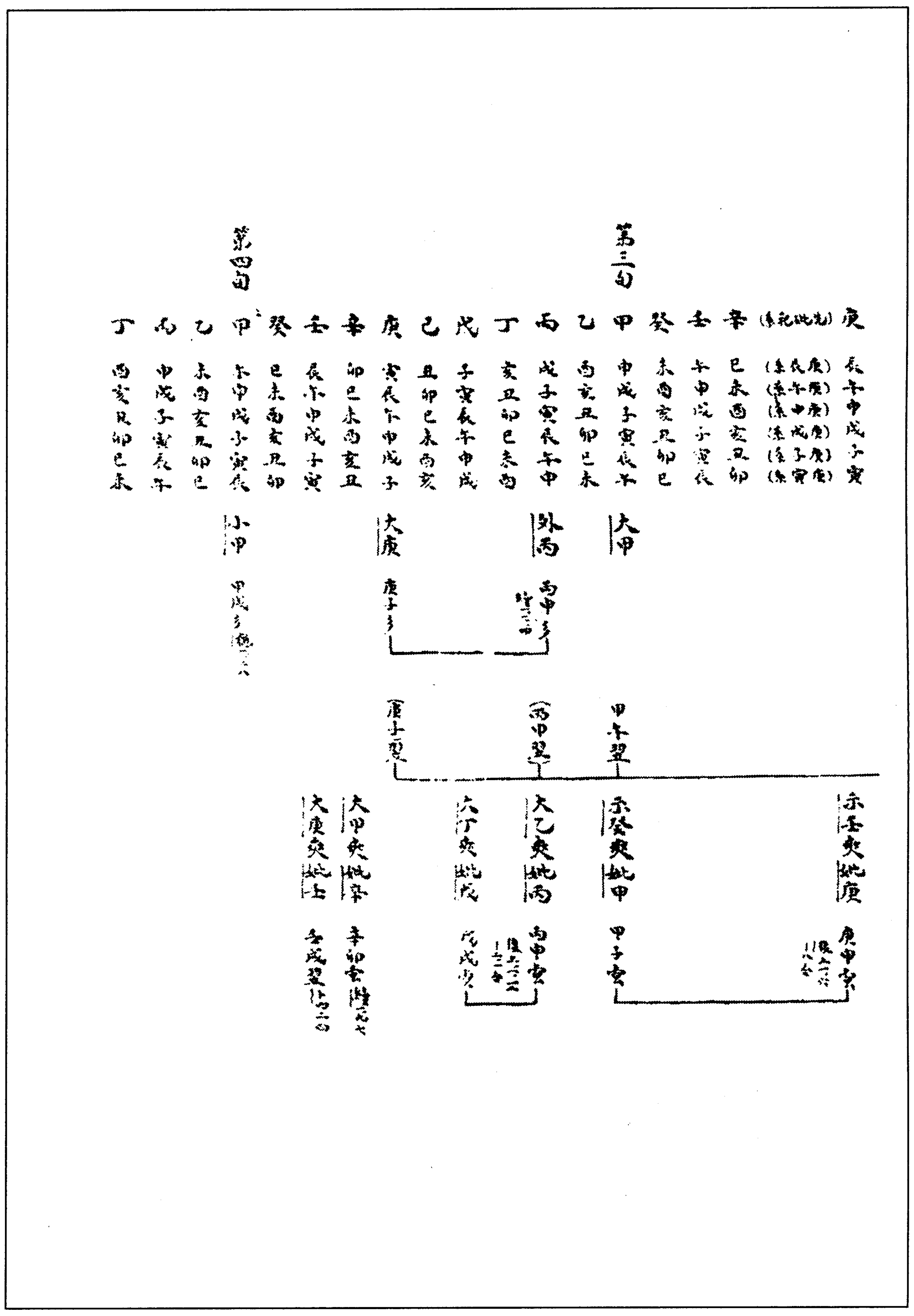
今、實例を擧げ、綴合の重要さと、其の當に注意すべき點を表示し、以て綴合編の作者に正を求める。甲骨分期の研究は、最も依據するに足る者は、自から稱謂に歸屬する。ただ稱謂もまた確實な商世系表に依據しなければならない。そうしてはじめて稱謂にもとづいて時代を定めることができる。殷本紀世系はただ先王に限り、其の間はまたやゝ誤りがある。幸にして祖甲と帝乙・帝辛の時に當っては、一種の系統のある祀典を擧行し、先王先妣の世次にもとづいて、旬を逐って祭りを致す。此の種の卜辭によって、完全な先王先妣の世次を求められる。董作賓氏は『殷曆譜』上編巻二には、帝乙帝辛の時の、五種祀典、祖妣祭日表を列しているのは、實に重要な創獲である。ただ此の表を以て構成し、引證し解説してあるところは、尚ほ詳晰を欠く。私は祖甲及び乙辛の卜辭を根據として、各々關係ある甲骨を連綴し、周祭祀譜を重譜するのは、のちの董表の由来するところであり、共に其の正確の貴ぶ可きところである。あるところでは、やはり小しく増補訂正がある、祖丁の三配偶の一名妣己の如きは、董表はその祭祀を第八旬に列し、今、改訂して第七旬にあり、證據は下の如し。

一、『庫方「二氏所藏甲骨文字」』一二二一片に據れば、祖甲卜辭は、「庚戌王賓示壬配妣庚。乙亥王賓祖丁配妣己」と、董表に據れば妣庚を祭るのは第二旬である。干支の下に依って妣己を祭るのを推せば第七旬にある。

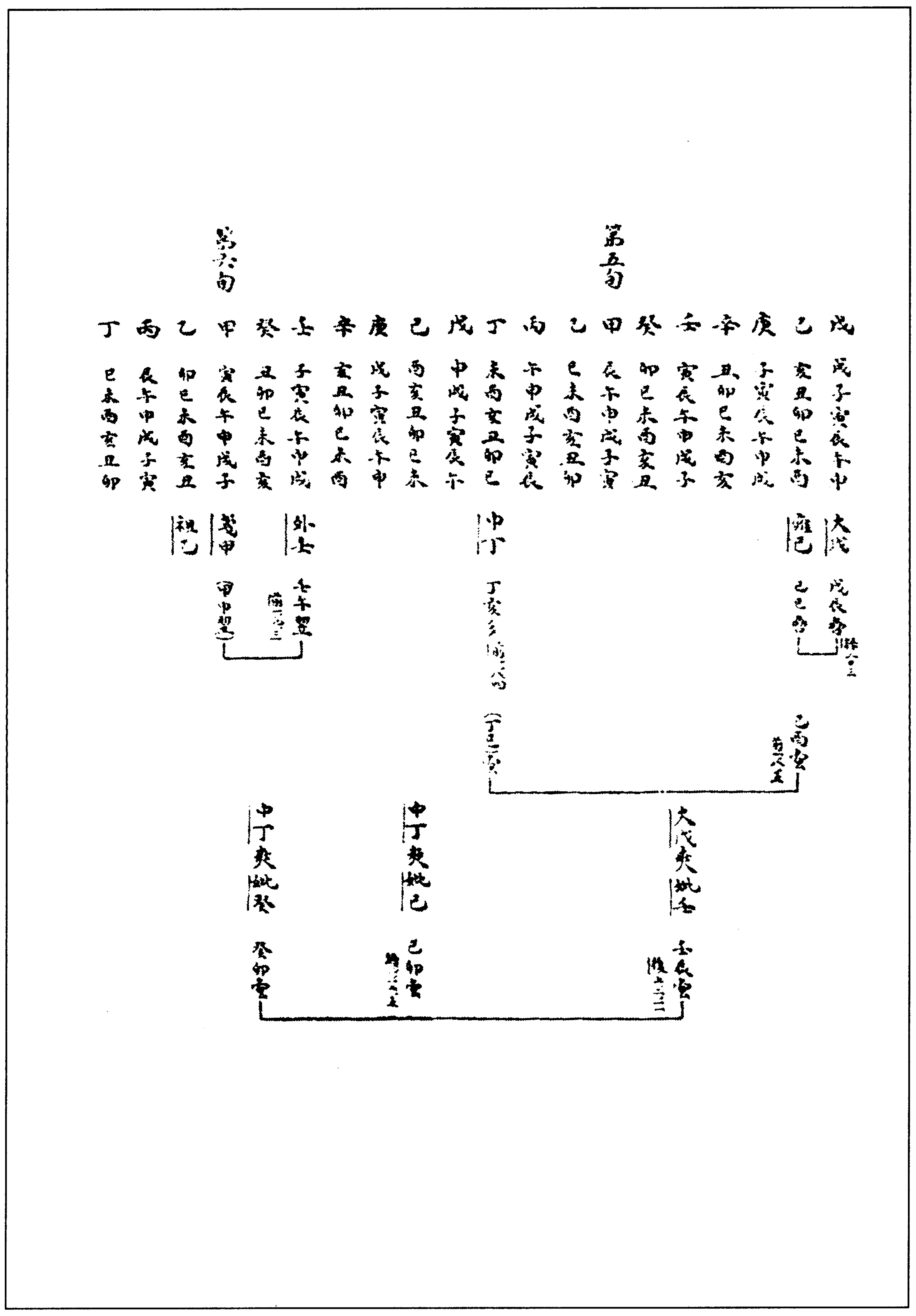
二、「『殷虛書契』前編一・一七・二片に據れば乙辛卜辭は、彡日の祭りを記す。乙丑王賓四祖丁（即ち祖丁）の配は妣己、「庚戌王賓小乙配妣庚」と。董表に據れば妣庚を祭るのは第九旬にある、干支上より推せば妣己を祭るのは當に第七旬にある。

註[五]　董作賓作製表による帝乙帝辛時五種祀典祖妣祭日表（殷曆譜上編巻三・祀與年）

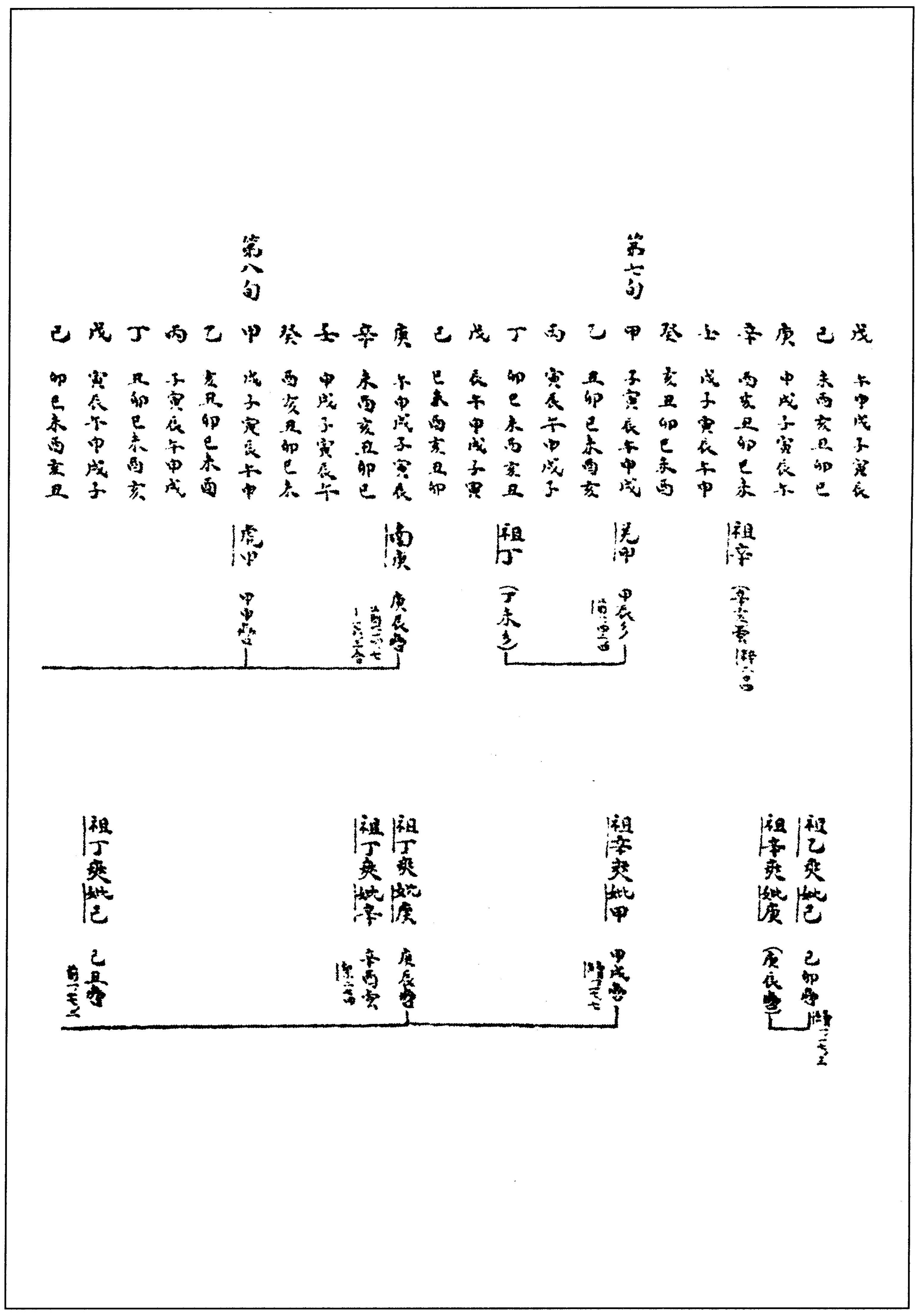
旬	日干	日支	先祖彡翌祭壹舂	卜辭例		先妣彡翌祭壹舂 卜辭例
第一旬	甲	子寅辰午申戌	上甲	甲申祭 [illegible]	甲戌翌 [illegible]	
	乙	丑卯巳未酉亥	匚乙	乙卯翌 [illegible]	乙亥翌	
	丙	寅辰午申戌子	匚丙	丙申彡 [illegible]	丙午翌	
	丁	卯巳未酉亥丑	匚丁	丁卯彡 [illegible]	丁丑翌	
	戊	辰午申戌子寅				
	己	巳未酉亥丑卯				
	庚	午申戌子寅辰				
	辛	未酉亥丑卯巳				
	壬	申戌子寅辰午	示壬	壬子祭 [illegible]	壬午翌	
	癸	酉亥丑卯巳未	示癸	癸亥壹 [illegible]	癸未翌	
第二旬	甲	戌子寅辰午申				
	乙	亥丑卯巳未酉	大乙	乙卯壹 [illegible]	乙酉翌	
	丙	子寅辰午申戌				
	丁	丑卯巳未酉亥	大丁	丁亥壹 [illegible]	丁亥翌	
	戊	寅辰午申戌子				
	己	卯巳未酉亥丑				


第三旬
第四旬
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
大甲
外丙
大庚
小甲
甲午翌
（丙申翌）
庚子翌
示壬奭妣庚
示癸奭妣甲
大乙奭妣丙
大丁奭妣戊
大甲奭妣辛
大庚奭妣壬

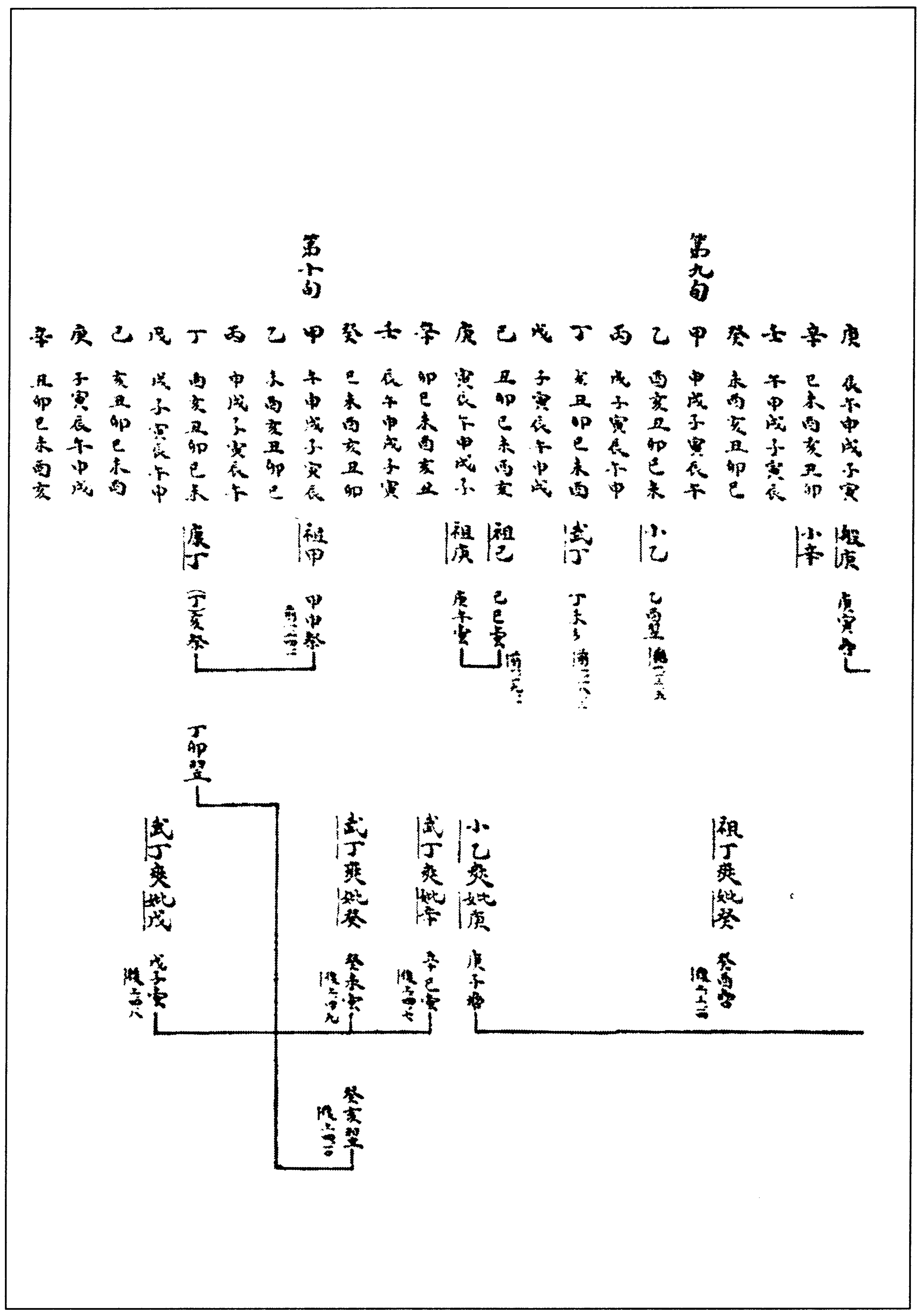
207


第五旬
第六旬
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
大戊
雍己
中丁
外壬
戔甲
祖乙
壬午翌
甲申翌
大戊奭妣壬
中丁奭妣己
中丁奭妣癸

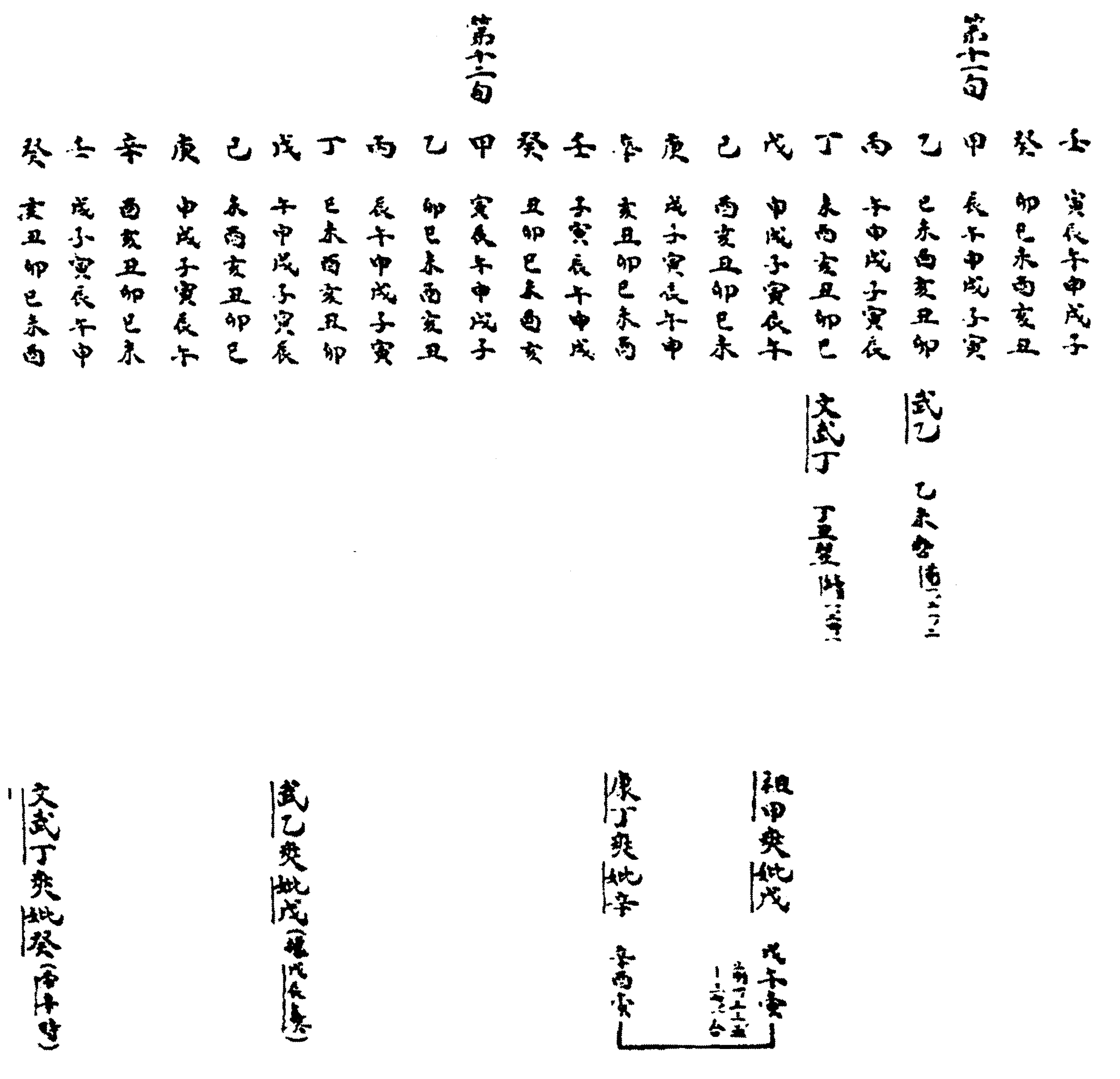
208


第七旬
第八旬
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
祖辛
羌甲
祖丁
南庚
虎甲
祖乙奭妣己
祖辛奭妣庚
祖辛奭妣甲
祖丁奭妣庚
祖丁奭妣辛
祖丁奭妣己

209


第九旬
第十旬
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
壬
癸
甲
乙
丙
丁
戊
己
庚
辛
般庚
小辛
小乙
武丁
祖己
祖庚
祖甲
康丁
丁卯翌
祖丁奭妣癸
小乙奭妣庚
武丁奭妣辛
武丁奭妣癸
武丁奭妣戊
癸亥翌

210



壬　寅辰午申戌子
癸　卯巳未酉亥丑

第十一旬
甲　辰午申戌子寅
乙　巳未酉亥丑卯　武乙　乙未[illegible]
丙　午申戌子寅辰
丁　未酉亥丑卯巳　文武丁　丁丑[illegible]
戊　申戌子寅辰午
己　酉亥丑卯巳未
庚　戌子寅辰午申
辛　亥丑卯巳未酉
壬　子寅辰午申戌
癸　丑卯巳未酉亥

第十二旬
甲　寅辰午申戌子
乙　卯巳未酉亥丑
丙　辰午申戌子寅
丁　巳未酉亥丑卯
戊　午申戌子寅辰
己　未酉亥丑卯巳
庚　申戌子寅辰午
辛　酉亥丑卯巳未
壬　戌子寅辰午申
癸　亥丑卯巳未酉

祖甲奭妣戊　戊午[illegible]
康丁奭妣辛　辛酉[illegible]
武乙奭妣戊（[illegible]）
文武丁奭妣癸（[illegible]）

註〔六一〕　陳夢家氏作製する「周祭祀譜」。陳夢家は周祭祀譜の作製について「周祭祀譜は先王先妣の祭祀中の次序と祀周の組み合せである。先王妣は其の一定の資格によって祀譜に入れ、其の世次・長幼、及位と死亡の順序通りに、其の命名した日の日、旬、祀季中にあり順々に祭をする。周祭中に三種の主な祭法が一祀を構成している。三種の主な祭法〝彡〟〝羽〟をそれぞれ挙行しており、〝劦〟は〝祭〟〝壴〟〝劦〟三種聯合により挙行している。よって乙・辛刻辭中一祀を分けて〝彡〟〝羽〟〝劦〟の三個の〝祀季〟とする。だから私は五種をおこなっていたとはしなく三種が主な祭法をおこなっていたとする。『殷曆譜』上編巻三に〝帝乙帝辛五種祀典祖妣祭日表〟がある。また下巻二〝祀譜〟に詳見する。以下は私の論定する世系を根據とし、甲骨の原材料を根據として審査を加へた。細微な節目の修正を除いた外は、大方は董氏の祭日表と同じである。以下は周祭祀譜である。（綜述三八六頁）……此の譜の横を讀むと、一旬は一旬に接し、アラビア數字の1、2、3……は先王の順序を表示し、(1)(2)(3)……は先妣の順序を表示し、先妣の上に夫の名を附け加へた。縦に此の譜を讀むと、甲項以下は、同干の先王と先妣を知ることができる。▲は祖甲周祭の終點を表示し、▲▲は帝乙を表示し、▲▲▲は帝辛を表示する周祭の終點である。但〝劦季〟は三種の祭法を包含しているのであるから、整った祀季の終りは〝彡〟〝羽〟の兩旬に長じ、故に上の表は只〝彡〟〝羽〟及び劦季の〝祭〟を適用している。又〝祀季〟は甲日の日に上甲を祭る祭りを開始する。若し此の日甲戌ならば則ち甲戌祀系をなす。餘、類推すれば、これは董氏の所謂六祀系である。祀季開始の上一旬は〝工册〟であり、工册のある所の甲日は甲申をなし、董氏に稱する甲申祀統であり、餘は類推である」『殷虚卜辭綜述』第十一章　先王先妣・第七節　周祭祀譜的編排　三八六―三八八頁。と説明している。

周祭祀譜

[旬]＼[日]	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸
一	1 上甲	2 報乙	3 報丙	4 報丁					5 示壬	6 示癸
二		7 大乙		8 大丁						
							(1) 示壬 妣庚			
三	9 大甲		10 外丙				11 大庚			
	(2) 示癸 妣甲		(3) 大乙 妣丙		(4) 大丁 妣戊			(5) 大甲 妣辛	(6) 大庚 妣壬	
四	12 小甲				13 大戊	14 雍己				
									(7) 大壬 妣壬	
五				15 中丁					16 卜壬	
						(8) 中丁 妣己				(9) 中丁 妣癸
六	17 戔甲	18 且乙						19 且辛		
						(10) 且乙 妣己	(11) 且乙 妣庚			
七	20 羌甲			21 且丁			22 南庚			
	(12) 且辛 妣甲					(13) 四且丁 妣己	(14) 四且丁 妣庚			
八	23 陽甲						24 般庚	25 小辛		
九		26 小乙		27 武丁		28 且己	29 且庚▲			
							(15) 小乙 妣庚▲	(16) 武丁 妣辛		(17) 武丁 妣癸
十	30 且甲			31 康丁						
					(18) 武丁 妣戊					
十一		32 武乙		33 文丁▲▲						
					(19) 且甲 妣戊			(20) 康丁 妣辛		
十二		34 帝乙▲▲▲			(21) 武乙 妣戊▲▲			(22) 文丁 妣癸▲▲▲		

由此點我們可以檢驗綴合編中有關各片：

一、綴合七〇片，共合二片。即前編一・一七・二及一・八・二前者已見引于前，其所增者，為癸酉王賓中丁配妣癸，與董表適合。可證我們改定祖丁配妣己于第七旬之正確。

二、綴合三七片共合甲（中甲）乙（前右甲）丙（前左甲）丁（後右甲）戊（尾右甲）五片，曾氏甲骨叕存六，亦曾錄此，但多了第六片，（尾左甲）殷曆譜下二・三六僅併合了乙丁戊三片，用祀譜來看，董氏謹愼是可取的，因甲與乙丁戊三片的干支不相聯接，丙片可能與甲片聯屬，叕存的尾右甲，與此組無關，刪去是對的。

三、綴合六八片，共合甲乙丙丁戊己六片，據干支，甲乙是一組，丙丁是一組，戊己是一組。三組不相聯系，第二及第三組，各自成為一組，見殷曆譜三・五―六，第一組的綴合待考。

四、綴合七三片，共合甲乙丙三片，殷曆譜三・二僅合甲乙為一片，據干支丙片與甲乙不相聯系。

五、綴合七四片，共合甲乙丙丁戊五片，殷曆譜三・四只有丙丁戊合為一片，據干支甲乙為一組，丙丁戊為一組，兩組不相聯系。

六、掇合七二片，共合二片，干支不相聯系。

由上諸例所示，則綴合的時候，不但要甲骨折斷處的契合，並且要卜辭內容的契合，但上舉之例，在曾氏書中僅為極少數。

過去研究甲骨者，總是太努力于認識新字，太熱心于利用殘破卜辭，重構古史與古代社會。我向來認為要利用甲骨，必須先整理它。整理的工作，是瑣碎繁重，利人不利己的。但若不

經過這種技術的手續，則研究本身是無從下手的。我從前看了曾氏甲骨地名通檢和殷虛書契續編校記，認為是最切要有用的書，都是整理材料的工作。今此綴合編問世，真有珠聯璧合，破鏡重圓之感。實在是甲骨學的功臣，相信甲骨學研究，因此而更可前進一步。

一九四九年九月十五上虞陳夢家記于北京。

此の點によって私は綴合編中に各片に關わりのあるものを檢驗すべきである。

一、綴合七〇片は[七]、すべて合せて二片である。即ち前編一・一七・二及び一・八・二。前者は已に前に見引され、その增す所は、「癸酉王賓中丁配妣癸」なりと。董表と適ま合う。私は祖丁の配の妣己を第七旬に改定した正確さを證することができる。

二、綴合三七片は[八]すべて合せて甲（中甲）乙（前右甲）丙（前左甲）丁（後右甲）戊（尾右甲）五片。曾氏は『甲骨叕存』の六は、亦會って此れを錄す、ただ第六片は多い（尾左甲）『殷曆譜』下二・三六に僅かに乙丁戊三片を併合している、祀譜に用いたのを見ると、董氏は謹愼して取るべきで、甲は乙丁戊の三片によって干支が相い聯接しない、丙片は能く甲片と聯屬する。『叕存』の尾右甲は、此の組と關係ないので、この對を删去した。

三、綴合六八片は[九]、すべて甲乙丙丁戊己六片を合し、干支によると、甲乙は一組であり、丙丁は一組であり、戊己は一組である。三組は相い聯系しない、第二及び第三組は、各々自から成って一組となる、『殷曆譜』の三・五ー六を見れば、第一組の綴合は考を待つ。

四、綴合七三片は[十]、すべて甲乙丙三片を合せ、『殷曆譜』三・二は僅かに甲乙を合せて一片となし、干支に據れば丙片と甲乙とは相い聯系しない。

五、綴合七四片は[十一]、すべて甲乙丙丁戊五片を合せ、『殷曆譜』三・四はただ丙丁戊あり合せて一片とする、干支によれば甲乙は一組にし、丙丁戊は一組とする、兩組は相い聯系しない。

六、綴合七二片は[十二]、すべて二片を合す、干支は相い聯系しない。

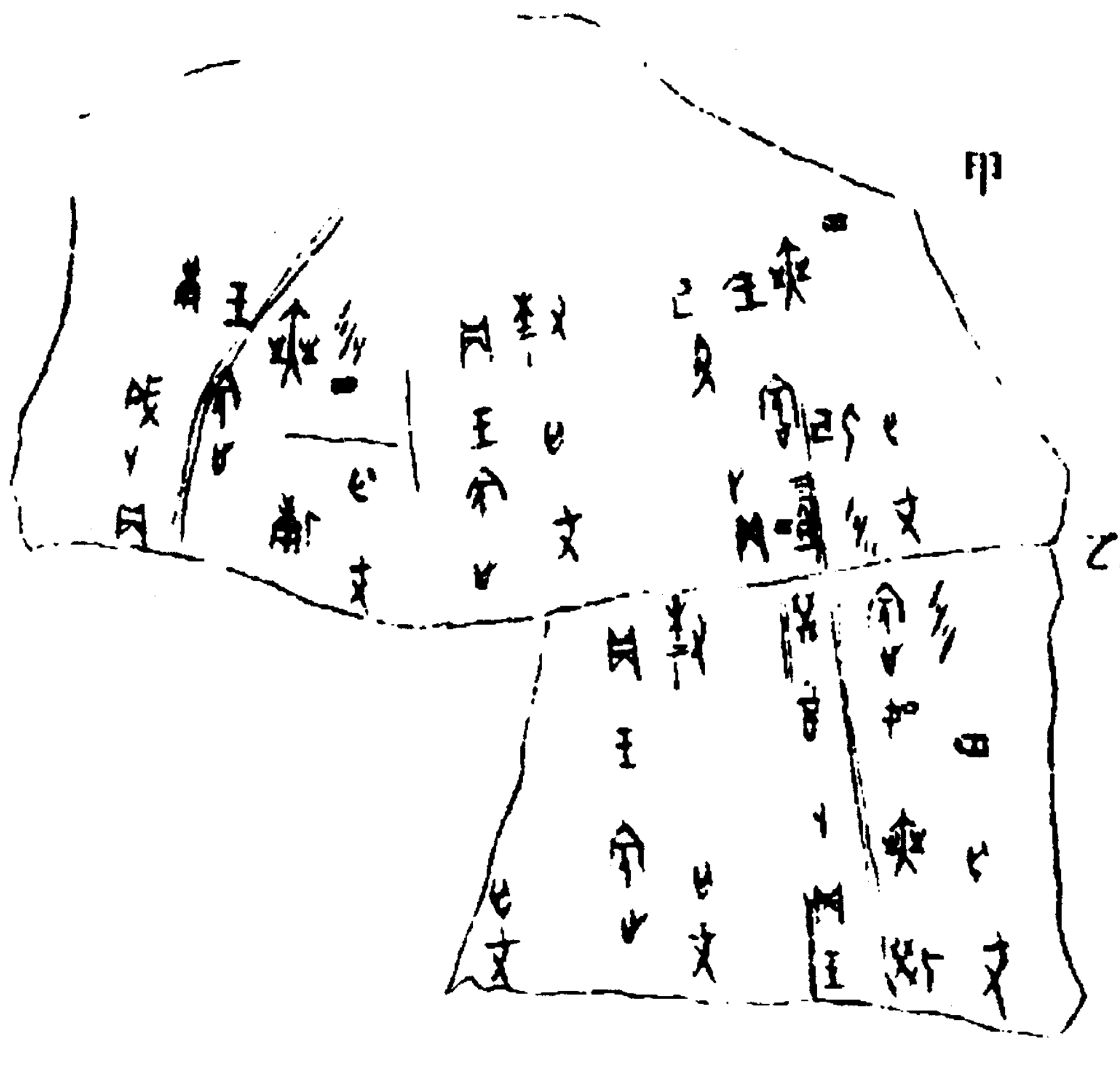
上の諸例によって示す所は、則ち綴合の時は、ただ甲骨の析斷する處の契合を要せず、並に且つ卜辭內容の契合を要する。ただ上に擧る例は、曾氏の書中では僅かに極少の數である。

過去の甲骨を研究する者は、總て新字の認識に大いに努力し、殘破の卜辭の利用に大熱心で、重び古史と古代社會に構う。私は從來甲骨の利用しようとするものは、必ずぜひとも先づそれを整理すべきことを認める。整理の工作は、これ瑣碎繁重であり、人を利して利としない。ただこの種の技術の手續を經過しなければ、則ち研究しているものは全く手のつけようがない。私は以前曾氏の『甲骨地名通檢』（『甲骨地名通檢』註[四]・第三輯一一〇頁參見）『殷虛書契續編校記』（『殷虛書契續編校記』註[二]・第三輯・一一九頁參見）を見た、これは最も必要で有用な書であることを認める。みなこれ整理材料の工作である。今此の『「甲骨」綴合編』を世に問ひ、真に貴重なものが一か所に集まる、一旦離縁してもとのさやにおさまるの感がある。實にこれ甲骨學の功臣である。甲骨學研究は此れによって更に前進一歩することが出來ることを確信している。

一九四九年九月十五日、上虞（浙江省）の陳夢家（『殷契摭佚』註[三]・第三輯參見）北京にて記す。

註[七]　綴合七〇片

七〇

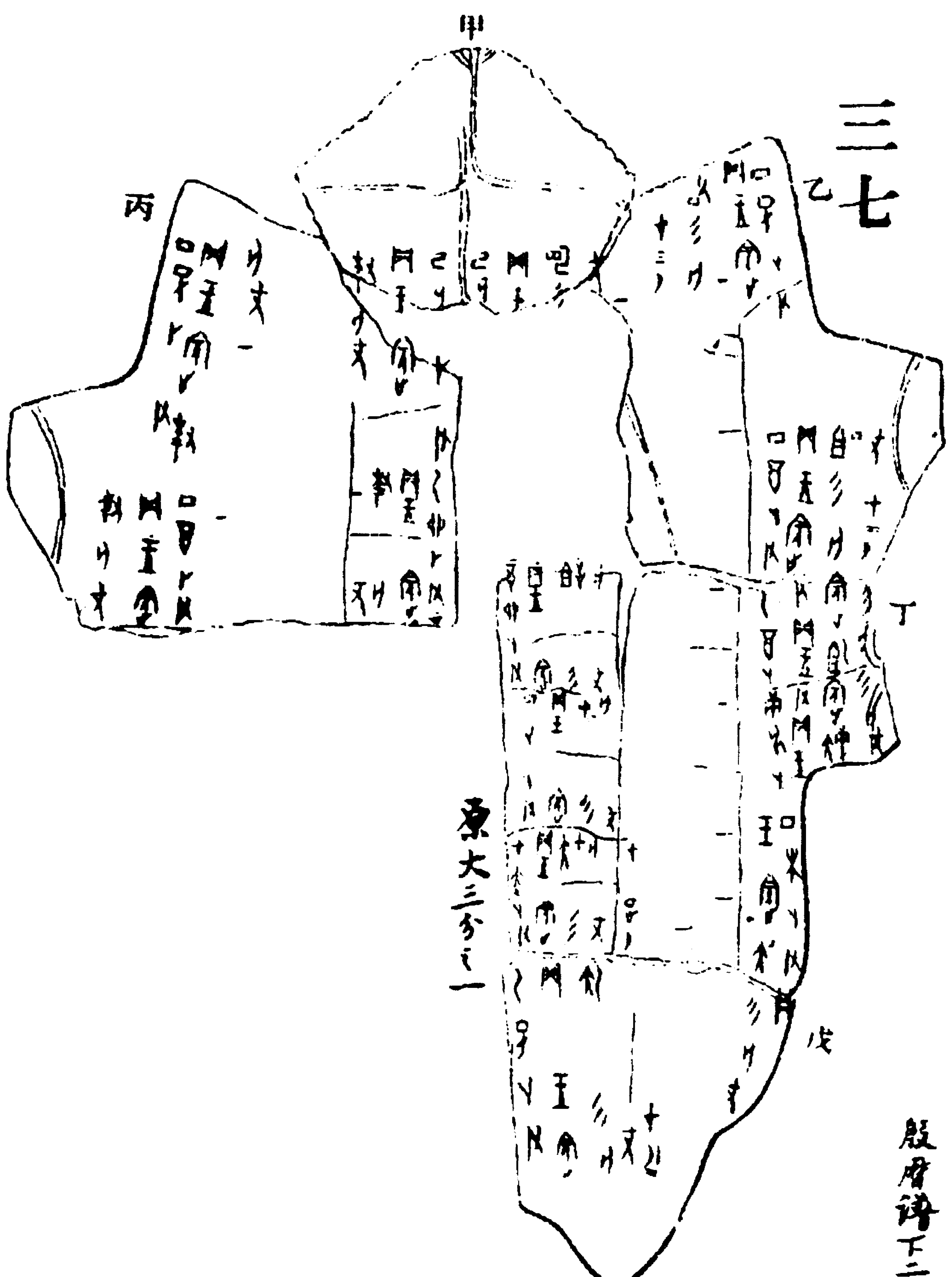


甲前一・一七・二　乙前一・八・二

龜

註[八]　綴合三七片

三七

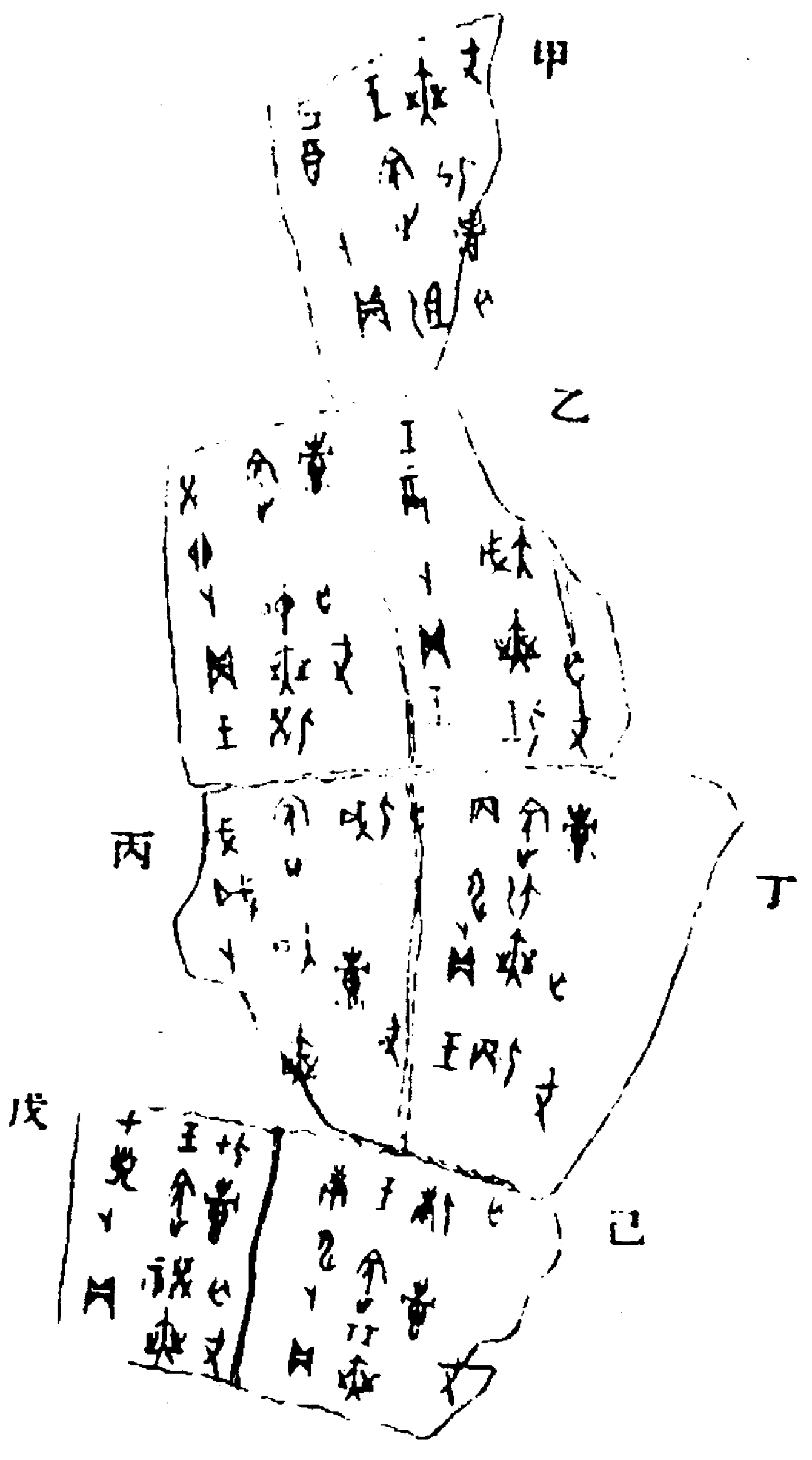


殷曆譜下二・三六　龜

叕存六
甲拼二〇七
乙拼三〇七
丙編四六七
丁拼一七六
戊錄二六八

註「九」　綴合六八片

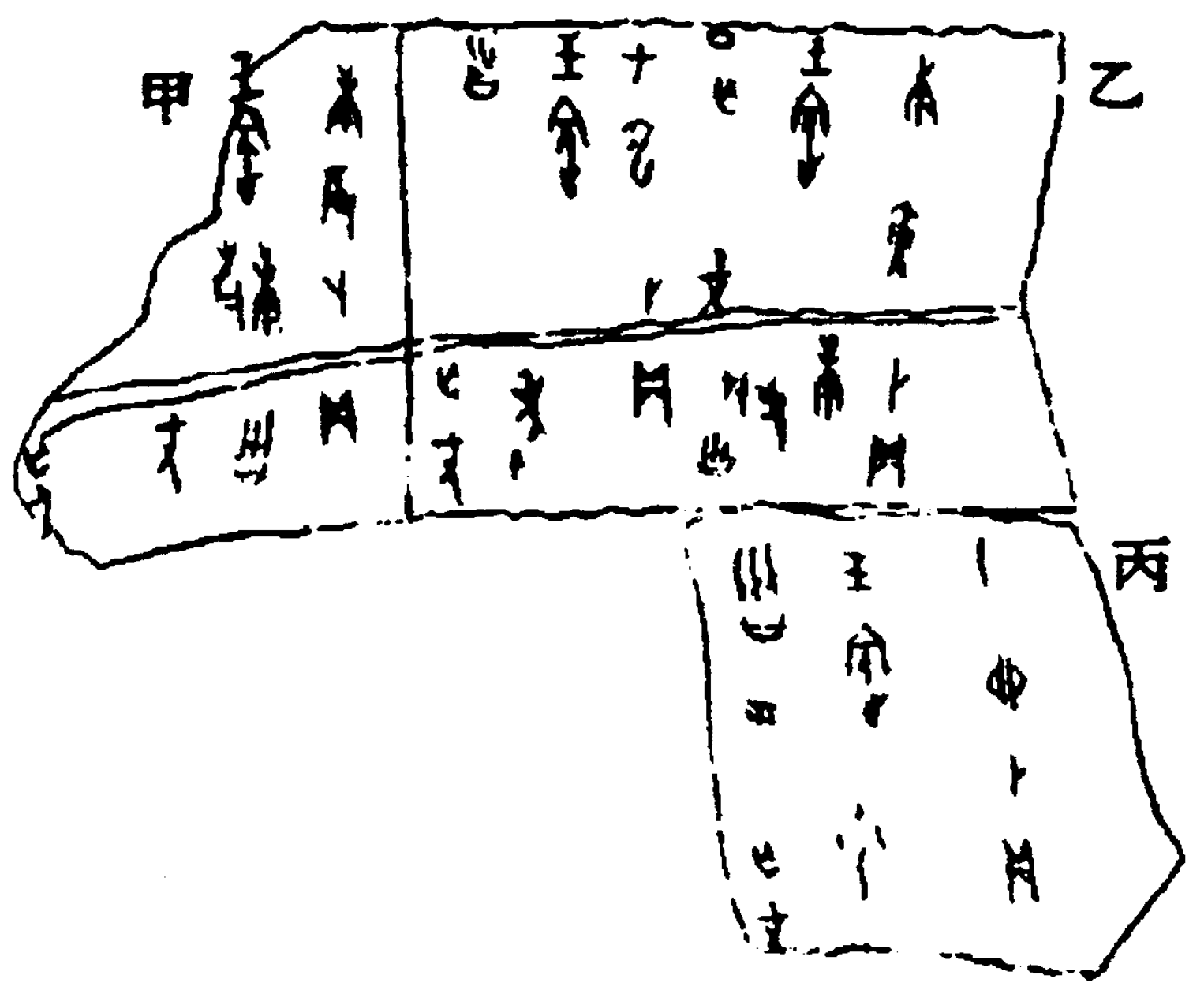
六八　甲後上・三・二　乙後上・二・一　丙後上・二・一　丁後上・一・七　戊後上・一・八　己後上・一・六　龜



219

註「十」　綴合七三片

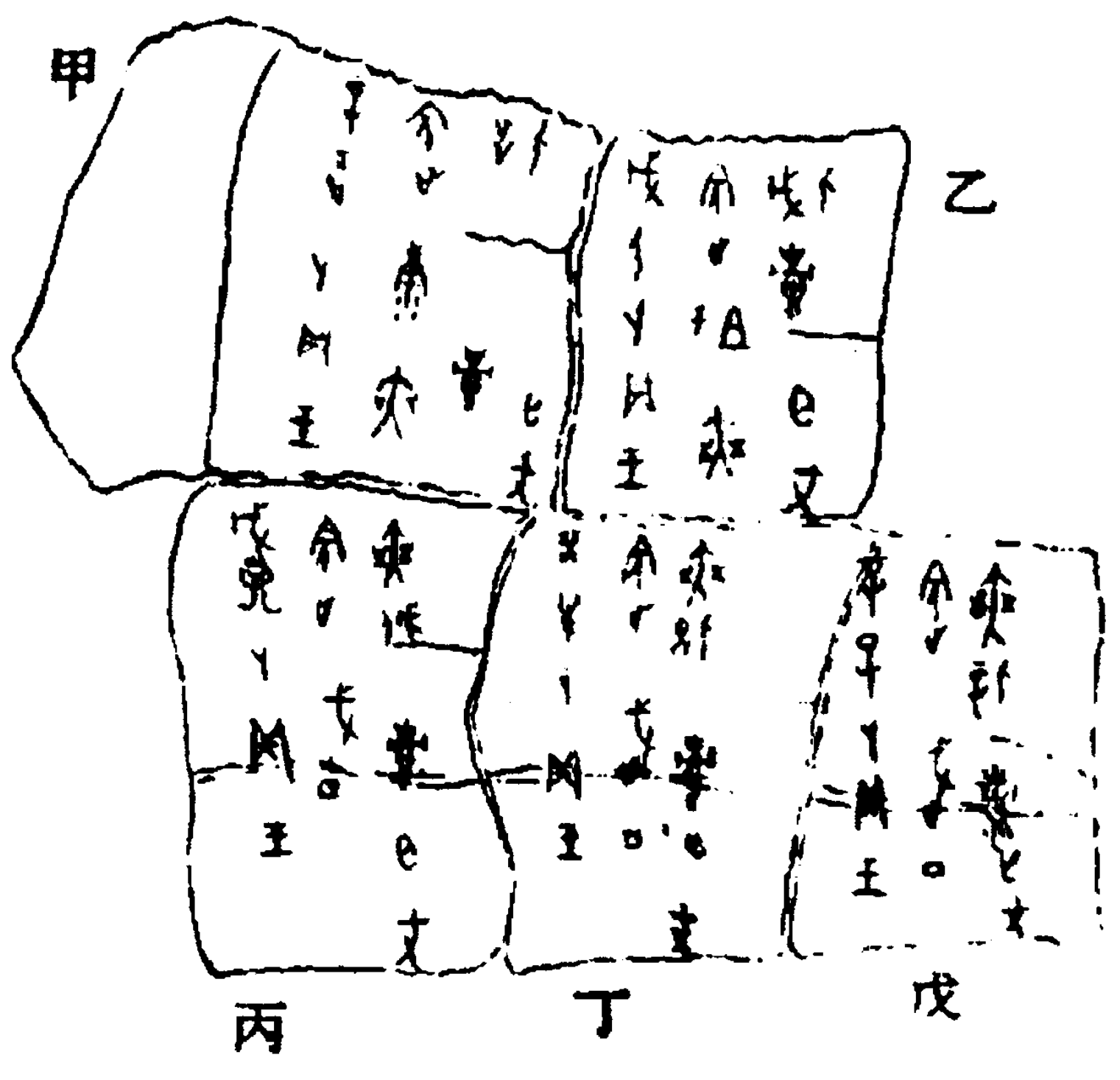
七三　甲前・二・四・七　乙前・一・五・三　丙前・二・一七・一　殷麻徵上・三・四　龜



220

註「十一」　綴合七四片

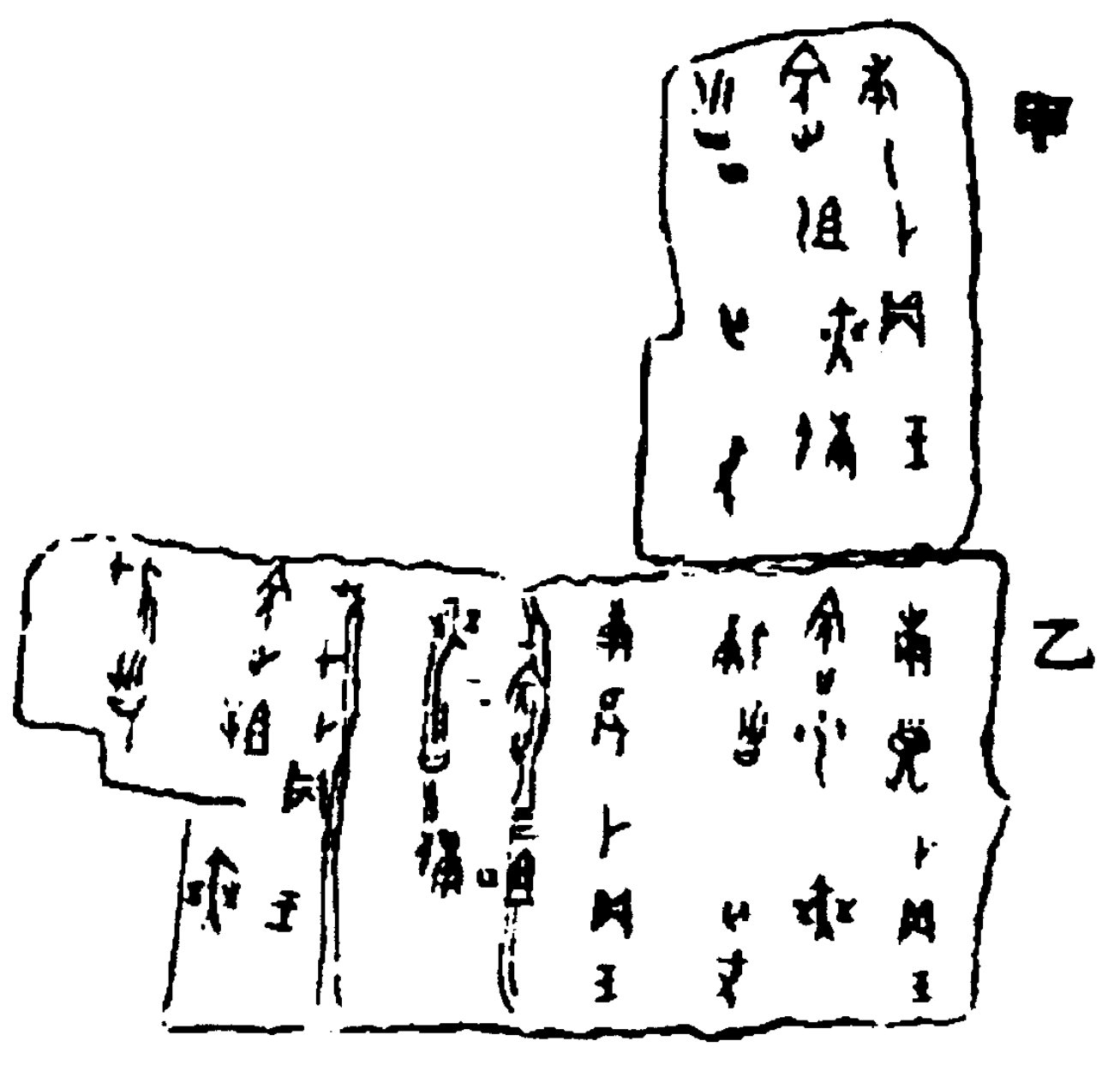
四　甲前・一・三七・一　乙前・一・三三・五　後上・四・二　丙後上・四・八　丁後上・四・九　戊後上・四・七　殷麻徵上・三・四　龜



221

註「十二」　綴合七二片

龜　七二　甲後上・三・一　乙續一・一七・七　龜



222

〔容庚序〕

民國十七年秋，得識曾毅公先生于明義士先生家，時毅公助明氏治甲骨文字。十九年春假，余与顧頡剛洪煨蓮諸先生作豫魯旅行。復見毅公于齊魯大學國學研究所。二十八年，遂成甲骨叕存。甲骨地名通檢。殷虛書契續編校記三書。以敏銳之眼光，縝密之心力，人所忽畧者，獨能自得之。令人欽服。曾以卜辭影本見貽。中有「辛未貞𠦪年于高祖沈于辛巳酌燎」一文，可碻定沈爲殷之先公。言卜辭者所未知也。余作卜辭研究，遂以沈爲曹圉。三十年冬，太平洋戰事起。毅公歸自濟南，一家數口，無以爲生。乃出所藏甲骨書籍以易米。友人于思泊先生雖有所佽助，顧不能救其久窮。貿販鄉邨，博蠅頭之利。每與于思泊孫海濤及君縱談世界大勢及易老平陂往復柔弱剛強之理，以相策勵。謂強敵終當傾覆九州得見大同也。三十四年秋，日寇投降。次年春，余應廣西大學教授之聘。毅公來送行。時就職廣播電臺，聊以維生。匪云研究。比余至柳州西大以校舍之故罷課。乃東歸故里。七月轉就嶺南大學中國文學系主任教授。三十六年五月，至京取眷班荊道。故知其轉任北平圖書館職，復治所業。深爲之喜。頃以甲骨綴合編印稿寄示，屬爲之序，可無一言。

民國十七〔一九二八〕年の秋、曾毅公先生を明義士先生の家に識るを得たり。時に毅公、明氏を助けて甲骨文字を治む。十九〔一九三〇〕年の春假に、余、顧頡剛（顧頡剛・『天壤閣甲骨文存』註〔十四〕・三輯八二頁參見）・洪煨蓮〔十三〕諸先生と豫魯〔河南省〕旅行を作す、復た毅公に齊魯大學國學研究所に見ゆ。二十八〔一九三九〕年遂に『甲骨叕存』・『甲骨地名通檢』・『殷虛書契續編校記』の三書を成す。敏銳の眼光、縝密の心力を以て、人の忽畧にする所の者も、獨り能く自からこれを得。人をして欽服せしむ。嘗って卜辭の影本を以て貽らる。中に「辛未貞𠦪年于高祖沈于辛巳酌燎」の一文有り。沈〔十四〕は殷の先公爲るを碻定す可し。卜辭を言ふ者の未だ知らざる所也。余『卜辭研究』を作り、遂に沈を以て曹圉と爲す。三十年冬、太平洋戰事起り、毅公濟南より歸る。一家數口、以て生を爲す無し。乃ち所藏の甲骨書籍を出だして以て米に易ふ。友人于思泊先生佽助する所有りと雖も、顧だ其の久窮を救ふ能はず、版を鄉邨に貿ひ、蠅頭の利を博くす。每に于思泊・孫海濤（孫海波・『鐵雲藏龜』註〔四十〕・第一輯三八頁參見）及び君と縱に世界の大勢を談じて易老の平陂往復柔弱剛強の理に及び、以て相ひ策勵す。強敵終に當に九州を傾覆して大同を見るを得べきを謂ふ也。三十四〔一九四五〕年の秋、日寇投降す。次年〔一九四六〕の春、余、廣西大學教授の聘に應ず。毅公來りて行を送る。時に廣播電臺に就職し、聊か以て生を繼ぐ。研究と云ふに匪ず。比ごろ余、柳州西大〔學〕に至るも校舍の故を以て課を罷む。乃ち東のかた故里に歸る。七月、轉じて嶺南大學中國文學系主任教授に就く。三十六〔一九四七〕年五月、京に至りて眷を班荊の道に取る。故に其の北平圖書館の職に轉任し、復た業とする所を治むるを知り、深くこれが爲に喜ぶ。頃ろ『甲骨綴合編』の印稿を以て寄示し、これが序を爲らんことを屬せらる。一言無かる可けんや。

註〔十三〕　洪煨蓮（一八九五—　）字は煨蓮、福建閩侯の人。米國コロンビヤ大學に留學し、文學碩士を得た。その後、燕京大學史學系教授に任じ、また哈佛燕京社引得編纂處主任に任じ、引得の出版に力を盡した。彼の著書に『引得說』・『勺園圖錄考』がある。

註〔十四〕　容庚氏が揭げるこの卜文の「高祖𠄎」は「高祖河」と釋されるべきであって、沈とは釋さない。このト片は李亞農氏の『殷契摭佚續編』に收められている。

甲骨脆弱易碎。加以鑽鑿熯灼，斷裂隨之。辭句不完，難於索解。故欲訂古史之譌闕，審文法之變遷。必先將此分散殘存之材料，使其聯綴可讀，綜合整理而後，考證之功，始有所施。甲骨綴合始于王靜安先生。其殷卜辭中所見先公先王考據殷虛書契後編卜辭「丁酉酌絲匚丙匚三匚三示閼大丁十」以證匚丙匚丁即報丙報丁。其續考據戩壽堂殷虛文字卜辭有田匚示癸等字。彼片有匚丙匚丁等字。疑本一骨折而爲二。乃以二拓本合之。其斷痕若合符節。文辭亦連續可誦。凡殷先公先王自上甲至於大甲。其名皆在焉。謂示癸大丁之間無大乙。大乙爲大祖。先公先王或合食於大祖故也。及董彥堂先生得見盧江劉氏善齋所藏甲骨拓本。復發見第三片有大乙十大庚七之文。可證合食於大祖之說之誤。余曾爲燕京大學購得徐坊所藏甲骨千餘片。卜辭有「甲戌翌上甲、乙亥翌匚乙閼、壬午翌示壬癸閼、翌大丁」之文。以拓本寄郭鼎堂先生于日本。鼎堂于「翌大丁」之上補以「甲申翌大甲」、「丁亥」。後著殷契萃編發見二斷片「翌大丁」之下爲「甲午翌」。於是改正其上爲乙酉翌大乙，謂憑肊度之徒勞。以王郭兩先生之妙悟肊度，猶不能無失。綴合之要可知矣。余編殷契卜辭，曾比對數日。綴合十餘片。自謂畧盡于此。今讀此編一五一片。乃殷契卜辭四與二一六之綴合。蓋當時只小片與小片之綴合。而忘小片與大片之綴合也。明義士・商錫永・董彥堂・郭鼎堂・孫海濤皆曾致力于綴合之工作。而所著書猶待毅公爲之發覆。其所得爲何如耶。毅公作甲骨叕存。得七十五片。今增爲三百九十六片。十年之間已五倍過之。

甲骨脆弱にして碎け易く、加ふるに鑽鑿熯灼を以てすれば、斷裂、これに隨ひ、辭句完からず、解を索むるに難し。故に古史の譌闕を訂し、文法の變遷を審かにせんと欲せば、必ず先ず此の分散殘存の材料を將って、其をして聯綴讀ひ可からしめ、綜合整理して後、考證の功、始めて施す所有り。甲骨の綴合は、王靜安（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註〔二十三〕・第一輯一〇一頁參見）先生に始まる。其の『殷卜辭中所見先公先王考』（『甲骨學商史論叢初集』註〔十五〕・第三輯二五一頁參見）は『殷虛書契後編』の卜辭「丁酉酌絲丙匚三匚三示大丁十」に據りて以て匚丙匚丁は即ち報丙報丁なるを證す。其の「『殷卜辭中所見先公先王』續考」は『戩壽堂殷虛文字』（『戩壽堂所藏甲骨文字』註〔一〕・第一輯一四〇頁參見）卜辭に田匚示癸等の字有り、彼の片に匚丙匚丁等の字有るに據りて、本一骨、折れて二つと爲るを疑ふ。乃ち二拓本を以てこれを合はせば、其の斷痕符節を合する若く、文辭も亦連續して誦す可し。凡そ殷の先公先王は上甲より大甲に至る、其の名は皆な焉に在り。謂ふに「示癸大丁の間、大乙無きも、大乙は大祖爲り、先公先王、或は大祖に合食するが故也」と。董彥堂先生、盧江の劉氏、善齋所藏の甲骨拓本を見るを得るに及んで、復た第三片に「大乙十大庚七」の文有るを發見す。大祖に合食するの說の誤りを證す可し。余嘗って燕京大學の爲に徐坊所藏の甲骨千餘片を購い得たり。（『殷契卜辭』自序・第二輯一七七頁參見）卜辭に「甲戌翌上甲乙亥閼匚、壬午翌示壬癸、翌大丁」の文有り。拓本を以て郭鼎堂先生に日本に寄す。鼎堂「翌大丁」の上に于て補ふに「甲申翌大甲、丁亥」を以てす。後、『殷契粹編』（『殷契粹編』註〔五〕・第二輯二二頁參見）を著して、二斷片を發見す、「翌大丁」の下は「甲午翌」と爲す。是に於て其の上を改正して「乙酉翌大乙」と爲す。謂ふに肊度に憑るの徒勞は、王〔國維〕・郭〔沫若〕兩先生の妙悟肊度を以てして

すら、猶ほ失無きこと能はず、綴合の要知る可し。余『殷契卜辭』を編す、曾って比對すること數日、十餘片を綴合す。自から謂へらく、略此に盡くと。今、此の編を讀むに一五一片は、乃ち『殷契卜辭』四と二一六との綴合なり。蓋し當時は只だ小片と小片との綴合にして、小片と大片との綴合を忘るるなり。明義士（明義士・『殷契書録』註〔二〕・第一輯三二頁參見）、商錫永（商承祚・『殷虛文字類編』註〔五〕・第一輯一七三頁參見）、董彥堂、郭鼎堂、孫海濤は皆な曾って力を綴合の工作に致す、而して著す所の書は猶ほ毅公の、これが發覆を爲すを待つ。其の得る所は何如と爲すや。毅公『甲骨綴存』を作り、七十五片を得、今增して三百九十六片と爲す。十年の間に已に五倍これを過ぐ。

燕京大學所藏一千二百片而殷契卜辭所收只八百七十四片。善齋所藏萬五千片而殷契粹編所收只一千五百九十五片。其餘皆以字少無特異而棄置者。燕大所藏女弟媛所收。掌毅公盍往海淀。一行使棄置之。三百餘片入君之手。安知不一一生光怪邪。如告成功請。得上甲骨綴合專家之尊號。毅公亦足以自娛哉。將見善齋倒屣延請。更多創獲矣。南歸四年、以事務勞其體。以衣食攖其心。鮮讀書之暇。無從游之人。新得甲骨百餘片。爲鐫篋中。經年不一視。求一墨拓之人而無之。欲如北平優游研究之樂。此日不再得。今序此編。歷歷前痕。斷而復續，念毅公孳繹之勤。遂能有此成就。中經顛沛。毅志不渝。而年來返顧。益以自懟毋謂余豪興猶昨也。

一九五〇年二月十五日。東莞容庚序于嶺南大學。

燕京大學の所藏は一千二百片にして『殷契卜辭』の收むる所は只だ八百七十四片なり。

善齋所藏は萬五千片にして、『殷契粹編』の收むる所は只だ一千五百九十五片なり。其の餘は皆な字少く特に異とする無きを以て棄置せらるる者、燕大の所藏、女弟媛〔註五〕の收掌する所なり。毅公盍ぞ海淀に往かざる。一たび行きて之を棄置せしめば、三百餘片は君の手に入らん。安んぞ一一光怪を生ぜざるを。如し成功を告ぐれば請ふ、甲骨綴合專家の尊號を上つるを得んことを。毅公も亦以て自からを娛しむに足らん。將に善齋の倒屣延請し、創獲多きを見んとす。

南に歸へりて四年、事務を以て其の體を勞し、衣食を以て其の心を攖ぐ、讀書の暇鮮く、從游の人無し、新たに甲骨百餘片を得、爲鐫の篋中、年を經るも一視せず、一の墨拓を求むるの人にして之なし。北平優遊の研究の樂みの如きを欲するも、此の日再びは得ず。今、此の編に序して、歷歷たる前痕、斷ちて復た續く。念ふに毅公孳繹の勤にして、遂に能く此の成就有り。中ごろ顛沛を經るも、毅志は渝らず。而して年來返顧せられ、益ゝ以て自から、余の豪興は猶ほ昨のごとしと謂ふなきを懟づ。

一九五〇年二月十五日、東莞〔廣東省〕の容庚（『殷虛文字類編』註〔三〕・第一輯一七一頁參見）嶺南大學に序す。

註〔十五〕 容媛（一九〇四－一九？）字は八爰、廣東省東莞の人。容庚の妹。中國國民黨々立婦女運動講習所を卒業し、廣東婦女協會總會幹事、廣西省黨部婦女部幹事、哈佛燕京學社秘書に任じた。その專門とする學については不明であるが、特に金石學に興味を向けていたのか、著書に『金石書録目』十卷があり、また『燕京學報』各期の「學術消息」を執筆していた。（『中國文化界人物總鑑』）

六九、五十年甲骨文發現的總結（一）

殷墟出土商朝後半期的甲骨文字，自從一八九九年，也就是清朝光緒二十五年開始發現，到現在已經整整的五十年了。（註一）據我們粗略的統計，在這短短的五十年裏，出土的甲骨，共有十六萬一千九百八十九片；（註二）研究甲骨文字寫有論著的作家，共有二百八十九人；（註三）出版的著作，共有八百七十六種。（註四）毫無問題，這是中國近代學術史上最新而又最發達的一種學問。

在今天，研究中國的文字，我們不再把東漢許愼所撰說文解字一書，看成神聖不可侵犯的經典。有了甲骨文字，時代比它早了一千四五百年。（註五）

因爲甲骨文的發現，使我們曉得古時所謂「六書」，不過是兒童們剛學識字時所用的干支表，即六行書。漢朝人才把它附會成「象形、指事、會意、形聲、轉注、假借」，說這是「造字之本」，也就是六種造字的條例。（註六）一千八百多年以來的文字學者，始終都在這一個圈子裏打轉。六書之學，汗馬牛，充棟宇。各家說法的異同是非，成了永遠不能解決的糾紛問題。（註七）我們現在的看法，就大大的不同了。

因爲甲骨文的發現，使我們曉得不但「伏羲畫八卦」，「倉頡造書」的傳說完全無稽；（註八）就連所謂古文、籀文、大篆、小篆，也都不過是戰國時代的文字。（註九）

由於甲骨文的發現和研究，使我們曉得，說文解字一書，至少有十分之二三，應該加以訂正。因爲在許愼的書裏，充滿了宗教迷信的色彩，哲學主觀的意見。像他解釋數目干支一類的字，簡直是一套完整的陰陽五行的學說。許愼在東漢是一個有師承、有名望的古文經學家，他的書，可以說是一部「究天人之際，通古今之變，成一家之言」的專書，並不能算是一部

科學的文字學著作。（註一〇）

註（一）參看胡厚宣五十年甲骨學論著目（中華書局出版）自序。

註（二）見後第八節五十年出土材料的總計。

註（三）看同註一。

註（四）看胡厚宣五十年甲骨學論著目，中華書局出版。

註（五）許愼說文解字一書，成於公元一〇〇年，上於公元一二一年。最早的甲骨文字，約爲公元前一三九五年。

註（六）參看張政烺六書古義，刊中央研究院歷史語言研究所集刊十本一分，一九四二年四川初印本，又一九四八年商務印書館重印本。

註（七）參看唐蘭中國文字學十一，六書說批判。（開明書店出版）

註（八）看唐蘭中國文字學八，關於中國文字起源的傳說。

註（九）參看王國維戰國時秦用籀文六國用古文說，收入所著觀堂集林卷七。又史籀篇疏證（王忠慤公遺書初集本，又商務海寧王靜安先生遺書第十七冊）敍。唐蘭中國文字學二十六，大篆小篆。

註（一〇）另詳胡厚宣說文解字的批判。

殷墟に商朝後半期の甲骨文字が出土した、一八九九年より、つまり清朝光緒二十五年開始發現されてより、現在に至るまで已に五十年になる。（註一）私たちの粗略な統計によれば、この短かい五十年にあって、出土の甲骨は、すべて十六萬一千九百八十九片

ある。（註二）甲骨文字を研究して論著を書いた作家はすべて二百八十九人いる。（註三）出版の著作は、すべて八百七十六種ある。（註四）すこしも問題はなく、これは中國近代學術史上最新にしてまた最も發達した一種の學問である。

今日では、中國の文字を研究するには、私たちはもはや東漢の許愼撰する所の『說文解字』の一書は、神聖にして侵犯すべからざる經典とは見なさない。甲骨文字が出てからは、時代は說文より更に一千四五百年もさかのぼっているからである。（註五）

甲骨文の發現によって、私たちはむかしの所謂「六書」は、兒童たちが丁度學ぶのに文字を識る時に用いた干支表、即ち六行の書に過ぎないのを知った。漢朝人はやっとそれに附會して「象形、指事、會意、形聲、轉注、假借」を成し遂げた。これは「造字の本」であり、つまり六種の造字の條例であるという。（註六）一千八百年以來の文字學者は、始終みなこの一つの輪をどうどうめぐりしていた。六書の學は馬牛に汗し、棟字に充ってある。各家の言い方の異同の是非は、永遠に解決できない紛糾問題を成した。（註七）私たち現在の見方は、就ちはなはだちがっている。

甲骨文の發現のために、私たちはただ「伏羲八卦を畫く」、「倉頡書を造る」の傳說は完全に無稽であるばかりでなく（註八）就ち一連の所謂古文、籀文、大篆、小篆は、またみな戰國時代の文字に過ぎないのを知るのである。（註九）

甲骨文の發現と研究により、私たちは、『說文解字』の一書は、少くとも十分の二・三が、當然加して訂正すべきであるということを知る。許愼の書は、宗教的迷信の色彩、哲學的主觀の意見が充滿しているからだ。他の數目の干支一類の字を解釋しているように、全くひとそろいの完整な陰陽五行の學說である。許愼は東漢では一人の教師であり、名望ある古文經學家で、彼の書は、一部の「天人の際を究め、古今の變に通じ、一家の言を成す」の專書であるというべきで、並に一部の科學的文字學の著作であるとみなすことはできない。（註一〇）

（註一）胡厚宣『五十年甲骨學論著目』自序參考にせよ。

（註二）後の第八節「五十年出土材料的總計」を見よ。

（註三）同註一を見よ。

（註四）胡厚宣『五十年甲骨學論著目』を見よ、中華書局出版。

（註五）許愼の『說文解字』一書は、紀元一〇〇年に成り、上紀元一二一年。最も早い甲骨文字は、約紀元前一三九五年なり。

（註六）張政烺『六書古義』、中央研究院歷史語言研究所集刊十本一分、一九四二年四川初印本。又一九四八年商務印書館重印本を參考にせよ。

（註七）唐蘭『中國文字學』十一、「六書說批判」（開明書店出版）を參考にせよ。

（註八）唐蘭『中國文字學』八、「關於中國文字起源的傳說」を見よ。

（註九）王國維『戰國時秦用籀文六國用古文說』を參考せよ。著す所の『觀堂集林』卷七に所收。又『史籀篇疏證』（王忠慤公遺書初集本、又商務の『海寧王靜安先生遺書』第十七冊）叙。唐蘭『中國文字學』二十六、「大篆小篆」。

（註一〇）另に胡厚宣『說文解字的批判』に詳しい。

註「一一」本書は甲骨文が發見されてより五十年にわたる出土・收藏・著錄の歷史を概觀したものである。內容は一、引言（甲骨の發現と古代史學の展開について述べ、殷を簡單に奴隷社會ときめつける一部の論者に、臣妾奴の諸字の本義を說く。こゝに收めた序は引言の文である。）二、甲骨文的名稱（甲骨文の名稱を、甲骨文、甲骨文字とするがよいとする。）三、甲骨文的認識（殷墟の發見から、甲骨文が知られるに至ったことを述べる。）四、甲骨文出土的地方（中央研究院が區劃を設定して發掘を行った結果、從前著錄した甲骨の出土の場所が知られている。）五、甲骨文的蒐購和流傳（蒐購家の購入と流傳を述べる）六、科學發掘的甲骨文字（中央研究院成立以來の活動を述べる）七、戰後甲骨文的出土和採訪（戰後胡氏は京津にあって公私の收藏家を訪ね、甲骨二千、拓六千、摹寫二千を得た）八、五十年甲骨文出土的總計（著錄七十一種四萬片をこえ、未著錄は十二萬という）からなる。出版は一九五一年、上海。

在今天，要想作科學的中國文字學的研究，沒問題，甲骨文應該是最基本而重要的資料。

中國古代的歷史，據近年學者們的研究，有所謂「託古改制的古史觀」和「層累造成的古史觀」。（註一一）不但三代以上的許多傳說，都是後人有意無意的造假。就是禹湯桀紂的故事，有許多也往往是層層累積的誇飾偏激之辭。（註一二）於是中國第一部古代史書尚書，只有商書盤庚一篇，時代最早，也比較可信。其餘各篇和周易毛詩，都是周以後的作品。（註一三）春秋和三傳三禮國語國策世本紀年山海經以及先秦諸子，那就更不用說。

現在這十六萬多片甲骨，每片平均以十個字計算，就有了一百六十多萬言。內容豐富，問題繁複，殘文斷句，片羽吉光，無一不是商代的直接史料。幾千年來，僅存比較可靠的商代信史，盤庚上中下篇，總共不過一千二三百字。在短短的五十年裏，從前連殷人之後的孔子都嘆為不足難徵的商代文獻，（註一四）竟發現了一百六十餘萬言之多，這不能說不是中國近代學術史上一件驚人的盛事。

由這十六萬多片，一百六十多萬言的甲骨材料，不但商代的歷史，可以大講特講，就是商以前和商以後好多古史上的問題，也都可以從甲骨文裏求得解決。（註一五）

由甲骨文，我們曉得史記殷本紀大體可信。但也有少量錯誤的地方。（註一六）由甲骨文，我們曉得商朝後半期，已經是以農業為主要生產。（註一七）已經是一個家族意味的封建社會，至少已經進到了由奴隸社會到封建社會的過渡時期。（註一八）文化已經很高，青銅業已經發展到了最高峯。（註一九）因而推知在商以前一定還有一個長期的文化發達的時代。由甲骨文，我們曉得商周並不是兩個文化絕不相同的民族。相反的，舉凡周朝一切的文化禮制，在商代都可以找到它的前身。所謂「郁郁乎文哉！吾從周」，所謂「周公制禮作樂」，所謂「周公之聖，與周之所以王」，那都是後人想像的不可信憑的追述。（註二〇）

古代的故事傳說，有的也並不是完全沒有根據。譬如山海經一書，連太史公作史記，都以為它荒誕不經，摒而不引。歷代的藝文經籍志書，也往往把它列入小說家者流。但王國維却從大荒東經裏，發現王亥一名。這個極重要的殷代高祖，見於甲骨文，而不見於殷本紀。（註二一）又如尚書堯典，什麼人都曉得它的時代很晚，有人還說作於漢武帝時。（註二二）但我却從堯典和山海經裏邊，找出了整套的商代史料，四方風名。甲骨文，堯典和大荒經所記，實在是息息相通。（註二三）

從可信的材料中，證明有的說法，並不完全正確。在晚出的傳說裏，發掘有的學說，也不見得就根本無稽。也只有甲骨文，是最新式的工具，是最可靠的尺度和準繩。

中國的古典之學，如所謂經史子書，因為古今詞句語法的不同，和幾千年展轉傳鈔的錯誤，有很多地方，我們已經難懂。惟有甲骨金文，尚可據以比勘。近年來的學者，有所謂「新證」之學，如所謂古史新證（註二四）古籀新證（註二五）羣經新證諸子新證（註二六）等，都是根據甲骨金文等直接資料以印合古書的例證。

（註一一）看顧頡剛古史辨第一・二・五冊。楊寬中國上古史導論，收入古史辨第七冊上編。顧頡剛當代中國史學，勝利出版公司出版。胡厚宣古代研究的史料問題，商務印書館出版。周予同五十年來中國之新史學，刊學林第四輯。

（註一二）看顧頡剛古史辨第一・二冊。

（註一三）看王國維古史新證，清華研究院油印講義本，又刊國學月報二卷八・九・十號合刊，又刊燕大月刊七卷二期，又來薰閣影印手稿本。梁啓超古書真偽及其年代，清華研究院講義本，又中華書局飲冰室合集本，又單行本。

（註一四）論語八佾：「子曰：夏禮，吾能言之，杞不足徵也；殷禮，吾能言之，宋不足徵也。文獻不足故也，足，則吾能徵之矣。」

（註一五）看朱芳圃甲骨學商史編，中華書局出版。周傳儒甲骨文字與殷商制度，開明書店出版。胡厚宣甲骨學商史論叢初二集，齊魯大學國學研究所出版。及胡厚宣五十年甲骨學論著目（中華書局出版）歷史類論著。

（註一六）看王國維殷卜辭中所見先公先王考及續考，收入學術叢書，又刊觀堂集林卷九。又古史新證，刊見註一三。

（註一七）看胡厚宣卜辭中所見之殷代農業，收入所著甲骨學商史論叢二集，齊魯大學國學

235

研究所出版。

（註一八）看胡厚宣殷代封建制度考，收入所著甲骨學商史論叢初集第一冊。

（註一九）看胡厚宣中央研究院殷墟發掘出品參觀記，刊一九三七年四月二十八至三十日南京中央日報專刊；又刊中國藝術論叢，商務印書館出版。

（註二〇）看胡厚宣殷代封建制度考，殷代婚姻家族宗法制度考兩文，並收入所著甲骨學商史論叢初集第一冊。

（註二一）看同註一六。

（註二二）看顧頡剛從地理上證今本堯典為漢人作，刊禹貢半月刊二卷五期。

（註二三）看胡厚宣甲骨文四方風名考證，刊責善半月刊二卷十九期及二十二期，又收入所著甲骨學商史論叢初集第二冊。

（註二四）王國維著，刊見註一三。

（註二五）唐蘭古籀新證，北京大學講義本。

（註二六）于省吾有尚書新證詩經新證易經新證及諸子新證等書，自石印本。

今日では、科學的に中國文字の研究をしようとするのなら、問題はない。甲骨文は當然最も基本として重要な資料とすべきである。

中國古代の歷史は、近年學者たちの研究により、所謂「古への改制にことよせた古史觀」と「造成を重ねた古史觀」がある。（註一一）ただに三代以上の多くの傳說だけでなく、すべて意識的にか、無意識的にか、就ち禹・湯・桀・紂の故事である、澤山のまた往往にして重重累積の誇飾激に偏よる辭がある。（註一二）ここに於て中國第一部の古

236

代史書『尚書』は、只『尚書』盤庚の一篇だけが、時代は最も早く、比較的信じられる。其の餘の各篇と『周易』『毛詩』は、みな周以後の作品である。（註一三）『春秋』と三傳、『國語』『戰國策』、『世本』、『竹書紀年』、『山海經』以て先秦諸子に及ぶ、それについては更に云うまでもない。

現在この十六萬ちかくの片の甲骨は、毎片平均十個の字で計算すれば、就ち一百六十萬言ちかくある。內容は豐富で、問題は繁複、殘文斷句、片羽吉光は、ひとつとして商代の直接史料でないものはない。幾千年來、比較的信頼できる商代の歷史つまり、盤庚上・中・下篇でも總て一千二三百字に過ぎない。短かい五十年にあって、昔は殷人の後につづく孔子でさえもみな商代の文獻徵し難いと嘆いたが、（註一四）竟に一百六十餘萬言の多くを發見した、これは中國近代學術史上の一件に人を驚かす盛事でないと言うことはできないだろうか。

この十六萬ちかくの片により、一百六十萬言ちかくの甲骨材料は、但に商代の歷史を大いに講じ特別に講ずることができるばかりでなく、就ち商以前と商以後多くの古史上の問題さえもまたみな甲骨文から解決を求められる。（註一五）

甲骨文により、私たちは『史記』殷本紀は大體信ずべきことを知った。ただ少量の誤りの點がある。（註一六）甲骨文によれば、私たちは商朝後半期は、已に農業を以て主要生産をなしていたことを知った。（註一七）已に一つの家族を意味する封建社會であり、少しく已に奴隸社會より封建社會に至る過渡期に進んでいることである。（註一八）文化は已に大變高く、青銅業は已に最高峯に發展していた。（註一九）よりて商以前にきっとまた一つの長期の文化發達の時代にあったことを推知できる。甲骨文により、私たちは商周が決して

237

二つの文化は絕だ相ひ同じでない民族ではないことを知った。それどころか、凡そ周朝一切の文化禮制を擧げれば、商代にみなその前身を搜すことができる。所謂「郁郁乎として文なるかな、吾は周に從はむ」と、所謂「周公禮を制り樂を作る」と、所謂「周公の聖は、周の王たる所以なり」と、それはみな後人想像の信憑できない追述である。（註二〇）

古代の故事傳說は、あるものはまた並に完全に根據があるのではない。譬へば『山海經』の一書の如きは、太史公が史記を作ったことさえも、みなその荒誕不經と思うのは、除いて引いていない。歷代の藝文經籍志の書は、また往往にしてそれを小說家の流れに列入している。但だ王國維は却って「大荒東經」より、王亥の一名を發見した。これは極く重要な殷代の高祖で、甲骨文に見え、殷本紀には見えない。（註二一）又尚書堯典のごときは、どのような人もみなその時代のたいへん遅いことを知っている。人はまた漢の武帝に作ったという。（註二二）但だ私は却って「堯典」と『山海經』より、セットの商代史料四方風名を選出した。甲骨文は、「堯典」と「大荒經」に記すところ、實に息息として相ひ通ずるものがある。

信ずべき材料中より、ある說く方法を證明することはあるものは完に正確とはいえない、遅く出た傳說の中でも、ある學說を發掘して、根本的に無稽とはいえない。また只甲骨文がありさえすれば、最新式の工具であり、最も信頼すべき尺度と物事の標準である。

中國の古典の學は、所謂經史子の書の如きは、古今の詞句語法は同じでないのであるから幾千年展轉と傳鈔の誤りがあり、大變多くあり、私たちは已にわかりにくい。ただ甲骨金文には、尚據りて比較校勘すべきである。近年來の學者は、所謂『古史新證』（註二四）『古籀新證』（註二五）『羣經新證』・『諸子新證』（註二六）等の如きは、みな甲骨金文等の直接資料を根據として古書の例證を印合している。

238

（註一一）顧頡剛『古史辨』第一、二、五冊を見よ。楊寬『中國上古史導論』、『古史辨』第七冊上編所收。顧頡剛『當代中國史學』，勝利出版公司出版。胡厚宣『古代研究的史料問題』、商務印書館出版。周予同『五十年來中國之新史學』、『學林』第四輯に刊す。

（註一二）顧頡剛『古史辨』第一、二冊を見よ。

（註一三）王國維『古史新證』、清華研究院油印講義本、又『國學月報』二卷八、九、十號合刊に刊す，又『燕大月刊』七卷二期，又來薰閣影印手稿本。梁啓超『古書眞僞及其年代』，清華研究院講義本，又中華書局『飲冰室合集本』，又單行本。

（註一四）『論語』八佾に「子曰く、夏禮は吾能く之を言かむとせるも、杞徵するに足らざるなり、殷禮も吾能く之を言かむとせるも、宋徵するに足らざるなり、文と獻と足らざるが故なり、足らば則ち吾能く之を徵せむ。」と。

（註一五）朱芳圃『甲骨學商史編』を見よ、中華書局出版。周傳儒『甲骨文字與殷商制度』，開明書店出版。胡厚宣『甲骨學商史論叢』初、二集，齊魯大學國學研究所出版。及び胡厚宣『五十年甲骨學論著目』（中華書局出版）「歷史類」論著。

（註一六）王國維『殷卜辭中所見先公先王考』及び『續考』を見よ。『學術叢書』所收、又『觀堂集林』卷九に刊す。又『古史新證』、註一三に刊見。

（註一七）胡厚宣『卜辭中所見之殷代農業』を見よ、著す所の『甲骨學商史論叢』二集所收、齊魯大學國學研究所出版。

（註一八）胡厚宣『殷代封建制度考』を見よ、著す所の『甲骨學商史論叢』初集第一冊所收。

（註一九）胡厚宣『中央研究院殷墟發掘出品參觀記』を見よ、一九三七年四月二十八より三十日に至る南京『中央日報』專刊に刊す；又『中國藝術論叢』を刊す、商務印書館出版。

（註二〇）胡厚宣『殷代封建制度考』、『殷代婚姻家族宗法制度考』兩文を見よ、並に著す所の『甲骨學商史論叢』初集第一冊所收。

（註二一）同註一六を見よ。

（註二二）顧頡剛『從地理上證今本堯典為漢人作』を見よ、禹貢半月刊二卷五期に刊す。

（註二三）胡厚宣『甲骨文四方風名考證』を見よ，『責善半月刊』二卷十九期より二十二期に及ぶ、又著す所の『甲骨學商史論叢』初集第二冊所收。

（註二四）王國維著、註一三に刊見す。

（註二五）唐蘭『古籍新證』、北京大學講義本。

（註二六）于省吾に『尚書新證』『詩經新證』『易經新證』及び『諸子新證』等の書がある、石印本。

中國史前的考古，近年以來，從周口店猿人，到舊石器和新石器時代的文化遺址，雖然也發現了很多，（註二七）但因為材料的零碎，只能作點的和線的研究，還不容易構成面體，和有史時代接連起來。勉強可以藉作渡越的橋梁的，也應該是甲骨文字。（註二八）史前遺址的陶石骨器，都可以相互和殷墟所發現的來比較，以定其相對的年代。殷墟所發現的器物，則以甲骨文字知其為商朝後半期的東西。

還有，在社會發展史學習高潮的今天，甲骨學也是最基本的一種學問。

學習社會發展史，每一個人都考慮到社會發展史同中國社會史配合的問題，而急切的想要解決。因此商周到底是一個什麼社會？說它是奴隸社會，是不是還有問題？所謂「亞細亞生產方式」究竟有沒有？中國的封建社會，究竟從什麼時候開始？所謂「前封建社會」，在中國史上，是否能夠找得出？中國史上究竟有沒有一個奴隸社會階級？中國史上的奴隸社會，究竟在什麼時候開始？又在什麼時候，才過渡到另外一個社會階級？都是學術界正在爭論着的問題。尤其在最近，由於蘇聯考古學歷史學家吉謝列夫來華演講，提出了許多新的啓發，這一切問題，更普遍的展開了熱烈的討論。

但，這些問題，決不是只憑主觀的想法，就可以解決。也不是單靠真僞雜糅的幾篇書經詩經，就可以得到結論。惟有十六萬多片，一百六十多萬言的甲骨文，商朝直接的信史，才是解決這許多問題的有力的憑藉。

引用甲骨文，根據甲骨文，必先對它有充分的了解和研究，否則也會犯了錯誤。

譬如有人說商朝是奴隸社會，常喜歡引甲骨文的奴、僖、臣、妾、婐、妌、好、嬗等字來證明。說臣、僖是男奴，妾、婐、妌、好、嬗是女奴。奴是奴隸的共稱。但「奴」字實應釋嘉，意思是吉祥。「臣」是官名，地位很高。「妾」的意思是配偶。「婐」「妌」「好」「嬗」，都是人名，乃武丁的后妃。都不能作為殷為奴隸社會的證據。倒是甲骨文說：「乙巳卜，殼，貞王大令衆人曰，𦔳田其受年。十一月」。這種「衆人」究竟是什麼身分，那才是解決商朝究竟是否奴隸社會的關鍵和焦點。

又如還有人因甲骨文有漁、斂、田、獸等字，所以商朝應該是漁獵社會。因甲骨文有牧字，所以商朝人應該還營着游牧生活。因甲骨文有焚字，所以商朝的農業，應該還很幼稚，商朝人還在使用着原始的燒田耕作法。又以甲骨文有買、賣、資、貨、財、貸等字，所以商朝已

有商業交易的行為。又以甲骨文有父、母、祖、妣、妻、妾、嬪、妃、兄、弟、姊、妹、兒子、姪、孫等字，所以商朝已有宗法家族的稱謂。這些也都是大有問題。詳細的解說，都另見拙著古代研究的史料問題，我們於此不再重述。

要想避免這一種斷章取義望文生解或咬文嚼字的錯誤，那只有對甲骨文作進一步較深的了解和研究。所以說在社會發展史學習高潮的今天，甲骨學也是最基本的一種學問。

關於甲骨學一般通俗總括的論述，從事於專題研究的人，往往不大願作；一知半解的著作，又常是淺陋而多誤。我以前也寫過幾篇文章，（註二九）有的登在報刊，有的在內地付印，流傳都很少。而且時間久了，有許多地方應該修正和補充。現在趁這甲骨學五十週年的時間，再對甲骨學作一個概括的通俗的敘述。

但因為本書規定篇幅的限制，所以先只講甲骨文發現的歷史，和出土材料的統計。另外關於甲骨學一般的知識，當再於甲骨學要論一書中詳之。

（註二七）看胡厚宣古代研究的史料問題，商務印書館出版。

（註二八）詳見胡厚宣商周史斷代的意義。

（註二九）胡厚宣甲骨學概要，刊大學月刊二卷一期。又甲骨學簡說，刊一九四六年四月十九日成都中央日報專刊。又甲骨學提綱，刊一九四七年一月八日天津大公報文史周刊十三期；又一九四七年一月十五日上海大公報文史周刊十三期。又甲骨文發現之歷史及甲骨學研究之經過兩文，都刊在一九四六年四月二十日成都中央日報專刊。又甲骨文發現之歷史及其材料之統計，收入甲骨學商史論叢初集第四冊。又甲骨學緒論，收入甲骨學商史論叢二集第二冊。

中國史前の考古は、近年以來、周口店猿人より、舊石器と新石器時代の文化遺址に至るまで大變多く發見されたというけれども、（註二七）但だ材料に零碎のために、ただ點と線の研究を可能にするだけで面體を構成し、有史時代と接續を始めるのに容易ではない。むりに渡越し橋梁をなすことのできるものは、また當然甲骨文字であるべきである。（註二八）史前遺址の陶石骨器は、みな相互に殷墟發現する所のものと比較することができそれで其の相對的年代を定めることができる。殷墟發見する所の器物は、則ち甲骨文字を以てその商朝後半期の物であることが知られる。

また社會發展史の學習の高潮な今日では、甲骨はまた最も基本的な一種の學問である。

社會發展史を學習するときに、だれでもみな社會發展史と同じく中國社會史の配合の問題を考慮するようになり、急切に解決を必要とせんことを思ふ。此れによりて商周は一體一つのどのような社會であったろうか、それは奴隸社會と云うのは、また問題があるのではないか、所謂「アジア生產樣式」は結局あったのか、中國の封建社會は、結局どのような時に開始されたか、所謂「前封建社會」は、中國史上にあって、さがしだすことができるのか、中國史上は結局一つの奴隸社會の段階があったのだろうか、中國史上の奴隸社會は、結局どのような時に開始されたか、又どのような時になって、やっと外の一個の社會段階にうつれたかどうか、みな學術界では論争になっている問題である。尤も最近では、ソ連考古學歷史学家の吉謝列夫は中國に來て講演するによると、多くの新しい啓發を提出した。この一切の問題は、更に普遍的に熱烈な討論を展開した。

但だ、この問題は、決してただ主觀によった考へ方で就ち以て解決することができるものでない。また單に同じ眞僞雜糅の幾篇かの『書經』『詩經』で、就ち結論に至るべきではない。ただ十六萬ちかくの片　一百六十萬言ちかくの甲骨文　商朝直接の眞の歷史で、少しくこの多くの問題を解決するのに有力な憑藉があるのである。甲骨文を引用し、甲骨文を根據とするには、必ずまづその充分な了解と研究がなければならず、なもないと則ちまた誤りを犯すことに出會う。

譬へばある人商朝は奴隸社會であると說くのは、常に歡喜して甲骨文の奴、僕、臣、妾、㜽、好、嬗等の字から證明する。（殷代の社會・『甲骨文字研究』註三」・第一輯三五一頁參見）說くところは臣・僕は男奴であるという、妾・㜽・妌・好・嬗は女奴であると。奴は奴隸の共稱である。但だ「奴」字は實に應に嘉と釋すべきであり、わけは吉祥である。「臣」は官名であり、地位は大變高い。「妾」のわけは配偶である。「㜽」「妌」「好」「嬗」は、みな人名であり、乃ち武丁の后妃。みな殷は奴隸社會たる證據とすることは不可能である。それなのに甲骨文にいう「乙巳卜、㱿、貞王大令衆人曰、𦔮田其受年。十一月」と。この種の「衆人」は結局どのような身分であろうか。それはあの商朝が奴隸社會かどうかを解決することが肝じんかなめと焦點なのである。

又またある人は甲骨文に漁、敏、田、獸等の字があることにより、商朝は當然漁獵社會とすべきであるとする。甲骨文に牧字があるによって、商朝人は當然また游牧生活を營んでいた。甲骨文に焚字あるによって、商朝の農業は、當然また大變幼稚で、商朝人はまた原始の燒田耕作法を使用していた。また甲骨に買、賣、資、貨、敗、貸等の字があるによって、商朝は已に商業交易の行爲があった。また甲骨文に父、母、祖、妣、妻、妾、嬪、妃、兄、弟、姉、妹、兒、子、姪、孫等の字あるによって、商朝に已に宗法家族の稱謂があった。これらはそれまた大きな問題である。

詳細な解說は、みな別に拙著『古代研究的史料問題』を見よ。私は此において再び述べない。

要するにこの一種の斷章取義、望文生解あるいは咬文嚼字の誤りを避けようとするのなら、その甲骨文に對して一歩進んでやゝ深い了解と研究をなすべきである。だから社會發展史學習の高潮な今日では、甲骨學はまた最も基本となる一種の學問である。甲骨學一般の通俗の總括の論述に關して、專門題の研究に從事する人は、往々にして大頗の作ならず、一知半解の著作もまた、常に淺陋にして多くの誤りがある。私は以前また幾篇かの文章を書いたことがある。（註二九）有るものは新聞にのり、有るものは本國で印刷されたが傳わっているものは大へん少くない。そのうえ時間がたつと、多くの點に當然修正と補充をすべきことになる。現在この甲骨學五十週年の時をかりて、再び甲骨學に對して一つの概括的に通俗の敍述を作った。

但だ本書には紙面の都合があるので、先に只だ甲骨文發現の歷史と出土と材料の統計を講ずる。

他に甲骨學一般の知識に關しては、當に再び「甲骨學要論」（書中においてこれを詳しくする。

（註二七）胡厚宣『古代研究的史料問題』を見よ、商務印書館出版。

（註二八）詳しくは胡厚宣『商周史斷代的意義』に見える。

（註二九）胡厚宣『甲骨學概要』は、『大學月刊』二巻一期に刊す。また『甲骨學簡說』は、一九四六年四月十九日成都の『中央日報』專刊に刊す。また『甲骨學提綱』は、一九四七年一月八日天津の『大公報文史周刊』十三期に刊す；また一九四七年一月十五日上海の『大公報文史周刊』十三期。また『甲骨文發現之歷史』及び『甲骨學研究之經過』の兩文は、みな一九四六年四月二十日成都の『中央日報專刊』に刊す。また『甲骨文發現之歷史及其材料之統計』は、『甲骨學商史論叢』初集第四冊所收。また『甲骨學緒論』は、『甲骨學商史論叢』二集第二冊所收。

七〇、戰後寧滬新獲甲骨集[一]

序言

余既編京津所獲甲骨五千九百六十片爲戰後新獲甲骨集之一，友人李亞農同志推薦於中國科學院，謀爲之影印出版。繼又編寧滬所獲爲戰後新獲甲骨集之二，則來薰閣主人陳濟川先生數年以來，謀爲刊行，今始付之實現者也。

抗日戰興，時逾八載，一九四五，倭寇投降。余自成都遄赴京津，蒐訪淪陷期間甲骨出土情形，並購得實物及拓本萬片以上。曾聞一九四〇年前後，安陽出土甲骨一大坑，爲上海禹貢古玩行葉叔重氏購去，片大字多，盛兩網籃。翩自北京重返成都。翌歲，東來上海，探葉氏於昭通路，時當傍晚，葉氏方攜古物一箱，擬即搭夜車前往南京參加某項文物展覽，開箱視之，固在北京所聞兩網籃之甲骨。一時忻快，匪可言宣，商談良久，以厚值留之。並悉此批甲骨，聞有分散，亦均設法一一羅而致之。時代多屬於廩辛康丁武乙文丁四王，大約出於小屯村中。揀棄疑僞，得六七百片。於是編之爲卷一。

一九四六年歲末，余自濟南來南京，轉道上海，以交通中斷，留教復旦大學。暇者涉獵場肆，得識中國古玩社周氏黄生，承其代購甲骨一批，一百六七十片，字大塗朱，喜未曾有。因其多屬於武丁及帝乙帝辛時期，與羅振玉早年所得者相類似，大約出自小屯村北。於是編之爲卷二。

此外數年以來，往還寧滬，於商肆藏家，三五偶見，兼收並畜，細大不捐，計其所得，亦二三百片。於是編之爲卷三。

總合三卷，得片一千一百四十有三。爲應甲骨學研究之急需，不敢自秘，未待考釋，先予

發表。以其俱在寧滬所得，故名爲戰後寧滬新獲甲骨集。

余、既に京津獲る所の甲骨五千九百六十片を編して「戰後新獲甲骨集之一」と爲す。友人李亞農（李亞農・『殷契摭佚續編』註[二]、本輯一九八頁參見）同志は中國科學院に推薦す、謀りてこれが影印出版を爲す。繼いでまた寧滬に獲る所を編して「戰後新獲甲骨集之二」と爲す、則ち來薰閣主人陳濟川先生[二]數年以來、謀りて刊行を爲し、今、始めてこれを付して實現する者なり。

抗日戰興る、時に八載を逾え、一九四五、倭寇投降す。余、成都より遄ち京津に赴き、淪陷の期間甲骨の出土情形を蒐訪し、並に實物及び拓本萬片以上を購得す。曾って聞くならく一九四〇年前後、安陽出土の甲骨一大坑は、上海禹貢古玩行の葉叔重氏[三]の購去と爲る、片大きく字多く、兩網「二つの包みくるんだ」の籃（かご）に盛る。翩いで北京より重（ふたたび）成都に返る。翌歲「一九四六年」、東して上海に來り、葉氏を昭通路に探し、時に傍晚に當り、葉氏は方に古物の一箱を携え、擬して即ち夜車に搭じ前に南京に往き某項の文物展覽に參加す、箱を開いてこれを視るに、固より北京に在りて聞くところの兩網の籃の甲骨。一時忻快、言宣ぶ可きに匪ず、商談良に久く、厚值を以てこれを留む。並に悉く此の批の甲骨は、間〻分散有り、また均しく法を設けて一一羅ねてこれを致す。時代は多く廩辛・康丁、武乙・文丁の四王に屬す。大約、小屯村中に出づ。疑僞を揀棄し、六七百片を得。是に於てこれを編して卷一と爲す。

一九四六年の歲末に、余は濟南より南京に來り、轉じて上海に道し、交通中斷をもって、留まりて復旦大學に教ふ。暇者、場肆を涉獵し、中國古玩社周氏黄生[四]を識り得て、

其の代を承け甲骨一批を購ふ、一百六十七片は、字、大きく朱を塗り、喜び未曾有なり。因って其の多くは武丁及び帝乙・帝辛の時期に屬す、羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）と早年に得るところのものと相い類似し、大約、小屯村北より出ず。是に於てこれを編して卷二と爲す。

この外、數年以來、寧滬を往還し、商肆藏家に於て、三五偶見し、兼收並に畜へ、細大にして捐てず、其の得る所を計ふれば、亦二三百片なり。是に於てこれを編して卷の三と爲す。

三卷を綜合し、片一千一百四十有三を得。應に甲骨學研究の急需は、敢えて自から秘とせず、未だ考釋を待たず、先に予、發表をすべき爲し以て其れ俱に寧滬に在りて得る所、故に名づけて『戰後寧滬新獲甲骨集』と爲す。

註[一]　本書は胡厚宣氏が戰後新獲した甲骨集四部作の一つである。全三卷よりなり、卷一、六八八片、卷二、一六六片、卷三、二八九片、全一一四一片を錄す。編纂方法は『戰後南北所見甲骨錄』の序例に述べるのと同じであるが、甲骨の配列は、時代の順序を以てし、更に每期の甲骨はその內容により氣象、農產、祭祀、田獵、征伐、行止、災禍等々に類別し、甲骨の斷代は董作賓に從わず、第一を盤庚小辛小乙武丁時期、第二を祖庚祖甲時期、第三を廩辛康丁武乙文丁時期、第四を帝乙帝辛時期とする。收錄の甲骨で特に目のつくものは骨片が大きく字も大きいものが多く、牛胛骨の卷一の一一〇片と一一一片は最大最全で且つ文字の最も多いものであろう。出版は一九五一年、二冊。北京・來薰閣書店。

註[二]　陳濟川　事略不明。

註[三]　葉叔重　事略不明。

註[四]　周黄生　事略不明。

擧其特點，如二卷二四片二六片與殷虛書契菁華三片爲同文，二卷二五片二七片與殷契菁華四片爲同文，一卷一九七片與雙劍誃殷契駢枝三編附圖一爲同文，一卷五九七片與殷契摭佚續編二〇一片爲同文，俱爲一事多卜之例。二卷一二片卜兆刻過，與歷史語言研究所第十三次發掘殷墟一二七坑所出甲骨，同其作風。一卷二一七片二一九片二五〇片五七九片，二卷五六片爲毛筆濡朱所書。二卷二四片二五片二六片二七片六三片七五片刻字塗朱。二卷三〇片刻字塗墨。二卷二八片二九片三一片同版刻字朱墨兼塗。足徵甲骨文字已由實用階段達到極高之藝術階段。

由一卷一一九片言「高且河」，知河爲祖先之名。由三九七片言「隱鹿其南微𡴬？其北微𡴬？」知微爲田獵之一法。由一四八片伐之作𢦏，知殷代伐祭之人恒爲羌。由二卷四八片望之作𦣠，知望字實像人足立土丘，擧目望看之狀。由一卷四二片五三七片言「吉弦用」，二四〇片五三六片言「大吉弦用」，二七八片言「大吉用」，二四六片五八〇片言「不用」，五八一片言「弦不用」，可證用爲行用，殷人之卜，因大吉而施行。

餘如三卷九四片言「余一人」，一卷四四一片四四二片言「二方白」，二〇一片言「父甲門」，三一九片言「南室」，一五六片言「三丁」，一七五片言「日乙」，二〇六片言「二

父多父」，一九七片言「下土」，一八六片言「宗丙」、三三三片言「其隮其亞」，一九三片言「鼎豙」，二九三片二九四片四三七片四三八片言「用執」，五〇六片言「一族三族馬族」，四二二片言「匋邑」，五二一片五二二片言「王畜馬在茲寓」，四八四片言「火不𠀠」，四八二片四八三片言「其水木水」，三四九片言「弜𢀷」，五五片四六九片言「王囚」，五一片言「習二卜習三卜習四卜」，一八六片矣之作，一四一片「高且王亥」之作，四〇三片四〇四片四〇五片射之作，以及罕見字之作（五〇〇）（三七七）（三〇六）（一四）（一三五）（二〇一）（五九七）（三〇七）（三九五）（二三一）者，多至不可勝舉，而皆極重要。

二卷一四五片左方刻一圖畫，雖似為帝乙帝辛時習字者所為、但其象以弓矢射麋於京室，其旁另有一豕牛之狀，頗為逼真，固一三千餘年前勞動人民所創造極寶貴之藝術作品。

至於長文大片，完整卜辭，其有裨於考究歷史經濟社會禮制風俗，尤非於此短篇序例，所能盡書。發揮暢論，請俟釋文考證或當另立專篇以詳之。

書成，承沈尹默先生惠予題字，魏建功先生為題書簽，統於此敬致謝意！

一九五一年三月，胡厚宣 於復旦大學之筑莊。

其の特點を擧ぐれば、二卷二四片・二六片と『殷虛書契菁華』二片とは同文為り、二卷二五片・二七片と『殷虛書契菁華』四片とは同文為り、一卷五九七片と『雙劍誃殷契駢枝三編』附圖一とは同文為り、一卷五九七片と『殷契摭佚續編』二〇一片とは同文為り、倶に一事多卜の例為り。二卷十二片の卜兆刻過は、歷史語言研究所第十三次殷墟を發掘せし一二七坑に出づる所の甲骨と、その作風同じ。一卷二一七片・二一九片・二五〇片・五

七九片、二卷五六片は、毛筆朱を濡して書す所なり。二卷二四片・二五片・二六片・二七片・六三片・七五片は字を刻みて朱を塗るなり、二卷三〇片は字を刻みて墨を塗るなり、二卷二八片、二九片、三一片は同版に字を刻み朱墨兼塗す。甲骨文字已に實用段階より極高の藝術階級に到達するを徴するに足る。

一卷一一九片に言ふ「高且河」に由り、河は祖先の名為るを知る。三九七片に言ふ「陵鹿其南徴𢀷？其北徴𢀷？」に由り、徴[五]は田獵の一方法為るを知る。一四八片の伐はに作るに由り、殷代伐祭の人は恒に羌為るを知る。（伐、『古文聲系』註[六十三]・第二輯四一〇頁參見）二卷四八片の望の[六]に作るに由り、望字は實に人土丘に足立し、目を擧げて看るを望むの狀に像どるを知る。一卷四二片・五三七片に言ふ「吉茲用」、二四〇片・五三六片に言ふ「大吉茲用」、二七八片に言ふ[七]「大吉用」、二四六片・五八〇片に言ふ「不用」、五八一片に言ふ「茲不用」により、用は行用為り、殷人の占は、大吉に由りて施行せらるを證す可し。

餘は三卷九四片に言ふ「余一人」[八]、一卷四四一片・四四二片に言ふ「二方白」[九]、二〇一片に言ふ「父甲門」[十]、三一九片に言ふ「南宣」[十一]、一五六片に言ふ「三ヿ」[十二]、一七五片に言ふ「日己」[十三]、二〇六片に言ふ「二父多父」[十四]、一九七片に言ふ「下土」[十五]、一八六片に言ふ「宗丙」[十六]、三三三片に言ふ「其隮其亞」[十七]、一九三片に言ふ「鼎豙」[十八]、二九三片、二九四片、四三七片・四三八片に言ふ「用執」[十九]、五〇六片に言ふ「一族三族馬族」[二十]、四二二片に言ふ「匋邑」[二一]、五二一片・五二二片に言ふ「王畜馬在茲寓」[二二]、四八四片に言ふ「大不𠀠」[二三]、四八二片・四八三片に言ふ「其水木水」[二四]、三四九片に言ふ「弜𢀷」[二五]、五五片、四六九片に言ふ「王囚」[二六]、五一八片に言ふ「習二卜習三卜習四卜」[二七]、一八六片に矣の[二八]に作り、一

四一片に「高祖王亥」の亥はに作り、（亥、『殷虛書契考釋小箋』註[五一]・第一輯二一九頁參見）四〇三片・四〇四片・四〇五片に射の[二九]に作り、以て罕れに見る字の[三十]（五〇〇）[三一]（三七七）[三二]（三〇六）[三三]（一四）[三四]（一三五）[三五]（二〇一）[三六]（五九七）[三七]（三〇七）[三八]（三九五）[三九]（二三一）に作るに及ぶが如き者は、多く勝へて擧げる可からざるに至る。而して皆な極めて重要なり。

二卷一四五片[四十]の左方に一圖畫を刻し、帝乙帝辛の時に習字を為す者の所為（しわざ）に似たると雖も、但、其の弓矢を以て京室に射麋するに象どり、其の旁は另に一豕牛の狀有り、頗る逼真為り、固より一三千餘年前の勞働人民の創造する所の極く寶貴の藝術作品なり。

長文の大片に至って、完整の卜辭は、其れ歷史經濟社會禮制風俗を考究するに裨ひ有り、尤も此の短篇の序例に非ず、能ふるところ盡く書す。暢論を發揮し、請ふらくは釋文考證或は當に另に專論を立て以てこれを詳にするを俟たん。

書成り、沈尹默（沈尹默、『鐵雲藏龜零拾』註[三]・第三輯九六頁參見）先生に題字を惠し、魏建功（魏建功、『殷契卜辭』註[四]・第二輯一七九頁參見）先生は題書の簽を為すを承け、統て此に敬んで謝意を致さん。

一九五一年　胡厚宣（胡厚宣、『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）

復旦大學の筑莊にて。

註[五]

徴　牧の卜文はに作る。徴はに作り、牧と彳に从ふ。李孝定氏は牧字にこの字を入れている。（『甲骨文字集釋』第三、一〇八一）徴は牧と區別されるべきものであるが例文が少なく明らかでない。

註[六]

望　説文解字に「出亡在外、望其還也。从亡、朢省聲」と解す。白川静博士はこの字を解されていう「もと望・朢は一字である。卜文の字は臣と壬に従うが、臣は目の形、すなわち企望の字である。月相をいう字に多く用いて朢となり、のち臣を亡聲にかえて望に作る。出亡者の歸還を望むというのは、望文の訓にすぎない。」（『説文新義』巻十二、一七三頁）と。胡氏のあげる卜文は臣と壬と土に从う。普通はに作る。

註[七]

用　説文解字に「可施行也、从卜从中、衞宏説」と解す。白川静博士はこの字を解されていう「徐鉉は「卜中、乃可用也」とし、段注等多くその説に據る。六書故に鐘鏞の象形とする説を出し、徐箋もその説に依る。述林四〇には桶の形とし、金文の簸の下體が用形に従うことを證としている。しかし卜文の字形は鐘鏞の象ではなく、おそらく牆柵の象であろう。甬もこの形に従い、樊籠の象において通ずる。疑疑に、字は卜と八と二に従い、三人占うときは二人に従う意であるとし、舒藝堂隨筆には由の倒文に従うといい、金氏の管見に、字を卜宁に従う形にして貯積の用否を卜する義であるという。また斠詮には卜中にして用牲の義とする。字例三一六も卜中説をとり、「按卜兆向中、即為可用」とし、字は中の字形に従うものではなく、「字倚卜畫其兆現於中形」とする解釋である。聞載に字は城垣の形にして、後に土墉が行なわれるようになって用・墉の字が分化したとする。聞載の説が最も參考とすべきであるが、ただ上下缺畫のところを城闕の形とするのは、比類を失したものとすべく、宇閑の柵など

の形であろう。これを施用の義に用いるのは假借であろうが、卜辭には出遊畋獵をトするとき、その叶うものには「茲御」・「茲用」のようにいい、すでに施行の義に用いられている。「衛宏説」の衛宏は後漢書儒林傳にみえ、字は敬仲、も詩を謝曼卿に學んで詩序を作り、のち杜林に古文尚書を受けて訓旨を爲り、古學盛行の先驅をなした。その古文官書には古文奇字多しといわれ、古籍を竄亂するものとされるが、孫詒讓の説によるとその作者は晉の衛恒であるという。說文に引く衛宏説は二條、何れもその書の訓義中にみえるものであろう。古文の字形は魏石經にみえる。」（『說文新義』巻三・二二四頁）と。

註〔八〕 余一人　卜文は「个一卜」。胡厚宣氏は「余一人」と稱する卜文例をあげ、經籍の例多數によって、天子の自偁であることを證した。（『釋余一人』歷史研究・一九五七・一。）白川靜博士は子・余・子某の關係について次の片をあげていう「己丑子卜貞、子鬥手出敱」己丑子卜貞、余又手出敱　前・八・一〇・一十京大　この二辭は接合された一片中の刻辭であるが、ここには、子・余・子鬥の名が並んで見えている。この余は、子鬥と對響されてゐること、手出という命令の對象とされてゐることから考へると、單なる代名詞でないともいひうるので、さきにあげた貞人子・余・我の余に當ると見てよい。また　甲戌卜王、余令角帚、載朕事　佚・一五　粹一二四四　の例では、王が自ら余と稱してゐる如くであるけれども　壬戌……王妻……載朕事、三月　京津二二四五　□寅卜王、𠂤弗其載朕事、其𢦏余……　拾掇・九五　方御、戴、載朕由　拾掇・二・六五

の諸例を參照すると、王と余とは別人であるらしく思はれる。」（『甲骨學商史論叢』五集・四一頁）と余は貞人の余と解されるもの、あるいは王が自らが余と稱する場合があると解されている。

註〔九〕 二方白　卜文は「壬戌卜王其𠂤二方白　大吉」四四二とあり、二方白は地名であろう。

註〔十〕 父甲門　卜文は「又𠬝其征𠂤乂十門」二〇一とある。

註〔十一〕 南亶　卜文は「丁巳卜于南㐭十日」三一九とある。卜文に「弜亶方」後・上・二四・七とある亶方は小國名であるが、ここにあげる南亶も國名にちかいものと思はれる。

註〔十二〕 三匚　卜文は「辛巳卜三匚豆于……」一・五六とある。郭沫若氏は「「三匚」之文屢見、「三匚」者、余意即匚乙匚丙匚丁也」（『殷契粹編考釋』第一一八片・三八六頁）と報乙・報丙・報丁とする。

註〔十三〕 日己　卜文は「乙未卜其又歲于𡆥茲用」とある。胡厚宣氏は𡆥を日己とする。

註〔十四〕 二父多父　卜文は「于二乂弓乂庚吉、于臣乂吉」二〇六とある。二父多父は熟語ではない。上文は二父己父庚であり、下文は多父である。

註〔十五〕 下土　卜文は「丁酒叀桒、乙酒叀桒、甲酒叀桒一𡿧小乙桒其、其下桒、其上桒、从𠂤」一九七とある。下土は一𡿧を指すようであるが、𡿧を土と釋しているが土は𡈼に作る。この字は卜文𡿧の自に似ている

註〔十六〕 宗丙　卜文は「辛丑卜𠬝介丙」一八六　宗丙は祖先名。同版に祖乙の名がみえる。

註〔十七〕 其隩其亞　卜文は「𠀠隩𠀠亞」一五三に作る。意不詳。

註〔十八〕 鼎家　「其鼎家父丁」一九三に作る。意不詳

註〔十九〕 用執　卜文は「□卜其用執王受」二九四に作る。

註〔二十〕 一族三族馬族　卜文は「叀三族馬令、叀族令、𦥑令三族」五〇六に作る。一族三族馬族の六字は熟語ではない。卜文に一族・三族はあるが馬族はない。族は說文に「矢鋒也、束之族族也、从㫃从矢」と解す。白川靜博士はこの字を次のように解されている。「段注に鏃に從う字に作り、「今字用鏃、

古字用族、金部曰、鏃者利也、則不以爲矢族字矣」とし、鏃の初文とする。これを族類の意に用いるのは、詩の魯頌泮水の毛傳「五十矢爲束」の引伸の義であるという。また說解の文として、さらに「㫃所以標衆、衆矢之所集」の十字を補い、「韻會・集韻・類篇皆引此、而衍一曰从三字、則不可解矣」とするが、「一曰从㫃」以下はおそらく補記の文で、段氏はこれを一曰の義としては通じがたいとして、上三字を削って錄入したものであろう。また引伸して族類の義があることについて、「謂旌旗所以屬人耳目、旌旗所在、而矢咸在焉、衆之意也」とするも、要領をえない。釋例に、字は矢を主とするもので、これを㫃部に屬するは疑うべく、「宋鈔小徐本、汪刻本皆無族字、顧本乃有之、是以大徐本補之也、蓋無者是也、族以矢爲主、蓋矢部捝佚、後人誤補于㫃部也」と論じ、鏃を本義とする字であるとしている。劉氏の古本字考二にも鏃を本義とし、「从矢从㫃、會意」とするが會意の義を說かず、金氏の管見に、㫃は「旌旗之末垂者」玉篇であるから、「言族之鋒、若旌旗所垂之末、故以矢鋒釋之也」としてまた鏃を本義とするも、字はやはり族類の義であろう。字が矢に従うことについて、徐箋に「矢所叢集、謂之族、族湊也、言湊集於侯中也、因之、矢鋒謂之族、射禮以旗唱獲、倚旌於侯中、當射則以旌居乏、而待獲、故从矢在㫃下、指事兼會意」とし、射儀において、旌を以て射の中否を示すゆえに㫃に従うとする。羅釋中・四四葉に「軍旅之下、矢所集也」というのは段注と同じ。丁山は字を族組織を示す字とし、「矢所以殺敵、㫃所以標衆、基本義應是軍旅的組織」として清人八旗の制をあげ、唐書突厥傳に「分其國爲十部、號爲十設、毎

設賜以一箭、故稱十箭、箭者矢也、族字从矢、當又與部落稱箭的涵誼相同、是八旗十箭的故事」と論じ、族の起源は氏族社會の軍事組織に發するという。これはおそらく、兒笘錄に「旗者軍中部族也、从㫃者、所以指麾也、从矢者、所以自衞也、國語楚語曰、在中軍、王族而已、族字之義、韋昭所說、最為得之、經傳族字、惟此為本字本義」としている考え方を承けるものであろう。しかし矢を「所以殺敵」、あるいは「所以自衞」と解するのみでは、なお族の義を説くのに十分でない。別に葉玉森に交に從うとする説があり、「族字之原、應創造于酋長時代、古之酋長、必俘虜異族之人、而歸屬于旗下、以擴張其部衆、故族字象交脛人、在旗下、交脛人卽俘虜也」說契・九葉と虜酋の義とするが、形義ともに誤る。六書疏證にも、衞聚賢の人に從うとする説をとり、矢は大の字形の譌變としているが、卜文・金文の字形を無視したものとすべきである。字がもし矢鏃を意味するものならば㫃に從う要なく、矢鏃の初文とする説は明らかに誤である。また矢が敵を殺し、自ら衞るものであるとしても、これを㫃下に加えることによってその義があらわれるものでもない。「衆矢之所集」とする解は叢集の義を説きえても、族の本義に關しない。族は族類を示す語である。假借義證に族類の義を假借とし、「魏風汾沮洳、殊異乎公族、毛傳以為公屬、齊語、工立三族、注、族屬也、是本借族為族類字」というが、屬は牝牡相屬する字でもと別義。㫃は旌字にみられるように、本貫を離れて他に出行する際に揭げる氏族の旗識であり、㫃にすでに氏族標識としての意味が含まれている。また矢は、おそらく誓約に用いるものであろう。矢に矢誓の義があり、誓盟の

とき矢を折り、束矢を入れ、侯に候禳の意があり、知・智が矢を以て明誓する儀禮を意味し、また古代の射儀が、すべてこれらの意味を含む重要な候禳・誓約の儀禮であったことを考えると、氏族標識である㫃と、明誓のための矢を組み合せたこの字は、血緣者の軍事的結合を示す字であることが理解される。古代の軍制が氏族軍を單位とするものであったことは、卜文に王族・多子族・三族・五族・五族戍の語があり、また金文にも、明公毀「唯王命明公、遣三族、伐東國」・班毀「遣命曰、以乃族、從父征」・毛公鼎「以乃族、干吾王身」など、みなその氏族軍をいう。左傳にもその例が多い。これを以ていえば、族の初義は氏族軍であり、族はその結盟の儀禮を示す字である。卜文中華・文編・二九三に、祝告を意味する𠙵を族下に加えている形のものがあり、その證となしえよう。他の諸義は轉義もしくは假借である。」（『說文新義』卷七・三八一四一頁）と。

註［三十二］ [illegible]𠂤。卜文は「口寅卜方其至于[illegible]𠂤」四二二とある。某𠂤をいひ、白川靜博士は𠂤を𠂤と釋され「軍旅の出づるや、𠂤すなわち脤肉を受けて發するのであるが、軍の次るや、𠂤をおいてここに駐した。従って軍の次るところをまた𠂤と稱した。このやうな軍事據點を某𠂤あるひは𠂤某と稱する例は、甲骨文錄に最も多く見えてみて四十數例があり、また他の著錄にも散見している」（『甲骨金文學論叢』三集・二七頁）と解されている。

註［三十二］ 王畜馬在茲寓。卜文は「王畜馬十𢆶寓毋戊王受」五二一とある。『殷契粹編』一五五一片にこれと同文があり、郭沫若氏は「畜乃从幺从囿、明是養畜義、蓋謂繫牛馬於囿也」粹編考釋二〇七頁。と牛馬を繫ぐ囿とする。陳邦懷氏は「畜、从幺、囿聲。廣韻一屋云「畜、丑六、許救二切。囿、于六切、又于救切。」今按囿字、音切于六、乃畜从囿得聲之證也」（『殷代社會史料徵存』）とする。

註［三十三］ 大不祉。卜文は「口卯卜火不止」四八四とある。胡氏は火不止を大不祉と隸釋しているが火は火であり止は止であるから、火不止となる。

註［三十四］ 其水不水。卜文は「[illegible]水兩子[illegible]不水」四六三とある。この四字は熟語ではない。

註［三十五］ 弜[illegible]。卜文は「弜[illegible]」三四九とある。

註［三十六］ 王[illegible]。卜文「口[illegible]」四六九とある。卜文明らかでないので隸釋しがたい。

註［三十七］ 習二卜習三卜習四卜。卜文は「羽〇二卜　羽〇三卜　羽〇三卜」五一八とある。陳邦懷氏は『尚書』金縢の「乃卜三龜、一習吉」、『左傳』襄公十三年の「石癸言於子囊曰、先王卜征五年、而歲習其祥、祥習則行、不習、則增修德而改卜。」の杜注「五年五卜、皆同吉、乃巡狩。不習謂卜不吉。」により「習一卜」「習二卜」の習は、吉義とする。（『殷代社會史料徵存』卷下、習一卜）

註［三十八］ [illegible]の[illegible]に作り。卜文は「辛亥卜[illegible]御祖乙」一八六とある。

註［三十九］ 射の[illegible]に作り。卜文は「[illegible]二月[illegible]」とある。李孝定氏の『甲骨文字集釋』は待考四七七一頁に置く。射は[illegible]粹三一四・三二九に作る。

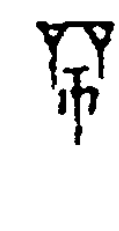
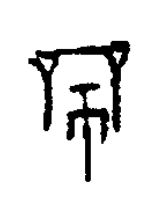
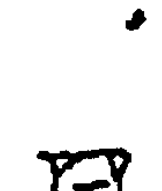
註［三十］ [illegible] 卜文は「叀口[illegible]今[illegible]月」五〇に作る。[illegible]は隸釋未定。

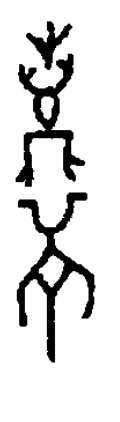
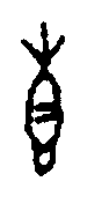
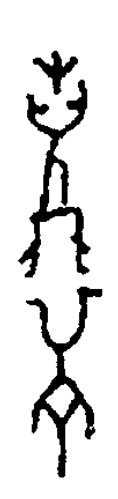
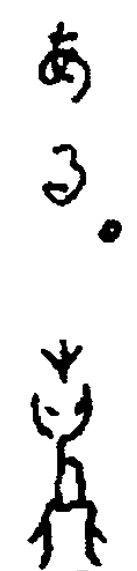
註［三十一］ [illegible] 卜文は「[illegible]田在口」三三七とある。[illegible]を李孝定氏の『甲骨文字集釋』は待考四七三一頁に置く。

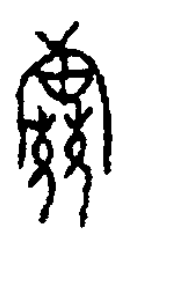
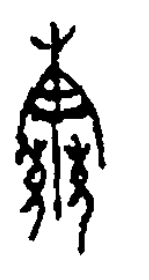
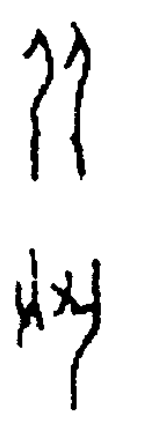
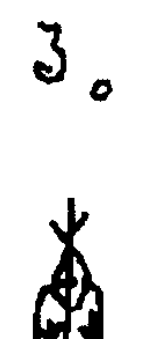
註［三十二］ [illegible] 卜文は「口甲子酌其[illegible]」三〇六に作る。李孝定氏の『甲骨文字集釋』は待考四七四三頁に置く。

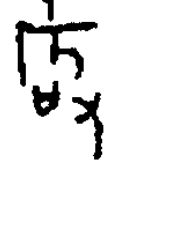
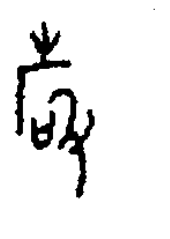
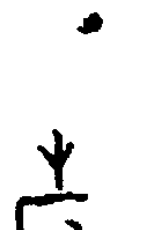
註［三十三］ [illegible] 卜文は「甲午卜于[illegible]」一四に作る。隸釋未定。

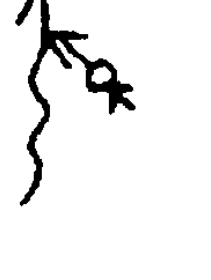
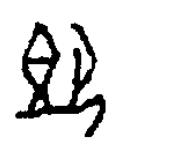
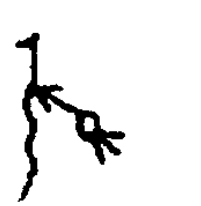
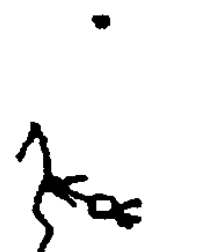
註［三十四］ [illegible] 卜文は「口[illegible][illegible][illegible]」一三五に作る。隸釋未定。

註〔三五〕。卜文は「㞢只其征父甲門」二〇一とある。は隸釋未定。

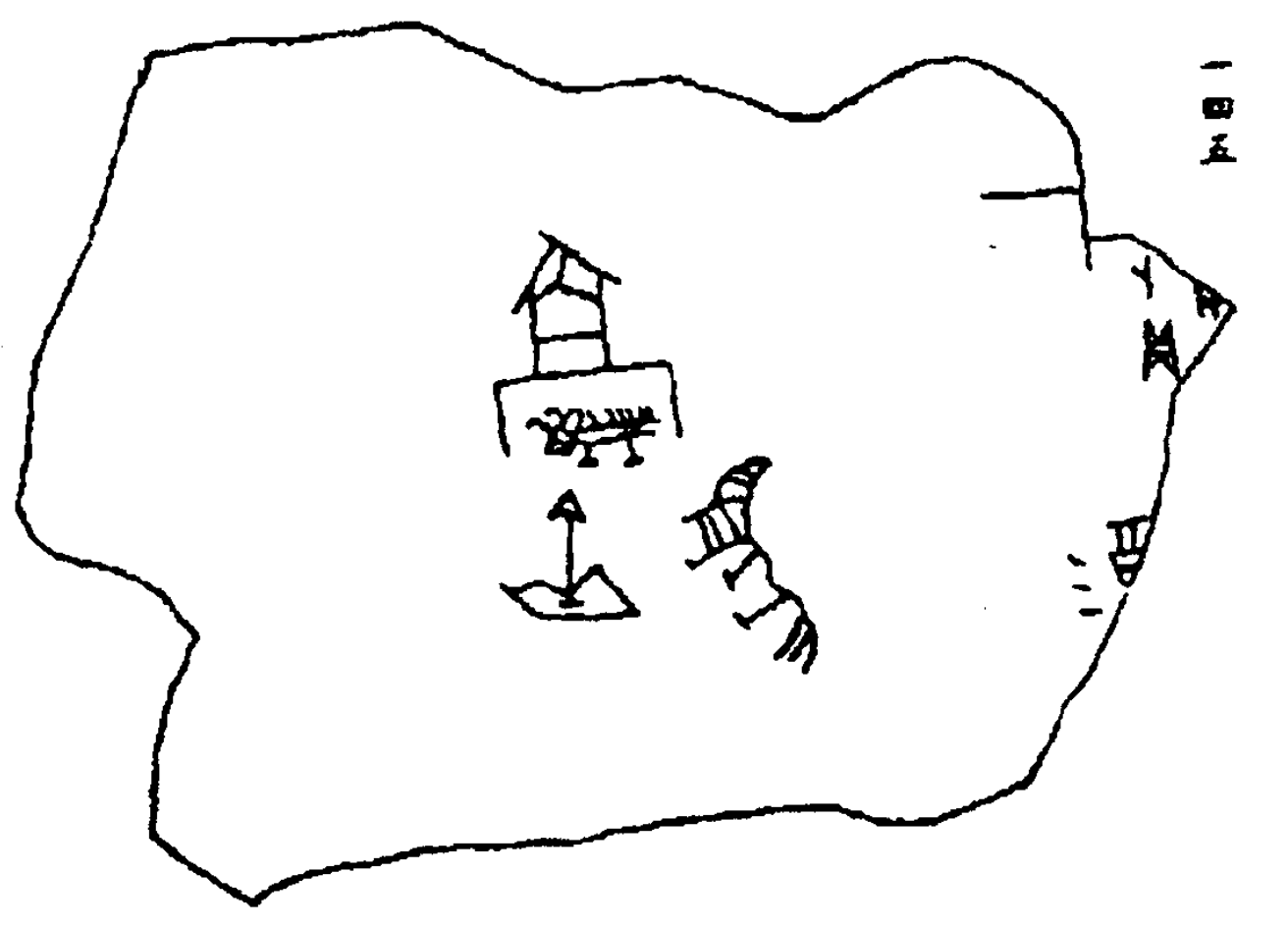
註〔三十六〕卜文は「甲午卜翌日」五九七とある。は隸釋未定。

註〔三七〕卜文は「貞方」三〇七とある。は隸釋未定。

註〔三十八〕卜文は「王叀豕山州亡𢦔」に作る。は隸釋未定。

註〔三十九〕卜文は「于中姓」二三一に作る。は隸釋未定。

註〔四十〕二巻一四五片。



七一、殷契徵醫〔二〕

「董作賓序」

自殷虛發現甲骨文字，頗為世人所珍異，方期於其中徵殷商之信史以見吾國古代文化之真，固也。然環顧宇內，治契學者，果能盡其心力，充分利用此新史料以探賾索隱，揭櫫所得，刊為論著，以饜世人之望乎？殆猶未也。若云有之，則或在時局動盪之近十年間，三二種而已，一萍此書，其為一顯例乎！

竊謂五十年來，甲骨學之進程有四階段：一為字句之考釋，二為篇章之通讀，三為斷代之研究，四為分派之觀察。前二者歷時三十年，譬之斬荊披棘，開夫先路，而歧途徘徊，猶未知其所之，斯無論矣。後二者，近二十年事耳；途徑既得，門牆可望，而深入堂奧，盡覩其蘊藏之美富，則似尚有所待。換言之，即以斷代方法，分期分類，整理卜辭，作各項專題之探索，已足得其梗概，游刃而有餘矣。倘更能分別新派舊派，從而作縝密之觀察，則知殷商文化之表現於卜辭中者，蓋屬偶然，雖吉光片羽，半爪一鱗，其必前有所承後有所啓，益足見吾國古代文化之悠久崇高，一脈相傳淵源有自矣。

最近十年以斷代法作專題研究之成果；一為胡厚宣君之甲骨學商史論叢初二集，刊於成都；一為余之殷曆譜十卷，刊於李莊，於殷代之非奴隸社會，殷代之為封建制，殷代之龜卜，家族，氣候，農業；殷代之曆法，祀典，天象，地理諸侯方國；皆已有所論列，擧其要略；宛轉曲折以求之，鑽研愈深，愈覺卜辭中所含史實之貧乏，愈感吾人研究所得知識之有限，而殷代文化之不可知者，且茫無津涯也。三十一年厚宣有殷人疾病考之作，分列八目，一引言，二疾字之認識，三疾病之種類，四疾病之情況，五疾病之患者，六疾病之原因，七疾病之治

療，八結論。蓋猶滯留於第三階段，雖分期未臻精密，大體略有可觀。今一萍殷契徵醫之作，致力於醫之專題，搜求材料之勤，考釋文字之精，徵引典籍之博，實較胡君又進一步，雖未著錄者，著錄而未見者，不能無有，然吾已可正告世人；「欲知殷代疾病與醫療之事者，視此已足」也，此書原附有徵引各片之影摹本，以印刷不便，未能刊入，為可惜耳。

殷虛甲骨文字を發現してより，頗る世人の珍異とする所と為る，方に其の中に殷商の信史〔たしかな史籍〕を徵して，以て吾が國古代文化の真を見るを期（ねがう）こと，固（もとよ）り也。然れども宇內を環顧するに，契學を治むる者，果して能く其の心力を盡し，充分此の新史料を利用して以て賾を探り隱を索め，得る所を揭櫫して，刊して論著を為り，以て世人の望に饜めんか。殆んど猶ほ未だし。若しこれ有り云はば，則ち或は時局動盪の近十年間に在り，三二種〔二・三種の誤りか〕のみ。一萍の此の書は，其れ一の顯例為り。

竊かに謂ふに五十年來，甲骨學の進程に四階段有り。一は字句の考釋為り，二は篇章の通讀為り，三は斷代の研究為り，四は分派の觀察為り。前の二者は時を歷（ふ）ること，譬ふるに荊を斬り棘を披きて，夫の先路を開き，而も岐途徘徊し，猶ほ未だ其の之く所を知らず，斯れ論無し。後の二者は，近二十年の事のみ；途徑既に得られ，門牆望む可し，而して深く堂奧に入り，盡く其の蘊藏の美富を覩るには，則ち尚待つ所有るに似たり。これを換言すれば，即ち斷代方法を以て，分期分類し，卜辭を整理し，各項の專題の探索を作すこと，已に其の梗概を得るに足り，游刃して餘り有り。倘更に能く新派・舊派を分別し，從って縝密の觀察を作（な）せば，則ち殷商文化の卜辭中に表現せらるる者は，蓋し偶然に屬し，吉光片羽，半爪一鱗と雖も，其れ必ず前に承くる所有りて，後ちに啓く所有るを知

り、僉ゞ吾が國古代文化の悠久の高高にして、一脈相ひ傳へ、淵源は自（もとづく）有るを見るに足る。

最近十年、斷代法を以て專題研究の成果を作（な）せるもの、一つは胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註〔八〕・第二輯一三四頁參見）君の『甲骨學商史論叢初・二集』（『甲骨學商史論叢初集』註〔二〕・第三輯二〇一頁參見）爲り、成都に刊す、一つは余の『殷曆譜十卷』（『殷曆譜』註〔二〕・第三輯二八六頁參見）爲り、李莊に刊す、殷代の奴隸社會に非ざること、殷代の封建制爲ること、殷代の龜卜、家族、氣候、農業、殷代の曆法、祀典、天象、地理諸侯方國に於て、皆な已に論列する所有りて、其の要略を擧ぐ。宛轉曲折以てこれを求む、鑽研愈ゞ深くして、愈ゞ卜辭中含む所の史實の貧乏を覺え、吾人研究の得る所の知識の限り有るを感ず、而して殷代文化の知る可からざる者は、且つ茫として津涯（みぎわ）無き也。三十一年「胡」厚宣に「殷人疾病考」（『甲骨學商史論叢初集』註〔二〕・第三輯二二一頁參見）の作有り、分ちて八月を列す。一、引言。二、疾字の認識。三、疾病の種類。四、疾病の情況。五、疾病の患者。六、疾病の原因。七、疾病の治療。八、結論なり。蓋し猶ほ第三階段に滯留し、分期未だ精密に臻らざると雖も、大體略ぼ觀る可き有り。今、一萍の『殷契徵醫』の作は、力（ちから）を醫の專題に致し、材料を搜求するの勤、文字を考釋するの精、典籍を徵引するの博（ひろさ）、實に胡君に較（くら）べ又一歩を進む。未だ著錄せざる者、著錄して未だ見ざる者、有る無きこと能はざると雖も、然れども吾れ已に世人に正告す可し、「殷代疾病と醫療の事を知らんと欲する者は、此れを視れば已に足る」と。此の書原（もと）附して徵引各片の影摹本有り、印刷の便ならざるを以て、未だ列入する能はざるは、惜しむ可しと爲すのみ。

註〔二〕　本書は嚴一萍氏の著したもので、卜辭にあらわれる卜病に關する卜片四百餘を集めて、これを作醫の年、藥物の用、病因病象、告祭禱祝の禮、巫醫等に分類し、古代中國醫學について詳述している。出版は一九五一年。

於此、吾將贊述一問題、即在此專題之下、何以卜辭僅限於武丁、祖庚、文武丁之三世。此乃出於題外、吾且代一萍作解答、斯蓋新舊兩派之所以異也。武丁中興名王、祖庚守成、文武丁復古、皆爲舊派、各王氣魄宏而感情富、故於婦子近臣之生育疾病、有問卜、求祐之擧。祖庚弟祖甲、革新派之領袖也、當其初即位時、如祀典、文字、曆術之大者、且毅然改革而不惜、遑論龜卜。故貞卜之事必一一納之於規律、使其整齊嚴肅、有條不紊、大異于舊派之所爲。其所以不卜疾病者、非無疾病也、蓋新派各王、如祖甲以及後世之帝乙帝辛、皆有其堅強之理智與一貫之科學精神在也。新派不惟不卜疾病生育、且亦不卜夢卜死、卜求雨求晴、卜日月交食等事。度新派各王、必已洞悉卜事之不足信、而於祖宗遺制、未便盡廢、乃擇其祭祀、征伐、田獵、巡守、卜旬、卜夕等犖犖大端與例行公事、且仍舊貫、加以整飭、俾有常軌、其他瑣事、則一概廢之不擧耳。吾人於此、且幸舊派各王之多情與好事、得遺留若干疾醫問題於其卜辭、足供後人之苦思冥求；又深幸有新派各王之破除一部分迷信、賢明而有法度、使吾人知殷代禮制、時加訂定、其政權組織、已臻美備、故新舊兩派之政潮能互爲起伏者再也。

一萍近方致其業餘之力、從事契學、昕夕研討、樂而忘倦、吾知其將來之貢獻於世人、當有更大於此書者、故樂爲之序。

、中華民國四十年六月十五日

此に於て、吾れ將に一問題を贊述せんとす、即し此の專題の下に在りて、何ぞ卜辭を以て僅（ただ）武丁、祖庚、文武丁の三世のみに限るや。此れ乃ち題外に出づ、吾れ且（しばらく）一萍に代りて解答を作（な）さん、斯れ蓋し新舊兩派の異なる所以也。武丁は中興の名王、祖庚は成を守り、文武丁は古きを復し、皆な舊派爲り。各王の氣魄宏くして感情富（ゆたか）なり、故に婦子近臣の生育疾病に於て、求祐を問卜する擧有り。祖庚の弟は祖甲、革新派の領袖也、其の初めて位に即く時に當り、祀典、文字、曆術の大なる者の如きは、且つ毅然として改革して惜まず、遑（にわか）に龜卜を論ず。故に貞卜の事は必ず一一これを規律に納（おさ）め、其の整齊嚴肅、條有りて紊れざりしめしこと、大いに舊派の爲す所に異なる。其の疾病を卜わざる所以は、疾病無きに非ざる也、蓋し新派の各王は、祖甲の如く以て後世の帝乙帝辛に及び、皆な其の堅強の理智と一貫の科學精神に在る有り。新派は惟に疾病生育を卜せざるのみならず、且つ亦卜夢・卜死せず、卜求雨求晴し、卜日月交食（蝕）等事をせず。度るに新派各王は、必ず已に卜事の信ずるに足らざるを洞悉し、而も祖宗の遺制に於て、未だ便ち盡くは廢さず、乃ち其の祭祀、征伐、田獵、巡守、卜旬、卜夕等を擇び犖犖たる大端と例行の公事、且（しばらく）舊貫に仍り、加ふるに整飭を以て、常軌有ら俾む、其の他の瑣事は、則ち一概にこれを廢して擧げざるのみ。吾人此に於て、且つ舊派各王の多情と好事は、若干の疾醫問題を其の卜辭に遺留するを得（え）、後人の苦思冥求を供するに足るを深く幸とする。又新派各王の一部分の迷信を破除する有り、賢明にして法度有り、吾人をして殷代の禮制を知らしむるを深く幸とす、時に訂定を加へて、其の政權組織、已に美備に臻る、故に新舊兩派の政潮は能く互に起伏を爲す者再也。

一萍近ごろ方に其の業餘の力を致し、契學に從事す、昕夕研討し、樂しみて倦むを忘る、

吾れ其の將來の世人に貢獻し、當に更に此の書より大なる者有るべきを知る。故に樂しみてこれが爲に序す。

中華民國四十年〔一九五一〕六月十五日。

【自序】

殷虛甲骨、自遜清光緒己亥發見、閱五年而有鐵雲藏龜問世。當是時、劉・羅諸家、斷爲殷商遺物、欲以攷證錄辭、是正經史、顧文字奇古、僅別干支、能徵者卜龜占日而已。翌年、孫詒讓著契文擧例、用廣十類、所得猶寡。再越十載而雪堂攷釋之書出、識字漸多、能通句讀矣。迨王觀堂攷見先公先王、以卜辭證史、遂開新頁。董先生創貞人說標斷代之例、繹日月食以推證殷曆、上合天行、下核疑年。殷史再建、基礎迺奠、五十年甲骨學至此、更進一境矣。

雖然卜辭所見、不足當殷代信史之全豹、而探賾索隱、亦足窺殷代文化之大體。此所以今之从事者、將以分代分類研究爲尤重也。

攷今存世甲骨、約略十餘萬片。論時代、上起般庚、下迄帝辛。出土雖未全、而大體可攷、骨爲殷室二百七十三年間之眞實紀錄。文字體用、遠承荒古；屬辭造句、不異誥謨。固能一一尋勘、隸其年代；擧一反三、冥悟而得其眞、則不特書可補而禮足徵。若譜帝王之紀、敘人物列傳、志典章制度、爲昔孔子所未見、史公所缺聞者俱在焉。此誠中國古文化無盡之寶藏、而待吾人之發揮者正無限也。

年來从事契學、嘗擧卜疾有關之辭凡四百餘版、董理而攷釋之、若作醫之年、藥物之用、病因病象之辨、告祭禱祝之禮、防治賅備、巫醫並業。曩所疑莫能道者、渙然氷釋。于是殷商醫學之眞相見、而中國醫學之淵源明矣。

時當離亂、携稿天涯。既請益彥堂先生、蒙賜指正、而勗以流傳、因付梓人以問世。是爲序。

辛卯春正月　秀水嚴一萍。

270

殷虛の甲骨は、遜清光緒己亥「一八九九年」發見してより、五年を閲へて『鐵雲藏龜』（鐵雲藏龜 註「一」・第一輯一頁參見）有りて世に問ふ。是の時に當りて、劉「劉鶚・『鐵雲藏龜』註「九」・第一輯一三頁參見）・羅（羅振玉・『鐵雲藏龜』註「六」・第一輯一一頁參見）の諸家は、斷じて殷商の遺物と爲し、以て錄辭を攷證して、經史を是正せんと欲す。顧ふに文字は奇古、僅に干支を別ち、能く徵する者龜を卜して日を占ふのみ。翌年「一九〇五年」、孫詒讓（孫詒讓・『契文擧例』註「十七」・第一輯四九頁參見）『契文擧例』（『契文擧例』註「二」・第一輯四一頁參見）を著し、用って十類に廣（ひろ）むれども、得る所猶ほ寡し。再び十載を越えて雪堂（羅振玉）の攷釋の書（『增訂殷虛書契考釋』註「二」・第一輯八三頁參見）出づ、字を識ること漸く多く、能く句讀に通ず。王觀堂（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註「二十三」・第一輯一〇一頁參見）の先公先王（『甲骨學商史論叢初集』註「十五」・第三輯二五一頁參見）を攷見するに迨んで、卜辭を以て史を證し、遂に新頁を開く。董「作賓」（董作賓・『殷契書錄』註「四」・第一輯三二四頁參見）先生貞人說を創り斷代の例を標（あらは）す；（『甲骨文斷代研究例』註「一」・第二輯二一頁參見）日月食「蝕」を釋して曆を推證し（『殷曆譜』註「一」・第三輯二八六頁參見）上は天行に合し、下は疑年を袪（さ）る。殷史再建せられ、基礎迺ち奠（さだ）まる、五十年の甲骨學此に至って、更に一境を進む。

然るに卜辭に見える所は、殷代信史の全豹に當るに足らざると雖も、而して賾を探り隱を索むれば、亦殷代文化の大體を窺ふに足る。此れ今の事に从ふ者は、將に代を分ち類を分つの研究を以て尤も重しと爲さんとする所以也。

今、攷ふるに世に存する甲骨は、約畧十餘萬片なり。時代を論ずれば、上は般庚に起り、下は帝辛に迄る。出土未だ全たからずと雖ども、而かも大體は攷ふ可し、骨な殷室二百七

271

十三年間の眞實の紀錄爲り。文字の體と用は、遠く荒古に承く；屬辭造句は、誥謨に異ならず。固より能く一一尋ね勘（かんが）え、其の年代を隸（屬）也。一を擧げて三を反し、冥悟して其の眞を得ば、則ち特（ただ）に書、補ふべきのみならず、而して禮徵するに足る。帝王の紀を譜し、人物の列傳を叙し、典章制度を志すが若きは、昔し孔子未だ見ざる所、史公聞くを缺（か）く所の者俱に在りと爲す。此れ誠に中國古文化無盡の寶藏にして、吾人の發揮を待つ者は正に限り無し。

年來契學に从事し、嘗って卜疾に關わり有るの辭、凡そ四百餘版を擧げ、董理してこれを攷釋す、作醫の年、藥物の用、病因病象の辨、告祭禱祝の禮の若きは；防治賅（か）ね備わり、巫醫並に業（おさ）む。曩に疑ひて道ふ能ふなき所の者も、渙然氷釋す。是において殷商醫學の眞相見はれて、中國醫學の淵源明かなり。

時に離亂に當り、稿を天涯に携ふ。既に益を彥堂先生に請ひしに、蒙（あつ）く指正を賜わり、而して勗（はげま）すに流傳を以てせらる。因りて梓人に付して以て世に問ふ。是に序を爲る。

辛卯「一九五一年」の春正月　秀水「浙江省」の嚴一萍。（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註「四十三」・第一輯三九頁參見）

272

七二、殷契拾掇[一]

一九四八年夏天，我為清華大學文物館到上海購買甲骨，聽説殷契拾掇已經付印，很盼望它能早日出版。一直到今年四五月間，我由北京寫信給徐森玉先生，請他向編者借用已印未訂的印本，承編者郵寄給我，甚覺材料的可貴。七月間到了上海，始識編者于衡山路華東文物處，我當即表示此書應該早日問世，今承告以即可裝訂出版，故在旅中匆匆寫下數語，以表我的愉快之情。

承編者的厚意，又將他所作小屯甲乙編的綴合工作見示，尤為欽佩。編者用心的細密與慎審，都是值得贊揚的。我從前看到友人曾毅公先生綴合甲骨的工作，覺得他不顧生活的困難、孜孜于此以求有用于人，實在是契學的功臣。今見郭先生的工作，才知道同此懷抱的，不止曾先生和我自己而已。

抗戰期間我們在昆明聽説安陽小屯村中出了一批相當完整的卜骨，歸于葉叔重先生。一九四八年夏，我來滬向葉先生問起，他説他原盼望這批材料能歸到公家，無奈他已先讓給胡厚宣先生了。遂由他邀集潘光旦胡厚宣先生和我一同商談，將這整批卜骨讓歸清華大學；除由清華付款一半外，又由友人劉仁政孫冰如和葉叔重三先生各捐贈一部分。我由胡先生處取到甲骨約千片，航運回北京，加以整理。這批材料大部分的摹本均見于胡先生最近出版的戰後寧滬新獲甲骨集卷一卷二中。

一九四八年の夏、私は清華大學文物館の為に上海へ甲骨を買いに行った時、『殷契拾掇』が已に印刷されていることを聞き、それが早く出版されることを希望した。ずっと降って

今年の四五月にいたって、私は北京の徐森玉先生[二]より手紙をいただき、彼が編者に已に印刷されているが、まだ訂正されていない書物を借りたいと願っていることを、編者はそこで私に郵送してきたのを見て、甚だ資料が貴重なものであることを覺った。七月上海に行った時、始めて編者を衡山路の華東文物所で知りあった。私ははじめ此の書物を早く世に出されることを表明した。今、近々に裝訂出版されることをきいた。だから旅中にあっても取り急ぎ數語をしたため、私の欣快の情を表わした。

編者の厚意を承けて、また彼の作る『小屯』甲乙編の綴合の仕事を見せられ[三]、尤も欽佩とした。編者の心を用いた細密さと愼審さは、全くほめたたえるに値ひするものである。私は先に友人曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）先生の綴合の作業をみて、彼が生活の困難をかえり見ないで、孜孜として此に有用を人に求めているのは、實に契學の功臣であることを覺えた。今郭〔若愚〕[四]先生の作業を見れば、同じような考えを抱いておられることを知った。これは曾先生と私だけにはとどまらない。

抗戰期間は私は昆明におり安陽小屯村中から一つのかなり完整な卜骨が出土し、葉叔重（葉玉森・『殷契鉤沈』・註[三]・第一輯一八二頁參見）先生に歸した。一九四八年の夏、私は上海より葉〔玉森〕先生に向って問を起した。彼が言うにはこの資料は本來公けのものに歸することであったが、既に胡厚宣先生（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）に讓ってしまっていたのでどうしようもなかった。遂に彼は潘光旦[五]と胡厚宣先生と私と一同を集めて商談することによって、將にこの完整な卜骨は清華大學に讓り歸した。清華大學が一部金を出した外に、また友人の劉仁政[六]、孫冰如[七]と葉叔重の三先生が各々一部分を貢獻した。私は胡先生の處より甲骨約千片を取り、航運して北京に歸り、

そして整理を加えた。この資料の大部分の摹本は均しく胡先生の最近の『戰後寧滬新獲甲骨集』（『戰後寧滬新獲甲骨集』註[一]・本輯二四九頁參見）卷一卷二の中に見られる。

註[一]　本書は郭若愚の編纂による。編者が上海亞洲文會博物院、上海市立博物館、智龕、胡厚宣、王懿榮、劉鐵雲、孔德研究所舊藏の甲骨を掇合拓印したものである。五五〇片を收録する。出版は一九五三年。

註[二]　徐鴻寶（一八八一－）原名は盅、字は森玉、浙江省吳興の人。前清の擧人、山西學堂の卒業、奉天將軍署文案、奉天測圖局長、高等工業學校監督、學部圖書局編譯員、北京大學圖書館長、國立北平圖書館を整理。共和國成立後は其の采訪部主任として貢獻するところが多かった。彼の學は目錄版本、金石學に深い造詣があり、清代学故にも通じ、佛學にも精通し、詞に工みである。近年故宮博物院古物館館長の任にあった。

註[三]　郭若愚の小屯甲乙編の綴合は『殷虛文字綴合』一九五五年刊　科學出版社。第五輯所收。

註[四]　郭若愚　未詳

註[五]　潘光旦（一八九八－）字は仲昂。江蘇省寶山の人。清華學校卒業後、米國コ

ロンビヤ大學哲學科に學び文學博士。優生學家として世に知られる。吳松國立政治大學教務長、上海時事新報編輯、光華大學文學院長を歷任。また清華大學教授兼教務長、中山文化教育館研究部心理建設研究員等の任についた。潘氏は上海新月書店を經營し、共和國成立後は中華人民共和國中央人民政府政務院文化教育委員會委員。

註[六]　劉仁政　未詳

註[七]　孫冰如　未詳

寧滬卷一拓本五百多片，就是上述小屯村中一坑之物，都是牛胛卜骨，其時代都屬于康丁武乙文丁三朝。這一批卜骨曾經郭先生加以拼合，所以清華據原物所製的拓本較之摹本要完整許多。摹本中分為數片者往往可以拼綴成一大片。我曾以拓本請曾毅公先生拼合了二十多塊，後來和他並羅福頤馬漢麟先生據實物校核，則拓本可合的于原物未必相合，原物在地下久已裂折的可藉拓本之合而重合。後來我自己又拼合了一些，此次郭先生又面告我一些可拼合的片子。希望將來拓本付印時，可以比較完整。

拾掇智厂自藏的甲骨拓本，也是上述這一坑分散出來的。我曾據寧滬卷一拾掇（智厂部分）和清華拓本（約四百多片）相對，知道這一坑所出大部分在清華，七十多片在智厂處，尚有一小部分不知何在。清華所藏與智厂所藏可綴合的至少有下列各片：

寧滬三四七　十　拾掇四一八

寧滬二六八 十 拾掇四二二
寧滬五一二 十 拾掇四五三
寧滬六二四 十 拾掇四四四反面
寧滬四四二 十 拾掇三九七
寧滬四〇九 十 拾掇四五一

除此以外、寧滬七 十 三六‖拾掇四四三、此片今在清華。寧滬卷一第九和第十一兩片是一骨的兩端，都在清華，缺中間一段曾在上海看到拓本，據說已經出洋去了。

由這一批材料的流傳經過，可知保存原坑材料的完整和破折後的綴合工作，是非常重要的。

現在拾掇正式出版，可補清華藏片的不全部分。實物雖已分屬，在紙上還有重聚的機會，這是我最感快慰的。

編著此書的材料，有未見著錄的，有僅見摹本的，今以拓本影印，自屬大有用處。據編者見告，他手自墨拓的零星甲骨，尚有若干，很希望續編不久出世，庶幾在甲骨研究上，更多一些原材料。

一九五一年七月杪，上虞陳夢家記於上海。

寧滬卷一の拓本の五百ちかくの片は、就ち上述の小屯村から堀り出した一坑の物である。みな牛胛卜辭であり、其の時代はみな康丁・武乙・文丁の三朝に屬する。この一つの卜骨は會って郭「若愚」先生をへて以て拼合を加えた、だから清華の原物によって製るところの拓本をこの翻刻本と較べるとずっと完全である。翻刻本中を分けて數片は往々以て拼綴して一つの大片を作ることが出來る。私は會って拓本を以て曾毅公先生に二十いくつかの

塊の拼合をお願いした、のち彼と並に羅福頤[八]、馬漢麟[九]先生は實物によって比較しくらべ、則ち拓本の合う可き原物がどおしても合わなかった。原物は地下にあり久しく已に裂折しているので拓本の合うものを籍りて重合すべきである。のち私は自分で幾くつかを拼合した、此れに次いで郭先生はまた私に一つの拼合すべき片（子）をしらせた、將來拓本付印の時に、以て完整を比較すべきことを希望する。

拾掇の智厂自藏の甲骨拓本は、また上述のこの一坑で分散して出來たものである。私は曾って『寧滬』卷一拾掇に據って（智厂の部分）清華の拓本（約四百いくつかの片）に相い對し、この一坑に出るところの大部分は清華にあることを知った。七十幾くつかの片は智厂の處にある、尚一小部分あるも何れにあるかを知らない。清華所藏と智厂所藏の綴合すべきものは少しく下列の各片がある。

寧滬三四七 十 拾掇四一八[十]
寧滬二六八 十 拾掇四二二[十一]
寧滬五一二 十 拾掇四五三[十二]
寧滬六二四 十 拾掇四四四の反面[十三]
寧滬四四二 十 拾掇三九七[十四]
寧滬四〇九 十 拾掇四五一[十五]

此れを除いた以外は、『寧滬』七 十 三六‖拾掇四四三[十六] 此の片は今、清華にある。『寧滬』卷一第九と第十一の二片は一骨の兩端である[十七]。みな清華にあって、中間の一段の缺けているものは會って上海にあって拓本を見た、說くところによれば已に外國へ出た。

この一つの材料の流傳經過によれば、原坑資料の完整の保存と破折後の綴合作業とが、

非常に重要なものであることがわかる。現在「『殷契」拾掇』の正式出版は、清華藏片の不完全の部分を補うことができる。實物は已に分屬するというけれども、紙上にあってはまた重聚の機會があり、これは私の最も快慰と感ずるものである。

編著はこの書の資料には、まだ著錄を見ないものがあるも、僅かに翻刻本に見ることができる、今、拓本の影印を以てすれば、自から屬すること大にして用いる處がある。編者の見告によれば、彼の手自から墨拓する零星な甲骨はなほ若干ある、實に續編がはやく世に出ることを希望する。ねがわくば甲骨研究上にあって、更に一つの原の資料の多きことを。

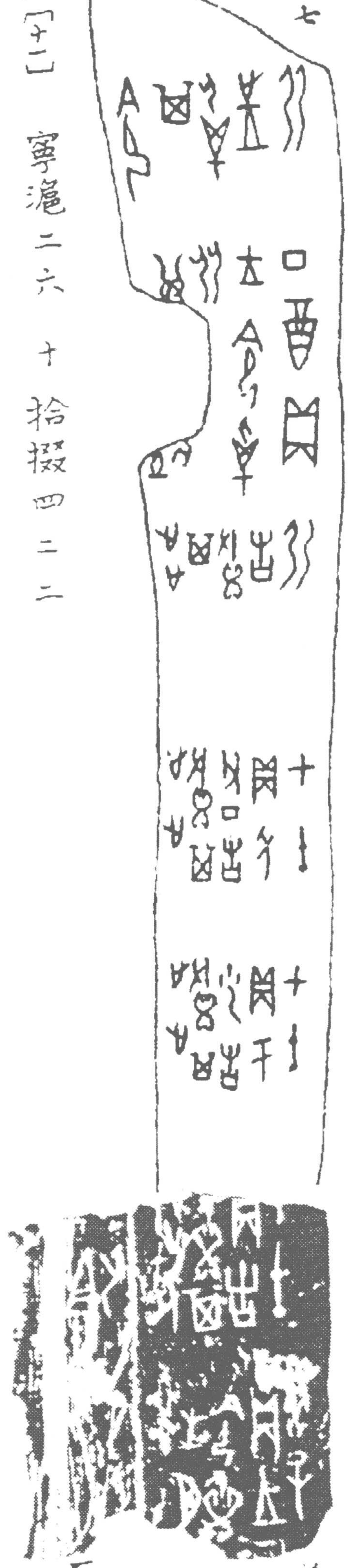
一九五一年七月末、上虞の陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註[三]・第三輯一四〇頁參見）上海にて記す。

註[八] 羅福頤（一九〇五－？）字は子期。浙江上虞の人。彼は羅振玉の子で、戰前大連縁堂書莊を經營していた。また奉天博物館臨時鑑定委員、旅順大庫舊檔整理處編輯主任兼指導員、滿日文化協會囑託、滿洲國立中央博物館學藝官等に任じた。學は金石を專門とする。

註[九] 馬漢麟 未詳。

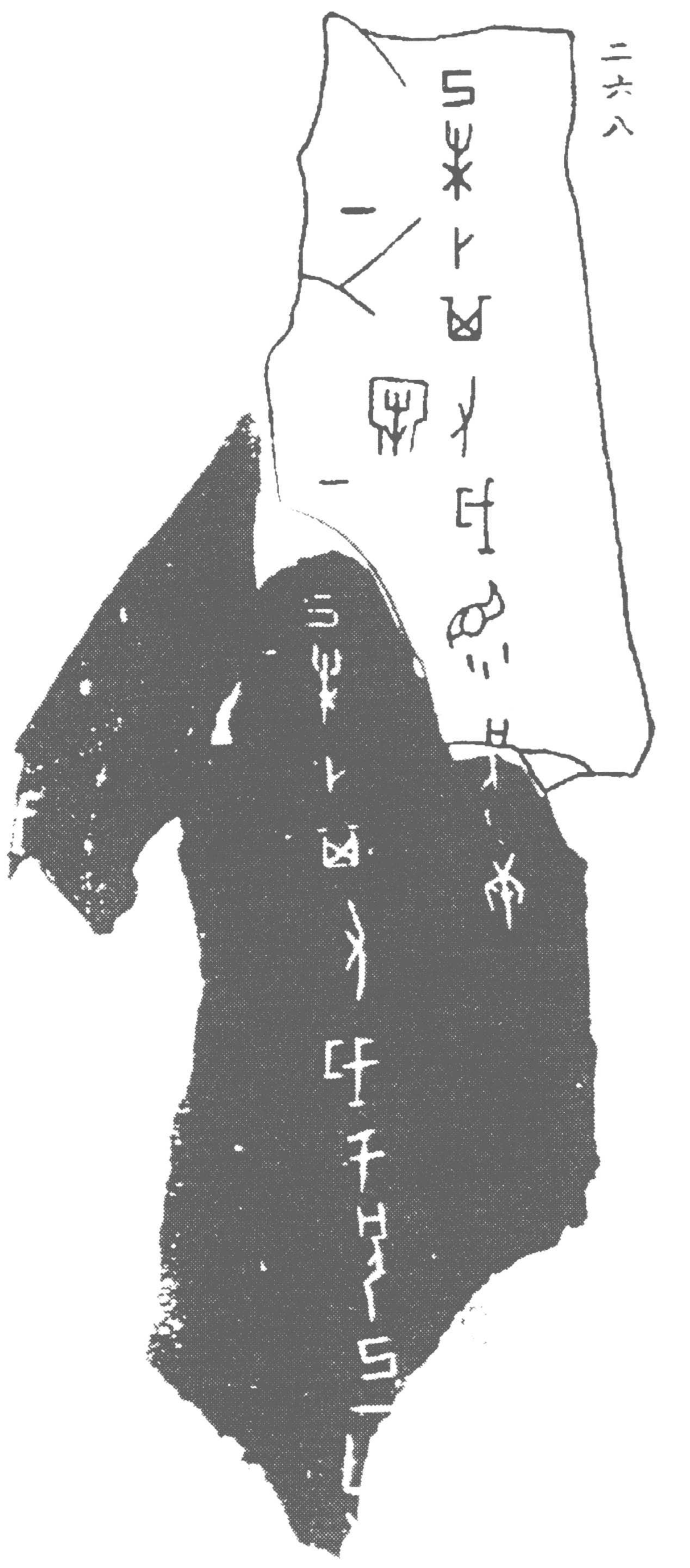
註[十] 寧滬三四七 十 拾掇四一八

三四七

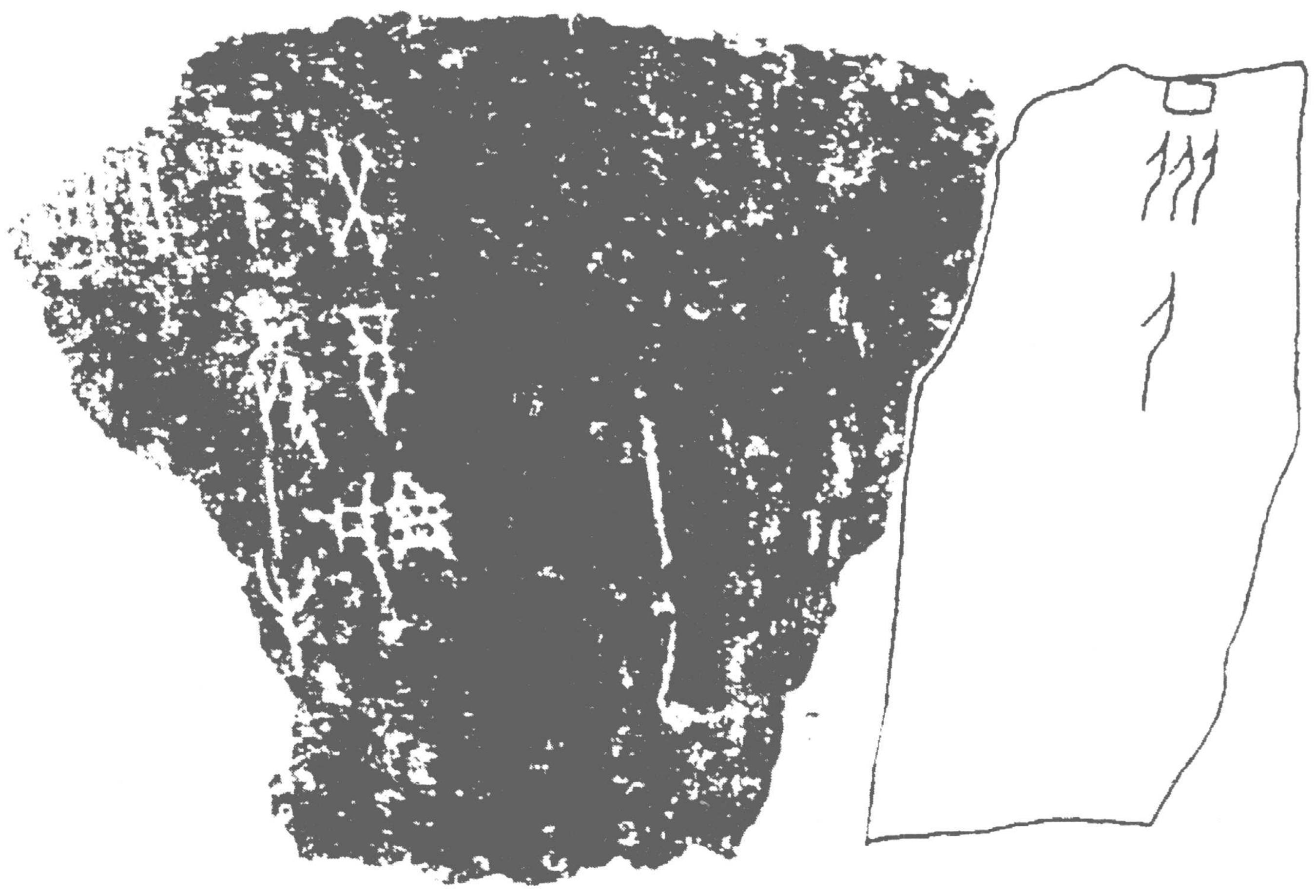


註[十一] 寧滬二六八 十 拾掇四二二

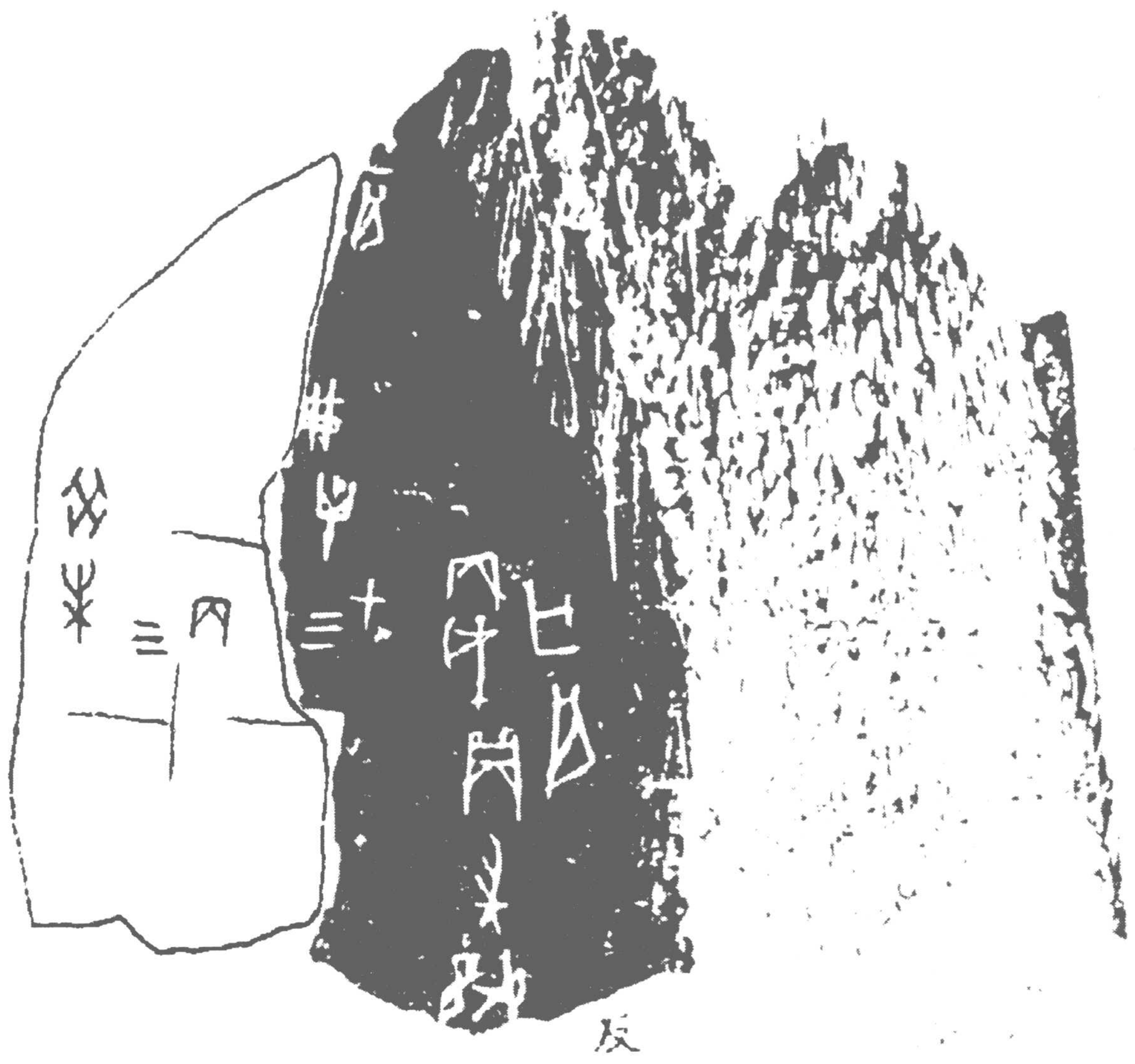
二六八



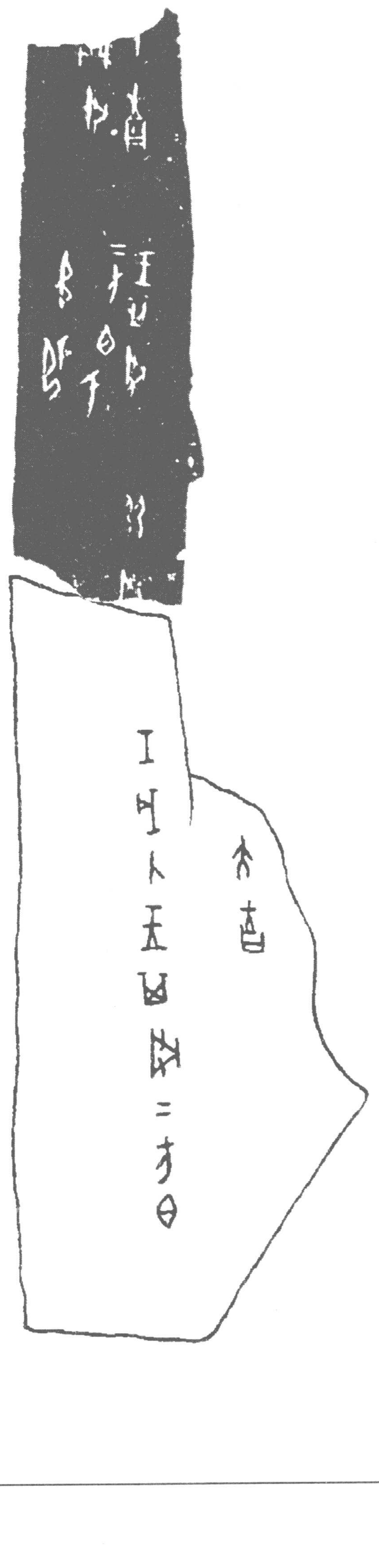
註［十二］ 寧滬五一二十 拾掇四五三



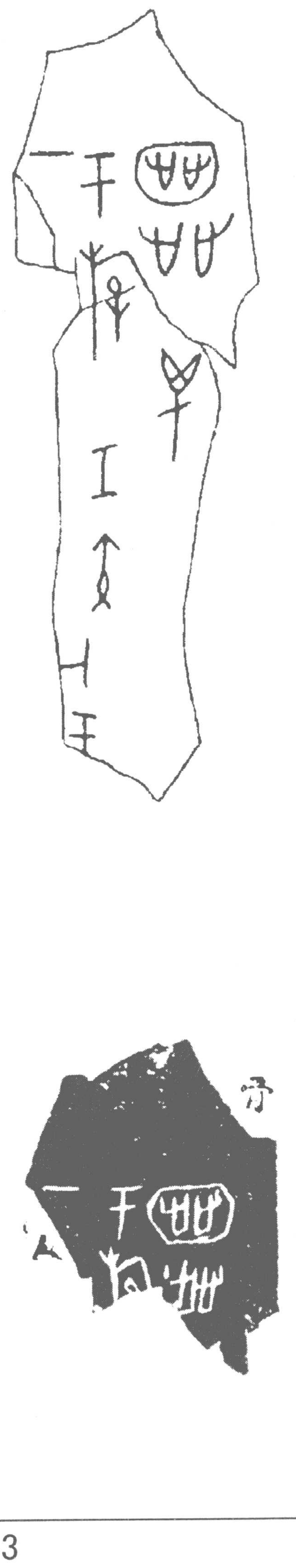
註［十三］ 寧滬六二四十 拾掇四四四



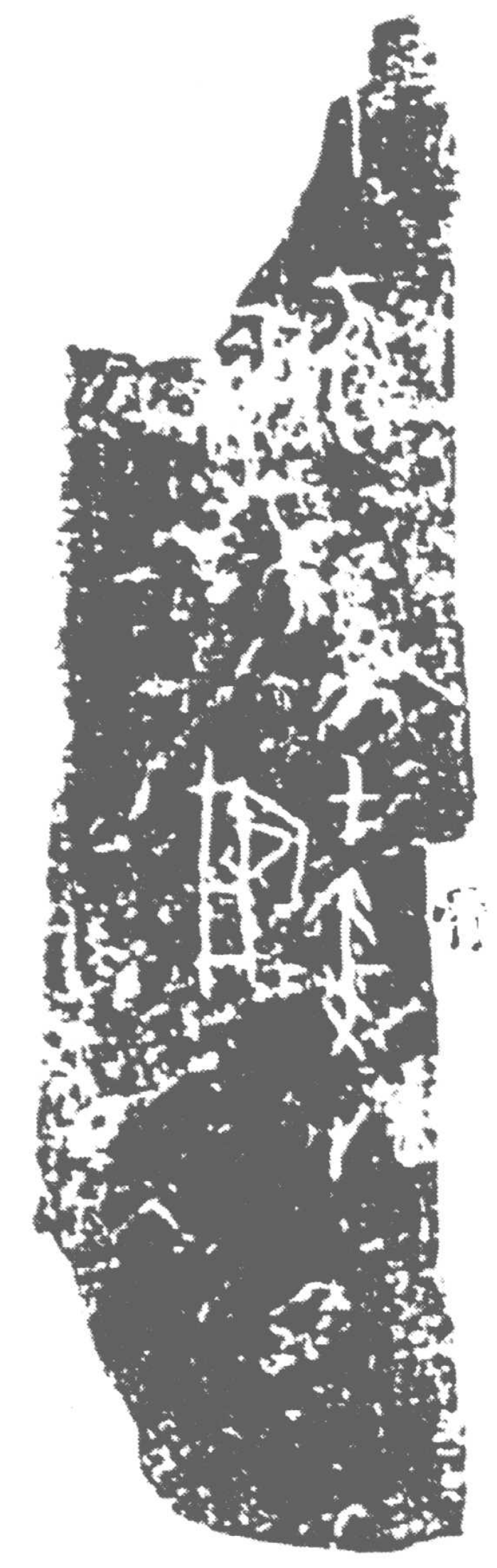
註［十四］ 寧滬四四二十 拾掇三九七



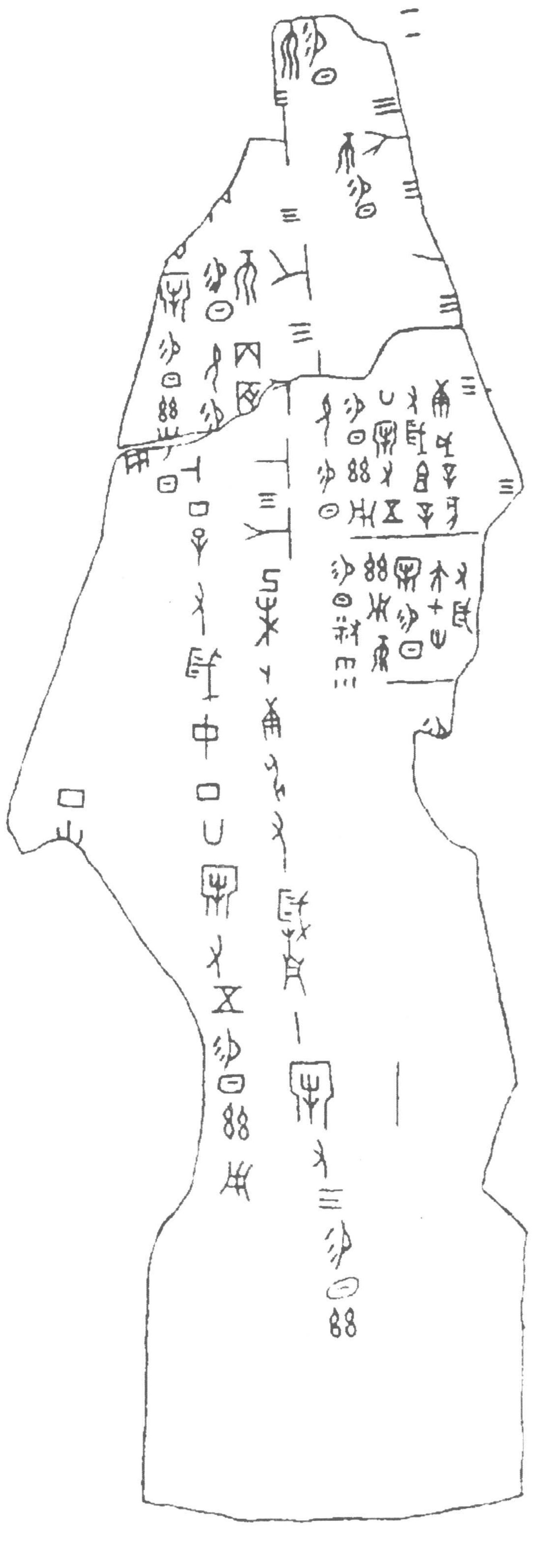
註［十五］ 寧滬四〇九十 拾掇四五一



註［十六］ 寧滬七十 十三六＝拾掇四四三（左の綴合は拾掇四四三）



註［十七］ 寧滬巻一第九と第十一の二片は一骨の両端



自序

如果清光緒己亥（一八九九年）那年，福山王懿榮在北京因病服藥，把龜版甲骨從菜市口達仁堂買了來，因而開始發現殷墟文字是事實的話㊀，甲骨材料的發現到目前為止，該是第五十二個年頭了。這五十多年來，經過了不少國內外學者們的研究，從文字的真偽一直到中國古代社會的探討，造成好許多輝煌的成績。所以無論如何，我們研究古代的中國，尤其是殷代，甲骨文字應該肯定是第一手的好資料。

最近有人提出了甲骨文字不容易整理的三個原因：

「……首先，由於刻骨的工作，不完全是由有學問的人來担任的，不能保證其一字無譌；其次，由於龜板獸骨上所刻文字不出於一手，不成於一時，所以筆畫極不整齊劃一，不易識別其異同；最後，我們又要顧慮到在龜板獸骨上契刻艱難，刻字的人，必然貪省筆以輕其功，更無由考見一代字形的真跡」。（新建設第四卷第三期：關於研究中國古代史的材料問題）

因為有了這些大原因，結論是：「所以研究甲骨文字的困難是很嚴重的」。

其實這些困難，都不怎麼「嚴重」，而是「顧慮」得過份了一些。在殷代一個有學問的人刻起甲骨來，難道就保證一字不譌了嗎？而且這裏的「學問」指的那些學問呢？中國古代的金文秦篆漢隸章草以及行草書，同樣是「不出於一手，不成於一時。」我們並不覺得有什麼「不易識別其異同」。殷代的甲骨文字那裏會有什麼不同呢？至於甲骨上契刻的艱難，那更不少我們去「顧慮」了。殷代「刻字的人」還在堅硬的甲骨上刻了很多生動的動物和有趣的圖畫哩。要是契刻困難他們那裏有這些興致呢！（見安陽發掘報告第三期，「再論小屯和仰韶」文插圖）我認為真正存在着的而且是嚴重的困難，便是鼎堂先生說的：「要研究中國古代，材料實在太少了，然而虛偽的材料却又不少。而且幾千年來的舊觀念也很不容易肅清，總是在那兒糾纏着。」（見關於周代社會的商討一文）我們就是沒有把我們頭腦裏的舊觀念肅清，一切憑自己主觀去任意推測。這問題不但嚴重，而且簡直是危險的！

但是研究甲骨材料的方法，亦不像該文中所說的那樣簡單：

「我們只能細心伏案，用歸納的方法，從叢雜的材料裏找出它的條例來；去發現刻龜的人們省筆誤筆以及一字數形的規律，便容易着手了。」

試問先是知道甲骨文字的「省筆」、「誤筆」和「一字數形的規律」，能解決了什麼問題？我們研究甲骨唯一的好方法便是深深地掌握馬列主義，用歷史唯物主義的立場和目光去判斷事實，多多接觸實物，正確地運用材料，使它發揮效用。這樣才能把中國古代社會的真面目，漸漸的顯現出來。

本編收集的七處甲骨文字，便是我幾年來接觸到的實物，由我自己手拓，（孔德研究所兩片取自舊拓本）按了獲得的先後編排起來的。每一宗都經過分期分類，每一片駐明「甲」（龜腹甲）、「背甲」（龜背甲）或「骨」（牛胛骨）；說明骨版的「正」或「反」，文字的書寫或塗硃，可以拼合的都拼合起來。我這樣做這些瑣屑的工作，可能給予讀者們一些方便。如果可能，我還想表明破碎骨是全龜或全胛骨的某一部份，文字細小的放大到適當大小，這樣一定會給讀者更多便利。我並不去考慮先印摹本，再印拓本，再印釋文，那樣不但增加讀者們的負担，還給了研究者不少麻煩。同時把我毫不成話的考釋，硬要塞到讀者們的手裏，我總覺得是一件不應該做的事。好在初學的讀者們，如果需要檢查一下釋文的話，可以參考「卜辭通纂」和「殷契粹編」兩書的考釋。那裏的見解，都是非常正確的。

㊀ 據說胡石查（義贊）亦藏有甲骨三十餘片。如此甲骨發現的時期，必須要提早了。

もし果して清の光緒己亥（一八九九年）のあの年に、「山東省」福山の王懿榮（王懿榮『鐵雲藏龜』註[十二]・第一輯一五頁參見）は北京におり病に因って服藥し、龜版甲骨を菜市口達仁堂より買った、因って殷墟文字發見の開始は事實である㊀なら、甲骨資料の發見は目前にいたって止まった、第五十二個の年頭を備えているのである。この五十年來、少なからざる國內外學者の研究を經過した、文字の眞僞からずっと中國古代社會の探討にいたるまで、輝煌の成績を多く作り出した。だからどおあっても、私は古代の中國を研究し、特にそれは殷代を研究するには、甲骨文字は應に肯定に該當するのは第一手の好資料である。

最近或る人は甲骨文字に整理が容易ならざる三つの原因を提出した。

「……首め先ず、刻骨の仕事に關して、凡そ學問をする人によって担當されたものでないので、其の一字の誤りが無いことを保證することは出來ない、其の次は、龜版獸骨上に刻む所の文字は一人の手になったものでなく、一時に出來たものでないから、筆畫は極めて整齊劃一でなく、其の異同は識別しにくい；最後に、私はまた顧慮を要するのは龜版獸骨上の契刻のむつかしさである。字を刻む人は、必然にやたらに筆をはぶこうとし、其の功を輕くしようとするので、尚更ら一代の字形の眞跡を考見せられるわけがない。」（『新建設』第四巻、第三期、「中國古代史の材料を研究する問題に關して」[十八]）

これらの大きな原因があるので、結論は「甲骨文字を研究する困難は實に重大である」となる。

とは云ってもこれらの困難は、全く何う重大ではない、「きびしいもの」ではなくて、しかも必要以上に「心配」した。殷代に或る學問をする人が甲骨を刻んで、まさか一字も誤らないことを保證し得ようか。そのうえこゝで云う「學問」とはどの學問を指すのか。

中國古代の金文秦篆漢隷章草に及び行草の書は、同樣に「一手に出ないで、一時に出來ない」のである。私たちは決してそれらが何らかの意味で「その異同を區別するのがたやすくない」とは感じない。殷代の甲骨文字の中にはどうして何らかの違いがありえようか。甲骨上契刻の艱難さにいたっては、それは更に必ずしも私をして「心配」させるほどのものでない。殷代の「字を刻む人」はまた堅硬な甲骨上に實に多くの生動な動物と趣のある圖畫を刻んだ。もし契刻が困難であるなら、彼等はどうしてそれほど面白がったのであろうか。（『安陽發掘報告』第三期「再び小屯と仰韶を論ず」の文の插圖に見える）私は眞に存在している而も重大な困難というものは、即ち鼎堂先生の云った次のことである。「中國古代を研究しようとするには、資料は實にはなはだ少ない、然かも虛僞の資料が反對にかなり多い。そのうえ幾十年來の舊觀念はまた實に肅清するに容易ではない、つまりそのところで混亂しているのである。」と。（「周代社會に關する商討の一文」に見える。[十九]）我々は自分の頭腦の舊い觀念をなくすのでなければ、一切を自己の主觀に憑って任意に推測をすてる。この問題はただ單に重大になるだけでなく、しかも全く危險になる。

ただ甲骨資料研究の方法も、また文中に說いているようにそんな簡單なものでない。

「私はただ能く細心して伏案し、歸納の方法を用い、叢雜な材料より私はその條例を探し出して、刻龜の人たちの省筆誤筆及び一字の數形の規律を發見すると、即ち容易に着手しうる」

試みに問えば、單に甲骨文字の「省筆」「誤筆」と「一字數形の規律」を知っているだけで、どんな問題を解決し得ただろうか。甲骨を研究する唯一の好き方法は更に深く〳〵マルクス・レーニン主義を掌握するにある、歷史唯物主義の立場と識見をもって事實を判

斷し、多くの實物に接觸し、正確に材料を運用し、それらをして效用を發揮せしめる。このようにしてはじめて能く中國古代社會の眞の姿をとらえれば、だんだんと顯現することが出來る。

本編收集の七處（か）の甲骨文字は、卽ち私の幾年來か接觸し得た實物を、私は自己の手拓によって（孔德研究所の二片は自分の舊の拓本から取る）獲得した先後に從って選び出した。一種類ごとにみな分期分類を經て、一片ごとに「甲」（龜腹甲）、「背甲」（龜背甲）或は「骨」（牛胛骨）と駐明した。骨版の説明は「正」或は「反」で、文字の書き方或は塗砞は、拼合できるものはみな拼合した。私はこの樣にしてこの瑣屑な仕事をして、讀者達にいささかの方便をあたへるのである。如し果して可能なれば、私はまた破碎骨、全龜あるいは全胛骨の某の一部分であることを現したく思い、文字の細小のものは適當な大きさに擴大した。この樣にしたら必ず讀者に更に多くの便利をあたへうる。私は決って先に離刻本を印刷し、次に釋文を印刷する、あの樣な無責任な出たらめに考慮を拂わなかった。單に讀者たちの負担を增加するのみならず、また研究者には少なからず煩雜さをあたへた。同時に私の全く話しにならない考釋を無理に、讀者たちの手もとにおしつけることは、全くなすべき事ではないと考える。

幸い初學の讀者にあって、如し果して釋文の話を一度調べたいと思はれるなら『卜辭通纂』（『卜辭通纂』註[二]・第二輯一一二頁參見）と『殷契粹編』（『殷契粹編』註[二]・第三輯一八頁參見）の兩書の考釋を參考とすることができる。その見解は、みな非常に正確なものである。

㊀胡石査（義贊）[三十]の説に據れば、亦甲骨三十餘片を藏している。此のように甲骨發見の

時期は、必ず提出の早いことを要すべきである。

註[十八]「關於研究中國古代史的材料問題」『新建設』四巻三期は一九五一年六月刊、
張舜徽の論文

註[十九]「關於周代社會的商討」郭沫若の論文はいづれの雜誌に刊行されたか不明。

註[三十]　胡石査（義贊）未詳。

本書圖版的付印、還是一九四八年九月裏的事。眞想不到編印一本小冊子，發表一部分學術資料，就會擱上了四個年頭。一直到上海解放了第二年的今天，才被「解放」出來。這不能不說是一件幸事。這裏來說明一下這些材料的來源：

一、上海亞洲文會博物院藏甲骨文字：上海亞洲文會的甲骨，在一九三四年中國雜誌二十一巻第六號裏有吉卜生發表的摹本、一九三八年出版的甲骨卜辭七集亦有。我在一九四八年的春天在博物館裏墨拓了一份。一共是一七六片。

二、上海市立博物館藏甲骨文字：市博館的甲骨，都是劉鐵雲的舊物、共有一千二百片。比較有用的都收在殷契佚存裏了。一九四八年夏天，我利用暑期的空暇，在館裏椎拓。本書選了二〇二片。

三、智龕自藏甲骨文字：一九四八年的二月裏我收到了一批甲骨，連同沒有字的，總數是一千片。後來因為出讓者又出讓給了北京的友人，因此我就有機會交換到較好的八十片。經過拼合，就是七十二片了。（三九三、四四二兩片是王秀仁藏物。）

四、胡厚宣藏甲骨文字：胡先生藏甲骨有一萬多片，這裏是最精萃的十片。現在其中四片聞已歸嚴一萍氏收藏。㊁

五、王懿榮舊藏甲骨文字：這兩骨是方豪氏的收藏品、前版見天壤閣甲骨文存第二四片，後者見第九一片。一片是我剔出了幾個字、一片拓本面積大些，可以便利綴合，因此都收在這裏。

六、劉鐵雲舊藏甲骨文字：鐵雲藏龜因為是石印的，有很多地方印得不清楚。這裏在上海市立博物院藏骨和自藏的拓本裏選印了八十五片，對於研究藏龜那書的讀者們可能有一些幫助吧！

七、孔德研究所舊藏甲骨文字：孔德研究所藏骨，以這兩片最大最重要。這拓本可能是古玩商流傳出來的。現在殷契摭佚續編亦著錄了。

至於這些材料的內容，是相當有用的，奇異少見的文字，亦隨處可見。我虔誠地介紹給研究的學者們，它確實替我解決了好幾個重要的問題。我寫了「卜和兆的研究」、「㐅和㐅甲」、「殷代災異考」等幾編論文，全是這些材料給予我的啓發。還有一件小小的事，便是甲骨上的陽文。陽文卜辭是僅殷虛粹編的第一五八五版那一片，鼎堂先生說：「此殘片存「卣一」二字，均呈陽文者，乃泥塞字畫間未被剔去，致高於周遭之骨面。此現象往往有之，非真陽文也。」本編第三五二、三五三、三五四，三版甲骨我椎拓時看見反面附着非常堅硬的泥土，而且印上了甲骨文字，如秦漢的泥封一般。我好奇地把文字拓了下來，這樣一來，甲骨陽文的迷就此拆穿了㊂

未了，我得感謝沈延國和顧起潛兩位先生，本書在編印時他們給我很多幫助和指導。

一九五一年七月二十二日　郭若愚。

㊁據嚴氏的女兒說。惟未見實物、不能指出是那幾片。

㊂印在硬化泥土上的甲骨文字、自然都是反文。粹編一版、亦不能例外。而且甲骨文字是正反通用不加區別的。

本書圖版の印刷は、やはり一九四八年九月の事である。一冊の小冊子を編印するにいたるとは思いもよらない事であった、一部分は學術資料に發表して、就ち四年もほったらかしておいた。それ以降上海解放の第二年目の今日にいたって、やっと「解放」されるに至った。これは一つの幸いなことであると云わざるを得ない。ここにこの材料の來源を一應説明しておく。

一、上海亞洲文會博物院藏の甲骨文字：上海亞洲文會の甲骨は、一九三四年の『中國雜誌』二十一巻第六號[三十一]に吉卜生[三十二]發表の離刻本がある、一九三八年出版の『甲骨卜辭七集』[三十三]にもまたある。私は一九四八年の春に博物館にあって一部を墨拓した。合計一七六片である。

二、上海市立博物館藏の甲骨文字：市博物館の甲骨は、みな劉鐵雲の舊（もと）の物であり、すべて一千二百片ある。比較的役に立つものは、みな『殷契佚存』（『殷契佚存』註[二]・第二輯一九八頁參見）に收められている。一九四八年の夏、私は夏休みを利用して、館で椎拓した。本書には二〇二片を選んだ。

三、智龕[三十四]自から藏する甲骨文字：一九四八年の二月に私は一連の甲骨を收めた、字のないのを含めて、總數は一千片である。のち讓渡者がまた北京の友人に讓渡した、此れによって私は比較的よい八十片を交換する機會をもった。拼合を經て、就ち七十

二二になった（三九三、四四二の二片は王秀仁藏のものである。〔二十五〕）

四、胡厚宣藏の甲骨文字：胡先生藏の甲骨は一萬片ちかくある。ここに最も精華なものは十片である。現在その中の四片は已に嚴一萍（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註〔四十三〕・第一輯三九頁参見）藏に歸すという。㊁

五、王懿榮舊藏の甲骨文字：この二骨は方豪氏〔二十六〕の收藏品である。前版は『天壤閣甲骨文存』第二四片に見える。後者は第九十一片に見える。一片は私の幾個かの字の剔出であって、一片は拓本の面積が大きく、綴合に便利である。これによってみなこゝに收めた。

六、劉鐵雲舊藏の甲骨文字：『鐵雲藏龜』（『鐵雲藏龜』註〔二〕・第一輯一頁参見）は石版印刷であり、實に多くの部分が鮮明でない。これは上海市立博物院の骨と自から藏する拓本を八十五片選んだ。藏龜の研究に對してあの書の讀者たちは聊かの助けとなり得るであろう。

七、孔德研究所舊藏の甲骨文字：孔德研究所藏の骨は、この二片をもって最大にして最も重要とする。この拓本は恐らく古玩商流傳から出來たものであろう。現在『殷契摭佚續編』にまた著錄した。

この資料の内容に至っては、相當役に立つ。奇異にして余り見かけない文字が、隨處に見られる。私は誠意をもって研究上にある學者の人たちに紹介した。それは確實に私のために幾多くの重要な問題を解決した。私は「卜と兆の研究」「方と方甲」「殷代災異考」等の幾編かの論文を書いた〔二十七〕、すべてこの資料によって私は啓發されたのである。また一件小さなことである。卽ち甲骨上の陽文である。陽文の卜辭は僅かに『殷契粹編』の第一

五八五片〔二十八〕のあの一片である。鼎堂先生はいう「此の殘片は『卣一』の二字存す、均しく陽文を呈し、乃ち泥塞の字の畫間は剔出するに至らず、周遭の骨面の高さに至る。此の現象は往往これあり、眞陽の文に非ず」と〔二十九〕。本編第三五二、三五三、三五四の甲骨三版は私が推拓した時反面に非常に堅硬な泥土が附着し、そのうえ甲骨文字を印上して、秦漢の泥封一般の如くである。私は好奇をもって文字の拓をとり、このようになってくると、甲骨陽文の迷で就ち此れをおりまげた。㊂

おわりに、私は沈延國〔三十〕と顧起潛〔三十一〕兩位の先生に感謝する。本書編印の時に彼らは私に實に多くの幇助と指導をしてくださった。

一九五一年七月二十二日　郭若愚。

㊁ 嚴（嚴一萍）氏の女兒の説に據る。惟だ未だ實物を見ないし、これ幾片なるか指出することができない。

㊂ 印は硬化泥土上にある甲骨文字、自然にみな反文である。『粹編』の一版は、亦例外とすることはできない。そのうえ甲骨文字は正反通用して區別を加えることができない。

註〔二十一〕『中國雜誌』二十一卷第六號。これは「上海亞洲文會博物館藏甲骨卜辭」で、一九三四年『中國雜誌』（China Journal）二十一卷六號の「商代之象形文字（The Picture Writing of Shang）の一部、英國人吉卜生の飜刻本である。

註〔二十二〕吉卜生（H.E. Gibson）英國人。經歷不明。方法歛（Frank.H. Chalfant）、庫壽齡（Samuel Couling）兩氏が上海亞洲文會博物館に賣った甲骨を一九三四年、ギブソン氏は『中國雜誌』二十一卷・六號に發表した。彼の甲骨學研究の活躍は一九三四年から三九年頃までで、論文は次のものがある。

商代象形文字（The Picture Writing of Shang）一九三四年中國雜誌二十一卷六期

商代の文字（The Writing of Shang）一九三五年四月、中國雜誌二十二卷四期

商周の貞卜と儀節（Divination and Ritual During the Shang and Chou Dynasties）一九三五年七月、中國雜誌二十三卷一號。

商代の農業（Agriculture in China During the Shang Period, From Information Collected From The Inscribed Shang Bone）一九三七年六號、中國雜誌二十六卷六號。

商代象形文字より中國文字の進化をみる（The Evolution of Chinese Characters Begining from Shang Pictographs）一九三九年、亞洲文會雜誌。

註〔二十三〕甲骨卜辭七集（Seven Collections of Inscribed Oracle Bone）。米國の方法歛（Frank.H.Chalfant）の摹錄を同國の白瑞華（Roswell.S. Britton）が校閲した甲骨の著錄。

註〔二十四〕智龕　未詳

註〔二十五〕王秀仁　未詳

註〔二十六〕方豪〔？〕方氏については明らかではないが、現在台灣に在住しているようで、「王氏舊藏兩胛骨補記」『大陸雜誌』十卷五期の一文がある。

註〔二十七〕郭若愚の「卜和兆之研究」「方和方甲」「殷代災異考」の論文は未見。

註〔二十八〕『殷契粹編』一五八五片

註〔二十九〕『殷契粹編考釋』一五八五片　二一二頁による。

註〔三十〕沈延國　未詳。

註〔三十一〕顧起潛　未詳。

七三、戰後南北所見甲骨錄〔一〕

序例

一、本書為戰後新獲甲骨集之三。戰後新獲甲骨集全部共分四編：一為戰後京津新獲甲骨集、拓本四冊、收一九四五年編者在京津兩地所得甲骨實物及拓本五九六〇片、後減為五六四二片、書於一九四九年編成、因須畧加修改、故尚未付印。二為戰後寧滬新獲甲骨集、摹本二冊、收一九四五至一九五〇年、編者在寧滬兩地所得甲骨一一四三片、已於今年五月、由來薰閣書店出版。三為戰後南北所見甲骨錄、摹本三冊。四為十家所藏甲骨文存、拓本二冊。則皆編者近年以來、在南北各地、所見公私機關及師友所藏、徵獲同意、編錄成書。今先出版戰後南北所見甲骨錄、以供獻於研契之學人。

二、本書各篇所錄甲骨、以時代為序、每期甲骨、再以類分、以及其他一切體例、俱仿拙編戰後京津新獲甲骨集及戰後寧滬新獲甲骨集兩書。

三、時代暫分四期、一曰盤庚小辛小乙武丁時期；二曰祖庚祖甲時期；三曰廩辛康丁武乙文丁時期；四曰帝乙帝辛時期。

四、類別則按其性質、列為來源、氣象、農產、祭祀、神明、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等項。

五、本書全部、包括摹本及釋文。茲以甲骨學研究材料之急需、先將摹本出版。釋文考證、容續行編印。

六、本書所錄甲骨、有龜背甲、龜腹甲、及左右牛胛骨之不同。甲骨摹本、有兩片為一骨之

正反面者。並當於釋文中注出。

七、本書所錄甲骨、有與他書或本書之片、可以拼合者甚多、亦當於釋文中詳之。

八、本書所錄甲骨、有已重見著錄於他書者、將另製著錄表、附於釋文之後。

九、輔仁大學所藏甲骨二百二十片、抗戰期間、在北京購得。一九四五年、承周燕孫教授以拓本見假、使摹錄一過。除鄴中片羽三集已著錄者外、得片一百零七。復蒙輔仁大學之許可、允其選錄發表、可感殊深！

十、誠明文學院甲骨七百餘片、原係英籍猶太人哈同之舊藏、抗戰期間、輾轉歸誠明文學院。一九三六年、編者以蔣竹莊院長、朱瑞如秘書之協助、獲得參觀、並鈔錄戩壽堂所藏殷虛文字一書所未著錄之九十一片。復承兩先生厚誼、允以誠明文學院名義發表、至為感謝！

一、本書は戰後新獲集の三と為す、戰後新獲甲骨集は全部共に四編に分つ、一は『戰後京津新獲甲骨集』（『戰後京津新獲甲骨集』註〔二〕、第五輯參見）為り、拓本四冊、一九四五年に編者京津兩地に在りて得る所の甲骨實物及び拓本五九六〇片を收む、後ち減じて五六四二片と為り、書は一九四九年に編成る、因って須らく畧ぼ修改を加ふるべし、故に尚未だ付印せず。二は『戰後寧滬新獲甲骨集』（『戰後寧滬新獲甲骨集』註〔二〕・本輯二四九頁參見）為り、摹本二冊、一九四五より一九五〇年に至る編者、寧滬の兩地に在りて得る所の甲骨一一四三片は、已に今年の五月に、來薰閣書店より出版す。三は『戰後南北所見甲骨錄』為り、摹本三冊。四は『十家所藏甲骨文存』〔三〕為り、拓本二冊。則ち皆な編者近年以來、南北各地に在りて、公私機關及び師友

の藏する所を所見し、徵するに同意を獲て、編錄して書を成す。今、先づ『戰後南北所見甲骨錄』を出版し、以て契を研むるの學人に供獻す。

二、本書の各篇に錄する所の甲骨は、時代を以て序と為す、每期の甲骨は、再び類を以て分ち、以て其の他一切の體例に及ぶ、俱に『戰後京津新獲甲骨集』及び『戰後寧滬新獲甲骨集』の兩書に倣ふ。

三、時代は暫らく四期に分つ、一に曰く盤庚小辛小乙武丁の時期；二に曰く祖庚祖甲の時期、三に曰く廩辛康丁武乙文丁の時期、四に曰く帝乙帝辛の時期。

四、類別は則ち其の性質を按じ、列するに來源、氣象、農產、祭祀、神明、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等の項為り。

五、本書は全部、摹本及び釋文を包括す、茲に甲骨學研究材料の急需を以て、先づ將に摹本を出版せんとす。釋文考證は、容に續行編印すべし。

六、本書に錄する所の甲骨は、龜背甲、龜腹甲、及び左右牛胛骨の同じからざる者有り、甲骨摹本は、兩片に一骨の正反面を為す者あり。共に當に釋文中に注出すべし。

七、本書に錄する所の甲骨は、他の書或は本書の片と、以て拼合す可き者甚だ多く有り、亦當に釋文中にこれを詳かにすべし。

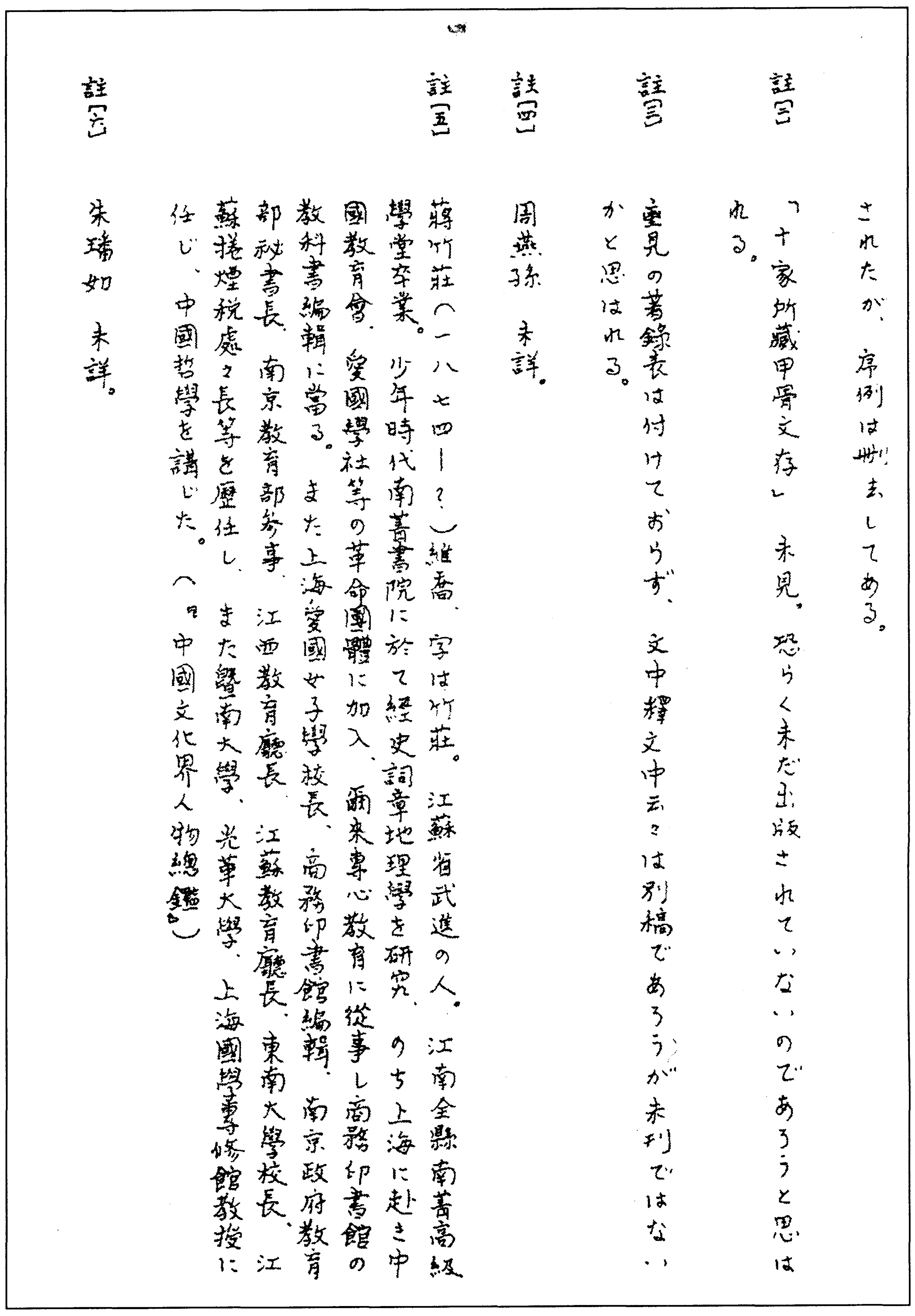
八、本書に錄する所の甲骨は、已に著錄他書に重見有る者は、將に另に著錄表を製り、釋文の後に附す〔三〕。

九、輔仁大學藏する所の甲骨二百二十片は、抗戰期間、北京に在りて購得す。一九四五年、周燕孫〔四〕教授拓本を以て假さる、摹錄一過せしむるを承く。『鄴中片羽三集』（『鄴中

片羽三集』註〔二〕・第三輯一三七頁參見）に已に著錄を除くの外は、片一百零七を得。復た輔仁大學の許可を蒙り、其の選錄の發表を允（ゆる）され、感ずること殊に深かる可し。

十、誠明文學院の甲骨七百餘片は、原（もと）英籍猶太人哈同（ハートン）（哈同・『殷虛書契後編』註〔四〕・第一輯一二〇頁參見）の舊藏に係（よ）り、抗戰期間、輾轉として誠明文學院に歸す。一九三六年、編者は蔣竹莊院長〔五〕、朱瑞如秘書〔六〕の協助を以て、參觀を獲得し、並に『戩壽堂所藏殷虛文字』（『戩壽堂所藏殷虛文字』註〔二〕・第一輯一四〇頁參見）一書の未だ著錄せざる所の九十一片を鈔錄す。復た兩先生の厚誼を承けて、誠明文學院の名義を以て發表を允され、至りて感謝を為さん。

註〔一〕 本書の成書については序文に詳しいので説明する必要はないが、概略ここについて記しておく。胡厚宣の編纂による。收錄した甲骨は編者自から各地を歩いて集めたものである。それらは輔仁大學所藏甲骨文字一〇七片、誠明文學院所藏甲骨文字九一片、上海文物會所藏甲骨文字一五七片、南京博物院所藏甲骨文字四片。無想山房舊藏甲骨文字五〇九片、明義士舊藏甲骨文字八四七片を收める。本書の各巻の卜片收錄は、南北師友所見甲骨錄巻一、二〇四片、巻二、二七一片。南北坊間所見甲骨錄巻一、一一一片、巻二、二〇八片、巻三、一四四片、巻四、五五六片、巻五、六七片、合計三二〇九片となる。また卜片の配列は『戰後寧滬新獲甲骨集』と同樣に四期に分ける。出版は一九五一年十一月、摹本十篇十二巻、全書共に三冊、序文の前に陳子展の「題詩」があるが、ここでは割愛させていただいた。北平來薰閣書店、初版三百部。一九六五年台灣より再版



されたが、序例は刪去してある。

註〔二〕 「十家所藏甲骨文存」 未見。恐らく未だ出版されていないのであろうと思はれる。

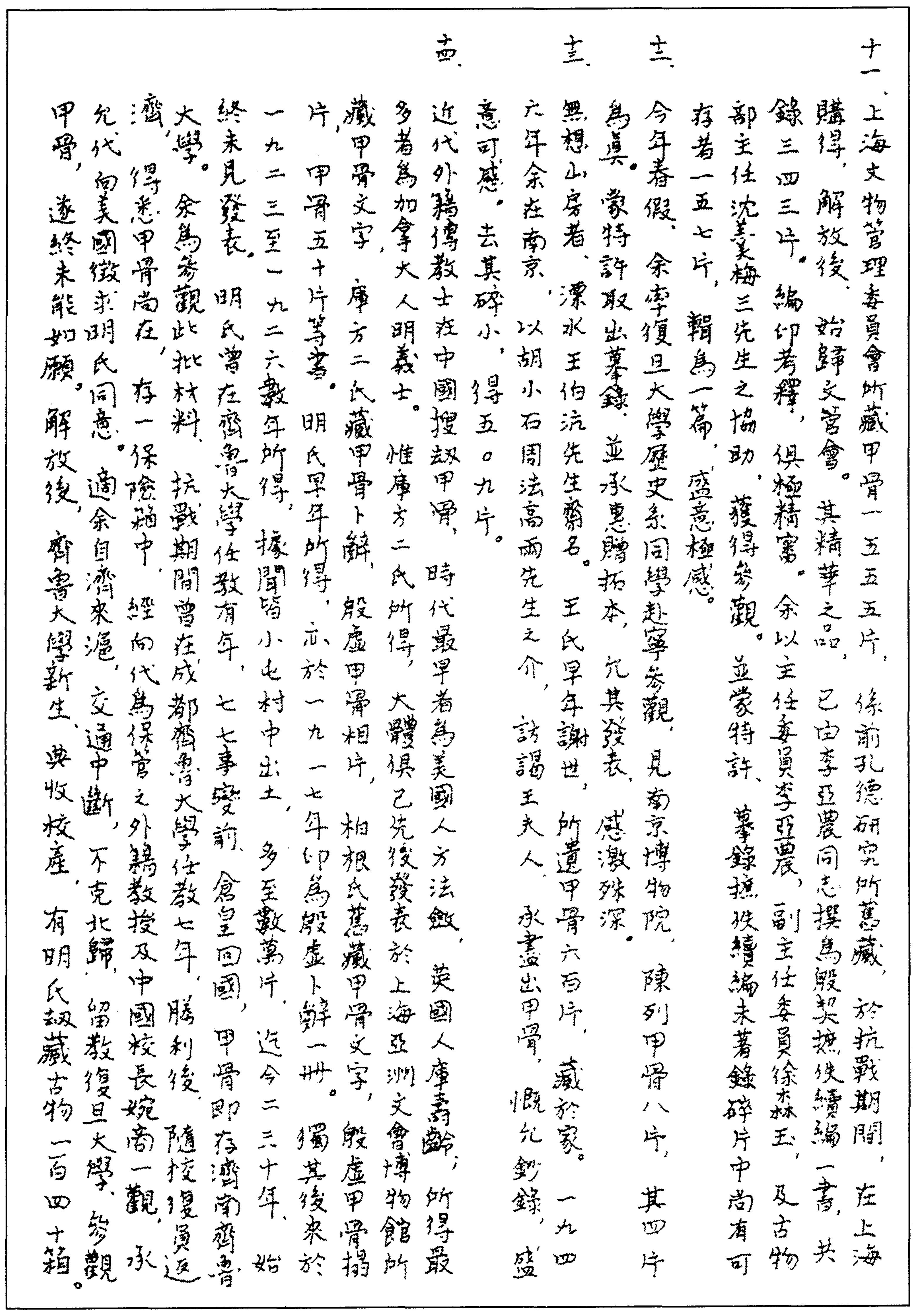
註〔三〕 董見の著錄表は付けておらず、文中釋文中云々は別稿であろうが未刊ではないかと思はれる。

註〔四〕 周燕孫 未詳。

註〔五〕 蔣竹莊（一八七四－？）維喬、字は竹莊。江蘇省武進の人。江南全縣南菁高級學堂卒業。少年時代南菁書院に於て經史詞章地理學を研究、のち上海に赴き中國教育會、愛國學社等の革命團體に加入、爾來專心教育に從事し商務印書館の教科書編輯に當る。また上海愛國女子學校長、商務印書館編輯、南京政府教育部秘書長、南京教育部參事、江西教育廳長、江蘇教育廳長、東南大學校長、江蘇捲煙稅處々長等を歷任し、また暨南大學、光華大學、上海國學專修館教授に任じ、中國哲學を講じた。（『中國文化界人物總鑑』）

註〔六〕 朱瑞如 未詳。

301



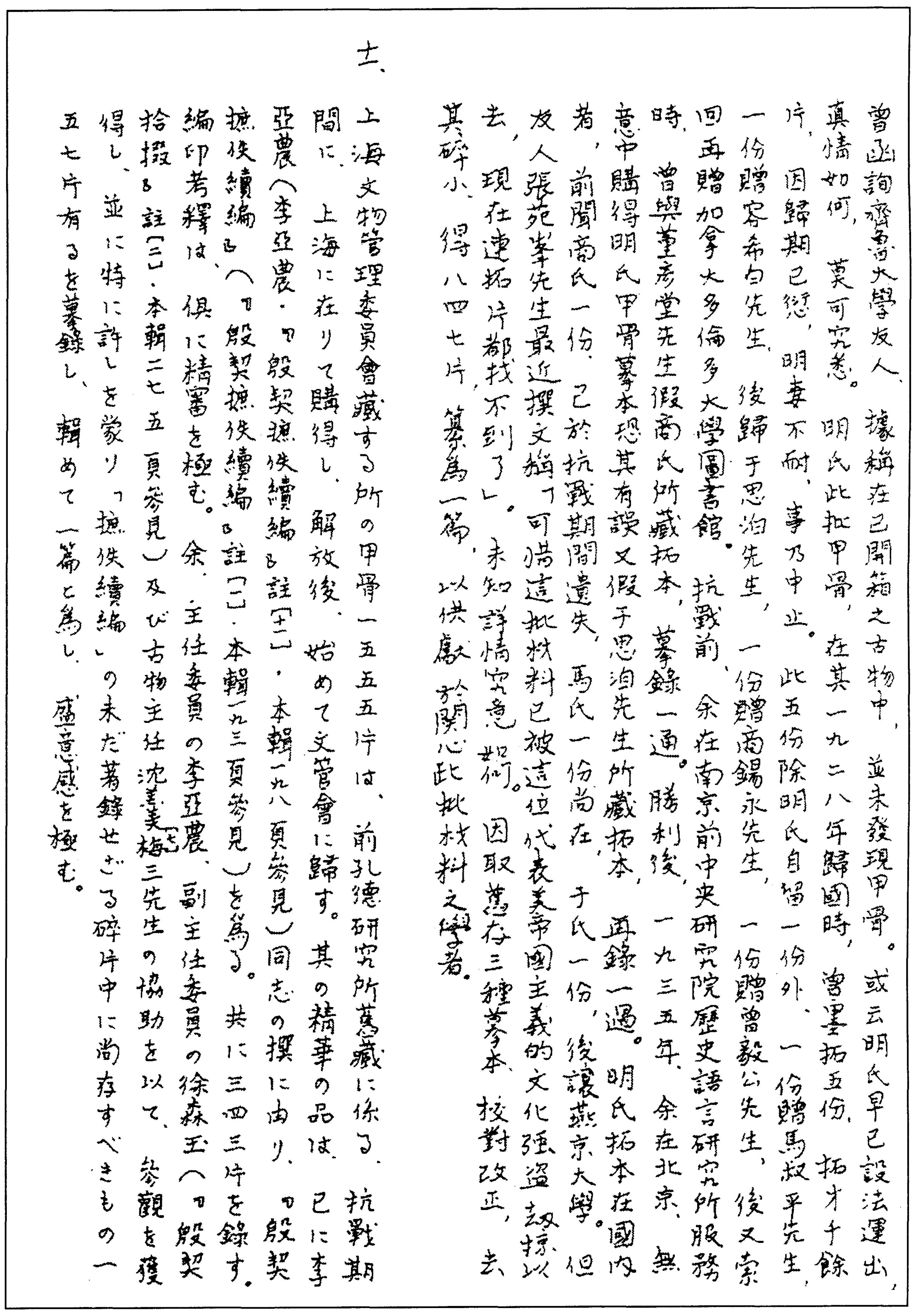
十一、上海文物管理委員會所藏甲骨一五五片，係前孔德研究所舊藏，於抗戰期間，在上海購得，解放後，始歸文管會。其精華之品，已由李亞農同志撰為殷契摭佚續編一書，共錄三四三片。編印考釋，俱極精審。余以主任委員李亞農，副主任委員徐森玉，及古物部主任沈羹梅三先生之協助，獲得參觀。並蒙特許，摹錄摭佚續編未著錄碎片中尚有可存者一五七片，輯為一篇，盛意極感。

十二、今年春假，余率復旦大學歷史系同學赴寧參觀，見南京博物院，陳列甲骨八片，其四片為真。蒙特許取出摹錄，並承惠贈拓本，允其發表，感激殊深。

十三、無想山房者，溧水王伯沆先生齋名。王氏早年謝世，所遺甲骨六百片，藏於家。一九四六年余在南京，以胡小石周法高兩先生之介，訪謁王夫人，承盡出甲骨，慨允鈔錄，盛意可感。去其碎小，得五〇九片。

十四、近代外籍傳教士在中國搜劫甲骨，時代最早者為美國人方法斂，英國人庫壽齡；所得最多者為加拿大人明義士。惟庫方二氏所得，大體俱已先後發表於上海亞洲文會博物館所藏甲骨文字，庫方二氏藏甲骨卜辭，殷虛甲骨相片，柏根氏舊藏甲骨文字，殷虛甲骨搨片，甲骨五十片等書。明氏早年所得，亦於一九一七年印為殷虛卜辭一冊。獨其後來於一九二三至一九二六數年所得，據聞皆小屯村中出土，多至數萬片，迄今二三十年，始終未見發表。明氏曾在齊魯大學任教有年，七七事變前，倉皇回國，甲骨即存濟南齊魯大學。余為參觀此批材料，抗戰期間曾在成都齊魯大學任教七年，勝利後，隨校復員返濟，得悉甲骨尚在，存一保險箱中，經向代為保管之外籍教授及中國校長婉商一觀，承允代向美國徵求明氏同意。適余自濟來滬，交通中斷，不克北歸，留教復旦大學，參觀甲骨，遂終未能如願。解放後，齊魯大學新生，典收校產，有明氏劫藏古物一百四十箱。

302

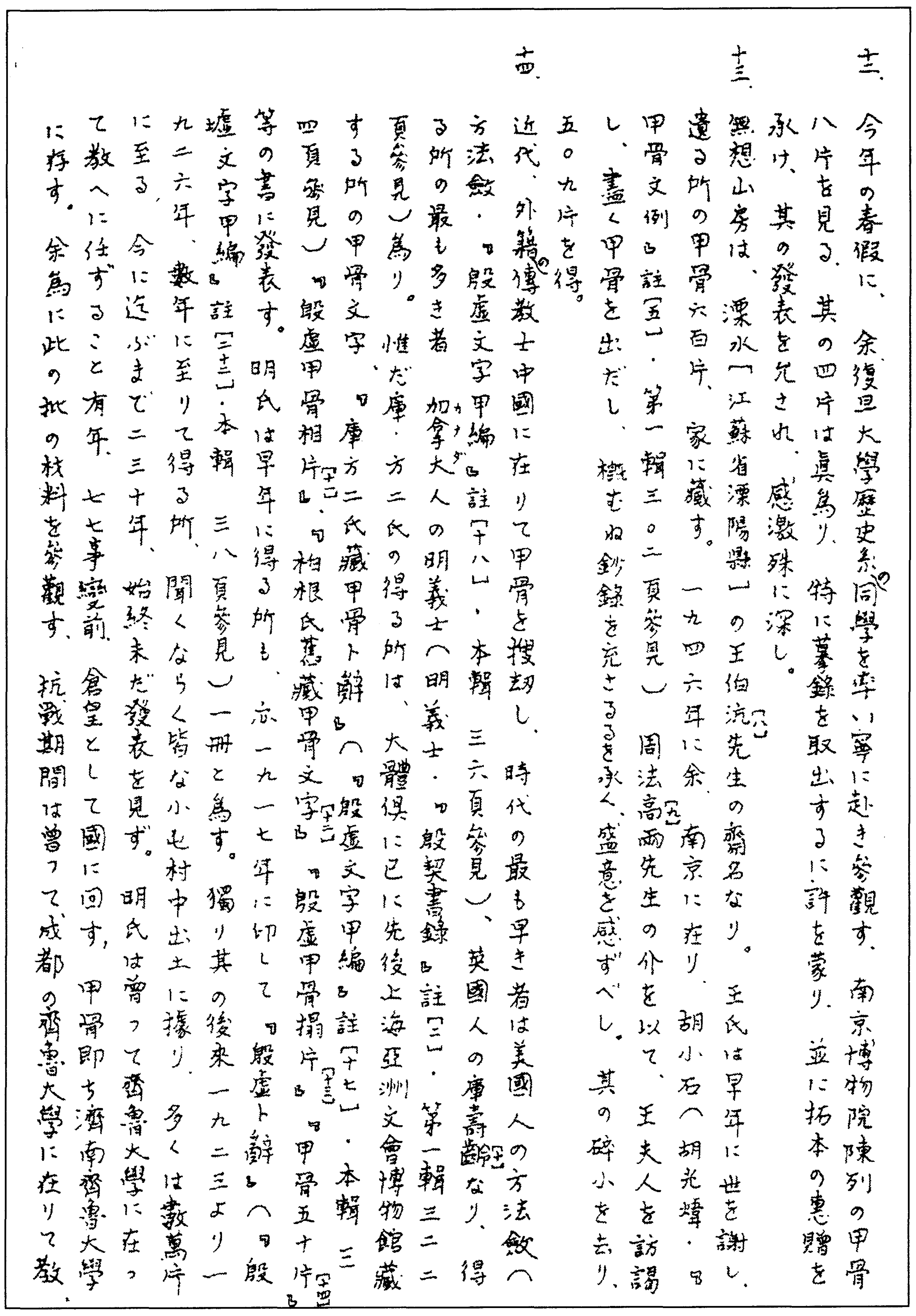


曾函詢齊魯大學友人，據稱在已開箱之古物中，並未發現甲骨。或云明氏早已設法運出，真情如何，莫可究悉。明氏此批甲骨，在其一九二八年歸國時，曾墨拓五份，拓才千餘片，因歸期已促，明妻不耐，事乃中止。此五份除明氏自留一份外，一份贈馬叔平先生，一份贈容希白先生，一份贈商錫永先生，一份贈曾毅公先生，後又索回再贈加拿大多倫多大學圖書館。抗戰前，余在南京前中央研究院歷史語言研究所服務時，曾與董彥堂先生假商氏所藏拓本，摹錄一通。勝利後，一九三五年，余在北京，無意中購得明氏甲骨摹本恐其有誤又假于思泊先生所藏拓本，再錄一過。明氏拓本在國內者，前聞商氏一份，已於抗戰期間遺失，馬氏一份尚在，于氏一份，後讓燕京大學。但友人張苑峯先生最近撰文稱「可惜這批材料已被這位代表美帝國主義的文化強盜劫掠以去，現在連拓片都找不到了」。未知詳情究竟如何。因取舊存三種摹本，校對改正，去其碎小，得八四七片，纂為一篇，以供獻於關心此批材料之學者。

十一、

上海文物管理委員會藏する所の甲骨一五五片は、前孔德研究所舊藏に係る。抗戰期間に、上海に在りて購得し、解放後、始めて文管會に歸す。其の精華の品は、已に李亞農（李亞農・『殷契摭佚續編』註〔十二〕・本輯一九八頁參見）同志の撰に由り、『殷契摭佚續編』（『殷契摭佚續編』註〔二〕・本輯一九三頁參見）を爲る。共に三四三片を錄す。編印考釋は、俱に精審を極む。余、主任委員の李亞農、副主任委員の徐森玉（『殷契拾掇』註〔三〕・本輯二七五頁參見）及び古物主任沈羹梅〔七〕三先生の協助を以て、參觀を獲得し、並に特に許しを蒙り「摭佚續編」の未だ著錄せざる碎片中に尚存すべきもの一五七片有るを摹錄し、輯めて一篇と爲し、盛意感を極む。

303



十二、今年の春假に、余復旦大學歷史系の同學を率い寧に赴き參觀す。南京博物院陳列の甲骨八片を見る。其の四片は眞爲り。特に摹錄を取出するに許を蒙り、並に拓本の惠贈を承け、其の發表を允され、感激殊に深し。

十三、無想山房は、溧水（江蘇省溧陽縣）の王伯沆〔八〕先生の齋名なり。王氏は早年に世を謝し、遺る所の甲骨六百片、家に藏す。一九四六年に余、南京に在り、胡小石（胡光煒・『甲骨文例』註〔五〕・第一輯三〇二頁參見）周法高〔九〕兩先生の介を以て、王夫人を訪謁し、盡く甲骨を出だし、概むね鈔錄を允さるるを承く、盛意を感ずべし。其の碎小を去り、五〇九片を得。

十四、近代、外籍の傳教士中國に在りて甲骨を搜劫し、時代の最も早き者は美國人の方法斂（『殷虛文字甲編』註〔十八〕・本輯三六頁參見）、英國人の庫壽齡〔十〕なり、得る所の最も多き者加拿大（カナダ）人の明義士（明義士・『殷契書錄』註〔三〕・第一輯三二二頁參見）爲り。惟だ庫・方二氏の得る所は、大體俱に已に先後上海亞洲文會博物館藏する所の甲骨文字、『庫方二氏藏甲骨卜辭』（『殷虛文字甲編』註〔十七〕・本輯三四頁參見）『殷虛甲骨相片』〔十一〕、『柏根氏舊藏甲骨文字』〔十二〕『殷虛甲骨搨片』〔十三〕『甲骨五十片』〔十四〕等の書に發表す。明氏は早年に得る所も、亦一九一七年に印して『殷虛卜辭』（『殷虛文字甲編』註〔三十三〕・本輯三八頁參見）一冊と爲す。獨り其の後來一九二三より一九二六年、數年に至りて得る所、聞くならく皆な小屯村中出土に據り、多くは數萬片に至る。今に迄ぶまで二三十年、始終未だ發表を見ず。明氏は曾って齊魯大學に在って教へに任ずること有年、七七事變前、倉皇として國に回す，甲骨即ち濟南齊魯大學に存す。余為に此の批の材料を參觀す、抗戰期間は曾って成都の齊魯大學に在りて教、

304

へに仕ずること七年、勝利の後、校に隨ひ復員して濟にり、悉く甲骨尚在り、一保險の箱中に存するを得。向代保管の外籍教授及び中國校長の婉商一覲を爲すを經、允に美國に代向するを充され、（微明氏の同意を）適ゝ余濟より滬に來り、交通中斷し、克く北歸せず、留りて復旦大學に教ふ、甲骨を參觀し、遂終未だ能く願うも如かず。解放後は、齊魯大學新たに生れ、校産を與收し、明氏の叔藏の古物一百四十箱有り。曾つて函は齊魯大學友人に詢り、據りて已に開箱の古物中に在りて、並に未だ甲骨を發見せざると稱す。或は云く「明氏早く已に法を設けて運出す」と、眞憍如何、究悉すべき莫し。 明氏此の批の甲骨は、其の一九二八年歸國の時に在りて、曾つて墨拓の五份は、拓才（わずか）に千餘片、因って歸期已に總り、明「氏」の妻耐えず、事を乃ち中止す。此の五份明氏を除き自から一份を留むるの外は、一份は馬叔平（馬衡・『卜辭通纂』註[三十四]・第二輯一二一頁參見）先生に贈り、一份は容希白（容庚・『殷虛文字類編』註[三]・第一輯一七一頁參見）先生に贈り、後ち于思泊（于省吾・『殷契佚存』註[三十五]・第二輯二三〇頁參見）に歸す、一份は商錫永（商承祚・『殷虛文字類編』註[五]・第一輯一七三頁參見）先生に贈り、一份は曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）先生に贈る。後ちまた回り索めて加拿大多倫多（トロント）大學圖書館に贈る。抗戰前に、余、南京の前中央研究院歷史語言研究所に服務の時に在りて、曾つて董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）先生と商「承祚」藏する所の拓本とを假り摹錄を一通す。勝利の後ち、一九三五年に、余、北京に在り、無意の中に明氏の甲骨摹本を購得し其の誤りあるを恐れ、また于思泊先生藏する所の拓本を假り再錄一過す。 明氏拓本は國内に在る者は、前に商氏の一份と聞く、已に抗戰期間に遺佚し、馬

305

「衡」氏の一份は尚在り、于「省吾」氏の一份は、後ち燕京大學に讓る。但友人張苑峯[十五]先生は最近文を撰して「惜む可きことにはこの材料は已にこのとき（の）代表美帝國主義の文化強盗によって奪われてしまった。現在は一連の拓片はみな見あたらない」[十六]と稱し、未だ情を詳かにするを知らず、究竟如何。因りて蒐めて三種存するの摹本を取り、校對改正し、其の碎小を去り、八四七片を得、纂して一篇と爲す。以て此の批の材料に關心あるの學者に供獻す。

註[七]　沈蔓梅　未詳。

註[八]　王伯沆　王瀣のこと。『鐵雲藏龜拾遺』註[四]・第一輯二四一頁參見。

註[九]　周法高（現代生年未詳）言語學者であり、現在台灣におり、中央研究院歷史語言研究所所員。

註[十]　庫壽齡（Samuel Couling）山東省濰縣の牧師であったイギリス人。彼は甲骨發見の初期に甲骨蒐集を方法斂とともにし、『庫方二氏藏甲骨文字』を出版している。この書については『殷虛文字甲編』註[二]・本輯　頁參見。

註[十一]　『殷虛甲骨相片』（Yin Bone Photographs）は米國人白端華（Roswells Britton）の書で寫眞版。卜片一〇四片。一九三五年米國ニユーヨーク出版。單行本。

306

註[十二]　『柏根氏舊藏甲骨文字』（Bergen Collection of the Inscribed Oracle Bone）は明義士（James Mellon Menzies）に編による。七四片を錄す。一九三五年『齊大季刊』六七期、巻末に摹本と考釋を附す。また一九三五年に齊魯大學國學研究所より單行本一冊として刊行された。

註[十三]　『殷虛甲骨搨片』（Yin Bone Rubbings）は米國の白瑞華（Roswell S. Britton）の編による。甲骨二二片を收錄。一九三七年、米國ニユーヨークにて出版。影印單行本一冊。未見。

註[十四]　『甲骨五十片』（原名不明）米國の白瑞華（Roswell S. Britton）の編による。甲骨五十片を收錄。一九四〇年出版。未見。

註[十五]　張苑峯　未詳

註[十六]　張苑峯の文、未詳。

十五、南北師友所見甲骨錄者、係十餘年來、每於師友藏家、見有甲骨、隨即摹錄、或實物、或拓本、少則一二片、多或十餘片乃至數十片、分雖零碎、合則成篇、錄而出之、供之同好。因隨時摹錄、放置一起、日久不易分清、恐強分或致混淆、故統名南北師友所見甲骨錄。至卷二所錄、多選自友人葉粟如先生所藏其尊人葉洪漁先生、遺著甲骨文選甲

307

乙編。於此謹向協助師友、致以最誠懇之謝意。

十六、南北坊間所見甲骨錄者、卷一卷二所錄、係在京津寧滬場肆坊間、見有甲骨、未能購成、鈔錄之所得。卷一據實物鈔錄。卷二據拓本摹成。卷三所錄、乃在寧滬所購、未能收入於戰後寧滬新獲甲骨集者。卷四所錄、乃在京津所購未能收入於戰後京津新獲甲骨集者。俱以爲本書之附錄。

十七、總上十篇十二卷、計收甲骨三二一九片。萬一此書於甲骨材料上能有所裨益、皆以上公私藏家及有関師友協助之功、至於摹錄有誤、編次不妥、則皆編者草率之過也。尚祈讀者不吝賜教、指正錯誤、至所幸感！

十八、書成之後、承沈尹默先生吳湖帆先生惠題書耑書簽、陳子展先生爲賦長句、來薰閣書店再爲出版、統於此敬致謝意！

一九五一年九月二十四日、胡厚宣記於復旦大學之筑莊、翌日將有皖北土改之行。

十五、「南北師友所見甲骨錄」は、十餘年來、每に師友の藏家に甲骨有るを見れば、隨即摹錄す（るに係る）。或は實物、或は拓本、少なければ則ち一・二片、多ければ或は十餘片乃至數十片、分れて零碎と雖も、合すれば則ち篇と成る。錄してこれを出だし、これを同好に供す。因って隨時摹錄し、放置一起し、日久しく整理（分清）し易からず、強ひて分ち或は混致するを恐る。故に統るに「南北師友所見甲骨錄」と名づく。卷二錄する所は、多く友人葉粟如先生[十七]の藏する所、其の尊人葉洪漁（葉玉森・『殷契鉤沈』註[三]・第一輯一八二頁參見）先生、遺著『甲骨文選甲乙編』[十八]より選ぶに（至る）。此に於て謹ん

308

で協助の師友に向し、以て最も誠懇の謝意を致す。

十六、「南北坊間所見甲骨錄」は、巻一・巻二錄する所　京津寧滬の場肆の坊間に在り、甲骨有るを見て、未だ購成せる能はず、鈔錄の得る所　巻一は實物の鈔錄に據る。巻二は拓本の摹成に據る。巻三錄する所は、乃ち寧滬に在りて購ふ所、未だ『戰後寧滬新獲甲骨集』に收入する能はざる者なり。巻四　錄する所は、乃ち京津に在りて購ふ所未だ『戰後京津新獲甲骨集』に收入する能はざる者なり。俱に以て本書の附錄を為す。

十七、總上十編十二巻は、計えて甲骨三二一九片を收む。萬一此の書甲骨材料上に能く裨益する所有るは、皆な以上の公私藏家及び師友協助の功に關わり有り、摹錄に至りて誤り有れば、編次妥んぜず、皆な編者草率の過ちなり。尚讀者に錯誤の教指を賜わることを吝まざるを祈る。至りて幸感とする所なり。

十八、書成るの後、沈尹默（沈尹默・『鐵雲藏龜零拾』註[三]・第二輯九六頁參見）先生、吳湖帆[十九]先生の　書耑書簽を惠題さるを承く。陳子展[二十]先生は賦の長句を為り、來薰閣書店は再び出版を為し、統るに此に敬んで謝意を致す。

一九五一年九月二十四日、胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第二輯一三四頁參見）復旦大學の笯莊に記す、其の翌日將に皖北土改めの行有り。

註[十七]　葉粟如　未詳

註[十八]　『甲骨文選甲乙篇』　葉玉森撰　未刻か。

註[十九]　吳湖帆　未詳。

註[二十]　陳子展　未詳。

七四、五十年甲骨學論著目[一]

序言

一

殷墟甲骨文字、自從一八九九年、也就是清朝光緒二十五年開始發現、到現在已經是整整的五十年了。

為了紀念這一門剛有半世紀歷史的新興科學、我寫了三篇長短不齊的文章：

一、五十年甲骨文發現的總結。
二、五十年來之甲骨學。
三、五十年甲骨學論著目。

也可以說是對這五十年來的甲骨學、作了一個小小的清算。因為五十年甲骨學論著目、也許是初學用得着的一本工具書、所以先把它付印出版。

二

據我的統計、在這五十年中、甲骨文材料的出土：

一、已著錄出書者	七一種	四一〇八七片
二、國內機關採集尚未著錄者	三一處	二〇九七一片
三、國內私人收藏尚未著錄者	七六家	九三六二五片
四、國外機關採集尚未著錄者	九處	五四八一片
五、國外私人收藏尚未著錄者	六家	八二五片

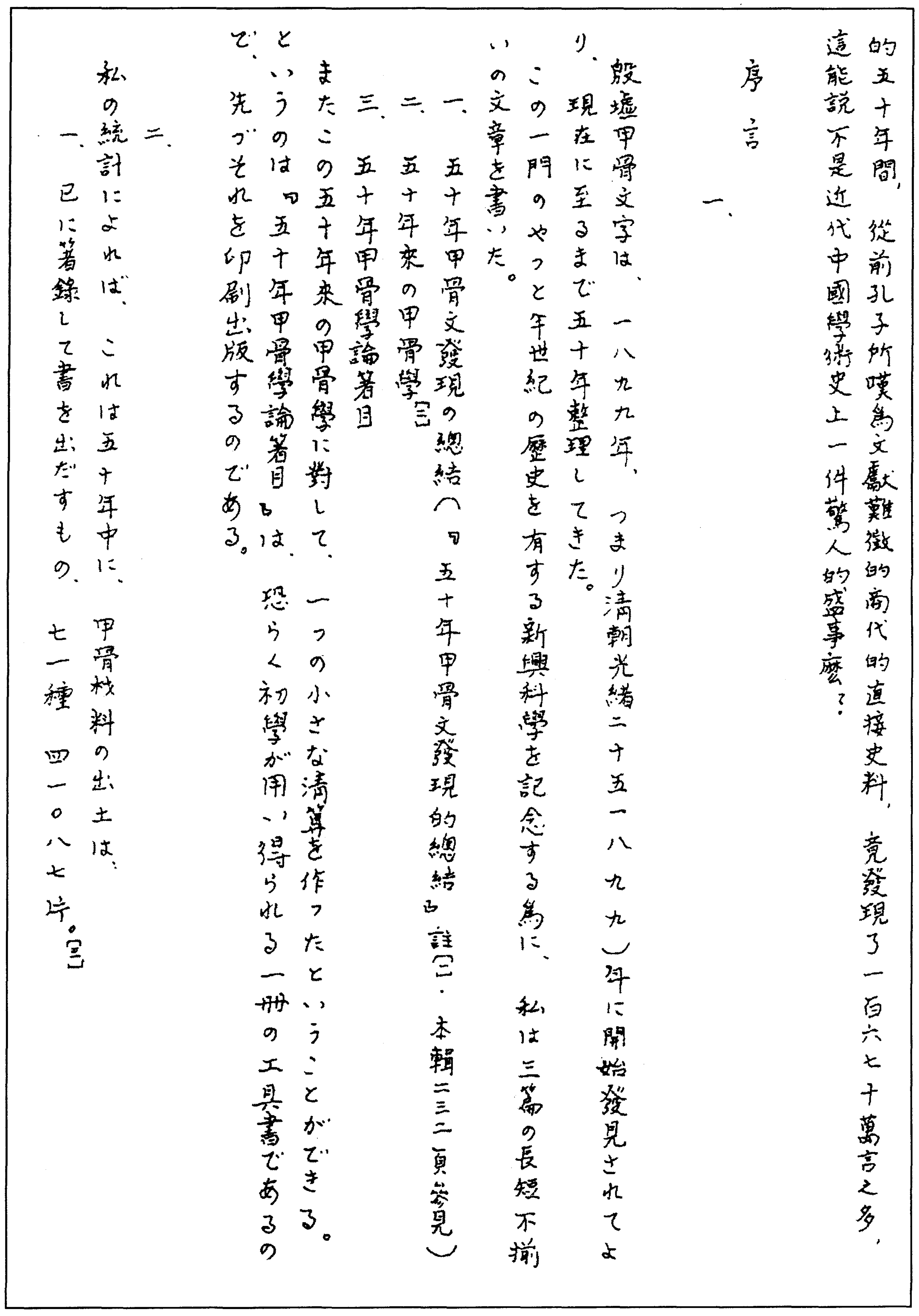
總共是一九三宗、一六一九八九片。只短短的五十年、發現的材料、竟有十六七萬片之多、這在中國考古學上、史料學上、眞是一件了不得的盛事。

我們先不要說甲骨文是中國最古的文字、因為有它的發現、使一千八九百年以來千萬學者所萃力研究的中國文字的歷史、提早了一千四五百年。我們也先不必提甲骨文是商代最可信的直接史料、在兩千四五百年以前、連殷人之後的孔子、都嘆殷禮之不足徵、而我們現在倒可以大講特講。只單就材料的豐富來說、已經是大可以驚人了。

再就歷代地下發現的古代文字史料而言、據說在漢武帝末年、魯恭王壞孔子宅、曾發現古文經。晉朝初年、在平原汲郡魏哀王的墓中、也曾發現過大批的竹簡。可惜不久、就都散失、眞相詳情、不得而知。但即使不散失、前者不過是戰國時魯國的文字、後者不過是戰國時梁國的史籍而已。他如陶器文字、石器文字、骨器文字、玉器文字、以及璽印封印、貨布帛幣、鑾鈴鏡鑑、符契帶鉤、數量都不算多、有字也很零碎。而且時代大體也不出春秋、戰國之間。材料最豐富、而關係最重大的、恐怕要算被稱為鐘鼎彝器的銅器銘文了。但我們看羅振玉的三代吉金文存、號稱後來居上集大成的專書、總數不過四八三一器。劉體智的小校經閣金文、連一些假的東西都算上、總數不過六四五六器。福開森的歷代著錄吉金目、有字無字的、都收在一起、總數也不過萬器左右。比起十六七萬片的甲骨文來、那數量是差多了。

就是秦漢以後的文字史料、近年發現、以甘肅、寧夏、蒙古、新疆一帶出土的漢、晉簡牘、最為有名。但我們從一九〇〇年斯坦因和斯文赫丁等的考察算起、直至一九二七年西北科學考察團、一九三二年新綏公路察勘隊、以及一九四二年西北史地考察團的發現、總括起來、最多也不過一兩萬片而已。僅及甲骨文數量的十幾分之一、而時代却晚了一千五六百年了。

十六七萬片的甲骨文字、每片平均、就以十字計算、已經是一百六七十萬言了。在這短短



的五十年間，從前孔子所嘆爲文獻難徵的商代的直接史料，竟發現了一百六七十萬言之多，這能說不是近代中國學術史上一件驚人的盛事麽？

序言

一、

殷墟甲骨文字は、一八九九年、つまり清朝光緒二十五（一八九九）年に開始發見されてより、現在に至るまで五十年整理してきた。この一門のやっと半世紀の歴史を有する新興科學を記念する爲に、私は三篇の長短不揃いの文章を書いた。

一、五十年甲骨文發現の總結（『五十年甲骨文發現的總結』註[二]・本輯二三二頁參見）

二、五十年來の甲骨學[二]

三、五十年甲骨學論著目

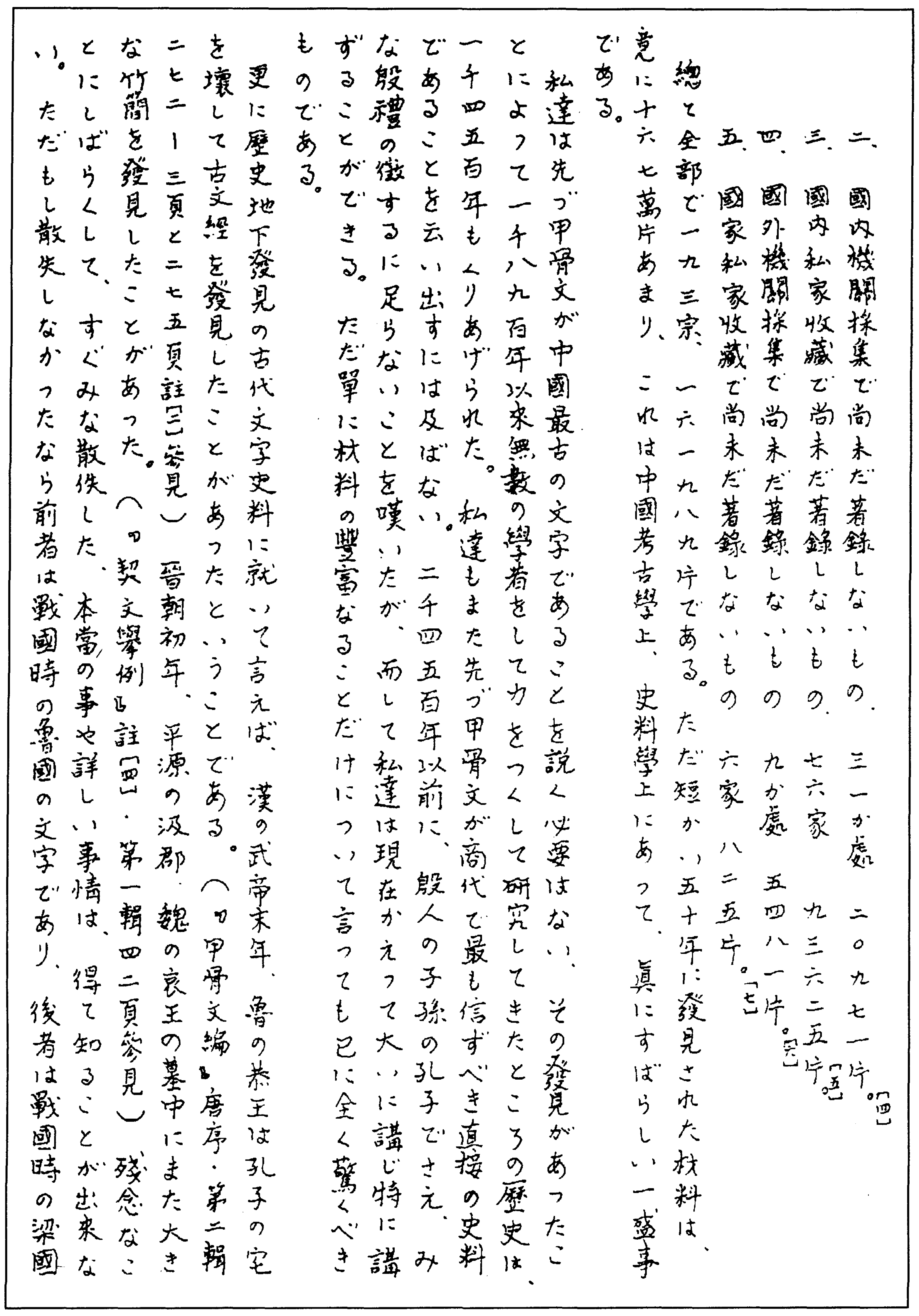
またこの五十年來の甲骨學に對して、一つの小さな清算を作ったということができる。というのは『五十年甲骨學論著目』は、恐らく初學が用い得られる一冊の工具書であるので、先ずそれを印刷出版するのである。

二、

私の統計によれば、これは五十年中に、甲骨材料の出土は、

一、已に著録して書を出だすもの、七一種 四一〇八七片。[三]

313



二、國内機關採集で尚未だ著録しないもの、三一か處 二〇九七一片。[四]

三、國内私家收藏で尚未だ著録しないもの、七六家 九三六二五片。[五]

四、國外機關採集で尚未だ著録しないもの 九か處 五四八一片。[六]

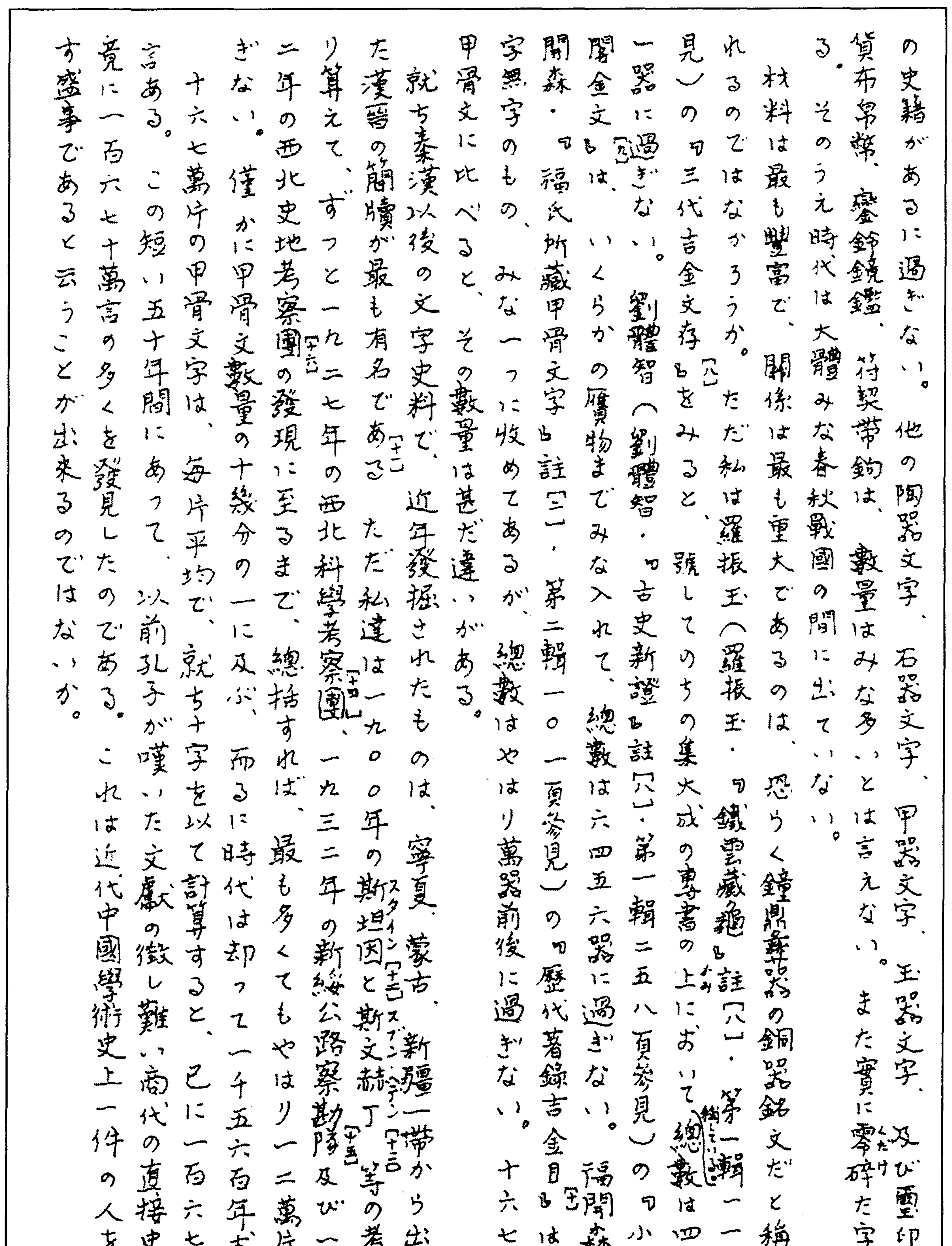
五、國家私家收藏で尚未だ著録しないもの 六家 八二五片。[七]

總と全部で一九三宗、一六一九八九片である。ただ短かい五十年に發見された材料は、竟に十六七萬片あまり、これは中國考古學上、史料學上にあって、眞にすばらしい一盛事である。

私達は先ず甲骨文が中國最古の文字であることを説く必要はない。その發見があったことによって一千八九百年以來無數の學者をして力をつくして研究してきたところの歴史は、一千四五百年もくりあげられた。私達もまた先ず甲骨文が商代で最も信ずべき直接の史料であることを云い出すには及ばない。二千四五百年以前に、殷人の子孫の孔子でさえ、みな殷禮の徴するに足らないことを嘆いたが、而して私達は現在かえって大いに講じ特に講ずることができる。ただ單に材料の豐富なることだけについて言っても已に全く驚くべきものである。

更に歴史地下發見の古代文字史料に就いて言えば、漢の武帝末年、魯の恭王は孔子の宅を壞して古文經を發見したことがあったということである。（『甲骨文編』唐序・第二輯二七二—三頁と二七五頁註[三]參見）晉朝初年、平源の汲郡、魏の哀王の墓中にまた大きな竹簡を發見したことがあった。（『契文學例』註[四]・第一輯四二頁參見）殘念なことにしばらくして、すぐみな散佚した。本當の事や詳しい事情は、得て知ることが出來ない。ただもし散失しなかったなら前者は戰國時の魯國の文字であり、後者は戰國時の梁國

314



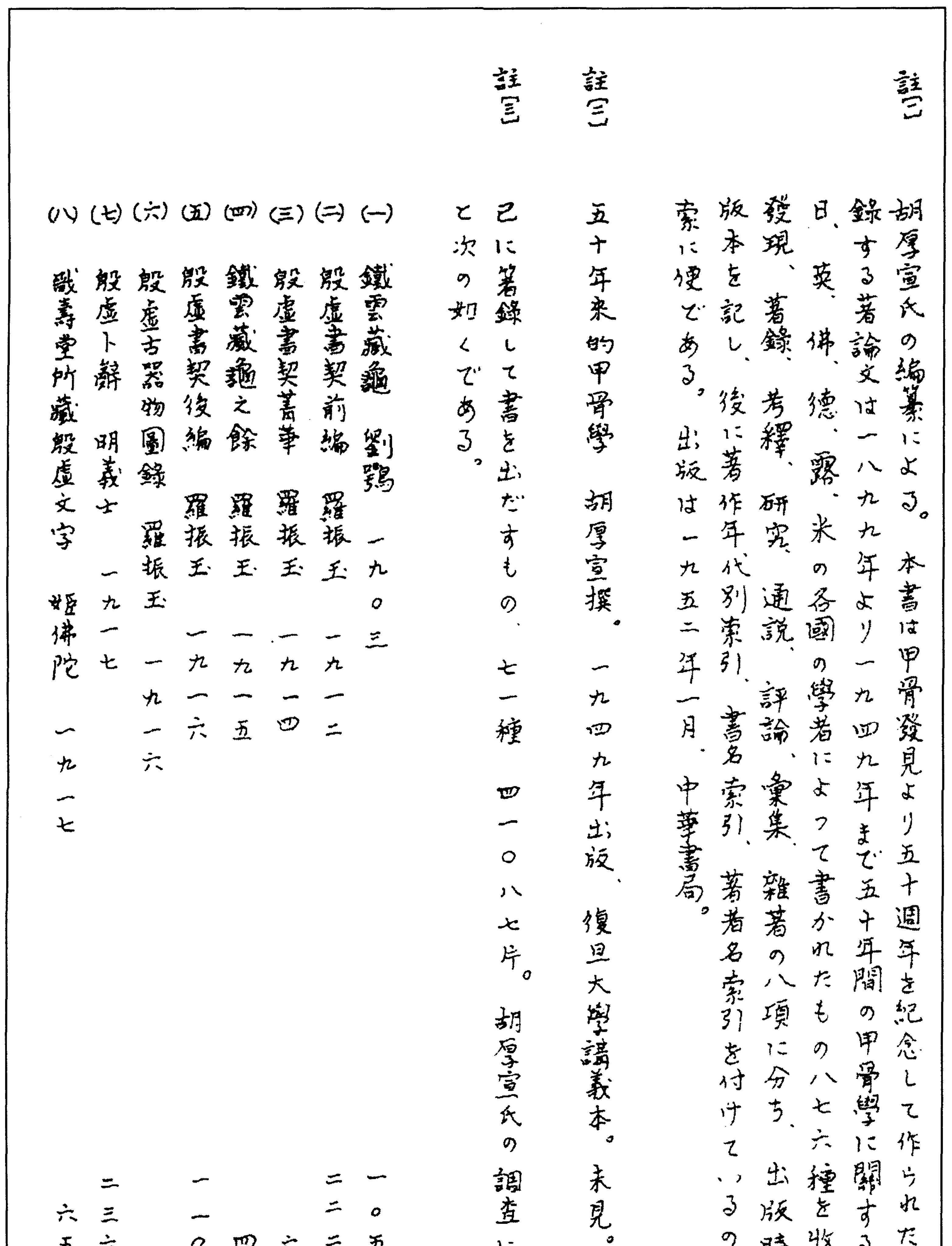
の史籍があるに過ぎない。他の陶器文字、石器文字、甲器文字、玉器文字、及び璽印封印、貨布帛幣、鑾鈴鏡鑑、符契帶鉤は、數量はみな多いとは言えない。また實に零碎（くだけ）た字もある。そのうえ時代は大體みな春秋戰國の間に出ていない。

材料は最も豐富で、關係は最も重大であるのは、恐らく鐘鼎彝器の銅器銘文だと稱せられるのではなかろうか。ただ私は羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）の『三代吉金文存』[八]をみると、號してのちの集大成の專書の上（かみ）において總數は四八三一器に過ぎない。劉體智（劉體智・『古史新證』註[八]・第一輯二五八頁參見）の『小校經閣金文』[九]は、いくらかの贋物までみな入れて、總數は六四五六器に過ぎない。福開森（福開森・『福氏所藏甲骨文字』註[二]・第二輯一〇一頁參見）の『歴代著録吉金目』[十]は、有字無字のもの、みな一つに收めてあるが、總數はやはり萬器前後に過ぎない。十六七萬の甲骨文に比べると、その數量は甚だ違いがある。

就ち秦漢以後の文字史料で、近年發掘されたものは、寧夏、蒙古、新疆一帶から出土した漢晉の簡牘が最も有名である[十一]。ただ私達は一九〇〇年の斯坦因（スタイン）[十二]と斯文赫丁（スヴェン・ヘディン）[十三]等の考察より算えて、ずっと一九二七年の西北科學考察團[十四]、一九三二年の新綏公路察勘隊[十五]及び一九四二年の西北史地考察團[十六]の發現に至るまで、總括すれば、最も多くてもやはり一二萬片に過ぎない。僅かに甲骨文數量の十幾分の一に及ぶ、而るに時代は却って一千五六百年おそい。

十六七萬片の甲骨文字は、毎片平均で、就ち十字を以て計算すると、已に一百六七十萬言である。この短い五十年間にあって、以前孔子が嘆いた文獻の徴し難い商代の直接史料が、竟に一百六七十萬言の多くを發見したのである。これは近代中國學術史上一件の人を驚かす盛事であると云うことが出來るのではないか。

315



註[一] 胡厚宣氏の編纂による。本書は甲骨發見より五十週年を紀念して作られた。集録する著論文は一八九九年より一九四九年まで五十年間の甲骨學に關する中、日、英、佛、德、露、米の各國の學者によって書かれたもの八七六種を收めて、發現、著録、考釋、研究、通説、評論、彙集、雜著の八項に分ち、出版時期と版本を記し、後に著作年代別索引、書名索引、著者名索引を付けているので檢索に便である。出版は一九五二年一月、中華書局。

註[二] 五十年來的甲骨學 胡厚宣撰。一九四九年出版、復旦大學講義本。未見。

註[三] 已に著録して書を出だすもの、七一種 四一〇八七片。胡厚宣氏の調査によると次の如くである。

(一)	鐵雲藏龜	劉鶚	一九〇三	一〇五八片
(二)	殷虛書契前編	羅振玉	一九一二	二二二九片
(三)	殷虛書契菁華	羅振玉	一九一四	六八片
(四)	鐵雲藏龜之餘	羅振玉	一九一五	四〇片
(五)	殷虛書契後編	羅振玉	一九一六	一一〇四片
(六)	殷虛古器物圖録	羅振玉	一九一六	四片
(七)	殷虛卜辭	明義士	一九一七	二三六九片
(八)	戩壽堂所藏殷虛文字	姫佛陀	一九一七	六五五片

316

(九) 龜甲獸骨文字　林泰輔　一九二一　一〇二三片
(十) 簠室殷契徵文　王襄　一九二五　一一二五片
(十一) 鐵雲藏龜拾遺　葉玉森　一九二五　二四〇片
(十二) 傳古別錄第二集　羅福頤　一九二八　四片
(十三) 新獲卜辭寫本　董作賓　一九二八　三八一片
(十四) 大龜四版考釋　董作賓　一九三一　四片
(十五) 書道　下中彌三郎　一九三一　九七片
(十六) 殷虛文字存眞一至八集　關百益　一九三一　八〇〇片
(十七) 周漢遺寶　原田淑人　一九三二　二片
(十八) 福氏所藏甲骨文字　商承祚　一九三三　三七片
(十九) 殷契卜辭　容庚　一九三三　八七四片
(二十) 卜辭通纂　郭沫若　一九三三　九二九片
(二十一) 帚矛說　董作賓　一九三三　九九片
(二十二) 釋後岡出土之一片卜辭　董作賓　一九三三　一片
(二十三) 殷虛書契續編　羅振玉　一九三三　二〇一六片
(二十四) 殷契佚存　商承祚　一九三三　一〇〇〇片
(二十五) 甲骨文　王子玉　一九三三　一七二片
(二十六) 上海亞洲文會博物館所藏甲骨文字　吉卜生　一九三四　八九片
(二十七) 鄴中片羽初集　黃濬　一九三五　二四五片
(二十八) 郼齋所藏甲骨拓本　金祖同　一九三五　二六片

(二十九) 庫方二氏藏甲骨卜辭　方法斂　一九三五　一六八七片
(三十) 衡齋金石識小錄　黃濬　一九三五　二片
(三十一) 殷虛甲骨相片　白瑞華　一九三五　一〇四片
(三十二) 柏根氏舊藏甲骨文字　明義士　一九三五　七四片
(三十三) 安陽侯家莊出土之甲骨文字　董作賓　一九三五　四二片
(三十四) 甲骨文錄　孫海波　一九三七　九三〇片
(三十五) 殷契粹編　郭沫若　一九三七　一五九五片
(三十六) 鄴中片羽二集　黃濬　一九三七　九三片
(三十七) 殷虛甲骨搨片　白瑞華　一九三七　二二片
(三十八) 殷虛卜辭後編　明義士　一九三七　二七〇〇片
(三十九) 甲骨卜辭七集　方法斂　一九三八　五二七片
(四十) 天壤閣甲骨文存　唐蘭　一九三九　一〇八片
(四十一) 鐵雲藏龜零拾　李旦丘　一九三九　九三片
(四十二) 殷契遺珠　金祖同　一九三九　一四五九片
(四十三) 金璋所藏甲骨卜辭　方法斂　一九三九　四八〇片
(四十四) 鄴中片羽三集　黃濬　一九三九　二一五片
(四十五) 卜辭雜例　胡厚宣　一九三九　七一片
(四十六) 甲骨叕存　曾毅公　一九三九　七五片
(四十七) 誠齋殷虛文字　孫海波　一九四〇　五〇〇片
(四十八) 雙劍誃古器物圖錄　于省吾　一九四〇　四片

(四十九) 殷虛文字甲編　董作賓　一九四〇　三九二九片
(五十) 甲骨五十片　白瑞華　一九四〇　五〇片
(五十一) 河南安陽遺寶　梅原末治　一九四〇　一四九片
(五十二) 卜辭同文例　胡厚宣　一九四〇　二七三片
(五十三) 卜辭記事文字史官簽名例　胡厚宣　一九四〇　三七片
(五十四) 中央大學史學系所藏甲骨文字　李孝定　一九四一　二五〇片
(五十五) 殷契摭佚　李旦丘　一九四一　一一八片
(五十六) 敘圃甲骨釋要　何遂　一九四一　二二片
(五十七) 殷契駢枝三編　于省吾　一九四三　二片
(五十八) 殷文丁時卜辭中一旬間之氣象紀錄　董作賓　一九四三　一片
(五十九) 甲骨學商史論叢初集　胡厚宣　一九四四　八片
(六十) 廈門大學所藏甲骨文字　胡厚宣　一九四四　二九片
(六十一) 甲骨六錄　胡厚宣　一九四五　六五九片
(六十二) 殷曆譜　董作賓　一九四五　一五片
(六十三) 武丁日譜　董作賓　一九四五　二三七片
(六十四) 骨的文化　懷履光　一九四五　二四片
(六十五) 元嘉造像室所藏甲骨文字　胡厚宣　一九四六　二七〇片
(六十六) 頌齋所藏甲骨文字　胡厚宣　一九四六　一三片
(六十七) 雙劍誃所藏甲骨文字　胡厚宣　一九四六　二五四片
(六十八) 戰後殷墟出土的新大龜七版　胡厚宣　一九四七　七片

(六十九) 龜卜　金祖同　一九四八　一二五片
(七十) 殷虛文字乙編上中冊　董作賓　一九四九　六二七二片
(七十一) 戰後京滬新獲甲骨集　胡厚宣　一九四九　八五四片

胡厚宣著『五十年甲骨文發現的總結』八、五十年甲骨文出土的總計による。

註〔四〕

國内機關採集で尚未だ著錄しないもの、三一か處　二〇九七一片。胡厚宣氏の調査によると次のごとくである。

(一) 前中央研究院十三次發掘所得（未著者）　四四五五片
(二) 前中央研究院十四次發掘所得　二片
(三) 前中央研究院十五次發掘所得　五五九片
(四) 前中央研究院購藏　六二片
(五) 前中央研究院新購　六〇〇片
(六) 上海前孔德研究所舊藏　約三〇〇片
(七) 國立北京歷史博物館藏　二九片
(八) 河南博物館發掘所得（未發表者）　約二五〇〇片
(九) 上海市立博物館藏　一五〇〇片
(十) 旅順博物館舊藏　約二〇〇〇片
(十一) 安陽古物保存會藏　約二〇〇片

(一二)	濟南廣智院藏	約一〇〇片
(一三)	前中央圖書館藏	約二〇〇片
(一四)	前中央圖書館新購	約一五〇片
(一五)	前中央圖書館第二次新購	四〇片
(一六)	國立北京圖書館舊藏	約二〇〇片
(一七)	國立北京圖書館新購	二〇五〇片
(一八)	國立北京圖書館第二次新購	四六一片
(一九)	山東圖書館舊藏	七一片
(二〇)	雲南昆華圖書館舊藏	四片
(二一)	雲南昆華民衆教育館藏	約五〇片
(二二)	山東省古代文物管理委員會藏	一〇三〇片
(二三)	上海市文物管理委員會藏	一五五五片
(二四)	國立北京大學研究所藏	四六三片
(二五)	國立清華大學第一次購得	約一〇〇〇片
(二六)	國立清華大學第二次購得	約一〇〇〇片
(二七)	國立清華大學第三次購得	約一〇〇〇片
(二八)	北京輔仁大學舊藏	約一五〇片
(二九)	北京輔仁大學新購	二二〇片
(三〇)	上海誠明文學院藏	約七〇〇片
(三一)	中央文化部文物局新購	一二〇片

胡厚宣氏の『五十年甲骨文發現的總結』八、五十年甲骨文出土的總計による。この表のうち(一)(二)(三)は『殷虛文字乙編』に收錄される予定であったが全部收められていないようである。（殷虛文字乙編序註〔二〕参見。）この國内機關の採集について陳夢家氏の調査統計は詳細を究めているのでこゝに紹介しておく。

〔收藏場所〕	〔收藏數〕	〔著錄數〕	〔著錄書〕
前中研究發掘して得たもの	二四九一八片	一三〇四一片	甲、乙
王伯沆より購入	六〇〇片		無想
贈入	六二片		
河南博物館發掘して得たもの	三六五六片	九八三片	河
北京圖書館羅振玉より受取る	四六二片	四六二片	前
張仁蠡より接收	二九二片		
何遂贈るもの	一三〇片	一六・六一	別一、佚
胡厚宣より購入	一九〇〇片		
通古齋より購入	四二〇片	四二〇片	鄴
清華大學于省吾より購入	六九七片	二五四・一一四	劍、鄴初、存
胡厚宣より購入	九〇〇片	七四六片	寧滬Ⅰ・Ⅱ
廠肆より購入	三八片		
北京大學は燕京大學を承く	一〇三八片	八七四片	燕
霍保祿贈る	五二一片	約三〇〇片	續

羅福頤より購入	七八八片		
慶雲堂より購入	四八六片		
久下司より受取る	五片		
張仁蠡より受取る	三二片		
北京師範大學は輔仁大學を承く	三二〇片	一二〇片	鄴三
前誠明文學院	七四一片	七四一片	戩、誠明
南京大學は中央大學を承く	二七七片	二七七片	中大
金陵大學を承く	三七片	三七片	福
廈門大學	二九片	二九片	廈、存
華西大學	一六片	一六片	華西
文化部劉體智より購入	二八〇〇〇片	一五九五片	粹（京津に澤山有り）
羅伯昭寄付	三八八片		
徐炳昶寄付	一三片		
張珩寄付	三二片		
郭若愚より購入	四四〇片	一七一片	掇一、掇二
孟定生より購入	三六〇片		
邵伯絅より購入	二二片		
上海博物館は孔德研究所を承く。	一五五〇片	三四三・二八九	摭續、掇一、存
市立博物館を承く。	一〇三二片	三四片	掇二
購買及び寄付	一〇片		

山東文管會羅振玉より受取る。	一三〇九片	四二片	存
山東圖書館より受取る。	七一片		
明義士を代って管理する。	一〇三七片	八四七片	明續
青島文管會	二七片		
浙江文管會	一六〇十	？九・一三一	佚、掇二、存（四十七五十四三）
天津市文化局	八〇〇片十	八〇〇片	簠
浙江省圖書館	二二片	二二、一片	掇二、存
南京博物院	四片	四、四片	掇二、存
明義士を代って管理する。	二三八四片	二三・六九片	明
旅順博物館	一五〇〇片	二五六片	存
廣州博物館	約一五〇片	一三五片	存（寄）
東北博物館	三九〇片	五三片	存
故宮博物院	約二〇〇片		
北京歷史博物館	二五〇片	九片	存
江蘇博物館	九片	七片	存
吉林博物館	四〇片	一八片	存
新鄭圖書館	二〇〇片（小）	二七片	存
河南省文管會	二〇〇片（小）	三八片	存
華東師範學院	一二〇片	三八片	存
復旦大學	三〇〇片	四九片	存

東北人民大學　四〇片　七片　存

總計　約八萬片　約二萬五千片

陳夢家著『殷虛卜辭綜述』第二十章 附錄(八)出土甲骨的統計 六五五―六頁。

註〔五〕 國内私家收藏で尚未だ著錄しないもの、七六家 九三六二五片。胡厚宣氏の調查によると次の如くである。

(一)劉晦之藏（未著錄の者）　約二八〇〇〇片
(二)羅叔言舊藏（未著錄の者）　約二〇〇〇〇片
(三)明義士舊藏（未著錄の者）　約二〇〇〇〇片
(四)胡厚宣新獲（拓本・摹本を連ねたもの）　約一五〇〇〇片
(五)葉淟漁舊藏（未發表の者）　約一二〇〇片
(六)于省吾藏　約一〇〇〇片
(七)王伯沅舊藏　約六〇〇片
(八)郭智龕藏　約六〇〇片
(九)曹仁裕藏　約六〇〇片
(一〇)王富晉藏　約五〇〇片
(一一)張彥生藏　約五〇〇片
(一二)黄伯川藏　約四〇〇片
(一三)端午橋舊藏　約四〇〇片

(一四)溥心畬舊藏　約四〇〇片
(一五)徐尊六藏　約三〇〇片
(一六)王緒祖舊藏　約三〇〇片
(一七)郭正徳藏　約三〇〇片
(一八)喬友聲藏　約二〇〇片
(一九)胡小石藏　約二〇〇片
(二〇)柳翼謀藏　約二〇〇片
(二一)酈衡叔藏　約二〇〇片
(二二)馬叔平藏　約二〇〇片
(二三)孫海波藏　約二〇〇片
(二四)單孝天藏　約二〇〇片
(二五)潘景鄭藏　約二〇〇片
(二六)金祖同藏　約二〇〇片
(二七)郭墨林藏　約二〇〇片
(二八)陳保之藏　約二〇〇片
(二九)張丹斧舊藏　約二〇〇片
(三〇)金貴南藏　約一二〇片
(三一)容希白藏　約一〇〇片
(三二)王壽之藏　約一〇〇片
(三三)潘景鄭藏　約一〇〇片

(三四)沈燕謀藏　約一〇〇片
(三五)陳伯衡藏　約一〇〇片
(三六)方地山舊藏　八九片
(三七)何叙甫新獲　五九片
(三八)商錫永藏　五〇片
(三九)曾毅公藏　五〇片
(四〇)陳子彝舊藏　三五片
(四一)侯德圃藏　三〇片
(四二)唐立厂藏　三〇片
(四三)杜亞貽藏　三〇片
(四四)沈勤廬藏　二七片
(四五)賀次君藏　二〇片
(四六)何春畬藏　一九片
(四七)徐旭生藏　一三片
(四八)甘茂德藏　一〇片
(四九)周俊望藏　一〇片
(五〇)欒調甫藏　八片
(五一)莊尚嚴藏　八片
(五二)黄賓虹藏　五片
(五三)梁思永藏　四片

(五四)嚴一萍藏　四片
(五五)方杰人藏　二片
(五六)郭石祺舊藏　一片
(五七)傅子通藏　一片
(五八)孫伯恒舊藏
(六一)龔熙台舊藏
(六四)鮑扶九藏
(六七)王寓藏
(七〇)莊竹莊藏
(七三)沈鏡心藏
(七六)陳松茂藏

(五九)姚茫父舊藏
(六二)金至淇藏
(六五)孫伯遠藏
(六八)劉恭祿藏
(七一)柯燕聆藏
(七四)王治易藏

以上片數未詳。

(六〇)羅振常舊藏
(六三)李鶴年藏
(六六)周美權藏
(六九)溫雄飛藏
(七二)張天方藏
(七五)汪宇藏

胡厚宣氏の『五十年甲骨文發現的總結』八、五十年甲骨文出土的總計による。

註〔六〕 國外機關採集で尚未だ著錄しないもの、九か處、五四一八片。胡厚宣氏の調查によると次の如くである。

(一)德國（ドイツ）柏林（ベルリン）博物院　七一一片
(二)日本上野博物館舊藏　五一〇片
(三)日本東京帝大考古學教室舊藏　約一〇〇〇片

(四)日本京都帝大考古學教室舊藏	四五片
(五)日本東洋文庫舊藏	一一五片
(六)加拿大多倫多博物館藏	約三一〇〇片
(七)美國國會圖書館藏	未詳
(八)美國哈佛大學藏	未詳
(九)日本桃山中學舊藏	未詳

胡厚宣氏の『五十年甲骨文的總結』八、五十年甲骨文出土的總計」による。また陳夢家氏にも海外流失の甲骨の統計があり、右に掲げる。

「收藏場所」	「收藏數」	「箸錄數」	「箸錄書」
柏林民俗博物館	七一一片	七二片	七（衛）
上野博物館	二一片	七片	別二、
東京帝國大學	一〇〇片	一四・一五片	別二、安
京都帝國大學	四五片	七片	別二
林泰輔（入東洋文庫）	六〇〇片	二一三片	林
トロント博物院	三〇〇〇片	二七片	坎
桃山中學	一片以上	一片	別二

陳夢家氏の『殷虛卜辭綜述』、第二十章附錄、(八)出土甲骨的統計の(九)「甲骨流失在國外之統計」六五六頁による。陳氏の調査によると二五處、甲骨一五六六九片、このうち收錄數は四八一二片とする。右に掲げる胡氏の甲骨の數について松丸道雄氏の『日本散見甲骨文字蒐彙』によれば、その片數に差異

がある。それについては既に『卜辭通纂』註〔二〕・〔三〕・〔四〕・〔九〕に紹介しておいた。また桃山中學藏は松丸氏の調査によると既に紛失とある。(『日本散見甲骨文字蒐彙』五・『甲骨學第十一號』)

註〔七〕 國外私家收藏で尚未だ著錄しないもの、六家 八二五片。胡厚宣氏の調査によると次のごとくである。

(一)日本富岡謙藏舊藏	約八〇〇片
(二)日本内藤虎次郎舊藏	二五片
(三)盧芹齋藏	未詳
(四)日本岩間德也舊藏	未詳
(五)日本後藤朝太郎舊藏	未詳
(六)日本岡田朝太郎舊藏	未詳

胡厚宣氏の『五十年甲骨文發現的總結』八、五十年甲骨文出土的總計」による。胡氏の掲げた六家のうち富岡謙藏所藏のものについては『卜辭通纂』註〔十二〕・第二輯一一九頁、内藤虎次郎については同書註〔十一〕・第二輯一一八頁に詳しい。

註〔八〕 三代吉金文存二十卷 羅振玉輯。羅振玉は凡そ傳世の銘文を器物別に拓本によって搜羅し、その拓は搜輯に富み、鑑別は嚴、印刷は鮮明である。卷一 鐘一百一十四、卷二 鼎四百七十四 卷三 鼎二百六十五、卷四 鼎九十四、卷五

甗七十二、鬲一百二十一、卷六 彝三百九十五、卷七 𣪘二百三十六 卷八 𣪘一百二十三、卷九 既六十七、卷十 簠九十一、簋六十、豆十二、卷十一 尊二百七十一、罍二十六 卷十二 壺一百十三、卣一百四十五、卷十三 卣一百九十三、斝五十二、卷十四 盉六十三、觚二百二十、觶二百五十六 卷十五 爵三百六十八、卷十六 爵三百四十四、角三十三、卷十七 盤六十三、匜六十八、卷十八 雜器一百六十一、卷十九 戈一百三十四、卷二十 戟六十、矛四十六、雜兵九十一。以上凡そ商周銘文四千八百三十一器を收錄。出版は民國二十六年影印本。

註〔九〕 小校經閣金文拓本十八卷 劉體智の輯。此の書は拓本を影印しており、時代は殷周より元明にいたる。釋文を付し、間々各家の題識を附す。容庚氏は「鑒別不精、印刷也未盡善、但搜羅可謂豐富」(『殷周青銅器通論』青銅器著錄書籍的評介二四九頁)と評す。目錄は卷一 鐘一百二十七 句鑃五、錞于三。卷二 鼎四百九十七。卷三 鼎七十八、鬲一百一十四、甗五十。卷四 卣二百五十三、罍九、壺八十七。卷五 尊二百又七、觥二、觚一百二十六、觶一百九十二、耑。卷六 爵四百八十二、角三十一、斝十九、擧一。卷七 彝二百六十 敦二百二十二。卷八 敦一百七十五。卷九 簋八十五 簠五十五 盉四十九、匜四十五、盤五十七、雜器八十七。卷十 兵器三百一十四。卷十一 秦權量九十 漢以後鼎一百十七、壺四十八、鐙九十二、度量衡二十三。卷十二 度量衡一百四十四、洗一百五十四。卷十三 洗三十八、鉤七十五、雜器二百六十六。卷十四 兵器一

百又六、帛范一百五十九、符牌一百又一。卷十五 鏡三百四十六。卷十六 鏡四百三十一。卷十七 鏡三百九十一。卷十八 造像二百四十。凡そ六千四百五十六器を收錄。民國二十四年石印本。

註〔十〕 歷代著錄吉金目一冊。米國福開森撰 商務印書館鉛印。一九六八年日本大安書店影印。

註〔十一〕 近年發見された甘肅、寧夏、蒙古、新疆等の一帶から出土した漢・晉時代の簡牘は本編の註〔十二〕・〔十三〕・〔十四〕・〔十五〕・〔十六〕並に『殷曆譜』註參見

註〔十二〕 スタイン(Marc Aurel Stein)(一八六二―一九四三)イギリスの探檢家、東洋史學者。ハンガリアの首都ブタペストに生れた。ブタペストおよびドレスデンで幼時を過ごし、長じてウイーンおよびテユーリンゲンの大學に學び、さらに英國に留學しオクスフオード大學で考古學を專攻した。スタインは一九〇四年イギリスに歸化し、それより前、インドのラホールの東洋學校およびカルカッタのカルカッタイスラム寺院附屬學校の校長(一八九九)に任じた。一九〇四年一月インド古跡調査局に入り、中央アジア探檢を行う。第一回(一九〇〇―〇一)、第二回(一九一三―一六)、第三回(一九一三―一六)それぞれホータン、ニヤ地方、敦煌とその附近、ハラホトからペルシヤ東南部およびインダス川上流地方の遺跡を調査し成果をあげた。とくに東

トルキスタンの古代文化を明かにし、トルコ系民族がこの方面に拠る以前に、アーリアまたはイラン系民族が文化の中心をなし、さらに中國政府の支配と漢民族の移住とによって、中國文化が大いに榮えたことを實證した功績が大きい。第一回、第二回の探檢でニヤの遺蹟の發掘で漢文木簡やカローシュティ文字で書かれた木簡を發見した。第四回一九三〇年の中央アジア調査は國民政府の許可が得られなかった。この間インド・ローマ各地を調査し、四三年十月カシミールからペシャーワールをへてカーブルにいたり、アフガニスタンの組織的發掘を行なおうとして急死した。

註〔十三〕

ヘディン（Sven Anders Hedin）（一八六五－一九五二）中央アジアの探檢家、地理學者。スウェーデンのストックホルムに生る。高等學校卒業後、ストックホルム大學に學び、のちドイツに留學しベルリン大學で研究、とくに當時地理學者として名聲のあったリヒトホーフエン氏に赴きアジアの地理を徹底的に研究して中央アジアの探檢に志した。探檢は第一回（一八九三－九七）、第二回（一八九九－一九〇二）、第三回（一九〇六－一九〇八）、第四回（一九二七－三五）と四回行ひ、その探檢の貢獻を紹介すると、當時ほとんど未知の地域であった東トルキスタンの地理を明かにしたことは、ロシアの地理學者プルジェヴァルスキーとヘディンに負うといってよい。ヘディンはさらに秘境チベットに入りチベットの地理學について無比の貢獻をし、さらに樓蘭の遺跡や、トランス・ヒマラヤ山脈を發見した。

またタクラマカン砂漠の地理を明かにし、ロプ・ノールの周期的移動を確認するなど、中央アジア地理學に幾多の大貢獻をした。第四回には西北科學考察團を組織し、科學的調査で、多くのスウェーデン人ドイツ人中國人の専門家を伴い、觀測所を設け、ひとり地理、地質のみならず氣象動物植物考古その他を研究調査した。

註〔十四〕

西北科學考察團 The Sino-Swedish Expedition（英） Hsi-pei Kohsüeh-tuian（中）中國西北の新疆省、寧夏省などを一九二七年より三五年に調査した學術探檢隊。ヘディン（Sven. Anders Hedin）を隊長とし、スエーデン人隊員四人、Larson（隊長）Hummel（醫生）Norin（地質並に作圖）Bergmen（考古學）丹馬人隊員 Haslund（副隊長）、ドイツ人十一人 Haude（氣象主任）Mulenweg（会計）Lieberenz（寫眞；）Zimmerman；Heyder、Hempel、Maly、Pottman、Massenbach、Von Kaull。中國人隊員十人、徐炳昶、袁復禮（地質研究、考古及び古生物）、詹蕃勳（地圖學）、崔鶴峰、馬叶謙、李憲之、劉衍淮、龔元忠（寫眞）の隊員からなる。この考察團は三期に分けられ、第一期（一九二七・二－六・五）はベルリン－北京－上海間の航空路開設のための調査で、ドイツのルフトハンザ社の出資により、氣象學、地理學の地質學上の調査を主とし、古生物學、生物學、考古學、民族學などの學者とドイツ側の航空専門家も參加した。各地に觀測所等を設けた結果、政治的に空路反對があり、ルフトハンザ社は退いた。第二期は二八年夏より三三年秋まで探檢

隊は學術調査のみにきりかえた。調査費用はスエーデン・中國兩政府と外部よりの寄付で調査は進行され學術的に最も成果が上った。第三期は國民政府が新疆省への自動車道路を建設するための調査を目的とし、さまざまな専門の七人の隊員が自動車で新疆省に赴いたが、おりからの同地の内戰により、對戰する兩軍から交互に抑留されるにいたりこの考察團の仕事も終止符をうたざるを得なかった。

※

この時團員の Folke Bergman 氏がこのカラホトの東南三〇キロにあるボロツオンチの漢代の遺蹟を調査したのは一九三〇年のことである。四月二十日、實測圖を作っていた彼が、落したペンを拾うべく腰をかがめた時に、漢の五銖錢を發見した。それに力をえて、本格的な調査を始めた結果、銅器、陶片等の遺物と共に所謂木簡三六〇片を拾いあげた。それから居延海一帶や、エチナ河沿岸にわたって次々と調査發掘をつづけ、上記の如く約一萬點に及ぶ木簡を採集して、翌年五月北京に歸ったのである。その中最も多く發掘されたのはム・ヅルベルヂンで四〇〇〇點以上にのぼり、全體の半數に近い。次いで多量に出土した地點はタラリンジン・ヅルベルヂンで約一五〇〇點に及ぶ。（米田賢次郎氏の「居延漢簡とその研究成果」古代學二巻二五三頁による）

註〔十五〕

新綏公路察勘隊 この察勘隊については詳細な記録はないが、察勘隊が作られるまえ、即ち民國十八年頃新疆省民朱炳民が同志を集め、新疆及び綏遠間の自動車道路開拓に努力し、民國二十二年末、天津に新綏汽車公司を設立のうえ、のち運行となった。これがこの察勘隊の前進と思はれる。しかしのち新疆省のほうで内亂があり一時中止していたが、二十四年末再開した。（『支那省別誌』新疆）また容媛氏は「黄文弼君去秋由教育部派赴新疆考査教育及古文化、經一年之跋涉、現已返抵北平。據黄君云、彼去秋十月初旬、隨鐵道部新綏公路査勘隊出發、經蒙古草地首途赴新、至額濟納河時曾發現一龐大之漢代古址」…「西漢論語殘簡發見」（『燕京學報』十六期・十八期）と記録しているのみで詳細なる報告はない。

註〔十六〕

西北史地考察團 この發掘隊は一九四二年國立中央研究院歷史語言研究所と國立中央博物院と中國地理研究所の三學術機關によって結成された。團長は辛樹幟で、歷史語言研究所派には勞榦、石璋如、中央博物院には西南聯大學教授の向達、中國地理研究所は李承三、周廷儒等と齊大學教授吳靜禪が植物を擔當した。三十一年に甘肅、寧夏、青海を工作し、考古工作は僅かに甘寧の兩省の一部に限られた。二十四年にいたって則ち轉じて陝西の工作となり發掘地帶は古董灘、陽關葬地、老虎墩等で、出土品については詳細な報告はない。

三、

根據這一本五十年甲骨學論著目的統計、五十年中、研究甲骨學而有論著的作家有：

一、中國 二三〇人

二、日本　四〇人
三、英國　六人
四、美國　五人
五、德國　四人
六、法國　二人
七、蘇聯　一人
八、加拿大　一人

共計二八九人。其中本國二三〇人，外國五九人。

四

他們所寫的著作：

一、屬於發現者　五〇種
二、屬於著錄者　五四種
三、屬於考釋者　一五種
四、屬於研究者　五五三種
五、屬於通說者　六七種
六、屬於評論者　八四種
七、屬於彙集者　三二種
八、屬於雜著者　二一種

其中以研究一項、數量最多、又可以分類如下：

一、文字　二二三種
二、文法　二五種
三、文例　一一種
四、文學　二種
五、歷史　二一種
六、地理　二四種
七、帝王　二七種
八、禮制　四〇種
九、社會　四四種
一〇、經濟　二四種
一一、文化　一二種
一二、宗教　九種
一三、風俗　九種
一四、曆象　五二種
一五、考古　三〇種

總計八七六種，其中專書一四八種，論文七二八種。

五

至於談到那些作家寫的文章比較多，如果以題目或種數來統計，那麼，十種以上的作家、有下列十八人：

一、楊樹達　九二種
二、胡厚宣　五四種
三、董作賓　四二種
四、孫海波　二三種
五、羅振玉　二〇種
六、陳夢家　二〇種
七、王國維　一九種
八、郭沫若　一八種
九、金璋　一七種
一〇、丁山　一五種
一一、唐蘭　一五種
一二、王襄　一二種
一三、商承祚　一二種
一四、吉卜生　一一種
一五、明義士　一一種
一六、戴家祥　一〇種
一七、聞一多　一〇種
一八、金祖同　一〇種

自然這樣統計，並不是說明成績的優劣。因為文章有長短，分量有小大，問題有輕重，價值也有高低。這不過就題目，作一個種數的統計而已。

六、

如果按照年份來分：

一九〇三年　一種
一九〇五年　一種
一九〇六年　一種
一九〇九年　一種
一九一〇年　二種
一九一一年　四種
一九一二年　二種
一九一五年　六種
一九一六年　四種
一九一七年　一二種
一九一九年　四種
一九二〇年　六種
一九二一年　五種
一九二二年　二種
一九二三年　一五種
一九二四年　五種
一九二五年　一四種
一九二六年　三種

一九二七年　九種
一九二八年　一八種
一九二九年　一八種
一九三〇年　四一種
一九三一年　二三種
一九三二年　二五種
一九三三年　五四種
一九三四年　四〇種
一九三五年　五五種
一九三六年　四八種
一九三七年　三八種
一九三八年　一〇種
一九三九年　三七種
一九四〇年　五二種
一九四一年　二四種
一九四二年　二一種
一九四三年　一六種
一九四四年　四一種
一九四五年　八九種
一九四六年　二五種

一九四七年　二一種
一九四八年　一六種
一九四九年　七種
待查者　五二種
其中以一九四五年、一九三五年、一九三三年、一九四〇年、一九三六年等種數爲最多、都超過四十五種以上。

三、

この一冊の「五十年甲骨學論著目」の統計を根據にして、五十年間に甲骨學を研究して論著のある作家は、

一、中國　二三〇人
二、日本　四〇人
三、英國　六人
四、米國　五人
五、德國（ドイツ）　四人
六、法國　二人
七、蘇聯　一人
八、加拿大（カナダ）　一人

あり、すべて二八九人を計（かぞ）ラ。其のうち本國は二三〇人、外國人は五九人。

四、

彼等の書いた著作は

一、發見に屬する者　五〇種
二、著錄に屬する者　五四種
三、考釋に屬する者　一五種
四、研究に屬する者　五五三種
五、通說に屬する者　六七種
六、評論に屬する者　八四種
七、彙集に屬する者　三二種

其のうち研究の一項は、數量最も多くまた分類すれば下の通りである。

一、文字　二二三種
二、文法　二五種
三、文例　一一種
四、文學　二種
五、歷史　二一種
六、地理　二四種
七、帝王　二七種
八、禮制　四〇種
九、社會　四四種
一〇、經濟　二四種

一一、文化　一二種
一二、宗教　九種
一三、風俗　九種
一四、曆象　五二種
一五、考古　三〇種

總計八七六種、其のうち專書は一四八種、論文七二八種なり。

五

それらの作家の書いた文章の比較的多いものを談するに至れば、もし題目の或る種の數からの統計にするならば、十種以上の作家は、下に列すれば十八人あり。

一、楊樹達[十七]　九二種
二、胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）　五四種
三、董作賓（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）　四二種
四、孫海波（孫海波・『鐵雲藏龜』註[四十]・第一輯三八頁參見）　二三種
五、羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）　二〇種
六、陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註[三]・第三輯一四〇頁參見）　二〇種
七、王國維（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註[三十三]・第一輯一〇一頁參見）　一九種
八、郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁參見）　一八種
九、金璋[十八]　一七種
一〇　丁山（丁山・『雙劍誃殷契駢枝』註[二]・第三輯一三二頁參見）　一五種

一一、唐蘭（唐蘭・『殷虛文字類編』註〔二一〕・第一輯一七一頁參見）　一五種
一二　王襄（王襄・『簠室殷契類纂』註〔八〕・第一輯一五八頁參見）　一二種
一三　高承祚（高承祚・『殷虛文字類編』註〔五〕・第一輯一七三頁參見）　一二種
一四　吉卜生（吉卜生・『殷契拾掇』註〔二十二〕・本輯二九五頁參見）　一一種
一五　明義士（明義士・『殷契書錄』註〔三〕・第一輯三二二頁參見）　一一種
一六　戴家祥〔十九〕　一〇種
一七　聞一多（聞一多・『甲骨學商史論叢初集』註〔三十七〕・第三輯二五四頁參見）一〇種
一八　金祖同（金祖同・『殷虛卜辭講話』註〔三〕・第三輯一三頁參見）　一〇種

自然この様な統計は、並に成績の優劣を說明することはできない。なぜならば文章には長短あり、分量には小大あり、問題には輕重あり、價値には高低がある。これは就ち題目に過ぎず、一つの種數の統計を作っただけである。

六

だから年に照して分ければ

一九〇三年　一種
一九〇五年　一種
一九〇六年　一種
一九〇九年　一種
一九一〇年　二種
一九一一年　四種

一九一二年　二種
一九一三年　三種
一九一四年　四種
一九一五年　六種
一九一六年　四種
一九一七年　一二種
一九一九年　四種
一九二〇年　六種
一九二一年　五種
一九二二年　二種
一九二三年　一五種
一九二四年　五種
一九二五年　一四種
一九二六年　三種
一九二七年　九種
一九二八年　一八種
一九二九年　一八種
一九三〇年　四一種
一九三一年　二三種
一九三二年　二五種

一九三三年　五四種
一九三四年　四〇種
一九三五年　五五種
一九三六年　四八種
一九三七年　三八種
一九三八年　一〇種
一九三九年　三七種
一九四〇年　五二種
一九四一年　二四種
一九四二年　二一種
一九四三年　一六種
一九四四年　四一種
一九四五年　八九種
一九四六年　二五種
一九四七年　二一種
一九四八年　一六種
一九四九年　七種
調査を待つ者　五二種

其のうち一九四五年、一九三五年、一九三三年、一九四〇年、一九三六年等の種數が最も多い、みなで四十五種以上をこえる。

註〔十七〕　楊樹達（一八八五—一九　）字は遇夫、湖南省長沙の人。楊氏は日本の第三高等學校に學び、民國革命のさい歸國し、葉德輝、梁啓超からその學術と思想をうけた。そして湖南省立第一女子師範學校、師範學校中學校の漢文教員、教育部の編審員、國立北平師範大學の國文系主任、清華大學教授を歷任した。彼の研究を大別すれば二期に分けられる。初期は漢文法と漢書の研究、後期には文字學を究め、その著論文は高く評價されている。

註〔十八〕　金璋（一八五四—一九五二）（Hopkins, Lionel Charles）英國人、東洋學者。イギリスの外交官。一八七四年、見習通譯として中國に渡り、九五年上海領事、九七年、芝罘領事、一九〇一—〇八、天津總領事を歷任した。中國古代史を研究し、とくに甲骨文の研究は著名で、甲骨文字學、殷商の帝系、狩獵等について論文數十點がある。

註〔十九〕　戴家祥（一九〇六—？）字は幼和、浙江省永嘉の人。國立清華大學研究院卒業。中山大學副教授、南開大學經濟學院講師、四川大學教授を歷任、考古社社員。甲骨の論文には、釋字、書評がある。

七、

倘若這五十年再分成十年一段的五節：

一、第一個十年（一八九九——一九〇九）　四種

二、第二個十年（一九一〇—一九一九）四一種
三、第三個十年（一九二〇—一九二九）九五種
四、第四個十年（一九三〇—一九三九）三七一種
五、第五個十年（一九四〇—一九四九）三一二種

在第一個十年中，論著僅有四種，到第二個十年，就增加了十倍，第三個十年又較第二個十年增加了兩倍年。第四個十年又較第三個十年增加了四倍。第五個十年，如果不是趕上抗戰，照這樣增加的比例推算起來，論著至少也該在千種以上。七七戰事發生，好多學者，投筆從軍，參加抗戰工作，即或不然，也多拋棄書卷，流亡轉徙，謀生之不暇，還那裏談到寫作雖然如此，但這期著作，也還有三百多種，和第四個十年相差不多。甲骨學的論著，這樣按年成倍的增加，說明了這一種學科，正有着長足的進步，其發揚光大的神速，是近代任何學問所不及的。

在這五個十年中，主要的甲骨學者，第一個十年中有王懿榮、劉鶚、孫詒讓和美國人方法斂。王懿榮是第一個認識甲骨文字的人。劉鶚作了第一部著錄甲骨文字的專書鐵雲藏龜。孫詒讓作了第一部研究甲骨文字的專書契文舉例。方法斂是歐、美蒐集和研究甲骨文字的第一人。

第二個十年中，增加了羅振玉、王國維、日本人林泰輔、英國人金璋，和加拿大人明義士。林泰輔是日本蒐集研究甲骨文字的第一人。他的龜甲獸骨文字，也是日本著錄甲骨文字的頭一部專書。明義士的殷虛卜辭，是歐、美著錄甲骨文字專書之始，也是第一部寫印本的甲骨文書。羅振玉對於甲骨的蒐集和流傳最為有功。王國維於史學的發明，貢獻最大。

第三個十年中，又增加了王襄、商承祚、葉玉森、胡光煒、容庚、聞宥、程憬、丁山、董作賓。王襄的簠室殷契類纂，是第一部甲骨文字典。葉玉森開始對甲骨文字，作了綜合的研究。胡光煒作了第一部甲骨文例。程憬首先應用唯物史觀，根據甲骨文，說商朝是氏族社會。董作賓是第一個從事發掘殷虛甲骨文字的人。此後研究二十餘年，重要的著作還有甲骨文斷代研究例和殷曆譜。

第四個十年中，又增加了郭沫若、束世澂、劉朝陽、吳其昌、唐蘭、孫海波、朱芳圃、陳夢家、聞一多、金祖同、胡厚宣、美國人白瑞華、英國人吉卜生和蘇聯人布那柯夫。郭沫若應用新的史觀，根據新的甲骨材料，對中國古代社會，作了新的研究，在學術界發生了極為重大的影響。他另有卜辭通纂，是第一部綜合分類的甲骨選集。唐蘭使用偏旁分類法，識字獨多。劉朝陽則專意糾正董作賓的殷曆之作。孫海波作甲骨文編，朱芳圃作甲骨學文字編、商史編，都是很有用的工具書。陳夢家由甲骨文研究商代的祭祀、王名、神話和巫術。胡厚宣的甲骨學商史論叢，則旨在綜合所有甲骨，作一全面的澈底整理，以期解決甲骨文中的一些問題。

第五個十年中，又增加了于省吾、張宗騫、李旦丘、曾毅公、楊樹達和德國人魏特夫格。于省吾作有殷契駢枝三編，李旦丘作有鐵雲藏龜零拾和殷契摭佚，釋字考文，亦多新解。楊樹達以六十幾歲的老先生，最後寫文章最多，不失為五十年來甲骨學研究中最努力的一人。

八、

殷代的甲骨文字，自從三千三四百年以前埋在地下，以至最近的發掘和研討，按它的性質，又可以分成八個時期：

一、埋藏時期，
二、破壞時期
三、藥材時期
四、古董時期
五、金石時期
六、文字時期
七、史料時期
八、考古時期

遠在三千三四百年以前，自從殷代的人貞卜完了把甲骨埋在地下以後，大約經過了一個很長的時期，沒有人動過它。這就是所謂埋藏時期。後來因為封建社會喜歡厚葬，隨着盜墓之風，漸漸盛行起來，因而翻動了埋藏着的甲骨文字，也許在戰國時代，也許在漢朝，或者宋朝，當有大批的甲骨被掘出，但因為沒有人認識，隨着就又把它毀棄了。這樣又經過了一個很長的時期，不知毀掉了多少寶貴的史料。所以我們稱之為破壞時期。至少就在清朝的幾百年中，也許在明朝或明以前就開始了。平原安陽縣小屯村，有很多人家，以販賣龍骨藥材為生。大量的都運往北京批發，零碎的就趕集場廟會擺地攤兜售。龍骨藥煎服，可以醫治內科病症。用鋼銼銼成細粉，搽在外傷創口，可以止血生肌。這種大量批發和零售的龍骨藥，不是別的，正是殷代王朝占卜所用的甲骨。所以我們稱這個時期為藥材時期。

這三個時期還不曉得甲骨是殷代的東西，更不曉得甲骨上還刻着殷王的貞卜之辭和與貞卜有關的記事文字。這都是五十年以前的事，可以稱為甲骨的前期。

一八九九年，也就是清朝光緒二十五年，王懿榮在北京，因為害病吃藥，才發現了那藥中「龍骨」上所刻，乃是古代文字。從此以後，慢慢的才有了所謂甲骨之學。就着研究的性質，也可以分為五個時期：先為古董時期。把甲骨文看成古董，這可以王懿榮、劉鶚作代表。其次為金石時期。把甲骨文看作金石學的一門，這可以馬衡、陸和九作代表。其次為文字時期。專研究甲骨的文字，這可以孫詒讓、羅振玉、唐蘭、于省吾作代表。其次為史料時期。把甲骨文當作史料，由這些直接的史料，以考論古代的歷史，這可以王國維、郭沫若、董作賓、胡厚宣作代表。其次為考古時期。用考古學的科學方法，發掘甲骨，探討甲骨，以甲骨文字與殷虛發掘的居址墓葬遺跡器物等合起來研究，這可以前中央研究院李濟、梁思永、董作賓、石璋如、胡厚宣等為代表。

這五期都是認識了甲骨文字之後，近五十年間的事情，可以稱為甲骨的後期。

在這五十年中，甲骨之學，由古董金石的研究，到古文字學的研究，到史料考古學的研究，這是一個極大的進步。

至於五十年來甲骨學研究的詳細經過，譬如什麼時候，舊的說法被揚棄了，什麼時候，又有了新的問題提出，以及每一個作家的特殊貢獻與發明，則另詳五十年來之甲骨學一文，這裏就不再辭費了。

七、

もしこの五十年を更に十年、一段にして五節に分ければ、
一、第一の十年（一八九九—一九〇九）四種
二、第二の十年（一九一〇—一九一九）四一種
三、第三の十年（一九二〇—一九二九）九五種
四、第四の十年（一九三〇—一九三九）三七一種

五、第五の十年（一九四〇－一九四九）　三一二種

第一の十年にあつては、論著は僅に四種ある。第二の十年に到つて、就ち十倍に増した。第三の十年にはまた第二の十年に較べて二倍半に増加した。第四の十年にはまた第三の十年に較べて四倍増加した。第五の十年に、もし丁度抗戰にでもあわなければ、この様な増加の比例で推算してくると、論著は少なくてもまた當然千種以上あるべきである。七七戰争が發生して、多くの學者は筆を投げ出して、抗戰工作に參加した。たといそうでなかつても、やはり多くは書巻をほおりなげ、流亡轉徙し、生計をたてる暇もないのに、どうして著作を談じえたろうか。此のようであつたけれども、ただこの期の著作は、やはり三百種余りあつた、第四の十年と差は多くない。甲骨學の論著は、この様に年を追つて倍に増加したのは、この一種の學科が、正に長足の進歩があり、其の光大を發揚した神速さは、近代どの學問も及ばない所のものであることを説明している。

この五つの十年中に在つて、主要な甲骨學者は、第一の十年中には王懿榮（王懿榮・『鐵雲藏龜』註[十三]・第一輯一五頁參見）劉鶚（劉鶚・『鐵雲藏龜』註[九]・第一輯一三頁參見）孫詒讓（孫詒讓・『契文擧例』註[十七]・第一輯四九頁參見）と米國人の方法斂（方法斂・『殷虛文字甲編』註[十八]・本輯三六頁參見）である。王懿榮は第一に甲骨文字を認識した人である。劉鶚は一冊の甲骨文字を著録した專著『鐵雲藏龜』（『鐵雲藏龜』註[二]・第一輯一頁參見）を作つた。孫詒讓は一冊の甲骨文字を研究した專書『契文擧例』（『契文擧例』註[二]・第一輯四一頁參見）を作つた。方法斂は歐米の甲骨文字を蒐集研究した第一人者である。

第二の十年中、羅振玉、王國維、日本人林泰輔（林泰輔・『殷商貞卜文字考』註[三]・

第一輯六二頁參見）、英國人金璋とカナダ人の明義士である。林泰輔は日本で甲骨文字を蒐集研究した第一人者である。彼の『龜甲獸骨文字』（『龜甲獸骨文字』註[二]・第一輯一四四頁參見）は、やはり日本での甲骨文字を著録した最初の專書である。明義士の『殷虛卜辭』（『殷虛文字甲編』註[三]・本輯三八頁參見）は、歐米の甲骨文字を著録した專書の始めであり、また第一番に寫印本の甲骨文書である。羅振玉は甲骨の蒐集と流傳に對して最も功があつた。王國維は史學の發明に貢獻最も大である。

第三の十年中、また王襄、商承祚、葉玉森（葉玉森・『殷契鉤沈』註[三]・第一輯一八二頁參見）、胡光煒（胡光煒・『甲骨文例』註[五]・第一輯三〇二頁參見）、容庚（容庚・『殷虛文字類編』註[三]・第一輯一七一頁參見）、聞宥（聞宥・『殷契書録』註[五]・第一輯三二五頁參見）、程憬[三十]丁山、董作賓が増えた。王襄の『簠室殷契類纂』（『簠室殷契類纂』註[二]・第一輯一五五頁參見）は、初めての甲骨文字典である。葉玉森は甲骨文字に對して、綜合研究することをはじめた。胡光煒は第一冊目の『甲骨文例』（『甲骨文例』註[二]・第一輯二八九頁參見）を作つた。程憬は首め先づ唯物史觀を應用して、甲骨文を根據として、商朝は氏族社會であると説いた。董作賓は殷虛甲骨文字の發掘に從事した初めの人である。此の後研究すること二十餘年、重要な著作はまた『甲骨文斷代研究例』（『甲骨文斷代研究例』註[二]・第二輯二頁參見）と『殷曆譜』（『殷曆譜』註[三]・第三輯二八六頁參見）である。

第四の十年中は、また郭沫若、束世澂（束世澂・『甲骨學商史論叢初集』註[十]・第三輯二三九頁參見）、劉朝陽[三十一]、吳其昌（吳其昌・『雙劍誃殷契駢枝』註[六]・第三輯一三三頁參見）、唐蘭、孫海波、朱芳圃（朱芳圃・『甲骨學文字編』註[三]・第二輯二五一頁參見）、

陳夢家、聞一多、金祖同、胡厚宣、美國人の白端華[三十二]、英國人の吉卜生（吉卜生・『殷契拾掇』註[二十二]・本輯二九五頁參見）と蘇聯人の布那柯夫[三十三]が増えた。郭沫若は新しい史觀を應用し、新しい甲骨材料を根據として、中國古代社會に對して、新しい研究をなしたことは學術界には極めて重大な影響が發生した。彼は外に『卜辭通纂』（『卜辭通纂』註[二]・第二輯一一二頁參見）があるがこれは、第一部の綜合分類した甲骨選集である。唐蘭は偏旁分類法を使用して、識字獨り多し。劉朝陽は則ち董作賓の殷曆の作を糾正するに專意した。孫海波は『甲骨文編』（『甲骨文編』註[二]・第二輯二六九頁參見）を作り、朱芳圃は『甲骨學文字編』（『甲骨學文字編』註[三]・第二輯二四九頁參見）『甲骨學」商史編』（『甲骨學商史編』註[二]・第二輯三二五頁參見）を作つた、みな實に有用な工具書である。陳夢家は甲骨文に由つて商代の祭祀、王名、神話と巫術を研究した。（『甲骨學商史論叢初集』註[三十二]・[三十三]・[三十四]・[三十五]・第三輯二五六－八參見）胡厚宣の『甲骨學商史論叢』（『甲骨學商史論叢初集』註[二]・第三輯二〇一頁參見）は、則ち旨くあらゆる甲骨を綜合することを主として、全面的な徹底整理を作り、以て甲骨文中の一つの問題を解決せんと試みた。

第五の十年の中は、また于省吾、張宗騫[三十四]、李旦丘（李旦丘・『鐵雲藏龜零拾』註[四]・第三輯九七頁參見）、曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）、楊樹達と德國（ドイツ）人魏特夫格（ウイットフォーゲル）（魏特夫格・『甲骨學商史論叢初集』註[三十]・第三輯二五五頁參見）が増えた。于省吾は『殷契駢枝』（『雙劍誃殷契駢枝』註[二]・第三輯一三二頁參見）と『三編を作り、李旦丘は『鐵雲藏龜零拾』（『鐵雲藏龜零拾』註[二]・第三輯九六頁參見）と『殷契摭佚』（『殷契摭佚』註[二]・第三輯一四〇頁參見）を作り、釋字考文は、また新解が

多い。楊樹達は六十歳の老先生、最も後れて文章を書くこと最も多く、五十年來甲骨學研究中最も努力した一人であることを失わない。

八、

殷代の甲骨文字は、三千三四百年も以前から地下に埋もれ、最近の發掘と研討を以て、その性質に照して、また八つの時期に分けることが出來る。

一、埋藏時期
二、破壞時期
三、藥材時期
四、古董時期
五、金石時期
六、文字時期
七、史料時期
八、考古時期

遠く三千三四百年以前にあつて、殷代の人が甲骨を貞卜しおわつて甲骨を地下に埋めてより以後、おおよそ一つの實に長い時期を經過した、誰もそれを動かしたものはなかつた。これは就ち所謂埋藏の時期である。のち封建社會は厚葬を好むによつて、盜墓の風が、だんだん盛行するに隨つて、因つて埋藏してある甲骨文字を掘り動かした。或は戰國時代にあつてか、或は漢朝の時か、或は宋朝の時か、きつと大きな甲骨が發掘された。ただ人が氣付かなかつたので、すぐに破棄してしまつた。この樣にしてまた一つの實に長い時期を

經過してどれほどの寶貴な史料をこわしたか知らない。であるから我々はこれを破壞の時期と呼ぶ。少くとも清朝の幾百年中にあって、また明朝或は明以前に就ち開始した。平原の安陽縣小屯村は、實に多くの人家があり、龍骨の藥材を販賣するを以て生業としていた。多くはみな北京に運ばれ大口販賣され零碎なものは就ち市や露天に出して小賣りされた。龍骨藥は煎じて服めば、內科の病症をなおすことができる。細を用いて錯錯として細粉し、外傷のきず口に塗れば、止血し肉をもる。この種の大量の大口に賣るのと小賣との龍骨藥は、別のものでないのである。まさに殷代王朝占卜に用いた所の甲骨である。だから私達はこの時期を藥材の時期としているのである。

この三つの時期にはまた甲骨は殷代のものであることを知らなかった。更に甲骨上には殷王の貞卜の辭と貞卜に關する記事文字が刻してあることを知らなかった。これはみな五十年以前の事である。以て甲骨の前期と稱することが出來るのである。

一八九九年、また就ち清朝光緖二十五年、王懿榮は北京にあって、病となり藥を呑んだことで始めて、その藥中の「龍骨」上に刻されているものが、乃ち古代の文字であることを發見したのである。此れより以後、遲々としてやっと所謂甲骨學ができあがった。研究についた性質についても、やはり五つの時期に分けることができる。最初は古董の時期とする。甲骨文を古董と見たのは、これは王懿榮、劉鶚を以て代表とすることができる。其の次は金石時期である。甲骨文を金石學の一門とみなしたのは、これは馬衡（馬衡・『卜辭通纂』註〔三十四〕・第二輯一二一頁參見）陸和九〔三十五〕を以て代表をなすことができる、其の次は文字の時期である。專門に甲骨文を研究したのは、これは孫詒讓、羅振玉、唐蘭、于省吾を以て代表とすることができる。其の次は史料の時期である。甲骨文を史料とみなし、これらの直接の史料によって、以て古代の歷史を考論した。これは王國維、郭沫若、董作賓、胡厚宣を以て代表とすることができる。其の次は考古の時期である、考古學の科學的方法を用いて、甲骨を發掘し、甲骨をしらべ甲骨文字と殷墟發掘の居址墓葬遺跡器物などを一緖にして研究する、これは前中央研究院李濟（李濟・『卜辭通纂』註〔四六〕・第二輯一四九頁參見）、梁思永（梁思永・『殷曆譜』註〔四十五〕・第二輯三四四頁參見）、董作賓、石璋如（石璋如・『殷虛文字甲編』註〔四十三〕・本輯四五頁參見）、胡厚宣をもって代表となすことができる。この五期はみな甲骨文字を知ってのちに、近々五十年間の事情であって、甲骨の後期と稱することが出來る。

この五十年の間に、甲骨の學は、古董金石の研究より、古文字學の研究に到り、史料考古學の研究に到った、これは一つの極めて大きな進步である。

五十年來の甲骨學研究の詳細な經過に至っては、譬へばどの時期に於ても、舊い言い方は棄てられ、どの時期も、新しい問題の提出がある、並に各作家ごとの特殊な貢獻と發明の如きは、則ち別に『五十年來之甲骨學』の一文で詳かにし、ここでは余分な辭を費さない。

註〔三十〕 程憬（一九〇二― ）字は仰之、安徽績溪の人。國立清華大學卒業。かって廈門大學、中國公學の教授、國立暨南大學史學系主任、安徽大學文學院院長などに任じた。彼の著論文に「殷民族的社會」、「殷民族的氏族社會」「商民族的經濟生活之推測」がある。

註〔三十一〕 劉朝陽 生卒經歷不明。著論文には董作賓氏の殷曆に對し糾正したものが多い。その論文に「殷曆質疑」「再論殷曆」「三論殷曆」「關於殷周曆法之基本問題」「甲骨文之日珥觀測紀錄」「殷末周初日月食考」等他數篇ある。

註〔三十二〕 白端華（Roswell S. Britton）米國人。宣教師。一九〇六年方法斂が米國のプリンシトンに賣った甲骨をブリットン氏は一九三五年に『甲骨卜辭相片』、三八年に『甲骨卜辭七集』、三九年には『殷虛甲骨搨片』を校究している。また論文に「卜骨中の顏料」がある。

註〔三十三〕 布那柯夫（George W. Bounacoff）ソ聯人。生卒經歷不明。論文に「甲骨學の新研究」、「安陽龜甲獸骨」「安陽古器物と美國の甲骨學」がある。

註〔三十四〕 張宗騫 經歷未詳。論文に「卜辭弜弗通用考」燕京學報二十八期所收がある。

註〔三十五〕 陸和九（一八八四― ）本名は開鈞。字で以ておこなわれる。號は墨盦、湖北沔陽の人。清吏部學治館を卒業。北京民國學院、湖北武昌大學漢文科長、湖北襄陽第二師範學校國文教員、輔仁大學金石學教員を歷任。また民國十八年以來私立中國大學系講師、私立民國學院中國文學系教授、輔仁大學美術導師に任じて金石學を講じた。陸氏の學については詳らかではないが、金石學家としては著名でまた書畫篆刻に工みで金石學資料としての拓本を藏することで知られる。

（『中國文化界人物總鑑』）

九

現在要問，五十年來的甲骨學，既有這麼大的進步，材料，作家和論著，既都有這樣多，那，甲骨學上的問題，是不是就完全解決了呢？

我們的回答是，絕對沒有。眞正科學的甲骨學研究，至多是剛剛開始，也許還尚待起頭。

五十年來，儘管我們已經由古董金石的研究，進到了古文字學和史料考古學的研究。儘管我們已經由望文生解，斷章取義，進到了旁搜遠撫，通核偏參。儘管我們已經不再根據幾個字的有無，去講殷代的文化狀態。儘管我們已經不再一個字一個字的亂講，一句話一句話的瞎猜了。但我們對於這一批豐富的甲骨材料，並沒有能够應用最科學的方法，去統計，考證，比勘，分析，解釋，作一種精密的研究。我們雖然已經開始作所謂通盤全部的澈底整理，但這只是剛剛開始，而且應用的人還不多。

所以，五十年來，儘管我們也解決了一些問題，重要的像王國維的考先公先王，董作賓的論甲骨斷代，郭沫若的釋「五十」「七十」和武丁的后妃，吳其昌的證雍己考人祭，唐蘭的考白兕和釋中，釋仔，釋春秋，丁山的釋疾，釋夢，說亡尤，于省吾的釋羌甲，釋河岳，楊樹達的釋殹，釋央和先公稱王說，胡厚宣的考卜龜來源，記事文字，四方風名，以及農業生產，封建宗法，傳長立嫡，高媒求生，重男輕女的制度。但商代的氣候，到底比現在暖不暖？商代到底是氏族社會，還是奴隸社會？商朝「前八後五」的十三次遷都，到底是從東向西，或自西向東？迄今都尚在爭論之中。而最近二十年辯難最屬害的古代曆法問題，由董作賓開其端，參加論戰者有劉朝陽，孫海波，魯實先，陳子展，章用，吳其昌，丁山，莫非斯，章

鴻釗、岑仲勉、楊憲益以及竺可楨、錢寶琮、胡厚宣等人，至今也還不能得到一致的結論。此外關於甲骨文的斷代，董作賓已經起其例而發其凡，光大發揚，由粗淺而精細，使多數的甲骨文字，都歸派到它應屬的每一帝王，還有賴學者們的繼續努力。

至於商代整個的先公先王，都邑地理，祭典禮制，田獵征伐等等重大的問題，我們迄今不但沒有澈底解決，有的連一個輪廓都還不知道。

因此五十年來的甲骨學，雖然是近代學術史上最發達的一種學問，雖然甲骨材料有十六七萬片，作家近三百人，論著近九百種，但我們所解決的問題實在太少了。

一〇

今年是甲骨文發現的五十週年，也正好趕上中華人民共和國的成立，我們真幸運，能夠以無比興奮的情緒，來紀念這一個偉大的年頭！

明年，一九五〇年，是甲骨文發現的第五十一年。在這一年中，全國的解放事業，即可完成，國家的一切，都將要走上和平建設的大路。朋友們，努力罷！新生的中國，前途是充滿了光明，甲骨學的前途，也充滿了無限的希望！

我們曉得，商代是中國信史的開端，它是中國封建社會的原始，它創生了中國三千幾百年相沿的傳統文明。我們要想了解新時代的偉大，必須先對它加以了解。它是中國信史的發端，也是史前史考古學研究的關鍵。甲骨的材料，是這樣的豐富，甲骨的內容，是那樣的繁複，我們實在可以配合起大時代的需要，繕兵秣馬，大展其才了！

我們又希望生活能夠安定，材料能夠集中，寫出文章來，有地方可以出版。我們又要能夠得到一點點的方便和鼓勵就成了！

我們更希望殷墟能夠繼續發掘，根據過去的經驗，小屯地面下的寶藏，是無窮無盡。在以後的甲骨學研究中，應該不會再有壟斷包辦剝削和榨取，應該不會再有「怠者不能修，忌者畏人修」的現象了。因此我們希望有機會能把所有有興趣有毅力的同志們，集合在一起，從事於集體的學習商討與研究。在光明的新時代中，為大眾人民服務。

舊的時代死去了，新的中國誕生了。五十年來的甲骨學，給它作一個小小的結束罷！從今以後，在這個新時代中，我們應該站在新的立場，應用新的觀點方法，對甲骨文字另作一番新的研究。我們應該發憤努力，毅然的擔負起這一椿偉大時代的偉大任務來！

以上是我編完這本目錄後的一些感想，把它寫出來，就當作一篇序。

胡厚宣一九四九年十二月十七日在上海復旦大學之淞莊。

九

現在もし、五十年來の甲骨學が既にこんなに大きな進步があり、材料、作家と論著が、既にこの様に多くあるからには、それでは、甲骨學上の問題は、就ち完全に解決できたのかと問うならば、私達の回答は、絕對にそうでないということである。眞正の科學の甲骨學研究は、せいぜいやっと始まったばかりである、或は頭をもたげかけたところかもしれない。五十年來、私達は已に古董金石の研究より、古文字學と史料考古學の研究へと進み、私達は已に〝望文生解〟〝斷章取義〟より〝遠摭旁搜〟〝通核編參〟まで進み、私達は已に幾くつかの有無を根據とし、殷代の文化狀態を講じるようなことはなくなった。私達は亂講し、一句一句をあてずっぽに當てる必要はなくなったけれども、私達はこの一つの豐富な甲骨材料に對して、最も科學的な方法を充分應用して、統計し、考證し、比勘し、

分析し、解釋をし一種の精密な研究をなしえないでいる。私達は已に所謂全面的に全部の澈底整理を開始したけれども、ただこれはやっとはじまったばかりで、そのうえ應用する人はまだ多くない。

だから、五十年來、私達もやはりいくつかの問題を解決できた、重要なのは王國維の『殷卜辭中所見一先公先王考』（『甲骨學商史論叢初集』註[十五]・第三輯二五一頁參見）、董作賓の『甲骨〔文〕斷代〔研究例〕』（『甲骨文斷代研究例』註[二]・第二輯二頁參見）、郭沫若の「釋五十」「七十」と武丁の后妃（『甲骨文字研究』註[二]・第一輯三四七頁參見）、吳其昌の雍己を考へ、人祭[二十六]を證し、唐蘭の「白兕」と「釋中」「釋仔」「釋春秋」[二十七]を考へ、丁山の「釋疾」「釋夢」「說亡尤」（『雙劍誃殷契駢枝』註[三][四][五]・第三輯一三三頁參見）である。于省吾の「釋羌甲」「釋河岳」[二十八]、楊樹達の「釋登」「釋夾」と先公が王を稱する說[二十九]、胡厚宣の「卜龜の來原」、記事文字、四方風名を考へ、以て農業生產、封建宗法、傳長立嫡、高媒求生、重男輕女の制度に及ぶ。ただ商代の氣候は結局現在と比べて暖かったのかどうか。商代は結局氏族社會なのか、また奴隸社會なのか、商朝の「前八後五」の十三次の遷都は、結局東から西に向うもので、或は西より東に向うものなのか、今に至る迄これらはみな爭論の中にある。（以上胡氏の論說は『甲骨學商史論叢』初・二集に收錄されている。第三輯二〇一・二二七、二七七—二八一頁參見）而るに最近二十年ゆかり難いことこの上なかった古代曆法問題は董作賓によってその端を開き、論戰に參加したのは劉朝陽[三十]、孫海波[三十一]、魯實先[三十二]、陳子展[三十三]、章用[三十四]、吳其昌[三十五]、丁山[三十六]、莫非斯[三十七]、章鴻釗[三十八]、岑仲勉[三十九]、楊憲益[四十]及び竺可楨[四十一]、錢寶琮[四十二]、胡厚宣[四十三]等の人である。今に至るもまだ一致した結論を得るにいたっていない。

此の外甲骨文の斷代に關して、董作賓は已に其の規準をたて其の大要をのべ、精華をあげ、粗淺より精細に、多數の甲骨文字を使って、みなそれが應に屬する一帝王每に歸派した、その上信頼するにたる學者が繼續努力している。

商代はすべての先公先王に、都邑地理、祭典禮制、田獵征伐等[四十四]の重大な問題に至っては、私達は今迄に單に澈底した解決がないだけではなく或るものは一つの輪廓さえもわかっていない。

此れに因って五十年來の甲骨學は、近代學術史上最も發達した一種の學問であるけれども、甲骨材料には十六七萬片あり、作家は三百人に近く、論著は九百種に近いけれども、ただ私達の解決した所の問題は實にはなはだ少ない。

一〇

今年は甲骨文發現の五十週年は正しく中華人民共和國の成立に間に合った。私達が無比なる興奮の情緒を以てこの一つの偉大な年頭を記念することができるのは眞に幸運である。明年、一九五〇年、甲骨文發見の第五十一年である。この一年中にあって、全國の解放事業は、即ち完成することができる。國家の一切は、みな將に平和建設の大路を走上しようとしている。友人達よ努力せよ、新生の中國は前途が光明で充滿している。甲骨學の前途も、また無限の希望で充滿している。

私達は、商代は中國信史の開端であり、それは中國封建社會のはじまりであり、それは中國三千幾百年の相い沿う傳統の文明を創生したことを知っている。私達が新時代の偉大なることを了解しようと思うならば先づそれらに了解を加えることが必要である。それは

中國信史の發端であり、また史前史考古學研究の鍵であるからである。甲骨の材料は、この様に豐富であり、甲骨の内容は、あのように繁複である。私達は實に大時代の需要にあわせて、辶を繕ぎ馬に秣して大いに其の才を展（のば）すことができる。

私達はただ生活が充分に安定し、材料は充分集中し、文章を書いたら、出版してくれるところがあることを希望する。私達はただ少しの方便と鼓勵だけでよいのである。

私達は更に殷墟が充分つづけて發掘されるのを希望する。過去の經驗を根據として、小屯の地面下の寶藏は、無窮無盡である。以後の甲骨學研究中にあって、當然二度と獨りじめしたり搾取するとか搾取を受けあうなどあってはならないし、「怠る者は修むる能はず、忌む者は人の修むるを畏る」【四十五】の現象は當に二度とあってはならない。此れに因って私達はすべての興趣あり毅力ある同志達を、一ケ所に集めて、集團の學習討議と研究に從事することを希望する。光明の新時代中にあって、大衆人民の服務できる機會である。舊い時代は死んで、新しい中國が誕生した。五十年來の甲骨學は、それに一つの小さい結論を與えた。今より以後、この新しい時代の中には、私達は常に新しい立場に立って、新しい見方方法を應用して、甲骨文字に對して一つ新しい研究を作らねばならない。

私達は應に發憤努力して、毅然としてこの一椿の偉大な時代の偉大な任務を負擔すべきである。

以上は私のこの本の目録を編んだ後の一つの感想である。それを書き出してまさに一篇の序とする。

胡厚宣　一九四九年十二月十七日　上海復旦大學の淞莊にあって。

註【二十六】「雍己」云々は不明、恐らく「殷代人祭考」清華週刊二十七巻九・十號文史專號ではないかと思はれる。

註【二十七】「獲白兕考」燕京大學史學年報第四期　未見

釋中『殷虛文字記』三十七—四十一頁

釋俘『殷虛文字記』四十四—四十五頁

釋春秋『天壤閣甲骨文存釋文』二十三頁廿五行至二十四頁。

註【二十八】釋羌甲　于省吾撰『雙劍誃殷契駢枝』所收。釋河岳も同じ。

註【二十九】釋登　楊樹達撰　未見

釋吷　楊樹達撰　一九四五年四月、湖南大學古文字學研究講義本。未見。

註【三十】劉朝陽氏の殷曆に關する論文には次のものがある。「殷曆質疑」一九三一・十二月燕京學報第十期「再論殷曆」一九三三年六月、燕京學報第十三期。「三論殷曆」一九三六年二月、中山大學研究院文科研究所歷史學部史學專刊一卷二期。「殷曆的輪廓」一九四四年華西大學中國文化研究所專刊乙種第二冊、周初曆法考之三。「晚殷長曆」一九四五年華西大學中國文化研究所專刊乙種第三冊。「關於殷周曆法之基本問題」一九四五年、華西大學中國文化研究所集刊第四卷。「甲骨文之日珥觀測紀錄」一九四五年一至三月、宇宙十五卷一至三號。「殷末

周初日食考」一九四四年、華西・齊魯・金陵三大學中國文化研究彙刊第四卷。「夏書日食考」一九四五年華西・齊魯・金陵三大學中國文化研究彙刊第五卷等があり董作賓氏の說を糾正している。

註【三十一】孫海波　孫氏の殷曆の論文には「卜辭曆法小記」一九三五年六月、燕京學報第十七期。「說十三月」一九三二年・五月學文一卷五期がある。

註【三十二】魯實先　生年經歷あきらかでない。現在台灣の東海大學教授。魯氏の學は甲骨金文學を專門とする。殷曆の論文に「斥傅斯年殷曆譜序之謬」一九四五年八月二十六日、重慶新蜀報蜀雅十一期。又油印本がある。

註【三十三】章用　經歷不明。現在台灣にあり。論文については不明。

註【三十四】陳子展　生年經歷不明。論文に「龜曆歌」一九四五年油印本。又重慶の新蜀報蜀雅。「關於殷曆譜糾譎」一九四七年八月二十六日、中報春秋がある。

註【三十五】吳其昌　曆象の論文に「叢殘甲骨金文中所涵殷曆推證」中央研究院歷史語言研究所集刊四本三分がある。

註【三十六】丁山　殷曆を論じたものについては不明。

註【三十七】莫非斯　生年經歷不明。曆象の論文に「春秋周殷曆法考」一九三六年十二月、燕京學報二十期がある。

註【三十八】章鴻釗（一八七八—？）字は演群。浙江吳興の人。宣統三年に東京帝國大學理學部卒業。地質學を專攻した。歸國後、北京政府農商部地質研究所長、北京大學教授等を歷任。のち上海にあって中華科學社副社長、東方文化事業上海委員、編譯館の鑛物學地質學名詞の審查委員の書がある。殷曆に關する論文に「殷周年曆問題之商討」一九四六年・七月、說文報十九至二十三期がある。

註【三十九】岑仲勉（？）廣州中山大學教授。歷史學者、著書に『隋唐史』『黃河變遷考』『中外史地考證』等がある。殷曆の論文は「仲康日食內在的難題」一九四七年三月一日南京和平日報人文二十二期がある。

註【四十】楊憲益　生年經歷について不明。曆象の論文に「仲康日食考辨」一九四五年二月四日、南京中央日報文史週刊三十七期がある。

註【四十一】竺可楨（一八九〇—）字は藕舫。浙江紹興の人。北京清華學校卒業後、米國イリノイス大學及びハーバード大學において地理學を專攻し、哲學博士の學位を得た。民國七年歸國。のち國立武昌高等師範學校教授、國立東南大學地理學主任教授、上海商務印書館編譯所史地部主任、天津南開大學教授、國立中央

大學地理學主任教授、中國科學社長、國立中央研究院氣象研究所長等を歷任。戰後一九四九年九月、中華全國教育工作者代表會議準備會代表として人民政協會議に出席。十月中央人民政府の成立とともに政務院所屬科學院副院長となる。彼の專門とするものは明らかでないが、殷曆に關する論文には「二十八宿起源之時代與地點」一九四六年 思想與時代 三十四期がある。

註[四十二]　錢寶琮（？）字は琢如、浙江嘉興の人。英國バーミンガム大學の理學士。江蘇省立第一工業專門學報算學教授兼高中部教務主任、天津南開大學算學系教授、國立中央大學理學院算學系副教授、國立浙江大學文理學院算學教授等を歷任。曆象の論文に「論二十八宿之來歷」一九四七年三月 思想與時代 四十三期がある。

註[四十三]　胡厚宣　胡氏の殷曆の論文には次のものがある。「一甲十癸」辨 一九四一年甲骨學商史論叢初集所收。「甲骨文中之天象紀錄」一九四一年、成都齊魯大學國學研究所 責善半月刊 二卷十七期 「殷代年歲稱謂考」一九四二年、甲骨學商史論叢初集 「論殷卜辭中關於雨雪之記載」一九四五年、八月。學術與建設第一期

註[四十四]　先公先王の研究の現狀については『甲骨文斷代研究例』註[三]・世系 第二輯九一一六頁に詳しく紹介しておいた。

都邑地理　現在のところ諸論文三十數篇ある。主として羅振玉氏の『殷商貞卜文字考』都邑篇、『殷虛書契考釋』、王國維氏の『殷虛卜辭中所見地名考』、林泰輔氏の『甲骨文地名考』が初期の研究としてあげられる。董作賓氏が『甲骨文斷代研究例』の方國において卜辭に見える國々を間接的な斷代としてとらへている。（『甲骨文斷代研究例』註[六]・方國第二輯六七一七一頁參見）胡厚宣氏には「殷代舌方考」があり舌方の地望の問題をテーマとし、種々の角度より追求したものである。（『甲骨學商史論叢初集』第三輯二一三一二一六頁參見）また胡氏には「卜辭地名與古人居丘說」（『甲骨學商史論叢初集』第三輯二二五一六頁參見）があり卜辭の地名の考證をしたものである。方國を歷史地理的にとらえた白川靜博士の『甲骨金文學論叢』一―十集の雄族考、鄭、雀、畢、微、肅、臬、戉の國族が殷周時代を通じて大きな歷史的作用をなし、とくに殷周交替における歷史的意義をとらえたものとして高く評價されている。都邑の建築面からみた發掘報告は石璋如氏の『小屯殷代建築遺存』がある。

祭典禮制　諸論文五十數篇にのぼる。主なものには王國維氏の殷周制度の異同を論じた『殷周制度論』（『甲骨學商史論叢初集』註[十二]・第三輯二四三頁參見）があり、またこの書の一部となる『殷禮徵文』（『甲骨學商史論叢初集』註[十六]・第三輯二五三頁參見）は殷人の祭祀禮制を論じている。降って董作賓氏に「五等爵在殷商」があり、『甲骨文斷代研究例』の稱謂において、祭祀に記す受祭者と主祭者との關係を貞人によって明らかにしようとした。この受祭

者の稱謂は各貞人の集團の卜辭に先王の時代決定を下すことができるとする。（『甲骨文斷代研究例』註[三]・第二輯一六一二一頁參見）また『殷曆譜』においては新派、舊派に各王を分け、この兩派においていろいろ制度を異にし、それが曆法に及んでいるとする。（『甲骨文斷代研究例』補註[一]・第二輯三二一四一頁參見）卜辭によって商周の祭祀を考察し　陳夢家氏の「古文字中之商周祭祀」（『甲骨學商史論叢初集』註[三十二]・第三輯二五六頁參見）、殷の神話の發生より殷の神話形態を明らかにせんとしたものであり、また巫の成立過程と職事、國家との關係について論じた「商代的神話與巫術」（『甲骨學商史論叢初集』註[三十三]・第三輯二五七頁參見）がある。胡厚宣氏には『殷代婚姻家族宗法生育制度考』があり、周の家族制は殷制の演化したものとみ、王國維氏の『殷周制度論』に修正を試みている。また『殷代封建制度考』は從來にない詳細に殷代の封建を論じた論文である。（『甲骨學商史論叢初集』註[二]・第三輯二〇一一二〇四頁參見）我が國においては島邦男氏の『甲骨卜辞の研究』がある。これは五祀の祀序を整理發見したもので、董作賓氏とは別個に、祀序の存在がわが國の學者によって發見された書である。白川靜博士に文字學より宗教的起源から說き起した『甲骨金文學論叢』一―十集の釋史、釋文、作册考、釋師、載書關係字說―古代の詛盟祝禱儀禮と文字―、媚蠱關係字說―中國古代における呪術儀禮の一面―、自辛字辛關係字說―主として中國古代における身體刑について―は殷周における官制の占めていた地位、文身習俗に關する文字を中心として古代における社會階層意識・刑罰意識を浮き雕りにした論文である。

田獵征伐　この關係のものが閑却されている。郭沫若氏の『卜辭通纂考釋篇』田獵、征伐の項はまとまったものとは言えない。董作賓氏の『甲骨文斷代研究例』の事類には、武乙、帝辛時代の田獵を好む風を述べている。わが國の島邦男氏の『殷墟卜辞研究』と松丸道雄氏の『殷代田獵卜辭の研究』がよくまとまったものである。

註[四十五]　「怠る者は修むる能はず、忌む者は人の修むるを畏る」。典據不明。

七五、殷虛刻辭的語法研究[一]

甲骨刻辭引起學者的研究，從劉鶚著錄鐵雲藏龜，孫詒讓作契文擧例，已經半個世紀了。甲骨刻辭是現在已發現的最可靠的殷代文獻；自前中央研究院歷史語言研究所有計劃的發掘殷虛以來，擧世公認甲骨刻辭是盤庚遷殷至帝乙歸妹二百餘年間的王室檔案。學者們對於甲骨刻辭的研究，如經濟法則，社會制度，王統世系，曆法，文字，都有了很好的成績。關於語法方面的研究，如胡光煒先生著甲骨文例，郭沫若先生釋冎釋介等等，散見各家著作中。

本文的材料共根據十六部較重要的甲骨文著錄，以卜辭通纂，殷契粹編，殷契佚存，殷虛文字甲編及乙編上中輯爲主。有許多甲骨文字還不認識，因之應用此項材料時感到困難。本文就考釋有定論的文句作分析研究，對語法現象作一番有系統的敍述，其中有一部分是承襲前人的研究成果。作者識見淺陋，難免有許多錯誤，誠懇接受批評和指正。

本文是就作者在浙江大學中國文學研究所的畢業論文改寫而成的。在浙大研究所我的導師是鄭石君先生，改寫時又承羅莘田先生提示整理方法，寫成後承郭沫若先生在百忙中審閱全文，指正尤多。因爲他們的指教，使我避免了不少錯誤，非常感激。

管燮初　一九五二年五月一日．北京。

甲骨刻辭は學者の研究を引き起し、劉鶚より『鐵雲藏龜』（『鐵雲藏龜』註[二]・第一輯一頁參見）を著錄し、孫詒讓（孫詒讓・『契文擧例』註[十七]・第一輯四九頁參見）は『契文擧例』（『契文擧例』註[二]・第一輯四一頁參見）を作ってより、已に半世紀を經た。甲骨刻辭は現在已に發見され最も信ずるにたる殷代の文獻である。前中央研究院歷史語言研究所よりの計畫の殷虛發掘以來、世を擧げて甲骨刻辭は盤庚が殷に遷る帝乙に至る歸妹二百餘年間の王室の檔案である。學者は甲骨刻辭の研究に對して、經濟法則の如く、社會制度は、王は世系を統し、曆法、文字は、みな實に好い成績を有した。語法方面の研究に關しては、胡光煒（胡光煒・『甲骨文例』註[五一]・第一輯三〇二頁參見）先生の著『甲骨文例』（『甲骨文例』註[三]・第一輯二八九頁參見）、郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁參見）先生の「釋冎」「釋介」[二]等の如く、各家の著作中に散見する。

本文の材料は共に十六部の重要な甲骨文著錄を較べて根據とし、『卜辭通纂』（『卜辭通纂』註[二]・第二輯一一二頁參見）、『殷契粹編』（『殷契粹編』註[三]・第三輯一八頁參見）、『殷契佚存』（『殷契佚存』註[三]・第二輯一九八頁參見）、『殷虛文字甲編』（『殷虛文字甲編』註[二]・本輯七頁參見）及び『乙編上・中輯』（『殷虛文字乙編』註[三]・本輯九六頁參見）を主とする。多くは甲骨文字にまた認識せざるものがあり、これに因って此の項の材料を應用した時は困難を感じた。本文は就ち考釋には定論の文句があり分析研究を作った、語法現象に對しては一番に系統の敍述を作った。其の中の一部分は前人の研究成果をうけ、作者の識見は淺陋にして、多くの錯誤は免れ難い。誠に懇摯な批評と指正を受く。

本文は就ち作者が浙江大學中國文學研究所の卒業論文を書き改めて成したものである。浙大研究所にあっては、私の導師は鄭石君[三]先生であり、書き改めた時はまた羅莘田[四]先生に整理と方法の提示を承け、書成って後、郭沫若先生の多忙中にあって全部の審閱を承け、指正尤も多く、因って彼等の指教の為に、私をして多少の錯誤を免れられるのは、非常な感懐である。

管燮初[五]　一九五二年五月一日　北京にて。

註[一]　管燮初氏の浙江大學中國文學研究所における彼の卒論を書き改めたものである。本書は甲骨文字の語法について十六部（卜辭通纂、天壤閣甲骨文存、甲骨文錄、殷契粹編、殷契佚存、殷契卜辭、殷契拾掇二編、殷虛文字甲編、乙編。殷虛書契菁華、前編、後編、續編、寧滬、龜甲獸骨文字、鐵雲藏龜）の著錄より刻辭の語法について論及したものである。目次は一、引論　1.甲骨文字　2.甲骨刻辭的體例　二、句法　1.句型　2.省略　3.語序　4.疑問句的格式　5.修飾語　三、詞類　1.名詞　2.代詞　3.數詞　4.量詞　5.時地詞　6.動詞　7.繫詞　8.形容詞　9.副詞　10.連詞　11.介詞　12.感歎詞　四、結論より成る。

註[二]　釋冎　郭沫若撰　未見
釋介　郭沫若撰　未見

註[三]　鄭石君　未詳

註[四]　羅莘田　未詳

註[五]　管燮初　未詳

玉田繼雄編著

甲骨關係文獻序跋輯成

第五輯

據日本京都朋友書店一九七九年四月版影印

目次

七六、殷契拾掇二編……一
七七、戰後京津新獲甲骨集……三〇
七八、積微居甲文說……六〇
七九、耐林廎甲文說……六九
八〇、卜辭求義……七二
八一、殷虛文字綴合……七四
八二、甲骨學五十年……八四
八三、續殷曆譜……一〇〇
八四、甲骨續存……一〇七
八五、殷虛文字外編……一六四
八六、殷虛卜辭綜述……一六九
八七、巴黎所見甲骨錄……一七七
八八、殷代社會史料徵存……一八一
八九、殷虛文字丙編……一九〇
九〇、龜卜……二七四
九一、殷代地理簡論……二九七
九二、中國書譜……三〇五
九三、續甲骨文編……三二四

九四、殷代貞卜人物通考……三三四
九五、殷虛文字甲編考釋……三五九
九六、甲骨文編……三九一
九七、甲骨文字集釋……三九七
九八、中國文字叢釋……四二五
九九、薇顧甲骨文原……四三二
一〇〇、海外甲骨錄遺……四四二
一〇一、美國納爾森美術館藏甲骨卜辭考釋……四五一
一〇二、龜版文例研究……四五三
一〇三、殷卜辭中五種祭祀研究……四七九
一〇四、殷虛卜辭後編……四八九
一〇五、卜骨上的鑿鑽形態……五〇五
一〇六、甲骨集成……五一一
一〇七、甲骨綴合新編……五一五
一〇八、鐵雲藏龜新編……五一九
一〇九、甲骨文字研究第一輯……五二五
あとがき……五二七

七六　殷契拾掇二編

『殷契拾掇二編』又可以裝訂出版了，當我收到『樣子』的時候，心中感到無限的輕鬆和愉快。數年來的奔走，無論暑天寒天，日間晚上，在家或在旅途中，我隨時注意着甲骨材料。我這項地上的『發掘』工作，真不知要比挖土方困難多少倍。可是二編終於印成了，我却並不是想與羅王比功，倒覺得是一種責任似的。

一九四七年的夏天，我在上海博物院路上看到一家專銷『洋莊』的古玩鋪，櫃子裏陳列着一匣甲骨，標着說明，說共有甲骨一千片，寄售出讓。我看着陳列着的幾片甲骨『樣子』，都是殷王廪辛武乙和文丁三朝的東西，是新出土的珍貴的材料。可是這批材料正企待着外國主顧，我只能眼看着祖國的文化遺產，被奸商們送往帝國主義的博物館裏去。真如一九五一年四月二十七日大公報載的『美日帝國主義怎樣劫掠我們的甲骨文』一文中說的：『帝國主義者，尤其是美日帝國主義，對我國除了進行政治經濟和武裝的侵略以外，更加注重文化侵略。這種侵略的方式，一方面通過以巨額款項津貼宗教、教育、文化、醫療、出版，「救濟」等各項事業，加以控制，來進行對中國人民的欺騙麻醉，和灌輸奴化思想，以圖精神上來奴役中國人民。另一方面，則以旅行傳教為掩護，以考察參觀為藉口，通過了中國反動政府和「文化機關」，並利用其豢養的買辦官僚及流氓「學者」為爪牙，對我先民遺下的寶貴文物，進行其大規模的掠奪。』而那些沒有被豢養資格的流氓『學者』，又到處在鑽空子，眼前看見的便是事實㊀

一天我把這事和鼎堂先生談起了，他亦感到十分悵惘，他說唯一的辦法便是能得到這些材料的拓片。這時使我深深地感到收集拓本工作的重要，而且是一件急不容待的事。此後我在兩年內承公私藏家的協助，收到了上海亞洲文會博物院、上海市立博物館、胡厚宣氏等甲骨墨本，輯印了殷契拾掇一卷。

上海解放以來，舊書坊印行了好些甲骨材料的摹本，我隨便把手頭的拓本和印行的摹本比校了一下，發現的情況是：

一、拓本原有文字，而摹本奪去的；

拾掇四一八片『甲午貞告晝其步于且丁』
摹本脫『于且丁』三字（戰後寧滬新獲甲骨集——以下稱「寧滬」——卷一、三四七片）㊁

拾掇四四八片『己巳卜王弜步台宮』
摹本作『弜台』，脫去七字（寧滬卷一、三四九片）

本編七八片反C片墨書『月彳歲妣庚中』
摹本此行脫去（戰後南北所見甲骨錄——以下稱「南北」——上海文管會藏甲骨文字一〇〇片）

本編一五九片左下方卜辭五條『己巳卜雨、允雨　己巳卜庚雨　己巳卜辛雨　己巳卜壬雨　己巳卜癸雨』
摹本脫去『己巳卜庚雨』卜辭一條（寧滬卷一、一一〇片）

本編四一三片左上方卜辭殘文『妣壬』
摹本此條脫去（南北師友所見甲骨錄卷一、一九五片）

本編四六一片『王徝屮方受……』
摹本脫去『受』字（南北坊間所見甲骨錄卷五、三〇片）

本編四六七片反『貞其侑酘不……』
摹本此條脫去（同上三六片）

本編四六九片上一辭『□考□往乎吳取』
摹本脫『考』字（同上二一片）

本編四七四片最下端有殘辭『甲……』
摹本此條脫去（同上四二片）

本編四八一『癸巳……蒿……卯……』
摹本『癸巳』下脫『巳』字（同上五一片）

二、拓本完整，而摹本失去一部的；

拾掇四二二片　摹本失去左上殘辭『戊……』一部（寧滬卷一、二一三片）

本編四四五片　摹本失去右上『卜殻貞……』一部（南北坊間所見甲骨錄卷五、四片）

三、拓本完整，摹本失去一部，而文字又脫去的；

拾掇四四三片『甲寅卜啓　不雨』
摹本脫去『卜』字，上部失去『不雨』一部（寧滬卷一、七片）

四、摹本描摹錯訛的；

拾掇一八四片『卜其桒且乙南庚彖甲』
摹本『彖甲』訛作『冢王』㊂（寧滬卷一、一八四片）

五、拓本完整，摹本並未綴合，分散為若干片的；

拾綴三八五片　摹本分為三片（寧滬卷一、一一五、二七五、三四二各片）

拾綴三八六片　摹本分為三片（同上一九五、六〇四、六一七各片）
拾綴三八八片　摹本分為二片（同上二九〇、三三七各片）
拾綴三九五片　摹本分為六片（同上六四、六六、七二、七一、七五、五四〇各片）
拾掇四〇〇片　摹本分為二片（同上一六七、六四八各片）
拾掇四〇一片　摹本分為八片（同上三五二、三五七、三六〇、三七九、五三六、六〇九、六五七、六八六各片）
拾掇四〇三片　摹本分為二片（同上四一一、四一二各片）
拾掇四〇四片　摹本分為二片（同上一〇三、三七六各片）
拾掇四〇七片　摹本分為二片（同上一五八、二一五各片）
拾掇四〇八片　摹本分為二片（同上二三八、五九九各片）
拾掇四一二片　摹本分為二片（同上二三二、二八八各片）
拾掇四一四片　摹本分為二片（同上三〇六、六一九各片）
拾掇四一五片　摹本分為四片（同上一六五、三〇七、四三二、五七六各片）
拾掇四一六片　摹本分為二片（同上一七六、三〇四各片）
拾掇四二七片　摹本分為三片（同上二九八、二九九、六六四各片）
拾掇四二八片　摹本分為三片（同上四九七、四九九、六一八各片）
拾掇四三一片　摹本分為三片（同上四九六、五〇五、六七二各片）
拾掇四三九片　摹本分為三片（同上五五、五六、四七〇各片）
拾掇四四五片　摹本分為二片（同上三九九、六六六各片）
拾掇四四九片　摹本分為四片（同上六五九、四〇三、四〇四、六二九各片）

拾掇四五〇片　摹本分為二片（同上四二九、四三三各片）

以上僅是就我手頭的拓本比較了一下，大部份摹本，我無法校勘了，我想錯誤是不會少的。

我決意把本編的墨本印出來，便是要使讀者們可以接觸到真正的材料。

㊀ 後來這批材料，又陳列在江西路一家「洋莊」古玩鋪裏，一部份我收購下來（殷契拾掇智龕自藏），一部份後來歸清華大學，其他如嚴一萍氏、美國林黛琳夫人等都收到一部份。

㊁ 此片與上部一片是我代為拼合的，我曾據摹本原稿代為拼合若干片，即寧滬卷一、八九、一〇五、一一五、一六〇、一九七、二九〇、三〇八、三四七、四〇九、等各片。

㊂ 此事摹本序文中並未說明，大概是遺忘了。摹本與拓本字形上稍有出入的甚多，唯此條錯誤最嚴重。

『殷契拾掇二編』はまた裝訂して出版できる、私は『見本』を收めた時、心の中に無限の手輕さと愉快さを感じた。數年來の奔走は、無論暑い日も寒い日も、晝も夜も、家におり或は旅の途中にあっても、私はいつでも甲骨の材料に注意していた。私のこの種の地上の『發掘』作業では、この土地を掘るのに較べその為にどれほど困難が大きかったか全く分らない。然し二編はついに印刷が出來たのである、私は反って羅王（羅振玉・王國維）と功を較らべようとは思はず、一種の責任に似たものを覺えた。

一九四七年の夏、私は上海博物院の路上にあって一軒の專門店『洋莊』の古董店を發見した。櫃〔箱〕には一つの小箱の甲骨が陳列されていた、標示の說明に、すべて甲骨一千

片有り、販賣を委託し讓渡すると說かれていた。私は陳列された幾片かの甲骨の『見本』を見た、みな殷王廩辛・武乙と文丁の三期のものであり、新しく出土した珍貴な材料である。この一連の材料は正に外國の顧客に企てを待つものであろうか。私はただ祖國の文化遺產が惡德商人たちによって帝國主義の博物館に送られていくのをぼんやり見ておれようか。真に一九五一年四月二十七日の大公報の記載のように『米日帝國主義はどのようにして私たちの甲骨を取ったか』の一文中にいう『帝國主義者は、特にそれは米日帝國主義で、我が國に對して政治經濟と武裝の侵略を遂行する以外に、更に重要文化の侵略をも注ぎ加えた。この種の侵略の方式は、一方面では一定の全額の補助金の宗教、教育、文化、醫療、出版、「救濟」等の各項の事業を通じて掌握を加え、中國人民に對して欺騙麻醉を進行させ、奴隸化の思想をそそぎこみ、精神上で中國人民を奴役することを圖った。別の一方面では、則ち旅行傳教を以て掩護をし、參觀考察を口實にして、中國反動政府と「文化機關」を通じて、共に其の目をかけた外國商人の手先官僚及び流民の「學者」を利用して爪牙となり、私ども先人が殘した文物に對して、其の大規模な掠奪を進行した』。そしてあの目をかけられなかった資格の或る流民『學者』は、また至る所でうまくたちまわり、眼前に見えることだけが、本當のことと考えた。㊀

或る日私はこのことを「郭」鼎堂先生（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）と話をした。彼はまた充分に殘念さを感じ、彼の說く唯一の方法は便によくこの資料の拓本を得ることであった。この時、私は深く〳〵拓本を收集する仕事が重要であること、そのうえ一件急いで待つことの出來ないものであることを感じた。此ののち私は二年の內に公私所藏の協助を承けて、上海亞洲文會博物院、上海市立博物院館、胡厚宣氏

等の甲骨墨本を收めて『殷契拾掇』一巻を輯印した。

上海解放以來、舊い書坊でよき甲骨資料の摹本を印刷した、私は自由に手もとの拓本と印行の摹本を比較してみて次のような事を發見した。

一、拓本にはもと文字があって、そして摹本で（文字が）脫落。

拾掇四一八片『甲午貞告畫其步于丑丁』（諸）

摹本に『于丑丁』の三字脫（戰後寧滬新獲甲骨集』以下「寧滬」と稱す、—卷一の三四七片）㊁

拾掇四四八片『己巳卜王弜步台官』

摹本『弜台』に作る、七字脫落。（寧滬卷一、三四九片）

本編七八片の反、C片の墨書は『月彳歲妣庚中』

摹本この行脫落。（戰後南北所見甲骨錄—以下「南北」と稱す、—上海文管會藏甲骨文字一〇〇片）

本編一五九片　左、下方の卜辭五條『己巳卜雨、允雨、己巳卜庚雨、己巳卜辛雨、己巳卜壬雨、己巳卜癸雨』

摹本の『己巳卜庚雨』卜辭の一條脫落。（寧滬卷一、二〇片）

本編四一三片　左、上方の卜辭の殘文「妣壬」

摹本この條脫落。（南北師友所見甲骨錄卷一・一九五片）

本編四六一片　『王徝由方受……』

摹本『受』の字脫落。（南北坊間所見甲骨錄卷五・三〇片）

本編四六七片の反『貞其侑酘不……』

摹本此の條脫落。（同上三六片）

本編四六九片上の一辭『口考口往于吳取』

摹本『考』の字脫落。（同上二一片）

本編四七四片の最下端に殘字『甲……』がある。

摹本に此の條脫落。（同上四二片）

本編四八一『癸巳……蔑……卯……』

摹本の『癸巳』の下『巳』字脫落。（同上五一片）

二、拓本は完整にして、摹本は一部分を失う。

拾掇四二二片　摹本は左上の殘辭『戊……』の一部を失う。（寧滬卷一、二一三片）

本編四四五片　摹本の右上『卜㱿貞……』の一部を失う。（南北坊間所見甲骨錄卷五・四片）

三、拓本は完整で、摹本の一部を失ったもの、而して文字はまた脫落。

拾掇四四三片『甲寅啓不雨』

摹本『卜』の字脫落。上部の『下雨』の一部脫落。（寧滬卷一、七片）

四、摹本の描摹（スケッチした摹本）の間違い。

拾掇一八四片『卜其案且乙南庚象甲』

摹本の『象甲』誤って『冢壬』㊂に作る（寧滬卷一、一八四片）

五、拓本は完整で、摹本は並に未だ綴合しないで、分散して若干の片となる。

拾掇三八五片　摹本分れて三片となる（寧滬巻一、一一五、二七五、三四二の各片）
拾掇三八六片　摹本分れて三片となる（同上一九五、六〇四、六一七の各片）
拾掇三八八片　摹本分れて二片となる（同上二九〇、三三七の各片）
拾掇三九五片　摹本分れて六片となる（同上六四、六六、七二、七一、七五、五四〇の各片）
拾掇四〇〇片　摹本分れて二片となる（同上一六七、六四八の各片）
拾掇四〇一片　摹本分れて八片となる（同上三五二、三五七、三六〇、三七九、五三六、六〇九、六五七、六八六の各片）
拾掇四〇三片　摹本分れて二片となる（同上四一一、四一二の各片）
拾掇四〇四片　摹本分れて二片となる（同上一〇三、三七六の各片）
拾掇四〇七片　摹本分れて二片となる（同上一五八、二一五の各片）
拾掇四〇八片　摹本分れて二片となる（同上二三八、五九九の各片）
拾掇四一二片　摹本分れて二片となる（同上二三二、二八八の各片）
拾掇四一四片　摹本分れて二片となる（同上三〇六、六一九の各片）
拾掇四一五片　摹本分れて四片となる（同上一六五、三〇七、四三二、五七六の各片）
拾掇四一六片　摹本分れて二片となる（同上一七六、三〇四の各片）
拾掇四二七片　摹本分れて三片となる（同上二九八、二九九、六六四の各片）
拾掇四二八片　摹本分れて三片となる（同上四九七、四九九、六一八の各片）
拾掇四三一片　摹本分れて三片となる（同上四九六、五〇五、六七二の各片）

拾掇四三九片　摹本分れて三片となる（同上五五、五六、四七〇の各片）
拾掇四四五片　摹本分れて二片となる（同上三九九、六六六の各片）
拾掇四四九片　摹本分れて四片となる（同上六五九、四〇三、四〇四、六二九の各片）
拾掇四五〇片　摹本分れて二片となる（同上四二九、四三三の各片）

以上は僅かに私の手もとの拓本をちよっと比較しただけであるが、大部分の摹本は、私には校勘の方法がなかった。私は間違いは多いと思う。私は本編の墨本を印刷しようと決意したのは、即ち讀者たちをして眞の正しい材料に接觸することができるようしたかったからである。

㊀ その後この一連の材料は、又陳列は江西路一家の『洋莊』古董店にあり、一部分は私が購入して收めた（殷契拾掇、智龕自ら藏す。）一部分は後ち清華大學に戻った。其の他は嚴一萍（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註〔四三〕・第一輯三九頁參見）氏、米國の林黛琳夫人等のものみな一部分を收めた。

㊁ 此の片と上部の一片とは私が代って拼合したものである。私は曾って摹本の原稿により代りに併合を若干片した。即ち巻一、八九、一〇五、一一五、一六〇、一九七、二九〇、三〇八、三四七、四〇九等の各片。此の事は摹本の序文中、並に未だ説明していない。大體の樣子は忘れてしまった。

㊂ 摹本と拓本とは字形上に稍やくいちがいがあること甚だ多く、唯この條の間違いは最も嚴重にした。

註〔二〕『殷契拾掇』初編に續くもので、公私所藏及び郭若愚藏する甲骨を拾掇し收錄。それらは二十五ケ處の公私機關で、一、北京圖書館藏、二、南北博物院藏、三、上海文物會藏、四、浙江文物會所藏、五、浙江省立圖書館藏、六、沈會植舊藏、七、張丹斧舊藏、八、陳伏廬舊藏、九、龔心釗舊藏、十、黄賓虹藏、十一、陳器成藏。十二、嚴一萍藏。十三、劉體智藏、十四、陳伯衡藏、十五、邊政平藏、十六、張彥生藏、十七、孫叔仁藏、十八、金祖同藏、十九、劉華端藏、二〇、童大年藏、二一、吳進思藏、二二、杜亞貽藏、二三、潘查盦藏、二四、智龕藏、二五、智龕藏拓本の廣範圍に亘って蒐集して掇合にあたったものである。それによって人頭骨刻辭の發見、四方風名刻辭の發見、殷曆の補充、最大の牛胛卜骨の發見、洹水の殷代遷都の關係、斷片卜辭の綴合等を明らかにする卜片を發見したことはこの序文に詳しく論じられている。出版は一九五三年、來薰閣。

註〔三〕米國の林黛琳夫人。

本編收集公私所藏及自藏甲骨共二十五處，內中、一、六、七、十六幾處材料是我收集到的墨本，並知道它們的出處，其他都是我汰除僞品、自己手拓的。現在說明一下這些材料的

特點：

一、人頭骨刻辭的發現：在殷墟和甲骨同時出土的材料，除了大量牛胛骨和龜腹甲、龜背甲以外，便是少數牛肋骨條、牛頭刻辭、鹿頭刻辭等，人頭骨刻辭還是新發現。據說加拿大人明義士曾得到一片刻有六七字的人頭骨，但亦沒有見到實物或拓本。本編第四九片定為人頭刻辭，是我根據一九五一年出版的一本小冊子『五十年甲骨文發現的總結』上的記載：「慶雲堂碑帖舖有一千多片甲骨，假的佔一多半（原文如此），索價奇昂。我因其中有一片「人頭刻辭」，一片「牛肋骨刻辭」，相當重要。……思之再三，終不願把機會放過。」我想這點大概還不至於撒謊，後來這批材料又讓歸北京圖書館保存，一九五〇年的十月裏，我到北京圖書館參觀時，却找不得這片東西，大概當時不知被分售到那裏去了。這片研究殷代奴隸直接的珍貴資料的遺失，是深可痛惜。本編第八七片的『人頭骨』是我憑自己直覺的觀察，沒有經過科學研究，我懇切的希望這方面的專家們，能夠給我指教。

二、四方風名刻辭的發現：甲骨文四方風名的發現，還是在一九三七年鼎堂先生在日本編輯殷契粹編的時候，是劉善齋先生所藏的一片牛胛骨（本編一五八片），當時因為見到的是拓本，不能遽定眞僞，因此粹編沒有著錄，這種謹愼的態度是應該的。後來在前中央研究院第十三次發掘小屯所得的甲骨內，又發現了一片祭四方風的卜辭（小屯乙編四五四八片）、因此知道這版四方風名的刻辭，有它的來歷。現在北京圖書館所藏一片（本編第六片）、原在北京古玩店中發現，這片卜辭恰巧可和十三次發掘的一版拼合，兩片拼合的圖版，我已收在殷契文字綴合一書內，這裏要保存本來面目，不把它們印在一起了，現在把這組完整的卜辭記在下面，給研究者參考。

『辛亥卜內貞帝（禘）于北方曰・役風・

辛亥卜內貞帝（禘）于南方曰岂風。
貞帝（禘）于東方曰析鳳（風）曰劦
貞帝（禘）于西方曰彝鳳（風）」

三、殷奭的補充：鼎堂先生編著卜辭通纂時，發現了殷代末期的「先妣特祭」例，製成了祖妣配列世系表，一九三三年在殷契餘論中又補充了仲丁配妣己、祖辛配妣甲和祖丁配妣庚，因此把世系表亦更正了一下；一九三七年編著殷契粹編時又發現祖甲配妣戊之外、又有母己。本編第二一四片有辭云：

「庚申卜貞王賓祖乙奭妣庚彡亡尤」

可知祖乙配妣己之外，又有妣庚。本編第二一五片有辭：

「戊寅卜貞王賓祖丁奭妣戊壹亡尤」

此片妣戊的戊字拓本上看不清楚，但是卜問的日子是戊寅，可見一定是妣戊無疑的，（上一辭庚申卜彡祭妣庚便是證明）由此可知祖丁配妣甲、妣己、妣庚、妣癸以外，又有妣戊了。

現在把已發現的殷代祖先的配妣，補充例表如下：

示壬	十	妣庚
示癸	十	妣甲
大乙	十	妣丙
大丁	十	妣戊
大甲	十	妣辛
大庚	十	妣壬
大戊	十	妣壬
仲丁	十	妣己 妣癸
祖乙	十	妣己 妣庚
祖辛	十	妣甲 妣庚
祖丁	十	妣甲 妣戊 妣己 妣庚 妣癸
小乙	十	妣庚
武丁	十	妣戊 妣辛 妣癸
祖甲	十	妣戊 母己
康丁	十	妣辛

四、最大牛胛卜骨的發現：有人統計出土的甲骨，說是羅振玉殷虛古器物圖錄中的一塊牛胛骨，是完整牛胛骨的最大者。本編第一五九片劉體智藏大胛骨，與之相校，我覺得有過之無不及，而且刻辭甚多，的確是一件珍貴的資料。此骨自歸劉氏收藏以來，因骨質鬆脆，從來沒有椎拓過，一九五一年六月裏，承劉先生慨然假拓，厚誼可感。本編卷首附印此大骨的原形，可以看到它的真面目。

五、洹水對殷代遷都的關係：本編第四七六片有辭云：

「癸亥卜㱿貞洹弗作……囗囗卜㱿貞洹其作茲邑，

王𠮷曰其作隹……」

作字從鼎堂先生釋，是為作字，前編一卷廿七葉第四片有辭云「隹我𡿧（有）乍𡆥（禍），不隹我𡿧（有）乍𡆥（禍）」，此處擬是「作禍」之省，洹水作禍，便是鬧水災了，這片卜辭的意義是殷王武丁在癸亥那天，由卜人㱿卜問說：「洹水會對我們的首都有害嗎？洹水對我們的首都不會有害吧？」最後是殷王自己乩卜，做出結論，可惜卜辭殘缺了。由此可知洹水對殷都的關係很大，以後帝乙遷沫，洹水的作祟，不能說不是一個原因，而因此「完全打消了帝乙因水患而遷都的假說」㊃是完全不必要。此片卜辭關係安陽殷墟的年代問題，是值得重視的。

六、斷片卜辭的綴合：上海市文物管理委員會所藏的甲骨，總數有一五五五片，其中有用的材料，由李亞農先生編輯了殷契摭佚續編。一九五一年夏天我去整理了一下，選拓了一些經我綴合的甲骨。大概是那年的秋天吧！我有病在家，在我小孩子的手裏，看到一片甲骨上還有一個牛字（本編三九九C片），忽然覺得這骨版和摭佚續編第一二五片是可以拼合的，結果是的確不錯。我真高興那片被我拋棄了的甲骨還有這麼大的用處，董作賓說：「例如一

個大片上只有一兩個殘餘的干支字，或小如指甲的碎塊上，一半個貞卜字、干支字等等……對於研究上實在沒有多大用處；本編落選的，佔全數約五分之二都屬於這一類。」（殷虛文字甲編序）我完全不同意這種看法，我真為這五分之二「落選」的材料惋惜。為了讀者們檢查的方便，把綴合的甲骨列成表式：

本編五四片	摭佚續編二八一（倒置）
本編五九片	摭佚續編一八九
本編六四片	摭佚續編二九八十三一八
本編七五片	摭佚續編一一八十一三二
本編七六片	摭佚續編八五
本編七七片	摭佚續編三六
本編七八片	摭佚續編一四一（A）十一六（B）
本編八二片	摭佚續編一八六十一八四
本編三九九片	摭佚續編一六一（A正）十一二五（AB反）十智龕自藏（C）

此外如本編一六六「乙丑桒自大乙至丁且九示」且丁作丁且，是為「人名顛倒例」；本編一七〇「癸未卜𢓊福父甲至父乙酒一牛」父甲至父乙，當是象甲、盤庚、小辛、小乙，可知此片卜辭應為武丁時物，亦是斷代研究上的一個標準；本編四七八「辛丑卜㱿貞小臣冥妨」，「冥妨」舊釋「娩嘉」，「小臣」和「冥妨」兩辭連在一起，是值得研究的。其他如一八片的「井方」合文，一二二片的「王賓龠」，一二六片的「貞方帝」等，都是研究的好資料，限於我的識見，不能摘出它的秘奧來。好在研究甲骨文的專家們自會有合理的解釋，不必我來主觀的附會了。

最後要說明的，是本編附有側面和反面祇有卜兆鑽灼而沒有文字的拓片，側面是表示龜甲的厚度和鋸痕㊄，（本編一六三龜腹甲亦然）；反面是表示鑽灼的形式。我覺得做學術工作是嚴肅的、精密的，因此亦必須是負責的，根本不能忽視一點現象，而且要立刻說明，以供大家研究。

本編二四三、二四四、二六七、二六九、三〇九、三一三、三三二、四一三等數片龜甲，都是龜背甲，「甲」字上漏掉了「背」字，這點附帶在這裏說明，同時向讀者們致歉。

徐森玉先生、顧起潛先生、陳伯衡先生、陳夢家先生、尹煥章先生，在我收集這些資料的時候，都給我很大的幫助，我敬致以至誠的謝意。

一九五三年一月廿七日　郭若愚

㊃ 見董作賓甲骨文斷代研究例。

㊄ 殷人應用龜背甲時，是先把龜背甲正中分剖為二，所以有鋸過的痕跡。

本編收集の公私所藏及び自分で藏する甲骨はすべて二十五ケ處、そのうちの一、六、七、十六の幾處かの材料を私は墨本で收集した並にそれらの出處不明のは其の他はみな私が偽品を除いた、自己の手拓である。

現在以下の材料の特別な點を說明する。

一、人頭刻辭の發見：殷墟にあって甲骨と同時に出土した材料は、大量の牛胛骨と龜腹甲、龜背甲等を除いては、更に少數の牛肋骨條、牛頭刻辭、鹿頭刻辭等であり、人頭骨刻辭はやはり新しい發見である。聞くところによるとカナダ人の明義士（明義士・「殷契書

錄』註〔三〕・第一輯三二頁參見）が一片に六七字を刻む人頭骨を得た〔三〕、ただやはり實物あるいは拓本は見ていない！。本編第四九片〔四〕は人頭刻辭と決定する。私は一九五一年出版の一冊の小本である『五十年甲骨文發見の總結』上の記載によれば『慶雲堂碑帖鋪に一千片近くの甲骨があって、贋物が半分以上を占める、（原文此くの如し）價を求めるとべらぼうに高い。私は其の中に一片の「人頭刻辭」と、一片の「牛肋骨刻辭」があった　相當重要なものである。……これを思うこと再三、終に機會を放置しておこうとは思ってはいない。』と。私はこの點で恐らく嘘をついてはいない！。のちこの材料はまた讓られて北京圖書館に來って保存された。一九五〇年の十月に、私は北京圖書館にゆき參觀した時、却って私はこの片のものを得られず、恐らく當時賣られてどこかへ行ってしまったのであろうか知る由もない。この片で殷代を研究する直接の珍貴な資料が遺失しているのは、深く痛惜とするところである。本編第八七片〔五〕の「人頭骨」は私の自己の直覺の觀察であって、科學研究の經過ではない、私は懇切にこの方面の專門家に、能く私に指教を與へ賜わんことを希望する。

二、四方風名の刻辭の發見：甲骨文の四方風名の發見は、また一九三七年鼎堂先生は日本に在って『殷契粹編』を編輯した時である。劉善齋先生所藏の一片の牛胛骨である（本編一五八片）、當時見たものは拓本であったので、眞僞を定めることが出來ず、此の故に「粹編」には著錄しなかった、この種の謹しみ深い態度は當然なものである。のち前中央研究院第十三回發掘の小屯で得た所の甲骨を收めた、また一片に四方を祭る卜辭を發見した（小屯乙編四五四八片。）此れによってこの版の四方風名の刻辭には、その來歷があることを知った。現在北京圖書館所藏の一片は、（本編第六片）もとは北京の古董店中に發

見されたものであり、この片の卜辭はいい具合に十三回發掘の一版の〔六〕拼合であることを知った、兩片拼合の圖版は、私は已に『殷虛文字綴合』の一書內に收めた。これは本來の面目を保存しようとして、それらの印刷をひとまとめにしなかった。現在はこの組の完整の卜辭を以下に記し、研究者の參考に給する。

『辛亥卜內貞帝（禘）于北方曰役風。
辛亥卜內貞帝（禘）于南方曰岂風
貞帝（禘）于東方曰析鳳（風）曰劦
貞帝（禘）于西方曰彝鳳（風）』

三、殷先の補充：「郭」鼎堂（郭沫若・二七・『甲骨文字研究』註「十四」・第一輯・三七五頁參見）先生の『卜辭通纂』を編著した時、殷代末期の「先妣特祭」の例を發見し、（『卜辭通纂』註「十八」・第二輯一二七頁參見）そして祖妣の配列世系表を作製した。一九三三年「殷契餘論」（『古代銘刻彙攷四種殷契餘論、金文續攷、石鼓文研究、漢代刻石二種各一卷』註〔一〕・第二輯二五三頁參見）中にまた仲丁の配偶妣甲と祖丁の配偶妣庚母甲を補充した〔七〕。此れによって世系表をまた一度更正した。一九三七年「殷契粹編」（『殷契粹編』註〔二〕・第三輯一八頁參見）を編著した時また祖甲の配偶妣戊の外に、また母己の〔八〕あることを發見した。本編第二一四片に辭がある。

『庚申卜貞王賓祖乙奭妣庚彡亡尤』

祖乙の配偶妣己の外に、また妣庚のあることを知ることが出來る。本編第二一五片に辭がある。

『戊寅卜貞王賓祖丁奭妣戊壹亡尤』

此の片の妣戊の戊字は拓本上から見ればはっきりしていなく、ただ卜問の日は戊寅であって、必ずや妣戊であること疑いないことを見ることが出來る、（上の一辭庚申に卜する妣庚を彡祭することで便に證明できる）此れによって祖丁の配偶妣甲、妣己、妣庚、妣癸以外にまた妣戊があることを知ることが出來る。現在已に發見の殷代祖先の配偶の妣をとらえて、補充して例表すると下の通り。

庚	妣	十	壬	示
甲	妣	十	癸	示
丙	妣	十	乙	大
戊	妣	十	丁	大
辛	妣	十	甲	大
壬	妣	十	庚	大
壬	妣	十	戊	大
乙	妣	十	丁	仲
癸	妣			
己	妣	十	乙	祖
庚	妣			
甲	妣	十	辛	祖
庚	妣			
甲	妣	十	丁	祖
戊	妣			
乙	妣			
庚	妣			
癸	妣			
庚	妣	十	乙	小
戊	妣	十	丁	武
辛	妣			
癸	妣			
戊	妣	十	甲	祖
己	母			
辛	妣	十	丁	康

四、最大の牛胛卜骨の發見：ある人が出土の甲骨を統計し、羅振玉の『殷虛古器物圖錄』中の一塊〔九〕の牛胛骨が、完整な牛胛骨の最大のものであるという。本編第一五九片は劉體智藏の大胛骨で、これと相い較らべると、私はこれに過ぎるも及ばないことを覺った、そのうえ刻辭は甚だ多く、確かに一件の珍貴な資料である。此の骨は劉氏收藏より以來、骨質はさくさくしていて、從來推拓なく、一九五一年六月に劉先生よりためらわずに拓を借り承けたこと厚誼を感じる。本編の巻首に此の大骨の原形を附印し、以てその眞の面目を見ることができる。

五、洹水の殷代遷都に對する關係：本編第四七六片に辭ありいう。

『癸亥卜㱿貞洹弗乍……口口卜㱿貞洹其乍茲邑、
王乩曰其乍隹……』

作字は「郭」鼎堂先生の釋によれば、これは作字〔十〕である、『殷虛書契』前編一卷廿七葉第四片に辭あり云う『隹我𡆥（有）乍囚（禍）、不隹我𡆥（有）乍囚（禍）』と。此の處をおしはかれば『作禍』の盾であり、洹水は禍する、便に水害騷ぎが起るとする、この片の卜辭の意義は殷王武丁が癸亥の日にあるのであり、卜人㱿によって卜問している『洹水は私達の首都に對して害があるのか、洹水は私達の首都に對し害があるのかないのか』最後は殷王自からの乩卜であり、結論を出す、惜しいことに卜辭は殘缺である。此れに由って洹水の殷都に對する關係は實に大きいということがわかる。以後帝乙の沫に遷るのは、洹水が祟をなしたことが、一つの原因でないと說くことは④出來ない。而して此れによって『完全に帝乙が水患によって遷都した假說は打ち消された』とは完全に必要がないのである。此の片の卜辭關係は安陽殷墟の年代問題で、重視に値ひするものである。

六、斷片卜辭の綴合：上海市文物管理委員會所藏の甲骨は、總數一五五五片あり、其の中の役に立つ材料は、李亞農（李亞農・『殷契摭佚續編』註「十二」・第四輯一九八頁參見）先生によって『殷契摭佚續編』（『殷契摭佚續編』註「二」・第四輯一九三頁參見）に編輯された。一九五一年夏に私はちょっと整理して、すこし私は甲骨を綴合して選拓した。大體の樣子はあの年の秋の日で、私は病で家におり、私の子供達の手にあり、一片の甲骨上にまた一つの半分の字を見た（本編三九〇片）とき、忽然としてこの骨版と『摭佚續編』第一二五片とは拼合できることを覺った、結果は的確で誤りはなかった。私は自分がなげ捨てたあの甲骨がまたこんなに役立ったのを本當に嬉しく思った。董作賓（『殷契書錄』

註〔四〕・第一輯三二四頁參見）はいう『例へば一個の大片の上にただ一、二個の殘餘の干支文字があり、……研究上に對して實際に大して用徒のないものもある。本編に落選したのは、全數の約五分の二を佔めみなこの一類に屬する。』（『殷虛文字甲編序』）（第四輯一二頁參見）私は完全にこの種の見方には同意しない。私は眞にこの五分の二の『落選』の材料を惜しいと思ふ。讀者たちに檢査の方法の爲に、綴合の甲骨を列して表式をつくる。

本編五四片	摭佚續編二八一（さかさに置く）
本編五九片	摭佚續編一八九
本編六四片	摭佚續編二九八十三一八
本編七五片	摭佚續編一一八十一三二
本編七六片	摭佚續編八五
本編七七片	摭佚續編三六
本編七八片	摭佚續編一四一（A）十一六（B）
本編八二片	摭佚續編一八六十一八四
本編三九九片	摭佚續編一六一（A正）十一二五（ABの反）十智龕自ら藏する（C）

此の外は本編一六六の『乙丑桒自大乙至丁且九示』は且丁を丁且に作る如く、これは『人名顚倒の例』とする；本編一七〇の『癸未卜彵福父甲至父乙酒一牛』は、父甲より父乙に至る。當に象甲、盤庚、辛、小乙であり、此の片の卜辭は應に武丁の時の物であることが知られる。また斷代研究上の一個の標準であり、本編四七八の『辛丑卜㞢貞小臣冥放』、『冥放』〔十一〕は舊（もと）『婉嘉』と釋す、『小臣』と『冥放』の兩辭は一緒に連ってあり、研究に値ひする。其の他は一八片の『井百』〔十二〕の合文、一二二片の『王賓龠』、一二六片の『貞方帝』〔十三〕〔十四〕等の如く、みな研究の好き資料である。私の識見の限りでは、その秘奧を兩手ですくひ出すことは出來ない。幸いに甲骨文を研究する專門家は自からの理解する合理的な解釋があるので、私の主觀のこじつけを必要としない。

最後に説明を要するのは、本編に側面と反面があり、ただト兆鑽灼があって文字の拓片はない。側面は龜甲の厚度と鋸痕を表示するもので、㊄（本編一六三の龜腹甲もまた然り）、反面は鑽灼の形式を表示するものである。私は學術工作をすることは嚴肅的、精密的なるものであることを覺った。此れに因ってまた必ず須らく責任を負うものであり、根本は一點の現象をも無視することは出來ない。そのうえすぐに説明を要し、大家の研究に供する。本編二四三、二四四、二六七、二六九、三〇九、三一三、三三二、四一三等の數片の龜甲は、みな龜背甲である。『甲』字の上は『背』字が漏れてなくなり、この點はここに説明を添付した。同時に讀者達におわび申し上げる。

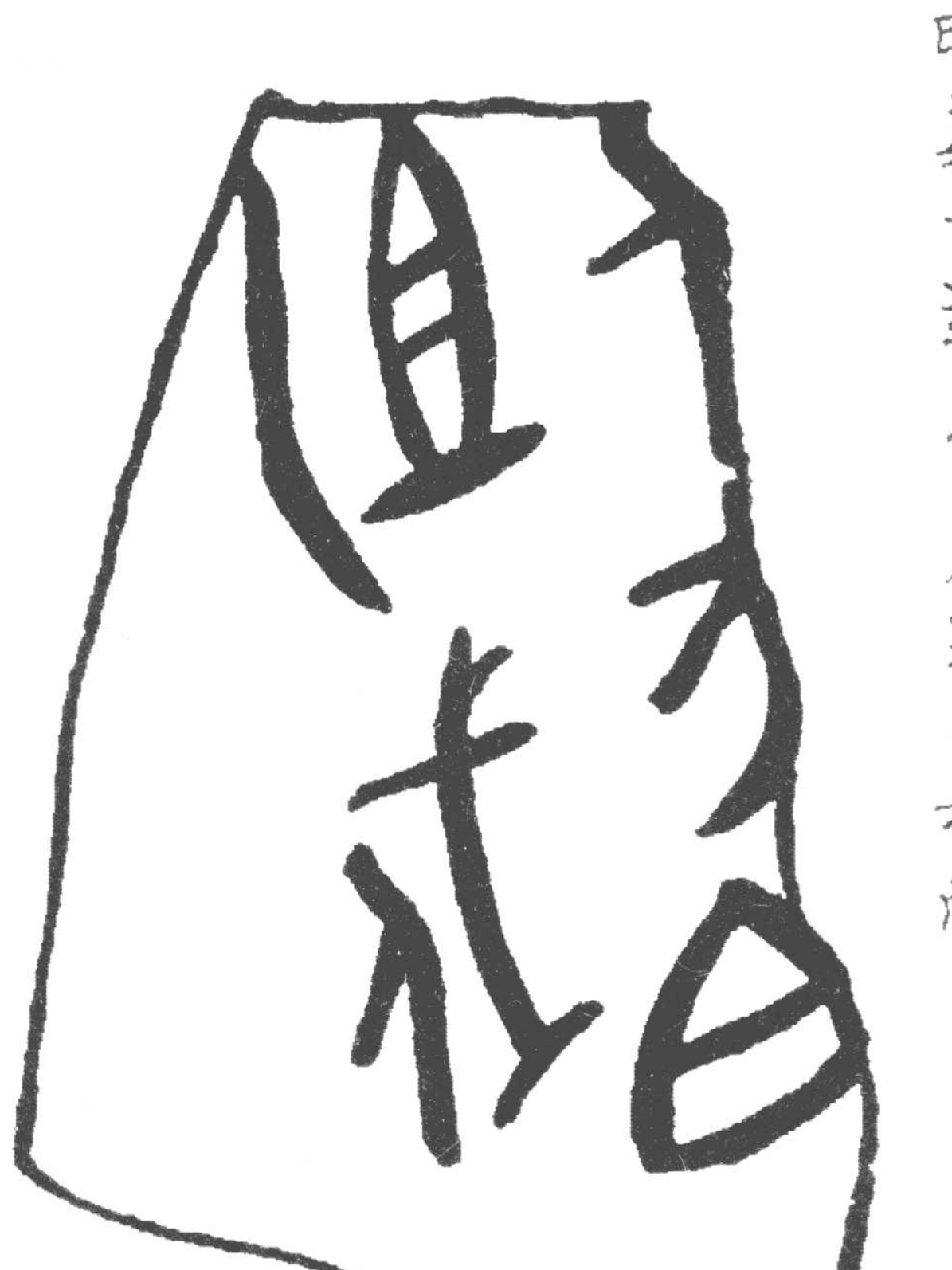
徐森玉（徐鴻寶・『殷契拾掇』註〔二〕・第四輯二七五頁參見）先生、顧起潛（傳未詳）先生、陳伯衡〔十五〕先生、陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註〔三〕・第三輯一四〇頁參見）先生、尹煥章（尹煥章・『殷虛文字甲編』註〔五十一〕・第四輯七八頁參見）先生は、私のこの資料の收集の時に、みな私に實に大きな手傳をなされ、私は敬んで謝意をあらわす。

一九五三年一月廿七日　郭若愚（傳未詳）

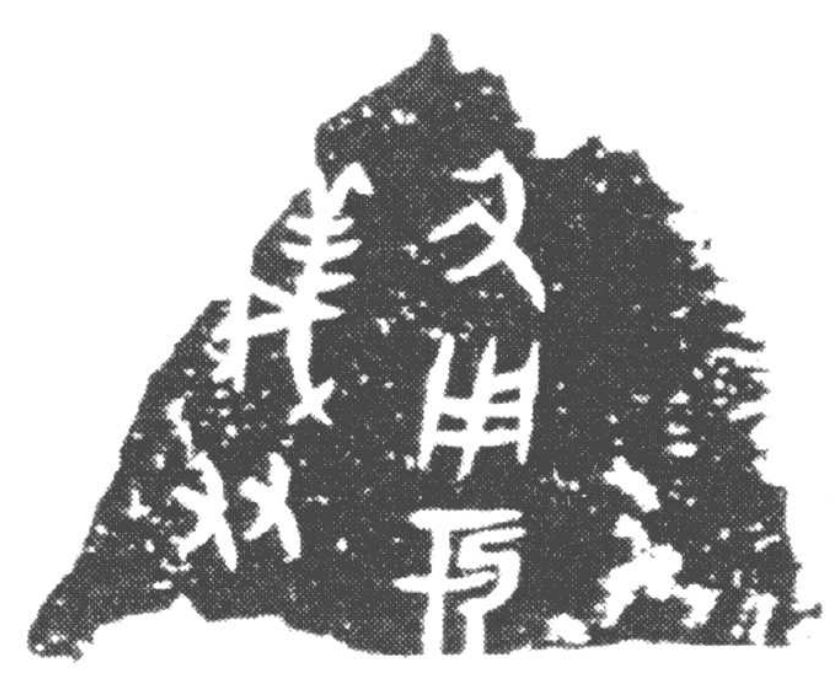
㊃　董作賓の『甲骨文斷代研究例』を見よ。

㊄　殷人が龜背甲を必要とするとき、先づ龜背甲をとって眞中に分けて切開し二つとしたのだから、鋸（のこぎり）の痕跡がある。

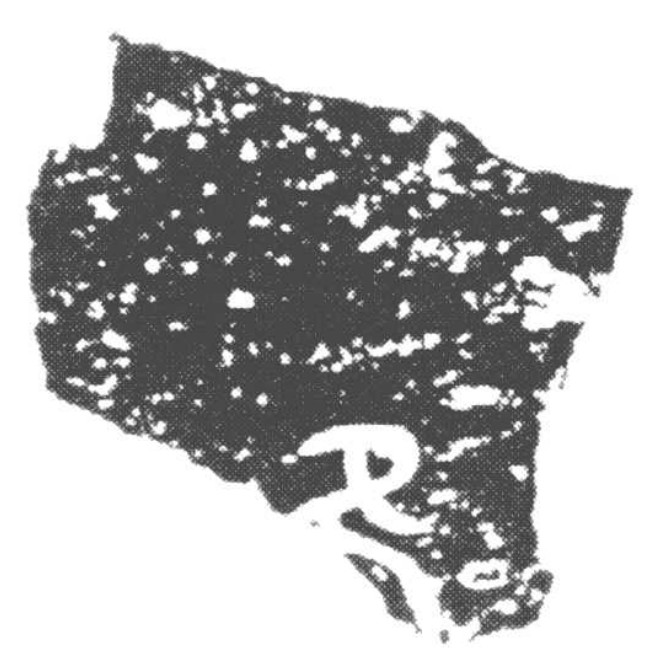
註〔三〕　明義士發見の人頭骨刻辭



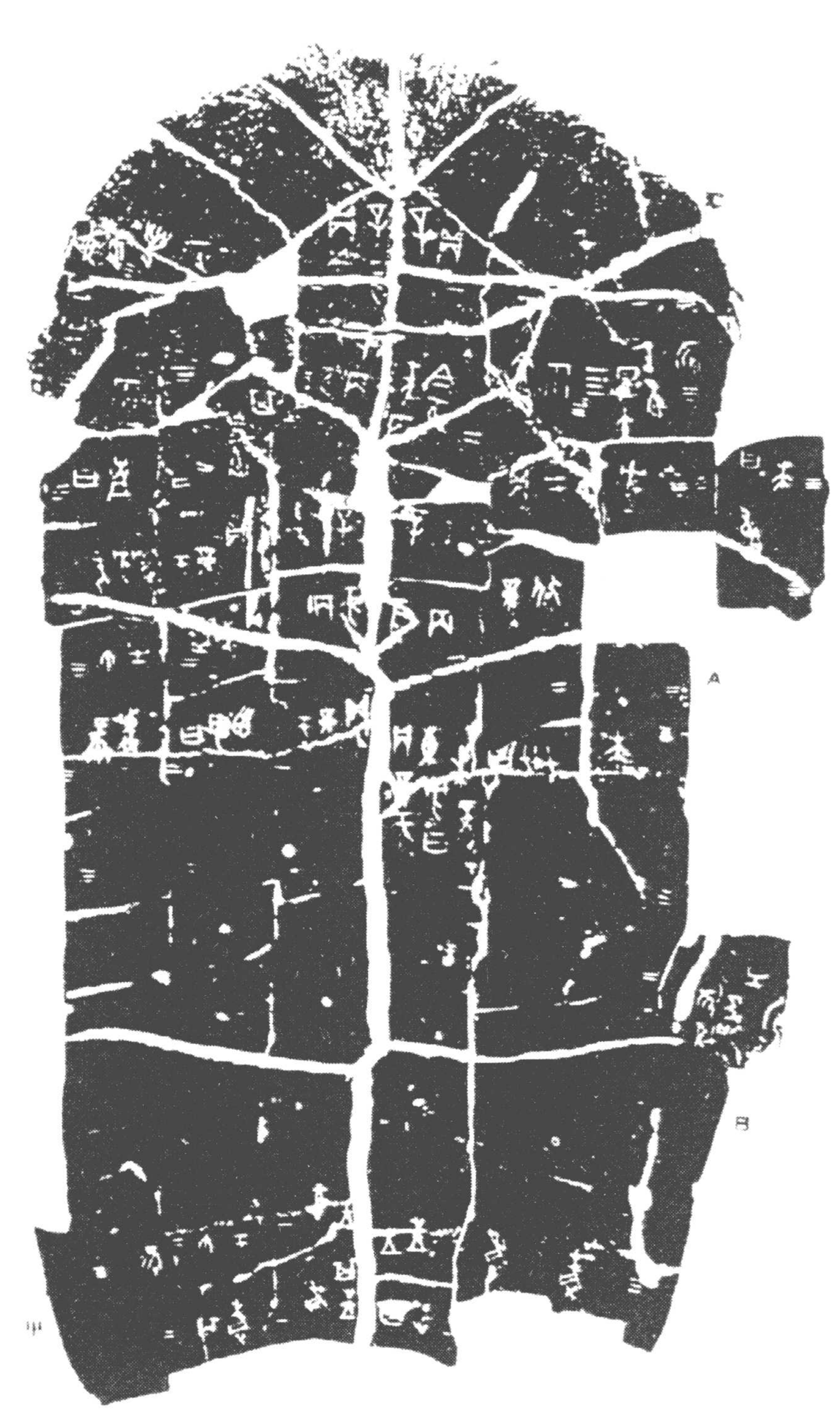
註〔四〕　本編第四九片の人頭骨刻辭



註〔五〕　本編第八七片の人頭骨刻辭



註〔六〕　殷虛文字綴合二六一片

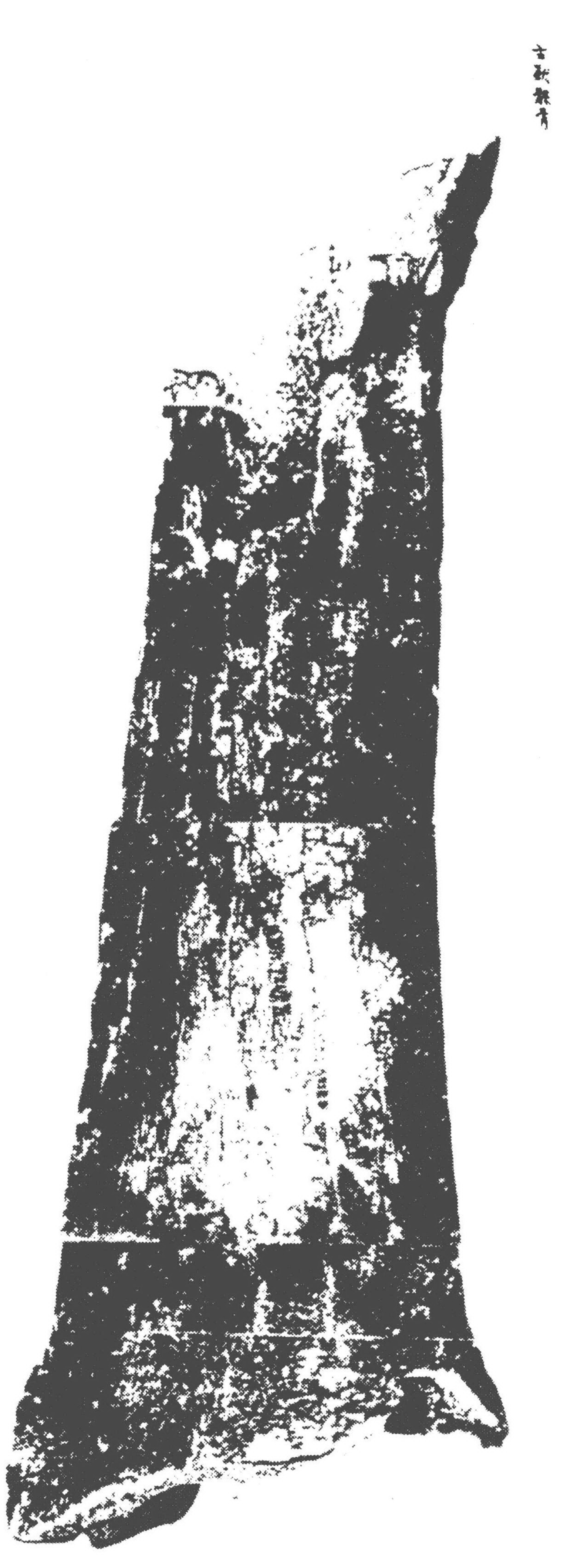


A 4548 13・0・10590　甲4794 13・0・11031
B 5161 13・0・11704　乙4876 13・0・11200
C 掇二・6（京圖藏甲）

註〔七〕『殷契餘論』において仲丁の配偶妣己、祖辛の配偶妣甲と祖丁の配偶妣庚母甲を補充。

註〔八〕『殷契粹編』を編著した時また祖甲の配偶妣戊の外に、また母己のあることを發見した。『殷契粹編』第三四〇片。「母己爲祖甲之配、祖甲之配已知者有妣戊」と。

註〔九〕『殷虛古器物圖錄』中の牛胛骨



註〔十〕作　郭沫若氏の説は『甲骨文字研究』上册の「釋作」にあり、次のようにいう「余意、迺丮形之變、說文云、丮持也、象手有所丮據也、讀若戟、戟音與作同部、秦風無衣、丮以澤戟作三字爲韻、是乍之與丮、形音義俱相若也、作字量侯敦从木、丮象人有所丮據、姞氏敦作𢼄、从攴、此與後世通行作字从人者、同爲形之複矣、作或假爲則、我其巳賓、乍帝降若前・七・三八・一、胡光煒讀巳爲祀、又云、以文誼推之、乍當爲則　文例・二一　按其說是也、其讀作爲則之例、經籍中饒有之、商書皐陶謨、烝民乃粒、萬邦作乂、作與乃對文、與洪範鯀則殛死、禹乃嗣興同例、又詩大雅文王、儀刑文王、萬邦作孚、作孚猶言則服、金文亦有假作爲則之一例、大豐毀云、文王監在上、丕顯王作相、丕緒王作賡、言文王丕顯、武王則儀型之、文王於穆、武王則發皇之也。」と。白川靜博士は金文中よりその用例を引きその字義を考せられて次のようにいう。「彝銘の末文に必らず「作寶尊彝」・「作宗彝」のように、制作のことをいう。次に「作嗣土」・「作嗣工」・「命女作宰」など、官職の任命をいうものが頻見する。また「先王作明井」のように典刑を稱し、「迺作余一人咎」のように作爲の義にも用いる。作邑・作寢など大規模な設營をもいうが、本義は制作のことをいう字である。字はまた木に從い、又に從い、又辵に從い、乍の上下に手を加えた形や、旁に攴を加えた形のものがある。又・攴を加えたものには、陵貯毀「隹巢來殳」・叔夷鐘「女戒戎毀」・驫羌鐘「遂征秦迮齊」など、軍事に關するものが多い。假借ときに師嫠毀のように「師龢父毀」と崩殂の義に用いることがあるのは、作は又や攴を加えて、何らかの造作を加えうる、材質を示すものとしなければならぬ。その形については、文源に「象興構之形」というも、詳しい説明はない。字は木に從う形のものがあり、それはおそらく柞であろう。柞とは除木をいう。詩の周頌載芟に「載芟載柞」、大雅皇矣に「作之屛之」とみえるものである。除木を柞薪という。周禮に柞氏の職があり、「掌攻草木及林麓、凡攻木者、掌其政令」とみえる。柞薪を以て獸の陷阱を蔽い、あるいはこれを阱中に樹てるを柞鄂という。周禮雍氏の掌るところ、疏に「柞鄂者、或以爲豎柞於中、向上鄂鄂然、所以載禽獸、使足不至地、不得躍而出、謂之柞鄂也」というものである。これによれば、乍とは木枝を撓曲して用いるもので、字の初義はおそらくこれを以て垣牢などを設ける意であろう。ゆえに撓曲のために又を加え、また攴を加えることがある。詩の齊風東方未明は小地主の狂態を嗤う詩であるが、末章に「折柳樊圃　狂夫瞿瞿」という。折柳樊圃とは折柳を垣牆とする意で、乍のことである。乍とは小枝を撓曲する象。それよりして器物の製作をいい、宮室の造營をいい、また引伸して明刑を制し、戎毀を興すことをいう。作は乍の繁文であるが、金文にその字形をみない。おそらく又・攴を加えた字形の譌變か、あるいは作爲の義によって人を加えたものであろう。」『說文新義』巻八・四二頁）と。

註〔十一〕冥㚤。卜文は冥㚤に作る。郭沫若氏は㚤を「㚤乃妿省。讀爲嘉。此言帚好有孕、將分娩、卜其凶吉也」（『殷契粹編考釋』一六〇葉上）と釋す。この冥㚤と小臣との關係について白川靜博士は、卜文中よりその用例を引き次のようにいう「戊午……小臣不……㚤、癸……央、甲戌……　乙・二一六八　戊午卜、小臣㚤　十月」戊午卜、口小臣㚤　乙・二四五一　辛丑卜、𡧊貞、小臣冥㚤　南北・師五・二六　のやうに、おそらくは安產を意味するらしい冥㚤（娩嘉）の卜辭が、小臣に對しても見られることである。娩嘉はもとより婦人のことであるから、嫂　粹・一二三七　帚妌　乙・四九六　帚好　乙・七四三　帚妝　乙・一〇二〇　帚鼠　乙・一二四九　帚臽　乙・五四〇五　のやうに婦人の名を示すのが普通であって、單に小臣娩嘉などと稱するのは異例に屬してゐる。それで、この例などから、冥㚤の二字を娩嘉と釋字することに異議をもつ人もあるが、その釋字について幾分問題があるにしても、この字が出生に關するものであることは、まづ疑ひないところである。」（小臣考（上）『立命館文學』一一六號・一〇頁）と。

註〔十二〕井白、卜文は井白に作る。陳夢家氏は井伯を井方の伯とする。（『卜辭綜述』二八八頁）金文の道曹鼎、師虎毀、師毛父毀、豆閉毀、師奎父鼎、走毀、利鼎に井伯の名がある。井伯は周初の康王から末期の夷厲に及んでいる。

註〔十三〕王賓龠　卜文は王𡧊𠕋に作る。郭沫若氏は𠕋を釋していう「由上數項之推證可知龠當爲編管之樂器、其形轉與漢人所稱之簫相類、……字在卜辭乃祭名、當即禴祭之禴」（『甲骨文字研究』釋龢）と「龠」と釋して禴祭とし、各家これに從っている。王賓に龠祭することをいう。王賓については『增訂殷虛書契考釋』註〔十二〕・第一輯九〇頁參見。

註［十四］ 貞方帝 卜文は冃方帝に作る。「貞、方帝」は天神や神話的祖神を祀る祭儀。

註［十五］ 陳伯衡（現代？）未詳。

七七、戰後京津新獲甲骨集序［二］

殷虛甲骨出土、到今五十餘年矣、其文字之記載、皆史實也。而甲骨諸家能以故書雅記稽合甲文以證明古史者、寥寥不過數人、胡君厚宣其一也。廬江劉氏藏一片、所記爲四方風名、君以尚書堯典及山海經諸故書證合之。是其事也。昔王靜安以楚辭山海經證王恒王亥、擧世莫不驚其創獲。及君此文出、學者又莫不驚歎、謂君能繼王君之業也。君所著又有商史論叢諸編、治甲者莫不人手一編矣。顧君不以此自足、念甲骨之爲物、質脆易破、未能久存、不亟搜討、容可散失、於倭寇戰敗請降後、奔走南北、遍搜甲片、御風乘傳、席不暇溫、私家之藏、婉辭以請、市肆所列、重金以求、亦既成寧滬南北兩集印行問世矣。茲復成京津集、將付書坊、公之於世。憶甲骨初出、羅叔言編印殷虛書契前後續編及菁華、其傳布之勤、士類莫不稱之。今君既擅靜安考釋之美、又兼叔言播布之勤、以一人之身、殆欲併兩家之盛業、何其偉也！抑羅氏諸書、編次凌雜、散無友紀、而君則分時代、別門類、條理井然、於學者尤便、此又突過羅君、後來居上者也。余粗治甲學、苦無心得、顧辱君引爲同志、命序君書、因述君盛美、聊志欽慕之忱云爾。

一九五四年二月十一日

長沙楊樹達書於嶽麓山之耐林廎

殷虛甲骨の出土は、今に到るまで五十餘年、其の文字の記載は、皆な史實也。而るに甲骨諸家能く故書雅記を以て甲文を稽合し以て古史を證明する者は、寥寥として數人に過ぎず、胡君厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註［八］・第三輯一三四頁參見）は其の一也。

廬江の劉［善齋］（劉體智・『古史新證』註［八］・第一輯二五八頁參見）氏一片を藏す、記す所は四方風名爲り、君は「尚書」堯典及び「山海經」諸故書を以てこれを證合す。（『甲骨學商史論叢初集』註［二］・二二〇頁、第三輯參見）是れ其の事や、昔王靜安『楚辭』『山海經』を以て王恒・王亥を證し、（『殷虛書契考釋小箋』註［五］・第一輯二一九頁參見）世を擧て其の創獲に驚かざるは莫し。君は此の文を出だすに及んで、學者又驚歎せざるは莫し、君は能く王君の業を繼ぐと謂ふ也。君の著す所は又『［甲骨學］商史論叢』の緖編に有り、甲を治むる者は人手に一編せざる莫し。顧ふに君は此れ自足を以てせず、念ふに甲骨の物爲るは、質は脆くして破れ易し、未だ久しく存する能はず、搜討を亟にせず、容は散佚すべく、倭冦戰いに敗れ降を請ふて後に、南北に奔走して、遍く甲片を搜し、風を御して乘傳［四頭だての驛繼ぎの馬車］し、席溫まる暇あらず、私家の藏は、辭を婉にして以て請ふ、市肆に列するところ、重金もて以て求むるも、亦既に『寧滬』『南北』兩集の印行を成して世に問ふ。茲に復た京津集を成し、將に書坊に付し、之れを世に公にせんとす。憶ふに甲骨初めて出づるとき、羅叔言『殷虛書契續編』及び『菁華』を編印し、其の傳布の勤め、士類之れを稱さざるは莫し。今、君既に靜安の考釋の美を擅にし、又［羅］叔言播布の勤を兼ね、一人の身を以て、殆んど兩家の成業を併さんと欲す、何ぞ其れ偉なるや。抑も羅氏の諸書は、編次凌雜、散じて友紀無し、而るに君は則ち時代を分ち、門類を分ち、條理井然、學者に尤も便なり、此れ又羅［振玉］君を突過し、後來、上に居る者なり。余は粗甲學を治む、苦しく心に得る無し、顧ふに君引く同志爲るを辱す、命せられて君の書に序し、因りて君の盛美を述べ、聊らく欽慕の忱を志して云爾。

一九五四年二月十一日

長沙の楊樹達（『五十年甲骨學論著目』註〔十七〕・第四輯三四八頁參見）嶽麓山の耐林廎にて書す。

註〔一〕　胡厚宣の編纂による。收錄する甲骨は胡氏が抗戰後に京津兩地に於て得た實物及び拓本の甲骨五九六〇片收めたが（『南北所見甲骨錄序要』）本書では五六四二片に編成。本書の體裁は『南北所見甲骨錄』に同じであるが、董作賓氏の掲げる不錄貞人期を武丁初期及び晩期と定めていることが新しい問題提起である、次の「序要」に詳しい。出版は一九五四年三月、群聯出版社。

序要

一、本書為「戰後新獲甲骨集」之一、（戰後新獲甲骨集之二為「戰後甯滬新獲甲骨集」、摹本二冊、收甲骨一一四一片。戰後新獲甲骨集之三為「戰後南北所見甲骨錄」、摹本三冊、收甲骨三二七六片。已先於一九五一年四月及十一月由上海來薰閣書店出版。）一九四九年編成、所錄甲骨、因係一九四五年日本帝國主義投降、抗日戰爭勝利結束後、編者由後方復員、在京津等地蒐集所得、故名「戰後京津新獲甲骨集」。

二、本書所錄甲骨、共五六四二片、約計實物三之一、拓本三之二。其蒐集經過及材料之來源、另詳拙著「我怎麼蒐集的這一批材料」一文（一九四六年四月二十日成都新中國日報專刊）及「五十年甲骨文發現的總結」一書。（一九五一年三月商務印書館出版）

三、本書著錄甲骨、以時代為序、同一時代、再以類分。以及其他一切體例俱仿拙編「戰後新獲甲骨集」之二、三、即「戰後甯滬新獲甲骨集」及「戰後南北所見甲骨錄」兩書。

四、甲骨時代、暫分四期：

自編號一至三一六〇為一期、即盤庚、小辛、小乙、武丁四王之物。其中一至二九〇七、當屬於武丁時。二九〇八至三〇六八、筆畫纖細；三〇六九至三一一四、筆畫偏寬；三一一五至三一六〇、筆畫挺勁、疑皆當屬於武丁以前、或為盤庚、小辛、小乙之物。其筆畫挺勁者、或以為當屬於武乙、文丁時。凡此均未敢必決、尚待究明、姑附於武丁時之後。

自編號三一六一至三八〇二為二期、即祖庚、祖甲時之物。

自編號三八〇三至四九八六為三期、即廩辛、康丁、武乙、文丁四王之物。廩辛、康丁、武乙、文丁時甲骨、根據稱謂、有確可分為廩辛、康丁及武乙、文丁兩期；亦有確

可知其當屬於某一王者；但絕大多數、並無稱謂可據、字體事類、往往類似混同、難以強分。茲為慎重起見、姑列為一期。

自編號四九八七至五六四二為四期、即帝乙、帝辛時之物。

五、甲骨斷代、自王國維王襄開其端、董作賓發其例、時代先後、畧可究明。惟精密分辨則尚待研討。本書約畧序為四期、難免疏舛、改正訂補、俟之將來。

同期甲骨、以類為次。依其性質、分為來源、氣象、農產、祭祀、神明、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等二十四科。

六、本書全部、包括拓本及釋文。茲為甲骨學研究資料之需要、先將拓本出版。釋文考證、俟條件許可、續行編印。

七、甲骨有龜背甲、龜腹甲及左右牛胛骨之不同；拓本有兩片為一甲、或骨之正反面、或三片為一骨之正反及四面者；又本書所錄有與他書或本書之片可以拼合者、均當於釋文中、詳細注出。

八、本書所錄甲骨、間有已見著錄於他書者。因非吾人自所發掘、既先已流傳、則互見重出、即屬難免、而校對比勘、實一最煩瑣之工作、雖經反覆審視、書成後仍發現重者約佔全書二十分之一。擬另製重見著錄表、附於釋文之後。

一、本書は『戰後新獲甲骨集』の一為り、（戰後新獲甲骨集の二は『戰後甯滬新獲甲骨集』為り、摹本二冊、甲骨一一四一片を收む。戰後新獲甲骨集の三は『戰後南北所見甲骨錄』為り、摹本三冊、甲骨三二七六片を收む。已に先づ一九五一年四月より十一月に

及び上海來薰閣書店由り出版す。）一九四九年に編成り、錄する所の甲骨は、因って一九四五年日本帝國主義投降し、抗日戰爭の勝利の結束後、編者後方に復員して由り、京津等の地に在りて蒐集して得る所に係る。故に『戰後京津新獲甲骨集』と名づく。

二、本書に錄する所の甲骨は、五六四二片、約實物の三の一、拓本三の二を計ふ。其の蒐集の經過及び材料の來源は、另に拙著『怎麼蒐集的這一批材料』の一文（一九四六年四月二十日成都新中國日報專刊）及び『五十年甲骨文發現的總結』の一書に詳かなり。（一九五一年三月）商務印書館出版。

三、本書は甲骨を著錄するに、時代を以て序と為し、同一時代は、再び類を以って分つ。以て其の他一切の體例と倶に拙編の『戰後新獲甲骨集』の二、三に仿ふ、即ち『戰後甯滬新獲甲骨集』及び『戰後南北所見甲骨錄』の兩書なり。

四、甲骨の時代は、暫く四期に分つ。

編號一より三一六〇に至るまでを一期と為す、即ち盤庚、小辛、小乙、武丁の四王の物なり。其の中一より二九〇七に至るまで、當に武丁時に屬すべし。二九〇八より三〇六八に至るまで、筆畫は纖細なり；三〇六九より三一一四に至るまで、筆畫は偏寬なり、三一一五より三一六〇に至るまで、筆畫は挺勁なり、疑ふらくは皆な當に武丁以前に屬すべし、或は盤庚・小辛・小乙の物為り。其の筆畫、挺勁なる者は、或は以為く當に武乙・文丁時に屬すべし。凡そ此れ均しく未だ敢えて必ずしも決めず、尚究明を待ち、姑らく武丁時の後に附す。

編號三一六一より三八〇二に至るまでを二期と為す、即ち祖庚・祖甲時の物為り。

編號三八〇三より四九八六に至るまでを三期と為す、即ち廩辛・康丁・武乙・文丁

四王の物為り。廩辛、康丁、武乙、文丁時の甲骨は、稱謂を根據とし、確かに分ちて廩辛、康丁、及び武乙、文丁の兩期と為す可き有り；亦確かに其の當に某一王に屬するを知る可き者有り、但絕大多數は、並に據る可き稱謂無く、字體事類は、往往類似混同して、以て强いて分ち難し。茲に慎重に起見（目的を立てて）を為し、姑らく列して一期と為す。

甲骨斷代は、王國維・王襄（王襄・「簠室殷契類纂」註〔六〕・第一輯一五八頁參見）より其の端を開き、董作賓（董作賓・「殷契書錄」註〔四〕・第一輯三二四頁參見）其の例を發し、時代の先後、略究明す可し。惟精密の分辨は、則ち尚研討を待つ。本書は約略序して四期と為し、疏舛を免ぬがれ難し。改正訂補は、之れを將來に俟つ。

五、同期の甲骨は、類を以て次と為す。其の性質に依り、分つに來源、氣象、農產、祭祀、神明、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等二十四科と為す。

六、本書の全部に、拓本及び釋文を包括す。茲に甲骨學研究資料の需要を為すに、先づ將に拓本の出版をせんとす。釋文考證は、條件の許可を俟ち、續いて編印を行ふ。

七、甲骨に龜背甲、龜腹甲及び左右牛胛骨の同じからざる有り、拓本に兩片一甲を為し、或は三片に一骨の正反及び臼面為す者有り、又本書に錄する所は他書或は本書の片と以て拼合すべき者有り、均しく當に釋文中に、詳細に注出すべし。

八、本書に錄する所の甲骨は、間已に他書に著錄せらるる者有り。因りて吾人自から發掘する所に非ず、既に先に已に流傳し、則ち互に重出を見い、即ち免ぬがれ難きに屬す。而して校對比勘は、實に一つ最煩瑣の工作、反覆審視を經ると雖ども、書成りて後仍ほ發見の重なる者約全書の二十分の一を佔む。擬して另に重見の著錄表を製り、釋文の後に附す。

九、至於本書資料，有比較重要者，述之如左；

若編號一、二（正反面）、六四八、八九九、一二六六之大龜四版，字多辭整，卜兆皆經刻過。其一版背面（二）且有毛筆朱書之「甲橋刻辭」，疑當與前中央研究院一九三六年第十三次發掘殷墟所得一二七坑之甲骨為同時，或即為同坑之物。（此四版前已著錄於拙著「戰後出土的新大龜七版」一文，一九四七年二至四月，上海歷史博物館「文物週刊」第二十二至三十一期。）由此大龜契刻卜兆，及其他甲骨字內之塗朱塗墨與鑲嵌松綠石，知殷代甲骨卜辭，已由單純紀實進入高度藝術之階段。由「甲橋刻辭」，知殷人卜龜，係由南方所入。（見下）由此「甲橋刻辭」書寫鋒芒色澤之美觀，知殷代已有精緻之毛筆及艷麗之顏料，而甲骨卜辭之為先寫後刻，亦可由此與以證明。又有半龜一版，（九一七）及較大之牛胛骨十二片，（四七六、四七七、一二二九、三八一四、三九一六、三九七三、三九七四、四〇二四、四〇二九、四〇三〇、四四二一、四二四五）文字亦多，史料重要。

又若三九二二，係一牛肋骨。殷王卜用甲骨，甲為龜甲，兼用腹背；骨為牛骨，每用肩胛。其用牛肋骨者，據已往所知，僅前中央研究院發掘，獲有一片，收入「殷墟文字甲編」。今合此共有二版，但所刻皆為記事文字，並非卜用之辭。

更重要者，五二八一與五二八二，為兩片人頭刻辭，所記皆殺用戰俘以祭祖之事。（我怎麼蒐集的這一批材料」一文及「五十年甲骨文發現的總結」一書。）于省吾先生昔年曾得牛骨記事文字一片，記戰爭所得勝利品及以俘虜祭祖之事甚詳，（看拙編「戰後平津新獲甲骨集」第二冊，「雙劍誃所藏甲骨文字」第二一二片。一九四六年七月成都齊魯大學國學研究所出版。）但辭乃刻於牛骨，今此則逕於戰獲俘虜之人頭骨上刻之。此與卜辭中之「伐」祭，及殷墟發掘中所見之人殉制度，均可證殷為奴隸社會時期。此種人頭刻辭，曩聞加拿大明義士曾獲有一片，今合此已共有三版。

卜辭曰：「口口口，殼，貞王大令衆人曰：劦田，其受年。十一月。」可證殷代農業，係由奴隸集體生產。此於卜辭，已往凡三見：「殷墟書契前編」七卷三十葉二片，「殷墟書契續編」二卷二八葉五片，及「殷契粹編」八六六片，（簠室殷契徵文歲時五片同）今合本書之五八〇片，即已共有四版。

殷代卜用甲骨，骨為本地所出，甲則南方所入，兩者皆先經過一種祭典而後用之。甲骨中有關於此種來源及祭典之記載，編者嘗名之為「五種記事刻辭」。曩於「殷代卜龜之來源」及「武丁時五種記事刻辭考」兩文，（收入「甲骨學商史論叢」初集第四冊及第三冊，一九四四年三月成都齊魯大學國學研究所出版。）計收「甲橋刻辭」二百七十三例，「甲尾刻辭」三十七例，「背甲刻辭」十三例，「骨臼刻辭」一百七十七例，「骨面刻辭」二十六例，共例五百二十六條。今本書所收，又有「甲橋刻辭」一百三十七例，（二至一〇、一二、一四至一七、一九、二一、二三至二六、二八至三六、三八、四〇、四二至四五、四七、四九至五四、五六、五七、五九至六二、六四至七〇、七二至七六、七八至八〇、八二至八五、八七至九〇、九二至九五、九七至一〇〇、一〇二、一〇四、一〇五、一〇七至一一三、一一五、一一六、一一八、一二〇、一二一、一二三至一二九、一三一、一三二、一三四至一三八、一四〇、一四二、一四四至一五一、一五三、一五五至一六一、一六三至一六五、一六七、一六八、一七〇、一七二至一七四、一七六、一七八）「甲尾刻辭」十五例，（一七九至一九一、一三二六、二三二四）「背甲刻辭」五十八例，（一九三至二〇〇、二〇二、二〇三、二〇五、二〇七至二〇九、二一一、二一三至二一六、二一八、二一九、二二一、二二二、二二四、二二六至二三〇、二三二、二三四、二三五、二三七、二三九至二四四、二四六至二五三、二五五、二五六、二五八、二六〇至二六五、二六七、二六九）「骨臼刻辭」十二例，（二八九至二九八）「骨面刻辭」十四例，（二九九至三〇五、三〇七至三一三）共例二百三十六條。於「五種記事刻辭」之解說，又增加更多之例證。

關於甲骨記事史官簽名之例，編者曩作「卜辭記事文字史官簽名例」一文，（前中央研究院「歷史語言研究所集刊」第十二本，一九四八年一月商務印書館出版。）除「背甲」「甲橋」「骨臼」「骨面」四種刻辭之外，尚有「背甲項端簽名例」十一條，「甲尾正反面簽名例」十一條。今本書所收，又得「甲尾正面簽名例」三條，（四八〇五至四八〇七）「背甲項端簽名例」且至十七條（二七〇至二七八，二八〇至二八七）之多。

甲骨上一完整卜辭，除「敘辭」「命辭」「占辭」「驗辭」之外，亦或記「用辭」。（拙著「甲骨學提綱」一九四七年一月十三日天津大公報或十五日上海大公報「文史週刊」第十三期。）而言「茲用」。「茲」者此也，「用」者施行，謂按照此卜所貞之事而施行也。「茲用」晚期亦作「茲御」，「御」猶「用」也。編者曩作「釋茲用茲御」一文，（前中央研究院「歷史語言研究所集刊」八本四分，一九四〇年商務印書館出版。）曾舉例證不少。今本書所收，除常見之「茲用」「茲御」外，又有稱「吉用」，（四五九二至四五九四、四五九七）「吉茲用」，（四五九九）「大吉茲用」，（四五九五）「大吉不

用」，（四五九四 四五九六）「弘吉不用」，（四五九七）「吉不御」，（四五九八）「从之丝用」（四六〇〇）等十一條，亦皆有力之佐證。

又如一〇三〇與一〇三一文字相同，四八二三與「殷契摭佚續編」二〇一片文字相同，俱為「一事多卜」之例。詳拙著「卜辭同文例」一文。（前中央研究院「歷史語言研究所集刊」第九本，一九四七年九月商務印書館出版。）

殷代四方之風，各有專名。甲骨中有記四方風名者，見劉晦之先生藏骨。有卜祭四方風者，見「殷虛文字乙編」四五四八片。編者曾作「甲骨文四方風名考證」一文，（「責善半月刊」二卷十九期，一九四一年十二月成都齊魯大學國學研究所出版。又「甲骨學商史論叢」初集第二冊。）並備錄原骨摹本。今本書五二〇係劉藏牛骨之拓本，購自北京慶雲堂者。（看拙著「我怎麼蒐集的這一批材料」，及「五十年甲骨文發現的總結」。）又一二五片與「殷虛書契前編」七卷九葉二片大字塗朱之牛骨，亦可以相接，皆使殘文復員，成為極重要之史料。

由一五五八言「中商」，知殷人已有東南西北中五方之觀念。（看拙著「論殷代五方觀念及中國稱謂之起源」，「甲骨學商史論叢」初集第二冊。）由九六九言「帚田」，五三八、五三九、五四〇、一九九四言「帚姘受年」，一九七九言「帚好受年」，二〇〇〇言「帚姘黍」等，知武丁多妻，諸帚或有食邑封地。由一九八二、二〇五三言「帚好冥，不妨，隹女」，知殷人已有重男輕女之風習。（拙著「殷代婚姻家族宗法生育制度考」，「甲骨學商史論叢」初集第一冊。又「卜辭中所見之殷代農業」，「甲骨學商史論叢」二集第一冊。）由一二六七言「臣周」，一二二〇言「方人其臣商」，知周族及其他方國，確曾向殷人稱臣。由四一三八至四一四一言「用執」，知殷人每以戰獲俘虜祭祀祖先。由四〇三四言「羌二方白其用于且丁父甲」，知殷人祭祖，或以所獲敵人之方白酋長為牲。由四〇〇一言「爯玉于祖乙」，知殷人祭祖，亦或用玉。

由二二〇言「其氐龜」，二八八言「弗其氐龜」，知殷人卜用之龜，係从外來。（看拙著「殷代卜龜之來源」及「武丁時五種記事刻辭考」兩文。）由一五九六、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二言某固某固，知殷人貞卜，其視兆而問之固，亦不僅是殷王之所為。又龜腹甲反面尾端緣中縫之處，每見一辭曰「可」或「不可」，曾見「殷虛文字甲編」三三二四片及三三二六片。今本書二二四七、二二四八、二二四九又凡三見之。又所見「骨臼刻辭」，常例皆直行自上而下，今二九一則自上而下橫行，為前此未見之例。

又匚乙、匚丙、匚丁三祖合稱「三匚」，見本書三九六九及三九七一。雍己又稱「曰己」，見本書三二五一及三九九七。高祖王亥之「亥」亦作「雉」，曾見「殷契佚存」八八八片，亦見本書三九二六。又殷人畜馬有廄，曾見「殷契粹編」一五五一片，「戰後寧滬新獲甲骨集」一卷五二一片及五二二片。亦見本書四八三一。

又七〇三言「作冊」，四八四九、四八五四言「冊至」，一三八〇至一三八六、一二四一、一二四二言「爯冊」，四一九言「爵示」，八八六言「㞢丰」，一〇三二言「用丰」，一〇〇二言「氏車」，九七七、二三四六言「立人三百」，一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇八言「作邑」，一六〇九言「作宗」，四三四五言「東內」，四六一四言「東寠西寠」，六七四言「大甲賓咸」，一一七一言「夢婐隹囚」，一二九一言「小羌」，二二四五言「羌叶朕事」，四七六八言「孫」，四一四二、四一四三言「鄭」，五八一、五八二言「眈」，五六一一、五六一二、五六一三、五六一五言「隹王六祀」「隹王十祀」「隹王十祀又四」及「……祀」，皆極重要，有資考史。

他如叹、風、雨、雪、亘、星、易日、降莫、多雨、延雨、明雨、日雨、昃雨、夕雨、夜雨、霝雨、奉雨、侑雨、舞雨、烄雨、寧雨、隹岳它雨、寧雨于方、丝雨隹若、丝雨隹囚、丝雨氐𢻱；求年求禾、受年受禾、受黍年、受稻年、今歲受年、來𣏟受年、我受年、商受年、大受年、雀受年、奠受年、𠱾受年。東南西北受年、東土南土西土北土受年、登黍告秋；高祖、高祖夒、高祖王亥、高祖乙、夒、𦢞、河、岳、王亥、兇、兕、季、土、蚰、虫、龍、龍甲、學戊、盡戊、咸、伊、伊尹、黃尹、孟、無、上甲、自上甲、自上甲至于多后、匚乙、匚丙、匚丁、示壬、示癸、大乙、自大乙、自大乙大丁大甲、大乙至于大甲、唐、大丁、卜丙、大甲、小甲、大庚、呂己、中己、大戊、中丁、卜壬、戔甲、祖乙、中宗祖乙、中宗、下乙、祖辛、虎甲、祖丁、后祖丁、四祖丁、小丁、南庚、羌甲、祖庚、小辛、父辛、小乙、父乙、父戊、兄丁、父乙、父庚、二父、父甲、祖甲、帝甲、父丁、康丁、康祖丁、兄丙、兄庚、兄壬、兄辛、高妣己、妣庚、妣壬、妣癸、妣辛、母丙、母庚、母辛、母己、母癸、公、多介兄、丁示、黃示、帝示、大示、二示、三示、五示、六示、九示、十示、廿示又三；奉、御、㞢、又、告、祭、巳、祀、兄、祝、即、既、鄉、帝、登、𢀛、氐、征、𤎩、枫、叙、烄、沈、埋、卯、伐、用、𠀠、歲、則、且、𢻱、取、彳、酒、豐、鬯、肖、福、畬、棠、𡆥、進、𩱦、鬻、𩱏、𤯍、來、日、夕、莫、杏、衣、力、𠭰、祏、劦、彡、㽙、𢀛、王賓、夕福、枫福、戠福、彡日、彡夕、劦日、又伐、又彳、又戠、又匚、新鬯、新𢀛、十卣、十卣又五、𤉲兕、牛、羊、犬、豕、羊、罕、芮、豚、宰、牢、牡、牝、大牢、小牢、白犬、黃犬、白牛、幽牛、白豚、㞢𤰔、㞢𠬝、㞢妾、二𠬝、㞢一伃、又羌、彳羌、伐羌、用羌、戠羌、三羌、用來羌、五羌、六羌、十羌、卅羌、五十羌、百羌、二人、三人、五人、十人、十人五、百犬百豕卯百牛、犬百卯十宰、犬百羊百卯十牛、五羌卯五牛、十羌卯十牛、卯三羌一牛、羌三人卯宰㞢一牛、其祀多先祖、奉于王帝；受又、降囚、帝降囚、霝降囚、希王、它余、河希、王亥希、羌甲希余、父甲希生、妣甲希、祖辛它余、祖丁它王、父甲它王、父乙它王、祖乙它、羌甲它丁示它、娶子它我、多妣它王、娥它、兩它小子、母丙它帝；有來艱、亡來艱、有來艱自方、有來艱自南、有來艱自西、方來、方出、方大出、方亦出、告方、正方、取方、追方、𢦏方、方董、方歸、吾方出、吾方出、隹我囚、吾方至于象、呼見吾、伐吾方、𠀠吾方、𤔲吾、吾方還、循土方、伐土方、伐下危、伐巴方、伐𢀛、羌方、𠭰方、𢑚方、旨方、夷方、𢦏方、周、蜀、戉、𣄰、𢦔、雀、冎、𦍌、丰、兕、𡆥、𠭰、𣌭、𠷎；王从望乘伐、王从沚𢦏伐、王从易白、爯冊王人、令般取龍、𢦚叔羌龍、王登人𦎫小羌、王令三族追舌方、令𦎫又𢦏伐、令眾伐、三千人伐、五千人伐、今夕自亡𤰔、方其正、今日執、㞢囚艮亡囚執；田、獸、𢆶、射、𢀛、𦊓、𦊓、焚、从、㝉、𢀛、𠭰、田𤔲、田𢏚、田宮、田雞、田衣、田𢼸、田盂、田潢、田滋、田麥、田𦵷、田召、田𢓍、田𢖍、田函、田𦕅、田𦔻、田叀、田囚、田𠭰、田盛、田𡆥、涉滴至于𢀛、㞢雞大告麑王其从、隻虎、隻豕、隻兕、隻鹿、隻麋、隻麑、隻𡊄、隻狼一、隻狼七、隻狼十、隻百六十、隻百又八十七；𩵋、魚；王出、王步、王往、王𡆥、王在、王至、王𢓊、王來、王入；三卜、自卜、其用三卜；作大邑、立中；門亞、室、宣；王夢妻、多鬼夢；有疾、疾齒、疾耳、疾有希、疾隹蠱、告疾于祖乙、告疾于祖辛、小疾勿告于祖乙、凡囚有疾𪗺；死、馬死、百人死、葬；𢼸𢿨、受又又、帝受我又、吉、不吉、若、不若、囚、有囚、亡囚、今夕亡囚、今夕亡囚寧、旬亡囚、旬

㞢希、隹囚、㞢希、亡希、隹它、㞢巛、亡巛、亡巛利、戋、弗戋、㞢尤、不隹孽、殸、㞢殸、其畀、不畀、㞢囚、齒戲、𢦏囚、其每、隹洹乍兹邑囚；王帚、帚好、帚好冥、帚好娩、帚姘、帚姘有子、帚姘冥、帚鼠、帚汝、帚姓、帚董有子、帚妹、帚嫖、帚共、帚嫖、帚芥、帚如、帚良、中帚、婡、姘、冥、幼、冥幼、冥不幼；中子、子汰、子弜、子效、子央、子藥、子宛、子虜、子肝、子彈、子漁、子春、子高、小王、小王臣；王族、族馬、我多臣、小臣、多射、侯專、竹侯、𠂤侯、男、白冓、𠂤般、雀、𠦪、𢓊；𠣞、卓其衆衆；令、呼；叶王事、弗其叶；不其尋；㞢工、亡辰止、㞢舌、亡古、為賓；百日八、百日、四旬、出八日；七十、四十；曰貞、余曰、呼𠦪曰之類、不能盡擧、亦皆為研究商史之重要史料。

至於辭之稀見，字之僅有，以及其他種種問題，更難一一備加闡述，均俟於釋文考證部分詳之。

十、本書出版後，前出「戰後平津新獲甲骨集」書名取消，所錄「元嘉造像室所藏甲骨文字」「頌齋所藏甲骨文字」及「雙劍誃所藏甲骨文字」，將編入另外部份行之。

十一、一切敬請讀者專家指教為幸！

一九五三年十月　　胡厚宣

九、本書の資料に至って、比較して重要有る者は、これを述ぶれば左の如し。

編號一、二（正の反面）、六四八、八九九、一二六六の大龜四版の若きは、字多く辭整ひ、ト兆皆な刻過を經る。其の一版の背面に（二）且つ毛筆朱書の「甲橋刻辭」有り、疑ふらくは當に前中央研究院一九三六年第十三次殷墟發掘に得る所の一二七坑

の甲骨と同時為り、或は即ち同坑の物為るべし。（此の四版は前に已に拙著『戰後出土的新大龜七版』の一文に著錄す、一九四七年二「月」より四月に至る、上海歷史博物館『文物週刊』第二十二より三十一期に至る。）此の大龜契刻のト兆、及び其の他甲骨字內の塗朱塗墨と鑲嵌松綠石に由り、殷代の甲骨ト辭は、已に單純に實を紀す「事實を記す」に由り高度藝術の階段に進入するを知る。「甲橋刻辭」に由り、殷人のト龜は、南方由り入る所に係るを知る。（下に見ゆ）此の「甲橋刻辭」の、書寫鋒芒「書き寫した筆のほこさき」色澤の美觀に由り、殷代は已に精緻の毛筆及び艷麗の顏料にして、甲骨ト辭の先寫・後刻を為すこと有るを知り、亦此れに由りて以て證明に與るべし。又牛龜の一版及び（九一七）較大の牛胛骨十二片有り。（四七六、四七七、一二二九、三八一四、三九一六、三九七三、三九七四、四〇二四、四〇二九、四〇三〇、四四二一、四二四五）文字も亦多く、史料重要なり。

又三九二二の若きは、一牛の肋骨に係る。殷王トに甲骨を用ふ、甲は龜甲為り、腹背を兼用す；骨は牛骨為り、毎に肩胛を用ふ。其の牛の肋骨を用ひる者は、已往知る所に據れば、僅かに前中央研究院發掘のみ、獲て一片有り（『殷虛文字甲編』[三]に收入す。今此れを合すれば共に二版有り、）但刻する所は皆な記事文字為り、並にト用の辭に非ず。

更に重要なる者は、五二八一と五二八二、兩片、人頭刻辭為り、記す所皆な殺す戰俘を用て祭祖の事を以てす。（拙著『我怎麼蒐集的這一批材料』の一文及び『五十年甲骨文發現的總結』の一書を看よ[三]。）于省吾（『殷契佚存』註[三五]・第二輯二三〇頁參見）先生昔年曾って牛骨記事文字の一片を得、戰爭に得る所の勝利品及び以て俘虜祭祖の事を記すこと甚だ詳かなり。（拙著『戰後平津新獲甲骨集』[三]第二冊、『雙劍誃所藏甲骨文字』第二一二片。一九四六年七月、成都齊魯大學國學研究所出版。）但辭は乃ち牛骨に刻す、今、此れ則ち戰獲俘虜の人頭骨上に遝りこれを刻む。此れト辭中の「伐」祭（『古文聲系』註[八三]・第二輯・四一〇頁參見）と、殷墟發掘中に見る所の人殉制度に及び、均しく殷は奴隸社會の時期為るを證す可し。此の種の人頭刻辭は、曩に加拿大の明義士（『殷契書錄』註[三]・第一輯三二二頁參見）曾って獲て一片有りと聞く、（『殷契拾掇二編』註[三]・本輯二三頁參見）今、此れを合して已に共に三版有り。

ト辭に曰く：「口口口、殻、貞王大令衆人曰：劦田、其受年。十一月。」殷代の農業は、係るに奴隸集體生產に由るを證す可し。此のト辭に、已往、凡そ三見、『殷虛書契前編』の七卷三葉二片、『殷虛書契續編』の二卷二八葉五片、及び『殷契粹編』の八六六片は、（『簠室殷契徵文歲時五片に同じ。』）今、本書の五八〇片と合すれば、即ち已に共に四版有り。

殷代のトは甲骨を用ふ、骨は本地に出る所為り、甲は則ち南方より入れる所、兩者は皆な先に一種の祭典を經過して後これを用ふ。甲骨中に此の種の來源及び祭典の記載に關して、編者曾ってこれを名づけて「五種記事刻辭」と為す有り。（『甲骨學商史論叢初集』註[二]・第三輯二二一頁參見）曩に「殷代ト龜之來源」及び「武丁時五種記事刻辭考」の兩文に於て、（『甲骨學商史論叢初集』第四冊及び第三冊に收入す、一九四四年三月成都齊魯大學國學研究所出版。）討ふに「甲橋刻辭」二百七十三例、「甲尾刻辭」三十七例、「背甲刻辭」十三例、「骨臼刻辭」一百七十七例、「骨面刻辭」二十六例を收め、共に五百二十六條を例す。今、本書に收むる所、又「甲橋刻辭」

一百三十七例有り、（二より一〇に至る、一二、一四より一七に至る、一九、二一、二三より二六に至る、二八より三六に至る、三八、四〇、四二より四五に至る、四七、四九より五四に至る、五六、五七、五九より六二に至る、六四より七〇に至る、七二より七六に至る、七八より八〇に至る、八二より八五に至る、八七より九〇に至る、九二より九五に至る、九七より一〇〇に至る、一〇二、一〇四、一〇五、一〇七より一一三に至る、一一五、一一六、一一八、一二〇、一二一、一二三より一二九に至る、一三一、一三二、一三四より一三八に至る、一四〇、一四二、一四四より一五一に至る、一五三、一五五より一六一に至る、一六三より一六五に至る、一六七、一六八、一七〇、一七二より一七四に至る、一七六、一七八）「甲尾刻辭」十五例、（一七九より一九一に至る、一三二六、二三二四）「背甲刻辭」五十八例、（一九三より二〇〇に至る、二〇二、二〇三、二〇五、二〇七より二〇九に至る、二一一、二一三より二一六に至る、二一八、二一九、二二一、二二二、二二四、二二六より二三〇に至る、二三二、二三四、二三五、二三七、二三九より二四四に至る、二四六より二五三に至る、二五五、二五六、二五八、二六〇より二六五に至る、二六七、二六九）「骨臼刻辭」十二例、（二八九より二九八に至る）「骨面刻辭」十四例、（二九九より三〇五に至る、三〇七より三一三に至る）共に二百三十六條を例す。「五種記事刻辭」の解說に於て、又更に多人の例證を增加す。

甲骨記事史官簽名の例に關して、編者曩に『卜辭記事文字史官簽名例』[三]の一文を作り、（前中央研究院『歷史語言研究所集刊』第十二本、一九四八年一月商務印書館出版。）「背甲」「甲橋」「骨臼」「骨面」の四種刻辭の外を除き、尚「背甲頂端簽名

例」十一條、「甲尾正反面簽名例」十二條有り。今、本書收むる所に、又「甲尾正面簽名例」三條、（四八〇五より四八〇七に至る）「背甲項端簽名例」は且に十七條（二七〇より二七八に至る、二八〇より二八七に至る）の多きに至るべし。

甲骨上一完整の卜辭は、「敍辭」「命辭」「占辭」「驗辭」を除くの外にも、亦或は「用辭」を記す。（拙著『甲骨學提綱』[三]一九四七年一月十三日天津大公報、或は十五日上海大公報『文史週刊』第十三期）而して「丝用」と言ふ。「丝」は此也、「用」は施行、按ずるに此の卜、貞ふ所の事に照して謂へば施行也。「丝用」の晩期も亦「丝御」に作る。「御」は猶ほ「用」のごとき也。編者、曩に『釋丝用丝御』（『雙劍誃殷契駢枝』註[九]・第三輯一三四頁參見）の一文を作る。（前中央研究院『歷史語言研究所集刊』八本四分、一九四〇年商務印書館出版）。曾つて例證少なからざるを擧ぐ。今、本書に收むる所、常見の「丝用」「丝御」を除く外に、又「吉用」（四五九二より四五九四に至る、四五九七）「吉丝用」、（四五九九）「大吉丝用」、（四五九五）「大吉不用」、（四五九四、四五九六）「弘吉不用」、（四五九七）「吉不御」、（四五九八）「从之丝用」（四六〇〇）等十一條を稱する有り。亦皆な有力の佐證なり。

又一〇三〇と一〇三一の文字と相い同じ、四八二三と『殷契摭佚續編』[四]二〇一片との文字相い同じ、俱に「一事多卜」の例為るが如し。拙著『卜辭同文例』[五]の一文に詳しい。（前中央研究院『歷史語言研究所集刊』第九本、一九四七年九月商務印書館出版。）

殷代四方の風は、各〻專名有り。甲骨中に四方風名を記す者有り、劉晦之先生の藏

骨に見ゆ。四方の風を卜祭する者有り、『殷虛文字乙編』の四五八四片に見ゆ。編者、曩に『甲骨文四方風名考證』（『甲骨學商史論叢初集』註[一]・第三輯二〇頁參見）の一文を作る。（『責善半月刊』二卷十九期、一九四一年十二月、成都齊魯大學國學研究所出版。又『甲骨學商史論叢』初集第二冊。）並に原骨の摹本を備錄す。今、本書五二〇は劉「鐵雲」藏する牛骨の[六]拓本に係り、北京の粹雅堂より購ふ。四二八片は適〻『殷虛文字乙編』四五四八片と相い接す、北京の慶雲堂より購ふに係る者。（拙著『我怎麼蒐集的這一批材料』、及び『五十年甲骨文發現的總結』を看よ）[七]又一二五片と「殷虛書契前編」七卷九葉二片の大字塗朱の牛骨とも、亦以て相い接す可し、皆な殘文復員して、成りて極重要の史料と爲さしむ。

一五五八に言ふ「中商」に由り、殷人に已に東西南北中五方の觀念有るを知る。（拙著『論殷代五方觀念及中國稱謂之起源』『甲骨學商史論叢』初集第二冊を看よ。）（『甲骨學商史論叢初集』註[一]・第三輯二〇頁參見）。九六九に言ふ「帚田」、五三八、五三九、五四〇、一九九四に言ふ「帚姘受年」、一九七九に言ふ「帚好受年」、二〇〇〇に言ふ「帚姘黍」等に由り、武丁の多妻、諸帚或は食邑の封地有るを知る。一九八二、二〇五三に言ふ「帚好冥不妨」、「隹女」に由り、殷人に已に男を重んじ女を輕んずるの風習有るを知る。（拙著『殷代婚姻家族宗法生育制度考』『甲骨學商史論叢』初集第一冊。又『卜辭中所見之殷代農業』、『甲骨學商史論叢』二集第一冊。）（『甲骨學商史論叢初集』註[一]・第三輯二〇四頁と『甲骨學商史論叢二集』註[二]・第三輯二七七頁參見）一二六七に言ふ「臣商」、一二二〇に言ふ「方人其臣商」に由り、周族及び其の他の方國は、確かに曾つて殷人に向って臣と稱するを知る。四一

三八より四一四一に至るまで言ふ「用執」（『戰後寧滬新獲甲骨集』註[十九]・第四輯二五七頁參見）と、殷人每に戰獲俘虜を以て祖先を祭祀するを知る。四〇三四に言ふ「羌二方白其用于且丁父甲」に由り、殷人の祭祖、或は以て敵人の方白尊長を獲て牲と爲す所を知る。四〇〇一に言ふ「甾玉于祖乙」に由り、殷人の祭祖にも、亦或は玉を用ひるを知る。

二二〇に言ふ「其氏龜」、二八八に言ふ「弗其氏龜」に由り、殷人卜用の龜、外來より係るを知る。（拙著『殷代卜龜之來源』及び『武丁時五種記事刻辭考』の兩文を看よ。）（『甲骨學商史論叢初集』註[一]・第三輯二二四頁と二二一頁參見）一五九六、一五九九、一六〇〇、一六〇一、一六〇二に言ふ某囚某囚に由り、殷人の貞卜、其の兆を視てこれを固に問ふも、亦僅かに是れ殷王の爲す所ならざるを知る。又龜腹甲反面の尾端は中縫の處に緣し、一辭見る每に曰く「可」或は「不可」と、曾つて『殷虛文字甲編』三三二四片及び三三二六片[八]に見ゆ。今、本書二二四七、二二四八、二二四九に又凡そこれを三見す。又所見の「骨臼刻辭」は、常例皆な直行、上より下、今二九一は則ち上よりして下へ橫行す、前に此れ未だ見ざるの例爲り。

又匕乙、匕丙、匕丁の三祖合して「三匕」（『戰後寧滬新獲甲骨集』註[十二]・第四輯二五六頁參見）と稱し、本書三九六九及び三九七一に見ゆ。雍己は又「日己」（『戰後寧滬新獲甲骨集』註[十三]・第四輯二五六頁參見）と稱す、本書三二五一及び三九九七に見ゆ。高祖王亥の「亥」も亦「䧹」に作る、曾つて『殷契佚存』の八八八[十]片に見ゆるも、亦本書三九二六に見ゆ。又殷人に馬を畜ふに寓有り、（『戰後寧滬新獲甲骨集』註[二十二]・第四輯二六一頁參見）曾つて『殷契粹編』の一五五一片、『戰後寧

滬新獲甲骨集』の一卷五二一片及び五二二片に見ゆ。亦本書四八三一に見ゆ。

又七〇三に言ふ「作冊」（『殷契佚存』註[十七]・第二輯二二〇頁參見）、四八四九、四八五四に言ふ「冊至」[十三]、一三八〇より一三八六に至る、一二四一、一二四二に言ふ「𢀛冊」（『金璋所藏殷契遺文』註[八]・第三輯二五五頁參見）四一一九に言ふ「爵示」[十二]、八八六に言ふ「㞢羊」[十四]、一〇三二に言ふ「用羊」[十五]、一〇〇二に言ふ「氏車」[十六]、九七七、二三四六に言ふ「立人三百」[十七]、一六〇三、一六〇四、一六〇五、一六〇八に言ふ「作邑」[十八]、一六〇九に言ふ「作宗」[十九]、四三四五に言ふ「東宀」[二十]、四六一四に言ふ「東宴西宴」[二十一]、六七四に言ふ「大甲賓咸」[二十二]、一一七一に言ふ「夢娥隹𡆥」[二十三]、一二九一に言ふ「小羌」[二十四]、二二四五に言ふ「羌叶朕事」[二十五]、四七六八に言ふ「孫」[二十六]、四一四二、四一四三に言ふ「鄭」[二十七]、五八一、五八二に言ふ「眈」[二十八]、五六一一、五六一二、五六一三、五六一五に言ふ「隹王六祀」「隹王十祀」、「隹王十祀又四」[二十九]及び「……祀」は、皆な重要を極め、考史に資す有り。

他は𡨦、風、雨、雪、電、星、易日、降䕭、多雨、延雨、明雨、日雨、昃雨、夕雨、夜雨、霝雨、莽雨、侑雨、舞雨、烄雨、寧雨、芒岳它雨、寧雨于方、丝雨隹若、丝雨隹囚、丝雨氏𡙕；求年求禾、受年受禾、受黍年、受稻年、今歲受年、來𣪠受年、我受年、商受年、犬受年、雀受年、奠受年、吅受年。東南西北受年、東土南土西土北土受年、登黍告秋；高祖、高祖夒、高祖王亥、高祖乙、夒、夒戉、河、岳、王亥、兇、𢦏、季、土、蚰、虫、龍、龍甲、學戊、盡戊、咸、伊、伊尹、黃尹、玉、缶、上甲、自上甲、自上甲至于多后、匚乙、匚丙、匚丁、示壬、示癸、大乙、自大乙、自大乙大丁大甲、大乙至于大甲、唐、大丁、卜丙、大甲、小甲、大庚、呂己、中己、大戊、中丁、卜壬、戔甲、祖乙、中宗祖乙、中宗、下乙、祖辛、虎甲、祖丁、后祖丁、四祖丁、小

丁、南庚、羌甲、祖庚、小辛、父辛、小乙、父乙、父戊、兄丁、父己、父庚、二父、父甲、祖甲、帝甲、父丁、康丁、康祖丁、兄丙、兄庚、兄壬、兄辛、高妣乙、妣庚、妣壬、妣癸、妣辛、母丙、母庚、母辛、母己、母癸、公、多介兄、丁示、黄示、希示、大示、二示、三示、五示、六示、九示、十示、廿示又三；桒、御、㞢、又、告、祭、巳、祀、兄、祝、即、飤、鄉、帝、登、覃、氏、征、𡧊、椇、叙、烄、沈、埋、卯、伐、用、冊、歲、則、且、㪔、取、彳、酒、豊、𧆣、𦙶、福、龠、寮、叀、淮、㴱、𣪕、𩰫、𩱛、米、日、夕、莫、杏、衣、力、𠬝、衫、劦、彡、㫚、丕、王賓、夕福、𠑹福、戠福、彡日、彡夕、劦日、又伐、又彳、又戠、又匚、新𧆣、新丕、十卣、十卣、又五、𡰥兕、牛、羊、犬、豕、羍、𦎫、豚、宰、牢、牡、牝、大牢、小牢、白犬、黄犬、白牛、幽牛、白豚、㞢𦎫、㞢𠬝、㞢妾、二𠬝、㞢十仔、又羌、彳羌、伐羌、用羌、歲羌、三羌、用來羌、五羌、六羌、十羌、卅羌、五十羌、百羌、二人、三人、五人、十人、十人五、百犬百豕卯百牛、大百卯十牢、大百羊百卯十牛、五羌卯五牛、十羌卯十牛、卯三羌一牛、羌三人卯牢㞢一牛、其祀多先祖、桒于王帝；𢦔又、降囚、帝降囚、𤉲降囚、希王、它余、河希、王亥希我、羌甲希余、父甲希王、妣甲希、祖辛它余、祖丁它王、父甲它王、父乙它王、祖乙它、羌甲它丁示它、娶子它我、多妣它王、𡚬它、𣎴它小子、毋丙它帝；有來艱、亡來艱、有來艱自方、有來艱自西、方來、方出、方大出、方亦出、告方、正方、取方、追方、牵方、方堇、方歸、舌方出、舌方出隹我囚、舌方至于象、呼見舌、伐舌方、冊舌方、𢦏舌、舌方還、循土方、伐土方、伐下危、伐巴方、伐𢀛、羌方、𢦏方、叀方、𠂤方、𡕒方、𢆶方、周、蜀、戉、𢀛、猷、雈、𠬢、灉、木、兕、𠧵、𠭰、𠑹、𠮛、王从望乘伐、王从沚𢦏伐、王从易白、𠦪冊王人、令般

取龍、朿叔羌龍、王登人𦥑小羌、王令三族追舌方、令𢀛又眾伐、令眾伐、三千人伐、五千人伐、今夕𠂤亡㞢、方其正、今日執、㞢囚及亡囚執；田、獸、𢀛、射、㝅、罝、𦏓、焚、从、𢆶、𡧊、𦫵、田㪔、田𤰔、田宮、田鷄、田衣、田𦒸、田盂、田潢、田淮、田麥、田蒿、田召、田斿、田𣏌、田函、田𡏿、田𦤎、田𦼛、田囚、田𨌬、田盎、田𡆥、涉滴至于𤼷、在鷄大告麓王其从、隻虎、隻豕、隻兕、隻鹿、隻麋、隻麑、隻𦍒、隻狼一、隻狼七、隻狼十、隻百六十、隻百又八十七；𠬝、魚；王出、王步、王往、王𠂤、王在、王至、王𢓊、王來、王入；三卜、自卜、其用三卜；作大邑立中；門、亞、室、宣；王夢妻、多鬼夢；有疾、疾齒、疾耳、疾有希、疾隹蠱、告疾于祖乙、告疾于祖辛、小疾勿告于祖乙、凡囚有疾齲；死、馬死、百人死、葬；𢼸𢀛、受又又、帝受我又、吉、不吉、若、不若、囚、有囚、今夕亡囚、今夕亡囚寧、旬亡囚、旬㞢希、隹囚、㞢希、亡希、隹它、㞢巛、亡巛、亡巛利、戋、弗戋、㞢尤、亡尤、不隹孽、酘、㞢酘、其㫷、不㫷、㞢匃、齒𢽍、𢦔囚、其每、隹洹乍𢆶邑囚；王帚、帚好、帚好冥、帚好㝅、帚妌、帚妌有子、帚好冥、帚鼠、帚汝、帚姓、帚堇有子、帚妹、帚媒、帚共、帚𡢗、帚井、帚如、帚𠬝、中帚、𡜎、𡚸、冥、妫、冥妫、冥不妫；中子、子汏、子𤔲、子效、子央、子𦣻、子宮、子𢆶、子肸、子𤕌、子漁、子春、子𦎫、小王、小王臣；王族、族馬、我多臣、小臣、多射、侯專、竹侯、冒侯、男、白𢀛、𠂤般、雀、朿、𠂤、𠬝、𢀛其丧眾；令、呼；叶王事、弗其叶；不其𡆥；㞢工、亡𡆥、㞢舌、亡古、為賓；百日八、百日、四旬、㞢八日；七十、四十；曰貞、余日、呼朿曰の如き類は、盡く擧げる能はず、亦皆な商史を研究するの重要史料為り。

辭の稀見、字の僅有、以て其の他種種の問題に及ぶに至りて、更に一一備さに闡述

を加へ難し、均しく釋文考證部分に從ちてこれを詳にす。

十、本書出版の後、前出の『戰後平津新獲甲骨集』の書名は取り消し、錄する所の『元嘉造像室所藏甲骨文字』『頌齋所藏甲骨文字』及び『雙劍誃所藏甲骨文字』は、將に另外の部份に編入してこれを行はんとす。

十一、一切敬んで讀者專家の指教を請はんことを幸と為す。

一九五三年十月　胡厚宣

註〔二〕『殷虛文字甲編』第三六二九片、習契の肋骨である。他に陳夢家氏の『殷虛卜辭綜述』の圖版拾伍に載せる鄭州二里崗出土のもの一片と善四五五一の一片がある。

註〔三〕『殷契拾掇二編』序、本輯一七頁參見。

註〔四〕『戰後平津新獲甲骨集』一九四六年（民國三十五年）五月・七月。成都齊魯大學國學研究所專刊の一、二冊。未見。

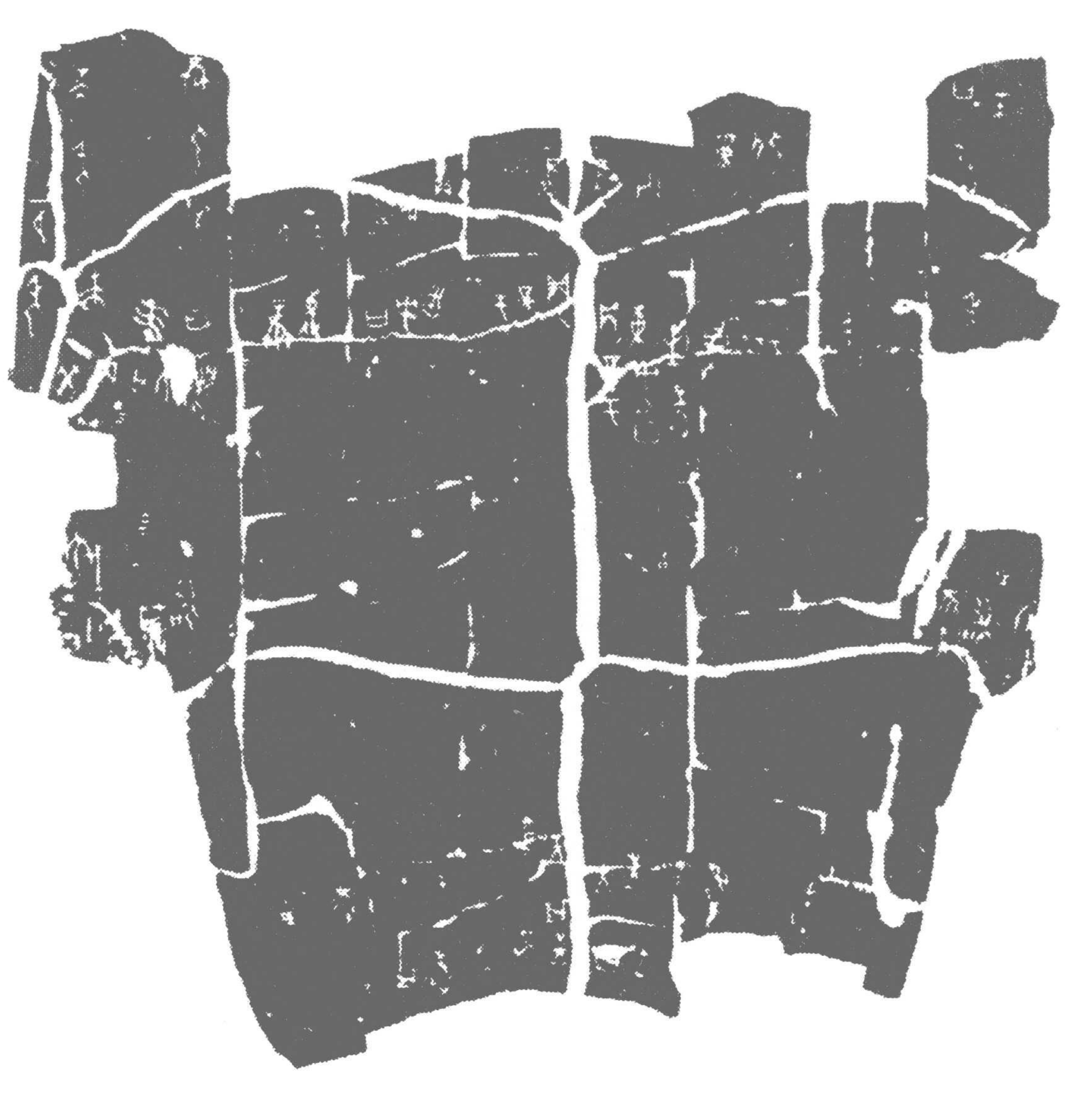
註〔五〕「卜辭記事文字史官簽名例」中央研究院歷史語言研究所集刊、第十二本、一九四年一月刊。胡厚宣氏は甲骨文中に貞卜の史官を除いて、つねに卜辭の中にその名を記すものの外、記事文字の末、或は龜甲のはしに、常に史の簽名が記されている（特に）その例を一、背甲刻辭簽名例、二、甲橋刻辭簽名例、三、骨臼刻辭簽名例、四、骨面刻辭簽名例、五、背甲頂端簽名例、六、甲尾反面簽名例、七、

甲尾正面簽名例の七つに分け論述している。

註〔六〕『甲骨學提綱』一九四七年（民國三十六年）一月十五日刊の上海大公報文史週刊十三期、また天津版の大公報文史週刊十三期。未見。

註〔七〕『卜辭同文例』中央研究院歷史語言研究所集刊、第九本、一九四七年（民國三十六年）刊。胡厚宣撰。卜辭の一事多卜の例は、異った甲骨上にトうものがあり、則ち同一卜辭は常に一甲骨ごとに刻み、所謂卜辭同文の例である。卜辭中この例多く、諸家に閑却化されていた。胡氏は徵引されうる限りの甲骨によって、二版あるいは二版以上の甲骨で、一辭同文の例より、二辭同文例、三辭同文例、四辭同文例、五辭同文例、六辭同文例、八辭同文例、多辭同文例、辭同序同例、同文異史例、同文反正例より凡そ十一種、九十八例をあげている。

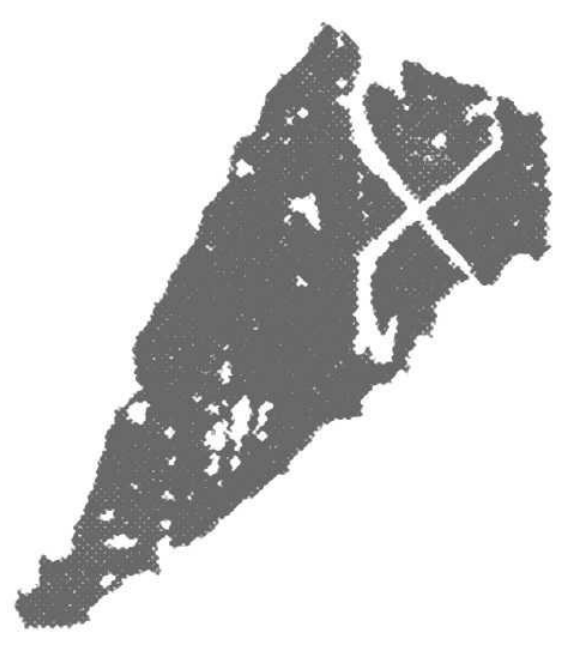
註〔八〕殷虛文字乙編四五四八を中心にして綴合したものが『殷虛文字丙編』中輯(一)の圖版貳零壹にあり、それは四五四八十四七九四十四八七六十四八八三十五一六一十六五三三の綴合である。その圖は次の如くであるが、上部は京津四二八片である。



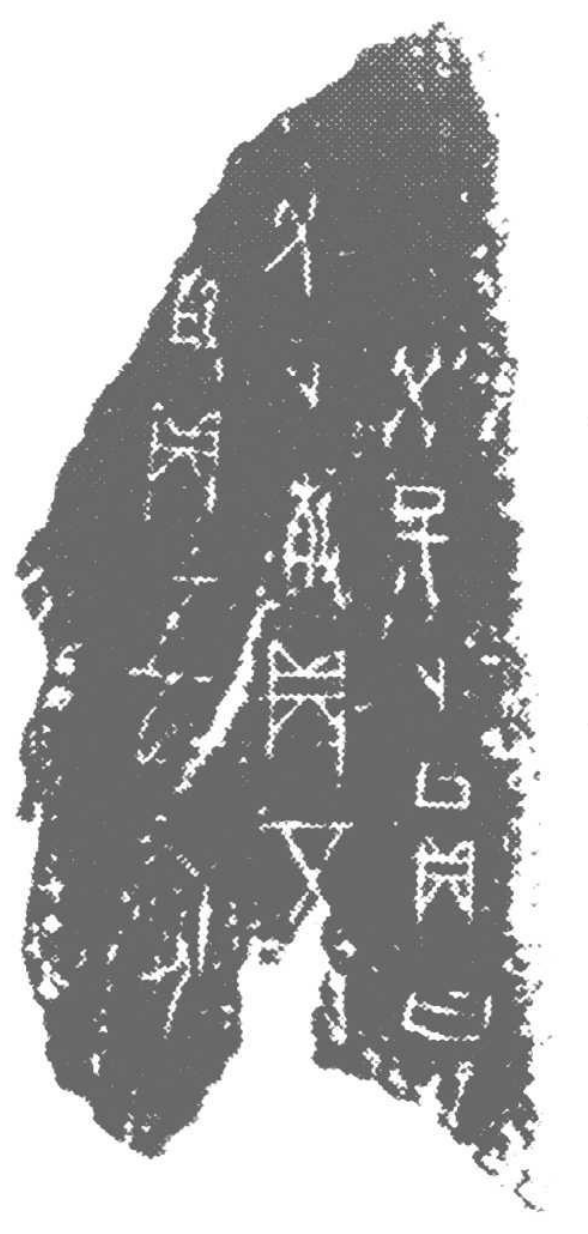
4548+4794+4876+4883+5161+6533

13.0.10590+13.0.11031+13.0.11200+13.0.11212+13.0.11704+
13.0.13775 13.0.13777 13.0.13778 13.0.13780

註[九] 京津一二五と殷虚書契前編七巻九葉二片の綴合。この両片の綴合はどのように綴合されるのか不明であるのでこゝに両片を録しておくにとどめる。



京津125



前編7.9.2

註[十] 『殷虚文字甲編』三三二四の卜文は「可 不」。三三二六は「可」とある。この刻辭は龜版の背面で甲尾の近い處、中縫の両旁に分かれて不、可の二字が刻まれている。

註[十一] 『殷契佚存』八八八片。卜片は「辛巳卜貞、太𡦹田既于丮」とある。雖は𡦹に作る。

註[十二] 册至。京津にみえるものは册至のみで前後の文は缺けているが、粹編二六五には「至祖丁口王受又。册至、王受又」、京大一八八三に「册至、王受祐」がある。貝塚茂樹氏は「册して某祖に至るという目的格の祖名を略した文として理解せねばならない」とされる。(『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』)册至については『古文聲系』註「七十四」・第二輯四〇六頁參見。

註[十三] 辭示。卜文は「貞𧦝于」とある。

註[十四] 㞢羊。卜文は「㞢羊」に作る。

註[十五] 用羊。卜文は「用羊」に作る

註[十六] 氏車。卜文は「氏車」に作る。

註[十七] 立人三百。卜文は「丙辰卜米昍立人三百」二三四六に作る。

註[十八] 作邑。卜文は「口戌卜𣪘貞、我乍邑」一六〇三に作る。

註[十九] 作宗。卜文は「甲申卜乃御乍宗」に作る。

註[二十] 東宗。卜文は「于東宗」に作る。

註[二十一] 東寑西寑。卜文は「于東寑」、辛丑卜于西寑」に作る。

註[二十二] 大甲賓咸。卜文は「貞大甲不賓于咸」に作る。

註[二十三] 夢娥隹囚。卜文は「貞口狀娥不隹囚」に作る。

註[二十四] 小羌。卜文は「……其𢦏人……小羌」に作る。

註[二十五] 羌叶朕事。卜文は「壬戌……王令……由朕事三月」に作る。

註[二十六] 孫。卜文は「𢀸」に作る。字の上部缺く。

註[二十七] 鄙。卜文は「啚」に作る。

註[二十八] 畯。卜文は「田夋」に作る。

註[二十九] 圖錄に見える代表的な卜文の語彙を胡氏獨自の分類により來源、氣象、農產、祭祀、神明、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜項の二十四項の順に紹介している。

七八、積微居甲文説〔一〕

甲骨文者、殷商之文字也。欲識其字、必以説文篆籀彝器銘文為途徑求之、否則無當也。甲文中已盛行同音通假之法、識其字矣、未必遽通其義也、則通讀為切要、而古音韻之學尚焉、此治甲骨者必備之初歩知識也。甲骨文所記者、殷商之史實也。欲明其事、必以古書傳記所記殷周史實稽合其同異、始能有所發明、否則亦無當也。大抵甲骨之學、除廣覽甲片、多誦甲文、得其條理而外、舍是二術、蓋不能有得也。就形以識其字、循音以通其讀、然後稽合經傳以明史實、庶幾乎近之矣。試觀王襄葉玉森之所為、用力非不勤也、而所得殊尠者、未嘗以二述為其基也。余以此説求之五十年來甲骨學諸家、得二人焉、一曰王君靜安、一曰郭君鼎堂。王君功力絕深、毎下一義、泰山不移。讀其書、怡然理順、渙然氷釋、使人之意也消、恒言所謂爐火純青者、王君近之矣。郭君神識敏鋭、博學多通、能於無字縫中讀書、據甲文未見武乙奭妣戊、因定紂遷朝歌、妣戊之卒當在紂遷以後、其最著之例也。兩家業績至豐、其所以致此者無他、廣讀甲文、由文字聲韻以通其文義、據故書以證合史實而已。余治甲骨之學後於兩君、幸獲讀兩君之書而有所啓發。王君著女字説、郭君證奭母同用、余因得悟大乙母妣丙之母、義為女子而非後世父母之母。郭君謂犬中告麋之犬為官名、余因得據左傳定為周禮之迹人。自餘如毋桼之為簡狄、上甲湄之為上甲微、皆以文字為階梯明史實者也。甲文有𠕋宗新宗、見祀者有至、有高、有蔑、有先等、余以竹書紀年所記殷王名説之。方國有方、有叡方、有旨方、余以國語之大彭、詩侵阮徂共之徂、尚書之西伯勘黎説之。殷人祭先、重直系而輕旁系、余以尚書高宗肜日之典祀無豐于昵説之。此余稽合故書説史之事也。雖余所得渺小、不敢望王郭兩君、然余治此學所由之經途固康莊大道、此差可自信不疑、

亦可與天下人以共見者也。

一九五三年四月二十九日、楊樹達記於嶽麓山齋。

甲骨文は、殷商の文字なり。其の字を識らんと欲すれば、必ず説文の篆籀彝器の銘文を以て途徑と為し之れを求めよ。否ざれば則ち當る無き也。甲文中已に盛んに同音通假（音の同じもの近いもの轉じたものを任意轉じて同意義に考へること。）の法を行ふ、其の字を識るも、未だ必ずしも遽かに其の義に通ぜざる也。則ち通讀は切要為り、而して古への音韻の學は尚し。此れ甲骨を治むる者は必備の初歩の知識也。甲骨文記す所の者は、殷商の史實也。其の事を明らかにせんと欲せば、必ず古書傳記記す所の殷周史實を以て其の同異を稽合すれば、始めて能く發明する所有り、否ざれば則ち亦當る無きなり。大抵甲骨の學は、甲片を廣覽し、多く甲文を誦し、其の條理を得て徐くの外は、この二術を合つれば、蓋し得ること有る能はざる也。形に就いて以て其の字を識り、音に循って以て其の讀に通ず、然る後經傳を稽合して以て史實を明にせば、これに近づくに庶幾。試みに王襄（王襄・『簠室殷契類纂』註〔八〕・第一輯一五八頁參見）・葉玉森（葉玉森・『殷契鉤沈』註〔三〕・第一輯一八二頁參見）の為せし所を觀れば、力を用ゆること勤めざるに非る也。而も得る所殊に尠きは、未だ嘗って二術を以て其の基を為さざれば也。余此の説を以てこれを五十年來の甲骨學諸家に求むるに、二人を得たり。一に曰く王君靜安（王國維・『増訂殷虛書契考釋』註〔二十三〕・第一輯一〇一頁參見）、一に曰く郭君鼎堂（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）なり。王君の功力絶だ深く、一義を下す毎に、泰山移らず。其の書を讀めば、怡然理順ひ、渙然として氷釋し、人の意をして消さしむ、恒言所謂爐火

純青なる者は、王君これに近し。郭君は神識敏鋭、博學多通、能く字無きの縫の中に書を讀む、甲文に據れば未だ武乙奭妣戊を見ず、因りて紂朝歌に遷ると定む、妣戊の卒は當に紂遷以後に在るべし〔二〕。其れ最も著しきの例なり。兩家の業績は至って豐なり、其の此れを致す所以の者は他無し、廣く甲文を讀み、文字聲韻に由りて以て其の文義に通ず、故書に據りて以て史實を證合するのみ。余、甲骨の學を治むること兩君に後る、幸に兩君の書を獲て讀み啓發する所有り。王君女字説〔三〕を著す、郭君奭母同じく用ひらるを證す〔四〕。余、因りて大乙母は妣丙の母なるを悟るを得、義は女子と為す後世の父母の母に非ず〔五〕。郭君、謂へらく犬中告麋の犬〔六〕は官名為りと、余、因りて『左傳』に據りて定めて『周禮』の迹人〔七〕と為すを得たり。自餘の母桼の簡狄為る〔八〕、上甲湄の上甲微為る〔九〕が如きは、皆な文字を以て階梯して史實を明かにする者為り。甲文に𠕋宗〔十〕新宗有り〔十一〕、祀見らるる者に至有り、高有り、蔑有り、先等有り〔十二〕、余『竹書紀年』に記す所の殷王名を以てこれを説く。方國に方あり、叡方あり、旨方あり〔十三〕、余『國語』の大彭、詩の阮、徂、共侵するの徂、『尚書』の西伯勘黎を以てこれを説く。殷人先を祭る〔十四〕、直系を重じて旁系を輕んず、余、尚書高宗肜日の典祀「昵に豐する無し」を以てこれを説く。此れ余、故書に稽合して史を説くの事なり。余得る所渺小なり、敢へて王・郭兩君に望まずと雖も、然れども余此の學を治むるに由る所の經途は固より康莊の大道なり、此れ差自から信じて疑はざる可きも、亦天下の人と以て共に見る可き者なり。

一九五三年四月二十九日、楊樹達（楊樹達・『五十年甲骨學論著目』註〔十七〕・第四輯三四八頁參見）嶽麓山齋に記す。

註〔一〕 文字學上すぐれた業績を世に送った楊樹達の甲骨文の字説を輯録したものである。その内容目次について紹介すると上巻は説字の文凡そ三十三篇。これを四類に分け第一類は識字の屬凡そ十一篇（宂、鉌、[illegible]、[illegible]、[illegible]、彔、冎、[illegible]、迖、[illegible]、[illegible]）、第二類は説義の屬、凡そ十三篇（[illegible]、星、易、于、曰、亦、𢓊、追逐、[illegible]鳳、禦、犬、省、从大）。第三類は説讀の屬凡そ六篇、（猷、登、戈戠、相、大、校舟）。第四類は説形の屬は凡そ三篇（囗匚匸巨、農、[illegible]）から成る。下巻は考史の文凡そ二十篇、これを五類に分ける。第一類は人名の屬、凡そ七篇（新宗、羔、𠕋宗、竹書紀年所見殷王名疏證、河、毋來、[illegible]）。第二類は國名の屬、凡そ二篇（滴、沚）第四類は祭祀の屬、凡そ二篇（尚書典祀無豐于昵疏證、肜日）第五類は雜考の屬、凡そ四篇（甲文中之四方神名與風名、讀胡厚宣殷人疾病考、甲文中之先置賓辭、釋乍邑令𨖷）上下巻あわせて五十三篇を收める。巻末に『卜辭瑣記』を錄し、四十九項に分ち釋字正誤の文を錄す。出版は一九五四年五月、中國科學院出版。

註〔二〕 郭沫若氏の「未だ武乙奭妣戊を見ず、因りて紂朝歌に遷ると定む、妣戊の卒は當に紂遷以後に在るべし」の説は「武乙之配為妣戊見諸戊辰彝。卜辭中未見妣戊此事至關重要、蓋妣戊於帝乙徙朝歌以前猶存也。武乙在位三十五年、文丁在位十三年帝乙在位三十七年（《諸王年代詳王國維「紀年疏證」》）卜辭有帝乙二十年以後、妣戊有存世之可能。此事足證帝乙末年確遷朝歌而戊辰彝及殷辛二十年之器也。」『卜辭通纂攷釋』世系七四ウ－七五オに據る。

註〔三〕　女字說　王國維撰　觀堂集林所收。これは彝器銘にある周の女字、蘇冶妊鼎の「蘇冶妊作虢改魚母賸鼎」の改は、蘇國の姓、魚母は其の字。某母は男子の某父というごときものとし周代制度の一端とする。

註〔四〕　郭沫若氏の「奭母同じく用ひらるを證す」の說は「此字有與母字通用之例，如祖丁奭妣己，有一例言祖丁母妣己，大乙奭妣丙，一例言大乙母妣丙。說文林部𣝗（無注），从林奭，奭或說規模字，从大卌，卌亦聲。然以金文𣝗字言，奭當作奭，不从大卌，此與卜辭本字之作奭者形同，是奭古有用為規模字者，雖不必即是模字，其音必近於模。」『卜辭通纂考釋』世系の貳貳頁に據る。

註〔五〕　積微居甲文說卷上、釋奭

註〔六〕　郭沫若氏の「大中告𧊒の大は官名為り」の說は「『大中』蓋謂大人之官名中者、周禮秋官有大人職」殷契粹編考釋第九三五片による。

註〔七〕　積微居甲文說卷上、釋犬。

註〔八〕　母𣓁の簡狄と為し。楊樹達氏は卜文「侑于母𣓁」の𣓁を朿と釋していう「然則母朿當為何人乎？余疑其為簡狄也。史記殷本紀云：『殷契，母曰簡狄，有娀氏之女，為帝嚳次妃。三人行浴，見玄鳥墮其卵，簡狄取呑之，因孕，生契。』

簡狄字乃作朿者，說文十篇上犬部狄字从犬，从亦省聲，而二篇下辵部迹字从亦聲，或从責聲作蹟，又或从朿聲作速，責字亦从朿聲，然則亦朿二聲古本相通，故甲文作朿而傳記作亦聲之狄也。簡狄單稱朿，猶經傳記殷先祖之相土，甲文止稱土也。簡狄為殷祖帝嚳之妃而契之母，其見祀，宜也。以其為契之母，故稱母朿也」積微居甲文說卷下と。

註〔九〕　上甲湄の上甲徽と為す。楊樹達氏は卜文「貞御王自上甲[illegible]，大示，十二月」。の[illegible]を湄と釋していう「余謂上甲湄即上甲徽也。徽與眉古音同，二字古多通作。儀禮少牢饋食禮云：『眉壽萬年』。鄭注云：『古文眉為徽』。莊公二十八年左氏春秋經云：『築郿』。公穀二家經皆作築徽』。是其證也。書契前編卷參廿貳之參云：『甲申卜，穷貞，王湄大宗。』按此辭文特簡略，細審之，湄大示與前辭文同，湄亦上甲徽也。特省上甲不言耳。其卜日以甲申，亦可證也。」積微居甲文說卷下と。

註〔十〕　𠬞宗。楊樹達氏は卜文の「甲寅，且乙召𠬞宗」の𠬞宗を釋していう「按此辭與且丁召新宗（見佚存壹參）文例恰同。余往者考釋彼辭，謂且丁召者，行劦日之祭於且丁，猶尚書言高祖肜日，為行肜日之祭於高宗也。新宗者，新與新同，新為且丁之名，新宗即且丁之廟也。且丁召新宗，即於且丁之廟行劦日之祭也。以彼例此，知此辭之𠬞宗，𠬞亦當為且乙之名。然古本竹書紀年（御覽卷捌拾參引）云：『祖乙滕即位，是為中宗，居庇。』則殷先王之祖乙名滕，不名𠬞。攷說文十一

篇上水部滕字从水朕聲，而八篇下舟部朕字下不記其形，說文亦無𠬞字。甲文朕字屢見，字作[illegible]，見甲骨文編捌之拾參，左从舟，與小篆同，右从𠬞與說文朕字右旁从火作灷者異，而其字與𠬞宗之𠬞同，然則𠬞殆即祖乙之名，與紀年記名滕者文異而實同也。」積微居甲文說卷下と𠬞を祖乙の名とし、紀年の祖乙滕の滕は說文に滕が水に从ひ朕聲であることから、甲文の朕が[illegible]に書かれていることによって、朕の𠬞と𠬞宗の𠬞が同じであるから祖乙の名とするのである。

註〔十二〕　新宗。楊樹達氏は卜文「且丁召劦，新宗。」の新宗を釋していう「凡卜辭言某宗者，義猶春秋之言煬宮武宮，皆指先祖之宗廟為言。如云：「于羔宗酒，又雨」（甲編柒柒玖）羔，余釋為殷先祖之帝嚳，羔宗者，帝嚳之廟也。又如云：『癸卯卜，賓貞，井方于唐宗，彘。』（後編上卷壹捌葉伍版）唐宗者，成湯之廟也。他如丁宗，中丁宗，且辛宗，且丁宗之語，亦屢見於卜辭，然則新乃殷先祖之名，不得以新舊之新釋之也。尋古書傳記未見言殷先祖有名新者，惟今本竹書紀年載祖丁名新。按今本竹書固出後來之綴輯，非是眞書，第以唐宋人所引古本竹書紀年之文校之，大都相合者多，非盡由於臆撰。今以卜辭相檢核，辭云且丁召者，召與劦同，劦為祭名，且丁劦與尚書篇名高宗肜日辭例正同。彼為行肜日之祭於高宗，則此謂行劦日之祭於祖丁也。祖丁之名曰新，新與新音同，然則新宗者，與羔宗唐宗之稱句例相同，正謂祖丁之廟，新宗之稱，猶他辭之稱祖丁宗，行祖丁劦日之祭於祖丁之廟，尤事理之宜也。」積微居甲文說卷下と新宗は殷の先王の名とし、今本竹書紀年に見える「祖丁名新」であり、甲文の新宗は祖丁の廟をいうもの

ものであるとする。

註〔十三〕　祀らる者に至有り、高有り、蔑有り、先等有り。これは『積微居甲文說』卷下の「竹書紀年所見殷王名疏證」に、竹書紀年に見える殷王名十八名を疏證した。先づ至について楊氏の說を紹介する。卜文「冊至」、「又有雨」ほか數片を擧ていう「按以上諸辭之至，皆謂大甲也。冊冊皆讀為𣍝。說文云：『𣍝，告也。从曰，从冊，冊亦聲。』甲文字或作𠕁，从口與从曰同。鐵雲藏龜壹柒陸貳版云：『子雀𣍝兄丁』。文例同。按今本紀年出自後人之綴輯，人多疑之，然其書記且丁名新，而卜辭有『且丁召新宗』之文，新即新也。又記陽甲名和，三年西征丹山戎，與山海經大荒北經郭璞注引竹書云「和甲西征得一丹山」之文相合。知其書雖出自後人，要為有本，非杜撰無稽者可比矣。」と大甲にあてる。卜文の冊至については本輯『戰後京津新獲甲骨集』註〔十二〕五七頁參見。高については卜文「乙卯，卜，貞，𠦪禾于高，尞九牛」ほか數片を引きいう「太平御覽八十三引古本紀年云『小甲高即位，居亳。』今本紀年云：『小甲名高』」として高は小甲とする。蔑については卜文「貞㞢于蔑」を引いて「按甲文未見宓字，而蔑字屢見，確為殷人所事之神名，而不知其人為誰。然蔑與宓音近，甲文之蔑殆即紀年所記大戊名之宓矣。」と大戊とする。先については卜文「貞其于西宗[illegible]示，王卟曰：弘吉」を引いていう「釋者或釋西為東西之西，余以羔宗唐宗美宗新宗文例推之，知彼說非是。古音西與先同，西宗即先宗，謂廩辛之廟也。文選四子講德論云：『毛嬙西施』，西或作先。李注云：『先施西施一也。』匡謬正俗卷八云：

西有先奇』並其證也。」と西宗を馮辛と解している。

註〔十三〕 方國に方あり、𢧵方あり、旨方あり。楊樹達氏は方について卜辭にいう「方其大出」の方は一至強の國族であり、後漢書東夷傳の方夷、國語鄭語の大彭、尚書牧誓の彭人という。積微居甲文說 巻下。𢧵方については聲類によってこれを求めると、詩大雅皇矣の徂である。皇矣の徂は毛鄭は說を異にして毛は徂を訓じて往とし、鄭箋は「阮也、徂也、共也、三國犯周、而文王伐之、密須之人乃敢距其義矣、違正道、是不直也。」として國名とする。楊氏は甲文により詩經を勘校して鄭說をとる。旨方については卜文「乙酉卜、旨方來、告于父丁」はか數片をあげていう「旨方為殷之敵國、其事甚明、然經傳未見有旨方之稱、余疑其為尚書西伯戡黎之黎也」と。

七九 耐林廎甲文說自序〔三〕

此編收集余說甲骨之文字凡六篇、本積微居甲文說中之文字也。初余於一九五二年三月取積微居甲文說送中國科學院請審查出版、不知何故、審查人擱置一年不報、余無已、通書陶孟和先生詢之、遂由院別請一人審查、久之得復、從原稿七十篇中選定十篇、謂可刊行。余意卷中頗多會心之作、可存者決不止十篇、例如竹書紀年所見殷王名疏證一文、乃余前後費時數年、辛勤采獲、在甲文中證驗明確、毫無可疑者、亦竟在屏棄之列、以是余頗憤憤、心不能平。繼思審查人不知誰氏、度亦治學之人、宜不至故與余立異、特學力未到、不能認識耳。因此余不復與之辨論、而以書達科學院長郭鼎堂先生請其審定。旋得復、為余選定文字五十餘篇、即近日科學出版之積微居甲文說是也。此六篇為郭先生汰去十餘篇之少半、余意以為可存者、以荊山之和、一再刖足、經郭先生審定、屈已大伸、不欲復有言也。頃者上海羣聯出版社向余徵稿、余因取此六篇名曰耐林廎甲文說付之。耐林廎者、數年前夢中得句有曰霜枝耐晚林者、余喜其語吉、因取以自名其室者也。慮讀者疑篇牒甚少、何以別行、因記其始末云尔。

一九五四年六月二十七日耐林翁楊樹達書於嶽麓山、時年七十。

此の編は余、甲骨を說くの文字凡そ六篇を收集す、本の『積微居甲文說』中の文字也。初め余一九五二年三月に『積微居甲文說』を取め中國科學院に送りて出版を審査せられんことを請ふ、何の故か知らざるも、審査の人は擱置すること一年報ぜず。余已む無く、陶孟和〔三〕先生に通書してこれを詢る、遂に院 別に一人の審査を請ひ、これを久しうして復

を得たるに由り、原稿七十篇中從り十篇を選定し、刊行す可しと謂ふ。余意ふに卷中頗る會心の作多く、存す可き者決して十篇に止まらず、例へば「竹書紀年所見殷王名疏證」（『積微居甲文說』註〔十二〕・本輯六七頁參見）の一文の如きは、乃ち余前後時を費やすること數年、辛勤采獲し、甲文中に在りて證驗明確、毫も疑ふ可き無き者、亦竟に屏棄の列に在り、是を以て余は頗る憤憤として、心平かなる能はず。繼いで思ふに審査人は誰氏なるか知らざるも、度るに亦學を治むの人ならん。宜しく故さらに余と異を立つるに至らざるべし、特だ學力未だ到らずして、認識する能はざるのみ。此れに因りて余復たこれと辨論せず、而して書を以て科學院長の郭鼎堂（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）先生に達し其の審定を請ふ。旋ち復を得、余の為に文字五十餘篇を選定す、即ち近日科學院出版の『積微居甲文說』は是れ也。此の六篇は郭先生十餘篇を汰去するの少半為り、余意ふに以て存す可きと為す者は、荊山の和を以て、一再刖足し、郭先生の審定を經て、已の大伸に屈して、復た言有るを欲せざる也。頃者、上海羣聯出版社余に向ひて稿を徵す。余因りて此の六篇を取りて名づけて『耐林廎甲文說』と曰ひこれに付す。耐林廎とは、數年前夢中に句を得て「霜枝晩林に耐う」と曰ふ者有り、余其の語の吉を喜び、因りて取りて以て自から其の室に名くる者也。讀者篇牒甚だ少きに、何ぞ以て別行せしかを疑はんことを慮んばかり。因りて其の始末を記して云爾。

一九五四年六月二十七日、耐林翁楊樹達嶽麓山に書す、時に年七十。

註〔三〕 本書は楊樹達氏の字說と論文を集めたものである。目次の内容を紹介すると一、釋多介父（同版の帝名、あるいは祭りによって多介且戊が盤庚であることを證

す）二、說羗甲爽匕庚之見祀 三、再說羗甲爽匕庚之見祀（羌甲の配妣を論ず、既に郭沫若に說がある。）四、甲骨文中開礦、五、開礦文字後記（四は圣田について論じたもので圣は掘鑿、田は音獷にして今の礦字にあたり、采礦のことをトしたものとする。五は四を申說したもの。）六、說殷先公先王與其妣日名之不同（王と妣の干名が一致しないことを論ず）、七、釋萅（今春の春を「唐虞曰載」の載とする。）の七篇を錄す。出版は一九五四年、羣聯出版社。ほかに『卜辭求義』を錄す。

註〔三〕

陶孟和（一八八七ー？）名は履恭、字を以て通用する。河北天津の人。日本に留學し東京高等師範學校卒業後、英國のロンドン大學に學び經濟學士。歸國して國立北京高等師範學校教授、北京大學教務長、上海商務印書館編輯、北京大學政治系教授、中華文化教育基金委員會北京調查所長等を歷任。また第二回太平洋問題調查會に中國側代表となった。

八〇、卜辭求義〔三〕

余生平喜讀高郵王氏書、故於義詁之學最爲留意。治文字之學、以形課義、亦以義課形、務令形義二者脗合無閒而後已。治金文、初據字以求義、繼復因義以定字。余於古文字之研究重視義訓如此。殷虛文字古矣、然既是文字、未有不表義者也。余十餘年來治此頗勤、往讀甲文諸家之書、遇有說義善者、則手錄之、心有所觸、自覺其可存者、亦附記焉。久之不覺盈帙。適羣聯出版社以書稿爲請、遂以付之。時賢善說、固當不止於此、恨余無暇補錄耳。

一九五四年九月十三日楊樹達記於嶽麓山之耐林廎。

余、生平高郵の王氏（王念孫・『增訂殷虛書契考釋』註〔二十九〕・第一輯一〇七頁參見）の書を讀むを喜ぶ。故に義詁の學に於て最も留意を爲す。文字を治むるの學は、形を以て義を課すも、亦義を以て形を課す。形義二者をして脗合閒無からしむるを務めて後ち已む。金文を治むるには、初め字に據りて以て義を求め、繼いで復た義に據りて以て字を定む。余古文字の研究に於て義訓を重視すること此くの如し。殷虛文字は古し。然れども既に是れ文字なり、未だ義を表わさざる者有らざる也。余十餘年來此れを治むること頗る勤む、往（おりおり）甲文諸家の書を讀む、義を說いて善き者有るに遇へば、則ち手づからこれを錄す。心觸るる所有りて、自から其の存す可しと覺ゆる者も、亦附記す。これを久しくして帙に盈つることと覺えず。適〻羣聯出版社書稿を以て請ふことを爲す、遂に以てこれに付す。時賢の善き說は、固より當に此れに止まらざるべし。恨むらくは余補錄に暇なきのみ。

一九五四年九月十三日。楊樹達嶽麓山の耐林廎に記す。

註〔二〕

楊樹達の書で卜辭研究書三六種より字說の見るべきもの二一八字を模、鐸、唐、歌、月、寒、侯、屋、鐿、幽、覺、冬、豪、咍、德、登、微、沒、痕、屑、眞、支、錫、靑、合、覃、帖、添の二八部に分類して各家の說を紹介し、まゝ自說を付記している。本書には別に『耐林廎甲文說』を錄す。出版は一九五四年、羣聯出版社。

八一、殷虛文字綴合〔一〕

甲骨文字出土後，號稱難讀。一則由於文字之古，而卜辭內容可與史籍相印證的很少。一則由於甲骨質脆，往往破裂分散不能恢復原狀，致使其內容更為支離破碎。過去的學者們在此"斷爛朝報"之中，摭拾了隻字片語，辛勤探研，用力甚劬，然其收穫究竟是有限度的。一九一七年春，王國維先生因考釋戩壽堂甲骨，見其一片（戩一．一〇）和後編（上八．一四）"文義聯續，而斷痕可相接合，乃知由一片折而為二也。"這兩斷片的復合，不但創綴合之先例，並因此而知上甲到示癸的順序，糾正了史記的錯誤。過了二十年，一九三七年郭沫若先生編釋善齋甲骨為殷契粹編，其第一一三片綴合了三片甲骨，而得上甲以來周祭的順序，為研究殷人祀譜奠立了基礎。從此甲骨斷片的綴合成為整理甲骨的一項基本工作。使斷爛朝報恢復了原來的完整，對於了解卜辭的款式，推定月日干支的銜接，確定同版卜人的關係，都有極大的幫助。

解放前小屯發掘所得的甲骨刻辭，曾分別為殷虛文字甲編乙編影印行世。其中很多同坑出土的甲骨，原來是完整的，不幸經過了好幾次的遷運和其他原因，致多數成為破碎的斷片。這兩部書印出之後，學者間亦偶有將可以綴合的斷片拼成較為完整的原形的，但很零散。現由郭若愚先生細心綴合，凡得三二四號。本所陳夢家先生曾詳加審對，同時並會同曾毅公、李學勤兩位先生，將郭若愚先生所未綴合的，復加綴合，自三二五號起至四八二號止，為增補於後。張政烺先生曾將全稿審閱過，並提出寶貴的修正的意見。這將近五百號的綴合，雖尚未必盡此二書中甲骨斷片的綴合的能事，但甲編乙編零碎破折之可復合的，已大致可擷齊備，為研究甲骨刻辭的學者們提供了比較完整的材料。對於他們幾位先生的這番辛勤工作的

成果，想學術界一定會加以重視的，故我們就將它們影印出版。至整理的細節，詳見編者附記。

鄭振鐸　一九五四年十月九日。

甲骨文字出土の後、ほぼ讀み難いと稱する。一つには則ち文字の古いことによって、卜辭內容は史籍と相い印證（合致して証明する）すべきものはたいへん少い。一つには則ち甲骨の質が脆い（もろい）ことによって、往往破裂分散して原狀に恢復することが出來ない。其の內容は更にばらばらに壞われる結果となる。過去の學者達は此の"斷爛朝報"の中に在って、隻字片語を摭拾し、辛勤探研して、力を用いること甚だ多く、然るに其の收穫には結局は限度があるのである。一九一七年の春、王國維（『增訂殷虛書契考釋』註〔二十三〕・第一輯一〇一頁參見）先生は戩壽堂甲骨の考釋に因りて、其の一片（戩一・一〇）と後編（上八・一四）を見て"文義聯讀、而して斷痕相い接合す可く、乃ち一片由り折れて二と爲るを知る也"（『戩壽堂所藏甲骨文字』註〔一〕・第一輯一四〇頁參見）と。この兩斷片の復合は、但だ綴合の先例を創らず、並に此れに因って上甲より示癸に到る順序を知り、『史記』の間違いを糾正した。二十年を過ぎて、一九三七年郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）先生は善齋の甲骨を編釋して『殷契粹編』（『殷契粹編』註〔一〕・第三輯一八頁參見）を作った。其の第一一三片は三片の甲骨を綴合し、而して上甲以來の周祭の順序を得て、殷人祀譜の研究をなし基礎を奠立した。（『殷契粹編』序、第三輯二一頁ならびに註〔五〕・二三頁參見）此れより甲骨斷片の綴合を成し甲骨整理の一項は基本工作となった。斷爛朝報をしてもとの完全に恢復した、卜辭の款式を了解することに對して、月日干支の接續を推

定し、同版卜人の關係を確定した。みな極めて大きな助けがある。

解放前小屯發掘にて得た所の甲骨刻辭は、曾って分別して『殷虛文字甲編』、『乙編』（『殷虛文字乙編』註〔一〕・第四輯九六頁參見）と爲し影印して世に行われている。其の中にはたいへん同坑出土の甲骨が多く、もとからこれは完全なもので、不幸にも幾たびかの遷運と其の他の原因を經過して、多數と成り破碎の斷片となった。この二部の書物の印出の後ち、學者間には亦た偶ま將に綴合すべき斷片のつなぎ合せを以て較さ完全な原形をなそうとすべきであるが、ただ大變こまごまで散りじりである。現に郭若愚（傳未詳）先生の細心の綴合によって、凡そ三二四號を得た。本所の陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註〔三〕・第三輯一四〇頁參見）先生は曾って詳しく審にこたへを加へ、同時に並に曾毅公（曾毅公・『甲骨綴存』註〔三〕・第三輯一一〇頁參見）李學勤〔二〕兩先生に會合し、將に郭若愚先生の未だ綴合しない所のものに、復た綴合を加へ、三二五號より四八二號に至って止め、增補を後（あと）にした。張政烺〔三〕先生は曾って將に全稿の審閱をし、並に貴重な修正の意見を提出された。これ將に五百號の綴合に近かく、尚未だ必ずしも此の二書中の甲骨斷片の綴合の能事を盡さないけれども、但だ『甲編』『乙編』のこなごなで壞れた復合すべきものは、已に大凡きちんとそろっていると稱すべきで、甲骨刻辭を研究する學者達に比較的完整の材料の提供をした。彼等幾人かの先生のこの辛勤作業の成果に對して想へば學術界はきっと重視を加へる筈だ、故に我々は就ち將にそれ等を影印出版しようとするのである。整理の細節に至っては、編者の附記を詳見せよ。

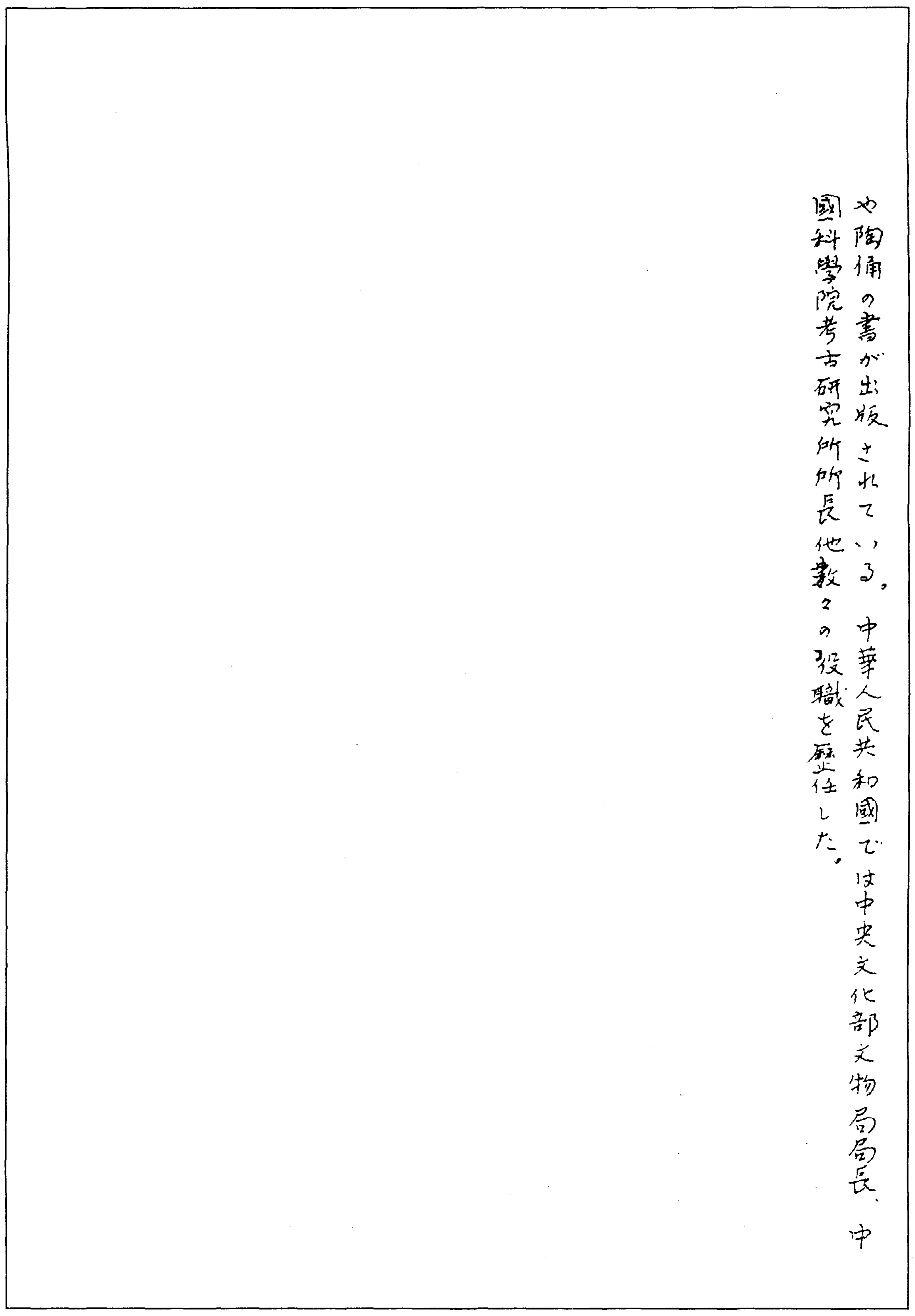
鄭振鐸〔四〕　一九五四年十月九日。

註〔一〕　本書は中央研究院歷史語言研究所刊の『殷虛文字甲編』『殷虛文字乙編』に收める卜片の甲骨斷片をいち速く綴合したものである。これに當ったのは綴合の專門家である郭若愚、曾毅公、李學勤の三氏。そのうち郭氏綴合のものは一—七六、乙編七七—三二四。曾、李兩氏は甲編の三二五—三六〇、乙編の三六一—四八二をそれぞれ綴合し合計四八二片。出版は一九五五年、科學出版社。

註〔二〕　李學勤（？　）生年經歷については不明。著書に『殷代地理簡論』がある。

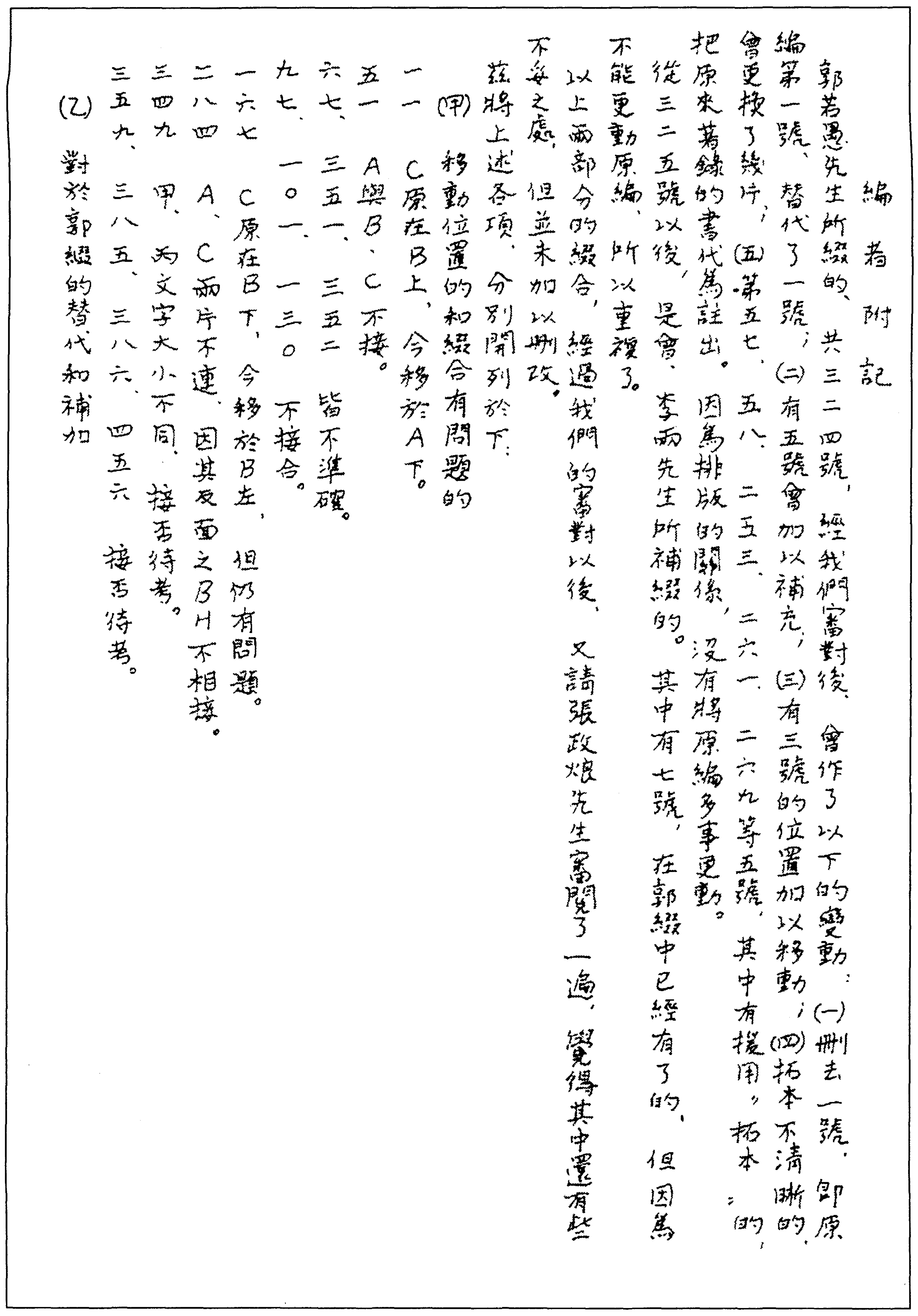
註〔三〕　張政烺（？　）生年經歷については不明。論文に『關於奭字說』、『說文燕召公史篇名醜解』、『奭字解』、『六書古義』、胡厚宣氏との合作の『關於殷代卜龜之來源』等がある。

註〔四〕　鄭振鐸（一八九八—一九五八）筆名に西諦、賓芬、郭源新などがある。福建省長樂縣の人。上海南洋大學を卒業して英國ロンドン大學に學んだ。歸國後、上海『時事新報』編輯、國立暨南大學、私立中國公學、復旦大學中國文學系教授、上海商務印書館『小說月報』社總編輯。民國十九年秋、國立清華大學中國文學系教授、私立燕京大學講師。民國二十一年燕京大學文學院院長、民國二十四年上海暨南大學文學院院長兼圖書館館長、香港大學教授を歷任し、また中國文藝協會を創立し、其の理事となり、『文學季刊』、『文學』、『世界文庫』を主宰。鄭氏は文學のみにとどまらず考古美術の研究の著作も數多く特に敦煌壁畫



や陶俑の書が出版されている。中華人民共和國では中央文化部文物局局長、中國科學院考古研究所所長他數々の役職を歷任した。

78



編者附記

郭若愚先生所綴的、共三二四號，經我們審對後，曾作了以下的變動：(一)刪去一號，即原編第一號，替代了一號；(二)有五號曾加以補充；(三)有三號的位置加以移動；(四)拓本不清晰的，曾更換了幾片；(五)第五七、五八、二五三、二六一、二六九等五號，其中有援用〃拓本〃的，把原來著錄的書代為註出。因為排版的關係，沒有將原編多事更動。

從三二五號以後，是曾、李兩先生所補綴的。其中有七號，在郭綴中已經有了的，但因為不能更動原編，所以重複了。

以上兩部分的綴合，經過我們的審對以後，又請張政烺先生審閱了一遍，覺得其中還有些不妥之處，但並未加以刪改。

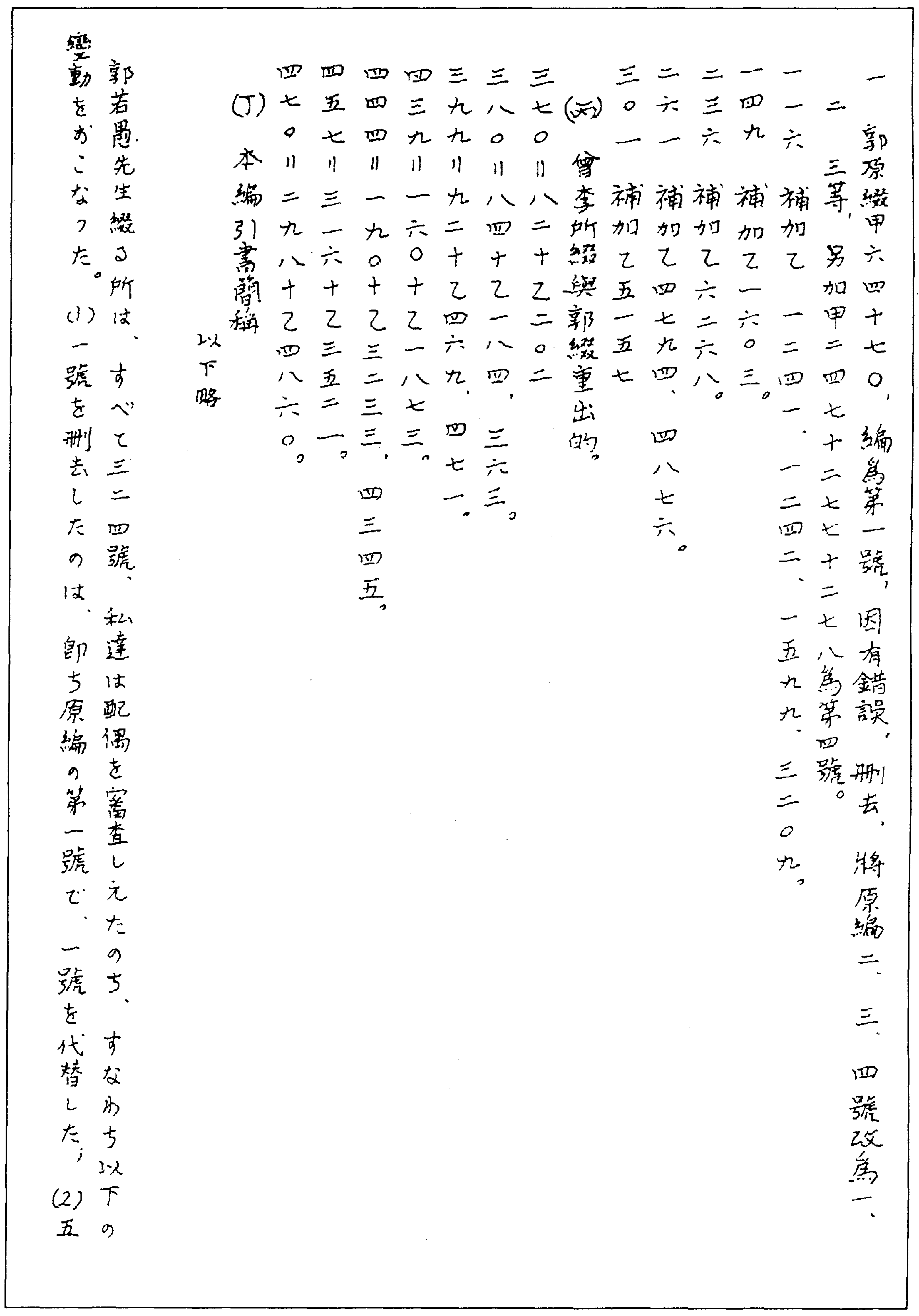
茲將上述各項，分別開列於下：

(甲) 移動位置的和綴合有問題的

一一　C原在B上，今移於A下。
五一　A與B、C不接。
六七、三五一、三五二　皆不準確。
九七、一〇一、一三〇　不接合。
一六七　C原在B下，今移於B左，但仍有問題。
二八四　A、C兩片不連，因其反面之BH不相接。
三四九　甲、丙文字大小不同，接否待考。
三五九、三八五、三八六、四五六　接否待考。

(乙) 對於郭綴的替代和補加

79



一　郭原綴甲六四十七〇，編為第一號，因有錯誤，刪去，將原編二、三、四號改為一、二、三等，另加甲二四七十二七七十二七八為第四號。
一一六　補加乙一二四一、一二四二、一五九九、三二〇九。
一四九　補加乙一六〇三。
二三六　補加乙六二六八。
二六一　補加乙四七九四、四八七六。
三〇一　補加乙五一五七

(丙) 曾李所綴與郭綴重出的。

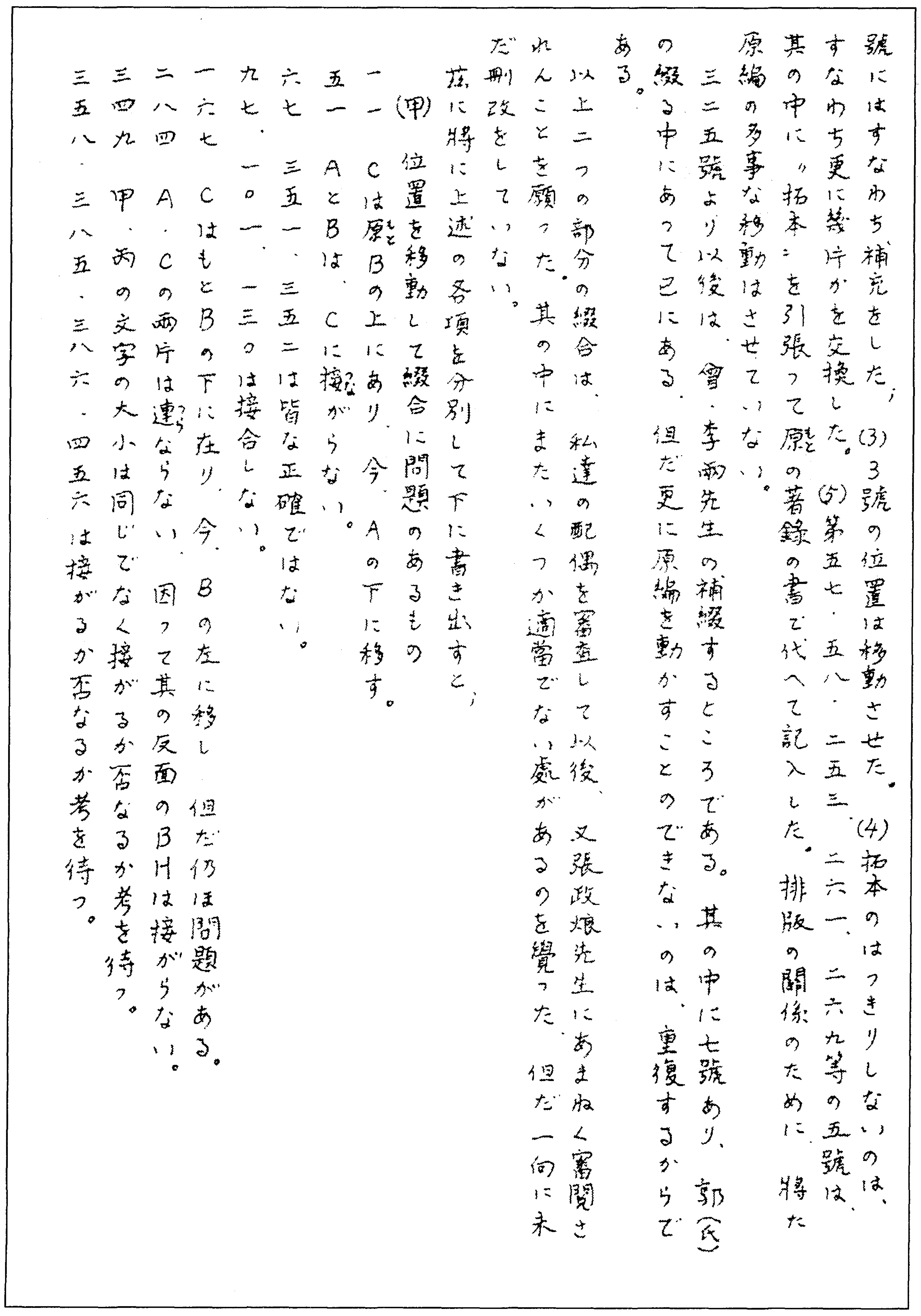
三七〇＝八二十乙二〇二
三八〇＝八四十乙一八四，三六三。
三九九＝九二十乙四六九，四七一。
四三九＝一六〇十乙一八七三。
四四四＝一九〇十乙三二三三，四三四五。
四五七＝三一六十乙三五二一。
四七〇＝二九八十乙四八六〇。

(丁) 本編引書簡稱

以下略

郭若愚先生綴る所は、すべて三二四號、私達は配偶を審査したのち、すなわち以下の變動をおこなった。(1)一號を刪去したのは、即ち原編の第一號で、一號を代替した；(2)五

80



號にはすなわち補充をした；(3)3號の位置は移動させた。(4)拓本のはっきりしないのは、すなわち更に幾片かを交換した。(5)第五七、五八、二五三、二六一、二六九等の五號は、其の中に〃拓本〃を引張って原との著錄の書で代へて記入した。排版の關係のために、將た原編の多事な移動はさせていない。

三二五號より以後は、會・李兩先生の補綴するところである。其の中に七號あり、郭（氏）の綴る中にあって已にある。但だ更に原編を動かすことのできないのは、重複するからである。

以上二つの部分の綴合は、私達の配偶を審査して以後、又張政烺先生にあまねく審閲されんことを願った。其の中にまたいくつか適當でない處があるのを覺った。但だ一向に未だ刪改をしていない。

茲に將に上述の各項を分別して下に書き出すと；

(甲) 位置を移動して綴合に問題のあるもの

一一　Cは原とBの上にあり、今、Aの下に移す。
五一　AとBは、Cに接ながらない。
六七　三五一、三五二は皆な正確ではない。
九七、一〇一、一三〇は接合しない。
一六七　Cはもと、Bの下に在り、今、Bの左に移し　但だ仍ほ問題がある。
二八四　A・Cの兩片は連ならない、因って其の反面のBHは接がらない。
三四九　甲・丙の文字の大小は同じでなく接がるか否なるか考を待つ。
三五八・三八五・三八六・四五六は接がるか否なるか考を待つ。

81

一、(乙) 郭が綴った代替と補ひに對して、郭が原綴った甲64十70は、編して第一號とした。だから錯誤がある。刪去し、將に原編二・三・四號を改めて一・二・三等とした。另に甲二四七・二七七・二七八を加えて第四號とした。

一一六　乙一二四一・一二四二、一五九九、三二〇九を補う。
一四九　乙一六〇三を補う、
二三六　乙六二六八を補う、
二六一　乙四七九四、四八七六を補う
三〇一　乙五一五を補う。

(丙) 會・李が綴った所と郭が綴って重出したもの。

三七〇＝八二十乙二〇二
三八〇＝八四十乙一八四、三六三
三九九＝九二十乙四六九・四七一
四三九＝一六〇十乙一八七三
四四四＝一九〇十乙三二三三、四三四五
四五七＝三一六十乙三五二一。
四七〇＝二九八十乙四八六〇

(丁) 本書引書簡稱

以下略す。

八二、甲骨學五十年〔二〕

甲骨學五十年、是董彥堂先生叙述五十年來甲骨學發展的總結集。五十年的時間不算短，但甲骨學還是在青年的時代。從最初珍玩骨董的境界，而臻於今日成為一種專門的學問，這中間，甲骨本身有其嚴格的條件作基礎。五十年來，經過無數學者的鑽研努力，而能夠提綱挈領建立起甲骨學的體系的，惟有彥堂先生。第一、如果沒有貞人的發見，就不能作斷代的區分。第二、如果沒有殷曆譜的建立，就沒有正確的殷商年代；也不會知道禮制上的新舊分派。今天十萬片甲骨離不開這個體系；也就是甲骨已經有了成為一種專門學問的基礎。

殷曆譜推算的正確，我曾經綴合了八月乙酉月食龜腹甲而得到更明顯的證明。現在應當提一提的是另一個腹甲殘片的綴合，足以證明彥堂先生在二十五年前發現貞人時所擬補卜辭之正確可信。那即是大龜四版之四的卜旬版。殷墟第三次發掘得大龜四版，是在民國十八年，其中第四版紀的全是卜旬辭，原版出土時已殘缺不全，經著錄於小屯甲編二一二二號。當時彥堂先生把殘缺部份的卜旬辭依照文例補足。民國四十一年我整理小屯甲編，發見二一〇六號的一塊殘片可以補上，取與覈對當時所擬補的（附圖見頁66後），竟絲毫不爽。這是甲骨本身嚴格的條件限制使然；正也就是甲骨所以能成為一種專門學問的基礎所在。

甲骨學已經是當今的顯學，未來的發展，正是前程無限。可是埋首從事的學者，視諸過去全盛時代，真顯得寂寞凋零，相差太遠了。我希望彥堂先生這一冊甲骨學五十年，對於學術界，將不僅是過去甲骨學研究的總報告，而更是今後研究甲骨學的指程碑。

中華民國四十四年七月後學嚴一萍謹序。

甲骨學は五十年、董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）先生は五十年來の甲骨學發展の總結集を叙述された。五十年の時は決して短かいものとはいえない、ただ甲骨學はまた青年の時代である。最初は珍玩と骨董の境界よりして、今日に至って一種の專門の學問と成った、この中間に甲骨の本身はその嚴格な條件にあって基礎を作った。五十年來、無數の學者の鑽研と努力をへて、能く甲骨學の體系を建てることを提綱した、惟うに彥堂先生にある。第一如し果して『殷曆譜』（『殷曆譜』註〔三〕・第三輯二八六頁參見）の建立がなければ、就ち正確な殷商年代もない。また禮制上の新舊分派を知ることも出來なかった。今日十萬片の甲骨は離れて個々の體系を開いていない。ゆずかに甲骨は已に一種の專門の學問の基礎をなしえたのである。

『殷曆譜』の推測探究は正確で、私は曾って八月乙酉月食龜腹甲を綴合して更にはっきり證明することができた。現在應に一つを提出したこれは一つの腹甲殘片の綴合によるものである。以て彥堂先生の二十五年前にあって貞人を發見した時に予定した所の卜辭を正確に補って信ずべきことを證明するに足るものである。それは即ち大龜四版の四つの卜旬版である。殷虛第三回發掘で大龜四版を得た、これは民國十八〔一九二九〕年に在り、その中の第四版に記すものは全て卜旬の辭である。原版出土の時に已に殘缺して完全でなく、『小屯甲編』二一二二號に著錄を經た。當時彥堂先生は殘缺の部分の卜旬の辭をとらえて文例に照すことによって補足した。民國四十一〔一九五二〕年私は『小屯甲編』を整理して、二一〇六號の一塊の殘片を發見し以て上に補うべく、取と覈とに當時補足する所に對して（附圖頁六六の後を見よ〔三〕）とうとうこまごまとは明らかにしなかった。これは甲骨自身の嚴格な條件の限制が然からしめたものである。正しく僅かに甲骨は能く一種の專門の學問

をなす基礎の到るところだからである。

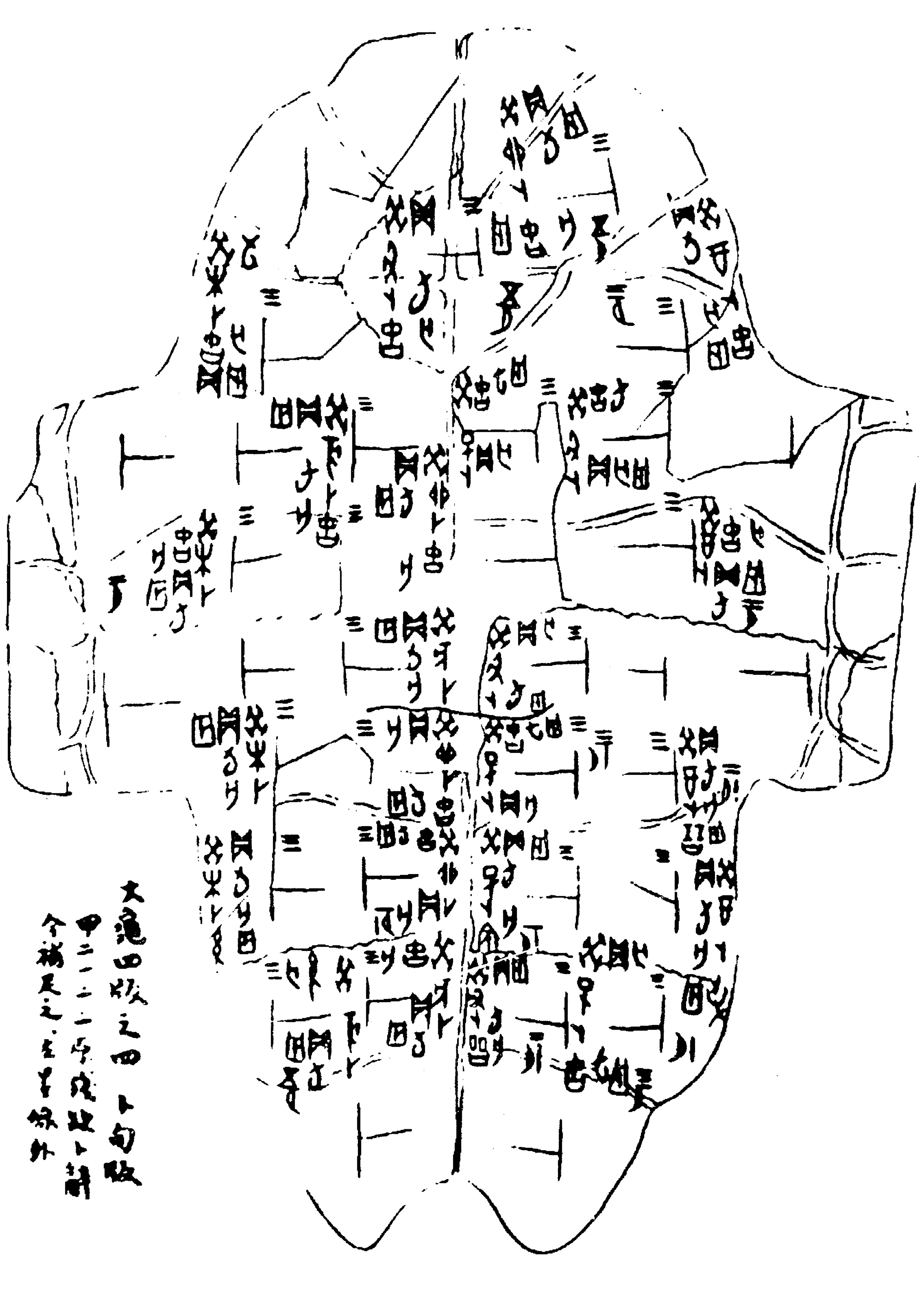
甲骨學は已に當今の顯學をへて、未來の發展は、正に前途無限である。首を埋めて從事する學者は、誰れを過去の全盛時代に見れば、眞に顯れて寂寞凋零を得、差を見ると太だ遠い。私は彥堂先生のこの一冊の甲骨學に希望することは、學術界に對して、將に僅かにこれは過去の甲骨學研究の總報告だけでなくして、更に今後の甲骨學研究の指程の碑である。

中華民國四十四「一九五三」年七月、後學の嚴一萍謹んで記す。

註〔二〕　甲骨學についての研究史を論述したものは本書が始めてである。著者は董作賓氏。彼が甲骨學研究に從事したのは一九二八年中央研究院歷史語言研究所が安陽の小屯を發掘した時であった。研究所の命によって發掘主任となり、幾多の發掘工作にあたった。この樣な精緻な業を成すことができたのは、發掘工作の經驗と机上の整理を兼ねた甲骨學者であったからである。こゝに目次內容を紹介すると、一、解題和概說（甲骨文字的定名、前期與後期研究的不同、甲骨文的字數和片數）二、殷代文化寶庫的開發（殷墟概略、殷墟開發的前期－私人挖掘、殷墟開發的後期－公家發掘）三、前期研究的經歷（字句的考釋、篇章的通讀）四、後期研究的進程（分期的整理、關於貞人、斷代研究的十個標準。分派的研究、殷代禮制的新舊兩派）五、甲骨文材料的總估計（已見著錄的甲骨文字、未著錄的甲骨文字、甲骨文材料的總估計）六、最近十年的甲骨學（回顧甲骨學的六十年。殷契周甲、解題、六十年來殷契研究之概略、十萬片以外的一片卜辭。甲骨學前途之展望、甲骨資料之結集、綴合復元之重要、索引工具之編製、研究方法之改進）附錄として董作賓先生遺像、董作賓先生傳略、殷墟發掘工作存眞、ならびに董作賓、胡厚宣兩氏による『甲骨年表』、董作賓、黃然偉兩氏による『續甲骨年表』を錄している。以上のうち五、甲骨文材料的總估計より『續甲骨年表』までは『甲骨學六十年』に增補收錄されたものである。元の『甲骨學五十年』の原稿は『大陸雜誌』第一卷、三、四、六、九、十期に連載されたものを嚴一萍氏の序文を付して單行本としたものである。のち十年にして『甲骨學六十年』として右のように增補しさらに「甲骨學六十年校後記」と「甲骨學五十年英譯本編輯瑣言」の序と『甲骨年表』の跋があるのでこゝに收めた。出版は一九六五年。

註〔三〕　「八月乙酉月食龜腹甲」嚴一萍撰。『大陸雜誌』第九卷第十一期（一九五四年七月）また『續殷曆譜』所收。詳しくは『殷曆譜』註〔三十七〕、第三輯三二七頁參見。

註〔三〕　殷虛文字甲編の二一二二＋二一〇六の綴合（附圖六六より）



大龜四版之四　卜旬版

甲二一二一片殘此卜辭

今補足之，左甲缺外

甲骨學六十年校後記

甲骨學六十年終於校印完畢，可以出版了。從開始付印到現在，已經過整整三個年頭。回想起來，眞有萬分感慨！

甲骨學五十年的單行本，是民國四十四年出版的。民國五十一年秋天，日本遠東文化中心徵求彥堂夫子的同意，把它譯爲英文。同時，夫子也囑我把中文本加以補充再版。於是輯錄敘述最近十年來甲骨研究情形的論文三篇，增爲「最近十年的甲骨學」一章。又加上新由李霖燦兄從美國帶回的「殷墟發掘工作存眞」圖片數十幅，以及甲骨年表正續編。而書名也決定改爲「甲骨學六十年」。

這冊書，先是用照相打字製版，印出時，很不理想。所以再用活版重印過的。而圖片的鋅版，也製了兩次。因此一再遷延，拖過了三個年頭。其中最大的原因，自然是夫子的逝世。我失去了耳提面命的導師，肩挑起無比沉重的擔子。兩年來，臨深履薄，也祇有一步步的向前走去。

回憶殷曆譜的再版，平廬文存上冊的完成，曾經夫子目睹，那時病軀衰弱已漸近彌留狀態。而文存下冊的出版，已在逝世週年以後。這一冊甲骨學六十年，又遲延到現在纔能問世。我惟有深深引疚，自恨力量太小。但是，想到夫子生前期許我的工作還多，又不能不鼓起勇氣，盡其心力，傳絕學於一線，以告慰夫子在天之靈！

嚴一萍記於板橋之萍廬　五十四年六月卅日。

甲骨學六十年は、遂に校印完全に終り、出版することができた。印刷を開始して現在に到るまで、已に丸々三ヶ年の年月を經過した。思いおこすと眞に非常に感慨である。

『甲骨學五十年』の單行本は、民國四十四年「一九五五」年に出版したもので、民國五十一「一九六二」年の秋、日本の遠東文化は、彥堂先生の同意を心から求め、それを釋して英文と[四]した。同時に、先生はまた私に命じて中文本に補充を加えて再版したのである。ここにおいて最近十年來の甲骨研究の情形を叙述した論文三篇を輯錄した「最近十年の甲骨學」の一章を増やした[五]。また上に新たに李霖燦兄[六]が米國から持ちかえった「殷虚發掘工作存眞」による圖版數十幅及び『甲骨年表』の正續編を加えた。而も書名はまた『甲骨學六十年』と改めることに決めた。

この書は、先づ寫眞とタイプライター版を用いたので、印刷が出た時は、甚だうまくいかなかった。だから再び活版を用いて重印したのである。而も圖版の鋅版もまた二回製った。この為一度ならずのびて、三ケ年がすぎた。其の中でも最大の原因は、もとより先生の逝世である。私は直接面と向って指導してくれる先生を失ひ、この上ない負擔を買うことになった。二年來、深きに臨み薄きに履して、また祇に一歩一歩前進した。『殷曆譜』の再版と『平廬文存』[七]上冊の完成を回顧するに、既に先生の存命中であったが、あの當時、病氣がちなからだは衰弱し、だんだんと病氣が長びいて重く危篤狀態にあった。而して『文存』の下冊の出版は、已に逝世一週年以後にある。この一冊の『甲骨學六十年』は、また遲延して現在に至ってはじめて能く世に問うこととなった。思うに深く病いを口實にして、自からの力量の甚だ小さいことを恨む。ただ先生が生きていた時の時期に私に與えてくれた工作がやはり多かったことに思い到ると、天にある先生の靈をなぐさめることができるように想う。また勇氣をふるい起し、其の心力を盡して、後繼者なき學問をひとすじに傳えないわけにはいかないのである。

註[四]　英文版の『甲骨學六十年』未見。

註[五]　『最近十年的甲骨學』は原載は『大陸雜誌』二十一卷一・二期合刊（民國四十九年七月十五日）であったが、本書ではこれに一、回顧甲骨學的六十年（原載四十八年五月廿二日、『新生報讀書週刊』第二期）、二、殷契周甲（原載民國四十八年四月『幼獅學報』一卷二期）、三、甲骨學前途之展望（原載未詳）を加えて編者により『最近十年的甲骨學』とされている。

註[六]　李霖燦　傳未詳。

註[七]　『平廬文存』。嚴一萍氏編輯による董作賓氏の論文集で、『董作賓學術論著』（上・下二冊）に收めなかったもので、なかに甲骨關係の論文も多く收錄されている。上・下二冊の洋裝本。民國五十二（一九六三）年、藝文印書館刊。

甲骨學五十年英譯本編輯瑣言　Kimpei Goto

一九六二年秋，遠東文化中心徵求董作賓教授同意，將其所著「甲骨學五十年」譯成英文，付之剞劂。其時董先生適在病中，即函表同意，於是本中心從事此名著之譯事。嚴一萍先生於原書序內提及，此書「綜述五十年來甲骨學研究之結果，並指示將來研究此學之途徑」，實為恰論。因其如是，此書全部實具有特殊性質。是以在將其譯成英文時，對於其內容再三注意，務求使學術專家及一般讀者，皆易於領悟而不致誤解。因之祇有將多數之甲骨刻辭，及書中引用學者之言論，割愛未譯。然為使讀者易於瞭解是項學問起見，於中文增刊攝影圖片，書末增列附錄。是以本書實為原書之節譯本。所至望者，本書之出，可達成將五十年來研究甲骨學之歷史宣揚於世界而不致引起誤解之目的。

當譯述工作正在進行之際，董先生逝世噩耗傳來，不勝惋悼。其最可惜者，書成之後，未能邀董先生過目，予以指正耳。謹將此譯本奉獻於原著，以資紀念。

本書第一、二、五章，係索費亞大學楊保羅先生之譯筆，其餘第三、四兩章，則為遠東文化中心所譯，附錄亦係中心所編。在準備本書之譯刊時，多蒙天理大學梅原末治教授，京都大學貝塚茂樹教授，東京大學文化研究所松丸道雄先生，及美國楊伯利翰大學海耶保羅教授之批評指教，謹致謝忱！

一九六二年の秋、遠東文化中心（センター）は董作賓教授の同意を徵求し、將に其の著す所の『甲骨學五十年』を英文に譯成し、これを剞劂に付さんとす。其の時董先生は適〻病中に在り、即ち函にて同意を表す。是に於て本中心（センター）は此の名著の譯事に從事す。嚴一萍先生原書の序

内に於て提及し、「此の書は「五十年來の甲骨學研究の結果を綜述し、並に將來の此の學を研究するの途徑（みち）を指事す」とせしが、實に恰論と為す。其の是くの如く因り、此の書は全部實に特殊の性質を具有す。是に以て將に其の英文に譯成せんとする時に在り、其の內容に對し再三注意し、務めて學術專家及び一般讀者をして皆な領悟に易くして誤解を致さしむるを求む。之れに因りて祇（ただ）多數の甲骨刻辭、及び書中に引用するの學者の言論を將って、割愛して未だ譯さざる有り。然して讀者をして是の項の學問の起見を瞭解し易くせしめる為に、中文に於て攝影の圖片を增刊し、書末に增して附錄に列す。是れ本書を以て實に原書の節譯本と為す。至望する所は、本書の出るや、將に五十年來甲骨學を研究するの歷史を世界に宣揚して誤解を引起するを致さざるの目的を達成す可し。

譯述工作正に進行の際に在るに當りて、董先生逝世噩耗「死亡のしらせ」の傳へ來り、惋悼に勝へず。其の最も惜む可き者は、書成るの後、未だ董先生の過目を邀える能はず、予指正を以てするのみ。謹んで將に此の譯本[八]を原著に奉獻し、以て紀念に資（もたら）さんとす。

本書第一・二・五章は、索費亞大學楊保羅先生の譯筆に係り、其の餘第三・四兩章は則ち遠東文化研究中心（センター）の譯する所為り、附錄も亦中心（センター）の所編に係る。本書の譯刊を準備するに在りし時、多く天理大學の梅原末治教授[九]、京都大學貝塚茂樹教授[十]、東京大學文化研究所松丸道雄先生[十一]、及び美國楊伯利翰大學海耶保羅教授[十二]の批評指教を蒙る。謹んで謝忱を致す。

註[八]　楊保羅　傳未詳

註〔九〕　梅原末治（一八九三―　）大阪に生れる。大正二年同志社普通學校を卒業し、大正三年京都帝國大學文科大學に勤務し、大正十四年助手となり文學部へ、昭和四年京都帝國大學講師、東方文化學院京都研究所研究員に就任、その間、文部省在外研究員として考古學研究のため欧米に留學し各地の古代遺蹟、博物館の調査に精力をそそいだ。昭和三年水野清一氏と殷虚の發掘現場を歩き、また昭和十一年にも華北・華中への調査旅行に派遣された。また十三年の後半から三年間中央研究院に赴き殷虚の遺物の整理にあたった。昭和十四年『支那青銅器時代の研究』に於て文學博士の學位を得。同年京都大學教授となり文學部考古學講座担任となり昭和三十一年京都大學を退休するまで九州大學、岡山大學、名古屋大學、和歌山大學、山形大學の講師となる。退休後は天理大學おやさと研究所研究員となり昭和四十一年まで務められた。この間台灣大學文學系客座教授、宮中御講書初めに日本上古の古鏡について御進講した。昭和四十一年特旨を以て叙勲二等旭日章を授けられた。彼の考古學の發掘調査とその研究は日本、朝鮮、中國に及びその研究成果は望大なものであるがここに中國關係のものを列記しておく。『鑑鏡の研究』、『南朝鮮に於ける漢代の遺蹟』、『漢三國六朝紀年鏡集録』、『欧米に於ける支那古鏡』、『殷墟出土の白色土器の研究』、『柉禁の考古学的考察』、『欧米蒐儲支那古銅精華』、『漢以前の古鏡の研究』、『戰國式銅器の研究』、『洛陽金村古墓聚英』、『古代北方系文物の研究』、『支那考古学論攷』、『古銅器形態の考古学的研究』、『河南安陽遺寶』、『河南安陽遺物の研究』、『東亞考古學論攷』、『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』『殷墟』があり他數百篇に及ぶ。

註〔十〕　貝塚茂樹（一九〇四―　）東京にて和歌山縣士族小川琢治（京都帝國大學教授）の次男として生れる。一九二五年第三高等學校を卒業し一九二八年京都帝國大學を卒業、同年京都帝國大學大學院に入學し研究題目を中國古代史とする。一九三二年東方文化学院京都研究所研究員に任せられた。一九四八年京都大學人文科學研究所研究員に就任するまで甲骨文の研究に從事し支那古代の封建制度、特に金文を通じてみた策命制度、甲骨・金文および經書に見える史實の比較研究を行う。一九四八年には朝日文化賞をうけた。一九四八年京都大學に任命され、人文科學研究所に勤務し、一九六八年京都大學を退休するまで中國古代都市國家の研究、甲骨文時代区分の基礎研究とに努められた。研究の分野は各方面に亘っているが甲骨學關係の著論文をあげると『中國古代史學の發展』、『甲骨文斷代研究例再檢討』（第二輯四一頁に紹介）『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』圖版册（上・下）『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』本文編、『京都大學人文科學研究所藏甲骨文字』索引があり、他に『貝塚茂樹著作集』（全十巻）が刊行されている。

註〔十一〕　松丸道雄（一九三四―　）東京に生れる。一九五八年東京大學文學部東洋史學科を卒業し、六〇年東京大學大學院人文科學研究科東洋史學專攻修士終了し、六〇年より六六年まで東大東洋文化研究所助手を勤め、六六年四月から七〇年春までオーストラリア國立大學太平洋問題高等研究所研究員となる。歸國後東大東洋文化研究所講師となり七一年助教授。專門は中國古代史。著論文に「殷墟卜辞中の田猟地について――殷代國家構造研究のために」東洋文化研究所紀要三一冊、「殷周國家の構造」岩波講座世界歷史4、「西周青銅器製作の背景」東洋文化研究所紀要七二冊、Chén Mèng-chia, Style of Chinese Bronzes, Archieves of the Chinese Art Society of America, Vol. I の邦譯「殷周青銅器の形態」、陳夢家編・松丸道雄改編『周青銅器分類圖録』がある。

註〔十二〕　海耶保羅　傳未詳。

甲骨年表跋〔十三〕

甲骨年表之作，彦堂夫子草創於民國十九年。此後所輯材料，由受業胡厚宣君整理，於民國二十五年，以胡君合編名義發表。至民國四十九年秋創刊中國文字，復出民國二十六年以來所見所錄之資料，交臺灣大學同學黃然偉君整理，依前表體例，爲續甲骨年表。並以黃君合編名義，發表於中國文字第三期以下各期。民國五十二年六月，中國文字出版至十二期，已歷時三載，而夫子病日篤，續甲骨年表尚僅發表至民國四十六年。今所附錄者，輯至民國五十年止，則皆黃君後來所整理補入者。五十二年十一月二十三日夫子歸道山，甲骨研究，頓失導師，實爲學術界莫大之損失，亦甲骨年表所應大書特書者，固不僅爲紀念夫子也。今續表未能斷筆於此，不無遺憾耳。校印既竟，誌其經過如此。

民國五十四年夏及門嚴一萍記。

甲骨年表を作ることは、彦堂先生が民國十九〔一九三〇〕年に草創された。此の後輯る所の材料は、弟子の胡厚宣君（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註〔八〕・第三輯一三四頁參見）の整理によって、民國二十五〔一九三六〕年に、胡君との合編名義を以て發表した。民國四十九〔一九六〇〕年秋に至って『中國文字』〔十四〕を創刊した、また民國二十六〔一九三八〕年以来所見所錄の資料を出し、臺灣大學同學の黃然偉君〔十五〕と合同で整理し、前表の體例により、『續甲骨年表』とした。そして黃君と合編名義を以て、『中國文字』第三期以下各期に發表した。民國五十二〔一九六三〕年六月、『中國文字』の出版は十二期に至った、已に時に三年を歷て、而して先生の病は日に篤く、『續甲骨年表』は尚僅かに民國四十六〔一九五七〕年に至って發表した。

今、附錄する所の者は、民國五十〔一九六一〕年前までを輯めた。則ち皆な黄君のちに整理し補入したものである。五十二〔一九六三〕年十一月二十三日先生は亡くなられ、甲骨研究は、急に導師を失った。實に學術界莫大の損失である。また『甲骨年表』が所の大書特書に値ひするのは、固より先生を紀念するからだけではない。今の續表は未だ此に筆を斷つことなく、聨か遺感である。校印既に竟り、其の經過をこのように誌すのである。

民國五十四〔一九六五〕年夏、及門で嚴一萍記す。

註〔十三〕　本書は嚴一萍氏の跋にあるように一九三〇年に董作賓氏が創め、資料は胡厚宣氏が整理にあたり、一九三六年胡厚宣と共著で出版された單行本であるが、こゝに一九三七年以降の年表を『續甲骨年表』として嚴氏と黄然偉氏とによって作製し『中國文字』に掲載されたものをまとめて本書の附錄として收錄したものである。この書の體裁は左記の編纂略例のごとくである。

一、甲骨年表乃就董作賓民國十九年七月所發表之甲骨年表，增訂重編。續甲骨年表，銜接續編，於民國四十九年十月起陸續發表於中國文字。

二、本表紀年始自清光緒二十五年（一八九九），訖於中華民國二十五年（一九三六）八月。續甲骨年表則自民國二十六年（一九三七）至民國五十年（一九六一）。民國紀元以前，以陰曆為主，民國紀元以後，以陽曆為主。

三、表中共分三欄：(一)紀年，列中國年代，甲子，西曆紀元。(二)紀事，略記甲骨文字之發現始末，流傳情形，及研究撰著之經過。(三)撰著，備列關於甲骨文字之專著及論文。

四、撰著一欄，有關必錄，不厭其詳。惟間有徵引甲骨文字而無關宏旨者，概不列入。

五、撰著中除中文之外，西文日文之作品，亦均收錄。其有譯為中文者，則僅收譯文。

六、撰著中有雖尚未出版，但據他書稱引，知其確已撰成者，本表亦酌量收錄。

七、撰著排列，以成稿之年月為準，而注明其出版之年月。其原文未載成稿之年月者，以出版年月為準。其原書所記月份，有陰陽曆之不同，則於與本表系統不同之月份，別注一陰字或陽字。月份不詳者，附於本年之後。

八、撰著之下，均詳注卷數冊數，或所見之雜志報章，出版處所及定價等。不知者闕之。

九、撰人之籍貫別號，均於第一見時注明。不知者闕之。

十、每種撰著編為一號。

十一、甲骨年表紀事欄共錄九十七條，撰著欄共錄三百三十三款。以與原表相較，在民國十九年七月以前，有原表佚誤今為之訂補者，計紀事欄凡二十九，撰著欄凡八十四。在民國十九年七月以後，為原表所無，今為之增入者，計紀事欄凡二十三，撰著欄凡一百八十七。續表紀事欄凡三十六，撰著欄凡五百七十二。二十餘年來，關於甲骨學之文獻，增益何啻倍蓰，惟此稿僅據瀏檢所及，缺誤之處，當不能免，博雅君子，幸賜補正！

註〔十四〕　『中國文字』董作賓氏が主編となり嚴一萍、金祥恒等が中心となり中國文字の專門の雑誌として一九六〇年に第一冊が出版され五十二冊刊行された。

註〔十五〕　黄然偉　傳未詳。

八三、續殷曆譜〔二〕

董彥堂先生的殷曆譜於民國三十四年發表，到現在已經十年。因為是甲骨和曆法的專門研究，所以十年來，有力的和者與反者，確實都很稀少。我在民國四十年寫了一篇「殷曆譜旬譜補」，或者可算是第一個「和者」。這是根據殷曆譜的方法研究甲骨的一個例子，算不得什麼成就。到民國四十年底綴合了八月乙酉月食龜腹甲，也祇是更明顯的證明殷曆譜推算的無訛，加強了殷商年曆堅固不拔的基礎。關於這腹甲的研究，彥堂先生曾經寫過一篇「卜辭八月乙酉月食考」，刊登於大陸雜誌特刊第一輯。不懂甲骨的人，懷疑這腹甲的綴合，所以我寫了一篇「八月乙酉月食腹甲的拼合與考證經過」。這是值得重視的發見，彥堂先生曾經指着這塊綴合的腹甲，而稱許我已經有了「不朽之業」；僅卽由此而算是殷曆譜的有力的和者，那我還是覺得惶愧無已的。

反的一方面，如果正式站在學術的立場而提出商討的，國內可說沒有，國外也只見日本的藪內清先生一人而已。藪內清先生並沒有讀到殷曆譜，而對殷曆譜批評，自不免有許多誤解。因此，我寫了一篇「正日本藪內清氏對於殷曆譜的誤解」，到現在發表已經四年，還沒有見到答覆。

除此以外，跟着殷曆譜以俱來的，是一項無聊的攻訐，它作態多方，也已經糾纏十年了。彥堂先生認為不屑與語，所以始終沒有答覆。很多人憂慮着「君子道消小人道長」，而為眞正的學術耽心；自然偽學可以亂眞，也的確容易使是非顚倒。於是我的「兩宋月食考」第一次開始對於偽學的無情暴露，接着「一論殷曆譜糾譎」，更澈底的揭發偽學的眞面目。在「一論殷曆譜糾譎」，更澈底的揭發偽學的眞面目。在「一論」發表以後，我原擬把「二論」

繼續發表。學術界認為「一論」已經把殷曆問題的是非弄清楚了，而且公認這個問題已經告一段落（見民主評論六卷九期編者語），因此我的「二論殷曆譜糾譎」就不一定要發表了，也就不收入這集子。

許倬雲君的「殷曆譜氣朔新證」，原是覆核根據五十六種曆法推算祖甲六祀氣朔的斟譌，也是對於偽學的深刻教訓。所以一併收在這裡作為附錄；另一篇附錄是彥堂先生對于「殷曆譜的自我檢討」，這可以告訴讀者，殷曆譜究竟是什麼？

以上這些文章，都是有關殷曆譜的問題，我把它們集在一起，總稱之為「續殷曆譜」。彥堂先生根據甲骨材料建立起來的殷曆譜，在中國史學上是一項了不起的成就，我這冊「續殷曆譜」不過是殷曆譜的若干注解而已。殷商史的充實，還有待於新材料與新研究的發現；殷商年代的骨幹，則已經是無可爭論的事實。今天我很高興在我的筆下結束十年來對於殷曆譜糾纏不休的無聊爭論，因此，願意摘引幾句攻訐者自己的話，作為這一爭論的結束：

彥堂前輩先生道右：
先生於殷契甚多刱見，若骨文例，若斷代之研究，若殷曆之發見，並可為後學之矜式。
後學魯實先手奏

（節錄民國三十年四月十六日責善半月刊二卷十五期學術通訊欄）

中華民國四十四年八月嚴一萍序。

董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）先生の『殷曆譜』（『殷曆譜』註〔二〕・第三輯二八六頁參見）は民國三十四〔一九四五〕年に發表され、現在已に十年を經ている。甲骨と曆法の專門研究であるから、十年來より、有力な賛成者と反對の

者とは、確實にみなたいへん稀少である。私は民國四十〔一九五一〕年にあって、「殷曆譜旬譜補」（本編註〔一〕參見）の一篇を書いたが、或は第一の「和者」とみなされうる。これは殷曆譜にもとづいて甲骨を研究する一つの例であり、なんらでき上っているとは思はれない。民國四十〔一九五一〕年に、たって八月乙酉月食龜腹甲を綴合した。（『甲骨學五十年』註〔三〕・本輯八七頁參見）やはりただ殷曆譜推測探究の誤りの無い明らかなことを證明した。殷商年曆が堅固で拔くことのない基礎を強く加えた。この腹甲の研究に關して、彥堂先生は曾って「卜辭八月乙酉月食考」の一篇を書いたことがある。『大陸雜誌特刊第一輯』に刊せられた。甲骨の人が、この腹甲の綴合に疑いを懷いたかどうか知らない。そこで私は「八月乙酉月食腹甲的拼合與考證經過」（本編註〔一〕參見）の一篇を書いた。これは重視に値いし得る發見で、彥堂先生は曾ってこの塊の綴合の腹甲を指摘され、而して私は已に「不朽の業」があったことをほめそやされた。もし此れによって『殷曆譜』の有力な和を算えたとするならそれは、私にはやはり恐れはじ已む無きを覺える。

反對の一方の面は、如し果して正式に學術上の立場に立って協議することを提出しうるもので國內では說くものはなく、國外ではただ日本の藪內淸先生〔二〕一人だけを見る。藪內先生は並に未だ少しも『殷曆譜』を讀むことなくして、而して『殷曆譜』に對して批評するのを見るだけで、もとより多くの誤解をもっていることは免れない。此れに因って、私は一篇の「正日本藪內淸氏對殷曆譜的誤解」（本編註〔一〕參見）を書いた。現在にいたって發表は已に四年を經て、まだ回答〔三〕を見ていない。

これを除いた外は、殷曆譜についていずれも來るものは、一項の意味のない攻擊で、それが多くの方面にこびへつらい、やはり已に厄介なこと十年を經た。彥堂先生は認めて不

屑の語とされた。だから始めから終りまで回答することはない。實に多くの人が憂慮するのは「君子の道は消え小人の道長し」であり、眞正な學術の執心である。もとより僞學は以て眞を亂すもので、また確かに是非を顚倒させることは容易である。こゝにおいて私の「兩宋月食考」（本編註〔一〕參見）は第一回の僞學に對する無情な暴露を開始した。つづいて「一論殷曆譜糾譑」（本編註〔一〕參見）で、更に徹底的に僞學の眞の面目を揭發し、左の「一論」を發表して以後は、私は原の「二論」を續けて發表するつもりにしている。學術界は「一論」が已に殷曆の問題の是非をはっきりさせたことを認めている。そのうえこの問題を已に一段落を告げたことを公認した。（『民主評論』六卷九期、編者の語に見える）此れに因って私は「二論殷曆譜糾譑」は就ち發表するかどうかきめていない〔四〕。また就ちこの集に收めない。

許倬雲君の〔五〕「殷曆譜氣朔新證」は、もともと五十六種の曆法にもとづいて祖甲六祀の氣朔の斟謬を推測探究することを調べたものである。また僞學に對する深刻な教訓である。一諸にして附錄しここに收める。もお一篇の附錄は彥堂先生の「殷曆譜之自我檢討」（本編註〔一〕參見）に對するものである。これは讀者に『殷曆譜』は結局何たるかを教へるものである。

以上のこの文章は、みな殷曆譜に關するものである。私はそれらを集めてひと所にし、總てこれを編して『續殷曆譜』とする。彥堂先生は甲骨材料を根據として立てた殷曆譜は、中國史學上にあって大變できあがっている。私はこの冊の『續殷曆譜』はただ殷曆譜の若干の注解であるに過ぎない。殷商史の充實は、また新材料と新研究の發見に待つことがある。殷商年代の骨幹は、則ち已に爭論することのできない實をえた。今日、私は實に十

年來殷曆譜の糾纏（より合わせた繩）休まざるも意味なき爭論に對して筆を置くことができたのを喜びとする次第である。幾句かの攻擊者自身の言葉を引用して、作ってこの一爭論の結論をなさんことを願う。

彥堂前輩先生道右

先生は殷契に甚だ創見多く、甲文例の若く、斷代の研究の若く、殷曆の發見の若く、並に後學の謹んで手本とすべきものである。

後學の魯實先（魯實先・四輯三六七頁參見）手から奏す。

（民國三十〔一九四一〕年四月十六日　責善半月刊二卷十五期、學術通迅欄より節錄）

中華民國四十四〔一九五五〕年八月　嚴一萍序す。

註〔一〕　嚴一萍氏の一連の殷曆に關する論文五篇を收める。一、殷曆譜「旬譜」補（『大陸雜誌』第三卷第七期原載）は董作賓氏の『殷曆譜』の旬譜の空白の一部を甲片の綴合によって卜旬の辭曆六ヶ月を發見した。二、正日本藪內淸氏對殷曆的誤解（『大陸雜誌』第五卷第九期原載）は藪內氏が『東方學報』第二十一冊に載せた董氏に對する殷曆の批判である「殷代の曆法」に嚴氏が答えた論文で、項目は一、引言　二、小雪節的誤植與誤解　三、無節置閏的解釋　四、四分術與至日　五、對于骨甲的正確認等によって藪內氏の殷曆に對する態度を論じる。三、八月乙酉月食腹甲的拼合與考證的經過（『大陸雜誌』第九卷第一期原載）

嚴氏が董氏の『殷曆譜』と『殷代月食考』を讀んで、甲編の一二八九版の「八月月㞢食聞」の辭が、一七四九片と拼合することを知り、八月月食の正確な日を發見した。四、兩宋月食攷（もと『大陸雜誌』第九卷第三、四、五期に載す）董氏の「殷代の月食攷」で年代學上の波動として、三十一年の月相甲子周期、九三年の交食甲子周期を發見した。これに對し嚴氏は交食甲子周期は確定的なもので古代殷商だけでなく後世の宋代の天文志においてもそれを見るし、また月相甲子周期も爭論することのできない證明をされたと論ずる。五、一論「殷曆譜糾譑」（もと『大陸雜誌』第十卷第一期に載す）は魯實先氏の「殷曆譜糾譑」に對する批判を收める。附錄に董作賓の「殷曆譜的自我檢討」、許倬雲の「殷曆譜氣朔新證舉例」（もと『大陸雜誌』第十卷三期に載す）は魯實先に對する批判。以上七篇を錄し出版は一九五五年、藝文印書館。

註〔二〕　藪內淸（一九〇六——）神戶市に生れる。昭和四年京都大學理學部卒業。京都大學名譽教授。著書に『隋唐曆法史の研究』、『天工開物の研究』、『中國中世科學技術史』、『中国の天文曆法』らがある。

註〔三〕　藪內淸氏の回答を見ていない。藪內氏の董作賓氏の殷曆に對する批判論文は「殷代の曆法－董作賓の論文について」東方學報京都二十一冊（一九五二）と「殷曆に關する二、三の問題」東洋史研究十五卷（一九五六）であり、最初の論文について嚴一萍氏は「正日本藪內氏對殷曆的誤解兼辨日至」大陸雜誌第

五巻（一九五二）を書いて反駁をし、あとの論文については「答藪内清氏『關於殷的兩三個問題』」大陸雜誌十四巻の論文を書き論争された。現在藪内氏の總括的な再批判として考えられるのは『中国文明の形成』（岩波書店一九七四年刊）の第四章殷・周の天文暦法であろう。

註〔四〕　嚴一萍氏の「二論殷曆譜糾論」は發表されていないのではないか。

註〔五〕　許倬雲については傳未詳。「殷曆譜氣朔新證」は『大陸雜誌』第十巻第三期に掲載された。本書に附錄として收録されている。

八四、甲骨續存〔一〕

解放以來、我曾編印過「戰後京津新獲甲骨集」，「戰後寧滬新獲甲骨集」，「戰後南北所見甲骨錄」等三書，（註二）收錄抗戰勝利，復員歸來，在南北各地所得見的甲骨文字一萬片左右。最近幾年，由於工作的需要，常到各處參觀，於公私所藏，續有所見，隨手描錄，或施墨拓，日久漸積，就多了起來。畧加整理，我想還是把它發表出來，好供大家研究的方便。書編訖，題名爲「甲骨續存」。

本編體例，一切仍仿前出三書。著錄先後，以時代爲序；同一時代，再按照類分。惟以採錄的家數較多，爲了避免煩瑣，才把它們混合起來，編拓本爲上編，摹本爲下編，號碼各自起訖。計錄拓本二七五五，摹本九九八，共三七五三片。採錄來源，另作採錄資料索引表，附於後。

甲骨時代，仍暫分四期

上編自一到一四六五，下編自一到五九八，爲一期，即盤庚、小辛、小乙、武丁四王之物。其中上編一到一四三二，下編一到五七八，當屬於武丁時。上編一四三三到一四六五，下編五七九到五九八，筆畫或纖細，或扁寬，或勁挺。我因見這期卜辭有父丁、子庚的稱謂，父丁即祖丁，子庚即盤庚，疑皆當屬於武丁以前，即盤庚、小辛、小乙時之物。近見日本學者著作，頗以我這種說法爲然。但論者或以當屬於武乙、文丁時，或以當屬於武丁的末期。未敢必決，故附於武丁時之後。

上編自一四六六到一七二七，下編自五九九到七三〇，爲二期，即屬於祖庚、祖甲時。

上編自一七二八到二二七〇，下編自七三一到八六一，爲三期，即廩辛、康丁、武乙、

文丁四王之物。這期甲骨，根據稱謂，有的確可以分成廩辛、康丁和武乙、文丁兩期；也有的確可知其當屬於某一帝王。但絕大多數，都沒有稱謂和貞人可據。字體事類，常是類似混同，難以强分。茲爲慎重起見，姑仍算作一期。

上編自二二七一到二七五五，下編自八六二到九九八，爲四期，即屬於帝乙、帝辛時。

每期甲骨，再以事類爲次。按其性質，仍分爲來源、氣象、農產、祭祀、神祇、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等二十四門。

（註一）胡厚宣、戰後京津新獲甲骨集四冊，一九五四年，羣聯出版社出版。又戰後寧滬新獲甲骨集二冊，戰後南北所見甲骨錄三冊，都是一九五一年來薰閣書店出版。

解放以來、私は曾って『戰後京津新獲甲骨集』（『戰後京津新獲甲骨集』註〔三〕・本輯三二頁參見）『戰後寧滬新獲甲骨集』（『戰後寧滬新獲甲骨集』註〔三〕・第四輯二四九頁參見）『戰後南北所見甲骨錄』（『戰後南北所見甲骨錄』註〔三〕・第四輯三〇〇頁參見）等の三書を編印した。（註二）抗戰の勝利で、復員して歸って、南北各地にあって得た所の甲骨文字一萬片の物を收錄した。最近の幾年かは、仕事の需要によって、常に各處に行って公私の所藏を參觀し、續いて所見があれば、思うまゝに描錄し、或は墨拓を施し、日久しく漸やく集積し就ち多くなりはじめた。ほぼ整理を加え、私はまたそれらを發表することとしようと思ったのは、よろしく大家の研究の方法に供せんためである。書編訖り、題名を『甲骨續存』とした。

本編の體例は、一切すなわち前出の三書にならった。著録の先後は、時代を以て順序とし、同一の時代は、再び類分け通りにした。ただ採録の家數が比較的多いので、煩瑣なことを避けて、他のものとまぜた。拓本を上編とし、摹本を下編として編した。番號は各自開始より終りまで。録する拓本は二七五五、摹本は九九八で、すべて三七五三片をかぞう。採録の來源は、採録資料索引表を後に附した。

甲骨の時代は、すなわち暫定的に四期に分ける。

上編は一より一四六五まで、下編は一より五九八までで一期とする。即ち盤庚、小辛、小乙、武丁の四王の物である。そのうち上編の一から一四三二まで、下編の一より五七八までは、當に武丁時に屬する。上編一四三三より一四六五までと、下編五七九より五九八までは、筆畫はあるいは纖細で、あるいは扁寛で、あるいは勁挺である。私はこの期のト辭に父丁、子庚の稱謂を見ることに因って、父丁は即ち祖丁、子庚は即ち盤庚で疑うに皆な當に武丁以前に屬する、即ち盤庚、小辛、小乙時の物である。近く日本學者の著作に見え〔三〕、頗る私のこの種のいい方を是とする。ただ論ずる者は、或は當に武乙、文丁の時に屬し、或は當に武丁の末期に屬する。未だしいて必ず決定しようとしない。故に武丁の後に附す。

上編は一四六六より一七二七までと下編五〇九九より七三〇までは、二期にして、即ち祖庚、祖甲の時に屬する。

上編一七二八より二二七〇までと、下編七三一より八六一までは、三期であって、即ち廩辛、康丁、武乙、文丁四王の物である。この期の甲骨は、稱謂を根據として、的確に廩辛・康丁と武乙、文丁の兩期に分けることが出來る。また的確にそれが當に某の一帝に

屬することを知ることが出來る。ただ絶大多數は、みなよるべき稱謂と貞人がない。字體・事類は、常に類似混同しており、強いて分け難い。茲に慎重に考えをなせば、しばらく仍ちかぞえて一期とする。

上編の二二七一より二一七五五までと、下編の八六二より九九八までは四期にして、即ち帝乙、帝辛時に屬す。

各期の甲骨は、再び事類を以て順序とする。その性質にかんがみて仍ち分ける、來源、氣象、農產、祭祀、神祇、征伐、田獵、芻魚、行止、卜占、營建、夢幻、疾病、死亡、吉凶、災害、諸婦、多子、家族、臣庶、命喚、成語、紀數、雜類等の二十四門とする。

（註一）胡厚宣、戰後京津新獲甲骨集四冊。羣聯出版社出版。また戰後寧滬新獲甲骨集二冊、戰後南北所見甲骨錄三冊、みな一九五一年來薰閣書店出版である。

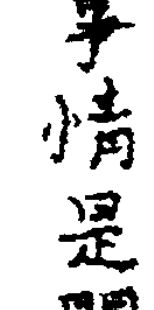
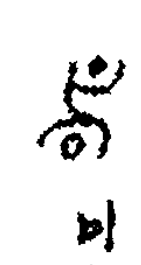
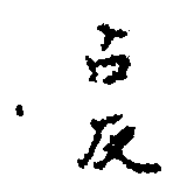
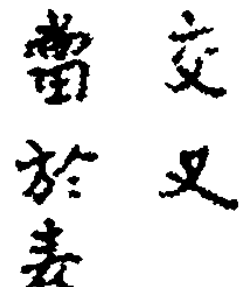
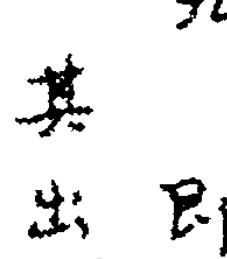
註〔二〕胡厚宣氏の編纂による。本書は「京津」「寧滬」「南北」につづいて一九五三年春から一九五三年秋にいたるまでに、各地を歴訪して收集したもので、その努力は前三書と同じであるが、卜片の出處、所藏はすべて巻末に明記し、公私機關四十ケ處に及んでいる。そのうち我國に到來した三井家の五五片の墨拓が收められている。その全卜片は四千片近い數で、既出の著録と若干重復するものもある。また『戰後平津新獲甲骨集』中の資料も本書に選録されている。本書の編輯は、前出の書の體例を襲いで上下二編とも時期、事項別に配列してお

り、時期區分は、胡氏の見解により四期として詳しく述べている。この序文では本書の資料についてのうち特に注目すべきものを擧げ詳しく述べている。出版は羣聯出版社。一九五五年。

註〔三〕「分期について近く日本の學者の著作に見え、頗る私のこの種のいい方を是とする。」について誰の論文をいうか不明。

甲骨有龜背甲、龜腹甲和左右牛胛骨的不同；有兩片為一甲或一骨的正反面，或三片為一骨的正反和臼面者；又本書所錄，間有已見著錄於他書，或先錄摹本，現又錄拓本，或先錄拓本，現又誤錄摹本者；又本書所錄有與他書或本書之片可以拼合者，均當於以後摸寫釋文時，詳細注出。現在暫不煩述。

至於本書資料，有比較特殊者，請約畧述之。

首先下編三八八、三八九和四四二、四四三，是兩版完整龜腹甲的表面和背面。三八八是一版龜腹甲的表面，四兆四辭，占卜兩件事情。一件事情是問這個人來不來。右上一辭占正面，說「戊寅卜，設貞，其來」；右下一辭占反面，說「 不其來」。另一件事問沚戠這個人來不來。右上一辭占正面，說「戊寅卜，設貞，沚戠其來」；左下一辭占反面，說「貞沚戠不其來」。四辭兩事，正反面左右上下交叉。卜兆都是第二卦。兩事的占辭都刻在三八九，即同一龜腹甲的背面。右邊一辭，即相當於表面一辭的地位，刻辭說「王占曰，其出，其隹丁不出，其有疾」。左邊一辭，即相當於表面沚戠一辭的地位，刻辭說「王占曰，戠其出，隹庚」。

四四二是另一版龜腹甲的表面，左邊六兆，一、二、三、四、五、六，右邊七兆，一、二、三、四、五、六、七，次序都是自上而下，占卜般這個人有無災禍的事情。左邊一辭占正面，說「戊午卜，由貞，般其有禍」。右邊一辭占反面，說「戊午卜，由貞，般無禍」。四四三是同一龜腹甲的背面，刻占辭，說「王占曰吉，無禍」。

兩龜都是武丁時所卜，卜兆刻過，卜辭字劃裏邊塗着赭色，和前中央研究院一九三六年春季第十三次發掘殷墟所得一二七坑的整坑龜甲作風相同，疑為同時所卜，或即為同坑所出之物。有一個最好的證明，本書下編三八八、三八九是第二卜，殷虛文字乙編六八七七、六八七八是第三卜，殷虛文字乙編七二七、七二八是第四卜，三版表背面同文，乃同時為同事而占卜，（看附圖一至六）這便是我所說的一事多卜，卜辭同文的例子。（註二）另外還應該有一版第一卜，尚未發現。

甲骨文關於這種一事多卜，卜辭同文的例子，我前在「卜辭同文例」一文（註三）所擧已經很多。後編「京津」、「寧滬」兩集，都曾補充了一些。今本書除前擧下編三八八、三八九之例；又上編九七二、九七三和菁三、四同文，其摹本已見「寧滬集」外；上編一〇一三說「河不喪衆，其喪衆」，和下編三三七同文；下編四九〇說「于西南」，和下編四九一同文；上編四六說「叀伐羌龍」，和京一二九三、拾五、五同文；契六四六、鐵一〇五、三、與此為同一事類的反面；上編五五一說「舌方其至于象土」，和佚二一同文，佚為第三卜，此為第四卜。

殷代卜龜，多為南方所貢。龜甲上有專記來源的記事刻辭。或言入，或言來，或言氏。入就是貢入，來就是送來，氏即是致。（註四）本書下編四四說「六來龜」，下編六四說「龜氏」，下編五七說「來氏龜」，是氏龜的記載，除記事刻辭外，亦見於卜辭。五七說「來氏龜，雷八、

龜五百十」，黿和鼉疑都是龜的名稱和種屬。

甲骨文專記甲骨來源和祭祀甲骨的記事刻辭，有甲橋、甲尾、背甲、骨臼、骨邊等五種。我曾作「武丁時五種記事刻辭考」一文。（註五）後編「京津」「寧滬」「南北」等三書，都補充了一些例證。今本書又錄甲橋刻辭五十七，（註六）甲尾刻辭四，（註七）骨臼刻辭二十五，（註八）骨邊刻辭四。（註九）

至於上編一〇八九乃背甲頂端，上編一〇九一乃尾甲背面，都是貞卜史官簽名的例證。詳拙作「卜辭記事文字史官簽名例」一文。（註一〇）

下編一六六說「庚辰卜，貞翌癸未𠂤西單田，受有年。十三月」。占卜在西郊平坦的土地上，施用肥料，問將來能否得到好的收成。我曾根據它和前五．二七．六「𠂤有足，乃圣田」，（註一一）後下一三．七「𠂤口單口」等三辭，作「殷代農作施肥說」。（註一二）文發表後，續有所得。珠四〇五說「𠂤出田」，乙八二九五說「𠂤田」。今本書上編一七七說「令角𠂤出田」，辭更完整，占卜命角這個人在田地上施用糞肥。都可作前文的補證。

甲骨文稱小臣和眾人者常見。（註一三）本書下編四七六說，「貞叀𡧍乎小眾人臣」，合小臣眾人而稱小眾人臣，這樣的例子，在過去少見。「叀𡧍乎小眾人臣」即「呼𡧍小眾人臣」，獨前六．一七．五和前六．一七．六「乙亥卜，貞令𡧍小耤臣」的「令𡧍小耤臣」。𡧍為人名，小耤臣和小眾人臣是他的職位。小耤臣就是耤小臣，是管農業生產的官。（註一四）小眾人臣就是眾人小臣，是管理眾人也就是管理奴隸的官。合此兩辭看來，𡧍在殷代是管理着大批奴隸以從事於農業生產的一個小臣之官，就很明白了。

本書收錄甲骨有關於農業生產者，如言「凷」（上一七六），「耤」（上一七五）「𦔫」（下八八六），「乎𤰔𣏗黍」（下六〇），「乎黍于凷受年」（上一七八），「叩受年」（上一七九）「受黍年。受稻年」（上一八〇），

「帝姘受黍年」（下一六四）。殷人以年景收成，為上帝所授，說「帝受我年」（上七二）「帝受我又」（上二一九、四七九、六七二）。以降雨者為雲，說「茲云其雨」（上一〇七），「茲入云其雨」（下九五）。以風雨過大則成災，說「鳳隹禍」（上一七四），「茲雨不隹禍」（下一三七）。倘久不下雨，就以為是上帝降熯，說「帝熯我」（上四八〇）「帝其熯我」（下一五六），或「上帝降熯」（上一六八）。

甲骨文每言「立中」，「𢦔中」，亦作「立㫃」。中字甲金文作𠁩，亦作𠁩𠁩。其義本為旗。秦漢有人名「中旗」，史記天官書言「旗中」。本書下編八〇三說，「癸酉貞，方大出，立中于北土」。商立中，方亦立中，知立中者，當為軍隊駐紮、武裝墾殖，或者是原始氏族社會立旗圈地，開闢疆土的孑遺。

關於殷墟出土的人頭骨刻辭，我前在「京津集」中，曾著錄兩版，（註一五）今本書二三五八，又是一塊。原物經吳定良教授鑒別，定為人的右顱骨。僅賸下了一個「白」字，也是殺用戰俘尊長以祭祀祖先的記事刻辭。

本書所錄，有殺人祭祖先的卜辭很多。除言「人歲」（下六〇九、六二七），「用羌」（下一〇二），「𠬝羌」（下七五五），「用辰來羌」（下二六五）「用氐羌」（下五三），「氐羌用」（上一六〇五），「用執」（上一七九五、下一六一），「𢾅用」（下七五二），「用執用𠬝」（下二六八），「𠕋𠬝」（下一八二、二七〇），「又𡚾」（上三四〇），「烄」（上一〇九、一八三一，下七四四），「烄汏女」（上一七七七），「又二𠬝」（下五八二），「烄三妾」（下七四四），「五羌」（下二三二），「用六𢀛羌」（下二六六），「羌十人」（上一八八二），「十𠬝」（上三〇四），「用十人五」（上一七九三），「伐羌十又五」（上一四九九），「伐羌十又八」（上一四九九），「卅羌」（下七八四），「王賓卅人」（下二三二七），「刞羌百」（上三四七），「百羌」（上三四八），「三百羌」（下一九五），「羌四百」（上一九三）之外，下編九一七說「庚辰，王卜，在𣏟貞，今日其逆旅，已執于東單，亡𡿧」，是占卜迎接執旋歸來的師旅，並殺用俘虜於東郊的卜辭。九一五說「……小臣牆从伐，禽危

𡩜……人廿人四、𠬪千五百七十，𩠳百……丙，車二丙，𩡧百八十，函五十，矢……又白麐于大乙，用鬼白及……于且乙，用𡩜于且丁，𠈖甘京卯……」，是記小臣牆从王征伐，獲得各種戰利品，並殺用俘虜酋長以祭祀祖先。其時代當屬於帝乙帝辛。在十幾萬片甲骨文字之中，這是最重要的一條殷末戰爭史料，即在周金文中，亦惟有小盂鼎銘可以彷彿似之。車上兩字，以前二．一九．一言「馬廿丙」，續一．二九．四言「馬五十丙」例之，當為馬幾丙。𩡧字不識，當為盾牌之屬。是戰利品中除𠬪𩠳之外，還有盾牌函矢和車馬。殷代田獵用車，見鐵一一四．一（註一六）前七．五．三，前七．一八．三，龜一．七．一、一，（註一七）菁三，寧三．二四，（註一八）拓本見本書上編九七二。以車戰者，見於殷虛文字乙編七七九五，說「（癸）丑卜，㱿貞，自今至于丁巳，我𢦏𠂤。王占曰，丁巳我毋其𢦏，于來甲子𢦏。旬出一日癸亥，車弗𢦏。之夕𡆥。甲子允𢦏」。（看附圖七）今以此辭戰利品中得有車馬證之，是殷代除使用車獵外，又使用車戰，蓋無可疑。而殺戮敵人的諸多酋長以祭祀諸多祖先，其戰爭的激烈，砍伐的悽慘，由這一片，也就可想而知了。

本書收錄甲骨有關於征伐者，如言「方其出」（上五〇五、五〇七、五一四）「方允出」（上五〇六、五〇八），「方亦出」（上五〇九、五一〇）「方其大出」（上五〇四、五一二），「𢀛方其出」（上五四五、五四八），「𢀛方出，隹有作禍」（下二八五），「𢀛方出，不我禍」（上五四六），「𢀛方不隹禍」（上五四七），「𢀛方其亦正」（下二八六），「𢀛方其正于𡆥」（上五五〇），「𢀛出王鄉」（上五四九），「告𢀛方」（上五五三、五五五），「見𢀛」（上五五二），「勿執多宰，乎望𢀛方。乎氏多宰伐𢀛方」（下二九一），「乎伐𢀛方」（上五五八、五五九、五六〇），「乎𢦔𢀛方」（上五六九、五七〇），「𢀛方于𠭯亦𢦏」（下二九七），「王伐央方。王从𠬪」（上六二七），「王叀北羌伐」（上五九七），「乎从望乘伐下危，受出又」（上六二三），「王𠦪三千人乎伐𢀛方𢦏」（下三〇），「𠂤人伐巴方」（上六三五），「王从沚𢦔」（上六六八至六七五、六七七

至六八二、六九〇），「王从望乘」（上六八六、六九〇、六九一），「王从侯告」（上六九四），「沚𢦔爯冊」（上六八三至六八五、六八九），「爯冊」（上六九三、六九六、一一九），「登人」（上七〇七），「登人三千」（上七〇八）「登人五千」（上七〇九）「𢦏冀方」（下三〇一），「及龍方」（下三〇二），「冓方不𡉓」（下三〇五），「其克𢦏周」（下三一七）。

有關於田獵者，如言「獸」（下三四三至三四六），「𢓊」（上二〇〇六），「㽙」（上七三七、七三八），「𤰈」（下三四九），「𠙶」（上七三五、七三六、七六七），「焚」（上二〇〇五），「王田大彔」（下九二三），「田于𡆥」（上七二六），「田于兕𡆥」（上七二三），「王田盂，隻鹿二」（上二三六九），「王田𠭯，隻兔十，雉十又一」（上二三七〇），「王田𡨦，隻虎一，狀六。虎一狀九」（上二三七四），「亞𢦔燕」（上二三七三），「隻兕一」（上二三七〇、二三七一），「隻百十有四」（下三五八）。

甲骨文有掌田獵的官名叫犬，擔任着發現了野獸，就向殷王報告。如說：「在盂犬告又鹿，王田」，（註一九）「在盂犬告豚于萊，王其从」。（註二〇）「王其从盂犬曰田，𡆥尤，其雨」。（註二一）「在𣶒犬中告麋」。（註二二）「在鷄犬告見一鹿」。（註二三）今本書下編八二一說「盂犬告鹿，𡆥其从，𢀛」，即其例。

甲骨文有祭出日入日者，詳拙作「殷代之天神崇拜」一文，（註二四）後見乙二〇六五說，「戊戌卜，內，乎雀𠭯于出日于入日」。今本書上編一八二九說「又出日」，一八三〇也說「又出日，又入日」。

甲骨文有日月食記載，前統計日食二次，月食五次。（註二五）後見契六三二有殘文說「夕口口食」。今本書下編一四九說，「十一月有食」，疑均為月食之例。是甲骨文裏關於天象的記錄，已經有七次月食。

甲骨文祭四方的卜辭，曾見拙編「戰後南北所見甲骨錄」，明六八一說，「辛亥卜，𠨉彡彰，其又于四方」，明四八七說，「庚戌卜，寧于四方，其五犬」。今本書上編一八二九也

說，「酒四方」。

本書所錄甲骨有關於營造建築者，如言「乍邑」（上八〇五）「[illegible]邑」（上八〇四），「乍[illegible]」（上八〇六），「東[illegible]」（上八一三），「寢」（上八一〇、八一二），「[illegible]」（上八一三）。

有稱宗示者，如言「帝宗」（上二二九五），「大乙宗」（上一七八七），「祖乙宗」（上一七八八），「康祖宗」（下八七六），「丁宗」（上三三五），「右宗」（上一七五九），「[illegible]示」（下一八四），「伊示」（下七六六），「大示」（上三三三、一八二四、下七六五），「小示」（上一七八六），「四示」（下七六七），「五示」（上一八二三、下七六七），「六示」（上一七八六），「十示又二」（上一七八六）。宗即庙。示即祇，亦即世。

本書所錄甲骨，其先公、先王、先正之名有比較特殊者，如言兇（上一七八〇），高祖乙（上一七八九），中宗祖乙（上一七九五、一八〇二），祖丙（下八七三），兄庚（上一五一〇、五二、下六二八、六二九），子庚（上一四五六），高妣己（上三一〇），高妣庚（下二二三），中母（上一四五九），之若（上一五〇七、一七八一、一七八二）等。

又有先妣特祭之例，如言「王賓且丁奭妣己。王賓祖丁奭妣己。王賓小乙奭妣庚」（上一五三三），「王賓中丁奭妣癸」（上一五一四），「王賓小乙奭妣庚」（上一五一五），「王賓武丁奭妣癸」（上二二九四），「王賓示癸奭妣甲」（下八七九），「王賓大乙奭妣丙」（下八八〇）。

商朝人有了災害，常以為是先祖作它。據本書所錄，如說「隹岳它。隹夒它。隹企它」（上九九〇），「且乙它」（上九九七），「且丁它」（上九九八），「父甲它王」（上九九七），「父甲它我」（上一〇〇一），「父乙它」（上三九、一一九、九九五、一〇〇二、一〇〇三），「父辛它王」（上一〇〇四），「多介父它」（上一〇八）。「多介父它」（上一〇〇八）。或以為先妣作它，如說「娥它王」（下四三四），「妣己它」（上一〇一二），「毋丙它帚姘」（下四三五）。有時還以為上帝的臣工作它，說「帝工它我」（上一八三二）。

卜旬之後，有隨記祭祀甲祖者，如言「甲申祟小甲，劦大甲。甲午祭戔甲，劦小甲。甲辰祭羌甲，祟戔甲」（上二六八七），「甲戌祟虎甲，劦日羌甲」（上二四六三），「甲辰祭小甲」（上二四六五），「甲戌祭戔甲。甲申翌羌甲」（上二六八九），「甲寅翌上甲。甲戌翌日大甲。甲申翌日小甲」（下九六六），「甲寅劦日大甲。甲戌劦日且甲」（下九六八），「甲戌祟大甲」（下九六五），「甲申翌日大甲」（下九六七），「甲寅彡羌甲」（下九六四）。

卜旬之後，有隨記年祀者，如言「隹王四祀」（上二二七六），「王廿司」（下九四二）。又或言「隹王來正人方」（下九六三）。

甲骨文有卜婚娶者，如殷虛文字乙編四七三六說「辛卯卜，㱿，乎取奠女子。辛卯卜，㱿，勿乎取奠女子」。本書下編五八九說「甲戌，余卜，取后」，是殷王親卜取后的卜辭。

甲骨文又常有占卜生育的卜辭。或言「凡生」，或言「𠦪生」，或言「𠦪王生」。其祈求的對象是高妣己，妣丙，妣己和妣庚（註二六）。今本書下編七七三也說「𠦪生」。卜辭中又有受生之占，前曾見拙編「戰後南北所見甲骨錄」，說「丁酉卜，賓貞，帚好有受生。王占曰，吉，其有受生」。（註二七）今本書上編一〇六五片也說「貞其有受生」。

商朝是帶有父權制家庭式性質的奴隸制社會。所以重男而輕女。說見拙作「殷代婚姻家族生育制度考」一文。（註二八）甲骨文占卜王的婦后生產，以生女為不嘉。如說「甲申卜，㱿貞，帚好冥，不其妿。三旬㞢一日，甲寅冥，允不妿，隹女」。「甲申卜，口口，口好冥，妿。王占曰，其隹丁冥，妿。其隹庚冥，弘吉。三旬㞢一日甲寅冥，不妿，隹女」。（註二九）（看附圖八）「壬寅卜，㱿貞，帚口冥妿。王占曰，其隹口申冥吉，妿。其隹甲寅冥，不吉，[illegible]，隹女」。（註三〇）「……申帚好口，口妿，隹女」。（註三一）「甲辰口，㱿貞，口目冥不妿，女。五月」。（註三二）「……[illegible]，癸巳冥，隹女」。（註三三）「……不妿，隹女」（註三四）今本書上編一〇二二說，「帚好冥，不妿，隹女」，一〇六四說，「冥，不妿，隹女」，均可為前文的佐證。但以前所見，僅說「不妿，隹女」，其生男為妿者，並未見於卜辭。今本書上編一〇四三說，「帚[illegible]冥妿，隹[illegible]子」。以生子為妿，子即男子，以生男為妿，生女為不妿，重男而輕女，乃得到完全的證明。

本書所錄甲骨，關於諸子之名，有子[illegible]（下二〇九、二二四），子[illegible]（下二五〇），子[illegible]（下四一四），子效（下四六〇），子[illegible]（上一〇六七），子[illegible]（上一〇六八），子[illegible]（上一〇六九），子洋（上一〇七〇），奴子（下七〇）和多子（下四五八）。

殷契粹編一一六二說「丁酉卜，其乎㠯多方小子小臣，其敎戈」。郭沫若先生說，「㠯多方小子小臣其敎戈，當為一辭。敎即教字，見說文。戈殆戒之省。據此，可知殷時鄰國，多遣子弟遊學于殷也」。（註三五）今本書下編四五九說「多子𦥯」，𦥯即學，「多子學」，猶言小子其受教。郭說確不可易，這一個很好的證明。

本書所錄甲骨，其官名有多射（上二六、七〇五、一〇八一），多新射（上一〇八三），多馬（下三八〇），多馬亞（下六六）小臣（上二〇五、下四七五），多宁（上一八〇四），多[illegible]（上一〇四一），戾告（上六九四），[illegible]庚（下四六三），和男[illegible]（下四六六）。

又有占卜關於夢幻、疾病和死亡者，如言「王夢隹福」（上八一四），「王夢隹孽」（上八一七），「帚有夢，勿祟，有旬」（上八五五）。如言「王有疾」（上八一九），「帚有疾」（上八二〇），「[illegible]有疾」（上八二二），「嫂骨凡有疾」（上八二三），「[illegible]骨凡有疾」（上七三九），「有疾，隹黃尹它」（下三八四），「王疾夕告，小臣若」（下三八三）。如言「帚鼠其死」（上八三四），「龐不死」（上八三六）等。

又甲骨記數最多的，常見於人祭和征伐的卜辭。人祭最多的「𠕋千人」，甚至「戈伐二千六百五十六人」。征伐方國，徵集人數，普通都是「登千人」，「登人三千」，「登人五千」。最多的有「登人三千登旅萬」。甚至「三萬」。言萬人者，前曾見拙編「戰後南北所見甲骨錄」（註三六）。今則本書下編四八五說「乎口萬口」，五八二說「萬人歸」。

由上編一七七八說「酒伐于王。酒伐于[illegible]」，上編九九〇說「隹岳它，隹夒它。隹企它」，知岳與企都是先公之名。由下編一七八說，「上甲眔河」，知河亦先祖。上編一八五九說，「乎沐帝子」，以沐為上帝之子。上編一五九四說，「𠦪于王帝」，以上帝為王之上帝。上編七〇說「司工」，疑即後之「司空」。上編一六八說「上帝降莫」，為武丁時所卜，知帝之加上，不始於帝乙帝辛時。

其他如說「氏魚」（上三九〇），「氏王」（上一三六八），「㞢[illegible]」（上一三三三），「叶占」（上一二八），「非田」（下四四四），「[illegible]牛」（上一七九六），「其上」（上一三〇七），「不用」（上一七八七二〇二四），「叶王事」（上一〇九三），「叶朕事」（上一一二〇），「王曰集貝」（下二二八），「三卜，占曰，幸」（下三八一），「歲于丁，尋王」（下七三），「叀亞氏眾人步」（下三七七），「令鬼[illegible]剛于高」（下八四六），以及字之特殊者，像[illegible]、[illegible]（下九五）[illegible]（下一三三）[illegible]（下一七七）、[illegible]（下四七七），[illegible]（下五〇五）[illegible]（下五〇七），[illegible]（下三三）[illegible]（下七六五）[illegible]（下七六五）[illegible]（下八〇三）之類，不一而足。下編三三〇片的[illegible]字，象人一手持弓，一手持首，這個字常見於早期的金文。下編四七八片的[illegible]字，从戈砍奚，四點像砍去人頭所流的血液，疑為伐字繁文。伐字有作[illegible]者（註三七）象用戈砍伐羌人俘虜的頭形。[illegible]字从戈从奚，奚是奴隸，乃象砍伐奴隸之形。

如此之類，不能備舉，都是研究商史的重要資料。

（註二） 看同下註三。

（註三） 胡厚宣，卜辭同文例，刊歷史語言研究所集刊第九本，一九四七年。

（註四） 看同下註五

（註五） 胡厚宣，武丁時五種記事刻辭考，甲骨學商史論叢初集，第二冊，一九四四年。

齊魯大學出版。

（註一六）上一、三、四、六、八、一〇、一二、一四、一六、一八、二〇、二二、二三、二五、二七、二八、三〇、三一、三三、三五、三七、三八、四〇、四二、四四、四五、四七、四九、五一、五二、五三、五五、五七、五九、八五、八七、下二、四、六、八、一〇、一二、一四、一六、一七、一八、二〇、二二、二四、二六、二八、三〇、三二、三四、三六、三八、四〇。

（註七）上六〇、下四一、四二、四三。

（註八）上六二、六三、六五、六七、六九、七一、七四、七六、七七、七八、下四六、四八、五〇、五二、五四、五六、五九、六二、六三、六五、六七、六九、七一、七三、七五。

（註九）上八〇、八二、八三、八四。

（註一〇）胡厚宣、卜辭記事文字史官簽名例、刊歷史語言研究所集刊第十二本、一九四八年。

（註一一）圣原釋紂、當更正。

（註一二）胡厚宣、殷代農作施肥說、刊歷史研究一九五五年第一期。

（註一三）看胡厚宣 卜辭中所見之殷代農業、甲骨學商史論叢二集第一冊、一九四四年、齊魯大學出版。

（註一四）看同注一三。

（註一五）京五二八一、五二八二。

（註一六）前五・六・四。

（註一七）以上四片同文、看同注三。

（註一八）以上二片同文、看胡厚宣戰後寧滬新獲甲骨集序。

（註一九）甲六九二。

（註二〇）南師二・二〇七。

（註二一）龜二・二八・一四。

（註二二）粹九三五。

（註二三）佚九九五。

（註二四）胡厚宣、殷代之天神崇拜、甲骨學商史論叢初集第二冊、一九四四年、齊魯大學出版。

（註二五）看胡厚宣、甲骨文中之天象記錄、刊責善半月刊二卷十七期、一九四一年。又同注二四。又卜辭中所見之殷代農業。

（註二六）看胡厚宣、殷代婚姻家族宗法生育制度考、甲骨學商史論叢初集第一冊、一九四四年。

（註二七）南師一・八〇、又八一。

（註二八）同註二六。

（註二九）乙七七三一。

（註三〇）乙四七二九。

（註三一）京一九八二、二〇五三合。

（註三二）乙三三七三、三四九八、三九五四合。

（註三三）乙二三三三。

（註三四）珠五二六。

（註三五）郭沫若、殷契粹編考釋一四九葉、一九三七年、日本文求堂書店出版。

（註三六）南明一九一。

甲骨には龜背甲、龜腹甲と左右牛胛骨が同じでないものがあり、兩片で一甲となり、或は一骨の正反面となったりしておるもの、或は三片が一骨の正反と仰面となるものがある；また本書に錄するところで、間〻已に他書の著錄に見え、或は先に摹本に錄され、現にまた拓本に錄され、或は先に拓本に錄され、現にまた摹本に誤り錄されているものもある。また本書に錄する所は他の書にあるもの或は本書の片と拼合すべきは、みな以後の摸寫釋文の時に當って、詳細に注出する。現在暫くくどくどと述べない。

本書の資料に至っては、比較的特殊なものが有れば、これを略述してはっきりさせる。はじめまず下編の三八八、三八九と四四二、四四三は、兩版完整な龜腹甲の表面と背面である。

三八八の一版は龜腹甲の表面である。四兆四辭は、二件の事柄を占卜している。一件の事柄は〓この人が來るか來ないかを問うている。左上の一辭は正面に占い、いう「戊寅卜、㱿貞、〓其來」と。右下の一辭は反面に占い、「〓不其來」と。もう一件の事は沚戠たるこの人が來るか來ないかを問う。右上の一辭は正面に占い、いう「

戊寅卜、㱿貞、沚戠其來」と。左下一辭は反面に占い、いう「貞沚戠不其來」と。四事の二事は、正反面左右上下は交叉する。卜兆はみな第二卦である。二事の占辭はみな三八九に刻してあり、即ち同一龜腹甲の背面である。右邊の一事は、即ち表面の〓の一辭の地位に相當する。刻辭にいう「王占曰、〓其出、其隹丁不出、其有疾」と。右邊の一辭は、即ち表て面の〓の一辭の地位に相當する。刻辭にいう「王占曰、戠其出、隹庚」と。

四四二の一版は龜腹甲の表の面である。左邊の六兆は、一、二、三、四、五、六、右邊の七兆は、一、二、三、四、五、六、七、順序はみな上より下へであり、この人の災禍の有無の事情を占卜している。左邊の一辭は正面を占い、言う「戊午卜、㱿貞、般無禍」と。左邊の一辭は反面を占い、言う「戊午卜、㱿貞、般無禍」と。四四三は同一龜腹甲の背面であり、占辭を刻している。言う「王占曰吉、無禍」と。

兩龜はみな武丁時に卜する所のもので、卜兆を刻して、卜辭の字劃には赭（あか）色を塗っている、前中央研究院一九三六年春秋第十三回殷虛發掘で得た所の一二七坑の完全な坑の龜甲の作風と相い同じである。疑らくは同時に卜するところのものである。或は即ち同坑から出た物である。一つの最も好き證明は、本書下編三八八、三八九は第二卜であり、『殷虛文字乙編』六八七七、六八七八は第三卜で、『殷虛文字乙編』の七二七、七二八は第四卜である。三版の表と背面は同文であり、乃ち同時に同じ事を占卜する。（附圖一より六〔四〕までを見よ。）これは便に私の言う一事多卜で、卜辭同文の例である。（註二）（『戰後京津新獲甲骨集』註〔七〕・本輯五五頁參見）外は應に一版の第一卜に該當するも、まだ發見されていない。

甲骨文はこの種の一事多卜、卜辭同文の例に關しては、私は前に『卜辭同文例』の一文（註三）がある。擧〔例す〕る所は已にたいへん多い。後に編した『京津』『寧滬』の兩集は、みな曾ってすこし補充した。今、本書は前に擧げた下編三八八、三八九の例を除いた。また上編の九七二、九七三と萬の三、四の同文の、その摹本は已に『寧滬集』の外に見える。上編一〇一三に言う「弜不衷盤。其衷盤」と下編の三三七は同文で、下編四九〇に言う「于西南」は、下編四九一と同文である。上編四六に言う「𥝌戈羌龍」は、京〔津〕一二九三、拾五、五と同文である。契六四六、鐵一〇五、三は、此れと同一事類の反面である、上編五五一に言う「吾方其至于爹土」は、佚二一と同文にして、佚の第三卜であり、此れは第四卜である。

殷代の卜龜は、南方の貢（みつぎ）ものである。龜甲上に來源の記事刻辭を専記する。或は入と言ひ、或は來と言ひ、或は氏と言う。入は就ち貢入であり、來は就ち送來であり、氏は即ち致である。（註四）（『甲骨學商史論叢初集』註〔一〕・第三輯二一頁參見）本書の下編四四に言う「六來龜」、下編五七に言う「來氏龜」は、氏龜の記載である。記事刻辭を除いた外は、また卜辭に見える。五七に言う「來氏龜、竈八、鼃五百十」と、竈と鼃〔五〕は疑らくはみな龜の名稱と種屬である。

甲骨文は専ら甲骨來源と祭祀甲骨の記事刻辭を記す、甲橋、甲尾、背甲、骨臼、骨邊等の五種がある。私は曾って『武丁時五種記事刻辭考』の一文を作った。（註五）後に編した『京津』『寧滬』『南北』等の三書に、みな少し例證を補充した。今、本書はまた甲橋刻辭五十七（註六）、甲尾刻辭四（註七）、骨臼刻辭二十五（註八）、骨邊刻辭四（註九）を錄した。上編一〇八九に至っては乃ち背甲の頂端で、上編一〇九一は乃ち尾甲背面で、みな貞卜

史官簽名の例證がある。拙作『卜辭記事文字史官簽名例』の一文（註一〇）（『戰後京津新獲甲骨集』註〔五〕・本輯五四頁參見）に詳しい。

下編一六六に言う「庚辰卜、貞翌癸未屎西單田、受有年。十三月」。は西郊平坦の土地にあり、肥料を施し、將來好よき收獲なるかの能否〔できるかできないか〕の問ひを占う。私は曾って他の前五、二七、六「屎有足、乃圣田」（註一一）、後下一三、七「屎冂單冂」等の三辭を根據にして、『殷代農作施肥說』〔六〕（註一二）を作った。文發表後、續いて得るところがあった。珠四〇五に言う「屎出田」、乙八二九五に言う「屎田」である。今、本書上編一七七に言う「令𡕎屎出田」、辭は更に完全で、占卜は𡕎この個人に田地上に糞肥を施用することを命ず。みな前文の補をなすものである。

甲骨文には小臣と衆人を稱するのは常に見られる。（註一三）（『甲骨學商史論叢二集』註〔一〕・第三輯二七七頁參見）。本書下編四七六に言う「貞叀𥝌乎小衆人臣」〔七〕は、小臣衆人を合わせて小衆人臣と稱する、この樣な例は、過去に少しく見られる。「叀𥝌乎小衆人臣」は即ち「呼𥝌小衆人臣」であり、猶は前六・一七・五と前六・十七・六は「乙亥卜、貞令𥝌小耤臣」の「令𥝌小耤臣」なり。𥝌は人名であり、小耤臣と小衆人臣は彼の職位である。小耤臣は就ち耤小臣で、農業生產の官を管理するものである。小衆人臣は就ち衆人小臣であって、衆人を管理するものであり、また奴隸の官を管理するものである。此の兩辭を合せてみれば、𥝌は殷代には大いに奴隸を管理した農業生產の一小臣の官に從事していたことは、就ちたいへん明白なことである。

本書收錄の甲骨のうち農業生產に關するものであるのは、「甾」（上一七六）「耤」（上一七五）「𥝌」（下八八六）、「乎耤𥝌黍」（下六〇）、「乎黍于𡆥受年」（上一七八）「𠮯受年」（上一七九）

「受黍年。受稻年」（上六〇）「帝姘受黍年」（下一六四）と言うが如し。殷人は作物の收穫を成すを以て、上帝の授る所となし、「帝受我年」（上七二）、「帝受我又」（上二九、四七九、六七三）。という。雨を降すを以て雲となし、「茲云其雨」（上一〇七）、「茲入云其雨」（下九五）という。風雨の大なるを以て則ち災となる。「鳳隹禍」（上一七四）、「茲雨不隹禍」（下一三七）という。倘久しく雨が降らなければ、就ち上帝は𦰩（ひでり）を降すのである。「帝其𦰩我」（下一五六）、或は「上帝降𦰩」（上一六八）という。

甲骨文は毎に「立中」〔八〕「乍中」と言ひ、また「立㫃」に作る。中の字は甲金文は𠁧に作り、また𠁩𠁩に作る。其の義はもと旗である。秦策に人名として「中旗」あり。『史記』天官書に「旗中」と言う。本書下編八〇三にいう「癸酉貞、方大出、立中于北土」と。商の立中は、方もまた立中で、立中とは、當に軍隊が駐在し、武裝して開墾することであり、或は原始氏族社會で區劃した土地に旗を立てて、領土の少しばかりを開闢したことを知るのである。

殷墟出土の人頭骨刻辭に關しては、私は前に『京津集』中にあり、曾って兩版を著錄した。今、本書二三五八は、また一塊である。原物は吳定良教授〔九〕の鑒別を經て、定めて人の右顱骨とする。僅かに一つの「臼」の字を賸下し、また戰爭で俘虜の尊長を殺して以て祖先を祭祀した記事を刻辭している。

本書に錄する所は、人を殺して祖先を祭ることの有る卜辭がはなはだ多い。「人歲」（下六〇九、六二七）、「用羌」（下一〇〇）「呂羌」（下七五五）、「用𠂤求羌」（下二六五）、「用氏羌」（下五三）、「氏羌用」（上一六〇五）「用執」（上一七九五、下一六一）、「執用」（下七五二）、「用執用𠂤」（下二六八）、「㞢𠂤」（下一八二、二七〇）「㞢奚」（上三四〇）、「烄」（上一〇九、一八三一、下七四四）、「烄派女」

（上一七七）、「又二卯」（下五八二）、「烄三妾」（下七四四）、「五羌」（下二二）、「用六百羌」（下二六六）、「羌十人」（上一八八二）、「十及」（上三一四）、「用十人五」（上一七九三）、「伐羌十又五」（上一四九九）、「伐羌十又八」（上一四九九）、「卅羌」（下七八四）、「王賓卅人」（下二三二七）、「則羌百」（上三四七）、「百羌」（上三四八）、「三百羌」（下一九五）、「羌四百」（上二九五）の外を除いて言へば、下編九一七にいう「庚辰、王卜、在𥷚貞、今日其逆旅、呂執于東單、亡災」と。凱旋して歸つきた師旅を歡迎することを占卜したものであり、並に俘虜を東郊に殺したときの卜辭。九一五にいう「……小臣牆从伐、禽𠂤夗……人廿人四、而千五百七十、𡚸百……丙、車二丙、𢏚百八十、函五十、矢……又白麐于大乙、用𢀛白印……于且乙、用夗于且丁、𠦪甘京印……」、と、これは小臣牆が王に从って征伐し、各種の戰利品を獲得し、並に俘虜の酋長を殺して以て祖先を祭祀することを記した。其の時代は當に帝乙、帝辛に屬する。十幾萬片の甲骨文字の中には、これは最も重要な一條の殷末戰爭の史料であり、即ち周金文中には、また惟れ小盂鼎〔十〕にありこれに似ていることとそつくり。車の上の兩字は、前二、一九、一に言う「馬廿丙」、續一、二九、四に言う「馬五十丙」以てこれを例とすれば、當に馬幾丙とする。𢏚字識らず、當に盾牌の屬である。この戰利品中而𡚸の外を除いて、また盾牌、函矢、車馬がある。殷代の田獵には車を用いること、鐵一一四・一（註一六）前七・五・三、前七・一八・三、龜一・七・一・一（註一七）菁三、寧三・二四（註一八）に見え、拓本は本書上編九七二に見える。車戰を以てするものは、殷虛文字乙編七七九五に見える、いう「（癸）丑卜，𡧊貞，自今至于丁巳，我𢦏𠂤。王占曰，丁巳，我毋其𢦏，于來甲子𢦏。旬㞢一日癸亥，車弗𢦏。之夕皿，甲子允𢦏」と。（附圖七を見よ）〔十一〕今、此の辭は戰利品中車馬を有得してこれを證明する。殷代車獵の使用を徐くほか、また車戰を使用し、蓋し疑うべき、

ことはない。而るに敵人の多くの尊長を殺戮して多くの祖先を祭ること、其の戰爭の激烈、砍伐の悽慘は、この一片によって、もはや考へればわかる。

本書に收錄の甲骨で征伐に關わりあるものは、「方其出」（上五〇五、五〇七、五一四）、「方允出」（上五〇六、五〇八）、「方亦出」（上五〇九、五一〇）、「方其大出」（上五〇四、五一一）「舌方其出」（上五四五、五四八）、「舌方出、隹有乍禍」（下二八五）「舌方出、不我禍」（上五四六）、「舌方不隹禍」（上五四七）、「舌方其亦正」（下二八六）、「舌方其正于壺」（上五五〇）、「舌出王卿」（上五四九）、「告舌方」（上五五三、五五五）、「見舌」（上五五二）、「勿執多宰、乎望舌方。乎氏多宰伐舌方」（下二九一）、「乎伐舌方」（上五五八、五五九、五六〇）、「乎戠舌方」（上五六九、五七〇）、「舌方于𢀛亦𢦏」（下二九七）、「王伐𢀛方。王从𢀛」（上六二七）、「王𠂤北羌伐」（上五九七）、「乎从望乘伐下危」（上六三五）、「受出又」（上六二三）、「王𢆶三千人乎伐𢀛方𢦏」（下三〇〇）、「𢀛人伐巴方」（上六三五）、「王从沚戠」（上六六八より六七五に至る、六六七より六八二に至る、六九〇）、「王从望乘」（上六八六、六九〇、六九一）、「王从侯告」（上六九四）、「沚戠爯冊」（上六八三より六八五に至る、六八九）、「爯冊」（上六九三、六九六、二二九）、「登人」（上七〇七）、「登人三千」（上七〇八）、「登人五千」（上七〇九）、「𢦏𢀛方」（下三〇二）、「及龍方」（下三〇二）、「𢀛方不歷」（下三〇五）、「其克𢦏周」（下三一七）と言うが如くである。

田獵に關わりあるものは「獸」（下三四三より三四六に至る）、「𢓊」（上二〇〇六）、「𡇒」（上七三七、七三八）、「𦊕」（下三四九）、「𦊕」（上七三五、七三六、七六九）、「焚」（上二〇〇五）、「王田大𥂀」（下九二三）、「田于𡆥」（上七二六）、「田于兕壺」（上七二三）、「王田盂、隻鹿二」（上二三六九）、「王田𡈼、隻兔十、雉十又一」（上二三七〇）、「王田牢、隻虎一、𢦏六。虎一𢦏九」（上二三七四）、「王登破燕」（上七四六）、「王登集于沚」（下一六六）、「王其𢀛」（上一九一六）、「王射隕鹿」（上一九六八）、

「王射𡥉兕觀」（上二三八三）、「隻虎三、𢦏、𡈼」（上二三七二）、「隻兕一」（上二三七〇、二三七一）、「隻百十有四」（下三五八）と言うがごとくである。

甲骨文に田獵を掌どる官名に犬と呼ぶものがある。野獸を發見したら、すぐに殷王に向って報告することを担任した。「在盂犬告又鹿、王田」（註一九）「在盂犬告豚于菉、王其从」。（註二〇）「王其从盂犬𡆥田、囚尤、其雨」。（註二一）「在𣶒犬中告麋」。（註二二）「在𪂇犬告一鹿」というごとくである。今、本書下編八二一にいう「盂犬告鹿、囚其从、𢍰」は、即ち其の例である。

甲骨文に出日入日を祭ることがあるのは、拙作の「殷代之天神崇拜」の一文に詳しい。（註二四）（『甲骨學商史論叢初集』註[二]、第三輯二一七頁參見）後ち乙二〇六五に見え、いう「戊戌卜、内、乎雀𢦏于出日于入日」と。今、本書上編一八二九にいう「又出日」と、一八三〇にまたいう「又出日、又入日」と。

甲骨文に日月食の記載がある。前に日食の二回と、月食の五回を統計した（註二五）のち契六三二に殘文があるを見ていう、「夕口口食」と。今、本書下編の一四九に言う「十一月有食」と、疑うに均しく月食の例である。これは甲骨文天象の記錄に關するもので、已に七回の月食がある。

甲骨文に四方を祭る卜辭は、嘗ての拙編の『戰後南北所見甲骨錄』に見える。明六八一にいう「辛亥卜、𡆥彡酚、其又于四方」と。明四八七にいう「庚戌卜、𢍰于四方、其五犬」と。今、本書上編一八二九にまたいう、「酒四方」と。

本書に錄する所の甲骨で營造建築に關するものがあるのは「乍邑」（上八〇五）、「𢦏邑」（上八〇四）、「乍𠁥」（上八〇六）、「東𠁥」（上八一二）「𡧊」（上八一〇、八一一）「𡨦」（上八一三）というがごとくである。

宗示を稱するものがある。「帝宗」（上二二九五）、「大乙宗」（上一七八七）、「祖乙宗」（上一七八八）、「康祖宗」（下八七六）、「丁宗」（上三三五）、「右宗」（上一七五九）、「𢆶示」（下八四）、「伊示」（下七六六）、「大示」（上三三三、一八二四、下七六五）、「小示」（上一七八六）、「四示」（下七六七）、「五示」（上一八二三、下七六七）、「六示」（上一七八六）、「十示又二」（上一七八六）というがごとくである。宗は即ち廟。示は即ち祇、示即ち世なり。

本書に錄する所の甲骨、其の先公、先王、先正の名は比較的特殊なものがあり、𠭰（上一七八〇）、高祖乙（上一七八九）、中宗祖乙（上一七九五、一八〇三）、祖丙（下八七三）、兄庚（上一五一〇、一五二、下六二八、六三九）、子庚（上一四五六）、高妣己（上三一〇）、高妣庚（下二二三）、中母（上一四五九）、之若（上一五〇七一七八一、一七八三）等と言うがごとし。

また先妣特祭の例がある。「王賓且丁奭妣己。王賓祖丁奭妣己。王賓小乙奭妣庚」（上一五三）、「王賓中丁奭妣癸」（上一五四）、「王賓小乙奭妣庚」（上一五五）、「王賓武丁奭妣癸」（上二二九四）、「王賓示癸奭妣甲」（下八七九）、「王賓大乙奭妣丙」（下八八〇）と言うがごとくである。

商朝人は災害があったら、常にこれ先祖がこれをなすと考えた。本書に錄する所に據れば、「隹岳它。隹𡆥它。隹企它」（上九九〇）「且乙它」（上九九七）、「且丁它」（上九九八）、「父甲它王」（上九九七）、「父甲它我」（上一〇〇〇、一〇〇一）、「父乙它」（上三九、一二九、九九五、一〇〇二、一〇〇三）、「父辛它王」（上一〇〇四）、「多介父它」（上一〇〇八）と言うが如し。或は以て先妣がなせば它に作る、「娥它王」（下四三四）、「妣己它」（上一〇一二）、「毋丙它帝姘」（下四三五）という如くである。時にまた上帝の臣工がなせば它に作ることがある。いう「帝王它我」（上一八三二）と。

卜旬の後ちに、甲祖を祭祀することを隨記する者がある「甲申𠭰小甲、劦大甲。甲午祭戔甲。𢼄甲。甲辰祭羌甲、𠭰戔甲」（上二六八七）、「甲戌𠭰虎甲、劦日羌甲」（上二四六三）、「甲辰祭小甲」（上二四六五）、「甲戌祭戔甲。甲申翌羌甲」（上二六八九）、「甲寅翌上甲。甲戌翌日大甲。甲申翌日小甲」（下九六六）、「甲寅劦日大甲。甲戌劦日且甲」（下九六八）、「甲戌𠭰大甲」（下九六五）「甲申翌日大甲」（下九六七）、「甲寅彡羌甲」（下九六四）と言うがごときである。

卜旬の後ちに、年祀を隨記している者がある、「隹王四祀」（上二二七六）、「王廿司」（下九四二）と言うがごとくである。また或は言う「隹王來正人方」（下九六三）と。

甲骨文に妻を娶ることを卜するものがある。『殷虛文字乙編』四七三六にいう「辛卯卜、㱿、乎取奠女子」の如し。本書下編五八九にいう、「甲戌、余卜、取右」と、これは殷王親ら卜して右を取る卜辭である。

甲骨文にまた常に生育を占卜する卜辭がある。或はいう「凡生」、或はいう「桒生」、或はいう「桒王生」と。其の祈求の對象は高妣己、妣丙、妣己と妣庚である。（註二六）（『甲骨學商史論叢初集』註[二]、第三輯二〇四頁參見）今、本書下編七七三にまたいう「桒生」と。卜辭中にまた受生の占いがある。前に嘗って拙編の『戰後南北所見甲骨錄』に見える、いう「丁酉卜、賓貞、帚好有受生。王占曰、吉、其有受生」（註二七）と。今、本書上編一〇六五片にまたいう「貞其有受生」と。

商朝は父權制家庭式性質の奴隸制社會を帶びている。男を重んじ女を輕んずる所以である。その說は拙作の『殷代婚姻家族生育制度考』の一文に見える。（註二八）甲骨文で王の婦后が子を產むことを占卜するものに、女を生むを不嘉としている。「甲申卜㱿貞、帚

好冥、不其妫。三旬㞢一日、甲寅冥、允不妫、隹女。」「甲申卜、口口、口好冥、妫。王占曰、其隹丁冥、妫。其隹庚冥、弘吉。三旬㞢一日、甲寅冥、不妫、隹女」。（註二九）（附圖八〔下三〕を見よ）「壬寅卜、㱿貞、帚口冥妫。王占曰、其隹口申冥吉、妫、其隹甲寅冥、不吉、亞、隹女」（註三〇）「……申帚好口、口妫、隹女」（註三一）「甲辰口、㞢貞、口㠯不妫、女。五月」。（註三二）「……㞢、癸巳冥、隹女」。（註三三）「……不妫、隹女」（註三四）と言う如くである。今、本書上編一〇二二に言う「帚好冥、不妫、隹女」、一〇六四にいう「冥、不妫、隹女」は均しく前文の佐證である。ただ以前の所見は、僅かにいう「不妫、隹女」と、其れ男を生めば妫とするのは、並に未だ卜辭に見えない。今、本書上編一〇四三にいう「帚苐冥妫、隹𦥑子」と。子を生むを妫とする。子は即ち男子にして、男を生むを妫とする、女を生むを不妫とする、男を重んじて女を輕んずるは、乃ち完全な證明を得たのである。

本書に錄する甲骨に、諸子の名に關しては、子狀（下二〇九、二二四）、子𠷎（下二五〇）、子吕（下四〇四）、子敚（下四六〇）、子廣（上一〇六七）、子𨸏（上一〇六八）、子𢀛（上一〇六九）、子洋（上一〇七〇）、及子（下七〇）、知多子（下四五八）がある。

『殷契粹編』一一六二にいう「丁酉卜、其乎㠯多方小子小臣、其敎戒」と。郭沫若先生はいう「㠯多方小子小臣其敎戒」とは當に一辭爲り。敎は即ち数の字、說文に見ゆ。戒は或の省に殆し。此れに據れば、殷の時の隣國、多く子弟を殷に遊學を遣るを知る可し」と。（註三六）今、本書下編四五九にいう「多子斉」、斉は即ち學、「多子學」は、猶ほ小子、其の教へを受けるをいう。郭說は確かに易へることは出來ない。これは一つの實に好き證明である。

本書に錄する所の甲骨の、其の官名に多射（上二六、七〇五、一〇八一）、多新射（上一〇八三）、多馬（下三八〇）、多馬亞（下六六）、小臣（上二〇五、下四七五）、多宁（上一八〇四）、多𠙵（上一〇四一）、戍告（上六九四）、𠷎戍（下四六三）、知男㞢（下四六六）がある。

又夢幻に關する占卜がある。疾病と死亡は、「王夢隹禍」（上八一四）、「王夢隹𡿪」（上八一七）、「帚有夢、勹崇、有囚」（上八五五）と言うがごとくである。「王有疾」（上八一九）「帚有疾」（上八二〇）、「𠂤有疾」（上八二一）「𩰫骨凡有疾」（上八三三）、「㐭骨凡有疾」（上七三九）、「有疾、隹黄尹它」（下三八四）、「王疾夕告、小臣若」（下三八三）というごとくである。「帚鼠其死」（上八三四）、「龍不死」（上八三六）等と言うがごとくである。

また甲骨に數を記すこと最も多く、常に人祭と征伐の卜辭が見える。人祭の最も多いのは「卅千人」、甚しきものは「戈伐二千六百五十六人」に至る。方國を征伐し、人數を徵集するのは、普通みな「登千人」、「登人三千」、「登人五千」である。最も多いのは「登人三千登旅萬」がある。甚しきは「三萬」に至る。萬人を言うのは、前に嘗って拙編『戰後南北所見甲骨錄』に見える。（註三六）今、則ち本書下編四八五にいう「乎口萬口」、五八二にいう「萬人歸」と。

上編一七七八にいう「酒伐于𠂤」、「酒伐于呂」と、上編九九〇に言う「隹岳它、隹𡆥它」によっていえば、𠂤と岳はみな先公の名であることが知られる。下編一七八によって言へば、「上甲眔河」の河はまた先祖なのである。上編一八五九にいう「乎汏帝子」は汏を以て上帝の子とする。上編一五九四にいう「𠦪于王帝」は、上帝を以て王の上帝とする。上編七〇にいう「司土」は、疑らくは即ち後の「司空」である。上編一六八にいう「上帝降𦰩」は、武丁の時に卜う所のものであり、帝に上を加えることは、帝乙、帝辛時

に始まらないことが知られる。

其の他は「氏魚」（上三九〇）「氏王」（上一三六八）、「㞢𠬝」（上一三三三）、「叶占」（上一一二八）、「非囚」（下四四四）、「𠂢牛」（上一七九六）、「其上」（上一三〇七）、「不用」（上一七八七、二〇二四）、「叶王事」（上一〇九三）、「叶朕事」（上一二二〇）「于日集男」（下三三八）、「三卜、占曰、幸」、（下三八一）、「歲于丁、弄王」（下七二）、「叀亞氏衆人步」（下三七）、「令鬼𠂤刚于高」（下八四六）、以て字の特殊なるものに及んでは、𩰫、𢦏、𠛬（下九五）、𦣞（下一三三）、𢦔（下一七）、𩠐（下四七七）、𢦓（下五〇五）、𡆥（下五〇七）、𢦔（下七三二）、𢦦（下七六五）、𦥑（下七六五）、𢦏（下八〇二）の類に像り、ひとつばかりではない。下編三三〇片の𢦔字は、人が一手に弓を持ち、一手に盾を持つに象どる。この一つの字は常に早期の金文に見える。下編四七八片の𢦏字は、戈と砍矢に從う。四つの點はあたかも人頭を切りとって流れる所の血液に似い、疑らくは伐字の繁文である。伐字には𢦏に作る者あり、戈を用いて羌人の俘虜をたたき切った頭の形に象ったものである。𢦏字は戈に從い奚に從う、奚は奴隸であって、乃ち奴隸を砍伐するの形に象どる。

此の類の如く、ことごとくあげることは出來ない。みな商史を研究する重要な資料である。

（註二）同下註三を見よ。

（註三）胡厚宣 卜辭同文例『歷史語言研究所集刊』第九本刊。一九四七年。

（註四）同下註五を見よ。

（註五）胡厚宣、武丁時五種記事刻辭考『甲骨學商史論叢初集』第三冊、一九四四年。

齊魯大學出版。

（註六）上の一、三、四、六、八、一〇、一二、一四、一六、一八、二〇、二二、二三、二五、二七、二八、三〇、三一、三三、三五、三七、三八、四〇、四二、四四、四五、四七、四九、五一、五二、五三、五五、五七、五九、八五、八七、下の二、四、六、八、一〇、一二、一四、一六、一七、一八、二〇、二二、二四、二六、二八、三〇、三二、三四、三六、三八、四〇なり。

（註七）上の六〇、下の四一、四二、四三なり。

（註八）上の六二、六三、六五、六七、六九、七一、七四、七六、七七、七八、下の四六、四八、五〇、五二、五四、五六、五九、六二、六三、六五、六七、六九、七一、七三、七五なり。

（註九）上の八〇、八二、八三、八四なり。

（註一〇）胡厚宣、卜辭記事文字史官簽名例『歷史語言研究所第十二本刊』一九四八年。

（註一一）圣は駁鹵と釋す、當に更正すべし。

（註一二）胡厚宣、殷代農作施肥說『歷史研究』一九五五年第一期刊。

（註一三）胡厚宣の卜辭中所見之殷代農業『甲骨學商史論叢二集』第一冊、一九四四年を見よ。齊魯大學出版。

（註一四）同註一三を見よ。

（註一五）京五二八一、五二八二。

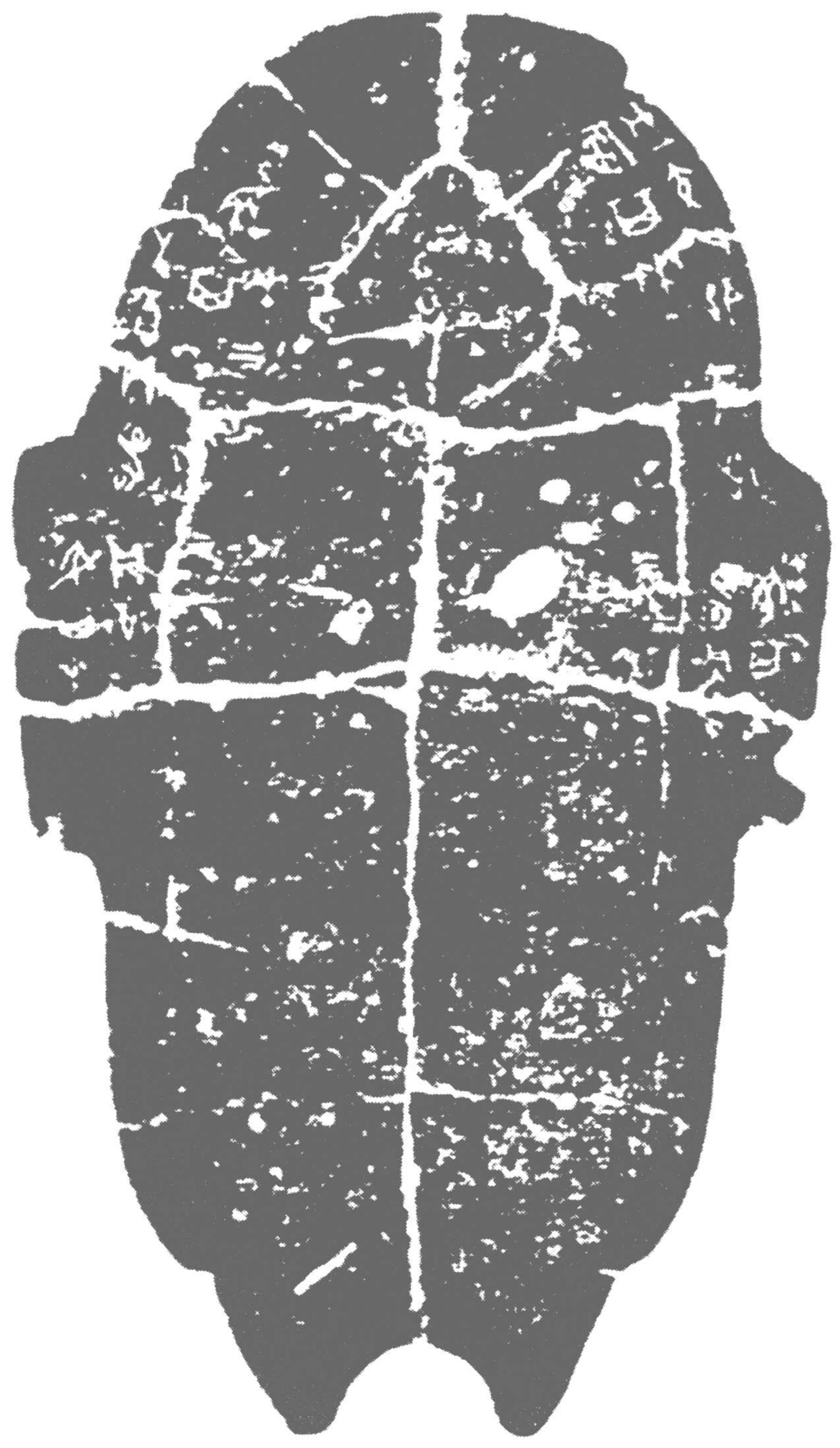
（註一六）前五・六・四。

（註一七）以上四片は同文、同註三を見よ。

（註一八）以上二片は同文、胡厚宣の『戰後寧滬新獲甲骨集序』を見よ。
（註一九）甲六九二
（註二〇）南師二、二〇七。
（註二一）龜二、二八、一四。
（註二二）粹九三五。
（註二三）佚九九五。
（註二四）胡厚宣、殷代之天神崇拜、『甲骨學商史論叢初集第二冊』、一九四四年。齊魯大學出版。
（註二五）胡厚宣の　甲骨文中之天象記錄　、『責善半月刊』二卷十七期刊、一九四一年を見よ。又　註二四に同じ。
（註二六）胡厚宣の　殷代婚姻家族宗法生育制度考　『甲骨學商史論叢初集第一冊』、一九四四年を見よ。
（註二七）南師一、八〇、また八一。
（註二八）註二六に同じ。
（註二九）乙七七三一。
（註三〇）乙四七二七。
（註三一）京一九八二、二〇五三に合う。
（註三二）乙三三七三、三四九八、三九五四に合う。
（註三三）乙二三三三。
（註三四）珠五二六。

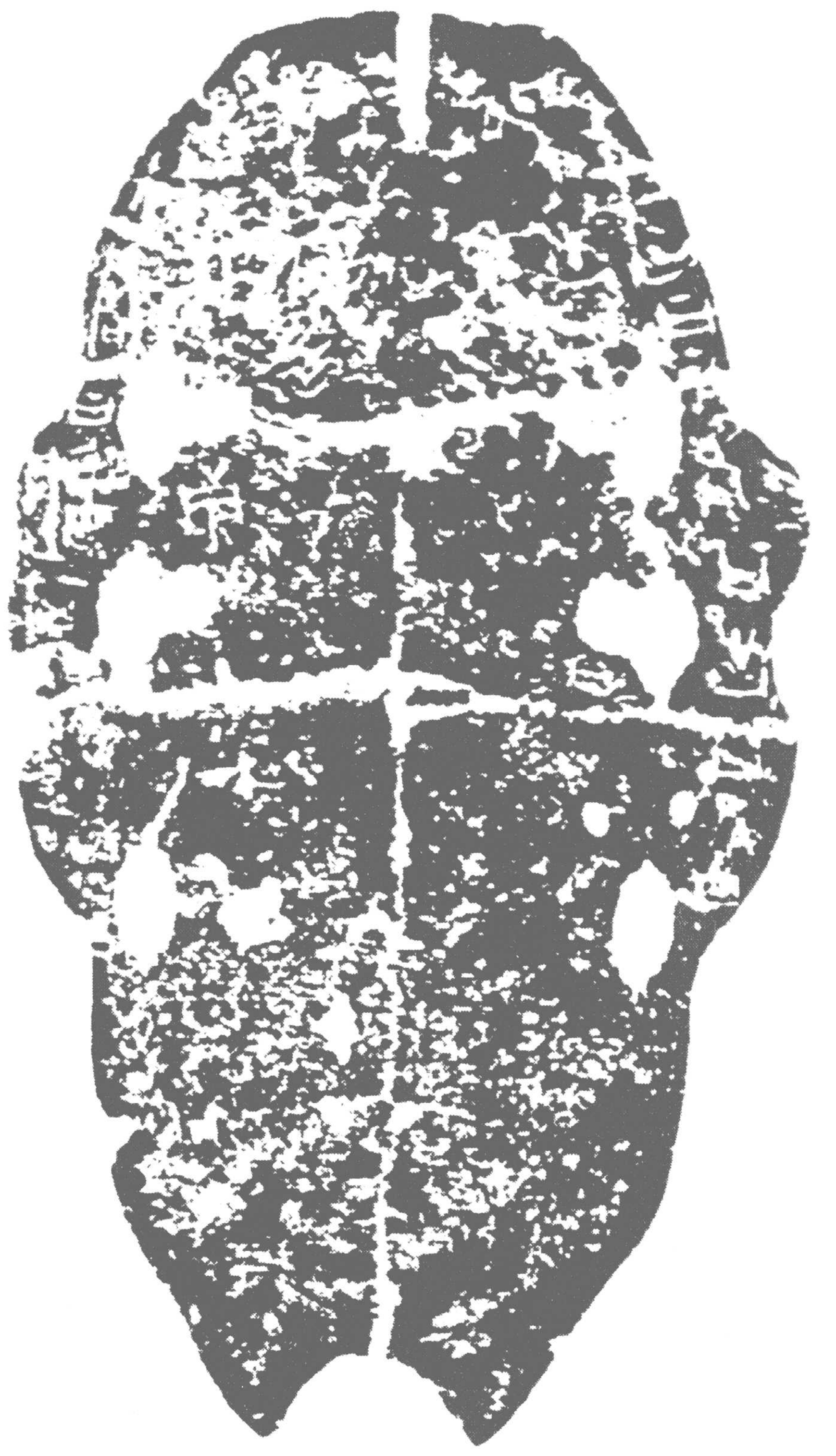
（註三五）郭沫若、『殷契粹編考釋』一四九葉、一九三七年、日本文求堂書店出版。
（註三六）南明一九一。
（註三七）寧一、一四八。

註［三］　釋文篇は未だ出版されていない。
註［四］　甲骨續存附圖一一六。



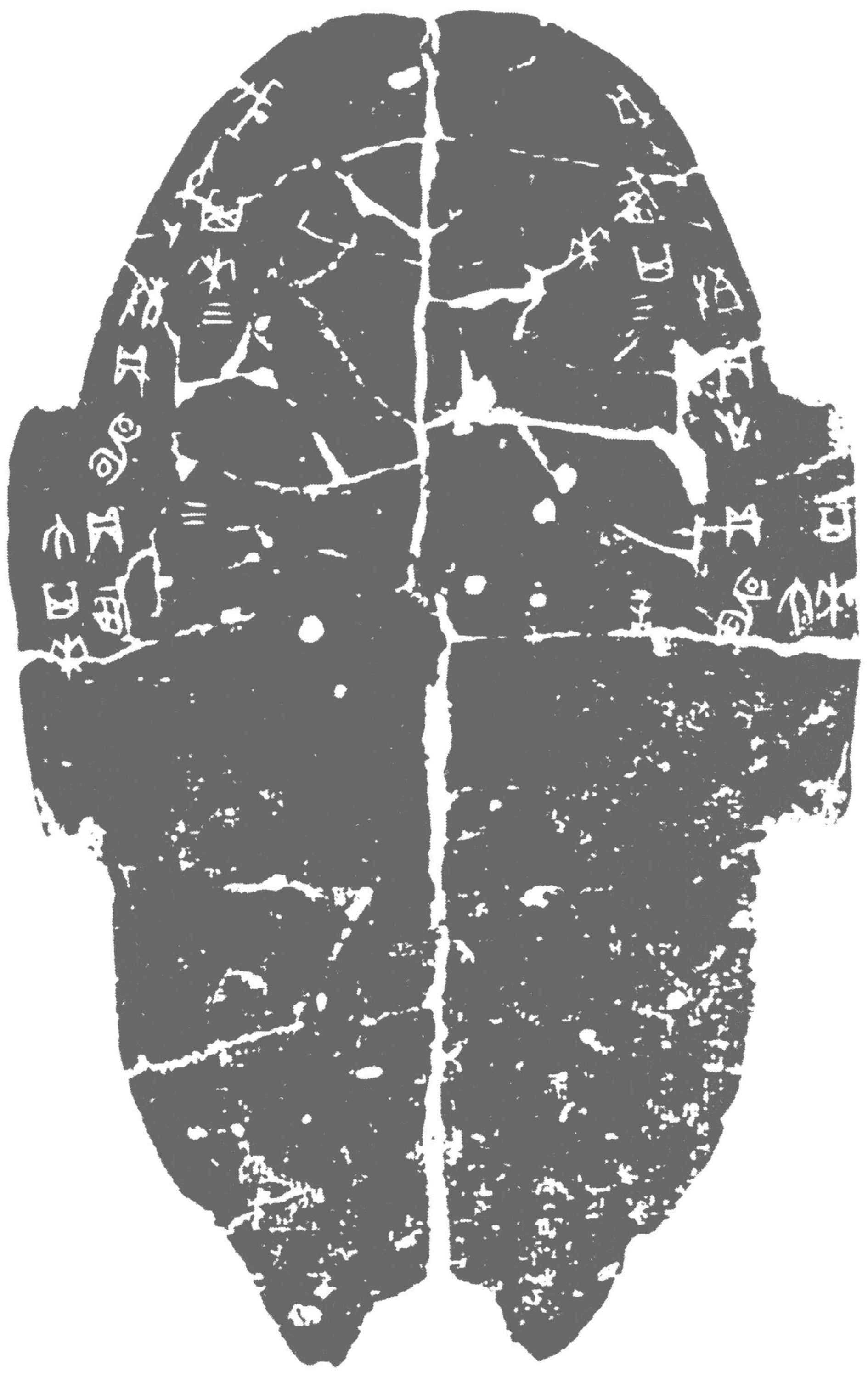
附圖一

圖一和二，三和四，五和六，是武丁時先後的三版龜腹甲的表背面。乃同時卜同事，故卜辭同文。圖一、二是第二卜，圖三、四是第三卜，圖五、六是第四卜。另外還應該有一版第一卜的龜腹甲，尚未發現。這三版都是表面的左四辭，卜兩個人來不來的正反兩面，左右上下交叉。占辭兩條，都刻在背面。卜兆刻過，字劃裏塗有[illegible]色。
圖一是第二卜龜腹甲的表面，卜辭說：
左上　戊寅卜，殻貞：雷鳳其來。　二
右下　雷鳳不其來。　二
右上　戊寅卜，殻貞：沚戠其來。　二
左下　貞沚戠不其來。　二
（採自《文物參考資料》[illegible]）



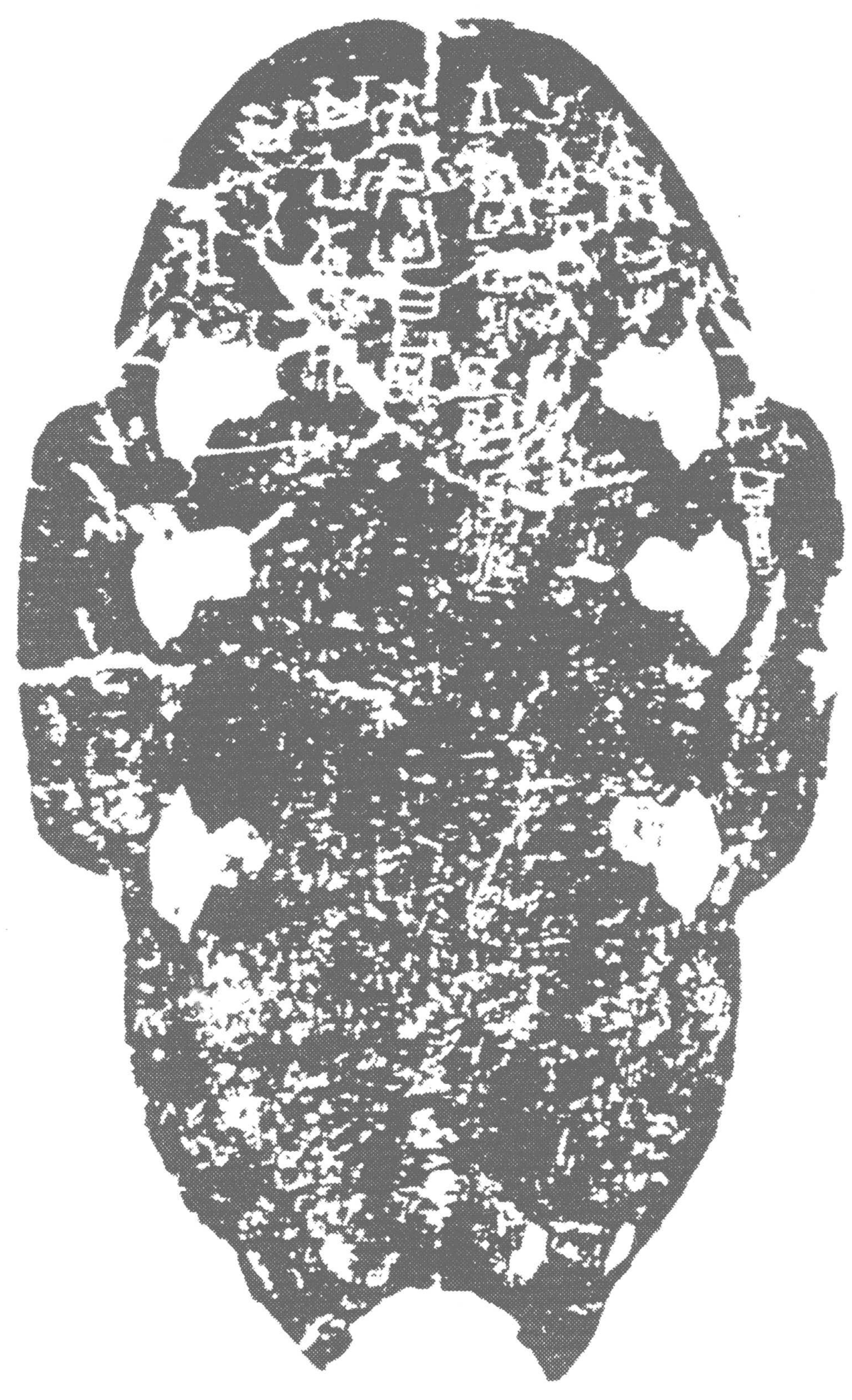
附圖二

圖一龜腹甲的背面。刻雷鳳和沚戠來不來的占辭兩條。雷鳳一條，和表面即圖一左上雷鳳一辭的地位相當；沚戠一條，和表面右上沚戠一辭的地位相當。知其爲相連屬。惟雷鳳有[illegible]，沚戠有[illegible]。占辭說：
右　王占曰：鳳其出，其隹丁。丁不出，其有疾，[illegible]。
左　王占曰：戠其出，隹庚。[illegible]。
（採自《文物參考資料》[illegible]二〇四）



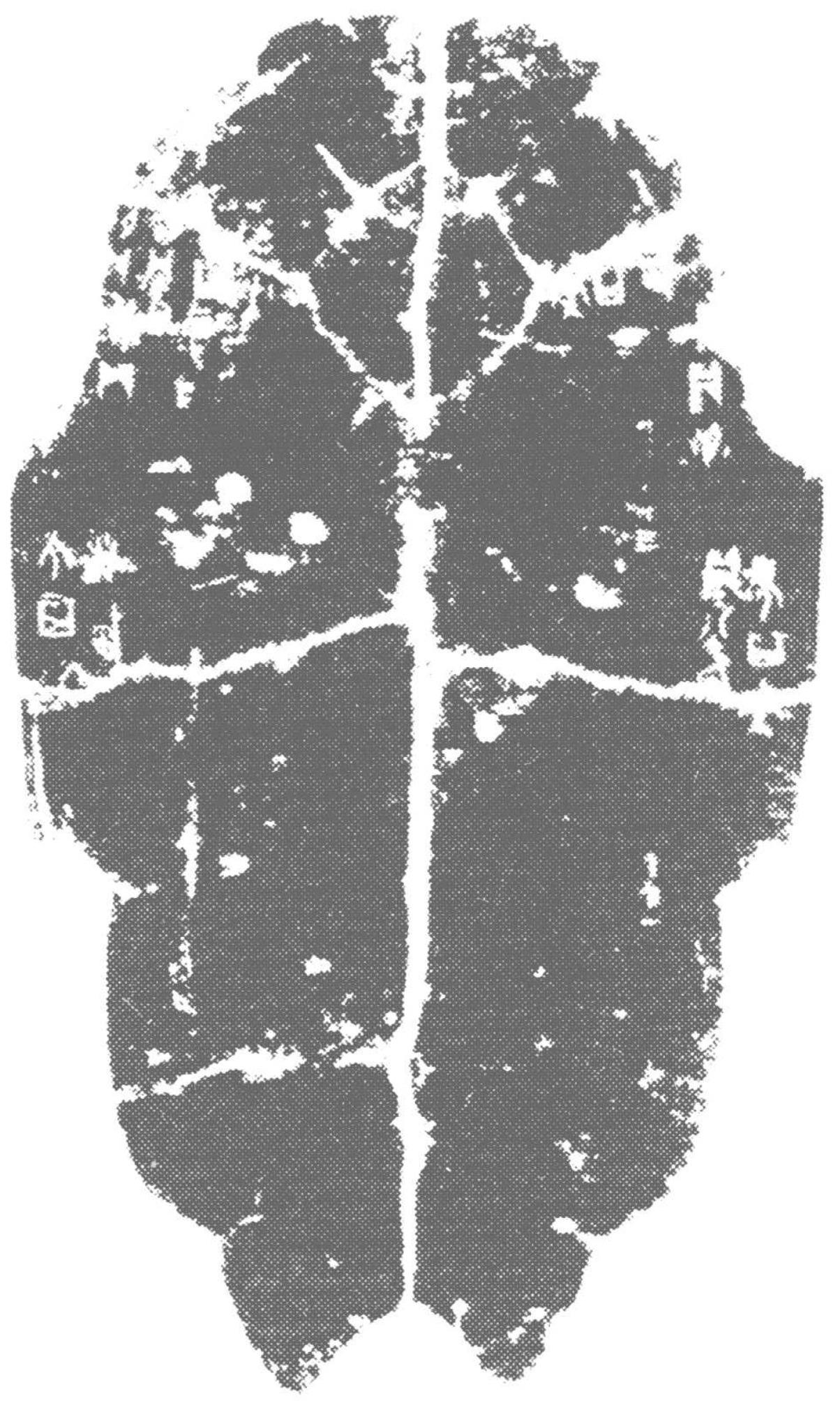
附圖三

如圖一、二武丁時龜腹甲同時同事第三卜龜腹甲的表面，同文。惟雷有[illegible]，沚戠一辭有[illegible]。卜辭說：
左上　戊寅卜，殻貞：雷其來。三
右下　貞雷不其來。三　二告
右上　戊寅卜，殻貞：沚戠其來。三
左下　貞戠不其來。三　（乙6877）



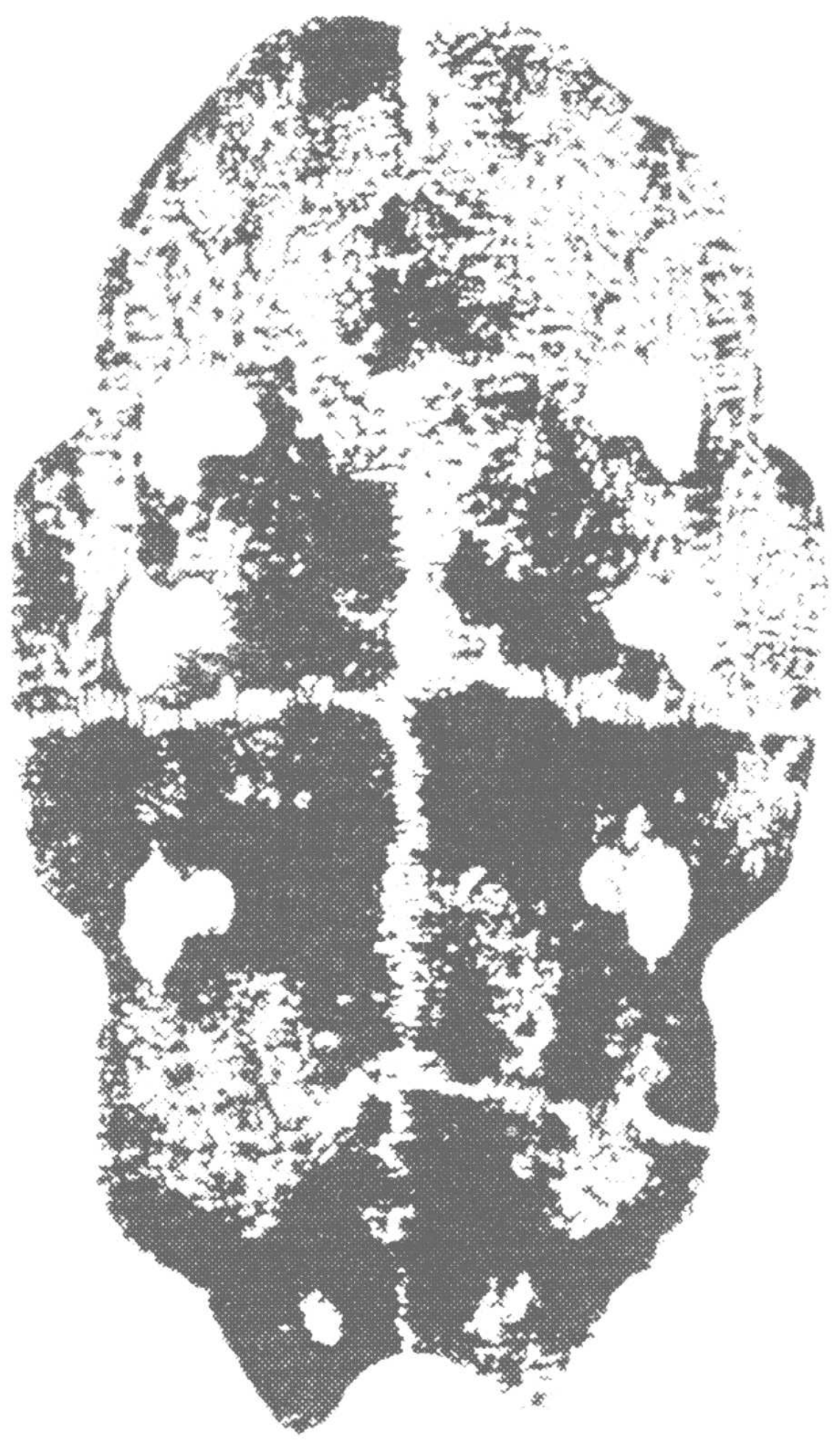
附圖四

[illegible]



附圖五

[illegible]



附圖六

[illegible]

註［五］ 卜文〓を黽と釋し、〓を鼄と釋し、甲橋刻辭と同じく致龜の辭であるとみなすが、龜と釋するのは問題があるのではないか。

註［六］ 殷代農作施肥説 胡厚宣撰。歷史研究一九五五年第一期所收。胡氏によるとその農耕技術は原始的な農耕の段階を脱していて屎（卜文〓）田施肥の初歩の段階の方法が行われていたとする。

註［七］ 皋 卜文〓、胡氏は小象人臣とは象人小臣であり、奴隸を管理する官で、皋が多數の奴隸を使役して農業生産に從事した小臣の官であると解している。白川靜博士は「〓は皋と釋すべく、その名は皋水と關係があるらしいが、皋といふ地名の分布から考へて、それは汝潁の上游、成皋、魯陽、許昌を結ぶ地域のうちにあったと見られ、ほぼ鄭の西方に位置する。すなわち殷が鄭を中心としてこの方面に勢力を扶殖しつつあったころ、その前衛として、河南西部に對してゐたところであった。竹書紀年によると、仲丁より外壬までの間、殷は亳・囂（隞）に都したと傳へられてゐるが、亳・囂はこの地域の北部にあたる。すなはち〓は、殷の重要な據點を領して、その經營に當ってゐたものである。その地に接する外族には、羌・〓・南があり、これらの諸侯は〓の支配下にあって、若干生産的な芻牧のことにも從ってゐたやうであるが、多くはその牛羊とともに犧牲として宗廟に用ひられた。このやうな外族俘虜を犧牲として管理してゐた〓のところには、また〓と稱せられる多數の下層民があったが、か

れらは平常は農耕に從ってをり、ときには外征に用ひられてゐる。これら下層民の管理者としては、小耤臣・小象人臣などがあり、王臣とか牧人とよばれるものも他から送られてきてゐる。つまり〓の支配してゐたものは、外族や下層の被支配者たちであり、その構成は決して本來の氏族的なものではない。これは〓が外族と接する地にあり、かつその地が芻牧や農耕の適地であるために、外族俘囚や下層民をここに移して、殖民的經營を行ひ、〓をしてこれを管理させたものだと思はれる。〓が王族の親縁であることは、その祭祀關係の卜辭からみて疑問のないところであるが、殷代の雄族中に、外族俘囚を管理する特殊な部曲的氏族があることは、甚だ注目すべき事實であると考へる。このことは、殷代奴隸制の問題に、一の照射を與へる事實であるといふことができる。〓族に屬するこれらの外族が、いはゆる奴隸であるかどうか、といふことは、非常に大きな問題である。奴隸にも種々の區別があるが、王都から遠く離れたこの地に管理されてゐる羌・南諸族は、もちろん家内奴隸ではないし、また生産奴隸といふものでもない。芻牧のことに從ってゐるのは、別に〓芻とか河芻・〓とよばれる芻人がゐるわけであり、羌・南が主として生産的行爲に從ってゐたことを徴すべき資料はない。むしろかれらは多く宗廟の犧牲として牲殺されてゐるのである。〓はあるひは下層民であらうが、これは征旅にも犧牲にも用ひられてゐて、また羌・南とは異るものである。〓が生産活動に從ってゐたかどうかも明かではないが、その數が甚だ多いことからみると、平生は何らかの生産に從ってゐたものであらう。その社會的身分關係からいへ

ば、一應奴隸的不自由民とみてよい。そしてこれらの種々な身分のものを包含する奚は、殷の雄族中にあって、特殊な構成をもったものと思はれるが、かういう構成が奚など特殊な氏族に限るものか、それとも他の氏族にもある程度一般化しうるものか、その點が明かでない。奴隸制の問題は、奚のやうな構成が殷代の他の氏族にも一般化しえたときに、はじめて問題となりうる性質のものである。」（『甲骨金文學論叢』七集六八―九頁）と解されている。

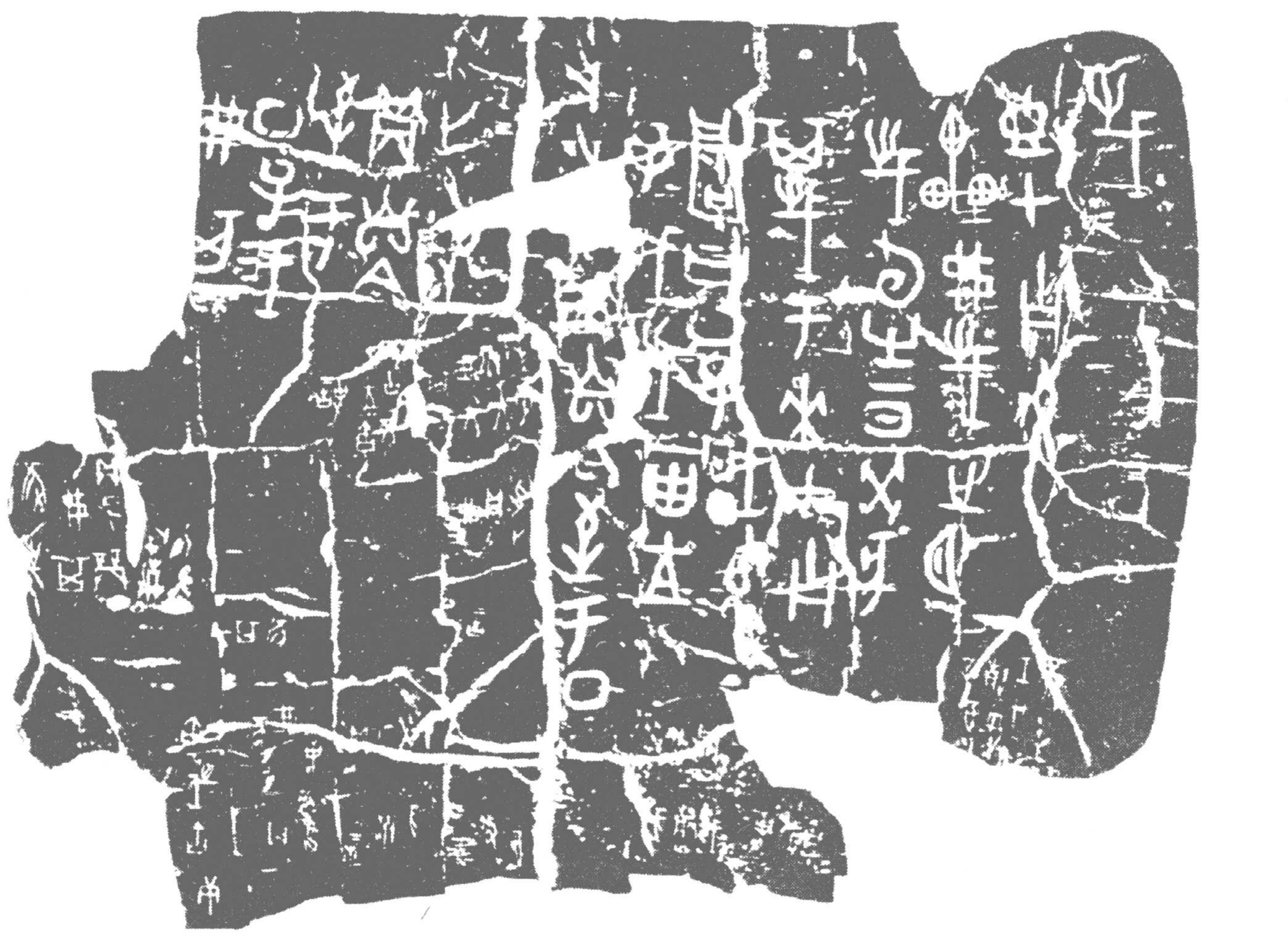
註[八]　立中　卜文立中を立中と胡氏は隸釋する。そして立中とは軍隊が駐在し、武裝して開墾することであり、或は原始氏族社會で區劃した土地に旗を立てて領土の少しばかりを開闢したものと解する。卜文立中は普通中は多く旗竿の形、あるひは偃斿の形を付している。この立中の中は史（使・事）の省文と見るべきで立使と隸釋すべきである。

註[九]　吳定良（生年不詳）字は均一、江蘇省金壇の人。中央研究院歷史語言研究所員兼第四主任。民國十八年に英國ロンドン大學の哲學博士をうけ、ロンドン大學測骨學試驗室で頭骨關係の研究に勵んだ。

註[十]　小盂鼎の次の文をいうのであろう「告曰、王[令]盂、以□□伐戴方、□□馘□、執嚚二人、隻馘四千八百□十二馘、孚人萬三千八十一人、孚馬□□匹、孚車卅兩、孚牛三百五十五牛、羊卅八羊、盂□……我征、執嚚一人、孚馘二百卅七馘、

孚人□□人、孚馬百四匹、孚車兩□□、王□□□、盂、拜頓首……卽大廷」と。

註[十一]　甲骨續存附圖七



附圖七

武丁時大龜腹甲．有兩條占卜戰爭的卜辭，一卜正面，一卜反面．大字塗朱，記述一事件，極為嚴肅．卜反面一辭，僅賸殘缺．卜正面一辭完整，並且記有占辭驗辭．驗辭裏記載着用兵打了勝仗，是商代戰爭史上，一條重要的資料．卜辭說：

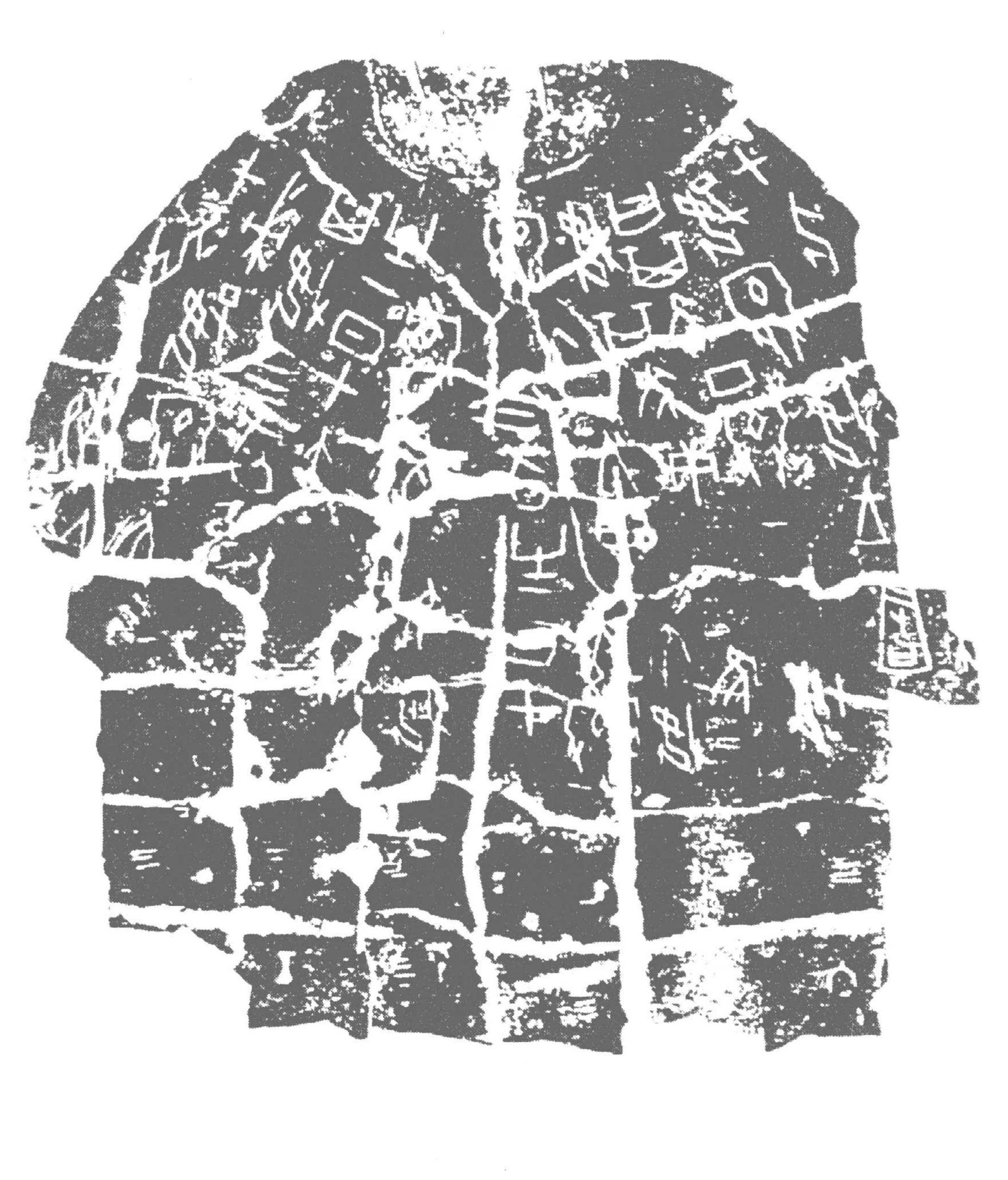
右　癸丑卜，㱿貞．自今至于丁巳，我𢦏宙．王占曰，丁巳我毋其𢦏，于來甲子𢦏．旬出(有,又)一日癸亥，車弗𢦏．之夕皿，甲子允𢦏．

左　癸丑卜，㱿貞：自今至于丁巳我弗其𢦏宙．……

（乙7795 [illegible]）

註[十二]　犬。犬は犬方とも呼ばれ、西方の部族であった。また犬は先秦の文獻に見える畎夷であり、當時殷の勢力圏にあって犬侯といわれた。こゝにいう犬は犬人の職であろう。

註[十三]　甲骨續存附圖八。



附圖八

武丁時大龜腹甲。大字塗有赭色。有兩條占卜武丁的婦后名叫婦好生育的卜辭。一卜正面，並有占辭；一卜反面。兩辭都記有驗辭，說占卜以後的第三十一天，婦好生育，果然不好，因為是生了一個女的。由此可以證明商朝人重男輕女的觀念。兩條卜辭說：

右　甲申卜，㱿貞：婦好冥(娩)㚼(嘉)。王占曰，其隹丁冥㚼。其隹庚冥弘吉。三旬出(有,又)一日甲寅冥，不㚼，隹女。一

左　甲申卜，㱿貞：婦好冥，不其㚼。三旬出一日甲寅冥，允不㚼，隹女。一（乙7731隹女二字另據照片補）

一九五三年春，同顧頡剛先生去蘇州參觀，承蘇南文管會陳穀岑主任委員和蘇州市文管會汪星伯先生協助，得參觀兩機關所藏甲骨。蘇南文管會藏拓本六十五，係土改時沒收宜興沙姓地主所藏，我選摹了五片。蘇州文管會藏甲骨九片，我選摹了七片。今俱歸江蘇博物館收藏。陳墨逸先生藏其令弟保之先生抗戰期間在北京所購甲骨百片拓本，選摹了十片。沈勤盧先生藏甲骨四十片，係抗戰前在南京買劉鐵雲舊藏，選拓了二十片。

一九五三年暑假，我奉復旦大學歷史系派往華北各地作考古參觀。先過濟南，承山東文管會張靜齋主任委員和李既陶先生協助，得參觀會中所藏甲骨。共四批，原為前山東圖書館羅振玉、明義士和柏根氏舊藏。共約六七千片。明義士舊藏數量雖多，但皆碎小。前山東圖書館和柏根氏舊藏已見著錄，羅振玉舊藏一三九〇片，係解放後從大連買來，先歸膠東文管會，後歸山東文管會。（註三八）我選摹了四十二片。

到北京參觀歷史博物館，承韓壽萱館長和楊昭庸主任特許，把夏商周陳列室正在陳列着的甲骨取出，使從容摹錄。除菁華一版已見著錄外，選摹了七版，其中整龜兩版，為一九五〇年唐蘭教授所捐獻。（註三九）

到安陽參觀小屯保管所，承李連卿同志出示所藏小片甲骨約二百片，選摹了二十六片。到新鄉參觀人民圖書館，承杜靜山館長出示文物展覽所藏小片甲骨約二百片，選摹了二十七片。到開封河南地誌博物館參觀，承劉孟真館長出示所藏甲骨四盒約百片，也多碎小，選摹了十六片。參觀河南文物管理委員會時，承李樹勳、陳寶三兩同志出示河南文物工作隊所藏小片甲骨約二百片，選摹了三十八片。陳寶三同志並以自藏甲骨拓本見示，有的極精，選摹了四片。

一九五四年春，因公去杭州，參觀浙江文物管理委員會和浙江博物館，承文管會鄭衡叔

主任委員沙文海主任和博物館李易、趙人俊兩同志協助，得參觀兩機關所藏的甲骨。博物館藏十五片，選摹了十四片。文管會藏約二百片，選摹了七十六片。兩者都是西泠印社吳振平舊藏。麗衡叔先生原藏甲骨二百片，係在南京所購劉鐵雲舊藏，今亦歸文管會，我從中選摹了四十二片。在杭州又以浙江文管會的介紹，得識陳伯衡先生，他收藏甲骨五十片，選摹了四十片。

一九五四年暑假，我應邀去長春東北師範大學講學，講畢承師大介紹，並由薛虹同志陪同，參觀了東北的幾個博物館。承東北博物館李文信、朱子方兩主任，旅順博物館金培錕館長、李元星主任，吉林博物館范王樸館長王亞洲同志協助，在參觀時給了方便不少。旅順博物館藏甲骨約有一千五百片之多，我花了兩個整天，選摹了二百五十六片。東北博物館藏四百片，選摹了五十三片。吉林博物館藏四十片，選摹了十七片。有的都很精。

一九五四年國慶節我去南京參觀，過鎮江，順便去揚州參觀揚州文管會展覽，由耿鑑庭先生協助，得參觀方曾壽先生所藏甲骨。原物三百片，為其先人方地山氏舊藏。又承李梅閣先生惠贈墨拓，本書選錄了一百四十五片。

南京博物院四片拓本，係南博尹子文先生寄贈。浙江圖書館藏十片，沈鏡如教授寄贈拓本，選其一張。沈教授又將浙江師範學院王永元先生甲骨拓本十餘片寄來，我選了四片。

前上海歷史博物館所藏甲骨拓本，承楊寬館長惠假。原甲骨一千四百片，抗戰前得自周連寬，或云原為葉洪漁氏舊藏，本為劉鐵雲故物。今歸上海博物館。拓本係選的重要的，共約五百片，去其碎小不清及已見著錄者，得二百八十九片。華東師範大學歷史系藏甲骨一百二十片，解放後，購自上海。我選摹了三十八片。復旦大學藏甲骨三百片，一部分原為前暨南大學所藏，暨大得自束天民，束氏在南京所購劉鐵雲舊物。已著錄在拙編「甲骨六錄」中。

（註四○）一部分最近購自金祖同。本書拓本，一部分即為金先生所贈。

在長春，東北師大歷史系藏甲骨四十片，徐喜辰教授藏四十片；在吉林王亞洲同志藏四十片，我都選摹了一些，十片五片不等。在大連，羅振玉氏的長孫羅繼祖先生藏大骨三版，其兩版為菁華所錄，另一版我摹了下來。

易均室及葉洪漁氏舊藏拓本，係葉氏哲嗣葉粟如教授供給，何叙甫氏舊藏係王林同志供給。

日本三井源右衛門所藏則為金祖同先生所惠。

在上海熱心協助的還有孫師匡先生。他除了把自藏甲骨代為墨拓之外，還把自藏拓本惠假。甲骨實物百餘片，後歸羅伯昭，羅氏於一九五四年捐獻中央文化部。（註四一）拓本數册，蓋有「宧鞠樓所藏金石文字」圖章，似為羅振玉舊物，為其子羅振常售出者。拓本中多係劉晦之善齋舊藏，間係劉氏當年贈與羅氏者。束天民教授亦以所藏甲骨拓本一批相贈，係在南京與友人分購劉鐵雲一批甲骨時所拓。我都校去重覆，採用了很多。羅伯昭先生一九五一年曾贈得小片甲骨四十片，承惠借選拓，得十六片。原物聞已捐贈西南博物院。

于思泊教授雙劍誃，謝午生先生元嘉造像室，和容希白教授頌齋舊藏甲骨，我一九四六年在成都編印摹本「戰後平津新獲甲骨集」，曾收入書中。但書印的不多，由齊魯大學發行未久，遇復員，此書中途遺失，以後未再發售（註四二）且「京津集」既已出版，此書名即應取銷，故將原收甲骨，再選錄在本書內。于藏仍錄摹本，謝藏容藏錄拓本。容希白教授曾續得甲骨一二六片，承遠道以拓本惠贈，現亦一併收入書中。謝藏後歸北京大學。于藏先歸清華大學，現歸北京大學。容藏近亦歸廣州文管會。

前廈門大學中國文化研究所藏甲骨，曾以摹本收入拙著「甲骨學商史論叢」初集，現「論叢」即將修訂重版，此批甲骨即改以拓本收入本書。原物乃劉鐵雲舊藏。聞廈門大學今已無存。此

拓本乃抗戰期間，在成都時，由鄭德坤教授所贈。除此之外，梁思永先生贈甲骨拓本二片，為其尊人任公先生舊藏。李梅閣先生贈拓本二片。羅伯昭先生贈拓本二片。而平時在書肆坊間，常買到一些甲骨拓本，數量不少，但多重出，又往往不知其來源藏家，今亦加以剔選，一併編入書中。

總之，此書之出，全賴以上的機關領導公私藏家以及許多熱情朋友的協助與支持，謹於此致以誠懇的謝意！

本書和以前各書的出版，我只懷着這樣一個意念，為了提供大家研究的方便，我應該把自己所蒐集得見的甲骨材料，及時的公布出來。但由於個人能力有限，聞見不廣，又因業務忙，水平差，缺點錯誤，自然是很多的。尚祈讀者專家不吝指教批評為幸。

一九五五年十月　胡厚宣　於上海復旦大學之筑莊。

（註三八）看文物參考資料二卷七期，一七七頁，一九五一年。

（註三九）看文物參考資料一至六期彙編，八三頁，一九五○年。

（註四○）胡厚宣，甲骨六錄一册，一九四五年，齊魯大學出版。

（註四一）看陳夢家甲骨補記，刊文物參考資料一九五四年第十二期一二○頁。

（註四二）胡厚宣，戰後平津新獲甲骨集二册，一九四六年，齊魯大學出版。印數不多，未全發行。

一九五三年の春、顧頡剛（顧頡剛・『天壤閣甲骨文存』註[十四]・第三輯八二頁參見）先生と同じく蘇州へ參觀に行った。蘇南文管會陳穀岑[十四]主任委員と蘇州市文管會汪星伯[十五]先生の

協力と援助を承け、兩機關の所藏する甲骨を參觀するを得た。蘇南文管會藏拓本六十五は土地を改革した時、宜興の沙氏地主所藏を没收し、私は五片を選摹した。蘇州文管會藏する甲骨九片を、私は七片選摹した。今、俱に江蘇博物館の收藏に歸している。陳墨迻[十七]先生藏と其の令弟保[十八]之先生は抗戰期間に北京に在って購う所の甲骨百片の拓本で、十片を選摹した。沈勤廬[十六]先生藏の甲骨四十片は、抗戰前に南京にあって劉鐵雲（劉鶚・『鐵雲藏龜』註[九]・第一輯一三頁參見）の舊藏を買って、二十片を選拓した。

一九五三年暑假に、私は復旦大學の歴史系に率して淮北の地に派遣されて參觀をした。先づ濟南を過り、山東文管會張靜齋[十九]主任委員と李既陶[三十]先生の協力と援助を承けて、參觀會中の所藏甲骨を得た。すべて四片、原は前山東圖書館羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）、明義士（明義士・『殷契書錄』註[三]・第一輯三二二頁參見）と柏根氏[三十一]の舊藏のものである。すべて約六七千片である。明義士舊藏は數量は多いというけれども、ただ皆な碎小にして、前に山東圖書館と柏根氏舊藏は已に著錄に見える、羅振玉舊藏は一三九〇片[三十二]である。解放後は大連より買い、先に膠東文管會に歸し、後ち山東文管會に歸した。（註三八）私は四十二片を選摹した。

北京に行って歴史博物館を參觀し、韓壽萱[三十三]館長と楊昭康[三十四]主任の特別な許しを承けて、夏商周の陳列室に正しく陳列の甲骨を取り出し、ゆったりと摹錄をして、菁華一版を除って已に著錄に見える外は、七版を選摹し、その中の整龜二版は、一九五〇年唐蘭教授（唐蘭・『殷虛文字類編』註[三]・第一輯一七一頁參見）[三十五]の捐獻する所のものである。

安陽に行って小屯保管所を參觀し、李蓮卿同志の所藏小片甲骨[三十六]を約二百片の出示を承け、二十六片を選摹した。新鄉に行って人民圖書館を參觀し、杜靜山館長の文物展覽に係る所

藏の小片甲骨約二百片の出示を承けて、二十七片を選摹した。開封の河南地誌博物館に參觀に行き、劉孟真[二十七]館長の所藏甲骨四盒約百片の出示を受け、また碎小多く、十六片を選摹した。河南文物管理委員會を參觀した時、李樹勲[二十八]・陳寶三[二十九]の兩同志の河南文物工作隊所藏の小片甲骨約二百片の出示を受け、二十八片を選摹した。陳寶三同志は並に自藏の甲骨拓本を見示され、極精なもので、四片を選摹した。

一九五四年春、公事に因り杭州に行き、浙江文物管理委員會と浙江博物館を參觀し、文管會の酈衡叔[三十]主任委員沙文海[三十一]主任と博物館の李易[三十二]趙人俊[三十三]兩同志の協力と援助を承け、兩機關の所藏の甲骨を參觀することを得た。博物館は十五片を藏し、十四片を選摹した。文管會藏は約二百片で、七十六片を選摹した。兩者はみな西泠印社の吳振平（未詳）の舊藏である。酈衡叔先生はもと藏すること甲骨二百片、南京に在って劉鐵雲の舊藏を買って、私はうちより四十二片を選摹した。杭州にあってはまた浙江文管會の紹介があって、陳伯衡先生（未詳）を識ることを得て、彼の收藏甲骨五十片、四十片を選摹した。

一九五四年の暑假に、私は招待に應じて長春の東北師範大學に學問研究に行った。研究おわって師の大いなる紹介を承け、並に薛虹[三十四]同志の隨行によって、東北の幾くつかの博物館を參觀した。東北博物館李大信[三十五]・朱子方[三十六]兩主任、旅順博物館金培銀[三十七]館長、李元星[三十八]主任、吉林博物館范玉樸[三十九]館長王亞洲[四十]同志の協助を承けて、參觀には色々と少なからず便宜を賜った。旅順博物館の甲骨は約一千五百片の多くを藏して、私はまる二ケ月かかって、二百五十六片を選摹した。東北博物館は四百片を藏し、五十三片を選摹した。吉林博物館は四十片を藏し、十七片を選摹した。あるものは實に精巧なものである。

一九五四年國慶節で私は南京に行き參觀し、鎮江を過ぎ、ついでに揚州に行き揚州文管

會展覽を參觀した。耿鑑庭[四十一]先生の協助によって、方曾壽[四十二]先生所藏の甲骨を參觀することを得た。原物は三百片で、其の先人方地山[四十三]氏の舊藏である。また李梅閣[四十四]先生の墨拓の恵賜を承けて、本書一百四十五片を選録した。

南京博物院の四片の拓本は、南博の尹子文[四十五]先生の寄贈による。浙江圖書館は十片を藏し、沈鏡如[四十六]教授は拓本を寄贈され、其の一張を選んだ。沈教授はまた浙江師範學院王永元[四十七]先生の甲骨拓本十餘片を寄せられ、私は四片を選んだ。

前上海歷史博物館所藏の甲骨拓本は、楊寬[四十八]館長の許しを賜った。もと甲骨は一千四百片で、抗戰前は周連寬[四十九]より得た。或は言う原は葉葓漁（葉玉森・『殷契鉤沈』註[三]・第一輯一八二頁參見）氏の舊藏と。本は劉鐵雲の故物なると。今、上海博物館に歸っている。拓本は重要なものを選んで、全部で約五百片である。其の碎小で整理しないもの及び已に著録に見えるものを除いて、二百八十九片を得た。華東師範大學歷史系は甲骨一百二十片を藏する。解放後は、上海より購う。私は三十八片を選摹した。復旦大學は甲骨三百片を藏し、一部分はもと前曁南大學所藏であり、曁大は東天民（傳未詳）より得る。東氏は南京にあって劉鐵雲舊藏を買ったものである。已に著録は拙編の『甲骨六録』中にある。（註四四）一部分は最近金祖同（金祖同・『殷虛卜辭講話』註[三]・第三輯一二頁參見）より買った。本書の拓本は、一部分は即ち金先生の贈るところのものである。

長春にあって、東北師大歷史系は甲骨四十片を藏し、徐喜辰[五十]教授は四十片を藏す。吉林にある王亞洲同志は四十片を藏する。私[五十一]はみな少し選摹し、十片や五片くらい。大連にあって、羅振玉氏の第一番目の孫羅繼祖先生は大骨三版を藏し、其の兩版は『殷虛書契』菁華』に録するところとなり、別に一版を私は摹してきた。

易均室[五十二]及び葉葓漁氏の舊藏拓本は、葉氏の令息葉粟如（傳未詳）教授の供給に係り、何叙甫氏（『卜辭通纂』註[十五]・第二輯二二一頁參見）舊藏は王林[五十三]同志の供給に係る。日本三井源右衛門（三井源右衛門・『殷契遺珠』註[四]・第三輯一〇二頁參見）は金祖同先生のいただいたものである。

上海で熱心に協力と援助をしてくれた人は孫師匡[五十四]先生である。他は自藏の甲骨を代り墨拓してくれた外に、また自藏の拓本の許しを賜った。甲骨の實物は百餘片であり、のち羅伯昭[五十五]に歸し、羅氏は一九五四年に中央文化部に捐獻した。（註四二）拓本は數冊、蓋し宸翰樓所藏金石文字[五十六]の圖章がある、羅振玉の舊物に似ている。其の介弟羅振常（羅振常・『殷虛書契前編』註[三]・第一輯七〇頁參見。）の賣り出したものである。拓本のうち多く劉晦之善齋（劉體智・『古史新證』註[六]・第一輯二五八頁參見）舊藏に係る。聞くところ劉氏により當年羅氏に贈られるものである。東天民教授はまた以て所藏の甲骨拓本少しを相い贈る、南京にあって友人と劉鐵雲の少しの甲骨を分買した時に拓したところに係る。私はみな校して重複をのぞき、實に多く採用した。羅伯昭先生は一九五一年曾って小片の甲骨四十件を購得し、選拓の恵借を承け十六片を得た。原物は已に西南博物院に捐贈されたと聞く。

于思伯（于省吾・『殷契佚存』註[二十五]・第二輯二三〇頁參見）教授の雙劍誃・謝午生[五十七]先生の元嘉造像室、容希白（容庚・『殷虛文字類編』註[三]・第一輯一七一頁參見）教授の頌齋舊藏の甲骨とは、私は一九四六年成都にあって摹本を『戰後平津新獲甲骨集』に編印し、曾って書中に收入した。ただ書印多くなく、齊魯大學發行未だ久しからず、遇ゝ復見し、此の書中途で遺失により、以後未だ再發賣していない。且つ『京津集』は既に出版され、

此の書名は即ち取り消しに想じ、故に甲骨を原に收めて、再び選録して本書の内にある。于〔氏〕藏は仍って摹本を錄し、謝〔氏〕藏・容〔氏〕藏拓本を錄した。容希白教授は曾って續けて甲骨一二六片を得、遠道以て拓本の恵賜を承け、現にまた一緒に書中に收入した。謝藏のはのち北京大學に歸した。容藏は近くまた廣州文管會に歸した。

前の廈門大學中國文化研究所藏甲骨は、曾って摹本を以て拙著『甲骨學商史論叢』初集に收入し、現に『論叢』は即ち修訂重版しようとしている。此の甲骨は即ち改めて拓本を以て本書に收入した。原物は乃ち劉鐵雲の舊藏のものである。聞くところによると廈門大學は今已に存していないと、此の拓本は乃ち抗戰期間、成都にあった時、鄭德坤（鄭德坤・『甲骨學商史論叢初集』註[三十八]・第三輯二七四頁參見）教授に由って贈られたところのものである。

此の外を除いて、梁思永（梁思永・『殷曆譜』註[四十五]・第二輯二四四頁參見）先生は甲骨拓本二片を贈る。その尊ぶべき人仕公[五十八]先生の舊藏である。李梅閣先生贈る拓本は二片、羅伯昭先生の贈る拓本は二片である。而るに平時書肆の坊間では、常に一つの甲骨拓本を買い、ただ數量は少なく、重複して出す。また往往その來源の藏家は知られない。今、また以て選取を加え、一緒にして書中に編入した。

要するに此の書の世に出たのは、すべて以上の機關指導、公私藏家及び多くの熱情ある朋友の協力と援助と支持に頼り、此に謹んで以て誠懇の謝意を致さん。

本書及び以前多書の出版は、私はただ次のような念いを懷き、大家の便利に提供する。私は當然自己の蒐集して見い得た甲骨材料を、時に及んで公布出來るようにすべきだった。ただ個人の能力には限界があるによって、聞見廣くなく、また業務の忙しさにより、水平

の差、缺點の誤り、もとより多いために、なお讀者專家に指教の批評をおしまないのを幸とする。

一九五五年十月、胡厚宣
上海復旦大學の筑莊にて、

（註三八）『文物參考資料』二卷七期、一七七頁、一九五一年を見よ。

（註三九）『文物參考資料』一至六期彙編、八三頁、一九五〇年を見よ。

（註四〇）胡厚宣の『甲骨六錄』一冊、一九四五年、齊魯大學出版。

（註四一）陳夢家の『甲骨補記』を見よ、文物參考資料一九五四年第十二期一二〇頁に刊す。

（註四二）胡厚宣、『戰後平津新獲甲骨集』二冊、一九四六年、齊魯大學出版。印刷數少なく、未だ全て發行していない。

註「十四」　陳毅岑、傳未詳。

註「十五」　汪星伯　傳未詳。

註「十六」　陳墨逸　傳未詳。

註「十七」　陳保之　傳未詳。

註「十八」　沈勤廬　傳未詳。

註「十九」　張靜齋　傳未詳。

註「二十」　李既陶　傳未詳。論文に「濟南市齊城峪九頂塔年代的商榷」文物、「一件極珍貴的歷史人物—西漢石洛侯金印」光明日報、「山東嶧縣發現平東將軍金印」文物がある。

註「二十一」　柏根（？　）Bergen. アメリカ人で漢名は柏爾根とも書く。齊魯大學校長であった。彼の蒐集したものは明義士の編により『柏根氏舊藏甲骨文字』（第四輯註「二十二」三〇七頁參見）が刊行されている。

註「二十二」　羅振玉舊藏は一三九〇片と書かれているが、陳夢家氏の調査によると山東文管會は一三〇九片とある。（『殷虛卜辭綜述』第二十章附錄、以）出土甲骨的統計）

註「二十三」　韓壽萱　傳未詳。論文に「花紋與實物史料」歷史教學がある。

註「二十四」　楊昭廉　傳未詳。

註「二十五」　李達卿　傳未詳。

註「二十六」　杜靜上　傳未詳。

註「二十七」　劉孟真　傳未詳。

註「二十八」　李樹勳　傳未詳。

註「二十九」　陳寶三　傳未詳。

註「三十」　酈承銓（一九〇四—　）江寧の人。字は衡叔、號は願堂。かつて國立中央大學講師、國立暨南大學、厦門大學教授を歷す。酈氏には說文研究の書がある。

註「三十一」　沙文海　傳未詳。

註「三十二」　李易　傳未詳。

註「三十三」　趙人俊　傳未詳。論文に「浙江嘉興雙橋附近新石器時代遺址的調查」考古通訊、「西湖發現宋銅鏡和元〃昏爛鈔印〃」文物參考資料「紹興漓渚棠棣鄉的南宋磚室墓」考古通訊、があり、他數篇發表されている。

註「三十四」　薛虹　傳未詳。

註「三十五」　李太信　傳未詳。

註「三十六」　朱子方　傳未詳。論文に「內蒙古寧城縣大名城近年出土官印考釋」考古通訊がある。

註「三十七」　金培銀、傳未詳。

註「三十八」　李元星　傳未詳。

註「三十九」　范玉樸　傳未詳。

註「四十」　王亞洲　傳未詳。論文に「吉林汪清縣百草溝遺址發掘簡報」考古、「長春附近發現的石製農業工具」考古がある。

註「四十二」　耿鑑庭　傳未詳。

註「四十三」　方濬壽　傳未詳。

註〔四十三〕　方地山　傳未詳。

註〔四十四〕　李梅闇　傳未詳。

註〔四十五〕　尹子文　傳未詳。

註〔四十六〕　沈鏡如　傳未詳。

註〔四十七〕　王永元　傳未詳。

註〔四十八〕　楊寛（？、）中國古代史を專門とし、著論文に『中國上古史』、『論西周金文中"六𠂤"、"八𠂤"（考古）『再論西周金文中"六𠂤"和"八𠂤"的性質』（考古）等がある。

註〔四十九〕　周連寛　傳未詳。論文に「蘇聯南西伯利亞所發見的中國式宮殿遺址」（考古學報）がある。

註〔五十〕　徐喜辰　傳未詳。

註〔五十一〕　羅繼祖（一九一三－　）浙江上虞の人。字は奉高、號は蕺齋。羅振玉の長孫、かつて庫籍整理處刊校主任、滿日文化協會「國民文庫」編輯、滿洲醫科大學豫

科講師を歴す。論文に「關於新出土的三方遼墓志的考證」考古、「「遼國駙馬贈衛國王墓志銘考證」商榷」（吉林大學社會科學學報）がある。

註〔五十二〕　易均室　未詳。

註〔五十三〕　王林　傳未詳。

註〔五十四〕　孫師匡　傳未詳。

註〔五十五〕　羅伯昭　傳未詳。

註〔五十六〕　宸翰樓所藏金石文字　未詳。

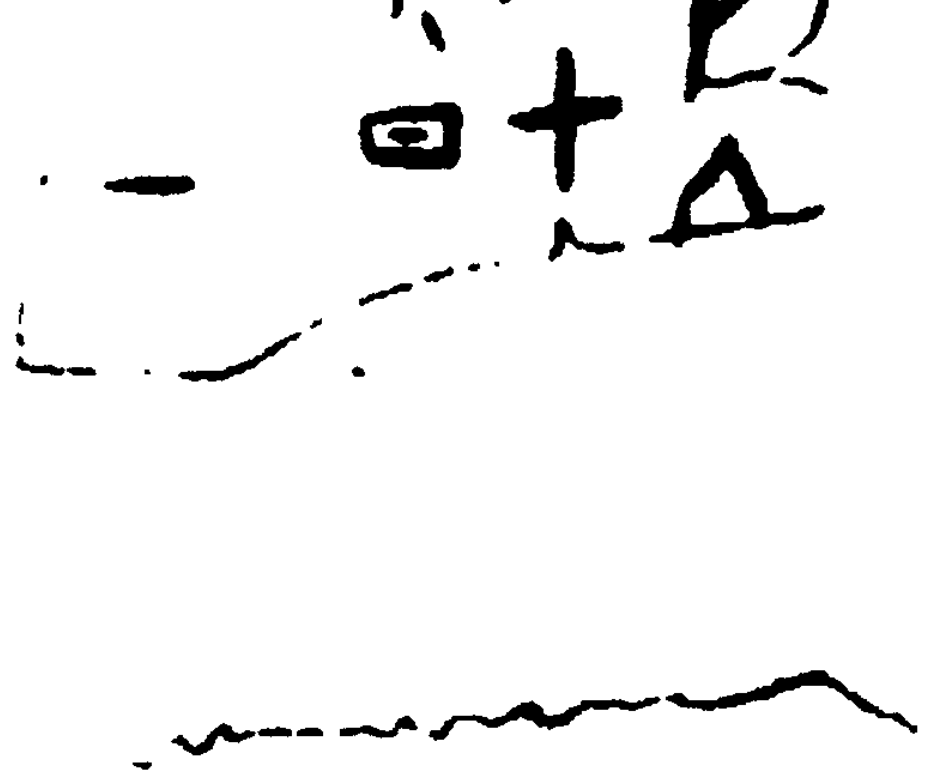
註〔五十七〕　謝午生　安陽の人。傳については明らかでない。陳夢家氏によると胡厚宣の「元嘉造像室所藏甲骨文字」をもと謝が藏しておったが、今、北京大學に藏しているという。（『殷虚卜辭綜述』第二十章、附録、三、甲骨著録簡表、第一類已刊材料。）

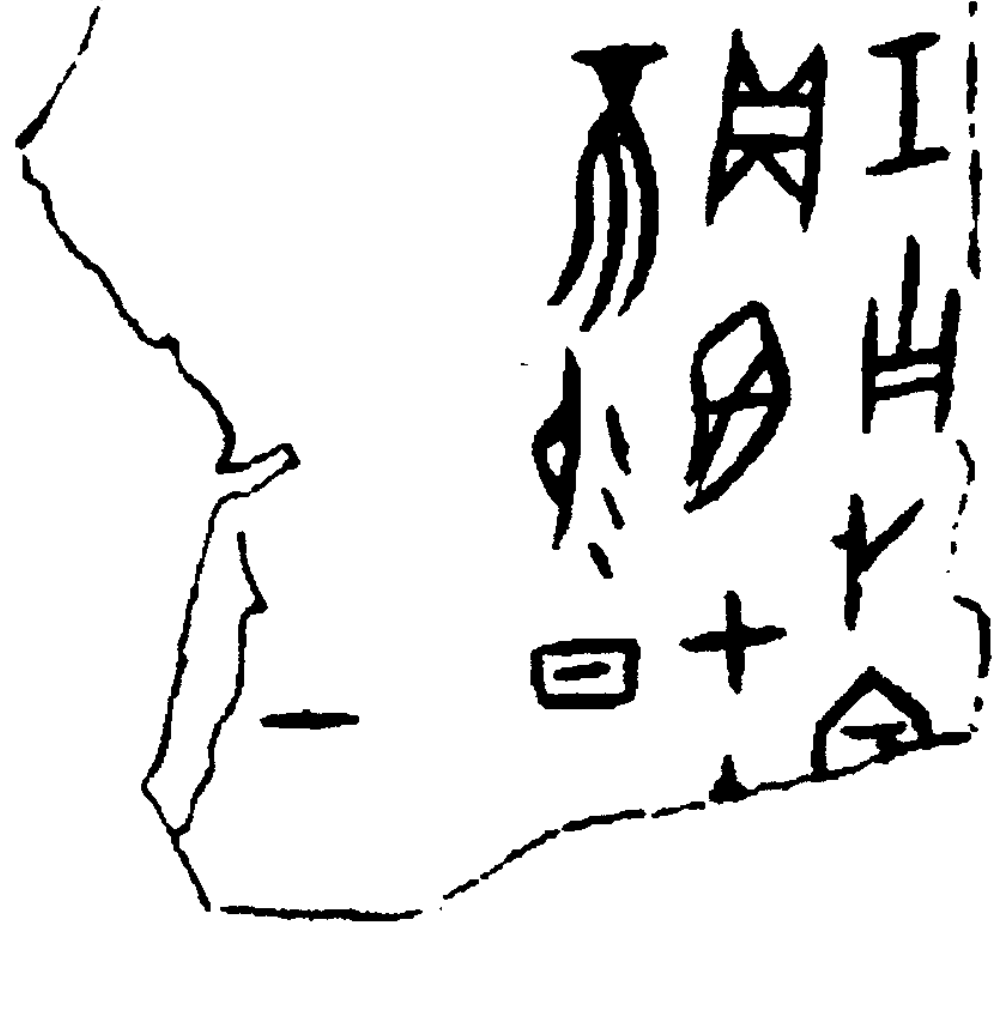
註〔五十九〕　梁啓超（一八七三－一九二九）、廣東新會の人。字は卓如、任公はその號、自ら飲氷室主人と稱す。筆名は中國少年、梁任公、梁卓如、滄江、飲氷子等があ

る。著述は各方面にわたって多いが、『飲氷室合集』に集成されている。

八五、殷虛文字外編〔二〕

甲骨契刻之日、上距三千餘年、自盤庚遷殷以迄帝辛亡國、八世十一王二百七十三年間朝夕之所卜、皆沉埋於此洹濱黄土之中。陵谷未遷、三千年猶一瞬耳。然自光緒己亥以來五十八年所出土、纔共十萬餘片。逆計卜用之遺、數必夥頤、何所見其若是寥落也？在昔箕子朝周、過國未久、故都憑弔、已見坵墟；則顯世甲骨、殆爲兵燹之遺、或幸而著録流傳、十不逮一、若不幸而復歸湮没、又不知凡幾。昔人悲出土之日爲澌滅之期、信非危言。雖然兵燹刼餘之眞相、不可復睹；出土復歸澌滅之明證、所在多有。若本書第三九〇片、亦即鐵雲藏龜之三・二版。





既藏龜全而本書殘、是其顯例。藏龜刊布於光緒癸卯、距鐵雲收藏未久。及其既死、遂歸散佚。近彥堂先生輯入外編、已物易其主、而半付闕如。以此證之、著録流傳、寧非急務歟？

殷虛文字外編者、有別殷虛文字而言、殷虛文字者、中央研究院歷史語言研究所十二次發掘殷墟所得甲骨文字之總集、而爲彥堂先生所手輯。蓋自民國十七年試掘殷墟、以迄最後一册殷虛文字之出版、皆彥堂先生所親歷、幾將卅載。發掘而外、公私購藏、時有所獲、則借拓彙輯、成此一書、故曰外編。凡收一十四家、四六四版、五期咸備。零骨碎甲之中、尤多罕見之文、至堪珍異。奈何世事多故、迄未刊布。

己丑之歲、一萍間關來謁。每當長夜請誨、教無不盡、於材料之搜輯流傳、尤多勗勉、既默識而嘗從事焉。顧積横逆、猶愧無成。今也何幸、得肩刊布之任、復以舊所摹釋者比附矣。既而承命作序、益深惶悚。運斧斤於大匠之前、一萍何敢贅一辭；然有不能已於言者、三十年來、彥堂先生主持發掘者非一次、摩挲甲骨者以萬計、而一己之私所寶者、惟此拓本一編、別無一骨一甲之藏。高風亮節、莫之與京。世但知先生於學術之貢獻之爲國之瓌寶；猶不知特行之頡頏末俗、起衰一世。一萍八載承教、心識如此、仰泰山而渺塵埃、始終未敢以夫子稱者、寸衷欽敬、先生實春秋魯叟耳！謹序。

歲在丙申莫春之月秀水後學嚴一萍。

甲骨契刻の日は、上、三千餘年を距つ、盤庚殷に遷りてより以て帝辛國を亡ぼすに迄るまで八世十一王二百七十三年間朝夕のトする所、皆な此の洹濱黄土の中に沈埋す。陵谷未だ遷らず、三千年は猶ほ一瞬のごときのみ。然れども光緒己亥「一八九九」より以來、五十八年を歷て出土する所、纔に共に十萬餘片なり。卜用の遺を逆計するに、數必ず夥頤なり、何ぞ見る所其れ是の若く寥落なるや。在昔箕子周に朝す、國を過りて未だ久しからずして、故都を憑弔し、已に坵墟を見る、則ち世に顯るるの甲骨、殆んど兵燹の遺爲り、或

は幸に著録流傳するもの、十一に逮ばず、不幸にして復た湮沒に歸するが若きは、又凡そ幾ばくなるかを知らず。昔人出土の日は澌滅の期と爲らんことを悲しむ、信に危言に非ず。然りと雖も刼餘の眞相は、復た睹る可からず、出土するも復た澌滅に歸するの明證は、所在多く有り。本書第三九〇片の若きも、亦即ち鐵雲藏龜の三・二版なり。既に龜を藏すること全として而も本書は殘す、是れ其の顯例なり。藏龜は光緒癸卯「一九〇三」に刊布す、鐵雲の收藏を距ること未だ久しからず。其の既に死するに及んで、遂に散佚に歸す。彥堂先生輯して外編に入るに迨って、已に物其の主を易へ、而も半ば闕如に付す。此れを以てこれを證するに、流傳を著録するは、寧ぞ急務に非ざる歟。

『殷虛文字外編』は、別に殷虛文字有りて言ふなり。殷虛文字は、中央研究院歷史語言研究所十二次殷虛を發掘し甲骨文字を得る所の總集にして、彥堂先生の手づから輯むる所爲り。蓋し民國十七年殷虛を試掘してより、以て最後の一册の殷虛文字の出版に迄ぶまで、皆な彥堂先生の親から歷する所、幾んど將に卅載にならんとす。發掘而外は、公私の購藏す、時に獲る所有れば、則ち拓を借りて彙輯し、此の一書を成す、故に外編と曰ふ。凡そ一十四家〔三〕、四六四版を收め、五期咸な備わる。零骨碎甲の中に、尤も罕れに見るの文多し、至堪にして珍異なり。奈何世事に故多く、迄に未だ刊布せず。

己丑の歲、一萍間關として來謁す。每に長夜誨へを請ふに當り、教へて盡さざるは無し、材料の流傳を搜輯に於て、尤も勗勉多し、既に默識して嘗みに事に從ふ。顧ふに横逆を磨つも、猶ほ成す無きを愧ず、今や何ぞ幸なるかな、刊布の任を肩にするを得、復た舊と摹釋する所の者を以て比附せり。而して命を承けて序を作り、益〻深く惶悚す。斧斤を大匠の前に運び、一萍何ぞ敢へて一辭を贅せん、然れども言ふを已む能はざる者有り、三十年來、

彥堂先生發掘を主持すること一次に非ず、甲骨を摩挲すること萬を以て計ふ、而して一己の私寶とする所の者は、惟だ此の拓本一編のみにして、別に一骨一甲の藏無し。高風亮節、これより京なるはなし。世但先生學術の貢獻に於て國の瓌寶を爲すを知るのみにして、猶ほ特行の末俗に頡頏し、一世に起衰せるを知らず。一萍八載教へを承く、心識此くの如し、泰山を仰いで塵埃を渺し、始終未だ敢へて夫子を以て稱する者ならざるも、寸衷欽んで敬ふ、先生は實に春秋の魯叟「孔子」なるのみ。謹んで序す。

歲は丙申の莫春の月に在り。秀水の後學嚴一萍。

註〔三〕

董作賓氏の編輯による。外編と名付けるについては序文中の「蓋自民國十七年試掘殷墟、以迄最後一册殷虛文字之出版、皆彥堂先生所親歷、幾將卅載。發掘而外、公私購藏、時有所獲、則借拓彙輯、成此一書、故曰外編」による。收める卜片の諸家は十四家、それについて『續甲骨年表』に「該書蒐輯計有歷史博物館舊藏原骨二十版、中央研究院購自南京原骨四十五版、何春禽所藏十九片、鐵雲舊藏由商錫永備拓甲骨十五版、何叙甫所藏六十一片、沈瑩廬在蘇州購得劉鐵雲舊藏甲骨二十五版、梁思永存任公先生舊藏甲骨四版、徐旭生在西安購得甲骨十三版；莊慕陵舊藏甲骨七版、陳中凡原甲骨一七八版、歷史語言研究所於民國十七年調查殷虛購得甲骨十五版、李玄伯舊藏之一部份甲骨七版、嚴一萍購藏原骨四版」と各諸家の入手經過と卜片數を紹介している。本書の卜片數は四六四片、體裁は墨拓、摹釋より成り、摹釋は嚴一萍氏の手による。出版は一九五六年、藝文印書館。

註〔三〕　諸家十四家。註〔二〕参見。

八六、殷虛卜辭綜述〔二〕

本書從一九五三年開始寫起，至一九五四年底寫完，共經二年。本來想要作的，是一個稍加評論的"總結"，敘述五十年來有關甲骨刻辭研究的成績，並且稍加以去取與估定其貢獻。這樣的做法，免不了許多無謂的繁瑣的引述與爭辯。因此，在試作數章以後，改變了原來的計劃，將前人可以成立之說加以整理，根據現有的新材料加以補充和修正，按照我們今日的理解對於甲骨刻辭的某些類別的材料加以解釋。我們稱此書為"綜述"者，是綜合了前人近人的各種可采取的說法，綜合地敘述甲骨刻辭中的各種內容。希望它對於研究甲骨學的和研究古代歷史社會的，可以有一些參考和檢查的用處。

作此書時，會時常注意到兩件事：一是卜辭，文獻記載和考古材料的互相結合；一是卜辭本身內部的聯系。為了使卜辭所反映的殷代社會更為顯著起見，在某些地方特別引述了西周的材料以資對照。

作者在一九三二年起從事甲骨研究之時，曾經片面的注重於文字的分析與尋求卜辭中的禮俗。後來因為作完了銅器斷代的工作，才覺得應從斷代著手，全面的研究卜辭。遂於一九四九年起寫了甲骨斷代學四篇。這四篇已經發表，其大部分稍經刪改後併入於本書之內。過去所已發表的一些單篇，有很多不成熟與錯誤之處，均因本書的印行而作廢。

作者在此敬致謝於以下各位先生：郭沫若、唐蘭、于省吾、楊樹達、胡厚宣，他們的著作、通訊，討論對於本書的作成有很大的幫助；鄭振鐸、尹達、梁思永、夏鼐、徐炳昶、郭寶鈞、張政烺、唐蘭、于省吾，或者審定了本計劃的進行，或者審閱了本書的一部分，提供了寶貴的意見；徐森森、王獻唐對於我經常不斷的鼓勵和關懷；張長壽、陳公柔、周永珍曾有過部

分的協助；我在清華大學寫作甲骨斷代學時也曾獲得朱德熙和馬漢麟的協助。這些工作也是構成本書的一小部分。

限於個人的能力和時間，有許多地方未能作詳細的核對。其中一定有許多錯誤和遺漏，希望讀者多加指正。

一九五五年一月陳夢家記於考古研究所。

本書は一九五三年より書き始めて、一九五四年に至って書き終った。共に二年を經た。本來作ろうと思ったのは、一つの稍〻評論を加えた「總結」である。五十年來の甲骨刻辭の研究に關する成果をのべ、その上稍〻取捨選擇を加え以てその貢獻を見定めんとした。この様な方法は、多くの無謂的繁瑣的な引用し述べるのと論爭とを免れることは出來ない。此れによって、試みに數章以後を作ってから原の計劃を改めた。そして前人の成立の説に整理を加え、現在ある新材料を根據として補修と修正とを加えた。私どもの今日の甲骨刻辭をいくらかに類別した材料に照らして解釋を加えた。私がこの書を稱して「綜述」とするのは、前人近人の各種の采取できる説法を綜合したのである。綜合の區域は甲骨刻辭中の各種の內容を叙述した。その甲骨學の研究と古代歷史社會の研究に對して、以て一つの參考と檢査の用途であることを希望する。

此の書を作った時は、かって常に二つのことがらに注意した。一つは卜辭の文獻記載と考古資料の互に助けあう結合である。一つは卜辭それ自身の内部の聯系である。卜辭をして反映する所の殷代社會を更に顯著なものにする為にあるところでは、特別に西周の資料を引いて以て對照を覽めた。

作者は一九三二年に甲骨研究に從事した時、曾って片面の文字の分析に重きを注ぐのと、卜辭中の禮俗を尋求した。のち銅器斷代の[三]工作を終ったのではじめて、斷代より着手し、全面的に卜辭を研究することを感じた。遂に一九四九年より甲骨斷代學四篇[三]を書いた。この四篇は已に發表を經て、其の大部分は稍〻刪改を經てのち本書の內にまとめて入れた。過去に已に發表の一つの單篇は實に未成熟と誤りの處が多くあり、均しく本書の印行によって廢した。

作者はこゝに以下の各位先生に感謝する。郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁參見）唐蘭（唐蘭・『殷虛文字類編』註[三]・第一輯一七一頁參見）于省吾（于省吾・『殷契佚存』註[三十五]・第二輯二三〇頁參見）楊樹達（楊樹達・『五十年甲骨學論著目』註[十七]・第四輯三四八頁參見）胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）彼等の著作、通迅討論は本書の作成に對して實に大きな助けがあった。鄭振鐸（鄭振鐸・『殷虛文字綴合』註[四]・本輯七七頁參見）尹達[四]、梁思永（梁思永・『殷曆譜』註[四十五]・第三輯三四四頁參見）夏鼐（夏鼐・『殷虛文字甲編』註[四十七]・第四輯七七頁參見）、徐炳昶[三]、郭寶鈞（郭寶鈞・『殷虛文字甲編』註[四十八]・第四輯七八頁參見）張政烺（張政烺・『殷虛文字綴合』註[三]・本輯七七頁參見）、唐蘭、于省吾は、或は本計劃の進行に審定し、或は本書の一部分を審閲した、そして寶貴な意見を提供された。徐森玉（徐森玉・『殷契拾掇』註[三]・第四輯二七五頁參見）王獻唐（王獻唐・『殷曆譜』註[四十七]・第三輯三四四頁參見）は私に對して常に不斷の鼓勵を心にかけられ、張長壽、陳公柔[七]、周永珍[六]には曾って部分の協力と援助に過ぎることがあった。私は清華大學に在って甲骨斷代學を書いた時、曾って朱德熙[五]と馬漢麟（未詳）の協力と援助を得た。この作業はまた本書構成の一小部分である。個人の能力と時間には限りがあり、多くの部分の未だ詳細な校對を作ることが出來ない。その中には一定の多くの誤りと遺漏があり、讀者の多くの指正を加えられんことを希望する。

一九五五年一月、陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註[三]・第三輯一四〇頁參見）考古研究所にて。

註[三]

著者は陳夢家。本書は從來の甲骨學研究の經過を綜合し卜辭に見える殷の文化現象を組述的に述べんとし、特に卜辭文獻の記載と考古資料の互相結合と卜辭それ自身の內的聯系に注意したとする。そして卜辭をして反映する殷代社會を更に顯著にするため西周の資料をも引用對照している。この書は二十章より成り、こゝに簡單に紹介しておく。第一章は總論として甲骨の出土由來、甲骨學の發展、甲骨の用法、出土地、發掘經過、卜辭內容を述べ卜骨を龍山式、小屯式、殷末周初式に分け、この順序で發展したとみる。第二章は文字、研究史の概略を述べ、構造法を論じ象形・指事、形聲は殷代に完成していたとする。また卜辭の合文について「一方では漢字の簡省規律と漢語の單音綴性と相ひ抵觸し、一方では形聲字の結構と相ひ關連している」とする。第三章は文法。品詞、句式について例を上げて述べ、格變化、受動と能動との未分化、否定詞等の特徵について述べる。第四、五章は斷代。この章は以前發表された『甲骨斷代學』四篇『考古學報』を修訂したものである。陳氏は坑位による同坑、同版、同辭關係

より董氏の文武丁說を檢討し第一期に屬することを證した。また第三期の廩辛卜辭と康丁卜辭とを區別できることをも證した。陳氏の在位時期區分は、Ⅰ武丁時期、Ⅰ武丁晚期、Ⅱ祖庚時期、Ⅲ廩辛時期、Ⅳ武乙時期、Ⅴ帝乙帝辛時期に分ける。貞人の斷代については既に『甲骨文斷代研究例』補註[三]・第二輯五八—九頁に紹介しておいた。第六章は年代。盤庚から帝辛まで前一三〇〇—一〇二七と推定。第七章は曆法天象。置閏法、歲春、秋、その他の記時法、記年法および日、夕、𣅀、月食、雲、旦、各日、朝、莫、昃、郭兮、大食、小食、益日、大采、小采、妹、晚殷の紀年月日法、天象記錄には月食、日食、日又戠、風、霾、雨、雪、雲、虹、隮、霞雲、暘日、啓、霽、霰等をあげ考證する。（歲は永年、麥年の半年を指す、殷代には日月の農曆と旬、祀の祀譜曆とがあり、その相互影響により曆法が發展したという假說を出している。）第八章は方國地理。殷の王都商を今の商邱附近、大邑商を沁陽、天邑商は朝歌、中商を安陽とする。そして亳、衣について考證する。泉名および京名、武丁時代の多方（廿一を揭る）、武丁時代の晉南諸國（十國）、武丁後の多方（七國）乙辛時代に征する人方、盂方を論じ、殷の區劃は北約緯度40°以南易水流域および其の周圍の平原、南は約緯度33°以北淮水流域と淮陽山脈、西は112°太行山脈と伏牛山脈の東、東は黃海、渤海に至るとある。第九章は政治區域。卜年と族邦、四土四方、邑と鄙、邦伯と侯伯、第十章は先公舊臣。商殷の世系研究、殷本紀先公と卜辭の對照を述べ先公臣を傳說に比定、先公臣の芒、祟、年雨の祈求、先公の祭祀と並列關係により祭祀の目的を論ず。舊臣には六人をあげる。第十一章は先王先妣。殷本紀の世系（卜辭には世系を正す）商王の繼統法、直系先王及びその順序、先王は法定配偶であること、祀周と農曆、周祭祀譜の編排により先王周祭をとく。第十二、三章は廟號。史書上の商王廟號をのべ、七甲、六乙、二丙、八丁、一戊一癸、廟號の區別字、諸母諸兄の稱謂、先王先妣、集合の宗廟、宗室と建築について論ず。第十四章は親屬。親屬、配偶の稱謂、女字と帚（婦姓の婦は姓を示すものでなく、字を示すとする）來生、集合の親稱、宗法等について述べる。第十五章は百官。臣正、武官、史官の官の職司を論ず。第十六章は農業及其他。農業と水、卜年の種類、登嘗の禮、農作の過程、農具飲食器具、田獵と漁具、車等を論じ殷代の穀物は禾（小米）、來（麥）、𪏰（稷）、黍、秬（黑黍）の五種とする。第十七章は宗教。上帝の權威（天界表象、賓天について述べ、賓天は配天觀の先驅と解する）帝廷及び其の臣正。風雨諸神（東母、西母は日月神で上帝の配偶とする）帝の一つの問題（卜辭に帝を祀る明文がないことについて、その特殊儀禮に及び、殷代の上帝は農業生產神であることを主要性格とし、自然的主宰であって、また人格化屬性がないとする。）土地諸祇（先公と某地の社神があって、土と四方觀念が結ばれている）山川諸示（山川神と先公との混淆、山川神と地名との混淆を困難としながら山川神名を列擧している）求雨の祭（求雨の舞種、烄祭、音樂）第十八章は身分。卜辭の人、西周文中の殷人の身分によって統治階級は、王、侯、田、邦伯、百官、多士（上層百姓）、二、被統治階級、自由の小人（下層百姓）、衆を農耕奴隷とする。第十九章は總結。『殷周制度論』を批判し、郭氏の『殷代社會研究』を紹

介して、全章を總括しながら殷代社會の歴史文化を論ず。第二十章は附錄。甲骨材料の記載（蒐輯）、論著目錄簡目、著錄簡表、地圖、圖版を收めている。出版は一九五六年、科學出版社。

註〔二〕 銅器斷代。『考古學報』の九、十、十一、十二、十三、十四各期に掲載された「西周銅器斷代」である。

註〔三〕 甲骨斷代學四篇 陳夢家撰。燕京學報四〇期（一九五一年）、考古學報五・六・八期（一九五一—一九五四年）これは本書第四・五章の前稿であって、これを修訂して收めた。

註〔四〕 尹達（？—　）河南の人。一九五〇年、中國科學院考古研究所副所長となり、のち哲學社會科學學部常務委員、歴史研究所學術委員會委員兼第二副所長を歴す。彼の專門は新石器時代の考古學。

註〔五〕 徐炳昶（一八八六—　）河南唐河の人。字は旭生、字を以て行はれる。フランスに留學してパリー大學を卒業。歸國して河南歐米留學豫備學校教授、國立北京大學教務長、同大學哲學系主任教授、西北科學考査團長、國立北平大學哲學教授兼研究所國學門導師を經て民國二十年二月國立北平師範大學校長、その

翌年辭任して北京大學哲學系名譽教授となる、また北平研究院歴史學會編輯兼考古組主任にも任じた。それよりのち西南聯合大學教授となる。その譯書に教育哲學關係のものが多い。

註〔六〕 張長壽 傳未詳。

註〔七〕 陳公柔 傳未詳。論文に「對於編寫報告的一些體會」考古通訊、「記幾父壺、柞鐘及其同出的銅器」考古、「白沙唐墓簡報」考古通訊、「士喪禮、既夕禮中所記載的喪葬制度」考古學報、「關於居延漢簡的發現和研究」考古、「長沙戰國繒書及其有關問題」文物 等がある。

註〔八〕 周永珍 傳未詳。論文に「殷代墓葬形制」考古通訊がある。

註〔九〕 朱德熙 傳未詳。

八七、巴黎所見甲骨錄〔一〕

本年九月、予役法京、出席第九屆國際漢學會議、日得交其碩彥長德、縱觀博物院圖書館庋藏、故國寶器、往往手在、敦煌殘卷、觸手如新、載玩斯文、有忻永日、流連階陛者久之、洹水甲骨、夙所究心、前歲旅居扶桑、弋鈞所及、薄有纂記、將次第載於港大東方文化半年刊、若巴黎藏契、向所未聞、各家之書、從無紀述、洎來此間、得王君聯曾之助、先後於巴黎大學中國學院（Institut des Hautes Etudes Chinoises）策努斯奇博物院（Musée Cernuschi）歸默博物院（Musée Guimet）獲觀所藏龜甲獸骨、爰剔去僞品、橅錄以歸、甄集爲編、鍵戶竭旬日之力、爲作攷釋、萋々叢品、享帚自珍、用付殺青、就正鴻博、夫知河海不擇于細流、庶幾方家罔勞乎旁采、他日彼邦人士、倘能景拓問世、以存其真則此區々摹本、爲覆瓿焉可耳、歐陸藏龜、以大英博物院蘇格蘭皇家博物院爲巨觀、具見方法斂（Frank H. Chalfant）摹寫之庫方二氏藏甲骨卜辭（The Couling Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone）若金璋（L. C. Hopkins）所藏、泰半已歸劍橋大學、友人李棪君方從事於景錄疏說焉、法京甲骨、茲所著錄、僅二十六版、就中見於殷絜佚存者四、與他書同文者亦四、參互證繹、頗文臆義、可診發者尚夥、故不憚覼縷、試爲考覈、并附有關釋字四篇、爲硏絜之一助、編中每攷一字、必徧徵全部卜辭、殊形異訓、廣爲歸納、覬發隱滯、惟倉卒屬稿、慮多踳誤、用祓方聞、理而董之。

丙申十月上浣饒宗頤識于香港大學中文系。

本年〔一九五六〕九月、法京〔フランス〕に予役し、第九屆國際漢學會議に出席し、因りて

其の碩彥長德〔二〕に交りを得て、博物院圖書館庋藏を縱觀す。故國の寶器は、往往手として在り、敦煌の殘卷は、手に觸れば新なるが如し、載ち斯の文を玩び、忻（たのし）む有りて日を永うす、階陛に流連するはこれを久しくす、洹水の甲骨は、夙に心を究むる所なり、前歲扶桑〔日本〕に旅居し、弋鈞の及ぶ所、纂記有ること薄（かろ）んず、次第を將て『港大東方文化半年刊』〔三〕に載す、巴黎（パリー）の契を藏するが若きは、向に未だ聞かざる所にして、各家の書、從って紀述無し、來るに洎んで此の間、王君聯曾〔三〕の助を得て、先後巴黎大學中國學院〔四〕（Institut des Hautes Etudes Chinoises）策斯奇博物院（Musée Cernuschi）歸默博物院（Musée Guimet）に於て藏する所の龜甲獸骨を觀るを獲て、爰に僞品を剔去し、橅錄して以て歸へる、甄集して編と爲し、戶に鍵して旬日の力を竭し、爲に攷釋を爲る、萋々たる叢品、享帚して自ら珍と爲し、用って殺青に付して、就きて鴻博に正す、亦、河海は細流を擇ばざるを知り、庶幾くば方家旁采に勞無からんことを。他日彼の邦の人士、倘能く景拓して世に問ひ、以て其の眞を存すれば、則ち此の區々たる摹本、覆瓿と爲るも可なるのみ。歐陸〔ヨーロッパ大陸〕の藏龜は、大英博物院蘇格蘭皇家博物院を以て巨觀となす。具に方法斂（Frank H. Chalfant）〔方法斂・『殷虛文字甲編』註〔十八〕・第四輯三六頁參見〕の摹寫の『庫方二氏甲骨卜辭』（The Couling Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone）（『殷虛文字甲編』註〔十七〕・第四輯三四頁參見）に見ゆ、金璋（L. C. Hopkins）（金璋・『五十年甲骨學論著目』註〔十八〕・第四輯三四八頁參見）の藏する所の若く、泰半は已に劍橋（ケンブリッジ）大學に歸す、友人李棪〔四〕君は方に景錄疏說に從事す。法京の甲骨は、茲に著錄する所〔五〕、僅かに二十六版のみ、中に就きて『殷契佚存』に見える者は四、他書と同文の者も亦四なり、參互證繹せしも、頗文臆義にして、診發すべき者尚夥しい、故に覼縷を憚らず、試みに考覈を爲す、并に關わり

有るの釋字四篇を樹して、研契の一助と為す。編中一字を攷うる毎に、必ず偏ねく全部の卜辭を徵し、形ちを殊にし訓を異にするは、廣く歸納を為し、隱滯を覩發す。惟れ倉卒に稿を屬（つづ）る、踳誤を多からんことを慮ばかる、用って方聞を俟ち、理めてこれを董（ただ）さん。

丙申「一九五六年」十月、上浣の饒宗頤[六]、香港大學中文系で識す。

註[二] フランスのパリーに所見する甲骨を饒宗頤氏が摹本し編したものである。それは巴黎大學中國學院（Institut des Hautes Etudes Chinoises）所藏甲骨十三片、策努斯奇博物院（Musée Cernuschi）所藏甲骨九片、歸默博物院（Musée Guimet）所藏甲骨四片、合計二六片を錄している。卷末に全片の攷釋を付し、附錄として釋𡆥、釋貴、釋䶬、釋吉黄の字釋四篇を收める。出版は一九五六年十二月、香港。

註[三] 彦長德 傳未詳。

註[三] 王聯曾 傳未詳。

註[四] 李棪 傳未詳

註[五] 『殷契佚存』に見える者は四、他書と同文の者も亦四なり。

巴黎所見甲骨錄	1	殷契佚存	572

巴黎所見甲骨錄	2	殷契佚存	570
〃	3	〃	525
〃	5	〃	571

他書と同文の者も亦四なり。

巴黎所見甲骨錄	1	後編上・十二・十一殘龜
〃	7	續存下一七七
〃	7	前編一・一・一
〃	12	續存上一四九〇骨（平津元嘉二〇一重）

註[六] 饒宗頤（？～　）廣東潮州の人。字は選堂、號は固庵。中山大學卒業。中央研究院史語所兼任研究員、新加坡新加坡大學中文系主任、香港中文大學中文系・教授。專攻は中國文學・古文字學。著書に『楚辭書錄』、『楚辭與詞曲音樂』、『九龍與宋季史料』等三百餘種。

八八、殷代社會史料徵存[二]

我寫這本小書，是以殷墟卜辭為根據，並參考古代典籍來考證殷代社會的一些情況和一些制度。考釋文字不是本書的重點。現在將比較重要的部分提出，分別寫在後面。

殷代後期，常患水災。在防禦方面，卜辭裡有用圩扞水的記載。漢書溝洫志：「按經義，治水有決河深川，而無隄防雍塞之文」。今據卜辭所記隄防壅塞的事，不但可補典籍所無，並可證明三千餘年前，我國勞動人民治水已有圩的發明。

殷代的工業，如冶金、雕刻已很發達，見過實物或圖版的人都能知道他的輝煌成就。從卜辭的記載裡，也可想見其他方面的成績。卜辭裡關於工業的記載，僅發現二條：一、審察革縫是否能直。因為戰士需着革衣，革縫能直，就證明革衣能製得完善。周禮考工記裡說函人視革縫。也是記載這類事。二、殷王嘗命官員名𠂤的比較蠶絲生產的成績。詩經豳風：「八月載績」。可知周代考績蠶絲的事，和殷代是一樣的。殷代重視紡織原料，希望蠶絲生產豐富，因此有了祭蠶神的祀典。

殷代的教育，郭沫若先生很早發現一片卜辭，揭載於殷契粹編一一六二號：「丁巳卜，其乎呼呂多方小子，小臣其敎戒？」我又蒐集了三條：一、「呼多𤔲尹敎王族」，是殷王命多𤔲尹誠懇的教王室子弟；二、「多子往學」，是貴族子弟入學校的記載；三、「教瞽」，是使瞽目的人到學校裡學樂歌。由此可知殷代除注意貴族子弟的教育外，也教瞽人學樂歌。孟子滕文公章：「學則三代共之，皆所以明人倫也，人倫明於上，小民興於下。」可以推想殷代對民間教育大概也很注意吧。

殷代的刑獄，卜辭裡有五次記載：一、兩造訟訴，通過法官審判，四方的人民都認為處理

公允。二、殷王問小臣[illegible]，有無關於圉圄的事。小臣立于東方，對答了王的問話。三、有一罪人經法官審判，後期死刑，仍予拘囚。四、罪人被判死刑，殷王寬赦，得免於死。五、役使罪人舂糧，官員替他申請免於徭役。免於徭役的事，漢書高祖本紀裡也有記載。現在我們知道這一制度，遠在殷代即已有之。

殷代戰征是頻繁的，殷代的軍制是怎樣的呢？據卜辭所記，有「三師」（分為左・中・右）和「左右部」兩種制度。

又有不關於軍制而屬於軍事方面的。如在戰鬬當中，常時防備敵人來侵犯、突擊；到戰鬥迫急之時，就把帳棚用火燒掉，表示戰鬥必死的決心。這就是「置之死地而後生」的意思。以上兩種軍事上的防備和措施，一直到春秋時代還是有的。春秋左傳：「迭我殽地」，「秣馬蓐食，師陳焚次」。杜注：「迭，侵突」。「次，舍也。焚舍示必死」。這些記載和卜辭是完全相同的。

殷代的馬政，卜辭有不完備的記載。一、馬的來源，大多數是由臣下貢入，如「[illegible]入馬」，「子入馬」，「辰入馬」，「貯入赤𩣓」皆是。二、養馬的廄，分為左右。三、駕車的馬，也分為左右。四、掌馬的官有士，同於周禮。五、祭馬祖的制度，也與周禮相同。

殷代宮室宗廟制度已極完備，如三門、南門、掖門，根據典籍，皆有可考。又如「五室」「六寢」之制，上起於夏，下及於周。周禮考工記鄭注：「或舉宗廟，或舉王寢，或舉明堂，互言之，以明其制同」。今天我們可以證明鄭說三代宗廟其制相同是正確的。由此可以設想殷代宮室宗廟的構造絕不平凡，而當時勞動人民的建築技術又是何等偉大。

殷代的婚姻，卜辭裡記載僅兩見。甲骨續存下編五八九片：「甲戌，余卜，取台」。胡厚宣先生說明這片卜辭「是殷王親卜取台的卜辭」，這是極可珍貴的史料。我曾發現一片卜辭，

也是卜問殷王取右的事。簠室殷契類纂雜事編六一片：「口戌卜，出貞，自今十年又五，王嬉□」。這片卜辭可惜殘闕不完，他的意思是說自今經過十五年，王與嬉舉行婚禮。在卜問時，大概王的年齡尚幼，所以要經過十五年才行婚禮；並可推知嬉當幼年即決定為王后。這是典籍沒有記述的事。這種情形和過去舊社會裡的童養媳像是一樣的。

以上列舉的幾點，多半是片段的材料。這一來因為這幾類的刻辭迴不如卜「天象」、「祭祀」、「田遊」的那樣多。再就是我個人見聞不廣，雖然有而未能發現。很希望今後能發現更多的材料，再作系統的研究。

現在把我所見到的寫出來，是希望能作為研究中國古代史和社會史的同志的一種參考資料；同時更希望同志們提出寶貴的意見，有所教正。

公元一九五六年六月陳邦懷寫於天津文史研究館。

私がこの小書を書いたのは、殷虚卜辭を以て根據としたのである。並に古代の典籍を参考して殷代社會のいくらかの情況といくらかの制度を考證した。文字の考釋は本書で重點としなかった。現在比較的重要な部分を提出し、區別して後面に書く。

殷代後期は、常に水災に患へた。[三] 防禦方面では、卜辭には防水提をもって水を防いだ記載がある。『漢書溝洫志』に「經義を按ずるに、水を治むるには河を決り川を深くするにあり、而して隄防雍塞の文なし」と。今、卜辭の記すところの隄防壅塞の事に據れば、ただ典籍に無き所を補うのみならず、また三千餘年前のことを證明している。我が國の勞働人民の治水には已に防水提の發明があった。

殷代の工業は、治金、雕刻の如く已に大變發達し、寶物或は圖版を見たことのある人な

らみなその輝煌ある成果を知り得る。卜辭の記載の中から、また其の他方面の成績を想見することができる。卜辭の中で工業に關する記載は、僅かに二條を發見した。一、革縫することができるかどうかを審査する。[三] 戰士が革衣（かわごろも）を必要とするから、革縫を能く直しうれば、就ち革衣が完全に善く製られることを證明している。『周禮』考工記に函人革縫を視るという。やはりこの類のことを記したものである。二、殷王は嘗って官員名らに命じ蠶絲生產の成績を比較した。[四]『詩經』豳風「七月」の「八月載ち績す」は周代が蠶絲の事を調べさせたようであるのはこと殷代と同じである。[五] 殷代は紡織原料を重視し、蠶絲生產の豐富なることを希望し、此れによって蠶神を祭る祀典がある。

殷代の教育に、郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁参見）先生は實に早く一片の卜辭を發見して『殷契粹編』一一六二號に揭載した。「丁巳卜、其乎呼[六]呂多方小子、小臣其教戒」と。私はまた三條を蒐集した。一、「呼多〓尹敦教王族」は、殷王が多〓尹に誡戀して王室の子弟を教へることを命じた。二、「多子往學」は[七]、貴族子弟が學校へ入る記載である。三、「教瞽」[八]は、瞽目の人をして學校へ行かせ樂歌を學ばせた。此れに由って殷代は貴族子弟の教育に氣を配る以外に、また瞽人に樂歌を學ばせたことを知ることが出來る。孟子滕文公章に「學は則ち（夏・殷・周の）三代之を共にす。皆な人倫を明らかにする所以なり。人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」と。以て殷代は民間教育に對しても恐らくまた大變注意していたことが推測される。

殷代の刑獄は、卜辭に五つの記載がある。一、原告と被告の訴訟、法官の審判を通過し、四方の人民みなが公平で當を得ていることを認めている。[九] 二、殷王は小臣〓に問う、牢獄の事に關係がある。小臣は東方に立ち、王の問に對して答えた。[十] 三、一人の罪人が法官

によって審判され、死刑の執行を延期されそこで拘囚をあたへられる。[十一] 四、罪人は死刑を判せられ、殷王は寬赦して、死を免れるを得た。[十二] 五、罪人を舂糧に使役し、官員は他に代って申請し徭役を免れんことを申請した。[十三] 徭役を免れることは、『漢書』高祖本紀にまた記載がある。現在私どもはこの一つの制度が、遠く殷代にも已にあったことを知るのである。

殷代の戰征は頻繁であり、[十四] 殷代の軍制はどのようなものであったか、卜辭に記す所に據れば、「三師」（分けて左・中・右とする）と「左右部」二種の制度がある。また軍制に關係しないで軍事の方面に屬するものがある。もし戰鬪の眞際中に在って、常時敵人が來て侵犯を防備し、突撃し、戰鬪急迫の時にいたって、就ち天幕を火で焼きおとし、戰って必ず死の決心を表示したのである。[十五] これは就ち「これを死地に置いて後ち生ず」の考へである。以上二種類の軍事上の防備と処置は、ずっと春秋時代にいたってもまだ存した。春秋左傳に[十六]「我が殺の地を迭（す）ぎ」「馬に秣（まぐさか）ひ、蓐に食ひ、師陳して次を焚け」と。杜注に「迭は、侵突なり」と。「次は舍なり、舍を焚いて必死を示す」と。この記載と卜辭は完全に相い同じものである。

殷代の馬政は、[十七] 卜辭には完全に備わっていない記載がある。一、馬の來源、大多數は臣下よりの貢入である。「戎入馬」、「子入馬」「辰入馬」「貯入赤騩」は皆なこれである。二、養馬の廄は、分けて左右とする。三、駕車の馬、また分けて左右とする。四、馬を掌る官には士がある。『周禮』に同じ。五、馬祖を祭る制度は、また『周禮』と相い同じ。

殷代宮室宗廟制度は已に完備を極め、[十八] 三門、南門、捍門の如く、典籍にもとづいて、皆な考證ができる。また「五室」「六寢」の制の如く、上は夏に起り、下は周に及ぶ。『周

禮』考工記鄭注に「或は宗廟を擧げ、或は王寢を擧げ、或は明堂を擧げ、互にこれを言ひ、以て其の制を明にすること同じ」と。今日私どもは鄭[注一]が三代宗廟の其の制は相い同じというのは、正確であることを證しうる。此れによって殷代の宮室宗廟の構造は決して平凡なものではない、而して當時の勞働人民の建築技術は又なんと偉大であるかを想像できる。

殷代の婚姻は、卜辭中に二つを記載するのみ。『甲骨續存』下編五八九片に「甲戌、余卜、取右」は胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁参見）先生がこの片の卜辭を說明して「これは殷王親ら卜して右を取る卜辭である」（『甲骨續存』序、本輯一三二頁参見）と。これは極めて珍貴な史料である。私は曾って一片の卜辭を發見した、やはり殷王が右を取る事を問うたものである。『簠室殷契類纂』雜事編六一片は「口戌卜、出貞、自今十年又五、王嬉□」と[十九]。この片の卜辭は惜しいことに殘片にして完全ではない。その意味は今より十五年經過したと說く、王と嬉は婚禮を擧行した。卜問の時には、恐らく王の年齡がなお幼いからで、だから十五年の經過を要してから始めて婚禮を行った。同時に嬉は幼年で即ち王后となることを決定したと推則される。これは典籍に記述のないものである。この種の事情と過去の古い社會の息子の妻を小さいときから育てるのと同じようなものである。

以上あげたいくらかの點は、大半は片段的な材料である。この一つはこの幾類かの刻辭は、やはり「天象」「祭祀」「田游」を卜するもののように多くない。それに私個人の見聞が廣くなく、あるけれども未だ發見されていない。今後更に多くの材料を發見し、再び系統の研究を作ることを希望する。

現在私の見たところを書き出したのは、中國古代史研究と社會史を研究する同志の一種の參考資料となり得ればと願ったからである。同時に更に同志達に貴重な意見を提出することを希望し、教正する所がある。

公元一九五六年六月陳邦懷（陳邦懷・『殷虚書契考釋小箋』註〔三〕・第一輯二一八頁參見）天津文史研究館にてしるす。

註〔一〕　陳邦懷氏の書で殷代社會を甲骨文獻より成語を選び經籍と合せ殷代を論述したものである。こゝに目次を紹介しておく。巻上は四方風名、帚母星、殷之軍制（三師、左右部）、殷の馬政、殷の宮室を收め、巻下に舞雨、寧風、鶉星、即日、足河、禦水、章大邑、作大田、量地、斫地、織、蔟、𨿅、坐、朕辨、糸續、蠶示、用兕、敎瞽矇、敎王族、多子徙學、尊獻有槃、宴食、大食、用新醴、斟新酒、省牛、剁牛、見牛、多羊、宿祭、𢼄祭、門示、元祀、用龜、屬龜、習一下、冤一人、卜王、王嬪、克捐王疾、王寧小臣、州臣、敗老、亞位、𨻰休、私伊、肯、而、宅棘、告、受蝦、丁蝦、降食、降𪓿、殃我、方相、置四人、懲六人、讞啇、稱僭、于東對、王更囚、事奉復、邊衛の以上六七の語彙を中心に述べている。出版は一九五九年九月、天津人民出版社。

註〔二〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「足河」二頁、「禦水」三頁による。

註〔三〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「朕辨」七頁による。

註〔四〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「糸續」七頁による。

註〔五〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「蠶示」七頁による。

註〔六〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「敎王族」九頁による。

註〔七〕　『殷代社會史料徵存』巻下「多子徙學」九頁による。

註〔八〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「敎瞽矇」八頁による。

註〔九〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「讞啇」廿九頁による。

註〔十〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「于東對」卅頁による。

註〔十一〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「稱僭」卅頁による。

註〔十二〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「王更囚」卅頁による。

註〔十三〕　『殷代社會史料徵存』巻下「事奉復」卅一頁による。

註〔十四〕　『殷代社會史料徵存』巻上、殷之軍制の「三師」七頁による。

註〔十五〕　『殷代社會史料徵存』巻上、殷之軍制の「焚舍」八頁による。

註〔十六〕　『春秋左氏傳』成公十三年、襄公二十六年の文による。

註〔十七〕　『殷代社會史料徵存』巻上、「殷之馬政」　頁による。

註〔十八〕　『殷代社會史料徵存』巻上、「殷之宮室」一四頁による。

註〔十九〕　『殷代社會史料徵存』巻下、「王嬪」一九頁による。

八九、殷虛文字丙編[二]

中國考古報告集之二，小屯，殷虛文字，丙編（以下簡稱丙編），是由乙編及其編餘的甲骨，拼兌、復原，重新傳拓，重新編輯，加以考釋而成。所以，這一編，也可以說是一部：殷虛文字乙編甲骨復原選集。

從事於乙編工作的人：屈翼鵬（萬里）先生，李陸琦（孝定）先生和我。先後都曾下過一番工夫，求其能夠拼兌復原。在乙編中，每一拓本，都有二種號碼。較大的是拓本號，較小的是發掘號。發掘號中的〝13〟，〝14〟，〝15〟等是代表發掘的第若干次數，〝0〟代表有字龜甲，〝2〟代表有字獸骨。每一個發掘號碼，代表一塊甲骨。有時，一個拓本號的後面，往往跟着一長串的發掘號碼，這就表示着一連串的拼兌過程，可以測驗出拼兌的工夫，也可以看出甲骨碎裂的程度。在整理的時候，我們沒有夠大的屋子，只有斗室一間，面積不過方丈，即使僅開一箱，也是無法全部陳列出來，做排比黏兌的工作，只能一盒一盒地打開來，從那些破爛的，吸滿灰塵的，發着霉臭的舊棉花堆裏，檢出碎甲，攤在桌上，先按發掘號碼排列，然後拼兌，鼻孔往往被污濁的塵灰和霉爛的臭氣，刺激得噴嚏不止，逼使我們不得不戴上紗罩，蒙住口鼻，却又教人悶得透不過氣來，然而，在這樣的情況之下，我們還是整日價手持碎片，東拼西湊，耐心地去尋求綴合。有時，一版甲骨的拼兌復原，需要幾天的時間。有時，花了幾天的工夫，甚至一片也接不上去，亦屬常事。儘管從事工作的人，不辭艱苦，辛勤搜索，想使那些碎甲，恢復到原來的完整程度，但是，事實上，在當時的客觀環境的限制下，那是無法辦到的事情。原來那些完整的甲骨，在幾經播遷之後，不但已是四分五裂，七零八落，而且也分裝在十幾個不同的箱子裏了，至於那些在出土以前，原已破碎的甲骨（

現在已復原），自然更不必說，不會在一起的。譬如本輯圖版壹，原是一塊大龜腹甲，折裂成二十一片碎甲，其中大部分是在出土以前，久已碎裂的，也有一小部分，是在搬運的時候震裂的，這些碎片，分別裝在好幾個不同的箱子裏，其發掘號碼，前後相差到一萬幾千，像這樣的情形，在那時的工作環境之下，無論怎樣地勤奮，也無法把它們合在一起，拼兌復原的。後來經過了一段漫長的時間，等到全部拓本完工以後，這纔陸陸續續地將它們拼兌綴合，恢復到現在的那個樣子——百分之九十五以上的完整程度。這，並不是由於客觀環境有所改善，相反地，近十年來，我們一直局處在楊梅和南港的倉庫裏，仍舊無法打開所有的箱子，全部陳列，分類排比，作通盤的拼兌工作。但是，我們已經有了全部有字甲骨的拓本，可以參考，作為進一步拼兌復原的依據。因此，丙編的綴合復原工作，得以進行，在本輯即將付印的時候，我要特別感謝屈李二位先生，在乙編中所作的貢獻，他們已經替丙編，完成了初步的工作，沒有他們的辛苦勤勞，丙編拼兌上的困難，更將十倍於此。

丙編的工作，事實上，開始得很早，民國三十五年冬，史語所復員到南京，董彥堂（作賓）師在赴美講學的前夕，命我繼續李陸琦先生的工作，並且要我撰寫乙編考釋。於是我就一面整理甲骨，編排圖版；一面參考實物，先寫釋文。在乙編編到下輯的時候，我們已經發現其中尚有若干甲骨，還可以拼兌復合，但是乙編的圖版和拓本的次序，已經排定，不易更動，上中兩輯，且已付印，更是無法重排重編的了，為了那些復合甲骨的處置問題，我也曾經大為躊躇，最後，纔決定把它們放在考釋之中，作為附圖，來彌補乙編中無可奈何的缺點，我們原想等乙編完成之後，再繼續將那些復合的甲骨，重行黏兌，傳拓。不料徐蚌一戰，大局劇變，史語所遷到臺灣楊梅，所有箱子，堆積在幾間狹窄的倉庫裏，實在無法打開來整理，於是只得暫時用摹本來替代拓本，但是，有的甲骨，只有正面拓本，沒有反面拓本，或者只

有反面拓本，沒有正面拓本，因此，在臨摹的時候，便有困難，而且，我們既然保管着實物，無論如何，總不能捨棄實物的拓本，而採用一種不完全的摹本，放在考釋之中，所以我們又必須等待重拓。然而乙編考釋的工作，却不能因此而停頓下來，所以又不得不暫時採用那些不完全的摹本，作為底稿。等到史語所遷來南港，辦公室落成之後，這纔有一個勉強可以開箱整理的場所，雖則地方仍不夠大，不能全部攤開來排比黏兌，却可以將歷年來根據拓本所復合的甲骨，取出重拓。可是，在技術上，又有人手不足之感。原來在李莊，在南京，我們都有好幾位能打拓片的同事，現在只剩了劉淵臨先生一人而已。我們所拼合的甲骨，已有五六百片，正面和反面的拓本，將近千號，從數字上看來，這還不及乙編中的十分之一，但以篇幅而論，已經超過了三分之一以上，如果僅賴劉君一人傳拓，勢非再等一段漫長的歲月，不能全部竣工，如果按照原來的計畫，作為乙編考釋的附圖，則又必須順着乙編的先後，挨次傳拓，這樣，不但使得乙編考釋的工作，無法早日完成，也加重了印刷經費的負擔，而且其中有一些圖版，在乙編中原來一片拓本也沒有的，因此，在圖版，釋文，考證等等的安排上，也很難得到滿意的結果。為了想使這一批復原了的甲骨，能夠早日貢獻給國內外的學者，作為研究的資料，所以我們決定將它們另編一部殷虛文字丙編，選擇一些比較大的，比較完整的，比較有特殊意義的甲骨，儘先傳拓，依類編次，分期付印，陸續出版。

中國考古報告集の二『小屯、殷虛文字、丙編』（以下丙編と簡稱する）これは『乙編』及びその編餘の甲骨によって、拼兌、復原して、更に新に傳拓し、更に新編輯し、以て考釋を加えて出來たものである。だからこの一編は、また以てこの一部を說くべき、『殷虛文字乙編甲骨復原選集』である。

『乙編』作業に從事した人は、屈翼鵬（屈萬里・『殷虛文字乙編』註〔三〕・第四輯九七頁參見）李陸琦（李孝定・『殷曆譜』註〔四〕・第三輯三四四頁參見）先生と私（張秉權）で、先後みな一度は仕事をはなれて、其の能く拼兌復原を滿たすことを求めた。『乙編』中には、一拓本ごとに、みな二種の番號がある。比較的大きいのは拓本の記號であり、比較的小さい方が發掘の記號である。發掘記號のうち〝13〟〝14〟〝15〟等は發掘を代表するただ若干の回數であり、0は字の有る龜甲を代表し、2の代表は字の有る獸骨である。時に一つの拓本記號の後方に、往往一つの長い列の發掘番號に從ってこの就ち一連の列の拼兌過程を表示し、以て測ると拼兌の工夫時間を驗出することができるし、また甲骨碎裂の程度を見い出すことができる。整理の時には、私達には充分な大きな部屋がなく、ただ小さな部屋が一間（ひとま）あって、面積は方丈に過ぎず、即ち僅かに一箱（ひと）を開けても、全部陳列する方法がなかった。排比と黏兌（はりつけ）をする作業は、ただよく一盒（ふたのある容器）一盒を打ち開き、その破爛（ぼろぼろに破れる）によって、灰塵を充分に吸ひ、かびくさい舊い棉花の堆より發し、碎けた甲を檢出し、卓上にならべ、先ず發掘番號に從ってならべ然るのち拼兌した。鼻孔は往々にして汚濁の塵灰とかび腐る臭氣を被り、刺激されくしやみをして止まらず、カバーをかぶって、口鼻をおおいかくしてしまうし、却って息の出來ないようにしてしまった。然もこの様な情況のもとには、私はやはり一日中手持ちの碎片を、あっちこっち工面してよせ集め、心に耐えて綴合を尋ね求めた。時には、一版の甲骨の拼兌復原は、幾日かの時間を必要とした。時には幾日かの時間を費やしても、甚しきに至っては一片もまた接することができなかった。ひたすら作業に從事する人は、艱苦に辭さず、辛勤して搜索した。その碎甲をして本來の完全な姿に復させようとした。ただ事實上、當時

の客観環境の制限下にあっては、それはやりとげる方法のないことである。もとのあの完全な姿の甲骨は、なん度かのさすらい遷った後をへて、已にちりちりばらばらにしただけでなく、支離滅裂な、そのうえまた整理して十いくつかの違った箱にあり、それは出土以前にあり、原の已に破碎の甲骨に至っては（現在已に復原した）もとより言うに及ばない。一つになり得ないものである。譬へば本輯の圖版壹のごとく、原は一塊の大龜腹甲である、折れ裂けて三十一片の碎甲となった、その中の大部分は出土以前にあったもので、久しく已に碎裂し、また一小部分であるが、これは運搬の時の震動の裂である、この碎片は、分別の包裝はいくつもの違った箱にあり、其の發掘番號は、前後相い不等いで一萬幾千まで、この様な事情のようでは、あの時の作業環境の下に在っては、無論どの様にねんごろに奮い立っても、また他をとらえて合せて一つにしても、拼兌復原する方法がない。のち一段のだらだらと長い時間を經過し、等しく全部の拓本を完工し終って以後、この平凡なさまを續々と拼兌し綴合した、現在のその片の様子にまでに恢復して、百分の九十五以上の完整程度である。これは決して客観環境が改善されたのではない。それどころかこの十年來、私はずっと楊梅と南港の倉庫にとぢこもり依然としてなすすべのない凡ての箱を、全部陳列して、分類・排比し、全般的な拼兌の仕事をした。ただこれは、私どもにはすでに、全部字のある甲骨の拓本があるから、參考とし、更に進んで拼兌復原の依據となすことができる。此れに因って、『丙編』の綴合復原の仕事は、以て進行することを得た。本輯の部ち將に印刷の時に在って、私は特に屈「萬里」、李「孝定」二人の先生に感謝したい。『乙編』にあって作った所の貢獻は、彼等は已に『丙編』のために初歩の工作を完成し、彼等の辛苦勤勞がなければ、『丙編』拼兌上の困難は、更に將に此れに十倍する。

『丙編』の作業は、事實上、開始が出来たのは實に早く、民國三十五「一九四六」年冬、史語所が復員して南京にいたり、董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）先生はアメリカに講學に赴く前夕にあって、私は李陸琦先生の作業に繼續を命ぜられ、並に且つ私に乙編考釋を著述せんことを要求せられた。是に於て私は即ち一方甲骨を整理し、圖版を順序にならべる一方實物を參考し、先づ釋文を書いた。『乙編』を編んで下輯の時にいたって、私は已にその中になほ若干の甲骨をまた拼兌復合すべきことを發見した。ただ『乙編』の圖版と拓本の順順に、已に順序をきめ、もお動かしがたい。上中兩輯もまた已に印刷し、更に力を入れてならべさらに編するすべはない。それらの甲骨を復合する處置問題の為に、私はまた曾って大いに躊躇したが、最後にやっとそれらを考釋中に入れることを決定した。附圖をつくり、さて彌〻『乙編』中のいかんともなしがたい缺點を完全にした。私はもとから『乙編』を完成してのち、再びあの復合の甲骨を繼續し、再び黏兌、傳拓を行おうと思っている。徐蚌一戰を料らずも、大局は劇變し、史語所は臺灣の楊梅に遷り、凡ての箱は、うづたかく積んで幾間かの狹い倉庫にあり、實に整理に打開する方法なく、ここに於てただ暫くの時間を得て摹本を用いたが拓本に替えた。ただある甲骨は、ただ正面の拓本があって、反面の拓本がなく、或はただ反面の拓本があって、正面の拓本がなく、此れに因って、摹に臨む時に、便に困難があり、そのうえ私はすでに實物の保管をした以上、どんなものであろうとも、總ての實物の拓本を捨てさることはできない、一種の不完全な摹本を採用し、ならべて考釋の中に挿入した、だから私はまたぜひとも等しく更に拓を待たねばならないのである。然るに『乙編』考釋の作業は、却って此れに因って停たいすることは出来ず、だからまた暫くの間はその不完全な摹本を採用し、底稿を作

らざるをえない。史語所が南港に遷り、公室落成をそなへた後に、ここにわずかに一つ無理に箱を開いて整理する場所ができたのである。則ち場所は大きなものでなく、全部を開いてならべ、黏兌することはできないけれども場所は却って前々から拓本にもとづいて復合する所の甲骨を取り出して更に拓することができた。ここに技術上、また人手不足の感がある、原（もと）は李莊にあり、南京にあり、私には何人かの拓片を打つことのできる同僚がいた。現在ただ劉淵臨先生[三]一人だけが殘っただけである。私の拼合した甲骨は、已に五六百片あり、正面と反面の拓本は、將に千號に近い、數字上より見ると、これはまた『乙編』中の十分の一に及ばない。ただ篇幅を以て論ずると、已に三分の一以上を超過した、もし僅かに劉君一人に傳拓を頼めば、勢い再び一段とだらだらと長い歲月を待たなければ、全部竣工することはできない。如し果して原の計畫に照し考へると、『乙編』考釋に作った附圖は、則ちまたぜひとも『乙編』の先後に順じ、次の傳拓を待つ、この様にすれば單に『乙編』考釋の作業を、早日に完成させる方法はないし、また印刷經費の負擔を重ね、そのうえその中にいくつかの圖版があり、『乙編』中の原の一片の拓本もなく、此れに因って、圖版、釋文、考證等の排列において、また實に滿足した結果は得がたい。この種の復原させた甲骨を使って能く早日に國內外の學者に貢獻するようにしたい。作って研究の資料とすることを思うが為に、私は他の一部『殷虛文字丙編』を編することを決定し、いくつかの比較的大きなもの、比較的完全なもの、比較的特殊で意義のある甲骨を選擇した。儘く傳拓を先にし、編次を依賴し、期に分けて印刷し、ぞくぞく出版する。

註[二]　本書は『殷虛文字乙編』およびその編餘の甲骨によって拼兌、復原して新たに

傳拓し、更に新編輯して考釋を加えて完成した『殷虛文字乙編』の甲骨復原選集と言えるものである。上輯(一)は圖版八七〇。復原の龜腹甲は五三、復原の龜背甲は一、拓本九五、考釋一二八頁。上輯(二)は圖版九三。拓本一〇〇片、考釋一四四頁。中輯(一)は圖版一〇一。拓本一〇四片、考釋八五頁。中輯(二)は圖版一〇〇。拓本一〇八片、考釋一一二頁。下輯(一)は圖版九九。拓本一〇一片、考釋八〇頁よりなり、體裁は圖版の下には綴合番號と卜片の元の番號を記載し、丙編と乙編の間の一頁毎の圖版上には、一枚の薄い透明紙を掩ひ、甲骨復合の稜廓をなぞり、同時に甲骨上の卜辭をそのもとの位置にてらして條を分ち楷書で釋文を書き、符号によって左行、右行を表している。考釋は、(一)に出土地、出土狀況、刻兆の有無、大字か小字か、塡褐か、塡墨か、時代を記し、(二)に釋文、(三)に考證として、版の由來と文字、卜片の問題點を前人の考釋を引見して論證している。著者は張秉權。編輯者は李濟、石璋如、董作賓、高去尋等。出版は中央研究院歷史語言研究所、上輯(一)は一九五七年、上輯(二)は一九五一年、中輯(一)は一九六二年、中輯(二)は一九六五年、下輯(一)は一九六七年、が出版されたが完結はしていない。本書の作業は「小屯甲編、乙編」に繼ぐ望大なものである。

註[三]　劉淵臨　未詳。

丙編共分三輯、每輯的圖版與考釋、同時發表。現在先印上輯(一)、計有圖版：捌柒頁。

復原的龜腹甲：五十三。
復原的龜背甲：一。
拓本：九五。
考釋：一二八頁。

圖版的編排，並不按照發掘號的次序，而是採取類聚的辦法，儘量地求其前後數版，能夠互相印證，互相發明。每一拓本，都有三種不同性質的號碼：

(一)小寫的中文數字：一、二、三、四……等，是丙編的拓本號。

(二)丙編的拓本號之後，較大的阿剌伯數字，是一些乙編的拓本號。丙編拓本，是根據實物，重新傳拓的，原可不必附記乙編號碼，但為明瞭拼兌情形，便於考查起見，而亦將乙編原號，附在丙編號碼之後。如果丙編的某一甲骨，有正反兩面的拓本，而在乙編中，原來只有正面（或反面）的拓本，那末在丙編圖版的反面（或正面）拓本上，須要註明乙編號碼時，只有借用其正面（或反面）的拓本號了，而在該號之前，冠一〃反〃字（或正字），以表示乙編之中，原無此一拓本號碼。如果是乙編未載的碎甲，那就只記它的發掘號碼。如果是連發掘號也沒有的碎甲，則僅註明〃無號碎甲〃或〃無字碎甲〃而已（註二）

(三)丙編號與乙編號下面的那一排，以〃13〃〃14〃〃15〃等領頭的小字號碼，是發掘號。

丙編的圖版，是根據實物復原的，已經看不出拼兌的痕跡了，為了明瞭丙編與乙編之間的關係，所以在每一頁圖版之上，覆蓋一層薄薄的透明紙，將甲骨復合的稜廓，鈎畫出來，用A、B、C、D等字母，分別註明，以便查對乙編原號。同時，也將甲骨上的卜辭，按照其原來

的部位，分條用楷書在透明紙上，譯寫出來，並且用符號來表明該辭的左行或右行。卜辭的次第，如(2)(3)(4)等，則與考釋中的釋文次序，完全一樣。不過，在透明紙上，僅照卜辭楷譯，而不擬補缺文，那是為了便於認字，為了補救拓本的不夠清楚，也為了免得混淆不清。如果覺得這裏的楷譯行款，不夠清楚，或者想進一步了解卜辭的完全意義，則請參閱考釋，在那裏，我將審慎地比較文例，補足闕文，並且介紹它們的大意，在透明紙上，可以看到卜辭在甲骨上的原來式樣；在考釋的釋文中，可以知道全辭應有的字句和意義。所以二者相輔而行，可以參伍互勘。

（註一）沒有發掘號，而有文字的，稱〃無號碎甲〃，沒有發掘號，也沒有文字的，稱〃無字碎甲〃。

『丙編』はすべて三輯に分け、毎輯に圖版と考釋を同時に發表する。現在まず上輯(一)を印刷し、計えると

圖版は八七頁
復原の龜腹甲　五三
復原の龜背甲　一、
拓本　九五
考釋　一二八頁ある。

圖版の順序ならべは決して發掘番號の順序通りにせず、而して類聚の方法を採用した、できるだけその前後の數版を求めると、能く互に相い印證するにたり、互に相い發明した。

一拓本ごとにみな三種の違った性質の番號がある。

(一)小さく書いた中文の數字は、一、二、三、四……等で丙編の拓本番號である。

(二)『丙編』の拓本番號の後に、比較的大きなアラビア數字は、いくつかの『乙編』の拓本番號である。『丙編』の拓本は、實物を根據とするものであり、更に新しく傳拓したものは、もとより必ずしも『乙編』の番號を附記していない、ただ拼兌事情を明瞭にする為には、考査をはかるのに便利で、また特に『乙編』の原の番號には、附して『丙編』の番號の後にある。如し果して『丙編』の某の一甲骨が、正反兩面の拓本であれば、『乙編』中には、もとのただ正面（或は反面）の拓本がある。その終りは『丙編』圖版の反面（或は正面）の拓本上にある、ぜひ『乙編』番號の註を明らかに必要とする時は、ただその正面（或は反面）の拓本番號を借用すれば、番號の前に該當するものがある、一つの「反」字を冠しているのは（或は正字）、『乙編』中に表示した、もともと此の一拓本の番號はない。もし果して『乙編』に未載の碎骨であれば、それは就ちただその發掘番號を記す、もし果して發掘番號さえもない碎骨であれば、則ち僅かに註に明かにして「番號のない碎骨」或は「字の無い碎骨」とするのみである。（註二）

(三)『丙編』番號と『丙編』番號下のその一列は、〃13〃〃14〃〃15〃等の先頭を切る小字の番號を以て、發掘番號とする。

『丙編』の圖版は、實物を根據として復原したものであり、已に拼兌の痕跡も出ないものを見た、『丙編』と『乙編』の間の關係を明瞭にする為に、一頁毎の圖版上には、一層の薄い透明紙を掩ひ、甲骨復合の稜廓は、鈎（はねがき）書ができ、A、B、C、D等の字母を使って、

明白に分け、以て『乙編』の原の番號をつきあわせてしらべるのに便利である。同時にまた甲骨上の卜辭を、そのもとの位置にてらして、條を分け楷書を用い透明紙上に、釋を書き、並に且つ符號を用いその辭の左行或は右行を表明する。卜辭の次第は、(1)、(2)、(3)、(4)等の如く、則ち考釋中の釋文の順序は、完全に同じである。だが透明紙上に、僅かに卜辭の楷釋をうつし、而して缺文を補って推し測からないのは、それは字を認めるのに便利な為であり、拓本の明瞭足らざるを補ひ救う為であり、また混淆してはっきりしないことを免れる為である。如し果してこの中の楷譯書法の體裁が、はっきりしないと思うなら、あるいは進んで卜辭う完全な意義を解することを望むならば、則ち『考釋』を參閲されたい。そこには、私は審しく比較の文例をつくり、闕文を補足し、並に且つその大意を紹介して、透明紙上に、卜辭の甲骨上におけるもとの樣式を見ることが出來る。考釋の釋文中には、以て全辭に應に字句と意義を有していることを知ることが出來る。だから二者は相い輔けて行い、以て參伍互勘すべきである。

（註一）發掘番號がなくて、而して文字があれば、「番號なく碎甲」と稱し、發掘番號がなく、また文字がなければ「字なく碎骨」と稱する。

關於考釋，無論在文體上，格式上，作法上，都是一種嘗試，尤其是標點符號的使用，更是一種大膽冒險的嘗試。我們時常可以看到一些對於古書的錯誤的標點，可見標點古書，已非易事，何況甲骨文字，標點起來，更加困難萬分。所以審慎的人，對於卜辭，往往不加任何標點。這樣，固然可以免得發生大的錯誤，却也無法解釋得清楚明瞭。我想：作考釋，至

少應該做到清楚明瞭的地步。我不知道我能否達到這種境界，但是我總竭力向這一方面做去。採用標點符號，就是想使卜辭的意義，能夠解釋得更清楚一些。

考釋的標題，同時採用圖版與拓本兩種號碼，並且，將每一版上的一般現象，用最簡明的術語，在括號中，加以註明，附在標題之後。譬如：

YH127：是坑位的名稱。本編大多數的甲骨，均出此坑。其它如：B112，B119，B122，B123，B125，B126，B128，B130，B136，C75，C128，C170，C171，YH005，YH006，YH017，YH036，YH038，YH044，YH076，YH083，YH090，YH096，YH126，YH228，YH251，YH253，YH258，YH265，YH279，YH288，YH309，YH330，YH338，YH344，YH347，YH354，YH359，YH362，YH364，YH367，YH370，YH371，YH393，YH409，YH423，YH427，YH448，YM253，YM331，YM362等等都是坑位的名稱，所出甲骨都很少。

中鋒：是指刻槽的兩側，傾斜度相等，其依線正在中間。不過，那祇是在放大鏡底下，目力觀測的結果，不會像用精細儀器所測得的那般準確。

刻兆：是指那一版上的卜兆，曾經被刀子刻過的。

塡硃：是指刻槽中，塡着硃色，這種顏色，在甲骨上，有時非常鮮明，與後世的硃砂的顏色，完全一樣。其化學成分，則尚待定性分析，纔能確定（註一）。

塡褐：是指刻槽中，塡着褐色，這種顏色，比墨稍淺，其化學成分，尚待定性分析，纔能確定。

塡墨：是指刻槽中，塡着較褐更深的黑色。其成分是否和後世的墨一樣，也還有待於化學成分的定性分析。

武丁：是指這一版甲骨卜辭，屬於武丁時代。如果是其他的時代，則用其他各王的名字。如果不能確定其屬於那一個王，則用第一、二、三、四、五等期的名稱來區分時代。如果時代的特性，不很明顯，不能遽定，則暫時從闕。如果甲骨有正反二拓本，則在反面拓本號下，不再註明時王或時期了。

考釋的內容：每一版都分為"釋文"與"考證"兩節。釋文部分，卜辭的次第，則以那一版上的干支先後為標準。每一卜辭之末，則用符號來表明其在甲骨上的左行或右行的方向。每一卜辭的卜兆序數和記兆術語，則用小一號的字，附記在該辭最後的右上方。至於那些沒有卜辭的序數和兆語，則每一組序數，列為一辭。最理想的作法是應該在透明紙上，將每一組序數，加以區分聯繫，標擧條目，但是那裏已經畫了拼合的界線，如果再加幾種線條，將會混亂不堪，況且序數的分佈，既散漫，又無定規，所以我們無法在一張圖上，表現我們所想表明的一切，甚至連條目都無法標出，這是憾事，也是不得已的，好在序數字的本身，並不難認，只是它們的排列和歸屬，須要加以一番捉摸而已。至於考證的部分，則有二個重點：一是實物的描寫；一是文字史實的考詮。前半部是敘述拼合的經過與出處，以及實物狀況的描寫。尤其是實物的描寫，我認為那是一件極重要的工作，在甲骨上，有許多現象，是拓本和照像都不能表示出來的，那只有靠文字的敘述了。我們目驗實物的人，應該將那上面的種種情形，忠實地記錄下來，向世人報告，貢獻給並世學人，共同研究。一種新的研究甲骨學的方法，不但應該從能說話的文字方面去研究問題，更應注意到那些不能說話的啞吧部分，應該從那些材料中，去尋求問題，提出問題，解決問題。從這一方面看去，則甲骨學的前途，

大有可為，甲骨中的資料，實甚豐富，甲骨中的問題還有許多正待發掘。因此，我對於實物的描寫，特別注重，也特別小心。有些記錄，似乎是多餘的，但是如果把它當成一個問題去研究，也許會有新的發現，新的結果。考證的後半部，是文字及史實方面的詮釋。對於一般已有定論的文字，則不復加以討論。如果一個字有幾種不同的解釋，那就選擇一個比較可信的說法，取其結論，註明出處。五十多年以來，甲骨文字的考釋，當以孫詒讓、羅振玉、王國維等人識字最多，亦最可信，本編考釋，大部分還是採用他們的說法。至於史實的考證，也只能作扼要的敘述，提出簡單的結論。

在考證中，有一些常見的述語，它們是有特殊的意義的，在這裏，須要有個交代，我在卜龜腹甲的序數裏（註二），對於那些術語，下過界說，現在推廣其義，再說一遍：

一、正面與反面　每一甲骨，都有兩面，一為疏鬆的，粗糙的海綿狀組織所構成，一為平滑的、細緻的密質組織所構成。平滑的一面，是灼卜之後，呈現坼兆的那一面，大部分的卜辭，都是刻在這一面上的，因為占卜以見兆為主，所以我們稱這有坼兆的那一面，為甲骨的正面。正面之反，即為反面，也就是粗糙的海綿狀組織的那一面，鑽鑿燒灼，大都是在這一面上的，有時雖亦契刻卜辭，遠不如正面之多。

二、右邊與左邊　我們對於甲骨上的左右之分，無論正面或反面，一律以人為主，在人的左邊，稱之為左；在人的右邊，稱之為右。在龜腹甲上，則稱縱分的齒縫之左為左邊，齒縫之右為右邊。

三、內與外　在甲骨上，無論左邊或右邊，我們稱靠近邊緣的部分為外，靠近中間的部分為內。

四、上與下　在龜甲上，以接近首甲者為上，反之則為下。在胛骨上，以接近骨臼者為上，

反之則為下。這大都與卜辭的上下是一致的。

五、序數　序數是一種甲骨上的數目字，是用來標記卜兆的占卜次序的，它們不是卜辭，但與卜辭有着十分密切的關係。這些字，通常刻在卜兆的左上端（坼兆向左者）或右上端（坼兆向右者）。

六、兆語　兆語或稱記兆術語，是標記卜辭性質的術語，如"上吉"、"小吉"、"大吉"、"弘吉"、"不牾"、"不牾黽"、"茲用"等等，常與卜辭雜處，但非卜辭，通常是刻在卜兆的左下端（坼兆向左者），或右下端（坼兆向右者）。

（註一）那是指史語所在殷虛發掘所得的一批甲骨而言的。此外，關於甲骨上所塡的顏色之研究，則有：美國皮其來氏（A. A. Benedetti Pichler）的中國骨卜塗色之顯微分析（Microchemical Analysis of Pigments Used in the Forsal of Incision of Chinese Oracle Bones）載民國二十六年工業化學工程雜誌第九卷（Industrial and Engineer-ing Chemisitry Vol. 9 pp. 149）。美國白瑞華氏（Ros Weel S. Birtton）的卜骨中之顏料（Oracle-Bone Color Pigments）載民國二十六年三月哈佛亞洲學報二卷一期（Harvard Journal of Asiatic Studies Vol. 2, No 1, March 1937）

（註二）見集刊第二十八本慶祝胡適先生六十五歲論文集上冊 PP 二二九－二七二

考釋に關しては、無論文體上、格式上、作法上に、みな一種の試みがある。特に標點符

號（中國式句讀符號）の使用は、更に一種大膽にして冒險な試みである。我々はいつでもいくらかの古書に對する間違の標點を見つけ出すことができる。古書に標點することは、已にたやすいことではない。何をか況んや甲骨文字に於ては。標點を付けだせば、更にずっと困難が加わる。だから慎重に調べる人は、卜辭に對して、往往にして何れの標點をも加えない。この樣にすると當然大きな間違いが發生することを免れないが、ところが却ってまたはっきりと明瞭な解釋を得る方法はない。私は想うに、考釋を作れば、少くとも當然はっきりと明瞭にすべき地位にいたる。私は能くこの種の境界に達することを否定することを知らない。ただ私は總ての力を竭くしてこの方面に向って努力していく。標點符號の採用は、就ち想うに卜辭の意義をして、能く解釋を更にいくらかでも整理することを得るに足るようにするにある。

考釋の標題は、同時に圖版と拓本との兩種の番號を採用した。並に且つ、一版ごとの一般現象を、最も簡明な術語を用い、かっこ中に、加へるに註を以てし、附して標題の後にある。

YH127は、坑位の名稱である。本編の大多數の甲骨は、均しく此の坑より出ている。その他はB112, B119, B122, B123, B125, B126, B128, B130, B136, C75, C128, C170, C171, YH005, YH006, YH017, YH036, YH038, YH044, YH076, YH083, YH090, YH096, YH126, YH228, YH251, YH253, YH258, YH265, YH279, YH288, YH309, YH330, YH338, YH344, YH347, YH354, YH359, YH362,

YH364, YH367, YH370, YH371, YH393, YH409, YH423, YH427, YH448, YM253, YM331, YM362等はみな坑位の名稱であり、出た所の甲骨はみな實に少ない。

中鋒：これはみぞを刻んだ兩側を指す、傾斜度は相い等しく、其の底線は正に中間にある。だがそれはただ大鏡のもとに置き、目力觀測の結果であって、決して精細な儀器で測ったようにそんなに正確にはなり得ない。

刻兆：これはその一版上の卜兆を指す、嘗って刀で刻まれたものである。

填硃：これは刻んだみぞの中に、硃色を塗ることを指す、この種の顏料は、甲骨上にあっては、時には非常に鮮明で、後世の硃砂の顏料と完全に同じ。其の化學成分は、則ち尚定性分析に待ち、わずかに能く確定した。

填褐：これは刻んだみぞの中に、褐色を塗ることを指す、この種の顏料は、墨に比べてやゝ淺く、其の化學成分は、尚定性分析に待ち、こゝに能く確定した。

填墨：これは刻んだみぞの中に、比較的褐より深い黑色を塗ることを指す。其の成分は後世の墨と同じであるかないか、また化學成分の定性分析に待たねばならない。

武丁：この種の版の甲骨卜辭は、武丁時代に屬することを指す。如し果して其の他の時代であれば、則ち其の他の各王の名字を用いる。如し果してそれがどの一人の王に屬するかが確定できなければ、則ち第一、二、三、四、五等の名稱を用いて時代を區分する。如し果して時代の特性が、實にはっきりしていなく、遽に定めることが出來なければ、則ち暫時闕に從う。如し果して甲骨が正反と二つ拓本があれば、則ち反面の拓本番號の一つに、再度王或は時期をはっきり注記しない。

考釋の內容。一版ごとにみな分けて〝釋文〟と〝考證〟との兩節とする。釋文の部分、卜辭の次第は、則ちその一版上の干支の先後を以て標準とする。一卜辭の末ごとに、則ち符號を用いて其れが甲骨上の左行あるいは右行の方向を表明した。各々一卜辭の卜兆序數と兆語は、則ち一組の序數ごとに、列して一辭とした。最も理想的な作法は當然透明紙上に、各一組の序數に加えるのに區分の聯繫を以てし、標して條目を擧げる。ただその中には已に拼合の界線を書き、もし果して再び幾種かの線條を加えるなら、將に混亂に會して堪えない、況んや且つ序數の分佈は、既に散漫にして、また定規がないので、我々が一枚の圖上に、私の想うところの表明の一切を表現する方法がない。甚だしきにいたっては條目さへも標出する方法がない。これは殘念なことで、また已むを得ざるもの、幸いにも序數字のもとは、決して認めがたいものでない。ただそれらの排列と歸屬は必ず一番見當づけを加える必要がある。考證の部分に至っては、則ち二つの重點がある。一つは文字史實の考詮である。前半部は拼合の經過と出處の敍述であり、また實物狀況の描寫である。とくに實物の描寫を、私はそれは一件の極めて重要な工作であることを認める甲骨上にはたくさんの現象があり、この拓本と寫眞でみな表示の出來ることの出來ないものであり、それはただ文字の敍述によりかゝるものがある。我々は實物を目で驗査した人が、當然その上面の種種の情形を、忠實に記錄して、世人に向って報告し、並世の學人の爲に貢獻し、共同研究すべきである　一種の新しい甲骨學を研究する方法は、ただ當然話の出來る文字の方面に從って問題を研究すべきではなく、進んであれらの話の出來ない啞の部分に注意すべきであり、當然その材料の中から、問題を尋ね、問題を提出し、問題を解決すべきである。この一方面から見れば、則ち甲骨學の前途は、大いに爲すべきことがあり、甲骨中

の資料は、實に甚だ豐富にして、甲骨中の問題はまた多人の正に發掘に待つものがある。此れに因って私は實物の描寫に對して、特別注意し、また特別小心にする。ある記錄は、餘分のものにみえるが、ただもしそれを一つの問題として研究していくと、やはりまた新しい發見かもしれない。考證の後半部は、文字及び史實方面の詮釋である。一般に既に定論のある文字は、則ち復た以て討論を加えない。如し果して一つの字に幾種かの同じでない解釋があれば、それは就ち比較的信ずべき一つの方法を選擇し、其の結論を取って、出處を明白に注解した。五十年以來、甲骨文字の考釋は、當に孫詒讓（孫詒讓・『契文擧例』註〔十七〕・第一輯四九頁參見）羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註〔八〕・第一輯一一頁參見）王國維（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註〔三十三〕・第一輯一〇一頁參見）等の人の文字を知っているのは最も多いし、また最も信ずべきで、本編の考釋は、大部分また彼等の論法を採用した。史實の考證に至っては、またただよく肝要な敍述を作り、簡單な結論を提出した。

考證中には、一つの常見の術語がある。それらには特殊な意義があり、これは必ず一つの交代をせねばならぬ、私は『卜龜腹甲的序數』〔註三四〕にあって、その術語に對して、定義をしたことがある。現在その義を推廣して、再び一遍を說こう。

一、正面と反面：一甲骨ごとに、みな兩面があり、一つはあらく、ごつごつした海綿狀の組織に構成する所である。一つは平らで滑らかである。細緻にして密質組織で構成したものである。平らで滑らかな一面は、灼卜ののち、坼兆のその一面を現わしたものである。大部分の卜辭は、みなこの一面上にある。因りて占卜をなして兆があらわれるのを以て主とする。だから私の稱するこの坼兆のあるその一面を甲骨の正面とする。正面の反

は、即ち反面である、また就ちごつごつした海綿狀組織のその一面である、鑽鑿の燒灼は、ほとんど この一面上にある、時にはまた契刻し卜辭するというけれども遥かに正面の多いのには及ばない。

二、右邊と左邊　私は甲骨上の左右の分に對して、正面或は反面をとわず一律に人を以て主とする、人の左邊にあれば、これを稱して左とする、人の右邊にあればこれを稱して右とする。龜腹甲の上に在っては、則ち縱に分けた齒縫「齒の合せ目、いわゆる龜腹甲の合せ目」の左を稱して左邊と稱し、齒縫の右を右邊とする。

三、内と外：甲骨上にあっては、左邊或は右邊にかかわらず、邊緣に近い部分を外とし、中間に近い部分を内とする。

四、上と下：龜甲上に在っては、首甲に接近するものを上とし、この反對を則ち下とする。これはおゝむね　卜辭の上下と一致するものである。

五、序數：序數は一種の甲骨上の數目字である、これは卜兆の占卜次序の標記に用いる、それらは卜辭ではない。ただ卜辭とは十分密接な關係がある。これらの字は、通常刻するのに卜兆の左り上端にあり、或は右上端にある。

六、兆語．兆語は或は兆術語を稱記する。これは卜辭の性質を標記する術語で、〃上吉〃、〃小吉〃、〃大吉〃、〃弘吉〃、〃不梧〃、〃不梧鼄〃、〃茲用〃等の如く、常に卜辭と入りまじっており、ただの卜辭ではない、通常は刻するには卜兆の左り下端、或は右下下端にある。

（註一）それは史語所が殷虛發掘に得た一種の甲骨を指して言う。此の外、甲骨上の塡める所の顏料の研究に關しては、則ちアメリカの皮其來氏（A. A Benedetti pichler）の「中國骨卜塗色之顯微分析」（Microchemical Analysis of Pigments used in the Fussal of Incision of Chinese Oracle Bones）民國二十六年工業化學工程雜誌第九巻に載す（Industrial and Engineering Chemisitry Vol. 9, PP. 149）美國白瑞華氏（Roswell S. Birtton）の「卜骨中之顏料」（Oracle-Bone Color pigments）民國二十六年三月哈佛亞洲學報二巻一期（Harvard Journal of Asiatic Studies Vol, 2 Vol, March 1937）

（註二）集刊第二十八本、慶祝胡適先生六十五歲論文集上冊、pp 二二九－二七二を見よ。

註[三]　卜龜腹甲的序數　張秉權撰。この論文は龜腹甲の序數について論じたもので、序數とは甲骨上の卜辭の下に一、二、三、四、五、六、七、八、九、十等の數字、卜兆の占卜順序は卜辭と關係あるとする。形としては、甲式、上より下、乙式、内より外、上より下、丙式：外より内、上より下、丁式：下より上へ、戊式：複雜にまじりあって一定の排列のないもの。序數と占卜の回數は、最大十回とする。胡厚宣氏は十八回とするの論爭、そして序數の研究の結果、序數のあるものは成套卜辭へ次の項の序文に詳しい」であって、ないものは一事一卜もので、龜版のセットは五版であるとする。

上輯圖版的取材和編排，一方面固然要選取一些比較完整的大龜甲，同時，也想趁此機會對於成套卜辭與成套甲骨，用圖版來作一說明。丙編是以復原甲骨爲對象的，在這裏，對於

〃復原〃二字，先要加以解釋，一般的觀念，認爲復原就是把破碎的甲骨，拼兌成爲一塊完整的，但是本編所謂復原的意義，略有不同，我所從事的復原工作，不但要儘可能地復一甲一骨之原，而且要儘可能地復一套之原，因此，在本編中，有些龜甲，原已完整，但我仍舊把它們收集在此，和一些拼合的圖版編在一起，使那些折散了的套，散而復聚。那就是在復一套之原。何謂成套卜辭與成套甲骨？我在卜龜腹甲的序數中，已有說明，並且舉了幾個例子，在本輯中，將有更多的實例。成套卜辭與同文卜辭的性質是不同的，〃同文〃的着眼點，在求卜辭的相同，不管序數的能否聯繫，而成套的關係，則完全建立在序數上。在一套中，有些卜辭，可以省簡到僅存一二個字，這是無法用同文的關係來加以解釋的，也不是用同文的觀點，所能發現的，所以成套卜辭，未必同文，同文卜辭，也未必成套。只有從成套的卜辭中，才能看出卜辭省簡的由來，進而研究卜辭省簡的語法。從成套卜辭的辭例中，可以了解另一些零碎的，省簡的卜辭的真義，進而了解那些像謎一樣難解的卜辭的意義。爲什麼殷虛的甲骨中，會有成套的卜辭和成套的甲骨的呢？這就是本輯所要加以解釋的。

在說明成套卜辭與成套甲骨之前，先要介紹幾版不成套的，好讓大家比較一下，成套與不成套者之間，究竟有何分別。圖版壹，貳是一塊大龜腹甲的正反兩面，由乙編中的十塊碎甲所綴合（註一），其裂痕大部分都是舊的，它們是在出土以前，原已碎裂的，各版的色澤，也不一致，可知其在地下的位置，也是不同的，這一版的拼合，是經過一段相當長的歷程的，而且也不止一次的拼合，我所描繪的摹本，就有四、五幀之多，現在，總算把它復原了，成爲一版極難得的重要史料，在那上面，有日子，有月份，有許多的人名與地名，記載着不止一次的戰事，有粗筆大字的卜辭，也有細筆小字的卜辭。序數的排列，有自上而下者（在左右兩甲橋上），有自內而外者（在胸腹甲的左右兩邊），有自外而內者（在後腹甲上）。雖則字痕中所塡的顏色，已經褪了色了，但是大字中所塡的朱色，依然可見。小字中所塡的褐色，有些部分，還保存得很好，也許，有人會根據類似這樣的現象，認爲卜辭中的大字，總是塡朱色，小字總是塡褐色或墨，從而推論到它們的重要性上，有什麼不同之點，或者塡朱與塡墨的意義上，有什麼分別，這在當時，也許是有所分別的，但是現在，我們已經看不出它們爲什麼要用朱或褐或墨的道理來了。據我觀察實物的經驗，粗筆的大字，塡朱色的固然很多，塡褐或墨的，也不是沒有。細筆的小字，塡墨或塡褐的，固然很多，塡朱色的，却也不少。又如圖版陸柒與陸捌，是一套小龜腹甲中的兩版，前者塡朱，後者塡褐，可見塡朱或塡褐，似乎沒有什麼分別的了。因此，我們還不能從刻字的肥瘦或塡色的朱墨上去作任何推斷。何況我們所謂的〃朱〃、〃褐〃、〃墨〃的化學成分，都還沒有經過定性的分析，其本身的問題，都還沒有解決哩。這一版上的卜辭，是不成套的，可以作爲一個標本。同時它也具備着上述種種優異的特點，是一塊罕見的尤物，所以我把它選爲丙編的第一號龜版。

圖版參、肆也是一塊大龜腹甲的正反兩面。因與圖版壹，可以互相參證，彼此發明，在解釋上，有事半功倍的方便，所以把它們接着編在一起，那也是一版不成套的卜辭的標本。

圖版伍，是一塊大龜腹甲，是一套對貞的成套卜辭的標本。由左、右各五條卜辭組合成套，每一條卜辭，刻在每個卜兆的旁邊，其序數爲：一、二、三、四、五，自上而下，左右對稱。其卜辭則逐漸省略。

	右　邊	左　邊
(一)	庚申卜：爭貞：西史旨亡囚古？一	庚申卜，爭貞：西史旨其㞢囚？一上吉
(二)	貞：西史旨亡囚古？二	西史旨其㞢囚？二
(三)	貞：旨亡囚？三	旨其㞢囚？三

(四)	㞢亡囚？四	其㞢囚？四不鍺
(五)	㞢亡囚？五不鍺	其㞢囚？五

事實上，這些卜辭（左、右共計十條），只是一件事情的重複記載而已。有時候，即使是成套卜辭，亦未必在每個卜兆旁邊，都有卜辭的記錄。譬如圖版柒，占卜的次數，序數的行式，和圖版伍的完全一樣，但是它只有六條卜辭（左、右各三條），那也是一套，不過刻辭的方式不同，它在每一邊的第一、二兩兆之旁，都刻着卜辭，而在第三、四、五等卜兆之旁，則僅合刻一辭：

	右邊	左邊
(一)	丙辰卜、㱿貞：其敀羌？一	貞：于庚申伐羌？一
(二)	貞：敀羌？二	貞 庚申伐羌？二
(三)	貞：敀羌？三 四五	貞：庚申伐羌？三四五

因此，這一套卜辭，較圖版伍省掉了四條（左、右各二），但是它所表達的意義，還是一樣的充分與完整。如果我們再看圖版捌與壹零，就可以了解成套的卜辭，是怎樣產生的了。圖版捌的龜腹甲，與圖版伍的大小相近，占卜的次數相同，序數的行式也相同，但是它只有二條卜辭（即一組對貞的卜辭），刻在左、右兩邊的卜兆旁邊，它雖祇二條卜辭，但其意義與五條所代表着，完全一樣：

(一) 丙辰卜，殼貞：我受黍年？ 一二三四五

(二) 丙辰卜，殼貞：我弗其受黍年？ 一二三四五

這不是成套的卜辭，但可以解釋成套卜辭的由來，如果刻辭的人，像這樣刻法，就不是成套的卜辭了。如果照圖版伍或柒的刻法，就成了成套的卜辭，它們的方式雖則不同——卜辭

條數有多寡的不同，但是它們表達意義的份量，完全一樣。

看了上面的幾幅圖版，我們也許會問：為什麼在幾塊大小和卜法相似的甲骨上，有的刻上一套卜辭，有的却只刻一條（只就一邊而言），這個問題，須要追問到：甲骨上為什麼要刻卜辭？城子崖的卜骨上，豈不是沒有刻辭的嗎？在殷虛，極大多數的占卜過的甲骨上，豈不是也沒有刻辭的嗎？即使在有字的甲骨上，也還有着許多僅有卜兆而無卜辭的事實。那末，在甲骨上契刻卜辭，並不是最早的，也不是最普遍的現象了，它只是一部分甲骨上的現象。這一部分刻着卜辭的甲骨，大概是為了便於考查占驗的緣故。如周禮春官下大宗伯所說：

凡卜筮，既事，則繫幣以比其命。歲終，則計其占之中否。（鄭注：杜子春云：繫幣者以帛書其占，繫之於龜也。玄謂：既卜筮，史必書其命龜之事及兆於策，繫其禮神之幣，而合藏焉。書曰：王與大夫盡弁，開金縢之書，乃得周公所自以為功代武王之說。是命龜書。）

這一假設，由甲骨上的許多驗辭，可以得到證明，所以我們可以推想得到，刻辭是一種備忘性質的記錄，既是備忘性質，則其刻辭重覆與否，當視能否達到備忘目的而定，如果刻辭的人，認為刻一條卜辭就可看得清楚，那就只刻一條，如果他恐怕日子一久，會弄不清楚的，那就在每個或附近的一組卜兆之旁，都刻卜辭，不過其中總有一條是最完整的，其餘的，則有時用省略或最省略的句子，等於作一記號而已（也有不省的），成套卜辭的由來，大概是如此的。我們再看圖版捌叁，是一版大龜腹甲，由乙編中的十塊碎甲綴合而成，其上有十四條卜辭，其中六條是成套的（註一），其餘的八條則非成套卜辭，這是成套的與不成套的卜辭雜見於一版的例子，成套的幾條卜辭之間，更夾雜着幾條不成套的卜辭，而且這一套的灼龜之法，也與上舉幾版不同，其序數是自外而內，自下而上的，並且又不很規則，現在我們

看，如果在這一套卜辭所有的卜兆之旁，祇刻一條卜辭，像其它卜兆之旁的卜辭一樣，那是可能的嗎？事實上，決不可能的，因為那幾個卜兆，分散得太厲害了，如果不是在它們的旁邊，刻着成套的卜辭，我們就無法認得出那些東分西散的卜兆，是屬於同一件事情的占卜的，現在由於成套卜辭的標明，我們可以將這些紛歧錯雜的序數，聯串起來。因此，我們可以知道成套卜辭的契刻，自有其事實上的需要的。為了便於考查占驗，所以要在若干卜兆之旁，重覆地刻上一套卜辭。

（註一）其中有二塊在乙編中原已綴合而重見者。

（註二）見釋文第（一）辭至第（六）辭。

上輯の圖版の取捨と順序にならべることには、一方面ではもとより一つの比較的完整な大龜甲を選び取ることを必要とした、同時にまた想うに此の機會に乘じて說明の出來ている卜辭と定說のある甲骨に對しても、圖版を用いて一つの說明を作ろうと思った。『丙編』は甲骨を復原して對象となすものである、これにおいては、「復原」の二字に對して、先ず以て解釋を加えたいと思う、一般の觀念では、復原は就ち破碎の甲をとらえて、拼兑が成って一塊の完整をなすと認めている、ただ本編は所謂る復原の意義は、略ぼ同じでないものがある、私の從事したところの復原の作業は、ただできるだけ一甲一骨の原を復するだけでなく、そのうえできるだけひと揃いの原に復原しようとした、此れによって、本編中にあっては、いくらかの龜甲は、もともと已に完整し、ただ私は依然としてそれらをここに收集し、いくつかの圖版を一緒に併合して、それらの折れて散り散りの揃いより、散って

いるのをまた集めた。それは就ちひと揃を原に復原することである。どれを揃いの卜辭と不揃いの甲骨というか、私は卜龜腹甲の序數中に、已に說明をして、更に幾くらかの例をあげた、本輯中にあっては、將に更に多くの實例がある。揃いの卜辭と同文の卜辭の性質は違う、「同文」の着眼點は、卜辭の互いに同じものを求め、序數聯繫できるかどうかに關係はない、完全に序數上に建立している。ひと揃い中にあって、ある卜辭は、簡略にして僅かに一二の字が存することが出來る。これは同文の關係をもって解釋を加えるより方法がない。また同文の觀點を用いて、發見できるものではない、だから揃いの卜辭は、未だ必ずしも同文ではない、同文卜辭は、また未だ必ずしも揃いではない。ただ揃いによる卜辭中に、はじめて卜辭省簡の由來を見い出すことができ、進んで卜辭省簡の語法を研究できる。揃いの卜辭の辭例中に、他のいくらかの零碎な省簡した卜辭の眞義を了解することができ、進んであの幾くらかの謎のような難解な卜辭の意義を解することができる。なぜ殷虛の甲骨中には、揃いの卜辭と揃いの甲骨があるのであろうか。これは就ち本輯で解釋を加えようとするものである。

揃いの卜辭と揃いの甲骨とを說明する前に、先ず幾版かの揃っていないものを紹介する必要がある。みんなに一つ比べてもらえば、揃いと不揃いの間には、結局どんな分別があるのだろうか。圖版壹〔四〕、貳〔五〕は一塊の大龜腹甲の正反兩面である、乙編中の十塊の碎骨によって綴合したものである、（註一）其の裂痕は大部分がみな舊いもので、それらは出土以前本來すでに碎裂していて各版の色澤もまた一致する、その地下にあった位置が、同じでなかったことを知り得る、これは一版の拼合が、一段と相當長い歷史過程を經過したのである、而も且つまた一回の拼合にとどまらない、私のスケッチするところの摹本は、就ち四、五

頗もあり、現在やっとそれを復原して、一版の極めて得がたい重要史料となし得たようである。その上面にあっては、日、月份あり、多くの人名と地名あり、記載は一回の戰事にとどまらず、粗筆な大字の卜辭があり、また細筆の小字の卜辭がある。序數の排列は、上より下のものあり（左右兩甲橋上にあり）、内より外にあるもの（胸腹甲の左右兩邊にあり）、外より内にあるものは（後腹甲上にあり）。則ち字の痕中に彩色するところの顔料は已に色が褪せているが、ただ大字中に彩色するところの朱色は、依然として見ることができる。小字中に彩色するところの褐色は、ある部分は、やはり保存は實に良い、あるいは或る人はこの樣なものに似た現象にもとづいて、卜辭中の大字は、總て朱色を彩色する、小字には總て褐色あるいは墨を彩色するものであると認めている。そこからその他の重要性まで論を推すと、どんな違った點があるか、或は塡朱と塡墨の意義上、どんな分別があるか、これは當時にあっても、また分別する所があったのである。ただ現在では、私は已にそれらがどおして朱あるいは褐あるいは墨を使うかという道理を見い出すことが出來ない。私の實物の觀察の經驗に據れば、粗筆の大字で、朱色を彩色するのは固より實に多く、褐あるいは墨を彩色するのはまたないことはない。細筆の小字に墨あるいは褐を彩色するのは、固より實に多い、朱色を彩色するのも、やはりかなりある。また圖版陸柒[六]と陸捌[七]の如きは、ひと揃いの小龜腹甲中の兩版である。前者は朱を彩色し、後者は褐を彩色する。彩朱あるいは彩褐は何の分別もないように思える。此れによって、私どもはまた刻字の肥瘦あるいは彩色の朱墨上からどんな推斷もすることが出來ない。まして我々の所謂〝朱〟、〝褐〟、〝墨〟の化學成分は、みなまたきまった分析經過をしていないからなおさらであり、何に一つ解決していない。この一版上の卜辭は、不揃いであって、一つの標本とすること

が出來る。同時にそれはまた上述の種種優殊な特點が備わっている、一塊の罕れに見る尤物である、私がそれを選んで丙編の第一號の龜版とする所以である。

圖版參[八]、肆[九]もまた一塊の大龜腹甲の正反兩面である。圖版壹と互に相い參證できる夫々の發明は、その解釋上、事半功倍（努力すくなくして而も其の効を收むること大なるの諺）の方法があることによって、それらをとらえ編して其のひと組するのは、それはまた一版の不揃いの卜辭の標本である。

圖版伍[十]は、一塊の大龜腹甲である、ひと揃い對貞の揃いの卜辭の標本である。左右各條の卜辭が組み合って揃い、一條ごとの卜辭は、刻むのに每個卜兆の旁邊にあって、その序數は一、二、三、四、五、上より下へ、左右對稱である。その卜辭は則ち逐次省略する。

	右邊	左邊
(一)	庚申卜：争貞、西史旨亡囚古？一	庚申卜、争貞、西史旨其㞢囚？一　上吉
(二)	貞：西史旨亡囚古？二	西史旨其㞢囚？二
(三)	貞：旨亡囚？三	旨其㞢囚？三
(四)	旨亡囚？四	其㞢囚？四不啎
(五)	旨亡囚？五不啎	其㞢囚？五

事實上は、これらの卜辭は（左右全部で十條をかぞえる）ただ一件の事柄の重復の記載があるだけである。時には、たとえ揃いの卜辭であっても、また未だ必ずしも一個每に卜兆の旁邊に在って、みな卜辭の記錄があるとは限らない。譬へば圖版柒[十一]のごとく占卜の回數、序數の行式は、圖版伍と完全に同じである。ただそれは下條の卜辭があり（左右各々三條）それはまたひと揃いである。だが刻辭の方式は、圖版伍とは完全に同じで、ただそ

れは他の六條の卜辭があり（左右各條）それはまたひと揃いである、だが刻辭の方式は同じでない。それは各一邊ごとの第一、二兩兆の旁に在り、みな卜辭を刻している。そして第三、四、五等の卜兆の旁にあり、則ち僅かに合せて一辭を刻む。

	右邊	左邊
(一)	丙辰卜、古貞：其敀羌？一	貞：于庚申伐羌？一
(二)	貞：敀羌？二	貞：庚申伐羌？二
(三)	貞：敀羌？三　四　五	貞：庚申伐羌？三　四　五

此れに因ってこのひと揃いの卜辭は、圖版伍と較べると四條を減らしふるうている（左右各々一）ただそれが表達するところの意義は、また同樣に充分で完整である。如し果して私が再び圖版捌[十二]と壹零[十三]を見れば、就ち以て揃いの卜辭がどのようにして生れたかを了解することができる。圖版捌の龜腹甲は、圖版伍とほぼ相い近いものである。占卜の回數は相い同じく、序數の行式はまた相い同じで、ただそれはただの二條の卜辭があるだけである。（即ち一組の對貞卜辭）、刻は左右兩邊の卜兆の旁邊にあり、それはただ二條の卜辭であるけれども、ただその意義は、五條の代表する所と完全に同じである。

(一) 丙辰卜、㱿貞、我受黍年？一　二　三　四　五

(二) 丙辰卜、㱿貞、我弗其受黍年？一　二　三　四　五

これは揃いの卜辭ではないが、ただ揃いの卜辭の由來を解釋すべきである。如し果して刻辭する人が、この樣な刻み方をすれば、就ち揃いの卜辭ではない、如し果して圖版伍あるひは柒の刻み方と照せば、就ち揃いの卜辭となる。それらの方式は、則ち違うけれども——卜辭の條數は多い寡いがあって同じでない、ただそれが表達する意義の分量は、完全

に同じである。

上面の幾幅かの圖版を見れば、我々は次のようなことを問うかもしれない。どおして幾塊かの大小と卜法に相い似た甲骨上に、あるものはひと揃いの卜辭を刻し、あるものは却ってただ一條のみを刻むかという（ただ一邊について言う）この問題は、須らく追問する必要がある。甲骨にどおして卜辭を刻む必要があるのか、城子崖の卜骨の上に、みな刻辭してあるではないか。殷虛にあっては、極めて大多數の占卜が甲骨上に卜辭を栔刻したのは、決して最も早いものではなく、また最も普通の現象でもない。それはただ一部分の甲骨上の現象である。この一部分の卜辭を刻してある甲骨は大概は考查占驗の緣故に便利するものである。周禮春官下の大宗伯に言うところのごとくである。

「凡そ卜筮は、事既らば、則ち幣を繫け、以て其の命に比す。歲終らば則ち其の占の中否を計る」と、鄭[玄]注に、杜子春云く、「幣を繫くとは、帛を以てその占を書し、これを龜に繫くるなり」と。玄謂へらく、「卜筮を既れば、史必ず其の命龜の事及び兆を策に書し、其の神に禮するの幣に繫けて而して合せ藏す」と。書[經]に曰く、「王と大夫と盡く弁じて、金縢の書を開く、乃ち周公自から以て功と爲り、武王に代るの説を得たり」。是れを龜書と命ず。

この一假説は、甲骨上の多くの驗辭に由って、以て證明を得ることができる。私が以て推論して得た所以は、刻辭は一種の備忘な性質の記質の記錄であり、既に備忘の性質のものであるからには、則ちその刻辭の重復と否は、當に能否をみて備忘の目的にいたって定まる、如し果して刻辭する人が、一條の卜辭を刻んで就ち明瞭であり得ると認めるなら、

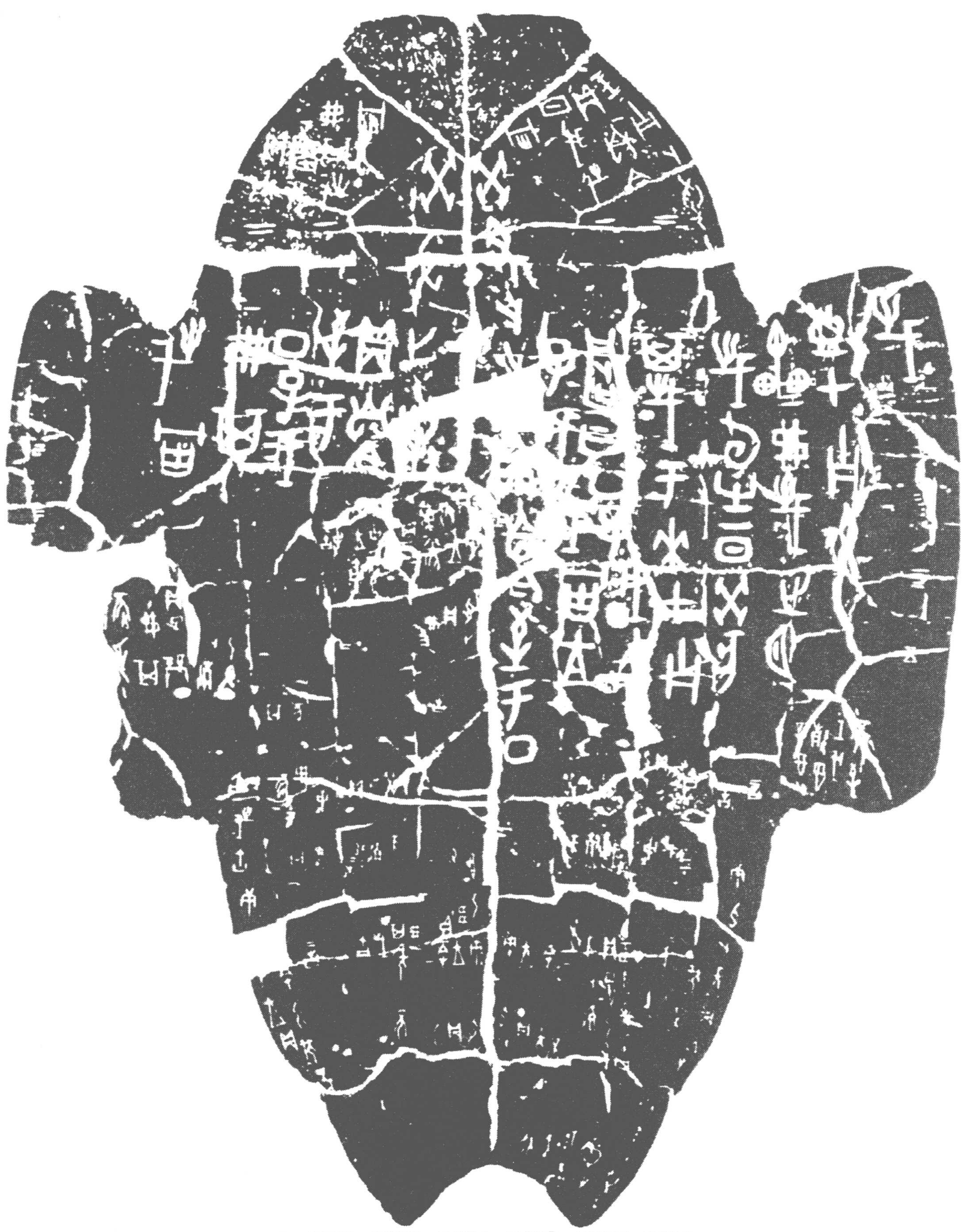
そこで就ちただ一條を刻み、如し果して彼が日數が長くはっきりさせえないと思うなら、そこで就ち一個ごとに或は附近の一組は卜兆の旁にみな卜辭を刻す、だが其の中には必ず一條は最も完整であるものであり、其の餘りは、則ち時に省略し或は最も省略なる句を用いることがある。それは一記號をなすに等しい。（また省略しないものもある）揃った卜辭の由來は、大概かくのごときものである。私は再び圖版の捌参〔十四〕を見ると、一版は大龜腹甲である。乙編中の十塊の碎甲綴合に由って成る。その上には十四條の卜辭がある、その中の六條は揃いであり、（註二）其の餘りの八條は則ち揃っていない。これは揃っているものと不揃とのト辭が一版に雜見した例であり、揃った幾條かの卜辭の間には、更に幾條かの不揃いの卜辭が雜っている、そのうえこのひと揃いの灼龜の方法は、また上にあげた幾版とも違う、現代私どもが見て、如し果してこのひと揃いの卜辭にある所の卜兆の旁にただ一條の卜辭を刻んでいるのは、其の他の卜兆の旁の卜辭と同じもののようである。それは可能であるか。事實上は、決して可能ではないというのは、その幾くらかの卜兆は、分類してとてもひどいものになった、もし果してそれらの旁邊に、揃いの卜辭を刻んであるならば私は就ちちりちりばらばらの卜兆を認める方法がない。これは同一事件の占卜に屬するものである、現在は揃いの卜辭の目標を明かにするに由って、私はこの紛岐錯雜の序數をつらねることができる。此れに因って、私は揃いの卜辭の契刻は、もとより事實上の需要があることを知り得るのである。考査占驗に便をなす為に若干の卜兆の旁に重復してひと揃いの卜辭を刻するわけである。

（註一）。其の中の二塊は乙編中にあって已に綴合して重見する者。

（註二）釋文第（一）辭より第（六）辭に見える。

註〔四〕 圖版壹

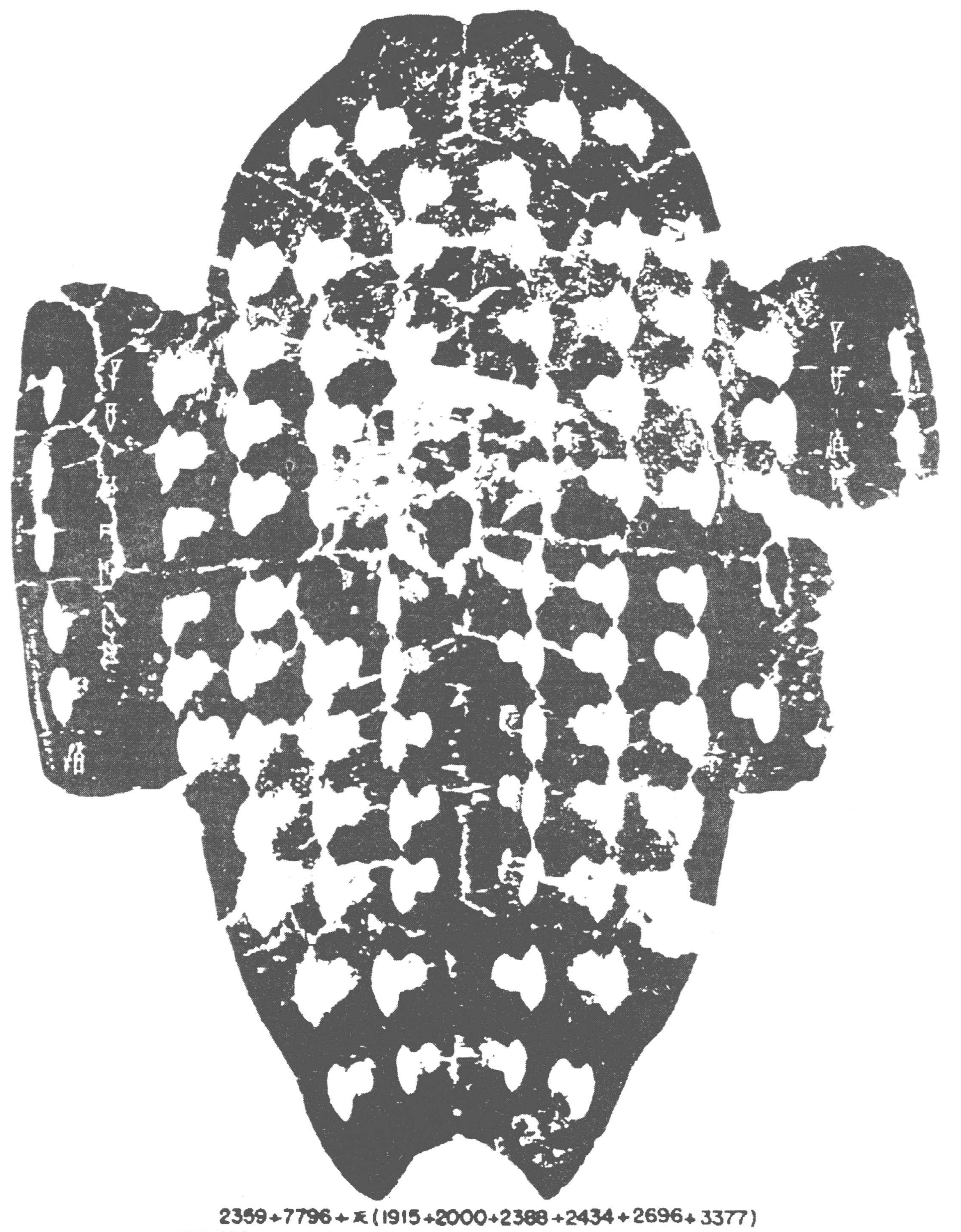
丙編圖版



1915+2000+2358+2388+2434+3233+3377+6702+7795+2696
13.0.3986+13.0.4149+13.0.4737+13.0.4774+13.0.4692+13.0.6928+13.0.7164+13.0.5527
+13.0.14079 13.0.15297——13.0.15316+13.0.16388

註〔五〕 圖版貳

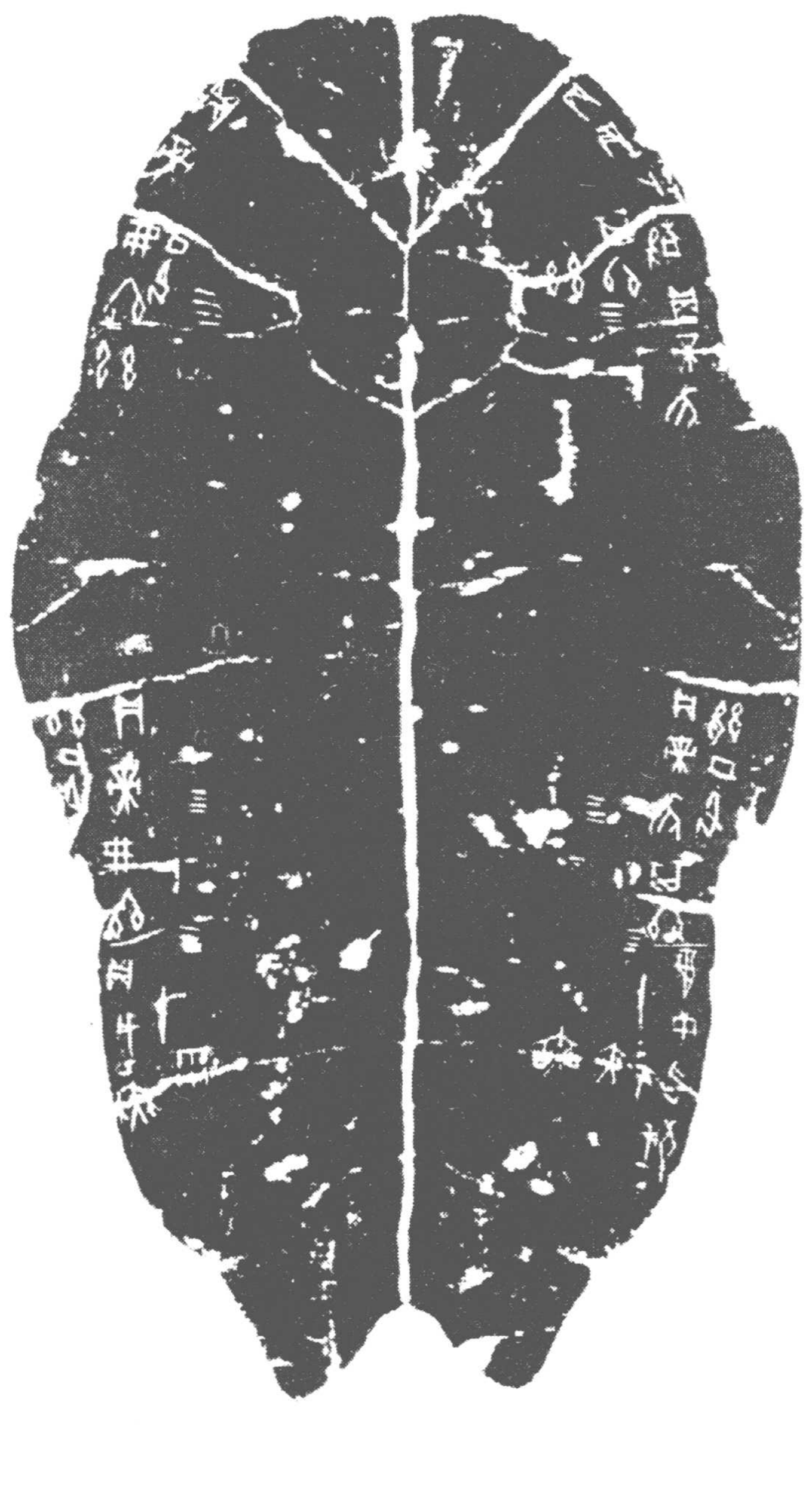
丙編圖版



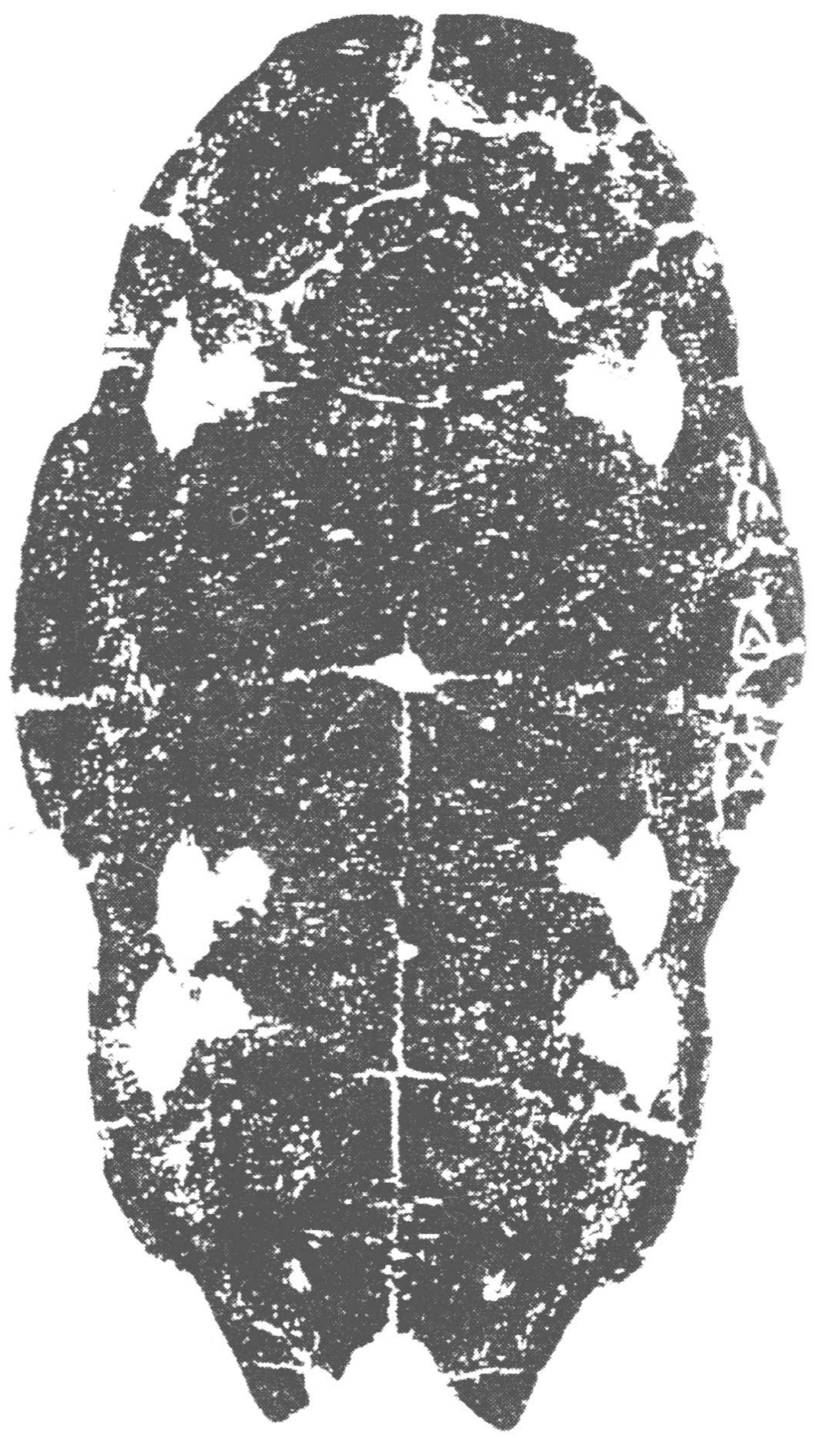
2359+7796+反(1915+2000+2388+2434+2696+3377)
13.0.4737+13.0.16388 13.0.15297——13.0.15316 13.0.14079 13.0.6928+13.0.3986
+13.0.4149+13.0.4774+13.0.4692+13.0.7164 +13.0.5527反

註〔六〕 圖版陸柒

丙編圖版



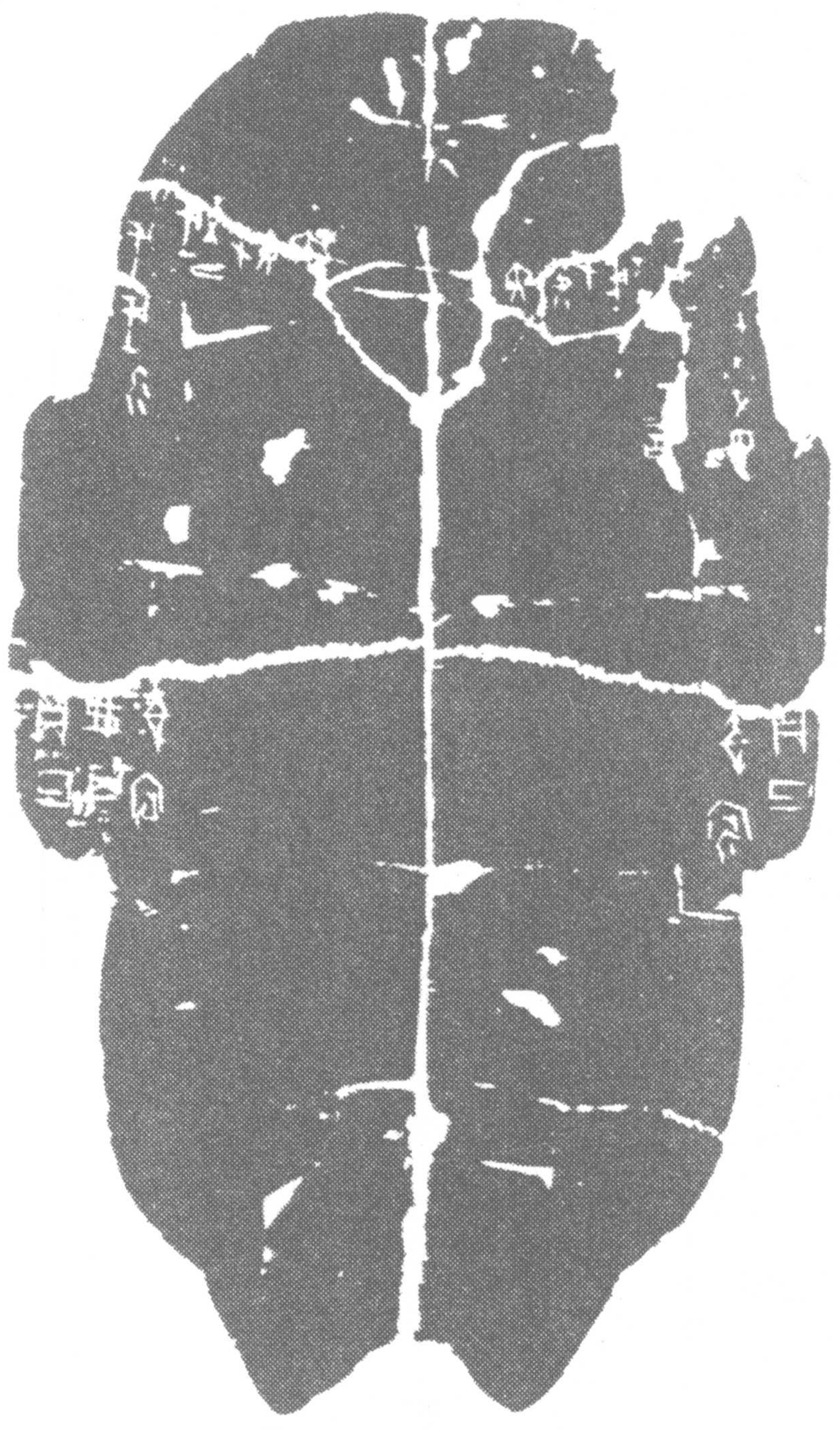
4534
13.0.10568



4535
13.0.10568 反

註〔七〕 圖版陸捌

丙編圖版



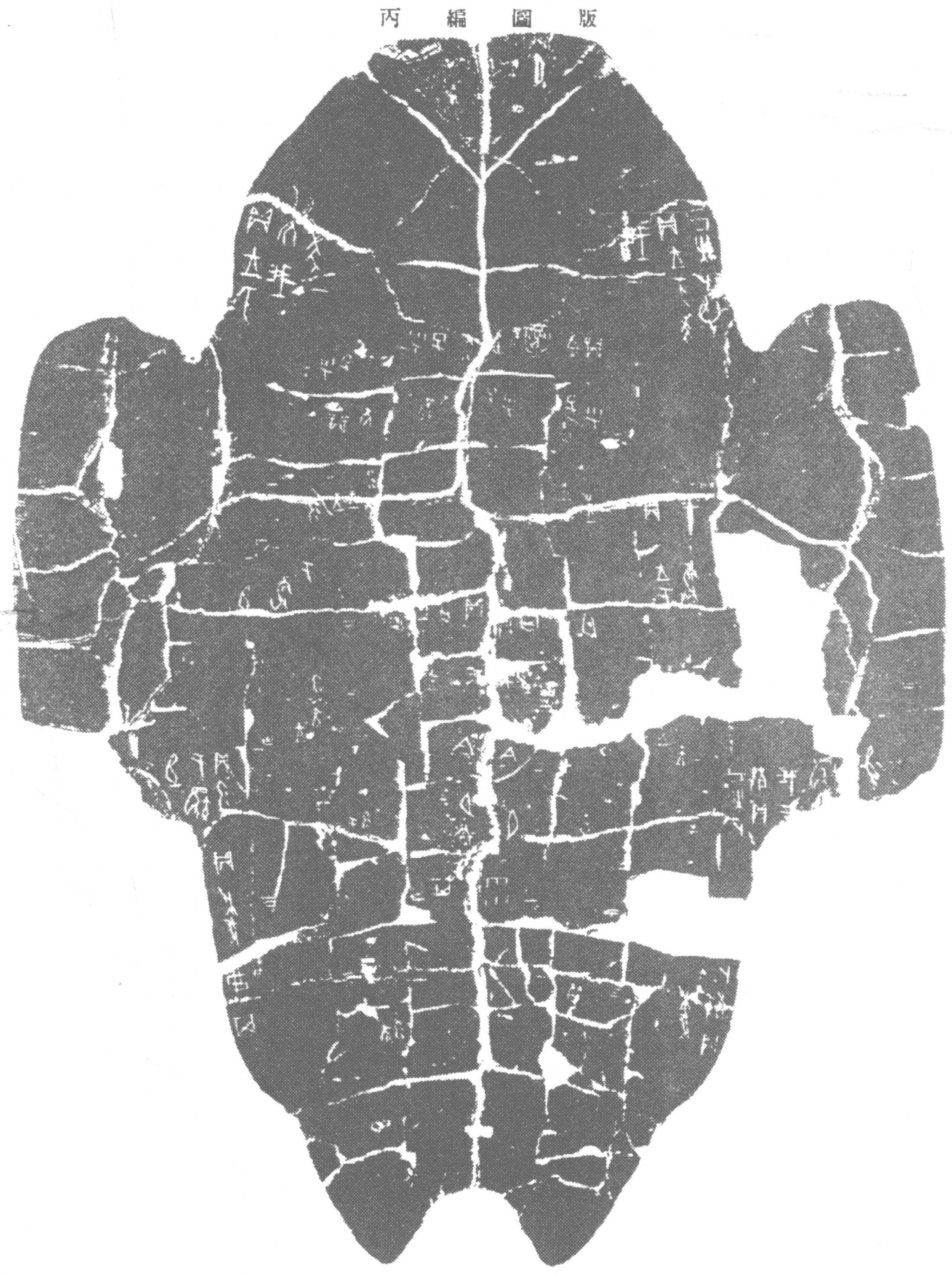
2572+7248

13.0.5192+13.0 15266

226

註〔八〕 圖版參

丙編圖版



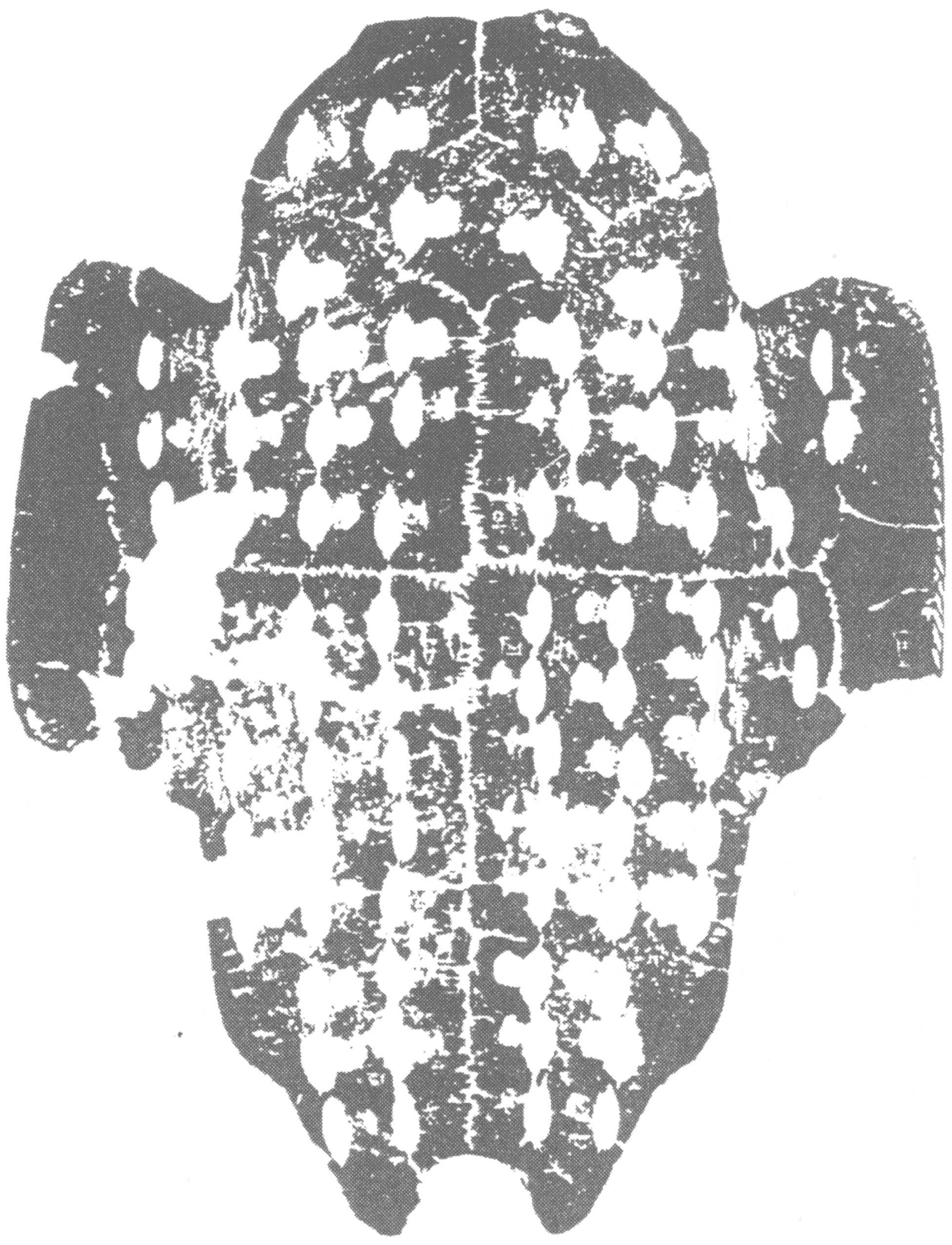
2215+5403

13.0.4489+13.0.12003

227

註〔九〕 圖版肆

丙編圖版



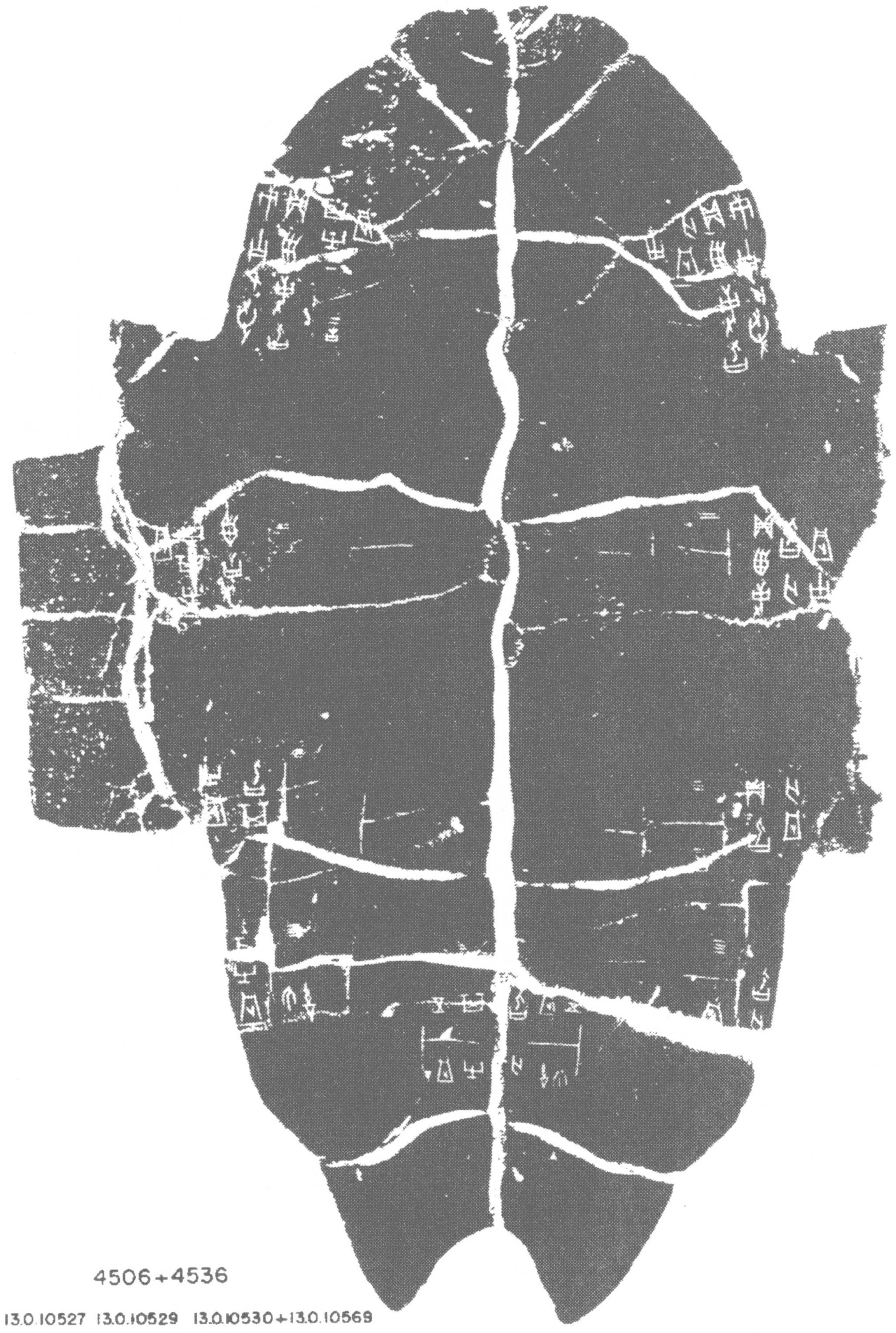
2216+5404

13.0.4489+13.0.12003反

228

註〔十〕 圖版伍

丙編圖版



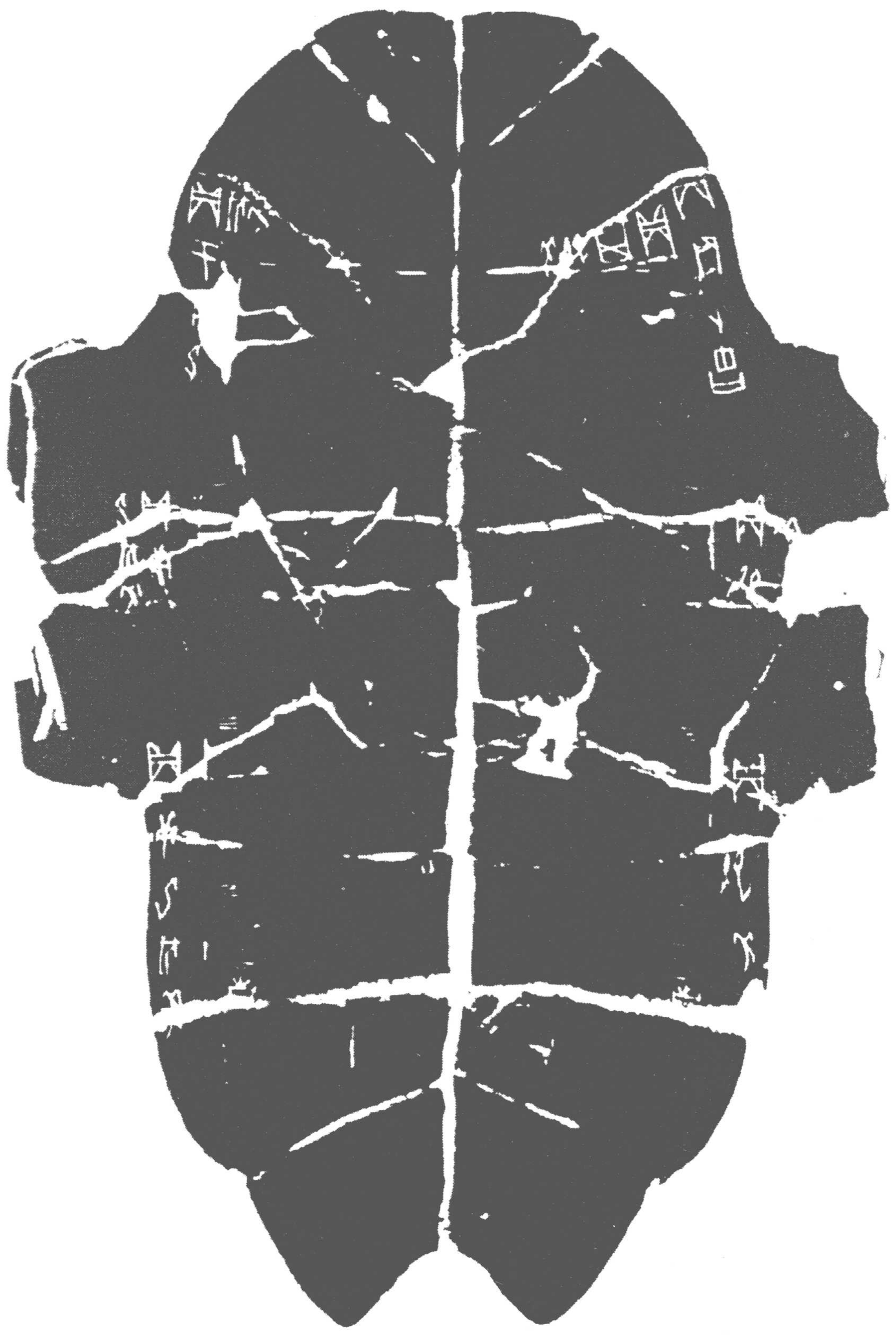
4506+4536

13.0.10527 13.0.10529 13.0.10530+13.0.10569

229

註〔十一〕　圖版柒

丙編圖版



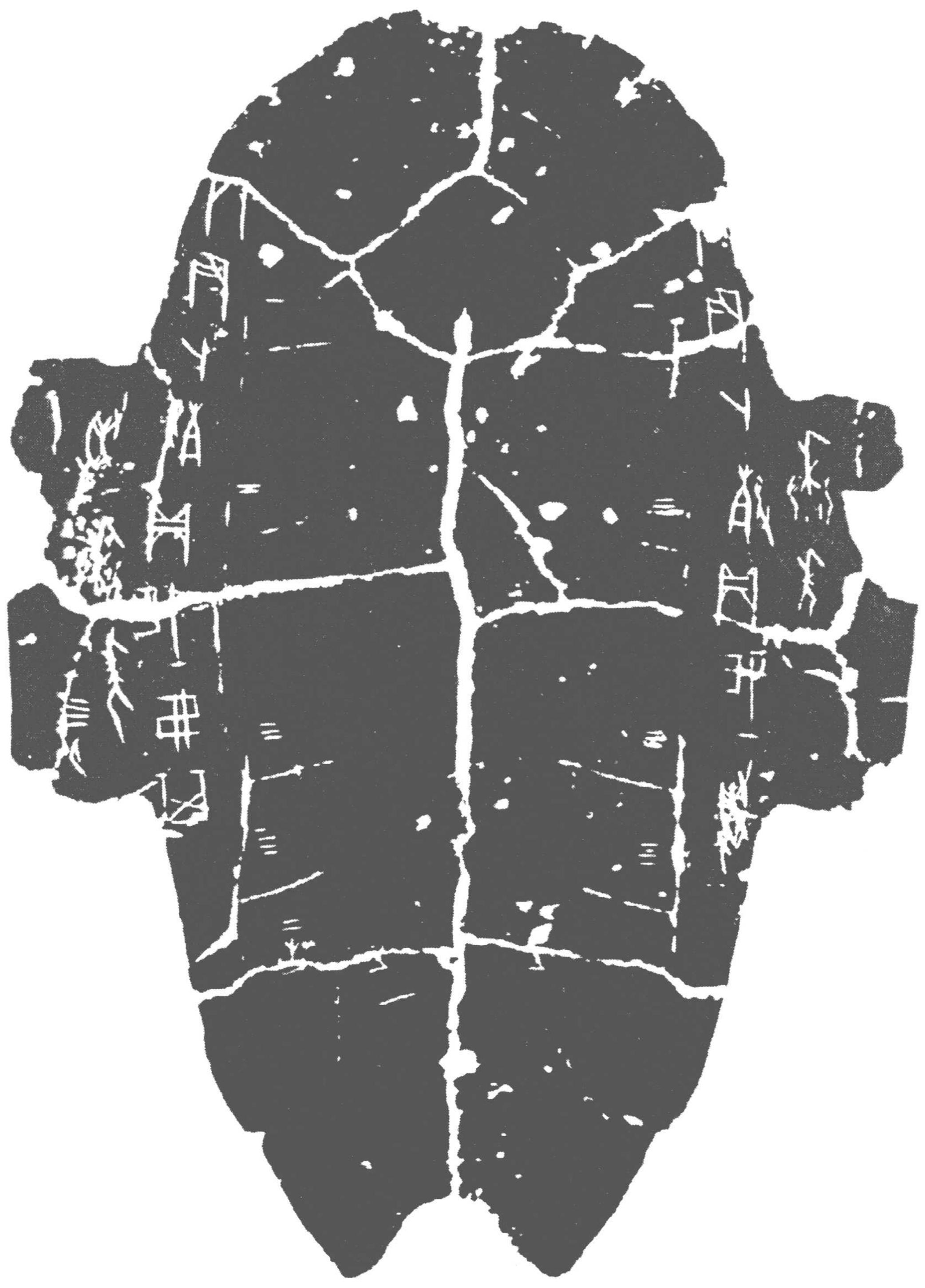
6742+13.0.4634

13.0.14119+13.0.4634

230

註〔十二〕　圖版捌

丙編圖版



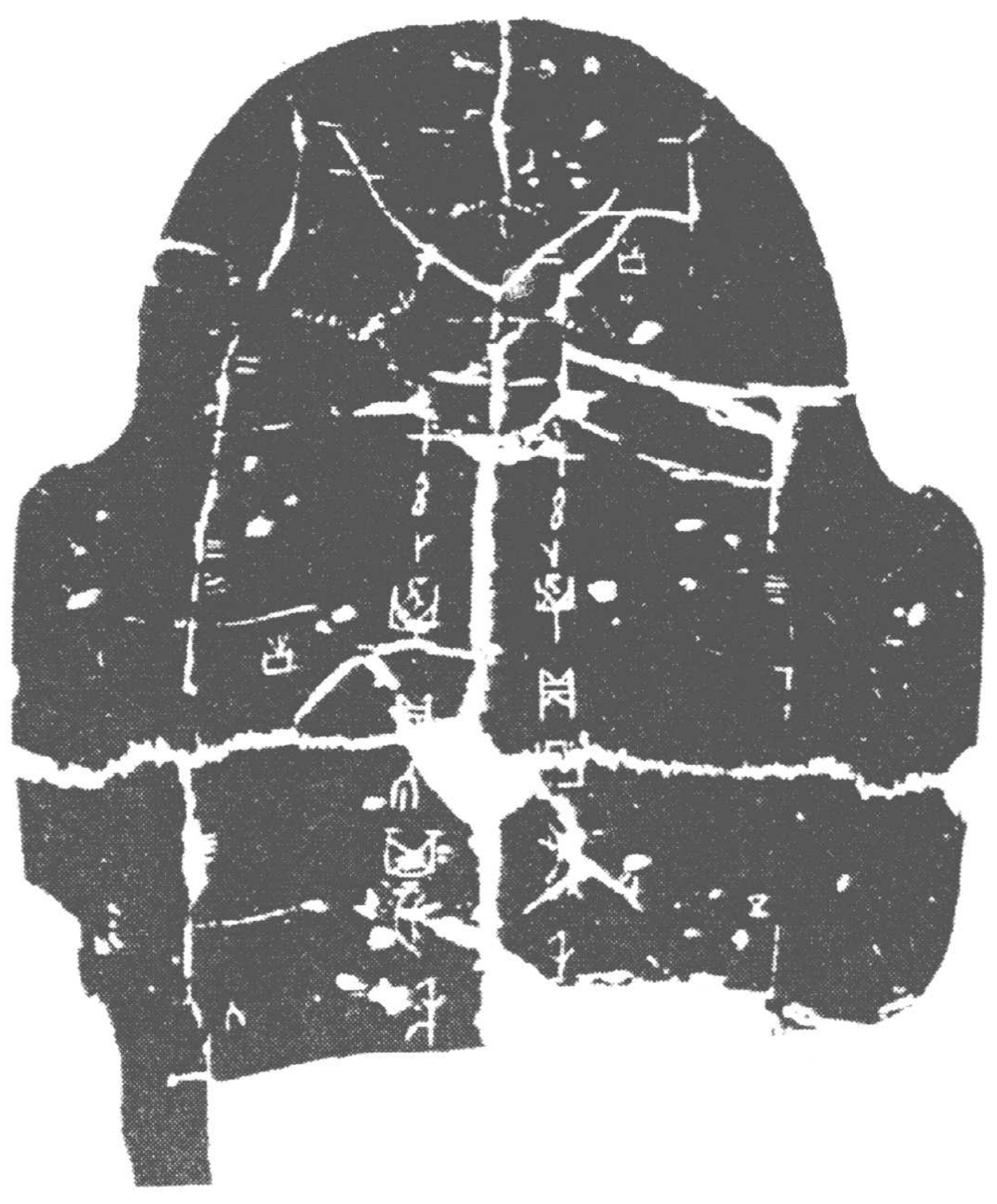
6725+13.0.4016

13.0.14107+13.0.4016

231

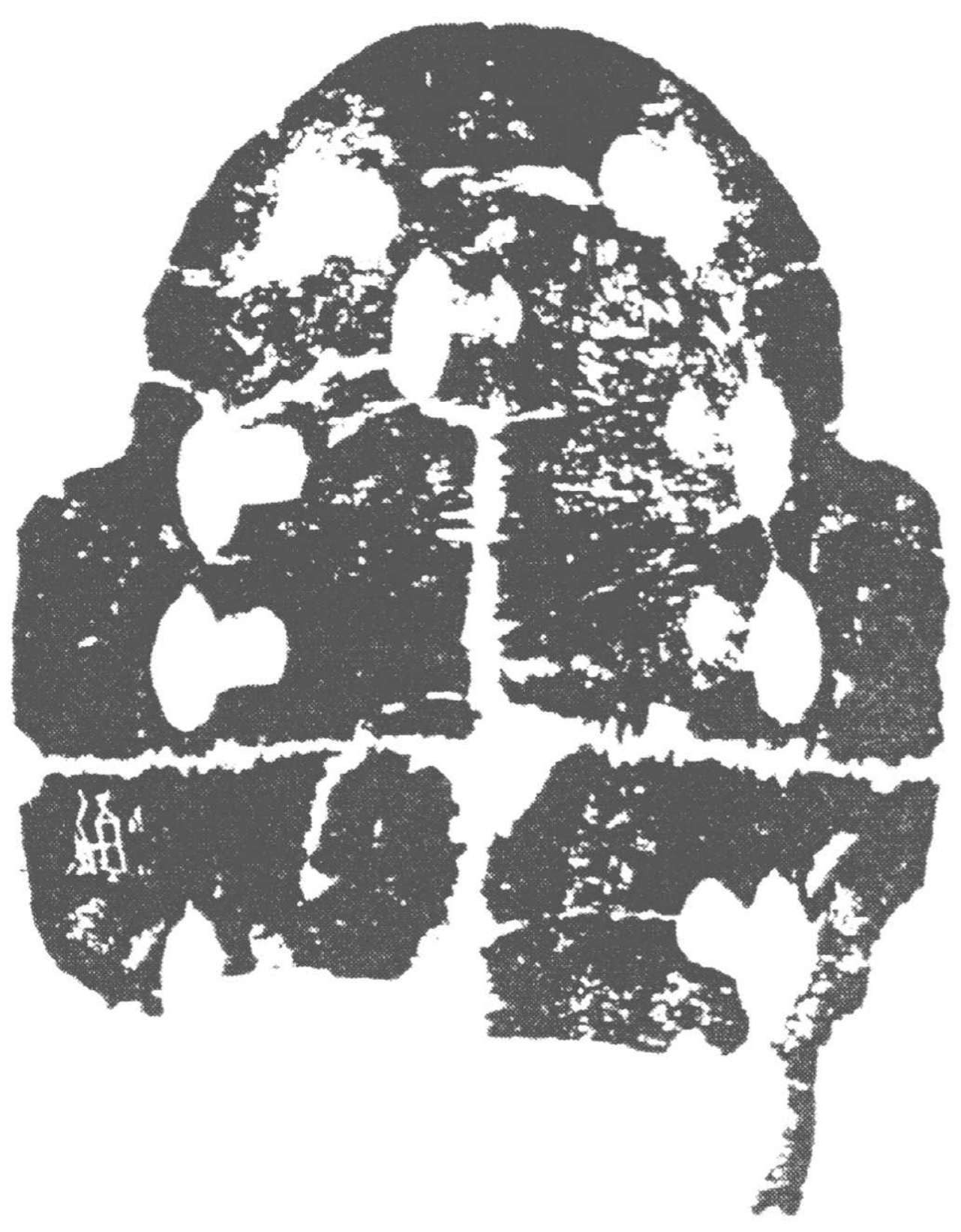
註〔十三〕　圖版壹零

丙編圖版



8172+8176

13.0.17067　13.0.17078　13.0.17083　13.0.17088
+13.0.17073



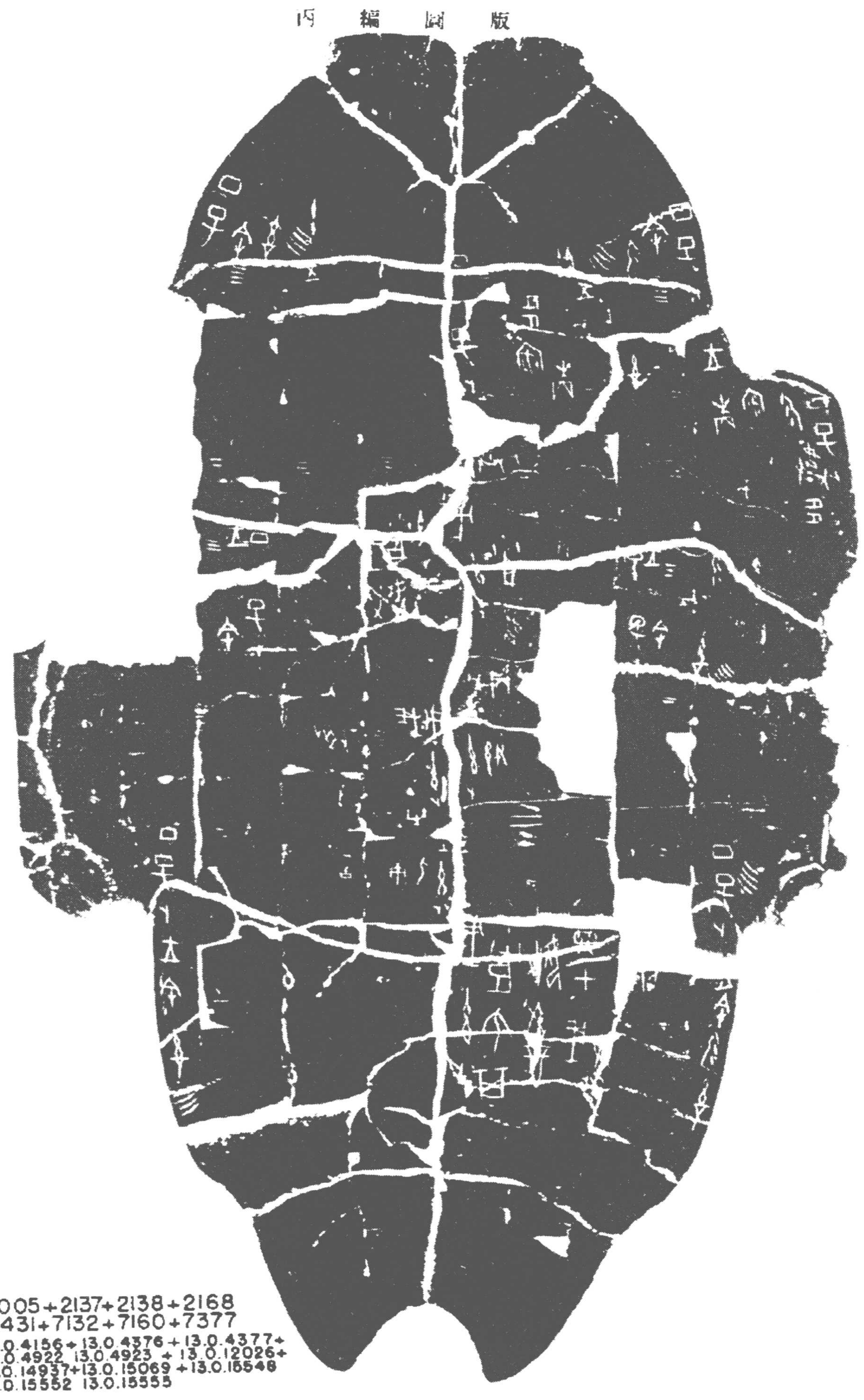
8173+反8176

13.0.17067　13.0.17078　13.0.17083　13.0.17088
+13.0.17073

232

註〔十四〕　圖版捌參

丙編圖版



826+2005+2137+2138+2168
2451+5431+7132+7160+7377
13.0.1520+13.0.4156+13.0.4376+13.0.4377+
13.0.4424+13.0.4922 13.0.4923+13.0.12026+
13.0.14936 13.0.14937+13.0.15069+13.0.15548
13.0.15550 13.0.15552 13.0.15555

233

占卜的時候，如果同時用幾塊不同的甲骨，來貞問同一的事件，便須將成套的卜辭，分別刻在幾塊不同的甲骨之上，這就是成套的甲骨了。譬如圖版壹壹，壹參，壹伍，壹柒，壹玖等五塊大小相近的大龜腹甲，便是成套的龜甲，其上卜辭，則為成套的卜辭，它們每一版都只有一種序數字，一看序數，便可以知道那是第一或第二、三、四、五版。又如圖版參壹、參貳、參參、參肆、參伍等五塊大小相似的大龜腹甲，也是成套的龜甲，在那一套中，有甲辰及乙卯二個至少相隔在十二天以上的占卜日子，但是甲辰和乙卯的占灼用龜的次序，完全一樣，所以在這一套中，也是每版只有一種序數字，像這樣能夠整套地保存起來，經過若干日子，又整套地搬出來使用，其次第，毫不紊亂，可知當時對於甲骨的保管，必有專門負責的人才，和專門儲藏的場所。成套的甲骨，究竟由多少塊組成一套？關於這，我還不敢十分肯定地說，不過據我所收集的材料，一套甲骨，還沒有超過五塊以上的，無論是殘缺的，或者次第連接的，都還沒有發現第五版以上的甲骨（即全版的序數在五以上），所以我們如果認為：成套的甲骨，是由五塊大小近似的龜甲或牛胛骨所組成一套的，這句話，至少在目前，是與事實相去不遠的。這兩套是比較完整的（如果五版算是完整的一套的話），其它如：圖版貳柒、貳捌，及續存三八八（見考釋）則只存一套中的第二、三、四版。圖版陸陸與陸柒則只存第二、四兩版。圖版陸玖與柒壹，則只存第二、三兩版。圖版柒參及考釋附圖陸，則只存第一、五兩版。至於圖版貳壹、參陸、肆肆等，則僅存一套中的一版了。

這裏，還有一個現象，也值得一提，即在成套的腹甲中，似乎也有不成套的卜辭，夾雜其中，這現象，和成套的與不成套的卜辭雜處於一版的情形一樣。譬如圖版伍貳，是由乙編中的三片碎甲，綴合而成，有六條（即三組對貞）卜辭：

(一) 口亥卜，㱿貞：王亩易伯兟从？　一二〔三〕四

(二) 口亥卜，㱿貞：（王）勿隹易伯兟从？　一二三四
(三) 貞：王亩侯告从正人？六月。　四
(四) 貞：王勿隹侯告从？　四
(五) 己巳卜，㱿貞：我受年？　四
(六) 貞：我不其受年？　四

其中第(一)、(二)兩辭不是成套卜辭。第(三)、(四)、(五)、(六)等辭，似乎是成套腹甲中的成套卜辭之第四辭。我說："似乎是"者，因其尾甲尚有殘缺，故不敢十分肯定地說。如果沒有(A)乙編一八五九版的拼合，則第(一)辭的序數一、二，和第(二)辭的序數一、二、三，就無從看到，很可能也把第(一)、(二)兩辭認為是成套腹甲中的成套卜辭，但是由於(A)版的綴合，確定了它不是成套卜辭中的一條。由此，亦可見完整材料的可貴，(A)版的本身價值並不高，只有幾個序數及殘字，幾乎等於不能說話的啞吧材料，可是與B，C二版拼合之後，却說出了一段意想不倒的重要事實來了。

又如圖版參陸，是由乙編中的八片碎甲所綴合，已經復原到近於完整的程度，這一版上的序數，除了第(一)辭在側有一個"三"字而外，其餘的都是"二"，當是一套中的第二版。假如第(一)辭不是這一版上的成套卜辭，那末似乎還應該有個序數"一"。但是沒有，而且連劃削的痕跡都沒有，所以我懷疑那個序數"三"，也許是"二"字的誤契，而這一版上的卜辭，可能都是成套的。可惜我們還未發現這一版中的其它任何一版，否則，是與否，或者可以得到一個確證的。不過在甲骨上，刻錯了字，而沒有改正過來，這種例子，也是有的。

關於其它種類的獸骨，因為材料太少，我在這裏，且不討論。至於牛胛骨，從一些零碎的材料中看來，是否有成套的骨版，我還不敢十分肯定的說。但是，牛胛骨上，有成套的卜辭，

則可斷言，在圖版壹壹的考釋中，我舉了一套牛胛骨上的成套卜辭（見插圖壹）有十條卜辭（即五組對貞卜辭）組成一套，分別刻在五塊殘碎的牛胛骨上，其序數自一至五，這可能是成套的骨版，因其殘缺過甚，所以我並未肯定它們是成套的牛胛骨。不過，那是不同骨版上的成套卜辭，則無疑問。

圖版參捌，是由乙編中的五片碎甲所綴合的大龜腹甲，記載着"五示"的世系：

(六) 貞：咸允左王？
(七) 貞：咸弗左王？
(八) 羽乙酉，㞢伐自咸若？
(九) 羽乙酉，㞢伐于五示：上甲、咸、大丁、大甲、祖乙。

第(九)辭中，把歷來各家認為是先臣巫咸的咸，放在先祖的五示系統中，這是極難得的材料，此外，和這一條一樣的，只有乙編五三〇三版的：

㚔于上甲、咸、大丁、大甲、下乙。

把咸放在五示中的上甲之後，大丁之前，並且也可證明下乙就是祖乙。但那一條却無"五示"二字。有人把咸認為是大乙（成湯），從世系上看，那是對的，但是把"咸"字分為从丁的"成"，即成湯，和从口的"咸"，即巫咸，那又不對了。我們看圖版參陸的卜辭：

(一) 貞：咸宾于帝？
(二) 貞：咸不宾于帝？
(三) 貞：大甲宾于咸？
(四) 貞：大甲不宾于咸？
(五) 甲辰卜，㱿貞：下乙宾于「咸」？

(六) 貞：下乙不宾于咸？
(七) 貞：大甲宾于帝？
(八) 貞：大甲不宾于帝？
(九) 貞：下乙「宾」于帝？
(十) 貞：下乙不宾于帝？

"咸"字从口，而在大甲、下乙之前，且和大甲、下乙一樣地可以賓于帝，又可以為"大甲"、"下乙"所賓。這樣的情形，這樣的地位，是巫咸所能當得起的嗎？這和圖版參捌中所謂从丁的咸（或釋為成）的情形不是一樣的嗎？那末這二個字的分別，又在什麼地方呢？然則又何從分起？況且在甲骨文中，即使在同一套或同一版中，一個字有幾種不同的寫法，也是常有的事，如果不看文義，僅从形體上去分別，將會發生錯誤的。譬如圖版參陸的"賓"字就有二種不同的寫法，何況"口"與"丁"，這二個字在甲骨文中究竟有何差別也還難說。所以從文義上，從甲骨文的本身上來相比，我認為這似乎只是一字，而非二字。

圖版捌零，是柒玖的反面拓本。由乙編中的二片殘甲所綴合，那上面記載着一次大規模獵麋的收穫：

允隻麋四百五十一

因為這一條是在反面的拓本上的，所以很少被人注意到，有好些統計狩獵的文章，都沒有引到這一條材料。

在本輯裏，我們附加了六幅照相，作為參考，其中圖版貳壹和貳貳是一塊大龜腹甲的正反兩面，由乙編中的一一片碎甲所綴合，它們的折裂痕，都是舊的，各版的顏色也不一樣，如果照拓本拼兌，絕對無法復原，因為製版的時候，拓本被製得走了樣了。把它留個影，讓大

家者看眞相。圖版貳伍和貳陸，也是一塊大龜腹甲的正反兩面，正面是一個刻兆的標本，反面的卜辭有用筆寫的，有用刀刻的，書寫的文字在拓本上無法表現，只能照相，但是照片對契刻的文字，又表現得不够清楚，所以我們遇到這種情形，總是照片與拓本兼收並用。讀者可以對照着看。圖版陸壹和陸貳是一塊大龜背甲（右半邊）的正反兩面，反面有刻的和寫的文字。

丙編圖版將儘可能地保持原大，所以版面的大小很難求得一致。本輯所收的都是極重要的一些材料，在這裏，因爲篇幅所限，不能一一介紹。不過我要補充聲明一下，本輯的材料固極重要，但是，極重要的材料，並不完全都在本輯之中，那些復原的重要資料，我們將繼續發表，到那時，另作介紹吧。

乙編及其編餘的材料，是很豐富的，拼兌起來，也很費力，我們雖則儘可能地在求其復原，但是，遺漏的地方，恐怕還有不少，希望國內外學者，加以指教。不過，在丙編中，拼兌錯誤的拓本，是決不會有的，因爲它們是復原甲骨的重拓本，是百分之百的可靠與可信，這一點，可請讀者放心。

去年冬天，董彥堂師在香港替本所購得一部殷虛文字綴合編，那是根據拓本而綴合的，我曾經把它和我的底稿校核一遍，除了其中有一小部分與實物不合者而外大部分都跟我所復合的相同。不過它所復原的程度，比較起來，不如本編來得完整；綴合的圖版，也沒有本編那麼多。譬如本輯的圖版，大部分是綴合編所沒有的。那是因爲它對於乙編的綴合，限於上中兩輯的緣故。但是也有一小部份，是我從前所未拼合的，所以它對本編的編著，還是有所裨益的。

我的工作，多年以來，一直由李濟之師、董彥堂師指導和鼓勵，丙編的收獲，是他們二位

老人家，多年來教導與督促的成績，在此，謹向他們致最深的敬意與謝忱。本輯圖版與考釋，由高曉梅先生、屈翼鵬先生、石璋如先生審閱一遍，有所教正，也是我最要感謝的。傳拓的工作，劉淵臨先生負擔了一大部分，宮雁南君後來參與其事。黃慶樂、陳仲玉二位先生，對寫號與繪圖方面，幫了不少的忙。透明紙上的描譯文字，是劉淵臨先生根據我的釋文繕寫的。考釋的清稿，由吾妻李鱗徵女士幫我一再地抄寫謄清。印刷方面的事情，由汪和宗先生負責。管理員李光宇先生給我充分的自由，隨時可以檢視實物，應用材料，使我在工作上方便不少。這些，都是我要在此致謝的。

本輯的出版，尤其要感謝所長李濟之師的籌畫，無論是經費，版樣和紙張，都曾經他老人家費過一番心血的。

最後我要向中華教育文化基金董事會的諸位董事先生們致最深的謝意。沒有他們的慷慨資助，本輯的付印，是很難實現的。

民國四十六年八月十五日於南港。

占卜の時に、如し果して同時に幾々塊かの異なった甲骨を用いて、同一の事件を卜問すれば、すなわちきっと揃いの卜辭は、分別して幾く塊かの異なった甲骨上に刻んだ。これが就ち揃いの甲骨である。譬へば圖版壹壹〔十五〕壹參〔十六〕壹伍〔十七〕、壹柒〔十八〕、壹玖〔十九〕等の五塊の大小相い似た大龜腹甲は、すなわち揃いの龜甲である、其の上の卜辭は、則ち揃いの卜辭である。それは一版ごとにみなただ一種の序數字がある、一度の序數を見れば、すなわちそれが第一である、は第二、三、四、五版であることを知ることが出來る。また圖版參壹〔三十一〕參貳〔三十二〕參參、〔三十三〕參肆〔三十四〕、參伍等の五塊が大小相い似た大龜腹甲が、また揃いの龜甲である、そのひと揃いの

中では、甲辰および乙卯の二つの少くとも十二日以上あい隔った占卜日がある、ただ甲辰と乙卯の龜に用いる占灼の順序は、完全に同じであるので、このひと揃い中に、やはり版ごとにただ一種の序數字がある、この樣に能く充分に保存してくると、若干の日を經過してもまた完全に搬出して使用でき、其の次第は、すこしも紊亂がない。當時は甲骨の保管に對して、必ず專門の責任をもつ專門家があり、また專門に儲藏する場所がある。揃いの甲骨は、結局いくつかの塊組によってひと揃いと成るのか。これに關しては、私はまた十分に斷定的に言うことができない。だが私の收める所の材料によると、ひと揃いの甲骨はまた五塊以上超過するものはない。殘缺は言うに及ばず、或は次第の連接したものなど、みなまた第五版以上の甲骨を發見していない（即ち全版の序數は五以上にある）、私どもが如し果して、揃いの甲骨が、五塊の大小近似の龜甲あるいは牛胛骨でひと揃いをなすものと認めるならば、言い方は少しく現在においては、事實と相い去ることば遠くない、このふた揃いは比較的完整なもので（たとへば五版が、完整なひと揃いであると見なしてのことである。）其の他は圖版貳柒〔二十五〕貳捌〔二十六〕及び「日甲骨」續存巳三八八〔二十七〕（考釋に見える）則ちただ第三、四の兩版が存する。圖版陸玖〔二十八〕と柒壹〔二十九〕は、則ちただ第二、三兩版が存する。圖版柒參〔三十〕および考釋附圖陸は、則ちただ第一、五の兩版に存し、圖版貳壹〔三十一〕參陸〔三十二〕肆肆〔三十三〕等に至っては、則ち僅がにひと揃いの中に一版存する。

この中には、また一つの現象があり、またいち提起するに値ひし得る、即ち揃いの腹甲中に、ま不揃いの卜辭が、その中は夾雜しているのに似ている、この現象は、揃いと不揃いの卜辭が一版に夾雜している情形と同じである。譬へば圖版伍貳〔三十四〕の如く、「乙編」中の三片の碎甲に由って綴合して成り、六條の（即ち三組は對貞）卜辭がある。

(一) □亥卜，殼貞：王叀易伯兹从？ 一 二 〔三〕 四
(二) □亥卜，殼貞：（王）勿隹易伯兹从？ 一 二 三 四
(三) 貞：王叀侯告从正人？ 六月
(四) 貞：王勿隹侯告从？ 四
(五) 己巳卜，殼貞：我受年？ 四
(六) 貞：我不其受年？ 四

その中に第(一)、(二)の兩辭は揃いの卜辭ではない。第(三)、(四)、(五)、(六)等の辭は、揃いの腹甲中の揃いの卜辭の第四辭のようである。私が「似ていること」と言うのは、その尾甲にほ殘缺が有ることによって、故に敢へて十分に斷定して言うことができないからである。如し果して(A)乙編の一八五九版の拼合がなければ、則ち第(一)辭の序數の一、二と第(二)辭の序數の一、二、三は就ち見る方法はなく、第(一)、(二)の兩辭を認めて揃いの腹甲中の揃いの卜辭とすることは實に可能である。ただこれは(A)版の綴合によって、それが揃いの卜辭中の一條でないことを確定した。此れによって、また完整な材料の貴ぶ可きことを見るべきである、(A)版それ自身の價値は決して高くなく、ただ幾くらかの序數及び殘字があるだけで、殆んど話のできない〃おし〃の材料に等しいが、B、C二版の拼合の後、却って一段の思いもよらない重要なる事實がでてきたと言える。

また圖版の參陸のごとく、乙編中の八片の碎けた甲を綴合する所に由るもので、已に完整の程度に近い復原を得た。この一版上の序數は、第(一)辭の左側に一つの〃三〃字がある以外は、其の餘（あま）りはみな〃二〃である。當にひと揃い中の第二版である。假に第(一)辭の如きはこれ一版上の揃いの卜辭ではない、それならやはり序數〃一〃があるかのようである。

そのうえ削り取った痕跡すらない。であるから私はその序數〝三〟を疑わしく思う。或は〝二〟の誤りの契であるかもしれない。而してこの一版上の卜辭は、みな揃いである。惜しいことに私はまたこの一版中のどのような一版も、未だ發見していない。そうでなければ、是か否は、或は以て一つの確證に至り得るであろう。だが甲骨上に、字を誤り刻み、而して改正していないこの種の例もまたあるのである。

その他の種類の獸骨に關しては、材料ははなはだ少ないので私はここでは討論しない。牛胛骨に至っては、いくらかの零碎な材料中よりみてみると、揃いの骨版があるか否かを、私はまだ十分斷定して言うことができない。ただ牛胛骨上には、揃いの卜辭を擧げ（插圖壹を見よ）、十條の卜辭があって、（即ち五組の卜辭に對貞する）組してひと揃いを成し、分別して五塊の殘碎の牛胛骨上に刻み、その序數は一より五に至る。これは揃いの骨版であるということができる、その殘缺が甚しきによって、私は未だそれが揃いの牛胛骨であることを斷定しえない所以である。だが、これは同じでない骨版上の揃いの卜辭であって、則ち疑う餘地はない。

圖版参捌〔三十五〕は『乙編』中の五片の碎けた甲の綴合する所の大龜腹甲であるによって、五示の世系を記載している。

(六)　貞：咸允左王？
(七)　貞：咸弗左王？
(八)　羽乙酉、出伐自咸若？
(九)　羽乙酉、出伐于五示、上甲、咸、大丁、大甲、祖乙。

第(九)辭中は、歷來の各家が先臣巫咸と認めている。咸を先祖の五示の系統中におくことは、これは極めて得がたき材料である。此の外、この一條と同じようなものは、ただ『乙編』五三〇三版のものがある。

　桒于上甲、咸、大丁、大甲、下乙。

咸を五示の上甲の後、大丁の前におくことは並に且つまた乙が就ち祖乙であることを證明している。ただその一條には却って〝五示〟の二字がない。或る人は咸を大乙であると認めた。世系上より見れば、それは正しいが、ただ〝咸〟の字を分けて丁に從う〝成〟としたら即ち成湯と、口に從う〝咸〟は、即ち巫咸となる。それは正しくない。圖版参陸の卜辭を見れば、

(一)　貞：咸宾于帝？
(二)　貞：咸不宾于帝？
(三)　貞：大甲宾于咸
(四)　貞：大甲不宾于咸
(五)　甲辰卜、㱿貞：下乙宾于「咸」？
(六)　貞：下乙不宾于咸？
(七)　貞：大甲宾于帝？
(八)　貞：大甲不宾于帝？
(九)　貞：下乙「宾」于帝？
(十)　貞、下乙不宾于帝？

咸字は口に从い、而して大甲下乙の前に在り、且つ大甲は、下乙と同じ帝に賓（まつり）すべきで、また以て「大甲」とすべきである。この様な事情、この樣な地位を、巫咸が擔い得るであろうか。これと圖版参捌中の所謂丁に从う咸は（或は釋して成とする）の事情は同樣ではないのか。それならこの二つの字の分別は、またどこにあるか、然らば則ちまた何から分かれたのか。まして且つ甲骨文中に於て、たとえ同一の揃いの或は同一版中に在って、一つの字に幾種かの同じでない書き方があったとしてもまた常に有る事である。もし文義を見なければ、僅かに形體上に从び分別をしていけば、將に間違いの發生することがあり得る。譬へば圖版参陸の〝賓〟字の如く就ち二種の違った書き方がある、何をか況んや〝口〟と〝丁〟、この二個の字は甲骨文中に在って結局何の差別があるか說き難い。だから文義上、甲骨のそれ自身から相い比べると、私はこれはただの一字で、二字ではないように思われる。圖版捌零〔三十六〕これは柒玖の反面の拓本である。『乙編』中の二片の殘甲の綴合するところによって、その上面には一回の大規模な麋を狩獵した收獲が記載してある。

　允隻麋四百五十一

この一條は須度反面の拓本上にあるので、實に人の注意されること少ない所以で、たくさん狩獵を統計した文章があるが、みなこの一條の材料を引くものはない。

本輯に在っては、私は六幅の寫眞を附け加えて、參考とする。その中の圖版貳壹と貳貳〔三十七〕は一塊の大龜腹甲の正反兩面である。乙編中の一一件は碎甲によって綴合するもので、それの裂痕するところは、みな舊いものであり、各版の顏料はまた違う。如し果して拓本に照して拼兌すれば、絶對に復原の方法はない。製版の時に、拓本は色あせて作られたようである。それを寫しにとどめてみんなに眞相を見させる。圖版貳伍〔三十八〕と貳陸〔三十九〕、また一塊の大龜腹甲の正反兩面である、正面は一個の刻兆の標本である、反面の卜辭は筆寫を用いたものもあり、刀刻を用いたものもあり、書寫の文字は拓本上に在っては表現の方法なく、ただ寫眞をうつすことができるだけである。ただ寫眞契刻は文字に對してまたはっきり現われない。だからこの種の事情に到達すれば、どうしても寫眞と拓本とを兼ね收めて並用する。

『乙編』及びその編餘の材料は、實に豐富である、拼兌してより、また實に力を費やし、私たちはできるだけその復原に求めたけれども、ただ遺漏の方面のものもあり、恐怕すくなからずあり、國內外學者に、以て指教を加えられることを希望する。だが『丙編』中に在って、拼兌と錯誤の拓本は、決してあり得ない。それらは甲骨の重拓本を復原したのであり、百パーセント信ずべきである。この一點は、讀者に安心してもらいたい。

去年の冬、董彥堂先生は香港にあり本を替えて買った一部『殷虛文字綴合編』（本輯七七頁參見）を得た。それは拓本を根據として綴合したものであり、私は曾ってそれと私の原稿とを一度調べて比べたことがあった、その中の一小部分が實物と合わない以外は、大部分はみな私の復合する所と同じである、だが復原する所の程度を比べると、本編のように完璧にはできていない。綴合の圖版は、また本編のそれほどに多くない。譬へば本輯の圖版の如く、大部分は綴合編にないところのものである。それはそれが『乙編』の綴合に對して、上中兩輯に限ったからである。ただまたすこしの部分がある。私は前に未だ拼合しないもので、それが本編の編著に對しては、また碑益する所がある。

私の仕事は、數年來、ずっと李濟（李濟・『卜辭通纂』註〔四六〕・第二輯一四九頁參見）先生、董彥堂先生によって指導と鼓勵されたもので、兩編の收獲は、この二人の老大家により、數年來敎導と督促の成果で、ここに謹んで老先生に最も深く敬意と感謝をあらわします。

本輯圖版と考釋は、高曉梅先生（高去尋・第三輯三四二頁參見）、屈翼鵬（屈萬里・『殷虛文字乙編』註〔三一〕・第四輯

九七頁參見）先生、石璋如先生によって審閲されることを一遍、教正する所があり、また私の最も感謝とするところであります。溥拓の作業は、劉淵臨先生に一大部分を負擔した、宮雁南［四十］君はのちのことに參與した。黄慶樂［四十一］、陳仲玉［四十二］二人の先生は、寫眞番號と繪圖の方面に對して、少なからず手傳っていただいた。透明紙上の楷譯文字は、劉淵臨先生が私の釋文にもとづいて淨書した。考釋の清稿は、吾が妻李麟徵［四十三］女士は私に一度ならず清書を寫し書きしてくれた。印刷方面の事情は、汪和宗［四十四］先生の負責に由る。管理員李光宇先生は私に充分の自由を與へ、いつでも實物を檢視し、材料を應用し、私に作業上少なからず好都合となった。これらはみな私が此に感謝するものである。

本輯の出版は、特に所長の李濟先生の籌畫「考へはるかをつくす」に感謝したい。經費は言うに及ばず、版樣と紙張で、みなかってこの老大家の最も心をわずらはせて下さったものである。

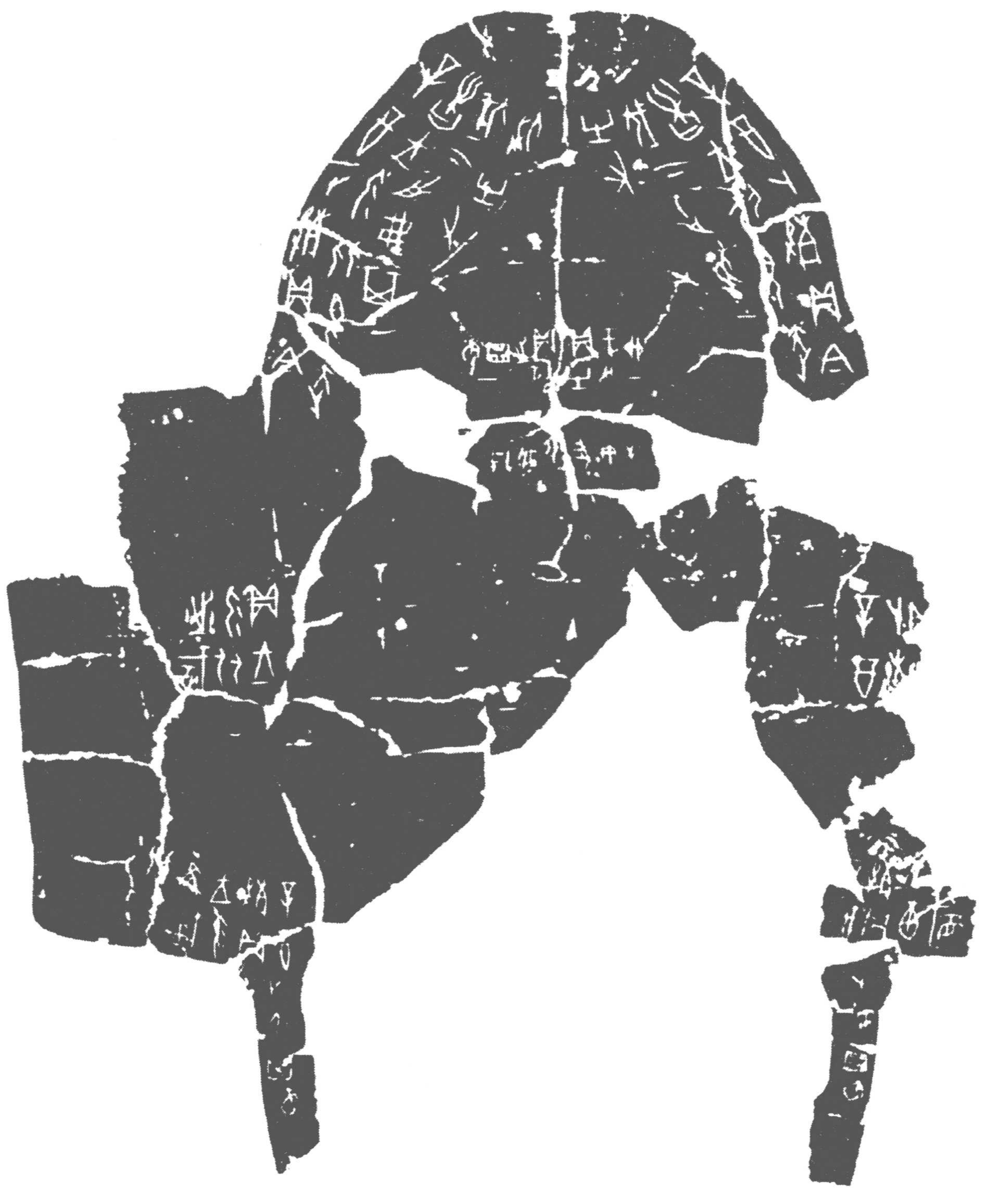
最後に私は、中華教育文化基金董事會の諸位董事先生らに敬んで最も深く謝意をあらはします。

彼等の慷慨と資助がなければ、本輯の印刷は、實に實現しがたいものである。

民國四十六〔一九五七〕年八月十五日南港にて。

註〔十五〕　圖版壹壹

丙編圖版

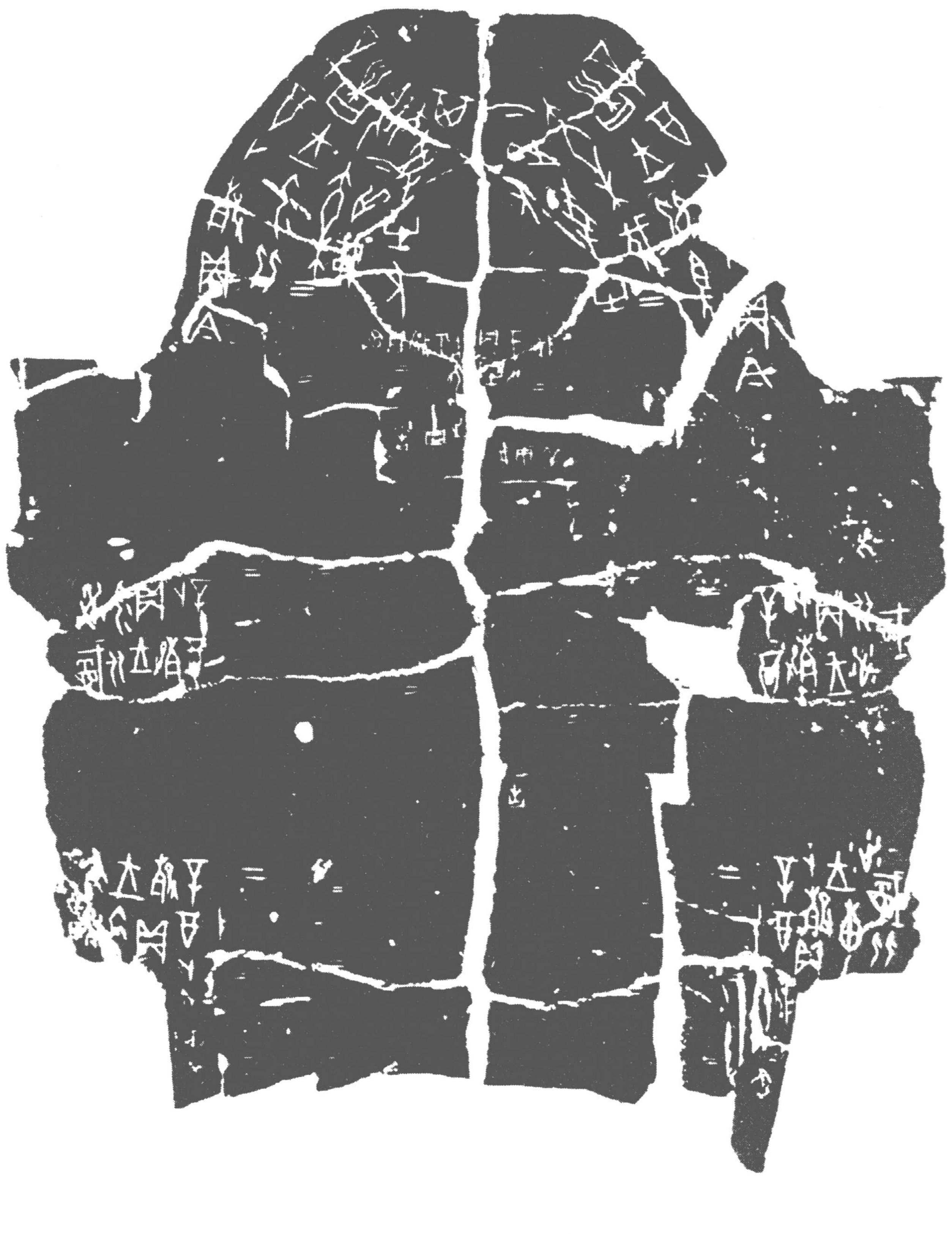


2109+3312+3354+3685+7054+7058
+7348+7478+8302+13.0.7155

13.0.4327+13.0.7053+13.0.7108+13.0.8002+13.0.14798
13.0.14799+13.0.14804　13.0.14805+13.0.15474　13.0.15475
+13.0.15821−13.0.15823+13.0.17304+13.0.7155

註〔十六〕　圖版壹參

丙編圖版

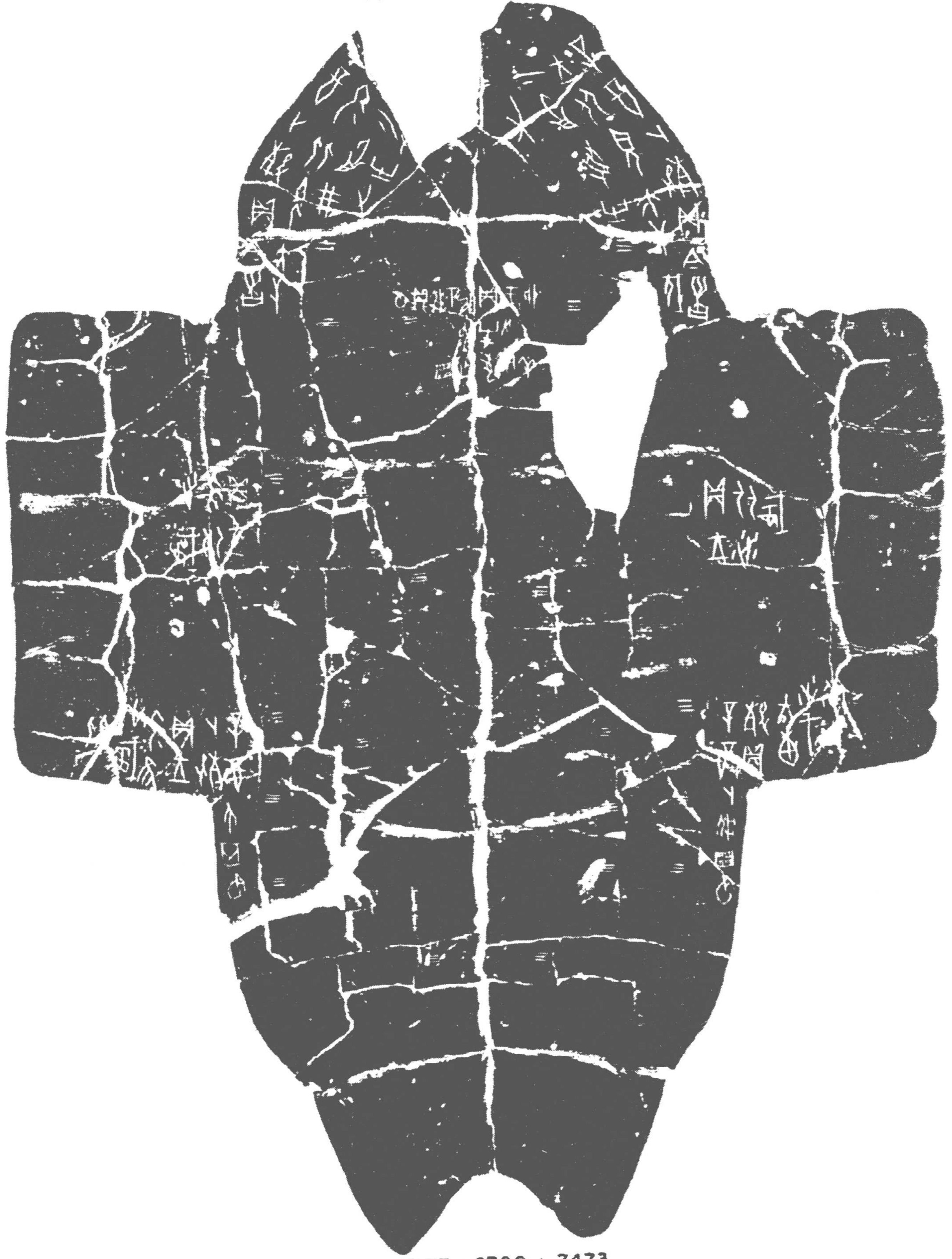


1923+2662+6743+6986

13.0.3999　13.0.4003+13.0.5456+13.0.14120+13.0.1466

註〔十七〕　圖版壹伍

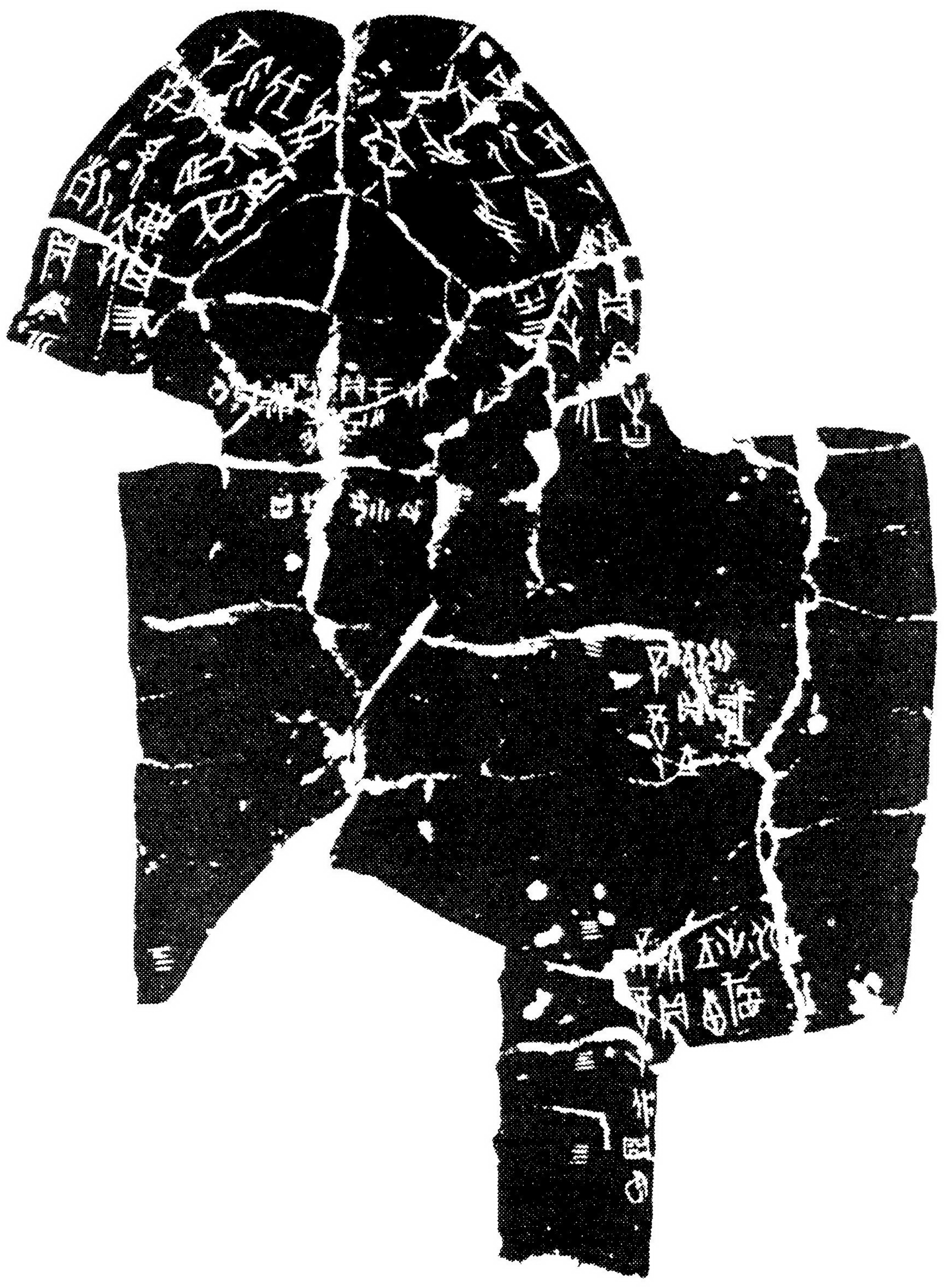
丙編圖版



1907+6700+7473
13.0.3977+13.0.14078　13.0.14080　13.0.14086　13.0.14992+13.0.15812

註[十八] 圖版壹柒

丙編圖版

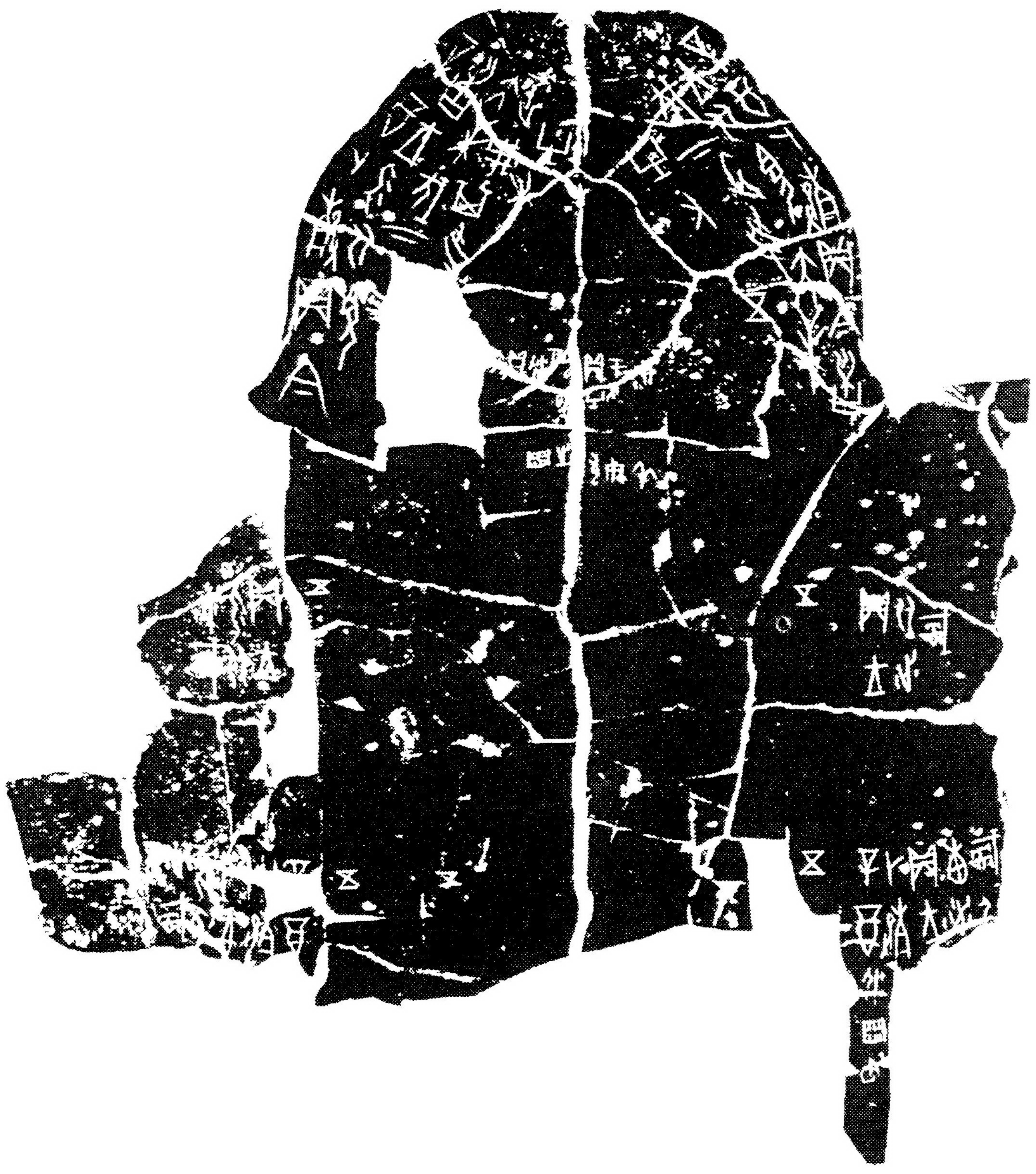


745+2029+2099+2405+7384+[illegible]
13.0.1268+13.0.4194 13.0.4199+13.0.4316-13.0.4318
+13.0.4797+13.0.15565

250

註[十九] 圖版壹玖

丙編圖版

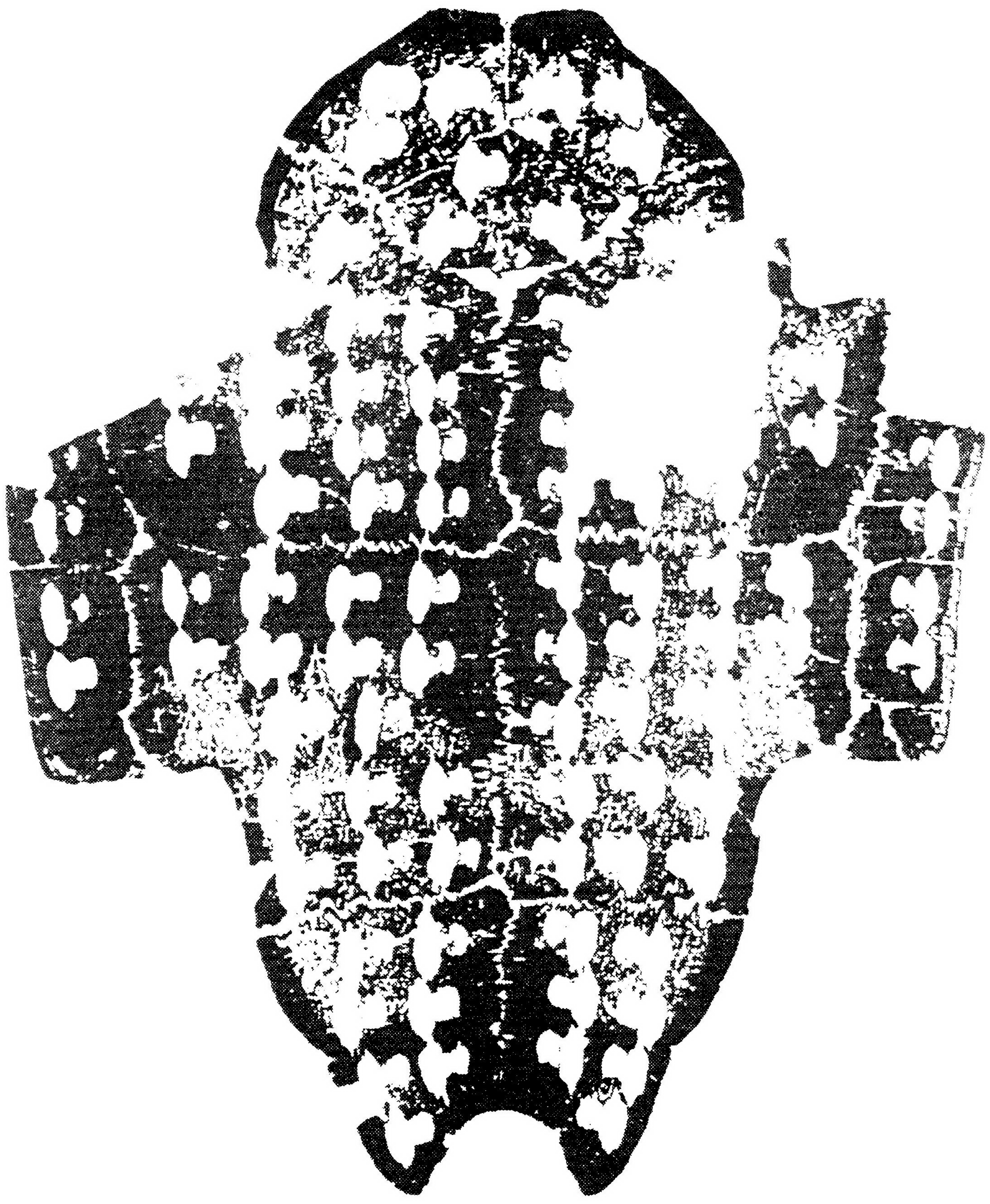


838+2522+2553+2555+2644+2700+3737+4608
+乙7987+13.0.5142
13.0.1578+13.0.5088+13.0.5136 13.0.5141+13.0.5138 13.0.5140 13.0.5143
+13.0.5414+13.0.5543+13.0.8121+13.0.10694 13.0.10712+13.0.16685
+13.0.5142

251

註[三十] 圖版叁壹

丙編圖版

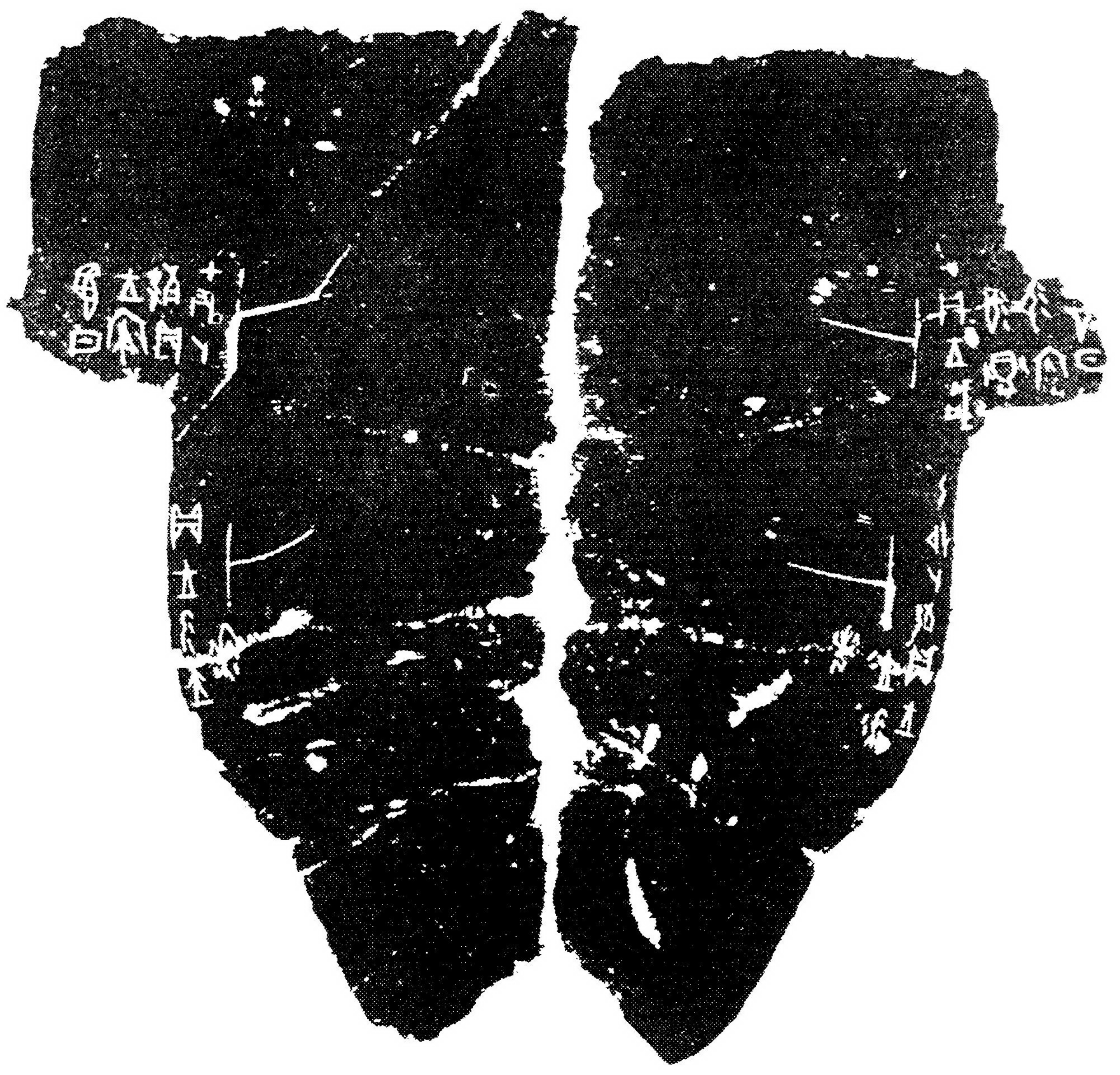


2140+6720+7202+7510+乙7016
13.0.4378+13.0.14103+13.0.15175 13.0.15176 13.0.15179 13.0.15180 13.0.15182+
13.0.15183+13.0.15899 13.0.15900 13.0.15901 13.0.15906 +13.0.14737反

252

註[三十二] 圖版叁貳

丙編圖版

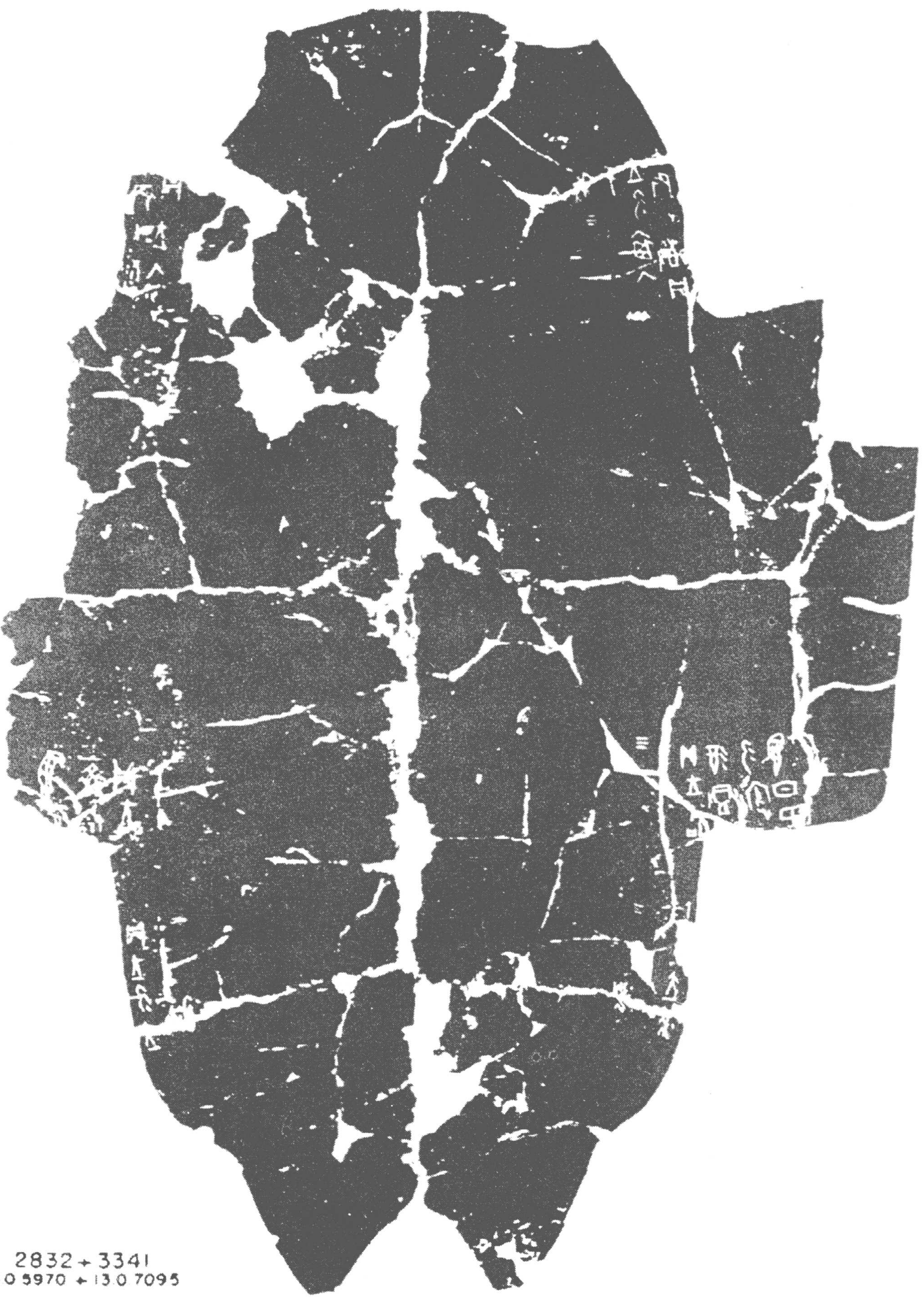


3152+3733
13.0.6758+13.0.8118

253

註〔三十二〕 圖版參參

丙編圖版

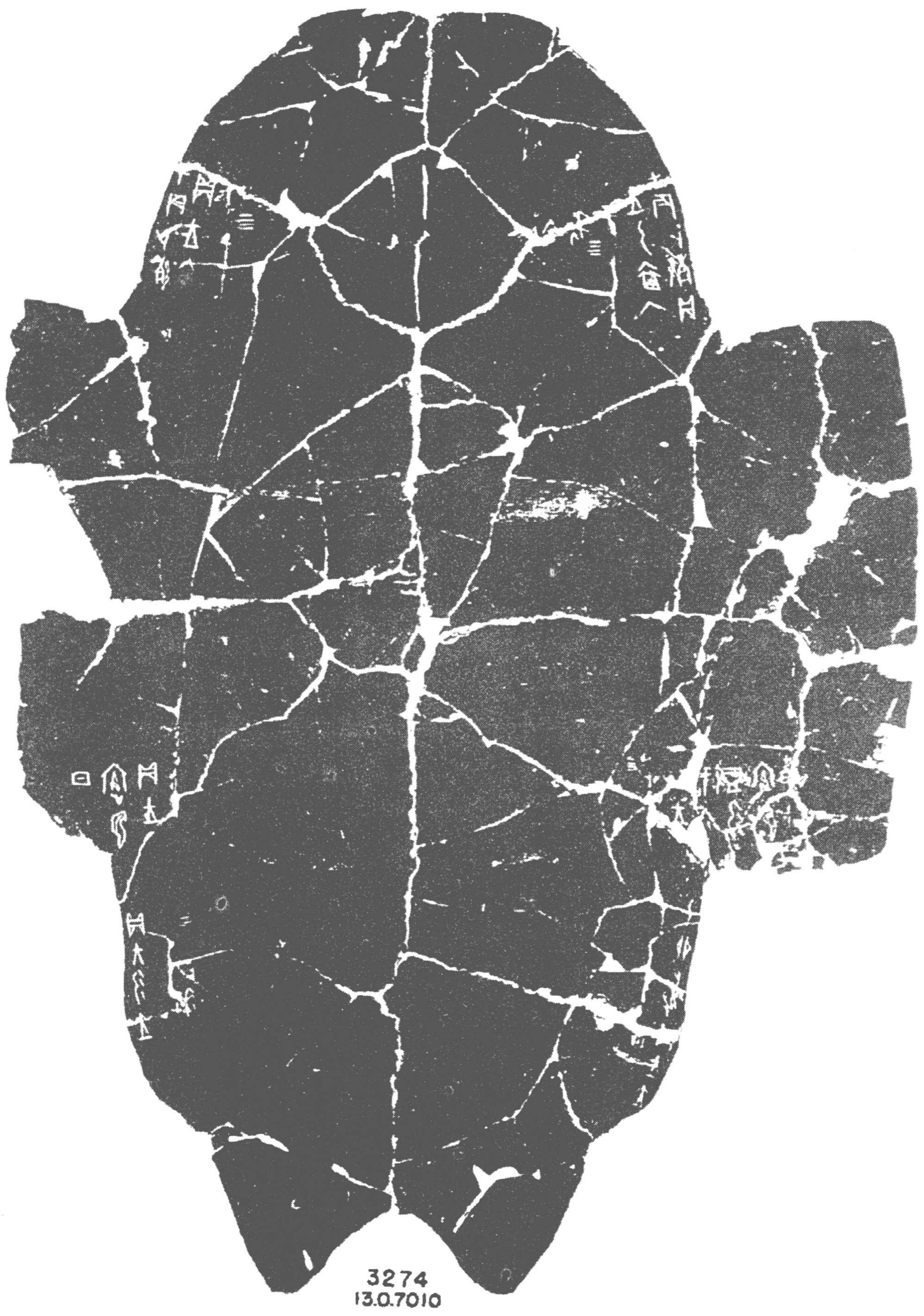


2832 + 3341
13.0.5970 + 13.0.7095

254

註〔三十三〕 圖版參肆

丙編圖版

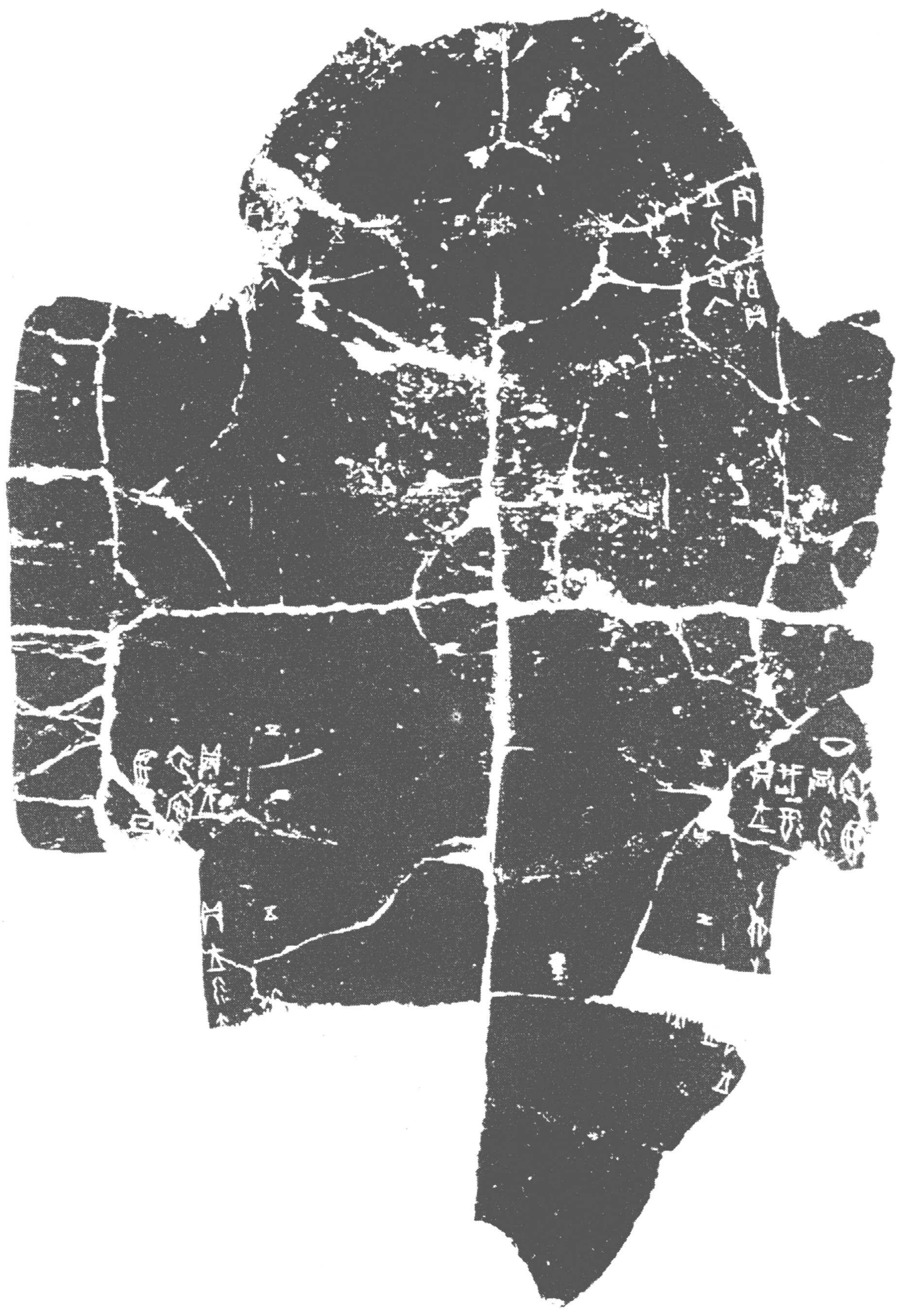


3274
13.0.7010

255

註〔三十四〕 圖版參伍

丙編圖版

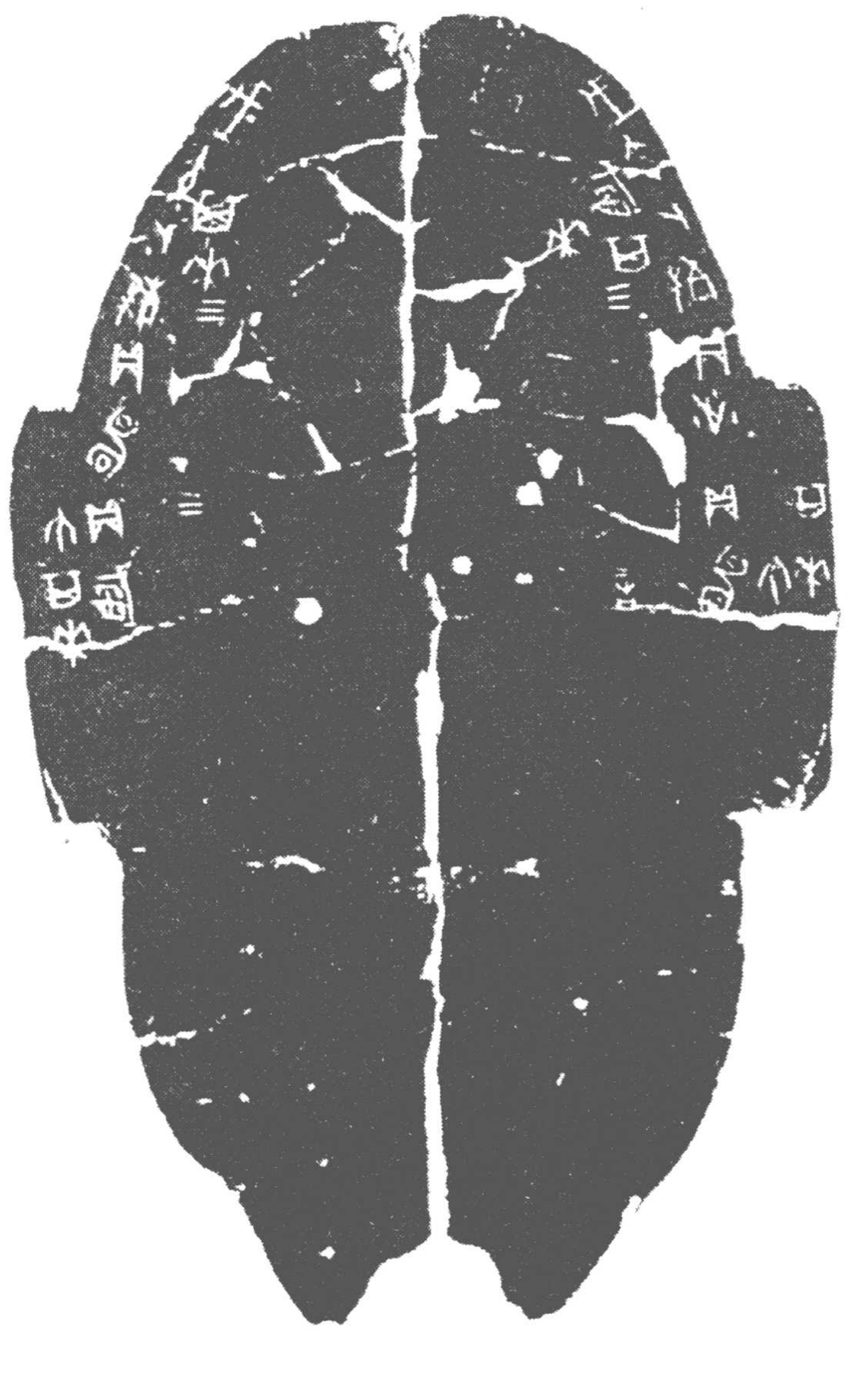


1331+7766+7988+8045
13.0.2811+13.0.16351+13.0.16687+13.0.16786

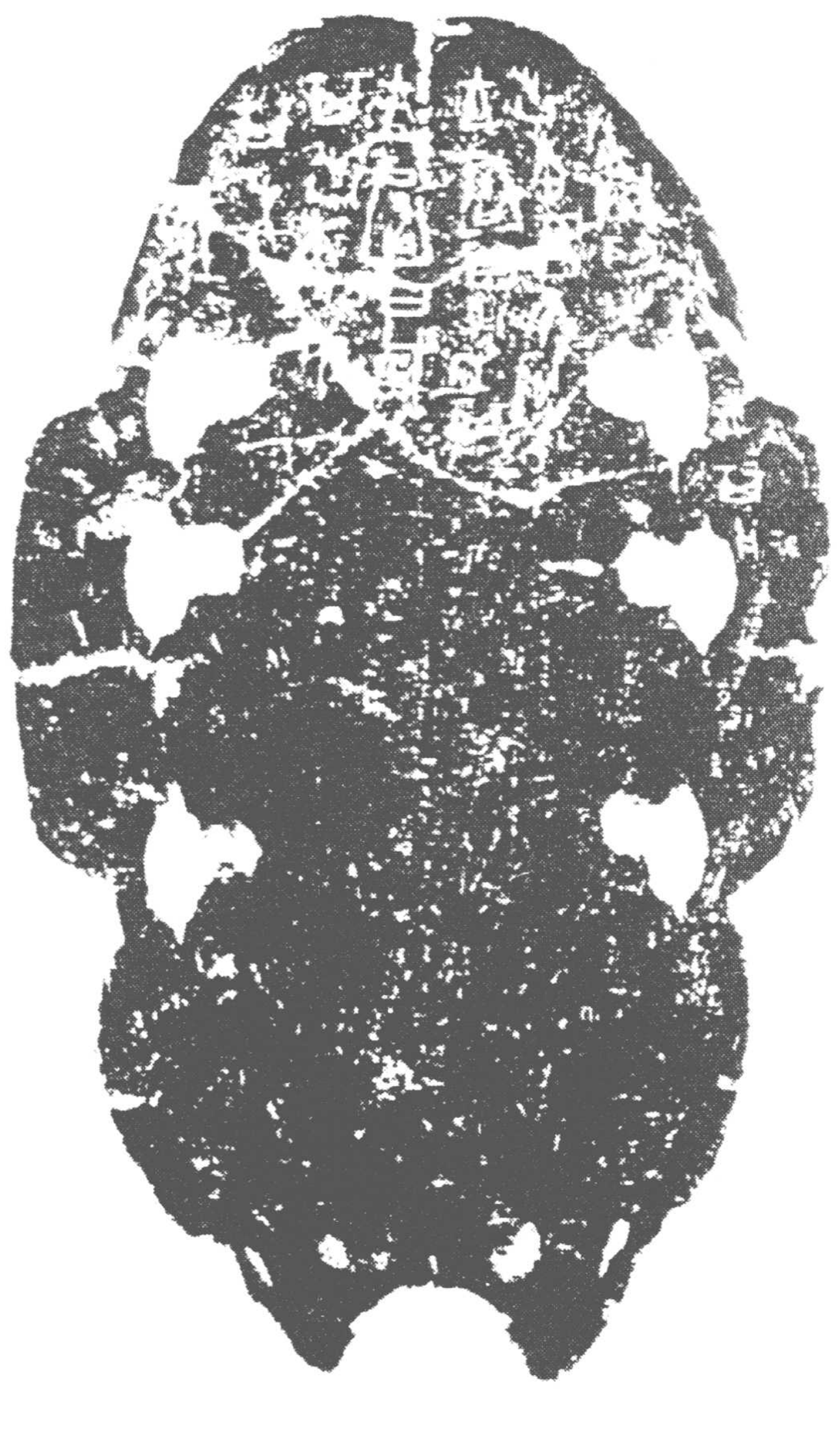
256

註〔三十五〕 圖版貳柒

丙編圖版



6877
13.0.14378—13.0.14382

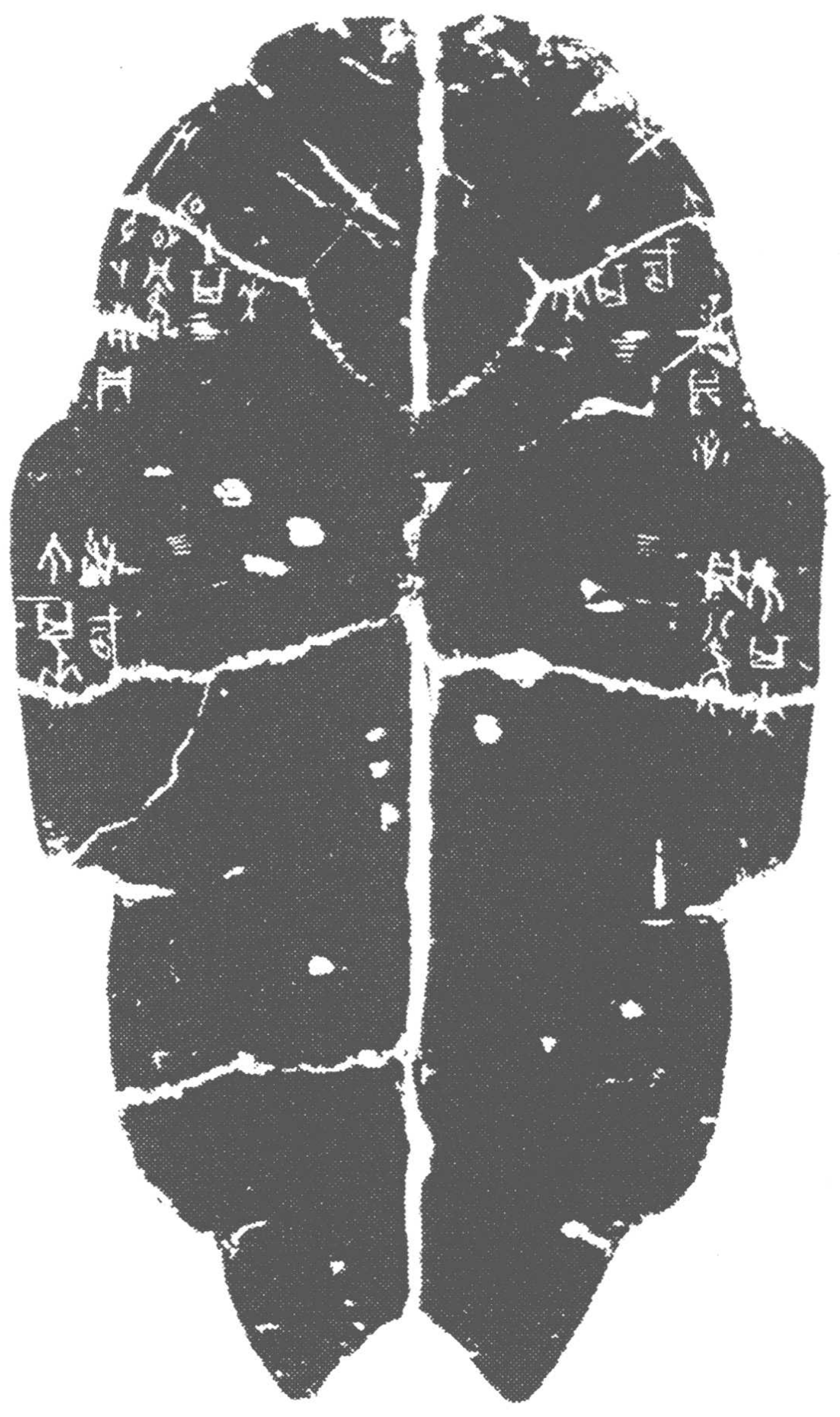


6878
13.0.14378—13.0.14382 反

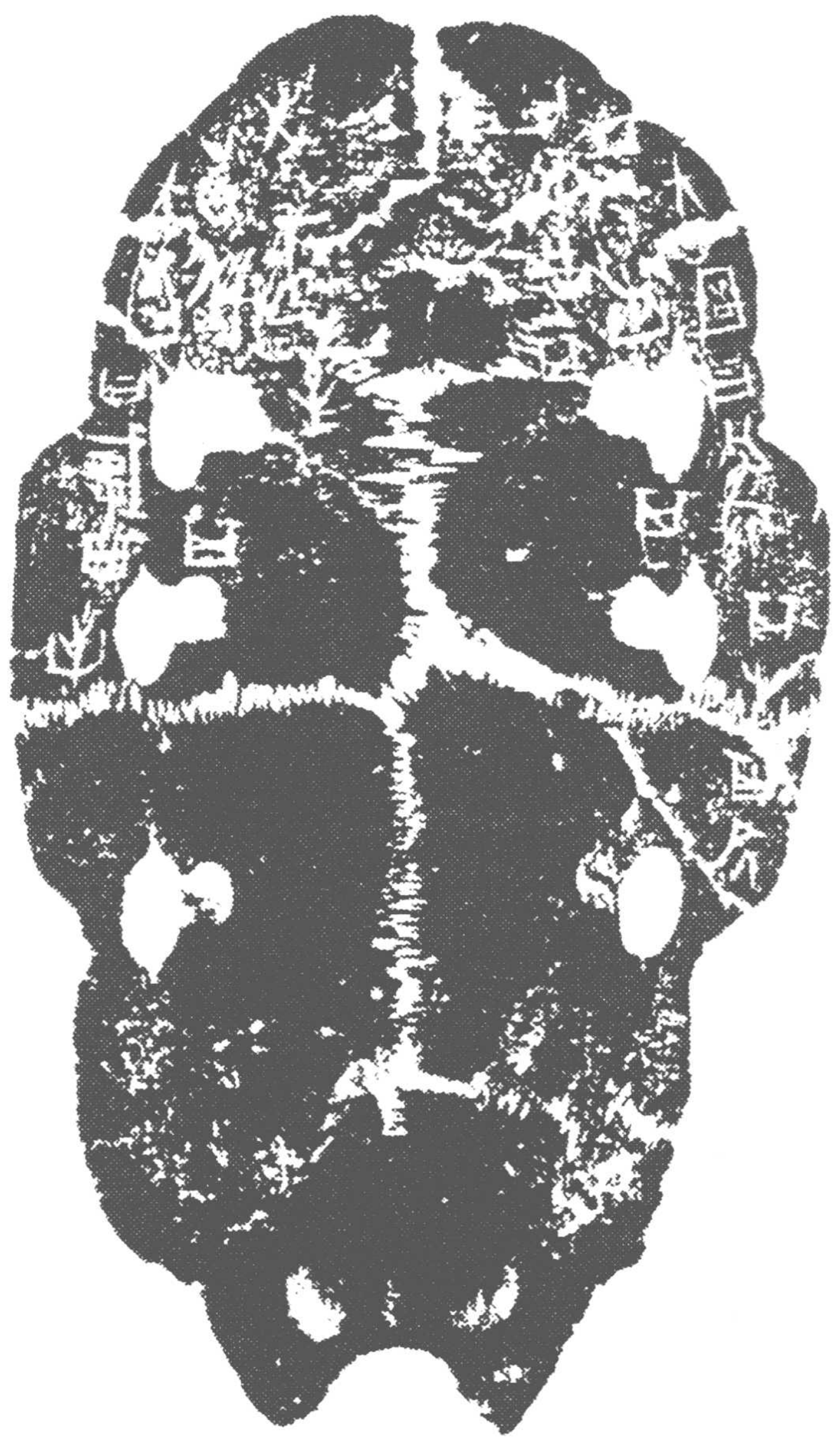
257

註〔三十六〕 圖版貳捌

丙編圖版



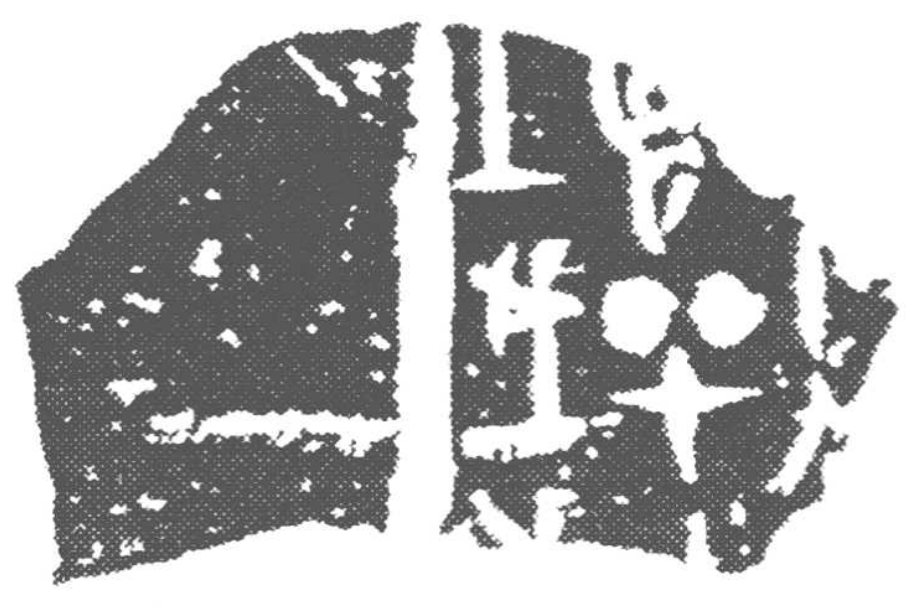
727
13.0.1239



728
13.0.1239 反

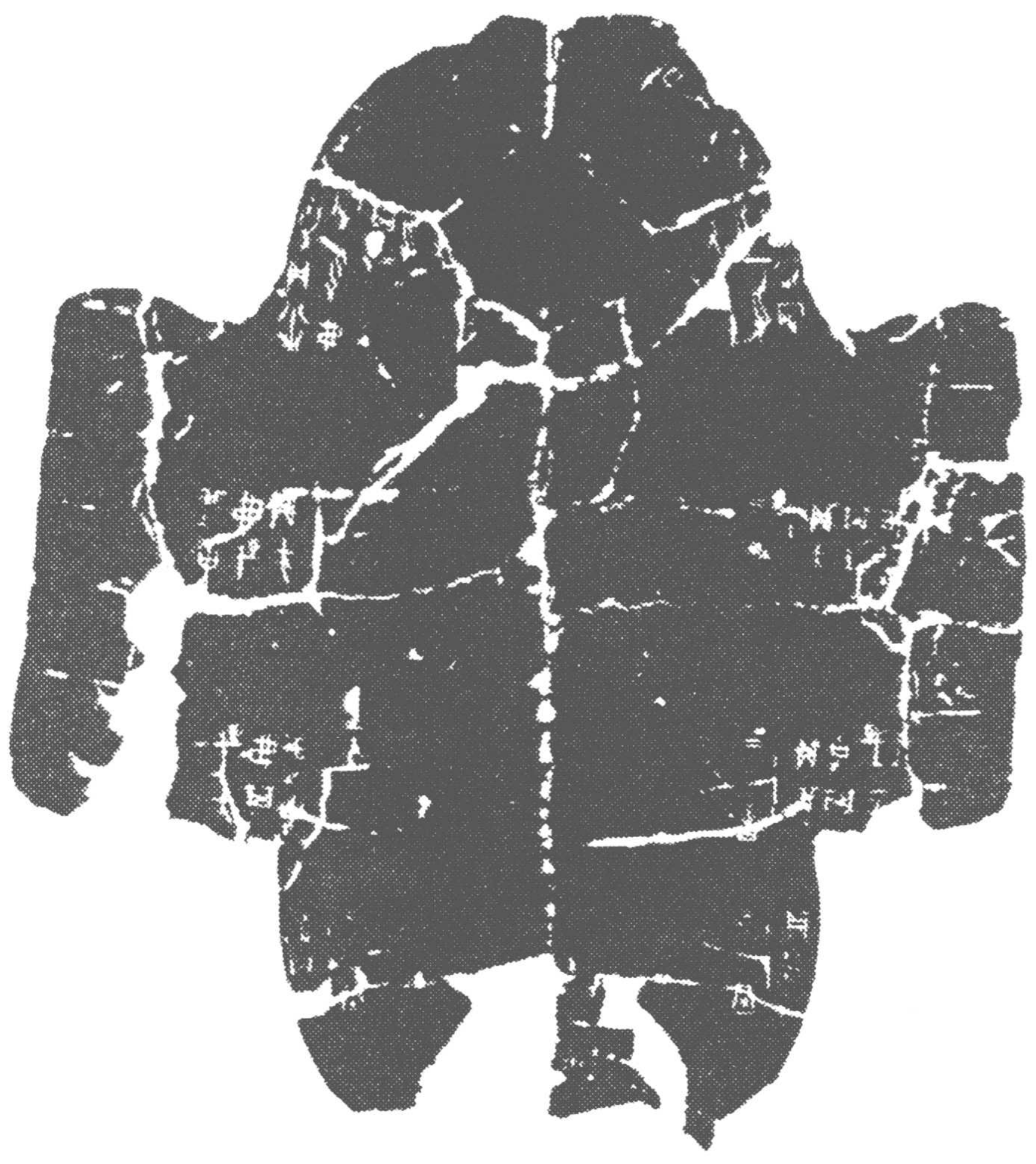
258

註〔三十七〕 甲骨續存三八八



註〔三十八〕 圖版陸玖

丙編圖版

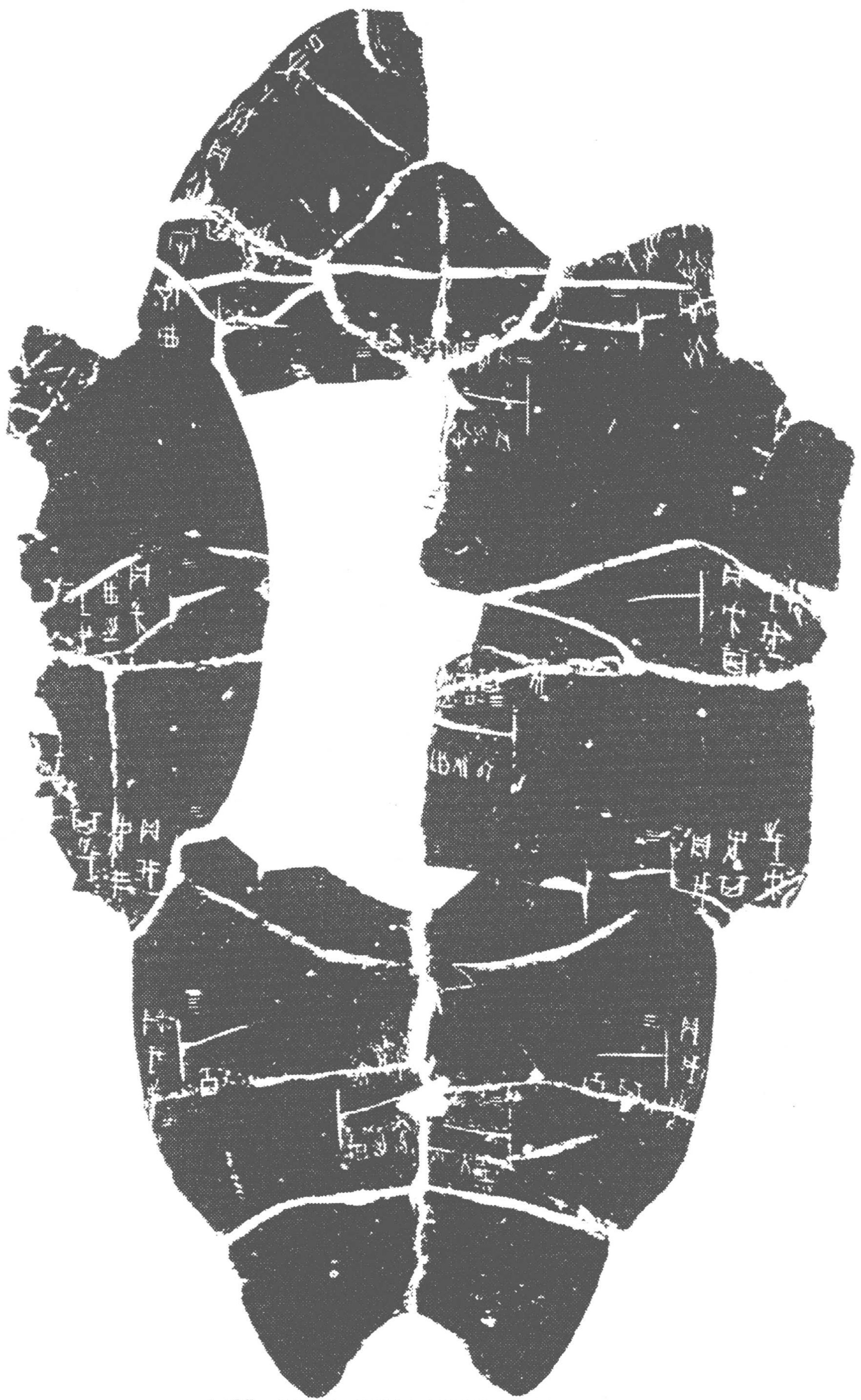


7764+8094+8099+13.0 4453+13.0 16915
13.0 16350+13.0 18909+13.0 16913+13.0 4453+13.0 16915

259

註〔三十九〕 圖版柒壹

丙編圖版

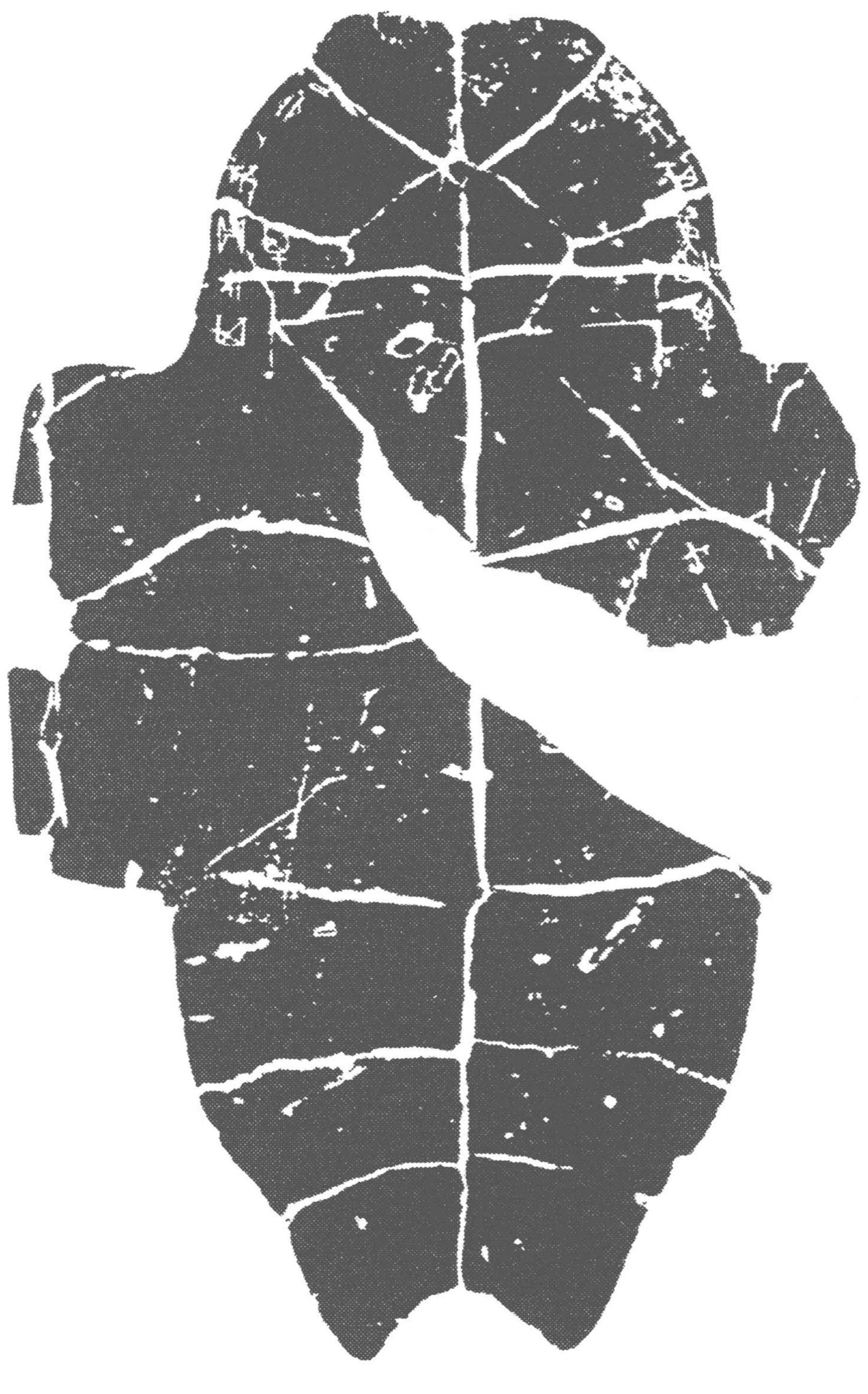


1155+2044+2287+2347+7042+7207
13.0.2285—13.0.2287 13.0.2290+13.0.4212+13.0.4628+13.0.4722+13.0.14778+13.0.15210

260

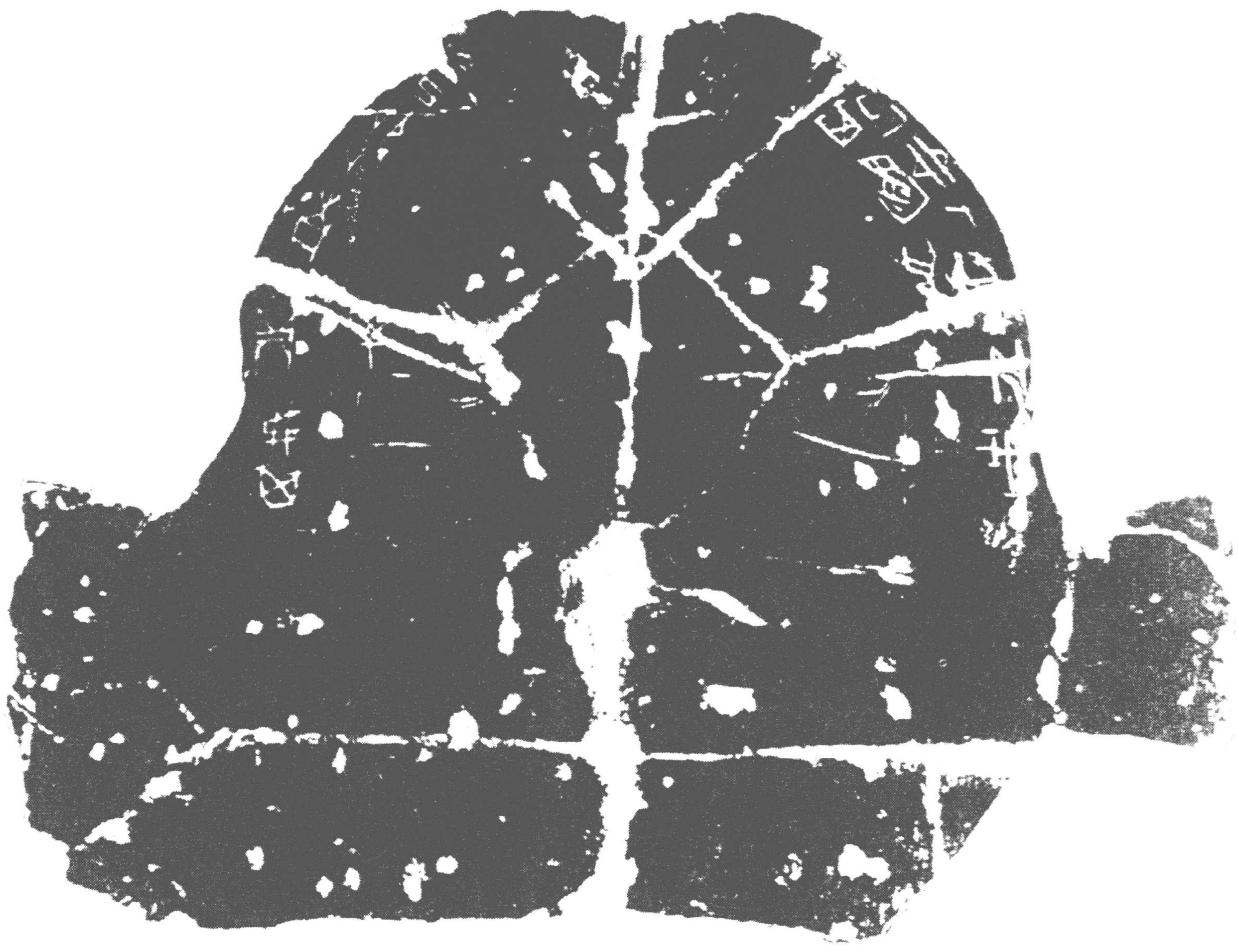
註〔三十〕 圖版柒參と考釋附圖六

丙編圖版



2891+6737
13.0.6151+13.0.14116

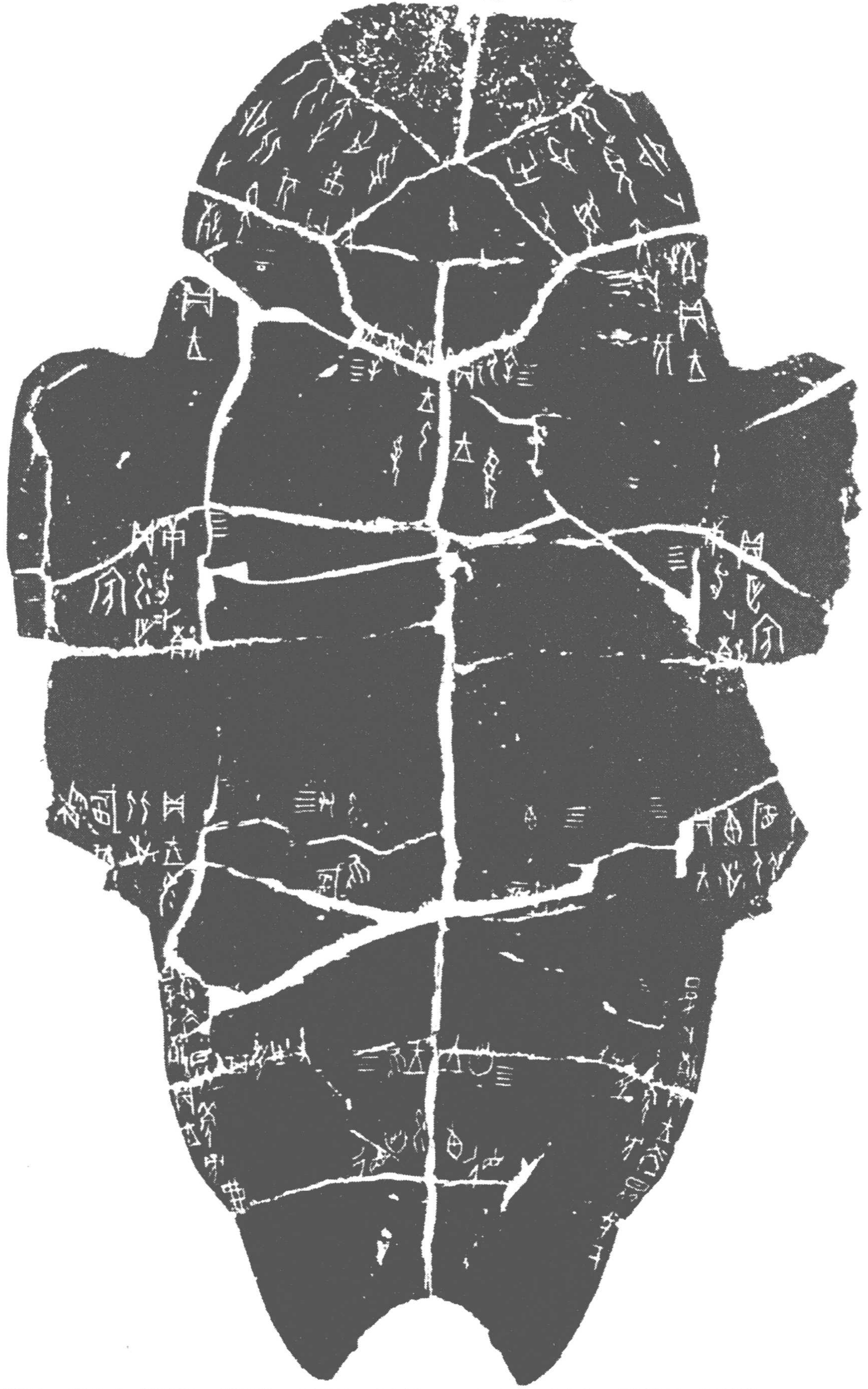
261



262

註「三十一」 圖版貳壹

丙編圖版

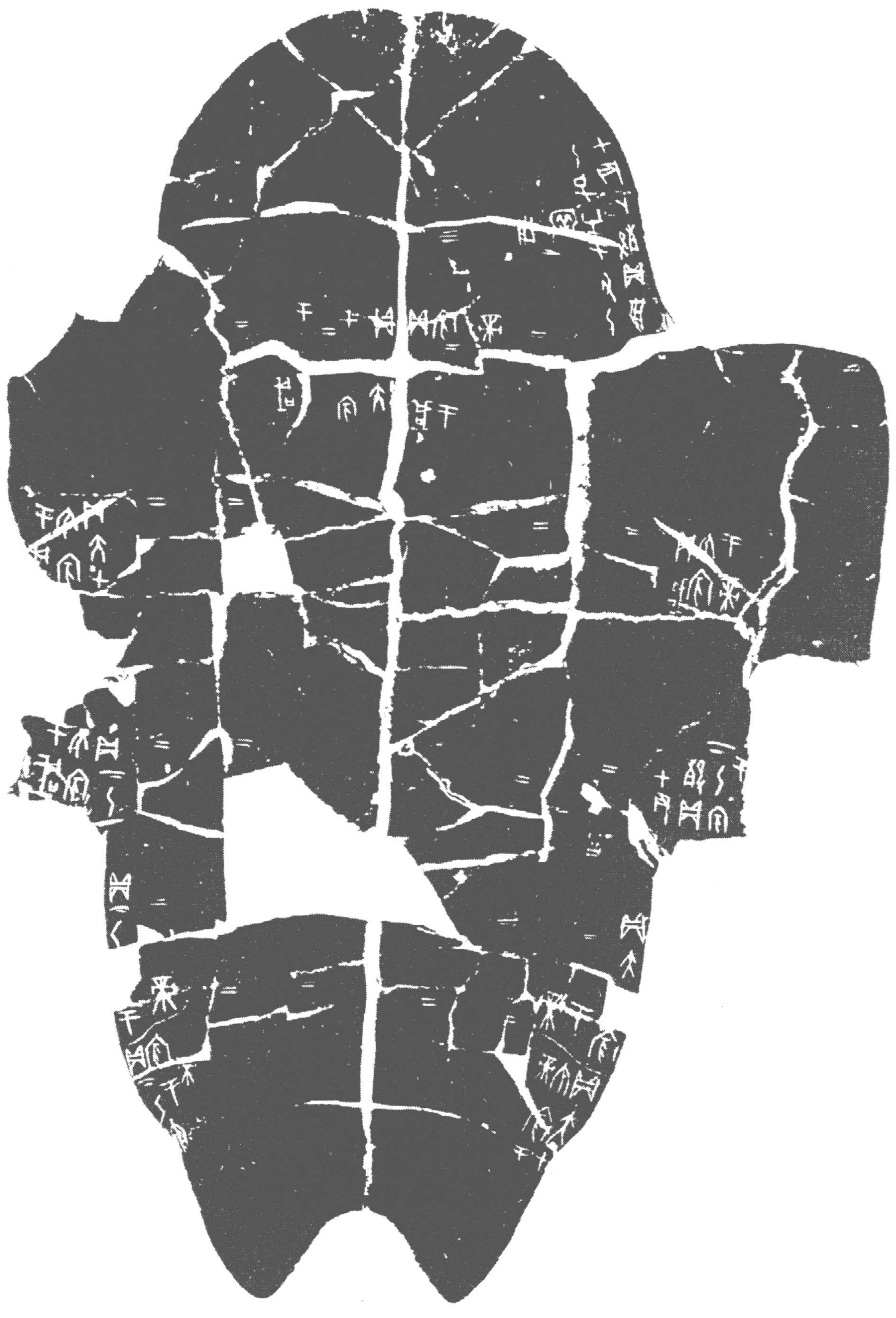


1873+1884+1925+1986+2615+2616+6859+6888+7237+7275+7486
13.0.3922+13.0.3938 13.0.3940 13.0.3941+13.0.4001+13.0.4119+
13.0.5328+13.0.5329+13.0.14345+13.0.14415+13.0.15243+13.0.
15317+13.0.15835 13.0.15836

263

註「三十二」 圖版參陸

丙編圖版

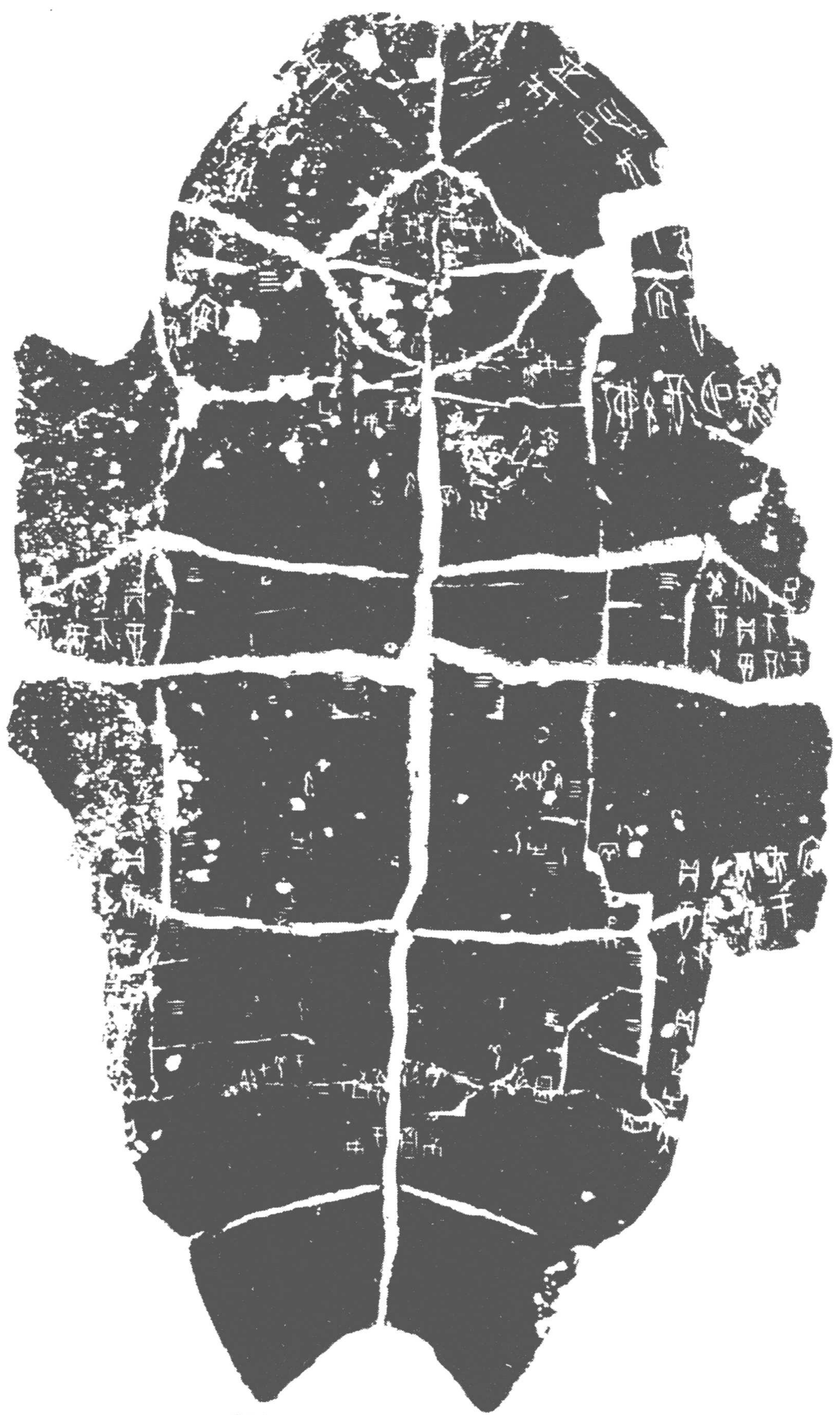


2293+2455+7197+7198+7434+7511+7549+8328
13.0.4633+13.0.4926 13.0.4927+13.0.15157 13.0.15160 13.0.15161+13.0.15158 13.0.15159
+13.0.15691−13.0.15696+13.0.15907−13.0.15910+13.0.15974+13.0.17373

264

註「三十三」 圖版肆肆

丙編圖版

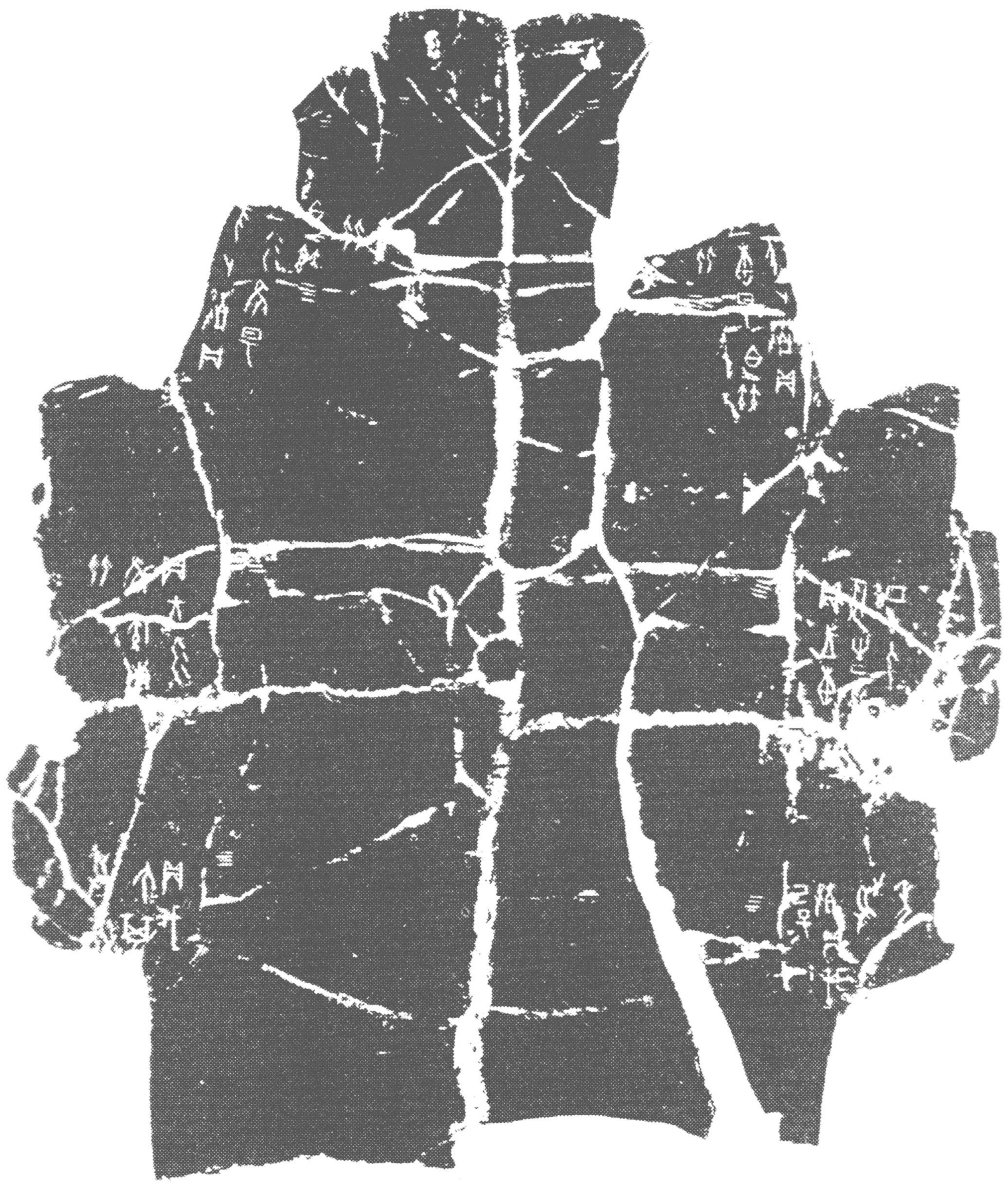


5386+5767+5808+6921
13.0.11986+13.0.12565+13.0.12619+13.0.14504

265

註[三十四]　圖版伍貳

丙編圖版



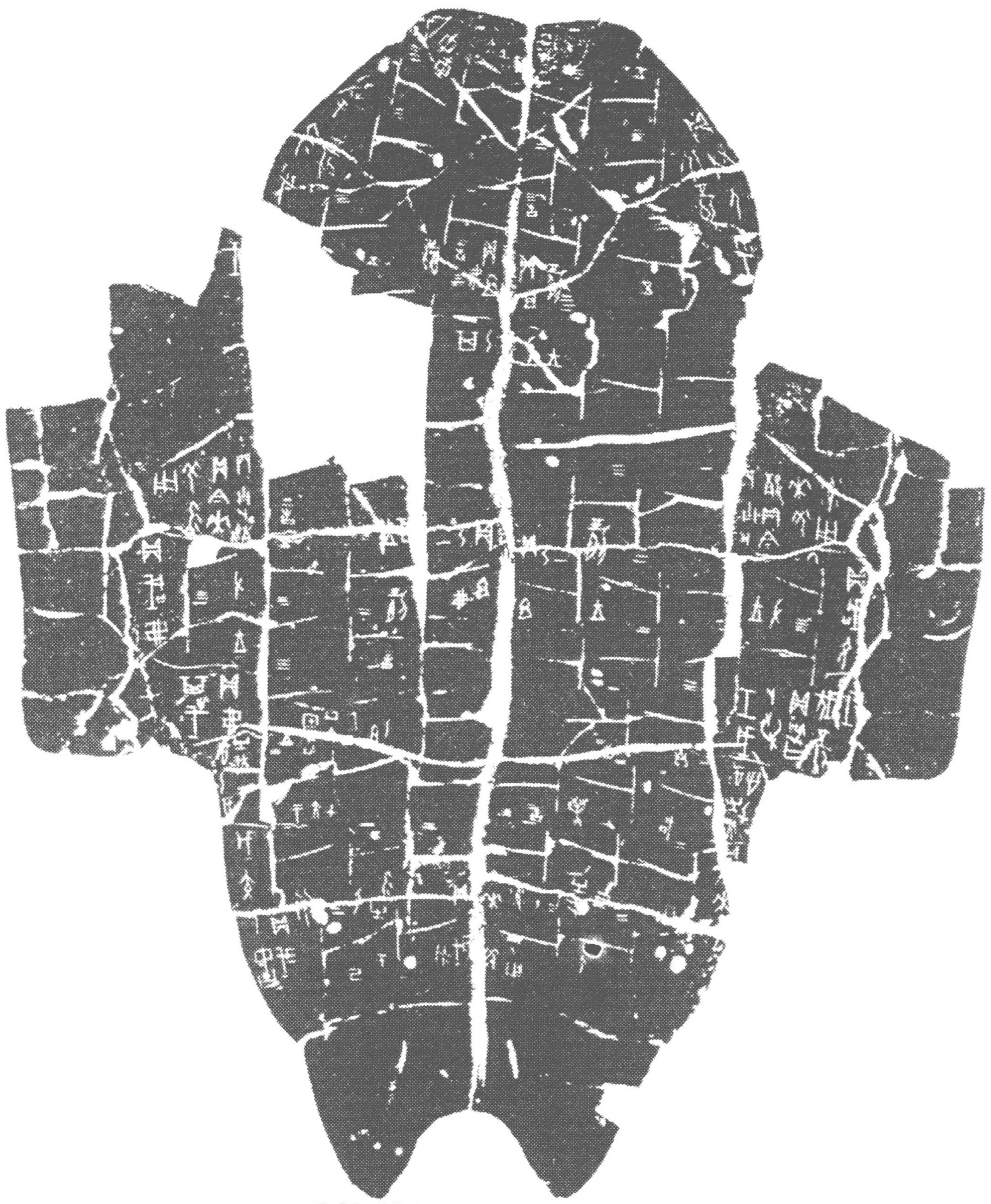
1859+2871+7246

13.0.3904+13.0.6085 13.0.6087 13.0.6088
13.0.6106+13.0.15263 13.0.15265

266

註[三十五]　圖版柒捌

丙編圖版

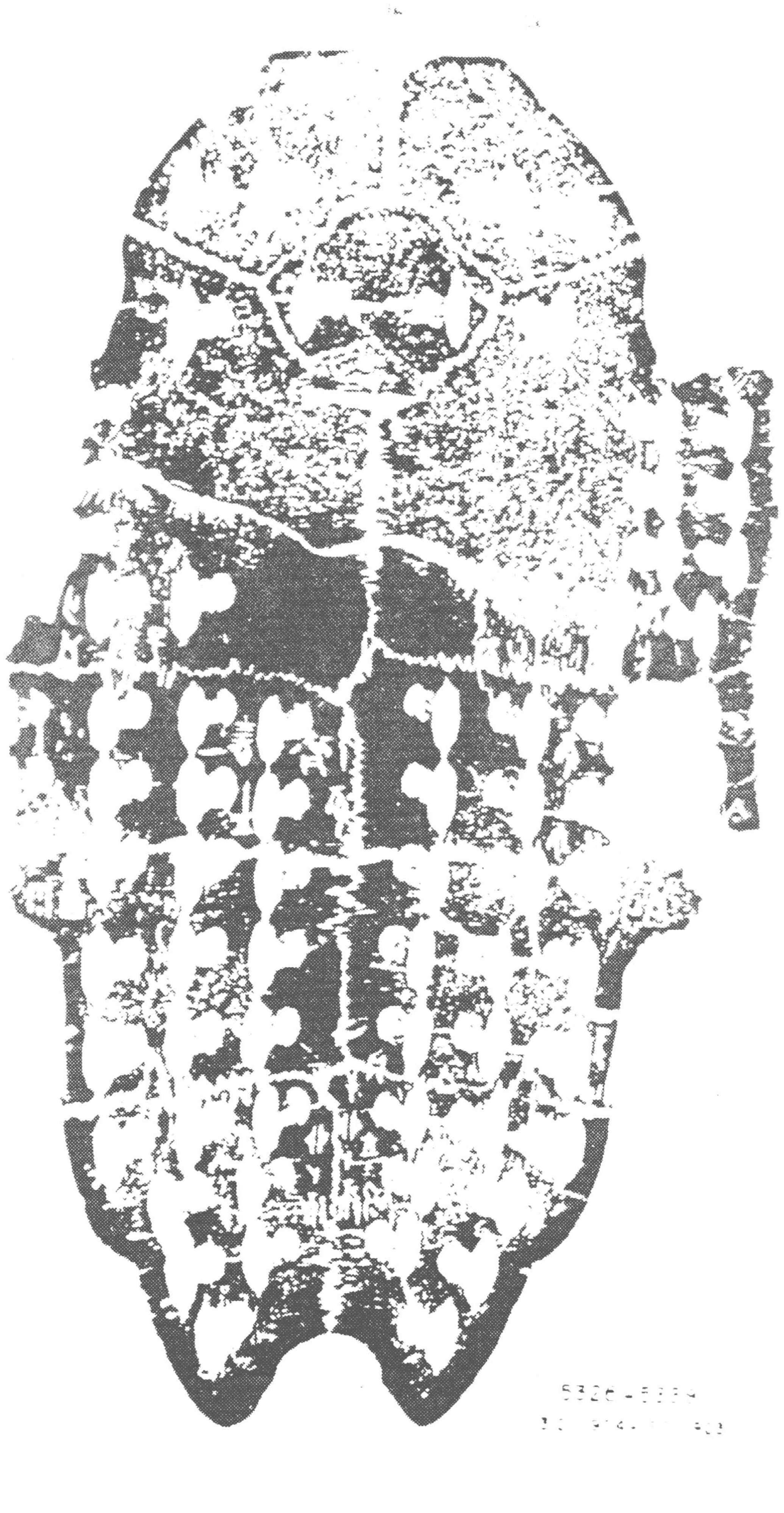


2139+6719+7016+7201+7509

13.0.4378+13.0.14103+13.0.14737+13.0.15175 13.0.15176 13.0.15179 13.0.15180
13.0.15182 13.0.15183+13.0.15899 13.0.15900 13.0.15901 13.0.15906

267

註[三十六]　圖版捌零

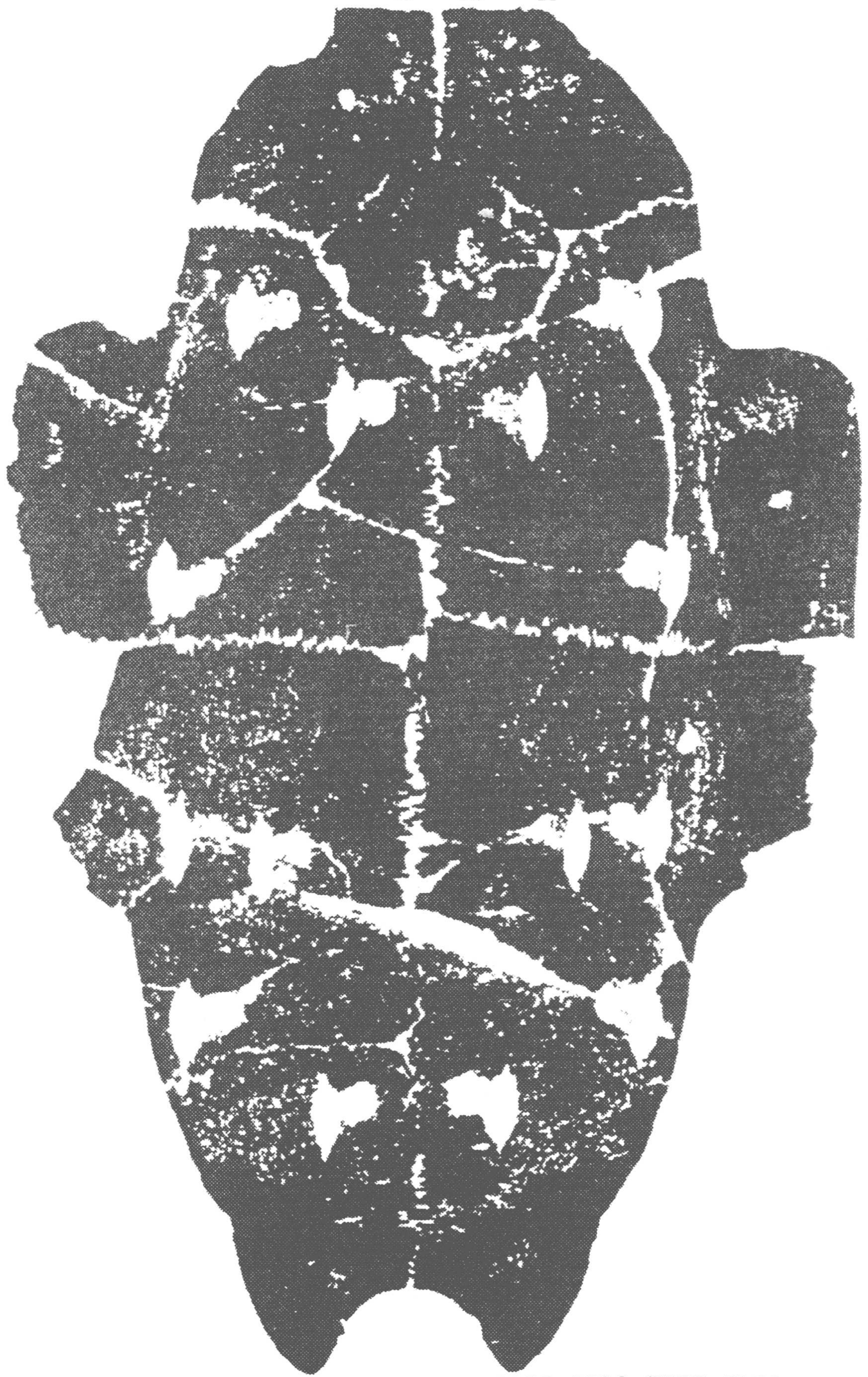


5326+5334
[illegible]

268

註[三十七]　圖版貳貳

丙編圖版

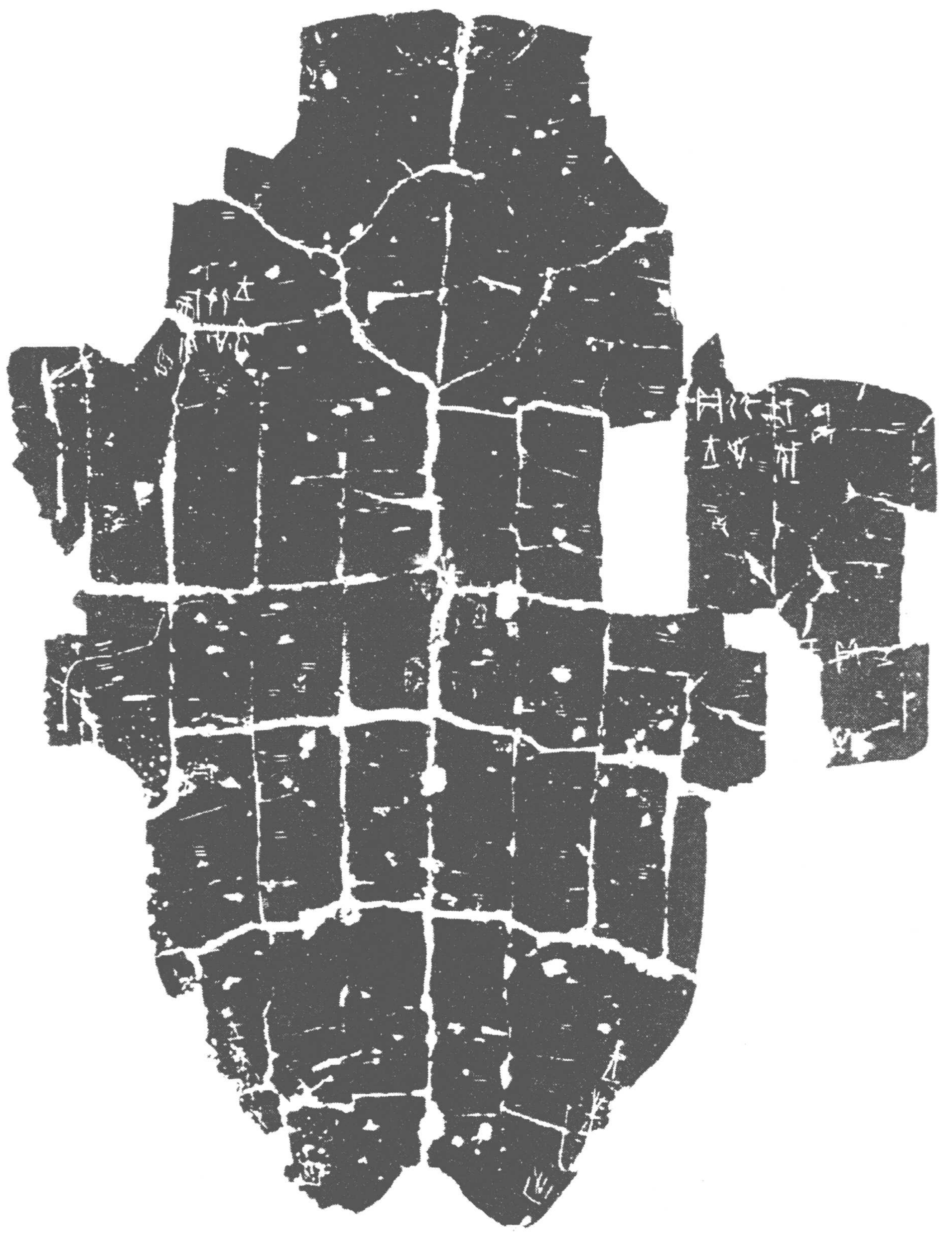


反(1873+1884+1925+1986+2615+2616+6859+6888+7237+7275+7486)
13.0.3922+13.0.3938 13.0.3940 13.0.3941+13.0.4001+13.
0.4119+13.0.5328+13.0.5329+13.0.14345+13.0.14415+13.0.
15243+13.0.15317+13.0.15836 13.0.15836

269

註「三十八」 圖版貳伍

丙編圖版

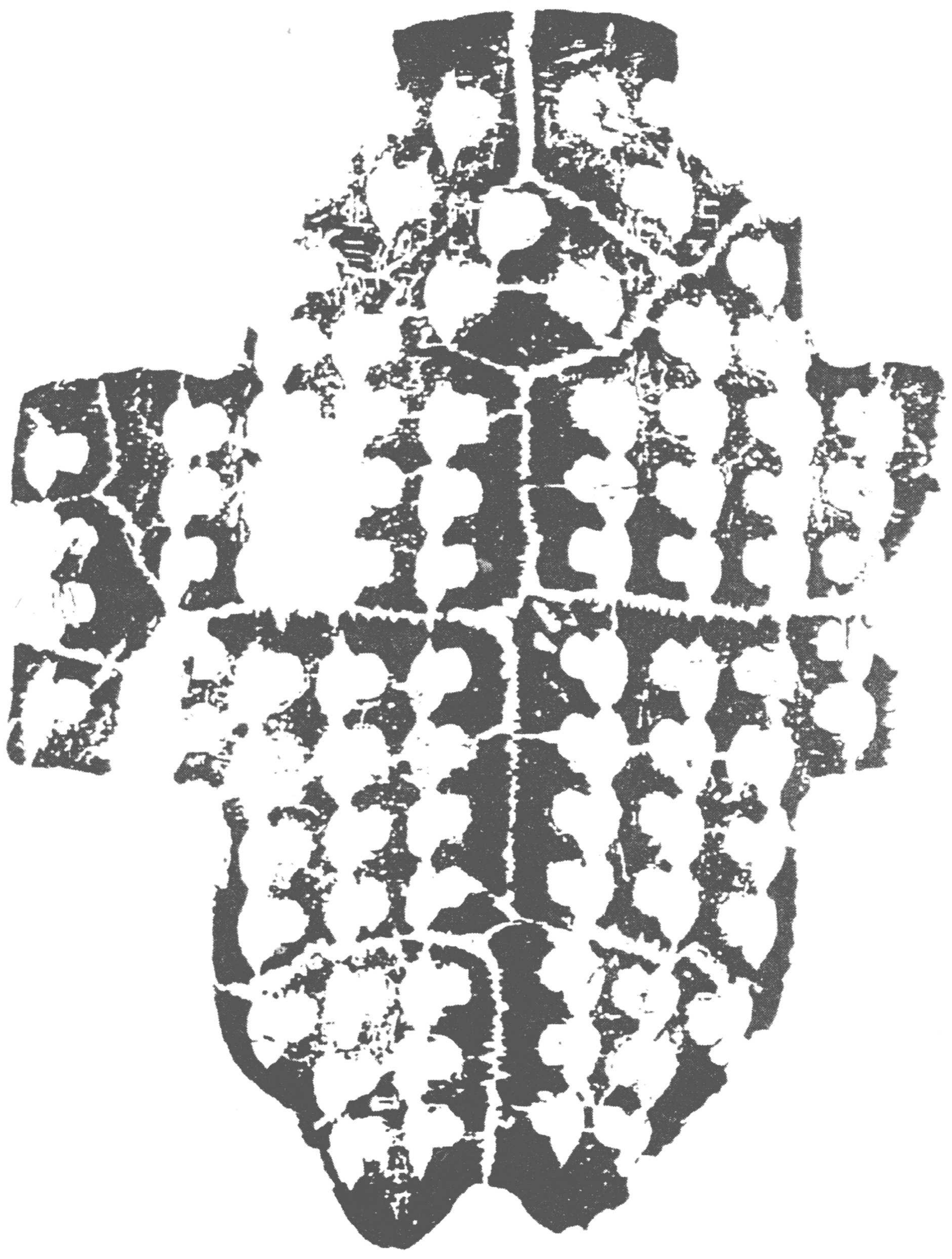


2248+7774

13.0.4534 13.0.4535+13.0.16356

註「三十九」 圖版貳陸

丙編圖版



7775+反2248

13.0.16356+13.0.4534 13.0.4535反

註「四十」 宮雁南 傳未詳

註「四十一」 黃慶樂 傳未詳

註「四十二」 陳仲玉 傳未詳

註「四十三」 李麟徵 傳未詳 張秉權氏の妻

註「四十四」 汪和宗 山東泰安の人。一九一四年生れ、中央研究院歷史語言研究所管理員。

九〇．龜卜〔三〕

〔郭序〕

龜卜百二十五片、原拓本確係日本河井荃廬氏舊藏。拓者某翁、姓名荃廬、曾以相告、余已失記、今觀題簽、下有章文、曰氣仙聿長、或即某翁之多號耶、此外殘拓甚多、荃廬云乃羅氏翦殷虛書契前編時之餘蛻、詢之祖同已被毀棄殊覺可惜也。

民國卅六年八月十三日　郭沫若

龜卜百二十五片の、原拓本は確として日本河井荃廬氏（河井荃廬・『殷契遺珠』註〔三〕・第三輯一〇一頁参見）舊藏に係る。拓する者は某翁なり、姓名は荃廬、曾って以て相い告ぐるも、余已に記を失す。今、題簽を觀れば、下に章文有り、曰く「氣仙聿長」と。或は即ち某翁の前號なるや。此の外殘拓甚だ多し、荃廬云く「乃ち羅氏の殷虛書契前編を翦輯せし時の餘蛻なり」と。これを祖同に詢う、已に毀棄せらると。殊に惜む可きを覺ゆ。

民國卅六〔一九四七〕年八月十三日。郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕第一輯三七五頁參見）

註〔三〕　『龜卜』は金祖同氏の編纂による。甲骨は百廿五片、曾って金氏が郭沫若と共に日本の各收藏家の卜片を見聞した時のもので、特に河井氏より贈拓され、河井氏舊藏のものである。卷末の跋には河井の卜片の入手や林泰輔と羅振玉との著錄の重複などについて詳しく記述されている。次に錄す。出版は一九五七年。

跋

予既自河井荃廬氏所贈三井源右衛門氏藏契墨本中選輯四百二十八片編入殷契遺珠、今又自叢殘中檢出「龜卜百二十五片」者、加以詮次、輯爲此集、仍原名曰：「龜卜百二十五片」、存其眞也。

日本所聞三井源右衛門氏藏甲骨、十年前與沫若師見之於河井荃廬家、計大木合數十、纍々多大塊巨製、目擇手迭、竭半日之力、纔盡十三四、未嘗得窺全豹也。自是之前、學人無有知三井家藏龜有如此之多且巨者、（註一）有之則余家瑞撰日本甲骨之收藏與研究一文（註二）曾謂：「三井源右衛門氏亦得三千片」、此三千之數、雖非確數、要亦相去不遠、（註三）余氏未見原物（註四）、其傳聞之辞、尚屬可信。時予方從事搜拓彼邦藏家所有甲骨、已拓有中村不折氏、田中慶太郎氏、中島蠔叟氏、堂野前種松氏諸家、河井荃廬氏所藏則拓未畢事、因得沫若師之訪問、得更見如許珍秘、觀喜贊嘆、莫可言喻、師亦勗予盡拓之、得河井之贊助、徵得三井之同意、方將從事椎蠟、而七七事變起、予將襆被返國、臨行復訪河井、告以變起倉促、恐未能將事、相對默然者久之、忽河井躍起、急趨別室出拓本一叠示予、謂此爲二十餘年前某叟爲三井氏拓存者、其間曾爲羅雪堂林泰輔二氏選擇若干片、羅以之入殷虛書契前編、林以之入龜甲獸骨文字、此其剩餘、然猶有可觀者、今盡以贈君、使無遺憾、亦以此贐君也、予再拜受之、孰意此一別後、中日戰爭卒起、荏苒十年、今且聞河井已死於轟炸火東京之役矣、感時懷人、益腸予邑。

歸國後、沫若師以奔走國是、東西南北、無有寧處、予則仍供職孔德圖書館、未廢所學、尹默沈先生勗予完成斯業、予因舉前拓五家藏契、復自三井墨本中擇其尤殊者四二八片、結爲一集、顏曰殷契遺珠、請序於沫若師、師序涉及羅氏前編所取材、曰

> 祖同所拓及其原物、余均曾一一目睹、就中頗多精品、而以三井氏所藏爲最豐富、羅氏殷虛書契前後編、即多取材於此、然羅氏所據、乃河井氏所藏拓片、爲日人某叟所拓者也、其翦輯之殘蛻、余亦曾見之羅書特祕而未宣耳。

予復申之曰、

三井氏所得、蓋在上虞羅氏前、遣專足自安陽輦來者、羅氏前編所揭、即從此出。上所言及、本之河井氏所語、其言得之在上虞羅氏前、雖未免過甚其辭、然前編曾於此中取材、則爲信史、而外間有頗不以爲然者、（註五）爲傳信計、今特藉此明辨之。

三井氏藏龜除見於遺珠之四二八片外、又見之於林泰輔之龜甲獸骨文字、（註六）唯林氏未注明爲某家藏契、今勘以遺珠與林書之重出者、知聽冰閣爲三井氏之齋名、從而知繼述堂即爲河井氏之齋名、然林書雖晚出、然較早四年（註七）出版之羅氏殷虛書契前編與之重出者、計百餘版之多、（註八）三井氏拓本都爲三份、羅氏之取給於此、極爲可能、若謂林書襲自前編、則我不信也、不寧惟是、予與沫若師參觀三井氏藏契時、師曾於原物中綴合一極珍貴之片、此片見之遺珠一一八二、爲四二八片中唯一爲予手拓者、乃爲羅氏著錄於前編時、析而爲四、正文上截見卷七、三七頁、下截見同卷五頁、背文上截見卷七、一四頁、下截見同卷四頁、沫若師曾於卜辭通纂第四九八片合成之、然猶未知有背文、若非目睹原片、誠易爲所蒙、至翦棄其無字部份、使後之從事於綴合工作者、無所措手、則其尤謬者、学者徒震於羅氏自序所謂：「寒夜擁炉、手加氈墨」一語、信爲其自藏、是真君子之可欺以其方矣、或曰：其自序曾謂：

> 將平昔所蓄之三千年骨與甲者、鄭重載入行笈、而輾轉運輸及稅吏檢察、損壞者十已五六、幸其尤殊者、墨本尚存、

羅氏前編成於東京、歷叙運遞之經过、可信其確爲本人所藏、或則書成後、原物讓諸三井氏、故與林書有重出也、答之曰：余之所以計較此瑣事、非爲揭羅氏之隱私也、爲後之覽者並統計契文材料者解惑耳、余所欲明者爲羅氏前編曾取材於此耳、非謂羅氏全襲自三井藏品也、

猶憶遺珠出版時、曾以影本一份贈羅氏、其覆書有謂：

> 海東諸同好以鑒別精審故、無一贋品、往嘗欲乞諸家墨本、編入書契、乃什纔得一二、以爲憾事、

是羅氏亦未嘗盡諱、其明年六月、聞羅氏卒於遼東、悼惜者久之、誠如沫若師所謂、

> 且事有不可因人而廢者、羅氏振玉之於甲骨彝器之学、其功實不可沒、而甲骨彝器之學、亦早已超脫羅氏之樊籬矣（註九）

羅氏之於甲骨彝器之學、所謂彪炳人間、耀人耳目、此不過小德出入、固無損其大者也、獨惜其出處有不堪爲人言者耳、且事更有趨於兩極端者矣、羅氏前編之取給於三井氏藏契、既有人爲之辨飾矣、而外間復有盛言羅氏文字盡出王靜庵先生提刀者、乃未聞之吳興徐聖翁、謂王氏爲羅氏捉刀爲一極不可能之事、以文字論、羅亦勝於王也、聖翁與雪堂論交數十載、此言当非虛耳、論拓本事、因并及之、

至言三井藏契係遣專足自安陽輦來者、此所謂專足、我疑是東京文求堂書坊主人田中慶太郎、田中號救堂、賈而儒者也、精於鑒別版本、即長澤規矩也亦爲嘆服者、初鐵雲藏龜出、林泰輔猶疑爲僞物、（註十）時田中往來平滬、買販舊籍、購得百餘版、以十版獻之林氏、林氏既見實物、疑始渙然、因有清國河南湯陰發見之龜甲獸骨一文、時在宣統元年、西歷一九〇九年也、時則去羅氏所謂「國變」、所謂「避地海東」、（註十一）猶早三年、去前編之出版、猶早五年、田中之於三井、我知爲賓主、田中之於羅氏、我知爲舊交、田中既曾稗

敗甲骨、故河井氏所称之專足、極可能爲田中、而羅氏之得三井氏墨本、亦極可能田中爲之蹇修也。

（註一）郭沫若卜辭通纂序：「此外尚有大宗蒐藏家、則因種々關係、未得寓目也」疑即指三井家。

（註二）日本甲骨之收藏與研究、余家瑞撰、刊國學月刊二巻一期。

（註三）三井氏藏甲骨、殷契遺珠著錄四二八片、殷虛書契前編及龜甲獸骨文字二書著錄合計得百數十片、本集百二十五片、篋中尚存叢殘近二千片。

（註四）河井氏告我、三井藏契、度置其家已二十年、塵封未動。

（註五）見陳夢家評殷契遺珠、刊國立北平圖書館圖書季刊、又孫海波評、刊淪陷期北平中和雜誌一巻二期。

（註六）西曆一九一七年出版。

（註七）西曆一九一三年。

（註八）見胡厚宣撰甲骨文材料之統計一文。

（註九）見郭沫若撰甲骨文辨証上集序。

（註十）余家瑞語、見日本甲骨之收藏與研究。

（註十一）羅振玉撰書序中語。

予既に河井荃廬氏より三井源右衞門（三井源右衞門・『殷契遺珠』註[四]・第三輯一〇二頁參見）氏に贈る所の藏契の墨本中の四百二十八片を選輯して『殷契遺

珠』（『殷契遺珠』註[三]・第三輯一〇〇頁參見）に編入せり。今、又叢殘中より「龜卜百二十五片」を檢出する者、加ふるに詮次を以てし、輯めて此の集を爲る。原名に仍りて曰く「龜卜百二十五片」と、其の眞を存する也。

日本の戰閥三井源右衞門氏甲骨を藏す、十年前（郭）沫若師とこれを河井荃廬の家に於て見る、大小を計ふるに合せて數十、纍々として大塊の巨製多し、目、手迭り擇い、半日の力を竭すも、纔に十三四を盡す、未だ嘗って全豹を窺ふを得ざる也。是れよりの前、學人三井家に藏龜此くの如きの多く且つ巨なる者有るを知ること有る無し。（註一）之れ有るは則ち余家瑞撰ぶ所の「日本甲骨之收藏與研究」の一文に、（註二）曾って謂へらく「三井源右衞門氏も亦三千片を得」と。此の三千の數は、確數に非ずと雖も、要するに亦相い去ること遠からざらん。（註三）余氏未だ原物を見ざるも（註四）、其の傳聞の辭、尚信ず可きに屬す。時に予方に彼の邦の藏家に有する所の甲骨に拓を搜ぬるに從事せんとす、已に拓中村不折（中村不折・『卜辭通纂』註[五]・第二輯一一四頁參見）氏、田中慶太郎（田中慶太郎・『卜辭通纂』註[七]・第二輯一一五頁參見）氏、中島蠔堂（中島蠔山・『卜辭通纂』註[六]・第二輯一一四頁參見）氏、堂野前種松（堂野前種松・『殷契遺珠』註[三]・第三輯一〇一頁參見）氏の諸家有り、河井荃廬氏藏する所は則ち拓未だ事を畢らず、因りて沫若師の訪問に侍し、更に如許珍秘なるを得、歡喜贊嘆し、言の喩ふ可き莫し、師も亦予を勗まし盡くこれを拓す、河井の贊助を得て、徹めて三井の同意を得、方に將に椎蠟に從事せんとす、而して七七事變起り、予、將に獲獲して國に返らんとす、行に臨みて復た河井を訪づれ、告るに變起り倉に促がされ、恐らくは未だ將に事めんとする能はざるを以てす。相い對して默然たるものこれを久しくす、忽ち河井は躍起して、急いで別室に趨り拓本一

壹を出だし予に示す、謂へらく「此れ二十餘年前某叟三井氏の爲に拓し存する者爲り、其の間曾って羅雪堂（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）、林泰輔（林泰輔・『殷商貞卜文字考』註[三]・第一輯六二頁參見）の二氏は若干片を選擇す、羅以てこれを『殷虛書契前編』（『殷虛書契前編』註[二]・第一輯六六頁參見）に入れ、林以てこれを『龜甲獸骨文字』（『龜甲獸骨文字』註[二]・第一輯一四四頁參見）に入る、此れ其の剩餘爲り、然れども猶ほ觀る可き者あり、今、盡く以て君に贈りて、遺憾無から使む、亦此れを以て君に贈る也」と。予は再拝してこれを受く、孰か意はん、此の一別の後、中日戰爭卒に起らんとは、荏苒として十年、今、且つ河井は已に大東京を轟炸するの役に死すと聞く。時に感じて人を懷しめば、盍ぞ已るに勝へん。

歸國後、沫若師以て國是に奔走するを以て、東西南北、寧んずる處有る無し、予、則ち仍孔德圖書館に供職し、未だ學ぶ所廢せず、尹默沈（沈尹默・『鐵雲藏龜零拾』註[三]・第三輯九六頁參見）先生は予に斯の業を完成するを勗ます、予因りて前に拓する五家の藏契を擧げ、復た三井墨本中より其の尤も殊なる者四二八片を擇び、結めて一集と爲す、顏して『殷契遺珠』（『殷契遺珠』・第三輯一〇〇頁參見）と曰ふ、序を沫若師に請ふ、師の序渉りて羅氏前編の取材する所に及んで曰く、

祖同拓する所及び其の原物は、余均しく曾って一一目睹す、中に就きて頗る精品多し、而して三井氏藏する所を以て最も豐富と爲す、羅氏の『殷虛書契前後編』は、即ち多く此に取材す、然れども羅氏の據る所は、乃ち河井氏の藏する所の拓片、日人某叟拓する所の者爲り。其の剪輯の殘蛻は、余も亦曾ってこれ見る、羅書特に秘して未だ宣べざる耳。

予復たこれを申べて曰く、

三井氏得る所は、蓋し上虞羅氏の前に在り、專足を遣わし安陽より輦來る者、羅氏の前編の揭ぐる所は、即ち此れ從り出づ。

上に言及する所は、これを河井氏の語る所に本づく、其のこれを得ること上虞羅氏の前に在りと言ふは、未だ其の辭を過まって甚しくするを免ぬがれずと雖も、然れども前編は曾って此の中より取材せしは、則ち信史と爲す。而して外に間々頗る以て然りと爲さざる者有り。（註五）信計を傳ふると爲す、今、特に此れを藉りてこれを明辨す。

三井氏の藏龜は『遺珠』の四二八片に見ゆるを除く外は、又これを林泰輔の『龜甲獸骨文字』に見る。（註六）唯林氏未だ明らかに某家の藏契爲るを注せず、今、覈ぶるに『遺珠』と林書との重出せるものを以てすれば、聽冰閣は三井氏の齋名爲るを知り、從りて繼述堂は即ち河井氏の齋名爲るを知る、然れども林書は晩く出づと雖も、然れども較早きこと四年、（註七）出版の羅氏『殷虛書契前編』との重出する者、百餘版の多きを計ふ、（註八）三井氏拓本は都て三份爲り、羅氏の給を此れより取ること、極めて可能と爲す、林書襲ふこと前編よりすと謂ふが若きは、則ち我れ信ぜざる也。寧ぞ惟れ是ならざらん、予沫若師と三井氏の藏契を參觀せし時は、師曾って原物中に於て一の極めて珍貴の片を綴合す、此の片はこれを遺珠一一八二に見る、四二八片中、惟だ一つ、予の爲に手拓する者爲り、乃ち羅氏前編に著錄を爲す時、折けて四と爲す、正文の上は截りて卷七、三七頁に見え、下は截りて同卷五頁に見ゆ、背文の上は截りて卷七、一四頁に見え、下は截りて同卷四頁に見ゆ、沫若師は曾って『卜辭通纂』第四九八片に於てこれを合成す、然れども猶ほ未だ背文有るを知らず、若し原片を目睹するに非ざれば、誠に矇する所と爲り易し、其

の字無き部份を剪棄するに至りては、後の綴合工作に從事する者をして、手を措す所ろ無からしむ。則ち其の尤も謬る者は、學者徒らに羅氏自序の所謂「寒夜炉を擁し、手づから氈墨を加ふる」の一語に震せられ、信に其の自から藏すると爲す、是れ眞に君子の欺むくに其の方を以てす可し。或は曰く、其の自序に嘗って謂へらく

將に累蓄の三千年の骨と甲に辛苦せんとする者は、鄭重に行笈に載入して、輾轉運輸す。統吏の檢察するに及んで、損壞する者は十に已に五六、幸に其の尤も殊なる者は、墨本尚存す。

羅氏の前編は東京に於て成る、運遞の經過を歷叙すれば、其れ確に本人の藏する所爲るを信ず可し、或は則ち書成りて後、原物は諸れを三井氏に讓れり、故に林書と重出有る也と。これに答へて曰く、余の竹竹として此の瑣事を計較するは、羅氏揭ぐるの隱私爲るに非る也、後の覽る者並に契文材料を統計する者の爲に惑を解くのみ。余、明かに世人と欲する所の者は羅氏の前編曾って此れより材を取ることなるのみ。羅氏は全て襲ふこと三井の藏品よりと謂ふに非る也。猶ほ憶ふに遺珠の出版の時、曾って影本の一份を以て羅氏に贈る、其の覆書に謂ふ有り、

海東の諸の同好は鑒別精審なるの以ての故に、一の贋品無し、往きて嘗って諸家の墨本を乞ひ、書契に編入せんことを欲せしも、乃に什に纔に一二を得たり。以て憾事と爲す。

是れ羅氏も亦未だ嘗って盡く覈（かく）さず。其の明年の六月、羅氏遼東に卒するを聞き、悼惜する者これを久しくす。誠に沫若師の謂ふ所の如し：

且つ事は人に因りて廢す可からざる者有り、羅氏振玉の甲骨彝器の學に於て、其の功

は實に沒す可からず、而して甲骨彝器の學も、亦早く已に羅氏の樊籬を超脫す。（註九）

羅氏の甲骨彝器の學に於ける、所謂る人間に彪炳し、人の耳目を耀するもの、此れ小德の出入に過ぎずして、固より其の大なる者を損ふ無き也、獨り其の出處に人の言爲るに堪えざる者有るを惜むのみ、且つ事更に兩極端に趨る者有り、羅氏前編の給を三井氏藏契に取る、人これが爲に辯飾有り、而して外に間〻復大盛んに、羅氏の文字は盡く王靜安（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註〔三十三〕・第一輯一〇一頁參見）先生の提刀に出づると言ふ者有り、乃ち未だ其の門弟子にこれが爲に申論するもの有るを聞かず、殊に深怪とす可し、我れこれを吳興の徐聖翁に聞く〔三〕、謂へらく「王氏、羅氏の爲に提刀するは一に極（はなはだ）不可能の事爲り、文字論を以てせば、羅も亦王に勝る也」と。聖翁と雪堂と論交すること數十載、此の言當に虛りに非るべきのみ、拓本の事を論じて、因りて并にこれを及ぶ。

至りて三井の藏契は專足を遣わし安陽より攀來（はこびきた）る者に係ると言ふに至る、此の所謂る專足とは、我れ疑ふらくは是れ東京文求堂書坊主人田中慶太郎ならん、田中は救堂と號し、賈にして儒者也。版本を鑒別するに精しく、即ち長澤規矩也〔四〕も亦嘆服を爲す者なり、初め『鐵雲藏龜』出づるや、林泰輔猶ほ疑ひて僞物と爲す（註十）時に田中は平滬を往來し、舊籍を負販す、百餘版を購得し、十版を以てこれを林氏に獻ず、林氏既に實物を見る、疑、始めて渙然たり、因りて「清國河南湯陰發見の龜甲獸骨」（『殷商貞卜文字考』註〔三〕・第一輯六三頁參見）の一文有り、時に宣統元年に在り、西曆一九〇九年也、時は則ち羅氏の所謂「國變」、所謂る「地を海東に避く」（註十一）を去るより猶ほ早やきこと三年なり、前編の出版を去ること、猶ほ早やきこと五年なり、田中の三井に於て、我れ賓主爲るを知る、田中の羅氏に於て、我れ舊交爲るを知る、田中既に曾って甲骨を稗販す、故に河

井氏称する所の專足は、極めて田中と爲すを可能とす、而して羅氏の三井氏の墨本を得しことも、亦極めて田中これが爲に蹇修するを可能とす。

（註一）郭沫若の『卜辭通纂』序に「此の外は尚大宗の蒐藏家有り、則ち種々の關係に因りて、未だ寓目を得ざる也」、疑らくは即ち三井家を指す。

（註二）日本甲骨の收藏と研究は、余家瑞撰、『國學月刊』二卷一期に刊す、

（註三）三井氏藏の甲骨は、『殷契遺珠』著錄四二八片、『殷虛書契前編』及び『龜甲獸骨文字』の二書の著錄合計百數十片を得、本集百二十五片、篋中に尚叢殘二千片近く存す。

（註四）河井氏我れに告ぐ、三井の藏契は、其の家に庋置すること已に二十年、塵封して未だ動かず。

（註五）陳夢家の『評殷契遺珠』に見ゆ、『國立北平圖書館圖書季刊』に刊す、淪陷期の『北平中和雜誌』一卷二期に刊す。

（註六）西曆一九一七年出版す。

（註七）西曆一九一三年。

（註八）胡厚宣撰、『甲骨文材料之統計』の一文に見ゆ。

（註九）郭沫若撰『甲骨文辨證上集』序に見ゆ。

（註十）余家瑞の語、『日本甲骨之收藏與研究』に見ゆ。

（註十一）羅振玉撰、『書序』中の習語

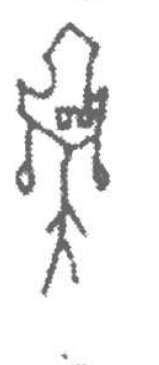
註〔二〕余家瑞　未詳。

註〔三〕徐聖翁　未詳

註〔四〕長澤規矩也（一九〇二——　）東京出身。一九二六年東京帝國大學文學部支那文學科卒業。同年東京帝國大學大學院に入學し「支那文學の書誌學的研究」を研究題目とする。一九二九年第一高等學校講師となり、一九三〇年教授。一九三四年第一高等學校を退職、その間に日本書誌學會を創立し、『書誌學』を創刊。一九三九年東京帝國大學講師、一九四〇年法政大學教授、金澤文庫、その他各地の圖書館の漢籍目錄の作成に努力し、一九六六年中國書誌學研究の業績により紫綬褒章を受く。

據上所言、是日本之始有甲骨在一九〇九年、去甲骨之正式視爲古物之一八九九年、已差近十年、其時甲骨之價值、以端方爲準、謂每字酬銀二兩五錢、（註十二）價亦昂矣、價重則作僞者興、最初之作僞在光緖三十六年、西曆一九〇一年也、（註十三）故三井氏所藏已未免雖有僞品、惟僞品羅氏前編未之收、遺珠亦未之收、而河井贈予拓本中有之、今揭一頁如左：

上片爲早期作僞者、刀法盡同、文字則稍有移易、字多不識、文更不能卒讀、蓋聞汴洛間作僞者亦有家法、作風爲自不同、最精妙者、鈔刻眞品、間雜一二奇文、以眩購者、其技往々得售、唐立厂商錫永輩俱能列擧其名、至初期贋作、則一望可辨其僞、當時僞品產量甚多、其一小部份流入日本、其大部份則在廬江劉氏篋中、劉氏善齋藏契冠於國中、而僞品幾占十之二三、予盡見之、劉氏於所得年月未嘗告人、覿於其所持僞品與三井藏者同似、從可知其所得之年月、亦應在清民之交、與三井收得者同時、初予從沫若師治契文時、即以善齋藏拓爲藍本、洎予得三井藏拓、師即於其中與劉氏藏拓綴合一片、文曰：「尞于王亥、七月」、上載「尞于王」三字爲三井氏拓本、下載「亥七月」則劉氏拓本也、自非二家同時分有此一大宗甲骨、則上下二十餘年、相隔重洋、延津之合實不可能也、予於此片之綴合、信爲契文佳話、

予因是而重有感焉、「尞于王亥　七月」片、予已揭之殷契遺珠第一〇三六片、其拓本上截無字處甚大、周徑幾二寸許、下截「亥　七月」則僅拓字文、餘具虛而未拓、粗視之、此固無損於契文本身、熟審之、則於從事綴合者、將大感迷惘、予細審某叟所拓三井藏契則無此弊、雖二三字著於大肩胛骨者、亦全拓之、又契文之有背文者、前輩學人都不注意、以其假手拓工、或拓或不拓、或拓而分置之（註十四）故早期出版書契載籍、未有連揭背文者、至容希白之殷契卜辭、商錫永之殷契佚存、始稍々注意及之、然非手拓、故亦在有意無意之間、至予拓存東京五家藏契時、始極力注意此點、如中村所藏之大肩胛、三井藏之字版、俱有背文、均關係非淺、而某叟所拓墨本、於有背文版、都連綴拓之、此「龜卜百二十五片」中、有背文者凡七版、均於背文左上以紅圈爲記、其心細於髮、卓識超人、使二十年後治契文者爲之愧死、

中日搆釁者近十年、此十年中、予奔走南北、營謀衣食、學問之事、荒廢久矣、今幸天誘其衷、氛祲克掃、萬里歸來、檢視篋中、尚存河井氏所存拓本近二千片、雖多零辭隻句、無甚珍秘、然沫若師亦嘗於此中綴合一橫行之干支表（註十五）、故竹頭木屑、斷簡殘編、俱不失爲敝帚之珍、然以印刷困難、一時恐难藏事、因就其中一束、上署「龜卜百二十五片」者、畧爲詮次、曰征伐、曰田獵、曰先公先王、曰祭祀、曰用牲、曰卜旬、曰卜夕、曰卜雨、曰習語、曰干支、曰雜存、都十一類、其間雖與書契前編、龜甲獸骨文字、殷契遺珠三書有重出者、而未之前見者、亦幾及半、至前編及林書有剪失者、此均得存其眞、此則是書之足以自存自見者也。

三井源右衛門氏以藏碑版稱、其南北宋拓聖教序九成宮、不下數十本、安氏藏宋拓石鼓文三本及臨川四寶均其淸祕中物、甲骨蓋其餘事耳、藏甲二十年來均庋置其友河井荃廬家、河井寓去靖國神社不百步、神社祀甲午以來日人所謂戰死者之亡靈、大戰中不免於难、而河井家乃爲池魚之殃焉、藏物之成爲灰燼亦意中事、此戔戔者或應爲天壤間惟一孤本矣、

予治契文垂十五年、雖稍有述作而迄無是處、顧視世之治此學者、其成就均勝我遠甚、駑馬折足、不及騏驥安步、鍥而無功、不若改趨他道、謹以此作國門之獻、成運海上、請從此辭、告我知者、使聞此語、

三十六年八月一日　　金祖同

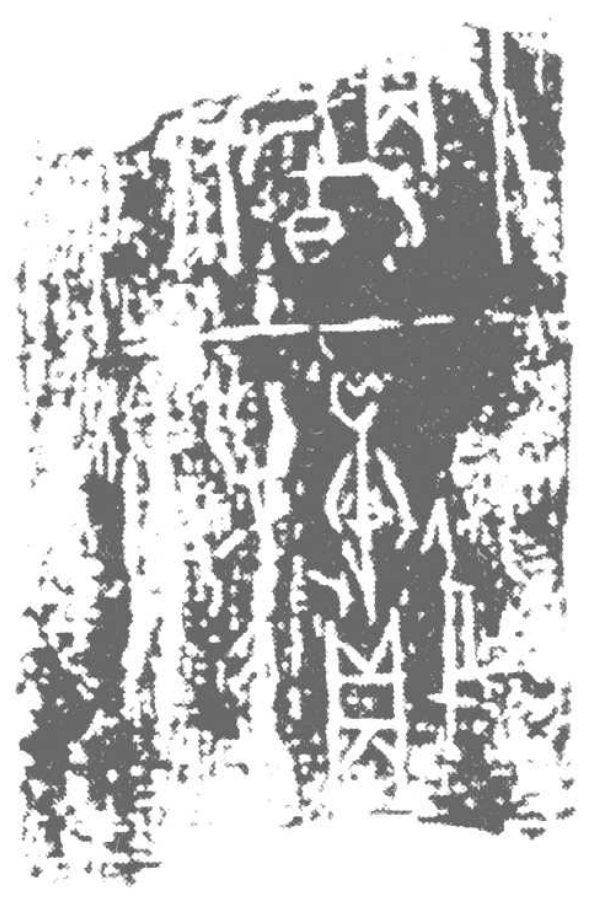
（註十二）　見董作賓胡厚宣合撰甲骨年表。

（註十三）　據明義士甲骨研究講義。

（註十四）　我於是更致疑於羅氏親加氈墨一語。

（註十五）　本片見卜辭通纂第七片、右截見林書卷一、一五頁、左截見同頁、亦見前編卷三、三頁、郭先生曰：「此當是巨大肩胛骨破碎、今僅存此二片而不相連、然由其干支之次第及字跡、可以確知其爲一片之折」、後果於三井氏拓本中得一片補足之。

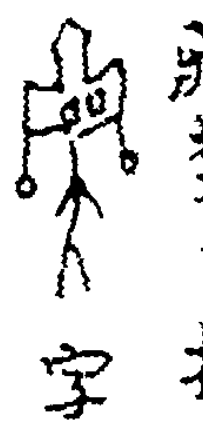
上に言ふ所に據れば、是れ日本の始めて甲骨を有するは一九〇九年に在り、甲骨の正式に視て古物と爲すの一八九九年を去ること、已に差十年に近し、其の時の甲骨の價値は端〔五〕方を以て準と爲す、每字の酬銀二両五錢なりと謂ふ（註十二）價も亦昂れり。價重ければ則ち僞を作る者興る。最初の僞を作りては光緒三十六年に在り、西暦一九〇一年也。（註十三）故に三井氏藏する所は已に未だ雜りて僞品有るを免ぬがれず、惟だ僞品、羅氏の前編に未だこれを收めず、遺珠も亦未だこれを收めず、而して河井予に贈る拓本中にこれ有り、今、一頁を揭ぐれば左の如し。



上片は早期に僞を作る者爲り、刀法盡く同じ、文字には則ち稍や移易有り、字、識らざるもの多し、文更に卒讀する能はず、蓋し聞くならく汴洛（開封）の間の僞作る者も亦家法有り、作風は各々自ら同じからず、最も精妙なる者は、眞品を鈔刻し、間々一二の奇文を雜へ、以て購ふ者を眩わす、其の技往々にして售を得。唐立厂（唐蘭・『殷虛文字類編』

註〔三〕・第一輯一七一頁參見）、商錫永（商承祚・『殷虛文字類編』註〔五〕・第一輯一七三頁參見）の輩は俱に能く其の名を列擧す、初期の贋作に至っては、則ち一望して其の僞を辨ず可し、當時僞品の產量は甚だ多し、其の一小部份は日本に流入す、其の大部份は則ち廬江の劉氏（劉體智・『古史新證』註〔六〕・第一輯二五八頁參見）の篋中に在り、劉氏善齋の契を藏すること國中に冠たり、而して僞品幾んど十の二三を占む、予盡くこれを見る、劉氏は得る所の年月に於て未だ嘗って人に告げず、其の持つ所の僞品と三井藏する者を覿れば同じく似たり、從りて其の得る所の年月も、亦應に清、民の交に在り、三井の收得する者と同時なるを知る可し。初め予沫若師に從って契文を治むる時、即ち善齋藏拓を以て藍本と爲す、予三井藏拓を得るに洎んで、師即ち其の中に於て劉氏の藏拓と一片を綴合す、文に曰く、「尞于王亥、七月」と、上截の「尞于王」の三字は三井氏の拓本爲り、下截の「亥七月」は則ち劉氏の拓本也、自から二家同時に分ちて此の一の大宗の甲骨を有つに非ず、則ち上下二十餘年、相ひに重洋を隔て延き津の合すること實に可能ならざりし也、予此の片の綴合に於て、信に契文の佳話と爲す。

予是れに因りて重ねて感ずる有り、「尞于王亥、七月」の片は予已にこれを『殷契遺珠』第一〇三六片に揭ぐ、其の拓本の上截の字無きの處甚だ大なり、周徑幾んど二寸許り、下截の「亥七月」は、則ち僅かに字文を拓するのみ、餘は具虛にして未だ拓せず、粗くこれを視れば、此れ固より契文の本身を損ふ無し。熟らこれを審にすれば、則ち綴合に從事する者に於ては、將に大いに迷惘を感ぜんとす、予某叟の拓する所の三井藏契を細審すれば則ち此の弊無し、二三字の大肩胛骨に著す者と雖も、亦全てこれを拓す、又契文の背文有る者は、前輩學人都て注意せず、其の手を拓工に假るを以て、或は拓し或は拓せず、或は

拓するもこれを分置す、（註十四）故に早期出版の書契の載籍は、未だ背文を連揭する者有らず、容希白（容庚・『殷虚文字類編』註〔三〕・第一輯一七一頁参見）の『殷契卜辭』（『殷契卜辭』註〔三〕・第二輯一七四頁参見）、商錫永の『殷契佚存』（『殷契佚存』・註〔三〕・第二輯一九八頁参見）に至りて、始めて稍々注意これに及ぶ、然れども手拓に非ず、故に亦有意無意の間に在り、予、東京五家に存する藏契を拓する時に至って、始めて極力此の點を注意す、中村藏する所の大肩胛〔六〕、三井藏の字版〔七〕の如きは、倶に背文有り、均しく關係淺きにあらず、而して某叟拓する所の墨本の、背文有るの版に於ては都て連綴してこれを拓す、此の「龜卜百十五片」中、背文の有る者凡そ七版、均しく背文の左上に紅圏を以て記を為す、其の心は髮より細く、卓識人に超ゆ、二十年後に契文を治むるをしてこれが為に愧死せしむ。

中日の釁構は十年に近し、此の十年の中、予南北に奔走し、謀を衣食に營（めぐ）らし、學問の事は、荒廢久しい。今、幸いに天は其の衷を誘ない、氛祲克く掃ひ、萬里歸来す。篋中を檢視すれば、尚河井氏拓本を存すること二千片に近し、零辞隻句多しと雖も、甚だ珍秘なるは無し。然れども沫若師亦曾って此の中において一横行の干支表を綴合す、（註十五）故に竹頭木屑、斷簡殘編も、倶に敝帚の珍為るを失わず、然れども印刷の困難（原文では唯とあるが、難ではないかと思はれる）一時事を蔵り難きを恐るるを以て、因りて其の中の一次に就いて、上に「龜卜百二十五片」と署する者なり、畧、詮次を為る、曰く征伐、曰く田獵、曰く先公先王、曰く祭祀、曰く用牲、曰く卜旬、曰く卜夕、曰く卜雨、曰く習語、曰く干支、曰く雜存、都て十一類、其の間、『書契前編』、『龜甲獸骨文字』、『殷契遺珠』の三書と重ねて出づる者有ると雖も、而も未だこれ前に見えざる者も、亦幾んど半ばに及ぶ、前

編及び林書に剪失有る者に至っては、此れ均しく其の眞を存するを得、此れ則ち是の書の以て自存自見するに足る者也。

三井源右衛門氏碑版を藏するを以て稱せらる、其の南北宋拓の聖教序、九成宮は、數十本を下らず、安氏藏宋拓石鼓文三本及び臨川四寶は均しく其れ清の祕中の物なり、甲骨は蓋し其の餘事のみ。藏する甲は二十年來均しく其の友河井荃廬家に庋置す、河井の寓は靖國神社を去ること百歩ならず、神社は甲午以來の日人所謂る戰死者の亡靈を祀る、大戰中難を免ぬがれず、而して河井家は乃ち池魚の殃いと為る。藏物の成灰燼と為りしも亦意中の事なり、此の劣契は或は應に天壤間、惟だ一孤本と為すべし。

予、契文を治むること十五年に垂んとす。稍述作有りと雖も而して近（ごろ）に是（よき）處無し。顧ふに世の此の學を治むる者を視るに其の成就は均しく我れに勝りて遠きこと甚しい、駑馬足を折るも、駃騠の安步に及ばず、鍥みて功無ければ、改めて他の道に趨るに若かず、謹んで此れ以て國門の截、成運の海上を作（な）す、請ふ此の辭に從めんことを、我が知を告ぐる者、此の語を聞かしめよ。

三十六年八月一日　金祖同

（註十二）　董作賓・胡厚宣合撰の『甲骨年表』に見ゆ。

（註十三）　明義士の甲骨研究講義による。

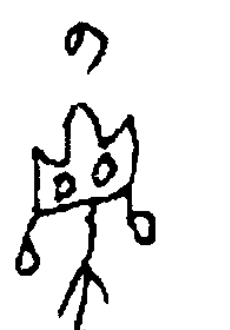
（註十四）　我れ是に於て更に羅氏の親から甑墨を加ふるの一語に疑ひを致す。

（註十五）　本片は『卜辭通纂』第七片に見ゆ、右は林書巻一、一五頁に載見す。左は同頁に載見するも亦前編巻三、三頁に見ゆ、郭先生曰く「此れ當に巨大肩胛骨

の破碎なるべし、今、僅かに此の二片を存して相ひ連らならざるのみ、然れども其の干支の次第及び字跡に由りて、以て確に其の一片の折為るを知る可し」と。後ち果して三井氏拓本中に一片を得てこれを補足す。

註〔五〕　端方（一八六一―一九一一）滿洲正白旗に隸屬。字は午橋、陶齋と號す。また寶華盦の別號がある。姓は托活洛氏、光緒八年壬午の擧人、官は四川総督に至り、辛亥彼の部下陸軍第三十一師の少數兵卒のために殺害され忠敏と謚された。彼は吏事の暇に金石文字を好み、また新舊の學術に對する理解をもち新學の提唱者であると共に舊學の發揚を期望した人である。彼の著した吉金類は『陶齋吉金錄』八巻、『陶齋吉金續錄』二巻附補遺、他種々の書がある。

註〔六〕　中村藏する所の大肩甲。『卜辭通纂』別二に著錄。

註〔七〕　三井藏の字版。『卜辭通纂』第四九八片。

校勘記

龜卜	遺珠	林書
一	一一九二	一、三、一〇
二	一一八三	
三	一三三四	
四		一、八、一八
六		一、四、七
七	一一一六	
八	一一一一	
九		一、八、一〇
一二	一一二六	
一七	一一三三	
二〇		一、七、一二
二一	一四三三	一、八、三
二二		一、八、一四
二五	一〇六〇	
三八		二、二九、一〇
三九		一、二、一
四六		二、二七、二六
四七		一、四、六

四八	一一〇三	
五〇	一一〇八	
五五	一〇九四	
六七		一、一、一〇
六八	一二五六	
八九		一、二、四
九〇	一一四二	一、四、八
九一		一、二、一四
一〇五		一、二、一六
一一〇		一、一、七
一一一	一四五二	
一一二	一三七一	
一一八	一三八四	
一一九		一、七、三
一二二		一、三、八
一二三		一、四、四
一二四	一四三一	一、六、二
一二五		一、七、一九

林泰輔亀甲獸骨文字序、其夾注中有言「編中所藏與殷虛書契同者、係聽冰閣所藏實物拓本、非襲殷虛書契所錄也」、此為羅氏取材於三井氏藏契最好之斷語、亦林氏表示不滿而未

忍顯著言之者也、林書與前編重出者、據胡厚宣先生統計、約得百版之多、手边無前編、姑先就殷契遺珠及林書與本書對勘、其互見者、約得四十版、列表如右、又林序自署曰：「書於擢古齋南窗」、是魚尾下所称「擢古斋藏」、而仍有與本書重出者、我疑林藏後歸三井氏所有也、不然林書拓本亦有剪裁之跡、為予毀棄之殘蛻應是林氏所遺、是與河井氏所言稍有出入矣。

祖同又記

一九四七・九・九

筱子鈔

表略す。

林泰輔の『亀甲獸骨文字』の序に、其の夾注中に言ふ有り、「編中に載する所と殷虛書契と同じ者は、聽冰閣藏する所の實物拓本に係る、殷虛書契の錄する所を襲ふに非ざる也」と、此れ羅氏材を三井氏の藏契より取るの最好の斷言為るも、亦林氏の表示は不滿にして未だ顯著にこれを言ふに忍びざる者也、林書と前編と重ね出づる者は、胡厚宣先生の統計に據れば、約百版の多きを得、手辺に前編無し、姑く先づ『殷契遺珠』及び林書に就いて本書と對勘するに、其の互ひに見ゆる者は、約四十版を得、表に列すれば右の如し、又林序の自署に曰く「擢古齋の南窗に書す」と、是れ魚尾の下「確古斋藏」と称する所、而して仍（なほ）本書と重ねて出づる者有るは、我れ疑らくは林藏は後ち三井氏の所有に歸せしならん也。然らずんば林書の拓本も亦剪裁の跡有り、毀棄の殘蛻を予應に是れ林氏の遺す所為り、是れ河井氏の言ふ所と稍（やや）出入有り。

祖同又記す。

一九四七、九、九

筱子鈔

九一、殷代地理簡論[一]

河南安陽的殷代甲骨卜辭是在一八九八年、即清光緒二四年戊戌、由當地農民首次發現的。一九〇三年、北京的金石學家劉鶚刊行了第一部甲骨著錄〃鐵雲藏龜〃、可以視為甲骨研究的起點。在這六〇年中、科學發掘或非科學發掘所得有字甲骨、數量已達一〇萬片左右。現在、甲骨學對于中國古代史、正如紙草學之對于埃及古代史或泥版學之對于兩河流域古代史、已經成為一門必要的史料學科。

甲骨研究雖然有了半個世紀以上的歷史、但是由于羅振玉等封建學者和董作賓之流資產階級學者長期把持壟斷、阻礙了這項科學的發展。董作賓和他的徒裔、追隨着胡適的方向、提倡無用的煩瑣考據。這些資產階級學者、就是在甲骨史料的編纂上、實際也沒有作出多大的貢獻。他們所斤斤計較的不過是點滴孤立的一字一義、或者是荒誕無稽的所謂〃殷曆譜〃、對于殷代社會、甚至殷代的歷史事件、他們是完全茫然無知的。

真正的甲骨學是郭沫若先生建立起來的。由於郭沫若先生等馬克思主義歷史學家的辛勤工作、纔使我們對殷代史有了一定的認識。因此、目前在甲骨學領域內、也必須迅速而徹底地拔除白旗、高擧紅旗、向資產階級學術路綫作毫不假借的鬥爭。

河南安陽の殷代甲骨卜辭は一八九八年に、即ち清の光緒二四年戊戌に、當地の農民によってはじまって發見された。一九〇三年、北京の金石學家劉鶚（劉鶚・『鐵雲藏龜』註[九]・第一輯一三頁參見）は第一部の甲骨を著錄し『鐵雲藏龜』（『鐵雲藏龜』註[二]・第一輯一三頁參見）を刊行した。だから甲骨研究の起點をなしていると視ることが出來る。この六〇年間に、科學的發掘或は非科學的發掘で得た所の字のある甲骨は數量已に一〇萬片に達する。現在甲骨學の中國古代史に對しては、正に紙草學の埃及古代史或は泥版學の兩河流域の古代史に對するが如く、已に一門の必要な史料學科となりえた。

甲骨研究は半世紀以上の歷史があるけれども、ただ羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[六]・第一輯一一頁參見）等の封建學者と董作賓（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）の資產階級に流れた學者によって長期に一手ににぎり利益を獨占しこの項の科學の發展を隔てさえぎられた。董作賓と彼の徒裔は、胡適（胡適・『殷虛文字甲編』註[四十六]・第四輯七七頁參見）の方向に追隨し、無用の煩瑣な考據を提倡した。この資產階級學者は、就ち甲骨史料の編纂上にあっては、實際また多大の貢獻をなしていない。彼等は斤斤として協議したのは點滴孤立した一字一義に過ぎず、或は荒誕無稽の所謂『殷曆譜』（『殷曆譜』註[三]・第三輯二八六頁參見）である。殷代社會に對して甚だしきは、殷代の歷史事件にいたっては、彼等は完全に茫然として無知である。

真の正しい甲骨學は郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註[十四]・第一輯三七五頁參見）先生が建立した。郭沫若先生ら馬克思（マルクス）主義歷史學家の辛勤工作によってはじめて私たちをして殷代史に對して一定の認識をえた。此れによって目前の甲骨學領域内において、また必ず須らく迅速にして徹底的に白旗を取り除いて高く紅旗をあげ、資產階級學術路綫に向って少し假借のない鬬爭をなそう。

註[一]　著者は李學勤。本書は第一章、殷、商與西獵區。この章では商の範圍を大邑商西南部及び西方の狩獵區としてこれに關係する地名を分述して、殷代の獵區は東は今の河南輝縣より、西は山西西南隅及び其の以西、大行山以南、黃河以北とする。第二章は帝乙十祀人方路程。征人方の往返路程を五段に分け、(一)十祀九月甲午より十一月癸卯に至る、大邑商より雇に至る、又奉を商に返す。(二)十祀十一月某日より乙巳に至る、滴より攸に至る。(三)十祀十二月癸酉より次年の正月壬寅に至る、舊返より攸侯喜鄙永に至る。(四)次年の正月癸卯より三月乙巳に至る、攸より商に返る。(五)次年の正月丙午より四月癸酉に至る、商より云奠河邑に至る。以上の五段路程を卜辭金文によって論ず。第三章は殷代多方。卜文に現われる方を九節に分け、(一)土方、舌方、羼方。(二)祖甲〃卜王〃の卜辭分析、(三)危方、鬼方、微方、(四)羌方、龍方、四邦方、絴方、黏方、(五)刀方、大方、(六)留、缶、罟、(七)盂方、井方、二邦方、(八)商王國の政治地理結構、(九)商周の際歷史的地理問題。これ等の項目によって商との政治關係及び對外戰爭を論じている。附錄に殷代王卜辭分類表を付す。出版は一九五九年、一〇一頁、科學出版社刊。

殷代歷史地理的研究是甲骨學的一個重要部分。如果對殷代地理缺乏足夠的瞭解，就會影響充分理解當時的歷史事件。在甲骨卜辭發現以前，各種論述古代的坤輿，地理的著作，關于殷代地理都祇能依據有限的周以下文獻，因而是極不確實的。我們可以說，在甲骨學未建立時，殷代地理研究是一片空白。

第一個考證卜辭地名的是王國維。王氏和後來許多考證殷代地名的學者一樣，是選取卜辭中若干地名，孤立地與後世類似地名比附。這種方法是非常不可靠的。郭沫若先生在〃卜辭通纂〃書中，首先運用了聯系若干地名而系統加以考證的正確方法。

在本書中，我們試以安陽即殷這一肯定的事實為基點，聯系論述殷代的歷史地理及有關歷史事件。本書初稿寫于一九五四年，至付印前作了進一步的校正，但本書還是有許多重大缺陷的。最主要的缺點是祇作了史料的整理，而沒有提到理論高度上加以分析。即使在史料的論述上，很多重要問題也沒有充分展開，例如第三章三節曾指出周康王時殘盂鼎所記馘方並非武丁時的鬼方，它其實應是祖庚卜辭中的馘，這一點對糾正關於鬼方的誤解很重要，然而沒有詳細討論。此外，本書還缺少應有的示意地圖和地名索引。由於作者近年從事其它方面的研究工作，這些缺陷不可能徹底彌補，希望讀者鑒諒。

殷代歷史地理の研究は甲骨學の一つの重要な部分である。如し果して殷代地理に對して充分瞭解を缺乏したなら、就ち當時の歷史事件を充分理解することに影響してくる。甲骨卜辭發見以前に在っては、各種古代の坤輿の論述、地理の著作は、殷代地理に關してみな祇に限られた周以下の文獻によく依據し、因って確實のなさを極めたのである。甲骨學にあっては未だ建立しなかった時は、殷代地理の研究は一片の空白であると言うことができる。

第一に卜辭の地名を考證したのは王國維である。王氏はのちの多くの殷代地名の學者と同じように、卜辭中の若干の地名を選取し、孤立して後世類似の地名を比附した。（『甲骨學商史論叢初集』註[十四]・第三輯二五一頁參見）この種の方法は常に信じることのできないものである。郭沫若先生は『卜辭通纂』の書中にあって、はじめ先づ聯系の若干の地名を運用して以て考證の正確な方法を加えた。

本書中にあって、私は安陽はとりもなおさず殷であるということの一つの肯定的事實を以て基點となすことを試み、聯系して殷代の歷史地理及び歷史事件に關することがあることを論述する。本書は初め一九五四年に書き、印刷前に至って一歩進めて校正した、ただ本書はまだ多くの重大缺陷があり、最も主要な缺點は、祇に史料の整理だけをして高度に理論を高めた上で分析しなかった。たとへ史料の論述上において、實に多くの重要問題はまた充分な展開をしていなくとも、例へば第三章三節は曾って周の康王の時の殘盂鼎で記す所は鬼方並に武丁時の鬼方でないことを指出した。その實、應に祖庚卜辭である此の外は、本書はまた應にあるべき示意地圖と地名の索引を少し缺いた。作者は近年其の他の方面に研究作業するに由りこの缺陷は徹底的にうづめ補ふことは不可能である、讀者に鑒諒を希望する。

本書付排後、我們又看到一些新材料、有可以補充本書論點之處、補述於下。

日本〃甲骨學〃雜誌所刊〃書道博物館藏甲骨文字〃一、三四〔一二〕：〃貞、乎戈人壆罝〃：罝即盂區中近盂的罝（二九頁）。一、一三〔一一〕：〃乙亥卜爭貞、及龍方〃。龍方即羌、龍之龍、見第三章。一、四三卜若爭、喜同版、如果摹本不誤、則是一、二期連鎖的又一例證。

本書第二章三節曾論及〃宁〃義近于族、這一點可參看周初的揚方彝題銘：

覌㝬卿（會）宁百生（姓）、揚用作高文考父癸寶障彝、用鬸（嗣）文考剌（烈）、余其萬年隣、孫子寶〃文〃。錄遺五一〇

可見宁中有百姓。

本書第一章六節曾提及亯可能即是高、這一點可由田齊陶器題銘得到參證。此種陶器題銘中有地名〃高閭〃，其不同寫法如下：

高閭丁。　〃蒦齋藏陶〃一、四一、二
高閭豆里人陶尚曰曰口。　〃鄴章陶拓屏條〃一〇
亯閭。　〃三代古陶軒陶拓〃二、二〇、二
塙閭不敢。　〃季木藏陶〃三八、三
塙閭里善。　〃周氏藏陶〃八、四
塙閭里人陶尚曰泉。　〃古陶瑣萃〃一、七
塙閭横里曰臉。　〃雪堂藏陶〃

本書所引用甲骨資料、除已發表的全部著錄外、還有一些拓本、照片和摹本。這些未發表的材料大部分已收入曾毅公先生與作者合編的〃甲骨文据〃，尚待出版。承曾毅公先生允許我們在這裏預先徵引、特此表示感謝。

作　者

一九五八年五月八日、北京

本書は順序に付してのち、私はまた一つの新材料を見た、以て本書の論點の處を補充すべきことがあり、下に補述する。

日本の〃甲骨學〃[三]雜誌の刊する所の「書道博物館藏甲骨文字」一、三四〔一二〕、〃貞戈人壆罝〃：罝は即ち盂區中近くの盂の罝（二九頁。）一、二二〔一一〕：〃乙亥卜爭貞及龍方〃：龍方は即ち羌龍の龍、第三章に見える。一、四三のト若は爭・喜と同版、如し果して摹本に誤りがなければ、則ち一、二期連鎖のまた一例證である。

本書第二章三節は曾って〃宁〃を論及し義は族に近い、この一點は周初の揚方彝題銘を參考とする。

覌㝬卿（會）宁百生（姓）、揚用作高文考父癸寶障彝、用鬸（嗣）文考剌（烈）、余其萬年隣、孫子寶。文。「『商周金文』錄遺」五一〇。

宁の中に百姓を見ることができる。

本書第一章六節は曾って亯は即ち高であることを說き及んだ。この一點は田齊陶器題銘によって參證を得るべきである。此の種の陶器題銘中に地名・高閭〃があり、その筆法は同じでなく下のようである。

高閭丁。　〃蒦齋藏陶〃一、四一、二
高閭豆里人陶尚曰曰口。　〃鄴章陶拓屏條〃一〇
亯閭。　〃三代古陶軒陶拓〃二、二〇、二
塙閭不敢。　〃季木藏陶〃三八、三
塙閭里善。　〃周氏藏陶〃八、四
塙閭里人陶尚曰泉。　〃古陶瑣萃〃一、七
塙閭横里曰臉。　〃雪堂藏陶〃

本書に引用する甲骨資料は、已に發表の全部の著錄を除いた外はなおいくらかの拓本寫眞と摹本があり、この未發表の材料の大部分は已に曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）先生と作者合編の『甲骨文据』[三]に收入し尚出版を待つ。曾毅公先生は私たちにこゝに預め先づ徵引することを許してくださった、時に此に感謝を表示する。

作　者[四]

一九五八年五月八日。北京

註[三]　『甲骨學』我が國における唯一の甲骨學專門の雜誌である。昭和二十六年十月創刊、既に十一號を數へる。創刊號より十號迄は昭和四十七年六月に汲古書院より復刊され上下二冊となっている。

註[三]　『甲骨文据』未刊。

註[四]　李學勤（？、）傳未詳。（現在、中國社會科學院歷史研究所の古文字學者）論文に「戰國時代的秦國銅器」（文物參考資料）、「郿縣李家村銅器考」（文物參考資料）、「戰國題銘概述」（文物）、「補論戰國題銘的一些問題」（文物）、「關於東周鐵器的問題」（文物）「談安陽小屯以外出土的有字甲骨」（文物參考資料）「談近年來新發現的幾種戰國文字資料」（文物參考資料）がある。

九二 中國書譜[二]

民國四十二年夏，我曾經編過一套中國書譜，自殷商以下，共分十二冊，嘗鼎一臠，僅是舉例而已。雖然祇是薄薄的十二冊，能夠在那時候完成，已經很不容易。材料的搜輯，要感謝彥堂先生；最後代替我完成實際工作的，全仗金祥恒兄的熱誠封忙。五年後的今天，我再度編印中國書譜，如許往事，又歷歷在目，眞不禁感慨萬千。五年的磨練，環境不同了，心情也隨之不同，中國書譜的重編方式，與過去的更不一樣。

中國書譜的編印目的，主要在流中國「字」的書體材料，從最早創造的文字畫，經過若干演變，到方塊字形成，把各時期的代表作，有系統的綜合在一起。因此整部書譜的編輯方式，現在擴充為縱橫兩方面。縱的方面以時代分，橫的方面以種類分，殷商編是屬於縱的方面，是包含殷商一代所見各種書體材料的總集。

殷商的文字，已經相當豐富，書體更有各時代的特色。除了著之竹帛的文字未曾發現外，其餘寫在石器陶器龜甲上面的朱書墨書，刻在龜甲牛骨鹿頭牛頭人頭肱骨玉器石器，以及鑄在銅器上面的文字，形形色色，應有盡有。其中甲骨卜辭與銅器銘文，傳世最多，決非一冊書譜所能兼收，因此本譜著錄的，祇是若干選輯而已。

民國四十二（一九五三）年の夏、私は曾って一組の『中國書譜』[三]を編した。殷商より以下、みんなで十二冊に分けた。それはほんの一部を載せ、僅かに擧例しただけである。紙に貧弱な十二冊でありますけれども、あの當時に完成するのは、已に實に容易ならざるものがあった。材料の搜輯には、彥堂（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）先

生に感謝をしたい。最後に私にかわって、實際に仕事を成し遂げたのは、すべて金祥恒兄[三]の熱誠な助力によるものであった。五年後の今日、私は再度『中國書譜』を編印する。往っての事がくの如く、また歷々として目に在り、眞に感慨萬千を禁じえない。五年の練磨、環境は同じでなく、心情はまたこれに隨って同じではなく、『中國書譜』の重編方式は、過去と更に同じではない。

『中國書譜』の編印の目的は、主に中國の「字」の書體材料を傳えるにある。最も早く創造された文字畫より若干の演變を經過して方塊字（四角の紙に字を書いたもので子供が字を覺えるためのものが、）の形成まで、各時期の代表作を系統的に綜合し一つにした。此のため、書譜を整理統合する編輯方式は、現在擴充して縱橫兩方面となった。縱の方面は時代を以て分ける。橫の方面は種類を以て分ける。殷商編は縱の方面に屬するのである。これは殷商一代に見える各種書體材料を包括した總集である。

殷商の文字は、已に相當豐富で、書體は更に各時代の特色がある。竹帛に著はされた文字が、未だ曾って發見されていない外、其の他石器陶器龜甲上面に書かれた朱書墨書、龜甲牛骨鹿頭牛頭人頭肱骨玉器石器に刻したもの、及び銅器上面に錄した文字など、種々樣々で、あるべきものは皆な揃っている。其の中の甲骨卜辭と銅器銘文は、傳世最も多い。決して一冊の書譜に兼收することの出來ないところのものである。それで本譜の著錄はただ若干の選輯があるだけである。

註[一] 本書は嚴一萍氏の編纂による。殷周 甲骨金文の書跡名品を各甲骨金文著錄より、刻辭三三片、牛骨刻辭二八片、骨[illegible]四片、人頭骨刻辭十五片、牛頭甲辭一

片、鹿頭刻辭一、鹿頭一、鹿角刻辭一、骨器一、石殷刻辭五、石器玉魚朱書二、白陶墨書一、玉管牛距骨刻辭三、骨柶刻辭二、銅器銘刻四三六銘、陶器銘刻二二片を收錄し書譜としたものである。一九五八年藝文印書館出版。

註[二] 中國書譜 十二冊。未見。

註[三] 金祥恒。民國六年に生る。浙江省の人。台灣大學中文系教授。著書に『續甲骨文編』がある。

材料的來源，甲骨陶器部分，主要的採自中央研究院歷史語言研究所的小屯一、二、三本。其中一部分是經我綴合而未曾發表過的新材料。金文方面採自商周金文錄遺，那是羅氏三代吉金文存所未曾著錄，而是近二三十年來出土的銅器銘文。這些材料中間有若干銘文，可能是西周早年的作品，但其稱謂與殷代是同一系統，也就放寬尺度收在一起。我所以這樣選輯的理由，完全是為了流傳，使大家容易見到這些不容易見到的新材料。

這裏有需要特別說明的，是甲骨的綴合問題。過去專力從事甲骨綴合的是曾毅公氏，已經發表過甲骨叕存等專集。近幾年來更有「殷虛文字綴合」問世，那是以小屯為對象的綴合總集。著錄的材料不算少，可是重要的並不多，而不應當有的錯誤，却有好幾處。小屯甲編的綴合比較困難，因為著錄的材料都是經過盜掘後的劫餘之物，殘甲斷骨，零落東西，偶然發見，很難復原。乙編就不然，材料最多的十三次發掘所得是一整坑，完整的腹甲至少有四五百版，抗戰時期的長途顛簸，使它們紊亂了；所幸原材料都在，祇要小心接兌，是容易綴合

的。能夠做到全部復原，那纔算是甲骨研究者盡到了應盡的責任。一鱗半爪的接兌，依舊是斷骨殘甲，不值得怎樣重視。幾年來我也斷斷續續的做了些綴合的工夫，盡力想使乙編的大龜甲復原，目的只在便利自己的研究，所以無意輯為專集去發表，偶爾看到人家的綴合專集，有時加以比較，總覺得綴合的問題太多。

材料の來源、甲骨の陶器部分は、おもに中央研究院歷史語言研究所の小屯一、二、三本[四]より采った。其の中の一部分は私の綴合を經たもので未だ曾って發表していない新材料である。金文方面は『商周金文錄遺』[五]より採り、それは羅氏の『三代吉金文存』（『五十年甲骨學論著目』註[六]・第四輯三三〇頁參見）に未だ曾って著錄していないものである。そして近二三十年出土の銅器銘文である。この材料の內に若干の銘文がある。恐らくは西周の早い時期の作品であろう。ただその稱謂は殷代と同一系統なので、また就ち尺度をゆるめて一つに收めた。私はこの樣な選輯をした理由はすべてひろめる為で、みんなにこれらの容易に見られない新しい材料を見てもらう為であった。

この中に特別な説明がいるところがあるのは甲骨の綴合の問題である。今までに專ら力を甲骨綴合に從事したのは曾毅公（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）氏である。已に『甲骨叕存』（『甲骨叕存』註[二]・第三輯一〇九頁參見）等の專集を發表したことがある。ごく最近では更に『殷虛文字綴合』（本輯七七頁參見）を世に問う。それは小屯を以て對象とする綴合總集である。著錄の材料は少ないとは言えない。だが重要なものは決して多くはなく、而るに必ずしも錯誤があるのではない。却っていい處がいく

つもある。小屯甲編の綴合は比較的困難で、というのは著録を為す材料はみな盜掘後のしりぞけた餘りの物であって、殘された斷片的甲骨は、零落のものは東西に散り、偶然發見するも實に復原しがたい。乙編は就ちそおではない、材料は最も多く十三回發掘で得た所の一つの整坑である。完整の腹甲は少しく四百版ある。抗戰時期の長途にがたがた揺れ、それらを紊亂せしめた。幸に原材料はみなある、ただ氣をつけて接兑をすれば、綴合は容易である。全部復原することもできる。それは總に甲骨研究をする者の應に盡すべき責任であるといえる。一鱗半爪の接兑は、やはり斷骨殘甲であって、何ら重視するに値ひしない。

幾年來私はまたとぎれとぎれにその綴合の時間をつくった。盡力して乙編の大龜甲を復原せしめた。目的はただ自己の研究の便利の為である、だから輯めて專集として發表する氣はなかった。偶々人の綴合專集を見て、時には比較をなし、いつも綴合の問題の太だ多いことを覺った。

註〔四〕 小屯一、二、三本。嚴一萍氏が所見した小屯は次の書物と思はれる。

小屯殷虛文字甲編 董作賓 民國三七年四月 臺北國立中央研究院。

小屯第二本殷虛文字乙編 董作賓 民國三七年一〇月至三八年三月 臺北國立中央研究院。

小屯第二本殷虛文字丙編上輯(一) 李濟董作賓等編 張秉權撰 民國四六年八月、臺北中央研究院歷史語言研究所。

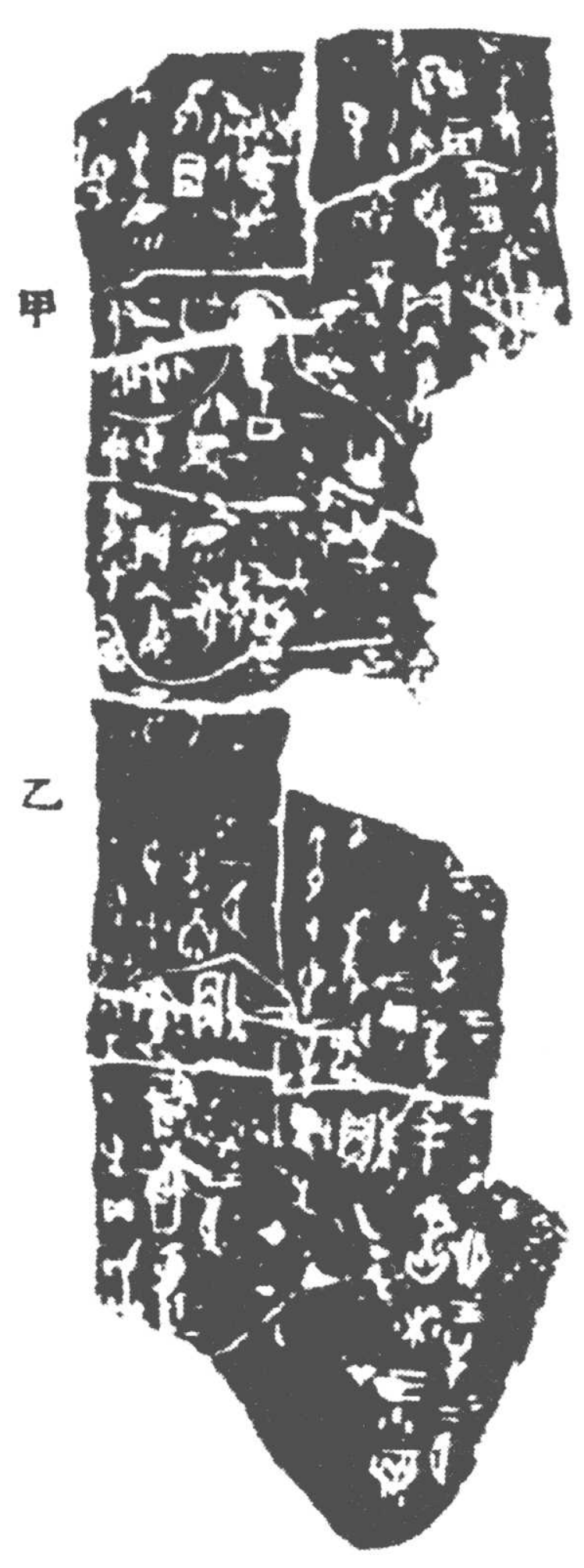
小屯第三本殷虛器物甲編陶器上輯 董作賓 民國四五年 臺北中央研究院歷史

語言研究所。

註〔五〕 商周金文錄遺 于省吾編著。本書は青銅器銘文の拓本を六百十六種、そのうち三分の二は編者の輯集、三分の一は海内學者からの借拓（郭沫若、容庚、唐蘭、商承祚、陳夢家、胡厚宣、陳保之等所藏）による。これらは羅振玉の『三代吉金文存』未著錄のものであるが、まゝ重復する。また新出の銅器銘文を收錄。編輯方法は器銘と字數の短長によって順序とする。各器種數は鐘十三、鼎八五、甗七、鬲七、殷五五、敦一、簠六、盨六、尊二六、罍九、壺一七、卣四六、斝十、盉五、觚六六、觶一五、爵一〇三、角一、盤二十、匜四、方彝八、雜器二二、戈二八、戟十四、矛一、劍十七、襍兵六、不知名器八。出版は一九五七年八月、中國科學院考古研究所編輯、科學出版社。

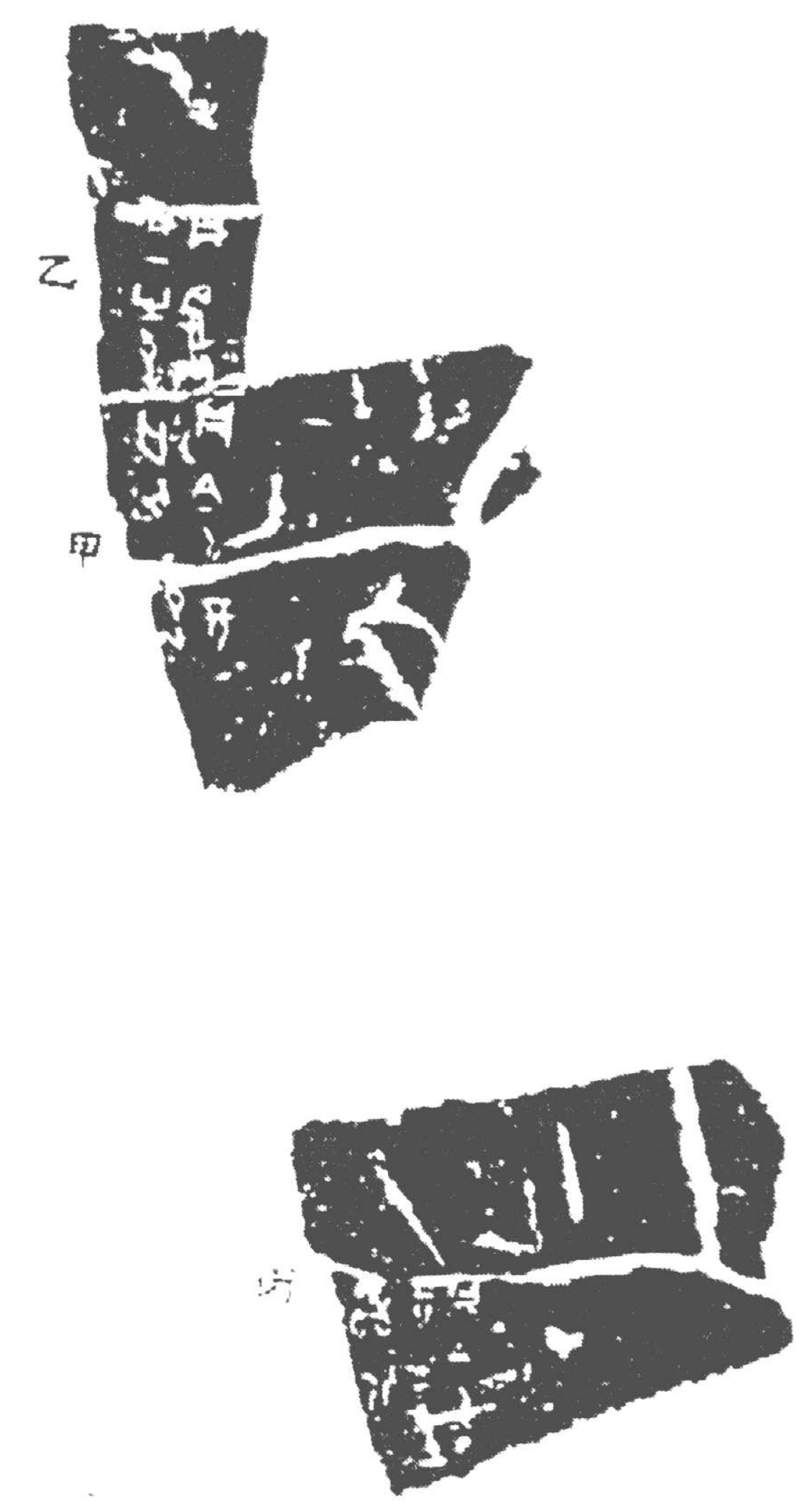
這裏、即以殷虛文字綴合編而論、擧幾個例子作對照。

一、本譜一四頁的右尾甲是由小屯甲編一六九一加二〇二九綴合的。殷虛文字綴合三四〇號（左圖）把甲編的一一六七版綴上是錯的。



甲 1167 300486
乙 2029 301744

二、本譜四〇頁的龜腹刻辭、是由小屯甲編三〇八六、三一三二、三一四〇、三一二〇四版順序綴合的。殷虛文字綴合不瞭解背甲的部位、因此綴合三五五的排列如左圖、把可以連接的三版分開了。



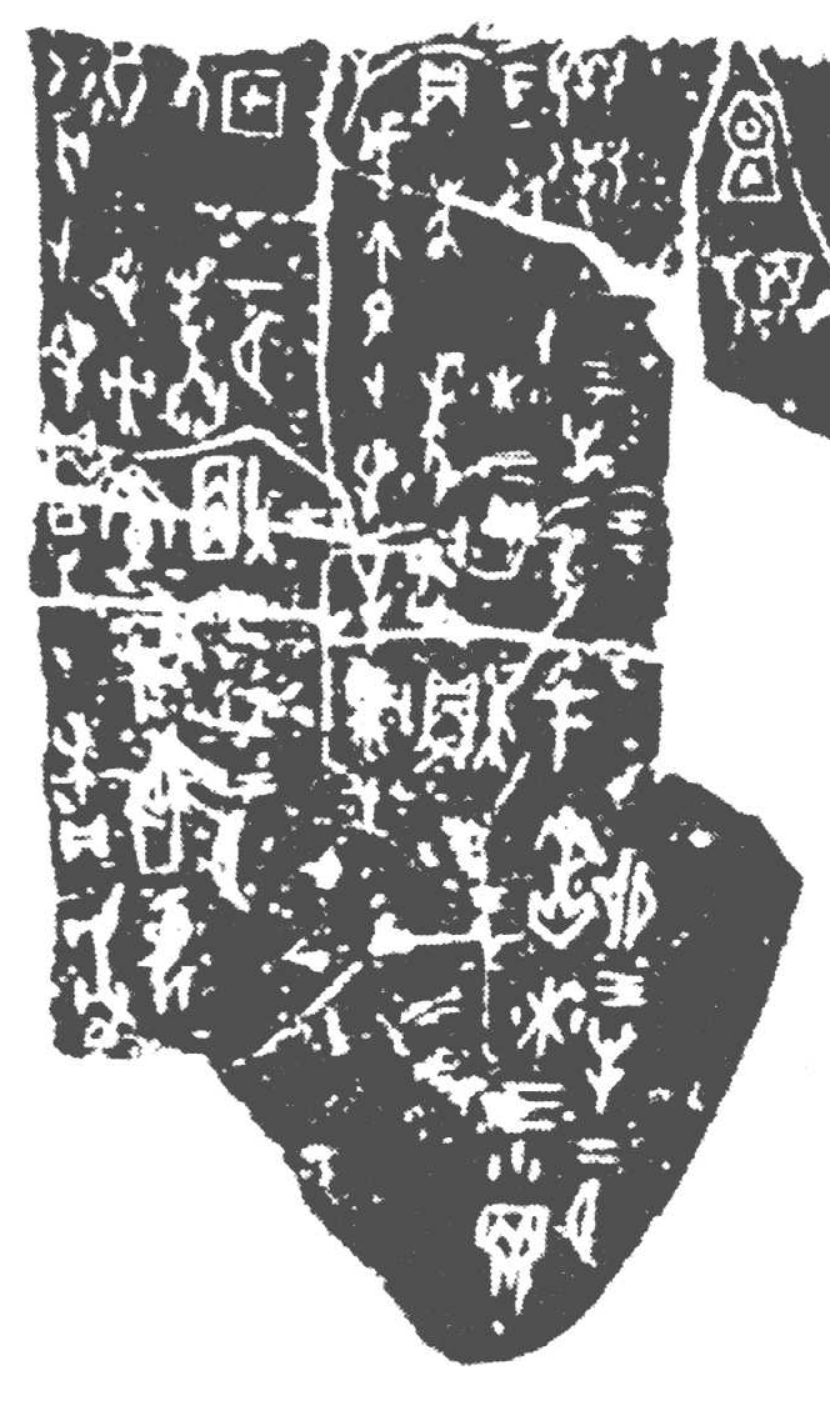
甲 3120 400194
乙 3132 400211
丙 3140 400223

ここでは、即ち『殷虛文字綴合編』を以て論じ、幾くらかの例を擧げて對象とする〔六〕。

一、本譜一四頁の右尾甲は「小屯甲編」一六九一によって二〇二九を加えた綴合である。『殷虛文字綴合』三四〇號（左の圖）は『甲編』の一一六七版を綴り合わせたのは誤りである。

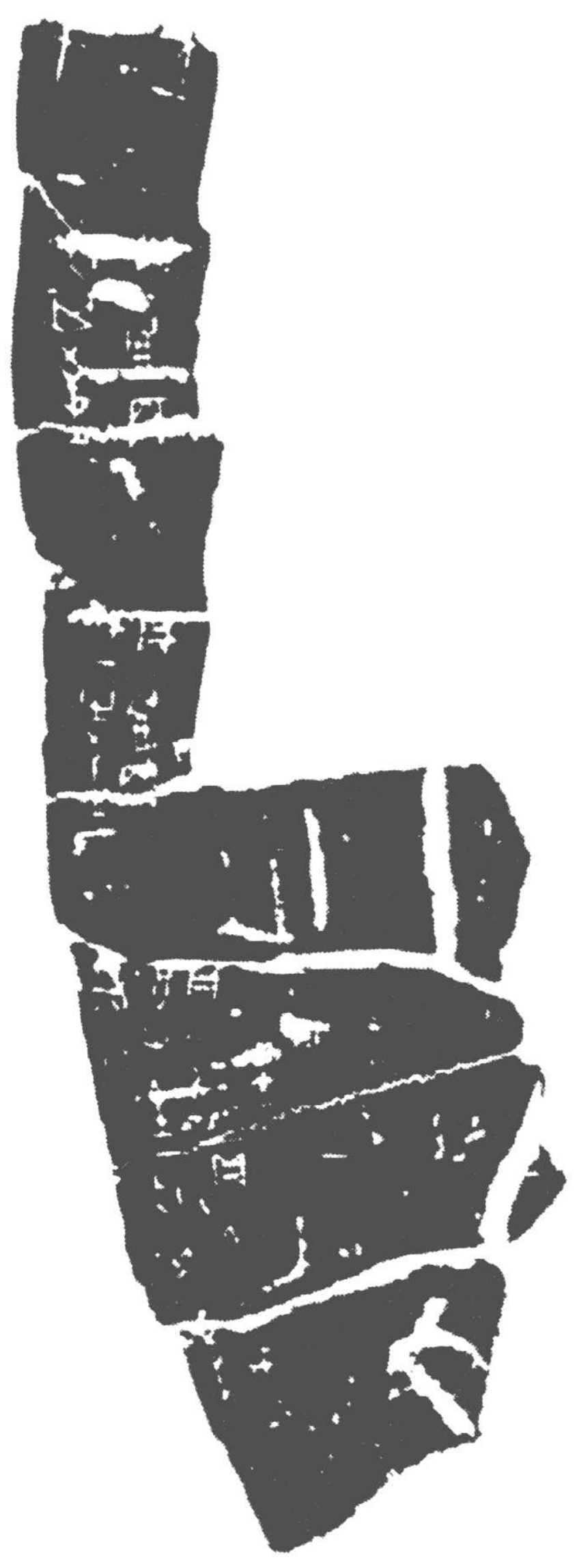
二、本譜四〇頁の龜腹刻辭は、「小屯甲編」三〇八六、三一三二、三一四〇、三一二〇、四版〔七〕によって順次に綴ったのである。『殷虛文字綴合』は背甲の部位が明瞭ではない、それで綴合三五五の排列は左の圖の如く、連接のできる三版を分離した。

註〔六〕 甲編考釋 圖版陸捌より轉載。



零陸捌 1691+2029

註〔七〕 甲編考釋 圖版壹柒叁より轉載。

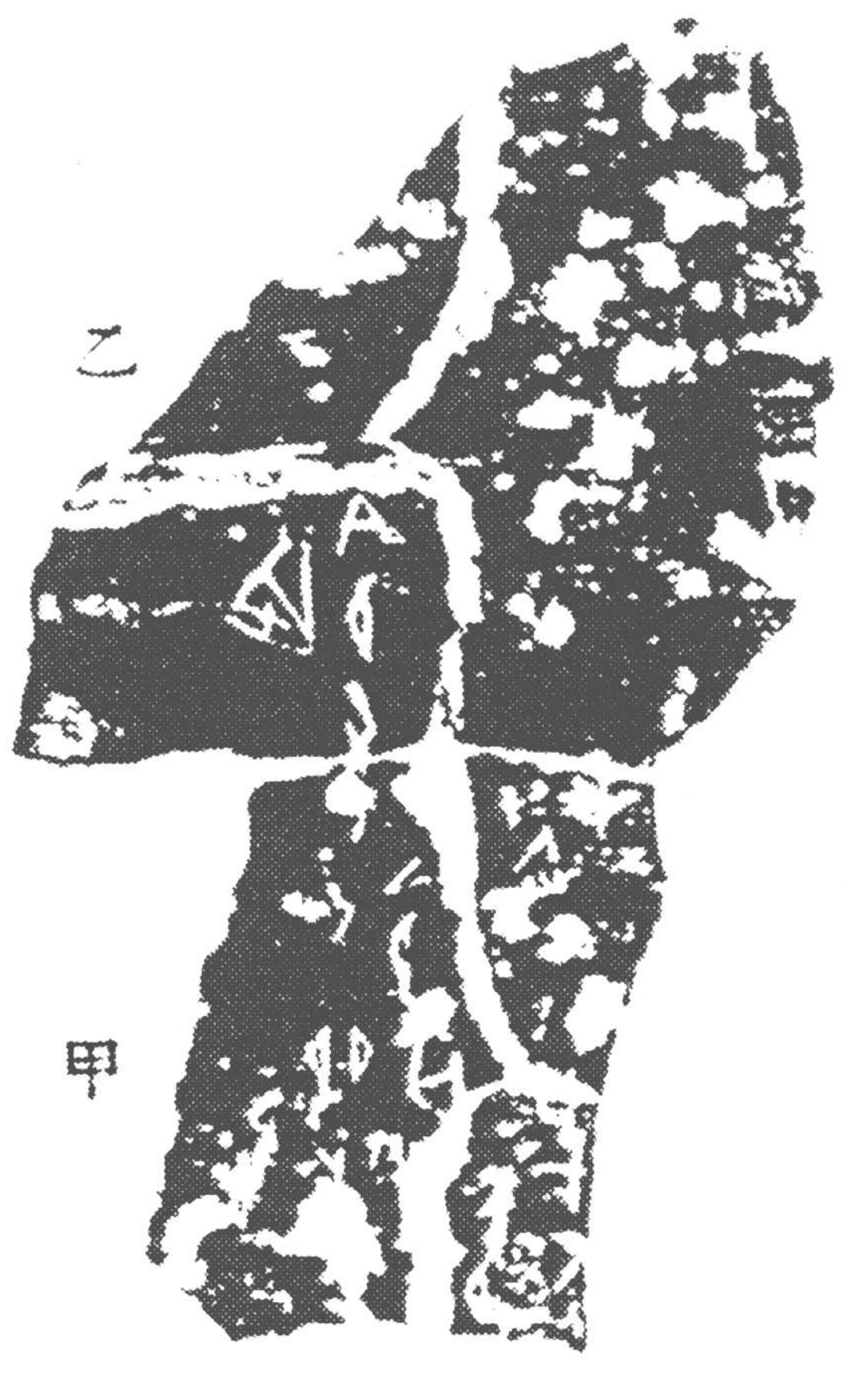


壹柒叁
3086+3120+3132+3140

三、同貞的卜夕背甲是由小屯甲編九五九、九六二、九六三、九六四、二〇四二共五版綴合的。尚有一八八〇的一版，也是同一背甲的殘片。是近尾部的第二肋骨之右端近脊甲部份、可惜與上面的綴合不能銜接。這是相當大的一塊沒有鋸開的腹甲、現在綴合的衹是第七肋第六肋左右兩邊與脊甲相連、及第五肋的左邊一半。背甲沒有鋸開即卜用、前此似乎還沒有發見、在號稱十萬片甲骨中、恐怕就是這綴合的一例了。殷虛文字綴合的三三八版（左圖）把不相干的九五九與九六三接上了、這是根本不瞭解背甲盾紋部位的關係。

四、本譜一四頁上面的一版首腹甲、是由小屯甲編三四二七、三四七七、與甲骨續存二八〇一（亦即元嘉造像室一一〇）三版綴合的。殷虛文字綴合七三衹有甲編兩版、而沒有把元嘉造像室的一一〇版接上。

三、同貞のト夕背甲は『小屯甲編』九五九、[八]九六二、九六三、九六四、二〇四二など五版によって綴合したものである。尚一八八〇[九]の一版があり、また同一背甲の殘片である。



甲 959　3.0.0047

乙 963　3.0.0051

尾部に近い第二肋骨の右端で脊甲に近い部份である、殘念なことに上面との綴合と銜接できない。これは相當大きい一塊の鋸「鋸の痕」の開きのない復甲である、現在の綴合は祇に第七肋、第六肋左右兩邊と脊甲が相い連及し、第五肋の左邊一半である。背甲に鋸の開きがないのは即ち卜に用いる、此れ以前にはまた發見はないようである。十萬片と稱する甲骨中に、恐らくこの綴合の一例があるだけである。『殷虛文字綴合』の三三八版（左の圖）は相い關係しない九五九と九六三とを上につないだ、これは根本的に脊甲盾紋部位の關係が瞭解できないのである。

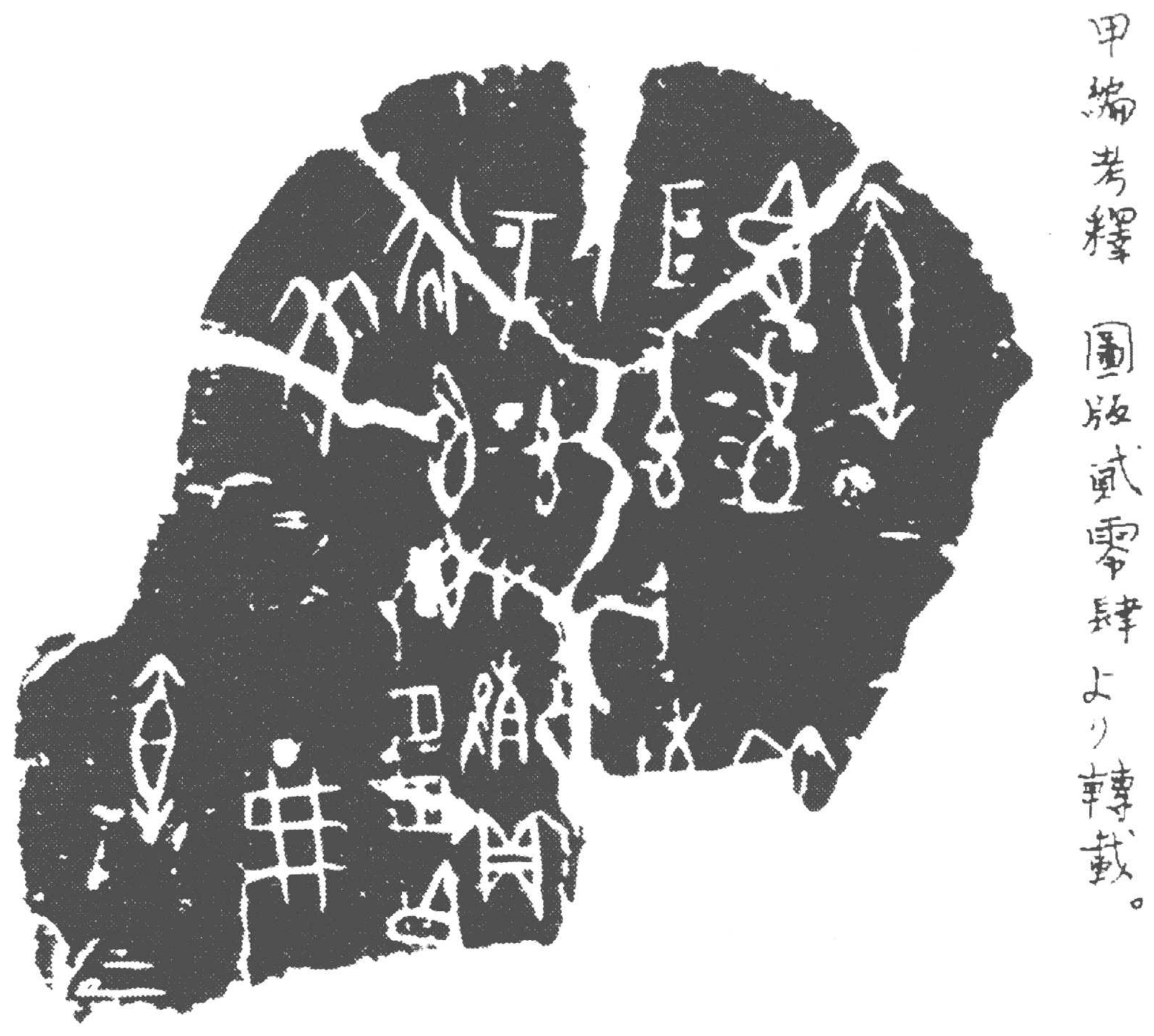
四、本譜一四頁上面の一版の首腹甲は、『小屯甲編』[十]三四二七、三四七七と『甲骨續存』六〇一[十一]（亦即ち元嘉造像室一一〇）の三版とも綴合したものである。『殷虛文字綴合』七三はただ甲編兩版があるだけで元嘉造像室の一一〇版をつないだものはない。

註[八]　甲編考釋　圖版肆捌より轉載。

[illegible] 959+962+963+964+2042

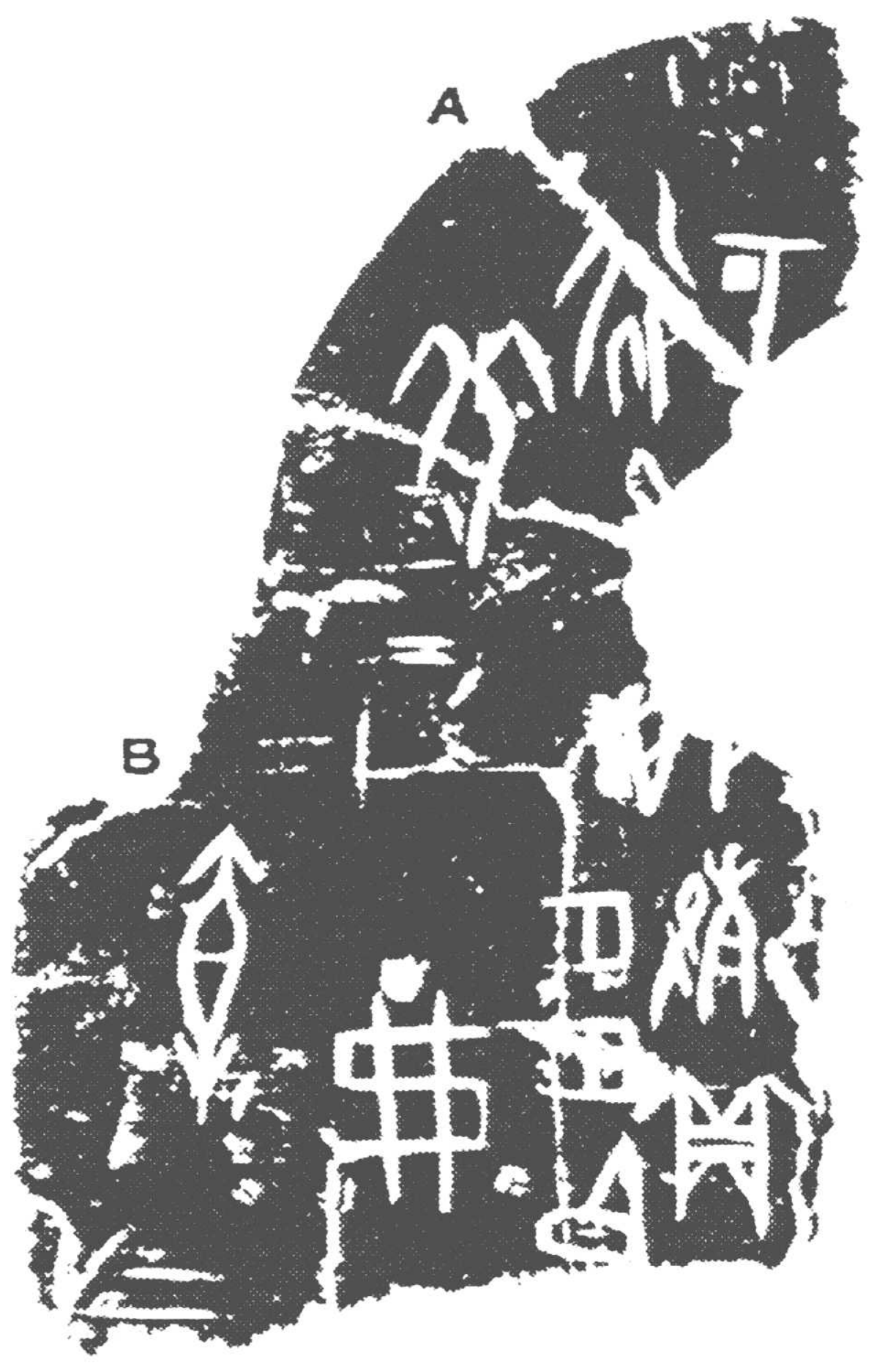
註[九]　小屯甲編一八八〇。

註[十]　甲編考釋　圖版貳零肆より轉載。



貳零肆　3427+3477+續存601

註[十一]　殷虛文字綴合　七三



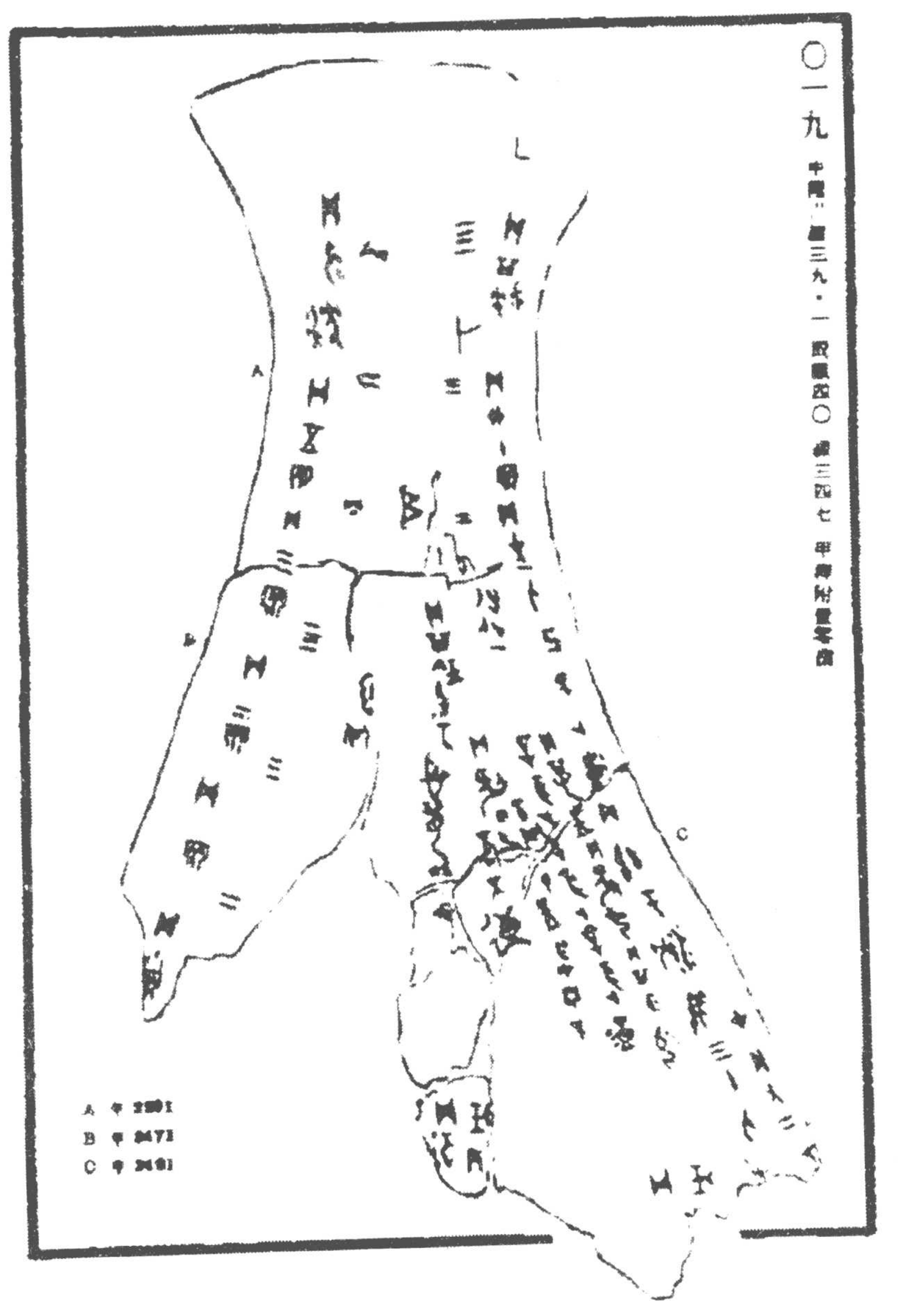
五、本譜三九頁的牛骨、是由小屯甲編二四七一、二五〇一、二四九一共三版綴合的。殷虛文字綴合四〇祇有二四七一、二五〇一兩版。

六、本譜三四頁的卜雨背甲、是由小屯甲編的三三九九、三四〇三與殷契佚存的四〇六、鄴中片羽初集的二九、一（亦即京津三一八〇）四版綴合的。又如本譜二十頁、二十一頁、二十二頁的三版大腹甲、都是小屯甲編裏很著名的材料、從沒見人有所綴合、這裏發表的三版都有綴合了。至於八月乙酉月食的綴合（一四頁）、直到現在還沒有見到他們提及。

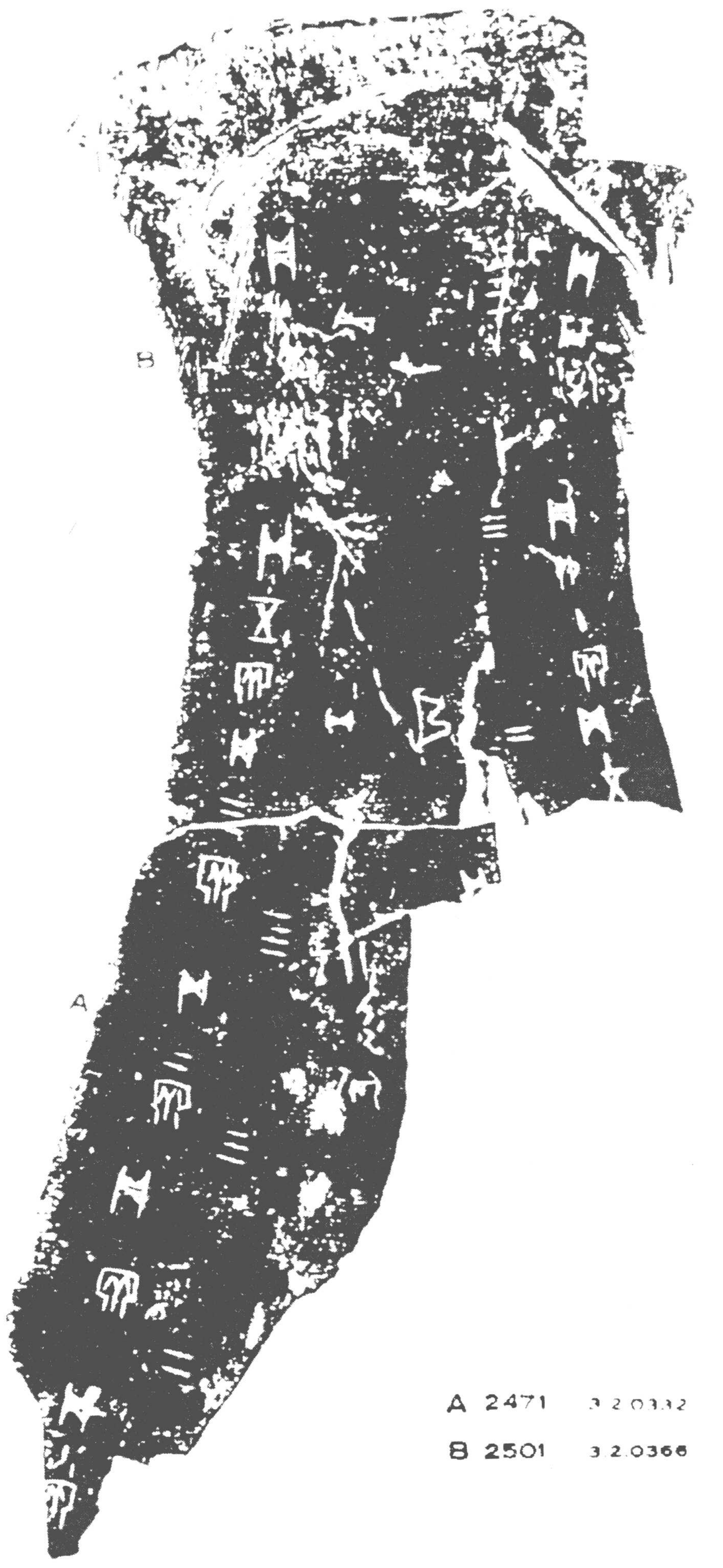
五、本譜三九頁の牛骨は、『小屯甲編』[十二]二四七一、二五〇一、二四九一など三版によって綴合したものである。『殷虛文字綴合』四〇[十三]にはただ二四七一兩版があるだけである。

六、本譜三四頁の卜雨背甲は、「小屯甲編」[十四]の三三九九、三四〇三、と「殷契佚存」の四〇六「鄴中片羽初集」の二九・一（亦即ち「京津」三一八〇）の四版によって綴合したものである。又本譜[十五]二十頁、二十一頁、二十二頁三版の大腹甲の如きはみな「小屯甲編」の實に著名な資料であって、從來人が綴合したものを見たことはない。ここに發表した三版はみな綴合である。八月乙酉月食の綴合に至って（一四頁）（本篇註[十一]參見）ずっと現在に至るまでまた彼等が提起するに至ったものはない。

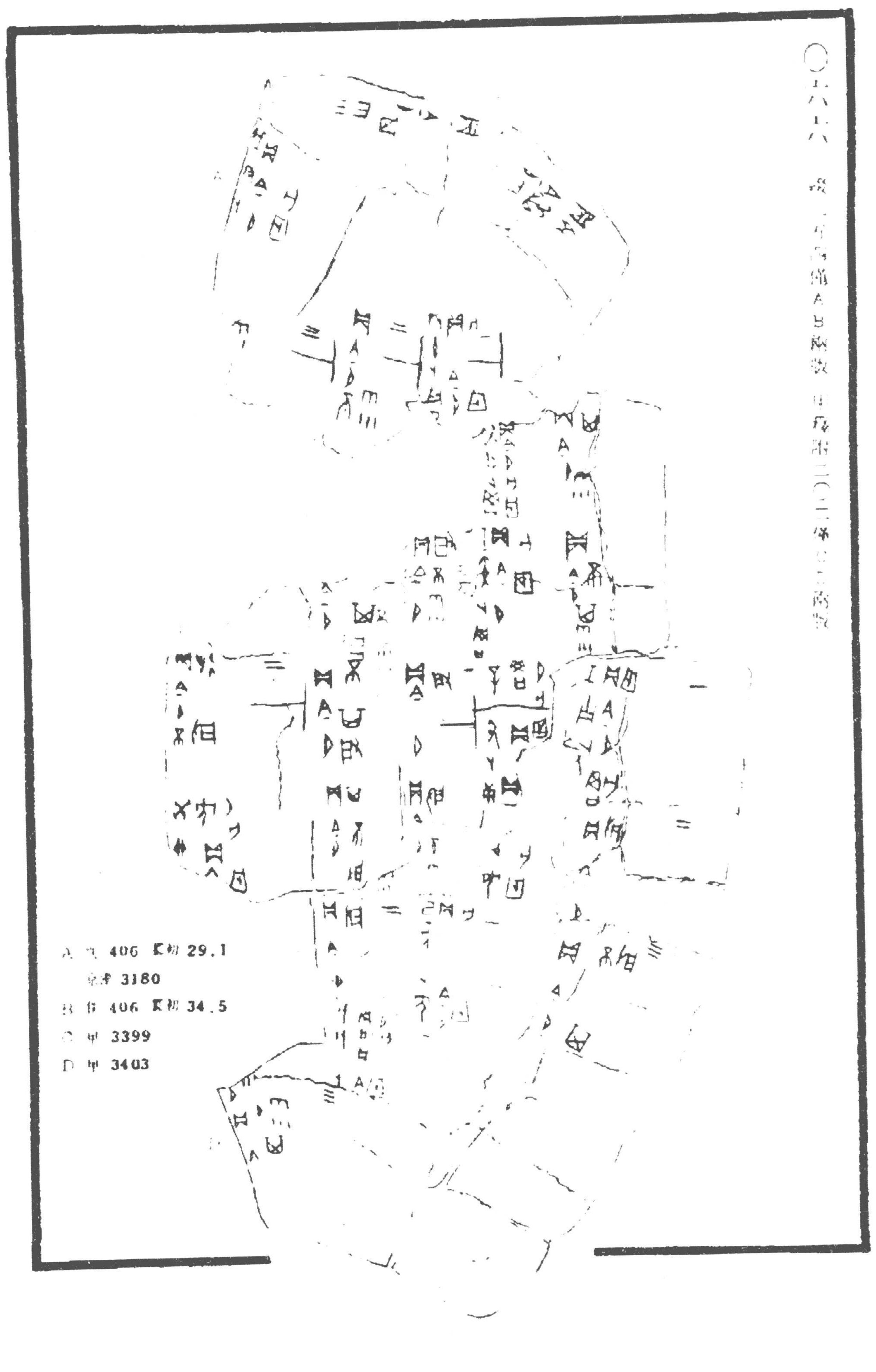
註[十三]「小屯甲編」二四七一、二五〇一、二四九一の綴合。


〇一九
A 甲 2501
B 甲 2471
C 甲 2491

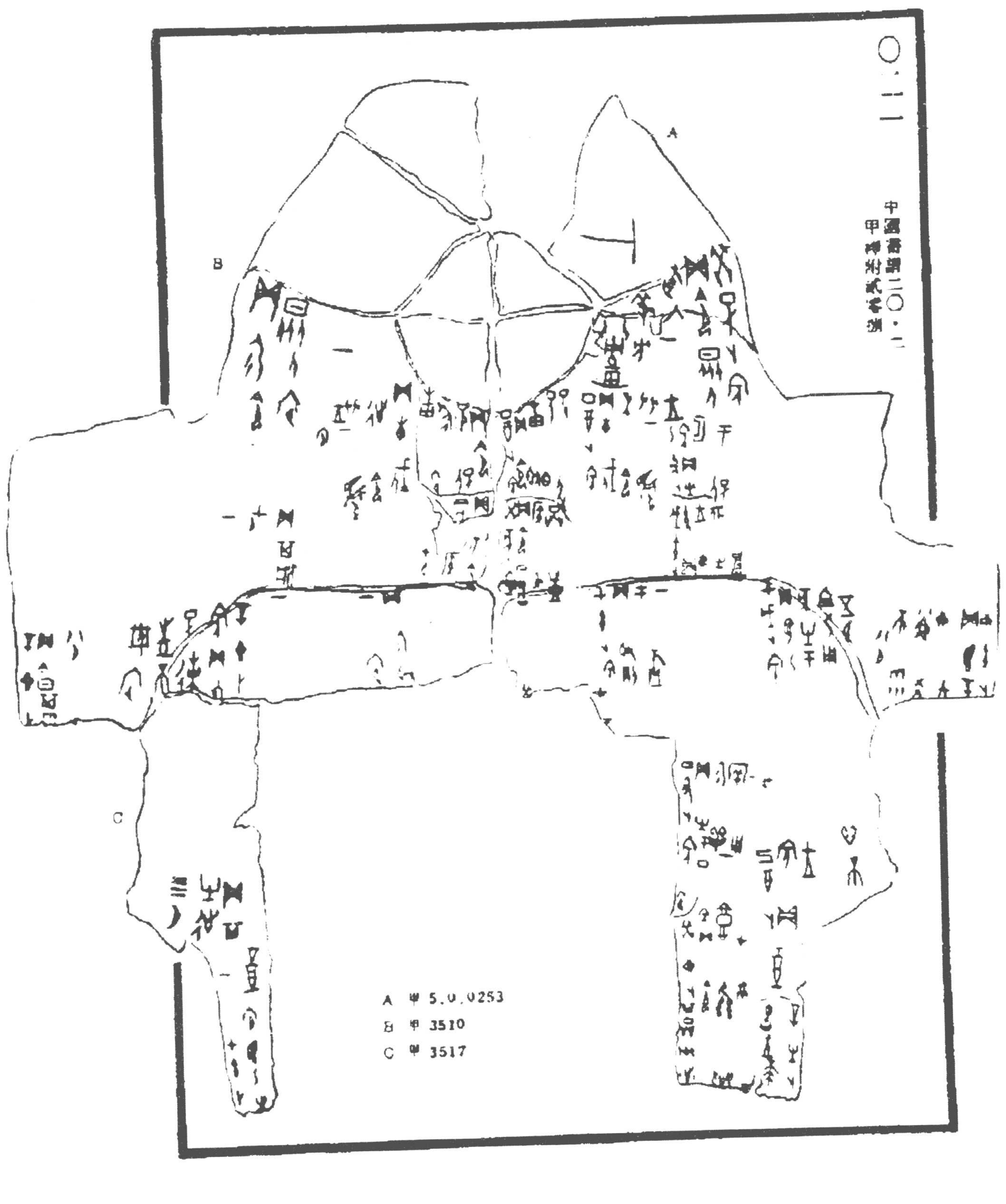
註[十三]「殷虛文字綴合」四〇。

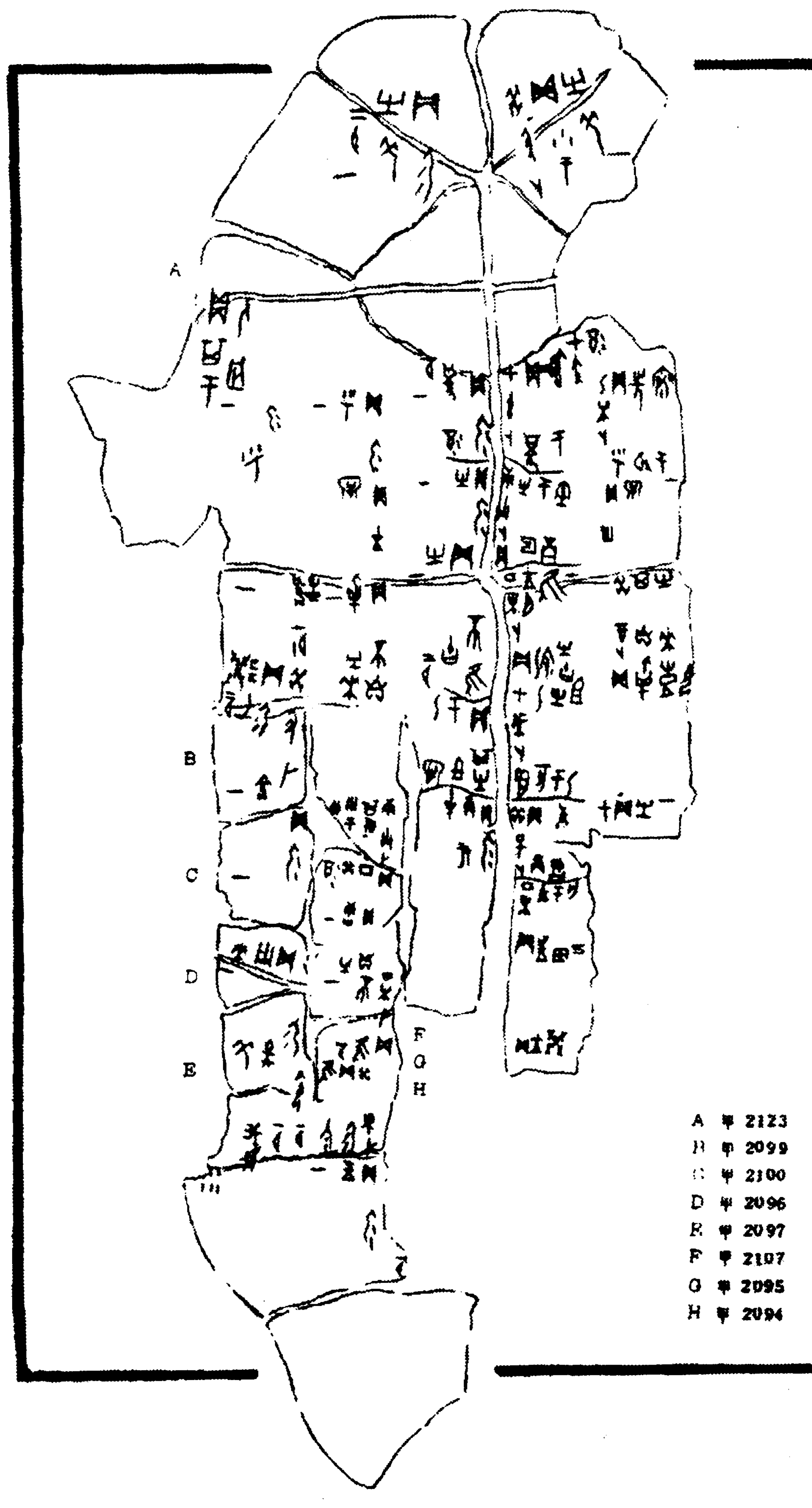

A
B
A 2471 3.2.0332
B 2501 3.2.0366

註[十四]「小屯甲編」三三九九、三四〇三、と「殷契佚存」四〇六、「鄴中片羽初集」の二九・一の綴合。（「甲骨綴合新編」による）


〇六八八
A 佚 406 鄴初 29.1
京津 3180
B 佚 406 鄴初 34.5
C 甲 3399
D 甲 3403

註[十五]本譜二十、二十一、二十二名頁三版の大腹甲。このうち二十一頁の圖は「甲骨學五十年」註[三]・本輯八八頁參見。各片は「甲骨綴合新編」による。


〇二一
A
B
C
A 甲 5.0.0253
B 甲 3510
C 甲 3517



〇〇九　中國書譜二一・二　甲釋附著柒玖

以上是很少幾個例子、在在足以證明甲骨的綴合似容易而實非容易。必需具備甲骨研究的其他條件、方能獲得有意義的結果。小屯乙編可以綴合的材料、觸處都是、而全部甲骨可以綴合的更不在少數、可是有意義的綴合並不多、既沒有什麼特殊意義、也不想去災梨禍棗。多年來我始終不願意把我綴合的甲骨材料以專業方式去發表的原因在此、而今天選輯若干綴合的甲骨在書譜裏作比較的動機亦在此。

中華民國四十七年九月三日、嚴一萍。

以上はたいへん少ない幾くらかの例であるが、甲骨の綴合が容易なようにみえて實は容易ではないことを證するに足るものである。甲骨研究の其の他の條件を必ず完全に備わってこそ、まさに能く意義の有る結果を獲得しうるのである。『小屯乙編』の綴合しうる資料は、觸れる處みなそれであり、而も全部の甲骨で綴合できるのは決して少數ではない、しかし意義のある綴合は決して多くはないのである、既にどのような特殊な意義もないものであってもやはり災梨禍棗〔綴合できなかったという意味か？〕にしてしまおうとは想はない。多年来私は始終私の綴合の甲骨材料を以て專業方式で發表したく思わない原因はここにあるのである。而も今日若干の綴合した甲骨を選輯して書譜に於て比較をした動機もこゝにある。

中華民國四十七〔一九五八〕年九月三日　嚴一萍（『鐵雲藏龜』註〔四十三〕・第一輯三九頁參見）

九三　續甲骨文編[二]

清光緒廿五年，學者始得見殷虛甲骨文字。數千年之祕藏，發現於小學昌明之後，其為世所重可知也。六十年來，自孫仲容、羅叔言、王靜安諸先生以至董彥堂師，竭精殫思，前于後喁，遂樹立甲骨文字學之規模。學者非特可據甲骨文以是正三千年來形體訓詁之訛誤，且可據以證史明曆，觀世知化。如王、董兩先生之成就，固已彰彰在人耳目矣。

清の光緒廿五（一八九九）年、學者始めて殷虛の甲骨文字を見るを得たり。數千年の祕藏は、小學昌明の後に發現し、其の世に重んぜらる所と為るは知る可きなり。六十年來、孫仲容（孫詒讓・『契文擧例』註[十七]・第一輯四九頁參見）、羅叔言（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）、王靜安（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註[二十三]・第一輯一〇一頁參見）の諸先生より以て董彥堂師（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）に至るまで精を竭し思いを殫し、前于後喁「莊子・齊物論」して、遂に甲骨文字學の規模を樹立す。學者は特だに甲骨文に據りて以て三千年來の形體訓詁の訛誤を是正す可きのみに非ず、且つ以て史を證し曆を明にするに據りて、世の知化「變化を知る」を觀る可し。王・董兩先生の成就の如きは、固より已に彰々として人の耳目に在り矣。

註[二]　金祥恒氏の編纂による。本書は孫海波氏の『甲骨文編』に継ぐもので、『甲骨文編』以後に刊行された著錄を收め、體裁は文編に同じであるが、のち解讀された字、あるいは訂正された者はそれを收錄。編纂の方法については凡例に詳

しいので後に錄した。全書線裝本四冊、十四巻、附錄二巻、檢字一巻、出版は一九五九年、臺灣藝文印書館刊。

字彙之編輯，上宜以便專門之研究，下宜以便初學之檢查。近世如翟云升之隸篇，吳大澂之說文古籀補，楊守敬之楷法溯源，分別部居，遵依許書，咸能博取嚴辨，學者便之。民國廿三年孫海波之甲骨文編，亦其選也。孫書本為補正其師商承祚之殷虛文字類編而作。上距商書，僅十一年，而所補正者已甚多。今日上距孫書已二十五年，此二十五年中，古文字之學日益進步，甲骨之出土者亦日益增多。則繼孫書而有作，亦事之宜也。

字彙の編輯は、上、宜しく以て專門の研究に便ずべく、下、宜しく以て初學の檢査に便ずべし。近世の翟云升[三]の『隸篇』[三]、吳大澂（吳大澂・『名原』註[三]・第一輯五五頁參見）の『說文古籀補』（『說文解字古籀補』をいう。『殷虛書契待問編』註[二]・第一輯一二八頁參見）、楊守敬[四]の『楷法溯源』[五]の如きは、部居を分別するに、許書に遵依し、咸な能く博く取り嚴しく辨じ、學者これを便とす。民國廿三（一九三四）年、孫海波（孫海波・『鐵雲藏龜』註[四十]・第一輯三八頁參見）の『甲骨文編』（『甲骨文編』註[二]・第二輯二六九頁參見）も、亦其の選なり。孫「海波」の書は本其の師、商承祚（商承祚・『殷虛文字類編』註[五]・第一輯一七三頁參見）の『殷虛文字類編』（『殷虛文字類編』註[二]・第一輯一七〇頁參見）を補正せんが為にして作るなり。上（かみ）、商「承祚」の書を距（へだ）つること、僅かに十一年、而して補正する所の者は已に甚だ多し。今日（こんにち）上、孫「海波」の書を距つこと已に二十五年、此の二十五年中に、古文字の學は日に益（ますます）進歩し、甲骨の出土する者も亦日に

益々多きを增す。則ち孫の書に繼いで作ること有るも、亦事の宜きなり。

註[三]　翟云升（清の人）山東掖縣の人。字は文泉、桂馥の弟子、道光の進士。官は國子監助教。『隸篇』と『五經歲徧齋集』を著す。

註[三]　隸篇十五巻、續十五巻、再續十五巻。自刻本。南宋より隸字を集めて字書を作り、それは韻や偏旁のみで分類されたものであったが、翟氏は顧氏の隸辨、偏旁の意を說文に引申し篆を以って隸の異なるもの、隸の同じものを金石隸古流傳の遺文に求め成ったものである。

註[四]　楊守敬（一八三九－一九一五）湖北省宜都の人。字は惺吾。同治壬戌の鄉試擧人。まず黄州府儒學教となり、其の官舍が東坡雪堂と相い隣りするので鄰蘇と號し書嗁を鄰蘇園と號した。光緒初年に駐日大使何如璋に隨って日本に使し、日本の舊籍をあつめ、佳槧善本を滿載して歸國。張之洞が湖廣總督となるや彼は兩湖書院に招かれ勤存、存古兩學堂の講席兼通志局編纂となり、また內閣中書に奏請された。のち京師禮學館の顧問となる。辛亥革命のときは上海に難を避け賣字生活をした。民國になって參議院參政ともなったが生活に窮してその藏書は政府に購收された。彼の學は特に中國地理の考證であった。また目錄、金石の學に造詣が深い。

註[五]　楷法溯源十四巻、所采古碑目錄一巻、所采集帖目錄一巻、楊守敬編、光緒三年宜都楊氏刊本。

祥恒少治六書，篤嗜契文。十載以來，在彥堂師指導之下，籀讀拓本，夙夜摹寫，樂在其中。因念甲骨文字對於古代華夏人文之闡明，實為重要之管鑰，爰據過去二十五年間新出土新流布之甲骨文字，賡續孫書，輯為此編。凡孫氏誤摹誤釋之字，皆於編中糾正。計字首二千五百餘文，共錄五萬餘字。非敢自矜有得，亦以供學人之參考。自知謭陋，謬誤難免；惟冀並世明達，有以教之！

祥恒少くして六書を治め、篤く契文を嗜む。十數載以來、彥堂師の指導の下に在りて、拓本を籀讀す。夙夜摹寫し、樂み其の中に在り。因って念ふに甲骨文字、古代華夏人文の闡明に對し、實に重要の管鑰を為し、爰に過去二十五年間の新出土新流布の甲骨文字に據り、孫書に賡續し、輯めて此の編を為（つく）る。凡そ孫氏の誤摹誤釋の字は、皆な編中に於て糾正す。字首二千五百餘文を計へ、共に五萬餘字を錄す。敢へて自から得ること有るを矜（ほこ）るに非ざるも、亦以て學人の參考に供せん。自から謭陋にして、謬誤免ぬがれ難きを知る；惟だ並世の明達に、以てこれを教へられんこと有るを冀ふのみ。

本編之得以問世，彥堂師督勉之力最大；國立臺灣大學與哈佛燕京學社欽助印費，使本編得以印行；錢思亮、李濟之、沈剛伯、臺靜農、戴君仁、毛子水諸先生之熱情贊助，感激尤深；嚴一萍先生校讀全稿，匡正甚多；於此謹致謝忱。全書黏貼謄錄，胥出內子徐錦女士之

手，感念勤勞，因並及之。

中華民國四十八年十月金祥恆序於臺北。

本編の以て世に問ふを得るは、彥堂師勉を督の力最も大なり、國立臺灣大學と哈佛燕京學社とに印費を飲助され、本編をして以て印行するを得しむ。錢思亮[六]、李濟之（李濟・『卜辭通纂』註[四六]・第二輯一四九頁參見）、沈剛伯[七]、臺靜農[八]、戴君仁[九]、毛子水[十]諸先生の熱情の賛助は、感激尤も深く、嚴一萍（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註[四十三]・第一輯三九頁參見）先生は全稿を校讀し、匡正甚だ多し、此に謹んで謝忱を致さん。全書の黏貼謄錄は、胥な内子徐錦[十一]女子の手に出づ、勤勞に感念し、因りて並にこれに及ぶ。

中華民國四十八年十月　金祥恆臺北に序す。

註[六]　錢思亮（一九〇八―　）浙江杭縣の人。化學博士。中央研究院の院士。

註[七]　沈剛伯（一八九七―　）湖北省宜昌の人。英國ロンドン大學史學系を卒業。中央研究院の院士となり、台灣大學文學院教授。著論文に「文化衰弱的原因」、「美國制憲的經過」、「五十年來的教育」「今天的大學和社會」「我所認識到的胡適之先生」、「我所認識的蔣夢麟先生」ら數篇ある。

註[八]　臺靜農（一九〇三―　）安徽省の人。台灣大學中文系教授。

註[九]　戴君仁（一九〇一―　）字は靜山、浙江省鄞縣の人。北京大學卒業、浙江大學專任講師、南開大學教員を歷し、一九四〇年北平大學女子文理學院文史學系教授兼秘書に任じ、戰後台灣に渡り、現在は台灣大學中文系教授。著書に「中國文學構造論」、「涵養與察識」がある。

註[十]　毛子水（一八九二―　）字は子水。浙江省江山の人。ドイツに留學し數學を研究。歸國後廣州國立中山大學史學教授に任じ、一九三〇年には北京大學圖書館長兼同大學文學院史學系教授に任じた。また天津「益世報副刊」の讀書週刊の主編者でもあった。現在は台灣大學中文系教授で「孟子」の專家。

註[十一]　徐錦（？―　）傳未詳。

編輯凡例

一、自孫氏輯甲骨文編以來。新出材料日多。考釋亦衆。此編繼之輯錄。故名續甲骨文編。

一、凡孫氏已輯之書如鐵雲藏龜、鐵雲藏龜之餘、鐵雲藏龜拾遺、殷虛書契前編、殷虛書契後編、殷虛書契菁華、龜甲獸骨文字、戩壽堂所藏殷虛文字等八種。除今所據各書未有其字者重行摹錄。其餘概不收入。以免重複。

一、本編摹寫之字以拓片覆印爲準。寫本如明義士殷虛卜辭、庫方二氏所藏甲骨卜辭、戰後平津新獲甲骨集、金璋所藏甲骨卜辭、河南博物館藏甲骨文字、甲骨卜辭七集、甲骨續存下編等書雖摹寫清晰。究不如原物拓片之可信。故不予收錄。

一、本編摹寫之字所據各書。皆以原書名之一字或二字代之。詳見摹寫拓片書目。

一、每字以阿拉伯數字。注明其在某書某冊某冊某葉或某類某片。以便檢閱原片。如續一、三・十即殷虛書契續編第一冊第三頁第十片。徵二、三即簠室殷虛徵文地望第二第三片。

一、分別部居序次悉照說文解字。

一、每字前冠以大徐本說文解字篆文。及說解以資參考。

一、拓片覆印模糊之字概不摹錄。以免謬誤。

一、字之考訂。博采通人聞。或參以己意。凡所隸定。較孫氏之書。約增三百餘文。

一、造字之初。字少而文多。其後形聲相益。孳乳日繁。在甲骨文字中常見不鮮。本編於孳乳之字。不復分列。僅在原文下注明。爲某字之重文。例如妣下注明爲匕之重文。

一、說文所無之字。以其所屬部首附之於後。

一、兩字合文。或爲一辭者另輯一編作附錄一。

一、現在尚未考釋之字。無法分析其偏旁。不能歸屬於說文部首者另輯一編作附錄二。

一、卜辭中如卜貞及干支等字。幾乎每片。皆有除字形畧有變化外別無意義。故就其異體者收錄之。亦不別作索引。

一、卷首附檢字表。以供檢查。其例如下。

一、凡說文所有之字。以其筆劃多少爲序。

二、說文所無之字。以說文部首爲序。附之於後。

以下略

一、孫「海波」氏『甲骨文編』を輯めてより以來、新出の材料日に多く、考釋も亦衆し、此の編これに繼いで輯錄す、故に『續甲骨文編』と名づく。

一、凡そ孫氏已に輯むるの書は、『鐵雲藏龜』、『鐵雲藏龜之餘』、『鐵雲藏龜拾遺』、『殷虛書契前編』、『殷虛書契後編』、『殷虛書契精華』、『龜甲獸骨文字』、『戩壽堂所藏殷虛文字』等の八種なり、今、據る所の各書を除いて未だ其の字有せざる者は重ねて摹錄を行ふ。其の餘は概ね收入せず、以て重復を免がる。

一、本編摹寫の字は拓片覆印を以て準と爲す、寫本は明義士の『殷虛卜辭』・『庫方二氏所藏甲骨卜辭』、『戰後平津新獲甲骨集』、『金璋所藏甲骨卜辭』・『河南博物館藏甲骨文字』[十二]、『甲骨卜辭七集』、『甲骨續存』下編等の書の如きは摹寫清晰と雖も、究に原物拓片の信ず可きに如かず、故に予め收錄せず。

一、本編摹寫の字の據る所の各書は、皆な原書名の一字或は二字を以てこれに代ふ、摹寫拓片書目に詳見す。

一、每字阿拉伯數字を以て、其の某書某冊、某冊某葉、或は某類某片に在るを注明し、以

て原序の檢閲に便ず。續一・三・十の如きは即ち『殷虛書契續編』第一冊第三頁第十序、徵二・三は即ち『簠室殷契徵文』の地望第二、第三序なり。

一、部居を分別するの序次は悉く『說文解字』に照す。

一、每字の前冠は大徐本『說文解字』篆文を以て、說解に及ぶ。以て參考に資す。

一、拓片覆印模糊の字は概ね摹錄せず、以て謬誤を免がる。

一、字の考訂には、博く人間に通ずるを采り、或は參するに己の意を以てす。凡そ隸定する所、孫氏の書に較べ、約三百餘文を增す。

一、造字の初、字は少なくして文多し、其の後形聲相い益し、孳乳日に繁なり、甲骨文字中に在って常に鮮からず見ゆ、本編孳乳の字に、復た列を分けず。僅かに原文の下に注明し、某字の重文と爲す、例えば妣の下の注明に匕の重文と爲すが如し。

一、說文に無き所の字。其の屬する所の部首を以てこれを後に附す。

一、兩字合文。或は一辭を爲す者は另に一編に輯めて附錄一を作る。

一、現在尚未だ考釋せざるの字、其の偏旁を分析するに法無く、說文部首に歸屬する能はざる者は另に一編に輯めて附錄二を作る。

一、卜辭中の卜貞及び干支等の字の如きは幾（ほと）んど每序、皆な字形、畧變化有るを除く外は、別に意義無し、故に其の異體に就いてはこれを收錄するも、亦別に索引を作らず。

一、卷首には檢字表を附し、以て檢查に供す、其の例下の如し。

一、凡そ說文に有する所の字は其の筆劃の多少を以て序を爲す。

二、說文に無き所の字は說文部首を以て序を爲し、これを後に附す。

註「十二」　河南博物館藏甲骨文字　未見。

九四、殷代貞卜人物通考「二」

有清之季、洹水炳靈、龜文呈兆、曠代未覩、一旦發塚、並出塵埃；既補亡之取資、尤沾溉之無盡。學者鑽研其塗多方、或師汶長以考文、或類廣徵之證史、無不銳心冥索、各立傀異。自董氏貞人之說行、然後分期斷代、略有可循；而殷商遺事、晦盲否僿、近三千年莫之知者、乃得粗具端倪、浸且蔚爲顯學、亦一時之盛事也。

惟契文簡質、通讀匪易、單辭隻語、咸是碎金、人地專名、罔由尋證、自非通體董理、爬梳抉剔、而欲綜覈名實、憂乎其難。宗頤研討有年、闚測所得、竊以斷代根柢、在於卜人、分人研究、當務尤急。惟有比次其貞卜之文辭、鉤稽相關之人物、則時代序次、庶有脈絡之可尋、融會旁通、庶免枘鑿之難入；是故見夨與穷內同版、知向隸文武丁之未安、（夨與穷同版、見小屯甲二三六一；與內同版、見屯甲二三四。又屯乙五三四七穷之卜辭言：「予取夨芻」、知夨宜屬武丁時。）察泳有沚戓之貞、悟曩說第五期之難信。（庫方一五一一云：「卜泳貞：今十三月、沚戓至。」同版又見卜人亘、穷等、原物現藏大英博物院、余複勘無誤、永字旁明從水、與貞人泳同名。）凡所䚡理、稍異時賢、但求心安、非敢唐突。亦以前修未密、直綴有待、是用屬詞比事、莫憚其勞。又卜辭爲殷王室檔案、所見人物、大都王之親近、不出宗老小臣多子世婦之流、迹其名字、晦薶千載、尚書、殷本紀、竹書人表概乎未聞者歷世綿遠、凡茲鉤索、未始不可補龍門之遺、苴蘭臺之缺、紹子氏之統緒、而激一代之風烈者也。

有清の季、洹水の炳靈（あきらかなれい）、龜文兆を呈（あらわ）し、曠代「當世に並ぶものがない」未だ覩ず、一

旦塚を發いて、並びに塵埃に出づ。既に亡を補ふの資を取り、沾溉「うるほいそゝぐ」の盡きる無きを尤む。學者鑽研して其の塗（みち）多方、或は汶長「許愼」を師とし以て文を考へ、或は廣徵（束晳・『殷虛書契前編』註「二」・第一輯六七頁參見）の史を證するに類せ、銳心冥索して、各ゝ傀異を立てざるは無し。董（董作賓・『殷契書錄』註「四」・第一輯三二四頁參見）氏の貞人の說行われてより、然る後分期斷代に、略ゝ循ふ可き有り；而して殷商の遺事は、晦盲否僿（くらやみとじふさがる）、近三千年これを知るなき者、乃ち粗ぼ端倪（いとぐち）を具ふるを得、浸く且に蔚として顯學を爲さんとす、亦一時の盛事也。

惟だ契文は簡質、通讀易きに匪ず、單辭隻語は、咸な是れ碎金、人地の專名は、證を尋ぬるに由罔し、通體董理、爬梳抉剔「かきあつめえぐり出す」、而して名實を綜覈「物事を綜合して事實を考へ究める」せんと欲してするに非ざる自りは憂乎「むつかしいさま」として其れ難し。宗頤（饒宗頤・『巴黎所見甲骨錄』註「六」・本輯一八〇頁參見）研討有年、闚測して得る所、竊かに斷代の根柢を以てするに、卜人に在りて、人を分つ研究は、當務尤も急なり。惟だ其の貞卜の文辭を比次し、相關の人物を鉤稽する有れば、則ち時代の序次は、庶ねに脈絡の尋ぬ可き有り、融會旁通して、庶（こいねがは）くば枘鑿（ほぞとあな）の入り難きを免がれんことを。是の故に夨は穷・內との同版に見え、向（さき）に文武丁に隷（つな）くの未だ安んぜざるを知る、（夨と穷とは同版、小屯甲二三六一に見ゆ、內と同版、屯甲二三四に見ゆ。又屯乙五三四七穷の卜辭に言く；「予取夨芻」、夨は宜しく武丁時に屬するを知る。「三」）察するに泳に沚戓の貞ひ有り、曩の說第五期の信じ難きを悟る。（庫方一五一一に云く「卜泳貞：今十三月、沚戓至」。同版に又卜人亘・穷等を見ゆ、原物は現に大英博物院に藏す、余、復た勘して誤り無し、永字の旁は明かに水に從ふ、貞人泳と同名なり。）凡そ䚡理する所、稍、

時賢に異なり、但だ心の安きを求め、敢へて唐突に非ず。亦前修の未だ密ならざるを以て、亘綴待つあり、是れ屬詞「關係のあることばを綴り、國々の事件をならべて書く」比事を用ふれば、其の勞に懈む莫し。又卜辭は殷王室の檔案爲り、所見の人物は、大都、王の親近、宗老小臣多子世婦の流れを出でず、其の名字「名稱」を述ぬれば、千載の尚書、殷本紀、竹書、人表に晦蘊して、未だ聞かざる者は、歷世の綿邈に概るか、凡そ茲に鉤索「引き出し求める」は、未だ始めより龍門の遺を補ひ、蘭臺の缺を直ふ可からず。子氏の統緒「てがかり」を紹けて、一代の風烈を激する者也。

註二

饒宗頤氏の著で、貞人（卜人）に就いて詳細に研究した書物である。本書は廿巻より成り、巻一、前論、巻二、貞卜人物記名辭式釋例、巻三ー巻十七（貞卜人物事輯一ー一五）、巻十八、備考、巻十九、結語、巻二十、附錄に貞卜人物同版關係表、貞卜人物同辭關係表、各期貞卜事類表。別に補記をのせ、巻末に索引として人名官名索引、地名索引、祭名索引を附している。下冊の最後には英文にて各巻各章の要約をのせて便である。この書は貞人別の集説を試みまた字說にも富む。本書の中核をなすのは巻三ー巻五の貞卜人物事輯で、貞人を一一七名あげ、疑問の殘るものとして二十人を加えている。各貞人ごとに分類し、更にそのうち各卜辭內容別に分類整理し、（たとへば殼であれば卜雨、卜晴、卜風、卜夕、卜旬、卜年、卜狩、卜往來、卜夢、卜疾病、卜邑、卜祭祀、卜征伐與方國、殼卜辭所見人物、雜卜、成語に分れている）貞人の性格を究明せんとしたものである。特に注目すべき點は第五期貞人を第一期とすることである。

出版は一九五九年十一月、香港大學出版社。上下二冊。A5版。總一四二四頁。

董作賓氏の「小屯乙編序」において扶、𠂤、子、勺を文武丁期貞人とするが、貝塚茂樹氏は武丁期とする。

註三

若夫殷禮無徵、宣尼所喟。少牢特牲、乃諸侯卿士之祭、《鄭氏三禮目錄》肆獻祼享、惟周官凡目之存。杜君卿閒拾珠璣、凌次仲差具條例、欲以聚毳毛之冠、綴狐腋之裘、湮墮既多、望古興嘆而已。今者賴此契龜、粗得涯略、王賓之文、徵諸洛誥、立尸之義、同乎禮器。《立尸見乙六六九六、參本書頁二九五》八命可證大卜之篇、泣卜亦符士喪之禮、《俱詳本書前論》軒轅審兆、果見龜焦、《詳魏書諸帝子孫傳。焦即龜燋不兆也。小屯乙四八二二及四七四一有「卜燋」語、其甲面俱不見兆。》上甲作儺、載在世本、《太平御覽禮儀部引世本云：「微作儺。」》他如「不興」「惟農」之語、非易象管子莫由詳、《屯甲二一二四云：「歲卜不興、亡匄。」後編下一一、一：「歲不興、用。」易同人九三文辭：「三歲不興」語可互證。「歲由農」語、見後編上七、一一、續編二、二、一、明義士六六八。又云：「歲今農」、見明義士四六。管子五行篇云：「歲農、豐年大茂」、可爲卜辭佐證。》合邑大御之指、得春秋公羊而彌備。《小屯乙五七八三：「合邑、大御于祖乙。」即公羊大事大祫之義。》凡此之類、留心古禮、固宜講明、析疑抉隱、譬電拆與霜開、覓證尋源、每珠流而壁合、雖曰草昧之初闢、亦類涇渭之疏鑿者矣。

夫の殷禮に徵無きが若きは、宣尼「孔子」の喟く所なり。少牢特牲は、乃ち諸侯卿士の

祭《鄭氏三禮目錄〈拜經堂叢書所收〉》肆に祼享「酒を地にそそいで神を降し物を供へて神を祭る」を獻ずるは、惟だ周官凡目「綱目」の存するのみ。杜君卿「杜預」は珠璣を閒拾し、凌次仲[三]は差ぼ條例を具へ、以て毳毛「やわらかく細い毛」の冠を聚め狐腋「貴人の衣」の裘を綴らんと欲するも、湮墮「しずみうもれる」既に多く、古へを望みて嘆を興すのみ。今は此の契龜に賴りて、粗ぼ涯略を得る、王賓の文（第一輯九〇頁参見）は、諸れを洛誥に徵し、立尸の義は、禮器に同じか。《立尸は屯乙六六九六に見ゆ、本書頁二九五[四]を參せよ。》八命は太卜の篇を證す可し。泣卜[五]も亦士喪禮に符す、《俱に本書前論に詳らかなり。》軒轅兆を審にし、果して龜焦を見る。《魏書の諸帝子孫傳に詳らかなり。焦は即ち龜燋にして不兆なり。小屯乙四八二二及び四七四一に「卜燋」の語有り、其の甲面共に兆を見ず[六]》上甲は儺に作り、載せて『世本』に在り。《『太平御覽』禮儀の部『世本』を引いて云く「微、儺に作る」と。》他は「不興」[七]「惟農」[八]の語の如く、『易』は『管子』に象るに非ず詳にするに由莫し、《屯甲二一二四に云く、「歲卜不興、亡匄。」『後編』下一一、一「歲不興、用」は『易』の同人九三文辭の「三歲不興」の語は互に證す可し。「歲由農」[九]の語は、『後編』上、七、一一、『續編』二、二、一、明義士六六八に見ゆ。又云く、「歲今農」は明義士四六に見ゆ。『管子五行篇』に云く、「歲農、豐年大歲」は、卜辭に佐證を爲す可し。》合邑大[十]御の指は、『春秋公羊』を得て彌、備はる。《小屯乙五七八三の「合邑、大御于祖乙」は即ち公羊大事大祫の義なり。》凡そ此の類は、心を古禮を留むれば、固より宜しく講明し、疑を析き隱を抉くべし、譬へは電拆と霜開とは、證を覓め源を尋ぬれば、珠流れる毎に璧合す。草昧「世のひらけはじめでまだ秩序がたたない狀態」の初闢と曰ふと雖も、亦涇・渭の疏鑿「山などを切り開いて川が流れるようになる」に類する者なり。

註三

凌廷堪（一七五五ー一八〇九）字は次仲、少くして孤。江永、戴震の學を慕ひ、羣經に精通し禮に精しかった。乾隆の進士。官は寧國府教授。書室を校禮堂という。著に『禮經釋例』、『魏書音義』、『燕樂考原』等がある。（清史列傳）

註四

立尸。卜文「〔辛口卜〕穷貞立尸。辛口卜、穷貞、勿立尸。……甫羽甲申、立尸。……卜、穷貞、勿隹羽甲申、立尸。」の立尸を『禮器』にいう「夏立尸而卒祭、殷坐尸。」「周坐尸、詔侑武方、其禮亦然、其道一也」により、夏殷以來敬尸の禮ありとする。

註五

泣卜。泣卜とは「即親臨主持卜事之人。士喪禮所記爲士之卜、若天子之卜、大事由宗伯泣卜、小事則由太卜泣卜。（見周禮太卜及鄭注、賈疏。又儀禮釋官云：「族長泣卜、經即稱爲泣卜、以事目其人」）という。（『殷代貞卜人物通考』一七頁）

註六

龜焦。卜文の「迻[illegible]綸（命）」于斡、叀（惟）今龜、叀今燋（粹一一五一）の燋について「按說文「燋、灼龜不兆也。春秋傳曰『龜燋不兆』。讀若焦。」哀二年傳「卜戰、龜焦」。無「不兆」二字。又定九年傳「衛侯將如五氏、卜過之、龜焦」。魏書諸帝子孫傳「昔軒轅卜兆、龜焦」。俱借燋爲焦。廣韻字作燋、灼龜不現兆曰燋。此片龜與燋分言之。考卜辭間言灼龜不見兆之卜。屯乙四八二二殘甲右甲橋有「卜燋」二字。又同書四七四一殘甲左甲橋有「貞燋」二字、此兩版同爲第十

三次發掘所得，可以綴合，見殷綴二七七。審甲上俱無圻兆，正可證龜爲灼龜不兆之說。」と説く。

註[七]　不興。卜文の「歲卜不興」は易の同人九三爻辭の「升其高陵、三歲不興」によって證することができるとする。（『殷代貞卜人物通考』二八〇頁）

註[八]　惟農。卜文の「口卯卜、大……亦癸，歲亩農，酌。」の歲亩農について「按「歲亩農」爲卜辭成語，亦時見于旅，即之卜辭，其義向未明。考管子五行篇「歲農，豐年大茂。」从農之字皆有盛義，故歲惟農，即祝歲豐穰之意，管子蓋沿殷人習語。」（『殷代貞卜人物通考』八二〇頁）と説く。

註[九]　歲亩農。本篇註[八]參見。

註[十]　合㞢。卜文の「乙亥卜，穷貞合（祫）㞢，大甲且乙。丙子卜，穷貞，力（名卽祭）于且乙。（乜乙五七八三）の合㞢について「按此片㞢字𥁕匕（朼）形。「合」殆祫字。春秋文二年：「大事于大廟」。公羊傳「大事者何大祫也。大祫者何合祭也。毀廟之主陳于太祖，未毀廟之主，皆升合食于太祖。五年而再殷祭」。說文「祫大合祭先祖親疏遠近也。」此言「合㞢大御祖乙」爲合祭無疑。祖乙爲武丁高祖其下尚有祖辛，祖丁，陽甲諸世，當祫升而合食于祖乙也。」（『殷代貞卜人物通考』二九〇頁）と説く。

宗頤束髮受書，卽耽倉雅，慕義之心方切，淑世之術長乖；坐閱日月之馳，彌深澒洞之歎。海隅留滯，奄忽十載。中間亦曾東走扶桑，西極羅馬，曝蠹書於羽琌，索玄珠于赤水，（余於東西諸國所見甲骨，俱有載錄。于扶桑有日本所見甲骨錄，于法京有巴黎所見甲骨錄，於瑞士則有瑞士巴塞爾人種學博物館所藏甲骨考釋，於英國則有倫敦讀契記待刊，其重要者，散見本書各條下。）獨行踽踽，窺古茫茫，冥搜遐想，慚無補于時艱，饋貧課虛，味深同乎畫餅。惟是反覆龜策，耽思傍訊，非徒考史，蓋以研經，冀循此塗，參互證繹，庶幾經文可通，三禮辨秩。嘗謂不明故訓，不甄典制，不通校勘，不嫻文例，而欲尚論三古，譬諸絕潢以蘄至海，其道奚由。天下方毀經，相率侈于言史，本根之學既蹶，則皮傅奇邪之論滋起矣。餘杭章氏謂說彝器款識之極，足以覆國，慨乎其言，可勝嘆哉。

余書臚列蔦辭，有類獺祭，鉤稽名號，事等點鬼。自知緒煩而寡要，思勞而蔑功，王少石多，其瑣已甚。然而殷代荒邈，文獻不足，僅此剩文，略可徵信，故不憚覼縷，撰爲長編，以便來彥；所謂蟲繭重厚，緖其出絲，想讀者之不我譴訶也。凡予所解悟與所考論者，未敢自信其是，當俟後之匡正。惟甲骨發現，歷五十年，叢碎繁賾，散無友紀，至於今茲，乃粗具條理，此則肇于余手，其中甘苦，治卜辭者類能道之，無庸余之煩言耳。

戊戌秋饒宗頤自序。

宗頤、束髮にして書を受く、即ち倉雅に耽る。慕義「正義をしたふ」の心は方に切なり、世を淑するの術は長く乖く。坐して日月の馳するを閲みて、彌ゝ澒洞「相連なるさま」の歎きを深うす。海隅の留滯、奄忽「たちまちの意」ち十載なり。中間亦會って東のかた扶桑に走り、西は羅馬を極め、蠹書を羽琌に曝らし、玄珠を赤水に索む。（余、東西諸國に見る

所の甲骨、倶に載錄有り。扶桑において『日本所見甲骨錄』[十一]有り、法京において『巴黎所見甲骨錄』[十二]有り、瑞士に則ち『瑞士巴塞爾人種博物館所藏甲骨考釋』[十三]有り、英國に於ては則ち『倫敦讀契記待刊』[十四]有り、其の重要なる者は、本書の各條下に散見す。）獨行踽踽として、古へを窺ふこと茫茫たり、冥搜遐想し、時の艱を補ふ無きを慚ぢ、饋貧「貧乏のために食を求めること」課「仕事」虛しく、味の深きこと畫餅に同じ。惟だ是れ龜策を反覆し、耽思傍訊「深く考へあれこれと考へる」、徒だに史を考ふるのみに非ず、蓋し經を研むるを以て、此の塗に循はんことを冀ひ、參互證繹し、經文の通ず可きを庶幾ふ、三禮は秩を辨ず。嘗って謂へらく故訓に明らかならざれば、典制に甄かならず、校勘に通ぜざれば、文例に嫻はず、而して尚ほ三古を論ぜんと欲するは、諸を潢「水の深く廣いさま」を絕ちて以て蘄めて海に至るに譬ふ、其の道は奚れに由らん。天下は方に經を毀さんとす、相ひ率いて史を言ふに侈る、本根の學既に蹶づけば、則ち皮傅「深く內容を究めず、うわべを見ただけでこじつける」奇耶の論滋ゝ起る。餘杭の章「章炳麟・『殷契卜辭』註[三]・第二輯一七四頁參見」氏謂へらく「彝器款識の極を說けば、以て國を覆ふに足る」[十五]と、慨乎たる其の言、勝げて嘆く可けんや。

余の書蔦辭を臚列するは、獺祭「詩文を作るのに多くの參考書をならべて調べる」に類する有り、名號を鉤稽するは、事、點鬼「死んだ人の過去帳」に等し。自から緖め煩にして要寡なく、思ひ勞して功に蔑く、王少なく石多く、其の瑣已に甚しきを知る。然り而して殷代は荒邈にして、文獻足らず、僅かに此の剩文、略徵して信ず可し。故に覼縷を憚からず、撰して長編を爲り、以て來彥に便ずるなり、所謂蟲繭の重厚は、其の緖を出だすを稱し、讀者の我れを譴訶「とがめしかる」せざるを想ふ也。凡そ予の解悟する所と考論す

る所の者とは、未だ敢へて自から其の是を信ぜず、當に後の匡正に俟つべし。惟みるに甲骨の發現は、五十年を歷て、叢碎繁賾にして、散じて友紀無し、今茲に至り、乃ち粗ぼ條理を具ふ、此れ則ち余が手において肇まり、其の中の甘苦は、卜辭を治むる者の類ね能くこれを道ふ、余の煩言を庸ひること無きのみ。

戊戌「一九五八年」の秋、饒宗頤自から序す。

註[十一]　日本所見甲骨錄　未見

註[十二]　巴黎所見甲骨錄　本輯一七九頁參見。

註[十三]　瑞士巴塞爾人種博物館所藏甲骨考釋　未見。

註[十四]　倫敦讀契記待刊　未見。

註[十五]　章炳麟氏の『理惑論』による。

FOREWORD

The greater part of the books on the Oracle Bones that have appeared since their discovery, sixty years ago, have been compilations of inscriptions ranging from tiny fragments with a single character or part of a character, to a full-size plastron of a tortoise, or the shoulder-blade of an ox, engraved with over two hundred and fifty-three characters. With infinite care these have been transcribed, photographed, reproduced in rubbings, collated and studied, until from the whole known collection of some 100,000 fragments scattered through many lands, about 40,000 inscriptions have been numbered and recorded and made available to scholars throughout the world.

In contrast to this work of reproducing, recording and cataloguing, comprehensive studies have been comparatively few. The *Yin-hsü shu-ch'i k'ao-shih* 殷虛書契考釋 ('Interpretation of the Inscriptions from the Waste of Yin') by Lo Chên-yü 羅振玉 (1914), was the first of these, followed by the special studies of Wang Kuo-wei 王國維, which were afterwards collected in the posthumous *Kuan T'ang tsi-lin* 觀堂集林. The *Preliminary Reports on the Excavations at An-yang* 安陽發掘報告, published by the Academia Sinica 1929–1933, include numerous papers on various aspects of the newly excavated material; while the monumental *Chia-ku wên tuan-tai yen-chiu li* 甲骨文斷代研究例 ('The Method of Determining the Periods of the Oracle Bones') by Tung Tso-pin 董作賓 in 1933 was the most important comprehensive study on the Oracle Bones published in the period immediately preceding the war. During the war the chief contributions were the *Chia-ku hsüeh Shang-shih lun-ts'ung* 甲骨學商史論叢 ('Collected Essays on Shang History from the Oracle Bones') by Hu Hou-hsüan 胡厚宣, published in three series from 1944 to 1946; and the *Yin-li p'u* 殷曆譜 ('The Calendar and Chronological Studies of the Yin Dynasty') by Tung Tso-pin published in 1945. After the war much valuable material collected by Hu Hou-hsüan was published on the Mainland, and a complete corpus of inscriptions on Oracle Bones excavated at An-yang was published in four volumes by

The divination ritual is discussed in relation to the divination rules preserved in the three Ritual Books, *I-li* 儀禮, *Chou-li* 周禮, and *Li-chi* 禮記, and others of the Chinese Classical books, each throwing light upon the other. Although compiled at a later date, the Ritual Books, as can be seen from resemblances on the Oracle Bones, are based upon ancient rites and usages derived from the dawn of Chinese history. The Oracle Bones thus provide the evidence for the 'rites of Yin' that Confucius admitted was lacking in his day. Similarly, in his study of the 'idioms and phrases' used by the different diviners, the author has revealed resemblances to the style of the Classical books that increase our confidence in the antiquity of the sources from which those books are derived.

Thus, this book of 1,400 pages, which might appear at first sight to be but a compendium of oracular sentences, many of which are in a fragmentary condition, is in reality a valuable source book for a systematic study of the Oracle Bones in relation to the Classical books, and does in fact provide in a convenient form a basis for the critical study of Yin dynasty history, society, and religion.

Mr Jao, who is a lecturer in Chinese literature at the University of Hong Kong, is peculiarly well fitted for this task. Ranging wide in his studies since his earliest days, he has for ten years devoted a large part of his energies to the study of the Oracle Bones, upon which he has already published a number of important papers, of which the following may be mentioned: *Oracle Bones in Collections in Paris* 巴黎所見甲骨錄, Hong Kong, December 1956; 'Oracle Bones in Japanese Collections' 日本所見甲骨錄, *Journal of Oriental Studies*, Volume III, No. 1 University of Hong Kong, January 1956 (published in June 1957); 'Some Oracle Bones in Overseas Collections' 海外甲骨錄遺, *Journal of Oriental Studies*, Volume IV, Nos. 1 and 2, University of Hong Kong (in the press).

In addition, Mr Jao is at present preparing for publication an encyclopaedic work on the 'Interpretation of the Divination Sentences': *Pu-tz'ŭ i-chêng* 卜辭義證.

the Academia Sinica, now in Taiwan, between 1948 and 1953 (*Hsiao-T'un: Inscriptions* 小屯 殷虛文字). This recently published material has made available new sources for further study, of which Mr Jao has taken full advantage to produce a work on different lines from any followed so far.

To the present time no scholar has made a comprehensive study of the persons whose names appear on the Oracle Bones in connection with the divination ritual, that is to say, the actual diviners whose names are recorded in the divination inscriptions as officiating at the divination ceremonies.

This task has been undertaken by Mr Jao Tsung-i. Mr Jao has listed some 130 names which appear in all some 10,000 times on the Bones, being all names of persons, other than the King himself, participating in the divination ceremonies. Some occur only once or only a few times; some as many as 2,000 times or more. Collecting and transcribing every one of the sentences in which these names occur, Mr Jao has been able to present a picture of the activity of the diviners of the Yin dynasty, from the reign of Wu-ting 武丁 to the end of the dynasty.

The period in which some of these persons lived is determined, by the appellations with which they address the deceased ancestors, to belong to the reigns of certain monarchs. The dating of the remainder is deduced by their association on the Oracle Bones with those of known date. Thus a large number of inscriptions, hitherto undated, is brought into the datable sphere.

The inscriptions in which the names of these diviners occur are arranged first under the names of the persons concerned, and next under the matters in connection with which they were called upon to divine: 'the weather', 'the evening', 'the decade', 'sacrifices', 'coming and going', 'military expeditions', 'outlying regions' etc., a survey of which is sufficient to reveal the matters which were of daily concern to the Yin people. A convenient summary of these for Western readers can be seen in the list of *Contents*, given in English at the end of the work.

In all these studies Mr Jao Tsung-i has combined a capacity for tireless work and comprehensive outlook with extraordinary exactitude and infinite attention to detail.

We wish to acknowledge with gratitude a generous grant from the Trustees of the Harvard-Yenching Institute by which the publication of this important work has been made possible.

F. S. Drake

University of Hong Kong
14th July, 1959

六十年前の卜辭の發見以來發表された、それらに關する書物の大部分は、一つの文字か或いは一文字の部分からなる小さな斷片から、二五三字以上も雕られた龜の腹甲の完全な形のものや牛の肩甲骨にいたるまでの銘の編集であった。細心の注意をもってこれらは轉寫され、寫眞にうつされ、すり寫しで再生され、對照されて研究された。そして遂に各地に散らばっている約十萬の既知の全斷片から總計約四萬の銘の數に達し記錄されて世界中の學者に利用されるようになった。

この再生の仕事とは對照的に、記錄や分類、比較の研究は比較的少ない。羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註[八]・第一輯一一頁參見）の『殷虛書契考釋』はこれらの最初のものであった。それに王國維（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註[三十三]・第一輯一〇一頁參見）の特別研究が續いた。そしてそれらは後になって著者の死後出された『觀堂集林』[十六]に集められた。Academia Sinica［中央研究院歷史語言研究所］一九二九－一九三三に發表された『安陽發掘報告』[十七]は新しく發掘された資料のあらゆる面に關するおびただしい論說を含んでいる。一九三三年董作賓（董作賓・『殷契書錄』註[四]・第一輯三二四頁參見）によって書かれた『甲骨文斷代研究例』（第二輯一頁參見）は戰爭にすぐ先立つ時期に出版された卜辭に關する一番重要な比較研究であった。戰爭中においては主な貢獻物には一九四四年から一九四六年にかけて三回の續き物で出版された。胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註[八]・第三輯一三四頁參見）によって書かれた『甲骨學商史論叢』（第三輯二〇一頁參見）や一九四五年に出版された董作賓の『殷曆譜』（第三輯二八六頁參見）があった。戰後胡厚宣によって集められた多くの貴重な資料は中國大陸で出版された。そして安陽で發掘された卜辭に關する銘の完全な集成が一九四八年と一九五三年の間に今は台灣にある

Academia Sinicaによって四冊で出版された[十八]。この最近出版された資料は將來の研究に新たな拠りどころを提供した。そして饒氏は今までに起ったあらゆるちがった方面での研究を示すためにそれを十分活用した。

現在に至るまで占いの儀式と關連して卜辭にその名前が表われている人々、つまりその名前が占いの儀式で式を司どったものとして、占いの銘に記錄されている實際の占い者の人々の比較研究をした學者はひとりもいない。

この仕事は饒宗頤氏によって行なわれた。饒氏は卜辭に全部で約一〇〇〇回あらわれているおおよそ百三十の氏名を目錄にした。そしてそれらは卜占の儀式に參加した王自身とは別な人々のすべての氏名であった。あるものは僅か一回か二・三回出てくるし、或るものは二〇〇回かそれ以上もでてくる。これらの名前がでてくる文章の一つ一つを集め轉寫した時に饒氏は武丁の支配から殷王朝の終りまでの殷朝の占者の活動の姿を提示することができた。

これらの人々のあるものが生きた時代は、彼らがある君主の支配に屬していることを死んだ先祖にのべている稱謂によって決められる。殘餘の年代記入は知られている時代の卜辭とそれらに關連あるものの結合によって推論される。かくして今まで時代不明の銘は年代推定可能な範圍内にもちこまれている。

これらの占い者の氏名が出て來ている銘は、最初、關係ある人々の名前の下に整理され、そして次に彼らが予言するように求められたものに關連ある事件のもとに整理されている。すなわち、天候、宴會、十年間、いけにえ、出生と死去、軍征、中央を離れた地域など、こうしたものを觀察すれば、殷の人々が日々關心をもっていたものごとを十分知りうる。

西洋の讀者へのこれらの便利な要約は、その作品の卷末に英語でしるされた要旨一覽表で理解することができる。

卜占の儀式は、三冊の儀禮の書物、儀禮、周禮、禮記とほかの中國古典の書物に保存されている卜占の儀式とを關連して檢討される。そして各々が他のものを補足說明している。のちの時代に編集されたけれども、卜辭に關する類似性から知られるように、儀禮の書物は、中國の歷史の黎明期にさかのぼっている古代の儀式や慣習に基いている。かくして卜辭は孔子が彼の時代に不足していると認めていた殷の儀式に對する證據を與えた。同じように、いろいろな占者によって使用された慣用的な言葉や文句の研究の中で著者はこの古典の書物の文體の類似點を明らかにした。そしてそれらが、これらの書物がでてきた出所の古さを我々に益々確信させる。

かくして千四百頁のこの本は、一見したところでは託宣の文章の要約だけであるように見えるかもしれないし、その文章の多くは斷片的狀態にあるが、實際は古典の書物に關連ある卜辭の體系的研究のための價値ある原典である。そして事實殷王朝の歷史、社會、そして宗教の批判的研究のための根據を簡便な型式で提供している。

饒氏は香港大學の中國文學の講師であるが、この仕事に特に最適である。彼はその初期の時代以來研究分野が廣い範圍にわたっているが、卜辭の研究に十年間自分の精力の大部分を捧げてきた。そしてそれに基づいて彼はすでに幾らかの論文を發表している。その中で次のもの、『巴黎所見甲骨錄』（一九五六年十二月、香港）『日本所見甲骨錄』（一九五六年一月香港大學Journal of Oriental Studiesの第三卷のVol 1）一九五七年六月に出版それに『海外甲骨錄遺』[十九]（香港大學第四冊 Vol 1 と Vol 2）などがあげられるだろう。

加えて饒氏は目下『卜辭義證』[二十]に關する百科事典的な研究の出版を準備中である。

これらすべての研究の中で、饒宗頤氏はたゆまない著述と廣範圍な展望に對する能力を非常な正確さと微に入り細にわたる大變な注意力に結びつけた。

この重要な著作の出版を可能にしてくれたハーバード・燕京のInstituteの評議員からの寛大な認可に我々は心からの感謝を表明したい。

F. S. Drake[二十一]

香港大學　一九五九年七月十四日

[十六] 『觀堂集林』に收める王國維の甲骨關係の論文は「說珏朋」、「釋昱」、「釋物」、「釋西」、「釋旬」、「釋史」、「釋禮」「釋辥」、「說耿」、「釋天」、「古史新證」、「殷虛卜辭中所見地名考」、「殷卜辭中所見先公先王考」、「殷卜辭中所見先公先王續考」「殷先公先王考附注」、「殷周制度論」、「殷禮徵文」、「殷虛甲骨文字及書目」、「隨庵所藏殷虛文字跋」である。

[十七] 『安陽發掘報告』　この報告書は安陽の發掘を主にしたもので李濟主編で、その報告論文は殆んど董作賓氏の筆でしめられている。發刊は民國十八（一九二九）年十二月より二十二（一九三三）年六月に至る四冊で上海中央研究院歷史語言研究所專刊である。

[十八] アカデミア・シニカによって四冊出版。小屯甲編、乙編上・中・下四冊をいうのであろう。

[十九] 『海外甲骨錄遺』饒宗頤撰。本輯四四頁參見。

[二十] 『卜辭義證』饒宗頤撰。未刊？

[二十一] F.S. Drake 傳未詳。

例言

現存數萬片甲骨刻辭，以貞卜者性質而論，大別可分爲三類：一爲王自卜者，一爲卜人記名者，一爲不記名者。其卜人記名約占全數三分之一，本書卽專從卜人記名之刻辭加以研究。如武丁時卜人殻，本書所采輯卽有二千餘條，幾與「殷虛書契」一書相埒。

治卜辭者，無不盛言分期，因有所謂「斷代」及「分派」二種方法，然分派必以斷代爲依據，斷代則以貞卜人物及其對先王稱謂爲區劃標準。過去甲骨學者，于卜人之探索，往往僅擧一二事以示例，未能將刻辭所見之卜人，通體董理，以故斷代標準不能確立。卽偶有揭出者，大都以偏槪全，衡之他辭，動多乖牾。鄙見無論「斷代」「分派」，必先以分人研究爲基礎，本書之作，卽在提出卜辭之「分人研究法」，使有卜人記名之刻辭，得一綜合之整理。

本書所謂「貞卜人物」，乃指前辭記名之「卜某」及「卜某貞」一類之人物。舊目之爲貞人，然間多省略「貞」字，而「貞人」一詞，舊籍罔徵，故茲改稱曰「貞卜人物」。（「貞」「卜」二字連言，見左傳哀十七年云「衞侯貞卜。」）凡刻辭所見卜人記名，爲例綦繁，別爲釋例一篇，以論究之。

貞卜事項，周禮八命，不出天象人事兩大綱，而「國之大事，在祀與戎」，殷人亦不能外，故此兩類所見特多。祖甲以來，時占則卜夕卜旬，賓祭則夕禘禰禘，尤更僕難數。今不避稠疊，幷爲臚列，凡貞卜之事，謹依類詮次，殷禮可徵，其在茲乎。

卜辭所見人物，若侯、伯、子、婦、小臣、方國君長，多與卜人有關，若此之倫，別爲綴粹考證，撰成外編，將與本書相輔而行。本書則但于卜人事類中擧出同辭人物之名號，及所見書名葉數，以備鉤稽，而免繁冗。

卜辭簡質，通讀維艱，本書擬錄各辭，審釋句讀，隨文闡義，多出己見，揚搉論定，尚待

方來；其參采前修近賢之說，則揭明所出，不敢攘善，惟通訓則從略，但甄采精要，于異說不復繁陳，用祛紛糾之病。（至于句讀方面，學者每於句末，不理是否卜問，一律加上疑問號，今則但作斷句，以求矜愼。）

讀契之事，校勘爲先。綜其大要，約有兩端：一曰原物對勘，一曰同辭互勘。余于金璋方法歛諸摹本，曾就大英博物院、劍橋大學圖書館、瑞士巴塞爾人種學博物館（卽德國衞禮賢舊藏）所藏者，加以覆勘，頗有發正，如泳廌改屬武丁時，卽其一例也。至於同辭互見之版，甲骨著錄書，比比皆是。有同書重出者，（如前編四、三六、五與六，兩片上下自重。）有同片而重出凡四次者，（如鄴中片羽初集下三三、八，又見于雙劍誃一二八，京津三三二六及續存下六六三等。）紛紜難究。大抵摹不如拓，拓不如影，參互比勘，是在乎善讀之士。

本書于重出之片，不殫繁瑣，詳爲注明，或于契學，不無涓埃之助。

龜甲古脆，出土卽遭斷碎，彌增斷爛之憾，于是綴合工作尚焉。自觀堂開其端，至于近世，若曾氏（殷契綴存、綴合編）郭氏、李氏（殷虛文字綴合）張氏（小屯兩編）皆顓門之業，前人之勞，後人之逸，裨益無窮，今多據取。間亦有一二新綴，或舊綴未安者，不敢強從，幷爲注出，用資考校。

治卜辭者，類多注重年世，武丁祖甲，享年尚永，至於廩辛康丁，則皆短祚，（據今本紀年，廩辛四年，康丁八年。）卜人之高壽者，何嘗不可綿歷數世；倘欲區別某某爲某王之人，事甚困難。其或以字形成語，摭摘立證，每乖通達之義；今但列其事實，不欲妄斷。至若以事繫年，董氏曆譜，間有比次，偶爲附記，以資參考，而俟論證。

殷代祭祀之制，卜辭所載，稍存梗槪，如七甲連續之祭、歲事之祭，皆犖犖大端，而名目繁多，或欲納爲五種祀典，苟廣觀旁求，則知非此所能畢賅者。其祭法祭統，較之周禮，其

間損益之跡，猶灼然可稽。本書於殷周禮制異同，多隨文診發，庶幾卜辭與經籍，有參互證驗之功。

刻辭有但記「卜某」，而他處不見「貞」字，末由確定爲卜人與否者，僅依存疑之義，不欲删剟，姑列于備考中。

大龜巨骨，所鐫刻者，往往占卜不止一人，其同版及同辭所見卜人，卽爲同期之明證，除于卜人各條下分述外，別爲兩表于卷末，以備稽覽。

甲骨叢殺，雜處各方，匃集非易。治此學者，寶其涓滴，有同瑾瑜，傳拓之勤，嘉惠來學。本書于有卜人記名之殘碎各辭，雖僅存一二字者，亦爲摭拾；明知榛楛不汰，蕪濫可譏，而歸納條繫，標注出處，期不負前賢蒐討之心，而爲後人省尋檢之勞，區區微意，覽者或有取焉。

現存の數萬片の甲骨刻辭は、貞卜者の性質を以て論ずれば、大別して分ちて三類と爲す可し；一は王自ら卜する者爲り、一は卜人名を記す者爲り、其の卜人記名は約全數の三分の一を占む。本書は卽ち專ら卜人記名の刻辭に從り加ふるに研究を以てす。武丁時卜人殻の如きは、本輯に采轉する所は卽ち二千餘條有り、幾んど『殷虛書契』の一書と相い埒（ひと）し。

卜辭を治むる者は、盛んに分期を言わざるは無し。所謂「斷代」及び「分派」の二種方法有るに因る。然れども分派は必ず斷代を以て依據と爲す、斷代は則ち貞卜人物及び其の先王に對する稱謂を以て區劃の標準と爲す。過去の甲骨學者は、卜人の探索において、往往僅かに一二の事を擧げて以て例を示すのみ、未だ將に刻辭に見ゆる所の卜人を將って、體を通じて理を董（ただ）す能はず、故を以て斷代の標準確立する能はず。卽ち偶ま揭（かか）げ出だす者

有れば、大都（おおむね）偏く全てに概（おお）るを以て、これを他辭に衡（はか）れば、動（やや）もすれば乖牾「うらはらでちぐはぐ」多し。鄙見は「斷代」「分派」に論無く、必ず先づ分人研究を以て基礎と爲す、本書の作は、卽ち卜辭の「分人研究法」を提出し、卜人記名の刻辭をして、一綜合の整理を得ることと有らしむるに在り。

本書の所謂「貞卜人物」は、乃ち前辭に名を記すの「卜某」及び「卜某貞」一類の人物を指す。舊（もと）と之を目して貞人と爲す。然れども間、「貞」字を省略すること多し。而るに「貞人」の一詞は、舊籍に徵する罔し、故に茲に改稱して「貞卜人物」と曰ふ。（「貞」「卜」二字は連言、『左傳』哀十七年に見え云く「衞侯貞卜」と。）凡そ刻辭に見れる所のト人は名を記し、例、綦（きはめて）繁ん爲り、別に釋例一篇を爲り、以てこれを論究す。

貞卜事項は、『周禮』八命に、天象人事兩大綱を出ださず、而るに「國の大事は、祀と戎に在り」と、殷人も亦外なる能はず、故に此の兩類見る所特に多し。祖甲以來、時の占いには則ち卜夕卜旬し、賓祭には則ち夕（ゆふべ）に禘し禰「父のみたまや」に禘し、尤も更僕「侍御の人を更代させる」數へ難し。今、稠疊「しげく重なる」を避けずに、幷せて臚列を爲す、凡そ貞卜の事、謹んで類に依りて詮次し、殷禮徵す可し、其れ茲に在る乎。

卜辭に見る所の人物は、侯、伯、子、婦、小臣、方國、君長の若く、多く卜人と關わり有り、此くの若きの倫（たぐひ）は、別に綴粹考證を爲し、撰して外編を成す、將に本書と相い輔けて行ふ。本書は則ち但（ただ）卜人の事類中に同辭人物の名號及び見る所の書名の葉數を擧出し、以て鈎稽に備へて、繁冗を免（まぬ）がる。

卜辭は簡質、通讀維れ艱なり、本書は各辭を撮錄し、句讀を審釋し、文に隨ひて義を闡（ひら）き、多く己見を出だす、揚搉論定し、尚ほ方來に待つ；其の前修近賢の說を參采し、則ち

揭げて出だす所を明にし、敢へて攘善せず、惟だ通訓には則ち略に從ひ、但精要を甄采し、異説においては復た繁（おお）く陳べず、用って紛糾の病を祛（はら）ふ。（句讀の方面に至って、學者毎（つね）に句末に於て是否の卜問を理（はか）らず、一律に疑問の號を加上す。今、則ち但斷句を作り、以て矜愼を求む。）

契を讀むの事は、校勘を先と爲す。其の大要を綜れば、約兩端有り：一に原物の對勘を曰ひ、一に同辭互勘を曰ふ。余は金璋（金璋・『五十年甲骨學論著目』註[十八]・第四輯三四八頁參見）・方法斂（方法斂・『殷虛文字甲編』註[十八]・第四輯三六頁參見）の諸摹本において、曾って大英博物院、劍橋大學圖書館、瑞士巴塞爾人種博物館（即ち德國の衛禮賢[三十二]藏）の藏する所の者に就いては、加ふるに覆勘を以てし、頗る發正有り、泳は應に改めて武丁時に屬すべきとするが如きは、即ち其の一例也。同辭互見の版に至って、甲骨の著錄書は、比比として皆な是なり。同書重出に有る者は、（前編四、三六・五と六、兩片上下自ら重なる。）同片に有って凡そ四次重出する者は、（『鄴中片羽初集』下三三・八の如く、又『雙劍誃』一二八、『京津』三三二六及び『續存』下六六三等に見ゆるが如し。）紛紜究め難し。大抵摹[模寫]は拓[拓本]に如かず、拓は影[影印]に如かず、參互比勘、是れ善くこれを讀むの士に在り。本書重出の片においては、繁瑣を殫（つく）さず、詳に注明を爲す、或は契學において涓埃[細い流れとちり]の助け無くんばあらず。

龜甲古く脆（もろ）し、出土すれば即ち斷碎に遭ひ、彌〻斷爛の憾を增す、是において綴合工作これを尚ぶなり。觀堂（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註[三十三]・第一輯一〇一頁參見）より其の端を開き、近世に至る、曾氏（曾毅公・『甲骨叕存』註[三]・第三輯一一〇頁參見）の（『殷契叕存』、『綴合編』）郭氏（郭若愚・傳未詳）李氏（李學勤?・傳未詳）（『殷虛文字綴合』）張氏（張秉權・『殷虛文字甲編』註[七]・第四輯八頁參見）（『小屯丙編』）の若きは、皆な顓門の業、前人の勞、後人の逸、裨益窮まり無し、今、摭取多し。間〻亦、一二の新綴有り、或は舊綴未だ安んぜざる者は、敢へて強ひて從わず、幷に注出を爲して、用って考校に資す。

卜辭を治むる者は、類むね年世を注重すること多し、武丁祖甲、享年尚永く、廩辛、康丁に至っては、則ち皆な短祚[在位年限の短いこと]（『今本紀年』に據れば、廩辛四年、康丁八年。）卜人の高壽は、何ぞ嘗って數世を綿曆[長く續くこと]すべからざるや、倘し某某を區別して某王の人爲らんと欲せば、事甚だ困難なり。其れ或は字形の成語を以て、掎摭して證を立つるに、每に通達の義に乖（そむ）く、今、但其の事實を列し、妄りに斷ずるを欲せず。事を以て繫年するが若きに至っては、董氏の『殷曆譜』に、間〻比次有り、偶附記を爲り、以て參考に資して、論證に俟つ。

殷代祭祀の制は、卜辭に載する所、稍梗概を存す、七甲連續の祭、歲事の祭の如きは、皆な犖犖大端にして、名目繁多なり、或は納れて五種祀典を爲らんと欲し、苟しくも廣觀旁求すれば、則ち此れ能く畢（ことごと）く該（おお）う所の者に非ざるを知る。其の祭法祭統は、これを周禮に較ぶれば、其の間損益の跡は、猶灼然として稽ふ可し。本書は殷周禮制の異同に於て、多く文に隨ひて診發す、卜辭と經籍とに、參互證驗の功有らんことを庶幾（こいねが）ふ。

刻辭に但「卜某」と記すのみにして、他處に「貞」字を見ざるもの有り、確定して卜人と爲すと否（しか）らざる者と爲す、僅かに存疑の義に依り、刪削を欲せず、姑く備考の中に列す。

大龜巨骨に、鐫刻する所の者は、往々にして只卜一人に止まらず、其の同版及び同辭に見る所の卜人は、即ち同期の明證を爲す、卜人各條下に分述するを除くの外は、別に兩表

を卷末に爲り、以て綜覽に備ふ。

甲骨の叢類は、各方に雜處し、匈集易きに非ず。此の學を治むる者は、其の涓滴を寶とし、瑾瑜に同じき有り、傳拓の勤、來學に嘉惠す。本書は卜人記名を有するの殘碎各辭においては、僅かに一二字を存する者と雖も、亦摭拾を爲す；明かに搜括汰らざるを知る、蕪濫[みだれる]して識る可し、而して條繫に歸納し、出處を標注す、期に前賢蒐討の心を虧（か）かざるを期し、而して後人の爲に尋檢の勞を省く。區々たる微意覽る者は或は焉れを取る有らん。

註[三十二] 衛禮賢 Richard. Wilhelm ドイツ人で中國で宣教師を務めたまた中國學者でもあった。彼の收藏品は"THE SEVEN COLLECTIONS"のWILHELM COLLECTIONSとして收錄されている。

九五．殷虛文字甲編考釋〔一〕

殷虛文字甲編，是民國二十四年秋天編定的。可是，由於戰亂的關係，經過三次付印，直到三十七年四月，才得出版。從編定到出版，歷時十三個年頭。那些一波三折的情形，在董彥堂先生的自序裏，已經慨乎言之了。

當初的計劃，本打算着甲編和甲編考釋同時出版。後來因為胡厚宣君只作甲編的釋文，沒作考證；不久他又離所他就。考釋工作既沒有完成，所以先印了甲編的圖版。而且，甲編出版之後不到半年，戰禍又熾，中原鼎沸。經過多次播遷而喘息甫定的史語所，又遷移到臺灣。所裏的全部圖書和標本，都堆積在楊梅鎮中一個倉庫裏。箱篋充棟，沒有隙地，自然無法開箱工作。民國四十三年冬天，史語所又遷到南港，才漸能開箱工作。而研究工作的全面展開則是在四十四年秋天李濟之先生接任所長之後。於是擱置了多年的甲編考釋工作，也於此時計劃着恢復。

在未作考釋之前李濟之先生命我先作拼綴工作。希望把可能拼合的甲骨，儘量拼合起來，然後傳拓付印，附於考釋之後。這是一個非常化費時間的工作。那時，我是以兼任的名義，每星期來所兩天，專門從事於拼綴工作。這樣工作了近乎兩年，拼合的進度，還不到全書的三分之一。四十六年夏，改在本所專任，工作的時間較多，拼合的進度稍快。又因為胡占魁兄助我工作了兩個多月，終於在四十七年底，才全部拼合完畢。

拼綴工作的甘苦，不是局外人所能想像得到的。每次擺出了幾百片甲骨之後，便凝神注目地去尋找它們的〝姘頭〞。有時聚精會神地看上幾天，而結果卻一無所獲。但有時卻於無意之中，拼合起一版來。〝衆裏尋他千百度，驀然回首，那人只在燈火闌珊處〞。辛稼軒的詞

句，正可以替拼綴甲骨的情景寫照。當在〝衆裏尋他〞時，那種焦急的心情，不知曾經多少次搔首蹙額，但當忽然拼到一版的時候，那種愉快的心情，又簡直地會使人不知手之舞之足之蹈之了。

拼綴的結果，共得到二二三版。其中的十六版，是全用甲編未著錄的甲骨碎片拼合而成的。它們雖被綴合，但大多數仍無足取。因而本編只拓印了其中的四版，另外的十二版，就沒收入本編。故本編著錄了新綴合的甲骨，是二一一版。（另有補遺十版，未計入。）這二一一版當中，包括着：根據新獲卜辭寫本拼合的二版（殷虛文字綴合已著錄），根據董彥堂先生所拼合的七版（其中六版殷虛文字綴合已著錄），根據嚴一萍君所拼合的六版（其中一版殷虛文字綴合已著錄），完全採用殷虛文字綴合的七十四版，因殷虛文字綴合而有所增補的十四版，取用嚴一萍君增補殷虛文字綴合的二版。除了上述的情形之外，本編所收這次新拼綴的甲骨，不過一〇六版而已。

關於殷虛文字綴合一書，這裏也值得一提。這書屬於甲編部分的，共綴成一一二版。其中因襲新獲卜辭寫本的二版，因襲董、嚴兩家所綴合的共七版，可以逕接而不相連屬的三版（本編未採用），以上共計是十二版。下餘的一〇〇版之中，已確定它是拼錯的計十一版，可能是拼錯的一版。它們的號碼如下：

甲、確知拼錯的：

一九九（一・〇・〇四一三）＋二七一（一・〇・〇四九三）
二四七（一・〇・〇四六六）＋二七七（一・〇・〇五〇三）＋二七八（一・〇・〇五〇五）
三一〇（一・二・〇〇一六）＋二二四二（三・二・〇〇〇四）
四四九（二・〇・〇〇〇二）＋四五〇（二・〇・〇〇〇三）

四九〇（二・二・〇〇〇一）＋四九五（二・二・〇〇〇三）
五八四（二・二・〇一三六）＋七九五（二・二・〇四一一）
九五九（三・〇・〇〇四七）＋九六三（三・〇・〇〇五一）
一一六七（三・〇・〇四八六）＋二〇二九（三・〇・一七四四）
二二四四（三・二・〇〇〇六）＋二六六三（三・二・〇五六〇）
三〇一一（四・〇・〇〇七二）＋三〇三二（四・〇・〇〇九八）
三一四九（四・〇・〇二三四反）＋三三二〇（四・〇・〇七三九）

乙、可能拼錯的：

二七九九（三・二・〇七三一）＋佚存二五七＋佚存二六六

證明它們被拼錯的理由，是：骨（包括甲）版厚薄不同，或骨質堅朽各異，或部位不合。而最重要的條件，則是骨縫不能密接。拿一〇〇和十一來比，它的拼錯率達百分之十一。這對於以拓片或影摹本互相拼合的甲骨學者，實在是一個嚴重的警告。因為，如果稍一大意，便有偽造史料的危險。

『殷虛文字甲編』（『殷虛文字甲編』註〔一〕・第四輯七頁參見）は、民國二十四「一九三五」年秋に編定されたものである。しかしながら、戰亂の關係によって、三度の印刷を經過して、三十七「一九四八」年四月にいたって、やっと出版を得た。編定してより出版にいたるまで、時を歷ること十三ケ年。それら一波三折「事にいろいろ變化や問題がおきること」の事情は、董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）先生の自序でもあるように已にこれは言はれている。

當初の計劃は、もともと『甲編』と『甲編』の考釋を同時に出版するつもりであった。胡厚宣（胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註〔八〕・第三輯一三四頁參見）君はただ甲編の釋文を作り、考證を作らなかった。まもなくして彼はまた彼の從事するところを離れた。考釋の作業は未だ完成していない。だから先づ『甲編』の圖版を印刷するのである。そのうえ、甲編出版ののち半年にいたらないで、戰禍はまたさかんで、中原に鼎沸した。何度もさまよい遷って、喘息はじめて定った史語所は、また臺灣に移った。所の全部の圖書と標本は、みな楊梅鎮中の一つの倉庫に積み上げられた。箱篋は棟に充され、空地もなく、もとより箱を開いて作業する方法がなかった。民國四十三「一九五四」年冬の日、史語所はまた南港に遷りはじめて漸やく箱を開く作業をすることができた。而して研究作業は全面的に展開されたのは、則ち四十四「一九五五」年の秋、李濟（李濟・『卜辭通纂』註〔四十六〕・第二輯一四九頁參見）先生の所長就任ののちである。ここにおいて多年に放置された甲編考釋の作業は、また此の時には計劃は恢復した。

未だ考釋しない前に李濟先生は私に先づ拼綴の作業をするように命ぜられた。拼合できる甲骨を、できるだけ拼合し、然るのち傳拓し印刷して、考釋の後に附すことを希望した。これは非常に時間のかかる作業である。あの時、私は兼任の名義であったので、毎週二日「史語」所にきて、專門の拼綴の作業に從事した。この樣にして二年近く仕事をしたが、拼合の進度は、また全書の三分の一にもいたらなかった。四十六「一九五七」年の夏に、改めて本所の專任となり、仕事の時間は比較的に多く、拼合の進度は稍く快くなった。また胡占魁〔二〕兄が私の仕事を二ケ月以上助けてくれ、終に四十七「一九五八」年末に出來、やっと全部の拼合がおわった。

拼綴作業の甘苦は、局外の人ではよく想像することも出來ない。每回幾百片かの甲骨をならべて、便に神經を凝らして注目してそれらの「拼頭」（卜片と卜片のあうもの？）を尋ねさがした。時には精神を集中して幾日見ても、一つも獲る所のものはなかった。ただ時には反って無意の中に、一版の拼合が出來た。『衆くのものを千百度さがした。莫然として首を回らして、あの人はただ燈火闌珊の處にあり』と。「辛稼軒」の詞句は〔三〕、正に以て甲骨を拼綴する情景の為に描かれた。當に「衆くの中でそれをさがす」の時には、例のいらいらする心がどれほど思案したか知れない。ただ忽然として一版がつなぎ合わさった時は、あの種の愉快な氣持は、全く人をして手を舞はし足を蹈むことさえ知らないようにさせた。

拼綴の結果全部で二二三版を得た。其の中の十六版は、すべて『甲編』未著錄の拼合を用いて出來たものである。ただ大多數は仍ち取るに足らないものである。それらは綴合されたけれども、ただその中の四版を拓印した。外の十二版は、就ち本編には收めていない。故に本編は新しい綴合の甲骨を著錄し、二一一版である。（補遺十版あり、まだ數に入れていない）この二一一版の中には、『新獲卜辭〔寫本〕』にもとづいて、拼合した二版（『殷虛文字綴合』は已に著錄〔四〕）、董彥堂先生にもとづいて拼合した七版（そのうち六版は『殷虛文字綴合』に已に著錄〔五〕）、完全に『殷虛文字綴合』の七十四版を採用して、『殷虛文字綴合』によって增補する所の十四版、嚴一萍（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註〔四十三〕・第一輯三九頁參見）君の『殷虛文字綴合』に增補した二版〔六〕を取用した。上述の事情の外を除いては、本編に收める所のこの次の新しい拼綴の甲骨は、一〇六版に過ぎない。この書は『甲編』の部分に『殷虛文字綴合』に關する書もこれまた一提に値いし得る。

屬し、全部で綴って一一版できた。其のうち『新獲卜辭寫本』の二版を因襲し、董「作賓」・嚴「一萍」両家の綴合する所は計七版を因襲する。以て遙かにつなぐべきだが相い連屬しない三版（本編では未だ採用しない）以上合計十二版である。下の餘りは一〇〇版の中、已にそれが誤っているものは計十一版、能くつなぎ間違いするもの一版である。それらの番號は下の如し。

甲、確かにつなぎ間違と知られるもの。

一九九（一・〇・〇四一三）＋二七一（一・〇・〇四九三）
二四七（一・〇・〇四六六）＋二七七（一・〇・〇五〇三）＋二七八（一・〇・五〇八）
三一〇（一・二・〇〇一六）＋二四二（三・二・〇〇〇四）
四四九（二・〇・〇〇〇二）＋四五〇（二・〇、〇〇〇三）
四九〇（二、二・〇〇〇一）＋四九五（二、二、〇〇〇三）
五八四（二、二・〇一三六）＋七九五（二・二・〇四一一）
九五九（三・〇、〇〇四七）＋九六三（三・〇・〇〇五一）
一一六七（三・〇・〇四八六）＋二〇二九（三、〇、一七四四）
二二四四（三、二・〇〇〇六）＋二六六三（三・二・〇五六〇）
三〇一一（四・〇、〇〇七二）＋三〇三二（四・〇、〇〇九八）
三一四九（四・〇、〇二三四の反）＋三三二〇（四・〇・〇七三九）

乙、つなぎ間違いのありうるもの

二七九九（三、二・〇七三一）＋佚存二五七＋佚存二六六

それらのつなぎ間違われる理由を證明すれば、すなわち骨（甲に包括）版の厚薄が同じ

でなく、或は骨質の堅朽が各々異なり、或は部位は合わないもの、而して最も重要な條件は、則ち骨縫が密接であり得ない。一〇〇と十一とを比べて見ると、そのつなぎ間違いの率は百分の十一に達する、これは拓片或は影摹本で互いに相い拼合した甲骨學者に對して、實に一つの嚴重な警告である。であるから、如し果して稍しく大げさに言えば、便に史料を偽造する危險がある。

註〔一〕本書は『小屯殷虛文字甲編』の考釋篇である。これは始め胡厚宣氏が担當していたが、戰亂のため胡氏は大陸に留ったので續けることが出來なくなった。この時の原稿を底稿として屈萬里氏があとを引き継ぎ、甲編の卜片二一一版を綴合し、釋文に考證を加えた。屈氏は貞人の時期區分の問題について、董作賓氏の揭げる不錄貞人（第四期卜辭）を檢討した結果第一期武丁期と定めて考釋した。本書は卷末に圖版二二〇版を付している。出版は一九六一年六月、中央研究院歷史語言研究所。

註〔二〕胡占魁（一九〇五―）河北省安國の人。曾って中央研究院史語所管理員に任じ、現在已に退休。

註〔三〕辛稼軒（辛棄疾）（一一四〇―一二〇七）中國南宋の詩人。字は担夫、のち幼安と改む。號は稼軒、甘粛省狄道の人。この詞は「青王案」の「東風夜放花千樹、更吹落、星如雨、寶馬雕車香滿路、鳳簫聲動、玉壺光轉、一夜魚龍舞、蛾

兒雪柳黃金縷。笑語盈盈暗香去、衆裏尋他千百度、驀然迴首、那人却在、□□」の一節である。

註〔四〕「新獲卜辭」にもとづいて拼合した二版。二一〇、他の一片不明。

註〔五〕董彥堂先生にもとづいて拼合した七版。二九七、三四六、二二八二、二四四二、二五七二、二六九二、二九一三の各片。

註〔六〕嚴一萍氏の『殷虛文字綴合』に增補した二版。九五九、二四七一の片。？

在釋文方面、本編是參考着胡厚宣君的底稿而重作的。因為胡君的釋文，是作成在二十年前；那時所不能識的字，所不能瞭解的文義，現在已有許多可以認識，可以瞭解了。況且本編拼合了二百多版，又有補遺的十版；再加上背面有刻辭而原來被忽略的，背面有書寫之辭而原來沒注意到的種種情形，所以原來的釋文，已不適用。至於考證方面，則着重於辭義的瞭解。這點，在例言裏已有說明。對於舊所未識或舊釋未安的字，本編中妄逞臆說的，共計有七十多個；其中較敢自信的，約有四十個字左右。至於字義的解釋，不同於舊說的，也所在多有。這些，究竟有無是處，是翦着殷切地盼望着方家們給以指教的。關係重大而需要特別提出來一說的，是董彥堂先生所定的第四期貞人的問題。貞人的發現

初斷代研究，是彥堂先生在甲骨卜辭方面的重大創獲。但，關於他所認定的第四期貞人，則頗有討論的餘地。當彥堂先生作甲骨文斷代研究例的時候，以為第四期是〃不錄貞人的時期。後來才知道：

第四期不是沒有貞人，因為省去貞字的關係，當時未能認出來；又因為以前出土的四期卜辭較少，發掘所得武乙時卜辭大部分出土在小屯村中，果然沒有貞人。現在知道：有些貞人誤入第一期，有些省去貞字而不認識，原因又在分辨不清第四期的卜辭。（甲骨學五十年一一四頁）

到了他作殷曆譜時，已認清了第四期的卜辭，並已找出了第四期的貞人。又後，他在殷虛文字乙編的自序裏，舉出了十七個第四期貞人的名子，那就是：

扶　𠂤　卣　叶　取　我　𤔲　史　𠦪　衖　勹　匿　衞　幸　萬　余　子

民國四十二年（公元一九五三）日本的貝塚茂樹和伊藤道治發表了甲骨文斷代研究例之再檢討一文（東方學報京都第二三冊），以為彥堂先生所認定的第四期卜辭，都應該屬於第一期；由於字體的不同，他們認為是另一貞卜機關的作品。四十三年（一九五四）胡厚宣君在他的戰後京津新獲甲骨集的自序裏，對於所謂第四期卜辭的安排，雖然煞費猶豫，但終於把它們暫時放在武丁以前及以後。四十四年，他的甲骨續存出版又把那些所謂第四期的卜辭，姑附於武丁之後。換句話說，也就是都列入了第一期。四十五年（一九五六），殷虛卜辭綜述出版。在這書裏的斷代上部分，曾經用了很多的篇幅，來討論此一問題。關於彥堂先生所舉的十七個貞人，它以為除了〃迷〃和〃史〃不是卜人外，其餘的十五個，都應該屬於武丁晚期；也就是說，他們都是第一期的卜人（綜述把貞人叫作卜人）。綜述論據的要點，是：

一、從稱謂上看，𠂤組（𠂤、扶—卽𠦪—勹）和賓組（賓、㱿、爭、亘、古、品、

韋、永、內、𡧊、充、吾、箙、掃、共）很多相同的。其中如父甲、父乙、父庚、父辛、母丙、母丁、母庚、母壬、兄丁、兄戊、子癸、子伐等稱，尤堪注意。

二、由字體來看，𠂤組一方面遵守賓組的舊法，一方面已產生了新形式。

三、𠂤組的記時法，和賓組大同而小異。

四、𠂤組某種卜辭形式，或同於賓組，或為𠂤組所特有，或下接祖甲卜辭，與字的情形一樣，足以表示𠂤組當武丁之晚葉，開下代之新式。

五、𠂤組祭法見於賓組，而〃㞢〃〃又〃通用亦顯示交替之迹。

六、子組（子、𢓊、我、余）在稱謂方面，主要的是同於賓、𠂤兩組。

此外，關於坑位問題，綜述也有所討論。原來彥堂先生在甲編自序裏，曾說E一六坑的圓井，是塌陷在祖甲時（這圓井裏出土了𠂤組的卜辭很多），因而說：〃井中只有一、二期的卜辭〃。後來作乙編自序的時候，又以為𠂤組貞人，屬於文武丁的時代。綜述指出了這個矛盾之後，於是以為如果把𠂤組等卜辭，列在武丁晚期，〃就不會產生這種矛盾與不一致〃。（綜述一五五頁）。

除了綜述所舉的例證之外，在甲編裏，還有更重要的證據，證知犬（犾、扶）是第一期的貞人，因為：

一、二三六一片，犬貞的卜辭，和賓貞的卜辭，同見於一版。（本條殷代貞卜人物通考六五七頁已論及。惟該書又謂甲編二三六片犬和內同見一版，誤。）

二、二八〇片，犬貞的卜辭有〃子咸〃、子咸是武丁之子。

三、三四八三片，犬貞的卜辭，字體既和第一期的相同；又有侯𢦏，侯𢦏是武丁時人。（此條殷代貞卜人物通考六五七頁，也會說到）。

四、三二八一十三二八五，𠂤貞的卜辭有〃子宋〃，子宋是武丁之子。

又如犬貞之辭裏，曾有𣏟（後編下二四〇、一〇）和陕（前編八、八、一）兩人，他們都是武丁時人；𠂤貞之辭裏有陕（續編五、一、四）和帚𣶒兩人，這兩人都曾見於㱿貞之辭；陕又見於犬貞之辭。子貞之辭，除兩見武丁之子子𤕌之名（後編下四一、九，綴合編三三〇）外，並曾和武丁時的貞人𣏟所卜之辭同見於一版（金璋六二二）。余貞之辭，和爭（𢦔）貞之辭同見於一版（乙編六八六九，背六八八〇）。以上都是殷代貞卜人物通考曾經舉出來的證據（奇字的隸定，都依照原書。）有了這些證據，可知原來所認為第四期的貞人，實際上應該歸入第一期。日本島邦男氏的貞人補正（原刊於甲骨學第四、五合併號，後收入殷墟卜辭研究），雖然還主張彥堂先生之說；但對於上述的問題，有的沒曾注意到，有的雖曾注意到，但也無法給以圓滿的解釋。因而他的議論，對於彥堂先生之說，也沒有很大的幫助。所以，本編關於原所謂第四期的卜辭，大部分都改入了第一期。原來認為第四期的卜辭，一旦歸入第一期，那麼，許多史料，都不能不另作安排。尤其對於彥堂先生的〃武乙、文丁父子復古〃之說，具有重大的影響。

釋文方面では、本編は胡厚宣君の底稿を參考して再び作ったものである。胡「厚宣」君の釋文は二十年前の作成であるから、あの當時は識ることの出來ない字、了解することの出來ない所の文義は、現在已に多く知ることができるようになり了解できるようになった、況んや且つ本編は二百ちかくの版を拼合し、また補遺十版があり、それに背面に刻辭がありもとは忽略にされていたもの、背面は書寫の辭があってももとは注意されなかった事情をつけ加えた。だからもとの釋文は、已に適用しない。考釋方面に至っては則ち辭義の了

解を重んじた。この點、例言には已に説明がある。古く未だ識らないもの或は舊釋で未だ不安な字に對し、本編中にみだりに臆説を逞したのは、共に計えて七十あまりある。そのうち比較的敢へて自信のあるのは、約四十個の字のものがある。字義の解釋に至っては、舊説には同じでないものも、またある所が多い。これらは結局正しい處があるかないかは著者が丁重に方家「深く學問を修めた人」の指教を與えられんことを希望しているものである。

關係が重大にして特別に提出して一言すべき必要のあるのは董彥堂先生の定める所の第四期貞人の問題である。貞人の發見と斷代研究は、彥堂先生の甲骨卜辭の方面の重大な創獲である。ただ彼の認定する所の第四期貞人に關しては、則ち頗る討論の餘地がある。彥堂先生が『甲骨文斷代研究例』（『甲骨文斷代研究例』註〔二〕・第二輯二頁參見）を作った時は、第四期は「不錄貞人の時期」とされた。後のちやっと知られるにいたった。第四期は貞人がないのではない、貞字を省去する關係であるから、當時は未だ能く認めることが出來ず、また以前出土の四期とする卜辭は比較的少ないものであるから、發掘して得た所の武乙時の卜辭の大部分の出土は小屯村中にあり、果して貞人がない。現在知られているものは、いくらかの貞人が第一期に誤入され、いくらかは貞字の省去されて認識されていない、その原因はまた第四期の卜辭は分け方がはっきりしていない（『甲骨學五十年一一四頁）

彼が『殷曆譜』（『殷曆譜』註〔三〕・第三輯二八六頁參見）を作った時、已に第四期の貞人を搜し出した。また後に、彼は『殷虛文字乙編』の自序（『殷虛文字乙編』註〔三〕・第四輯九六頁參見）で十七個の四期貞人の名を選び出した。それは就ち、

犾、𠂤、㞢、叶、取、我、歸、史、東、衍、勹、匧、御、幸、萬、余、子である。

民國四十二〔公元一九五三〕年日本の貝塚茂樹（貝塚茂樹・『甲骨學五十年』註〔五〕・本輯九五頁參見）と伊藤道治〔七〕は『甲骨文斷代研究の再檢討』（『甲骨文斷代研究例』補註〔三〕・第二輯四一頁參見）の一文を發表した（『東方學報』京都第二三冊）以て彥堂先生の認定する所の第四期の卜辭は、みなまさに第一期に屬し、字體の同じでないことに由って、それらは別の貞卜機關の作品であると認めた。四十三〔一九五四〕年に、胡厚宣君は彼の『戰後京津新獲甲骨集』（『戰後京津新獲甲骨集』註〔三〕・本輯三二頁參見）の自序に、所謂第四期の卜辭の排列に對して、長い間を費し、躊躇していたけれども、最後にそれを暫定し時に武丁以前及び以後においた。四十四〔一九五五〕年、彼の『甲骨續存』（『甲骨續存』註〔二〕・本輯一一〇頁參見）が出版され、またその所謂第四期の卜辭を、姑らく武丁の後に附した。いいかえて言えばまた就ちみな第一期に入れたのである。四十五〔一九五六〕年『殷虛卜辭綜述』（『殷虛卜辭綜述』註〔二〕・本輯一七二頁と『甲骨文斷代研究例』補註〔三〕・第二輯五八頁參見）を出版した。この書にあって斷代上の部分は、曾って實に多くの紙幅を用いて、此の一問題を討論した。彥堂先生の擧る所の十七個の貞人に關しては、それは"述"と"史"の卜人でないものを除いた外は、其の餘りの十五個は、みな當然武丁の晚期に屬すべきものである。また就ちこれを言えば、彼等はみな第一期の卜人である。（『綜述』は貞人をとらえて卜人に作る）。『綜述』の論據の要點は、

一、稱謂より見れば、𠂤組（𠂤、扶—卽ち人—勹）と賓組（賓、㱿、爭、亘、古、品、韋、永、內、春、充、㕜、箙、掃、共）は實に多く相に同じである。そのうち父甲、父乙、父庚、父辛、母丁、母庚、母壬、兄丁、兄戊、子癸、子伐等の稱で尤も注意に堪える。

二、字體より見れば、𠂤組は一つの方面では賓組の舊法を遵守し、一つの方面では已に新形式を生產した。

三、𠂤組の記時法は、賓組と大同小異である。

四、𠂤組某種の卜辭形式は、或は賓組に同じ、或は𠂤組に特有なものである。或は下は祖甲卜辭に接し、字體の事情と同じ、以て𠂤組は武丁の晚葉を表示するに足り、下の代の新式を開く。

五、𠂤組の祭法は賓組につねに見え、而して"㞢""又"の通用は交替の迹を顯示する。

六、子組（子、𠂢、我、余）は稱謂方面にあって、主要なのは賓、𠂤兩組に同じである。

此の外、坑位問題に關して、『綜述』はまた討論する所がある。原彥堂先生は『甲編』自序にあってE一六坑の圓井は、祖甲時に陷るものである。（この圓井は𠂤組の卜辭で賓に多く出土した）。因って說う「井中はただ一・二期の卜辭があるだけで」と。のち『乙編自序を作った時は、また𠂤組の貞人を文武丁の時代に屬すると思った。『綜述』はこの矛盾の後に指摘した。ここに於て果して𠂤組等の卜辭を、列して武丁の晚期に在るとするならば、就ちこの種の矛盾と不一致を生ずる筈がない。（綜述一五五頁）『綜述』に擧る所の例證を除いた外は、『甲編』に在っては、また更に重要な證據がある。犬（犾、扶）は第一期の貞人であることを證するを知る。であるから

一、二三六一片は、犬貞の卜辭は、賓貞の卜辭と一版に同見する。（本條は『殷代貞卜人物通考』六五頁に已に論及している。惟だ該當する書はまた甲編二三六片の犬と內の同見の一版をいうのは誤り）。

二、二八〇片、犬貞の卜辭には「子咸」あり、子咸は武丁の子である。

三、三四八三片、犬貞の卜辭は、字體既に第一期と相い同じで、また侯𢦚あり　侯𢦚は武丁時の人である。（此の條は『殷代貞卜人物通考』六五七頁に、また曾って說くにいたった。）

四、三二八一＋三二八五は、𠂤貞の卜辭で"子宋"が有り、子宋は武丁の子である。

また犬貞の辭にある如く、曾って𣏟（後編下、二四、一〇）と陕（前編八、八、一）の二人あり、かれらはみな武丁の時の人である。𠂤貞の辭には陕（續編五、一、四）と帚の二人あり、この二人はみな曾って㱿貞の辭に見える。陕はまた犬貞の辭に見える。子貞の辭は二見の武丁の子、子𠫑の名を除いた（後編下四一、九、綴合編三三〇）外は、並に曾って武丁時の貞人𣏟とトする所の辭は一版に同見する。（金璋六二二）。余貞の辭は、爭（乇）貞の辭と一版に同見、（乙編六八七九、背六八八〇）。以上はみな『殷代人物通考』にあって曾って擧げ出來た證據である。（奇字の隸は、みな原書の通り）この證據にあって、原の認めた所の第四期の貞人は、實際には應に第一期に歸入すべきを知る。日本島邦男氏〔八〕の『貞人補正』〔九〕は（原刊は『甲骨學』第四・五合併號）のち『殷虛卜辭研究』に收入）まだ彥堂先生の說を主張しているけれども、ただ上述の問題に對して、或るものには注意するに至っていないし、或るものは注意するに到ったけれども、ただまだ圓滿な解釋を與える方法ではない。因りて彼の議論は、彥堂先生の說に對してもやはり實に大きな幫助になっていない。だから本編は原の所謂第四期の卜辭に關して、大部分はみな第一期に改入した。もとは認められて第四期の卜辭となり、一旦第一期に歸入した。そうなると澤山の史料は、みな排列しなおさざるを得ない。特に彥堂先生の「武乙、文丁父子復古說」（『甲骨文斷代研究例』補註〔三〕・第二輯三二頁參見）に對して、具さに重大な影響がある。

註〔七〕　伊藤道治（一九二五―）一九二五年、名古屋市に生る。一九四九年、京都大學文學部史學科東洋史卒業。京都大學人文科學研究所研究員を經て、一九五九年、神戶大學文學部助教授。（現在教授）中國古代史の專門家。特に甲骨學の論文には『中國戰後甲骨學』東洋史研究十一卷五號、『甲骨文斷代の再檢討』東方學報第二三冊、『甲骨文字研究の現狀』甲骨學九號、『甲骨・金文に見える邑』研究三三號、『西周時代に於ける王權の消長』研究三五號、『宗教面から見た殷代の二・三の問題―殷王朝の構造―』東洋史研究二十卷三號、『殷代における祖先祭祀と貞人集團』研究二八號、『卜辭に見える祖靈觀念について』東方學二六冊、『殷以前の血緣組織と宗教』東方學報三二冊のほか數篇あり、著書數篇を著している。伊藤氏は殷周史の專門家で殷周の國家構造について究明した論文が多く、それは殷の血緣による王の子弟には、それぞれ族集團を率いていること、また集團內の慣習、制度の差異や王位繼承を論じ、また兄弟の意味を考察して、その制度は周代に繼續されたが三監の亂はこのような背景をもち、これを緊密化するために宗法制と封建制が生れたとする說である。

註〔八〕　島邦男（一九〇八―七七）一九〇八年、青森縣に生る。一九三三年、東京帝國大學支那哲學科卒業。弘前大學文理學部教授をへて弘前大學名譽教授となる。甲骨學の專門家。著論文に『卜辭中の先王稱謂』甲骨學一號、『祭祀卜辭の

研究』一九五三年刊、『甲骨文の地名』人文社会九号、『貞人補』甲骨學四、五号、『亞の官職』甲骨學六號、『門字不屬第一期之證』甲骨學八號、『帝乙帝辛之在位年數』集刊外編、董作賓六十五歲論文集 等數篇がある。『祭祀卜辭の研究』は董作賓氏の『殷曆譜』が日本に將來されていない時、祀序の存在に氣づき獨自に發見したのがこの書である。また『殷虛卜辭研究』一九五八年刊 の第二編の『殷の社會』では卜辭の地名五四二をあげ、兩地間の行程日數の明りかにし得る一〇五の地名によって、殷の地域を考定し、殷周の關係や奴隸說、氏族制產業、封建、曆法等を論じている。また他に『殷虛卜辭綜類』一九六七年がある。

註〔九〕

貞人補正『甲骨學』第四・五合併號、一九五六年刊、この論文は董作賓氏の『甲骨文斷代研究例』、『殷曆譜』の貞人分期說や、陳夢家、貝塚茂樹說に對し、島氏は一つ一つ卜片をあげ檢討批判している。第一期二十七貞人、第二期二十貞人、第三期十七人、とくに第四期武乙・文武丁期の貝塚說の王族子卜貞の二貞人集團を第一期とする說に對し批判し第四期とする。胡氏も『甲骨續存』において「武丁以前に屬するもの」とするが、武乙、文武丁時なるか武丁期なるかを疑問として武丁卜辭後に列している。第五期は五貞人とする。

在考釋方面，最感困難，是關於祭祀的問題。"祀統"的發現是彥堂先生繼斷代研究之後，又一驚人的創獲。雖然彡，翌，祭，壹，劦這五個字的意義，是否全完如彥堂先生所說，還不能絕對肯定。但，他把那些散落在滄海裏的珍珠，從深水於沙裏揀出來，再穿貫成恰到好

處的項圈，這眞是一個偉大而又精細的工作。可是，除了這五種祭祀之外，那許多有關祭祀的名詞或動詞，它們所代表的實際情形究竟怎樣，從事甲骨文研究的人，對於這些問題，還大多數弄不清楚。甚至於有些是祭名或是用牲之法，都還無法斷定。這點，作者謹以至誠，寄望於對於三禮有深切研究的學者們。

其次的麻煩問題，便是地名。雖然有些地名，可以就它們的連索關係，推測到它們的約略所在；但能夠確實斷定是後來什麼地方的，眞是少而又少。原因是地名很多奇字，有些簡直地不能認清它們的偏旁；字形，字音，目前都無法辨識，自然就沒法子確定它們的地望了。這些，也不能不寄望於並世及將來的學者們。

甲編共計著錄了三九四二張拓片，其中如兕頭刻辭，鹿頭刻辭，和鹿角器刻辭，都是人們所共知的。另外還有人頭骨刻辭（三七三九），兕牛或象肋骨刻辭（三六二九），則非人們所素知。又如：整個的龜背甲（未從中間鋸開）刻辭（九五九十九六二十九六三十九六四十二〇四二，此乃嚴一萍君所發現，說見中國書譜殷商篇序）；以及鑽灼痕在腹甲中縫的左方及右方各自相向，而非隔中縫左右相向的（三五七五，三五七六）。這些，都是罕見的例子。

在刻辭方面，甲編所著錄的拓片中，有很多是習書者所刻的，例繁不勝枚擧。此外，還有，

脫文的，如：四四四，四八六，一五二二，二一〇六十二一二二之一七……等。

衍文的，如：三二，七五六之二，一二六一，二四九〇之三。

添注的，如：二七，二一三，二三八，二六一，二六四，……等。

誤字未經剜改的，如：二，六〇，四七六之一，三四〇九，……等。

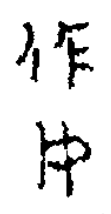
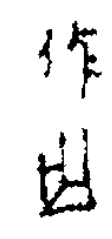
剜改誤字的，如：二二一四，二二一八，二五九三，二九六四，……等。

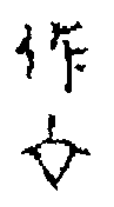
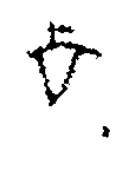
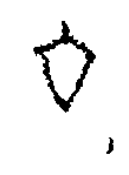
缺刻筆畫的，如 二二一，二八四，三〇五，六六一，七八七……等。

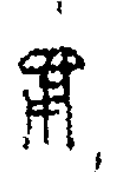
字倒刻的，如：一一七四，一二〇九，一五一〇十一五一五……等。

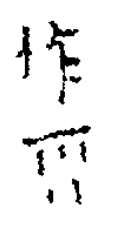
這些都是值得注意的特例。

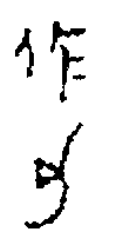
在字形方面，也有不少是最常見的熟字而貌似奇字的，如：

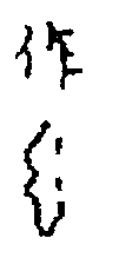
用字作，見一八二，二〇二十二〇五等；又作，見二六三〇。

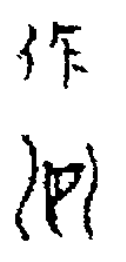
在字作，見二〇六；又作，，見二九〇八。

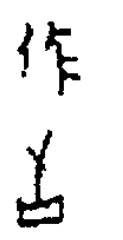
辰字作，見一六六六。

兩字作，見二三一四。

歲字作，見二二七八。

旬字作，見二四七一十二四九一十二五〇一之九及一〇。

沈字作，見同上片。

鈂字作，見二六九三。

這些，如果不從它們的上下文義去推證，就簡直地無法證明它們是些什麼字。

在行文方面，也有值得一提的。它們有的順着卜兆橫出之紋所指的方向而行文的（一般的都是逆兆行文），如二二一，二五六，四七五，一二二八，一四五〇等。有同在一個部位，而刻辭則或左行或右行的，如四九七，一四六七，一四九五等。有其辭本爲右行，又轉而左行的，如二一四，七九五，一一五八等。也有其辭本爲左行，又轉而右行的，如三九一四之一四。這些都不是常例。至於一般通例，如刻辭的先後之序，則多是由下而上，和周易卦爻之序相同。一事數卜，而相間刻辭，和周易陰陽爻的相間一樣。龜甲刻辭及牛骨刻辭的左右對貞，又和周易內外卦的相應一樣。尤其是三九一七卜夕的那個完整的龜腹甲，刻辭的順序，是先內後外，再先下後上，它和易卦的重內輕外，先下後上的意味，完全相同。我會說易卦

是由龜卜衍變而來的（見拙著易卦源於龜卜考，集刊第二十四本），這些常例，都可以替鄙說作證。

就甲編所著錄的甲骨數量而言，可謂前無古人。這近乎四千片圖版的一部大書，在編輯時自然難免有疏略的地方。如：

有已登記而未收入甲編的整個龜腹甲，見本編圖版貳壹貳（原登記號：三、〇、二〇四九）。

有未登記也未收入甲編的字數較多的龜甲和牛骨刻辭，見本編圖版貳壹叁至貳貳壹。

有把拓片倒植的，見三二六五，三三一二，三四〇八，三五六四。

有拼合錯誤的，見三一〇六。

有把龜甲誤作牛骨的，見九一六，九二二，二二八四，二三九〇。

有把牛骨誤作龜甲的，見一一九，一六六一，三〇二三。

有把三次發掘所得誤作二次發掘所得的，見九二二。

有背面有字未拓印的，見一九七六，二二七八，二二九三十二三二四等。

有背面有朱書之字未影印的，見二五〇〇，二五〇六，二六九八，三三一二。

有骨臼刻辭未拓印的，見二九〇八，二九三五。

這些當是助理編輯者百密一疏的地方。

我的興趣，本來不專在甲骨文方面。這本考釋的作成，完全由於李濟之先生的鼓勵和督促，這是首當感謝的。只是本編紕繆粗疏，自己不滿意的地方很多，這，使我對於李先生及讀者們，又不能不深感歉疚。脫稿之後，復承病後體力還沒康復的董彥堂先生，審閱一過，使我又感激又不安。還有，勞榦先生曾應著者之請，細閱本稿一遍，提出了很多寶貴的意見。臺灣大學動物系主任王友燮先生，惠予鑒定三六二九，三六三〇，三七三九參片骨骼。兩位先

生的高誼，也都是著者銘感在心的。此外，胡占魁兄助我拼合，劉淵臨兄，助我黏貼圖版，在寫作期間，又得到洛克斐勒基金會（Rockefeller Foundation）的資助，謹併誌感謝之忱。

中華民國四十九年八月二十三日　屈萬里

考釋方面にあって、最も困難を感じたのは、祭祀の問題である。"祀統"に關しての發見は彥堂先生の斷代研究の後に継いで、また人を驚かした創獲である。然るに彡、翌、祭、壹、劦のこの五つの字の意義は完全に彥堂先生の説く所の如くであるかどうか、未だ絶對に肯定することは出来ないけれども、ただ彼はその大海原に散落していた眞珠を深く游沙より揀り出し、再び長所に頂圈〔首輔〕をつらぬくことが丁度できた。これは眞に一つの偉大なものでまた精細な仕事である。であるからこの種の祭祀を除いた外はその多くは祭祀に關する名詞あるいは動詞、それらが代表する所の實際の事情は結局どのようであれ、甲骨の研究に從事する人は、この問題に對して、まだ大多數ははっきりさせ得ない。甚しきはそれは祭名でありあるいは用牲の方法であるに至っては、みな斷定する方法がない。この點作者は謹んで至誠を以て、"三禮"に對して深切に研究する學者たちに望みを托する。

其の次のやゝこしい問題は、便ち地名である。ある地名は就ちそれらの關係を連ね索めると、それらは略ぼ在る所を推測できるけれども、ただよく後ちのどの地方であるのか確實に斷定するに足るのは、眞に少くしてまた少ない。原因は地名であり實に奇字が多い。そのまるっきり　それらの偏旁をはっきり認めることが出来ない、字形、字音は今のところみな識別する方法なく、もとより就ちそれらの地望を確定する方法がない。これもまた並世及び將來の學者たちに望みを托さざるを得ない。

甲編は全部かぞえて三九四二張の拓片を著錄する。その中には冢頭刻辭、鹿頭刻辭と鹿角器刻辭の如く、みな人の共和する所である。この外はまた人頭刻辭（三七三九）、冢牛あるいは象の肋骨刻辭が（三六二九）あり、則ち人の素より知る所ではない。また整個の龜背甲（未だ中間の鋸開によらず）刻辭（九五九十九六二十九六三十九六四十二〇四二）此れ乃ち嚴一萍君の發見する所、説は『中國書譜殷商篇』序に見える。（『中國書譜』註〔八〕・本輯三一四頁參見）、以て鑽灼痕に及ぶ腹甲中縫の左方及び右方に各自相い向ってあり、而して中縫隔左右に相い向っているのではない。（三五七五、三五七六）これはみな罕れに見る例である。

刻辭方面にあっては、甲編の著錄する所の拓片中、實に習書して刻するものが多くあり、例は多く枚擧にいとまがない。此の外にまたあり、

脱文は四四四、四八六、一五二二、二一〇六十二一二二の一七……等の通り。

衍文は三二、七五六の二、一二六一、二四九〇の三の通り。

注を添えるものは二七、二一三、二三八、二六一、二六四……等の通り。

誤字にして未だ雕り改めていないものは二、六〇、四七六の一、三四〇九……等の通り。

誤字を雕り改めたものは二二一四、二二一八、二五九三、二六九四……等の通り。

筆畫を缺刻したものは二二一、二八四、三〇五、六六一、七八七……等の通り。

字の倒刻のものは一一七、一二〇九、一五一〇十一五一五……等の通り。

これはみな注意に値する特例である。

字形方面にあっては、また少なからず最も常見の熟字がある、貌（かたち）は奇字のようで、用字は中に作り、一八二、二〇二十二〇五等に見える。又凶に作り、二六三〇に見える。

在字は▽に作り二〇六に見える、又▽▽に作り、二九〇八に見える。

辰字は甫に作り一六六六に見える、

兩字は㒳に作り、二三一四に見える。

歲字は戉に作り、二二七八に見える。

勿字は彡に作り、二四七一十二四九一十二五〇一の九及び十に見える。

沈字は川に作り、同上片に見える。

毓字は㐬に作り、二六九三に見える。

これは、如し果してそれら上下の文義より推證に從はなければ、就ちまったくそれらはどの文字を證明するのか方法がない。

行文方面に在っては、また一提に値いするものがある。それらの或るものは卜兆横出の紋に指す所の方向に順って行文する（一般はみな逆兆行文である）二二一、二五六、四七五、一二二八、一二四五等の如くである。同じく一つの場所にあり、而して刻辭は則ち或は左行あるいは右行で、四九七、一四六七、一四九五等の如くである。其の辭が本は右行であり、また轉じて左行となる、三九一四の一四の如くである。これらはみな常例ではない。一般通例に至っては、刻辭の先後の順序のように、則ち多くは下より上である、『周易』の卦文の順序と相い同じ。一事の數卜は、而して相間に刻辭する、『周易』陰陽爻と相間同じである。龜甲刻辭及び牛骨刻辭の左右對貞は、また『周易』內外卦とこの段は同じである。特にそれは三九一七卜夕のあの完整な龜腹甲は、刻辭の順序が、先ず內で後ち外である。再び先ず下へ後ち上である、その易卦の內を重んじ外を輕んじるのは、先ず下後ち上の意味と完全に相い共に同じである。私は嘗って易卦は龜卜の衍變により來るものであると説いた（拙著『易卦源於龜卜考』〔十〕に見える。集刊第二七本）これは常例で、みな以て鄙説を替えて證を作ることが出来る。就ち『甲編』に著錄する所の甲骨の數量より言へば、前に古人無しと謂うことが出来る。これ四千片の圖版は一部の大書に近い、編輯の時に在ってもとより疏略のある所を免れ難い。

已に登記しても未だ『甲編』に收めてない完全な龜腹甲は、本編圖版の貳壹貳に見える（原の登記番號は三・〇・二〇四九）。

未登記のものもまた未だ『甲編』に收めず字數は比較的龜甲と甲骨刻辭が多い、本編圖版貳壹參より貳貳壹。

拓片の倒植のあるのは、三二六五、三三一二、三四〇八、五五六四に見える。

拼合に間違いのあるのは、三一〇六に見える。

龜甲を誤って牛骨となすものは、九一六、九二二、二二八四、二三九〇に見える。

牛骨を誤って龜甲となすものは、一一九、一六六一、三〇二三に見える。

三回發掘に得た所を誤って二回發掘に得た所のもととなすのは、九二二に見える。

背面に字があって未だ拓片していないものは、一九七六、二二七八、二二九三十二三二四等に見える。

背面に朱書の字があって未だ影印しないものは、二五〇〇、二五〇六、二六九八、三三一二に見える。

骨臼刻辭の未だ拓印しないものは、二九〇八、二九三五に見える。

これは當に編輯を補助するものの百密一疎の所の如きものである。

私の興味は、本來は甲骨文の方面だけではない。この本の考釋の作成は、全く李濟之先生の鼓勵と督促に由る。これははじめに感謝すべきである。ただ本編は誤りやすく、雜把であって、自分で滿足しない所も實に多い。これは私が李先生及び讀者たちに對して、また申し譯けなく思っているところです。脫稿ののち、復た病となり後ち體力はまた健康に復さず董彥堂先生によって一度審閱してもらったのは私をしてまた感激し、また不安ならしめた。まだある。勞幹（「殷曆譜」註〔三九〕・第三輯三一五頁參見）先生は曾って著者の請に應じて、本稿を細閱すること一遍、實に多くの寶貴な意見を提出された。臺灣大學動物系主任王友燮〔十一〕先生は、予に惠するに三六二九、三六三〇、三三三七の三片の骨骼を鑒定された。兩位先生の高誼は、また著者の感激は心の中にある。此の外、胡占魁兄は私の拼合を助け、劉淵臨兄（「殷虛文字外編」註〔三〕・本輯一九七頁參見）は、私に圖版の黏貼を助け、書くにあたって期間を作り、またロックヘラー基金會の援助を得た、謹んで感謝の心を併せ誌す。

中華民國四十九「一九六〇」年八月二十三日。屈萬里

註〔十〕　「易卦源於龜卜考」屈萬里撰。中央研究院歷史語言研究所集刊第二十七本。一九五六年四月刊。この論文を目次の順に紹介すると、㈠甲骨刻辭の順序は、最初上より下へ、あるいは下より上で一定の通例がなかったが、晚期になって、則ち下より上への習慣が顯著になり、第五期では殆んど通例となった。これは甲骨刻辭の下より上へだんだんと變化した結果であることを說明している。易の卦爻位の下より上への順序は、則ち一蹴して出來たのである。このように說く

なら、これは易卦が龜卜を因襲している。㈡卜龜の腹甲は、既に中間の一線によって、分かれて左右兩方になっている。則ちその左右對貞はたいへん自然である。易卦の順序は、もと任意に排列したものであり、必ずしも一定としないで反對を以て順序としている。易卦は既に反對を以て順序としている。これは龜卜を因襲している。㈢、龜腹甲と盾板の花紋は自然のものである。易卦の七と六の數は人爲的である。易卦の九、六の數は龜卜を因襲しているからである。㈣卜筮は相類の物事であり、後世の書だから、卜筮の連言の語句は大變多い。ただ甲骨文には既に筮字は見えないし、また八卦或は六十四卦は見えない。㈤我が國の考古學方面の材料から見ても、龜貞卜の習俗は早く、傳統の習慣より見て、龜卜は重視された、周易の一家は蓍草を占筮の道具とし、蓍は多年生の草本植物であり、龜の年壽も長い、だから「蓍龜」の名がある。ただ龜卜は普遍性があり、易筮は獨特性があり、この二者は因襲の關係がある。㈥卜辭の下より上への順序の習慣は、既に殷代末年にあり、易の卦爻畫はこの順序によった、則ち易卦が生れた時期は、殷代末年或は周初であろう。㈦以上を考えると八卦と六十四卦は同時の產物で、個別的獨立的に存在したとは考えられない。卦爻辭は西周初年の作品である。㈧殷人は龜を得ることが便であったが周人は西に僻し得がたいところから蓍策を發明して龜卜の不足を補った。龜卜の手續は繁瑣で、蓍策の手續は簡便である。就ち事物演化の通例は、自然に從った。この二つの觀念から見ると七條の論證にあひ、上述の理由を基に易卦は龜卜に源流する。

註〔十一〕　王友燮　傳未詳。

殷虛文字甲編考釋凡例

一、本編係就殷虛文字甲編（以下簡稱甲編）所著錄之甲骨文字，依照原書次序，逐版作為釋文。其需要考證或說明者，即將考證或說明分著於各條之下；其不需要考證或說明者，則但著釋文。

二、考釋之作，其目的不外下述三點：㈠拓片不清晰者，可藉釋文而辨其字；㈡、不專習甲骨文者，可藉釋文得利用其材料；㈢已有創見，藉以質正於學林。作者於甲骨文字之學，用力甚淺，不敢侈言有所創獲；雖有拾遺補闕之說，與夫異於時賢之論，然以囿於學力，紕繆必多。至於拓片不清晰之字，則必檢原甲骨定之，未敢苟且從事。而於書本文獻中所不習見之字或辭，往往予以解說，俾不專習甲骨文字者，亦可以通其辭。方家如鄙其淺陋瑣屑，當俛首受之。

三、不可確識之字，不能詳知之名物制度，以及不易通之辭，甲骨文中尚多。若此之類，各家有說解者，則取其較有理致之說；或參以鄙見。其無他家說解，或雖有而無甚理致，又非鄙見所敢臆斷者，則存而不論。

四、引用各家之說，以但著其結論為原則。非有極端必要，不具列其繁徵博引之辭。蓋引用之說，皆已注明出處，讀者欲知其詳，自可覆案原書。

五、甲編每一圖版，皆有大字號碼一組，及小字號碼一組或數組。大字號碼，亦該書著錄拓片之次第；小字號碼，則為發掘時之發記號。發掘所得之有字甲骨，每片皆有登記號。然其殘碎過甚，僅存半字或一二習見之字者，則未收入甲編。故甲編所收之甲骨拓片，其登記號碼，有時不相連接。又有二片或數片甲骨，經拼綴合拓後收入甲編者，故大字

號碼後，時有兩組或兩組以上之登記號碼。本編則但著其大字號碼。

六、甲編所收，係本所第一次至第九次發掘所得之有字甲骨。而此九次發掘所得之有字甲骨，偶有未經發記亦未收入甲編者。本編除補其圖版外，並為之考釋。然其出土時日及地區，則已無由斷定。

七、近年就甲編所收之甲骨，再予拼綴，共拼成二百餘版。拼綴後之甲骨，皆傳拓墨本，以其圖版附於本編之後。本編之考釋，即以拼綴後之甲骨為依據。至於他書所著錄之拓片，可與甲編之拓片綴合者，亦儘可能將其綴合之圖版，載入本編，並綜合作為考釋。

八、釋文於卜辭闕文，能確知其所闕字數者，則每一闕文，以一〃口〃代之。不能知其有無闕文，或知有闕文而不知其所闕字數者，則以〃⧄〃示之。

九、本編於每版甲骨，首著其號碼，次著其實物之特徵（如塗色，界畫，鋸削，拼綴情形等）。其無特徵可述者，闕之。

十、凡甲骨刻辭，可以知其契刻時代者，則於敍述該版特徵之後（無特徵可述者，則於號碼之後），以壹、貳、叄、肆、伍等字識之。分時代之標準，以董彥堂先生甲骨文斷代研究例及甲骨學五十年為主。即：壹，表示第一期（盤庚遷殷至武丁）；貳，表示第二期（祖庚、祖甲）；叄，表示第三期（廩辛、康丁）；肆，表示第四期（武乙、文丁）；伍，表示第五期（帝乙、帝辛）。惟於董先生所舉第四期之貞人，則多從殷虛卜辭綜述說，改隸第一期。至於殘碎過甚之辭，不易斷定其時代者，則闕而不著。惟本編所定第一及第四兩期之辭，恐不免互誤之處；尚祈方家正之。

十一、甲編所著錄之甲骨，其出土地區，已見於該書董彥堂先生序。石璋如先生，將有殷虛出土器物坑位表之作；則甲編所收甲骨出土之坑位，檢該表即得。故本編不再附列甲骨出

土地區及坑位表。

一、本編は就ち『殷虛文字甲編』（以下『甲編』と簡稱する）に著錄する所の甲骨文字に係る、原書の順序通り、版を逐って釋文を作った。其の考證あるいは説明を必要とするものは、即ち將に考證あるいは説明を各條の下に分けて著し、其の考證あるいは説明を必要としない者には、則ち但だ釋文を著した。

二、考釋を作った、其の目的は下述の三點に外ならない。(一)拓片の明らかでない者は、釋文を藉りて其の字をあきらかにすることができる；(二)甲骨文を專門に學ばない者は、釋文を藉りて其の材料を利用することができる；(三)已に創見があれば、藉りて學林に是非を正す。作者は甲骨文字の學に於て、力をいれること甚だ淺く、敢へて創獲する所の有るものを大言壯言しようとはしない；闕を補う説を拾遺することがあるけれども、夫の時賢の論の違いに對し、然して學力にこだわれば、誤りが必ず多い。拓片の明らかでない字に至っては、則ち必ず原の甲骨を檢べてこれを定め、未だ敢へて苟くも從事しようとしなかった。而して本文獻中習見しない字あるいは辭を書くのに、往々私は解説を以てした。甲骨文字を專門に學ばない者にも、亦その辭に通じることができる。方家に其の淺陋瑣屑を併するように、常に頭をさげてこれを受けよう。

三、確かに識ることのできない字、詳しく知ることのできない名物制度、以て通じ難い辭に及んでは、甲骨文中に尚多い。此くの若きの類は、各家に説解のある者は、則ち其の比較して道理にかなった説のあるものを取り、或は調べて鄙見を以てした。其の他家に説解がなく、あるいはあっても道理にかなってなければ、又、鄙見して敢へて臆

斷するものではない。則ち心にとめて論じない。

四、各家の説を引用するには、但だ其の結論を著すを原則とする。極端に必要がなければ、其の繁徵博引の辭を具列しない。蓋し引用の説は、皆な已に出處を注明し、讀者が其の詳しく知ろうとするなら、自ら原書を覆案すればよい。

五、『甲編』は一圖版ごとに、皆な大字の數字一組、及び小字の數字一組、或は數組がある。大字の數字は、著錄拓片の次第の書に備っていることを示す；小字の數字は、則ち發掘時に發表した記號である。發掘で得た所の有字甲骨は、毎片皆な登記號がある。然れども其の殘碎は甚だしく、僅かに半字あるいは一二の習見の字がある者は、則ち未だ『甲編』に收めていない。故に『甲編』に收める所の甲骨拓片、其の登記數字は、時には共につづかない。又二片あるいは數片の甲骨が有るのは、いっしょに綴合して拓（本一した後に『甲編』に收めた者、故に大字の數字の後に、時に二組あるいは二組以上の登記數字がある。本編は則ち但だ其の大字の數字を著した。

六、『甲編』に收める所は、本所第一回より第九回に至る發掘で得た有字甲骨に係る。而るに此の九回發掘で得た所の有字甲骨は、偶ま未だ發記（發表を記した）していなくても、未だ『甲編』に收めない者である。本編は其の圖版を補う以外は、並にこれを考釋とした。然れども其の出土日時及び地區は、則ち已に斷定に由るものがない。

七、近年『甲編』に收める所の甲骨について、再び私は拼綴し、すべていっしょに二百餘版ができあがった。拼綴後の甲骨は、皆な墨本を傳拓し、其の圖版を以て本編の後に附した。本編の考釋は、即ち拼綴後の甲骨を以て依據とする。他書に著錄する所の拓片に至っては、『甲編』の拓片と綴合できる者は、亦儘く將に其の綴合を可能にした

八、圖版は、本編に載入し、並に綜合して考釋を作った。釋文は卜辭の闕文において、確かに其の字數の闕ける所のわかる者は、則ち一闕文ごとに、一に〃口〃を以てこれに代へた。その闕文の有る無しを知ることが出來ない、あるいは闕文のあることがわかって其の字數の闕ける所がわからない者は、則ち〃⧄を以てこれを示した。

九、本編は甲骨の版ごとに、はじめに其の數字を著し、次に其の實物の特徵を著した。（塗色、界畫、鋸削、拼綴情形等の如し。）其の特徵の述べることが無い者は、これを闕いた。

十、凡そ甲骨刻辭は、以て其の契刻時代を知ることが出來る者は、則ち版に備っている特徵を叙述した後に（述べるべき特徵のない者は、則ち數字の後にした）壹、貳、參、肆、伍等の字を以てこれを識した。時代を分けた標準は、董彥堂先生の『甲骨文斷代研究例』及び『甲骨學五十年』を以て主とした。即ち、壹は、第一期（盤庚、殷に遷って武丁に至る）を表示し、貳は、第二期（祖庚、祖甲）を表示し、參は、第三期（廩辛・康丁）を表示し、肆は、第四期（武乙・文丁）を表示し、伍は、第五期（帝乙・帝辛）を表示する。惟だ董（彥堂）先生謂る所の第四期の貞人は、則ち多く『殷虛卜辭綜述』の説に從った、第一期に改屬した。殘碎の甚しい辭、其の時代を斷定しにくい者に至っては、則ち闕いて著さなかった。惟だ本編定める所の第一及び第四期兩期の辭は、恐らく互いに誤る處少しくなく、尚、方家にこれを正されんことを祈る。

十一、『甲編』著錄する所の甲骨は、其の出土地區は、已に書に備っている董彥堂先生の序に見える。石璋如先生は、將に殷虛出土器物坑位表の作がある。則ち『甲編』に收める所の甲骨出土の坑位は、表に檢べて即ち得られる。故に本編には再び甲骨出土地區及び坑位表を附列しなかった。

九六、甲骨文編〔二〕

編輯序言

古代銘刻研究在歷史、考古學中有其一定的地位。進行這方面的研究，工具書是迫切需要的。我所有鑒於此，於一九五六年八月先後邀請了有關專家討論，在已有的基礎上，改編甲骨文編和金文編。金文編的改訂本，已於一九五四年出版。

甲骨文編的改訂本為河南省歷史研究所孫海波先生所編纂。編纂之前，我所曾邀請唐蘭、商承祚、于省吾、張政烺、陳夢家、孫海波等先生共同商討了改編的體例，郭沫若院長也提了書面的指導意見。初稿完成後，曾經過了一再的修訂。

改訂本較之一九三四年的初編本，有着很大的不同；在材料上比較完備，在考訂上采納了許多新的研究成果。此書正編和附錄所收共計四六七二字，而其中有些字還可以歸併；目前甲骨刻辭中所見到的全部單字的總數，約在四千五百字左右。其中雖然只能辨認九百餘字，但比之從前所能辨認的五六百字，已增益了許多。

為了便於檢字和引用，我們為全書編制了順序的號數如下：

正編　〇〇〇一—一七二三　見於說文的九四一字。
合文　二〇〇一—二三七一
附錄　三〇〇一—五九四九

我們希望本書的出版，能對研究卜辭的人有一些方便。河南省歷史研究所大力支持了本書的編輯出版工作，為此，謹致謝意。

中國科學院考古研究所　一九六四年一月

古代銘刻研究は歷史、考古學中にあって、其の一定の地位にある。この方面の研究を進めるには、工具書は大變必要である。私がこの點に鑒みて、一九五六年八月先後に關係ある專家へ討論を招揭し、已にある基礎上に、『甲骨文編』（『甲骨文編』註〔二〕・第二輯二六九頁參見）と『金文編』（『殷虚文字存眞第一輯考釋』註〔六〕・第二輯一八七頁參見）を改編した。

『甲骨文編』の改訂本は河南省歷史研究所孫海波先生（孫海波・『鐵雲藏龜』註〔四十〕・第一輯三八頁參見）の編纂するものである。編纂の前に、私は曾って唐蘭（唐蘭・『殷虚文字類編』註〔三〕・第一輯一七一頁參見）、商承祚（商承祚・『殷虚文字類編』註〔五〕・第一輯一七三頁參見）、于省吾（于省吾・『殷契佚存』註〔三十五〕・第二輯二三〇頁參見）、張政烺（張政烺・『殷虚文字綴合』註〔三〕・本輯七七頁參見）、陳夢家（陳夢家・『殷契摭佚』註〔三〕・第三輯一四〇頁參見）、孫海波等の先生に賴んで、共同で改編の體例を討議してもらい、郭沫若（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁）院長はまた書面で指導意見を提出した。初稿の完成後ひとたびならず修訂をへた。

改訂本はこれ一九三四年の初編本と比較すると、實に大きな違いがある；材料上にあって完備を比較すれば、考訂上多くの新しい研究成果をとり入れた。此の書は正編と附錄に收めるものはすべて四六七二字をかぞえる。しかも其の中にはまた歸併すべき文字もある。目前の甲骨刻辭中に所見の全部の單字の總數は、ほぼ四千五百字ある。其の中にただ辨認しうるもの九百餘字と雖ども、但だ從前の區別し認めた五六百字に比べれば、已に多くを增益した。

檢字と引用に便利なるために、私達は全書を編制するのに順序の番號は下のごとくである

正編　〇〇〇一—一七二三　說文の九四一字に見える。
合文　二〇〇一—二三七一
附錄　三〇〇一—五九四九

私達は本書の出版が、能く卜辭を研究する人に對していくらかの役に立つことを希望している。河南省歷史研究所は大いに本書の編輯出版工作を支持した。此の為に、謹んで謝意を表す。

中國科學院考古研究所　一九六四年一月。

註〔一〕　本書は孫海波氏の『甲骨文編』と同名であり、孫氏の書を改訂したものである。著者は中國科學院考古研究所の甲骨研究班の手によるものであると思はれる。收錄字數は四六七二字。編纂方法については凡例に詳しいので參照されたい。出版は一九六五年、中華書局。

編輯凡例

一、本編收字、以實物照像及拓本覆印為主、至摹本中有罕見之字、亦酌為收錄。所收之書及書名簡稱，見引書簡稱表，附於卷末。

一、所收各字、均依原文摹錄。凡印本漫滅無法臨摹的字，皆不入錄，以免謬誤。

一、凡一字而同版數見的、除字體特異者外、餘均版錄一字、不再標注每版所見的字數。

一、凡一版而各書重複互見的，僅錄其一。有印本則錄印本而不錄摹本；如同係印本，則選較好者入錄。

一、分部別居、悉依說文解字。每字之首、冠以說文的篆文，並注明此編的順序數，以清眉目。

一、凡一字而有數解的，兼存異說，於其字下注明「某人釋某」，以備參考。

一、凡一字而具數體的、用說文或體之例、於其字下注明「某或為某」。

一、凡一字而有數用的、用互見之例，於其字下注明「用某為某」，「某用為某」，以資區別。

一、卜辭中有關考證的重要辭例，選錄其一二條，分別附注於所收各字之下。

一、甲骨文字有可以按其偏旁隸定者，雖為說文所無、仍用徐鉉新附之例，附於各部之後，注明「从某从某，說文所無」。每字之首，冠以隸定的字體。

一、甲骨文中合書之字甚多，別為「合文」一卷，附於「正編」之後。

一、不能辨認的字，或其字雖經學人考釋而尚未成定論者，畧依其偏旁所從分類，收入「附錄上」。校改時從正編和附錄中所抽出來的字以及寫定後所補收的新字，如干支卜貞等，

少則數十見，多則數千見，其辭例足供考覈，而文繁不煩備錄，仍依茲編次第，別錄爲「甲骨文索引」，另書印行。

一、卷末附檢字一卷，以供檢查。數字代表卷葉，合字代表合文，附字代表說文所無，按其偏旁隸定而附載於各部之後者。

一、本編に收める字は、實物の寫眞と拓本の覆印を以て主とする。摹本中に至って罕れに見る字があるが、亦酌みて收錄した。收める所の書及び書名の簡稱は、引書簡稱表を見よ。卷末に附した。

一、收める各字は、均しく原文の摹錄による。凡そ印本はさっぱりなくなり摹する方法のない字は、皆な謬誤をされる為に錄さなかった。

一、凡そ一字にして同版に數見するものは、字體の特異なものを除いた外は、均しく版を殘して一字を錄し、二度と各版に所見する字數を標注していない。

一、凡そ一版にして各書に重復互見するものは、僅かに其の一つを錄した。印本には則ち印本を錄し、摹本を錄していない；同係の印本の如きは、則ち好いものを選んで錄した。

一、分部別居は、悉く『說文解字』による。字の始めごとに、說文の篆文を冠した。並に此の編の順序數を注明し、眉目をあきらかにした。

一、凡そ一字で數解のある者は、異說を兼存し、其の字の下に「某人、某と釋す」と說き明かした。

一、凡そ一字で數體を具へる者は、說文の或體の例を用いて、其の字の下に「某或は某と為す」と說き明かした。

一、凡そ一字にしてしばしば用いるものは、互見の例を用い、其の字の下に「某を用いて某と為す」、「用いるに某は某と為す」と說き明かし、區別に資した。

一、卜辭中に考證に關する重要辭例は、其の一、二條を選錄し、分別して收める各字の下に注を附した。

一、甲骨文字には其の偏旁隸定すべきものは、說文にはないけれども、仍ち徐鉉の新附の例を用い、各部の後に附し、「某に从ひ某に从う、說文に無きところ」と、毎字のはじめに隸定の字體を冠した。

一、甲骨文中には合書の字が甚だ多い、別に「合文」一卷をつくり、「正編」の後に附した。

一、區別し認めがたい字は、或は其の字が學人の考釋をへていて未だ定論となっていないものは、ほぼ其の偏旁によってよる所の分類で、「附錄上」に收めた。校改の時正編と附錄中より抽出してきた字及び書いてから補收した新字は、均しく「附錄下」に列ねた。

一、本編に錄するところは、同文異體字を以て主とする。同文同體の字に至っては、干支卜貞等の如く、少なくて則ち數十見、多ければ則ち數千見、其の辭例は考覆に供するに足る。而るに文が繁にして備錄に煩らはされず、仍ち茲の編の次第によって、別に錄して「甲骨文索引」をつくり另に書を印行した。

一、卷末には檢字一卷を附し、以て檢查に供した。數字は卷葉を代表し、合字は合文を代表し、附屬の字は說文に無いものを代表する。其の偏旁隸定によって、各部の後に附載した。

九七、甲骨文字集釋〔二〕

殷人用為占卜之龜甲牛骨，出現於洹水之濱者，不知幾歷歲年。安陽土人，初本用為藥物。自清光緒二十五年福山王懿榮氏識為古文刻辭以來，於今六十有六載矣。學者由識字而正說文之失，與夫經說及史事之訛；進而斷代分期，作多方面之探討。於是藏甲骨刻辭者遍寰宇，治之者，亦旁及殊方之士。約略計之，六十餘年來，甲骨文專書已刊布者得百八十餘種，論文得九百七十餘篇。可謂極一時之盛矣。

但就識字一端言之，劉鶚之印鐵雲藏龜也，自謂能識四十餘字。然今日覘之，彼所釋而不誤者，實僅三十四字；其中且有數目字二，干支字一十有九，凡此皆最易辨認者也。光緒三十年，孫詒讓著殷契舉例，所釋而可信以及近是之字凡百八十餘。民國四年，羅振玉作殷虛書契考釋，已得四百八十五字。十六年，羅氏增訂前書，收字五百七十有一。厥後治斯學者漸衆，識字亦漸夥。孫羅二家所釋，今已證知其誤者頗多。然啟之辟之，以導先路，其功實不可沒也。

以字書之體例輯甲骨文字為書者，初有王襄之簠室殷契類纂，及商承祚之殷虛文字類編。前者乃王氏一家之言，且其書雜有偽刻文字；後者亦僅著羅雪堂王靜安二家之說，且所收可識之字不及八百。故其用皆未弘。嗣後如朱芳圃之甲骨學文字編，雖集錄衆家之說，而其時能識之字究尚無多。孫海波甲骨文編繼出，收錄之字較夥；吾友金祥恆先生續甲骨文編，蒐羅尤備。然二書以限於體例，但列各字異體，不著諸家說解之辭。學者欲究某字何以釋某，初釋其字者何人，至何人而成定讞，凡此，皆不克於二書得之也。

解釋甲骨文字之作，以論文為多。殷契專書，流傳既已不廣；論文散見於期刊，檢閱尤難。故治斯學者，每以為苦。友人李陸琦先生，欲為學林釋此憾，乃發憤著是書。經始於民國三十年之秋，越三載而脫稿。時戰亂初定，稿遺北平，未及梓行。迨赤氛既張，中原鼎沸，乃隨中央研究院歷史語言研究所播遷臺員。近歲以來，重理舊業；既網羅衆家之說而折中之，又或獨抒所見創為新解，爬羅剔抉，又五年而蕆事。卷帙倍於舊稿，陳義邁乎前修。自有甲骨文字書以來，斯可謂集成之作矣。

夫治文字之學者，固不容不識甲骨文字；治古史者，尤不容不參稽此殷代之直接史料。甲骨文不同之字，今可知者，數逾三千，可識者亦達千餘。其足以訂許君之舊說，正古史之野言者，比比皆是。而拘墟之士，猶獨抱說文與傳說之古史，硜硜自守。推原其故，蓋以臺瀛公私家藏殷契之書者既罕，且無便於初學研習之作以導之，遂致學者多昧於此三千年前之真文獻，而不得不墨守陳說故步自封耳。今陸琦此書出，既可為初學者升堂之階，又足為續學者商究之資。奇字異體並陳，得比勘之便；定論歧說駢列，省檢索之勞。行見家藏斯編，人識龜文。此不僅治文字學者之寶筏，其影響於學術風氣者，蓋尤大。

中華民國五十四年四月二十九日　屈萬里序。

殷人用ひて占卜を為すの龜甲牛骨、洹水の濱に出現する者、幾歷歲年を經るかを知らず。安陽の土人は、初め本用ひて藥物と為す。清の光緒二十五年、福山の王懿榮氏（王懿榮・『鐵雲藏龜』註〔十二〕・第一輯一五頁參見）古文の刻辭為るを識りてより以來、今に六十有六載なり。學者は識字に由りて說文の失と、夫の經說及び史事の訛とを正す。進みて斷代分期し、多方面の探討を作る。是に於て甲骨刻辭を藏する者は寰宇に遍ねく、これを擧治

せしむる者も、亦旁ねく殊方「他國の地」の士に及ぶ。約略これを計ふれば、六十餘年來、甲骨文の專書已に刊布する者は百八十餘種を得、論文は九百七十餘篇を得。一時の盛を極むと謂ふ可し。

但だ識字の一端に就いてこれを言へば、劉鶚（劉鶚・『鐵雲藏龜』註〔九〕・第一輯一三頁參見）の『鐵雲藏龜』を印する也、自ら謂へらく「能く四十餘字を識る」と。然れども今日これを覌れば、彼の釋する所にして誤まらざる者は、實に僅かに三十四字のみ。其の中には且つ數目の字二つ、干支字一十有九有り。凡そ此れ皆な最も辨認し易き者也。光緒三十（一九〇四）年、孫詒讓（孫詒讓・『契文擧例』註〔一七〕・第一輯四九頁參見）『契文擧例』を著す。釋する所にして信ず可く以及これを是とするに近きの字凡百八十餘なり。民國四（一九一五）年、羅振玉（羅振玉・『鐵雲藏龜』註〔八〕・第一輯一一頁參見）『殷虛書契考釋』『增訂殷虛書契考釋』註〔二〕第一輯八三頁參見）を作る、已に四百八十五字を得。十六（一九二七）年、羅氏は前書を增訂し、字五百七十有一を收む。厥の後斯の學を治むる者は漸く衆く、識字も亦漸く夥しい。孫・羅二家の釋する所は、今、已に證して其の誤りを知る者は頗る多し。然れどもこれを啓きこれを闢いて、以て先路を導く、其の功は實に沒す可からざる也。

字書の體例を以て甲骨文字を輯編して書を爲る者は、初め王襄（王襄・『簠室殷契類纂』註〔八〕・第一輯一五八頁參見）の『簠室殷契類纂』（『簠室殷契類纂』註〔三〕・第一輯一五五頁參見）、及び商承祚（商承祚・『殷契文字類編』註〔五〕・第一輯一七三頁參見）の『殷虛文字類編』（『殷虛文字類編』註〔二〕・第一輯一七〇頁參見）有り。前者は乃ち王氏一家の言、且つ其の書は僞刻文字を雜有す、後者も亦僅かに羅雪堂・王靜安（王國維・『增訂殷虛書契考釋』註〔三十三〕・第一輯一〇一頁參見）二家の説を著すのみ、且つ收むる所の識る可きの字は八百に及ばず。故に其の用皆な未だ弘からず。嗣で後ち朱芳圃（朱芳圃・『甲骨學文字編』註〔三〕・第二輯二五一頁參見）の『甲骨學文字編』（『甲骨學文字編』註〔二〕・第二輯二四九頁參見）の如きは、衆家の説を集錄すると雖ども、而して其の時能く識るの字、究に尚ほ多きこと無し。孫海波（孫海波・『鐵雲藏龜』註〔四十〕・第一輯三八頁參見）の『甲骨文編』（『甲骨文編』註〔三〕・第二輯二六九頁參見）繼いで出づ、收錄の字は較夥しい；吾が友金祥恒（金祥恒・『中國書譜』註〔三〕本輯三〇七頁參見）先生の『續甲骨文編』（『續甲骨文編』註〔二〕・本輯三〇六頁參見）は、蒐羅尤も備はる。然れども二書は體例に限るを以て、但だ各字の異體を列し、諸家説解の辭を着さず。學者某字は何を以て某と釋し、初め其の字を釋する者は何れの人、何れの人に至りて定獻を成すかを究めんと欲すれば、凡そ此れ、皆な二書にしてこれを得る克はざる也。

甲骨文字を解釋するの作は、論文を以て多しと爲す。殷契の專書は、流傳既に已に廣からず、論文は期刊に散見し、檢閱尤も難し。故に斯の學を治むる者は、每に以て苦しみを爲す。友人李陸琦（李孝定・『殷曆譜』註〔四四〕・第三輯三四四頁參見）先生は、學林の爲に此の憾を釋かんと欲し、乃ち發憤して是の書を著す。民國三十（一九四二）年の秋に經始し、三載を越えて脫稿す。時に戰亂初めて定まり、稿を北平に遺る。未だ梓行に及ばず。赤氛既に張り、中原鼎沸するに迨んで、乃ち中央研究院歷史語言研究所に臺員を播遷「遠くにさすらう」するに隨ふ。近歲以來、重ねて舊業を理る；既に衆家の説を網羅してこれを折中し、又或は獨り見る所を抒べ創めて新解を爲す。杷羅剔抉し、又五年して事を蔵す。巻帙は舊稿に倍し、義を陳べること前修を邁ぐ。甲骨文字の書有りてより以來、斯れ集成の作と謂ふ可し。

夫れ文字の學を治むる者は、固より甲骨文字に識らざる容からず、古史を治むる者は、尤も此の殷代の直接史料を參稽せざる容からず。甲骨文の同じからざるの字、今知る可き者は、數三千を逾ゆ、識る可き者も亦千餘に達するなり。其の以て許君の舊説を訂すに足り、古史の野言を正すに足る者は、比比として皆な是なり。而して拘墟の士は、猶ほ獨り説文と傳説の古史を抱き、硜硜として自から守る。推して其の故を原ぬれば、蓋し臺灣公私家に殷契の書を藏する者は既に罕れなり、且つ初學の研習に便なるの作　これを導く無きを以て、遂に學を致す者多く此の三千年前の眞の文獻に睽く、而して陳説故步を墨守して自から封ぜざるを得ざるのみ。今、陸琦の此の書出で、既に初學者堂に升るの階を爲る可く、又學を積む者の商兌の資と爲すに足る。奇字異體並に陳ね、比勘の便を得るなり；定論歧説騈列し、檢索の勞を省く。行斯の編を家藏して、人、龜文を識るを見ん。此れ僅かに文字學を治むる者の寶筏「佛教に歸依するたとへ」のみならず、其の學術風氣に影響する者は、蓋し尤も大なり。

中華民國五十四（一九六五）年四月二十九日　屈萬里序す。

註〔一〕　本書は李孝定の手による。甲骨文字の隸釋ならびに釋字については從來多くの學者によって試みられてきたことは周知のごとくである。こゝに集められた正字は一六九八字、これについて充分に著者は諸家の説を引いて釋字を行い按語を附し新説を出している。この書は大部なもので全四七六六頁、十六册、巻首には屈萬里、張秉權、自序、凡例、正文目錄、存疑目錄、本書索引、本書所收諸家異説索引、存疑索引、本書引用諸家著述書名簡稱對稱表、後記を收め、第一册―第十四册は正文の集釋。第十六册は補遺、存疑、待考を收める。出版は一九六六年、中央研究院歷史語言研究所。

〔張秉權序〕

昔者裴注三志，酈注水經，李注文選，莫不博采典籍，旁搜襍志，鈎稽異説，網羅舊聞，條分縷述，載在注釋。故當時文獻，賴以傳後，後之學者，得以稽古，存雖片羽，彌足珍貴，獲惟鱗爪，裨益良多，是則三氏之於藝文，功莫大焉。予友李子，字孝定，號陸琦，湖南常徳人也。曩在南雍，嘗從蘄春黃季剛、嘉興胡小石諸先生游，好學深思，雅擅辭翰，旋入史語所，爲南陽董彥堂先生及門高第，鑽研卜辭，歷有年所。今乃綜覈契文，撰著甲骨文字集釋十四卷，都數百萬言。斯誠千秋之盛業，不朽之巨構也。觀其分別部居，師範叔重，歸納衆流，有若淵海，蓋欲存諸家之異説，集近賢於大成。驅策羣彥，役使百氏，以證其説，以申其論。凡所徵引，皆有出處，至於冶煉金沙，攻錯玉石，評論折衷，具見勝義，殆又度越三氏，卓然成家矣。

夫甲骨者，殷人之所遺，近世之顯學也。炳燿於宇內，傳播於海外，流風所及，人相爭習，殊方學士，類能言之，自孫仲容以來，著者輩出，而考文證史之作，林林總總，更僕難數，或連篇累牘，以騰其説，或片言隻語，以述其要，若此之類，蓋云衆矣。率多分載於襍志，散見乎報章，檢閲費時，搜尋尤難，不有集釋之製，何得逢源之樂。案書契集釋，始於葉氏玉森，原其要旨，厥在考釋前編，故倚傍卜辭，隨文敷演，甄集雖富，苦無系統耳。若夫字書之流，王氏類纂，商氏類編，蓽路藍褸，粗具規模，雖有椎輪之功，實無使用之利。而朱氏文字之編，又復取資未周，簡畧殊甚，學者病之，安足道哉。逮孫氏文編，金氏續編，則以字形爲主，許説爲副，以之解釋卜辭，殊多鑿枘，用爲考據索引，又感不足。縱目近世字林，其能兼顧形義，疏通卜辭，方便學人，易於檢閲者，蓋亦鮮矣。乃今李子，有志於斯，孜孜矻矻，發憤忘食，上探契文演變之蹟，下窮諸家紛紜之説，彙而集之，分而析之，其於

考訂，時或推陳出新，深入精微。凡所解析，往往擘分肌理，妙造幽趣。閲時廿載，無間寒暑。成此巨著，嘉惠士林，洵足以共日月而長存，並金石而不敝矣。

中華民國五十四年五月十八日　張秉權序於台北南港。

昔は裴「松之」〔二〕『三志』を注し、酈「道元」〔三〕は『水經』を注し、李「善」〔四〕は『文選』を注し、博く典籍に采り、旁く襍志に搜さざるは莫し。異説を鈎稽し、舊聞を網羅して、條分縷述し、載して注釋に在り。故に當時の文獻は、賴に以て後に傳ふ、後の學者は、以て古へを稽ふるを得。存するもの片羽と雖ども、彌珍貴とするに足る。惟れ鱗爪を獲て、裨益良に多し、是れ則ち三氏の藝文に於ける、功焉より大なるは莫し。予の友李子は、字は孝定、號は陸琦、湖南常徳の人也。曩に南雍「南京」に在り、嘗って蘄春「湖北省」の黃季剛（黃侃・『古文聲系』註〔三十六〕・第二輯三五九頁參見）嘉興「浙江省」の胡小石（胡光煒・『甲骨文例』註〔五〕・第一輯三〇二頁參見）諸先生に從ひて游す、學を好んで思ひを深くし、雅に辭翰を擅にす、旋て史語所に入り、南陽「河南省」の董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）先生及門の高第爲り、卜辭を鑽研し、年所を歷有す。今乃ち契文を綜覈し、甲骨文字集釋十四卷を撰著す、都て數百萬言。斯れ誠に千秋の盛業にして、不朽の巨構也。其の分別部居を觀れば、叔重を師範にし、衆流を歸納し、淵海の若き有り、蓋し諸家の異説を存せんと欲し、近賢を大成に集む。驅して羣彥に策し、百氏を役使し、以て其の説を證し、以て其の論を申ぶ。凡そ徵引する所、皆な出處有り。金沙を冶煉し、玉石を攻錯するに至っては、評論折衷し、具さに勝義を見る、殆んど又三氏を度越し、卓然として家を成すなり。

夫の甲骨は、殷人の遺る所、近世の顯學也。宇內に炳燿し、海外に傳播し、流風及ぶ所、人相ひ爭ひて習ふ、殊方の學士、類むね能くこれを言ふ、孫仲容（孫詒讓）以來より、著者輩出す。而して文を考へ史を證するの作は、林林總總として、更僕「侍御の人を更代させる」數へ難く、或は連篇累牘して、以て其の説を騰げ、或は片言隻語、以て其の要を述べ、此くの若きの類は、蓋し衆しと云ふ。率く襍志に分載すること多く、報章に散見す、檢閲に時を費し、搜尋尤も難し、集釋の製有らずんば、何ぞ逢源の樂を得ん。案ずるに書契の集釋は、葉氏玉森（葉玉森・『殷契鈎沈』註〔三〕・第一輯一八二頁參見）に始まる、其の要旨を原ぬれば、厥れ前編に考釋在り、故に卜辭に倚傍し、文に隨って敷演す。甄集富むと雖ども、系統無きに苦しむのみ。夫の字書の流れ、王「襄」氏の『類纂』、商「承祚」氏の『類編』の若きは、蓽路藍褸にして、粗規模を具ふ、椎輪の功有りと雖ども、實に使用の利無し。而して朱「芳圃」氏文字の編は、又復た資を取るに未だ周ねからず、簡略殊に甚しく、學者これを病む、安んぞ道ふに足らんや。孫「海波」氏の『文編』、金「祥恒」氏の『續編』に逮んで、則ち字形を以て主と爲す、許説副と爲し、これを以て卜辭を解釋す。殊に鑿枘多く、用って考據の索引を爲すに、又足らざるを感ず。近世の字林に縱目するに、其の能く形義を兼顧すれば、卜辭に疏通し、方に學人に便じ、檢閲に易き者は、蓋し亦鮮し。乃ち今、李子は、斯に志有り、孜孜矻矻「勞をおそれず」として、發憤して食を忘れ、上は契文演變の蹟を探り、下は諸家紛紜の説を窮む。彙めてこれを集め、分ちてこれを析し、其の考訂に於ける、時に或は推し陳べて新しきを出だす、深く精微に入る。凡そ解析する所、往往肌理を擘分し、妙は幽趣に造る。時を閲すること廿載、寒暑に間無し。此の巨著を成して、士林に嘉恵す。洵に以て日月を共にして長く存し、金石を並べて敝えざるに足る。

中華民國四十五「一九六五」年五月十八日、張秉權（張秉權・『殷虛文字甲編』註〔七〕・第四輯八頁參見）台北南港に於て序す。

註〔二〕　裴松之（三七二—四五一）字は世朝。河東聞喜の人。南朝宋の官僚、歷史家。官は中書侍郎、西郷侯となる。元嘉六年、文帝の命令で、陳壽の『三國志』が良史だが欠略が多いのを補うべく『三國志注』を著わし、『魏略』をはじめ二〇三種の古史、覇史、別傳、家傳の類を引用した。文選李善注、世説新語劉孝標注、酈道元水經注とならび六朝史の考證に資するところ多く、文帝も彼の業を賞えた。

註〔三〕　酈道元（？—五二七）字は善長。河北省の人。北魏の地理學者。官としては尚書の官や州の知事になったが、のち蕭寶寅の反亂のため陰盤の驛亭で殁した。その著述には本志十三編、七聘および諸文があったというが傳わらない。漢代の書と考えられる『水經』に注を施した『水經注』四十巻は、南北朝に多く作られた地理書の集大成であり、彼の名を不朽にしている。

註〔四〕　李善（？—六八九）唐の學者、揚州江都の人。高宗のとき、崇文館學士となり、『文選』の注六十巻をかき表賞にあづかった。のち涇城の令となったが、事件に連座して姚州に流された。許されてのちは諸生に講授し、その學は文選學と稱された。李善ののち五臣注がでたが彼の注には遠く及ばない。

自序

自殷虛甲骨出土以來。六十餘年間、爲之考訂研索者、無慮數十百家。或據以證驗古代歷史、或據以考見社會制度。或講曆法。或研禮制。而要皆以創通文字爲先務。至甲骨文字之研究。自瑞安孫氏導乎先路。羅王繼起。力邁前修自、後碩學通人作者朋興。踵事增華。斯學益富。弘篇鉅製。卷帙繁興。而初學之士。恆苦津逮莫由。於是有采摭衆說。編爲字書。分別部居。用便省覽者如羅振玉殷虛書契待問編。王襄簠室殷契類纂。商承祚殷虛文字類編。殷虛文字待問編。朱芳圃甲骨學文字編。孫海波甲骨文編。金祥恆續甲骨文編之屬。惟是諸書。或著一家之言。無以考見衆說。或羅各家之說。而復未定取舍。或則僅錄文字。而說解闕如。或則節引考釋而出處從畧。稽考不便。疵病難免。且諸書編成除金氏續文編。成書較晚。自餘最晚者迄今亦垂二十餘年。其間更有新說。莫由采錄。爰擬效諸書體例。更加增廣。博采衆說。而後定以己見。庶使檢一書而諸說。並陳考一字而淵源悉備。則於初學。或亦不無裨助也。本書之分別部居。一仍許氏說文解字。萬貫始一終亥。分爲十四卷。另附補遺一卷。正文未備者。屬之存疑一卷。諸家有釋而未能成爲定論者。屬之待考一卷。不可識之字屬之又卷首一卷。擧凡序言凡例目錄索引引書簡表後記等均屬之。每字之下首列該字各種異體。（本書重在甲骨文。文字學之研究非索引性質。故於一文之同形重出者。不悉錄。蓋有孫海波之甲骨文編。金祥恆之續甲骨文編。在可供學者檢索也。）次擧各家異說。並詳注出處書名卷葉。以供檢覈。然後別出按語。定以己意。自民國四十八年十月經始歷時五年有半而全書始成。自審學殖荒落。文質無所底。重以付印。匆遽未遑校理謬悠之說魯魚之譌所在。多有方聞君子。進而教之。則幸甚矣。

中華民國五十四年五月十日。李孝定序於台北南港中央研究院。

407

殷虛甲骨出土してより以來、六十餘年間、これが考訂研索を爲す者は、無慮數十百家なり。或は據りて以て古代歷史を證驗し、或は據りて以て社會制度を考見す。或は曆法を講じ、或は禮制を研す、而して要するに皆な文字に創通するを以て先務と爲す。甲骨文字の研究に至りては、瑞安の孫「詒讓」氏先路を導き、羅「振玉」、王「國維」繼いで起り、力は前修を邁せし自り、後ち碩學通人より作者朋に興る。事を踵いで華を增し、斯の學益々富む。弘篇の鉅製、卷帙繁く興る。而して初學の士は、恒に津逮の由る莫きに苦しむ。是に於て衆説を采摭する有り、編して字書を爲る、部居を分別し、用って省覽に便ずる者は羅振玉の『殷虛書契待問編』、王襄の『簠室殷契類纂』、商承祚の『殷虛文字類編』、『殷虛文字待問編』、朱芳圃の『甲骨學文字編』、孫海波の『甲骨文編』、金祥恒の『續甲骨文編』の屬の如し、惟だ是の諸書は、或は一家の言を著し、以て衆説に考見する無し、或は各家の説を羅ね、復た未だ取舍を定めず、或は則ち僅かに文字を錄するのみにして、説解闕如す。或は則ち考釋を節引して出處は畧に從ふ。稽考便ならず、疵病免れ難し。且つ諸書の編成には金氏の『續文編』を除けば、書を成すこと較晚し。自餘最も晚き者は、今に迄るまで亦二十餘年に垂んとす、其の間更に新説有り、采錄するに由莫し、爰に諸書の體例に擬效し、更に增廣を加へ、博く衆説を采り、而して後定むるに己見を以てす。一書を檢べて而して諸説並に陳べ一字を考して淵源悉く備はら使むるに庶ければ、則ち初學に於て、或は亦裨助無くんばあらざる也。本書の分別部居は、一に許氏の『説文解字』に仍る。萬貫「萬來のしき」は一に始まり亥に終る、分ちて十四卷と爲す、另に補遺一卷を附す、正文未だ備はらざる者は、これを存疑一卷に屬す。諸家に釋有り未だ成して定論と爲す能はざる者は、これを待考一卷に屬す、識る可からざるの字は之を又卷首一卷に屬す。凡そ

408

序言、凡例、目錄、索引、引書、簡表、後記等を擧げて均しくこれに屬す、每字の下首に該字各種の異體を列す、（本書は甲骨文を重んずる在り、文字學の研究は索引の性質に非ず、故に一文の同形に重出する者は、悉く錄さず、蓋し孫海波の『甲骨文編』、金祥恒の『續甲骨文編』は、學者の檢索に供す可きに在る有り。）次に各家の異説を擧げ、並に出處の書名卷葉を詳注し、以て檢覈に供す。然る後、別に按語を出だし、定むるに己の意を以てす。民國四十八（一九五九）年十月より經始して時を歷すること五年有半にして、全書始めて成る。自から學殖荒落、文質底まる所無きを審らかにし、重ねて以て付印す、忽據として、未だ謬悠「でたらめ」の説、魯魚「文字の寫し誤り」の譌の所在を校理するに遑まあらず、多く方聞の君子、進んでこれを教ふる有らば、則ち幸甚なり。

中華民國五十四（一九六五）年五月十日。李孝定台北南港中央研究院に序す。

409

甲骨文字集釋凡例

一、本書取材以殷虛出土甲骨文字經諸家著錄並考釋者爲主。他如鐘鼎彝器銘文之考訂與此足資參證者。間亦採入。

一、有關甲骨文字考釋之專著。其流布較廣。搜求較易者大概畧備。於是至單詞隻字之考訂。多散見於報章雜誌。雖已盡力蒐羅。然疏漏實多。未能悉備。

一、本書之分別部居。悉從說文正文。計十四卷。另附卷首一卷。擧凡序言凡例目錄索引引書簡表後記之類屬之。補遺一卷正文未備者屬之。存疑一卷諸家有釋而未能成爲定論者屬之。待考一卷係就孫海波甲骨文編金祥恆續甲骨文編兩書附錄所迻錄。非甲骨文不可識之字。悉備於此也。

一、本書每字之下於眉端。首列篆文。次擧甲骨文之諸種異體。其同形屢見者不悉錄。次列諸家考釋。並儘可能注明出處書名卷葉。後加按語。定以己意。

一、鐘鼎彝銘文字。上承契文。下啟小篆。於文字學之鑽研。實可互爲發明。本書於所收契文諸字之下如金文中亦有此字者。則於按語中。就容庚所輯金文編悉錄。所見異體。以利比勘。

一、本書所收甲骨文字均據孫海波甲骨文編及金祥恆續甲骨文編所輯。但加臨寫。每多失真覽者。欲睹原文。仍當求之影本。至二書所輯諸文。則分見下列諸書。本書於每一甲骨文字之下。分注書名。以備查考。其書名代字。如下表。

藏　鐵雲藏龜

中略

一、本書輯錄諸家著述。力求詳盡。故多迻錄全文。其或原文過長。或則發爲論議。與文字

410

之研究無涉者則加刪節而於刪節之處。注「中畧」「下畧」字樣以明之。

一、本書引用諸家著述。皆於每條之下。注明書名卷葉。書名多用簡稱。別爲本書引用諸家著述書名簡稱對照表附之卷首。用便檢覈。其或引用之次數較少者。則隨文附注。未備於此。

一、本書卷首列目錄一編。分正文重文。說文所無字三類均以大字標出重文之下。注◎形符號。說文所無字之下注△形符號。（說文所無而見於後世其他字書者亦同。）以爲識別。並於每字之下標明本書葉次。用便檢尋。其諸家所釋與本書所采異趣者。如第七卷二四九五葉宮字條。諸家或釋雍、紓、呂、旁、予、環、田、營諸字。則於諸家異說。分別以小字標出。低一格注於正文。大字之下。亦各標明葉次。

一、本書目錄所偁正文概爲說文所有之字。

一、重文者制作之始字少而文多。及後形聲相益孳乳寖多。卜辭之中此類實多。如且爲祖、彔爲祿、豊爲禮、畐爲福、羊爲祥、匕爲妣、乍爲作、各爲格、㞷爲往、复爲復、凡爲風之類。即以後一字爲前一字之重文。分隸二部注明某字重文。契文多有偏旁。可識而其字之音義。不可確知者即就偏旁隸定以爲說文所無字。附於各部之末。計得五六五字。實則待考一卷中若此之類尚多。以待考一卷。寫定時正文。早已寫成。付印未及補入。

一、本書另附索引三種，(甲)本書索引凡本書正文十四卷及補遺一卷。目錄以大字標出之。正文重文說文所無字屬之。(乙)本書所收諸家異說索引凡諸家異說在上。舉十五卷目錄中。以小字標出者屬之。(丙)存疑索引凡存疑一卷目錄所有之字屬之。皆以筆畫多少爲序。並於每字之下注一阿剌伯數字以示該字所在卷次。（在補遺卷首則注一補字）下出中文數

字。則爲該字所在之總葉碼。筆畫計數悉以楷書爲準。

一、存疑一卷中有截然不同之二文。而治契諸家或有釋爲同字者並存之。如存疑第一第四四五一及四四五二葉有兩祼字。就契文言實爲截然不同之二字。而屈徐二家各釋其中一文爲祼。二說既並有可商。故均不收入正文。亦無由別擇。故並存之入於存疑。

一、本書の取材は殷虚出土甲骨文字の諸家の著錄並に考釋を經へし者を以て主と爲す。他は鐘鼎彝器銘文の考訂の如き此れと參證に資すに足る者は間〻亦採入す。

一、甲骨文字考釋に關わり有るの專著は、其の流布較〻廣く、搜求の較〻易き者は大抵略ぼ備ふ。是に於て單詞隻字の考訂に至りては、多く報章雜誌に散見す。已に力を盡して蒐羅すると雖も、然れども疏漏實に多く、未だ悉く備ふる能はず。

一、本書の分別部居は、悉く說文正文に從ひ、十四卷を計ふ。另に卷首一卷を附し、凡そ序言、凡例、目錄、索引、引書簡表、後記の類を擧げ之れを屬す。補遺一卷は正文の未だ備はらざる者之れを屬す。待考一卷は識る可からざるの字之れを屬す。待考一卷は孫海波の『甲骨文編』金祥恒の『續甲骨文編』の兩書の附錄して迻錄する所に係就す。甲骨文に非ずして識る可からざるの字は、悉く此に備ふる也。

一、本書は每字の下の眉端に首め篆文を列し、次に甲骨文の諸種異體を擧げ、其の同形の屢〻見ゆる者は悉くは錄さず。次に諸家の考釋を列し、並に可能な儘り注して出處の

書名・卷葉を明かにす。後ち按語を加へ、定むるに己の意を以てす。

一、鐘鼎彝銘の文字は、上は契文を承け、下は小篆を啓き、文字學の鑽研に於て、實に互に發明を爲す可し。本書は所收の契文諸字の下に金文中にも亦此の字有るが如き者、則ち按語中に於てす、就ち容庚輯むる所の『金文編』に悉く錄す。所見の異體は、以て比勘に利す。

一、本書所收の甲骨文字は均しく孫海波の『甲骨文編』及び金祥恒の『續甲骨文編』輯める所に據る。但臨寫（手本をみてかく）を加へ、每に眞贗を失ふ者多く、原文を睹んと欲して、仍ち當にこれを影本に求めんとすべし。二書の輯むる所の諸文に至り、則ち下列の諸書に分見す。本書は一甲骨文字の下每に、分ちて書名を注し、以て查考に備ふ。其の書名、字に代ふ、下表の如し。

藏　鐵雲藏龜

中略

一、本書に輯錄の諸家の著述は、力めて詳盡（くわしくつくす）を求め、故に全文を迻錄すること多し。其の或は原文長きに過ぎ、或は則ち發して論議を爲し、文字の研究と涉る無き者は刪節を加へて刪節の處に於て、「中畧」「下畧」の字樣（字の範式）を注し以てこれを明かにす。

一、本書引用の諸家の著述は、皆な每條の下に、注して書名卷葉を明かにす。書名は多く簡稱を用ふ。別に本書引用の諸家著述・書名簡稱對照表を爲りてこれを卷首に附し、用って檢覈に便ず。其の或は引用の次數の較や少き者は、則ち文に隨ひ注を附し、未だ此に備へず。

一、本書の卷首に目錄一編を列す。正文重文を分ち、說文に無き所の字三類は均しく大字を以て重文の下に標出し、◎形の符號を注す。說文に無き所の字の下に△形の符號を注す。（說文に無き所にして後世其の他の字書に見ゆる者も亦同じ。）以て識別を爲す。並に每字の下に本書の葉次を標明し、用て檢尋に便ず、其の諸家に釋する所と本書に采る所と趣を異にする者は、第七卷二四九五葉の宮字の條の如し、諸家或は雍・紓・呂・旁・予・環・田・營の諸字に釋す。則ち諸家の異說を分別するにおいて小字を以て標出し、一格低くして正文に注す、大字の下にも、亦各〻葉次を標明す。

一、本書の目錄に偁する所の正文は概ね說文に有する所の字爲り。

一、重文は制作の始め字少くして文多し、後ち形聲相い益し孳乳寖く多きに及ぶ。卜辭の中、此の類ひ實に多し。且を祖と爲し、彔を祿と爲し、豊を禮と爲し、畐を福と爲し、羊を祥と爲し、匕を妣と爲し、乍を作と爲し、各を格と爲し、㞷を往と爲し、复を復と爲し、鳳は凡そ風の類と爲すが如し、即ち後の一字を以て前の一字の重文と爲す。契文に多く偏旁有り、其の字の音義を識る可く、二部に分隸して某字の重文を注明す。

確知す可からざる者は即ち偏旁隸定に就いて以て說文に無き所の字と爲す。各部の末に附して、計へて五六五字を得、實に則ち待考一卷中此くの若きの類尚多し、待考一卷を以てす。寫定の時の正文、早や已に寫成して、付印に未だ補入するに及ばず。

本書は別に索引三種を附す。(甲)本書の索引は凡そ本書の正文十四卷及び補遺一卷、目錄は大字を以て之れを標出す。正文裏文の說文に無き所の字は之れに屬す。(乙)本書所收の諸家異說索引は凡そ諸家の異說は上に在り、十五卷の目錄中に擧ぐ。小字を以て標出する者は之れに屬す。(丙)存疑索引の凡そ存疑一卷目錄に有する所の字は之れに屬す。皆な筆畫多少を以て序を爲す。並に每字の下に一阿剌伯（アラビア）數字を注して以て該字の所在の卷次を示す（補遺卷に在る者は則ち一補字を注す）下に中文の數字を出だし、則ち該字所在の總葉碼を爲す、筆畫計數は悉く楷書を以て準と爲す。

一、存疑一卷中に截然として同じからざるの二文有り。契を治むる諸家、或は釋して同字と爲す者有り並に之れを存す。存疑第一第四四五一及び四四五二葉の如く兩の裸字有り、契文に就いて言へば實に截然として同じからざるの二字爲り、屈・徐の二家、各〻其の中の一文を釋して裸と爲す。二說既に並に譌る可き有り。故に均しく正文に收入せざるも、亦別擇に由る無し、故に之れを並存して存疑に入れる。

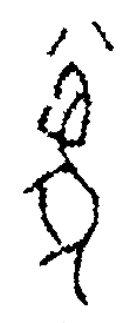
後記

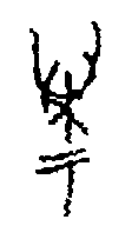
一、本書經始於民國四十八年十月時。先慈以腦血管阻塞之疾臥病。已一年有半。病骨支離輾轉牀第。羣醫束手。籲天無門。孝定於侍疾之餘。復當埋首於故紙堆中。以為此書蒐集資料。心力交瘁。如此者三年又九閱月。而先慈棄養。又歲餘而此書始成。定生年三歲。而慈父見背。先慈矢志撫孤。含辛茹苦至於成立。其所以望於定者。至殷而一事無成。冉冉將老。今茲此書之成。固亦微不足道。然慈母之於愛子。得此或亦可少慰其舐犢之情。而昊天不弔。先慈見背。忽且二年。遂並此亦不及見。烏乎痛哉。本書付印既竣。謹當以此獻慰慈母在天之靈。烏乎阿母鑒此微忱。

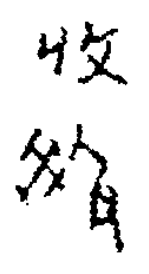
一、本書於四十八年十月開始蒐集資料。歷時兩年有半。有關資料。雖尚有未備。然亦不得不暫時告一段落。而於五十一年五月一日開始寫定。其始原擬先成初稿。再加校繕。嗣以編纂本書。先後曾向羅氏基金會及中國東亞學術計畫委員會。申請研究補助。其時所提計畫原擬於四年之內完成全書。嗣雖因寫作。計畫變更。申請延長一年獲准。所餘寫作時間亦僅兩年有半。且本所復校延長計畫之時間於五十一年十一月及五十二年十月先後兩次。向中國科學長期發展委員會。申請補助印刷經費。亦蒙先後在五十二及五十三兩年度內核准。補助印刷費用共十萬八千元計第一次八萬元第二次二萬八千元。此項經費須分別在五十三年六月底及五十四年三月底。支用完畢。並報銷竣事。故本書付印之期至為迫促。且刻不容緩不得不即以初稿隨寫隨印。未遑校繕。是以本書前數卷字跡潦艸殊甚。且因初步計畫原擬。更加校繕。故開始寫定時。每一甲骨文字之說解均另起一葉。蓋如是倘有闕漏。尚可隨時補正。嗣以付印匆遽。當時此項原稿已寫成約六七卷。未暇另付清繕。繼此有作。亦不得不仍。維原來之形式。故本書自始至終均屬每一字另起一葉。且字句之間。譌敓亦多實逼處。此覽者諒之。

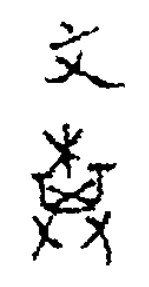
一、編寫目錄索引。時於本書全文。雖未細加校理。然亦嘗略事翻檢。已發現疏漏之處甚多。有如下述。此不過畧見一斑。非謂本書之譌誤疏漏。盡在於此也。

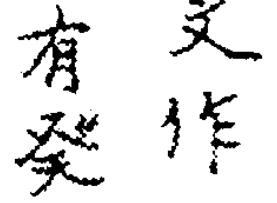
(甲)編纂方面之重出與譌誤

1、第二卷〇二七九葉八部末字條。應列入存疑。第二卷八部誤入正文。

2、第三卷〇九二七葉六行第三文《甲編、二七七四》一文。乃祓字已收入一卷祓字條下。復誤於三卷數下重出。後者當刪。

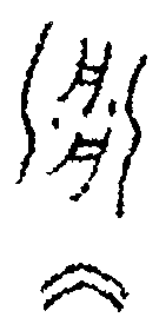
3、第三卷一〇八七葉攴部末。說文所無字。收作敪。按此字已收入第十二卷手部作揆。見三五七一葉。三卷敪字當刪。

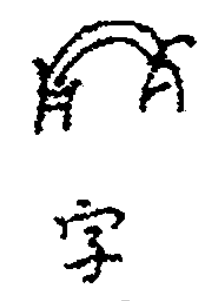
4、第四卷一三九五葉蘱字條下所收第二文《前二、十八、六》已收。作棊在一九九九葉。《六卷》蘱下所收當刪。

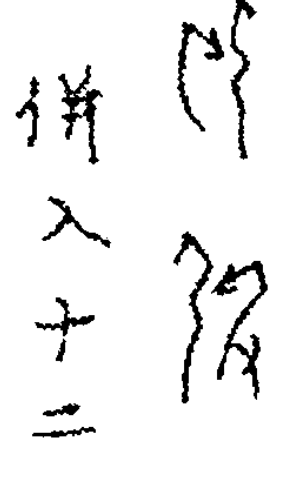
5、第五卷一七二三葉盟字契文作。當是益字。誤收。作盟當刪。

6、第十卷三一八七葉火部末有癸字。已收入第二卷癶部、在〇四七三葉。十卷火部一文。當刪說解。移入第二卷癶部癸字條下。

7、第十一卷三二七九葉第一行所引後、下三十、十三、一辭「令往湡」与「口未卜宕貞囚」之間有界畫痕。當非一辭。原文誤引。張秉權兄所告如此。

8、第十一卷二三八〇葉收《前・六・二・四》作洀。以為說文所無字。按本字已收入第八卷二七七一葉般字條下。第十一卷重出。當刪。洀字下所引諸條應移入第八卷般字條下。

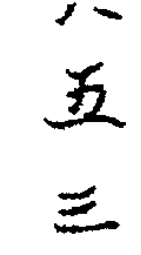
9、第十三卷三九一三葉字。當从郭沫若說釋霓。本書仍从于省吾說。收作虹。實誤。以寫定此字時始獲新證據。時第十一卷已印。就未及補正。說見三九二一葉。

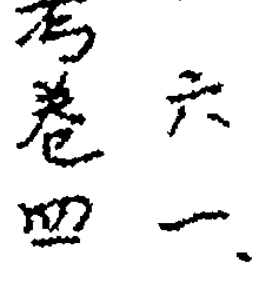
10、第十二卷三八四七及三八四八葉分收作旂二字。又於十四卷四〇九九葉斤部重出作旂。十四卷一文當刪說解。併入十二卷旂字條下。

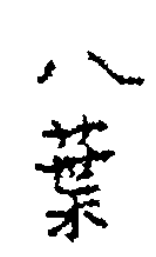
11、存疑第十卷四五六八葉奚字。存疑第十三卷四五八七葉又收作繫。後者當刪。併入十卷四五六八葉奚字條下。

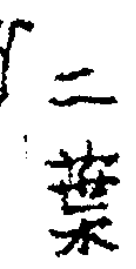
12、第十四卷四〇五七葉收鑄字。又於存疑卷四五九五葉重出、後者應刪。併入十四卷鑄字條下。

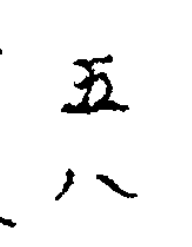
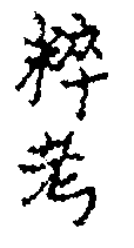
(乙)編纂方面之疏漏

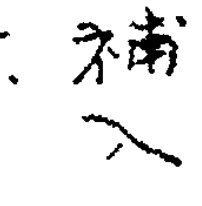
1 新、二六五三、有字。應釋甹。本書漏未收入。應補入第五卷丂部。

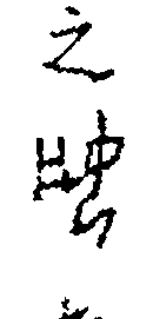
2、粹、一一六一、有字。應釋牆。本書漏未收入。應補入第五卷嗇部。

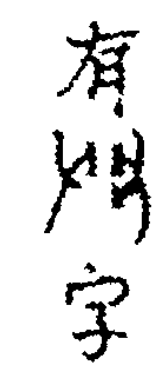
3、本書待考卷四六九八葉六行有字。疑當釋柄。應補第六卷木部。

4、本書第四卷一二九二葉睢字作《乙、三四六八》當釋普。補入七卷日部。

5、粹、一五八八有字、郭沫若粹考二一二葉下云「乃褘之繁文」。其說可从。當據補入八卷衣部。

6、續、三、三一、三、有字。續文編第七卷卅三葉上收作[illegible]。本書收作聑在十二卷三五四七葉。應於聑下。補金氏釋[illegible]一條。

7、本書待考四七〇六葉三行之。當釋妝。補入十二卷女部。

8、乙、三四四三有字。金氏續文編第七卷卅三葉上收作瘧。宜存疑補入存疑卷第七瘧字條下。

(丙)印刷方面之疏忽

1、第七巻二五〇九葉篆首膠字漏印一半。
2、第七巻二五五三葉篆首四字全字漏印。
3、第十二巻三七〇六葉第一文。説文所無字之嫈。漏印一點作嫈。
4、第十二巻三八一九葉篆頭匸字誤印作乚。

一、本書寫作期間。渥承董彥堂李濟之兩先生之督勵。深用銘感。寫印既竣。復承屈翼鵬張秉權兩先生作序獎飾過當。慚感莫名。又承許進雄卓敬三兩君代編索引。許君又爲編引書簡表。並校讀一至十一卷一過。並編成部分目錄。併此敬致謝忱。

中華民國五十四年五月廿四日李孝定謹記於臺北南港中央研究院歷史語言研究所。

一、本書は民國四十八（一九五九）年十月に經始〔開始〕す。時に先慈腦血管阻塞の疾を以て病に臥す、已に一年有半、病骨支離、牀第に輾轉す、羣醫手を束ね、天に籲れ門無し、孝定疾に侍の餘に、復た當に首を故紙推中に埋め、以て此の書を爲る、資料を蒐集して、心力交（こもごも）に瘁（や）む。此くの如き者三年又九閲月、而して先慈養を棄つ。又歳餘して此の書を始めて成る。定〔孝定〕生年三歳にして、慈父に背（そむ）かる。先慈の矢って孤を撫せんと志し、撫孤して辛を含み、苦き（にが）を茹（く）らひて成立に至る、其の定に望む所以の者、殷に至りて一事も成る無し、冉冉として將に老んとす、今、茲に此の書の成るは、固より亦微にして道ふに足らず、然れども慈母の愛子に於ける、或は亦少しく其の舐犢〔親が子を盲愛すること〕の情を慰む可し、而して昊天弔らはず、先慈背かれ、忽ちにして且（まさ）に二年ならんとす、遂に此れも亦見るに及ばず、烏乎痛ましいかな。本書の付印は既に竣る。謹んで當に此れを以て慈母天に在るの靈に獻慰すべし、烏乎

阿母此の微忱を鑒みよ。

一、本書は四十八（一九五九）年十月に資料を蒐集せんことを開始し、時を歴ること兩年有半、資料に闕ゆり有れば、尚未だ備はらざること有ると雖ども、然れども亦暫く時に一段落を告げざるを得ず、而して五十一（一九六二）年五月一日に寫定を開始す、其の始め原（も）と先づ初稿を成し、再び校繕を加へ、嗣いで本書を編纂せんと擬す。先後曾って向に羅氏基金會及び中國東亞學術計畫委員會に、研究補助を申請す、其の時、提する所の計畫は原（も）と四年の内に全書を完成、嗣いで寫作に因りて、計畫變更すと雖も、延長一年の獲准〔許〕を申請せんと擬す。餘す所寫作の時間も亦僅かに兩年有半のみ、且つ本所復校〔[illegible]〕は計畫の時間を五十一（一九六二）年十一月及び五十二（一九六三）年十月前後兩次に延長す、向に中國科學長期發表委員會に、印刷經費を補助せられんことを申請するも、亦先後五十二及び五十三兩年度内に在りて、核准を蒙く。此の印刷費用は共に十萬八千元計、第一次八萬元、第二次二萬八千元を補助せらる。此の項の經費は須らく分別するに五十三（一九六四）年六月底及び五十四（一九六五）年三月底に在るべし、支用〔支出して用ひる〕完華し、並に竣事を銷すを報ず。故に本書付印の期は至りて迫促〔さし迫る〕と爲り。且つ刻するに緩かにす容からず、即ち初稿を以て隨寫隨印せざるを得ず、未だ校繕に遑あらず、是を以て本書の前の數卷字跡は潦艸〔ことをなげやりにする〕殊に甚し、且つ初歩の計畫の原擬に因りて、原と更に校繕を加ふ、故に寫定を開始する時、一つ甲骨文字の説解ごとに均しく另に一葉を起す。蓋し是くの如く倘し闕漏有れば、尚隨時補正し、嗣いで以て怱遽付印す可し。當時此の項の原稿は已に寫して、約六七卷を成す、未だ另に清繕を付けるに暇あらず、此れに繼いで作ること有るも、

亦維れ原來の形式に仍らざるを得ず。故に本書は始めより終りに至るまで均しく一字毎に、另に一葉を起す、且つ字句の間、譌敓も亦實に過る處多し、此れ覽る者これを諒とせよ。

一、目録索引を編寫す、時に本書全文に、未だ細かく校理を加へずと雖ども、然れども亦嘗て略翻檢〔ためしなおす〕を事とす。已に疏漏の處を發現するの處、甚だ多きこと、下述の如き有り。此れ畧一班を見るに過ぎず、本書の譌誤疏漏は、盡く此に在りと謂ふに非らざる也。

(甲)編纂方面の重出と譌誤

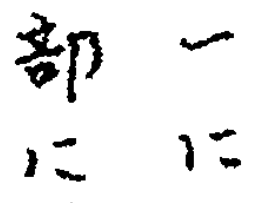
1、第二巻〇二七九葉の八部末の八[illegible]字の條は、應に列して存疑に入れるべし、第二巻八部は誤りて、正文に入る。
2、第三巻〇九二七葉の六行第三文の[illegible]〈甲編二七七四〉の一文、乃ち袚字は已に一巻袚字の條下に收入す。復た三巻斅の下に誤りて重出す、後者は當に删るべし。
3、第三巻一〇八七葉支部の末は、説文に無き所の字、[illegible]を收めて斅に作る、按ずるに此の字は、已に第十二巻手部に收入し、揆に作り、三五七一葉に見ゆ、三巻の斅の字は當に删るべし。
4、第四巻一三九五の奠字の條下に收むる所の第二文[illegible]〈前二、十八、六〉は已に收めて、棊に作り一九九九葉〈六巻〉に在り、奠下に收むる所は當に删るべし。
5、第五巻一七二三葉の盄字の契文は[illegible]に作る、當に是れ益の字、誤り收めて、盄に作るは、當に删るべし。
6、第十巻三一八七葉火部の末に𤆍字有り、已に第二巻癶部に收入し、〇四七三葉に在

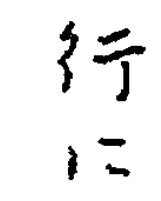
り、十巻火部の一文は、當に説解を删り、第二巻癶部𤆍字の條下に移入すべし。
7、第十一巻三二七九葉第一行引く所の曰後「編」上、三十、十三の一辭の「令往過」と「口未卜另貞皿」の間に界畫の痕有り、當に一辭に非ず、原文誤引す、張秉權兄告ぐる所此くの如し。
8、第十一巻三三八〇葉は[illegible]〈前六二、四〉を收め滑に作る、以て説文に無き所の字と爲り、按ずるに本字は已に第八巻二七七一葉に般字の條下に收入し、第十一巻に重出す。當に删るべし、滑字の下引く所の諸條は應に第八巻般字の條下に移入すべし。
9、第十三巻三九一三葉の[illegible]字は、當に郭沫若説の霓と釋するに從ふべし。本書は仍ほ于省吾説に從ひ、收めて虹に作り、實に誤まる、以て此の字を寫定する時に始めて新證據を獲る、時に第十一巻に已に印し、就ち未だ補正するに及ばず、説は三九二一葉に見ゆ。
10 第十二巻三八四七及び三八四八葉は[illegible][illegible]に分收し弜弢の二字に作る、又十四巻四〇九九葉の斤部に重出して弜に作る、十四巻の一文は當に説解を删り、十二巻の弜字の條下に併入すべし。
11、存疑第十巻四五六葉の奚字は、存疑第十三巻四五八七葉にも又收めて繫に作る、後者は應に删り、十巻四五六八葉の奚字の條下に併入すべし。
12、第十四巻四〇五七葉に鑄字を收む、又存疑巻四五九五葉に重出、後者は應に删り、十四巻鑄字の條下に併入すべし。

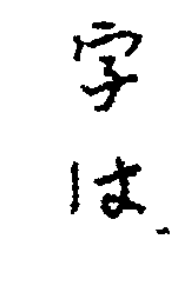
(乙)編纂方面の疏漏

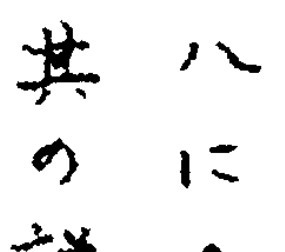
1、新二六五三に[illegible]字有り、應に甹と釋すべし、本書に漏れて未だ收入せず、應に第

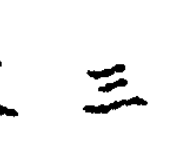
五巻丂部に補入すべし。

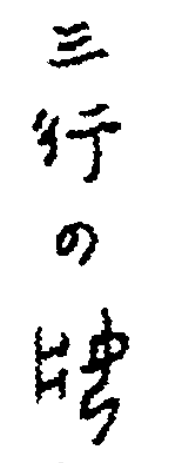
2、粹、一一六一に字有り、應に牆と釋すべし、本書に漏れて未だ收入せず、應に第五巻嗇部に補入すべし。

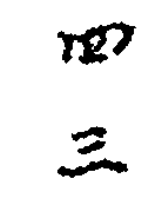
3、本書待考巻四、六九八葉六行に字有り、疑らくは當に柄と釋すべし、應に第六巻木部に補ふべし。

4、本書第四巻一二九二葉の唯字は、に作る、《乙三四六八》當に普と釋し、七巻日部に補入すべし。

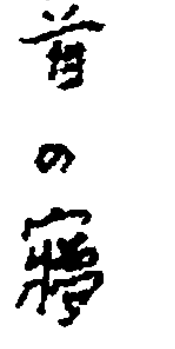
5、粹、一五八八に字有り、郭沫若粹考二一二葉下に云ふ「褱は乃ち禕の繁文なり」と。其の說从ふ可し、當に據りて、八巻衣部に補入すべし。

6、續三、三一、三に字有り、『續文編』第七巻卅三葉上に收めて黼に作る、本書は朋に作りて收む、十二巻三五四七葉に在り、應に朋下に、金氏の釋黼の一條を補ふべし。

7、本書の待考四七〇六葉三行のは、當に妝と釋し、十二巻女部に補入すべし。

8、乙三四四三に字有り、金氏『續文編』第七巻卅三葉上に黻に作りて收む、宜しく存疑して、存疑巻七瘧字の條下に補入すべし。

(丙)印刷方面の疏忽

1、第七巻二五〇九葉篆首の字は一半を漏印す。

2、第七巻二五五三葉篆首の四字は全字漏印す。

3、第十二巻三七〇六葉第一文は、說文に無き所の字の婈、一點を漏印して婈に作る。

4、第十二巻三八一九葉の篆頭の匚字は誤印して乚に作る。

一、本書の寫作期間に、渥く董彥堂、李濟の兩先生の督勵を承け、深く用って銘感す。寫印既に竣る、復た屈翼鵬（屈萬里・『殷虛文字乙編』註〔三〕・第四輯九七頁參見）、張秉權兩先生序を作り、獎飾の過當を承け、慚愧名づくる莫し。又許進雄〔五〕・卓敬三〔六〕兩君は代りて索引を編するを承く、許君又引書簡表を編し、並に一より十一巻に至る校讀すること一過、並に部分目錄を編成する爲り、併せて此に謹んで謝忱を致す。

中華民國五十四（一九六五）年五月廿四日李孝定謹んで臺北南港中央研究院歷史語言研究所にて記す。

註〔五〕 許進雄 傳未詳。甲骨學を專門とし、彼の著書は本輯にも收めたが、『殷卜辭中五種祭祀的研究』、『卜骨上的鑿鑽形態』がある。また明義士蒐藏の甲骨卜辭を整理著錄した『殷虛卜辭後編』や『The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones』がある。

註〔六〕 卓敬三 傳未詳。

九八、中國文字叢釋〔一〕

中國文字肇興，其由來遠矣。說文解字序云：「黃帝之史倉頡，見鳥獸蹏迒之跡，知分理之可相別異也，初造書契。」黃帝去今四千六百餘年，我國文字產生亦將四千餘年乎？且爲倉頡一人所獨造者乎？非也；蓋文字乃大衆生活記錄之工具，先民以社會生活日繁，需用記憶事物之工具益切；故不得已始各自創造其所應用之符號，因而任情刻識物形，不爲定體。容庚氏云：「古代象形文字，皆因物賦形，變異無定，不拘點畫，故或立，或臥，或正視，或一體，或全身，視之若圖畫無異。」由是則象形文字生焉；象形者，圖繪也，亦即物象之本也。圖繪文字之興，據古籍載，可上溯庖羲氏所繪之八卦。說文序云：「古者庖羲氏之王天下也，仰則觀象於天，俯則觀法於地；觀鳥獸之文，與地之宜，近取諸身，遠取諸物，於是始作八卦，以垂憲象。」憲象者，圖繪之謂也，劉師培曰：「八卦爲文字之鼻祖。」趙曾望云：「伏羲之畫八卦，爲萬世文字之祖。」準此可知文字初創，始於伏羲之畫卦；伏羲去今幾許歲月？無從稽考，據文字學家推測，我國文字之產生約有萬年以上之歷史，惟八卦尚未具文字形體，故不得謂伏羲造字，因文字至倉頡始完成；然則倉頡亦非造字之祖，乃爲總其大成之一人耳，荀卿曰：「好書者衆矣，倉頡獨傳者壹也。」倉頡時之文字，其形體若何？今雖無存，據說文序載：「倉頡之初作書，蓋依類象形」，即後世六書所謂之「象形文字」也。

殷代甲骨文，已非純象形文字，純象形文字僅見於殷銅器所鐫刻之銘文。先師董彥堂先生謂之爲「殷之古文」。亦即原始圖繪文字。殷古文，當去殷代邃遠，至於殷代甲骨文已演變成爲符號文字，董師謂之爲「殷今文」。象形文字成，繼之則有指事、會意、形聲、轉注與

假借之作，此乃文字演進發展之經過，至此則六書備矣。王鳴盛曰：「自黃帝至周文武文字孳乳大備，而周公始定此名；非倉頡先立六書之名，始造文字，乃造成已久，後人追定其名耳」。孫海波氏云：「文字滋生，循乎自然，非一時一人所能牽拘爲之者……夫文字乎，及其孳乳繁衍，名實眩惑，考文之聖，將爲之別異，是以叩其類別先後，假名以爲之耳」。其形體既定，然代有改作、是以篆、隸，草，楷不一而足。自甲骨文迄於今楷，三千年內，按正統之演變，已是七易形體（別體之多，不勝列舉，姑不予俱論），自先殷金文，而殷甲骨文，而周之金石大篆、秦之小篆、漢之隸書，魏晉之草書，以及唐宋至今之楷書是也。

民國四十九年秋，董師以所著之「中國文字演變史之一例」賜予且謂曰：「日內將開始整理古文字，即按照此例作之：與一萍（嚴先生）祥恒（金先生）等共同研究，擬出期刊，定名爲『中國文字』。釋文步驟，即自先期金文漸次演變至於今楷，循序詮釋，使大衆明瞭古今文字之異同，與夫今日文字之根源，以及我國文字在三千年內之演變過程，藉以得知吾國遠古文化發展之一斑。」唐蘭氏曰：「文字隨世變化，漸失本真，故殷世文字周時已有譌誤，周之文字早晚亦自有殊，秦篆及六國文字又復互有長短，蓋自前尋後，嬗變之迹易求，而後證前則瞢然失其本然。」；然識字乃一切探討之第一步……且文字乃社會文化之一要徵……卜辭及文字則一切後代文化之原始細胞也」。倩君謹遵董師於研求契學之種種指點，本乎唐氏以前證後之成法，且依郭云：「識字乃一切探討之第一步」，著釋文二十二篇，約十八萬言，悉刊布於「中國文字」，今都爲一冊，定名曰：「中國文字叢釋」，謹就教於方家。

中華民國五十六年三月九日田倩君序于臺北洹齋。

中國文字の肇（はじ）めて興るは、其の由來遠し。『說文解字』序に云く「黄帝の史倉頡は、鳥獸蹏迒の跡を見て、分理の相い別ちて異なる可きを知るや、初めて書契を造る」と。黄帝は今を去ること四千六百餘年、我が國の文字產生も亦將に四千餘年ならんとするも、且つ倉頡一人の獨り造る所の者と爲すか、非也。蓋し文字は乃ち大衆生活記錄の工具、先づ民は社會生活の日びに繁く、事物を記憶するに需用する工具は益ゝ切なるを以て、故に已むを得ず始めて各ゝ自ら其の應用する所の符號を創造す、因りて情に任せて物の形を刻み識し、定體を爲さず。容庚（容庚・『殷虛文字類編』註〔三〕・第一輯一七一頁參見）氏云く「古代の象形文字は、皆な物に因りて形を賦し、變異定まる無く、點畫に拘わらず、故に或は立ち、或は臥し、或は正視し、或は一體、或は全身、これを視るに圖畫に異なる無きが若し」〔二〕と。是れに由りて則ち象形文字生ず；象形とは、圖繪なり、亦即ち物象の本也。圖繪文字の興りは、古への籍載に據れば、上は庖羲氏繪く所の八卦に溯る可し。說文序に云く「古へは庖羲氏の天下に王たるや、仰いでは象を天に觀、俯しては法を地に觀る；鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸れを身に取り、遠くこれを物に取る、是に於て始めて八卦を作り、以て憲象を垂る」と。憲象とは、圖繪の謂也。劉師培〔三〕曰く「八卦は文字の鼻祖なり」と。趙〔四〕會望云ふ「伏羲の八卦を畫くや、萬世文字の祖爲り」と。此れに準（なぞら）れば文字の初創は、伏羲の卦を畫くに始まるを知る可し；伏羲は今を去ること幾許の歲月ぞ、稽考に從ふ無し、文字學家の推測に據れば、我が國文字の產生は約萬年以上の歷史有り、惟八卦は尚未だ文字形體を具へず、故に、伏羲字を造ると謂ふを得ず、因りて文字は倉頡に至りて始めて完成す；然らば則ち倉頡も亦字を造るの祖に非ず、乃ち其の大成を總ぶるの一人爲るのみ、荀卿（荀子）曰く「書を好む者は衆し、倉頡獨り傳ふるは壹也」〔五〕と。倉頡の時の文字は、其の形體若何（いかん）、今、存すること無きと雖も、『說文』序に載するに據れば、「倉頡の初め書を作り、蓋し類に依りて形を象る」と。即ち後世の六書謂ふ所の「象形文字」也。

殷代の甲骨文は、已に純象形文字に非ず、純象形文字は僅かに殷銅器の鑄刻する所の銘文に見ゆるのみ。先師董彥堂（董作賓・『殷契書錄』註〔四〕・第一輯三二四頁參見）先生これを謂ひて「殷の古文」〔六〕と爲す。亦即ち原始圖繪文字なり。殷の古文は、當に殷代を去ること遼遠なるべし。殷代に至って甲骨文已に演變し、成りて符號文字と爲る、董師これを謂ひて「殷の今文」〔七〕と爲す。象形文字成る、これに繼いで則ち指事、會意、形聲、轉注と假借の作有り、此れ乃ち文字演進發展の經過なり、此に至りて則ち六書備わる。王鳴盛（王鳴盛・『古文聲系』註〔四十四〕・第二輯三七七頁參見）曰く「黄帝より周の文武に至りて文字の孳乳大いに備はり、而して周公始めて此の名を定む、倉頡先に六書の名を立つるに非ず、始め文字を造り、乃ち造成已に久しくして、後人追って其の名を定むるのみ」と。（『古文聲系』註〔四十四〕・第二輯三七七頁參見）、孫海波（孫海波・『鐵雲藏龜』註〔四十〕・第一輯三八頁參見）氏云く「文字の滋生は、自然に循ひ、一時一人の能く牽拘してこれを爲る所の者に非ず、矧んや文字をや、其の孳乳繁衍に及んで、名實眩惑す、考文の聖、將にこれが別異をなさんとす、是に以て其の類別の先後を叩き、名を假して以てこれを啟るのみ」と。（『古文聲系』第二輯三七五頁參見）其の形態旣に定まる、然れども代ゝ改作有り、是に以て篆、隷、草、楷一として足らず。甲骨文より今の楷に迄るまで、三千年の內、正統の演變を按るに、已に是れ形體を七たび易ふ、（別體の多くは、列擧に勝へず、姑く予め俱に論ぜず）先の殷金文よりして、殷の甲骨文、周の金石大篆、秦の小篆、漢の隸書、魏晉の草書、以て唐宋より今の楷書に至るに及ぶまで是れ也。

民國四十九（一九六〇）年秋、董師以て著す所の「中國文字演變史之一例」を以て予に賜ふ且つ謂ひて曰く「日內〔一兩日〕中に將に古文字を整理するを開始せんとす、即ち此の例に按照〔準據〕してこれを作る」。〔嚴〕一萍（嚴一萍・『鐵雲藏龜』註〔四十三〕・第一輯三九頁參見）・〔金〕祥恆（金祥恆・『中國書譜』註〔三〕・本輯三〇七頁參見）等と共同研究して、期刊を出ださんと擬す。名を定めて『中國文字』と爲す。釋文の步驟〔ものごとの進行のどあい〕は、即ち先期金文より漸次演變して今の楷に至る、序に循って詮釋し、大衆をして古今文字の異同と、夫の今日文字の根源とを明瞭にし、以て我が國の文字三千年內の演變過程に及び、藉（か）りて以て吾が國遠古文化發展の一斑を得しむ」と。唐蘭（唐蘭・『殷虛文字類編』註〔三〕・第一輯一七一頁參見）氏曰く「文字は世に隨ひ變化し、漸く本眞を失ふ；故に殷世文字は周の時に已に譌誤有り、周の文字は早晚亦自から殊る有り、秦篆及び六國文字も又復た互に長短有り、蓋し前より後を尋ね、嬗變の迹求め易し、而る後に前を證して則ち豁然として其の本然を失ふ」と（『甲骨文編』第三輯三九二頁參見）。郭鼎堂（郭沫若・『甲骨文字研究』註〔十四〕・第一輯三七五頁參見）謂へらく「余、卜辭を研究するは、志し中國社會の起源を探討するに在り、本は文字史地の學に拘拘たるに非ず、然れども識字は乃ち一切探討の第一步：」且つ「文字は乃ち社會文化の一要徵：卜辭及び文字は則ち一切後代文化の原始細胞也」と（綜合第一輯三四八頁參見）。倩君謹んで董師の契學を研究するの種種の指點に遵（なら）ふは、唐氏前を以て後を證するの成法に本づくか、且って郭云ふ「識字は乃ち一切探討の第一步なり」に依りて、釋文二十二篇を著し、約十八萬言、悉く『中國文字』に列布す、今、都て一冊と爲し、名を定めて曰く『中國文字叢釋』と。謹んで教へを方家に就かんことを。

中華民國五十六（一九六七）年三月九日田倩君臺北漚齋に序す。

註〔一〕 本書は『中國文字』に揭載された釋字二十二篇、說家、釋夷、說婚、釋憂、釋禮、釋鄉鄉饗、釋豐、說棄、釋以、釋女、釋鼎、田字說、釋監、釋南、釋朝、釋莫、說明、樂字的形音義、釋鼓、說人、國字的演變、釋申電神の各字の正統の演變過程を見る。著者は田倩君。出版は一九六七年、臺灣商務印書館、人人文庫。

註〔二〕 容庚氏云く「古代の象形文字は、皆な物に因りて形を賦し、……」と。の典據未詳。

註〔三〕 劉師培曰く「八卦は文字の鼻祖なり」と。劉師培（一八八四－一九一九）別名光漢。字は申叔。號は左盦。江蘇省儀徵縣の人。清末民國初めの學者であるが一時革命家であったが北京大學教授となり經學・小學・校勘・學術史の方面に健筆をふるった。その著に『國學教科書』五種、『左盦集』がある。ここに引く文は「論小學與社會學之關係」の三三三三（左盦外集）による。

註〔四〕 趙會望云ふ「伏羲の八卦を畫くや、萬世文字の祖爲り」と。の典據未詳。

註〔五〕 荀卿曰く「書を好む者は衆し、倉頡獨り傳ふるは壹也」と。荀子卷十五、解蔽

篇二十一に據る。

註〔六〕 董師これを謂ひて「殷の古文」と為す。「中國文字演變史之一例」平廬文存卷四所收に據る。

註〔七〕 董師これを謂ひて「殷の今文」と為す。「中國文字演變史之一例」平廬文存卷四所收に據る。

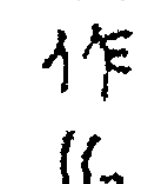
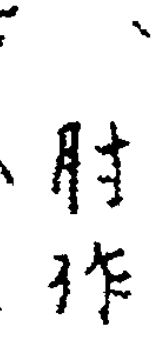
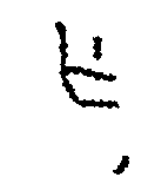
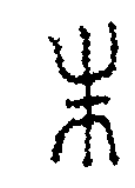
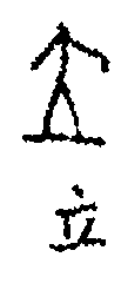
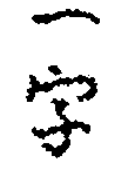
註〔八〕 田倩君（一九一九―　）本書によると民國八年一月二日生。河北省清河の人。國立東北大學中文系卒業、現在は中國文化學院、輔仁大學中文研究所に教鞭をとる。經史・文字の學を嗜讀し、山水音樂を愛好。

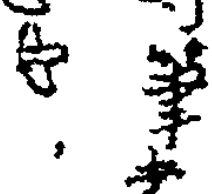
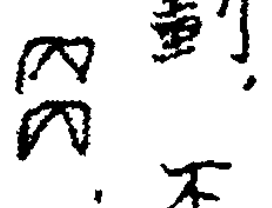
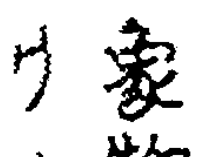
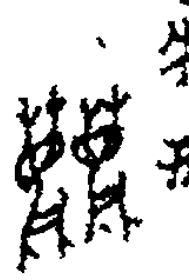
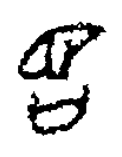
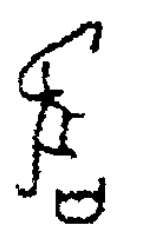
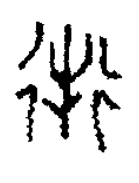
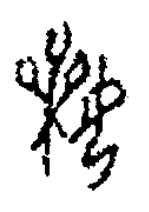
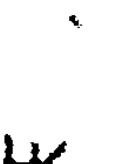
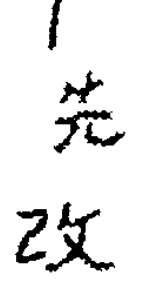
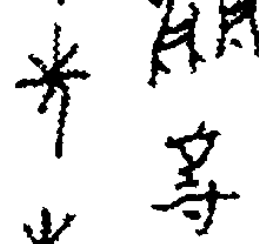
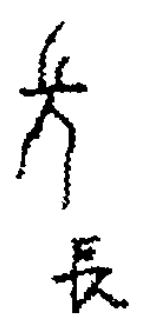
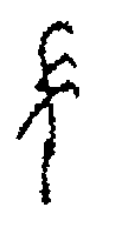
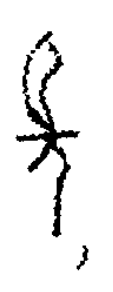
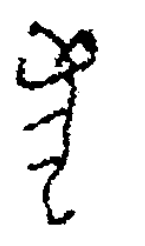
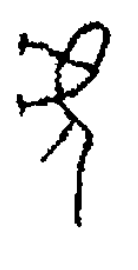
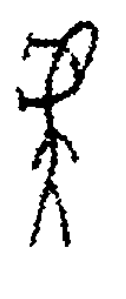
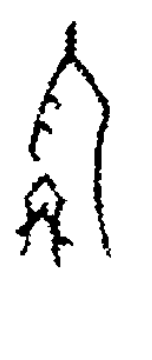
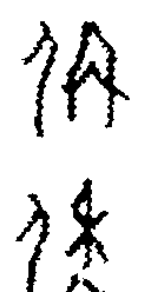
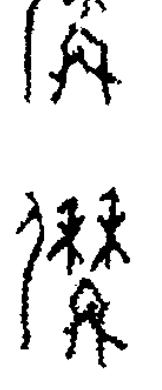
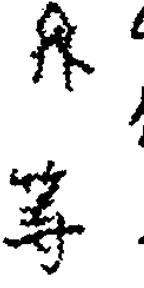
九九、薇頎甲骨文原

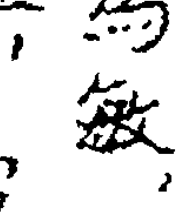
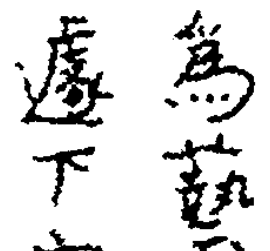
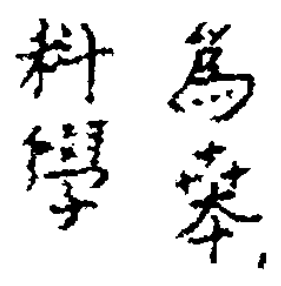
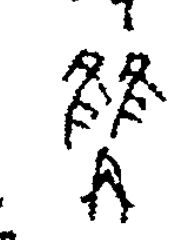
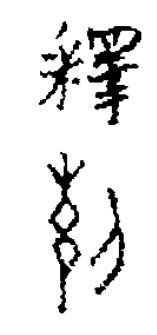
自序

甲骨文為我國現存文字之最古者，由其字形，尚可窺知古人造字之用意。顧自前清光緒二十五年（西元一八九九年）發現甲骨文以還，迄今七十一年，雖研究此學者中外不啻百數十人，而專治其文字者並不多覯，尤以解釋字形意義者寥々無幾。予自幼輒嗜研習金石篆刻，每欲探求文字之本原，問之師長，檢之書籍，終無法獲致解答，遂引為憾事。來台後偶得甲骨之書，見其字多為象形，知文源猶可於甲骨文求之，乃搜集資料，潛心研究，一有所得，即予記錄，積久成帙。退居以來，復補充材料，加以整理，數易文稿，乃成此書，亦所以補前人之缺，而啟新文字學之端也。

予以為文字之用，即記錄語言者也，隨時隨地隨事而造，故有種々不同之造法。先窮其奇，次解其義，而後繪其形，乃成文字，許氏說文敘言所謂「黃帝之史倉頡，見鳥獸蹏迒之迹，知分理之可相別異也，初造書契」此不過說明造字之動機而已，非必一一依象圖形，預造備用也。

古人造字之方法，據予研究歸納之所得，不外七種，一為象形，二為象意，三為假借，四為指事，五為形声，六為符號，七為變形。象形象意假借形声四者為人所熟知，茲不備述，述其餘三者。指事者雖有形可見而屬於物之一部，繪其全部則易與他物混，繪其一部則難認識，如手之肱，足之腿，臂之肘，刀之刃，樹之株，均難繪出，於是繪其可識之形，而以符號指其部位以表示之，如肱作，腿作、肘作 ，刃作，株作是。所謂符號者，如附於上項指事文字上之ㄥコㄴ丨一等俱是，⌒表天，一表地，於雨立二字見之，

其或獨立文字若如彡兄∧下中左二二三三亖四丨十等是。此等筆劃，不象物形，祇是符號而已。所謂變形者，於別造專有名詞時用之，或重複其形，如，，、等字是。或另加偏旁，如、、、等字是。或稍改其形，如、先改作光，長改作，虎改作偁改作等是。其所以如此者，以與普通名詞區別也。用此七法，可以造出無數之文字，於我國複雜之語言，足以應付裕如矣。

由上言之，我國文字皆由有形之物，与少數符號組合而成。有形必有物，有物必可識，果能審辨其形，一切文字皆可得而知之也。是故吾人研究契文，首重辨別字形，蓋造字者既先音、次義、而後形，則考釋者當反其道以推究之，先分析其形，辨其為何物，屬於何法，次讀其辞例，究其意義，如相符合，然後議其音，再證以金文之形義音，復彙集同其偏旁之字，以觀其是否融合貫通，然後決定其初文為何，本義為何，假借為何。造字之本原畢明，然後隸定其字，斯為正確，此即予研究契文之態度也。世之學者往々以湊合法解釋契文，見略與金文或秦文字形相似者，即斷定為某字，如釋為敏，釋為藝，釋為桑，釋為雙，釋為約，不辨其形、究其義，求其証，窮其源，而遽下定論，殊非科學之道也。

許氏說文為我國唯一解釋字形之書，嚮為文字學家所重視，然該書之所根據，祇為秦文与列國文字，視契文尚後一千餘年，較造字原形，譌變甚多，實難期分析至當，故每多牽強附會之辞，且間雜陰陽五行之說，故亦玄虛，益增淆昧，故持許書以證契文，亦非適當之方法也。

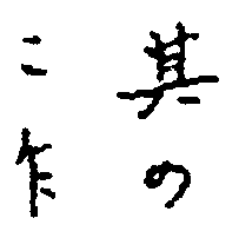
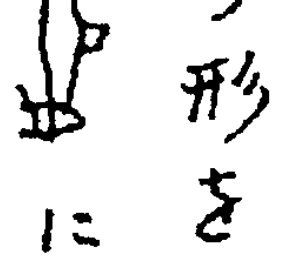
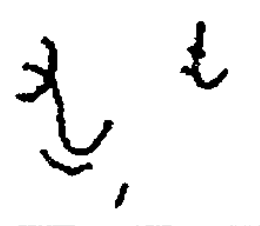
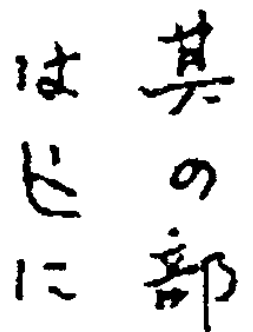
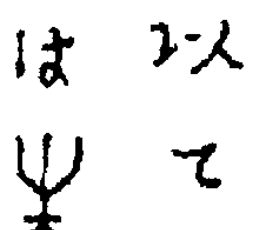
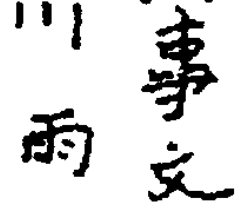
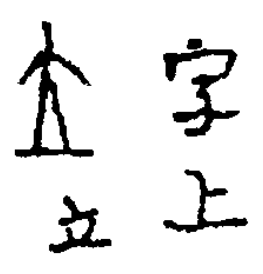
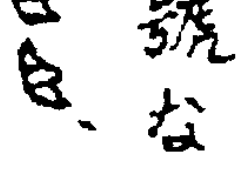
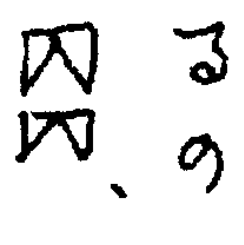
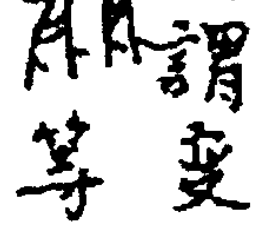
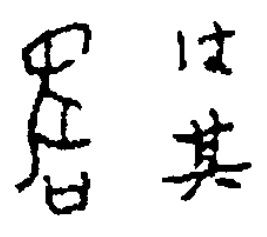
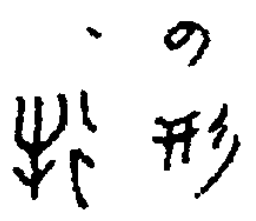
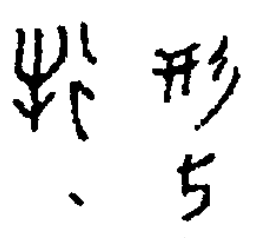
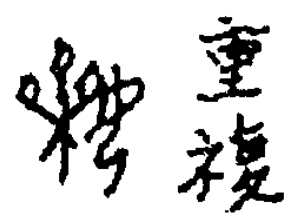
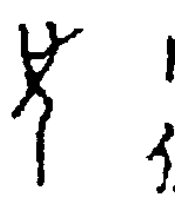
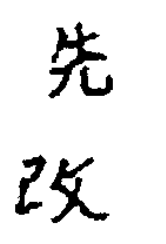
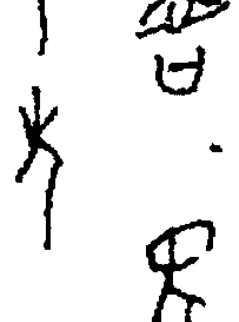
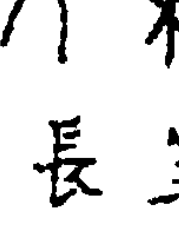
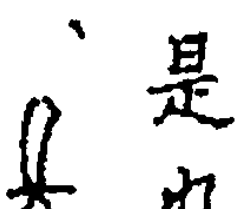
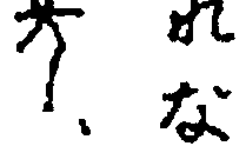
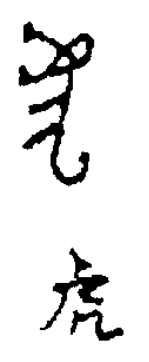
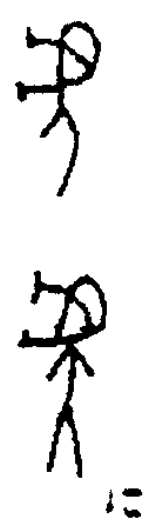
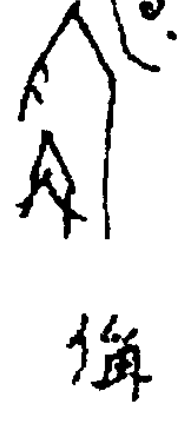
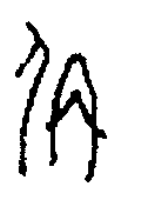
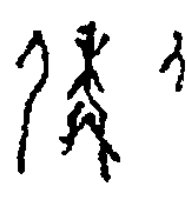
本書考釋契文，無所依據，但求方法合理而已，創見雖多，不敢自是，為求商榷於並世同

文賢明，得訂正錯誤，公開研訂，以臻完滿，用敢不揣淺薄，獻其一得之愚，以公於世。
本書自民國五十四年開始寫述，歷時五載，以年逾古稀之頹齡，任此艱鉅工作，初自以為無法完成者，卒覩厥成，殺青之日，誠不覺破涕為笑，感彼蒼之佑我哉！
本書撰寫，先後承東海大學文學院顧院長敦鍒，台灣大學文學院中國文學系金教授祥恒惠允檢閱甲骨資料，使工作得以順利達成，於此深致謝忱！
中華民國六十年一月永嘉馬薇廎序於虎溪之寄寓。《時年七十有四》

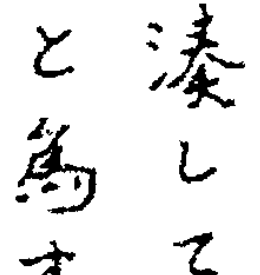
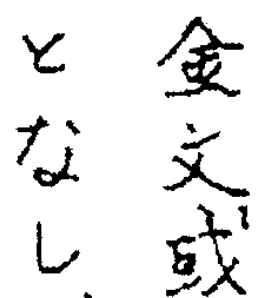
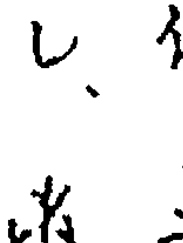
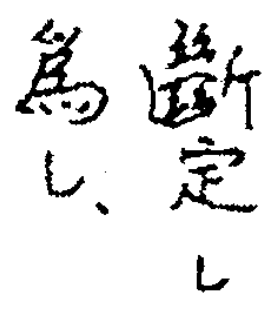
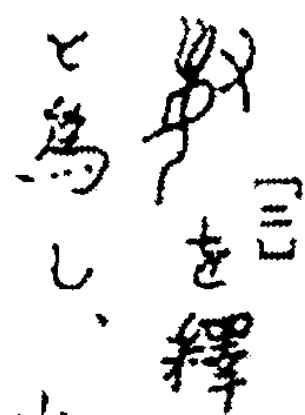
甲骨文は我が國に現存する文字の最古の者為り、其の字形に由り、尚古人字を造るの用意を窺ひ知る可し。顧みるに、前清光緒二十五年（西元一八九九年）甲骨文を發現してより以還〔このかた〕、今に迄るまで七十一年、此の學を研究する者中外啻〔ただ〕に有數十人ならずと雖も、而も專ら其の文字を治むる者は並に多く覯〔み〕ず。尤も以て字形意義を解釋をする者は寥々として幾はくも無し。予幼きときより輙ち金石篆刻を研習することを嗜む、毎に文字の本原を探求せんと欲す。これを師長に問ひ、これを書籍に檢し、終に解答を致すを獲るに法無く、遂に引きて憾事と為す。台〔灣〕に來りて後偶ま甲骨の書を得、其の字を見れば多く象形為り、文の源は猶ほ甲骨文にこれを求む可きを知る。乃ち資料を搜集して、研究に潛心〔心おちつけて考へる〕し、一に得る所有れば、即ち予記錄して、久しきを積みて帙を成す。退居して以來、復た材料を補充して、加ふるに整理を以てし、數々〔しばしば〕文稿を易へ、乃ち此の書を成す。亦前人の缺を補ひ、而して新文字學の端を啓く所以なり。

予以為らく文字の用は、即ち語言を記錄する者なり。時に隨ひ地に隨ひ事に隨ひて造る、故に體々同じからざるの造法有り。先に其の音を審にし、次に其の義を解して、後ち其の

形を繪〔えが〕き、乃ち文字を成す、許氏の說文叙言に所謂「黃帝の史倉頡は、鳥獸蹏迒の迹を見て、分理の相い別ちて異なる可きを知る也。初めて書契を造る」と。此れ字を造るの動機を說明するに過ぎざるのみ、必ず一一象に依りて形を圖〔えが〕くに非ず、預め備用〔入用だけの用意〕の一を造るなり。

古人字を造るの方法は、予の研究歸納の得る所に據れば、七種に外ならず、一に象形為り、二に象意為り、三に假借為り、四に指事為り、五に形声為り、六に符號為り、七に変形為り。象形・象意・假借・形声の四者は人の熟知する所、茲に備〔つぶさ〕に述べず、其の餘の三者を述べん。指事とは形ち見る可き有りと雖も而も物の一部に屬す、其の全部を繪けば則ち他の物と混り易く、其の一部を繪けば則ち認識し難し、手の肱、足の腿、臂の肘、刀の刄、樹の株の如きは、均しく繪き出だし難し、是に於て其の識る可きの形を繪いて、而も符號を以て其の部位を指し以てこれを表示す、肱はに作り、腿はに作り、肘は，刄はに作り、株はに作るが如きは是れなり。所謂符號とは、上項の指事文字上のㄥコし丨一等に附するが如き俱に是れなり、⌒は天を表し、一は地を表し、雨立の二字に於てこれを見る、其の獨立文字を成す者は彡形∧下中在二二三三亖四丨十等の如き是れなり。此等の筆劃は、物の形に象らず、祗〔まさ〕に是れ符號なるのみ。所謂変形とは、專有名詞を制造する時にこれを用ふ、或は其の形ち重複す、、、州、等の字の如き是れなり。或は另に偏旁を加ふ、、、、等の字の如き是れなり。或は稍ゝ其の形を改む、、先改めてに作る、長改めて、、に作る、虎改めてに作る、偁改めて、 、等に作る如き是れなり。其の此々の如き所以の者は、以て普通名詞と區別する也。此の七法を用ひて、以て無數の

文字を造り出だす可し、我が國複雜の語言に於て、以て應付〔要求に應ずる〕裕如〔ゆったりとしている〕たるに足る。

上に由りてこれを言へば、我が國の文字は皆な有形の物に由り、少數の符號と組み合ひて成る、形ち〔かたち〕有れば必ず物有り、物有れば必ず識る可し、果して能く審に其の形を辨ずれば、一切の文字は皆な得てこれを知る可き也。是れ故に吾人契文を研究するに、首め字形を辨別するを重んず。蓋し字を造る者は既に音を先にし、義を次にし、而して形を後にす、則ち考釋する者は、當に其の道に反して以てこれを推究すべし、先に其の形を分析して、其の何物たるか、何れの法を用ふるに屬するかを辨ず、次いで其の辭例を讀み其の意義を究むれば、相い符合するが如し、然る後其の音を議し、再證するに金文の形義音を以てす。復た其の偏旁を同じうするの字を彙集して、以て其の融會貫通するや否やを觀て、然る後其の初文の何んたるか、本義の何んたるか、假借の何んたるかを決定す。字を造るの本原畢く明かなり、然る後其の字を隸定し、斯に正確をなす、此れ即ち予が契文を研究するの態度なり。世の學者は往々にして合法を以て湊して契文を解釋す、略金文或は秦の文字と形ち相い似る者を見れば、即ち斷定して某字と為す、〔三〕を釋して敏となし、〔三〕を釋して藝と為し、〔四〕を釋して桒と為し、〔五〕を釋して雙と為し、〔六〕を釋して約と為す如く、其の形を辨ぜず、其の義を究め、其の證を求め、其の源を窮め、而して遽に定論を下すは、殊に科學の道に非る也。

許氏の說文は我が國唯一の字形を解釋するの書たり、獨に文字學家の重視する所たり、然れども該書の根據にする所は、祗に秦文と列國文字たり、契文を視〔ならぶ〕れば尚一千餘年に後す、造字の原形に較ぶれば、譌變甚だ多く、實に分析至當を期し難し、故に毎に牽強附

會の辭多し、且つ間ゝ陰陽五行の說を雜ふ、故に玄虛〔奥ぶかくてうかがうことができないもの〕を示し、益ゝ滿昧を增す。故に許書を持ちて以て契文を證すも、亦適當の方法に非る也。

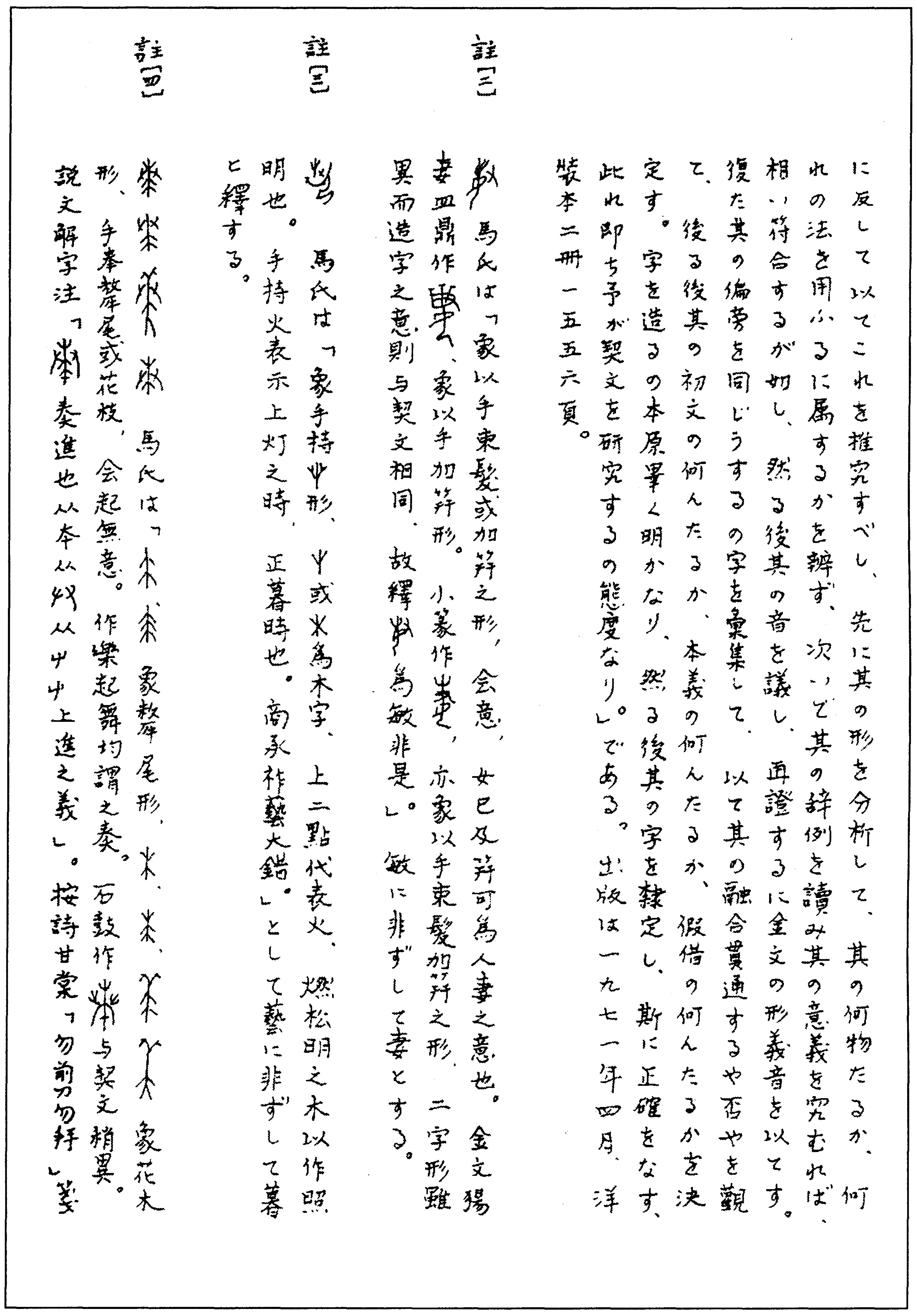
本書は契文を考釋するに、依據する所無し、但方法の合理を求むるのみ。創見多しと雖も、敢へて自から是とせず、商榷を並世同文の賢明に求むるを為す。錯誤を訂正し、研討を公開するを得て、以て完滿に臻り、用って敢へて淺薄を揣〔はか〕らず、其の一得の愚を獻じて、以て世に公にす。

本書は民國五十四（一九六五）年寫述を開始してより、時を歷ること五載、年は古稀を逾ゆるの頹齡を以て、此の艱鉅の工作に任ず、初め自から以為らく完成に法無き者と。卒に厥の成るを觀る。殺青の日、誠に覺えず破涕して笑を為す、彼蒼の我れを佑くるを感ずる哉。

本書の撰寫は、先後東海大學文學院顧院長敦鍒〔三〕、台灣大學文學院中國文學系金教授祥恒（金祥恒。『中國書譜』註〔三〕・本輯二〇七頁參見）の允に甲骨資料に檢閱するの惠を承け、工作をして以て利に順りて達成するを得しむ。此に深く謝忱を致さん。

中華民國六十（一九七一）年一月永嘉の馬薇廎〔四〕虎溪の寄寓に序す。時に年七十有四。

註〔三〕　本書は凡例にあるように文字を天象、地理、植物、動物、人、身體上、身體下、矢器、刑具禮器、衣食、往行、雜文の十二類に分類して、各字に音切を表わし、字釋を加え、卜辭例を擧ている。馬薇廎氏の研究態度は序文に見えるように「吾人契文を研究するに、首め字形を辨別するを重んず。蓋し字を造る者は既に音を先にし、義を次にし、而して形を後にす、則ち考釋する者は、當に其の道



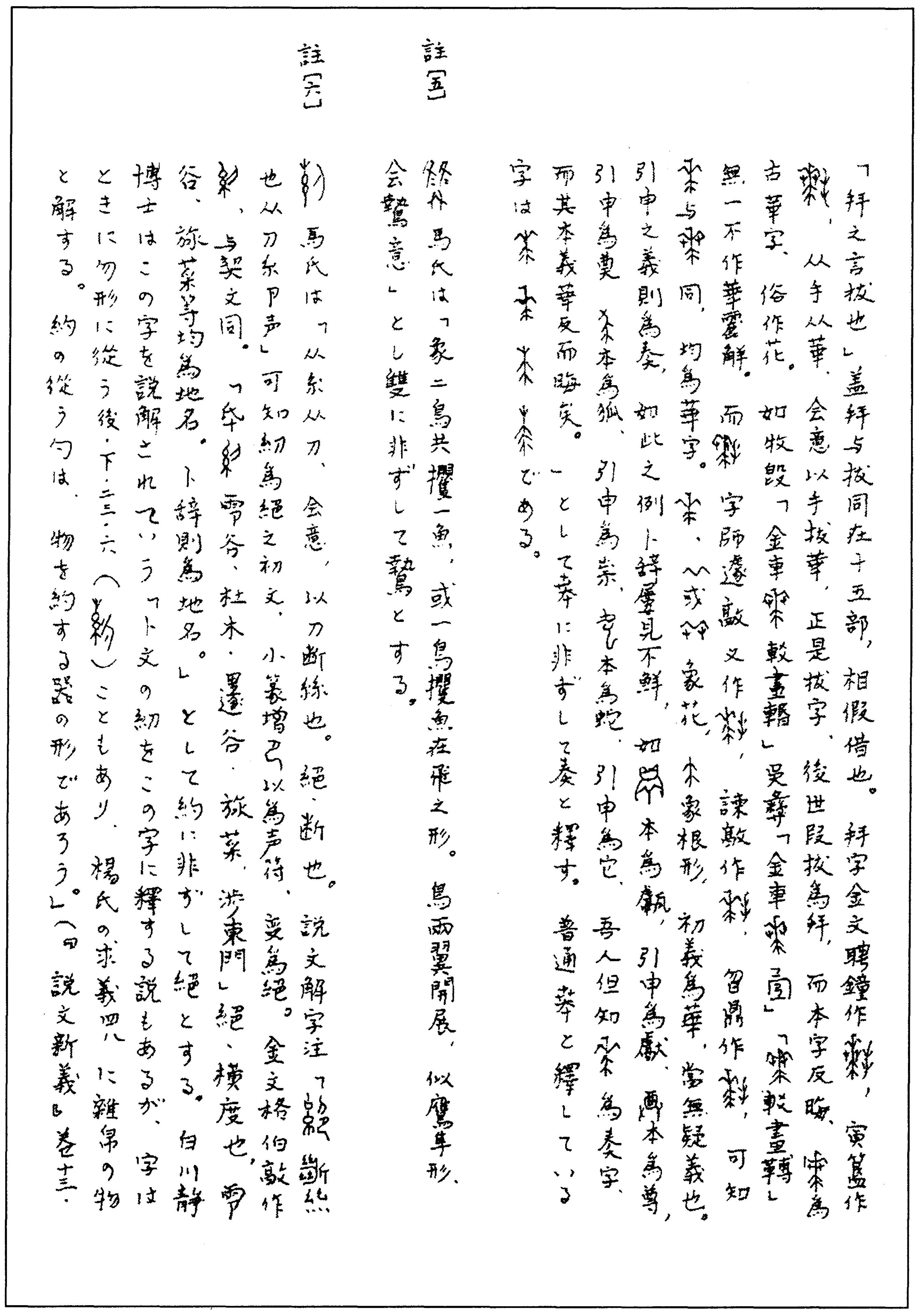
に反して以てこれを推究すべし、先に其の形を分析して、其の何物たるか、何れの法を用ふるに属するかを辨ず、次いで其の辞例を読み其の意義を究むれば、相い符合するが如し、然る後其の音を議し、再證するに金文の形義音を以てす。復た其の偏旁を同じうするの字を彙集して、以て其の融合貫通するや否やを観て、後る後其の初文の何んたるか、本義の何んたるか、假借の何んたるかを決定す。字を造るの本原畢く明かなり、然る後其の字を隷定し、斯に正確をなす、此れ即ち予が契文を研究するの態度なり」である。出版は一九七一年四月、洋装本二冊一五五六頁。

註〔二〕 馬氏は「象以手束髮或加笄之形，会意，女已及笄可為人妻之意也。金文鴞妻皿鼎作、象以手加笄形。小篆作，亦象以手束髮加笄之形，二字形雖異而造字之意則与契文相同，故釋為敏非是」。敏に非ずして妻とする。

註〔三〕 馬氏は「象手持屮形，屮或木為木字，上二點代表火，燃松明之木以作照明也。手持火表示上灯之時，正暮時也。商承祚釋藝大錯」として藝に非ずして暮と釋する。

註〔四〕 馬氏は「象犛尾形，象花木形，手奉犛尾或花枝，会起舞意。作樂起舞均謂之奏。石鼓作与契文稍異。說文解字注「奏進也从夲从廾从屮屮上進之義」。按詩甘棠「勿翦勿拜」箋

438

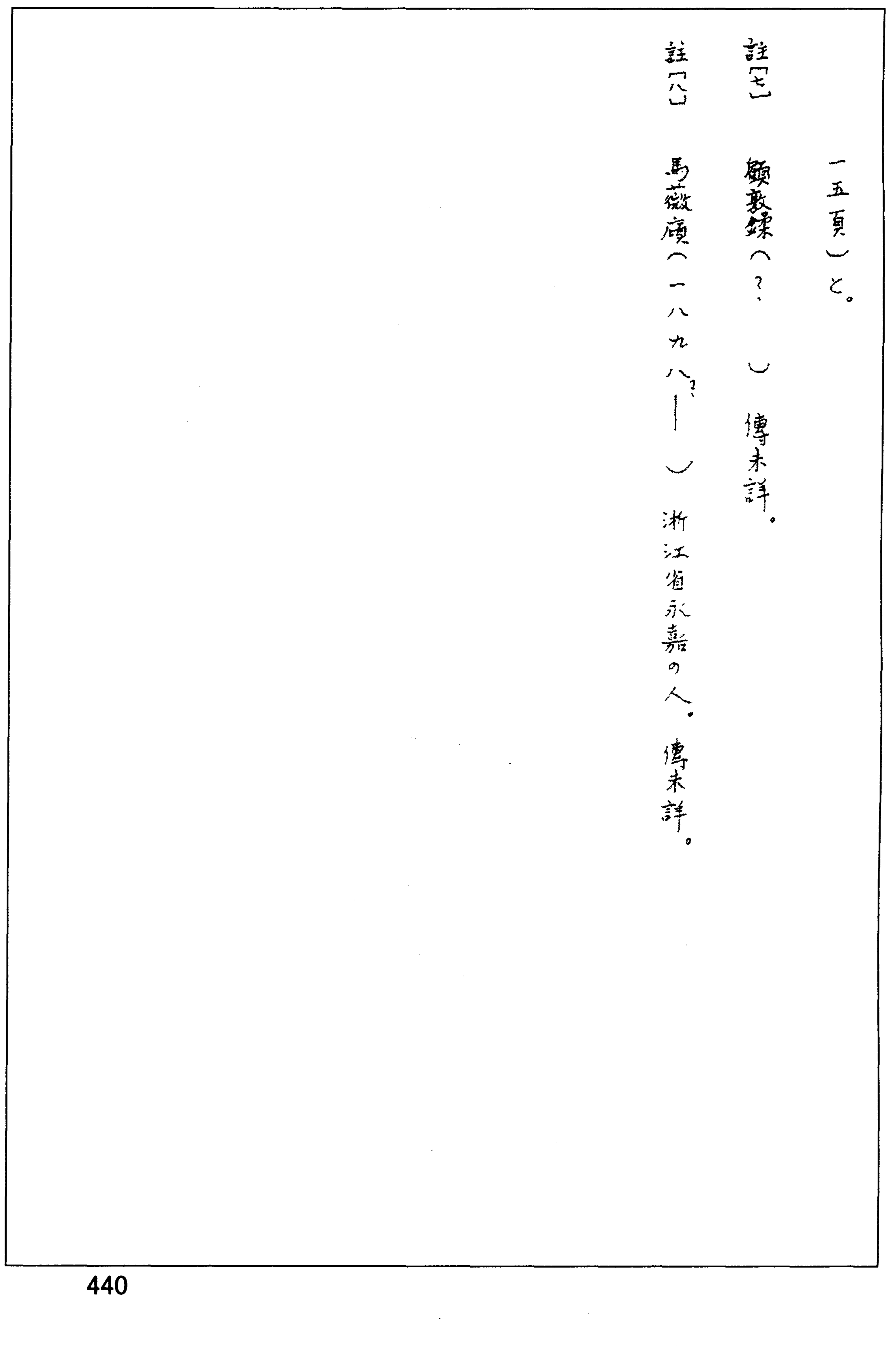


「拜之言拔也」蓋拜与拔同在十五部，相假借也。拜字金文聘鐘作，寅簋作，从手从華，会意以手拔華，正是拔字，後世段拔為拜，而本字反晦，為古華字，俗作花。如牧段「金車較畫轄」，吳彝「金車」「較畫轉」，無一不作華靈解。而字師遽敲又作，諫敲作，曶鼎作，可知与同，均為華字。、从或从象花，木象根形，初義為華，當無疑義也。引申之義則為奏，如此之例卜辞屢見不鮮，如本為，引申為獻，酉本為尊，引申為奠，本為狐，引申為祟，它本為蛇，引申為它，吾人但知為奏字，而其本義華反而晦矣。」として奉に非ずして奏と釋す。普通奉と釋している字はである。

註〔五〕 馬氏は「象二鳥共攫一魚，或一鳥攫魚在飛之形。鳥兩翼開展，似鷹隼形，会鷙意」とし雙に非ずして鷙とする。

註〔六〕 馬氏は「从糸从刀，会意，以刀断絲也。絶，断也。說文解字注「斷絲也从刀糸卩声」可知為絶之初文，小篆增卩以為声符，変為絶。金文格伯敲作，与契文同。「雨谷，杜木・還谷，旅菜，涉東門」絶，横度也，雨谷，旅菜等均為地名。卜辞則為地名。」として約に非ずして絶とする。白川静博士はこの字を説解されていう「卜文のをこの字に釋する説もあるが、字はときに勺形に従う後・下・二三・六（）こともあり、楊氏の求義四八に雑帛の物と解する。約の従う勺は、物を約する器の形であろう」（『説文新義』巻十三・

439

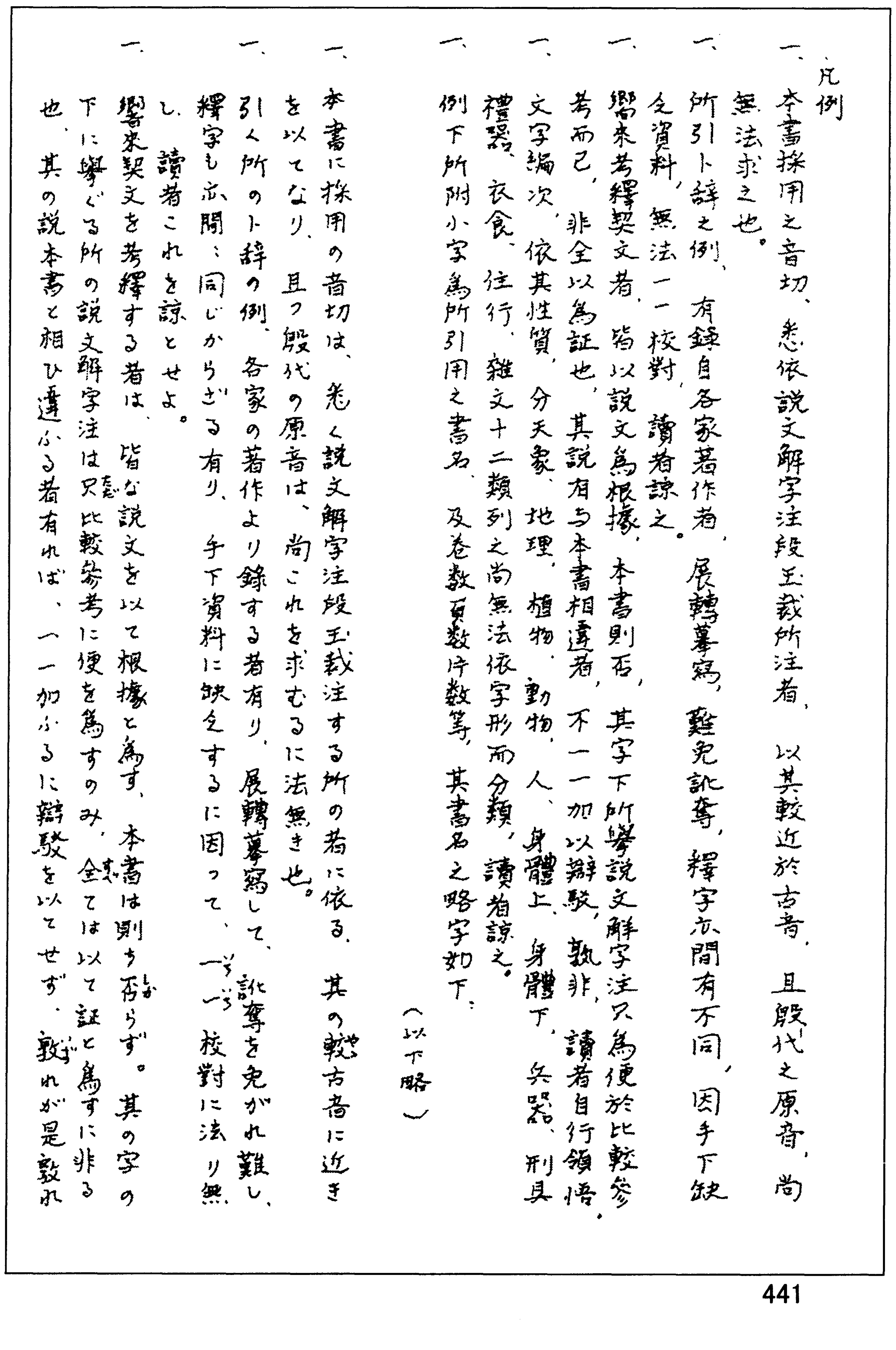


一五頁）と。

註〔七〕 顧敦鍒（？、　）傳未詳。

註〔八〕 馬薇廎（一八九八？—　）浙江省永嘉の人。傳未詳。

440



凡例

一、本書採用之音切，悉依説文解字注段玉裁所注者，以其較近於古音，且殷代之原音，尚無法求之也。

一、所引卜辞之例，有録自各家著作者，展轉摹寫，難免訛奪，釋字亦間有不同，因手下缺乏資料，無法一一校對，讀者諒之。

一、嚮來考釋契文者，皆以説文為根據，本書則否，其字下所擧説文解字注只為便於比較參考而已，非全以為証也，其説有与本書相違者，不一一加以辯駁，孰非，讀者自行領悟。

一、文字編次，依其性質，分天象，地理，植物，動物，人，身體上，身體下，兵器，刑具禮器，衣食，住行，雜文十二類列之尚無法依字形而分類，讀者諒之。

一、例下所附小字為所引用之書名，及巻数頁数序数等，其書名之略字如下：

（以下略）

一、本書に採用の音切は、悉く説文解字注段玉裁注する所の者に依る、其の較古音に近きを以てなり、且つ殷代の原音は、尚これを求むるに法無き也。

一、引く所の卜辞の例、各家の著作より録する者有り、展轉摹寫して、訛奪を免がれ難し、釋字も亦間〻同じからざる有り、手下資料に缺乏するに困って、一〻校對に法り無し、讀者これを諒とせよ。

一、嚮來契文を考釋する者は、皆な説文を以て根據と為す、本書は則ち否らず。其の字の下に擧ぐる所の説文解字注は只だ比較參考に便を為すのみ、全ては以て証と為すに非るも、其の説本書と相ひ違ふる者有れば、一一加ふるに辯駁を以てせず、孰れが是歟れ

441

が非なるかは、讀者自から領悟を行

一、文字の編次は、其の性質に依り、天象、地理、植物、動物、人、身體上、身體下、兵器、刑具禮器、衣食、往行、雜文の十二類に依りこれを列す、字形に依りて分類するに法無し。讀者これを諒とせよ。

一、例の下に附する所の小字は引用の書名及び巻數頁數片數等にして、其の書名の略字は下の如し。

以下略す。

一〇〇 海外甲骨錄遺[二]

歐陸藏龜，以英國大英博物院蘇格蘭皇家博物院所藏，最爲巨觀，具見方法斂（Frank H. Chalfant ）摹寫之庫方二氏甲骨卜辭（The Couling - Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bones）。法國則巴黎大學中國學院（Institut des Hautes Etudes Chinoises）、萊努斯奇博物院（Musée Cernuschi ）、歸默博物院（Musée Guimet ）所藏、斷璣碎璧；余經摹錄，譔次爲巴黎所見甲骨錄（一九五六印行）。至若私家所藏，則有金璋（L.C. HopKins ）葉慈（W.P. Yetts ）二氏，泰半已歸劍橋大學圖書館。友人李棪齋先生，于英京蒐羅所獲得數十片，其中不無精品。又德國衛禮賢（W. Wilhelm ）舊藏者，曾由方法斂摹出，刊于甲骨七集（Seven Collections of Inscribed Oracle Bones ），原物則歸瑞士巴塞爾人種誌博物館（Museum of Ethnography, Basel, Switzerland ），此歐陸甲骨收藏之現況也。

自比歲來，余三度赴歐、英法兩地，公私藏契，除蘇格蘭之物，未及經眼，其餘若大英博物院及劍橋大學藏品，皆曾勘讀，別有校記。李君所藏者，既付影錄，幷加椎墨。而瑞士巴塞爾藏物，則得E. Burkhardt 君之助，由該館P. Hinderling 博士以影片見貽，幷惠允刊布；良朋佳貺，感篆莫忘。兩家之物，余既甄采，著錄于拙作殷代貞卜人物通考中，寒假餘閒，復爲排比詮釋，輯成二卷，題曰「海外甲骨錄遺」，碎文賸義，聊資研契者之一助。

凡所收錄，共壹佰壹片，擧其要者，棪齋之「日夕鳴鳥」「取玉」，可明古代鳥占與采玉之遺俗。「ㄓ」與「子龏」、「子[illegible]」俱是人名。「不左」、「不卌」、「弜死」，

存其習語。「夏」、「上甲」之祀及「上子授祏」，可考見殷代禮制。「貞疾員休」語，頗類龜策傳。若此數片，咸足珍貴。若巴塞爾藏物，卜人「乏」一片，可正綜述之誤。「穷卜子番」及「旅卜桒龍」兩版，幷可資以考證他片，尤有價值；其餘則無關宏恉。茲載其影本，聊以存眞，較之摹錄，自勝一籌耳。

巴塞爾第六五片，刻「不𢆶黽」三字，此卜辭習語，義爲不再命，亦省作「万𢆶」，猶言「不再」。茲附拙作卜辭義證之「不𢆶黽」解一篇，以供參考。

歐陸の藏龜は、英國大英博物院蘇格蘭皇家博物院の藏する所を以て、最も巨觀と爲す、具さに方法斂（Frank. H. Chalfant ）（『殷虛文字甲編』註[十八]・第四輯三六頁參見）摹寫の『庫方二氏甲骨卜辭』（The Couling - Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bones）（『殷虛文字甲編』註[十七]・第四輯二四頁參見）に見ゆ。法國は則ち巴黎大學中國學院（Institut des Hautes Etudes Chinoises）、萊努斯奇博物院（Musée Guimet）藏する所は、斷璣碎璧なり、余摹錄を經て、譔次して『巴黎所見甲骨錄』（一九五六印行）（本輯一七九頁參見）を爲る。私家藏する所の若きに至っては、[三]則ち金璋（L. C. Hopkins）（『五十年甲骨學論著目』註[十八]・第四輯三四八頁參見）葉慈[三]（W.P. Yetts）の二氏有り、泰半は已に劍橋大學圖書館に歸す。友人李棪齋先生は、英京において蒐羅して獲る所數十片を得、其の中に精品無くんばあらず。又德國の衛禮賢（W. Wilhelm）の舊藏は、曾って方法斂の摹出に由り、『甲骨七集』（Seven Collections of Inscribed Oracle Bones）（『殷契拾掇』註[三十三]・第四輯二九五頁參見）において刊す、原物は瑞士巴塞人種誌博物館（Museum of Ethnography, Basel, Switzerland）に歸す、此れ歐陸甲骨收藏の

現況也。

比歳より來、余三度歐に赴き、英法の兩地は、公私契を藏し、蘇格蘭の物を除いて、未だ眼を經るに及ばず、其の餘大英博物院及び劍橋大學の藏品の若きは、皆な會って勘讀し、別に「校記」有り。李君藏する所の者は、既に影錄に付し、并に椎墨を加ふ。[三] 而るに瑞士巴塞爾の藏する物は、則ち E. Burckhardt[四] 君の助を得て該館の P. Hinderling[五] 博士に由り、影印を以て貽らるる并せて利布を允恵（ゆるす）。良朋の佳貺は、感篆「心に銘じて忘れぬこと」忘るる莫し。兩家の物は、余既に甄采して、拙作『殷代貞卜人物通考』（本輯三三六頁參見）中に著錄し、寒假の餘閒に、復た排比詮釋を爲し、輯めて二卷と成し、題して『海外甲骨錄遺』と曰ふ。碎文賸義して、聊か契を研（きわ）める者の一助に資す。

凡そ收錄する所は、共に壹佰零壹片、其の要を擧ぐる者は、棪齋の「日夕鳴鳥」[六]「取王」[七]は、古代の鳥占と采玉の遺俗を明かにす可し。「叹」[八]と「子龏」[九]「子𠂤」[十]は俱に是れ人名なり。「不在」[十一]「不冓」[十二]、「弜死」[十三]は、其の習語を存す。「夏」、「上甲」[十四]の并祀及び「上子授祐」[十五]は、殷代の禮制を考見す可し。「貞疾員休」[十六]の語は、頗る「史記」龜策傳に類る。此くの若き數片は、咸な矜貴するに足る。巴塞爾の藏物、卜人「𤴓」[十七]の一片の若きは、『綜述』の誤りを正す可し。「穷卜子畬」[十八]及び「旅卜[illegible]龍」[十九]の兩版は、并に資して以て他片を考證す可く、尤も價値有り、其の餘は則ち宏指に關わる無し。茲に其の影本を載せ、聊か以て眞を存す、之れを著錄に較ぶれば、自から一籌を勝るのみ。

巴塞爾の第六五片は、「不[illegible]」[二十]の三字を刻す、此の卜辭の習語は、義再命せざると爲すも亦省して「不[illegible]」に作る、猶「不再」と言ふがごとし。茲に拙作『卜辭義證』の「不[illegible]」解の一篇を附し、以て參考に供す。

註〔一〕 『海外甲骨錄遺』は饒宗頤の編纂によるものであり、ヨーロッパの私家に藏するものを饒氏の友人である李棪齋が英國において收錄した三三片と饒氏がヨーロッパに赴き、瑞士巴塞爾の藏するもの六八片を收めて、考釋を加えたものである。卷末には『卜辭義證』之一に揭載した「不[illegible]」解を錄し、また華語と同文の英文の序を載せている。本書は『東方文化』一九五七－五八年第四卷第一及二期抽印本に揭載され出版は香港大學出版部。

註〔二〕 葉慈 W. P. Yetts. 傳未詳。論文に「最近安陽附近之發掘」、「商朝與安陽古物」がある。

註〔三〕 李棪齋　傳未詳。

註〔四〕 E. Burckhardt　傳未詳。

註〔五〕 P. Hinderling　傳未詳。

註〔六〕 日夕鳴鳥　棪齋所藏甲骨(1)の卜辭「庚申卜，㱿貞　王勿……」「……之日夕，㞢鳴鳥」の「鳴鳥」について饒氏は殷代鳥情占の事であるとする。

註〔七〕 取王　棪齋所藏甲骨(5)の卜辭「辛酉卜，穷貞：乎𠂤般取珏，不𠂇」の取珏につ

いて饒氏は「古陳玉以卜，周禮春官天府「季冬，陳玉以貞來歲之媺惡。」故㱿卜辭有「…正玉」之貞。（京津一三四三）取玉者，山海經西次三經「峚山，其中有白玉，是有玉膏。……黃帝乃取峚山之玉榮，而投之鍾山之陽，瑾瑜之玉爲良。堅栗精密，濁澤而有光。五色發作，以和柔剛。天地鬼神，是食是饗，君子服之，以禦不祥。」是「取玉」二字可解爲采礦石以取玉，觀殷代玉器傳世之多，及其精巧，證以此條，知師般曾督玉人往取玉也」と解している。

註〔八〕 叹　棪齋所藏甲骨(4)の卜辭「……隻（獲）叹五，叹于東，十二月」の叹を人名とする。叹は亦𠬝にも作るとする。

註〔九〕 子龏　棪齋所藏甲骨(9)の卜辭「……子龏……㞢……〔月〕」について饒氏は卜辭例をあげ、同日同事に㱿・永・争三人共卜し、また子龏と省体に作っていること、官は小臣の職で武丁時に地位が隆盛であったことを證している。

註〔十〕 子𠂤　棪齋所藏甲骨(21)の卜辭「不死。子𠂤曰：弜死。」の子𠂤を人名とする。𠂤はまた小臣𠂤と稱し，㱿卜辭には帝𠂤と見えるとする。

註〔十一〕 不在　棪齋所藏甲骨(5)の卜辭「辛酉卜，穷貞：乎𠂤般取珏，不𠂇」の「不𠂇」を釋していう「不𠂇，爲殷時成語，𠂇即左讀爲「差」，不左猶言不差，與不忒義同。他辭亦言「亡𠂇」者，有前編四、三七、四」と。

註〔十二〕 不冓　棪齋所藏甲骨(14)の卜辭「貞員休。貞：不冓」の不冓は殷の習語とする。

註〔十三〕 弜死　棪齋所藏甲骨(21)の卜辭「不死。子𠂤曰：弜死」の弜死を弗死とする。

註〔十四〕 「夏」と「上甲」の并祀。棪齋所藏甲骨(13)の「[illegible]貞告既，出于「夏」、于甲」の并祀をいう。

註〔十五〕 上子授祐　棪齋所藏甲骨(11)の卜辭「貞：上子不我其受「又」。貞上〔子〕不〔我〕其…」について饒氏は「上子殆與上帝同例，乃指天神言」と釋す。

註〔十六〕 貞疾員休　棪齋所藏甲骨(14)の「貞：員休。貞：不冓」を「此片貞員休貞不死一組辭，塗朱。員字亦見福氏二，即咼之倒書。卜辭習見成語有不咼、弗咼、又咼等；于省吾釋敗（駢枝續編），敗與休對言；休，美也。此貞問病者休乎？敗乎？抑不死？」と釋す。

註〔十七〕 𤴓　瑞士巴塞爾人種誌博物館藏甲骨(4)の卜辭「癸巳卜，𤴓貞：旬亡𡆥」の𤴓を「𤴓字，甲骨文編釋𤴓，按說文起古文作𨑙，从辵與从止同意，故𤴓殆即「起」字。此辭同版有卜人大，知𤴓之年代略當祖甲祖庚時」と解する。

註〔十八〕 穷卜子畬　瑞士巴塞爾人種誌博物館藏甲骨(1)の卜辭「囗酉卜，穷貞：子畬不冓」について「子畬，武丁時人名。畬字上象枝葉扶疏形，舊釋春。」と釋し、　片

を擧げていう「他辭云：「貞：子𦝠不死」者，又有後編下二九・七，及前編六・一四三．四兩片，字形與此同。又南北明義士藏一一五一云：「…貞，知子𦝠于𥁕」亦可與此參證。卜辭又云：貞：來乙丑，勿子𦝠，㞢于父乙。（續編一・三〇・四）貞：今乙丑，子𦝠，㞢于父乙。（遺珠一〇四二，林一・八・一七重）亦為同一事之卜。此外有關子𦝠之卜辭：貞：子子[𦝠]升于…（林一・一四・六）貞：知子𦝠于毋…（拾掇二・二八）、貞：子𦝠…（庫方一八二三）」と。

註[十九]　旅卜𣎵龍　瑞士巴塞爾人種誌博物館藏甲骨(9)の卜辭「己巳[卜，旅]貞：龍不既𢦔，其大𢦔自上甲，其告于丁。十一月。…旅…[既]𢦔…」についての相ひ同じものを擧げていう「庚辰卜，旅貞：龍不既，其大殹[𣎵]其𢦔𡧊于上甲。（金璋七二九，又七三〇文略同。）[辛]巳卜，旅貞，龍不既𢦔，其大殹𣎵，由丁亥酌，十一月。（拾掇二四八七，南北坊五・五七重）又漳之卜辭云，辛亥卜，漳貞：龍不既𢦔，其亦𣎵，由丁巳酌。辛亥卜，漳貞：龍不既𢦔，其亦𣎵，其「𢦔」𡧊。（綴合編九六一文錄六二九十五四四）乃同事異人之卜，庫方一二四四殘辭亦同。龍或指蒼龍，即指歲星。他辭云「𣎵龍」（粹編四八三）「其兄（祝）龍，丝用。」（後編下・六・一四）此因有祭于龍星，故卜之。」と。

註[二十]　不孚𢓊　饒氏は「不紂」「不紂罷」と釋し、讀んで「不再」、「不再命」とする。

一〇一　美國納爾森美術館藏甲骨卜辭考釋[二]

一九六六年八月杪，日本梅原末治先生將有美國之行，行前承告坎恩薩斯城納爾森美術館（Nelson Gallery of Art）有未著錄之甲骨收藏。九月，先生至美，遊歷一月，曾參觀該館新收資料，並請館長席克門先生（Mr. Laurence Sickman）代將甲骨攝影，計照片十二幀，於同年十月十二日寄達日本；先生即轉寄一萍，囑加研究，並許以自由發表。長者獎挹之忱，至深感激！當時曾加考釋，分五次刊載於中國文字二十二，二十三，二十四，二十五，二十九各期。

關於納三五，一一五，一二版所補「甲申」二字，因未見原物，故據異版同文之例加以意補。既發表二年以後，接獲納爾森美術館東方部一九六九年十月三日惠書，以該館缺乏椎拓之工具及紙張，難以墨拓，特將原骨背面影本見貽；又恐模糊難認，復將原刻「甲申乙亥」四字臨摹於影本之旁，使曩所懸測者以證實，東方部諸執事先生之熱心學術，至堪推崇。茲者重加董理，泐為專冊，以供甲骨學者之參考採擇，並對梅原末治先生與席克門先生暨納爾森美術館東方部諸先生，致其誠摯之謝意。

中華民國六十一年三月　秀水嚴一萍序於板橋之萍廬。

一九六六年八月の杪（すえ）、日本の梅原末治先生（梅原末治、『甲骨學五十年』註[九]本輯九四頁）将に美國の行有らんとす。行前に坎恩薩斯城納爾森美術館に（Nelson Gallery of Art）未著錄の甲骨收藏有るを承告す。九月、先生美に至り、一月（ひとつき）遊歷す、嘗って該館の新收資料を參觀し、並に館長席克門先生[三]（Mr. Laurence Sikman）に代ふるに甲骨攝影を將てせんことを請ふ、照片十二幀を計ふ、同年十月十二日に日本に寄達す；先生即ち嚴一萍（嚴一萍『鐵雲藏龜』註[四十三]・第一輯三九頁參見）に轉寄し、囑されて研究を加ふ、並に許して自由發表を以てす。長者（すぐれたる）獎挹の忱（まごころ）、至りて感激深し、當時嘗（たまたま）考釋を加ふ、五次に分けて刊して『中國文字』二十二、二十三、二十四、二十五、二十九の各期に載す。

納の三五、一一五、一二版に補ふ所の「甲申」二字に關しては、未だ原物を見ざるに因り、故に異版同文の例に據りて加ふるに意補を以てす。既に發表二年以後、接で納爾森美術館東方部より一九六九年十月三日に惠書を獲る、該館椎拓の工具及び紙張缺乏し、以て墨拓し難きを以て、特に原骨の背面影本を將って貽見るるなり。又模糊認め難きを恐れ、復た原刻「甲申乙亥」の四字を將って、影本の傍に臨摹し、曩に懸測する所の者をして、以て實を證するを得しむ、東方部の諸の執事の先生の學術に熱心なるは、至りて推崇に堪ゆ。茲者重ねて董理を加へ、泐して專冊を爲し、以て甲骨學者の參考採擇に供す；並に梅原末治先生と席克門先生暨び納爾森美術館東方部の諸先生とに、其の誠摯の謝意を致す。

中華民國六十一（一九七二）年三月　秀水の嚴一萍板橋の萍廬に序す。

註[二]　嚴一萍氏による編纂。未著錄のアメリカネルソン美術館の藏片。卷頭に圖版十二は實物の寫眞に每葉雕刻し一葉を付け、次に考釋を付す。考釋の例文を別に後葉に雕刻五十一圖を付す。出版は一九七二年、藝文印書館。

註[三]　席克門（Laurence Sikman）傳未詳。

一〇二 龜版文例研究〔二〕

讀龜版文例研究（代序）

一九六六年秋，李達良學士從予習甲骨文字於香港中文大學研究院，有志於卜辭文例之整理。越二載，甲文述例先成，書中袪釆錄小屯復原龜腹甲者，蓋其慎也。他日若能將小屯復原牛肩胛骨及小屯發掘以外之較完整甲骨，再從事於甲與骨文例之比較，以涵養新知，嘉惠來學，誠一繁重而又急切之工作也。

二人共卜之例，自郭鼎堂於一九三七年考釋殷契粹篇第一四二四片卜骨時，引書洛誥「我二人共貞」為證（粹考，頁一八七）；於是胡厚宣卜辭雜例（二零）遂引申為兩史同貞例。陳夢家卜辭綜述（斷代下）有「并卜卜人」之詞，解云：「所謂并卜者是同一卜辭內，兩個卜人並卜，此例僅見於武丁時代，僅限於㕣，而与爭、内、穷、出並卜。」（頁一七五、一七六）一九五九年饒選堂殷代貞卜人物通考又增「彭、穷」；「大、即」；「兄、矜」及「仌、爭、大」數例（卷一，卷二）。屈翼鵬考釋殷虛文字甲編第一二七四片（頁一八零），亦以為是「大、即」二人共貞例。諸家之說，陳陳相因，凡歷三十餘年，幾成定論。曩歲余發掘一批拓本，始覺屈氏改讀饒氏「彭、穷」之辭極確；惟「大、即」之說法，則屈与饒相同。金祥恒卜辭卜人解惑（中國文字三十三期）證「丙寅卜卜出貞」之片，其中一「卜」字為衍文，蓋訂正拙稿後忽有所啟發，旁搜例證而成之；其說甚精。惜拙稿已付排印，未及改易；祥恒兄攻錯之意，至足感也，謹識於此，以誌吾過。案小屯第三次出土諸片，已有不少變例，因疑「二人共貞」之說，並非無可再商者。值茲与達良研討之餘，不辭固陋，畧陳所見。

一九五三年，余為劍橋大學整理金璋舊藏甲骨時，初疑「王㕣貞」一殘片為僞刻；越二年，

選堂自巴黎至倫敦，余偕其至劍橋大學圖書館，審視此片，卻以為非贋。不久，選堂撰卜辭義證，讀㕣字為語詞之「載」，以印證「不再命」之說（東方文化四卷一、二期合刊）。一九五九年，選堂撰通考成書，遂沿舊說，逕以㕣為第一期卜人矣。其主要證據則為殷墟文字甲篇三一七七片也。

陳氏所云：「兩個卜人並卜，此例僅見於武丁時代，僅限於㕣而与爭、内、穷、出並卜」，並未致疑何以僅限於㕣。今考各辭均屬卜旬，而「㕣」字又必緊接一習見貞人名字之下，此必有故。茲錄各辭於下，庶備參考：

1、癸酉卜，爭㕣貞：旬亡囚？（七集衡五）

2、癸未卜，爭㕣貞：旬亡囚？（簠室貞類三一，遺珠九六；粹篇一四二四；續存上九一二；寧滬二·二二）

3、〔癸〕□〔巳〕，爭㕣貞：旬亡囚？壬辰雨。□□□㕣貞：旬亡囚？丁未雨。乙酉□□□（林一、二七·一〇）

4、癸未卜，爭㕣……（寧滬二·二二）

5、癸未卜，穷㕣貞：旬……（林一、二六·一一）

6、癸未卜，内㕣貞：……（林一、二六·一〇）

7、〔癸〕□〔巳〕，殼㕣貞：旬……（京津一八二一；又二六四五重見）

8、癸卯卜，凵（殼？）㕣貞：旬亡囚？（簠室貞類三〇；續編五·三一·八重見）

其他有「㕣貞」之詞而「㕣」上無貞人者，均屬殘片；而又均与卜旬有關；此中消息，殊堪玩味。案小屯甲編三一七七片乃第四次發掘所得，為龜腹甲之前左甲与後左甲之一大部分，甲龜特長，完整不泐，惜至今未能綴合耳。其九條卜辭，隸定如下。

a、癸酉卜，□貞：旬亡〔囚〕？（右行卜字下斷缺，亡字下亦斷缺）

b、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？（右行）

c、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？（左行）

d、癸酉卜，水貞：旬亡囚？（左行）

e、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？（左行）

f、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？（左行）

g、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？（左行）

h、癸酉卜，㕣貞：旬亡囚？五月。（左行）

i、癸酉卜，㕣貞：旬？戊寅帚妹𡚬？七月。（左行。旬字下缺刻亡囚二字）

各辭「貞」字均作冈形，屈氏以之入第一期，豈受二人共貞說所影響耶？案貞旬卜辭，同屬一干支而連續不斷紀錄於一片之上者，此例僅見。余以為此乃同在五月癸酉之日連續卜問至少八次，故用「再」字，惜第一辭「卜」下龜甲斷缺，不知有無「㕣」字。如曰無之，則第一辭不當有「再」字。饒氏以此片定「㕣」為貞人之主要證據，余反以此片定「㕣」為非貞人之主要證據；蓋如此則不但金璋「王㕣貞」之片，可以解為「王再貞」；而爭、穷、内、殼各貞人卜旬諸片之㕣字，亦未嘗不可讀為「再」也。

早在一九三九年唐立庵先生釋天壤閣第四片之時，已有「㕣貞者，再貞也。」（天壤考釋頁二至四）之說。唐氏解「不𢆶黽」一詞為「不再墨」，余向不苟同；然所云「才當為再，才再声本相近」，誠為創見。唐又謂「郭氏二人共卜例中，卜人有爭、内、等，均与㕣同卜，而他人則無一同卜之例，是其說未洽。」（天壤考釋頁七）則唐氏亦已疑之矣。一九六零年饒氏卜辭義證之一，雖云：「貞人㕣常見与穷、爭等人共貞」，乃郭氏解為兩

貞人同貞之例。然續又云：「然如讀為再，謂卜人某再度貞問，於義亦通。」（東方文化四卷一二期合刊）是則饒氏并未完全否定唐氏再貞之說也。

自董氏發明「卜下貞上」之字乃貞人之名，世人公認之，絕不能否定者矣。惟董氏未有將常例以外之例證，明白指出，故「㕣貞」一詞，遂生問題。茲擧「曰貞」一詞為例：

(一) □□卜，王。曰：「貞：其雨？」（甲編二五七九）

(二) 壬午卜，王。曰：「貞：又夢？」（鐵二六·三）

(三) 乙酉卜，王。曰：「貞：㞢尸……自取且乙𩁹……若？」（殷契卜辭二五）

(四) 甲寅卜，王。曰：「貞：羽乙卯其田？往來亡𡿧？于谷」。（佚存一一三）

(五) 庚午卜，王。曰：「貞：羽辛未其田？往來亡𡿧？不冓田？」茲用。

庚午卜，王。曰：「貞：毋田？」鄴一·四十·一；（又重見京津三四五四）

(六) 甲寅卜，王。

甲寅卜，王。

乙卯卜，王。

乙卯卜，王。曰：「貞：羽丙辰王其步自𢼸？」

乙卯卜，王。曰：「貞：于丁巳步？」（京津三四八三）

(七) 庚子卜，行。曰：「貞：羽辛丑，其又𠂤歲于且辛？」（佚存四零一）

(八) 甲申卜，曰：「貞：首往來……」（乙編四三）

(九) 丁酉卜，曰：「貞：……冓。」（佚存三九一；又重見四零三）

第一至第六，舊定為「王曰貞」之例。今案第六，即戰後京津新獲甲骨集三四八三片，各辭完整；若合五辭觀之，則是「卜王組」中之「曰貞」例而已。第七「庚子卜，行：」亦當与

習見之「某日卜某」省去「貞」字之例相同。第八第九則「曰貞」之義尤為明顯。上舉九例，「曰」字不能作人名解之，否則「行曰」二字，豈不可當合為二人共卜耶？

唐氏又指出：「𡆥」字用於祭名之前，如「𡆥㞢」（前編七．三．二四）；「𡆥奉」（佚存三四）；「𡆥用」（前編四．七．六）等；以為𡆥㞢者再侑也；𡆥奉者再禱也，𡆥用為再用也（天壤考釋二至四頁）。如是則又與「再貞」之再，涵義相同。案唐引三例之外，尚有一片，其辭甚完整，可資参證：

甲戌卜，出貞：王𡆥㞢于大戊？二月．（續編一．十二．十六）

此辭卜下貞上有人名，𡆥上有王字；故「王再侑」與「王再貞」其義殆相同。又殷契拾掇有殘骨片云：

乙巳卜，王．弜步？吕俞？（拾掇一／四四八）

俞字不識，或穷字異體，亦祭名也。祭名前用吕字者，尚有小屯第十三次發掘之一龜腹甲；經張秉權氏綴合後，整片幾已復原，其辭如下：

丁乙卜，王．余勿𢆯三？一二

丁巳卜，王．余𢆯彡？一二

丁乙卜，王．余勿𢆯三？三

丁乙卜，王．余口口？三

丁巳卜．王．余勿𢆯三？十月．四五

丁乙卜，国．余𢆯三？四五（丙編圖版八三、九十）

張氏向讀「不吕巽」為「不牾殊」，故此片之「𢆯三」沿襲讀為「牾彡」而無說．案「牾」有乖逆之意，若加之於祭名之前，作「牾㞢」，「牾奉」，「牾用」，「牾穷」或「牾彡」，頗難通解。饒氏通考（五／四五七）引乙編二一三八片乃殘腹甲，故辭有漏脫：

丁乙、余𢆯彡．（核案：此辭在龜首甲之左，乃第四及第五次卜辭）

丁乙，余勿彡．十月（核案：此辭在龜首甲之右，乃第四及第五次卜辭）

解云：「『𢆯彡』与『勿彡』對言，則𢆯乃語詞」。案饒說未的。此殘片乃龜首右甲及龜首左甲部分，非特龜首右甲（甲編七三三七片）補「王」、「𢆯」二字，則其辭不完也。當依兩編讀「𢆯彡」為一詞，而以「勿𢆯三」与「𢆯彡」對貞，始合。

又檢殷墟書契前編卷六，著錄文武丁時代卜辭一片，文例特殊，契刻行款亦詭異；然非偽骨也，其中兩辭，釋述如下：

壬申．叀一人𦥑貞：不？

壬申．弜貞：不？（前編六．十三．一）

葉玉森集釋讀為：「貞：不徹（執）一人？壬申，叀。壬申弜。」；乃早期看法，不足據。近年嚴一萍氏改讀為：「壬申，弜貞不。壬申，叀一人貞不𦥑。」見中國文字十八期釋𦥑。嚴氏以𦥑為臾之初形，謂說文訓蕢為草器，字雖後起，頗存朔誼。故𦥑當是貯物之草器，可以奉之以饋人。所以滕送從𦥑而饋遺從貴，皆有贈与之義云。案嚴氏以𦥑訓蕢，可備一說；惟嚴氏以前編（六．十三．一）一片𦥑形所從之丨為即8之異體，尚有可商。余細看前編初印本拓片𦥑字之丨形，極可能是從丨作𦥑，而與小屯甲編三一七七片之𡆥相類。如是則余改讀為「叀一人再貞」，似有可能。甲骨文「一人」習見，當是「余一人」之簡稱，詳胡厚宣余一人解（甲骨學商史論叢）。此片兩貞均缺「卜」字；干支下接用「叀」字或「弜」字，均極罕見。如解「弜貞」為「弗貞」，則「𡆥貞」似亦可解為「再貞」矣。余未嘗不知吾說之未安，然既有此卜辭，遂不得不論及之耳。若因「一人貞」之辭，附會推斷，而產生「二人貞」之解釋，則去之彌遠矣。

「𡆥」既非屬名詞，而只是副辭，則郭、胡、陳三氏所舉二人共卜之說，至少可以得到另一說法。至於饒氏所增無「𡆥」字之四例，亦當於此商訂之。（案．𡆥、吕、𢀛、及𡆥四形，疑是同字異體）

饒引前編二．三七．七一片，以為三人共貞：

丁丑卜，𣏟、争、大（此二字合文）貞：令羽（翌、祭名）子𢏚臣于萬。（通考．前論．頁二七）

島邦男氏殷墟卜辭綜類（頁二五一）亦引此條而讀法不同：

丁丑卜，争貞：令翊氏子𢏚臣于𡇂。

余檢前編初印本校之，此片殘甲，兩貞之間，有界畫，均左行。第二辭存「争口多口方口𡆥」四字。此辭第一行「卜」字墨重，幾不辨筆畫。第二行第一字「𡆥」清晰，第二字貞只存最下殘畫。第三行「𦏧」字與同書六．五一．二争貞一片辭庚下卜争貞「令𦏧比黃」之「𦏧」字正同。亦左行，下方尚有殘辭，見「争」字。兩片字體與行款極相類，蓋同期之物也。「翊」字與「氏」字之間，都留有一字之位置，然以本例推之，知無缺泐。又兩片行款俱不整齊，當以「争貞令某」連文，於義為長。初印本丁丑卜之片，「𦏧」字左旁「𠆢」字，下有小橫畫，雖與庚午卜之片作𠆢者微有不同，然非從大也。令字之後，不當緊接祭名；島氏之釋，較合文例。然略去第一行行末「𠈌」字，豈謂此字當屬之別組辭？余以此片行款潦草，疑此字乃補刻在令字之下。茲重為校讀，並隸定如下：

丁丑卜，争貞：令𠈌、𦏧、氏子𢏚，臣于𡇂。

案前編（八．十四．二）有一辭，丁丑卜，王貞：令𠈌𠂊乃于𡆧叶朕史？，後編（下．二四．一０）亦有殘辭：「壬辰卜𠈌：令𠈌取宜衛」，故「令𠈌」在卜辭中非只一見也。又試𦍒（三六九）有：「庚午卜，穷貞：令亻、𠈌、歸于口」之辭，乃同時令諸臣之例，亦習見。島氏在同書（頁四五三）重引上述丁丑一辭，為：

丁丑卜𠈌争貞：令大氏子羽臣𢏚𡇂于

既受饒說所惑，遂改易文字之次第，惜其不可卒讀。甚矣，在同一書中前後相應之不易也！

饒氏所引小屯甲編二七六九片釋文，

乙丑卜，彭、穷貞，其萬（馬）且（祖）丁門，于𠱩衣，卯彡。（通考、頁九零四引）屈翼鵬氏小屯甲編考釋，讀法與釋說均有不同：

乙丑卜，彭貞：其萬且丁門，于賓、𠱩、衣、卯、彡。

解云：「案此彭与穷同貞，萬即師祭之禡。卯彡猶言余彭」。（通考頁九零五）注云：「此祖丁，蓋謂武丁。門謂築門也。賓疑宗字之訛；宗，廟也。」（頁三五四）。余檢視甲篇此殘骨拓本，本辭極為完整，四周空白，雖行款凌亂，尚有迹象之可尋。饒屈兩釋，殊未愜意，爰為改讀如下：

乙丑卜，彭貞：其穷為且丁門，于𠱩、衣、卯、彡？

原刻第一行「彭」字特大，「貞其穷」當是第二行，穷字位近行末者，尚存添注之意。案「穷為」或「為穷」均為卜辭習見成語。「且丁門」与「父甲門」（寧滬一．二零一）同義，陳夢家以為是先祖先妣神主所在之宗廟或宗室（綜述頁四六八）是也。𠱩、衣、卯、彡，四者當是祭名。如此，似比屈氏解為「祖丁築門」較順，且又不用改字訓之。

小屯第二次發掘，彭組卜辭中，除上述二七六九片之外，尚有不少殘片，其所契刻均一反常例者，如：㈠添字例：、二四七一、十、二四九一、十、二五一零片、：第六辭「貞：王其令手射鹿射？」「王」字添注於「其」之下，「令」之右旁；「手」字下餘地甚多，然「射

鹿射」三字則畧移向左下行。案此片為胡厚宣与嚴一萍兩氏所綴合，共有卜辭二十條，貞人只見彭一人。其第九辭：「己巳卜，彭貞：御于河，羌三十人？在十月又二卜」。在紀月之後，用一「卜」字，亦罕見。二八七一片第二辭：「癸酉卜，何貞：旬亡囚？」，「何」字漆注於亦字之左旁；第四辭有「彭」字。(二)改字例：二二一四片彭貞，「囚」字有剷削痕，蓋初誤刻他字因而剷改者。(三)倒刻字例：二四一七片共三辭，每辭之「彭」字皆倒刻。二四九三片彭貞第二辭「旬亡」二字倒刻。(四)一辭之中行文忽左忽右例：一一五八片彭貞第一辭，初由上而下折而右轉，復由上而下折而左轉。(五)同一辭中字體大小不同，刻劃粗幼有異例：二七七九片彭貞，命辭一句共十一字，前六字較大，刀刻粗深；後五字較小，刀刻細淺。屈氏以為「父庚以下五字蓋另一人所刻，故字跡与上段不同」。棪案：上述彭組卜辭之變例各條，已足證卜辭契刻行款確有反常現象。至於第三次發掘彭組以外資料，契刻反常者亦甚多，無煩列舉矣。

通考卷二（頁五四）引甲篇一二七四片，謂大与即二人同卜，隸定為：

癸亥卜，大、即：王其田學（禽）

屈注云：「大、即，皆二期貞人名；此二人並貞之例也」。今檢甲篇拓本，此乃首右甲殘片，非得前右甲復合之，則此辭之缺文，極難補完，況大卜數百條，而貞問田狩之事者僅此乎？屈氏又云：「本辭即下省貞字」。余細審拓片，大下作「既」形，則「既」字也，為之訂補如下：

癸亥卜，大：既〔求〕，王其田學？

案大小有省貞字之例。如殷契卜辭一二六片，遺珠三八三片，明義士九八片等是也，如是則「癸亥卜大」一辭，大下省貞字，並非特例。又案小屯第三次發掘有一殘骨著錄甲編二六四

八片：「叀戊田？弜往田，不學？既求，王其田亡𡆥？」此片雖未見貞人之名，然「既」与「田」同辭，則与此片同。饒氏在通考卷十三，貞人事輯，嘗引甲編一二七四片，並云：「大之卜辭卜田狩者僅見此一條」。（頁八一九）惟句讀則与同書卷二（頁五四）所定有異：

癸亥卜大：既……王其田。其……

在同一書內，而前後有矛盾之見解者，其中一說，必難成立。豈著者自覺其誤列此於「二人共貞例」之未確，故校改之歟？

通考（頁五四；又七五七；又八八）引佚存六九片：

壬寅卜，兄屰爽……

饒氏云：「此片商氏釋作『卜兄[illegible]』，以屰為它字未確。右辭可讀為卜人兄与屰同卜，如是則屰之年代可下至祖甲矣」。今檢佚存拓本，墨淡，而筆畫並不清晰，商、饒二氏各有所執，存疑可也。況此殘碎之片，若用之為二人共貞僅有之例，殊未協，故不具論。

小屯歷次發掘所得二萬二千餘片，既未能證實在同一條卜辭之內有連續兩個貞人之紀錄。而小屯兩編復原龜版數百片，亦不見有類似饒氏後舉之四例者，故「二人共貞」之說，不得不重行檢討矣。

余讀此書一遍，因將蓄疑於陶中之一問題畧述如上，不識達良以為何如？

香港中文大學建立之八年，時維一九七一年三月十五日書於中國文化研究所。

李棪

龜版文例研究を讀む（序に代ふ）　李棪

一九六六年秋、李達良學士予に從ひ甲骨文字を香港中文大學研究院に於て習ふ、卜辭文例の整理に志有り。二載を越え、甲文述例〔三〕先づ成る；書中殆だ小屯復原の龜腹甲を采錄する者は、蓋し其の愼也。他日若し能く小屯復原の牛肩胛骨及び小屯發掘以外の較完整の甲骨を將って、再び甲と骨との文例の比較に從事し、以て新知を涵養し、來學に嘉惠するは、誠に一繁重にして又急切の工作也。

二人共卜の例は、郭鼎堂（郭沫若）一九三七年に『殷契粹編』第一四二四片の卜骨を考釋せられし時より、書〔經〕洛誥の「我が二人共に貞ふ」を引きて證と爲す、（粹考、頁一八七）；是に於て胡厚宣『卜辭雜例』（二零）は遂に引申して兩史同貞の例を爲る。陳夢家『〔殷虛〕卜辭綜述』（斷代下）に「并卜卜人」の詞有り、解に云く、「所謂并卜とは是れ同一卜辭内に、兩個の卜人並卜す、此の例僅かに武丁時代に見え、僅かに㱿に限るのみ、而して争、内、穷、出と並卜す。」（頁一七五、一七六）と。一九五九年饒選堂（饒宗頤）の『殷代貞卜人物通考』も又た「彭、穷」、「大、即」、「兄、屰」及び「㱿、争、大」の數例を增す。（卷一、卷二）屈翼鵬（屈萬里）は『殷虛文字甲編』一二七四片を考釋し、「大、即」二人共貞の例と爲す。諸家の説は、陳陳相ひ因り、凡そ三十餘年を歷て、殆んど定論を成す。曩歲余『北美所見甲骨選粹考釋』（本校中國文化研究所集刊三卷二期）第三片を發表す、亦誤りて「卜、出」を以て二人と爲す。近ごろ力を小屯第三次發掘一批の拓本に致し、始めて屈氏饒氏の「彭、穷」の辭を改讀して極めて碻かなるを覺る。惟れ「大、即」の説法は、則ち屈と饒とは相ひ同じ。金祥恒の『卜辭卜人解惑』（中國文字三十三期）に「丙寅卜卜出貞」の片を證す、其の中の一つ「卜」字を衍

文と爲す；蓋し拙稿を訂正して後ち忽に啟發する所有り、旁ら例證を搜してこれを成す；其の説甚だ精なり。惜むらくは拙稿已に排印に付し、未だ改易するに及ばず；祥恒兄の攷錯の意は、至りて感ずるに足る也；謹んで此に識し、以て吾が過ちを誌す。案ずるに小屯第三次出土の諸片は、已に少なからざる變例有り、因りて「二人共貞」の説を疑ふ。並に再び商る可き者無きに非ず。茲に達良と研討の餘に值り、固陋を辭せず、畧所見を陳べん。

一九五三年、余、劍橋大學の爲に金璋蒐藏する甲骨に整理するの時、初めは「王㱿貞」の一殘片を疑ひて僞刻と爲す；越えて二年、選堂巴黎より倫敦に至り、審に此の片を視るを偕にし、御って以て贋に非ずと爲す。久しからずして、選堂は『卜辭義證』を撰し、㱿字を讀んで語詞の「載」と爲す、以て「不再命」の説を印證す。（東方文化四卷一、二期合刊）。一九五九年、選堂『殷代貞卜人物通考』を選し書を成すに、遂に舊説に沿ひ、遽ちに㱿を以て第一期の卜人と爲す。其の主要證據は則ち『殷虛文字甲篇』三一七七片爲る也。

陳〔夢家〕氏云ふ所る：「兩個の卜人並卜は、此の例僅かに武丁時代に見え、僅かに㱿に限り而して争、内、穷、出と並卜す。」並に未だ何を以て僅かに㱿に限るかに疑ひを致さず。今、各辭を考ふれば均しく卜旬に屬す、而して「㱿」字も又必ず一習見の貞人名字の下に緊接す；此れ必ず故有り。茲に各辭を下に錄して、庶くば參考に備へん。

1、癸酉卜，争㱿貞：旬亡囚？（七集衛五）

2、癸未卜，争㱿貞：旬亡囚？（簠室貞類三一；遺珠九六；粹篇一四二四；續存上九一二；寧滬二、二二）

3、〔癸〕囗〔卜〕，争㱿貞：旬亡囚？ 壬辰雨。囗囗囗㱿貞：旬亡囚？ 丁未雨。乙酉囗囗

𡆥（林一、二七、一〇）
4、癸未卜，爭㕣……（寧滬二、二二）
5、癸未卜，穷㕣貞：旬……（林一、二六、一一）
6、癸未卜，内㕣貞：……（林一、二六、一〇）
7、[illegible]口𡆥，殻㕣貞：旬……（京津一八二一；又二六四五に重見）
8、癸卯卜，出（殻？）㕣貞：旬亡𡆥？（簠室貞類三〇；續篇五、三一、八に重見）

其の他に「㕣貞」の詞有り、而して「㕣」上に貞人無き者は、均しく殘片に屬す；而して又均しく卜旬と關わり有り、此の中の消息は、殊に玩味に堪ふ。案ずるに小屯甲編三一七七片は乃ち第四次發掘に得る所ろ、龜腹甲の前左甲と後左甲の一大部分に在り、甲龜の特長は、完整にして泐さず、惜むらくは今に至るも未だ綴合する能はざるのみ。其の九條の卜辭、隸定すれば下の如し。

a、癸酉卜，口貞：旬亡𡆥（右行の卜字下斷缺；亡字の下も亦斷缺。）
b、癸酉卜，㕣貞：旬亡𡆥？（右行）
c、癸酉卜，炏貞：旬亡𡆥？（左行）
d、癸酉卜，炏貞：旬亡𡆥？（左行）
e、癸酉卜，㕣貞：旬亡𡆥？（左行）
f、癸酉卜，㕣貞：旬亡𡆥？（左行）
g、癸酉卜，㕣貞：旬亡𡆥？（左行）
h、癸酉卜，㕣貞：旬亡𡆥？五月。（左行）
i、癸酉卜，㕣貞：旬？戊寅帚妹𡚧？七月。（左行、旬字の下〃亡𡆥〃の二字缺刻。）

各辭の「貞」字は均しく閛形に作る；屈氏以てこれを第一期に入る。豈に二人共貞説の影響する所を受くる耶。案ずるに貞旬卜辭は、同じく一干支に屬して連續して斷たず一片の上に記錄せらるる者は、此の例僅かに見ゆ。余以爲く此れ乃ち同じく五月癸酉の日に在りて、連續卜問して少しく八次に至る。故に「再」字を用ふ。惜むらくは第一辭「卜」下の龜甲斷缺し、「㕣」字有りや無しやを知らず。如しこれ無きと曰へば、則ち第一辭は當に「再」字有るべからず。饒氏此の片を以て「㕣」を定めて貞人の主要證據と爲す；余反って此の片を以て「㕣」を定めて貞人の主要の證據に非ると爲す；蓋し此くの如きは則ち但だに全璋の「王㕣貞」の片、以て解して「王再貞」と爲すべきのみならず；而して爭・穷・内・殻各貞人卜旬諸片の㕣字は、亦未だ嘗って讀んで「再」と爲す可からざる也。早に一九三九年唐立庵（唐蘭）先生天壤閣第四片を釋するの時に在って、已に「㕣貞は再貞也」（天壤考釋頁二至四）の説有り。唐氏「不多冓」の一詞を解して「不再冓」と爲す。余向に苟も同じうせず；然れども云ふ所の「才」は當に再と爲すべし、才再は声本相ひ近し」とは、誠に創見と爲す。唐又謂へらく「郭氏の二人共卜の例中、卜人に爭・内、等有り、均しく㕣と卜を同くす、而して他の人則ち一の卜を同じくするの例無し、是れ其の説未だ洽がず」。（天壤考釋頁七一）と。則ち唐氏亦已にこれを疑ふなり。一九六零年饒氏『卜辭義證』の一に「貞人㕣、常に穷・爭等の人と共貞するを見る」と云ふと雖も、乃ち郭氏解して兩貞人、同貞の例と爲す。然れども續いて又云く「然れども讀んで再と爲すが如きは、卜人某は再度の貞問を謂ひ、義に於ても亦通ず。」（東方文化四卷一・二期合刊）と。是れ則ち饒氏并に未だ完全に唐氏の再貞の説を否定せざる也。董「作賓」氏「卜下貞上」の字乃ち貞人の名を發明してより、世人これを公認し、絕えて否定する能はざる者なり。惟だ董氏未だ常例以外の例證を將って、指出を明白にすること有らず、故に〃㕣貞〃の一詞は、遂に問題を生ず。茲に〃曰貞〃の一詞を擧げて例と爲す：

(一) 口口卜，王・曰：「貞：其雨？」（甲編二五七九）
(二) 壬午卜，王・曰：「貞：又夢？」（鐵、二六、三）
(三) 己酉卜，王・曰：「貞、由尸……自取且乙𩛥……若？」（殷契卜辭二五）
(四) 甲寅卜，王・曰：「貞：羽乙卯其田？往來亡巛？于谷。」（佚存一一三）
(五) 庚午卜，王・曰，「貞：羽辛未其田？往來亡巛？不冓田？」茲用。
(六) 庚午卜，王、曰：「貞：毋田？」鄴一、四十、一；（又京津三四五四に重見）
甲寅卜，王・
甲寅卜，王・
乙卯卜，王・
乙卯卜，王・曰：「貞：羽丙辰王其步自敦？」
乙卯卜，王・曰：「貞：于丁巳步？」（京津三四八三）
(七) 庚子卜，行、曰：「貞：羽辛丑、其又勺歲于且辛？」（佚存四零一）
(八) 甲申卜，曰：「貞：首往來……」（乙編四三）
(九) 丁酉卜，曰：「貞：……冓。」（佚存三九一；又四零三に重見）

第一から第六に至る、蓋し定めて「王曰貞」の例を爲す。今、第六を案ずるに、即ち『戰後京津新獲甲骨集』三四八三片は、各辭完整なり；若し五辭を合してこれを觀れば、則ち是れ「卜王組」中の「曰貞」の例のみ。第七の「庚子卜，行」は、亦當に習見の「某日卜某」は「貞字」を省去するの例と同じ。第八第九は則ち「曰貞」の義尤も明顯爲り。上に九例を擧ぐ、「曰」字は人名に作ればこれを解する能はず；否らざれば則ち「行曰」の二字は、豈に牽合して二人共卜と爲すべからざるや。

唐氏又指出す；「㕣」字は祭名の前に用ふ、「㕣㞢」（前編七・三・二四）；「㕣桒」（佚存三四）；「㕣用」（前編四・七・六）等の如し；以爲く㕣㞢は再侑也；㕣桒は再捧也；㕣用は再用也。（天壤考釋二至四頁）是れ則ち又「再貞」の再と、涵義相ひ同じきが如し。案ずるに唐「氏」引く三例の外に、尚一片有り、其の辭甚だ完整、參證に資す可し。

甲戌卜，出貞：王㕣㞢于大戊？二月。（續編一、十二、十六）

此の辭卜下貞上に人名有り、㕣上に王字有り；故に「王再侑」と「王再貞」は其の義殆んど相ひ同じ。又『殷契拾掇』に殘骨片有り云く；

乙巳卜，王、弜步？多[illegible]？（拾掇一／四四八）

[illegible]字識らず、或は穷字の異體、亦祭名也。祭名の前に多字を用ふる者は、尚小屯第十三次發掘の一龜腹甲に有り；張秉權氏の綴合を經て後ち、整片殆んど已に復原す。其の辭は下の如し；

丁巳卜，王、余勿[illegible]？一二
丁巳卜，王、余[illegible]？一二
丁巳卜，王　余勿[illegible]？三
丁巳卜，王・余口口？三
丁巳卜，王・余勿[illegible]？十月。四五
丁巳卜，国・余[illegible]？四五（丙編圖版八三・九十）

張氏は句に「不〓〓」を讀んで「不〓殊」と爲す、故に此の片の「〓〓」は舊讀に沿って「〓彡」と爲して說無し。案ずるに「〓」に乖逆の意有り、若しこれより祭名の前に加ふれば、「〓出」、「〓柰」「〓用」・「〓𡧊」或は「〓彡」に作る、頗る通解し難し。饒氏通考は（五一四五一七）乙編二一三八片乃ち殘腹甲を引くも、〓の辭に漏說有り。

丁巳、余〓彡。（校案ずるに、此の辭は龜首甲の左、乃ち第四及び第五次の卜辭に在り。）

丁巳、余勿彡。十月。（校案ずるに、此の辭は龜首甲の右、乃ち第四及び第五次卜辭に在り。）

解に云く「〓彡」と「勿彡」とは對言、則ち〓は乃ち語詞なり」と。案ずるに饒說未だ的ならず。此の殘片は乃ち龜首右甲及び龜首左甲の部分、將た龜首右甲（甲編七三三七片）は「王」、「〓彡」の二字を補ふに非ず、則ち其の辭は完からざる也。當に『丙編』に依りて「〓彡」を讀んで一詞と爲す。而して「勿〓彡」と「〓彡」の對貞を以て、始めて合す。

又『殷虛書契前編』卷六を檢ぶれば、文武丁時代の卜辭一片を著錄す、文例特殊、契刻行款も亦詭異なり；然れども僞骨に非る也。其の中の兩辭、釋述すれば下の如し。

壬申，叀一人〓貞：不？

壬申、弜貞：不？（前編六・十三・一）

葉玉森の『殷虛書契前編』集釋』讀みて「貞：不㚔（執）一人？壬申、叀。壬申、弜」と爲す；乃ち早期の看法は、據るに足らず。近年嚴一萍氏改讀して「壬申、弜貞不、壬申、叀一人貞不〓」と爲す。中國文字十八期『釋〓』に見ゆ。嚴氏〓を以て史の初形と爲す、謂へらく說文賣を訓じて草器と爲す、字後に起ると雖も、頗る朔の誼を存す。故に〓當に是れ物を貯ふるの草器なるべし、以てこれを奉じて以て人に饋る可し、媵送は〓に從ひて

饋遺は貴に從ふ所以は、皆な贈与の義有りと云ふ。案ずるに嚴氏は〓を以て賣と訓じ、一說に備ふ可し；惟だ嚴氏前編（六・十三・一）の一片〓形の從う所の〓を以て即ち〓の異體と爲す、尚ほ商す可き有り。余細かく前編初印本拓片〓字の〓形を看れば、極だ能く是れ〓に從ひ〓に作る可し、而して小屯甲編三一七七片の〓と相ひ類す。如し是くの如くんば則ち余改讀して「叀一人再貞」と爲すも、可能有るに似たり。甲骨文に「一人」習見す、當に是れ「余一人」の簡稱なるべし，胡厚宣余一人解に詳なり（甲骨學商史論叢）。此の片兩貞均しく「卜」の字を缺く；干支の下に「叀」字或は「弜」字を接用す，均しく極めて罕れに見ゆ。「弜貞」を解して「弗貞」と爲すが如きは、則ち「〓貞」は似て亦解して「再貞」と爲すべし。余未だ嘗って吾が說の未だ安んぜざるを知らずんばあらず、然れども既に此の卜辭有り、遂にこれを論及せざるを得ざるのみ。若し「一人貞」の辭に因りて、附會推斷して、「二人貞」の解釋を產生すれば、則ち之れを去ること彌〻遠し。

「〓」は既に名詞に屬すに非ず、而して只是れ副辭、則ち郭、胡、陳三氏擧ぐる所の二人共卜の說は、至少以て另に一說法に到るを得可し。饒氏增す所「〓」字の四例無きに至っては、亦當に此に於てこれを商訂すべし。（案ずるに、〓、〓、〓、〓に及ぶ四形は、疑ふらくは是れ同字異體なり。）

饒引く前編二・三七・七一片は、以て三人共貞を爲す；

丁丑卜，〓、争、大（此の二字合文）貞：令羽（翌は祭名）子〓臣于〓。（通考、前論、頁二七）

島邦男氏『殷虛卜辭綜類』（頁二五一）も亦此の條を引きて讀法同じからず。

丁丑卜，争貞：令翊氏子〓臣于〓。

余前編初印本を檢してこれを校せば、此の片殘甲、兩貞の間に、界畫有り、均しく左行なり。第二辭に「争口多口方口〓」の四字を存す。此の辭の第一行は「卜」字墨重なり、殆んど筆畫を辨たず。第二行第一字の「〓」は清晰なり、第二字の貞は只最も下に殘畫を存す。第三行「〓」字と同書六・五一・二争貞の一片の辭の庚下の卜争貞とは、「令〓比〓」の「〓」字に正に同じ、亦左行、下方に尙ほ殘辭有り、「争」字見ゆ。兩片の字體と行款は極めて相ひ類し、蓋し同期の物也。「翊」字と「〓」字との間には、都て留に一字の位置有り、然れども本例を以てこれを推せば、缺泐無きを知る。又兩片の行款は俱に整齊ならず、當に「争貞令集」の連文を以てすべし、義に於て長と爲す。初印本の丁丑卜するの片は、「〓」字の左旁は「〓」字、下に小しく橫畫有り、庚午卜するの片〓に作る者と雖ども徵するに同じからざる有り，然れども大に從ふに非る也。

令字の後、祭名を緊接す當からず；島氏の釋、較文例に合す。然れども署第一行行末の「〓」字を去る、豈に此の字、當にこれを別組に屬すべしと謂はんや。余、此の片の行款潦草を以て、疑ふらくは此の字乃ち補刻して令字の下に在り。茲に重ねて校讀を爲し、並に隸定すれば下の如し。

丁丑卜，争貞：令〓、〓、氏子〓、臣于〓。

案ずるに前編に（八・十四・二）一辭有り：「丁丑卜，王貞：令〓〓〓于〓叶朕史」後編（下・二四・一〇）にも亦殘辭有り；「壬辰卜〓：令〓取宜衛」，故に「令〓」は卜辭中に在りて只一見するに非る也。又誠齋（三六九）に「庚午卜，𡧊貞：令〓、〓、歸于口」の辭有り；乃ち同時に諸臣に令ずるの例、亦習見す。

島氏の同書に（頁四五三）上述の丁丑の一辭を重引する在り。

丁丑卜〓争貞：令大氏子羽臣〓〓于」爲り、既に饒說の惑ふ所を受く、遂に文字の次第を改易し、其の卒讀す可からざるを惜しむ。甚しきかな、同一書中に在りて前後相ひ應ずるの易すからざる也。

饒氏引く所の小屯甲編二七六九片の釋文は、

乙丑卜，彭、𡧊貞：其〓（馬）且（祖）丁門，于〓衣，〓彡。（通考頁九零四引く）

解に云く：「案ずるに此の彭と𡧊とは同貞、〓は即ち師祭の禡、〓彡は猶ほ余彭を言ふ」と。

（通考頁九零五）屈翼鵬氏の小屯甲編考釋に讀法と解說とは均しく同じからざるに有り；

乙丑卜，彭貞：其爲且丁門，于賓，〓，衣，〓，彡。

注に云く；此の祖丁は、蓋し武丁を謂ふ。門は築門を謂ふ也。賓疑ふらくは宗字の訛なり；宗は、廟也」と。（頁三五四）。余甲篇の此の殘骨拓本を檢視すれば、本辭極めて完整爲り、四周空白、行款淩亂と雖も、尙迹象の尋ぬ可き有り。饒屈の兩釋は、殊に未だ意に愜はず、爰に改讀を爲せば下の如し。

乙丑卜，彭貞：其𡧊爲且丁門，于〓、衣、〓、彡？

原刻第一行の「彭」字特に大なり、「貞其𡧊」は當に是れ第二行なるべし、𡧊字の位行末に近きは、尙ほ漆注の意を存す。案ずるに「𡧊爲」或は「爲𡧊」は均しく卜辭習見の成語爲り。「且丁門」と「父甲門」（寧滬一・二零）とは同義，陳夢家以爲く是れ先祖先妣神主在る所の宗廟或は宗室（綜述頁四六）是れ也。〓、衣、〓、彡なり」，四者は當に是れ祭名なるべし。此くの如く、屈（萬里）氏の解に比ひて「祖丁築門」と爲すは較順なるに似たり，且つ文字を改めるを用いずしてこれを訓ず。

小屯第三次發掘は、彭組卜辭中、上述の二七六九片の外を除いて、尙ほ少くなからず殘

片有り、其の契刻する所は均しく一に常例に反する者なり。(一)字を添へるの例；ゝ二四七一・ゝ十ゝ二四九一・ゝ十ゝ二五一零片；第六辭は「貞：王其令弔射鹿射？」「王」字は「其」の下に添注し、「令」の右旁なり；「弔」字の下の餘地、甚だ多し、然れども「射鹿射」の三字は則ち畧左り下行に移向す。案ずるに此の片は胡厚宣と嚴一萍兩氏の綴合する所為り、共に卜辭二十條有り、貞人は只彭一人を見るのみ、其の第九辭は：「己巳卜、彭貞：御于河、羌三人？在十月又二卜」なり。月を紀すの後に在り、一つに「卜」字を用ふるも、亦罕に見ゆ。二八七一片の第二辭は：「癸酉卜、何貞：旬亡囚？」なり、「何」字は亦字の左旁に添注す；第四辭に「彭」字有り。(二)改字の例；二二一四片の彭貞は、「囚」字に剷削の痕有り。蓋し初め他字を誤刻して因りて剷改する者なり。(三)倒刻の字例；二四一七片は共に三辭なり、每字の「彭」字は皆な倒刻なり。二四九三片の彭貞第二辭「旬亡」二字は倒刻なり。(四)一辭の中行の文は忽左忽右の例なり；一一五八片の彭貞の第一辭は初め上由りして下に折れて右に轉ず、復た上よりして下に折れて左に轉ず。(五)同一辭中の字體大小同じからず、刻劃粗拙にして異例有り；二七七九片の彭貞は、命辭の一句は共に十一字、前の六字は較大きく、刀刻粗深なり；後の五字は較小さく、刀刻細淺なり。屈氏以て「父庚以下の五字は蓋し另の一人の刻する所ろ、故に字跡と上段同じからず」と為す。核案するに、上述の彭組卜辭の變例の各條は、已に卜辭契刻の行款は確かに常の現象に反することと有るを證するに足る。第三次發掘彭組以外の資料に至っては、契刻の常に反する者は亦甚だ多し、列擧に煩らすこと無し。

通考卷二(頁五四)に甲篇一二七四片を引き、謂へらく大と即二人同卜す」と。隸定して、癸亥卜、大、即、王其田牢(禽)と為す。『殷虚文字甲篇考釋』(頁一八〇)こ

れに從ふ。屈注に云く：「大、即は、皆な二期の貞人名：此の二人並貞の例也」と。今、甲篇拓本を檢すれば、此れ乃ち首の右甲の殘片、前右甲を得てこれを復合するに非ず、則ち此の辭の缺文は、極めて補完し難し、況んや大卜の數百條は、而して田狩の事を貞問する者は僅かに此れのみならや。屈氏又云く：「本辭は即ち下の貞字を省く」と。余細かに拓片を審にすれば、大の下は皀形に作る、則ち「既」の字也。之れより訂補を為せば下の如し、

癸亥卜、大、既国、王其田牢？

案ずるに大卜に貞字を省くの例有り。殷契卜辭一二六片、遺珠三八三片、明義士九八片等の如きは是れ也。是くの如くんば則ち「癸亥卜大」の一辭の如きなり；大の下は貞字を省き、並に特例に非ず。又案ずるに小屯第三次發掘の一殘骨甲編二六四八片に著錄する有り；「叀戊田？弜往田，不牢？既求、王其田向？」と。此の片未だ貞人の名見えざると雖ども、然れども「既」と「田」とは同辭なり，則ち此の片と同じ。饒氏の通考卷十三に在り、貞人の事蹟、嘗って甲編一二七四片を引き、並に云く「大の卜辭に田狩を卜する者は僅かに此の一條に見る。」(頁八一九)惟だ句讀は則ち同書の卷二(五五四)に定める所と異なる有り：

癸亥卜大：既…王其田。其……

同一書內に在りて、而して前後矛盾の見解有る者、其の中の一說は、必ず成立難し。豈に著者は自から其の曩に、此を「二人共貞の例」の未だ確かならざるに列するを覺りて、故に校してこれを改むるか。

通考(頁五四；又七五七；又八八八)佚存六九片を引く、

壬寅卜、兄犿炎……

饒氏云く；「此の片商氏釋して『卜兄乾』に作る、犿を以て它字未だ確かならざると為す。右の辭讀むに卜人兄と犿とは同卜為る可し。是れ則ち犿の年代下りて祖甲に至る可[illegible]一二。(三)、[illegible]、墨淡くして筆畫並に清晰ならず、商、饒二氏各〻執る所有り、存疑可なり。況んや此の殘碎の片、若しこれを用ふれば二人共貞為ること僅かに有るの例、殊に未だ協わず、故に具さに論ぜず。

小屯の歷次發掘して得る所の二萬二千餘片は、既に未だ同一條卜辭の內に在りて連續して兩個の貞人の紀錄有るを證實する能はず。而して『小屯丙編』に龜版數百片を復原す、亦饒氏後ちに擧るの四例に類似する者有るを見ず、故に「二人共貞」の說は、重ねて檢討を行わざるを得ざるなり。

余此の書を讀むこと一遍、因りて將に疑ひを胸中に蓄ふるの一問題を將って畧述することと上の如し。達良以て何如と為すかを識らず。

香港中文大學建立の八年、時に維れ一九七一年三月十五日、中國文化研究所に書す。李棪

註〔一〕 本書は小屯丙編復原の龜腹甲四百八十餘圖と胡氏の新大龜七版を以て卜辭三千四百餘を蒐め、舊聞を裒集し、新說を方位篇、文例に分け、方位篇には卜龜の概略、刻辭の位置、背面の相承。文例篇には卜辭の類別、段落結構の組識、前辭の繁變、文辭の簡省等の例、每例の前に先づ序論を附し、後に例證、圖解を

載せて案語を加えている。著者は李達良。出版は一九七二年七月、香港中文大學聯合書院文史叢刊乙種之二。

註〔二〕 李達良（？ ）傳未詳

註〔三〕 『甲文述例』未見

前言

一九六六年，余在中文大學語言研究所從李棪齋先生習甲骨文字，兩歲以來，遍讀時賢之作，其中有每援文例以論卜辭者。惟諸賢曩所論列，多未采用小屯發掘之資料，既有所局限，故言多未盡。逮至張氏秉權綴合小屯乙編若干腹甲為丙編上中下三輯，於是考史考文，耳目一新。惟文例一事，張氏与胡氏厚宣，均有創獲，然尚未有推究文例之全，泐成專著者。聯合書院中文系同事周鴻翔博士，致力甲骨僞刻有年，近亦從事於卜辭對貞之例。然博士所著書尚未刊行，無由借鏡矣。

竊不自量力，取小屯丙編復原龜腹甲四百八十餘圖，益以胡厚宣新大龜七版（其中有為丙編所未收者），約得卜辭三千四百餘條，迺裒集舊聞，案證新說，取其所長，綜核而論之，名之曰龜版文例研究。上半部曰方位篇：論述卜龜之概畧，刻辭之位置，行文之方向，同組辭之相對位置，與背面之相承。下半部曰文例篇：論述卜辭之類別，段落結構之組織，前辭之繁變，文辭之簡省等例。每例之前，先次序論，後舉例證，或用圖解，或加案語。至所以專腹甲而不及胛骨之故，良以二者體積各異，書寫之例不同；兼綜為難，離之雙美云爾。末學膚受，又未嘗睹祕府与海外之藏，疏舛謬誤，自知不免，方聞君子幸垂教之。

一九六八年夏李達良謹識

一九六六年，余は中文大學語言研究所に在りて李棪齋先生より甲骨文字を習ふ。兩歲以来，遍く時賢の作を讀む。其の中に每に文例を援き以て卜辭を論ずる者有り。惟だ諸賢曩に論列する所，多く未だ小屯發掘の資料を採用せず，既に局限する所有り，故に言多く未だ盡さず。張氏秉權「小屯乙編」の若干の腹甲を掇合し「丙編」上中下三輯を為るに至るに

逮ぶ。是に於て考史考文は、耳目一新す。惟だ文例の一事は、張氏と胡氏厚宣とは、均しく創獲有り[四]。然れども尚未だ文例の全てを推究するに有らず、泐して專著を成す者なり。聯合書院中文系同事周鴻翔博士は[五]、力を甲骨僞刻に致すこと有年、近く亦卜辭對貞の例に從事す。然れども博士の著す所の書は尚未だ刊行せず、鏡を借るに由無し。

竊に自から力を量らず、「小屯丙編」復原の龜腹甲四百八十餘圖を取り、益すに胡厚宣の新大龜七版（其の中に「丙編」を為りて未だ收めざる所の者有り）を以て、約卜辭三千四百餘條を得、迺ち舊聞を裒集し、新說を案證し、其の長ずる所を取り、綜核してこれを論ず。これを名づけて「龜版文例研究」と曰ふ。上半部は「方位篇」と曰ふ、卜龜の概畧、刻辭の位置、行文の方向、同組辭の相對位置、背面の相承を論述す。下半部は「文例篇」と曰ふ、卜辭の類別、段落結構の組織、前辭の繁變、文辭の簡省等の例を論述す。每例の前に先づ序論を次し、後に例證を擧げ、或は圖解を用ひ、或は案語を加ふ。腹甲を專らにして胛骨に及ばざる所以の故なるに至っては、良に二者の體積各〻異なり、書寫の例同じからざるを以てなり；兼綜難きと為す。これを離す雙美云爾。末學膚受、又未だ嘗て祕府と海外の藏を睹ず、疏舛謬誤は、自から免ぬがれざるを知る。方聞の君子幸にこれに教へを垂れんことを。

一九六八年夏、李達良謹んで識す。

註[四] 張氏と胡氏とは、均しく創獲有り。張氏には「殷虛文字」「乙編」上輯、中輯、下輯「卜龜腹甲的序數」「論成套卜辭」があり、胡氏には「卜辭雜例」「卜辭同文例」、「武丁時五種記事刻辭考」、「卜辭記事文字史官簽名例」がある。

註[五] 周鴻翔、傳未詳。書に「殷商帝王本紀」がある。

一〇三、殷卜辭中五種祭祀的研究（一）

引言

自甲骨文字出土於河南安陽的殷墟，經王懿榮的鑑賞，劉鶚鐵雲藏龜的拓傳後，即慢慢激起一股探討的熱潮。首先是文字的考釋，以訂正說文之失。繼則印證史實，和考訂古代的禮制。但起初因不能斷定卜辭的正確時代，故成績並不太理想。到了王國維先生寫殷卜辭中所見先公先王考（註一），才提出以稱謂定時代的方法。但因殷人稱呼其諸伯叔父母也是父母，並沒甚分別，而且單靠稱謂就可以判定時代的卜辭畢竟不多，故沒有引起太大的注意。一直等到中央研究院大舉在安陽發掘，獲得大龜四版後，董作賓先生才發現過去意義一直不明的貞上卜下的一字，是貞人自署的名子（註二）。由此貞人的釐定，擴而充之，他著成了甲骨文斷代研究例一文（註三），提出世系、稱謂、貞人、坑位、方國、人物、事類、文法、字形、書體等十項為斷代的標準。可「遠之斷定其時代，近之斷定其世代，更進而斷定其年代」（註四）。由此學者才能徹底地整理分類甲骨刻辭，依之以修訂殷代的禮制系統，使甲骨學成為顯學。董作賓先生分卜辭時代為五期（註五），並於此五期解釋為新舊派相互間勢力的更遞。新舊派不論在曆制、典祀、卜事、文法、政治作風等各方面，都有不同的表現。現在要討論的五種祭祀，就是其中一個很顯明的例子。

這裏所說的五種祭祀，是指翌、祭、壹、劦、彡五個祀典而言。這五個祀典在殷新派王朝的祖甲、帝乙、帝辛三王時，是一組首尾相貫，連綿不斷地舉行的祀典。這種祀典依着一個已擬定的祭譜，很有規律且定日地逐次祭祀其先王先妣，而成一種緊密完整的祭祀週期。因這種祀典是有系統性，又有周期性的，故董作賓先生命之為五祀統，而陳夢家名之為周祭。

五種祭祀可以說是完全利用分期，分派以研究卜辭的成果，在甲骨學中算是一個很小的專題。因此注意這個問題，討論這個問題的人也比較少。除了首先發現這種禮制的董作賓先生的殷曆譜（註六）、日本島邦男氏的殷墟卜辭研究裏的長篇大論（註七）、以及陳夢家於卜辭綜述的一些敘述討論文字外，似乎很少看到有關此問題的文章。其所以很少人討論這個問題的原因，大概是這個問題的範圍太小，而董作賓先生及島邦男氏的大著作，幾乎已包含了殷代五種祭祀的全貌。遺下的問題，都是憑現在的材料所難解決的，所以大家就存而不論了。

董作賓先生和島邦男氏所採用的研究方法和根據的資料，可以說是沒什麼大不同的，而他們歸納推衍所得的結果卻大異其趣，甚至是相反的主張，這是頗耐尋味的。五種祭祀不單是殷新派王朝的一種革新的祭祀禮制而已，因為這種祭祀對於受享的資格有所限制，是考訂宗法、世系的重要材料，而其祀序的規則，祭祀日期的一定，也是考察殷代曆法實際施行情形的絕好資料（註八）。宗法、世系、曆法等都是史學研究的重要課題，因此對於這五種祭祀實有詳細討論辨明的必要。

（註一）原載觀堂集林

（註二）見董作賓大龜四版考釋，載安陽發掘報告第三期，已提出斷代法。

（註三）載中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種。

（註四）見殷曆譜上編卷一葉一下。

（註五）見甲骨文斷代研究例，後於殷虛文字乙編自序自第四期析出文武丁而成六期。

（註六）為民三四年四月中研究史語所專刊石印本，後又寫殷曆譜後記，載史語所集刊十三本。殷曆譜的自我檢討，載大陸雜誌九卷四期。等。

（註七）最先寫祭祀卜辭之研究，後增寫為殷虛卜辭研究，其後又寫帝乙帝辛之在位年數，

（註八）　載甲骨學九號。卜辭之殷曆―殷曆譜批判，載中國學會報十八期。等。島邦男氏的帝乙帝辛之在位年數・卜辭之殷曆等、都是利用五種祭祀以考察殷代的曆法的論文。

甲骨文字河南安陽の殷墟に出土してより、王懿榮の鑑賞、劉鶚の鐵雲藏龜の拓傳えた經て後ち、即ちだんだんとひと筋の探討に熱心な氣分が起ってきた。首めは先づ文字の考釋であり、以て說文の失を訂正した。繼いで則ち史實を互に証明するのと、古代の禮制を考訂した。ただ初め卜辭の正確な時代を斷定することができないことにより、故に成績は決して理想的ではなかった。王國維先生が『殷卜辭中所見先公先王考』（註一）を書くにいたって、はじめて稱呼きもって時代を定める方法を提出した。ただ殷人の稱呼によれば、其の諸々の伯叔父母はまた父母であり、なんら分別がない、そのうえ單に稱呼にたよるだけでは、就ち時代を判定できる卜辭は結局多くはなく、故にとても大きい注意を引き起すことはなかった。ひきつづき中央研究院は大擧して安陽で發掘するようになり、大龜四版を獲得してのち、董作賓先生はやっと過去にずっと意味が明らかでなかった貞上卜下の一字は、貞人自ら署する名であることを發見した。（註二）此の貞人の整理改訂、擴充によって、彼は『甲骨文斷代研究例』の一文（註三）を著し、世系、稱謂、貞人、坑位、方國、人物、事類、文法、字形、書體等十項を提出して斷代の標準とした。「遠くは其の時代を斷定し、近くは其の世代を斷定し、更に進んで其の年代を斷定した」（註四）ものである。此の學者の才能によって徹底して甲骨刻辭を整理分類した、これに依りて以て殷代の禮制系統を修訂して、甲骨學をして顯學ならしめた。董作賓先生は卜辭時代を分けて五期となし、（註五）並びに此の五期の解釋に新舊派相互間の勢力の更遞をつくった。新舊派は曆制、典祀、卜事、文法、政治作風等各方面だけでなく、すべてに違った表現がある。現在討論をしようとしている五種祭祀は、就ち其の中の一つの非常にあきらかな例である。

ここに說く所の五種祭祀は、翌・祭・壹・劦・彡五つの祀典を指して言うのである。この五つの祀典は殷の新派王朝の祖甲、帝乙、帝辛三王の時にあって、一つの首尾相い貫ぬいて、連綿としてたえずとり行ってきた祀典である。この種の祀典は一つの已に考定した祭譜により、非常に規律があり且つ日を定め逐次其の先王先妣を祭祀し、而して一種の緊密完整の祭祀週期を成している。この種の祀典は系統性があるにより、又周期性があるので故に董作賓先生はこれを名づけて五祀統とする。而して陳夢家はこれを名づけて周祭とした。五種祭祀は完全に分期分派を利用して以て卜辭の成果を研究するのだと云えるが、甲骨學中にあって一つの非常に小さい專題ということになる。此れによってここの問題に注意し、ここの問題を討論する人は比較的少ない。はじめにこの種の禮制を發見した董作賓先生の『殷曆譜』（註六）、日本島邦男氏の『殷虛卜辭研究』の長篇の大論（註七）、陳夢家の「『殷虛』卜辭綜述」に及ぶいくつかの文字の討論を敍述した外は、非常に少しく此れに關係のある問題の文章をみるのは非常に少ないようだ。故に其の非常に少しの人がこの問題を討論するわけは、大概はここの問題の範囲のとても小さいものであり、そして董作賓先生及び島邦男氏の大著作は、幾んど已に殷代五種祭祀の全貌を包含しているからであろう。殘された問題は、すべて現在の材料によっては解決しがたいもので、大家は就ち殘しておくだけで論じない所以である。

董作賓先生と島邦男氏採用する所の研究方法と根據とした資料は、何ら大きな違いはないと言うことができる。而るに彼等は歸納推行して得た所の結果はかえって大いに其の趣を異にし、甚しくはこれ相ひ反する主張は、これ頗る意味がある。五種祭祀は單に殷の新派王朝の一種の革新の祭祀禮制だけではないというのはこの種の祭祀は、享受する資格に對して制限するところがある。これ宗法・世系の重要材料を考訂し、其の祀序の規則、祭祀日期の一定も、また殷代曆法を考察して實際の實情を施行する絕好の資料である。（註八）宗法、世系、曆法等はすべて史學研究の重要課題であり、此れに因りてこの五種祭祀に對して實に詳細に討論辨明するの必要がある。

（註一）　もと『觀堂集林』に載す。

（註二）　董作賓の『大龜四版考釋』に見え、『安陽發掘報告』第三期に載せ、已に斷代法を提出。

（註三）　「中央研究院歷史語言研究所集刊外編第一種」に載す。

（註四）　『殷曆譜』上編巻一葉一下に見える。

（註五）　『甲骨文斷代研究例』に見え、後ち『殷虛文字乙編』自序に第四期より文武丁を析出して六期と成す。

（註六）　民(國)三四年四月「中研究史語所專刊」石印本なり、後ち又『殷曆譜後記』を書き、「史語所集刊」十三本に載す。「殷曆譜的自我檢討」は、『大陸雜誌』九巻四期等に載す。

（註七）　最初に『祭祀卜辭の研究』を書き、後ち増訂して『殷虛卜辭研究』となし、其の後ち又「帝乙帝辛の在位年數」を書き、『甲骨學』九號に載す。「卜辭の殷曆―殷曆譜批判」は、『中國學會報』十八期等に載す。

（註八）　島邦男氏の「帝乙帝辛の在位年數」、「卜辭の殷曆」等は、すべて五種祭祀を利用して殷代の曆法を考察した論文である。

――――○――――

註〔一〕　五種祭祀は、翌、祭、壹、劦、彡の五つの祀典をいうが、この五種祀典は祭祀週期をなし、系統があるため董作賓氏は五祀統とし、陳夢家氏は周祭としている。蕭着の許進雄氏は董作賓、島邦男氏等が同じ卜辭資料を使っての研究態度について序文に「歸納推行して得たところの結果はかえって其の趣を異にし、甚しくこれに相い反する主張は、これ頗る意味がある。五種祭祀は、享受する資格に對して制限する所がある、これ宗法、世系の重要材料を考訂し、其の祀序の規則、祭祀日期の一定も、また殷代曆法を考察して實際の實情を施行する絕好の資料である。宗法、世系、曆法等はすべて史學研究の重要課題であり、此れに因りてこの五種祭祀に對して實に詳細に討論辨明するの必要がある」と述べる。內容についてここでは第二、第三章について紹介すると、二、五種祭祀的特性　では三種の事情は他の時期や他の祭の卜辭にまた出現することがあるが、ただすべての五種祭祀にはないが、祖甲等三王の革新に設施される。これは卜祀の文章の言葉使いにみな一定の格式がある。「王宾」の字を使用しているように、則ち祭名は一定して先王先妣名の後にある。「王宾」を使用しないときは祭名は一定して前に在って、例外があるように、それは第二期に屬する。

董作賓はかって雍己は第五期背甲上の位置にあるとしたがしかし雍己卜祀の辭の碎片を比較すると、それは部分に屬し、みな刻辭が龜背甲の中肋にあることを發見した。これによって卜問の五種祭祀を見い出した時、すべて專用の甲骨上にあって、そのうえまた卜問の順序によって、時に一つの小片の殘辭によりまた全甲の刻辭を補足することができる。このように見ると、祖甲は五種祭祀の統系を創ったけれども、未だ決定しないものが多く、第五期に到ってすこし完備したのである。だから討論は第五期を以て中心とすると述べる。三、受祭的資格　では五種祭祀を受ける資格は、先王には直系旁系を議論しないのは、あるものは已に立って太子となりまだ卽位していないのに均しく祭祀を受けているからである。先妣においては則ち有子卽位に限定しているのは、あるものが立って太子となりわずかに祀を受けることができる。だから同一世中に二人の先王の配妣に祭祀できる。後になって更に嚴格に一世にただ一大宗に限定し、ただ直系であれば有子卽位の先妣には後の享祭をした。先王の祭りをする次序は則ち位についた先後を順序とし、親屬間の順序の高低を考へていない。先妣が一王に數妣ある時の順序に至っては、是否は先王の卽位先後による。其の子の卽位の順序によってきめることは文獻で証明することができない。眞に其の子の卽位先後によって定めるのであれば、則ち各王の母は大部分みな考定することができると述べる。そして四、祭譜的擬定。五、祀首的擬定。六、祀與年的問題　七、帝乙辛祀譜。八、祀週與祀序。九、祀譜的檢討より成り、詳細に五種祭祀について再檢討を加えている。一九六八年六月出版。國立臺灣大學文

學院の文史叢刊之二十六。巻末に英文の要旨を付けている。

校後語

趁此論文即將出版的時候，來說幾句感激的話。

(1) 首先要感謝東亞學術研究計劃委員會，於民國五十一年及五十五年、先後給予研究此問題的補助。

(2) 特別感謝三位老師：屈先生萬里、李先生孝定、金先生祥恒；以及張秉權、嚴一萍兩先生，對予我的教導和指正。

(3) 本論文付印前，曾抽出一部分發表了三篇短文：①、對張光直先生的殷代廟號新考的幾點意見，刊於中央研究院民族研究所集刊第十九期；②、甲骨卜辭中五種祭祀祀首的商討，刊於中國文字第二十二期；③ 五種祭祀的祀週和祀序，刊於中國文字第二十四期。

(4) 本論文雖參考過不少的專書和論文，但討論的主要對象，是殷曆譜、殷墟卜辭研究、和殷虛卜辭綜述三書。為免冗贅，參考書目只列引用到的專書和論文，未經引用的，就不再列擧了。

(5) 非常感謝吾友會文石、張平男二先生，他們為本文作了英文摘要。

此の論文を即ちこれから出版しようとする機會に乘じて、幾句かの感激した話を語ろう。

(1) 首めに先づ東亞學術研究委員會に、民國五十一（一九六二）年から五十五（一九六六）年に及ぶまで、先後私は此の問題の研究の補助をいただいたことを感謝しなければならない。

(2) 特別に三人の老師：屈先生萬里、李先生孝定、金先生祥恒から、張秉權、嚴一萍兩先生にまで私にあたえられた指導と指正に對して感謝します。

(3) 本論文の印刷の前に、曾って一部分を抜き出して三篇の短文を發表した：①「對張光直先生的殷代廟號新考的幾點意見」は中央研究院民族研究所集刊第十九期に刊行した。②「甲骨卜辭中五種祭祀祀首的商討」は中國文字第二十二期に刊行した。③「五種祭祀的祀週和祀序」は、中國文字第二十四期に刊行した。

(4) 本論文は少なからずの專書と論文を參考にしたけれども、ただ討論の主要對象は『殷曆譜』、『殷墟卜辭研究』と『殷虛卜辭綜述』の三書である。冗贅を免ぬがるために、參考書目は只引用した專書と論文を列ねた。未だ引用を經ないものは、就ち再び列擧しなかった。

(5) 非常に吾が友會文石[二]、張平男[三]二人の先生に感謝します、彼等は本文のために英文の要旨を作ってくれました。

註[二]　會文石　傳未詳。

註[三]　張平男　傳未詳。

一〇四　殷虛卜辭後編[二]

編者的話

明義士先生是外國人當中，收集和研究甲骨卜辭最著名的，他眼光的敏銳，是難與比擬的。他注意到的問題，如貞人名、周易為卜辭所衍變，鑽鑿的不同型態，都證實了是甲骨學上的重要發現。如果他不是外國人士，以致研究中國的學問有很多不方便的話，相信其成就更不可限量。

明義士先生到底收集過多少甲骨，其毀損的情形，運入加拿大的經過如何，恐怕已無人能夠解答。從有限的資料，可知他收藏而現在尚存的有：(1)一九一七年他於收集的五萬片中，選出二三六九片印行殷虛辭。據稱現在保存於南京博物院的明義士藏骨二三七〇片，就是摹本殷虛卜辭的原骨。(2)一九五二年於濟南的齊魯大學校舍內，挖出明義士先生埋藏甲骨一萬多片，因埋藏時間過久，大都已腐爛成粉，其殘存者歸山東某處代管。陳夢家於殷虛卜辭綜述中，說此代管的一〇三七片，已有八四七片出版於南明。按南明所摹的大都是大塊的骨頭，與報導的殘存者都是碎小的情形不合。恐怕其中傳聞有錯誤。到底這挖出的一萬多片，與第一次收藏的五萬片有無關係，就不得而知了。(3)多倫多的皇家安大略博物館藏約四七〇〇片，已選出綴合後的三一七六片，出版為 The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones in the ROM: A Catalogue。(4)新近因某種原因才發現的近四百片之甲骨，有幾版是可與上一收藏拼合的，但也有些是他家的收藏，已無確切的資料可核對到底有多少是明義士所藏的。(5)明義士先生於一九二八年編拓的殷虛卜辭後編二八一二片（綴合後的數目），原甲骨已不知去向。

明義士夫人告訴李棪先生，此編之原甲骨埋藏於山東。不知一九五二年

挖出的殘留者，有無此編之物。

據胡厚宣戰後南北所見甲骨錄的序例，此編共拓有五份。明氏自留一份，一份贈馬衡，一份贈商承祚，一份贈容庚。容氏的一份，轉歸于省吾，又轉歸清華大學，最後歸北京大學。還有一份贈曾毅公，後索回改贈多倫多大學圖書館。但據曾與明義士共事甚久的史景成教授面告，明氏只拓四份而已。安大略博物館的藏本，是明氏歿後才收到的；多倫多大學並沒藏有此稿。收錄於南明的是胡厚宣摹自商承祚和于省吾的拓本，都沒有藏甲的部分，大概是甲質脆弱不便多拓，故只贈送他們骨頭的部分，則此館所藏的或是唯一的全本了。

此編原來分裝為九大冊，每葉一片，前六冊為藏甲，後三冊為藏骨，他於藏甲部分，於序列號外，並註明購進時的包裹號碼。藏骨則除少數外，都是只有序列號碼，可能是整批購進的。兩者的拓本共是二八一九片，有七片可與他片綴合，故為二八一二片。其中二片被撕去，以及確實偽刻的二片，模糊無法辨讀的三片，實數是二八〇五片，全部編入本書。

甲骨不論大小，都有其考古上的價值，通常為了施拓的容易，都選擇比較大塊的出版，編者本也想選取大塊或字形罕見的，但想及明義士先生不忽視碎小甲骨的價值主張，而特別延工施拓，何不完成其遺志把它們全部出版呢？所以又把初擬擇棄的再編排上去，以見明氏傳布甲骨的熱心。

本書編排的體例一如安大略博物館出版的明義士藏骨，先分期，分甲骨，再分事類。原稿本於骨之正反、塗朱都有記載，就以如下記號表示之，S為甲，B為骨，a是正面，b是反面，c則為骨臼，塗朱就用米號，相信這些資料是有助於綴合的。

S〇五五四，S二三七八，S二三八五，B一六八三，B一六九一，B一七二一，B二四八八，都是由二片綴合而成。較之與已出版的明義士藏骨綴合的例子少得很多，也許是明義

士先生已作過拼合的工作，或是編者尚無法找出其伙伴來，其與已出拓本可拼合的有：

①B二二三二加ROM一八〇七。
②B二二三六加ROM一六八〇。
③B二二五六加ROM一七〇七。
④B二二七九加ROM一七六八。
⑤B二二八五加ROM一八二三。
⑥B二四五二加ROM二三一二。
⑦B二四五九加ROM二四五二。
⑧B二四八六加ROM二四八三。
⑨B二四八七加人文二二八八。
⑩B二四八九加B二五六〇加ROM二三五九。
⑪B二四九一加ROM二七四八加甲編七四九。
⑫B二四九二加ROM二四九六。
⑬B二四九五加B二四九六加ROM二三八六。
⑭B二五〇三加ROM二五二八。
⑮B二五一〇加ROM二三三七。
⑯B二五二五加ROM二三五〇。
⑰B二五三六加ROM二七五五。
⑱B二五五二加ROM二八〇一。
⑲B二五五四加ROM二四三〇。
⑳B二五七〇加ROM二三八〇。
㉑B二六一三加ROM二六五一。
㉒B二六一四加ROM二六四七。
㉓B二六五六加ROM二七四〇。
㉔B二七五六加人文二九二七。
㉕南明四九九（原拓已失）加粹編五〇六。

這批材料的可能來源，請參考安大略博物館的明義士藏骨的序言。

本書的精華是第三和第四期的卜骨，其上有很多卜問上一世的祭祀，可以從稱謂以決定時代。第三期和第四期的卜辭是很難劃分其界限的，編者於整理明義士的藏骨，發現鑽鑿的型態是很有效的斷代工具。但是缺少有稱謂以確定時代的第三和第四期卜骨，以致不能確定其界限。此書提供了很多這種資料，可惜原骨已失，無法比較其上的鑽鑿型態，以之確定每位貞人的時代和更細的分期。

本書與殷契佚存重複了十七版，大都是商承祚的藏拓，其號碼為B一五五九（佚五六一），B一五八三b（佚五五八），B一六二九a部分（佚五六五），B一六三六（佚五五二），B一六四五（佚五五一），B一六三三b（佚五四六），B一六七九（佚五三〇），B一六八五（佚五四九），B一七〇六（佚五三四），B一七二三（佚五二六），B一七三九（佚五四四），B一七六〇（佚五五六），B一八二三（佚五二八），B二六二二（佚九一），B二六四二（佚一〇〇），B二七三三（佚五四五），B二七六一（佚五四七）。最後為核查的便利計，特將南明與明續（殷虛卜辭後編）對照的結果，列為表一和表二，另附於後。

本拓本之得以出版，得力於屈師萬里向博物館遠東部部長時學顏博士的商洽，以及藝文印書館願冒蝕本之險，這是編者所最感謝的。

一九七一年十二月．許進雄．

編者の言葉

明義士（明義士・『殷契書錄』註[三]・第一輯三二二頁參見）先生は外國人の中にあって、甲骨卜辭の收集と研究とに最も著名で、彼の眼光の敏鋭さは、ひきくらべ難いものがある。彼の注意した問題は、貞人名、周易卜辭の衍變するところ、鑽鑿の型態を同じでないと為すが如きは、すべて甲骨學上の重要な發現であることを證明した。彼が外國人でなくその結果中國の學問を研究するのに甚だ不便が多いというのならば、其の成果は更にはかりしれないと思う。

明義士先生は結局どのくらい甲骨を收集したか其の毀損の事情、カナダに運び入れられた經過はどうか、恐らくは已に充分な解答はできる人はない。限りある資料より　彼の收

藏して現在尚存しているものは次のものがあるのを知ることができる。(1)一九一七年彼の收集の五萬片中に於て、二三六九片を選出して『殷虚卜辭』(『殷虚文字甲編』註〔三十三〕・第四輯三八頁參見)を印行した。現在南京博物院の明義士藏骨二三七〇片保存されていると稱されるに據れば、就ち摹本は『殷虚卜辭』の原骨である。(2)一九五二年濟南の齊魯大學校舍内に於て、明義士先生埋藏の甲骨一萬多片をほじくり出した、埋藏時間久しきにより、すべて已に腐爛して粉となり、其の殘存は山東の某處に代って管理されている。陳夢家(陳夢家・『殷契摭佚』註〔三〕第三輯一四〇頁參見)は『殷虚卜辭綜述』中に於て、此の代って管理されている一〇三七片について述べ、已に八四七片を『南明』に於て出版している。思うに『南明』摹する所のすべては大塊の骨頭であり、報導の殘存とはすべて碎小の事情は合わないのである。恐らくは其の中の傳聞に錯誤がある、この結局ほり出した一萬多片は、第一次收藏の五萬片と關係があるかないか、就ち知ることができなくなっている。(3)トロントの皇家安大略博物館藏は約四七〇〇片、已に綴合を選出した後の三一七六片は、出版して『The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones in the ROM: A Catalogue』〔三〕を作った。(4)近頃某種の原因により少しく發現の四百片近い甲骨は幾版かあり上の一つと收藏併合するものであり、但だまたその他家の收藏があるが、結局どのくらいが明義士の所藏であったのかを照合すべき確かな資料もない。(5)明義士先生が一九二八年に編拓した『殷虚卜辭後編』二八一二片(綴合後の數目)は、原の甲骨は已にどこへ行ったかわからない。明義士夫人は李棪(李棪・『海外甲骨錄遺』註〔三〕・本輯四四六頁參見)先生に此の編の原甲骨は山東に埋藏していたことをつげた。一九五二年ほり出した殘留のものは、此の編の物であるかどうかわからない。

胡厚宣(胡厚宣・『雙劍誃殷契駢枝』註〔八〕・第一輯一三四頁參見)の『戰後南北所見甲骨錄』(四輯三〇五頁參見)の序例に據れば、此の編は共に拓して五部ある。明氏は自ら一部を留め、一部は馬衡に贈り、一部は商承祚に贈り、一部は容庚に贈った。容氏の一部は、轉じて于省吾に歸し、又轉じて清華大學に歸し、最後は北京大學に歸した。また一部は曾毅公に贈られ、後ち回改を索めてトロント大學圖書館に贈られた。ただ曾や明義士と久しく仕事を一諸にして史景成教授(『殷虚文字乙編』註〔十〕・第四輯一五一頁參見)の函告によれば、明氏はただ四部を拓しただけである。安大略博物館の藏する本は、明氏歿後に少し收めたものである;トロント大學は此の稿を別に藏したことがない。『南明』に收録する胡厚宣の摹は商承祚と于省吾の拓本によるものである。すべて甲の部分を藏するなく、大概は甲の質は脆弱にして多く拓することが出來ない。故にただ彼等は骨頭の部分を贈った。則ち此の館に藏する所は、或は唯一の全本である。

此の編はもともと分裝して九つの大冊につくり、毎葉一片、前の六冊は甲を藏し、後の三冊は骨を藏し、他の甲を藏した部分は、序列の番號の外に、並びに購入の時の小包みの番號を注釋して明にした。骨を藏した則ち少數を除いて、すべてただ序列の番號だけで恐らくは全部一まとめにして購入したものであろう。兩者の拓本は全部で二八一九片であり、七片は他片と綴合することができる。故に二八一二片である。其の中の二片はさけており、以て確實に偽刻二片に及び、模糊として正しく讀めないもの三片、實に數は二八〇五片であり、全部本書に編入した。

甲骨は大小を論せず、すべて其の考古上での價値があり、通常拓を施すことを容易にする爲に、すべて比較的大塊を選擇した、編者の本もまた想うに大塊或は字形の穿れに見る

ものを選び取ったが、但だ明義士先生が碎小甲骨の價値をおろそかにしないと主張し、而して特別に工を延して拓を施したことに想いいたり、どうしてその意味を全うしてそれら全部を出版しないでおれようか。それで初めのぞき捨てようと思ったものを再編して、以て明氏の甲骨を傳布するの熱心さを見んとするものである。

本書が編した順序の體例は一に安大略博物館出版の明義士藏骨の如く、分期を先にして、甲骨を分け、再び事類に分けた。原稿は骨の正反に本づき、塗朱にはすべて記載がある。就ち下記のごとき記號をもって表示する。Sは甲なり、Bは骨なり、aは正面であり、bは反面であり、cは則ち骨臼なり、塗朱は就ち*號を用ひ、これらの資料は綴合に助けになるものと信じている。

S〇五五四、S二三七八、S二三八五、B一六八三、B一六九一、B一七二一、B二四八八、すべて二片から綴合したものである。これをすでに出版してある明義士の藏骨綴合の例がとても少ないのはあるいは明義士先生は已に併合の工作を作っていたのかもしれない、或はこれを編者は尚法り無く其の仲間からさがし出した。其の已に拓本を出だして併合したものに

①B二二三二にROM一八〇七を加える
②B二二三六にROM一六八〇を加える
③B二二五六にROM一七〇七を加える。
④B二二七九にROM一七六八を加える。
⑤B二二八五にROM一八二三を加える。
⑥B二四五二にROM二三一二を加える。

⑦B二四五九にROM二四五二を加える。
⑧B二四八六にROM二四八三を加える。
⑨B二四八七に人文二二八八を加える。
⑩B二四八九にB二五六〇を加えROM二三五九を加える。
⑪B二四九一にROM二七四八を加え甲編七四九を加える。
⑫B二四九二にROM二四九六を加える。
⑬B二四九五にB二四九六を加えROM二三八六を加える。
⑭B二五〇三にROM二五二八を加える。
⑮B二五一〇にROM二三三七を加える。
⑯B二五二五にROM二三五〇を加える。
⑰B二五三六にROM二七五五を加える。
⑱B二五五二にROM二八〇一を加える。
⑲B二五五四にROM二四三〇を加える。
⑳B二五七〇にROM二三八〇を加える。
㉑B二六一三にROM二六五一を加える。
㉒B二六一四にROM二六四七を加える。
㉓B二六五六にROM二七四〇を加える。
㉔B二七五六に人文二九二七を加える。
㉕南明四九九(原拓已に失す)粹編五〇六を加える。

これらの材料が恐らくどんなところから來ただろうかということは、安大略博物館の明義

士藏骨の序言を參考せんことを請ふ。

本書の精華は第三と第四期の卜骨であり、其の上に非常に多くの卜問上の一代の祭祀があり、以て稱謂により以て時代を決定することができる。第三期と第四期の卜辭は非常に其の境界を劃分しがたいのである。編者は明義士の藏骨を整理するに於て鑽鑿の型態は有效に斷代する工具であることを發現した。稱謂が時代を確定する第三と第四期の卜骨を以てするには欠けるものあり、以て其の境界を確定することができない。此の書は非常に多くのこの種の資料を提供した。惜むべきは原骨已に失い、其の上の鑽鑿型態を比較する法がないので、以て位い毎に貞人の時代と更に細い分期を確定した。

本書は「殷契佚存」と十七版重複している。すべて商承祚の藏する拓である。其の番號はB一五五九（佚五六一）、B一五八三b（佚五五八）、B一六二九aの部分（佚五六五）、B一六三六（佚五五二）、B一六四五（佚五五一）、B一六三三b（佚五四六）、B一六七九（佚五三〇）、B一六八五（佚五四九）、B一七〇六（佚五三四）、B一七二三（佚五二六）、B一七三九（佚五四四）、B一七六〇（佚五五六）、B一八二三（佚五二八）、B二六二二（佚九一）、B二六四二（佚一〇〇）、B二七三三（佚五四五）、B二七六一（佚五四七）なり。最後にしさいな調査を爲す便利を考えて、特に南明と明續（殷虛卜辭後編）との對照の結果を、列して表一と表二とし、別に後に付した。

本拓はこれを本にして以て出版を得た。力を屈師萬里に得て、博物館遠東部部長時學顏〔三〕博士に相談し以て藝文印書館に本の險艱さを冒蝕するを願ふに及び、これは編者の最も感謝する所のものである。

一九七一年十二月。許進雄

註〔二〕 オンタリオ博物館所藏の明義士舊藏の甲骨拓本を許進雄氏が編輯したものである。甲骨、正反の別、骨臼、塗朱などについて明義士のノートにある拓本原稿をもとにして全片を分類しているのであるが、時期は武丁以前、武丁期、祖庚、祖甲期、康丁期、武乙・文武丁期、帝乙・帝辛期の五期とし、事項は祭祀、祈年、風雨、旬夕、田獵、往來、內外諸事、使令、疾病与夢、雜卜の十項とする。收錄の甲骨は二八〇五片であり、そのうち牛胛骨八四七片の模本は既に胡厚宣氏の『戰後南北所見甲骨錄』に發表されている。（四輯三〇四―三〇五頁參見）明義士の一九二七年以前の購入の甲骨は彼が自ら「不幸一九二七……予所遺于彰德之物幾盡毀于駐兵之手、骨則踐踏成灰……」（『齊大季刊』一期「商代文化」殷虛之覓得」と述べていたが、現存されていて許氏のなみなみならぬ努力によって整理されたのである。出版は一九七二年三月、洋裝二冊、台灣台北藝文印書館より刊行された。

註〔三〕 The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones。Volume 1 この書は明義士（メンヂース博士）の舊藏によるものである。現在カナダ、オンタリオ博物館所藏の甲骨卜辭であり、約四七〇〇片の甲骨を許進雄氏の採拓、整理、編纂によるものである。編纂については從來のものと異なる。それは許氏は貝塚氏の鑽鑿形態により王族卜辭の第一期であることの傍證とされている。しかし許氏は「鑽鑿對卜辭斷代的重要性」（『中國文字』三七）とこの書の序文において、その第四期であることの重要證據としている。圖錄二六四頁、拓本三一七六片、綴合六例、附錄に他書甲骨との綴合模本四二例。出版はカナダ、トロント、ロイヤル、オンタリオ博物館、一九七二年。

註〔三〕 時學顏 傳未詳。

YIN-HSÜ P'U-TZ'U HOU PIEN

(Additional Collection of Oracle Divinations from the Waste of Yin)

Foreword by Arthur R. Menzies

My father, Dr. James M. Menzies was a student of the archaeology and ancient history of China for nearly fifty years until his death in 1957. He believed that through the application of scientific archaeological methods and painstaking study of the inscriptions on the oracle bones and bronzes of the Shang Dynasty, interpreted in the light of the Classics, much could be learned about the formative ideas of Chinese culture. He considered it important to try to understand the roots of Chinese thought.

Father had been trained first as a Civil Engineer and Land Surveyor before studying theology to go to North Honan, China as a missionary of the Canadian Presbyterian Church in 1910. He was sent to work in Changte in Anyang Hsien. There, in the spring of 1914 he stumbled on the site of the ancient capital of the Yin or Shang Dynasty. This he proclaimed in the preface to his first book, "Oracle Records from the Waste of Yin", published by Kelly and Walsh in Shanghai in 1917.

Father served from 1917-1920 as a Staff Captain with the Chinese Labor Corps, recruited for service with the British Army in France. Then he returned to Changte from 1921 to 1927. It was in this period that he collected many fragments of oracle bones, pieces of pottery and bronze. I can recall as a young boy going on expeditions to the site near Hsiao T'un Village from which many of the oracle bones came. Dealers also came to our home, knowing that my father would take a keen and knowledgeable interest in their accounts of the provenence of the artifacts they brought. They knew that as a missionary he could not afford to buy the whole bronze vessels, pots or bone pieces that would command a good price in Peking or Shanghai. They knew he was not interested in doing business (pu tso mai mai). But by paying small sums for inscribed bone fragments and bits of bronze and pottery he could learn much from them. This was the basis on which he built his study collection.

In 1927 foreign missionaries evacuated North Honan because of the civil war and much

of what father had collected was destroyed or lost. Father taught for a year at the College of Chinese Studies in Peking, then returned to Canada on furlough leave in 1929 by way of India, Mesopotamia and Palestine where we visited archaeological sites. From 1930-32 he was again in Changte until he was asked to go to Cheeloo University, Tsinan, Shantung as Professor of Chinese archaeology and epigraphy. I think that father found the five years he spent at Cheeloo University from 1932-37 some of the most challenging and rewarding of his career. Here he felt that he was making a worthwhile contribution to the archaeological research undertaken by a growing number of Chinese scholars and at the same time interesting students in the new scientific methods of studying the origins of their own great culture.

Because of the Sino-Japanese hostilities father returned to Canada in 1937 where he continued his study of Chinese archaeology at the Royal Ontario Museum, associated with the University of Toronto. He obtained a Ph. D. degree in 1942 for his dissertation on "Shang Ko: a Study of the Characteristic Weapon of the Bronze Age in China in the Period 1311-1039 B.C." published in 1967.

During the war years, 1942-46, father served as a consultant with the U. S. Office of War Information in San Francisco endeavouring to maintain contact with Chinese scholars in occupied China, and later in the State Department's cultural relations program. He suffered a heart attack in 1946 and returned to Toronto, Canada where he continued his research on early Chinese history until his death on 16 March, 1957.

Following his death my mother and I arranged for the transfer of his collection of Chinese archaeological specimens, inscribed oracle bone fragments and books on Chinese archaeology and early history to the Royal Ontario Museum in Toronto on the understanding that his study of the "Shang Ko" should be published and his collections of oracle bones and rubbings should be collated and published.

I am grateful to Dr. Shih Hsio-yen, Curator of the Far Eastern Department of the Royal Ontario Museum for the care she took in preparing father's study of the "Shang Ko" for publication. I am pleased that Mr. Hsü Chin-hsiung has undertaken the study, collation and preparation for publication of the Menzies oracle bone collection, and that in doing so he has enunciated new ideas for the study of the Five Rituals and about the importance of the chiselled holes in the periodic classification of oracle bones.

I consider that my responsibility as a son to arrange the completion of my father's studies will be fulfilled by the publication of the nine folios of rubbings so that these will be available to scholars interested in research on the Shang Dynasty and the origins of Chinese thought and culture. I am glad that I Wen has agreed to publish these rubbings.

Arthur Menzies

殷虛卜辭後編〈殷虛卜辭の追加の收集〉

我が父、ジェームス、M・メンヂース博士は、一九五七年に沒するまでの凡そ五十年間中國の考古學及び古代史を研究した。彼は古典作品にてらしあわせて理解される商時代の甲骨及び銅器にかゝれてある銘文を科學的な考古學の手法を適用し深く研究することによって中國文化を形成する思想について多くのことが學ばれると信じた。彼は中國人の思想の根源を理解しようとすることが大切であると願っていた。

父は一九一〇年にカナダの長老教會の傳導師として中國の河南へ行くために、神學を勉強する以前には土木技師及び測量技師としての訓練を最初に受けていた。彼は安陽縣の彰德に巡遣された。そこで一九一四年の春に彼は殷または商時代の古代都市の遺跡に出くわした。彼はこれを一九一七年に上海にてケリーとウオルッシエによって出版された彼の最初の〃殷虛卜辭〃（『殷虛文字甲編』註〔三十二〕第四輯三八頁參見）の序文の中で公表した。

父はフランスにおける英國陸軍の奉仕のために傭兵された中國人勞働部隊とその（人事）隊長として、一九一七から一九二〇年まで仕えた。それから彼は一九二一年から一九二七年まで、廣東に戻っていた。彼が多くの甲骨の破片や陶器や銅器の破片を收集したのはこの時期であった。私は少年として多くのその甲骨が發見された小屯村の近くの遺跡を探檢しに行った事を思い出すことが出來る。商人達も私の父が彼等が持ってくる有史以前の遺品の出所の話に非常な興味を示すことを知って、私達の家にきた。商人達は父が傳導師として上海や北京で、良い値で賣れる無きずの銅器の壺、骨の破片を買う余裕がないことを

知っていた。商人達は父が〈すばらしい商賣だ〉商賣をすることに興味がないことを知っていた。しかし銘刻入りの骨の破片や銅器や陶器の一部分に少額の金を拂うことによって、父はそれらから多くの事を學ぶことが出來た。これが彼が彼の收集物研究の基くもととなった。

一九二七年、外國人傳導師達は中國の市民戰爭のために河南を引き拂い、父が集めたものの多くは、壞わされたり、そう失したりした。父は北京の中國學院の大學で一年間教鞭をとり、一九二七年にインドやメソポタミア、パレスチナを經由しながら、その各地の考古學上の遺跡を訪ねて、休假にカナダへ戻った。中國考古學と碑文學の教授として山東の泰安の芝罘大學へ行くように要請されるまで彼は一九三〇〜一九三二年まで、再び彰德に居た。父は彼が一九三二〜一九三七年まで芝罘大學で過した五年間を彼の人生の中でも最も意欲的な又實りのあるものと想っていたと私は考える。この時父は增加しつつある中國人學者によってなされる考古學的研究に對して、價値ある貢獻をしており、又、學生達が彼等自身の偉大な文化の起源を研究する新しい科學的手法で興味を持たせる事に價値ある貢獻をしていると感じていった。

日中交戰の爲に父は一九三七年にカナダに戻り、そこでトロント大學と關連したロイヤルオンタリオ博物館で中國考古學の彼の研究を續けた。彼は一九六七年に出版した「商戈考BC一三一一〜一〇三九年の間の中國の青銅時代の特徵的武器の研究」に於て學位論文で一九四二年にPh.D（の称號）を得た。

一九四二〜一九四六年の戰時中の間、父は占領された中國に於ける、中國人學者との接觸を維持する努力をしながら、サンフランシスコの合象國戰爭情報局の相談役として働い

た。そしてその後國務省の文化關係のプログラムに於て働いた。彼は心藏疾患に苦しみ、一九四六年カナダのトロントに歸り、そこで一九五七年三月十六日他界するまで中國初期の歷史に於ける彼の研究を續けた。

彼の死後、私と私の母は父の商期の研究が公表されるべきであり、又、彼の甲骨卜辭の拓本の收集が對照され、また公表されるべきであるとの理解のもとにトロントのロイヤルオンタリオ博物館に中國考古學の考古學及び初期の歷史についての中國考古學上の標本及び銘刻入り甲骨の破片そして書物の收集の移轉を手配した。

私はロイヤルオンタリオ博物館の極東部門の管理者である時學顏博士に彼女の商時代の父の研究の公表を準備する事に協力してくれたことに對して感謝するものである。私は許進雄氏がメンヂースの甲骨收集物の發行の研究對称及び準備をやっていただいた事をうれしく思います。また彼がそうすることに於て五種祭祀の研究、また甲骨の時期的な分類に於て鑽鑿の重要性について新しい考へ方を發表されたことに滿足しています。

私の父の研究の完成を進めるという息子としての私の責任は、九つの拓本集によって、遂行されるであろう。そうすれば、これらは商時代の研究、そして中國思想及び文化の起源に興味のある學者達にも有意義であろうと考える。私はラエンがこれらの拓本を出版することに同意したことをうれしく思う。

アーサー・メンヂース

一〇五 卜骨上的鑿鑽形態〔二〕

發掘於安陽的甲骨卜辭，其年代約自般庚遷都安陽以迄滅於周的二七三年。如不能確定每片卜辭的年代，則其史料的價值必大大的減低，並且也會犯顛倒和紊亂史實的毛病。

董作賓先生的斷代研究例無疑是開展甲骨學的主力。但是斷代法的兩個基礎標準—貞人和稱謂—的應用是有限的，它們之出現於卜辭，並不意會可確實表明其時期。因為貞人不一定與王同進退，所以卜辭也不一定屬於貞人所常供職的朝代。甚至稱謂也不是絕對的標準，譬如父丁的稱謂就可能是第二期之稱武丁，或第四期之稱康丁，所以常常又要根據書體與字形的標準來斷代。由於他們又是由貞人與稱謂的標準推演而來的，自然也會發生錯誤和困擾。書寫的史官也和貞人一樣有供職數期的情形，使得斷代的應用更形困擾，最顯明的例子莫過於所謂的細小剛勁的第三期書體，有些人把它們稱為第三、四期，恐怕也不是恰當的。由稱謂而可定時代的這種書體，雖多數是第三期的，也有不小是第二期祖甲和少數是第四期武乙時代的。此種書體之卜辭有兄己，兄庚的稱謂，很顯明是第二期之稱祖庚和祖己的。

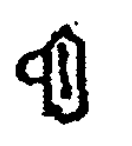
鑿鑽型態之足為斷代的標準，是由手拓摹寫之中慢慢體驗出來的。現在雖尚在研究的初期階段，已可看出鑿鑽型態於各期的演變明顯過程是不可否認的事實。由於分期的最大爭論在於所謂的王族，多子族卜辭，所以本文特別注重辨明此種卜骨上的各種型態。傳統的斷代標準無法解決其紛爭，而鑿鑽型態的標準是可能的。由於王族卜骨上的鑿鑽型態全同於第四期而迥異於第一期的，故它們很顯明是屬於第四期的。

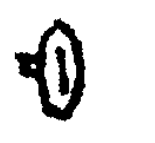
本文也提出用鑿鑽型態來細分一時代之早晚的建議，雖然皇家安大略博物館收藏的甲骨仍然有限，尚無法整理出具體的體系來，但其方法之可行及值得推展是無可疑的，故不嫌簡陋

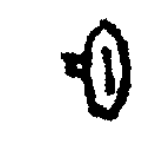
地提出補充董氏斷代方法的方向，希望能見到豐富收藏的學者，共同努力來建立一個精密的體系，以確定卜辭的確實時代。

本書分成二部，第一部是明義士藏骨第一冊（一九七二年出版於多倫多）的鑿鑽型態簡圖。第二部是解說鑿鑽型態與分期的關係及相關問題。由於經費所限，無法延聘專家繪圖，只好由筆者描畫型態的匡廓了。茲說明其圖例如下：

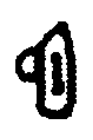
(一)於甲上者：

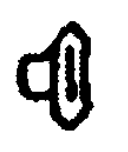
 表示長鑿旁有未燒灼過的圓鑿。

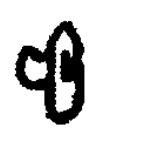
 表示燒灼過的圓洞是鑿或剝裂成的。

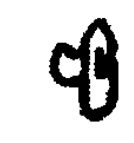
 表示於長鑿旁燒灼而不剝裂表面的。

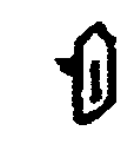
(二)於骨上者：

 表示長鑿旁有未燒灼過的圓鑿。

 表示長鑿旁有燒灼過的圓鑿。

 表示於長鑿旁燒灼並剝裂骨面。

 表示於長鑿旁燒灼但不剝裂骨面。

 表示圓鑿大於並包攝長鑿。

○ 表示小圓鑽。

本書引用不少皮茨堡的卡內基博物館藏甲骨的鑿鑽型態圖，是筆者特地去證實王族卜骨上的鑿鑽型態與第四期文武丁時代的完全相同而描畫下來的。非常感謝該館的好意准予援用，使得本文得具完備的各種鑿鑽樣態。

非常感謝屈萬里和史景成兩師的懇勤指導和鼓勵，這是筆者於多倫多大學東亞系修習ろ

Ph.D.學位的論文，沒有良師的指導，本文的研究和寫作是無法順利完成的。筆者也非常感謝皇家安大略博物館遠東部的同仁，尤其是時學顏博士和Proctor夫人。主任時小姐儘量供給筆者研究的方便，而Proctor夫人與我工作數年，有足夠的知識來修改筆者的英文而免於錯誤的表達。最後謹謝明義士基金會給予研究的基金。

一九七二年五月　于多倫多

安陽に發掘するの甲骨卜辭は、其の年代は約盤庚安陽に遷都してより以て周に滅びるまで二七三年なり。もし每片の卜辭の年代を確定することが出來なければ、則ち其の史料の價值は必ず大きく減低し、そのうえまた史實を顛倒し、紊亂するの誤まちを犯すことにもなるはずだ。

董作賓（董作賓・「殷契書錄」註[四]・第一輯三二四頁參見）先生の斷代研究例は甲骨學を展開した主力であることは疑いない。ただ斷代法の二つの基礎標準は—貞人と稱謂—の應用に限りがある、それらの卜辭に出現するのは、決して確實に其の時期を表明することができるとは思わない。というのは貞人は王と同じく進退一定せず、それで卜辭もまた貞人に常に供職する所の朝代に屬すとはきまらない。甚しくは稱謂でさえもまた絕對の標準ではない。譬へば父丁の稱謂の如きは就ち第二期の武丁を稱すること、或は第四期の康丁を稱することは可能である。それでいつも又書體と字形の標準にもとづいて斷代をしなければならない。彼等を又、貞人と稱謂の標準によって推演していけば、自然にまた錯誤と困擾が發生することになる。書寫の史官はまた貞人と同樣に數期に供職した實情がある。斷代の應用を更に困擾ならしめ、最も顯明な例は所謂細小剛勁の第三期の書體に過ぎざる

はなく、その他を稱して第三、四期となしたのは、おそらくまた適當でないであろう。稱謂に由りて時代を定めたこの種の書體は多數は第三期であるけれども、また第二期祖甲と第四期武乙時代のものであるものも少なからずある。此の種の書體の卜辭に兄己、兄庚の稱謂があり、非常にあきらかなことは第二期の稱謂祖庚と祖己のものである。

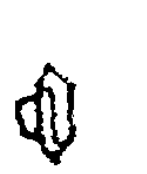
鑿鑽型態の斷代と為すに足る標準は、手拓摹寫の中より段々と體驗から出て來たものである。現在尚研究は初期の段階に在ると雖も、已に鑿鑽型態の各期の演變は否認することの出來ない事實が明顯していることを見い出している。分期の最大爭論が所謂王族、多子族卜辭に在るので、本文は特別に此の種の卜骨上の各種型態を辨明することを重要視したのである。傳統の斷代標準は其の紛爭に解決する方法なく、而して鑿鑽型態の標準は可能である。王族卜骨上の鑿鑽型態に由れば全く第四期に同じにして第一期と迥かに異なる。故にそれらは第四期に屬することは非常にはっきりしている。

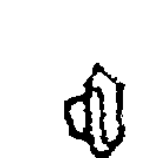
本文はまた鑿鑽型態を用いて一時代の早晚を細かく分けた建議を提出した。皇家安大略博物館收藏の甲骨はあいかわらず限りが有る、尚整理して具體的體系を出だす方法はないけれども、ただ其の方法を實行し發展させる價值のあることは疑う余地がない。故に簡單な粗末なるを嫌わず、董氏斷代法を補充するところの方向を提出した。能く收藏を豐富にする學者が見れば、共同努力して一つの精密な體系を建立し、以て卜辭の確實な時代を確定せんことを希望する。

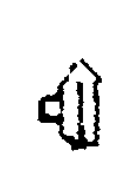
本書は分けて二部となし、第一部は明義士藏する骨第一冊（一九七二年、トロントにて出版す）は鑿鑽型態の簡單な圖である。第二部は鑿鑽型態と分期の關係及び相關問題を解說した。經費の限りあるところにより、專家の繪圖を招聘する方法なく、筆者が型態の匡

鄭描寫するより仕方がなかった。茲に其の圖例を説明すれば下の如し。

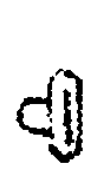
(一)甲上の者

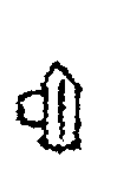
は長鑿の旁に未だ焼灼しない圓い鑿を表示した。

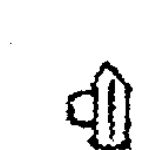
は焼灼した圓洞で鑿或は剝裂したものであることを表示した。

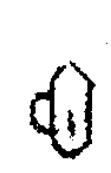
は長鑿の旁に焼灼にして剝裂していない表面を表示した。

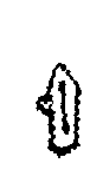
(二)骨上の者

は長鑿の旁に未だ焼灼のない圓い鑿を表示した。

は長鑿の旁に焼灼の圓い鑿の有ることを表示した。

は長鑿の旁に焼灼並びに剝裂の骨面を表示した。

は長鑿の旁に焼灼は但だ剝裂しない骨面を表示した。

は圓い鑿の大きさは並びに長鑿を包攝したものを表示した。

○は小圓鑿を表示した。

本書は少なからず皮茲堡の卡内基博物館藏する甲骨の鑿鑽型態圖を引用した、筆者は特に王族卜骨上の鑿鑽型態と第四期文武丁時代の完全に相び同じであるのは描畫より出てくることを證實した。非常に該館の予に援用に進じられた好意に本文は各種の鑿鑽狀態を完備するを得たことを感謝している。

非常に屈萬里（屈萬里・『殷虛文字乙編』註[三]第四輯九十七頁參見）と史景成（史景成、『殷虛文字乙編』註[四]第四輯一五一頁參見）兩師の殷勤な指導と鼓勵に感謝している。これは筆者がトロント大學東亞系において、「Ph.D」に修習した學位論文である。良師の指導がなければ、本文の研究と寫作は順調に完成する法はなかった。筆者はまた非常に皇家安大略博物館遠東部の同仁に感謝している。尤も其の時學顏博士とProctor夫人である。主任の時、夫人はできるだけ筆者の研究の便に供給され、而してProctor夫人と我が工作の數年は、充分な知識から筆者の英文を改修して誤りの表現を免ぬがれた。最後に明義士基金會に予に與えられた研究の基金に謹んで感謝する。

一九七二年五月　トロントにて。

註[三]　著者、許進雄氏は董作賓氏による斷代研究例のうち貞人と稱謂には限度があって、決してその時期を決定することはできないと思うとし、卜辭の鑽鑿形態について各期の演變をみて「分期の最大爭論が所謂王族・多子族卜辭に在るので、本文は特別に此の種の卜骨上の各種型態を辨明することを重要視したのである。傳統の斷代標準は其の紛爭に解決する方法無く、而して鑿鑽形態の標準は可能である。王族卜骨上の鑿鑽形態に由れば全く第四期に同じにして第一期と迥かに異なる。故にそれらは第四期に屬することは非常にはっきりしている」という。本書の目次によると一、序　二、明義士藏骨鑿鑽形態圖さの七、三、卜骨上的鑿鑽形態において各期の鑽鑿を比較し、とくに王族卜辭と第四期、第三期と第四期の鑽鑿、第三期田獵卜辭の比較辨別等十二項に分ち行う。四、附錄。以上の本文の華語を英譯。五、本文引用之圖一、六、本文引用之圖二を附す。以上のように卜辭の鑽鑿によって董氏斷代研究法を補充し精密な體系を作り卜辭の確實な時代を期せんとするものである。出版は一九七三年八月、藝文印書館。

一〇六　甲骨集成[二]

著錄甲骨之書。以鐵雲藏龜爲嚆矢。劉氏先後所得逾五千片。選其精品千片。由直隸王瑞卿拓墨付諸石印。羅振玉藏龜序謂。「癸卯夏。拓墨付景印。既訖功」。初讀之以爲羅氏拓墨其實非也。故殷虛書契續編序曰。「辛丑。予就丹徒劉氏所藏。編印爲鐵雲藏龜」。斯得其實矣。繼鐵雲而後收藏甲骨之富。當推羅氏。嘗先後影印殷虛書契前編後編及菁華諸書。然林泰輔於龜甲獸骨文字序中嘗言。「編中所載與殷虛書契同者係聽氷閣所藏實物拓本非襲殷虛書契所錄也」。林氏序於大正六年。亦卽我中華民國之六年。羅氏前編印於民國元年。何羅氏之序不及一言。或聽氷閣之甲骨於民國元年以後購自羅氏。亦未可知。殷虛書契續編出版於民國二十二年。盡屬他人墨本。其序曰。「此二千紙。大率爲丹徒劉氏天津王氏北京大學四明馬氏所藏。其什之一。則每見估人所售於千百中遴選一二而手拓以存之者」。所謂丹徒劉氏卽戩壽堂所藏殷虛文字。天津王氏卽簠室殷契徵文。四明馬氏卽凡將齋所藏甲骨也。羅氏雖於序中說明其來源。然甲骨之誰屬。並未註明。實啓後來混合他人拓本以編印。甲骨書之濫觴。近年以來流傳甲骨以望都胡氏爲最動。然材料之重複。亦以胡氏爲最夥。先以摹本付梓。繼以拓本隨之。一再影印樂此不疲。鐵雲藏龜拾遺鐵雲藏龜零拾皆有成書。而續存錄之印之。戰後京津新獲甲骨集更多善齋藏品。已見於殷契萃編之中。以編者之熟悉。甲骨不宜如此。孫海波之誠齋殷虛文字實爲揚天錫所藏。估人孫誠溫得其拓本。卽以誠齋名其書。殷契摭佚爲羅振玉所藏。摭佚續編乎是顧青瑤之物。後之以某某所得甲骨成書者。更屬重複。前人之業無足論者諸如此類。未臻篤實。今欲整理甲骨。使無重複之患。惟有採取名歸主人之辨法。一一尋其最早之藏家。沿流溯源方可還其眞相。甲骨集成之編印卽是此意待全書完成之日。當爲甲骨整理。就緒之時。余將勉力以赴期其有成也。是爲序。

乙卯長夏。秀水嚴一萍。

甲骨を著録するの書は、『鐵雲藏龜』（『鐵雲藏龜』註[二]・第一輯一頁參見）を以て嚆矢と爲す。劉（鶚一）氏先後得る所五千片を逾え、其の精品千片を選ぶ。直隸の王瑞卿拓墨して諸れを石印に付すに由る。羅振玉藏龜序に謂へらく「癸卯の夏、拓墨して景印に付し、既に功訖る。」と。初め之を讀みて以て羅氏の拓墨と爲す、其の實は非也。故に『殷虛書契續編』序に曰く、「辛丑、予、丹徒の劉氏藏する所に就きて、編印して『鐵雲藏龜』を爲る」と。斯に其の實を得たり。鐵雲に繼いで而して甲骨の富を收藏するは、當に羅氏を推すべし。會って先後して『殷虛書契前編』・後編』及び『菁華』諸書を影印す。然れども林泰輔『龜甲獸骨文字』序中に於て、會って言ふ「編中載する所『殷虛書契』と同じ者は聽氷閣所藏實物拓本に係り『殷虛書契』を錄する所を襲ふに非ざる也」と。林氏大正六年に序するも、亦即ち我が中華民國の六年。羅氏前編は民國元年に印す。何ぞ羅氏の序一言に及ばざる。或は聽氷閣の甲骨民國元年以後に羅氏より購ふも、亦未だ知る可からず。『殷虛書契續編』民國二十二（一九三三）年に出版す。盡く他人の墨本に屬す。其の序に曰く「此の二千紙、大率丹徒の劉氏、天津の王氏、北京大學、四明馬氏の所藏爲り。其の什の一は、則ち估人の售る所を見る每に千百中に遴（むさぼ）りて一二を選び而して手拓して以て之を存する者なり」と。所謂丹徒の劉氏は卽ち『戩壽堂所藏殷虛文字』（『戩壽堂所藏殷虛文字』註[三]・第一輯一四〇頁參見）なり。天津の王「襄」氏は卽ち『簠室殷契徵文』（『簠室殷契徵文』註[三]・第一輯二六五頁參見）なり。四明の馬「衡」氏は卽ち凡將齋藏する所の甲骨也。

（『卜辭通纂』註〔十四〕・第二輯一二一頁參見）羅氏序中に其の來源を説明すると雖も、然れども甲骨の誰れに屬するか、並に未だ註明せず。實に後來他人の拓本を混合し以て甲骨書を編印するの濫觴を啓く。近年以來流傳の甲骨は望都の胡〔厚宣〕氏を以て最も勤むと爲す。然れども材料の重複も、亦胡氏を以て最も夥しと爲す。先に摹本の付梓を以て、繼いで拓本を以てこれに隨ふ。一再影印此れを樂みて疲れず。『鐵雲藏龜拾遺』、『鐵雲藏龜零拾』は皆な成書有り。而して『〔甲骨〕續存』之れを錄し之れを印す。『戰後京津新獲甲骨集』は更に善齋の藏品多し。已に『殷契粹編』の中に見ゆ。編者の熟悉を以てすれば、甲骨宜しからざること此くの如し。孫海波の『誠齋殷虛文字』は實に楊天錫藏する所、估人孫誠溫其の拓本を得、即ち誠齋を以て其の書を名づく。『殷契摭佚』は羅振玉藏する所爲り。『摭佚續編』は半ばは是れ顧ふに青璩の物。後の某某得る所の甲骨を以て書を成す者、更に重複に屬す。前人の業論ずるに足る無き者、諸此の類の如し。未だ篤實に臻らず。今、甲骨を整理し重複の患ひ無からしめんと欲す。惟だ採取名は主人の辨法に歸するに有り、一一其の最早の藏家を尋ね、流れに沿ひ源を溯れば必ず其の眞相に還る可し。『甲骨集成』の編印は即ち是れ此の意。全書完成の日を待ちて、當に甲骨の整理を爲すべし、緒に就くの時、余將に力を勉め以て赴むき其の成る有るを期せんとする也。是に序を爲る。

乙卯（一九七五年）の長夏。秀水の嚴一萍。

註〔二〕 嚴一萍氏の編輯による。序に「今、甲骨を整理し重複の患ひ無からしめんと欲す。惟だ採取名は主人の辨法に歸するに有り、一一其の最早の藏家を尋ね、流れに沿ひ源を溯れば必ず其の眞相に還るべし」と述べるように各書契に卜片が

重複されていることは特に研究所の發掘以前のものに多い。それらを所藏者別に墨拓とその模寫を附している。第一は羅振玉藏、易均室藏、羅伯昭藏、楊天錫藏、王懿榮藏を載せる。第二以降は未刊。出版は一九七五年、洋裝本、四八〇頁、藝文印書館。

一〇七 甲骨綴合新編〔三〕

民國七年，王國維先生撰戩壽堂所藏殷虛文字考釋，於第十片曰：

此片與殷虛書契後編卷上第八葉第十四片，文字體勢大小全同，又二片斷痕，合之若符節，蓋一片折而為二也。

此即有名之殷代世系卜辭，而為綴合之嚆矢也。其後，曾君毅公以綴合為專門之業，先出版甲骨叕存於戰前，所得尚少。又復出版甲骨綴合編於戰後，舉凡民國四十年以前可見之甲骨著作，咸在綴合之列，所得凡三百九十有六版。余初無其書，民國四十五年，得其綴合號碼於饒君固庵處，一經覈對，為余之綴合所無者約五之一；然未見原書，雖檢視原片，苦不得其綴合之故。至民國五十九年，旅遊日本，承松丸道雄先生複影見示，始知此無法綴合之五之一，真皆不能綴合者也。

民國四十四年，殷虛文字綴合出版，為一集體著作，專以殷虛文字甲編及乙編中下輯之材料為對象，計綴合甲編一百一十二版，乙編三百七十版，然不明甲骨部位，間有錯誤，余輯中國書譜殷商篇時，曾加指正。而此書自小屯兩編及甲編考釋問世，殆成廢物，已不再可用矣。

余自民國四十年後，從事綴合，尤致力於甲乙編，偶將所得之重要材料為文發表一二，蓋不以綴合為專業，迄未成書也。民國四十六年，中央研究院歷史語言研究所小屯兩編上輯第一冊出版，迄今將二十年，已出上中下三輯六冊，專以乙編為綴合對象。然乙編材料可綴者尚多，尤以文武丁時代部份，及第十五次發掘所得，張氏猶未及之。張氏既以乙編為專業，度必賡續為之，故余輯是書，特將乙編除外，其餘者悉為甄錄。書中凡余所綴合而為他家發

表者，但註明為某家所綴。雖未發表，一經抄示綴合號碼者，亦註明為某人綴合。凡各家所綴有錯誤處，除一部份已說明於綴合中外，另出訂譌一篇殿其後，以明其是非也。

書中所有甲編之查對補拓，均承劉淵臨君幫忙，許進雄君抄示其未發表之綴合及持井康孝松丸道雄兩君所綴，及門白君玉崢平日亦時以綴合相商榷，皆使此集更臻完美，特一併致其謝意。書成，因述其經過如此。是為序。

中華民國六十四年夏曆元旦。秀水嚴一萍於板橋之萍廬。

民國七（一九一八）年、王國維先生『戩壽堂所藏殷虛文字考釋』を撰す、第十片に曰く；

此の片は『殷虛書契後編』巻上第八葉第十四片と、文字體勢大小全く同じ、又二片の斷痕、之れを合すれば符節の若し、蓋し一片折れて二と爲る也。

此れ即ち有名の殷代世系の卜辭、而して綴合を爲すの嚆矢也。其の後、曾君毅公綴合を以て專門の業と爲す、先づ『甲骨叕存』を戰前に出版し、得る所尚少し。又復た『甲骨綴合編』を戰後に出版す、凡そ民國四十（一九五一）年以前見る可きの甲骨の著作を擧ぐれば、咸な綴合の列に在り、得る所凡そ三百九十有六版なり。余初め其の書無し、民國四十五（一九五六）年、其の綴合號碼を饒君固庵（饒宗頤、『巴黎所見甲骨錄』註〔六〕・本輯八〇頁參見）の處に得、一たび覈對を經るに、余の綴合に無き所と爲す者約五の一；然れども未だ原書を見ず、原片を檢視すると雖も、其の綴合の故を得ざるに苦しむ。民國五十九（一九七〇）年に至り、日本に旅遊し、松丸道雄（『甲骨學五十年』註〔十二〕・本輯九五頁參見）先生複影の見示を承け、始めて此の綴合するに法無きの五の一を知る。眞に皆な綴合する能はざる者也。

民國四十四（一九五五）年、『殷虛文字綴合』出版は、一集體の著作爲り、專ら『殷虛

文字甲編』及び『乙編』中下輯の材料を以て對象を為し、綴合甲編一百一十二版、乙編三百七十版を計ふ、然れども甲骨の部位を明らかにせず、間ゝ錯誤有り、余『中國書譜 殷商篇』を輯めし時、會って指正を加ふ。而して此の書『小屯兩編』及び『甲編考釋』世に問ひし自り、殆んど廢物を成し、已に再び用ふる可からず。

余、民國四十（一九五一）年より後、綴合に從事し、尤も力を甲乙編に致す、偶ゝ得る所の重要材料を將って發表の一二為らんとす、蓋し綴合を以て專業と為さず、未だ書成らざるに迄る也。民國四十六（一九五七）年、中央研究院歷史語言研究所『小屯兩編』上輯第一冊出版す、今に迄るまで將に二十年ならんとす、已に上中下三輯六冊を出だす、專ら『乙編』を以て綴合の對象を為す。然れども『乙編』の材料綴る可き者尚多し、尤も文武丁時代の部份、及び第十五次發掘の得る所を以て、張「秉權」氏猶ほ未だ之れに及ばず。張氏既に『乙編』を以て專業と為す、度るに必ず賡續して之れを為さん、故に余是の書を輯め、特に『乙編』を將って除くの外、其の餘は悉く甄錄を為す。書中凡そ余綴合する所にして他家の發表を為す者は、但だ註明して某家綴る所と為す、未だ發表せずと雖も、一たび綴合號碼を抄示するを經し者は、亦註明して某人の綴合と為す。凡そ各家綴る所錯誤有る處は、一部份已に綴合中に說明するを除くの外、另に訂譌一篇を出だし其の後に殿にし、以て其の是非を明にする也。

書中有する所の『甲編』の直對補拓は、均しく劉淵臨（『殷虛文字兩編』註〔三〕・本輯一九七頁參見）君の幫忙、許進雄君（『甲骨文字集釋』、註〔五〕・本輯四三四頁參見）其の未發表の綴合及び持井康孝〔三〕松丸道雄兩君綴る所を抄示するを承け、及門の白君玉崢平日亦時に以て綴合相ひ商権し、皆な此の集をして更に完美に臻らしむ、特に一に併せて其の謝意を致す。書成り、因りて

其の經過を述べること此くの如し。是に序を為す。

中華民國六十四（一九七五）年 夏曆元旦、秀水の嚴一萍 校稿の萍廬に序す。

註〔二〕 嚴一萍氏の甲骨綴合で、編者の綴合は勿論、諸家の綴合をも入れる。そのことは序に「故に余是の書を輯め、特に乙編を將って除くの外、其の餘は悉く甄錄を為す。書中凡そ余綴合する所にして他家の發表を為す者は、但だ註明して某家綴る所と為す、未だ發表せずと雖も、一たび綴合號碼を抄示するを經し者は、亦註明して某人の綴合と為す。凡そ各家綴る所錯誤有る處は、一部份已に綴合中に說明するを除くの外、另に訂譌一篇を出だし其の殿にし以て其の是非を明にする也」とある如くである。本書は線裝本で十冊二帙、墨拓に模寫を附す。出版は一九七五年夏、藝文印書館。

註〔三〕 持井康孝（？ ） 東京大學東洋文化研究所助手。ス・バーナード氏の「中國からはじめて報じられた放射性炭素年代測定」（『甲骨學』第十一号）の翻譯がある。

一〇八 鐵雲藏龜新編〔一〕

遜清光緒己亥。甲骨出土於洹水之濱。翌年庚子。即為福山王文敏公所寶藏。文敏殉國。歸丹徒劉氏。知其所重而定為殷人之物者劉氏也。拓墨付印以廣其傳者亦劉氏也。時為光緒二十九年。癸卯歲。上距甲骨之出纔五年。去今已七十二年矣。七十二年前之印刷雖曰西法其術。未精致。藏龜拓印。模糊辨認困難。不能句讀者比比。民國二十年蟫隱廬翻刊石印。率意粉描。譌誤殊多。鮑氏用心雖苦。無裨研究。民國四十八年余曾重印附以摹本。其模糊過甚。辨認不清。雖亦摹錄。未足視為定論。聊助參考而已。顧劉氏之物自流死新疆。即為姬滕所分散之四方。一再易主。各家輯印成書。時見著錄。必欲使藏龜。還其清晰。唯有校對。此等後出諸書。擇其重印者。一一選換拓本。則刷印不清之弊可一掃而除。十五年來朝夕從事。迄今粗有所成。計各家重印者約為四百版。佔全書十分之四。昔之模糊莫辨者。今皆清晰可識。所餘不可讀者。僅數版而已。歲月不與。余亦垂垂老矣。因加整理。付諸影印。顏曰鐵雲藏龜新編。其與舊編有異者。約有六端。一曰選換拓本。二曰斷代分類。三曰綴合。四曰補背拓。五曰去複。六曰去偽。此六者皆為著錄甲骨之要事。不可或缺。故雖屬重印舊物殆有新義也。所惜考釋。尚未卒業。不能附麗以行。則唯有待諸異日矣。是為序。

歲次乙卯夏。秀水嚴一萍。

遜清光緒己亥（一八九九年）、甲骨洹水の濱に出土す。翌年庚子（一九〇〇年）、即ち福山の王文敏公（王懿榮）の寶藏する所と為り、文敏國に殉じ、丹徒の劉（鶚）氏に歸す。其の重んずる所を知りて定めて殷人の物と為すは劉氏也。拓墨付印して以て其の傳を廣む

る者も亦劉氏也。時に光緒三十九年為り。癸卯の歲、上（かみ）甲骨の出づるを距つこと纔かに五年、今を去ること已に七十二年なり。七十二年前の印刷は西法と曰ふと雖も其の術は、未だ精致ならず、藏龜の拓印は、模糊辨認は困難にして、句讀する能はざる者は比比なり、民國二十（一九三一）年蟫隱廬翻刊石印は、率意粉描す。譌誤殊に多し。鮑氏（鮑鼎。『鐵雲藏龜』註〔三九〕・第一輯三八頁參見）心を用ふるや苦しむと雖も、研究に裨する無し。民國四十八（一九五九）年余は曾って重印して附するに摹本を以てす。其の模糊甚しきに過ぎ辨認の清ならざるものも、亦摹錄すると雖も、未だ視（しめ）して定論と為すに足らず、聊か參考に助するのみ。顧ふに劉氏の物は新疆に流死してより、即ち姬滕の之れが四方に分散する所と為る。一再主を易へ、各家輯印して書を成す。時に著錄に見ゆ。必ず藏龜をして其の清晰に還へらしめんと欲す。唯だ校對有り、此等の後ち諸書を出だし、其の重印を擇ぶ者は、一ち一ち拓本を選換し、則ち刷印清ならざるの弊一掃して除く可し。十五年來、朝夕事に從ふ、今に迄るまで粗（ほ）ぼ成す所有り。各家の重印を計ふる者は約四百版為り、全書の十分の四を佔む。昔の模糊辨ずる莫き者は、今、皆な清晰識る可し。餘の讀む可からざる所の者は、僅に數版のみ。歲月與みせざれば、余も亦垂垂として老へり。因りて整理を加へ、諸れを影印に付し、顏けて『鐵雲藏龜新編』と曰ふ。其の舊編と異り有る者は、約六端有り。一に曰く拓本を選換す。二に曰く斷代の分類。三に曰く綴合。四に曰く背拓を補ふ。五に曰く去複。六に曰く去偽。此れ六者は皆な甲骨を著錄するの要事為り。或は缺く可からず。故に舊物を重印するに屬すと雖も、殆んど新義有る也。惜しむる所考釋に尚未だ業を卒へず。附麗を以て行ふ能はず。則ち唯（た）だ諸れを異日に待つ有り、是に序を歲次乙卯に為る。秀水の嚴一萍。

註(二)　嚴一萍氏は以前に『鐵雲藏龜』（民國四十八年）を復刻するに拓本の誤刻、偽刻、失拓、綴合を檢し、更に模寫を附して刊行したが、それは「模糊甚しきに過ぎ辨認の清ならざるものも、亦蒐錄すると雖も、未だ覩して定論と爲すに足らず、聊か參考に助するのみ」であったので、本書ではその後その拓本をいちいち選換し、斷代の分類をし、綴合し、背拓を補ひ、去複、去偽を行う。分期・分類については凡例を錄したので參考にされたい。出版は乙卯の夏、台灣藝文印書館。

鐵雲藏龜新編凡例

一、是編以鐵雲藏龜。按斷代分類重編。昔彥堂夫子撰小屯甲編序稱鐵雲藏龜一系之書。無五期卜辭。係第二區劉姓地所出。今整理結果確無五期卜辭。編中所收最多為一期。其次二期四期。然亦發現三期卜辭三版。

一、編中有全偽之卜辭四版為

五七・一　八四・一
一三〇・一　二五四・一

一、編中有自相重複之卜辭三版為

八七・二與一九五・一
八九・二與一九二・二
一一六・二與一九五・三

一、甲骨學六十年後期研究的進程。節對於卜事。嘗暫分為二十項。原極粗略。今據本編所有者。細加分類。得四十八項。猶有不能分類之卜辭。茲列之如左。

卜祭祀　卜求年　卜帝　卜卌　卜使人　卜告因祟　卜征伐　卜供人　卜雉象
卜命　卜田狩　卜乎　卜取　卜挈　卜步　卜至　卜王出入　卜往出　卜來
卜去　卜風雨　卜暘攸　卜夢　卜疾　卜死　卜有子　卜娩　卜王　卜旬　卜
夕　卜歸　卜得　卜用　卜若　卜𡆥　卜陟降　卜亞　卜雈　卜王聽　卜循
卜从　卜因告　卜監王事　卜舞　卜乍　王固曰　小告二告　不𢆶黽

一、其他意義不明斷詞殘句。不能分類者列最後。

一、一版而有數類卜辭者。擇其一類而入之。

一、二期三期四期之卜辭過少不能明白分類。

一、是の編は『鐵雲藏龜』を以てす。按ずるに斷代分類の重編は昔し彥堂夫子『小屯甲編』序を撰し、『鐵雲藏龜』一系の書と稱す。五期の卜辭無し、第二區は劉姓の地に出づる所に係る。今の整理の結果は確に五期の卜辭無し、編中收むる所は最も多きは一期為り、其の次は二期、四期。然れども亦三期の卜辭三版を發見す。

一、編中に全てこれを偽とする卜辭の四版有り、五七・一、八四・一、一三〇、一、二五四、一為り。

一、編中に自ら相い重複の卜辭三版有り。

八七・二と一九五、一、
八九、三と一九二、二
一一六、二と一九五、三為り。

一、甲骨學六十年後期研究の進程は、節に卜事に對し、嘗って暫く分ちて二十項と為す。原と極めて粗略。今、本編の所有する者に據りて、細かく分類を加ふれば、四十八項を得。猶ほ分類する能はざるの卜辭有るがごとし、茲に之れを列すれば左の如し。

卜祭祀　卜求年　卜帝　卜卌　卜使人　卜告因祟　卜征伐　卜供人、卜雉象、卜命、
卜田狩　卜乎　卜取　卜挈　卜步　卜至　卜王出入　卜往出、卜來、卜去、卜風雨、
卜暘攸、卜夢　卜疾、卜死、卜有子、卜娩、卜王　卜旬、卜夕、卜歸、卜得、卜用、
卜若、卜𡆥、卜陟降　卜亞、卜雈、卜王聽、卜循　卜从　卜因告、卜監王事、卜舞、
卜乍　王固曰、小告二告　不𢆶黽

其の他の意義の不明なる斷句殘句の分類する能はざる者は最後に列す。

一、一版にして數類の卜辭有る者は其の一類を擇びて之れを入れる。

一、二期・三期、四期の卜辭は過少にして明白に分類する能はず。

一〇九　甲骨古文字研究第一輯〔二〕

甲骨古文字之研究，式微甚矣！自董夫子作古，泰山其頹，已不復見震爍古今，足以傳之千秋若宏篇鉅製如殷曆譜者，即或考釋文字，爬梳典制，粲然可成一家之言，亦猶鳳毛麟角，百不一覯。嗚呼！學術之衰替，至於斯極矣！二十年來，儆焉憂之。自夫子發刊中國文字，鳩合有志之士，與夫及門諸子，各出其心得，共爲薪火之傳，逆乎風會，守其殘闕，歲月不居，忽歷十五寒暑也。余不文，亦忝與作者之列，檢點舊業，所論不一，然求於甲骨古文字或有發明者，亦得若干篇，爰益以在大陸雜誌發表若數篇，裒爲一輯，總名曰：「甲骨古文字研究」。一燈續焰，兼誌雪泥。是爲序。

中華民國六十五年歲在丙辰四月秀水嚴一萍。

甲骨古文字の研究は、式微（甚しくおとろへる）甚し。董夫子古きを作してより、泰山其れ頹れ、已に復た古今に震爍を見ず。以てこれを千秋に傳ふるに足る、宏篇鉅製の若きは『殷曆譜』の如き者なり。即ち或は文字を考釋し、典制を爬梳し、粲然として一家の言を成す可きも、亦猶ほ鳳毛麟角のごとく、百に一覯せず。嗚呼學術の衰替、斯れ極に至れり。二十年來、儆焉としてこれを憂ふ。大子『中國文字』を發刊してより、有志の士を鳩合し、夫の及門の諸子と、各〻其の心得を出だし、共に薪火の傳を爲し、風會に逆ふか、其の殘闕を守り、歲月居らず、忽ち十五寒暑を歷する也。余、文せざるも、亦、忝くも作者の列に與かり、檢べて舊業を點ふれば論ずる所一ならず、然して甲骨古文字を求めて或ひは發明有る者も亦、若干篇を得、爰に益ふるに以て『大陸雜誌』に發表する若數篇在り、裒めて一輯と爲し、總名して『甲骨古文字研究』と曰ふ、一燈の焰を續け、兼ねて雪泥を誌す。是に序を爲る。

中華民國六十五（一九七六）年の歲、丙辰四月に在り。秀水の嚴一萍。

註〔二〕　本書は嚴一萍氏が『中國文字』と『大陸雜誌』に掲載した古文字の釋文を輯め一冊としたものである。その收錄のものは、一、釋得、二、說文特犙牭犕四字辨源、三、釋[illegible] 四、釋[illegible] 五、釋[illegible] 六、釋[illegible] 七、釋[illegible] 八、釋習 九、釋沙 十、釋[illegible] 十一、證[illegible] 十二、釋[illegible] 十三、釋[illegible]與[illegible] 十四、說「出」 十五、釋[illegible] 十六、字義新釋 十七、卜辭四方風新義 十八、釋小[illegible] 十九、釋[illegible] 二十、[illegible]祭祀譜 二一、殷曆譜「旬譜」補 二二、帝乙祀譜的新資料 二三、釋「四日丁」 二四、釋[illegible] 二五、釋[illegible]方 二六、[illegible]方補釋 二七、不國解 二八、甲骨卜辭七集中孫氏藏甲骨的眞偽問題 二九、關於「戰後殷虛出土的新大龜七版」 三十、補述新大龜七版中的雙劍誃藏甲 三一、吳人 等三一篇を收める。出版は一九七六年四月、台灣藝文印書館である。

あとがき

この序跋集は、本輯をもってひとまず完結とする。おもえば、第一輯を印に付したのが昭和四十七年の中秋であったから、完結まで七年餘の歲月を要したわけである。本書は當初の計畫では全四輯にまとめるつもりであった。しかし、近年斯界の研究成果はめざましく、その後、關係の專書が陸續と發表刊行された。このため一輯を增さざるを得なくなり、全五輯となった。また、最後の第五輯が大變遅れたが、それは昨秋、新刊速報によって、中國科學院歷史研究所より『甲骨文合集』なる書物が出版されると聞いたからである。この書物は、小屯發掘以後七十餘年の間に發表された約百點にのぼる書籍・雜誌類に資料として掲載された甲骨、および中國内外における公私所藏甲骨の實物の寫眞と拓本とを網羅して集めたものという。そこで是非その序文も收錄したいと思い、出版を待つことにした。しかし、いつまでたっても中國から到來しない。第五輯を放置したまま、いつまでも待っているわけにもいかない。結局これは本輯に收めることを斷念したのであるが、このためほぼ一年を空しくしてしまったのである。先日、朋友書店の土江氏より聞くところによると、もうこの十二月中には入荷を見るでしょうとのこと。まことに喜びに堪えないが、これも第一集からではなく、第二集から入るということで、序文は望めそうにもない。心のこりではあるが、それはそれでまたの機會もあろう。

本書はすべて、筆耕ならびに校正は私自身が行なったものである。おそらく誤字・脫字が多く、内外の利用者諸兄に御迷惑をおかけしていることと思う。註の疎漏・原文の脫文誤讀とともに叱正を賜われば幸である。

なお、既刊四輯までの發行所は立命館大學中國文學研究室であった。しかし昨年春に私は立命館大學の職を辭したので、本輯はこれを朋友書店に移した。

最後に、本書を編するにあたっては、恩師白川靜先生、高木正一先生、および内藤戊申先生、松本幸男教授、平松金吾氏、清水凱夫氏に何かと御指導をいただいた。ここに紙面をかりて厚く御禮申し上げる次第である。

昭和五十三年十二月一日

玉田継雄しるす

序跋與述評

論文資料

商三句兵跋

海甯　王國維

商句兵三出直隸易州今歸上虞羅叔言參事其一銘曰大祖日己祖日丁祖日乙祖日庚祖日丁祖日己祖日己其二曰祖日乙大父日癸大父日癸中父日癸父日癸父日辛父日己其三曰大兄日乙兄日戊兄日壬兄日癸兄日癸兄日丙凡紀祖名八父名六兄名六三器之文蟬嫣相承蓋一時所鑄曩見吳縣吳愙齋中丞所藏一戈有乙癸丁三字不得其解以此三器例之蓋亦祖父之名矣所云大祖大父大兄皆謂祖父兄行之最長者大父即禮喪服經及爾雅釋親之世父古世大同字如世子稱大子世室稱大室則世父當稱大父非後世所謂王父也其器出易州當為殷時北方侯國之器而其先君皆以日為名又三世兄弟之名先後駢列皆用殷制蓋商之文化時已沾溉北土矣嘗讀山海經紀王亥有易事恒以為無稽之說及讀殷人卜辭見有王亥王恒諸名乃知楚辭天問中該秉季德一節實紀殷之先祖王亥王恒及上甲微三世之事與山經竹書相表裏二書言王亥託於有易天問作有狄古者易狄同字有狄即有易蓋商自侯冥治河已徙居河北遠至易水左右逮盤庚遷殷又從先王故居則今易州有殷人遺器固不足怪往者嘉興沈乙庵先生語余箕子之封朝鮮事非絕無淵源頗疑商人於古營州之域夙有根據故周人因而封之及示以此器拓本先生又謂北史及隋書高麗傳之大兄或猶殷之遺語乎此說雖未能證實然讀史者不可無此達識也因附記之

（原載《觀堂集林》卷十八，中華書局，一九五九年）

新獲卜辭寫本後記跋

傅斯年

民國十八年一月間,董彥堂先生以他手寫上石的"新獲卜辭寫本後記"寄來廣州本所。所中同人看了大高興,以爲彥堂這次發掘雖然依舊是繼續十七年夏之調查,不居于發掘的本身,然而若干攷古學的基本問題,已在這試驗的發掘中列出。例如,河道與殷墟的問題,甲骨之地下情形由于冲勢,商代歷法之設想,卜辭工具之舉例,一个字體之"發生式"的演化,等,雖說都只是提出來的問題不是答案,然在這樣試驗的發掘中正只重在取得問題,持此等之試驗以作結論,轉是荒唐。殷代刻文雖在王國維君手中有那麼大的成績,而對待殷墟之整個,這還算是第一次。于是在廣州的幾位本所同人,要有所貢獻于彥堂。我也感于他的新獲卜辭第三五八"伐乎"及第二七七"令周侯"之兩塊,引起許多感想,寫給彥堂一封信,要爲這後記寫一跋語;而本所北遷,終未得寫。中間中央研究院聘李濟之先生爲本所攷古組主任,于十八年春將殷墟開始爲系統的發掘,于是在中國境內近代的攷古學,藉這工作在本所中由李董兩先生創業。兩季工作之結果,已經引起國際學術界的注意,到現在已全不用我來頌贊。惟舊時感于彥堂之後記而想到的兩个問題,在心中續有所增展,李董兩位逼我如約寫下,于是不得不有下列兩段扯二連三的跋。

一 楚之先世

新獲卜辭第三五八"戊戌卜又伐乎。"彥堂說:

> 羋作乎,當爲殷時國名。史記楚世家:"陸終生子六人;其長曰昆吾,二曰參胡,三曰彭祖,四曰會人,五曰曹姓,六曰季連,羋姓,楚其後也。"又稱"昆吾氏,夏時嘗爲侯伯。""彭祖氏,殷之時嘗爲侯伯。""季連生附沮,附沮生穴熊。其後中微,或在中國,或在蠻夷,弗能紀其世。"按昆吾,彭祖之後,嘗爲夏殷之侯伯,則羋之爲姓,當在夏世之前,殷代有羋姓之國,固無足異。惟史傳失載,莫可攷證耳。

按:此一殘片,一經彥堂釋定,他是羋字,則古史中若干材料憑借他點活者不少。大凡新獲的直接記載,每不能很多的,而遺傳的記載,雖雜亂無章,數量却不少。每每舊的材料本是死的,而一加直接所得可信材料之若干點,則登時變成活的。即如史記殷本紀的世系本是死的,乃至山海經的王亥,天問的恒和季,不特是死的,並且如鬼,如無殷墟文字之出土,和海寧王君之發明,則敢去用這些材料的,是沒有淸楚頭腦的人。然而一經安陽之出土,王君之攷釋,則史記山海經天問及其聯類的此一般材料,登時變活了。又如現在古玩舖的及外國博物院的中國眞東西,不爲不多,此時還是死的,一經科學的發掘,便可因幾點確定了之後而變成活的。彥堂這个發見,正是這麼一个點活的一點。

記得民國十三年間,我正在柏林住着,見到顧頡剛先生在"努力"上的疑夏禹諸文,發生許多胡思亂想。曾和陳寅恪先生每一禮拜談論幾回,後來也曾畧寫下些來,回國途上只抄了一半給頡剛。經過兩年,頡剛不得我同意,把他在國立中山大學語言歷史學研究所週刊第二集第十四期(一九二八年一月三十一日)印出,其中有一段說（本刊本集第三四葉）:

> 荆楚一帶,本另是些民族。荆或者自商以來即是大國,亦或者始受殷封號,後遂自立。楚國話與齊國話必不方言之不同,不然,何至三年莊嶽,然後可知?孟子罵他們鴃舌,必然很和北方的中國話不類。按楚國話存止到現在者,只有謂,乳,'穀,'謂虎'於菟'二詞,乳是動詞易變動,而虎是靜名,尙可資用。查吐蕃(即今西藏)語,謂虎爲stag吐蕃語字前之s每在同族語中爲元音,是此字容有印度日耳曼語系的線索,但一字決不能爲證耳。又漢西南夷君長稱"精夫",疑即吐蕃語所謂Rgyal-po者。後漢書西南夷傳有幾首四字詩,漢夷對記,假如有人能精于吐蕃語,太語,緬甸語,當有所發現。這个材料最可寶貴。楚之西有百濮,今西藏人自稱曰"濮"。又蠻閩等字音在藏文爲人,或即漢語民字之對待。總之,文獻不足,無以徵之。

現在想來,楚之前因後果,還有好些可徵的。大致可說:楚之先世實在是一个大民族,曾據河水與淮水流域好些地方,北至當今山西中部,至少也到河東,西至當今四川湖北陝西三省之間,即漢水中流之西南方東括濟水上游,淮水上下游,直到海邊,都有這个大民族的遺跡。歷經夏商四代,都曾剿伐他們,結果是不在蠻夷,便在中國爲附屬小國。到了西周之末,其遠在西南的一支以荆楚爲號者,曾經强大了一次。然而被厲王和召虎打得他又回去,到底不能吞併了中國的"南國"。直至宗周滅亡他然後大得其意,一步一步的剿伐"南國"而北上,若非齊桓晉文,他當繼周而爲四代了。

解明這些話,且分別去說。鄭語:

> (桓)公曰:南方不可乎?(史伯)對曰:夫荆子熊嚴生子四人伯霜,中雪,叔熊,季紃。叔熊逃難於濮,而蠻季紃是立。薳氏將起之,禍又不克。是天啟之心也。又甚聰明和協,蓋其先王。臣聞之天之所啟,十世不替。夫其子孫必光啓土,不可偪也。且重黎之後也。夫黎爲高辛氏火正,以淳燿惇大,天明地德,光昭四海,故命之曰祝融,其功大矣。夫成天地之大功者,其子孫未嘗不章,虞夏商周是也。虞幕能聽協風以成樂物生者也;夏禹,能單平水土,以品處庶類者也;商契;能和合五教以保于百姓者也;周棄,能播殖百穀蔬,以衣食民人者也。其後皆爲王公侯伯。祝融亦能昭顯天地之光明,以生柔嘉材者也。其後八姓於周未有侯伯。佐制物於前代者,昆吾爲夏伯矣,大彭豕韋爲商伯矣,當周未有。已姓昆吾,蘇,顧,溫,董,董姓鬷夷,豢龍,則夏滅之矣。彭姓彭祖,豕韋,諸稽,則商滅之矣。禿姓舟人,則周滅之矣。妘姓鄔,鄶,路,偪陽;曹姓鄒,莒;皆爲采衛,或在王室,或在夷翟,莫之數也。而又姓無令聞,必不興矣。斟姓無後。融之興者,其在羋乎?羋姓夔越,不足命也。蠻羋,蠻矣。唯荆實有昭德。若周衰,其必興矣"

照這話,則祝融八姓的範圍實在大的很。且還不只此,晉語八,(范)宣子曰,"昔匄之祖自虞以上爲陶唐氏,在夏爲御龍氏在商爲豕韋氏,在周爲唐杜氏,周卑晉繼之,爲范氏"。然則陶唐氏

者,也是祝融諸姓之一支。今就上列兩端合以顧棟高春秋大事表,秦嘉謨世本輯補所輯,參校原書,增刪以成祝融諸姓表,如下。

國	姓	時代	地望	附記	校訂
昆吾	己	在夏末爲伯見鄭語。	依顧說,今河南許昌;又今河北濮陽東二十五里有昆吾城。正義曰,‘昆吾居此二處未知誰爲先後。’	詩商頌,“韋顧旣伐,昆吾夏桀。”	參看左傳昭十二年楚王語。
蘇	己	?	當在溫鄰近,或即近代懷慶府屬,蓋蘇忿生之邑有溫(左傳隱元),知其當不遠。	蘇秦列傳索隱:“蘇秦,字季子,蓋蘇忿生之後己姓也。”	周武王司寇蘇忿生(見左傳隱十一年注)或他姓之人就蘇地而封者,司馬貞以爲卽己姓,疑誤。 國語,“有蘇氏之女曰妲己,”此蘇爲己姓之證。
顧	己	夏時國,見鄭語。		見昆吾段。	
溫	己	夏時國,見鄭語。	據杜注,今溫縣		
董	己	夏時國,見鄭語。		左傳昭二十九年,蔡墨曰,“昔有飂叔安,有裔子曰董父,實甚好龍,能求其耆欲以飲食之。龍多歸之,乃擾畜龍以服事帝舜。帝賜之姓曰董,氏曰豢龍,封諸鬷川;鬷夷氏其後也。” 國語鄭語韋注“董姓,己姓之別受氏爲國者。有飂叔安之裔子曰董父,以擾龍服事帝舜,賜姓曰董氏,曰豢龍,封之鬷川。當夏之興,別封鬷夷,於孔甲前而滅矣。傳曰,孔甲不能食龍,而未獲豢龍氏。劉累學擾龍於豢龍氏,以事孔甲。”	
樊	己		杜曰:“一名陽樊,今野王縣西南有陽城。”按野王當今沁陽(河內)縣。	鄭語韋昭注,“昆吾祝融之孫,陸終第二子,名樊,爲己姓,封於昆吾,昆吾衛是也。”	
己	己姓之原	早滅	齊國之東南,當今山東壽光等地。		按以己爲國之祝融後裔,不見經傳,若經傳之己(紀)乃姜姓之國。然以姓之由來,本因國邑之名之故,則在姜姓之紀建國之前,必有祝融之己;若昆吾蘇顧董樊之姓,己,皆由其中出耳。此祝融之己,當時何在,實未能確知,然當去姜紀之邑不遠。
鬷夷	董	夏時國,見鄭語。		見董下。	
豢龍	董	夏時國。見鄭語。		見董下。	
彭祖	彭	商時國。	彭城當今江蘇銅山(徐州)。	鄭語韋注“大彭陸終第三子曰籛,爲彭姓,封於大彭,謂之彭祖,彭城是也。豕韋,彭姓之別封於豕韋者。殷衰,二國相繼爲商伯。”又曰:“彭祖,大彭也。豕韋,諸稽,其後別封也。大彭豕韋爲商伯,其後世失道,殷復興而滅之。”	按,彭祖者疑當釋之彭姓之宗邑,他邑則其分支。以彭祖爲人,蓋後起之說。又此名屢見於殷墟文字,有曰“辛丑卜𠂤貞乎𠭯彭。”(卷五,三十四葉)。以殷王都洹水之理計之,此彭必非彭城,當與韋爲近。
諸稽	彭	商時國,見鄭語。			
舟人	禿	周所滅,見鄭語。	州當今河南沁陽(故懷慶首縣河內)。		此名不見他處,然以因與州音同,故或卽左傳隱十一年之州。其文曰,“王取鄔,劉,蔿,邘,之田于鄭,而予鄭人蘇忿生之田,溫,原,絺,樊,隰,郕,欑,茅,向,盟,州,陘,隤,懷。”此數地名中,鄔,溫皆爲祝融八姓之國,其樊蘇劉亦與相涉。
鄢	妘	周時采衛,見鄭語。		左傳隱二年,“鄭伯克段于鄢。	
鄔	妘		杜云,“河南緱氏縣西南有鄔聚,”按,緱氏當今偃師縣。	按,國語宋公序本,唯作鄢,天聖明道本作鄔。黃丕烈曰,“詩譜及史記注引虞翻及索隱皆作鄔。”今仍兩存之。	
鄶	妘		左傳僖三十三年杜注,“故鄶國在滎陽密縣東北	鄭語韋昭注曰:“陸終第四子曰求言,爲妘姓,封于鄶,今新鄭也。 詩有檜風。詩譜曰,檜者,高辛氏之火正,祝融之後,妘姓之國也。其封域在古豫州外方之北,滎陂之南,居溱洧之間。祝融之故墟,是子男之國,後爲鄭武公所并焉。	
路	妘	周時國			
偪陽	妘	周時國,滅于晉。	春秋哀十年,杜曰,偪陽,妘姓國,今彭城偪陽縣。按今屬山東嶧縣南境。		
鄅	妘	昭十八年邾入之。	春秋昭十八年:“邾人入鄅。”杜曰:“今琅琊開陽縣。”按當今山東臨沂。	又同年左傳杜曰:“鄅妘姓國”	
夷	妘		左傳隱元年:“紀人伐夷”杜曰:“夷國在城陽壯武縣。”按當今山東膠縣,與卽墨縣境。	同年正義曰:“世本夷妘姓。”	

邾	曹	直至戰國初尚存。	邾卽鄒,今山東鄒縣嶧縣境。		按:邾之故國多爲魯奪。孔丘孟軻皆鄒(邾)人,而顏回之顏氏則邾武公後(引見氏族略)。
小邾	曹	同前	今山東滕縣境。	邾彝器頗有存者,不稱周王紀年,字體則近齊器。	
莒	曹	春秋中偶見。	今山東莒縣。		據鄭語,莒爲曹姓,然左傳文七年:“穆伯娶于莒,曰戴己,生文伯;其娣聲己,生惠叔。” 廣均又以爲己姓。案左傳此節頗類劉逢祿所指爲數衍經文者,自當仍從國語。若果有己姓者,亦必別是一國。
曹		其滅亡當在周之前。	今山東西南境正當殷都之東。		按:古籍無記祝融後之曹國者;然以姓之由來本由國邑之理推之,必邾莒之先有曹國,爲祝融之後,特滅亡在周前,史不得而攷耳。
夔越	芈		今湖北秭歸東境。		鄭語:“芈姓夔越,不足命也。” 韋曰:“夔越,芈姓之別國。楚熊繹六世孫曰熊摯,有惡疾,楚人廢之,立其弟熊延。摯自竄於夔,其子孫有功,王命爲夔子。”是韋以夔越爲一國之名,未知然否?
芈蠻	芈				韋注謂“蠻芈謂叔熊,在濮從蠻俗。'未知蠻芈是否指此?
荊楚	芈		初居今湖北秭歸荊門一帶,繼向東北發展。		
	斟			鄭語:“斟姓無後,” 韋曰:“斟灌斟鄩,……皆夏同姓,非此也。”	
唐		滅于周公,以封叔虞。	據晉國之地望,及詩唐風,當在河東汾水之域。		按:此卽陶唐氏之唐;晉語八,(范)宣子曰:“昔匄之祖自虞以上爲陶唐氏,在夏爲御龍氏,在商爲豕韋氏,在周爲唐杜氏,周卑晉繼之爲范氏。” 豕韋御龍之姓,既可知其誰屬,則陶唐當亦祝融之族。
唐	祁(據顧)	左傳宣十二年,唐惠侯爲楚軍左拒。 定五年,楚滅唐。	據顧,唐當今湖北隨縣。		按此疑是周滅唐後其支屬南奔者。

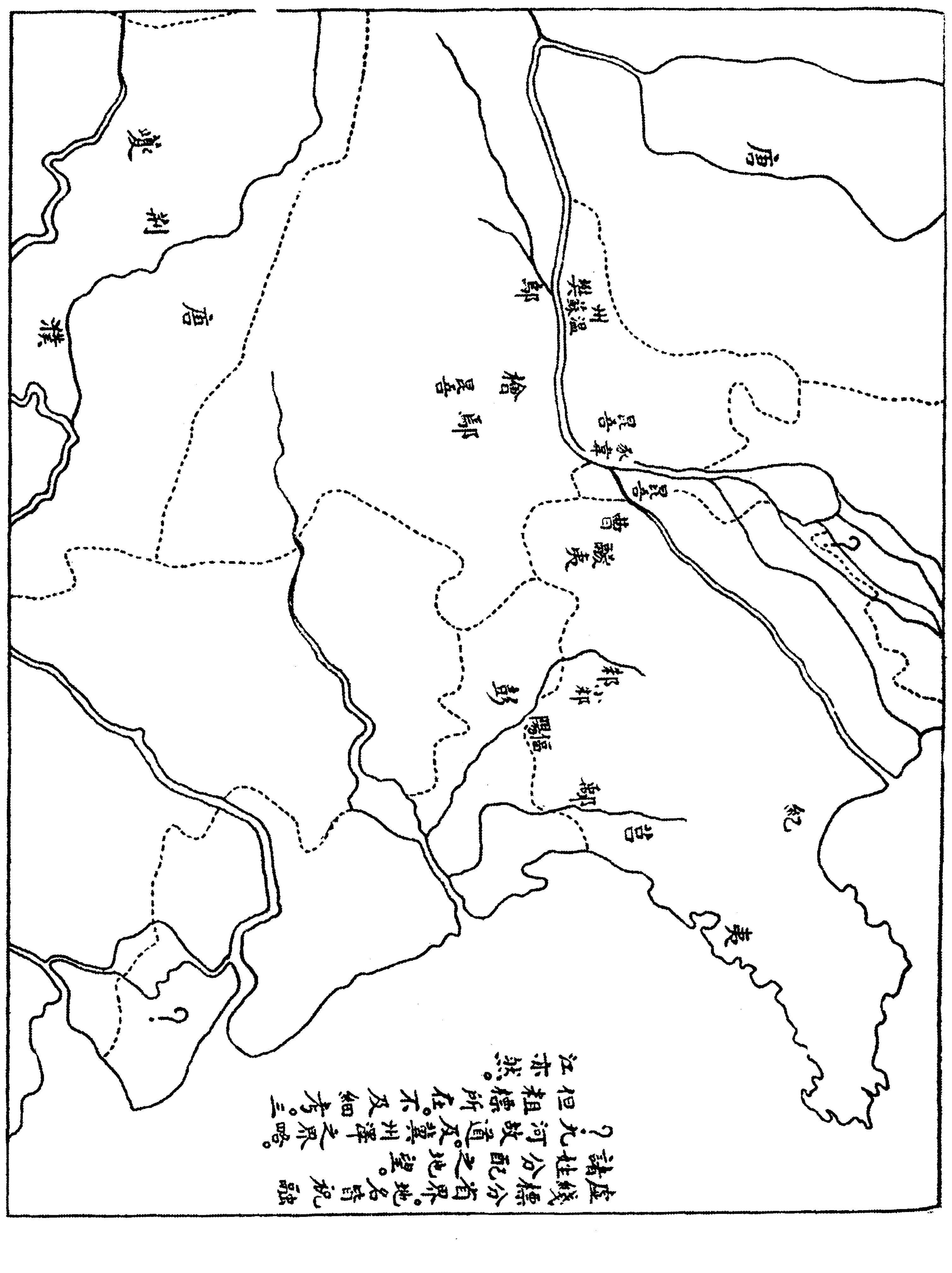
如上列之表更依其地望畫成一圖,則可見祝融諸族在虞夏商周間的分布,實在洛邑迤東,河南北岸甚寬廣之區域,東經許鄭（河之南）衛（河之北）各地,逾曹滕諸境,直括淮水之北,嶧嶧之陽,而抵瑯琊東海。又有西北上的一支,在河東汾水區域。更有西南部的一堆,在今湖北境漢水中流。這樣分配應如何解釋,且待下文說。

又左傳昭十二,“(楚)王曰,‘昔我皇祖伯父昆吾,舊許是宅。今鄭人貪賴其田而不我與。’” 據此可知楚與昆吾之爲宗屬的關係,在左傳國語中並非一見。

除上列一堆材料外,尚有史記楚世家所記楚之先世,是極可寶貴的材料。這材料的大體當是從太史公所見之國語及世本出來的。現在錄在下邊,並附以校正疏說的話。

> 楚之先世出自帝顓頊高陽。高陽者,黃帝之孫,昌意之子也。

按顓頊當爲虞夏之祖。（虞夏同宗,余別有論。）國語四“有虞氏禘黃帝而祖顓頊,夏后氏禘黃帝而祖顓頊,” 若楚之宗乃是祝融。鄭語明標祝融八姓,而以祝融與虞夏商周爲對,明其並非一族。離騷曰,“帝高陽之苗裔兮,” 此高陽之帝,當是祝融。帝而曰陽,陽而曰高,與火正之義正合。又按,虞夏之盛,南方民族必受其文物之影響,則初謂虞夏之祖與自己之祖有若何關係,楚語“顓頊受之,乃命南正重司天以屬神,命火正黎司地以屬民” 正其例。然此但指官守而已,後來更有大一統之論者,以爲有如何血統之關係。尤後更錯亂其名號,于是高陽乃成顓頊。高陽成顓頊



之說,只見于史記,不見于左傳國語。左傳國語所紀,則顓頊自顓頊祝融自祝融。祝融爲芈等八姓之祖,顓頊爲虞夏之祖。國語雖已有黃帝十二姓之說,然泛祖宗之黃帝'論,猶未暢然發達,且高陽之帝號猶未見。

高陽生稱,稱生卷章,卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正,甚有功能,光融天下,帝嚳命曰祝融。

按:此說與國語不合,應從國語,以國語遠在大戴帝系及史記之前。重黎二人,而史記以爲一人。如史記說,重黎乃顓頊之曾孫,即使傳世甚速,亦焉能及身使其曾孫司天司地?

又按:此所謂光融天下,已暗示其爲拜火拜日之教。蓋祝融正可譯爲司火。重黎兩族,蓋南方之拜火敎也。

共工氏作亂,帝嚳使重黎誅之,而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎,而以其弟吳回爲重黎後,復居火正爲祝融。

按:帝嚳爲商之宗帝,所謂帝嚳誅重黎者,無異商之先世曾與祝融之族征戰而殺其王,或其族姓已臣服于商,而商以不適意而殺之。

又按離騷,“惟庚寅吾以降,”據此可知庚寅者,楚俗之重日。

吳回生陸終,陸終生子六人,坼剖而產焉。其長一曰昆吾,二曰參胡,三曰彭祖,四曰會人,五曰曹姓,六曰季連,芈姓,楚其後也。

按:會人應即國語之鄶,參胡不知當國語中何名,昔則與蘇顧爲近。

昆吾氏夏之時嘗爲侯伯,桀之時湯滅之。彭祖氏嘗爲侯伯,殷之末世滅彭祖氏。

按:此與國語合。

季連生附沮,附沮生穴熊。其後中微,或在中國,或在蠻夷,弗能紀其世。

按:此處若無新獲卜詞“卜伐芈”之語,則楚與中國諸祝融後之關係,終在惝怳迷離之間。

周文王之時,季連之苗裔曰鬻熊。鬻熊子事文王蚤卒。

按:此即下文所謂“吾先鬻熊文王之師也。”既曰早卒,焉得子事文王? 必楚人誇大之語。

其子曰熊麗,熊麗生熊狂,熊狂生熊繹。熊繹當周成王之時,舉文武勤勞之後嗣,而封熊繹于楚蠻。封以子男之田,姓芈氏,居丹陽。楚子熊繹與魯公伯禽,衛康叔子牟,晉侯燮,齊太公子呂伋,俱事成王。

按:此本之左傳昭十二楚靈王語,亦高攀之詞,至多芈之一部落爲荊楚之先者,曾受周封朝貢,或在周人勢力不及之地,開拓疆土,周人羈縻之而已。

熊繹生熊艾,熊艾生熊黮,熊黮生熊勝。熊勝以弟熊楊爲後。

按:楚之諸公諸王,兄終弟及時甚多,特每由爭殺得之。左傳文元年“楚國之舉恒在少者,”蓋其宗法並非傳長。此亦近于殷遠于周者。

熊楊生熊渠,熊渠生子三人。當周夷王之時,王室微,諸侯或不朝,相伐。熊渠甚得江漢間民和,乃興兵伐庸。

按:杜預以庸當上庸縣,即今湖北竹山縣(故鄖陽屬)地。

楊粵至於鄂。

按:史記集解引九州記曰,“鄂今武昌。”

熊渠曰,“我蠻夷也,不與中國之號謚。”乃立其長子康爲句亶王。

按:集解引張瑩曰“今江陵。”

中子紅爲鄂王。

按:彝器中有鄂侯馭方鼎,記王南征經鄂事,不知地即此之鄂否? 集解引九州記曰,“今武昌。”

少子執疵爲越章王。

按:越章疑即後來之豫章。

皆在江上楚蠻之地。及周厲王之時,暴虐,熊渠畏其伐楚,亦去其王。

按:熊渠時楚曾一次强大,旋以厲宣南征而不逞。詩所謂“蠢爾蠻荊,大邦爲讐”者,當即指其稱王略地事;所謂“荊蠻來威”者,當即指其去王號事。史記此節實與詩經所記者絕相應。

後爲熊毋康,毋康早死。熊渠卒,子熊摯紅立。摯紅卒,其弟弒而代立,曰熊延。

按:索隱引譙周曰,“熊渠卒,子熊翔立,卒,長子摯有疾,少子熊延立” 當是據其所見之世本。

熊延生熊勇,熊勇六年而周人作亂,攻厲王。厲王出奔彘。熊勇十年卒,弟熊延爲後。熊延十年卒有子四人,長子伯霜,中子仲雪,次子叔堪,少子季徇。延卒,長子伯霜代立,是爲熊霜。熊霜元年,周宣王初立。熊霜六年卒,三弟爭立。仲雪死,叔堪亡避難於濮,而少弟季徇立,是爲熊徇。

按:熊渠死後,至熊徇,楚有內亂,故周幽平間,宗周雖亂,未聞楚師北上。

熊徇十六年,鄭桓公初封於鄭。二十二年,熊徇卒,子熊咢立。熊咢九年卒,子熊儀立,是爲若敖。若敖二十年,周幽王爲犬戎所弒,周東徙,而秦襄公始列爲諸侯。二十七年,若敖卒,子熊坎立,是爲霄敖。霄敖六年卒,子熊眴立,是爲蚡冒。蚡冒十三年,晉始亂,以曲沃之故。蚡冒十七年卒,蚡冒弟熊通,弒蚡冒子而代立,是爲楚武王。

按:楚當僅是熊渠之一支,承若敖蚡冒之一線者。東周之初,方始强大。

據以上兩種材料,我們可以推求祝融後裔,直至荊楚之大綱節目。惟在推求之前,有一事須先決者,即國語世本史記之材料,如何可據。此題若未得回答,則以下的議論皆無着落。按:左傳一書,原不是春秋之傳,而大體是經國語中抓出來,傅會上些書法以成的,在今日除古文專守經學家以外,已成定論。若其中記載古代族姓國家的分合,至多也不過很少的一部分是漢時羼入的。現在若把左傳國語中這些材料抄出,則顯然可以看出有兩類,大多的一類是記載族姓國別的,例如上文所引鄭語中的一節;甚少的幾段記古帝之親屬關係,例如黃帝子廿五宗,受姓十四人之類。上一類是記載民族國姓之分別,乃是些絕好的古史材料,下一類當是已經受大一統觀念之影響,强爲一切古姓古帝古帝即每一民族之宗神 (Tribal gods) 說另詳。造一个親屬的關係。此種人類同源的觀念,雖于發展到秦漢大

一統的局勢上有甚多助力,但是混亂古史的力量也非常利害的。我們如果畧去這些,則國語左傳中記載古代民族的說話,實是些最好的材料了。這个標準既定,然後我們可以去用左傳國語中的古史料。至于史記所記的世系,本是依據世本的。世本一部書已佚,現在只有幾種輯本。我們據這幾部輯本和史記,知道這部書實是絕重要的書,不幸亡佚了。世本大體可靠與否,雖不能全部證明,然可借其一部分證其全書非由妄作。殷本紀所載之世系,雖有小誤,然皆由文字傳寫而生,不由虛造。既不妄于殷本紀,何至妄于楚世家?所以我們現在對于楚世家所記,正沒有理由不憑借他。

這个先決的問題既經討論,我們可以分析楚先世在大體上曾有幾个段落了。

唐虞三代之觀念,實甚後起來,在左傳國語中只有虞夏商周的一个系統。即至甚後的文詞如史記,所記伯夷餓死時之歌,也只是說“神農虞夏忽焉沒兮,”直以虞夏接神農,無所謂唐。在左傳國語中這个情形更明顯。晉語八,范宣子曰,“昔匄之祖自虞以上爲陶唐氏,在夏爲御龍氏,在商爲豕韋氏,在周爲唐杜氏。” 此明明白白以陶唐爲在虞之先,至不以陶唐列入虞夏商周之統。然而陶唐是祝融之姓,這是我們很可注意的一點。又,虞夏商周四代的觀念,只可說是周代人的觀念,或可說西土包括河南西部山西之河東及陝西人的觀念。若東土人則如左傳所記各東夷之傳說,並不如此,當是大皞,少皞,殷,一个系統。東土人之未嘗看重虞夏,若禹之宗教另有別論。又可以詩商頌爲證。“韋顧既伐,昆吾夏桀”是直以韋顧昆吾夏爲列國。而西方之系統中,亦無風姓之太皞有濟(齊),任姓之少皞,這个情形大致如下表:

西土的統系　虞——夏——周

東土的統系　太皞有濟——少皞——商

這个情形,在左傳國語裏頗明顯的。若說到詳細,非寫一本書不可,現在只好從略了。

在這東西兩个系統之先,東西兩地中至少有很廣的一部分是被祝融的宗姓佔領的。或者竟是大多的一部。祝融之本土,即所謂“祝融之虛,”者,鄭玄詩譜以爲在檜。照地望說,正在中央,似乎可信。陶唐氏既在有虞之先,而祝融八姓之內許多是古國。所謂昆吾爲夏伯者,無異說,在夏時昆吾曾爲一个强大國,與夏爲敵。所謂大彭豕韋爲商伯者,無異說,在商時大彭豕韋爲强大國,與商爲敵。果然,“董姓飂夷豢龍,則夏滅之矣,彭姓彭祖豕韋,則商滅之矣。” 又庶人稱黎民,秦俗如此稱者尤多。黎之一詞,蓋即重黎之謂。中原之下層人爲黎族,則黎族必在早年據中原。凡此種種皆證明西土之夏,東土之殷,皆繼祝融諸姓而强大,在夏殷未作之前,據東土西土者,必以祝融諸姓爲最强大。然則楚之先世“景員維河,”實中原之舊族,經三代而南遷,非歷熊渠若敖蚡冒而始北上。

那麽,我們要插進一个問題了。祝融諸姓本在中原時是何等的文化?他們所有的是何樣的一个生活?根據現在的材料,我們不能解答這个話,但下列的提示頗可論定。曰,“祝融亦能昭顯天地之光明,以生柔嘉材者也,” 可知他們是林中的生活。飂夷豢龍豕韋諸國,或在其有土之時,或在其亡國之後,都以飼龍爲事業,翻譯成現代的話,都是玩鼉魚的,仿佛像印度的玩蛇的,則他們必是在澤隰中過日子了。又,“命南正重司天以屬神,火正黎司地以屬民,” 則神道爲拜火之教,族類爲來自南方之人,亦甚明白。且“祝融亦能昭顯天地之光明”非日光神而何?把這些話括起來,正可以說,以祝融爲宗神宗祖之諸姓,雖在夏商起來之前佔據中原,但畢竟是和南方有牽連的民族,曾在中原過其林隰生活 (Jungle Life)。或者黃河流域林木之斬伐,天氣之漸趨乾燥,正是使他們折而南退的大原因,不僅是夏商的壓迫而已。按夏之遺跡,雖在中原之西部,而其來源亦若自南方者。此處不及詳論。

歷夏商兩代,祝融諸姓被新興大國所驅除,已如上文所說。而濬彥堂之發見,更可見殷與芈姓必常在相斫中。甲文雖只發見此一片,然事實必不只此一次。到殷商之亡,更有力氣的周民族進來,尤其把倒運的祝融後代驅除了一陣,有逸周書爲證。按逸周書各篇之可靠雖不同,作雒解乃其中最可靠者。

> (周書作雒解)周公立,相天子。三叔,及殷,東,徐,奄,及熊,盈,以畧。周公召公內弭父兄,外撫諸侯。元年夏六月,葬武王子畢。二年,又作師旅臨衛,政殷。·殷大震潰降。辟三叔,王子祿父北奔,管叔經而卒,乃囚蔡叔于郭淩。凡所征熊盈族十有七國。俘維九邑,俘殷獻民,遷於九畢。
>
> (呂氏春秋古樂)成王立,殷民反王命周公踐伐之。商人服象,爲虐于東夷,周公遂以師逐之,至于江南,乃爲三象以嘉其德,
>
> (史記魯世家)管蔡武庚等果率淮夷而反,周公乃奉成王命興師東伐,作大誥。遂誅管叔,殺武庚,放蔡叔,收殷餘民,以封康叔于衛,封微子于宋,以奉殷祀,寧淮夷東土。

以上三節是相合的。作雒解之所謂熊盈,即在呂覽所謂東夷之內,亦即在史記所謂淮夷之內。盈即嬴,徐之宗姓,秦趙的宗姓,嬴,是因爲後來被周人封建在西土的。按秦趙嬴姓之來自徐方,史記所載甚明白。蓋秦之人民固可爲來源自西者,而秦之公姓則來源自東。今西洋人每謂秦族來自西,以黎民及黔首等辭爲證,不知黎民本黎族,正是祝融之族,初普布于中原,後乃居民衆之下層。若黔首者,則傳記猶云,“黔其首以爲城旦”指服飾言,非謂髮色。甚矣其妄也! 熊自然是楚先世之姓了。可見殷周之際,熊姓在東南,曾被人列在淮夷東夷中,更可見熊,氏曾爲殷商亡國而奮鬥。這必是已在殷室宗盟中列于異姓之班了。楚之似殷不一端,姑舉數例。一,宗法之同。即所謂傳弟,亦即所謂“楚國之舉,恆在少者。” 二,官名之同。阿衡稱伊尹,楚之執政者亦曰令尹。按伊尹應爲湯之血屬,不然,宗祀何以有伊尹,屢見殷虛卜辭。楚之令尹亦概由王之親屬爲之。三,舞之相同。按:萬舞所布之地在商在楚,他無所聞。詩商頌那,“奏鼓簡簡衎我烈祖。……庸鼓有斁,萬舞有奕。” 又,邶風簡兮,“簡兮簡兮,方將萬舞。” 邶鄘衛風固皆商地之舊。左傳莊廿八年“楚令尹子文欲蠱文夫人,爲館於其側,而振萬焉。” 四,離騷已是甚後之作,而其中所用故典,殷事最多。彭咸,飛廉,有娀,伊摯,傅說,武丁。周爲後王,事跡粲然,所用反甚少。這正可看出楚國文化所自來之系統來。彥堂的一塊甲文,正可證明殷與楚祖之芈,“代相干也,”

大約宗周盛時,是祝融諸姓最倒運的時候。不特在中國的“熟祝融”因周室封建而割宰的剩下不多,即在南方的“生祝融,” 亦因周室之開闢南國而大受壓迫。然而周朝雖在方盛的時候也未能在南方大逞。昭王南征不復,究竟是誰做的把戲,

現在雖不能考定,然齊桓以此責楚,楚請他"問諸水濱,"看來當是楚之同宗在江上者做的了。到夷厲的時代,芈之一支熊渠曾大拓土一次,封了許多的王,史記所載與詩經所記虢季子白盤所記相應。彼時荊楚必是接續着南淮夷爲南方的大患。這患之大,儼然與玁狁之患爲對。周室對于這个南方的大患,曾經很用了幾下子力氣。對付淮患最費力氣,因爲淮人取个攻勢,周王曾命彔"以成周師氏師戍于甚自。" 陶齋吉金錄卷二第三十九葉。詩大小雅所記,關于徐淮者也較多。所說到荊的,只"蠢爾蠻荊,大邦爲讐,""薄伐玁狁荊蠻來威。" 但所記召虎定江漢,申伯宅南國等,都應該與伐荊當做一件事看。熊渠當是夷厲時代的人,史記所載既這樣,而大雅中有關各篇,若比較其年代來,也這樣。說詳拙著大雅的時代一文,尙未刊。在熊渠先拓土後去王號的一番經過之後,周室曾以召伯虎的領導,大大的開闢江漢。這事以後,熊渠之嗣有幾番內亂,如史記所說,不然,何以不乘宗周之亂北上呢? 然而其中畢竟有一支經若敖蚡冒而開了些山林地方,到熊通便利害的不得了,儼然要窺周室了。這一節裏所說,見拙著周頌說本所集刊第一本第一分第九五葉。又見友人丁山箸召伯虎傳集刊第二本第一分第九十一葉。

熊渠去王號以後,熊通復王號以前,頗有幾件銅器存到現在。楚公爲鐘三器,吳孫諸氏均釋爲爲字,形固是,然史記楚世系無以爲名者,按其時代必在熊渠之後。蓋熊渠以前,猶稱荊,詩可證;春秋改荊用楚,在僖公元年。秦晉則始終稱之曰荊,直到戰國末,韓非子諸書猶然。大約荊用楚號,必北上得楚麓之地,然後如此。楚麓之名見于詩,所謂"周公奔楚,""王在楚"當指此成周以南大山中之區域。然此代亦必不在熊通之後,蓋熊通又已用王號了。自熊渠後至熊通前之數代,假定史記所載並無遺漏,則眴或即爲之形誤;匕可誤作目或口。眴索隱引玉篇作眴 亼可誤作勹。若然,則爲即蚡冒。然此不過是一个隨便的假說。至楚公夜雨鐘則可較詳的推測。他的銘文實是翻轉了的吾友丁山說。我覺得中間的幾个文字不與銘相干,或是記樂律者,𢆶爲逆字,前人之釋可信,但孫王諸氏均謂即史記之熊咢,則似少依據。說文雖云咢从吅屰,屰亦聲,但金文咢字皆作𡀚,咢侯馭方鼎,咢侯敦,師咢父鼎叔咢父敦,皆从雙吅及𡭴,絕無從屰者。按:摯紅弟曰熊延,弒而代立。延字在金文作𢓊,呂𢓊丁未角,𢓊,師遽敦諸形,逆字易于譌成之。惟無論逆字當何世,這幾个鐘必皆熊渠後熊通前差及百年間物,則無可疑。這个時候,楚之制作如此粗獷,比起同時中國制作,如虢季子白盤來,眞有天上人間之別,似乎不像曾染中國文化很長久的。但,我們須知,祝融之宗,本分了很多族類,以地望的不同自有生熟之別。中原的祝融子遺,當是夷爲僕隸附庸者多,能遠適者少。荊楚之興,固當是生祝融,不當是由中原適去的族姓之恢復。猶之女眞兩次進到中國皆是生人進來,不是自中國退出的重回來。進來後過些時便全是中國人了。而今黑龍江吉林東境猶存些非漢化的女眞。又中國簡牘之用,自唐而絕,然女眞部落保持到滿清入關時;正其適例。

自楚武王以下的三世,是與中國爭'南國'的。實在是中夏文化之最勝處,自楚有'南國,'然後又有了正統文化,說詳見我所作周頌說,引見前現在不再論。

以上所陳說,差可以表顯祝融諸姓在歷代之起落。彥堂找到殷商與荊楚之宗國芈有關係之一片,恰恰補到古代流傳下來的材料之最缺乏處。這是何等暢快的事!

二殷周之關係

殷周的關係,如依傳統的說法是不給我們任何理解的。如我們相信古代的歷史猶之後代的歷史,不是異國相併,便是異姓相續,則古代一切朝代的代嬗,也當同樣的不出下列幾个公式:

一.純粹的外國代興,如女眞,蒙古,等外國,之于宋。

二.已經有若干中國化的外國,如拓跋之代,河西之夏,奴兒哈赤之後金。

三.純粹漢化了的虜姓,如劉淵之漢,符堅之秦。

四.中國的一个部落或區域,如秦之于六國,趙宋之于南唐等。隋之對陳也這樣,雖然隋所自承的是个虜朝。

那麼殷周的關係是上列的那一類呢?

以第一項的關係斷爲殷周的關係者,只有詩經魯頌"實維太王,""實始翦商,"兩句話。周是到太王時纔立國的,而立國的朝代便翦商,豈不是與商無干嗎? 顧頡剛先生便頗相信殷周之不相干。但魯人是周的子孫,周的子孫難免爲他自已的祖宗誇大,所以這話還是不甚有力的證據。今有彥堂的"命周侯"一段甲片,這个可能完全消滅了。

第四項的可能也不大成問題,因爲詩書上明明白白說出他們種姓,地理,建置,各項差別的。

那麼,殷周的關係非二即三。其實這兩件也只是程度的不同而已。

據詩經所載,周之種姓最與姜姓爲近。古公亶父本來是个窮鬼,住在土穴裏,而一旦爲姓姜的拿去做贅壻,便築起房屋來,築起大門來,有工頭(司空,)有管賬的(司徒)了。見詩大雅緜。那麼,我們因此不免有一問題,即周之姬姓是否爲姜之一支。這話看來很像是的,因爲周人自稱他的始祖總是姜嫄。但也有很有力的反此說的記載。國語十,"黃帝以姬水成,炎帝以姜水成。成而異德。故黃帝爲姬,炎帝爲姜。二帝用師以相濟也,異德之故也。異姓則異德,異德則異類。異類雖近,男女相及,以生民也。同姓則同德,同德則同心,同心則同志。同志雖遠,男女不相及,畏黷敬也。" 又國語十六,"姜姓,荊芈,實與諸姬代相干也。姜,伯夷之後也。嬴伯翳之後也。" 有這樣的反證據,所以我們不能但憑姜嫄一个名詞,斷定周的種姓。那麼,我們還是看看"據世本"的史記怎樣說。史記所據的世本,對殷之先世既已證明不說謊話,則對周之先世所謂後王更粲然者,當不去說謊話。若小的誤謬,也當是不能免的。

> 周后稷,名棄。其母有邰氏女,曰姜原。姜原爲帝嚳元妃,說見後。姜原出野,見巨人跡,心忻然說,欲踐之。踐之而身動如孕者。居期而生子;以爲不祥。棄之隘巷,馬牛過者皆辟不踐;徙置之林中,適會山林多人,遷之;而棄渠中,水上飛鳥以其翼覆薦之。姜原以爲神,遂收養長之。初欲棄之,因名曰棄。棄爲兒時,屹如巨人之志。其游戲好種樹麻菽,麻菽美。及爲成人,遂好耕農,相地之宜,宜穀者稼穡焉。民皆法則之。以上大致是翻譯大雅所記者。帝堯聞之,舉棄爲農師,天下得其利,有功。帝舜曰,"棄,黎民始飢。爾后

稷播時百穀。" 以上是春秋戰國貫通各姓說者之論 封棄於部。此語與"其母有部氏女"一語或矛盾。 號曰后稷別姓姬氏。后稷之興,在陶唐虞夏之際,皆有令德。后稷卒,子不窋立。不窋末年,夏后氏政衰,去稷不務。不窋以失其官,而犇戎狄之間。不窋卒,子鞠立。鞠卒,子公劉立。公劉始稱公,蓋始立部落;其前更微。 公劉雖在戎狄之間,復修后稷之業,務耕種,行地宜,自漆沮渡渭取材,用行者有資,居者有畜積。民賴其慶,百姓懷之,多徙而保歸焉。周道之興自此始。故詩人歌樂思其德。公劉事亦自詩大雅翻譯來。公劉卒,子慶節國於豳。慶節卒,子皇僕立。皇僕卒,子差弗立。差弗卒,子毀隃立。毀隃卒,子公非立。公非卒,子高圉立。高圉卒,子亞圉立。此必父子皆名圉而後以高亞別之,猶太丁少丁也。亞圉卒,子公叔祖類立。公叔祖類卒,子古公亶父立。古公亶父復修后稷公劉之業,積德行義,國人皆戴之。薰育戎狄攻之,欲得財物。予之,已復攻,欲得地與民。民皆怒,攻戰。古公曰,有民立君,將以利之。今戎狄所爲攻戰以吾地與民。民之在我與在彼何異? 民欲以我故戰,殺人父子,而君之,予不忍爲。乃與私屬遂去豳,度漆沮,踰梁山,止於岐下。以上並見孟子。

照史記說,周之先世事蹟較多者有三代:一.后稷,是帝嚳姜嫄所生之子,二.公劉,三.古公亶父;中間都是些不大重要的。這話和詩經正合。中間的那些名字裏面,自公劉以下至亶父,有九世,而三世稱公,而皇僕,差弗,公非,三世之僕,弗,非,皆似一音之轉。僕之一音,固吐蕃語中男子之號。我們固不能憑着這個,斷定他的種族是當和現在所謂印度支那語系者一類,猶之乎不能依據羌姜同字,而羌中之部落有吐蕃族,以斷定姜姓也是印度支那族類,一个樣。不過,詩經史記所載周先世的地名人名,多是單音詞,大約總當是說一種印度支那語的人了。

爲討論的方便,且倒着去說,先談古公亶父。古公亶父之古,是个形容詞,大約由于國人愛之,而稱他曰古公。這恰如普魯士人稱伏里迭里二世爲 Alter Fritz 一樣。假如我們認定詩經的話和孟子不矛盾,則此公必是先被薰鬻趕到渭水南岸,到那裏做了姜家的贅婿,反而發達起來的。假如我們覺得詩經緜篇開頭幾句話,"緜緜瓜瓞,民之初生。自土沮漆,古公亶父,陶復陶穴,未有家室。" 是說古父生來並未有土地人民,只是一个窮光棍,則孟子的話又是戰國人的謠言。誰無論如何,太王時代總只是草創經營的地步,只做到"虞芮質厥成," 實談不到翦商;因爲遠在西極的密阮共諸國還是文王開始翦伐的呢。翦商一說也不過是他的後人誇詞罷。太王王季文王必是一个極端接受殷商文化的時代。凡是一个野蠻民族,一經感覺到某種文化高明,他們奔赶的力量,遠比原有這文化的人猛得多。這是一个公例。王季文王武王的强烈殷商化,並用一个最有效的法子,就是討殷商或殷商治下諸侯的女兒做老婆。這是野蠻人整個接受文明人的文化系統的大道。後代的歷史證明這个事實很清楚。譬如唐宗女文成公主下嫁吐蕃弃宗弄贊一事,文成公主未必即是一个怎樣有才的人,然而挾着她宗國文化的背景,"明駝千里"到吐蕃,便在吐蕃種下一个漢化的强種子,至今在西藏人的國民宗教中,文成公主佔一个極重要的位置。又如回紇歷世受唐婚,結果是唐化得無對,雖佛教的經典還要用漢文譯本爲正,而又帶着唐化向西方流布。參看 A. von Le Cog 諸書。又如看現在的留學生,一經討到一个外國老婆,便"琵琶鮮卑語"不覺其可恥。比喻少說,言歸正傳,詩經上記這三代的姻事說:

王季一代　"摯仲氏任,自彼殷商,來嫁于周,曰嬪于京。乃及王季,維德之行。大任有身,生此文王。" 大明。這樣看來,文王正是殷商旁門的外甥,必是大殷化而特殷化的,這必然即是"文王之所以爲文也。"

文王二代　"文王初載,天作之合。在洽之陽,在渭之涘。文王嘉止,大邦有子。大邦有子,俔天之妹。文定厥祥,親迎于渭,造舟爲梁。不顯其光,有命自天。命此文王,于周于京。" 大明。關于這一段的解釋,最可喜且可信的,爲顧頡剛先生的話:他以爲這是帝乙歸妹的故事,天之妹即是帝乙之妹。說詳他所箸"周易卦爻辭中的故事。" 載在,燕京學報第六期,文長不轉錄。

然而文王又續了一个有莘氏女。詩同篇接着說"纘女維莘,長子維行。篤生武王。" 這也是顧頡剛先生說,見同文。 莘也是東方的諸侯,就地望看,仍然是在殷"邦畿千里"之內。今莘縣在山東省西境,去河南省安陽一帶至近。或者即是"天之妹"之媵罷?

武王三代　武王雖然用不着再討殷商的女子做妻,然他的生母嫡母祖母一直是由殷商出的,則他在種類上先有四分三是東方人。至于"母教,"便等于殷化,是不消說的了。武王的事業在滅舅的國家。楚文王也有這樣德行。創業之君,總是先自近的吞併起呀。

這樣子的從根基上受殷化,結果便是整個的承認了殷商的文化正統。所以周雖把殷滅了,還說,"殷之未喪師,克配上帝。" 還追述文王娶殷女事說,"大邦有子,俔天之妹。文定厥祥,親迎于渭。造舟爲梁,不顯其光。" 此亦從頡剛說。 還以殷人來朝爲榮,說,"侯服于周,天命靡常。殷大膚敏,祼將于京。

在這樣的受殷化中,最重要的一件事,是竟自把殷人的祖宗也認成自己的祖宗了。周人認娘舅的祖宗本有顯例。如,"厥初生民,實爲姜嫄,"這是認了大王的老婆的祖宗。至于認商的始祖,尤其是中國人宗教信仰之進化上一个大關鍵。這話說來好像奇怪,但看其中的情形,當知此說容許不誤的。

初民的帝天,總是帶个部落性的。舊約的耶和華,本是一个猶太部落的宗神。從這宗神 (tribal god) 演進成聖約翰福音中的上帝,眞正費了好多的事,決不是一蹴而成的。商代的帝必是个宗族性的,這可以歷來傳說商禘嚳爲直證,並可以商之宗祀系統爲旁證。周朝的上帝依然還和人一樣,有愛眷,有暴怒,見詩皇矣。然而已經不是活靈活現的嫡親祖宗,不過是踐跡而生。且將商周的不同觀念一作比校:

商　"有娀方將,帝立子生商。" 這是說,商爲帝之子,即契爲嚳之子。

周　"履帝武敏歆。攸介攸止,載震載夙,載生載育,時維后稷。誕彌厥月,先生如達。不坼不副,無菑無害,以赫厥靈。上帝不寧,不康禋祀,居然生子。"

> 這是說,稷爲姜嫄之子,而與帝之關係是校微弱的。

這樣看來,雖然殷周的上帝都與宗姓有關係,然而周的上帝確是從東方搬到西土的,也有詩爲證。

> 皇矣上帝,臨下有赫。監觀四方,求民之莫。維此二國,其政不獲。維彼四國,爰究爰度。上帝耆之,憎其式廓。乃眷西顧,此維與宅。

把這話翻譯成較不古的話,大致便是:

> 大哉上帝,赫然看着四方。監察四方的國家,求知道人民的疾苦。把這兩國看,看得政治是不對的。把那四方之國再都一看,看來看去,考量了又考量,上帝覺得他們那樣子真討厭。于是轉來西看,(看中了意),便住在這裏了。

這个上帝雖在周住下,("此維與宅")然而是從東方來的。（二國毛傳以爲殷夏,當不誤。）這話已經明說周人之帝是借自東土的了。進一步問,這个上帝有姓有名不呢? 曰,有,便是帝嚳。何以證之? 曰,第一層,"履帝武敏歆,"毛傳曰,"帝,高辛氏之帝也。"因爲我們不能盡信毛傳,這話還不算一个確證。第二層,魯語上,"商人禘嚳而祖契,郊冥而宗湯,周人禘嚳而郊稷,祖文王而宗武王。……上甲微,能帥契者也,商人報焉。高圉,大王,能帥稷者也,周人報焉。"這句話着實奇怪,豈不是殷周同祖嗎?然殷周同祖之說,全不可信,因其除禘帝嚳以外全無同處。且周人斥殷動曰戎商戎殷,（說詳下）其不同族更可知。然魯語這一段話,又一定是全可靠,因爲所說既與一切記載合,而商之禘嚳,上甲之受報祭,皆完全由殷虛卜辭證明之。一个全套而單元的東西,其中一部分既確切不移,則其他部分也應可信。那麼,這个矛盾的現像如何解釋呢? 惟一的可能,足以不與此兩個都可信的事實矛盾者,即是:商人的上帝是帝嚳,周人向商人借了帝嚳爲他們的上帝,所以雖種族不同,至所禘者則一。帝者,即所禘者之號而已。第三層,世本史記各書皆以爲殷周同祖帝嚳。這个佐證若無左傳國語中的明確的記載,我們總是不相信的。但一有國語中那个已有若干部分直接證明了的記載,而我們又可以爲這記載作一不矛盾的解釋,則世本史記的旁證,也可引以張軍了。

禘帝是一个字,殷虛文字彝器刻詞皆這樣。帝郊祖宗報五者,人名,禮名,皆同字,所在地或亦然。帝之禮曰帝,(禘),帝(禘)時所享之神爲帝。祀土之禮曰土(社)祀土之所在曰土,(社),所祀之人亦曰土,即相土。（說詳後） 殷之宗教,據今人研究卜辭所得者統計之,除去若干自然現象崇拜以外,完全是一个祖先教,而在這祖先教的全神堂Pantheon中,總該有一个加于一切之上的。這一个加于一切之上的,總不免有些超于宗族的意義。所以由宗神的帝嚳,變爲全民的上帝,在殷商時代當已有相當的發展,而這上帝失去宗神性最好的機會,是在民族變遷中。乙民族年用了甲民族的上帝,必不承認這上帝只是甲民族的上帝。周誥周詩是專好講上帝三心二意的,先爲（去聲下同）夏,後來爲殷現在又爲周了。這樣的上帝自然要抽像,然而畢竟周詩的作者,不是約翰福音的作者,或聖奧古斯丁,還只是說上帝是"惇惇然命之"的。（例見緜篇。）

周人抄襲殷人的全神堂時,不特借用了一个頭子,並且用自己的材料仿造了第二把交椅,在殷是相土,即所謂"亳社"之神,在周是后稷。我們先看相土是甚麼。王靜庵戩壽堂殷墟文字考釋第一葉,"其賓于土,"王云:

> 土,殷先公相土也。卜辭紀祀土者,或曰,"貞賓於土,三小牢,卯一牛。"又曰,"貞于土米。"又曰,"貞米年于土,九牛。"又曰,"貞ㄜ賓于土。"并此書二事而六。土字作⌂者,下一象地,上O象土壤也。盂鼎"受民受疆土"之土,作⊥,此作⌂者,卜辭用刀鍥不能作肥筆,故空其中作⌂猶亦之作亦,●之作口矣。知土爲相土者,詩商頌,春秋左氏傳,世本,史記諸書,皆連言相土,而荀子解蔽篇云,"乘杜作乘馬。"楊倞注曰,"世本云'相土作乘馬,'杜與土同以其作乘馬之法,故謂之乘杜。"是乘本非名,相土可單稱土,又假用杜也。然則卜辭之土,當即相土。曩以卜辭有当⌂字,即邦社,假土爲社,疑諸土字,皆社之假借。後觀卜辭中殷之先公,有季,有王亥,有王恆,又自上甲至於主癸,無一不見於卜辭,則此土當爲相土而非社矣。

按:王君認此文爲相土之土,固爲最勝之義,惟謂爲非社,則實誤。此文固爲相土之土,亦爲当⌂(邦社)之社,邦社相土實即一事。土字之即社字,社字之即土字,在經典中甚明顯;如后土即社一類之例,正不煩遍舉。相傳社始于祀共工氏之子句龍,曰后土者,稷始於祀烈山氏之子柱者,經三代之交替,祀禮存而所祀者因代而異,益若社稷是兩事者。然社稷之稱,在左傳國語論語等早年可靠之書中*或單稱社,或稱社稷,從來不單言稷祀。且社之以國分,其義甚顯,因爲社本是邦土之之祀,若稷之分國,則頗不可解。且水土百穀實全是相因者,即令有不同之神,其祀禮當爲一事。魯語上,"莊公如齊觀社。曹劌諫曰,"不可。……夫齊棄太公之法,而觀民於社。君爲是舉而往觀之非故業也。何以訓民? 土發而社,助時也,收攟而蒸納要也。今齊社而往觀旅,非先王之訓也。'" 據此可見社稷之關係,可見稷田之禮即行於社,是則社稷之祀本是一事。孟子,"犧牲既成,粢盛既潔,祭祀以時,然而旱乾水溢,則變置社稷。"此猶是近古之說,明社稷爲一事。殷墟卜辭中歷歷言祀土,而不言祀稷,周詩歷歷言祀稷,而不言祀土,明其相同,明其不妨並列。又按,詩商頌,"相土烈烈,海外有截。"此亦類于平水土之意。周官校人,"秋祭馬社。"鄭注曰,"馬社始乘馬者。世本曰,"相土作乘馬。"" 馬社雖不可謂即是社,然既曰社,而鄭君復以相土之故事引入,或者可見相土與社有如何之關係。且有一事至可注意者,即殷人祭其先世,自上甲至於多后爲一系,而以上諸世與之絕不同。用一切卜辭之統計而作結論,現在尚不可能,此須待至彥堂擬作之卜辭彙編成後,然姑以王靜菴君之殷虛書契考釋及古史新證（不在這書中而編于述學社國學月報之"王靜安先生專號"內）所輯,關于卜祀之辭觀之,已可見其絕不同處。此兩書中所列祀殷先王者數百事,然祀"自上甲至于多后"之合祭,與祀自上甲以來各世祖妣之分祭,皆不用賓。（只有一例外,即殷虛書契考釋增訂本卷下第十四葉第五行,"大甲,賓三羊,卯三牛。"此爲羅君增訂本,不注出處無從查于原版。然大甲或合上文讀。）而祭夋與土則皆用賓,亦有賓于王亥及妣乙者。王亥即振,已爲定論,此世固在上甲之前。妣乙爲何代之配,因無合祭,不可知。準以高祖夋之例則此當爲其始祖妣。說文釋乙爲玄鳥,與詩正合,然則妣乙即簡狄也。（論此另有一文。）賓蓋燔柴之祭,與沉埋等,皆不可于室

---

*左傳之云"可靠"者,指其不關書法之材料而言。

中行之,自上甲以來者,旣始用宗廟之祭可以上甲報乙報丙報丁諸名之書形知之。上甲之从口者,必設位于中,報乙報丙報丁之从匚コ者,必設位于旁,口與匚當即祏一類者。此必是室中之祭。賓旣不可于室中行之,而祀高祖夋及土,皆但用賓,可知其必不在室。此與祀帝于郊,祀后土于社之場所正合。又賓,沈,貍,諸祭,亦用于兕蚰等,此數字雖不可知其究何指,然其指自然之怪,則可信。然則祀自然亦與夋,土等同,明夋,土等不僅是殷之先祖,且與自然爲同類矣! 凡此分別,皆顯然表示夋土諸世與自然之祭爲一系,而不與上甲以來者爲一系,亦即表示亼雖爲相土,亦應並爲邦社也。然最有力之證,仍爲詩生民中‘誕后稷之穡,有相之道”一語。毛曰:“相助也。” 鄭曰:“大矣后稷之掌稼穡,有見助之道,謂如神助之力。” 此解全不可通,毛傳鄭箋中此類不同之例至多。今如以相爲人名,不特文從字順,且于經典正有其證。國語三,“昔共工棄此道也,”正與此同其文法,特一用名詞,一用代名詞而已。凡上文所舉,雖均非直證,然旁證者旣如是多端,則相土即邦社,當可爲定論。蓋夏商周同祀土(即今所謂“土地廟,”)而各以其祖配之。夏以句龍,殷以相土,周以棄稷。至于所謂配者,是如何解,已頗不易明。所以配者究竟以爲上帝之自然神以外,更有夋,或者夋即是上帝呢? 究竟土之自然神以外,更有夋,或者夋即是土之自然神呢? 然三位一體之論,在後來固是一个很雄辯的哲學,在初民時代也當有一个抽象的與具體的混淆了的背景。那麽,再問周人向殷人半借用半模仿而成的全神堂,在後來有證麽? 曰,有。滿洲的祭天,本是跳神。然自滅中國以後,承襲了儒家的祀正統之天,在天壇,並承襲了嘉靖帝的道士之天,在大高殿,而同時繼續其跳神之天,於坤寧宮中殺豬! 因爲接受前一代的土地人民文化,不得不接受前一代的宗教,—— 至少在表面上。

殷之種姓　上期寄頡剛的信上有一段說:

> 魯是一个古文化的中心點,其四圍有若干的小而古的國。曲阜自身是少昊之墟。昊(皞)容或爲民族名,有少皞之於太皞,猶大宛小宛,大月氏小月氏也。我疑及中國文化本來自東而西,九河濟淮之中,山東遼東兩個半島之間,西及河南東部,是古文化之淵源。以商興而西了一步,以周興而更西了一步。不然,此地域中何古國之多也。齊容或也是一個外來的强民族,遂先於其間成大國。

十六年八月始于上海買王靜菴君之觀堂集林讀之,知國內以族類及地理分別之歷史的研究,已有如鬼方玁狁考等之豐長發展者。然此一綫上之題目正多,而每每甚細,如粗粗鹵鹵的泛以這民族那民族論,亦未曾有是處。旋見國學論叢第一卷第二號徐中舒先生“從古書中推測之殷周民族”一文,至覺傾佩。今欲辯殷之種姓,轉錄其一節如下:——

> 今由載籍及古文字,說明殷周非同種民族,約有四證。
>
> 一曰由周人稱殷爲夷證之。左傳昭二十四年引太誓曰:“紂有億兆夷人,離心離德;”夷人殷人也,服氏杜氏均以夷爲四夷之夷非也。逸周書明堂篇曰:“周公相武王以伐紂夷,定天下;”紂夷連文,亦謂殷人爲夷也。紂夷又見佚書太誓篇,墨子非命上引其文曰:“紂夷處不肯事上帝鬼神;”非命下引作“紂夷之居而不肯事上帝;”天志中引作“紂越厥夷居而不肯事上帝;”此同引一書而其文不同如此。蓋昔人罕見紂夷連文,因轉寫譌謬,遂失其讀。逸周書祭公篇云:“用夷居之大商之衆;”夷居大商與太誓之稱紂夷居義同,此皆謂殷人爲夷也。
>
> 二曰由周人稱殷爲戎證之。逸周書商誓篇云:“命予小子,肆我殷戎,亦辨百度;”殷戎猶紂夷也。書康誥“殪戎殷;”僞孔傳“戎兵也;”殊爲不詞,鄭注“戎大也;”亦非。逸周書世俘解“謁戎殷於牧野,”戎殷猶殷戎也。亦稱戎商。周語單襄公曰“吾聞之太誓之故曰,‘朕夢協朕卜,襲於休祥,戎商必克;’”此皆謂殷人爲戎也。(以下兩證不錄)

今將此處所舉例,更進一步分析之,則可得下列之分別,即殷之公室爲戎族,殷之土地人民爲夷土夷屬也。周人稱戎殷者,旣如此多例,而殷人亦自稱其來自有娀。詩商頌,“有娀方將,帝立子生商,”是也。且戎族之中,有以子爲姓者,左傳“小戎子生夷吾。”自稱,爲人稱之,皆曰戎,而戎中至春秋尙有子姓,則殷之宗室,必爲來自有戎者,蓋可無疑。戎狄之稱,後來均甚泛,然在最初必是國名,猶之胡之一稱,在初不過指林胡等地,而後來用之遍稱匈奴烏桓鮮卑西域以至天方各部落;蕃之一稱,在初不過是吐蕃之省詞,而後來用之遍稱天山南各族,阿拉伯人,（例如諸蕃志。）大西洋人。（例如廣東人至今稱西洋人及其一切物事曰蕃。）西戎姜戎之稱,大約西周方有之。最初有戎必爲一大國,非其族類者,用此强大之名於他族之上,後來乃爲外國人之泛名也。國語左傳所謂犬戎,即詩所謂混夷。（見王靜安“玁狁鬼方考。）且姜戎犬戎小戎等,皆類後起之號。可知周初尙不以戎呼一切外國人,或者殷亡而戎爲賤稱,乃用于一切外國人嗎? 以戎爲西方之族,蓋甚後之事,冠以西字,而曰西戎,明其有別于不在西方,原負戎稱者也。

至于殷公殷王所踐之土爲夷境者,亦可推想知之。呂氏春秋古樂篇“商人服象,爲虐于東夷。” 左傳“紂爲黎之蒐,東夷叛之。” 據此,可知殷非夷人,而曾服夷,墨子天志引太誓“紂越厥夷居,而不肯事上帝,” 明紂從殷俗,忽畧其上帝之祀。此祀或是自戎狄間來,與周共之者。殷墟卜辭中每言伐人方,此人字實當釋爲夷字。金文中人夷兩字大體無別,而以夷爲名之國,入春秋尙有。（見左傳隱元年。）蓋殷末東方之國,曾泛稱夷,此諸夷者,其中實有太皞少皞有濟之後而爲負荷古代文化之民族,故殷亡而箕子往歸之,周衰,而孔子思居之。周人初與東方民族接觸,知東方以人(夷)爲稱,于是以夷泛稱一切外國人,如所謂混夷者。然蠻夷戎狄閩貉皆是國名,在初非有賤意。狄本作易,不從犬。（即今易水一帶之地,王君所考。）蠻本作䜌,不從虫。秦公敦,虩事䜌夏,䜌指荊楚,而夏指晉。蠻之本地何在,今不可知,然必南方之國。戎爲有戎氏之國,已如前所說。貉疑即潞子嬰兒之潞。閩蓋民之後起字。夷即人之分化字。黎即重黎之遺民,國亡之後,降爲臣僕。古者具體及分別語多,抽象及總類語乃絕無僅有。以一人字概括王公士大夫庶人臣僕以及男女,蓋甚不易者。民字之義,至今不上於士大夫。人字之義,在金文中爲錫庸之品,黎爲重黎之後,在經典中甚顯,而黎民之稱在戰國甚通用,社會的階級即民族的階級,在現在的世界中尙大半是這樣,例如全歐洲貴族多日耳曼及斯拉夫種,而人民則希臘羅馬高羅穆爾之遺也。

以上論殷爲戎姓而其土地人民則爲夷之一說,在今日雖

不能以爲定論,然看來已很像一个甚顯然的設定。且此設定可解釋下列一件事實。近兩年中李濟之董彥堂兩君之殷墟發掘,所得物件,顯然表示殷商文化之多源,並表示中國文化由來之正統。因爲殷墟的物件中有許多野獸骨,證明其畋獵生活,又許多海中的產品,至少亦可證明其與海濱民族有甚多之關係。果"以戎姓爲夷土之君"之一說可信,此謎立解。又其一切石器玉器兵器陶器之異樣,雖未必即能概括周初之物質文化,因爲我們現在尚不曾發掘到周初都市的故墟或墓葬,正不能如此斷定,然以宋代以來研究古器物者之文書譜錄來看,大體旣備于殷墟。那麽,殷周之際,是難得有物質文化變遷的。因民族變動而引起之文化,當是偏于社會組織一面,特別是宗法。

然而周人是不甘于但去恭恭敬敬接受殷人的文化基業的,不免一面接受,一面立異。猶之乎遼金諸虜,一面向宋人要絹贈,這些東西正是漢人文化之結晶品,一面還只呼宋人爲南人,不以之爲中國之正統。又猶之乎建州虜,一面以受明封爲榮,一面又說並不與明相干,而遠比忽比烈之功烈。（即如康熙,一面向孝陵,跪九叩頭,一面又謂,"自古得國之正無過于本朝者。"）周人所以標出來抗殷的是夏。夏之故域在河東,（左傳定四年,"分唐叔以大路密須之鼓,闕鞏沽洗懷姓九宗,職官五正,命以唐誥,而封于夏虛。啓以夏政,疆以戎索。）而渭南之崇,亦是諸夏之一,（詩"旣伐于崇,作邑于豐;"是崇在豐今西安之西。鯀在傳說中爲禹父,又號有崇伯鯀,明崇夏有關。）漢水又名夏水。或者夏之區域,錯處在今河南境之大半,南至江漢之交,亦未可定。所謂諸夏者,在初必是夏族之諸部落,後乃推之一切負荷中原文化之人。所謂夏后者,當即諸夏之長,如此名之,以別于其他之夏部落。"殷因于夏禮,所損益"的,是如何一段故事,現在已不可知。但商人實未曾將夏之支姓一掃而光,而河東河南一帶始終負夏之名,至荀子時尚有此稱。儒效篇"君子居楚而楚,居越而越,居夏而夏。"戰國末尚存此名。殷周之際,諸夏必尚有甚多分居中原者。周人兩代與殷通婚,然一爲異姓,帝乙之妹之下落又不可知,而生武王者,反是夏遺之莘,則周人伐紂時,說是以商待夏之道還之于商,或至竟去說是爲夏人報仇,且承諸夏正統,未嘗不合情理。匈奴之劉淵造反,先去祀漢三祖,正是此理。果然,周人對于夏的稱呼,不是戎商一樣的。周頌中兩稱時夏:一,"我求懿德,肆于時夏。"二,"無此疆爾界,陳常于時夏。"時夏之時如何解,雖不可確知,然稱周亦曰時周,如"時周之命于繹思,""敷天之下,裒周之時,時周之命。"則時夏之稱必甚美甚親近者。又有時說的簡直是報仇洩憤一般,如"文王曰咨,咨女殷商。…殷鑒不遠,在夏后之世。"這一類話,在周誥中猶多。不特如此,更說自己是夏。康誥"惟乃丕顯考文王,克明德慎罰,不敢侮矜寡,庸庸祗祗,畏威顯民,肇造我區夏。"又周詩之本體爲雅,而雅即是夏,此,王伯申之大發明。* 這樣看來,眞正和劉淵建國曰漢一樣了。

不過"命周侯"一版是證明史記所載殷命周昌爲西伯,竹書紀年所載殷命季歷爲西伯,一些話,是不錯的。劉淵到底是晉臣呢!

補記:此文字完,承徐中舒先生爲我細看一遍,作下列之提示,謹當補入以誌同好者之感情:——

一　陸終娶鬼方氏女曰女隤,(似是媿,隗,別體。)楚靈王稱"皇祖伯父昆吾,"鬼方,昆吾,當是夏或其近族,故楚仍可包括在夏民族中。（說詳"再論小屯與仰韶。"）

二　戎殷戎商的解釋,現在又畧有變更,時夏時周與戎殷戎商似爲相對名詞。時是同字,此也;戎女也。即此名稱,也有內諸而外殷商之意。時周,與咨女殷商,正是顯明的旁證,淸人稱明,也說爾明國。

三　銅器有"伐楚荆,""伐荆,"的記載,大約是成康時物,昭王穆王,也曾經營過南方的,這是楚在周初確是周人的勁敵的證據,即楚爲周初一个大民族之證。

四　蒲姑,薄姑,亳姑,亳,薄,在字音上講與濮也有若干關係。地名有濮上,城濮,與薄(亳)均在中土左文十六年"麇人率百濮聚于選,將伐楚于是申息之北門不啟;"是百濮在楚北之證。

五　易,喪牛於易,喪羊於易,山海經有易之君緜臣,此諸易字皆當是狄字。契母稱簡狄亦當注意。

六　虢季子白盤記伐玁狁之事說"用政蠻方,"古代未必即指南方異族,春秋左傳有茅戎在成周附近,公羊作貿戎,即蠻之聲轉。

(原載《安陽發掘報告》第2期,1930年)

---

* 余謂詩三百皆以地域標名初無風雅頌之別四始之說乃漢儒之義見詩經講義未刊

序跋一

商辭序

商承祚

文章體製.因時而嬗變.上世文多簡奧.世愈降而愈繁.故班書繁於馬.班以後又繁於班.此自然之趨勢也.尙書詰屈聱牙.往往難通.以其原爲古文.後人於不識之字.以意揣測.又從而附會竄改之.遂至不可卒讀.善哉王靜安先生之言也.自周迄今.垂三千年.其迄秦漢.亦且千年.此千年中.文字之變化脈絡不可盡尋.故古器文字.有不可盡識者.勢也.古代文字.叚借至多.至漢音亦多變.叚借之字不能一一求其本字.故古器文字有不可強通者.亦勢也.從來釋古器者.欲求一字之無不識.一義之無不通.而穿鑿附會之說生.穿鑿附會者.非也.謂其字之不可識.義之不可通.而遂廢之者.亦非也.文無古今.未有不文從字順者.今日通行文字.人人能讀之.能解之.詩書彝器.亦古之通行文字.今日之所以難讀者.由我輩之知古代.不如現代之深也.（毛公鼎銘考釋序）可謂通人之論矣.今就甲骨文及彝器之銘觀之.當日音讀用字.與近代誠多隔絕.若考其文字.比較詞義.徵之往籍.要非不可盡讀.而讀之之道.則非好學深思.不能心知其意.此其所以難也.周金銘文.其長者多至四五百字.有卒不易辨者.若藉上文以求下義.即上字以證下義.則讀之較易.甲骨文以數字爲一篇者最多.其長至四五十字者.千不得二三.而字又不能盡識.從來治甲骨文學者.非徵其制度.則考其文字.而未及其文章體制.蓋辭雖貞卜.均爲記事之文.乃商之遺簡.殷之史實.且未經後人竄改.重要不在商書下.此誠史學之祕藏寶庫也.往者海城于君思泊.擇錄商周金文.爲吉金文選.評點句讀.粲然易明.論者謂足與周書抗衡.茲予商辭之作.雖難易不同.不敢不勉.甲骨拓本之刋世者.已萬餘版.闕文賸義.不知凡幾.若錄其全文.汰其複句.亦得四千名左右.韓昌黎所謂存十一於

千百．自不能謂商辭盡於是 今摹釋其文．旁加徵證．於所不知．不作強解．志在存眞．孔子有言．周因于殷禮．所損益．可知也． 學者由此． 或粗有以窺見二代質文之遞嬗乎．二十五年三月．商承祚序于白門之古先齋．

例　言

一．本書盡舉今所著錄甲骨文不同之句法．摹寫而迻錄之．考釋之．義有未明．不敢妄下己意．強爲附會．名曰商辭．

一．次第以字數多寡定之．始于一而終于五十餘．

一．凡遇泐文．知其爲幾字．則以□代之．殘字則爲補入．而旁加｜以別之．

一．甲骨出土．以年代湮遠．多殘闕不完．然于文疑爲泐而實可讀者．或實完全而非殘者．此類取舍．其嚴其慎．

一．每文之下．標疏所出．並注明某書某卷某頁某版．而用簡稱．如殷虛書契前編卷四第三十二頁六版．則作前四．三二．六．以備讀者之檢查．

一．文雖殘闕．而辭句淵懿．及有關考證者．都爲擇存．錄作附編．入之卷末．

引用書名及簡稱

前	殷虛書契前編	八卷	玻璃版本	羅振玉
續	殷虛書契續編	八卷	玻璃版本	羅振玉
後	殷虛書契後編	二卷	玻璃版本	羅振玉
菁	殷虛書契菁華	一卷	玻璃版本	羅振玉
鐵	鐵雲藏龜		石印本	劉　鶚
餘	鐵雲藏龜之餘	一卷	玻璃版本	羅振玉
遺	鐵雲藏龜拾遺	一卷	玻璃版本	葉玉森
戩	戩壽堂所藏殷虛文字	一卷	石印本	王國維
甲	龜甲獸骨文字	二卷	石印本	林泰輔日人
徵	殷契徵文	二卷	石印本	王　襄
契	殷契卜辭	一卷	石印本	容　庚
佚	殷契佚存	一卷	玻璃版本	商承祚
福	福氏所藏甲骨文字		玻璃版本	商承祚
別	卜辭通纂別錄	第二	玻璃版本	郭沫若
鄴	鄴中片羽	一卷	玻璃版本	黃　濬
新	新獲甲骨		摹寫石印本	董作賓
大	大龜四版		石印本	中央研究院歷史語言研究所
獸	獸頭刻辭		石印本	同　上
眞	殷虛文字存眞		原拓本	河南博物館
卜	殷虛卜辭	一卷	摹寫石印本	明義士英人
庫	庫方二氏所藏甲骨卜辭		摹寫石印本	白瑞華美人

（原載《金陵學報》第6卷2期，1936年）

序甲骨文辨證

郭沫若

餘杭章太炎先生於甲骨彝器之學素所鄙夷，曩歲為「理惑論」曾揭五疑以難吉金，斷言「吉金著錄，寧皆贋器」。而於甲骨尤深惡痛斥，謂「近有掊得龜甲者，文如鳥蟲，又與彝器小異。其人蓋欺世豫賈之徒，國土可鬻，何有文字？」言之聲色俱厲。

比者金君祖同得其手書四通，其前二通均以甲骨文真偽為主題，所見已較往年大有改進。如謂「鐘鼎可信為古器者什有六七，甲骨之為物，真偽尚不可知」。於鼎彝已由懷疑變而為肯定，於甲骨則由否認變而為懷疑，此先生為學之進境也。再隔若干年，余深信「甲骨可信為古物者什有六七」之語必將出於章先生之筆下矣。

懷疑辨偽乃為學之基階，為學與其失之過信，寧取乎多疑；子輿云「盡信書則不如無書」，此終古不刊之論也。鼎彝甲骨誠多贋品，然而疑之有方，辨之有術，富有經驗之士於其真偽之間幾於一目可以別白。所貴乎學者即在養蓄自己之目力，先期鑒別之精審，更進而求其高深。若徒懲羹而吹虀，因噎以廢食，則于于然與木石居與豕鹿遊可耳，又焉用學為？章先生乃小學專家，於聲音訓故之業蓋集乾嘉學派之大成，若能移其力於古器物學之探討，其所獲必能軼羅王而邁吳孫，特惜其疑之過深，遂不免屏之過絕。金君謂「先生以經古文家之立場，為護許運動，若叩

史記·孟子荀卿列傳正義謂孟軻字子輿。

其初意，亦不免為違心之論」，此評或不免稍失之苛，然而平心觀之，深知先生實有所蔽也。

竊觀先生之蔽，在乎盡信古書。一若於經史字書有徵者則無不可信，反之則無一可信。實則古書之存世者幾何，而存世者亦饒有真偽之別。如尚書僅存廿餘篇耳，晉世偽古文，在閻百詩、惠定宇之前，其誰不以為乃唐虞、三代之真書？然在今日則雖初中學生亦能知其為偽矣。今先生於劉歆所改竄之周官信之，於龜策列傳所著之「略聞」信之，於邯鄲淳三體石經信之，乃至荒唐如紅崖碑之類者亦信之，而獨於彝器甲骨則深深致疑而不肯多假思索，此實令人難解。至謂「文字源流除說文外不可妄求」，寧非先生自身所當理之惑耶？說文誠為小學之良書，欲明真書之根者固當視之為總龜，即欲明古文之源者亦莫不賴之為梯航。今之治甲骨吉金文字之學者，胥奉許氏為不祧之祖者也。然而許書乃文字學之源，並非文字之源，二者烏可混？許氏生於東漢，去古已遠，所說解以小篆為主，間出古籀，為數無多，且大率周末文字。其後叙云「郡國亦往往於山川得鼎彝，其銘即前代之古文，皆自相似」，是許於鼎彝未曾加以懷疑，但既言「往往」，則知所見未廣。設許氏而生於今之世者，其所為書必大改舊貫。故愛護許氏者當遵循其精神，不當暖姝其陳跡。

識字有賴於師弟之傳授，有賴於字書之檢閱，固為經常之門徑，然捨此以外不能謂遂無它途。蓋人類有推理之智能，文辭有一定之軌跡，古文奇字雖不見於字書，雖無徵於典獻，苟非隻字單文，率可由客觀之論證，參驗互讎而得。如丁之作●，除金文外於任何字書均所未見，章氏不已云「確然無疑」耶？（見理惑論）人患不知用心耳。苟知用心，有如國際偵探，雖密碼電報，亦有法破之，何況祖先所已曾使用之文字。字亦終有未可盡識者，則以可供參互比讎之資料有未備耳。資料未備，論證未充而妄加揣測，皮傅，則「鶻突」「專輒」之譏自所難免；然若以其難知而棄置之，或以其事小而不屑為，「受人欺紿，釀為嘲笑」之事或可無，但非好古敏求之道也。學無所謂大小，亦無所謂古今，其要當在追求客觀之真理而化除主觀之成見。春秋秦漢以來之事固不可勝觀，然而殷代史跡胡可置之不問？孔子之不言黃帝者，以黃帝乃出於道家者流之所依託，實無物可言。殷世殊不然，此乃吾國文化之淵源，究史者欲觀春秋秦漢以後而不問殷世，是猶欲窮河源而不問星宿海耳。

且事有不可因人而廢者，羅氏振玉之於甲骨彝器之學，其功實不可歿，而甲骨彝器之學亦早已超脫乎羅氏之樊籬矣。甲骨彝器之研究，近來日臻完備，其所裨補於商周史實者已甚多，有諸家書錄在，今不具論。

一九三六年五月廿二日

本篇據甲骨文辨證，上海中國書店一九四一年影印本編入。

（原載《考古論集》，科學出版社，一九九二年）

「小屯」

自序（其二）

董作賓

新開高明 譯

此の「殷墟文字甲編圖版・甲編」の序文は二度目の執筆・三度目の印刷ではありますが、何はともあれ、此の頃、最も欣快とする所であります。説き起せば長い事になりますが、やはり申し上げないわけには參りません。民國十七年の第一次殷墟試掘以來今日まで、丁度十九年になりますが、こんなに長い期間を經て、尚、發掘で得ました甲骨文字は出版出來ないでゐるのでありますから、人々が私共を責めて「秘藏櫃中」とか「包而不辦」等と言はれるのも無理ないのです。然し、事實が充分我々に代って辯明してくれます。——十七年の第一次發掘で甲骨七八四片を得ましたが、二ヶ月内に、その三八一片を選び、石印して「新獲卜辭寫本」一冊を出版、世に公にしました。十八年には引續き第二・第三次の發掘を行ひ、以後毎年、春秋二季に野外作業を爲して二十三年の第九次發掘に及んだのであります。毎次得ました甲骨文字は慎重な經過整理・登記・編號等々幾多の手續を要し、腐朽したものは、更に膠液に浸して堅牢を期す事が必要で、かくて始めて工匠の手に委ね、用心深く拓本に取り、一片に付き四枚取りましたが、多くすると、原物を損傷せんことを恐れたからです。この傳拓の仕事は、十八年から始まり、北平・上海・南京と移動しつゝも、その間、全く停頓する事はしませんでした。第九次發掘は二十三年の春で、この冬には、第一次から第九次までに手に入れた甲骨文字を全部傳拓し終へました。而して第十次の殷代王室の陵墓である、侯家莊・西北岡の發掘には、甲骨が出ませんでしたので、我々は小屯村の九次の發掘で出土した、甲骨文字を編輯印刷し、一應けりをつける事を決定致しました。二十四年の春には剪貼編選の仕事に取りかゝり、半年以上もの日子を費して「殷墟文字甲編圖版」三百餘頁の原稿を完成し、直ちに、出版の打合せをしました。二十五年には、商務印書館と合同を約し、書館の印刷引受けで、圖版に書いた文字・數字を、活字に組み變へ、一々貼り付け、寫眞に取り製版しました。二十六年の春に八十頁のゲラが出來、南京に送って來ました。私はちよっとした序文を書いてみましたが、それもゲラの校正を爲し、表紙や扉も皆一應出來上った。此の時、我々は、この發掘出土の甲骨文字の、時を經ずして、世に問はれんとしてゐるのを見て、感慨無きを得ませんでした。此れは、第一回の印刷であり、又私の書いた、第一回目の序文でもありました。だが不幸にも國難到來、七七事變勃發し、抗戰が開始されました。此の時、商務印書館のこの圖版は滬東の工場にありましたが、滬東は敵に占領され、出版しようにも、術がなくなってしまひました。八月中旬には敵軍は商部を砲爆撃したので發掘の古物を保全せん爲、歷史語言研究所は長沙に遷り、二十七年の春には昆明に遷りました。二十八年には再び、商務印書館と契約し、原稿、拓本を香港に送り、改めて、寫眞に取り、製版して、一年内に印刷をし終へる樣にしました。私の第一回目の序文は手許にありましたので、之も送りました。かくて二十九年の秋には「殷墟文字甲編圖版」が實際出版されたのでありませう。或人が私に、廣告を見ると定價は一部百二十元だと報せてくれましたがその頃、もし飛行機で一部を昆明まで送るとすれば郵便料三百元を要したので、我々は終に此の本にお目見得する事が出來ませんでした。此れが第二回目の印刷であります。三十年の十二月には敵は香港に侵入し、商務印書館は大損害を蒙りました。かくて此の第二回目の出版たる殷墟文字も亦第二次世界大戰の犧牲となったのであります。所が去年の秋（三十六年）歷史語言研究所が四川の李莊から南京に復歸し、私が南京に來て始めて傅孟眞先生の許に參りました際、先生は開口一番、自分は三度この書物を印刷するつもりであると私に申されました。私は此處で一言、言って置かなければなりませんが、此の書物の出版については、いつも先生の御援助を仰いでおったのであります。從って甲骨文字は先生の寶であります。又同時に國の寶でもあります。先生は何時も寸時の暇もあらせず人々を勵まして整理・傳拓・編輯に當り、しばしば煩を厭はず相談され、印刷の紙に至るまで、皆先生の再三の選擇を經ました。この度は、第三回の印刷にあたり、果さるかな、出版のはこびとなり、かの老先生の心願を滿たす事にもなります。他の方々は實際の事や、事に携はる人の苦心を察せず、時に責められる事もありますが、私共は只じっと忍ぶばかりであります。私共の愛護保管の責任が、如何にこの國寶に對する取扱ひを細心ならしめたか御存知ないのです。各一片毎に、登記・整理・膠付けには時間を要し、傳拓・剪貼・編印には何かと工夫が要り、影寫・製版・印刷には手續を要して、一擔の甲骨文字の採掘から一本の書に成るまでは決して、生易しい事ではありません。又どうして、この自分の手で親しく採掘した甲骨文字が、一日も早く發表される事を想はない事がありませうか。又何で、時を惜んで進行に努めない事がありませうか。然らば、今日迄まる十年間、私共をして此の書の出版を遲延せしめたのは一體誰の責任でありませうか？

本書の命名は傅孟眞先生の考へであります。本來私達は「甲骨文字」と名付けるつもりでゐました。私といふのは、本書は殷墟發掘總報告の一部分で、私達は、殷墟出土の古物中、文字のある物は全部單に甲骨のみに限らず、銅器・陶器・骨角器・獸頭骨等の刻銘も、皆その中に含む計畫でしたので「殷墟文字」と言ふのを用ひて、すべてを統括しようと思ってゐたからです。本編には獸頭刻辭三件・鹿角器銘文一件を附してゐますが、之は龜甲や牛の肩胛骨以外の文字に外なりません。私共は分期編印し、この「甲編」のあとに「乙編」「丙編」を續けて出すつもりでゐます。又私共の計畫と致しましては、各編毎に「圖版」と「考釋」の二部とも、先づ、發掘で得た新材料を發表する立て前から「圖版」の部分を先に印刷し、「考釋」の部分はその後に出す事に致しました。これも傅孟眞先生の主張であります。で「甲編」の考釋は胡厚宣君が擔任しました。胡君は考釋をするからには全甲骨文字の研究に手を染めなければならないと言う考へを持っておられますが、之には私も同意であります。胡君は研究所で七年間仕事に從事し、努めて材料を搜し求められ、各方面の研究を爲し、同時に實物を參證されて、本編の釋文を書かれました。二十九年の冬、彼は顧頡剛先生に抜擢されて齊魯大學で教鞭を取っておられた時、甲編全部の釋文を届けてくれましたが「考釋」の方は未だ筆を著けるに至ってゐませんでした。その後李孝定、張秉權の兩君は釋文を一通り校合されました。今日でも尚「圖版」だけを先づ付印し「考釋」の部分は後の出版を待つの止むを得ざる事情にあります。

さて、編輯の經過を述へますと次の如くです。先づ九次の甲骨拓本中から選擇をします。本來から言うならば、選擇したりすべきではありません。何故かと言へば、各一片は各々それなりの價值を有し、字の多少に關せず、將來綴合して復原するのに皆有用なのですから。とは言うものゝ、全部を印刷すると言う事は經濟上許されません。例へば一個の大片上に只、一乃至二個の干支字が殘ってゐたり、或元程の小片上に、せいぐ一個位の自卜字や干支字が殘ってゐた所で、發掘の時、得られたと言うので一律に、皆登記番號の中に入ってはゐるもの、研究上には、實際そう大した用途もないのです。本編で選に選れたものは總數の約五分の二ですが、皆そう言った類です。次に排列の方法でありますが、決して期に依って分けるとか、類を以て分けるとかはしてゐません。それは「この資料は科學的發掘に依ったものである事を示さんが爲であります。從ってそれ等の出土の先後の次序に照らして排列致しました。各片毎に、二種の番號が附いてゐますか、大きい方は拓本の番號で、小さい方は發掘の時書物上に附した、登記番號であります。拓本番號の順序は全く登記番號の順になってゐます。登記の時、先づ甲と骨を分けて二類とし、更に出土の日や、坑位や層次に依って、一々編排しました。現在は登記番號を主としてゐますが、拓本剪貼の時には相當ひっかゝりがありました。何となれば各片の大小は不同で時には一片で二枚或は三枚の拓本を要し、而も一頁の圖版の上に配置し、順序を亂さず、綺麗でなければならないから工夫を要する仕事ですから。登記番號は左から右へ讀みます。第一位の數字は發掘の次數を、第二位の數字は出土物の種類を表示します。

0・有字龜甲　1　無字龜甲

2　有字骨版　3　無字骨版

本編所收のものは、0と2の二類だけです。第三位以下の數字は出土物の號數です。例へば、本編中の圖版第一八頁第一片拓本下にある、387　2.0139 との二種の番號は、387は甲編中の拓本で第三八七番目なることを示し、2.0139は、此の片は第一次の發掘(一)に出土した、有字骨版(2)の第一三九號(0139)である事を示します。一拓本番號には一拓片があります。從って、一つの拓本番號は登記番號と完全に

何れも文字があるとすれば、二枚の拓本があり、二つの番号がある訳です。一つの骨版に正面反面骨臼に何れも文字があれば、三枚の拓本があり、三つの番号があります。而も實物は只一個の登記番号を有するに過ぎません。中には、實物が二片で、登記番号は二つあるが、編集の時一枚の拓本に合はせて一つの番号にしてしまったのもあります。こう言う次第ですから、本編の拓本の数は、決して所収甲骨原片の数ではありません。本編中の拓本と甲骨原片の関係は次の如くであります。

編入甲骨片数		編入拓本号数	
甲	2467	甲	2513
乙	1399	乙	1425
合計	3866	合計	3938

拓本と實物との差は七二であります。これは只七二の拓本だけが甲骨の反面、若しくは骨臼だと言うのではありません。同時に實物は二或は三個の番号を有するが、拓本は一の番号しかない物も有ります。本編の拓本は總じて三九四二で、上に擧げた甲一（3939）鹿頭刻辞二（3940, 3941）及び鹿角器一（3942）です。

本編の拓片を引用する時は、たゞ拓本番号だけを書けば良く、本編は「甲」と略稱します。例えば先に擧げた片で、「甲，387」と言ひます。若し出土の狀況や、遺址・遺物との関係を研究せんとならば、登記番号を調べなければなりません。本来なら、登記番号を記した以上は、當然、坑位・層次・出土期日等の詳細な図表が有って然るべきなのですが、それ等は、その中・發掘報告の遺址部門・及び本編の「考釋」の部分で見ていたゞくとしまして、今は、同時に發表出来ない事を諒とされたいのであります。こゝでは、只、九次にわたる發掘に於ける甲骨文字出土の状況を、拓本に照合し、簡單な表を一つ作成し、その梗概を示し得るに過ぎません。それは次の如くです。

九次發掘殷墟所得甲骨文字出土時期數量地点及甲編圖版拓本對照表

發次 掘数	工作時期 年	工作時期 月日至月日	甲骨實物登記号数 甲	甲骨實物登記号数 乙	甲骨實物登記号数 合計	出土地	本編拓片号数 甲	本編拓片号数 共	本編拓片号数 乙	本編拓片号数 共	總合計
1	17	10.13 – 10.30	1.0.0001 – 0555	1.2.0001 – 0299	854	小屯村中 村北	1 – 296	296	297 – 447	151	447
2	18	3.7 – 5.10	2.0.0001 – 0055	2.2.0001 – 0685	740	小屯村中 村北	448 – 489	42	490 – 928	439	481
3	18	10.7 – 10.22 11.15 – 12.12	3.0.0001 – 2050	3.2.0001 – 0962	3012	小屯村北	929 – 2238	1310	2239 – 2940	702	2012
4	20	3.21 – 5.11	4.0.0001 – 0751	4.2.0001 – 0031	782	小屯村北	2941 – 3328	388	3329 – 3362	34	422
5	20	11.7 – 12.19	5.0.0001 – 0275	5.2.0001 – 0106	381	小屯村中 村北	3363 – 3576	214	3577 – 3658	82	296
6	21	4.1 – 5.31		6.2.0001 –	1	小屯村北			3659	1	1
7	21	10.19 – 12.15	7.0.0001 – 0025	7.2.0001 – 0006	29	小屯村北	3660 – 3684	25	3685 – 3690	6	31
8	22	10.20 – 12.25	8.0.0001 – 0256	8.2.0001 –	257	小屯村北	3691 – 3782	92	3783	1	93
9	23	3.9 – 5.31	9.0.0001 – 0446	9.2.0001 – 0011	457	小屯村北 侯家莊南	3784 – 3929	146	3930 – 3938	9	155
合計			4411	2102	6513			2513		1425	3938

本書中の材料は純粋に文字學の方面から言ても、勿論これ以前に出た、甲骨文字の書物と同等の價値を有してゐる。たゞ讀者は本書には絶對に僞刻のものは無い事を信じて可なりです。が、もし考古學の立場から見ますならば、本書は從前の甲骨文字の書物とは大いに趣を異にしてゐます。その一片一片には、皆その出土小史とでも言うべきものがあり、それ等の環境や一切の狀況がすべてはっきりしてゐるからです。どの一片を取って見ましても皆私達が手づから掘り出し、撫でさすりつゝ觀賞したものばかりです。こう言うわけで私共はこれ等に對しましては、殊の外親密なる感慨を懷くのであります。かかる事はもとより私達少数の者に限られた感慨でありますけれども、願くは讀者諸子に於かれましても、之等に對しまして、別の眼を以て接せられます様に。

こゝで私は、これ等の考古學上に於ける貢献に就き、あらましお話ししたいと存じます。

第一は斷代研究法の啓示であります。この話はもう古い事に屬しますが、第一次殷墟發掘は民國十七年の十月で、着工の第一日は十月十三日で、各々相當距った四ケ所に四つの新坑を掘りましたが、結果は大いに失望致しました。一片の甲骨すら見當らなかったのであります。第二日目には、村内の人夫の經驗に賴らし、村北の洹水の兩岸に近い、朱氏の地所内で、嘗て何度も掘られた事のある舊坑を、又掘り返して見て澤山の腐朽破碎した甲骨を見付けました。これが私が斷代研究例中で言ふ第一区第九坑であります。朱氏の地所の西南に接した劉氏の地所内でも又舊坑にぶつかりましたが、これが第二区第二十六坑であります。小屯村でも張氏の野菜畑内に未發掘の新坑を探し當てました。第三区第二十四坑であります。（斷代研究例坑位図352－353頁を參照して下さい）本編内で上に擧げた三坑出土の甲骨文字の拓本番号と登記番号を對照すれば左の如くなります。

拓本番号	登記番号	
1 – 109	1.0.0001 – 1.0.0151（甲）	第一区，第9坑，朱姓地
297 – 352	1.2.0001 – 1.2.0102（乙）	
110 – 178	1.0.0152 – 1.0.0384（甲）	第二区，第26坑，劉姓地
368 – 375	1.2.0118 – 1.2.0125（乙）	
391	1.2.0145（乙）	
353 – 367	1.2.0103 – 1.2.0117（乙）	第三区，第24坑，張姓地
378 – 387	1.2.0128 – 1.2.0139（乙）	
390	1.2.0142（乙）	

讀者は上に擧げた拓本番号を積りに見て行かれれば、此の三区三坑出土の甲骨文字が同じくない事に感付かれる事でせう。此等は皆私が手づから掘り出したもので、私が各片に就き、仔細に觀察して受けた印象では、三区は夫々に一つのグループを成してゐて、夫々特異な点を持ってゐる樣でした。例へば、第一区第九坑にはきちんと整った小字が多く見られます（1.2.0001, 2, 28, 45, 92, 及 1.2.0005, 25, 93）第二区第二十六坑には一として小字の片はありませんが、一種細弱な書体があります（1.0.0235, 240, 295）第三区第二十四坑では「亡戈」と言う辞が五たび出て來ます（1.2.0107, 108, 110, 142, 187,）又「癸□貞旬亡田」と言う卜旬の文例があります（1.2.0106, 137）その上書体が一二区の卜辞とは非常に異ってゐます。私は當時ひそかに、時代に先後関係があるのではあるまいかと疑って「新獲卜辞寫本」の「後記」の中で、「第三区書字之特見」と言う問題を提起して見ました。

現在、私共はこの事に就いて明らかに出來ます。卽ち、第一区第九坑の卜辞は、第一期武丁時代のもの、上に擧げた大字及び貞人・㱿・賓・史等の各版（1.0.0052, 77, 120, 及 1.2.0003, 22）第二期の祖甲の時代の「卜王」（父人、貞人行等が有る各版（1.2.0016, 27, 41 …）第五期帝乙・帝辛時代のきちんとした小字版等を含んでゐます。私共は朱氏の地内及びその附近一帯に出土した甲骨文字の時代は只、第一、二及五期のものに止る事を注意しなければなりません。再に第二区第二十六坑を見ますと、このグループの卜辞中には第一期武丁時代のもの、有る事は貞人㱿・從や大字等で分ります（1.0.0172, 232, 242）又第二期祖甲時代のものゝある事は貞人出で分り（1.0.0202, 271,）第四期の文武丁時代のものゝある事は先述の細弱な書体や、貞人狄で分ります。で、注目すべき事は一として、第五期の卜辞が有りません。第三区に至っては、小屯村中出土の甲骨文字を包括してゐますが、何れも第三・四期の物ばかりでありまして、第一・二・五期の物は一片も存しません。本編中で、村中出土の第三期廩辛・康丁時代の卜辞には、祖己を父己と稱し（1.2.0153,）第四期武乙時代の卜辞には廩辛・康丁を父辛（1.0.0394）父丁（1.2.0169）と稱し、康丁の妃を母辛（1.2.0149）と言ひ、文武丁時代の卜辞に武乙のことを父乙（1.0.0448）と稱してゐるのを見ます。これ等はたゞ第一次發掘の資料に就いて若干の例を擧げたに過ぎません。

三ヶ所から出た甲骨文字が同じでないと言う事は私に大きな指標を與へてくれました。私は何か卜辞の時代を辨別し得る方法は無いものかと日夜頭を悩しましたが、三年と云う長期間に四回の發掘を行ひやっと大龜版四版の中から貞人を探し出しました。民國二十一年に私は「斷代研究例」なる一文を發表しましたが、この方法に賛成してくれた學者は少数でした。當時は私の古くからの親友であります明義士氏（James M Menzies）も反対者の一人で「貞人質疑」一連の反対文を書く人もありました。私が斷代法を應用して「殷曆譜」を書き、胡厚宣君も亦分

研究法を用ゐて「甲骨學商史論叢」を發表しましてからは、もう何人と雖も、此の方法に疑を持ち得ないだろうと考へるに至りました。か、此の断代分期の新研究法も、もとを正せば發掘作業の中から得来ったものに外なりません。

第二は、以前に著録された甲骨文字の出土地が、此れに據って推しはかられます。私共の發掘の経験に據り、又村人の言ひ傳へ等を参證して　次の事が分りました。私共の第一次發掘以前に最も早期に小屯村の村民が甲骨文字を掘り出したのは　光緒二十五年（1899）で、出土地点は劉氏の二十畝の地所内、先に述べた第二区二十六坑附近であります。其の次は光緒三十年（1904）、發掘地点は朱氏の三十畝の地所内で、上述の第一区九坑の附近であります。發掘回数の最も多いのは、小屯村中の、私の言ひました第三区で、最も早くは宣統元年（1909）の事であります。この三区出土の甲骨文字は夫々特異点を有し、その包含する時代が異る事は上に述べましたから此れに據って既に著録済みの資料の出土時期と地点を推断できます。之を表にしますと、

甲骨文字出土地点	開始挖掘	継續挖掘	著録書	収藏者	特点
第一区 （朱姓地、洹河）	光緒三十年 （1904）	民國九年 （1920）	前,後,續,菁, 虛,龜,卜,等	羅振玉, 明義士,等	一,二,五期
第二区 （劉姓地,朱地西南）	光緒二十五年 （1899）		鐵,藏,餘,拾, 等	劉鶚	一,二,四期
第三区 （張姓菜園,小屯村中）	宣統元年 （1909）	民國十二年至十七年 （1923–1928）	粹,卜,後,佚, 等	明義士, 劉體智,等	三,四期

之から次の様に言う事ができます。最も早く劉鶚が手に入れた甲骨文字「鐵雲藏龜」一連の書には第五期のものは無く、第二区から出たものであります。これに次ぐものは朱氏の地所内から出た一群のものは一、二、五期のものを含み、羅振玉が最も多く手に入れ、分散も亦最も廣汎であります。村中で發掘する以前には全く、第三期の卜辞は無く、第四期の卜辞も亦村中から出たものが最も多い。三期の卜辞は私達の第三次の發掘で「大連坑」から澤山出て来ましたし、第九次の發掘でも、侯家莊から一群の甲骨が出ました。何れも後の事であります。でありますからこれ以前の著録では「佚存」所収の米國・スミスの一部と「粹編」所収の「善齋」の一部分の外は、他書には絶えて無いのであります。若し、私共が各書中の資料の収藏年代と内容に考察を加へ、上表に照らし合はせて見ますならば、それらの出土地点を知る事ができる事になります。大体から言ひますと、一九〇四年以前出土のものは劉氏の地に出たもので、第五期の卜辞がなく、一九〇九年以前の出土で第五期の卜辞があり、村中の三四期の卜辞の無いものは朱氏の地に出たものであります。一九〇九年以後得られたもので三四期のものが有りとすれば、村中出土たる事疑ひ無しです。抗戰期間中上海に流布してゐた甲骨の摹本を見た事がありますが、何れも第四期の卜辞でありましたから、之は村中出土のものたる事が分ります。

最も興味ある證明は残片の綴合と一グループの史料の分散とであります。残片の綴合と言ひますのは、例へば

①私共は第一次に第九坑を發掘しましたが、第一日に得た一骨片、本編の拓本番号297，登記番号1.2.0001（之は曾て「新獲卜辞寫本」の第一号に入れました）は永遠に忘れる事が出来ません。と言うのは「惟王八祀」の四字、その中「王」字は只鳥の足一つと二片の羽毛を残してゐるだけですが、「帝乙祀譜」を書きました際、忽然と悟る所があって「庫方二氏所藏甲骨文字」の第1661と綴合致しました。この版は今では倫敦の大英博物館にあります。上面には四回の卜旬と四個の月名を記載してゐますが、その四個とも方法斂博士（Dr. Frank Herring Chalfant 1865-1914）に依り「三月」と寫定されました。私はこの三月に四個の癸日が有る筈がないと疑ひ、老友、吳金鼎博士に書面を送り、一度原片を調べてくれる様に頼んでみました所、結果は私の思った通りで、一の癸酉卜旬は二月、癸未、癸巳、癸卯の三つの卜旬は三月である事が証明され「惟王八祀」の一片とする事によって帝乙八祀の一連の祭祀の系統を明かにする事ができたのであります。（詳しくは「殷曆譜」祀譜二・帝乙八祀を見て下さい）。この一骨版は一九〇四年、朱氏の地内の大規模な發掘の時に破砕したもので、その一小片が土中に脱落埋没してゐたのを私が再び掘り出したのでした。大片の方は轉々して英國に蓄られ三十年後にそれ等は長い離別から再びめぐり合った、云はば破れた鏡が再び完全になったと言うわけです。

②、之も亦第一次發掘でありますが、小屯村の前の大通りの傍で得ました一骨片（本編の拓本番号264，登記番号10,0485，舊本番号360）それは十七年十月二十七日、三十六坑の深さ二六フィートの所から出土し、現在は「殷契粹編」の425号に綴合されてゐるものですが、記してある事は第四期文武丁の時代、丁未の日に咸戊を祭らんことを卜するの辞で、中に貞人狄が出て参ります。「十七年試掘小屯報告書」に附した「第三十六坑東西剖面圖」中に、私は次の様な事を書きました「こゝは地面下六フィートまでは、十七年春、村人の發掘を被り、爲に土層が混乱してしまった。四フィートの所から鐵の鍬が出て来たりするのはその證據である」（二十四頁）と。私が得ました一片は、混乱した土層の下層東辺に在りました。ですから「粹編」の264号は同じ坑から出たもので、十七年春に村中で發掘された一群の甲骨の上海に運はれて、劉善齋に蓄られたものである事が分ります。村中の卜辞は、劉善齋の外には明義士の得たものが最も多く已にかの「殷契卜辞」中に入ってゐますが、まだ出版になってはありません。

③民國十八年秋、私共が張氏の十八畝の地内で發掘した「大連坑」にはまだ手に入れられた事のない新坑でその包含する時代は第一期から第五期迄で、就中、第三期が最も多いのです。本書中の拓本2282号の一片は、四片を合成したもので、その各々の登記番号は3.2.0056,63,77,120であります。この一片と「殷契佚存」の256号の一版とは合成ができ、現に「佚存」中には合成した全片を986号として並べてゐます。此の版は第四期の卜辞で「求雨自上甲、大乙、大丁、大甲、大庚、大戊、中丁、祖乙、祖辛、祖丁十祀」の記載が有り、この十示は何れも大宗であります。「佚存」中のこの種の資料の來歴に就きましては、曾て序の中で述べた事がありますから、改めて申すには及びますまい。

以上三つの例はすべて以前に著録された資料の出土地点を確たる証據に基づいて証明し得るもので、讀者は此れに依って類推して可なりであります。

次に或るグループの資料の分散に就いて述べませう。これに就いては私は只もうあらまし整理のついた一群の甲骨卜辞を例に取り得るに過ぎないが、帝辛十祀十月より十一祀七月まで「人方」を征った一組の資料に依れば、少くも殷代に甲骨卜辞を如何に整理したかを知る事ができます。此の十二ヶ月内に、帝辛は一度東南方に遠遊した事が有りましたが、先づ「大邑商」に行き、祖廟に告祭し、攸侯喜と一緒に「人方」を征せんことを告げました。次いで大邑商を離れて南方に行き、鴻等幾多の地を経て攸國に至り、攸侯喜と淮河以南の各地を巡遊しました，又曾て齊にも至りましたが、最後には大邑商にもどり再び殷都に歸って来ました。帝辛のこの度の東征は至る所で狩獵・遊観をしてゐますが一度も戰の事は無い様で、或は「人方」の各國が天王の御親征と云うので、相共に服従したのかも知れません。想ひまするに、當時十二ヶ月の遊行中、王の行止・癸日毎には旬を卜し、每夜に夕を行はんとする祭祀・田獵等は何れも皆卜しなければならなかったので、これ等の卜辞は現在は皆小屯村内の帝辛の部分から現はれます。只、行止・夕を卜った一部の残片は已に八個の龜甲と、二十五個の骨版を復原してゐますが、それでも當時用ゐた十分の一にも及びません。祭祀田獵を卜った甲骨は少くもその倍はある筈です。所で、この千數百塊の龜甲・牛骨は嘗に散せ、何時いかなる時でも王の占卜に供した事は疑ありません。大史・太卜が辞を契し、灼兆した後に、充分保存に注意して東征より首都への歸來にも持ち歸って、此の一組の史料を宗廟に保藏したものが、三千年後になって始めて朱氏に依り地中から掘り出されたものでありまして、これはもう間違いない事です。此の一組の史料は一ヶ所に保藏され、たとへ分散したとしましても、そんなにかけ離れてはゐません。若し私の輯録しました材料に大なる錯誤無しとしますならば一つの統計を作る事が出来ます。このグループの卜辞の各種の著録書中にあらはれた残片の數を統計に取って見ますと（書名は略名を用ひました。原片は「殷曆譜」閏譜五及び日譜三に引いてあります。）

「前」32、「後」3、「續」8、「菁」2、「上」2、「明」1、「通」3、「匡」2、「珠」2、「金」5、「甲」（本書）5、

の如くであります。各書に見える残辞は全部で約六十五片、復原した甲骨は三十三版ですが、ここで注意すべきは、劉鶚所得の「鐵雲藏龜」一連の書にはそれが一片もない事であります。「甲編」の五片から推すと、拓本番号2562,2572,2691は大連坑出土3355は三二一坑出土ですが、この二坑は、未發掘であった所であり、[illegible]は第九坑出土で、正に朱氏が曾て大規模な發掘を行った所でありますから、上の各書

中の第五期のト辞はすべて小屯村北の河に臨んだ地帯から出たものである事が分るのでありまして、この事は「征人方」一群の史料が証明してくれます。この一群の史料の分散は羅振玉四十五片・明義士三片・日本五片・英国七片・中央研究院五片となってゐますが・此等は私が嘗て輯録した残存物中のほんの一小部分に過ぎません。又この一群の史料中のある一甲骨の分散にも同様な事がありまして、例へば帝辛十一祀の正月四日庚子から二十五日辛巳までの王の行止をトした一骨版（図は「日譜」三・骨十六に出てゐます）は現在では四片に割れ、三ヶ所に蔵されてゐます。一片は英国・金璋氏家（L.C.Hopkins）で「金」544に見えるもの。二片は羅振玉氏の許に在り「前」2.17.3，2.17.5——一片は日本の麗水閣に在ります——「亀」2.5.7 是は確かに末氏が発掘する前に一つだったものが発掘の時に破損して・無字の部分は棄てられ、有字の部分は三つにこれ骨董家の手を経て・夫々国を異にする三収蔵家に売られたものであります。すべて併合可能なト辞は大部分こうした類で、中には殷代にすでに破損したものもあり・割れ口の新旧でそれが分ります・私共の知ってゐるものでは、後岡の一甲片と・侯家荘の若干の甲骨を除いて・他は皆小屯村から出ており・しかも・殷代には又計畫的に備蔵してゐるのでありますから・若し充分科学的に分期分類の研究をしたならば・自づと、各々が一組の史料となって・殷代の舊観を復する事ができ・甲骨の残片も全部その所に落着く日も有り得るわけです・

第三は甲骨文字の地下埋蔵の状況です・発掘した経験をもとに私共は大体甲骨文字の地下埋蔵の様子を明らかにする事が出来ます。これは非常に複雑な問題で総報告の遺址部分と・私が書こうと思ってゐます「甲骨文字與殷墟遺址」の中で詳しく述べる筈ですから・こゝでは只大略をかいつまんで申すに止めます。先づ第一に知らなければならぬ事は・殷墟の範囲はどれだけかと云う事ですが・これは謎であります・ただ殷代の宗廟宮室もそれ程明瞭ではありませんが・少くとも小屯村から始まって・北は洹水の南岸・東は洹水の西岸まで私共の發掘した場所は何れも當時の宮殿の所在地だったと云へます・私は第一次の発掘で殷墟は嘗て洹河のために浸没されたのではないかと疑ってみましたが・その誤りである事がわかりました・但し洹水が殷墟を破壊した力も大変なもので・最近の石璋如君の遺址研究の結果に據りますと・殷代の宮室はもともと規模宏大で整然とした一團の建築物があり・時期にこそ先後は有りますが皆連繫が有るものだそうですが・殷代の宮室は大率・中間の純粋な黄土の台基を中心としまして、其両には漳山の門があって一直線上に列び・両側の建築物は可能な限り東西対稱をなしてゐます・ですから東辺の大部分はすでに洹水の破壊を被ってゐるわけです・当時の建築物は地上と地下とに分かれ・地上のは宗廟宮室で・現在では若干の版築の跡と・柱下の石礎を見得るに過ぎません・地下は復穴と・竇窖で・復穴とは地下室の事でありますが・住居とも仕事場ともなります・竇窖とは室内の井で・そこに物品を備蔵します・小屯村での十年間の發掘——それも一小部分に過ぎませんが——で總じて版築の跡が五十許りと・復穴竇窖六一七を見出しました・當時の宮寝中の建築物の複雑な事が之でよく分りました。各版築の附近には必ず穴窖があって・甲骨文字は大部分その穴窖の中から出たものですか・その埋蔵の状況は之を四つに分ける事ができます・

① 存儲：　存儲とは意識的な保存備蔵を云ひます。例へば第一次發掘の第九坑は一、二五期を含み・第三次發掘の大連坑は一二三五期のものを包含してゐます・此の両坑は確かに武丁の時には備蔵に用いており・祖庚・祖甲になっても引き續き使用してゐます・その後此の坑に備蔵しない王もありましたが・帝乙帝辛の時に至り又ト辞を備蔵いたしました・ために一二五期の甲骨文字が同じ坑から出て來る事が可能だったわけです。この第九坑・大連坑は何れも復穴でありますが・共に竇窖もあって・甲骨文字はその中に備蔵してゐたものがあります・竇窖の中には復穴中になく・直接地面を穿って作った竇窖もあります・例へば・第四次發掘のE十六坑等は一個の圓井で・竇と呼ぶべきものであり・井中には只一二期のト辞が在るのみであります。この坑は深さ十米で水面に達し・二米以下は砂ばかりでありますから・第二期の祖甲の時に此の竇は陥没して・癈て、用ゐられなくなったのでありませう。そう云う次第で當時の備蔵物が今日まで保存せられたのであります・ことさらに作爲的に備蔵した事が顯かにわかるのは上節に擧げました「征人方」のト辞であります・遠路はるばる持ち歸るとは・保存せんがためでなくして何んでありませう？小屯村中では三四期のト辞が一個處に集中し・侯家荘では六つの腹甲と背甲が半分・一塊になって地下室内に置かれてゐますが或は小屯に持ち歸らんとして存置したまゝ忘れたのかもわかりません・

② 埋蔵：　この種のものは甚だ少い様であります。第十三次の発掘には一萬七千餘片の龜版（乙編に入れました）をH一二七灰土坑中から得ました・石璋如君の記する所に據りますと・H一二七坑の堆積は三層に分つ事ができ・上層は灰土・下層は緑灰土で中間の層に・灰土の堆積中に龜甲が雑ってゐるそうであります・それで地面から一米七十糎で坑口が現われ・坑口下五十糎で龜版が現はれ・二米十糎で止まりますので・龜甲文字の厚さは・大凡一米六十糎になります・此の坑は復穴中の一竇窖で・その開鑿も非常に早く・初めは穀物を儲存したのですが・後癈用し・そこに龜版を埋蔵したものでせう。石君の観察に據りますと・此の坑は龜版を北側から入れたものらしく・同時に一組の人骨も出てゐるが・この人間は龜甲を拿ってゐた人間らしいとの事ですが・龜版が埋没したので・その管理人も殉難したのでせう。こう云う事は別の坑には見られない事です。

③ 散佚：　多くの復穴内・或は版築中或は灰土中に偶然残片かの甲骨文字を發見しますが・それ等は皆此の中に入る可きものです・當時・貞卜を刻した甲骨が非常に多かった爲に・運搬に際し・至る所に遺落する事は免れ得ない。但此等は数も少く・存儲や埋蔵等とは比較になりません。例へば第六次發掘中・ある地下室の一復穴の土階の旁から・表面に第五期のト辞を有する一骨版が出て來ましたが・恐らく知らぬ間に遺失したものでありませう。小さな甲骨片が灰土中に混入してしまった後に新たに宮室を建築するとそのために版築層中に入ってしまひます一体暗夜の星の如くに零細に出土する甲骨文字は皆當時偶然散佚したものであると云って良いでせう。

④ 癈棄：　この種のものはそれ程多くありませんが・次の様なものが有ります・即ちある骨版を文字のある部分を取り去って別のものに作り上げたり・時には使ひ古しの骨版を書契の練習の用に供したりしたもの・例へば多くの干支表等です・本編中では拓本番号2692，2693，2880，2881 の四つは・もとは一枚の大胛骨でそれが二つに裂け・表裏共文字のあるものですが・表面では只十組のト兆を伴ってゐるト辞だけが・第三期の貞人狄の記したもので・他の四十は初心者が貞人狄のト辞をまねて書いたもので・習字の用途に供したものであります・かゝるものは「癈棄」と云はんよりは「廃物利用」と云った方が良いかも知れません。　以上の四つは・只私個人の極く大さっぱな印象であります。その詳細な研究は將來「甲骨文字與殷墟遺址」なる一文を書く時迄待たねばなりません。

第四は・遺址遺物の年代を確証できる事であります。殷墟全部の遺址中である建築物がどの王の時代に相當するかを確定するに足る最も良い標準は・それに伴って出て來る甲骨文字であります・多くの版築中に夾雑してゐる零細なト辞のかけらはどんなに小さくても・夫々の最大の効用を發揮できます・たとえ残餘の一字そこいらの干支字でも甲乙己卯等を除けば皆字形からその年代を判定できるのでありまして・その外の字は言うには及びません・例へば上節に擧げましたE十六坑は・第二期の祖甲の時陥没して癈棄せられたものでありますが・E二十一坑からは第五期「征人方」ト旬の辞が出た事があり・（へ4.2.0025）同時に出土のものも皆帝辛の時の物で・一つの鯨の背椎骨・象の下顎骨が一・鹿頭刻辞一等何れも多かれ少かれ東夷と関聯のあるものであります。それに此の坑から出ました陶器その他の遺物は・亦E十六坑とは確然と区別がありますからE十六坑は祖甲以前のものであり・E二十一坑は帝辛時代のものである事が証明出來るのでありまして・両坑の年代は相距たる事百年以上・文物の制作にも相當の変化を來してゐます・又中間にある黄土台基はその北側が復穴になっており穴中に竇窖が有って之が大連坑でありますが・武丁から帝辛までのト辞を包含してゐますから・この黄土台基の建築は相當に早い事が推測できます。何となればその後南方に擴張した建築物は皆これを中心にしてゐますから・又・小屯村中や侯家荘の南にある建築物は地上地下共第三期廩辛康丁の時よりも溯る事は出來ませんが・これも甲骨文字の証明する所であります。此等は皆・本編の資料の考古學への貢献で・その事は總報告中に詳しく檢討するつもりでゐます。

（筆者は東大文學部助手）

（原載《甲骨學》第二號，一九五二年）

新瓶舊酒

董作賓

當代名學家陳寅恪氏，審查馮友蘭博士的中國哲學史，在報告書中，陳述他自己的意見之後說：「殆所謂『以新瓶而裝舊酒，』誠知舊酒味酸而莫肯售，始注於新瓶之底，以求一嘗，可乎？」把馮氏書比「新瓶」，自己意見比「舊酒」，有點客氣。我現在借來比「集古文字，作新篇章」，這也是新瓶裝了舊酒。

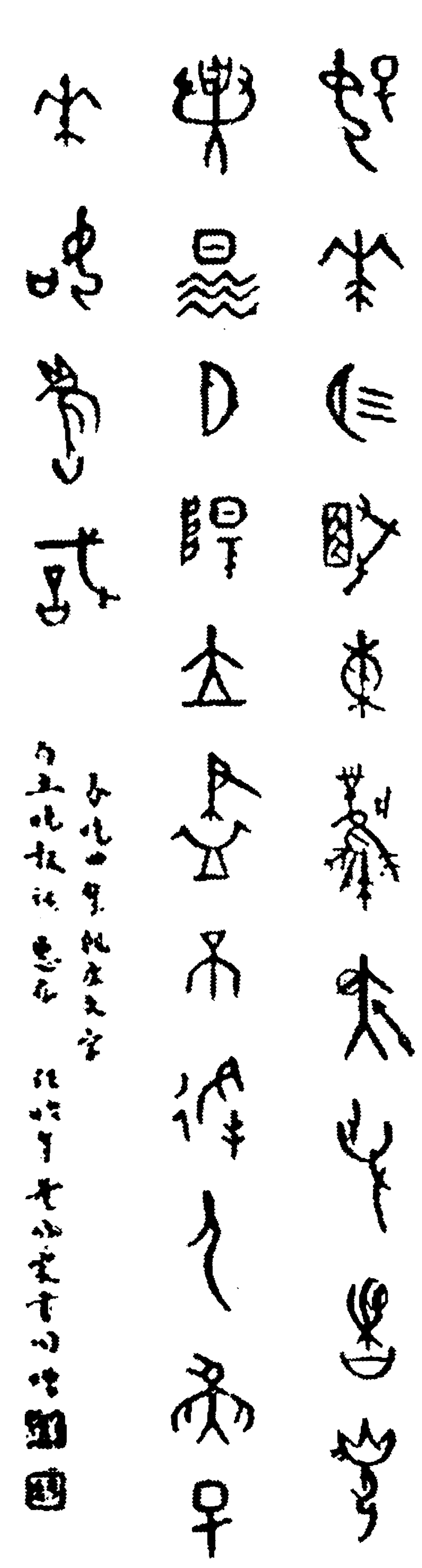
世界上一切文字的起源，都是圖畫，書畫同源，在中國尤其是幾千年來一脈相傳。書法的美，是中國文字的特色，欣賞書法，也是中國人才有這種眼福，才有這種修養。從古至今，從甲骨、金文、篆、隸到行、草、楷書，歷代都有大書家，他們的工夫精到，下筆有神，各個表現出特殊的風格和趣味，這正是「可爲知者道，難與俗人言。」文字逾古，距離圖畫也逾近，所以人們都喜歡篆書。五十年前，安陽殷墟出土了殷商甲骨文字，這是篆的最古者，有許多象形字，簡直是圖畫，眞可稱「雅俗共賞」，所以尤爲人們所愛好。甲骨卜辭的文法古奧，原文不易瞭解，於是爲了供應一般社會的欣賞，把舊酒裝入新瓶，把甲骨字集成聯語詩文，寫成屏幅楹聯，以便觀覽。最早的是羅振玉（叔言）的殷墟文字集聯，曾經印爲專書。以後有章鈺（式之）、高德馨（香遠）、王季烈（君九）諸人的集聯，四家又合印爲一冊，共有四百餘付，名曰集殷虛文字楹聯彙編。此外還有丁輔之（鶴廬）的集聯、集詩和觀水游山集，簡琴齋的集古詩句，錫山秦氏的集頌、集聯，葉玉森（洪漁）的集詩，可謂洋洋大觀了。一般治古文字學者，師友中爲沈兼士、馬叔平、容希白、商錫永諸位，也都歡喜寫甲骨文送朋友。於是乎埋在地下三千多年的古董，一躍而登了大雅之堂，儼然成爲最時髦的藝術品了。就是筆者，在四川時也曾寫得宜賓紙貴。

今年六月間搬入青田街七巷十號的寄宿舍。暑假中發現了住在對門的原來是一位詩翁，國語辭典的主編者，國語速記法的發明者汪怡（一庵）先生，有一天偶然談起來，老先生到臺灣之後寫過三百多首竹枝詞，寫過一本臺灣遊草，又曾作過一種詩牌新編，因而談到用甲骨文字集詩聯的問題。老先生大爲高興，在最近兩三個月內，竟集成了聯、詩、詞三百多條。集詞是創格，甲骨雖有可識的一千多字，但一半以上是不合用的。一鼓作氣，能有如許的收穫，端的是老斲輪手。紙業公司的朋友們，見我買不到玉版宣紙，很熱心的把他們試造的出品送一些給我試用，於是乎我就大寫而特寫。現在隨便舉出兩篇汪一庵先生集甲骨字的詩詞，介紹在這里：

一、幽人謝車馬，遊子畏風塵，相對宜長飲，花前盡一尊，

二、依依朝日上牀初，長對幽花酒一壺，爲問歸來新燕子，可猶省識舊人無？

三、好花易謝東風疾，爭（怎）春光。今異昔？夕陽立盡不逢人，燕子歸來如舊識。



索性把「春曉曲」寫一幅（參閱插圖），送給自立晚報社，說不定這一瓶酒，可以換來一版義務廣告。

（原載《董作賓先生全集》乙編第四冊，臺北藝文印書館，一九七七年）

『小屯』

自序（第二）

董作賓

新開高明 譯

ここで、更に歩を進め、然らば、現在私は甲骨文字を如何に見てゐるかに就いてお話しませう。私が北京大學研究所國學門で學んでゐました時から甲骨の中に踏み込んで、今日でもう二十五年を越えますが、私の甲骨文字に対しますを考へは、時と共に變革を加へて參りました。此の事は、此の學問に從事する他の多くの人々と同じかもわかりません。二十年前には只神秘の符と見ただけでしたが、十年前には一の宝庫と見るに至りました。今日になって見ますと、又それとはいささか異るのであります。郭沫若氏はその「古代社會研究」を自己批判して次の様に言ってゐます。「其の中には多くの未熟な甚しきに至ってはまちがった見方もあり、現在に至るも尚相當深刻な影響を殘してゐると。又「ある友人は未だに私の誤りを踏襲し、或る人は私の誤った引用をそのまま用ゐて、別の誤った結論を出すに至った。かかるわけで古代の眞相に關し、幾多の新たな混乱を惹起した」と。これはもとより單に甲骨文字の部面だけを指したのではありませんが、私共の過去に於けるト辭研究もかくの如くでないとは云へません。十年前の事ですが、私は「册六」と云ふのを誤解して、甲骨は殷代の簡册なりと考へましたが、この失敗は「卓頤」以上でした。私共は、現在でも勿論慎重に編纂を重ねなければなりませんが「後之視今、亦猶今之視昔」の例にもあります様に、現在誤ってないか否かは又非常に斷じ難いのであります。譬へば、私自身は「殷曆譜」を書いた方法はま違ってゐないと思ってゐますが、人有ってこの方法は完全に誤りであると云ふ。假にしてももっと適切な方法を有してゐますならば「南無阿彌陀佛、誠善哉！我誤てり我誤てり！」と自分の誤りを認め、その人に感謝すべきでありますが、もしその人にして他のより妥當な方法を呈示してくれるのでなければ、私としましても自分の考へに「固執」する事を許していただかねばなりません。學問は眞理探究がその生命でありますが、郭氏の如く、誤を認めるに勇なる事は又見上げた事としなければなりません。私は今ここに甲骨文字を如何に見てゐるかを記し、その是非

第一．甲骨文字は殷代文化を代表する事はできません。ここに「代表」と言ひますのは、一般には殷代文化は、只甲骨文字に據ってのみ探り得るものであり、甲骨文字中の記載だけが殷代文化そのものであると言ふ考へ方を指します。然し之は余り誇張った望で、不可能な企てであります。私達は甲骨文の性質と内容を充分明らめて適當な評價を與へる事が必要で、過小評價するにも及びませんが、又余り買ひ被ってもならないと思ひます。かくてこそ殷代文化の眞の姿が如何なるものであったかを推測できるのであります。

①甲骨文字は單に殷代の文字を應用したものの一種で、専ら貞卜の事だけを記した文字であって、幾分「周易」の卦爻辭に似たもの、又幾分、現今の神閣のオミクジに類するものであります。私共は殷代には文字が廣く使用されてゐた事を知ってゐます。例へば、各種の器物中に書かれた文字や刻された文字等で白色陶器、灰陶、骨角器、玉器、石器等には常に短文や人名が記してあり、多くの銅器上には又常に数十字の刻辭があるのであります、甲骨文字も存されてゐるわけです。殷代には文字の使用は、大部分は恐らく典册上であったでありませうが、惜しい事にはこれらの典册は、疾うに亡佚してしまいました。然し甲骨文字中でもいくらか典册の面影を窺う事ができます。例へば「王若曰云云」は、當時は册命文の言に於ける一種の常套語で、もとはといへば同册上に書いた文章なのですが、時に史官が骨版中に書いたと思はれます。これは本編の拓本1504号に見える所で、文武丁の時の人の書いたものです。祖甲の時に、ある史官が二ヶ月の日曆を刻しました。これは正月甲子から二月癸亥に至るもので、私は前に「殷曆譜朔譜一」（「後」下一、5）に入れておきました。漢代の曆簡を見ますと、そこに記されてゐますことは、月名と毎日の干支でありますから、それから推して、これは殷代の曆譜の寫しではないかと想像されます。私共は、帝乙、帝辛の時に五種の祀典の挙行されてゐた事を知ってゐます。こそかし最初だった事と思ひますが、祭の開始にあたり、「工典」と稱するある種の儀が行はれます。その意味は元祖、元妣の譜牒を献上すると言ふ事です。それで

この典冊上には、某日に某の祀を以て某人を祀ると云ふ事が記してあります。私共も嘗て、二個の典冊の寫しを見つけました。一つは甲戌の日、上甲を翌祭す、から始まり、一つは甲寅の日から始まります。（「粋一二3、二4」説見「殷曆譜祀譜」）武帝の時代にも、絶えず「祉鼓爯冊」なる記録が出て參ります が、これ等は皆、殷代に典冊のあった事の證據であります。かくて私達は、甲骨文字は單に甲骨上に寫刻した卜辭の一種で殷代の文字使用から言へば一小部分に過ぎぬ事を知りました。從って余り過大評價はできません。

②殷代の普通の文章のきまりは、下行、そして左行で、現在と變りは有りません。比較的長い多くの銘刻からその事は證明されます。私共が發掘して得ました 本編の拓本3939—3942の牛頭骨刻辭一、鹿頭骨刻辭二 小臣系石殷銘文一（佚存一中の骨器銘刻三、部朗度（[illegible]）博物館藏の鼎善銘刻一方舞兩藏小臣龍玉器一、以上の數頭、骨器、玉器石器上の文、全部で九件ですが、皆下行そして左行で一として右行のものはありません。銅器の銘文は更に澤山有りますが、一の例外もないのであります。

これが殷代の普通の文章で見る事ができませんか、典冊もきっとこうだったらうと思ひます。所が甲骨文字には、それも極く簡單なものに限り、左行の外に右行のものも澤山有ります。この原因は對稱と美觀の爲であります。卜辭は卜兆に伴ふもので、卜兆は腹甲上、中線の左右に對稱になるものでありますから、そこで文も對稱である事が要求され、遂に左行のものあり、右行のもの有りと云ふ事になったのであります。龜の背甲は左右に二分しますが、牛の胛骨ももとも左右の二骨がありますから、その關係も腹甲と同じく、卜兆を左右に分ち、文章も左右行に分つのです。これは相對の美の爲で、碑墨を塗って美觀を求める心理と同じかと思ひます。又文章が對稱になる爲に、文字にも對稱を求める樣になって「反文」と云ふものが出來て來たのであります。問題は至極簡單ですから、改めて甲骨の文章を研究するまでの事はないでせう。

③貞卜の事項には一定のものは有りません。勿論これは、卜旬とか卜夕等の慣例の事を除いて云ふ事です。ここで私は、先づ新派舊派の關係をお話しなければなりません。元來殷代の王朝の禮制には、新舊兩派の別がありまして、舊派は成規を篤く守り、古制に遵ふもので、武丁をその代表といたします。之に對し新派は制度を改革し、迷信を除去するもので祖甲を以てその代表といたします。然しこの兩派は又四期に分つ事ができまして、第一期は舊派で盤庚が殷を遷してから、小辛・小乙・武丁・祖庚の三世五王を經ますが、武丁以前はそんなにはっきりしてゐません。第二期は新派で祖甲の創始にかかり、廩辛・康丁と二世三王を經ます。第三期は又舊派で武乙・文武丁父子であります。第四期は再び新派で帝乙・帝辛父子です。この四期の新舊兩派の更迭起伏は、なかなか趣味深い問題であります。兩派の大別に就きましては「殷曆譜」上編卷一で説明した事がありますが、今その項目を擧げて見ますと

(1)祀典之異　(2)曆法之異　(3)文字之異

(4)卜事之異

になります。ここでは只「卜事之異」だけをお話してみませう。祭祀・征伐・田狩・游觀をトしたり、卜旬・卜夕等の事は、新舊兩派共通した事で、そこで異なるのは祭祀の典禮・征伐の方國・田遊の地方卜夕・卜旬の文章及び附記の事項等ですが、行止をトして毎日の行程を記したりする事は新派だけに有る事で、卜告・卜䝴・卜旬、卜求年・受年、卜ヘ或は記載一日月食・卜夢・生育・疾病・有子・死亡・求雨・求啓等の事は只舊派だけに出て來て、新派には極く稀な事であります。この事から私共は舊派の迷信は相當根強く、新派は多くの迷信を打破してゐる事を知る事が出來ます。例へば、王が夢見たとか王妃が妊娠或は分娩したとか、王子の疾病・死亡等の事には新派はトに問うたりはしませんし、天帝に向って、雨や年や啓を求めたりもいたしません。これ等は皆兩派の人々の人事と自然界の現象に對する觀念が同じでない事を表明してゐます。之に反し・舊派はト貞の事項が多い爲に、私達に多くの史實を留めてゐてくれますし、武丁や文武丁が好んで王后の妊娠・出產や王子の疾病等の事をトしてみますので、私共に彼等の婦・子の名を多く知らせてくれます。ですが武丁が多婦多子である事がわかったからと言って、武丁一人だけ斯の如くであったとも、武丁が始めて多妻制を實行したとも言へないのであります。新派が同樣に多婦多子ではなかった、と云へない事は極めて明かな事で、只「不百而已矣」に過ぎません、かく兩派の卜事の相異を知ったわけですが、私達は舊派の卜事に対し、これが殷代一般の現象なのであって、それがたまたま遺留したまでで、決してこれが一王一時代の特殊現象でない事を認めなければなりません。

第二、甲骨文字は原始文字ではありません。これは何もくどくどとあげつらふ迄もない事ですが、以前には少し誤った考へがあって、現在尚それを安け襲いでゐる人が少くない樣です。例へば殷代を文化の開始とし、文字は殷代に創られたものであるとするのがあれでありまして、或る人は、中國文化は殷代に誕生したと云ふ。又多くの歷史書は極端にも殷代以前には敢て言及せず、まるで甲骨文字以外の一切のものは典籍も信ずるに足りないとし、堯・舜・禹等は皆神話中の人物に過ぎないと考へてゐる樣であります。私共の現在の考へでは、甲骨文字はもう已に繪畫の域を脱し、一種の符號になってゐて、一番もとの繪畫文字から距たること甚だ遠いと考へてみます。甲骨文字は殷代後期二百七十三年の間にもそれ程顯著ではありませんが漸次變化してゐるのでありますから、殷代前期更に殷代以前にも必ずや長い間が變遷進化を經てゐるだらうと云ふ事は想像に難くありません。今三項に分けてそれを説明して見ませう。

①世界で創り出された文字は皆その最初は繪畫文字であります。遠くはエジプトの繪畫文字ですが、シカゴ大學東方學院のエジプト學專門家の研究に據りますと、西曆前一千五百年から五百年までのエジプト文字は依然手のこんだ繪畫文字だそうで、只書寫體に幾分簡單化の傾向が見られるさうであります。近くは雲南 麗江の麽些文字も繪畫文字で大凡、宋代に創られ現在に到るも依然象形文字の段階で、符號にまで變化してゐるものはありません。私共が甲骨文字を見ますと 象形のものもありますけれど繪畫を距ろ事已に甚だ遠いのであります。例へば動物の字であります。馬・象・虎・兔・犬・豕字の類・會意字であります宿・疾・死字の類は皆横から竪に變化してゐるもので、エジプト文字や麽些文字にはこうした事はありません。この事は私達の文字が、殷代にはもう相當變遷進化してゐて、一種の符號となってしまった爲に動物字が頭上尾下で四足が空に躍ってゐたり、寢臺の病人の牀、死者の棺が直立してゐたりしても一向差支へがないのであります。多くの形象文字は假借されて別の言葉の符號になりますが、例へば鳳が風に、荊が世に、骨が禍に、鼎が問に借用されると云った工合で、校學に暇がありません。而して二十二個の干支字も皆假借して日名を記する符號に使ったものなのです。私共がエジプト文字や麽些文字を見ますと、それ等が幾つもの繪である事は一目瞭然でありますが、甲骨文字を見ますと若干の例外を除けば、容易にその意味を解しかねるものばかりで、私共の文字が殷代に至るまでに悠久な歷史を有する事が、これを以ても充分證明されると思ひます。

②殷代は文字創造の時代ではありませんから、甲骨文字に基づいて、殷代社會の背景を研究する事はできません。譬へば、遠い昔に字の造られた時には知の字は男の俘虜が手を背に縛られてゐる字であり文の字は、女の俘虜が兩手を前に縛られてゐる字でありまして、殷代の男女囚犯の刑具は尚この種の古風を保存してゐます。（陶俑を御覽下さい）然し殷代には知字は若字と同樣に使はれてゐて、もう俘虜の意はありません。又文字は殷代には地位が非常に王后の生時には封地があり、死後には王と同等の祭祀を受けてゐる程ですから、文が皆俘虜だとは言へないのであります。同樣に字形から「民」は目を刺きつぶしてゐるのであり、「臣」は首を垂れて命を聽いてゐるのだから、臣と民とは奴隷で、從って殷代の臣民も奴隷で、殷代社會は奴隷社会なりと斷ずる事はできません。これは大いに問題のある所で、臣民兩字の創られた當時果してそんな意味であったかどうか、又そうであったとしても假借を經てゐるか、ゐないか？而も殷代の人民は「人」とも「衆」とも稱され、「衆」の字は、土地の下に三人人がゐる形であるとすればどこに奴隷の痕跡が有るでありませうか。

③私共の原始的な繪畫文字は殷代でもまだ使用してゐるのですが、却って人の注意する所となっておりません。それは殷代銅器の銘文中の象形文字で「文字畫」とも稱するものであります。私共は漢代からずっと今日まで使用してゐるのは隸書で、印璽には篆文を用ひる事を知ってゐますが、篆文は私共からすれば古字で、一種の美術字であります。之と同じ事で繪畫文字は殷代にあってはやはり彼等の古

字であり、美術字であったのです。幾つかの銅器は銘文が模様の中にまじってゐますが　良く見ますと図繪であります。殷代人は美術を愛好し、銅器全面を掩う精緻な模様の間に幾つかの繪画文字を列みつけ文字と圖案とがうまく調和して、一層の美観を呈する様に致しました。従って私達が原始文字を探そうとしますならば只殷代の金文中からそれらの古字を探し出すより外ありません。常に見かける鳥、獣、虫、魚、更には人物の圖形等は皆殷代の古字で原始繪画文字であります。殷代の金文と甲骨文とを比較して見ますと、甲骨文は殷代の今文、金文中の繪画文字は殷代の古字である事が知られます。

第三　甲骨文字研究は現在尚初歩的段階であります。甲骨文字を研究する人はもう澤山居る事と考へてはなりません。著作のある中國及び英、米、佛、露、獨、日各國の學者は全部で一八七人あります。又研究著作がもう非常な数に達する等と考へる事も許されません。董著論文共で五百四十種です（胡厚宣君の民國三十三年の統計）：而して此等の研究は決して最後の定論でない事は、はっきり云へますし甲骨文字の研究は現在でもまだ初歩的段階で　やっと門径に入ったばかりです。私共は甲骨文字が殷代文化の一小部分に過ぎず、又見得る資料はその甲骨文字の中の一小部分、更に、理解でき、研究できるものは又その一小部分である事を知ってゐます。ですから甲骨文字研究は尚、前途遼遠と言はなければなりません。私を例に取って見ますと、私は二十五年間研究をして参りまして、その道の專門家とも称されましたが、どの甲骨の拓本を一冊開きましても至る所で壁に衝きあたり、障害に出くわすのでありまして、甚だしきは、一片の卜辞に向ひ、しばし呆然として全く何が何だかわからない事もあります。この事は私の愚かさを証明する様なもので、他の方だったらそんな事は無いかも知れません。然し、思ひますにもし今から二、三十人の人々が專ら各方面の研究を致しましたならば　三十或は五十年の後には何か手がかりを得て、正確な結論を導き出せるかもわかりません。十萬の骨片の殷代文化中の何物をも代表できぬ事は勿論でありますが、然し、これは又殷代文化が如何に偉大であるかを　そして私共の知識の如何に微々たるものであるかを示すに足るものであります、研究も依然、初歩の段階を脱しませんが、方法も亦言ひ古されたままであります。

(i)先づ第一に材料を集中し　十萬の骨片を全部一編にしなければなりません。

(ii)分派、分期、分王の方法で全資料を整理します。

(iii)すべてを綴合して復原する工夫、即ち　全資料を個々の細片から完全なものにする事。

(iv)字典、辞典、類典等の索引を作成して　各方面の研究の便をはかる。

(v)類推法の原則を應用して、瑣々たる殘滓から殷代文化を推定して行く。

と云った工合で、外の方法は一一論ずるに及びますまい。ここで説明しなければなりませんのは「何を推測（隅反）と云うか？」と云う事です。殷代文化は偉大にして、遺留せる史料はホンの一部に過ぎず大海の一滴、大倉の一粟にも等しいのですから　私達はこの得難い材料を充分に利用して、窺ひ得た極く僅かな事から殷代文化の全貌を推さなければなりません。それで孔子がこう云う事を云ってゐます「擧一隅、不以三隅反　則不復也」と、「擧一反三」が、私が取って「隅反」と言った意味なのです。試みに二つ程例を擧げてみますと、一は「聞」と言う字に就いてです。舊派の人々は、日月に食があるとこれを一種の災異と考へました。で卜旬の時に「王固曰有祟」と云へば、史官たちはどうしても、一旬中に起った不祥事を探し出して、卜旬の後に記載し王の占ひの應驗あらたかである事を證さなければならないので、時には「某某夕、月有食」と記します。時に殷都では月食が見えず　方國が「某日月食有り」と報告したとしますと、彼等は之を取上げ敷衍して「月有食、聞」と書きます。こう見て來ますと、「聞」と云う一字に過ぎませんが、それが殷代文化に關係する事の如何に大であります事か！　もともと別の處にも「王固曰、其有來聞？」とか「貞、有聞曰云云」等を見かけますが、何れも「聞」とは一種の報告、それも書面報告である事を表示してゐます。口頭報告もありますが、それは「言」と呼びます。「月有食、聞」と記したものは二ヶ所、本編の拓本1289號と、「栔」632 とにありますが、決して偶然ではないのです。以上私達は「聞」とは一種の公文方式で、方國の諸侯が王朝への書面報告である事を知って見ますと、これに聯関して問題がたくさん出て参ります。①諸侯の方國は何のために月食を報告する必要があったのか？王朝がそうする事を要求し彼等もそれに服従しなければならなかったのかどうか？　②諸侯の方國はどの様にして月食を知り得たか、專門家がゐて測候するのか否か？　③王朝は方國の月食報告を求めてどうするのか？　專ら災象を記録する爲なのか、それとも　それによって曆の朔望を證する爲なのか？　④若し月食に據り、曆法を校正するとすれば、王朝には既に「觀象授時」を司る專官があったのか否か？　⑤王朝の命令を諸侯が服從してゐるとすれば、王朝の中央集權はもう相當強大ではないのか？　⑥「漢書五行志」は日食に「史官不見、郡國以聞」と云った類の事を記す事が多いが、この様な地方が中央への日月食報告の方法がどうして上下一千年以上にもわたって軌を一にしてゐるか？ずっと絶える事なく承け繼がれてゐる制度なのかどうか？　若し然らずとするならばどうしてこの種の公文をすべて「聞」と呼びなすのか？　と云った工合で、僅か一文字でざっと通り過ぎれば何の関係もない事でありますが、良く考察を加へて見ますと幾多の問題がそこから引き出せるのであります。　もう一つの例は、ある日數についてであります。私共は十三次の發掘で一亀背甲の殘片を得ましたが、それは只一個の卜辞の下半分だけを殘してゐて、「〔上缺〕行坒、五百四旬七日至丁亥、从。在六月」と云うのですが、この中の「五百四旬七日」が非常に問題になるのです。これは文武丁時代の卜辞で、舊派の紀日法を用ひてゐますが、武丁の時とは多少異ります。武丁の時にはトする日も計算に入れますが、文武丁の時には入れません。ですから此の片の日數はトする日を計算に入れると548日となります。丁亥から上に548日溯ると庚辰になります。即ち此の事をト問した日は庚辰にあたるわけで。庚辰以後547日目が丁亥なのです548日と云う日はどう云う日であるかと云ひますと、之は古四分暦の一年半の歲實です。四分暦の一年は365¼日即ち、365.25日で、半年は182日余、即ち182.625日です。この兩數を加へますと、365.25+182.625＝547.875日、切り上げて整數にしますと正に548日になります。整数と云ふものは勝手にどうにでもなるものではありませんし、始日を計へない方法は文武丁時代の別のト辞中にその證據があります。僅か一日ですが、ゆるがせにはできません。更に「行坒」を見ると、これは耕田と關係があり、「星」を見ると、これは日至の事で、冬至、夏至は、古代には均しく「日至」と稱してゐるが、又省略して「至」と論ずる事ができる様です。この片はもともと「五百四旬七日、日至丁亥」とすべきを、一の「日」字を省いたものでせう。又再に「在六月」を見ますと殷代は建丑を以て正月とし冬至は建子の月にありますが、これは殷代の十二月で夏至は建午の月にあって正に殷代の六月になります。私は嘗て「殷曆譜」中で、これらの多くの問題を論じましたから、詳しくは「日至譜、二」を御覧下さい。ここでは一々申し述べる事は省きます。胡適之先生は嘗て私共に指針を示されまして、學問は須らく「大胆假設、小心求證」なるべしと申されました。私は　細心の用意をもって甲骨文字に書證を求めて、微々たる成果を上げ得たに過ぎません。そこで大胆にこれらの多くの問題を假設して見ましたが、或は余りに大膽に過ごると非難されるかも知れません。私はここで只二つの「隅反研究法」の例を提出したに過ぎませんがもし此の方法を用ひないとしますならば、此の上、甲骨文字の研究をするには及ばないと考へます。甲骨文字は、どんなに見積っても殷代文化の中のある一部分を告げるに過ぎません。即ち四角形の一隅に過ぎないのですから、その餘の三隅はどうしても皆さん自身が考へ出さなければならないのです。

甚だ勝手な言ひ方かも存じませんが　幸ひにして甲編圖版がまだ手許になくて、こんな長い序文が書けます事は洵に欣快に耐へない所であります。元來秋の三ヶ月は、私は講義がなく、休暇中は普段話をする機會等滅多にありませんので、夏鼐先生が私にこんな好題目をお與へ下さいましては、勢い大いに論ずる事になってしまった様なわけでして、兼ねて國語の練習をして見た次第です。讀者の皆様は或は私のたどたどしさに嫌氣を催されたかとも思ひます。先づはこれにて筆を止めませう。

最後に私は、本書の出版にあたりまして、所長の傅斯年先生及び親しく發掘にあたられた、李濟、梁思永、郭寶鈞、吳金鼎諸先生並びに石璋如、劉燿、李光宇、尹煥章、王湘の諸君に感謝の意を表はさないわけには參りません。又細心の注意を以て拓本を取られました、魏善臣君、王文林君、剪貼のお手傳ひをして下さった宋筱宸女士にも、併せて心から謝

意を捧げます。利委燕湯平文士の絶えざる激勵にも亦、衷心感謝致す次第であります。

民國三十六年十二月十八日
米國シカゴ大學東方學院に於いて董作賓序す。
（譯者　東大文學部中哲研究室助手）

（原載《甲骨學》第三號，一九五四年）

甲骨学會成立の經緯

山田勝美

昨年の九月下旬、京都大學で第二回日本中國學會が開催され、その終了後の懇親會の席上、池田（東大）、水澤（教大）、守屋（同）の三氏や小生の間に甲骨文研究の全國的連絡の會を作り、相互の研究成果の發表や資料の交換を計つてはといふ話が持ち上り、偶々座を移して話の中に這入つて來られた加藤先生にその旨を申上げたところ、先生も大いに賛成の意を表して下さつた。といふのは、その時の研究發表中、島氏（弘大）や池田氏のものは、甲骨文に關聯を持つたもので、貝塚博士も會場に現れて熱心に討議に加つて居られた。又これよりさき同博士の力作「中國古代史學の發展」が刊行されるや、我國に於ける新方面の研究の前途に光明を投ぜられた感あり、一方斯文會講堂に於ける加藤先生の「漢字ノ起原」をテキストとする契金文に基く漢字研究の説文會は毎回各方面からの聽講者を多數集めつゝあり、これ等が文字研究に對する關心をそゝつてゐたといふ事情も與つて大いに力があつたのである。尤もかゝる氣運は既に早くから釀成されてゐたのである。即ちこの年の春水澤氏は甲骨學關係資料調査の爲全國各地を歷遊され、（「契學著作分類年表」昭和廿五・六・一五東京文理大漢文學會發表は即ちこの時の報告であるが極めて小部數しか印刷せられなかつた爲その後各方面からの熱心な要求に應ずる事が出來ず、内容を增訂し索引を附して契學綜覽と改題して本誌に連載して頂くことになつてゐる。）その際京都大學人文科學研究所に於て貝塚茂樹博士により當研究所に於ける多大の研究の便宜を受け、更に廣島大學に於ては池田末利氏、弘前大學に於ては島邦男氏、信州大學の市川本太郎氏、香川大學藤原茂氏など各地方在住の諸氏と歡談する每に、斯の方面多彩な研究熱とその[illegible]コースを教へられ、どうしても全國的に一本の綜合機關の下に研究を進めなければならぬと言ふ結論に達したのであつた。かくして七、八月、更に水澤氏は再度關西方面に南下、京大人文科學研究所に於て、貝塚茂樹博士や平岡武夫氏などとその下相談を行ふ一方東京及各地方の有志等とも連絡をとる等、かくの如くして各方面に於て學會結成への意欲は強くなる勢にある時偶々全國の中國學者がこの中國學會の總會を目指して參集したのは正に好機と言ふべきであらう。

歸京後水澤氏の奔走によつて話は次第に具体化し、會名は「甲骨研究會」テキストは吳其昌の殷虛書契解詁（文哲季刊收載）が手頃だらうとのことで、それに決定、早速プリントの用意にかゝり、同時に趣旨を印刷して知合の間に參加方勸誘の葉書を發送した。話が前後したが場所は參考書の便宜もあるので東大中哲文研究室を拜借することにし、日時は第一、第三水曜日の午後三時よりの月二回といふことになつた。勿論加藤先生の御指導で、會員がプリントを輪讀し、隨時御説明を御願ひするといふ立前であつた。

さて愈々フタを開けて見ると相當の反響があり、地方からはプリントだけでも是非頒けて貰ひたいといふ様な要望も二、三あり、又考古學教室の佐藤武敏氏（現市立大阪大）や篆刻家の小林庸浩氏など変つた顔振れも見え、第一回は昨年十一月二十二日に予定の如く中哲文研究室で催され、確か十三、四名集つたと思ふ。その後第二回を十一月二十九日、第三回を十二月十三日に持ち、部屋の都合で考古學研究室を拜借したことなどもあつたが、ともかく人數も大体十名前後を計え、曲りなりにも会は発展の方向へ進んで行つた。越へて昭和二十六年一月二十四日、折から所用の爲御上京中の貝塚博士を迎へて、赤門前白十字に於て第四回目の会を新年懇親の意もこめて開き、加藤先生以下会員二十名近く出席、貝塚博士から御研究の一端を伺つた。この時常盤敏之助氏から、新著の「大陸雜藁」を始めて示され、董作賓氏やその他の甲骨關係の論文の收載されてゐるのを見て、台灣學界の様子を片鱗ながらも窺ふことが出來た。（もつとも私はさる七月來日早々の徐復觀氏に面談の際聞いた所によると中國學界の主流は必ずしも甲骨文研究のみではなく、北京に在つて中共政權に屈しない熊十力氏一派の哲學は特に陽明學と佛學とを融合した思想的立場に立つて、所謂經世致用を説く流もあるとのことである。）その後二月下旬には貝塚博士の再度の御上京を機として、谷中にある故中村不折氏の書道博物館に集まり、收藏中の甲骨の現物につき種々御説明を頂いたこともある。この時は雨中にも拘らず会員多數出席し、極めて有意義な見學であつた。

その後会は順調に進んで行つたが、四月台佐藤氏が大阪へ榮轉され、そのもたらす所の報により、京都にても同趣旨のもとに既に会が発足し、やり方は異るが、仲々盛会とのことを聞き學界の爲め大に慶賀した次第である。東京では去る六月末で会を持つこと十四回、去る九月十九日の会を以て文哲季刊第三卷第二號の二二一頁から二六八頁に殷虛書契解詁を終へ、第二冊目第三號に入り第十六片解詁をよみ終へた。最初は朱芳圃の甲骨學文字編の補遺の如きものを行く行くは作るつもりで、諸家の當否を判別する予定であつたが、現在はまだそれまでに到つて居らない。然し会は一回の次は相當進步の跡著しいものがある様に見うけられる。

抑々甲骨學は、我が林泰輔博士が商周遺文會編し「龜甲獸骨文字」二卷を出した當初に於ては、中國に比して決して劣らぬ位の業績を擧げて居られたのに、その後繼いで之を研究する者なく、徒らに一部好事家の手にゆだねられた爲に、遂に今日の如き立ち遅れを招來したのである。中國に於ては對日戰爭中の悪條件をも克服して「小屯」三冊を刊行し、その釋文は旣に刊行を待つばかりになつて居り、その考釋は胡厚宣氏（齊魯大學）に委囑されてゐるといふ。董彥堂氏の小屯甲編序文を讀めば、中國學人達の篤學さには唯々頭が下るのみか、「小屯」の三度に亘る罹災のその悉くが日本軍の手によることを思ふ時、誠にお恥の書でもあり、又申譯なくも感ずる。にも拘らず、昨年は「小屯」三冊が京都大學に寄贈され、その後本年四月中央研究院長朱家驊氏の御厚意と中國代表團の崔萬秋氏の奔走とにより、東京大學と廣島大學とに「小屯」甲編各々一冊宛が寄贈されたことは、誠に學会の爲に無上の喜である。これこそ戰後中日兩國を文化的に堅く結んだ太い絆の一本であると思ふ。小生もその間多少斡旋の労をとつたが、早速快諾の御返事を航空便に託して來つ

て來られた朱家驊院長の御厚意を、當時沁々身にしみて感じた次第である。最近は又倉石先生の御配慮により、甲骨研究の最新の労作たる曾毅公著の「甲骨綴合編」二冊を非常な高價にも拘らず研究室で購入して下さったので、これ亦大いに利用させていたゞけると思ふ。この書については水澤氏が本誌次号の中に解説を書くことになってゐるので、就いて御一讀を乞ふことにして、とも角發足後一年に垂んとして、どうやら會も格好がつきかけた所、同氏より會の見通しがついたので、會誌を出すから何か書けとのことである。同時に水澤氏から會則を整備し、京都の方からも幹事に入ってもらひ、會名も「甲骨學會」としては上の提言があったので私も別に異議がないまゝに諒承した。私は會の成立當初より水澤氏のよき相談相手の一人とはなって來たと思ふが、面倒な事務一切は擧げて同氏に御願し、たゞたゞ會の恩惠のみを享受するだけで、それが誠に申譯なく感じてゐた。そこでせめてこの陰言ふさぎにと思って、會の成立前後の經過を概略ながら傳へる爲に、この駄文を草した次第である。將來この會が健全に育成されたならば、それは加藤・貝塚兩先生の御援助もさることながら、會員としては水澤氏の功最も大きに居ることを特記しておく。（一九五一・九・二六）

（筆者　東京大學中國哲学科研究生）

（原載《甲骨學》第一號，一九五一年）

唐蘭の『古文字學導論』

池田末利

卜辭・金文の研究が文字の本質的解明を前提とする事は勿論であるが、甲骨學五十年かゝる基礎的研究に就て科學的・客觀的法則を規定する労作の出現を見ない事は如何したものであろうか。董作賓によれば貞卜文字約三千・解讀可能のもの約一千三百餘字に過ぎない（大陸雜誌第一巻第三期四頁・學者の定説となれるものは更に少い）が、未解讀文字の多いのも一にかゝる基礎工作の缺如に原因するものと言へよう。この點から唐蘭の『古文字學導論』の如きは不完全乍ら吾々の右の要求に應ずるものとして再檢討されていゝであろう。

唐蘭字は立庵・嘉興の人・光緒二六年の生れ・その學的業績はその別著『天壤閣甲骨文存』（民國二八年刊）の序に詳かである。文字學に於ては最初說文の考訂を意圖し、漸次古文字へと進んだものの如くである。その透徹した頭腦と該博なる識見とは烈々たる學問的情熱と相挨って當時の學界に令名高く王國維の稱讚する所となってゐる（殷虚文字類編序）。文字學方面の著書・論文も四〇に垂んとしてゐるが、古器物銘學・古籀新證・鐘鼎文字研究（以上未見）殷虚文字記・全研究・天壤閣甲骨文存并考釋及論文若干の外は凡て未刊に屬する。

古文字學導論二冊は民國二四年の自刊（二〇〇部）自序によれば元來唐氏古文字學七書の一として、甲骨・金文・六國文字・秦篆を綜合した『名始』の序例に該當すべきものである。本書の企圖する所は從前の恣意的な『猜謎式』『神話的文字解釋』を一掃して、古文字學に理論と方法との科學性を與へ、文字解明の普遍的法則を樹立せんとするに在る。

然らばその普遍的法則とは何か。著者は此に答ふる前に古文字學の一般的・基礎的事項を反省する。本書の上編は即ちその一般的・前提的研究であり、下編はその方法と法則との個別的規定と其の應用である。以下一應その内容を紹介することとしよう。

先ず古文字とは近代文字との對立概念であるがその下限を小篆とする（一章・一節）。その分類に就いては從來の器物別の方法を廢し、時代と地域とから殷商系・兩周系（[illegible]）・六國系・秦系の四系統とし（一・2）、又資料としては古書・古器物があるが、後者を以て主對要とするは勿論である（一・3）、次で古器物の発見とその蒐集について漢以來の歴史が詳述せられ（一・4）、更に古文字研究が文史的に概觀せられてゐる（一・5）。

次に文字の起源とその變遷に及び（二）、一般的見地から支那言語の起源に觸れ（二・1）、又文字の始源に就ては自然發生説を持して飽迄圖形を以ての原初形態としてゐる（二・2,3）。然らば文字發展の系路如何と云ふに原始文字より近代文字への變遷過程を三分して、繪畫から象形文字までを原始期・象意文字の作成期を上古期・形聲文字の發生より完成までを近古期とする（唐氏は象形文字を一萬年以上・形聲文字でさへ三五〇〇年の歷史を持つとする。）、而して文字の分類に關しては陳腐なる六書を排し、代ふるに實物を形状する象形（名）・單一形の變化複合による象意（文）・形符に注音せる形聲（字）の三分法を以てし、字形の分化・字義の引申・字音の假借を文字發展の三原則とする（二・4）が、此の三分法は文字繪畫起源説と共に本書の骨子となってゐる。象形文字は内容的に象身・象物・象工に三分され（二・5）自然發生的なるに對して、その一部を抉取して新意義を賦與せる象意文字は人爲的である（二・6）。併し象形・象意共に圖形的であるに對し、近古形聲文字は主音要素を有する點に於て大いに趣を異にする。繪畫から注音へ——これは一大變革であるが、その窮極的原因としては一應支那語の孤立語に屬する事が考へられる。而も注音化して綴音化せざる處に支那文字の特色が見られるのであり、象意文字作成の二法則と形聲文字發生の三法則——歸納・轉注・增益——が擧げられる（二・7）。形聲文字は音符と共に意義の類別を指示する極めて完備した文字と謂へる（二・8）。又近古形聲文字と近代文字との間には構造上の差別はないが、なほ不斷に變化して本義の識別困難な記號化を續けてゐる（三・9）。

以上が上編の概略であるが、この基礎的理解の上に下編古文字解明の方法と規準とが展開する。此の點から本書の中心は寧ろ下編に存するものと見るべきである。

先づ古文字研究と方法とに就てゞあるが、研究の目的は一般に云はれる如き古代史・文化理解或は古書校勘の補助的役割に止まらず、文字学上に於ける主體的價値を認めて、言語・音韻學と共に字原研究を獨立せる科學たらしむるに在りとする。此が爲には各文字の歷史・同族文字との關係・各變異又は誤謬の法則を歸納的に詳密檢討しなければならぬ（一）。併し古文字學がかゝる學としての普遍性を有する爲には更に基礎學の準備を前提とする（二）。その一は一般文字學であって地下資料の研究にも說文は固より爾雅・方言・釋名・廣雅・玉篇・等の文獻資料を輕視せざる様警告してゐる（二・1）。その二は斯學の祖家と見るべき古器物銘學であるが、古器物銘の根本的解明の爲めには一般考古學・古器物學・古代藝術を始め、古代史學・社會史・文化史・古代地理學・古代曆學等の補助科學が必要であるが、本質的には古代文法・修辭學・古韻研究が重要と云へよう（二・2）。

是等の基礎科學を足場として古文字學の發定が可能であるが、着手すべき最初の工作は古文字の蒐集と整理とである。資料の蒐集に當って脱落・謬誤なきを期するは勿論であるが、眞僞の辨認が最も肝要であり、又整理の方法としては後述の自然分類法により各文字不同の字體を時代と地域別に排列すべきてある（三）。

古文字把握の方法として最初に必要な事は筆畫の明晰なる辨識である。と云ふのは古器物自體の損壞・拓本の不明晰等の外的制約と共に研究自身の犯す誤認が尠くないからである。文字の變化は如何に複雜であっても必ず一定の法則性を有するものであるから、かゝる誤認の責任は此を研究者自身の無理解に歸するの外ない（四・1）。そこでかゝる法則の規定が要請されるが、その第一は古文字と說文を媒介とする近代文字との照合による對照法（比較法）である。此の場合反書・倒書・左右或は上下位地交換等變例の存する事を知るべきであり、又不同の字を同字とすべきでない。又比較の限度外のものは他の方法に依らねばならぬ（四・2）。此方法の外從來用ひられた方法として文義に由る尋索法即ち推考法があるが、此も全體よりする部分の類推に止まる他律的方法であって、文字自體よりする自律的本質的解明でないから此法にも限度がある（四・3）。

古文字解說の最も基礎的な方法として、偏旁を解體檢討した後再び此を綜合する偏旁分析法がある。宋・清の金文・說文學者にも既に用ひられてゐるが

單に篆文との比較に止まる。只孫詒讓のみは資料の不足・方法上の疏謬により不完全ではあるが、此方法による可成りの成功を収めてゐる（四・４）此か適用に際して最も注意すべきは偏旁を明確にする事、次に數箇の偏旁よりなる文字に就いては各單字の歴史的變遷を注意する事である。かくて此方法によれば例へば乙の門なる事を知って[illegible]＝過、[illegible]＝稺、[illegible]＝[illegible]の三字を、又[illegible]の斤なるを知って[illegible]＝新、[illegible]＝揄、[illegible]＝斷…以下十八字を解明出來る如く、一二の偏旁によって數十字を識別出來る事となり、僅々一千字に過ぎない甲骨文も倍増の解讀を得る事となる。”さすれば從來の手工業的方法に比し正に機械工業的役割を演ずるものである（四・５）”

かくて偏旁分析法は對照法或は推考法の缺陷を補ふものであるが、なほ原始象形文字に適用困難であり、又分析の精密に比例する障碍の増加｜此は文字の非固定性に基く｜と云ふ二つの弱點を有する。仍て一文字の完全なる理解は綿密なる偏旁の分析と共にその史的變遷の考證とを必要とする（四・６）、前者は文字研究の横であり、後者はその縱を形成するものである。こて各文字の個別的史的考證となれば頗る繁雜であるが、此場合にも幾つかの共通法則が見出される。

第一に圖形文字識別の方法としては(イ)實物との比較、(ロ)簡易化せる文字との比較、(ハ)外國圖形文字との比較、(ニ)偏旁の分析－[illegible]＝莫犬＝猴の如き・(ホ)歴史的追溯－契文[illegible]を萬象名義・原本玉篇により[illegible]と解する如き－等があるが、尚ほ原始圖形文字の形聲化・書法上の改易を注意すべきである。

第二は字形變遷の法則である。字形は聲韻と共に流動變化するものであるが、各變化は無制約的でなく凡て原因を有し、同一原因下に於ては必ず同一の變化が見られる。か﹅る變化法則の樹立こそ古文字研究中最も重要な對象である。一體文字の變遷には漸進的變異と突然變化とがあるが、前者は更に上か上となる如き自然的變化と簡易・增繁の人爲的變化とに區別される。先づ簡易化現象としては(イ)原始圖形の簡易化、(ロ)篇章構成の爲の聯綴に基く圖形文字の整齊統一、(ハ)字形の一部の省去の三條が考へられる。逆に増繁化現象にも(イ)文字の整齊化に伴ふ疏𨻶の調整によるもの、(ロ)形聲文字の盛行に伴ふ偏旁の添加、(ハ)書法の藝術化に伴ふ筆畫・偏旁の增加――鳥篆は此の例の進化せるもの――の三路が存する。（簡易增繁共に一々例證してゐるが煩を避けて一切省略する。）以上は何れも漸進的變化であるが、突然變異も亦(イ)希僻或は使用率の低い文字は相似の別字に改められる――譌か龜となる如く――、(ロ)注音化した圖形文字が後に元來の圖形を省略して形聲文字となる――鳳か凡聲を加へて鳳となり鳥に从ふ凡聲となる如き――、(ハ)圖形象意文字が形聲文字に改まる場合――毌が貝に從ふ毌聲の貫となる如く――の三つの場合がある。以上の外注意部の變化があるが此は本書の範圍外とする。

第三は字形通轉の法則である。『通轉』は時間的變化であるが、『變遷』は時間に關係なく文字形式固定以前の公認せられた字形の通用である。それは亦(イ)字形全體の通用――[illegible]を[illegible]等とも書く――、(ロ)同一象形により孳乳せる偏旁の特點を失はぬ限りの通用――『人』より孳乳せる大・人・女に从ふ天＝[illegible]＝[illegible]、(ハ)類義の偏旁の通用――常・帬・幢・帙＝[illegible]・裙・褌・袟――の三類に分れる。

字形は繁雜より次第に簡易化の方向を辿るが、簡易體にも限度があるから茲に文字の混淆と錯誤が起る。そこで歴史的考證の第四として字形の混淆と錯誤とを注意すべきである。此の二者は文字の變遷過程に於ける偶然的例外的現象であるが、その原因も亦依然として前述變遷と通轉との法則の埒外に出るものではない。

第五に文字の變遷過程に於ける改革と淘汰とを注意すべきである。圖形文字の象徴化・簡易化・聲音化に伴って書寫・識別困難な字は多數滅亡してゐる。春秋以後は文字の混亂時代であり、各國文字各々その傾向を有し著しく辨識困難となっているが、秦の文字統一小篆の作成は一大改革である。そこで

第六に右の一般法則に準據するの外、各文字の個別的歴史に注意してその發生と變革とを精密に檢討すべきである。

文字の歴史的考證としては以上の六條を注意すべきであるが、此を要するに文字の識別に當っては先づ分析的に偏旁を考察し、次て綜合的にその變遷を考證すべきで、此の兩者相俟って始めて文字の本質的解明が可能といへるであろう。

字形解釋の基本原則は以上によって略々確立されたとしても、文字が字形の外、意義・聲音の二要素を包有する以上、當然字義・字音の問題が關聯的に考察されねばならぬ。依って著者は更に字義の解釋について述べる（四・７）。文字の本義（字義には本義の外に語義と詞義とがある・）とは象形・象意文字に在ってはその象る物件事象を、又形聲文字に於てはその形符から意義の一部を推定すべきである。併し字形の簡易化・誤認により本義の不明な圖形文字もあり、又引申・假借義に用ゐられて本義の湮晦せるものもある。そこで字義の探索も(イ)字形から最古の形式を見出すと共に(ロ)字音に就ては本義が失はれても孳乳せる形聲字中に保有せられ、或は本字は假借されて別義となり、本義は寧ろ聲音の近い別字に假借されてゐる場合があり、(ハ)本義の歴史がそのまゝ本義とならぬまでもなほ其處に保存された意義が一つの證據となる場合がある事を知るべきである。結局字形の十全なる辨析によって本義を知ると共に廣く文字の歴史を徵し、音・義に就てもその客觀的證左を求める事が字義解釋の必須條件である。

又古文字の聲韻の追究も極めて困難であるが古音の歴史的證據――例へば同音を導く如く――を見出す事も可能であり、又文字の假借から古音を推究する事も出來る（四・８）。

以上は古文字研究の積極的準則であるが、同時に消極的戒律が亦肝要であって著者は(イ)專門家たらんとする焦慮(ロ)前述根本諸事項の廢棄(ハ)恣意的臆測(ニ)苟且輕率(ホ)偏守固執(ヘ)雜駁紛亂を堅く禁じてゐる（四・五）。

最後に古文字學の應用（六）として古文字の分類（六・１）と簡字問題に就ての所見として新文字の創造（六・２）に及んでゐる。古文字の分類法としては六書を廢して文字の歴史を最も合理的な方法によって編次せんとする自然分類法と、古文字彙は此の分類法に基いて編纂さるべきこととを強調してゐる。又民國以來の簡字問題に就ては古文字學の立場から文字の綴音化に反對して注音文字の長所を指摘し、文字の改革に於ても右の立場から形符に注音符號を添加した獨自の新形聲文字を主張してその優點を指摘してゐる。

以上本書の内容を紹介して稍煩に亘ったが、本書を一貫するものは客觀的精神であり、古文字學の科學化である。文字學・文字學史と銘打った著書は數多く見受けるが、何れも單なる文字書法の變遷史乃至六書の解説に過ぎず、文字理解に就ての本質的研究を見ない。此の意味から本書の文字學史上に於ける價値は高く評價さるべきであろう。著者もこの點に於て聊か恃む處ありと見え『遂作導論、備立條例、蓋許君以來未有斯說、敢謂人神之作、不無艸創之勞云々』（天壤閣甲骨文序）と云ってゐる。吾々は此を以て單なる自賛と見るべきではない、と云ふのはあれ程隆盛を極めた清朝考證學に於ても、又近五十年來の契・金文研究に於ても學としての文字學の確立を見出し得ないからである。されば嚴學窘もその客觀的態度・歴史的眼光を賞讚し（讀中島竦書契淵源、考古社刊第二期）、胡樸安も古文字學の基礎を確立したものと云ってゐる（中國文字學史六一三頁）。本書の學界に與へた影響も以て知るべきである。

併し乍ら本書は著者自身言ふ所によっても明かな如く結局『導論』である。それは未開拓の分野に科學的試掘を企圖したと云ふに止まるのであって、古文字學が今後此の方向に發展させらるべきは言を俟たない。又未熟卒介に到っては獨斷を免れぬ處も尠くない――例へば上編第二章第八節に夏爲王を帝征とし、又下編第四章第六節圖形文字研究の項の『古』の解明の如き――のである。著者自身此を以て足れりとせず漸次改定を施すべき事は自序に明かであり、事實懷鉛隨錄――考古社刊第四期――・天壤閣甲骨文存自序等にもその事を述べてゐる（後書考釋二五葉に龍字に就ての前說を訂正してゐるのはその一例）吾々は總建功と共にその改訂の出現を期待してゐる（讀天壤閣甲骨文存並考釋・輔仁學誌第九卷第一期）が其後刊行の消息を聞かないのは殘念である。本書の後に公にされた殷虛文字記（二三年完稿）自然分類法による殷虛文字研究及天壤閣甲骨文存考釋等皆考證精密進に前人を凌ぎその蘊奥を竭して餘す所がない。後書の如きはト辭文字の時代的區別を顧慮した点に於て本書より更に一歩を進めたものと云へよう。甲骨學は著者の指摘する如く『雪堂先路を導き觀堂史を考し彥堂時代を區し鼎堂辭例を發した』（天壤閣序）のであるが、更に『立庵文字を解す』と云ふべきであろう。彼我交通の困難なる今日著者の動靜も杳として明かでなく、數多くの未刊書に就ても知る由もないが、吾々は著者の自愛を祈ると共に、刊行の一日も早からん事を切望して已まないものである。

筆者　廣島大學助教授

（原載《甲骨學》第二號，一九五二年）

戦後新獲甲骨集について

山田勝美

本誌第一號に佐藤氏が胡厚宣氏の近業を紹介し、その末尾に於いて胡氏の戦後新獲甲骨集につき一寸觸れて居られるが、幸にして今回その四部作の内の第二・第三に相当する戦後寧滬新獲甲骨集（摹本二冊）と戦後南北所見甲骨録（摹本三冊）とが新着したので、簡単に御紹介いたしたい。

胡氏の戦後新獲甲骨集四部作とは、戦後京津新獲甲骨集（拓本四冊・五六四二片）と十家所藏甲骨文字（拓本二冊）に前述の二集を加えたものである。胡氏の序例（南北甲骨録）によれば、京津新獲甲骨は一九四五年に氏が京津両地に於いて得た實物及び拓本五九六〇片を收めてゐるが、後に減じて五六四二片とし、一九四九年に編成したが、少しく修改を加へる必要があるので向未た付印しない、と言ってゐるが、寧滬甲骨集附録の自書目録には中國科学院より出ることになって居り、目下印刷中とあり、又南北所見甲骨録も出版を待つばかり、とあるから、後者二集もいづれは入手出来ることと思ふ。自書目録には、別に戦後平津新獲甲骨集二冊が齊魯大学國学研究所專刊として一九四六年に成都に於いて出版されたことになってゐるが、これと京津甲骨集との関係は一体どうなってゐるのか。恐らくこの二者は一部分重複してゐるものであろう。何にしても五六四二片といふ多量の甲骨が収容されてゐるといふから、その内容は注目に値する。

さて寧滬新獲甲骨集と南北所見甲骨録とは倶に昨年北京の來薫閣書店から出版されたもので、現在はたゞ拓本の摹本のみに過ぎないが、胡氏の言によれば拓本・釋文・考證及索引も引き續いて出すとのことである。寧滬甲骨集の序言（一九五一年三月の日附あり）及び述例と南北所見甲骨録の序例（一九五一年九月二十四日の日附あり）とを讀むと、中共治下に於ける甲骨学界の情況と胡氏の立場とがよく分って面白い。これらの書には沈尹默氏が題字を、魏建功氏が題簽を書いて居り、又中共では李亞農（旦丘）が甲骨学者として活躍して居るらしく、彼は最近「殷契摭佚」の續編を出して居るとか、胡厚宣氏が事毎に彼を同志李亞農と呼んでゐるのは、何だか少しくすぐったい感じがする。これらの甲骨を配列するに当って、胡氏は時代の順序を以てし、更に每期の甲骨はその性質を按じて気象・農産・祭祀・田獵・征伐・行止・災禍等々に類別してゐるのであるが、こゝで注目すべきは、董作賓の断代研究例の五期の区分に必ずしも従ってゐないことである。即ち胡氏は第一を盤庚小辛小乙武丁時期・第二を祖庚祖甲時期・第三を廩辛康丁武乙文丁時期・第四を帝乙帝辛時期とし、従來の第三・第四期の区別の立て難いのを理由として之を一期にまとめてゐることである。胡氏は云ふ。

> 甲骨断代、自王國維王襄明義士發其端、董作賓開其例、時代先後、畧可研明、惟精密辨別、尚待討究。如董氏分為五期、其三期四期、即廩辛康丁及武乙文丁時物、雖有少數可以分為兩期、或可以確知其当屬於某一王者、但絶大多數、往往類似混同、不易分辨、故今姑列為一期、改正訂補、俟之將來。（序例）

と。五期の区別については、董氏自身に既に反省があるのみならず、我が貝塚博士も亦修正意見を御持ちの様であるが、胡氏によって斯く甲骨配列上に適用されたことは、当面急遽解決すべき一つの問題として新しく提起された譯である。

その内容について一言すると、寧滬甲骨集は三巻に分けられてゐるが、その巻一・巻二には倶に骨片が大にして字も亦大なるものが多く、特に巻一の一一〇片と一一一片との如きは一骨の正反両面の摹拓で、牛胛骨中嘗て發見されたものの最大最全にして且文字の最も多い一版である。その他罕見の文字も少からず存し、「甲骨文編」を將來或は增補する必要があり、又刻字に塗朱したもの・塗墨したもの・或は同版刻字に朱墨兼塗したものがあり、更に刻に及ばず筆に大字を朱書したのみのもの（二一七・二一九片等）があるに至っては、毛筆の發明は蒙恬だなどと云ふ傳説は今や一顧だに値しなくなるであろう。

南北所見甲骨録に於いて注目すべきは、明義士舊藏甲骨文字八四七片についてである。これに関しては胡氏が序例中に詳述してゐる如く、もと數萬片あったとかいふ甲骨の一部分で、その數萬片の行方が今日杳として明かでないといふことである。事實あったものか、或は單なる傳聞に過ぎないのか、その間の消息が不明のようであるが、何はともあれ一日も早く事実の究明されることを望んでやまない。万一これら数万片の甲骨が現存するとすれば、それは甲骨學研究上実に計り知れぬ貴重な資材といふべきであろう。中共側の一宣言は明義士が持ち出したものと一図にきめこんで

> 可惜這批材料已被這位代表美帝國主義的文化强盗劫掠以去，現在連拓片都不剰了，

とまで極言してゐる。その当るや否やは暫く假すに時を以てしたい。

編輯子にせかれるまゝに匆々筆を執ったので、一二思いついた事を順序もなく書きならべたに過ぎないので、最後に片數を参考までに書きつけておく。

寧滬新獲甲骨集　三巻・一一四三片
南北所見甲骨録　一二巻・三二一九片
　輔仁大学所藏　一〇七片
　誠明文学院所藏　九一片
　上海文物管理委員會所藏　一五七片
　南京博物院所藏　四片
　無想山房舊藏　五〇九片
　明義士舊藏　八四七片
　南北師友所見甲骨録（巻一～巻二）　四七五片
　南北坊間所見甲骨録（巻一～巻五）　一〇八六片

（筆者は東大文學部研究生）

董作賓氏の甲骨文研究の一方向について

佐藤武敏

(1)

董作賓氏の甲骨文研究の代表的な著作としては周知のように「甲骨文断代研究例」「殷暦譜」（これは筆者は未見であるが、いろいろの論文に引用されてゐるので大体の輪廓だけはうかがえる）「小屯殷墟文字甲編自序」「殷虚文字乙編序」などがあげられるであろうが、これらを通じて考えうるに董氏の甲骨文研究の主要な関心は、まづ年代学的な面にむけられていたといえるであろう。そして「甲骨文断代研究例」に於て提起されたあの劃期的な研究方法から「乙編序」に於けるその訂正にいたるまでの歩みについては前号で貝塚教授がふれられたところである。ともかくこのように甲骨文の研究は次第に詳密になってきているが、董氏自身は近年さらに甲骨文を他の原始文字と比較する方法によって、甲骨文の特色を明らかにしようと試みている。その一つとして「從麼些文看甲骨文」（大陸雜誌第三巻第一二・三期・民国四十年七、八月・所載）が發表されたので、これを中心に氏の意圖するところを簡単にうかがうことにしよう。

(2)

董氏が甲骨文と比較しようとする麼些文とは、雲南省麗江縣一帯に居住し、自らは拿喜（Na-Khi）と称している麼些民族が用いている一種の文字を云う。これについてはすでに民国二年（1913 AD）にフランスのJ. Bocatが〝Les mo-so〟で紹介し、民国三十六年（1947）にはアメリカのJoseph F. Rockが〝The Ancient Na-khi Kingdom of southwest China〟という二冊からなる膨大な報告書を発表し、吾国にも到着している。中国に於けるこの方面の熱心なる研究家は李霖燦氏で、氏は民国二十八年から三十二年まで實地調査を試み、三十三年には「麼些象形文字字典」を発表しているし、最近では「論麼些族象形文字的発源地」（大陸雑誌第二巻第十二期、民国四十年六月・所載）が発表されている。董氏は李氏の「麼些象形文字字典」の序文（筆者未見）を書いたといわれ、すでにこの頃から麼些文に注目していることが知られるが、こゝで新たに両者のかなり詳細な比較を試みようとしているのである。

(3)

まず董氏の説くところを簡単にのべてみよう。一体ここで甲骨文と比較しようとする麼些文は象形文字であるが、厳密にいうと文字と圖畫の間に位するものである。この文字の発生は唐代以前に溯ることはできないし、今日なお麼些族の巫師たちに用いられているという。それで甲骨文と何らかの歴史的関係があるというのではないが、両者を比較することにより次のような重要な諸点が明らかにされるという。

(A) 麼些文から甲骨文が久しい変遷をなしていることがわかる。

麼些象形文字は前にのべたように圖畫に近いものである。これに対し、甲骨文は圖畫より進んで一種の符号となっている。たとえば、獣類に関する字を

比較すると、麽些文では虎豹鹿象牛羊馬犬豕などが詳しくえがかれており、四足なども完全にえがかれている。ところが甲骨文ではそのえがき方が粗略で特徴だけがえがかれている。また鹿の字が直立し、牛羊が正面である以外は、すべて側面がえがかれている。というのは中国の文字は横書きでなく縦書きであるためである。ともかくこのように甲骨文は一種の符号となっており、麽些文がすでに千年の歴史を有するにかかわらず、なお圖畫の段階である点から考えれば、甲骨文が符号となるにはかなり長い年月を経たにちがいないという。

(B)麽些文から甲骨文の起源が古いことがわかる。

麽些文は近一千年来の産物で、それら各字の創造は巫師の口や現代の麽些社会からその源をたづねることができるが、甲骨文があらわしているのは遠古の社会で、今日その背景のわからないのが多い。麽些文の創造は鉄器時代の晩期であり、麽些文では斧をえがいて「 」鉄の意味に用いられている。ところで甲骨文が使用されたのは銅器時代の中期であり、さらにその創造は新石器時代と考えられる。新石器時代の第一の重要なことは斧に一つの長い柄をつけたことであるが、甲骨文の「父」は手で石斧をにぎっているところで、これは旧石器時代の古いやり方であり、戊・我・戌・戈・戚などは少し進んで柄をつけた武器となっている。これらの字が造られたのは殷代でなく、これらはすべて石器だったのである。

第二に農業の発明である。甲骨文の「耤」の字はひとりの人が左足は地につけ、右足は犁端の横木を踏んでおり、この犁は耒耜のはじめの形である。麽些文では「犁」は今日なお使用され、上は犁の柄で、下は鉄の犁の刃である。作物は甲骨文には「禾」「麥」「稻」「黍」が見えるが、麽些文には「黍」がなく、「禾」「麥」「稻」はすべて下穂をえがいている。

甲骨文でとくに注意されるのは稻が原形でなく、米が器にある會意の字となっていることである。之は稻の字が造られる時代、その地方で稻をうえず、白い米粒が器につまっているのを見ただけであるからではないか。

第三に陶器の製作である。甲骨文の「鼎」「鬲」「甗」「皿」「豆」「壷」などの烹飪器、盛器は陶製となっており、麽些文の器物は鍋は銅製、盆は木製、酒罎は瓦製で今日と同様である。

次にそれぞれの字の本義が何であるかという点について麽些文はほとんど明らかであるが、甲骨文では不明なのが多い。たとえば「有」「無」の二字であるが、「有」は麽些文では一つの木盆の中に六つの小さい圓いわがえがかれ、食物が木盆にあるのをあらわしており、その音は「dzo」である。ところが甲骨文で「有」は、旧派では「㞢」にかかれるが、何うよむのか、何を象ったのかわからない。祖甲になると「又」が用いられるが、これは右手をえがいたもので、字のもとは左右の右である。次に「無」は麽些文では一つの線で光のない歳月をえがいており、音は「mɛ」である。甲骨文では「無」は「亡」とかかれるが、その本義が何で、とれにかりたものか明らかでない。また「釐」という字は甲骨文で十一種ほどのかき方があり、その本義は麥粒をわける意味のようだが、殷代では「福」と同じような意味に用いられる。このように使用されるには多年を経過したと思われるが、麽些文にはこうした例はない。また興味深いのは女の字である。これについて如と同一に見る説もあるが、殷以前の造字時代はおそらくそうではない。当時俘虜罪人奴隷は男女待遇が異なり、女は手は前にしばられ、刑具も前面で加えられるが、男は後でなされる。これは甲骨文および殷墟出土の陶俑（大陸雜誌第三巻第二期表紙にその図がのっている）などで証される。「女」とは女俘であり「如」とは男俘である。すなわちこれらの字が造られた時代は農業社会で、男権がすでに確立し、また同姓不婚の関係から女子は多くは異姓部落から俘虜としてつれられてきたもので、それで女は女俘に象った。女子は男子に服従しなければならなかったもので、当時に於ける男女の不平等がわかる。ところで殷代は女子の地位がかなり高くなっており、原始的な意味は失われている。また如も殷代には若と同じとなり、男俘の意味はなくなる。

(C)麽些文から造字の時の地理環境を明らかにすることができる。

たとえば、山は麽些文では一つの高山をえがいているのに、甲骨文は三つの山の起伏している遠景をえがいている。それで甲骨文の地理的環境は近くに山がなかったことが考えられる。このような方法で他に水、泉、田、路、石を比較すると、麽些文と甲骨文の地理環境が同じでないことがわかる。また朝暮をとってみても、麽些文は日が山から出たり、山にしずんだりすることでそれらがあらわされるが、甲骨文では平地或は林中となっている。また動植物も同じでないのが多い。

(D)麽些文から造字の時の社会背景を明らかにすることができる。

この例として鏡、手鐲、葬法の三例があげられる。鏡は甲骨文は水盆、麽些文は銅鏡がそれぞれあらわされており、手鐲は甲骨文は木興、麽些文は鉄鐲となっており、葬法は甲骨文では土葬、麽些文では火葬となっている。

(E)麽些文から造字の時の心理が同じであることがわかる。

一体象形文字は対象が同じであれば同じようにえがかれるわけである。日は圓く、人には手足があり獣には頭尾があるようにえがかれるが、この他期せずして一致するものとして、門、絲、束、梯などがとりあげられる。また王なども端坐している人の形の正面がえがかれていて、両者同様である。

(F)麽些文から造字の時の印象が異なっていることがわかる。

同じような対象でも、字を造る時の印象が全く同じだというわけにはゆかない。これについては旨、天、晰、電、雷、光、明などの例があげられる。たとえば、天は麽些文では地上を覆うものとして、大きい屋根に似たようなもの（⌒）にえがかれるが、甲骨文ではひとりの大人をえがき、それにさらに頭を加えている（天）。または大の字の上に二本を加えている（天）。或は光は麽些文では太陽の光である（ ）が、甲骨文では坐っている人の側面をえがき、その頭上の燈火が光となっている（ ）。

(4)

以上甲骨文と麽些文の比較に関する董氏の興味ある研究をきわめて簡単に紹介した。董氏はつゞいて甲骨文とその他の原始文字との比較を試みることを計画しており、(1)「中国古代文化的認識」（大陸雜誌第三巻第十二期、民国四十年十二月 所載）によればエジプト文との比較がまだ発表されていないけれど、試みられているようである。一体中国の文字と他の原始文との比較研究は早くから着目されており、エジプト文或はバビロニアの楔形文字とのそれについては A.Churchward, De.Lacouperie, Ball. や吾国の板津七三郎氏などの研究があることは改めていうまでもない。ところでこれらの研究は文字の一元的な発生を予想し、比較を行う両文字の間に歴史的な関係があることを主張するものであって、古代文字研究に関する今日の進んだ水準から見れば、独断的で誤り多いものであることを認めなければならない。董氏は以上の諸研究と異なり、中国の文字は独立に創造されたことを主張するものであり、その使用せる資料は確実なものにもとづいており、研究方法もなかなか慎重である。中国の文字と他の原始文字の比較研究に於て一歩を進めたものといってよいであろう。勿論董氏の研究にも多くの疑問はある。たとえば、文字はすべて圖畫より変遷するものと考え、麽些文は発生より千年近くもたっているのに圖畫の段階である故、甲骨文が符号となるまでは長年月をへたにちがいないとするが、麽些文の歴史のようなのは文字の変遷についての尺度としてよいであろうか。また文字からいえば甲骨文が麽些文より進んでいるが、文化の発展過程から見ると麽些文の時代が甲骨文のより進んでいることになっている。このようなことは一体何のように解したらよいのであろうか。

なおいくつかの疑問があるが、甲骨文研究に新たな一つの方向を提示している点については敬意を表したい。ことに甲骨文と他の原始文字との比較研究によってそれぞれの地理環境乃至社会背景の究明に或る程度までアプローチすることの可能性を示唆していることは、すでにヨーロッパ(2)に於ける比較言語學の歴史研究への適用が實り多い成果をあげていることを考えれば、今後の課題としてきわめて重要なる示唆であろう。

註

(1)「中国古代文化的認識」については筆者は「古代學」第二巻（一九五二・二）に於て短評を試みた。

(2)高津春繁氏「比較言語學」（一九五〇）参照。

（原載《甲骨學》第二號，一九五二年）

胡厚宣氏の商史研究　上

——甲骨學商史論叢——

白川　靜

胡厚宣氏の「甲骨學商史論叢」初集四册、二集二册をこのたび私の研究室に入手した。この書は初集は民國卅三年三月、二集は民國卅四年三月、齊魯大學國學研究所專刊之一として出版されたもので、出版後すでに久しい歲月を閱したに拘はらず、つひにわが國に齎らされることがなかつたやうである。國都を四川の重慶に遷し、重要な文化機關も殆んど蜀地にあつた當時、この書は成都で二百部だけ印刷された。初集は民國卅一年八月に付印され、一年半後に漸く世に出てゐる。本書の名は、戰後の中國人の著書にもよく引用されてをり、その後の胡氏の新著二三も將來されてゐるので、それらによつてよく知られてゐたのであるが、今日までわが國にもたらされたといふ話も聞かないので、或ひはこれが最初であるかも知れない。また十年近くも前に二百部しか作られなかつたものであるから、今後もたやすく多くを入手しうるとも思はれない。何れにしても稀少な書であるから、本書の內容をひろく紹介しておくことは、意義のないことではあるまいと思ふので、この稿を記すことにしたのである。なほこの書には所々に丁山氏の書入れがある。

著者の胡厚宣氏は、はじめ中央研究院歷史語言研究所にあつて、董作賓氏を助けて卜片の發掘整理につとめてゐたが、不幸な戰亂のため一時昆明にのがれ、後成都に來つて齊魯大學の教授となつた。「甲骨學商史論叢」はその頃すでに脫稿してゐて、顧頡剛・錢賓四・郭鼎堂・商錫永・徐中舒・丁山・陳夢家諸名家の商討と推說とを受けてゐたらしい。「論文二十篇、都三四十萬言」（初集徐中舒序）に及ぶこの書は、卜辭研究家としての胡氏の地位を不動のものたらしめたといふも過言ではない。卜辭の學は、孫詒讓がその淵博な學を以て篳路藍縷の功をひらいてから、羅王董郭の四家がその規模を定めたといふことができる。いま羅王はすでになく、董郭兩氏もまた研究には支障の多い境遇にあるときに當つて、胡氏は中共治下における斯界の第一人者といふべき地位にある。「堂々堂々　郭董羅王　觀堂沈淵雪堂化　彥堂入海鼎堂忙……君不見胡君崛起四君後　丹甲青文彌復光、鳥擬遺蹤奚足數　史巫紛若不離譜……」（殷墟南北所見甲骨錄　陳子展題詩）とは、必ずしも溢美の辭でないと思ふ。徐中舒氏のごときは、王董胡の三人を以てこの學の正系と目してゐる。（論叢序）胡氏の論叢自序によると、卜辭に關する文獻は殆んど搜集してこれを網羅し、また胡氏が自ら玩索した卜片は七八萬にも及んでゐるといふ。その藏する墨本も一萬五千に上る。（續編六二頁）いま知られてゐる卜片の數は凡そ十六萬片であるから、その半數はすでに氏の目驗するところである。卜辭に關する知見において、いま氏に及びうるものは容易に求めがたいのではないかと思ふ。

胡氏の卜辭研究は、從來の著錄に加へて、主として自ら整理に當つた資料をも驅使してをり、極めて實證的な點にその特質が認められる。論叢の高亭氏の敍に、胡氏の學風を五端に約し、一取徵甚詳、二立論不苟、三匡正舊說、四創獲新義、五證實古書の各項に分つて述べてゐる。この五端はまことに胡氏の學風を的確に示したものであり、一部の史家に見られるやうな立異標奇、孤證を搜つて縱論するといふ弊は見られない。しかしまた一面、このやうな學風が、資料の平面的取扱ひに終り易いといふ一般的な缺陷を含みやすいことも、必ずしも否定しえないやうに思ふ。もとより兩美を求めるのは揚州の鶴のやうな話であるから、一人に備はることを求めるといふ意味ではなく、ただ學風の傾向をいふだけである。

次に、胡氏自ら編した「五十年甲骨學論著目」によつて、氏の主要な業績を列次しておく。

編著書

甲骨年表　一九三七年　董作賓氏共編　中央研究院歷史語言研究所單刊乙種之四

○甲骨學商史論叢初集　民國卅一年八月付印　同卅三年出版　齊魯大學國學研究所專刊之一

總目「陳序」（本書に無し）「徐中舒序」「高亭序」「繆鉞題辭」（目次に無し）「自序」「殷代封建制度考」「殷代婚姻家族宗法生育制度考」「殷非奴隸社會論」「殷代焚田說」（以上第一册）「殷代舌方考」「殷代之天神崇拜」「殷代年歲稱謂考」「一甲十癸辨」「甲骨文四方風名考證」「論殷代五方觀念及中國稱謂之起源」（以上第二册）「卜辭下乙說」「殷人疾病考」「殷人占夢考」「武丁時五種紀事刻辭考」（以上第三册）「殷代卜龜之來源」「卜辭地名與古人居丘說」「釋死」「廈門大學所藏甲骨文字」「讀曾毅公君殷虛書契續編校記」「甲骨文發現之歷史及其材料之統計」「引用甲骨文材料簡名表」（以上第四册）

○甲骨學商史論叢二集　民國卅四年三月　成都　齊魯大學國學研究所專刊之一

總目「自序」「卜辭中所見之殷代農業」（以上上册）「氣候變遷與殷代氣候之檢討」「甲骨學緒論」「甲骨學類目」

（以上下册）

○古代研究的史料問題　一九五〇年六月　上海商務印書館　本文八一頁

○五十年甲骨文發現的總結　一九五一年三月　上海商務印書館　本文八五頁

○五十年甲骨學論著目　一九五二年一月　上海中華書局　本文二七三頁

著錄考釋

甲骨六錄　一九四五年七月　成都齊魯大學國學研究所專刊之一　一册

戰後平津新獲甲骨集　一九四六年五月　同上　二册

戰後殷墟出土的新大龜七版　一九四七年二月　上海中央日報文物週刊廿二—卅一期

○戰後滬寧新獲甲骨集　一九五一年四月　北京來薰閣書店　二册

○戰後南北所見甲骨集　一九五一年十一月　北京來薰閣書店　三册

論　文

殷商文化叢考　一九三三年六月　北京大學新夢一卷五・六期

釋牢　一九三九年十月　中央研究院歷史語言研究所集刊八本二分

○卜辭雜例　一九三九年十月　集刊八本三分

釋茲用茲御　一九四〇年　集刊八本四分

甲骨文所見殷代之天神　一九四一年十一月　成都齊魯大學責善半月刊二卷十六期

甲骨文中之天象記錄　一九四一年十一月　責善半月刊二卷十七期

卜辭零簡　一九四一年十二月　責善半月刊二卷十八期

甲骨文四方風名考補證　丁聲樹氏共著　一九四二年二月　責善半月刊二卷廿二期

甲骨學提綱　一九四三年一月　大學二卷一期

關於殷代之氣候　呂炯氏共著　一九四四年　齊魯大學學史叢刊第一期

論殷卜辭中關於雨雪之記載　一九四五年八月　學術與建設第一期

○卜辭同文例　一九四七年九月　集刊第九本

○卜辭記事文字史官簽名例　一九四八年一月　集刊第十二本

以上の論著目を一覽すると、氏の研究の精要は殆んど論叢初集第二集に收められてゐることが知られるであらう。いまそのうちの重要なものについてその內容を紹介し、あはせて一二の私見を附記することとしたい。（○印は本研究室藏本）

胡氏の論叢甲、政治・社會に關するものとして「殷代封建制度考」「殷非奴隸社會論」及び「殷代舌方考」の三篇について述べよう。

「殷代封建制度考」

この論文は一引言、二諸婦之封、三諸子之封、四功臣之封、五藩國之封、六其他之侯伯、七封建侯伯於殷王之義務、八五等爵之來源、九[illegible]之成變、十結論の十項より成る。

一、封建の制がすでに古く夏殷の際に行はれてゐたとする說は、たとへば史記の陳杞世家に「滕薛騶、夏殷周之間封也」と見えるほか、五帝本紀や夏殷周各本紀その他にも見えてゐるが、それらは何れも文獻の時代が甚だ晚くて、到底三代の古史を證することはできないものである。近く王國維は「殷周制度論」を作つて、周制の商に異るものとして封建・廟數之制・同姓不婚の三者をあげ、これこそ周が天下を綱紀する所以であると論じた。そのうち「君天子臣諸侯之制」すなはち封建制は、立子立嫡、宗法喪服の制と關聯して子弟を封建したことより生じたものであるとし、これを「周公制作之本意」であり、「欲知周公之聖、與周之所以王、必於是乎觀之矣」とも述べてゐる。もともと文化や制度は長期にわたる沿革を經て成立するもので、一人の獨創、一代の特有としがたいものである。王氏のいふ喪服や廟數の制はみな後世儒家の傅會託古の說に過ぎず、封建の制の如きもその起源は遠く遡つて、少くとも殷の高宗武丁の世にあり、もとより周公の獨創とはしがたいものである。

二、武丁の時代にはその妃である諸婦が封地食邑を受け、その地の受年・受黍年が貞はれてゐる。帚妌・帚[illegible]・帚好はみな武丁の妃であり、妌は河內平皐縣の邢丘の地に當る。好・[illegible]の二地はいま考へえないが、また姓もしくは地名であらう。武丁の妃はすべて六十四名あり、その寵をえざるものは宮中を出でて一地に封ぜられ、祭祀・征伐に往來出入すること、殷代の使臣と同樣である。

三、武丁の諸子も分封せられ、子[illegible]・子宋・子[illegible]・子[illegible]・子[illegible]・子漁等には往來や于命、あるひは受年を貞ふものなどがあつて、何れも所封があつたものと思はれる。子[illegible]はまた侯[illegible]（[illegible]二・七・二）とも稱ばれてゐる。

四、また功臣に分封することもあり、武丁の時の猛將に沚𢦔といふものがあつて、その亡禍・往來・令从・征伐を貞ふ辭例など甚だ多く、しばしば王や婦好に從つて舌方・土方等の征伐に當つてゐる。また雀・侯虎等も多く征伐に從事し、沚𢦔とともに鼎足して王朝を捍衛する武臣であつた。沚は殷の西あるひは西北にあたる地で、土方・舌方と接してゐる。沚𢦔再册といふのは再册受命の義であり、また白𢦔（天・九〇）と稱するものがあるから、その封爵は伯であつた。武丁の使臣にまた雀と稱するものがあり、その亡死・行止・田獵・祭祀・叶王事・受年を貞ふ辭例がある。その地は祭・亘・犬・[illegible]・羌を伐つものがあるから殷の西方に位置したと思はれ、山西の汾水の域、界休縣の西南に雀鼠谷といふのがこれであらう。侯雀（甲四四〇）雀男（[illegible]二・二二・二）といふ例もあり、前者は武丁、後者は武乙文丁期のものであるから、はじめ侯にして後に男に改封されたものであらう。他に亘・旨、また西吏・北吏・我吏などがあつてみな王事に勳勞したが、旨方は「己酉卜、旨方來、告于父丁」（甲・八

一〇のやうに、武乙の頃には勁敵と化してゐる。帝辛の時代に攸侯喜といふものがあり、王が夷方を征するに當つてはしばしば駐在の地となつた。攸はおそらく鳴條の地で、その地が亘夷にあることは孟子離婁篇に見えてゐる。

五、卜辭にはまた分封方國のことがあり、武丁期の井方には王室と往來かあつて井白（[illegible]）といはれてゐる。後に周に滅ぼされて、その遺民遺地が瓜分されたことは周公𣪘・大克鼎・散氏盤などに見えるから、その地は散關の東、岐山の南、渭水の南岸であらう。虎方も武丁の時にしばしば王の征伐を受けた國であるが、單に虎（契・四一六）ともよばれ、侯虎（菁・七・一）ともいはれる。沚畝と並んで征伐に從ふ例（後・下・三五・二）があるから、後には殷の封を受けて將官となつたものであらう。鬼方は易や詩の大雅蕩篇にも見え、羌に近い方國であるが、鬼方の一地であつた易は後に殷に屬して易白となり、東のかた夷方を伐つのに動員されてゐる。犬方もはじめは殷の敵國であつたが、後には多子族に從つて王事に勞し、犬侯とよばれ、その受年を貞うたものがある。周を伐つ辭例があるから周に近い地で、古く犬邱とよばれてゐた右扶風の槐里がその地であらう。周は殷の西北にある勁敵で、卜辭にその征伐をいふものが多いが、周侯・帚周の語があるから、殷の封册を受け、婚姻を通じたことが知られる。下つて帝乙・帝辛の頃、盂方はしばしば夷方の征伐に從つたが、また盂方白ともよばれ、夷方も夷方白とよばれてゐることがある。

六、なほ他に爵號の見えるものは、活字で示しうるものだけをあげると、武丁期に示侯・丁侯・禾侯・伊侯・先侯・斷侯・侯光・侯唐・侯專・侯告・雇白・歸白、祖庚祖甲期に殺白、武乙文丁期に敎侯、帝乙帝辛期に其侯・侯綿等があり、すべて三十九の侯白男がある。

七、土地所有の形態は、本來國家に屬した土地が王の分封によつて封建侯白に屬するものとなるか、もしくは、本來諸部族國家の有した土地が王によつてその領有を承認されるかであるが、いづれにしても封地は諸侯の領地と見なされてゐた。卜辭に「沚畝告曰、土方正于我東鄙、戈二邑、舌方亦侵我西鄙田」「囚妻安告曰、土方侵我田十人」といふ場合の「我」はみな上文の告者であつて、殷を我とするのではない。土地の私有は厳然として存在してゐたと思はれる。

封建諸侯の殷王に對する義務は、イ防邊、ロ征伐、ハ進貢、ニ納稅、ホ服役に大別しうる。進貢としては甲橋刻辭に貢龜をいふもの多く、また侯家莊の大龜出土の骨笄の頂端にも「邑入二」の刻辭があり、それが貢物であることが知られる。告麥とは麥の豐凶を殷王に來告するもので、その豐凶が納稅の基準になつてゐたのであらう。「辛丑卜殻貞、帚妌乎黍于商」（續・四・二六・一）の商は王畿の地であるから、この卜辭は、帚妌が王のため衆人を率ゐて黍を作るのに服役したことを示すものであつて、諸侯はその國外においても殷王のため耕作する義務を有したものと解される。

八、殷の封爵は帚・子・侯・白・男・田の六種で、帚は王の婦、子は王の子である。侯は射侯、伯は伯長でともに征戰に任じ、男は耕作、田は稼穡を樹ゑた象形で、またともに農耕に關してゐる。男・田は同義であるから、もと一字の演變したものと思はれ、武乙文丁の時は男に作り、帝乙帝辛期には男を田に作つてゐる。侯・白もまた一義で、子宋は宋伯ともいはれ、子貫は侯貫といはれた。帝乙帝辛の時の「多田于與多白」とは子帚以外の兩系の諸侯をさす。大盂鼎の「殷邊侯甸」、尙書君奭の「小臣屛侯甸」も同樣である。侯白は軍事、男田は農耕を初誼とするが、兩者には嚴密な區別があるわけではなく、雀侯にも田事があり、田某にも征役のことがある。武乙文丁期に至つて三公多公など公の稱が見えるが、公は先祖の稱に過ぎず、祭祀の對象であつて封爵の稱ではない。侯白子男は必ずしも定稱でなく、春秋時代においても同樣であつた。いはばそれらは古代における國君の通稱であつて、必ずしも爵祿でなく、また等級を示すものでもない。

九、殷代の畿服は侯田の二服で、それはさきの多田と多白とにあたる。令彝には「侯田男、舍四方命」とあるから、周では侯田の他に一男を加へたのであらう。尙書顧命にも「庶邦殷侯田男衞」の語がある。後世五行思想が行はれるに至つて、侯服甸服の他に賓服要服荒服を加へて五服とし、更に演して六服・九服・九畿の諸說を生んだが、何れも戰國末年の說に過ぎない。

＊胡氏のこの論文は四十葉一萬八千言に及ぶ長篇で、引據の卜辭も四八九例に上つてゐる。卜辭が出現してから後、その知識をもつて古代の封建制を統論したものは、王國維の「殷周制度論」にはじまり、傅斯年の「論所謂五等爵」（集刊第二本第一分）、董作賓氏の「甲骨文斷代研究例」（慶祝蔡元培先生六十五歲論文集上冊）「五等爵在殷商」（集刊第六本第三分）及び郭沫若氏の「金文所無考」（金文叢攷）等があるが、董氏の第二の方の論文は胡氏の整理した資料によるものであつた。胡氏のこの論は多數の卜片を目驗してゐる胡氏がその知見を傾けた力作であり、從來の封建制論より一層詳審なものであるが、なほ問題とすべき點がないわけではなく、いへば、今日の段階はまだ問題の提起に過ぎないともいへるのである。いま詳論の暇はないから一二の私見を述べ、詳細は他日に讓る。

第二項、胡氏のあげる五十五國のうち、子帚の封國は八であるが、胡氏はこの子婦をみな武丁の婦子と定めてゐる。卜辭に見える子婦をみな武丁の婦子と見るのは、郭沫若氏（骨臼刻辭之研究）董作賓氏（斷代研究例）二氏以來疑はれたことのない說であり、胡氏もこの論證において終始その解をとつてゐるが、それにはやや不合理な點があるので、私は別稿「殷の王族と政治の形態」（古代學第三卷第一號收殷探定）において、これを特定の王の婦子の名でなく、他の親族稱謂と同じく類別的呼稱であるとする解釋を提出し、あはせてその政治形態との關聯にも及んでおいた。子某の所封は後に同族の藩屏として殷の政治支配を支へたが、婦の所封については、胡氏のいふやうに失寵の婦人の所領でなく、むしろ本來は婦の出自の家の所領ではないかといふ疑問がある。すなはち、たとへばマリノウスキーかトロブリアントの部族の例に示してゐるやうに、婚家が酋長に貢納地區を負擔するといふやうな一種の聚嫁婚 patrilocal marriage .の形態ではないかと私は考へる。だから帚妌は井方より出でて殷室に嫁したのであつて嫁して後に井に封地を受け、あるひは他に食邑を受けたのではない。「帚妌伐龍方」とは帚妌の本貫たる地が西土に近かつたことを示すものではあるが、帚妌がその所封を西土に近く與へられたことを示すものではあるまい。また別に所封をえたとしても、ただ沐邑の地のみに受年を貞ひ、或ひは帚好の場合の如く、その沐邑の地のみから衆數千を徵募するごときは不合理ではないかと思ふ。失寵の婦人が出されて封地をえたといふやうな說明は、十分な解決であつたとはいへない。

第四項、功臣の封として沚畝・雀・亘・旨・攸等があげられてゐるが、これらの中には殷王室の出自のものがあるかと思はれる。たとへば雀のごときは王室の出であらうが、これらの家族については私見を別稿で述べる豫定である。旨方は卜文と金文とを比較して考へると、召方と釋すべきではないかと思ふ。いま卜辭の研究者は召の繁文はみな召と釋してゐるが、武丁期のものをみな旨と釋して疑はないやうである。繁文を用ひたのは殷末以後で、金文も繁文によつてゐる。召方は後の召公の方國で、西吏召（乙四五三六）といはれ、その地望は他の關係卜辭を檢しても別に扞格するところはない。しかしこれも詳論は他日に讓る。

胡氏の封建制論はすでに見てきた如くいはば分節的であつて、ここでは今日の史家が問題としてゐる封建制の社會史的定位といふことは全く問題とされてゐない。豐富な資材と穩健な論斷にも拘はらず、その所說に慊ぬところがあるとするならば、まつこの點が最大の理由であらう。中國における封建制の問題は、社會の發展を段階的に公式化しようとする一部の論者に、甚だ困惑を感じさせてゐる。郭沫若氏のごときも、殷周をあはせて奴隷制時代とし、周代の極めて顯著な、あの典型的な身分的階層制に對しては、全く眼を閉じてしまつてゐるが、實は周代封建制の問題にもつと正面から對ふのでなくては、殷周史の解明は不可能といつても過言ではない。部族國家がより大きな統一に向ふ過程において、他の部族國家を漸次その從屬下におき、その結果、政治的には封建制の形態をとるに至ることは極めて自然な發展である。胡氏が分封と服屬とによる封建制の成立、軍事と農耕による侯甸等の爵號の來源を考へてゐるのは、周代の封建制を考へる際にもよい參考とならう。胡氏の本稿は、ここに取扱はれてゐる限りにおいてもなほ議すべき點はあるが、資料的には殷代の政治形態を見るべき卜辭の種類を、一應網羅してゐるといふことができよう。

「殷非奴隷社會論」

殷代社會奴隷社會說をとる學者は、多く奴臣僕妾等の文字の解釋に依據してゐるのであるが、しかしこれら字解から奴隷社會說を證することはできない。羅氏が奴と釋した字は女と力に從ふ嘉字であつて、男子を生む義である。また卸あるひは嬄を王襄は位とよみ羅氏は僕豎と解してゐるが、これは嬄すなはち艱の借字である。同じく奴隷とされてゐる臣は實は官名、婐・妌・好・嬉はみな人名にして武丁の配妃である。妃も人名でもと靈妃といふ。妾は妻と同義、僕は卜辭に僅かに一見するのみで、その字解もなほ確かでない。俘は戰爭の俘虜であるが、これは古今を通じてあるもので、奴隷制社會の證據にはならない。奴隷制問題は、奴隷が農耕や戰爭に從事したかどうかといふことが主要な考察點の一つである。

卜辭に「叀小耤臣」といふ語があり、これを農奴だといふ人がある。叀は龜を貢し、祭祀を主り、征伐を出し、邊防を戍るなど、內外の大事に參與する王の親信であつて、その地位甚だ高く、小臣の官も、卜辭金文によつてみると、王の左右にある高官であると思はれる。叀は小耤臣として王の左右にあるもので、重要な農官に任じてゐたものであらう。「叀氏射」「叀氏王臣」（氏は致）とは叀が射や王臣を從へて事を執つたのであるから、これを以て農奴と解するのは無稽も甚しいといはねばならぬ。

卜辭に「王黍」「帚妌黍」といふものがあるが、これは王や帚妌が直接農耕に從つたといふ意味でなく、「戊寅卜穷貞、王往氏衆黍冏」（前・五・二〇・二）「乙巳卜殻貞・王大令衆人曰、劦田、其受年、十一月」（前・七・三〇・二）「貞傳小臣令衆黍一月」（前・四・三〇・二）のやうに、王・小臣は衆を領導督察して衆に農耕させたのであつた。また殷代の軍事に從つたものは、王・帚某・子某・侯白・戍吏・將官等の統率のもとに師や旅が出動したが、戰士は旅・人・衆・衆人などとよばれてゐる。すなはち殷代の軍事と農耕は衆及び衆人とよばれるものが負擔してゐたわけである。衆の名は尙書盤庚篇に十二見してゐるが、王が遷都のことを衆に諮つてゐることから見ると、國家の主要な構成員であることが知られるから、彼らは自由なる公民であつたと思はれる。從つてその得喪は重大な問題であり、卜辭には「其喪衆」「不喪衆」をいふ辭例がある。孟子に「鄰國之民、不加少、寡人之民、不加多」とあるのはその意である。

殷代には奴隷制はなかつたが、奴隷はもとより存在した。卜辭には人祭の辭が甚だ多く、㞢・又・用・御・イ・酒はみな祭名、卯・歲・伐等は用牲の法であるが、伐の例が甚だ多い。その數の證るべきものは、七百三十六人に及んでゐる。伐の字は戈を以て人頭を殺伐する形で、殷の銅戈・銅斧、あるひは金文に同種の象形字がある。殷墟から發掘された人頭葬・無頭葬はみなこの種伐祭の遺跡で、その一部分は戰爭の俘虜であるらしく、卜辭に獲羌・伐羌といふものが最も多いから、西北の羌人が最も多く牲殺されたものと思はれる。

中央研究院は民國廿三・四年・侯家莊西北岡の殷王陵墓九座を發掘し、また廿五・六年小屯で殷代宮室宗廟の附近に四百十六座を發見したが、いづれも多數の殉葬を伴つてゐた。これらは必ずや人祭の行はれた遺跡で、その無身あるひは無頭のものは、あるひは卜辭中の伐祭の人牲であらう。人祭人殉の別なく、その慘酷な情形から推して、少くともそのうちの大部分のものは奴隷であり、その來源は戰爭の俘虜であつたと考へられる。

民國廿八年、殷墟から「一王人頭」が出土し北平の估人の手

に入つたが、高さは約一寸五分、頸圍は拇指大で、頂部に歴然と髮文があり、圓狀をなしてゐる。その樣は清人の辮髮に似てゐる。ただその異るところは、清人の辮髮は頸部から編みはじめるが、これは頭頂の中ごろから編みはじめ、また僅かに頸部まで垂れてゐて清人のほど長くない。中央研究院の發掘した俑にも類似のものがあるが、これは卜文の奚の字に當り、辮髮を提る形に象る。殷代の貴人はみな髮を蓄へ笄飾を施してゐたので、そのことは皇の字形からも察せられるが、奴隸は辮髮にして區別したものであらう。

殷代に奴隸は存在したが、社會生產の主要な階層として奴隸が存在したのではないから、これを以て奴隸社會といふことはできない。農業も軍事もすべて自由人たる衆が擔當した殷代の社會は、ギリシヤやローマの奴隸社會とは絶對に同じものではない。

＊殷代奴隸社會說は、郭氏の「十批判書」一九四五年「奴隸制時代」一九五二年をはじめ、近人の古史を編するものでその說をとるものが多くなつてきてゐる。吳澤氏の「古代史」はその代表的な著作であるが、胡氏は近年「古代研究的史料問題」一九五〇年の一書を著はして、この書に徹底的な批判を加へ、奴隸制の問題にも論及してゐる。その立場は、この論文と全く同じで、胡氏の說がその後も變つてゐないことがわかる。

奴隸制論者のあげる少數の文字が、何ら奴隸制の存在を證しうるものでないことは、胡氏の所論の通りである。ただ胡氏はその行論中に「奚小耤臣」の例をあげて、奚と小耤臣とを同位の語と解し、それによつて小耤臣の地位を論定しようとされたが、この「奚小耤臣」は同位の語でなく、「子弓臣」後・下・三二・二「子效臣」續・一・七五・一「帝臣」後・上・三〇・一三の例のやうに「奚之小耤臣」の意である。もし同位の語ならば「小臣中」前・七・七・二「小臣妥」粹一二七五「臣沚」乙六九六といふ語法をとるべきであらう。奚は殷の同族たる諸族の一であらうと私は考へてゐるが、他日詳論する。耤臣は農官で、王室所有の農耕地である邑に派遣されたものだと思ふ。農耕や征旅に從つたものは衆人であり、彼らが自由人であつたことは疑ひないところである。

胡氏は奴隸的身分のものとして奚と羌とをあげ、殉葬の玉人や俑によつて奚が辮髮の奴隸であることに注意してゐるが、これは興味ある事實である。羌も二・三期以後は糸に從ふものが多いが、やはり辮髮にしたものであらうか。人牲に供されるものをもし奴隸とするならば、胡氏のあげた奚・羌のほかにも、及・美・南があり、奚の頭部を略して女形に作るもの、それに戉を加ふるもの、奚形の首に長髮を附加へたものなどもあり、そのうち及や南の辭例はかなり多い。

侯家莊の殷王の大墓や小屯の多數の小墓、特にそこに見られる夥しい殉葬についても、郭氏の「十批判書」や「奴隸制時代」によつて漸くその梗概を知りえた狀態であつたが、それより以前に本書にその大略が記されてゐたわけである。彼我の交通が隔絶してから十餘年、このやうな審査すべき事實についても、簡略な發掘報告しかもちえないでゐるのは、彼我の學術のために遺憾に堪へない。本年七月、私は郭氏の「奴隸制時代」をよみ、郭氏がこれらの殺殉を以て奴隸制の鐵證であると主張してゐるのを見て、私にはこれらの殺殉が何ら奴隸制の確證となりえないことを論じ、これらが羌・南等の異族犧牲の遺迹であることを考察した。その論文「殷代の殉葬と奴隸制」は、すでに本學の人文科學研究所に託してあるので、近く研究所紀要第二輯に收載される豫定である。人牲說については中國に否定論者があり、近時國人にもその說を采る人があるが、その議論は㞢や伐、伐羌伐南の辭釋に至つて殆んど窮してをり、甚だしいものはこれらの反對資料に何ら言及してゐないものさへある。

殷代の奴隸制は、胡氏のいふやうに、主として農事と軍事との二方面から考察しなければならぬ。特に農業の生產形態は最も重要な點であるが、胡氏の論はその點に深く觸れてゐない憾みがある。私は殷代奴隸制の問題についても近く發表したいと考へてゐるので、そこでこれらの問題をも含めた考察を試みる豫定である。

殷の社會・政治とは直接關しないけれども、舌方の問題は關係諸族の問題をも含むものであるから、「殷代舌方考」をこの項で紹介しておく。

「殷代舌方考」

すべて十三項より成る。全篇卅一葉、引證の卜辭三二六、附註一四三である。

一、舌の字解について、孫詒讓は昌、葉玉森は苦、郭沫若は邑、林義光は鬼、陳夢家は邛と釋し、唐蘭・柏根の兩氏は陳說に近い解釋をとる。舌の工に從ふことは疑ひないが、邛笮の邛であるとは定めがたいものがある。

二、葉氏は禹貢の「惟箘簵楛、三邦底貢」の楛とし、陳氏は「邛仲之孫伯戔盤」「邛君婦壺」等が河內の出土であることから、その地は殷墟の西であるといひ、春秋の羣を以てこれに當ててゐるが、卜辭の來寇記事から見ると稍近きに過ぎる嫌ひがある。また唐氏は邛笮の邛にして四川の邛縣といふが、これは甚だ遼隔に過ぎる。こんなに遠くては、山川の險を超えて頻繁に來寇することは不可能であらう。殷人の勢力が當時蜀川の盆地にまで及んでゐたかどうかは疑問としなければならぬ。郭氏はその地を河套附近とし、玁狁の部族としたが、辭に臆測多くして信じがたい。その來寇をいふものはみな「自西」としてをり、その報告者あるひは交戰者は沚馘・長・甾・戉などであるから、舌方の地を定めるにはこれらの諸地の所在を檢する必要がある。

沚は沁と一音で、沁水の域なるべく、いまの山西南部、汾水以東の地。長は後の張で、河東に西張・東張・張碭の諸地がある。甾は金文にも見え、その關係卜辭に見える侵地は鄭（陝西華州の鄭）夾（河南の陝）方（山西安邑の方山）であるから、その地は陝・安邑・華州に近い地であると考へられる。また戉はもと河北の地で、いまの山西平陸の東北。唐は古の夏墟、今の山西の蒲州以西、聞喜一帶の地に當る。以上の事實によつていへば、舌方はさらにその西方であるから、山西以西、陝西の地であることが知られる。

舌は恐らく共で、詩の長發に小共大共といひ、書序に九共といふものであらう。小雅巧言に「匪其止共　維王之邛」大雅皇矣に「密人不恭　敢距大邦・侵阮徂共」といふものこれである。阮とよく竝稱されてゐるが、阮も關內の要地で、ともに涇州の西に當る。すなはち殷代の舌方の活動區域は、凡むね今の陝北の地であつた。

三、卜辭には舌方の出・來・亦出・不亦出・大出・亢出・允出來・出隹我㞢乍囚・還などを貞ふものがあり、

四、また征・撻伐・伐など內侵をいふものがある。

五、內侵の原因は二あり、帝が殷を護祐せざるか、もしくは黃尹が我に祟してこれを致すかである。

六、從つて殷人はこれを祖靈に禱告して祭祀を行つた。祭祀の對象は王亥・岳・河・報乙・示壬・唐・乙大己・大甲・祖乙・黃尹・好・受令・令などである。

七、殷人はその內侵を擊攘することを試みたが、舌方の出擊を王が觀察する「壬子卜𡧊貞、舌方出、王萑、五月」（甲骨文外叢一、董氏拓）の辭があり、またほかに望・乎・卸・卽・見等をいふものがある。伐・正の辭例は甚だ多いが、冊（口を加ふ）䇂・冊（口を加ふ）及はみな牲殺を意味する。冊（口を加ふ）もまた伐の意で、他にも𢦏・𢦔・𢦚などのいひ方がある。舌方を伐つに「帝受我又」「受㞢又」をいひ、また「我受舌方又」といふものもあるが、これは殷人の宗教的觀念を示すものである。

八、舌方に伐つに步伐といふものは車騎を用ひず、逆伐といふものは迎擊の意である。また循伐のほか語義不明のものもある。

九、征伐の統帥には王・王子たる子弓、その他多臣・師般・多宰（郭釋、未必是矣）・𠂤等の近臣、望乘・吏等の將吏、沚馘・戉・雀・見等の侯國がこれに當つた。

一〇、しかし實際の戰鬪員は衆とよばれるもので、登人三千、登人五千とは衆人を聚める意であらう。

一一、征討の後はその俘酋を臣として羈縻したので、卜辭には臣舌・臣舌方の語がある。

本篇に引く舌方關係の卜辭はすべて三二六例、そのうち月份を記すものは僅かに二十例で、紀年の例は一片もない。

＊この一篇の主要なテーマは舌方の地望の問題である。舌方の地望を推定する方法は、胡氏が試みたやうに、その關係卜辭に見える他の國族地名などから大きくしぼつてゆくよりほかには方法がない。胡氏はその侵地の鄭・夾・方、防禦の關係者沚馘・長・甾・戉・唐等から推してこれを共とし、涇州の西方と定めたが、舌を共と稱することの當否にはにはかには定めがたい。しかし私は胡氏と同樣の方法によつて、もつと東方、山西の域內にその地を求むべきではないかといふ考へをもつてゐる。今その詳細な考證はさし控へなければならぬが、鄭は卜辭に我鄭續・五・三・一、菁・四・三二等とあつて殷の直領地らしく、かつ鄙を貢してゐるから、陝西華州の鄭に比定するは當らず、北鄭後・下・二四・一の語もあるから、あるひは河の南北に鄭名の地があつたので、河南の鄭州はその一であらう。夾は郟鄏の郟にして今の洛陽であらうかと思はれ、その西方の陝縣ではあるまい。沚は沁水であらうが沁陽は河南に屬し、この族が汾水東邊にまで出てゐたとは考へられない。また長はいまの長治・長平の地でほぼ今の潞安地區にあたり、大行山脈を超えて直ちに安陽を指呼のうちに望む殷都の前衞である。長を張の假借として、その地を黃河の屈曲部に近い虞鄉西北に求めた胡氏の說はいささか結論を豫定してそれに曳かれたといふ嫌ひがある。戉はあるひは平陸の附近であらう。甾も戉とともに征伐に赴く卜辭續・五・三・二があり、他に獲羌の例も多く、危急に臨んでは「癸巳卜王其令五族戍甾」粹一一四九のやうに王が五族をして戍らしめたこともあるから、また甚しく遼隔の地ではあるまい。これらによつて考へると、舌を共として遠く陝西・甘肅の境としたのでは、中間があまり隔絶して、卜辭に見えるやうな頻繁にして緊張した關係が理解できず、しばしば河內方面に侵寇したといふ事實と一致しないので、胡氏の說はにはかに首肯しがたいところがある。

共は詩の大雅皇矣に「密人不恭　敢距大邦　侵阮徂共」とあるものであるが、密は甘肅の平涼、阮は同じく甘肅の涇川で、詩はさらに密人が深く陝西に入つて洛河上游の鄜を侵したことをいふ。皇矣は更に「王赫斯怒　爰整其旅　以按徂旅　以篤于周祜　以對于天下」と歌つてゐるが、徂旅は孟子には徂莒に作る。これによれば莒は共の更に東に位置するが、共の地域はかなり廣大で陝北の一帶を占めてゐたと思はれるから、莒はおそらく河を超え、汾河に及ぶ地域ではなかつたかと思ふ。殷の勢力は、おそらく汾水の流域には及んでゐなかつたのではないかと私は考へてゐる。もし殷の軍事力が汾水流域に布かれてをれば、長・鄭などの要地にしばしば侵寇を蒙ることは考へられないことである。史傳によれば、周は文王の末年、陸周に入る前に、犬戎をうち、山西の黎城（長治の北）を敗り、長驅して河內の懷州の邘を侵したが、一轉して陝西鄠縣の崇侯を伐ち、豐に入つてここに遷つた。おそらく北方族の侵寇のために山西中部にあつた周が南方に追迫せられ、一轉して陝西に遁竄したものであつて、密人が共を攻つて莒に侵寇するのを防いだのは、周がなほ山西方面にあつたときのことではないかと思ふ。河汾の間の山地は呂梁といはれ、呂は旅と同音で、また古く莒ともよばれてゐたものであらう。もし舌方をこの方面に比定しうるとするならば、關係卜辭に見える國族の地望もみな比較的合理的に解釋することができる。なほ胡氏は「于王曰、𢀛舌方矢」後・上・一七・四を、辭が殘缺して意味は不明であるが、要するに亦舌方の內侵を禱告する辭であるとしてゐる。矢字と同形の字は、たとへば小屯甲編一九七六・三四二一・三七三六・乙編二一一・三三七〇・三六二一・五二四五等に見え、それらの中には勿矢・于矢の語があるから、動詞の用法であり、あるひは誓約の意ではないかと思ふ。この矢を執る字形のものも見えてゐる。河汾の間にゐた舌方は、叛服常ならず、西方にあつてつねに殷人を奔命に勞させてゐたのであらう。もし私のこのやうな推定が成

立しうるものとすれば、胡氏の陝北とする考へよりも、關係卜辭の理解を幾分容易にするのではないかと思ふ。

なほ殷の政治形態に關聯する問題を含むといふ意味において、「武丁時五種記事刻辭考」と「殷代卜龜之來源」の二篇をもここにあはせて紹介しておく。

「武丁時五種記事刻辭考」

この論考は紙幅では二集の「殷代農業」に次ぐ長篇であるが、その大半は資料から成る。五種とは甲橋・甲尾・背甲・骨臼・骨面の各刻辭で、篇末の補足例をも加へると、甲橋二七九例、甲尾三八例、背甲一四例、骨臼一七七例、骨面二九例をあげ、その形式と內容とを分類整理してある。これらの刻辭の解釋について、胡氏は從來の諸家の說を批判し、著者の考義を加へた。すなはち入は入貢、人馬の入で入貢、來は來馬・來羌の來で進貢、氏は提・挈の諸說あるも致の義、三者みな呈貢致送の義である。これらの辭がひとり龜甲に見えて牛胛に見られないのは、牛胛は北方にも多いが、龜甲はこれを南方の貢來に待つほかなかつたからである。貢龜の者はすべて四十八、人名の知るべきもの二十、官名四、地名國名十一、未詳十三、大抵王官か王と密切な關係にある人であるが、必ずしも南方とは限らず、東方西方の諸國もある。しかしこれについては、いまここには細論しえない。貢龜の數は一二・三三四龜に上つてゐる。なほ未見の材料を加へると、この數はさらに增加しよう。

「三自某若干」の刻辭では、取は捕、三は諸說あるも、气で訖・迄の意とする于省吾說が正しく、その義はまた取の意である。採龜の人は六人で、行・吉・帚井等がある。「某示若干」の示は祭名・置・視・地示之示などの說があるが、龜甲獸骨を卜用に先だつて祭つたもので、月令のいはゆる「命大史釁祠龜策」といふ禮であらう。祭龜の人は十六、帚某子某その他の近臣である。また祭骨の人は四十二、また王・后・帚某・子某・小臣その他の近臣がこれに當つた。

匠は從來矛・茅・包・屯あるひは倒豕の形などと說かれてゐたものであるが、匠の字であらう。また半骨のノ形のものは片と訓むべきであらう。末文の史官の名はすべて十八名である。

＊甲橋・甲尾は一類、骨臼・骨面は一類、背甲は兩者の形式をかね有するものでまた一類であるから、この種の刻辭は實は三類としてよい。董作賓氏の帚矛說、郭沫若氏の「骨臼刻辭之研究」以來、この種の刻辭は斯學の好題目であつたが、胡氏は兩者を遙かに超える刻辭例を捜集してこの長篇を作つた。董氏は後また小屯乙編自序に改めてこの問題を論じ、屯と釋し一對と解する說を述べてゐる。私は本年八月、「殷の王族と政治の形態」の一篇を稿して古代學協會に提出し、その稿は第三卷第一號に收載される筈であるが、その中で多子・多帚の問題に論及し、甲橋・骨臼の刻辭にもふれておいた。入・來・致を胡氏は殆んど同義と見てゐるわけであるが、私はこのやうな形式において異字を用ひる以上は、その字義において異るものがあつたであらうと解するので、入は入貢、來は賚、氏は徵取の義を含むのではないかと思ふ。貢龜の數は、董作賓氏は胡氏のやうにその數を合計する考へ方をとらず、「壬申邑示三屯」とあるものはみな同時の貢龜であるとして、その同文の刻辭を有する四龜をこの六龜中の四龜と解してゐる。私も董氏のこの考へ方に贊成である。「我」の來もしくは氏をいふ甲橋刻辭は、胡氏がまだこの論考に收めてゐない小屯乙編上中二輯のうちに、來といふもの五例、氏といふもの四例あり、氏をいふものでは乙一〇五三・二六八四・二七〇二・三四三二にみな「我氏千」といひ、その龜の類は小形の同種のものである。そのうち一〇五三には「帚井示卅」、二六八四には「帚丙示百　㱿」、三四三二には「帚井示卅」とあつて、これら卅・卅・百龜づつ帚某に祭られてゐる龜は、みな「我氏千」のうちの龜であり、別々に千龜づつ齎らされたものではなからうと思ふ。胡氏の計算ではこれを合せて四千に數へるわけであらうが、必ずしも悉く別時の龜とはしがたい。ただ董氏のやうに、數の等しいものはみな同時の龜としてしまふのではまた甚だ危險であつて、同數の龜が何次にも貢納されることがありうる。たとへば乙一八九五・一九三八・四〇六八はみな「壴入二」とあるが龜の種類も同じからず、また賓の「來十」といふものは四例あるが、龜の大小が甚だ異つて、この四例が一時の貢龜であるとは思はれない。なほ胡氏の論には他にも論ずべきことがあるけれども、他の機會に詳論しよう。胡氏のこの論文は、刻辭に卽した研究としては詳細を極めたものであるが、實はこれを階梯として殷の政治支配の形態を見るとき、この種刻辭の資料的價値が大いに發揮されるのである。この長篇は殆んど資料の整理に終始してゐる傾きがあるが、實は問題は貢龜の人と王室との關係、その政治的意味の追及といふ點にかかつてゐるのである。

「殷代卜龜之來源」

殷代の遺跡中、山東歷城縣の城子崖、河南安陽の高岡・高井台子・同樂寨、及び濬縣の大賚店では、かつてみな卜骨を發掘した。殷族は山東を中心とする黑陶文化系の種族でいはゆる東夷とほぼ支裔の關係があり、はじめ骨卜の習俗をもつてゐたが、殷墟の文化は黑陶文化を承け、貞卜においても骨卜に更に龜卜を加へてゐる。從來出土の卜片を、龜甲は十片を一甲、卜骨は五片を一胛としてその全數を推測すると、龜一六・〇〇三、骨一一・八五八といふ數がえられる。また從來の卜辭によつて知られる犧牲の牛は少くとも九三七四頭を下らないが、その胛骨は占卜に用ひられたものであらう。龜は卜辭に南或ひは西からえられたことが知られるから、その方面から致送されたものと思はれる。殷の勢力範圍は前にいはれてゐたよりも遙かに遼隔にまで及んでゐたやうである。漢以前の文獻では、龜の產地をいふものは八例、うち七例は南、一例が西で、みな長江の南北である。漢以後の方志においても、長江珠江の流域が最も多い。かつて秉志氏は卜龜の來源の問題にはふれず、卜龜の種類に一類をたててしばらく安陽田龜と名づけたが、のち卞美年氏はこれに中國膠龜の名を與へ、南方福建・廣東・廣西・海南・臺灣に產するものと同種と定めた。また第十三次の發掘でえた一大龜も南方種だといはれてゐる。かくて卜龜は主として南方より貢入されたのであるが、甲橋刻辭等に見える甲數は一二・三三四で、さきの龜卜の推定數一六・〇〇三と甚しく遠くはない。殷代における南方との交通は、すでに李濟博士の指摘されたところでもあり、また發掘された動物の種類からも實證されたことである。殷人の龜卜の風は、南方系の龜をえてから骨卜の風を移して行はれたものであり、當時の殷の勢力が廣く南方に波及してゐたことを知りうるのである。なほ付註には詳細に產龜の文獻を列示し、かつ附圖三を付してある。

＊胡氏の貢龜の數の計算方法に問題があることはさきにふれておいた。龜が長江流域に產することの多いのは首肯しうるが、近代の方志によると河南・山東はもとより河北・山西にも龜を產する。貢龜の國族は大體においてその土地の產龜を貢進してゐたものであらうが、その地を檢すると、むしろ黄河系・淮水系の水域が甚だ多い。龜に大中小、またやや長大のものなど、大體種類があり、その貢進者によつて種類にほぼ定まりのあることが知られる。たとへば雀乙編に十九見には小龜多く、稀に大龜乙二〇〇六・四五一〇時に長大なるもの乙五三二八があり、畫乙編に十九見には大龜多く、時に小龜乙七五四稀に中龜乙五五九四がある。龜の大小により、一次の貢數が甚だ異る。いはゆる武丁六龜のやうにいま馬來に產するものは、古代においても南方から將來されたものと思ふが、他は多く黄河淮水系の產で、一部に江漢の龜を含む程度でなかつたかと思はれる。貢龜の國族の名から推せば、當時において、殷の勢力が長江の域を越えてゐたと見るのは、なほ危險であらうと思ふ。殷系の彝器はいはゆる安州六器をはじめ孝感・嘉魚からも出土してゐるが、これとても殷の支配がここに及んでゐた直接の證據となるものではない。胡氏の殷の支配圏設定は、「吾方考」においてもこの論文においても、やや寛きに過ぎるおそれなしとしない。私もこの種の刻辭によつて殷の勢力圏設定を試みる用意があるので、他日發表の機會があらう。

胡厚宣氏の商史研究　下

――甲骨學商史論叢――

白川　靜

產業に關する論文には「卜辭中所見之殷代農業」及びこれに關聯する氣象曆法關係のものがある。

「卜辭中所見之殷代農業」

一序言、二農業環境、三農業區域、四農業管理、五農業技術、六農業產品、七農業禮俗、八結論の八項より成る。全文百四十二葉、十數萬字に及ぶ本論叢第一の長篇で、引用の卜辭は二〇一四片、附注二二八である。

一、殷代の農業經濟を論ずる學者は多いが、程憬・萬國鼎・陶希聖・郭沫若・吳其昌の諸人は、多くは殷代を以てなほ田漁牧畜、漸く粗耕の時代に入つたものとしてゐる。その證として援引される卜辭の漁は人名たる子漁や地名の漁を誤り解したものであり、牧も地名を誤り解したものである。郭氏は芻・牧・受年もみな牧畜のためであると解したが、受年受黍年が農耕を卜するものであることは疑ひない。廩辛・康丁以後田獵の辭が多いのは、遊樂のためであつて生產のためではない。施肥・灌漑の確證は見當らないとしても、牛耕の可能性はないとはいへない。殷代青銅器文化の高さから見て、すでに農耕が盛行してゐたと思はれる。

二、卜辭には帝令雨足年・足雨・大雨・多雨・征雨・其雨等、雨を卜する例は甚だ多いが、月份を記するものは少い。また降雪をいふもの若干あるが、多くは雨雪を兼ね記し、あるひは朝夕の降雪をいふ。日中の降雪は不祥とされたらしい。十二月と一月との間に閏をおいて十三月と稱するものが武丁、祖庚祖甲期にあるが、祖庚祖甲期には一ケ月中に五癸六癸を連ねるものがあり、廩辛康丁以後には十三月の名は見えない。帝乙・帝辛期にも五月に五癸を連ねた例がある。置閏は節候を調節する

目的のものであるから、四時の知識はすでに知られてゐた筈である。卜雨の辭例は一年を通じて見られる。氣候は時代によつて變遷するものであるが、かつて中央研究院が安陽からえた哺乳類の骨骼を地質調査所で研究の結果、南方森林地帶の竹鼠、南方の貘・腫面猪、長江流域の獐、フイリッピンの野水牛に類似する聖水牛、印度象などがあつた。象・貘は南方から將來したものであらうが、他は當時この地に生存してゐたものであらうと推定された。この結果、殷代にあつては安陽の氣候は今日よりも溫暖であつたと考へられる。卜辭には來象のほか獲象といふものもあるから、土著の象もゐたわけである。また兕を射獲する等の辭もあり、兕も北方に廣く分布してゐたらしい。「今歲受年、十月二」の類のものがあるが、殷正の十二月は今の十二月・一月にあたる。今の中原では、この時期の收穫は考へえない。思ふに當時中原の氣候は、今の江蘇、湖南に似てゐて、農業の發展に適してゐたのであらう。

殷人はすでに日食・月食に注意してをり、日食を記すもの二次、月食を記すもの五次である。星象をも觀測してをり、星字をはじめ鳥星・火・大星・大歲の名がある。歲は年歲の意にも用ひられた。今歲來歲の意に使はれた今春來春といふ語は、四季の名としてではなく、唐蘭氏の說のやうにまた年歲の意に過ぎない。今秋・來秋といふのも同樣である。春秋農穀成熟の時を年・春・秋を以て稱んだのである。故に今春をいふものに三・四・五・十一・十二の各月がある。殷曆九月に連雨十八日に及ぶことがあり、また終年雨を見ることなどから、當時の安陽が溫暖であつたことが知られる。また曆象の學の發達の程度から見て農業は相當發達した段階に達してゐたことが知られるのである。

三、卜辭に東西南北四方の受年を貞ふものがあり、程憬・馬乘風の諸氏は耕地を卜問したものだといふが、また四方受年の辭と見るべきである。四方の稱は東南西北、また東北西南のやうに太陽の轉向に循ふ。商は天下の中であるから、中商といひ、五方の觀念がすでに備はつてゐる。受年には地名・子某・帚某をいふものがある。その地名に見える㠱は陝西華縣の近傍、沚は殷の西北、雀は殷の西、𦎫は殷の末期の田遊に頻見する東方の地、宮もまた東方である。商は安陽、單に大邑ともいふ。蜀は諸家は羌蜀の蜀と釋するも、魯の泰安より汶上に至る地域である。雩は孟子にいふ雪宮で、臨淄の東北に當る。𥃦は𠭯丘、龍囿は汝水の域の龍鄉、その他に宿（安徽東平縣）奄（山東曲阜）盂（河南歸德府）羊（江蘇睢寧）若（河南商邱）莘（河南南陽）犬（陝西興平）鄭（陝西華縣）亘（河東蒲坂）敖（河內沁陽）など、みな受年を貞ふ辭があり、その農業區域を知りうる。西は陝西興平、東は江蘇睢寧、南は河南淅川、東北は山東臨淄、すなはち黃河流域の六省をその地域に含んでゐる。

四、殷に失寵の王妃を封地に就かしめ、王子子畫を齊、子宋を商邱、子鄭を華縣に封じ、また功臣沚戓・望乘・侯虎・史官雀・貞人亘・攸侯喜を分封したほか、井方（岐山の南方）旨方（殷の西邊）虎方（西）鬼方（西）易（羌と近し）犬方（犬邱）周方（西北）などの諸方國をも封册して侯白とし、他にも侯・白・男と稱するものが多い。王の直領は「我東鄙二邑」「我西鄙田」等といはれてゐるから、他はみな封建諸侯の領であることが知られる。諸侯は邊防と征伐、進貢と納稅、王田の耕作等の義務があつたが、別に農官を置いたこともあり、小耤臣といふ。叀小耤臣の叀は王の重臣であつたから、小耤臣は決して一部論者のいふ農奴などではない。小臣もまた王の左右の重職であつた。農官にはまた某畯とよぶものがあり、詩の田畯に當るものであらう。耕作には衆人が當つてゐたが、彼らは有事には戰士として軍事に從つた。その得喪は從つて極めて重大であつたから、多く喪衆を貞ふ卜辭がある。しかし殷庚に十二見する衆の字の場合を考へてみても、衆は自由人であつて奴隷ではない。

五、耤は耒を執る形で動詞名詞の例があり、また地名に雨耒と雨犬とに從ふ字がある。犬に耒を曳かせたことがあつたのかも知れない。力に從ふ字に男・𠦪があり、𠦪は本義は祭名で合祭の義だが、衆人𠦪田の辭例がある。また嘉・幼も力に從ふ。力は耒の形である。また卜辭に習見する刅・刅牛は犂を以て土を耕起する形で、刅牛とは黎黑の牛、いま長江以南に多い水牛である。物は人名、また吉利の意があり、馬に從ふものは驪の初文で黑馬である。收穫の意の采禾に從ふ夏に下に土を加へた字などもある。刅と耒とは、古くは必ず一物であつたであらう。後世には相・枱・梩等の名がある。殷代の農具は木製のみに止まるとする說もあるが、青銅禮器や兵器の發達から見て、ひとり農具だけが木製のみに止まつてゐたとは考へられない。牛耕は春秋期に起るといひ、また戰國期とする說もある。しかし黎を黑色とするのは刅牛に出てゐるのであるから、その用法の方が古いとしなければならぬ。殷人はすでに牛馬を用ひる知識をもつてゐたのである。また犬を用ひたことも字形から知られるが、いまも北方の諸族は犬に車や橇を曳かせてゐる。

殷人が灌漑を知らぬといふのも謬說である。田の字形は中に區劃多くして阡陌の形に象り、いまの稻田と類してゐる。また焚の字によつて燒田の行はれたことをいふものもあるが、これは田獵のためであつて、火田耕作法の行はれたことを示すものではない。卜辭にはまた收穫の佳否をトするもの、省廩のことをいふものがある。

六、農作物としては黍（商周等に當す）穆（稻也）麥（來）秜（稗）の四種が主要なものであつた。酒は殷代の祭祀に最も廣く用ひられて、主として黍・稻から作られた。鬯は醴で稻米より作り、穆は醴酒の義を示した文字である。鬯は香酒で、黑黍に香草を加へたもの、文獻では秬鬯・鬱鬯とよばれてゐる。

七、殷人は降雨降暵は帝や祖靈の降すところとしてゐたので、その關係卜辭が多い。父雨は脩雨、大采雨の大采は祭名である。𠦪雨その他求雨を示す字が二三あり、祭儀に舞を用ひた。すなはち舞雩である。舞字には雨に從ふものがある。烄雨とは人を焚いて祭る求雨の儀禮で、文獻には旱に當つて人を犧牲にする例が多い。燎牲に牛羊犬豕を用ひることも繁多である。求雨の時期は一・二・三・九の各月である。雲の去來を見、降雨の日時方角、また𩃬、若不若を貞ふものもある。水が過ぎると災患があるから、これをもトした。今夕王寧・今夕旨亡寧の辭例が習見するが、また寧雨といふものもあり、止雨の意であらう。𠦪年・受年等收穫を貞ふものは、祖神祖王を對象としてをり、また月令の嘗新に當る告秋の辭もある。これを要するに、殷代の農業はすでに相當發達した段階にあり、決して田獵牧畜、もしくは粗耕の時代にあるものではない。

＊胡氏のこの一文は從來の著錄に見える農業關係の卜片を捜集配列してあり、その豐富な資料は見るべきものがある。殷代をなほ牧畜的な社會とする郭氏らの舊說は、わが國の學者にも一時影響を與へてゐたが、今日ではその說を信ずる人はなからう。私はかつて「殷の社會」（昭和廿三年九月立命館文學第六六號）において農耕社會說を主張しておいたが、そこでは胡氏がこの論文で取扱つてゐない他の問題にもふれておいた。胡氏のこの論文で注意すべき點は、氣候の問題、犂耕・灌漑等の農耕技術の問題である。この論文は民國廿七年冬の成稿であるが、卅四年春、著者はさらに六十四葉に及ぶ「氣候變遷與殷代氣候之檢討」の一篇を著した。內容は史前時代の氣候變遷・歷史時代の氣候變遷・歐美各地の氣候變遷・舊籍中所見の古代氣候・卜辭中所見の殷代氣候の各項に分つて論述し、最後の項では「殷代農業」中にあげた氣象關係や獸畜の辭例を更に加へて、殷代の氣候が今日より溫暖であつたことが强調されてゐる。その文は繁富であるが、論旨は同じであるから紹介に及ばなかつた。ただ胡氏のあげる資料が、果して古今氣候の甚しい變化を論證しうるものであるかどうかについては、私はなほ多少の疑問をもつてゐる。動物の移動などは、土地の開發や地形條況の變化など他にも原因があることであるし、天象の記事も月を記さないものが多いので、季節的な狀態は正確には殆ど知られない。一體卜雨の辭の性質は、記錄といふよりはむしろ當時の要求あるひは反對に危惧を表はすに過ぎないとみられる場合が多い。それから霾・雪・颱風などを貞ふのは、その氣象がむしろ今日とあまり變るところがないやうに思はれる。勿論氣候は時代によつて多少の變遷はあるとしても、かりに今日の狀態においても農業が可能であるならば、古代と時に異つた事實が生れてきてゐるのではないのであるから、氣候の變化がそれほど特筆して强調される理由はあまり感じられないやうである。近時董作賓氏は、小屯乙編自序において、卜辭中の一・二月に雨・霰、三月に大風、四月に卜雪の例あることをあげて、安陽の氣候が今日より甚だしく溫暖であつたとは思はれないとされたが、おそらく事實に當つてゐよう。

殷は安陽に都してここに軍事政治の中心を定めたが、經濟的な根據地は、私の考へではむしろ商亳の方面、すなはち河の南北より南方に擴がつてあつたのではないかと思ふ。胡氏はその長大な農業關係の論文の中で、殆んど邑や鄙の制に及ぶところがなかつた。私見では農業經營はむしろ邑・鄙を中心に考察するのが望ましいのではないかと思ふ。卜辭に習見する作邑の辭はかなりの數に上つてゐて、鄙には多數の邑を包含してゐた。「鄙三邑」とはその數で、ときには「𢀛卅邑」（乙六九六）のやうに多數の邑が一度に取り及ばれてゐることがある。南鄙の語が多いのも、殷が多く南方に農耕地を經營してゐた事情を反映するものであらう。この方面の殷の直領地に、殷滅亡の後に周の經營するところとなつた。これらの河南東部の地が後の周南の地に當ることについては、かつて拙稿「西周期における東南地域の政治と文學」（昭和廿八年五月、立命館文學九六號）に論じたところであるが、その殷代の經營については別稿に述べる豫定である。

殷の農耕技術の考察は、遺物の出土の少い今日では、なほ困難が少くないやうに思ふ。犂耕の問題は徐中舒氏の「耒耜考」によつて提出されて以來、なほ決定的な結論はえられてゐないのではないか。耦耕や灌漑なども興味ある問題であるが、私としては、田や邑の字形から耕地が長方形であると思はれること、田字中の區劃は水路とは考へがたいことを指摘するにとどめておく。殷代の農耕については、最近天野元之助博士に「殷代產業に關する若干の問題」（東方學報京都第廿三冊）「中國における原始國家の形成」（社會經濟史學一九ノ一・二）にすぐれた研究と展望とが試みられてゐるから、參照されるやう希望する。

なほ胡氏は「殷代の焚田說」（初集）において火田耕作法說に對する批判を試み、焚田は燒田のためではなく、田獵のために行はれたものであることを、「其焚、禽、癸卯允焚、隻兕十一豕十五麑廿五」（十三次）の辭例をあげて論證してゐる。この一片はいま小屯乙編二五〇七に著錄されてゐるものである。

農業關係の論文を紹介した機會に曆法や居住に關するものをあげておく。

「一甲十癸辨」

殷曆において平年十二月、閏年十三月、大月三十日、小月二十九日とする董作賓・吳其昌兩氏の說に對し、劉朝陽・孫海波兩氏は殷曆に閏も大小もなく、各月は三十日、ただ時に月に十日あるひは廿日を加へるので、每旬の日次と干名とは比較的固定し、もし朔日ならば十日は癸であるといふ一甲十癸說を唱へた。董氏はさらに「殷曆中幾個重要問題」（安陽發掘報告三）にこの問題を論じたが、胡氏は本文で劉・孫說の反證三例をあげてゐる。尤も胡氏の殷曆に對する考へは必ずしも董・吳兩氏と同じではないらしい。私の考へでは、劉・孫兩氏の說は、卜辭に紀月を缺く場合多く起りうるのであるから、よほどの確證がなければこのやうに不安定な曆法を考へることはできないのではないかと思ふ。

「甲骨文四方風名考證」

善齋所藏の一片に「東方曰析、鳳曰劦、南方曰夾、曰鳳光、西方曰韋、鳳曰彝　北方曰𠑹、鳳曰陂」とある例をあげ、他にも二三類似の卜片があることに注意し、これを山海經大荒經に「東方曰析　來風曰俊」「南方曰因、乎夸風曰民」「有人名曰石夷、來風曰韋」「北方曰鵷、來之風曰狻」とあり、また尙書堯典に「厥民析、鳥獸孳尾」「厥民因、鳥獸希革」「厥民夷、鳥獸毛毨」「厥民隩、鳥獸氄毛」とあるのに對比して、その關係を論じた興味ある論文である。山海經が多く古傳を含むことに王國

維のすでに注意したところであり、また堯典等に古い神話を含むこともマスペロなどの早く指摘したところであるが、四方の風名が殷の武丁期にその徵を求めえたとするならば、古典籍の研究に卜辭を利用しうる一つの事例を加へたものであつて、興味ある收穫といふべきであらう。

「殷代年歲稱謂考」

爾雅釋天に「夏曰歲、商曰祀、周曰年、唐虞曰載」とある年歲稱謂は、淸以來學者の間に疑義異說があらはれ、卜辭が出てから後はまた商祀周年の說は誤らずとされるに至つたが、實は殷代の年歲稱謂には年・歲・祀・司・春・秋および大事紀年の諸例がある。春・秋は四季の名ではなく、また年歲の稱に過ぎない。年・歲・春・秋を以て年を紀するものは武丁期に最も多く、祀・司・大事紀年の形式のものは帝乙帝辛期であり、武乙文丁期には巳をいふものが一例あるだけである。

＊ 著者は大事紀年法の現はれた理由を、「一係殷末國勢衰頹、外患日亟、征伐之事、恆爲國家之生死關頭、故以其事紀之」と說明してゐるが、來艱を逮へることはむしろ武丁期の方に多かつた。王の行爲を以て紀年とするのは、殷の末期に王を帝と稱するに至つたのと同じく、むしろ王の神聖性が强調された結果ではなからうか。「王固曰」の辭を初期には多く背面に刻したが、末期には卜辭に連ねて刻することが多いのもこれと關聯しよう。王卜貞形式の出現もまた同じ。祀は祭祀の意であるが、近時五祀の一巡する三十七旬を以て一祀とし、祀は年歲と異るとする說がある。それには五祀の最初の工典がつねに年頭にあると丁度好都合なのであるが、二・三・五・六月に肜祀の例があつたり、十二月に工典が行はれたりしてゐるから、必ずしもその一巡を曆日上の一祀と定めたものとは思はれず、祀序の一巡にほぼ一年近い日數を要することから、他の年歲稱謂のやうに、本義から轉じて年歲の稱となつたのではないかと思ふ。大事紀年の法は周初にも襲用され、永く金文における紀年法となつたが、また一時の風尙の結果であらう。

「論五方觀念及中國稱謂之起原」

五方帝の說は羅氏これを唱へ、郭氏これを斥非し、まだ結論をえてゐないものであるが、卜辭には東西南北のほか中商といふ語があるから、五方の觀念が成立してゐたことは爭へない。帝五臣・帝五工臣・帝五工も五方より出たもので、五行說の濫觴はすでに殷代にある。中商はまた中國の名の起るところであつて、天邑・大邑の名もこの觀念を反映したものである。

＊ この一篇は小篇であるが、疑古派が甚だ精力を發してうち立てた學說を、簡單に打破した興味ある一篇である。尤も本論と同旨の陳夢家氏の論文「五行之起原」（燕京學報廿四期）が民國廿七年に出てゐて、帝五臣等の卜辭もすでにそこに引證されてゐる。

「卜辭地名與古人居丘說」

卜辭の地名は千に近くその識るべきものは五百に近い。その命名は農桑・工業・畜牧・林木・園囿・水產・鳥・地勢・水名によるものなどである。方といふのは周代の國に當る語である。邑も國、鄙は後世の次の字で王の舍次するところ。門は宮廟の稱、彝は祭名でみな祭事と關係がある。東西南北、あるひは上下は方位によつて區別した名である。山・泉・麓などはその地勢の名であらうが、京も高邱の稱である。𠂤某といふものも小阜であらう。碓・埠・敦・墩・隊・屯はみな同系の語である。また丘・阜・土があり、みな丘の意であつて、丘はまた虛にも作る。土は社で、後にはわざわざ壇墠を作つたが、もとは丘墟の義である。また單ともいひ、墠・壇に作る。古人の邑は多く高亢の地にあつたのである。古籍の地名・帝王の名號・氏名に、その例證は甚だ多い。九州の州もまた丘陵の義であらう。古人が丘陵に選び住んだのは、黃河流域が濕潤であつたためであるが、古い時代には洪水傳說に見られるやうな水患も多かつたであらうし、卜辭にも洹河その他の水患を貞ふものが多數ある。いま殷墟附近の洹濱に圓形の周圍約數十丈、高さ一二丈の寨が多く、土垣を繞らし一寨門をとどめ、中に小廟のあるものが多い。同樂寨もその一つであるが、他にも永安寨・豐安寨・夏寒寨がある。山東の城子崖、河南の大賚店も史前遺址は城寨の上にあるので、古代の丘居はこの種の古城古寨がこれを證明するであらう。

＊ 地名の起原については著者のいふやうに簡單には定めえないと思ふが、いまはふれない。地名の考證は卜辭の研究においては甚だ興味あるかつ重要な仕事であるが、困難も大きい。わが林泰輔博士に早くその考證があり、中國に紹介されてゐる。博士の遺緒をつぐ國人があつてもよいのではないか。古人丘居の說にいはば常識的なものであつて問題は少いが、土や州をも丘と釋するのは如何であらう。邑は國名とは限らず、卜辭の例では地名であり、むしろ農耕地、いはば村落と見てよいものであらう。卜辭には作邑の辭が多く、鄙地に多く作られてゐる。ただ古寨の遺址が報告されてゐるのは注意すべきであつて、大規模な遺址以外に、一般の氏族が生活した住居遺址の調査がもつと豐富に行はれることが望ましい。安陽においても邑民の住居遺址が不分明であることが、研究に障碍となつてゐるところがある。

家族法、親族法關係のものには次の一篇がある。

「殷代婚姻家族宗法生育制度考」

この論文は、一妻與多妻・家族與宗法・求生與產神・分娩與寢宮・子名與子子・大子與小王・子女與子孫・結論の八項より成る。

一、卜辭に多父・多妣の語があるため、殷代をプナルア婚の行はれた時代であるとする說が一時大いに行はれ、また他に對偶婚制とする說をも生じたが、みな古いモルガンの學說によつたもので、殷代のやうに高度の段階にある社會には適合しない。殷の前期には一夫一妻の制が行はれ、後期には一夫多妻の制を生じた。すなはち卜辭によれば、示壬より大戊に至るまではみな一祖一配であり、大戊以前にはその制が行はれてゐたものと思はれる。しかるに中丁以後になると必ずしも然らず、中丁には妣己妣癸の二配あり、祖乙に妣己妣庚の二配あり、祖辛に甲・庚の二妣あり、祖丁に甲己庚辛癸の五妣あり、小乙に妣庚のほか甲丙丁己辛壬癸あはせて八妣あり、後の七妣はみな武丁期に母とよばれてゐて、小乙の配妃である。祖甲に戊己の二妣あり、康丁に辛己の二妣あり、武丁には戊辛癸の三妣のほか、己・壬の二配があつて、祖庚祖甲期の卜辭に母己・母壬の名で見えてゐる。ただ武丁の生婦の名はみな帚好・帚鼠等と稱し、卜辭に見えるもの六十四名に上り、また多帚の稱がある。武丁の配妃すでに多く、從つてその子も尠なからず、卜辭に見える子漁・子畫等の名は五十三人・多子・多子族の稱もある。このやうに多數の帚子を恠しむ人もあるかも知れないが、たとへばアフリカの Ashanti 族では王妃の數が法律で制限されて三千三百三十三人以內と規定されてをり、また Loango や Uganda の國王は六七千人の妃嬪を有するといふ。武丁期の多帚制は、勿論これらの單純な多妻制とは異つてゐて、いはば一夫一妻と一夫多妻の兩制が竝行してゐたのであり、多帚はまづ後世の娣媵嬖妾と同じものと見てよい。それは當時すでに强大な父權の成立してゐたことを示すものであつて、その意味では、殷の社會は周以後の社會と何ら異るところがない。

二、一夫多妻制の成立は、「重國廣嗣」といふ繼統上の要求と、「廣嗣重祖」といふ宗教上の要求が重要な原因となつてゐるが、祖祭の發達に伴つて多帚制も擴大され、つひに武丁期に六十四帚を見るに至つた。かく多數の帚子があれば、自然嫡庶の分が生じ、宗法の制が定まる。封建の制もここから生れるので、これらはみな周代の宗法制度の先驅である。王の一族は王族とよばれ、また子族・多子族・三族・五族の語もある。左傳定公四年に見える殷民六族、殷民七族とは、氏族社會といふ場合の氏族ではなく、家族といふときの族であらう。

宗法には父系・族外婚・傳長子の三義を含む。先妣特祭の例を以て殷代の父系制を疑ふ人もあるが、祖王の特祭合祀の例は甚だ多く、これに反して先妣の合祀はその例がないし、また子をトするに男子に嘉といひ女子を不祥として扱ふなど、父系制であることは疑問の餘地がない。また王國維氏は殷代に女子の姓を稱せず、同姓不婚は周制の特有としてゐるが、帚妌・帚好は女子の名で妌・好はみなその姓、すなはち國族の名である。これ族外婚の證である。王氏はまた殷は兄終弟及の制であつたといふが、康丁以後の殷末五王は父子相承け、周初にも太伯は王位を避け、周公が王と稱する例などがある。すなはち宗法は周代特有のものでなく、すでに殷代に萌芽し、周に至つて次第に定まつたものに過ぎない。

卜辭には先公・先世あるひは祖王の名をとつて河宗・唐宗・丁宗（祖丁）・岳宗・一宗上甲・中丁宗・祖乙宗・四祖丁宗・武乙宗・武祖乙宗・文武宗・中宗・右宗・北宗・西宗の稱がある。これ殷にはもと一祖に一廟があつた證で、殷墟の宮廟遺址もまたこのことを證する。祖庚・祖甲以後、はじめて上甲より多后に至る合祭が見え、廩辛康丁期に至つて大宗小宗の名が見えてゐる。大宗では上甲以下の直系の祖王、すなはち大示、小宗では上甲あるひは大乙以下の直系外の祖王、すなはち小示が祀られた。大示には牛、小示には羊を用ひるのが例である。大宗小宗の別は、後の宗法の先驅的形態をなすものである。

宗の本義は宗廟の稱であるから、また上甲家・祖丁室・祖丁門・丁宗・丁門・中室・東室・南室の南門ともいはれ、戊亞・乙門・父甲亞といふのも同例である。儒家のいふごとき宗法制度は周代の經籍にも金文中にもその證迹がなく、學說の完成もまた戰國末年の新儒家興起後であり、實施されたものかどうかにさへ疑問をもたれるものなのであるが、宗法は殷代の後半にその先蹤があり、周制はその演化して成つたものであつて、殷周の間には、王氏のいふやうな截然たる區別が存してゐたわけではない。

三、殷人重嗣の例としては、求子求生の卜辭がある。求生の對象は高妣丙・妣庚等の先妣で、酒の祭儀や犧牲を用ひてゐる。これに當るものは周代では高禖であり、上帝を祀つたが、殷人は先妣を祀つた。また受生をトするものがあるのは、求年の後に受年をトするものがあると同じである。

四、武丁期のものに、帚某の娩嘉をトするもの、帚某の出子をトするもの、また育・娠・孕をトするものがある。嘉とは男子を生むことで、「不嘉隹女」（粹五二六）のやうに女は不嘉とせられてゐる。男尊女卑の風はすでにこのときに存したのである。

五、王の諸子は長じては子某と稱するが、初生の幼子は「帚某子」といつた。「御帚鼠子于妣己、允[illegible]」（續・一・三九・四）は、帚鼠の子が妣己を祀るのであるから、あまり年少とはいへず、周人が生れて三月にして命名するのとは同じからず、注意すべき點である。「また子帚某子」といふ一類の卜辭において、上文の子は動詞であり、兒子として承認することを貞卜したものである。古人に棄子の風があつて、周の后稷、齊の孟嘗君、楚の子文のごときもみなさきに棄てられた人々であるか、もしトして不祥ならばこれを養はずに棄てる風は、殷代以來あつたのである。

六、卜辭にはまた大子と小王との名が見える。「貞御子弓大子、小宰、十月」（前・四・一六・四）の子弓大子とは、大子たる子弓で、この卜辭は武丁期のものであるから、子弓は武丁を繼いだ祖庚であらう。また武丁、祖庚祖甲期のものに小王の名が見え、廩辛康丁期に小王父己の名がある。小王とはまた繼統の大子をいふものであらう。

七、卜辭に多子・多子女・孫・子孫・多子孫の語があり、金文の「子孫其永寶」に見える子孫の觀念は、すでに卜辭中に見られるものである。これを要するに、殷代の家族制は、周代の

それと截然異るといふやうなものでなく、むしろ相似た點が多いのであつて、周の家族制は殷制の演化したものといふべきである。

＊胡氏のこの論文も卜辭を引くこと約三百三十片、付註一〇三、三十五葉に及ぶ長篇である。論旨は概ね穩妥であつて、王國維の殷周制度論に對して適切な修正を試みてゐる。結論には異存がないし、殷周の文化を連續的なものと見る考へ方の根本は、私の從來の立場とも一致してゐる。ただ行論の間に一二疑問とすべきところがあるので、付記して後考を俟ちたい。

1　多子と多帚とについては前に述べたが、子某は類別的稱謂で子輩の名であり、必ずしも武丁の子とは限らず、金文にも子某と稱するものが甚だ多い。子・余・我等の卜する子卜貞形式のものは、貝塚茂樹氏の說のやうにおそらく多子に屬する人たちの貞卜と思はれるものであるが、これと同じ樣式をもつものに、「戊子貞帚禾又子・戊子貞帚壴又子・戊子貞帚巡又子」乙四五〇四「貞帚巡又子」前・八・三・五、粹一二四二同片のやうな例があるので、これらの帚は子某の帚であらうと考へられる。帚は本來は子婦の義で、爾雅釋親には「子之妻爲婦」とあり、弟の妻をも婦といふ。「婦有姑之辭」穀梁文公三年ともいはれてゐる。王妣は「王夾隹出止巷」續・六・三「貞王妣」甲・三三三三のやうにはつきり王妣とよばれてゐるし、妣目甲二五をはじめ妣某と稱するもの甲三三五・三三二九、乙一一八・八七〇・二七三二・四九六八があり、そのあるものは出祀を受け、あるひは「貞匕井帚巷王」のやうにその靈が王に巷禍を與へるか否かが貞はれてゐるから、死後も干名を受けなかつた妣があるらしい。多帚の後裔を說くのに胡氏は未開民族の例をあげてゐるが、未開族の後宮の女と、隆禮を受けてゐる社會的にも地位の高い卜辭の帚某とは、同日に論ずることはできない。配偶の名にはまた妻・母・女（妾の誤刻か妾上部辛に從はざるものあり）などの字が用ひられてゐる。ただし小乙の七母、武丁の二母等は果して小乙・武丁の妃であるか否か明かではなく、胡氏のあげる母某の例には、何れも「武丁夾妣戊」のやうに小乙・武丁の王名に關していふものがない。小乙の同輩行には象甲・般庚・小辛の三王があり、武丁の同輩行にも兄丁・兄戊の二兄があるから、これらの母某は母輩を以てよばれてゐる小乙・武丁以外の同輩行の妃を含むものであらうと推測される。これを以ていへば、祀典にあらはれる妣は、祖丁の五妣を最とし、武丁の三妣、中丁・祖乙等の二妣に過ぎず、康丁以下は名の識るべきものは一妣にとどまつてゐる。多帚の論は郭氏以來通說のやうになつてゐるものであるが、私は殷代親族稱謂の一般的な性質から考へて、この通說に敢て疑問を提出するのである。

2　胡氏は左傳定公四年の殷民六族・七族の族は、氏族の族でなくして家族の意であらうとしてゐる。この考へは、おそらく、當然王族や三族・五族・子族・多子族等にも適用されてゐる解釋であらうが、これについても疑問なしとしない。左傳の殷民六族・七族は懷姓九宗と對稱されてゐるものであるが、唐・晉の初封に當つて他の重器とともに分賜されたものである。特に氏の名をあげた後に、「使帥其宗氏、輯其分族、將其類醜、以法則周公、用即命于周」とあるのは、氏の規模を明らかにしたものであるが、分族はもとより、類醜のやうに非血緣的なものと思はれる要素をも包含するものは、普通の語義による家族とは解せられない。卜辭によれば、子某にも子數臣粹・一六四・一、子商臣乙五一三〇反のやうに臣をもつものがあり、また胡氏のあげるごとく受年を貞ふものがある。特に子某の族がそのまま國族の名としてあらはれ、あるひは單獨で征戰を遂行してゐるものがあることなどを考へると、生活單位は必ずしも家族のやうに小規模ではなかつたと思はれる。從つて私は、氏族內部の日常生活はすでに家族を單位とするものに分化してゐたとしても、社會生活の單位としてはなほ氏族的なものが殷代社會の基盤をなしてゐたのではないかと考へるのである。もとより私のこの考へは、氏族內部における家族的なものの發展、從つてまた宗法的なものの漸次的な成立を否定するものではない。家族的なものの發展による氏族規制力の後退、それに代る宗法的秩序の成立は、祖祭の體系の中にすでに十分によみ取れることであつて、胡氏の論述はその限りにおいては妥當なものである。

なほ多子が特定の身分集團であることについては、貝塚茂樹氏にその說があり、また多子族については私見を「殷の基礎社會」立命館大學五十周年紀念論文集文學編所收に述べておいた。多子族のうちには大子を大宗として祀るものがあつて、殷族がすでに宗法的なものをもちながらも、なほ氏族的な集團の形態を保持していることが注意される。

3・4については異見はない。5の項中、「御帚鼠子于妣己、允里鼠」の一片を釋して、胡氏は、「婦鼠子、祭於妣己、則其年齡不能太小、自此可以推測殷人命名之年、與周人子生三日乃命之名者不同、爲一大可注意之事」と述べてゐるが、この解は不可解といふほかない。この卜辭の意味は、「婦鼠の子に禍が降りさうなので、妣己を祭つてその禍を禳がうとしたところ、まことに禍があらはれた」といふ意味で、疾病や咎禍の原因である巷や祟を禳ふ祭祀が禦であり、その供犧が出である。なほ巷にも形を現はすやうな例があつて、「子父乙示、余見巷、在比」前・七・三三・一のやうな卜辭がある。なほ禦祭については、拙稿「殷の王族と政治の形態」古代學第三卷第一號收載豫定に詳論してある。

6、胡氏は大子・小王の稱をあげてゐるが、上子後・上・八・七、同八、中子續・人・一〇三、甲子粹・三・一五四、小子戩七五四・七九五、乙三四三・四三七等に及んでゐない。また「貞・御子弓大子、小宰、十月」を證として子弓を武丁の大子と推定してゐるが、卜片は子弓と大子との間で缺行してゐるので、董氏はその間に一字を缺くものと解してゐる殷曆譜下卷三・三頁。この辭は、「子弓を大子に御るに小宰を用ひんか、十月」の意で、大子の祟を禳ふことを貞ふものである。この大子とはおそらく早く夭した武丁の子兄己で、よく巷禍を降したらしく、後には小王として祀られてゐる。文獻に見える孝己は、不遇な王子として傳へられてゐる。

7、では多子・多子族・多子女・孫・多子孫の屬が、子孫觀念の重視される例證としてあげられてゐるが、なほ同類のものに子族續一四・二、甲二七三、乙三四一多生甲三八〇衆子粹一・五一〇の屬がある。

以上、胡氏の論證の過程において議すべき二三の點をあげたが、もとより問題の點はここに盡きてゐるのではない。しかし、胡氏の全體の立論は、よく當時の王室の族生活を明らかにしてゐる。ただ著者の意はこれを通じて父權的な家族の成立を强調するにあるやうに思はれるけれども、多子・衆子・多生・多子孫・多兄南北・上海・八五・多父甲九三・王族・三族・五族等の語及びそれらの卜辭內容などから考へてみても、類別的呼稱をそのまま維持しえた殷の社會は、なほ氏族的な形態を多分に殘存せしめてゐたとするのが、事實に近いのではないかと思ふ。最後に宗教的觀念を扱つた小篇二篇にふれておきたい。

「殷代之天神崇拜」

古代及び未開社會には天神の崇拜が盛であるが、卜辭にもその證迹がある。帝は雨を降し、年穀を授け、嘆を降し、王を祐保し、祐を授け、若不若を降し、また禍を降すものとして畏敬された。王亥・上甲・河岳もよく巷禍を降したが、帝は直接求年求雨の對象とはならず、祖祭の對象ともならなかつた。これは帝が至上神であつたためである。武丁期に下上若・下上不若といひ、また帝乙帝辛期に「上下受又」等の成語があり、「上下受我又」といふこともある。武丁時の帝祭は、帝禦を以て先公を祀つたもので、また「下乙賓于帝」のやうに祖王を帝に配祀するものがある。從つて先王もよく咎禍を降した。帝には左右の侍臣があり、帝臣・帝五臣・帝五丰、帝五丰臣の語がある。丰は官・工の義であらう。廩辛康丁のとき祖甲を帝甲と稱したが、廩辛康丁も自ら帝と稱し、帝乙・帝辛のときには文武丁を文武帝とし、帝は特に上帝と稱した。日神には賓日既日・出納・御・出食の禮あり、月食や虹を咎禍を示したものとしておそれた。祭星も行はれ、大星・火・鳥・歲星を祭つたが、火は商星として特に殷人の崇敬を受けた。雲神には二雲・四雲・六雲があり、四方上下に神靈があつた。風には寧風の祭あり、犬を犧牲として用ひてゐる。また四方を帝祭し、方帝の語がある。

＊すべて二九葉、付註八七。殷人祭天の風については郭沫若氏の「天の思想」陳夢家氏の「商代的神話與巫術」燕京學報二十期等があり、國人では小島祐馬博士「支那古代の祭祀と禮樂」古代支那研究がある。胡氏のこの文は祭儀の面についてはあまり觸れられてゐないが、その點では陳氏の文を參照する必要がある。祖祭と異る諸點については、今後なほ研究すべき點があるやうに思ふ。私もかつて「帝の觀念」昭和廿四年十月立命館文學十五周年紀念號において、禘・帝の祭祀について多少精神史的な考察を試みたことがある。胡氏の論のうち、帝を禘あるひは蔕と解する說に對して、帝は祖神に非ずとしてこれを論駁し、日中星鳥・殷人主火の風が古く卜辭にも見えてゐること、歲星の知識を春秋や戰國期のものとするわが新城・飯島二博士の說を非として、その知識がすでに卜辭にあることを指摘してゐることなどは、注意すべき諸點である。

「殷人疾病考」

病の種類に頭・眼・耳・口・牙・舌・喉・鼻・腹・足・趾・尿・產、あるひは小兒・婦人・傳染の諸病あり、これを卜するものは王及び王帚・王子・王臣等であるが、その原因は諸神祖靈の致すところと考へて、これを禱告し、御祭をしたことを述べ、また左傳に見える蠱毒の說も卜辭に見えてゐることを論じてゐる。そして當時脚氣病が流行したことは、この地方の氣候が濕潤であつた一證としてゐるが、胡氏が脚氣病としたものは、「貞疾止、隹出巷」龜・二・九・七の疾趾である。ところが趾は字形からみても足趾を意味するので、これを脚氣とは定めがたいやうに私は思ふ。

「殷人占夢考」

文獻に見える古代の占夢・釋夢・夢影・夢人・夢因・夢禍を分說し、夢への迷信と占夢の風を述べ、後世の素問以下、五鑑・關尹子にまで及んでゐる。

「釋死」

從來井・刑・囚・死など種々に釋せられてゐる字であるが、胡氏は丁山說を采つて死と釋した。亞室中に人の横臥する形である。また別に朽骨の傍に人の跪拜する形の字は、よく死と釋せられてゐるが、これは死ではなく屍であり、また尸であるといふ楊樹達氏の字釋が正しいとしてゐる。

わが國では近時池田末利氏に釋死中國學會報第二一篇があり、骨を跪拜する形の字を髑髏崇拜の義で死字であると釋するのであるが、もしこの囚形の字を死と訓みうるならば、骨を拜跪してゐる形のものはむしろ複葬の葬に近づけて考へ、double burial の習俗としてよいのではないかと思ふ。

論叢所收の甲骨學史に關する數篇は、紹介を略する。それらは著者の「五十年甲骨文發現的總結」一九五一年三月「五十年甲骨學論著目」一九五二年一月にそれぞれ增訂大成されてゐると見てよく、また別に將來まとめられるものもあるらしい。著者の最近の見解は、吳澤氏の「古代史」一九四九年二月に徹底的な批判を加へた「古代研究的史料問題」一九五〇年六月に見られるが、ここに紹介した諸論の論旨は、殆んどそのまま維持されてゐると考へてよいやうである。戰後斯學の樣子があまり知られてゐなかつたので、中國學界の紹介の意味をもかねて、その「總結」は、古代學第一卷第一號に簡單な紹介を試みておいた。

「甲骨學商史論叢」初集二集あはせて六冊は、斯學空前の金字

搭的論文集である。董氏の「甲骨文斷代研究例」がこの學に一期を劃したものとすれば、この「論叢」はその上にまた一期を劃するものであつたといふことができる。ただ最も遺憾なことは、本書の刊行が不幸な戰亂のさ中にあつたために、久しくわが國に齎らされることなく、わが學界に寄與する機會をえなかつたといふことである。戰後八年を經て、「わが國にも漸く何ほどかの安定が戻つてきた」中國學界の輝しい成果である「小屯」甲乙編や「殷曆譜」はすでに將來されてゐるし、最近の業績も漸く齎らされつつある。そしていま、甚だ遲ればせではあつたが、この「論叢」を加へることによつて、資料的には、わが國の斯學にも新しい出發の用意がほぼ整つたといへよう。

「論叢」二集の下册に、三集の豫告が出てゐる。上册は「甲骨六錄」と題され、中央、華西兩大學等の甲骨文字六集と釋文・索引であり、下册は「殷代征伐考」「殷代田獵考」「殷代官名考」「殷代之祖先崇拜」「再論殷代之農業」「再論殷代之天神崇拜」「釋叶」「釋告」「卜辭雜例補」「卜辭記驗例」「殷商文化之分析」「殷虛發掘與商代文化」「甲骨學類目補」の十三篇を收めるが、まだ上梓のことを聞かない。尤も上卷にあたる「甲骨六錄」は、その名で一九四五年七月成都で出版されてゐる。また「總結」引言の終りに「甲骨學要論」が出される旨記されてゐるが、これもまだ出てゐないらしい。著者にはこの種の既發表のものが多いから、あるひはこの書でそれらを大成する考へかも知れない。著者の精力的な活動は、戰後にすでに、著錄三種と、著書三種とを出してゐる。おそらくこれら豫告された業績もやがて發表される日があらう。「論叢」六册の巍然たる巨帙も、著者にとつては、あるひは高亨氏の敍にあるやうに、ただ「長江之濫觴、大輅之發軔」に過ぎないものであるかも知れない。

胡氏の論文內容を紹介するに當つて、私はそれぞれ二三の私見をかき添へておいたが、これは主として私の研究上の備忘の意味であつて、決して胡氏の所論に微瑕を求めようといふやうな考へからではない。私見については勿論適當な機會に詳論しうるものもあるであらうが、それまでにも、同學の方々の叱正を受けたい希望を以て、敢て附記したにとどまるのである。なほいふまでもないことであるが、胡氏の論文の內容紹介は必ずしも辭を逐うてしてゐるのでなく、ほぼ大意を取つて述べたに過ぎないものであるから、ときに表現上のニュアンスが異り、あるひは私の理解に不十分な點があつたかも知れない。また胡氏の論文が多くの資料を驅使した極めて重量のあるものであるのに、ここではすべて資料を沒して結論だけを述べたため、大いにその精采を傷つけたところがあるのは免れなかつたと思ふ。この點に特に著者と讀者の方とに對つて、諒恕を乞はなければならないところである。

昭和廿八年九月十八日

（原載《立命館文學》第一百二、一百三號，一九五三年）

評陳夢家殷虛卜辭綜述

李學勤

（中國科學院歷史研究所第二所）

陳夢家所編寫的殷虛卜辭綜述一書，引用了大量的卜辭材料，對卜辭研究的某些方面有其貢獻。但由於作者沒有完全採取實事求是的態度，以致編製草率，出現很多的錯誤。在這裏要想對該書中所有的訛誤一一指摘詰辯，不僅繁瑣，而且是不必要的。同時這本書裏有很大部分祇是複述了前人、近人的學說，這些轉引的理論也有些是不妥的，我們在此不加評論。我們所要批評的，祇限於陳夢家自己提出的主張中的重要錯誤。

一

殷虛卜辭綜述（以下簡稱綜述）最主要的缺點是作者對殷代社會性質及其發展途徑沒有明確的認識，因而書中祇羅列了龐雜的現象，不能提高到理論的階段，同時對若干現象也不能有滿意的解釋。這和馬列主義的歷史科學相距是很遠的。但本書旣要綜述卜辭的各種內容，就不得不涉及有關殷代社會經濟的問題，如第十八章身分和第十六章農業及其它。上述缺點在這些章節表現最爲明顯。

身分章目的在於論述殷代社會的階級結構，但全章實在沒有說明什麼問題。作者肯定“殷代是階級社會”(1)，又肯定“爲王室耕作的‘衆’或‘衆人’，應當是奴隸”(2)，却沒有根據奴隸在這一階級社會的生產關係中所佔地位去推定當時的社會性質。實際綜述關於衆是奴隸的論證是極薄弱的。書中所列證據有五：“一.殷王有衆。二.‘喪衆’是奴隸的逃亡。三.‘衆’也從事農耕。四.王常卜‘收穫’。五.殷王宗廟所在，集中的儲藏了大批石製收割具”(3)。這五條裏，第一、三、四不能算作證據，因爲它們也適用於奴隸以外的情形，第二、五兩條則是錯誤的，須加討論。

關於“喪衆”：卜辭中有“喪衆”、“喪羊”、“喪明”等，“喪”均應解爲亡失。前6,39,6有“……不喪衆，授方祐”，可見“喪”是動詞，“衆”是賓詞，“喪衆”是在戰爭中亡失人衆。如依陳夢家以“喪”爲衆的主動逃亡，那麼卜辭依文法須乙作“衆喪”和“衆不喪”，這是不對的。

關於石製收割具：這是指所謂小屯石刀。第二至七次安陽發掘中出有大量此種石刀，很多坑出了百件以上，共達3640件。它們大多是半成品，如以下各例即代表修製的各階段：

編號	修製情況
10	僅有輪廓，厚薄不均
1	毛邊，兩面錘啄，未作刃
34	粗磨，毛邊，有刃
245	粗磨，磨邊，有刃
88	細磨，有刃
143	細磨，有刃，後端打剝

綜述所舉大連坑及E區所出即是如此。這些出石刀地點顯然是製造石刀的工場，而不是像陳夢家所說是儲藏收割具的宗廟所在(4)。農業及其它章第五節“石鏟”的命名是不適當的。

在身分章中，作者不從卜辭的直接材料來論述殷代的階級結構，而祇徵引了一些周代金文和文獻。這裏面出現不少奇怪的論點，例如用大量篇幅討論“馘”和“訊”的階級身分。看書中各例，很明白的逸周書世俘和小盂鼎的“俘人”即敔簋等的“執訊”，指戰爭中生俘敵人；小盂鼎的“獲馘”即兮甲盤等的“折首”、敔簋的“馘首”，指戰爭中砍得敵人的首級，這本沒有什麼可疑的。陳夢家却說“訊”、“馘”是兩種奴隸，還指實玁狁和淮夷社會中都有這兩種奴隸(5)，眞是異想天開之論。

陳夢家又把大盂鼎的“人鬲”讀作“人讞”。人所盡知，鬲和甗是不同的器物，自殷代起“鬲”、“甗”兩字也迥然有別，陳夢家竟說兩字可以相通，而且在實物上“鬲也就是甗”(6)！其實即使如此，說文訓“讞”爲“議罪”，“人鬲”又應如何解釋呢？

綜述不僅對殷代社會制度無所發明，而且也未綜述前人、近人在這方面的研究成果。祇是第十九章總結中設有一節，簡單抄錄了郭沫若先生著作中關於殷代社會的各種論斷。這和本書體例也是不相合的。

二

綜述第八章方國地理、第九章政治區域論述殷代的政區地理及外服的政治結構，第十五章百官論述內服的政治組織。對這三章，我們評述如下。

方國地理章對殷代地理的敍述極不精密，且多錯誤，可以看出作者根本不曾有系統地整理有關地理的卜辭。該章第三節把商、大邑商、天邑商分爲三地，就是顯著的錯誤之一。按帝乙、帝辛時卜征伐之辭常卜問三事：（1）是否受祐於上下與𥚾示；（2）是否不曹𢦏；（3）告於大邑商；是否亡𢓴才禍。商王出征時所採取重要行動須告知“商正”，如前2,5,3記王留居在上𩱦，命人示於商正。“商正”即大盂鼎所說“殷正”，指商內服的百辟羣寮。所謂“告於大邑商”也就是告於國人之意。此種卜辭多稱“大邑商”，而甲3690在同樣位置上稱“天邑商”，可證二者是一。萃907以四土與商對舉，佚653以四方與大邑對舉，此“大邑”、“商”均指商人心目中四方之中的一個區域。它既稱“大邑”又稱“商”，應即“大邑商”。羅振玉殷虛書契考釋卷上說“大邑商”即“天邑商”，而“大邑”意即“王畿”，大致是不錯的。

陳夢家對殷代獵場、都邑、方國的敍述大多是不正確的，但在此不能詳論(7)。我們試舉其征人方曆程爲例，可概其它。他所排征人方卜辭，基本上沿襲了董作賓殷曆譜帝辛日譜，未能充分剔除董譜誤收的甲骨。陳夢家考攸侯喜鄙永爲今永城，是以𤔲攸從諸器爲證(8)。按𤔲攸從鼎的攸和𤔲攸從盨的永應即卜辭的攸和永，但祇要一讀散氏盤即可知攸和永決不能在永城一帶。散氏盤記矢、散間土地轉讓之事，矢人有司涉事者包括豆人、小門人、原人、𨾚人，散有司包括𢋍人、散人小子及𦎫之有司。矢王居於豆新宮，可證豆，小門、原、𨾚等皆矢人所居之地，而𨾚也見於征人方卜辭。𢋍、𦎫等屬於散，𦎫有司三人爲𨗨、州𥃝、攸從鬲，州氏即邢邑田節所記“陟州岡”之州地，可見攸也在此一區域之內。散氏盤地名可考者有周、原、渠、同、州、豆等，顯然不能移於淮水上游。

仔細研究征人方卜辭各地名，可以知道許多地名不在商南而在商西。例如十祀十一月甲子所至的危([illegible])，距攸在一日程以內，此地距𡨄一日程，見佚182，䧿距𥃩也是一日程(燕47、綴20)。𥃩在商西，即左傳“成鄩部”之部，是陳夢家所承認的。又如十祀十二月甲午所至的𡧊，其地鄰於䧘(菁9,10、錄716、717)，而䧘近於𢓊(掇續164)，又近於河(續3,30,11)。𢓊即𢓊方地，是“四邦方”之一(續3,13,1)，與羌方並稱。武丁時𢀛方勢力也達到𢓊，如存上550記“今秋𢀛方其𠧟於𢓊”。由以上簡略的敍述已可看出陳夢家的矛盾，他把𢓊(隸定爲“𢓊”)放在晉地，羌方、𢀛方均放在豫晉邊太行山一帶，却把人方推到淮水流域，這證明他的地理考證的不確。

政治區域一章是過於簡略的，如所列卜年各地均未考其所在(9)。所謂“四戈”並不是“四國”。甲622“甲子卜，王從東戈，乎侯𢦏？”中的“乎侯”是一侯名，見下列各辭：

甲辰卜，𡿧𢦏叔侯？　　綴140
戊申卜，令𡿧伐叔侯？　　甲183
……𡿧伐乎侯？　　甲440

乎侯即叔侯，商王自不能分從“四國”去征伐乎侯。“東戈”等當如“北羌”、“上𩱦”之例，指四名“戈”之地或“戈”地的四部分。

同章第三節所繪“畿服”式圖是無據的(10)。如商外有奠，其他都邑也有其奠，如武丁卜辭“癸未卜永貞，旬亡禍？七日己丑，微友化乎告曰：𢀛方𢦔於我奠豐，七月。”(南朝鮮漢城大學藏骨)所言是微的奠。殷代多方常有夾居於商外侯伯之間的，不能簡單地把多方畫在所謂“四土”、“四方”之外。

百官章也祇是簡略的排比一些職官名，並未詳究各職官的職守及其相互的關係。其中也有誤讀，如把“多馬亞”分讀爲“多馬、亞”(11)。卜辭常見“馬亞”、“多馬亞”，而不見

“亞、馬”或“亞、多馬”聯稱之例。平元16“多馬亞侃”，多馬亞是侃一人的職名。把率領師衆的“犬征”與“犬中”等相當於逆人的犬相等同，也是不恰當的〔12〕。

三

綜述第二章文字、第三章文法、第七章曆法天象、第十七章宗教和第一章總論中關於占卜的叙述等，都涉及殷代的文化。這幾章較少新義，簡評於下。

文字章第四節中，陳夢家提出他對甲骨文字結構的看法，以象形、形聲、假借爲漢字的基本類型。他所謂“象形”內涵極爲龐雜，所包括的“抽象”、“省易”、“分合”、“指示”、“會合”等〔13〕，實已遠超出象形所可能包括的範圍。所謂“假借”祇是一種運用文字的方法，不是文字結構的類型。

宗教章第四節說“卜辭之帝或上帝當近於秦的白帝少皞”〔14〕，而在第十章第二節又說卜辭中的東方析就是少皞〔15〕，互相矛盾，兩者都無根據。同章又誤以四方名爲“四方帝”，並毫無根據地與東周以後由五行說產生的五方帝比附〔16〕。這一章中對殷代宗教的本質也沒有理論的叙述。

曆法天象章第一節引用前述十祀征人方卜辭來論證殷末歲末置閏之制，這是沿襲董作賓的。董譜所以置閏九月者，是由於誤收一些不屬於同組的卜辭，特別是續3,29,6。此片爲十祀十月甲午，與征人方卜辭的十祀九月甲午相衝突，其辭不記征人方，應屬於另一王世。征人方卜辭月日可以衣祭規律檢證。其十祀九月甲午遘上甲彡，十一月甲申旬內應𦺇於文丁，並行工觀其彡，至十二月甲午旬內𦺇於武乙配妣戊，爲𦺇祀之終，甲午日彡於上甲，爲彡祀之始，故金574、庫1672於十祀十二月甲午記“十祀彡”，正合於𦺇、彡二祀重疊二旬的規律，其間絕無置閏九月的餘地。歲末置閏應認爲殷代一貫通行的置閏法。

曆法天象章第五節關於月食的推算是不可靠的，因爲(1)卜辭所記月食不一定見於安陽，該辭可能是在安陽以外所卜。(2)卜辭所記干支不一定是延續到晚周從未紊亂。此節所列一些天象用字的解釋不盡可信，如以“§”爲“阱”，以“霍”爲“霾”，以“殺”爲霓等。他所隸定的“霰”其實是“䨓”，是“霹”字的晚期寫法，庫1665對卜“䨓”與雨可證〔17〕。

綜述對卜辭“文例”，即：(1)卜辭與兆的位置上的關係，(2)同版卜辭之間的關係，(3)異版同卜各卜辭之間的關係，完全沒有叙述。

四

綜述第十章到第十四章都是論述商王世系的。

第十章先公舊臣中關於所謂“先公”的叙述非常混亂，原因是作者沒有分清楚殷代的自然神和祖先神。該章第四節把河、岳等均列爲先公〔18〕。我們知道夒和王亥稱高祖，他們和王恒、王夨、王中、季等是商上甲的先世。夒與河、岳有時並列，祇能說夒有一定的自然神性，而不可把河、岳等排入商王先世。此外如以王亥爲契〔19〕，也沒有根據。

同章所謂“舊臣”一名是不能成立的。前4,15,4應讀爲“貞，我□家舊𦣻，我臣亡老?”，作者誤以爲有“舊老臣”；武丁卜辭的“告我舊臣”也不能確定是指伊尹等商先世重臣〔20〕。陳夢家所述“舊臣”，有些是誤認的。如伊陟，所引金481是僞刻；鐵13“戊陟、戊爻“是陟戊，爻戊的倒寫式。爻戊、陟戊、咸戊、盡戊並稱，“戊”是日名而不是“巫”，他們都是武丁的先世。又如遲任，陳夢家以爲即卜辭的“旨千”。其實合219應讀爲：“己未□□貞，旨□千，若于帝又?貞，旨□□，不□若于帝又?”從文字學來說，“千”也不能讀爲“壬”〔21〕。

綜述關於世系的叙述中還有兩項關係很大的謬誤。其一是認爲商代的日名（甲至癸）是“表示及位、死亡和致祭的次序”〔22〕。按以日名爲次序始於清吳榮光，其筠清館金文卷一稱：“甲、乙、丙、丁猶一、二、三、四，質言之如後世稱排行爾。衛聚賢的讀釋支干也曾有類似主張。如果此說是眞的，則我們將不能用日名親稱（父甲、母乙等）來斷代，因爲(1)一人有父癸，則他必有父甲至父壬一套。(2)所謂“父甲”可以是第一、十一、二十一……父，不能確定，如武丁的父乙。我們說此說是錯的，殷人日名乃是死後選定的。下列祖庚卜辭可以爲證：

[癸]未[卜]□[貞，旬]亡禍?己丑小刳卌，八月。　(1)
[丁亥卜]□貞，其有[來]艱?二日己[丑]小刳卌，八月。(2)
[己丑卜]大貞，作喪小刳?　(3)
[己丑卜]大貞，作膀小刳，亡梌?　(3)
貞，其梌?　(4)
庚寅[卜]□貞，王□□小刳……?　(5)
丙申卜出貞，作小刳日，叀癸?八月。　(6)
丁酉卜……小刳老，八月。　(7)
丁酉卜大貞，小刳老，惟丁叶?　(7)
[貞]，不[惟]丁[叶]?　(7)

(1)明1983(有誤摹)(2)掇1,210(3)前7,28,1
(4)前2,32,6、林1,2,66(5)南坊4,161
(6)後下9,3,10,1、簠人4(7)綴17、掇2,151

小刳死於八月己丑，當日卜作喪，丙申卜作其日名爲癸，丁酉卜老（考，宫廟初成之祭）。簠人5、珠1055祭小刳均用癸日。庫985+1106卜“乙巳卜，帝日叀丁?叀乙?叀辛?”是武乙爲康丁選擇日名。乙、辛二卜下均記“有日”，故定康丁日名爲丁。

關於商王世系的另一謬誤是把一些不屬於商王世系的人列入世系。這個錯誤的來源是誤認爲一切殷代卜辭都是屬於王的。我們看陳夢家所謂“午組”、“子組”及YH 127坑的兩小甃〔23〕，具有下列特點：

(1)沒有王自卜或王自稱，也不提到王，而多稱“我”。
(2)沒有常見的商先王名號，而有不同的另一套名號。
(3)親屬稱謂別成一套。
(4)祀典較簡略。

例如所謂“午組”，其親屬稱謂爲：祖丁、祖戊、祖己、祖庚、祖辛、祖壬、妣乙、妣丁、妣辛、妣壬、妣癸、乙妻妣戊、父乙、父丙、父丁、父戊、父己、母戊、兄己和子庚，所見名號有：石甲、上乙、下乙、內乙、工乙、黑乙、天戊、內戊、外戊、后戊、內己、后己、上庚等。這個稱謂系統無法適合於殷代任何王世。下乙雖見於武丁卜辭，但猶如爵銉、卣（貞松堂集古遺文補1,34、小校經閣金文4,59）的毓祖丁不是卜辭的毓祖丁（祖丁），這個下乙也不必是武丁所稱下乙（祖乙）。“子組”等也有類似情況。這些卜辭是殷代晚期貴族、貴婦的卜辭，其稱謂和殷銅器銘文中種種稱謂一樣，不在王世系之內。綜述強把它們納入武丁稱謂系統內，便造成無法解釋的矛盾。

第十四章親屬所列親屬稱謂中，“小父”、“中（應爲‘仲’）子”、“亞子”、“多生”、“多公（應爲‘后’）”〔24〕等都不是親屬稱謂。卜辭中的“婦”，前人多指爲王的配偶，我們則認爲是子婦。先秦文獻中“婦”均訓子婦，周初的婦闔組銅器也以“婦”、“姑”對稱。無論如何，商王常卜婦的生育等事，王室卜辭中的婦必須是王的親屬。綜述以婦爲“一種婦女的身分”〔25〕，是不妥的。

五

綜述第四、五章題爲斷代，第六章題爲年代，是論述商王年代及卜辭的時代問題的。關於商王年代，主要根據了竹書紀年。竹書紀年是戰國時魏人史書，它對東周年代的記載是可信的，但對西周以上各代年代的數字記載就不一定準確。特別是推算公元年次時，商元年要根據周元年，夏元年更根據商元年，因此是很不可靠的。

關於卜辭的斷代，我們提出下面的意見：

(一)卜辭的分類：卜辭的分類與斷代是兩個不同的步驟，我們應先根據字體、字形等特徵分卜辭爲若干類，然後分別判定各類所屬時代。同一王世不見得祇有一類卜辭，同一類卜辭也不見得屬於一個王世。綜述沒有分別這兩個步驟，就造成一些錯誤。例如綜述所謂“康丁卜辭”，便是用一個斷代上的名稱代替分類上的名稱。該種卜辭不用龜甲，而兆辭有“習龜卜”(明715)、“習龜一卜”(粹1550)，故應與用龜甲的其它類同時存在。後者應即綜述所稱“廩辛卜辭”。這兩類卜辭均記伐羌方、微方等事，其同文者如：

□丑卜狄貞，戍逐其[雉]王衆?
甲1767，所謂“廩辛卜辭”
戍逐弗雉王衆?　鄴3下38,2，所謂“康丁卜辭”
□亥卜，□羌二方白，其用於祖丁、父甲?
京4034，所謂“廩辛卜辭”
己酉卜卬貞，叀二方[白]用，又大□?吉。
甲1130，所謂“廩辛卜辭”
壬戌卜，王其𢦏二方白?大吉。
掇1,397+寧1,442，所謂“康丁卜辭”

在所謂“康丁卜辭”中有父丁（甲413等），又有聯稱的兄己、兄庚（南明639、640、寧1,213+1,268），它的時代應上延至祖甲晚世。我們依卜辭的字體、字形等，至少可把小屯所出卜辭分爲二十四類。例如武丁卜辭就可分三類。

(二)斷代標準和卜人：卜辭斷代標準應以稱謂系統爲主，祖先世系則係其根據。卜人雖是一個有效的標準，但因很多類卜辭不記卜人，所以並非通用的標準。綜述以祖先世系與卜人爲斷代的第一標準，是不恰當的〔26〕。第五章關於卜人的叙述頗多錯誤，分述於下：

武丁卜人中有一些誤認的。如出，乙1448不是武丁時的，“出”字也不是卜人；續9,31,8是㱿、夫並卜，陳夢家誤以“㱿”的下半爲“出”。續6,12,6的“奴”（陳讀“共”）、乙1121和後下17,16的“𥃝”、前6,24,2的“正”，都無從證明是卜人。乙749的“彶”是“永”的誤讀。乙2118、6770等的“雔”是“芉”的誤讀。明664的“邑”是“兄”的誤摹。

“𢦏”即“何”，二人應合併爲一。綜述所引武丁時“𢦏”卜辭，字體不同於武丁時，實仍是三期的。“吏”、“史”也應合併，卜辭“史”字有時作歧頭的，不可讀爲“吏”。史是武丁卜人。

武丁卜人中亞、𡳿（陳隸定爲“㚔”）、衛都是文丁時或其前後的。所謂“午組”、“自組”、“子組”及其附屬卜人也屬於文丁時或其前後。“自組”附屬的“畀”則是武丁的。“畀”字隸定錯誤，實爲“庯”字所從的“𢍏”。陳夢家引前1,37,6，以爲是“自組”的“畀”卜辭，此片是他所謂“自組”的，但“𢍏”在該片上並非卜人。

合192有卜人岳，存上198有卜人甬，是武丁時卜人，綜述未收。

祖庚、祖甲卜人中，冉雖稱卜冉，卻沒有卜辭。金622“冉”不是卜人。“𠇗”即冎，卜辭“冎”字有如此寫的，應合併。絲725+726祖甲卜辭有夫、口同版，口也是祖甲卜人之一。庫1215卜人㕘不同於“羕”（陳釋“洋”），也是此期卜人。

上面提到的應移於文丁及其前後的卜人中，午、丁、取、𦣞、豖（陳讀“豕”）五人應刪去；萬、車、卣三人已經貝塚茂樹指出是誤認的，也應刪去。“午”是“禦”字之省，

如：

戊申卜，午巢於父戊？　乙3478

癸未卜，午余於祖庚，羊豕艮？

於祖戊印余，羊豕艮？　乙4521

癸未卜，午內乙牢？　乙7512

甲寅卜，午石甲牢用？　前8,8,4

乙4521一辭作"午"，一辭作"卸"；"卸彘"見遺5,14、乙6690、合256、470。所謂有卜人丁的掇1,315、乙443二例，都是把"貞"字誤分爲"丁貞"，可參看前8,5,7和佚11。卜人取是誤讀了前8,5,7，此辭應讀爲"乙巳卜王貞，立取貝宁廿戠？六月。"乙87和南坊，4,155的"㖞"、合80的"豖"都不是卜人，可看原辭。

文丁及其前後卜人中"㣊"即是"㣊"，"徜"即是"徣"，不應分別。卜人徜祇見甲241，出於F36坑，該坑純係文丁的"自組"卜辭。

文丁卜人𢀛，陳夢家曾加懷疑。按懷1011有"……其啓？三日庚寅大啓。𢀛今夕卜曰：'翌庚寅其雨'，余曰：'己其雨'，不雨，庚大啓。"可確證𢀛是卜人。

庫189有卜人夂，是文丁卜人；甲2562有卜人仲录，是帝乙或帝辛卜人，綜述未收。

總上，綜述的卜人斷代總表[27]應刪去21人，移動19人，增補5人。

(三)卜辭的斷代：綜述對卜辭的斷代有些是錯誤的。我們在上面已指出所謂"康丁卜辭"實是祖甲晚期至康丁的，可能還延至武乙初年。綜述以爲侯家莊HS 57坑所出卜骨近於"午組"，我們曾在別處指出它們屬於廩辛時代[28]。此外重要的斷代問題有舊所謂"文武丁卜辭"和帝辛卜辭。

"文武丁卜辭"一名是董作賓在殷虛文字乙編序中提出的。陳夢家則認爲董作賓的"文武丁卜辭"都是武丁晚期的。陳夢家的這一主張實同於日本貝塚茂樹。貝塚氏在1946年印行的中國古代史學的發展中分析了兩個"貞人集團"，稱爲"五貞人集團"和"子卜貞卜辭"，即相當綜述的"自組"和"子組"。貝塚氏也將之列於武丁時代。我們認爲這些卜辭中王卜辭仍是文武丁時代的，理由如次：

(1)其字體、字形都是晚期的。

(2)與公認的武乙至文丁初的大字卜辭（有卜人𢀛）和另一類有"自上甲廿示"的卜辭聯系。

(3)沒有武丁至祖庚初與𢀛方戰爭的紀載。

(4)"自組"的稱謂系統不同於武丁，而近於文丁初的大字卜辭。

關於(1)至(3)在此不能詳論，僅把"自組"稱謂系統開列於下，以資比較：

祖甲、祖乙、祖丁、祖戊、祖己、祖庚、祖辛、四祖丁、妣丙、妣己、妣庚、妣辛、妣壬、妣癸、父甲、父乙、父戊、父辛、父癸、母甲、母乙、母丙、母戊、母庚、母壬、母癸、后母甲、后母己、母萑、母婘、兄甲、兄丁、兄戊、小王。

這一稱謂系統和武丁時是很不相同的。祖己、庚、甲當即武丁子輩的一小王、二王。武丁時雖偶見祖甲、祖庚，其地位遠不如在"自組"中顯要。四祖丁指祖丁，見於帝乙、帝辛卜辭。父戊、父癸、母甲、母乙、母戊、母壬、后母甲、后母己、母萑、母婘、兄甲、小王均不見於武丁卜辭。小王也就是武丁子祖己，父癸即康丁的子癸。要把這些排入武丁世是不可能的。"自組"最主要的父是父乙，母是母庚，兄中有兄丁，此三人也見於文丁初大字卜辭，父乙、兄丁見甲611、粹373等，父乙、母庚見南明613。"午組"、"子組"等是晚殷的非王卜辭，前已述及。

小屯所出卜辭有帝辛時代的，董作賓在殷曆譜中曾舉出一些證據。陳夢家在綜述中補充了兩個證據，不幸都是不妥的。第一個證據是"文丁配妣癸"，實則他所引衣祭文丁配妣癸的卜辭（寧2,125）祇記"妣癸"，無法判定是何王之配。第二個證據是"文武帝"即帝乙[29]，這也是錯誤的。有"文武帝乙"的𠨘其卣是僞器。他所引乙日祭文武帝的例子，續2,7,1"來乙丑"是"來丁丑"的誤讀，前1,22,2"大乙日"是"翌日"的誤讀。文武帝仍應是文武丁。

六

以上我們分評了綜述的各章，下面再就全書體製方面加以批評。

(一)文字的誤讀誤釋：這方面的例子是不勝枚舉的，前面也已列舉不少，下面再舉一個突出的實例。第十五章第一節作者臚列了三條關於"來王"的卜辭[30]，全部是錯誤的，今將陳釋與正確的釋文並列於下，可見一斑：

陳釋："㞢不其來王——㞢不其來見王"

乙5393：己未卜㱿貞，㞢其來見王？一月。

己未卜㱿貞，㞢不其來見王？

陳釋："貞□來王，惟來？……"

誥159：……貞，光……來？王𠭰[曰：吉]，□惟來。……

陳釋："小臣咏王"

甲1267：叀𠂤，呇克又𢦏，呇王？

翌日遘𠂤？

(二)釋文牽合鉛字：綜述中誤釋的字，有些是作者的錯釋，有些則是故意牽合楷書鉛字。例如第495頁把從"尸"從"去"的"𡲬"字省文釋爲"居"，第606頁把從"衛"從"豕"的字釋爲"傢"，第608頁把"𣶒"釋爲"米"，第177頁把"𡗕"釋爲"昊"，第179頁把"㗊"釋爲"品"，"𠀠"釋爲"无"等，也是數不勝數。這些都違反文字學的原則。

(三)釋文前後矛盾：我們且舉一例。胛骨、背甲署辭中的"𠂆"字，于省吾先生釋"屯"，是正確的。"屯"即"純"，義爲一對，見徐灝說文解字注箋。陳夢家在第五章第二節釋"屯"而未加解釋，在第一章第三節中又毫無根據的釋爲"弋"，前後矛盾。

(四)使用僞造材料：綜述引用了一些假材料而未能識別。甲骨方面，如第265頁所引鄴412，我們曾目驗原骨，知是僞刻，其文字是不通的，"中"字誤刻爲"中"形。第365頁引金481，也是不通的僞品。第364頁引庫1533，是仿刻大36一骨。在銅器方面，如多次引用的𠨘其三卣，即是假的，張政烺先生曾予指出[31]。現在我們把四祀一卣拓本附印於後（插圖），其字迹的不堪是很明白的。陳夢家在西周銅器斷代中還引用了不少僞器，有些也兼見綜述，我們將另文評論。

如上所述，陳夢家的殷虛卜辭綜述一書並不能總結前人、近人這一方面的研究成果，而且出現了許多錯誤。陳夢家於此自命甚高，是不相稱的。陳夢家在綜述中竭力鼓吹自己，即以第二十章中甲骨論著簡目而論，不少論著沒有收入，却收錄了他自己全部的文章。這裏面有一些內容早已陳舊過時，在綜述中也已加以否定；有一些是未成文的稿本；有一些是本書的一部分，更應刪除不載。這種自我標榜的態度更爲我們所不取。

注　　釋

[1] 殷虛卜辭綜述第640頁。
[2] 同上第637頁。
[3] 同上第626頁。
[4] 迄今安陽地區所發現的殷代建築遺址，都不能斷定是宗廟。
[5] 殷虛卜辭綜述第619頁。
[6] 同上第618頁。
[7] 詳見拙作殷代地理簡論，待刊。
[8] 考古學報第十一册第76頁。
[9] 如巴黎所見甲骨錄14武丁卜辭卜"于蔡黍，受年"，即甚重要。
[10] 殷虛卜辭綜述第325頁。
[11] 同上第508頁。
[12] 同上第514頁。
[13] 同上第77–78頁。
[14] 同上第582頁。
[15] 同上第338頁。
[16] 同上第592–593頁。
[17] 以上所論見同上第243–247頁。
[18] 同上第355頁。
[19] 同上第340頁。
[20] 同上第362頁。
[21] 以上關於"陟"見同上第364頁，關於"戊"見第365頁，關於"旨千"見第366頁。
[22] 同上第444頁。
[23] 這些名稱是不妥的，但爲敘述便利起見，暫時借用，下同。
[24] 殷虛卜辭綜述第484–485頁。
[25] 同上第493頁。
[26] 同上第137頁。
[27] 同上第205頁。
[28] 李學勤：談安陽小屯以外出土的有字甲骨，文物參考資料一九五六年第十一期。
[29] 殷虛卜辭綜述第421–422頁。
[30] 同上第505頁。
[31] 殷虛出土的牛距骨刻辭引，中國考古學報第四册。

（原載《考古學報》1957年第3期）

圖書評介

殷虛文字丙編、上輯(一)；張秉權著，

151 中央研究院歷史語言研究所出版，中華民國四十六年八月印行。序文13頁，考釋127頁，圖版87版，插圖6版。四開本。定價：精裝本新臺幣200元；平裝本166元。

本書是“小屯第二本”中之一種；而“小屯”則是中央研究院歷史語言研究所出版的“中國考古報告集之二”的一部分。在材料上說，本書雖是就殷虛文字乙編所著錄的龜甲殘片拼綴而成；但在應用於學術研究的價值來說，它則是“青出於藍”，而遂“勝於藍”了。

現在我們所見到的甲骨碎片，在最初它們都是完整的龜版、牛胛，這是人所共知的。但，經過埋藏、農人耕作、匠人取土、以及盜掘、發掘、移運等過程之後，原來完整的龜版、牛胛，絕大部分都變成了“斷簡殘編”。如果想把這些“斷簡殘篇”復原，那眞是一件艱難到使人無法想像的工作。十多年以來，張秉權先生便一面從事甲骨學的研究，一面從事這艱難的拼綴工作。“老天不負苦心人”，經過十年寒窗之後，殷虛文字乙編所著錄的碎片，使其復原的、或一部分復原的，已達六百版以上。本書所著錄的，只是已經復原的一小部分；其餘的將陸續刊布。這，對於研究甲骨文的人，眞是莫大的功德。

由於拼綴的結果，原來讀不通的殘辭，現在讀通了；原來由於左右對貞而其辭一詳一略的，現在由於“詳辭”的證明，也可以瞭解那“略辭”的意思了。這些好處，還在人們意料之中。而本書最大的貢獻，則是證明了“成套的卜辭”。

成套的卜辭，共有兩種。一種是在同一版上而成套的：如圖版伍的一個龜版，共計刻了十條卜辭，而1, 3, 5, 7, 9五辭和2, 4, 6, 8, 10五辭對貞。“卜辭雖有十條，事情只是一件，反正地各灼卜了五次”(本書圖版伍考證語，見考釋頁21）。另一種則是刻在不同版上的成套卜辭(本書又叫做成套甲骨)：如圖版壹壹，和壹叁、壹伍、壹柒、壹玖、等五版是一套，各版上所刻的卜辭雖間有詳略，而所卜的事情，則是一樣。只是各版上的序數不同——第一版的序數全是“一”，第二版的序數全是“二”，以至於第五版的序數全是“五”。

由於成套卜辭的發現，因而糾正了不少治甲骨學者的錯誤觀念。本書圖版壹壹的考證(頁30)說：

> 自從成套卜辭和成套甲骨被發現以後，我們對於卜辭的數量觀念，應該加以修正了。在從前，總以為卜辭條數多，便是卜問的次數多；現在，由於成套卜辭和成套甲骨的研究，我們可以知道，代表卜問次數的是卜兆序數而不是卜辭條數。因為一回事情的卜問，可以刻上若干條成套的卜辭，也可以只刻一條卜辭。因此，我們對於統計的方法上，須要大大地加以修正了：尤其是選樣或取材之際，必須考慮更多的因素了。甚至在研究卜辭中的氣象、戰爭、狩獵、祭祀等問題的時候，可否用統計的方法，也還是個問題。

成套卜辭被發現後，其影響於甲骨文字之研究，有如是者！

復次，關於每一龜版出土時的坑位，和灼兆情形、文字的刻劃情形、字中塗朱或塗墨等情形，一一注明，這也是本書的一大特色。有了這些記載，將會給予治甲骨學的人以許多啓發，說不定可以解決了許多意想不到的問題。

甲骨文的發現，雖然已有五十多年的歷史；但是，不認識的字以及還沒有定論的字，依然多如牛毛。不認識的字，只好依樣葫蘆；沒有定論的字，也只有姑取一家之說：這是本書的態度；這態度是平實可取的。至於引書的地方，或不免偶爾有些小誤(如頁45“說命”及“書序”，均應作“學記引兌命”；“念終始典于學”和“學學半”，二語應分著。又頁75“尹吉”下應為書名標)，但都無關宏旨。

總之，本書是治甲骨學者所必不可不讀的著作。

（屈萬里）

（原載《臺灣大學考古人類學刊》第9、10期，1957年）

陳夢家氏「殷虛卜辞綜述」によせて

赤塚　忠

戦後の甲骨学は、新しい動向を次第にあらわにしつつあった。それは、一には安陽殷墟の発掘の一應の結末を示す、そこから得た一三、〇四一片の卜辞集殷虚文字甲編乙編（四八―五三）が発刊されて研究資料が豊富になったこと、二には鄭州二里岡、輝縣その他（五〇～五二）から殷代遺跡が発掘されつつあることが報告されて殷文化の広さと深さとに大きな期待をいだかせたことに促進されたものである。そこで、まず李亜農氏の殷契摭佚続編（五〇）、郭若愚氏の殷契拾掇（五三）、ことに胡厚宣氏のめざましい活躍で、戦後寧滬新獲甲骨集、戦後南北所見甲骨録（五一）、戦後京津新獲甲骨集（五四）、甲骨続存（五五）等未刊卜辞が続々と編刊されて、研究資料が一層整備され、また胡氏の五十年甲骨文発現的總結（五一）、五十年甲骨学論著目（五二）、董作賓氏の甲骨学五十年（五五）等の従前の甲骨学成果整理の試み、さらに李亜農氏の殷代社會生活（五五）のような殷文化の鳥瞰胡氏の殷墟発掘（四）のような殷文化研究の将来の展望等が為作されて、殷文化を系統的に解明するという甲骨学の新たな展開が約束されることになった。

殷文化を系統的に解明するということは、もちろん、戦後に始ったことではなく、甲骨学の初期からの終局的目的で、王観堂の殷周制度論（一七）、郭沫若氏の卜辞中之古代社會（三〇）等はその点で意義のあるものであり、また郭氏の卜辞通纂はその目的を意識して卜辞資料を整理したものであった。だが、初期のこの種の研究は断章取義の弊を免れなかった。

新たな発展に董作賓氏の甲骨文断代研究例（三三）が劃期的役割を果しているのはいうまでもない。董氏はこの外に、殷暦譜（四五）を著して、卜辞資料の編年的整理の試みを示すとともに殷代の特殊な祖先祭祀の制度、いわゆる週（循環）祭祀の制度を明かにし殷文化にはいわゆる新派と旧派との交代による発展があることを指摘した。同じ頃、胡氏は論文集商史論叢（四四―四五）を発刊し、成し得る限り多く関係卜辞例を集めて殷代の宗教、社会制度、産業等を復元しようとしていた。この頃を系統的研究の胎動期とすべきであろう。わが国の古代史学界に大きな反響を喚起した貝塚茂樹氏の中国史学の発展（四六）が世に現れたのは終戦直後であるが、その準備は戦前にあり、また甲骨文に関しては董氏の断代批判の外に、斬新な多子族集団の仮説をもって殷代社会究明の新展開を促すものであった。島邦男氏の祭祀卜辞の研究（五三）も戦前からの多年の研究の成果で、多数の卜辞例を蒐集して、殷王朝下の祭祀組織を復元しようとするものであった。

それにしても、系統的研究は、十分な甲骨資料と個別的な研究の成熟なしでは達せられないので、その条件が整って可能になったのであり、またそれが一般的に痛感されて来たのは主として戦後であると見てよいであろう。われわれが卜辞のうちのある事象を理解しようとすれば、当然のことながら、必ず他の事象と関連して来る。それを初期においては、関連を切断して、その事象だけを研究した。そこでや、もすれば、その帰結を文献記載の伝説等に求め、殷代の事実の理解としては妥当を欠くことが少くなかった。何といっても卜辞資料は根本資料であって、後世の改修を経ることの多かった文献資料にたよらずに、それ自体のうちから古代事実を把握しなければならない。そのためには事象相互の関連を切離さずに、綜合的に殷代文化の事実が復元されなければならない。卜辞自体のうちからその基幹となっている事項を見出し、その相互関連によって綜合的に殷文化を復元し、その下においてそれぞれの事象の形態や性格やが理解されなければならない。こういう戦後の一般的動向に明確な形を与え大きな成果をあげたものが陳夢家氏の殷虚卜辞綜述（五六）である。

殷虚卜辞綜述は、すでによく知れ渡っているので、今更紹介するまでもないことと思われるが、いち早く北京の中国科学院考古研究所から本会におくられたので、その盛意にこたえるため、また、未見の会員の方のために一、二卑見を申述べたい。

陳氏についても紹介するまでもない。早く（三三）から甲骨学の研究に従い、ことに宗教に関する示唆に富んだ論文が少くない。金文古文字等に関する価値ある著述も多く、また文学、語学にもわたり視野は広い。

卜辞綜述は六四三頁の大著で、限られた紙面ではその百分の一をも伝えられないが、序文によれば、従来の研究成果を綜合し、卜辞に見る殷の文化現象を組述的に述べようとしたものであり、特に常に卜辞、文献の記述と考古資料との結合、卜辞の内的相互連繫に注意したといっている。

第一章は甲骨の出土由来、甲骨学の発展、甲骨の用法、甲骨の出土地、安陽の発掘経過、卜辞内容等を略述した總論で、卜骨に龍山式（例城子崖下層、後岡中層）、小屯式、豬卜式（例二里岡）、殷末周初式（洛陽）を区別し、この順序での発展を考えているのは、殷文化成立の点から注意をひく。第二章は文字について、その研究史の概略を述べ、文字の構造法を論じて象形、形声、指示の基本類型は殷代に完成していたとし、また、甲骨文には崗（擎）来（上帝）のような合文があるが、これについては一面では漢字の簡略化単音綴の性格と抵触し、一面では形声法と関連するとしている。後者は別に考え方もあろう。第三章は文法。品詞、句式等について実例をあげて説明し、格変化、受動と能動との未分化、否定詞の位置等の特徴を指摘している。文法史に興味ある事実を加えるであろう。また生月についても新解釈を施している。欲をいえば、隹（維）字の用法についても記する必要があろう。

第四・五章は断代について、以前考古学報（五一）に発表の論文を少しく補正したもの。董氏が殷の世系、称謂を基礎とし、貞人を主要な指標とし、その他坑位、方国、人物、事類、文法、字形、書体の補助基準によって、甲骨資料を五期に時期区分した（三三）。これが甲骨学発展の劃期的貢献であることはいまさら繰返すまでもないが、その際董氏は繊細な書体の子卜貞卜辞を第五期のものと見た。その後（四五）董氏はこれを第四期の後半文武丁の時期に属させ、かつ第四期の貞人として扶、自、子以下十七人を挙げた。これに対し、貝塚氏は子卜貞体卜辞が第一期に属することを指摘し（四六）、さらに貝塚氏・伊藤道治氏は（甲骨文断代研究法の再検討・五三）董氏の文武丁説を検討して、それが第一期に属することを証するとともに、主として坑位によって第一期には（一部は二・三期にかけて）殻、賓等二十五人の公的貞人集団、王、扶、勺、自、叶、徙、取等の王族貞人集団、子、余、我、術、歸の多子族集団が存したとする多元集団説を発展させている。陳氏も同様に坑位を重視する。坑位というのは、殷墟の発掘の結果、卜甲骨は意識的に集積埋蔵されたものであることが判明したので、坑の層次からの時期判別が考えられ、ことに同一坑から出土するものは同一時期または同一集団の卜辞と見るべきこととなったのである。ただし、出土坑の状態は二、三を除けば全卜辞の群別を示すほど明確ではない。そこで、陳氏はまず坑位関係によって第三期の廩辛卜辞と康丁卜辞とを区別しうることを指摘し、つぎに同坑と同版または同辞関係を主として卜人（貞人）の群別を求め、その群の称謂を詳細に検索して、その時期を比定するとともに群相互の関係を定め、さらに坑層位関係、字体、語彙、文例等の補助手段を利用してつぎの卜人断代総表をえている。

Ⅰ武丁時期〔賓組〕穷、㱿、爻、亘、古、𡆥、
争、卜、内、㞢、田、㐱、吕、圉、𣏟、㸚、
〔賓組附屬〕冏、㪅、㠯、旃、己、赤、朿、
亞、外、中、𢓊、執（𡘓）、𢆶、𠬝、忄、㕣、
𢀛、𥸨、𢓊、卯、𠧢、䊵、㝵、
〔午組〕幺、𠚤、
Ⅰ武丁晩期〔𠂤組〕𠂤、勹、扶、〔𠂤組附屬〕
𢓊、𣇋、口、勺、㞢、冈、果、彡、𠷎、
〔子組〕子、余、𠦬、𢓊、𢓊、史、𢎪、𢍏、
〔子組附屬〕𠦝、𢓜、〔不附屬〕𠬛、𢓊、
𨸏、𠆢、㞢、𡨦、𥫗、𢍏、
Ⅱ祖庚時期〔出組兄群〕兄（𠒇）、出、逐、
〔出組大群〕中、大、𡰥、
Ⅱ祖甲時期〔出組大群〕喜、禾、木、
〔出組尹群〕尹（𡰥）、行、旅、
〔出組附屬〕𠂤、涿、矢、洋（洀）、
〔不屬組〕𡕩、𠬸、矣、㐱、𠬪、
Ⅲ廩辛時期〔何組〕何、𠃊、㽘、𣪊、彭、𡇒、
口、狄、逆、𢓊、叶、夕、
〔不屬組〕𢦏、宁、𡇈、大、㝬、
Ⅲ武乙時期　歷
Ⅴ帝乙帝辛時期　黄、泳、𢓊、个、立、𠂢。
もっとも陳氏は武丁以下九朝代に分別しうる場合もあるが、大概は五期分別法により、時には武丁より廩辛に至る早期、康丁より文丁に至る中期、帝乙帝辛の晩期の三期分別法によらなければならぬし、分期を厳密に朝代に一致せしめるものではない。要するに、問題はまだ残っているが、董氏の断代説の再検討としては、現在のところ最も精細であり、ことに董氏が第四期に属させた𠂤以下が早期に属させなければならないことは、貝塚、伊藤氏説と相俟って定論とすべきである。

第六章年代、般庚から帝辛末まで前一三〇〇－一〇二七と推定。第七章暦法天象。置閏法、歳春、秋、日・夕、昏、その他の記時法、記年法および月食、雲、雨その他の天象記録について解説。歳は禾年、麦年の半年を指した、殷代には日、月の履暦と旬、祀の祀譜暦とがあり、その相互影響により暦法が発展したという仮説を出している。

第八章方国地理。商は今の商邱附近、大邑商は沁陽附近とし、天邑商は朝歌、中商は安陽であろう、亳は穀熟集の西南、衣（＝殷）は沁陽附近で、晩殷の田猟区はこの附近であったとしている。これはまだ異説を氷解しているとはいえない。その外、泉、京名、武丁時の多方（＝邦）帝乙辛時の人方、盂方征伐経路の地を挙げてその地理を比定。商の区域は北四〇度、南三三度、西一一二度、東は黄河・渤海の線内にあり、その敵対国は河東郡、上党郡方面にあったとする。第九章政治区域。殷王朝の勢力範囲、四土、邑鄙、侯伯の例とその義務等を説く。

第十章先公旧臣。卜辞中の先公神として夒、王亥、土、季、王恒、害、汚、光、王大、戣、をあげ、伝説に比定し、またその祭祀目的、祭儀を述べて、その性格を自然神と人王神との中間、転化関係の媒介の位置にあるとする。また旧臣として伊尹、黄尹、咸戊、旨千、戢、等を摘録。第十一章先王先妣。殷の世系を卜辞によって正し、また法定配偶、先王週祭の制についてとく。週祭については島氏に一層詳細な論考がある。第十二・三章廟號。先王、諸母等の称謂、宗廟制について考証。なお、父乙、祖乙等の十干名は祭祀順序によるものであって、生日死日には関係ないとしている。第十四章親屬。親屬、配偶の称謂、族の名義、索生等。帰妊の如きは帰の姓を示すのではなく、字を示すものとする。また殷の一世一直系制は後世の宗子制に近い性質のものとする。これ等は議論の余地がある。第十五章百官。臣正、武官、史官に分って官名をあげその職司を説く。

第十六章農業及其他。殷代の穀物は禾（小米）、禾（梁）、齍（稷）、黍、秬（黒黍）の五種であるとし、また登嘗の礼、農作過程等の卜辞例、農具、飲食器具、田猟例、貝、車等について説いている。

第十七章宗教。上帝の権威、天界表象、賓天について述べ、賓天は配天観の先駆とする。風雨諸神を述べ、東母、西母は日・月神で上帝の配偶とする。卜辞には帝を祀る明文がないことを問題として、その特殊儀礼に及び、殷代の上帝は農業生産神であることを主要性格とし、自然的主宰であって、まだ人格化属性が与えられて居らず、殷の先公先妣先生は賓天以後天神化され、もと自然神に属する山川土地神は祭祀上は人格化されているといい、卜辞の上帝は秦の白帝少皞の観念に近いであろうともいっている。土地神としては、先公と某地の社神があることをあげ、土と四方観念が結合していることを指摘し、また四方観の発展を述べる。山川神については、山川神と先公との混淆、山川神と地名との混淆を困難としつゝ山川神名の例を列挙。求雨の舞種、校祭、音象等について説いている。

第十八章身分。文献史料との比較により卜辞の衆を農耕奴隷とする。

第十九章総結。王観堂の殷周制度論を批判し、郭沫若氏の殷代社会研究を掲げた後、以上の論述を総括している。結論は以前新建設所載（五五）。

要するに、ここには甲骨の出土以来の甲骨学の発展があり、卜辞解釈の基礎的事項から卜辞の史料的性格を定める断代研究、殷の天文、産業、社会組織、地理、宗教にわたる広般な殷文化の復元があり、やゝ比重の相違があるが、ほゞ取上げるべき事項とその問題もつくしており、多少繁簡の差はあるが卜辞例も豊富で、ほゞ重要なものを備えていて事項索引にも役立ち、また文献資料との比較研究もよく行われている。詳細に見れば、ただ一例だけをあげるに、陳氏は「婦姘受黍年」の婦姘を一部族又は一地方を代表するものと解しているが、これは「王立黍・受年」と同趣の文で、農事に奉仕することの吉凶を卜したものと解しなければならないように、卜辞例の適切でないものがある。卜辞中の事項の理解に至っては、わたくしにとって首肯し難いものが間々あるが、他の研究者の異説を唱えるものも少くなかろう。それにしても、今日では期待しうる最上の殷文化の総覧書としなければならない。また、書中には数多い甲骨文字の新な読解があり、附録には甲骨材料の始末、出土甲骨の統計、参考文献目録、甲骨著録目録があるのも、読者にとって便利である。

ただし、陳氏は「これは殷代社会とその歴史文化に対する初歩的理解である。この理解は殷代社会の性質分析に役立つものであるべきである」といっている。その初歩的理解というのは謙遜の辞で、当らないことはいうまでもないが、これが甲骨学の最終段階ではなく、陳氏が期待するように、その今後の発展の有力な踏台となるものである。

例えば、貞人の群別、その時期的交代等は本書に示されているところであるが、一歩進んで、何故に群別があったのか、交代があったのか、それが如何なる社会的位置を占めていたか、如何なる機能を果していたか等については詳細を期待し得ない。そこに董氏の新派旧派の交代説があったわけでもあり、貝塚、伊藤氏の貞人多元集団説があるわけでもあるが、これらはなおよく卜辞例を蒐集分類してそれぞれの群団の職司が検討されなければならないであろう。そして、それは当然貞人集団成立の因に遡らなければならない。その意味では、早くから古代社会の特殊構造に注目し、言語現象、神話等を手掛りとして宗教人の性格、機能の探索を進めておられる加藤常賢博士の研究に注目すべきであろう。

また、甲骨資料の量には及ばないが、殷代文化研究の資料には、少くない殷代または殷式銅器銘があるが、本書にはその部分的利用はあるが、相互比較研究はない。これによって卜辞の欠を補正することが出来るのである。丁山氏に甲骨文所見氏族及其制度の遺書（五六）があるが十分ではなく、加藤博士の斬新な解釈の一端の発表があった（五六、羽出・定本書道全集一）が流布を見ない。目下は加藤道理氏が精密な卜辞との対校研究を行っている。

要するに、このような甲骨学の研究は層一層推進されるべきものが多い。そして、本書はその推進の問題の所在を示し、発展の基礎となるのである。そうした発展は管見の及ぶところでもすでに各方面でなされつつある。その一に、貝塚、白川、内藤、大島、伊藤の諸氏は近々殷古代帝国の文化の綜合研究成果を発刊の筈と聞いている。その成果が期待される。

その甲骨学の発展はようやく甲骨資料学と古代文化学との分化を萌しつつあるように思われる。董作賓氏の今日之甲骨学（五七、金匱論古綜合刊一）によれば、饒宗頤氏に甲骨資料索引の甲骨文滙編の編纂があり、金祥恒氏に甲骨文録の続編の編纂がある。また、陳氏によれば、于省吾氏に甲骨字典の契文例の稿本がある。董氏のいうように、字典、索引等は研究者に不可欠で、その整備が望まれ、それぞれ一日も早い公刊が待たれる。陳氏によれば未著録の甲骨数万があるが、これも著録して研究者の便に供してもらいたいものである。本会でも、研究者の便を慮って、本号からとくに島氏に請うて甲骨索引を逐次掲載することとした次第である。

この研究工具の整備にまして重要なのは、実証的に広般に究明しうる中国最古の文化は殷文化であるので、その特質を明確にして中国文化史展開の研究に貢献することである。この点では、陳氏の執筆の当時よりも事情は有利になっている。それは中国各地で考古学的研究が一層推進され、ことにまだその総成果の公刊はないが、鄭州の発掘が進捗するにつれて、その古代文化史的意義は著るしく、小屯文化に先行する文化形態、それに続くもの、つまり殷文化の文化史的位置確立の希望が増大したことである。殷文化がどういう過程を経て成立したかは殷文化の特質理解に役立ち、その将来の展開を予測させる。甲骨学の究極目標からいえば、甲骨卜辞の資料としての性格にはある種の局限があることであり、それを豊かに解釈して殷文化を綜合復元するには、これらの考古学的な研究と緊密な連繋協力がなければならない。この点では陳氏はよく殷墟発掘の物的証拠を利用しているのではあるが、断代に坑位を問題にしているだけに、殷墟の考古学的な物的文化復元も附して置いてもらいたかった。殷墟発掘の総報告がないので、困難なことではあるが。なお、伊藤氏が目下殷住居址、坑の層位等綿密な復元に努力しておられるので、何れその結果が公表されるであろう。

殷文化の史的特質はもちろん考古学的研究だけによって明かにされるのではない。卜辞自体のうちにそれ

を明かにしうるものがある。陳氏の綜述は何れかといえば殷文化の横の構造を主にしたが、縦の構造—立体的な構造を明かにしなければならない。一甲、一骨に刻されているいくつかの卜辞は独立したものではなくある行事を主にして相関連するものである。そこでその関連を辿ると主となっていた行事を捉えることが出来る。董氏や島氏が祖先週祭の特殊な祭祀形態を見出したのはこの方法によった。それは祖先祭祀ばかりでなく、他の行事についても同様である。例えば「乙亥貞來甲申酌禾𢍰于今癸。乙亥貞侑彳伐自上甲亣至父丁于乙酉。丙子侑膤亭人于河其用。戊寅貞惠王𢍰。戊寅貞囗斯令。」（甲六九〇。）によれば、その祖先祭（祭祀形態は異る）も含めて、甲申から始って今に禦し、多先祖を祀り、河を祭り、ついに王以下が𦔮田する祈年祭の祭祀形態が復元出来よう。また関連する卜辞は一甲骨には止らず、いくつかの甲骨片にわたっている。YH一二七坑のように同一坑の卜甲の集積はその関連群行事の分類が出来はしないか。まだ十分な成果はえていないがある程度の見通しは立つ。とにかく、このようにして一層少数の殷文化の形態が明かになり、それだけにその性格も判然とする。

　この研究法は当然に、祖先祭、河祭等のそれぞれの発生ないしは本来の性格と、何故にそれらが王朝の祭祀形態に統合組織化されたかということと、つまり殷文化の成立を問題にしなければならない。卑見によれば、殷文化は多元な先行文化を要素として成立したものである。例えば、陳氏は山川神と先公、地名との混淆を困難としているが、この混淆は族（人）名とにもあろう。そしてこの混淆は、この点から見れば当然であって、実は混淆ではなくて、殷に先行する氏族神の残存と解しなければならない。また陳氏は、一面には河、羔、土を先公神に列し、一面には土地神に列している。確かに先公神にはその二面性があるのではあるが、氏族神が先行することを知れば、その中から河、羔の代表が立てられ、そして陳氏が指摘しているように、方締の祭祀と結合した土神がさらにその統合として立てられるという殷王朝の宗教形態の発展過程が明かになって来るのではなかろうか。そしてこの土を立てることは上帝観の成立と対応一致するものである。

　このような殷文化の成立は、個々の事実の横の関係が物語り、殷王朝（卜辞時代）間の展開の変動が示唆するが、時には卜辞の及びえないものもある。それは一般的な古代学、民族学等の知識によって補わなければならないであろう。とくに他の文化圏との比較が重要になろう。例えば、卜辞に現れる上帝の最も顕著な権能は雨を降らせることである。つまり雨師である。

ところで、雨師に王上の機能を認めるのは他の文化圏にも存する事実である。とすれば、その相互比較は殷の上帝観を一層明確にするとともにその特質を明かにするであろう。ことに卜辞には四方観のようにシャーマニズムから上帝観が確立する程序を物語っているものがある。しかも上帝はシャーマニズムを先行としながら、自然的主宰神から邑集合体の王朝の主宰神へと発展した。統一的殷王朝には統一的宗教が成立し、ここに殷王朝の神政政治があった。つまり、殷文化の王朝形成の根本からの統一的理解ができることになるのではなかろうか。また、それ故に王朝文化の発展は、殷をつぐ周においても上帝観—天命観を根幹とする必然性があったということになるのではなかろうか。

　こうした見通しが立てられるのも、個別的な殷の文化現象の研究とその総体との見透しとがあってのことである。その意味で、わたくしは陳氏の綜述が甲骨学の基準と道標とを建てられた功績に感謝する。これを一期に劃して、それもちろん多くの甲骨学者、古代学者の切瑳と協力とによるのであるが、殷文化の研究はいよいよ深奥に達することであろうと思われる。

（原載《甲骨學》第六號，日本甲骨學會，一九五八年）

“殷代地理簡論”評介

(李学勤著,科学出版社 1959 年 1 月出版　101 頁)

全书共分三章:第一章叙述商西猎区,对大邑商西南部及其西方的狩猎区,根据可以联系的地名和地理位置分为凡、敦、盂、邵四区。这一区域是以沁阳为中心,地当太行山麓,沁水附近与黄河之間,是狩猎及政治上的重要地方。第二章叙述帝乙十祀征人方路程及其有关問題。第三章叙述商王国以外的一些方国和他們与商的关系以及一些战爭上的地理問題;最后并附带的説明了商王国的活动范围。

曾如作者所說的,本书并非将卜辞中所有的地名,尽多地罗列出来,而只是对于上述三方面的問題,作了論述。其在研究当中所采用的办法,作者在自序中也曾談到,即是:“以安阳即殷这一肯定的事实为基点,联系論述殷代的历史地理及其有关历史事件”。

过去,研究殷代地理的,或者单独地、孤立地就其文字的音义和現在的地名相比附、着重于一些地名的考释;或者是根据古代文献中所記載的三代都邑而加以研究。前者如王国維“殷虚卜辞中所見地名考”,楊树达“释滴”等是;后者如王国維的“説殷”、“説亳”和丁山的“由三代都邑論其民族文化”等是。虽然在他們的考释中也偶尔能有一些收获(如王国維对于雍、盂的考訂),但是,由于其研究路綫、方向、方法的錯誤,以致其研究的結果常常是錯誤甚至是荒謬的。

郭沫若氏在“卜辞通纂”中,定“衣”为地名,并且指出其地在沁阳县。在該书的自序中又加以比較詳細的申述,以为噩、衣、盂、雍四地相近,晚殷畋遊之地多在今河南沁阳附近。这种創造性的运用了联系若干地名而系統的加以考訂的研究方法,是馬克思列宁主义的研究方法体現的,給殷代地理的研究工作指出了明确的方向。

“殷代地理簡論”一书,就是在这种研究方法的启发与影响之下来进行研究的。尽管书中的立論稍嫌浅显,并且只是作了一些史料的整理与排比,但是从学术研究的路綫方向来讲,本书努力的方向还是对的,是值得介紹的。

第一章中关于凡、敦、盂、邵狩猎区域的联系論述,是在前人研究的基础上,又为引申了一步。在第二章里对一向被認为帝辛征人方的說法,提出新的論据而改訂为帝乙征人方。并且駁斥了董作宾、陈梦家等的荒謬錯誤說法。都是比較好的一些章节。

在第二章里,作者为了要解释散氏盘的地名,而联带的叙述了西周后期銅器的分期問題,这种并不詳明的叙述,就显得很不必要。

在研究“距离”的問題上,推理罗輯也不周衍。例如书中提到“戊日王田于牢,三日后卜田于盂,这两个地点的距离,就不能超过三日的行程。如果相同的两个地点在一版上相距三日程,在另一版上相距二日程,那么应取二日程为其間距离的上限。……在同日兼卜两地,这两地的距离,必然短于一日程,我們称之为“一日程”(8 頁)。这种說法原是可以的。但作者在下面引申下去举出若干例子就不合理了。如(象第 35 頁,高(高):此地距:

𣿅	六日
𠷎	二日
雝	五日
榆	五日

由这样的一些材料上来看,我們可以得到一个印象即:𣿅距高最远(6日程),而𠷎距高則最近(高距𠷎不过二日程—53 頁)事实上不管是否如此,这个道理是不好解释的。譬如說某人 5 号在北京、6 号在安阳,8 号才到郑州;又某人于某月 12 号离北京,14 号直达广州,按照上述写法应为,北京:此地距:

广州	三日程
郑州	四日程

似乎北京距广州近而距郑州远了。若說为至多不超过三日、四日則可,若象上述写法,則很不合适。商王逐猎、行軍,或途中稽宕时日,或乘胜迅速直追,岂能以所需时間,定其近远?时間、距离、速度三者知其二項可以求其另外一項,作者这种提法只是举出时間,并未能举出速度,如何可以生出”距离”的概念来?

书中引用前人意見,应註明出处,可以見出那些是肯定前人的意見、那些是在前人著作的基础上又作了引申的研究、而那些是作者的創見。

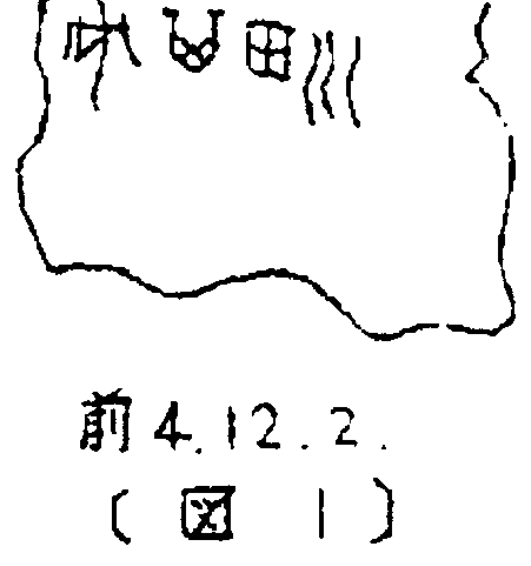
书中缺少了完全不应該缺少的示意图和地名索引,虽然作者在自序中曾經提到因为“近年来从事其它方面的研究工作,这些缺陷不能彻底弥补……”,但缺陷則毕竟是一个缺陷。

(原載《考古》1959年第5期)

釋甽 ——關野・天野両氏の論争をめぐって——

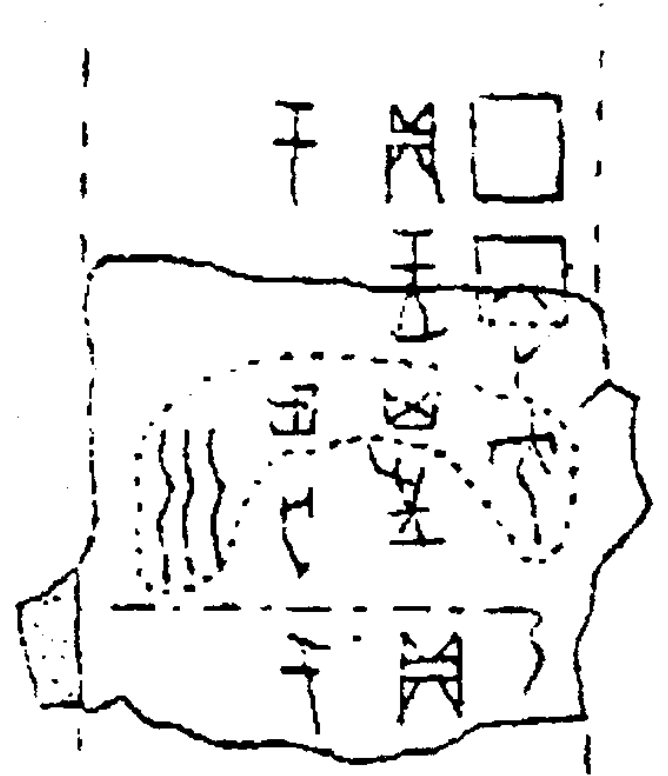
松丸道雄

数年来、関野雄氏と天野元之助氏との間に、図Ⅰの卜辞の読み方について、論争がある。（①関野「殷王朝の生産的基盤」（東洋文化研究所紀要第五冊）。②天野「殷代産業に関する若干の問題（『殷代青銅文化の研究』）。③天野「中國古代史家の諸説を評す」（歴史学研究一八〇號）。④関野・前掲論文付記（『中國考古学研究』）を参照）今、その論争の過程を詳述することは避るが、要は関野氏が甽を一字と見做して甽と釈し畎の古字として、そこから殷代に"すでに灌漑の施設も或る程度備わっていた"であろうとされたのに対し、天野氏は、これは田と巛の二字で「田獵をして災なきかの意」に読むべきもの、"したがって甲骨文字の上から今のところ田圃灌漑の確證をつかむことは出来ない"とされたところにある。その後、伊藤道治氏は、この一片には上下に欠字があるとされた（⑤書評「中國考古学研究」（東洋史研究15-4））が、如何に読むべきか、どのような欠字があるかには触れられていない。



前4.12.2.
〔図1〕

　ところで、私はこの一片と比較対照すべき卜辞を、偶々、京大人文科学研究所蔵骨のうちに見い出した（図Ⅱ）。この卜片の上半と下半の残字を勘合することによって、上半は「王亥卜何貞王其往于田亡巛」と読みうるについては、疑問の余地はないと思う。（かゝる文体の田獵卜辞は第一〜四期を通じて、習見する。）とすれば、図Ⅱに於いて、点線で囲んだ四字は、問題の図Ⅰとまったく同じであって、図Ⅱは布字のズレによって、最下段に四字が横列し、この部分のみ残ったものと考えられるために、復元すれば、「王亥卜何貞王其往于田亡巛」となり、たまたま田と巛が接近したに過ぎないと思われる。貞は第三期貞人であって天野説の如く亡（なし）には読めず、また甽は二字であって関野説の如く甽とした上で灌漑施設の存在した証拠とするわけにはいかないであろう。図Ⅰは、王が田獵地に赴く際に災禍が降るか否かを貞卜した第三期卜辞であると考えるが如何であろうか。（昭三四・四・七）



人文.925
〔図Ⅱ〕

（原載《甲骨學》第七號，一九五九年）

島氏「殷虚卜辞研究」を讀む（一）

——「貞人補正」の補正——

池田末利

陳夢家の殷虚卜辞綜述（一九五六）に續いて吾國では二つの綜合的な卜辞研究が相次いで公刊された。貝塚茂樹氏編の「古代殷帝國」（一九五七）と島邦男氏の「殷虚卜辞研究」（一九五八）とがそれである。中央研究院發掘の甲骨資料や胡厚宣等に據る戰中戰後の新資料が整理刊行された事から、これまでの材料を基本的に検討し直すと共に、單に卜辞資料に止らず同時にそれを凡ゆる地下遺物遺蹟との関係に於て見てゆく総括的考察を意圖する事はこの學界の最近の傾向のやうに思はれる。この事は云ふまでもなく從前の断片的な研究からの成長を意味するものでまことに喜ぶべきことである。併し一面研究が綜合的となればなる程そこに内包される問題も多くなる譯で、手放しで喜んではかりも居られまい。「古代殷帝國」が周知の如く卜辞に止らず、最近の地下資料に基いて殷代諸文化の立體的素描を試みたものではあるが、細論に亘る純學術的叙述と云うよりは概説書であるに對し、島氏の本著は厖大な卜辞資料を一つ〳〵整理した、多年に亘る氏の労作の集大成である。何は兎もあれ　これ丈の資料を解讀し統合し、これに基いて殷末諸文化を系統付けた著者の努力に對して吾々は心から敬意を拂ふものである。

　さて本書の内容については一々紹介するよりも氏の自序に徴するが簡明である。稍煩重に亘るが一應引用すると、「本研究は卜辞により殷室の祭祀及び國家の状態を考察し、以て殷人の精神的社會的環境を明かにしたものであって、序論と本論より成ってゐる。序論は卜辞の時期を決定する基準である「貞人」と「父母兄子の稱謂」を研究し、前者に在っては董作賓氏・陳夢家氏の貞人説を検討批判して五期貞人説を補正し、後者に在っては卜辞上の父母兄子の稱謂を、世代毎に識別してその統属関係を明かにしてゐる。本論は第一篇「殷室の祭祀」・第二篇「殷代の社會」より成てゐて、前者は殷室の祭祀を内祭、外祭、祭儀の三方面より考察したものであり、後者は殷代の社會を地域、方國、封建、官僚、社會、産業、暦法の七方面より考究したものである。古代に於いては國の大事は祭祀と征伐であると謂はれてゐるやうに、卜辞に存ってもこの兩者が大半を占めてゐて、殷王室の宗廟の祭祀には五祀と禘祀とがあり、五祀は先王、先妣を五種の祀典によって整然と定例に祀るもの、禘祀は父王を尊祀して五世の先王に及ぶ祭祀であって、前者に於いてはこの祭祀の体系と先王先妣が祭られる祀序とを卜辞より歸納し、この歸納に本づいて、史記殷本紀の世系を修正し、又第二期、第五期の祀譜を復原し、これによって帝乙の在位は二十年、帝辛紂王の在位は三十一年であることを立證して居り、後者に於いてはこの祭祀の意義を明確にすることによって、漢儒以来聚訟の府とされてゐる禘祫説を解決してゐる。又宗廟外の祭祀は農事と戰勝を祈ることが主要目的であって、上帝・自然神・高祖神・先臣神が祭られて居り、これに於いては上帝の祭祀・諸神の神格・禘祀と郊祀・上帝と天などの問題を解明し、更に祭儀に就いては祭祀用語の意義を明かにすることによって、内外二祭祀の祭禮を考察してゐる。第二篇の「殷代の社會」に於いては、卜辞の地名五四二のうち、兩地間の行程日数を明かにし得る一〇五の地名によって、殷の地域を考定し、この四周には例へは武丁時には二十二の敵國があって、武丁は之を征伐して居り、就中、帝乙王十年の夷方征伐・帝辛王八年・王十年の夷方征伐、及び殷、周の関係については特に之を精密に論証し、又内外の諸侯、及び官僚の組織を考察することによって、氏族制が残存してゐる中央集権的封建國家であることを証し、且つ奴隷制社會説の論據を逐一検討して、この説の信ずるに足らざることを明かにし、更に農耕が全地域に行はれ王が藉田の禮を以て天下の豊穣を祈ってゐて、農業が社會の基盤をなしてゐること、及び暦法は董説の如き四分術が行はれて居らず、帝乙以前は太陰暦であって、帝辛時に及んで太陽暦が行はれ、暦年を三六〇日、太陽年を三六五日前後とするやうになったことを明かにして、周の暦法研究の基礎を確立してゐるのである。」と云ふのである。

　果してこの自序の通り本書の内容が悉く精密・正確であるとすれば、これは「殷墟卜辞の研究」であるに止らず、實に「殷墟文化の綜合的研究」であり、どれ一つ取り上げても論争を招かぬものはない殷末社會文化の全組織に一つ〳〵解決を與へたまことに未曽有の偉業と云ふ事になる。例へば「漢儒以来聚訟の府とされてゐる禘祫説を解決してゐる」とすれば、態ゞ一書をものして論陣を張った清朝の毛奇齢（郊社禘祫問）、程廷祚（禘祫辨誤）、惠棟（禘説）、胡匡衷（禘祫問答）、孔廣林（禘祫觿解篇）、胡培翬（禘祫答問）等を始め諸家の疑惑が僅々十三頁（一七七—一八九頁）に一擧に解決された譯で、地下に眠る清儒達も「卜辞」と云ふものの靈妙不可思議なる効能に讃歎これ久しうする事であらう。又殷末期が「氏族制が残存してゐる中央集權的封建國家であること」が立証され、奴隷社會説が「信ずるに足らざること」が明かにされたとすれば、戰後頓にかまびすしい日中古代社會史學者間の論争にも一應終止符が打たれた譯で、亦驚異すべき學界への貢献と云ふ事にならう。更に殷暦法に就ても董作賓等とわが薮内清博士との間に論争があるが、これ亦解決済みとなりさうである。其他宗教、地理、産業等の各分野に於てもこれまでの疑問は悉く霧消し、要するにこの一書によって「精密に論証」された殷墟文化の決定版が與へられた事となる。かくて甲骨學徒は今後失業状態に置かれないとも限らない。

　そこで私は本誌の編輯者から書評を依頼されるや、その責任の重且つ大なるを痛感して、一頁一頁私なりに検討を續けたところ、序論に於て既に意外なる事實に遭遇した。即ち氏の所謂「卜辞の時期を決定する基準である」最も基礎的な貞人説に於て、吾々が一應結論済みと信じてゐる貝塚、伊藤氏（以下貝塚と簡稱）の王族子卜貞の二貞人集團、即ち陳夢家の武丁晩期貞人集團が本書では武乙期或は文武丁期に引下げられてゐる事、即ち結論的には董作賓説に近くなってゐる事である。周知の如く、これ等貞人グループの歸屬に就てはこれを文武丁期と見る董氏説に對する貝塚氏の反論があり、又これとは別に陳夢家の詳密な斷代四篇（殷虚卜辞綜述に收載）がある。貝塚、陳氏の結論は厳密には必ずしも同一ではないが、これ等貞人の時期を武丁期とする點に於て略一致を見てゐる。又胡厚宣はこれ等卜辞の字体上の特異性や父丁・子庚等の稱謂からその時期を武丁以前、盤庚、小辛、小乙時のものと推定を加へながらも武乙・文丁時なるか武丁期なるか疑問として武丁卜辞後に列してゐる（甲骨續存序）。貝塚、陳説を正面切って認めないのでは勿論ないのである。それにしても斯界の一人者たる胡氏が甲骨研究の最も基本的事項に就てかかる曖昧な態度を持する事は遺憾と云はねばならぬ。其後董氏は依然として自説を枉げてゐないやうである（[illegible]綜合簡評刊）が、その論據は小屯乙編序以上には何等示されてゐない。貝塚、陳氏の武丁期説を打破するに足る根據が示されない以上細部に於ては多少の問題があるにしろ、吾々はこれを以て一應定説と見做すものである。然るに前述の如く島氏が本著に於いてこれ等を再び武乙・文武丁期に引下げてゐる事は實に意外である。この序論の「貞人補正」は本誌第四、五號に收載された山の

であるが、その結論に不審を抱いた私は昨年名古屋大学に於る第九回日本中國学會大會に於て島氏に董説に據るか否かを質問したところ、時間の制約もあってか、同氏からは「氏獨自の考察によるもの」との頗る自信に満ちた解答しか得られなかった。依って本書に對する全般的な價値附け等は後に譲り、これ等の問題をも含め頁を追って檢討した結果の私見と疑問とを提出する。折角の著者の努力に對して強いて異を立てんとするつもりはないし、況んやけちをつけようとか、揚足を取らうとか云った根情は毛頭持たないが、嘗て書いた通り、甲骨學研究が今日まだ基礎的段階に在るものと確信する私は、研究上の基本的事項に就ては今日に於て徹底的に究明して基礎を固めて置く必要を痛感するからである。豫め著者及び讀者の諒恕をそふ次第である。

序論　第一　貞人補正

○五頁　(イ)貞人「中」を武丁期とする董説を著者は駁して大、矢と同版なれば第二期とする。陳氏も祖庚期の出組大辞に編入するが、祖庚期卜人の武丁晩期に及ぶ可能性を認めてゐる（綜述一九〇頁）。董氏の示す續1.45.5に徴すれば出祭―第二期にも出は若干見えるが―があり、且つ貞人を兼ねる場合が多い武丁期骨臼刻辞の簽署人に「中」がある（甲3507、燕347等）事を併せ考へれば武丁期に及ぶものと見て差支へなく、大、矢と同版なるは逆に此の二人の武丁期に溯る可能性をも考へられる。從って態々董説を駁する必要はない。且つ島氏が中、大同版の例とする本書十二頁の摩1248の大は夶に作り、夶（扶）とも見得るから、逆に中の武丁期たる證ともなし得る。(ロ)𡴎を著者は唐蘭に從って貞人と見ないで再とする。この字形を𢦏として才との通音から再と讀む唐氏の解字は文字に精通する同氏の說としては牽強の感が深いが、それは別としてもこの字を連用する貞人が内、賓、亘の三人のみに限られるのは如何なる理由であらうか。著者はこの字が右三貞人の必ず下にある事を再の理由とするが、𡴎が貞人階級に於て三人より下位に在ったとの想像も不可能ではあるまいし、必然的理由とはなし得ないであらう。吾々は暫らく董・陳及び李亞農（[illegible]）に從ひやはり貞人とするを妥當と信ずる。

○六―七頁　界・桊及び𢓊以下十三人中𦍌・㠯以外は皆既に陳氏の擧ぐるところである。かかる場合、著者の記述だけを見れば如何にもその穫であるかの感を抱かせる。併し前人の業績はその事を明記するが研究者としての態度ではあるまいか。たとひ別個の立場からの獨自の發現であるにしろ、既に前人の述る所であれば叩は卒直に認めて其方に譲るべきであらう。さも無くば前人の業を無視する事となる。意識的か悪意識的かは判らないが、本書の随處にかかる前人（殊に邦人の場合に多い）の無視の態度が見られる。著者の甲骨學に於る自信の程を示すものかも知れないが、正しい學問的態度でないかと非難されても已むを得ないであらう。又著者の示す京176には𡆥は見られず、𡆥（陳氏の失）が見えるのみ。㠯は亘の異體とも見られ（[illegible]釋文）、著者の云ふ「更に他證を必要とする」部類であらう。

○八頁　(イ)陳氏の山貞人説を駁して續5.31.8の山を著者は㱿の殘痕とするが確證はない。又乙1448の山は著者の云ふ通り如何にも貞人らしくないが、陳氏は同一人が該片に見える事を示したのみで此片に於て貞人たる事を云ってゐるのではないであらう。又𡆥の字體を第三四期特有とするは著者の持論である。私も嘗て𡆥字形に就て考察した事がある（[illegible]）が、當時まだ資料が十分でなかったのと董氏斷代説を過信してゐた事から𡆥を後期字形と判定した。一般的にこの結論は誤りとは云へないが、武丁晩期に於て既に𡆥に作るものがある事は前期王族（𠂤組陳氏）の子卜貞（子組陳氏）の武丁期たる事を認める限り事實である。從って𡆥字形は斷代の相對的基準とはなり得ても、絶對的基準とはなし得ない。乙1448の字体―字体もそれのみを絶對基準と爲し得ない事は後述の通りであるが―武丁晩期とする事は決して不當でない。(ロ)陳氏の貞人と見る「共」に就て、續6.12.6の場合著者はこれが「貞人であるためには更に確証を必要とする」と云ふが、同版の右辞「丙午卜妥貞」との並列関係から推せば「辛亥卜共貞」と讀む事は一向差支へない。更に確證を要求するなら、著者が前頁に於て只一例のみから貞人たる事を結論してゐるのも同様であらう。(ハ)著者は𡆥を武丁期として文82を示す陳説を駁して、帚井の語が後期に見える證として寧3.238、京1004（同片南方坊2.192）の二例を擧げる。前者の字体は如何にも後期殊に第四期らしいが確證は得られない。但帚某が後期にも見える事は陳氏も既に認めてゐるやうである（綜述四九二頁）。未を第一期に米に作る事は無いとするのも武丁晩期貞人を第四期に引下げる先入見に基くもので、字体を絶對視する著者の基本的誤謬である。又京2004所見の𠂤或が第四期以外に無いと云ふなら、その證例を示すべきである。これは武丁期頻見の𠂤或の異体と見得るであらうし、並に帚井武丁期說を裏付けるものと爲し得よう。骨臼刻辞に𡆥が見える事はその武丁期なる傍證である。

○九頁　(イ)貞人己に就ての陳氏の示例粹1239の己を著者は巳（㠯）とするが、これは無理でどう見ても巳とは見えない。郭氏が己とするは當然である。凡て著者は陳氏の所説に對して同一結論の場合には前述の如く名を示さず、見解を異にする場合は強いて異を立てて無理に反駁してゐるかの感を禁じ得ない。そこに多分に陳氏への對立意識が見出されるのは如何なものであらうか。(ロ)貞人㞢を武丁期とする陳氏への反論として干支卜・干支卜貞形式及び字体を擧げるが、これ亦子卜貞卜辞を武丁期に非ずとする先入觀を前提とするものである。卜辞の形式、字体が斷代の要素となる事は疑ひないが、それ等は他の諸要素―坑位・人名等の―と相關的に綜合的に考へられるべきものでそれのみが絶對的基準とはなり得ない。武丁期から乙・辛期まで全体としての書体の變遷は事實であるが、亦同期卜辞相互間に在っても可成りの差異の存する事は吾々の經驗するところである。換言すれば書体は必要な要素ではあっても十分な要素ではあり得ない。著者は何處までも字體を絶對視し、これを尺度として他の諸要素を規定してゐるやうであるが、これは寧ろ逆で字體はその客觀的乃至主觀的傾向性の故に他の客觀的諸要素の後に置くべき二次的性格のものである。卜辞形式に就ても同様で武丁期には既に干支卜某形式と共に干支卜貞形式が見られる事は貝塚氏の指摘する通りである（斷代再検討三八頁、前5.40.2等それである）。著者のかかる顛倒した研究態度の導いたものが武丁晩期貞人グループに對する時代錯誤と云へよう。(ハ)𠂤に就ての陳氏の示例後下22.3に就ても著者は𡆥を理由に第三期の何と同一人とする。此片の𡆥は下欠で𡆥に作ったかも知れないがそれは著者の臆測に過ぎない。たとひ𡆥としても前述の如くこれのみで第三期とする理由とはならぬ。著者は陳氏の「可能與何爲一人」の語を引用してゐるが、陳氏は明かに「可能與下何爲一人」―即ち「次の何（武丁期）と同一人かも知れぬ」と云ふのであって第三期何とは區別するのである。(ニ)かく陳氏は康辛時の人が武丁期に既に生存してゐたか否かは別として第一期の何と第三期のそれとを字體及び坑位によって一應區別するが、著者は何等の理由も示さずして「この說には遽かに信を措くことは出來ない」とする。これは一體どういふことであらうか。字體を重視する他の場合と矛盾するものではないであらうか。(ホ)陳氏が字形により斷定的に武丁期とする貞人御に就て、著者は𠂤の場合と同様燕631の𡆥を理由に第三期に引下げるが、この𡆥も下欠、若し𡆥に作ったとしても前述の如く第三期たる必然的根據とは爲し得ない。(ヘ)陳氏がやはり武丁期と見る𥄂を著者は介D（六月）を理由に第二期に下げる（十五頁）が、武丁期とする陳氏の午組卜辞に於ては既に介Dに作る（綜述一六二頁）。著者は午貞人を認めない（三一頁）からかく結論するのであらうが、この午に就ては其の項で批判する。尤も御と同様陳氏も字形から斷定的に武丁期とするに過ぎない。

○十頁　(イ)陳氏の𠂤組貞人術を文武丁期に引下げ、又これと徙とを同一人とするは共に首肯し難いがこの事は後に述べる。(ロ)陳氏が字形から武丁晩期乃至祖庚期とする貞人𢀛を著者はその字體の祖銑を理由に第二期とする董説を妥當とするが、かかる「祖銑」と云った主觀的判定のみからの反論は客觀性を有しない。第一期には更に祖銑なる字體が幾らも見出されよう。陳氏も祖庚期に及ぶ可能性を認めてゐるから強いて異を立てる必要はない。(ハ)陳氏の武丁期貞人𠂤を亦著者は父D（六月）を理由に第二期とするが、粹1338には介𠂤に作り前述同様武丁期として差支へない。(ニ)陳氏の武丁期と見る貞人𢀛に就き、前6.24.2の丁亥卜𢀛とを著者は字形の大小により一辞と考へ得ないとするが、見方の相違で一辞とするも差支へないであらう。但この場合𢀛か貞人であるか否かは問題である。かくて著者は「陳氏が第一期貞人としてゐるものは盡くこれを第一期と見做し得ない」と斷ずる。陳氏は「干支卜某貞」形式又は字形のみにより武丁期とする場合は必ずしも固守するわけでなく、時期の下延を認めるとか暫定的とする等一應の愼重さを忘れてゐない。然るに著者のこれに對する反駁は字形―それも時には未確認の字形―のみを理由とする以外に客觀的根據は何等認められない。ここ等に著者の結論を急ぐ缺陷を暴露して居り、同時に陳氏への對立意識が窺はれる。仍ち逆に「島氏の非難は盡く當ってゐない」と云ふも敢て過言ではないであらう。

○十一頁　(イ)陳氏が𠂤組貞人とする𠂤の用例乙124に就ては既に貝塚氏がこれを文武丁期とする董氏說に疑問を抱いてゐる（前揭論文三六頁）。但乙124の字體はこれを𠂤組と見るも決して不當とは云へないであらう。(ロ)界に貞人以外の用法が見える事から著者が陳氏の示す前1.37.6の界が貞人なるかを疑ふは可とするも林2.22.9等に於て陳氏の云ふ如く武丁晩期貞人と見て差支へないであらう。又界に就て妣士の稱謂例として著者の示す外429は子組卜辞で第三期ではなく、粹1545は郭氏は仕？とし、丁山も以多田亞任と釋して金文及び尚書の「男」に當ててゐる（甲骨文所見氏族及其制度四五頁以下）。前後の關係より推して妣士でない事は明かである。界を𠂤組附屬貞人とする陳氏への著者の反論は成立し難い。

○十四頁　字體のみから𢀛を第二期貞人とするは前述の如く遽かに贊成し難い。

○十五頁　(イ)著者の示す先、賓、亘、介等の貞人は既に著者自ら認める如く陳氏の擧げる所であるから、其の事を明記して置くべきであらう。(ロ)介Dを根據として

亘・𣪘の第二期なるを説くの非は前述の通りである。

○十六頁 (イ)陳氏が武丁晩期より第二期に及ぶ貞人とする丹に就て著者は更に確證を要求するが、文519の卜丹曰……より推すも又陳氏の示す佚527下通別二上395との用字例の對比より見るも、これが貞人たる事は認むべきであらう。 (ロ)陳氏が第二期貞人を祖庚時と祖甲時とに分け、兄庚と稱し得るを後者と見るを著者は駁して「兄庚の稱謂は他日に發現する可能性が無しとはせず」と云ふが、かかる非難は全く非難の爲の非難に過ぎない。凡ての學問がさうである如く、吾々は現在與へられた甲骨資料を素材としてしか立論し得ざるものであり、將來新資料の發現により立論・訂正の必要が生ずればその時に改訂すべきが當然である。未知の資料を豫測して立論せよとの要求は研究者に豫言者たれと強ひるものであり、科學の世界では不可能の事に屬する。現に著者自身、十一頁では兄庚と稱する貞人が第二期である事を強調してゐるではないか、矛盾も甚だしいと云はねばならぬ。 (ハ)周祭・歳祭制度の成立を祖甲期以後とする陳氏の見解を著者が斥けて、両祭共第一期に成立通行したとするは周祭中の𢦏・彡・翌三祭が第一期にも見える事に據るものの如くである(一〇四頁)。併し第一期所見の此等三祭が祖甲期或は乙・辛期の如く周期化せる確證は何も得られない。そこで第一期に於ては其の萌芽のみを認める陳氏の見解(綜述三九七—八頁)が妥當である。若し成立通行したと云ふならその詳細を示すべきである。 (ニ)第三期貞人を康丁時に限るは廩辛の即位を否定する著者の特異な見解に基くものらしいが、その賛成し難い事は後に述べる(の七綜四頁)。

○十八頁 (イ)第三期貞人としての𠭰・𡧊・彘・狄・𢓊・𢀛・教・𤰔等は既に陳氏の指摘するところである。(ロ)著者は𢓊と逆との字體の相違を指摘し乍らも董氏に從って暫らく同一人とするが、この二字は右傍の構造を異にするから陳氏が一字と見ない(綜述一九三頁)が妥當である。

○十九頁 第二期貞人即が第三期に及ぶ證例として粹375を擧げる。郭氏も「此片類失其次」と云って即を貞人と見てゐるが、卜貞の字は見えず、此の即が果して貞人であるか甚だ疑問である。又第三期の后祖丁は武丁でなく、祖丁(祖辛の子)と見るべきである。此の事も後(本書八八頁)に觸れる。陳氏も云ふ(綜述三九一頁)如く、即は祖甲期から更に祖庚期に溯る可能性が強い。

○二十頁 (イ)著者は㕣(名)を甲3377に於て何と同版との理由から康丁期貞人とするが、前引陳氏も云ふ如く(綜述一八四頁)、此版の何は第三期の何と書法を同じくせず、寧ろ武丁期と考へられる。從って名も亦武丁期とすべきである。若し陳氏の右の差別に異論あらば反駁すべきであるが、著者は何等の反證も示してゐない。

(ロ)次に就て甲3515の字體から康丁期とするが、若し字體を論ずるなら第一期とすべきであらう。著者の論據とする𢀛(戌)形は第一期にも見える(董氏干支字五期演變表參照)。(ハ)其他珝(御)𢀛(彤)の第一期の可能性に就ては前述の通りである。

○二一頁 以下の武・文期貞人に關する著者の立場は董説とこれと對立する貝塚・陳説とを批判したものであるが、問題の子卜貞及び王族卜辭に就ては董氏が文武丁期とする後者を武乙期に移すに過ぎず、何れも第四期と見る點に於て董説に近いものである。從って貝塚・陳説とは大きく對立する。著者の根據は總括的に云って父母兄子の稱謂と字體とであって、坑位の如きは「大体の論」として簡單に片附けられてゐる。貝塚・陳氏の稱謂・坑位・字體に亘る綜合的な詳論に對してその本據を衝く事なく、右二條を不可侵の信條として僅々十二頁の間にいとも簡單に片付けて居り、逆に、若し二氏に從って武乙期に引上げれば如何なる矛盾現象が生起するかと云った裏附けは一つも試みられてゐない。父母兄子の稱謂が客觀的な斷代要素である事は云ふまでもないが、それは飽くまで他の與件との相關的考察を必須とする。 字體に就ては前に述べたやうに特に慎重を要する。著者の論述を見るに、字體の先入觀から父母兄子の稱謂を限定し、それが貞人を決定すると云った循環論證の弊に陷ってゐるところが多い。そこで私も著者の論據の一つ一つを、いとも簡單に駁して全面的に贊成し難い事を明かにしよう。基本的な論證は細部に亘れば異論もあるが、貝塚・陳氏の考察によって十分であると信ずるのでここでは繰り返さない。

先づ𠂤(扶)が武乙・文武丁期貞人たるの證として父乙・父戊・父辛を擧げ、父乙・父辛は武丁期にも存するが、父戊の稱謂例三十三版中に武丁期のものは一版も存せずとして「父母兄子の稱謂參照」とあるから四二頁を見ると、既に「父戊は第一期・第五期以外の各期にある」から始って「然るに陳夢家は第一期にも父戊の稱謂がありとして、陳氏が「𠂤組及其他」として第一期としてゐる諸版をあげてゐるが(卜辭綜述一五三頁)、これらはいずれも第一期ではなく、又陳氏が第一期とする𠂤・子・午組貞人の諸版をあげてゐるが、これらの第一期でないことは前述の如くであって、第一期には父戊の稱謂は存しない」(傍圏點は)とある。煩を顧みず全文を引用したのは本書の各處にかかる循環論證が多いからである。即ち前の後述「參照」は後の「前述の如く」で片附けられてゐる。勿論この「前述の如く」は𠂤組等が武丁期でない事の總括的結論を意味するものであらうが、その總括的結論を導く論據の一つが少しも究明されてゐない。既に陳氏の𠂤組等は武丁期に非ずとの前提から、從って父戊は武丁期稱謂に非ずとするいとも簡單な論法である。これでは父戊を第四期とする陳氏への反論は少しも成立してゐない。陳氏の立場から云へば父戊は乙282以下十三版の午組の外、𠂤組・子組にも存する。著者が第四期とする乙777以下十六版も右と重複するものが大部分である。一々云はないが十六版中、私の檢討によれば乙779には父戊は見えない外、第四期と斷定し得る確證を有するものは一版もない。從ってこれ等が第一期か第四期かは坑位・文法・字體等他の要素との相關々係に於て論ぜられなければならぬ。貝塚・陳氏の勞作の意義がそこにある。著者は茲で𠂤と署名卜辭の𠂤兄(子)が第一期には絶無と云ってゐるが、その根據は第一期には出を用ゐたとするに過ぎず、貝塚・陳説で第一期に𠂤・兄二體を用ゐた事となるのが何故誤謬であるかに就ては少しも論駁されてゐない。これでは反論は成立しない。

○二二頁 (イ)從って𠂤と同版との理由から又・𠂤を武乙期とするも確證なく、二氏武丁期説は少しも反論されてゐない。抑も著者は𠂤の父乙の稱謂からその父武丁期なる事も認めるのであるから、この二貞人も亦文武丁期に及ぶとすべきである。著者は𠂤の兄甲は武丁期に見えぬとするが、それは既に𠂤を武丁期に非ずとの前提に立つものである。(ロ)かくて確實に武乙期と爲し得る貞人は彭と𡧊との二人のみであるがこの一人は既に陳氏の指摘するところ、彭は廩辛に及ぶ(陳氏何組)。この場合著者は歷卜辭の字體を強調し、特に𡧊に就てこれを第三期末乃至第四期早期に始るとし、(貝塚氏の說によれば𡧊字を用ゐてゐる貞人は「𠂤」であるとして居り、又によれば𡧊は𠂤と同時とせざるを得ないとする。如何にも貝塚氏は𡧊と𢀛とに就て各卜辭群の編成を試みてゐるが、それが各子卜貞・王族卜辭の表徵の一つであるところからこれを基準にその集成を行ったまでで、この二形が他期卜辭に存せずとするのではない筈である。王族卜辭全部が𢀛に作られてゐるわけではないし、又逆に祖甲期貞人即卜に𢀛が見える(上海八四等)。即を第三期に引下げる著者説に確證無い事は前述の通りである。八頁の條で檢討した京2006の如きも武丁期𢀛の一證と爲し得よう。𢀛形式に就ても同樣で子卜貞中に此形式に作らないものも勿論存する。そこで𢀛・𢀛形であれば悉くが王族・子卜貞であると云ふのではない。字形を絶對視する缺陷が茲にも表れてゐる。

○二五頁 文武丁期貞人に關する著者の見解には更に異論が多い。著者は二氏を駁して「貝塚氏は武丁時と文武丁時の稱謂の暗合する蓋然性が非常に少いと謂ひ、陳氏は武丁時の稱謂と𠂤組貞人の稱謂とに同じものが多いから両者は同一時期であるとして、両氏の立論は同軌であり、文武丁時に於ては父は武乙一人であって、文武丁時の貞人とされてゐる𠂤・𡧊・子等は父甲父庚父辛等を稱する道理がなく、父名として甲・庚・辛・乙を稱してゐることは寧ろ第一期貞人である證となすのである」と云って、然し乍らこれ等の貞人も父乙の外に父甲父庚父辛を、母丙母庚母壬を、兄丁兄戊を各々稱し得るから、これ等の稱謂の故に第一期とは爲し得ないと反論するのである。又煩を重ねて原文を引用したのは、これ丈け讀むと著者の云ふ所如何にも尤もなやうであるが、二氏の原著(貝塚氏前揭論文四六一—五一頁、陳氏綜述一四六—七、一五六—八、一六〇—一六一—五頁等)を參照すれば判るやうに著者の云ふやうな單純なものでなく、貝塚氏に於ては凡ゆる可能性の場合を指定した上での論であり、陳氏も亦稱謂の一々の貞人關係と坑位・字體等とを併せ顧慮した立説であって、以下に著者が駁するやうな父甲は第一期以外にもあり得ると云った個別的な見解のみに立脚するものではない。要素の可能的な場合を網羅する事がこの種の考察に肝腎な事は云ふまでもないが、著者は一つ一つばらばらに分解した上での反論でいとも單純な筆法である。そこで私も以下にその論證の根據を個別的に檢討して見よう。

父甲の第一期(甲骨)第三期(何組)以外の例として著者は前1.24.4以下十一版を擧げる。そのうち柏14は𠂤及び第一期に絶無な𢀛(御)の故に第一期でないと云ふのみで第三期とするのか、それとも第四期とするのか明瞭でないが、𢀛も用 𠂤・𢀛形を後期に限るは既に𠂤組を武丁期としない前提に立つもので反論にはならない。柏14は勿論𠂤組であり、拾綴2.170金415も同樣で父乙は即ち小乙である。𠂤組の兄甲は前1.38.7等がその例である(綜述四七一頁)。其他の諸版にも文武丁期なる確證は一つも存せず、逆に前1.24.4(綜述九四頁)後上5.4庫715乙456東方1.3等は武丁期、京4056・4058は第三期である。文311にも文武丁の證はない。かくて父甲を文武丁期にも認めんとする著者の論證は要するに𠂤組・子組を武丁期より外す事を前提とせる循環論證以外の何物でもない。

○二六頁、父庚に就ても同樣で、著者は第一期(庚盤)第三期(何組)以外の父庚として續1.33.5等九版を示し、特に郭1.39.1に父庚と父丁・父辛・父癸とを併稱する事に就て、父丁・父辛を併稱し得るは武乙時のみとする。併し陳氏等の立場から云へば父辛(小辛)の外武丁期にこれ等稱謂の可能性は全部存する。即ち午組に乙766等十版の父丁があり(綜述一六三頁)、𠂤組に鐵241遺530の、子組に乙370の各父癸があり(綜述一六〇—一頁)、又𠂤組に乙108・119の父癸があり(綜述一四六頁)、更に父辛・父庚同版の例は𠂤組にも存する(綜述一五七頁)。かく見れば郭1.39.1を武乙期とする確證はなく、その字體と相

換って寧ろ武丁晩期と見るべきである。著者の云か康丁の兄庚はこの場合關係は無い。著者の示す其他の諸版にも武乙期と断定すべき確證は見出せない。(ロ)武乙期の父辛（辛）は當然であるが、これが父・ᑫの武乙期たる事の證左にはならぬ。(ハ)文武丁期母丙の證として著者は前1.28.4京805を示し字體をその根據とするが、後版は自組であり、前版が文武丁期たる確證は何等見られない。又甲3047は陳氏の自組の母丙（綜述四四九頁）の例である。(ニ)母庚に就て武丁に限らずとして著者が南明613を文武丁期とするには字體のみに據るものであらうが確實でなく、此の㞢字母としては甚だ異體である事を指摘して置く。

○二七頁 (イ)著者の示す第四期母壬の例甲2902乙1329 8661は皆柔軟字體で武丁晩期の可能性が強い（陳氏綜述四四九頁）。(ロ)兄丁の文武丁期可能性の例として粹373を示し、その干支貞形式及び子の字形が決して第一期或は第五期でないとするが、此の版に就ては問題がある。即ち同形式卜辞として

(1)丙子貞𢦏兄丁于父乙　粹373
(2)丙子卜殸兄丁于父乙凡　後上25
(3)癸巳卜貞兄丁凡父乙　甲611
(4)甲午囗貞囗丁于囗乙　通別何7（佚194）
(5)辛酉卜殸兄丁于父宗　摭續225

等が見える。多少の相違こそあれ、卜辞の内容及び字體共略類似してゐる。白川氏は(1)と(2)共に文武丁期とする郭説と、武丁期と見る董説とを引用し、氏自身は字迹から董説に從ってゐる（甲骨金文學論叢六集七三—四頁）。別に陳氏は郭氏同様文武丁期とし、兄丁則文丁的諸兄、武丁祭兄丁以御出等法、此期則用將祭、至武丁文丁兩世兄或作兄、則一樣的と云ってゐる（同綜述四五七頁・四一九頁）。茲に注意すべきは(3)(4)各同版に子戠なる人物が見える事である。前にも觸れた如く子某なる人物は後期にも絶對に可能性が無い事はないが略武丁期に屬する。著者がこれを一、四兩期に分けるのは武丁晩期卜辞を文武丁期に移すによるもので、同一人物の長期存在の矛盾を蔽はんが爲めに世襲としてゐる（本書四四七—八頁）が、然らば貞人の同名なるを何故世襲としないか。何れにしろ確證無き事であるが、それは兔も角として、この子戠の例として著者は第一期例乙4817、第四期例續4.25佚194を示してゐる。この續4.25には甲尾刻辞「吶入」の語が見え正に武丁期で陳氏も吶を自組附屬の貞人としてゐる（綜述一八四頁）。(4)の如き第四期字體への親近性を思はせる點もあるが確證は得られない。して見れば子戠を武丁期の人物とする事は決して誤謬とは云へない。↓・自・子字形等皆武丁晩期の特色を示してゐる。白川氏が字迹から武丁期とされるのは正しい。從って前掲諸辞を武丁期と見るも敢て不當とは云へないであらう。この點から著者の文武丁期兄戊の證とする甲1812（下三六坑）乙9071が王族卜辞である事は云ふまでもない。かくて父母兄の稱謂上からの貝塚氏に對する著者の反論は既成觀念に基く循環論證であって悉く納得し難い。

更に(ニ)坑位に就て著者は陳氏が董氏の甲編自序に云ふ所を認めた事を指摘して陳氏は「第九坑よりは一・二・五期と廩辛時の卜辞及び子組卜辞が出で、第二六坑よりは武丁時・祖庚時の卜辞と自組の卜辞が出でたとしてゐる。然らば右の陳氏の所説は大体の論であって、固より之を以って自組子組貞人が第一期に屬する根據となすことが出來ない」とする。坑位が必ずしも断代の絶對的標準たり得ない事は陳氏も注意する所であるが、これは著者が絶對視する字體或は卜辞形式に就ても同樣である。寧ろ字體こそ「大体の論」と云ふべきで、要はこれ等の要素が断代の要因たり得るに過ぎない。「大体の論」の故に顧みずして可なるものでは決してない。（現に著者自身も𢓊・衜の同一人なる理由（此見解は從ひ難いが）として共に下36坑出土なる事を述べてゐるではないか）。さればこそ陳氏は董氏の云ふ所を檢討して坑位別にその卜辞を形式・内容の兩面から結論を導出せんとしてゐるのであり、貝塚氏の場合も略同樣である。董氏が二區二六坑を一・二・四期とするを陳氏は卜人から一・二のみとし（綜述一四一頁）、著者は觸れてゐないけれども臨大なト辞を出土したYH一二七坑中に董氏が文武丁期と認めるのを、陳氏が自組・子組とするのも單に坑位のみからの結論でない事は勿論である。今のところ自組・子組は賓組或は二期卜辞と同坑であっても純然たる四期卜辞と同坑の例は見られない。坑位の重要性がここに存する。陳氏に對する「大体の論」との非難は見當違ひと云ふの外はない。(ホ)貝塚氏の示すト141の由、古同版に就て、著者は古が必ずしも貞人でない用例を示してこれを反論するが、かく古に別用法があるとしてもト141の場合のそれが貞人或は人名である事は貝塚氏の説明（前掲論文五五頁）によって明瞭で、明574の丙子卜由……由囗曰……等と同形式である。これを人名に非ずとすれば著者は何と解するか。若し著者の論法を以てすれば著者が第一期貞人とする明664の邑等も同形式であるから、貞人以外の用例無きか檢討を要する。されば邑が郷邑の意味に用ゐられる場合は數多い（陳氏綜述五七〇頁）から明664の場合も必ずしも貞人と云へない事とならう。　子卜貞卜辞の甲子卜某形式に就ては貝塚・陳氏の指摘する所である。尚ほ貝塚氏は示されてゐないが庫1348の仌は仌と見得るとすれば、第一期貞人「中」と同版となり仌の第一期たる有力な左證とならう。

○二八頁 (イ)既に觸れた事であるが、貝塚・陳氏が武丁期と見る子某を著者は第五期以外の各期に見え、又第一期のそれが後期にも稱せられてゐるとしてその例を示すが、著者が「殷の封建」の節に於て示す子某の例を檢するに、悉く武丁期或は武丁晩期に屬するもので確實に第二・三・四期と断定し得るものは一つも無い。著者が第四期等とするものは皆循環論證によるものである。　(ロ)陳氏が貞人扶の證とする侯咎に就て著者は侯某・某侯は後期にも見えるとする。その示例（四二六頁以下）を見るにその第四期とするものは皆第一期である。但著者も云ふ如く第五期に貞侯以下が見える。併し著者が第四期侯咎の例とする甲3483は既に扶を四期とする前提に立ってゐる。簠人72續5.5.2前6.11等皆第一期の證であって、侯咎の後期なる確證は見當らぬ。

かくて著者は貝塚・陳氏の擧證は「一として成立するものはなく、この誤に從へば卽って卜辞形式・字体の演變に混亂が生ずる」とする。どうやらこの後半が著者の基本的立場と考へられる。卜辞形式・字體に演變があり、時期的特色が認められる事は勿論であるが、それは飽まで原則ではあっても機械的なものではない。相對的基準ではあっても絶對不動の標準ではあり得ない。これは卜辞のみならず、凡ての古代文化に普遍的な事象である。この相對性を絶對性と錯視せる所に著者の根本的な誤謬があるのではないであらうか。貝塚・陳氏や吾々の立場からすれば著者の擧證は「一つとして成立するものはない」と云はなければならぬ。

○二九頁 (イ)自組を文武丁期とした爲めに同版關係から子組の余・子・我・徂・歸等をも同期とするが、その誤謬である事は自組に對すると同樣である。(ロ)乙830の史に就て貞を閑に作る事から著者はその貞人なる事を疑ってゐる。貝塚氏も二の史を使に讀んでゐる（前掲論文三五頁）が、陳氏は子組貞人とする（綜述一五九頁）。後下10.10も同例かと思はれる。今疑問として置く。(ロ)由・萬・幸・臣の疑問なる事は既に貝塚氏の指摘する通りである（前掲論文三一頁）。陳氏も辛を武丁期とし串・萬も一應疑問とし乍ら（綜述一六六頁）、貞人断代總表には收めてゐる。著者はこれ等二氏の態度を明記すべきである。

○三〇頁 (イ)著者は衜（衜）と㣺（徭）とを同一人とするが、陳氏に據れば衜は甲241京3051等の如く自組にして賓組に近い字體でF三六坑、徭は同じ自組附屬であってもE一六坑、B一一九坑等の出土であるから（綜述一六六・一八三頁）、一應區別するが妥當であらう。(ロ)亜に就てその閃を理由に著者はこれを文武丁期貞人とするが、既に述べた如く武丁期とすべきである。陳氏も賓・自・子組所見の兄丁が見える事を指摘してゐる（綜述一八三頁）。(ハ)曰は卜曰・卜王曰貞・卜自貞王曰等（綜述一五二頁）武丁期頻見のこれ等の形式に於る曰と見るべきで貞人とすべきではないであらう。著者の示す乙43の柔軟字體は子組に近く、乙100 107等と共に卜曰形式である。(ニ)指綴1.284の𠂤も纖細なる子組の字體である。(ホ)乙443の口は陳氏自組附屬の丁であり（綜述一五〇頁）、(ヘ)佚108のトは𠂤の缺文と見るべきで辛亥卜自貞王曰形式である。(ト)甲3014は丙午ト个貞と讀むべきでなく、(1)丙午卜勿（自組貞人）、(2)丙午、(3)貞兄不死の三辞に分讀すべきであり、个（不）は勿論貞人ではない。(チ)乙4860の死は貞不死と讀むべきで貞人ではないであらう。而してこれが戌午卜と一辞であるかは疑問であり、恐らく別辞であらう。たとひ一辞としても自組の字體である。　(リ)𢓊は前述の如く第一期貞人である。

○三一頁 (イ)午の武丁期貞人なる事に就ては陳氏の詳説する所である（綜述一六二一五頁）。著者は字體と父丁・祖庚・子庚の稱謂から貞人ならば武乙期とする。如何にも父丁の稱謂は午組特有のものであるが、別に下乙等の稱謂は武丁期の傍證となすを得、祖庚は武丁期と思はれる乙3476柏17に見えて居り（綜述四五二頁に此二片賓組とす）、子庚の見える乙4010 4549 5327には㞢、乙5156 5379には御が見えるから武丁期に子庚を認めるも差支へない。凡てこれ等は陳氏の詳説する所、著者の反論を以て覆すに到ってゐない。著者の示す南坊44續存1452乙1464（四五頁）も同樣武丁期とすべきである。　(ロ)陳氏が武丁期とする兄貞人に就ても著者の反論は字體と父戊の稱謂とに過ぎない。父戊は自組にも見える（綜述一四六頁）。著者の示す乙5399甲2907（四二頁）は何れも武丁期に屬する。(ハ)𢀛・𠂤・史・車・𤰔に就ては前述の通りである。(ニ)勿を著者は陳氏の示す乙3014+3020中に發見出來ずとするが、前述の如く著者の誤讀に基くもので、丙午卜勿と讀むべきである。但この場合、勿が果して貞人であるかは疑問である。(ホ)𠕁は前述の如く甲尾刻辞に見えるところから先づ武丁期貞人と見て差支へないであらう。　(ヘ)著者は徂・𢓊・衜を同一人と見るが、共に子組であり、陳氏もYH一二七坑の前二人が同一人なる可能性を指摘する（綜述一五八頁）。併しF一六坑の衜は多少字體を異にしてゐるので徂と衜との場合の如く一應別人と見るが無難である。

以上貞人の断代に關する著者の所論を檢討したが、これを要するに著者は卜辞の形式・字體を絶對的基準と考へてこれを重視するの餘り、總括的考察に至らず、断片的事象のみを以て全般を律する獨断論に陷ってゐる。その結果董氏の文武丁期貞人説を一應は批判し乍らも結論的にはこれを踏襲する事となって居り、貝塚・伊藤氏及び陳氏の武丁期説への反論は自説を前提とする循環論證に終始し、その立論の本據を衝くに到ってゐない。　卜辞断代の基礎である貞人説のかくの如く

鑄銘は本者の以後の叙述にも致命的影響を齎してゐる。この書は折角の資料の豐富な蒐輯にも拘らず、本著の價値を半減せしめるかの感を抱かせるのであって甚だ遺憾である。重複する事が多いと思ふが以下更に頁を逐うて私見と疑義とを提出する。

追記　自組、子組卜辭を武丁期とすべき事に就ては右に述べた通りであるが、この問題に關し最近李學勤氏の論文が出たので聊か蛇足であるが序でに一言觸れて置く。同氏は考古學報一九五八・一に、「帝乙時代的非王卜辭」なる一論を發表したが、氏の所謂非王卜辭とは貝塚氏の子卜貞卜辭即ち略陳氏の子組卜辭に該當するもののやうで、この卜辭群の內容と特質とを可成り詳細に說明したものである。併しこれを帝乙時代とする論據は⑴殷代銅器九例に「子」が見えてゐて、それ等の字體が子卜辭と相類して居り、且つその中には帝乙の人方征伐と關係ある銘句がある事、⑵子卜辭所見の地名と是等子銅器群との聯關が考へられる事、この二條に過ぎない。これ等の論に就ての詳細な檢討は別の機會に讓るが、概括的に云って氏は單に子卜辭中の類似點を銅器に求めたに過ぎず、稱謂、坑位等若干觸れてはゐるが、これ等を帝乙期とする事によって起る矛盾即ち論證の裏附けに就ては何等の反省も加へられてゐない。早い話が若し子卜辭が帝乙期のものであるならばYH一二七坑卜辭中にも他の第五期卜辭が有るべき筈なのにそれが見出されないのは如何なる理由であらうか。この爲めか李氏はC區に於る第十三—十五次發掘を殆んど大規模の軍隊編制埋入の墓葬と見るやうである。多子族が政治・軍事上の重要な地位を占めてゐた事は貝塚氏の研究によって明かである。併し子卜辭の內容が帝乙時代の征人方を直接に證するものは今のところ見當らないやうである。李氏の着眼は頗る興味深いが　更に檢討を要すべく、遽かに賛成し難い事を附記して置く。

（原載《甲骨學》第七號，日本甲骨學會，一九五九年）

殷虛文字乙編摹寫本示例

董作賓

這是距現在二十年以前的事了。當民國二十九年的秋季，我們的中央研究院歷史語言研究所全部的圖書標本為了保管安全起見，遷入雲南昆明城北龍泉鎮龍頭村的響應寺古廟中工作。那時節我們親手發掘的甲骨文字全部編號就緒，我就首先摹寫乙編一部分龜背甲的原片。

二十年雖然是很短的時期，在我們中華民國變化是相當大的。我當時的意見以為我們發掘甲骨文字，得盡我們最大的力量，來供給研究的學人最大的方便，所以我主張用三種方法拓印甲骨片子，第一是「照相」，第二是「摹寫」，第三是「傳拓」，最好兼用三種方法。在甲骨出土的六十年間，三種方法都是用過的，但是一件材料三種全用的並不太多。

我們親手發掘的材料，普通的係用傳拓的方法把它全部拓出來，付之印刷，以供專門治契學的同人的研究，有時參用「照相」，參用「摹寫」，更供學人的方便。日本京都大學所印的甲骨片子可謂盡善盡美。我們發掘的材料僅是把「圖版」先印出來，考釋後印，需要作「釋文」時，看出清楚的拓本取出實物，仔細審視，摹寫下來，俾研究者明瞭真象，這在我們整理者便盡了最大的責任。我一直在心裏這樣的想着。關於乙編的開首一部分那時候可以分別得出腹甲同背甲，背甲上面字太細小了，那時還沒有拓過，我就想到拓不清楚，所以先從事按編號的次第一一摹寫出來。在民國二十九年七、八月間一共寫了四十八葉，甲上編號到十三次的九百七十八號，從此就停止了。

二十年前的親筆摹寫的片子，現在看來和乙編圖版比較，有拓本不清楚而摹本清楚的，有摹本錯的而拓本對的。當時摹寫極端小心，有蟲蛀痕跡類似刻劃的文

字者，必在陽光之下，塗上清水方能辨刀刻與蟲蛀的不同。諸如此類盡於在我之責任而已。

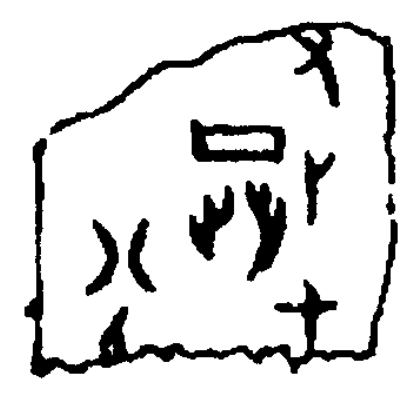
至於甲、乙、兩編的編輯和命名在甲編序文中提到的：

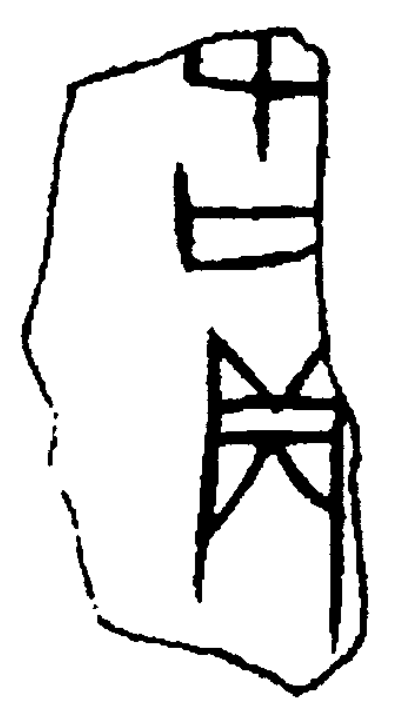
這部書的命名，是傅孟真先生的意思。本來我們是可以叫它作「甲骨文字」的，因為它是殷虛發掘總報告的一部分，我們計畫把殷墟出土的古物中，有文字的統同收入，並不只限於甲骨。凡是銅器、石器、陶器、骨器獸頭骨等銘刻，均在其內，所以用「殷墟文字」來賅括它。本編附有獸頭刻辭三件，鹿角器銘文一件，就是龜甲同牛胛骨以外的文字。我們打算分期編印，這是「甲編」，以後續出「乙編」等等。我們計畫每一編都有「圖版」同「考釋」兩部分，為的先發表發掘所得的新材料起見，圖版部分提前付印；考釋部分以後續出，這是傅孟真先生的主張，甲編的考釋，是胡厚宣君擔任的，胡君以為考釋的工夫，應該從全部甲骨文字的研究入手，我也同意。他在研究所工作了七年，努力搜求材料，作各方面的研究，同時考證實物，寫本編釋文，二十九年冬他被顧頡剛先生拉去齊魯教書時，把甲編的全部釋文交了卷，可是考釋還沒有着筆。後來李孝定、張秉權兩君，都曾把釋文校對過一遍。現在也只好先印圖版，把考釋部分留待以後出版了。

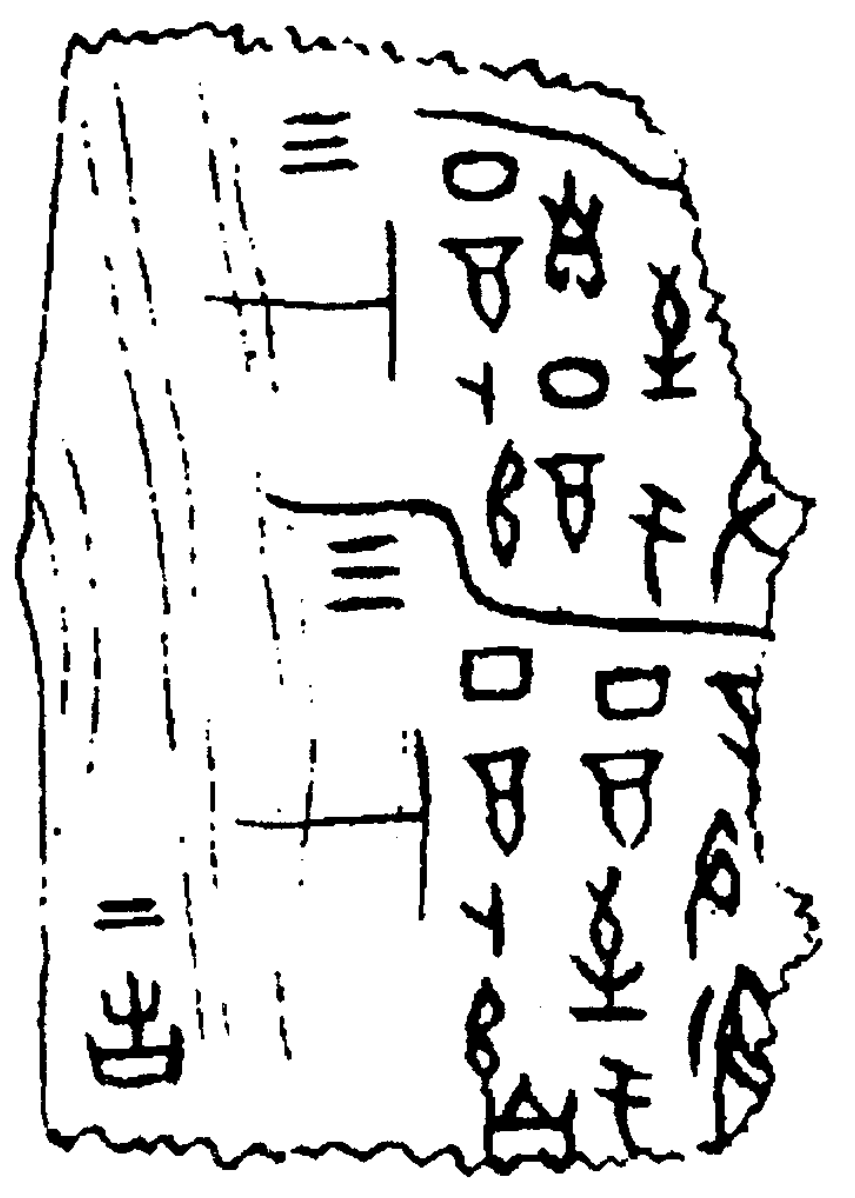
現在，甲編「圖版」印出已是十二年了。十二年以後「釋文」同「考證」正在印刷中，不久就可以面世了。（甲編的「綴合」圖版，二百二十一版，附在後面。

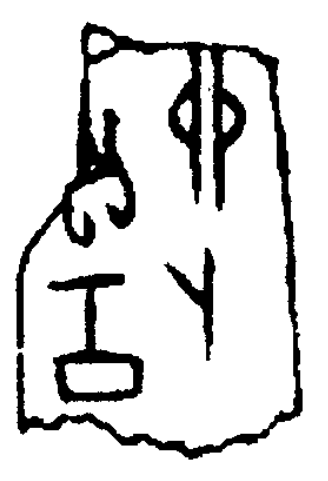
乙編分上、中、下三冊，把全部片子，作為「圖版」部分。也出版十年以上了。在乙編的序文中也講得很明白的

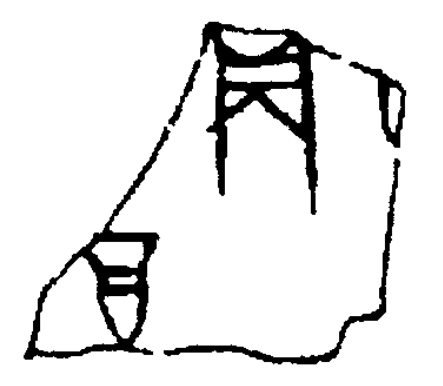
殷墟文字乙編，繼甲編而作，包括着殷墟發掘第十三次到第十五次所採獲的甲骨文字。這可以說是一個很自然的區劃。第一次至第九次，接連着在小屯村發掘，從民國十七年秋季到二十三年春季，這九次所得的甲骨文字，已全部收入甲編；第十次至第十二次，從二十三年秋季到二十四年秋季，這三次工作重心轉移到洹河北岸，侯家莊西北岡，殷代陵墓的發掘，沒有得到甲骨文字，所得的全是金石陶器銘刻，將來打算收入丙編。第十三次至第十五次從二十五年春季到二十六年春季，這三次發掘工作，又重新回到小屯

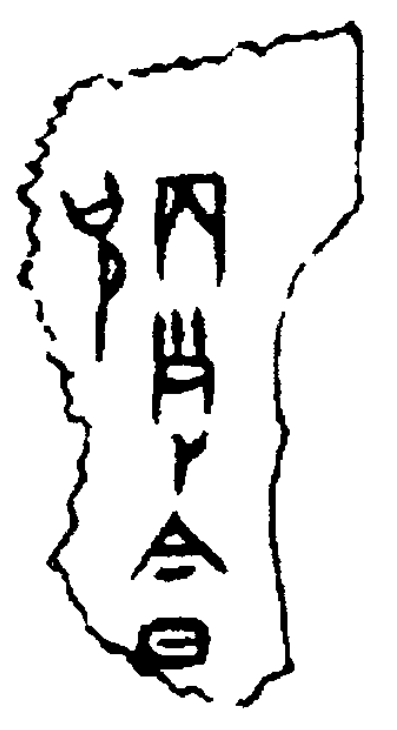

10 13.0.9

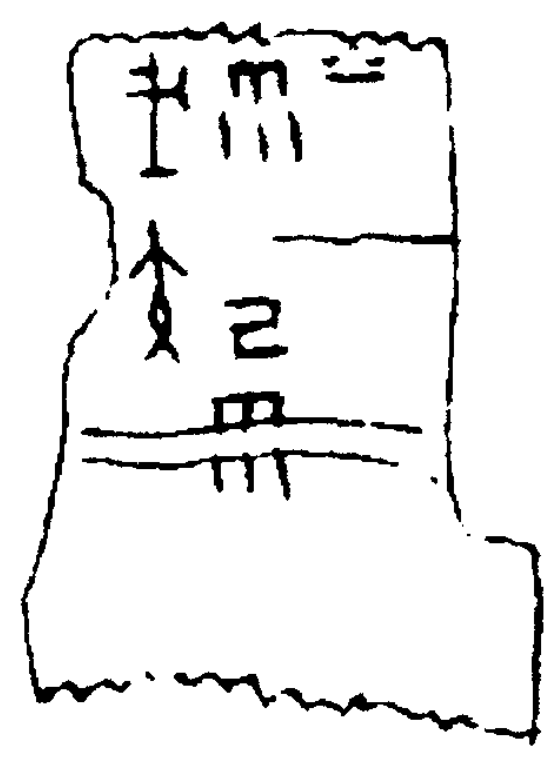

4 13.0.4

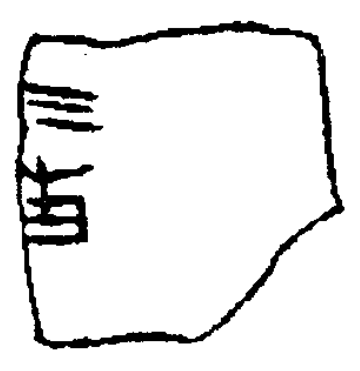

1 13.0.1 背

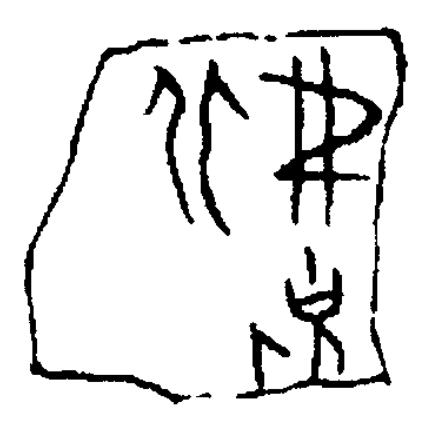

11 13.0.10

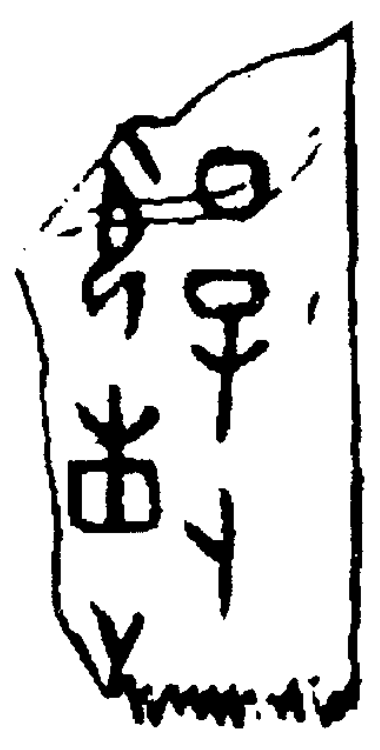

8 13.0.7

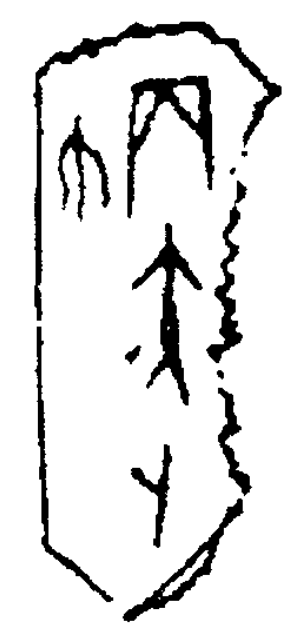

6 13.0.5 背


2 13.0.2 背


13.0.11

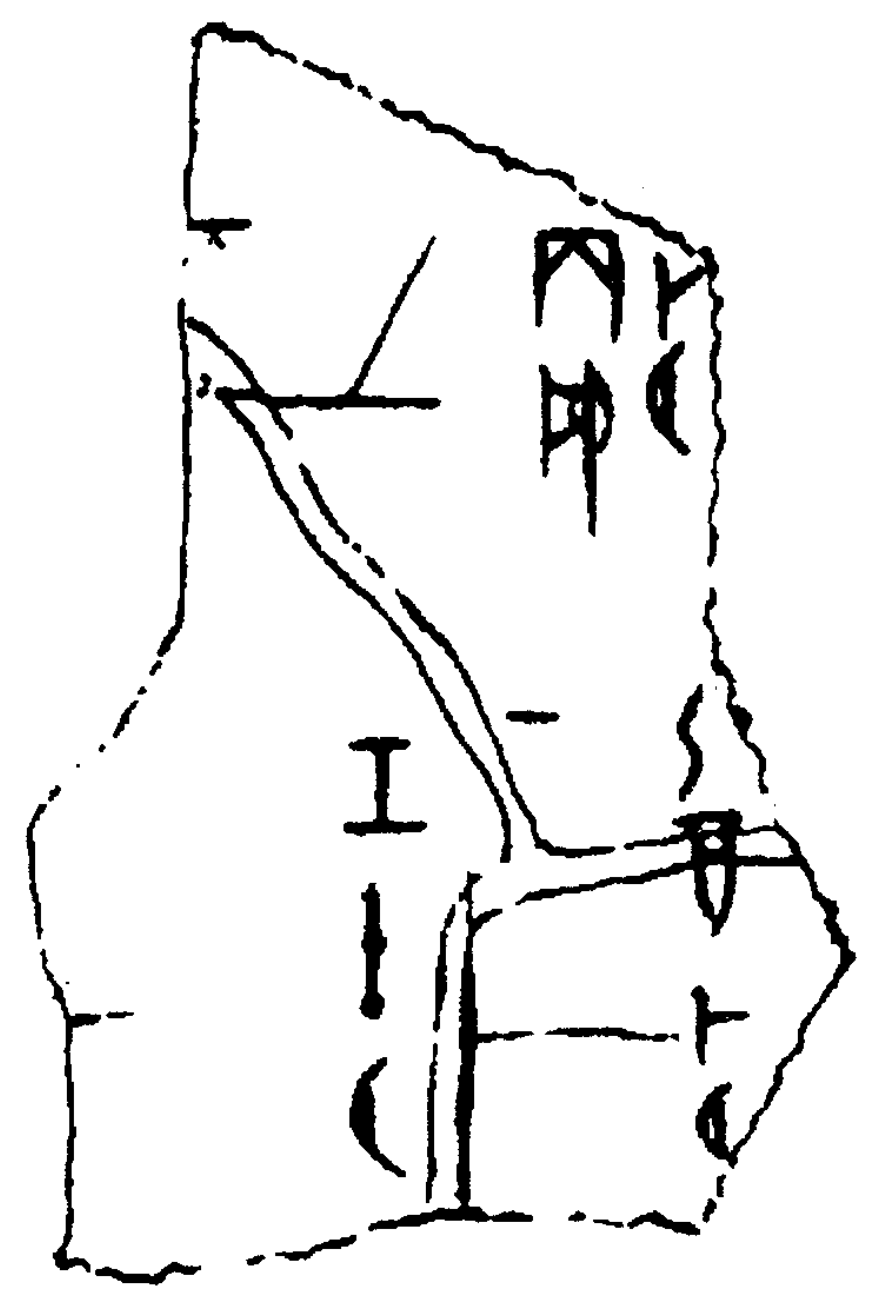

9 13.0.8

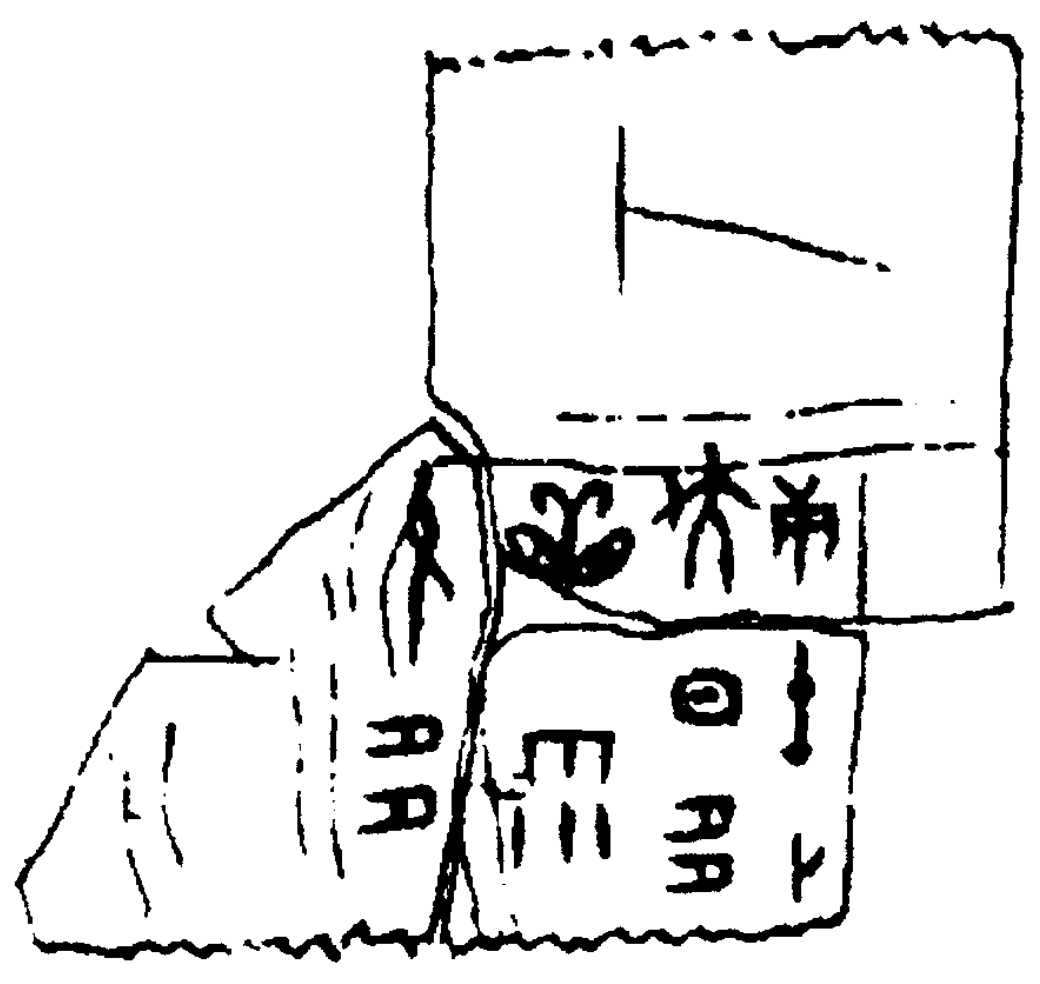

7 13.0.6 背

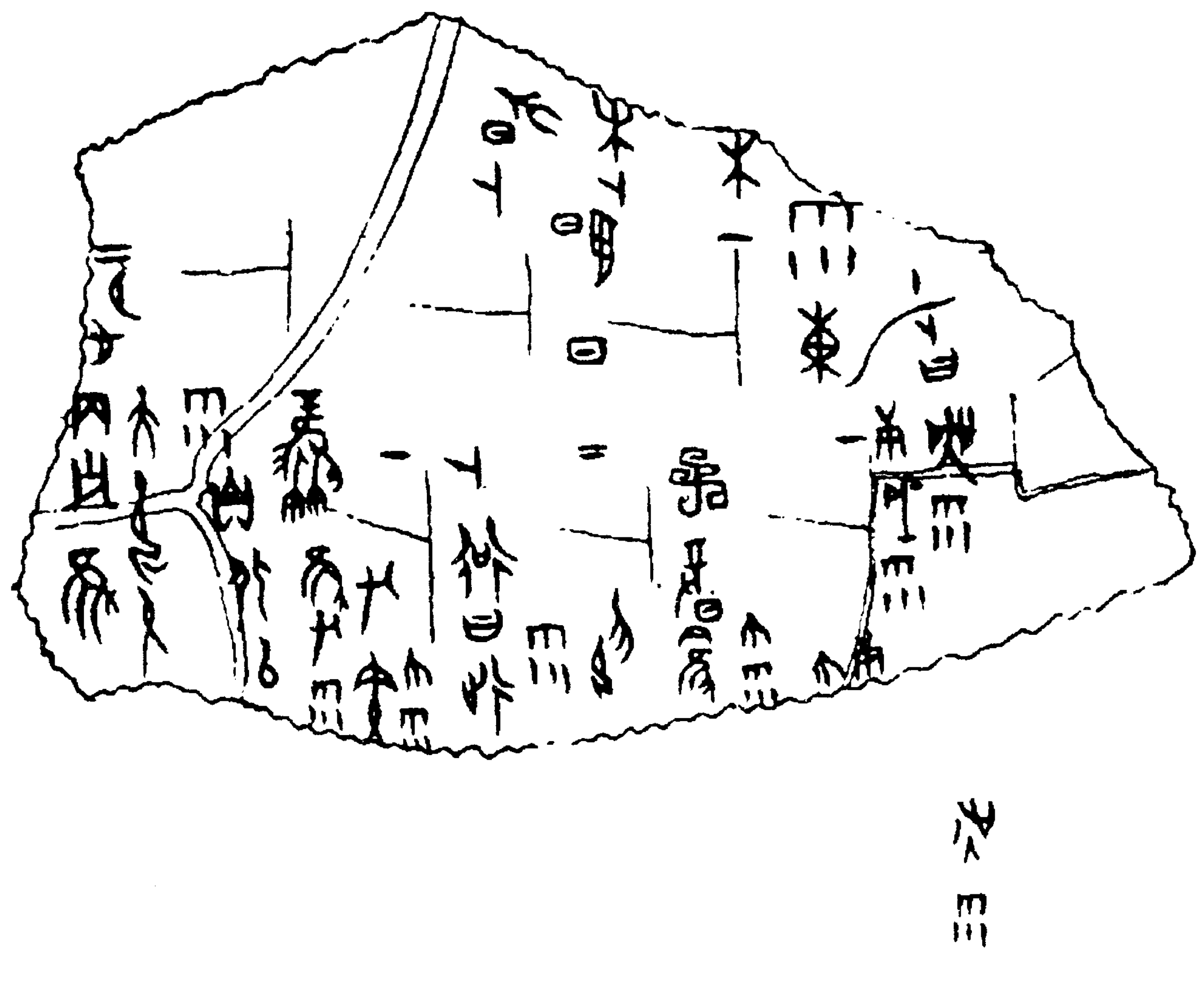

3 13.0.3 背

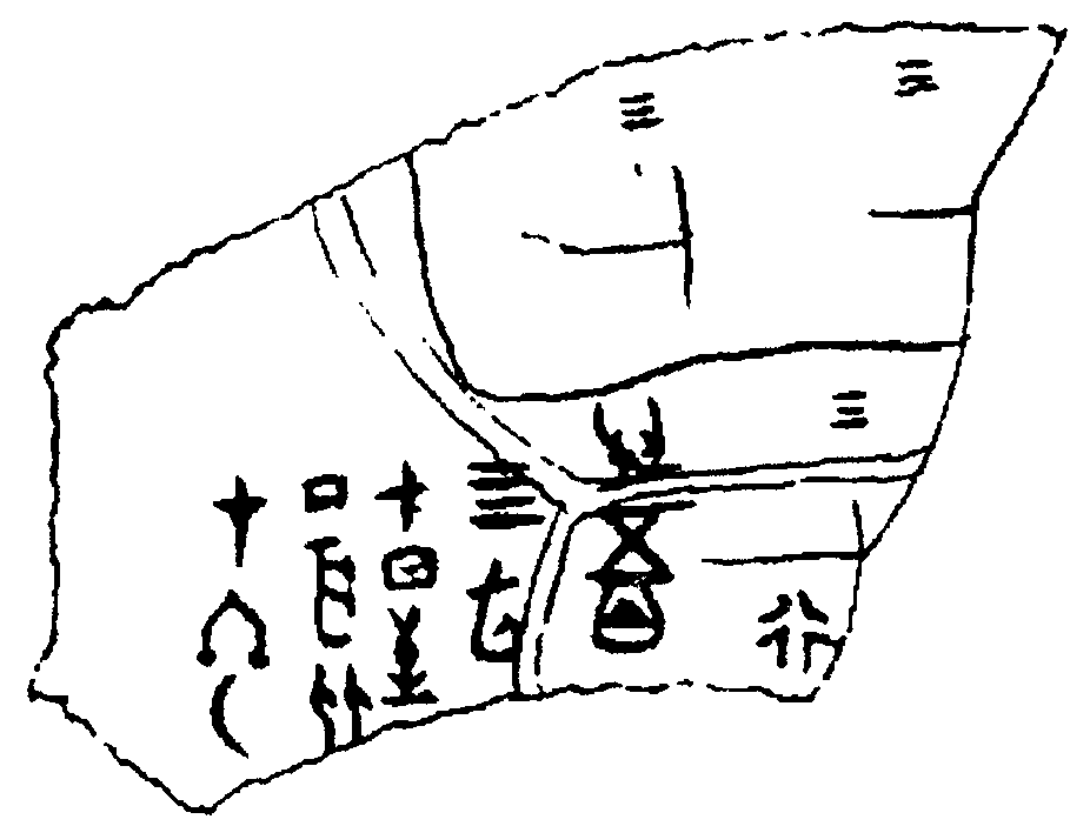
村並且集中在村北的B、C兩區，所得的甲骨文字全部收入乙編，十五次發掘所得的陶、骨、石、銅器銘刻，將來也都要收入丙編的。

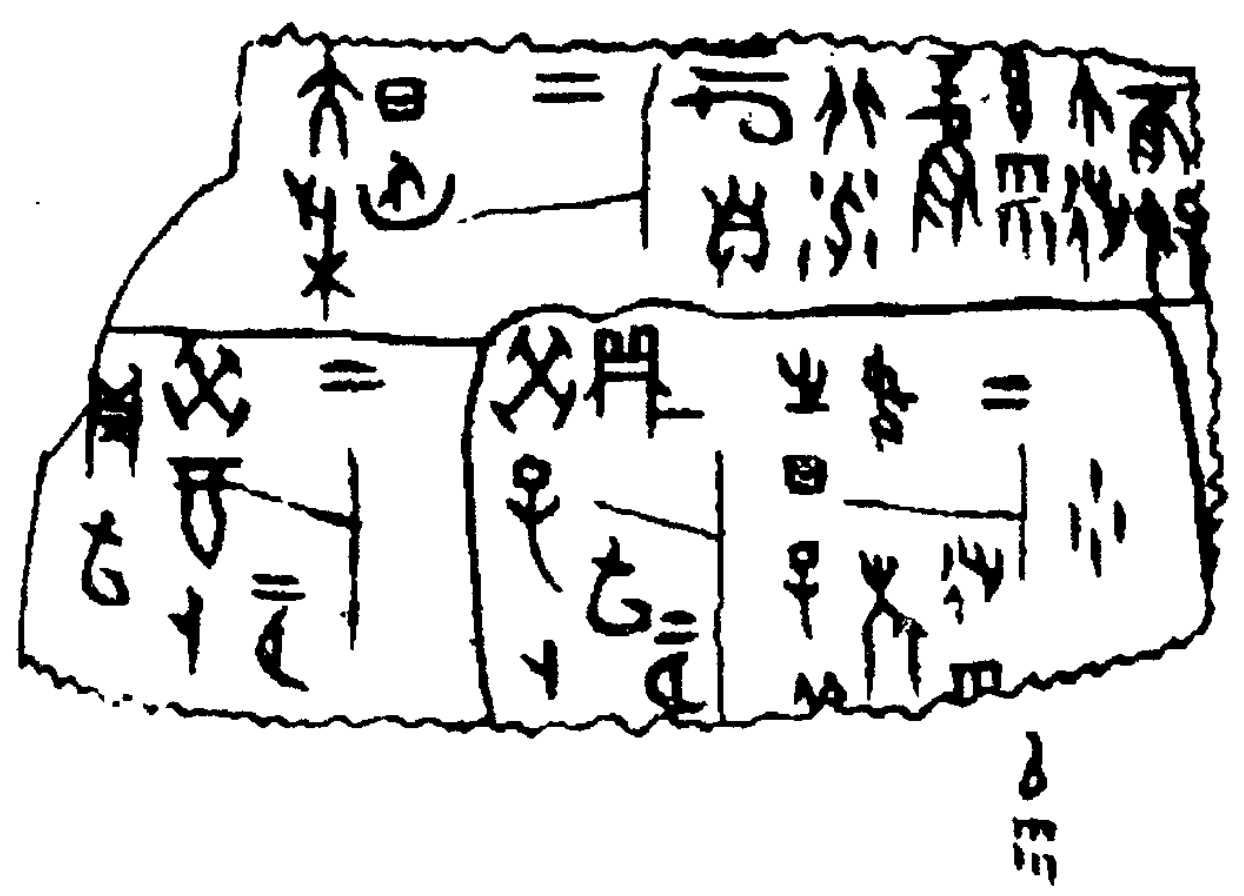
考釋方面，變動原計畫甚大，現在的丙編，等於乙編重版的復活，重印，國家多難也該是學術界多難。事實上變動的辦法，相同於「隨機應變」以後的「丙編」，只好作為「丁編」或「乙編」之第四冊了。

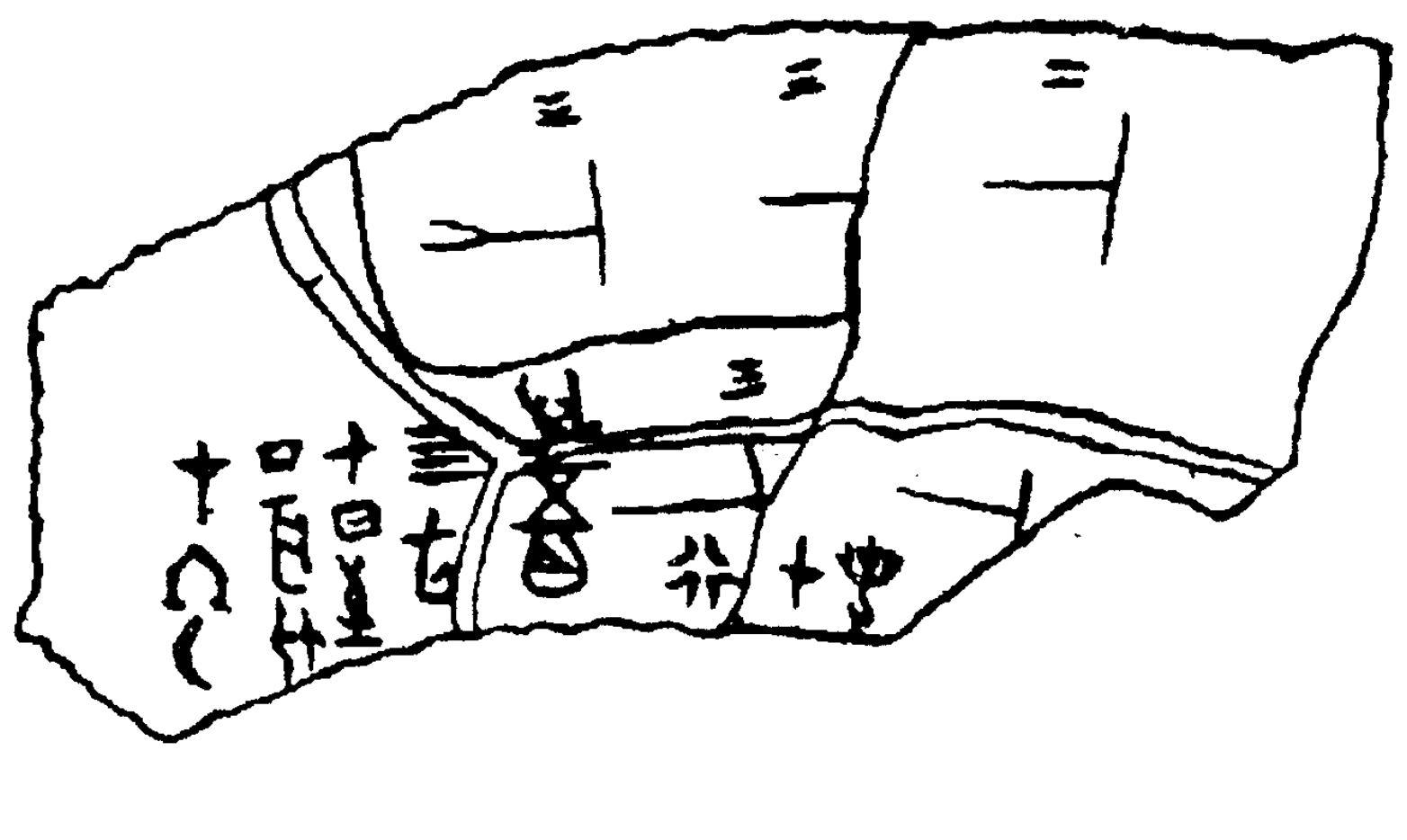

19 13.0.22

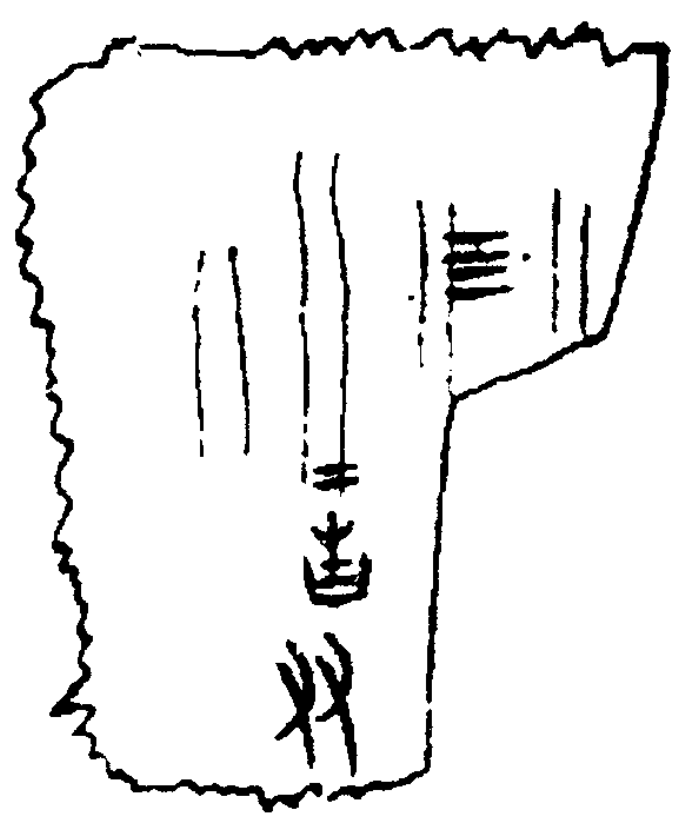

17 13.0.18—20 背

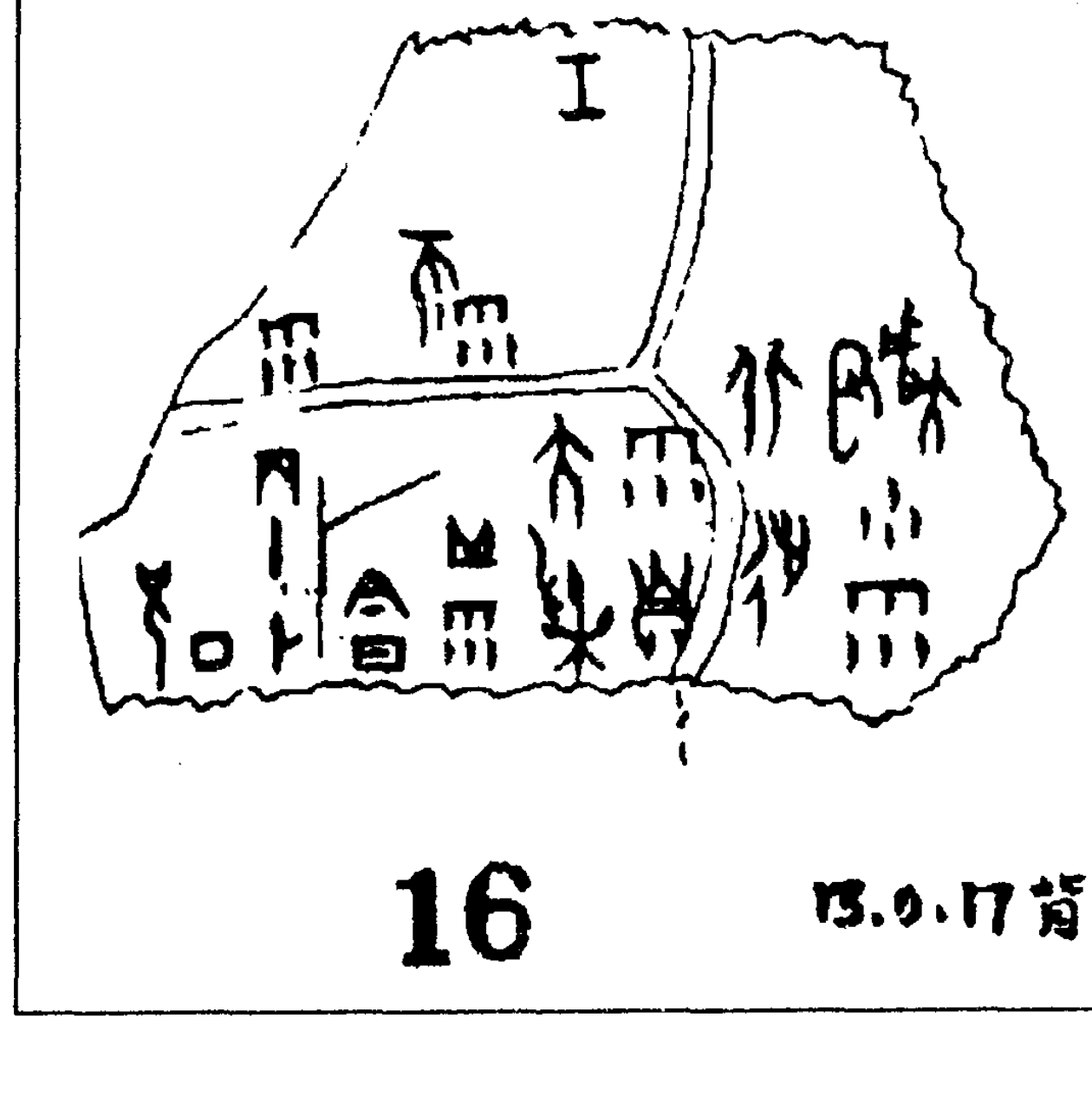

18 13.0.21 13.0.23 背

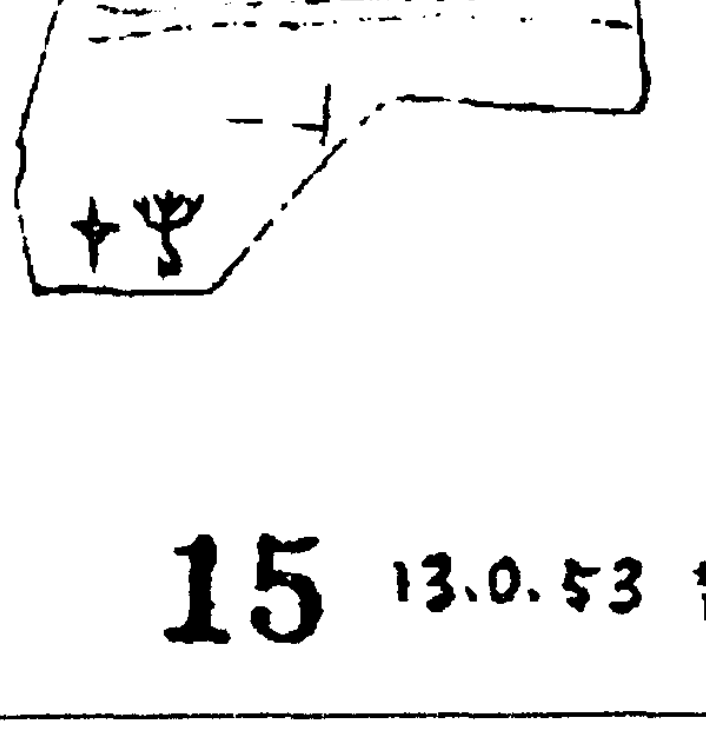

15 13.0.16 背

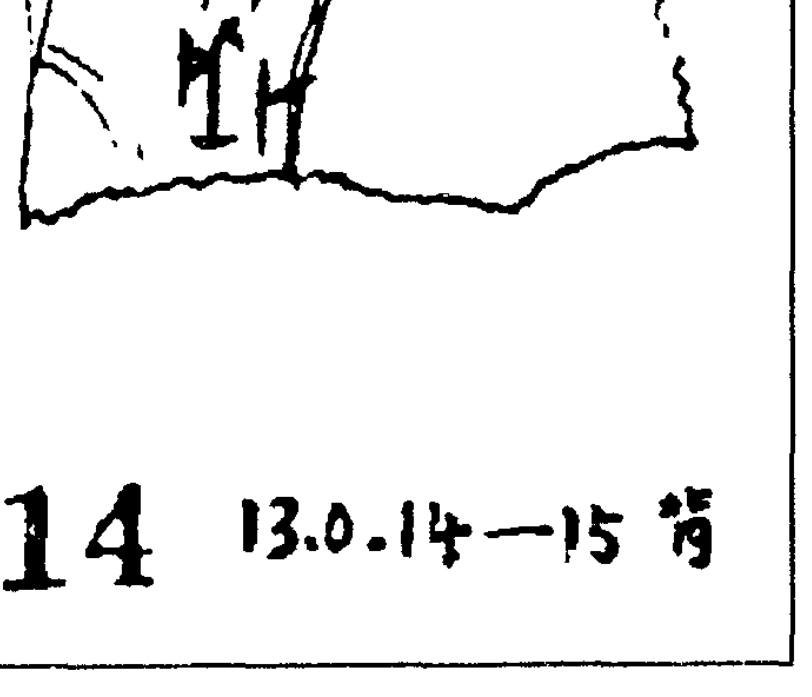

12 13.0.12 背

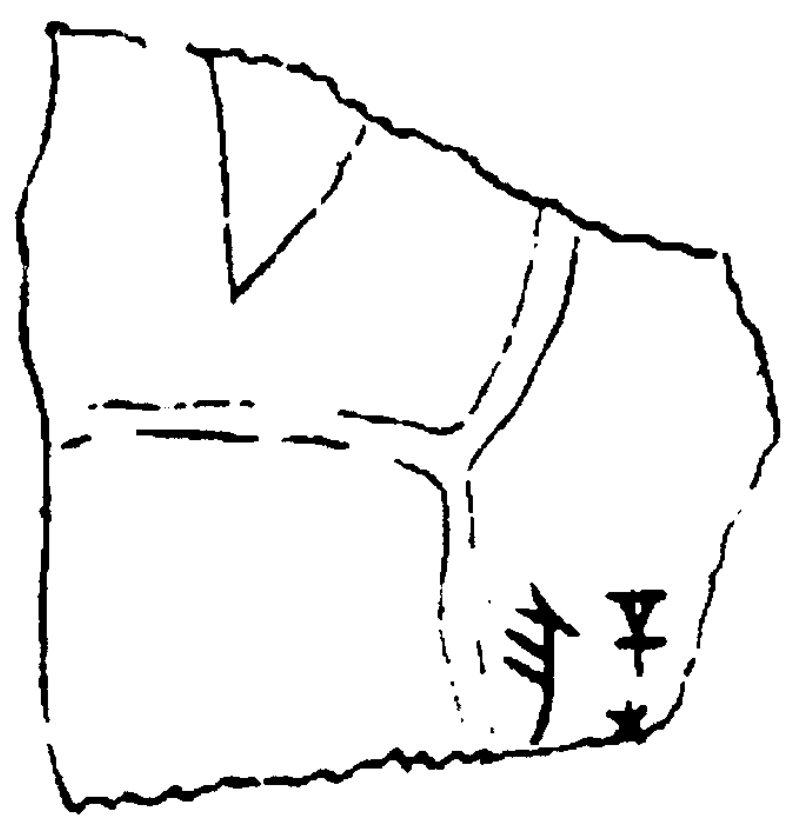


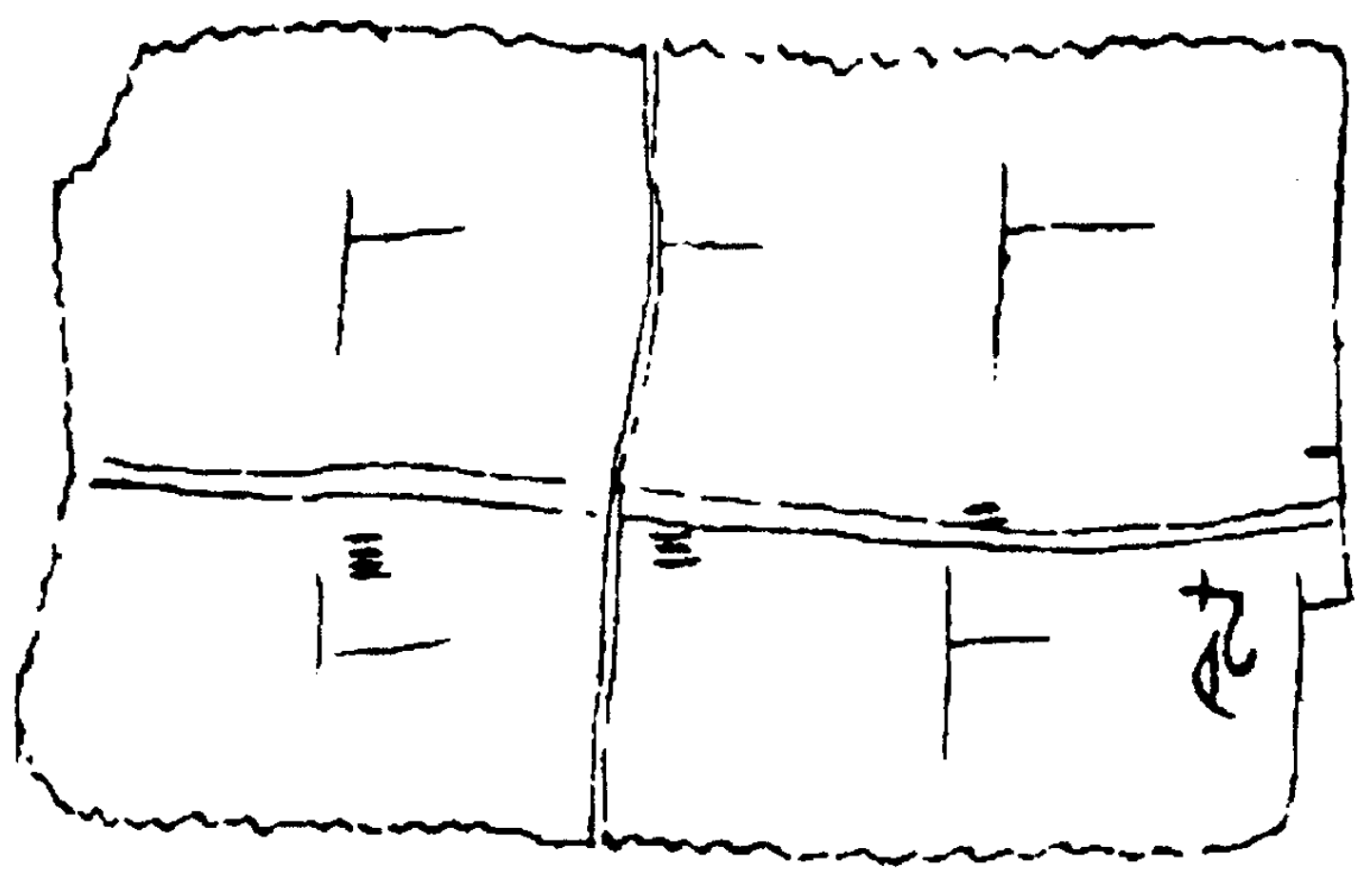

13 13.0.13 背

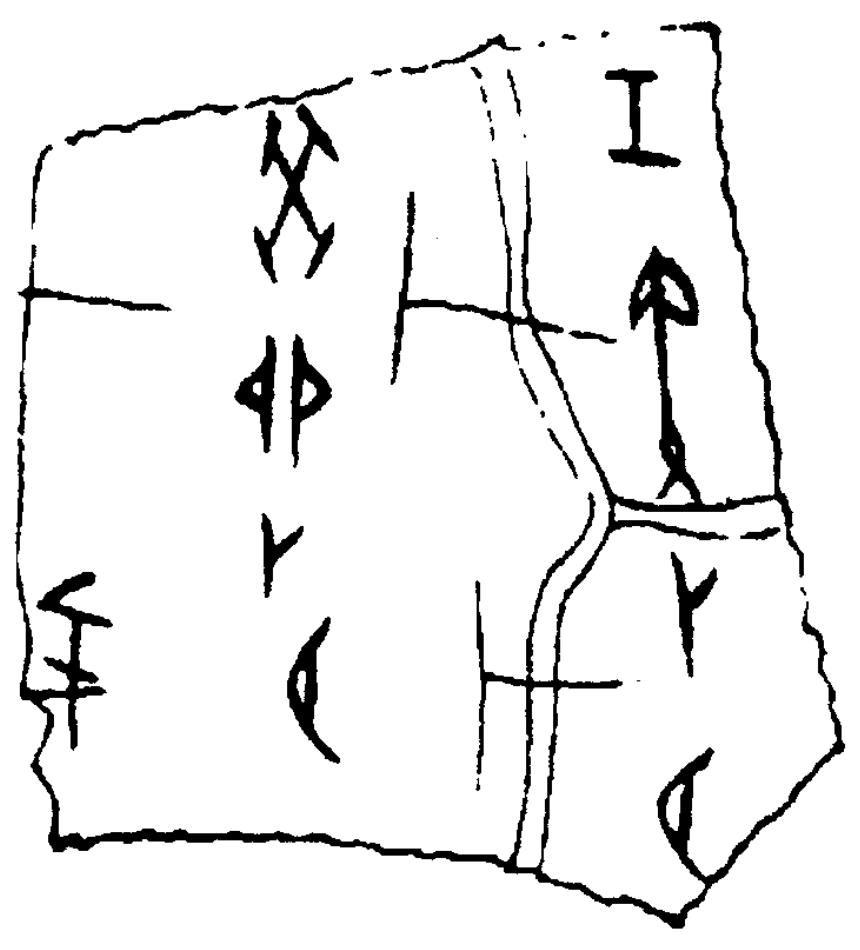

16 13.0.17 背

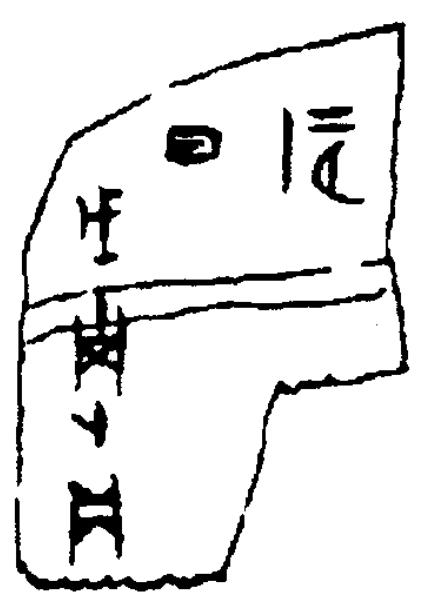

15 13.0.53 背

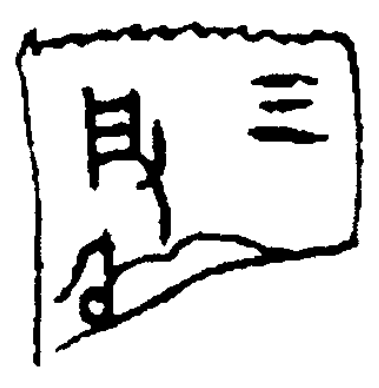

14 13.0.14—15 背

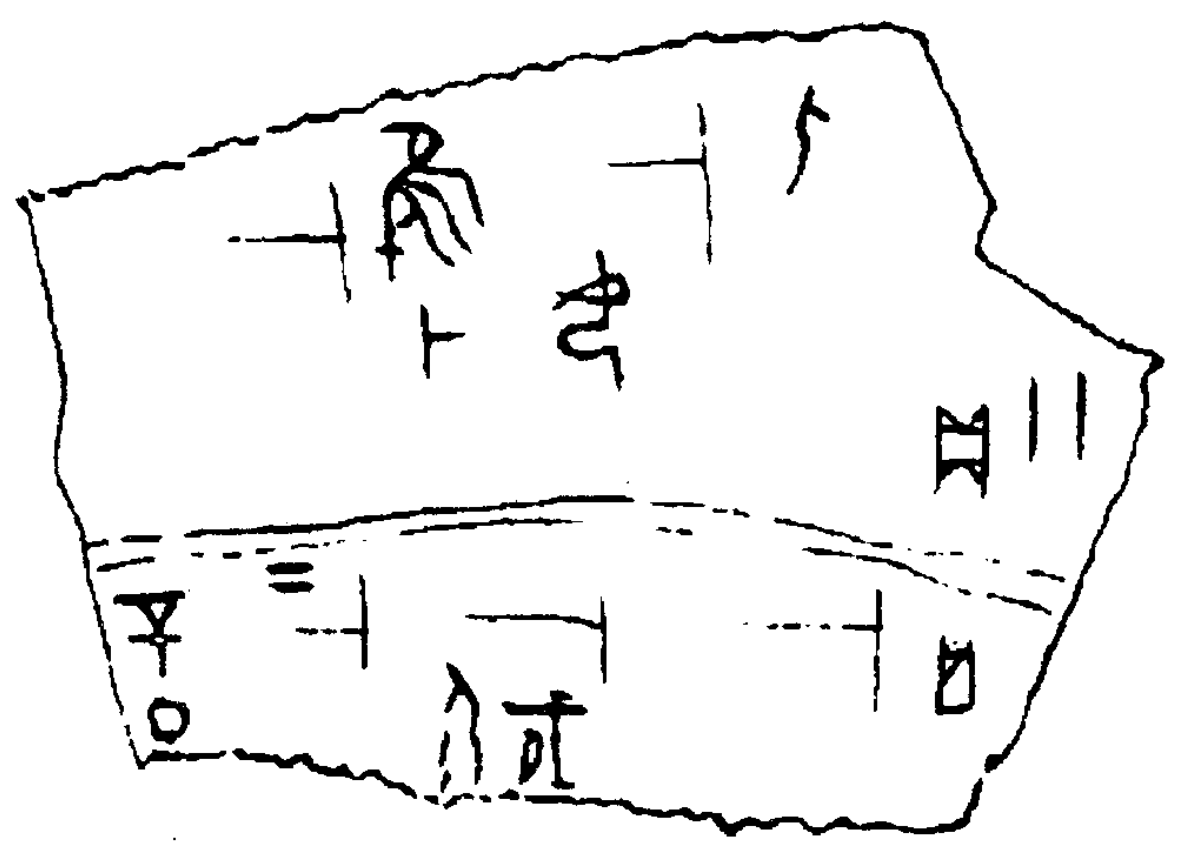

20 13.0.24背

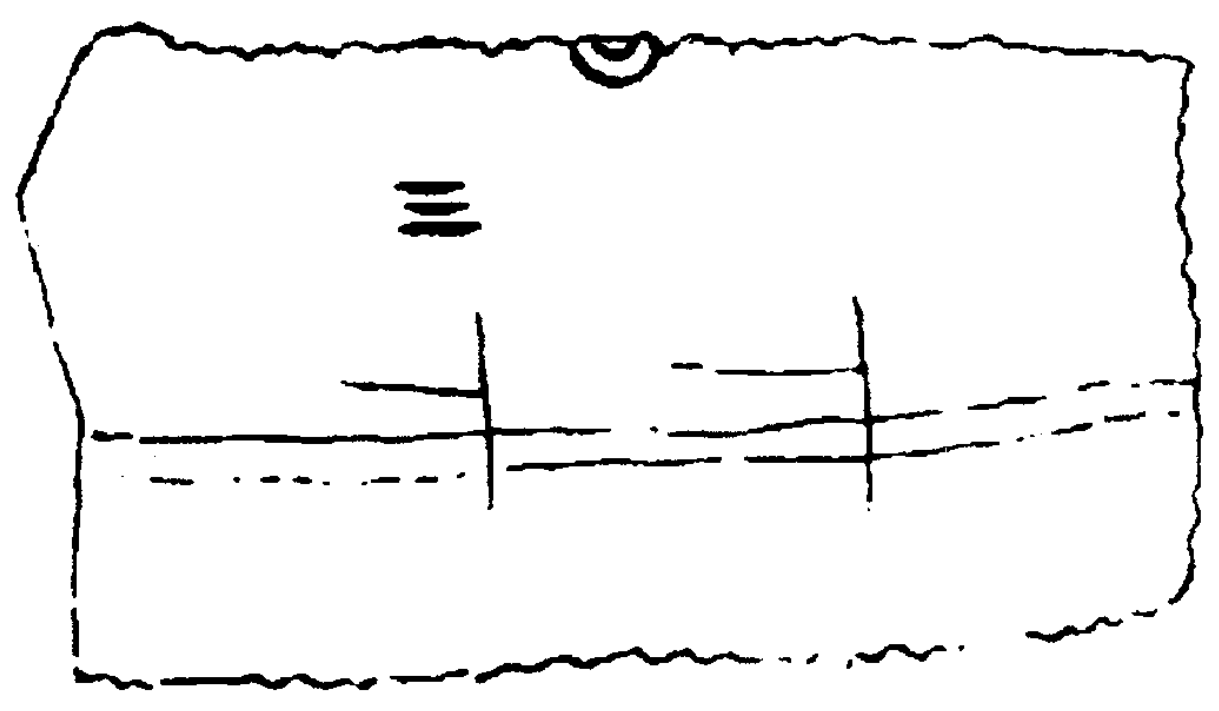

13.0.27—28背

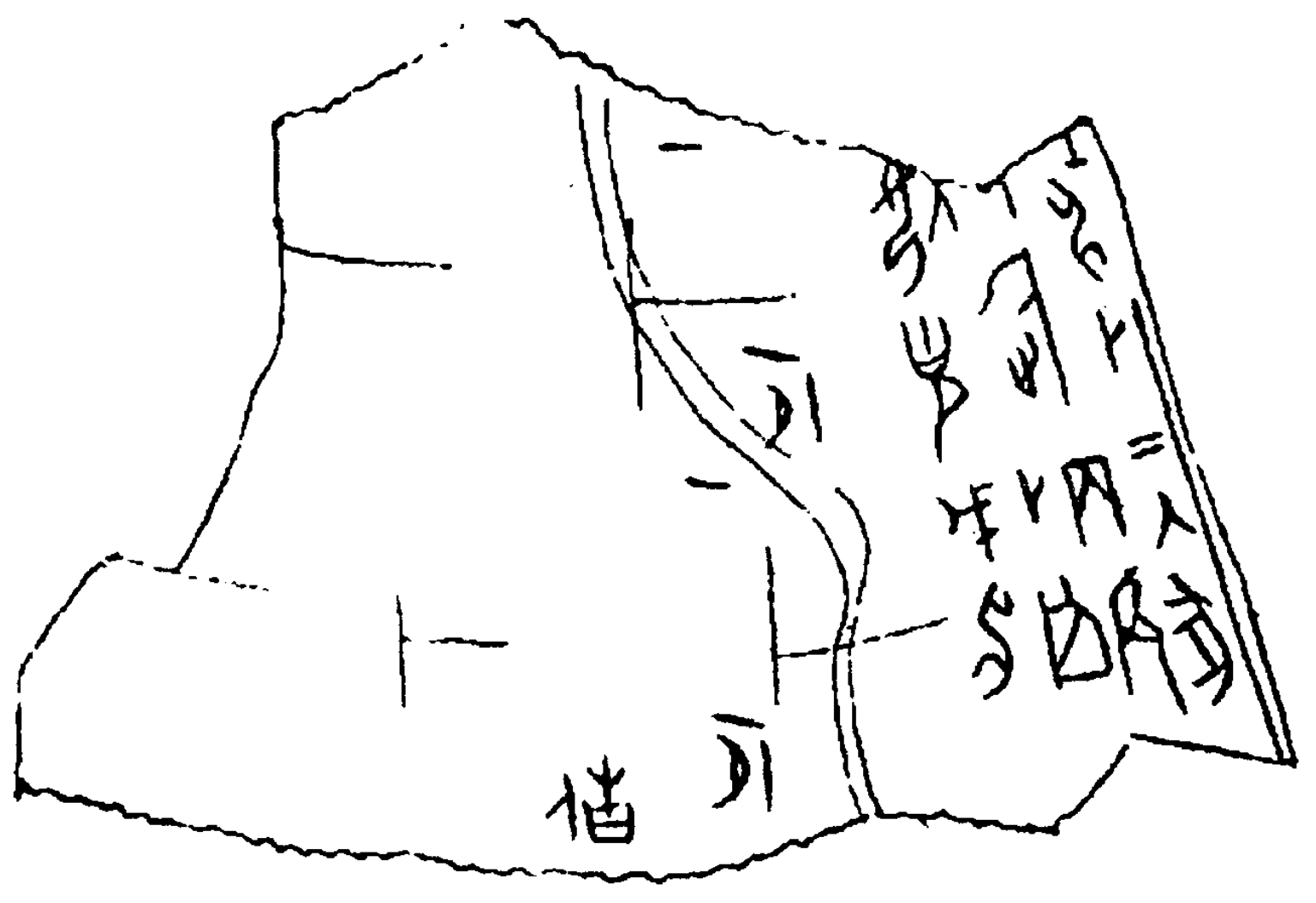

21 13.0.25背

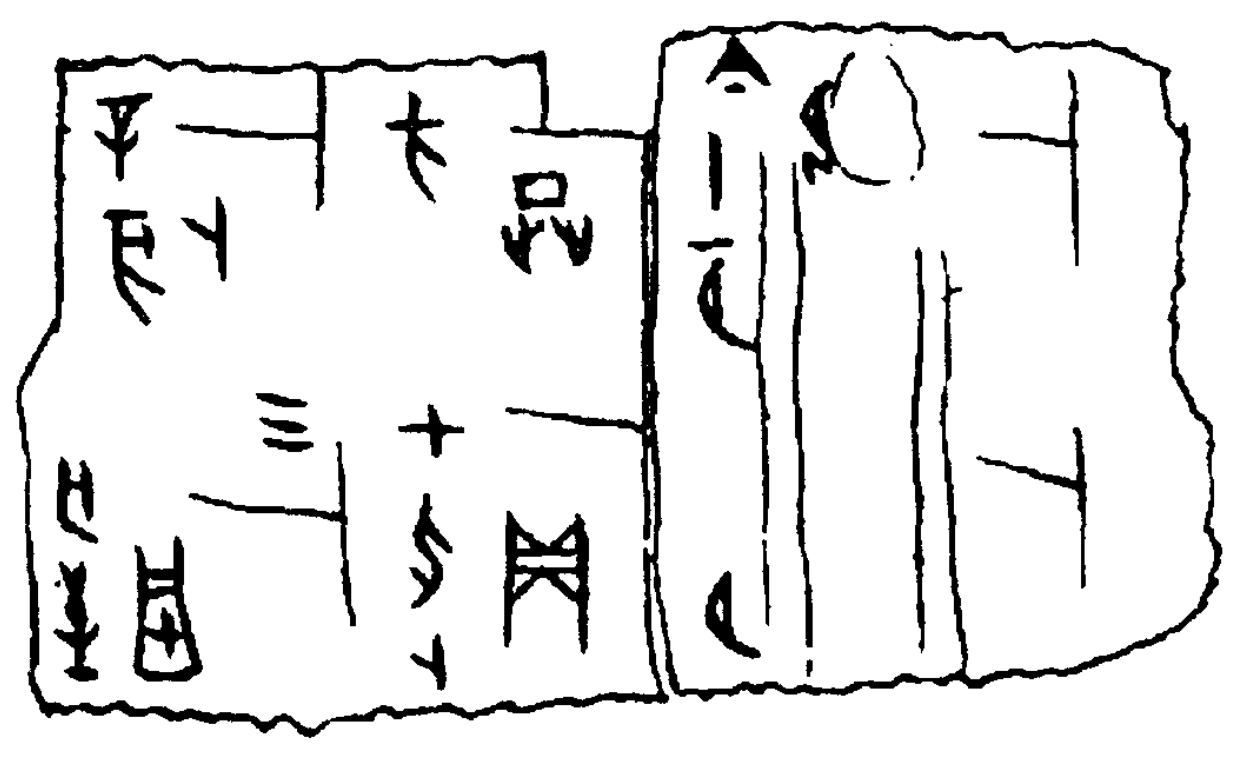

23 13.0.29背

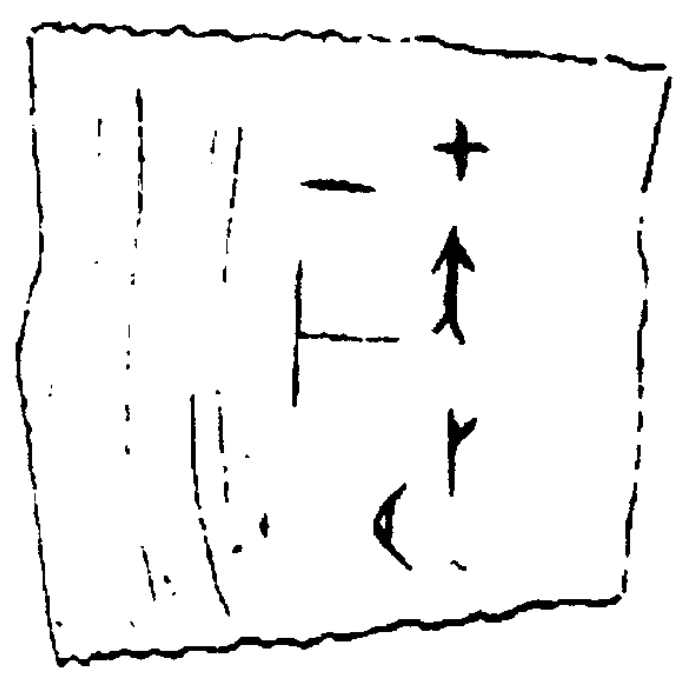

24 13.0.30

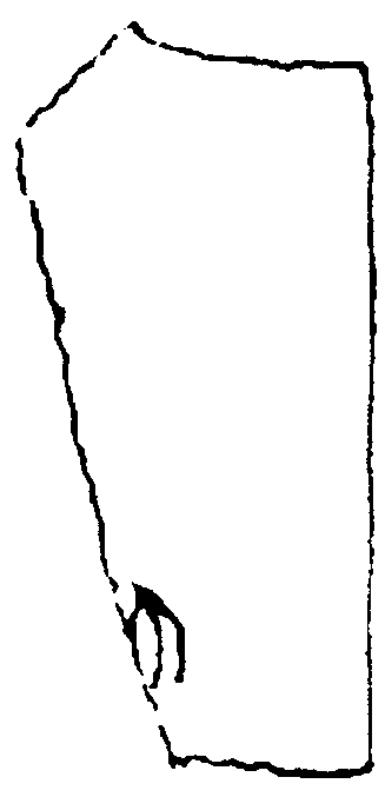

22 13.0.26背

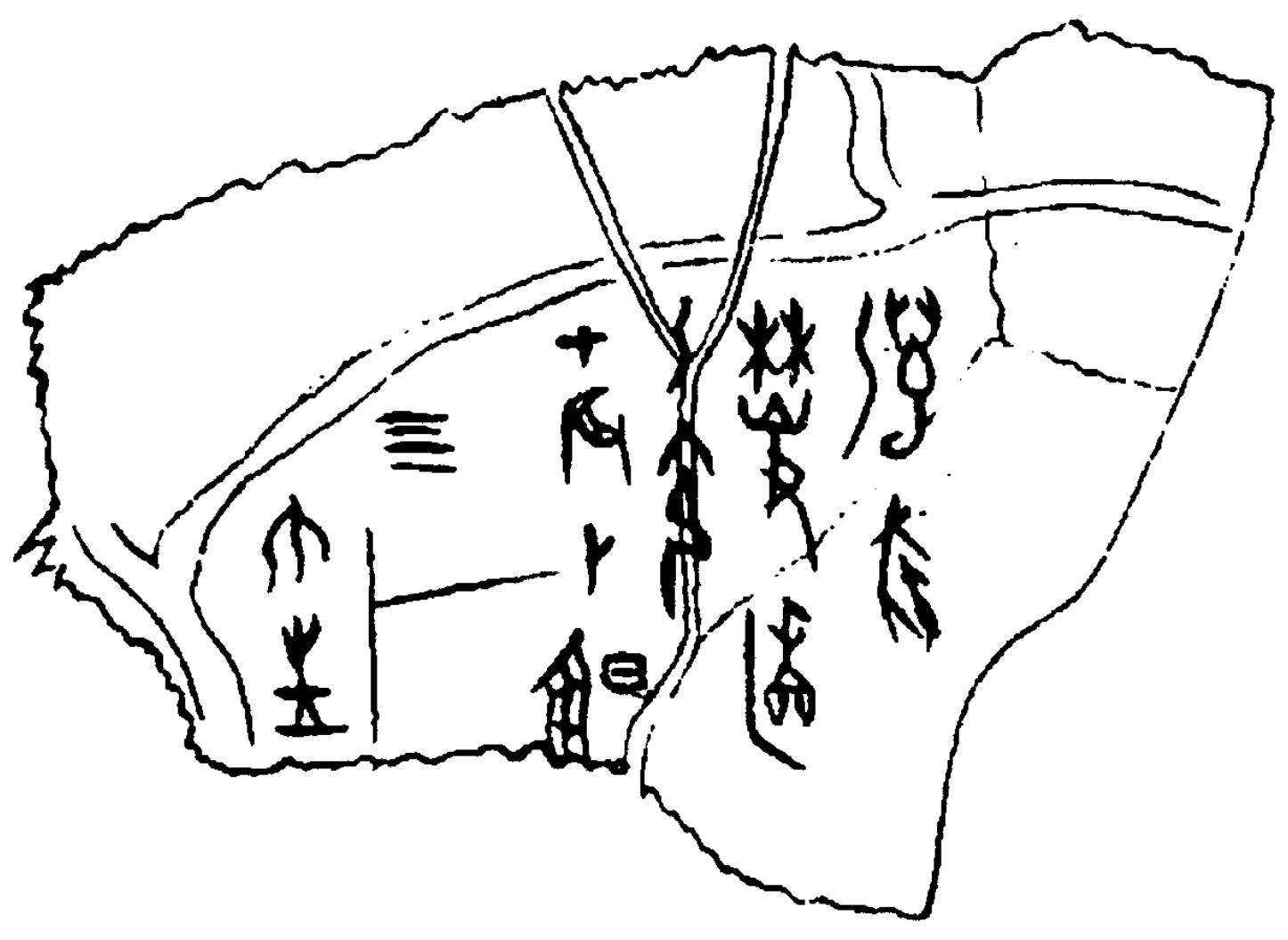

13.0.31背

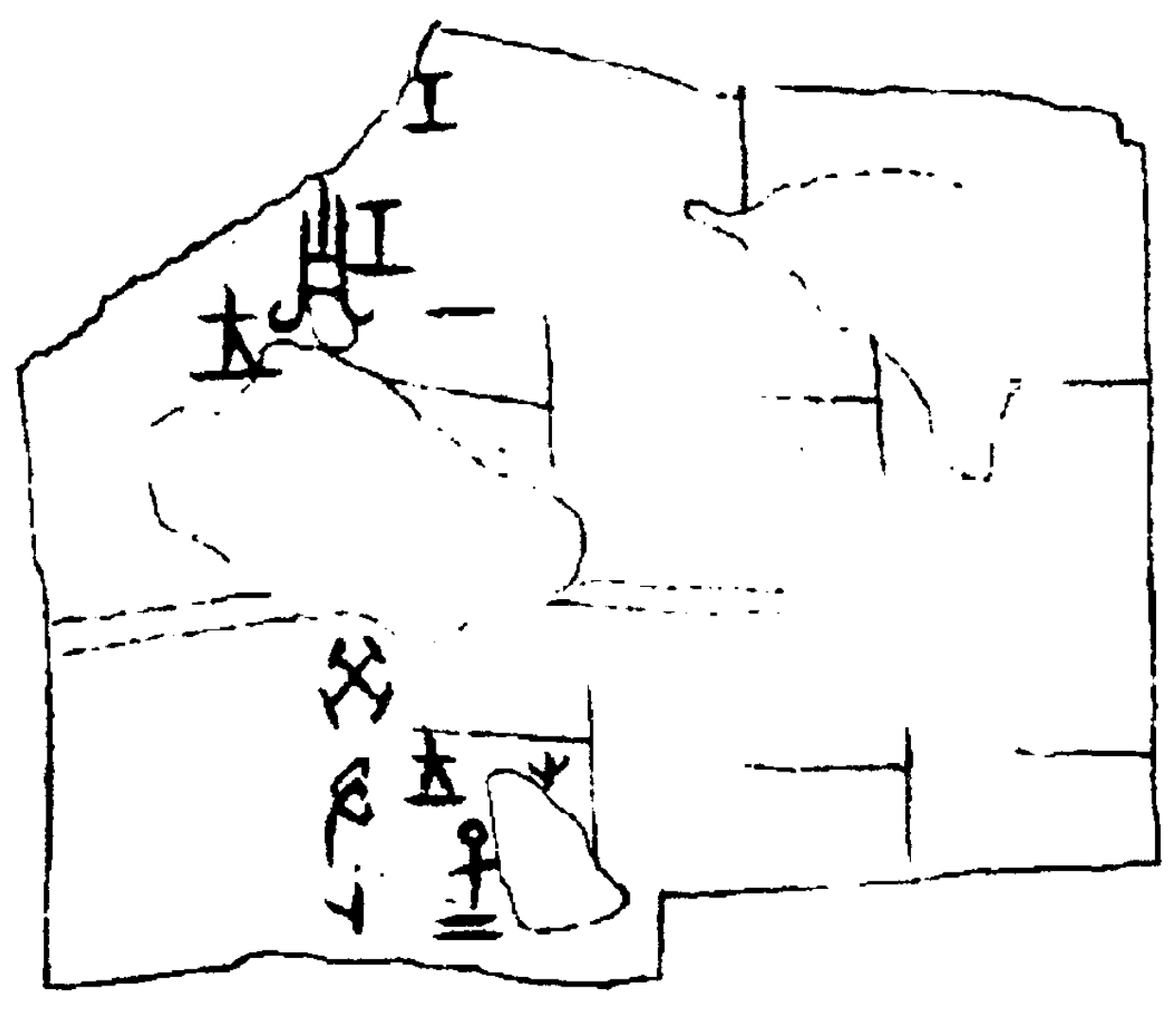

25 13.0.32背

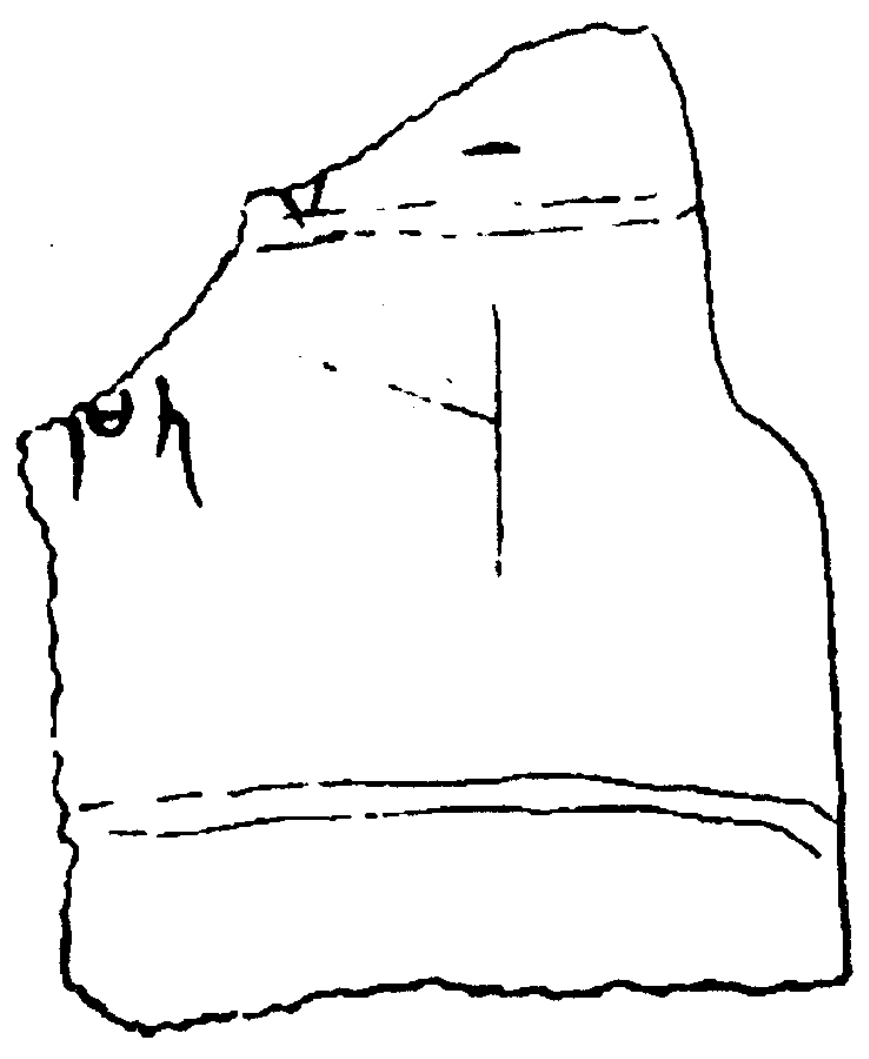

28 13.0.36—37背

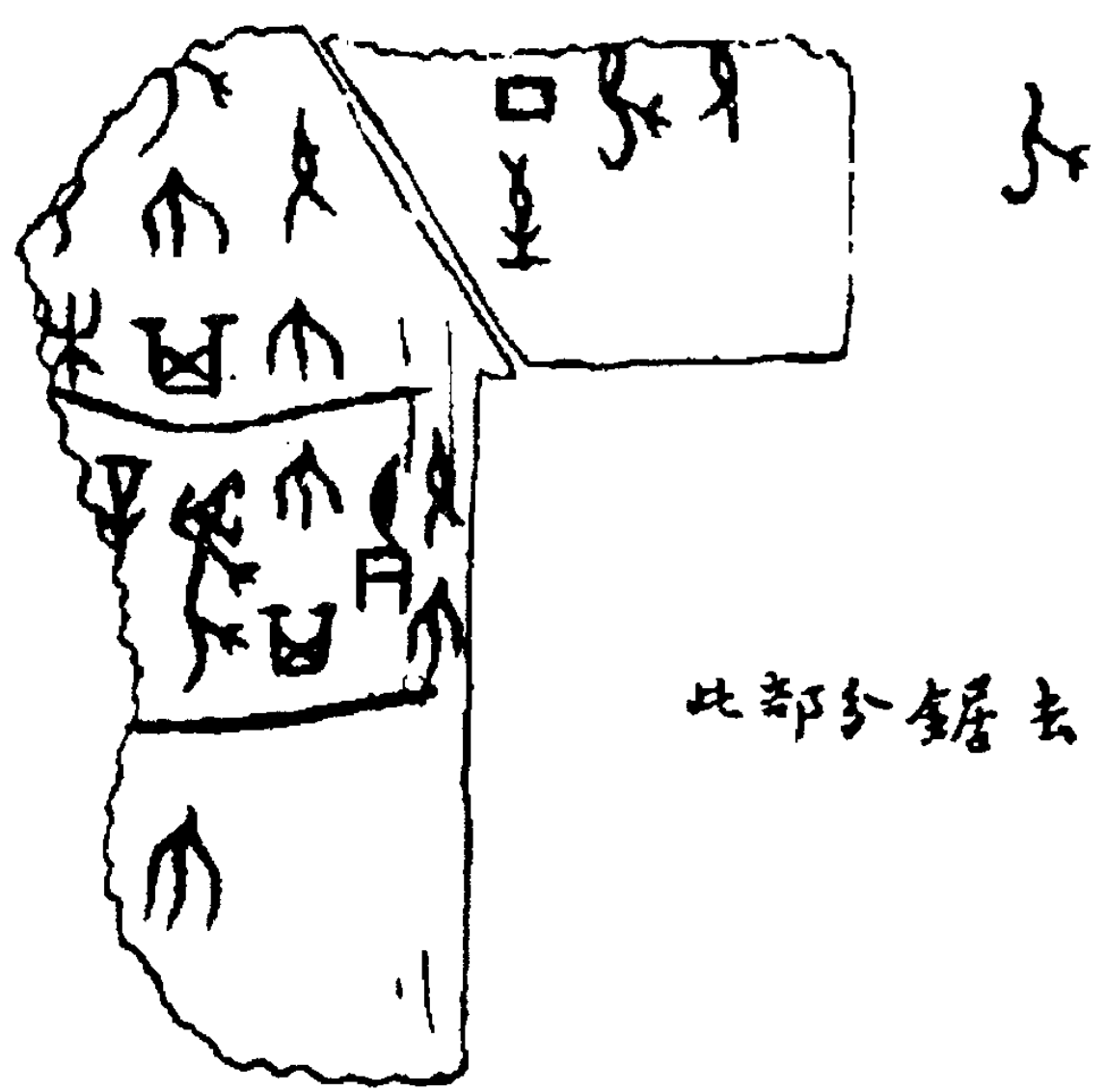

26 13.0.34背


13.0.33背

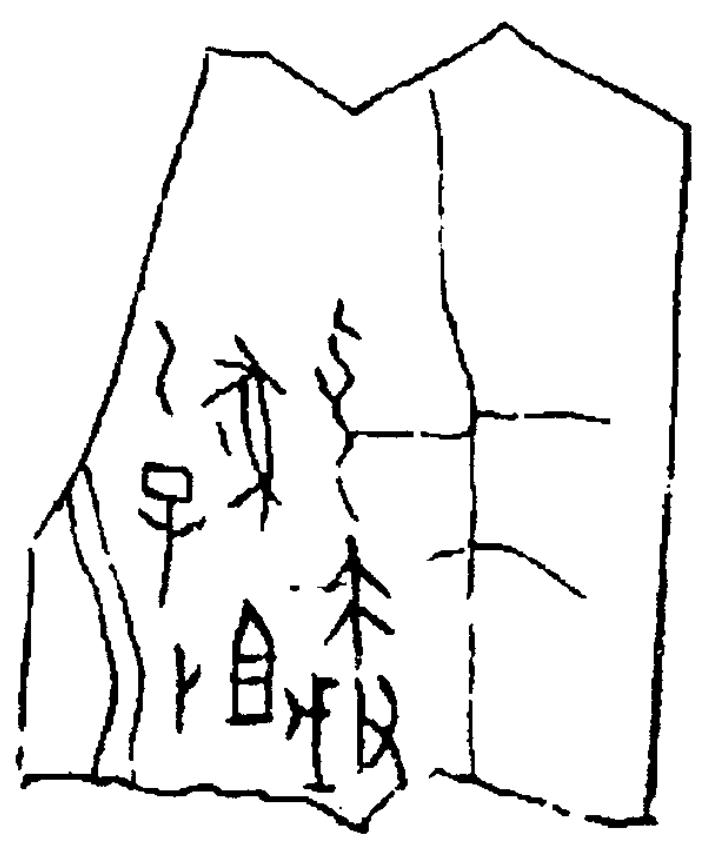

29 13.0.39—41背

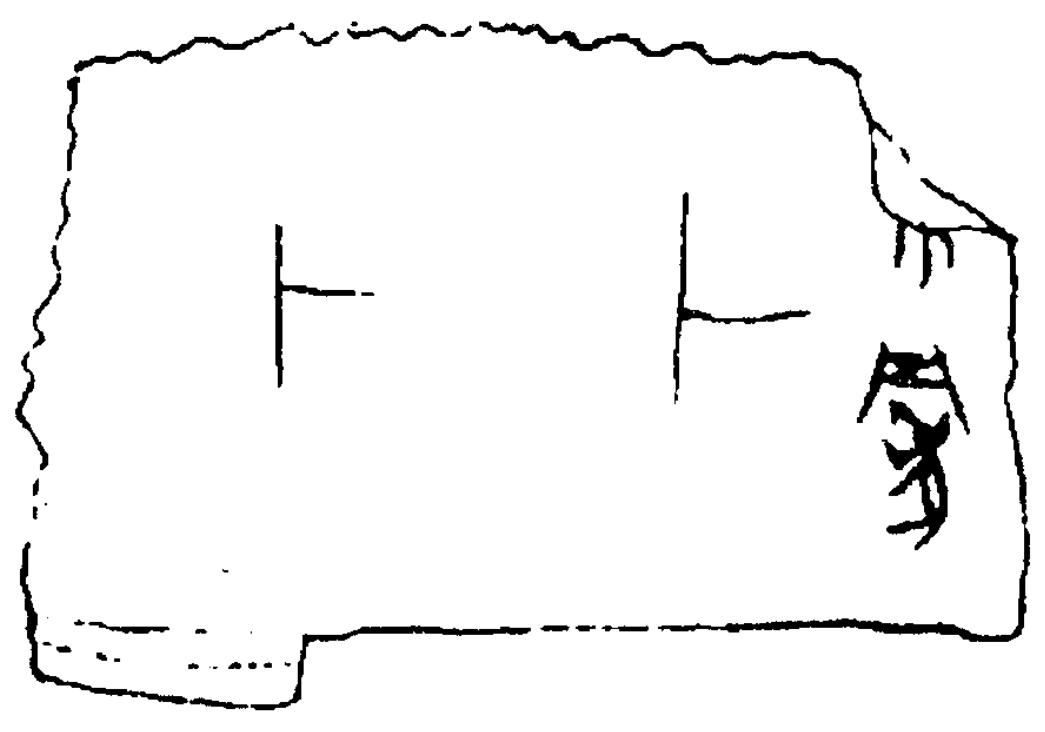

27 13.0.85背 多被蟲蛀

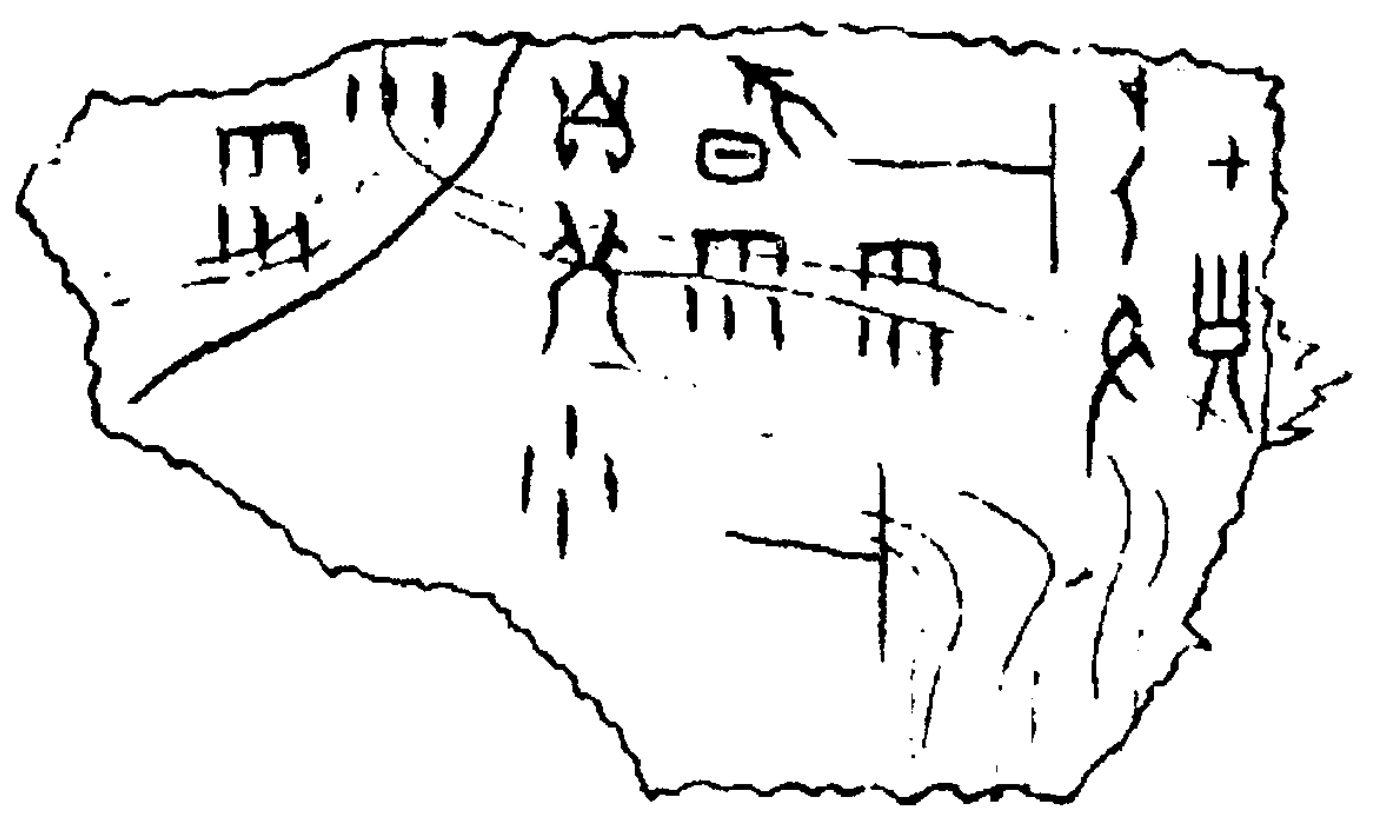

13.0.38

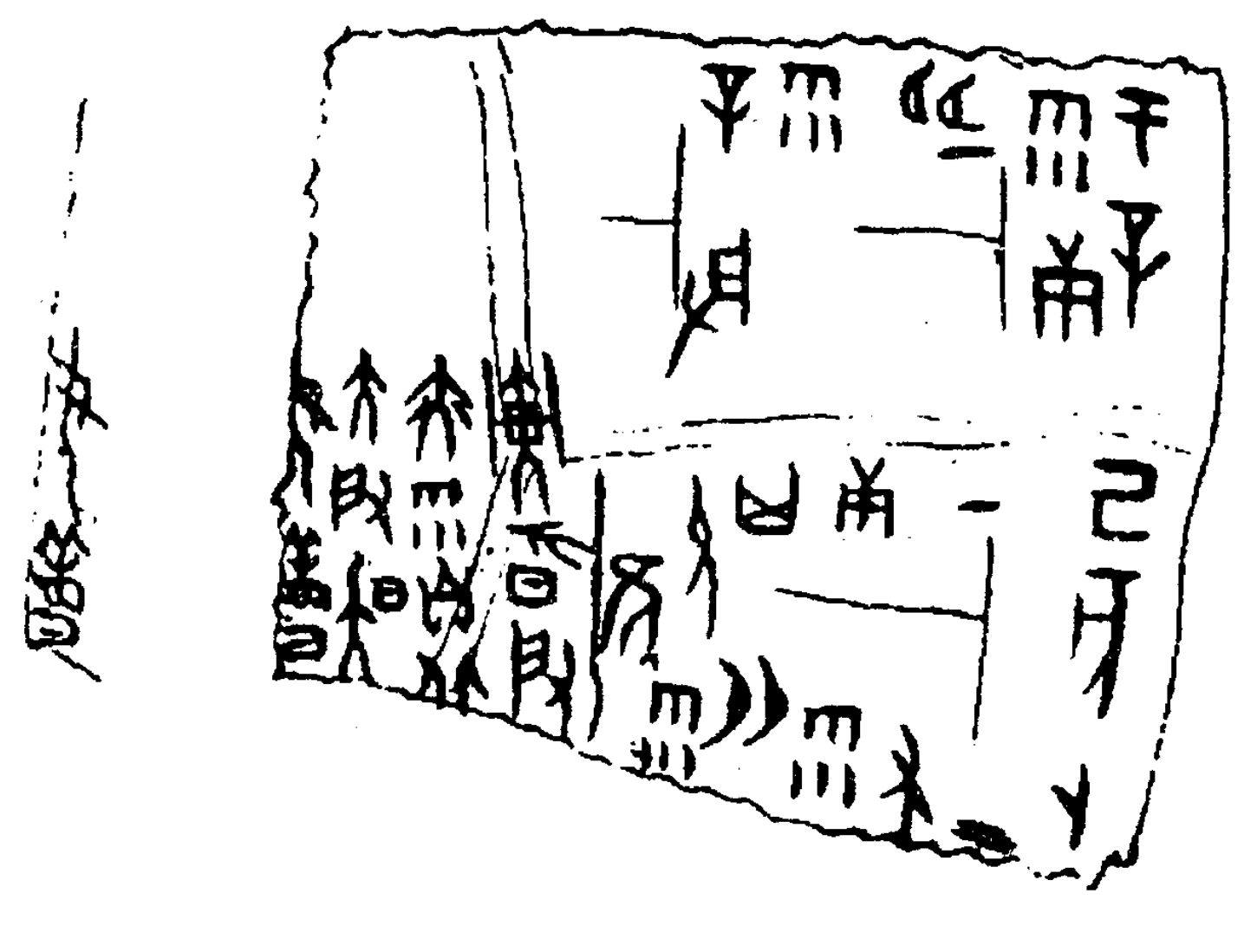

此部分鋸去

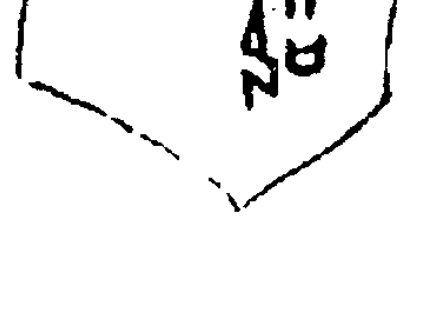
30 13.0.42—43背

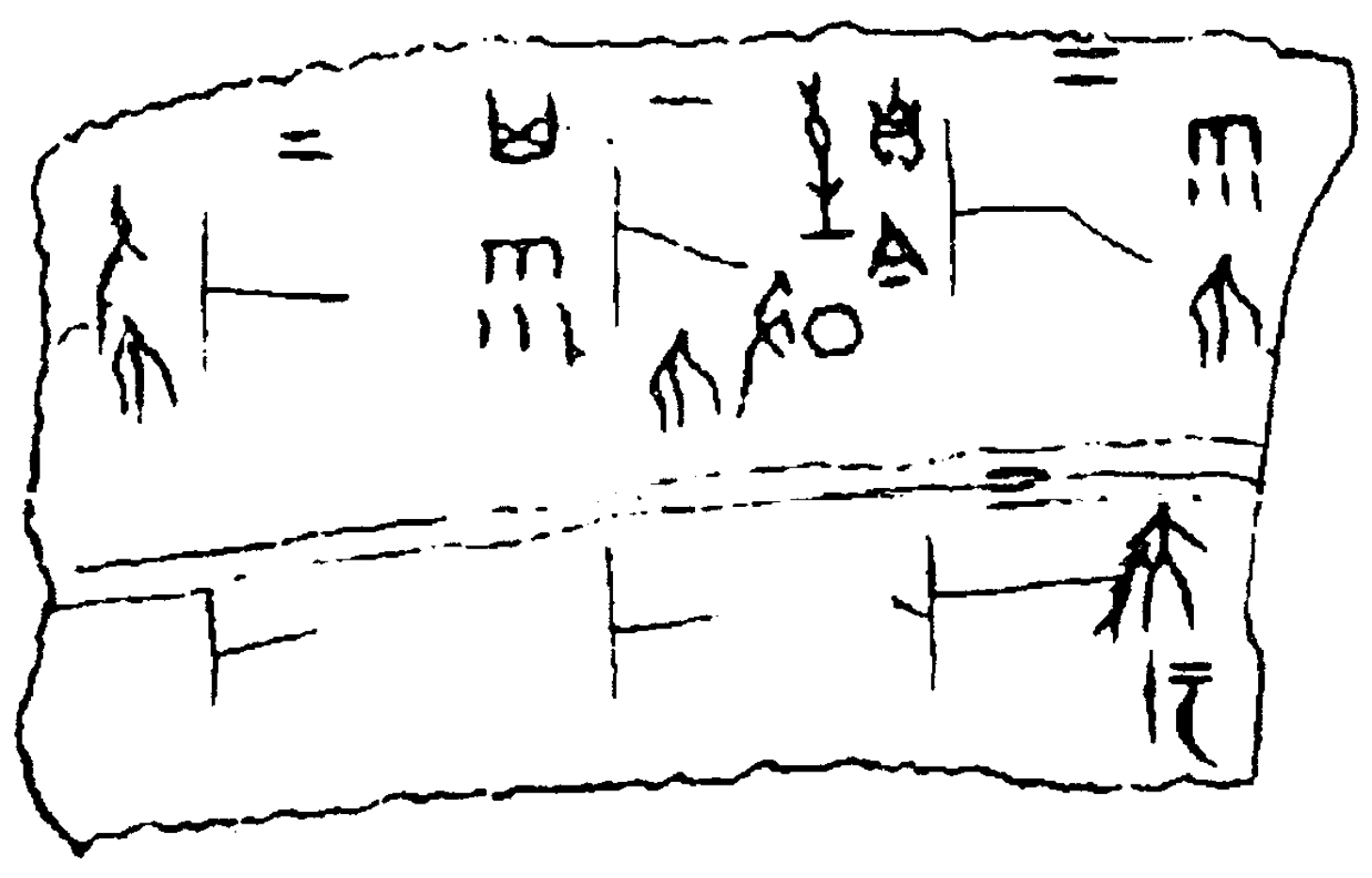

33 13.0.46背

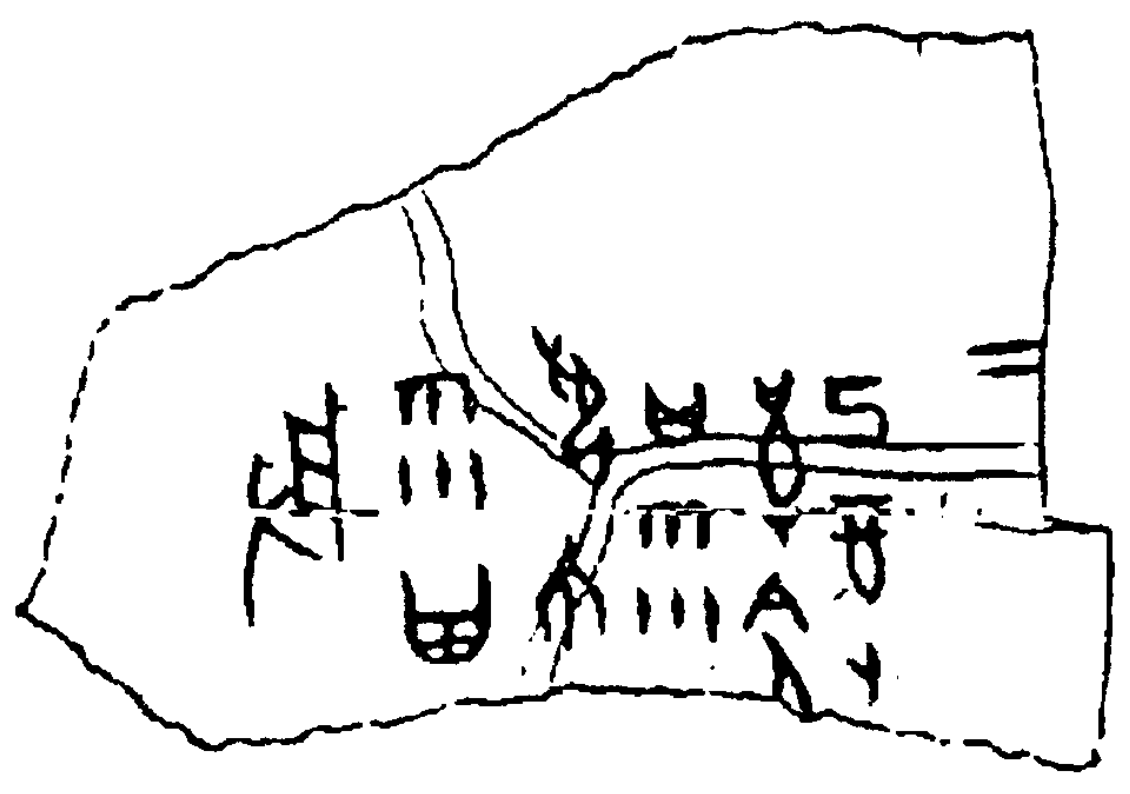

31 13.0.44背

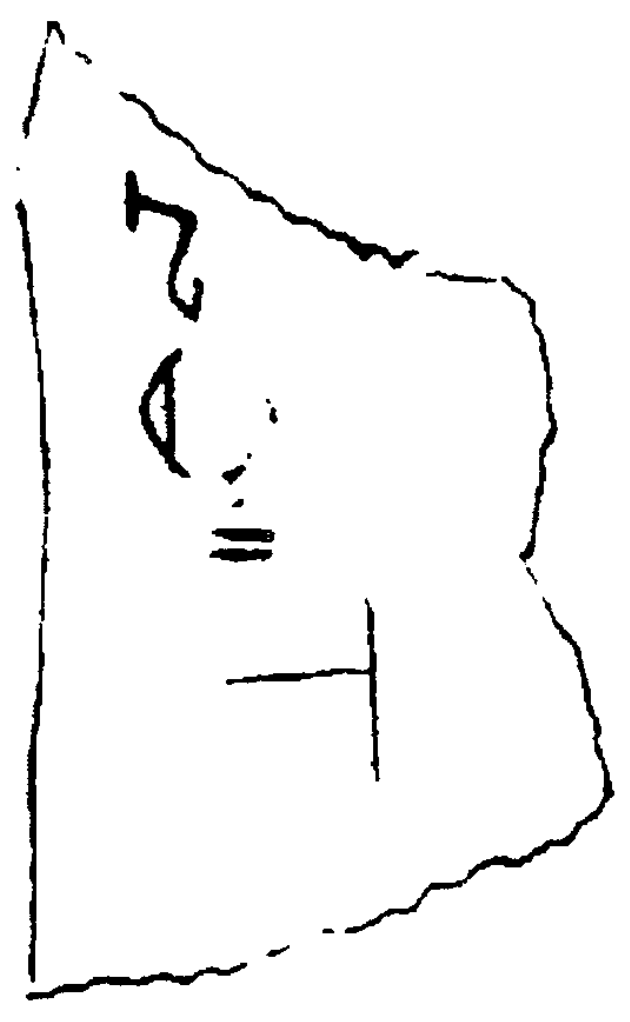

34 13.0.83背

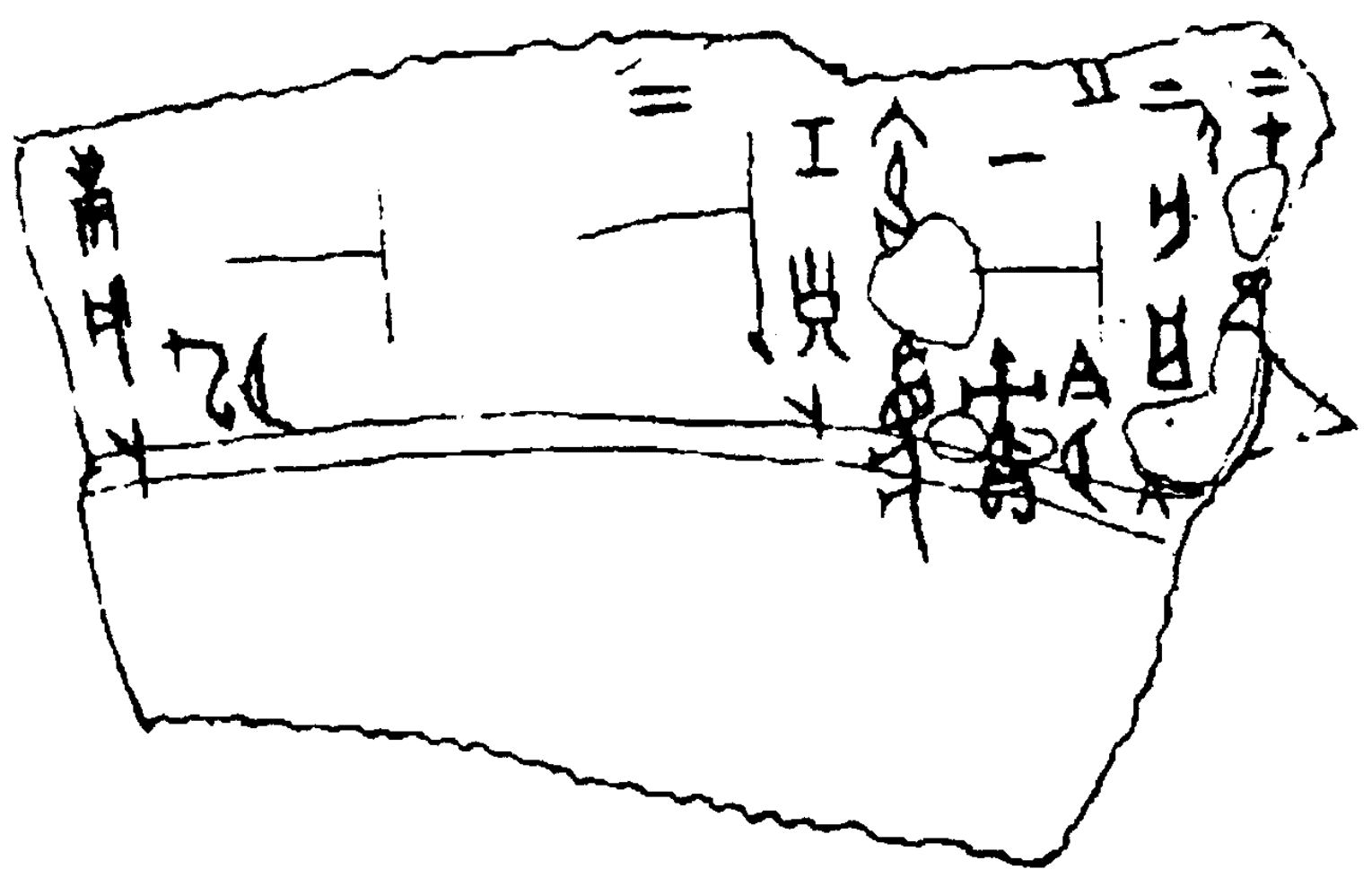

32 13.0.45背

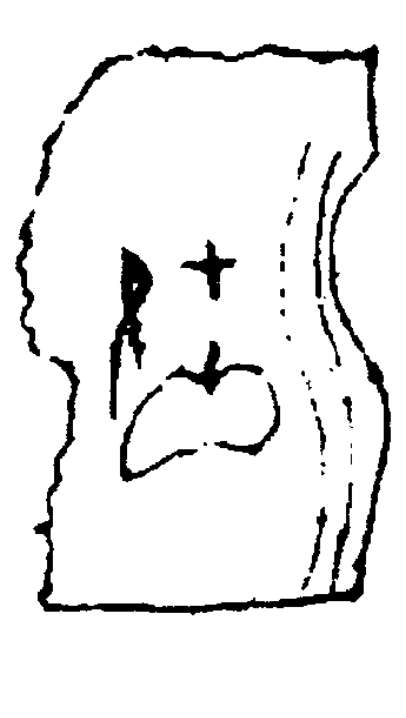

34 13.0.47

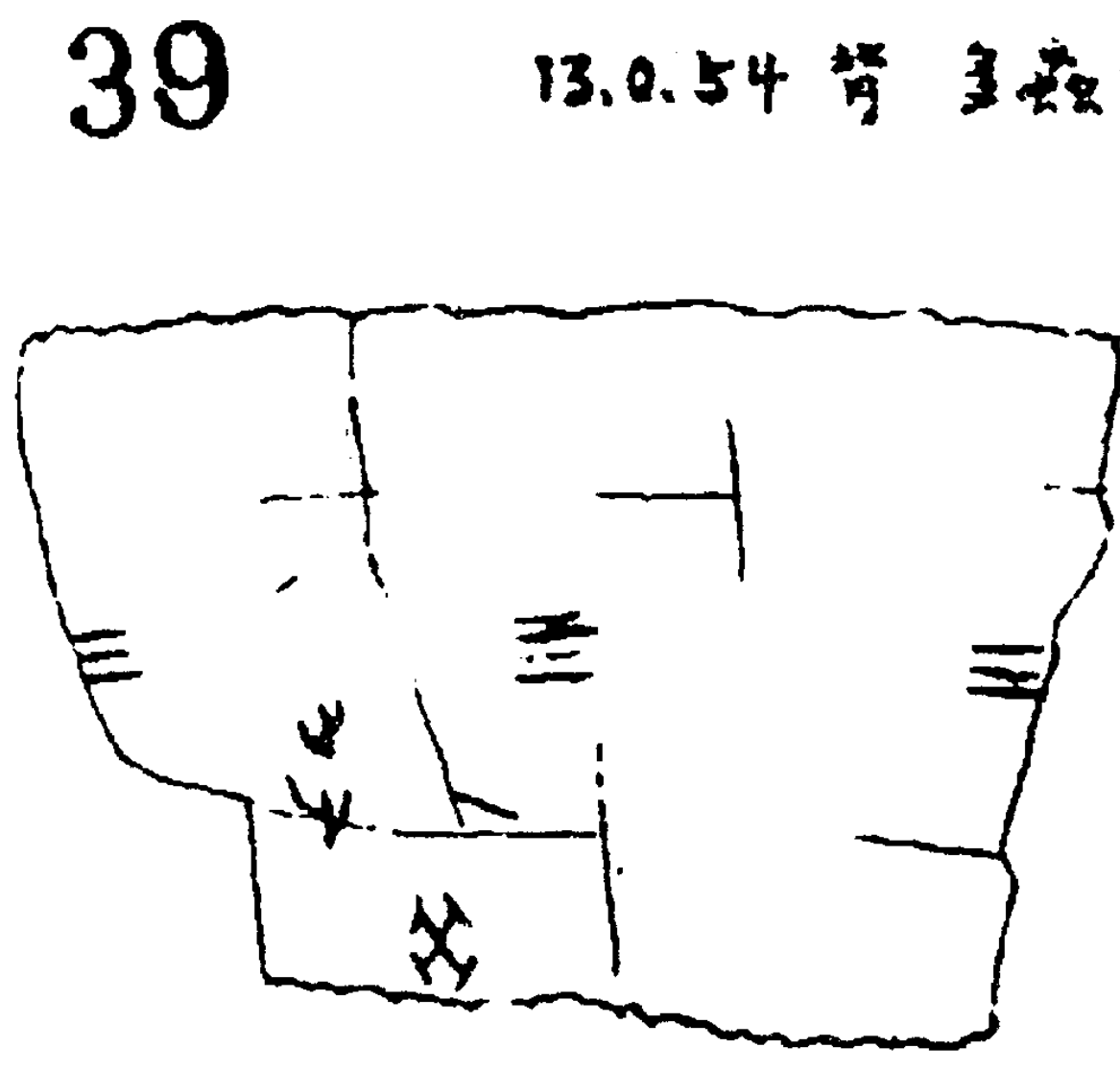

35 13.0.48背

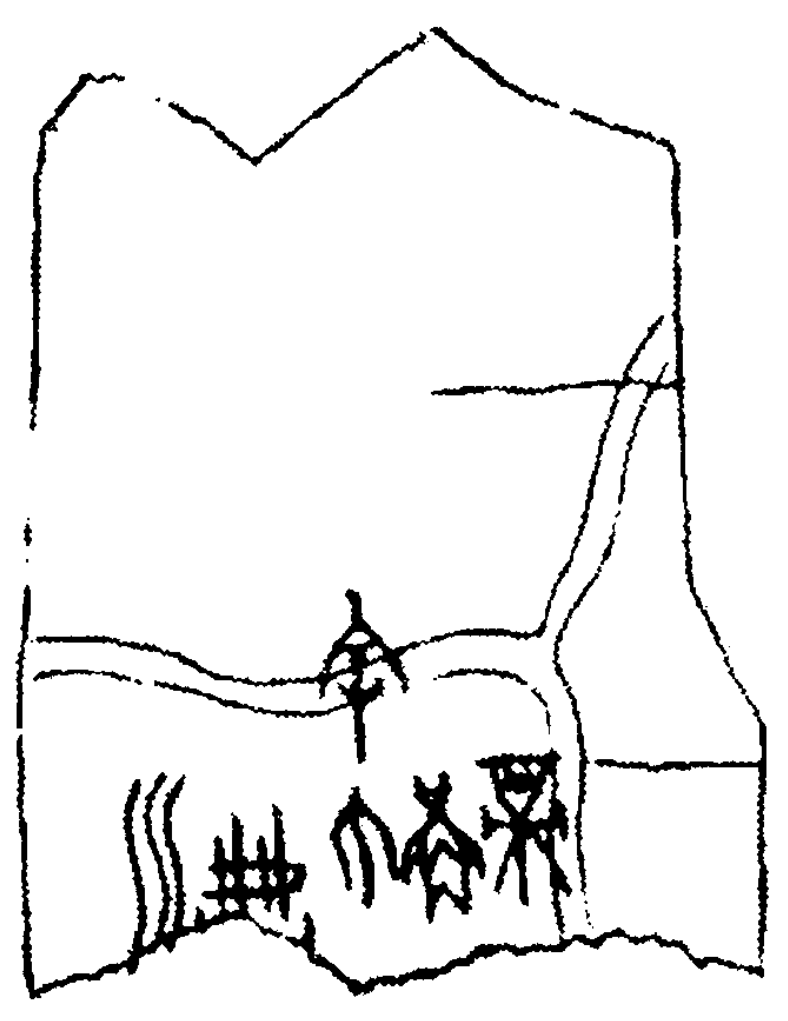

38 13.0.52背


36 13.0.49背

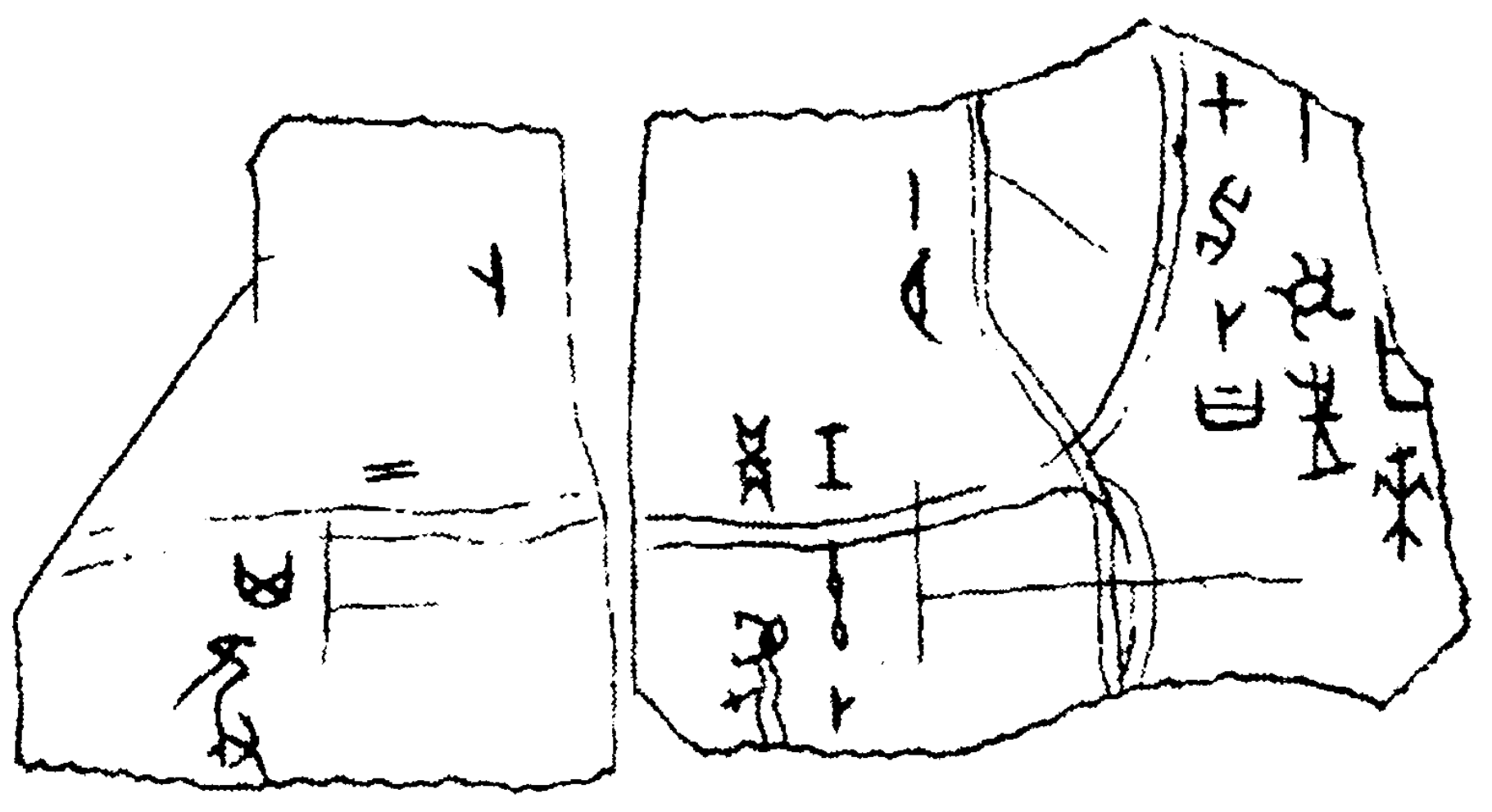

39 13.0.54背 多蟲蛀


37 13.0.51背


37 13.0.50背

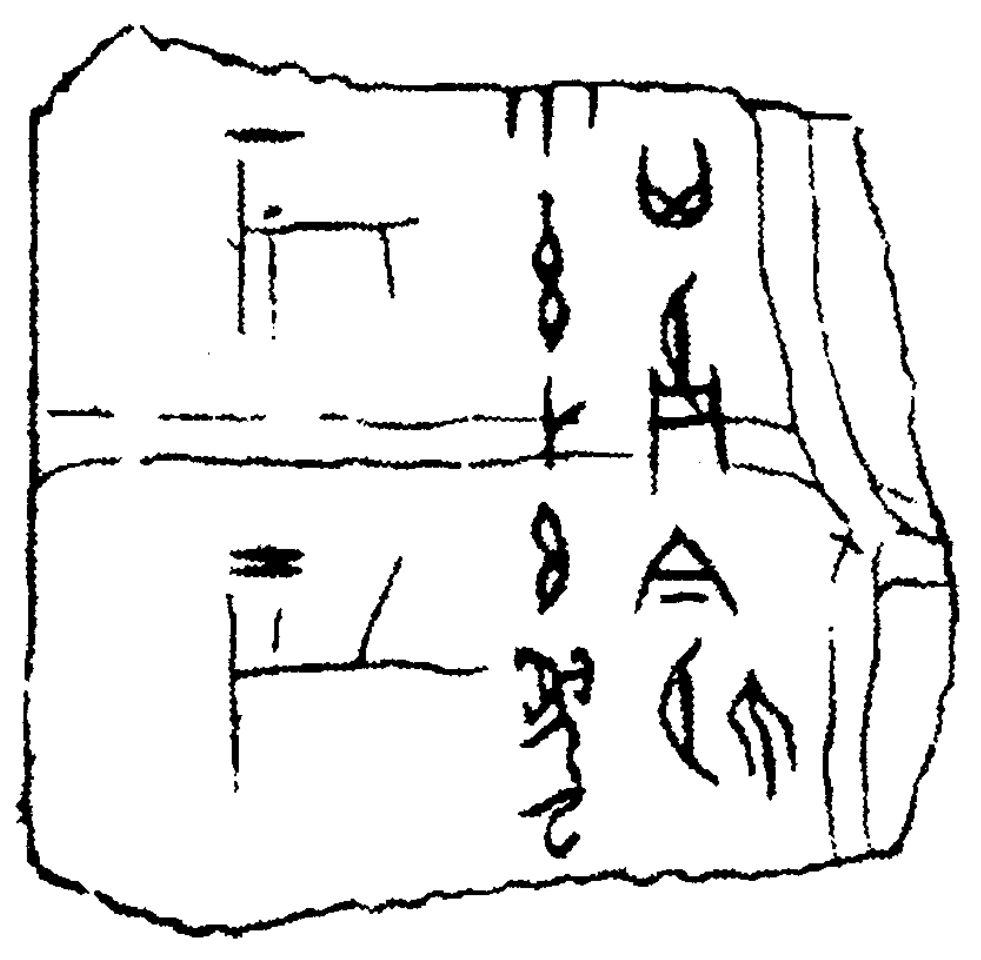


45 13.0.66背

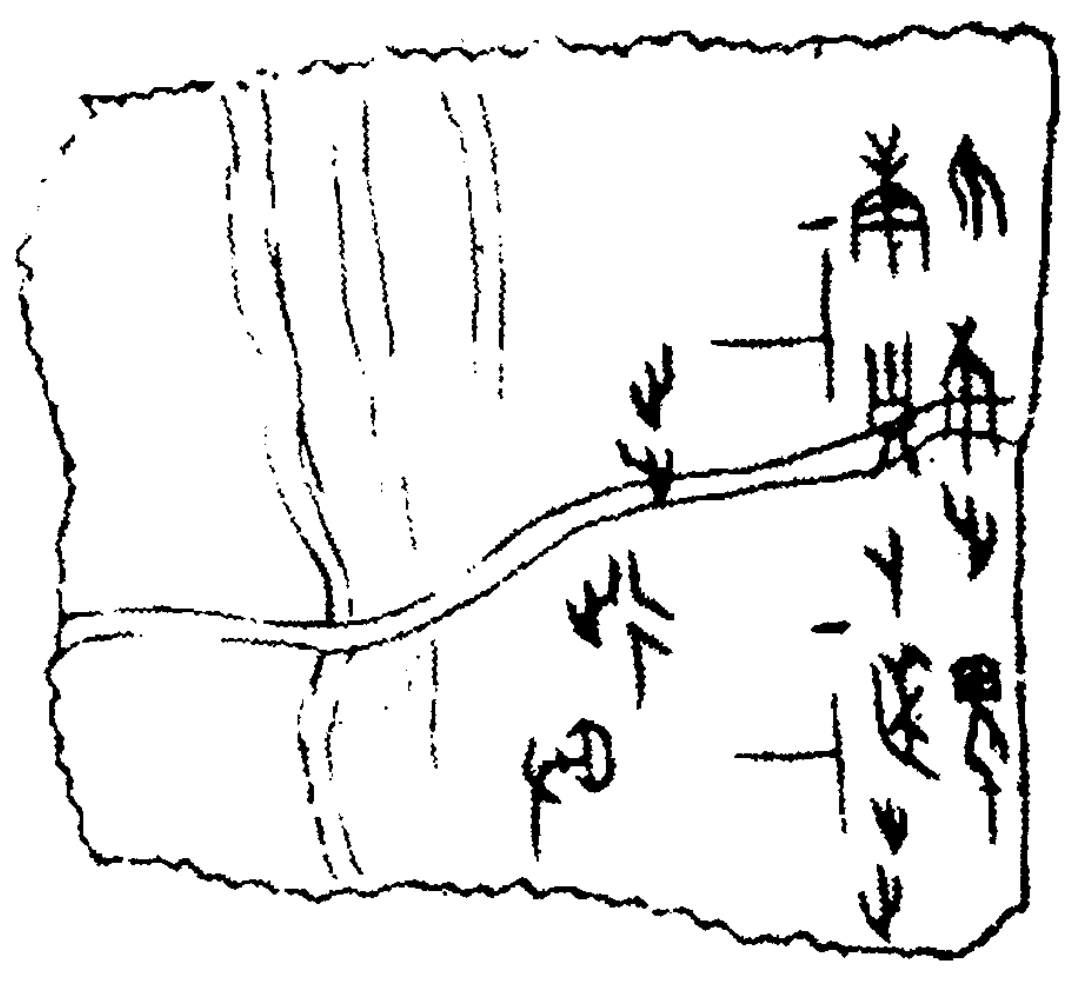


43

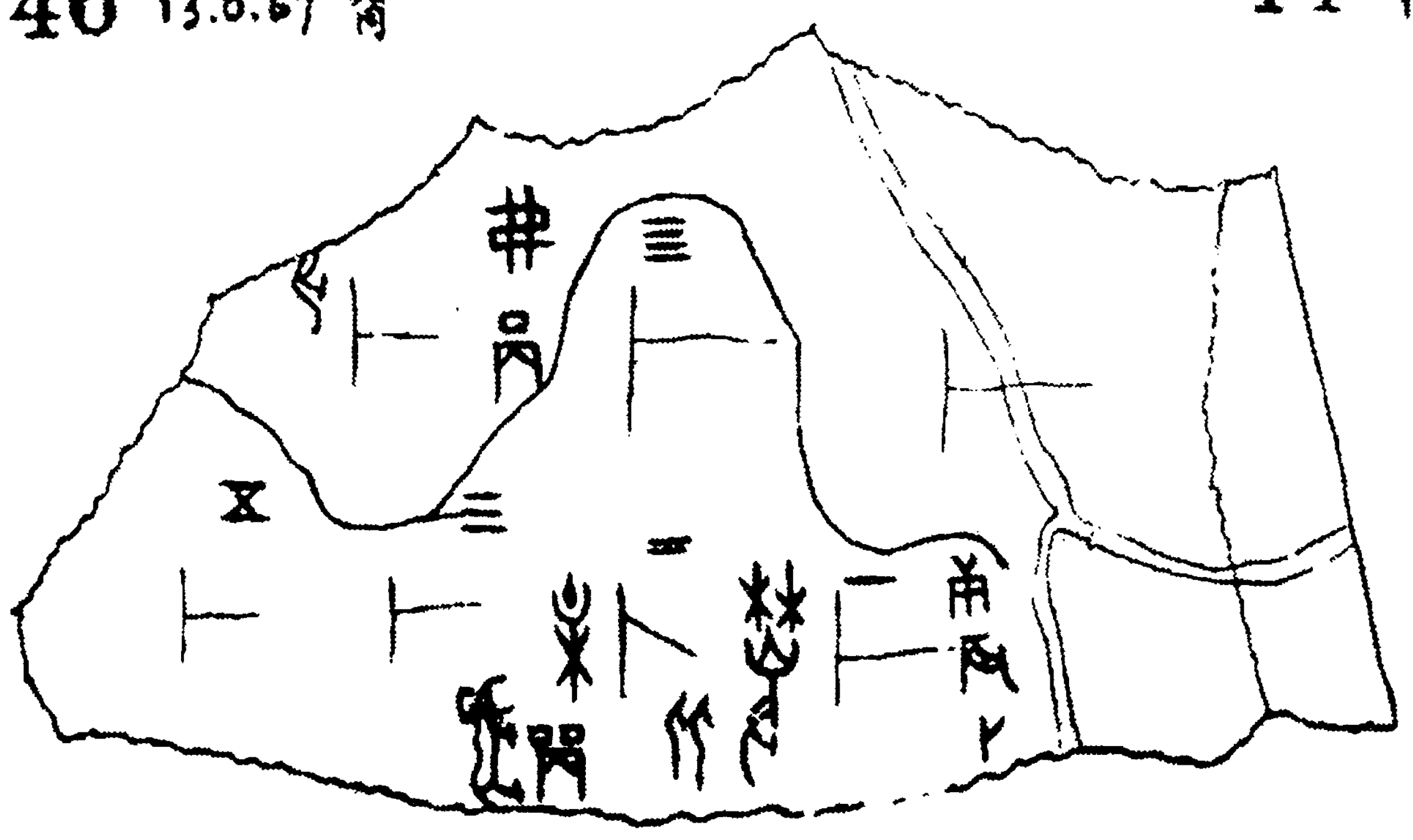
13.0.61背　13.0.62—63背



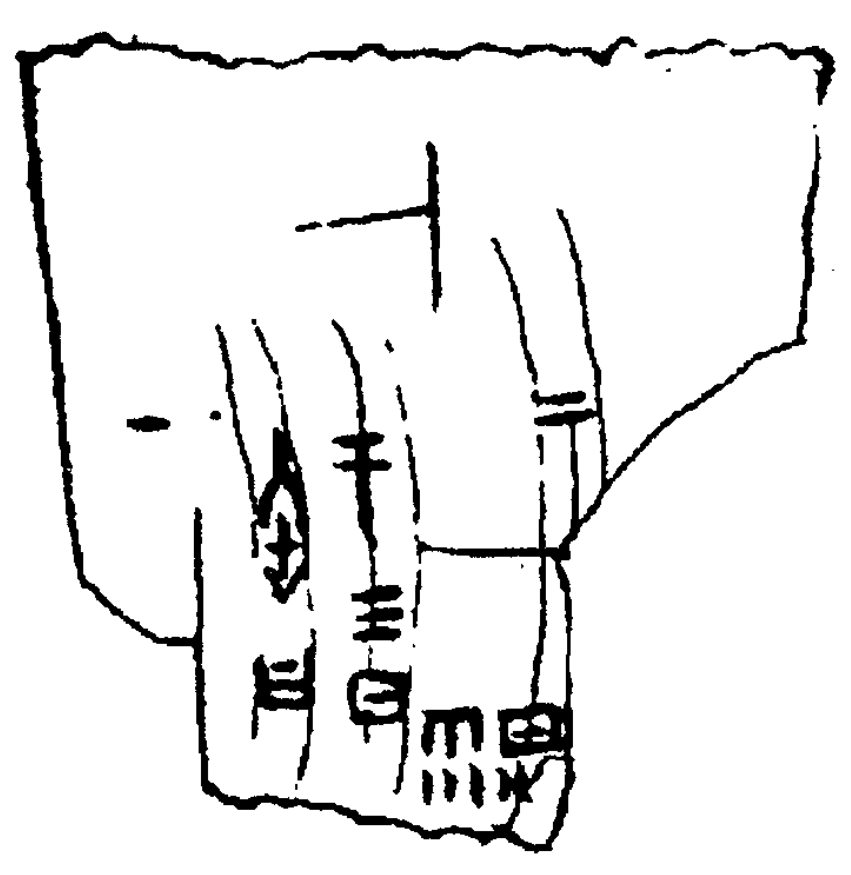
46 13.0.67背



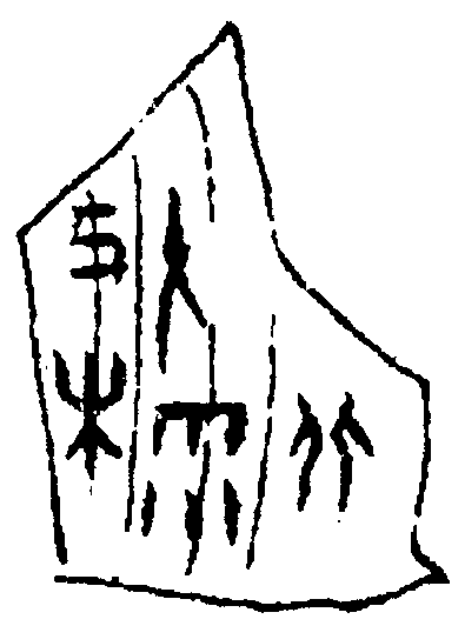
44 13.0.64背



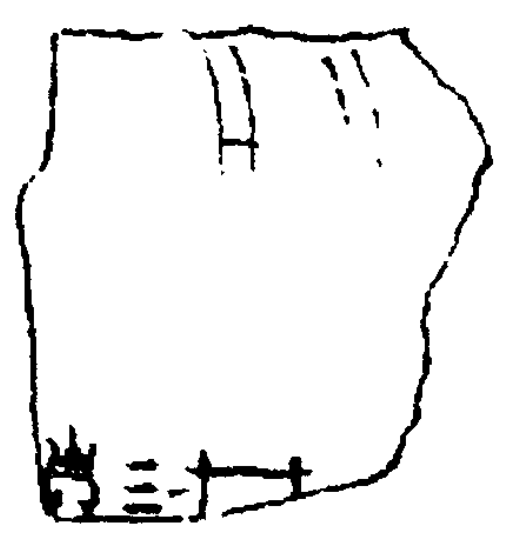
47 13.0.68背



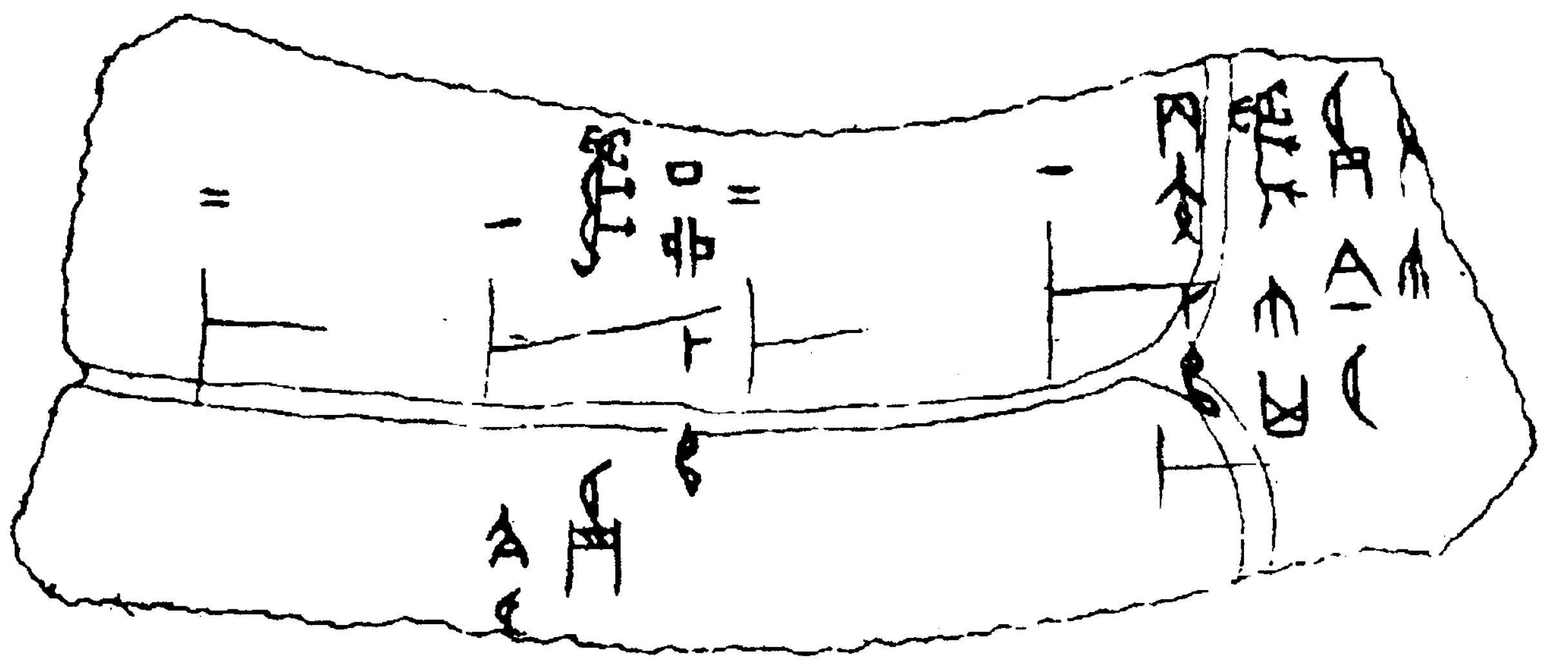
40 13.0.73背



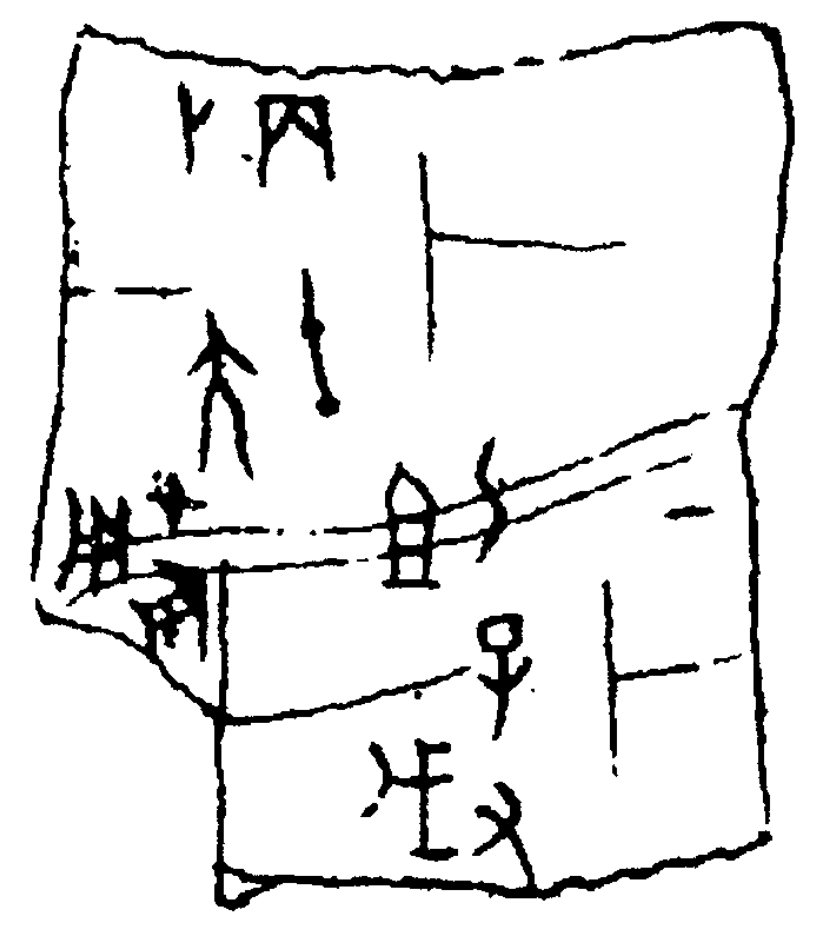
40 13.0.55背



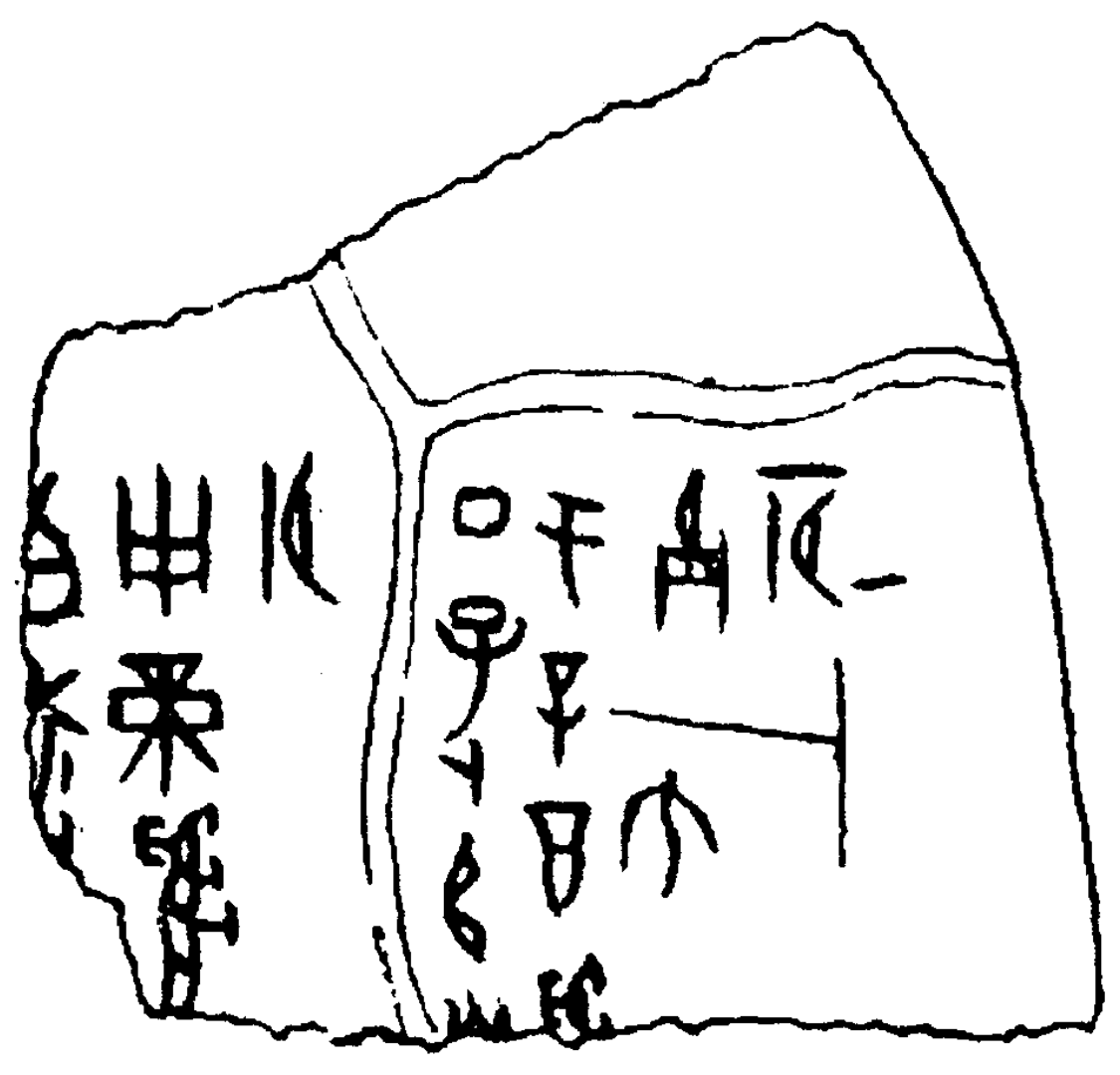
40 13.0.56背



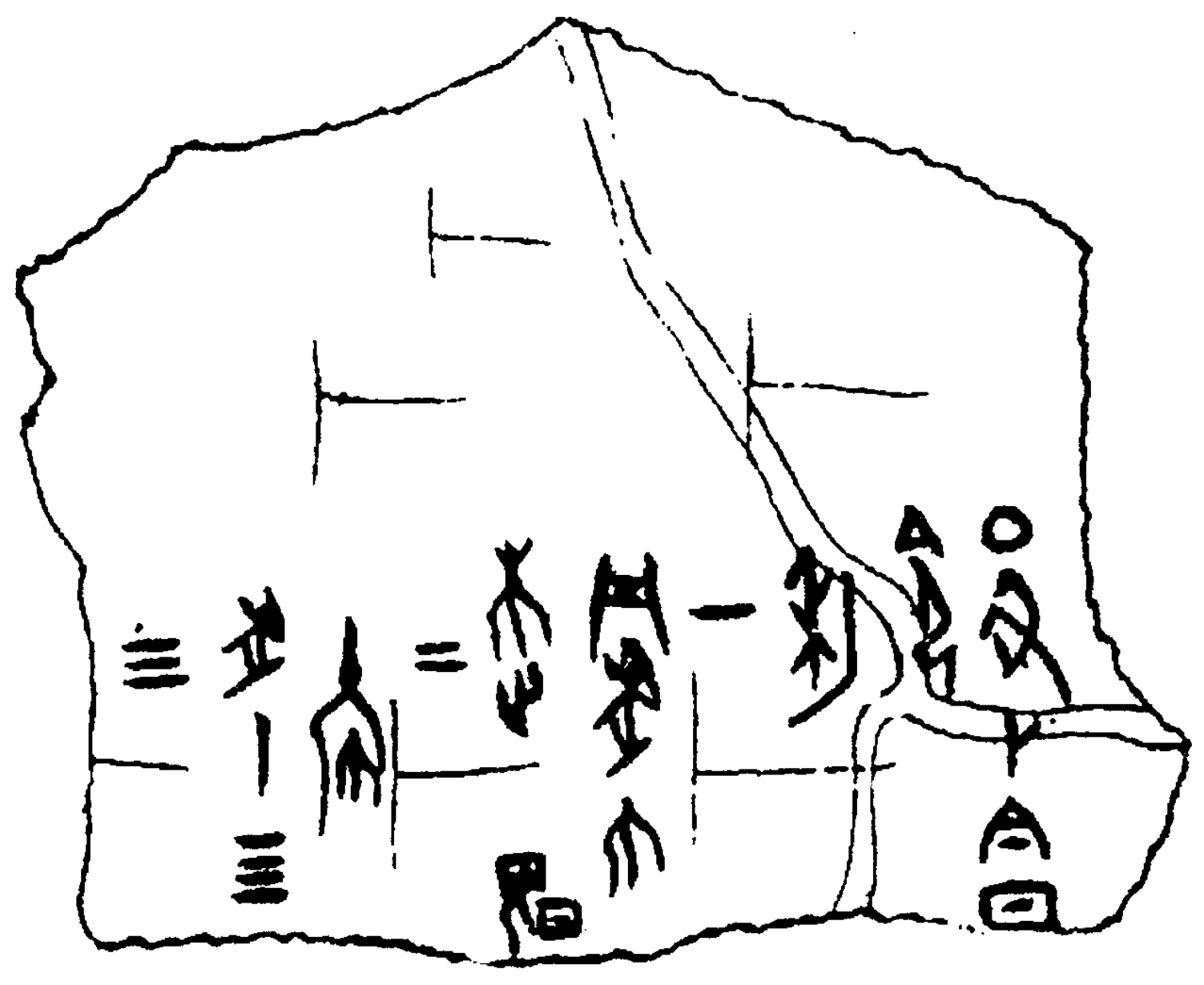
41 13.0.57背



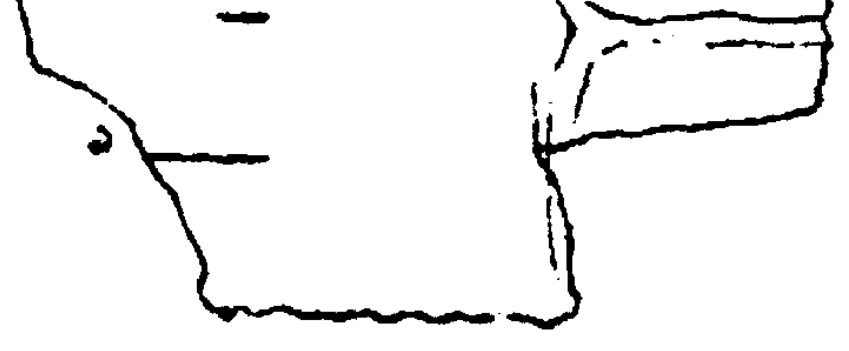
(13.0.59無字誤入) 13.0.60背



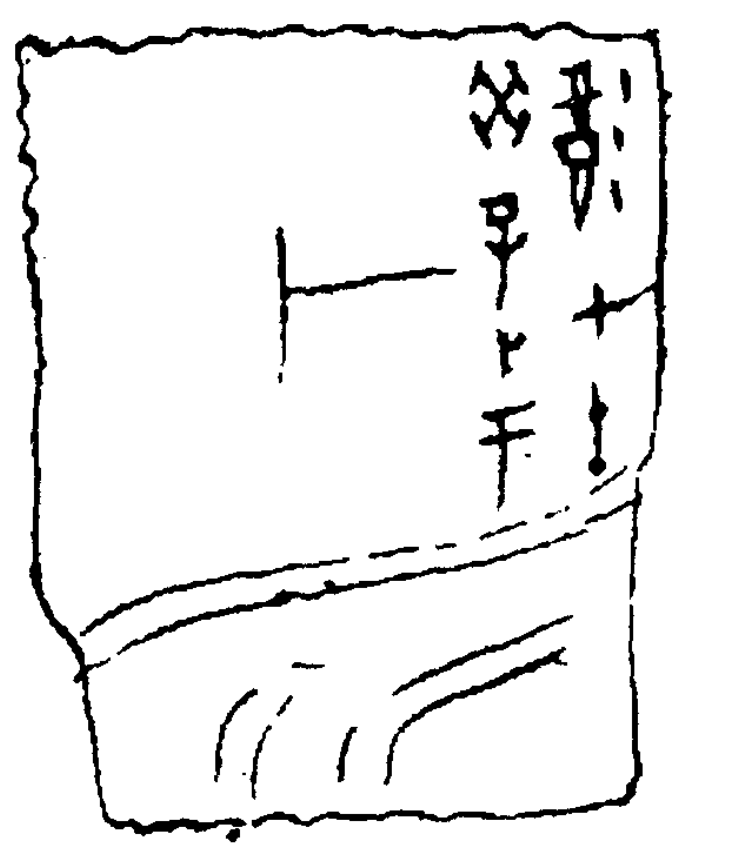
42 13.0.58背



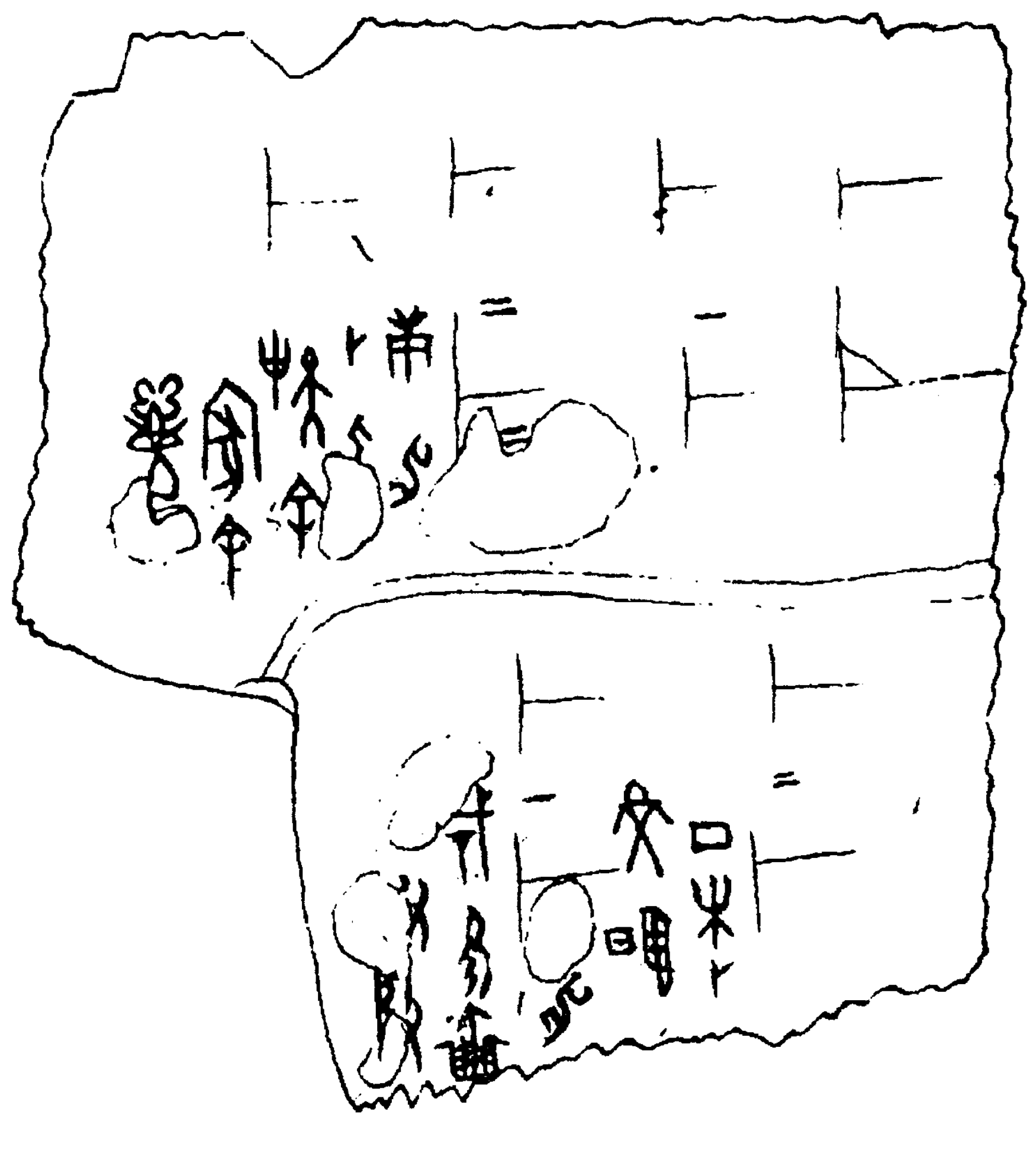
55 13.0.78背



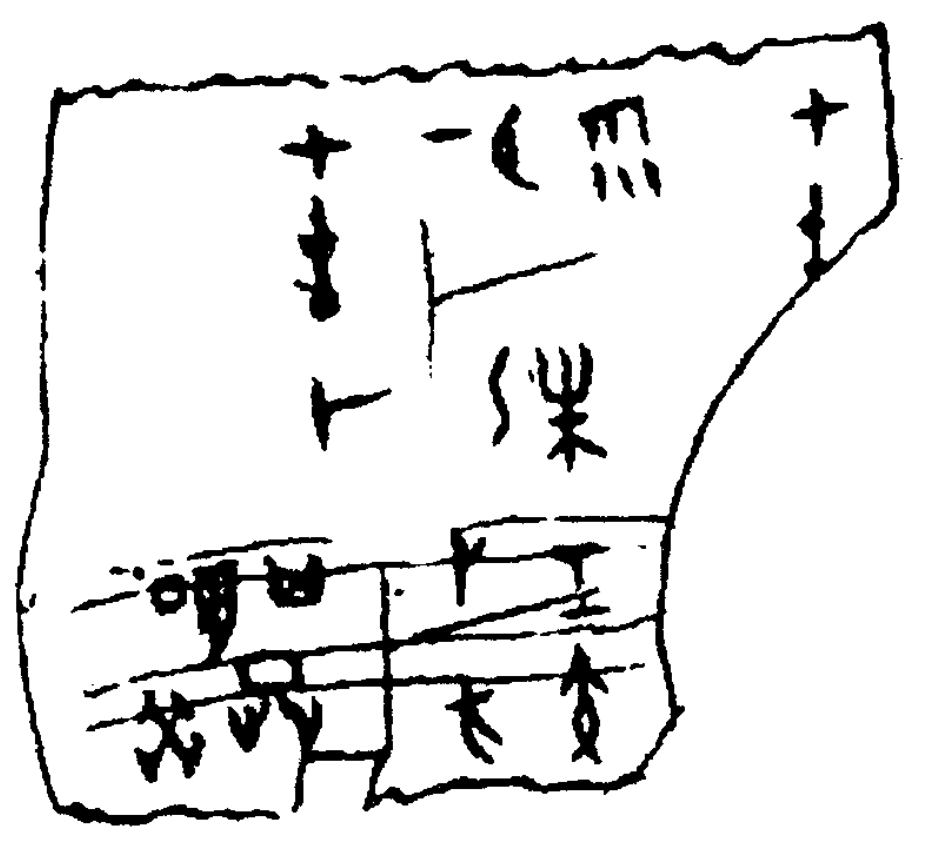
54 13.0.77背



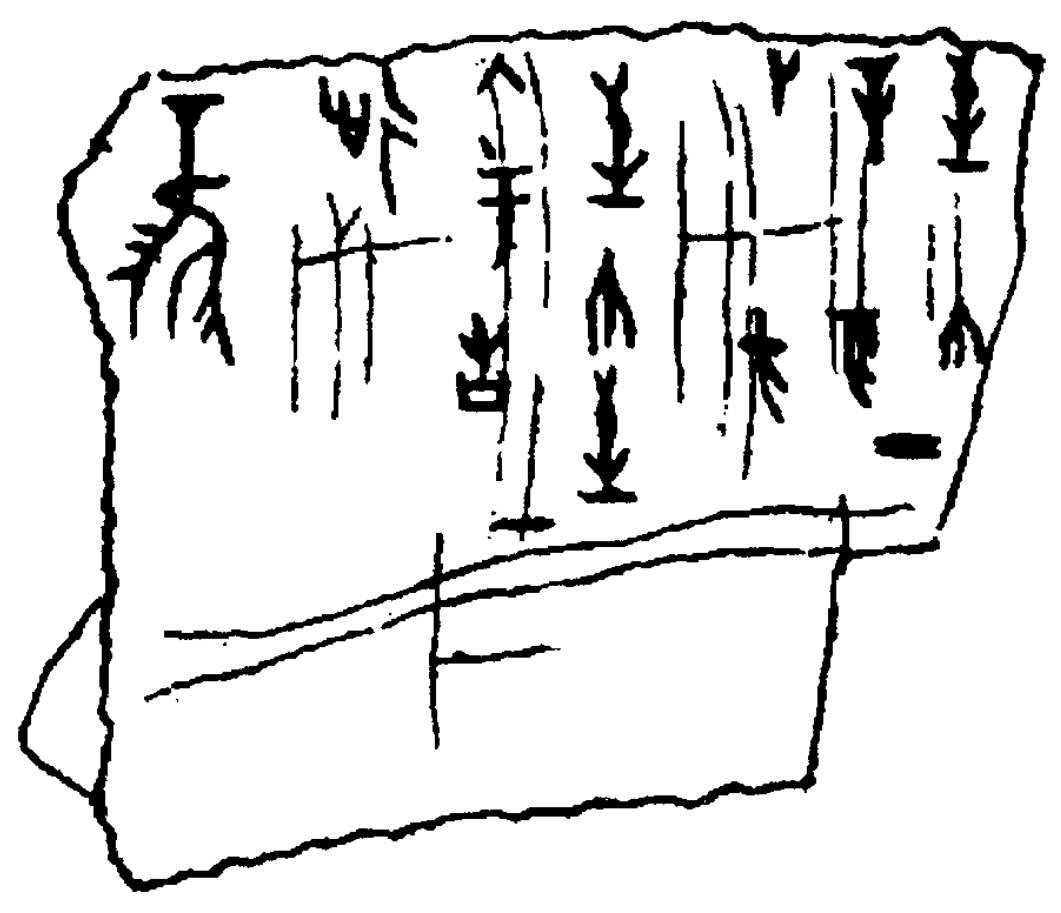
58 13.0.81背



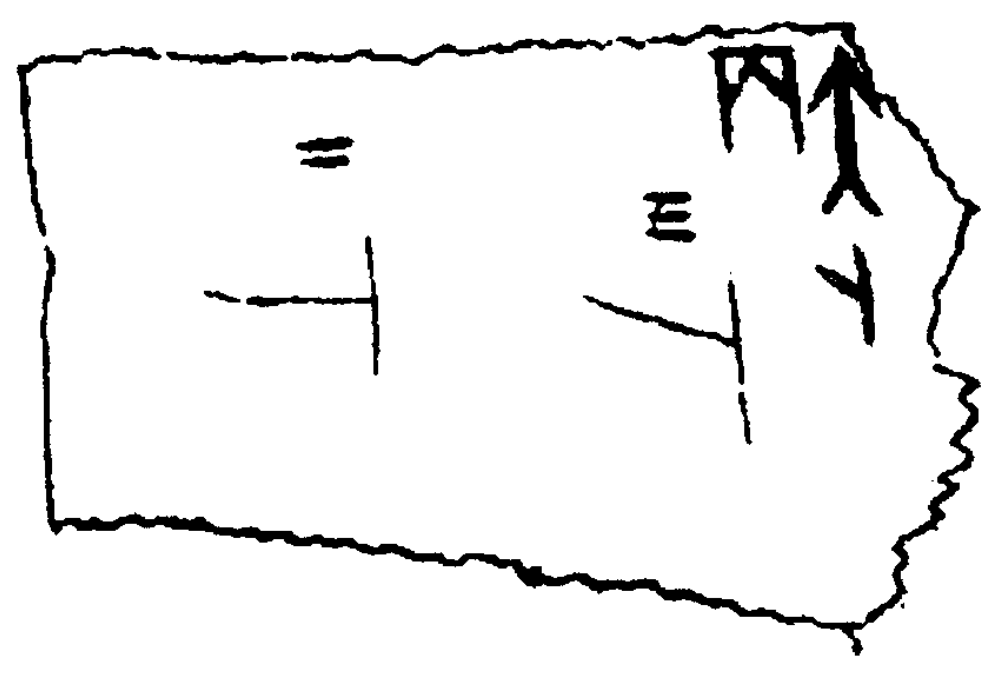
58 13.0.88背



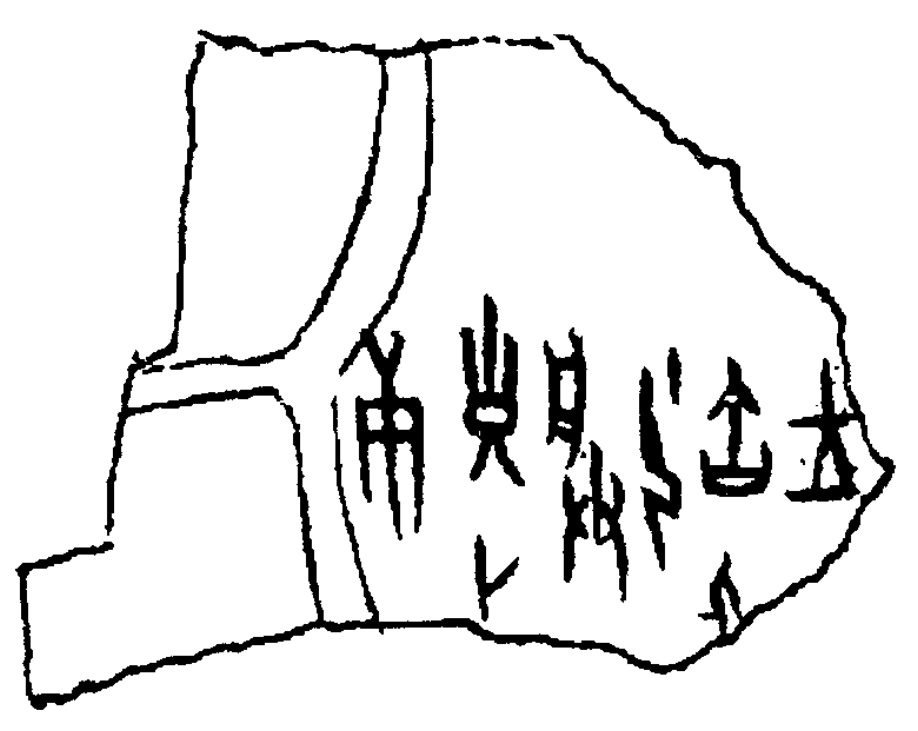
56 (全版兼妊,不可屬讀)13.0.79背



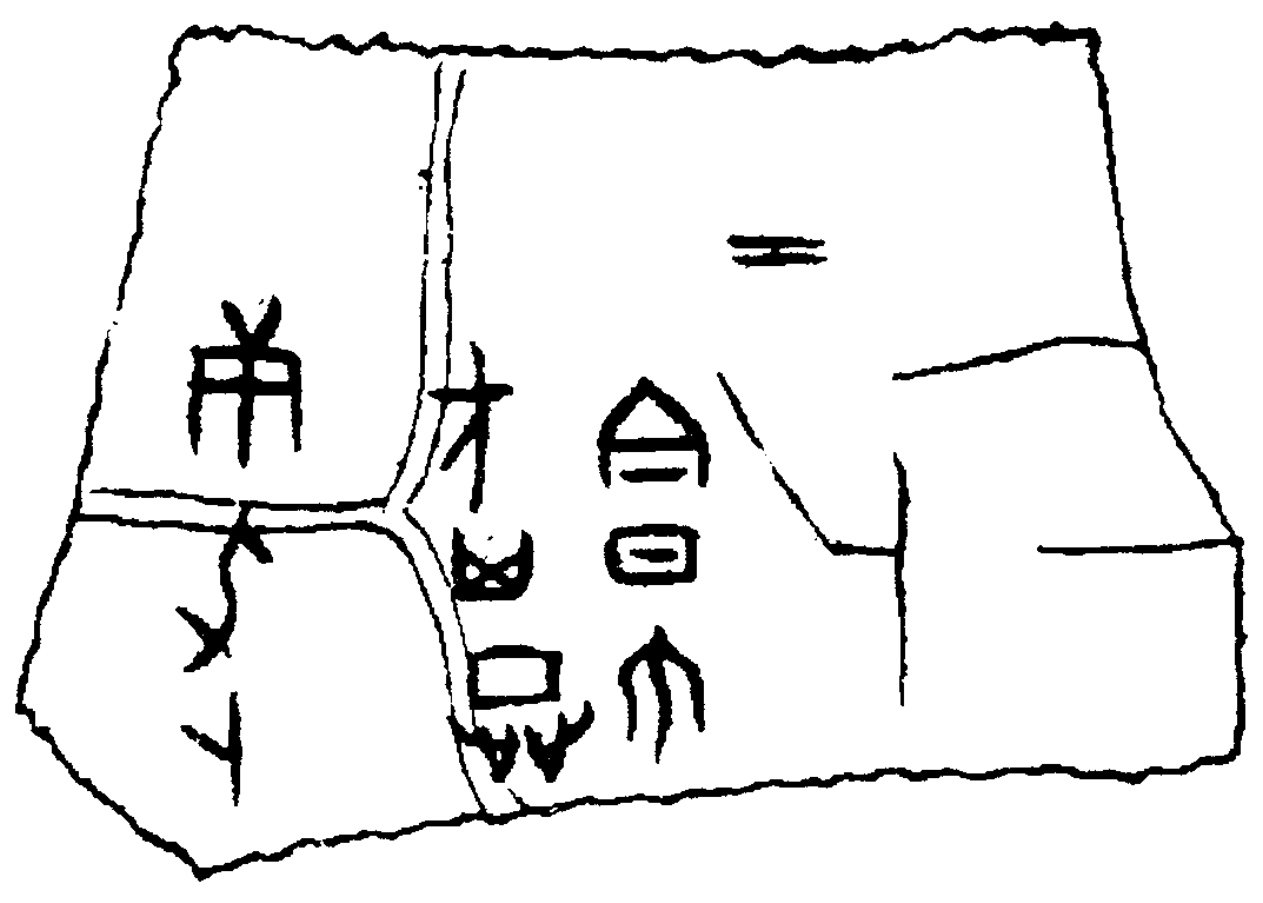
51 13.0.74背



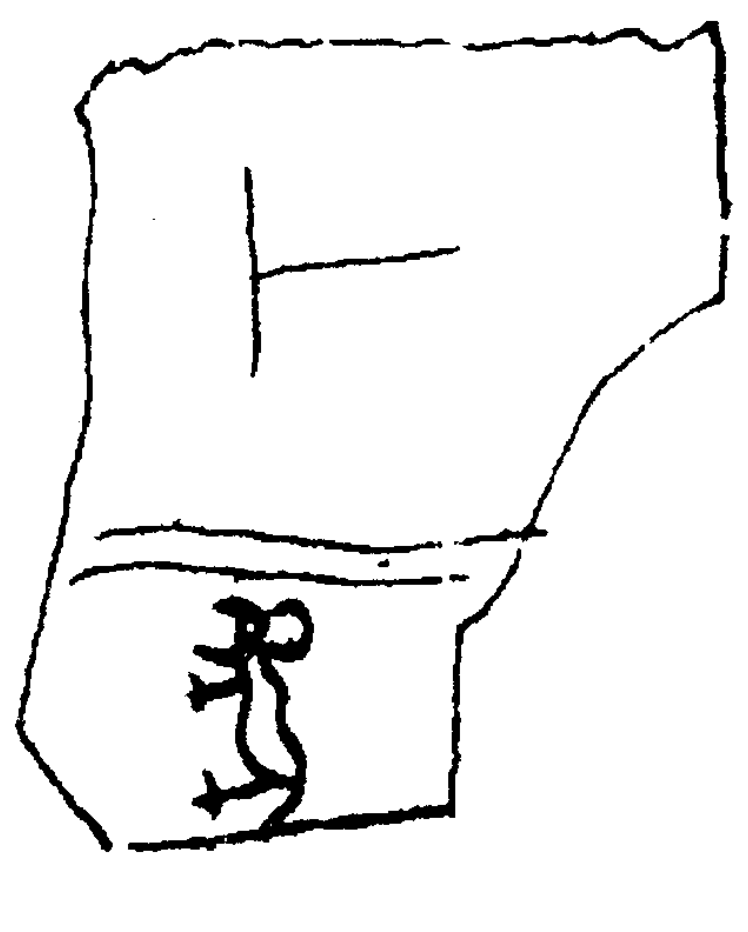
48 13.0.69背



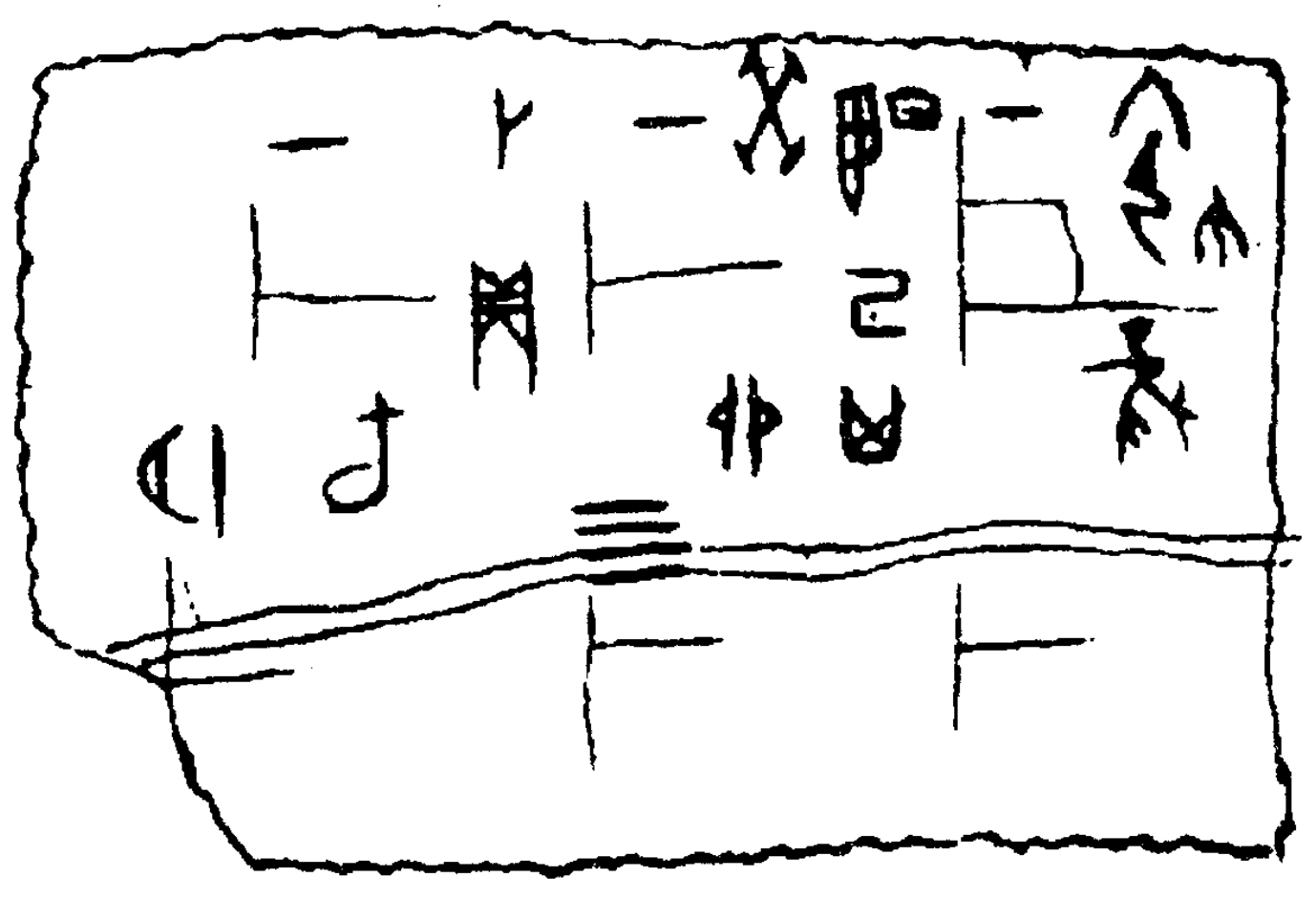
52 13.0.75背



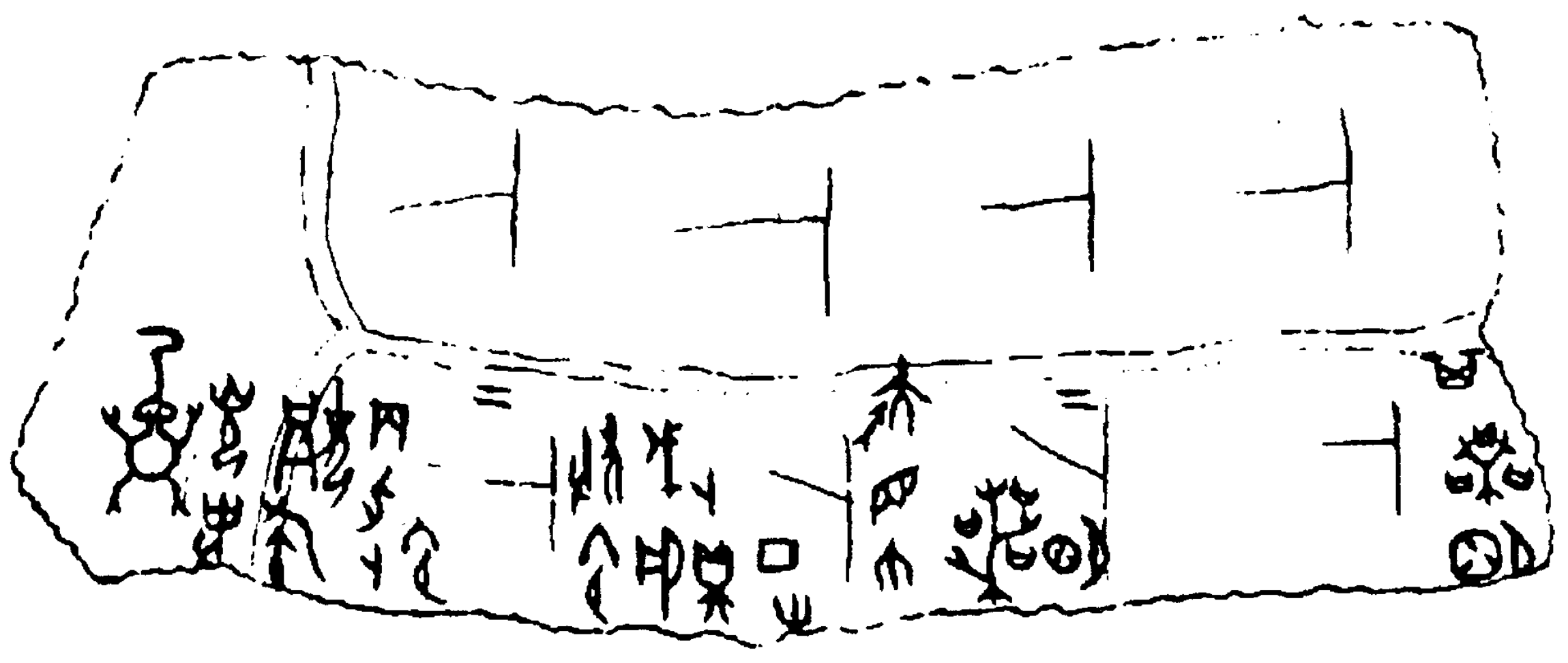
49 13.0.70背



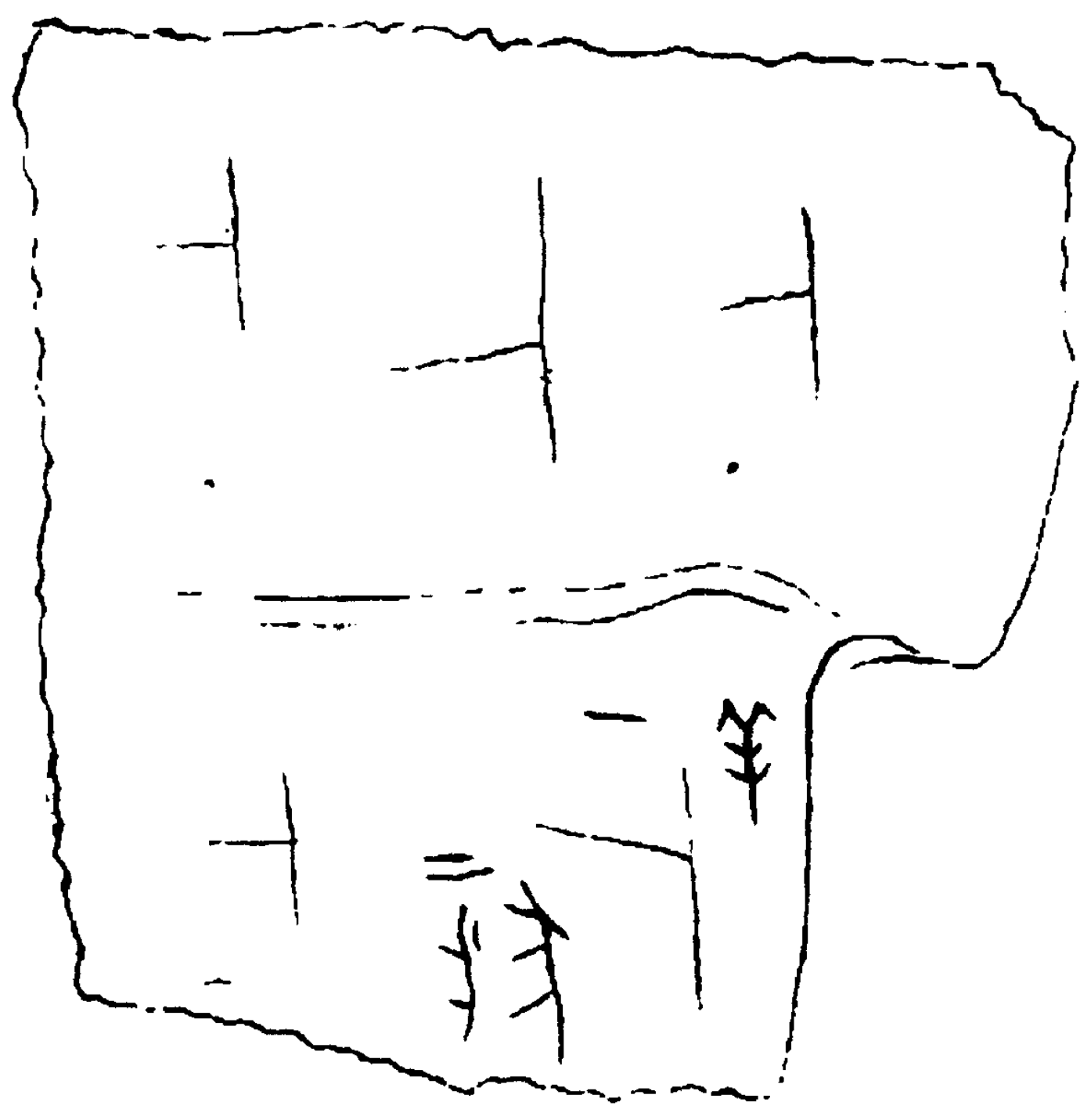
53 13.0.76背



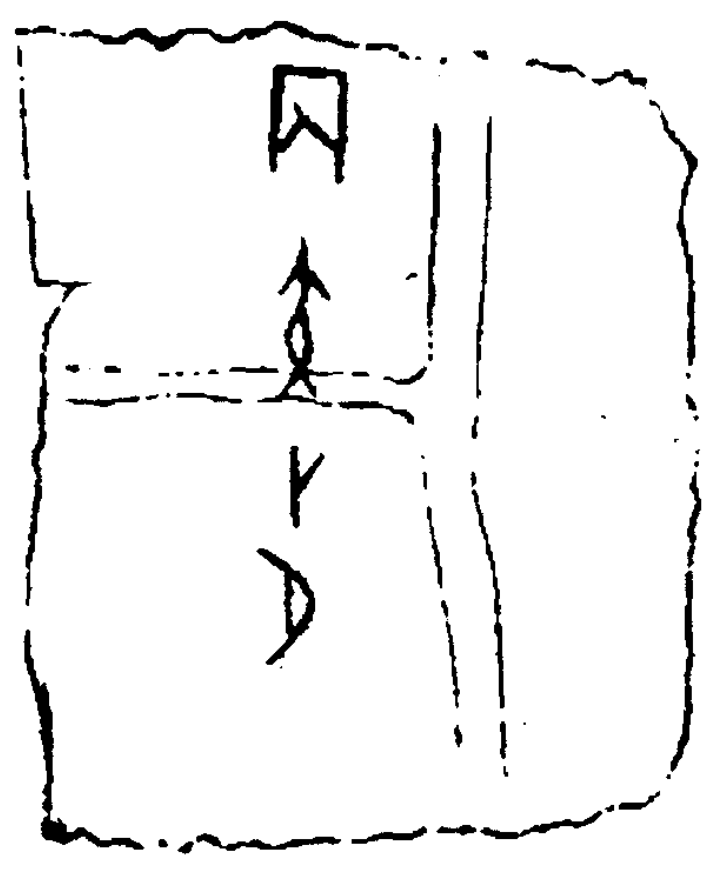
50 (13.0.71無字誤編入) 13.0.72背



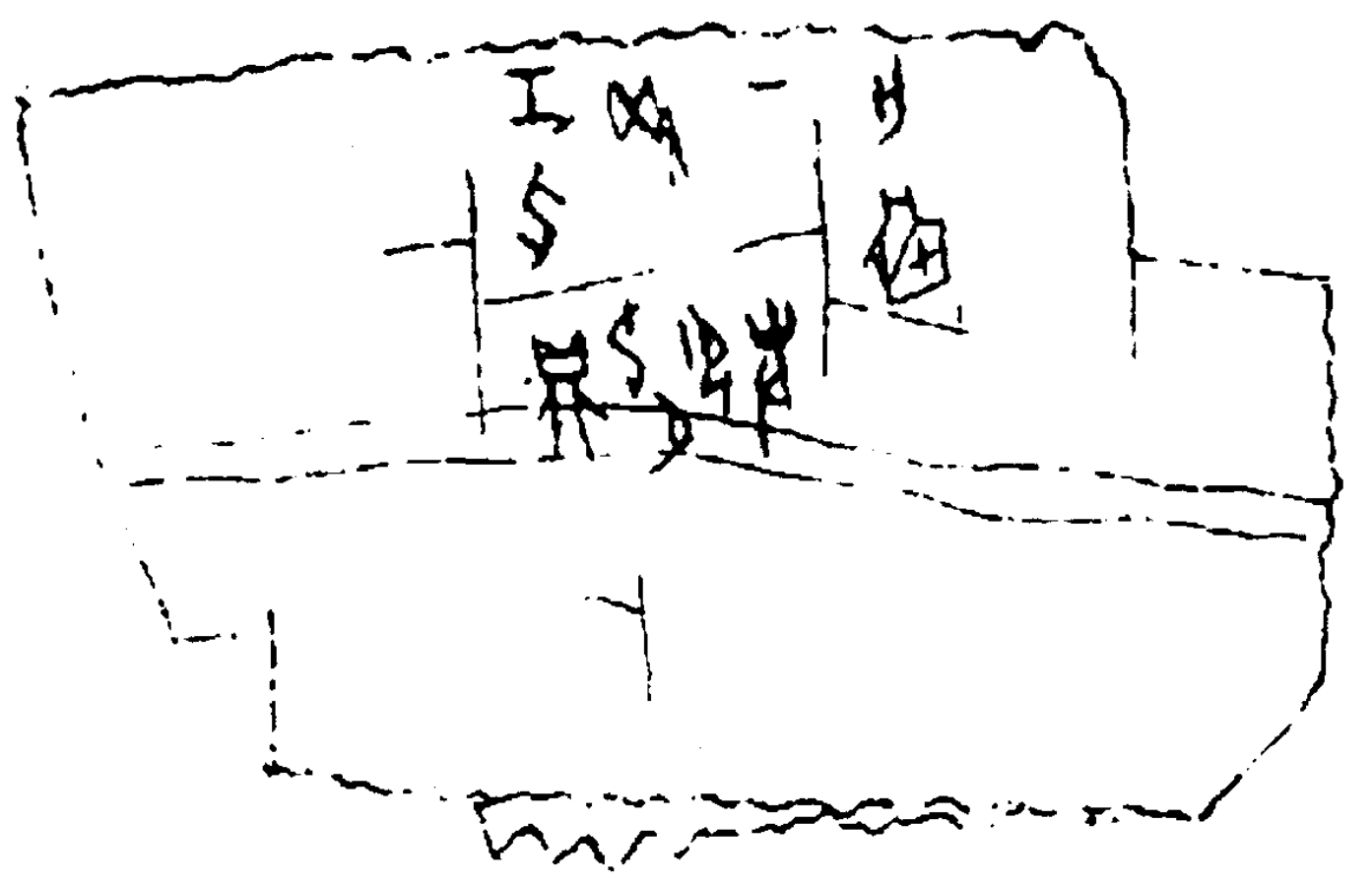
64 13.0.87 背



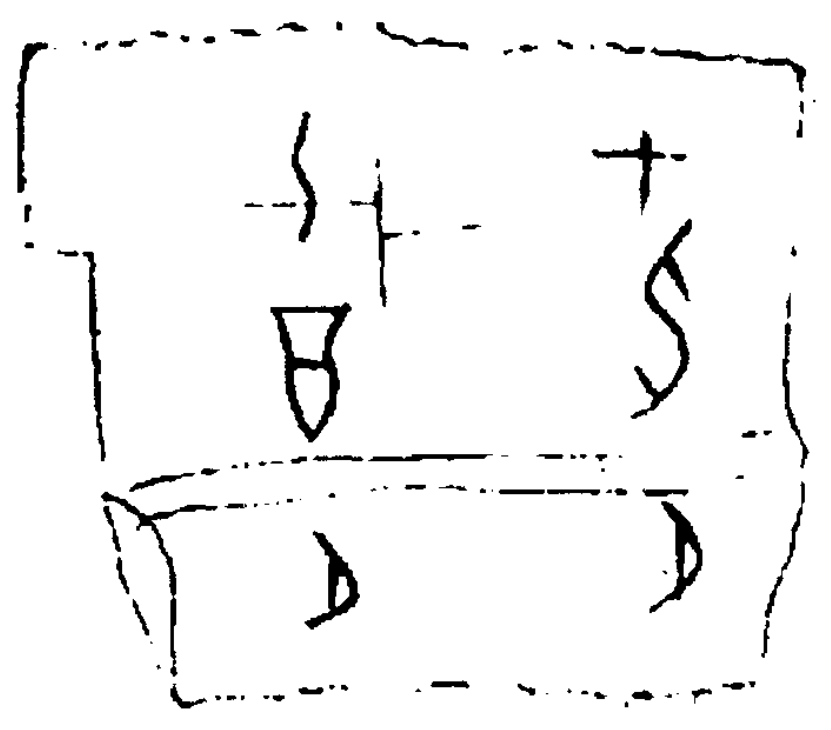
67 13.0.91



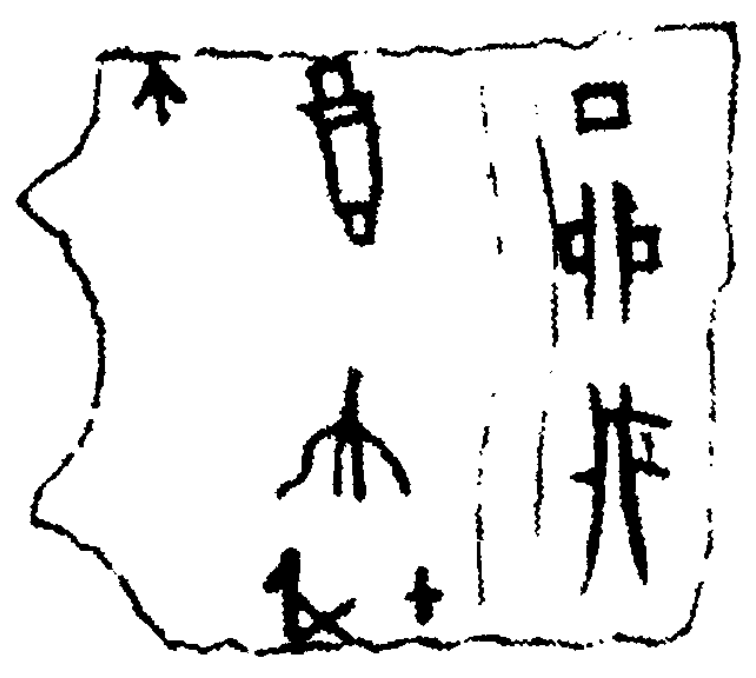
65 13.0.89 背



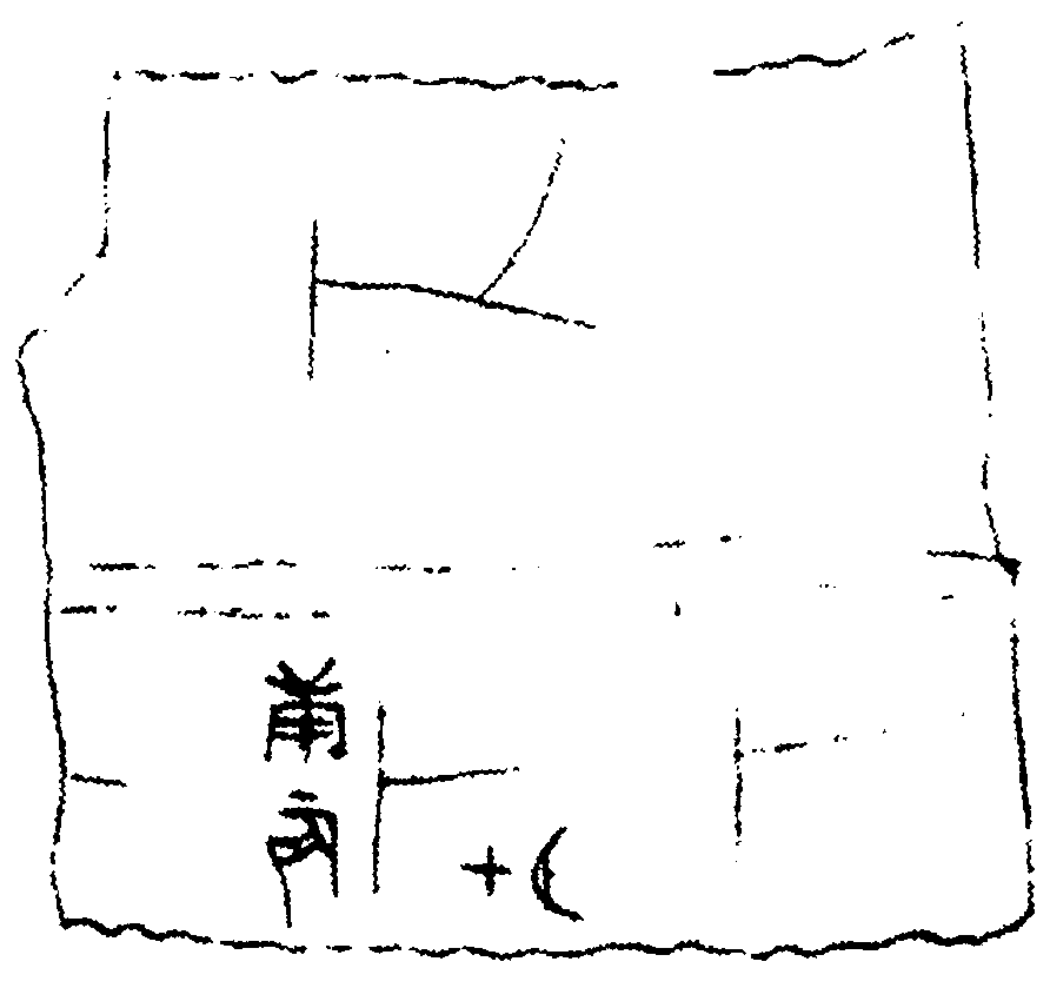
68 13.0.92 背



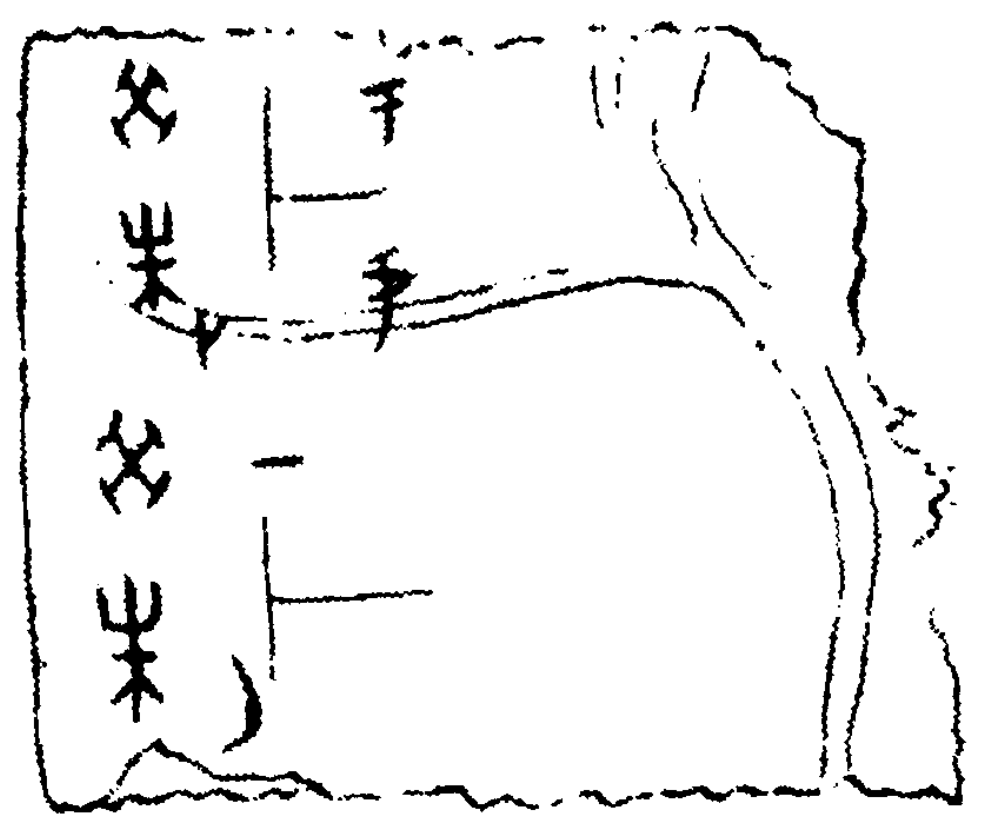
66 13.0.90 背



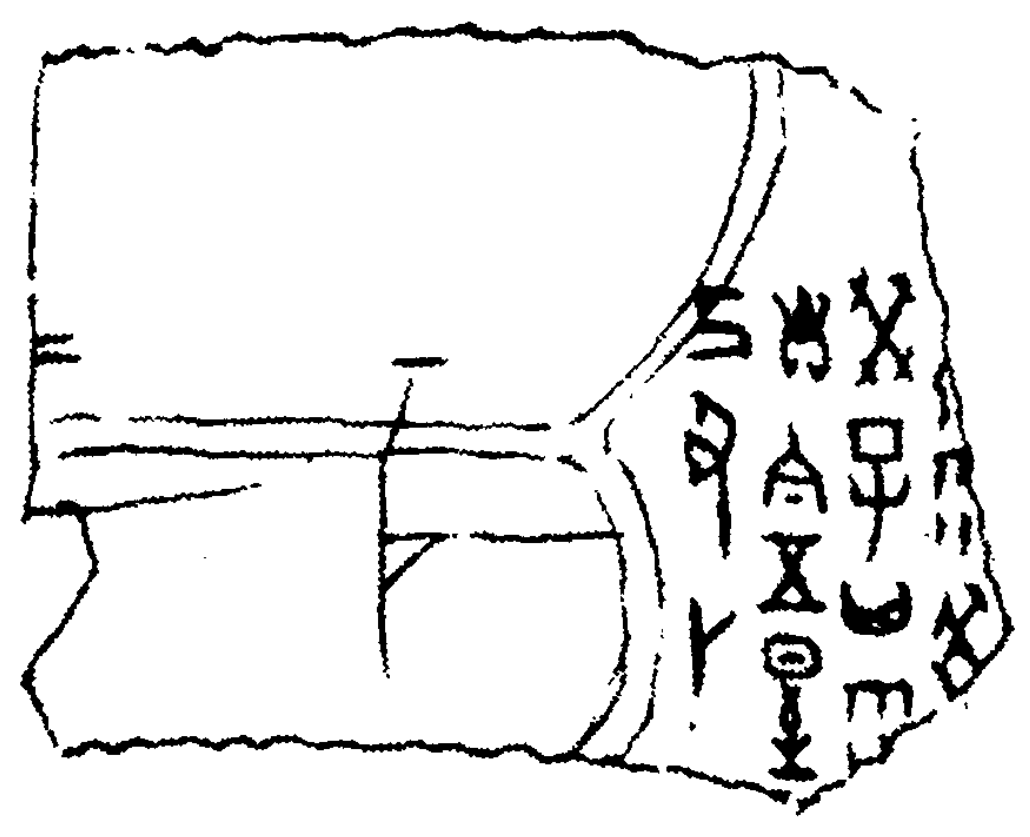
61 13.0.84 背



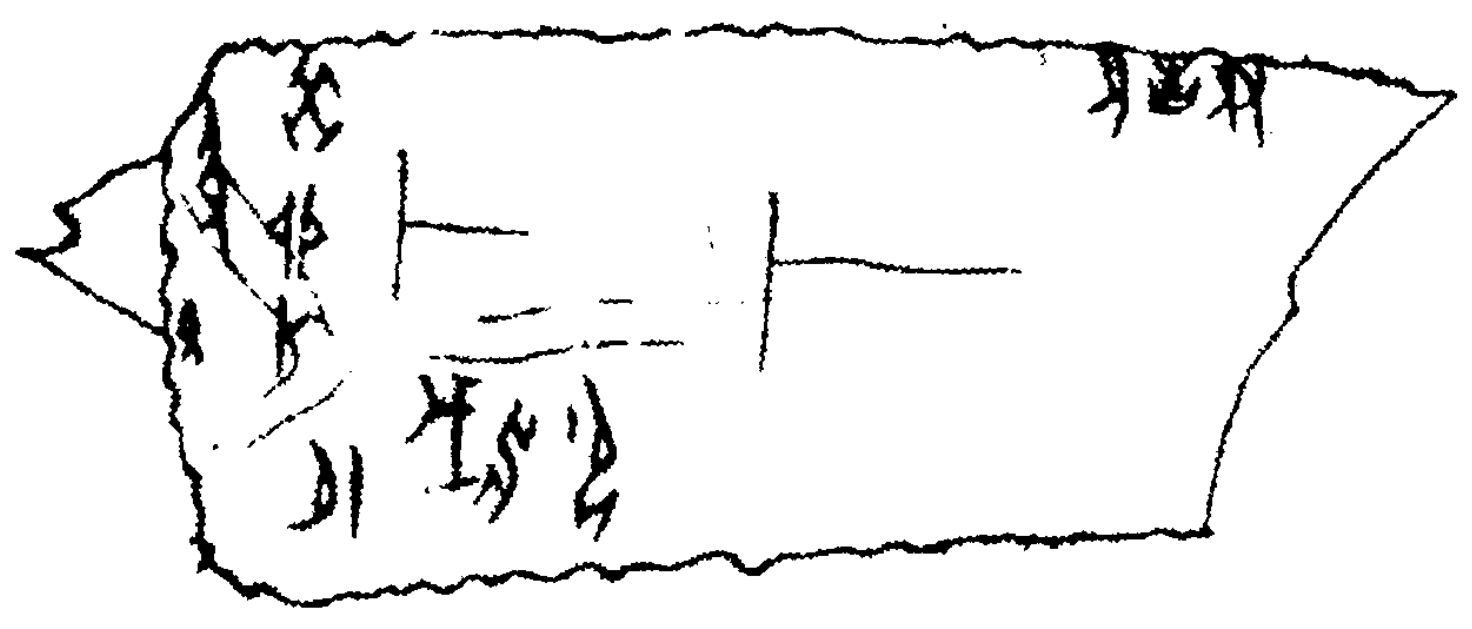
57 13.0.80 背



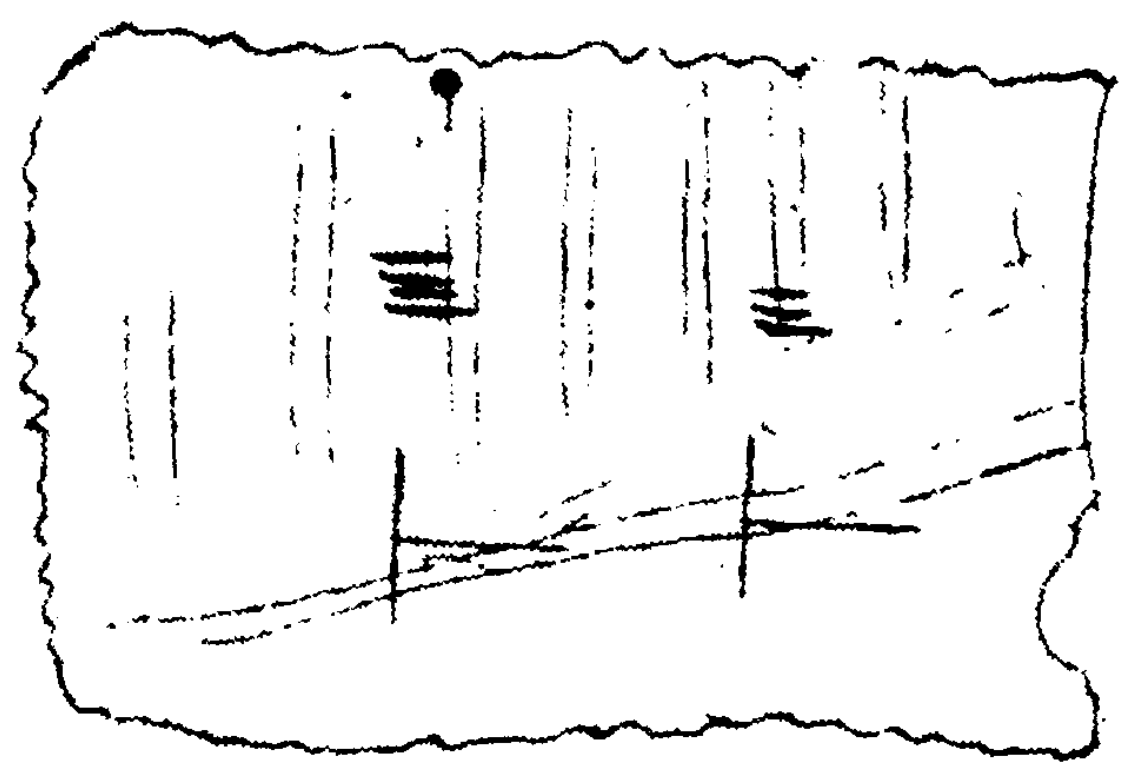
62 13.0.85 背



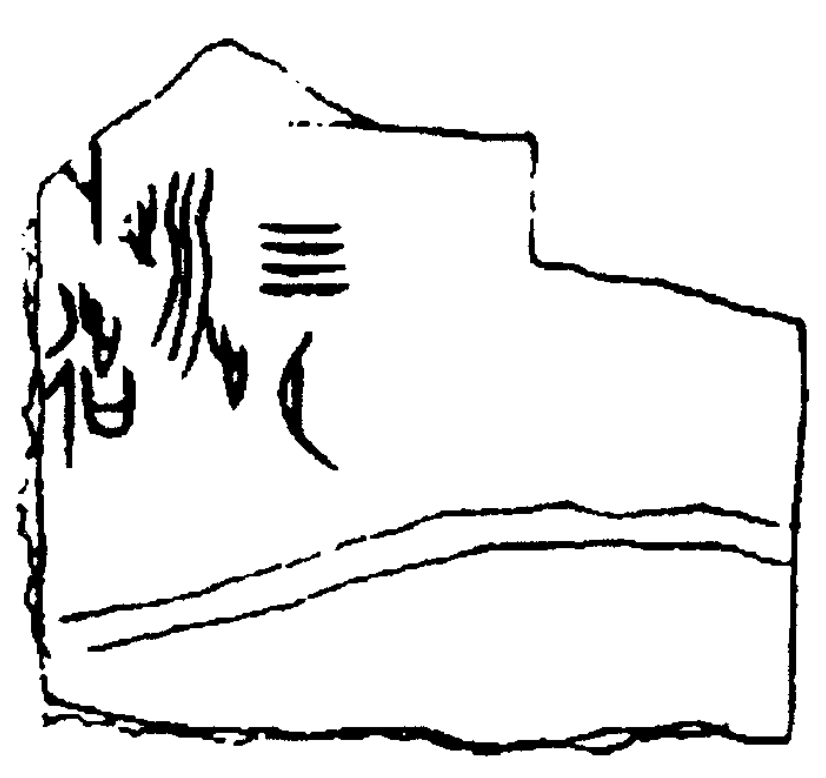
59 13.0.98 背



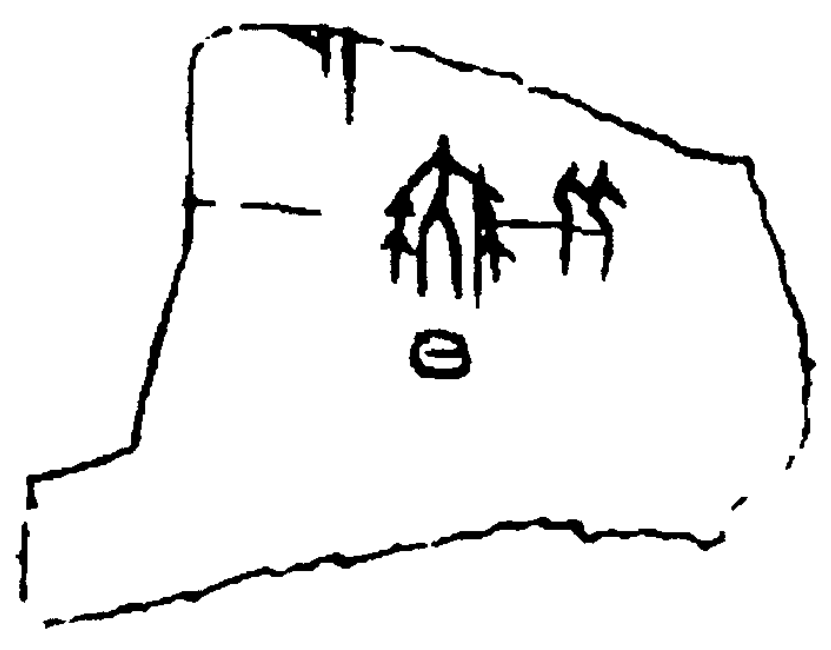
63 13.0.86 背



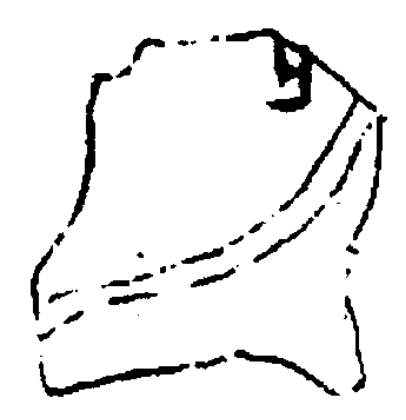
60 13.0.82 背



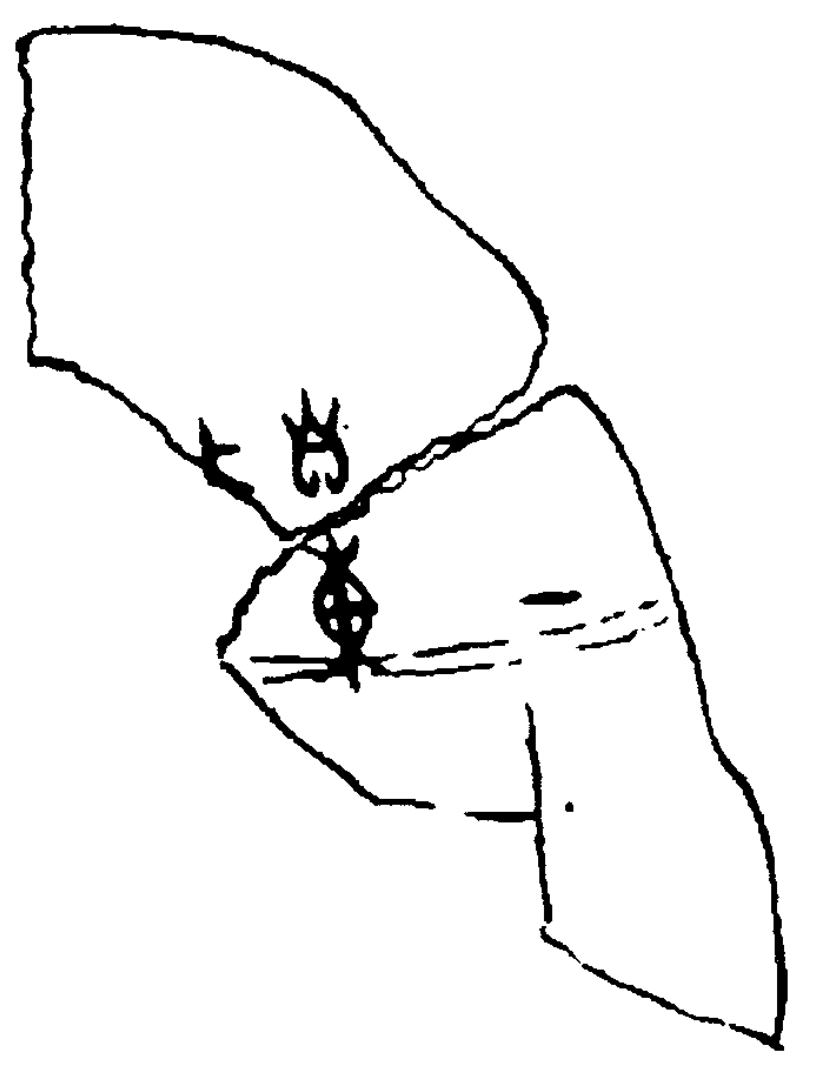
79 13.0.109



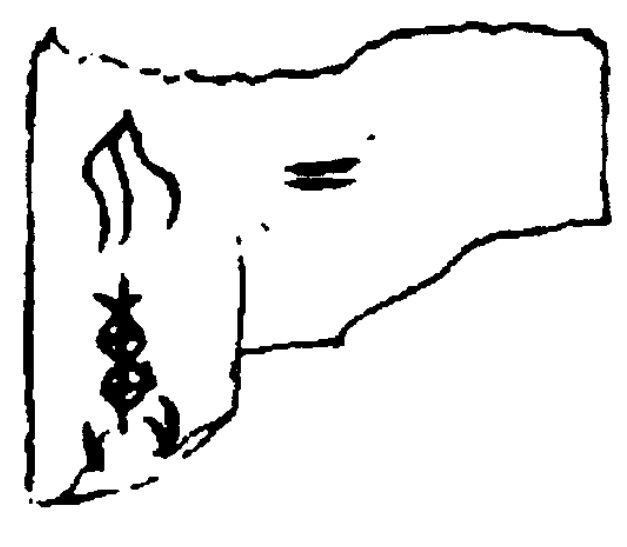
76 13.0.106 背



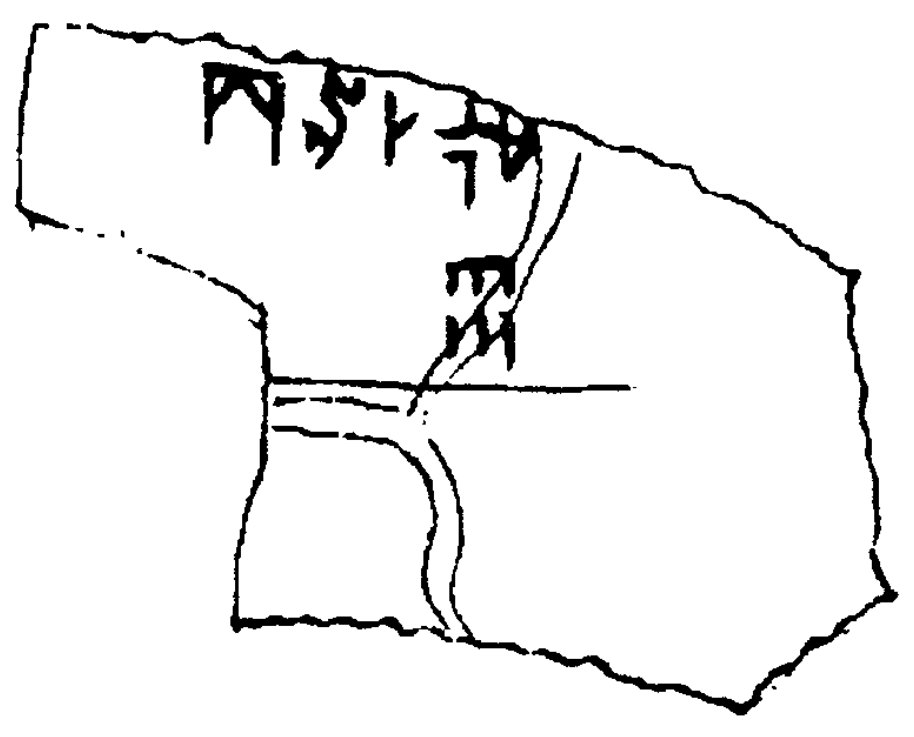
13.0.103 背



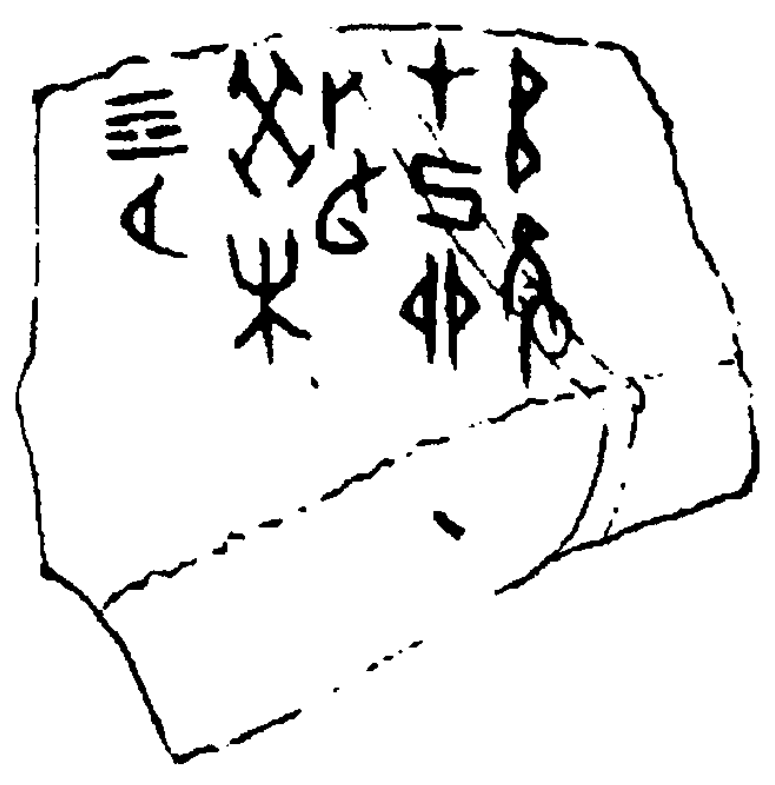
80 13.0.123 (13.0.125)



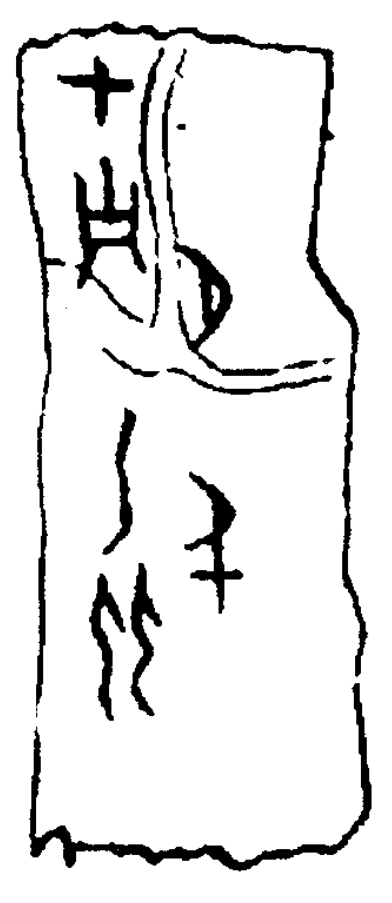
77 13.0.107



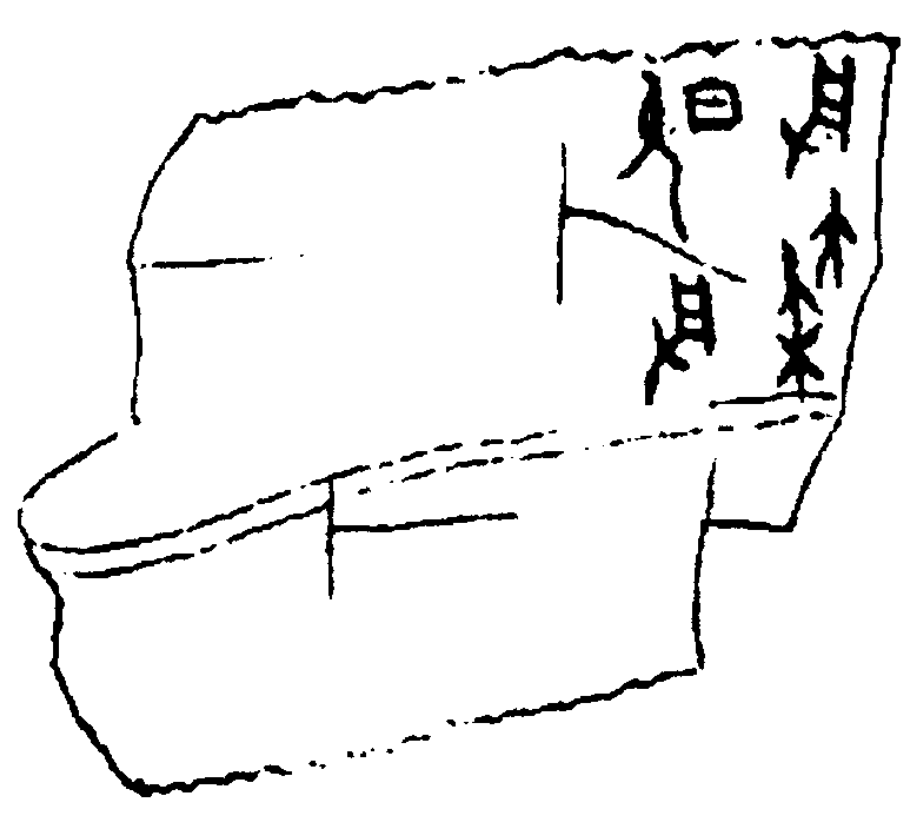
74 13.0.104 背



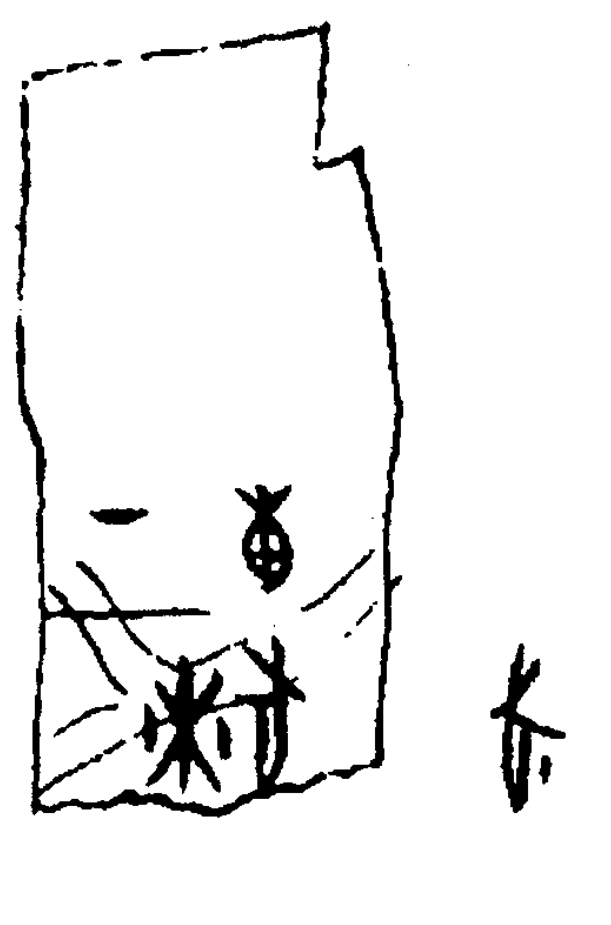
80 13.0.110 背



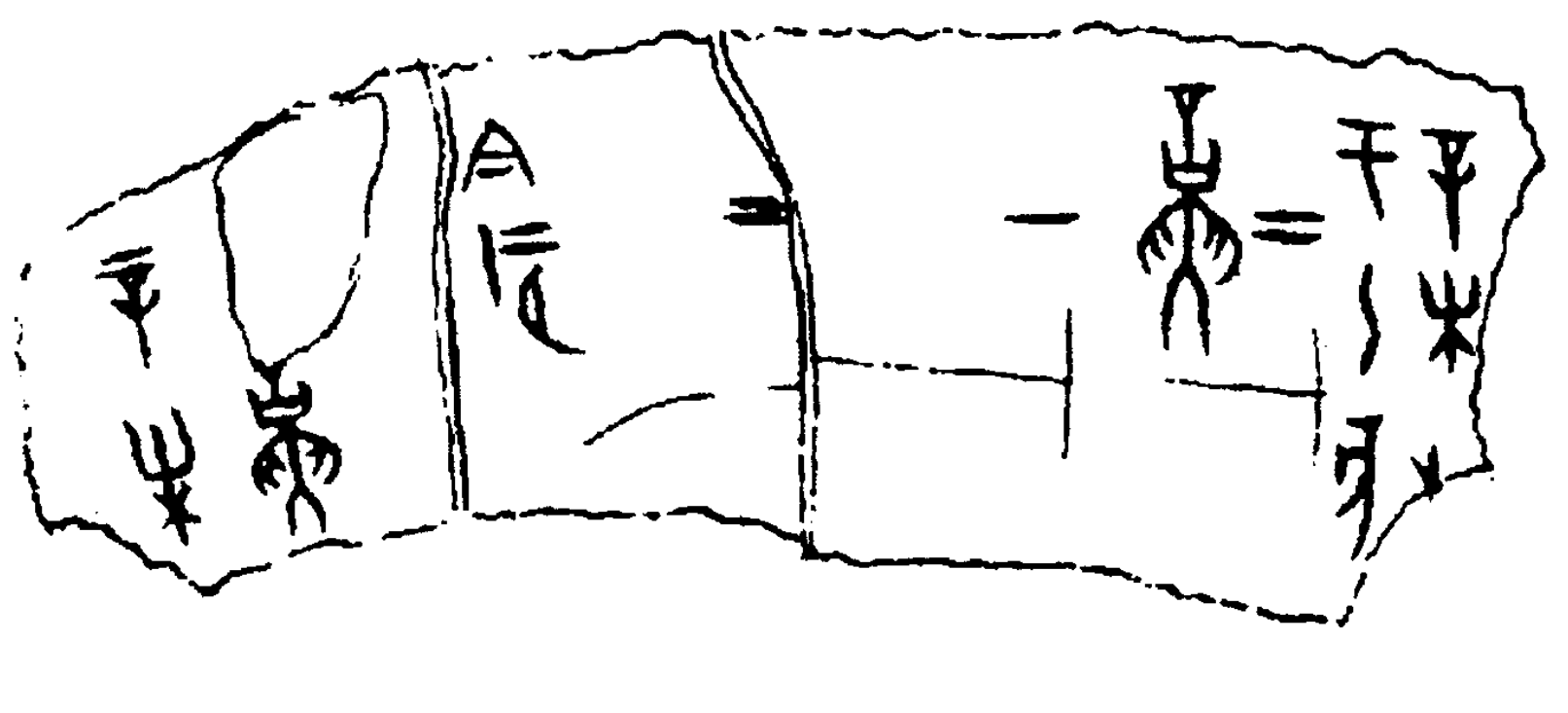
78 13.0.108 背



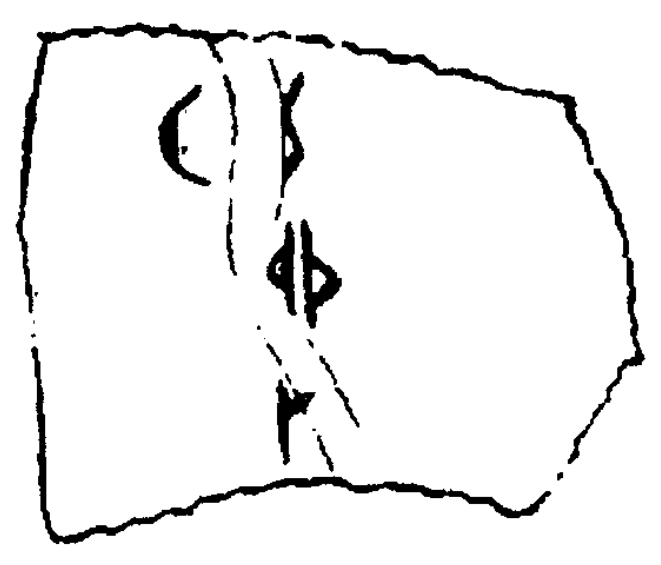
75 13.0.104 背



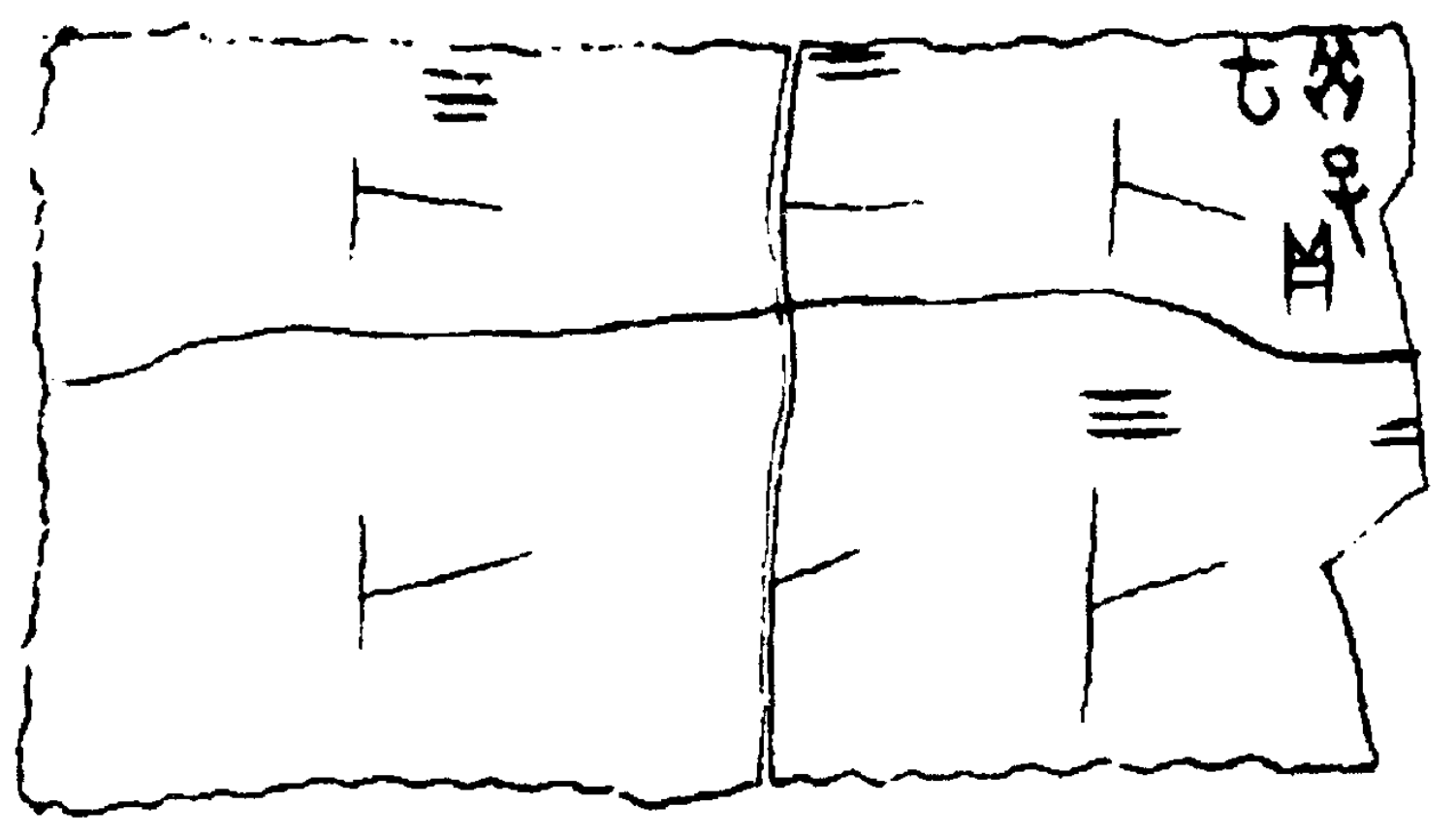
72 13.0.101 背



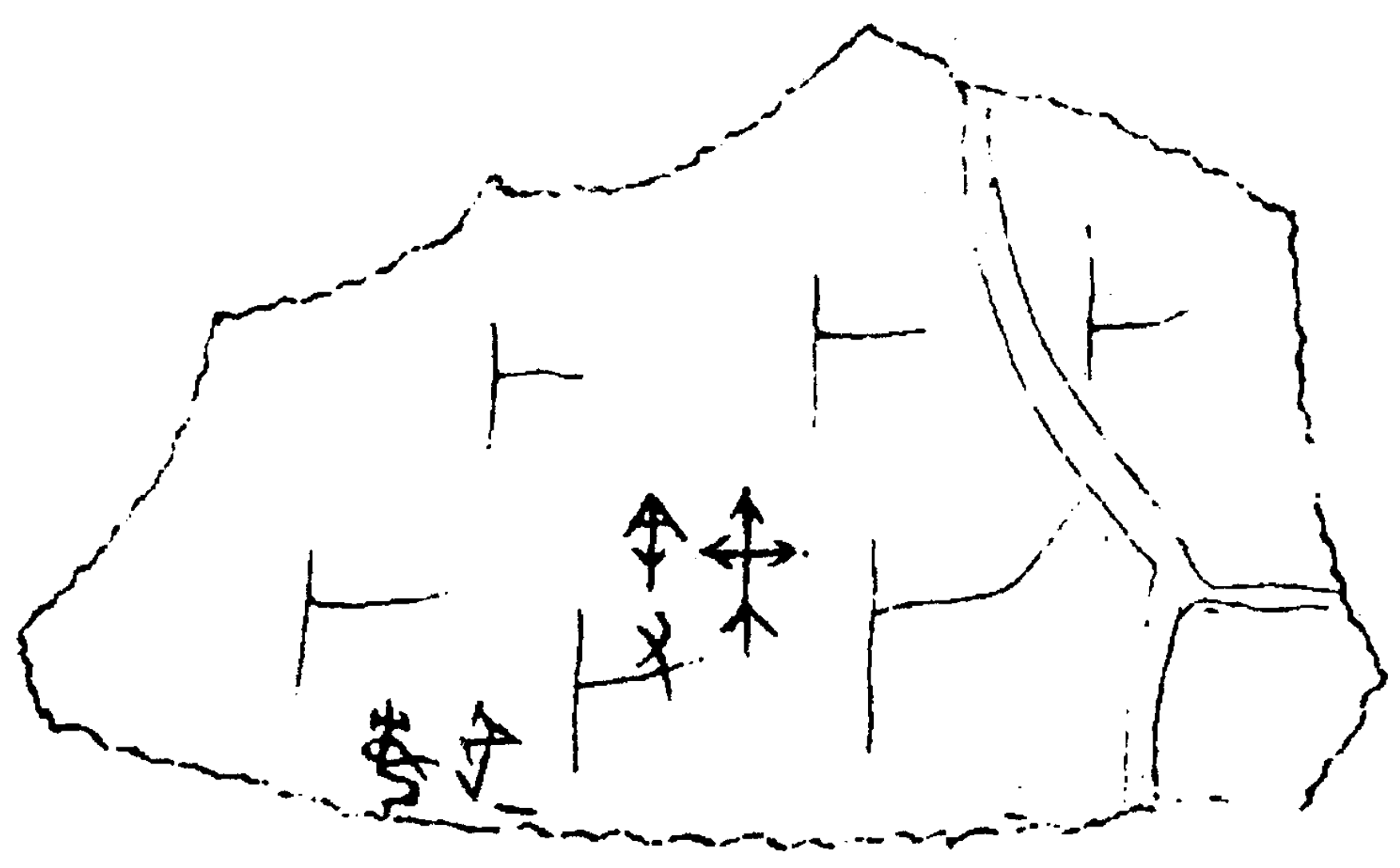
69 13.0.93—95 背



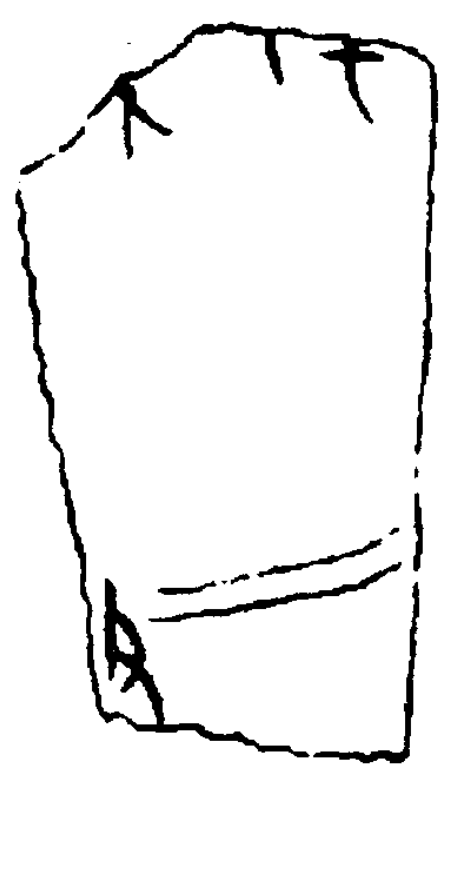
73 13.0.102 背



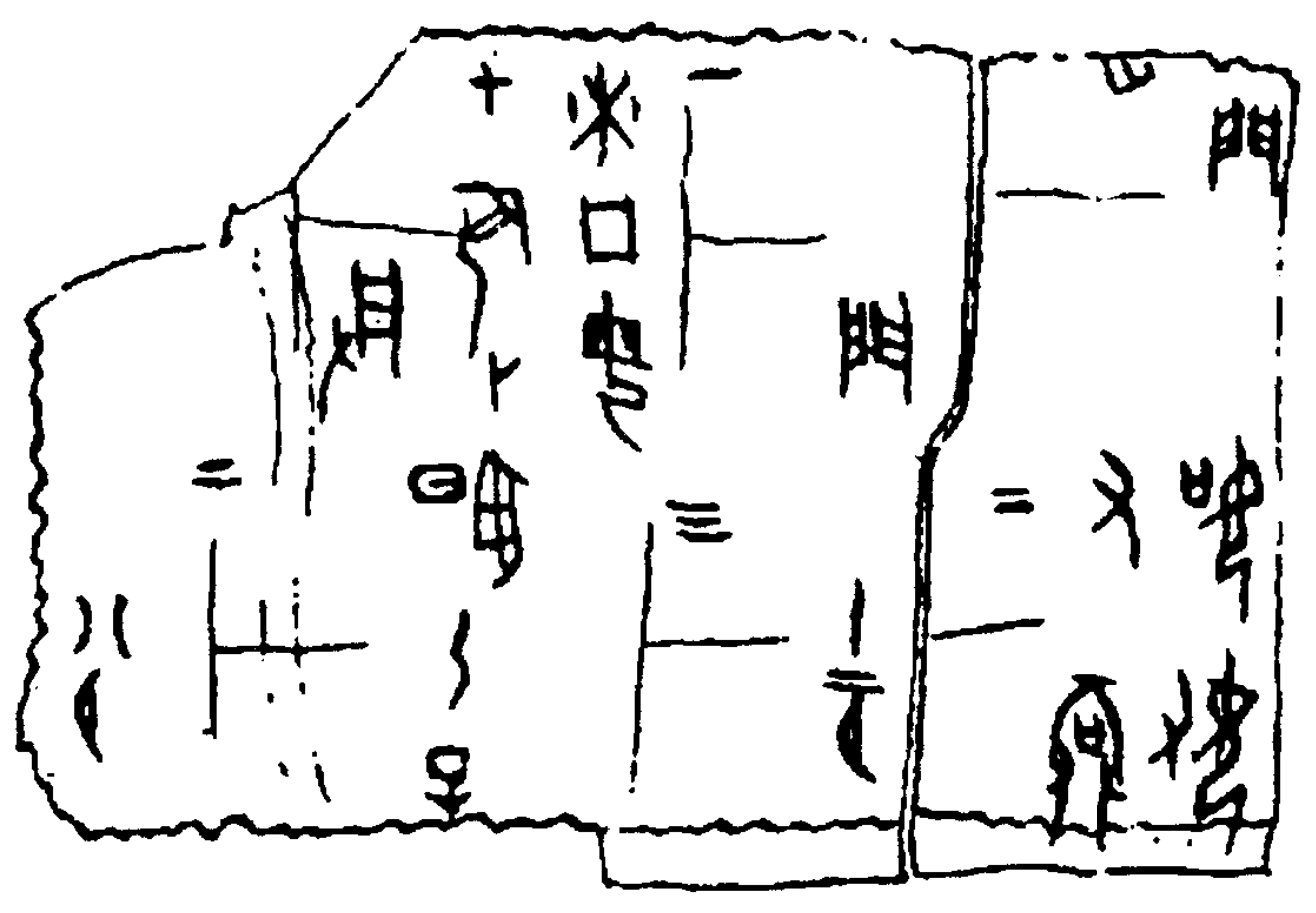
70 13.0.96—97 背

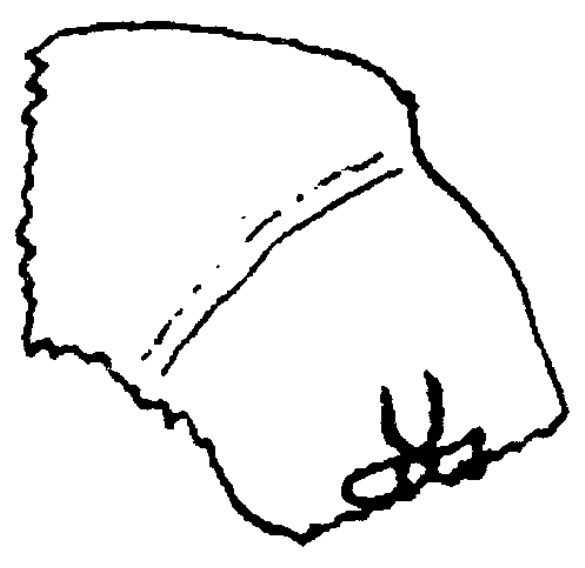


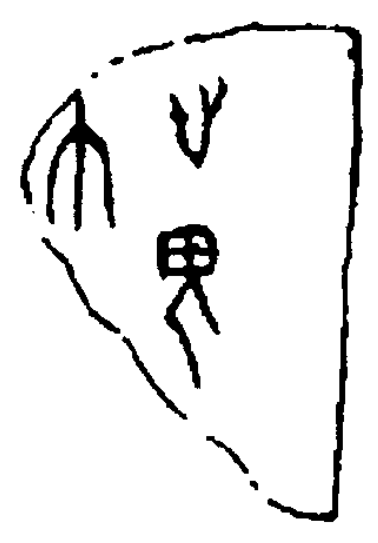
71 13.0.100 背

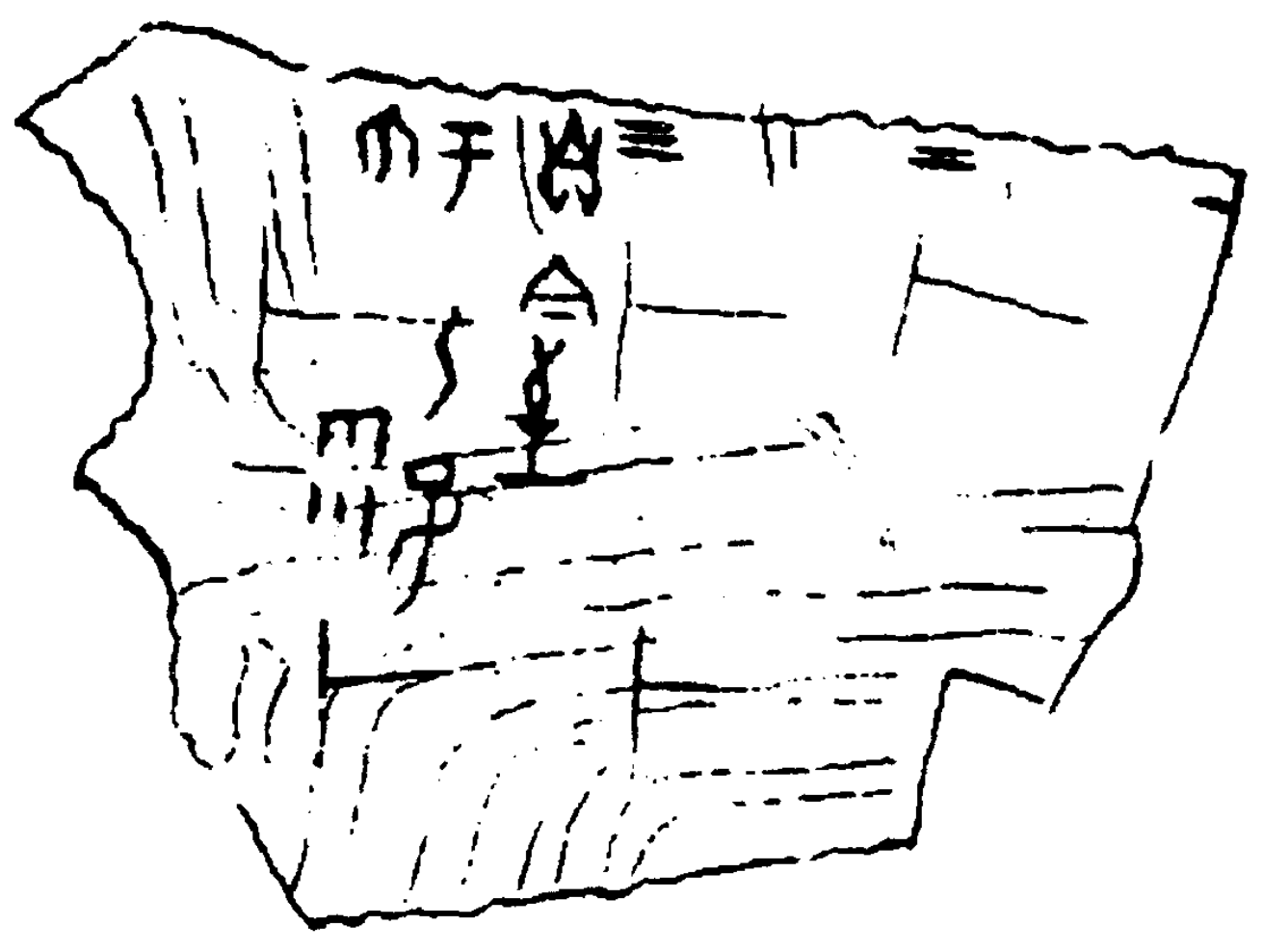


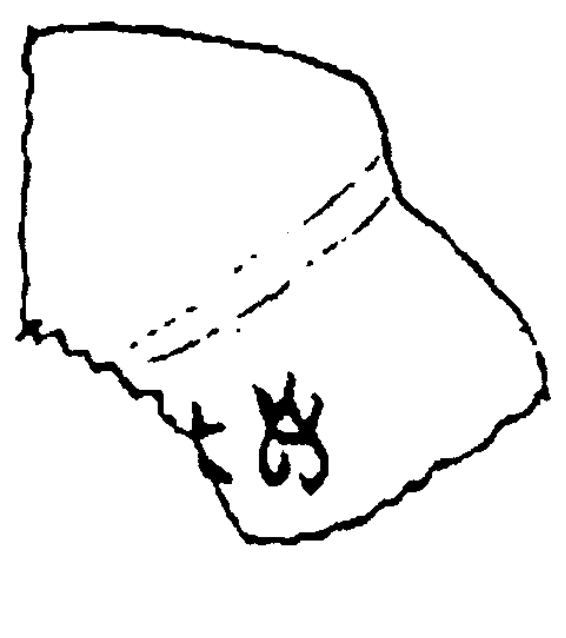
13.0.99 背

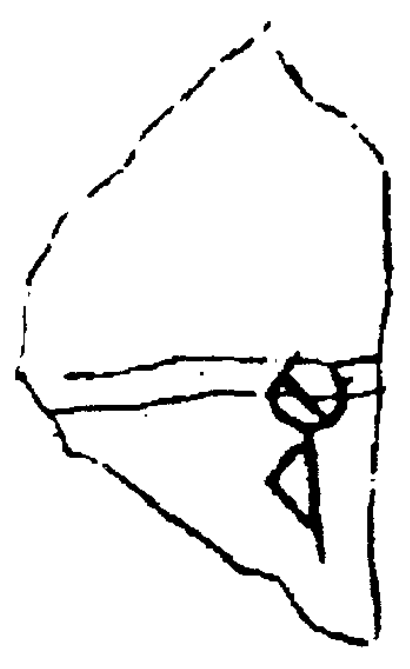

92 13.0.128—13.0.131 背

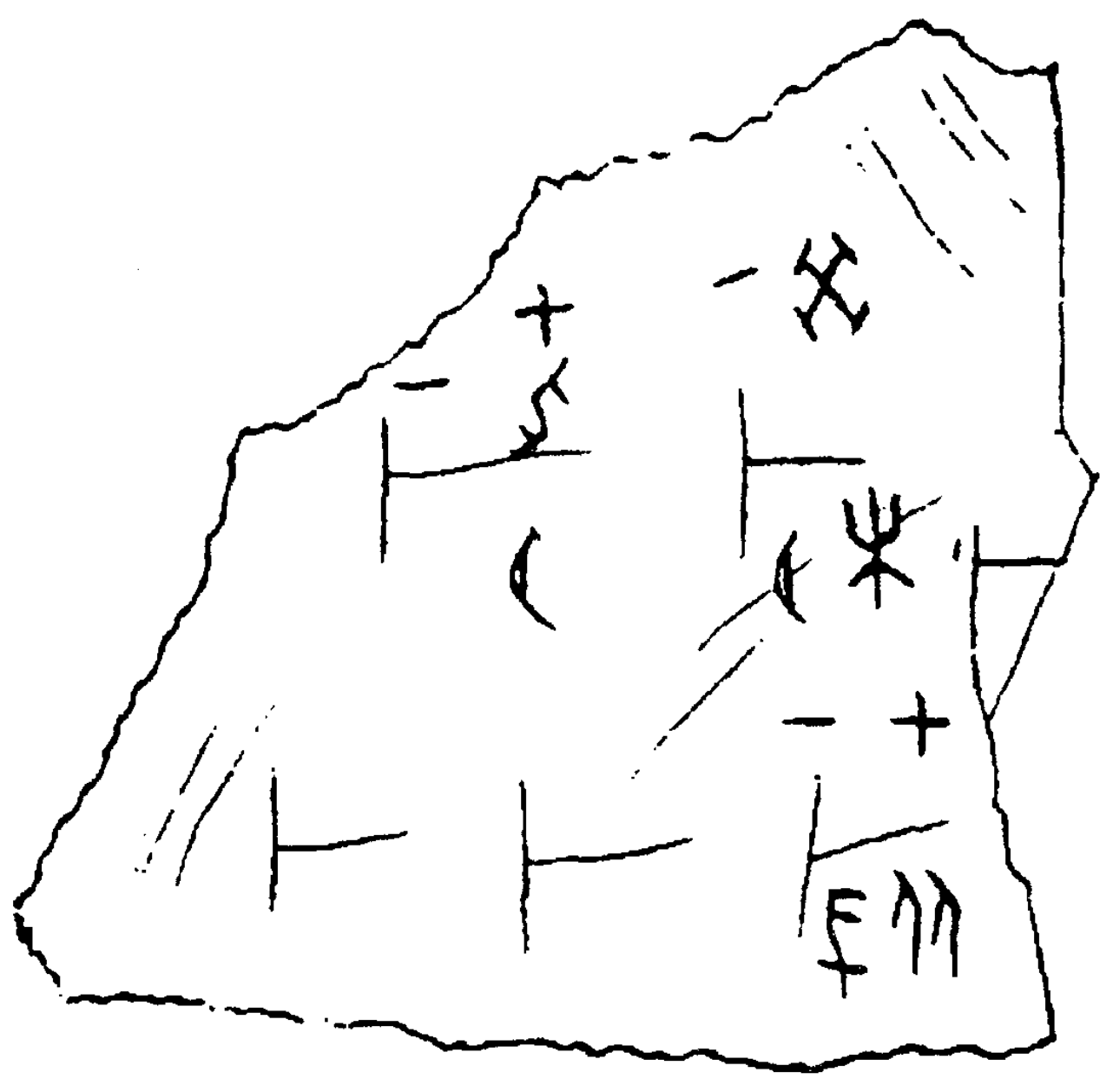

91 13.0.124

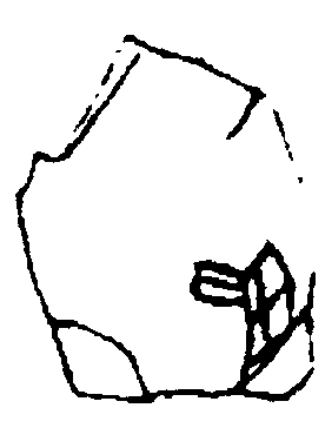

89 13.0.120 背

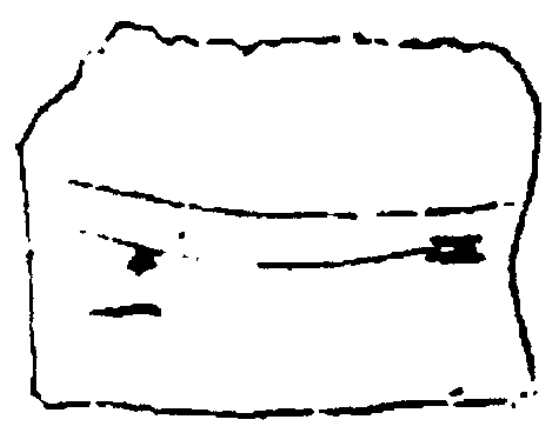

93 13.0.129 背

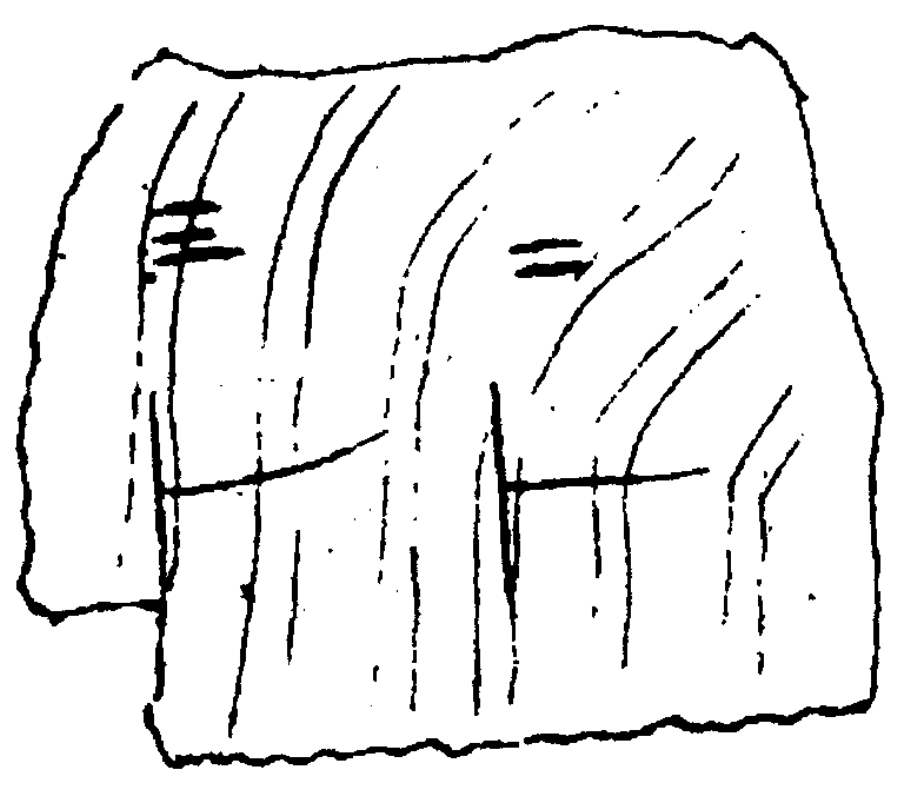

13.0.125

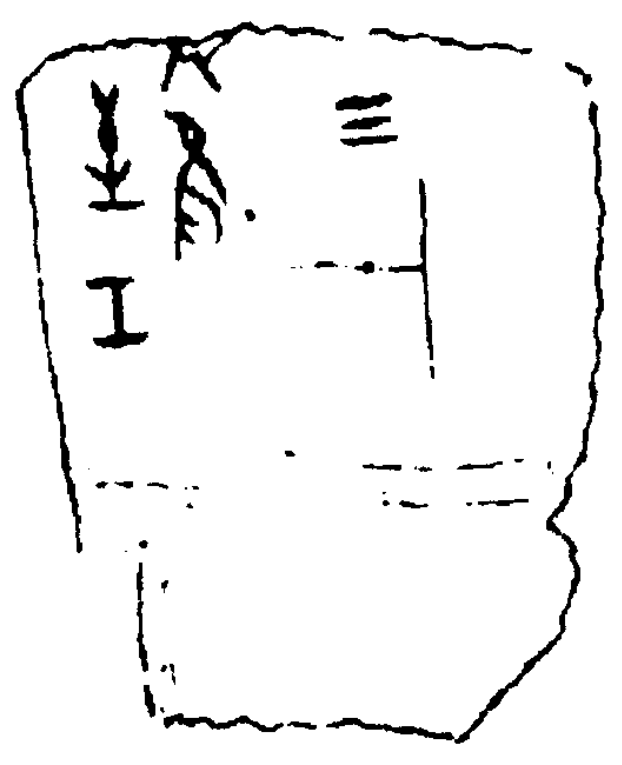

90 13.0.121 背

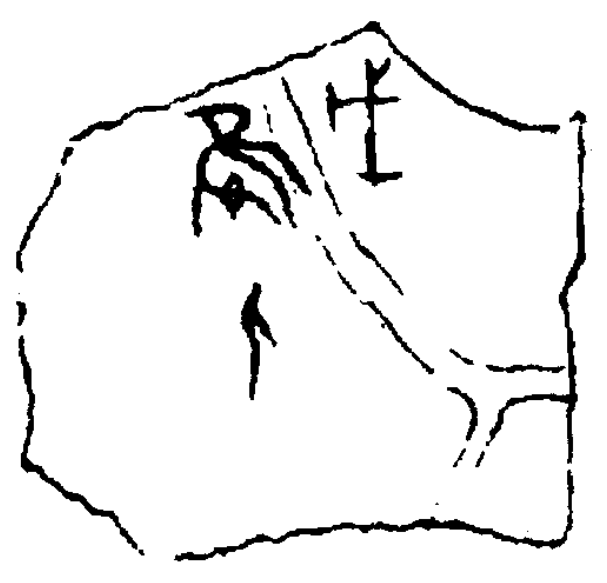

94 13.0.130

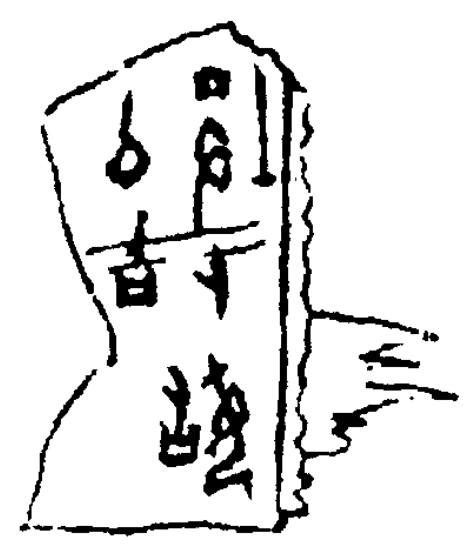

13.0.126 骨臼入
(13.0.127 背,無字不錄)

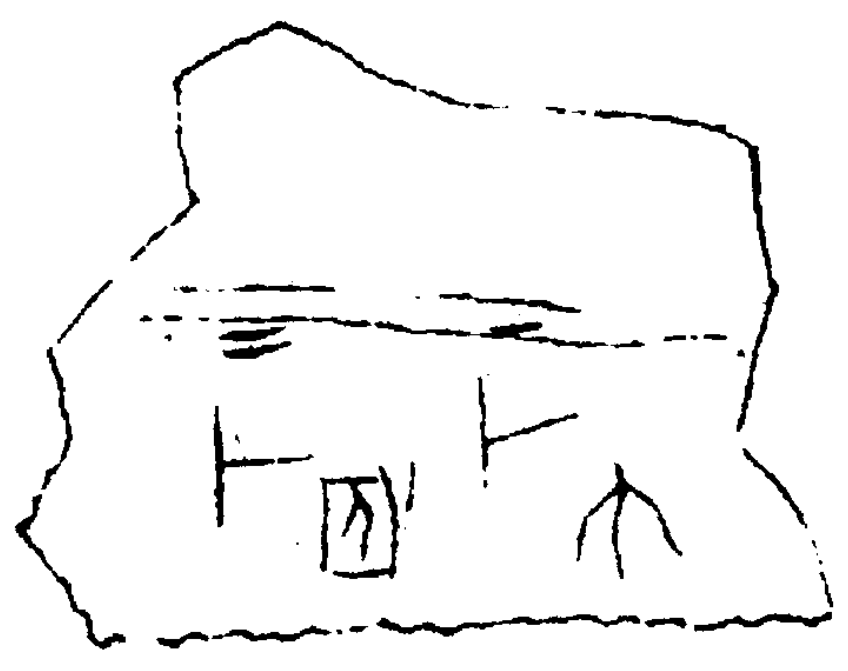

13.0.122 背

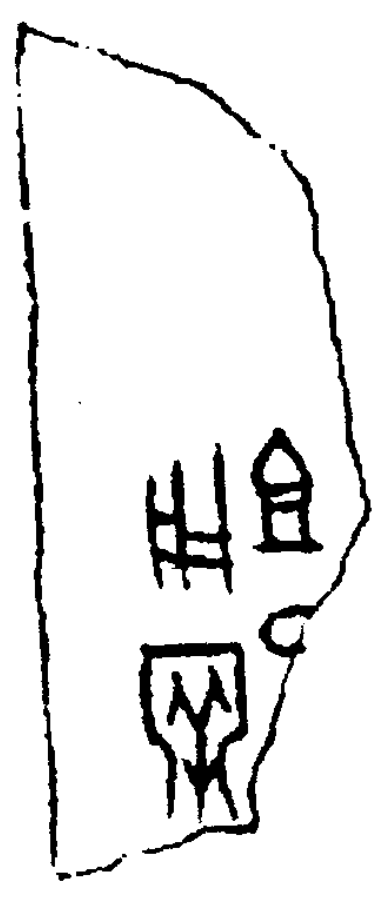

13.0.117 背

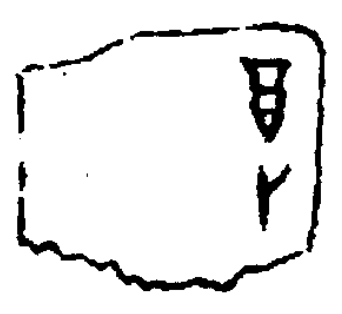

84 13.0.114 背

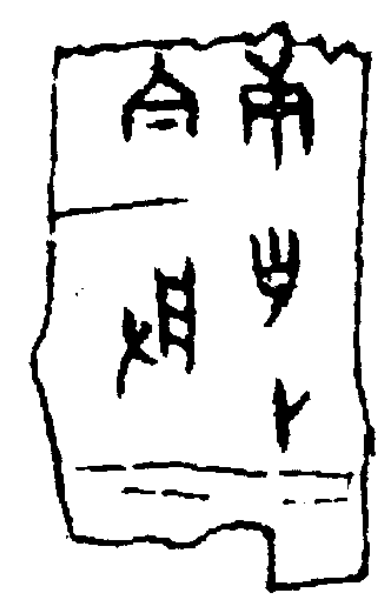

81 13.0.111 背

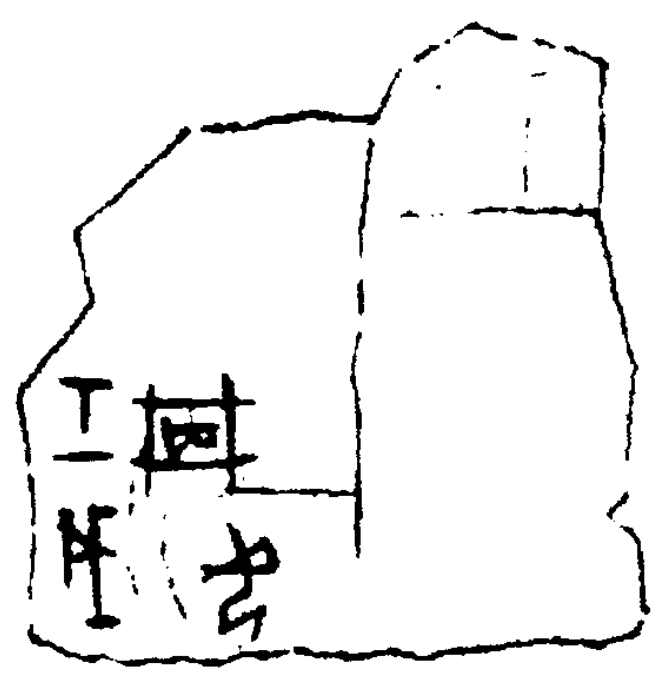

87 13.0.118

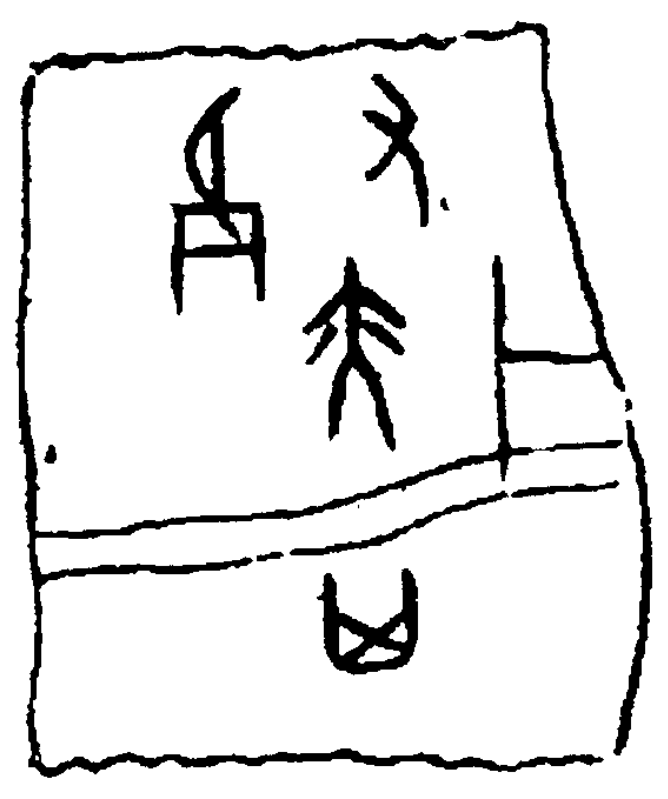

85 13.0.115 背

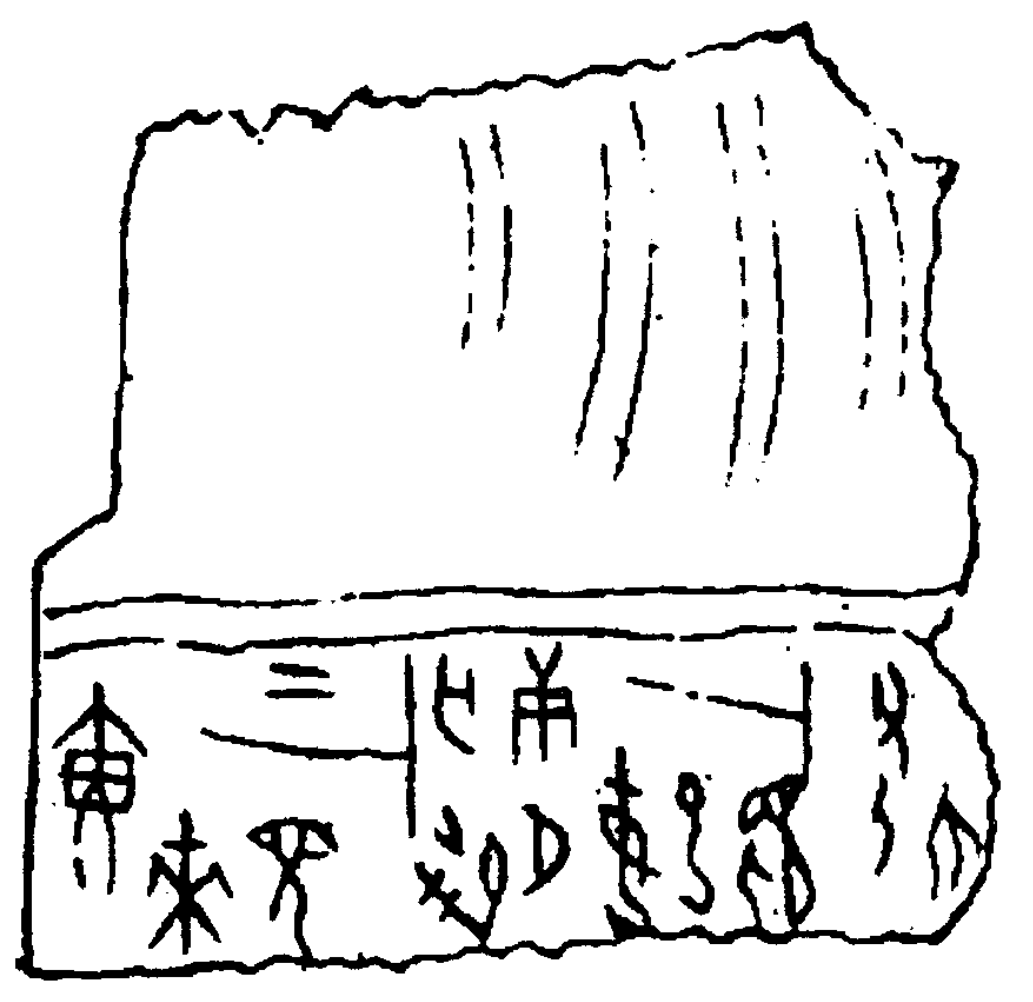

82 13.0.112 背

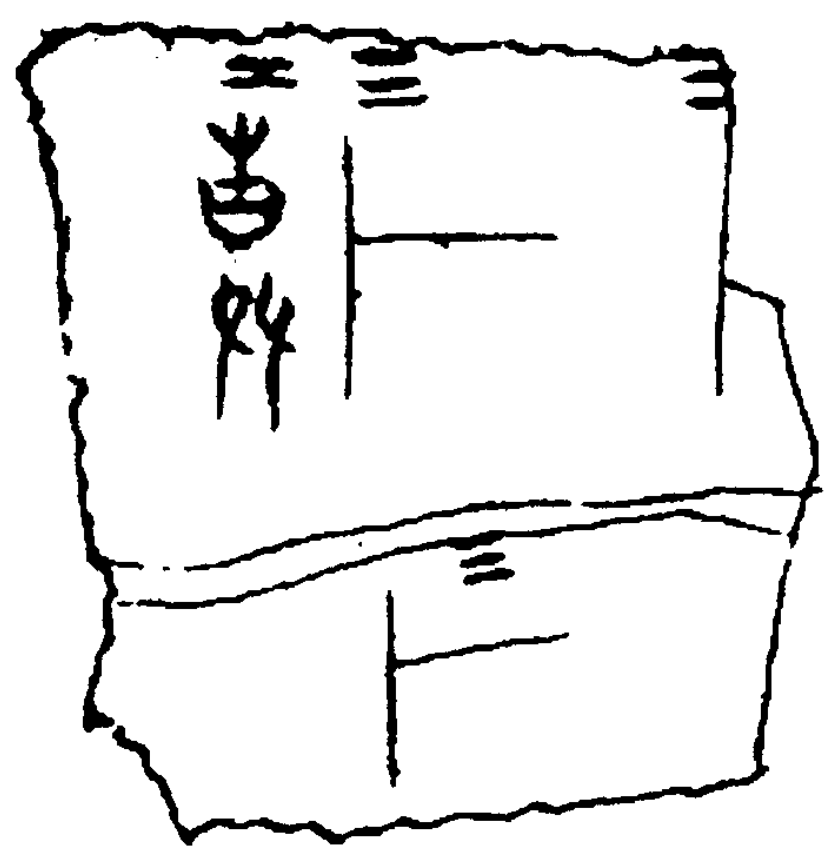

88 13.0.119

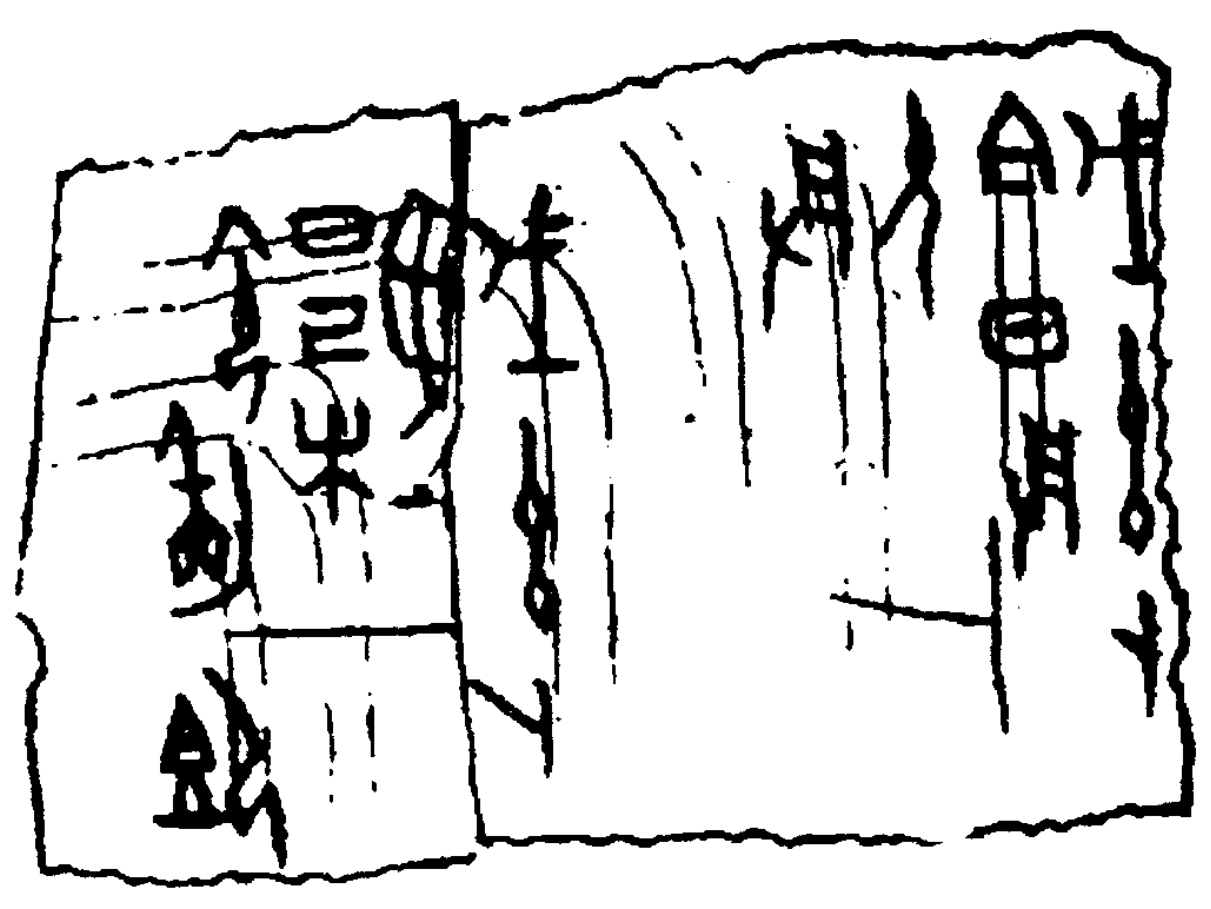

86 13.0.116 背

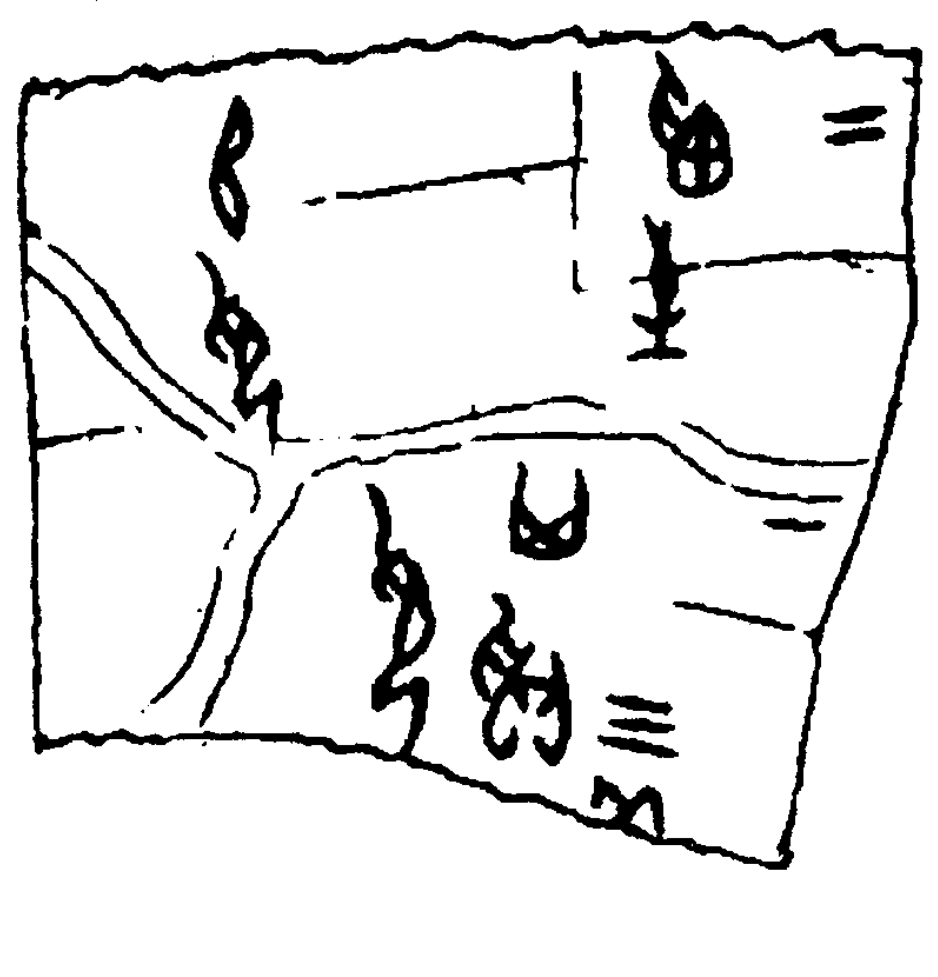

83 13.0.113

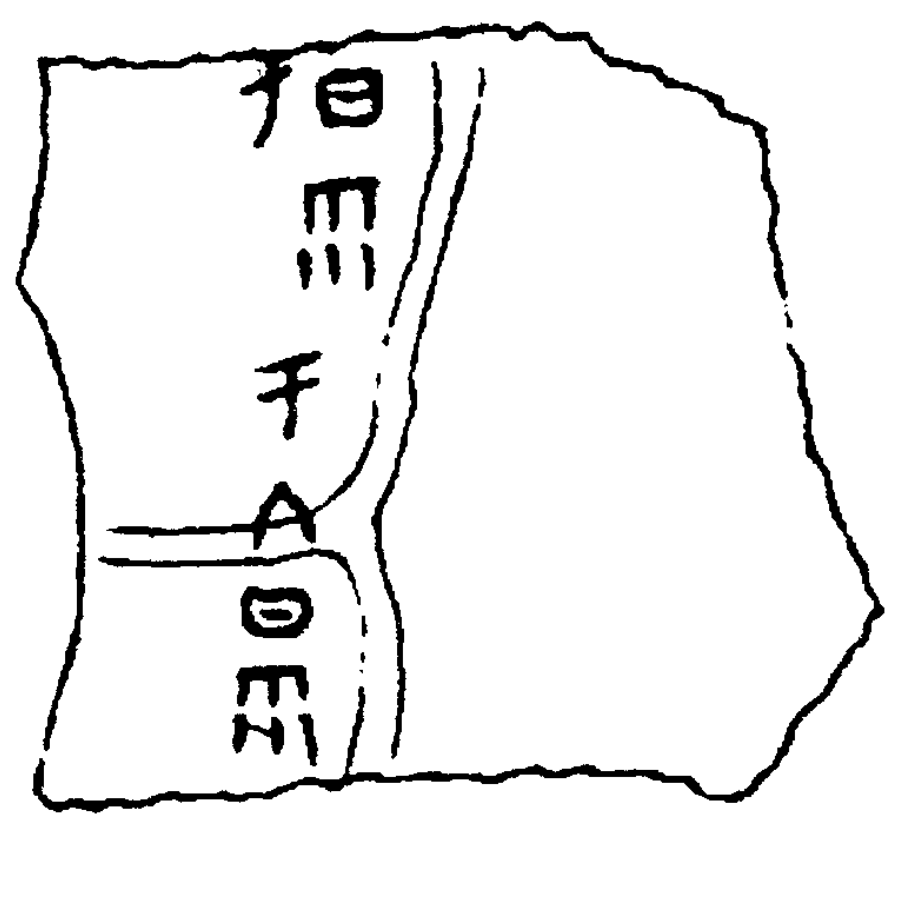

102 13.0.139 背

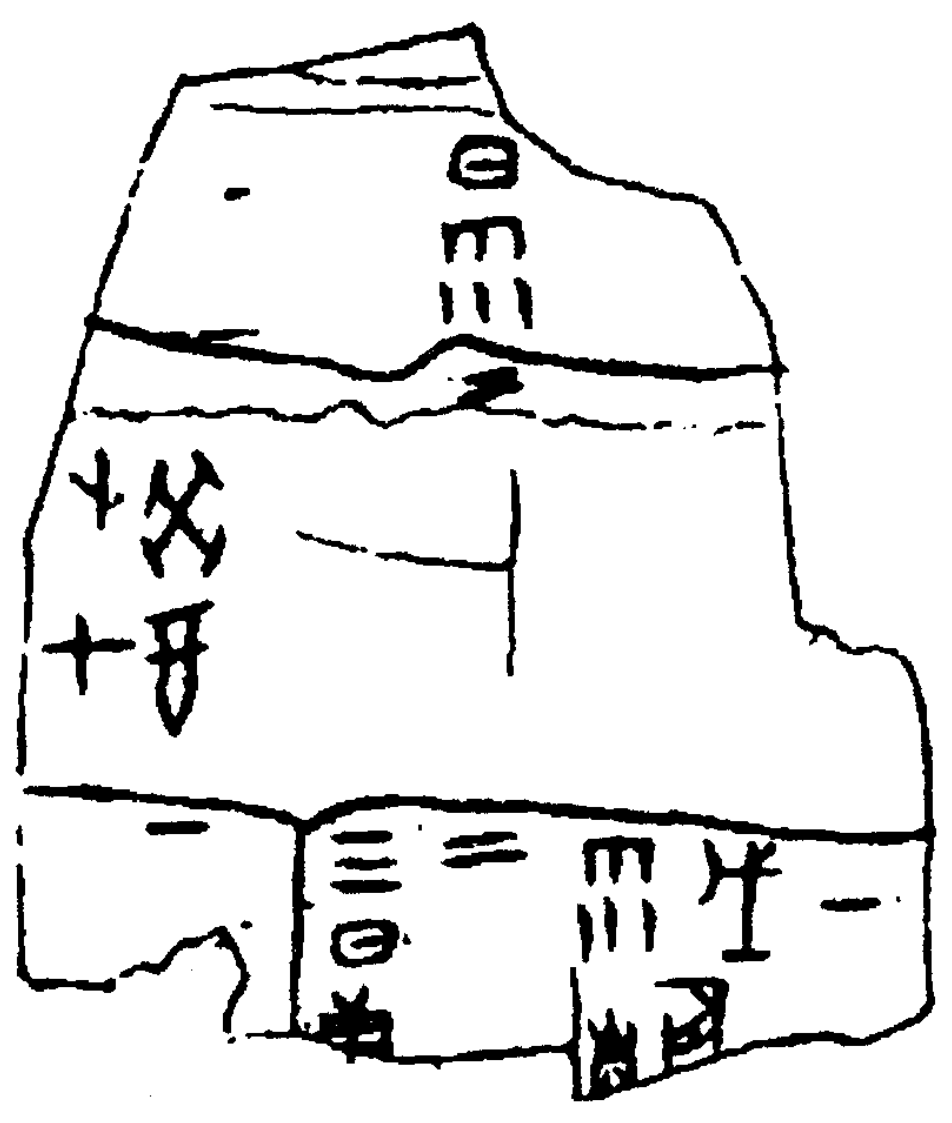

99 13.0.136 背

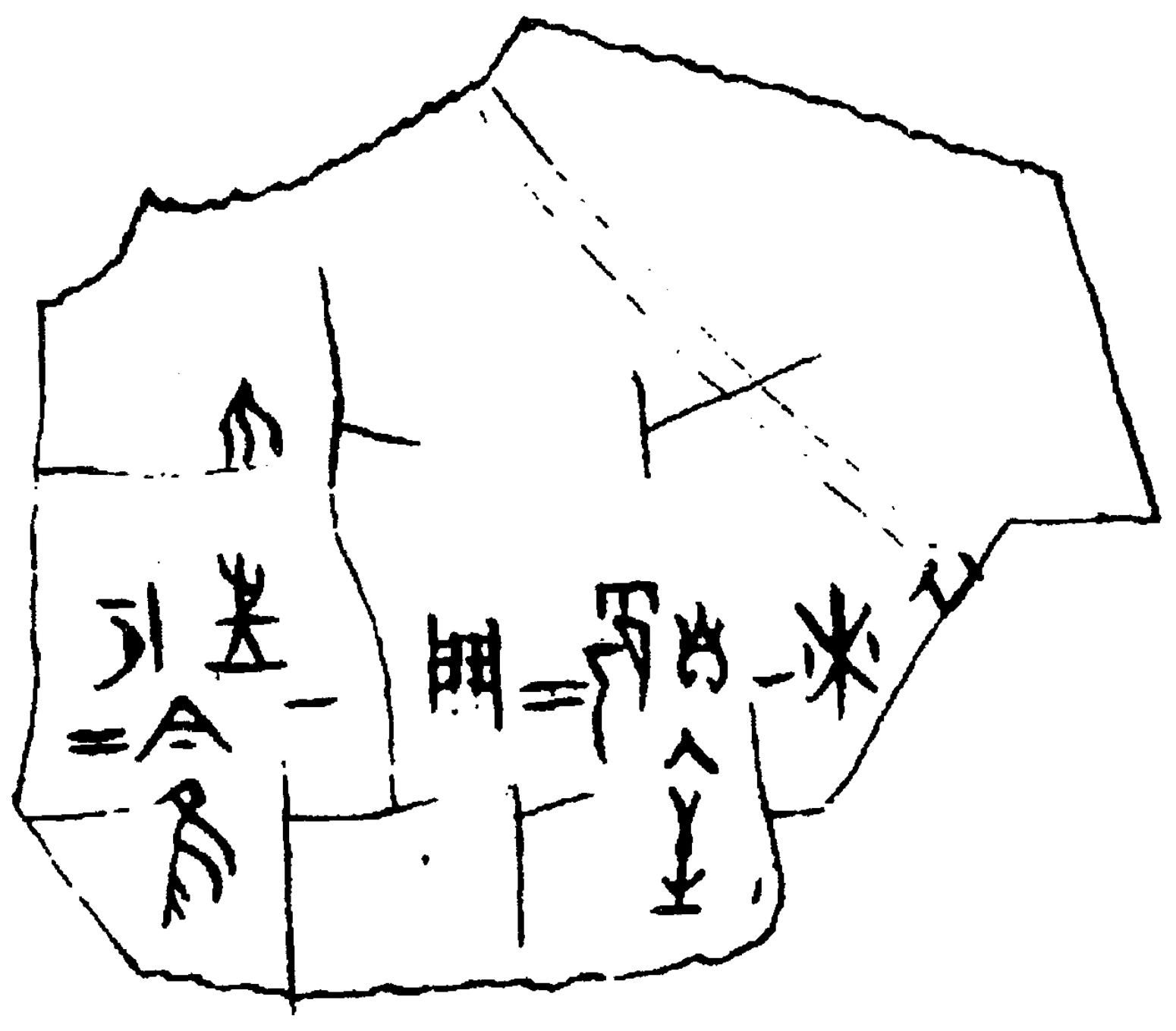

103 13.0.140 背

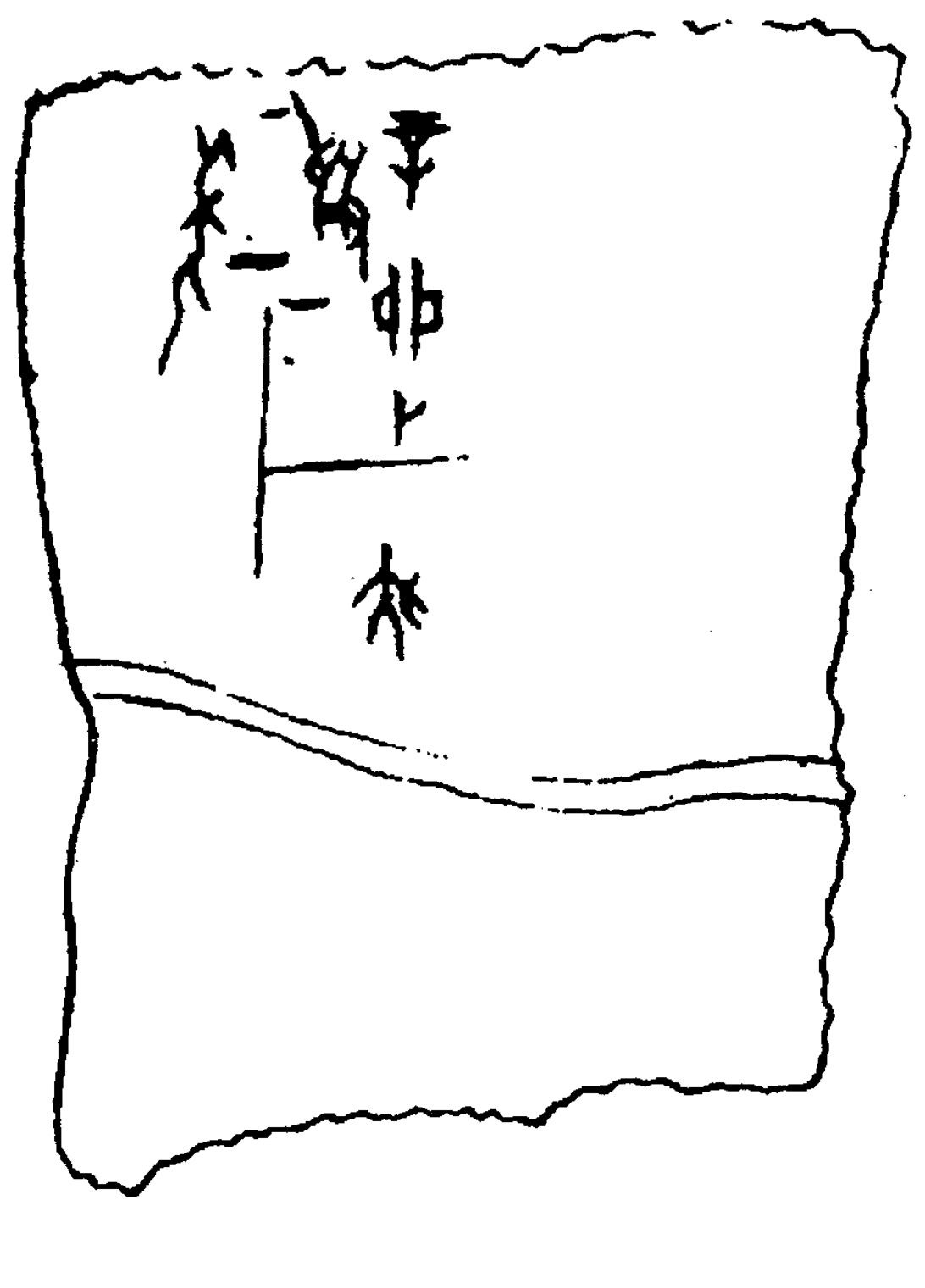

100 13.0.137 背 13.0.168 背

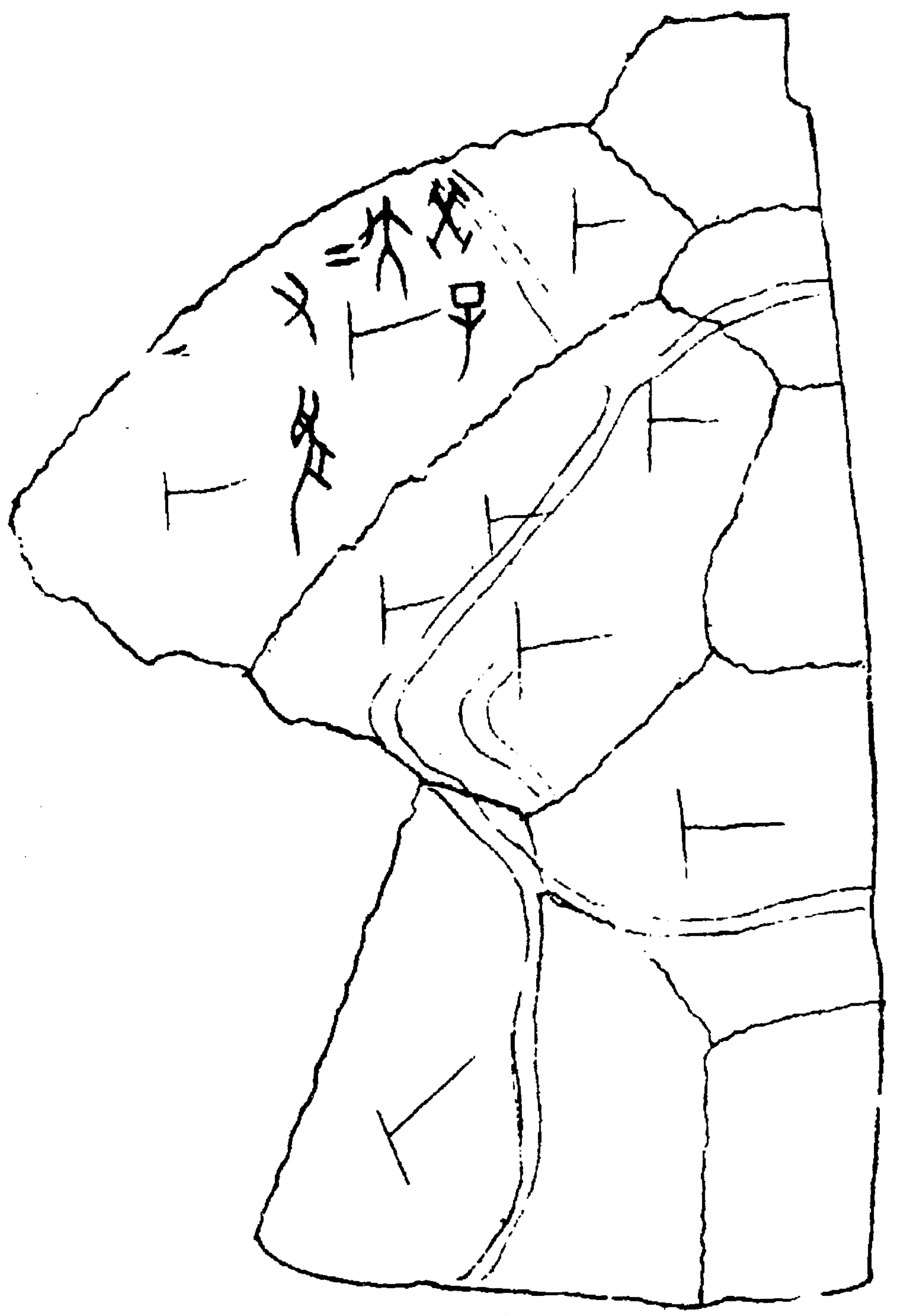

104 13.0.141 背

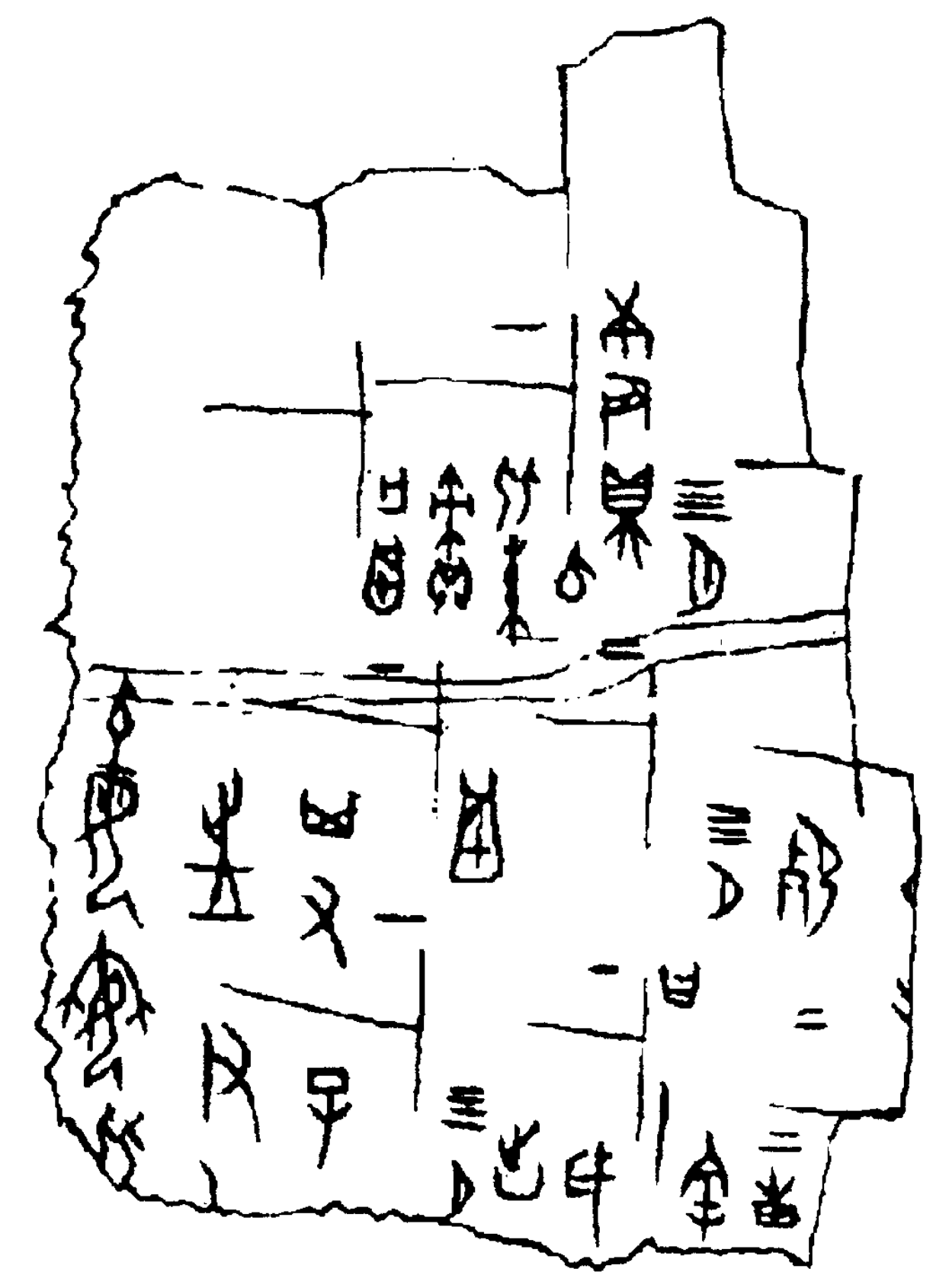

101 13.0.138 背


97 13.0.134 背

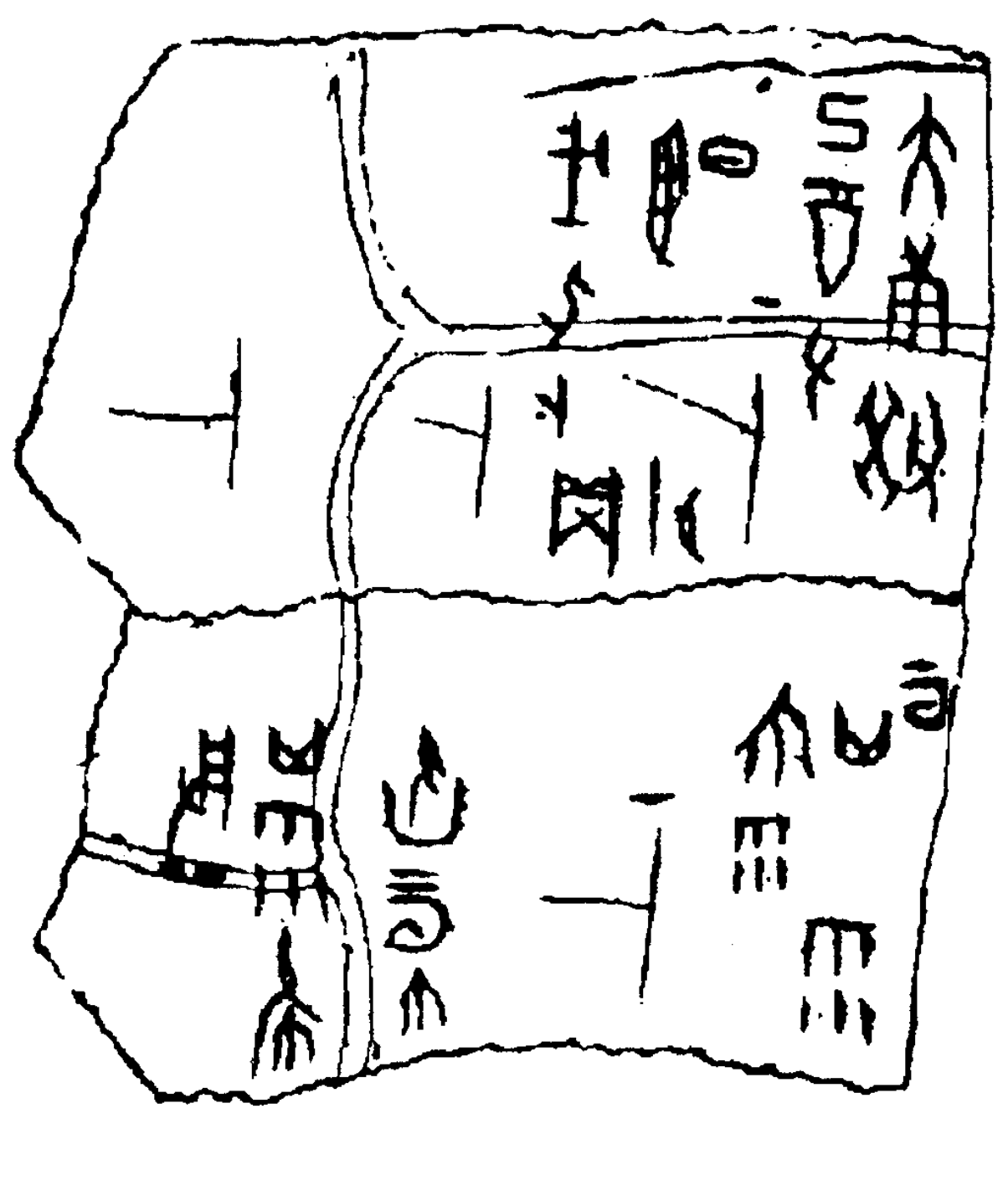

95 13.0.132 背


98 13.0.135 背

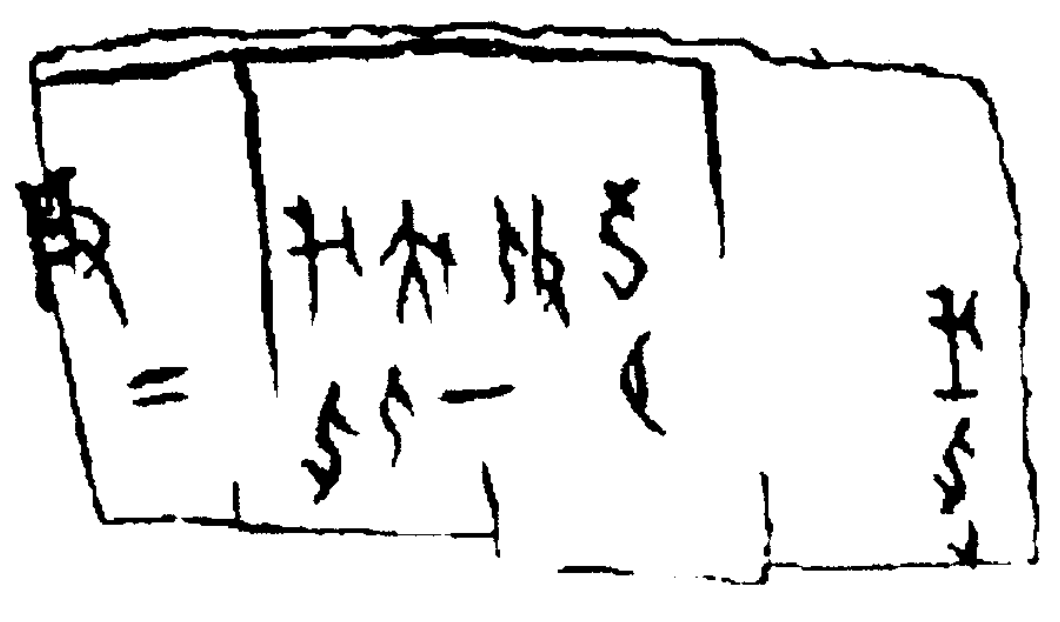

96 13.0.133 背



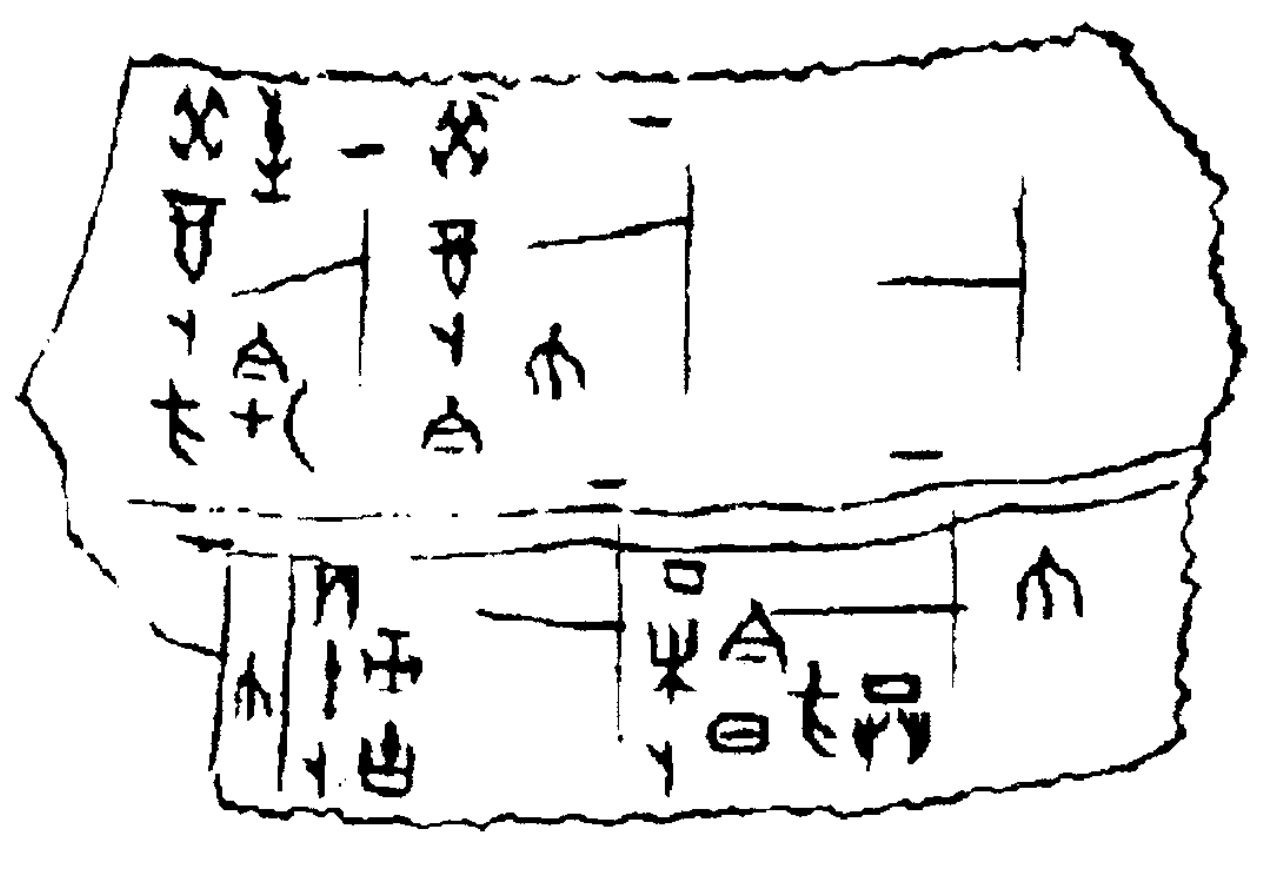
105　13.0.142



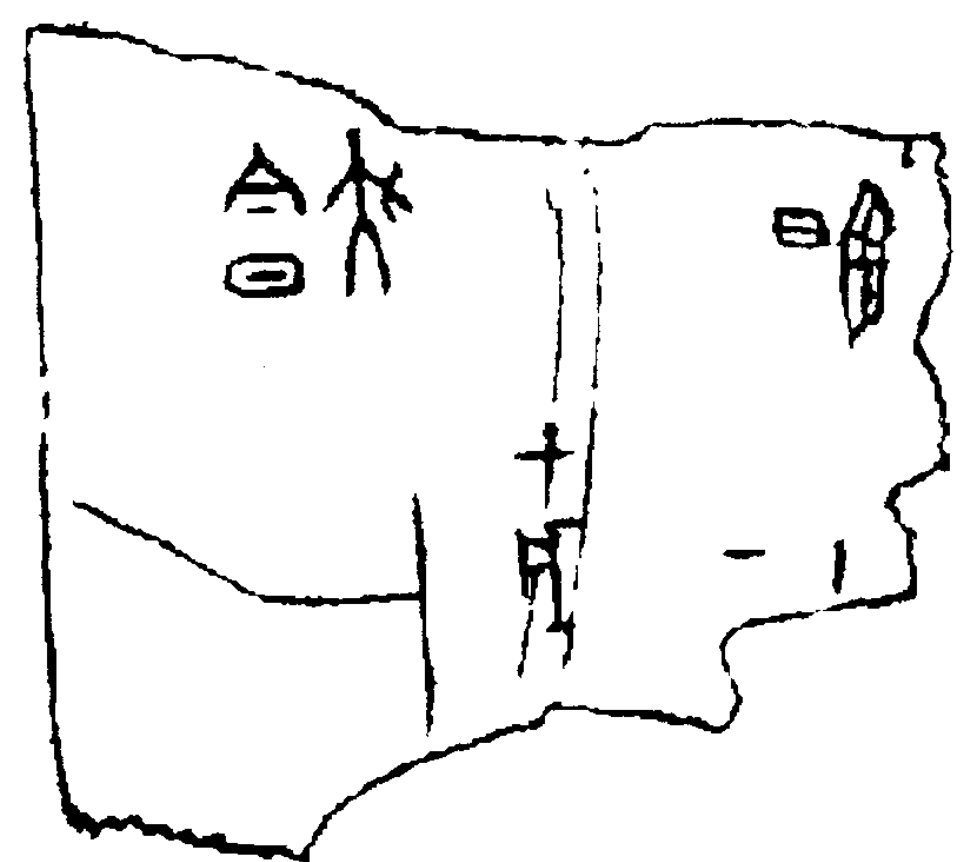
108　13.0.145背



108　土銹剝蝕,字多不辨.13.0.148背



106　13.0.143背



108　13.0.149背
字有剝蝕

（原載《中國文字》第1册，1960年）

集契集自敘

汪怡

我因與甲骨學專家而又最長於書契的董彥堂（作賓）教授同巷居住，常常看見他所寫東西，喜其美妙，引起了我的興趣，先後就殷契文字集成了這「集契集」。董先生在我所集之中。隨舉幾首寫成契文，並作了一篇「舊酒新瓶」的小品文，首段大意是引了陳寅恪教授審查馮友蘭博士中國哲學史報告書中，陳述自己意見後，說：「殆所謂以新瓶而裝舊酒」一句話，借來比「集古文字作新篇章」。我現再就這「舊酒新瓶」四字補充一點意見：殷墟甲骨雖有三千多年的歷史，埋藏地下，從發見到今日只五十年，開始尋繹契文還只四十五年，可是經過各專家的努力，於文字學、考古學上的收獲却實不少，即就董先生的「殷曆譜」那部鉅製和所編各冊「小屯報告」「殷契文字」言，已大可驚人的了！如比作酒，的的確確是一年代久遠，醇而且美的陳花雕，與新瓶的「新」對稱，自應作「舊」，實際上似宜稱為「陳酒」。這種遠年陳紹，能夠苦苦去尋細細去飲，而享受那延年益壽之福的，只有像那董先生一樣的甲骨學專家，像我們這些想聞聞酒香的，只好欣賞欣賞那書契的墨寶——盛酒新瓶可是這種新瓶却不能隨手取用因為殷契文字已由所發見的甲骨片上尋繹出來的，字數既極短少，且俱屬當時記錄有關占卜之辭，倘任取一則聯語詩文，就這殷契文字來書寫，斷斷辦不到。書契之前，固然必先集契，但比之製瓶，集契是「造坯子」工作，而書契才是精鍊與加釉的工作呢！合作工成，新瓶出而墨寶現。準此，董先生所謂之「集古文字作新篇章」，實包括作文作書二者並言的。董先生文中有點側重作文之作，而「作篇章」三字連用，人亦恐易於誤會，故我願為聲明一下。

現在再來談談我的集契經過：

一、集契作品我先後所見過的，只有羅叔言（振玉）先

生的「集殷虛文字楹帖」和羅氏與章式之（鈺）、高香遠（德馨）王君九（季烈）四家合印的「集殷虛文字楹聯彙編」二種，這兩書不但只限於聯語，而且成書都將近念年，目下頗難購得。此外附有集詩的，聽說數量不多，亦同一不易去買，我這才着手來集聯集詩和集詞，初以為集詞近乎創作，似恐較難，可是集集倒覺得比七絕以上還容易，這或者我平素作詞較多，也許令詞比較活動一點的緣故。

二、人或以我向未研究甲骨學，對於所集也有點懷疑，不知集契只須知道現有的殷契文字便成。比之戲曲，填詞、歌唱，可以分工，集契亦事同一例。再按上述集聯彙編中的作家王君九先生，是我老友，他又何嘗是甲骨學專家，且未聽說他是長於書契的。

三、集契所難，還在原有契文字的缺少，以現在能用的字說，不過數百，其中又往往有此無彼，致不能用作複詞或相對詞，尤難的是缺少作說明語或脈絡詞用的字因為這種字在句中篇中都時時需要的。本編集詞，「媚」字似用得稍多，不知此中艱苦的，或許以譏刺梅谿詞之屢用「偷」字，來作同樣的批評，那就未免太冤了。「媚」字通常有「諂媚」「媚神」和「陽春媚我以烟景」三種用法，契文本為貞卜詞，只作名詞地名。本集卻由第三種引申而來用入詞中，似尚不甚討厭，即此可以證明中國文字的巧妙，也可以看出契文字的缺乏，否則，也不會想到而大用特用的舉一為例，可概其餘。

四、推上所述契文字缺乏之故，似尚應.

(1) 不忌習見　平常作詩詞，此首與彼首尚應力避有習見之弊，集契既為字限，又絕少幾首連用，單獨書契，亦似無關，在能不多用固佳。否則亦只好不管。本集如「燕、風」等字，每每喜用，以其契文本美觀，而用入詩詞亦至相當之故.

(2) 不管雷同　在同體中當然應免雷同，詩與詞間亦然。惟集聯間有數條與集詞中五七言偶句相同或相似的，此在當時本為試驗聯語與詩詞的關係，故以聯語入詞，現在本可將聯刪去，以免雷同。可是準上所說，亦不妨保留，備人分別書契。再在同體中小有相似的也不復顧忌。將在祇供朋輩欣賞，一人一件，不慮其診也。

(3) 不論套襲　凡做詩文，都應當出自心裁，而切忌套襲的，至於集契，此層亦無關係，因為有了字的限制，真想套襲實屬不易。我曾就手頭詩詞，約略繙繙既絕少有整句可以全同契文，而我所作全集詩詞，有近套襲的，似只北曲小令天淨沙一首，但全曲五句，已幾無一句與

喬吉的曲相同，兩句全異，餘三句也各有更易。雖幸改成殆已大費其力。若以所用時間來自集，一定可得兩首以上。偶有巧合，或所不免，存心去辨，恐真有事倍功半之苦了！

五、契文假借字實較今文為多，如假「鳳」為「風」，假「史」為「事」等等，本集在一首中力避並用，萬一並用，好在契文多異體，亦大可酌就異體書寫。至如以「乍」為「怎」，在唐代詩詞中已習見不尠，自益大可借用。不過遇有容易相混致生誤解時仍為加注，如集詞春晚曲「好花易謝」首中「乍春光今異昔」句寫釋文却宜於「乍」下作(怎)，以為區分。因此「怎」字為副詞而上聲，一誤動詞而平聲，那就不免音義兩誤了。此外倘有同樣之字，在集中未為注出的，書契諸君，不妨照加。

六、集詞酌用詞韻，自無問題。集詩既為絕與律同屬近體詩，似乎應遵詩韻，不知今尚號稱詩韻的，係元人劉淵之平水韻，此書係沿用唐宋禮部韻略而成。唐代官書當日歸併唐韻，如合「元、魂、痕」為「元」韻等，都極欠合，唐人除應試外已不盡遵用，杜甫、李商隱詩頗多例證，我們今日再去遵守，真正大可不必。本集「昏、春」「川、言」等之叶用，即以此故，並不是誤押。

七、集契在用字上當然不能超出殷契文字的範圍，但命意遣詞却宜自我來驅使所用之字，而不能受其驅使。再集詩集詞亦宜稍重性靈，本集為書寫張掛計，也曾竭力避免有牢騷抑鬱的語氣，可在絕句令詞，即生值盛世的前人，亦未嘗全為歌舞昇平的作品，那麼本集間有傷春傷別之辭，更不足怪，好在內中尚不乏樂觀和超然之作，建壽詞等等亦多備列，似大可隨書契者自去采用的了。

八、本集計集聯一百八十二聯，自四言五言以上悉以字數列序，內中五言七言等聯數較多的再各以有動物詞的彙列在後，餘列前。此因動物詞多為象形字，契文寫起來較好看，列在一起，或可較便選用。集詩九十一首，也依四言五絕等各以字數順按體列序，書契本不列題可在本集，每首之前加上一題，閱看選用，似也可各覺醒目點。集詞七十七首，又北曲小令六首，也各依字數按調分列，有異體的，以較習用的列前餘附其次。北曲小令附列全部集詞之後，亦以各調字數列序。詞曲原本各有調名，不另列題。再本編集聯集詩與集詞(集曲附)合併共計得三百八十有六。

九、董先生和我原來商定，由我集契由董先生書契

後再付印，以完成這「集古文字作新篇章」——「新瓶」的工作。現在關於我的似已告一段落，謹示清稿，送交董先生去書契。至這「集契集」的名称，似只限於我的集契工作言，將來還得重定呢！

復次，我還希望：

一、董先生和其他閱者諸君，對我所集多多的指正。

二、書契諸君如承采用，最好於契文後附錄譯文，以我曾屢見友人觀覽契文或大篆等有不能盡識之苦。再詞曲譯文倘肯照加標點，似更道地。此言好像太過，但文字學專家錢玄同先生早已開端，並非創舉再在我們曾事提倡新標點的，也似應有此請求。

三、即非契文，而為大篆以下的，也不妨試書。以契文年代最古，而字數也最少，契文能寫，其餘當亦能寫。

三九、一、二八、汪怡於台北

（原載《中國文字》第一冊，一九六〇年）

甲骨文字研究の現状

―「京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字」の編集・執筆に参加して―

伊藤道治

私は京大人文科学研究所蔵甲骨文字の編集、執筆の一部に参加したのであるが、その途上において色々生じた問題などを、整理して本誌に発表するようにとの編集の方からお話しを受け、それでは一つ私自身の自己批判を兼ねてとおひきうけしたまではよかったのであるが、今になって図版冊の編集の頃をふりかえって見ると、なんたか当時色々感じた問題などが、一向はっきりしないで、現在までそのまゝ残っていることが漠然と感じられるに過ぎない。それならば本文冊についてはどうかというと、勿論祭祀にしろ、征伐・外国関係田猟など個々に生じた問題については、その折にふれて問題を提出したわけであるが、未だにまとまった解答は得られないものが多く残ったまゝで一向に進歩していないのに、われながらいさゝかといった感じである。それにしても本文冊の執筆を始めるに当って、技術的に一番問題になった点は、読み下し文をつけるか否かであった。貝塚教授は積極論であったのに対し、私はむしろ反対であった。その理由は甲骨文字といい卜辞というも、現在まで個々の文字の釈読に重点がおかれ、これを文章として研究することが余り行われていない現状では、性急に読み下しを行うのは、却って危険であると感じたからであった。然し貝塚教授はそれだけに、読み下しを行えば、その点もより問題がはっきりして、今后の研究を促進する筈であるし、若しこれを行わなければ、文章としての意味を厳密に考えることが出来ないし、それだけ註釈も問題点が不明確になるからという点を主張され、結局思い切って読み下し文をつけることになったわけである。私自身分担した範囲に関する限り、あまり所期の目的が達せられたとは考えられないけれでも、ともかくその途上で感じたことを述べて、責をまぬかれたいと思う。その感じた点というのは、一口で言えば、卜辞をどのような言語と考えたらよいかということである。

現在までの甲骨文字の解読は、先づ「説文」を中心とした字形の比定から出発した。この手順そのものが誤りであるとは考えられない。これがなければ恐らく研究は不可能であったと考えられる。しかし字形の比定がそのまゝ意味の同一性を示すものとしてよいのか、若しこれが両者には許されないとすると、よく行われる同音假借によって意味を考えることが、との程度まで許されてよいのか。或いは同一文字を用例によって幾つかの意味に使い分けることが行われるけれども、これも同様にどの程度まで許容されるか。こういった点が注意された。換言すれば、甲骨文字で書かれた卜辞という言語を、どういう性格のもの、即ち卜占の記録であることによって制約を受けていないか否か、また言語としてとのような段階のものと考えるか――甲骨文字が現在では中国最古のものであり、文章としても同じであることは言うまでもないが――、という問題になると思われる。

かつて郭沫若氏は、臣・奚・奴・衆などの字を象形文字として扱い、その意味を奴隷であるとした。これに対し、甲骨文字は、もっと進んだ文字であり、象形の点から意味を考えることを誤りとする人達もある。私自身もこれらの文字の意味が郭沫若氏の言う如きものではなかったと考えるのであるが、この場合に、これらの文字の、卜辞の文中における用例から帰納的に意味が決定される可きものがあることは勿論であるが、しかし用語如何よりは、むしろ社会史観の差異から郭氏の説を否定しようとする人々もないではない。こうした二つの立場が行われるのも、結局は、卜辞のもつ上記のような性格を不明確にしたまゝで史料としようとするからである。以下このような点を、例について具体的に考えて見よう。

人文科学研究所のS〇四四三には

辛卯卜殻貞吳禍凡出疾。

の辞がある。このうち禍凡の二字のもとの字形は凶凡である。この文字については唐蘭氏は猷同と釈し、攸同の意とすること、及びこの説に対する批判は既でにのべた。唐蘭氏は第五期卜辞の凶はまさに猷字であり、西周后期の金文大克鼎・毛公鼎に見える猷字そのものであるとする。唐氏自身はこの全文の猷字の意味についてはふれないが、一般には「爾雅」釈詁にいう如く、謀の意に解されている。しかし第五期卜辞における凶の意味とは全く異る。こういう場合、この二つの場合を、同じ形の文字で結びつけるものは、何か。単に同音のみによって可能となったのか。それとも我々の考えている意味に誤りがあって、古くは意味の上でも関係をもっていたのか。唐氏は凶の声は凶であるとする。猷＝猶が、「爾雅」釈獣、「説文」などでは、犬に似た動物と解されているけれども唐氏の如く、凶がその声においても意味においても凶であるとすれば唐氏の説だけでは凶字の造字の理由の説明は何んら得られない。むしろ「爾雅」釈獣、「説文」が後記の意味であり、首字がよってその声を示すにすぎない。私自身は凶と猷とは別の文字であり、従って凶・凶と首、ひいては凶と卣（[illegible]）とも別個の文字ではなかったかと考える。ところで唐氏は酉は酒尊の形であり、卣と声が近く、かつ「爾雅」に卣は中尊也とすることによって、酉＝首と卣とは通ずる。かつ凶の字形は尊吾と略ぼ同じでありとするけれども、一体凶と吾とがどうして同じであるのか。例え同じであるとしても、卣が明らかに酒器として鬯一卣の如く卜辞のうちで使用されるに対し、凶のほうに酒器としての用法は見られないのではないか。若しそうであるとすれば、凶字は唐氏の説に従うとすれは、本来の酒器としての意味はすでに失なわれてしまって、その音のみによって意味が考えられていたことになる。唐氏が猷同、攸同とする猷、攸は助詞として使用されるものと言うことが出来るが、凶字はすでに音のみによって使用され、本来の意味を失っていることは、当時すべてに凶字が助詞化して了っていたことを示すことになる。甲骨文字を考える際に、果してこうしたことがそのままあてはまるかどうか。実は検討されなければならない。

一般に発語の助詞唯・惟と解される隹字が卜辞においては単なる発語の詞ではなく、隹＝鳥を神意の具体的なあらわれと考えることから使用した文字でなかったかということは、S〇〇四六の註で述べた如くであるが、この考え方はまた祖先を祭祀するための青銅酒器に鴟鴞尊が見られる理由であるとも考えられる。隹は単なる発語の詞として使用されたのではなく、もっと内容をともなった語であったわけである。勿論この一例のみによって、卜辞には助詞が全くなかったというのではない。第一期卜辞の否定詞に往々ともなう[illegible]などは、否定詞を強調するための助詞かとも考えられるが、しかしこれが目を非常に誇張した動物の字形をとることは、やはり何か意味があったのかもしれない。また第五期祭祀卜辞において使用される、其と叀とについてみると、叀はコレの意の助詞以外に、犠牲を処理する動詞として割にも解されている。しかし第五期卜辞に関する限り、強いて割と解する必要は認められない。その理由は、其の叀とは、その夫々の下に記される犠牲に区別があり、且つ其と叀とが対に使用されたと考えられるからである。このように考えると、叀は其と同じく助詞であったことになるのであるが、それならばそれで、犠牲の種類によって其と叀とを使いわけるのは何故か。何か単なる助詞として片づけて了うには、割りきれなさを感ずるのである（S二五七九・S二六八八）。

ところで凶、凶・猷などは、ともに旬亡凶（猷）、今夕亡凶（猷）の形式の文章に使用されることが最も多い。何れも何か害になることが起るか否かをトウものであるが、これと同じような意味をもつものとして、亡害、亡尤、亡災、亡戉がある。いづれも否定詞として亡をともない、時に通用されるものもある。しかし卜辞においては、亡災・亡戉が田獵・往来、征伐卜辞に関して用いられ、亡尤・亡害は祭祀卜辞に使用され、しかも亡尤と亡害とではやはり傾向として差異がある。しかし一方で通用されるものがあることは、それによって示される意味に共通するものがあり、そこから一つの共通した意味が抽象化されて出て来る可能性があることは充分認められるのであるが、卜辞について見る限り、それぞれにこれらの（亡）凶、（亡）猷、（亡）尤、（亡）害、（亡）災、（亡）戉のおこる場合を示す前文に区別があることは、その起るかもしれない害が区別されていたことを示している。さらにこのことはこれらの害をおこす「力」に区別がされていたことを示すものである。このような考え方は、現在から見れば、却って観念的な思弁にすぎないと言われるかもしれないが、商をはじめ萬霊崇拝の風習をもつ殷代にあってはむしろ具体的な事実として考えられていたに相違ないのである。私自身凶、凶を禍と訳するのが最善と考えるわけではない。むしろ現在ではもとの字形そのまゝで示しておくのが研究の段階であると考える。

ところで第五期田猟卜辞には　往来亡災の語が記され　これが卜問の目的をなしている。この往来の語は一見慣用句の如きものであまり意味がないように考えられる。島邦男氏らが田猟地の相対的な位置関係を考察された方法に関する私見はすでにのべたが、島氏の考えに従うと、この往来の語は、「往きと帰りの間」の意ではなく、「行動している間」の意に解されたと推測される。しかし実際には文字通り「往きと帰りの間」の意に解すべきものであることは、B二九二八の註において述べた所である。これも、助詞とはことなるが単なる慣用句として余り意味を考えないことが、卜辞の解読には危険であることを示す一例と言うことが出来る。

田猟卜辞には、これらのほか、田猟の当時における機能などが問題となるけれども、私が本文冊で述べた基礎には、東京大学東洋文化研究所の松丸道雄氏の教示によるところが多い。その后得られた私自身の考えについては何れまた発表するであろうけれども、松丸氏は、近く数年来の問題としてこられた田猟に関する研究の結果を発表される由である。同君から与えられた援助について、ここに謝意をのべ、且つ氏の研究の成果を待望するものである。

ところで本書の編集において、第四期田猟卜辞として分類したものを見ると、例えば

壬午卜貞、王其田向亡戉　（B二四九三）

のごとく、干支卜貞形式の卜辞がある。第四期卜辞の基本型は干支卜貞形式であることは言うまでもないが、田猟卜辞に関するものは、ほとんどが干支卜貞形式をとり、かつ王子も第四期の標準体である大とはことなり、互に依る。これは第三期或いは第三・四期の体である。こういった点が田猟卜辞に集中してあらわれるのは、とういう意義をもつのであろうか。第四期の貞人集団――署名がないので、どのような貞人があったかは不明であるが、貞人集団は他の時期と同じようにあったと考えられる――のなかで田猟の卜問には、いわば専門ともいうべき独自の貞人があったかどうか。若しそうであったとすると、貞卜の官の内部に分業があったことになる。他の時期にはあまりこういった事実は認められないと考えられるが、第四期には他の時期とちがいがあったのだろうか。

これとともに、本書では第三・四期卜辞という分類を行って、一つの卜辞群をつくったのであるが、このうちには第二期までさかのぼると考えられるものがあることは、すでに貝塚教授によって指摘されているところであるが、この群に属すると考えられる南北・明六三九には、兄己、兄庚の稱謂がある。これから見ると、明らかにこの群には第二期後半祖甲時代と言うことの出来るものがあることになる。従って第二期后半から第四期にかけては、少くとも二つの貞人の集団が併存していたことになる。これは殷の王朝の構成を考えるのにとう位置づける可きであろうか。これは所謂王族卜辞・多子族卜辞についても云えることで、これが第一期標準卜辞と同じ坑から出土するという事実とも併せて、どのように考える可きであろうか。私自身の見解は何れ別に発表する予定であるけれども、殷代の社会、経済を考える際に、いきなり奴隷・封建といったごとき論述に入って了うことが、実際には稔り少ないものでしかない現

在では、むしろこういった点を綿密にあとづけるほうが、より基本的な研究であり　これはまた卜辞の時期的な特性が如何なる理由によって生じて来るのかをも明らかにする問題であろう。たゞ現在の研究段階では　一応時期的な区別によって見出だされる夫々の特性を相互に比較し、その結果得られた時期による差から、夫々の貞人集団の相違点を考えることから始めなければならないのであるが。

さてここで再び最初の問題にかえることとしよう。先にあげた第五期卜辞の凶字は、凶・凶に犬を附したものであるが、その犬を附した理由は、唐氏の考え方では、その理由が明らかでないこともすでに指摘した。卜辞における犬の用例を見ると　族名としての犬以外に、犠牲獣としてあらわされている。即ち犬を犠牲とするわけである。そのなかでも、東西南北の四方とその風に対して行われる祭に、犠牲として使用されるのは犬に限定される。四方のもつ意義については別にふれる予定であるが、凶・凶が実は帝をはじめ四方などによってもたらされるものであることを考えると、それを防止するために犬が使用されたものである。そのほか、考古学的に明らかになったところによれば、墓の腰坑、建築基礎の下面に犬を埋めたのも　犬が悪霊を防ぐ力をもつものと考えられていたことを示している。こうした点から考えると、凶の字に犬を附して凶としたのは、実はあらかじめ犬を附することによって、凶のおこることを防止する意味があったのではなかったかと想像させる。このことは、卜旬そのものが第五期にいたって儀礼化して了っていたと考えられる事実とも対応することである。こうして見てくると、当時にいわばコトダマ信仰ともいう可きものがあったと推測させ、若しそうであれば、甲骨文字には絵画的或いは象形的な要素が可成り残っていたのではないかと考えさせる。こういったからとは言え、甲骨文字がすべて絵画文字・象形文字であるというのではないのは勿論である。十干十二支をとりあげて見ても、すでにその字形が何の象形であるかは不明であり、ここにしばしばとりあげた凶・凶にしてからが、それがもとは何をかたどったかは明らかでない。しかし以上に述べて来たような点は、卜辞のもつ時代的な性格、或いは卜占の記録、言いかえれば宗教的な文章としての性格によるとも考えられる。さらに卜辞には省略形式の文章が多いこともトいの記録であることに起因すると考えられるが、どこまでを省略することが出来、どれだけは欠くことの出来ないものなのか、省略形の文章の意味は完全形の文章によって、もとの形に復原して考えなければならないのであるが、省略の法則の如きものがあったとすれば、それを求めることも必要になる。こういった幾つかの点は言語学の領域に属する事柄と考えられるけれども、これが行われなければ、金文や詩書などとの比較も今一つ確実性をかくであろう。

次に祭祀卜辞における伐字は、島氏らは仮借と解されているのに対し、私は斬首の意の動詞説に従った。これは俘虜を祭祀の際に、犠牲として神に供する一方法と解するわけである。この説は、その字形からする考えとともに、大墓中の人頭骨、或いは身首を切断して埋めた大墓周辺やC区の墓坑などの考古学的な事実と関聯させて考えられたものである。

これと同じようなことは[illegible]という文字についても考えられる。これは右手に戈、左手に干をもった形であり、金祥恒氏は戦と釈し、晋也とする（「續甲骨文編」）。これをもとの卜辞について見ると、

癸酉卜、殷貞、雀干翌甲戌[illegible]。（乙五七九八）

とあり、主格雀の動詞として使用される。いま考古発掘による資料について見るに、大墓の墓道中央の腰坑や四隅の坑、或いはC区建築遺蹟の門戸に当る部分に、戈や、戈と干とによって武装した兵士が埋葬されていたことがわかっている。これらはすべて死者や生人を襲う悪霊を防ぐために埋められたものと考えられる。雀は人名、国族名としてあらわれ殷と親しい関係にある属国である。この卜辞は雀族出身の者が、甲戌の日に守衛の役につくことをトったものである。この守衛の役がある特定の場合、例えば殉葬などの時に行われるものか、日常一般のことかは、用例が不足しているため明らかではないが、以上の資料とは別に、殷末周初に多い、族記号といわれる金文のうちには、この甲骨文字と同じ文字が数例存在する。白川静氏らは、これら記号をその族の殷王室に奉仕する際の職能を示すものと解される。若しこれが一定の職能として考えられるようになるとすればこれはむしろ非常に意味が限定されて了ったことを示す。こうした意味の限定化も、前にのべたものとは多少ちがうけれども、一種のコトダマ信仰にもとづくものであろう。このような族記号の例は伐字についても同じように見られる。これらはさしづめ大伴、物部などに当る族であろう。ついでに、もしそうとすれば雀がこの任務についたのは如何なる理由によるのであろうか。

以上の伐、[illegible]の例は動詞と固有名詞との関係であるが、先にふれた犬字にも族名としての用法があった。或いは卜辞には動物としての馬以外に、官名と考えられる場合の馬字があり　金文にも、犬・馬ともに族記号或いはその要素として使用される。これらはその族の職能が、犬或いは馬と密接な関係があったことによるものと考えられるけれども、その理由は別として、当時の普通名詞が同時に固有名詞として使用された例である。

ところで大という字は、卜辞では形容詞、副詞として使用される以外に、国族名、人名としてあらわれる。この関係はどのように考えられるのであろうか。殷人は自分たちの国をよぶ際に、大邑商の如く、大を美称として使用することから考えると、国族名として大方という場合、この大は美称から固有名詞に転化したとも考えられるが、実際にはこれと殷と敵対関係にあった国であることを考えると、これに美称としての意味があったとは考えられない。或いは大敵としてこれをあつかった――これも美称と言えば言えなくはないが――としても、実際に卜辞に出る情況からは、むしろこれ以上の大敵は幾つかあったのである。こうして考えて来ると、この大方の大は、同音仮借によって大の字をあてたのではないかと考えられるのであるが、今まで述べて来た如き当時の一般の言語、特に固有名詞の生い立ちとは、全くことなつたものであることがわかる。こういうことが、卜辞のなかで許容されるのかどうか、やはり検討を要することであろう。極端なことをいえば、或いは当時の大字にはもつとちがつた意味があつたかもしれない。

このほか、一人称代名詞としての我、余の問題もある。これは一般に殷王、或いは子（多子族卜辞貞人）の自稱の代名詞と考えられているが、我には記事刻辞中に見えるものがある。この記事刻辞に使用される場合は、他の例から考えて、当然固有名詞としなければならない所に問題が生ずる。私自身、記事刻辞以外の我をすべて固有名詞として考えた場合、どうしても意味の通じないものがあるか否か、未検討であるけれども、卜辞というものの性格から考えて、果して代名詞を必要としたか、ことさら代名詞によって書かなければならない理由があったとは考えられないのではないか特に主格を省略したものすら往々あることから考えて見て、これは当時の言語が、人稱代名詞を発生させる段階であつたか否かということよりは、卜辞であるという性格からより多くの制約があつたことによると考えられるのである。しかし若しこれが固有名詞であつたとすると、これが人稱代名詞になつたのは何故であろうか、或いは両方の意味が卜辞中にあつたとすれば、何故こうしたことが行われたのか、先きの大の場合と同じような疑問が出る。

管燮初氏の「殷虚甲骨刻辞的語法研究」は、こうした卜辞を言語としてとりあげたものではあるけれども、その方法は、一つの文字の意味をその場〳〵で、つかい分けて考えて行くもので、例えば助詞の作り方を知るうえに、裴楽海氏の「古書虚字集釈」が便利なのと同じであるけれども、しかし両者ともに、それならば、一つの文字の原義その意味の多様化の理由などについては、結局なにもわからない結果になつている。

以上の如く、甲骨文字というものの性格、極言すれば表意か表音か――同音假借が進めば表音となつて了うのではないか――ということにはじま

つて、実は余りその性格がはつきりしないものであることがわかる。これが言語として一つの文章を形成すれば、なお複雑な問題を生ずるものであることも、明らかになつたと思う。最初にもふれた如く、甲骨文字の解読は、字形を中心として「説文」との対比から出発した。これがなければおそらく今日の如く、甲骨文字が殷代の同時資料として重視されるにはいたらなかつたであろう。しかしこゝから一歩進んで古典における文字の用法と比較されるようになると、そこに大きな問題が生ずると考えられる。その一例がしば〳〵のべた音の仮借による意味の解釈である。このような解釈の方法が確立したのは漢代に入つてからであろうが、それだけに、この方法は、春秋、戦国と次第に進んできた言語の用法を基礎として成りたつ方法があることは言うまでもない。これを無批判に甲骨文字の解読に利用するということが危険であることもまた言うまでもない。　この点では金文は立場がことなり、古典に接近する——私がここでくど〳〵と述べて来たことは、実はこの従来の方法に批判を加えて、新しい発展を望みたいからである。最近では一つ〳〵の文字の用例を綿密に追究し、その上で意味を帰納的に考えようとする方法がとられている。これは労多くして功の少ない方法であるけれども、今后はこれが組織的に行われなければ、甲骨文字の解読も、本質的な進歩は望まれないし、またこれが行われなければ卜辞を文章として、より大胆な表現をつかえば、殷人の発想形式を検討することも不可能であると考えられる。最も面倒な段階に達したわけであり、それだけにより多くの研究者の緊密な協同が要望されるわけである。とりとめのないことばかり書いたけれども、私自身釈文の一部を分担し、特に読み下し文を作る段になつて、実は従来卜辞が文章としては、余りにも研究されなさに過ぎ、また釈字が恣意的とも言ってよい程に一貫した方法なしに行われるために、しば〳〵作業が停頓したことから以上のようなことが痛感されたわけである。その意味で、同書の読み下し文が、何か疑問点を提出することが出来たとすれば、それだけでこの試みの大半の任務を果したと言うことが出来るのではないかと思う次第である。

（原載《甲骨學》第九號，一九六一年）

「一九五八—一九五九年殷墟發掘簡報」について

松丸道雄

戰前、十五回に亘って行なわれた殷墟發掘は、その後、戰争による長い空白期間を置いたが、一九四九年十一月に中國科学院が創設されると早速に再開され、翌五〇年春以降、數回の發掘が行なわれて、その都度、考古学報その他に報告されてきた。現在までのところ、入手しうる範囲での雑誌類から判断した限りでは、一九五〇年から一九五九年までの十年間に計七回の發掘が行なわれたようである。戰前の十五回の發掘に関して、東方学報京都第二十三冊（特集「殷代青銅文化の研究」一九五三年三月）の附録に「殷墟發掘年表」があるので、今、これに接續させる意味で、「戰後殷墟發掘年表」を作製してみると、ほゞ、別表のようになるようである。

ところで、この表ですると第七回に当る、一九五八～九年に亘って行なわれた發掘の報告を載せている「考古」一九六一年第二期を、私は某氏の好意によってたまたま入手しえたが、寡聞の限りでは我國に殆ど將來されていないようすであり、したがって多くの研究者に未だ知られていないと考えられるが、その發掘規模においては少くとも戰後最大であって發掘地点も十一ヶ所にのぼり、内容的にも、例えば、從來の小屯東北で發見された「水溝」とは全く規模を異にする巨大な「灰溝」の發見とか、木製「耒」の痕跡の発見といった、注目すべき幾つかのトピックを含み、また、殷墟遺跡の編年が試みられているなど、大いに重要であろうと思われる。そこで、とりあえず、ここにその大要を紹介しておこうと思う。

〇

〔戰後殷墟發掘年表〕

發掘次數	時期	調査員	發掘地	重要發現（殷代に限る）	發掘機関	報告
1	1950年（4.12～6.10）	郭宝鈞、馬得志 趙銓、魏善臣 安志敏、裴毓明 王[illegible]元、王珍明	四盤磨村 武官村北	大墓1 墓葬25 排葬坑17 灰坑6 居住遺址3 帶字卜骨1	中國科学院考古研究所	郭宝鈞「1950年春殷墟發掘報告」中國考古学報第5冊（1951年）〔註1〕
2	1953年（3.1～4.25）	馬得志、陳公柔 鍾少林、周永珍 張雲鵬、魏善臣	大司空村	墓葬152 車馬坑1 遺址5	仝上	馬得志他「1953年安陽大司空村發掘報告」考古学報第9冊（1955年）
3	1953年（6～7月）	石興邦、魏善臣	大司空村	墓葬14 遺址5	仝上	仝上
4	1954年（1月）	馬得志、全進	大司空村		仝上	仝上
5	1955年（8.18～10.23）	?	豫北紗廠宿舎西南 小屯村東 小莊西南	墓葬2 灰坑1 房基遺址1 帶字卜骨1	河南省文化局文物工作隊	河南省文化局文物工作隊第一隊「1955年秋安陽小屯殷墟的發掘」考古学報1958年第3期
6	1957年（8月）	?	高樓莊北（＝薛家莊南）	冶銅遺址2 製骨遺址1 墓葬8	仝上	趙霞光「安陽市西郊的殷代文化遺址」文物參攷資料1958年第12期
7	1958～9年〔1960年に及ぶ〕	安志敏他（前後35人）	小屯西地 苗圃北地 張家墳 白家墳 梅園莊 孝民屯 北辛莊 范家莊（龍山期のみ） 後岡 大司空村 武官村北地	鑄銅遺址 製骨遺址 巨大灰溝 墓葬260餘 排葬坑10 殺殉坑1 車馬坑2 帶字卜骨2 木耒痕跡	中國科学院考古研究所	中國科学院考古研究所安陽發掘隊「1958―1959年殷墟發掘簡報」（執筆者安志敏他）、考古1961年第2期〔註2〕

〔註1〕この他、科学通報第1巻、第2,3,4,5期（1950年）、文物參攷資料第1巻第6,7期（1950年）に簡單な報告がある。

〔註2〕この他、魏樹勛「安陽出土的人頭範」考古1959年第5期
郭沫若「安陽円坑墓中鼎銘考釈」、同附録二「関於安陽後岡殉葬円坑的説明」（安志敏）
考古学報1960年第1期（のち、郭沫若『文史論集』1961年に再録）
趙佩馨「安陽後岡円形葬坑性質的討論」考古1960年第6期
がある。

中國科学院考古研究所安陽發掘隊「一九五八―一九五九年殷墟發掘簡報」（執筆者　安志敏・江秉信・陳志達）（以下「簡報」と略稱）は、「考古」一九六一年第二期（總第五四期――一九六一年二月十日出版、本期延至三月中旬出版）の六三～七六頁の本文（挿図一～一六を含む）と、巻頭のアート紙図版壹～参よりなる。標題には五八～九年とあるが、部分的には、六〇年初めの發掘についても、多少の記述がある。全体は四章にわかれ、各章に標題はないが、内容的には、一、前言　二、仰韶・龍山期遺存　三、殷代遺存　四、結語　となっており、第三章が中心であってほゞ十一頁を占めている。以下、順を追って紹介しよう。

一

戰後の殷墟發掘は、一九五〇・一九五三～一九五五・一九五七年に、中國科学院と河南省文物工作隊によって、前後して五回にわたって行なわれた、とする。これまで刊行された報告をまとめてみた前表からすると、六回になるのではないかと思われるのだが、ここでどのように数えて五回としたかは不明である。

一九五八年以降は、考古研究所が継續して發掘しており、一九五九年には、小屯村の西に「工作站」や「殷墟陳列室」が設けられた、とのことである。

一九五八～九年の發掘地点は、小屯西地・苗圃北地・張家墳・白家墳・梅園荘・孝民屯・北辛荘・范家荘・後岡・大司空村・武官北地の十一ケ所であり、面積は四千平方米に達し、参加人員は前後三十五人であった、とする。この「簡報」には發掘地点図が無く、「中國考古学報」第二冊にある地図（東方学報京都第二十三冊に轉載）―Aや陳夢家『殷虚卜辞綜述』附録の地図―Bなどによって、十ケ所については確めうるが、独り「張家墳」のみは、何處であるか明らかでない。十一地名をならべた順番から、洹河南の、たぶん王裕口村あたりであろうか。尚、地図Bによって、「梅園荘」の位置を確めうるが、地図Aでは、ここは「煤原荘」と記されている。梅園荘とは戰後改稱されたものであろうか。この地点は、「簡報」でこの遺跡編年のひとつの據所とされている重要な意義をもつ遺跡である。

二

後岡南坡・大司空村南地・范家荘北地などで、仰韶・龍山両種文化堆積を発見した。後岡は415 m²を發掘、他は試掘。

地層堆積情況は、各地点とも一致していない。

後岡 ｛仰韶・殷交迭層
　　　仰韶・龍山・殷・東周交迭層

大司空村 ｛仰韶・殷交迭層
　　　　　單純龍山層

范家荘　單純龍山層

この結果、一九三一年の後岡發掘で確定された仰韶・龍山・殷の相対年代に疑点のないことが再び証明された、とする。はたしてしからば、大給氏によって報告された後岡の状況などは、いかに理解すべきものであろうか（大給尹「河南省安陽郊外後崗・高樓荘兩遺跡發掘調査豫報」史学第十七巻第四號）。

（一）仰韶文化遺存

後岡と大司空村の仰韶文化性質は、はっきりと異なっていて二種の類型を代表している、とする。以下、發見遺跡・遺物を抜き書きする。

〈後岡〉

○房子遺跡二種――ともに浅い竪穴式。一は鈍角長方形（？）で、南北に各一の「斜坡形門道」あり、4.4×1.95 m²・中央に柱洞あり。他の一は、円形で南辺に門道あり、直径2.7 m。

○円形竪穴二箇。

○墓葬八座――仰身伸直葬・俯身葬・二次葬など。副葬品なし。

これら房屋・墓葬は、豫西・關中一帯の仰韶文化遺存にすこぶる近似している。

○打製石器――盤状器。

○磨製石器――鏟・磨棒・彈丸など。

○骨器――鑿・笄・針など。

○陶器――鉢・罐・鼎・紅頂碗など。罐類は豫西に近く、小口長頸瓶・鉢は西安半坡に近い。

〈大司空村〉

○灰坑一箇

○陶窯一座――円形竪穴式。

○陶片――器形復原不能、ただし、鼎・鉢・紅頂碗なし。

（二）龍山文化遺存

後岡・大司空村・范家荘の文化遺存は、基本的にはすべて「河南龍山文化」の範疇に屬し、また「後岡第二期文化」とも稱せる、とする。

○円形白灰面（范家荘）――豫北常見の形式。

○陶窯（范家荘）――陝縣三里橋と同じ。

○墓葬（後岡）五座。

この他、各遺跡に灰坑あり。

○打製石器――燧石刮削器（細石器の特徴あり。

○磨製石器――斧・環・鏃など。

○骨蚌器――錐・鏃・刀・鎌など。

○陶器――罐・盆・碗・豆・鼎・斝・器蓋など。

尚、後岡より円錐形の製陶工具を発見、鬲内に置くとちょうど合致するから、陶器製作の際の内模であろう、と見る。

三

（一）殷墟布局和遺存堆積的分期

殷墟の範囲は、合せてほゞ24平方キロ以上になる。今次發掘の十一地点のうち、范家荘を除く各地点に殷代の堆積と墓葬があった。解放前後の發掘、とりわけ最近二年間の發掘により、殷墟の範囲や布局が、かなり明確になってきた。凡そを言うと、洹河南岸の殷代王宮を中心とし、その周囲に居民点・手工業作坊・墓葬などをめぐらし、一方、洹河北岸は、武官村・侯家荘北一帯を中心とし、殷王陵墓・貴族墓および千をもって数える殉坑があって、その周囲にも、聚落や墓葬などがある。地下堆積は、小屯周囲が最も豊富であり、この外囲を形成している大小の聚落は、完全には聯成しえないが、その分布は相当に密集しており、中心からや、離れたところはかなりまばらになっている、としている。

「簡報」では、ほゞ以上のように記述されているが、これと合せて考えられてよいと思われるのは、殷墟において殷代堆積の發見される地域は、洹河に沿ってその両岸の僅かに小高い箇所に、上流は西北周辺から、後岡あたりまで、ほゞ帯状に分布している点であって、今次發掘地点もまたその例外ではない。この長さは略六キロに達し、また從来の殷代堆積を發見しえた多数の地点のうち洹河から最も遠いものでも、今次發見の梅園荘が一キロほど離れているにすぎない。もし、このように洹河ぞいに聚落が發達していたものとするなら、鄭州城壁との比較から、未發見の殷墟に於ける城壁の有無についてなされてきた推測（たとえば貝塚茂樹「中國古代都市國家の性格」世界考古学大系六所收・大島利一「中國古代の城について」東方学報京都第三十冊四二～三頁などを参照）に、別の見方を提供するであろうし、ひいては中國古代の聚落ないし都邑の形態について興味深い事実を示していることにもなろう。たゞ、この問題は、以下で触れる、今回はじめて知られた巨大な「灰溝」と関わりがあるので、そこでまた述べよう。

「簡報」では、このあと、梅園荘および大司空村の二ケ所の地層を採り上げて、遺跡の編年を試みている。

1．梅園荘

小屯西南約二キロ、殷墟の辺縁地区にある。この殷代堆積の面積は大きくはないが、なかに少しの墓葬もある。その地層の上部は宋・戰國など晩期堆積であり、下部は殷代堆積である。下部堆積は二層に分ちうる。上層から出る器物は殷墟普遍のものと一致し、下層の陶器は、鄭州二里岡下層と接近する。この下層を〃梅園荘Ⅰ期〃、上層を〃梅園荘Ⅱ期〃と稱する。Ⅰ期の分布面積はかなり小さく、Ⅱ期は比較的廣い。

2　大司空村

かなり豊富な殷代遺存あり、一九五九年秋に、整った交迭層次を發見。上部には近代攪乱層・隋唐層・漢代層・戰國層などの晩期堆積があり、下部は殷代堆積で、また二層に分かれる。上層から出る器物は〃梅園荘Ⅱ期〃と同じで、殷墟常見のものと一致し、下層の陶器は上層と顯著な変化があり、特に鬲と簋がにわかに出てくる。最も注意すべきは、一一四号灰坑で發見された一片の卜骨

で、「孝貞在衣」の四字があり、字体から見れば武丁期に属するものであって、この層の堆積の絶対年代に有力な証拠を提供している。便宜上、下層を〝大司空村Ⅰ期〟、上層を〝大司空村Ⅱ期〟と称する。Ⅰ期は堆積分布面積はかなり小さく、Ⅱ期は充分廣くて、この一帯でもっとも常見の堆積である、とする。

この項での記述は、この程度の簡単なものであるが、後に、各層から出る陶器の形態の特徴について述べられ、更に結語中で、絶対年代について言及しているので、この問題は、最後に述べることとする。

(二)建築遺存

1、小屯西地的灰溝

この節に述べられている事実ないし推定は、從来の殷墟についてのわれわれの觀念を大巾に改めさせるに充分であり、「簡報」中でも最も注目すべき箇所と思われるので、特に原文のまゝ、全てを掲げておく。

在小屯村中心以西約二〇〇米的地方、发现了一条巨大的灰沟、经探錐探査了七五〇米长的一段、宽为七—二一、深为五—一〇米、由西南绕向东北、沟内填满灰土、包含着殷代晩期的遺物、靠近洹河南岸则变成了大面积的淤土。沿着灰沟东岸探出有用碎陶片和砾石铺成断续的一条道路、长约五〇、宽二・三—五・二米。这条灰沟向西南延長的部分尚待继續探測、从其趋势看来好象是环绕着现在的小屯村。因此我們有理由推测这条巨大的灰沟是殷代王宫周围用人工挖成的防御設施、但到晩期已被堆积所填满。根据钻探所知、灰沟附近没有夯土墻一类的痕迹。由于目前尚未进行全面了解、难于做出最后結論。

未だ発掘の段階に至っていないため、推測に保留がつけられているのは当然であるが、もしこの推測が当っているなら、殷墟においてはじめて発見された城壁と同様の機能をもったこれに類るものと言えよう。「簡報」での推測のように、この「巨大的灰沟」が人工かつ殷代のものであって、小屯村をとりまき、西南にのびる未探査部分が洹河につながるとするなら、洹河の水をこの部分で分流させて、殷墟の中心部分たる小屯一帯の四囲を河流で取りまいていたと考えられ、殷代における都邑構造を知る上に大きな意味をもつことになるであろう。鄭州城壁がはたしてこれに先行するなら、それとの関連もまた重要である。また、殷大墓よりも規模の大きい、おそらく殷墟について從来しられた最大の土木工事であろうと思われ、これまでその使用目的について屡々論議されてきた小屯C区を中心とする水溝との関連も考えられ、再検討が求められるであろう。灰溝中からの出土物が、単に「殷代晩期的遺物」とのみしか記されていない点は甚だ残念であり、探査部分の平面図の発表も待たれる。

2、夯土台基址

完整遺存なく、ただ殷代及び後期に擾乱され、復原不能の夯土台基のみを発見。挿図より、それが、「小屯西地」と考えられる。

3、窖穴

○円形窖穴	五七ケ
○楕円形窖穴	三五ケ
○長方形窖穴	一二ケ
○方形窖穴	一ケ
○形状不規制窖穴	一三ケ
計	一一八ケ

これら窖穴の大小深浅は様々であり、あるものは潜水面以下に及ぶ。用途については、多くは貯蔵用であろうが、あるものは昇降用の脚窩・台階をもち、「奴隷」の居住場所であった可能性があり、また深い窖穴は、当時の井戸であった可能性もある、とみている。

尚、ここで注目されるのは、木製耒の痕跡に関する次のごとき報告である。

少なからざる窖穴壁上に明瞭な木耒の痕跡を発見、すべて双歯で、大型の耒は、歯長19cm、歯径7cm、歯距8cm（小屯西地三〇五号灰坑）、小型の耒は、歯長18cm、歯径4cm、歯距4cm（大司空村灰坑）である。これまでは甲骨文と金文の字形から耒の形状を推断するのみであったが、今次新発見の痕跡は、耒の形状・寸法を明らかにしえたのみならず、木耒が、殷代の主要な起土工具のひとつであったことも明らかにしている。（挿図略）

從来も、しばしば殷代の重要な工具として木耒が使用されていたろうと推定されてきた（例えば関野雄「殷王朝の生産的基盤」中國考古学研究所收、を参照）が、ここにはじめて考古学的に確證を得たわけである。

4、手工業作坊

(1)鋳銅遺址

小屯東南一キロの苗圃北地で、一一二五m²を発掘したが、この遺跡は少くとも一万m²以上に及ぶと考えられる。一九五七年河南省文物工作隊によって発見された薛家荘の鋳銅遺存から東西僅か四〇〇余mしか離れていず、一ケの遺址である可能性がたいへん大きい。

○長方形房基一座——東西8.1～8.2m、南北3.6～4.0m、墻0.5m、東西二つの部屋に分れ、東の方が大きい。西の部屋に瓢形竃址一ケあり。房内の主要出土品は殷代晩期陶片・陶范、房基附近には大量の陶范・坩鍋片など。

○その他、單間房基（鋳銅作坊）多数。

○鋳銅遺物

坩鍋

陶范——凡三八三五塊（うち外范二八二〇、内范一〇〇三、陶模七）。器形には、觶・觚・斝・爵・鼎・簋・戈・卣・盤・器蓋などあり。

鋳銅技術上の問題についての叙述は省略するがこの遺址から銅鉱石が全く見い出されなかったところより、おそらく鉱山近くで冶煉して銅塊をつくり、それを運びこんだのであろう、としているのは注目すべき点であろう。

(2)製骨遺址

北辛荘南地（ここを「殷墟的辺縁地区」とみなす）において、房基一座（長方形2.8×1.95m²）・骨料坑一（楕円形7.85m×1.8～2.9m——共存陶片より殷代晩期とする）とともに発掘した二四七m²内に豊富な骨料・半製品・製骨工具（青銅の刀・鋸・鉆や礪石）などを発見、このあたりを骨器作坊の遺址とみなす。骨は牛・馬・猪・羊・狗・鹿の肢骨や鹿角などで、人骨は全くなく、その点、鄭州と異なる。

(三)墓葬

凡てで二六〇餘座を発見、その形制より、墓道をもつ長方形竪穴墓・長方形竪穴墓・无横穴の人骨架・瓮棺葬の四類に分類できる。別に十座一列の排葬坑・一座の殺殉坑・二座の車馬坑を発掘。

(1)帯墓道的長方形竪穴墓

二座。大司空村東南に、東西並列し、間隔は02m。一座は已盗掘、一座は保存良好。墓室3×184～1.9m²・深さ75m、墓道は北辺にあり全長2.6m、五段の階段がある。人骨・随葬品・腰坑なく、いわゆる〃仮墓〃の可能性がある。

(2)長方形竪穴墓

凡て一三七座。各地点で発見あり、大司空村と小屯西地が最も多い。

墓室構造は「二層台と腰坑をもつもの」「二層台のみ」「腰坑のみ」「口底同大」「頭前に壁龕のあるもの」の五種あり、前二者が多い。葬具はみな腐朽しているが、残迹より松または梛のあったとみられるもの八五座、棺の大きなものには、往々紅・黒色の彩繪がある。葬法のあきらかなものには、仰身伸直葬（凡七五座）・俯身伸直葬（凡一七座）の二種あり、また、殉人を伴うもの四座。随葬品を伴うもの一〇二座、陶器が主で、少数の銅器・玉器などあり、また二件の漆盤・一件の残漆盒あり。

(3)人骨架

殷代灰層あるいは窖穴のうちより、六九体を発見、大部分は小屯西地である。

(4)瓮棺葬

四二箇を発掘、多くは居住址附近にある。葬法は仰身直肢と仰身屈肢の二種、多くは嬰児あるいは十才以下の児童であり、全てに伴葬品はない。

(5)排葬坑

武官村北地約七〇〇米で、一列の十坑を発掘、一九五〇年発掘の武官村大墓より北一〇〇米にあたる。十坑は東西にならび、坑形不整、各坑間021～029m、坑0.8～1.0×2.0m²。十坑中より計五五体の頭を切りとられた人骨あり、葬具・随葬品はない。人骨はともに青年男子。この排葬坑より南五米に

類似の葬坑四排あり、また西二〇米に、墓道をもつ大型殷墓一座があって、伝えるところによれば司母戊大鼎はここから出たという。

(6)殺殉坑

この坑については、すでに郭沫若「安陽円坑墓中鼎銘考釈」およびその附録として、この「簡報」執筆者のひとり安志敏によって書かれた「関於安陽後岡殉葬円坑的説明」（考古学報一九六〇年第一期、のち郭『文史論集』一九六一年所収）によって紹介され、更に趙佩馨「安陽後岡円形葬坑性質的討論」（考古一九六〇年第六期）によって、同坑の性格について論じられた。郭氏は、同坑中出土の一鼎（高48cm、安志敏によれば、器形は大盂鼎に似る。銘三十字で、殷墟発掘所得彝器中の最長文。）の銘文中の〝戍嗣子〟（「戍」を国名とみなす）が、同葬坑の墓主であろう、と見、これについて趙氏は、殷代独立墓は通常長方形をなすのに反しこれが円形である点、および二五体中より墓主を明確に指摘しえぬ点などから、同坑が大墓ないし建築物の附属墓ではないか、とし、またこの坑に埋葬されているのは、一族の戍卒とそれを率いる首領であろう、とした。

さて、「簡報」によれば、同坑発掘は二次に亘ってなされ、前記の安氏の文章は、第一次を了えた段階で草されたものの如くである。一九六〇年に第二次の発掘がなされ、更に下層から、人骨二九体などを発見（計五四体）、第一次発掘では、深さ248mとあるが、第二次発掘では、378mまで掘り下げられた。

上層二五体の葬法はまちまち、うち一体の前額には、明瞭に刀砍の痕跡がみられる。鑑定によると性別不明の一体を除いて全て青年男子で、年令は一四、五〜一八、九才が最も多い。随葬品として銅鼎などの青銅彝器・武器の他、貝・粟・麻織物などがある。上、下層の間には陶器砕片が満たされており、おそらく人骨を隔離したものであろう。下層二九体の葬法は、仰身・側身・俯身跪伏の三種で、前二者が多い。跪伏の二体は、その状況からみて、捆縛されていたものらしい。この層の人骨の年令は十四、五〜十七、八才の間のようであり、判定しうるものは全て男性である。尚、五体は児童であって、ほゞ三〜六才の間かと思われる。

この坑中に、復原しえた陶器三一件あり、これと同じ類型の陶器は、殷代晩期地層中に習見のものである。青銅器はかなり晩期の特徴をもち、鼎の如きは西周初期の大盂鼎に近似し、長胡二穿銅戈も西周の作風をもっているので、この坑が殷代に属するかを疑うものもあるかもしれないが、共存陶器から考えて、この坑は殷代晩期である可能性が比較は大きい、としている。

又、郭・趙両氏のとり上げた問題については、殺殉された全てが奴隷であり、〝戍嗣子〟の墓葬に属する可能性は大きくなく、また、児童を含んでいるところから、一族の戍卒とは見做せず、祭祀用の殺殉坑であろう、としている。

(7)車馬坑

孝民屯南において二座を発掘。二坑並列し、南北わずか15mを距つ。形状・葬法とも、一九五五年（一九五三年の誤り？）大司空村発掘の車馬坑と似ているが、細部の結構には若干ちがいがある。

○第一號車馬坑——345×3.3m²、車一、馬二、殉葬人骨一、随葬品なし。たゞ骨盤より高さ15〜20cmのところに、「席印」一片あり。尚、二六本の車輻を有する車輪があり、殷墟発見中、完全に保存された唯一のもの（大司空村発見の車輪は大略半円形にのこり、車輻は十八本と考えられている）。

○第二號車馬坑——南壁を唐墓にこわされ、廣さは不明。内部の情況は第一號と基本的には同じである。たゞ人骨がみられないが、唐墓に破壊された可能性がある。

(四)文化遺物

Ⅰ、陶器

修補復原の上で、三百余件に達した。一般に器形は、従来殷墟習見のものであるが、はっきりした層位に基いて、陶器の進行分期が可能である。

(1)梅園荘Ⅰ期（二里岡下層と接近）

陶質は、泥質黒陶、泥質灰陶を主とし、両者はひとしく35%以上を占め、次は夾砂紅陶、その次は夾砂灰陶である。陶器紋飾は、細縄文を主とし、次は磨光素面、その次は印紋と弦紋である。器形を復原しうるものはごく少ないが、高足鬲・扁平三角形鼎足・平底斝・圜底罐・盆・鉢などがあり、そのうちで高足が最も多い。

(2)大司空村Ⅰ期

陶質は、泥質灰陶を主とし、夾砂灰陶がこれに次ぎ、泥質紅陶と夾砂紅陶はごく少くて各5%を占める。紋飾は、縄紋を主（粗細縄文并存）とし、弦紋がこれに次ぎ、素面はかなり少なく、附加堆紋は更に罕であって、薄胎夾砂圜鬲上にみられるのみである。梅園荘Ⅰ期の印紋、磨光素面はないし、また晩期の三角劃紋もない。主要な器形には、鬲・甑・簋・盆・豆・罐・尊・杯などあり、鬲が最多、簋がこれに次ぎ、すべてかなり顕著な時代特徴がある。鬲の形制にはいろいろあるけれども、基本的特徴は、斂口・深腹・足尖稍高な点である。簋の基本型には二種あり、一種は浅腹かつ腹壁が垂直に近いもの、他の一種は深腹であり腹壁が傾斜して縮まっているもので、後者が最も常見する。

(3)殷墟晩期（梅園荘Ⅱ期・大司空村Ⅱ期）

この期の陶器は、梅園荘と大司空村の二處で、基本的に同じであり、殷墟の範囲内で分布は極めて普遍的であって、最晩の一段階を代表している。この期の陶質は、大司空村Ⅰ期と基本的に同じであるが、たゞ陶胎は一般にかなり厚手で、薄胎は顕著に減少しており、泥質紅陶が増加する。紋飾は、粗縄紋を主（細縄紋は極く少見する）とし、次には弦紋・劃紋・三角劃紋・附加堆紋がある。常見の器形には、鬲・甑・簋・盆・豆・罐・尊・大口罇・瓿・鉢・斝・觚・瓶などがある。器形は、基本的には大司空村Ⅰ期と似ているが、やゝ変化もあって、最も常見する鬲・簋においてかなり顕著である。鬲の形態は至って多いけれども、一般に多くは寛沿・浅腹で襠は平らに近く、足尖は甚だ矮小であるか或いは無い。簋は、基本的には前期に最も常見の形式を承けてはいるが、たゞ腹部が浅く変り、圏足が高くなり、新たに出現してくるのは、腹上に常に縄紋及び三角劃紋をつけている点である。早期の鬲・簋はまれに本期中に出てくるが、本期の特徴であるとしたこの種の形態の鬲・簋は、早期には無いところのものであって、時期を画する標準となしうる。本期新興の器形には、大口罇・罍・瓿・盤などがある。比較的特殊なものに、かなり復原可能な大型双耳釉陶罐（高392・腹径382cm）があり、これは従来は極く僅かしか発見されなかったものである。この他、三片の有字陶片が発見され、これは焼成後に刻られたものである。

以上の三期は、地層堆積に基づいて区分したものであるが、陶器の形態についても、各々に特徴がある。たとえ各期の間に新たな補充をなし得るかも知れないが、基本的な形態の演化は、かなり明らかである。

上述の容器の他、弾丸・網墜・紡輪・陶罌・各種鳥獣頭・陶範などがあり、みな殷墟習見の器物である。注目に値いするのは、かって発見されたひとつの人面陶范で、殷人の面貌を窺がえ、従来未見のものである（楊樹勛「安陽出土的人頭範」考古一九五九年第五期参照）。

2、銅器

全部で一五〇余件を出土、墓葬・遺址から均しく発見された。鏃・鑿・刀・削・鋸・鈷・錐・魚鉤、鼎・甗・卣・爵・觚・勺、害・轄・車飾・戈・矛・鏃、鈴など。大凡は殷墟習見のもの。銘文ある彝器としては、前述殺殉坑中の鼎の他、小屯西地より、蓋及び器底に「大亥作母彝」とある簋（高23cm）を出土。又、張家墳より、魚鉤を出土、今日のそれと似ているが、殷墟では珍らしい。

3、玉石器

○玉器——装飾品として魚・鳥・璧・璜・蟬・獣面飾・柄形飾・緑松石飾など。明器として斧・戈・刀など。

○石器——二三〇余件。鏟・斧・刀・礪石が多い。

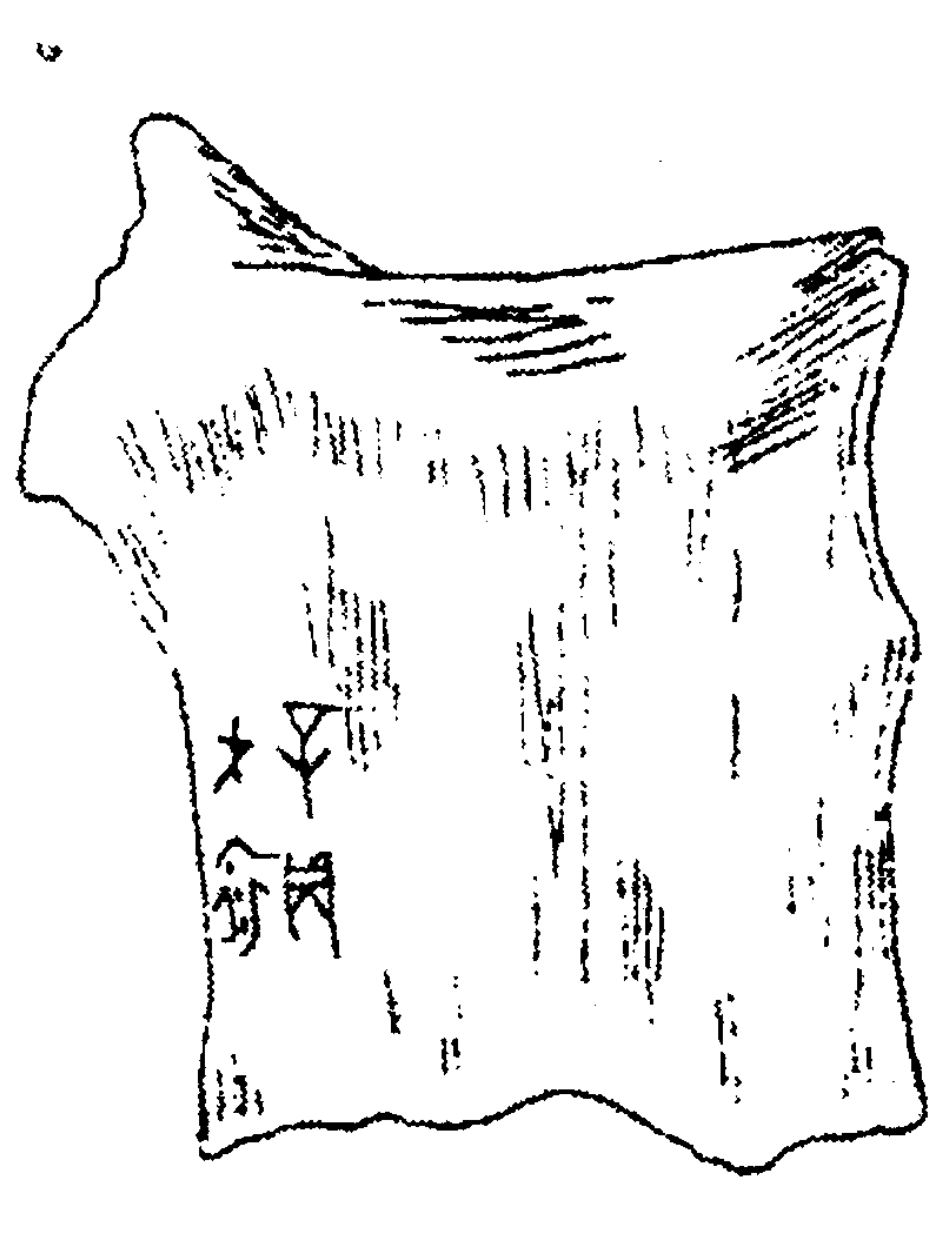
4、骨角蚌器

○骨器——六七〇余件。工具類として鏟・錐・針・鑿・刀・匕・梳・製陶工具など、武器類として鏃、装飾品類として笄・花骨など。角・牙・蚌器の出土は、あまり多くない。

5、卜用甲骨

全てで六四八片を出土、そのうちト甲一二五片、ト骨五二一片、契刻文字二片。形制は、過去殷墟発見のものと基本的に同じである。最も多く出土するのは小屯西地で、總数の約30％を占め、次が大司空村で、125％を占める。小屯を離れるにしたがって、数量が減少するようである。

大司空村発見の二片の帯字卜骨のうち、一片は一一四号灰坑より出、整治はやゝ粗雑で、臼角は切り取ってなく、正面の左辺に「辛貞在衣」の四字がある。別の一片には「文貞」の二字があり、字体は纖細で、あきらかに習刻に系る（後者は挿図なし）。



図一六　大司空村发現第Ⅰ期卜骨

（約½）

大司空村の二片の帯字卜骨は、小屯・後岡・侯家荘・四盤磨以外の、第五の帯字卜骨の発見地点である。前者の字体は武丁期の特徴を具え、地層及び共存遺物もまた早期に属するので、これは分期と絶対年代を推断する上の証拠を提供する。未切去の臼角は、あきらかに早期の特徴であり、従来の晩期に特有のものとなす説は正しくない。文辞上からみれば、たいへん習刻のようではあるが、たゞ言うところの〝衣〟は疑いなく地名であり、〝衣〟なる地名は卜辞に常見し、殷王田遊の地であって、一般には今の沁陽にあったと認められている。この卜骨片の発見で、われわれは、〝衣〟の地点は安陽附近であって、王都と密接な聯系があったのではないかという疑問をいだいている。

6．其他

漆器（漆盤・漆盒など）の痕跡、麻布の痕跡などを発見。

四、

以下、結論として、次の二点について述べている。

（一）奴隷制的新資料

ここでは、まず「殷代奴隷制」を云々する際に常にもち出される殉葬の問題を指摘し、これは、殷代が奴隷制社会に属した確実な証拠である、とした上で、武官村排葬坑・後岡殺殉坑中の人骨が、全て男性であった点は注目に価する一現象である、とする。また、手工業作坊の発見については、これが農業と手工業の大規模な分業を反映したものと見、かつ、手工業作坊遺址が散在し、規模も大小さまざまで、ある遺址から発見されるのが必ずしも単一工種ではない、などから、生産は一奴隷主の需要によって行なわれたのではなく、いまだ國家統一的事業分工が行なわれていたのではない、とみる。また骨器作坊から発見される青銅工具が粗末なものであることから、奴隷は多くの労力を耗費せねばならなかったし、奴隷主の残酷な剝削のもとでは、精致な青銅工具を採用できなかった、とする。そして、殷墟の範囲内では、殷代晩期堆積がもっとも豊富であることをもって、殷末における奴隷制の鼎盛状況を反映したものと見做せる、と結んでいる。

ここで前提にされている殉葬者をたゞちに「奴隷」とみなす点について、白川氏によって疑問とされた（白川静「殷代の殉葬と奴隷制」立命館大学人文科学研究所紀要二）ように、未だ検討の余地はありうるし、発掘の報告とは別個の問題として多角的に取り上げられるべきだと思うので、ここではこれ以上ふれないことにする。尚、「簡論」では、結論以前の箇所でも、たとえば殷代宮殿と陵墓の所在地は「大奴隷主の直轄範囲」である、とか、人骨架は殷代の「奴隷」の墓葬であり、「奴隷主」に殺戮されて窖穴や灰層中に棄置されたのだろう、とするなど、数ヶ所にかゝる見解が述べられている。

（二）殷墟的分期和断代

○梅園荘Ⅰ期――地層からこれが最早期の一段階であることを説明しえ、その基本的内容は鄭州二里岡下層と似ているけれども、絶対年代は想定の方法がない、とする。たゞ、一九六〇年に、孝民屯からもこの種の性質の遺存が発見され、この層が殷墟範囲内に少なからず分布していることを証明している、としている。

○大司空村Ⅰ期――地層はこれが殷代の稍早い時期の堆積であることをあらわしている。共出の武丁期卜骨によって、だいたいこの絶対年代がほゞ紀元前一三世紀前後であると推断してよい、とする。

○殷代晩期――廣泛な分布と豊富な堆積とから、更に細かい発展段階に分けるべきであり、一歩進んだ分析が待たれる。現在の資料からは、その上限は廩辛～文丁期、即ち紀元前一一～一二世紀に相当するかもしれないと考えられ一九五五年に小屯東南で発見した第三、四期とその共存陶器の如きは、絶対年代の有力な証拠である。その下限に至っては、殷代亡國の帝辛時（紀元前一一世紀）に接近するにすで、後岡殺殉坑の青銅器の如きは、形態上西周初期と近く、西周初期銅器の前身としてよい。したがってその共存陶器も殷墟最晩期を代表しているとすべきである、とする。

「簡報」における結論は、ほゞ右の如くであって、殷代遺址編年の試み」一・てよ、[illegible]一三・六頁空村の層位の説明、各層における陶器の特徴の説明、最後に各層の絶対年代の推定として分述されているわけである。「簡報」によればその発掘面積もかなり限られているらしい梅園荘・大司空村の二ヶ所が、殷墟の他の発掘地点にまでも一般化しうるのかについてや、疑問もないわけではないが、それはもとより、「簡報」も言うように、今後の発掘によって逐次たしかめられ、精緻化されて行くべき問題であろう。発掘報告中で、殷墟遺址についてはじめて編年のための準標がたてられたことを嬉びたい。たゞ、私としていささか疑問かと思うは、大司空村Ⅰ期を武丁期と推断したのが、たゞ插図一六の一片の字骨にのみ依據している点である。林巳奈夫氏が論じたところから、出土甲骨の時期からその遺址の年代を推定する点自体にはほゞ問題はない――もっともこれは小屯について確かめられた事実である――としても（「殷文化の編年」考古学雜誌第四三巻第三號四六～九頁）、そのまえに「商報」で言うように、この卜骨の一字「衣」を、一武丁期の特徴を具有している」ものと断じて問題はないであろうか。通常の小屯出土卜辞からの知識では、「辛」はたしかに早期的（一～三期にみられる）であるが、「在」「衣」のごとき結体は各期を通じて殆どないように思う（「貞」字は、問題の典型かと思われるが、插図摹本が明瞭でない）。そして、この字体より更に問題なのが文体であって、私の知る限りで「辛貞……」に類する前辞形式をもつ卜辞は、小屯卜辞中にはないように思うし、たとえあってもそれは極く例外的なはずである。又、「簡報」では「在衣」と讀んで、衣を地名と解しているが、小屯卜辞において郭沫若氏などにより地名と考えられてきた「衣」は、私見によれば、あきらかに地名ではなく（その点は別稿で詳論の予定）、この卜骨を「簡報」の如く解せるなら、これが殷墟卜辞中「衣」字を地名として用いた唯一の例であろう。加えて、「辛貞在衣」では、「卜辞」たりうるか疑問である。「簡報」には何ら触れていないが、裏面に灼痕があるのだろうか（摹本には、表面に卜兆が描かれていない）、こう考えてくると、「簡報」でもやゝ疑問だとしているように、本片が、今次発掘の他の一片と同様、「習字骨」である可能性がたいへん大きいよう考えられ、はたしてそうだとするなら、この四字の字体から武丁期と見做すのはやゝ武断にすぎるようである。少くとも、従来の小屯卜辞の知識をもって、この大司空村出土字骨の年代を推定するのは危険ではあるまいか。もとより、私が何らかの結論をもっているわけではなく、武丁期であるかも知れないし、それより早いか、あるいは遅いかも知れない。只、このト骨の時期決定が、「簡報」における殷墟遺址編年上で重要な意味をもっているからには、その推定は大いに慎重になされるべきだろうと思う。

以上で「簡報」のほゞ大綱を紹介したが、もとよりかなり省略した部分もある。前述の如く、殷墟発掘は、従来とは異って、一九五八年以降は殆ど継続して行われているようであり、おそらくは現在も進行中であろう。「巨大灰溝」がどのよう

にのびているかなどは殷代研究者の誰しも大きな関心事であろうと思う。今後も発掘の継続と、そして速かな報告とを、是非とも期待したいと思う。草率に筆をとったため、あるいは大きな過誤を犯しているかも知れず、その点、御諒恕をわかいたいと思う。

〈後記〉

以上を書き上げたのち、考古一九六一年第四期を入手しえたが、ここに、中国科学院考古研究所資料室「中国科学院考古研究所一九六〇年田野工作的主要収獲」があり、このうちに、「二、殷周時代」の「（一）安陽殷墟的新発現」なる一項があって、すでに「簡報」でもごく一部ふれていた、一九六〇年度の発掘の状況を簡単に紹介している。本書もまた、我国には殆どもたらされていないようであるし、短いものなので、以下に全文を訳出しておく。

○

一九六〇年安陽殷墟の工作は、一歩進めて、一九五九年に行った分期を証明した。孝民屯と苗圃北地において、〃梅園荘Ⅰ期〃と〃大司空村Ⅰ期〃の遺物を、別々に発見した。殷墟の布局について、新たな認識もあった。

まえには、殷墟の手工業作坊の分布は、一定の区画があり、苗圃北地は鋳銅作坊、北辛荘南地は製骨作坊などとみなした。実際の区分はこれほど明確ではなく、苗圃北地の鋳銅作坊の附近に、骨料や半成品などの製骨遺物があり、大司空村に陶器と製骨遺跡があり、孝民屯と四盤磨でかなり多くの鋳銅陶范を発見したりもした。無論、一種の手工業生産に従事していたたけではないようであり、まして、鋳銅作坊が一処ということは決してない。

苗圃北地の鋳銅作坊遺址で、長さ1.2mに達する方形陶范と、〃流道〃であったかもしれない焼流面とを発見、これは殷代の大型銅器鋳造方法を研究する際の重要資料である。孝民屯遺址で出た陶范は、下層には尊・瓿などの容器と矛があり、上層はわずかに戈・斧の二種のみであった。

別に、各区で発見された殷墓では、随葬陶器の組合せに一定の差別があり、あるものは觚・爵・豆を主とし、あるものは豆がなくて鬲があり、この種の不同が、時代の早晩によるかその他の原因であるか、尚一歩進んだ探討が待たれる。苗圃北地で、一件の銅鏟、長さ21cm、寛11cmを出土、これは大司空村に次いで発見された第二番目の殷代銅鏟である。

（原載《甲骨學》第九號，一九六一年）

貝塚茂樹氏著「京都大学人文科学研究所蔵 甲骨文字 本文篇」を読んで

赤塚忠

私は、前号で「京大人文研甲骨文字」釈文篇が早く出版されるようにとの希望を述べたが、これ程早く公表されるとは思わなかった。図版冊の分期分類はこの用意がなければ出来ないことではあるが、釈文にはまた別な準備と工作と、更には印刷の労苦があることを推量していたからである。しかも、これは實に周到な用意と、細密な解説と、斬新な解釈とから成っており、これに加えて、とかく難解で近づき難い甲骨学を一般知識人の問題としようとする熱意を豊かに盛っており、驚嘆すべき成果である。

本書の紹介評者は、編輯同人が適任者に交渉中であったが、手違いを生じ、今となっては最も不適任な私がそれに當らざるを得なくなった。私は、本書の公刊について、甲骨学研究の後学としての感謝の意を嘗って新聞紙上に表わした。そこで、ここには私が精読して理解した限りの紹介と卑見とを申述べることにする。勿論、敢えて批評唱異しようというのでなくて、芻蕘の言もいささかでも著者の盛意に報い、また甲骨学の発達に何か役立てたいと願うのである。

さて、本文篇は序論から始っている。序論（六章一二三頁）は、先ず人文研所蔵甲骨がその所蔵に歸する経緯を述べ、その大部分の出土坑位が小屯村中および村北張学獻の菜園に在ることを推定した後、董作賓氏の卜辞五期分期説に基いて、所得の甲骨の整理に従事しているうちに、五期説では律し得ないもののあることを見出し、遂に著者の所謂王族卜辞、多子族卜辞説を立て、賛否の両論を喚起するに至った次第を叙している。次に轉じて（第三章 甲骨文時代区分の基礎―貞人の意義について）、主として饒宗頤氏が唱え出した、後期の貞人が、それよりも前期の卜辞に人名または族名として現れていることによって、殆ど機械的にその貞人の時期を遡らせている説に對する批判の形をとって、貞人を規定する根本問題に立入り、貞人はその貞人として在職した期間が根本條件であるとして、貞人同版関係によって貞人群を再構成すべきことを唱え、この原則により（第四章）第一期貞人集團の外、第一期貞人に関連するものとして、王、扶、自、勺、叶（由）の王族貞人群、子、余、我、㣇、𩰫の多子族貞人群、ほぼ同様にして第二期の貞人に第一分團大、出、兄、逐、附属中、混合分團矣、喜、第二分團尹、円、旅、行、即、第三期貞人に何、宁、口、彘、彭、壴、口、狀、倖、逆、卯、叙、专（敍、弔、猷、犬、晛）の群を設け、また貞人の署名のな、時期については（第五章）主として卜辞表記の形式によって、第三、四期卜辞と第四期卜辞とを区別している。かく群別を立てた上で、更に進んで（第六章 甲骨文時代区分の標準）殷王室の世系を根據として貞人群の時代比定を行う方法を説き、わけても、島邦男氏の三派、多子族卜辞の類を第四期とする説に對する懇到な批判を通じ、先王稱謂、祖先合祭・同版関係、坑位等の本質、卜辞の特色とくに兆側刻辞、および卜骨卜甲の處理法の傍證を擧げて、王族卜辞、多子族卜辞の第一期に屬することを明白にしていられる。

この序論は、本書の時期区分の理論的根據を示しているばかりでなく、時期区分の主要問題を網羅し、そ、根本から、しかも明快流暢に説いているので、これに基いて圖版を讀めば、殆どこの序論だけで、最近の最も優った分期説に通ずることが出来るであろう。

序論の説と、著者の先行論文「甲骨文断代研究法の董説変遷観の批判」（中国古代史学の発展）、「甲骨文断代研究法の再検討」（東方学報第二十三冊）とを比較して見る

と、前者は、後者の要を摘み、最近の分期説に對する批判の外に、先王稱謂・同版関係・卜甲骨虛理法等の確證事項を加えて推進しているが、王族卜辞、多子族卜辞に関しては、勿論それを確證するものであって、その主張にはかわりがない。ただ、序論に於て、管見では、新に提唱されたものは、主として第三・四期卜辞という一群を設けることに関連するものである。獨特な字體で省略形式をとっている一類の卜辞があり、その時期判定には甚だ困難するのであるが、著者はそれを第三四期卜辞として一括する。それは、第三期を中心として第二期、第四期の前後に亘り、時代を餘り正確に指定することを避ける（頁八七）という時期の上では多少の便宜性を含むが、分類は便宜的ではなくて、それに積極的意義を認めているのである。即ち、著者は、卜辞形式を、貞人署名標準式の外に、干支卜貞人名形式、干支卜王形式、干支卜形式、貞形式、干支卜王貞形式、干支卜貞形式等に類型化し、第一期には標準式と同時に干支卜貞形式、干支卜形式の共存した事實を指摘し、これを媒介として王親貞卜辞（干支卜王貞形式、干支卜王形式）を中心とする王族卜辞が第一期、第二期の公式貞人集團に密な連絡をもつ特殊貞人集團のものであることを示唆し、また第二期には標準式と干支卜王形式が共存するが干支卜形式がないこと、第三期貞人集團の卜辞には標準式、貞形式、干支卜貞形式、干支卜王形式等があるが、干支卜形式が殆ど存しない事實を指摘した後、これを伏線として、所謂第三、四期の主なる特徴をその干支卜形式と貞問直叙形式とに於て捉え、その第四期卜辞への展開を重視すると共に、第三期に標準式と所謂第三、四期の省略形式との共存する事實を、前者は書體、書風が因襲的、頽廢的、後者は新鋭、文體は前者が傳統墨守であるのに對し、後者は「第一、第二期の干支卜貞、干支卜の二省略形式をその儘継承した外に、第一、第二期に於てもっとも廣く行われた貞形式卜辞の代りに貞問直叙形式なる新形式を發明し（第一期に於ても稀に「隹我出作禍・不隹我出禍」＝前一、二七、四、「王貞龍方代。勿隹龍方代」＝乙三七九七のように直叙形式に當るものが存するので「發明」とはいえないのではないか）、これを最も頻繁に使用している。要するに、第三期貞人署名卜辞の保守性に比較し、第三・四期卜辞は革新性を示している」（頁八八）と解釋し、そうして、第四期を、董作賓氏が単に復古の時期とするに對して、復古的にして同時に革新的時期とし、この第三期に貞人署名卜辞の保守的墮落的傾向と相並んで、第三・四期の革新的創造的傾向が存することはその第四期の先驅をなすものであり、後者の卜辞形式は第一期以來の固定した形式が無力化し、第四期の新形式に至る轉換期の具象であると、その意義を強調しておられる。また、第四期卜辞については、通常第四期として認められるもののうち、干支貞形式、干支卜形式、貞問直叙形式が第四期のものとして確定し得る事實を指摘し、それは革新性を最も鮮明に力強く現わしているとされている。かくて、更に「要するに第三期以後盛んに守り、第四期以後貞人署名卜辞を圧して、殷代卜辞の本流となった貞人署名を省略した干支卜、干支卜貞、干支貞諸形式卜辞は、第五期に勃興した干支王卜貞形式卜辞とともに王朝の公式の貞人集團の傳統の天筮、三個人の神秘化、その世俗的、宗教的權力の集中の現われと理解することができる」と論じておられる。

これは、始めて所謂第三、四期卜辞を設定し、その意義を指摘し、卜辞形式の展開研究についての注意を喚起している点で重要であるばかりでなく、董作賓氏の舊派新派交代説とは異った、斬新で興味深い殷代文化發展觀を述べていられるものでもある。また、拙い要約では觸れ得ないが、重要な問題提起も多く含まれている。

私は、著者の歸結としている時期が降るに従って貞人がその權威を失墜し王權が擴大されるということには賛同し、それを殷代社会文化展開の最も特徴的現象と考えているのではあるが、残念なことには卜辞形式の詳細な研究を欠いているので、卜辞形式が系統的な展開をしているが、それが殷文化展開のそれと相即的現象であるか、省略形式のうちでは何故に干支卜、干支卜貞形式が特に重要であるか、それが、董氏のいうような第二、第五期の所謂新派の王親貞ではなくて、必然的に第五期の干支王卜貞形式に連絡するものか、第三期に貞人卜辞と第三、四期卜辞とが共存するのは、第一期に於ける公的貞人と王族貞人、多子族貞人との関係のように異傾向派の共存としてより以外には解釋し得ないか、等を確認し得ない。この面に心ある学者によって検覈され支持されることを望む。

著者が、S〇二六九、珠二七七によって、「或は干支卜貞、干支卜形式卜辞は王親貞卜辞の省略形態ではないかとも考えうる」（頁七二）とされているのは、そのうちに含まれている重要な問題提起の一つであるが、両者は王親貞卜辞であるから、その限り、ないしは所謂王族に於ては事實であるが、それを干支卜貞、干支卜に一般化して考え得るかは疑問ではなかろうか。ただ、例えば「庚申卜王貞、余伐不。庚申卜王貞、余勿伐不。癸亥卜殻貞、翌乙丑多臣伐缶」（乙三〇〇七）、「辛亥卜王貞、母父乙吾軍。十一月。戊午卜爭貞、惠王自往犯、十二月」（乙五四〇九）などのように、比較的に堅ったト版の卜辞関連を見ると、第一期公式貞人集團に於ても、それが特定の貞人を煩わしたか否かは明かでないが、王親貞と貞人貞とには或種の分職があった。王親貞は第一期よりは第二期に顯著になることであるから、こういう面からも王親貞の意義を解し得るのではないかと思う。

また、著者の説いておられるように第三期および第四期が過渡的時代であったことは事実であるが、卜辞形式を離れて、祭事現象などから推すと、第二期の守成期に對して、董氏が説いているように統括的にいわれるべきものではないにしても、第三期は変動期であり、第四期は革新よりも反動性があったのではなかろうか。勿論、著者も卜辞形式だけから論じているのではなく、また「序論」の範囲では觸れ得ない研究成果が裏付けになっているので、軽々に意見を差出すことは慎しまなければならないが、董氏の論以外には殷文化發展についての論著の少い現在では、著者の論を刺戟として、多くの研究が增進されることを望むままに述べたのである。

なお、著者は「董氏はこの外に干支卜貞形式に屬する田遊卜辞を第四期武乙時代のものに擬定しているが、著者は寧ろ、これを第三・四期卜辞中に分類する方が妥當であろうと信ずる」と、明確な線を劃しておられるが、圖版篇を見ると、「　」「　」等若しく第三・四期の特徴を備えた干支卜貞形式田遊卜辞が第四期に分類されており、本文篇にはB二五・四三第三・四期に屬させるべきものとしている外、その他については特別の説明がない。この間の解説が欲しい。

前に述べたように、序論は最も備った分期説であって、私はその分期、括環・準則に異議を唱えるべきものを持合わさない。ことに著者の三族卜辞、多子卜辞が第一期に屬するという説は確實な根據のあるものとして従い、それによって多元的な殷文化の形成を究明し得るとしていたのであり今はそれは定論であるとするものであるが、なお理解し得ないでいる一二點がある。例えば、多子族卜辞に於て「壬午余卜、于一月又事」（S三二四三）の如きは、一月は王朝にて祭事のある月であるからそれと対應するとして、多子族卜辞の特殊事項[illegible]も、特に「王族所屬の私的占卜機関」（[illegible]）、「三に直屬する王族の占卜機関」（[illegible]七六）と規定する理由を十分に會得することが出来なかったその點で、王族卜辞の釋文に期待したのであったが、事項の或種の特殊性を認め得たが、王朝貞人との共通事項もあって、それが特殊集團的卜辞であることは疑わないのではあるが、その性格規定については必ず理解し得ないものを残している。「丙午卜出、三吉叙出、由繇曰若、往」（卜五七四）、「乙亥卜自貞、王曰、有孕、嘉。扶曰、嘉」（佚五八六）「癸卯卜、王曰、兆其[illegible]、貞、余勿乎延登、出曰、吉、其乎登」（前四・三三・四）の如く、貞人自身が繇辞を加えていること、一卜辞に二人の貞人のが見えることは、王族卜辞の特殊現象の一である。これにつき、著者（頁四六）は、「扶曰、嘉」「出曰吉云云」もそれぞれの繇辞とされているが、同一貞人が明白に繇辞を加えている場合は別として、二人の貞人の語がある場合は如何であろうか。殊に「余勿乎登」と「吉、其乎登」とでは距離があり、[illegible]。これに[illegible]第二期にもあり、

「丙寅卜貞兵、卜夕日、王其㞢于丁單、王曰、从邑・翌丁卯、乎若」（鉄五一九）とある。やや明確を欠くが、邑は丁（庭）に対して、地名であると思う、卜夕の下に深れという意見と王の邑の地に从りするという意見とが相反したので、兵の字に誤讀したのではなかろうか。そうであるとするならば、三朔兵への卜に於ても一連の合議裁判であるかな、この三族兵、の特殊様式もその為作な形式であるか、または或る時の逆判事態と考えることも出来るのではなかろうか。

多子族卜辞については、著者は貞人名「我」「余」を「子」の自称代名詞と解しておられる（頁五三）が、とすると、乙四九四九のように同一版二に「子・余・我」の貞人名が出するのか、殊に乙六二九八のようにしかも相接して「甲戌卜、余而于口・乙亥卜、我口口」とある「我」、「余」の別を如何に解すべきであろうか。また、多子族卜辞には「我天單」を読うているものが少くない。著者の指摘しているように、多子族卜辞の我字は固有名詞か代名詞か判定に苦しむものが多いが、S三二四四（訂文編）の「口口卜徙、今夕月我又爭」の我も巡の自称と解すべきであろうか。同じ多子族卜辞中の「子不辛、犬又爭」（乙一〇一二）によって推すと、「我」を固有名詞としても解し得る。私の多子族卜辞研究はようやく卜辞例を蒐集して、遅々分析を加えつつある段階で、決定的なことはいえないが、「余」「我」を族名を負う固有名と解すると、多子族の興味ある特殊な組織が理解し得るのではないかと考えている。

要するに、私は「序論」を読んで、分期説・殊に論争点であった三族、多子族卜辞について、問題点はほとんどここに論じつくされたが、今後は、所謂十個標準でいえば、「事類」の面についての一層細密な系統的研究が行われなければならぬ段階になったと感じている。

次に「釋文」について見ると、先ず周到な用意が施されている。即ち、第一には既刊の甲骨と綴合していることである。卜辞を理解するには、卜辞相互の関連が重要であり、それには砕けた細片の卜辞をつなぎ合わせて原型に近く復元することが緊要であるが、何分とある、しかも拓影にすってつき合わせることは容易な業ではない。なお、貝塚氏の指摘したものも補入されているが、同氏はその後綴合し得べき例を新に見出しているとのことである。第二には亀甲片については、一々その部位を注記していることである。また鑚鑿灼痕についても、随時注意している。これは現物を取扱っているものでなければ出来ないことである。第三には、拓影の不鮮明なもの、重要なもの、綴合したものについては、詳しく多くの原寸大、摹本図版が附されていることで、拓影の不鮮明に悩むことの多い甲骨著録書を見るものにとっては福音であり、また一々図版冊を対照せずとも、この図版によって本文篇だけで殆ど用を済ますことができる。

釋文は、図版冊に示された期別、甲、骨別、事類別により順序に従って行われていることはいうまでもない。ただ、少数ではあるが、分類の訂正を注記しているものがあるので、図版冊を利用するときには本文篇を対照する注意を要する。釋文には、伊藤道治氏が相当多量を分担し、よく協力していられる。ただ、何しろ大部冊であり、貝塚氏渡米の忽々のことであるから、多少統制漏れがあるように見受ける。例えば、卽（即）を或は即（S三〇七四）、或は饗（頁一三九引用佚八八八、B〇九八二、S三〇七六）とし、㲃（祝、私は饗薦に當る祭儀で、祝彰は、諸酒醸酒の意であると考えている。猶不戦金文考釈頁二）を或は「火とりて」（B一七八四）、或は「炬（ひともし）ごろ」（B一八四八）、或は意味不明（B一八四八）とし、差（差の原字ではなかろうか）を或は孚（B一九四一）、或は張（B二一三〇、B二五二四）とし、由（由＝㽕の省略形、長髮を戴く頭部の象形。巳、子字、免、冀などと古書同じで、主となって行う意であると思う。貞人名の場合を除く）を或は叶（S〇三三八、B〇九二〇）、或は由（S三二五二）、とし、允を「まことに」（S〇一六六）、「允して」（祭儀）（S五二五〇）とし、㚔（毎、原義、つまり悔の意に用いている（ものを除く。悔の假借であろう）を或は毎（晦）（B三〇四七、三〇四九）とし、或は侮（B二四二）、としているなどは、索引編輯の際に統一して頂ければ幸である。

著者が、釋文を施すに方って第一に注意されたことは、不明瞭な刻を明確にし、欠字を補って、卜辞を可能な限り完全に復元することであったと思う。それは實に丹念に行われており、例えばS〇三三八、B一八七八の釋文と拓影とを比較すれば、推察し得よう。第二には、同類型の文例を集めて読み方を帰納することであった。卜辞のような簡単な文を読解するには、これは緊要な工作ではあるが、満足な甲骨索引のない現在では容易ではない。ただ、B一九二六の鼎（象系）は象直（白）ではなかろうか。B一九四一の夊は鬼ではなくて象（𡕒）であろう。また、S〇四三八は果して「今夕其大雨疾」であろうか。管見では雨疾という語、または雨疾と連接するのは全く初見である。雨は出の字形が崩れたのではなかろうか。少しく気付いたところでいえば、S〇〇六六の「癸卯卜㱿貞、方口奚于口」の方を国族名と解しおられるが、「方帝奚于工」（乙三三七二）の文例によると、方は祭儀（祊）であり、欠字はそれぞれ帝、土であろう。B三二二一の「乙丑卜、丙貞、桒火（𡿧）柰（𡿧）雨」は、「癸巳貞、其𢦏十山（𡿧）、雨」（甲三六四三）、「癸未卜、其𢦏十山、好山、雨」（康三〇七）などの文例によると、𡿧は火でなくこの場合山ではなかろうか。従ってB一九四五も、「小山に𢦏し宗に既（饋）せんとす。直ち至（缶）之に来るや、大雨ありや」ではなかろうか。なお、S〇〇一六の「癸（亥）卜、口貞、翌（甲）寅㞢于祖乙」の亥字（恐らくは丑であろう）甲字の補入、B三二二〇綴合燕八八の「口辰卜曰、方其𢦏伐、允其乙」という抄本（方其𢦏何（𢦏、伐に紛らわしい）、允其𢦏口である。B〇九八五参照）は手違いであると思われる。

第三には、文字、事項の解釈について、既に他の学者の説のあるものは、それを掲げ、それに適正な批判を加えて、採否、または新解を示していられる。これは、著者の学問は多くの学者の協同とその集積の上に発展されるという持論の實践と推察され、敬服に堪えない。殊に、島氏、白川氏の労作には深い注意と推奨を示していられる。本誌連載中の池田氏の殷編釋文にも注意して頂ければなおよかった。また「孝数」「刻辞」（頁三五三）、「週祭」（頁三七七）「殷代地理の問題」（頁五一一）その他甲骨学の主要な問題、成果については紹介批判が行われている。これらを読めば、甲骨学の高度の概説に通ずることが出来る。

ただ、他の学者の説を採用された中で、S〇〇四七〇の丁を祖先の丁または上帝と解し、S二五七一以下の「貞、在甲丁示宗」の如き丁を丁祭と解するのは如何であろうか。丁が十干の一、殊に恐らくは先王の略称として用いられていることの外に、帝（上帝）の假借とし、また丁（禘、啻）祭なるものを説き出したのは、島氏の特色ある大胆な假説である。だが、それは丁（口）という字形から見ても、その音から推しても、庭（祭庭）の原字に外ならない。一㞢匚于丁、于南室形」（佚四一三）の如きは、丁（庭）と祭室との関係を示すものである。「癸于丁」（前一四六・五）の如きは中央の祭庭、「祖甲丁」「武乙升（祊＝祊であろう）丁」「武乙宗丁」はそれぞれの祭庭、祊宮の庭、宗廟の庭であろう。従って、「祖甲丁其宰」は所謂丁祭を貞うことには関係なく、祖甲の祭庭に如何なる牢数を用いるかを卜問しているものであり、「文武升丁其牢。茲用」（前四・三八・三）がまた「文武升其牢、（茲用一」（同版）とも書かれているものがあるが、その十にいて、「在升、用、王受又」（南明七二）とあるのは、この種の文例が祭祀を問うに主意のあることを示しているのではなかろうか。また、S〇三八九、B〇九七〇、S三一四五の「侯告」を「侯の告げ」と解して居られるのも、董、胡、陳、饒諸氏の説を排して、侯告は侯名ではなくて侯の告げであると解した島氏の説を尊重されたものであるが、「口亥卜㱿貞、王勿隹侯告从・冀、勿隹侯告、征人」（乙六八二二）という明證があるによると証侯ノ告とはしなければならない。「合殺从侯告」という文例は「今多子族从犬衆冬蜀」（前六・五一・六）と同様である。島氏が告を本備のままに解したのは、甲骨中に告を地名とするものが見出し難かったからではなかろうか。殷金文乃至殷式金文を見ると（殷文存殷尊一三、又三殷）、告が族名である證に乏しくない。告は饒氏（殷代貞卜人物通考一〇一六）の説かれているように鄂の或族であろう。勿論、これらは僅々検討を逸したものであると思う。

第四には、難解な文字、新出の文字には可能な限り丁寧な解釋を施していることである。偶々S〇一五一の受出又（受又又）の出を特に「出」と

訓ぜられると、Sの二六では原形で残すとこれた[illegible]、[illegible]（弜）にB一七九二以下一は訓讀が施これているとす。その理由を說しているように見受ける。何かの機會に補って頂きたい。文字の字形、用例に對する注意は綿密で、例えば、玄と其との使用別（頁六三七）、[illegible]の字四二に對する使用法の指摘などは興味がある。ただし、確かに[illegible]の字は四土に用いられることが多いが、[illegible]の字形、[illegible]（撰三六六）の字形に作っているものもあるので、[illegible]は小土の合文ではないであろう。同様に[illegible]（乙二二九八）も小帝（禘）ではなくて、帝（禘）の異體文字ではなかろうか。注目すべき新解釋も多い。例えば、從來定解を得なかった[illegible]を[illegible]の初文（頁二五三）とし、[illegible]數を蒐數の（頁五五三）或は治兵の原形か）とし、地名の止（之）を帝のつねに降下する場所（頁四六九、祉・改、時の古語か。ただし止若は二語で一神名ではなかろうか）とされているなどは興味がある。しかし、何しろ字數も多い上に解讀可能な文字は既に解されており、殘ったものはよくよく難解であり、かつその種の文字は用例も稀であるから、新解釋には學者の間に異說の出るものもあろう。いったい文字には、その構造の法則性と時代的特色とがあるものであるが、その點では象形の具體性を重視していられるようである。時にその象形解釋がやや過ぎるのではないか（例えば爵、殺）と思われるものがあるが、これは次に述べる古代事實探究の意圖と関連することであろう。

第五には、甲骨文字に對し一々近字を當てて卜辭全文の釋文を示していることはいうまでもないが、從來の釋文がここに止るに對して、達意を主とし、しかも原文構造に即した訓讀がつけられている。中國文化に關心のあるものは、如何なる初學者も一讀して甲骨文の如何を理解し得るであろう。

最後にいわなければならないのは、その釋文と相俟って、廣い視野からする古代事實に関する斬新な見解が解說中に縱橫に盛込まれていることである。例えば、殷代に於ける帚（婦）の生活樣態を北方民族のオルドとの比較によって推定されている（頁二五一）のは、事實を深く剔出していると思う。このように塞外民族の民俗と比較して殷代事實を理解し得るものが少くない。未開民族の風信仰やギリシャ神話のボレアスを聯想させる北風、北巫（頁五六三）の解釋も面白い。（この點については、私も中國哲學發生の古代事實で論じたことがある）。また、[illegible]（すは斫の象形で、[illegible]は遲、また遲ではなかろうか）、遂（両者共に土の巡るをいう）という儀禮は、台灣蕃民に見るような、土地先占の慣習によるという解釋（頁四九七）も興味が多い。

このような古代事實の復元、解釋に對しては、學者によっては異った見解を持つものもあろう。私も多少異議を唱えたく覺えるものもないではない。だが、それは多くの考證を要する。實は、そういう研究を喚起しようとする假說を示しているのもあるようである。殊に甲骨学は、ややもすれば史料に壓倒されて、視野を局限し勝ちなので、古代文化研究の範圍に擴大させようとする意図があるように忖度される。

これを要するに、本文著は誠に充實した貴重な研究成果である。私の蕪雜な紹介と意見とがその價値を傷つけることは萬が一にもないであろう。内外の甲骨学者がこれを尊重することはいうまでもない。私は、中國古代文化に關心を示す少壯の士がないわけではないが、甲骨学の難澁を避けてなかなか近づかないのを嘆じているが、本書によってこそ、甲骨学への興味と前進の勇氣とを得られることを希んでいる。

大部冊であり、高價なので、個人では備えかねる向もあろうが、廣く研究機關に寄贈されているので、それを利用することが出來よう。本會にも、著者から寄贈された。私も余恵に浴した。固より何れも會員の利用を待つものである。（B5判總八六〇頁　一九六〇年　京都大学人文科学研究所發行）

（原載《甲骨學》第九號，一九六一年）

評饒宗頤著「殷代貞卜人物通考」

島邦男著
鄭清茂譯

饒宗頤先生是一位甲骨學者，目前雖在香港大學講授中國文學，但仍傾其全力於甲骨學的研究。近年來，曾先後刊行「巴黎所見甲骨錄」（一九五六）及「日本所見甲骨錄」（一九五七）。至於這裏所要評介的「殷代貞卜人物通考」，則刊行於一九五八年的年底。

本書爲研討卜辭中所見「貞人」的專著。共分二十卷。貞人是研究卜辭最重要的基礎事項之一。卷一爲前論，分列十二項討論甲骨在地理上之分佈及甲骨之種類。卷二則對於貞人的記名卜辭辭例，綜合敍述以前研究的結果。卷三至卷十八爲本書的核心，著者就其所承認的一百三十七個貞人，分別從卜辭的內容及用語上加以分析、整理，並舉其用例加以考釋；創立新解，批判舊說。卷十九爲結語。卷二十爲附錄。

正如著者所言，僅以貞人卜辭爲對象，而從事其內容及用語的分類研究，在此以前，尚無先例。對著者精勤鑽研之功，固然不得不深表敬意，但著者在貞人所屬時代的改訂方法上，卻含有不少必須商榷的問題，令人無法首肯。

卜辭中貞人的研究，與甲骨版時代的決定具有密切的關係。因此，貞人所屬時代的改訂，一定要愼重嚴密。著者在改訂貞人的時代時所採用的方法，即著者所謂「分人研究法」。其法可分爲三：㊀同版關係，即視同一甲骨版上所見各貞人爲同一時代。㊁同辭關係，即視一卜辭中所見人名與該卜辭中之貞人爲同一時代。㊂異版同時同事關係，即甲骨版雖異，但同一時期而卜同一內容之貞人，亦得視爲同一時代。著者乃根據這三種方法，改訂屬於同一時代的貞人。其中同版關係，已爲各家所承認；至於同辭關係與異版同時同事關係之說，蓋發前人之所未發，因此如欲以此二說爲證據之際，必須具有嚴密的旁證，始能令人信服，但著者在這方面卻做得不夠充分。著者據此分人研究法所得的結果，與董作賓氏的貞人說大相逕庭，其尤甚者，則把董氏定爲第四期文武丁時的貞人及第五期帝乙帝辛時的貞人，一概視爲第一期武丁時的貞人。這是著者無確實之旁證而亂用同辭關係的結果。茲略指摘其非於下。

著者主張董氏的第四期文武丁時貞人，應屬於第一期，並舉出甲二三四、甲二三六一、乙五三四七、庫一二四八及七普八九等版爲據，認爲與第一期貞人有同版關係或同辭關係。其實上舉諸版均係時代不甚明確的零版，是否可據之成立同版或同辭關係，大半尚難遽予斷定。而著者竟未加任何考證，即立爲證據，其說之不足深信，自不待贅言。衆所周知，董作賓氏因第一期絕無「大乙」的稱謂，又因文武丁時貞人中曾見其名，所以改訂「大乙」爲第四期貞人。董氏的根據尚無人攻破，（筆者以前曾立異說，然再三精覈後，自覺董說之是而已說之非，故願在此訂正之。）著者亦未能攻破。事實上，如果不能推翻董說的根據，董說自然屹立不動，而所謂異說也者，亦逃不出臆說的範圍。這裏更可舉出有利於董說的另一例證。第一期貞人版中不見有「母戊」的稱謂，而此稱謂除第三期外，僅見於第四期的甲骨版上。其中「殷虛文字掇合」的四一一版，在董氏所謂第四期武乙文武丁時的干支貞卜辭中，刻有母戊之稱謂，其字體纖弱，貞字作方耳形。從其特徵觀之，此版之不屬於第三期，當爲有目者所共同承認。果然，則此第四期版中的母戊，如非武乙時稱其父康丁之配偶，即不外文武丁時指其父武乙之配偶而言。武乙時有母戊之稱謂與否，亦即康丁或康辛有配妣戊與否，雖在卜辭及金文中無法證明；但據戊辰彝，文武丁時確有得稱爲母戊的父武乙之配妣戊，即戊辰彝的「妣戊武乙婦」。其語法與卜辭的「妣己祖乙婦」（南明六五九）、「妣丙大乙婦」（甲一一六四二）相同，無疑是指武乙之配妣戊而言。武乙的配妣戊，在下一代即文武丁時，便稱之爲母戊。因此右舉四一一版上的母戊，可知當係文武丁時稱其父武乙之配妣戊。如此看來，此版之爲文武丁時物，已無疑問之餘地。這不僅可以旁證董說——文武丁時卜辭的特徵爲干支貞形式，字體纖弱，方耳形貞字——之正確，同時可以證明，具有此種特徵的董氏所謂文武丁時貞人，的確屬於文武丁時代，而並不屬於著者及一部分學者所主張的第一期。（參照拙著「甲骨學」第八號）

董作賓氏的文武丁時貞人說，曾引起頗大的爭論，許多學者都不表贊成，著者亦屬其中一人。但著者僅以假設爲根據而立論，或僅以零版爲證據而提出附會之說，竟忽視董氏立說根據的大乙稱謂問題，以及上述母戊的稱謂問題。實際上，著者仍未能提出足以使董氏首肯的卓越之說，此豈非反而暴露其異說之非？

其次，著者主張董氏的第五期貞人應屬於第一期，並舉出所謂同辭關係的版例以爲證明。例如關於貞人泳，㊀以庫一五一一版爲證據，主張與第一期貞人永係同一人；㊁以前四・一三・一、庫一五四二、甲二九〇、七普八一版爲證據，主張與第二期及第三期貞人有同辭關係；㊂以前一・一九・五版爲證據，關於貞人泳的卜辭，主張七甲王遣祀的祭祀終於祖甲，而此祖甲即武乙時對其祖父祖甲之稱謂，可知泳在第四期武乙時仍然生存。故其結論云：「由是觀之，泳乃第一期武丁時至第四期武乙時之貞人，所謂第五期之說，實應再予考慮。」這實在是令人寒心的論證。其中㊀，不過是偶然在第一期貞人永的永字上加三點水偏傍，其例蓋絕無僅有，極爲稀少；而著者卻以此極少之字體爲例，並因不見有第五期貞人泳之例，即主張泳，永爲同一人。此種說法，如非草率，即屬牽強。至於㊁，雖以同辭關係爲證據，但同辭關係能否成立，必須經過嚴密的考證，而著者卻未經考證的手續，直接舉爲證據，其不足爲證據之條件，自是一目瞭然。最後關於㊂，可說是對五種祀典缺乏充分理解而產生的謬說。假使把著者之說擴及泳以外的貞人，則具有五祀卜辭的第五期貞人，勢非全屬於第一期至第四期之貞人不可，其謬妄之程度自不待言。由此可知，著者所舉之論據，均不足以自圓其說。因此，第五期貞人應屬於第一期之說，不攻自破，實在沒有一顧的價值。

其實，根據同辭關係的分人研究法，如能站在嚴密的考證之上，仍不失爲一種正確的原理，但著者卻不用旁證，逕自加以亂用，其結果，在改訂文武丁時貞人及第五期貞人之際，難免犯下極大的謬誤。著者所採取的研究法，雖然足以暴露著者的無能爲力，但本書之價值並不因此而減低，如本書核心的貞人卜辭之分析，仍可贏得極高的評價。

（原載《大陸雜志》第二十二卷十二期，一九六一年）

讀池田末利君「釋衎—答嚴一萍先生」

嚴一萍

日本昭和四十年十二月，廣島支那學會出版的「支那學研究」第三十一號，刊有池田末利君的「釋衎—答嚴一萍先生」一文，我在今年二月底纔見到。因爲是答覆我的「再釋道」（刊中國文字十五期），我不能不仔細的看一下。經過翻譯後，祇能說勉强的看懂。在將近一萬字的大論中，分兩個部份。第一部份是討論衎字與「行人令」這官名的；第二部份是引證許多別人的意見來批評我的「甲骨文斷代研究新例」。我很樂意接受人家的批評，但是以批評者自居的池田君卻沒有自己的意見，這一點頗以爲憾！因此我祇想作幾點說明。

第一點要說明的是「衎人令」與「行人令」的問題。池田君根據吳能幼的封泥彙編有「衎人行令」，也有「行人令印」，以證明「行人令」這官名，但他並不承認「衎」之釋「行」爲錯誤。吳能幼的封泥彙編，這裡沒有，但在陳介祺的封泥考略裡也同樣分別收錄這兩方封泥。我不同意陳氏的考釋，有關這些問題，都是「釋衎」的題外文章，我不擬在這裡贅說。關於字形之小有不同，而非一字的例子，同樣在池田君的文章中可以發見，他所寫的「大行丞」「夷道丞」「嚴關丞」的「丞」字，一律寫成「烝」字，這與釋「衎」爲「行」，無可否認的，同是含混不辨。其實衎之所以釋道，大漢和辭典也有輯錄。雖然抄自古人陳說，卻也需要識見。在這裡我對諸橋轍次先生，不能不恭維他纔是日本的漢學耆宿。

第二點要說明的是考釋甲骨文字的問題。過去對於甲骨文字，大都根據單字作考證，因此很難在全部卜辭中讀得通順。我們現在的考釋方法，一定要求得在全部卜辭中能夠通讀；而且把所輯錄的材料統統附在後面，好讓讀者完全瞭解。因此釋「道」或釋「行」，何者能使全部卜辭通讀可解，讀者可以在我的「釋道」與「再釋道」兩文後，考察一下所附原片摹本，一定可以得到結論，我不必再作任何解釋。

在這裡，附帶要說明的是池田君對我的文章的瞭解程度，我很感到困惑。他說：

> 反之，嚴先生若把行字當做道字，則牛羊因爲行走，難道術衕亦解釋道字嗎?

這幾句話，不知從何說起。我在再釋道文中，曾經擧術衕衛等不同的字，以證明衎之不應釋行，當然這些不同的字也不應釋道；語意再明白沒有。現在池田君有此反問，眞是不可思議。在全篇文章中，類此誤解的情形還有，我無暇一一指陳。如果討論甲骨學的專門問題，而出於誤解的基礎，何處還有眞是非？

第三點要說明的是殷曆譜的問題、池田君自己承認「不懂天文曆法」，只憑「常識」判斷。所以他的批評是陳夢家、藪內清、饒宗頤，還有陳楚光的破殷曆譜等的意見之總和。總括一句，凡是反對殷曆譜的，他都認爲對的，統統抄集在一起。陳楚光的破殷曆譜，祇見一個「破」字，既破不了殷曆譜，在當時也沒有發生什麼作用。這經過我們都很清楚。甲骨刻辭僅有一版被認爲是「十四月」，這樣特殊的例子，一定另有原因，只是一時不易解答。充其量，也僅是多少甲骨疑問中的一點。如果是一位有研究經驗的甲骨學者，他一定會瞭解這些疑問的應否重視。藪內清對於殷曆譜的第二次批評，即「關於殷曆的兩三個問題」這篇文章的譯文，與我的「答藪內清氏關於殷曆的兩三個問題」一文，同時發表在民國四十六年（一九五七）一月十五日出版的大陸雜誌十四卷第一期上。轉瞬十年，纔在池田君的文章中得到一點消息。池田君說：

> 嚴先生因爲京大三〇九九的二月置閏，與殷曆譜的年曆不符，故加以修正，而改爲文武丁六年閏二月；而修正的根據，係在「殷正建丑，無節置閏」的原則下，以文武丁六年一月的冬至爲基點而計算的，然而根據藪內先生的說法，這種修正是毫無根據的。

藪內清氏過去沒有看清楚殷曆譜而批評殷曆譜；現在更否定有「閏二月」的這版甲骨卜辭的存在，而批評我的修正爲「毫無根據」。在我並不感到奇怪，因爲他對於甲骨根本沒有研究；不能瞭解，自在意料之中。至於陳夢家，他不懂曆法，所以在討論曆法的時候，有許多外行話。但他對於甲骨確有相當研究。因此，他對於殷曆譜有若干修正的批評，而不是一筆抹煞。根本的觀點，恰是完全接受而承認的。所以他對於「乙辛十祀」的一組卜辭，確認「當如殷曆譜閏譜五所推測，所閏爲九月。」（綜述頁二二二）憑這兩句話，就不能不承認「殷正建丑，無節置閏。」這一點，凡是稍具曆法常識，就不會再懷疑，也無需作解釋。這一個「閏九月」就是殷曆譜的根據，也就是我根據新出材料，修正文武丁六年閏二月的根據。池田君同意陳夢家的意見，而陳夢家的意見如此，那藪內清的批評，根本就沒有存在的餘地。然而他把兩者都採用，「這纔叫做有意的牽合」。（說實在話，他祇知道兩者都反對殷曆譜，並不知道兩者之根本不相容。）這樣的「批評」，是詭辯，絕不是學術討論。

第四點要說明的是文武丁時代的卜辭問題。我的「甲骨文斷代研究新例」的主要目的，是打破一般人把文武丁時代卜辭，仍舊列爲武丁以前，或武丁晚期的說法。所以首

先指出陳夢家分組的不合理，胡厚宣父丁子庚的錯誤，以及貝塚茂樹先生王族多子族說的不能另成系統。而文武丁年中置閏的發見，與先師彥堂夫子所舉大乙的稱謂，都是不能提前到武丁時代的堅强證據。池田君對於這些問題，都沒有親手深入研究，所以他不能達到明辨是非的境地。現在從他的文章中，得知貝塚茂樹先生已不再堅持武丁晚期說，而「認爲可以退後到第三期」。如此說來，這批被認爲「王族、多子族」的卜辭，又如何劃分爲第一期、第二期與第三期？又如何能夠確定不屬於第四期？這些標準又何在？假使同樣以甲骨斷代例的標準去分期，那麼還有什麼王族多子族的獨立存在！文武丁時代卜辭的問題，至此可謂已經完全解決，這就是「看到全體」的結論，不是只會獺祭成書，人云亦云的初學者所能領悟的！

一九六六·三·十五

（原載《中國文字》第十九冊，一九六六年三月）

「續甲骨年表」後記

黃然偉

「甲骨年表」出版於民國二十六年，是當年董彥堂師與胡厚宣先生共同編輯而成的。表中收錄自甲骨發現以來（一八九九—一九三七）有關的論著目錄，計有三百三十三條。自此以後，由於甲骨學的研究蔚成大國，著述倍增，編輯「續甲骨年表」的意念時在煩忙的董師心頭中浮現。

多年前的一個冬日早晨，董師從抽屜中取出一份「續甲骨年表」的稿本，着我細讀一過。那份年表記錄民國二十六年以後所見部份甲骨撰著的書目，這是他老人家在平日讀書撰述時隨見隨錄的底本。當時有關甲骨學的目錄書籍，除胡厚宣氏的「五十年甲骨學論著目」（一九五二年出版）外，再沒有其他有關的書籍出版，有之，亦只有散見於專書之後所附錄的部份論著目錄而已（如陳夢家氏之「殷虛卜辭綜述」等）；日本的「甲骨學」雜誌中也刊有關於甲骨學的論著目錄（見該刊「甲骨金文關係文獻目錄」加藤道理氏編輯），但只分篇刊於該書，亦無裒輯成册。胡氏之書，體例異於年表，所收書目始於一八九九年而迄於一九四九年，分門別類，與「甲骨年表」的編年格式頗有不同，但其所收錄民國二十六年以前的資料，頗多可補「甲骨年表」的闕遺。因此，「甲骨年表」與「五十年甲骨學論著目」兩書，是當時我們唯一最便參攷的書目。近二十年來有關甲骨學的專門著述出版很多，散見於國內外報章雜誌的論文亦屬不少，因而輯錄書目以供學人參攷的工作亟爲須要，董師遂將此編輯與整理甲骨年表的工作交我負責。編輯「續表」的原則，董師特別叮嚀說：收錄的資料，不分地區，不論所用何國文字，凡屬甲骨學的論著俱加輯錄。「續表」所收的七百多條書目，都是秉承這原則編成的。

一九六一年「續甲骨年表」刊於董師手創的「中國文字」季刊第三期。一九六三年十一月二十三日，董師卽世，「續表」仍以舊稿繼續刊登。其後屈翼鵬師以該表之可供學人檢用，囑續爲裒輯，印成專册；遂將已刊與未及發表之數百條重加整理，並請臺伯簡主任向中國東亞學術研究計劃委員會申請補助出版。中央研究院歷史語言研究所李濟之所長以「甲骨年表」爲史語所專刊之一，故着將「續表」亦交由史語所處理。一九六六年春，將「續甲骨年表」稿本送張秉權先生審閱；六月，我因國立澳洲大學之約離台，「續表」出版事宜，全承王恒餘先生惠予辦理，工作進展僅憑書信聯系。由於經費所限，不能鑄字印刷，乃雇員繕寫影印出版，這是「續甲骨年表」與「甲骨年表」唯一不同的地方。

「續甲骨年表」從初稿完成至早期出版，董師皆一一過目，或删或補，誠意感人。初稿中如今仍有他老人家的手蹟，有些是籤條，也有些是隨手從日曆上撕下來的小紙片，其上寫着大小不一的文字，那都是他當年增補原文的遺跡。自「續表」刊登於「中國文字」以後，嚴一萍、金祥恒兩先生時以所見有關資料告示；日本島邦男先生亦會將日本所見甲骨學部份論著目錄見示；付印之先，張秉權先生以其平日手錄卡片數十張借出校對，使「續表」資料增加不少。這册子之能面世供人檢用，其中好處，都是董彥堂教授與上述諸先生所賜予的。

（原載《中國文字》第二十六册，一九六七年十二月）

讀「殷虛卜辭綜類」與島邦男博士商榷

李　棪

余中歲治甲骨學，嘗於十七年前（1952），爲對外籍學生便於講授計，從倫敦大學西門華德博士之議，打破傳統式五百四十部首，重新根據甲骨字形，歸納整理爲一百類；以其易於檢查原文，從遊者稱便。是知治學之道，固不必墨守成規者也。近讀日本文學博士島邦男新著殷虛卜辭綜類，所用方法，與余略同，不禁欣然色喜。蓋博士自其所著殷虛卜辭研究出版(1958)之翌年，卽從事辭例整理與卜辭解讀之研究，歷八載而成是書；亦不沿用說文分部，而將三千餘個甲骨字形，分析綜合，得一百六十個部首；視余所定，更爲嚴密；然用意匪殊也。至於書中有不敢苟同之處，特寫此文，略抒管見。

本編正文摹錄卜辭，不加隸定，亦無釋說，惟正文頗注意由某一字所構成之詞語，分類臚列；其不敢斷定者，別附「其他」一項。玆擧第一頁第一字「亻形」類以見一斑。開首卽列：①「𠂤人」34條；②登人51條；③㞢人5條；④吏人51條；⑤喪人5條；⑥戈人13條；⑦眾人27條；⑧中人2條；⑨束人2條；⑩朿人1條；⑪口人11條；⑫白人4條；⑬我人7條；⑭亼人12條；⑮乙人9條；⑯正人5條；⑰伐人4條；⑱立人6條；⑲匄人3條；⑳歸人19條；㉑用人9條；㉒一人21條；㉓二人17條；㉔三人20條；㉕四人1條；㉖五人17條；㉗六人4條；㉘八人2條；㉙九人1條；㉚十人17條；㉛什 16條；㉜「十人㞢二」1條；㉝「十人又三」1條；㉞「十人又五」13條；㉟「十㞢五人；十㞢六人」1條；㊱「廿人」6條；㊲「卅人」8條；㊳「五十人」4條；㊴「七十人……五」1條；㊵「百人」3條；㊶「二百人」1條；㊷「九百人」1條；㊸「千人」1條；㊹「二千六百五十人」1條；㊺「萬人」2條；㊻「人（亻）方」62條；㊼「尸（亻）歲」19條；㊽「亻庚」（稱謂參照）；於此未有擧例；㊾「其他」172條。共引原文693條，凡49子目。按子目㉛什形有兩義：（一）「十人」二字之合文，與子目㉚之「十人」單位詞相同；（二）從人從十之「什」字，著者未有將第一、第三、第五條，列爲名詞；第七至第十五條，列爲單位詞；及第二第四條殘辭列入「其他」一項；初學者頗有難以分辨之歎。

按人字與匕（妣）字，往往同形借用；著者旣以形類次，則以匕字附之於此，本無可議。惟在複詞之前，應有單用詞例；蓋人字在卜辭中至少有三義也。（一）人名。如：「辛未余卜；乎人從射向若？」（菁華11.19）；「叀人犬乎田？田于唐？」（丙編316）。（二）地名。如：「庚申卜，穷貞：今春王其步，伐人？」「庚申卜，穷貞：今春王勿步，伐人？」（丙編276）；「辛亥卜，㱿貞：王叀昜伯兹從正人？貞：王叀侯告從正人？」（丙編55）；此地名之人，究與習見之人方，是否同一地域，雖未確定；若以𢀛亦稱𢀛方，土亦稱土方例之，則人與人方，當有關係。（三）普通名詞。再細別之，亦分五項。如：（a）「㞢羊，㞢一人？㞢叀犬，㞢羊，㞢一人品？」（丙編圖版79）；則指人牲而言。（b）「雀人芻于教？」（甲編206）；「奴雀人乎宅？」（乙編5906）；「乎王族人？」（甲骨文彔587）；則指邦人或族人而言。（c）「王其乎衆戍𢦏受人，叀𡈼土人眔𣪘人，又𢦔？」（鄴中片羽三集43.6及47.7）；「弜𢀛戍𢦏受人？」（粹編1198）；則專指駐在某地之人而言。（d）在動詞之後，如：「其喪人？」（甲編1099及誠齋殷虛文字318）；「王使人于沚，若？」（乙編1355）；或在形容詞之後，如：「勿乎眾人先于𦣞？」（京津1030；1031）；「我其喪眾人？」（佚存487）；則指集體羣眾而言。（e）「其于一人禍？」（甲編2123）；「余一人亡禍？」（金璋124）；則時王自稱之詞。以上所擧「人」字，乃卜辭數百例中之一例而已；著者綜合字形，分列詞性，用力甚勤；如能盡將含有數義之字，重加分析，以類排列，則初學者更感方便矣。

書中引用原文，往往隨意刪減，以致前後不同；亦有前後異讀，以致不相統一者；遂使讀者疑其誤解文義，或臆補字形。玆擧兩例：

〔一〕頁433「自東」類，引乙編8503片，寫爲：『……九日辛亥日酒?大雨自東小?……𩠐?西』？又在頁508「虹」類，引乙編8503片改寫爲：『……九日辛亥日酒大雨自東……虹西……』；著者在第二次引用同一片卜辭之時，旣將三個疑問符號省去，又將第一次寫入之「小」字刪削，復補足𩠐字之殘形爲全形。按李孝定甲骨文字集釋「首」字條下引此詞作：『辛亥𣄼雨自東首西』，以𩠐形爲「首」字，爲動詞，疑當讀爲徂，往也。（卷9頁2854）。李氏又在「虹」字條下引此條云：『𣄼字不識，當爲紀時字；𩠐字左側斷缺，當爲虹之殘文，爲虹之異體字，在本辭爲動字，當讀爲迺，然則虹字當釋䨮可知矣，本當收入雨部作䨮，惟以初從于省吾釋虹收入十三卷，寫定此字時，偶得乙8503片一條，始知此字商時固有假爲迺者。』（卷13頁3922）。著者豈先有李說存之胸中，故遂補𩠐形爲虹形，又析𣄼形爲三字耶？按乙編8503乃殘甲片，「自東」之下，有「小」字，而「小」字之下，殘「𩠐」形之上，究應相隔幾字，不能臆斷；李氏「東首」連讀固非，而本書頁508所引缺寫「小」字，亦未見精確。檢本書頁433「自東」類，所引殷虛書契菁華4片，有「自東」及「虹」之紀錄；殷虛文字綴合78片，79片，有「雨自東」及「大風自西」，「雨小采雨東」之紀錄；京都大學人3099片，有「雨自東小采」之紀錄。頁497「小采類」，重引綴合79片及京都人3099片之外，復引殷契佚存276片，亦有「雨」與「小采」之紀錄。若綜合上述卜辭觀之，則「雨自東」與「虹」之出現，當有關係，而「小采」則紀時之詞，李孝定謂「𣄼」形亦紀時字，雖不識，當可從也。著者旣析𣄼形爲三字，而以「大雨自東」連讀，惜其他卜辭，未有「大雨」與「虹」同見一片者，故著者讀法，不敢苟同。又著者分𣄼形爲三字，本可視爲見仁見智之別，惟不應將日形故意增加偏旁，屈就己意，使成爲一全形之酒字也。予以「虹西」連讀頗不辭，其他卜辭，亦無「虹西」連文之例；故疑乙編8503片，左方殘缺部位，應有如李孝定及著者所補足之虹形，而此形所佔契刻面積頗廣，其下當有餘位，可能刻有一「自」字，或一「于」字也。按菁華4片有「虹自北」之詞；殷虛書契前編7.43.2片，及龜甲獸骨文字1.10.12片亦有「虹自」殘詞；前編7.7.1.片有「虹于西」之詞；殷契遺珠452片亦有「虹于」殘詞；如是，則乙編8503片可以臆測其大意如次——『九日辛亥，𣄼，……雨自東；小（采），……虹（自）西』。

〔二〕頁123告字下，「其他」類，引鐵雲藏龜139.1片，寫爲：『辛酉卜，出貞：其𢀛新宗𠂤告于祖乙』，下注重出互見之片，有佚存832；續存1.1498；及南北無想462等。在頁362新字下「其他」類，及頁415「𢀛」類，均再引鐵139.1片，及重出互見佚存，續存，與無想各片；惟在頁178「𠂤」類，及頁524「且乙」類，雖亦覆引鐵139.1片，然於重出互見各片，均漏錄無想之片；前後遂有繁簡之異。又原片𠂤字作𠂤形，在頁178，頁362，頁415與頁524，均不誤；獨在頁123則改摹作𠂤形，亦嫌其不一致也。按冬飲廬甲骨第一片，卽最先著錄鐵雲藏龜139.1之牛肩胛骨殘片，惜椎拓未見加精，難資校訂。予上文引本書123，178，362，415，524各頁，寫爲「新宗」兩字者，係照原書所摹「𣂑宗」兩形所隸定，究竟著者是否如此解法，不敢妄測；因本書頁277，另立「宗」類，首條引佚存722殘片：『……卜，出貞：……王正……宗……』，次條引鐵139.1，並注出重見佚存832及續存1498，似著者並不以此爲「宗」字矣。甲骨文編卷七宗字下不收異形；惟在附錄上，頁108，有宗形，（編號4814），注爲鐵139.1。按孫海波凡例，凡不能辨認之字，或其字雖經學人考釋而尙未成定論者，入「附錄上」；甲骨文續編卷七「宗」字下引佚存832片以「宗」爲「宗」，附錄一「𣂑宗」下並引續存1498片亦以「𣂑宗」爲「新宗」。予從金說。商承祚釋佚存722片之宗形爲國族之名，殆以上文有「正」字之故；惟碎片殘辭，別無他證，若以本書頁277所擧兩條比勘之，則鐵139.1片在詞意上尤無法解釋者也。此片卜辭「其」字之下，「新宗」之上，字作巾形，諸家釋說不一，特於此提出討論之。

（一）孫詒讓契文擧例貞卜篇引作「其不新宗」；（二）商承祚殷契佚存考釋寫定爲𣥂形而無解說；（三）胡厚宣南北無想摹本又摹作𠱾形，與下文「告于且乙」之告字同形；（四）嚴一萍重印鐵雲藏龜摹本則作帀；（五）饒宗頤殷代貞卜人物通考頁861則又改寫作𣥂；并謂細審續存拓本，似從止從巾，集韻有𢂇字云古會字，凡言𢂇者乃會祭之義。著者在本書中五次均摹作𣥂形者，實沿饒氏之說；且在頁415特專闢「𣥂」類，以張其軍；義主一家，原無可議。然饒氏以繁形益㫃旁作𣥂者爲一字，著者則分爲二類。按頁415「𣥂」類只收兩條，其一爲戰後京津新獲甲骨集2746片之殘辭，只得「𣥂十月」三字，難以推論也；又「𢂇」類之標題，寫作𣥂形，所引二例，則作𣥂形；止形之方向相反，亦未爲嚴謹。予取各拓本比勘巾字，因拓墨之濃淡，遂使衆說紛紜；竊疑殆非從止從巾之𢂇字。如以爲是巾字，則又感例證不足；李孝定集釋引前編7.5.3；與文錄1.3.5；（卷7.頁2581）雖皆殘辭，然點勘前編7.5.3與佚存980兩片，知簡形之巾，與繁形之㠶，乃同字異體，而其義爲地名，若以之解此句「其巾新宗」，殊不相合。李殿魁冬飲廬藏甲骨文字考釋引章炳麟文始曰：『說文：巾佩巾也。旁轉諄，孳乳爲攟拭也；又旁轉諄，孳乳爲墐涂也。』因悟巾可通墐之義（中國文字第30期）。按詩豳風七月：「塞向墐戶。」傳云：墐塗也；說文：墐，涂也，段玉裁注云：內則曰：塗之以謹，注曰謹當爲墐，聲之誤也；墐塗，塗有穰草也。按合和黍穰而塗之謂之墐；然則「其巾新宗」，未嘗不可如李氏之解作「其墐新宗」也。「𣂑宗」一詞習見，如：甲編1040；佚存133；217南明668等；「新宗」一詞，除上引鐵139.1外，有文錄373『貞：勿于新宗酌？』之片。屈萬里曰：『𣂑，疑與新字同，𣂑宗卽新廟也。』（甲編考釋頁155）；

予按屈氏解爲新廟，與吳其昌之說同；拾掇1.390有云「且甲舊宗」（寧1.198重），殆卽且甲之舊廟；新宗舊宗，相對爲訓，固不必如郭沫若之解釋爲詩棫樸「薪之槱之」之薪（粹編考釋頁26），或如金祖同之解「新宗」爲「近宗」（遺珠頁44）也。

「新宗」一詞，嚴一萍氏在鐵雲藏龜摹本作「示𣂑宗」，如是則從辛從斤之𣂑形讀作新者，變成從辛從𠆢之𢆍形讀作匕辛；李殿魁引嚴說疑「示𣂑宗」之示形乃㞢字之倒寫，全辭乃貞問㞢祭于妣辛宗；李氏續云：『今考「㞢妣辛宗」一辭亦可商討：蓋在他人之宗祭某，必作「㞢某于某宗」，此處㞢祭妣辛之宗，似不成辭，如是在某宗祭，則某宗上又當有在字』。（冬飲考釋）。按商承祚及金祥恒兩家釋爲「新宗」較近，蓋妣辛乃大甲之配偶，而存世之完整卜辭，尙無妣辛與且乙同祀者，至於佚存410片，其下已殘，文錄287片，其上亦殘，不宜引爲例證也。本書頁543「妣辛」類收佚存410片，著者在𣂑形之旁，記一疑問符號，然則著者亦未肯定爲妣辛矣；但在同頁同類所引文錄371之片，則爲文錄372片之誤。按文錄371與372兩片，書體相類，371片新字作𣂑形，從斤之義甚顯，只372片之𣂑形爲略異耳。又本書頁271「宗·彡」類，亦引文錄371之片，揆之內容作「貞：勿于新宗彡？八月。」則亦是文錄372之訛，不知著者何以兩引文錄，均筆誤頁數也。

本書篇末，附「通用、假借、同義」用例約三百組；每組舉二形以上之句爲例證。惟既無釋說，而每組亦未標明該組果屬通用，抑假借，抑同義；遂使讀者無法揣知其意旨何在。計假借類最少，通用類頗多；同義類微嫌其過於廣泛，且中多可商者，爰分九類，爲三十九項，條舉如次：

〔第一類〕在同句卜辭中，所用之兩字，其義迴不相侔而强爲分組者，凡二項。(1)頁578下「羽、𠬛」組，引乙編751片云：『貞：𠕋上庚十𠬝，卯十羊，㞢上庚，㞢𢓊？』『𠕋上庚十𠬝，卯十羊，其㞢于上庚，亡其𢓊？』按𠬛字羅振玉釋印（增考頁59）；楊樹達讀爲副，（卜辭求義頁38）；郭沫若謂卽古孚字，「又孚」者以俘爲牲（粹編頁538）；金祖同解「𠕋𠬝爲以𠬝方之俘爲牲，讀鐵雲藏龜259·2片『我从人伐𠬝方』，則以𠬝爲方國之名（遺珠頁1）。嚴一萍重印鐵雲藏龜摹本改寫𠬛作𠔁形；陳夢家又讀此片之「𠬝方」爲印方（綜述頁284）；予按𠬛字，無論其應解作方國之名，抑屬俘之借字，其在卜辭之意義，則爲𠕋祭與㞢祭上庚時之對象；如乙編3329片，乙編5386片（卽丙編圖版44），及乙編6232片，均有「㞢𠬝于上庚「與」勿㞢𠬝于上庚」之辭；又如乙編8852片之「丁巳卜：𠬝羊上庚？癸卯貞：用𠬝羊上庚？」之辭，乙編8710及8723片，均有「用十𠬝」之辭，尤足證「用𠬝」殆用人牲以祭也。至於「㞢𢓊」之㞢字，雖與同辭「㞢上庚」之㞢字同形，然此乃假借爲「有」字，與對貞「亡其𢓊」之「亡」字，意義相反；文錄794＋795＋849片，後編下25·9片，均有「㞢羽」之辭；而甲骨續存1·171片，亦有「亡其羽」之辭；可見「㞢羽」與「亡其羽」兩辭，乃對貞之術語。𢓊字在此辭含義雖不確識，惟以丙編圖版71之「㞢古」、「亡其古」；殷虛文字綴合308之「㞢雨」、「亡其雨」；前編1·47·7，佚存999，遺珠570及988之「㞢夻」，與鐵雲藏龜95·3及粹編1135之「亡其夻」；等詞，語法相類。如是則著者所列之「羽、𠬛」爲一組，實難成立。又按粹編1288片云：『叀其𢦏𡆥？』，粹編1289片云：『叀其𠬝𡆥？』，𠬝字假借爲征服之服，與𢦏字尙可廣義相通耳。(2)頁579上，「𡆥、𡚸」組，引甲編3000片云：『魯㚤？允㚤，徃𡆥。』按𡆥形有釋囚、釋死、釋因、釋困諸說，均視爲不祥之字，與㚤之視爲吉祥之字，正相反。延𡆥，屈萬里解作延續困苦（考釋頁387）。此片關於貞問此名魯之婦人生育之㚤與不㚤，共有卜辭四條，第一條與第二條，及第三條與第四條、均「㚤」與「不其㚤」對貞，祇在第三辭之末加一驗辭「允㚤」，復綴以「徃𡆥」二字，說明魯雖得嘉，然備受困苦延續頗久之經過；似不能以「㚤」與「延𡆥」相提並論，合成一組也。

〔第二類〕割裂字形，强爲比附，遂致與本書正文分類相違背者凡一項：（一）頁587中，『冂、𠃌』組，引綴合334片：『癸亥貞：𠃌方吕牛，其𡆥于來甲申？』及通纂別錄Ⅻ·1片：『辛酉貞：冂𢆉（照原摹本之寫法）吕牛其𡆥于來甲申？』。按𠃌方亦見乙編6382，佚存387及913等片；或單稱𠃌，見甲編3690，綴合217及218等片；或稱下𠃌，見甲編942及乙編2751等片。𠃌形異體頗多，字在卜辭爲方國之名；著者在殷墟卜辭研究：殷之方國（第389頁）引孫詒讓釋台（舉例上34）；郭沫若釋勹（中國古代社會研究頁265）；林義光釋旨，謂下旨卽黎國（國學叢編一期二冊）；葉玉森釋椒（前編集釋四頁11）；于省吾釋危（駢枝頁22）；今按卜辭別有旨方（𣅀方），林說不能成立；李孝定從于說釋危，附入存疑（集釋頁4552）；可從。𢆉亦作「𢆉方」，見文錄631片；異體倒寫作𡉚或𡉚，見綴合253片；又作𢆉或𢆉，見後編下37.2及庫方1596等片；羅振玉釋旁（文編一，頁2引），屈萬里、李定定均從之，並謂旁在卜辭爲方國之名，是也。著者在殷墟卜辭研究：殷之方國，引第一期之卜辭有𢆉方一版（頁384）；又在本書頁462特立「𢆉類」，內錄九條十三例；是著者亦以𢆉爲方國之名也。不寧惟是，通纂別錄Ⅻ·1之片，亦赫然厠在「𢆉類」之第十、第十一兩例之中；不知何故在頁587，竟將𢆉形分割爲二，讀爲「冂方」以與「𠃌方」相通假。予試將著者所舉兩例讀之，則卜辭含義並不模糊；蓋在辛酉之日貞問𢆉地吕牛，復於三日後之癸亥，貞問𠃌方吕牛，如是而已。卜辭簡潔，同一詞語而只更易一人名或地名者，均習見；例如甲篇624片云：『丁巳卜：叀小臣剌吕𠣞于中室？丁巳卜：叀小臣口吕𠣞于中室？茲用。』，兩辭同文，只人名剌與口有異；然絕不能以剌與口二字視爲可通假之字也。𢆉之與𠃌方，又何以異此。

〔第三類〕因誤讀卜辭而强爲分組者，凡七項：(1)頁582上，「正、往」組，引殷契佚存116片，『貞：勿隹王正𢀛方，下上弗若，不我其受又？』；與後編上16.12片，『貞：勿隹王往伐𢀛方，下上弗若，不我其受（又）？』按正字不只一解，其中一義借爲征伐之征；卜辭習見「王征𢀛方」或「王伐𢀛方」之詞，蓋征與伐，同意互用。後編「王往伐𢀛方」之詞，與習見之「王來征人方」一詞，及甲骨續存1.744「王往征于……」，詞例相類。又卜辭有一成語『往來無災』，往與來，相反而相成者。若島氏以「征」「伐」爲一組，吾無間言，惟舍此而定「征往」爲一組，則失之疏矣。島氏或先由一種錯誤觀念所引起，因之淆混不淸，故在同頁，更以「正、征」同組，「正、徃」同組，「征、往」同組，「征、𢓋」同組也。正字，具詳嚴一萍釋「征𢓋」（中國文字十五期）。(2)頁584中，「㞢、𥞥」組，引甲編3430片『……辰卜，𡧊貞：受㞢年？』（按原拓作𠆢作𥝌作𥞥，著者誤摹）；與殷墟書契續編2·29·3片，『甲子卜，㱿貞：我受𥞥年？』。按著者在1958年所著殷墟卜辭研究（頁496—497），有六類受年之紀載。其中第一類以『受㞢年』與『受𠂇年』並舉，引穀梁傳五穀皆熟爲有年，以證「㞢年「與𠂇年」皆「有年」之借，是也。其第二類以「受黍年」與「受𥞥年」並舉，以爲黍𥞥一字，亦是也。其第三類以受𥞥年」獨舉，引羅振玉釋𠫑；唐蘭釋𦎫卽𦎫讀如𦎫，𦎫與稻同；陳夢家讀秬；著者疑之而未定其讀，存俟考定。然則「㞢」之與「𥞥」，著者本人亦已知其不相通之故矣。(3)頁577上，「𠦪·丁」組，第一例引佚存924片「丁裘」與續存1·1505片「父丁裘」爲比，乃屬省文之例，尙無誤；惟第三例引前編1·36·3片：『庚辰卜，大貞：來丁亥，其𠦪口于大室，勿口西鄉？己丑……貞……庚……𠦪㞢于匕庚五羊？』旁有日文小注謂口乃武丁，妣庚乃小乙之配。按口形之大小無別，用之於干支及王名之時則爲丁字，用之於祭名之時則爲祊字，諸家解爲報祭是也。卽以著者所舉之例言之，「𠦪、口」隸定爲「款、祊」或「款報」，二者皆祭名；「𠦪、㞢」隸定爲「款、又」，二者亦皆祭名；固不必讀「口」爲父丁之省也。又鐵雲藏龜之餘第13片，有「來𠮷王其𠦪口？」之語，干支在丁亥，而丁亥之丁字作口形，與𠦪祊之祊字作口形者正同；然甲編2799片，『丁未卜，何貞：𢀜小乙爽妣庚其𠆢鄉？』則以丁日卜𢀜祭于小乙之配妣庚矣。著者豈以前編之例係丁亥之日舉行祭祀，遂連類以口爲丁字歟？復次，就令「𠦪、口」之「口」，可讀爲「丁」字，然下文「勿口西鄉」一詞，亦不能讀爲「勿丁西鄉」也？(4)頁585中，「伊、黃」組，曾舉四例，均以伊黃對舉，似是一人而異名者。按祭祀伊尹之卜辭，自武丁，以至廩、康、武、文，均屢見之；惟祭祀黃尹之卜辭，僅見于武丁時。陳夢家嘗列舉三證，以見伊尹非阿衡，而卜辭之黃尹、黃奭、卽詩書之阿衡、保衡；伊奭、黃奭，可能是伊尹、黃尹，亦可能是伊、黃之配偶，且綴合篇47伊尹、伊奭，並見于一版，而乙編中黃尹、黃奭並出于一坑，所以不可能是指同一人。又以伊尹、黃尹在種種方面是如此平行，故疑黃尹可能是伊尹之子（綜述頁363—364）。按陳說雖未十分確定，至少伊與黃之是否同名互用，尙要進一步之研究也。(5)頁583上，「丁、𠃉」組，引粹編370『𠂤𠃌莫』，『癸卯貞：未徃𠂤丁，其隹凡？』之片，曾改訂郭沫若之讀法。按郭讀爲：『癸卯貞：𡆥未徃𠂤示其隹凡。丙午卜：𠂤叀𣪘□□子酒莫』，亦頗難解；著者將郭之第二辭割裂横行三字作「𠂤𠃌莫」，姑無論其當否，惟細審粹編拓本，幷不作𠃌形，惜此處有裂痕，不能定爲何字，故郭用□符號，表示不識，予以爲絕非𠃌字也。若以殘辭孤證，特出一組，竊以爲未善耳。(6)頁584上，「告、𠕋」組，引乙編5247云：『……卯卜，㱿……𠕋匕庚𡗜？貞：㞢匕庚羊告，其御？』按𠕋祭匕庚與㞢祭匕庚對舉；𡗜字不識，然常與𠕋祭𠬝祭同時舉行之一種祭禮並列，故知亦祭祀一類之專用字；如此，則本辭之𠕋、𡗜、㞢、告、御，均是祭名，不宜只拈出𠕋告二字自成一組也。(7)頁586上，「方、田」組，引金璋586片：『令望乘先歸，田？』及續存1·536片：『……爭貞：𠂤歸，方其……』，按望乘及𠂤乃人名，而兩辭之「歸」字乃動詞；「方其」乃殘辭，其缺文或爲習見之「方其大出」一類詞語，然則「方」字于此乃方國之名，不當與「田」字相應也。余有金璋586照片，極淸晰；此片有關望乘之卜辭有四條，其一云：『貞：王勿比望乘？』其二云：『令望乘先歸，田？』田字契刻在另一行，究應否屬於此條，無法確知；其三云：『王比望乘？』其四云：『王勿比望（乘）？』，附此以資參證。

〔第四類〕所舉例之兩字，形義截然不同者，凡四項：(1)頁587上，「鹿、牛」組，引續編1·53·1云：『甲申卜，𡧊貞：尞于東，三豕三羊𡆥犬卯黃牛？』及殷虛文字綴合268反面云：『尞東，黃鹿。』著者以兩辭均有尞祭東方而用黃色牲之事，遂以「牛、

𡧊」同組，實難自圓其說。予檢乙編5540有祭且乙用白牛之詞，而前編7·29·2有祭且乙用白豕之詞，又豈得云兩辭均有祭且乙而用白色牲之事，遂以「牛、豕」成組耶？

(2)頁580中，「羊、片」組，引殷契拾掇卷二第132片，『戊戌貞：又𢼀于片、伊侯古啚？中𢼀于義、伊侯古啚？』。按李孝定集釋「𢼀」釋「養」（卷5頁1）；又云從攴從牛者作牧，從攴從羊之𢼀收入本部之末，以爲說文所無字，其意則與牧同。（卷3頁1081，按李書并未將𢼀字收入攴部之末）；郭沫若古代銘刻彙考引此作『戊戌貞：右牧于片、攸侯古啚？中牧于義，攸侯古啚？』，并從張丹斧之說，讀古鄙爲故鄙。于省吾則云：古乃攸侯之名，如倉侯虎、𠂤侯喜之比（殷契駢枝續編頁41）。金祥恒教授讀ㄔ𢼀爲左牧，而疑左牧與中牧爲官名。在其釋𢼀一文中，謂卜辭分左、中者，師之分左行中行也。（中國文字21期），各家雖未明言羊片二字爲地名，然並無疑及羊片二字爲通用或假借或同義也。按本書356頁「義」字下附見拾掇此條，又引殷虛書契後編下13/5之片『戍，叀義、行用遘羌方，又𢦏？弜用義、行弗遘羌方？』；京都大學2141之片『其乎戍御羌方于義𠂤𢦏羌方，不喪眾？』則義爲地名之意，已甚明顯。又本書第447頁「片」字下亦附見此條，與殷墟書契前編4·45·3之片『…方…𧆞……片牧。』同引。雖片字尚有別義，然揆以前編「片牧」，及乙編8761『三片』兩殘辭，片之爲地名，亦無可置疑也。予曩者撰『釋左右』（英文本）一文之時，疑拾掇此骨片上端所折者必尚有一詞，嘗試爲補足全文如次：『戊戌貞：右牧於片、攸侯古鄙？中牧於義、攸侯古鄙？（左牧於口、攸侯古鄙？）』云云，右中左之序次，與殷契粹編597之片『丁酉貞：王作三𠂤：右、中、左？』相類，則此片之解釋甚明。若以現代語譯之，則爲：『在戊戌那天貞問所行事的吉凶：右師的人，去攸侯古的邊鄙片區遊牧好不好？中師的人，去攸侯古的邊鄙義區遊牧好不好？』如此則片與義，其爲不同之地名更顯。假定牧字從金氏「官名」之說，亦無礙乎解釋片與義之爲兩地也。　(3)頁577中，「𡿨、河」組，引金璋728云：「癸酉卜，在云𠂤小邑，泳貞：王旬亡𡆥？佳來征人方』。及前編4·13·3云：『…丑卜…𡿨𡧊。』按「云𠂤小邑」舊釋爲「云𠂤河邑」；「𡿨」字，羅振玉釋川（增考中，頁9），陳邦福釋澮，謂𡿨字正象兩岸間水流澮澮之形（辨疑頁10）；予以爲不論釋川釋澮，均與河字有別，如卜辭既有一河邑之地名，獨不能別有一川邑之地名乎？一九五五年，饒宗頤教授訪予於英倫，予偕其至劍橋大學圖書館，檢視金璋舊藏甲骨，嘗以此片研討終朝；至一九五九年，饒撰殷代貞卜人物通考成，附有考證，謂「云𠂤小邑」之小形與說文從反爪之𠃌應爲一字，乃古文掌也（通考頁615）。著者未將饒氏之說比勘，遽從舊說釋河，而以前編殘片之𡿨邑與金璋一片相爲比附，毋乃不可乎？

(4)頁584上，「商、貞」組，引前編6·39·3（京津1949重）云：『甲辰卜，㱿貞：今𡆥貞：不敗？』及庫方1708云『甲辰……今𡆥商不敗？』按所引前編卜辭，重見貞字，極爲罕見，饒考亦隸定爲貞（頁227）；庫方之片，現存倫敦大英博物館，予有臨本，此半字適當殘破之處，疑非貞字，亦非商字也。予頗不同意以孤證立例，況用殘片乎？

〔第五類〕詞性同而字句異者，凡三項。　(1)頁579中，「㞢不若、𡆥」組，引乙編6371云：『貞：王夢不隹𡆥？』及南北、南1·120云：『貞：王夢不隹㞢不若？』按「王夢佳𡆥」，與「王夢不佳𡆥」乃對貞卜辭，如丙編圖版48，81；乙編5224，6371，6408，7771；綴合162，165，211；等片均所習見，著者大概以「𡆥」與「不若」皆屬不吉之詞，故類次爲一組，未免過於寬泛。　(2)頁580上，「若、亡災」組，引甲編2132片云：『丁未卜貞：王往於田，亡𢦔？』及續編3·35·2片云：『壬戌卜，爭貞：王往于田，若？』按田遊卜辭，絕大多數用「亡災」一詞；其言「若」者，除上引續編之外，如綴合篇20，通纂XII，2，等只極少數；偶有用「𡆥」與「亡𡆥」對貞者，如乙編4692是也。若依著者之意，則無怪在頁579上，別分「災、𡆥」爲一組也。　(3)頁580中，「來𢆶、疾」組，引前編4·18·3云：『貞：亞多鬼夢，亡疾？三月。』及庫方1213云：『丁未卜，王貞：多鬼夢，亡來𢆶？』按「多鬼夢」郭沫若讀爲「多畏夢」，周官所謂懼夢（通纂，頁169）；卜辭只四見，而下文所用術語皆不同；如上引之「亡疾」，「亡來𡆥」之外，尚有後編下3·18之「不至𡆥」，簠室、雜65之「由疾見，由言見」。若如著者所分組，則「不至𡆥」一詞，何嘗不可以附入耶？又著者在頁44鬼字類摹錄庫方1213之卜辭，于夢字之旁，作一疑問號；予曾將卡內基博物院所藏原片攝影，夢字頗清晰，著者只據方法斂摹本，致疑甚是。

〔第六類〕詞性不同而字體亦異者，凡八項。　(1)頁581下，「入、𡧊」組，引甲骨文錄428片，『戊午卜，旅貞：王𡧊，求，亡尤？在十月二。戊午卜，旅貞：王其步，自入，亡（尤）？（在）十月二。』（按原片旅作𣄴形，島氏摹作𣄴）又引戩壽堂藏甲骨文字24·1片，『弜𡧊于之？若？』；及粹編697片，『王夕入于之不雨？』；按𡧊入二字，雖同屬動詞，而義卻有別。往者諸家讀𡧊爲賓客之賓，近知賓字在卜辭借爲儐，有導引之意，卜辭中「王𡧊」之例極多，皆言王儐接先祖之神靈使其格響。求乃求字，祭名，詳集釋卷10頁3237。著者所引文錄兩辭，用詞格式並不相同，乃僅因「卜日」、「貞人旅」、「亡尤」及「十二月」等同文，遂以「𡧊入」自爲一組。予謂戩24·1及粹697之片，應解作『勿儐（先祖）于茲地？其順利乎？』；及『王于夕間入駐于茲地，其不遇雨乎？』二辭各有所指，了不相涉。著者繼引甲骨文錄339片，『己巳…旅…中子……王其𡧊，入？』，以見「𡧊入」二字亦可連用。按殷虛書契後編上8·9之片，『…酉卜…貞：中子……其𡧊？』；及甲骨七集衛70之片，『丁酉……貞：中子…其…？……卜旅…中子…王…𡧊？』；與文錄339一片，當是同文異版。又按陳夢家殷墟卜辭綜述頁485，引河339（卽文錄339）「𡧊」下無「入」字。饒宗頤日本所見甲骨錄頁24引此，亦無入字，附摹圖亦缺入字。但饒氏後出之殷代貞卜人物通考頁959引此則有「入」字。予檢拓本，「𡧊」下有「入」形；揆之乙編6374「入百」之「入」字作「𠆢」形，一畫特長，當屬變體。然不論所引文錄339片之「𠆢」形是否入字，殆不可據以謂「𡧊」與「入」爲一字。若「𠆢」形的爲入字，則「𡧊、入」同見於一辭，尤可證「𡧊」之不同于「入」也。　(2)頁586上，『𥝌·四月·六月』組，引藏龜拾遺7·6：『庚申卜：我今𥝌又史？』乙編1106：『辛卯卜，貞：今四月我又史？』及乙編8206：『壬午卜，𣪊貞：今六月我又史？』按戩壽堂36·13片：『庚申（卜）：今𥝌月（又）史？』與拾遺之片，干支相同，如非同版之折，當是同文異版也。𥝌字葉玉森釋秋（鉤沈頁2），郭沫若釋稆（粹編考釋頁113），唐蘭釋𥞥（天壤考釋頁23），于省吾釋𥝌，讀爲臘，並謂今𥝌月必就一年中之一月爲言（駢枝頁9—12），李孝定謂于說無徵，只隸定作𥝌，以爲說文所無字，付之闕疑（集釋卷七，頁2381）。予按「今𥝌月」是否當卽「今臘月」，姑不具論；然「今四月」與「今六月」之詞性，實與習見之卜問今某月雨或不雨之辭相同。例如乙編6441片「今一月雨」，乙編8341片「今二月雨」，粹編809片「今三月雨」，綴合98片「今四月雨」，拾掇1·204片「今五月雨」，甲編2845片「今十月雨」，續編4·19·2片「今十一月其雨」，乙編6299片「今十三月雨」，等辭，其着眼之點，蓋在一年中不相同之月份；而所紀錄之不相同月份，絕不能相通。著者此組究能視作通用或同義乎？　(3)頁581下，「往、𡧊」組，引京津3233：『甲戌卜，尹貞：王𡧊夕𥙊，亡𡆥？』，及續編4·14·7：『丙午卜，𡚬貞：王往于夕𥙊，不冓雨？』；又引粹編728：『乙卯卜，何貞：王𡧊升歲，不冓雨？』，及前編4·51·1：『丁卯卜，𡚬貞：王往于升，不冓雨？』。按「王𡧊夕𥙊」一詞習見；卽以貞人尹之卜辭言之，其爲饒宗頤收入貞卜人物考者，已有全辭十條（頁1013—4）；而續編4·14·7，卽簠室天81重出𡚬貞之片，據饒宗頤之說，係取佚存864「何貞王往于日，不冓雨，𠨘由吉」之辭，疑有夕祭當有日祭爲解；然王往與王𡧊，仍有不同之處也。至於「王𡧊升歲」一詞，亦習見；而「往于升」一詞，只略可與續存2·187「往于上甲，佳父乙」，南北·誠17「今日往于上甲」，甲骨六錄束48「往于岳」，遺珠19「往于夒」，等片，同其語氣；其他卜辭，在「往于」之後接以祭名者，恐只前編4·51·1；續編4·14·7；及龜甲獸骨文字1·19·11等三片而已，鄙意總覺得王𡧊與王往，自有其不同之用法。

(4)頁578上，「曰・其」組，引後編上17·4『于王曰匄𢀛方矢。』及乙編7257『貞：王其匄于大甲矢？』兩片，曰字與其字，詞語實不相類。　(5)，(6)，(7)，(8)，頁577下，「由・乎」組；「乎・其」組；頁578上，「乎・𢆶」組；「乎・曰」組；四組之詞語，均不相類，附之於此。

〔第七類〕義近而字異者，凡三項。　(1)頁580下，「𦎫：𢦏」組，引丙編1，『癸亥卜，㱿：羽乙丑多臣𢦏由？』及粹編1175，『丁卯卜，㱿貞：王𦎫由于𦣻？』。按郭沫若云：『𦎫者，撻伐也。詩魯頌敦商之旅』，（粹考頁644）；張秉權云：『卜辭𢦏卽說文十二下戈部的𢦏字。𢦏傷也。𢦏某方就是傷害某方的意思。』（丙編考釋頁4）；𦎫與𢦏，雖同是用於軍事上之動詞，然詞意只是相近而已。　(2)頁580下，「伐・𦎫」組，引庫方1094『乙亥卜，貞：今日乙亥王𦎫𡸁𢦏？』及綴合249『辛巳卜㱿貞：乎雀伐𡸁？』按庫方1094片，今藏美國卡內基博物館，予有照片及拓本，知各家摹本不誤；予嘗綴合庫方1095及1014兩片，疑與1094片爲一骨之折，辭云：『丙子卜：于丁丑𢦔？丙子卜：于戊寅𢦔？丙子卜：弗𢦔？丁丑卜：戊寅𢦔𡸁？丁丑卜：今日𢦔𡸁？☐𢦔☐己（卯）☐？（庚）辰卜：』。卜日起於乙亥，而丙子，丁丑，戊寅，以至己卯，庚辰；用𢦔作動詞凡七次；惟𦎫字只在第一次乙亥始用之。如以𦎫字爲動詞訓撻伐，則與𢦔字爲動詞訓傷害，意義重複；既可能解作：「王有撻伐𡸁之舉，其有傷害乎？」；亦可能解作：「王有撻伐之事，其能傷害𡸁乎？」；然再看丙子與丁丑之卜辭，則詞意着眼之點乃在𢦔字也。著者所引「乎雀伐𡸁」之伐字，習見，如「伐𢀛方」，「伐土方」，之類不可勝數，然伐字往往與征字互用；𦎫字與𢦏字，義雖近，而仍有別，似不能視作通用字耳。按丙編1片之𢦏字作𢦏形，與庫方1750片之「㱿貞：我𢦏𡸁？」之𢦏字作𢦏形正同；因此庫方1094；及1095＋1014各片之𢦏字作𢦔形者，正是一字。又按庫方1094片之「乙亥王𦎫𡸁𢦔」，與粹編1181片之「乙亥…王𦎫𡸁…旬一日乙（酉）…」，似是同文異版；粹編殘片𡸁或竟有𢦔字，未可知也，然「𦎫𡸁」連文，必有其用法矣。

(3)頁580下，「及・𦎫」組，只引京都2521一辭，云：「庚午貞：辛未𦎫𢀛方？易日？允易日。弗及𢀛方？』。按𦎫字釋見上；「及」字於此當作追及解。卜辭習見「及」、

「弗及」之詞，而「及」字之後，恒繼之以邦族之名；如甲編3913片，於同一邦族名「屰」字之上　所用動詞有「遘」，有「出」，有「及」，有「來」，凡四種；於此可見京都之片，「羍」字與「及」字，應有不同之義也。

〔第八類〕義不近而字亦異者，凡六項。　(1)頁582中，「往、步」組，引綴合139，云：『貞：王勿步于夌京？』及綴合139，云：『貞：王往于夌京？』按郭若愚於1955年所綴乙編1215＋3071兩片，不及張秉權1959所綴之完整；丙編圖版150，係紀錄伐巴及下危之事，第10第11兩辭對貞，云：『貞：王往于夌京？貞：王勿步于朱京？』，第5第6兩辭亦對貞，然皆云：『王往于夌京？』若只據第10第11兩辭讀之，似乎著者所舉「往步」之例，可以成立；然卜辭慣例，凡時王在田獵區內附近來往，間或步行，則言步于某地或言步自某地，如前編2·17·3＋金璋544之片云：『辛丑王卜，在灉餗，貞：今日步于夌，亡災？壬寅王卜，在夌貞：今日步于永，亡災？』又如前編2·21·3之片云：『丙辰（卜）（行）貞：王其步（自）（□）于良亡災？丁巳卜，行貞：王其田，亡災？在良。（□）（□）（卜）行（貞）：（王）其步（自）良于朱？』；可推知灉，夌，永三地，或良朱二地，必極近，可以步行而往。獨惜丙編圖版150尚缺左右兩大片，而另一殘辭夌京之上有殘缺，更不知其對貞之辭又作何字也；然「往」之與「步」，究不應以此孤證，遂定其爲通用之字；況丙編圖版150之反面，除復述伐下危事之外，有「子畫涉」及「子𧗟涉」兩兩對貞之辭，復有「往途若」對貞之辭；由此觀之，一片之內，言往，言涉，言步者不一，其非通用字甚顯。　(2)頁584中，「冃、𢦔」組，引續編6·14·6云：『貞：乎王族眔𢦔？』及續編3·7·9云：『勿乎王族冃于𢦔？』按眔字在卜辭有數解，然以訓爲『逮及』之義較長。冃亦有數義，其中一義，雖未得其解，然確爲祭名；如「將兄丁冃父乙」（甲編611），「凡于且丁」（乙編4275），「其凡于且丁召？王受又。」（續存2·757），「貞：王勿凡父甲？」（南北、無想37）等是也。魯實先嘗謂眔之另一義爲祭名（殷契新詮三，頁8至12），然所舉例證，頗不明顯；假如著者從魯說以眔爲祭名，則「眔」與「凡」爲不同之祭，又安得通用乎？況卜辭言凡于先祖者，必備舉先祖之名，此𢦔究屬何人而可與先祖同享此祭歟？按甲編2040片屈氏釋𢦔爲疾病之名（考釋頁256），與此片不類。乙編1030；2466；2994；6446諸片，均有「𢦔挈羌」之辭，則𢦔殆是邦族之名；如是則著者所引之片「乎王族眔𢦔」，應解作「呼詔王族及𢦔族」；而「勿乎王族凡于𢦔」，應解作「勿呼詔王族用凡祭于𢦔族之地」，以視將「冃、𢦔」二字爲通用字，似較順也。　(3)頁584中，「自、眔」組引乙編7385片：『貞：行挈㞢𠂤眔㞢邑？』及乙編4539片：『貞：挈㞢𠂤自㞢邑？』按卜辭有𠂤，及㞢𠂤；亦有邑，及㞢邑；予疑爲地名人名互用；丙編472片：『癸巳卜，韋貞：行挈㞢𠂤眔邑？貞行弗其挈（㞢𠂤）眔邑？』，殆謂所挈之二地爲㞢𠂤及邑也。至乙編4539片，殆謂所挈之地爲㞢𠂤，而係由㞢邑之地開始挈之；亦如丙編42片之『壬寅卜，㱿貞：與方挈羌，用，自上甲至下乙』之詞意耳。　(4)頁583中，「其、廼」組，引粹編847片，『于翌日廼窶。其窶，至翌日？』按郭沫若考釋作『其窶，至翌日。于翌日廼窶。雨。』（頁566）。又按粹編845片，三辭均作「乃窶」，知「廼」「乃」通用，而非「廼」「其」通用也。　(5)頁585下，「用、𠙵」組，引外編252片：『𣥂改不其𠙵？』及甲編589片：『辛卯卜：由𣥂改用，若？』按屈萬里考釋作「由𣥂戶用，若」，並謂「𣥂　戶」未詳何義（頁92）。「用」字習見；𠙵字或釋叶，或釋古；然著者所引之「不其叶」與「用若」，究難以同類詞歸屬之也。

(6)頁586上，「奠、田」組，引乙編5584片：『我北田不其受年？』及拾遺10·2片：『貞：我奠受年？』又引菁華6片，『……土方𢦏我田十人？』及甲骨叕存26片：『𢀛方𢀛于我奠？』。按奠字王襄疑卽周官四丘爲甸之甸字（簠室考地壹頁5）；董作賓從而解釋拾遺10·2片，謂乃殷王畿之郊甸受年；又解釋金璋728片，謂「王在云，此云者乃郊甸濱河之邑（殷歷譜上九，頁38）；予頗不謂然。往者諸家多讀我字爲第一人稱代名詞，然卜辭中確有不少我字當讀爲人名或地名者，如乙編2596；4947；4953；丙編55；102；117；119；125；201；268；291；306等片皆是也。我既是地名，則「我奠受年」一詞，當是卜問我與鄭兩地受年與否，而不必如董氏所謂乃殷王畿之郊甸受年。他條準此。又按卜辭「多田」與『多奠」二詞習見，「北奠」一詞亦數見；田之與奠，究能相通與否，雖難確定，然著者以「我田」與「我奠」爲例，竊以爲當應再酌耳。

〔第九類〕詞義相反者，凡五項。　(1)頁579中，「冒、㝵」組，引續編5·14·2片：『貞：商其冒？』及京津2250片：『貞：商其㝵？』按冒形，孫詒讓疑爲遣之省（舉例下，頁15）；高田忠周釋爲信（古籀編52，頁2）；商承祚以爲卽貝字（福氏考釋頁2）；于省吾謂㠯卽退之古文通作敗（駢枝續頁35—36）；魯實先以冒㠯二形爲一字，從陳邦福殷契辨疑之說，釋爲員，而讀「商其冒」或「商不其冒」之辭，爲左傳桓五年「社稷無隕」之隕（殷契新詮之六，頁18）；李孝定集釋從于說而申明之，定冒爲退（卷2，頁0541），定㝵爲敗（卷3頁1061），謂二字同義；其歧而爲兩字，殷時已然（卷3，頁1061）。李氏據前編7·36·1之片，「敗女事」與「亡㠯」同見於一辭，因謂此兩字之義實相近；予按前編3·27·5片，字極清晰，有「貞：亡㝵？」一辭，㝵字從貝從夂，決非從貝從又，諸家並未注意，予疑此亦敗字，而非習見「亡㝵」之誤書誤刻；且字體頗大，與前編7·36·1「亡㠯」之片，極相類，殆是武丁同期之品。㝵形，羅振玉釋得，謂從又持貝，得之意也（增考中，頁60），諸家均從其說。嚴一萍釋得一文（中國文字1期），更詳乎言之。饒宗頤貞卜人物通考釋拾掇1·236片，謂「其㝵」卽「其得」，易經繇辭每言得，如坎九五云「三歲不得凶」，既濟六二云「勿逐七日得」，是其例（通考頁225）；饒氏繼釋綴合109片，謂「其㝵」之得，猶今言成事，易豫九四「大有得，志大行也」；𢽎𣪕「南征伐楚荆又得」，語同（通考頁454）。由此言之，㠯卽敗，㝵卽得，敗之與得，含義相反也。又按著者所引續編5·14·2片，本有對貞之辭，全文爲：『貞：商其㠯？貞：商不㠯？』；乙編3809片正面云：『貞：受不其得？』，反面云『王𡆥曰：吉！得！』；詞語一正一反，義甚明顯。若以著者所合之「冒、㝵」成組推之，則乙編5448片『貞往不其㝵？』，與京都人922反面之『其往其冒？』，又應作何解也。然著者亦知㠯之義爲不吉，故在同頁「冎、冒」組引京津1172片之「其降冎」，及鐵雲藏龜19·2片之「其降㠯」，兩兩相比。（按京津原拓，禍字作冎形，著者摹作冎）。于省吾云：「㠯爲禍災不利之義，降㠯猶言降災」，禮記孔子閒居「四方有敗」注，敗謂禍烖也（駢枝續，頁35）；著者以「㠯禍」爲例，與于說合。又按陳夢家論及天帝人鬼所降者，如禍，㠯等，常指天災，亦指人禍（綜述頁566）；亦同斯意。假令著者能尋出如予所舉前編3·27·5「亡㝵」之例多條，而以「亡㝵」與「亡冒」爲組，則似較以反語相通爲宜耳。　(2)頁579中，「冎、𢀛」組，引乙編4960片：『㞢疾其禍？』及乙編960片：『貞：㞢疾目不其𠃚？』；又引甲編3476片：『戊戌卜㱿…王疾，不…禍？八月。』及乙編4071片：『乙巳卜，㱿貞：㞢疾身，不其𢀛？』按冎卽禍，見前項解釋，𢀛字異體頗多，羅振玉釋龍（增訂殷考中頁33）；郭沫若以爲龍之異文假爲寵（卜辭通纂別2頁4）；唐蘭謂𢀛𠃚諸形卽𠃋字，爲地螾之象形，當讀爲悍或恝，訓憂（天壤考釋頁40—41）；嚴一萍雖從唐說，惟衡之卜辭，未能盡通，遂疑當讀爲眴，通瞚，卽眩（殷契徵醫頁41）；李孝定謂瞚眴眩音義並近，以讀卜辭疾目其𠃚、不其𠃚、之文，甚順，然以讀他辭，未盡恰當，嚴較唐已進一境，實未免鄰於想像（集釋頁3482）。饒宗頤謂𢀛卽龍，讀爲寵，和也（通考頁114）。著者在所著之殷墟卜辭研究第四章第一項裏，則以𠃚𢀛等形爲卽說文「龍無角者從虫丩聲」之虯字；又引乙編960等片爲例；以疾病王尤爲解；並云𢀛之字音或爲厥之假借。予按𢀛字每見於疾目，疾齒，疾身，等辭；惟對貞之否定詞，必用「不」字。如丙編圖版11，13，15，17，19成組之五龜版，均以「𠃚」及「不其𠃚」對舉；卽以著者上舉之乙編4071片言之，亦無例外；可見𠃚字，應是與疾病有關之詞語，而不當與含有普通性之「禍」字相提並論。著者上文所引甲編3476片，亦著錄在本書頁449「疾類」最末「其他」一項中，著者讀爲「王疾不……禍」；予檢甲編拓本疾字實夢字之譌，原辭當作「戊戌卜，㱿（貞）：王夢不（佳）冎？八月。」，饒宗頤釋此片作王夢（通考頁112），屈萬里甲編考釋亦作王夢（考釋頁441）；如此，則「王夢不佳禍」一詞，實不宜與「疾身不其𢀛」一詞，互相通義也明矣。按著者如此安排，亦有所本；檢魯實先殷契新詮卷六釋龍，以𢀛形爲龍字，謂爲恫之假借。魯氏隸定乙編4071片爲「乙巳卜㱿貞㞢疧氐不其𢀛」，並云，「㞢與氐於此辭乃方名，此辭乃卜㞢方加𢦏於氐方，是否有災」。魯氏又隸定乙編690片爲「貞：㞢疧目，不其𠃚」，並云「此卜有病於目，是否有災」。著者雖未明言采用魯說；然除此之外，以愚固陋，尚未發現其他類似之說也。　(3)頁579下，「𠃯、𢀛」組，再引乙編4071片：『貞：有疾身不其𢀛？』以與綴合441片『疾身不隹㞢它？』相比；又引龜甲林2·9·7片：『貞：疾趾隹有它？』及遺珠340片：『貞：疾趾𠃬？』。它字諸家均從羅振玉說，謂卜辭中凡貞祭於先祖，尚用「不它」、「亡它」之遺言，殆相沿以爲無事故之通稱（增考中，頁34）；饒宗頤則謂「㞢它」卽「有蹉跌」（通考頁226）。按卜辭之「它」、「隹它」、「有它」、「亡它」、「不它」、等詞，不下數百見，均以爲普通用語，而不當與𢀛字之含有與疾病性有關之義相比附。按此組所引遺珠340片，魯實先隸定爲「貞疧止𠃬」，並云，「止猶它辭之㞢，止、㞢、有、古音同爲噫攝，此卜病是否有災也。乙編5587片云疧又𠃚，與此爲同文異版」（新詮六釋龍）。著者或未必以魯氏所隸定之全文爲然，惟魯氏釋𢀛爲災，正合著者之意也。

(4)頁579下，「易、𠃯」組，引續編5·5·4片：『壬戌卜，亘貞：㞢疾齒，隹㞢它？』及前編4·4·2片：『甲子卜，㱿貞：王疾齒隹（㞢）易？』〔按著者誤摹爲王㞢疾齒隹（㞢）易〕。按它字見前項；易字羅振玉釋錫（增考中頁74）；孫詒讓說爲更（舉例上頁4）；郭沫若謂是昜之借字（粹考頁7）；又謂用爲難易之易，「惟易」殆言「亡害」（卜辭通纂頁11）；陳邦福謂當釋昜，爲湯之省（辨疑頁3）；又疑爲鬯之省（辨疑卷末）。著者或受郭說所影響，遂以「隹㞢易」卽「隹有害」歟？予嘗綴合前編4·4·2＋6·32·1爲一片：『甲子卜，㱿貞：王疾齒，隹易？甲子卜，㱿貞：王疾齒，亡易？』全辭以「隹易」與「亡易」對貞，爲傳世卜疾齒之辭所僅見，疑必與疾病有關，借嚴一萍

氏並未采入殷契徵醫也。按楊樹達取孫說解易爲今言之換牙，引素問「髮長齒更」爲證（甲文說頁11），饒宗頤則謂佳易之易字，當訓平復；而亡易之易字猶左傳襄三年傳「以歲之不易」不易者，多難也（通考頁113）。予意續編5·5·4之片，當與乙編4626：「貞　疾齒　不佳㞢⿱止它」之片相對舉；且字體之大小與書法之豪放又均相類，縱非一版之折，亦屬同文異版也。又乙編4511片以「疾齒佳𡆥」與「疾齒不佳𡆥」對貞；乙編2655與4009片以「㞢疾齒佳有凸」與「㞢疾齒不佳㞢凸」對貞；予疑「有⿱止它」與「有故」極相類，而「有易」與「有𡆥」亦似相類；總比著者以「有⿱止它」與「有易」同組之義爲近耳。　⑸頁580中，「不雨、易日」組，所舉「易日」與「不雨」二例，「易日」與「雨小」一例，「易日」與「啓」一例，「不其易日」與「雨」五例，凡九例；無非以易日卽不雨，雨卽不易日，爲說。按所舉第三例，據丙編圖版56綴合之部份腹甲，已復原頗爲完整之卜辭四條，紀載天象事有「易日」、「月食」、「翟」、「不雨」、數項，全文如下：『（癸未）卜，爭貞：羽甲申易日？之夕，月㞢食，甲翟，不雨。（貞：羽）甲申（不）其易日？（貞：羽己亥）易日？羽己亥不其易日？』（丙編考釋頁94）。又所舉第四例，據乙編6419及6420，反面尙有刻辭，全文如下。『貞：羽庚申我伐，易日？庚申，明翟，王來金首，雨小。貞：羽庚申不其易日？己未卜，㱿：不其明雨？羽庚，其明雨？（王）固曰：「易日，其明雨，其夕不雨。」』按易字在上文第四項「易⿱止它」組所論及者，只是易字之一義，此「易日」二字連文，亦習見之詞語，當是與天象有關之義。孫詒讓謂易日猶言更日，蓋皆吉則不更易日，不吉則更易日（擧例上頁4）；李孝定從孫說讀易日爲更日（集釋9頁3028）；王國維以孫說不可通，疑是祭名（戩考頁21）；陳邦福釋易爲昜，乃暘之省，昜日卽驅疫之日，不暘日則非驅疫日（辨疑頁2）；後又改釋爲鬺之省，易日乃鬺牲之日（辨疑卷末）；王襄以易爲祭日之名（簠考典禮頁1）；孫海波初從羅振玉說，讀爲錫，祭名（文編9頁10）；後又解易爲變，易日猶言變天（改訂本文編9頁11）；饒宗頤謂易日卽錫日，天雨求賜日也（通考3頁82）；郭沫若謂易乃暘之借字，說文：暘，日覆雲，暫見也，從日易聲，易日猶言陰日（古代銘刻彙考、易日解）；楊樹達從之（甲文說頁11，釋星）；陳夢家解爲有雲的陰天（綜述頁244）。予按卜辭習見天象之字，尙有「攺」或「戾」，卽說文雨而晝晴之晵；有翟，說文所無，郭沫若疑是冢之古文，讀爲霿，卽霧（粹考頁109）；各字均有其本身之涵義，不宜相混。若以「易日」爲賜日，則又何以別於晵也；不如從郭陳之說，解「易日」爲陰天，則與啓之爲晴天，正相對耳。殷人於天象氣候字，各有不同之用法，如上擧丙編56片之例，龜之正面言在癸未日貞問第二天甲申是否陰天；其驗辭則紀錄癸未之夕有月食之事發生，甲申之日有霧，並未有雨；龜之反面言在庚申日擧行伐祭之時是否陰天；其驗辭則紀錄庚申之早上有霧，當王來至首地，則有小雨也。又所擧第二例（綴合198），已有「易日」、「雨」、「啓」、三種不同之天象字；且「易日」與「啓」同見於一辭，則「易日」之與「啓」，當有其特異之點也。

「通用、假借、同義例」，中有一組兩例，擧出兩形繁簡之不同，可以通假；甚是。惜所引其中之一例，卻因誤摹原文；遂致有改易原文，屈合己意之嫌。按頁579下，「⿱止它、它」組，例①引戩壽堂21·9片：『隹岳⿱止它禾？』；例②引粹編11片：『庚寅卜：隹河它禾？』；以見從止之⿱止它，與不從止之它，雖兩形有繁簡之別，但可通假。若只從著者所摹寫之文字讀之，幷無錯誤。今檢殷契粹編原拓第十一片（頁19），⿱止它字形作虫，郭沫若釋文亦隸定作從止之⿱止它（頁350）。又檢續甲骨文編（卷13頁5），虫字下引粹編11片，金祥恒摹作虫，與郭釋及原拓均符。豈著者初稿摹臨粹編11片之際，偶然漏看虫形之偏旁止，以爲是簡形之虫；迨撰定全書時，幷未覆勘郭書原文，遂鑄成此錯耶？

卜辭習見「亡⿱止它」一詞，其作「亡它」者亦屢見之。至於同版之中，兩形互見者，如前編卷八頁十一第一片是也。前編初印本此兩字之形，一作⿱止它，而一作它，所謂同版異體者也。吳其昌殷虛書契解詁云：『又⿱止它，亡它對擧者，如前編8·11·1之「戊寅子卜：又⿱止它？戊寅子卜：亡它？」』（頁166）；吳氏目力極精，其說可從。本書頁84第一欄引前編8·11·1片作：「戊寅子卜又虫」「戊寅子卜亡虫」；同頁第四欄再引前編8·11·1片作：「戊寅子卜亡虫」；著者所引「又虫」竟加止偏旁作⿱止它，其誤正同。殷代貞卜人物通考（頁744）引此條雖亦作「亡⿱止它」，「又⿱止它」；然饒氏隸定爲文，只採其義，固不必斤斤於字形繁簡之校訂也。著者以此繁簡之形，特別分組，自不能漫無區別矣。按鐵雲藏龜46·2有「隹它」之詞，而前編1·16·6亦有「亡它」之詞；故李孝定謂卽習見之「隹⿱止它」、「亡它」（甲骨文字集釋卷13頁3909）；如是則「⿱止它」「它」互通，早經論定。著者只擧拓本幷不模糊之粹編11片爲例，將原文從止從它之⿱止它字，變易爲幷不從止之它字，竊以爲未可也。

本書分組，亦有①可以審訂前人之誤說者；②可以證實前人之推測者；③可以啓發吾人之新知者；玆各擧一例。　(一)頁586下：「中、中」組，引續存2·87之片『中日攺』；與甲編1561之片『中日大戾』；及續存2·803之片，『癸酉貞：方大出，立中于北土？』（按島氏漏摹貞字）；與粹編1218之片，『己亥卜，爭貞：王勿立中？』。按自羅振玉謂『凡卜辭中正字皆作中，從口從㫃；伯仲字作中，無斿形；史字所從之中作中；三形判然不淆。』（增訂殷虛書契考釋中，頁14），學者均遵其說。然羅說實未盡允也，今見著者所列，知中中通用，有斿無斿亦無分別。予藏骨片有「中日雪」一詞，中字亦作中，可以參證。　(二)頁584上：『丙、㒳』組，引粹編1239之片，『丁亥卜，亘貞：子丙妾㞢冥(娩)，不其㚤？』（按原拓貞人之名作己形，故郭沫若釋爲己；予意：或是亘字之誤刻；然摹寫必要存眞，本書應照原拓寫己字，不應改寫作亘形）；與金璋所藏甲骨錄548之片『……寅卜，宂(貞)子㒳妾㞢冥（不其㚤）？夕……』（按原拓貞人之名作宀形，本書摹作宂形，雖一畫之微，無關重要，但體例當要一律）。前人知「丙」與「㒳」爲一字，而未得佐證，著者此條，可作定論。　(三)頁577上：「口、冋」組，引前編8·6·3之片，『戊寅子卜，口：歸在川人？』；與前編8·12·4之片，『己亥子卜，貞：在川人歸？』；及前編8·6·3之片，『戊寅子卜，口：歸在𠂤人？』；與乙編1834之片，『乙卯貞：在𠂤歸人？』。按卜辭貞鼎同義，有王國維（史籀疏證頁23）；羅振玉（增考中頁17—18）；葉玉森（前釋卷一頁3）；孫海波（考古第三期頁73）；郭沫若（卜辭通纂頁6）；吳其昌（解詁頁3）諸家之說；而吳氏更旁徵博引，謂漢時匡衡、馬融、服虔時代，貞、鼎、當、三字皆一聲無別；雖董作賓西京雜記作者辨謂吳引服訓鼎爲當乃用誤證（平廬文存卷五頁4）；予按服虔時代確有讀鼎爲當音者，故貞鼎相通，已成定論。島氏以鼎丁並列，洵屬創見。商代旣以鼎爲貞，而丁鼎聲近，則以丁作貞字用，似亦可備一說。門人唐君健垣，嘗修訂乙編1010之辭爲：『癸丑貞：至豸亡囚？二癸丑貞：至豸亡囚？三癸丑口（貞）：自甘……』。予按貞鼎通用之說，有一實例，未爲人所注意，卽乙編第8816片是也。該片第一辭作「辛丑卜鼎」，而第七辭則作「丙午卜貞」，事隔五日，而用字有殊，必屬異體；又第二、第三、第四、第五、各辭，均作「丙午鼎」，而第六辭則作「丙午貞」，同屬一日，而用字亦不同，其爲當時通用之異體也必矣。所可惜者予尙未發現另一同版實例，以證著者「貞丁」之說。卜辭「卜丁」連文者，約有七條，（如前編863；845；鄴中片羽3·34·7；3·34·10；乙編8909；戰後京津2094），口字固可釋爲貞，但亦可釋爲干支之字，或人名也。唐生謂鄴中片羽兩辭及乙編8909一詞斷不能讀丁爲人名；然則豈不可讀爲干支字乎？卜辭「鼎丁」連文者，如乙編9016，則丁非貞之借矣；又「貞丁」連文者，如乙編830；1515；前編8·11·1；8·15·2；1·22·8；續存1—2040；等，丁字皆干支義。

最後，關於正文部分，引書之卷數頁數有誤；摹錄原文之有增字漏字；或字形之向背相反；甚或所引之例，複查原書，並無其辭；等等，姑擧一頁爲例。如頁557，發見錯誤五條：⑴引庫352，按當作庫353；⑵引粹1284。按原拓並無「卜」字；⑶引粹1271，多字作㠯形，按原拓則作㠯形；⑷引前5·12·1，按當作前5·25·1；⑸引粹148。按原書並無著者所摹之辭。

著者研治此學，毅力過人，八年之間，成斯巨著，網羅之富，前所未有，誠足爲甲骨學放一異彩。方今承學之士，研討殷商文字，必須遍檢字書，始知每一字之異體；對於原刻卜辭，又苦於無書可資檢勘；近廿年來，資料書籍，採購維艱，卽以香港一地而論，大學圖書館藏甲骨著錄書，只及著者所收三之二而已。此書雖屬摹本，然讀者所欲尋檢之主要卜辭資料，大體皆萃於是；雖摹錄時或失眞，引句時有删節，爲白璧微瑕，然終不能掩其完美。欽佩之餘，反復諷誦，爲之商榷如上，聊備他日再版時參訂，一得之見，想亦著者所樂許也。

（原載《香港中文大學中國文化研究所學報》第2卷1期，1969年）

重印殷虛書契前編序

嚴一萍

一

羅氏所輯殷虛書契前編八卷，刊布於民國元年壬子；民國二十年，曾再版一次。昔年平滬書賈，恆據一字以辨初版或再版；若初印者，必昂其值。所謂一字，卽序文第二頁第三行「婦弟范恆齋」句之「范」字，初版誤作「茫」，再版則已改正。其實初版再版之異，不僅序中一字而已，其內容實多不同處。最顯見者爲再版本修整拓片，盡失原物邊緣。而拓本移易，致使編號不同者，亦有多處。此點最使研究者困惑，爰爲揭出對照，以供治契者引據時之參考。

初版本	再版本
一・二四・三	（重入七・二五・一）
一・四一・七	一・四一・七
	一・四一・八（重一・四一・七）
一・五二・四	一・五二・四　拓本較全，右下角多「二告」二字。
二・二四・四	二・二四・四
	二・二四・五（重二・二四・四）
二・二四・五	二・二四・六
二・二四・六	二・二四・七
二・二四・七	二・二四・八
二・三八・一	二・三八・一
二・三八・二	二・三八・二
	二・三八・三（重二・三八・一）
二・三八・三	二・三八・四
二・三八・四	二・三八・五
二・三八・五	二・三八・六
二・三八・六	二・三八・七
五・一三・一	五・一三・一
五・一三・二	五・一三・二
五・一三・三	五・一三・五
五・一三・四	五・一三・三
	五・一三・四（重五・一三・二）
五・一三・五	五・一三・六
五・一三・六	五・一三・七
五・二六・一	五・二六・一
	五・二六・二（重五・二六・四）
五・二六・二	五・二六・三
五・二六・三	五・二六・四
五・二六・四	五・二六・五
五・二六・五	五・二六・六
五・二六・六	五・二六・七
五・二八・四	五・二八・五
五・二八・五	五・二八・四
七・九・四	七・一〇・二
七・一〇・一	七・九・四
	七・一〇・一（重六・二・一）
七・一〇・二	七・一〇・三
七・一〇・三	七・一〇・四
	七・二三・一（重七・二三・二）
七・二三・一	七・二三・二
七・二三・二	七・二四・一
七・二四・一	七・二四・二
	七・二五・一（重一・二四・三）
七・二四・二	七・二五・二
七・二五・一	七・二五・三
七・二五・二	七・二五・四
七・二五・三	七・二六・一
七・二六・一	七・二六・二

二

羅氏自序稱前編材料悉屬自藏甲骨，而手加氈墨者；民國六年（日本大正六年一九一七）日本林泰輔氏輯印龜甲獸骨文字，其序文有小注一行曰：「編中所載與殷虛書契同者，係聽氷閣所藏實物拓本，非襲殷虛書契所錄也。」據此可知前編尚有他家藏契；茲將取材於聽氷閣者一〇八版，列表對照於左：

前	林	前	林
4.1.7	2.18.18	1.7.6	1.12.11
4.2.1	1.26.12	1.28.6	1.22.1
9.25.3 4.4.4	2.3.7	1.36.5	2.2.9
		1.43.4	1.21.2
4.5.5	2.18.4	1.44.5	1.13.16
4.10.6	2.20.6	1.46.2	1.14.1
4.12.1	2.21.11	1.51.6	2.17.6
4.28.6	2.22.13	1.52.2	1.13.20
4.29.2	2.2.3	1.52.4	1.29.19
4.30.5	2.1.17		
4.31.6	2.1.16		
4.40.3	2.19.10		
4.51.1	1.30.14	2.4.6	2.20.8
4.53.3	2.12.6	2.5.2	2.1.11
4.54.5	2.18.8	2.10.1	2.5.7
		2.10.2	2.3.6
5.3.5	2.12.13	2.10.3	2.18.12
5.18.5	1.24.6	2.10.4	2.1.9
5.19.1	2.2.10	2.10.5	2.21.13
5.30.4	2.15.17	2.10.6	2.20.11
5.31.1	2.8.10	2.30.4	2.16.10
5.32.2	1.25.18	2.38.5	2.19.1
5.32.5	2.19.14	2.44.7	2.22.7
5.32.8	2.20.18	2.45.1	2.22.17
5.33.1	1.22.12		
5.38.5	1.26.15		
5.38.7	1.26.14	3.3.2	1.15.1
5.40.2	1.14.19	3.22.7	1.19.14
5.45.4	2.18.1	3.29.1	2.16.17
5.45.6	1.26.1	3.29.3	2.24.12

前	林	前	林
6.47.8	2.15.4	6.1.1	1.10.2
6.49.4	2.15.3	6.2.3	2.2.12
6.49.6	2.15.18	6.9.7	1.22.5
6.49.7	2.15.10	6.10.1	2.2.8
6.49.8	2.6.4	6.10.6	2.20.6
6.53.5	2.18.17	6.12.3	1.28.6
6.54.3	2.1.6	6.14.8	2.12.2
6.57.3	2.1.4	6.16.2	1.22.21
6.59.4	2.23.15	6.16.6	1.20.6
6.62.4	2.19.2	6.16.7	1.19.15
		6.17.7	2.16.4
		6.19.8	2.22.14
7.1.4	2.7.8	6.21.1	1.28.17
7.4.2	2.22.4	6.22.4	1.18.16
7.5.1	2.9.5	6.24.2	1.29.18
7.6.1	2.11.11	6.26.4	1.29.21
7.6.3	2.22.8	6.26.7	1.22.1
7.6.4	2.6.1	6.28.5	2.1.18
7.8.2	2.19.15	6.29.4	2.8.7
7.14.1	1.19.12	6.29.5	2.1.4
7.29.4	2.12.8	6.29.7	2.1.8
7.30.1	1.16.17	6.31.2	2.1.7
7.37.1	1.20.1	6.31.3	2.1.10
7.43.2	1.10.12	6.32.3	2.11.7
		6.32.6	2.4.9
		6.34.7	2.10.13
		6.36.4	1.25.14
8.2.5	2.11.15	6.40.5	2.10.6
8.12.4	2.22.1	6.40.6	2.9.8
8.15.2	2.10.7	6.41.1	2.14.15

三

羅氏以勝國遺老，眷戀舊君，時有復辟之思；卒至晚節不終，爲世所恥。然其對於學術之貢獻，亦不可全予抹殺。昔人或疑其殷虛書契考釋爲觀堂所作，或又指其剽竊孫氏契文舉例；十手所指，視羅氏於甲骨，若一無所知者，此皆耳食之過也。近歲以來，其考釋原稿與日記，相繼發見；既足以證明觀堂曾爲羅氏校錄此書，而原稿確爲羅氏親作。其日記所載逐日工作進度，亦可證考釋序所稱：「爰始操翰，訖于觀成，或一日而辨數文，或數夕而通半義」之情形爲不虛。且於羅王往返信札之中，更可見羅氏當日影印契文舉例之急切。儻有剽竊之心，何必急於爲孫氏表彰耶？重印前編既竣，略舉相關者數事，爲羅氏書明眞象也。

中華民國五十九年九月秀水嚴一萍序於板橋之萍廬

（原載《中國文字》第三十七冊，一九七〇年九月）

殷墟甲骨新書介紹

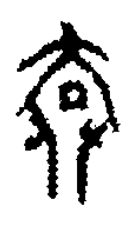
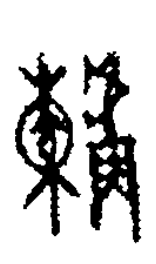
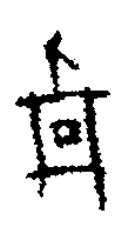
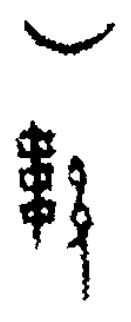
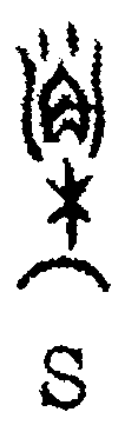
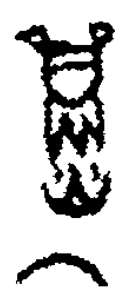
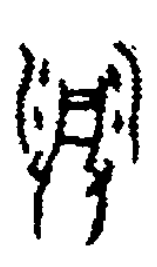
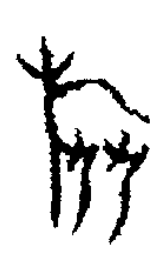
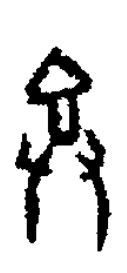
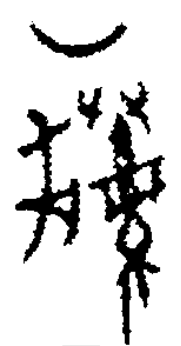
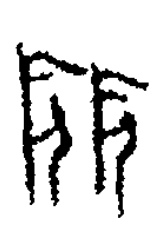
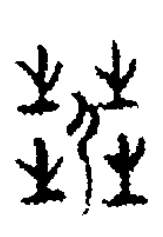
明義士殷虛卜辭續編第一集（The Menzie's Collection of Shang Dynasty Oracle Bones Volume I）

金祥恒

加拿大明義士子宜（James Mellon Merzies）收藏甲骨之富，不獨見稱於外人，就以吾國而言，亦無與匹敵。我國私人收藏者，除羅叔言之外，劉體智藏有二萬八千餘，部份選錄拓印於殷契粹編一千五百九十五片，其餘未見刊印。明義士收藏之五萬片，曾於民國六年三月（一九一七）從中選擇二千三百六十九片，影摹付梓，名曰殷虛卜辭（Oracle Records from the waste of Yin）雖影摹逼眞，難免筆劃粗細影響其體勢，不易分期，不若拓印遠矣。

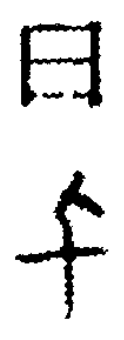
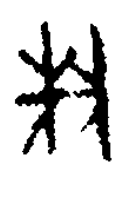
明義士所藏五萬片，原物下落不詳，其一部份約七千五百餘片爲加拿大皇家安大略博物館所收購，金櫃久藏，乏人董理，適有本校碩士班畢業生許進雄君，篤好甲骨，猶如杜癖，三年前受安大略博物館之請，負笈遠遊，整理該館收藏之甲骨，先以墨拓，再行分期，編印成書，於一九七二年由加拿大皇家安大略博物館出版，爲近年來甲骨卜辭之新資料。以百磅銅板紙平板影印，印刷清楚精美。

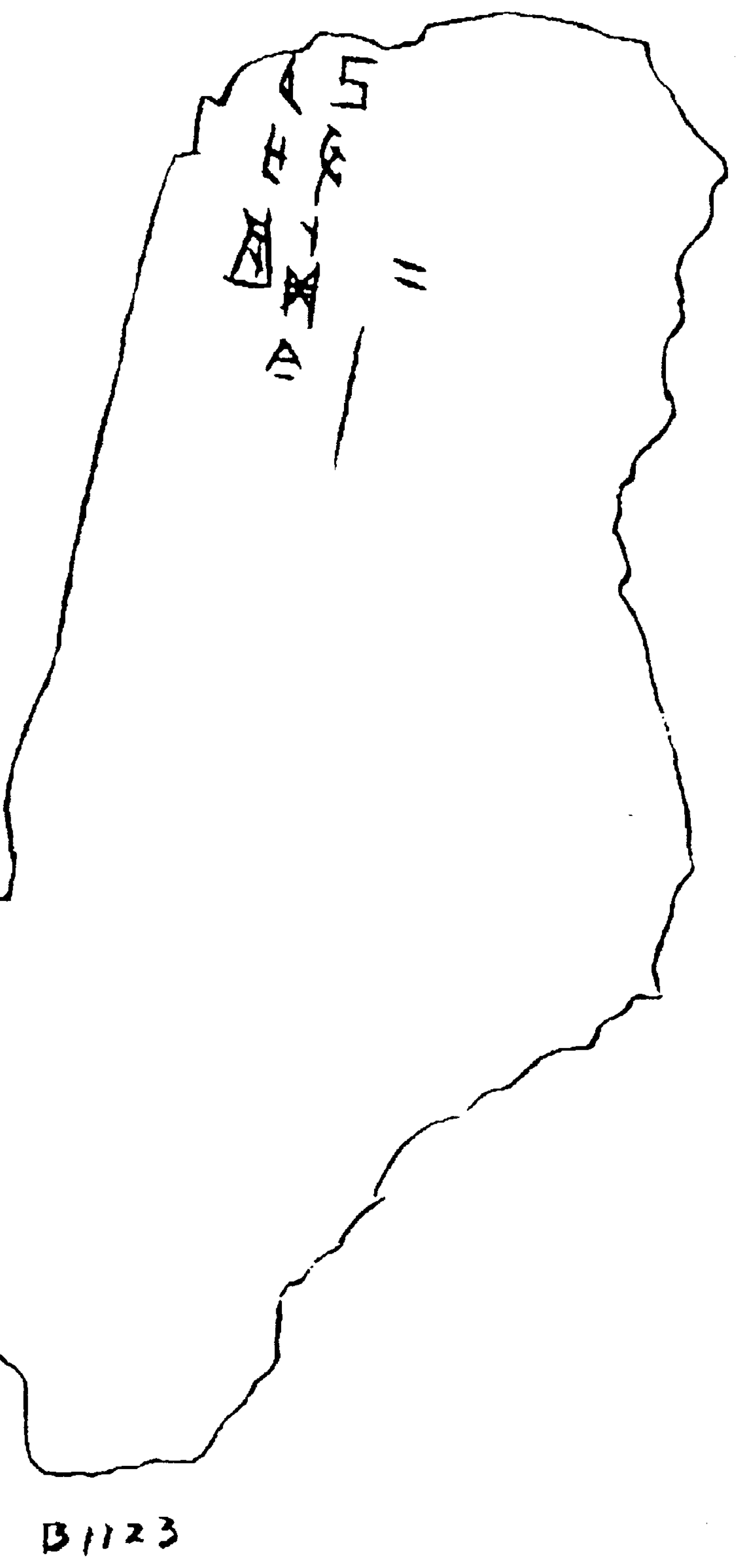
是書卜辭，依照董彥堂先生所創之斷代法分爲五期，第一期爲武丁及其前世之物，第二期爲祖庚祖甲，第三期爲廩辛康丁，第四期爲武乙文武丁，第五期爲帝乙帝辛。每期又分龜打骨，並照卜辭內容，分屬祭祀、求年、氣象、卜夕、卜旬、田游、方國征伐、疾病等類編次，有條不紊。全書共三千一百七十六片。附拼敘七片，與其他甲骨卜辭七集，殷虛文字甲編、戰後京津新獲甲骨集、殷虛書契續編、殷契佚存、京都大學人文科學研究所藏甲骨文字、庫方二氏甲骨卜辭、殷虛書契後編、殷虛卜辭、戰後南北所見甲骨錄、戰後寧滬新獲甲骨集、殷契粹編等書，拼敘者四十二片，摹錄於後，可見其用力之勤，工夫之深矣。

三千一百七十六片，多係斷簡，無一完整者，以字數論，有一片多至百餘者，少則一二字。大多爲小片，其中有不少罕見之新字，從未見過者，如（Ｓ一一五）（Ｓ四八八〇）（Ｓ六二二）（Ｓ八五四）（Ｓ八九五）（Ｂ一七三七）（Ｂ一七四二）（Ｂ二二九〇）（Ｂ二三四四）（Ｂ二三八八）（Ｂ二六八〇）（Ｂ二七二七）等，屢見不尠。如Ｂ一一二三六片：

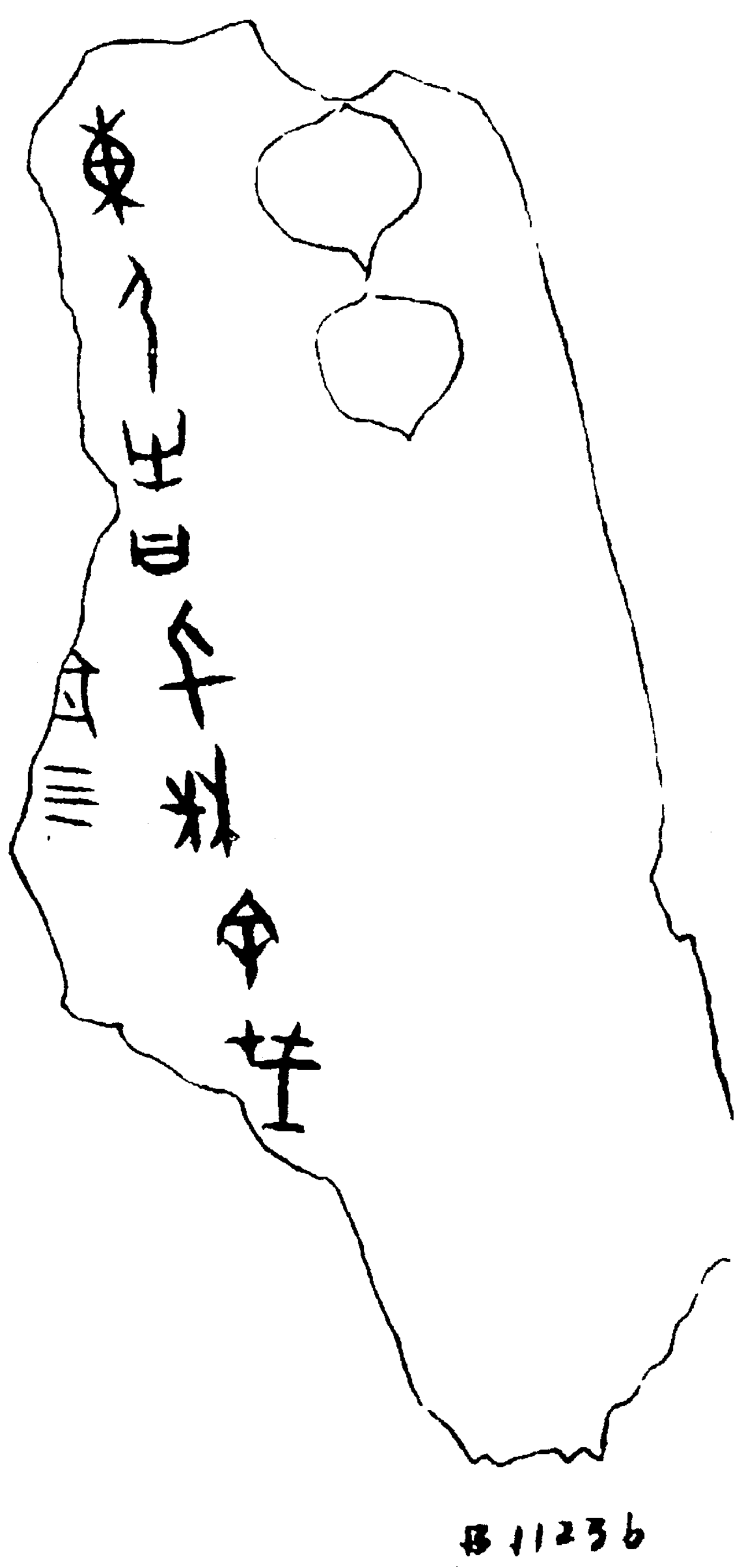
己丑卜，貞：今夕亡𡆥?

其反面：

東夷㞢曰（伐），余𢦏。



B1123

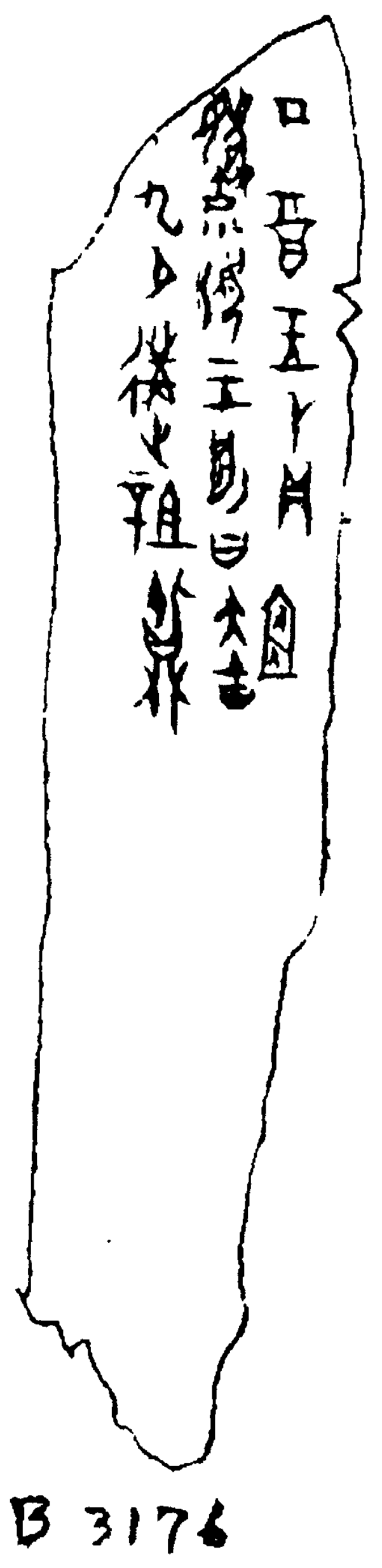


B1123b

東夷之名古籍金文屢見：如宗周鐘「艮子迺遣閒來逆邵王，南夷東夷具見。廿有六邦」。小臣謎殷「𠭯東夷大反，白懋父㠯殷八師征東夷。」疐鼎「王令趞戲東反夷」。禮記曲禮下「其在東夷北狄西戎南蠻，雖大曰子。」雜記「孔子曰少連大連，善居喪，三日不怠，三月不解，期悲哀，三年憂，東夷之子也」，左傳襄公廿九年「杞，夏餘也，而即東夷。」昭公十一年「紂克東夷而隕其身」。孟子離婁下「舜生于諸馮，遷於負夏，卒于鳴條，東夷之人也。」管子小匡「東夷西戎南蠻北狄中諸侯國，莫不賓服」。史記五帝紀「殛鯀於羽山，以變東夷。」後漢書有東夷列傳謂「武乙衰敝，東夷寖盛」，又「管蔡畔周，乃招誘夷狄，周公征之，遂定東夷。」惟甲骨卜辭僅此一見，考其由來，殆亦遠矣。

B三一七八片：

丁酉王卜貞，圂毓母乙，王固曰大吉，口九月遘且辛𪔂。



B3176

其中「圂」「毓」「母乙」諸字，拓印雖甚清晰，但原物經久埋藏，因而字跡漫漶，不易辨認。玆懸推而釋之，恐有錯誤。待後補正。「（在）九月遘且辛𪔂」。依照卜辭文例如：

才十月遘大丁羽。	甲二四一六
十二月遘示癸祭。	前一二、六
才九月冓示癸𠧞。	金一二四
才四月冓示癸彡。	綴二一
才正月遘小甲彡夕。	明六一
才九月遘報上甲𠧞。	前四、一八一十三、二七、六、
才九月遘報上甲尞五牛。	後上一八三　通五九〇

其羽、祭、𠧞、彡、尞，皆祭名，則此𪔂亦爲祭名無疑，王國維曾云：

古器物銘多云：「作𪔂鼎」「作𪔂彝」亦有單言「𪔂」者，如潘祖蔭所藏二器，其一銘曰「斿婦𪔂」，一曰「魯內小臣床生作𪔂」其器則皆鼎也。是𪔂爲鼎彝之名，今按𪔂字於金文，或从匕肉，从鼎，或从肉从爿从鼎，或但从匕肉从爿，殷虛卜辭，則或从匕肉从鼎，或从匕从鼎，或从 爿 从鼎，當即詩小雅或肆或將，周頌「我將我享」之將字，匕肉於鼎，有進奉之義，故引伸而爲進奉，應公鼎云「用夙夕𪔂」曆鼎「其用夕𪔂亯」，皆以「𪔂亯」並言，與周頌同，凡匕肉必於鼎，故鼎亦得𪔂名，非鼎之外，別有一種名𪔂者（甲骨學文編）。

𪔂祭之禮制如何，不若卜辭五種祭祀之羽、𠧞、劦、彡、祭有規律可尋也。

玆舉二例，一以考史，一以徵禮，其餘可供考文辨制，必有在也，惟好之者，經心研讀耳。

（原載《中國文字》第四十四冊，一九七二年六月）

麼些象形文字字典序

董作賓

近數十年，因爲考古學民族學的研究，逐漸發達，中華民族之文化，乃益放其燦爛偉大之輝光，不惟古代文化，已得到地下蘊藏遺物爲之徵信，卽現代各宗族間文化之謎，也多因考查研究而能闡幽發微，予以表彰。這部字典，就是一個例子。

在中華民族偉大的文化圈之內，僻處於西南高山深谷間的一支宗族，約當西曆十三世紀時，創造出一種很原始的象形文字，這種文字，雖然明淸兩代著作中曾提到他，可是直到近三十年纔有人注意研究，筆之於書，使與世人相見。固然，這在中華民族文化的統系上，祇能算泰岱華岳旁邊的一座小丘，長江大河沿岸的一股細流，但是這座小丘，這股細流，卻自有他特立的精神和發生的源泉是值得大書特書的，這就是本書所載的麼些象形文字。

我開始注意到麼些象形文字，到現在已是十年了。民國二十三年的春天，我住在北海公園的親蠶宮，方國瑜先生跑來看我，他說劉半農先生曾託他向麗江搜集麼些象形文字，他花了不少的工夫，輯錄許多字，採購許多經典，可惜半農先生已不及見了。接着方先生就到歷史語言研究所從趙元任李方桂兩先生治音韵學，並着手麼些文字典之編撰。

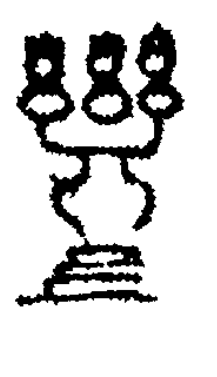
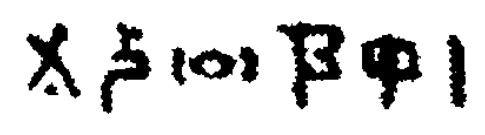
二十四年的秋天，我在南京又看到了楊仲鴻先生所編麼些文多巴字及哥巴字漢譯字典的稿本。從他的自序中，知道字典是作於民國二十年，又知道美國的洛克博士，也同時在研究這種文字。楊先生這本字典分麼些文爲十八類：數，天文、地理、時令、鳥、獸、昆蟲、植物、人、身體、服飾及用具、水火、雜佛、鬼、怪、龍。每字三列：左多巴字，中哥巴字，右漢譯，以漢字註音並釋義。在楊氏之前，有法人巴古氏(J. Bacot)於所著麼些一書(Les mo-so)中，附有字典，以法文譯義之字母爲序，書刊於民國二年(1913)。國人於麼些文字成一有系統之作，當首推楊氏，雖然他的字典採錄編纂，未能兼備，而他的創始之功，是不可埋沒的。

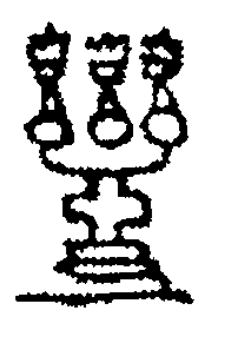
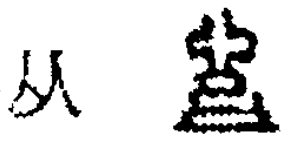
二十九年的秋天我住在昆明的東北郊外龍泉鎭，有一天方國瑜先生從城裏寫信給我，他說：「近月整理麼些文字大體已就緖，全書分四部份：一、緖論，文四篇：1. 麼些民族考，2. 麼些宗教考3. 麼些文字之構造，4. 麼些語言之特徵；二、麼些文字甲種，卽象形字；三、麼些文字乙種，卽音字及詞。四、附錄文二篇：1. 麼些經書譯例，2. 麼些語言譯例。已許齊魯大學出版，九月中交稿。此書先後七八年，隨時增刪，今始寫定」。云云。同時把一、二兩部份稿子送到，要我作一篇序。方先生的文字甲種，共分二十類：1.天文之屬，時令附，2.地理，方向附，3.植物，神樹附，4.飛禽，神鳥附，5.走獸，6.蟲魚，神蟲附，7.人稱，代名詞附，8.人事，9.形體，10.服飾，11.飲食，12.居住，13器用，14行止，15.形狀，16數名，17.宗教，18.聖，19.神，20.鬼。合計九百九十一字。每字，首編號數，次列麼些象形字，又次國際音標注音及聲調，又次訓詁及說明，或附列別體及異音、異義。此書已較楊氏字典詳贍，足供參考，惜至今五年，尙未出版。所以在這裏要特別介紹一下。

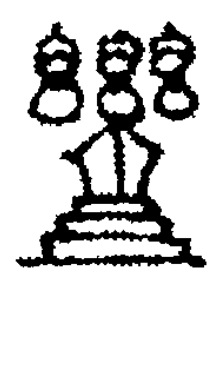
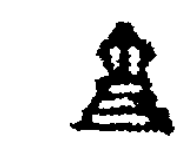
李霖燦先生這部字典可以說是一支生力軍，他着手雖晚，而成功卻很神速，眞是「譬若積薪，後來居上」了。楊方皆麗江人，於麼些文字之研討，耳濡目染，較易爲力。霖燦以異鄉之人，蹦踏生地，學習此難於瞭解之語言文字，而能不憚艱苦，專力爲之，前後五年，又於來川之後，努力於音讀之校訂，字彙之補輯，盡四個月之力，寫成此書。他這種「鍥而不舍」的苦幹精神，實在是令人敬佩。這部書有方書的長處，而材料增多了一倍以上，注音經張琨先生的幫助，可以說十分準確的。讀者倘能細心去理會，就彷彿臥遊於玉龍山麓，金沙江干，目覽麼些經文，耳聆「多巴」解說，不待我來恭維了。

我之所以注意麼些文字，不在音而在形。我打算拿這種象形字，來比較漢文的古象形字，或者可以幫助我們對於古文字得到更眞切的認識和瞭解。十年以來，偶有會心，可是因爲期待着一部完美的字典，始終還沒有作過大規模的整理。現在且把零星的意見，寫出來一點。

這裏有一個先決問題，是麼些象形字創造的時代。據李先生的假定，麼些文的形字，不能晚過明代，而象形字經典的時代，又不能早過唐。他這話是可信的。但是他同時卻不相信在宋理宗時代的麥琮「且制本方文字」之說，因爲「旁證不足」。現在有一個旁證，就在這本字典方面，第2048號不過因解說的不同，未被發見而已。此字楊、方書中皆有之，對照如下：

楊書　人類   讀「老」「油」「不補」「所」「數」「古」，卽造藏文，多巴文、漢文之人。

方書　聖之屬 892  la˧ iɣ˩ py˧ ʂo˧ ʂv˧ kv˧ 發明漢、藏、麼些三種文字者。字从  象神座。

本書　神類 2048  [la˧ o˧ i˩ ʂɯ˥ py˩ so˧] 神名，共三位，同坐於  神山之頂。此三神之名，用古宗人音，末一音之[so˧]卽三之意也。

李先生把這三位列入「神類」，又說末一音爲上，顯然是另一來源。方書則與楊書的解說，似乎是同一來源，楊先生是從中甸排的溫教師和華亭學來的，以爲這是三位造字的人，故列入「人類」。我們知道中國造字的聖人，在傳說中最普遍的是倉頡，依楊書次序「數古」與漢文都居第三位，「數古」也同倉頡的聲音相近，由此推之，則造藏文者是「老油」，造多巴文者是「補所」了。再對證其音：

	楊	方	李	今擬定
造藏文者	老油	la iv	lo o	
造多巴文者	補所	py So	py So	麥琮(保琮、牟保阿琮)
造漢文者	數古	Sv kv	i Sm	倉頡

方書故意把漢文放在第一，大概是「內諸夏」之義，但是次序卻不能音義相應了。我們如果照和華亭的說法，三人之中，至少可以猜出兩人，py So 之爲保琮或麥琮，Sv kv之爲倉頡，都不至於大錯的。只有造藏文的一人，與傳述中唐太宗時人圖密薩保達 Thu-mi Sam Bhota 音不相近，只好付之闕疑了。

我們現在可以說多巴字大概是麥琮創造的，不過隨時是在補充着新字的。

拿麼些象形字來比較漢文的古象形字，好像一位遠古的老聖人來垂詢一位宋朝的神童，老聖人只能把兒童的心理來回憶他的少年時代，因爲他的童年已是模糊不清了。在文字演進的過程中，麼些文算是童年，而今日所能看到的漢文古象形字，已到了少年時代了。

記得列子的湯問篇有這樣一段故事：

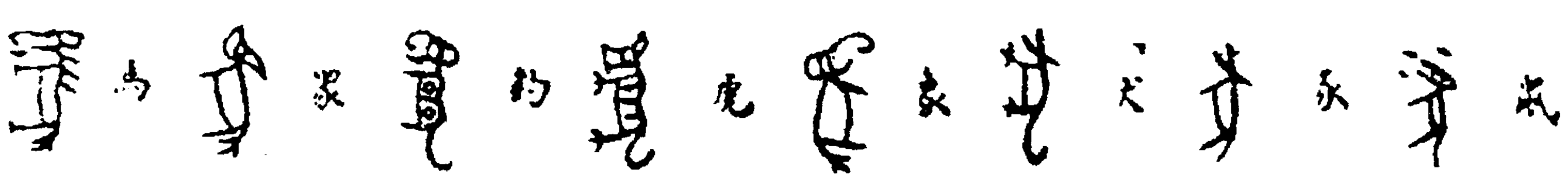
> 孔夫子出游到東方，遇見了兩個小孩子在吵架，問他們爲了什麼事？一個孩子說：「我以爲太陽纔出來時候離人近，中午時候遠」。一個孩子說：「太陽纔出時遠，中午時近」。這孩子說：「太陽剛出來，像一個車蓋那樣大，到中午，就小如盤盂，這不是遠的小近的的大嗎」？那孩子也說：「太陽剛出來，滄滄涼涼，到中午熱的如探湯一般，這不是近的熱遠的涼嗎」？孔夫子聽了，竟不能評判他們誰是誰非。

兒童自有他的活潑思想，特殊見解，所以孔子嘗說：「後生可畏」。現在我們要請倉頡老聖人來垂詢這位麥琮神童，把兒童時代的麼些象形字來比較甲骨金文中漢文少年時代的象形字了。

關於麼些象形文字本身的問題，李先生在引言中已發揮盡致，另外有方國瑜先生緖論中麼些文字之構造一篇，聞宥先生麼些象形文之初步研究一篇，都是提綱挈領，自成體系之作，我這裏不再論及，這裏所說的，是把比較麼些和漢文象形字的結果舉出幾個例子。

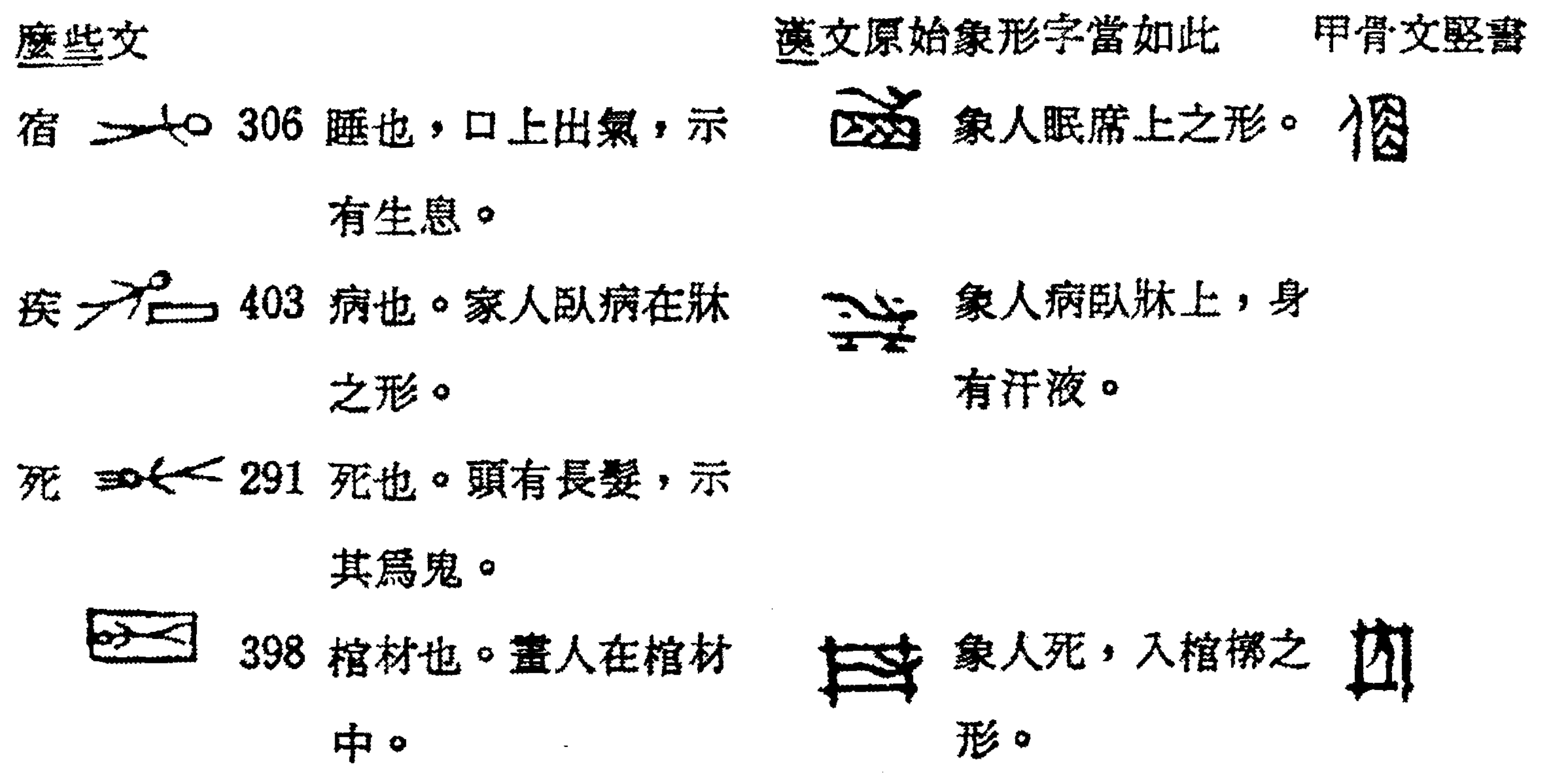
一、可以反映漢字演進之久。

文字原於圖畫，這是全世界沒有例外的，最初是寫生畫，漸進而簡單化了，變爲代表形象的符號，麼些文滯留在第一步，漢文我們以甲骨文爲標準，則到了第二步。李先生在本書引言論形字與圖畫一段裏，說的最明白，舉出一個「挿圖」，兩個「圖號」證明有些只是圖畫，不是文字。所以我稱他是文字的童年。甲骨文便大不相同了。文字到了殷商時代，已是「約定俗成」，完全脫離了圖畫的階段，而變爲一種符號。單就象形字來說，例如寫動物字，許多是竪起來的。



試看本書63—70葉獸類各字，絕無四足騰空之形，這就是繪畫與象形文字不同之處。漢文是可行的，若是把一個馬字橫寫起來，不但佔的地位太寬，寫着也不順手，因爲這是文字，不是圖畫，大家看起來便不覺奇異。如果麼些文獸類也這樣竪寫，「多巴」們卻要費解了。

甲骨文中，尙有許多字，原始的圖畫是橫的，現在也變爲竪的了，舉疾、宿、死三字比較之：

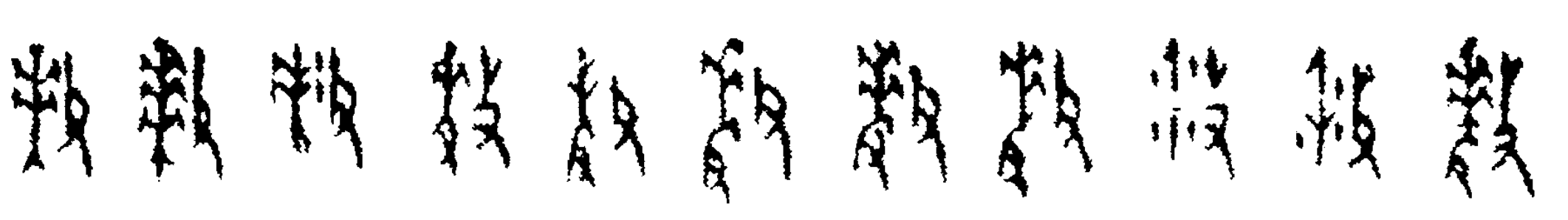


麼些文				漢文原始象形字當如此	甲骨文竪書
宿		306	睡也，口上出氣，示有生息。	象人眠席上之形。	
疾		403	病也。家人臥病在牀之形。	象人病臥牀上，身有汗液。	
死		291	死也。頭有長髮，示其爲鬼。		
		398	棺材也。畫人在棺材中。	象人死，入棺槨之形。	

麼些文人形多爲正面立象，與漢文大字作 同，亦作 ，甲骨文則以 爲天字。甲骨文人形多用側面立象之 ，這是不同之點。看上例，宿、疾、死字，人皆不應直立，而在甲骨文中，竟然把睡眠的，生病的，死的人，都使他們站起來了，因爲這是符號，是文字，不是圖畫，那時卽使竪寫，大家也會明白，所以我說中國文字到殷商時代，已入少年時代了。

麼些文象形字，可以說沒有一個字不知道他的來歷，甲骨文就不然，因爲文字的演進，時期已久，不但三千年下的今日，有許多字不易索解，就是在當時，也不免有這種情形。例如一個ㄓ字現在讀過國音字母的兒童，都可以認識他，說這是「ㄓㄔㄕ日」的「ㄓ」，也就是古寫「之字」。其實錯了，你不能把之字去讀甲骨文的ㄓ，這個字在殷代的早期，用作有無的「有」字，到了祖甲不用他了，用左右的右（ ，象右手）作有無的有，爲什麼要把ㄓ改爲 ，這倒是耐人尋思的問題。大概是像我們現在一樣，已不能明白ㄓ字的意義了罷。

又如一個 ，原來是打麥子的意思，殷代主要的農作物是麥稻（ ），黍禾（穀子，小米）四種，可是此字的來歷更古，到殷代已失去本義，而用爲福釐的釐字了。此字有



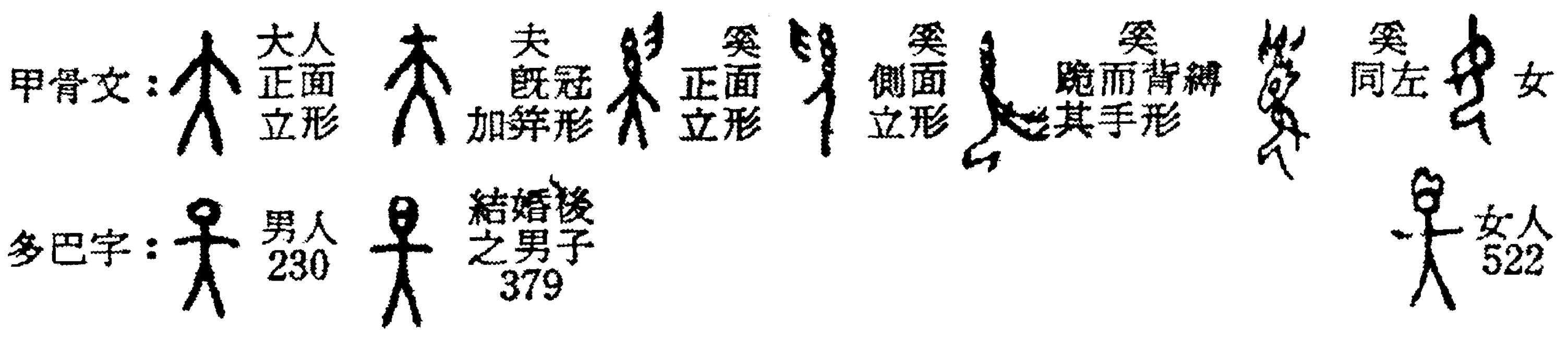
各種寫法，見於廩辛、康丁、帝乙、帝辛世的卜辭中，用爲「馭釐」或「延釐」，皆爲受福之義，可是我們分明可以看出這是一幅打麥子的圖畫， 是麥子， 是一手持捧，有些字尙有一手在執着麥 。時代久了，古義轉變了，把打麥之字，引申或假借爲福釐之釐了。這種情形，是麼些文中不會有的。

文字到殷代，已是相當的進步了，這是由幼稚而原始的麼些文字，反映得很清楚的。在甲骨文中，已俱備六書的規模，假借字之多，形聲字之逐漸孳乳，二百七十三年間，仍然不斷的演進着，這裏不便多說了。

二、可以反映漢字起源之古。

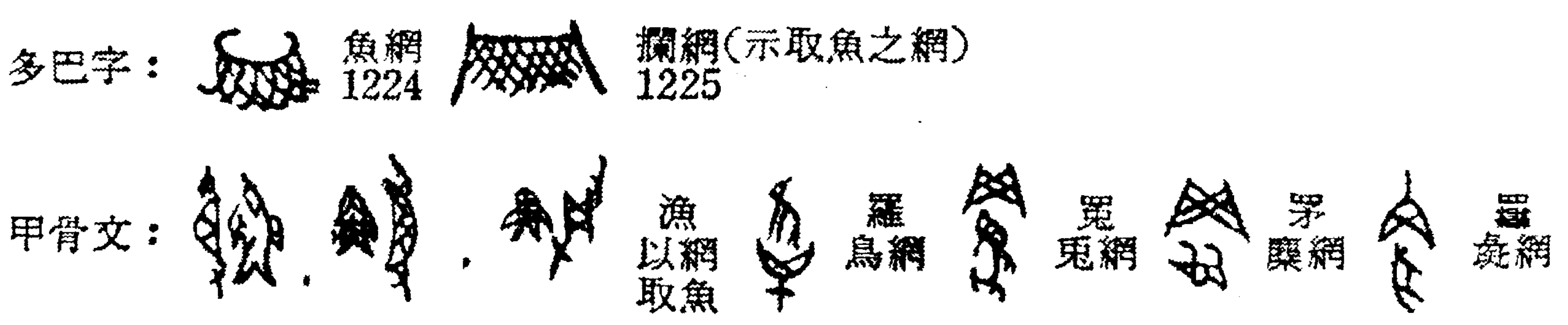
從上一個例子，已可以知道漢字到殷代既是演進日久，又是起源甚遠，我們還可以拿麼些文作一個反映。本來象形字的創造，除了自然物以外，可以說都是社會背景的寫眞，對於古代象形字的硏究，我們不可不特別注意的有兩點，都用殷代的甲骨文字作標準。第一點，我們不能因甲骨文象形字裏有這種現象，便硬派他殷代社會是如此，第二點，我們不能因殷代社會中有這種情形，便硬說這象形字是殷代人作的。以往拿文字來講古代社會問題的，多犯了這兩種毛病。

現在先說第一點，例如一個「女」字，甲骨文作 ，有時候頭上加一笄，作 ，有時候與 通用作母字。婦女在殷代的地位並不低，殷王賞給他的女兒些貝朋的賞賜，王的后妃，也有私田的享受， 活的時候， 帶軍隊出去征伐； 替國王主持祭祀，死了之後，與先王同樣的把神主供在宗廟，受着後人的祭拜。可是這女字所象之形，卻是一個俘虜。證據就在甲骨文裏。原來造字的時候，看見女子是從別的部落擄掠來的，她坐在地下，兩手是在前面縛着，乃造成側象的 字。我們知道奚是一種犯罪的人，普通的是把他們的頭髮編起來，給人提着，作 形，一是正面，一是側面立形，手都沒有縛的，有的作 形，背縛着兩手，而又跪着，縛手的繩子也畫出來了。又作 不過沒畫手同繩子，放大了頭部而已，甲骨文「如」字所從的，正是此形，作 ，一旁從口，一旁卻從男奴，不從女。再看麼些文的女字，完全同男人寫法一樣，只在頭上區別而已。一併比較如下：

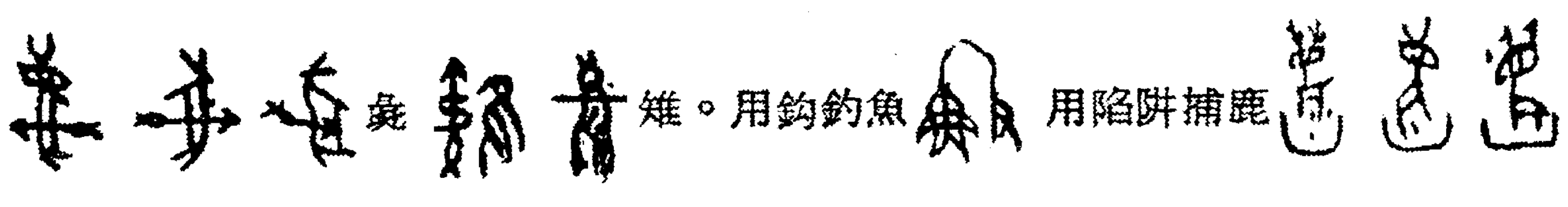


古今擄掠的敵人俘虜，就是罪人，也就是奴隸。古來跪坐又是同形。我們看甲骨文中的女字，爲什麼要同奴隸俘虜一樣的描繪，使她縛着兩手，使她跪着或坐着，我們再看多巴字，又是男女手等的 ，就可以知道女字作 的原始的意義了。男子縛手于後，女子縛手于前，下段尙有說明。

再說第二點。中國文字的創造，大概在由漁獵畜牧進於農業社會的時期，這裏只能舉兩個例子，與麼些文作比較。例如一個網，在麼些文中，只有魚網；甲骨文中可就多了，有魚網，有鳥，兎、麋、龕的網，並且各有專名。



殷代國王多歡喜打獵，一來是娛樂，二來是習武，他們打獵時用網之外，也用箭去射野獸同野雞，如



這些漁獵的工具，殷代確實仍在使用着，正像以上所舉的字。但我們只能說這些工具同文字，都是承受了前人的遺產，而不能說這全是殷人的創制。

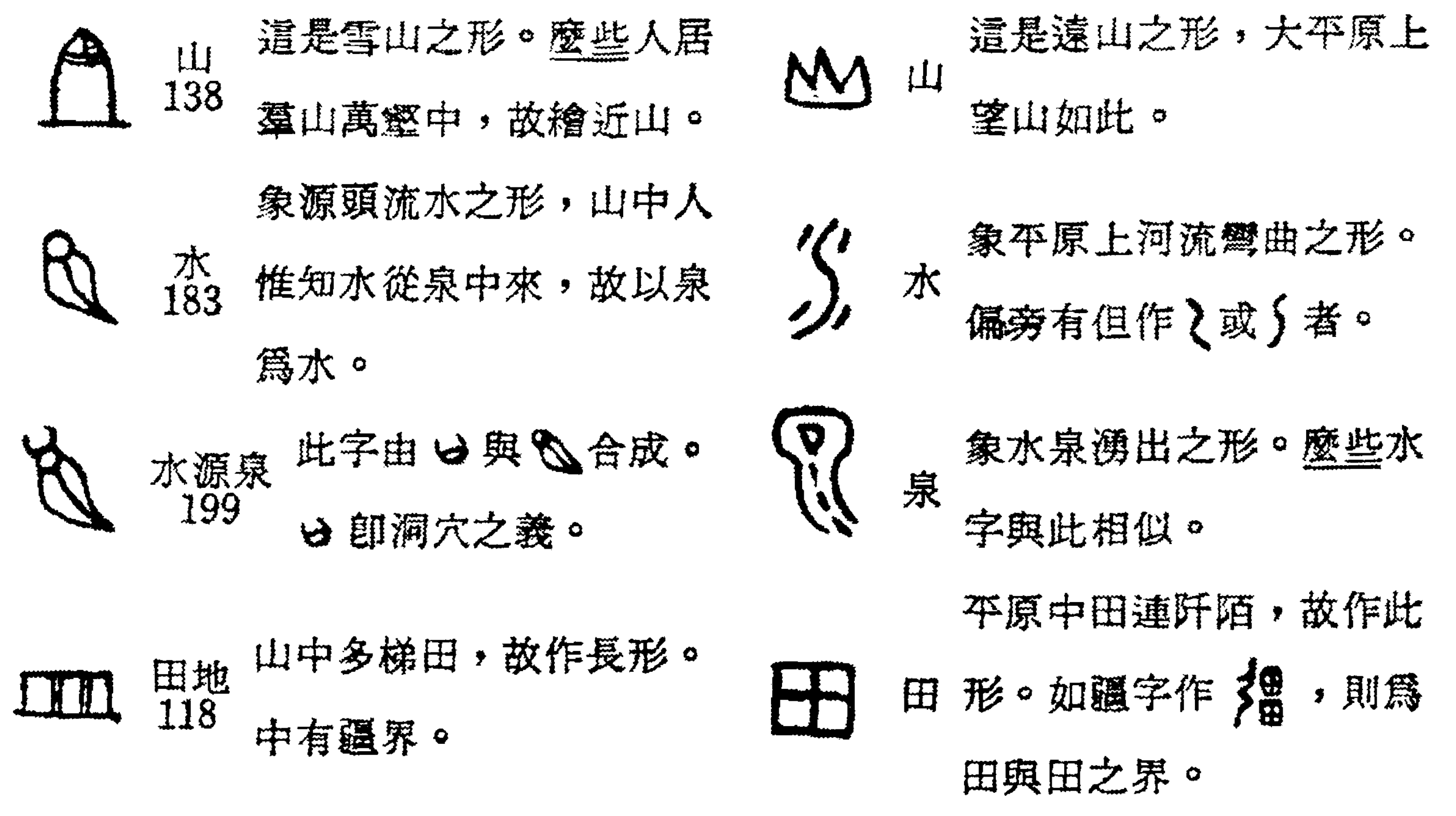
又如麼些文的獸類字760到856，都是側面之形，或作繁體畫全身，或作簡體畫頭部，只有貓853畫了一個正面的頭 。 甲骨文中獸類字多作側視全身形，只有牛、羊二字是正面的頭形。據我看，牛羊作 ，是由牢字想出來的，牛牢爲 ，羊牢爲 ，這牢字的創作，至少已到了農業社會，人們有定居了，開始豢養家畜，於是造了平頂的小房子給牛羊住，門口不能太大，只是保持一隻牛或羊的出入，當牛羊在門口，向外探望時候，造字的聖人，就造出兩個牢字來，從牢字裏面牽出來牛羊二字。次序是先有 ，後有 ，先有 ，後有 ，不然就無法解釋「這家畜之中，爲什麼牛羊只畫正面一個頭形」的問題了。

同時我們不能不提到家字。麼些文的家作 1520，是個形聲字，甲骨文的家作 ，是房子裏一條豬，這並不奇怪。漢代的陶製明器，養豬是在住家的樓下，現在各地方也還有這種士風。因爲古代的人，日出而作，日入而息，白晝裏男的女的，都到田間工作去了，家裏面只剩下這飽食終日懶洋洋地睡着的一條肥豬了。

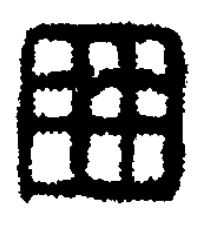
這些我們也不能說：殷代人養牛羊用牢，養豕於家，這牛羊牢室家等字，是他們造的。

三、可以對證造字的地理環境。

李先生從一個水字 ，中分之爲北 南 二字，推斷麼些象形字創造的地方在無量河的附近，大致是不會錯的。漢字的創造，無疑的是在黃河流域的大平原。這都是象形文字可以明徵的。現在簡單的舉幾個例子：

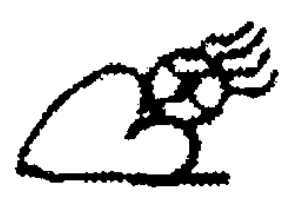
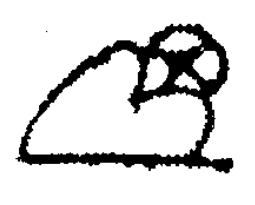
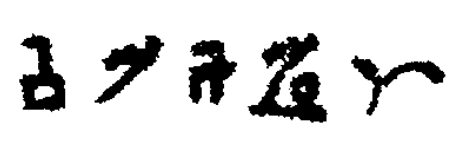


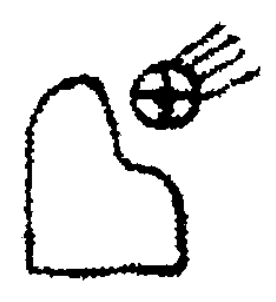
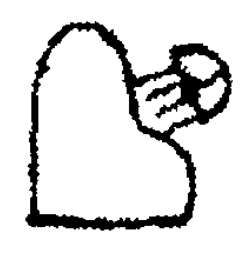
多巴字		甲骨文	
山 138	這是雪山之形。麼些人居羣山萬壑中，故繪近山。	山	這是遠山之形，大平原上望山如此。
水 183	象源頭流水之形，山中人惟知水從泉中來，故以泉爲水。	水	象平原上河流彎曲之形。偏旁有但作 或 者。
水源泉 199	此字由 與 合成。 卽洞穴之義。	泉	象水泉湧出之形。麼些水字與此相似。
田地 118	山中多梯田，故作長形。中有疆界。	田	平原中田連阡陌，故作此形。如疆字作 ，則爲田與田之界。

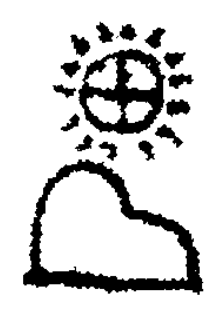
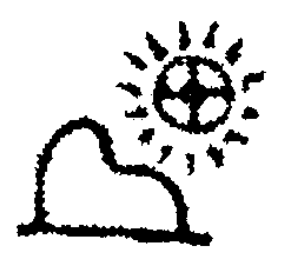
119　 田 此字爲古代井田遺制，亦田字。或作 ，作 ，均同。

路 223 山中多羊腸小徑，故作此形。　 行 平原上道路四通八達，故作十字形。行，卽道路。

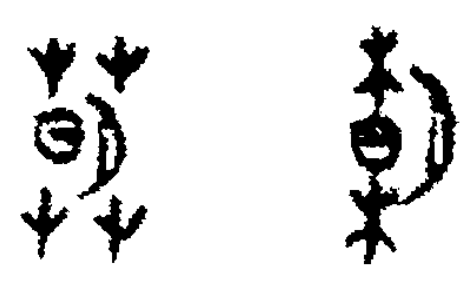
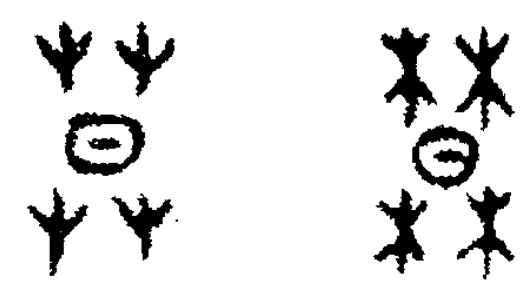
以上各例，已可以很明白的表現着地理環境的不同，創造的文字也因而不同。還有一個最有趣的比較，就是朝暮的字。麼些文中，朝是日出於山坡之上，暮是日落於山坡之上。這兩個字楊、方、李三家字典所收的微有不同。

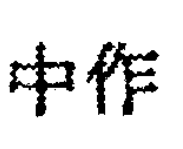
暘： 讀「你業」「每」「崩伯」「古」「苟」「土」日出於山上之意也。又云日出也。　  讀「你業」「每」「崩伯」「駝」「古骨」日入於山後之意，日落也。

方： ɲi˧ me˧ tʻv˧ 日出也。　 ɲi˧ me˧ gv˧ 日沒也。

本書 40 41  [ɲi˥ mɛ˥ mbo˧ ku˥ tʻu] 意爲太陽由坡頭出來。　 [ɲi˥ mɛ˥ mbo˥ tʻo˥ gɯ] 意爲太陽向坡後落下。

三種寫法，以暘書所據之本爲妙。主要的意思，都是表示着日出日落俱在山坡上的。我們再看漢字的甲骨文，朝暮字各有兩種寫法：

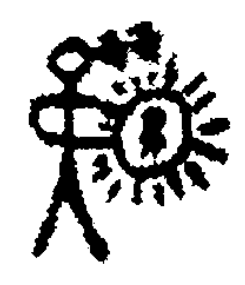
朝字： 此字從艸，從日月、會意，或從木。　暮字： 此字從日，從艸或木。

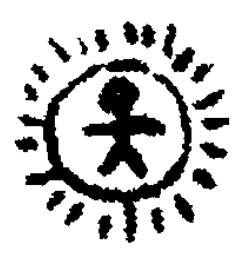
甲骨文中，屮同木，可以通用，這裏只是用作地面上的自然物，譬如說日頭已近地面落在草叢裏或樹林中了。這正是大平原上「暮」的景象，但是加上了一鈎殘月，爲什麼又成了「朝」呢？這在古人是有根據的，因爲「夙興夜寐」的夙字，乃是早起之意，在甲骨文中作，像早起之人，跪在地上，舉手向月之形，這「月」，應該是陰曆下弦以後之月，早晨時候，正是殘月當頭。「朝」字所用之「月」，和「夙」字之「月」是同一取象，就是二十六七日，早起時殘月在天，不久便見那一輪紅日透出於茂草叢林之間，這不是「朝」在大平原中的景象麼？不過我們要知道這是會意字，這字的結構，是把草和林，表示地面，把日表示時間之晚。日、草或林合起來成了「暮」的意思。同樣的，以日、草或林，加上早晨的殘月，合起來成了「朝」的意思。這是文字，不是圖畫。回頭再看麼些文，那才是眞正的圖畫，他們不是一個字，乃是「日出於坡上」，「日落於坡後」兩句話的寫眞，也就是「日出東山」，「日落西山」的兩幅圖畫，這也是我所說的兒童時代與少年時代不同之處。

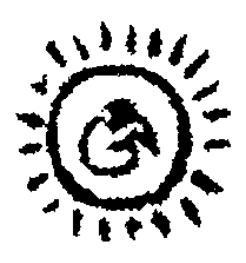
四、可以對證造字的社會背景。

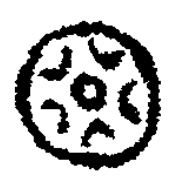
象形字是描繪社會上一切事物的畫圖，充分的表現着當時社會的背景。如本書裏「用具類」以下，處處可以看到麼些人的社會情狀。在這裏我只舉兩個例子。

第一個例子，舉用具中的鏡子。在本書列入「人文類」362至365，鈔錄於下：

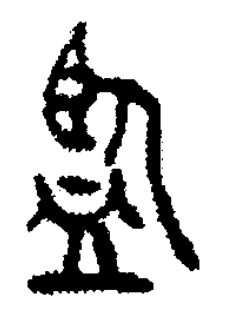
 362 看也。畫人持鏡照看之形。

 363 鏡也。畫明鏡之形。

 364 魯甸鏡字，注其音。

 365「若喀」區之鏡字。

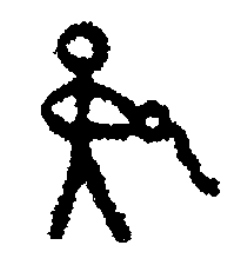
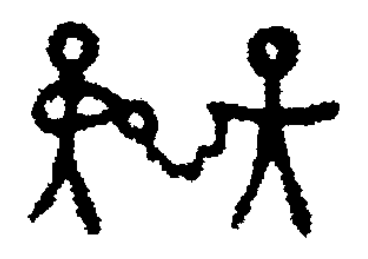
這些鏡子，是從內地流傳去的，必爲銅鏡無疑。這類銅鏡，在中國從周代一直用到清朝的初年。背面的花紋隨時在演變着。「若喀」區的寫法，乃是鏡子的背面，有簡單的花紋和鼻紐，正是唐宋以來銅鏡的形制。在周代以前，是沒有銅鏡的，遠古的人，也要用鏡子的，他們的鏡子，只是一盆清水，所謂「以水爲鑑」。看鏡子的「看」，就是「監」字。舉金文頌鼎中監字：



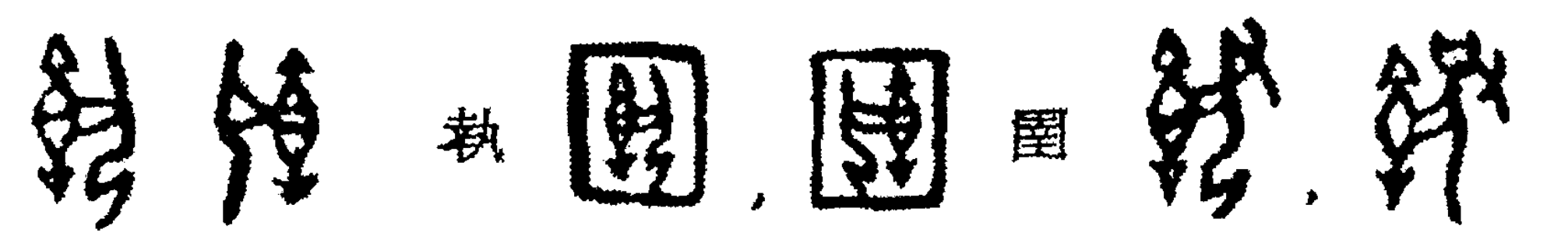
是見字，從人，從目，和麼些見字作 ，造字法相同。 是皿字，盆子一類的盛水器，（後來這種盆子就叫作鑑）中有一點表示水。人俯在水盆上面，睜大了眼睛向下瞧，就是看鏡子，就是監。

第二個例子，舉刑具中的手鐐。

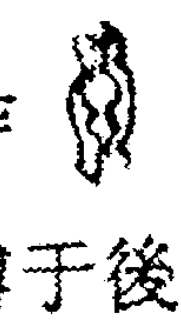
爲了維持社會的秩序，國家必有「法」與「刑」，麼些文中的刑具有手鐐，自然是描寫着我們國家的刑法了。可是這種圖象，是很近代的。如：

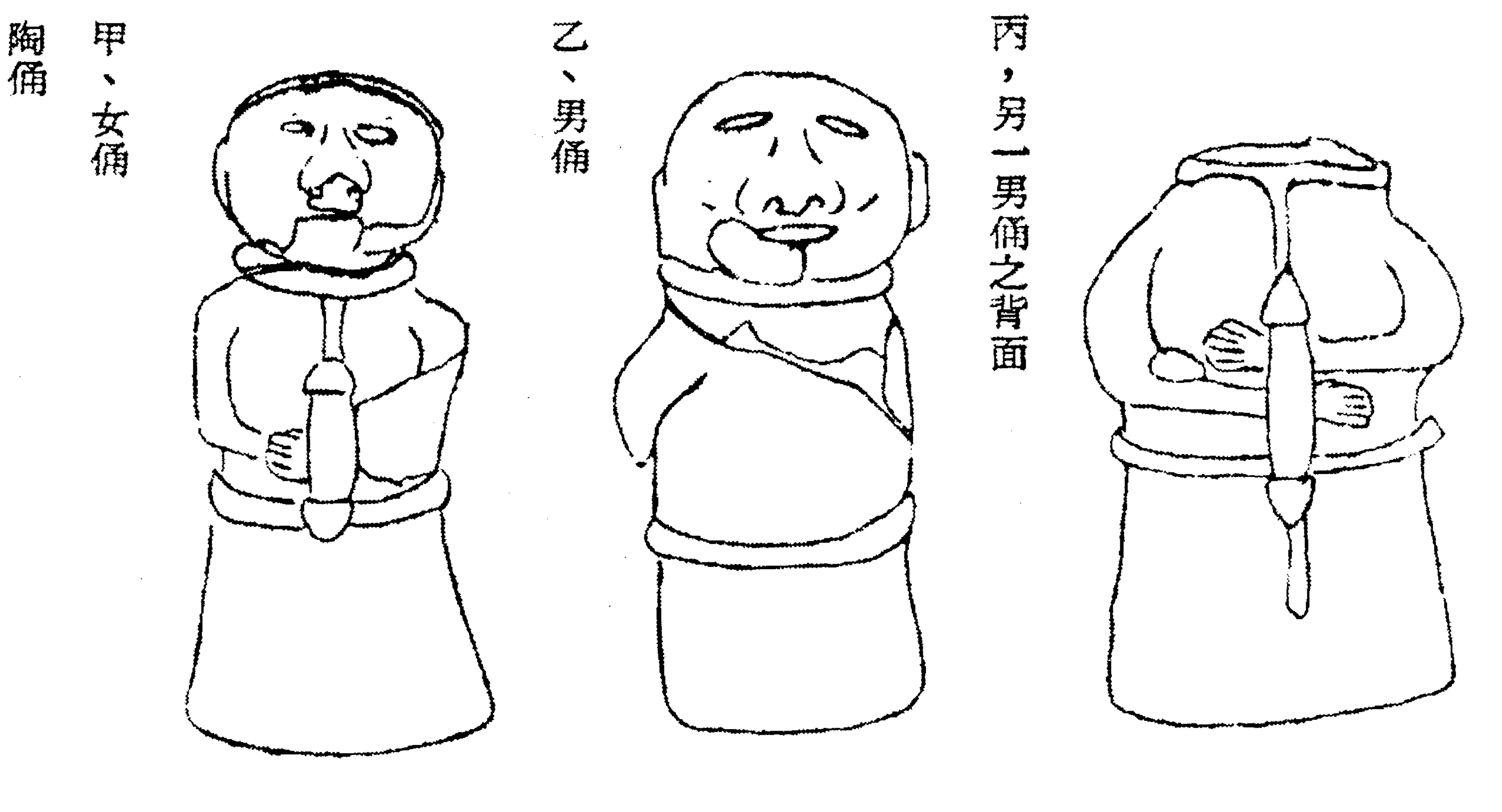
 341 手鐐也。畫人手上有鐐之形。或寫作  畫一人帶手鐐爲另一人所牽。

這手上的鐐，無論是繩是鐵，與現代的刑具，差不了好多。可是古代的手鐐就大不相同了。在甲骨文象形字裏，有一個 字，也作 ，這是手鐐的專字，就是械手的刑具。周禮秋官掌囚所載：「凡囚上罪梏拲而桎」的「拲」。甲骨文中的執字圉字，摯字，都圖繪着這種帶着手鐐的罪人，舉如下：



執字是一人帶了手械坐或立之形。圉字是執刑的罪人，囚在牢獄中之形。摯字從執，另一手，表示爲另一人所牽，正像麼些文的或體。次一形，頭上有口形，是又加了械頭頸的刑具叫作梏的。

這種刑具，殷代還在使用着，殷虛出土的小陶俑，作罪犯形，械手的刑具，正是這種桊。男的背了手械在後面，女的卻蒙優待，把兩手械在前面。所以說 ，是縛手在前面的，是女子，而 是縛手在後面的，是男子。「桊」的形狀，用法在陶俑上表現的十分淸楚， 是正面形，側面當作形，中有二孔，容兩手，上下以繩緊束之，上繩繫于頭，下繩繫于腰。男子反縛于後，女子縛于前，男子髡其首，女子有髮，一望可別。玆圖其輪廓如次：



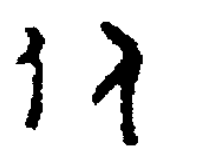
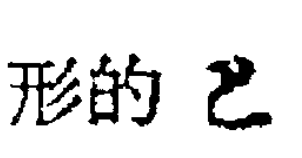
圖甲：頭上有髮，知爲女，兩手械于前，左臂殘缺。圖乙：丙：皆男俑，兩俑頭部殘損，桊形極清晰，繩束於背後，下垂顯然。

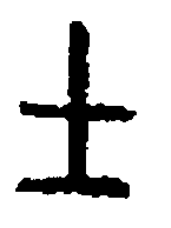
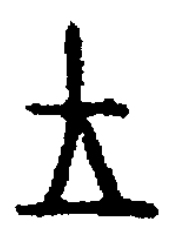
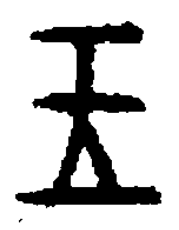
得到這些陶俑的證明，對照象形的「桊」字，我們才知道古代「手鐐」的眞象。不然做夢也不會想到的。

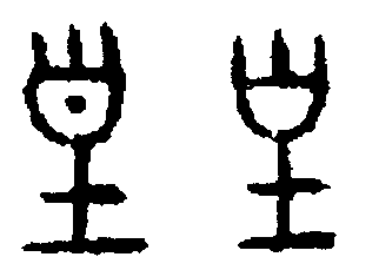
造字的時代，相距在三千年以上，社會的背景，當然也差的很多，讀者可以自己比較一下，必能發現許多有趣的問題。

五、可以見造字心理之同。

象形文字，是可以獨力創造的，世界上的物象，總不外乎「仰觀于天，俯察于地，近取諸身，遠取諸物」。對象異者，自然不會相同，對象同者，自然可以偶合，正所謂「人同此心，心同此理」。麼些文與漢文的古象形字，近似者極多，便是這個道理。現在也只能舉出兩個例子，不暇一一比較。

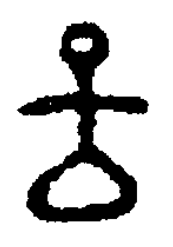
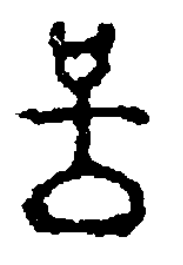
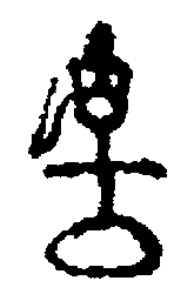
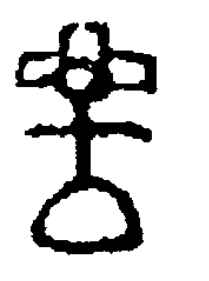
第一個例子，舉坐着的人形字。我們知道漢文古象形字裏，「近取諸身」的人形字數量甚多，大致有正面立形的大 ，側面立形的，側面坐形的，和特別爲女人造女 ，可是不見正面坐着的人形。這在十年以前，卻被我的朋友徐中舒先生發現了，他在二十三年的春天，寫了一篇士王皇三字之探原，說明士、王、皇都是正面坐着的人形。他所舉的僅王皇二字，現在爲增一士字，列如下：

甲骨文  士  王 祖庚以上之字。  王 祖甲以後字。 王 帝乙帝辛時字。

金文  皇

士同王，都象拱手端坐之形，皇象王者端坐頭上戴着冠冕之形，他列舉石刻、銅器、壁畫、偶象四種證據。從此我們才知道中國象形字裏，有象人正面端坐形的字，以前的解說全錯了。

現在我們可以拿麼些文替仲舒先生再添上一個有力的證據了。本來，這字的對象既是人，有側面而立的，有側面而坐的，就不能只有正面立的而沒有正面坐的。麼些文寫人形多用正面，所以男正面坐形的也多。例如本書中的

 坐也 232　 王 388　 帝王 387　 客人 325

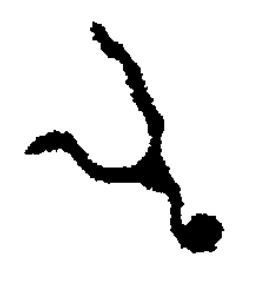
等字，與漢文的士王皇像極了。第一字與甲骨文的 字，寫法完全一樣。第三字帝王的冠冕雖不同，但是用大帽子表示帝王的尊嚴，造字的心理是相同的。士王皇是貴

族階級，所以能够悠閒自在的，像麼些的客人一般端坐着。

有一件史實，可以證明殷代人還知道王字是「王者端拱正坐」的象形字。原來殷虛卜辭中早期的王字，皆寫作，是代表當時皇帝的專字；王，只有一個，所謂「天無二日，民無二王」。武丁時，祖庚時，都是這樣寫的。到了祖甲即位，忽然就一律加上一横畫，寫作，不寫了，這卻是耐人尋思的一個問題。從各方面看，祖甲是殷代一個了不起的皇帝，他最富於革新的精神，改曆法、定祀典，在卜辭中都是彰彰可考的。據我看，祖甲知道這是國王專用的象形字，他覺得禿了頭不甚雅觀，所以加一畫代表冠冕。在他即位之初，便馬上下令實行了，

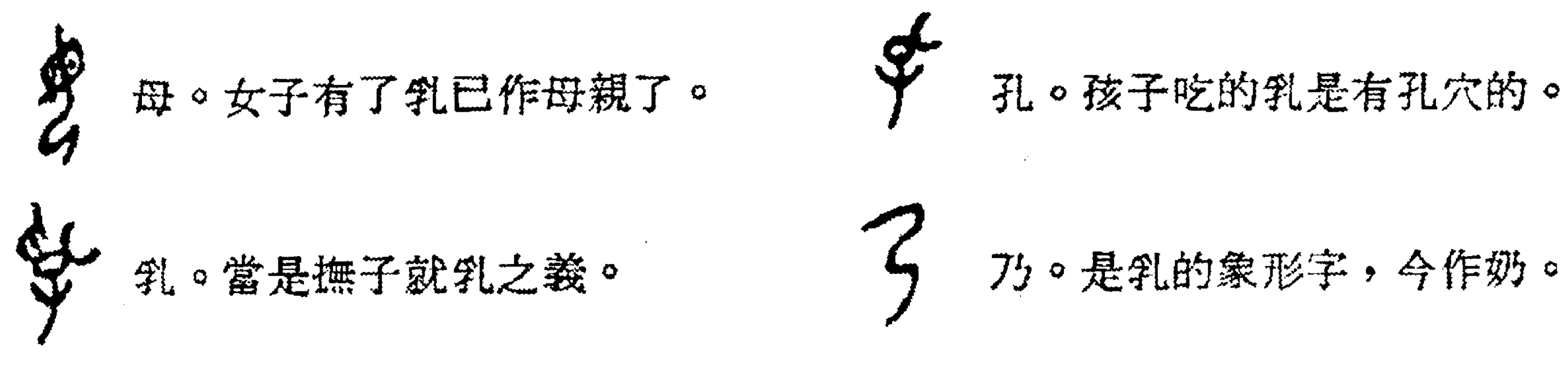
第二個例子，舉象形的奶字。

好像是郭沫若先生曾給我談過「乃」字的古篆，是「象奶子的形」，我以前也注意到林義光先生文源中「孔」、「乳」兩字的新說，現在從麼些文裏，卻得到很好的例證了。本書人體類 628 有乳字：



乳也。畫乳出乳汁之形。

這裏要注意的是，乳形只畫一個輪廓，更畫一乳頭及乳汁流出之形，以增強乳字的意義。我們再看漢文的孔字同乳字。林義光先生云「孔通也。古作本義當爲乳穴，引伸爲凡穴之稱象乳形就之，以明乳有孔也」。又云「以孔字義推之，乳本義當爲人乳，象撫子就乳形」。這種解說是很合理的。不過乳字有養育之義，不必就是人乳的本字，人乳應當是古象形的乃字，此字甲骨文作金文作上象臂肱，下象腹，中象人乳，皆以曲線示其輪廓，與麼些文乳字造法略同。今所指乳爲奶，加女旁，古但作乃。又關於乳，尙有一指事的母字，作，指示乳的所在，有乳，就是作了母親了。一併比較於下。



母。女子有了乳已作母親了。

孔。孩子吃的乳是有孔穴的。

乳。當是撫子就乳之義。

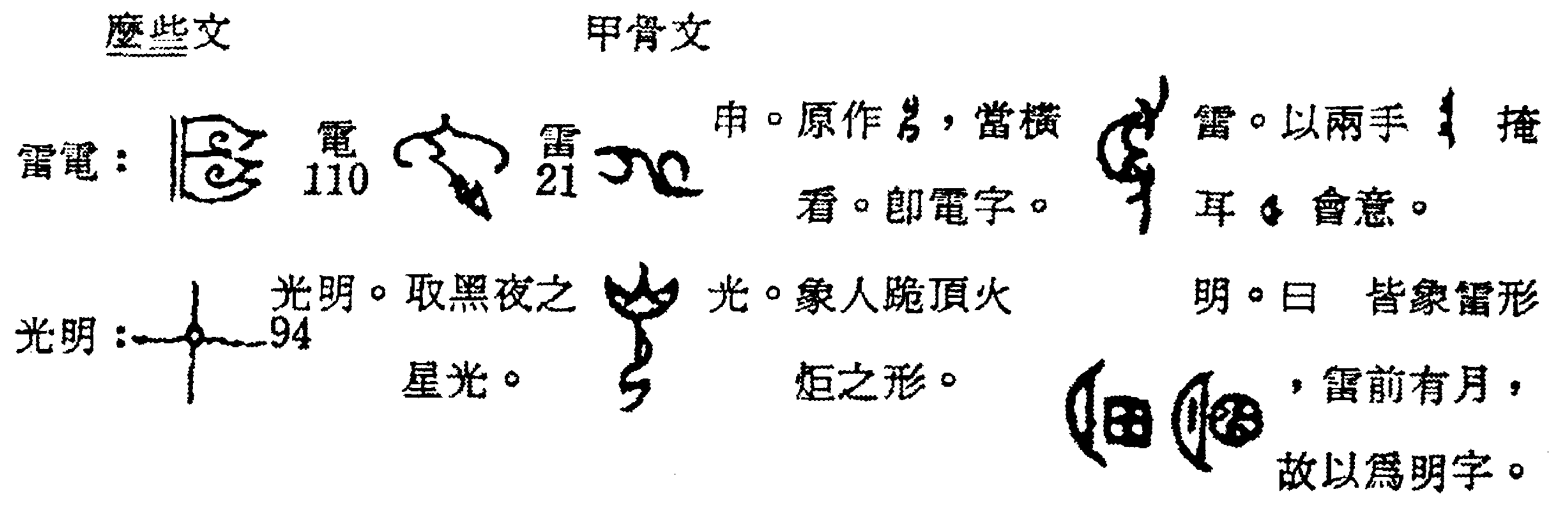
乃。是乳的象形字，今作奶。

孔字的，已是奶形的輪廓了，之，正和孔字所從的奶形一樣繪臂肱的輪廓，則是腹部的輪廓。由於麼些文的對證，一個不易索解的古乃字，竟可以說爲健康女子曲線美的一般了。再看甲骨文的（菁一），金文的（盂鼎），（不嬰簋），無不維妙維肖。好像有一位畫家要對着模特兒在那裏開始寫生了。

造字的心理是相同的，對象如果相同，造出來字就不會大異。譬如孕育的字，一是懷孩子，一是生孩子，這無論古今中外，都是一樣的。甲骨文的孕作，育作（即毓字，借作后同後）。麼些文孕作529，育作530，大致相同。只是甲骨文以人女，表示婦人，以子表示嬰兒，麼些文以表示婦人，以表示嬰兒，習慣小異而已。

六、可以見造字印象之異。

同一的事物，因印象的不同，造字便會大異。例如雷電和光明。麼些文當作由天上擊下，電作雲中閃光之形。光明本是抽象的字，有黑暗才能襯出光明，故用星光表示他。甲骨文的申字横看象電光，雷卻用兩手掩耳的會意字，光同明，一個象人頭上頂着火炬，一象窗前的月兒，比較如下：



申。原作，當横看。即電字。

雷。以兩手掩耳會意。

光明。取黑夜之星光。

光。象人跪頂火炬之形。

明。曰皆象窗形，窗前有月，故以爲明字。

好了！倉頡老聖人遇到了神童麥琮，一經攀談，就擺了這一大套龍門陣，也可以「休息」了。

我很高興的爲霖燦這本書寫一個序子。在我的老光眼鏡之下，從一個小小的觀點看去，已經是琳瑯滿目了。至於這本書在社會學、民族學、語言學等各方面的價值，自有專家們去估量，用不着我來介紹了。

最後，我希望霖燦繼續努力，把已編譯的經典、故事、音字、歌謠，統統發表出來，使我們僻處西南的這一支宗族麼些的文化，赤裸裸地表揚於世，同時完成他青年時代對于一種學問熱烈的興趣與偉大的志願。

董作賓　民國三十三年七月十日寫于四川栗峰

（原載《董作賓先生全集》甲編第3册，臺北藝文印書館，1977年）

書評

貝塚茂樹著

『中国の古代国家』

（貝塚茂樹著作集　第一巻）

江村治樹

一

本書は、著者貝塚茂樹氏が、その著作集の第一巻として新たに書き下ろされたものである。中国史学界において既発表の論文の集成である論文集は近年数多く出版されているが、このように一貫したテーマのもとに書き下された書はあまり見出しえない。このこと自体、中国史学界にとって大きな刺激であるが、その内容においても、読者の思考を様々な形で刺激する書である。

本書は、ギリシャ、ローマの古代都市を念頭において、著者ならではの該博な知識をもとにしてその類似をさぐりながら、あくまで中国的な古代国家の全体像を構築しようとしたものである。ここにおいて、著者が積年のテーマとされ、機会あるごとにその概略を述べてこられた中国古代国家論の全貌が明らかになったといえる。ただ、本書の内容は非常に広範囲にわたり、かつ個々の事実の実証は綿密を極めており、さらに事実によって語らせるという著者独特の論述の仕方がいかんなく発揮されているため、十全な紹介は期しがたい。それ故、この書評も評者の関心に引きつけた、かなり独断に満ちたものとならざるをえなかったことを、あらかじめお断りしておく。

二

本書は二部から成っており、第一部のテーマは「殷周時代の古代国家」、第二部は「春秋時代の都市国家」である。

まず、第一部では、最初に古代国家の形体を重点に、その宗教的性格を、ついでその人的基盤を明らかにしている。本書の書き出しは、著者が若き頃訪れた北京城の回想から始まり、知らず知らずのうちに読者を古代世界へと誘っていく。とくに紫金城の壮大な門と広場の印象は、著者の古代国家に対する発想の基底をなしている。紫金城は文献の考証にもとづく古制の模倣であり、それは古代へと直結している。著者はまず、古典にもとづく戴震の天子諸侯「三朝三門」説の正しさを論証し、さらに魯の国都の雉門の重要性を強調した後、著者独自の方法によって古代国家の門の歴史的意義を明らかにする。『詩』緜篇には周の古公亶父による首都創建儀礼が述べられているが、これは、フュステル・ド・クーランジュがその著『古代都市』において述べるロムルスによるローマ市創建儀礼と非常に類似している。とくにローマの場合、ロムルスの犂によって神聖化された境界線（さらにその内側の城壁）は越えることのできないものと観念され、門はその神聖なる境界線の中断とみなされた。著者は、門のこうした性格を中国古代の門にも見出す。中国古代の門は「闕」ともいわれ、もともと城壁の欠けた所という意味をもっていた。また、春秋時代における門攻めの儀礼的な性格は、門が城壁との関係において特殊な位置にあったことをうかがわせる。さらに殷代にさかのぼると、卜辞には門は儀礼の執行される場としてあらわれる。また殷虚遺跡の「門部」と名づけられる部分には列柱や安門墓がみられ、門は神聖なる境界線の中断箇所として特別に守護される必要があったのである。ローマとのより具体的な類似は、西周時代のものと考えられる青銅器の「奉冊形」（）金文に見出せる。著者はこの金文を都市建造を世襲とする部族の標識とし、この部族は、「方」（）すなわち耒を用いて都市創建儀礼を行なったとする。なお、「方」は「祊」の祭りとも関係があり、その祭神は境界神、神話的高祖神といった性格があり、都市の守護神とも考えられるとしている。著者はこれまで、『詩』緜篇の都市創建儀礼とローマのそれとの類似から、中国古代都市の宗教的性格を繰り返し述べているが（著作集第二巻参照）、本書ではその考えを、新たに有力な傍証によってより強固なものとされたといえる。ただ、この記述において、紫金城の平面図や殷虚の門部の発掘図などが付加えてあれば読者に対してより親切ではなかったかと思われる。

著者によると、以上のような性格を有する殷周国家は、征服王朝であり、その体制は「奴隷制度」と「戦士社会」によって特色づけられている。まず著者は、前者に関しては、殷の攻撃性を問題とする。第一期卜辞の中に西北の独立国であり外国である「多方」に対する殷の攻撃が多くあらわれ、以後しだいに減少することに注目し、これを殷による「多方」の征服属国化のあらわれだと断定する。また卜辞に、殷が外国に対して攻撃する場合、「𢦏」（）という語が用いられることに注目する。著者は、「𢦏」の字を、「方国を伐ち、その人民を捕虜として連行し奴隷とする」という意味にとり、殷の攻撃は奴隷獲得のためだと考えている。「𢦏」を『説文』の「戠」の字として「くびきる」という意味にとることは納得できるが、捕虜を得るという意味も含むのであろうか。ただ、この字を、捕虜の髪（）を切ることにより斬首の象徴とし、実際は奴隷として生かしておくという意味にとることは可能ではあろう。著者の説明がもう少し必要なように感じられる。次に著者は奴隷自体の性格については次のように述べている。周においては逃亡奴隷に対する追跡権が認められており、奴隷は他人に所有される物体とみなされていた。殷においても同様な性格がうかがえる。卜辞には「喪衆」「喪衆人」という表現がみられ、「衆」や「衆人」は他人に所有され産とみなされる奴隷身分と考えられる。また著者は「衆人」は戦力ともみなされているから、農業奴隷身分に属する戦士団体を意味するとも述べている。さて、殷における奴隷を問題にする場合、世界史に類例のない大規模殉葬に注目する必要がある。とくに貌大な数の斬首殉葬者は人身供犠としての大量の奴隷の存在を想像させる。殉葬自体の存在理由は宗教学上からも説明しうるが、大量の殉葬という点ではむしろ歴史上の北方民族の例を想起させる。著者は、このような大規模殉葬を殷による征服戦争に関係づけているのである。しかし、あまりにも多すぎる殉葬は、殷の専制化にともなう肥大化としており、特殊な例としているようである。本書では奴隷の経済的性格はほとんど述べられておらず、ギリシャ、ローマの場合にも相通じる戦争にともなう奴隷の問題に視点が向けられている。奴隷制度については所有の問題、アジア的性格の問題等様々な問

題があり、この点は著者自ら著作集第二巻の「あとがき」にも指摘されており、さらに論証が進められる必要があろう。

次に著者は、ウェーバーの考えを参考に、遊牧から定住への過程から殷周国家の「戦士社会」的性格を明らかにする。まず、周の定住過程を渭水中流の軍用牧場に注目してその開墾農地化という点から考え、ついで殷の定住過程を具体的にたどる。殷民族の故地は不明であるが、彼らが黄土台地から平原に出て東方の地を征服していく過程は考古学的にたどることができる。黄土台地を抜け出た殷民族は、まず偃師二里頭に都し、鄭州、奄、殷虚へと都を遷すが、それは東方の民族を征服従属化する過程であり、また戦士社会形成の過程でもあった。ただ、殷民族の征服王朝としての実態は資料的にはほとんど解明不可能である。そのため著者は周の場合について具体的に解明していく。周の征服戦争を記す『逸周書』世俘解は、同時代資料としての価値があり、そこに記されている三十万の捕虜がいかに組織化され奴隷化されたかは策命金文によってかなり明らかにすることができる。捕虜の一部は大臣や軍将に分配され、辺境である外服における植民地国家形成の基礎となったと考えられる。このような国家は少数の周族血族集団に率いられた異族奴隷戦士集団によって形成される「戦士」国家である。そしてこれらの植民者たちは土着の農業共同体を支配する征服者でもあった。なお著者は、内服の「戦士社会」内部の関係を西周晩期の青銅器「師酉𣪘」「訇𣪘」の銘文によって具体的に述べている。銘文の「商官」を「適館」の意味とし、部将の「虎臣」など軍士に対するお目見得の儀式が存在したとしている。なお著者は、この二つの銅器の銘文を比べてみると、軍士である「虎臣」の「庸」化、すなわち周の公的な軍士の私臣化が起っており、西周晩期にはすでに私的な君臣関係の萌芽がみられるとしているのは興味深い。しかし、これは次の第二部の問題である。

三

第二部においては、著者は春秋時代の「都市国家」の成立とその解体過程を明らかにする。春秋時代の「都市国家」は、著者によると、強力な王権の支配する殷周「古代国家」より自立化したものと考えられる。従来周室の東遷は「美姫亡国説話」によって説明されてきたが、その真相は軍事的植民国家である東方諸侯の周王朝からの自立の結果の一つのあらわれである。その自立化の傾向は、前代の厲王、宣王の時にあらわれており、周王の独裁と東方諸侯に対する軍役負担の増大が、これら諸国の反抗を招いたことは史書からもうかがえる。また、諸侯の独立性は、『春秋』の錫命礼にもあらわれている。すなわち、被任命者の相続における策命に際し、周王の使者が諸侯国に出向くようになり、西周策命金文とは対照的に策命の儀式は諸侯が主体となっているのである。諸侯国は、このように他の上位の権威からの独立化傾向という点で、ギリシャと同じように「都市国家」といえるのである。

さて、このように独立した「都市国家」の規模はいかほどであったのであろうか。文献からは、周代封建制国家には、所有権を有する実封とその周囲の支配権のみ有する名目的封地が存在したことが論証できる。ただ、西周策命金文によると、封建に際して与えられる土地は人民の附属物という傾向が強く、国土も山川によって代表され、国境もあまり明確でなかったようである。さらに西周春秋時代には、「里」の語には平方里を意味する例がなく、この時代には厳格な領土意識はなかったようである。ただ、戦国時代になると方百里の国が理想とされるが、これは春秋列国の現実領域と照応すると考えてもよい。方百里は、当時の尺度で計算すると、約三六〇〇平方キロメートルとなり、ギリシャのポリスよりはかなり大きい。著者によると、この相違は華北大平原という地理的条件にかかわるとするようであるが、これは「都市国家」の領土国家化と関係づけて考える必要があるように思われる。

次に著者は、「都市国家」の経済的交易の場としての「市」が一般市民の集会場でもあったことを指摘した後、さらに「都市国家」の宗教的側面の意義に説き及ぶ。『尚書』無逸篇や康誥篇には天命に対する疑いから民衆重視の考えがあらわれている。しかし、古代の民衆重視は、異民族支配ということと大いに関係がある。「都市国家」の宗教共同体的性格も、この異民族支配と関係がある。トインビーのいうように、宗教は国家統一の絆である。春秋時代にはそのような国家宗教として、宗廟と社稷があった。宗廟は主権者たる血族団体の象徴であり、社稷はその他の部族よりなる地域団体の象徴である。しかし、春秋時代は「神は非類を歆けず」という原則が貫ぬかれていたが、戦国末になると「民は神の主なり」というような地域団体中心の考えがあらわれる。そして「社稷」という語も、国家と同義に使用されるようになり、古代国家は血族団体的性格を失い地域団体的性格を強くもつようになる。これは「都市国家」の解体を意味する。

著者は「都市国家」の解体を二つの面から考える。第一は先にその一面を述べた宗教的共同体としての都市国家の解体である。『左伝』には滅国記事が多く記されているが、国を「滅」することは国の祭祀の廃止を意味した。ただ春秋時代では一般にそのような滅国はタブーであり、また被征服民族に対する宥和の面でも問題であった。それ故、春秋時代を通じて国の存続に非常な努力がなされたのであるが、そのうち政治的に滅ぼしながら祭祀だけは存続させるという便法が考え出された。このことは一方では「都市国家」の宗教的共同体としての性格を有力に物語るものであるが、完全な滅国（祭祀の廃止）への第一歩でもある。大国は小国を兼併し、「都市国家」は外延を拡大して領土国家、すなわち郡県制国家へと変貌していく。第二は、「都市国家」内部における新しい主従関係の発展である。「委質策名」の儀式は、その私的主従関係を表現するものであり、晋国では豪族だけでなく公室自体にもその風潮が強かった。著者はこれは、文公重耳以来の伝統で、この儀式は北方民族の風俗の感化をうけているのかもしれぬという。この考えはローマに対するゲルマンの関係を連想させるが、このような風潮は他の諸国においても多少の差異をともないながら一般的であったことから考えて、「都市国家」内部から理解する必要があるように思われる。なお、この新しい主従関係を端的にあらわす語として「主」という語を重視しているのは、戦国以後の「主客」の関係を考える上でも興味深い。最後に著者は、「都市国家」の解体から、個人的主従関係を基礎とする封建制国家が出現せずに、文官による官僚制国家へと進んだことにふれている。著者によると、それは世族の家臣の中には軍士だけでなく文章の素養のあるものが少なくなく、彼らが郡県政治を推し進めたからだとしている。だが、このような説明からは中国における文官官僚制への必然性は出てこないように思われる。著者の考えるように殷周国家が征服王朝としての戦士国家であるとするならば、それときわだった対照をなす文官官僚制はいかなる歴史のメカニズムから出現したのであろうか。

（原載《史林》第六十巻第六號，日本史學研究會，一九七七年）

四

以上、論旨をたどりながら、気のついた点に関して若干のコメントを加えてきた。最後に本書の構成全体にかかわる問題点にふれておきたい。

本書の最大の特色は、中国の古代国家を殷周「古代国家」と春秋「都市国家」とに区分した点にある。従来の都市国家論者も、邑制国家論者もともにあまりその歴史的展開を問題にしてこなかったように思われる。著者自身も、その初期の著作においては春秋時代以前の国家を漠然と都市国家としてひとまとめにしてとらえていたようである。ただ、著者はすでに、昭和二十七年刊の本書と同名の書（著作集第二巻所収）で、中国の古代国家の変遷を歴史的にたどろうとする試みをされている。すなわち、殷虚初期を都市国家連合の時代、末期を世界的国家の時代、西周初期を都市国家的領土国家的時代としてとらえているのである。殷虚初期には、殷に服属する諸都市は祭祀権を有し独立性が強かったが、末期になると、諸都市は殷に祭祀権を奪われ、殷王朝は中央集権化し、領土国家的傾向を有するようになる。この点は本書でも引続き繰り返し強調されている。ただ、この体制は西周にもちこされ、秦漢の専制支配の母胎をなすと考える点に相違がある。前説では、殷虚末期以後を、個有の都市国家が、しだいに領土国家的傾向を有し、秦漢中央集権国家へと向う過渡期として一貫してとらえているのである。ただ、そこでは春秋時代についてはふれていないが、その後、昭和三十三年に発表された論文（著作集第二巻所収）では、殷後期に王の神格化が起り、都市国家は一時エジプト的性格のものとなるが、中国の都市国家は一貫してメソポタミア的であり、春秋時代は小都市国家分裂のメソポタミア的時代であるとしている。著者は、春秋時代以前を大きく都市国家の時代としながら、それぞれの時代における国家の性格にも注意を払っているのである。

本書は、古代国家の時代的性格の追究という面で、こうした従来の考え方をより尖鋭に推し進めたものといえる。その結果、春秋「都市国家」を王政の支配の顕著である殷周国家から分離せしめることになった。王政からの独立という点で、春秋国家はよりギリシャ的な「都市国家」であるとされたのである。春秋国家は外部との関係からみれば確かに典型的な「都市国家」である。しかし、その内部に目を転じると、形体的には「小」周王朝の形をなしていたように思われる。周初に四、五十あったとされる姫姓国家は、春秋時代には主なものだけでも十五に統合されたことは著者も述べており、春秋国家自体、小都市国家を併合した領土国家的性格を有していたことは明らかである。周王朝からの離脱とともに兼併が進行しているのである。個々の国家形体からみれば、著者の前説の方がより一貫性があるように思われる。著者は「都市国家」の基本的性格として、他の権威からの実質的自立を強調するが、戦国末まで周王朝は存続し、形だけにしろ何らかの存在意義を有していたと思われる。このような形式が存在し続けること自体問題ではなかろうか。

また、本書においては、殷周がともに「古代国家」として一つにまとめられていることにも注意する必要がある。殷周の際をいかにあつかうかは、王国維の「殷周制度論」以来の問題である。著者はすでに、『中国古代史学の発展』において、王国維説を批判的に継承し、文化の基調の変化は認めながら、周は父子相続、子弟分封制など殷の制度を多くとりいれていることを明らかにし、支配の方式に連続の面があることを強調した。本書において殷周王朝をともに征服王朝としてとらえているのも、別の面でのこの延長である。そしてこの征服王朝説は、殷周を奴隷制時代とする考えをふまえていることはもちろんである。しかし、殷周の征服王朝としての性格が同質であるかはまだ疑問の余地がある。本書では論点にはなっていないが、殷の専制化が周によっていかに克服されたのかということも考えてみる必要があると思われる。この点、とくに著者に明らかにしてもらいたかった所である。

古代史研究の最大の問題点は偏った限られた資料にある。著者は、文献資料だけでなく、卜辞、金文、考古学的資料など利用可能なあらゆる資料を駆使して論証を進められる。しかし、すべての資料を網羅したとしても古代史は解明しえないことは明らかである。貝塚史学の特色は、資料の駆使と密接にからみあっている比較史の方法にある。比較史に対する考え方には様々な態度があると思われる。人類の要求する所は、地域によってそれほど差異があるはずはないと考え、比較自体に意味を見出そうとする態度がある。また、まず比較自体を棚上げにして資料に沈潜し、中国的特殊性を追究していこうとする態度もある。貝塚史学の場合は、比較によって共通点を追究しながら、それをたえず資料にもとづいて修正していくという方法をとっているように思われる。しかし、その修正のためには貎大な資料の蓄積と、資料全体の性質の正確な把握と、さらにそれを比較の対象に十全に対応させていく的確な判断が必要かと思われる。著者の比較が表面的なものに終らず、豊かな古代史のイメージを築き上げているのはこの点にあると思われる。本書においても、この貝塚史学の方法はいかんなく発揮されているのである。

評者は、中学時代、著者による中央公論社版『世界の歴史1』を読み大変感動したことを憶えている。中国古代史への興味はそれ以来のことであり、評者にとって著者の書との出会いは中国古代史への出発点であった。現在、殷周史についてはほんの駆け出しではあるが、敢えてこの書評をお引き受けしたのは、自らの新たなる出発点としたいと思ったからである。理解力の不足のため誤解が少なからずあると思う。また、本書によって古代史に対する基礎的な知識や考え方など多くを得ながら、非礼なる言辞を多弄していることと思う。著者の御海容をお願いする次第である。貝塚先生には今後ともますます御健筆を揮われ、また後進を指導、鞭撻されますようお願い致します。

（A五判　三九〇頁　一九七六年五月　中央公論社　二八〇〇円）

（京都大学人文科学研究所助手
京都市左京区修学院坪江町37－7　NTハイツD号）

（原載《史林》第六十巻第六號，日本史學研究會，一九六一年）

安阳殷墟五号墓座谈纪要

在英明领袖华主席为首的党中央抓纲治国战略决策的指引下，在党的十届三中全会精神的鼓舞下，中国社会科学院考古研究所和中国历史博物馆为了贯彻伟大领袖和导师毛主席**“百花齐放，百家争鸣”**的正确方针，响应华主席发展社会主义科学文化事业，发展马克思主义哲学社会科学研究的战斗号召，以实际行动迎接党的十一大的胜利召开，于今年七、八月间联合举办学术座谈会，就近年我国原始社会和夏商时期的若干考古新发现，进行多次热烈的讨论。每次座谈会都有历史考古工作者和有关同志数十人参加，与会同志各抒己见，畅所欲言，反映了打倒“四人帮”以后文物考古界的新面貌。现在我们刊登的是，七月廿二日座谈殷墟五号墓的部分发言纪录，希望能够有助于问题的深入研究。

郑振香（中国社会科学院考古研究所）：

安阳殷墟五号墓是殷墟发掘以来，唯一保存完整，并能确定墓主与墓葬年代的殷王室墓。随葬品极为丰富，品类繁多，其中青铜礼器就有二百多件，而且有不少大型铜器是前所未见的器型。这次出有大量玉器，精品有百余件。牙雕与骨器五百多件，其中三件牙雕更是不可多得的艺术珍品。铜器铭文和玉石刻文，很多可与甲骨卜辞相对应。这墓的发现，对于殷代铜器的分期断代、手工业生产、方国文化，以及探索殷墟布局提供了丰富的新资料，对于研究商代奴隶社会的历史具有十分重要的学术价值。

关于这座墓的基本情况，今年《考古》3期和《考古学报》2期都有报导，不再重复，这里仅就墓葬年代与墓主人问题，谈谈我们的意见。下面从随葬品的形制特点、铜器铭文及五号墓周围的有关情况试作初步分析，以就正于到会的同志们。

（一）目前我们将殷墟的陶器分作四期，一、二期属于殷墟文化早期，三、四期为晚期。从已有线索看，第一期可能早于武丁，其下限或许到武丁早期；第二期约相当武丁至祖庚、祖甲；第三期约相当廪辛到文丁，第四期相当乙、辛时代。该墓随葬品的形制特点比较接近一、二期。例如出土的一件陶爵，圆腹较鼓，体型粗矮。这种爵常与腹较粗的陶觚同出，是属于第二期墓中常见的器物。又如出土的石豆，平唇略外翻，豆盘较直，圈足粗矮，同形制的陶豆在第一期较常见。

随葬的铜器，从器类、器形观察也带有早期特点。如瓿、扁圆壶、侈口折肩尊、平底斝、平底爵、瘦高体的提梁卣以及腹下部较鼓、圈足直而矮的簋等，均为一、二期常见的形制。铜戈有直内、銎内和歧冠曲内等，也是一、二期常见的形制。

再如骨笄，共500多件，有鸟形、夔龙形、方顶、和双重圆顶等，以鸟形的最多。各种骨笄的杆都是由顶向下逐渐收杀，带有较早的特点。鸟形、夔龙形方顶的骨笄都是一、二期常见的形制。双层圆顶形盛行于第三期，但形制略有不同，两层圆顶之间的短柱较高，笄杆顶端细，中间粗。

出土的骨镞均为三棱式，一面呈弧形，一面中脊微突，略成三角形。此种镞也是一、二期常见的形制。

从遗物观察，这墓较解放前在小屯发掘的M232、333要晚，与238、188、066及在侯家庄发掘的1001号墓和解放后发掘的武官大墓时代比较接近。有多种遗物与1001、武官大墓近似。

（二）五号墓中有铭文的铜器为数不少，目前已发现铭文七种，其中“妇好”和“司母辛”是断定墓主身份与年代的关键。“妇好”铭文的铜器数量最多，共六十余件，并有不少大型铜器，如偶方彝、三联甗、圆甗、鸮尊等。从铜器的数量与质量观察，妇好应是墓主人。

妇好之名见于殷墟卜辞，一般认为系武丁诸妇之一，每每从事征战活动，地位显赫。我们认为该墓年代与第一期卜辞中的妇好年代相符。这墓墓室较大，棺椁讲究，随葬品丰富精美，与妇好身份相称。据此，我们认为墓主就是武丁的配偶妇好。

“司母辛”铭文的铜器有大方鼎两件，四足觥两件。刻“司辛”铭文的石牛一件。大方鼎无疑是主要祭器。卜辞记载武丁的三个法定配偶中，有庙号“妣辛”的，祖庚、祖甲时卜辞称之为“母辛”。铭文“母辛”当指武丁配偶“妣辛”。我们认为“妇好”与“妣辛”是同一个人，“妇好”为生称，“妣辛”和“母辛”是其庙号。至于“妇好”死的年代，从有关祭祀“妇好”的卜辞分析，当死于武丁在世时。

（三）五号墓发掘后，我们在其附近又发掘了两座较小的墓葬，两墓均有陶器铜器随葬，从器物形制观察也是属于第二期的，与五号墓年代基本相同。其中一件铜尊和斝上有“子渔”铭文，“渔”字写作水中四鱼，与《前编》六・五〇・七的“渔”字写法一致。“子渔”之名也见于武丁时卜辞，或认为是武丁之子。该墓内还出土有不同铭文的铜器，是否是“子渔”之墓尚不能确定。但“子渔”铭文的铜器在该墓出现是值得注意的。

杨升南
张永山（中国社会科学院历史研究所）：

五号墓保存十分完整，随葬品极为丰富，是殷墟发掘以来所未见的。墓中出土的铜器上，不少铸有铭文“妇好”二字。在甲骨文中，保存了不少关于妇好的史料，据不完全的统计，在武丁时期，有关妇好的卜辞就达二百多条。

从甲骨文中反映出妇好参加的活动是多方面的。

她曾统率军队对北方的土方，西方的羌方、东方的夷和西南的巴方作战。据记载妇好一次就率领一万三千人对羌方作战。这是所能知道的商朝参加人数最多的一次战争。商朝著名的将领如沚馘、侯告等都曾在她的指挥之下。

在奴隶社会，“国之大事，在祀与戎”。在商朝，主持祭祀往往是殷王本人或统治阶级中的重要人物。妇好就曾在商王命令下主持过一系列的祭祀典礼。在一次由妇好主持的祭典上，就杀死十个俘奴作为牺牲。这充分暴露出妇好的奴隶主阶级本质。

妇好也曾作为一个商朝重要人物被封在外地。武丁时期，为了加强对奴隶的镇压和对各方国的控制，经常把诸妇，诸子以及功臣等封在外地、这些被封者除为商王朝征收贡赋，戍守边防外，还常到王都安阳来觐见商王武丁。所以卜辞中常有某人多少和占卜来不来的记载。甲骨文中记有妇好一次贡入五十只龟，以作为祭祀占卜之用。又有武丁占卜问她来不来，那一月来的卜辞。这说明妇好同其他重要人物一样，被封在外地，为商朝镇守一方。

在甲骨文中还有不少武丁为妇好占卜生育和她的健康状况方面的卜辞。武丁向他的祖先卜问妇好有生育能力没有。当她怀孕以后，又多次卜问妇好何时分娩，是生男孩，还是生女孩。武丁对妇好的健康状况和她的吉凶祸福也格外关心，常常为之占卜。从武丁对妇好生育能力和健康状况的特别关心上，反映出武丁与妇好的特殊关系。这只有妇好是武丁的配偶，才能合理地解释这些现象。

除青铜礼器外，五号墓还出土了大量的兵器和妇女使用的骨、玉石制作的笄、梳等用品，这些随葬品与上面所讲的武丁时妇好的身份是相一致的。所以我们认为该墓墓主无疑就是甲骨文中出现的武丁时的“妇好”。

妇好死于何时，这对该墓年代至关重要。从甲骨文中的材料看，她在武丁时期就死去了。在武丁时期的甲骨文中，有直接卜问妇好死不死的卜辞，又有为她举行㞢祭宾祭酒祭寮祭等的卜辞。在甲骨文中，呼、令等一般是对还活着的人而发，㞢、宾等一般是对已死者的祭祀。既然妇好在武丁时期已经死去，我们认为，五号墓的年代不会晚于武丁时期。妇好在武丁时参加了一系列的重大活动，当不会死得太早，她或在武丁的晚期才死去。

王宇信（中国社会科学院历史研究所）：

五号墓出土的大量青铜礼器中，不少铭文可与甲骨文相对照，从而可以较为可靠地确定该墓的年代。

铜器中，铸有妇好铭文的约占礼器总数的三分之一。这么多的妇好之器以及其它铭文，说明该墓墓主就是妇好。

甲骨文里第一期武丁时期和第四期武乙、文丁时都有名叫妇好的人物。那么五号墓的墓主妇好究竟是谁呢？我同意郑振香同志的意见，五号墓属殷墟前期。第一期甲骨文里，关于妇好的记载据不完全统计，达二百四、五十条之多，而且她与武丁关系密切，地位也较为重要。第四期的妇好，总计不超过五、六条卜辞，而且多是卜问妇好之祸的卜辞，其身份和地位较一期的妇好差得多。因此，只有第一期的妇好才能与此墓墓主的地位相当。那么第一期的妇好是否与第四期的妇好为一个人呢？如果第一期的妇好活到第四期，要历经武丁（59年）、祖庚（7年）、祖甲（33年）、廪辛（6年）、康丁（8年）、武乙（4年）、文丁（13年）各期，这就差不多相隔一百二、三十年，这是不大可能的。所以，我们认为第一期的妇好与第四期的妇好不是一个人。

第一期的妇好死在武丁时期，这在甲骨文里有明确的记载：1.一期甲骨有卜问妇好死葬的材料。2.武丁把她列入祖先岳、河、王亥、上甲、匚乙、示壬、唐、大丁、大甲、祖乙的行列中，举行祈求之祭。3.有一次武丁向死去的妇好举行匄求之祭，冀求妇好的灵魂镇慑来犯的𢀛方。4.武丁时常祭祀妇好，祭名有哭祭、侑祭（㞢）、烧燎之祭（燓）、酒祭、嫔祭等。

妇好既然在武丁时死了，而武丁在位长达59年，这就有必要弄清楚妇好死于武丁的那个时期。

大量为妇好卜问生育以及妇好主持祭礼、参加征战的卜辞，说明妇好不会死于武丁早期。妇好生前曾参加征伐羌方、巴方、夷方、土方的战斗。而在商王朝与𢀛方这场较其它各方持续时间长的激烈战斗中，不仅没有妇好参加征战，而且她曾受到如同死去的祖先一样的匄求之祭。这说明妇好大概死于𢀛方平定之前。根据甲骨文的材料推断，𢀛方被灭于武丁的最晚叶，那么妇好自应死于武丁晚叶的前期。五号墓的下葬时间，应该也在这个时候。

在五号墓中，与墓主妇好铭文一起，还有后母辛、后辛、后驭母等铭文同出，它们与妇好应有密切的关系。甲骨文中有“后妇好”，可能因为曾被立为小王的孝己是妇好之子，在称谓上与其它诸妇有别。后母辛、后辛的称谓身份上与妇好相同，同为武丁之后。而且武丁三个法定配偶中，庙号为辛者死去时间最早，大体与妇好相近。因此，我们认为妇好死后，其庙号为辛，武丁祭祀她时称“后辛”，石牛应是武丁为妇好所作；后母辛是其子小王对其母妇好的称谓，五号墓中“后母辛”诸器为主要祭器，当为小王为其母所作。后驭母是女名。古人女子未嫁前称为某母，驭母又为后，身份上与妇好、辛、母辛也相同，可能为妇好的私名。此后母辛，因其子小王曾被立为太子，虽未及王位，但仍和及位的王一样，所以也被后世列入周祭祀谱，称为妣辛。

五号墓中出现的弜、卢、启这些方国，武丁时甲骨文中就已出现。弜与妇好还有着一定的关系。“人石”、“人戈”这些记事铭文，与仅流行于武丁一代的“记事刻辞”作风极为接近，这也从侧面证明了五号墓应为武丁时期。

另外，解放前发掘的1001号大墓中，曾出一件骨笄帽，上面有“县人二”字样，与五号墓的记事铭文字体，文例相近。1001号大墓是属于早期的，这也可以说明妇好墓不会晚到第四期武乙、文丁时代。

裘锡圭（北京大学中文系）：

很多同志主张墓主妇好就是武丁之妻妇好，并认为她也就是司辛、母辛、妣辛。

首先应该指出的是，妇好之名在三四期卜辞，即康丁、武乙、文丁卜辞里，也出现过好几次，如：

戊辰贞：妇好亡囚？（宁・491）
丙戌贞：妇好亡囚？三。（掇・444正）
⧄妇好乃。（同上反）
丙戌贞：妇好亡囚？四。（邺三下43.8）
己亥卜：辛丑歆妇好祀？（甲668）
□□卜：即妇好？（佚649）

我们知道，甲骨卜辞里所见的人名，绝大多数就是这个人的族氏，例如周族的人就叫“周”，父、子、孙都叫“周”。因此，在相隔一二百年甚至更久的卜辞里，可以看到很多相同的人名。这个问题张政烺先生的《中国古代的十进制氏族组织》已经讲得很清楚了（见《历史教学》二卷三、四、六期）。妇的名字也同样是族氏，例如周族的妇就称妇周（乙8854、邺初下46.15等）。只是妇名常常加上“女”旁，如井族的妇井在卜辞里就常常写作妇妌。卜辞的妇好，丁山认为是与商王同姓的子姓女子（《甲骨文所见氏族及其制度》56页），李学勤同志认为是保族女子（《文史哲》1957年11期34页。“保”古作“仔”，改“人”为“女”，即成“好”字）。我倾向李说。不管怎样，妇好的“好”总应该是一个族的氏姓而不是私名。只要是这个族嫁给殷王的妇都可称妇好。因此，不但第一期有妇好，其他期也可以有妇好。

此外，在三四期卜辞里也有司辛：

⧄于司辛？（甲824）

这个司辛大概就是见于周祭祀谱的康丁之配妣辛。

上举的三四期妇好卜辞，根据甲骨卜辞各期字体的一般情况来看，似乎可以归入第四期。但是康丁卜辞和四期卜辞的字体往往很难区别。不但有相当多的四期卜辞的字体跟一般的康丁卜辞很相象，并且有些康丁卜辞的字体跟一般归入第四期的卜辞的字体也很难区别。例如续1.34.3那块有父庚、父甲之名的卜骨，从字体看很象是属于四期的，但从亲属称谓看却显然应该归入康丁时代（参看《殷墟卜辞综述》450页）。所以我们按照胡厚宣先生的分期办法，对那些无法根据卜辞内容判断其确切时代的三四期甲骨不再加以区分。如果上举的三四期妇好卜辞是属于康丁时代的话，这个妇好便很有可能是这次发掘的大墓的墓主。她是康丁的配偶，死后称为司辛，后来又被称为妣辛，并被排入周祭祀谱之中。上举甲668“歆妇好祀”一辞的意义不大清楚。如果这是祭祀妇好之辞，她应该在康丁时就已死去，司是她死后的尊称。但是这条卜辞也可能是卜问鬼神是否接受妇好的祭祀的（“歆”象张口吸取食物的气味，也许是“歆”的表意初文），那末妇好就有可能是在康丁死后才死去的，也就是说这座墓有可能属于武乙时代。

这座墓还出了一把有铭玉戈，在戈内的边缘刻了“卢方㓞入戈（?）五”几个字。这条戈铭和甲骨文都是刀刻文字，字体作风类似，可以进行比较。根据初步观察，戈铭的字体跟武丁卜辞显然有别，而跟三四期卜辞则相当接近。戈铭提到卢方入贡。在第一期卜辞里，我们没有找到“卢方”（安明488B。作为国族名的闲、盧、虤等字与“卢”的关系不清楚，未考虑在内）。三四期卜辞里则既有“卢方”（续存上1947），又有“卢伯”（甲3652，邺三下36.9）。所以，从戈铭内容看，也以定作三四期为宜。

邹　衡（北京大学历史系考古专业）：

此墓是殷墟考古中非常重要的发现。仅就其出土铜礼器的数量而言，就已超过了解放前殷墟发掘品的总和，其他玉石器、象牙器、骨器等数量均甚可观，且多为完整而少见的精品。因此，毫不夸张地说，这是殷墟考古中的空前发现。此墓的重要性，当然不仅是出土物的丰富，而其所涉及的商代考古和商代历史等问题更是极其广泛的，有着很重要的学术价值。

由于此墓的铜器还在继续修复，正式报告尚未公布，有关此墓的诸学术问题，目前尚不能进行全面探讨。从现已展出的部分器物，尤其是铜礼器，无论从其形制、花纹、铭文各方面来看，都是比较复杂的。就是说，这二百多件比较大的铜礼器显然不是一家之物，更不是同时铸造，其中除一大批所谓“妇好”器外，还应该包括殉葬人的铜器在内。

就其时代而言，这批铜礼器似可分为三组：第一组，约相当于“殷墟文化第二期第3组”，数量较少，《亚弜鼎》即其例。第二组，约相当于“殷墟文化第三期第4组”，数量较多，诸平底爵即其例。第三组，或相当于“殷墟文化第三期第5组”，数量亦不太多，带盖圆瓿即其例。若用过去殷墟铜器分期的标准来衡量，则可大致估计其绝对年代，最早的可到武丁时代（晚期），最晚的可到武乙、文丁时代。若仅以其铜礼器来定，则此墓下葬的年代不会早到武丁时代，但也不会晚于武乙、文丁时代。甲骨文第一期（武丁）和第四期（武乙，大字）均见所谓“妇好”；在金文中也有此类铜器，《妇好卣》（《录遗》256）即其例。因为小屯五号墓未被盗掘，该卣决非出自此墓。可见所谓“妇好”至少也不是一人。总之，此墓的发现，对于研究妇（?）、子（?）、女（?）族的兴衰史是很重要的资料。

李学勤（中国社会科学院历史研究所）：

五号墓的青铜器，多数有繁缛的复层花纹（所谓“三层花”），很多件有连续的棱脊，一眼看去，确实给人时代很晚的印象。但是，如果仔细观察各件器物的形制和纹饰，不难发现较多的早期因素，例如细颈的卣，管状流的封口盉，件数较多的平底爵、斝等。有的花纹似乎非常晚，如“三联甗”中间甑上的夔纹，但实际对比，仍和商周之际的夔纹有很大差别。在殷墟前期，究竟有没有五号墓这种满装复层花纹的青铜器呢？我认为是有的，试举几个例子：

（一）小屯331号墓，是相当早的一座铜器墓。墓中出有《乙》9099卜骨，字体极近于武丁时期的“自组”卜辞。这座墓里出了一件方卣，细颈，颈部和提梁都有棱脊，盖上作鸟形钮，和五号墓的一件相似。它的花纹是复层的兽面。

（二）小屯H21窖穴，叠压在乙五基址之下，窖中出土铸作方彝用的泥模，模上有突起的夔纹和兽面，风格与五号墓青铜器的近似。所以，乙五基址“基层”中包含的甲骨不晚于祖庚、祖甲时期。

（三）传出于西北冈1001大墓的三件铜方盉（《河南安阳遗宝》图版四四——四六），形制是管状流的封口盉，全身具有繁缛的复层花纹。1001大墓出有“亚雀”鹿角器，而“亚雀”见于武丁时期有卜人子和允的两种卜辞。值得注意的是，卜辞和鹿角器上“亚雀”的“亚”字写作亞，和较晚青铜器铭文的“亚”迥乎不同，而五号墓青铜器上的“亚”字，恰恰是亞形的。

（四）小屯066号墓出土一件铜器盖，有“后[illegible]（有人释“驭”）母”铭文，与五号墓所见铭文之一相同。这座墓有人认为乙五基址的“奠基墓”，和它成对的18.4号墓所出陶器与西北冈1001大墓的属于同期。

从这几个例子看，我倾向于五号墓现已修复的青铜器标本，年代是比较早的。当然，这批青铜器铸造时代会有早有晚，究竟那些件可视为下限，还必须

妇，是否就是族名。但妇好明明是一个妇人之名，卜辞还经常占卜她生育子女吉利不吉利，如何能说它是族名呢？

妇好如果真是武丁的配偶，武丁时卜辞又还有不少关于妇好疾病死亡的记载，那么，把这座墓葬定在殷代早期武丁时较后，我认为是可以信从的。

高明（北京大学历史系考古专业）：

考订“妇好”墓的年代，是一件比较复杂的工作。仅从青铜器观察，具有较晚的作风。但铭文“妇好”在第一期卜辞多见，她是生活在武丁时代的人物。铭文“司母辛”，或谓“姛辛”，它是妇好的庙号，即武丁的配偶“妣辛”。看来偏晚的器型与铭文内容发生了矛盾。因而有同志提出四期卜辞也有“妇好”，商王配偶称妣辛的也不只此一人，康丁配偶也称“妣辛”。所以有同志推测该墓当属廪辛、康丁以后。这一意见不是没有道理，应当引起重视。有些问题需要慎重考虑。譬如武丁时代的铜器应当具有什么特征，缺乏典型资料可作比较。其中主要原因乃由于资料不足，但也包含有在认识上的局限。目前对商代铜器早晚时代的了解，还不能达到十分准确无误的程度。“妇好”墓其所以重要，在于它是目前所见唯一一座保存完好的商王朝贵族墓葬。出土遗物是一组完整的器群，尤其重要的是有不少与卜辞记载相同的人名，因而不论从任何方面来讲，都具有非常重要的价值。如能确切地考订出该墓的年代，对研究商代青铜工艺的生产和青铜礼器的发展变化都有重要意义。同时，也可为商代的考古学建立一个标准尺度。

解决该墓的年代问题，首先应当弄清楚此一妇好究竟应属那位商王时代的人物，我们所谓第一、四期卜辞中都有“妇好”，这是根据过去董作宾把卜辞分为五期的说法。关于卜辞分期，其中也存在问题，尤其是第四期卜辞问题最多，它同第一期卜辞有许多共同的作风和相同的人名，“妇好”仅是其中一例。如时代与该墓相当的第18号墓，在出土铜器中有铭作“子渔”者，渔字用两条水四条鱼写成，正同第一期卜辞（前编6·50·7，京津1516）中的写法相同。而“子渔”一名，在第一、四期中也皆有记载，又可说明第一、四期卜辞重名者不少。如何唯独在第四期卜辞中出现同第一期有若干重名而其它期没有？这是没有解决的问题，同时也反映出第四期卜辞时代是不很清楚的，还需要认真的研究。我想与其先用已有的尺度去衡量新出土的资料，不如先用新出土的资料来检验已有的尺度是否完全准确为好。

唐兰（故宫博物院）：

殷商前期后辛墓的发现，十分重要。我支持后辛即妇好，死在武丁生前的意见。从书法判断，也有别于后期。有后辛墓铜器作为武丁时代的标准，又有邲其三器等商纣时代的标准，对殷墟铜器的断代已比较有把握了。

后辛二字见于石牛颈下，后字写如司，有人就读为司辛是错了。春秋时叔夷鏄讲成汤伐夏后，后字也写成司。司、后本一字，《说文》把左向的读为司，右向的读后，古文字没有左右向的区别，或读为后，或读为司，我怀疑只是方言问题。

后字或加女旁作姤，是女性后的专字。《周易》有姤卦，《说文》在新附，实际后与姤同字，《后汉书·鲁恭传》注已说明了。后辛墓的大铜方鼎和兕觥都有姤辛二字，由于古代书法不规整，后旁常偏高，因而往往被误认为三个字，后母辛或司母辛；过去出土的姤戊大方鼎，也被误认为司母戊三字。故宫博物院藏商皝亚方尊和方彝，说：“者姤以大子尊彝”，旧释者婤与诸女也都是错的，实际是祭祀诸后与大子的彝器。周穆王时有些铜器说到王姤，也就是王后。

后字和姤字的释定，很重要。首先，如果释成司母辛或后母辛，这个墓就必须属于祖庚祖甲时代了。其次，我们知道，我国古代奴隶主统治者自称为帝，从炎帝、黄帝直到帝舜都如此，帝是代表上帝的。但从夏代起却称后，我称它为群后时代，后是管理国家事务的君长，像：后益、后稷、后夔、后羿等。夏代君主，生前称后，死后才称帝。商人先世是游移民族，从王亥起就自称为王，继承夏朝以后，还保存很多母系社会的遗留，妇女还掌握很大权力，从卜辞来看，武丁时的妇好是掌军事的，妇妌是掌农业的，妇好被称为后，大概由于这个原故。武丁据说在位五十九年，他的法定配偶有三人，即后来所称的妣辛、妣癸与妣戊。杜迺松同志说：后辛是妣辛，那末，过去所谓晚期的司母戊鼎也应提前了。我认为这值得考虑。后戊就是妣戊，我很怀疑她就是卜辞常见的妇妌，当然，这还有待于进一步的研究。周武王有乱臣十人，其中有妇人，一直到昭王时，王姜还很有权力，应该是这种习惯的遗留。殷代君主生前称王，死后也称帝，如帝乙。由于后辛和后戊是殷王的配偶，帝与后相对，于是本来是管理国家事务的男性君主的称号的后，现在改变为管理国家事务的女性君主的称号，而逐渐转化为王的配偶的专称，即使并未过问国事，也称为王后了。后字何以有两种意义，即男性君长与

等到全部器物修复后才能证明。

其次，我想谈一下五号墓铭文中的“妇好”与殷墟卜辞的联系问题。我觉得，不能简单地由于武丁卜辞里有妇好，就得出五号墓时代属于武丁的推论。

为什么呢？因为在卜辞里不是只有一种有妇好，而是两种卜辞都有妇好。一种是传统上称为一期的“宾组”卜辞，一种是称为四期的有卜人历的卜辞，可试称为“历组”卜辞（多出于小屯村中的一种大字卜骨）。“历组”卜辞，如《甲》668、《鄴》三下43。8、《宁沪》1.491、492和《宁沪》1.624十《拾掇》1.444等，都有妇好。特别是《甲》668卜辞有“辛丑戭（献）妇好祀”，以辛日祭妇好，更与五号墓青铜器既有“妇好”，又有“后母辛”铭文相应。

那么我们能不能说五号墓当为武乙、文丁时期呢？，我认为不能作这样的结论。关于“历组”卜辞的年代，研究甲骨的人本有不同看法。“历组”卜骨的许多人名、称谓，同于武丁以至祖庚卜辞，例如望乘、犬征、卓、妇好、妇井、妇女、子渔、子画、子鼓等等，不一而足。“历组”祭祀列王的卜辞，常在“小乙”之后继以“父丁”。这个“父丁”如果说是康丁，而商代的名王武丁、祖甲竟然不见于祀典，实在是太奇怪了。从种种迹象来看，“历组”卜辞很有可能是武丁晚期到祖庚时期的东西。这也就是说，两种卜辞的妇好可能是同一个人。因此，当前的问题不是用殷墟卜辞的分期去确定五号墓的年代，相反的，倒是五号墓的发现有助于解决卜辞断代研究中长期悬而未决的问题。

殷墟青铜器上有与卜辞相同的人名，在非发掘品中，还有一些例子，例如“子妥”（鼎，《三代》2.11.9）、“子韦”（爵，《岩窟》上31）、“子索”（爵，《三代》15.30.4、5）等，这几件都传出于安阳。五号墓附近同时期墓中所见铭文“子渔”，也见于“宾组”、“历组”卜辞，而写法更近于后者。过去大家很少把这种有铭文的青铜器与卜辞联系起来，今后应该注意这方面的研究。

胡厚宣（中国社会科学院历史研究所）：

妇好墓确是殷墟非常惊人的重要发现。过去在侯家庄西北冈发现过殷代的“王陵”，在后冈和武官村也都发现过王室的大墓，但一般都经过古今的几次盗掘，只在殉葬坑里和没有被盗掘到的部分，发现一些残存的遗物而已。现在这座妇好墓，从来未经扰动，保存十分完整，是迄今所发现唯一没有经过盗掘的殷王室之墓。

墓中出土的器物，只就我们所见到的而言，大件的青铜器，象两件大方鼎，通高80厘米，重235斤，就比西北冈1004墓的牛鼎鹿鼎器形大、时代早，是目前所知仅次于“司母戊鼎”的青铜重器。

大量的精美石、玉、牙、骨器物，则与西北冈1001墓所出是同一个类型。譬如一件大理石皿，其形制花纹，就和1001墓的一件几乎相同。一件青铜制的鸮尊，两缨外撇，尾足三立，又同1001墓的一件大理石鸮一模一样。又如一件带把的象牙杯，也和1001墓的大理石杯是同样的形制和作风。一些精致的象牙雕刻，其纹饰颇类似1001墓的牙雕和“花骨”。一些生动的石玉立雕，背面有槽，象是嵌在什么建筑或器物上的装饰，则又非常近似于1001墓的大理石雕刻的鸱鸮和“饕餮”。还有大量的骨笄和骨镞，两个墓里所出，也都很相象。我们可以这样说，除了1001墓里的一些大件的重器等等已经被盗，妇好墓没有发现白陶和仪杖“花土”之外，其他两墓出土器物的品种、形制、纹饰和作风，大部分基本上是相同的。

西北冈的“王陵”，分为东西两区。东区大墓三个，1129、1400、1443，一般比早期的人祭小墓为晚。西区大墓，除一座没有葬人的方形墓1567之外，还有七座，其先后次序大体是：1001，1550，1004，1003，1002，1500，1217；而以1001墓时代为最早。

妇好墓出土的器物，既与1001墓大体相似，那么，把它的时代定为殷代的早期，我想不是没有理由的。

另外，这个墓葬所以称为妇好墓，是因为墓中出土青铜器上所铸的铭文，以称妇好的为最多。只根据目前已经剔出来的青铜器，铸有妇好铭文的，就有六件一套的两种鼎，偶方彝，三联甗，成对的扁足方鼎，两种圆鼎，方斝，方彝，圆壶，方尊以及觚、爵、钺、勺等十几种几十件。那么，所谓妇好，很可能就是这座墓葬的主人。

而在甲骨文里，妇好是殷代早期最常见的一个妇名，她是殷王武丁的配偶，是武丁时相当重要的一个人物，她主持过殷王室的重要祀典，又曾率领一万三千人去伐羌。

在大量的武丁时关于妇好的卜辞之外，间或有少量的几条象是武乙文丁时的字体。但是从武丁到文丁，为期约在百年以上，妇好如果是一个人，她怎么能够活到那么大的岁数呢？可能在甲骨断代方面还有问题，这个问题，就在国内外甲骨学界，也还正在争论之中。

外国的甲骨学者，有的还疑心甲骨文里的子、

师。巫在古代有男巫和女巫，他们的身份地位是比较高的，商人笃信鬼神，例如著名的巫咸等的身份地位在当时还是相当高的。

（六）“妇好”墓出土的文物有很多都是成对成组的，如司母辛（姤辛）方鼎、妇好鸮尊、妇好铜钺、玉象、嵌松石象牙雕杯等都是成对的。亚弜编铙五件为一组。这些发现十分重要，对研究商代丧葬制度给我们提供了一整套重要资料，它和墓主人身份地位的尊卑是很有关系的。铜铙五件一组说明早在商代已经五音具备，在我国古代乐器发展史上是一个大的进步。

最后谈谈关于这座墓的断代问题，看了这些展出的部分文物后，给我的感觉是妇好墓的时代与武官村大墓比较接近，应该属于商代中期的。妇好墓之所以特别重要，就在于它出土了一批带有妇好铭文的铜器，对商代铜器断代方面给我们提供了确凿的证据，它将为我们在商代铜器和甲骨文的断代上提出新的课题。通过对“妇好”墓出土文物的研究，很可能使我们对商代铜器和甲骨文的断代上重新作出结论。

傅大卣（北京市文物管理处）：

此墓虽为中型，但极为完整，出土器物之多，在解放后所发掘的商墓中也是仅见的。墓中铜、石、玉象牙雕刻，器形新颖。尤其玉石类，出现了前所未见的新器形，为商文化断代提供了可靠的实物依据，其中特别引人注目的是：

（一）圆雕蹲猴，双手作交叉状，半透明，浅绿色，属于俗称“水石”之类。周身不见细雕纹饰，纯属磨成，磨后未再加工，使人感到它是一件初期的玉石雕刻。

圆雕猴的形象，以前我们只见到唐代才开始盛行的十二辰生肖中猴形的刻画或雕刻，直至明清两代，它在玉石类中才大量出现。这件商代蹲猴，可以认为是绝无仅有的最早的一件。

猴生活在我国南部，中原少见。商都劳动人民在见到这种稀有的动物形象时，竟能用玉石来为它传神写照，说明当时已有很高的艺术水平。

（二）圆雕玉象，浅青色，站立扬鼻，浑朴中见生动，周身纹饰与青铜器上的极相似。这件玉象在商代不仅圆雕罕见，即半雕也极少见，不似在青铜器中，有象尊、象纹等，倒是屡见不鲜的。

（三）扁身立人，两面平雕，接近圆雕，白色，质地介乎玉与石之间，是商代雕刻常用的一种材料。所雕一面男形，一面女形，两足各有一薄片，似为联接其它物体而设。它与甘肃灵台县白草坡西周墓出土玉人（见《文物》1972年12期，《考古学报》1977年2期）约略相似，头部眉、眼、口、鼻，虽都是凸雕，人面却作凹形，与平雕显然不同。商和西周早期圆雕人象的面部都有这种凹形的特征，湖南宁乡出土的商代人面方鼎（见《文物》1960年10期），面部与此件相同。可见这种凹下的面形是早期雕刻人象的一种特有的手法。

文少云
沈追鲁（北京市玉器厂）：

墓中随葬的大小玉器共四百多件，不仅数量多，而且造型多种多样，工艺也都十分精致。像这样的古代工艺品即使是在生产力状况已经有相应发展的封建社会末期，那也是相当可观的，而这个事实却发生在三千多年前的青铜器时代，那就更不是一件平常的事了。

单从技术角度来看，这个事实至少可以反映当时的技术水平。玉器业有一句话：“三分手艺，七分工具”，就是说琢玉这门工艺，具备相当的工具，对工具的使用得当而熟练，是一个关键。

首先，大批形象琢制得相当生动的虎、象、猴、鹰、鸮、螳螂等圆雕动物以及一些圆雕人物作品的出现，使琢玉工艺从平面雕发展到圆雕，特别是发展到琢制造型比较复杂的圆雕，这并不是一个简单的过程。它需要作者具有一定的立体造型能力，而且对玉料性质的认识要有更为丰富的知识和经验。另外也还需要琢玉工具有相应的发展。不然，是不大可能琢得出造型比较复杂，形象优美、生动的圆雕玉制品来的。

其次，即使以平面雕来说，这墓出土的一些玉瑗、玉戈的工艺水平，就已大大超过商代早期作品的水平。比如一些玉瑗上的花纹，无论是圆形的阴线或圆形的阳纹，一组一组线纹都琢得那么规矩而流畅自然，这是一种难度很大的高水平工艺。这样的工艺在殷商以前的玉器上至今还未曾见到过。再以几件一尺多长的大玉戈来说，特别是其中的那件最薄的墨玉戈，戈的两边刃口锋利得有如开刃刀口，像这样长而薄的弧形刃线，流畅得不带丝毫崩裂残缺的纹痕，这是很难得的。而更其难得的是，在这件薄戈的正反两面上，都还对称地琢出几条一尺多长的阳纹脊线，对称地开出两个四周带有棱形边线的血槽，这更是难度极大的工艺。而这样的工艺水平，在殷商以前的玉器上也还没有见到过。

这几件玉戈是由一个方国的奴隶主贵族进献给

王后，过去是无法了解的，由于后辛墓的发现，才能对这种转化有确切的解释。后字既专属于王后，管理国家事务的人就改称为有司。

后辛墓可以说明的问题很多，在这里我只提出一点，即：这个墓如果称为后辛墓，似乎比称为妇好墓更确切些，因为妇好是她作为武丁之妇的名称，是不能代表她的拥有权力的一生的。

杜迺松（故宫博物院）：

从一些青铜器的基本特征来看，墓葬是属于殷墟文化前期的。铜器虽然厚重，但具有商代前期的一些主要特征，如：爵杯仍保留早期的平底形式，且有极短的二蘑菇柱。方尊和圆尊都是高圈足并有十字孔。流向上的三空足盉和湖北盘龙城的形式基本相同。方尊、方罍、方壶、方彝等大量方形器的出土，在殷墟文化发展中也是在武丁时期才开始有的。带有“司母辛”铭文的两件大方鼎和巨大的长方形偶方彝，以及六足三联甗等大型铜器在殷墟前期可以铸造出来也并不奇怪，因为在郑州杜岭出土的形体巨大、具有高度的冶铸水平的两件大方鼎比这里的时代更早。

从花纹上看，也具有殷墟前期特点，如在一件大圆鼎上只有主题纹饰兽面纹，而无底纹。商代前期的斝或爵上的兽面纹饰，常以把为鼻饰，再把两旁铸上极简单的两眼，这次妇好墓出土的方斝等器物上也同样具有这一特点，但兽面纹比前期复杂些了，不单铸两眼，而且有眉和咀等。大钺上有二虎食人形象，这与安徽阜南月儿河出土的具有商代中期特点的龙虎尊上的一些形象很相似。

从铭文上看，我们知道商代金文和甲骨文虽有铸与刻之别，然文字的组织结构，字体的特点，在每一相应发展阶段基本上是相同的。“司母辛”三字的书法属于卜辞第一期武丁时代字体雄健宏伟的特点，妇好墓中出土的铜器铭文，最多的只有几字，这也符合殷墟前期就开始了的特点。从“司母辛”字体特点看，再对照司母戊大方鼎，两鼎书法风格雷同，字体均为波磔体，尤其是“司”字，有如出于一人之手，在铭文安排的顺序上也完全相同，“司”在右，“母辛”和“母戊”在左。两鼎铭文字体如此接近，而且在武丁时也有配偶叫妣戊的，因而司母戊鼎的年代似也可提到殷墟前期。

石志廉（中国历史博物馆）：

座谈会上大家谈了很多，对我启发很大，我想对其出土文物从以下几个方面谈几点个人的看法。

（一）“妇好”墓出土的淡绿色水晶猴与1953年安阳大司空村出土的淡绿色水晶鸟的质地风格极为相似。妇好大铜钺上面作两虎吞噬一人头形花纹与司母戊（姤戊）大鼎耳部花纹完全相同。司母辛（姤辛）方鼎的形态、纹饰也与司母戊大鼎的风格一致。鸟钮盖龙梁卣与武官村大墓出土的北单卣形象十分相似。类似这样的情况和例子还很多，说明这些器物都应与“妇好”墓出土的文物是同一时期的。“妇好”墓出土的文物对商代器物的断代具有十分重要作用和价值。

（二）“妇好”墓出土的许多前所未见铜器和玉器是研究古器物形态的重要新资料。例如偶方彝，形似宗庙，盖上排列七个出戟的房檐，从其圈足看并非两器相联，盖顶虽有两钮，因其器盖长大，分量沉重，主要是为了从两边拿取方便，不是两件方彝联成一体，从其纹饰中也可看得很清楚，确实很象一座高大雄伟宗庙建筑的形象。它如何定名较为适当，还值得进一步研究。再如一件玉马和四件铜镜也值得注意。商代铜器没有作马形纹饰的，仅在一些铭文中具有作象形马字的。商代玉马还是第一次发现。铜镜上有扁平长钮和简略直条纹饰是唯一经科学发掘出土的商代铜镜，把铜镜的历史从春秋又向前提早了数百年。

（三）有的同志认为，圜腹陶爵、亚弜大圆鼎、兽面纹铜甗和少数鸟首骨笄等器物的年代较早。我同意这种看法。玉器中也有不少较早期的作品。翘尖带扉小玉刀与1950—1951年河南辉县出土的翘尖带扉夔龙纹铜刀的形象是非常相似的，说明它们都是早于同出土的其他玉器的。

（四）“卢方□入戈五”玉戈和“妊竹入石”石磬都是方国向商王朝纳贡之器。入即内，内即纳。和商骨笄上的“邑入二”纳贡骨器的例子是相同的。它和文献记载可以互证，《尚书·牧誓》“庸、蜀、羌、髳、微、卢、彭、濮人”的卢即指此卢方，是商代南方的一个少数民族方国。《左传·文公》十六年“楚伐庸，自卢以往”，其地在今河南湖北一带。曾从周武王参加伐纣的战役。

（五）玉人对研究商代的服饰和发型十分重要，其中作跪坐状的玉人胸前带有芾（蔽膝）的形象，有的玉人不但身穿繁褥纹饰的衣服，而且头上横带一筒形卷状物可能是一种身分等级的象征。从其形象看，这个玉人的身份地位是比较高的，可能是个替大奴隶主贵族管辖奴隶的小头目。头饰角状双髻，一面雕作男象，一面雕作女象，双足作马蹄形，这种形象怪诞的阴阳人，我们怀疑他是带有神秘色彩的巫

当时的殷商王的。这说明在殷商时代即使是一个奴隶主贵族的所辖范围，也能琢制这样高水平的玉器，这从一个侧面又反映了当时的琢玉工艺和生产力的发展状况。这样的资料是很珍贵的。

从一些玉器上残留着的切割痕，还使我们了解殷商已经有了以青铜丝制作的类似现在使用的“镂弓子”那样的青铜丝锯工具。正由于有了这种工具，殷商的镂空透眼玉器多起来了，同时也能在一件玉器上表现比较复杂的镂空透眼技艺了。像那件厚约半公分的片饰青玉凤鸟，凤头和凤尾上的镂空透眼，就是采用青铜丝锯镂成的。而凤身的外轮廓，看样子也很像是以丝子锯“镂”出来的。

总之，在我们对先秦以前的古代琢玉工艺了解还很少的情况下，出土的这一大批玉器，它的研究价值是很大的，它的出土是非常令人鼓舞的。

华觉明（中国社会科学院自然科学史研究所）：

妇好墓铜器群为研究殷商青铜冶铸技术，提供了极重要的实物资料。“范金合土”、“陶铸”、“陶冶”，夏、商、周青铜器用泥范铸造，古代文献说得很明确。之所以能得到形状高度复杂的器物，关键在采用了分铸法。从妇好墓青铜器看，商代分铸已有较高水平，出现多种形式。其中，用得最多的是“后铸”法，即先铸器件，再接附件，如方彝兽头，鸮尊鋬、耳等，都是这种做法。为此，器体铸有榫头，以利铜接，有的鋬断口有残榫，端面有花纹，是其确证。器壁薄的如盉、卣，则在器身预留铸出孔，内安带涡纹的销钉，外面合范浇接附件，构思相当巧妙。中柱盂，带花瓣的空心柱，后铸不便，就采用“先铸”法，将先已铸得的中柱嵌入范内，与盂体铸接成一体。这种做法比较简捷，接合较牢固，春秋中期后成为分铸法的主流（如新郑和蔡侯墓铜器群所示）。

铸造方法的选择，在很大程度上取决于铸件的几何形状。青铜器形由简及繁的演变，决定了先有“后铸”，后有“先铸”这一发展序列。古代冶铸工匠以分铸为基本工艺原则，执简驭繁，开创出一条有本民族特色的自己青铜铸造技术的发展途径，值得我们借鉴。至今仍在生产中发挥作用的半永久泥型、叠铸和失蜡泥型等传统工艺，都是在商周泥范铸造的基础上发展起来的。

冯富根（郑州机械研究所）：

我从十三岁学徒，搞翻砂将近五十年了。过去看到形状复杂的商周铜器，总以为不用蜡模是铸不出来的。这次参加妇好墓青铜器工艺分析，才弄明白它们确是用泥范铸造的。

从这批青铜器看，凡形状稍为复杂一些的，几乎都要下芯子。例如：方彝的兽头，鸮等的附耳，甚至高仅3厘米的爵柱竟也是空的。这是因为：青铜在凝固时有约1%的体收缩量，下了泥芯，可消除铸件热节，减少缩孔、缩松，保证得到规整的几何形状和清晰的花纹，与现代下内、外冷铁，局部用铬砂是同样的原理。此外，通过安放泥芯，使壁厚均匀，又有利于达到同时凝固，防止热裂，对提高铸件质量也有很大好处。

这种“包皮芯子”全被铜水包围，没有通气孔道，如果不采取相应措施，必定会发生呛火、气孔，成为废品。为此，就得先在低温下把芯烤干，再经高温焙烧（600℃以上），去除部分结晶水，然后趁热浇注。这样，不仅大大减少了泥芯的发气量，而且由于铜水和范壁温差小，摩擦阻力小，浇注平稳，使很薄的器件和细微的花纹都能成功的铸出。这种工艺设计的合理性和工艺实施的成熟性，表明商代青铜冶铸技术已有很高水平，也是劳动人民创造世界、创造科学技术的很好证明。

高英（中国历史博物馆）：

我从事铜器修复四十多年，从来没见过这样丰富多彩的单元文物群及其许多件重要的器物。无疑，这次发现是我们文博考古界在毛主席革命路线，和以华主席为首的党中央抓纲治国战略决策指引下所取得的重大胜利，给殷代考古和历史研究的各个方面增添了极其宝贵的资料。

我认为“妇好”墓的铜器群，应该属于“早殷”时代。理由是：造型厚重，大件器物多，花纹布局虽然严紧，但回纹粗略。更重要的一点是冶金技术没有晚殷时代的高度，含锡量偏低，可能还有个别的红铜或含锡低于8%的器物（例如一件弓形器）。该墓没有一件花纹精细如丝、玲珑透体的晚殷时代的器物。这说明当时冶金技术还没有达到晚殷时代的高度。因此，断该墓为武丁时代是可取的。铜镜的发现，把我国铜镜的历史往前推进了五百多年，对比战国铜镜那样精美就毫不足怪了。然而从该墓铜镜的腐蚀现象看，估计它们的含锡量可能是偏低的，因此它们的光洁度和反光强度必然不如战国同类器物。但是晚殷铜器中却常常有含锡量很高（几乎近于战国铜镜的含锡量）的器物。这一点说明当时人们还没有认识含锡量可以决定青铜硬度和光洁度的自然规律，因此也就证明该墓青铜器的时代较早。

在二百件青铜礼器中，有一件高达30厘米的大铜爵，是空前的发现。我青年时曾修复过一对22厘米左右的西周铜爵，在我记忆中留下了不可磨灭的印象。象这样特大号的殷代铜爵却从未见过。由于该墓出土了几十件普通铜爵，所以这件大爵值得重视。

正在修复的大铜盂，身高43.5、口径55厘米，是殷代同类器物中最大的一件，可以称“盂祖”了。而最重要的还应该是两件大方鼎，是该墓礼器中具有极重要的历史价值的器物。从它们的器型、花纹和铭文三个方面，可以和郑州张寨南街两件方鼎和“司母戊”大方鼎上下相互联系，三者给我们提供了商代铜鼎的历史发展演变的很长、很重要的线路。

成对、成套的铜器多，是该墓又一个重要标志。本来殷代铜器成对是常见的，但多数是小件器物，例如觚、爵、觯等，特别是前两种成对是很多的。如果发现成对的鼎、簋、方彝等稍大器物，就很稀罕了。从未见过大型铜器成对的出现。特别象鸮尊、兕觥这种“象物”很强的铜器，成对是从来没有发现过的。成套铜器在殷代，除了乐器（铙）必须成套（否则宫商不分）外，礼器成套很少见。

该墓礼器中，酒器占70%，可是却未见到晚殷那种腰圆、大腹、大口型的提梁卣，这一点值得注意，可能与器物的演变、兴衰有关。

总之，这次的发现是空前的。

如果我们把该墓一千四百多件文物所需的人力、物力大略计算一下，就可以看出墓主人需要多少奴隶为她服务？多少物质供她挥霍？这相当深刻地揭露奴隶制社会残酷的政治压迫和血腥的经济剥削。同时，在这批琳琅满目的遗物中，强烈地表现出我们祖先高度的智慧和艰苦的劳动，给我们创造出光辉灿烂的历史文化。**“人民，只有人民，才是创造世界历史的动力”**。“妇好”墓又一次给这个伟大的真理提供了铁一般的历史见证。

王世民（中国社会科学院考古研究所）：

我想补充一点情况，谈谈自己的看法。

殷墟五号墓出土二百来件青铜礼器，大家看到六十多件，占总数的三分之一。这些都是经过分型分式挑选出来的典型标本，没有包括在内的器形极少。妇好墓的铜器大多成对，鼎、觚、爵同式的件数更多，所以大家实际已经看到出土铜器的百分之九十以上。大家根据这么多典型标本展开讨论，发表很多宝贵的意见，这对于进一步确定这座墓的年代帮助极大。根据现有的研究成果，殷墟五号墓的墓主，似乎仍以定为武丁时期的妇好比较合理，墓的年代应属殷墟中期。

解放以来，通过典型遗址和墓地的大规模发掘，逐步建立各个时期的年代序列，特别是陶器，断代更有较大的把握。但是，商周铜器的断代研究，情况就有不同。西周铜器常有较长的铭文，所载人物、史事可资考证，往往能够判明作器的时间应属某王。从形态上对西周铜器进行分期，那就难能搞得很细了，一般分成早中晚三期。至于商代铜器的分期，资料条件远不如西周，主要是有铭文内证作根据的标准器太少，而且限于乙辛时期，所以除区分二里头、二里冈和殷墟外，殷墟铜器的分期只能说刚刚开始。有的同志在资料有限的时候，从标型学的角度进行分析，提出了有助于分期的可贵意见。现在，资料已经几倍于过去，仅妇好一墓所出铜礼器即超过旧日的总和，殷墟西区墓葬还有几十座出土铜礼器的墓正在整理，在这样的情况下，如何适当参考过去的分期，在更加广泛而坚实的基础上大踏步地前进，是需要我们大家共同考虑的问题。

进行随葬器物分期，第一位是器物组合的变化，形制花纹的差异也应充分注意。而铜器的断代，同组关系和史事连贯最为重要。关于妇好，姑且不论甲骨一、四期重出是怎么回事，二百多条卜辞足以说明当时确有其人。那么占这座墓所出礼器三分之一的六十多件妇好组铜器，纵然铸造时间有先有后，也应看作一个历史时期的产物，不宜将其割裂。许多同志指出，妇好墓的东西与1001、武官两大墓最为接近。它同238号墓也有不少相似之处，如细颈卣、扁圆壶、小方斝和方彝等。整个说来，妇好墓缺少侈口双耳簋、直筒形尊、宽体卣和带穿戈一类典型的晚期器物，早期因素却很不少，颇有承先启后的味道。武丁是盘庚迁殷后在位时间最长的王，也是殷代的极盛时期，随后就走下坡路了，因此，武丁及其以后一段时间的文物，似可作为殷墟文化的典型代表。将妇好墓定为武丁晚期，上距盘庚迁殷已有一百年以上的历史，属早晚交替的殷墟中期，同当时的历史背景是符合的。如果认为妇好墓与甲骨四期相当，未免失之太晚。

（原载《考古》1977年第5期）

BIBLIOGRAPHY

REVIEW ARTICLES AND BOOK REVIEWS

REMARKS ON THE MENZIES COLLECTION OF SHANG DYNASTY ORACLE BONES, VOL. II: THE TEXTS

CHANG TAI-PING

(University of Washington)

This collection, edited by Dr. Hsü Chin-hsiung 許進雄, contains the texts of 3761 rubbings that were published in volume I of The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones in 1972.* Its aim is to transcribe the bone texts into modern characters with detailed annotations of certain phrases that appear frequently. An introduction, addendum of 19 plates, and an appendix of three chapters, namely: "Periodic Classification of Oracle bones," "The Five Rituals," and "Divinations on Hunting" are attached to this work. Dr. Hsü uses the shapes and lengths of the chiselled hollows, and certain formulaic phrases as criteria for establishing his own periodization.

Wang Kuo-wei 王國維, in his Kuan-t'ang chi lin 觀堂集林 (first published in 1923) was the first to use appellations and names in the Yin oracle bones to determine the periods of the Yin rulers.[1] Tung Tso-pin 董作賓 (1985-1963) expanded the theory and suggested ten criteria for determining the period of an oracle bone. Relying on genealogy, modes of address, names of diviners, original location when found (and if known), names of tribes and states, personal names, nature of contents, grammar, the structure of characters, and the style of writing, he established a chronological division of five periods.[2] Since then periodic classification has become one of the fundamental issues in the field, and problems, disagreements, and controversies have arisen in connection with it. For example, it is very difficult to distinguish inscriptions of the First and the Fourth Periods, especially those of the diviner Tui 𠂤,[3] i.e. the ones which Ch'en Meng-chia 陳夢家 calls the Tui diviner group.[4] Hu Hou-hsüan 胡厚宣 in his Chan-hou nan-pei so chien chia-ku-lu 戰後南北所見甲骨錄 divides the oracle bone inscriptions into four periods.[5] Kaizuka Shigeki 貝塚茂樹 divides them into eight types. He also classifies the First Period inscriptions into the Groups of Princes and Royal Family, and the so-called Third Fourth Period.[6] Ch'en Meng-chia[7] and Yen I-p'ing 嚴一萍[8] each have their own theories in classifying the periods. Another difficulty is that diviners were identified as belonging to different periods. For example, the diviner Ho 何, considered by most scholars as a diviner of the Third Period, was classified by Tung Tso-pin in the Second Period, while Jao Tsung-i 饒宗頤 and Ch'en Meng-chia classify him in the First Period.[9] Such disagreements have added complexity in distinguishing the periods of the oracle bones. Dr. Hsü employs his own method, explained in his preface as "differing from previous works in that it uses the style of hollows chiselled in the back of an oracle bone as a factor in its classification by period" (p. xv). He also says "Chiselled hollows have have not only provided new material for the solution to these problems, but have also proved useful in dating certain bones of the Third and Fourth Periods otherwise difficult to classify correctly" (p. xv). My paper will first discuss the new periodization theory proposed by Dr. Hsü, and secondly, comment on his study of "The Five Rituals" and some of the graphs involved.

I. Periodization:

Dr. Hsü tries to make clear distinctions among these five periods primarily by analysing the chiselled hollows on the bones. His method consists of describing the length of each hollow as well as its general shape and the shape of its ends. These criteria then serve as the basis for his period classification. For example, in the Second Period "no hollows of this period are straight-shouldered with needle-point ends as are some First Period examples, but some hollows about 2 cm long have triangular ends and shoulders straighter than the norm" (p. xvi). His analysis is quite attractive and interesting, but after making a careful study, I found certain contradictions and inconsistencies. For example, concerning the shape of the ends, the pointed ends and the triangular ends are found from the First Period throughout the Fifth Period; the rounded ends are found in the First, Second, and Fifth Periods; the pointed and rounded ends are found in the First, Second, Fourth, and Fifth Periods; and the flat cut ends are found in the Third and the Fourth Periods. As to the shape of the hollows, the straight shoulders, the curved shoulders, and the narrow, straight, pointed shoulders are also found from the First throughout the Fifth Period; the broad, straight shoulders are found in the Second, Third, Fourth, and Fifth Periods. The broad, curved shoulders were used in the Fourth and the Fifth Periods. (See Table I). One must therefore conclude that there are no exclusive, specific shapes for any distinct period and, consequently, they are all somewhat similar. In particular, a chiselled hollow with a triangular end and a curved shoulder as well as a hollow with a pointed end and a straight shoulder are found in every period, and these criteria are thus not meaningful for a periodic classification.

As to the length of the hollows, in the First Period, Dr. Hsü says, "The hollows are between 1.5 and 2.0 cm, usually about 1.7 cm" (p. xv). In fact, instances where the length of the hollows measures 1.4 cm and 2.1 cm are also found in the First Period. Dr. Hsü says the hollows in the Second Period are "at least 2.0 cm, and their length increases throughout the period" (p. xv). Yet, based on Dr. Hsü's own material, I have found many examples of so-called Second Period hollows that measure 1.2, 1.4, 1.5, 1.6, and 1.7 cm. Dr. Hsü says the length of the Third Period hollows "increases to at least 2.2 cm" (p. xvi). The length of the hollows of the last part of this period "shrinks back to 2.0 cm or even less" (p. xvi). I have found several examples in which the length of the Third Period ranges from 1.5 cm up to 3.3 cm. For the Fourth Period, Dr. Hsü says the "length diminishes to about 2.0 cm... After this early stage, [that is, of the Fourth Period] hollows are always under 2.0 cm long, some even shorter than 1.5 cm." (p. xvi). Thus, the distinguishing characteristics of the Fourth Period are rather vague. In this Period, the length of the hollows ranges from 1.0 cm up to 3.0 cm. In the Fifth Period, Dr. Hsü says, "These hollows are 1.8 to 2.0 cm long" (p. xvi) and on shells "the length returns to about 1.7 or 1.8 cm" (p. xvi). According to my statistical analysis, the hollows range from 1.0 cm to 2.0 cm in length. (See Table II).

In conclusion, the hollows measuring 1.5 cm, 1.6 cm, 1.7 cm, 1.8 cm and 2.0 cm are found in all periods. Also the common length of 1.4 cm to 2.6 cm obviously appears in three or even four periods. Therefore, I suspect that neither the shape of the hollows nor the length of the hollows provides adequate criteria from which to formulate a clear classification of periods.

Dr. Hsü carefully classifies every divination item into a certain period. Since many pieces of the oracle bones or shells were broken or fragmented, each piece has only one or two inscriptions in the rubbings preserved. Without any annotation or criteria, one wonders how those divination items can be classified into periods. The Menzies collection contains many (613 pieces or 19.3 percent of the entire collection,) that have no criteria for periodization, yet Dr. Hsu assigns them to a period anyway. It might be more useful to include those pieces in a separate section, instead of arbitrarily classifying them into periods.

II. Remarks on the Five Rituals and other sacrifices

Dr. Hsü further makes a thorough study of "The Five Rituals" in this collection. He has also published "A Study of the Five Rituals in Oracle Bone Inscriptions of the Yin Dynasty," Taipei, 1968, "A New Approach toward Study of the Five Rituals in Oracle Bone Inscriptions of the Yin Dynasty," CKWT, no. 35, 1970, and "A New Approach toward the Five Rituals and their Relevance to the Yin Calendrical System," CKWT, no. 41, 1971. As early as 1945, Tung Tso-pin had already published "The Five Rituals and their Relation to other Sacrificial Ceremonies" 五種祀典與其他祭祀之關係 in his Yin-li-p'u.[10] Since the Yin-li-p'u was published, Shima Kunio 島邦男 and Dr. Hsü have offered different interpretations of the sequential order of the Five Rituals.[11] The Five Rituals include five sacrificial complex rituals known as i 翌, chi 祭, tsai 𩛥, hsieh 劦, and jung 肜. Dr. Hsü gives a detailed explanation of the reconstructed ritual cycles. A genealogical table of the Shang kings and a sacrificial time table as well as a list of the successive ritual activities were appended to this collection. This article provides good information on how many hsün 旬 (ten-day weeks) a sacrifice lasted or in what hsün a sacrifice would be made, but gives no information on how the sacrifices were performed. Nor does it give any explanation of the sacrificial terms, either by graphic analysis of the character or by phonetic reconstruction. Tung Tso-pin in his Yin-li-p'u provides more detailed annotations. For example, for tsai 𩛥, Tung Tso-pin starts with the Shuo-wen chieh-tzu 說文解字 (hereafter SWCT) definition and then proceeds to the original graphic form in the oracle bones. He says, "The graph derives from shih 食 (food) and yu 又 (hand). This is because one uses his hands to present food before his ancestors (or spirits). (This graph also) derives from ts'e 屮. For the same reason 𢦏 was written as 𢦔, and ts'ai 才 was a sign of its pronunciation. The tsai sacrifice also uses wine.[12] He also gives the complete development of this graph, from the First Period of the oracle bones through the Fifth Period, and he even includes comparisons from the bronze inscriptions. I do not mean to suggest that one must agree with Tung Tso-pin. However, Tung's theory is sufficiently important as to require more than casual attention. Dr. Hsü's discussion of these terms is often cursory and shows a tendency toward making arbitrary judgments without paying enough attention to the process by which he has reached his conclusions. He frequently gives vague remarks such as "its meaning is unclear" or "someone has explained this term as..., but I am afraid it is not." In many of these cases, Therefore, wood does not appear in the graph. He concludes that liao 米, 𡿧, chui 叡, 叡, ch'ai 崋, 㸑, 柴,[32] and liao 尞, 燎, were the same graph with different forms.[33]

Although experts disagree about details, most scholars agree that the graph has three basic elements: a hand, a piece of firewood, and an ancestral tablet. We also know that the sacrificial animals or offerings used include pigs, oxen, penned oxen, penned sheep and wine.

The diviners mentioned in connection with the sacrifice are Lü 旅, Chung 中, Hsüan 㢩, Hsing 行, Hsi 喜, Chi 即, Yang 洋, Wang 𦉪, Ta 大, Ch'u 出, Fu(?) 卜 and Wang 王. They flourished from the First Wu Ting Period, which belongs to the Old School, down to the Third K'ang Ting Period, which belongs to the New School. According to Tung Tso-pin the so-called New School began in the Second Tsu Chia Period, and the graph liao 米 was changed to 叡 at that time. Jao Tsung-i and Ch'en Meng-chia agree that the diviners Chung, Hsi, Ta and Ch'u spanned the Wu Ting and Tsu Chia Periods. Jao suggests that Lü belonged to the Tsu Chia, Lin Hsin 廩辛 and K'ang Ting Periods. He also places diviners Chi and Hsing into Tsu Chia Period and diviner Yang into Wu Ting Period. Ch'en Meng-chia on the other hand assigns all of them to the Wu Ting and Tsu Chia Periods. As to the diviner Hsüan, Jao suggests that he belonged to the Tsu Chia Period.[34] Thus, the graph may have occurred in the so-called Old School period, and it would be difficult in that case to accept Tung's hypothesis.

If it were still necessary to take 𡿧 and 叡 as two different graphs, they nevertheless would be similar in meaning, both designating a burning sacrifice. The purpose of the two sacrifices, however, was different. Based on my survey of the existing oracle bone material,[35] the chui sacrifice was connected with the following matters:

1). Seeking rain (5 times).
2). Seeking "no rain" (2 times).
3). Seeking assistance for the king (2 times).
4). Hunting (1 time).
5). Chui followed by 亡尤 or 亡𢦏 (39 times).

The preserved material further indicates that the sacrifice was made to Ta I 大乙, T'ang 唐, Ta Chia 大甲, Ta Keng 大庚, Hsiao Chia 小甲, Chung I 中乙, Tsu I 祖乙, P'i I 妣乙, Tsu Hsin 祖辛, Wo Chia 沃甲, Tsu Ting 祖丁, Nan Keng 南庚, Yang Chia 陽甲, Hsiao Hsin 小辛, Hsiao I 小乙, P'i Keng 妣庚, Tsu Keng 祖庚, and K'ang Ting 康丁.

III. The graph hui 叀.[36]

Concerning the graph 叀 B1674, 叀 B1759, B1900, 叀 B2652 (叀), Dr. Hsü says, "It has the same meaning as wei 唯. It is a grammatical auxiliary word (yü-chu 語助)" (p. 25). But in his treatment of hui in specific contexts, he ends up actually recognizing at least seven distinct usages. In the examples that follow, I give an English translation based on Dr. Hsü's modern Chinese rendering:

1). Hui precedes the name of a sacrificial victim.

B1674 癸巳卜，𢦔甲歲，叀牡？
叀牝？茲用

"By means of a slaughtering ritual, one makes a sacrifice to Yang Chia. Is it proper to use a male-ox? Is it proper to use a female-ox? As a result, this divination is adopted" (p. 121).

In other places such as B1685, B1704, B1748, B1784, the graph hui is paraphrased by i 以 in the sense of "to use."

B1759 2) 叀二宰用，王受又？
"Use two penned oxen to make an offering; the king will receive assistance, won't he?" (p. 131)

In this and other passages such as B1686 5) 叀宰用正, hui actually occurs with yung 用. Hsü translates the latter "Is it a proper ritual to use an ox to make a sacrifice" (p. 123). Dr. Hsü in this instance seems to construe yung as 'to use,' and hui, which elsewhere he renders into modern Chinese as yung, is left unaccounted for.

B1801 壬申卜，其剛叀犬？
叀羊？
口申卜，四般歲四又宮口.

His translation of the first and the second lines says:

"Is it proper to sacrifice by using the method of slaughtering a victim in offering a dog (or a sheep)?" (p. 134)

When the graph hui occurs before the term 'dog' or 'sheep,' which refer to the sacrificial animal, Dr Hsü translates it as 'to offer.'

2). The graph hui precedes a place name.

B1908 不遘雨？吉
叀喪田省？遘雨？吉

He translates the second line as:

"Going to the hunting ground of Shang to make an inspection, [the king] will be caught in the rain, won't he?" (p. 145).[37]

When hui occurs before a place name, Dr. Hsü translates it as 'to go' (see also B1961, B2022, B2025, B2057).

3) The graph hui precedes a date, and a sacrificial term.

B1792 乙卯卜，曰叀乙？
"Is it proper that the date is set on an i day." (p. 134)

B1910 辛亥卜，王叀壬田盥，不雨？吉.
"The king, on the day of jen, will go to kuan to hunt; will it not rain?" (p. 146)

there has been much discussion by other scholars that needs to be considered. If one wishes to formulate a new interpretation, he must first examine the contributions of earlier scholars. As an example of how one might avail himself of this earlier scholarship to determine more exactly the meaning of some of these "vague" terms, I have included brief discussions of the terms shang 鬺, chui 叡, and hui 叀, which Dr. Hsu did not adequently examine.

1. Shang 鬺, 鬺, 鬺, 鬺, *siang/siang/shang

Dr. Hsu says "This (graph) derives from ting 鼎, with chiang 將 as phonetic. This is one kind of offering. It should be a sacrifice involving cooked food" (p. 43). Shang is one of the graphs not found in the SWCT. It has several variant forms in the oracle bone inscriptions. For instance, it was written 鬺 (ts'ui 粹 541), 鬺 (ch'ien 前 5.3.5), 鬺 (nan-ming 504), 鬺 (ching-chin 京津 212), and 鬺 (fu-wen 簠文 50) which forms mainly consist of jou 肉 (a piece of meat), ting 鼎 (a tripod) and ch'iang 爿 (a tray).[13] Basically it means that before cooking a piece of meat was placed on a tray which was laid on top of a tripod,[14] presumably to determine the proportions of water and heat to be used in cooking.[15] There is one graph found written 鬺 (ch'ien 5.3.7) in which the three small dots may indicate the juice of the meat.[16] Abbreviated forms of the graph are also found in the oracle bone inscriptions. For example, 鬺 (chia 甲 1633), 鬺 (ching-chin 4243), 鬺 (chia 840, ning 1.1, 1.193), and 鬺 (chia 2120, ch'ien 6.34.6). It is obvious that the two elements jou and ch'iang of the upper portion of the former graph were replaced by a pi 匕 (spoon or ladle), and the associative meaning of the graph is to spoon something out of the tripod. The meaning was then extended to the sense of "to offer."[17] In some cases it may also mean "to present" or "to perform."[18] The graph was written 鬺 (t'ieh 鐵 129.2), (nan-ming 676), 鬺 (hsü 續 5.30.16) which shows a piece of meat and a tripod. In this form the graph has the associative meaning of "to cook."[19] Finally we find the forms 鬺 (ching 菁 9.6) 鬺 (i 乙 810) and 鬺 (i 389), all of which have a tray and a tripod. The contents of the tripod were probably placed on the tray.[20]

One might conclude that the shang was a sacrifice in which cooked meat or food was offered to the ancestors so that the king would "receive assistance" (ning 1.1, chia 849, nan-ming 504), or "have no future concern."[21] We also know that the only offering that is mentioned in connection with the shang sacrifice is the rhinoceros. The diviners whose names occur in the oracle texts include Pin 賓,[22] Ta 大,[23] and Fu 𠷎.[24]

2. Chui 叡, 叡, 叡.

Dr. Hsü explains the graph chui as "It is a sacrificial name. Its meaning is not clear" (p. 122 and p. 133).

The identification of this graph has long been a subject of much discussion. For instance, Lo Chen-yü says, "This graph derives from a hand holding wood in front of an ancestral tablet. In antiquity, people burned wood when they performed divination. The wood is a kind of bramble. This graph seems to have the meaning of divination. In addition, Hsü (Shen's) Shuo-wen chieh-tzu has the character 𣪠. He (Hsü Shen) comments 'the Ch'u 楚 people called divining good luck or bad chui. The character derives from yu 又 (hand), which holds sui 祟 (malevolent influence of a god or demon).' However, sui is not an object which can be held. I suspect that the element ch'u 出 (of the character 𣪠) is a corrupt form of mu 木 (wood). But I cannot decide."[25] Further, in the Tseng-ting Yin-hsü shu-ch'i k'ao-shih 增訂殷虛書契考釋 he adds, "Ch'u probably is the corrupt form of mu. Then chui 叡 is the same as in the Shuo-wen. This graph is always a sacrificial term in the oracle bone inscriptions. Is not a divination sacrifice called chui 叡?"[26] Yü Hsing-wu 于省吾, basing himself on an explanation by Ch'eng P'ei-yuan 承培元, propose that chui is a loan graph for sai 賽, which was a sacrificial ceremony made in the winter, with special prayers seeking a good harvest in the coming year. Yü suggests that the graph chui is equivalent in meaning to sai (賽 or 塞) found in the classics, but he shows that it is not necessarily a winter sacrifice.[27] Kaizuka Shigeki explains that this is a sacrificial ceremony in which firewood is burned.[28] He agrees with Shima Kunio that it is a burning sacrifice. The ceremony was made to the spirit of the Yüeh 岳 (mountain) asking for rain.[29] Ch'en Meng-chia suggests that there are two common way to make a sacrifice to the mountain. One is liao 尞 and the other is juo 𡿧, and both involve the use of burning firewood. Ch'en also shows that there are variant forms of chui. For instance, it was written 𡿧, or 𡿧, or 叡, or 叡. He agrees with Wang Hsiang 王襄 that this graph is the original form of juo 爇.[30] Tung Tso-pin claims that liao was written 米, 米, or 米 in the Wen-wu Ting 文武丁 period, which Tung Tso-pin identifies as the "Old School" form, and was changed into 叡(叡) after the Tsu Chia 祖甲 period, which is his "New School." Thus, he postulates that liao and chui are the same graph. According to Tung, the original form is a pictograph of burning firewood, and the dots symbolize the sparks of flame flying into the sky. The new graph 叡 shows a hand holding a piece of burning firewood in front of an ancestral tablet.[31] Chin Hsiang-heng 金祥恆 elaborates on Tung's theory, pointing out that 叡 or 𣪠 consists of one or two hand(s) holding firewood in front of an ancestral tablet. The dots are the sparks of the flames which "cover" the wood.

blessing-sacrifice."

B2114 叀多万.
"Make (let) it be the various 万, it is greatly auspicious."

6). The graph hui precedes a term designating the object of a sacrifice, which is followed by a sacrificial term.

B1682 叀多子鄉　叀多父.
"Make (let) it be the various princes to whom a feast-sacrifice is offered." "Make (let) it be the various fathers."

7). The graph hui precedes the comment.

B1391 貞：叀鬼.
"Test [the proposition]: [the omen] will make it fearful."

IV. Series numbers and others

Dr. Hsü also make a comparative study of the differences in the divination customs between the Third and the Fourth Periods. He says "Divinations are not numbered in a series until the late Third Period but series numbers are commonly used in the Fourth" (p. xvi). In this collection, I find that numerous divinations are numbered in a series in the First, Second as well as the Fifth Periods. In fact, they are widely employed from the First Period through the Fifth Period and they are too numerous to be mentioned. This is one example of some of the obvious contradictions which the author made in his comments in this collection.

Besides insufficient explanation, Dr. Hsü omits many transcriptions of the texts. For example, in S0059, S0326, S0341, S0353, S0390, S0483, S0494, S0511, S0526, S0564, S0595, S0641, S0664, S0697, S0849, S0874, S0920, S0941, S1032, S1190, S1275, S1306, B1804 and B2386 transcriptions were apparently left out.

Generally speaking, in spite of minor flaws, this collection is very well done and beautifully printed. The modern punctuation of the texts as well as the translation into modern Chinese of obscure passages provides much assistance in the study of these oracle bone texts, even though there are deficiencies in the grammatical analysis. The material should be useful for studies of Shang history, religion, and language. Unfortunately, the book has no index, making it somewhat difficult to use. The book's utility could be enhanced with three separate indexes:

1). Unusual or new graphs or graphic variants.
2). New names of persons or places.
3). New terms referring to religious, social and political aspects of the Shang.

FOOTNOTES

*This article is a review of Hsü Chin-hsiung. The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones (Ming I-shih shou-ts'ang chia-ku shih-wen p'ien 明義士收藏甲骨釋文篇) Toronto, Canada: The Royal Ontario Museum, 1977.
I wish to express my gratitude to Professor Paul L-M Serruys for his generous assistance and advice.

[1] Wang Kuo Wei 王國維, "Yin-hsü pu tz'u chung so chien hsien-kung hsien-wang kao 殷虛卜辭中所見先公先王考," and "Yin-hsü pu-tz'u chung so chien hsien-kung hsien-wang hsü-kao 續考," Wang-kuan-t'ang hsien-sheng ch'uan-chi 王觀堂先生全集 (Taipei: Wen-hua, 1968), 2.391-432.

[2] Tung Tso-pin 董作賓, Yin-li-p'u 殷曆譜 (Ssu-ch'uan Nan-hsi 四川南溪: Kuo-li chung-yang yen-chiu yüan li-shih yü-yen yen-chiu-so, 1945), 1.1b.

[3] Kaizuka Shigeki reads it as shih in his Kyōto daigaku jinbun kagaku kenkyūjozo kōkotsu moji (Kyoto: Kyoto Daigaku Jinbun Kagaku Kenkyujo, 1960), p. 9.

[4] The writing style of the Tui diviner group is very similar to the Pin diviner group, and it is rather difficult to determine their periods. For a detailed explanation see Ch'en Meng-chia 陳夢家, Yin-hsü pu-tz'u tsung-shu 殷虛卜辭綜述 (Peking: K'e-hsueh ch'u-pan she, 1956), pp. 150-3.

[5] Hu Hou-hsüan 胡厚宣, Chan Hou-nan-pei so chien chia-ku-lu 戰後南北所見甲骨錄, (Peking: Lai-hsüan-ko shu-tien, 1951), Preface, p.1.

[6] Kaizuka Shigeki says "In my period classification I have established a new period which I call the 3rd-4th Period. Here I have placed those inscriptions which belong to either the 3rd or the 4th Period in which the name of the king cannot be determined." See Kyoto daigaku jinbun kagaku kenkyūjozo kōkotsu moji, p. 21. As to the Royal family and Group of Princes, see pp. 18-22.

[7] Ch'en Meng-chia, "Chia-ku tuan-tai-hsüeh 甲骨斷代學," Yen-ching hsüeh-pao, 40 (1951), 1-58.

[8] Yen I-p'ing 嚴一萍, "Chia-ku-wen tuan-tai yen-chiu hsin-li 甲骨文斷代研究新例," Chung-yang yen-chiu yüan li-shih yü-yen yen-chiu so chi-k'an, Ch'ing-chu Tung Tso-pin hsien-sheng liu-shih-wu sui lun-wen-chi, 4 (1960), 1-25.

[9] Hsü Chin-hsiung, "T'an chen-jen Ho ti nien-tai 談貞人何的年代," CKWT, 43 (1972), 1-4.

[10] Tung Tso-pin, op. cit., 3.13a-20b.

[11] Hsü Chin-hsiung, "Chia-ku pu-tz'u chung wu-chung chi-ssu ssu-shou ti shang t'ao 甲骨卜辭中五種祭祀祀首的商討," CKWT 22 (1966), 1-10.

[12] Tsung Tso-pin, op. cit., 3.15a.

[13] The SWCT omits this graph. According to the Liu shu-ku 六書故, the T'ang edition of the SWCT had it. Tuan Yu-ts'ai 段玉裁 adds the graph ch'iang under the radical p'ien 片. The SWCT says "P'ien means to split a piece of wood." Under the graph ch'iang it says "Ch'iang is a

B1697 叀甲戌𢦔酒？
"Is it proper to offer millet wine on the day of the chia-hsü?" (p. 124)

Hui in the first example is rendered ting 定 'to set', while in the second and third cases hui is equivalent to modern Chinese tsai 在 'on' (see also B1680, B1686, B1780, B1811, B2353, B2364).

4). The graph hui precedes a person's name.

B2129 叀見令？
"It is proper to order Chien to do it, isn't it?" (p. 167)

When hui occurs before a person's name as in the example above, Dr. Hsü does not translate it. The words 'to do it' (ch'ü tso 去做) which are not contained in the oracle bone passage, seem to indicate that, for lack of proper grammatical analysis, supplementary words are inserted to give only a general meaning (see also B2432 and B2718).

B2683 癸亥卜，王叀或从？
"It is proper that the king perhaps will make Huo go with him, isn't it?" (p. 214)

B1825 叀万舞，又正？大吉.
叀林舞，又正？大吉.
叀新舞，又正？吉.
"Is it proper to make (or Lin or Hsin) 万 dance in order to pray for rain?" (p. 137)

Dr. Hsü translates hui both in B2863 and B1825 as shih 使 'to make.'

5). The graph hui precedes an official title.

B2107 叀戍中往，又𢦏？
叀戍先往，又𢦏？
"There will be disaster (if one) makes hsü-chung (or hsü-hsien) go, won't there?" (p. 165)

Hui here is also rendered shih 'to make' (see also B2110, B2114, B2178).

B2119 叀𠔏犬陵从，亡𡆥
"To follow the dog official 陵 who is from 𠔏 area, there will be no disaster, won't there?" (p. 166)

B2719 丙午貞，叀王正刀方？
"It is proper that the king goes to attack Tao-fang, isn't it?" (p. 217)

In both cases, the graph hui is untranslated.

6). The graph hui precedes a term designating the object of a sacrifice, which is followed by a sacrificial term.

B1737 叀中录先𤈦？吉
叀東录先𤈦？吉
"Is it proper to make a cooked food offering first to Chung (Tung-lu)?" (p. 128)

Hui, in this case and one other example B1682, is not translated.

7). The graph hui precedes the comment.

B1385 貞：叀鬼？　貞：叀吉？六月
"There will be bad luck, won't there?" "There will be good luck, won't there?" (p. 104)

Dr. Hsü seems to have added hui 會 'will be' for rhetorical effect.

B0289 戊寅卜，史貞：王燕叀吉？
"The king's feast will be auspicious, won't it?" (p. 41)

Hui is translated as a linking verb here. (For other similar example see S0291, S1384, S1391, S1394, S1395, and S1399.)

If one relies on Dr. Hsü's pai-hua 白話 translations of phrases in which hui occurs, it turns out that it is not a meaningless particle, but it would have to have at least seven meanings and five functions:

1). Hui means 'to use'; 'to offer'; 'to go'; 'to be caught'; 'to set'; 'to do'. It functions as a verb.
2). Hui means 'to make'. It functions as a causative verb.
3). Hui means 'to be' or 'there will be'. It functions as a linking verb.
4). Hui means 'on (some day)'. It functions as a preposition.
5). Hui functions as a particle.

The variety of ways Dr. Hsü ends up translating hui is inconsistent with his claim that it simply equals wei 唯, and is a grammatical auxillary. The relation between hui and wei may not be one of straightforward equality. Professor Paul L-M Serruys has already questioned "why two signs (wei and hui) should be created and then used at the same time, even within the same line, without any difference."[38] Professor Serruys argues that hui represents "the causative counterpart of 隹, i.e. 'to cause to be, consider, assume, make'." It is possible to further develop this interpretation by considering that hui, when used as a "causative counterpart" of wei, can be assumed to have an imperative function, i.e. 'to make it be', 'to let it be' which implies the meaning of 'to choose'. 'to select', or 'to prefer' (note that Dr. Hsü in many instances construes hui as shih 'to make'.) For example:

1). The graph hui precedes the names of sacrificial victims.

B1685 叀犁．叀物．叀今夕酒．
"Make it be a brown-red ox. (Let it be a brown-red ox.) Make it be a plough-ox. Make it be this evening to offer a libation sacrifice."

2). The graph hui precedes a place name.

B1908 不遘雨．吉．　叀喪田省，遘雨，吉.
"[The king] will not be caught in the rain. Auspicious." "Let it be Sang [where the king] hunts and makes an inspection. [The king] will be caught in the rain. Auspicious."

3). The graph hui precedes a date, which is followed by a sacrificial term.

B2364 叀辛酉酒求.
"Make (let) it be a hsin-yu day to offer a libation, and a prayer-sacrifice."

4). The graph hui precedes a person's name.

B2683 癸亥卜．王叀或从
"On the kuei-mao divination, the king will make it be (let it be) Ho [who] performs the

reversed form of p'ien. It is pronounced ch'iang." See Tuan Yu-ts'ai Shuo-wen chieh-tzu chu (Shanghai: Shangwu, 1936), 7.69. In the Liu-shu-ku, Tai T'ung 戴侗 quoting Li Yang-ping 李陽冰 says "(If one splits a piece of wood into two pieces), the right piece is called p'ien, and the left piece is called ch'iang." Tai T'ung rejects this theory. See Liu-shu-ku, Ssu-k'u ch'uan-shu chen-pen, liu-chi, (Taipei: Shang-wu, 1975), 21.7b.

Wu Ch'i-ch'ang 吳其昌 considers ch'iang as a tray. In fact, Wu's explanation is based on an explanation by Wang Kuo-wei. Wang argues that either 爿 or 片 was a picture of a tray standing up on a side. Later, when the horizontal tray became commonly used, the vertical tray graph was discarded. See "Yin-hsü-shu-ch'i chieh-ku 殷虛書契解詁," Wen-che chi-k'an 文哲季刊, 3.2 (1933), 33, and Wang Kuan-t'ang hsien-sheng ch'uan-chi, pp. 137-41.

14. Wu Ch'i-ch'ang, "Yin-hsü shu-ch'i chieh-ku," p. 33.

15. Yen I-p'ing suggests this possibility in his "Shih 𢾸𦥑爿，釋將𦥑爿," CKWT, 8 (1962), 7. Shih-ching 209 has a line that reads 或肆或將 "Some [sacrificial meats] were displayed, and some were measured." The Mao commentary says "Shang means 'to adjust' ['to measure']. There is some speculation that the word shang meaning 'to measure [the water and heat]' of the Mao-shih is a later form of this graph. See Mao-shih chu-shu 毛詩注疏 in the Shih-san-ching chu-shu, (Kyoto: Chūbun, 1971), p. 1005. What perhaps is refered to here is a practice mentioned in the Chou-li: "The cook takes charge of supplying the tripods and cauldron in order to give the (proper) measurement of water and heat." Cheng Hsüan (127-200 A.D.) comments: "The cauldron is a vessel used for the purpose of cooking meats and dried fish. Once it is done, it is then placed on the top of the tripod and one measures [adjusts] the amount [of water and heat]." See Chou-li chu-shu, Shih-san-ching chu-shu, p. 1425. Yen I-p'ing argues that the meat was actually put on top of the tripod before the meat was done.

Note that the interpretation of Mao-shih 209 is problematic. See Bernhard Karlgren, "Glosses on the Siao Ya Odes," BMFEA, 14 (1942), #660.

16. Lo Chen-yü 羅振玉, Tseng-ting Yin-hsü shu-ch'i k'ao-shih 增訂殷虛書契考釋, (n.p. Tung-fang hsüeh-hui 東方學會), p. 131.

17. Chu Fang-p'u 朱芳圃, Chia-ku-hsüeh 甲骨學 "Wen-tzu-p'ien 文字篇," (Shanghai: Shang-wu, 1934), 7.7b.

18. Mao-shih 235 has the line 裸將于京 "...their libations were presented in the capital [of the Chou]." Mao-shih 272 has a similar usage: 我將我享 "We present our offerings." See Bernhard Karlgren, "Glosses on the Ta Ya and Sung Odes," BMFEA, 16 (1944), #761.

19. Yen I-p'ing, "Shih 𢾸𦥑爿." pp. 6b-7a.

20. Ibid., p. 9.

21 The graph 𡔷 has been transcribed in many different forms. Wang Hsiang 王襄 transcribes it as 侸 without giving its meaning. See Fu-shih Yin-ch'i lei-tsuan 簠室殷契類纂 (T'ien-chin: T'ien-chin Museum, 1925), 14a. Lo Chen-yü also transcribes it as 侸 or 豎 and says it means a petty official. See Tseng-ting Yin-hsü-ch'i k'ao-shih, pp. 103-4. T'ang Lan 唐蘭 transcribes it as 嬉，僖，𨛫，and 囏. He says that this is the chou 籀 form of the modern character chien 艱 'difficulty'. He argues that all of these graphs were pronounced almost the same in old Chinese. See Ku-wen-tzu-hsüeh t'ao-lun 古文字學導論, Preface (Hongkong: T'ai-p'ing, 1965), p. 8. Hu Hou-hsüan accepts T'ang Lan's theory; see Chia-ku-hsüeh Shang-shih lun-ts'ung 甲骨學商史論叢, "Yin-tai Kuei-fang k'ao 殷代鬼方考," (Ch'eng-tu: Chi-lu ta-hsüeh yen-chiu so, 1944), p. 4a. Kuo Mo-jo 郭沫若 offers a different interpretation. He says "This is a pictograph of a person kneeling beside a drum." The old form of this graph was 鼜. The Shuo-wen says "One guards the drum in order to keep watch at night. The graph derives from a drum 壴 and is pronounced ch'i 戚 ... The graph 𡔷 is the original form of 鼜." See Pu-tz'u t'ung-tsuan k'ao-shih 卜辭通纂考釋 (Tokyo: Bunkyū Shoten 文求堂書店, 1933), 3.87b-88b. Kuo Mo-jo also quotes the Chou-li and the Ch'un-ch'iu-chuan 春秋傳 to prove that ch'i means 'to concern'. Therefore, according to Kuo, the phrase 亡來𡔷 should read "there will be no imminent (coming) difficulties." However, Kuo does not give any proof for his identification of the bone graph 𡔷 and the character in the Shuo-wen. Although the element 女 of the graph 𡔷 was replaced by 堇 of the graph 囏, it is very possible that it is merely a variant of 艱. It still needs further study.

22. Pin was an important diviner during the Wu Ting Period. See Jao Tsung-i 饒宗頤, Yin-tai chen-pu jen-wu t'ung-k'ao 殷代貞卜人物通考 (Hongkong: Hongkong Univ. Press, 1959), p. 241. Tung Tso-pin estimates that the Wu Ting Period was from 1339 to 1281 B.C. See Chung-kuo nien-li tsung-p'u 中國年曆總譜 (Hongkong: Hongkong Univ. Press, 1960), pp. 87-94. Here is a table which shows the date of rule of the Shang kings.

period	kings	date of rule (B.C.)	
		Tung Tso-pin	Ch'en Meng-chia
Ia	Wu Ting	1339-1281 59y.	1238-1180 59y.
Ib	late past		
IIa	Tsu Keng & Tsu Chia (early past)	1280-1274 7y.	1179-1173 7y.
IIb	Tsu Chia	1273-1241 33y.	1172-1140 33y.
III	(Ping Hsin)	1240-1235 6y.	
	K'ang Ting	1234-1227 8y.	1139-1130 10y.
IVa	Wu I	1226-1223 4y.	1129-1095 35y.
IVb	Wen-wu-ting	1222-1210 13y.	1094-1084 11y.
Va	Ti I	1209-1175 35y.	1084-1060 24y.
Vb	Ti Hsin	1174-1112 63y.	1060-1027 33y.

See Tsung-tung Chang, Der Kult Der Shang-Dynastie im Spiegel der Orakelinschriften (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1970), p. 21.

23. Ta was a diviner of the Wu Ting and Tsu Chia time. See Jao pp. 811-2 and Tung, pp. 87-99.

24. Fu was a diviner of the Lin Hsin and K'ang Ting Periods. See Jao p. 1149 and Tung pp. 100-1.

Also see Wang Kuo-wei's "Yin-jen i-jih wei-ming chih so yu-lei 殷人以日為名之所由來," Yin-li cheng-wen 殷禮徵文, Wang Kuan-t'ang hsien-sheng ch'uan-chi, pp. 1945-52.

25. Lo Chen-yü, Yin-hsü wen-tzu lei-pien, (n.p. chueh-ting pu-i-hsuan, 1926?), 3.14a-b.

26. Tseng-ting Yin-hsü shu-ch'i k'ao-shih, p. 92. Ch'en Huan-pang 陳懷邦 agrees with Lo Chen-yü, but further argues that 𡔷 is the ku-wen 古文 form of 𢾊. See Yin-hsü shu-ch'i k'ao-shih hsiao-chien 殷虛書契考釋小箋, (n.p., 1925), p. 11b. Wu Ch'i-ch'ang also agrees with Lo Chen-yü, but he suggests that chui may be a synonym of chan 占 (to divine). See "Yin-hsü shu-ch'i chieh-ku," 3.4 (1934), 660.

27. Yü Hsing-wu, Shuang-chien-ch'ih Yin-ch'i p'ien-chih 雙劍誃殷契駢枝 (Peking: Ta-yeh, 1940), p. 43a.

28. Kaizuka Shigeki, op. cit., p. 377.

29. Ibid., p. 377 and p. 493.

30. Ch'en Meng-chia, Yin-hsü pu-tz'u tsung-shu, p. 596.

31. Tung Tso-pin, Yin-li-p'u, 1.4a.

32. Yen I-p'ing identifies 燎 as liao 尞. He says that 米 is 'scattered wood" and the circle ○ indicates that the scattered wood have to be bundled. It means one burns the bundled wood in front of ancestral tablet. See "釋 ," CKWT, 17 (1965), 5b.

34. See Yin-tai chen-pu jen-wu tung-k'ao, p. 565, p. 783, p. 811, p. 845, p. 902, p. 923, p. 972, p. 1020, p. 1029, p. 1101; and Ch'en Meng-chia's Yin-hsu pu-tzu tsung-shu, p. 190.

35. The material is based on Shima Kunio's Inkyo bokuji sōrui 殷虛卜辭綜類, (1967; rev. ed. Kyoto: Kyūko Shoin, 1971), pp. 154-5.

36. This graph hui often appears in the oracle bone inscriptions, and has been a subject of much controversy. In 1951, Ikeda Suetoshi 池田末利 published the article "Kenji ko 叀字考" which summarizes the conflicting views of eleven Chinese scholars. Ikeda includes the following chart that summarize the different hypotheses regarding hui:

1). The hypothesis of fu 甫 (搏) and hui.

2). The graph chuan 專 { The hypothesis of the graph t'uan 剸. / The hypothesis of a spindle. }

3). The hypothesis of the graph ch'ang 鬯.

4). The hypothesis of the graph chih 疐.

See "Kenji Kō 惠 叀字考," Kōkotsugaku 甲骨學 1 (1951), 9.

After Ikeda's study, two later articles also have attempted to analyze hui. The first one is Wang Hsien-t'ang 王獻唐 "Shuo t'a-hsien 說撻線," in which he concludes that hui is a pictograph of a spindle. See CKWT, 34 (1969), 3b. The second is Han Yao-lung's 韓耀隆 "Chia-ku pu-tz'u chung, hui wei yung-fa t'an-chiu 甲骨卜辭中叀唯用法探究." He agrees with Wang Hsien-t'ang that the original form of hui is a spindle. However, it never occurs in the oracle bone inscriptions in this sense. It was used in the sense of wei, to which he ascribes a number of functions such as 1) an introductory particle; 2) a grammatical particle; 3) equivalent to ch'i 其 (indicating "uncertainty"); 4) a preposition (meaning "at"). See CKWT, 43 (1972), 2-3. Yen I-p'ing considers that all usages of hui could be explained as the equivalent of wei. See Mei-kuo Na-erh-sen mei-shu-kuan ts'an chia-ku-pu-tz'u k'ao-shih, p. 4. Dr. Hsü seems to share this view, but he ends up actually listing at least seven distinct usages in his work.

37. I would question why t'ien 田 in this sentence is construed as "hunting ground." In a parallel example (B1961 叀豙田), Dr. Hsü renders t'ien as a verb "to hunt", I think t'ien is also a full verb here.

38. Paul L.-M. Serruys, "The Language of the Shang Oracle Inscriptions," T'oung Pao, 50 (1974), 25.

SHAPE OF HOLLOWS AND ENDS TABLE I

@SHAPE OF HOLLOWS	1	2	3	4	5	* SHAPE OF ENDS
straigh shoulders	@ *	@ *	@ *	@ *	@ *	pointed ends
narrow, straight, pointed shoulders	@ *	@	@ *	@	@	flat rounded ends
curved shoulders	@ *	@ *	@ *	@ *	@ *	trianglar ends
broad shoulders	@ *	@ *			*	rounded ends
broad, straight shoulders	*	@ *	@ *	@ *	@	pointed, rounded ends
narrow shoulders		@	@ *	@ *		flat cutting ends
broad, curved (or fat, short) shoulders				@	@	

LENGTH OF HOLLOWS TABLE II

	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5
1.0 cm				*	*	2.2 cm		*	*	*	
1.1 cm				*	*	2.3 cm		*	*	*	
1.2 cm		*		*	*	2.4 cm		*	*	*	
1.3 cm				*	*	2.5 cm		*	*	*	
1.4 cm	*	*		*	*	2.6 cm		*	*	*	
1.5 cm	*	*	*	*	*	2.7 cm			*	*	
1.6 cm	*	*	*	*	*	2.8 cm			*	*	
1.7 cm	*	*	*	*	*	2.9 cm			*		
1.8 cm	*	*	*	*	*	3.0 cm			*	*	
1.9 cm		*	*	*	*	3.1 cm			*		
2.0 cm	*	*	*	*	*	3.2 cm			*		
2.1 cm	*	*	*	*		3.3 cm			*		

REPLY TO PROFESSOR TAKASHIMA

David S·Nivison

(To evaluate in detail Professor Kenichi Takashima's interpretations of all the many texts he discusses would require more space than I could advise the editors to give me. Most of my criticisms have gone directly to Professor Takashima, in the course of our correspondence about his very interesting article. I present here an analysis of the main lines of our argument. --DN)

1. KT and DN both begin with their own conceptions of the standard or conventional meaning of verbal yu in Classical Chinese. Each projects his conception back into Shang and assumes this to be the ordinary meaning of verbal yu in the Shang speech community. Each recognizes that the adjectival meanings yu could have in a "yu Noun" noun phrase are in some way ultimately derived from the basic verbal meaning yu would have in a sentence in which this noun would follow yu as its grammatical object. KT derives the meaning "existing," then "some," and then adjectival meanings "many," "abandant," "good," etc. DN derives possessive pronoun effects "his/her/their" and demonstrative adjective effects "this/that/the".

2. KT and DN have such different results for several reasons:

(a) KT, even if he agreed with DN's analysis, would describe the matter differently, avoiding any suggestion that yu, verb or adjective, ever refers to anything: only nouns and pronouns refer, and yu is neither. DN uses the word "reference" differently. He would say, for example, that the sentence "A person should be able to get needed supplies" is equivalent to the sentence "A person should be able to get supplies that he needs." The paraphrase "that he needs" contains a referring pronoun. Therefore the word "needed" as used here has reference, to just what "he" refers to, in the same way that "that he needs" has reference; and this is so even though "needed" is a verbal adjective and not a pronoun. DN argues that adjectival yu in Shang Chinese is standardized in a use that allows it to have reference in exactly this way, even though it too is an adjectival use of a verb, and (in Period I at least) not a pronoun. (But see Note I.) If this were the only point of disagreement, KT could have simply proposed to DN that they distinguish between reference and "reference;" and it would be perverse for DN to object to this. Instead, KT proceeds to a theory that seeks to deny "reference" to yu even in the quotation-mark sense. The real differences between them therefore are these:

(b) They project back into Shang quite different supposed standard meanings for Classical Chinese verbal yu.

(c) In deriving the adjectival meaning of yu in any noun phrase "yu X", KT limits his attention to what he considers to be the fixed, context-free meaning of the verb yu. But DN always asks, "Suppose the user of this noun phrase "yu X" had uttered a sentence "Yu X" in this same situation context; what would he have meant?" The fixed meaning KT assigns to verbal yu makes this question irrelevant. The context-sensitive meaning DN gives to yu on the other hand requires the question.

2.1 KT describes the verb yu sometimes as "existential" and sometimes as either "existential" or "possessive." Actually, as DN reads his difficult argument, it is the "existential" sense that is required, and the "possessive" aspect is apparent only. KT really supposes that yu is essentially a purely "existential" verb, "there is..." or "there are..." followed by a general term (like Japanese aru, perhaps). In a sentence "A yu B", "A" only appears (grammatically) to be the subject; actually (semantically) "A" is unrelated to what follows, and the meaning which we, appraising the context, may take as (e.g.) "A has a/some B" is really something like this: "(Consider A: there is a/some B." So KT writes that "the grammatical requirement of the transitive verb yu" is not to be mistaken for a "semantic capability of specifying a particular noun preceding" it; and he warns that "this is a crucial problem of theory." In this way he attempts to block the possibility of an adjectival derivative yu having the kind of "reference" described above. Thus, he states "...the existential verb yu does not refer, either backward or forward, to a definite expression, but simply states the existence of indefinite and specific items..." (By "specific" KT means that one knows what kind of thing is meant; on his terminology here, see DN's concluding remarks.) Apparently when someone says "A yu B," even though his intention may be to say something about a particular A and an identifiable B or B's, considered in terms of the real meaning of yu his sentence does neither; and for KT, we will see, it is only this real meaning that counts, in finding out what an instance of adjectival yu might mean.

2.2 DN projects back to Shang the standard meaning "...has...," so that the normal sentence form will be "A yu B," "A" being "possessor" in some sense and "B" being, again, a general term translatable as an indefinite description. But if A has a/some B, and A' includes A, then A' has a/some B, and so on. In the final case, the "possessor" would be "the universe;" and then there would be no term used at all, for we use terms to get bounds on what we are talking about. In this case we have just "Yu B," and the meaning appears to us as just "There is a/some B." This case must, of course, be distinguished from a quite different one, where the subject "A" is understood but not expressed. In this case "Yu B" will mean, e.g., "He has a/some B."

2.2.1 Each could offer an argument for his chosen meaning for the verb yu. For his view, KT might argue that "A" isn't really a subject because A isn't doing anything. DN would argue that an abstract idea "there exists" is likely to evolve from a concrete idea (here "has" or "holds in hand") rather than the reverse—an insight borne out by the graph 又 depicting a right hand, used for yu; and by the fact that yu so represented also means "on the right."

2.3 Now consider how derivation of adjectival yu will be allowed by KT. Suppose there is a sentence "Pi yu ch'iang," which for KT will be "As for Pi, there are some ch'iang captives." Now, should KT encounter a noun phrase "Pi yu ch'iang" he will not think back to the sentence to find the meaning of yu. He might, to be sure, deny that yu has attributive syntax at all here (compare "Pi yu meng ..." in L 192 of DN's article in EC 3, which could be either "As to the dream Pi had..."--DN's reading

（原載《古代中國》第4卷，1978-79年）

--or "As to Pi's having had a dream..."). *But if he does take yu as adjectival, he will take its meaning directly from the dictionary*: verbal *yu*, essentially, means "there exists...;" therefore adjectival *yu* means "existing." Therefore the noun phrase must be bracketed "*Pi [yu ch'iang]*": not "*ch'iang* which are *yu*'d vis-a-vis Pi" but (perhaps) "*yu*'d *ch'iang* of Pi's," where "*yu*'d" means "existing," and the "possessor" status, if any, of Pi is indicated by syntax and context, not by *yu*. KT then understands *yu*, "existing," to mean "some" (he cites the adjectival use of the Japanese verb *aru* for this meaning). The whole will apparently be "some *ch'iang* captives (to be considered in relation to) Pi"--and so, perhaps, Pi's. (But context would give the relationship, not the meaning of *yu*; the intended meaning might be "some *ch'iang* captives Pi did *not* have.")

2.3.1 And given just a noun phrase "*yu ch'iang*" even in the same context, KT will not think of the *subject* "Pi" as having been "deleted" from "*Pi yu* ..."--for it *wasn't* the subject at all. The phrase for him *literally means* simply "some *ch'iang*," and while the context may indicate they are Pi's, the phrase itself does not mean they are his: *yu* has nothing to do with our understanding that.

2.4 For DN, "*[Pi yu] ch'iang*" as a noun phrase (so he will bracket it) means simply "the *ch'iang* that Pi has." This phrase normally would have to be a *definite* description, not because of what *yu* means, but because in using it one would be talking about *just* those *ch'iang* one would be talking about if one uttered the sentence "*Pi yu ch'iang*." (For an indefinite description possibility, see 5.3 below.) DN sees KT's "some" as an illegitimate derivation from "existing": "*the* existing X" is a quite coherent expression; and Japanese "*aru hito*" means "some people" only in the sense "certain people," who might be identified but are not. (For more on "some" see 6.1 below.)

2.4.1 As for "*yu ch'iang*" as a noun phrase, in the same kind of context DN would take this as "[(*Pi*) *yu*] *ch'iang*," with deleted subject, and so will translate it "his *ch'iang*." (There are contexts that would require "the *ch'iang*--see 5.1, 5.2.2 below--as well as "the *ch'iang* there," etc.) DN makes the generalization that such a "possessive pronominal" use of *yu* became a conventional use in the Shang language. Further, DN would argue that (as the evidence shows) normally deletion of the subject should be expected, because almost always, if the meaning is as he supposes, the subject entity would have to be named in the immediately preceding context, probably in the same sentence.

2.4.2 For DN, *yu* in this analysis behaves as any other transitive verb might. Compare *i* 㠯 "to take, bring" in the inscription series at S 15.3 甲 896:

(4) 壬戌貞王逆畢㠯羌

"Day *jen-hsü*, divining: The King should go to meet *the ch'iang captives that Pi is bringing*."

(5) 于滴王逆㠯羌

"At the Shang River the King should go to meet *the ch'iang captives that he (Pi) is bringing*."

But *yu* becomes a *de facto* possessive pronoun or demonstrative while other verbs don't, (1) because "his X" *means* "the X he has," and *yu* means "has;" and "that X" *means* (e.g.) "the X there is in that place," and *yu* means "in...there is..." And (2) because *yu* by itself has such meager descriptive content (unlike "dried" in "dried fish") that normally there would be no point in predicating "being *yu*'d" of something *tout court*, without implicit reference to a "*yu*-er."

2.4.3 But KT will probably insist too that for *him yu* behaves like any other verb. Only for *him the* model will be that kind of verb (like "to *dry*") that can have a verbal adjective use as a purely descriptive word whose meaning is complete without implicit reference to some agent or subject. Contrast the *essentially* relational verb "need" or "want" in "*needed fish*" or "wanted fish." DN would observe that "have," "own," "locate," etc., are such verbs, and so also is *yu*. English idiom does not happen to allow "had fish," with subject understood, to be used like "needed fish." Instead, we have to use our pronouns: not "had fish" ("Anglers should clean had fish at the sink"), but "fish that they have," or "their fish." Shang Chinese seems to have done it the other way.

3. At this point, DN's work is done. But KT had just begun. For, (a) he finds some contexts--especially "*shou yu nien*"--where mere "some" for *yu* ("We will receive some harvest") would hardly have any point; and (b) he finds some *yu* phrases--e.g., "*yu Ho*" ("The River," i.e., the god of the River)--which *must* be definite descriptions, not allowing "some" at all. DN sees KT seeking to solve these problems as follows:

3.1 As we noticed above, the direction of KT's analysis is to treat *yu* as a descriptive verbal adjective. So it is not surprising to find him seeking in it a latent descriptive potential, which is realized in new meanings. *Yu* meant "existing," and so (KT thought) "some." *But* "some" (KT thinks) implies quantity or plurality. So, *yu* acquires the meanings "many" or "much," and so "abundant"--a meaning he conjectures in "*shou yu nien*" and in the similar "*shou yu yu*" ("receive abundant aid"--against DN's "receive aid for this": see Note II.)

3.2 KT then supposes a development of meaning in which a noun phrase "*yu* X" ceases to be determined as necessarily indefinite by the meaning of *yu*. The matter now depends on whether the head noun "X" is mentally "specified" as "-proper" or "-definite," or as "+proper" or "+definite." Only in the former case will *yu* be found to have the indefinite force "some" (and, presumably, also KT's derivative meanings "much" and "abundant") already described.

3.3 The purpose of introducing this apparatus of head noun "specification" was explicitly to sanction the presence of *yu* in "*yu* X" phrases that function as *proper* names, and so must be definite. In such cases KT allows that *yu* often is to be translated "the" and--since this is true of "the" in such expressions as "the King" in English--he thinks (consulting the dictionary) that it then has such semantic features as "definite, unique, prominent and singular," etc.; i.e., it functions as a kind of honorific prefix. It now need not be prefixed only to a general term, as DN's theory had implied, but may precede a word that would be a proper name even without the prefixed *yu* (an example, KT thinks, might be "Tsu Wu"), and that need have no meaning as a general term at all.

3.4 KT also often (DN would say far too often) recognizes the "*yu* X" may be correctly rendered "the X's"--plural, with definite article. In so far as KT has a theoretical explanation for this, it is that the original meaning "some" connotes plurality. (One of the few examples that *both* DN and KT would place in this category is--probably--L 46 "*yu she*," "the soil altars.") KT does not see these *plural* "the" cases as a theoretical problem for his "indefinite" analysis of *yu* because throughout his article he regards *yu* in such phrases as having "indefinite *reference*," whatever he may take the "definiteness" of the phrase as a whole to be. (Here he may be misled by DN himself in his *EC* 3 article; see 5.1 below.) And sometimes (perhaps always--or perhaps not seeing the difference: see 5.3.1) he takes the whole phrase as indefinite: e.g., a supposed meaning for "*shou yu yu*," "receive *the* aid which there is," is taken as equivalent to "receive *some* aid" (DN's underlining). This is surprising, and will require comment (see 5.2).

4. How are these two analyses to be compared? Both can be criticized in at least two ways.

4.1. Both KT and DN start out by assuming a basic meaning for verbal *yu* which is treated as self-evident, needing no argument. (Indeed, it doesn't even occur to DN that someone might take verbal *yu* to have a meaning other than the one he assumes it to have.) But, obviously, these two rival suppositions of meaning (i.e., what the word is supposed to mean for the Shang language community) are empirical hypotheses. They must at least be recognized as such, even if they are not supported with evidence and argument. It is, therefore, improper for KT to reproach DN for making a mistake in not understanding verbal *yu* as KT does.

4.2 Both accounts of adjectival *yu* lack refutability to a dangerous degree, if not completely. KT will point out that DN's supposed "pronominal" *yu* could always be deleted without necessarily altering the sense (true--but true also of Classical Chinese pronominal adjectives), and that there are so many realizations of it in translation ("his," "its," "for it," "the," "that," even "some," in the sense "such-and-such amount of") that one of them will always "fit." DN will point out that KT generates as many meanings; and that if they don't seem (to DN) to fit the context, KT always nimbly reinterprets the context to make them fit; and DN will note that if a pronominal relationship provided by his own meaning for *yu* is needed, KT is always prepared to read it into the context on top of his meaning for *yu*.

5. These defects make it difficult to continue the discussion. Arguments to plausibility avail nothing, for the criterion is subjective. DN, for example, finds KT's "abundant" an utterly implausible derivation from "some" (even if "some" be allowed). But KT has replied sufficiently when he announces that for him it *is* plausible.

And criticisms of reasoning often seem equally inconclusive. When KT cites the *tui-chen* pair (*Pu* 77) "*Wo shou Kung-fang yu*"--"*Fu ch'i shou yu yu*" used by DN, and says of "*Kung-fang*" and "*yu*" that "I see no positive evidence pointing to *yu*'s referentiality," DN will ask, "What evidence *could* I give, except the extended coherence argument that I have given, tying together *all* my data? What would *satisfy* you?" And it may turn out that nothing *would* satisfy KT, short of agreement with his own *a priori* premises and methods. But could not KT turn the same protest back on DN? Perhaps the only thing DN can say at this point is that his own analysis is simpler and makes fewer independent assumptions about the meaning of *yu* at each step in the argument. And KT will surely retort that the "simplicity" and "independence" appealed to here are also subjective criteria.

KT has made one claim, however, that DN must notice.

5.1 KT claims a contradiction in DN's theory, and so, radically excessive explanatory power in it, in that DN allows, along with his pronominal analysis, that a noun phrase "*yu* X" may sometimes be translatable as "the X('s)," where *yu* has (DN's words) "no reference, or indefinite reference." The matter should be sufficiently explained by rereading 2.2 of DN's article: *yu* itself, *in* a term "*yu pang*," will implicitly refer to the implied *subject* of a sentence "*yu pang*," that one might use to talk about the entity or entities (*pang*) that the term "*yu pang*" as a *whole* refers to. If that sentence would have no implied subject (short of "the world"), then *yu* has no implied reference (short of "the world"), and the term means "the states," or "the state" (see 5.2.2). Note, here, that the reference, and so the definiteness of reference, of (1) "*yu*" and (2) "*yu pang*" are two completely *different* questions (see 5.3.1). This theory is *no more* inconsistent or over-explanatory than is the common-sense account of verbal *yu* from which it is derived. Of course, KT doesn't accept that account, but he does not appear to reject it as inconsistent. Perhaps DN should have described attributive *yu* in this "the" use as having "no explicit reference, or unlimited reference" (see note III). His meaning, in the light of the earlier 2.2, should be clear, but evidently he has misled KT.

5.1.1 Which one of DN's realizations of *yu* is the right one in a given case must depend on one's understanding of the whole situation. DN appears to assume that normally if there is an available noun or name in the same sentence then it will be the antecedent of *yu* (e.g., L 1 "*Hu Tzu-pin yu yü yu tsu*...," where "*yu*" before "*tsu*" refers to Tzu-pin). But this will not do as more than a *prima facie* rule of thumb; thus, introducing an expressed subject in L 48, turning it into "Pi should proceed to *yü*-supplicate to *yu Ho*," would not make "*yu Ho*" mean "his river;" for "*yu Ho*" in the sense "the River" is undoubtedly an "established phrase," as such prestige "the" phrases usually are also in English. (See 5.2.2(iv).)

5.2 We turn now from defense to criticism. KT recognizes, as noted above, that "*yu* X" can sometimes mean (inclusively) "(all) the X's" and also can sometimes mean (exclusively) "the X" in a singular or honorific sense. (May we not "dismiss these mutually conflicting interpretations as being, in fact, self-destructive"? Not quite yet.) KT might argue that his posited "specification" of the head noun as plus or minus "proper" or "definite" takes care of the matter: in the second case it is specified as plus, and in the first as minus; so one and the same phrase is never interpreted both ways. This requires that "(all) the X's" be somehow understood as an *indefinite* interpretation of "*yu* X;" but as was noted (3.4) KT does do this.

5.2.1 There are several things wrong with what is going on here.

(i) "(All) the X's" is a *definite* description. If KT wishes it otherwise, he is of course free to adopt his own technical terminology. But (a) when an adopted usage is so sharply at variance with normal usage one owes the reader a careful explanation; and (b) KT is *not* entitled to *name* "*yu* X" in the sense "(all) the X's" indefinite and then draw the *factual* inference that it is generated in the same way his supposed "indefinite modifier 'some'" sense is generated. And one cannot believe he has done so. On the contrary, his seeing an equivalence between, e.g., "*the*...that there is" and "some..." (III.2) is primary evidence that he does in fact tend to regard "the X's" or "all the X's" as an indefinite expression.

(ii) KT's "specification" apparatus is a purely ritual, *ad hoc* move. It amounts to noticing that some "*yu* X" phrases, at least, *must* have definite reference--to prestigious entities like gods and dynasties--and then announcing with a flourish, "That is the way it is." The formal apparatus serves only to encourage the impression that the matter has been explained when it has not been.

(iii) Furthermore, the apparatus quickly begins to misfire. We have already seen that there is no place in the scheme for a "*yu* X" phrase (singular or plural) recognized as a definite description in which *yu* is not honorific. The apparatus was invented by KT to authorize one situation: where, as he sees it, *yu* is followed by a proper name. We assume that by "+proper" KT means the kind of properness that makes a proper name proper (or surely he would have explained himself). He may think that the schema will give him the possibility of a definite description, at least if *yu* is honorific, in which the head noun (say,, *mu* "mother") is just specified "+definite," but not "+proper"--and so is not a proper name. But it cannot do so. For it is a dichotomy, and so it says of "*yu* X" terms that exactly one of the following situations, (1) or (2), holds: (1) "X" is "specified" as *not* proper, *or not* definite; *or* (2) "X" is "specified" as proper *or* definite. But it is a simple exercise in propositional logic to show that this dichotomy is *equivalent* to saying that "X" is "definite" *if, and only if*, "X" is also "proper." And, perhaps, that really is what KT thinks. If so, it is small wonder that he treats definite descriptions not containing proper names as indefinites.

(iv) But this must be counter-intuitive to KT himself. One would expect him to be moved to save the definiteness of definite descriptions, overlooking the "proper" difficulty (which he may not see), and paying the price his theory explicitly demands: taking all *yu* phrases intuitively perceived as definite and finding that, somehow, in them *yu* has an honorific sense. This seems to be just what happens. After listing more than a dozen *yu* phrases at III.1 which he thinks call for "the" (and he apparently thinks of *yu*, even as "the," as being an indefinite modifier here--misunderstanding DN), he stresses the possibility that they can be plural, and links this with his meanings "some" and "abundant." He then takes them up again later in the section, suggesting that in them *yu* has an honorific ("sacred, ornamental, fashionable...") import. It does seem that, in conflict with his theory, these phrases are taken as satisfying both sides of his dichotomy at once, and so as being both definite and indefinite. This contradiction becomes explicit with the discussion of "*yu chung*," "Ye multitudes," III.3: the head noun "*chung*" is "indefinite" (because plural!), yet "*yu chung*" is argued to be an honorific phrase. Such is the mischievous effect of a bad theory on a fine mind. (See Note IV.)

5.2.2 This disorder needs to be cleaned up. Notice first that KT's apparent procedure for getting his honorific meanings for *yu* is hardly acceptable. One cannot (a) conclude that *yu* sometimes seems to be translatable as "the;" (b) look up "the" in the dictionary and find that it sometimes has an honorific connotation; and then (c) conclude that the same is true of *yu*. Even if the conclusion is true (in a sense, it is), still (1) the conclusion doesn't follow; and (2) nothing has been explained. (Later, KT suggests that his "honorific" meaning for *yu* is connected with his meaning "abundant," without withdrawing his view that *yu* has honorific force in the same way that "the" has.) One should instead analyze how "the" comes to function in phrases that have this connotation, and then show that it is reasonable to suppose that *yu* functions the same way. The correct argument is as follows:

(i) English "the" introduces a definite description. DN's theory (2.4 and 2.4.1 above) shows why a *yu* phrase will ordinarily be a definite description. A definite description--this is a point of logic, not of English or of Chinese--is properly used only when there *is* one thing, and *only* one thing, to be referred to by the description. This thing may be an individual, or may itself be a set of things.

(ii) In Chinese, the subject of a verb may be omitted and understood from the context, without pronoun replacement. This is true also of embedded verbs, and in particular (DN holds) of *yu* in a "*yu* X" phrase. "X" itself here is a general term, which can be used in reference to many different things (KT consistently commits a category mistake in supposing that this makes such a term "indefinite"). But the context may supply a subject for the embedded *yu*, so that, so understood, it will be applicable to one and only one X; and then the whole descriptive phrase "*yu* X" will pick out just one thing. In this case, we have the "pronominal" use of *yu*. (E.g., the phrase "*yu mu*" in the right context can mean "his mother," referring to just one woman.) (See Note IV.)

(iii) When the context does *not* supply a subject for *yu*, the language-user's understanding rights the logical balance; he may, depending on the situation, take "*yu* X" in either of two ways, (1) or (2):

(1) He may take "*yu* X" as "the X's"--those *that there are* in the world, or in the domain of discourse, "*so yu chih* X" (所有之 X), and so, *all* of them--there being just one thing that is the set of all of them there (see analysis in 6.1 below). This is always possible in Chinese, because Chinese nouns have no singular inflection.

(2) He may take "*yu* X" as "the (most important) X," "the X (that first comes to mind)," "the X (in the fullest sense of the word 'X')"--there being, again, just one such X, so that, again, "*yu* X" is a well-behaving definite description. In this "honorific"--more accurately, distinguishing--use, the term "X" could denote a subset of the X's rather than an individual. Further, there is no logical obstacle, in either English or Chinese, for the two uses, totalling and distinguishing, to merge; for "the X's" *excludes* all things not entitled to wear the label "X". ("The Romans": compare "*yu* Yin." So, recognizing simultaneous inclusive and exclusive senses in a *yu* phrase was not KT's real problem. But, considered either way, these are *definite* descriptions.)

(iv) Obviously the second, distinguishing use of *yu* will often not be understandable unless all in the language community share an understanding as to which X is most important (or--a possibility--most abhorrent), and will first come to mind, etc. So, such "honorific" (distinguishing) *yu* phrases are likely to be well-established ones--a point already noted (5.1.1).

In short, "the" and *yu* behave alike in these uses, and for exactly the same reasons. This is a simple matter of logic, and requires no tinkering with the meaning of *yu*. In particular, KT quite misunderstands the "honorific" effect of "the" (and of *yu*), in, e.g., "the Nine Virtues" ("*yu chiu te*") when he can see no way for them to have this effect unless they be adjectives meaning "honorable."

5.3 The foregoing argument has this weakness: just as being used to serve (in its own way) the function of a possessive pronoun does not mean that *yu* is a pronoun, so being used (in its own way) in the function of a definite article does not mean that it is one. "His" *must* refer to a possessor. "The" *must* introduce a definite description. Neither is true of *yu*. The argument above would go through without a catch if it could be shown that *yu must* introduce a definite description, whether or not it also functions pronominally, but this is almost certain not to be true.

KT points to at least one case where an "indefinite description" interpretation of a *yu* phrase seems highly plausible, namely 丙 302 至于㞢丁. His argument that something is wrong with DN's interpretation here is persuasive. A DN type of analysis would yield an indefinite description only if the embedded *yu* in "*yu ting*" above is interpreted as deriving from a sentence that would not be about any particular *ting* day, and this too seems plausible. A better analysis than the one given by DN (his article, 5a) would be to connect "*yu ting*" with a possible sentence 作火㞢丁, "for making a fire attack there will (or may) be some (suitable) *ting* day (or other)," yielding, for "*yu ting*," "a (suitable) *ting* day (for it)." Perhaps, then, the right observation is that a *yu* noun phrase will be an indefinite description if it refers to a *future possibility*.

This question could use more study. And KT, playing the valuable role of "spoiler" in attempting to fault a new hypothesis, ought to notice carefully the following: DN has to assume that "standing presumptions" take the place of explicit particles and morphology in disambiguating Shang syntax. Thus, he had argued (in his article, 4 and 4.1) that there was a standing presumption or "convention" that a "*yu* X" phrase would normally have the syntax "*(ch'i) so yu chih* X" (其) 所㞢之 X, though a different syntax is possible. Likewise now he must assume that there was an intuitive standing presumption that a *yu* phrase would be a definite description, though *sometimes*, perhaps in certain well recognized cases, it may not be. And perhaps DN should argue that when *yu* in "*yu* X" had no understood subject there was a *standing* presumption that it meant "(all) the X's," although sometimes it would be "honorific" (in "established phrases" like "*yu Ho*"-- and "*yu Wang*": KT's meaning for this is *right*, even if *his* analysis is not). Such assumptions do of course need to be challenged and tested.

5.3.1 The same kind of analysis probably applies to the phrase "*yu yu*," in "*shou yu yu*" 受㞢又, which would seem to be a paradigm of future possibility; and in fact DN has always translated this phrase as an indefinite description ("aid for this"). But notice, that this has nothing to do with the question of reference for the attributive *yu* itself. For the whole sentence could well mean "(we) will receive *(some) aid for this*"--and on this interpretation, although the noun *phrase* "*yu yu*" 㞢又 is an *in*definite description (as underlined), still the *word* "*yu*" 㞢 in it has a definite reference. This is a distinction that may not have been appreciated by KT, for on his analysis the supposed non-referentiality of attributive *yu*, and its supposed meaning "some" (which makes the whole phrase indefinite), are but two ways of describing the same (supposed) semantic feature of the word. For DN, of course, "some" in the underlined indefinite description phrase above is not a translation of the individual *word yu* at all.

6. The "KT vs. DN" confrontation may be clarified by reconstructing the argument in a partially equivalent form. DN and KT started with different meanings of verbal *yu*: KT derives the (apparent) "has" sense from the (real) "there is" sense; DN derives the (apparent) "there is" sense from the (real) "has" sense. But a third view is imaginable, namely to recognize two different senses, (a) "there is..." without a subject, and (b) "...there is..." or "...has..." with a subject. Then DN 's position would be in part that attributive *yu* is an adjectival use of the verb in either sense, and KT's position could be approached by supposing that it must always be understood as an adjectival use (or derived from such a use) in sense (a) but never in sense (b). KT would have difficulty explaining, without arguing in a circle, why he would make this restriction; and so perhaps the course he actually takes (of admitting, in effect, only an existential sense) was the wisest one for him. But to get such a KT style analysis going one would then have to assume, against DN, that sense (a) gives the adjectival meaning "some." And to keep it going one would have to go on to derived adjectival meanings that put DN's and KT's semantic intuitions hopelessly at odds.

6.1 But is it not a matter of semantic taste whether from "there-is-an X" one derives "some X." There is a subtle problem of the logic of ordinary language here. KT reveals just how he thinks on this matter when he says of DN's analysis that "it is difficult to accept the derivation "*the* state... has" from "...has *a* state." (The underlining is KT's here.) Evidently KT thinks matters go thus: from a sentence

(a) N Verbs *an* X

we derive (justify use of) the indefinite noun phrase

(b) an X that N Verbs

And presumably "the" for "an" in (b) would require "the" instead of "an" in (a). Trying that out, we could get from "Kenji hit the (only) run" to "the (only) run that Kenji hit." But that is clearly out of order: the phrase allows that there may have been other runs by other players; the sentence does not. What is needed is a comma: "the (only) run, that Kenji hit." Applying this insight to (b), we get

(c) an X, that N Verbs

This can mean "an X--incidentally, one that N Verbs." (And obviously it will also have indefinite reference if "Verbs" is partially realized as "may Verb," giving a "future possibility" sense; see 5.3) But it is likely to mean "an X--namely the one that N Verbs" (thus: "yu mu," "a (certain) mother, namely the one that (Tzu-pin) has").

This analysis can be carried farther. (b) would indeed give KT his "some" (or "an") if the verb is realized as subjectless and "N" dropped: "some X that there is," or "some X that exists," seems to mean just "some X." But replace "some" (or "an") by the equivalent "one (or more) among all the," and interpret "Verbs" as "there is" (or "(there) exists," as KT wishes), and one has

(a') There exists one (or more) among all the X's

(b') one (or more) among all the X's that exist

But the only possible sense of (a') would be to distinguish certain X's as existing in the actual world, out of a (possibly) larger class of possible X's. We must therefore understand "X's" as "possible X's;" and now (b') becomes as embarrassing as "the (only) run that Kenji hit." The trouble is that the hidden quantifier "all" has illegitimately extended its scope from "the possible X's" to "the possible X's that actually exist." What is needed is, again, a (scope-breaking) comma:

(c') one (or more)among all the possible X's, that actually exist(s)

And this, by reasoning above, is likely to mean simply "those X's that actually exist," i.e., "all the (real) X's" (compare 5.2.2). So, KT may wish to restudy this matter. For if he cannot get "some" for yu, his argument cannot even begin.

The foregoing analysis at some points distills or reconstructs Professor Takashima's argument, and it is of course possible that I have not wholly understood it. I would like what I have ventured to say read with this in mind. But I obviously suspect that his "proper--definite" scheme can't work; and I have trouble with other language he uses, in particular his pair of concepts "specific" and "definite," in spite of patient attempts to explain them to me. I have had, therefore, to refuse to meet him on his own terminological ground. But I have not wanted to engage in a battle of terminology. Even when minimal logical analysis has been necessary, I have tried to avoid using technical language myself, unless its meaning seemed self-evident.

In any case, I hope that Professor Takashima will press on with his criticism, whenever he sees something suspicious. I owe thanks to him for about the most interesting and stimulating challenge that I can remember having to meet, and I would be saddened if my simple efforts to defend my position were to cause him to stop.

-- David Shepherd Nivison
Stanford University

There are certain corrections needed in my EC 3 article, that I take this opportunity to make. (For proof-reading was not possible; and I made a few mistakes.)

1. Title: "The Pronominal Use of the Verb Yu (giŭg: 㞢, 又, 侑, 有) in Early Archaic Chinese"

2. p. 3, sections 2.3 and 3: I should have referred here to Chang Ping-ch'üan's interpretation of 㞢母, etc., in 丙 182, given under 丙 155 (9)-(10), K'ao-shih p. 228. 丙 155 (9)-(10) is another example of adjectival yu which I had not noticed:

(9) 辛亥卜亘貞𢀛帚于㞢𡚦
(10) 勿𢀛帚于㞢𡚦

As Chang, and also Li Hsiao-ting (3599), both argue, 𡚦 is undoubtedly 妻, ch'i "(principal) wife;" so, "Crack on day hsin-hai, Hsüan divining: (we) should make yü-supplication for Fu(-N) to the (deceased) principal wife (of the king)," and negative tui-chen (here yu is taken as definite article with honorific effect; see discussion of "yu Ho" in 5.1 above). Or, ch'i perhaps here means ch'i kung 妻公, "wife's father," in which case yu ch'i would be "her (deceased) father"--compare 乙 8695 and 乙 8888 at S 137.4, 帚妻𡚦亾禍 "The ch'i of Fu Shuai (?) will suffer no misfortune" (taking 𡚦 as 𡚦). Chang thinks--surely a mistake--that ch'i in 155 means 母, and so links 㞢妻 with 㞢母 in 丙 182. Then he argues that both phrases mean 列母, i.e., 先母, "the ancestral mothers." The interpretation for 丙 182 is mistaken (㞢母 there is direct object of 𢀛, and the direct object of 𢀛 never refers to a deceased person or persons). But the syntax of yu seems to be correctly understood by Chang, and he gives it a meaning it does sometimes have ("(all) the..."). (See Note V.)

3. p. 5, left, line 9: "That is, it is not a special meaning of 㞢," etc.

4. p. 5, left, line 43: "180); "from it" (kind of trouble, 192-196)."

5. p. 7, right, line 26: read 有方多士 instead of 有多方士.

6. p. 8, right, line 1: "Not on the same piece," etc.

7. p. 9, left, line 43: "*Kag, k'u here)" etc.

8. p. 10, left, line 7, and right, line 24: "Malmqvist".

9. p. 10, right, lines 18-20: Professor Jao Tsung-i has already published on the identity of Shang 徝 as later 德. See my 'Royal "Virtue" in Shang Oracle Inscriptions' in this issue of Early China.

10. p. 14, L 94: The translation should read "We should not have (Ch'üan) Chih ((犬)𢓊) resume his march from the west." (See S 316.3; in the same group, note 貞勿令犬𢓊西于京.)

FOOTNOTES

Note I DN suspects that pronominally functioning yu in time evolves into the early archaic possessive pronoun chüeh 厥. This thesis conflicts with basic principles accepted in the reconstruction of the phonology of early Chinese. It will, therefore, have far-reaching consequences if it turns out to be right.

Note II On the matter of yu supposedly meaning "abundant," DN would observe that on his reading of Kung-yang Huan 3/10 attributive yu does not occur there at all. Further, we must distinguish KT's attempt to derive a meaning "abundant" from a meaning "some," from the possibility (fact, DN thinks) that verbal yu evolved a meaning "really have," "have plenty of," giving the predicate adjective sense "plentiful" in the Shih-Ching examples. That yu could come to mean "abundant" in this way in a Shang text is quite possible. So, also, one could argue (KT doesn't) that yu comes to mean "(regularly) sacrificed to," and so, perhaps, "venerable," before an ancestor term (e.g., "yu tsu")--from the special Shang verbal sense of yu "make an offering to." But nothing in any Shang text requires such assumptions as these. To make them would be to multiply meanings beyond necessity.

Note III Perhaps in saying (his article, 5.2 (1)) 'appropriate translation "the,"' DN should have added the caution that "the" is not, strictly speaking, a meaning of yu, but a translation strategy in handling the whole phrase. A yu phrase can sometimes be indefinite. But when "yu X" is interpreted as referring to the whole set of X's, or to the most important X (see 5.2.2), indefinite reference (for the whole phrase) is precluded, and then "the" is the natural "translation."

Note IV The head noun "X" in a yu phrase is a general term. And KT seems to think that a general term (like mi, "deer") must ordinarily be "indefinite," because like an indefinite description it does not, so to speak, considered by itself, "pick out" one thing--unless it has come conventionally to function by itself as a name (like wang, "King," perhaps). But calling a general term "indefinite" is a category mistake. It is descriptions, "the man," "a dog," that (being referring expressions) are definite or indefinite. "Man" and "dog" are neither. KT explicitly departs from this distinction near the end of III.1, in saying "[yu]... has been held" (by KT) "to introduce indefinite nouns," after just having given several lists of yu phrases that he would translate using "the," e.g., "yu mu" 㞢母 and "yu t'ien" 㞢田, etc. (Incidentally, his translation of the former as "the mother(s)," evidently having in mind deceased "mother(s)" like "Mu Kuei," is impossible for the only examples, i.e., in 丙 182. As object of the verb yü 𢀛, "yu mu" must refer to a living person, reasonably taken to be the same as the fu 帚 ("wife") in 丙 182 (11). KT's failure to attend to this undermines the whole of his criticism of DN's interpretation of 丙 182 at II.1.)

Note V Professor Takashima has suggested to me that 丙 155, "Yü Fu yü yu ch'i," is embarrassing to my theory, for on that theory the prima facie meaning would be "We should yü-supplicate for the Fu to her ch'i," and the most probable meaning for both fu and ch'i is "wife." And, of course, a wife cannot have a wife. The two translations I offer avoid the difficulty, to be sure. But the second (identifying 𡚦 as 妻, and interpreting it as 妻公, or perhaps 妻族) is obviously problematic. The first takes yu as "definite article" in its "honorific" or "distinguishing" effect, and this is an important possible interpretation allowed by both our theories--although Professor Takashima has, quite properly, given special attention to it. But one could object here that this interpretation would require supposing that yu ch'i was an "established phrase," even though this is the only available example of it.

（原載《古代中國》第4卷，1978–79年）

一部大型的甲骨文资料汇编
——《甲骨文合集》

王贵民

一部大型的甲骨文资料书——《甲骨文合集》已经开始陆续出版。

本书是把一八九九年以来八十年间先后在河南安阳小屯殷墟出土的十余万片甲骨文资料，选出四万多片，分期分类，编纂成册，以便于研究我国商史乃至古代社会文化。

五十年代制定的我国十二年科研远景规划，曾把《甲骨文合集》列为重要项目之一，由全国有关大学和图博单位协作，中国科学院历史研究所（现属中国社会科学院）先秦史研究室负责编纂，郭沫若任主编，胡厚宣任编纂组组长。《合集》的编纂工作从六十年代初即正式开始。文化大革命期间遭受林彪、“四人帮”极左路线的干扰，工作中断。一九七二年底恢复工作，仍间有停顿。粉碎“四人帮”之后，加速了编纂进度，加以出版印刷部门的积极配合，保证了这部大型资料书的早日问世。

甲骨文是我国商代王室贞卜时，刻在龟甲兽骨上的卜辞和少数纪事刻辞。商人迷信鬼神，统治者进行各方面活动都要进行占卜，这些卜辞就记录了当时的生产状况、生活动态、自然现象、地域、物产、上层建筑、意识形态以及科学技术等等，是难得的原始资料。举凡今天研究、记述我国古代历史文化的各个领域，除了有限的文献记载和其他地下发掘，多半得从甲骨文追溯渊源。甲骨文作为一种完整体系的文字，是我国迄今所发现的最早文字，它同世界上其他古文字一样，以自己完善的形态和精美的书法艺术，在古代文明中发射着熠熠的光彩。

八十年来，国内外利用甲骨文资料对商史和古文字的研究，取得了不少成就，材料著录百多种，研究论著上千种，作者三四百人。在国内，建国以来，用甲骨文研究商代社会性质从而探讨古史分期问题，一度有了蓬勃开展，一些甲骨文专家如于省吾、胡厚宣、唐兰、张政烺等都不断有新的论著和成就。这个时期，除了增订或重版了旧有著作外，还出版了一批新的著录，如胡厚宣的《战后宁沪新获甲骨集》等四种，曾毅公等的《殷墟文字缀合》，陈邦怀的《甲骨文零拾》，新版的孙海波《甲骨文编》。陈梦家的《殷墟卜辞综述》则是综述了一个时期内的甲骨文研究情况。同时原有的或围绕新的甲骨发掘对某些卜辞分期问题的讨论，和近年来关于殷墟五号墓出土妇好铭文问题的讨论都陆续推进着甲骨文研究的深入。

此外，在我国台湾省和香港有关大学、科研单位的人士，也提出了不少研究论著或资料著录。如饶宗颐的《殷商贞卜人物通考》、李孝定的《甲骨文字集释》，屈万里的《殷墟文字甲编考释》、《中国文字》杂志和张秉权的《殷墟文字丙编》（乙编缀合）、严一萍的《甲骨缀合新编》等等。

在国外，甲骨文的研究和著录也在不断发展。日本对甲骨文的研究是相当可观的，他们成立甲骨学会，出版《甲骨学》杂志。最著者有岛邦男的《殷墟卜辞研究》、《殷墟卜辞综类》，贝塚茂树的《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》及其释文。他们和白川静，伊藤道治等有不少研究论著。此外，加拿大籍华人学者许进雄编著《皇家安大略博物馆藏甲骨文字》，还作了考释；美国籍华人学者周鸿祥编著《美国所藏甲骨录》；其他一些国家也时有甲骨文研究论文出现。

但是，解放以前，甲骨文资料的流传、掌握、研究，都有很大的局限性。甲骨实物多是私人购置，私商贩售，外国人也可任意猎获，因而流散海外，有的遭受破损，有的长期私藏不宣。而甲骨材料的著录，亦多是私人从事，辗转易手，重见迭出，加以墨拓不清，印制不精，因此，尽管几十年来甲骨学取得上述种种成就，但要编纂一部完整的科学的《甲骨文合集》，仍是一项繁重艰巨的工作。

首先需要确定这部《合集》收录的范围。迄今所得的甲骨文片大致达十余万片，本书根据一定标准（如不常见的内容，不论全辞或残辞皆收录，常见刻辞则收录完全或较完全者）从中选用了四万多片，预计这样比较适合于各方面的要求。

所收录的材料中，尽管大部分都是发表过的，但也有小部分是没有发表过的新材料，例如加拿大人明义士早期在中国所得甲骨估计达数万片，除他摹录两千多片编为《殷墟卜辞》，回国前选拓一千多片分赠中国友人（后经著录），还有留下加以埋藏以致腐烂掉的一部分之外，应该有不少未发表的材料，本书即从山东博物馆等单位由明氏留下的未经著录的材料里墨拓并选用了一批。又一九七二年许进雄编著的《皇家安大略博物馆藏甲骨文字》三千多片，亦是明氏之遗物，本书都收录了。再如罗振玉是国内搜集甲骨最多的人之一，他自己说有“甲骨数万”，除所著《殷墟书契》的《前》、《后》、《菁》、《续》等书，总共也不超过六千片，现藏山东博物馆和东北地区几处博物馆的很多甲骨，即为他所遗存的，其中亦有不少未发表的材料，本书概为收录。文化大革命期间，上海博物馆新收入三百多片，已故徐宗元教授遗下“尊六室”甲骨三百多片，以及流传到德国柏林民俗博物馆的甲骨在国内存有照片的，都作为新材料编进了《合集》。

有的著录书为摹本，本书都尽量换用拓本。摹本本来基本上是可信的，但因不见拓本，加上有些摹录难免失真，总易引起怀疑。美国人方法敛早年在山东收集的甲骨摹录编成《甲骨卜辞七集》，被人怀疑为伪片或仿刻品，经与国内收藏的实物核对，全为真品，胡厚宣撰写《临淄孙氏旧藏甲骨文字考辨》一文为之辨正。本书收录其中有拓本者三十片。方法敛又同英国人库寿龄搜集甲骨，摹录两千多片编为《库方二氏所藏甲骨卜辞》，亦因系外国人所摹录，加以原物小部分确是真伪杂陈，更为人所怀疑，现在得到周鸿祥从美国十一个单位藏物集录《美国所藏甲骨录》一书（拓片）的核对，其中四百多片是《库方》书中的，证明摹本绝大部分不误，少数文字笔划摹写失真，可借拓本予以纠正。对此，本书凡能见到实物的即行新拓，凡能找到拓本的即行抽换。如上述《殷墟卜辞》的原物在南京博物院，《战后新获宁沪甲骨集》的实物多在清华大学，本书悉数新拓录入。有些摹本的原物分散在全国各处单位，也尽力分别进行墨拓。这样，就减少了对材料的怀疑，也纠正了其部分错误，增强了材

料的准确性。

即使是拓本，因原拓不清或印制不精，或模糊，或残缺，也难以释读和利用，本书也尽可能加以代换最新最清晰的拓本。有的旧著，材料经过剪裁，甚至同版多辞剪开后分录各处，如王襄的《簠室殷契征文》，本书全部换用其原藏完整拓本，恢复其本来面目。此外，对旧著把牛胛骨正、反、臼的三面刻辞分录各处的，也一律集中一处编为一号。对旧著存在的编号等文字记录的错误均为之纠正。

《合集》的编纂，也是系统地整理成百种甲骨著录所得的成果。既有的著录书重出现象相当严重，要避免此种现象再次发生，必须就所有著录进行相互校对，去掉重片。对重工作前人也部分的作过，如一九三九年曾毅公写有《殷墟书契续编校记》，一九四一年胡厚宣作《读曾毅公〈殷墟书契续编校记〉》，都是把《续编》中与他书的重片作了核校。本书进行全面的校重，总计用了六十多种著录，并以新得的与著录相关的多种拓本，互相校对。仅就著录书粗略统计，共校出重片六千多，重片次达一万四千多。这是一项繁琐而艰巨的工作，它的完成，可以说对旧著录书作了一次清算。

甲骨缀合，是作此项材料工作的一个重要方面。甲骨埋藏地下三千来年，质脆易碎，出土后稍不注意辄成碎片；整版裂成碎片，全辞就成残辞，不能卒读。缀合就是把本属一片被分裂为数片又分录数处的残片重新拼合，使之复原。最早是王国维将《戬》1.10和《后》上8.14两片缀合，复原商代上甲至示癸上世的顺序，纠正了《史记·殷本纪》中的错误。后来郭沫若的《卜辞通纂》、《殷契粹编》和董作宾的《甲骨文断代研究例》等著作都于此作了增补。这件事甚有意义，不断地有人作，开始见于著录的是一九三九年曾毅公的《甲骨缀存》，用了十六种书几百个碎片缀合成七十五版。后来他又和郭若愚、李学勤在一九五五年编著《殷墟文字缀合》，以《甲》、《乙》编为对象缀合成四八二版。台湾省的史语所则较全面地将《乙编》的材料缀合成完整或较完整的龟甲五百多版，相当可观，后又有严一萍的《甲骨缀合新编》。《合集》则更全面地将不下三十种旧著中二千多个碎片缀合成一六〇〇余版，大大超过了以前。通过缀合，出现和补充了新的材料。

甲骨材料的分期分类，为学习和研究者提供许多方便，目前，小屯殷墟所出甲骨文字一般认为属于从武丁至商末二七三年的这一历史阶段。卜辞内容文字风格等方面的不同，表现出它的阶段性，据此可以分出不同甲骨各属于不同的世代。最初，罗振玉、王国维从卜辞记载的对祖先的不同称谓，看出卜辞所属时期不同。董作宾于一九三一年作《大龟四版考释》，认出卜辞里贞人所属时代不同，一九三二年又写《甲骨文断代研究例》，提出了断代的十个标准，分甲骨文为五个时期，建立了甲骨断代学。与此同时，郭沫若也在作类似的探索，为董说第二期的贞人作了补充。后来有胡厚宣的四时期说、陈梦家的早中晚三期和七世九王的分期法。但彼此无大的出入。只有所谓“文武丁时代卜辞之迷”的有𠂤、子、（午）等贞人的那批材料，学者们看法不一，迄今不断有研究论文出现。本书在前人研究的基础上，在全面排比了数万片材料这一有利条件下，基本上采取五期断代法而有所前进，一部分难以划分的三四期材料，尽量分属于第三期或第四期。至于那部分有争议的所谓“𠂤组”者应为第一期，其它所谓“子”“午（？）”组主要的也倾向于第一期，但其中情况复杂，尚难遽定其早晚，都暂作为第一期的附属，单独编成一册，以待学者们进一步研究。

甲骨刻辞依其占卜内容，自然形成了不同的事类。一九二五年王襄编著《簠室殷契征文》开始明确分出天文、地望、帝系、典礼……等十二类；郭沫若《卜辞通纂》分为干支、数字、世系、天象等八类。但都还未分期。解放后，胡厚宣连续编著《战后宁沪新获甲骨集》等四种，均进一步先分时期，再就每期中分出来源、气象、农产、祭礼………等二十四类，可谓益臻缜密。分期分类既便于读者查检材料，也有利于对商代社会各个领域和历史发展序列的研究。过去的分类还只是就材料的自然状态作出区分，本书则在原有基础上，根据建国以来马克思主义史学的发展，尤其是商代社会历史的研究成果，遵照历史唯物主义原理，按商代社会历史内容分类，共分四大类，十九小类，如：一、阶级和国家，包括奴隶和平民、奴隶主贵族、官吏、军队等；二、社会生产，包括农业、渔猎畜牧等；三、思想文化，包括天文历法、气象、医学、祭祀、鬼神崇拜等；四、其他。数万片甲骨文经这样的归纳，材料就很集中。同时对于一版多辞包含数类内容的，将另编索引，彼此互见，以资查照。

《甲骨文合集》分图版、释文、索引三个组成部分。图版为八大开，四万多片约六千幅，分为十三个分册，其中拓片为十二个分册，依原大制版，以胶版纸珂罗双面版印刷；摹本为一个分册。全用布面精装。书前有彩色图版十幅，图版部分有必要的附录。释文和各类索引也将随后分别另行编纂。图版部分计划在一九八一年国庆节完成第一批出版发行任务，第二批在一九八二年底完成。

《甲骨文合集》的问世，是全国大协作的成果。全国十余处重点协作单位，七八十个甲骨收藏单位和个人，或选拓全部所藏甲骨，或提供拓本，或告以新的发现，或慷慨捐献所藏实物………，这在旧中国是不可想象的。郭沫若同志的关怀、指导，也是一个巨大的推动力量。本书的出版将会获得国内外学术界广泛的欢迎，将有助于甲骨文的科学研究事业的进一步开展。当然，由于主客观条件终归有所限制，本书也将不可避免地存在缺点和错误，可能会出现新的问题，也可能重复前人所犯过的错误和疏忽，仍有待于社会各界的批评和指正。

（原載《中國史研究動態》1979年第9期）

介紹著錄明義士旧藏甲骨的新刊二書

（日）前川捷三著

劉鋭譯　東由校

一、《明義士所藏甲骨文字》（The Menzies Collection of Shang Dynasty Oracle Bones, Vol.I, James Mellon Menzies）明義士（字子宣）旧藏。現藏加拿大安大略博物館的約四千七百片甲骨。許進雄選拓、整理、編輯。由該館在一九七二年出版。該書由序文十頁、圖錄二六四頁（拓片三一七六片、綴合六例）、附录一七頁（和其它書上的甲骨綴合的摹本四二例）所組成。

許氏的序文內容，可扼要地归納為四項介紹于下：

分類—時期分為武丁以前、武丁期；祖庚、祖甲期；康丁期；武乙、文武丁期；帝乙、帝辛五期。事項分為祭祀、祈年、風雨、旬夕、田猎、往來、內外諸事、使令、疾病占夢、雜卜等十項。不記貞人名而列入第三期的卜辭，是由于兆側刻辭形態與三期卜辭相同才归入了第三期，但也有四期初的可能性。被称為𠂤組或者是王族卜辭的卜辭，由于其鉆鑿形態归入第四期。

關於牛胛骨的鉆鑿形態—𠂤組的鉆鑿與其它期的鉆鑿比較。从一期到四期的鉆鑿特点。一期與四期，二、三期與四期的鉆鑿形態的比較。雖然不能用鉆鑿形態決定牛胛骨的准確時期，但能決定它是早期還是晚期。

甲骨發掘、購入年月和出土地的推定—甲骨上記載有博物館入藏的編号，由其貯藏位置被分成三部分。根据明義士的記述和與它書中甲骨的綴合，這三部分的甲骨，被推斷為一九二一—一九二八年的發掘品，以及一九〇九年大約是在張学献土地上發掘的。

關于資料的價值—地名初見的例子很多，這是有關商代地理範圍的貴重資料。S二八五四和S二八五八是關於五祀的重要資料。本書序文是《殷卜辭中五种祭祀研究的新观念》（《中國文字》第三五期）一文的進一步考證。

上述是有關許氏的見解和圖录等問題。

事項分類，分為十項是否恰當；每項中的內容是否恰當；根据研究者对卜辭的解釋，大約都有不同的意見。許氏似乎以《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》的十二項分法為基礎，將其分為十項。

關于鉆鑿形態的研究成果發表在《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》本文篇一一七—一二二頁；伊藤道治：《殷以前的血緣組織與宗教》《東方学报》第三二冊二五七—二六一頁）；《殷代的祖先祭祀與貞人集团》（神戶大学《研究》史学篇第二八号一—八頁）等三篇文章中。在那里指出了王族卜辭是系于第一期東西的旁證。與此相反，許氏在《鉆鑿对卜辭斷代的重要性》（《中國文字》第三七期）和在本書序文里將此作為王族卜辭是第四期東西的重要證據。並說在本書第二卷里，關于這個問題，當詳細的論述。我們期待着該文發表。但我個人認為，關于它的範圍、內容等，還有進一步分析、檢討的余地。

在圖錄中，雖然按時期與事項將各片進行了分類，但是在分類上，学者們也有不同的解釋。特別是因本書中小片的甲骨多，困難也會多吧！然而，如果根据許氏的見解，將𠂤組、子組等特殊的卜辭归入第四期，在第一期就只有賓組卜辭；可是，我以

為，在一期中，雖然是少數片子，也应归入特殊的卜辞中。例如：S〇〇五九「甲戌卜，王龍以巫」，就是研究𠂤組卜辞的寶貴資料。

還有，許氏在《談貞人荷的時代》（《中國文字》第四三期）、《略談貞人的在职年代》（《中國文字》第四四期）的文章中，論述了貞人任职有跨越數期的可能性。本書中也是根据那個說法加以分類的。但是，還存在例如：S一五〇四片貞人事（史）的卜辞放入第二期是否妥當等疑問。

此外，關于各片的時期分類、事項分類，為什麼放入那里；我認為還是有存疑的地方，這里不一一叙述了。

以上，雖然叙述了編者的見解和有疑問的地方，但是，本書包含了很多初見文字例、值得注意的父輩称謂例、及其它有兴趣的内容的卜辞例等貴重的甲骨資料。我想，這对研究殷代文化的学者們都是非常有用的。从這里可以看出，編者許氏在分類、綴合、發掘、購入年月的推定、鉆鑿形態考查等方面，付出了很大的劳动。另外，許進雄氏来日本時，我能有幸得到短時間請教的机会，并聽到了關于本書第三卷——《釋文篇》將要發行的消息。因此，進一步明确了許氏的見解，而關于有兴味的卜辞，也由編者給予了詳細的解釋。

（二）、《殷虛卜辞後編》（明義士續編）：

安大略博物館所藏的明義士旧藏甲骨拓片，由許進雄編輯，台北藝文印書館以《殷虛卜辞後編》上、下二冊（二八〇五片），於一九七二年三月出版。關于甲骨、正反的区别，骨臼、塗朱等，許氏把有明義士的筆记的拓本原稿，按照前面所叙述的同樣的見解，進行了分期分類。

本書甲骨中，牛胛骨八四七片的摹本，已經由胡厚宣氏在《戰后南北所見甲骨錄》中發表了。可是，若根据該書「序例」，讲到是从千余片的拓片中排除了小片的以外，摹录下来的。現在加了新的資料的拓本被刊行了，這是值得高兴的事情。

另外，由于明義士曾叙述过「不幸于一九二七年……予所選于彰德之物，幾尽毁于駐兵之手，骨則踐踏成灰……」（《齐大季刊》第一期，《商代文化》殷虛之覓得），因此，以為明義士一九二七年以前購入的甲骨已全部被破坏了。于是，《殷虛卜辞後編》的原甲骨被考訂為大概是一九二七、一九二八年两年購入的東西。可是，根据這次新刊二書，才明确了明義士在一九二七年以前的蒐集的甲骨完好無缺，並沒有被毁掉。

關于明義士收藏的甲骨和以後甲骨的所在，胡厚宣氏在《殷墟發掘》（学習生活出版社，一九五五年）三二一—三五頁中，曾詳細地叙述过。還有，關于一九二八年所拓的拓片的下落，胡厚宣氏在《戰后南北所見甲骨錄》序例中也叙述了。關于这点，在本書編者的「话」中，包含了新弄明白的東西。

最後，以著者論文為中心，列載與明義士有關的事項的年表。

年	事項
一八八五	生
一九一〇	作為传教士来中國。
一九一四	開始收集甲骨。
一九一七	①《殷虛卜辞》（Oracle Records from the Waste of Yin）（Kelly & Walsh 二三六九片摹本）。
一九二〇	从一九一七到本年，从事軍务。
一九二一	再次来中國。
一九二八	陳柱：《殷墟龜甲文字發掘的經过》（《東方雜誌》二五卷三号四三—四五頁。是⑦書序言的汉譯本。 《殷虛卜辞後編（明義士續編）》墨拓。
一九二九	归國。
一九三〇	第三次来中國。
一九三一	②《商代之文化》（The Culture of the Shang Dynasty）（《斯密森尼安报告 The Smithsonian Report》四九一—五五八頁）。
一九三二	③《商代文化》（《齐大季刊》第一期一—八頁）。 ④《商代之文化》（The Culture of the Shang Dynasty）（《导报》The Leader）
一九三三	⑤《表較新旧版殷虛書契前編並记所得之新材料》（《齐大季刊》第二期一九一—一三二頁附圖）。 ⑥《甲骨研究初編》（齐魯大学石印講義本）。 ⑦《中國商代之卜骨》（Old Bones of the Shang Dynasty China）济南廣智院（The Bulletin Rotary Club of Tsinan）
一九三四	⑧《蒙印聶光遜先生所藏青銅十字序》 ⑨《聶光遜先生所藏青銅十字圖表》 ⑩《銅十字分部編次例》 ⑪《馬哥孛羅时代在中國的基督教》（《齐大季刊》三、五合期。⑧一—三頁，⑨一五—一六一頁，⑩一六三—一六七頁，⑪一六九—一八五頁）。
一九三五	⑫《柏根氏旧藏甲骨文字》（《齐大季刊》第六期一—二八頁）。 ⑬《柏根氏旧藏甲骨文字考釋》（《齐大季刊》第七期）。 ⑭《柏根氏旧藏甲骨文字》（齐魯大学國学研究所）。
一九三六	⑮《中國古代之上帝》（God in Ancient China）（齐魯大学）。 ⑯《商周的美術》（The Art of the Shang and Chou Dynasties）。 ⑰《商代的文化與宗教思想》（Cultural and Religious Ideas of the Shang Dynasty）（《亚洲文会雜誌》Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society）第六、七期。⑯二〇八—二一〇頁，⑰二一〇—二一一頁，都是講演要点。
一九三七	归國。
一九四二	⑱《商戈——公元前一三一一—一〇三九年期間的特种武器的研究》（Shang Ko A Study of the Characteristic Weapon of the Period 1311–1039 B.C）因此文而得哲学博士称号。
一九五一	胡厚宣：《戰后南北所見甲骨錄·明義士旧藏甲骨文字》（八四七片摹本）。 二月，明義士旧藏甲骨二三九〇片送南京博物院保存。
一九五二	在齐魯大学校舍内，取出明義士埋藏的甲骨約一萬片。
一九五七	死。

附記

1.上表是参考文中所述的著作和《甲骨年表》、《續甲骨年表》、胡厚宣：《五十年甲骨学論著目》、古德里奇（グッドリッチ）：《明義士先生傳略》（黄然偉譯《中國文字》第二期）、玉田繼雄：《甲骨关系文献序跋輯成第一輯》（三二二—三二三

頁）、《殷虛卜辭後編》阿薩門斯（アーサ・メンジース）的序文等作成。

2．表中的④、⑥、⑦、⑬、⑮、⑱未見。並且，根據上記玉田氏寫的書，在《河南季刊》四—二中也有明義士的論文。關于這点，因為沒有作調查，故不記述。

3．《中國文字》第四四期中，金祥恒在《殷虛甲骨新書介紹》、平一萍在《讀殷虛卜辭後編》中，分別將新刊二書作了介紹。

4．寫成上文以後，得到許進雄氏的新著，因沒有時間，不能將內容詳細敘述，只有介紹書名：《卜骨上的鑽鑿形態》，一九七三年八月，台北藝文印書館。

（原載《古文字研究》第一輯，中華書局，一九七九年）

《殷虚卜辞综类》简评

姚孝遂

《殷虚卜辞综类》　〔日〕島邦男著
汲古书院刊行　据一九七一年增订版

殷墟甲骨的出土已整々八十年了。八十年来，人们对它的研究已取得了巨大的成就，使之基本上可以通读。它为研究商代的历史文化提供了丰富而宝贵的資料。它不仅是我国的、而且也是全世界学术界的共同财富。随着研究的不断深入，「甲骨学」已成为一门独立的学科，這是中外学者共同努力的结果。

在另一方面，甲骨刻辞的資料过于分散、零碎，诸家考释的意見分歧很大。在这种情况下，要想充分利用这些資料是非常困难的。尤其是缺乏有关的工具书，把大量的时间都花在原始資料的蒐集、整理和核对上面。

过去虽有《殷虚文字类编》、《甲骨文编》、《续甲骨文编》等可資利用，然而這些都只是偏重于文字形体本身。尽管可以据此为线索去探求辞例，而使用起来，终覺非常不便。不全面掌握甲骨刻辞的辞例，既无法了解文字本身的运用规律，更无法追索甲骨刻辞所反映的社会历史内容。

于省吾先生曾有《契文例》之作。据陈梦家先生在《卜辞综述》中所介绍，《契文例》「罗列材料之富」，远胜前人，「其長处系每字之下博引卜辞。但此是他自备检阅之用，並未作为成书供学人所用」（六十二頁）。陳夢家先生在编写《卜辞综述》一书时，曾長期借用《契文例》。事实上，凡是从事甲骨刻辞研究工作的，大都或详或略有一套辞例的索引。最低限度得有某些有关专题的索引，否则是无法从事深入的研究工作的。在这一点上，大家都干着重複的劳动，这是不利于研究工作有效地开展的。

島邦男的《殷虚卜辞综类》（以下简称《综类》）的问世，解决了長期急需解决，而又没有得到解决的有关甲骨刻辞辞例索引的工具书问题。

我们認为，《综类》一书主要具有下述的特点：

一、資料的收录比较完备　截至一九六七年为止所著录的所有原始資料，均加以收录。就資料部分来说，已超出了一九六五年的增订版《甲骨文编》。

二、資料的取舍比较谨慎　《综类》虽然仅仅是一部纂录原始資料然后加以综合、分类、排比的工具书，但是，在编辑过程中，也不能不牵涉到辨认、释读的问题。作为資料性的工具书，首先要求「全」，而面对甲骨刻辞这一具体資料，又要求摹写准确。差之毫厘，则谬以千里。《综类》对于某些有疑问的資料摒而不录是对的。摹写、释读一般都是经过深思熟虑的。既充分吸收了原有的研究成果，而又不轻易地盲从相信已有的成说。这一点非常难能可贵，我们在下面还要进一步加以申述。

三、编排体例是比较新颖的　《综类》是根据甲骨文字形体结构的自身特点加以排列，不落長期以来按《说文》部首排列的俗套，这是一个大胆的、值得肯定的尝试。

许慎《说文解字》是根据小篆的形体，按照许慎对这些形体的认识，分为五百四十部，将九千三百五十三字「分别部居」。五百四十部划分的得失，前人多已论及。如将五百四十部强加诸小篆以前之古文字形体，显然是不够恰当的。这正如现代通行的楷书不能依照五百四十部去加以区划是同样的道理。

吴大澂撰《说文古籀补》，以古文字补《说文》古籀之遗，其后《说文古籀补补》、《古籀汇编》、《金文编》、《甲骨文编》、《续甲骨文编》、《古玺文字徵》、《汉印文字徵》，等々，莫不按《说文》分类。这固然可以便于与小篆作比较之观察，但始终只能处于《说文》附庸的地位。且金文「荆」字作[illegible]、[illegible]，「蔡」作[illegible]，「薛」作[illegible]，均不从「艸」，而列于「艸」部；甲文「妣」字作匕，不从「女」而列于「女」部；「祖」作且，不从「示」而列于「示」部。像这样的例子多至不可胜举。这就违背了许慎原来分部的原则，像这种违背实际的「以类相从」的办法，不能说是合理的。

《综类》根据甲骨文自身的形体结构特点，分为一百六十四部，尽管这一百六十四部的划分是否完全恰当；约三千余文的以类相从是否完全合理，这是值得讨论的，我们将专文加以论及。但应该承认，这种新的分部大胆地突破了旧的框々，总的方向是正确的，其基本内容是值得肯定的。

四、检字索引比较方便　《综类》有汉字索引及部首索引两种，既可据隶定的形体以检索，也可根据其原有的构形以检字。尤其是部首索引，采取分部重見的办法，只要认识甲骨文字的任何一个组成部分，即可据以检索有关的辞例。如「[illegible]」字，既可在「𠂤」部中查到，亦可在「又」部中查到。「[illegible]」分别在∩、[illegible]、[illegible]部都可以查到。

我们在这里只想着重地谈一谈《综类》的一个最为突出的特点：作者並不是单纯地作一些資料排比整理工作，而是对資料进行了深入而认真的观察，不为旧说所迷惑，

在取舍判断的过程中是比较慎重的，有的时候还能力排众议，有自己独到的见解。通过以下的例证，大家会充分地理解我们上述的结论。

犆

自罗振玉释犆为「植」即「犆」，诸家多从其说。实则犆乃戠牛二字合文，指赤色之牛而言。枕卜辞「黄牛」或合书作𤘖是一致的。

郭沫若先生《卜通》53片《考释》谓「犆」指牛父，「言犆犹它辞言㸬言牡矣」。此乃误解。卜辞「戠牛」多与「羊」、「勿牛」相对可证。且《佚》518有「戠兕」；《甲》3939、《佚》427均有「白兕」，是尔「戠」当指毛色之确证。李孝定《集释》以为「犆」与「宰」相对，当为特牲，并以「宰」为「三牲具」作为依据。这种后世使用的概念不符合于商代的实际情况。且卜辞「宰」与「羊」、「牛」、「伐」、「羌」均可相对为言，此不足以证明「犆」当为特牲。卜辞牛父概称「牡」，未见有例外。卜辞「戠牛」与「黄牛」、「白牛」、「幽牛」同例，均指毛色言之。《综类》335以戠牛二字分书是正确的。

吋

《天》34「吕羊出戜」唐兰先生《考释》以为「喙」之本字。诸家多从其说。王襄《类纂》释「吠」，唐兰先生已辨其非，金祥恒《续甲骨文编》仍释「吠」。李孝定既释为「吠」，复释为「喙」，混淆莫辨。商承祚先生《类编》原释「喙」，《佚》359《考释》改正为「豚」字。释「豚」是对的。卜辞从「肉」之字或作「ㅂ」，「祭」字从「肉」或作「ㅂ」，或作「ㅁ」，可证。唐兰先生误以吋字为从「口」，未免疏失。《综类》进而区分吋、唯二形，且根据其辞例，唯为人名或地名，形体既殊，用法亦迥然有别。

𢆶

《摭续》181「……卜在𣎳……从于𢆶，生来亡𡿧」。生字适残，《甲骨文编》3253、《续甲骨文编》2.24误摹作𢆶。《甲骨文编》又于4787混入𢆶字。李亚农《考释》摹作𢆶，李孝定《集释》隶定作邎，都是错误的。惟《综类》472-2释读作「……卜才𣎳……从于𢆶，生来亡𡿧」，独具卓识。

𢓊

《甲》2926屈万里《考释》、《甲骨文编》3332、《续甲骨文编》2.32均以𢓊为一字，李孝定《集释》沿其误。《综类》315.4 445.2分为丫于二字。

甲骨刻辞经常有两个独立的形体紧密地相连，在这种情况下就产生了不同的看法：有的认为是一个字，有的认为是两个字。《综类》在处理这个问题时大体上乃是基于这个原则：凡是单文孤例，没有其他任何证据时，一概作为两个独立的形体。我们认为这样处理是正确的。与此类似的有下列诸字：

𦊐

《戬》39.8王国维《考释》隶作𦊐，《甲骨文编》0322、《续甲骨文编》3.10、李孝定《集释》等均沿其误。《综类》408-3分书收入𦊐字是对的。其上一字亦非从「臼」。

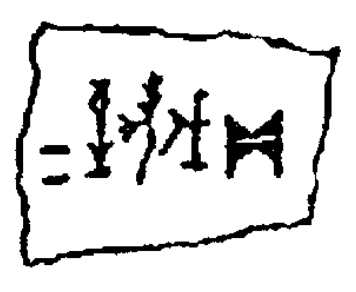
网雉

《合》354：「网雉，隻十五。」
「网雉，隻八。」
「甲寅卜，乎鸣网𨾴隻？丙辰雈，隻五。」

《甲骨文编》0971、《续甲骨文编》7.30均以「羅」为一字，非是。屈万里《甲》3112《考释》、《综类》236分为二字是正确的。同版「网𨾴」足以为证。金祥恒以此混入罹字，尤误。屈万里以为「不知何鸟」，实则𨾴即雉之初文，此枕「雞」或不从「奚」声，而但作𨾴形。

「隻丨㐅」屈万里读作「隻十五」是对的。同版有「六八」，读作「六十八」，是「六十」与「八」之间不必有「又」或「㞢」字。甲文「五十」必合文作「𠄡」，两形紧紧相连，不得分离。今分离作「丨㐅」，则当读作「十五」。《综类》误摹作𠄡，盖不知𠄡与丨㐅之有别也。

𦒺

《后下》20.14  《甲骨文编》1045、《续甲骨文编》8.14、《集释》2738皆误释为「耋」。《综类》11-4以为老至二字，是对的。甲骨刻辞有时确实难以区分其形体是一抑是二。但由于甲骨刻辞的辞例大多是反复出现的，在没有任何其他辞例证明的情况下，均不得「合二而一」，亦不得「一分为二」。

犾

《铁》104.1有二犬字并列。罗振玉释「犾」，金祥恒《续甲骨文编》、李孝定《集释》均沿其误。孙海波《甲骨文编》1144释「豩」，且以《甲》3634之犬豕二字亦释「豩」，尤误。卜辞犬与豕形体区分极严格，孙氏多误混。《综类》217-2以为二犬字是对的。

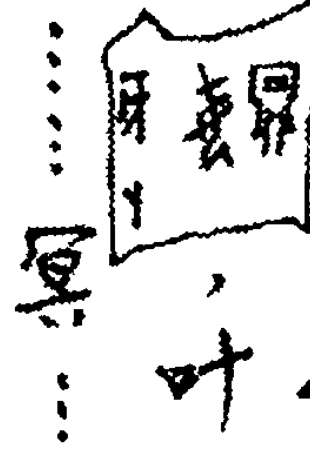
𤆍

《后下》8.18《甲骨文编》释为「𢦏」，《集释》3177沿其误。《综类》173-4读为「才火」二字是对的。

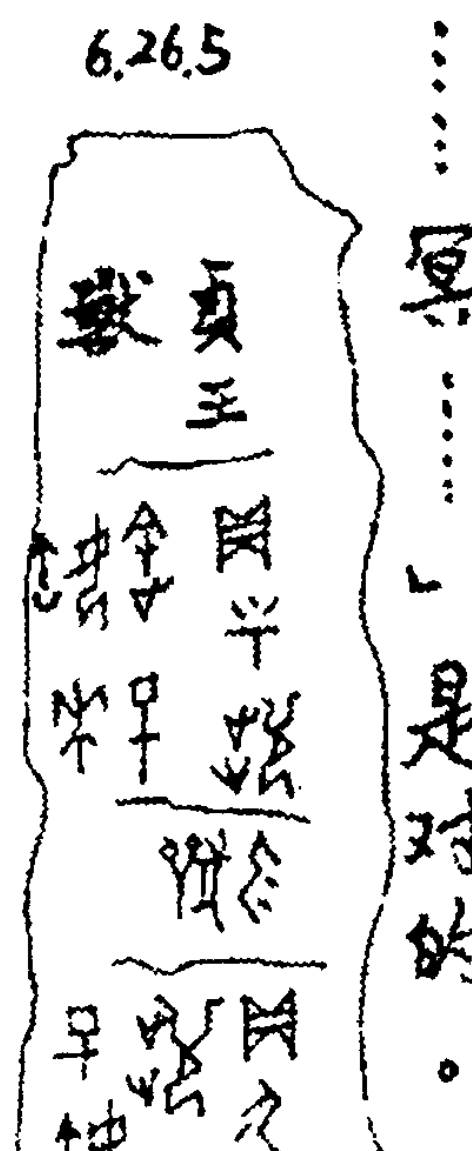
𩚻

《拾》1.14：「甲戌……𩚻日二牛」，叶玉森《集释》读为「沮丁二牛」，谓「沮丁即祖丁，段沮为祖，卜辞仅见。同声相段，此为明证。」《甲骨文编》1267、《续甲骨文编》11.2、李孝定《集释》均沿其误。《综类》525-3读作「且乙日二牛」，已纠正旧说之误。但「𩚻」非「且乙」，而当读作「小且乙」。《戬》5.10：「癸巳卜，即贞，翌乙未又于小且乙」，王国维《考释》以为「小乙」是也。

嫇

《甲骨文编》4942有嫇字，《续甲骨文编》12.11、李孝定《集释》3654皆承袭其误。查《前》6.28.4作 ，叶玉森释「婠」，即已误「女冥」为一字。《综类》282.3读作「……亥卜……女……冥……」是对的。

《前》6.26.5



叶玉森《集释》谓：「本辞第二行之舍，与第三行之娸左偏女逼近，诸家乃认为婠，观下辞自明其误。」

李孝定《集释》3706坚持错误的考释，谓经过谛审之后，仍当释「婠」。任何人只要认真地看看原拓片，是不可能以「娸」的女字偏旁，移于「舍」字之左而释为「婠」的。肯定李孝定甚至没有认真读叶玉森的考释，不然决不可能造成这样的错误。《综类》143「娸」字条的释读是正确的，并且进一步纠正了叶玉森以「[illegible]」为「[illegible]」

的錯误。

旹

《文》527孙海波隶作「旨」，增订本《甲骨文编》2316孙氏已改正为「之日」合文。但《续甲骨文编》7.2及李孝定《集释》犹沿袭旧误。《综类》159分书作「之日」二字不误。

除了上述之外，《综类》在摹写方面确实是下了不少功夫，纠正了许多误摹的形体，兹举例如下：

𢓊

《续甲骨文编》2.29录有𢓊字，李孝定《集释》从之，均误。《综类》324列于𢓊字是对的。

𡴘

《京》1332有卟字，《续甲骨文编》误作𡴘，李孝定《集释》从之。《综类》326-1作卟是对的。

𣂔

《佚》127「𣂔」字，《续甲骨文编》2.30摹作𣂔，李孝定《集释》进一步以讹传讹作𣂔，隶作𪨬。《综类》326不误。

𦥑

《甲骨文编》3495、《续甲骨文编》3.8摹《佚》561作𦥑，乃因袭商承祚之误。李孝定《集释》乃进而疑为𦥑字之異体。实则字当释「習」，详見于省吾先生《殷契骈枝续编》十五頁。《综类》101列于習下是正确的。

玨

（見《甲》403）《续甲骨文编》3.21录有玨字，李孝定《集释》945沿其误隶作敍。《综类》351-3摹作玨，不从「又」是对的。

𠕋

《甲骨文编》1180摹《前》6.64.8作𠕋，《续甲骨文编》14.13、李孝定《集释》4237皆沿其误。《综类》279-1摹作𠕋是对的。

觀

《甲》3918有𩁹字，屈万里《考释》隶作觀，李孝定《集释》1295 4439隶作觀，以为「从小隹从兄」，均误。字既不从「雚」，亦不从「小隹」。《综类》235-1摹其形体是对的。

𢀡

《续甲骨文编》3.9录有𢀡字，李孝定《集释》承其误隶作「彝」。其所据《乙》8858形体实作𢀡，《乙》8809与此同文可证。《综类》93作𢀡，乃据《乙》8809。《甲骨文编》5717作𢀡乃据《乙》8859。均是。《乙》8859适残，《综类》一律作𢀡，这种处理方法是可以的。

𢦏

《佚》739商承祚先生《考释》谓「𢦏从肉从戈，殆即《说文》训大脔之胾，肉祭也。」《甲骨文编》1521、《续甲骨文编》4.27、李孝定《集释》1512皆沿袭其误。《综类》335-1摹作𢦏，录入𢦏字是也。「王宾戠亡尤」卜辞习見。

簪

《前》2.5.5叶玉森《集释》隶作「簪」，《甲骨文编》0586、《续甲骨文编》5.6及李孝定《集释》皆沿其误。《综类》432-1摹作𥃲，较为近是。拓片漫漶，但断非从二束则可以肯定无疑。

潒

《甲骨文编》1334录《前》2.18.3有潒字，隶作潒、《续甲骨文编》11.7、李孝定《集释》3387均沿其误。《综类》249-2摹作潒，列入潒字是也。

有某些形体，诸家摹录有误，《综类》虽未能加以改正，但采取不予收录的办法，这也表示对旧说的怀疑与否定，已前进了一步。例如：

中

《续甲骨文编》录《林》2.7.9作中，实当作中，下为泐痕，乃沿袭孙海波旧版《甲骨文编》4.24之误。增订版已删去，重摹作中，列于1348邑下是也。《综类》未录。

吴

《甲骨文编》1251有吴字，释「吴」。实则《前》4.29.4为𠯑字，右乃泐痕。又5651有𠯑字，入附录，《续甲骨文编》10.19释𠯑为「吴」。李孝定《集释》沿袭孙海波、金祥恒之误并释为「吴」。实则《甲》1631当为「大丁」二字之合文，屈万里释作「大丁」可从。惟「丁」字残。《综类》不录「吴」字是对的，且5184正录《甲》1631作「大丁」。

盟

唐兰先生《殷虚文字记》十三以为《林》1.29.20有「𥁰」字，即《说文》「盟」字。《甲骨文编》0153、《续甲骨文编》2.17均从之。李孝定《集释》且据《甲骨文编》0152误摹《林》1.29.11之「此」，亦释为「盟」。实则《林》1.29.20当为𠙶形之残，参見《粹》1326。郭沫若先生亦误隶作盟，金祥恒亦沿其误。《综类》不录《林》1.29.20是其谨慎处。《综类》86误摹《粹》1326之「𠙶」二字为「𥂕」则非是。

某些甲骨文字形体变动不居，旧有考释对于形体的分合，每每产生误解。《综类》立足于严格区分不同的形体，同时又注意同字異形的合併，这只有在全面掌握并分析其辞例的基础上才能做得到。下面试举例加以说明：

𡧊

甲骨刻辞有𡧊字，从「宀」从「至」，即「室」字，不过「至」字倒书作𡧊而已。卜辞「矢」及从「矢」之字多倒书，如「侯」或作𠈉，「至」或作𡧊，均其例证。陈梦家先生于《卜辞综述》472隶𡧊作「宊」，并混同于𡧊（隶作宾），以为即倒室，二者实有别。

《甲》2684陈梦家先生释读作「丁丑卜彭貞于文宊」（《综述》472），屈万里《考释》释读作「貞，于文宊」。

《综类》369以𡧊列入「室」字，并区分𡧊与𡧊为二形，都是正确的，但据陈梦家以释读《甲》2684之行款则误。其行款当如屈万里之释读。

𥄎

《前》2.7.2旧均误摹作𥄎，以为从「示」从「目」，释作「视」。《甲骨文编》1073、《续甲骨文编》皆袭此说。《珠》263金祖同释𥄎为盾，《外》107严一萍隶𥄎作𥄎。均误。《综类》104并列入𥄎下是也。

員

《续甲骨文编》6.15混鼎、贞为一，并释为「员」。李孝定《集释》2127沿袭其误，还进一步据陈邦福之说将口形混入。《综类》246、254、397将口、鼎、贞三形分列是正确的。贞实鼎字之异体。鼎为其侧面形体，贞为其正面形体。《综类》将此二形分列是其不足。

币

《甲骨文编》0772释不为「币」，《续甲骨文编》6.11、李孝定《集释》均从之。《综类》361列入「不」字是对的。

及

卜辞及、𠬪二字形体及辞例均有严格之区分，《甲骨文编》0359、《续甲骨文编》3.17皆混同无别，均释为「及」。《综类》14加以区分是对的。

《综类》是岛邦男辛勤奋斗十年的结晶，为从事甲骨刻辞研究的科学工作者提供了极大的方便。我们应该充分肯定，这是一部有实用价值的工具书。

与此同时，我们不得不严肃地指出，这部著作也还存在着某些需要改正的缺点以至错误。尽管作为一部前所未有的、篇幅巨大的著作，这些缺点和错误是难以避免的。

虽然《综类》只是摹录原篆，但由于甲骨残缺者多，刻划模糊者多，泐痕难以区分者多，如果再加上经常会碰上行款不易区分的难题，这样就造成了形体辨识上的困难。

当然，释读甲骨刻辞也有一个比较有利的因素，这就是相同的辞例通常情况是多次反复出现的，同时还有对贞的、同文的、甚至成套的刻辞可供参考比较。这需要我们做细致而深入的观察和研究工作。

《综类》这部书的缺点和错误，大致有以下这几个方面：

一、释读的错误

我们在前面曾经指出，《综类》最为突出的成就之一在于纠正旧说的讹误，表达了自己独立的见解。在这里我们也需要进一步加以指出，《综类》的作者仍然免不了要沿袭某些旧有的错误。另外一方面，还免不了没有吸收已有的研究成果，也就是说，扬弃了成说的正确部分，造成了释读的错误。

我们需要做的是：肯定那些正确的东西，否定那些错误的东西。

1.《文》336：「小丁戌眔大(丁)……戌酌」

孙海波《考释》以「大丁」为「𠂸」，谓「𠂸亦殷之先世，故得与小丁同祭。其字与篆文矢字极相似，疑即矢字。」

按：孙海波误释为𠂸者，实乃大丁字，中为泐痕。拓本左半较模糊，疑为「大丁」合文。至于断非「矢」字，则无可疑。卜辞从未见殷之先世以「矢」为名者。《综类》363-2收录于𠂸字条下。102-1 345-4 392-3 531-2均摹其形作𠂸，乃承袭孙海波之误。

2.《乙》5269：「貞王㞢……𡥆子……𡥆……其氏……」

《综类》179-3作「貞王㞢……㜺子……其氏……」。其错误源于《续甲骨文编》14.8，金祥恒摹作㜺，李孝定《集释》4154沿袭其误，并隶作㜺。《综类》于其形体微有差异，而释读之错误则一。

3.《乙》7430：「貞今日㹞不其冥」

㹞《续甲骨文编》12.13误摹作㹞，李孝定《集释》3673沿其误释「妨」。《综类》145.3虽曾致疑，但仍摹作㹞。282-1甚至还作㹞，相去愈远，而不知中划实为泐痕，未免失考。

4.《戬》1.9王国维考释读作：

「癸卯卜酌奉貞乙巳自囗廿示一牛，二示羊△尞三示彘牢四示犬。」

此片亦见于《佚》884，商承祚先生《考释》读作：

「癸卯卜貞、酌奉，乙巳自、囗廿示一牛、二示羊△尞、三示彘牢、四示豕。」

释读均有误。《综类》基本上沿袭其误，219-2读作：

「癸卯卜貞酌奉乙巳自囗廿示一牛二示羊四戈彘三千𢀛。」

不仅数「土尞牢」三字，且𢀛实乃巫字之误。《综类》150-3将此段刻辞收录于「二示」条下，以此得知岛邦男氏读「下示」为「二示」，而非读作「上示」。《综类》327-2 511-4作「三𠂤」，余均作「三𠂤」，是其前后释读亦不一致。

此片刻辞《综类》曾先后收录于150-3 151-1 207-3 219-2 327-2 511-2 511-4。

此片刻辞之释读，陈梦家先生曾有考证。《综述》578谓：

「《续》1.2.4一条，因契刻行款有颠倒错置之处，所以向来引释此条的颇有出入。乙巳刻在酌奉之左，牢刻在尞右另一行之末……」陈氏释读为：

「癸卯卜貞乙巳酌奉：自上甲廿示一牛，下示羊，土尞牢，四戈彘，四巫豕。」

陈氏所释，除「豕」当作「豕」外，其余均是。《综类》沿王国维、商承祚先生之误，而不采录陈氏之说，未免疏陋。

5.《甲》2700：「……眔……妥余……上下于叙……邑商亡𢦔……六月」

此类辞例多见，屈万里已有释文。《综类》138-3引录作「……妥于商」，缺漏甚多。

6.《粹》1275：「叀小臣妥䊷不……乍自鱼」

《综类》138.3漏「䊷不」二字。「䊷不」无法单独成辞，与下段刻辞亦不连。郭沫若先生《考释》属上读是正确的。但释「𠂤」为「化」亦误。

7.《戬》42.3有𣎵字，实即𣎵字之异。王国维释「来」是正确的。《综类》201.4摹作𣎵，与「来」字分列，实误。

8.《粹》1589：「叀羊王受又」

郭沫若释读是对的。《综类》215.4作「……𦍋王受又」，非是。「羊」字右部乃泐痕，其上「叀」字清晰可辨，与同版辞例亦合。《综类》弄巧反拙。

9.《前》7.26.3：「……采各云自北西单雷……」

「采」字适残作「采」，但据下列辞例可以知其本作采，上当从「爪」：

《合》78：「九日辛未，大采，各云自北，雷，征大风自西……」

《粹》838：「……采各云……」

《粹》143-2 1043：「之日大采雨」

《综类》171-2 190-2引录《前》7.26.3摹作采，不合于本书体例。《粹》838本作采，摹作采亦不妥。采、采同为「采」字，但据本书之体例，亦属误摹。

10.《甲》3045：「戊子卜𠂤又卜㞢母示」

屈万里《考释》作「戊子卜𠂤又占母兮」，以为：「母兮未详何义，殆先妣之名兮者欤？」误。《综类》145.2作「戊子卜𠂤九𢓊」，亦误。

11.《乙》4693：「貞雀氏石𢦏……雀不其氏石(𢦏)」

𢦏于省吾先生释「係」。《综类》312-4 237-1读作「貞雀氏石𠂤」，以「𢦏」为「𠂤」，

误。又《综类》8-1作「貞隹氏石……」，则敚[illegible]字。

12.《乙》4275：「乙丑卜殻貞，彭子凡于且丁……五宰」

《综类》410-4 529-4作：「……廿卜殻貞賠……凡于且丁……五……」，敚「乙」、「子」、「宰」三字，並误「彭」为「賠」。

二、前后矛盾

作为一部完整的著作，应该是前后一致，不得自相矛盾与冲突。仔细地、认真地复核，是能够避免这种现象的。

《综类》有一些前后释读不一致的地方，例如：

1.《外》44：「癸酉卜，王貞，自今癸酉至于乙酉，邑人其見方俎，不其見方執，一月。」《南南》1.59有此片之摹本。正确之释读，必如上述方可。《乙》4030「其來俎，不其來執，四月」；《南坊》5.37「弗克氏俎，其克氏執，三月」，均可为证。「見」读作「猷」。说見拙著《商代的俘虏》。

《综类》107-3 461-3释读作「邑人其見方俎，不其見方執」，释读不误。但57-4 376-3则释读为：「邑人其見方俎執不其見方」，误将「執」字列于「俎」字下。卜辞行款每有极不规则者，须多方参考有关辞例始能加以确定。此其一例。

2.《外》20：「……□□□用」，亦見于《南南》2.156。《综类》18-4引录时，行款不误，只是□误摹作□。但《综类》101-4 486-3却释读为：「……白人归于河……□□」「白人归于河」属于另一段刻辞，误混入此。

3.《前》4.25.8：「……至于……洮隹……妾奉……出子」

《综类》90-3释读作「……至于……允洮隹……妾奉……出子」，而147-3 375-1则释读作「……学至于……允洮隹……妾奉……出子」。「学」、「允」属另段刻辞，不得混入。

《综类》136-1引录此条时，释读不误。

4.《宁》1.227：「于□」，当读作「于母乙」。

《综类》551-4列于「母乙」条是对的。但144-3又误列于「汝」字条下。

5.《粹》984：「于旦王迺田亡找」。此片《京》4546重出。

《综类》161-3引录《粹》984释读不误。而录《京》4546作「……吕王……田亡……」，同属一片，而释读不一，且同片而重复引录，此乃不应有之错误。

又《综类》288.2复将《粹》984引录于「吕」（宫）字条下。此片既已录于「旦」字条下，是释「吕」为旦；复录于「宫」字条下，是又释「吕」为宫，令读者无所适从，是亦不应有之错误。当以释「旦」为是。卜辞「宫」字作吕，形体整齐方正；「旦」字或作吕、吕，形体多不规则，乃由吕形所演化。

6.《合》359拓本漫漶不清，行款亦较混乱，但当自左而右读，则无可疑。《综类》凡四处引录，而释读均不一，互相矛盾：

《综类》149-1读作：「克□□二人……女王……」

132-3读作：「克□二人……又……女我王徕从用……女其……女」

「克□二人……女王……女其用□……」

473-2读作：「……女其用□……女王……

……其用□……弗每王徕」

303-3读作：「……又……女我王徕克孚二人」

「……女其用□……女王徕克孚二人」

「……其用□弗每王徕」

三、重复及误列

1.《铁》256-2：「貞邑來吉」，《综类》44-4列于「□」字条是错误的。卜辞□（□）（祝）、另（兄）区分极为严格。《综类》43-3此条列于邑字下不误。

2.《粹》11：「隹河芼禾，隹夒芼禾。」《综类》243-3录于「□」字条下是错误的。□与□有别，《综类》皆混。且《粹》11字本作□，《综类》误摹作□。83-2列于「芼」字条下不误，但摹写亦误。211-3 181-3 193-1均同误。

3.《天》81：「令众□十月」，□当隶作「絴」，非「羌」字。《综类》215-4录于□字下是对的。而18-4所引录，将另一段刻辞之「羌」字混入，录于「羌」字条则非是。两处释读亦不一。

4.《综类》25-4 26-4 □□两形分列是对的。但25-4引《库》1506「邛弟曰□」于□字下，则属误列。

5.《综类》135-4以□作为独立之形体，实误。此乃「小女」合文，当合併于133-4「小女」下。

6.《综类》143-1有□字，《菁》4已列于此条下，而245.4又重出□字，当合併。

7.《综类》138-2□与144-1□重出，当合併。

8.《综类》171-1与246.2□字重出，当合併。

9.《甲》827有「□」字，《综类》215-1误以为「□」「□」二字而列于「□」字条下。实则当列于同页之「□」字条下。

10.《综类》171-3 314-4 362-1□字重出，当合併。

11.《综类》引《遗》840「告□于河」，列于□（畴）字条下，殊误。□当释「雷」，应列于171-2「雷」字条下。

12.《综类》218「豕」字条，非常杂乱，有欠慎重考虑。其中混豕、犬、虎等为一。要想彻底分辨清楚，需要作大量的论证，因为这些字的区别过去大家一直並没有弄清楚。在这里举一些较为明显的例子来加以说明：

(1)《佚》81当读作「其从犬回学又□」

(2)《粹》950当读作「射又虎学」

(3)《外》75当读作「犬来告又虎」

(4)《摭续》1、《摭续》121並当为「虎」字。

四、引录伪刻

《综类》在引录时，十分注意剔除伪刻部份。但我们发现还是引录了《库》1807的伪刻部分。

《库方》所藏甲骨多伪刻，而某些刻辞的真伪问题，各家见解不一。陈梦家《综述》652的「库方甲骨卜辞伪刻表」，不以《库》1807为伪。

我们的意见则认为《综类》40-1 57-4 107-2 412-2 162-3所引录的《库》1807：「□□□□□□□□□□□□□□□□□」，此段刻辞辞例、行款均不合，无法通读，必伪无疑。至于是

否全片皆伪，則可以討論。

五、卷頁錯误（見附表一）

六、与原辞出入（見附表二）

七、摹写錯误（見附表三）

关于《综类》附录「通用、假借、同义用例」部分，其所牵涉的方面很广，我们将专文讨论其得失。

所有以上的论述，只是就一时翻检所及，举例加以说明。所見未必有当，希望能够得到同志们的指正。

一九七九年五月稿

《殷虚卜辞综类》勘误表〈一〉

综类頁	段	引书卷頁（误）	引书卷頁（正）	备注
七	一	《佚》五八四	《佚》五八六	
一八	二	《林》二、一五、一八	《林》二、一五、一九	
二五	一	《丙》二二	《丙》二一	
三七	二	《前》六、四四、六	《前》六、四四、四	
三七	二	《林》二、一九、三	《林》二、一九、一〇	
三七	四	《续》四、二三、八	《续》四、二四、八	
四〇	一	《宁》一、五一六	《宁》一、五一七	
五二	二	《前》四、三三、六	《前》四、三三、五	
五六	四	《佚》一一八	《佚》二一八	
一三七	二	《粹》二七	《粹》二四七	
四二五	三	同上	同上	
一四五	三	《前》二、三、五	《前》二、三、三	
一七一	一	《续》四、二八、五	《续》四、二六、五	
一七一	一	《乙》八四一八	《乙》八四一四	
一八一	三	《簠游》二一	《簠游》一九	
一八六	三	《粹》六七九	《粹》六九七	
一八七	一	《林》二、一八、一	《林》二、一八、二	

综类頁	段	引书卷頁（误）	引书卷頁（正）	备注
一八七	二	《后上》三一、六	《后上》三一、五	
二一三	四	《拾》一〇	《拾》一、一〇	[illegible]当作[illegible]
二二二	三	《文》三一五	《文》三一二	
二五四	一	《甲》二七〇	《甲》二七五	
二六四	四	《续》一、五一、一	《续》一、五二、一	
二七三	三	《续》三、二、二	《续》三、二、三	
三一九	四	《佚》三五三	《佚》三五五	
三六九	四	《甲》二九五七	《甲》二七五七	
三七二	二	《后下》二九、五	《后下》二二、五	
三八五	一	《前》六、一、六	《续》六、一、六	
四〇〇	四	同上	同上	
三八九	三	《京》一〇〇一	《京》一〇〇〇	
三九〇	四	《南明》四四三	《南明》四四五	
四〇八	三	《续》四、二一、一〇	《续》四、二二、二	
四二五	一	《乙》一八八七	《乙》一八八六	
四二五	三	《粹》一五八一	《粹》一五八九	

《殷虚卜辞综类》勘误表〈二〉

综类頁	段	引书卷頁	误	正	备注
一二	四	《佚》五七二	𠦪隻[illegible]	𠦪隻乚[illegible]	敚「乚」字，[illegible]字误摹
一五	一	《乙》四六九二	出隻羌……五十	出隻羌芻五十	敚「芻」字
四五	三		同上	同上	
三五〇	四		同上	同上	
三三	三	《乙》三三三	亦弗希王	亦尹弗希王	敚「尹」字
三四	一	《合》一九五		翌乙卯子[illegible]酌	同版尚有此段漏引
三七	二	《前》六、四四、一	王[illegible]……冓……	王[illegible]……不冓	敚「不」字
三七	三	《林》一、三〇、四	何貞[illegible]	何貞王[illegible]	敚「王」字
一七九	四	《粹》八五一	其桒年[illegible]	其桒年于[illegible]	敚「于」字
二二四	三	《合》一三二	……其[illegible]兹邑	……水其[illegible]兹邑	敚「水」字
二六一	二	《乙》四六八二	至于丙申雨	至于丙申不其雨	敚「不其」二字
三五七	四	《乙》七八二	今戌不其受年	今戌我不受其年	敚「我」字
三七二	二	《京》四四六七	……宰	……王宰	敚「王」字
四二五	三	《粹》一五八九	卯叀……王……	卯叀牛王受……	敚「牛」「受」二字
四六五	四	《京》五二八一	方白	方白用	敚「用」字
四七五	一	《合》三六二	庚子	庚子卜	敚「卜」字

《殷虚卜辞综类》勘误表〈三〉

综类頁	段	引书卷頁	误	正	备注
一二	四	《佚》五七二	[illegible]	[illegible]	《后上》一二、一同
一八	四	《存》二、二六六	[illegible]	[illegible]	本书四八六不误
三三	三	《续》一、一〇、五	[illegible]	[illegible]	
四〇	二		[illegible]	[illegible]	
四四	二	《粹》一四八	二牛	一牛	
五一六	一		同上	同上	
九〇	三	《后下》三七、六	四	[illegible]	
一〇〇	三	《前》六、一七、七	乚希	㞢希	
一〇四	二	《天》九三	弗	？	断非弗字。形体不清，参見《合集》三七七三
一三八	四	《佚》二五一	牢又二牛	牢又一牛	卜辞从未見牢又二牛之例，上乃泐痕
五四二	三		同上	同上	商承祚先生释为「二牛」，不可据。
一四一	四	《佚》四四五	[illegible]	[illegible]	商承祚先生隶作「妇」，不可据。
一四二	四	《乙》七五一四	[illegible]十	[illegible]丁	断非「[illegible]」字。有泐痕，疑是「示」字。
一四三	二	《前》七、二六、三	……[illegible]姶云	……[illegible]姶云	参見文中說明。
一七一	二		同上	同上	
一九〇	二		同上	同上	
一四五	三	《乙》七四三〇	[illegible]	[illegible]	

綜类頁	段	引书卷頁	误	正	备注
二八二	一	《乙》七四三〇	[illegible]	[illegible]	
二四三	三	《粹》一二	[illegible]	[illegible]	
一八一	三		同上	同上	
一九三	一		同上	同上	
二二一	三		同上	同上	
八三	二		同上	同上	
三一二	四	《乙》四六九三	貞雀氏石[illegible]	貞雀氏石[illegible]	
二三七	一		同上	同上	
八	一	《乙》四六九三．	貞雀氏石……	同上	数序字
一五二	二	《粹》一五〇四	出一丨例	出一〉例	
一七七	三	《续》一·二四六·七	[illegible]	[illegible]	
一七七	三	《后下》二五·一五	[illegible]	[illegible]	
一七七	四	《后上》一三·五	[illegible]	[illegible]	当併入三四頁炎
一七九	三	《乙》五二六九	……[illegible]子	……[illegible]子：[illegible]…	
二〇一	四	《戬》四二·三	[illegible]	[illegible]	当併入「来」字
二一五	一	《铁》八六·三	来十[illegible]	来十[illegible]	
二一五	四	《粹》一五八九	……[illegible]王受又	[illegible]王受又	
二一九	二	《戬》一·九	三壬[illegible]	三壬[illegible]	参見文中説明
四一八	三		同上	同上	

綜类頁	段	引书卷頁	误	正	备注
一五〇	三		同上	同上	
一五一	一		同上	同上	
二〇七	三		同上	同上	
五一一	四		同上	同上	
二三六	二	《合》三五四	[illegible]	丨X	[illegible]读作「五十」，丨X读作「十五」，二者有别
四〇九	二		同上	同上	
二四五	二	《后下》三·一三	[illegible]	[illegible]	
三二三	四	《甲》三四三〇	往于錄	往[illegible]錄	
三六三	二	《文》三三六	[illegible]	[illegible]	[illegible]疑当是吠之残，乃「大丁」合文
一〇二	一	《文》三三六	同上	同上	
三四五	四		同上	同上	
三九二	三		同上	同上	
五三一	二		同上	同上	
四一五	三	《前》七·五·三	巾	[illegible]	
四一九	二	《缀》二〇二	[illegible]	[illegible]	
四二五	三		[illegible]	[illegible]	
四五八	一	《南明》六三五	二父丂	二父一[illegible]	释读参見《卜辞综述》四九五頁
四六五	三	《铁》一四〇·一	[illegible]	[illegible]	
四七二	二	《粹》四九五	其乎兹[illegible]	其乎兹[illegible]	
五二五	三	《拾》一·一四	且乙	小且乙	参見文中説明

（原載《古文字研究》第三輯，中華書局，一九八〇年）

戴维·N·凯特利的《商史史料》

范毓周

在甲骨学研究史上，欧美等西方学者对于甲骨文的搜集和研究，几乎是和甲骨文的最初发现同时开始的。例如，明义士（J·M·Menzies）、方法敛（F.H.Chalfant）、金璋（L.C.Hopkis），吉卜生（H.E.Gibson）等，都是久已为人熟知的甲骨学早期研究者。但是，用西方文字对甲骨学作综合性的系统介绍则是最近才出现的事情，美国加利福尼亚大学出版部一九七八年出版的该校伯克利分校历史系教授戴维·N·凯特利（David N. Keightly）编著的《商史史料——中国青铜时代的甲骨刻辞》（Sources of Shang History: The Oracle Bone Inscriptions of Bronze Age China，以下简称《商史史料》）一书，可以说是这类著作的第一部。

戴维·N·凯特利是美国近年在中国古代史研究领域里，尤其是甲骨学方面的后起之秀。一九六九年，他以《古代中国的公众劳动——商和西周时期的强制性劳动研究》（Public Work in Ancient China, A Study of Forced Labor in the Shang and Western Chon）为论文获得哥伦比亚大学的哲学博士学位。在此后数年中，他一直致力于有关中国古代历史文化方面的研究，甲骨学是他尤为着力的一个领域。自一九六九年以来，凯特利相继撰写了《岛邦男的〈殷墟卜辞综类〉（书评）》、《释贞——关于商代贞卜性质的一个新假设》、《宗教信仰与都市主义的起源》、《商代的贞卜与商代的形而上学——附论新石器时代的贞卜与形而上学》、《商代历史时期的年代——中国青铜时代的编年史上的一个问题》、《〈古本竹书纪年〉的真实性》以及《安阳新发现的甲骨》等一系列论文。由于这些研究成果，他被推选为以美国加州大学为中心的学术组织“古代中国研究会”的主席，并担任了该组织出版的刊物《古代中国》（Early China）的主编。《商史史料》一书，是他在甲骨学领域里试图全面总结中外学者研究成果、系统介绍甲骨学知识的一次尝试，也是他多年研究甲骨学的一个结晶。

《商史史料》一书，根据甲骨学的实际内容，分五章介绍了有关甲骨学研究的各种问题。书后另附五项附录和许多插图与表格，并有书中所出现的人名和重要术语条目索引。就形式来讲，是一部比较完善的综述性著作。

该书的第一章，主要介绍商代的占卜过程。作者首先讨论了“骨占”的文化渊源及其作为一种文化特征在文化史研究上的意义。然后，从占卜材料的类别、来源、骨与龟甲的使用比例、骨与龟甲的攻治打磨等方面介绍了商代占卜的材料准备情况。最后又从五种记事刻辞、钻凿的挖制与排列，灼与兆的关系等方面，详尽介绍了占卜的进行过程。

第二章主要介绍卜辞的内容与结构，同时也对与卜辞有关的刻兆、辞间界线和涂色等现象的作用与意义作了相当深入的讨论。在介绍“序辞与后辞”时，作者着重讨论了贞人与贞人组问题，介绍了目前在这方面的研究成果与现有状况。在有关“命辞”、“占辞”和“验辞”的介绍中，作者除了对其内容与形式作一般性叙述外，还详尽讨论了它们与占卜过程在时间上的相对次序。最后，在介绍“卜兆”时，则着力讨论了占卜的成套性和兆语的含义。

第三章是该书的主体部分，在这一章里，作者概括介绍了有关卜辞研究和解读的一般情况和相关问题。作者首先介绍了已有的学术成就，然后介绍了甲骨材料的著录情况。接着又介绍了有关甲骨文的字汇、索引编制情况和概论、文献目录等参考著作的出版状况。继此，作者详细介绍了有关甲骨卜辞的解读的一般性研究并讨论了研究中的常见性问题。在本章的最后部分里，着重讨论了如何通读甲骨碎片上的卜辞问题和怎样全面研究完整龟腹甲上的各项内容。整个介绍和讨论都能深入浅出，引人入胜，介绍多是概括性论述，讨论则有具体的意见，在每个细节问题上，都附加详尽的注释，引述最新研究成果，基本上反映了当代研究水平。

第四章是专门讨论甲骨断代问题的。甲骨断代是甲骨学目前需要着力解决的重要问题，也是甲骨学中问题比较繁难、分歧争议较大的一个领域。作者在这一章里，不仅系统介绍了以董作宾为代表的传统理论，也注意介绍了董氏以来的各项新的研究成果，同时还在某些方面，例如在有关甲骨断代标准问题上，还提出了一些新的看法。值得注意的是，作者是从史料学的角度，把甲骨断代看作是一种根据史料内在特点，结合形态分析，参以考古学手段对甲骨材料作相对年代鉴定工作的。根据这一观点，作者建立了自己的断代标准体系。他分卜辞的内在标准、甲骨形态标准和考古学标准三个方面，对卜辞断代作了详尽讨论。仅在卜辞的内在标准一项内，他就提出了祖先称谓、贞人、书体、刻辞、卜辞位置、边缘记事刻辞、序辞和后辞形式、卜兆、验辞、兆序和成套性、兆辞以及事类与习用语等十二方面作为断代标准。这些标准尽管还可以加以归并和补充，但总的来讲，是断代研究可取的。此外，在介绍目前争议最大的所谓“子组”、“午组”等特殊卜辞时，作者除了对各家看法作一般性介绍外，还提出了自己的意见，他基本上依从日本学者贝冢茂树等人的说法，将这些卜辞统称为“王族卜辞”（简称为RFG），对于董作宾的新派旧派分派说，则采取了否定的态度。

该书的最后一章讨论了甲骨刻辞作为史料应当注意的问题。作者认为，甲骨文不是商代的唯一史料，尽管目前尚未发现书写在丝、帛、竹、木之上的文字资料，但从已发现的写刻在铜、陶、骨、玉、石器等上面的卜辞以外的文字看，这种发现不是没有可能。此外，在运用甲骨刻辞作史料时，还应谨防把它们视为档案的看法。卜辞材料可以用以勾划出商代思想在某些方面的轮廓，但并不是可以包纳一切生活领域的典型。接着，作者讨论了甲骨卜辞作为史料的典型性与年代划分问题。然后着重介绍了材料真伪的鉴别方法，提出了辨别伪刻的四种方法和证实可靠的四项标准。此后，作者又详尽介绍了制作拓本、摹本和摄制照片的方法与注意事项，并对卜辞释文中的一些技术上的细节作了论述。最后，作者又对卜辞的复原作了原则性的分析，而以对甲骨学发展前景的瞻望作为全书的结束。

书后的五项附录，是该书的有机组成部分。其中前三项是有关技术鉴定等方面的，主要介绍甲骨鉴别的常识和有关牛胛骨与龟腹甲的比率以及标本的尺寸等情况。后两项则分别从

绝对年代学角度和相对年代学角度，介绍了依靠年历研究和碳14测定确定甲骨材料绝对年代和各期贞问事类与习用语出现的规律等情况。

丰富而又实际的插图和表格，是该书的又一显著特色。根据书中各个章节的需要，作者选取和制作了与内容密切相关的三十三幅插图和三十八个表格。这些插图和表格，无疑为初学者提供了不少方便。

除了上述插图和表格外，作者还在书后附列了征引甲骨著录与参考文献目录，所收论著比较详备，在某种意义上讲，不啻是为读者提供了一个基础性的入门书目。此外，书后索引的编制也为读者检索重要术语提供了方便。

《商史史料》一书是迄今为止西方国家的外国学者以英文撰写出版的第一部系统介绍甲骨学知识的较大型综合性著作。由于它属初创，难免在个别地方还有值得进一步修订和补充的地方。但是，总的来讲，不失为一本较好的通论性入门著作。它的出版，对于西方国家研究甲骨学与商代史将会起到一定的推动作用。诚如美籍华裔学者张光直教授在该书封底的评语中所指出的：“本书将受到学习中国古代历史文化的学生们的热情欢迎和感谢。作为西方第一部系统介绍商代甲骨刻辞的入门书，作为对于以任何语言撰写的同类著作来讲都是最完善的一本著作，《商史史料》在未来的岁月里将是这一领域里的一本标准教科书。同时，学习中国古代古典文献和古典宗教的学生们也会感到它是十分有用的。”

甲骨学作为一门新兴的学科早已越出了国界，正在成为一门国际性学科。它正与埃及的纸草学，古巴比伦的泥版学以及美洲印第安人的玛雅文字学共同构成世界文化的瑰宝，引起世界上越来越多的人们的兴趣，成为各国学者共同研究的对象。《商史史料》一书的出版，充分证明了这点。

最近一个时期，甲骨学在我国台湾省、香港和国外其他地区发展速度都是比较快的，各种新的论著不断涌现，无论在材料的收集整理方面，还是在断代研究、文字考释方面，较前都有长足的进步。《商史史料》一书对此都曾作了比较全面的介绍，在某种意义上讲，也可以作为我们了解上述进展情况的一个借鉴。

（原載《中國史研究動態》1980年第12期）

讀嚴著「甲骨學」後

陳鐵凡

剛到美洲不久，有位青年同道談起現代甲骨學的研究，我就口占兩句打油詩

「熠爚四堂昭學史，
平廬後繼有萍廬」。

遣詞雖頗俚俗，記事却爲實錄。甲骨學四堂是羅雪堂（振玉）王觀堂（國維）董彥堂（作賓）郭鼎堂（沫若），這四位先進學者都有不朽的貢獻，而彥堂實集其大成。我曾在一篇紀念文章中說，甲骨文字之成「學」，也由彥堂先生刱立的。因爲雪堂訓釋文字，觀堂考證史實，鼎堂通讀卜辭，分類纂繫，俱各就其一端，成其輝煌的業績。而彥堂則自發掘、傳拓、綴合……乃至摹寫，每一方面都曾下過精深的探究，所以能得其「全」。平廬是彥老的別號，萍廬是一萍的別號。自從彥老參加中央研究院工作以後，從游之士卒業成家者大有人在，——即此一點已遠勝於羅、王、郭三氏。彥老遷台以後，最得意之筆，就是結識一個成就最大的甲骨學者嚴一萍，無論出之於口，筆之於文，彥老對一萍總贊賞不已。甚至有位朋友常以此譏嘲彥老，「權威的唯一門人」，就是指的一萍。其實，當代名學者高去尋、石璋如、李孝定、張秉權、金祥恒、……乃至青年學者許進雄、許倬雲、劉淵臨、黃然偉，以及最近逝世的屈萬里，陷在大陸的胡厚宣，都曾或長或短的時間追隨過彥老的杖履。不過，就「甲骨學」這一範疇言，一萍所及最廣、所業最專、所得於彥老者也最全。高石諸公參加發掘，躬親測繪坑位、紀錄藏甲的實況，所作高文，俱成信史，屈、李、金……諸公詮釋纂輯文字，功在啓廸。張公的綴合、許倬雲君的殷曆研究、許進雄君的鑽鑿研究、劉淵臨君的傳拓「找對」、黃然偉的編製年表，都有極高的造詣，極大的貢獻，可是他們都還有各自的本業，或者只從事甲骨學某一部分的鑽研。一萍則四十年如一日，除爲生活所需耗費部分精神與時間，其餘的日力全部奉獻於甲骨之學。石璋如先生稱彥老爲專門的甲骨學者，一萍則具體而微董門高弟之佼佼者。除去發掘以外，其餘各部分他都下過相當功夫。雖不及彥老之「全」，所得也至少在百分之九十以上。甚至有些方面還有「勝藍」之勝。上述打油詩之寓意在此，而並無漠視董門其他諸君子之意。

唯其一萍能得其「全」，所以才可以爲甲骨學做一個「總結」。果然，不負衆望，兩厚册一千四百多頁的甲骨學，終於問世了。

過去，甲骨學者也頗有想嘗試做這份工程，有些做了一部分就中道而廢，如朱芳圃的「甲骨學」只完成文字、商史兩編，胡厚宣的商史論叢，只出幾集，而且是由若干篇論文纂輯而成的。島邦男的殷虛卜辭研究，只寫了祭祀、社會兩篇。比較完整的是陳夢家的殷虛卜辭綜述。可是正如他前言所說，他這部書只是「將前人可以成立之說加以整理，根據現有的新材料加以補充和修正，按照我們今日的理解……加以解釋」。而改變了原先想作「一個稍加評論的總結」的計劃。其實，我懷疑這位老宗對甲骨學恐仍未能窺其「全」。我讀「綜述」時，核對拓本，發現不少錯誤，會隨手劄記，可惜近年輾轉播遷，若干劄記都被遺失了。

一萍的「甲骨學」共分九章，最重要的是：

第七章　斷代，一〇八七——一三四六頁。

其次是：

第三章　辨僞與綴合，四〇一——四五七頁；

第四章　鑽鑿與占卜，五〇三——七六六頁。

三章合計爲六〇五頁

由全書章數比例計，爲：九比三；由全書頁數計，則爲：七比三。——其着重之點可以知矣。

甲骨學的肇始，發自彥老的「貞人說」（大龜四版考釋），由貞人、稱謂、世系……而衍成斷代十標準，於是「開闢了甲骨研究的新園地」（陳夢家語）彥老的「甲骨文斷代研究例」，「實自甲骨文出土以來所未有。……文分十項……其全體幾爲創見所充滿」。（郭沫若語）甲骨文字之成爲「學」，當以彥老「斷代例」一文爲第一塊基石。一萍的「斷代研究新例」，則又在這基石的周圍加上厚厚的三合土。

斷代分期最引起糾紛的，是彥老原定的第四期。即武乙、文武丁卜辭。首先發難的卻是董門弟子胡厚宣。他懷疑這批甲骨（即彥老認爲是第四期者）當屬之武丁以前，或爲盤庚、小辛、小乙之物。其次是日本貝塚茂樹，他以爲這批甲骨是屬於爲一個占卜機關「多子族」和爲「王的私人占卜機關「王族」。再次是陳夢家根據胡厚宣、貝塚茂樹

諸說，而把這批甲骨移前爲武丁晚期之物。

一萍的「斷代新例」對以上諸說一一廓清，打了一場漂亮的保衞戰爭。

其實，彥老在「殷曆譜」自序中提出了新舊二派，己經澄清五期說文武丁時期易於令人誤會的卜辭了。

殷曆譜是一件鉅大的工程，彥老由此而爲甲骨學安放下第二方磐石。傅斯年先生說：如果不在甲骨文下過幾年功夫者，是不能作出正確評詁的。（殷曆譜序，大意如此。手頭無此，未能復案）這說法毫未誇張。

民國三十七年夏我到台灣，承蒙前輩高鴻縉（笏之）先生惠借所藏殷曆譜。那是一部初印本紙質極差，我競競業業細讀一過，深感其博大精深。遇到推步曆算，由於學殖淺薄，簡直是茫無眉目。第二年彥老來台，我有當面請益的機會，彥老指示該先讀一般基本的曆算之書，我以生性魯拙，終未得其門徑，只得知難而退，於是就終于停留在「小學」（文字學）的階段。嗣後跟些董門高弟談論，得知在這方面能贊一詞者，似乎也不太多，於是我也就自我解嘲，從此不再侈論甲骨之學，雖有少數解釋文字的短文，除了紀念彥老逝世發表一篇「率與亂」，其餘都存之巾笥之底飼養蠹魚了。可是有位朋友在短期間寫了一部「糾譎」。那年我正好到台中去，偶然在中央書局看到這個油印本，我站在那裡三、四個小時，一口氣讀完。覺得他那犀利的文筆、凌厲的氣勢，確是咄咄逼人。其後看到一萍的「續殷曆譜」（那時我尙未與一萍謀面）才知道「糾譎」所引的甲骨很多弄錯了。

一萍在曆法方面着實下過一番功夫，加上多年研究甲骨文字的根基，於是而爲彥老重編文武丁五——七年的曆譜，確定「文武丁的曆法沒有復古，他繼承新派的年中置閏，並沒有恢復舊派的十三月年終置閏」。彥老地下有知，一定會擊節贊賞的。一萍又排出文武丁祀譜……乃至許進雄的「殷卜辭中五種祭祀的研究」……又爲彥老的第二層基石塗上了混凝土。

最值得特書的是「八月乙酉月食」的發現。這個研究古史時間縱線上的天文「點」，不但修正了交食譜，而且跟古史紀錄的點線聯成一氣。當年彥老親手遞給我「卜辭中八月乙酉月食考」抽印本時，那份由衷欣悅之情，至今猶栩栩在目。那時，我還未見過一萍，但已對其卓越的成就，不禁豔羨不置。

乙酉月食的定點，基於甲骨的綴合。這種綴合工作，彥老固已優爲之者，然而一萍的難能可貴處是他的綴合，俱由拓本，十九無原片的憑借，所以他對這方面的貢獻，自應高估；而綴合甲骨對研究有商文化——當然主要是殷墟的重要性，從本書第三章的闡述，固可推知。這是前此諸家所未及未詳，而有些朋友一味情感意氣用事，懷疑綴合……，應該可以間執其口了。

占卜與鑽鑿的研究，也可算得是新闢的蹊徑。記得張秉權先生對卜兆做過一番研究，其後未見繼起之作。許進雄君由鑽鑿以探究斷代，如果擴大研究，成績定必可觀，這實在是一件令人鼓舞之事。將來在彥老所定十標準以外，再加上卜兆、鑽鑿應該是極爲可能的。

甲骨學由彥老開山，一萍的這部大作，也是以董氏學爲主。然而對於彥老諸說修正、改錯、補充之處也不一而足。從前讀段（玉裁）注說文，常常看到：「先生（指戴震）之說非也」，深爲其「當仁不讓」所感。今讀一萍此書亦然。

當讀這部書的時候，我把陳夢家、島邦男等人的書，也放在旁邊作爲一比較，發覺本書第一、二兩章比前人所述多出不少。——這固然無足驚異，因爲此書晚出了二十年，甲骨文出現若干新資料。難得的是上述所指出的第三、第四和第六三章，如果沒有一萍的功力，別人是不易着筆，至少不能及他這樣的左右逢源。

第八章，甲骨文字的藝術，是一個頗饒興趣的問題。中國書畫同源，甲骨文中象形特別多，本身就是藝術，現在把它集成楹聯、詩詞，構成畫面，當然更有清新的境界。

從前我遇到一些親友婚嫁壽慶，也常愛集契送份秀才人情。因爲甲骨文字不多，駕馭較易，而書法又沒有最高標準，也易於遮醜。而且這些應酬即景，也沒有保留的必要。所以我雖集了一些，留底稿的極少，茲錄其一：

「黃離明（建中）先生古稀雙壽
作育裁多士，高風天下宗，
齊眉同介壽，旨酒祝華封」。

儘管如此，我總覺這一部份研究，在甲骨學中只能視爲一股涓涓的小溪。今本書把它列爲專章，跟其他各章一比，顯得輕重懸遠。

第九章，也似乎草率一點。

由作者的序文得知，這部書的撰作，時間極其迫促。他日再版之時，恐怕仍需一番斤伐之勞吧。以一萍的功力，一定會寫得更出色的。

（原載《中國文字》新一期，一九八〇年）

讀嚴著甲骨學

丁驌

秀水嚴氏一萍近著「甲骨學」已經到我手邊經年，讀過好幾次，早就想寫一篇介紹此書的短文。無奈近年精神不濟，久久不能動筆。於今寫出，也算完成一椿心願。

這部書的作者，凡是學甲骨文字的人，無有不知。我則神交雖久，電話中亦偶爾通話，却從未能有機會見面。「讀其文如見其人」。看書前照片，也算有一面之緣了。一萍師承董彥堂，一直不斷地在甲骨方面有供獻。在彥老生前，發揚老師的學說，替老師捍衛許多無謂的攻擊。在老師仙遊之後，繼續修訂了老師的曆譜，教導後進，又不惜資財，印行有關甲骨學的圖籍，及其他我國的文化寶藏。末世人情之中，非常難得的。以嚴氏的豐富知識與經驗，來寫一本研究甲骨的基本教材，是「得其人」了。

統述甲骨研究的書，前此只有陳氏「綜述」，出版於二十五年前。陳氏在當時青年有爲，想像豐富，「綜述」一書也算是一本相當有用的基本報導。自從那時到今日，甲骨研究，已有很大的改變與進步，陳氏的書已感落伍。嚴氏此書正好能補其缺點，爲我們修正許多過去的錯誤，報導許多新的內容。雖則此書一部份是彥老生前所言所寫的見解，一大部份也是嚴氏及若干同行的貢獻。彥老思想散見各處，今得歸納成一有系統的著述，加上新的知識，爲一個初學的人，實爲「大成」。此書作者的態度謹嚴，內容分配也完備，平衡，不是容易做到的。

這本「甲骨學」分上下二册，共九章，凡千四百餘頁。挿圖極其豐富。內容第一、二章大致的分配是認識甲骨，甲骨的歷史，出土與傳拓、著錄。可以說，此二章是周到詳盡。從識龜到實物的研究的準備工作。我們學甲骨文字的人，能看見實物的已經不多，能眞正撫弄實物，研究實物的，就很有限了。發掘所得，都爲研究機關所收藏，或在海內外私人及博物館手中，不是每一個人都有緣可以看見的。因此有些人雖然研究甲骨，實則對於部位完全不知。此二章在啓蒙，使研究的人，一開始就能上正確的軌道，是不可缺的。其次書中述殷商疆域，出土的基址情況，都有最近發掘的材料在內。「著錄」一段，記載每書源流與內容，頗爲詳盡。其中敍述傳拓的方法，有益於初學的人不淺。

關於殷人所用的龜的來源，大致應補充一點，即龜多是國產，少數爲遠方貢品。秉農山師所訂的龜名已經卞美年改訂爲GEOCLEMYS。一九五五年楊鍾健又改稱CHINEMYS，乃是中國最普通的一類。本人會企圖用龜甲各部分的比例分龜的型式似乎尚可行。據此方法，龜有三種。這並非生物學上的分種，而是爲研究方便用的分法而已。

第三章辨僞與綴合是整理材料的一個重要手續。辨僞一項以前是一個嚴重問題，目下僞造的甲骨大概不太多了。綴合一項雖然看來好像只是技術問題，其實這種工作包括全部學問在內。可以拼合的偶然性也不算小，故此還要看做此工作的人的眼光與經驗。經驗是做來的，眼光却不只是技術而已。嚴氏先後綴合甲骨甚多，眼光銳利，經驗豐富，對於基本方法的敍述，是不可多得的。

第四章論鑽鑿與占卜。於鑽鑿的工具、方法、形式，分類敍述，極爲詳明。以前研究鑽鑿的不多。因爲一般學者，多以拓本爲研究材料，而拓本無反面的拓印。手中有實物的，所有也很有限，又多是斷片殘版，當然說不上研究鑽鑿了。其占卜一節討論占驗辨兆的方式，是前此學者未多注意的。本人會試爲殷人占卜方式作過研究。因材料不夠，沒有敢發表。後文再略加敍述。書中此章佔二百六十多頁，挿圖甚多，印刷上陳，可供我許多「紙上談兵」的研究材料了。鑽鑿的用途對於斷代是很有功效的。很明顯的文武丁時代的認定，不可不歸功於研究鑽鑿的輔助。

嚴氏分民間的、侯國的、王室的三類卜事甲骨，乃是水到渠成的歸納，正確無誤。但不要誤會以爲所謂「多子族」的卜辭也爲嚴氏所接受。我以爲在王室之中，除了王要卜問之外，當然可能王母、王兄、王的叔伯姑嬸子女也可能私人卜問，而以史官貞人爲他們辦理。這些私人之卜，恐怕不見於王室檔案裡面的。只有待將來看是否會有如此的甲骨發現。至今還未見有確切不移的證據。

由第五章起，方是甲骨研究的主題。第五章識字，釋字，第六章通讀句讀與甲骨文例，可以合而觀之，是研究的初步。從認字到通讀，是聯貫的步驟，又是交互爲用的。有時由讀句而識字，有時由識字而知句。甲骨學認字之難是不容忽視的。我們由說文回溯到金文，方到甲骨文字。知道由始而終，由終推始，都不是簡單的。因爲文字隨時間而變，不但形體有變，即書寫的方法，及其代表的意義都會變。因此研究的人，不但要有文字學的根基——說文與金文——而且還要明瞭文字的變化。人的思考能力，一面是邏輯，一面是憑想像。想像力不可沒有，太豐富的話，就會「穿鑿」，甚至無中生有了。前人如葉、郭、陳諸大家，都是想像力有些過份，有時近於李濟之先生說的「猜謎」。若完全沒有，不會有新發現。彥老令我佩服的地方，就是他能控制他的想像，他可以假設而不空言，他作的斷語，都是經過鄭重思索、校勘之後，方自爲之。所以不會有不穩當的結論。我們後學的人，連我自己算上，這層控制功夫，仍不到家。嚴氏所引的書，都是極爲「穩當」的典籍，近人著述，只見李孝定「集釋」。此書收容字數最多，又備錄前人學說，亦加按說，可以做一本好字典及通檢式的工具書。日人島邦男的「綜類」，雖有誤筆誤字脫漏的缺陷，用的人只要細心校閱，仍不失爲一本檢字句的書。

通讀一節列舉文例，共九十式，集其大成。究竟文例與時期的關係如何，則尚待更詳細的分析。此章列舉各式，均有詳圖可以供研究的人初步檢討。因爲此二章爲研究甲骨的基本方式，故我特爲節要附說於下：

認字的方法有五：

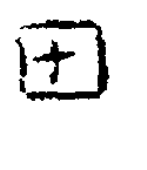
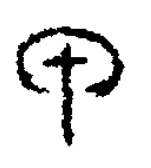
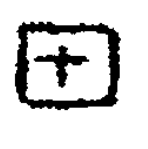
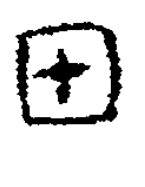
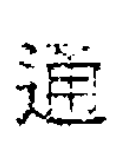
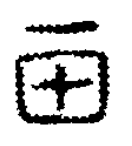
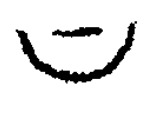
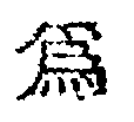
一、由文字演變的方式，與金文與其他古代文字比較以得識之。

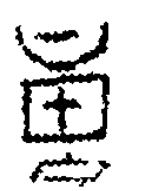
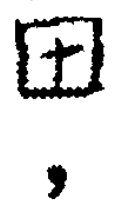
二、由文字構造，推測字之變化，益以聲音訓詁相互爲用以得識之。

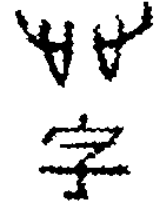
三、由契文本字字形，及其所出的辭句中比較而知。由綴合而得全的字與句，因而得識的字，亦屬此例。由契刻文例，亦可識字辨義。

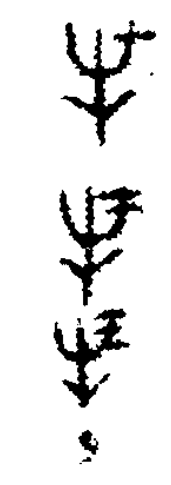
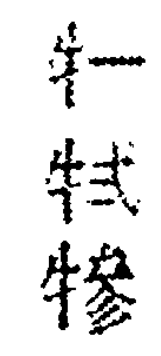
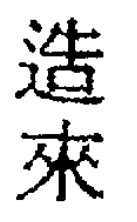
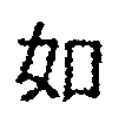
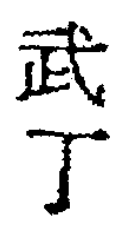
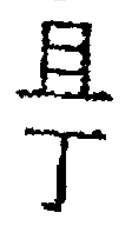
四、由遺物印證，而得知其造字之由，因而識之。

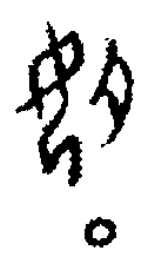
五、契文特有之字如合文、疊文，由已知之契文知之。

例如上甲，。十乃甲。金文出之契文。契文（鄙竟實爲甲微合文因爲口音，迺微。半口爲匚，讀如報。此並非本人發明，已有人說過），上甲微乃是合文，一爲之省。爲上字，會意。其下劃曲，上劃短，有別於二字（二）。

字見契文，簡爲，釋爲上甲，由契辭中祭辭多句參證，知其不誤。

字釋闔，讀契辭文從字順，不可易的。其中口乃音之源，可見上甲微之釋，不是太穿鑿。韋字讀音同。

，慘，實可以看爲合文，亦可以看爲 單字的構造來源。但，三白闔，就不會變爲單字，仍是合文。他如，武丁，，康且丁，妣壬妣癸亦是合文。後一合文，不但合，而且省借，妣字省而借用於壬癸二妣。

有些字似爲合，而實乃寫字體例有變，如二期把王妣名平列之類。又有因美觀整齊而拖長的寫法，如嚴氏所擧的莫字步字。又有因節省時間地位而簡的字，如帚婦之變成。

由遺物爲證而得識的字，如丁山的「死」字，狀「棺」形。烝字奚字都是其例。我想甲文亞或當釋墓，亦未可知。

由辭句通讀而認識的字頗多。不過這一法也易生誤謬，因爲辭的通讀牽涉契文的行文体例。不知文例，強求通讀，必有錯認的字。

關於契文文例，嚴氏詳擧之例凡數九十，各期甲骨取例分佈如表：

例號／期	骨	甲	數目
一	一—一四	五七、六〇—八四	四〇
二	一五—二〇	八五	七
三	二一—三二	五八、八六、八七	一四
四上	三三—四〇	五九、八八、八九	二四
四下	四一—五二		
五	五三—五六	九〇	五
共數	五六	三四	九〇

周鴻翔亦著有對貞文例，內容豐富，惟例亦太瑣細。

契文文例一般最普通的是在材料左邊的左行，在材料右邊的右行，除了單行直行上下，不能分其行文左右外，其餘多行的契辭，大都準此例。一版多辭，由下而上，順貞問次序而左右行，亦是常情。龜版以千里路爲左右分界。嚴氏第九十例最爲標準，第八十六例亦然，惟此例中下方一對獨反，辭由甲緣起，當然只能內行了。

契刻貞辭何以分行，何以有此文例？㈠是受材料大小性質所限制。因爲材料本身的形狀性質控制鑽鑿的數目，間接決定貞問的次數，與契辭的頻率。㈡是受契辭文句長短字的大小的限制，或單行或多行，故生左行抑右行的問題。㈢是受卜事多寡貞問次數的限制。㈣是卜事本爲對偶性質，契刻亦力求對稱，或是爲要美觀，左右對稱，自然如是，上下對稱，亦未嘗不可。㈤是受先後契辭的影響，先契的佔去地位，後來的或只能隨遇而安了。㈥是因在甲邊緣的關係，凡邊起的，當然只能內行。

文例數目似乎是無限的，其實不然，因爲可能有的例，受對偶的限制，是$\chi 2$的函數，x爲條件數目。例如問一件事是與否，卜兆有是否，就是兩個條件，2^2等于4，卽問是兆是、問非兆非。問是兆非、問非兆是。前二者仍是正，後二者爲反。如問失物歸，失物不歸，卽是此類。但若問爲失物歸在東，失物歸在西，失物不歸，就有三個條件，卽是失物歸否，東西方面。可能的數目有2^3等於8。在此數上要加上兆示的是否，如問遠人不歸于北，兆示爲否，則可能有兩種意思，卽遠人歸，遠人自北。可能的數就不止8個，而至少是2^4等於16。既有如此多的可能湊合，契辭要顧到的話，文例必很複雜的。更進一層，甲骨上每一骨一版不一定只貞問一件事，不同的事同在一版，在貞問過程之中超過預期次數，一版不能全容，勢必另用新版，或爲經濟起見，強契貞辭於夾縫間的事發生，必須用界劃分辭。事後亦有修訂文字改正錯字的可能，說文例必須把這些偶然事件剔出，不然不易整理出一個系統來。我以前曾做過文例研究，所不能做的就是我沒有材料。嚴氏的九十例，對我是一個很大的幫助。初步過目之後卽發現，一期龜版上端一對貞辭是左者右行，右者左行，二十一例中有十五例如此（統計χ^2等於2,85），因此懷疑這種情形是「有爲而發」的，不是偶然如此，後來又發現下端一對，也有類似的反例。最後方明白契由邊起，只能向內行，故爾文例一端還有許多研究的必要。研究的人必需看反面的鑿痕，契刻的辭與事的性質、序數、甚至兆示，才能窺其卜問判決的眞正方法。

今將第一期嚴氏書中六〇——八四的二十五例分析如下：

一、六〇、六一、六三、六六反、七二，五式契辭皆是單行。

二、六五、六八、七一、七五、八二、八三、八四、八七、八八、八九，契辭中有單行、多行夾雜。

凡一辭多行，其對貞不一定非是單行不可，故各例當視如一例。

三、多行契辭通例是左方左行，右方右行。上端一對反行，卽左而右行，右而左行。

四、二十一例之中有十五例如是，故此上端一對反行應視爲通例，變例爲：

甲、一版辭少如六九，契在版中部，按通例左左、右右（丙八）。

乙、一版辭少如七〇、七七、契在版中部，二辭皆反行（丙四五）。

丙、一版有六辭如七三，全部反行，包括上方者在內（丙六一）。

丁、一版全部契辭皆按通例，包括最上最下者在內，如八四式（丙一九七）。

以上四種格式規則，似可範圍大部契辭的文例。其不完全符合的緣由是因爲㈠我們不知道讀兆的確實方式，左行右行可能與兆象，貞問的次序、契刻的部位，字數的多寡字形大小有關。有王固辭的話，什麽例似乎可以不管。㈡我們不知道契刻的左右行與貞卜的事件有無關係。㈢我們還未做更精細的分析，故只能枚擧不同，例式太多，就難以爲例了。

嚴氏第八十一式共有十九辭，上方一、二兩辭，下方五、六兩辭反行，其餘都按通例而行。惟其最下十八一辭，似乎是合通例，却無對貞辭。此外十七、十九二辭也沒有對貞。契刻之時因爲第三與第四辭是多行多字，第三辭又有王固辭在其中，佔了許多部位，以至第九、十一對貞上下參差。以下各辭就是在塡空，不能講求部位，如十九一辭夾在第四與第五之間，就無例可言的。第十二辭「辛酉卜㱿貞羽壬戌不至」。乍看是負的，契在右方不合，其實此「不」字乃人名，故是正問，也足以說明文例可以證釋辭之

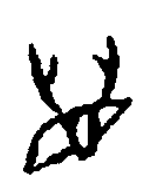
恰當也。大龜七版中第三版，丙七十六版，都是一例而行。

卜兆如何辨認，爲衆所欲知，嚴氏書中有詳盡的討論，載於第四章中。文例或與卜兆有關，故此在此一述。嚴氏研究結果，卜兆大致有十式。兆爲一直及一橫綫所成，橫綫可以直平出，直向上，直向下，頂端上彎，頂端下彎，在基部分歧，在頂部分歧。綫有曲折，線的寬度、寬甚，看得清，或不甚明，由於龜版裂開，使裂紋的左右有高低的差異，或無差異，似乎都是古代卜法辨兆的根據。上彎爲仰，仰者有吉凶之別。下彎爲俯，俯者似乎無甚用處。嚴書七三三——七三五頁所擧的，無論正反，都只見「仰」，不見言「俯」（一例係嚴據胡熙校改仰爲俯，看來胡氏錯了）。契刻龜版亦有卜兆契辭，今檢數版視之，作初步研究，即知契文的卜兆只有上彎，平、下彎三式。上爲肯定，平爲無斷，下爲否定（不是吉凶，只是肯定或否定命辭所問的）。兆不明白稱爲「不命」，契曰上告，或吉，則不知兆象爲何。余所見者甚少，故不能作更詳盡的揣測。「不魯」即「不旅」也，「不旅天子之命」之「旅」。 爲魯字之省，見拙作「不 命」文，可參考甲三〇〇〇版即知。

例乙七三三六，丁亥卜𡆥貞　于滴（正問）。凡契全辭即爲一套卜問之始。

苜不𡿧于滴　（反問）。

王固曰勿𡿧　（固辭）。

苜，疑即後世之苘，「工典其苘」之苘。𡿧象二劍交叉之形，劉幼丹以之爲襄字，𠻱字初文，釋爲禳，滴即今漳水。

正問之辭			反問之辭		
一卜	⺊	是	一卜	⺊	是
二卜	⺊	是	二卜	⺊	是
三卜	⺊	是	三卜	⺊	是
四卜	⺊	是	四卜	⺊	是
五卜	卜	不定或否			

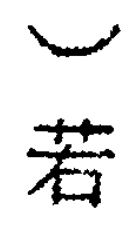
以上四卜無論正反問，卜兆上彎都作肯定，故𡿧亦是，不𡿧亦是，四比四無決定可言，第五卜正問兆，橫平出，略向下，王看兆而固曰「勿𡿧」。

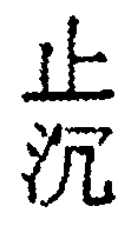
例乙六八八九「辛巳亘貞」以下爲受年之事，正反問對貞，固辭爲「在苜酒來」。

正問辭在右方			反問辭在左方		
一卜	卜	否	一卜	卜	否
二卜	⺊	是	二卜	⺊	是
三卜	⺊	是	三卜	不魯命	
四卜	不魯命		四卜	⺊	是
五卜	⺊	是	五卜	⺊	是
六卜	⺊	是	六卜	⺊	是
七卜	上告				

以上一至六卜都不能決。到第七節只有「上告」二字，并無卜兆。想上告乃是「告天」之意。王固「在苜酒來」，可見毫無決定，七卜而罷。

例乙七一二二，同時貞問兩件事。

「亩幽沉（ ）出黃牛。勿善曰上沉（）若」。（上）

「貞王曰止沉（）。勿曰止」。（下）　（乙）七一二二

「善」當是「祥」字　「王固曰勿口」（在版反面）

正問在右				反問在左			
一卜	上辭			一卜	下辭	卜	否
一卜	下辭	⺊	（固辭在此）	一卜	上辭	⺊	是
二卜		卜	不定或否	二卜		⺊	是
三卜		├	不定	三卜		├	是
四卜		⺊	不定	四卜		⺊	是

此交互對貞例，先以上下二辭爲對，繼下上二辭爲對。

正問皆「不定」或「否」，反問皆「是」，故王固爲否定式。

例乙六八八一「辛巳卜亘貞 岳求來歲受年」（右）

「貞來歲不其受年」（左）

左		結論	右		結論
一卜			一		？
二卜	├	是	二		？
三卜	├	平	三	┤	平，兆弱
四卜	不魯命	無兆	四	┤	是
五卜	⺊	平	五	不魯命	無兆
六卜	├	平	六	┤	平，兆弱
			七	┤	平

此例結論不知，惟「不魯命」三字見於左五、右四卜，并非卜已得吉，「不再命」也。

例合二四八「辛巳卜爭貞弜不其受年」

「貞弜不其受年」

左弜受年		弜不受年	結論
一卜	├	⺊	不受
二卜	├	├	無
三卜	├	├	無
四卜	⺊	⺊	無
五卜	⺊	⺊	無
六卜	⺊	⺊	無
七卜	├	├	無
	上告		
	上告		

右戠不受年		受年		結論
一	┤	一	┤	無
二	┤	二	┤	受年
三	┤	三	┤	無
四	┤	四	┤	無
五	┤	五	┤	無
六	┤	六	┤	不受年
七	┤	七	┤	不受年
八	┤	八	┤	不受年

八卜 乚　受年
二月
「王固曰吉眔𠃢受年」「𠃢受年」（驗辭）萑入百五十　貞戎戎

兆吉似可以爲決定之因素，結果不知。

以上所舉各例爲十數年前寫下之紀錄，或可供一參考。大致正反問皆得同一兆者，卽無決定，必要再卜，至正反問兆示不同爲止。

契辭的釋讀有些小困難，雖與宏旨無關，却很有趣味。契字的刻工大概不太識字，惟刻錯字在所不免。所以辭中有重文、漏字、漏筆、倒字之類。一般都可以說是誤刻，惟有把「王」字倒契，把王名顚倒，如「且乙」契爲「乙且」，是我人今日思想所不能容納的錯誤。然而契文中不乏改字、補字的情形，若此「王」是誤筆，恐怕老早就改正了。所以我想當時倒字必有什麼意義。我們今日寫倒字是迷信，「倒」諧「到」音，有「來到」的意思。把「王」字寫倒，也不是迷信可以解釋的。嚴氏舉出一個有趣的誤刻把「亡災」「玆用」刻成「玆災」「亡用」，「災」「用」二者形近而誤刻是可能的。不知是寫字的人寫別字呢，還是刻字的人自作聰明呢？有一個倒字恐未有人提過的是「工典其𦉢」的「𦉢」字，乃是倒轉之鼎釜之類，只，鼎也。又契文常見的「㞢」字乃是倒「帀」，「帀」有「一周」的含義，正合「㞢」爲周祭的性質。

文例之外，契文似可加一「字例」。譬如契文中有許多字是加女旁的，我們通常以爲加女的指性別，其實可能不是這回事，嚴例「子某」卽「婦某」，可見加一女旁更爲明白而已，由此我們可以窺見殷人稱呼是以輩份而言。凡長一輩的都是「父」「母」，平輩不論親堂姑表都是「兄」。小輩一律是「子」，直呼其名。沒有弟妹叔伯等親屬稱謂。臣下呼名，或直用方國之名名之。又有些字，多加一「口」，很多如此的字，不過是指人名而已，刻契或寫契的人用簡筆也不甚一律，例如同一個「宅」字（宀）可以簡爲∩，與「六」字相似，又可以簡爲ナ，可以錯認爲「左」爲「幼」之省。要校勘多版，方知爲「宅」之簡。帚姼的「姼」字，也是簡成「多」、「夕」。如不讀許多卜契文，一定難明。

董先生及許多研究者，把各期文字演變畫成表格，也是一件重要的事。我們應當出版一本文字演變的字典，以補現有字書的不足，一面列各期演變之跡，一面注入簡体的形態。嚴書有數例而已。事實上能圖其演變的字，本不太多，但也在數十個字左右，其他字先後有不同之處，也可以搜集影印成爲參考資料，這也可以做爲今後努力的方向。

本書第七章斷代，乃是甲骨研究的一個目的。只因斷代一事牽涉整体，所以好像我們研究結果，無論出發點如何，歸根結底仍到斷代一事上去。這是研究的成果的總結，意見不一，在所難免。癥結在㈠董氏的曆譜。㈡文武丁復古，㈢貞人的解釋。嚴氏繼承董氏的學說，修訂曆譜，根據董氏的斷代十項標準，一一提出文武丁時代的證據，因此與人發生論戰。我們本見仁見智的看法，可以說董氏十項標準是不可移易的，而且還要加上一項鑽鑿，變成十一個標準。對於董氏的曆譜曆法，根基也不能動搖。我承認王年或可上下，但也要顧前顧後，不能任意而爲，這也是董氏嚴氏一再提出的全体看法。我很明白這個「看全体」的原則易於陷入循環論證的誤謬，若我們細讀董先生的文章，便知道他的全体看法非常謹愼，沒有犯循環論證的毛病。我們下結論，也必須把這層可能發生的危險記在心頭，可不致誤的。對於貞人的研究，可以說理論多於證據。還要等更多的甲骨出土、研究後再說。我們當然也可以就目前所知，敍述我們的見地，以後待證。貞人可以是方國的人供職於朝廷，故不同的人，有不同的名。貞人也可以供職兩朝，甚至三朝。貞人爭，一定在二期中供職過的。貞人扶不是一個平常貞人，可能有他的政治背景（例如他是王的兄弟，或是巫覡派的領袖）。貞人𠂤可能是官名。貞人子可能眞是王子。武乙時代政治上有波動，反應在卜辭的体制，祀祭的情況上面。文丁之末想必也有大變動的。

嚴氏此章是用他自己的供獻爲例證。一是證文武丁時代，主要是文武丁曆譜，㞢祭及文字的風格，益以許進雄的鑽鑿研究，更由遺址分析出土的遺物，證其爲文武丁時代。二是對貞人問題的討論十分詳盡。例如扶的時代，與𠂤的非四期不同的鑽鑿型態。

由嚴氏此章提出的內容，我們可以看甲骨研究，是一個多變數的研究，或可設法以數量求一解答的方法。多年前我曾提出以電腦分析甲骨的文字。周鴻翔亦曾提及他用電腦爲甲骨文字的索引，其法未知其詳，但與我的想法似乎不是一件事，今以一個例來說明我的想法：

貞人夾是那一期的貞人？書体有三種，甲式乙式丙式。那些貞人有甲，那些貞人有乙，……？這些貞人A、B、C，又有幾種不同的書体？（如戊式庚式）又有那些貞人有庚式？這些簽名爲夾的是否是一個人呢？如不是那一式簽名，有那一些卜辭？如果把卜辭照我們想的扶甲扶乙扶丙分開，再研究各組卜辭中十項標準的每一項的一致性如何？再看鑽鑿是否可以吻合。如果結果不滿意，是不是這個假設有誤？我們又要以卜辭中可能有的根據找曆譜上的配搭。各辭中每一個字的分佈情形，寫的方法，用字的方式句法……可見我們實在是研討幾十個未知數。或可把這幾十個未知數按一個假說分組。雖然如此，也會有十餘組之多。從而求它們的關係，是非用電腦幫助不可的，憑我們自己一一分辨的話，十年八年還弄不清的。用電腦最困難的，是如何把契文中事實變爲符號，還要把全部卜辭、鑽鑿、文字……等等做成索引。個人財力精力有限，勢非一個機關從事於此不可。這電腦做法，就是董先生的「看全体」的摩登辦法，並非我標新立異也。

本書第八章論文字藝術，乃是書法家畫家所創的文字欣賞，有普及對甲骨文字認識的作用。甲骨文字可識者數目有限，用來寫後人文字，不得其全，勢必書者用文字學的知識去擬想一個契文中從來未有的字。這種辦法有時是很危險的。我在十年前大膽寫了一幅「長發」，就犯了這種毛病。這張字幸虧無人看到，將來如果我的朋友看見，還求他們原諒才好。嚴氏集了前人書寫的文字數十幅，製爲圖版可以範式。

最後一章作者以其尊師之文爲研究的展望，提出今後拓印本當附背拓一點，以顧及鑽鑿的研究。甲骨尚在出土，我們沒有機緣窺其全貌，勢必借重他人的研究及種種工具書籍。將來的研究者必當㈠培養文字學基礎，由說文與金文入手。㈡嚴謹地整理資料，

求其客觀無誤。㈢了解人的心理，窺測古人一字一句的用意。㈣了解中國社會制度的發展情形，不陷於一個格式，不受範於一個主義，不要削足就履才行。

我鄭重推薦這本書爲大學教本，爲治契者的參考。

一九八〇、三、七日于洛上集

（原載《中國文字》新二期，一九八〇年）

读《美国所藏甲骨录》

陈炜湛

美国加利福尼亚大学副教授周鸿翔先生编著的«美国所藏甲骨录»（一九七六年加利福尼亚大学出版），是一本值得介绍的好书。

我国殷墟的甲骨文字自清末被人发现之后，许多在华的外国学者、传教士也想尽办法采集，购求，几十年中流入海外的甲骨文字究竟有多少，一向无法精确统计，只是从已著录发表的材料知道，收藏我国甲骨的各国中，数量最多的是日本，其次是加拿大。现在读到这册«美国所藏甲骨录»（以后简称«美录»），乃知美国也藏有大量甲骨，仅次于日本和加拿大。在中美恢复邦交之后读到此书，得以较全面地了解甲骨文字在美国的流传情况，对于研究或关心甲骨文字的人来说，确是一件值得高兴的事情。

据作者自述，作者于一九六五年和一九七〇年两次在全美旅行，考察美国各地博物馆、图书馆所藏甲骨，从十五个公家机关所见一千六百余片甲骨中（如包括伪片，则将近二千片）选拓六百八十一片，编为七百号（其中十九片反面有字，每片编为两个号，故拓本编号为七百），乃成此书。这六百八十一片甲骨，选自十一个收藏单位：

一、卡内基博物馆（宾夕法尼亚州匹兹堡市）四百零七片（六片反面有字）

二、哥伦比亚大学东亚图书馆（纽约）六十六片（一片反面有字）

三、弗里尔艺术陈列室（华盛顿）一片

四、哈佛大学皮博迪博物馆（麻萨诸塞州剑桥市）五十五片（五片反面有字。此馆所藏约九百片，大多属细碎之小片）

五、国会图书馆中国朝鲜部（华盛顿）四片

六、纽约市立艺术博物馆（纽约）十一片

七、历史工艺博物馆（华盛顿）二片

八、自然历史博物馆（伊利诺斯州芝加哥）四片（两片反面有字）

九、普林斯顿大学图书馆（新泽西州普林斯顿）一百十五片（五片反面有字）

十、威廉·洛克歇尔·纳尔逊艺术陈列室（密苏里州堪萨斯）十二片

十一、M·H·迪杨纪念博物馆（加利福尼亚州三藩市）四片

本书可以说是对美国所藏甲骨一次全面的、综合性的著录。其著录方法，是（一）以甲骨所在机构的字母为序；（二）每一部分藏品内，以该机构的收藏号为序，并附有本书拓本号与收藏号的对比索引，便利翻检。从这里，我们既可看到各博物馆、图书馆的收藏情况，又可看到美国全国的收藏情况。卷首除有«导论»介绍美国人收集研究甲骨文的情况、对有关拓本的若干问题提出其自己的看法、扼要介绍书中所包含的重要材料外，还附有作者«关于美国所藏甲骨的报告»一文（此文曾于一九七一年在洛杉矶太平洋海岸亚州研究年会上宣读），详细叙述美国十五个公家机关所藏甲骨的来源、现状，以及他所见所闻的其它公私藏家的收藏情况（见附表）。无论«导论»或这篇«报告»，对中外读者无疑都是有益的。

«美录»所收甲骨虽然有相当一部分已经著录过，但仍具有重要价值。如本书中分量最大的一部分——卡内基博物馆所藏甲骨，本为方法敛（Frank H·Chalfant）一九〇三至一九〇八年间在中国所得，方氏的摹本已著录于«库方二氏所藏甲骨卜辞»（以后简称«库»，白瑞华校，一九三五年商务印书馆石印本）。但由于摹本不精，真伪混杂，致使谨慎的学者们对这批材料存有戒心，不大敢征引。周鸿翔对这批实物进行两次考察之后，剔除了伪片，且参以«欧美亚所见甲骨录存»（饶宗颐著）和«北美所见甲骨选粹考释»（李棪著），加以缀合，使这批材料更利于研究。将«美录»的拓本（1—413）与«库»的摹本（971—1408）相校，真伪分明，优劣自见。现在可以确知，«库»这部分摹本全伪者有九片：即971，973，977，978，994，1080，1082，1209，1226；部分伪者二片：即976（与972缀合为«美录»1），983（左上角伪）；疑伪者一片：即1192（此片亦不见于«美录»，就行款、文例、风格而论均似不伪）。其余均不伪。«库»物中不伪而摹本错误者则比比皆是，赖«美录»得以校正，其例如：

«库»983（«美录»8）辞曰：“丁亥卜，王出，今五月。”摹本夺“卜”字。

«库»1017（«美录»43）卜辞“贞：不雨，在三月。”“在”字摹本作十，与七相混，而拓本作十，极清楚。

«库»1041（«美录»69）摹本与拓本差异颇大，且无贞人名“行”。全辞为：“乙亥卜，行贞：王宾祖乙，翌日亡尤，四月。”

«库»1048（«美录»76）卜壬，误摹为阝工。

«库»1050（«美录»78）摹本右下侧癸巳、癸卯二贞旬卜辞均遗摹“卜”字。

«库»1086（«美录»112）摹本无法通读，视拓本则为一辞，曰：“丁丑卜，贞：王宾卜丙（二字合文）岁，亡田。”方氏误摹“卜丙”为“丙”，又误“亡”为“卜”。

«库»1093（«美录»120）乙丑之丑夊摹本误为夕（D），若无拓本为证，此片几疑为伪。

«库»1125（«美录»142）癸亥一辞摹本夺“亡”字。

«库»1193（«美录»198）从羊之闬（牢）误摹为田，五牢遂成“五上甲”，不可通。

«库»1205（«美录»210）“癸丑”误摹为“癸午”。原辞为：“癸丑卜，贞：翌甲寅酒上甲☐衣亡☐”。

«库»1260（«美录»263）“其”误摹为“日”，“九月”，夺“月”字。

«库»1295（«美录»298）“衣日”，误摹为“衣三”。

«库»1305（«美录»308），下方有“贞”字，摹本无。

«库»1329（«美录»333）摹本将罕字之下半丁，与上下二辞的分界线混而为一，误作厂。

然也有拓本不清而以摹本为优者，如«库»1006，1027，1049（«美录»77拓本失去右半部分），1074，1075，1079（«美录»107拓本显示此片有字处已断裂），1108，1117（«美录»137拓本无“征雀”二字，似已刮去），1131，1129，1229，1386等，约十余片，数量不多。其所以如此，可能是因为这些甲骨经过几十年的转辗流传，有所磨损，以致字迹模糊，拓本反不如早年之摹本清晰。

本书所收芝加哥自然历史博物馆的四片，其见于«库»的也有二片，正反面均有字：

«库»2178（«美录»559，560），正面“弗其☐”，拓本缺一块，仅存“弗”字；反面，拓本之“癸卯卜宾”，摹本夺“卜宾”二字；

«库»2176（«美录 561，562）正面伪，反面亦以拓本为优。

至于本书所收普林斯顿大学藏品一百十五片，摹本亦已著录于方法敛的«甲骨卜辞七集»；大部分照片及小部分拓片（二十一片）分别著录于白瑞华的«殷墟甲骨相片»与«殷墟甲骨拓片»。以«美录»校此三书，总的来说，以«美录»为优。

«美录»第414—480，计六十六片，乃纽约哥伦比亚大学东亚图书馆的藏品。据作者自述，他在一九六六年见到该馆收藏的甲骨七十三片；但一九七〇年再去时，仅见六十六片（甲五十，骨十六），其中四片又为一九六六年时所未见，实际上失去十一片（甲八，骨三）。本书所收六十六片，除五片（463，471，478，479，480）未见著录外，其余六十一片均已著录于商承祚先生的«殷契佚存»（以下简称«佚»），当即施密斯于一九三二年在北京所得的一部分。二者相校，拓本各有长短。但见于«佚»的六十一片，实际上只有五十九片，因为«佚»287一片龟甲在«美录»里已分成了三片，即«美录»423，443，和461（见附图一）。其所以如此，固然是因为龟甲易裂，原物已一分为三，但也不能不说是由于作者一时的疏忽，以致未能将此已碎之龟甲复原。又，«佚»所著录的施密斯所藏甲骨共六十二片，其中257，312，313三片却不见于«美录»，殆即一九六六年以后所遗失者。

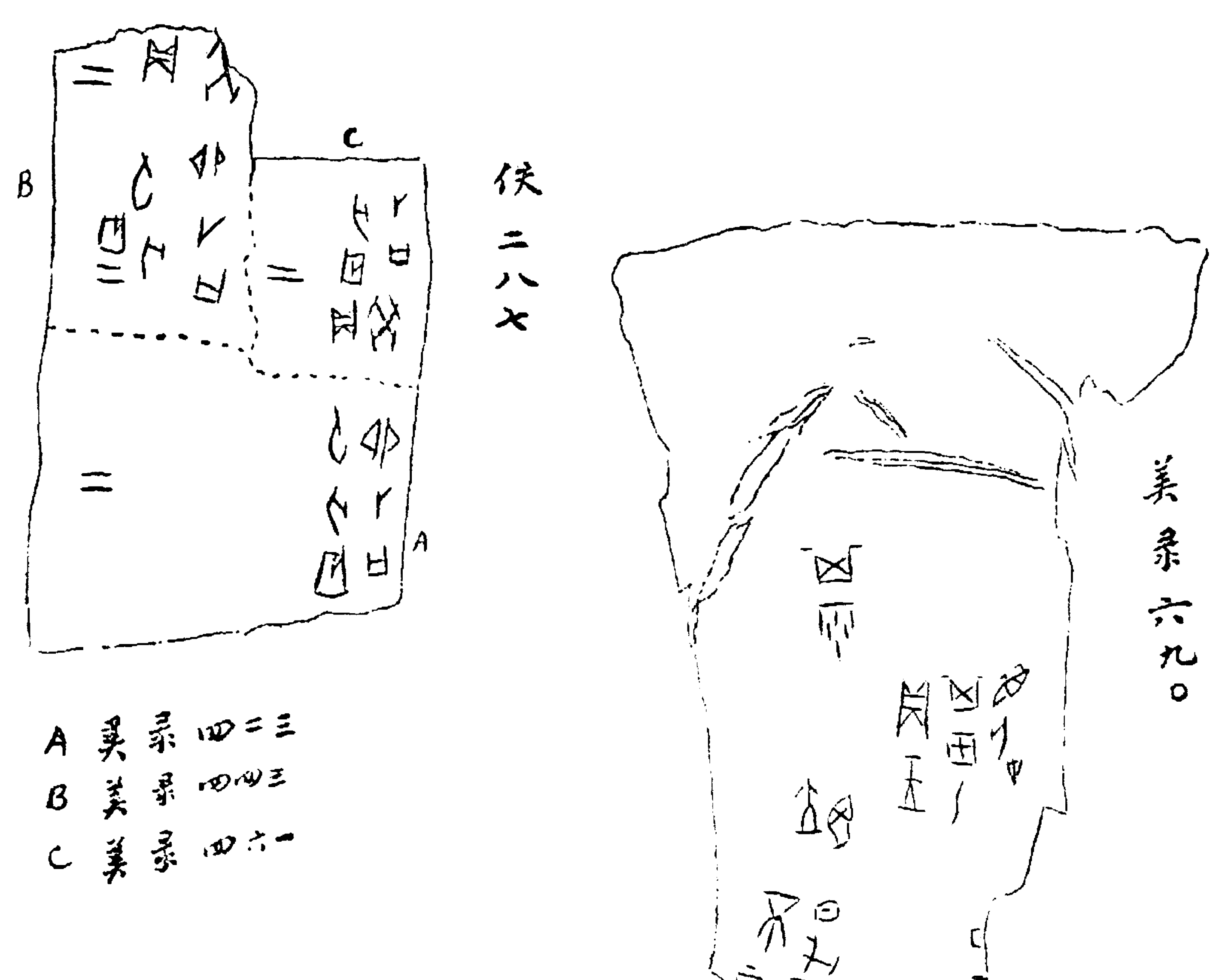
除与上述诸书重见者外，«美录»所收拓本中，卡内基博物馆的六十片，哥伦比亚大学的一片，哈佛大学皮博迪博物馆的十二片及普林斯顿大学的一片，共七十四片，也已分别著录于«欧美亚所见甲骨录»与«北美所见甲骨选粹考释»二书。

表面看来，属于本书第一次公布的甲骨资料似乎不足百片，但以拓本而论，六百八十一片的七百个拓本中，已发表过的却仅一百三十余片，大多数均是第一次发表。这于研究甲骨文者的帮助，是不言而喻的。

就内容而言，本书也不乏珍贵的资料，如«美录»1，是北美所藏最大的一片，也是流散到欧美的尺寸相近的少数几片之一，它是反复用于贞雨的。左侧有习刻的干支表（从甲子

我想，研究甲骨文字的读者是会一目了然的。

一九七九年四月　于中山大学



到己巳），右侧中部为伪刻。《美录》10，11，是一片肋骨的正反面，是已发现的四片肋骨中最大的一片。其它三片兽肋骨（见《佚》426，427，518）所刻均非卜辞，而此片所刻乃十条卜辞，均短小，文法又异于一般。《美录》18关于𢀛风的记载，也颇难得，仅《殷墟书契续编》卷二第十五页第三片与之相似。《美录》34，81，则是一套牛胛骨卜辞的第一版和第三版，记载着杀侯爵以祭先公先王的重要卜辞。《美录》40，是牛胛骨的中间部分，骨面上不规则地刻满干支名，且字大，这也说明此骨是初学者练习书技用的。《美录》92谓“四羊三犬，五羌。𩁹。”𩁹象亥（王亥）执一鸟之形，与古籍所谓王亥执一鸟而食其首之说合。此辞既珍贵而重要。《美录》505虽是一残片，但“王休”二字连文（“休”字左半乃刮削后重刻），这在甲骨文辞例中是第一次发现。诸如此类的材料，或有助于断代的研究，或有助于文法、辞例的比较，或有助于辨伪，在书中还有不少例子，不备举。

当然，也不能说本书没有缺点。上文谈到的《佚》原为一版而本书分为三碎片，即其一例；而《佚》287与283（即《美录》450）是可缀合的（参见严一萍《甲骨缀合新编》第481版）。卡内基博物馆所藏甲骨，前人已缀合了不少。本书缀合了十三版，是很好的；遗憾的是，还有一些甲骨，前人业已缀合，而本书仍旧。如《美录》77（《库》1049）与《美录》115（《库》1089），《美录》109（《库》1083）与《美录》148（《库》1135），《美录》349（《库》1345）与《美录》369（《库》1364）均经曾毅公缀合，著录于一九五〇年出版的《甲骨缀合编》（分别为第7，第10，第19版），又见于《甲骨缀合新编》（第626，627，628版），但此书既不加缀合，《导论》中又无一语提及，不能不说是一种疏忽。

本书作者对甲骨文字及甲骨材料本身的考察是很细致的，因而能提出不少中肯的见解。但也偶有失察之处。如《美录》690片，为威廉·洛克歇尔·纳尔逊艺术陈列室所藏的牛胛骨之顶部。其右半部分刻一畋猎卜辞，作者释为“贞王其田𠙵亡才”，并认为是“贞王其田湄日亡𢦏不冓雨”的省略，𠙵和才是湄与𢦏的简化（见《导论》，第13—14页）。案细审拓本，此辞田下尚有一字作“⺀”（见附图二），或为水字，作者缺释。𠙵与湄前人释眉与湄，可从。“湄日亡𢦏”或“湄日亡巛”是卜辞习见之语，亦可称“湄亡𢦏”，如《甲骨文零拾》第88片：“叀旃田，湄亡𢦏”。依辞例，“湄日亡𢦏”之下或可有“不冓雨”之语，亦可无之。本辞“王其田□湄亡𠁥”辞意已足，未必是有意省去“不冓雨”三字。类此之例卜辞屡见，如《殷墟文字甲编》第573，1535，1650；《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》第2012，2015，2020；《殷契粹编》第927，984，《甲骨文零拾》第88，以及《佚》249，277，294等片，“湄日亡𢦏”之后均无“不冓雨”之语。又此辞之𠁥虽有可能是𢦏的省略，也不能排斥另二种可能性，即（一）它是𢦏或巛（巛）的省略或缺刻。（二）它是𢦏或巛的假借，因在（才）与𢦏巛同音。现作者断言𠁥是𢦏的简化，似嫌证据不足。

本书各部分的编次以收藏号的先后为序，从便于查对来看，这是好的，但从内容上来看，则不免给人以凌乱之感。如能大体上依卜辞的内容来编排，将同一内容或内容相近各片编在一起，则于读者既方便，且更利于比较、研究。

上述的这些缺点，只不过是美中不足而已，瑕不掩瑜，本书的重要价值及其优点，

附表

美国所藏甲骨表*

收藏单位	收藏甲骨			来源	著录	备考
	甲	骨	合计			
卡内基博物馆（宾夕法尼亚州匹兹堡）	234	173	407	方法敛于1903—1908年在中国所得	《库方二氏所藏甲骨卜辞》（库本）971—1408； 《美录》1—413	此系剔除伪片，且由周鸿翔缀合后的数字。
圣·路易斯城市艺术博物馆（密苏里州）		7	7	购自日本京都（1919年5月）		据称每片价45美元。
哥伦比亚大学东亚图书馆（纽约）	55	18	73	施密斯等人之家属捐赠	《殷契佚存》255—316 《美录》414—480	此系1966年的统计，1970年仅存66片（甲50，骨16），其中4片为新发现者，实际失去11片（甲8，骨3）；《殷契佚存》第287片已碎为3片。
弗里尔艺术陈列室（华盛顿）	9	2	11	1900年购自索尔比的亲属	《美录》481	其中有整腹甲4，羊骨1。
哈佛大学皮博迪博物馆（麻萨诸塞州剑桥市）			约900	（1）兰登·沃恩尔于1914年4月购于小屯；（2）佛格艺术博物馆转赠	《美录》482—541	大多属极细碎之小片。
哈佛大学佛格艺术博物馆		14	14	日本古董商人于1935年所赠		有两片可缀合（《美录》486）现均归皮博迪博物馆。
国会图书馆（华盛顿）	3	1	4	不详	《美录》542—545	
纽约市立艺术博物馆（纽约）			25	A·W·巴尔于1923年、波尔·E·曼海姆于1967年所捐赠	《美录》546—556	
历史工艺博物馆（华盛顿）	2		2	1963年购自洛杉矶古玩店（据店主人述，来自日本）	《美录》557—558	二片价值20美元
自然历史博物馆（伊利诺斯州芝加哥）	3	21	24	有4片为库方藏品	《库方二氏所藏甲骨卜辞》（库本）2175—2178； 《美录》559—564	
普林斯顿大学图书馆（新泽西州）	93	22	115	此系库一方藏品的一部分	《甲骨卜辞七集》《殷虚甲骨拓片》、《殷墟甲骨相片》 《美录》565—684	该校原编号为119，遗失4片；据雪莉H·韦伯说，该校原藏200片，均为碎片。
加利福尼亚大学（加利福尼亚州，柏克利）		4	4	某三藩市人　于1973年捐赠		均为残骨
威廉·洛克歇尔·纳尔逊艺术陈列室（密苏里州，堪萨斯）		12	12	不详	《美录》685—696	其中11片为牛胛骨之上半，有骨臼，而骨臼上均无关于贡物的记载。
耶鲁大学艺术陈列室（康涅狄克州纽哈芬）	2		2	爱德华·H·休姆1905—1927年间在中国长沙所得，1957年由其妻捐赠该校		
M·H·迪杨纪念博物馆（加利福尼亚州）	1	4	5	艾弗里·布伦戴奇所送	《美录》697—700	
东、西方中心图书馆（夏威夷）			7			
洛杉矶东方艺术博物馆			2			
其它（私人收藏）	2	11	13		《中国的起源》图版1 《殷契佚存》647	

* 此表主要依据周鸿翔《关于美国所藏甲骨的报告》一文（《A Report on the Oracle Bone Collections in the United States》）所述资料编制

（原载《學術研究》1980年第3期）

讀《殷虛文字甲編考釋》

賈平

屈萬里著的《殷虛文字甲編考釋》（一九六一年台灣中央研究院歷史語言研究所出版。以下簡稱《甲釋》），全書由自序、凡例、引書簡稱表、考釋、圖版等五部分組成。考釋部分有五百頁，將《甲編》的三九四二片甲骨進行分期和考釋。此書內容豐富，分期比較準確，在文字考釋上能扼要地歸納各家之說，對某些字和詞的意義也有所補充和發展，是一部有參考價值的甲骨文著作。但此書也有一些值得商榷的地方。

（一）分期中的問題：

本書絕大多數甲骨的分期是正確的。但也有少數卜骨分期有誤，茲舉數例：

⑴ 有些第四期卜骨，歸入了第一期。

《甲》三五三：“甲辰貞其登黍……（甲辰貞：其登黍……）”。在《甲釋》第五五頁，把此片定為第一期。但從此片字體風格剛勁有力、“貞”字和“辰”字的寫法與第一期的H、冃有別；前辭作“干支貞”與第一期常見的“干支卜某貞”不同，而與本書定為第四期的《甲》六三五、六二七加六八九、七八一加七九○等片字體風格相似。《甲》六三五上有父丁，是武乙對其父康丁的稱呼。所以，《甲》三五三與《甲》六三五、六二七加六八九、七八一加七九○等片一樣，都可以定為第四期武乙卜辭。

《甲》六九五：“囗亥卜桒……十示一牛十示……于來乙巳（丁亥卜：桒口十示一牛；十示囗，于來乙巳）”。“癸巳卜王以沚戓（癸巳卜：王以沚戓？）”。《甲釋》一一○頁把沚戓隸定作沚𢦔，並認為“沚𢦔之稱，第一期卜辭中習見”，便而把這片定為第一期。我們認為，作者把沚戓釋作沚𢦔是錯誤的。因為戓字从口从戈，是戓字。沚是地名，𢦔和戓是人名，這是在不同時期出自沚地的兩個人（可能是氏族首領）。沚𢦔常見於第一期武丁卜辭，而沚戓則見於第四期武乙、文丁卜辭。而且，此片的字體風格也與第四期卜辭相似。所以，應把它定為第四期。

⑵ 《甲》四二九、三五六九、三六三四；八九五；五四四、五八九、六五四、八一二、八六三、八八四等片：《甲釋》把前三片定作第一期，八九五定為第三期，後六片定為第四期。我們認為，把後六片定為第四期是對的，但是前四片與後六片字體風格大體相似，也應歸入同一時期。如果仔細觀察，可以發現它們與武乙卜辭字體的剛勁有力的作風有所不同，字較小，筆鋒圓潤而柔軟，有些字寫有特徵。如，《甲》八九五、五四四、八一二、八六三的酉字作酉、酉，《甲》八一二的來字作來，《甲》三六三四的巳作子，《甲》五八九的叀字作叀等。這些特點，又與小屯南地七三年發掘的第二三號灰坑中的一○四號卜辭的字體風格相似注一。根據坑位、同出陶器、卜辭的稱謂、文例，該片定為文丁卜辭注二。所以，我們認為上述這十片也可以定為文丁卜辭。

（二）文字考釋中的問題：

⑴ 𢦏字，見於《甲》五五九、七五七、二四三三、二六五八、二七七二等片。

第八七頁，《甲》五五九⑴釋文：“其征𢦏，叀翌日酒？”其下考釋：“𢦏字數見，二六五八片作𢦏，二七七二片作𢦏，象械獸之狀，然未詳其音義。”

第一二○頁，《甲》七五七釋文：“王其田𢦏，叀囗。”考釋：“𢦏，不識為何字，於此亦地名也。”

細審拓片，“其”下之字，不是“田”，應是用（用）字，𢦏字應寫作𢦏。此片釋文應改為“王其用𢦏，叀囗”。

第三○七頁，《甲》二四三三⑴釋文：“囗自𢀛囗𢦏？”實際上，從拓片看，最後一字是𢦏，而不是𢦏。

第三五四頁，《甲》二七七二⑴釋文：“戊辰卜，㱿貞：又來𢦏自獸，今日其征于且丁？”考釋：“𢦏字前已屢見，似是災害之義……今因狩獵而受災害，蓋欲再祭且丁以禳之。”

第三七三頁，《甲》二六五八加二七六二⑵：“貞：又來𢦏自𢀛，其𢀛于囗。”考釋：“𢦏，已見五五九片，而未能識。𢀛，地名。”

關於𢦏字，从㚔、从犭。㚔像桎梏刑具之形。犭自羅振玉以來多誤釋為“虎”字。姚孝遂同志指出，犭字，人身虎頭，𦍋（羌）字人身羊頭，蓋以其頭飾不同而命名。從《前》六·六三·六“犭方其涉河東𣴎，其囗”，知道犭是一個方國名。所以，𢦏字當為帶上桎梏的犭方人員，這是一種戰俘的名稱注三。我們認為，這種解釋是正確的。

上述《甲》七五七“王其用𢦏，叀囗”，用字是殺牲的通稱，此辭應解釋為卜問王用𢦏祭祀之事。《甲》二七七二與《甲》二六五八加二七六二辭例相同，𢀛釋地名，則𢀛也可釋地名，全辭可解釋為：“有來自𢀛地之𢦏今日用之再祭祖丁。”

⑵ 杏字，見於《甲》五七一、八五○、三六二九。

第八九頁，《甲》五七一⑴釋文：“丙子卜，濱木丁，一牢？”考釋：“杏，本丁，《類纂》（正、六）釋杏，諸家多從之。然以《甲》三六二九片證之，當作木丁，乃康辛、康丁之諸父也。”《甲》三六二九之拓片為：“……𠂤杏ㄓ𢀛自……”第四六二頁此片之釋文：“囗木丁……其人當是康辛、康丁之諸父，由本辭證之可知。”父丁歲，即且口？”考釋：“木丁……其人當是康辛、康丁之諸父，由本辭證之可知。”

我們認為，杏不是木丁，更不是康辛、康丁之諸父，此字仍應按《類纂》隸定作杏，在卜辭中用作祭名，原因如下：

① 此字之寫法大多數作杏，但也有作杏和杏的。如，《寧》一、一九○：“丙寅卜：且丁濱杏又𠬝？”一九七三年小屯南地發現的第九九號灰坑中的第十三號卜骨：“己丑卜：明日庚，隹日其又杏于父甲？”注四。在甲骨文中，口與日作字的偏旁時，常見到互相通用的例子。如：“啓”字，可寫作𢼸、𢼸，也可寫作𢼸；“明”字，可寫作明和明。而作為祖先名或干支的“丁”字都作口、口，不見寫作日的。可見杏字本下之口，不應釋丁，此字不是木丁。

② 《存》二·七六三：“丁丑卜：其又杏于父甲？”、《人》一八一六“戊辰卜：其又歲于父戊？”辭例與《南明》六○七“其又歲于父甲，濱牢？”是相似的。杏字的作用近似歲字，應釋為祭名比較恰當，若釋作木丁則辭義不通。

⑶ 河字，見於《甲》三七七、二六八九等二十幾片。

第五九頁，《甲》三七七⑵：“貞：求于河，尞，沉三牛？”考釋：“先秦文獻中，凡言河者，皆謂黃河；……卜辭河字亦不例外，或以為殷之先祖，非也。”

第三四三頁，《甲》二六八九⑶：“貞：其征御，于又河鄉？”考釋：“又河，當與《逸周書·度邑篇》‘顧瞻過於有河’之‘有河’同義。河，謂大河；又，語詞

也」

我們認為，把卜辭的「河」一概解釋為黃河，這種看法太絕對化。卜辭中有不少的字常有數義，河字也是如此。綜觀卜辭，河字的用法大致如下：

① 地名。如：《前》二·四、八：「壬戌卜，行貞：今夕亡囚？在河。」

② 水名。如：《佚》一〇七：「壬辰王其涉河？」

③ 先公名。如：《摭》一·五五〇：「辛未貞：𠦪河高祖河，于辛巳酒𠦪？」「辛未貞：𠦪禾于河，𠦪三牢，沉三牛，俎牢？」「辛未貞：𠦪河于高祖，𠦪五十牛？」

《甲》二六二二：「口戌卜：𡧊貞：其又𠦪于河眾上甲？在十月又二，小臣口」

上述二例，把河稱為高祖，其地位與高祖王亥、高祖夒相似，而且又與上甲並列，可見河確是殷代之先祖。

河字雖然有這幾種意義，但以第三種最為常見。像《甲》三七七、二六二二、二六八九、三六一〇等片的河字，都可釋為先公名。

⑷《甲》二二四：「口ㄋ卜中尤𠙺方」

第三六頁此片釋文：「丁丑卜：在尤，㞢一人？」考釋：「𠙺，《萃釋》一九三九）、《天釋》（五五）並釋㞢。胡厚宣從其說而讀為寶；且謂「寶」古通「保」（《甲骨學商史論叢初集》，《殷代天神之崇拜》）。」「方，似是「一人」之合文，而非方字。……此蓋天子出行，在尤地所卜，而卜問神靈「其保佑我個人乎？」」

隸定作㞢是對的。但在卜辭中用作保佑之意只是極個別的例子。如：《鐵》一九一、四「帝弗㞢于王」。據《殷虛卜辭綜類》所列關於　字的七十多條卜辭中，可以看出，此字主要有兩種用法。

① 方國名或地名。如：《粹》一一七五：「丁卯卜，㱿貞：王𦎫㞢于蜀？」《丙》一⑸：「癸亥卜，㱿貞：羽乙丑，多臣𢦏㞢？」

② 人名。如：《丙》一二四：「乙未卜，㱿貞：㞢其來見王？」《誠》三四六：「甲辰卜，爭貞：㞢其𠬪？」

以第一種用法最為常見。《甲》二二四的㞢字可能是方國名。

是一字，非二字之合文。張秉權謂：「方是當作一個動詞用的，它的意義和「征」「伐」等字相似。」注五我們同意這種看法。如：

《丙》一⑸：「庚申卜，王貞：余林不？」

《丙》一⑺：「庚申卜，王貞：余朩不？」

朩與林（伐）通用，可能是伐字的簡體。我們認為，《甲》二二四可以釋為「丁丑卜：在尤，㞢伐……」

⑸第四五頁，《甲》二八〇⑴：「口戌卜，𡗜：口子咸，一豝？」考釋：「子咸，說者以為武丁之子。殷人祭祖先，則用牡牲；祭先妣，則用牝牲。此用豝（即牝豕），如子咸為女性。古女子亦稱子；則此子咸，蓋王已故之女也。」

我們認為，這種說法是根據不足的。殷人祭先祖，大多用牡牲，但也有用牝牲的例子。如：

《通》四三：「甲戌卜，旅貞：羽乙亥后祖乙歲牝？」

《明》二三六〇：「丙午卜，旅貞：羽乙未父丁歲牝？」

殷人祭先妣，多用牝牲，但用牡牲的也為數不少。如：

《金》一二一：「⊠卜，旅貞：妣庚歲牡？八月。」

《粹》三九六：「辛巳貞：其𠦪生于妣庚、妣丙，牡、牡、白豕？」

《乙》七二六一：「庚子卜：叀牡㞢妣乙，牛？」

此外，還有《粹》三八一、《寧》一、二二六、《金》一九一、《續》二、一五二、《前》一、二九、五，《鄴》三、三四六，《乙》八八五七、八八九五等片。可見，不能以用牡牲或牝牲來決定被祭祀的對象是男性還是女性。因此，單看《甲》二八〇這條卜辭，並不能判斷子咸是女性。

⑹第一三六頁，《甲》八八一釋文：「弜逆羌？」考釋：「逆，謂迎擊之也。《戰國策、齊策》：「故專兵一志，以逆秦。」高注：「逆，拒。」拒，即迎擊之義矣。蓋因羌人來犯，故有是卜。」

這種解釋欠妥。雖然在卜辭中，「逆」作動詞時有迎擊之義，但它多與伐字連用，且常見於第一期武丁卜辭。如：

《前》四、二四、一：「辛丑卜，㱿貞：吕方其來逆伐？」

《後》上、一六、一一：「辛丑卜，㱿貞：吕方其來，王勿逆伐？」

逆字，還有迎接之義。如第一三九頁，《甲》八九六⑶：「王于宗門逆羌？」「壬戌貞：王逆吕羌？」考釋：「逆，迎也。」「羌人可為祭祀之牲，故王迎之。」⑷

在這裏，作者的解釋是正確的。因為我國古代文獻中，也有君王迎接犧牲的記載。如：《禮記、明堂位》：「君肉袒迎牲于門。」可見，此種習俗可以上溯至殷代。

《甲》八八一與《甲》八九六同是四期武乙卜辭，均卜是否「逆羌」之事，應作同樣的解釋比較合理。我們認為，《甲》八八一應釋為「弜迎羌？」（即「不迎接羌俘嗎？」）

⑺第一二頁，《甲》五七：「己未卜：令冓示侯？」考釋：「冓從羅振玉釋（《殷釋》中一二葉），乃構之初文。亦與媾同（見《周易、左對》釋文）。《史記、平原君虞卿傳》：「不如發重使而為媾。」《集解》：「求和曰媾。」此蓋卜問「令某與示侯求和，其吉否」也。」

我們不同意作者的解釋。冓字在卜辭中的用法有四：

① 遇也。如常見的「冓（遘）雨」，「冓（遘）風」。

② 祭名。如：《南明》五一九：「叀三宰上甲遘……」

③ 地名。如：《合》二四八：「癸丑卜，㱿貞：冓受年？」

④ 人名。如：《甲》三五三九：「辛丑卜，𡧊貞：令冓氏𣴎御方于𨸏，𠂤？」

冓字，沒有媾和的意義。《甲》五七的「冓」，與《甲》三五三九相同，當為人名。

⑻第七九頁，《甲》五二〇加五六八加五九〇⑵：「叀般，以眾⊠受又？」考釋：「此般字疑為盤遊之義。」

我們認為，此般字不是動詞盤遊，而應是人名。其辭例如《南明》七三一：「叀𢀛以眾人」。在卜辭中，「般」作人名之例子還見《丙》一三〇：「戊午卜，𡧊貞：般往來亡囚？」《鐵》五九、二：「亩般乎田于𡆥？」《金》四一一：「庚寅㱿貞：亩般乎往？」等片。

⑼第四四九頁，《甲》三五三〇⑴釋文：「甲午卜，𡧊貞：王　不亡？三月。」考釋：「㐁𠃑字未識。」

㐁𠃑字，應是㐁、𠃑二字。㐁，《說文》：「宿，止也。从宀，㐁聲。㐁，古文

夙。』羅振玉釋宿，至確。在這裏，宿作宿止之意。𠂤是自字，釋作師。全辭應釋為：『甲午卜，爭貞：王宿師不亡？三月。』

此外，由于《甲釋》是以《甲編》中的三九四二片發掘所得的甲骨實物為准，但書中沒有提及甲骨出土的坑位，各片鑽、鑿的情況，因而給讀者帶來不便。

注　釋

一、中國科學院考古研究所安陽發掘工作隊：《一九七三年安陽小屯南地發掘簡報》，四五頁，圖一九、一。《考古》一九七五年一期。
二、同一，四三頁。
三、姚孝遂：《商代的俘虜》，《古文字研究論文集》，一四三頁。
四、同一，四一頁，圖一六。
五、張秉權：《殷虛文字丙編考釋》，第一五頁。

（原載《古文字研究》第三輯，中華書局，一九八〇年）

明義士舊藏甲骨を資料とする新刊二書の紹介

前川捷三

㈠、THE MENZIES COLLECTION OF SHANG DYNASTY ORACLE BONES, Vol. 1, James Mellon Menzies（明義士　子宣、以下明義士と記す）旧蔵、現在カナダ・オンタリオ博物館所蔵の約四七〇〇片の甲骨を許進雄氏が採拓・整理・編輯して、同博物館より一九七二年に出版したものである。序文一〇ページ、図録二六四ページ（拓本三一七六片、綴合六例）、付録一七ページ（他書甲骨との綴合模本四二例）からなる。

許氏による序文の内容を簡単に紹介すると、次の四項目にまとめられる。

分類について――時期は武丁以前・武丁期、祖庚・祖甲期、康丁期、武乙・文武丁期、帝乙・帝辛期の五期に分ける。事項は祭祀、祈年、風雨、旬夕、田猟、往来、内外諸事、使令、疾病占夢、雑卜の十項に分ける。貞人名無記で三期に入れた卜辞は、兆側刻辞形態が三期卜辞と同様であるから三期に入れたが、四期初の可能性もある。𠂤組あるいは王族卜辞と称される卜辞を鑽鑿形態より四期に入れる。

牛胛骨鑽鑿形態について――𠂤組の鑽鑿と他期の鑽鑿との比較。一期から四期までの鑽鑿の特質。一期と四期、二・三期と四期の鑽鑿形態の比較。鑽鑿形態でその牛胛骨の正確な時期は決定できぬが、早期か晩期かは決定できる。

甲骨発掘購入年月と出土地の推定について――甲骨には博物館受入番号が記されており、それが貯蔵位置により三分される。明義士の記述と他書甲骨との綴合とによって、三分された甲骨のそれぞれが一九二一～一九二八年に発掘されたもの、及び一九〇九年張学献の土地で発掘されたものであろう、と推定される。

資料価値について――地名初見例が多く、商代地理範囲に関して貴重な資料となる。五祀に関してS二八五四とS二八五八は貴重な資料であり、『中国文字』三五に「殷卜辞中五種祭祀研究的新観念」として再考の証を示した。

右の許氏の見解と図録について問題点を述べる。

事項分類は、この十項に分けるのが適当か、またその内容が適当か、研究者の卜辞解釈により異る意見もあるであろう。許氏は『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』の十二項を基とし、それを十項とされたようである。

鑽鑿形態に関しては、『京大人文研所蔵甲骨文字』本文篇一一七～一二二ページ、伊藤道治氏「殷以前の血縁組織と宗教」（『東方学報』第三二冊二五七～二六一ページ）、「殷代における祖先祭祀と貞人集団」（神戸大学『研究』史学篇第二八号一一八ページ）に研究成果が発表されており、そこでは王族卜辞の第一期であることの傍証とされている。これに対して、許氏は「鑽鑿対卜辞断代的重要性」（『中国文字』三七）と本書序文において、その第四期であることの重要な証拠とされ、更に本書第二巻にこの問題につき詳細な発表をされるとのことである。その発表が待たれるが、私自身は、その範囲・内容等について更に分析・検討する余地があるのではないかと考えている。

図録では各片を時期と事項によって分類してあるが、分類は研究者により異る解釈もあることであり、ことに本書の甲骨は小片が多いため困難も多かったことであろう。ところで許氏の見解によれば𠂤組・子組などの特殊卜辞は四期に入れられ、一期には賓組卜辞のみあるはずであるが、一期の中に少数ながら特殊卜辞が入っていると思う。例えばS00五九は「甲戌卜王龍以巫」とあり、これは𠂤組検討の貴重な資料でもあろう。

また、許氏は「談貞人荷的時代」（『中国文字』四三）、「略談貞人的在職年代」（『中国文字』四四）に貞人の奉職期間の数期にわたる可能性のあることを発表しているが、本書でもその説に基づいて分類を行なっている。だが、例えばS一五〇四貞人事の卜辞が二期に入れられているのは妥当か、など疑問点はある。

その他、各片の時期分類・事項分類について、何故そこに入れるのか疑問に思うものがあるが、一々は述べない。

以上、編者の見解とその疑問点について述べたが、本書は、初見文字例、注目すべき父輩称謂例、興味ある内容の卜辞例などを多数含む貴重な甲骨資料である。殷文化を考察する諸研究者に活用されることと思う。編輯者許氏が分類・綴合・発掘購入年月推定・鑽鑿形態調査などに多大の苦辛を払ったであろうことが察せられるものである。なお、許進雄氏が日本に来られたおりに、短時間ながら質問する機会を得たが、その際本書第三巻として「釈文篇」が刊行される予定と聞いた。これによって許氏の見解がより明らかになるであろうし、興味ある内容の卜辞についても編者により詳細な解釈が施されるであろう。

㈡、殷虚卜辞後編（明義士続編）

オンタリオ博物館所蔵の明義士旧蔵甲骨拓本が、許進雄氏の編輯により、台北芸文印書館から『殷虚卜辞後編』上下二冊（二八〇五片）として一九七二年三月に出版された。甲骨・正反の別、骨臼、塗朱などについて明義士のノートのある拓本原稿を、許氏が㈠で述べたと同様の見解により時期分類を行なったものである。

本書甲骨の中、牛胛骨八四七片の模本は、既に胡厚宣氏により『戦後南北所見甲骨録』に発表されているが、その「序例」によれば、千余片の拓本より小片を除いて模したものであるという。今回新たな資料を加えて拓本が刊行されたのは喜ばしいことである。

なお、明義士自身が「不幸一九二七年……予所遺于彰徳之物幾尽毀于駐兵之手、骨則践踏成灰……」（『斉大季刊』一期「商代文化」殷虚之覓得）と述べているので、一九二七年以前の明義士購入甲骨は全て破壊されたと考えられ、『殷虚卜辞

後編』の原甲骨は一九二七・一九二八両年の購入甲骨であろうと考えられていた。しかし、今回の新刊二書の刊行により、明義士の一九二七年以前の甲骨の全てが破壊されたわけではないことが明らかになった。

明義士の甲骨収蔵とその後の甲骨の所在については、胡厚宣氏『殷墟発掘』（学習生活出版社、一九五五）三二～三五ページに詳しく述べられ、また一九二八年に為された拓本の所在については、胡厚宣氏『戦後南北所見甲骨録』序例などに述べられていたが、この点についても、本書「編者的話」に新たにわかったことを含めてまとめられている。

最後に著作論文を中心とした明義士関係事項の年表を掲げておく。

年	事項
一八八五	生
一九一〇	宣教師として中国に渡る。
一九一四	甲骨収集開始。
一九一七	①『Oracle Records from the Waste of Yin 殷虚卜辞』（Kelly & Walsh 二三六九片模本）
一九二〇	一九一七よりこの年まで軍務。
一九二一	再度中国に。
一九二八	陳柱「殷虚亀甲文字発掘的経過」（『東方雑誌』二五巻三号四三～四五ページ、①序文の中国語訳） 『殷虚卜辞後編（明義士続編）』墨拓
一九二九	帰国。
一九三〇	三度中国に。
一九三一	②「The Culture of the Shang Dynasty」（『The Salthonian Report』549-558p.p.）
一九三二	③「商代文化」（『斉大季刊』一期一～八ページ） ④『商代之文化 The Culture of the Shang Dynasty』（導報 The Leader）
一九三三	⑤「表較新旧版殷虚書契前編並記所得之新材料」（『斉大季刊』二期一一九～一三二ページ付図） ⑥『甲骨研究初編』（斉魯大学石印講義本）
一九三四	⑦『中国商代之卜骨 Old Bones of the Shang Dynasty China』（斉南広智院 The Bulletin Rotary Club of Tsinan） ⑧「彙印聶克遜先生所蔵青銅十字序」 ⑨「聶克遜先生所蔵青銅十字図表」 ⑩「銅十字分部編次例」 ⑪「馬哥孛羅時代在中国的基督教」（『斉大季刊』三・五合期⑧一～三ページ、⑨一一五～一六一ページ、⑩一六三～一六七ページ、⑪一六九～一八五ページ）
一九三五	⑫「柏根氏旧蔵甲骨文字」（『斉大季刊』六期一～二八ページ） ⑬「柏根氏旧蔵甲骨文字考釈」（『斉大季刊』七期） ⑭『柏根氏旧蔵甲骨文字』（斉魯大学国学研究所）
一九三六	⑮『中国古代之上帝 God in Ancient China』（斉魯大学） ⑯「The Art of the Shang and Chou Dynasties」 ⑰「Cultural and Religious Ideas of the Shang Dynasty」（『Journal of the North China Branch of the Royal Asiatic Society』67、⑯208-210p.p.、⑰210-211p.p.、ともに講演要旨）
一九三七	帰国
一九四二	⑱「Shang Ko : A Study of the Characteristic Weapon of the Period 1311 - 1039 B.C.」にて哲学博士号を得る。
一九五一	胡厚宣『戦後南北所見甲骨録　明義士旧蔵甲骨文字』（八四七片模本）。 二月、明義士旧蔵甲骨二三九〇片を南京博物院に送付保存。
一九五二	斉魯大学校舎内にて明義士埋蔵甲骨約一万片を取出す。
一九五七	没。

付記

1、右の表は、文中に既述の著作と、他に『甲骨年表』、『続甲骨年表』、胡厚宣氏『五十年甲骨学論著目』、グッドリッチ「明義士先生伝略」（黄然偉訳『中国文字』二）、玉田継雄氏『甲骨関係文献序跋輯成第一輯』（三二～三三ページ）、『殷虚卜辞後編』アーサー・メンジース氏「序文」などを参考して作成した。

2、表中の④、⑥、⑦、⑬、⑮、⑱は未見。なお、玉田氏の前記書によれば、『河南季刊』四－二にも明義士の論文があるとのことであるが、これについては未調査のため記さなかった。

3、『中国文字』四四において、金祥恒氏が「殷虚甲骨新書介紹」で(一)を、厳一萍氏が「読殷虚卜辞後編」で(二)をそれぞれ紹介している。

4、右を書き終えたのち、許進雄氏の新著を入手した。いま、内容の詳細を述べる遑がないので書名のみ紹介する。『卜骨上的鑿鑽形態』（一九七三年八月、台北藝文印書館）である。

（終）

（原載《甲骨學》第十一號，一九八〇年）

試評「從子卜辭試論商代家族形態」兼論卜辭的時代

黃勗華

張樹森

李銳泉

最近大陸上的『古文字研究』發表了林澐所寫的『從子卜辭試論商代家族形態』一文。（以下簡稱林文）文中所引卜辭有誤釋，甚至刪改，且論點有很多值得商榷之處。以下僅將我們的一些意見提出來讓學者指正。

我們認爲林文中所細分的三種子卜辭（其中丙種記有貞人之名，即綜述所謂子組）基本上屬於同一類型及同一時代，它們的前辭形式體例一致，各種子卜辭字體互見同版，貞卜事類類同和祭祀的對象相近。但林文以同版，同坑、地層三方面斷定這些卜辭屬於武丁時期，這點與我們有很大的分歧。我們認爲這些卜辭不可能是武丁時代而只能屬於三、四期之物。

關於同版關係，三種子卜辭年代相若，所以各種子卜辭的字體互見於同版並不爲奇，但不能據此謂其必屬武丁之物。據林文云：「前三・一三・二這一牛胛骨，下部是丙種的干支表，而上端是典型的武丁時代王室卜辭（即所謂『賓組卜辭』）字體的卜旬辭，

卜人爲爭。羅氏輯錄時無理地截去了拓本的上端，原骨現藏吉林大學文物室」。考前三・十三・二（圖一）並非干支表，更非一期之物。原辭作丁巳卜、戊午卜、己未卜。子作孑與一期作孑不同，午作8更是後期特徵。上半部既無拓本，亦無摹本，眞相如何無從考據；但前代器物可被後世沿用，甲骨中常有刮去前辭而再刻之例，尤其是在習刻、抄摹時常利用舊物。

又林文中引子卜辭與所謂𠂤組字體見於同版以證明子卜辭是屬於武丁時代，其實、扶諸貞人之年代不屬於武丁，金祥恒先生在「論貞人扶的分期問題」中已有論及。（請參看董作賓先生逝世十四周年紀念刊該文）因此林文所云不確。

同版現象既不能用以斷代，同坑關係更不足論。其坑並不限於某王或某一時代所使用，後世的器物亦有混入前期者。而且早期的器物在後世亦可繼續使用。此外，某些坑位祇是發掘時的探方，並不一定是當時的窖穴，這些都是單獨以坑位斷代所存在的限制。

林文以ＹＨ一二七坑所出甲骨有大量的武丁卜辭和少量的「𠂤組」、「子組」卜辭；ＹＨ三三〇及ＹＨ三四四有子組和𠂤組卜辭同坑，遂據此而謂三種子卜辭自相關聯而與武丁有關，並謂子組、𠂤組年代皆屬武丁時期。

按ＹＨ一二七坑所出萬餘片龜版中，除了大量第一期武丁卜辭外（即綜述所謂𡧊組），尚有其他少量各期卜辭混入，如乙五三二八十五四五五（丙九二）（圖二）張秉權先生已考訂爲第三期之物。此外，綜述中所謂午組卜辭，亦應屬第三期之物。而且董作賓先生在乙編序中即揭示了大量文武丁卜辭；因此可以說ＹＨ一二七坑所包括的並不是單純的武丁卜辭。關於此坑的出土情形，石璋如在『小屯後五次發掘的重要發現』一文中已有記述。石氏推測此坑是清理前朝遺物時有意的埋藏。鑑於此坑出土一萬七千餘片甲骨中，骨版僅有八片而幾乎純粹是龜版，石氏的推測應當可信。其次論及ＹＨ一二七坑的地層，林文云：「由於ＹＨ一六四在ＹＭ一二七坑之上，而ＹＭ一六四屬廩辛――文丁時代，因而ＹＨ一二七所出文物應早於廩辛――文丁時代」。（大意）按ＹＨ一二七坑「在這一帶是資格最老的遺跡」（見石氏報告）但並不足以說明所出文物必早於廩辛――文丁，因爲這批甲骨既然有可能是清理前代文物的有意的埋藏，則使用舊有的窖穴儲物亦不爲奇。

因此，所謂客觀存在的同版、同坑、地層關係，在斷代上均存在着限制和缺點，甲骨斷代仍需全面的應用董作賓氏的十個斷代標準。

子卜辭非武丁時物，其證甚多。嚴一萍先生在『甲骨學』及『甲骨文斷代研究新例』中已詳加論列。我們也試從稱謂方面舉出下列例子：

㈠林文頁三二六引乙五四〇五（圖三）辭云：「庚戌卜：朕耳鳴，㞢钔于且庚羊百，用五十八，㞢女用」。按第四期武乙、文丁稱廩辛、康丁之父爲且庚，即武丁之子。雖然按理武丁亦可稱南庚爲且庚，但具第一期貞人署名之卜辭均稱南庚，絕未見有且庚之稱謂，其例如下：

□申卜，㱿貞：于南庚钔　（七集柏十一・柏根氏十八垂）（圖四）

庚午卜，㱿貞：于南庚㞢　（金璋六九二）（圖五）

己亥卜，𡧊貞：钔于南庚　（前一・一三・二）（圖六）

庚申卜，𡧊貞：南庚□㞢邑　（前一・一三・三，卜通一・一一重）（圖七）

……卜，𡧊貞：钔于南□。……钔于南庚，三艮　（庫一六四一）（圖八）

丁卯卜，亘貞：㞢于南庚　（續存上二七六）（圖九）

武丁時直稱南庚，在卜辭中例證甚多。第二期亦無稱祖庚者，因祖甲稱祖庚爲兄庚。

㈡林文列丙種子卜辭祭祀稱謂中有小辛、父辛（頁三一六）。按第一期卜辭絕無直稱小辛，只稱父辛，茲錄有關卜辭如下：

……貞：父辛希□？貞：父辛弗希王？　：父庚希王……　（丙五五三）（圖十）

乙丑卜，亘貞：隹父辛……　（續一・三四・二，誠明八重）（圖十一）

貞：勿㞢于象甲，父□、父辛、□牛　（乙七七六七）（圖十二）

武丁時稱小辛爲父辛。小辛的直稱只在祖甲以後才出現，例如粹二七五（圖十三）此片貞人爲行，祖甲時物；前一・一六・五十林二・五・九十續一・三三・四（簠帝一九二重）即新綴四三〇（圖十四）此片爲廩康時物；前一・一六・七（圖十五）帝乙帝辛時物。陳夢家在綜述頁四三三云：且乙子且辛從武丁到帝辛一直稱作祖辛，並無其他名稱。當祖庚祖甲時，武丁的父輩小辛本可稱「祖辛」，但當時與小乙一同稱爲小辛，小乙，遂不至於和祖乙之子祖辛混淆。因此，有小辛稱謂的卜辭必非武丁時物。

林文中關於子卜辭占卜的主體，認爲「只有當王自己卜問時，才用第一人稱『余』和『朕』」。按也有例外：丁亥卜，扶：余令日方其至。（坊間五・二三）（圖十六）而事實上卜辭中的「余」、「我」絕大部份是貞人之名。以下所列卜辭均具我、余、子等名稱，均可證明：

乙巳，𢓜卜：方來，𢓜，子𠂤征　（考古學報五八年第一期李學勤所引）

癸亥卜，中子有往來，惟若　（京津三〇二三，鄴三・四二・一〇鄴三・三四・一〇重）（圖十七）

癸丑卜，子貞：亡𡆥？

丁巳，夕往逆自。

癸亥卜：句逆娥？句娥。叀。　（乙八八九六）（圖十八）

辛巳卜，我貞：我又事，今十月。（（前八・三・三）（圖十九）

癸巳卜，䰜貞：五月，我又事。　（乙一〇一四）（圖二十）

庚寅卜，䰜貞：辛，我又事。　（乙一三一七）（圖二十一）

乙巳卜，𢓜貞：辛，我又事。

乙巳卜，𢓜貞：今五月，我又事。

乙巳卜，𢓜貞：六月，我又事。　（丙三三五〇）（圖二十二）

乙未，余卜，今八又（事）

乙未，余卜，㱙九月，又事。

乙未，余卜貞：今秋龜歸，若。　（乙四九四九）（圖二十三）

辛未，𢓊卜，我入商，勿我卸事。（珠一一四）（圖二十四）

辛未，𢓊卜，我出。（續三・三五・八）（圖二十五）

癸未，子卜貞：我不吉出。（前八・二・六）（圖二十六）

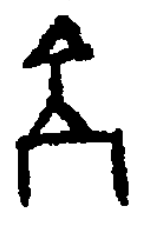
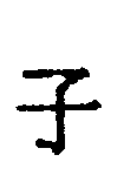
丁亥，子卜貞：我品田䴕，从。

己丑，子卜貞：余又乎出墉。

己丑，子卜貞：子商乎出墉，子它乎出墉，子口……（甲綴三三〇即前八。一〇・一十京都三二四一即綴新四三八）（圖二十七）

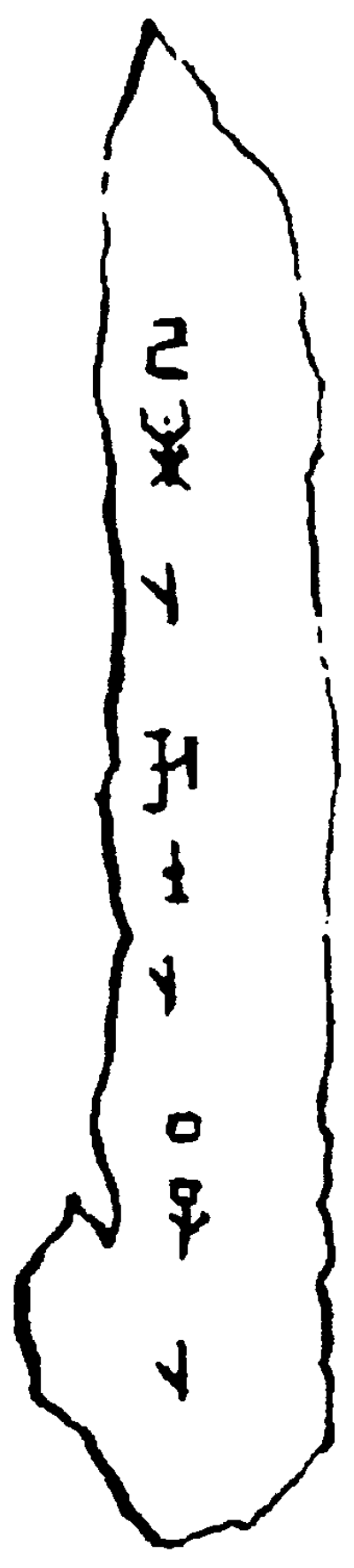
以上卜辭除京津三〇二三之外（此片林澐所引，謂是子卜辭，但細審拓本，子上尙有中字，中子爲一人名，林澐誤引），其他卜辭所具𢓊、子、肆、我，余等均是貞人之名，而辭中的「我」如「我又事」、「我入商」均可理解爲「我國」、「我的人」。

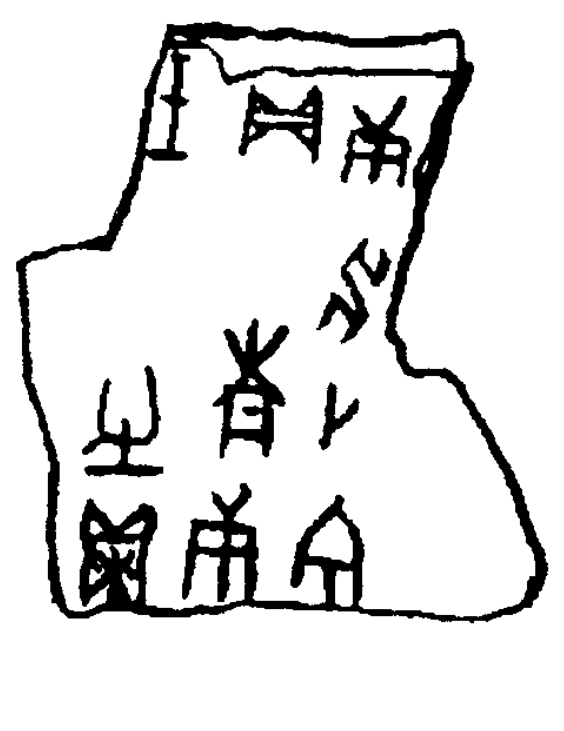
又林文頁三二七引京津三〇〇一辭：「我入商？——弗入商」？（圖二十八）云：「這似乎表明該家族（按：指子族）在商王都城之外的地方，有自己的邑落」。這些論點是十分荒謬的。稍爲對殷代歷史有認識的人都知道自盤庚遷殷以後，殷王都城已不在商地，入商者，重返故地的意思。多數是因有要事才返，故卜辭中有云：「我又事，入商」。（菁十一・十九）……「我入商，今我卸事」。（珠一一四）（圖二十四）林澐的論點正暴露他的甲骨的程度甚淺。

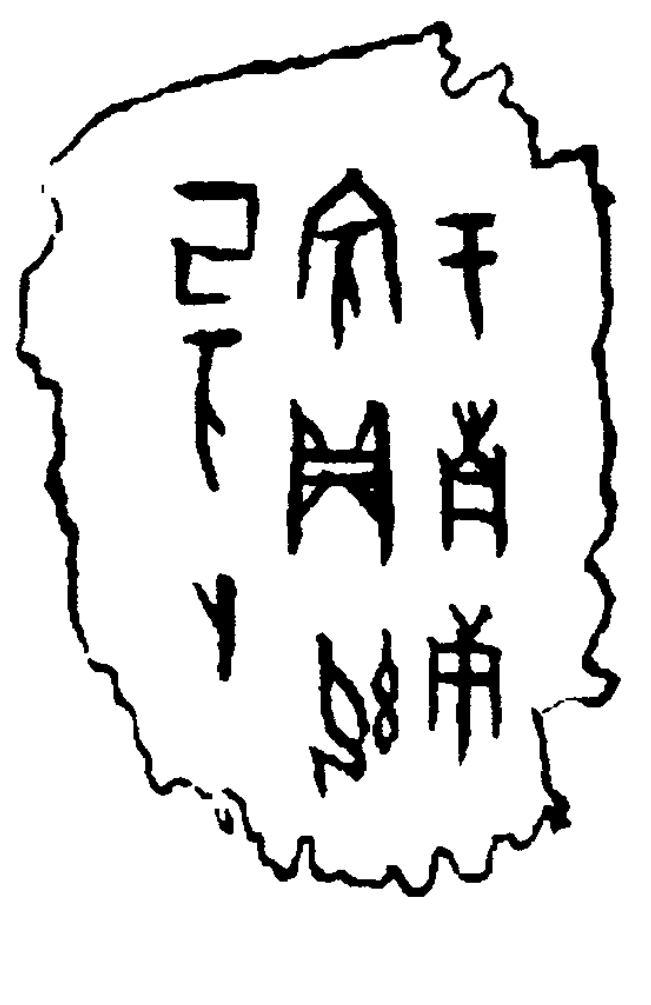
在談及商代的家族形態，林文認爲子啓、啓弟、子、子是子的弟輩或子輩；婦多、婦率、婦妥等是其妻妾，婦多子、婦𡚬子是其子姪或孫輩而構成一個家族。這些全是出於林氏的推想，絕不合乎科學的考證原則。林氏又認爲這些家族內部存在奴隸，並舉六例。按其所引各條，根本不能說明奴隸的存在，辭中的多臣、臣正、臣等正好證明是官員，多臣顯指衆臣而並非奴隸。

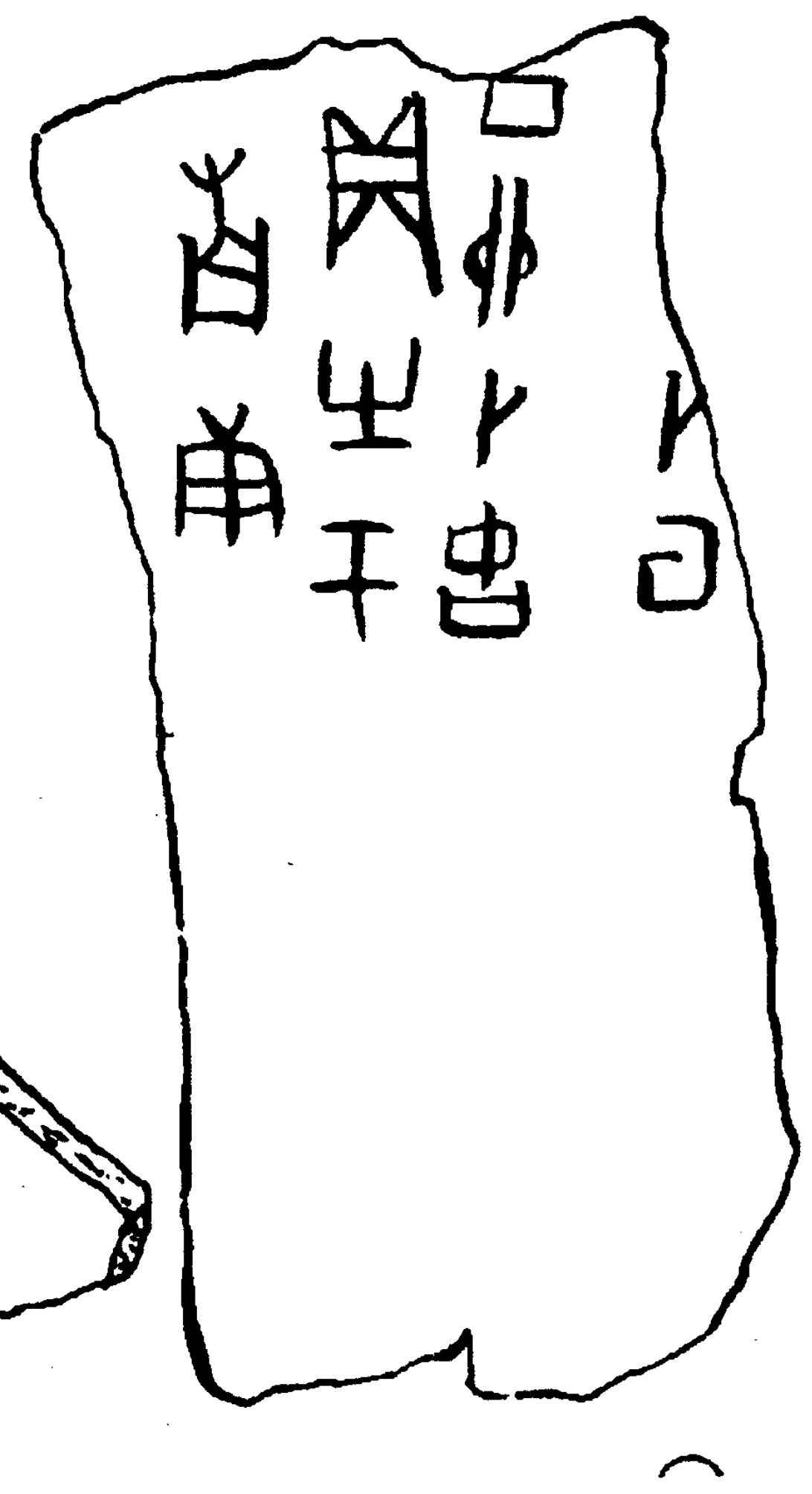
林文將子卜辭認爲是武丁時代之物的觀點，顯然是不對的，由於將這批材料的時代放錯了位置，所以其他論點都難以令人信服。以上僅爲我們一己之見，由於水平膚淺，實不敢過份自信，希望學者多加指正。

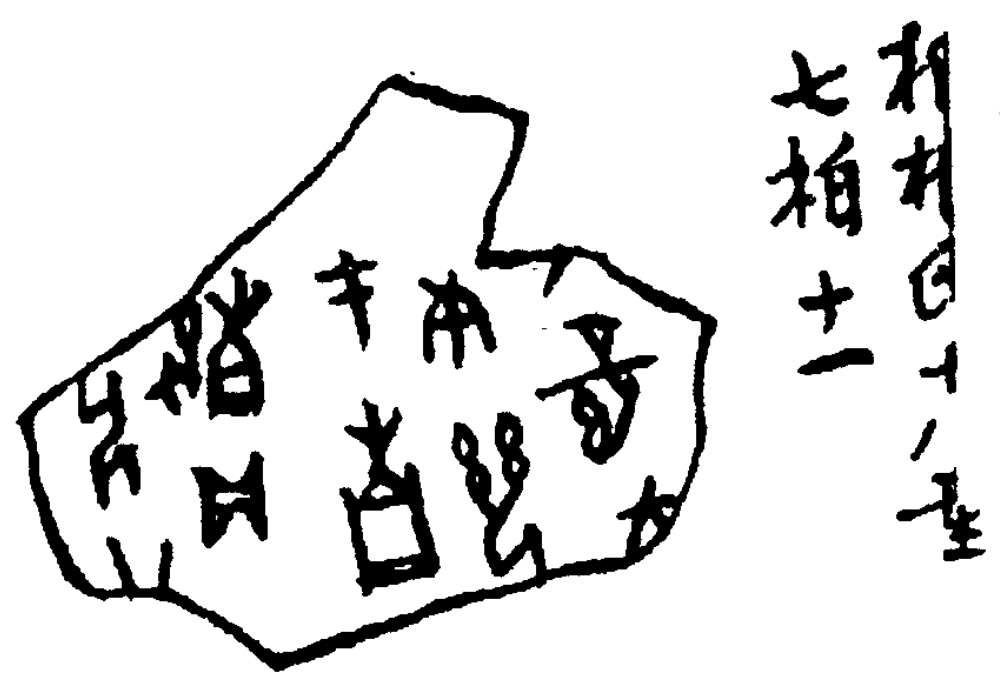
一九八〇年十二月

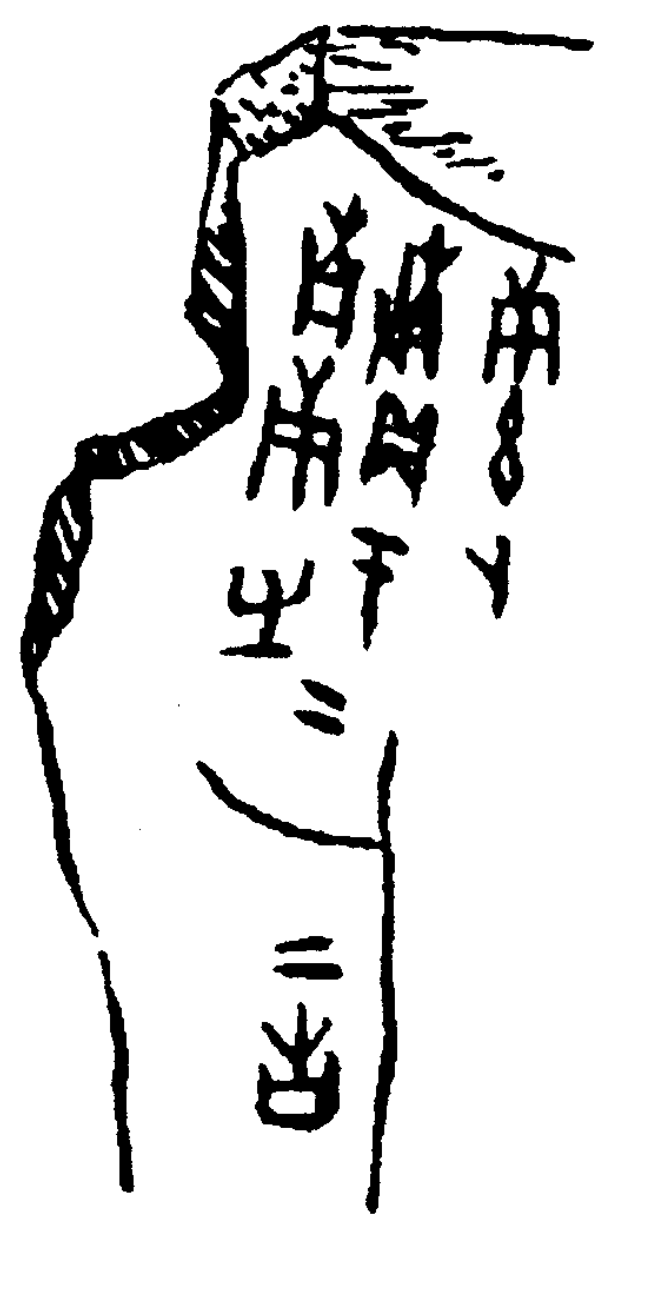

（圖一）

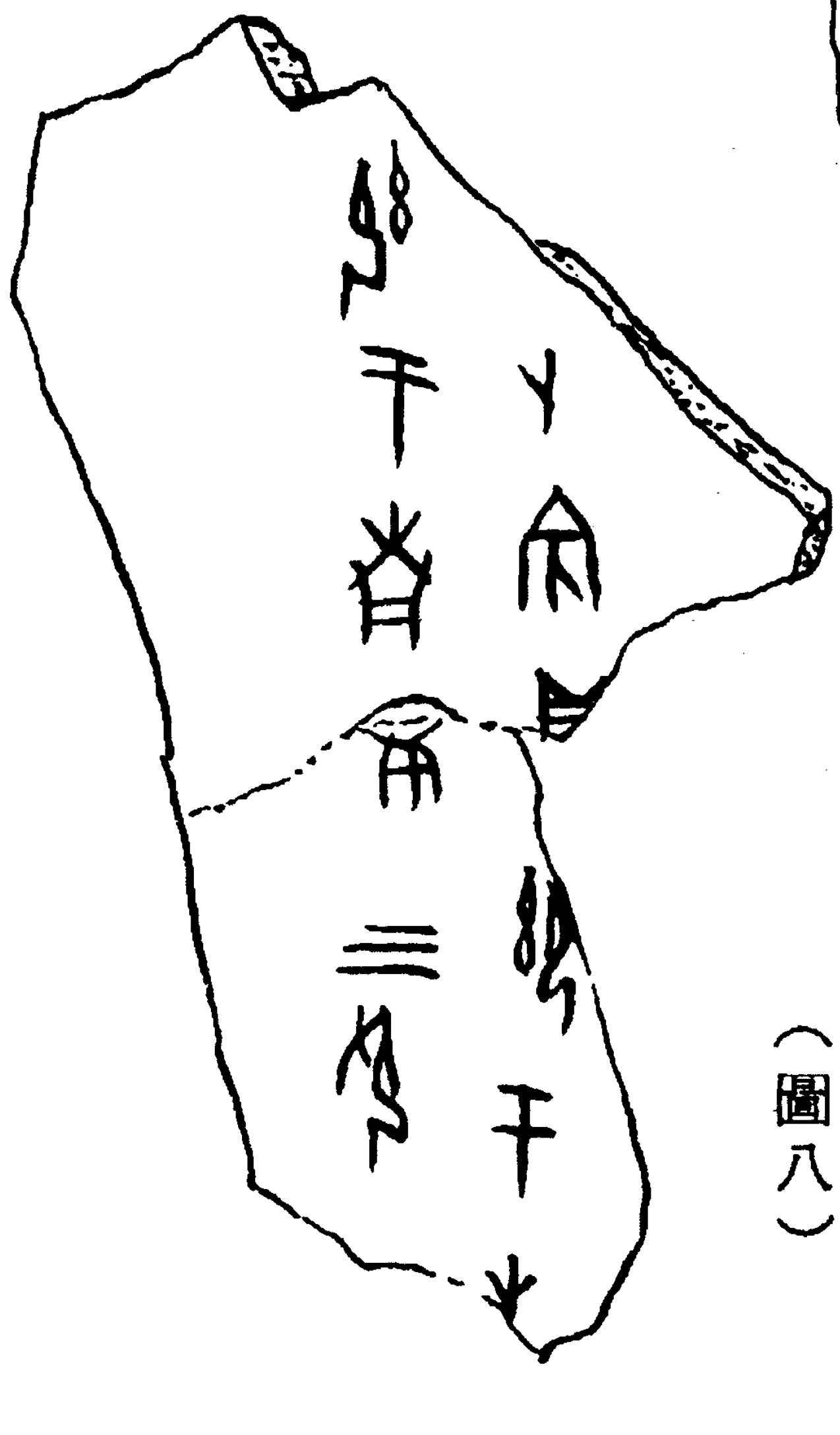

（圖七）

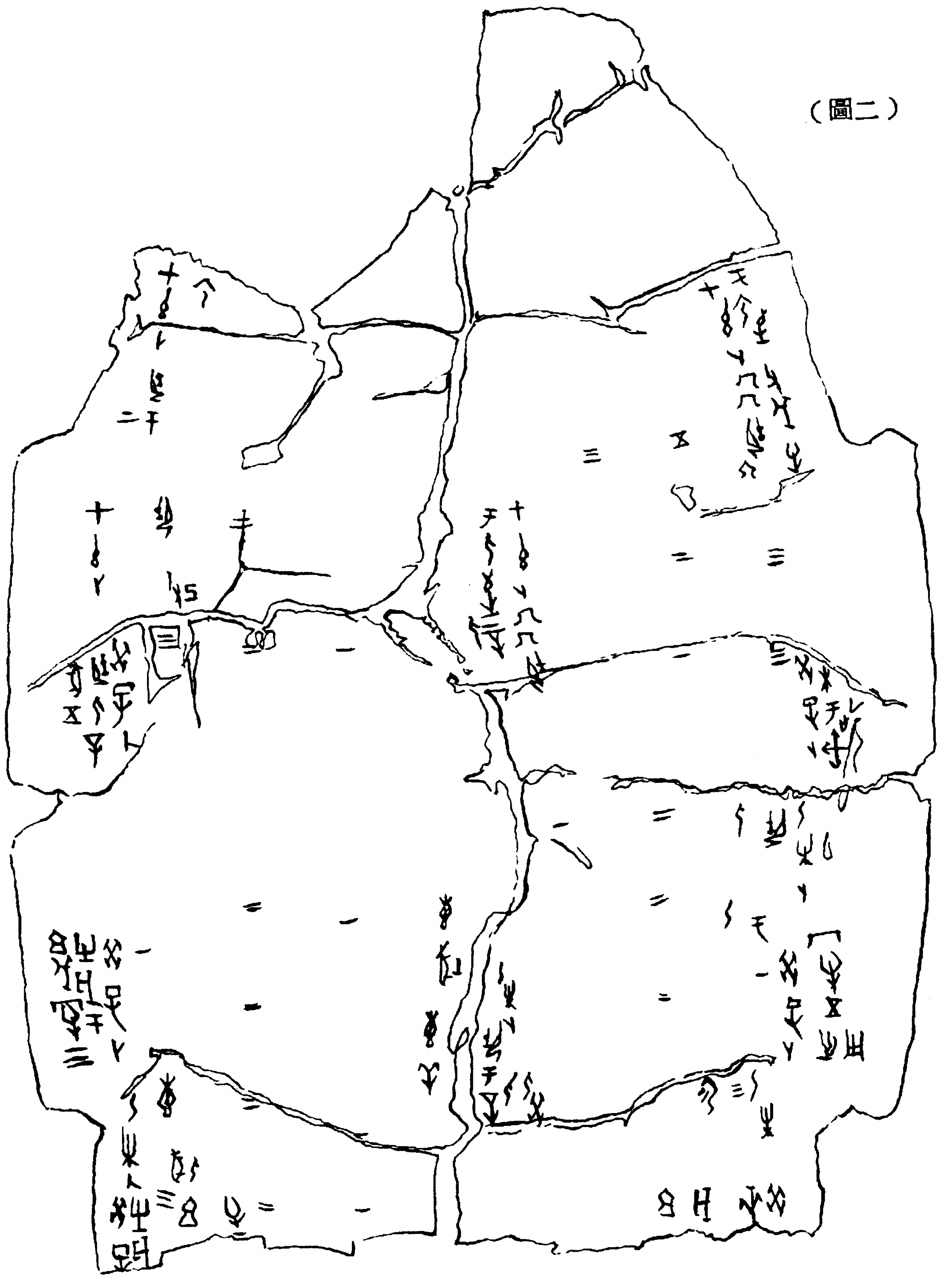

（圖六）

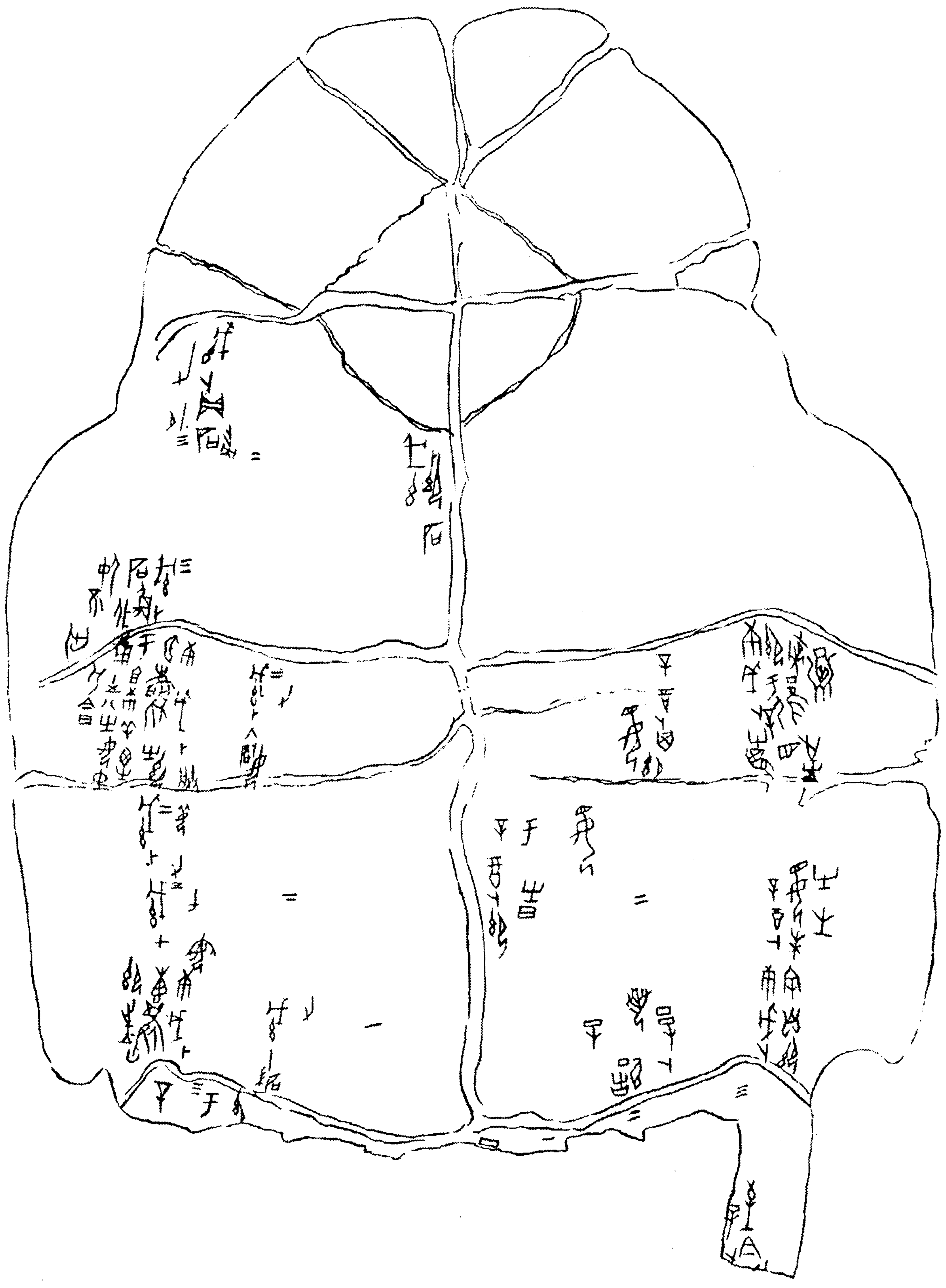

（圖九）


（圖四）

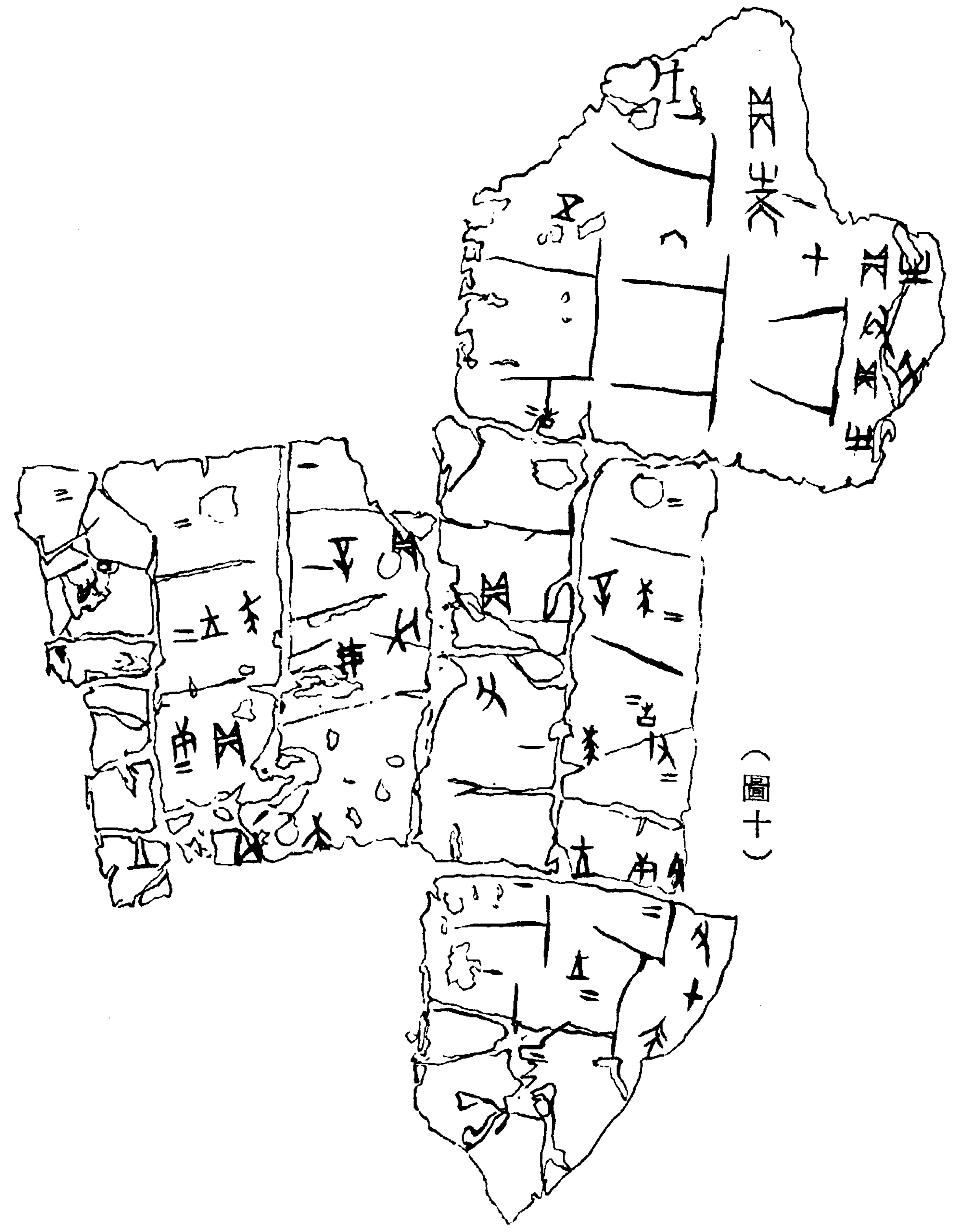

（圖五）


（圖八）

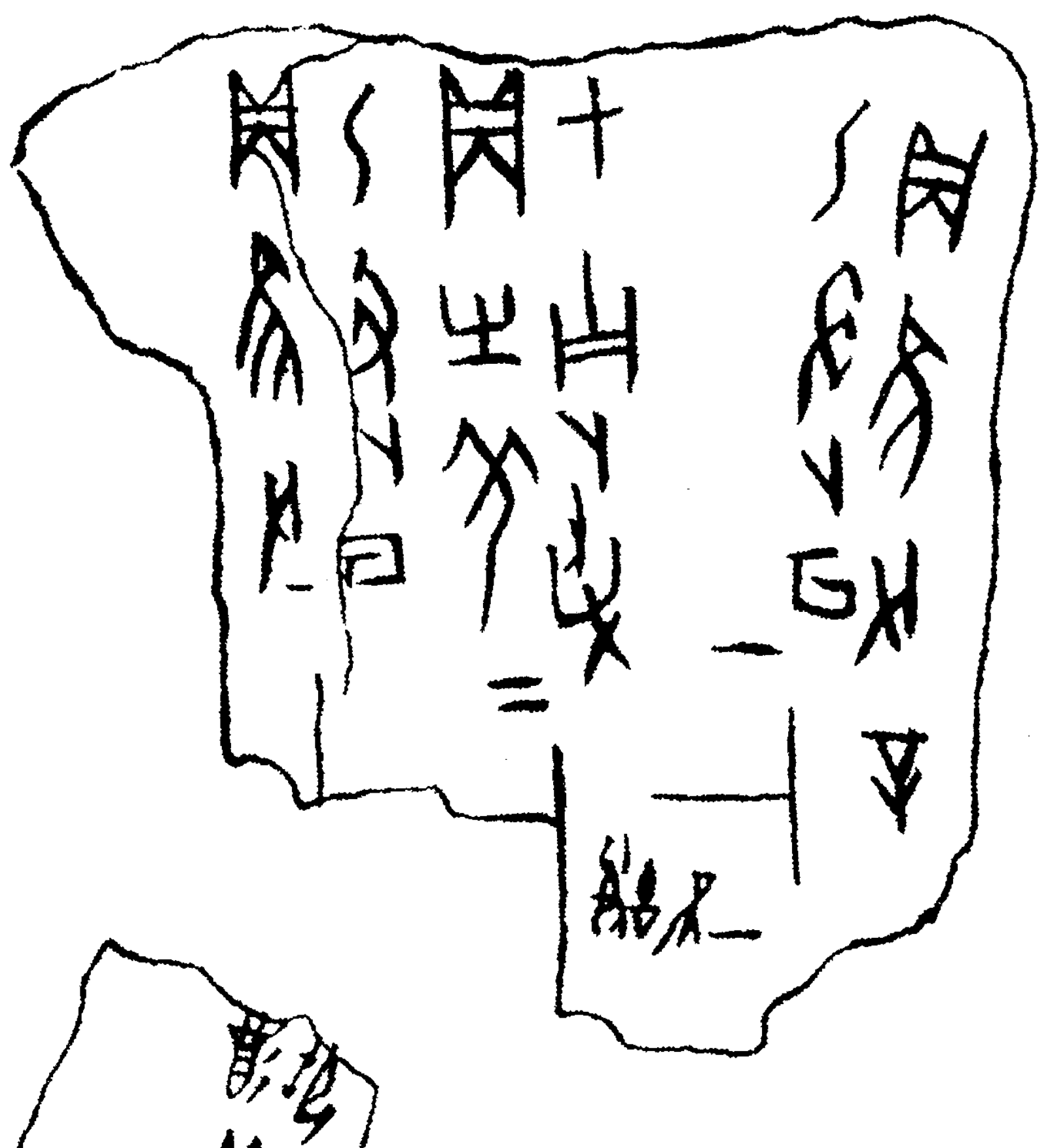

（圖二）



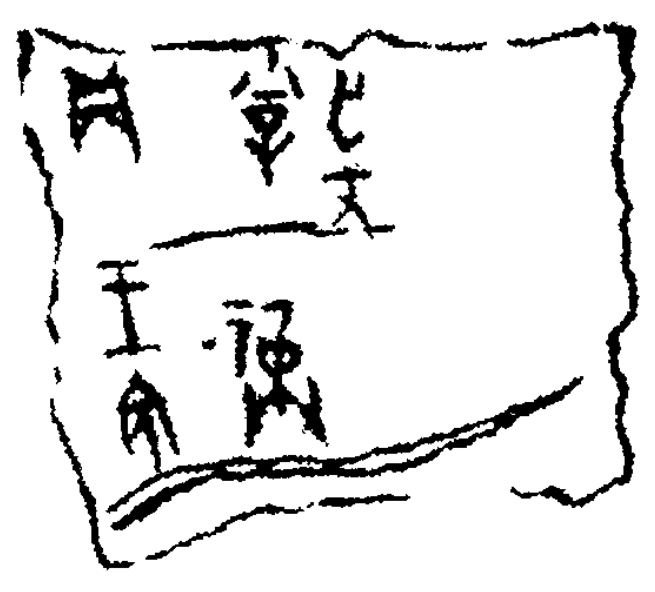
（圖三）



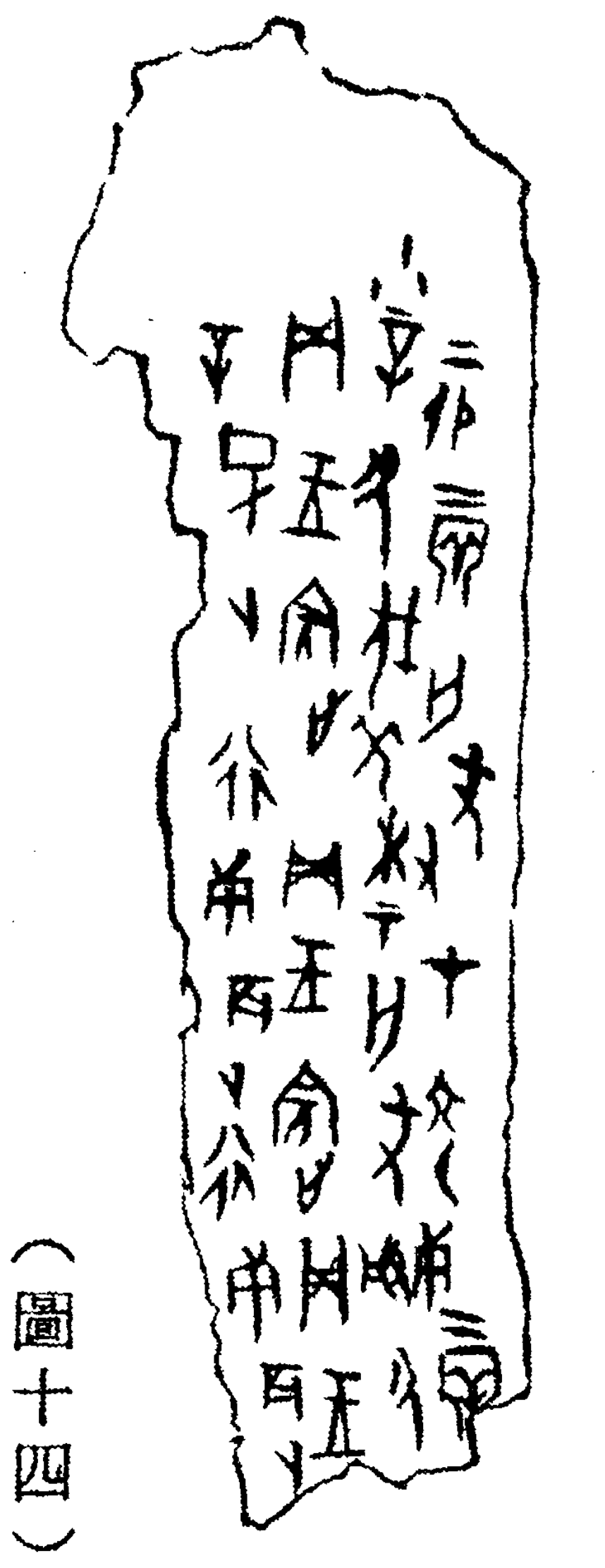
（圖十）



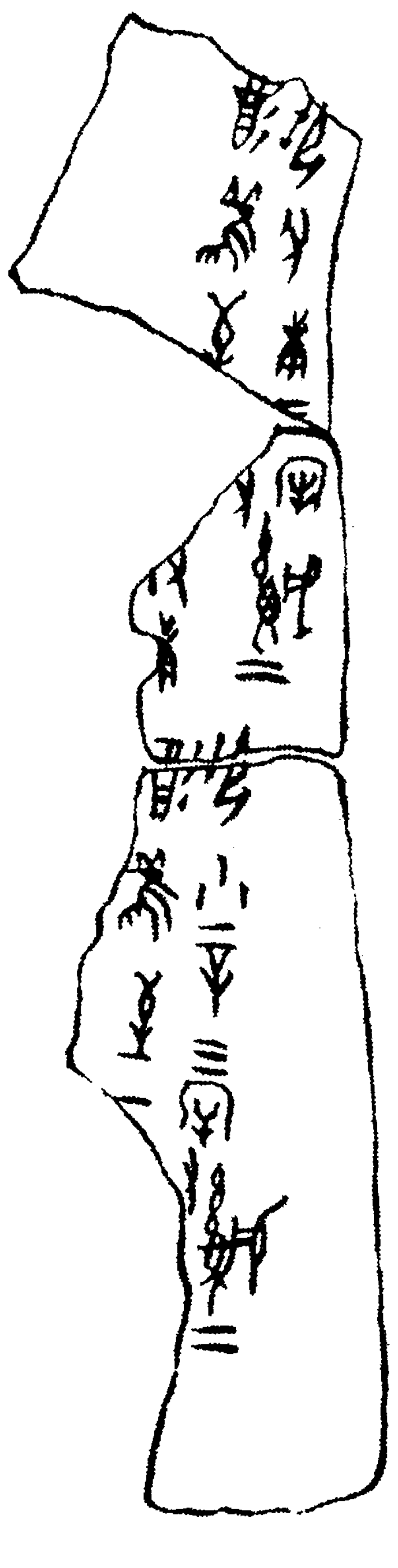
（圖十一）



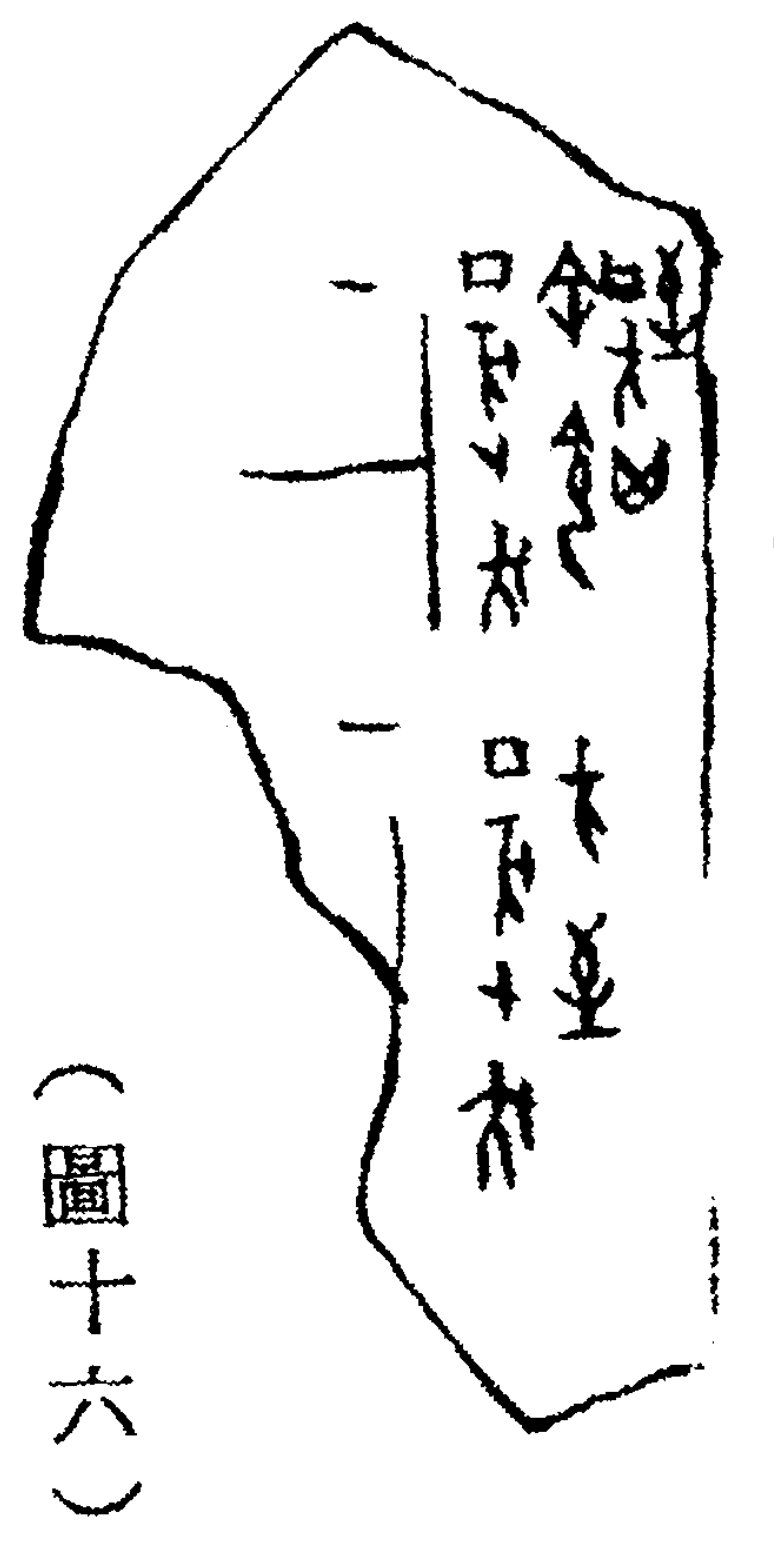
（圖十五）



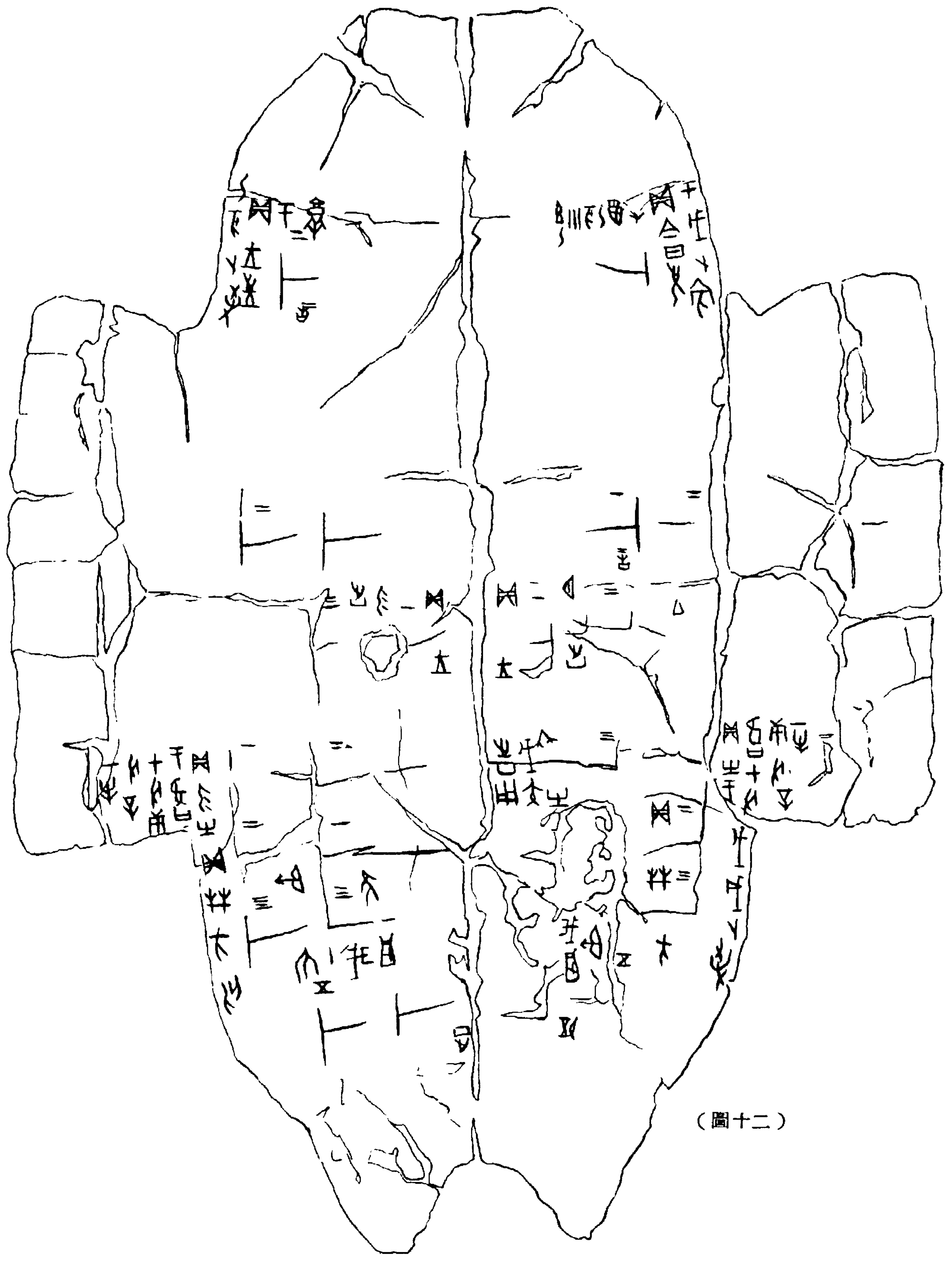
（圖十三）



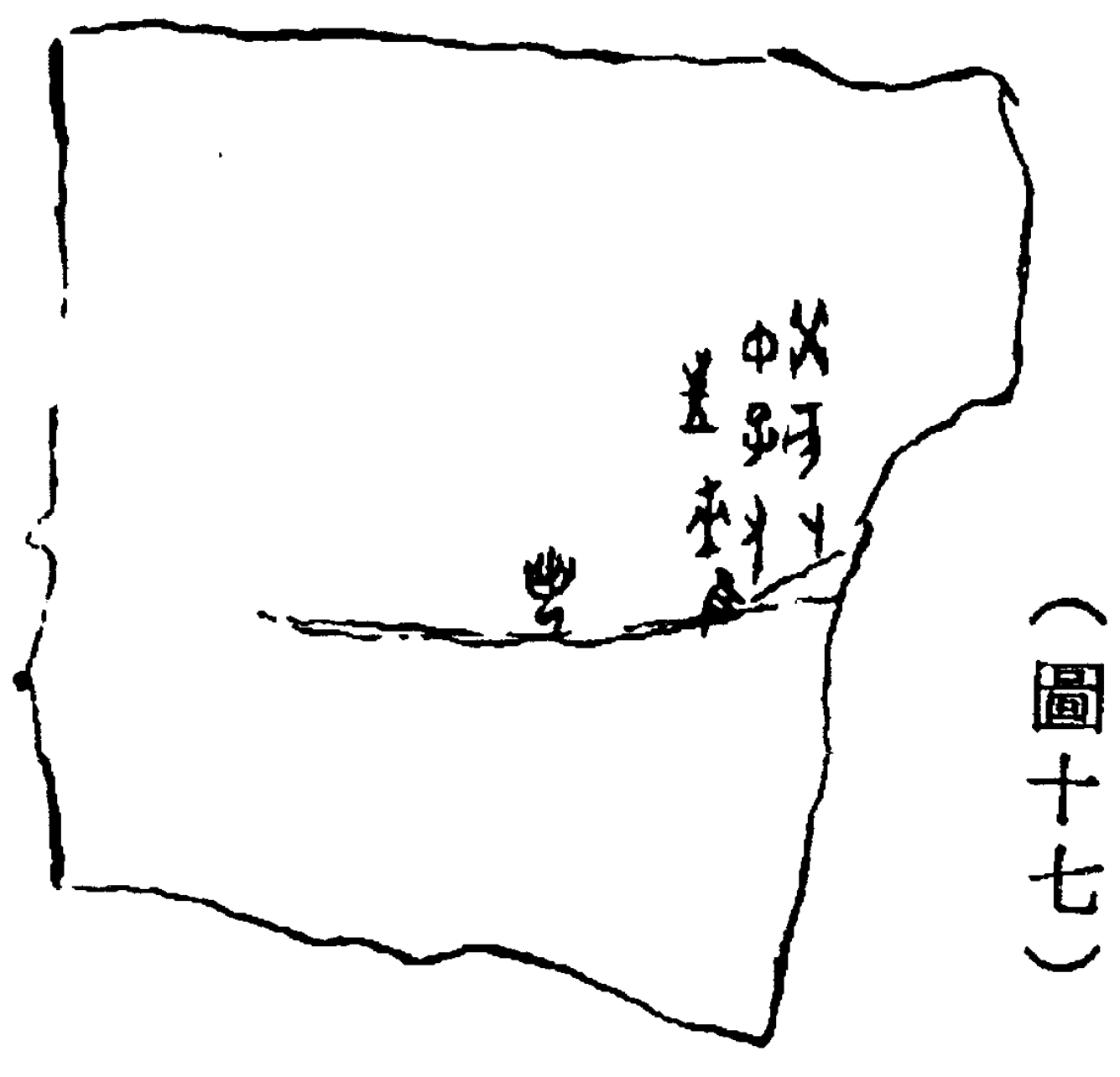
（圖十四）



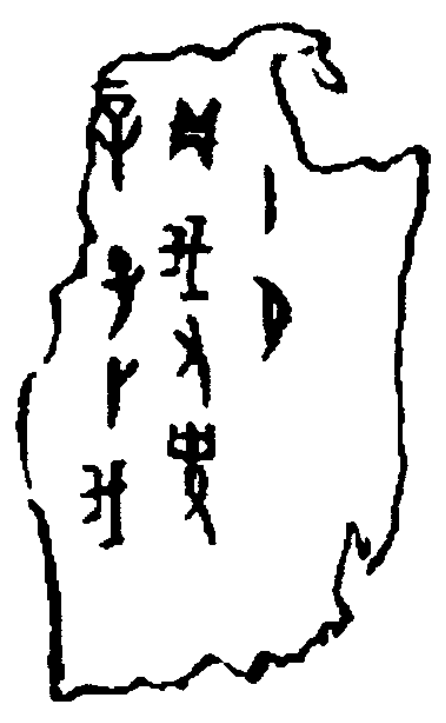
（圖十六）



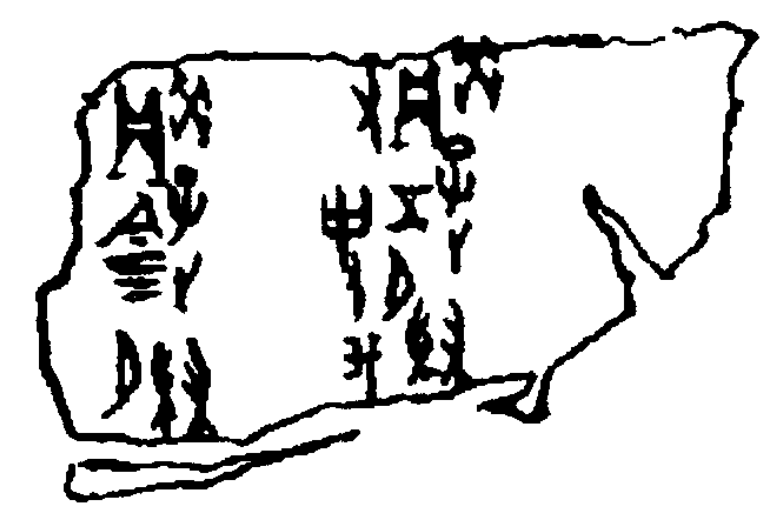
（圖十二）



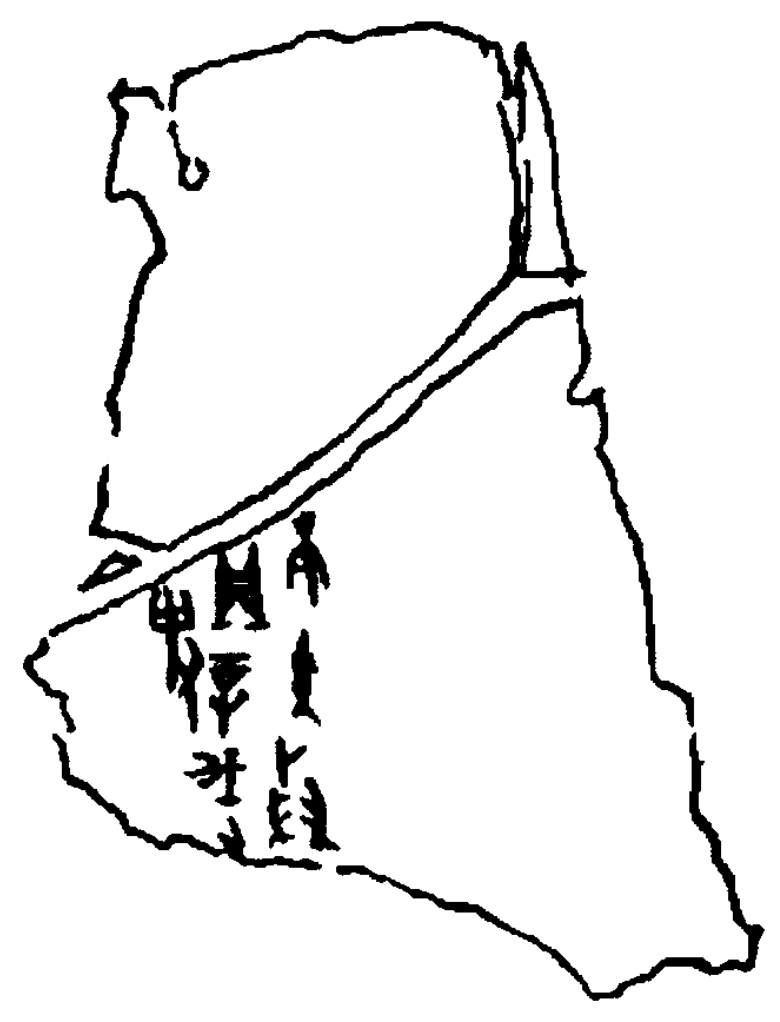
（圖十七）



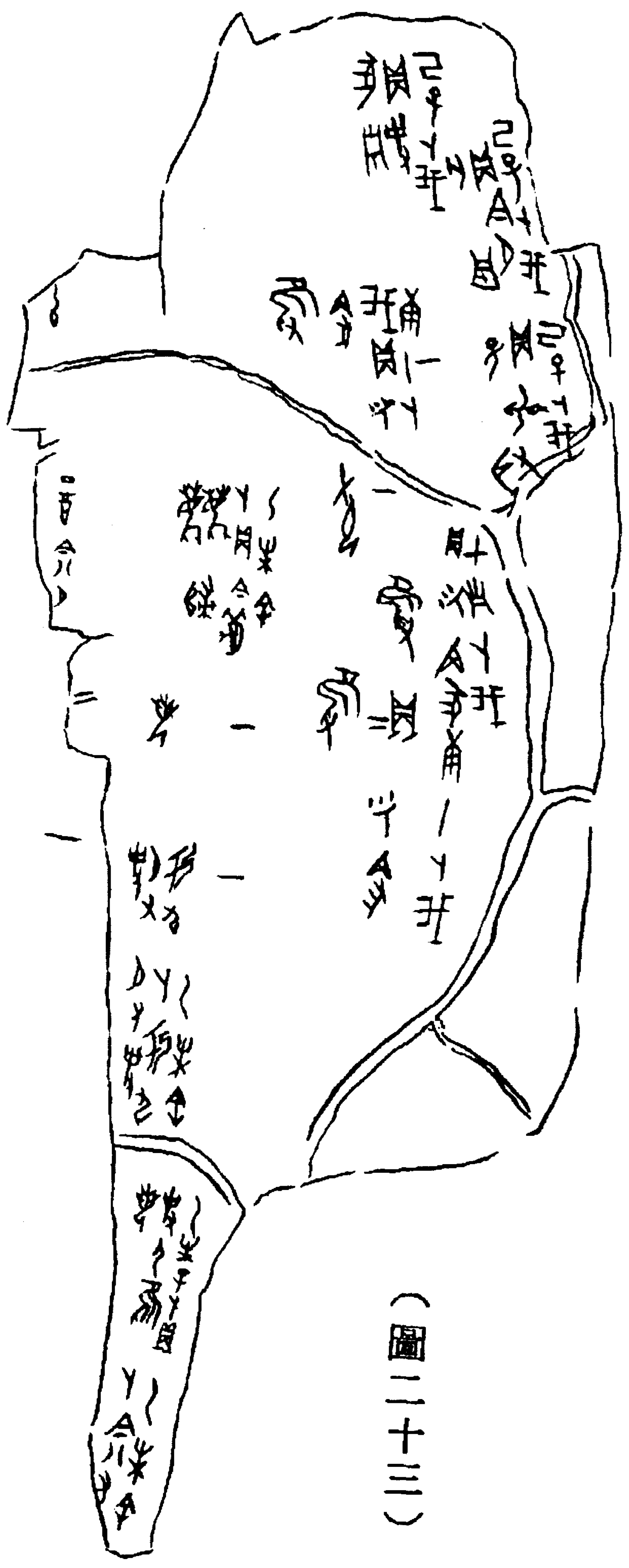
（圖十九）



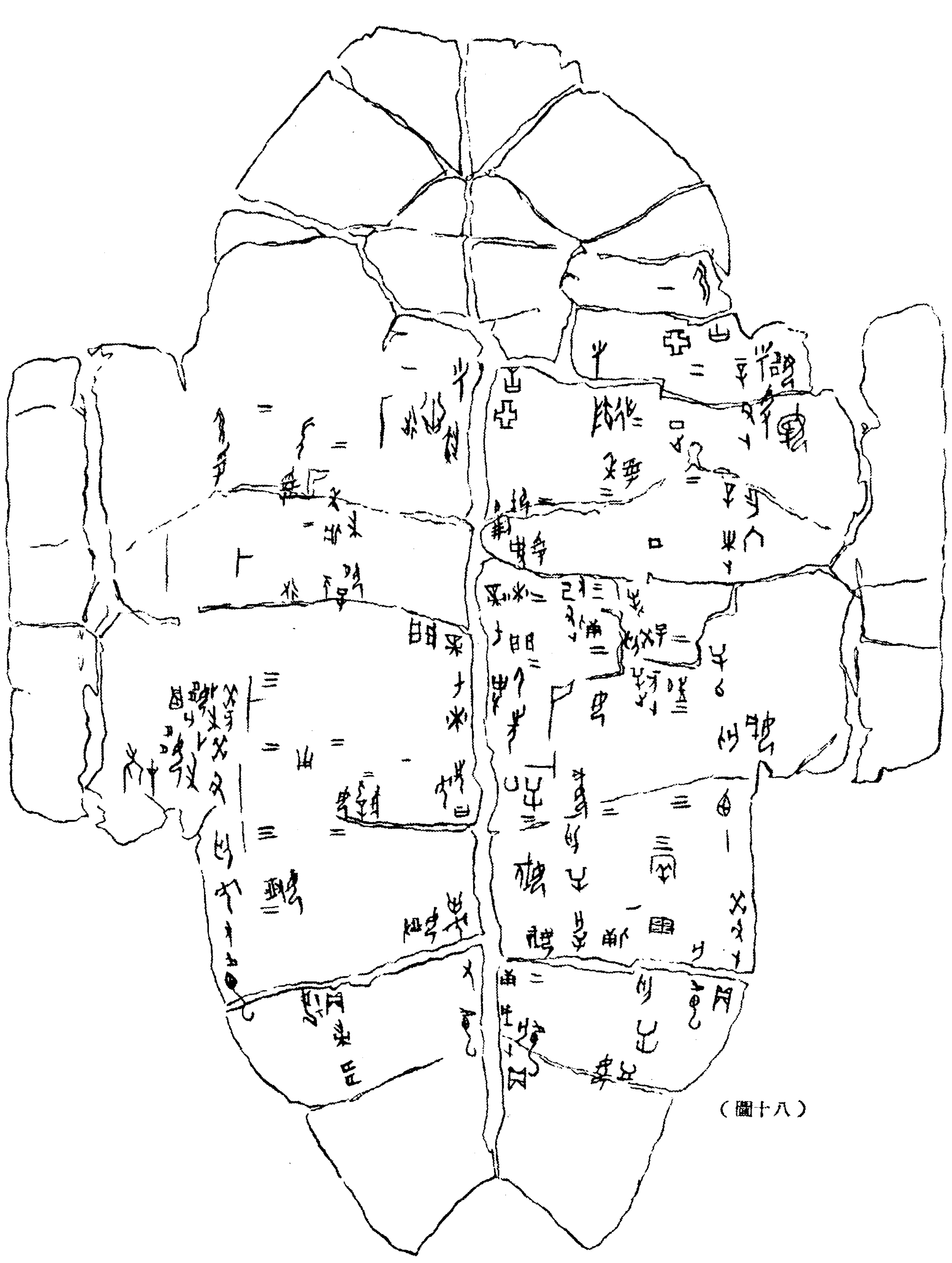
（圖二十）



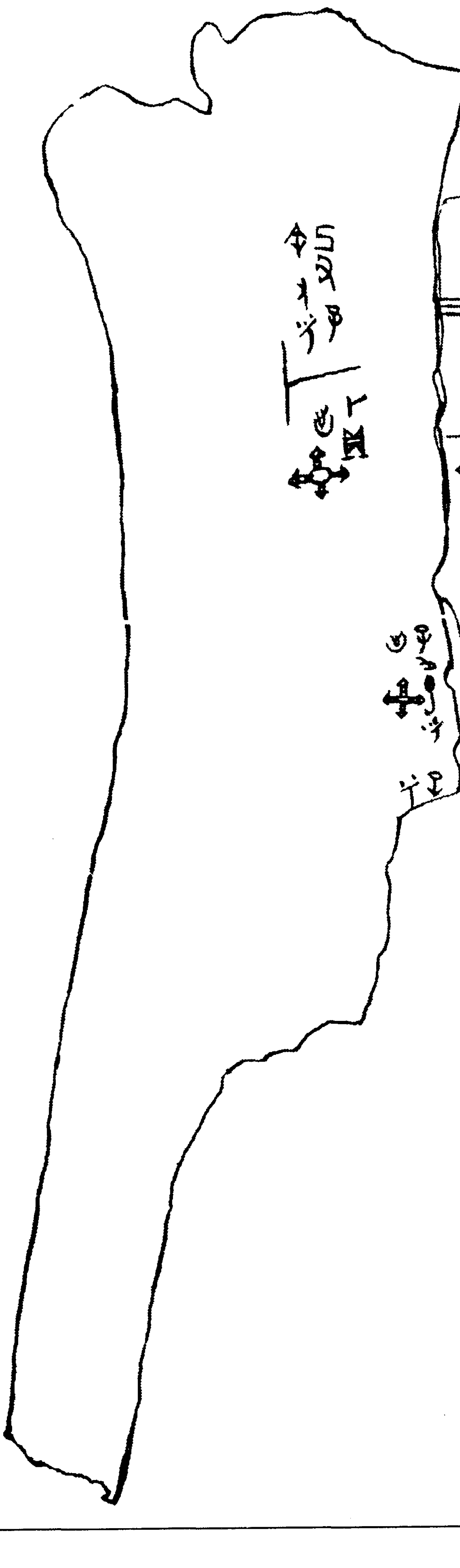
（圖二十一）

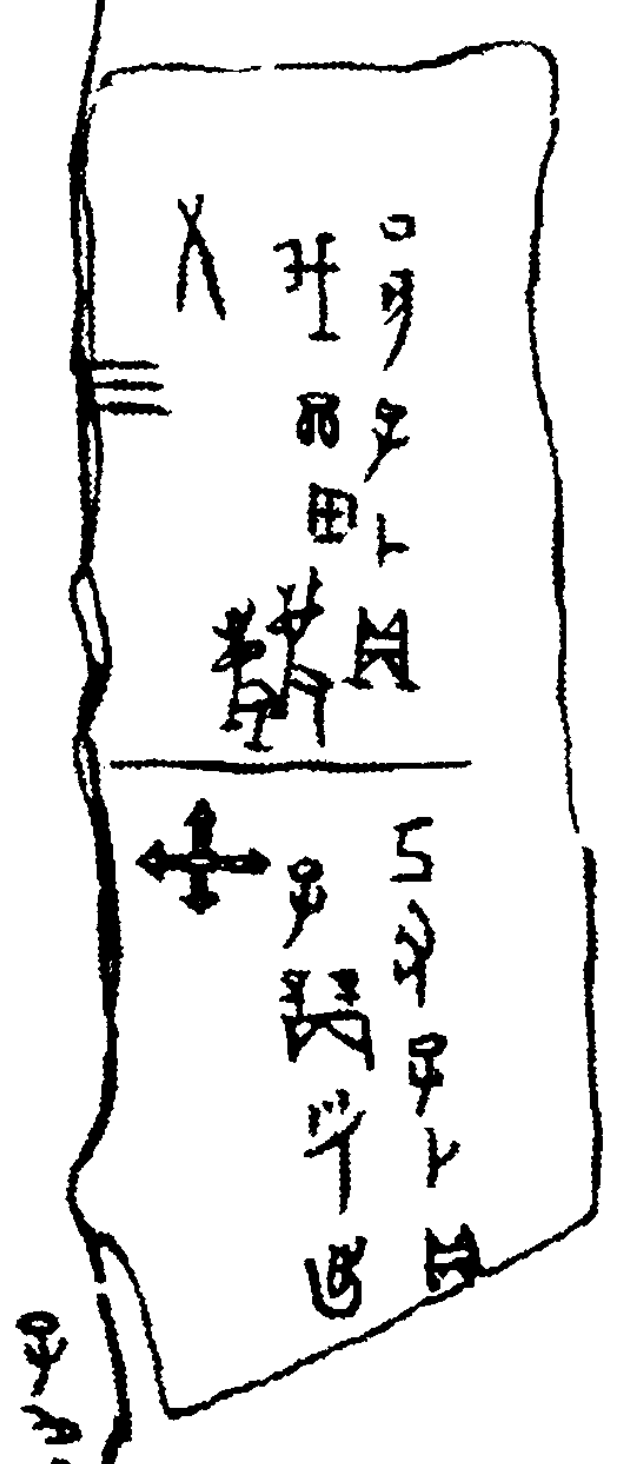


（圖二十三）

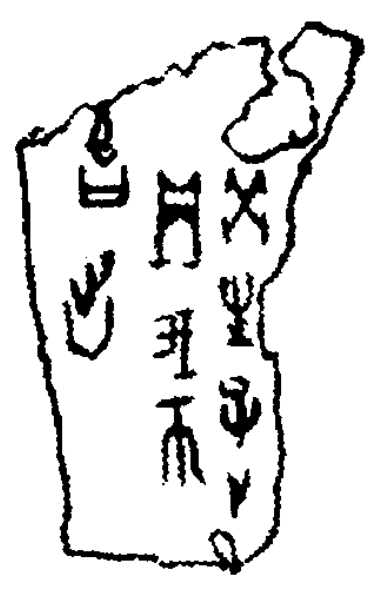


（圖十八）

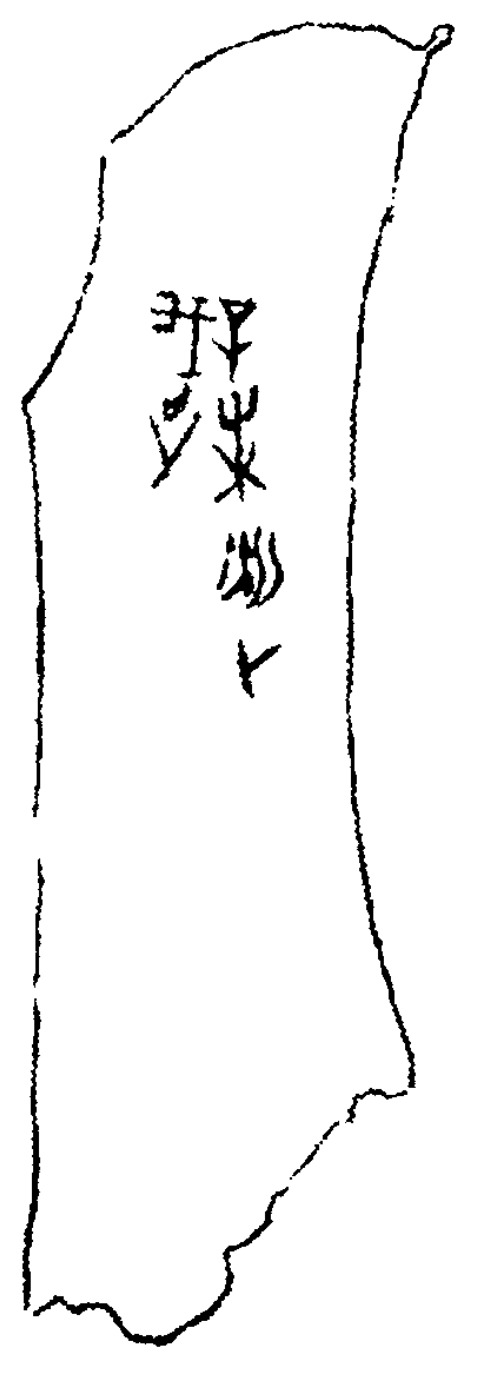




（圖二十七）

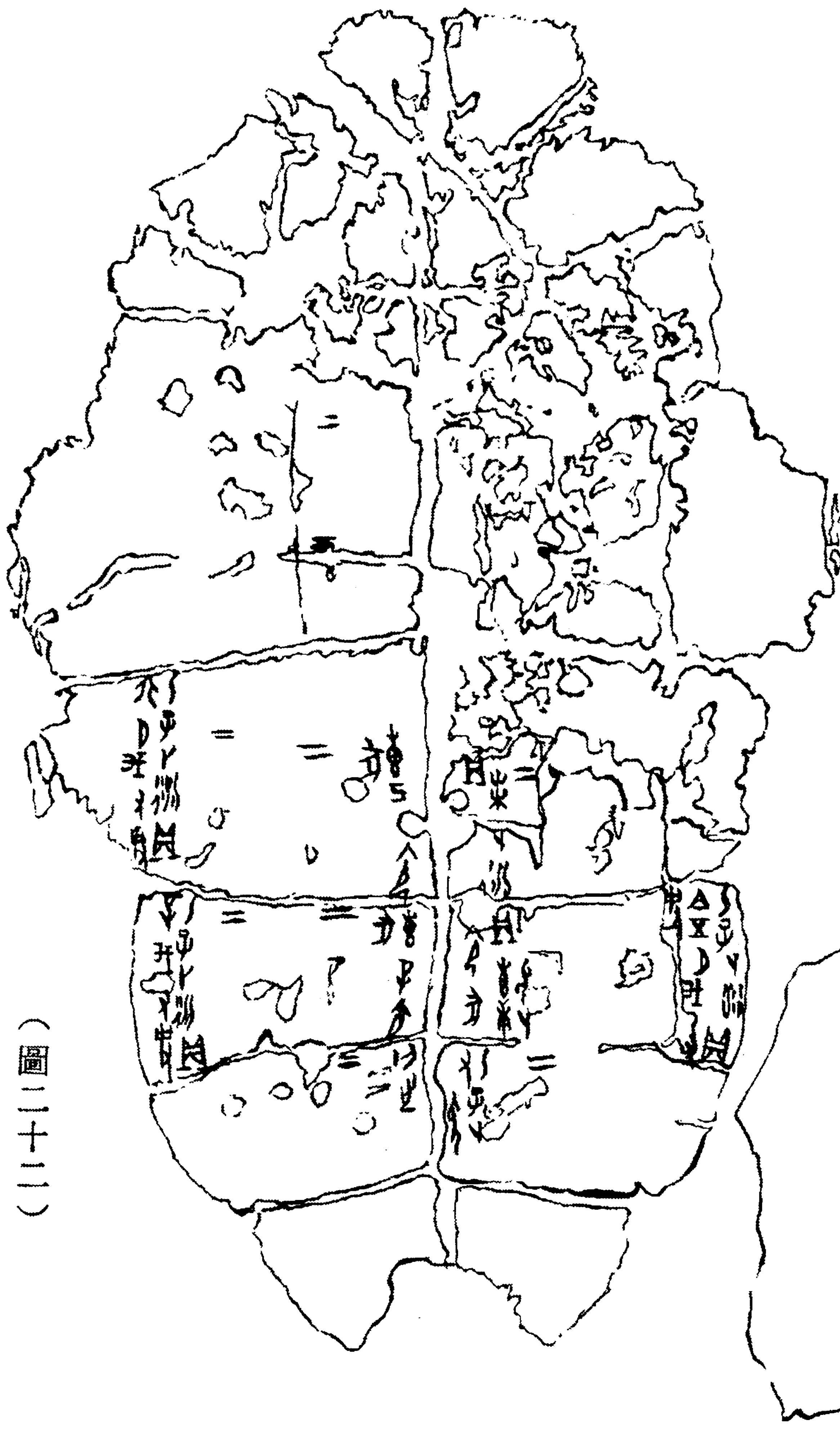


（圖二十六）



（圖二十五）

（原載《中國文字》新三期，一九八一年）



（圖二十二）

（圖二十四）

书 刊 评 介

《小屯南地甲骨》上册（第一、二分册）

史任

中国社会科学院考古研究所编、中华书局出版，上海市印刷七厂印刷，1980年10月第一版第一次印刷、八开本，精装二册。

《小屯南地甲骨》上册，由前言、拓本、图版号及拓片顺序号目录表、龟甲及背文统计表组成。其中彩色甲骨照片二版，拓本八百三十四版，文字及有关目录表等七十二页。

此书所收材料是考古研究所安阳发掘队1973年在河南安阳小屯南地发掘的全部刻辞甲骨，总数为5041片。在整理过程中，除了做去土锈、加固、粘对及墨拓等工作外，编者还缀合了甲骨530片，故现有甲骨为4511片，包括69片龟甲，4442片牛胛骨。因有的甲骨背面或侧面有刻辞，所以此书发表的甲骨拓本4589片，其中有甲71片，骨4518片，另外，还收进了一九七一至一九七七年考古研究所在小屯村一带发掘及零星采集的部分甲骨拓本23片，作为附录，附于其后。

此书拓本，以田野发掘时的地层、灰坑、房基址、墓葬为单位发表的，拓本的编号也保留了原出土时的顺序号，这样就便于读者对这批材料作进一步的整理与研究。

在《前言》中，编者介绍了甲骨发掘与整理的经过、甲骨埋藏的情况，典型地层叠压关系及与甲骨同出的各期陶器的特征，并发表了有关陶器图。编者采用考古学的整理方法，根据地层关系，将所出的陶器和甲骨进行综合分析研究，对学术界有争议的甲骨分期问题，提出了自己的初步看法。例如：

对“自组卜辞”，“午组卜辞”的时代，学术界有不同的意见，有的认为是武丁或武丁以前，有的认为是武乙、文丁时代的。这次在小屯南地发现了二十几片“自组卜甲”，十几片“午组卜甲”。其中如“自组”的《屯南》4513—4518（以下省去书名，仅列片号），“午组”的2698、2770、2771等片。所出的地层、灰坑及其共出的陶器均较早，属小屯南地早期，相当于大司空村一期。编者一方面依据这两组卜辞所出的坑位，另方面又从卜辞的内容进行了分析，认为它们都应为武丁时代的卜辞。

小屯南地出土的甲骨，绝大多数是过去一些学者所定的康、武、文卜辞。因这几种卜辞一般没有贞人，字体、文例又有相似之处，故不大容易区别。而且，对它们的分期，学术界也有不同的看法。这三种卜辞在小屯南地只出在中期及其以后的地层和灰坑，不见于早期的地层和灰坑，这就在地层关系上为断定它们的时代提供了依据。同时，在小屯南地中期的地层和灰坑中，编者根据打破关系和陶器型式的变化，又分为早、晚二组，即中期一组和中期二组。在中期一组的灰坑中，出两类卜辞，编者认为字体纤细、秀丽、上有父甲、父庚、父己及兄辛称谓的是康丁卜辞；字体较大，刚劲有力，上有父丁称谓的是武乙卜辞。中期二组灰坑除出康丁、武乙卜辞外，还见一种字体较小，笔锋圆润的卜辞，如751，其上有父乙称谓，编者认为这类卜辞是文丁卜辞。

此外，编者还从称谓、字体、文例等方面分别叙述了自组、午组及康丁、武乙、文丁卜辞的一些特征。

此书的甲骨，内容丰富、范围广泛，包括祭祀、征伐、农业、田猎、气象、天文历法及王事等方面。其中有不少新的材料。如：

贞人：新发现的贞人有“丩”(2113)，过去著录中武丁卜辞有此字，是人名。作为贞人名出现还是第一次。还有“令”。过去著录中有时是帝乙、帝辛时的贞人，有时是武丁的人名，而这次在4177中则是“午组卜辞”的贞人。

称谓：新的称谓在“自组卜辞”中有“小卜辛”(4518)；在“午组卜辞”中有“命乙”(2698)、“[illegible]”(2671)；“祖癸”(2771)；在康丁、武乙卜辞中有“后祖妣庚”(3186)、“中宗祖丁”(2281)、“后父丁”(647)、“高祖上甲”(2384)等。

方国：新发现的方国在康丁卜辞中有”殺方”(2651)；在武乙卜辞中有“沚方”(4090)、“卯方”(869)、“羊方”(2260)、“北方”(1066)。关于北方，著录中也曾出现过，如：《存》2.755“辛亥卜，北方其出”，但是否属方国，学者中尚有怀疑，此次发现的1066“王其正北方”，证明“北方”确是方国。

天文：过去著录中仅见“日又戠”，这次发现了“月又戠”(726)。其意义是否指月食，尚难确定，但作为一种天象变化则是没有问题的。

军旅编制：其中有左旅”、“右旅”(2328，2350)及“左戍、中戍、右戍”(2320)。

此外，还新发现了“大学”(60)、“百工”(2525)等。至于这批甲骨卜辞中新见的字、词及新的人名、地名等，在此就不一一列举了。

还应该指出的是，小屯南地从上世纪末就陆续出土甲骨。1928、1929、1931年，我国考古工作者在这里又先后做过一些发掘，但面积较小，所出的甲骨数量也不大多。而一九七三年的发掘，则是规模较大，收获甲骨刻辞较多的一次。因此，此书与过去著录中的一些甲骨，例如：601，1047，3083与《南明》655，498；488；1090与《安明》B2350＋《明续》2525；1078、3852与《粹编》135、432等片，内容和字体完全相同或基本相似。说明它们应为同期之物，而且出土地点也应相同或相近。所以，《小屯南地甲骨》的出版，便于甲骨学者综合整理和研究散见于著录中的康、武、文卜辞。

总之，《小屯南地甲骨》上册，是一部重要的甲骨著录，为甲骨文的分期断代，为古文字的研究，为商代历史的研究，提供了许多有价值的材料。

（原载《考古》1981年第4期）

Shang China is Coming of Age—A Review Article

David N. Keightley

On a recent research trip to China, I took only one Western-language work with me, Kwang-chih Chang's *Shang Civilization*. It proved an invaluable and encyclopaedic guide to the archaeology, anthropology, and culture of East Asia's first historical dynasty. Professor Chang has written, if not the Bible for the field, at least the New Testament, with its promise of a scholarly redemption in which the begats of half a century of site reports begin to make significant historical sense. Thanks to its comprehensive scope, the book will take numerous scholars the next decade to review adequately. I will simply indicate some of Chang's major achievements and then raise, not in a spirit of criticism, but as a part of an ongoing conversation among scholars, a series of comments that bear on some of his major interpretations.

Chang starts the book with a 65-page "Prolegomena: Five Doors to Shang," which deals with traditional historical accounts, the bronzes, the oracle bones, the archaeological evidence, and theoretical analytical models, assessing in each case the nature of the questions that can be considered and the reliability of the answers offered. Next, in part 1, "The Shang Society from An-yang," he discusses in four chapters the royal capital, natural and economic resources, the dynasty and its ruling apparatus, and the economy and the political order of the state. In part 2, "Shang History Beyond An-yang," he presents the Erh-li-kang culture at Cheng-chou and other sites, ending with considerations of absolute chronology, language and physique, and the relationship between Hsia, Shang, and Chou. Finally, in his epilogue, "Shang in the Ancient World," Chang assesses the implications of our understanding of Shang civilization for the study of early cultures elsewhere. An appendix lists twenty-eight carbon-14 dates for Hsia, Shang, and Western Chou archaeological finds. (For the Shang, these can now be supplemented by ZK-881 [*K'ao-ku* 1981.4:365], which, although suspiciously early for any scheme, may favor the "longer" chronology discussed below.)

Shang Civilization is crammed with useful information and challenging interpretations about (to choose almost at random) such matters as: the identification of the royal capital and the An-yang core (pp. 69–73); the two classes of human sacrifices (pp. 119–24); the rocks and clays used by the Shang craftsmen (pp. 149–51); the nature and functions of the *tsu* "lineage" (pp. 158–65, 195, 227, 230–33, 369); Fu Hao as a term "used to refer to all of the king's endogamous consorts and not just any single individual" (p. 177); and the origins of the Shang (pp. 335–48). There are a few highly technical topics that Chang does not elaborate in detail—such as the exact nature of the "neatly organized ritual schedule" (p. 171) or the fine points of bronze-casting technique (pp. 233–34)—but in most cases his 995 footnotes (lavishly supplied with Chinese characters) will guide the reader to the pertinent scholarship. His bibliography, which contains over 600 entries, is a scholar's delight. (I would suggest only the addition of four significant works: Chu [1957] at pp. 144–49; Satō [1962] at p. 231 [see the discussion in Keightley 1982:185, n. 110]; *Wen-wu tzu-liao ts'ung-k'an* [1977] at p. 273; and Akatsuka [1977], discussed below.)

Chang has an enviable mastery of what we may call thick tradition; his integrated approach moves plausibly and with a professional sense of the historiographical cautions involved (e.g., p. xiv), between hard archaeological data and softer, although not necessarily unreliable, later, textual evidence. And he is keenly aware of the provisional nature of many of his findings, acknowledging that it is "all too plain that the early historiography of the Shang civilization is still in a most fluid state" (p. 370). Chang's theoretical contributions—"The Question of 'Pristineness,'" "Shang's Position in Evolutionary Schemes," and "The Question of State Origins, Civilization, and Urbanism" (pp. 357–67)—I will leave to the assessment of anthropologists. I would note only that his conception of the Hsia, Shang, and Chou as partly coeval, rather than exclusively sequential, encourages us to document the synergistic effect that early states and cultures in China may have exerted on one another; such documentation may eventually provide a firmly grounded model of state generation, different from that involving pristine and secondary states.

In what follows, I will focus, all too briefly, on six of Chang's major historical themes. First, with regard to absolute chronology, I would question Chang's adoption of the "longer" chronology, which would place the fall of the Shang ca. 1100 B.C. (pp. 322–29). I would suggest that Chang's dating and interpretation of the lunar eclipse inscriptions (like those of Tung Tso-pin which he generally follows) are wrong and that there are sound reasons for preferring a "shorter" chronology which places the conquest between 1050 and 1040. (See Keightley 1978a: 171–76; Nivison forthcoming.) Chang has remarked of my own published discussion of the short chronology that it is "too brief to be of great use" and that his own attempt to follow my dating of the lunar eclipse inscriptions was not successful (1981:638). The issues are technical and lengthy, but I will briefly identify some of the major disagreements in our approaches and interpretations.

1) I believe that the word (*GSR* no. 483b) that Chang, following Tung Tso-pin, reads as *yin* (it figures in his eclipse inscription no. 5) was not, in this context, a sacrificial term, but a word, **d'ŭg/t'ou* (→**tŭk/cho*; *GSR* 1235a,b), meaning "cleave" (as, in other contexts, to cleave sacrificial meat); it referred to the no-man's-land period in the dark hours of night when one *kan-chih* day cleaved to another and dreams, toothache attacks, childbirths, and lunar eclipses were all recorded as occurring. (See the inscriptions transcribed by Chang Ping-ch'üan 1959:135–37, and the discussion at Keightley 1975b:142–44; 1978a:43, n. 79; and Takashima 1979–80:54, n. 19. Lung 1976, which Chang cites approvingly on p. 325, does not alter my interpretation of the word's function.) Chang's translation of his eclipse no. 5—"Seven days later, Chi-Wei [we performed the] *yin* [ceremony]. Keng-Shen, the moon eclipsed" (p. 324)—requires that the eclipse have occurred on day 57 (keng-shen) in the 60-day cycle, rather than day 56. My translation (which accords with that of Chou 1964–65:243)—"On the seventh day (after the original divination and prognostication of harm), in the *t'ou* period when chi-wei (day 56) cleaved to keng-shen (day 57), the moon was eclipsed"—has the eclipse straddling two days. I

David N. Keightley is Professor of History at the University of California, Berkeley.

Shang Civilization. By Kwang-chih Chang. New Haven: Yale University Press, 1980. xvii, 417 pp. Appendixes, Bibliography, Index. $30.

am therefore able to identify the inscription as a record of the total eclipse of December 27–28, 1192 B.C., which started at 9.32 P.M. An-yang time (of day 56) and ended at 1.25 A.M. (of day 57). (For the eclipse data, see Newton 1977:49.) Chang (p. 328) rejects this dating (and thus the interpretation of *yin* or *t'ou* it requires) because he rejects the "Roman day" (see below) upon which it is based, and because he cannot fit this relatively late date into the scheme that his other assumptions require; as a result, he offers (p. 327) a variety of dates for a day 57 eclipse, but none of them are suited to a "thirteenth moon" (see item 4 below).

2) Chang, again following Tung, believes that the Shang day was "Babylonian," i.e., that it began and ended at daybreak. I prefer the counterview, offered by Dubs (1951:329–30, 332; 1953:102) that the Shang used the "Roman" day, which started and ended at midnight. The fact that "the earliest historically attested Chinese 'day,' in Former Han times, began approximately at midnight, as have Chinese 'days' ever since" (Dubs 1953:102; Tung [1953:388] admits the point) strongly favors this view. The disagreement is crucial because, as Chang indicates (pp. 326–28), it alters the criteria by which we match the astronomical and calendrical data. (In this connection, I should point out what I take to be a confusing typographical error: at p. 328, line 2, "day 9" should be "day 10.")

3) Chang (p. 328) and I (Keightley 1975b:163–64) agree that it is impossible to fit all five lunar eclipse records into one consistent scheme. I accordingly reject Chang's eclipse no. 3 because both inscriptions recording the event (*Chia-t'u* 55 and *Pu-tz'u* 632; full citations for these and the other abbreviations of oracle-bone collections given below may be found in Keightley 1978a:229–31) contain the notation *wen* (*GSR* no. 441f). This indicates that the diviner, or whoever was responsible for the verifications carved on the shell, had not seen the eclipse himself and was simply noting, as a caution, "so we have heard," or "so it was reported." It may well have been a false or erroneous report. Such a conclusion is supported by the fact that three of the fifteen solar eclipses "reported" (*wen*) in *Hou Han shu*, "Wu hsing chih" never occurred, and four more report the day erroneously (three of them reporting the eclipse a day late). (These eclipse records are listed by Tung 1945, pt. 2, chap. 3:24a; I am grateful to Rick Kunst for translating the Chinese dates into Western dates and calculating the Julian Day numbers, which I could then check against the eclipses listed in Oppolzer 1962.) If nearly one-half of the solar eclipses "reported" in Latter Han could be wrong, the possibility that the Shang record of a "reported" lunar eclipse might also be wrong, either as the result of observation or dating error, is strong.

4) Chang, by contrast, rejects the "thirteenth [i.e., year-end, intercalary] moon" recorded on the oracle bone (*K'u-fang* 1595) that carries the record of his eclipse no. 5, "if for no other reason than its being in a long record" (p. 328). He does not explain on what historiographical grounds he distrusts particular parts, like this month number, of long inscriptions. (In this case, in fact, the "thirteenth moon" is also recorded on *Chin-chang* 594, a satisfactorily *short* record of the same eclipse!). In my shorter chronology, as we have already seen, the eclipse may be assigned to December 27–28, 1192, a date well suited to the year-end, thirteenth moon.

The result of our disagreements—about the significance of the words *yin* (or *t'ou*) and *wen*, about the "Roman" or "Babylonian" nature of the Shang day, and about Chang's rejection of a recorded Shang month date—leads to the following situation. Chang (p. 328) dates the five inscriptions to the periods 1282–1229 (a span of 53 years) or 1227 to 1189 B.C. (a span of 38 years). I, by contrast, exclude Chang's eclipse no. 3, as indicated above, and date the remaining four inscriptions to the 18-year period from 1198–1180 B.C. (Keightley 1978a:174, n. 19). The fact that the first (*Ping-pien* 57.1; Nov. 4, 1198) and last (*Ping-pien* 59.1; May 22, 1180) of these four eclipses were recorded on plastrons excavated from the same pit (YH127) offers additional, if inconclusive, support for the rightness of these calculations, for it suggests that the pit might have held the inscriptions for the approximately 20-year reign of one king, in this case Wu Ting.

Absolute dates are fundamentally important because they bear on the dynastic identification of so-called "Middle Shang" sites, the subject of my second query. If we accept, as I believe we should, the shorter chronology, which puts the Chou conquest at ca. 1045 B.C.; and if we date King Wu Ting, on the basis of the lunar eclipse inscriptions to ca. 1200–1181 B.C.; and if (following Bishop 1932) we continue to count backward along the Shang king list by 20-year reign periods (or 30 years per generation when fraternal succession is involved) (Keightley 1978a:174–77;228, n. b), we will—assuming that the king list (generally confirmed by Ssu-ma Ch'ien) derived from the Late Shang ritual cycle is a true historical record (see below)—arrive at ca. 1460–1441 for the reign of T'ang, or Ta Yi, the dynasty founder. Because the two relevant Cheng-chou samples (ZK-177, 178) yield carbon-14 dates of 1573 ± 140 and 1598 ± 110 (Barnard 1980:15), the short chronology makes it difficult to accept the Cheng-chou site as a dynastic Shang capital; the "Middle Shang" occupation would have been too early. (Note that Lei [1931:11] calculated only 25 years per generation, a figure that, if we follow the same procedures, would put T'ang on the throne ca. 1420–1401.) Chang, accepting the longer chronology and assuming that Cheng-chou was a Shang capital, argues by contrast that the founding of the dynasty would have taken place before 1700 (pp. 323–24). With only two radiocarbon dates available and the large, one-sigma confidence intervals involved, it is impossible to decide the issue on this basis. It is interesting to note, however, that Huber (in press), relying on the evidence of ceramic shapes and designs, has concluded that "Nothing would incline us at present to see any significant influence from Shantung in the later phases at Erh-li-t'ou or, certainly, Cheng-chou." If, as Chang proposes, "the rulers of the Shang dynasty could have been a political group, and a conqueror, from the east" (p. 345), Huber's conclusions seem to provide one more reason for wondering if Cheng-chou should be associated with the Shang at all. Certainly, there are traditional reasons for thinking Cheng-chou lay in the area of Shang domination, but, pending the discovery of inscriptions that actually link the site to the Shang dynasty, or of more carbon-14 dates that place it within the period (which itself still needs to be more firmly established) of Shang dynastic rule, the identification of Cheng-chou as a Shang royal capital needs to be treated with caution; it is no wonder that there has been no agreement (pp. 270–71) about which or whose capital it was. (For the latest discussion, which reiterates the view that Cheng-chou was the Po of T'ang, see Tsou Heng 1981.)

Third, in the realm of social and political history, I would like to suggest that more evidence is needed—and I choose these words carefully—before we can accept Chang's hypothesis about a system of royal succession in which ten *kan* units were classified into two major groups (Chang refers to them as A and B), which held power in alternate generations (pp. 165–88). This is an extremely bold and imaginative hypothesis fundamental to our understanding of lineage groups and the political process in Late Shang, but I find much to question in the present treatment. The issues—involving the identity of the royal tombs at Hsi-pei-kang, Tung Tso-pin's hypothesis about the Old and New Schools, the malleable, artificial nature of the royal genealogy (see, e.g., Keightley 1978a:186, n. e, 187, nn. f and h; an excessively malleable genealogy might invalidate my above calculations, based on the number of generations, about T'ang's reign dates), and inscriptional evidence—are highly technical; I will treat them separately (Keightley forthcoming).

Fourth, I should also like more evidence before I am prepared to accept Chang's claim that the various *fang* states "were political units but not cultural or ethnic units" (p. 253). The issue is important because it bears on the extent to which these groups were at a pretribal, tribal, or early state level of organization. Fried (in press) has noted, for example, that in "ethnographically known simple societies" there is no "marked tendency to congruence of . . . institutional networks" involving economic, kinship, linguistic, and religious ties. "Such networks fail in many instances to fully occupy a particular linguistic space or idiolect, while in others, networks cross-cut rather drastic linguistic differences." When states first form, however, and these networks become congruent to a significant degree, it is not clear whether cultural and ethnic unity is also implied at the local or regional level. Unfortunately, it must be doubted that either our archaeological or geographical knowledge is yet sufficiently precise for us to be able to agree with Chang that "on the basis of archaeological evidence, the cultural classifications of the archaeological remains in the area of Shang period *fangs* did not coincide with their political affiliations" (p. 253). And it should be noted that Akatsuka (1977) has documented, frequently plausibly, specific religious beliefs that defined, or were central to the existence of, many of the non-Shang groups or, at least, their elites (see Keightley 1982:143–44, 153–54, 156–58, 166–71). Indeed, I would suggest that, in any system of cultural definition, religious beliefs, which may otherwise leave little archaeological trace, should, when documentable with inscriptional evidence, be weighted equally with, if not be given priority over, potsherds and other elements of material culture. (But, in the absence of inscriptions, see Huber's eloquent statement [in press, n. 3] on the paramount importance of pottery for defining Neolithic cultural groups.) These considerations affect our understanding of state formation—for which Chang (pp. 335–48) provides a taxonomy, a rectification of names, rather than an explanation—if one argues (Wheatley 1971; Meacham 1974; Keightley 1975a; 1978b) that religious belief played a major role in focusing and legitimating political developments in early China.

Fifth, Chang envisions a Shang state network consisting of "hundreds of walled towns" (p. 240): Fu Hao "had her own walled town" (p. 190; see also p. 196); "Most if not all of the court officials . . . appear to have been granted title to land with income from harvests and walled towns" (p. 193; see also p. 217); the *tsu* lineage, "the Shang's basic social unit," lived "in a small walled town" (p. 195); walled towns "were the principal ruling instruments in Shang China" (p. 210). But what is the evidence for these assertions? It is true that a few Early and Middle Shang walls have been found—notably, the Erh-li-t'ou phase wall at Tung-hsia-feng, Hsia-hsien, Shansi (p. 345, n. 52), and the Erh-li-kang phase walls at Cheng-chou (pp. 273–77) and P'an-lung-ch'eng (p. 299). But no wall has been found at Hsiao-t'un. No walls have been found at the Shang sites (mapped on p. 71) ranging from Chü-lu in the north to Hsin-hsiang in the south, which formed, in Chang's view, the extended capital area. No wall has been found at the supposed sites of Feng and Hao, the Western Chou capitals in the Wei River Valley. It would not be easy for "hundreds" of rammed-earth town walls to leave no archaeological trace; thus, the possibility exists that the Shang polity was mainly composed of unwalled "residential hamlets" (p. 131) and that the political architecture of the North China Plain was closer in style to the Neolithic model, rather than to the Middle and Late Chou model (which may unduly influence our expectations with its records of wall building in *Shih-ching*, *Ch'un-ch'iu*, and *Tso-chuan*). It is significant, I think, that the "Lo kao" of *Shang-shu* makes no mention of wall building at the founding of Lo-yi, the new Western Chou capital in the east.

Finally, Chang implies that, by comparison with the Neolithic situation, the increased productivity of Shang agriculture was due primarily to advances in labor organization (pp. 225–26; he makes the point more explicitly in Chang 1974: 10–11). "Despite occasional claims to the contrary, bronze was not an oft-used material for [agricultural] implements" (p. 223). I would agree that the ability to organize labor effectively was fundamental to the development and character of Shang civilization (Keightley 1969; Franklin in press). The evident productivity of Shang agriculture, however, does raise some further considerations about Bronze Age technology. In one scenario, the Shang genius for labor organization, manifested in the labor-intensive bronze-casting industry, would indeed have produced bronze agricultural tools for the field gangs to use. Thus, Ma (1980:11) has suggested that, on the basis of the evidence from the Erh-li-kang strata at Nan-kuan-wai and Tzu-ching-shan near Cheng-chou, "the large number of molds for tools in contrast to a small number of molds for ritual implements" indicates "that tools for production and farming predominated. Indeed, these bronze tools and farming implements are indicators of the development of the forces of production of Bronze Age China." It is undeniable, however, that, generally speaking, relatively few Shang bronze tools have been found. One explanation for their absence would involve a scenario in which these precious bronze tools would not have been buried in tombs but would have been reused and recycled; the relatively small number excavated would reflect only patterns of burial and transmission. Ch'en (1981:410–12) has recently proposed an alternative scenario, arguing that, of the comparatively few bronze tools that have been found, those that might have been used in agriculture would have been reserved primarily for such rituals as the ceremonial ploughing of the sacred field (*chi-t'ien*) and possibly for the agriculture of the royal house. Ch'en suggests that most of the excavated bronze axes, adzes, and chisels were probably used for handicrafts, not for agriculture, and—implying the existence of what we might characterize as a "machine tool" revolution—proposes that such bronze handicraft tools would have led in turn to the production of more efficient agricultural implements of stone, bone, wood, and shell; thus, bronze implements would have contributed, although only indirectly, to increased agricultural productivity. Problems of definition are, of course, involved. Is an axe used to cut down trees so that land may be cleared for crop growing an agricultural tool or not? How do we know, in fact, that any Shang bronze tool was used by a farmer rather than a craftsman? My own proposal would be that most bronze tools did indeed have a ritual character in Shang times, and that, for example, the bronze spades, axes, adzes, and chisels found in half of the twelve Middle Shang graves excavated at P'an-lung-ch'eng (*Wen-wu* 1976.2:39, figs. 20–22, 27), or the nine adzes, two chisels, and seven spades (four of them strikingly ornate) found in Fu Hao's tomb at Hsiao-t'un (*Yin-hsü Fu Hao mu* 1980:100–103; pl. 67), might have been precisely the special, ritual tools that had been used to dig the burial pits and trim and carve the coffin timbers. Yang Hsi-chang, one of the archaeologists currently at the An-yang site, has in fact suggested to me that the great tombs at

Dubs, H. H. 1951. "The Date of the Shang Period." *T'oung Pao* 40:322-35.

———. 1953. "The Date of the Shang Period—A Postscript." *T'oung Pao* 42:101-105.

Franklin, Ursula. In press. "On Bronze and Other Metals in Early China." In *The Origins of Chinese Civilization,* ed. David N. Keightley. Berkeley: University of California Press.

Fried, Morton H. In press. "Tribe to State or State to Tribe in Ancient China?" In *The Origins of Chinese Civilization,* ed. David N. Keightley. Berkeley: University of California Press.

GSR (Grammata Serica Recensa). 1957. By Bernhard Karlgren. Stockholm: Museum of Far Eastern Antiquities.

Huber, Louisa G. Fitzgerald. In press. "The Relationship of the Painted Pottery and Lung-shan Cultures." In *The Origins of Chinese Civilization,* ed. David N. Keightley. Berkeley: University of California Press.

K'ao-ku. 1981.4. "Fang-she-hsing t'an-su ts'e-ting nien-tai pao-kao (pa)" [A report on radiocarbon dating (8)]. Pp. 363-69.

Keightley, David N. 1969. "Public Work in Ancient China: A Study of Forced Labor in the Shang and Western Chou." Ph.D. dissertation, Columbia University.

———. 1975a. "Legitimation in Shang China." Mimeo. Conference on Legitimation of Chinese Imperial Regimes, June 15-24, Asilomar, Calif.

———. 1975b. "The Date of the Shang Historical Period: A Problem in the Chronology of Bronze Age China." Mimeo. Joint Stanford-Berkeley Seminar on Chinese Culture, Feb. 18, San Francisco.

———. 1978a. *Sources of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China.* Berkeley: University of California Press.

———. 1978b. "The Religious Commitment: Shang Theology and the Genesis of Chinese Political Culture." *History of Religions* 17,3-4:211-25.

———. 1982. "Akatsuka Kiyoshi and the Culture of Early China: A Study in Historical Method." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 42,1:139-92.

———. Forthcoming. "Dualistic Phenomena in Shang Society: A Reconsideration." *Harvard Journal of Asiatic Studies.*

Lei Hai-tsung. 1931. "Yin-Chou nien-tai k'ao" [A study of Yin and Chou chronology]. *Wen-che chi-k'an* 2,1:1-14.

Lung Yü-ch'un. 1976. "Shih chia-ku wen *hsi*(?) tzu chien chieh hsi tsun" [Interpretation of the oracle-bone graph *hsi* (?) together with an explanation of the sacrificial *tsun*-vessel]. In *Shen Kang-po hsien-sheng pa-chih jung-ch'ing lun-wen-chi,* pp. 1-15. Taipei: Lien-ching.

Ma Ch'eng-yüan. 1980. "The Splendor of Ancient Chinese Bronzes." In *The Great Bronze Age of China,* ed. Wen Fong, pp. 1-19. New York: Metropolitan Museum of Art and Alfred A. Knopf.

Meacham, William. 1974. "Religion and the Origins of Shang Civilization: Notes on a Theory of Proto-History." *Ching Feng* (Hong Kong) 17,2-3:63-74.

Newton, R. R. 1977. *A Canon of Lunar Eclipses for the Years -1500 to -1000.* Research Report CP 054. Laurel, Md: Johns Hopkins University, Applied Physics Laboratory.

Nivison, David S. Forthcoming. "The Dates of Western Chou." *Harvard Journal of Asiatic Studies.*

评《建国以来甲骨文研究》

王宇信著　中国社会科学出版社1981年版

〔美〕戴维·恩·凯特利

译者按：本文作者戴维·恩·凯特利David N. Keightley，汉名吉德炜，现任美国加州大学伯克利分校历史系教授，古代中国研究会主席（该会研究中国汉以前历史文化，现有美国和其他国家会员四百五十余人），并任该组织的出版物《古代中国》主编。吉氏研究中国古代史和中国古文字。主要著述有《商代和西周强制性劳动的研究》、《宗教信仰与都市主义的起源》及专著《商代史料：青铜时代中国的甲骨文》等。后者是迄今西方国家学者用英文撰写的第一部系统介绍我国甲骨学知识的较大型综合著作。美籍华裔学者张光直评价此书时指出：“本书将受到学习中国古代历史文化的学生们的热情欢迎和感谢。作为西方第一部介绍商代甲骨刻辞的入门书，对于以任何语言撰写的同类著作来讲都是最完善的一本著作，《商代史料》在未来的岁月里将是这一领域里的一本标准教科书。”

王宇信《建国以来甲骨文研究》一书，为1949年以来甲骨学的研究作了非常宝贵的总结。第一章回顾了1899年——1949年之间的主要学术成就，诸如《殷墟文字甲编》和《乙编》的结集①、商王室世系的考证、董作宾甲骨断代例的发表以及YH127号坑的发掘等。其余的七章，全面总结了以后三十来年的学术成就及存在争议的问题。例如，王宇信论述了新卜骨的发现、缀合、辨伪、“异形文字”（现在，张政烺考证了甲骨上由六个数字组成的刻划符号就是《易经》中的八卦），概述了于省吾、陈梦家和郭沫若等著名学者的贡献；提供了断代和分期，人牲、妇好墓时代的鉴定；涉及到商代社会性质（对奴隶制和阶级斗争给予特别的注意）、图腾制度、商国家的领域、农业、水利、畜牧业、青铜铸造、医学、天文学、历法、数学及目前的研究情况（如包括一部新的、收有四万多片甲骨的内容广泛的《甲骨文合集》编纂）。同时还展望了此领域的未来（提出需要编一部优良的字典和词语索引）。王宇信的总结写得简明扼要，并不时从有关著作和论文中摘出一些有重要意义的引文。对于有志于从事甲骨文研究的人来说，这本书对几乎所有重要问题都作出了新的有价值的介绍或再介绍②。

如果不对这整个学科加以考察的话，人们几乎不能评介这样一本书的内容，我们在这里也不准备这样做。但是，可以作出两点一般性的评论。第一，这本书给予我深刻的印象是：中国的学者们越来越否认了董作宾关于在文武丁统治时期礼制复古的见解，对此我很高兴，因为这一点与我本人研究的结果是一致的。董把大多数有关的甲骨放在第四期，而现在的中国学者却把它们放在第一期偏晚或第二期稍早。王宇信的论据见原书第55——62页（这是他注意到1973年的发现支持了“自组卜辞”属武丁晚期）及第91页——93页（虽然王宇信本人在“历组卜辞”断限上并未表态）。

第二、王宇信虽然很好地概述了台湾、香港、日本和其它地方的甲骨文学术中一些重要进展（第191——201页），但他没有把这些进展同他在前面叙述的关于中国学者的成就结合起来。本来当他在描述

---

① 这些文集和另外一些下面的引证全名，参看戴维·恩·凯特利《商代史料：青铜时代中国的甲骨文》。伯克利，加州大学出版社，1978年版，第229——231页。

② 张光直认为王位继承是在两个重要的血族之间交替进行，他的这一假设所引起的争论没有被提到（对这个重要问题的反映，参看张光直的《商文化》。耶鲁大学出版社，1980年版，第183页注(65)）。也没有对日本赤塚忠对商文化采取的人类学研究方法给予正确的评价（参看我对他的《中国古代的宗教与文化》一书的评论。东京·1977年版，第267——320页）。

Hsi-pei-kang could not have been cut so deeply or so sharply without such tools (conversation, April 21, 1981). In this scenario, in short, bronze tools, just like the bronze vessels, would have been used primarily for the sacred purposes of the elite, not for direct agricultural production, and it would be their ritual nature (not, as with the first scenario, their lack of it) that explains their presence in the tombs. Systematic studies of the context in which bronze tools are excavated may eventually help us reach conclusions about these and other matters.

It is a tribute to the richness of Chang's work that it leads to speculations such as these. There is no doubt that this is the book that those of us in Shang studies have long been awaiting. The National Endowment for the Humanities is to be congratulated for supporting Chang's research, for with the publication of his book the field begins to come of age. We are no longer presented with catalogues of sites or artifacts. We now have an integral synthesis of Shang—one is almost tempted to say Chang—civilization that relates the disparate data, archaeological, inscriptional, and textual, to an organic political, social, and ethnographic whole. *Shang Civilization* does for early Bronze Age China what its author's *The Archaeology of Ancient China* has done so successfully for Chinese archaeology in general—it pulls the topic together and gives it shape, pattern, and significance. One looks forward to the paperback edition, due later this year, and, if and when they become necessary, the second and third editions. We could not be in better hands.

List of References

Akatsuka Kiyoshi. 1977. *Chūgoku kodai no shūkyō to bunka—In Ōchō no saishi* [Religion and culture in ancient China—The rituals of the Yin royal court]. Tokyo: Kadokawa shoten.

Barnard, Noel. 1980. *Radiocarbon Dates and Their Significance in the Chinese Archaeological Scene: A List of 420 Entries Compiled from Chinese Sources Published up to Close of 1979.* Canberra.

Bishop, C. W. 1932. "The Chronology of Ancient China." *Journal of the American Oriental Society* 52:323-47.

Chang, K. C. 1974. "Urbanism and the King in Ancient China." *World Archaeology* 6, 1:1-14.

———. 1981. "[Book review of] *Sources of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China* by David N. Keightley." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 41,2:633-40.

Chang Ping-ch'üan. 1959. *Hsiao-t'un ti-erh-pen: Yin-hsü wen-tzu: ping-pien* [Hsiao-t'un Vol. 2: Writings from Yin-hsü: Fasc. C]. Taipei: Chung-yang yen-chiu-yüan li-shih yü-yen yen-chiu so. Vol. 1, pt. 2.

Ch'en Wen-hua. 1981. "Shih-lun wo kuo nung-chü shih shang ti chi-ke wen-t'i" [A preliminary discussion of several questions about the history of agricultural tools in our country]. *K'ao-ku hsüeh-pao* 4:407-426.

Chou Fa-kao. 1964-65. "On the Dating of a Lunar Eclipse in the Shang Period." *Harvard Journal of Asiatic Studies* 25:243-47.

Chu P'ei-jen. 1957. "Chia-ku-wen so fan-ying ti shang-ku chih-wu shui-fen sheng-li-hsüeh chih-shih" [Knowledge of water-content physiology in ancient plants as reflected in the oracle-bone inscriptions]. *Nan-ching nung-hsüeh-yüan hsüeh-pao* 2:175-212.

Oppolzer, Theodor Ritter von. 1962. *Cannon of Eclipses (Canon der Finsternisse).* Trans. by Owen Gingerich; Preface by Donald H. Menzel and Owen Gingerich. New York: Dover.

Satō Taketoshi. 1962. *Chūgoku kodai kōgyō shi no kenkyū* [A study of the history of China's ancient industries]. Tokyo: Furukawa.

Takashima, K. 1979-80. "Some Philogical Notes to *Sources of Shang History." Early China* 5:48-55.

Tsou Heng. 1981. "Tsai lun 'Cheng Po shuo'" [Once again on 'The theory of Cheng and Po']. *K'ao-ku* 3:271-76.

Tung Tso-pin. 1945. *Yin-li-p'u* [Yin calendrical tables]. 2 vols. Nan-ch'i, Szechwan: Chung-yang yen-chiu-yüan li-shih yü-yen yen-chiu-so.

———. 1953. "Yin-tai ti chi-jih fa" [The Yin dynasty method for recording the day]. *T'ai-wan ta hsüeh wen-shih-che hsüeh-pao* 5:385-90.

Wen-wu. 1976.2. "P'an-lung-ch'eng Shang tai Erh-li-kang ch'i ti ch'ing-t'ung-ch'i" [Shang dynasty Erh-li-kang period bronzes from P'an-lung city]. Pp. 26-41.

Wen-wu tzu-liao ts'ung-k'an. 1977. "Cheng-chou Shang tai ch'eng yi-chih fa-chüeh pao-kao" [Excavation report on the remains of the Shang dynasty city at Cheng-chou]. Pp. 1-47.

Wheatley, Paul. 1971. *The Pivot of the Four Quarters: A Preliminary Enquiry into the Origins and Character of the Ancient Chinese City.* Chicago: Aldine.

Yin-hsü Fu Hao mu [The tomb of Fu Hao at Yin-hsü]. 1980. Peking: Wen-wu ch'u-pan-she.

（原载《亚洲研究杂志》第41卷3期，1982年）

中国的发展时，如果考虑到国外的研究工作的话，那将是更为有益；这一点它是不够全面的。例如，尽管他是意识到片与片之间缀合的存在，并作为“很有意义”的问题刻划了缀合的工作（第191页），但在这本书中，他只涉及到《乙编》的粗糙缀合（第127页）；这大概因为拼片是在台湾发表的，对中国大陆学者来说还不是随手可得的。他的断代论述（第58——62页、第91——93页），不仅需要考虑严一萍的贡献①，也需要考虑许进雄关于钻凿形态的变化和分布的理论（只是在第197页上提到），特别是因为这两位学者支持董作宾的断代例。如果不参考严一萍的专著，那末，对商代医学的任何论述②（第158——161页）都是不完全的。另外，对商代地理学的任何论述（第136——143页），也应当考虑到岛邦男③（王宇信仅在第199页上提到岛邦男的贡献）和钟柏生④的地图以及松丸道雄⑤提出的假设。

我无意批评这本书，只是想谈谈它的思想脉络。在王宇信的描述中的这种欠缺，反映了1949年以来在中国国内甲骨文研究的闭塞情况。因为王宇信在概述其它地方的研究发展情况时，曾几次（见注10及其以下之注）向中国学者介绍外国学者所作出的贡献；王宇信对这些进展的介绍是不吝惜笔墨的，他并且希望将来进行国际间的合作。

在这本书的最后，附录了三篇文献目录。第一篇目录收集了发表在1903——1975年间的甲骨文著录及通用的简称（并不始终与文集的编者相一致）⑥。第二篇目录是从1949年到1979年的编年论著简目和有关的学术成就：在中华人民共和国三十一年里发表（或再版）了324项，而近年更有长足的进步（1979年有46项）。第三篇目录是从1949年以来甲骨文作者论著简目（可与胡厚宣的早期文献目录⑦互见，很有用）。而且，当使用一个笔名时，提出作者的真实姓名，如江鸿的真名为李学勤，赵佩馨的真名叫裘锡圭。

第三篇附录由于省略了在国外发表的著作，作为从整体上介绍甲骨文研究，这就降低了它的使用价值⑧。但是我不能过分强调它，因为这本书具有针对中国国内研究发展的指南性价值。象大多数外国学者一样，我以前只零星地依靠《考古》、《考古学报》、《文物》以及偶尔从其它学科的几本主要杂志得到文章。王宇信提出的文献目录是一个新的提示。地方和大学学报上的甲骨文学术成就是一笔财富，我查日本的《东洋文献类目》，对其中大多数是不知道的；在我首次浏览了王宇信的附录之后，我发现有数十条条目，对我来说都是新的，仅从篇名上就可知道它们的重要意义。对于促进国际交往最好的途径之一，将是确保中国境外的学者能经常接触到上述那些出版物。所有的学者都经受过彼此老死不相往来之害。

王宇信的《建国以来甲骨文研究》，具体地包含了中国甲骨文研究的现状，条理清晰，颇有见地，书中论述精彩，富有指导意义；它的文献目录是令人鼓舞的，我高度地评价这本书，并向读者推荐它。

赵功民译自《哈佛大学亚洲研究杂志》42
卷1期，1982年。
张书生　朴　迪校。

---

① 严一萍：《甲骨文断代研究新例》，《史语所集刊》外编，台湾，四·二，1961年。第483——549页。

② 严一萍：《殷契征鉴》（台北，1951年原序），重印在严一萍：《甲骨金文丛考》（台北）中。

③ 岛邦男：《殷墟卜辞研究》（1958年），第349——442页。

④ 钟柏生：《卜辞中所见殷王田游地名考——兼论田游地名研究方法》，（〔台北〕台湾大学中国文学研究所，1972年）；《武丁卜辞中的方国地理考》（台中，1978年）。

⑤ 松丸道雄：《殷墟卜辞中の田猎地について——殷代国家构造研究のために》，东洋文化研究所纪要，三一（1936年），第1—163页。

⑥ 这是不完全的，其中省掉的，中间我注意到的有《台湾大学所藏甲骨文字考释》1和2（1953年），《丙编》（1957——1972年）及《缀新》（1975年）。

⑦ 胡厚宣：《五十年甲骨学论著目》（上海，中华书局，1952年）。

⑧ 关于一个在北京出版的极好的甲骨文研究文献，它包括了台湾发表的论著，并且对于国外出版物有专门的一节，可看肖楠：《甲骨学论著目录（1949——1979年）》，载《古文字研究》（1979年）第420——466页。

（原载《歷史教學》1992年第11期）

书　评

读赤冢忠著《中国古代的宗教和文化》

宋镇豪

日本东京大学名誉教授、二松学舍大学教授赤冢忠先生，致力于中国古代思想史和甲骨金文学的研究，在日本学界素享盛名。一九七七年三月，东京角川书店出版了他的《中国古代的宗教和文化——殷王朝的祭祀》一书（以下简称《祭祀》）。此书出版后，在日本国内介绍和评述的文章就有六篇，撰写者有家井真（见二松学舍大学人文论丛十二号，一九七七年十月）、西冈市佑（见国学院杂志七十九编一号，一九七八年一月；又见斯文八十二号，一九七九年三月）、江村治树（见史学杂志八十七编五号，一九七八年五月）、池田末利（同七号，一九七八年七月）、伊藤道治（见甲骨学十二号，一九八〇年八月），其中不少人是日本研究中国古代史的名学者。我国著名的甲骨学专家胡厚宣先生在一九八一年三月与笔者谈话时也认为此书是部学术大著，很不错。可见这部书的影响之大了。

《祭祀》一书，汇集了著者几十年的研究成果，该书利用甲骨文和金文资料考察商代社会的宗教和文化，论述了中国古代宗教在社会发展史中的地位和作用，考察了古代宗教的起源、演变和发展的途径，提出了许多独到的见解。这无论对于我国甲骨学界来说，还是对于其他学界来说，都是值得庆贺的。

《祭祀》共收七篇文章。第一篇是序论。回顾了甲骨文的研究史和《祭祀》一书所要考察的问题。值得注意的是对于殷王朝体制的看法，著者认为殷王朝在王族周围建立起联合其他土著族的朴素体制，主要根据有三：其一，尽管对祖先的祭祀有所谓直系和旁系的区别，但武丁至康丁的继承法不是传嫡而是传弟，当时没有确立宗主族；其二，虽然侯伯表示了身份的高低，但它们不是殷王封建的，虽然有建立殖民地的事，但甲骨文中找不到殷王封邑策命的积极证据；其三，甲骨文中人名、地名和族名同用的例子极多，表明那些族是自然形成的土著族。因此殷王朝的政治形态也是在这种联合其他土著族的朴素体制的基础上形成的。

在这里，著者提出了甲骨学和古代史上一个饶有兴味的问题，它不只是一个殷代国家体制的问题，而且涉及到族制、宗法、邑鄙制度、土地制度、政权结构、宗教性质和国家形态等一系列的问题，而其中的族制，恐怕是基本的研究要素之一。自三十年代至今，众多学者先后讨论过殷代的族制，如白川静的《殷的族形态》（说林二卷一号，一九五〇年），松木光雄的《中国古代的族》（历史学研究二六〇号，一九六一年）。张光直《商王庙号新考》（中央研究院民族学研究所集刊十五本，一九六三年）和持井康孝《试论殷王室的构造》（东洋文化研究所纪要八十二号，一九八〇年）都有所探讨。过去大都限于从亲属制度、宗法以及社会结构等角度考察殷代的族制。赤冢忠先生则把族制放在特定的宗教信仰的范围里加以考察，确是别开生面的。研究古代的宗教，总可以发现一些传统的古史材料，《祭祀》一书的致力点也在此。然而序论中提起的涉及殷王朝国家体制的上述三个简单的现象，也足以发人深思。

第二篇是殷王朝的“河”的祭祀。这是根据著者早年写的《殷王朝的河的祭祀及其起源》（甲骨学四、五号合刊，一九五六年十月）修订的。著者否认了过去把河当做先公神或自然神的说法，认为河是一位土著族的族神。这个族很早就生活在大河流域，有着自己的崇拜河神的信仰。当殷王朝确立王国体制时，为了把诸族吸引到自己的势力下，就把河神纳入了王朝的祀典。殷王朝祭祀河神，是在殷都附近的特定祭地，那儿筑有祭宫，或称“河宗”。河神可以支配雨、支配年成、支配天象和保护邑国，大都与其他神的权能没有什么两样，含有现实信仰的性质，只有保护邑国这一项才是河神固有的。导致这种变化的原因是因为殷王朝把祭神的目的统一在确保农业的前提下了，结果造成众神的权能的融合，以致每个族神逐渐失去各自的特性而变得抽象化和一般化了。河神虽是古老的族神，但它又是大河流域某一地域集团的守护神，殷王朝把河神纳入祀典，大概还出于保存那个集团守护性格的意图。在对河的众多祭仪里，只有沈仪才是原始的祭法。帝乙帝辛时就不再见河的祭祀，可能并入了盛行的农祭中去了。

把河神追溯为特定地域集团的族神，这种见解很独到。不过著者认为这个族是斫族，并说这个字就是河字，恐怕不妥。这个字从斤从弓，决非河字，甲骨文有“丁丑卜，宾贞，亩河日斫”（甲释二一四），两字同时出现在一条卜辞里，显然不是一个字，“河日斫”意思是在河神的祭祀日采用斫礼。因此倒不如说河神就是河族的族神。著者也曾注意到《山海经·大荒东经》、《竹书纪年》、《天问》的河伯，说是河族的部族长，那么河神原是古河族的族神，理由也是很充分的。

第三篇是殷王朝的“岳”的祭祀。这是根据著者的《殷王朝的“岳”的祭祀和中国山岳崇拜的特征》（甲骨学六号，一九五八年三月）修订的。论旨与第二篇是一致的。著者没有采纳过去的岳为先公神或自然神的简单说法，主张它不是岳字，而是山羊的合文，是以牧羊为主业的羊族集团的族神，“岳”又是山地诸族的代表神，受到这些族的崇拜和祭祀，它的祭地可能在中岳崇山。殷王朝出于统治国土的目的，也象河神一样，把它纳入了祀典。“岳”神可以支配成年、支配雨，这都不是它固有的性格，但甲骨文的“求邛……岳”（戬二十二·九），把“岳”当成抵御外族侵害的守护神，似乎还保存了一些原始的特性。而在殷王朝的祀典里，“岳”神更多地以一位农耕的保护神出现。在“岳”的许多祭仪中也只有以羊为最重要的祭牲这一点上还保留了古老的特色。此外甲骨文中又有一些其他古族崇拜的山岳神，也成了殷王朝祭祀的对象。

令人感兴趣的是，著者多次提到了他所称的“神苑图”，那是刻着几个光怪陆离的兽形的牛胛骨残片（见甲二三三六）。这片骨版过去董作宾称为“人猿图”，曾从艺术的角度推测：“新史官艺术兴趣比较浓厚，大部分的人不愿写字，专好画图，高兴在骨版上乱来一阵”。（《殷墟文字中之人猿图》，中国文字二期，一九六一年一月）而著者从宗教信仰的角度作了新的探讨，认为那些怪兽是殷人想象里的“岳”神、夔神、雉神、虎神等，它们是各个圣山的族神。所谓“神苑图”组成的是一幅许多族神聚集在“岳”神下面的图象，看来“岳“成了各个山地族的代表神了。著者还认为，宗教现象是现实生活的反映，“神苑图”揭示了殷王朝宗教发展的方向，即把许多具有地域性格的神的信仰统一起来了，当然这也是古代文化发展的必然道路。

第四篇是殷王朝的土的祭祀。这是以过去发表的《甲骨文所见的“土”》（高田真治博士古稀纪念论文集，一九六三年）为底本增订的。

关于土的本义，众说纷纭，有邦社说（王国维《殷礼征文》），有生殖器崇拜说（郭沫若《释祖妣》，《甲骨文字研究》所收），有土地神说（傅斯年《新获卜辞写本后记跋》，安阳发掘报告二册），有高禖神说（陈梦家《高禖效社祖庙通考》，清华学报十二卷三期），有鄂博说（白川静《关于社稷》，中国古代的文化），有宇宙轴说（铁井庆纪《关于社的初步论证》，东方学六十一辑），等等。著者认为，甲骨文中的土与先公神、河神、“岳”神的性质不同。第一，土没有“作它”（指作祸害）那种自身的积极权能；第二，土是人为设置的；第三，土的特殊祭礼是“方禘”，是一种招引四方众神的祭礼。因此土应是殷王朝设置的招集众神的祭坛。这种祭坛起了整齐祀典的作用，也是统一诸族信仰的象征场所。这样，土祭的目的也就象别的神一样，有祈年、求雨、宁风、防卫外寇等等。

著者还对甲骨文的“邦土”和亳土提出了自己的看法，认为邦土的邦字应释甫，甫、亳是两个从事农耕的古族名，所谓甫土、亳土，是殷王朝在甫、亳两地筑起的举行祈年祭的土坛。

著者联系甲骨文的土的祭礼和四土受年来考订土的本义，远较过去为优。但列举“于中土燎”（征·文六十九）一辞，有失草率。辞里的中字实际是史（事）的省写，史字从又持中，该甲骨文的中则省去了又，这样的情况在甲骨文中很多，如“癸酉卜，方大出，立史于北土”（存下八〇三）和“庚申卜，王，侯其立朕史人”（京都二六九），两个史都省去了又，很象个中字。况且这片刻辞作数行书写，参差不齐，上下文均残去了，所以甲骨文实际上没有“中土”一词。甲骨文的四土是与中商对应的（见胡厚宣《卜辞零简》，责善半月刊二卷十八期，一九四一年十二月），如果能从这方面考察土祭的意义，不就更令人信服了吗？

第五篇是甲骨文所见的诸神。这篇据《殷代祈年的祭祀形态的复原》上、中两文（甲骨学九号，一九六一年八月；十号，一九六四年七月）改订而成，是《祭祀》一书的第一长篇，达三〇四页，分论了族神、高祖神、巫先神、天神和上帝。著者认为，殷代受到崇拜的神很多，几乎可以说是神直接施政的时代，通盘检讨这些神的性格，可以从整体上了解殷代宗教文化的特征，以至它的发展进程。

族神一章，考察了兮、高、京等神，这些神名的共同点是兼作特定的祭地名，具备族神的固有性格，它们又都是殷王朝祈年祭的对象。各种族神，不可能没有相关的神话传说，如龙神、鸡神等，对此也努力作了考察。

高祖神一章，以王亥为重点，考察了王亥的神威、王亥的形象和彭族、高祖王亥及其传说。认为亥字本是豭（牝豕）的象形，所谓王亥，恐怕是居住在山麓的半农半猎的亥族的祖神，这个祖神被描绘成山里的野猪的形象。彭族的豕韦氏大概是亥族的后裔。著者还考察了甲骨文中别的视作高祖的那些先公神，认为也都不是殷王族的祖先，而是一些土著强族的族神。它们被列入殷王室的血缘系谱，说明统一诸族的信仰，方法并不是单一的，有时还相伴着血缘关系上的结合，这样就强化了殷王族，当然这一事态也通过祭祀各个高祖神体现出来。

我们认为，否定王亥为殷王族祖先神的理由是不足的。亥和豭，甲骨文判然有别，决不相混，并且王亥的亥字或从鸟形从亥，与《商颂》的“天命玄鸟，降而生商”恰相印证。胡厚宣先生对此早有考证，商族是以鸟为图腾的（《甲骨文商族鸟图腾的遗迹》，历史论丛一辑，一九六四年九月；又《甲骨文所见商族鸟图腾的新证据》，文物一九七七年二期）。王亥必是传说中的商族祖先神无疑。

巫先一章，著者认为受殷王朝祭祀的学戊、伊尹、黄尹等神，它们与先王神和族神不同，常常显示出某些巫祝信仰的特色。如学戊是掌管祭礼的巫先集团的神，伊尹、黄尹是持有神秘文化的伊、黄两族的神，所谓伊尹、黄尹是殷的旧臣的说法是不对的。甲骨文有“壬戌卜，又岁于伊廿示又三”（京津四一〇一）、“丁巳卜，又于十立伊又九”（粹一九四），分别是祭祀伊族的二十三示和伊族的十九示。伊族有自己的祖先神，有自己的祭祀体系。因为那些族以传统的文化服属于殷王朝，所以它们的神也被列入殷王朝的祀典。

甲骨文中的四方风名，为胡厚宣先生最先揭示（《甲骨文四方风名考》，责善半月刊二卷十九期，一九四一年十二月），后来又有补说（《释殷代求年于四方和四方风的祭祀》，复旦学报人文科学一期，一九五六年）。而著者从巫术信仰的角度提出了自己的看法，认为那些风名也以地名和族名出现，都与祭风有因缘关系，恐怕它们也是族神，但被视为风的灵验者，所以各与风一起受祭了。

天神一章，认为殷代的太阳信仰只是一个远古信仰的残余，祭祀太阳全部限于特殊的场合，只有一期四期有祭日卜辞，原因有三，一是肉眼看得到太阳，使太阳本身难以发展为神。二是殷代的上帝崇拜远居太阳之上。三是大概当时相信祭祀先王先妣的那类甲乙丙丁十干日名与太阳精灵相关。著者又认为东母西母可能是司太阳出入的女性神。王恒是住在月上支配月的男性神。著者认为，甲骨文的“有新大品并火“（后下九・一），过去谓大品为大星，即岁星，火为火星，很可疑，但甲骨文有鸟星的记录（乙六六六四，六六七二），它被当成有止雨魔力的星而受到祭祀。云被视作有神灵者。虹的出现被看成不吉利。

上帝一章，著者同意过去的至上神的说法，认为它是殷世界的最高主宰，殷王是行使它的旨意的代理人。上帝的权力主要表现在支配天候和支配殷王国方面。人格神的上帝的出现，对于维持农耕氏族部族集团的生活安定十分要紧，而以农业为国家基本经济的殷王国的出现，也极大地促进了人格神的上帝崇拜的形成。

第六篇是殷王朝的上帝祭礼的复原。这篇一九六六年曾发表在《二松学舍大学论文集》上。认为殷王朝对上帝诸神的祭祀主要分两大类，一类是战争之际为求得保佑的祭祀，属于临时性的祭祀。还有一类就是祈年祭。所谓祈年祭是殷王及诸族长对上帝为首的诸神举行的祭祀，是祈求年成丰收和实现王国安定的祭祀，是体现殷王朝统治的盛典。祈年祭的地点，武丁、武乙和文丁时通常是每回选定，祖庚时恐怕也差不多，祖甲、廪辛、康丁时在殷都的中心举行，帝乙帝辛时就固定在天邑商了。祈年祭的时间大都在一、二、三、十二或十三月，但以二月最多。围绕祈年祭，前后有一系列的宗教活动，接着或有一系列的农事仪礼。总之，祈年祭是上帝崇拜的产物，是中国古代大联合体制的原始性尝试，是建立在协同观念的发展基础上的。

第七篇是殷金文考释。一九五九年著者曾自刊油印过。包括成组和增补铜器，共收器铭一一五件。分为纪年、夷征伐关系、子锡某形式、农祭关系、祖先祭关系、飨宴关系、亚字铭、妇人器和其他这九类金文。每一器铭录有拓本、照片或摹本，又列为著录、释文、解说三项。解说的最大特点是联系甲骨文进行，因而把那些铜器定为殷代的东西，可信性很大。

赤冢忠先生系统地研究了中国古代的宗教和文化，尤其对于殷王朝统一远古土著族的信仰和建立上帝崇拜的国家宗教这两方面的考察，是独有建树的。如今的甲骨学已成为世界范围内的一门专门的学科，如果看不到这一趋势，很难在研究中有所收获。本诸中日两国的学术交流，把赤冢忠先生对于甲骨学商代社会研究的学说介绍给中国学界，写此短文。但用数千来字的文章，记述八六四页的巨帙，力非所及，恐怕还有理解上的错误，有待于著者和读者的特别谅解。

（原載《中國史研究動態》1982年第4期）

REVIEW ARTICLE

Akatsuka Kiyoshi and the Culture of Early China: A Study in Historical Method

DAVID N. KEIGHTLEY
University of California, Berkeley

Chūgoku kodai no shūkyō to bunka—In ōchō no saishi 中國古代の宗教と文化—殷王朝の祭祀 *by Akatsuka Kiyoshi* 赤塚忠. Tokyo: Kadokawa Shoten, 1977. Pp. 2+8+869. 19,500 yen.

Akatsuka Kiyoshi's *Chūgoku kodai no shūkyō to bunka* is one of the most ambitious and significant works on Shang[1] culture, as it was recorded in contemporary inscriptions, to appear in the last twenty-five years. There has been nothing like it, in its claims to depth and coherence, since the pioneering introductions by Ch'en Meng-chia and Shima Kunio.[2] Kwang-chih Chang has recently provided us with a comprehensive summary and anthropological interpretation of all aspects of Shang—its history, archaeology, politics, society, and economy—that serves as an essential, almost encyclopaedic, introduction to the civilization.[3] Akatsuka's concern is more introspective, more technical, more closely focused on the inscriptional evidence, and, in some areas—such as the nature of Ti, the role of shamanism, religious incorporation, and the significance of particular sacrifices—it attempts to go deeper. Akatsuka, as it were, is the inscriptional hedgehog; Chang is the archaeological fox.

Some quarter of a million words long, quoting the inscriptions on over twenty-five hundred oracle-bones and over one hundred bronzes, and illustrated with over three hundred figures,[4] Akatsuka's book is a massively documented study of ancient Chinese thought, religion, ethnology, and politics. And since it deals with the origins of many aspects of Chou culture, it should be of interest not only to scholars of the Shang but to all scholars concerned with the evolution of Chou and Han politico-religious conceptions.

The main body of the text, which follows an introduction that summarizes Akatsuka's assumptions and conclusions and, on occasion, qualifies some of his subsequent interpretations, consists of six sections: (1) "Ho 河 Ceremonies in the Yin Court" (originally published in 1956; original publication data are given on p. 867); (2) "Yüeh(?) 羔[5] Ceremonies in the Yin Court" (1958); (3) "T'u

---

This review was initially drafted during part of a leave supported by grants from the John Simon Guggenheim Foundation and the Humanities Research Committee of the University of California, Berkeley. I am grateful for their support. I should also like to thank Michael Gibbs for his research assistance and William Boltz, K. C. Chang, Jean A. Lefeuvre, and Paul L.-M. Serruys for their constructive criticisms of the first draft of this review. Ken-ichi Takashima's particularly detailed and thoughtful response saved me from some misunderstandings of Akatsuka's meaning and advanced my own imperfect knowledge of the inscriptions. If I have not taken advantage of all the suggestions these scholars made, it is largely in the expectation that the fruits of their continuing research will eventually appear in their own publications.

[1] Akatsuka, for reasons he nowhere explains, consistently refers to Yin 殷 culture and the Yin dynasty. On the basis of our present evidence, Shang 商 was more likely to have been the contemporary term (David N. Keightley, *Sources of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China* [Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1978], pp. xiv, xvii). In this review I generally use Yin when reporting Akatsuka's arguments, Shang when advancing my own.

[2] Ch'en Meng-chia 陳夢家, *Yin-hsü pu-tz'u tsung-shu* 殷虛卜辭綜述 (Peking: K'e-hsüeh ch'u-pan-she, 1956); Shima Kunio 島邦男, *Inkyo bokuji kenkyū* 殷墟卜辭研究 (Hirosaki: Chūgokugaku kenkyūkai, 1958).

[3] Kwang-chih Chang, *Shang Civilization* (New Haven: Yale Univ. Press, 1980).

[4] It is immensely helpful to have so many rubbings of inscriptions reproduced in text. Some, however, have not been well reproduced (e.g., *T'ieh-yün* 199.3 at p. 459; *Ch'ien-pien* 1.48.4 at p. 424) and many have been markedly reduced in size though no indication of this is given (e.g., *K'u-fang* 1506 on p. 311, reduced 50 percent; *Ping-pien* 216+*Ching-chin* 428 on p. 416, so greatly reduced [50 percent] that its period I calligraphy looks like that of period V; *Chia-pien* 2416 on p. 438, reduced 36 percent). (For complete bibliographic references to the oracle-bone collections which I cite here in abbreviated form, see Keightley [cited n. 1], pp. 229–31.)

[5] Akatsuka gives no phonetic reading for the Shang graph involved. Since most scholars read it as Yüeh 岳, I shall continue to use that romanization rather than the Yang which, on the basis of the sheep-spirit associations he infers and his *k'ai-shu* reconstruction, Akatsuka might prefer. For a rejection of Akatsuka's analysis see: Paul L.-M. Serruys, "On Phonology and Graph Analysis in Shang Bone Script" (presented to the Western Branch

土 Ceremonies in the Yin Court" (1963); (4) "Spirits which Appear in the Oracle Bone Inscriptions" (1961 and 1964); (5) "A Restoration of the Shang Ti 上帝 Ritual in the Yin Court" (1966); and (6) "Glosses on Yin Bronze Inscriptions" (1959). The last item had appeared only in draft, mimeographed form; some others had not been easily obtainable.[6]

It would be a mistake to regard the volume simply as a collection of reprints. Akatsuka has made so many additions that the editors can present the book as a substantially new publication (p. 866).[7] Furthermore, the articles—more comprehensive in scope and implication than their titles imply—have, when taken together, an impact far greater than that of the original monographs read singly.[8] The diligence of the editors and their assistants (listed on p. 868) who labored for three years to see the original articles into this final typeset form were eminently worthwhile.[9]

Sound books about Shang culture frequently have a *pointilliste* quality as the meaning of one oracle-bone inscription after another is analyzed. In the works by Ch'en Meng-chia and Shima Kunio referred to above (n. 2), the authors have been so closely tied to the divination records that the resulting picture of Shang has been a rather brittle mosaic, a *catalogue raisonne* of numerous inscriptions which, for all its excellence, has not taken us far below the surface of the inscriptions themselves. Chang Tsung-tung, in a more recent work, provided a stimulating indication of what might be done when the inscriptions were viewed anthropologically.[10] Akatsuka now takes a considerable step further. Thanks to his reliance, generally implicit (see below), on ethnographic analogy, thanks to the etymological finesse with which he attempts to tease new meaning out of the inscriptions, and thanks above all to his evident conception of the historian's task as *comprendre* as well as *connaitre*, the Shang culture which emerges in the pages of this book is a finely shaded anthropological and cultural reality, with most elements plausibly linked in an organic whole.[11] For all its considerable problems, the work is a triumph of scholarly imagination, rendering many aspects of Shang culture dramatic and significant on a scale and with a consistency that few, if any, scholars have attempted before. Anyone planning to write a historical novel about the Shang would be advised to read this stimulating and suggestive book. It is, as Emura Haruki 江村治樹 has termed it, a "magnum opus" (*taicho* 大著).[12]

The world which Akatsuka documents in such impressive detail may be described as follows. The basic unit of Shang society was the clan (or tribal) group (on the difficulties involved with this term, see "The Analytical Framework" below) centered around a holy place where the particular clan spirit was worshipped; the clan, clan leader, clan members, holy place, and clan spirit all shared the same name.[13] The court was composed of a union of such clans (or tribes), the theocratic domination of the royal lineage being legitimated by the blessings of Ti 帝 and the royal ancestors, by the process of religious incorporation, generalization, and myth-making by which the clan spirits of previously independent groups were included, sometimes as fictive ancestors, in the genealogy and sacrificial rituals of the Shang king, and by the king's ability to divine the future and to influence, through prayer, the will of these spirits, particularly those who controlled rainfall and harvest. The polytheistic spirit world above was patterned on and thus validated the political arrangements of the Shang court and its numerous tribal elements below.

The value of this picture, whose elements occur repeatedly throughout the book, lies less in its main outlines—which have been adumbrated by other scholars[14]—more in the detailed evidence which brings color and life to the bone inscriptions, and conviction to Akatsuka's presentation. As inscription after inscription is discussed, we are presented with a North China landscape, pulsating with spiritual forces, in which the mountains and rivers and the places where the king hunted and patrolled were also places of sacrifice, with their attendant tribal spirits and tribes, and in which the clouds, winds, rainbows, and duststorms all had their spiritual identities (e.g., pp. 12, 14–15, 512–13).[15] Akatsuka discusses the probable significance of particular ritual procedures—burning, immolation, dismemberment, libation, etc.—with a detailed reconstruction of the offerings and sacrifices involved in the harvest prayer rituals (e.g., pp. 537–56). He suggests how the inscriptions may reveal the existence of Yin myths about a male and female mountain pair (p. 134), about dragons (p. 216), about the sun as a living child whose daily birth was assisted by the Mother of the East (p. 451), about the drought spirit who devoured all living things (p. 474), and so on. He demonstrates how particular animals appear to have served as tribal spirits, symbolizing the ancestor of the group concerned (pp. 276, 295).

Akatsuka also considers the degree to which Shang religion may have had its roots in shamanistic beliefs and practices, particularly with regard to figures like Yi Yin 伊尹 and Huang Yin 黃尹 (pp. 364–76), but also with regard to wind and sun worship (pp. 431, 452) and the need for shaman-like intercessors in the worship of Shang Ti 上帝.[16] He demonstrates how Ti was not necessarily pro-Shang but was, like the T'ien 天 of the Chou, capable of mandating harm as well as blessing for the dynasty (pp. 489, 513, 533, 597). Akatsuka proposes how the Shang state may have been colonized through a series of population displacements, with the ritual establishment of settlements being accompanied by prayers for harvest (pp. 494–99, 546). And he also stresses, to take a final example, the crucial importance of weather to the fortunes of the dynasty (p. 535), demonstrating the way in which various elements

---

of the American Oriental Society, Berkeley, 24 March 1973), who relies on phonetic as well as graphic considerations; the review by Ikeda Suetoshi 池田末利 in *SZ*, 87.7 (1978), 70; and Cheung Kwong-yue, "Recent Archaeological Evidence Relating to the Origin of Chinese Characters," n. 5, in *The Origins of Chinese Civilization*, ed. David N. Keightley (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, forthcoming).

[6] The original versions of sections 3 and 5 were published so obscurely that they were neither listed in the appropriate volumes of *Tōyōgaku bunken ruimoku* 東洋學文獻類目 (Kyoto: Kyōto Daigaku Jimbun Kagaku Kenkyūjo, yearly) nor reviewed in the appropriate May issues of *SZ*.

[7] Akatsuka notes (p.25), however, that it was possible to consult only the introductory report (*KK*, No. 1 [1975], pp. 37–45; *Early China*, 1 [Fall, 1975], 8) on the 4,800-plus oracle-bone inscriptions excavated at Hsiao-t'un in 1973. Full publication of these inscriptions, which are to appear in *Hsiao-t'un nan-ti chia-ku* 小屯南地甲骨, may require qualification of some of his conclusions. Similar considerations apply to the over 17,000 supposedly Western Chou oracle bones, 190 now known to bear inscriptions, excavated in Feng-ch'u, Ch'i-shan, Shensi, in 1977 (for the initial reports, see *Early China*, 3 [Fall 1977], 97–98). Akatsuka, for example, remarks (p. 632) that the title Wen Wu Ti Yi 文武帝乙 does not appear in the oracle-bone inscriptions, but it is in fact recorded on H 11:1, one of the Feng-ch'u bones (Shen-hsi Chou-yüan k'ao-ku-tui 陝西周原考古隊, "Shen-hsi Ch'i-shan Feng-ch'u-ts'un fa-hsien Chou-ch'u chia-ku-wen 陝西岐山鳳雛村發現周初甲骨文," *WW*, No. 10 [1979], p. 39).

[8] Without wishing to minimize the editors' achievements it should be pointed out that repetitive passages, needless fresh starts, minor inconsistencies, and passages that read like research jottings occasionally betray the book's origins.

[9] I noted remarkably few typographical errors, e.g., p. 521, n. 50, 武丁 should read 文武丁; pp. 189 and 555, 先巫 should read 巫先; p. 316, last two lines, 咸 should read 帝 (as on p.554); p. 365, line 12, 丁 should read 下乙; p.391, last line, 𠂤尹 should read 尹𠂤 (as on p. 389); p. 465, 前 7.26.4 should read 7.26.3; p. 729, line 5 from left, 二妣 should read 二女.

[10] Chang Tsung-tung, *Der Kult der Shang-Dynastie im Spiegel der Orakelinschriften: Eine paläographische Studie zur Religion im archaischen China* (Wiesbaden: Harrassowitz, 1970); see the important review by Paul L.-M. Serruys, "The Language of the Shang Oracle Inscriptions," *TP*, 60 (1974), 12–120.

[11] A variety of scholars have, of course, contributed greatly to a more rounded, more anthropological, understanding of certain aspects of Shang culture. One thinks of, to name just a few, the works of Chang Kwang-chih 張光直, Itō Michiharu 伊藤道治, Ling Shun-sheng 凌純聲, Matsumaru Michio 松丸道雄, and Shirakawa Shizuka 白川靜. So far as the inscriptional evidence is concerned, Akatsuka's treatment, representing the achievements of his distinguished career, is the most comprehensive and also the most detailed.

[12] For Emura's summary and evaluation of the book, see *SZ*, 87.5 (1978), 198–99; this has been translated into English by Ken-ichi Takashima in *Early China*, 4 (1978–79), 82. Nishioka Ichisuke 西島市祐 (*Kokugakuin zasshi* 國學院雜誌, 79.1 [1978], 84–88) also refers to it as a "magnum opus"; he provides a useful but uncritical summary of the book's contents, section by section. For a more detailed and generally critical treatment, see the review by Ikeda (cited n. 5), pp. 69–76; Ikeda pays tribute to the book's splendid intentions but finds, as I do, many of Akatsuka's arguments overly speculative.

[13] Such "onomastic and toponymic affiliation," such "a mixture of appellatives, tribal names, and toponyms, all in the guise of patriarchal eponyms" is a common if not universal phenomenon in early cultures (Abraham Malamat, "King Lists of the Old Babylonian Period and Biblical Genealogies," *JAOS*, 88 [1968], 166).

[14] There is little, for example, in this general description of Shang culture which is not adumbrated in the pages of Kwang-chih Chang, *Early Chinese Civilization: Anthropological Perspectives* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1976). Akatsuka's writings, however, have generally not been cited by Western historians of early China.

[15] Akatsuka's vision of the spiritual geography of Shang China generally matches our understanding of the mythical world of primitive religions elsewhere. "Not only is every clan and local group defined in terms of the ancestral progenitors and the mythical events of settlement, but virtually every mountain, rock, and tree is explained in terms of the actions of mythical beings" (Robert N. Bellah, *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post Traditional World* [New York: Harper, 1970], p. 27).

[16] In writing of the Shang I choose to refer to the High God as Ti 帝, *tout court*, for so he appears in virtually all the inscriptions. Akatsuka (p. 506), extrapolating from only two fragmentary inscriptions (*Hsü-ts'un* 1.168 and *Hou-pien* 1.28.14 [both period I]; there is a third, *Chia-pien* 1164 [period III?], also at S149.3), generally refers to the High God as Shang Ti. In reviewing his book, I adopt his usage. (To assist the reader, I supply when feasible a citation to the oracle-bone inscriptions as transcribed in Shima Kunio, *Inkyo bokuji sōrui* 綜類, 2nd rev. ed. [Tokyo: Kyūko Shoin, 1971]; S149.3 refers to the third row of p. 149 in Shima's work. For the importance of this concordance and how it may be used, see *MS*, 28 [1969], 467–71, and Keightley [cited n. 1], pp. 61–62.)

of the strategic harvest prayer rituals were assigned to the participating tribal leaders (p. 538), how such ritual occasions might be used for military planning (pp. 540, 598), how the king, pouring water on the ground, symbolized Shang Ti's rain-making powers (p. 588), and how the participants then returned to their own territories to lead the farming there (p. 596).

All Akatsuka's insights and details, including those mentioned above, need to be treated first as worthy hypotheses before being accepted as Shang realities. But Akatsuka's coherent and comprehensive presentation of magical dances, inspections of sacrificial cattle, the flowing of blood, the giving and storing of sacred cowries, the marauding of crop-harming animals, the clearing of vegetation in sacred regions, his presentation, in short, of all the hustle and bustle of Shang life, together with his consideration of the oracle inscriptions not just in the context of other inscriptions, but in the full historical and anthropological context of what should have been happening—all this sets Akatsuka's work in a place of its own.

HISTORIOGRAPHICAL ASSUMPTIONS

If Akatsuka does promise to take us deeper into Shang than other historians have done, two fundamental questions arise: How is it done? And is it good history? The book is important not only for its conclusions (many of which may be challenged) about particular aspects of Shang culture, but also for its historical method. Akatsuka squeezes the oracle-bone inscriptions very hard. It is crucial to explicate his assumptions and to assess the risks involved.

I discern in the pages of *Chūgoku kodai no shūkyō to bunka* at least six key assumptions and five less important ones which need to be examined with care. I should make clear that I welcome assumptions; a historian who has never made an assumption has never made anything. The writing of good history requires the choice of assumptions that are not invalidated by the evidence or by other reasonable assumptions. (Differences in cultural as well as personal expectations about what is reasonable help explain the way in which our understanding of the past is forever changing.) In evaluating Akatsuka's assumptions (often implicit) I will be explicit about my own.[17]

Assumption 1. *That different divination topics carved on the same oracle bone are frequently related thematically.* This assumption above all others, repeatedly invoked, gives Akatsuka's work its extraordinary range and power, permitting him to transcend *pointillisme* and to deduce entire divinatory scenarios (e.g., pp. 346–48, 366–68, 478–79, 494–98). Despite the crucial importance of the assumption, Akatsuka refers to it belatedly and briefly (p. 601, n. 1), merely asserting, and not demonstrating, its validity.

One example will indicate the issues involved. *Hou-pien* 1.30.12 (reproduced as Akatsuka's fig. 1–104) is a strip of broken scapula, containing five divinatory charges, separated by boundary lines, and which, reading from top to bottom,[18] I would translate as follows:[19] (1) "(We will) perhaps not capture Ch‘iang 羌 (prisoners)"; (2) "It is Ti's *Ch‘en* 臣 who order(s)"; (3) Divining: "The king goes out (on campaign?)"; (4) "Perhaps make (? *tso* 作)"; (5) ". . . offer in sacrifice (?). . . ." Akatsuka, assuming that charges (2) and (3) were linked, uses this bone to argue that the king's going out was directly ordered by Ti's *Ch‘en*—spirit ministers in the court of Ti—and thus indirectly ordered by Ti himself (p. 481), a conclusion of no little importance.

This may be correct, but several considerations should be noted. First, no cyclical dates are provided, so we have no way of telling how closely in time these topics were divined. Second, no other inscriptions (see S158.1) show Ti's *Ch‘en* ordering anything, so we lack evidence to corroborate the linkage Akatsuka proposes. Third, if (2) the ordering and (3) the going out are related, why stop there? There seems to be no way to determine whether or not charges (1) and (3) were also related, with (1) the capture of Ch‘iang prisoners being the object of (3) the putative campaign which (2) Ti is thought to have ordered. Akatsuka proposes no objective criteria for deciding whether links which seem reasonable to us were also reasonable and real to the Shang. The only criterion offered is that of plausibility. In this case, in short, there is no way to tell whether Akatsuka is justified in arguing (as he also does at p. 499) that Ti's *Ch‘en* were thought to order the king.

Numerous and far more complicated cases, in which Akatsuka subjectively assumes an intentional thematic relation between inscriptions on the same bone, could be cited.[20] The assumption cannot be disproved and in many cases may indeed be correct. But as devil's advocate I should like to propose, as a "splitter" rather than a "lumper" of Shang divination themes, that a more fortuitous relationship between inscriptions on the same bone seems in many other cases to be equally if not more plausible. In this view, the only certain linkage we are justified in making, virtually automatically, about same-bone inscriptions is chronological. Divinations recorded on the same bone were presumably divined at or about the same time. A mix of divination charges—about harvest prayer rituals and hunts (pp. 542–43) for example—does not necessarily tell us that the Shang meant to relate one topic to another; what it does tell us is that, given contingent circumstances, these topics required divination at about the same time and that they happened to be divined on the same bone.

This minimalist view of same-bone divinations is supported by the following considerations. The example cited above (*Hou-pien* 1.30.12), like most if not all of the examples of significant relation that Akatsuka adduces throughout the book, dates from period I.[21] This was a period when routines of divination and sacrifice were still being developed and when seemingly heterogenous topics were frequently scrambled on one oracle bone. Such mixing becomes less common with the advent of the New School diviners of period IIb,[22] when particular oracle bones seem to have been reserved for particular topics, such as hunts or the sacrifice cycle. By period V such single-topic oracle bones were, I believe, the norm. Similarly, boundary lines (like those separating the divination charges on *Hou-pien* 1.30.12 above), common in periods I and II, were, generally speaking, no longer used by period V, presumably because they were no longer necessary; this is further evidence of the increasing orderliness of the inscriptions.[23] In other words, starting with period II, and increasingly by period V, it becomes less possible to make the kinds of significant linkages that Akatsuka proposes so freely and so rewardingly for period I. This is because inscriptions dealing with similar topics were now being placed on the same bone; there were no other same-bone inscriptions dealing with different topics to which they could be linked. This change does not reflect a decreasing number of linkages in Shang reality. It reflects increasing systematization of the divination record. The relative lack of system in period I, therefore, from which most of Akatsuka's examples are drawn, should probably be regarded as just that—a situation in which the diviners used oracle bones rather like scratch-paper, taking whichever plastron or scapula was at hand; there is no reason to believe that, *as a general rule*, different topics on the same bone in period I were significantly associated in Shang reality.

This does not mean, of course, that in many cases they could not have been associated. The king's toothache probably affected his campaign plans divined on the same oracle bone; and the sacrifices also divined there were presumably to propitiate the ancestor causing shipped in connection with military campaigns (pp. 260, 444, citing *Chui-ho* 178 and *Ts'ui-pien* 597 [both S160.1]); that Huang Yin was a contemporary of T'ai Chia 太甲 (pp. 375–76), and so on. This is not to say that such links did not exist; but the evidence so far adduced and the methodology employed cannot provide certainty. Each of Akatsuka's fruitful suggestions needs to be examined on its own merits.

---

[17] William G. Boltz, in his review of my *Sources of Shang History* (cited n. 1) points out that I did not "clearly enumerate or elaborate the extent of what must be assumed. This includes, but is not limited to, assumptions about the identifications of OBI [oracle-bone inscription] graphs with modern graphs, assumptions that there was no morphology or morphophonemics operating in the language in any way that affected meaning (this is a corollary to the assumption that the phonology of the language is not essential to reading the inscriptions), assumptions that the OBI grammar is largely the same as the grammar of Chinese of half a millennium later, assumptions that the meanings of characters were the same in the OBI as they are in standard Classical usage, and so forth" (*CLEAR*, 3.1 [1981], 161). These fundamental linguistic assumptions do indeed apply to my discussion of Akatsuka's work.

[18] Here I follow Akatsuka's order. Divination on scapulas, however, frequently proceeded from bottom to top (Keightley [cited n. 1], p. 25). If these inscriptions are read in reverse order, Akatsuka would presumably argue that Ti's *Ch‘en* had ordered the capture of Ch‘iang rather than the going out.

[19] I disagree with Akatsuka's translations on a variety of systematic grounds (see below). The disagreements have no bearing on the assumptions being discussed here.

[20] The assumption, I suspect, also causes Akatsuka to force the translation of certain words. For example, he interprets the charges on *Yi-ts‘un* 375 (fig. 1–5; S66.1, 225.1) as divinations about whether or not Hou Hu 侯虎 and Chih Kuo 沚戠 (=聝?) (on this name see n. 101 below) should participate in the harvest prayer ritual recorded on the same bone (p. 50). But *ts‘ung* 从 in the phrase *hui hou hu ts‘ung* 叀侯虎从 is generally taken to refer to military alliance, e.g., "It should be Hu Hou (whom the king) follows (in campaign)" (see the numerous campaign inscriptions at S19.4, 65.4 ff., 110.2 ff.); I know of no oracle-bone evidence that it could also mean "participate" in a ritual. (I would also question Akatsuka's view [p. 539] that *ts‘ung* refers to forced participation or assembly.) I believe the scapula fragment, *Yi-ts‘un* 375, records a scrambled mix of ritual and campaign divinations, linked only chronologically.

[21] On the five periods of Tung Tso-pin 董作賓 see Keightley (cited n. 1), pp. 92–93, table 14, p. 203.

[22] For an introduction to Tung Tso-pin's New and Old Schools, see Keightley (cited n. 1), p. 32, n. 18.

[23] Keightley (cited n. 1), p. 112; see too the 1963 article by Matsumaru discussed in that work at p. 32, n. 19.

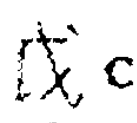
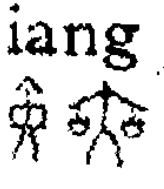
Assumption 2. *That subtopics, related to the main topic on one oracle bone, may be found on other oracle bones* (p. 497). This assumption—dealing, as a corollary to the first, with significant linkage between inscriptions on *different* bones—is equally plausible but problematic. An example will once again illustrate the issues. Akatsuka uses several inscribed plastrons to infer the main elements involved in the *tso-yi* 作邑 ritual of settlement building (p. 497): the king obtained Ti's approval to build the settlement (*Ping-pien* 147.1–4; translated on p. 494); he then visited the region, leading the tribes or tribal leaders he had chosen, including perhaps those being resettled there (*Ping-pien* 275; translated on pp. 494–95); after determining the place for, and the personnel and their functions involved in, the *chi-t'ien* 耤田 ritual for fruitful agriculture, the king himself determined the place the settlement should stand, and prayed for spiritual aid for the region (*Yi-pien* 3212 [S43.2, 142.3]; translated on p. 496). After this, sacrifices were offered to Yüeh 岳, the mountain spirit, Ho 河, the river spirit, the predynastic lords (*hsien-kung* 先公), the former kings, and the upper and lower spirits; large-scale harvest prayer rituals, including the *chi-t'ien*, were performed by the king who, by his symbolic actions, guaranteed fruitful harvests for the new settlement by accepting the will of Ti (*Ping-pien* 199.11; 199.3; 199.5; 199.1; translated on p. 495).

All the plastrons Akatsuka cites bear inscriptions referring at some point to settlement building; all are from period I; all were excavated from the same pit, YH 127. These considerations encourage us to hope that the inscriptions may be used to produce, as Akatsuka has done, a generalized reconstruction of settlement building under king Wu Ting. But how firmly can this reconstruction be supported? To what degree do the links Akatsuka posits between the different activities recorded on the same or different oracle bones appear to the pain.[24] In some cases one can actually demonstrate that the links Akatsuka proposes are justified,[25] but, in many cases, corroboration—which is, of course, not conclusive unless numerous instances of supporting evidence can be found—is lacking. It may be plausible to suppose that when charges indicating a desire for rain are followed on the same bone, some three or more days later, by divinations to determine which spirit is cursing the king, that the curse of the spirit was thought to be causing a drought (e.g., p. 239, citing *Yi-pien* 3429; see too, *Yi-pien* 5313), but, lacking other inscriptions which explicitly link these spirits to drought, such a conclusion will have to remain speculative. In this case, the conclusion is plausible for Wang Hai 王亥, whom one inscription reveals to have been thought capable of cursing the rain (*Ts'ui-pien* 75 [S479.2]; p. 270). But the conclusion must remain more speculative for the other two spirits 婪 and 高妣己 recorded on *Yi-pien* 3429 (S356.1, 540.4).

My "scratch-paper" approach to the period I divination records, if adopted, suggests that some of Akatsuka's conclusions need to be treated with caution. It is by no means certain, for example, that ritual hunting and fishing were performed prior to the harvest prayer ritual (pp. 542–43; cf. p. 52); that harvest prayers were linked to settlement building (pp. 203, n. 25, 496, 546, citing *Yi-pien* 3212 [S 43.2, 142.3]; see below); that the king led tribal leaders and tribesmen on settlement-building expeditions (p. 495; see below); that the king went to P'eng 彭 in connection with rituals offered to Wang Hai (p. 284; citing *Yi-pien* 5355 on p. 275); that the sun was wor-

---

[24] See the inscriptions on *Ping-pien* 12–21, a set of five plastrons discussed in Keightley (cited n. 1), pp. 76–90.

[25] *Chia-pien* 3338 (Akatsuka's fig. 1–13), for example, records charges about various officers assisting the king's affairs, about officer Pi making a burnt offering to (or at) the river spirit Ho (S406.4), and, mingled between the charges about assisting the king (S124.4), two charges about officer Yüeh  capturing Ch'iang 羌 (S350.2). The argument (pp. 96, 538) that the capture of these Ch'iang was part of a plan to offer them in sacrifice to Ho is supported by *Chui-ho* 301 (S182.3; cited by Akatsuka at p. 97) which records a pair of charges about the offering of three Ch'iang to Ho. Similarly, the appearance of separate charges about a beheading sacrifice to  (S364.3) and a dance for rain on the same plastron (*Ping-pien* 71.5–6; also, in the same set, *Ping-pien* 73.5–6), together with the appearance of a charge about a burnt offering to on the front of a plastron (*Ping-pien* 122.8) and a related prognostication, recorded on the back, that it would rain (*Ping-pien* 123.2) render it highly plausible that was a spirit thought capable of influencing the rain (pp. 377–78). Much of Akatsuka's contribution lies in his sensitivity to connections of this sort.

---

be significant rather than coincidental? The relatively large corpus of *tso-yi* inscriptions permits us to test the matter statistically.

Shima (cited n. 16) lists 30 oracle bones, recording 44 *tso-yi* (乍邑 or 作邑) divination charges (S43.2–3; Akatsuka cites the charges on only 5 of these bones).[26] Twenty of the 30 oracle bones are so fragmentary that they bear no inscriptions about any other topic. The other 10, either on the back or front, do record other topics beside settlement building. Unfortunately for Akatsuka's argument (and for his assumptions 1 and 2), the content of these other topics seems completely random. There was a divination about dreams (*T'ung-tsuan* XII.4; S450.4); about the *yü* 御 ritual to ward off sickness (*Chin-chang* 611; S540.2). There were divinations about ordering one or another person to follow another person (or group of persons) (*Ping-pien* 275.1–10; the order was divined on day 53, either 17 days before or 43 days after the settlement-building divination of day 10) and 2 other divinations, undated, about ordering a person (or persons) called Wang Ch'eng 望乘 and the Hou 侯 "Archer Lord," to return (*Chui-ho* 260; S439.3). One divination records that on day 7, the same day as the *tso-yi* divination, a person was to go (somewhere) (*Ping-pien* 93.3; S483.2, recorded as plate 86), and another indicates the king was contemplating a journey of inspection (*Ping-pien* 148.1–2). Various sacrifices are divined—offerings were made to Mu Keng 母庚 and to Ho (*Ping-pien* 199.1–6); there was a *kao* 告 ritual (*Yi-pien* 3212), a *pin* 賓 ritual (?) (*Ping-pien* 275.11–14), a *sheng* 升 ritual (*Chin-chang* 696; S501.1), and so on. But no sacrifice and no spiritual recipient appearing on one *tso-yi* oracle bone reappears on another.

As to the link, proposed by Akatsuka, between settlement building and harvest prayer rituals, the evidence is no more persuasive.[27] It is true that *Ping-pien* 199.9 records a rain dance (undated) to Yüeh, the mountain spirit, but it is likely, if we consider the use of the *ch'i* 其 particle in *Ping-pien* 93.1, the other *tso-yi* case where rain is mentioned, that, in some cases at least, the Shang did *not* want it to rain (on *ch'i*, see "Problems of Translation" below). One could always argue that too much rain had already fallen, so that the concern with rain could still have been agricultural; but it is equally likely that the king simply did not want to get wet as he travelled (the divination about rainfall on *Ping-pien* 93 preceded that about settlement building by two days).[28]

In short, no convincing patterns emerge. The rain dance of *Ping-pien* 199.9 is not sufficient grounds for suggesting that other harvest rituals (like that of *Yi-pien* 3212 [see n. 27]) were regularly linked to settlement building. Similar lack of corroboration calls in question many of the other details of Akatsuka's settlement-building scenario. I see no evidence to support either assumption 1 or assumption 2 in this particular case. One can, with equal plausibility, see on the scapulas and plastrons considered above the usual mix of topics—about sacrifices, weather, journeys, dreams, sickness, and so on—

---

[26] It is clear that these 44 charges refer to more than one instance of settlement building. The 18 charges for which a cyclical date was recorded were divined on the following days and by the following diviners: *tso-yi* 乍邑 cases: day 7 (diviner: Ping 丙); day 10 (Cheng 爭); day 16 (Cheng); day 21; day 36 (Ping); day 42; day 45 (Hsüan 宣; in the 8th or 9th moon); days 49 (Cheng) and 50 (Cheng; 3rd moon); day 50 (3rd moon [?]); day 57 (Cheng); *tso-yi* 作邑 cases: days 39 (Ch'üeh 㱿), 40 (Ch'üeh), and 42 (Ch'üeh); day 44 (Ch'üeh); day 51 (Ch'üeh); days 51 (Cheng) and 53 (Cheng). It seems likely that we may assign 3 clusters to 3 separate cases of settlement building: those dated to days 49, 50, 50 (*Ping-pien* 147, 199; all in the 3rd moon); to days 39, 40, 42 (all on the same oracle bone, *Ching-chin* 1604); and to days 51, 51, 53 (*Hsü-pien* 4.33.4, 5.17.1). But the remaining 9 dates are generally scattered throughout the 60 days of the cycle, so that we may in all be dealing with as many as 12 cases of settlement building.

[27] *Yi-pien* 3212 does record a series of eight *shou nien* 受年, "receive harvest," charges (partly at S142.3) for the area of Chi 妣, running down the middle of the plastron; these were divined two days before the two main *tso-yi* charges (S43.2), which were divined on the left of the plastron, and which refer to a different area, 在 北東, "northeast of Deerhead" (S104.3; Akatsuka, p. 497, suggests Chi and Deerhead were close, but notes that the relationship between them is not clear). The relationships between the inscriptions on *Yi-pien* 3212 are discussed and diagrammed by Chou Hung-hsiang 周鴻翔, *Pu-tz'u tui-chen shu-li* 卜辭對貞述例 (Hong Kong: Wan-yu t'u-shu kung-ssu, 1969), pp. 18, 84, 165 (fig. 13). The third, abbreviated, *tso-yi* charge intrudes between the last two "receive harvest" charges in the left-center column, but this placement implies no significant connection.

[28] The settlement building charges on *Ping-pien* 93 were divined in the 8th moon, i.e., in a 29- to 30-day period that would probably have spanned much of present August and part of September. In modern China there would be a fair chance of rain for at least part of this time (see, e.g., Chu Ping-hai, *Climate of China* [Washington, D.C.: U.S. Dept. of Commerce, Joint Publications Research Service, 1967] [a translation of Chu Ping-hai 朱炳海, *Chung-kuo ch'i-hou* 中國氣候 (Peking: Science Publishing House, 1962)], p. 372, who reports mean precipitation intensities measured at An-yang for a 15-year period to be 22.0 mm./day in August). Since the climate in the twelfth century B.C. was warmer and moister than it is now (Chang [cited n. 3], pp. 136–41), the Shang kings would have had reason to expect rain at this time.

that one would expect from any randomly selected sample of inscriptions.

Assumption 3. *That many graphs were pictures which reveal, or help reveal, the meaning of the words they record or the functions of the group they name.* In his introduction (p. 21), Akatsuka quite properly notes that graphic structure is only one clue to a word's meaning, that there were many phonetic loans in the oracle-bone inscriptions, and that his graphic interpretations of various words may not necessarily be correct. But in the body of the book itself we are presented with numerous etymologies based primarily upon the implicit but doubtful principle of *wang wen sheng shun* 望文生訓. For example, Akatsuka proposes that:

1. on the basis of graphic form, the original meaning of (S211.4; =䧅)[29] was *tse-fa* 責罰, "punish." The spirit of this name, holding an axe behind its back, not yet raised but ready to strike, was thus the overseer and punisher of injustice; the (to this hypothesis) rather awkward fact that harvest and rain prayers were addressed to may have been due, Akatsuka suggests, to the spirit's concern with diligence and indolence in agriculture (pp. 349–53);[30]

2. since the sheep-head (=*yang* 羊) was the key element in (S174.1)—which Akatsuka, after an exhaustive, even exciting piece of graphic analysis (pp. 83–92) reads as 恙, rather than the *yüeh* 岳 proposed by many scholars (see n. 5 above)—the divine nature of the spirit of this name resided in the sheep-head; that the spirit was originally that of the Yang 羊 tribe (pp. 109, 118, 152, 154); and further that the region with this name, as the bottom element (=*shan* 山) indicates, was mountainous (p. 99);

3. since the graph (S267.1; =*po* 亳) depicts sprouting vegetation and a tall building, i.e., a temple, it depicts praying for growth by worshipping vegetation; the Po tribe, therefore, seems to have practiced agriculture since ancient times (p. 194);

4. (S386.4; =*chin* 盡) depicted a hand with a brush cleaning the inside of a vessel; thus the figure called Chin Wu 盡戊 may have been a 巫先 (on this term see n. 44 below) who drove away impurities surrounding the sacrificial vessels (p. 341);[31]

5. or (S275.4, 276.3; =*pin* 賓) is composed of 丂, which Akatsuka takes to be an abbreviated form of (*jen* 人), emphasizing the head and indicating perhaps a figure from the spirit world; of (*chih* 止), which had the sense of "coming and going"; and of (*mien* 宀), which was a temple or house. So the graph as a whole should be taken as a *hui-yi* 會意 meaning "the coming to the temple where a figure from the spirit world is worshipped, and also his spirit." A study of graphic variants further suggests to Akatsuka that the phonetic may originally have been (=*shih* 豕, "pig, boar"), depicting the figure from the spirit world in animal form (p. 582).

At times, Akatsuka does rely on phonological rather than strictly graphic considerations, as in his explanation of the ten heavenly stems and twelve earthly branches. He proposes that the *kan* 干 symbolize in concrete terms the growth and development of plants during the year, from sowing to storage, and that the *chih* 支 reveal the life cycle of man from baby's fontanelle to skeleton (pp. 233–35). These etymologies, even more than some of the pictographic ones, seem based upon a series of strained, ad hoc interpretations.[32] It is hard to see how such subjective arguments can be either proved or disproved.

I do not mean to imply that Akatsuka's pictographic etymologies are necessarily wrong. But they do assume that the oracle-bone script was frequently pictographic or ideographic rather than logographic.[33] For particular simple graphs—though not generally, I think, for more complex ones—this assumption may be true; some Shang graphs may even be shorthand notations of acts rather than representations of words.[34] But there are difficulties with Akatsuka's approach. First, even if we are dealing with a picture, we cannot be certain that Shang stylization had not made it unrecognizable. Second, what looks like a picture to us may have been used by the Shang as a rebus, for its phonetic rather than pictorial value. As with the question of linkages discussed under assumptions 1 and 2 above, Akatsuka proposes no objective criteria to resolve these difficulties.[35] How can we tell if the drops around the *t'u* 土 graph (S171.3) represented the spirits (p. 190), rather than say the blood or millet wine? How can we tell if (S417.3; = *kung* 工) represented a chisel (p. 500), rather than, as I have speculated, with equal lack of certainty, a rammer for pounding earth, or closer to Akatsuka, an implement for striking, chipping, or hitting?[36] If (S150.1; =*shih* 示) represents the wooden pillar which the spirits possessed, how can we tell whether the top horizontal line depicted the spirit (p. 507) or the altar-stand shelf on which offerings to the spirits were placed?[37]

In short, Akatsuka's pictographic interpretations are frequently epigraphic Rorschach tests whose links to Akatsuka's conceptions of Shang reality are clear, but whose links to Shang reality itself are problematical. His imaginative etymologies, based so resolutely on graphic form, frequently need to be treated as speculations requiring further study.

Assumption 4. *That similarities in graph form indicate similarities in reality.* This assumption is related to (and sometimes combined with) the previous one. Assumption 3 claims, in effect: this is a picture of X, therefore it means X. Assumption 4 claims: graphs X and Y share an element; therefore X and Y are related in reality. To take some specific examples, Akatsuka proposes that:

1. primarily on the basis of the shared "eye" element, the Mu 目 tribe worshipped its (S101.2) spirit at the holy place of (S176.3) (pp. 122–24);

2. because (assumption 3) *hai* 亥 was a picture of a boar, Wang Hai 王亥 "King Boar" seems originally to have been the ancestral spirit of the Boar tribe, worshipped in the form of a boar (pp. 147–48, 178, 277).[38] And further (assumption 4), other persons or tribes whose graphs contained the element—such as (S219.4), (S573), (S218.3?), and (S572)—may have been related to the 亥 tribe (p. 148);

---

[29] In this and most of the following cases the modern graph is that proposed by Li Hsiao-ting 李孝定, *Chia-ku wen-tzu chi shih* 甲骨文字集釋, Institute of History and Philology, Academia Sinica, Monographs No. 50 (中央研究院歷史語言研究所專刊之五十), 8 vols. (Nankang, 1965). These graphs, and the pages in Li, are usually supplied as entry heads in Shima (cited n. 16). For an introduction to Li's dictionary see *Revue bibliographique de Sinologie*, 11 (1965), 252–53; Keightley (cited n. 1), p. 60.

[30] A similar interpretation, that meant "to attack by surprise," has been rejected by Serruys (cited n. 10), pp. 90–91, as "a mere subjective interpretation of the pictograph."

[31] Akatsuka cites *Yi-li* 儀禮, "T'e-sheng k'uei-shih li 特牲饋食禮," to support this interpretation.

[32] E. G. Pulleyblank has proposed that the stems and branches were "a set of twenty-two phonograms representing the consonants of the Chinese language at the time of the invention of the script" ("The Chinese Cyclical Signs as Phonograms," *JAOS*, 99 [1979], 24–38). His hypothesis has the advantage that it may be tested systematically against other phonetic evidence. It is hard to see how Akatsuka's subjective interpretation can be proved or disproved.

[33] On the issues involved, see Peter A. Boodberg, "'Ideography' or 'Iconolatry'?" *TP*, 35 (1940), 266–88, rpt. in *Selected Works of Peter A. Boodberg*, ed. Alvin P. Cohen (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1979), pp. 407–29.

[34] See Keightley, "*The Cradle of the East:* Supplementary Comments," *Early China*, 3 (Fall 1977), 56, and the note by William G. Boltz on p. 61 of the same issue, who suggests that such characters should perhaps be called dromenographs. There is considerable resistance to the idea that some of the oracle-bone graphs may not have obeyed the logographic principles we require of a writing system (e.g., Ken-ichi Takashima, "Some Philological Notes to *Sources of Shang History*," *Early China*, 5 [1979–80], 48, n. 1), but, given the mixture of words and emblems found in the early bronze inscriptions, such a mixture of words and dromenographs in the bone inscriptions would not, it seems to me, be implausible.

[35] For a classic instance of the problems which can arise, consider his treatment of the graph (*ɣə̂g/*hai* 亥). On pp. 148 and 277 he argues that it was a picture of a wild boar or male pig (**sieg/shih* 豕), with being the pictorial form, and the more abstract form. (This seems speculative; the 丅 of the supposedly abstract form is not present in the supposedly pictorial form.) On pp. 276–77 he proposes that it was the same as the phonetic element in **kăg/chia* 家; on p. 582, as we have just seen, he suggests that the graph may have been the phonetic in **pien/pin* 賓/穷, depicting a figure from the spirit world in animal form; on p. 235, as an earthly branch, it may have meant baby's first smile, **ɣəg/hai* 咳, or a skeleton, **ɣəg/hsieh* 骸. All these explanations may be possible (though I find some of the phonological arguments difficult to accept), but how can we be sure? (The archaic reconstructions I give here are those of Tung T'ung-ho 董同龢 as given in *Han-tzu ku-chin yin-hui*, 漢字古今音彙, ed. Chou Fa-kao 周法高 et al. [Hong Kong: The Chinese University of Hong Kong, 1973]. Akatsuka himself provides no phonetic spellings.)

[36] Keightley, "Public Work in Ancient China: A Study of Forced Labor in the Shang and Western Chou," Diss. Columbia Univ. 1969, pp. 19–21; "The Temple Artisans of Ancient China: Part One: The *Kung* and *To-kung* of Shang," mimeographed (Modern Chinese History Project Colloquium, University of Washington, 17 Dec. 1970), pp. 5–11.

[37] Keightley (cited n. 1), p. 17, n. 71.

[38] Akatsuka (p. 277) notes that *Lun heng* 論衡, "Wu shih p'ien 物勢篇," links the earthly branch Hai to the pig. In his long and stimulating discussion, Akatsuka observes (as have previous scholars) that in certain cases a bird element was added above the *hai* of the Wang Hai found in the oracle inscriptions (S479.2), thus depicting a hybrid figure (which may be related to the description in *Shan-hai ching* that "Wang Hai holds a bird in his hands") (pp. 287–88). Given the importance of such hybrids in later Chinese religious belief (see Michael Loewe, "Man and Beast: The Hybrid in Early Chinese Art and Literature," *Numen*, 25.2 [1978], 97–117), it is unfortunate that Akatsuka makes no attempt to utilize the iconography of the Shang bronzes which would accord well, one would think, with the iconographic view he takes of numerous Shang graphs and which, if the elements of bronze decor have any theological or social meaning, may eventually throw more light on the nature of Shang religion and state (see, e.g., the quotation from Chang given in n. 124 below).

3. Chih 止 (S64.3), an ancient, sacred place of the royal house, may have been connected to Chih 沚 (S65.4), the seat of a powerful clan of the royal house; and, if so, that 沚 might have been in the river valley, 止 on higher ground (p. 162);

4. Ho 河 (and here he partly follows Kuo Mo-jo 郭沫若) was composed of the water radical 氵 and the 丂 element, which depicted 柯, an axe handle. The axe handle, which made possible the sacred task of opening up the area, was seen as a gift of the gods. So the people engaged in this work bore the name of Ho, and so did the holy region itself (pp. 36–38);

5. the more pictorial, more concrete, graphs have some connection with political glory or religious belief, and are not simply abstract names; Akatsuka cites cases involving concrete representations of *hu* 虎 "tiger" (p. 139), *lung* 龍 "dragon" (pp. 216, 218), Nao 夒, and Yüeh 岳 (p. 352);[39]

6. entirely on the basis of graphic similarity, the Ming 鳴 (S238.4) and Chi 雞 (S469.1) tribes seem to have been related (p. 224);

7. the presence of the tree element in the graphs used for tribal names such as Mu 木 and Sung 宋 associates these tribes with tree worship (p. 229).[40]

Other examples of "graph play" may be cited.[41] One cannot even refer to "word play" since—as in the case of Ming 鳴 (**mi̯ĕng*) and Chi 雞 (**kieg*) cited above—Akatsuka ignores phonetic considerations. The links that Akatsuka proposes are frequently plausible; they are not necessarily wrong. But, as with assumption 3, they imply in almost every case that the Shang graphs were not simply notations for recording words but were drawings depicting reality. Akatsuka treats tribal names in particular as insignia—in which the picture of the pig or chicken or dragon element, for example, rather than the sound of the word, transmits the core meaning. Given our present knowledge about the origins of the Chinese script, it is not yet possible to judge whether, by Late Shang, the oracle-bone inscriptions were composed entirely of words or whether, as Akatsuka's analyses frequently imply, they were a mixture of words, insignia, graphic puns,[42] and dromenographs (see n. 34 above). And even if we adopt this second alternative as a working hypothesis, we still need to ascertain the particular nature of each graph discussed. Ad hoc speculation aside, Akatsuka has no method for doing this; he does not propose how it may be done. Until this is done, his conclusions based on assumption 4 must remain speculative.

Assumption 5. *That information found in Chou and Han literary texts may be used, with due caution* (p. 22; cf. p. 231), *to supplement the information found in the oracle-bone inscriptions, and vice versa.* I have in the past been a purist in matters of this sort, preferring to rely on "hard," contemporary, inscriptional and archaeological data for my understanding of the Shang, rather than on "soft," later accounts in Chou or Han texts, some of which may have been recorded more than a millennium after the facts they purport to describe.[43] Akatsuka's book, with its frequently persuasive citation of apposite classical passages, suggests that a less stringent attitude has its virtues. But a distinction needs to be made. It is one thing to find Chou continuities when we are certain what the earlier Shang practice was. It is quite another thing to use supposed Chou continuities to reconstruct what Shang practice may or must have been. It is hard to be sure, in other words, what constitutes "due caution." Some examples will illustrate the issues involved.

Inscriptions show that preparations for the Ho 河 ritual, especially when rain was sought, started with a *ch'ü* 取 (S111.3). According to Akatsuka this involved the ritual cutting with a large sickle of vegetation at the place of sacrifice, but the evidence to support this explanation comes from a commentary to the "Ch'i yü 齊語" section of *Kuo-yü* 國語, from the "Ssu-shih 肆師" section of *Chou-li* 周禮, and from *Shih-ching* 詩經, Mao No. 290 (p. 51), none of which refers to a *ch'ü* ritual by name or to the Ho.

Akatsuka's suggestion that Shang Ti was included among the spirits summoned from the four quarters is supported only by a passage in *Ch'u-tz'u* 楚辭, "Li sao 離騷" (p. 550).

Akatsuka's discussion of the meaning of *hsüeh* 學 (on what he admits is virtually no Shang evidence) as part of the temple used for ritual and sacrifice, and thus of the role of the *wu-hsien*[44] Hsüeh Wu 𦥯戊 (S478.1), depends entirely on extrapolations from *Li-chi* 禮記 and *Chou-li* and two not particularly informative Western Chou bronze inscriptions (pp. 338–41).

Similarly, Akatsuka presents no positive evidence in the oracle-bone inscriptions to link the Eastern and Western Mothers, Tung Mu 東母 and Hsi Mu 西母 (S133.3), to the sun or sun myths;[45] the relationship has to be posited on the basis of later texts such as *Ch'u-tz'u*, *Shang-shu* 尙書, *Shan-hai ching* 山海經, and *Huai-nan tzu* 淮南子. Akatsuka's reconstruction of the core of the sun myth in Yin times, with the sun as a living child, growing in the morning and dying in the evening (pp. 448–51), owes nothing to the Shang inscriptions themselves.

The argument that a *shih* 尸 personator served as a proxy for Shang Ti or the ancestors in the Yin rituals (pp. 579 ff.) receives some tacit support from the frequent appearance of the *pin* 賓 (S276.3–277.3 and cross references cited there) ritual of "entertainment"[46] in which the king entertained his ancestors and in which it is plausible to assume that some "entertainee" may have drunk and eaten for the spirits. Akatsuka (pp. 583–84) also speculates that the difficult phrases *tso pin* 作賓 (S476.4) and *wei pin* 隹賓 (S276.1; cf. n. 89 below) refer to the establishment of a personator, a guest, to represent Shang Ti.[47] But the existence of a Yin personator depends primarily (pp. 579–81) upon passages in *Yi-li* 儀禮 and, to a lesser extent, *Kuo-yü* and *Chou-li*.

Some of this speculation, especially when based on ethnographic analogy as well as later explication of Classical practice (e.g., the view that the spirits depended on the blood shed at various dismembering, cutting, and decapitating sacrifices and that the blood increased their spiritual force [pp. 165, 189, 325, 368, 424–25, 444, 446, 553]), seems eminently allowable.[48] The oracle-bone inscriptions are not self-reflective documents. We have to make some assumptions about function and meaning if they are to have any more than an antiquarian interest. But there is always the danger of an insidious back contamination in which Akatsuka's knowledge of Chou texts and culture causes him (as it causes us all) to approach the Shang materials with certain preconceptions that make some interpretations—ritual, philological, cultural—more reasonable and attractive than others.[49]

---

[39] For the view of Ting Su 丁驌 that the more pictorial representations were either earlier forms or were used for animals with which the Shang were less familiar, see Keightley (cited n. 1), p. 109, n. 75.

[40] Akatsuka supports this speculation by citing the late tradition—handed down, he suggests, in the state of Sung—that T'ang 湯, offering himself as a victim in time of drought, prayed in a mulberry grove. For a detailed study of this myth and its links to the Shang, see Sarah Allan, "Sons of Suns: Myth and Totemism in Early China" (in preparation).

[41] The argument that changes in graph form may reflect—in the case of Ho 河—the shifting fortunes of two Ho tribes (pp. 41–42, 66–69) may have merit; but the possibility that these variations reflect only the hands of two different inscribers (cf. Keightley [cited n. 1], pp. 49, 108–09, 110–11, 122, n. 138) rather than different realities needs to be considered (by a study of the calligraphic variants of *all* the graphs on the oracle bones concerned) before the argument is accepted.

[42] The argument that graphemic families may be explained by a metaphoric principle in which graphic (rather than phonetic) elements were used to signify related but separate meanings is presented by Arthur Cooper, *The Creation of the Chinese Script* (London: The China Society, 1978).

[43] See for example my reviews in *JAS*, 30 (1971), 655–58, and *HJAS*, 37 (1977), 381–411. For an eloquent statement of the way in which later texts may perhaps be used to reconstruct earlier realities, see John S. Major, "Research Strategies in the Study of Ch'u Religion," *History of Religions*, 17 (1978), 226–43.

[44] *Wu-hsien* 巫先 is a neologism coined, but nowhere defined, by Akatsuka. The *wu-hsien* were spirits who were chiefly worshipped as the spirits of shamans (p. 531); presumably, the figures they represent had served as shamans when alive and continued to so serve when dead. Akatsuka refers to the dead Yi Yin, for example, as both a *wu* (p. 358) and a *wu-hsien* (p. 371). Why Akatsuka did not merely refer to these spirits as *hsien-wu* 先巫, "former shamans" (he slips and uses this phrase on pp. 189 and 555) is not clear. Perhaps he wished to indicate that they were not merely "former shamans" but were, as *hsien* 先, "forerunners," still actively "shamanistic." I shall take *wu-hsien*, therefore, to mean "shamanistic forerunners," but will generally merely romanize the term. (I have benefitted from Ken-ichi Takashima's discussion of this phrase [letter of 22 Nov. 1978].)

[45] Dessa Bucksbaum, "A Study of the Word *Fang* 才 (方) in the Oracle-Bone Inscriptions," typescript (Berkeley, Dec. 1978), p. 34, notes that references to Tung Mu, Hsi Mu, and (ignored by Akatsuka), Chung Mu 中母, "Center Mother" (S133.4), trace the course of the sun's path.

[46] See Akatsuka's etymology of this graph, discussed at p. 282 above.

[47] Akatsuka's treatment of *tso pin* is inconsistent. On p. 583 he apparently takes the phrase (in *Ping-pien* 22.9–10; S476.4, recorded as plate 21) to mean, "to act as a guest." On p. 584 he treats the *tso* 作, in the similar context of *Ts'ui-pien* 1113 (S476.4), as equivalent to *tsu* 詛, "curse" (noting, on p. 492, that **tsâk/tso* 乍 was a loan for **tsag/tsu* 詛; I supply the phonetic reconstructions of Tung [cited n. 35]).

[48] Akatsuka, in fact, cites no supporting evidence in this case, but it may readily be found in anthropological literature (see, e.g., "Blood" in *A Dictionary of Comparative Religion*, ed. S. G. F. Brandon [New York: Scribner, 1970]). The assumption that a sheep victim enhanced the power of a sheep deity (e.g., p. 118 on *yang* 羊 being offered to 岳), and so on, is a plausible and useful hypothesis, but needs to be evaluated in each case to avoid the danger of circularity (the argument that 岳 was a sheep deity decause it was offered sheep).

In fact, Akatsuka's view of Shang culture varies widely in the way particular interpretations depend upon "hard" Shang inscriptions or upon "soft" Chou-Han texts, with a whole series of gradations in between, as hard inscriptions are translated, to varying degrees, on the basis of softer preconceptions. Clearly, no scholar can even begin to understand the Shang in a state of immaculate ignorance about Chou and Han culture and epigraphic evidence.[50] I would simply suggest that each of Akatsuka's reconstructions needs to be judged on an individual basis; the persuasiveness of one interpretation does not vouch for the persuasiveness of all.

As my formulation of assumption 5 indicates, Akatsuka also attempts to reinterpret some Chou materials on the basis of what he takes to be relevant Shang evidence. To limit ourselves to only one text, he presents fascinating, though frequently speculative, readings of many of the *Shih-ching* odes.[51] He suggests, for example that:

---

[49] To cite a specific case, Akatsuka notes that it is hard to tell in what manner the spirit [illegible] (S211.4) was transmitted to later ages, but he suggests that it may have been as the autumn harvest spirit, Ju-shou 蓐收 of the "Yüeh-ling 月令"; Ju-shou was also a spirit of warfare and punishment, though Akatsuka argues that these responsibilities were a later contribution of five-phase 五行 theory (p. 353). This is puzzling. The oracle-bone inscriptions indicate that [illegible] received harvest prayers, reports about locusts, cattle sacrifices, human victims, and various other ritual offerings (pp. 349–50), so some agricultural function (shared, of course, by numerous Shang spirits) might be expected of his successor, if he had one. But, as we have seen (p. 281 above), Akatsuka proceeds to etymologize, on the basis of the axe-behind-the-back graph-form, that the basic meaning was "punish" and that the Shang spirit oversaw and killed the unjust. One cannot help wondering if this subjective and (on the basis of the Shang evidence) unwarranted speculation was not originally inspired by Ju-shou's punitive functions in some text of the Warring States period, even though Akatsuka discounts them as inspired by five-phase theory.

Similarly, Akatsuka's view (pp. 490–93) that the 爯册 ritual (S422.4) involved the reading aloud of a complaint against an enemy's unrighteousness and of an oath that the enemy must be destroyed appears to derive from the various pre-battle "Shih 誓" in *Shang-shu*, as well as passages in *Mo-tzu* and *Li-chi*, not from the content of the Shang inscriptions.

[50] On this point, see Keightley (cited n. 1), p. 64.

[51] Akatsuka is suggestive about other classical texts, as in his discussion of *Tso-chuan*, Chuang 莊 8, where he relates the pig-like manifestation of the spirit of the dead Kung Tzu P'eng Sheng 公子彭生 to his view that the P'eng tribe of the oracle-bone inscriptions was linked to Wang Hai and thus to pig worship (p. 284).

---

1. the word *p'an* 槃 (translated by Karlgren as "joy") in Ode 56 derived from the shamanistic wind which brought the spirits by magic (pp. 572–73; cf. p. 54);[52]
2. Ode 123 is about the descent of the spirit to the *she* 社 and his transfer to the *chün-tzu* 君子 as personator, the *chün* in this case preserving his old shamanistic function (p. 395);
3. the term *yi-jen* 伊人 (which Karlgren had difficulty in rendering satisfactorily) in Odes 129 and 186 refers to a spirit, a vestige of the Shang sense of *yi* 伊 (pp. 38, 404–05);[53]
4. Ode 199 is a song worshipping the Ho spirit (pp. 39, 45);
5. Ode 232 links the pig to rainfall (being thus an extension of Yin belief in Wang Hai [see p. 284, above]), and treats the moon as a portent of rain (a Yin belief Akatsuka discerns in *Ping-pien* 117) (pp. 277–78, 458);
6. Ode 270 shows that the Chou court took the spirit of Ch'i-shan 岐山 to be the protector of the Chou state, thus continuing the Yin practice of mountain worship (pp. 168, 169).[54]

The acceptability of these interpretations must be judged by scholars who specialize in the Chou and Han texts concerned. The above examples will at least suggest the stimulating insights that Akatsuka proposes and will, I hope, make clear why this book will be of interest to all scholars interested in Classical China. Akatsuka discusses, for example, the evolution of *t'ien-ming* 天命 doctrine and Chou humanism (pp. 19, 196–97, 515–16, 599–600), the sex change of the "Eastern Mother" in Eastern Chou (p. 452), the evolution

---

[52] Akatsuka cites his earlier article, "Chūgoku kodai kayō no hassei to sono tenkai 中國古代歌謠の發生とその展開," *Chūgoku bungaku kenkyū* 中國文學硏究, 3 (1964), 1–16. It should be noted that oracle-bone graph 凡 (S410.3), which Akatsuka regards as the shaman's wind, has been interpreted by David Nivison in divinations about sickness as antecedent to *hsing* 興, "arise," "recover" ("The Pronominal Use of the Verb *Yu* [gi̯ŭg: 㞢, 又, 侑, 有] in Early Archaic Chinese," *Early China*, 3 [Fall 1977], 10). Takashima reaches rather similar conclusions but by a different route, taking the 凡 as 汎, meaning basically "to float" and thus "to float (recover) from illness"; Takashima Ken'ichi 高嶋謙一, "Fu Kō no shippei ni kansuru ichi bokuji no shishaku 帚好の疾病に關する一卜辭の試釋," *Kōkotsu gaku* 甲骨學 12 (1980), 55–65. There may well, of course, have been links between shamanistic curing and the winds.

[53] Ikeda (cited n. 5), p. 73, doubts Akatsuka's interpretation.

[54] Akatsuka, pp. 169–72, cites thirteen odes to support his contention that the Yin belief in 岳, as a mountain spirit who could control harvest and rain, continued, in some form, into Chou times. I am not persuaded that most of the odes cited require, or are relevant to, this interpretation.

---

from *t'u* 土 to *she* 社 (pp. 196–201), the way in which wind worship may have led to metaphysical conceptions of *ch'i* 氣 (pp. 433–34, 441–42), and the changing role of both the king and Shang Ti in harvest prayer rituals (pp. 591–93, 599–600). Given the richness and variety of Akatsuka's coverage it is a pity that (with the exception of the valuable index [pp. 835–59] to graphs appearing in Shang bronze inscriptions) the book has no index, even to texts cited. (A finding list of the inscriptions I cite may be found at the end of this review.)

Assumption 6. *That the evolution and focus of the divination record reflects underlying cultic and political realities rather than merely reflecting the character of the divination process itself.* Akatsuka does not address this assumption explicitly but readers of his book should keep it in mind since it may not be equally valid in all cases. For example, he argues that, in period II and after, the "Old School" spirits (see n. 22 above) who had been worshipped in period I, and who represented the "prehistory" of the Yin court, were dropped from the royal sacrifices and were either entirely lost or were kept alive among the people (p. 513). He argues that rituals to Shang Ti do not appear clearly in the oracle-bone inscriptions because they were carried out in secret by the king himself (p. 505). And he also argues that the king's virtual monopoly of divination in period V, when few other diviners are recorded, indicates the concentration of royal power (pp. 514–15).

These conclusions may once again be correct, but it must never be forgotten that the nature of the oracular record reflects, first and foremost, the nature of divination practice. Thus, taking the above examples, we can claim with assurance only that sacrifices to "Old School" spirits were no longer divined; the spirits may still have been worshipped, even by the elite. There is no reason to assume that rituals to Shang Ti (if they existed at all) had to be secret; it may simply be that for some reason—such as, for example, the inscrutability of Ti's will[55]—divination about such rituals might have been pointless.

---

[55] Keightley, "The Religious Commitment: Shang Theology and the Genesis of Chinese Political Culture," *History of Religions*, 17.3–4 (1978), 219–20.

The third case is more complicated because the scope and importance of pyromantic divination as a whole had shrunk markedly in period V. "Emphasis was focused upon divinations about the sacrificial schedule, the ten-day period and the night, and the hunt. Other areas of life, such as dreams, sickness, enemy attacks, requests for harvest, and the issuing of orders were divined far less frequently than they had been in period I, if at all."[56] The king did monopolize divination, but the institution had lost much of its strategic value. If, as I suspect, the reduced scope of the pyromantic record reflects the secularization of Shang political culture,[57] then the king's monopoly of divination would appear to have confirmed only his grasp of a diminished traditional and ritual role; it may have had little direct bearing on the true nature of royal power. How to relate changes in the divination record to changes in the underlying reality is one of the nicest and most vexatious problems facing the historian of Shang China.[58] The relationship needs to be evaluated in every case.

Numerous lesser assumptions undelie the pages of the book; a few may be treated briefly:

Assumption 7. *That when one spirit was worshipped or divined about before another, the first was in some way superior to, or took precedence over, the second* (e.g., pp. 248, 298, 329, 376). As Akatsuka himself notes, the evidence is contradictory in some cases, with the order of the spirits being reversed (e.g., pp. 248; *Ping-pien* 43, cited on p. 330, reverses the order Akatsuka sought to establish from *Yi-pien* 753 on p. 329).

Assumption 8. *That the order in which sacrifices were divined was the order in which the sacrifices were performed.* This assumption, crucial to Akatsuka's detailed reconstruction of Shang rituals, is plausible, but inconsistencies do appear in the inscription record (e.g., pp. 590, 606, n. 26).

---

[56] Keightley (cited n. 1), p. 122.

[57] Keightley, "The Late Shang State: When, Where, and What?" in Keightley, ed. (cited n. 5). It is also possible that the reduced scope of the pyromantic record reflected the introduction of new forms of divination such as that represented by the *Yi-ching* 易經 tradition. For a recent hypothesis about the origins of the hexagrams, which may have been in use by the end of the Shang, see Chang Cheng-lang 張政烺, "Shih-shih Chou-ch'u ch'ing-t'ung-ch'i ti ming-wen chung-ti Yi-kua 試釋周初青銅器的銘文中的易卦," *K'ao-ku hsüeh-pao* 考古學報, No. 4 (1980), pp. 403–15.

[58] Keightley (cited n. 1), pp. 122, n. 138, 139–40; cf. Keightley (cited n. 34), pp. 55–56.

Assumption 9. *That, in opposition to Occam's Razor, entities may be multiplied as needed to suit a particular anthropological model.* Or, to put the matter more concretely, when the inscriptions are silent about, or fail to give weight to, what in Akatsuka's model should have been a strategic element of Shang theology and cult, that silence or lack of emphasis may be explained away by complicating, rather than simplifying, the model. We shall see this assumption employed in Akatsuka's treatment of Ti worship and shamanism. I note here only that I subscribe to Occam's Razor and, when I can think of them, prefer simpler explanations which take account of the evidence we have.

Assumption 10. *That major conclusions may be reached on the basis of a few inscriptions, or even a single one.* Given the comparative paucity of Shang documents, I sympathize with Akatsuka's desire to make use of unique cases. But it is dangerous to build great arguments on meager evidence—as Akatsuka does, for example, in his treatment of Hsien Wu 咸戊 (see n. 77 below)—for at least two reasons. First, because in the absence of numerous inscriptions of a particular type we may not be translating the single or few cases correctly. Second, because meager evidence suggests the topic may not have been important to the Shang and that we should not, therefore, assign it a key role in our understanding of the culture.[59]

Assumption 11. *That places, the people living there, their leaders, and the spirits they worshipped, shared the same name.* Such an assumption is supported both by evidence from other cultures (see n. 13 above) and by a study of Chang Ping-ch'üan.[60] Akatsuka invokes so many cases where the assumption seems to work that it may be accepted as a general principle of interpretation. It is worth noting, however, that the validity of the assumption, and our inability to test it rigorously, depend to a significant extent on the (to us) ambiguous preposition *yü* 于 (Akatsuka explicitly recognizes this at p. 212, line 4). In a phrase of the type "X sacrifices *yü* Y," it is not certain, in the absence of a series of exclusively unambiguous parallels (of the form say, "X hunts *yü* [="at"]Y), whether X was sacrificing *to* Y (the spirit) or *at* Y (the place). Such ambiguity may have been present to the Shang themselves—a sacrifice at place Y was also a sacrifice to its tutelary spirit Y, with place and spirit being, in a ritual context, conceived as inseparable. But the assumption is at present supported largely by circular reasoning: because *yü* is ambiguous, we can see that places and spirits shared the same names, and because places and spirits shared the same names, we see that *yü* was ambiguous.[61]

These eleven assumptions then should be borne in mind, and assessed, by any reader who wishes to judge the accuracy and reliability of Akatsuka's arguments. To give a larger sense of how Akatsuka relies on these assumptions, I should now like to assess in general terms two of the book's major themes, that of religious incorporation, which bears on both the nature of the Shang state and of the High God Ti, and that of shamanism, a topic that has recently excited much interest.[62] For criticism of some of Akatsuka's other major themes the reader should consult Ikeda's review (cited n. 5).

RELIGIOUS INCORPORATION AND THE ROLE OF TI

Akatsuka's model of religious incorporation permeates the book. In general, he argues that local spirits like Ho (or Yüeh or T'u), or *hsien-kung* like Wang Hai and K'uei, had originally been tribal spirits (not nature powers)[63] worshipped by their eponymous tribe; that, as that tribe and its sacred places were incorporated into the Yin polity, its spirit, incorporated into the Yin cult, lost its individual and concrete tribal affiliations, so that Ho became a generalized and abstract River Spirit (Yüeh became a Mountain Spirit) representing all the other river (mountain) spirits (originally worshipped by other constituent tribes) in the Shang pantheon (e.g., pp. 20–21, 63; cf. pp. 46, 54–56, 76, 150, 154, 163, 178–79, 199, 200–201, 266, 285, etc.).[64] The fact that harvest prayer and other rituals were offered equally to Ho and Yüeh, and to *hsien-kung* like Wang Hai and K'uei, indicates to Akatsuka that their individual characters were being "dissolved" in a common nature (pp. 76, 167). Many of the former kings of the collateral line—such as Yung Chi 雍己, Ch'ien Chia 戔甲, Ch'iang Chia 羌甲, Nan Keng 南庚, Yang Chia 陽甲, and P'an Keng 般庚—may also have originally been associated with the Yung, Ch'ien, Ch'iang, Nan, Yang, and P'an tribes; the assignment of Heavenly stems and the fictive incorporation of their spirits into the Shang ancestral cult and genealogy served to strengthen the dynasty. The conferring of the title of *kao tsu* 高祖 on Wang Hai and K'uei illustrates the same tendency. Similarly, the spirits Yi Yin and Huang Yin were originally the spirits of the Yi and Huang tribes (p. 413).

Generally speaking—and with allowance made for exceptions in particular cases (such as Akatsuka's treatment of body parts as tribes, see "Problems of Translation" below)—this is a plausible hypothesis, supported both by other recent studies and by ethnographic analogies.[65] I am less well disposed, however, toward that part of Akatsuka's argument, really the corollary, involving the nature and function of Shang Ti.

There is no disagreement that Ti was the High God who had "dominion over rain, wind, other atmospheric phenomena, harvests, the fate of urban settlements, warfare, sickness, and the king's person. He shared some of these jurisdictions with the ancestors and nature powers, but he was the supreme religious deity."[66] And I believe that Akatsuka is correct in discerning a tension, finally resolved in Western Chou in favor of Ti (or T'ien), between the worship of an impartial Ti and the worship of the partial ancestors (e.g., pp. 599–600) and in suggesting that Shang Ti did not restrict his assistance to only the Yin court (p. 597) so that one may indeed conceive of a "Mandate of Ti," precursor to the Chou "Mandate of Heaven," which could inflict such disasters as crop failures and enemy attacks on the Shang (pp. 488–89, 513, 515, 533, 597).[67]

Akatsuka makes much, however, of the fact that ancestral spirits, *hsien-kung*, and tribal spirits shared many of Ti's functions. In particular, they received prayers for rain and harvest and they cursed the rain and crops (pp. 480–81). This leads him to argue that, since Shang Ti was in final control, these spirits had divided up his powers in ways foreign to their original natures (pp. 480–81; cf. pp. 504, 531). That Ho, Yüeh, and others received harvest prayer rituals indicates to Akatsuka that they were losing their individuality which became submerged in the common nature of Shang Ti (pp. 167, 597). He further argues that, since these spirits had divided Shang Ti's powers, they were both indispensable to him and under his control. Cult offered to them, therefore, was in effect implicitly addressed to Shang Ti whose agents they were and without whose presence the rituals would not have been complete (p. 504).[68] (This helps explain, in Akatsuka's view, the virtual failure of the oracle-bone inscriptions to record any cases of direct sacrifice to Shang Ti [p. 503]). Further, since Shang Ti seems to have been the main spirit to whom the harvest prayer ritual was directed, and because this prayer was fundamentally important to the preservation of the dynasty, Akatsuka argues that "all rituals converged in it" (p. 535) and that, accordingly, most aspects of what would appear as polytheistic cult were, again implicitly, addressed to Shang Ti, who connoted all spirits (p. 153). The worship of Shang Ti, therefore, served to unify the dynasty since even rituals addressed to particular spirits reminded all concerned of Shang Ti's ultimate control, thus reinforcing the unified control of the Shang king, who in his ritual acts embodied the will of Shang Ti on earth (pp. 499, 534, 598). The worship of Shang Ti, in fact, may be seen as an initial attempt to embody conceptions of large-scale cooperation and underlay the development of that concept (p. 600).[69]

---

[59] Cf. Keightley (cited n. 1), pp. 143–44.

[60] Chang Ping-ch'üan 張秉權, "Chia-ku-wen chung so-chien jen-ti t'ung-ming k'ao 甲骨文中所見人地同名考," in *Ch'ing-chu Li Chi hsien-sheng ch'i-shih-sui lun-wen-chi* 慶祝李濟先生七十歲論文集 (Ch'ing-hua hsüeh-pao-she, Taipei, 1967), II, 687–776.

[61] Akatsuka, like other scholars, also translates *yü* 于 on occasion as the connective "and." Thus he takes inscriptions of the form 求年婁于河 (S356.2) to mean "seek harvest at 婁 and Ho" (p. 239). (Cf. his treatment of *K'u-fang* 325 [p. 247], *Shih-to* 1.410, and *Yi-pien* 1987 [p. 250]).

[62] David Hawkes, "The Quest of the Goddess," *AM*, NS 13 (1967), 71–94; Loewe (cited n. 38), esp. pp. 99, 105, 106, 108; Major (cited n. 43); Jordan Paper, "The Meaning of the 'T'ao-T'ieh,'" *History of Religions*, 18.1 (1978), 18–41.

[63] The argument—which Ikeda (cited n. 5), p. 71, is not prepared to accept—requires a serious revision in our understanding of what have generally been thought to be nature spirits (as in Chang [cited n. 10], pp. 167–210).

[64] For the argument that Ho stood at the head of a hierarchy of river spirits, see Itō Michiharu 伊藤道治, "Shūkyōmen kara mita Indai no ni-san no mondai—In ōchō no kōzō, sono ni—宗教面から見た殷代の二・三の問題—殷王朝の構造, その二—," *TSK*, 20.3 (1961), 270 (rpt. in his *Chūgoku kodai ōchō no keisei—shutsudo shiryō o chūshin to suru In-Shū shi no kenkyū* 中國古代王朝の形成—出土資料を中心とする殷周史の研究 [Tokyo: Sōbunsha, 1975], pp. 57–58).

[65] Itō Michiharu, "Bokuji ni mieru sorei kannen ni tsuite 卜辭に見える祖靈觀念について," *Tōhō gakuhō* 東方學報, 26 (1956), 27; "Shūkyōmen," p. 275 (rpt. in *Chūgoku kodai ōchō*, p. 64) (both cited n. 64); Kaizuka Shigeki 貝塚茂樹, "Chūgoku kodai toshi no saishi 中國古代都市の祭祀," in *Kaizuka Shigeki chosakushu* 著作集, (Tokyo: Chūō Kōronsha, 1977), II, 51–54. See too, Chang (cited n. 60). For divergent views of religious incorporation in other cultures, see G. W. Ahlostrōm's review of Morton Cogan, *Imperialism and Religion: Assyria, Judah and Israel*, in *JAOS*, 98 (1978), 509–11.

[66] Keightley (cited n. 1), p. 33, n. 24.

[67] Keightley (cited n. 55), pp. 219–20.

[68] The argument here depends upon *Ch'ien-pien* 1.50.1 and *Ping-pien* 199, cited (p. 504) as evidence that Ti's will was divined in conjunction with divinations about rituals to various spirits. Examination of these two oracle bones, however, shows no reason why the argument of significant conjunction (assumption 1 discussed above) should be accepted.

Attractive though such a model is, the evidence may, with Occam, be amenable to a simpler explanation. I would suggest that originally, prior to the dominance of the Shang kings, North China was inhabited by a series of local groups; these shared, in broad terms, a common culture but worshipped their own tutelary spirits, each of which functioned as a miniature, local Ti with full control over rain, harvest, and the fate of the community (cf. p. 178, where Akatsuka presents a rather similar view). When, as we see in period I, these groups were incorporated, both politically and religiously, into the Shang system, these spirits lost their particularistic nature but they did not lose their individual powers. These powers had been characterized, not by restricted content (i.e., control over rainfall but not over harvest) but only by restricted geographical influence. They continued to be addressed as spirits with comprehensive powers but spirits who could now influence rain, harvest, and fate for the entire realm. Their original functions came to parallel or duplicate those of Ti who was an invention perhaps of the Shang dynasts, wishing to see in the spirit world the same kind of domination for which they strove on earth.[70] It may well be that, as time passed, the Shang came to believe Ti had delegated his powers to these lesser spirits, but the inefficient duplication of jurisdictions, so amply documented in the oracle-bone record, suggests that such delegation would have been only a post hoc rationalization as a series of local traditions were combined.[71] The tutelary spirits would not have divided up Ti's powers; they had possessed such powers originally. The fact that, as Akatsuka notes, some particularities of cult were preserved[72] lends support to this view.

The true evolution then would not have been one of division, generalization, and abstraction but one of domination, duplication, attentuation, and—by period V—eventual disappearance (at least from the divination record; see assumption 6), as the particularistic groups which had originally given birth to the spirits lost their political independence, their sense of cultural identity, and their religious traditions.[73] In this view, Ti would indeed have been the deity who "tied all things together" (accepting that *ti* 帝 was related to *ti* 締 [pp. 187–88]) but he would not necessarily have been, as he implicitly and somewhat surprisingly becomes in Akatsuka's model, a particularistic, Jehovah-like figure, tying things together for the Shang; he might equally well have been a universalistic, *t'ien*-like figure who transcended, or regarded with indifference, their local, dynastic interests, so that the "Mandate of Ti" could harm, as well as assist, the dynasty (see above). Akatsuka quite properly notes the way in which *Shih-ching* Odes 242, 243, and 244 stress the role of the ancestors in the maintenance of the Chou state and de-emphasize the role of Ti (pp. 599–600); but I see no reason—given the emphasis on ancestral rites in, and the virtual disappearance of Ti from, the oracle-bone record of period V—why the Chou would not merely have been continuing Shang practice rather than changing it.

SHAMANISM

Basing himself on classical texts, Akatsuka defines shamans (*wu* 巫) as practitioners of mysterious arts (*hijutsusha* 祕術者), able to pass between the human and spiritual worlds, and to influence men through the inspiration and authority of the divine spirits (pp. 323–24). He claims that such beliefs were a particular feature of Chinese religion (p. 324) and concludes that shamanism flourished in Yin times (p. 439). Given the importance of the subject, what can at best be an exploratory study of Akatsuka's arguments (which are frequently discursive, circular, and lacking in clarity) is in order. Relying on a variety of assertions and assumptions, Akatsuka argues that:

1. the oracle-bone graph ⊞ (S418.2) should be read as 巫 (pp. 508–9); it was a picture of the *shih* 示 altar stand possessed by the spirits summoned from the four quarters (i.e., ⊤ plus 十) (pp. 508–9);
2. the Hsien Wu 咸戊 of the oracle-bone inscriptions was the Wu Hsien 巫咸 of later texts (pp. 321, 323);
3. Hsien Wu 咸戊, Hsüeh Wu 學戊, Yi Yin 伊尹, etc., were what he calls 巫先 (pp. 371, 412–14; on the meaning of this term, see n. 44 above);
4. *hsien* 咸, used as a verb, referred to a magical ritual in which the force of the voice influenced the spirits (pp. 326–28);
5. Hsien Wu mediated between the ancestors and Shang Ti (p. 330);
6. *wu-hsien* 巫先 (such as 北⊞) inhabiting the four quarters controlled the winds in accordance with Shang Ti's orders (pp. 379, 421, 429) and were indeed wind spirits (pp. 431–32);
7. living *wu* 巫, one perhaps a woman, performed the *ti* 禘 ritual to the *ssu-wu* 四巫 or *ssu-fang* 四方 of the wind spirits (p. 435);
8. 黄⊞ (S364.3) and 伊⊞ (S365.3) were female *wu-hsien* 巫先 from the regions of Huang 黄 and Yi 伊, respectively (p. 384);
9. given what Akatsuka sees as a phonetic link between **kiwən/chün* 君 and **giwən* or *giwen/yin* 尹 (I supply the phonetic reconstructions of Tung, cited in n. 35 above), *chün*, formed of *k'ou* 口 and *yin* 尹, originally referred to a shaman who spoke for the Yin 尹 spirits; thus the *to-chün* 多君 (S93.1) were shamans, serving in the royal court and protected by the spirits of the *to-yin* 多尹 (S92.3) (pp. 395–96, 414; the pictographic etymology of *yin* as a skilled construction worker is given on pp. 390–91);
10. the practice of shamanistic arts by the king, tribal leaders, and other officers and the antiquity and wide distribution of local shamanistic beliefs explain the relatively low position of the shamans at court (pp. 437, 439);
11. shamanism arose from belief in a magical ability to order the winds and thus the seasons (p. 440);
12. the Tung Mu 東母, "Eastern Mother," who assisted the daily birth of the sun, was a *wu-hsien* who was in turn served by a shaman (p. 451), so that Yin sun worship was basically shamanistic (p. 452); but there are few divinations about sun (or moon) spirits because of the strong belief in Shang Ti (p. 465);
13. the oracle-bone graph 朿 (*ti* 帝; S157.1) depicts slanting timbers added to ⊞ (*wu* 巫), and that (with assumption 3) belief in Ti thus had shamanistic origins (pp. 509–10);[74]
14. given the links between the *ti* 禘 ritual and the spirits of the *ssu-fang* 四方 and *ssu-wu* 四巫,[75] and the importance of rain and wind to primitive life, early Ti worship may have involved a shaman setting up a wooden post which was possessed by the rain or wind spirits he invoked (p. 511).

It would require a monograph to assess Akatsuka's arguments which I have greatly abbreviated and simplified.[76] His exposition is filled with fascinating sidelights. I am particularly interested, for example, by his suggestion that the linking of five, nineteen, or twenty-three altar stands to Yi or Yi Yin 伊尹 indicates that the Yi tribe possessed a well-developed religious system of its own (pp. 405–10, 413, citing *Ching-chin* 4101; *Yi-ts'un* 211 [both at S151.1]; *Nan-pei*, "Ming" 459, 507 [both at S150.4]); and by his argument that the *ch'i* 氣 of later texts was a generalized abstraction derived from the wind worship of the Yin 殷 who, by associating the round of the seasons with the directional winds, were making a first attempt to discern the workings and underlying principles of the universe (pp. 433, 441–42).

---

[69] Cf. Chang (cited n. 14), p. 190: "Leading authorities . . . agree without exception that the concept of *Shang Ti* or Supreme Being was now well developed, and that the supremacy of the Shang and its ruling clan over the rest of China must have decisively facilitated the development of such a Supreme Being."

[70] See n. 69 above.

[71] Thorkild Jacobsen, *The Treasures of Darkness: A History of Mesopotamian Religion* (New Haven: Yale Univ. Press, 1976), pp. 84–85, provides the analogy from Mesopotamia in the third millennium B.C. "Besides their roles as lords of their manors and leaders in their local communities, most major gods held office and had roles to play on the national, or cosmic scene. [¶] In many cases these roles were essentially the old ways of the fertility powers, but they are now less expressions of the gods' innate natures than charges conferred on them by a high-ranking god such as An or Enlil, or by the assembly of the gods as a whole."

[72] E.g., Ch'iang 羌 victims were offered to Ho and the *hsien-kung*, but never to Yüeh 岳 (see n. 5 above), for whom sheep remained important sacrificial victims (p. 167). There is also reference (*Chia-pien* 779 [S212.1]) to what may have been a separate temple for [illegible], one of the *wu-hsien* (p. 350). For the general sociological analysis to support my hypothesis, see e.g. Bellah (cited n. 15), pp. 30–31.

[73] Because of the restricted content of the entire divination record by period V (referred to under assumption 6 above), it is difficult to tell if the final stages of such an evolution did take place. There are few if any rituals recorded in period V to Ho, Yüeh, or other tribal spirits or *hsien-kung*, but there are few if any records of requests for rain, harvest, or assistance, to Ti, the ancestors, or anybody. The obstacles indicated in my discussion of assumption 6 above remain to plague us.

[74] Ikeda (cited n. 5), p. 74, argues the contrary position: that belief in shamans developed from the belief in Ti.

[75] The compound *ssu-wu* does not appear in the oracle-bone inscriptions; only the ⊞ of the north and the east are recorded (p. 429).

[76] For an initial study of some of the problems involved, see David J. Keegan, "A Study of *Wu* in the Shang Inscriptions," typescript (Berkeley, April 1979). He concludes in part

But so far as shamanism is concerned, I would urge that Akatsuka's interpretations be treated with care. Without going into detail, I would only note that his argument frequently relies on the assumed significance of, and relation between, graph forms (assumptions 3 and 4), and on the supposed facts and myths bearing on the Yin situation which are contained in works like *Ch'u-tz'u*, *Huai-nan tzu*, *Shan-hai ching*, *Shang-shu*, and "Yüeh-ling" (e.g., pp. 322, 421, 442, 450, 451, 452, 459) (assumption 5). It relies heavily on the links that are assumed to exist between inscriptions on the same oracle bone (assumption 1). It relies, critically, upon the mediating role of Hsien Wu 咸戊 which was rarely, if ever, recorded in the oracle-bone inscriptions (assumption 10) and which may involve a misunderstanding of the two inscriptions concerned;[77] if Hsien Wu did not mediate, then the key shamanistic element is removed from the record. And finally, it must be noted that Akatsuka, not content with the remarkably broad definition he originally proposed, employs "shamanism" to include virtually any magical or religious attempt to influence weather and harvest spirits. A more precise definition will be needed before we may safely characterize aspects of Shang religion in this way.[78]

PROBLEMS OF TRANSLATION

I should like to turn now from issues of historiography and content to more technical issues involving Akatsuka's translations and his choice of certain analytical terms. At first count I note about sixty cases where I would query Akatsuka's translations. Given the relatively primitive state of our knowledge about Shang grammar,[79] it is neither particularly surprising nor encouraging that we should disagree about the meaning of so few of the inscriptions he quotes. Here I will focus only on the systemic disagreements.

It is to Akatsuka's credit that he does not follow the all too common practice—one denied scholars who do not write in Chinese or *kanji*, who must offer some translation—of merely reproducing an inscription in modern characters as though their meaning were self-evident; such a seemingly purist approach frequently leaves the reader in the dark about what the inscription meant and what the author quoting it thinks it meant. The method Akatsuka has adopted, of "transcribing-translating" every inscription quoted into a semi-classical Japanese, has its virtues, for it indicates, by the order in which he rearranges the *kanji* and their connecting *kana*, Akatsuka's conception of the Yin sentence structure.[80] But, by obscuring and, on occasion, distorting, the original Chinese, this method involves drawbacks of its own.[81]

The first systemic issue arises from the fact that Akatsuka translates all the divination charges as questions; thus 貞尞于帝雲 becomes "Divined (asked): '(Should we) make a burnt offering to Ti's clouds?'" (*Hsü-pien* 2.4.11; S164.4) (p. 502). I, and several other scholars, would propose by contrast that the charge was declarative, not interrogative: "Divined (tested): '(We) make burnt offering to Ti's clouds,'" with the pyromantic cracks indicating whether the statement of intent, prayer, or forecast—rather than any question—was auspicious or not.[82] The mood in which the inscriptions should be presented does not, in most cases, affect the general significance of Akatsuka's translations (though it becomes important when complex sentences are involved; see below).

Second, Akatsuka provides no satisfactory explanation for the Shang particle *ch'i* 其, which merely surfaces in his translations as an undigested *sore*, or is sometimes omitted entirely (as in Akatsuka's translation [p. 475] of *Ping-pien* 71.1 [S453.2, recorded as plate 66] and *Yi-pien* 3787 [p. 487; S66.3]). To give a simple example, Akatsuka translates 戊辰卜爭貞其雨 (*Ping-pien* 93.1) as 戊辰に卜して爭貞ふ,「其れ雨ふらんか」と (p. 494), "Crack-making on wu-ch'en, Cheng divined: '*Sore* will it rain?'" Nowhere does Akatsuka assign a force or meaning to *sore*—"that, it, this, then, etc.?"—nor does he explain its absence in the matching, negative charge on the other side of the same plastron, abbreviated simply as 貞不雨 which he translates as 貞ふ「雨ふらざるか」と, "Divining: 'Will it not rain?'"

This is a serious matter, if only because the mysterious and untranslated *sore* must crop up in as many as half of the 2500-plus inscriptions he translates. The fact, noted by Ken-ichi Takashima and Paul L.-M. Serruys,[83] that *ch'i* generally (though not invariably) appears in the undesirable charge of a charge-pair, suggests that it served a modal, weakening function; it is for that reason I have proposed that *ch'i* be taken as a particle of hypothesis and/or futurity (i.e., uncertain expectancy), and I signal its presence when it occurs in one of a positive-negative pair of divination charges, with a "perhaps." In independent, unpaired charges and in prognostications the rule of undesirability does not generally apply and I treat the *ch'i* as "if," a particle indicating conditional subordination.[84] The "perhaps" is a provisional solution which marks the function of *ch'i* rather than translates it,[85] but it permits us to render the present charge-pair (which, as discussed above, I do not take to be in the interrogative mood) as: "Crack-making on wu-ch'en (day 5), Cheng divined: 'It will perhaps rain'"; "Divined: 'It will not rain.'" As we have seen above (in the discussion of assumption 2), the view that the Shang in this case did *not* wish it to rain weakens Akatsuka's attempt to link settlement building to harvest prayer rituals. It is more likely that in this particular case they hoped for a period of dry weather, suitable for construction (see n. 28). Similarly, the presence of the *ch'i* in the positive rainfall charge ("On the next jen-yin it will perhaps rain") and its absence in the negative ("On the next jen-yin it will not rain") on *Yi-pien* 6404 appears to weaken, if not destroy, Akatsuka's claim (p. 272) that the moon, conceived as the consort of Wang Hai, was worshipped when rain was being sought; the *ch'i* indicates that the Shang did not want it to rain, and, quite in accordance with the king's prognostication (which Akatsuka mistranslates; see below), it did not.

There are several other cases where Akatsuka's failure to explicate the *ch'i* invalidates the significance he would give particular inscriptions. It is of crucial importance in what I take to be Akatsuka's misunderstanding of the sickness inscriptions (see the discussion of *Chui-ho* 165 below). In other cases, of course, the rule of *ch'i* strengthens Akatsuka's argument; the view that *Yi-pien* 2596, for example, was divined during a drought and that (following assumption 1), the curse of Chi 季 was responsible (p. 230), is supported by the charge 自今至于戊寅不其雨 (S261.1), "From today down to wu-yin

---

(p. 39) that "The *wu* 𢀖 [of Shang] are very different from the *wu* 巫 of the Chou and Han. Most of the questions that a study of the latter would suggest are meaningless when applied to the *wu* 𢀖." For an abstract of an earlier paper by Keegan bearing on the same subject, see *Early China*, 3 (Fall 1977), 119–20.

[77] For the details of the argument, see Keightley, "Shamanistic Mediation in the Shang Oracle Bones," *Early China*, 7 (1981–82) (in press).

[78] Loewe (cited n. 38), p. 105, refers to "features that are generally and almost universally associated with shamanistic practice; e.g., assimilation with an animal's garb or guise; utterances made in the tongues of animals or birds; and dependence on trees for ascent to or descent from another world." Stringent criteria such as these would make it hard to characterize Shang religion, as it is recorded in the divination inscriptions, as shamanistic.

[79] For a brief introduction to the scholarship dealing with Shang grammar, see Keightley (cited n. 1), pp. 65–66.

[80] Kaizuka Shigeki, *Kyōto Daigaku Jimbun Kagaku Kenkyūjo zō kōkotsu monji shakubun* 京都大學人文科學研究所藏甲骨文字 (Kyoto: Kyōto Daigaku Jimbun Kagaku Kenkyūjo, 1960) and Ikeda Suetoshi 池田末利, *Inkyo shokei kōhen shakubun kō* 殷虛書契後編釋文稿 (Hiroshima: Sōgansha, 1964) give Chinese transcriptions as well as Japanese translations, thus protecting the reader against the risk of solely Japanese transcriptions.

[81] Occasionally, through an editorial lapse, slightly different versions of the same inscription are given; for example, there are seven discrepancies, all minor, between the Japanese transcriptions of *Ching-hua* 4 (S508.4) given on pp. 423 and 469; differing transcriptions of *Jimbun* 2363 appear on pp. 210 and 544–45.

[82] For an introduction to the issues, see Keightley (cited n. 1), p. 29, n. 7.

[83] Ken-ichi Takashima, "Negatives in the King Wu-ting Bone Inscriptions" (Diss. Univ. of Washington 1973), pp. 267–305; Serruys (cited n. 10), pp. 24, 46–58. See too, Takashima, "Subordinate Structure in Oracle Bone Inscriptions: With Particular Reference to the Particle *Ch'i* 其," *MS*, 33 (1977–78), 36–61.

[84] For the function of conditional subordination, see Serruys (cited n. 10), pp. 48–58, and Takashima, "Subordinate Structure" (cited n. 83). See too, Keightley (cited n. 1), p. 66, n. 41, where I failed to develop the distinction between paired and unpaired usage. My present reasearch suggests that *ch'i* 其 (related to *ch'i* 期) served to limit undesirable charges to a specific future and might better be translated as "for a time." The subordination function would then relate to *ch'i* 期, "expect, hope."

[85] Serruys (cited n. 10), p. 58, in fact, has objected that "the translation 'perhaps, may be' is not only inadequate, but misleading" if we attempt "to understand the connection as well as the contrast between *ch'i* (subordination mark) and *ch'i* (less desirable alternative)." Such an objection may eventually be answered by the considerations raised in note 84 above. It does not, in any event, radically affect our understanding of the "less desirable alternative" cases considered in this review.

(day 15), it will perhaps not rain"; the *ch'i* indicates that in this case the Shang (did not want it not to rain =) wanted rain.

Akatsuka treats the word *hui* 叀 (S425.4) in a similarly uninformative way; it merely appears in the translations as an excrescent 叀れ (e.g., p. 367, line 3). *Hui*, I believe, served as the obligatory positive copula, "it should be," which is frequently paired with the obligatory *wu wei* 勿隹, "it should not be," in the negative charge.[86] The failure to account for its function is less critical than in the case of *ch'i*, but the reader needs to be aware of it.

Akatsuka occasionally misreads (or mistranslates) the inscriptions in more significant ways. On the front of *Yi-pien* 6404, as we have seen, there is the charge-pair: "On the next jen-yin (day 39) it will perhaps (*ch'i*) rain"; "On the next jen-yin it will not rain." (Note that the diviner did not want it to rain; see above.) Turning to the back of the plastron (*Yi-pien* 6405; S308.3), Akatsuka (p. 272) translates the prognostication as: "The king reading the cracks said: 'There will be fog,[87] it will not rain. On jen-yin (day 39) there should be rain and wind.' " Even in English the contradiction (will it rain or not?) suggests something is wrong. I would translate: "The king reading the cracks said: 'There will be fog (but) it will [not][88] rain' "; that prognostication was then followed by an entirely separate verification, "On jen-yin it did not rain (but/and) it was windy (?)."

In another significant mistranslation, Akatsuka, with remarkable idiosyncracy, treats the divination phrase (*jih*) *yüeh yu shih* (日)月㞢食 (S162.1) as recording a ritual food offering to the (sun and) moon, and thus as evidence of Shang moon worship, which he thinks was related to requests for rain (p. 458; cf. p. 373). The matter is important because the *yüeh yu shih* inscriptions have usually been taken to refer to lunar eclipses—"the moon had something which ate it" (cf. the Eastern Chou phrase in *Ch'un-ch'iu* 春秋, "*jih yu shih chih* 日有食之")—and have been used in attempts to establish the absolute date of the inscriptions themselves.[89]

There are at least two reasons why Akatsuka's interpretation seems wrong. First, to read 月㞢食 as 月に食を㞢める requires us to supply a prepositional *yü* 于 so that the sentence can be understood as *于月㞢食. There are no parallel inscriptions involving either *yüeh* 月 or *yu shih* 㞢食 (S398.1) to justify such an addition; if *yu shih* did indeed refer to a ritual food offering, it is awkward for Akatsuka's argument that it was never offered to any spirits apart from the (sun and) moon.[90]

Second, I believe that Akatsuka (p. 458) mistranslates, and misunderstands the functions of, the prognostication and verification recorded on *Ping-pien* 57.1 (S162.1, recorded as plate 54; the *chi* 己 and *chia* 甲 that Shima supplies in parentheses are both wrong). The charge reads: "On the next yi-[wei] (day 56), we will offer millet and raise a ritual vessel (?) to Tsu Yi." The prognostication reads: "The king, reading the cracks, said: 'There will be harm, (but) it will not rain.' " The verification, according to Akatsuka, then records: "In the night of the sixth day [wu]-wu (day 55), we made food offering to the moon. On yi-wei (day 56), we offered wine to [Shang Ti's] *to-kung* 多工 and then presented food (?)" (p. 458).

There are two reasons why this is a highly unlikely translation. First, it is a general rule that post facto verifications refer back to the content of the divination charge.[91] It would be most unusual for a verification which records an offering to the moon to follow a charge about an offering to Tsu Yi. There is no evidence that Shang divination was of the "hot" kind that would permit unplanned or unsought inspirations to erupt into the divination process.[92] Second, it is also a general rule, especially in what I call "display inscriptions"[93] of the type involved here, that the verification confirm the prognostication (cf. n. 88 above). It is unlikely that the king's forecast of disaster—"There will be harm, (but) it will not rain"—would have been carved into the plastron and that no subsequent disaster would have been recorded in the verification. I would therefore, following most scholars, translate the verification as: "In the night of the sixth day [wu]-wu (day 55), the moon was eclipsed (thus fulfilling the prophecy of harm but no rain). On yi-wei (day 56), the *to-kung* [illegible]."[94]

Equally idiosyncratic is Akatsuka's treatment of the word 疒 (S447.2), which most scholars have taken to mean *chi* 疾, "sickness,"[95] and the word 夢 (S450.3), which most scholars have taken to mean *meng* 夢, "dream."[96] Akatsuka (pp. 16, 557 ff.), by contrast, takes both words to be related ritual terms. He tentatively reads the first as *chiang* 將 (pp. 568–69) and takes it as the most important of the ritual offerings made to Shang Ti (p. 557), depicting the offering of a human victim placed on a bed, surrounded with drops of blood (pp. 557, 568, 574).[97] This interpretation, which seems to me totally wrong (thus invalidating much of the discussion on pp. 557–86), involves Akatsuka in much special pleading and a series of highly forced translations. A few examples of the difficulties involved must suffice.

First, in a series of painstaking, and in my view painful, analyses, he argues that all the inscriptions which scholars normally take to refer to sick teeth, sick feet, sick eyes, sick head, sick nose, sick ears, etc. (S447.2–4) are actually about *chiang* rituals involving the sacrifice of members of the Tooth, Foot, Eye, Head, Nose, Ear, etc. tribes. It seems unlikely that a group of tribes would have been named after body parts—especially when we consider that no "non-body part" tribes are ever *chiang*-sacrificed in this way. Second, it is anomalous that, if we accept the rule of *ch'i* (p. 303 above), the king did not want to sacrifice such victims; e.g., following Akatsuka, *Chui-ho* 165 (S447.4), 王其疒目/王弗疒目, would read, "The king will perhaps *chiang*-sacrifice (members of the) Eye (tribe)/The king will not *chiang*-sacrifice (members of the) Eye (tribe)"; such a preference for the negative charge makes better sense if we consider that the king did not want his eyes to sicken. Third, as Serruys and Takashima have shown, the negative *fu* 弗, which appears in the above inscription, was used when the situation involved natural forces or other phenomena beyond Shang control;[98] if this is accepted then *fu*, which also negates 疒 in *Ping-pien* 334, cannot have been used to negate voluntary ritual activity, but it would have been the appropriate negative to refer to involuntary sickness. Fourth, Akatsuka would have to translate 疒止隹㞢壱 (*Kikkō* 2.9.7; S447.3) as "We *chiang*-sacrifice (members of the) Foot (tribe) because there is a curse"; but the 隹㞢壱 formula (S83.3), like the use of 壱 itself (S82.1), is always used to identify the spiritual source of some harm, such as, in this case, sickness ("the sick foot is because there is a curse"); it is never used to justify a ritual or sacrifice in the way Akatsuka proposes. (There is no justification for Akatsuka's attempt [p. 569] to take 壱 in the sense of *jo* 若, "approval.") Fifth, turning to the "dream" inscriptions, Akatsuka proposes that 夢 meant to offer as victim a man who had already been killed (p. 575). Thus he takes 王夢隹祖乙 (*Ping-pien* 203; S450.4) to mean not, as most scholars would take it, "The king's dream was due to (i.e., caused by)[99] Tsu Yi," but, "The king made a 夢 offering on behalf of Tsu Yi" (p. 566). But there are no other inscriptions of the form *王 + sacrificial verb + 隹 + ancestor; this was not a divination formula used in connection with Shang rituals.

---

[86] See, e.g., the translation of *Ping-pien* 16.5–6 given at Keightley (cited n. 1), 79. For an introduction to the scholarship, see Serruys (cited n. 10), pp. 24–25, 74, 115.

[87] It is not certain that the graph [illegible] (S233.1) should be read *wu* 霚, as Akatsuka (cf. p. 462) takes it. It is generally agreed that it was something harmful. See Li (cited n. 29), pp. 1292–94, 2539–43.

[88] Akatsuka and I both supply a "not" in the prognostication. *Yi-pien* 6405 is slightly damaged at this point. Despite a direct examination of the plastron carried out recently by Chang Ping-ch'üan and J. A. Lefeuvre, it is not possible to be sure whether a *pu* 不 or any other graph was once present (Lefeuvre, letter of 4 April 1980). I supply the *pu* because I believe that in display inscriptions of this type (see n. 93 below) the verification ("it did not rain") did not, as a rule, contradict the prognostication ("it will [not] rain").

[89] Keightley (cited n. 1), p. 174.

[90] Ikeda (cited n. 5), p. 73, raises the same point.

[91] For another case where ignorance of this principle has led to mistranslation, see Keightley, "On the Misuse of Ancient Chinese Inscriptions: An Astronomical Fantasy," *History of Science*, 15 (1977), 267–72.

[92] On the "coolness" of Shang divination, see Keightley, "Shang Divination: The Magico-Religious Legacy," in *Explorations in Early Chinese Cosmology*, ed. Henry Rosemont, Jr. and Benjamin Schwartz (*Journal of the American Academy of Religion, Thematic Issue*, in press).

[93] "As I define them, the essential characteristics of these display inscriptions are: (1) bold, large calligraphy; (2) the prognostication and verification written as a single, continuous unit, and usually placed immediately next to the charge; (3) the verification, frequently detailed, confirms the accuracy of the prognostication" (Keightley [cited n. 1], p. 46, n. 90, which provides examples).

[94] I am not certain what the last three graphs mean, nor can I understand Akatsuka's Japanese rendering. To make the *to-kung* the recipient of the sacrifice as he proposes, however, does unjustified violence to the Chinese word order.

[95] E.g., Li (cited n. 29), pp. 2515–24; Yen Yi-p'ing 嚴一萍, *Yin-ch'i cheng-yi* 殷契徵毉 (Taipei, 1951), passim, (rpt. in Yen Yi-p'ing, *Chia-ku chin-wen ts'ung-k'ao* 甲骨金文叢考 [Taipei?, 1977?].)

[96] E.g., Li (cited n. 29), pp. 2509–14; cf. Ikeda (cited n. 5), pp. 74–75.

[97] Though, in his view, the 爿 element is "clearly a bed which was written vertically as a matter of convenience," Akatsuka notes there are almost no oracle-bone cases in which it was used as part of a graph to mean a bed for lying or sleeping; he takes it, therefore, to depict a bed on which things were offered up to the spirits (p. 568). Jean Lefeuvre, who has studied this graphic family exhaustively ("Serie 爿," typescript [Taipei, 1971]), rejects the notion that the 爿 represented a bed but notes that it generally appeared in graphs of sacrifice and probably represented an implement used in sacrificial ritual.

[98] Takashima, "Negatives" (cited n. 83), esp. pp. 196–226; Serruys (cited n. 10), pp. 61–68; see too, Keightley (cited n. 1), p. 70, n. 63.

I cannot deal here with the other errors and difficulties this section of the book involves. There may indeed have been, as the use of the ㅂ element suggests (n. 97 above), a ritual dimension to the king's sickness or dreams, the latter involving perhaps incubation in the temple, but sickness and dreams were, I believe, important topics of Shang divination. Indeed, quite apart from the grammatical and philological considerations involved, it strains credulity to believe that, if Akatsuka is right, the Shang kings never divined about sickness or dreams, two of the principal ways by which spiritual forces are thought to influence man in a deeply religious world. That dreams and sickness were certainly divined in Chou texts[100] makes it even more unlikely that this would not have been a Shang custom.

Finally, I should like to turn to the problem of complex sentences, that is, charges with two or more clauses which can be identified by the presence of two or more verbs. For example, *Yi-pien* 6857 (S36.1) bears the inscription 勿舞河亡其雨. Akatsuka (p. 476) translates: "If we do not dance at/to (*ni*) Ho, *sore* will there be no rain?" I would tentatively suggest—and here I have learned much from conversations with David Nivison—a different translation: "We should not dance at/to Ho (for if we do), it will perhaps not rain." In other words, in Akatsuka's view the Shang were asking: if we do not dance will it not rain? thus implying that we should dance. In my view, the sense was: there is no point to dancing, for if we do it will not rain. The intent of the two translations is entirely different.

To take another example, Akatsuka (p. 487) translates the negative charge on *Yi-pien* 3787 (S66.3), 王勿隹沚畝从伐巴方帝不我其受又, as "Unless it is Chih Kuo whom the king follows to attack the Pa-fang,[101] will Ti not confer assistance on us?" I, by contrast, would translate, "It should not be Chih Kuo whom the king follows to attack the Pa-fang [for if he does] Ti will not perhaps confer assistance on us." It should be noted that this negative charge is paired with a positive charge on the other side of the plastron which both Akatsuka and I would agree says, in effect, "The king should follow Chih Kuo to attack the Pa-fang and Ti will confer assistance." The key difference between our translations is this. Akatsuka believes that the negative charge says essentially the same thing as the positive, i.e., we should follow Chih Kuo, for if we do not, Ti will not assist us. I believe that the negative charge offers a genuine alternative to the positive charge, namely, "We should not follow Chih Kuo, for if we do, Ti will not assist us."

This disagreement, which occurs at other places,[102] stems from Akatsuka's translation of *wu* 勿 as *nakereba*. Following Takashima, Serruys, and Nivison, I take *wu* as a negative injunction, "We should not. . . ."[103] The illocutionary force of the complex sentences is not yet fully understood, but the matter is important since it bears directly on Shang divination methods and the function of the matching pairs in the positive and negative mode. Akatsuka himself is not consistent and in certain complex sentences (e.g., *Ping-pien* 93 and 147 on p. 494) he does take the *wu* 勿 as *naki ni*, "without" (i.e., not) doing something, giving translations that are, in my view, functionally accurate. The reader should be aware, in short, that Akatsuka's treatment of some complex sentences may require qualification.[104]

Numerous other translations might be queried, involving such questions (some already encountered above) as punctuation; the reading of individual graphs; the interpretation of phrases and whole inscriptions; the way in which inscriptions may be linked; the ambiguity of the preposition *yü* 于 after sacrifice verbs (does it mean sacrifice *to* a spirit or *at* a [spirit's] place, or both?); the word *yu* 㞢;[105] the translation of the term *shang-hsia* 上下 which Akatsuka takes to refer to the upper and lower spirits, including Shang Ti (p. 489);[106] and so on. Akatsuka tends to gloss his translations rather more rarely and thinly than I should like. That may be inevitable in a work of such range but it means that some of his major hypotheses are erected on what appear to be insufficiently explicated foundations.

THE ANALYTICAL FRAMEWORK

A final word needs to be said about Akatsuka's choice of some modern terms. As we have seen, Akatsuka argues that Shang state and society were composed of clan (or tribal) units. He refers to these units as *tsu* 族; their 族長 attended the Yin court; they had their 族神; their polities are sometimes referred to as 邦族 (p. 347); we are told that the 尹族 was characterized by its surveying and construction skills (p. 395); and reference is also made to the 殷王族 (p. 506). But nowhere does Akatsuka define or consider the social realities involved. *Tsu* 族 does appear in the oracle-bone inscriptions, in such compounds as 王族 and (多)子族 (S367.1 ff.). These *tsu* are generally thought to have been units drawn from, or led by, members of the royal family; but it has also been argued that the word orginally referred to a war-band,[107] which could, of course, still have been organized on kinship lines. Akatsuka does not, in any event, link his catchall term to these Shang usages. The matter is significant both for its own sake and because Akatsuka's vision of the Shang state is inextricably bound to the nature of its constituent elements. A court composed of tribal chiefs still worshipping tribal spirits, for example, would presumably have been weaker and less integrated than one in which families, smaller and less powerful than tribes, worshipped only family spirits. I do not immediately see how the present corpus of Shang bone inscriptions can throw much light on the subject. In most cases we know the units of the Shang polity only by their proper names—Yüeh 舌, Chou 周, Ho 河, and so on; we do not know what generic term, if any, was applied to them; nor, with the exception of the royal lineage,[108] do we know the extent to which these units were composed of both kin and non-kin elements. Our ability to characterize local descent systems exceeds the contemporary Shang evidence, though, given the situation in the royal Shang, the Eastern Chou, and the Han, it seems reasonable to suppose that some form of patrilineage was involved. Terms such as clan, tribe, and family are appropriately vague. It may be that theoretical studies and ethnographic comparisons will provide increased understanding.[109]

Akatsuka's theological vocabulary is equally unexamined. He uses 神, 神々, 靈, 神靈, 精靈, and 鬼 with no statement about how he conceives or distinguishes between these terms. He proposes that Yin spirits can be divided into six categories—(1) ancestral spirits, (2) tribal spirits, (3) spirits of the predynastic lords, (4) shamanistic forerunners, (5) Heavenly spirits, and (6) Ti—and he uses the term 神 to describe the first five (pp. 531–32). Yet, elsewhere he appears to distinguish between 神, for the spirit receiving a sacrifice, and 靈, for the spirits of the victims sacrificed (e.g., pp. 571–72, 576). But

---

[99] For this meaning of *wei* 隹, see Takashima, "Negatives" (cited n. 83), p. 243.

[100] E.g., *Shu-ching*, "Chin t'eng 金縢"; *Shih-ching*, Mao Nos. 189, 190, 192; *Tso-chuan*, Chao 昭 1.

[101] The reading of the two proper names in this charge is uncertain; see Keightley (cited n. 1), p. 83, n. 102, p. 84, n. 104; Akatsuka reads Yin-fang 印方 rather than Pa-fang.

[102] E.g., *T'ieh-yün* 244.2 (p. 488); *Ch'ien-pien* 7.38.1 (pp. 490–91).

[103] See Keightley (cited n. 1), p. 66, n. 44, p. 70, n. 63, for references to their scholarship.

[104] See Keightley (cited n. 1), p. 66, n. 44, for my initial attempt to work out the basic patterns involving *wu* 勿. It should be noted that the issues involved are far from settled. Takashima, "Subordinate Structure" (cited n. 83), reaches conclusions closer to Akatsuka's than to mine; see, in particular, his translation of *Ping-pien* 12.1–2 (pp. 44, 57), where Takashima concludes that, in a context very similar to that of *Yi-pien* 3787 which I have just discussed, "illocutionary analysis gives exactly the same reading for both" the positive and negative charge rather than, as I have proposed, contrastive readings.

[105] For an introduction to the issues, see Keightley (cited n. 1), p. 78, n. 85. For more recent arguments, see Nivison (cited n. 52); Ken-ichi Takashima, "Decipherment of the Word *Yu* 㞢/又/有 in the Shang Oracle Bone Inscriptions and in Pre-Classical Chinese," *Early China*, 4 (1978–79), 19–29; and Nivison's reply, ibid., 30–36. For its use as a verb of sacrifice meaning "to offer," see Takashima (cited n. 34), pp. 52–53.

[106] My own view is that *hsia-shang* 下上 (*shang-hsia* appears only in period v; Akatsuka reverses the order when he translates *Yi-pien* 4065 on p. 482) was a collective abbreviation for the pre-dynastic and dynastic ancestors from Hsia Yi 下乙 (=Tsu Yi 祖乙) up to Shang Chia 上甲. A comparison of the inscriptions at S149.4 and 131.3 will suggest the plausibility of this view. Chang (cited n. 10), p. 86, n. 5, is of the same opinion, but offers no evidence in support.

[107] E.g., Ting Shan 丁山, *Chia-ku-wen so-chien shih-tsu chi ch'i chih-tu* 甲骨文所見氏族及其制度 (Peking: K'e-hsüeh ch'u-pan-she, 1956), p. 33; Matsumoto Mitsuo 松本光雄, "Chūgoku kodai no 'zoku' ni tsuite 中國古代の族について," *Rekishigaku kenkyū* 歷史學研究, No. 260 (1961), pp. 30–34; Chin Ching-fang 金景芳, *Chung-kuo nu-li she-hui ti chi-ke wen-t'i* 中國奴隸社會的幾個問題 (Peking: Chung-hua shu-chü, 1962), p. 114; Shima (cited n. 2), pp. 471–72. For a good discussion of the *tsu* as a patrilineage, see Chang (cited n. 3), pp. 163–65, 369. Chang's understanding (e.g., pp. 191, 195) of the *tsu* as a military, social, and political unit does not greatly differ from Akatsuka's, although the latter lays more stress on its religious nature. On the probable existence of lineages and sub-clans belonging to the same mythological clans, see Chang (cited n. 14), p. 188. For a general discussion of clan structure, but one that relies primarily on Chou sources, see Léon Vandermeersch, *Wangdao ou la voie royale: Recherches sur l'esprit des institutions de la Chine archaique. Tome 1: Structures cultuelles et structures familiales* (Paris: École française d'extrême-orient, 1977), pp. 153–94.

[108] On the nature of the royal lineage, see Chang (cited n. 3), pp. 165–89.

[109] See, e.g., Morton H. Fried, "Tribe to State or State to Tribe in Ancient China?" in Keightley, ed. (cited n. 5). An abstract of Fried's original paper appears in *Early China*, 4 (1978–79), 91–92.

he also uses 靈 for the spirit of Shang Ti (p. 584), and for the spirits summoned from the six directions to receive the ritual offerings (p. 598). These and other inconsistencies suggest that Akatsuka has given no explicit thought to how the polytheistic powers of the Shang pantheon might best be characterized and named.

Akatsuka's evident unselfconsciousness about some of the larger implications of his analytical model raises further questions about that model's validity. I have already suggested (under assumption 5 above) the ways in which certain aspects of Akatsuka's interpretation may, inevitably and properly, have been influenced by awareness of later Chinese practice. Less evident, but potentially more serious, is the possibility that Akatsuka's reconstruction of Shang culture and religion as a whole owes more than it should to the model of Yamato and Nara Japan, as well as to the assumptions, implicitly accepted, of certain classical works of Western anthropologists.

Akatsuka would not be the first Japanese Sinologist to view ancient China *sub specie nipponensis*.[110] When the analogies are explicit—as in the case of the parallels Akatsuka proposes between Chinese and Japanese myths about vegetation spirits (pp. 235, 237, 288) and crop-harming animals (p. 279)—readers may judge their suitability for themselves. In some other cases no judgments can be reached. Akatsuka's conception of Ho and Yüeh, for example, as deities that were both ancestors and nature powers (see "Religious Incorporation and the Role of Ti" above) may have been partly inspired by Japanese conceptions of *kami* 神[111] as well as by studies of religious evolution elsewhere (see n. 15 above), but the oracle-bone inscriptions can tell us little about either the truth of this conception or the original nature of these powers (cf. Ikeda's objections, cited at n. 63 above). This is regrettable since more precise information on this point might help us resolve the question of euhemerization in China: were these spirits once ancestors who had become gods, or were they gods who had become ancestors? Given the profoundly social nature of early Chinese culture, one is tempted to opt for the first choice, but Akatsuka does not consider the issue explicitly.[112]

Akatsuka's choice of certain analytical and descriptive Japanese terms also raises, at least for a non-native reader of Japanese, possible questions about further cultural contamination.[113] The use of *shinshokusha* 神職者, "Shintō priests" (pp. 398, 414, 417) to refer to religious practitioners in the Yin court, or the identification of a *jinja* 神社, "Shintō shrine," where harvest prayer rituals were performed (p. 564), reminds us of the need to select, as far as possible, terms that, at the descriptive level, are derived from the contemporary usage of the culture under study, and that, at the analytical level, are defined with most careful attention to their implications.

Akatsuka's whole vision of the Shang polity as a tribal federation with a peripatetic king, moving through a sacred landscape, worshipping at the cult centers of dependent tribal groups, ensuring good harvest by his divinations and rituals, renewing the religious ties that bound the state together, so that sacred places and beliefs were incorporated into the system of court rituals, is in fact not dissimilar from our understanding of the early Japanese state.[114] I emphatically believe that, in general, Akatsuka's vision is correct, and that it can be further documented and amplified.[115] The divination inscriptions do not, in my view, merely support such a view; they require it. The similarity with the Japanese case, therefore, is not a cause for mistrust, but an opportunity for those who study state formation in comparative terms. The similarities need to be made more explicit and they need to be explained.

Similar considerations apply to Akatsuka's anthropological assumptions. No work of anthropology is listed in the footnotes, no anthropologist is mentioned in the text. But inevitably, Akatsuka's epigraphic labors cannot have been undertaken in an anthropological vacuum. Implicit assumptions—about the way tribes (?) establish animals as ancestral spirits and consume those animals as emblematic and power-giving victims;[116] about the relationship between those animals and the tribe's ecological circumstances (e.g., p. 277), about "totemism" and totemic sacrifice in short (though Akatsuka never uses the word);[117] about the way in which concrete and specific deities become symbolized, generalized, and abstract (e.g., pp. 46, 54–56, 154, 163, 167, 199, 200); about the magical and symbolic functions of ritual and sacrifice and the spilling of blood; about the relation between rites and myths; about belief in the power of the spirits to control life; about the nature of shamanism; about the sacred nature of most of the king's recorded activities; about the holy significance of certain topographical features; about the king's taking ritual blame for disasters, etc.—pervade the book. In the rather narrow world of inscriptional evidence Akatsuka's use of these assumptions seems generally plausible. But they eventually need to be tested against modern studies in religious anthropology. The shades of W. Robertson Smith, James Fraser, Emile Durkheim, Sigmund Freud, Marcel Granet, and Fustel de Coulanges that I discern in the pages of this book, shadowy ancestral spirits, perhaps, from Akatsuka's scholarly past, need to be exposed, not necessarily to debunk, but to make explicit the general interpretative assumptions that permit Akatsuka to understand, rather than merely decipher, the Shang inscriptions.[118]

Part of the originality, as well as the idiosyncracy, of this book, however, may be explained by the *sui generis* nature of Akatsuka's scholarship. References to the work of other scholars are relatively rare. The whole book, 869 pages long, contains only 322 footnotes—and many of these are either references to a few standard secondary sources (by Hu Hou-hsüan, Ch'en Meng-chia, Shima Kunio, etc.), analyses of other related inscriptions, or citations to Akatsuka's own publications. With a few minor exceptions, Akatsuka and his editors have not found it practicable to introduce citations to, or take account of, scholarship published since his original articles appeared. This means that some current opinions are ignored; the reader, while being educated about the Shang, is not being educated about recent scholarship on the Shang. For example, the question of place, person, and spirit names (passim) has been treated by Chang Ping-ch'üan (see n. 60 above); Ho (Akatsuka, pp. 27–73; the subsequent page references are also to Akatsuka) and Yüeh (pp. 75–176) by Ch'ü Wan-li;[119] moon worship (pp. 262 ff.) by Tu Erh-wei;[120] the possibility that *K'u-fang* 1506 (p. 311) was a fake was discussed by Chin Hsiang-heng;[121] K. C. Chang has provided valuable insights into the nature of Wang Hai (pp. 147–48, 267–95) and the cyclical stems.[122] Numerous other references of this sort appear in my footnotes. Nevertheless, the very fact that Akatsuka was able to write the first version of the papers in this book between 1956 and 1966, when much supporting scholarship had yet to be written, is further tribute to his pioneering originality.

---

[110] The analysis of Satō Taketoshi 佐藤武敏 (*Chūgoku kodai kōgyō shi no kenkyū* 中國古代工業史の研究 [Tokyo: Furukawa, 1962], pp. 15–17), seeking to show that skilled handicraft production in Shang times was in the hands of occupational clans, was probably inspired by his understanding of the occupational *be* 部 of the Nara period. There is certainly some Chinese evidence indicating the existence of corporations of skilled workers, but whether they were organized on the basis of clan or kinship ties, real or fictive, is not yet clear (see Keightley, "Public Work" [cited n. 36], pp. 29–39). Thus I would treat with caution Akatsuka's vision of the Yin 尹 or To yin 多尹 as hereditary agricultural specialists noted for their surveying and construction skills (pp. 390, 395–96). He argues (following assumption 3) that the graph 尹 (S92.3) shows a hand holding a rod, which could have been used in a variety of surveying and construction tasks (p. 391). It is true that the inscriptions show the Yin or To Yin involved in agricultural rituals and the construction of buildings, but they also participated in a variety of other functions—rituals, campaigns, hunts (pp. 384–90, 396; cf. Keightley, "Public Work" [cited n. 36], p. 131). This suggests they were generalists, less specialized than the Japanese *be*. The inscriptions tell us nothing about the extent to which the Yin were, or were not, a *tsu* 族.

[111] On *kami* and their links to ancestors, see Masaharu Anesaki, *History of Japanese Religion* (1930; rpt. Rutland, Vt.: Tuttle, 1963), pp. 21–23; Delmer M. Brown, "*Kami*, Death, and Ancestral *Kami*," in *Proceedings of the Second International Conference for Shinto Studies* (Tokyo: Kokugakuin University, 1967), pp. 169–82.

[112] For an introduction to the question, see Derk Bodde, "Myths of Ancient China," in *Mythologies of the Ancient World*, ed. Samuel Noah Kramer (New York: Doubleday, 1961), pp. 372–76.

[113] Ikeda (cited n. 5), p. 75, also calls attention to Akatsuka's reliance on the language and the model of the "national religion" (*kokka shūkyō* 國家宗教).

[114] See, e.g., Hori Ichirō 堀一郎, *Waga kokumin shinkō shi no kenkyū* 我が國民信仰史の研究 (Tokyo: Sōgensha, 1955), *I*, 361–65. (I am grateful to Carmen Blacker for calling this reference to my attention).

[115] See Keightley, "The Late Shang State" (cited n. 5). That paper was written before I had read Akatsuka and before the Japanese model had been called to my attention.

[116] It should be noted that this assumption is at variance with the traditional view that, in certain cases at least, the flesh of the totemic animal was not offered at the sacrifices in its honor. See Henri Maspero, *China in Antiquity*, trans. Frank A. Kierman, Jr. (Folkestone, Kent: Dawson, 1978), p. 74, n. 30.

[117] Given the popularity of the term in recent sinological studies, Akatsuka's failure to invoke it is surprising. See, e.g., Wen Yi-to 聞一多, "Shen-hua yü shih 神話與詩," in *Wen I-to ch'üan-chi* (Shanghai: K'ai-ming shu-tien, 1948), pp. 13–46; Yü Hsing-wu 于省吾, "Lüeh-lun t'u-t'eng yü tsung-chiao ch'i-yüan ho Hsia-Shang t'u-t'eng 略論圖騰與宗教起源和夏商圖騰," *LSYC*, No. 11 (1959), pp. 60–69; Hu Hou-hsüan 胡厚宣, "Chia-ku-wen Shang-tsu niao t'u-t'eng-ti yi-chih 甲骨文商族鳥圖騰的遺跡," *Li-shih lun-ts'ung* 歷史論叢, No. 1 (1964), pp. 131–59; "Chia-ku-wen so chien Shang-tsu niao t'u-t'eng-ti hsin cheng-chü 甲骨文所見商族鳥圖騰的新證據," *WW*, No. 2 (1977), pp. 84–87). Maspero (cited n. 116), p. 407, n. 33, and Chang (cited n. 3), p. 165, nn. 15, 16, 17, cite other scholarship; see too, Allan (cited n. 40). Perhaps Akatsuka was warned off by the strictures of Claude Levi-Strauss (*Totemism* [Boston: Beacon, 1963]) and the structuralists? The extent to which the early Chinese evidence, involving such items as the designs on Pan-p'o 半坡 pots, the iconography and insignia of Shang and Chou bronzes, and the tribe names and sacrifices recorded in the oracle bones, accords with, or challenges, the modern view that totemism should be regarded primarily as a sociological rather than a religious phenomenon (see, e.g., the remarks of J. R. Fox under "McLennan, John Ferguson," in *International Encyclopedia of the Social Sciences*, ed. David L. Sills [New York: Macmillan and Free Press, 1968], IX, 518) merits further study.

[118] There are occasional moments of anthropological insensitivity: references to attempts at weather control as "mistaken magic" (p. 512), or to the "abnormal mentality" which took any kind of error as a divine punishment (p. 570). But the remarkable empathy demonstrated by the rest of the book thoroughly belies these presentist lapses.

CONCLUSIONS

A word should be said in closing about the last section of the book (pp. 611–859), dealing with Shang bronze inscriptions. I must leave Akatsuka's treatment of particular issues to those more expert than I. Here I would only applaud the readiness with which he uses inscriptions found on bone to explicate those found on bronze, and vice versa. A typical Late Shang bronze formula is of the form "Cyclical date. The king was in X. He awarded Y of X cowries of Z, so many strings. (Y) thus made this precious vessel for Ancestor so-and-so." Akatsuka uses these inscriptions to discuss place names (passim), ancestors not on the main royal line (p. 728), the links between tribes (p. 742), and similarities between the writing style on Shang bronzes and that of particular Shang diviners (pp. 766, 824).[123] Problems of authenticity (e.g., pp. 687, 715, 716, 770) and dating (Shang or Western Chou?—e.g., pp. 664, 681, 687, 701, 749, 752, etc.) remain troubling on occasion, particularly when the vessel itself has been lost (e.g., p. 830), but the publication of increasing numbers of bronze inscriptions excavated under controlled conditions may permit us to confirm the authenticity and period of at least some of the inscriptions published here. Akatsuka generally ignores the abstract, theriomorphic iconography of the bronzes; studies of design and decor, when linked to the data recorded in the inscriptions, may eventually tell us much about such subjects as Shang myth, religious incorporation, social structure, and links between the Shang center and periphery.[124]

I have rarely, if ever, liked a book so well in the large that I would question so strongly in particular cases. Although Akatsuka's vision not infrequently outruns our present historiographical skills, *Chūgoku kodai no shūkyō to bunka* remains a stimulating and suggestive opus; it proposes a comprehensive vision of Shang culture, complex, shaded, and integral, that is more detailed than any we have had before. Akatsuka may perhaps be regarded as a Marcel Granet of the inscriptions. Transcending any particular disagreements, his intuitive vision, in its scope and strength, remains to challenge and inspire us to more soundly based etymological and anthropological analyses. All who read and reflect upon Akatsuka's book cannot fail to be better historians of the Shang for having done so.

FINDING LIST OF INSCRIPTIONS CITED

Chia-pien	
779	n. 72
1164	n. 16
2416	n. 4
3338	n. 25
Ch'ien-pien	
1.48.4	n. 4
1.50.1	n. 68
7.26.3	n. 4
7.26.4	n. 4
7.38.1	n. 102
Chin-chang	
611	p. 279
696	p. 279
Ching-chin	
428	n. 4
1604	n. 26
4101	p. 301
Ching-hua	
4	n. 81
Chui-ho	
165 (*Ping-pien* 107/503)	pp. 304, 308
178 (*Ping-pien* 171)	p. 278
260 (*Ping-pien* 14.5–8)	p. 279
301 (*Ping-pien* 124.1–2)	n. 25
Hou-pien	
1.28.14	n. 16
1.30.12	pp. 274, 276
Hsü-pien	
2.4.11	p. 303
4.33.4	n. 26
5.17.1	n. 26
Hsü-ts'un	
1.168	n. 16
Jimbun	
2368	n. 81
Kikkō	
2.9.7	p. 308
K'u-fang	
325	n. 61
1506	p. 317; n. 4
Nan-pei, "Ming"	
459	p. 301
507	p. 301
Ping-pien	
12–21	n. 24
12.1–2	n. 104
16.5–6	n. 86
22.9–10	n. 47
43	p. 292
57.1	p. 306
71.1	p. 303
71.5–6	n. 25
73.5–6	n. 25
93	pp. 280, 310; n. 28
93.1	p. 280, 303
93.3	p. 279
117	p. 290
122.8	n. 25
123.2	n. 25
147	p. 310; n. 26
147.1–4	p. 278
148.1–2	p. 279
199	nn. 26, 68
199.1	p. 278
199.1–6	p. 279
199.3	p. 278
199.5	p. 278
199.9	p. 280
199.11	p. 278
203	p. 308
216	n. 4
275	p. 278
275.1–10	p. 279
275.11–14	p. 279
334	p. 308
Shih-to	
1.410	n. 61
T'ieh-yün	
199.3	n. 4
244.2	n. 102
Ts'ui-pien	
75	p. 277
597	p. 278
1113	n. 47
T'ung-tsuan	
XII. 4	p. 279
Yi-pien	
753	p. 292
1987	n. 61
2596	p. 304
3212	pp. 277, 278, 279, 280; n. 27
3429	p. 277
3787	pp. 303, 309; n. 104
4065	n. 106
5313	p. 277
5355 (*Ping-pien* 116)	p. 277
6404	pp. 304, 305
6405	p. 305; n. 88
6857	p. 309
Yi-ts'un	
211	p. 301
375	n. 20

---

[119] Ch'ü Wan-li 屈萬里, "Shih Ho 釋丂," *CYYY chi-k'an wai-pien* (Special No.), 4.1 (1960), 189–95; "Yüeh-yi chi-ku 岳義稽古," *CHHP*, 2.1 (1960), 53–68.

[120] Tu Erh-wei 杜而未, *Chung-kuo ku-tai tsung-chiao hsi-t'ung: Ti tao hou-t'u yen-chiu* 中國古代宗教系統：帝道后土研究 (Taipei: Hua-ming, 1960). This book is seriously weakened by the author's a priori assumptions about the central role of moon worship in ancient China.

[121] Chin Hsiang-heng 金祥恆, "K'u-Fang erh shih chia-ku pu-tz'u ti-yi-wu-ling-liu-p'ien pien wei chien-lun Ch'en-shih Erh-chia-p'u shuo 庫方二氏甲骨卜辭第一五〇六片辨僞兼論陳氏兒家譜說," *Ta-lu tsa-chih t'e-k'an* 大陸雜誌特刊, 2 (1962), 173–92.

[122] For his latest contribution, see Kwang-chih Chang, "*T'ien-kan*: A Key to the History of the Shang," in *Ancient China: Studies in Early Civilization*, ed. David T. Roy and Tsuen-hsuin Tsien (Hong Kong: The Chinese Univ. Press, 1978), 13–42; *Shang Civilization* (cited n. 3), pp. 165–89.

[123] I would prefer to speak of the writing style associated with particular engravers rather than particular diviners; see Keightley (cited n. 1), pp. 48–49, 104.

[124] See, e.g., Virginia C. Kane, "The Independent Bronze Industries in the South of China Contemporary with the Shang and Western Chou Dynasties," *Archives of Asian Art*, 28 (1974/75), 77–107. Chang (cited n. 3), p. 165, has "detected an appreciable tendency for bronzes with different emblems to behave somewhat differently with regard to the selection of decorative styles, which is possibly due to subcultural variations in different lineage groups." The subject requires more analysis and demonstration.

（原載《亞洲研究雜志》第42卷1期，1982年）

«甲骨文合集»序

胡厚宣

甲骨文，河南安阳殷墟出土，乃商朝后半期殷代帝王利用龟甲兽骨进行占卦时刻写的一种所谓卜辞，也间或有少量与占卜有关以及其他偶然的记事文字。

这种所谓甲骨卜辞，虽然严格的说起来并不是什么历史记载，但是因为它的数量繁多，内容丰富，又因为时代比较早，无疑是研究我国古文字和古代史特别是研究商代历史的最重要的直接史料。

甲骨文，自从1899年被学者认识后，八十多年来，先后出土，约在15万片以上。从事甲骨文研究的中外学者作家有400多人，论著达2000余种。所谓甲骨学，在今天已经成了国际上非常活跃的一门学科。

但是甲骨文的材料，具有一个特点，首先是它的数量繁多，而且又分散零乱，搜集起来，比较困难。这对甲骨文的研究工作，就造成了一定的阻碍。

八十多年来，著录甲骨文的书刊，单是专著，就有80多种，论文50多种，再加上有关参考的重出著录，也有50多种，共有180多种，著录甲骨，将近10万来片。

这些著录的专书，又常有一些缺点，有的印刷模糊，文字看不清楚；有的摹写失真，字体多有错误；有的将就类例，分条加以剪割；有的墨本不全，只拓了有字的部分；有的墨本原来虽全，发表时却把没有字的部分裁掉；有的将骨头的正反两面分开，骨臼部分又另外排列；至于各书前后著录，重见迭出，更是屡见不鲜。

还有，这些书籍一般出版印数都不多，时一过往，难以寻觅。至于报刊论文发表的材料，不是印刷不清，就是缩小比例，搜集使用，就更不方便。

关于甲骨实物的收藏，据我们长年以来的调查，不完全的统计，在我国大陆上，计有25个省、市、自治区，41个城市，95个机关单位，44个私人藏家，总共收藏甲骨9万多片。在台湾、香港公私所藏，共有3万多片，另外再加上日本、加拿大、英国、美国、西德、苏联、法国、瑞士、比利时、南朝鲜等的2万多片，合起来就在15万片以上了。

除了甲骨实物和著录书刊之外，各单位有的还收藏有甲骨拓本。这些甲骨拓本，以北京各单位所藏为多，北京以外地区各单位收藏的也有不少。台湾、香港和国外也有，但我们没有仔细调查。仅国内各单位所藏，据我们所见到的，就有270多种，21万多片。

这些单位收藏的甲骨实物和拓本，虽然大部分都已见过著录，但是没有见过著录的材料也还有不少。有的拓本，不但没有见过著录，而且还不曾见到原来的甲骨。有的还是一些很重要的材料。这些材料，在单位里，一般都被列为珍品或善本，没有经过拓印和整理，更是不好使用。

因为这些原因，中外许多甲骨学者，很早以前，就提出，对于这些纷繁散乱的甲骨文资料，应该作一番科学的总括整理。已故的董作宾先生，在很早以前，就曾将这一问题提出过。已故的陈梦家先生和今天在香港的饶宗颐先生，都尝试进行过一部分的准备工作。先在台湾现在美国的严一萍先生，还编辑出版过«甲骨集成»第一册。但都没有把这一工作彻底完成。

1956年我们国家制定12年科学研究远景规划，我们把«甲骨文合集»这样一个项目提出，蒙哲学社会科学规划组采纳，列为历史科学资料整理重点项目之一。这年冬天，我和桂琼英同志从上海奉调来北京中国科学院(现为中国社会科学院)历史研究所，就把这一工作列入了个人的科研计划。

1959年领导上指示，这项工作最好组织一些同志集体来搞，说这样既可以作出成果，又可以培养人才。这一意见是正确的。我们把这项任务承担下来，并开始了一系列的准备工作。

先由研究所邀请全国有关领导同志和一些知名的甲骨文专家，组成了以郭沫若同志为主任委员的编辑委员会。在所内先秦史研究室成立了«甲骨文合集»编辑工作组，由我以室主任兼任工作组长。在党的领导和关怀下，我们制定了«甲骨文合集»编辑计划草稿，多次寄发向全国各方面征求意见，召开了编辑委员会，反复讨论，予以修改。经过一两年的筹备工作，然后同全国收藏甲骨的一些单位相协作，正式编辑工作于1961年4月开始进行。

因为搞运动，工作时作时辍，到"四清"和"文化大革命"期间，工作停了一个很长的时期。所有资料，装起箱来，先运到河南，又运到陕西，反复播迁，幸亏没有失散。1972年资料从外地运回，编辑工作于1973年恢复。又请郭沫若同志担任主编，由我担任总编辑。但是由于"四人帮"的干扰，工作仍然常有停顿。直到粉碎了"四人帮"之后，工作才得正常进行。所以单是图版工作的完成，就一直拖到了今天。

我们工作的步骤是，首先把这180多种著录甲骨的书刊，千方百计，设法搜集齐全，都选用较好的版本。在这近10万片的甲骨拓本摹本或照片上，都注上书名号码并校对无误。然后再把它们从书刊上剪下来，贴在专门印制的卡片上。

过去著录的甲骨，往往前后重出。重片之多，以«殷虚书契续编»一书为最。以前曾有学者作过«校记»，我也曾经加以补充。这次对于甲骨著录书中大量的重片，我们仔细校对，花了相当多的时间，作成了甲骨文著录表，把所有的重片，基本上都予以校出，总计不下万片左右。在每一条重出栏内，还要注明哪一片最真实最清楚最完全，并注明骨头的正面反面和骨臼几个部分是否都没有遗漏，以备编辑«合集»时进行挑选。

已著录甲骨，有彼此本为一片之折，可以相互拼合者。这项工作，前人已经作了不少。王国维、郭沫若、董作宾诸前辈之外，近期中外学者还有很多。撰为专书的，象«甲骨叕存»、«甲骨缀合编»、«殷虚文字缀合»、«殷虚文字丙编»、«甲骨缀合新编»、«甲骨缀合新编补»等，不一而足。我们在前人工作的基础上，在这一方面，也作了相当多的细致工作，总计拚合不下2000余版。单«殷虚文字»甲乙丙编，就拚合了1000版以上。

殷人占卜，一件事，常常使用多块甲骨进行，占卜之后，每块甲骨，都刻上同样的卜辞，这样就出现了卜辞同文的例子。同文的卜辞，如果遇到残缺，这块缺这几个字，那块缺那几个字，凑在一道，残缺的文字就可以相互补充。最早郭沫若同志曾写过«残辞互足二例»。这样的例子，我过去曾叫它作"同文"，后来也有人称它作"成套"。这次我们把所有同文的例子，都按照卜序把它们排在一起，这样残辞互足的例子就有很多，用起来可以有很大的方便。

除了著录甲骨的书刊之外，对于全国各协作单位收藏甲骨的实物，我们也作了实地的探访。我们先后去过30多个城市，有的还不只去过一次。有的城市，则用委托或通信的办法相联系。全国各单位收藏甲骨，在万片以上的有2个单位，千片以上的有9个单位，百片以上的有22个单位，百片以下的有62个单位。这些单位计有博物馆、高等院校各38，文物商店6，文管会、研究所各3，图书馆、中等学校各2，文物工作队、文物保管所及文物陈列室各1。一般的我们都作了一些搜集工作。

在我们探访各协作单位所藏的甲骨时，凡是遇到片数不多或方便墨拓时，我们都随时加以墨拓。有少数或委托原单位代拓，或借回甲骨选拓，或有现成拓本借回来选用。最后剩下一些藏有大批甲骨的重点单位，我们就集中全体人力，一气把它墨拓下来。

解放以后，凡是大批的甲骨，一般都归了公家，私人收藏，多是一些小宗。凡是我们探访时遇到的，也都顺便加以选拓。

至于探访时所见到的甲骨拓本，一般便就地加以选照，也有的委托或借回翻拍。若遇到一些重要的照片或摹本，也都予以翻拍下来。

对于流散到国外的材料，我们尽量利用出国访问和讲学的机会，或托请从国外归来的专家，顺便加以搜集，或托请外国朋友，大力协助，予以解决。

同时我们所室工作组里，因为工作的关系，遇到机会，也适当地采购了一些甲骨实物和拓本，并接受了热情的专家学者们所捐赠的一些材料。

把这些甲骨实物的拓本照片和摹本搜集来了之后，首先与著录书刊的材料相校对，凡是著录的摹本，有拓本的都换用拓本；凡是著录的拓本不清楚的，有原骨的都重新拓过；凡是著录书刊未拓全或有剪裁的片子，尽可能都换上齐全的拓本；凡是著录书刊所收正面反面和骨臼部分分开的，也都根据有甲骨实物的拓本，把它们编在一道。

把这些著录过和未经著录的材料，合并在一起，也都作了贴卡、对重、拚合和同文编在一道的一系列的整理工作。

对于这批大量的甲骨资料，经过剪贴书刊，重新墨拓，恢复原形，校对重出，拚合断片和同文类聚等一系列的整理工作之后，再就是从事于去伪存真、去粗取精的具体的选片工作。我们选片的原则是，凡是大片字多的当然入选，小片字少甚至残文残字，只要在文字学历史学上具有一定的意义的也一律入选。其有常见的辞句，但卜辞齐全或比较齐全的，亦予以选收。其辞句或文字常见，又残缺过甚者，则不予入选。这样在这十几万片大量的甲骨材料当中，共选了大约四分之一，总计四万多片。把它们都贴上卡片，在卡片上把藏家、著录、重见、拚合等等情况，都详细地注了出来。

然后就是怎样编排的问题。是在分期中再分类，还是在分类中再分期呢？有这两种意见。我们经过反复讨论后，采用了前者。即在分期中按事类编排。

关于甲骨文的分期，是当前学术界争论最热烈的问题。我们经过反复讨论，结果采取了比较分歧不太大的意见，暂时仍采用董作宾先生五期分类的学说。只是董先生认为是第四期的所谓"文武丁时代之谜"的那部分甲骨，也就是陈梦家先生所谓"𠂤组"、"子组"和"午组"的卜辞，我们认为应该属于早期。但早到什么时候，学术界仍有不同意见，所以我们把它们集中附在武丁期的后边，以供学者进行讨论研究。

我自己过去曾提出过卜辞中一定会有盘庚、小辛、小乙时的甲骨。郭沫若同志曾怀疑甲骨文里不一定有帝辛时的卜辞。最近甲骨学界对于旧说第四期的甲骨亦即所谓"历组卜辞"的年代问题，也正在讨论。迄今都还没有取得一致的见解。

所以我们最后也还是采取了比较保守的态度，即第一期，武丁时期；第二期，祖庚、祖甲时期；第三期，廪辛、康丁时期，第四期，武乙、文丁时期；第五期，帝乙、帝辛时期。

关于分类，我们讨论研究，反复修改了好多次，还召开了在京的编委扩大会议，邀请一些有关的专家参加，最后从阶级关系，生产发展，科学文化和其他杂纂等几个方面着眼，分成了四大类二十二小类，编辑成书。四大类是：1.阶级和国家；2.社会生产；3.科学文化；4.其他。二十二小类是：1.奴隶和平民；2.奴隶主贵族；3.官吏；4.军队、刑罚、监狱；5.战争；6.方域；7.贡纳；8.农业；9.渔猎，畜牧；10.手工业；11.商业，交通；12.天文，历法；13.气象；14.建筑；15.疾病；16.生育；17.鬼神崇拜；18.祭祀；19.吉凶梦幻；20.卜法；21.文字；22.其他。不过一版大片甲骨，常是卜辞很多，往往包括各种不同的内容。这样分类，不敢说就一定妥当。为了弥补这一缺点，拟于将来再作各种事类索引，予以解决。

至于摹本，以印刷关系，另册编印，分期分类，一切同前。

全书共计5241页，41956片。分订了13个分册。1至7册为第一期，8册为第二期，9至11册为第三期和第四期，12册为第五期。13册为摹本。

图版之后，将另印材料来源表，并编写释文、选本及续集。另外还要再出几种«甲骨文合集丛刊»。

最后我们必须指出，这一工作的完成，如果说它基本上能够集八十多年来出土甲骨文材料的大成，对今后甲骨文和商代史的研究能够有所贡献的话，那首先应归功于党的领导。若不是我们这样一个社会主义的国家，没有党的正确领导，没有全国各方面的大协作，象这样一项大型的工作，无论如何是作不成的。

编者注：本文是胡厚宣教授为«甲骨文合集»所写序言的一部分。

(原载《歷史教學問題》1982年第5期)

王襄复叶芷渔书

王翁如摘录

偶捡旧箧，得先严王襄于1923年致叶玉森先生书稿若干通，内容涉及很广，或谈论文字，或议论经史，乃至工作等。叶玉森字荭渔，江苏丹徒人，是我国早年研究甲骨卜辞的专家，著有《殷契钩沉》二卷，《说契》一卷，《研契枝谭》一卷等，在江南享有盛名，早已作古了。

叶先生的书信手迹，已在十年动乱中散失，此稿收在“纶阁文稿”中，也是劫后烬余。就其内容，可窥见二位老人治学态度，对于我们有可资借鉴之处。今摘录数通，以享读者。信中所讲殷代即有人殉之事、恐怕是最早的发现了。

王翁如谨志　一九八一年底

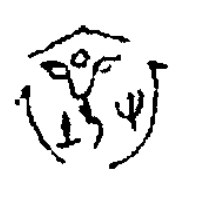
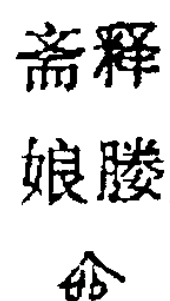
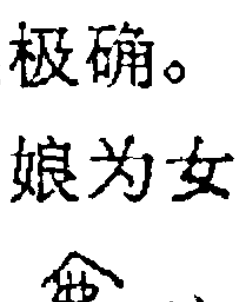
一

惠书敬悉，籍谉大雅，治殷契功深且有造述，无任响往。殷契晚出，知之者鲜，遑论讲求其学，今时惟罗（振玉）说较精，究未臻其极，所当研究者，为文字，典礼，他为国名，人名，地名。拙著志传文字，罗书兼及文字、典礼诸端。尊著当别有发明，请示大旨及编目。襄迩来研讨其文字，变化甚多，一字也繁简互殊，按之文义，则皆通，请参校之。承示拙著二事，至感。弟所引卜辞，均照录原文，未敢裁截一字，恐失文义之真。所阙者，皆甲骨已残，文自不定，非有弃取于其间。至未记文之左右行，则每行字数，亦应并记，事涉琐屑，故尔从略。仍拟编“殷契杂记”，专载殷文刻法、行式与其他事物，刻搜材料无可观，则中止耳。殷契出土，历时将二十载，毁弃者固多，流传人间收而藏之者亦夥。自恨力微，未能尽收所见。并时同志所藏，颇采入拙著。君于南中，访求藏家，或拓或绿，当有新奇可喜之字，及未著典礼诸事。襄谫陋，读书不多，惟酷好古文字，研求且三十年矣。於古人造字精意，少有悟处。自契文外，举凡古文字，靡不及之。惟拙于考证，未敢著述金文，望不弃其陋而教之。幸甚，幸甚。

二

承示鄙著各条，感谢，感谢。曩日编辑，实失检校，果可再版，遵命修正。近世治古文字学者，有新旧两派，旧则笃信许书，新则旁涉金文，以证许书。笃信许书者，举三代之金文，轻之为法帖，目之为伪作。金文固有伪者，究若者伪，若者不伪，确有不可移易之据，不当不求其实，概曰伪而已。章太炎讥吴悫斋、孙仲容二家古文字学说为野狐禅。要之，二家皆有可取，吴尤胜于孙，许书虽为治古文字学者不祧之祖，然只以其书之古，集字学之大成耳。当时纲罗散失，第就所见者缀录，遗漏意当不少。所引古文，多出自晚周，近世治金文者已证明之。陈簋斋说，许书叙云：郡国亦往往于山川得鼎彝，其铭即前代之古文，皆自相似，而书中未录鼎彝支字，亦未明注某某钟文也，某某鼎文也，是皆所遗者也。吴悫斋说许书所采壁中书，皆七国时诡异之体。华石斧先生说，壁中书乃邹鲁之遗文。皆谓许书之古文，出于晚周也，殷契之字，未经史籀之省改，为传世古文之真迹，以证许书之古文，多不合。以七国时之金文证许书之古文，则多合，其出于晚周也无疑。许书阅数千年，经后人点窜者不知凡几，更无论李阳冰辈，谬妄自是彰彰明者。所望博学君子，以金文字例，沙汰讹误，复许书之旧观，书中谊同声同而见于两部之字，亦在沙汰之列，不宜遵其是，并遵其不是也。契文、金文为古人之墨迹，无写录窜改之失，重于许书倍蓰，惟应精鉴，乃不为伪作所欺，不然徒多事耳。康长素谓：三代鼎彝，皆刘歆所制，狸藏诸地，武断无徵，三代法器，其文其字，一读可知，法家当鉴之矣。

三

承询稣甫人匜  字释文，吴悫斋释襄极确。此假为娘，稣甫人作嫚妃，娘媵匜娘为女字，文义乃得解，古小钵有 ，  字，均由此字所衍出，散盘武敞父教眛父克之，克为攘疑，较旧释为确，均请订正。尚书各篇，若以古籀文写定，虽不能复其古文之旧，然自可观。襄幼读盘庚、酒诰诸篇，苦信其佶屈，长颇疑盘庚之文，为当时语体。百诗阎先生有其敷心忧贤，扬历之正。今执事又有非法厥谋，弗由灵终之正，所见确当，视宋儒以意改经文者有间矣。襄赏谓论语为政篇：“思而不学则殆”，殆即怠之假，犹荒也。朱注云：故危而不安，殊曲晦难通。乡党篇：“割不正不食”，割即丐之假，乞也，金文中习见之。朱注：割肉不方正者，不食。状孔子迂，固不近人情，大失时中身分。皆宋儒不讲六书之陋。无可讳者，愚妄之论，未知有当经义否，请博学君子教之。尊集联语，夆妃敦一器，两罍轩曾著录，字乃陕中伪刻，不足取。以古文字为友，不敢不以实告。秋凉，伏维珍重。

四

奉惠书及大著四卷，谢谢。初读两过，颇多玄解，良用惊服。殷契晚出，考释者应各抒所见，待后人之去取，墨守一家言，斯学何能昌大？昔所收契文，今已择尤拓墨，类辑定稿。分天象、地望、帝系、人名、岁时、干支、贞类、典礼、征伐、游田、杂事、文字十二目，附以考釋。邮乡付印，惜不得引大著增重，至深惋恨。然有与大著默合者三数处，如尊释循方之循，襄释盾，从彳。亡戾，旧知从户，从犬。用华氏（华石斧——翁如注）释狐之说，未定为戾，今改定之。他如婚礼、国名与尊说亦有合者。登人即周时比军众之事，与登民数之典不同。日、风各有专祭。守疆场之臣，曰亘。斯皆近日所得之新谊。堪为大雅告者，卜辞两见，人三与牲数并记之文，疑殷世祭礼，有用人之事，即汤祈雨，周为牺牲之遗法，至春秋时，宋襄公用鄫子以祭次睢之社，亦沿其旧事。此说太新奇，未敢著录，贡诸左右，聊资异闻而已。

（原載《天津社會科學》1982年第2期）

李济著《安阳》一书评介

张光直

（美国哈佛大学人类学教授）

在公元前整整一个世纪前，司马迁在其著名的《史纪·项羽本纪》中提到一个事件的地点时这样说：“洹水南殷墟上”。说中国的学者向来知道河南北部安阳附近的殷墟大概是合乎情理的。在整个中国历史上对商代青铜器的盗掘至少早在东汉就已经开始，宋代的《考古图》（1092年）就把安阳（或鄴郡）列为商代有铭青铜器的出土地。但是，也许因为这是整个华北已知的几十个（如果不是几百个的话）青铜器出土地之一，所以直到十九世纪末在殷墟偶然发现了甲骨文之后，考古学家们才终于来到商代的最后一个都城（公元前1350—1100年）遗址。1928年，国民党政府成立了中央研究院，并在其下建立了一个历史语言研究所。该所年轻的新所长傅斯年最初的几个行动之一，就是在1928年年末派董作宾到安阳去调查，经过几十年的盗掘之后，安阳是否还有什么甲骨保存下来，以及这个考古遗址是否还值得发掘。董氏的报告对这两个问题都作了肯定的回答。于是傅氏决定将发掘殷墟作为他的研究所第一项重要的考古工作，但是，他首先必须寻找一个受过充分训练的学者来担任该所的考古组组长并领导这项发掘工作。

李济，原籍湖北，在1928年是一个32岁的年轻考古学家，可是他不仅颇具声望，而且资历不浅。他在1923年获得哈佛大学人类学博士学位，在南开大学（天津）和清华大学（北京）任过教，是最早用新的田野考古方法来发掘一处中国史前遗址（1925—26年，山西夏县西阴村）的中国学者，也是《中华民族的形成》这部开创性著作（1928年哈佛大学出版）的作者。1928年年底，李济从华盛顿归国，途中在香港停留，从那里前往广州并被引见傅斯年。傅氏当时就在那里请他主持新成立的考古组并领导安阳发掘工作，李济接受了。1928年至1937年著名的安阳发掘就这样开始了。而打这以后的一切，就成为历史了。但实际上，就见诸文字简载的意义来说，这一切并没有完全成为历史。安阳的最后一季田野发掘于1937年6月19日终止了。18天后，即7月7日，日军发动卢沟桥事变，漫长的中日战争从此爆发。历史语言研究所连同它的安阳文物，不得不从南京转移到长沙、昆明，最后搬到了四川的李庄。1945年之后，该所迁回南京，但是四年之后，它又不得不随着国民党政府再次迁移，迁到台湾。尽管到处迁移，这些文物大体上完好无损，但是考古人员却沿途减少和分散了。结果，原计划中的1928—37年发掘的正式报告未能编成出版。

《安阳》既不是仅有的也不是头一部介绍1928—37年发掘概况的书。但这是安阳发掘的领导者本人所作的叙述，作者常被人们称为中国人类学的创始者，或中国考古学的元老。仅据这些理由，就应该说《安阳》是一本具有重大历史意义的书。

本书的十五章可分成两大部分。第一部分（1—8章）是对导致中央研究院于1928—37年进行发掘的情况所作的历史回顾和发掘工作的概述。李济以一些主要人物为中心展开他的叙述。他从王懿荣和刘铁云开始，这两位晚清学者在一剂中药中

• 华盛顿州立大学出版社出版，1977年，华盛顿州西雅图，322页。

发现的甲骨文引出了这一连串事件。在这个最初发现之后，刻辞甲骨在古董收藏家中就尽人皆知了。接着，作者谈到罗振玉、黄濬、徐坊、方法敛（Frank H.Chalfant）、库寿龄（Samuel Couling）、金璋（L.C.Hopkins）、林泰辅（Hayashi Taisuke）、明义士（James M.Menzies）以及其他主要收藏家。小屯这个所有甲骨文的来源地，当时成了私人发掘的一个猎场。虽然这些蒐集活动有很大一部分造成了应该受到谴责的破坏，但是很多甲骨却终于幸运地被收入到学术性的著录里，并在孙诒让、罗振玉和王国维等知名的古典学者手里成为研究金石学和商代历史的重要资料。

对李济来说，孙、罗、王的甲骨文研究所代表的传统学术成了现代中国考古学的一个根基。另一个重要来源是诸如考古学、地质学以及古生物学等与田野考察技术有关的欧洲科学。李济接着求助于葛利普（W.W.Grabau）、安特生（J.G.Andersson）、步达生（Davidson Black）、魏敦瑞（J.F.Weidenreich）和德日进（Pierre Teihard de Chardin）他们是把西方技术、方法，以及现有最高标准的科学成就介绍到中国来的具有献身精神的科学家。李济也都认识他们本人，他的叙述就包括特别有价值的个人回忆和印象。

李济所叙述的安阳发掘，是汇集东、西方两组研究活动的结果。李济在第4——8章里给我们介绍了这些发掘工作（从1928年董作宾的初次调查开始），他自己接受委派领导这项工作的情况、两处主要的田野发掘（小屯的宫殿、宗庙遗址及文字和西北岗的王室墓地）、战争年代（1937—45年）为了继续进行安阳研究工作所作的努力，最后，还谈到本世纪最近二十五年中（1949年到七十年代中期）日益减少的工作人员在台湾为研究和出版大部分安阳文物而作的斗争。

在我看来，李济对过去五十年来该研究所的安阳研究工作所作的第一人称叙述，是他的书中最有资料价值和最感人的部分。最初，中国的考古研究只不过是少数几个学者酝酿并付诸实践的想法。这少数学者是：古典学者中的王懿荣、刘铁云、孙诒让、罗振玉、王国维，现代学者中的丁文江、傅斯年、李济、董作宾、梁思永和吴定良。这后一部分学者终于主持了安阳的发掘工作，从而在中国建立了现代考古学。这一成就主要是由于他们在1928年以后能够接近国民党统治机构中的上层人士，以及他们享有接触西方科学家介绍到中国的考古学知识的特殊条件。这些著名的科学家在中国进行研究工作，却用欧洲文字发表研究成果。正如李济所指出的：“对中国受过教育的人士来讲，只有少数受过专门训练的人能够得益。”（第36页）德日进“在中国推广科学的影响确实是多方面的”，但是“只有少数人有幸认识他”（第48页），正是这些极少数受过专门训练和享有特权的人促进了并且总的来说控制了中国的现代考古学，尤其是安阳的工作。小屯的普通村民同埋在他们脚下的精美的安阳文物之间的唯一联系是，或未被授权而私自挖掘，或充当雇工。这一点同当代强调考古学为“工农兵”服务和强调让他们作为考古训练班学员之类的有关人员直接参加发掘工作真有天壤之别。另一方面，我们杰出的学者们，以他们的知识、献身精神和才智，给我们留下了宝贵的遗产—（总结在《安阳》这本书里）　这个遗产属于考古学史，并将裨益于所有利用它的人。

李济的叙述还包括另外一些逸闻，这是关于考古学与外界之间不可避免的相互作用的其他方面的事。安阳发掘工作在很大程度上依靠美国的财政支持，但是安阳也从根本上触动了中国人的民族历史感，由此而产生的紧张状况，可用李济自己与华盛顿弗利尔艺术馆的交往经过来说明（第56、68页）。这些发掘也同1930年制定的文物保护法令有直接联系（第63页），但是直到1949年社会制度发生根本变化之后这个法令的精神和条文才得以彻底贯彻执行。然而，尽管有工作人员的献身精神与热情，但战争却终止了安阳的发掘工作，并且大大地影响了安阳的研究工作和出版计划。

“1937年11月的某日，当历史语言研究所考古组的几乎全体成员聚集在长沙一个路边小旅店里时，每个成员都郑重地说出他在战争中希望做的事。”（第122页）

结果是相当多的考古学家改行干别的事去了，于是安阳考古学家原有的队伍就逐渐减员，直至现在，长沙聚会之后四十年，该研究所在台湾只剩下了李济、石璋如、高去寻和李光宇几个人在整理保存下来的笔记、记录及照片，为中国和其他地方的考古同行以及中国人民出版叙述这个初期工作的报告。因此，这本书，在某种意义上说，是发掘领导人自己所作的果敢努力，以向世人报告恰好五十年前由傅斯年在广州交给他的工作的完成情况。尽管由于“直到七十年代中期的今天，我们还没有做到我们应当做的一切”（第156页）这一事实，李济表达了他的伤感，但是李济和他的同事们提出这个报告已经赢得我们对他们的毅力的加倍赞扬。

该书的第二部分（第九章至第十五章）“对迄今为止安阳发现的各种研究作了一个简短的综述”（第158页）。每章的题目相当清楚地点出了所涉及的问题：古代中国的史前遗存和传统记载，建筑、经济，装饰艺术，世系，贞人和亲族关系的一些问题，对祖先和其他神灵的崇拜，关于殷商人体质人类学的研究。这些篇章对一些已经发表过的资料作了很有用的和有时是很透彻的概括，偶而还包括了至今未曾发表过的资料（主要是照片）或者新的解释(例如小屯的地层，第104页、179页)。但是，作者在他的概述里没有提出任何理由就只收录了曾经或还在历史语言研究所工作的学者们所从事和撰写的安阳研究的成果。对于所外学者所撰写的关于安阳、甲骨文和商代历史的重要著作，作者所遗漏的就多得无法在此一一列举了。因此，这本书对安阳的各种研究只是提供了一个既不完整又带偏见的概述。

本书另一个值得注意的遗漏是没有指出战后考古发掘工作一直在安阳继续进行这个事实。李济在书中有些地方逗弄地暗示他知道一些“最新的发现”（第113页），但是显然他在计划写此书时就决定在他对安阳的叙述中不收录1949年以来在中华人民共和国所获得的工作成果。尽管人们可以理解和领会这一决定的理由，但事实依然是关于安阳的这本书并没有多少实际上可以得到的有关遗址的重要资料，一个毫不关心时事而只想了解这个遗址的读者不得不认为这本书对他的需要来讲，是不完全的和令人失望的。我在下面为这样一类读者提供一个在刊物上登载过的新的田野考察年表，并附参考文献的出处：

1950年　西北岗东区的王墓和四盘磨、花园庄附近的平民居住遗址（《考古学报》第五册，1951年，第1—61页，）
1953—54年　大司空村（《考古学报》1955年第九册，第25—90页，
1955年　小屯南地（《考古学报》，1958年第3期，第

63—72页，

1957年　薛家庄（《文物参考资料》，1958年第12期，第31页，《考古》；1963年第4期，第213—216页，《考古通讯》，1958年第8期，第22—26页，

1958年　大司空村（《考古通讯》，1958年第10期，第51—62页，

1958—59年　中国科学院考古研究所从这一年开始对安阳的考古遗址进行广泛的和连续不断的调查。在小屯、苗圃北地、张家坟、白家坟、梅园庄、孝民屯、北辛庄、范家庄、后岗、大司空村、武官村（西北岗）等地获得重要发现。（《考古》，1961年第2期，第63—76页，《1958—1959年殷圩发掘简报》；《考古》，1960年第6期，第35—36页，《考古学报》，1961年第1期，第1—5页，

1959年　〔在安阳殷圩〕修建了作为考古研究所考古队队部的博物馆

1962年　大司空村（《考古》，1964年第8期，第380—384页，

1969年　西北岗东区（《考古》，1977年第1期，第20—36页，

1971年　小屯（《考古》，1972年第2期，第2—7页，《考古》，1975年第1期，第27—46页，和后岗（《考古》1972年第3期，第14—25页，

1972年　后岗（《考古》，1972年第5期，第8—19页，和孝民屯（《考古》，1972年第4期，第24—28页，

1973年　小屯（《考古》，1975年第1期，第27—46页，

1975年　小屯（《考古》，1976年第4期，第264—272页，

1976年　西北岗（《考古》，1977年第1期第13—19页，同期第20—36页，《安阳殷圩奴隶祭祀坑的发掘》；《考古》，1977年第3期，第210—214页，和小屯（《考古》，1977年第3期，第151—153页，《考古学报》，1977年第2期，第57—98页，

1976年小屯的发掘（对李济来说，即使他想把新的发掘成果收入他的书里，这个发掘工作也是新近得无法收入的）特别值得注意，因为这是唯一的一座完全没有被盗过的安阳“王室”规模的墓葬。从这一座墓出土的青铜〔礼〕器数量（两百多件）就超过1928—37年发掘的所有墓葬里出土的青铜〔礼〕器的总数（共176件）！这就使得事情变得十分明显，安阳商代文明的一个完整的综述必须考虑到李济及其同事的接班人所获得的新发现。

本书在技术和编辑方面，缺点不少。但是，如果考虑到作者和他的出版者之间相距之远，我们完全可以理解作者不能对下列主要缺点负多少责任：

（1）彩版的质量没有达到应有的水平。

（2）很多插图的说明文字（如插图9）没有根据大为缩小了的尺寸而采用适当比例的字号。

（3）很多人名和地名采用了很古怪的罗马拼音，有些人名、地名则译得不正确。很多-n和-ng字尾互换了位置：成（城）被拼成Chen，金被拼成Ching，伏生（汉代学者）被拼为伏申（Fushen），李景聃（考古学家）被拼为李锦聃Li Chin-tan）等等。本书应该让懂得使用罗马拼音的讲汉语普通话的人过目一下，以便统一拼音。

另外还有些小错：“安阳的科学发掘”始于1928年，而不是1927年（第3页）。苏萨（Susa）在伊朗，不在美索不达米亚（第41页）。1926年德日进对北京人的最初怀疑不可能是由于他在伪造的皮尔当头骨方面的经验（第46页），因为这个伪造直到五十年代初期才被揭穿。作者在第245页说：“〔王亥〕取地支的最后一个亥字为他的名字这一事实似乎从未在历史学家中引起任何好奇”这个说法是不正确的。这个事实早就被王国维注意到了，并且成为胡厚宣等人的一个讨论题目。

（原载《哈佛亚洲研究双季刊》1978年，第38卷第2期，陈思民译，王俊铭校）

（原载《考古學參考資料》第5輯，文物出版社，1982年）

《簠室殷契》跋

王翁如

目前出版的几种有关介绍甲骨文知识的小册子，对于普及甲骨文知识是有好处的。但是，谈到甲骨发现一事时，有的不甚确切或不太全面。现将先严王襄同志遗作《簠室殷契》一文加以注释，刊登在这里。

王襄同志是甲骨文最早发现者之一。是篇作于1955年，曾述及甲骨发现问题，也简单地谈到卜辞的内容、写法以及研究的情况和成就，给学习甲骨文的同志提供了一些资料。

王襄同志收藏甲骨是经过一番险阻的。民国九年（1920），他撰成《簠室殷契征文》和《簠室殷契类纂》，这是天津市最早出版的两部甲骨文研究的著作。此后，他去浙江、闽、粤、滇工作，这批甲骨都随身带着，供研究和摩挲欣赏。1934年由湖北回天津时，又将这批甲骨和其他什物，一并交铁路局装箱运回天津，没想到在提取包裹时，所托运的箱物俱全，唯装有甲骨的箱子不见了，他大为惊慌，连去车站交涉，均无结果。又去北京托朋友探询，经铁路局方面按线分站，辗转查找了近五十天，最后才在张家口站找到。据分析，当时可能因他过分重视这个箱子，遂为他人所觊觎，将该箱标签改天津为张家口，转移地点。可是，当盗者将装甲骨的旧式木箱盖子前额打坏一看，是些朽骨败甲，并非什么珍宝，就原封不动地放回那里了。经过这次教训，他再不敢将甲骨运往外地了。

七七事变爆发，王襄同志失业家居，全家人的生活无着，只能吃“配给”的混合面过活。这时，天津“大罗天”一带的古玩商三番两次地来家，鼓动他把甲骨高价售与日人，他托辞甲骨存在内地搪塞过去。后来宁可卖去衣服什物维持生活，也不让祖国瑰宝流入异邦！原来，他在民国初年蒐集敦煌写经时得知许多珍品被外国人盗去。在编写《古镜写影》时，所需要的镜样，很多都藏在国外，实在令人窒气！他认为把祖国珍贵的文物、文献卖给外国人是“愧对子孙后代的”！

抗战胜利后，物价一夕数迁，北京藻玉堂书店的王老同几位学校负责人来家，想购买所藏甲骨。说什么“现在物价这样波动，老先生有点活钱，干什么也赚钱呀，存这堆死物干什么呀，不如善价出售！”还说：“现在有买主，东西还值钱；将来没买主，这种东西就卖不上好价钱呀！”往返怂恿再三，后来探知王襄同志不愿让甲骨流诸国外，又来人说：不愿意卖给外国，卖给南方东吴大学也可以，山东齐鲁大学也可以，他们是专门研究的，价钱多少都好说，愿意要美元、黄金也行，要法币也行，要大五福也行呀！”（大五福是天津生产的市布名，当时商人以之代替货币流通。）经过一个来月的游说，王襄同志答复他们说：甲骨是祖国的瑰宝，现在没有新的发现，将来也不会发现的很多！卖给那些大学，都是外国建立的，将来也会流失异邦！等到中国人想研究就困难了！

1952年夏天，家里生活还很拮据，已经是家徒四壁了。这时正好接到董作宾从美国寄来的信。董过去曾与王襄同志为《殷历》事作过探讨，时有文字往还。后来他去美讲学，在祖国解放后，来信探询国内情况，并问是否有意出售所藏甲骨，如有意，他可介绍卖与美国某大学。但王襄同志回信一面婉言谢绝，一面劝他回归祖国大陆，共研学术，乃祖国文化事业一幸事。惜董未答应，而去台湾接任伪中央研究院历史研究所所长的职务，1963年卒于台岛，时年69岁。

1953年王襄同志任天津文史馆馆长职，并将所藏甲骨全部献与国家。这是本市学者第一次将私人所藏文物献给国家的模范行动，受到政府的表扬和奖励。这批甲骨现存于天津市历史博物馆，其拓本已著录入最近出版的《甲骨文合集》中。这一点，也实现了王襄同志“集为丛书”的遗愿。1956年，王襄八十一岁时，他光荣地加入了中国共产党。他毕生研究甲骨文，通过《簠室殷契》一文，可以看出他的为人、文章和治学的态度。希望年青一代读者，学习他的精神，在老一代研究的基础上有所发明和发现，作出新的贡献。

（原载《歷史教學》1982年第9期）

评介张光直著《商代文明》

（日）伊藤道治

张光直是美国哈佛大学人类学教授，同时也是一位中国考古学和古代史的研究者。他的《中国古代考古学》（The Archaeology of Ancient China）一书也是大家熟知的。他在《商代文明》序论《通向商代的五个途径》中，概述了构成殷代史研究基础的古文献、青铜器、甲骨文、考古资料的性质和发现的过程及其研究法。接着在第一部分，围绕甲骨文研究和安阳发掘成果，分四章（《安阳和王都》，《自然经济资源》，《商王朝及其统治机构》，《国家的经济和行政秩序》）论述了殷王朝的社会、政治、经济各方面的性质。第二部分，根据最近考古调查和研究成果，分三章论述了郑州、安阳和郑州以外的商代考古学，以及有关商代文明的一般问题。另外还讨论了殷文化起源和夏文化问题。

本文主要就第一部分介绍如下：（一）关于甲骨文的时代。围绕所谓自组、子组两群甲骨文的时代归属至今争论不休。董作宾、岛邦男把它们说成是第四期的文武丁时代，而陈梦家、贝塚茂树和我认为是第一期武丁时代（贝塚、伊藤说包含着第二期）。张光直认为双方都没有从甲骨文本身得到有说服力的资料，而主张通过考虑出土情况来搞清问题。他采纳了第一种董、岛的意见。

所谓自组、子组的贞人，贝塚认为是每个王族、多子族的贞人，这是它的复杂性。而张氏对贝塚的说法有误解，以为贝塚主张的属于王族的这个贞人集团就是王族，王族是一个贞人集团。我认为，根据现有的资料虽不能确证贝塚的所说，但在时代上我与贝塚的意见是一样的，这可从最近发表的小屯南地甲骨文得到证明。这两组贞人集团的时代归属不仅是甲骨文断代上的问题，在判断小屯宫殿基址的时代上也很重要。张氏作出判断的根据是石璋如的《殷墟建筑遗存》，但后者是出于董作宾的文武丁时代说，其论述基址和出土甲骨之间的时代关系常常前后矛盾。

（二）殷都（包括殷墟）与商邑以及与安阳的关系。张氏认为，甲骨文中的商、大邑商、中商都是同一地。历来对其位置说法不一，张光直从董作宾之说，谓商之都市指历代殷王最重视的安置祖先宗庙的都市，并谓殷人以商丘为中心，有意把世界（国土）分为东西南北四方，也称四土（他解释说，由于商丘地区数遭黄河水患，遗迹尽被破坏）。因而商意味着是远过于政治性的宗教性都市。而且他认为从武丁到纣的殷都是以安阳为中心，北至邢台，南达新乡，这是企图把握首都圈作为其核心。他说首都（包括武丁以前的各首都）在甲骨文中称为兹邑（从岛邦男之说），英译名为Current Capital。首都圈中的各地设有离宫。

他认为，这个首都圈和包括早先的商丘地区是内服，其外侧，北到河北省的南半部，东到山东省西部，南达安徽省北部和江苏省西北部，西至山西省南部，是王室势力范围，设立有侯伯田等诸侯。这个势力范围是殷王狩猎（带来了皮革、骨角、肉等）的地域，又是提供经济资源的地域，特别是山西南部有重要的盐、铜和锡。它生产的谷物（张氏认为包括小麦）也是重要的。

在这个势力范围的外侧存在着称为方的“外国”（即北之土方，西北之𢀛方，西之羌、周、召方，南之虎方，东之人方，东北之盂方）。由于没有占卜这些方受年（稔）的事，可见它们与王室没有经济关系，而是殷的某种政治权力上的敌对集团。方的地望主要根据了岛邦男的《殷墟卜辞研究》，但我认为，中心似乎过于偏东南了，陈梦家把中商置于安阳地区的说法则较妥当（陈氏认为商是当时存在的几个地名）。特别从第一期甲骨文所见四方名和风名看，当时殷人的世界中心至少是在黄河以北的河南省内，或许还包括了洛阳地区。

与此相关，是殷的晚都遗址殷墟在何处的问题。张光直认为，它的南北界限是在淇河和黄河之间，以洹河为北限。他以《史记》的《项羽本纪》和《卫世家》中有关殷墟的记载为本，但具体说，似基于宫崎市定的意见。然而宫崎综合了《史记》的记载，是把殷墟的位置定在位于洹水南、淇水北和黄河西的地域内，其地相当于汉以前的朝歌，即今汤阴县。张氏是误解了宫崎的意见，这大概是为了上述首都圈南部位置的划定，结果却避开殷墟在今何处的特定问题。总之，首都圈的划定应建立在考古调查即晚殷遗迹的发现和所谓离宫存在的古传说上，西周初利簋铭的商，何尊铭的大邑商，不就意味了这个首都圈吗？这一点在此意义上是令人感兴趣的。邑一般理解为都市（Walled town），但西周时代金文中的邑和春秋时代称作敝邑的邑，决不仅仅由城市组成，即使考察甲骨文中的国（指一个政治性的地域集团）也不仅仅由邑（城市）构成。

（三）妇好墓的问题。不久前发现的这个墓据说是武丁的一个妣妇好（妣辛）的墓。它是在小屯宫殿基址群非常接近的地方发现的。张氏也说，是在小屯宫殿遗址北部，甲组基坛群的西南三百米处。张氏按照石璋如的说法，认为该基坛群是第一期武丁时代的居住遗址（前面已提到，石说有疑问），因而当成了妇好被埋葬在该居住区的附近。但由于墓上建有享堂，所以即使在武丁以后的时代也肯定都知道在这里葬着一个武丁的妣。而且甲组南的乙组恰恰距这个墓更近，再按张氏的意见，它是武丁之后第二期开始建设的，那么该如何理解乙组建筑和墓的距离呢？这不仅关系到当时都市的性质，而且关系到生与死的问题。由于张氏是引用宫崎之说，认为安阳地区不是殷都而是殷（包括后卫）的墓葬区。但他自己是如何考虑这个问题的呢？

另外，张氏说小屯村北仅仅是建筑遗址群，不是宫殿，洹河在当时位于更东的地方，而不是在小屯村东北折而向南，宫殿群更进至东面。可是，直至现在安阳地区尚未发现城郭，则张氏所说首都圈的核心地域在何处，是应该与妇好墓问题同时考虑的问题了。不过我没有采纳宫崎的墓葬地说。如果看一下战国时代的都城，在所谓内城的地区也有相当多的墓群，这一事实也应同时考虑吧。

（四）众和生产。张氏认为，族（clan）是当时的基本单位。包括农业、手工业等是族的生产活动单位。这认识与大多数研究者相一致。但族内有高、低族之分。据甲骨文记载，低级族中直接从事农业生产的是下层成员众或众人。张氏对于中国通常谓众是奴隶的说法未必赞成，但至少认为在殷王势力的整个社会里它是适合众的地位的。然而我国研究认为，众是一种集团，是构成殷代社会的族内的特定集团之一，这一意见是有力的。张氏那样的社会性概括不得不说是轻率的，虽然西周金文称众为个人单位，但殷代似乎不能如此认识吧。何况众是可由战争俘获的羌等等来补充的。同时他把甲骨文所见“丧众”之丧译为escape，即按照众自身的意志行动，这是错的。

张氏又认为，手工业由族来作。由于安阳侯家庄、苗圃北地发现过铸铜遗址的地面建筑，这至少表明，当时的上层阶级享受了某种收入。这是从殷（周）代来考察手工业者的地位，是个重要的看法。因为手工业等等对于王及贵族的隶属性往往只被一般强调之故。

（五）关于王位相续制。张光直在《商王庙号新考》一文中认为，殷庙号中的十干不是表示该祖先的生日或死日，而是十个集团之名，并且王位是在乙、丁两大集团之间按伯叔传甥方式交替相续的。这十个集团在“子”姓统治氏族中是组成最强王族的下级集团，通过王族的族内婚进行着王位的相续，这一相续法被称为乙一丁体系。当乙集团某人成为王时，丁集团的长者或强者位居同样有权的首相地位，到王死后就从本集团出而为王。为此目的而维持两大集团间隔代交替的执政制是可行的，但通过它也可能把王位独占到王族内。

那么说王族进行族内婚根据什么呢？张氏认为有妇好墓出土的青铜器铭文作有力的证据。妇好之名常出现在甲骨文中，此外还有许多称为妇某的，被认为是武丁之妣（不一定为所有研究者同意）。此“某”字表示了该女性出身的族，殷是子姓，所以构成“好”字要素的子当然表示是殷族的出身。同时，妇好墓还出土了为祭祀她而刻着母辛的青铜器，“辛”表示了出身的下级集团。因而妇好即母辛，是子姓氏族中的王族辛集团出身的女性。不过受祭祀的，有武丁的妣辛、妣癸、妣戊三位法定配偶，她们是第二期祖甲和第五期帝乙帝辛时五祀的对象，由于都是王族女性，故妇好一名也可以适合于妣癸、妣戊。另外，我想还有及位的王所具备的德治力量和政治追随者集团所持有的重要力量，所以相当于乙、丁集团的年轻王很可能企图把自己的母亲集团置于相续制的中心。特别是伯叔传甥也可认为是母系相续。故什么原因使乙一丁体系可能成立，尚缺少有力说明。由于普遍实行一夫多妻，所以张氏认为母亲出身在有力集团很重要。但殷王的法定配偶据何而定？特别是法定配偶数与及位于王的“兄弟相续”数一致者很多（未必如张氏所说全部一致），表明母与子王的关系是紧密的。然而怎样说明母的十干和子的十干多半不一致呢？所谓法定配偶，不能认为仅仅是出于祭祀需要的人为设定。另外，不见以乙、丁为名的妣，张氏认为这是决不允许两大集团彼此结合之故。然而对于大庚、大戊等王来说，不见得如此。张氏为了自圆其说就考虑欠周了。总之，张氏乙一丁体系的集团说，与董作宾所谓新派旧派在祭祀等习惯上对立的学说是相联的。但文武丁的父辈武乙为什么不是新派？陈梦家和我特别认为，从新派恢复到旧派的是武乙之父康丁，是丁集团。另外，董作宾当成文武丁时代的甲骨文实为武丁时物，包含武乙时代和文武丁时代的第四期卜辞，具有旧派的性格而不能严格地区别。这也有必要特加说明。

张氏还认为，乙集团（据他说，除甲之外，又包括庚、辛）和丁集团（庚、辛也包括在内）的对立，是与侯家庄西北冈大墓的配置（分为东西两区）相对应的，也恰与董氏新旧的分派成对应。但既没有武乙属新派的确证，又没有发现盘庚、小辛、小乙的甲骨文，所以这类说法是危险的。小屯村北的基址群，最南的恰恰是最小规模的丙组，它不过是一部分东西对称的基址的配置，别的甲组乙组，是在组成这类东西对称的配置范围内。张氏还进一步与周代的昭穆制相联系。然而，周代昭穆制是以族外婚为基础，是以血缘的父子相续为原则。相反，殷的乙一丁体系世代间的关系不象周那样为直系血缘关系。

选择如此的乙一丁体系，怎样理解甲骨文的大示小示或大宗小宗，当然也成问题。一般说，大示是直系父子相续的王的总称，在祖甲或帝乙等时代的所谓新派祭祀中其配偶妣可受祭。小宗是旁系兄弟相续而其配偶不能受祭的王的总称。对此，张氏据乙一丁体系别作解释，但其解释不清楚。他说，乙集团增加甲、戊组，庚、辛组同属乙、丁两集团，属乙、丁集团名的王隔代轮换，即出现了伯叔传甥的相续制。然而，把庚、辛两组附于这两大集团尚缺乏相当的说服力。我认为这问题很重要。因为我发现武丁和祖甲之间不是血缘父子的关系。祖甲对武丁的特殊祭祀只集中在二、三年，我想它大概为了假装父子关系的目的而出现的。然则大示所表现的父子关系是什么，又是什么原因必须如此？可惜现在我不能充分说明。张氏的乙一丁体系确有魅力，但如何加强这理论大概是今后的课题。张氏还把甲骨文中的大示小示和大宗小宗相提并论，但就实际资料看大宗小宗的性格并不清楚，所谓大示小示又都特别地不一样。同时应注意，这里的大宗小宗与周代宗法制的大宗小宗也不相一致。

以上五点评述足以理解它们是互相关联的。这表明张光直力图把握殷代社会多方面的问题，以期取得统一的历史图像。现在一些研究者急于表明自己的主题，往往看不到时代的全貌。从这点来说，《商代文明》一书具有相当重要的意义。

（宋镇豪摘述自《东洋史研究》四十卷四号，一九八二年三月。）

（原載《中國史研究動態》1983年第6期）

《古文字學通論》序

高　明

這本《古文字學通論》，是以作者在北京大學考古專業講授古文字學而編寫的《講義》為基礎，改寫而成。原來的《古文字學講義》共分三個部分：第一部分，除一些有關古文字學基礎知識之外，主要從理論上闡述古代文字的形、音、義，即文字、音韵、訓詁。第二部分是以字表的形式，說明古文字各種形體的演變。第三部分是古文字專題，其中包括甲骨文、銅器銘文、戰國文字等。講義的三部分內容，彼此緊密相連，互為依存。例如：講授第一章文字理論知識時，須從第二章字表中得到具體實例來印證；而在學習字表時，又須從文字理論上加深理解，以帮助記憶。當學生掌握一些理論，認識一定字數之後，再循序閱讀古文字資料。按照這三個環節進行講授，從教學效果來看，一般學生提高的速度較快，均有一定收穫。

因為社會上的需要，《講義》的第二部分《古文字表》，已改編為《古文字類編》一書，于一九八〇年冬季由中華書局出版。現在又將第一和第三部分，分別寫成《古文字學通論》中的上編和下編。但是，無論在資料、內容、结構等各個方面，都做了較大的變動，同原來的《講義》大不相同；不過基本系统没有打破，這本書同《古文字類編》仍有密切關係，對初學者來說，兩本書要互相參閱。

古文字學這門課程，在考古專業中是一門基礎課，因為考古工作同它接觸的機會較多，學生需要具備這方面的知識，從用途來講，它應屬于工具課的性質。文字本身就是輔助語言的社會交際工具，它可以將語言記錄下來，傳達給生活在不同空間和不同時間的人們。由于文字是記錄語言、表達思維的工具，所以古文字學既是一門獨立的專業學科，同時與其它專業諸如：古代史、經濟史、哲學史、法律史、地理史、文學史、音樂史、美術史、語言學、音韵學、考古學、古文獻等，都有密切的關係。

古文字同考古學與歷史學的關係非常密切，經考古發掘出土的甲骨文、銅器銘文、陶文、璽印文字、貨幣文字、以及簡書、帛書、載書，等等，其中有些資料本身既是歷史文物，又是歷史文獻，彼此不能分割，都是研究歷史的重要史料。尤其漢代以前的史料，有時直接來自古文字，可見考古、歷史與古文字，雖然各自研究的內容不同，但彼此是相輔相成的。如商代的歷史，文獻資料極其有限，主要是根據甲骨文和金文材料，才使商史研究大大向前推進，這就是最具體的實例。

研究古代經濟，時代愈早資料愈感貧乏，亦要依靠地下出土的材料，才能得到補充。關於西周時代的土地制度，文獻中記載了“普天之下，莫非王土”，因而我們只知道土地公有，不準買賣。豈不知早在周穆王時即已出現租田和易田，陝西岐山出土的“裘衛四器”，即有詳細記述。《大盂鼎》銘文記載周康王一次賞賜一位名盂的貴族一千餘名奴隸，《曶鼎》則記載五個奴隸價值銅百鋝，按漢代一鋝合六两大半两的說法折算，一個奴隸的價值還不到一百二十两銅。這都是研究當時社會經濟狀况的第一手資料。有關商周時代的法制，文獻資料甚少，《尚書・呂刑》雖有“五刑之屬三千”的記載，但無具體內容，西周時代的彝銘，却保存了這方面的資料。象《𠑇匜》、《曶鼎》兩篇銘文，分別記錄了當時爭議雙方自訴訟到判决的全部情况，敗訟者不僅要賠償勝訟者經濟損失，還要受懲罰，甚至要遭受鞭刑或黥刑。這些材料都是當事人的實錄，是研究西周時代法制的最好資料。哲學在我國起源很早，春秋戰國時期已經形成百家爭鳴的繁榮局面，當時呼聲最高的儒家思想，早在西周彝銘中即有反映。以此來研究中國哲學思想史，可以追溯儒家思想的淵源。

古文字與古文獻，二者關係更為密切。古籍經歷代傳抄，時逾千年以上，而其中訛誤實難估計。孫詒讓在《名原》中曾謂：“盖秦漢間諸儒傳讀經典，已不能精究古文，如古多假忞為文，與寍形近，而《書・大誥》曰：寍考、寍王、前寍人、寍武，則皆文之譌也。”此本吳大澂之《字說》，吳氏云：“文字有心者，或作忞……壁中古文《大誥篇》其文字必與寧字相似，后儒遂誤釋為寧。”類似的錯誤，在其它古籍中也時常可見。清代學者對古籍曾經進行大力整理，勘誤正別，做了大量的工作。他們採用了两種整理方法：一是利用不同版本相互勘校，發現歧異，再辨別是非；二是利用文字、音韵、訓詁，即文字學的知識，甄別文辭的訛誤。象王念孫的《讀書雜誌》、王引之的《經義述聞》、孫詒讓的《札迻》，均為後者的傑作。儘管清人做了許多工作，成績很大，但是在文獻當中，遺留的問題仍然不少，細心研讀，仍會時有所得。如《論語・公冶長》子貢問孔子：“賜也何如？”孔子回答：“女，器也。”子貢又問：“何器也？”孔子答：“璉瑚也。”《禮記・

明堂位》亦云："夏后氏之四璉。"古代注釋家皆以璉為簋之別稱，其實用古文字學來分析，璉並非簋之別稱，而為簋之誤字。先秦古文之簋字，可寫作"匭"或"軌"，因與連字形近，後人誤識為連，後又贅增玉符，寫成"璉"。再如孫詒讓的《墨子閒詁》是整理古籍的典型著作，但其中亦難免出現疏漏。如《節葬篇》云："鼎、鼓、壺、鑑"乃當時貴族死後用來殉葬的禮器，其中的鼓字，顯然是敦字之誤。戰國中晚期，鼎、敦、壺、鑑是當時殉葬禮制中最常見的禮器組合，因孫氏尚不了解當時的殉葬制度，故而搞錯。

近些年來有不少非常重要的古文獻出土，諸如：甘肅武威出土的簡書《儀禮》、山東臨沂出土的《孫子兵法》、湖北雲夢出土的《秦律》、尤其是湖南長沙馬王堆漢墓出土的帛書，其中有《易經》、《經法》、《老子》、《縱橫家書》、《天文》、《地圖》、《醫藥》、《相馬》、《導引圖》等多種書籍。整理這方面的古文獻，更須具備古文字的知識，因為抄寫的時間較早，書中使用許多別體字和假借字，如不能分析和辨別，則無法進行工作。

古文字這門學科，歷史悠久，自漢代以來就有人從事研究。迄至宋代開始取得學術界的重視，從而得到發展。自清乾嘉以來著名學者輩出，在古文字的研究方面獲得了不少成績。近些年來，由於全國各地考古工作的蓬勃發展，不斷湧現出大量古文字資料，種類繁多，內容廣泛，經過廣大學者的努力，研究工作取得前所未有的成績。不僅解決了許多歷史上的重要問題，而且在識字數量方面，也遠遠超過了過去。但是我們也應看到，在古文字學研究領域，還存在不少問題，譬如在辨識古字方面，還跟不上當前各項學術發展的要求。如果將歷史上發現的古文字資料和目前所能認識的字數作一比較，就會看出我們所能認識的字數太有限了。象中國社會科學院考古研究所一九六五年增訂本《甲骨文編》，共收甲骨文四千六百七十二字，其中收入正編的僅有一千七百二十三字，見於《說文》的只有九百四十一字，尚有二千九百四十九字不識、待問，收於附錄。容庚一九五九年增訂三版《金文編》，正編收一千八百九十四字，亦有一千一百九十九字不識、待問，收於附錄。羅福頤一九八一年出版的《古璽文編》，正編收一千四百三十二字，附錄收一千三百一十字。一九六四年臺北藝文印書館出版金祥恆編的《匋文編》，正編收四百九十八字，附錄收五百八十二字。從以上四書收於附錄中的待問字數來看，足以說明今後識字任務之繁重。這個數字，經過歸併去重，據初步統計，共發現各種古體漢字約八千餘字，實際能被大家所識的，只不過三千字，尚不足全部字數的百分之四十。不僅如此，而且關於古文字學理論的科學化和系統化方面，也有待於進一步提高；在研究方法上還有不夠嚴謹和不夠科學的現象，這些都應當引起注意，並共同勉勵，努力攀登，不斷地將古文字學研究推向前進。

這本書拖延的時間很久，如果連同撰寫它的前身《古文字學講義》的時間計算在內，前後不下十年。遲遲不敢拿出來的原因很多，主要是由於作者水平有限，愈學愈感到知識貧乏，力不從心。以自己之昏昏，難得使人昭昭，唯恐因己而誤人。后來由於使用過《古文字學講義》的兄弟院校同行和前輩，鼓勵我將其刊印成書，又蒙苑峰師、蘇秉琦師、季庚師等幾位前輩多次催促和勉勵，以及姚孝遂、李學勤、裘錫圭、趙誠等先生的大力幫助，使得撰寫工作，終於完成。

在此還應當感謝我的老師唐蘭（立庵）先生，先生在世時，曾為撰寫這本書想了幾個方案，花費了不少精力。他建議把講義中的字表補充擴大，獨立成書；再將其它部分充實提高，撰寫一本理論性較强的《古文字學》。由于先生的偏愛，委此重任，奈因能力所限，實難勝任。今有此書出版，雖不能滿足昔日之囑，只求不負先生之栽培和期望。

孫貫文先生既是良師又是益友，蒙其不吝賜教，受益良多。孫先生為撰寫《古文字學通論》亦花費了不少力量，有時為了討論書中一個問題，竟達數日不休。但是，現在此書即將出版，而孫先生却已作古。追憶往昔，我們為了研究古文字，終日促膝談心，攜手言志，綿綿之樂，竟相隔世。書以至此，不覺淚下，悲痛至極。此書出版，倘能裨益茲學，以報孫先生之一片苦心。

今天，全部編撰工作均已告罄，蒙文物出版社惠為刊印，借此機會，特向諸位師友表示衷心感謝，並希批評指正。一九八三年七月八日於北京大學考古教研室。

（原載《古文字學論集》初編，香港中文大學中國文化研究所吳多泰中國語文研究中心，1983年）

观堂书札遗录

王国维

第一札

再启者：自夏后所得公书，每想见怀抱不畅。迩年心情，想亦今兹为劣矣。公书时以家事为言，然此事亦正无法。大抵有可设法补救则补救之，无则姑置之。愤怒忧郁，无补于事，而徒伤于身。公此次胃疾，自中医言之，当以为肝病也。语亦有理。公平日最不喜闲，心常动作，乃系精力兼人之故，故以公之体用心与动作不能为病，唯郁结为致病之源，须以动作与闲散二法排遣之。前年《殷虚书契考释》成时①，前印公写照，维本拟题诗四首，仅成一首，故未题。其诗云："不关意气尚青春，风雨相看如怆神。南沈北柯②俱老病，先生华发鬓边新。"现凤老不知何如，乙老多疾，然无甚病，尚足支十年。公年力俱尚未艾，此数年中学问上之活动，总可继续二十年。试思此十年中之成绩，以度后之二十年，其所得当更何如？公事业尚未及半，切勿以小事介于怀抱而使身体受其影响。此非维一人之私望也。此间自入冬至上月杪，本甚温暖，朔日后骤冷，最低至十度左右，最高亦不过二十度，竟日未尝解冻，幸砚尚未冰，故得为乙老写成诗稿一卷。（今日稍暖而雨）顷读乙老《壬癸录》中有杂诗似为公作者，录呈之左右。专此

再请

道安

国维又拜

初五日上午③

安期尔何人，得非鲁连徒。却秦入东海，传为列仙儒。朝与青童游，暮归紫府居。锵锵白凤凰，侍从随仙舆。辟谷亦何为，食薇不愿余。披发下大荒，冥搜宛委书。云气闷徐市，岳图付仲舒。谁言齐士怪，正笑田横愚。南史简不存，长怀一嗟吁。

再，范处④百八十元当即交去。敬公⑤来取去秦金石刻辞、宏农冢墓遗文各四部，云已致函公处。又，哈园⑥前交来者，乃《天竺字源》。箱中物已均送伟公⑦处矣。又闻。

---

①罗振玉《殷虚书契考释》，写成于一九一四年冬。

②"南沈北柯"，"南沈"，指沈曾植，字子培，号乙庵（即"乙老"），亦号寐叟，时寓居上海；"北柯"，指柯劭忞，字凤荪（即"凤老"），号蓼园，居北京。

③由"自入冬至上月杪"等语，可断此"初五日"，系指农历十二月初五，此札当写于一九一六年十二月二十九日。

④范处，当指范兆经，罗振玉妻弟。

⑤"敬公"，指罗振常，字子经，版本目录学家，时在上海开设蟫隐庐书店。

⑥"哈园"，指上海哈同花园（亦称"爱俪园"），时王国维应聘在该园内任《学术丛编》杂志编辑。

⑦"伟公"，亦指范兆经，字伟公(尊称)

第二札

雪堂先生有道：上月晦寄一函，想达左右。（今日得两书，敬悉一切。当如尊指，景□日后可来。）公胃病乃尚未痊，何濡滞也。此次是否一至贺屋①所，抑仍用木邨耶？孙仲颂②《契文举例》当即寄工。惟此书数近百页，印费却不少，而其书却无可采，不如《古籀拾遗》远甚。即欲摘其佳者，亦无从下手，因其是者与错者尝并在一条中也。上卷考殷人制度，亦绝无条例，又多因所误释之字立说，遂觉全无是处。我辈因颂老而重其书，又以其为此学开山，更特别重之。然使为书费钱至数百金，则殊不必。公一观此书，当与维同感也。《尔雅》草木诸篇释例③，于晦日写好，朔日改定交出。初二以后无事，为乙老写去年诗稿共十八页，二日半而成。其中大有杰作。一为王聘三方伯作蔼医篇，一为陶然亭诗；而去年还嘉兴诸诗议论尤佳，其卫大夫宏演墓诗云："亡虏幸偷生，有言皆粪土。"今日任谈称此句，乙云："非见今日事，不能为此语。京师来者，皆言公在东大发财，此亦其一也。"云云。又云："北宋蔡京党调言直传至王明清、周密辈，国朝人过信宋人野史，当以万季野用《实录》窥野史之法正之。"语皆有识。今日以维抄本付乙老，而留其原稿于维处，复将至癸甲三年诗④取来，拟续抄之，当以初十日毕此事也。近日浙江又似有事，警察能站岗，诸将辞职。有谓吕与曲（段党）同率谋易诸将帅；有谓吕为党人所运动而部下反对之。现闻吕已辞职，日内即去杭，大约可暂无事矣。

专此敬请

道安不具

国维再拜　　初四夕⑤

（乙老二诗录奉）

（1）贺屋、木邨，系两日本医生姓。

（2）孙仲颂，即孙诒让（一八八四至一九〇八年）字仲容，号籀（庼），浙江瑞安人，著名金石、文字学家。《契文举例》是他据刘鹗《铁云藏龟》所撰的我国第一部考释甲骨文字的专著，称甲骨文为"契文"，就是由他提出的。《古籀拾遗》则是他考释金文的一部代表作。

（3）《尔雅》草木诸篇释例，即王氏所撰《尔雅草木虫鱼鸟兽释例》。

（4）"至癸甲三年诗"，指沈曾植在辛亥革命以后做了"遗老"，于壬子至癸丑、甲寅（一九一二、一九一三、一九一四年）三年间所写之诗。

（5）此信似蝉联上信（初五日），则署"初七日"，当写于一九一六年十二月三十一日。

第三札

殷虚卜辞云：贞𡘋（按：即燎字）于王亥。（《书契》①卷一第四十九叶）又云：贞之于王亥册牛辛亥用。（同上，卷四第八叶）殷人祀王亥之礼其隆也如此，王亥当系殷之先祖。案：《史记·殷本纪》："冥卒，子振立。"《索隐》："振，系本作核。"《汉书·古今人表》中上："垓，冥子；微，垓子。"是冥之子、微之父，名核，或垓，《史记》作"振"字之误也。《山海经·大荒东经》："有困民国，句姓而食。有人曰王亥，两手操鸟，方食其头，王亥托于有易河伯仆牛，有易杀王亥，取仆牛。"郭璞法引《竹书》曰："殷王子亥，宾于有易而淫焉，有易之君绵臣杀而放之。"是故殷主甲微假师于河伯以代（按：应为伐）有易，克之，遂杀其君绵臣也。是《山海经》之王亥，即《竹书》之殷王亥，亦即《世本》、《汉表》之"核"与"垓"，卜辞王亥正其人也。《吕氏春秋·审分览》："王冰作服牛。""冰"，篆文"仌"，与"亥"形相似，亦"亥"之讹。《初学记》（三十九）引《世本》："胲作服牛。"《太平御览》（八百九十九）引《世本》："鲧作服牛"，"鲧"乃"胲"之讹，"胲"亦"亥"之讹也。《山海经》之"仆牛"，亦即《吕览》、《世本》之"服牛"，古仆、服同音，盖王亥始作服牛，有易之君杀之而取其牛，《山海经》所纪与《竹书》传闻异辞。《楚辞·天问》："该秉季德，厥父是臧。胡终弊夫（按：应为于）有扈，牧夫牛羊。""该"亦即王亥，"有扈"与"有易"，则又传闻异辞。又云："恒秉季德，焉得夫朴牛。""朴牛"即"仆牛"，亦即"服牛"矣。由此观之，则战国时传说均以服牛之事始于王亥。相土作乘马，王亥作服牛，均商之先有大功德于民者矣。卜辞中商之先公仅见示丁、示壬、示癸，（罗参事《殷虚书契考释》以为即报丁、主壬、主癸）而独于王亥之祀其隆如此，先秦传说殆非无所本欤。又王亥之王，殆系追尊之号。《诗·商颂》亦称契为玄王，岂诗之追王上及诸先公，讫于始祖欤，抑古代之王不必为天下之号欤？不可得而考矣。又商人生子以日为名，皇甫谧谓始于上甲微。今观王亥以亥名，亦以亥日癸，与癸大乙用乙日，癸大丁用丁日同例；但用支而不用干，又与祖卯父、卯母，已娥卯等同。此殆为以日为名之始矣。

此王亥事一节②，其余目列后：

殷先公先王皆特祭

商人以日为名之由来

商先妣皆特祭

殷祭

外祭

附与日本林博士论王宾裸鬯二书③。

（1）《书契》，指罗振玉《殷虚书契前编》。

（2）此书当写于一九一七年正月下旬《阳历二月中），自京都罗振玉处度完春节，返回上海以后。时王氏正撰写《殷卜辞中所见先公先王考》（《观堂集林》第二册卷九，史林一，中华书局一九五九年版，下同。"此王亥事一节"，实即该文内之《王亥》条，两者可比照读之。

3、"二书"，即《与林浩卿博士论洛诰书》、《再与林传士论洛诰书》。（《观堂集林，第一册，卷一，艺林一。）

第四札

雪堂先生有道：今晨寄一书，并印举①首册，书当先到，印举因双挂号，须略迟矣。晨诣乙老，见澄清堂帖一、三、四、五卷，精拓用淡榻，与公旧藏本异曲同工。又一本署澄清堂帖，上下拓亦佳，疑明人将不全原石改题卷数，其邢子愿、吴荷屋诸翻刻，乙老处亦有之。此帖乙老考得系施武子刊于海陵澄清堂者，海陵公署堂名也，并谓此帖共甲乙丙丁戊五卷，赵子因极重此帖，盖去淳化之伪而辅以元祐续帖者。乙老有长跋，急切索不得，索得当抄呈。此帖竟考得刊者主名，可快。执甚想公欲观此跋甚亟也。其拓本二种，（石有沟处，自在公旧藏本之后，恐其石至明尚存）不知何时拓，与公旧藏本何如，则惜公不得遥观而定之也。端忠敏之石经残字影本已购得，向知黄本刊于《神州国光集》中，不知阮本有单行印本也。梅溪藏本之伪，殆已无疑，惟不识作伪者何人。以正理论，自系梅溪自为，抑或梅溪以前已有此本耶？季英②太夫人之病仍未有转机。沪上梅雨亦多，至今未见开霁，不独闷损，于摄生殊不易也。今日于乙老处见公书，渠谓所问数事均不易对，恐此等物已亡于赭寇之乱矣。汉石经每行字数，今以端本计算，则每行大抵七十三四字（因古今本字数不同，不能确定每行若干字），而钱本《公羊》独每行八十四字，益见其伪矣。《魏石经考》二卷，已写就清稿，但此稿石印底子恐仍须自书，（前史篇疏证③中篆字乃漫画斋主人方君书）因他人书之，其古篆体虽较维略（下缺）

（1）指十钟山房印举。

（2）季英，指刘季缨，刘鹗第三子，罗振玉长婿。

（3）史篇疏证，指王氏《史籀篇疏证》（一九一六年）。

第五札

雪堂先生有道：初六日寄一函想达左右。顷接季英处转来初四日赐书，敬悉□□行安胜，甚慰甚慰。榜信日恶，前日闻之，乙老者乃系确信此事①，尚何言哉。昨日排比粘帖哈园龟板拓本②，知得一字，甚快人意。此次将卜辞中所云"贞寸亾𡆥"者排列一处，乃知凡云"贞寸"者，皆用于癸日。微之各处，皆无不然（无用他日者）始知"寸"为旬字。殷人于十日之末，卜来旬之休咎，犹其于每月之首，卜一月之休咎。其卜一月者，所谓"贞今用亾𡆥"是也；其卜一旬者，所云"贞寸亾𡆥"是也。"旬无𡆥"，犹《易》言"旬无咎"《说文》：钧，古文作[illegible]，而使夷敦作[illegible]，可知[illegible]实是旬字。又古军字有作[illegible]者，此字疑亦疑（按：原札如此）从车，旬声，非从[illegible]省也③。连日天气炎热，乃类盛夏，又加以蒸郁，不知日本何如？专此敬请

道安不一

国维再拜　　初九日④灯下

（1）"此事"云云，当指一九一七年六日间张勋拥兵北上胁迫黎元洪下台，密谋"复辟"（七月一日）事。沈曾植（"乙老"）潜往北京，为参与者之一。

（2）即《戬寿堂所藏殷虚书契》（一九一七年）

（3）此信内容，后由王氏撰成《释旬》（一九一八年）。

（4）由信末所云"乃类盛夏"云云，此书写于农历五月（孟夏）初九，即一九一七年六月二十七日。

第六札

雪堂先生有道：前日所寄书，因沪上业经戒严，检查邮信，故无多言。时局想已于东报中悉之。此次之变，段、冯、梁①三人实为元恶。冯思为总统，段则欲乘此机以恢复其已失之势力，梁为幕中画策之人。然其结果已可初睹，首则必为国会与冯、段之争，而国会与民党必败；继则为冯、段之争，为军人与进步党之争。此种局面不能支持一年，可预决也。人心险诈，乃至天理尽绝。黄楼微日通电②（见于报中），托君急持上，可以知此次真相。盖事前均有接约，临时并不通知，此二语足以尽之，末日即在今明。乘舆尚无事。此次负责及受职诸公，玉老当能不忘久要，寐叟已有传其南归者，此恐不确也，止庵③乃无心肝，竟有电辨明心迹，与犬羊为伍，岂不痛哉。

公病所愈，尚期自宽。因此后尚有种种之责任，不可为无益之伤感也。专此敬请

道安不一

永观再拜　　廿二日夕④

（1）段、马、梁，指段祺瑞、冯国璋、梁启超。

（2）"黄楼微日通电"，当指冯国璋一九一七年七月五日（"微日"）宣告就任"代理大总统"事。

（3）玉老、寐叟、止庵者，系指劳玉宣、沈曾植、章梫，皆参与张勋"复辟"之前清"遗老"。

（4）此信当写于农历五月二十二日，即一九一七年七月十日，时张勋"复辟"已告败。

第七札

雪堂先生亲家有道：前晚一函，想达左右。昨奉书，敬悉一切。顷阅报纸，见彼方公府秘书厅函件，剪附尊览。高密①于此事已栽大跟兜，稍有人心，必须自退以谢天下。加以天怒人怨，恐不久即不能站脚，日磾②亦必随之而倒。故前日素意③俟其自败，不必加功。（素意或令心畬④入城一次，而陈一切。素答亦此。此甚老成之见，亦是自留余地）。窃意高密减政之策，本不期实行，但以掩人耳目。其大计画（划）既败（对素言不行则去，素必赞之），则亦自必求去。目下急务，在善后之策。元气大伤之后，外御风寒，内调肺腑，在在为难。库书一项，将来只有公开一法，以免攘夺，此则高密所断送者也。专肃即请

道安

永观顿首（5）

（1）高密，指郑孝胥，时为逊帝溥仪小朝廷之“总管内务府大臣”。

（2）日磾，指金梁（息侯），时辅佐郑总管“内务府”。

（3）“素”指升允，号素庵，蒙古人，前清重臣，时为逊帝溥仪“顾问”。

（4）心畬，指溥儒。

（5）此札未署日期，视其内容，当写成于一九二四年五、六月间。时王氏正“供职南斋”，罗振玉则被“思准”居天津而与问“宫禁”事。信内所云“库书一项”，指宫中累朝储藏之古书画，珍玩等，溥仪即靠押抵古玩继续其“皇帝”生活，北洋政对府九亦欲掠夺，不久即有冯（玉祥）军“逼宫”事发。

〔附录〕

王国维致其长、次二子信

潜高儿①入目：十日前由大陆汇去洋壹百三十元，想已收到。此中还贞明②前此帐上七十三元外，又还大媳③所送罗礼四元；汝母生日给汝等七人廿二元外，尚存洋卅一元，此中须为庆端④打一金锁，前已有信通知矣。沪上热度想已渐减、时气想亦从而减。汝兄弟身体想已全愈，望禀知为盼。贞明现在既无可考之处，拟令在清华大学班旁听。不知邮政考试将来举行否？望禀知。此中均安，天气尚在八十余度间。余俟续谕。

七月二十日灯下，父字⑤

（1）潜、高，系王氏长子潜明（一八九九至一九二六年）、次子高明即王仲闻，（一九〇二至一九六九年）时均在上海（分别在海关、邮局任事）。

（2）贞明（一九〇五年生），王氏第三子，时在北京求学。

（3）大媳，即潜明妻，罗振玉第三女，名孝纯（于一九六九年去世）。

（4）庆端，系王氏第五女端明（一九二二年生）。

（5）此信当写于一九二五年王氏教清华研究院期间。信未署七月二十日，系农历；按阳历计算，为九月七日，故信中有“热度想已渐减”等语。

罗福颐跋

昔王观堂丈与先君①通讯手札，集成十数册。先君以其中多臧否人物语，未可行世，止取此数札，付诸装池。是中前数札观堂丈居申江②，先君时客海东；末一札，则先君寓津沽③，观堂丈正在清华作导师也。此诸札中，如论《契文举例》，谈沈寐叟诗，释王亥，释旬，论丁巳复辟④，欲为殷虚书契考释题诗，足窥看堂丈议论之一斑。今家臧手札已全散佚，此册颐以携至沈阳，致历劫仅存。灯下展对，犹忆昔？。时世虽改，黄农可期，秉笔濡毫，又恨古人之不见今日也。时巳丑夏日，罗福颐谨识⑤。

（1）先君，指罗振玉（1866—1940），字叔韫，号雪堂，自称“永丰乡人”，一生著述甚丰。其对近现代学术之最大贡献，在对“殷代甲骨的搜集、保藏、流传、考释”，以及“关于金石器物、古籍佚书之搜罗颁布”（郭沫若《中国古代社会研究·自序》）其最重要之著作，为《殷虚书契考释》。

（2）申江，指上海。王氏于一九一六年初自日本回国后寓居上海，直至一九二三年春。

（3）津沽，指天津。罗振玉于一九一九年春夏间自日本归国，举家迁居天津。

（4）“丁巳复辟”，指一九一七年七月张勋复辟。

（5）罗福颐（一九〇五至一九八一年）系罗振玉第五子，我国著名金石、文字学家，生前任故宫博物院研究员，长期从事金文、甲骨文、敦煌文物等整理与研究，著述甚丰。

罗继祖跋

先叔①谓家藏观堂手札数十册全散佚者，实则此诸札后来转入余手。一九六三年，予合已有和所见（包括已归他人者）集录为《观堂书札》，将谋付印，未果。经“文化大革命”，幸未散佚。前年武汉文献研究室摘取其论学部份②，以外皆舍旃。今全稿将收入华东师大吴泽教授所编辑之《王国维书信集》，而迟迟不得出版。此数札乃先祖当日抽取付装池者，先叔藏之。余固已收入《书札》中，又撷其要语，入《行云录》③矣。故此名《遗录》。鸿祥同志为介刊《晋阳学刊》，特附识数语如右。一九八二年五月十八日，罗继祖。

---

①先叔，指罗福颐。

②即《观堂书札》（与罗振玉先生论学手札），《中国历史文献研究集刊》第一集。（中国历史文献研究会编，湖南人民出版社，一九八〇年九月版）

③即罗继祖近著《永丰乡人行年录》《罗振玉年谱》。（署名甘孺，江苏人民出版社，一九八〇年版）

后　记

此《观堂书札遗录》（并附录），都八通，乃罗福颐先生生前手定者。其二、四、五札部分论学内容，曾摘入《观堂书札》（分列为二十八、二十二、四十五札），余皆系未刊稿。承《晋阳学刊》的同志关心，以为此甚有助观堂思想及学术之研究，何不全刊以公诸同好耶？因征得继祖老师同意，连同跋文，一并交学刊付排。发表前，余参诸书札日期，重行调整次第，并断句标点（个别墨迹模糊之字，标以“口”号）。每札写作时间，则按其内容，结合落款时日推定。为着便于阅读，对书札及跋文酌加注释。标注过程中，继祖老师又扶病予以具体帮助、指导。惟个人见闻有限，疏误难免，尚祈读者指正。

陈鸿祥一九八三年元旦之夕，校诠并记，于南京之愚斋。

（原載《晉陽學刊》1983年第3期）

讀嚴一萍著甲骨斷代問題

丁　驌

廿餘年前一萍嚴氏已有長文「甲骨文斷代研究新例」載于中研院史語所集刊外編之四，今更爲一專書，因十數年來，資料更多，研究益更豐富。是書共七篇，附摹圖三百五十餘，余見之如獲至寶，收到已逾數月，始得全讀之。

是書要旨乃爲新進指示途徑，故編寫摹片，如此之多，實屬費盡苦心。只欲初研契文之學者，無意之中，勿發生不必要之錯誤。進而示其應爲之基本功夫益此例證，誠巨著也。其中第七編「相同稱謂不同時代」尤爲切要。篇末所附四表，爲最新之論斷，同好亦當熟研之，如有所增益，作者無不歡迎者也。

余每觀近人著作最淺顯之錯誤厥惟錯讀契辭，其原因亦不一而足如只根據已發表之釋文，不看原片，則因人之誤而誤。如本據原拓，則認字不清，斷句有誤，以致意義未明，亦復不少。更進則原有綴合之片，綴合有誤，則風馬牛不相及之字，串聯成句，貌似而神非矣。人非聖賢孰能無誤？只在曾否衷心預防之耳。國外學者三十年來著作不少，而國內新進似未曾有所聞。是故思路不廣，蹈人前轍，一無所得。或更標新立異爲驚人之論，則更可悲矣。

余讀嚴著之後，亦欲有言，今藉紹介是書之便，贅言於次。

一　貞人組別問題

貞人歸組首創于陳夢家。陳氏就種種方面，比較各貞人之同異，而以同者歸組，遂有所謂「方組」、「自組」「出組」等等。此組之重點爲同，舉其共同點爲之。

彥老當年分期，亦羅列某期代表貞人。其法則就個別貞人之貞辭內容，甚或字體之形式變化發展之路綫，以其有「異」之處爲斷代之根據。

誠然辨別異同乃爲思考之並行步驟。惟組別以類同而聚，若不辨其異，驟曰某貞人爲某組即是某期則大誤矣。蓋「同」不足以「斷代」，「斷代」云云者，乃就異點辨其時代也。

陳氏之組今日已成一家言，用之未審，則無異桎梏。後之人，師承有自，不易脫胎換骨，亦可鑒原者也。組別不是斷代之工具，蓋合多人之辭中之內容，借此填彼，則當然可見武丁時代之四父俱全，三妣皆在，勢必「自」也「方」也「歷」也皆武丁時代矣！

余所言非欲指摘陳氏，蓋夢家多年老友，其綜述一書成於數十年前，亦是苦心孤詣，難能可貴者。惟惜當年甲骨研究之資料尚無今日之豐，研究之結果更無今日之富，研究之方法亦無今日之新，故書中缺陷頗多。例如陳氏已知丁字作〇形，「于」字作「丂」，雖知此非武丁方爭㱿等人之字，而不以此「異」爲時代之異。試問如「自組」在武丁之初有此字體，何以下接武丁之㱿方爭等人絕無如是作者？其討論午組之時，將其中之「母戊妣戊」置之不說。蓋如母戊爲武丁之配午組必是二期，妣戊則非三期不可。陳氏亦知武乙妣戊，勢必將午組置之五期矣。故知而不言，殆一時疏虞歟？又如子組之中，「且戊」之稱只見于貞人豖，午組中午八八二人亦惟午辭有「且戊」，八八辭無之去此且戊，則將「子」「午」二組與「方」組比較，即多一異。留此且戊即多一同。而陳

氏每言「𡧊組同于𠂤組」者百分之幾十等，以爲證據。應不知所證者，乃陳所容納之人中之同。此同非組中人人皆有，乃積少成多者。如陳氏一計其組中之異，及其組與他組之異，組中貞人個別之異，即可見其統計之眞值矣。此因陳氏不明統計之法，亦難深責，即今之研究者，又有幾人用統計法而無誤者耶？

嚴書序中（一〇頁）論合二三五三四與合六〇四九兩片，可借以說明余上述之意。此二片：

其一：爲大貞。內容爲命小武子（合文）奠子𡧊，旁有「命𡧊」二文。

其二：爲𡧊貞，亦是命小武子奠子𡧊，八月。

大爲「出組」，𡧊爲「𡧊組」。出爲二期，𡧊爲一期。吾人亦知出上及武丁，𡧊下及二期。試問大爲何期？就組別言，大既不出組當是二期，𡧊仍是一期。如此則大𡧊二人之辭除本人名之外，無不皆「同」，如何分組？

如吾人更深思之即知此二辭有三種可能！

㈠小武子爲武丁至祖庚時人，故兩期貞辭皆有之。

㈡小武子爲武丁時人或爲祖庚時人，如此則「𡧊」「大」兩貞人之中，必有一人跨越兩期。則組不能斷代明矣。

㈢如小武子，𡧊，大三人皆生存於武丁及祖庚之世，則「𡧊組」「出組」同時代，又何斷代之可言？

以上唯有㈠項可曰𡧊是一期，大是二期。然此並非因組而斷。蓋三可能中，兩項皆非。唯此一項是根據小武子爲一至二期人一點假設而定，並非分組之功也。

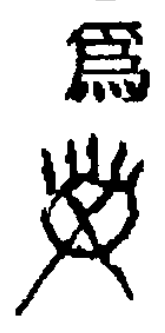
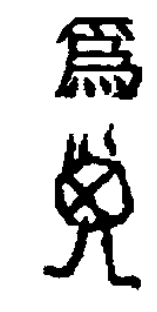
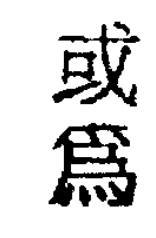
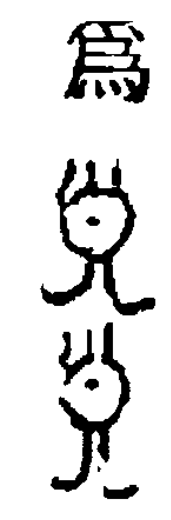
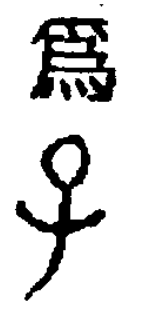
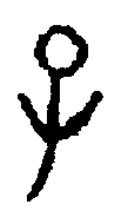
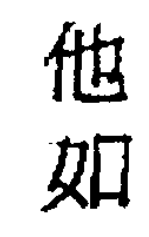
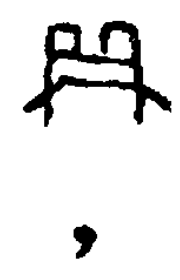
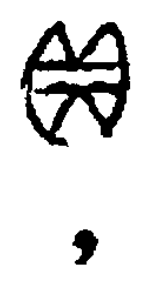
余（未發表）知𡧊，㱿，爭，亘，沐等貞人，在武丁初年即已存在。𠂤則並無蹤跡可覓。如𠂤爲早期貞人則武丁二十九年月食，甚至於十九年之月食，何以不見𠂤貞？武丁早年雀之征伐，亦不見𠂤之貞問。伐　方之時更不見其踪影？豈非怪事歟？

二　字之風格與形式

嚴書爲字體討論甚多，其中一扁示扶之字體，凡四體，引例百數十條。其書七頁有林君分類，曰：典型𡧊組，𠂤組大字，𠂤組小字，歷組一類，二類。又有𠂤𡧊間組。余未見原作，不知所言之「組」「類」有何分別？其中大字小字如何度量？孰寫大字？孰寫小字？

今先就字之大小而言。余在多年前將貞人字之大小由甲乙編中摹錄成一樣本（圖一），知貞人字體人人皆有大有小，有粗有細，勢必貞人擅長各體，不然則貞人寫若干辭，他辭則由胥吏爲之。故非某貞人自成一體。如此則典型𡧊組寫何種字？何以謂之典型？一人者抑一組者？

余以爲國之大事，如月食之例，必爲貞人主書。蓋周禮有卜師，卜人，有府，史，胥。殷或未必如此之繁，亦必有書、契之人。有卜有貞，亦有氏龜攻龜之專職（諸帚爲之）。每卜問之後由史書辭，由胥契刻。故無論㱿爭𡧊諸貞辭，字體大小均有。嚴氏所舉扶之書體即見有肥筆金文體之字，有瘦削之字等字，有小字。豈皆扶一人寫之哉。武丁一甲子中，字體之體裁變化極少。若早期忽見𠂤組之零亂不整，缺筆誤字，甚至倒寫文書之書體，何以在武丁「中晚」年與及二期，均不得見？又何以在三期、四期武乙之世忽又出現？唯一可言者即：武乙之「瘦金體」，乃武乙時之字風如此，似非武丁所能容者也。

嚴書中扶之字體分爲四種。余見其三型。一爲字較大（圖二）大者可二至三公分，小者亦在一公分左右。體裁漫漶。此又可分爲肥筆，瘦筆，字作金文體裁。其小字有時只得兩三公厘。界于二者之間者，則半公分以上一公分以下之中等大小。字之大小雖非因人之異，然寫大字隸書又習蠅頭小楷者究竟不多。謂此兩極端不同之字非一人手筆，諒可信也。以字體而論，寫「子」字爲爲或爲者，斷非寫子爲之人。寫已爲爲筆誤，亦必非寫之爲之人，他如，，三體，亦難爲隨手之變。故余以爲寫字之人非必即卜貞記名之人，故于斷代用書體之本法上，應多一層警覺也。

卜辭中之字之個別訓釋　治契者莫不皆爲之。其收集成字書者亦有數種，如李孝定之集釋，島邦男之綜類。島邦男所錄契辭每有失誤漏文，錯簡，而又截取有關之辭或捨去其餘或分置他文之下，故欲窺全豹者，欲知其字確作何形者，非檢視原拓不可。李書爲文字學之書，律己甚嚴。其隸定之文，有異於當世者。惟欲求字義、訓詁及前賢議論，則李書收羅於一處，便利之甚。但於原文上下用意，仍須檢視原拓，視其文句方可知也。

余曰「原拓」不言「原片」，皆因今日能見原物者有幾人哉？能得檢視原片者又有幾人耶？故退而求其次，以拓本代之。此層功夫爲嚴氏一再強調者，蓋因隸定契字，往往因人所見而有異。如只由書中抄契辭以爲根據，易致失誤。此一般研究者，用綜述，饒氏貞人考，島邦男綜類之缺點也。非知之難而行之難也，乞與諸君子共勉之。

字之所从亦隨時間而有演變。董先生即有分析若干字之變化，以其異點，而分期別。如陳夢家所舉之「不雉衆」之一辭，其中之雉字，即分別作「至」「矨」「雉」「雉」四種寫法。陳以之斷代乃武丁，廩辛，康丁，乙辛四時。其結論或可議，惟原則如此（綜述六〇九頁）。此亦因語言，聲音，假借，省筆字等種種改變文字構造之原因，隨時間而發生，故殷世二百多年間，應有變動，自毋可疑。況契用之字尙簡明，知「雉」當作「雉」而契寫爲「矢」，今得殘片，自然不識其原意。如見一版即可上下推敲，而知其爲省文也。契文省筆省文之例甚多，亦往往因之誤認。如「宅」省爲「宀」「多」省作「夕」，如承已契之全辭，第二片只契一「貞」字，省去其辭者亦彼彼皆是。皆因契文爲一特殊使用之文字，有其自身之文例也。故亦不能恒用尋常讀書之方法讀之。

契文成語成詞之使用，亦有章法，迄今未有專書，研究者只個別領悟之而已。嚴氏十年前文中，曾舉數例。就余所知者，如卜句辭尾必曰「亡𡆥」。下一句貞辭之尾必曰「亡尤」。蓋「亡𡆥」者謂一旬無禍，亡尤者二卜謂原卜無異也。如上句問祀某祖先幾牢？下曰「貞亡尤」即「照辦」也。此並非「允辭」而是卜辭，故有不同。他如卜出行必用「亡川」，「亡州」，五期用「亡𢦏（戾）」。「馭釐」見於二三期，「界豕」却似武乙祭物等等，如有人收集成册，則斷代工具又多一便利矣。

三　異代而同

嚴氏此著討論異代而同之情況有三。一爲同版異代。一爲同稱異代。一爲同名異代。

同一龜甲而有異代之契辭乃前人所忽略者，故前賢有「見于同版」即作同時之斷語，今已知其不然。按已有契辭之龜甲乃經過攻治，潔祀，然後使用者。既已使用，即成檔案，如非國有大變，斷不致散失。故其中如有將原辭括去，再作用途者，殆清理舊檔，剔除其無收存必要之物，俾胥吏習契之用也。觀乎ＡＳＴＴ——⑦４上之契刻，既無干支卜等例引，又非王事（如臣父乙，豚[illegible]丙等）疑即習契者所爲也。余不知龜甲既已使用，既已經灼而見兆。又再使用，其兆將如何識別？故知即欲使用，亦只能記事而已。另一可能即他人用之，而非王也。

如前王所留已經攻治而未用之龜甲，後王用之爲卜問，則事出當然。龜甲上有記事刻辭，示此龜甲爲何人所氏何人所攻治者，其必早於後代使用之貞人也，嚴書圖十七頁三二即有已預刻「干支卜王」之版，胛骨，至武乙世方用也。（卜王辭爲預刻，乃董先生之說，眞灼見也。）如有鑽鑿與契辭時代不符之例，更可見異代使用之眞象矣。

又如一版前代已半用之，尚有餘地，爲節撙起見，取出使用其餘部份，亦或可行。故亦可發生同版異代之辭也。

異代之人有同名者。蓋殷世方國庶邦多，人因地而名而氏。故同一沚前有戠後有或。此名之字異，尚可分辨。又如畢之二體[illegible]，[illegible]，異代同名，亦在字上分之。他如望乘，余近研究武丁一世之史蹟，即見自般之外尚有稱「般」者。雀在武丁世，又亦見于四期，此名同字亦同，而實異也。如認兩人爲一人，則所斷之代必誤矣。

稱謂異代相同，最費心思，因稱謂爲斷代主要工具之一。自有契文研究，即有稱謂斷代之術。殷人名用十干，故同干之稱必多。隔代尚可以且、妣等分之，又可用名號如象甲，雍己辨之。惟父母兄者多，隔代同名必亦衆矣。前此人多以貞人限于一時間，故凡見父甲、父辛、父乙必曰一期，貞人爲扶，扶即一期。此論斷之中暗藏一假說，曰「凡稱父者必是前王」，無奈貞人供奉二代者有之。稱父者又未必定是前王，則據之斷代，必更紊亂矣。嚴氏於此分晰甚詳，製有父母兄子四表，其中或有未盡列者，惟已較以前所有之表更爲準確矣。吾人亦必須了解，前世王兄有兄某（例如壬），後世未必必有父壬之記載。卜辭有卜則記，無卜則無記，故不會前後照應也。一貞人奉職兩代則先之兄戊乃後之父戊矣。父、兄皆出一貞人，而又非兩人也。如行供職祖甲廩辛二世。其兄己，父己皆是祖己也。

四　其他意見

讀嚴著既竟，其中有兩點余以爲可商者，姑說之以備參考。

一、嚴書一五二～四等頁論父丙彙及曆譜。因　嚴兄認此父丙爲武乙世者，又格於董譜武乙王年只有四年，故惟有武乙二年干支勉强可合，只須加一閏月，即可完全相符，因計算當年合天之閏，不料計算之閏，當在十月，於事無補。故移閏於「年中」置於是年正月，以合契辭。余爲之不安。蓋武乙二年，以四分術置閏，當在十二月，董之十三月乃當閏之閏，非純係舊派之閏也。余近研究知四分術所置之閏，後于合天之閏兩個月，故一沬計得十月，十分準確，移至正月，即難解說。蓋補閏恆遲於當閏，今提早而閏，似無充分之理由也。

查二月丁亥，四月乙亥，七月癸巳合文武丁三年。

文丁三年二月壬戌朔，丁亥二十六日

四月辛酉朔，乙亥十五日

七月庚寅朔，癸巳四日

故此辭可能㈠入之文武丁之世，則父丙乃武己之兄輩。

㈡如必爲武乙時而又有他證，則董譜之武乙王年必當下延。

究竟如何余不知其確，錄之供嚴兄共研之。

二、嚴書序十三頁之圖，有盤庚小辛之說，余有疑焉。蓋自契文發現以來，迄未有確證知其中龜甲有小乙之物，更無論前王矣。書契刻契如㱿，爭，者始于武丁，似易爲人接受，提前之爲盤庚，心理上不免格格也。

余以爲此版正反之字皆端正，如武丁世之字體。署名之[illegible]似亦爲貞人之名，不記見於何書。金器父子庚觚有此文在。正面文字「至于丁」「于兄庚」之「庚」大有疑。其與[illegible]有關。

如以兄庚爲祖庚，丁指武丁或父丁，說來平易。

如以庚爲武丁兄，丁爲且丁，即嫌勉强。

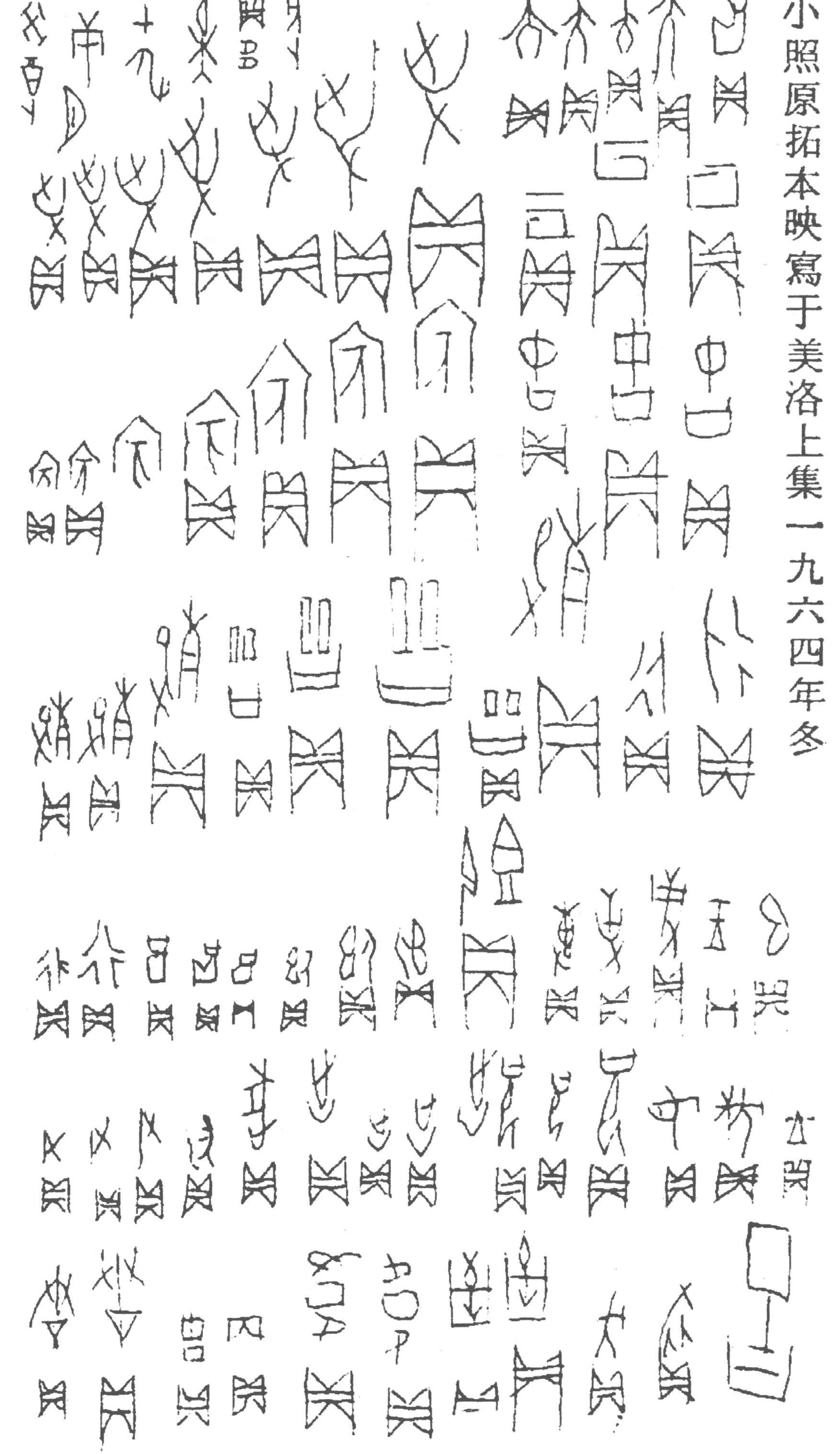
若更以庚爲盤庚，益加困難，非有旁證不可。況盤庚陽甲小辛小乙是否四兄弟有問題。武丁四父，三父，未必定是前王。武丁稱象甲不曰父甲亦可啓疑。「至于丁」一辭與「至于甲」「至于庚」相類，皆祠堂之稱。從未有「至于丁」以丁指且丁者。故余仍取保守想法，以此爲二期之辭，兄庚指且庚，丁則可能爲武丁，亦可能爲「子丁」，亦可能爲「丁宗」。觀乎文武丁之「㞢于丁」乃指「子丁」，故「丁」爲誰何，不能斷言也。

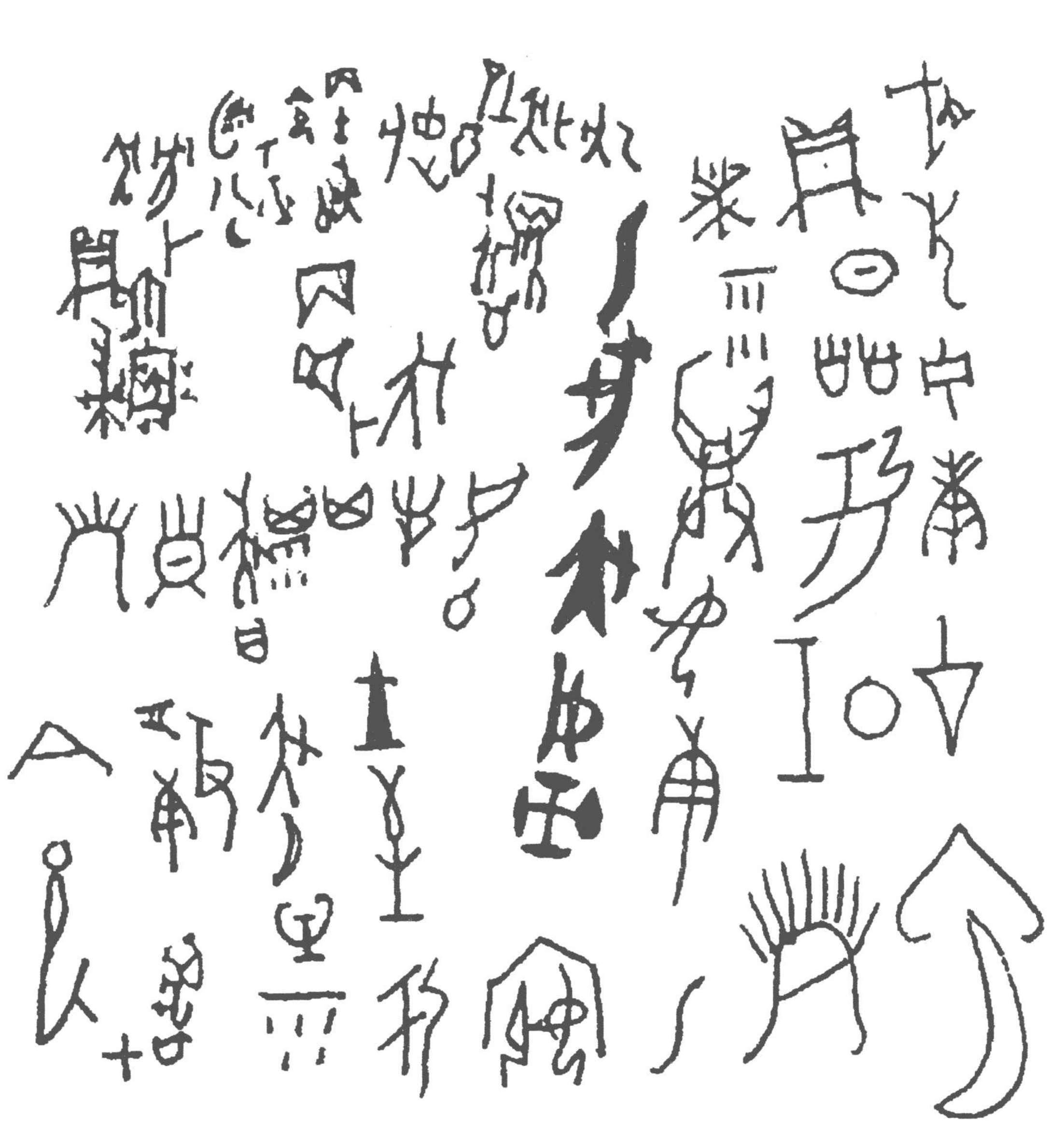
結語

嚴著乃對甲骨研究近來發生之病症下藥也。夫藥不瞑眩，厥疾不瘳，故一而再，再而三，望研究之人能三思之焉。甲骨之學基根有二，一曰文字，二曰曆法，皆爲其本。研究殷代文質以補古史之未足，其一用也。莘莘學子，望勿因用而忽略根本之學問基礎，治學之實事求是之態度，則未來幸甚矣。

圖一　契字大小之例　契文大字如右下角之⿴字，小者如左上癸酉卜等字。各貞人之字大小不一，由大而小莫不皆有。可攷寫者與貞卜人不是一人。圖中未示筆劃粗細，在原契中有圓潤大字，細削大字，似爲極硬之金屬所刻。字之工整與否亦不一律。

大小照原拓本映寫于美洛上集一九六四年冬





圖二　扶辭的字體

（原載《中國文字》新八期，一九八三年）

安陽發掘

——簡介李濟著「安陽」

●陳仲玉

田野考古方法在民國初年由若干西方科學家的引進之後，很快地就與中國傳統的考古學結合，使中國考古學呈現了新的面貌。而首次完全由中國政府的學術機構所主持的田野考古發掘工作，就是中央研究院歷史語言研究所（史語所）考古組在河南省安陽縣境內的殷虛發掘。這項在當時即受到國際學術界所矚目的考古發掘工作，始於民國十七年十月，一直到二十六年春季，前後共進行了十五次。但是因爲遺址範圍廣大，工作並沒做完，即被發生於該年的蘆溝橋事變後抗日戰爭全面爆發所中斷。以後沒有再回安陽工作的機會。即使如此，安陽發掘的成果乃爲中國的現代考古學奠定了堅强的基礎，也樹立了一處田野工作的楷模。因而也把中國的考古學提高到國際學術水準之上。

自始領導着安陽殷虛發掘的李濟博士，他在生前所著的最後一本專書，就是他用英文寫的〔安陽〕（AN YANG）。此書原名又稱〔安陽發掘〕（ANYANG EXCAVATION），由美國華盛頓大學出版部（University of Washington Press, Seattle）於一九七七年出版發行。全書正文有二六四頁，彩色圖版二十版，外加註釋、中英文名詞對照表和名詞索引等，共三百餘頁。此書誠如美國羅傑士（Millard B. Rogers）教授在序文中所說的；有關安陽發掘對於中國商代史研究的貢獻，李濟博士是最具權威的，因此由他來爲這段學術史做次簡述也是最恰當不過的。該書中的正文部分分成十五章：

[illegible]

1.甲骨文的發現和受到普遍的重視：甲骨文的發現是在清光緒二十五年（一八九九）。其時很引起史學界的重視，那是有它一段時代的背景。中國學術界對古文學的探討，自漢代以來曾經有過一段很長的讀「經」階段。許慎〔說文〕一書被奉爲圭臬有一千多年。但是，到了清代乾嘉年間，從閻若璩發〔古文尚書〕爲僞作的開始，興起了考據學的風氣。考據學者們多能應用自北宋以來的金石學研究材料。由這二方面的考查，在甲骨文發現的前夕，中國學術界早就瀰漫着對古史的存疑和要找尋新材料的氣氛。就在這時候，甲骨文發現了。它所給人的刺激是可想而知的。因此，也就很快引起了學術界的重視。

2.甲骨文的探查時期：所謂探查時期是指從光緒二十五年甲骨文的發現到民國十七年史語所正式發掘安陽的這段期間。這期間的事情要分三個方面來說：①私掘：甲骨文材料由原來中藥鋪中的「龍骨」或是小販的「刀尖藥」，一躍而成爲每字「兩銀子的寶」。自然地，私人的挖「寶」和古董商學者們的探「寶」，在學術界引起了一陣浪潮。可知的較大規模的私掘有九次之多。②收集：私挖的出土物自然是流入收藏家之手。其中外國人的收集還佔相當重要的部份。由於收集的需要，學者們急於探查甲骨文確實的出土地點。③編著：依董作賓先生的甲骨年表的記載，民

小屯村二次發掘情景李濟（左）董作賓（中）主持發掘

國十七年以前，有關甲骨文的著作，包括中文、日文和多種歐洲文學的，有一百一十種之多。劉鶚的「鐵雲藏龜」是第一本。但貢獻最大的要算孫詒讓、羅振玉、王國維等人，他們爲甲骨學奠下了基礎。

3.二十世紀初葉，西方的地質學、古生物學和考古學的學者們在中國所表現的田野工作方法：這三個學門，自十九世紀開始，在西方已經都有了相當的基礎。二十世紀初葉，爲了廣泛地找尋材料，遠東的中國自然是他們的一處主要的目標。傳播這些田野工作的人中有學者與傳教士。民國之建立，也使得中國知識份子更積極地重視自己國家走向科學化的途徑。民國五年，丁文江先生籌組地質調查所就是一個開始。該所延攬的西方專家很多，他們也做了許多田野工作，例如葛拉普（A. W. Grabau）的研究中國地質與古生物，葛氏並有人類起源於西藏說。安特生（J. G. Andersson）的發現仰韶文化及其發掘周口店和「北京人」的發現。步達生與魏登瑞等人之集其一生精力研究「北京人」化石。德日進（Teilhard de Chardin）之調查中國西北與內蒙古諸地。他們對中國近代科學的建立都有相當的貢獻。其實，在他們的工作之中已經有中國的知識份子參與或作密切的連繫。

4.早期的安陽發掘：民國十七年五月，傅斯年先生籌備成立中央研究院歷史語言研究所。傅先生即時定下了該所的工作要旨，其中最重要的一點就是找尋地下的史料。是年八月派董作賓先生前往安陽調查甲骨文出土地。經過董先生首次的調查與試掘，認爲安陽地區的地下蘊藏着豐富的甲骨文資料。這時李先生正好剛回國不久，並且已經在山西夏縣的西陰村發掘過史前的遺址。傅先生邀請李先生到史語所主持考古組，並且領導發掘安陽。經過董、李兩位在安陽的第二次發掘，對於安陽地下的情形更爲瞭解。遺址的全面測量，局部「地毯式」的挖掘，地層各層位間的觀察，器物出土情形的記錄與保存等方法的改進，逐漸走向科學化的途徑。民國二十年三月，安陽第四次發掘，將小屯分區，認清了版築土與夯土台的現象。直到民國二十三年四月，安陽第九次的發掘工作結束，工作的重點都放在殷代建築基址的找尋。同時，梁思永先生在後岡發現了仰韶、龍山與殷商在地層中之重疊關係。

在小屯(H127)坑發掘甲骨的情形右前爲李濟，左中是高去尋

5.王室陵墓的發現與系統的發掘：在民國二十二年，曾經有安陽當地的人私掘到三件青銅大方盉，地點是在小屯村的西北方，即侯家莊西北岡。所以，民國二十三年由梁思永先生所領導的安陽第十次發掘團，在聽到消息之後，即時將工作地點改在該地點發掘。於是發現了侯家莊殷代王室墓地區。到民國二十四年在那裏共發掘了三次。開掘墓葬一、二六七座：內一、二三二座是屬於殷商時代的，其中包括有大墓十座，一座未完成的大墓方坑，和一、二二一座附屬於大墓的小墓。梁先生原想把侯家莊的工作暫停，以便把這批豐富的材料作個整理以及再做更進一步的計劃。不料中日戰爭爆發，再發掘的事始終未能如願。侯家莊的發掘在上古史上的貢獻，至少有六點：①版築在殷商建築所佔的地位。②由一個陵墓的經營（以第一〇〇四號大墓爲例）所看出的殷商時代的埋葬制度及對於人工組織的力量。③殺人殉葬的眞實性與它的規模。④物質文化之發展階段及統治階級之享受程度。⑤石雕的發現及裝飾藝術的成就。⑥青銅業的代表產品。

6.戰前在小屯村所作的最後田野工作：侯家莊的發掘暫停之後，史語所安陽發掘團在小屯還繼續工作了三季。這三季的工作大部分集中在小屯 B.C. 兩區。除了大片夯土台的發現、若干灰坑、水溝、墓葬和先殷文化層的遺跡也受到密切的重視。關是坑穴有：在地下爲居住或藏物的坑穴、圓形的竇穴、方形或是長方形的窖穴等。此外在這三季的重要發現是：①車的殉埋。②在地下窖存的大量甲骨。由材料與現象的觀察，也解決了以下的五個問題：①殺殉。②動物葬與植物葬。③陶器。④地下與地面居住情形的演變。⑤地面上建築基址的規模。

7.抗戰期間繼續著的安陽研究：戰爭一開始，國民政府就號召全民作長期的抗戰。首先將國寶與科學設備撤退到大後方。史語所因而也往西南遷移，歷經重慶、昆明和川西的李莊。在昆明的期間（民國二十七年九月至二十九年六月），安陽的材料決定分由三組繼續研究：梁先生整理侯家莊報告、董先生作甲骨文和殷曆譜的研究、李先生整理小屯陶器。這時吳定良先生主持史語所人類學的工作，着手研究安陽的人頭骨材料。二十九年遷四川南溪縣的李莊。各項工作都在繼續進行，只是梁思永先生在李莊得了肺結核症，中止了「侯家莊報告」的寫作。董先生的「殷曆譜」就是在那時完成的。李先生也完成了他的「殷墟陶器圖錄」的編著。

一〇〇一大墓南墓道探坑中掘出的二組人頭骨

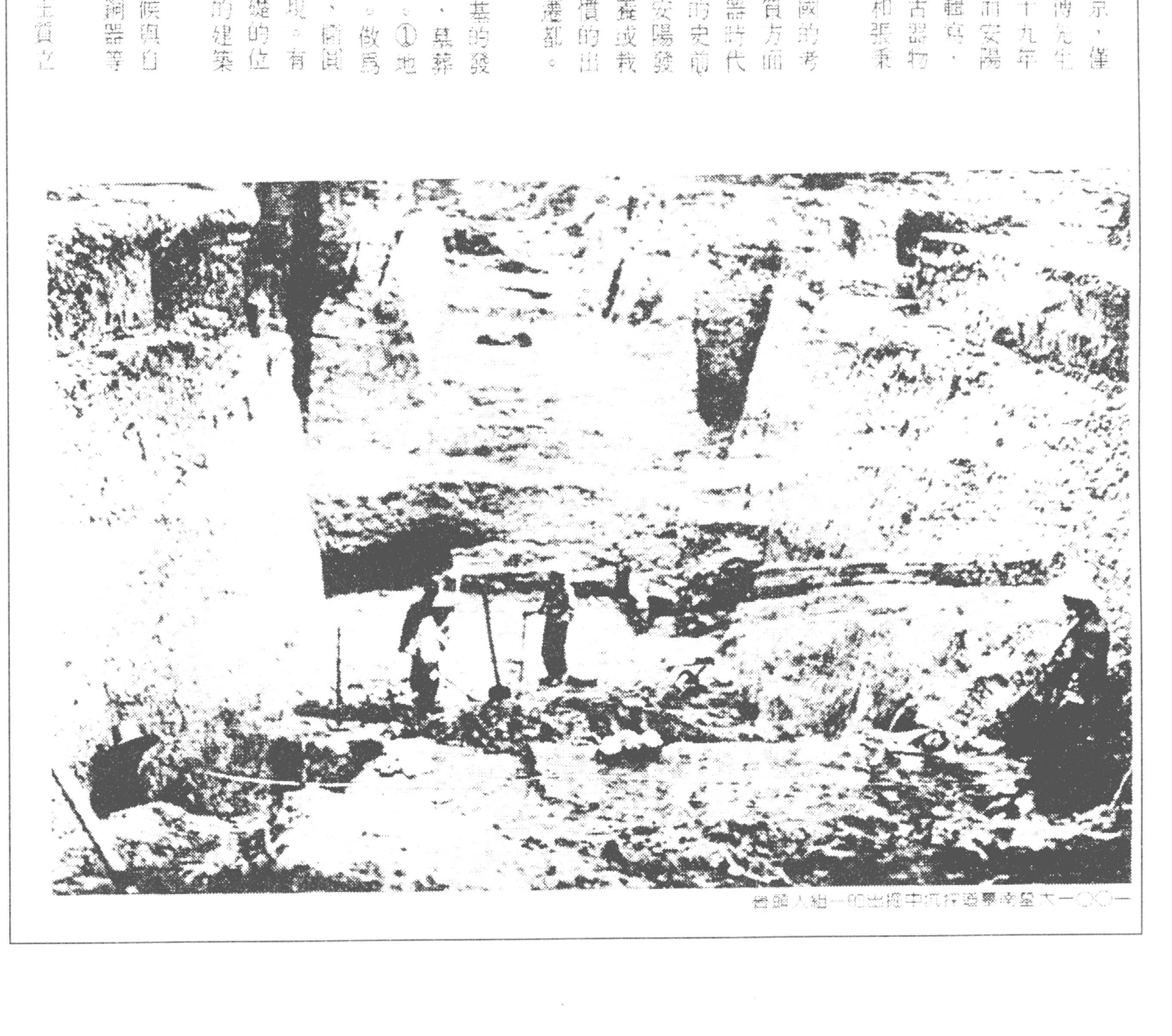
8.戰後的學術工作與安陽的研究：戰後，史語所遷回南京，僅有二年短暫的時間。接着在民國三十七年冬天遷來臺灣。傅先生接長臺灣大學，請李先生在臺大設立考古人類學系。自三十九年，傅先生逝世之後，史語所的人事雖然也有若干變動。然而安陽發掘的研究工作繼續不斷。「侯家莊報告」由高去尋先生輯補，「小屯基址與墓葬」由石璋如先生編著，李先生還是專於古器物的研究。甲骨文的研究部分，在董先生逝世後，由屈萬里和張秉權兩位先生繼續。各部分的工作都有很豐富的著作出版。

9.史前的遺跡與中國古史中的傳說：近六十年來，在中國的考古收獲，這自「北京人」與「藍田人」的發現。兩者在體質方面都顯示出了與現代蒙古種人之間有相似之處。自後的中石器時代、新石器時代的仰韶文化和龍山文化等的發現，也使中國的史前史添加了許多資料，這一章是將若干史前的遺物遺跡加上安陽發掘的材料，來談古史中的幾個問題。例如：①動植物的畜養或栽培的起源。②彩陶紋飾中之痕跡與毛筆之使用。③骨卜習慣的出現。④古史四大人物：黃帝、嫘祖、稷、大禹。⑤盤庚之遷都。⑥中國文字最早出現的時代……等問題。

10建築的遺存與地上建築的復原：版築做牆與夯土做房基的發明，早於商代在安陽建都的時代。在安陽所見夯土的情形，墓葬方面在第五章敍述。這章是敍述在小屯所發現的建築遺存。①地面下的構築。依石璋如先生的研究，可分居住與儲藏兩類。做爲居住的窖穴比較大，用於儲藏的坑穴較小。依形狀又有圓、橢圓和長方形等多種。共六百餘處。坑內並有夯土或器物的出現。有的還屬於黑陶文化的時代。②石先生也將地面夯土台和柱礎的位置作地面上建築的復原。有單層長排的大房屋，也有雙層的建築，更可能有只作祭壇用的台基。

11經濟資源和器物：①殷商農業與其他天然資源。②氣候與自然環境。③手工業和貿易：內包括石器、陶器、骨器、青銅器等工業。

12殷商的裝飾藝術：①包括陶器上的、骨器雕刻的、石玉質立體雕刻的、青銅器上的，各種裝飾藝術。②裝飾藝術的原始和若干特質。


一〇〇一大墓南墓道探坑中掘出的一組人頭骨

13諡系、貞人和親屬各方面：①商王室的特性：(a)自上亥以後是以天干作諡號。(b)早期的王位繼承是行兄終弟及或傳子，但不傳女。(c)凡王和后，其子有繼統王位者，均受祀於宗廟。②商王朝有如聯邦式的統治，其下有二百多個氏族，氏族各有食邑的族徽。向王室有進貢與服軍役等的義務。③貞卜對商王的政治統治有很重要的影響。因而，實行貞卜的貞人就成了相當重要的角色。董先生將甲骨文材料分成五期，每期都有若干貞人的名字出現。大凡牲祭、伐邦、狩獵、出遊、卜日、財富、求年、疾病、生死、養育、解夢、構築等等都要貞卜。④由於商代用干支記日，因而有些學者把這情形與巴比倫、印度的曆法做了若干比較研究。⑤甲骨文中只有祖父母、父母、兄三長輩的稱呼，而無叔伯、姑姨、弟、侄、姪等的稱呼。因而也使學者們對於商代親屬社會的許多問題引起興趣與討論。

14祖先與神祇的崇拜：殷人崇拜鬼神。商王既以天干爲諡號，又以干支記日，因而每以某日的干支配祭與此日有關的祖先。如帶「甲」之日要輪流祭以「甲」爲諡的某祖先。祭典又分成形、翌、祭、壹、劦五種。往往祭完一輪要一年的時間，所以到帝乙以後的甲骨文材料中「年」常用「祀」字代替。這五種祭典的細節也不相同。形主要奏樂及奠酒。翌要有舞和酒。祭用肉。壹用穀類。劦的情況不很清楚，也可能是每年一次的綜合大祭。除了祭祀祖先之外，殷人還祭如四方、山川等的各種神祇。祭典時對供品還有不同的處置；例如：燎祭時供品要放在火中燒烤，沈祭時供品是泡在水裏，薶祭則要把供品埋在土裏。除此之外，殺殉也是，祭祀的一種，在殷代大墓中是很普遍的現象。

15殷人的體質：從安陽的發掘中，到目前還保存着三九八個殷代殉葬坑中的人頭骨。經過楊希枚先生將這批材料與蝦夷人、保伐利亞人、巴黎人、拿瓜達人和美國人體質的比較研究。這組安陽人頭骨可以分成五個亞組：①典型的蒙古種人，②海洋性尼格羅種人、③高加索種人、④愛斯基摩人、⑤小型蒙古種人。如果就這個研究成果來說，在殷商時代的中國人種似乎已經混合的很複雜。然而，殷人常有對外的戰爭。譬如：武丁時代曾長年對付西北的吉方、土方，帝辛時的征伐東夷，甲骨文中常有記載。因此，這批出自侯家莊殉葬坑中的人頭骨材料所呈現的現象並不能解決殷人體質上的問題。

由這十五章的設計，可以看出這本書所涉及的問題是相當的廣泛。全書似乎又可分成兩大部份：前八章是敍述安陽發掘的背景和經過，以及在大戰前後所遇到的研究環境。後七章是說安陽發掘與中國上古史及古史傳說的關係，以及至目前在各方面的研究成果。此書至少有以下幾個特點：

1.在安陽發掘之前的一段時期，正是西方科學對中國大量輸入與中國知識份子對世局的認識與覺醒的時候。李先生學成回國正適逢其時。那時在中國作科學工作的中外學者，他都有親身接觸過的經驗。對於這段歷史背景的敍述與分析很詳盡透徹。

2.有關田野工作，雖然只是簡略的敍述，而非正式的報告寫法。但是，對於工作的目標與重點，以及每次工作在方法上的改進和若干重要的細節問題，都交待清楚。一般讀者可以免去閱讀長篇的報告而得到實際概況的瞭解。

3.史語所考古組的設立至今已五十餘年。李先生自始未曾離開他的工作崗位，自安陽工作的開始，歷經抗戰、戰後的復員和遷臺幾段艱苦的歷程。有關這段經過，不啻是有關史語所考古組的一篇回憶錄。

4.安陽發掘就整個中國考古學來說，僅是一個點的工作。但經李先生的敍述，將它與其他史前、商、周各遺址的連繫。並且，也與傳說中的若干古史作印證。安陽的這個點，也成了古史研究中的一個很重要的轉捩點。安陽發掘的重要性也就更顯明了。

5.田野工作之後的戰亂與搬遷，器物的損失在所難免。但大部分重要的器物至今仍能完好保存。李先生在戰前即著手陶器的整理。近年來更致力於殷商青銅器的研究，並建立了中國古器物學

的體系。其重要的研究成果，在本書也有頗詳細的敍述。

6.因爲安陽田野工作之後距今已經四十餘年。此書第十章以後，也將這多年來研究的成果作個總述，這一點是很成功的。尤其，此書是用英文著述，將之提供給廣大的國際學者。不但使之瞭解安陽的發掘，更使之瞭解近代中國考古學是如何地起步和它的成長。

由於有關考古學通論性的論著在國內甚是少見。專門性的考古報告又不能普及於一般讀者，國人大多僅聞及若干考古學工作的消息，對於研究的內容及其在學術上的成果，往往諱莫如深。李濟先生著的『安陽』，又爲考古學著作指向普及化開一道路。可惜的是，李先生在寫成這本英文書之後，還不及再爲國內讀者著述有關安陽發掘總論的專書就逝世了。如今，不但安陽殷虛的田野發掘報告還未完成；即是由安陽殷虛的研究所連帶引發的許多問題，也尚留有很大的研究領域，有待學者們的繼續努力。故而特爲簡介如上。

（原載《故宮文物月刊》第一卷三期，一九八三年）

《四方之极》一书的简介

《四方之极》（“The pivot of the Four Quarters”）是美国芝加哥大学历史地理学家惠特利（Paul Wheatley）于七十年代初期出版的一部著作。该书对于中国古代城市（并联系世界其他古老文明地区的城市）的起源问题，进行了详细的考察，在英语国家中具有较大影响。加州的埃伯哈德（W·Eberhard）在书评中称此书“站在了对早期中国历史和社会研究的最前列。”①加拿大的赛明思（M·S·Samuels）在书评中也认为，此书与晚些时候出版的《中国王朝时代晚期的城市》，堪称一对相互补充的代表性著作②。惠特利此书用不少篇幅分析了商周时期人们的思想观念，以及它是如何渗透并影响了城市现象的演进。“四方之极”一词，出自《诗经·商颂》“商邑翼翼，四方之极”。“极”在这里的含义是“中枢”，英译为pivot。西方的中枢，在本书中被认为是城市在古代人们的观念中以及社会实体中的一种本质。他认为这即是中国古代城市的特点，也是世界古代城市的普遍特点。惠特利在全书的序言中表示，其研究目标是要探索世界历史范围内的“超文化”（cross-cultural）现象，即凌架于不同文明之上的共通现象，要“抽取和分析那些在其他文明中也存在的城市形式所体现的超文化规律。”西方学者在研究城市问题时多偏爱西方和近代，而缺乏对古代东方的研究。他们关于城市历史发展的理论，可能是不够全面的。他表示他的这本著作就是要在这方面予以纠正。

惠特利在序言中还对自己的方法论作了说明：过去的学者在研究中国城市问题时主要采用人类学的方法，他自己则要侧重于社会科学家的方法，此即把主要着眼点直接放在社会结构、社会组织、社会制度等宏观现象上。在逻辑方面，他自称采用的是假设推演法，即在材料不完备的情况下，用假设及逻辑推理来填补缺环。由于中国关于城市起源的材料不如两河流域、埃及、中美（包括秘鲁北部的安底斯文化）的丰富，所以研究中国城市起源，除了利用考古材料直接的证据之外，还要利用间接证据，后者既包括后代的历史文献，也包括民间传说和神话。《四方之极》分两大部分、五章，现简要介绍如下。

（一）第一大部分是叙述商周时期城市起源、发展的历史过程，对各种历史素材进行归纳，而以对社会进行整体研究为背景。

其第一章否定了那种认为中国城市起源是受苏美尔等外来文化影响的观点，指出在公元前两千年这样远距离的“技术流动”是不可能的，而且在没有物质基础，没有出现必要的社会矛盾的情况下，人们不会凭道听途说去建造城市。他主张，中国城市是以华北为中心独立起源的。象华北那样，拥有早期城市形态的地区还有美索布达米亚、埃及、印度河流域、中美洲、中央安底斯以及尼日利亚西南部的尤如巴。这些地区为研究中国城市的起源提供了比较对象。

关于前城市时期，他赞同张光直的观点，认为仰韶时期的半地穴房屋村落是间断使用的，因为土地要轮换耕种，聚落需随土地的轮换而迁徙。到了龙山时期，村落永久化，发明了井，村子变大，有的村落还修了围墙。这是因为在农业中有了整田的技术，土地的轮换改为作物品种的轮种。

进入公元前两千年，中国挑起了文明的担子，开始了有城市社会的历史。城市起源的中心地区在洛阳——安阳一线，商代城市的主要居住者是王族、巫师、手工业者和卫兵。城市的中心建筑分为贵族住所、王室宗庙和礼仪中心三类，而周围有农村环绕。这些就是中国最早城市的典型形态，其中惠特利最重视礼仪中心，他认为商朝的高级聚落中，必有礼仪中心的存在。整个商朝可能有几个独立的礼仪中心相互竞争。

关于城市的政治结构，惠特利引用韦伯（Max Weber）的观点，认为商朝是宗法继承制的政治体制，在国王的观念中，国事即家事，国家的政府结构与王族的宗法结构是合一的。王族宗庙具有政治权威，关于经济结构，商代技术上的进步主要体现在奢侈品的生产上，这说明了阶级分化的影响。经济结构的变化是在上层及中心区为命令经济，存在聚集劳动，下层则仍保留前城市时期的互惠经济。

惠特利在第二章认为，宗法继承关系到东周开始转变为任人以能的政治关系，即官僚政治。方国之间最初维系以礼，后来转变为约法关系。自公元前八世纪中叶，城邦国家开始向地域国家转变。出现了地方专业化手工业和商用钱财买取政治地位的新现象。东周开始出现地主—佃户的契约关系（惠特利认为真正的封建制离不开契约关系）。自由土地所有者的出现形成土地市场，从而导致大土地所有者与无地农民的对立。接着，他例举王城、侯马古城、邯郸、燕下都、临淄、曲阜等十余座古城遗址详加说明之后归纳说，第一是周代城市化的扩展，西到渭河流域，东达今山东地区，南到汉水、长江流域。周人用封邑的办法拓展领土，一部分封邑逐渐具备了组织周围地域的特殊功能，而不仅仅是劳动力的居住地，这样的封邑便演化为城市。到东周时期，城市化的区域不再扩大，城市的发展主要表现在其自身的结构与规模上。第二周代城市出现了不同的等级，但任何等级的城市中都有坛庙。它们普遍具有农业的和军事的职能，其内在联系是以军事力量迫使农民做贡纳。周代没有庄园式经济，不少农民住在城里。除部分城市曾向商业化发展而外，一般城市的工商业很不发达。在商业化的城市市场中，人们不但进行财富交换，也进行思想交换，有助于社会文化的发展。

又，按西方城市理论家韦伯认为，城市起源的典型过程是先出现要塞，然后在要塞外面出现市场，最后两者合为城市。惠特利认为这理论不适合中国，因为古代中国的工商业在社会中的比重很小，缺乏组织，构不成独立社会力量。韦伯的另一个错误是忽视了礼仪中心的作用。早期城市在所有的国家都是“宇宙的中枢”，统治者在这里将天与地、人与神调和起来，形成中心权威。这一点在中国历史中尤为重要，不了解它，就不能认识中国城市的起源。同时，对于东周时期出现的县城，惠特利认为是一个新型的非宗法制的行政工具。创立县城最早的国家是位于长江中游的楚，那里的社会特点、亲属关系最适合于县的发展。北方不同，例如晋的县曾一度退化到家族分封的性质。第二章最后谈到周代城市均为正方向的方形或矩形，城内建筑也是正方向，重要的建筑都座落在高台之上。手工业作坊零乱地散布在城市内外，没有形成中心。这种表面分散的手工业实质上由统治者一人所控制，正是“再分配”经济制度的反映。有些文献将周城描绘的整齐壮丽，这是将其理想化了。关于周代城市的人口规模和建筑密度，惠特利认为是研究的缺环，这方面不如对两河流域古代城市的研究。

（二）在第二大部分中，惠特利对自己的核心思想，即礼仪中心在城市起源中的首要作用，进行了详细的论证，并就这一命题进行了全世界范围的比较研究。首先他指出，从中国、埃及、两河流域、印度河流域、中美洲、中央安底斯和尼日利亚的尤如巴的城市起源来看，城市不是从市场、堡垒，而是在礼仪中心的基础上最先兴起的。他引证大量材料，展示各个地区早期城市遗址（尤如巴的城市是现存的，其文化发展尚处于城市起源阶段）平面图，说明在每一地区的早期城市中，无一例外地存在礼仪中心。礼仪中心是社会、政治、经济以及家族的中心的创造者，同时又是宇宙、道德的象征。礼仪中心具有向心的聚合作用。古代巫师们的宗教权威与社会、经济权威是密切联系的。巨大的庙坛，精细的工艺，表现了宗教所能调动、驱使的社会力量。礼仪中心具有“再分配”的职能，这种职能不仅表现在经济上，也表现在权力上。没有“再分配”制度，就不会有城市。

惠特利承认，社会中不同阶层的分离，是城市起源的基本动力。过去有的学者强调环境，认为富绕地区拥有丰富的剩余产品，所以较早出现城市。惠特利认为他们忽视了是谁在控制剩余产品；过分强调环境，却忽视了社会的独立性。有的学者强调人口密度直接影响城市起源。惠特利感到，人口密度绝不是动因，而只是条件。人口密度取决于定居农业技术，与其研究人口，不如研究定居村落的模式，还有的学者强调技术的影响。惠特利指出，没有足够的材料说明技术进步对城市起源的影响。研究的焦点不应是技术本身，而应是在新技术影响下的新社会结构。总之，惠特利认为城市起源的直接动因是在社会组织、结构方面，进一步说，就是社会结构中的阶层化。那么，是什么领导了社会阶层化的完成呢？是宗教礼仪。在城市起源的前夜，礼仪中心是全社会的焦点。巫师是人类社会中第一批不劳而获者。宗教特权上添加了经济特权，在贡献的基础上诞生了“再分配”制度。宗教反映人们的思想，社会各方面的演变过程都要依据神来实现。没有庙坛就不能证实权威。所以城市围绕礼仪中心而起源。城市起源的过程是：分散型礼仪中心——集中型礼仪中心——城市。在城市起源的过程中，亦存在一个礼仪中心世俗化的过程，其表现是王权的兴起。军事首领——王夺取新土地，具有新土地上的权力，甚至拥有自己的巫师。在军事集团和宗教法令的支持下，王具有超越血亲道德的力量。他们是城市起源过程中强有力的催化剂。

城市起源是埃德姆斯（R·Adams）“文化进化”论的一部分，此“进化”主要表现在社会职能、行为者、社会组织三方面的分化，使这三者从血亲制度下解放出来，形成更高水平的社会整体。这种进化必须借助宗教力量，使之提供新的权威中心。随着社会的分化，宗教礼仪也发生了变化，其偶像、行为、组织、社会意义都出现了新的形式和内容。

惠特利在第四章中以韦伯和柴尔德（G·Childe）的观点作了比较研究。韦伯曾提出城市的五大特征（稳定性、市场城市、政府、联系性和公民自治权），惠特利认为这过分西方化和现代化，亦不够详细。柴尔德提出城市的十大特征（1、限定空间内的大量人口；2、专业手工业；3、再分配经济体制；4、大型公共建筑；5、丰富的社会阶层；6、使用文字；

---

① 见Journal of Asian Studies，1972年5月号，第643页。

② 见同上，1978年8月号。

7、占卜学；8、自然主义艺术；9、长途贸易；10、按居住区而不是按血亲划分的市民集团。）惠特利认为它失之僵化，缺乏关系和过程。他认为其中的第2、3、4、5、8条是正确的，第1、9条不适用。关于第10条，惠特利指出，根据埃德姆斯对两河流域的研究，在社会分化过程中原有的血亲关系并非完全消失，而是被结合到新结构中。例如在商代，族规中已出现不平等的因素，血缘单位间也出现了不平等的阶级式关系。社会组织呈金字塔结构。类似情况也出现在美索布达米亚。这种结构乃是从血缘关系向阶级关系发展的过渡阶段。

作为地理学家，惠特利强调了具有地理学特点的城市概念，即城市是建立以地域空间关系为基础的社会组织的工具。著名的中心地城市理论为这种城市观提供了有力的佐证。惠特利进一步指出城市有两种聚合作用：一为道德的聚合。一为技术的聚合。前者作用保守，后者具有进步意义。他强调，城市的职能是最重要的标准，而形态上的研究都是次要的。

在第五章中，惠特利提出了更高层次的命题，即古代城市的宇宙象征性。这一命题的基础是法国人伯泽路（Rend Berthelot）提出的“天体生物学”思想，即认为在远古时期，人们只能感到两种次序的存在，一个是日月星辰的起落，另一个是大地季节的循环与生物的荣枯。在古人的观念中，宇宙与人世这两种次序是密切关联的。在前城市时代，人们无法区别宇宙与自身。而在现代工业时代，人们对于宇宙和社会已有科学的认识和区分。所谓“天体生物学”的观念则位于二者中间，人们虽然注重宇宙与人世的联系，但感到不是直接的，需要巫师和一系列季节性礼仪活动作中间媒介。

中心城市被认为是最适于同苍天进行交流的“四方之极”（不是地理的，而是观念的、社会的），因而这样的城市便有了宇宙象征意义。惠特利认为在美索布达米亚，曾有过模仿星座的城市形态。在中国虽未发现这样的情况。但在中国古代城市规划思想中，也包含有宇宙象征的因素，如预测风水、正方向、轴向对称等。

（唐晓峰编译，齐慕实校）

（原載《中國史研究動態》1984年第2期）

评《甲骨文合集》

晁福林

《甲骨文合集》的出版是甲骨学史上的重大事件，是殷代史料编纂学的巨大成果。它对于殷商史的研究有着深远的影响。对于这部煌煌巨著的意义及其若干不足之处，本文试图提出一些粗浅看法，希望得到批评指正。

甲骨文是我们中华民族极可宝贵的文化遗产。它距今已有三千多年的历史，不仅数量繁多、内容丰富、文字成熟，是我国古代文化高度发展的标志，而且在同时期的古代世界文明中处于领先的地位。可以说，甲骨文是我们中华民族文化发展史上值得骄傲和自豪的瑰宝之一。整理和承继这一份文化遗产，使它在先秦史特别是殷商史的研究中、在古文字学的研究中发挥应有的作用．使它在向全世界介绍中国古代文明发展情况的时候发挥应有的作用，这是我国社会科学工作者义不容辞的光荣任务。《甲骨文合集》的出版是完成这项任务过程中的丰硕成果。

甲骨文最早是在一八九九年被学者认识的，八十多年来先后出土了十五万片之多。这本来是学术研究的一份宝贵资料，但是由于种种原因却使人们难于利用。首先是有相当一部分没有著录，有的还收藏在国外，人们很难见到。就从已经出版的八十多种甲骨著录图书的情况看，由于有的出版时间较早，有的印数很少，出版后不久就为人们罕见，现在不少成了善本、珍本，一般人无从问津。即使得见的一部分资料，也只窥一斑，不见全豹，大大限制了研究者的视野。其次，过去的甲骨著录图书，由于当时印刷和其它条件的限制，不少拓本漫漶不清，给释读带来很多困难；还有的在印刷时裁剪了拓本；有的混入了相当数量的伪片；也有些甲骨资料由于数易其主，数次墨拓，所以有相当数量的重片。这些都给使用已经著录的资料造成了不少的困难。《甲骨文合集》正是从这样两个方面解决了利用甲骨文资料的困难，这对于有关的学术研究真是功德无量的。

据统计关于甲骨实物的收藏我国有十二万多片，其中包括台湾香港的三万多片。在国外十余个国家收藏有两万多片。除了八十多种著录的图书以外，仅国内所藏的甲骨拓本就有二百七十多种，二十一万多片。要收集齐全这样繁富的资料，所需精力之巨是可以想见的。另外，校出重片的任务也同样是繁重而必要的，在数以十几万计的甲骨拓片中找出重片并比较优劣以决定取舍，这不仅是一项必须十分耐心而细致的工作，而且是一项学术性、技术性很强的工作。在编辑的过程中共校出一万四千多重片。仅此而言，也是一项了不起的成绩。

《合集》的编纂坚持了严肃的科学态度和一丝不苟的负责精神。在编纂时一百八十多种著录和数量众多的拓片，摹本和照片从书刊上剪下来，贴在专门印制的卡片上，并注明甲骨的正面、反面和骨臼等部分，然后进行校出重片和缀合的工作。此外，还要将同文卜辞集中一起，然后再进行选片。选片原则是，凡是大片字多的当然入选，小片字少甚至残文残字，只要在文字学历史学上具有一定的意义的一律入选。其有常见的辞句，但卜辞齐全或比较齐全的，亦予以选收。其辞句或文字常见，又残缺过甚者，则不予入选。实践表明，这个原则是完全正确的。它可以使研究者应用《合集》的资料时，能以较少的时间掌握有关的全部东西，并且能够没有遗珠之憾。在全部十五万多片甲骨资料中《合集》收录了四万一千九百五十六片，可以说这四万多片已经囊括了全部能够应用来进行学术研究的甲骨文资料。这四万多片仅占全部资材的四分之一，且不说收集鉴别这些资料的功夫，仅就“四分之一”这个数字看，它就已经省去了研究者占有资料时的大半辛劳。

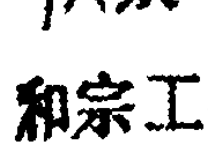
《合集》是编辑组的同志们花费了二十多年的心血奉献给祖国社会科学事业的卓越成果。他们高度的科学精神，严肃认真的工作态度，不计个人名利乐于为人作嫁的高尚风格，为社会科学工作者树立了榜样。《合集》出版，他们理所当然地应当受到感谢和尊敬！

二

《合集》是一部大型学术资料汇编，它对于学术研究做出了重大贡献，主要有以下几个方面。

首先，将数万片甲骨资料进行科学地分期、分类，然后编辑成书，这是甲骨学发展史上前无古人的事业。甲骨资料的分期是应用它进行殷商史研究的基础。关于分期问题，学术界有争论。《合集》采取了比较分歧不太大的董作宾先生的五期分类学说，并且将陈梦家先生指出的自组、子组和午组卜辞集中附在第一期卜辞的后面。这三组卜辞的字体和文例自有特色，对它的分期问题学者们争论很大。《合集》将它们集中一起分为甲、乙、丙三组，乙、丙两组依内容差异各分为两小组，为学者们的研究提供了方便，对于解决它的分期问题是很有好处的。

《合集》还将分期处理后的资料分为阶级和国家、社会生产、思想文化、其它等四大类和二十一个小类。这样分类比以前甲骨著录图书的分类不仅详细严密，而且更符合甲骨资料的实际内容，便于考查殷商时代政治、经济、文化等方面的情况、有些甲骨卜辞的含义，由于种种原因是很难通晓的。《合集》能准确地将它们分期分类，这说明编辑者已经对所有的甲骨资料进行了深入研究并弄清楚了其基本含义。尽管某些个别的甲骨材料的分期分类还有可以商榷之处，但就总的方面看来，《合集》的分期分类还是恰当的。这是我国甲骨学学术水平提高的一项重要标志。

其次，《合集》对于学术研究来说，不仅使大量的甲骨资料集中化、系统化，而且提供了许多前所未见的重要资料。这里可以举出几个例子。如《合集》8片：“……卜贞、众乍籍不丧。”这是一期卜辞，原为旅顺博物馆藏片，以前未见著录。众和众人是殷代主要的社会生产者之一，弄清其身分和社会地位，对于殷代社会性质的研究很有意义。“籍”是卜辞所载殷代的重要农业生产方式。关于众的甲骨资料虽然不少，但过去没有一条是将众和“籍”联系一起的材料。这次著录的“众乍籍不丧”揭示了众参加籍田的情况，反映了统治者对众在籍田时“丧”（逃亡）的担心。又如过去未见著录的《合集》19片：“……戊卜……众……宗工。”“宗工”是殷民身分的一种称呼，曾经见于《尚书·酒诰》。这条卜辞众和宗工并见，对于理解众的身分有重要启示。据统计《合集》新著录的关于众和众人的材料有七十多条。这些对考查众的身分这一重要问题是很珍贵的，再如，学者们很早就试图从甲骨资料中找出“金”字，一直未能如愿。《合集》36984片：“辛卯卜，在……贞，王其步重钨。”原骨藏山东省博物馆，未见著录。这里的“钨”字是甲骨资料里目前唯一见到的从金的字。“钨”表示象铜那样颜色的马匹。这说明当时社会上已经长期用铜，所以才能以铜色说明马匹颜色。这有助于从文字记载材料上说明殷代经济发展水平（关于“钨”字，胡厚宜、王宇信先生有考证，见《建国以来甲骨文研究》154—156页）。又如，过去著录中有兄丙至兄癸和兄甲，以天干为名的诸兄就缺兄乙，这次《合集》31953片和32729片著录了兄乙的卜辞，补上了这一缺环。过去著录的关于“多马”的职官有“多马亚”、“多马羌”，这次著录的《合集》5711片，5712片等又提到了“多马卫”，不仅使《京津》217片的残辞“贞于多……卫”的意思明确了，而且为职官研究提供了新资料。另外，关于先王先妣的卜辞是研究殷代世系和政治情况的重要材料，这次《合集》新著录了不少，如关于上甲的就有一百九十多条，祖乙的二百二十多条。闻名中外的殷墟妇好墓发现以后，研究者都十分关心有关妇好的卜辞，《合集》新著录的关于妇好的卜辞有七十多条。《合集》所提供的许多新资料对于解决殷商史的一些重要问题是很有意义的。

第三，甲骨断片的缀合是整理和应用甲骨资料的重要基础之一，许多著名的学者都曾进行过缀合工作。在前人缀合的基础上，《合集》又缀合了两千余版，不但数量多，而且质量也很高，有的还补充了前人缀合的不足，改正了某些错误。如《乙编》8132片“㞢任罘”，是一条意义不明的残辞。《殷虚文字缀合》242片：“徒㞢任嗇。”似乎完整，其实也是残辞。《合集》将《乙编》4269片、8132片和《殷虚文字缀合》242片重新缀合，列为《合集》3521片，这才使人们看清了这两条卜辞的庐山真面目：

徒㞢任嗇罘唐若。

徒㞢任嗇〔罘唐弗若〕。

任古通男，为殷代爵称。它和作地名的嗇连用，在卜辞中还只仅此一例，对于殷代官制的研究是一条重要材料。又如《殷虚文字缀合》252片266片和《乙编》6481片都有残辞“ 冥”， 的身分不明。经过重新缀合后的《合集》14035片作：

35313，前者为三期，后者为四期。《合集》41475重22421，前者为四期，后者为午组。这种同片不同期的情况，我所见到的有七十多片。可以肯定其中有一半的分期搞错了。校出以后可以订正其分期之误。其次，校出重片可以免除使用者的不必要的重复劳动。我所见到的同期重片一期有一百一十多片，二期、四期各有十几片，五期有六片。如果加上摹本与拓本的重片，其数量还要多些。再次，通过校出摹本与拓本的重片，可以避免某些著录的摹本错误的继续流传。如《合集》摹本40839片：“丁亥卜□，余令口方其至。”卜辞有“小臣口”（合集27884）和名口者（合集32906，21070等）的记载，但“口方”则仅此片所见。“口”是否为方国名尚有疑问。《合集》拓本20478片与该片重，细审拓片，知摹本的“口”为“曰”之缺摹，辞当为“丁亥卜□，余令曰：方其至。”这样就否定了“口方”的存在。另外，通过校出摹本的重片还可以提供释读拓片的很好的借鉴。如《京津》4393片，拓本漫漶不清，很难辨认。《南北·坊》4.411为该片摹本，正确释读了该片。比较二者，可见摹写的准确与洞察力。《合集》收《京津》4393片为32904片，但又收《南北·坊》4.411片为41534片。象这类情况应保存拓本，去掉摹本，但应在释文中说明，以便读者。我所见到的摹本与拓本的重片有一百二十多片，也有个别的摹本与摹本的重片。校出重片的意义主要是以上几个方面。当然，校出重片并非轻而易举的事情。有些重片的形状并不一样，这因为不少重片中有一片已缀合到别版，该片仍单列为一版；也有的重片是一片为另一片的有字部分或某一部分；还有的重片是其中一片已经收为某片的反面或骨臼图版，而该片还单列。另外，有些重片由于拓摹技术不同，施墨深浅各异，不细心对照，也很难发现。尽管有这些困难，但这项有意义的工作还是应当做得更好些。

第二，某些卜辞的类别可以进一步考虑，安排得更恰当。如关于王族、多子族的卜辞，《合集》将其一部分列入鬼神崇拜类（合集14912至14924），另一部分列入军队战争类（合集33004、33017、33133等）。王族、多子族殷代社会中很有影响的社会势力集团。这部分关于王族、多子族的卜辞似应集中起来列入平民或贵族类比较合适。又如《合集》177、4055、14526三片为同文卜辞，主要内容是关于武丁时期著名的贵族𡚸与臭的占卜，似应排在一起列入贵族类，不要象现在这样分在三个类别里。

第三，某些卜辞的分期值得商榷。如《合集》39577片：“己亥贞，其索于祖乙。”无贞人名、干支后无卜字，只有“干支贞”的前辞形式，这是后期卜辞的前辞文例特征，并且索祭均见于四期卜辞，如《合集》32150、32884、34579、34580、35245等片。因此《合集》39577应列入四期，不应象现在这样为一期。又如《合集》2100“乙亥卜贞，㫚隹□。”□为横书，而一期均为 ，作竖排。这条卜辞当列入均为横书的二期，不应属一期。又如《合集》8681、8988片为正规的一期卜辞，但其内容，辞例，字体均与自组的20489个、20184片完全一致，这两片应列入自组。

作为一部集大成的甲骨著录图书，《甲骨文合集》还要出续集、释文、索引等，我们预祝这些工作早日胜利完成，为祖国的社会科学事业的繁荣做出更大贡献。

（原載《中國史研究》1985年第2期）

〔贞〕，子□冥幼。

即称子某，可知她是殷王之女而嫁于□地者，和卜辞中曾贞问其分娩事情的子目、子□等相同。过去认为子某为殷王的儿子，后来有的学者指出子某还包括某些与殷王同姓的大家族的族长。我认为子某的范围还要大些，包括了殷王之女嫁于外地者。据统计《合集》新著录的关于“子某”的材料就有六十多条。这些材料对于研究殷代的多子族是很有用处的。

第四，《合集》通过甲骨材料的分类和同文卜辞的集中编排，以及补充骨臼和反面卜辞，不仅使许多卜辞的意义更加完整和明确了，而且便于某些甲骨文字的考释。如甲骨文□字，历来混同于动词“往”。《合集》将有关□字的材料编在第一期奴隶和平民类，表明编者认为这个字不是动词往字，而是一个表明奴婢身分的名词。这种编排是完全正确的。我认为它是徒字之异。甲骨文徒字作□，上部从土，下部从止。而□亦是从土从止，只是上下位置不同而已。甲骨文同一字的偏旁屡见位置不同之例，所以这个字亦当为徒字。它在卜辞中除表示步行和用作语气词外，还同于《小雅·车攻》“徒御不惊”的徒，指挽车和从事其它事务的奴仆。卜辞中的“侯虎徒”（合集3297）“子㹤徒”（合集6）指侯虎、子㹤拥有的徒；“王奎徒”（合集10372）“臭𠦬徒”（合集846、847）指王、名臭者捕获徒；“洲舟㞢徒”（合集849）指名洲者拥有的臣和徒；“□徒”（合集861）指对徒施用断腿的酷刑。这些材料对于研究殷代下层劳动群众的情况无疑是十分重要的。有些卜辞虽不是同文卜辞，但内容、文例相同，这些卜辞的集中编排，也十分有利于卜辞内容的理解。如《殷契遗珠》1007片，系残辞，原作：“贞……自𡆥……其……。”有些字残缺过甚，很难辨认。《合集》将它编为856片。把这片和其前后卜辞加以比较，可以考定这卜辞是“贞〔徒〕自𡆥〔不〕其〔得〕。”意为徒从囹圄中逃跑能否抓获。这种编排方法在《合集》中随处可见，说明了编者具有着认真、细致的态度。

总之，《合集》的编纂工作集思广益，精益求精，处处体现了对甲骨资料处理的准确性和科学性，并且充分考虑到了研究时的使用方便，说它是甲骨学与殷商史研究中的新的里程碑是毫不过分的。

三

从浩如烟海的拓本、照片和摹本中比较印证，勾沉索隐，编辑《合集》这样大型甲骨资料汇编，出现个别疏漏和值得改进的地方，应当说是在所难免的。《合集》的不足之处，据我看来有这样几点。

第一　在编辑时尽管校出了数以万计的重片，但是《合集》中仍有一定数量的重片，应当继续校出。这项工作对于甲骨资料的整理具有一定的意义。首先是通过校出重片可以更深入准确地解决某些甲骨资料的分期问题。如《合集》3257重23548；3260重23554。前者为一期，后者却为二期。《合集》18495重31140，前者为一期，后者为三期。《合集》31197重

讀《小屯南地甲骨》劄記

姚孝遂

一九七三年春，承蒙考古所諸領導及同志們的盛情，使我得以有機會參加小屯南地發掘工作，適逢約五千片甲骨出土的盛況。這是自一九三七年第十五次發掘結束以來，首次有這麼大批的有字甲骨的出土。我是除考古所諸同志以外，能夠首先接觸到這批全部資料的幸運者，當時，我有幸分享了考古所諸同志由於發現這批商代遺珍的歡樂。

對於田野考古發掘，我是門外漢。我實際上祇不過是前去向考古所的同志請教，想身臨其境地瞭解一下甲骨究竟是怎樣出土的，以及考察一下殷墟周圍的地理環境。

蹲在探坑內觀察成堆甲骨在幾千年前的埋藏情況，拂去塵土以辨識其字跡，這和在書齋中埋首故紙看看拓[illegible]其感受是不可同日而語的。早在發掘工地，我就被這些嶄新的資料及其豐富的內容所深深吸引。感覺到其中有一些或可以補充、或可以糾正我們過去對某些有關問題的准斷。偶有所獲，信筆書之，但一直未曾理董。

一九八一年秋，《小屯南地甲骨》（以下簡稱《屯南》）經過考古所諸同志長期辛勤的努力，其全部資料終於公布於世，這是甲骨學界值得慶幸的一件大事。我個人認爲，對這一彌足珍貴的資料作出進一步的研究和整理，這是一個再發掘的過程。在地下埋藏了幾千年之後，殷人的典册得以重見天日，是一大幸事，而深入探索其所反映的當時人們的社會生活和思想內容，使其珍貴的史料價值得到更好地發揮，更是甲骨學界一項長期的光榮而艱巨的任務。

賢者識其大者，不賢者識其小者。現謹將管見所及，擇其自視尚有新意者，作爲容老九十壽辰的獻禮。

次示

《屯南》七五一爲一大乇牛胛骨，除缺左下角外，其餘尚完整，現保存十六段卜辭，其中有三段卜辭爲

「乙酉ㄧ，又伐自□次示。」

「乙酉卜，又伐自□次示，叀乙巳。」

「乙酉卜，又伐自□次示，叀乙未。」

「次」字作□、□等形。于省吾先生《釋林》論其形體甚詳。謂：「次與涎乃古今字」，甲骨文「次」字「象以手拂液形」（三八二—三八七頁）

「次示」是前所未見的。「次示」即「它示」。

「次」，今字作「涎」，或體作湺，「次」與「它」古爲雙聲。

卜辭「它示」或作「柁示」，或作「鼓示」，張政烺先生在《釋它示》一文中曾詳加論列，並謂：「它示」乃指「直係先王（大示）以外的先王，即過去甲骨學家所稱旁係先王」（《古文字研究》第一輯）。

《屯南》七五一祭祀之先王有「大乙」、「大甲」、「祖乙」、「父乙」。「父乙」乃武丁之稱「小乙」，不能是文丁之稱「武乙」。如屬文丁卜辭，則「祖乙」當作「高祖乙」。大乙、祖乙、小乙均屬直係先王，「又伐自□次示」、「次示」即指大乙、大甲、祖乙，小乙以外的諸旁係，亦即「它示」、卜辭「它示」、「柁示」、「鼓示」、「次示」均屬假借爲之，無所謂本字，亦無專用字。但取其音而已。

《摭續》八八：「叀七牛次用，王受又」，「次」當讀作「澂」，乃用牲之法。卜辭祭祀「澂牛」常見。

高祖⿴囗甲

《屯南》二三八四：「庚辰貞，其陟……高且⿴囗甲幺……」。「高祖⿴囗甲」爲前所未見卜辭對於先祖明確稱之爲「高祖」的，僅有「高祖夒」和「高祖王亥」（或「高祖亥　」）。這是學術界公認的，沒有疑義。

《摭續》二：「辛未貞，𠦪禾高祖河，於辛巳酌求

陳夢家先生根據同版尚有：

「辛未貞，其𠦪禾於高且。」

「辛未貞𠦪禾於𡉈。」

「辛未貞於河𠦪禾。」

「辛未貞，𠦪禾於高且，尞五十牛。」

此外，《明續》四五三尚有：

「癸丑貞，𠬝𠦪禾於河。」

「癸丑貞，𠬝（𠦪）禾（于）高且。」

陳先生認爲：「凡此諸例，似乎高且與河、𡉈總是對立的，亦即是高祖不包括河、𡉈等。如此則卜辭的高且河應該讀爲高且、河」（《綜述》三四三頁）

陳先生當時爲資料所限，疑不能決。現在有了新的資料，可以證明這一考慮是正確的。

《屯南》九一六：「辛未貞，𠦪禾於高眔河。」辭句完整，字跡清晰，不會引起誤解。此一辭例也屬初見。

卜辭「高」有三種不同的用法。

一爲地名，如：

《前》二、三二、七：「王田高，往來亡災。」

《前》二、一二、三：「戊寅卜，在高貞，王田衣，逐亡災」。

另一種則爲「高祖」：

《甲》七八五「乙卯卜貞，𠦪禾於高，求九牛。」

《甲》五八五：「……𠦪高，王受……」

第三種用法則如常見之「高且乙」、「高匕」等，「高」與「毓」（後）是相對的。

「高祖」省稱爲「高」，卜辭所習見。《屯南》九一六之「高眔河」即「高祖眔河」，這乃是「高祖」與「河」並言，「河」不是「高祖」的最强有力的證明。

「高祖⿴囗甲」也應當是「高祖」和「⿴囗甲」。卜辭經常是「高祖」與「⿴囗甲」並言：

《明續》四七〇「庚寅貞，其先高祖，來於⿴囗甲三牛。」

《綴》一三：「辛未卜，高且𠦪，其卯⿴囗甲。」

據此，「⿴囗甲」顯然不能稱爲「高祖」。然則「高祖⿴囗甲」應讀作「高祖、⿴囗甲」與「高祖、河」同。

羌甲直系

《史記・殷本紀》：「帝祖辛崩，弟沃甲立，是爲帝沃甲。帝沃甲崩，立沃甲兄祖辛之子祖丁，是爲帝祖丁」。《索隱》引《世本》謂「沃甲」作「開甲」。

自郭沫若先生以卜辭之羌甲即《史記》之沃甲，學術界已屬定論，無異辭。于省吾先生謂：「甲骨文之羌甲《殷本紀》作沃甲者，沃乃羌字之形譌」（《釋林》四三頁）。學術界比較普遍的看法也都認爲，羌甲於商王之世次爲旁系，而不是直系。

張光直先生在《商王廟號新考》一文中，對商王的繼統及世次問題提出了許多新的見解。關於羌甲問題，張光直先生明確指出：「《殷本紀》以沃甲爲祖辛弟之說，在卜辭中證據不明。」

張先生據《粹》二五〇認爲：「如羌甲爲旁系，則不應躋身於五示之列」。再依據羌甲之配妣庚見於卜辭的祀典，斷言「倘沃甲如《史記》所說爲祖辛之弟，又無子爲王，其妣見於卜辭的祖甲祀典，與常例不合，無法解釋。因此，羌甲很可能是祖辛之子而祖丁之父」（臺灣中央研究院民族學研究所集刊第十五期）。

《粹》二五〇之辭爲：

「己丑卜　大貞，於五示告，丁、且乙、且丁、羌甲、且辛」。

「丁」即武丁，「祖乙」即小乙，乃歷數自武丁、小乙而上直至祖辛的五示先王，其世次是明確的。

《粹》二六〇亦是自下而上，以「且丁」、「羌甲」連言。

《乙》三〇六三則自上而下，以「祖辛、羌甲」連言，均可以互相證明。

陳夢家先生謂：「先王的五示，即祖辛至小乙三直系，另加祖辛弟羌甲與武丁兄丁」，以此來解釋《粹》二五〇的記載，這是缺乏根據的（《綜述》四四〇）。

沒有任何卜辭可以直接證明羌甲是祖辛之弟。

陳夢家先生也是首先肯定了羌甲祇能是旁系，纔得出了「在一次合祭中選祭若干先祖，多是直系或五世以內的先祖（包括旁系）」這一結論（《綜述》三七三頁）。陳先生所謂可以「包括旁系」，也是基於他對《粹》二五〇的理解，除此之外，並無任何其它的依據。

事實上陳夢家先生並不承認合祭中的選祭可以包括旁係。他在解釋《粹》一一二的時候，就堅定地認爲：大庚後的「朮」字「似小甲合文，但小甲非直系，何以列入，今仍暫不爲釋」（《綜述》三七四頁）。

很明顯，陳先生很堅定地認爲：合祭中的選祭，不可能包括旁系，正是由於這個原因，陳先生纔放棄了「朮」是「小甲」合文的看法。由於《粹》二五〇祇是一條孤證，因此大家對此也祇得將信將疑，對羌甲是否祖辛之弟，是直係抑是旁系，難以抉擇。

《屯南》二三四二爲我們進一步提供了綫索：

「……丑貞，王祝伊尹，取祖乙魚，伐告於父丁、小乙、祖丁、羌甲、祖辛。」

卜辭「取」字用法比較復雜，既可用作「得取」之「取」，也可用作「娶」。而經常的情況是用作祭名。陳夢家先生以爲假作「槱」，據《風俗通》謂「槱者，積薪燔柴也」（《綜述》三五五頁）。于省吾先生進一步加以申論，認爲應讀作「焣」（《釋林》一六〇頁）。「取祖乙」謂槱祭於祖乙。此祖乙乃是中丁之子、祖辛之父。

卜辭「取」祭從未見有附加牲名之例。「魚」在此不當是牲名，而應讀作「魯」，訓爲「嘉」，與《乙》七七八一「黍田年魯」之「魯」同義。《乙》七七八二之驗辭爲「王固曰吉魯」，「魯」正是嘉善之義。

卜辭「在甫魚」（《後上》三一、一）亦作「在甫魯」（《後上》三一、二），可以證明卜辭「魚」是可以假作「魯」的。

「父丁」即祖庚、祖甲稱其父「武丁」。這片刻辭與《粹》二五〇一樣，歷數自武丁而上，直至祖辛的世次是：武丁、小乙、祖丁、羌甲、祖辛。

然則，《粹》二五〇就不僅僅是一條孤證，它是可以充分加以信賴的了。

卜辭所反映的殷代王室繼統情況是：每一世次祇能有一個屬於直系。與此同時，兄弟輩必定屬於同一世次，父子輩必定不屬於同一世次。

據《屯南》二三四二與《粹》二五〇所共同反映的情況表明：在祖辛之後，祖丁之前，應該還有羌甲這一世次。羌甲應是祖辛的子輩，祖丁的父輩。而不是如《殷本紀》所說的，沃甲（即羌甲）乃祖辛之弟。

大家一致公認，祖辛、祖丁、小乙、武丁在商王系統中都屬於直係。在按世次排列的情況下，羌甲與這些直係先王並列，我們沒有理由認爲羌甲沒有屬於直系的可能。

再加上祖甲時羌甲之配妣庚列入周祭祀典，也是羌甲屬於直系先王的重要證明。

問題在於，《佚》九八六有一段比較明確的有關商王世次的記載，其次序是：上甲、大乙、大丁、大甲、大庚、大戊、中丁、祖乙、祖辛、祖丁。共十示。其世次與《殷本紀》同，在祖辛與祖丁之間，並沒有羌甲。《佚》九八六與《粹》二五〇、《屯南》二三四二之間關於世次的記載是存在矛盾的。

這種矛盾現象我們目前雖然難以作出圓滿的解釋，但無論如何、不能簡單地根據《佚》九八六就否定《粹》二五〇及《屯南》二三四二所記載的，在祖辛之後，祖丁之前，尚有羌甲的世次存在這一事實。與此同時，也無法排除羌甲是在祖辛的子輩這一可能性。

與此相類似的情況還有：《粹》一一二歷列了自上甲以下的次序是：匚乙、匚丙、匚丁、示壬、示癸、大乙、大丁、大甲、大庚……等。大庚以後，列有小甲。這也是與《佚》九八六的直系世次所不合的。

卜辭小甲書作「小十」亦作「卝」。或以卝混入「米」字，或混入「朿」（𦍒）字，都是錯誤的。陳夢家先生本以為「卝」「似是小甲合文」，這是對的（《綜述》三七四頁）。但他由於認為小甲不是直系，不應列入諸直系中，因而不敢決。

小甲在某種情況之下，是否有可能取代大戊而成為直系？我們認為這種可能性還是不能完全排除的。

商代自上甲以下直至小乙的世次問題，還有待於進一步的探討，仍然還有很多現象，我們目前尚無法加以說明。

祖甲特別提高羌甲在祭祀中的地位，以羌甲之配妣庚列入祀典，視羌甲為直系，這些現象能否給我們一些啓示：這其間反映了某種程度及某種形式的親疏關係？

我們目前還衹能根據《屯南》二三四二及《粹》二五〇所反映的現象，對傳統的看法提出一些疑問。至於對這些現象作出令人滿意的解釋，則苦於資料不夠，文獻不足徵，力有所不逮。

僅來羌

《屯南》七二五第二段卜辭為：

「……貞，僅來羌，其用於父丁。」

此段刻辭與《金》一一八同文，可以互相補足：

「己卯貞，犾來羌，其用於父（丁）。」

由於《金》一一八是摹本，犾的形體又屬僅見，不能不令人有所致疑。現在有了《屯南》七二五，則可以證明《金》一一八摹寫不誤。

卜辭僅、徨、衜當屬同字，均用為人名或地名，無例外。古文字偏旁從彳、從行、從止可通用無別。

「犾來羌」與「光來羌」、「𦣞乘來羌」等等同例，指某人或某氏族進納羌人而言。

犾與僅或徨在形體上及用法上都存在明顯的區別，僅或徨均從「至」，可隸作達或逕，于省吾先生以為「馹」之本字（《釋林》二七七—二八〇頁），在卜辭為動詞。

午組卜辭有母庚

午組卜辭與其它諸貞人組之刻辭，在稱謂上的同異，諸家曾有所論及，應該肯定，午組卜辭在書法字體以及親屬稱謂諸方面，均有其特異的地方。

陳夢家先生在分析午組卜辭之特徵時，以為沒有「母庚」之稱謂（《綜述》一六二—一七二頁）。作為王室體系而言，卜辭衹有武丁可稱小乙之配為「母庚」。小乙以後諸王，其配偶再無以「庚」為名者。

《屯南》二六七三：

「小子8母庚」

「8母庚宰」

據其字體，當為午組卜辭，而兩見「母庚」之稱謂。「8」假作「卸」讀作「禦」，謂禦祭於母庚。

我們目前雖難以證明此「母庚」是小乙之配或不是小乙之配，但午組卜辭有「母庚」之稱謂則是確切無疑的。

一字兩用

在甲骨刻辭中有一種比較特殊的書寫形式，即重文的省略或一字兩用。兩者的性質是相同的，這就是古文字中合書時偏旁借用的由來。

裘錫圭先生在《甲骨文字考釋》一文中（刊於《古文字研究》第四輯）對此有詳細的論述，所論極是。

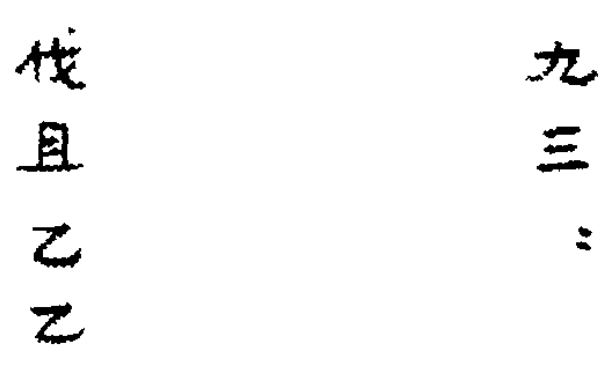
《粹》四七七：「乙亥卜，又十宰十伐大甲申」。郭沫若先生《考釋》謂：「大甲下著一申字，未解何義。若為甲申連文，則於大字亦無說」。由於郭先生不明重文省略之例，故不得其解，裘錫圭先生認為：「其實這個甲字是兩用的，既用作大甲的甲，又用作甲申的甲」。

與此相同的例子還有：

《庫》一〇〇五：「辛卯卜，又且乙未」

我們也可以把這種現象視為「重文」，衹是沒有重文符號而已。但金文的重文，都是屬於一個不可分割的詞，而「大甲申」、「祖乙未」則分屬兩個不同的詞。

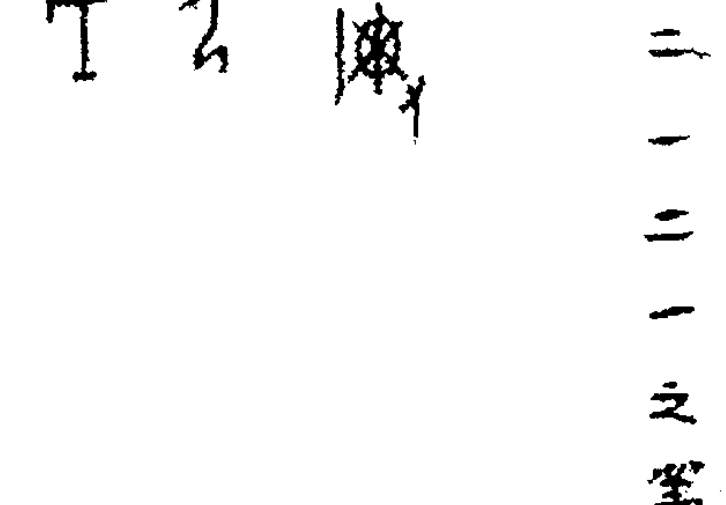
《人》一七九三：



此條當讀作「又伐且乙乙亥」，「乙」字為一字兩用，就其實質而言，也就是重文的省略。

《屯南》有資料可以進一步證明裘錫圭先生的意見是正確的。

《屯南》二一二一之第一辭為：



這段刻辭當讀作「其柷陳妣戊至母戊」，「大吉」。「戊」字為一字兩用，由於其中有間隔，似乎就不能稱之為「重文」。

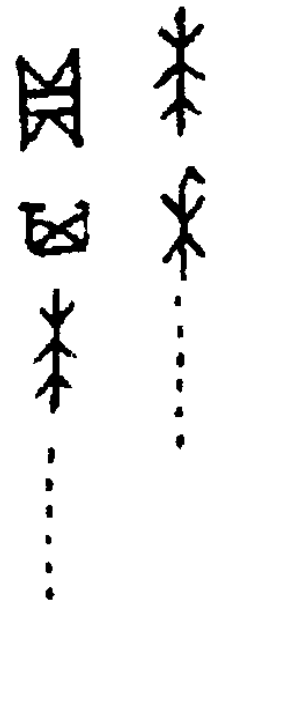
陳當為「束」字之繁體，乃祭名。《珠》四〇二有「癸酉卜，其束三示」，「束」字作「朿」，與《明續》六七六之「其陳匕庚」；《佚》八七九之「陳小母」辭例均同。

《屯南》二九五三第二辭：

「癸卯貞，酌乡戉於大甲，甲辰，五宰，茲用」，當讀作「酌乡戉於大甲，甲辰，五宰，茲用」。「甲」為一字兩用，也可以說是重文的省略。

這種處於上下緊密相連的位置，視為重文的省略或一字兩用，都比較容易理解。《屯南》二一二一「妣戊至母戊」，「戊」字亦屬一字兩用，但中間有間隔，並不連續，這種現象則屬罕見。然就其行款而言，亦可以認為「戊」與「妣」、「母」還是相連的。

《屯南》一一〇二的現象則更為特殊：



這似乎應當是屬於兩段卜辭，即使是屬於同一段卜辭，中間的間隔也太大，「癸」字一字兩用，然而作為行款而言，兩「亥」字與「癸」字之間，則是緊密相連的。

所有上述這一些，都是屬於干支字的一字兩用，其條件是上下文相連。作為行款言則緊密相鄰。

至於干支字以外的一字兩用問題，則尚有待於進一步之證明。

殷人的時間概念

卜辭於一日內時間之劃分，已經較為細緻，並有專門之名稱。由於早晚期名稱有所變異，加上資料零散，不夠完整，過去雖曾做過一些整理研究，但仍難免有所疏漏。

《屯南》六二四：

(1)、「辛亥卜，翌日壬，旦至食日不（雨）」？「吉」。

(2)、「壬旦至食日其雨」？

(3)、「食日至中日不雨」？「吉」。

(4)、「食日至中日其雨」？

(5)、「中日至𦎫兮不雨」？

(6)、「中日至（𦎫）兮（其）（雨）」？

《屯南》四二：

(1)、「弜田，其冓大雨」？

(2)、「自旦至食日不雨」？

(3)、「食日至中日不雨」？

(4)、「中日至昃不雨」？

這兩片都是康、庚卜辭，記載比較完整。我們再結合下列卜辭來觀察：

《粹》七一七：

(1)、「昃至𦎫兮其雨」？

(2)、「𦎫兮至昏不雨」？「吉。」

(3)、「𦎫兮至昏其雨」？

《粹》七一九：

「中日其雨」？

《掇》一·三九四：

「中日至昃其雨」？

「昃至𦎫不雨」？

《甲》五四七：

「中日至𦎫兮昃」？

郭沫若先生《考釋》將《粹》七一七第一辭之「昃」，誤作「昏」。島邦男先生《綜類》二六五—四，三五八—一，三六九—一，四九二—二在引錄《粹》七一七時，均沿襲郭氏之誤。

卜辭「旦」字作吕、昌等形，于省吾先生《釋林》有《釋旦》一文，論之甚詳。

《粹》九八四：「于吕日王迺田亡𢦔」，亦見於《京津》四五四六。「吕」亦旦字，與「宮」之初形作吕者易混。其區別在於：「宮」字初形吕，兩口形較規則且齊一，而「旦」字則上下兩口形既不規則，又參差不齊，且卜辭「旦」皆用為旦明之義，而「宮」則為地名。

《摭續》一九七「于昌王迺田……」與《粹》九八四、《京津》四五四六辭同，均為「旦」字。郭沫若先生《粹考》釋作「吕」，以為地名。島邦男先生《綜類》沿襲其誤，於二八八—二列入「宮」字條下，同時還列入一六一—三「昌」字條下，未免自相矛盾。且將同版重出之《京津》四五四六另行分列，而釋讀不一。

《爾雅·釋詁》：「旦，早也」；《公羊傳》哀十三年：「見於旦也」，何休《解詁》：「日方出」。上列卜辭諸「旦」字，皆用其本義。

卜辭𩫖、𩫖、𩫖等，均象城郭之形，亦用為城郭之義：

《合》一二一「基方乍𦎫，其希」。

《綴》一三六：「我𦎫於西，多氏人……」

「基」為商之敵方，作郭勢必造成威脅，故云「其希」。「我𦎫於西，多氏人」，謂招致衆多之人築城郭於西，「𦎫」用為動詞。

《說文》「𩫖」：「度也，民所度居也。從回，象城𦎫之重，兩亭相對也。或但從口」。許氏謂𩫖象兩亭相對之形是對的，但謂「從回」則非是。《說文》墉之古文作𩫖，與𩫖之形體同。金文又用為「庸」字。段玉裁以為「古讀如庸，秦以後讀如郭」，郭與墉乃一字所分化。

卜辭「郭兮」為一關於時間之專有名詞，與其形體無涉。郭沫若先生《粹》七一五《考釋》謂「𦎫殆假為形，明日也。兮假為曦」，其說非是。蓋由誤讀《粹》七一七之「昃」為「昏」，因而造成一係列之誤解。「昏之郭兮」，則「郭兮」難免附會成明日之晨曦。

卜辭「昃」字作昃、昃、昃、昃……諸形，象日西昃時人影之傾側。《說文》小篆作昃，謂「日在西方時側也，從日仄聲」。徐鍇《繫傳》「矢」部有「昊」字，王筠《說文句讀》以為蓋後人所增，譏之為「謬」。段玉裁《注》云：「小徐本矢部又出昊字，則復矣。夫製字各有意義，晏、景、暑、旱之日在上，皆不可易也。日在上而干聲則為不雨，日在旁而干聲則為晚，然則昃訓為日在西方，豈容移日在上？形聲之內，非無象形也。」段、王兩家之說均失之拘泥。

徐灝《說文解字注箋》云：「形聲之字，固有以偏旁上下為義者，然亦有取其字體相配，不可拘墟。若如段說，昃訓日在西方，不容移日在上，然則晢（晰）訓為明，晉訓為進，晵為晝晴，昔為日晞乾肉，其日皆當在上，何以置之下乎？昊乃昃之或體，因與昊形近易淆，故書傳罕用，久而佚之。《繫傳》存此，真乃一字千金。惟入之矢部為小誤耳。鼎臣以為俗體而徑刪之，妄矣。」徐灝之說，堪稱允當。

卜辭「昊」為昃之初形，本不從矢，昃為後起會意兼形聲字。

陳夢家先生以為「卜辭云中日至昃，昃至郭，則昃在正午以後，郭兮以前，日已偏斜故曰昃，昃即日側。《既夕禮》日側《注》：昳也，謂將過中之時，《無逸正義》以為未時，即午後二時」（《綜述》二三〇頁）。

陳先生並列舉廩康卜辭，定其順序為：

中日—昃—郭兮—昏

謂「中日、昃、郭兮、昏是先後為序的。假定中日為正午十二時，昏為下午六時，則昃與郭兮為下午二時與四時」（同上二三一頁）。這一論列大體不誤，但尚不够完備。現據《屯南》資料，可進一步補充其順序是：

旦—食日—中日—昃—郭兮—昏

這是一日之內的完整的分段。「夕」是與「日」相對的，不應包括在內。「旦」之後「中日」之前，尚有「食日」，武丁卜辭稱之為「大食」，亦可省稱曰「食」（《粹》七〇〇）。《粹》一〇〇：「大食其亦用九牛」，此處之「大食」，似不得理解為時間概念，當為「朝食」之本義。與武丁卜辭之「大食」、「小食」、「大采」、「小采」之指時間概念者當有所區別。

殷人於風雲雷雨之占卜，可視為早期之氣象預測。其預測之時間有長有短。其長者可過旬日：

《粹》六九二：「自今辛至於來辛又大雨」？

有時甚至可以作長達近一月的預測：

《合》九八二：「及今四月雨」？

《合》二六八：「丙寅卜，爭貞，今十一月帝令雨」

《乙》三二八二：「帝其及今十三月令雷」？

有時則僅僅預測一日之內的某一段具體時間，這一具體時間也是可長可短的：

《京津》三八三八：「旦湄至於昏不雨」？

《甲》五四七：「中日至郭兮昃」？

「旦湄（昧）」至「昏」包括了所有整個白晝的時間；「中日」至「郭兮」之間，尚有「昃」。正是由於上述現象的存在，我們就應該考慮到在某一段時間之內，尚包涵有其它特定時間存在的可能。這就需要我們掌握盡可能完整的資料。

《屯南》在這一問題方面，正是為我們進一步提供了較為完整的資料，使我們得以對殷人關於一日之時間分段較以往有一更為完整的認識。

除了上述「旦」—「食日」—「中日」—「昃」—「郭兮」—「昏」諸名稱之外、卜辭尚有「朝」、「暮」等時間概念。

陳夢家先生謂「朝莫相對，朝在天明以後，莫與昏相當」（《綜述》三三〇頁）。這種說法比較含混，不够明確。但在同書二三三頁所列的表中，陳先生的意見則是非常明確的。在該表中，陳先生謂武丁以後卜辭「朝」在「妹旦」以後，亦稱之為「大食」，大約相當於「辰」時。「莫」或稱「昏」，或稱「落日」，大約相當於「酉」時。

應該肯定，「朝」、「暮」是一種時間概念，但我們認為，「朝」、「暮」與「旦」、「食日」、直至「昏」等不屬於一個體係，不能相提並論。

相對地說來，「朝」、「暮」是一種比較廣泛的時間概念，不像「旦」、「昏」那樣具體而嚴格。自「旦」即日出之後，直至「食日」，似均可謂之「朝」。「食日」即「大食」亦即相當於「朝食」或「饔食」。「朝」應包括「旦」和「食日」，以「朝」列於「旦」之後，以為與「大食」相等是錯誤

的。然則「暮」應較之於「昏」所包括的時間要長一些，乃指「昃」以後，似應包括「郭兮」與「昏」在內。

《庫》一〇二五：

「翊甲寅，毓且乙戉，朝酉？茲用。」

「貞，暮酉？」

卜辭「暮」字作下列諸形體：

「其莫亡巛」　《甲》二〇三四

「其莫匕戈」　《寧》一·三七〇

「莫戉三牢王受又」　《佚》七九

「于明日莫」　《續》六·二一·七

「莫戉匕庚王受又」　《粹》三九四

「且丁莫戉二牢王受又……」　《粹》六三

「叀莫彡」　《存》一·一九三七

「匕庚戉叀[illegible]彡先日」　《佚》八七八

「……莫[illegible]不遘大雨」　《佚》九〇一

《庫》一〇二五則作[illegible]。

《屯南》二三八三爲我們理解「暮」字提供了新的綫索。其辭爲：

「王其省盂田，不雨？」

「莫往夕入……遘雨？」

「王其省盂田，莫往每入，不雨？」

「夕入其雨？」

「暮」和「夕」及「每」相對爲言，而「每」用作「晦」，這都是前所未見的。「弜田其每」，卜辭所常見。此「每」字乃用作「晦」。孫海波先生《誠》一四三《考釋》讀「弜田其每」之「每」爲「晦」，非是。「莫往每入」，即「暮往晦入」。《左傳》昭元年「晦淫惑疾」，杜注：「晦，夜也。」其時間順序，應該是「暮」、「晦」、「夕」。「晦」與「夕」似乎不相等。至於卜辭的「各日」，陳夢家先生以爲相當於「昏」「暮」，乃時間概念，這是缺乏根據的。《粹》一二七八：「印各日，王受又」，郭沫若先生《考釋》謂「各日殆猶出日，印各日猶賓出日也」，這種解釋是正確的。卜辭於「出日」、「入日」皆進行祭祀，「各日」相當於「入日」，乃指一種自然現象，而不是指某一時間單位。總之，「朝」、「暮」與「旦」、「昏」等乃屬於不同體係的時間概念，不能混同。「每」用爲「晦」，與「暮」相對，僅此一見，與通常之用作「悔」者不同。

今來翌

《屯南》二一〇六，「己亥貞，今來翌受禾。」「今來翌」連言，是過去所從未曾見過的，很費解。卜辭於時間概念區分極爲嚴格，也很細緻。「今」和「來」是相對而言的，是一種泛指的時間概念。籠統地說，「今」指現在，「來」指未來。「今」之前爲「昔」，「今」之後爲「來」。「今日」、「今冬」、「今月」、「今春」、「今秋」、「今歲」、「今祀」，都可以稱之爲「今」。這種「今」字的用法與現在的沒有區別。

在通常的情況下，如以「日」爲單位，則祇能是「當天」可以稱之爲「今」，第二天、第三天……就不得稱之爲「今」。例如：

《合》二八二：「辛酉卜，殻貞，自今至於乙丑其雨？」

《合》一一二：「壬寅卜，殻貞，自今至於丁丑其雨？」

「今」但限於「辛酉」、「壬寅」……等這一天，過這一天均不得稱之爲「今」。

但這不是絕對的。下述的情況也可以稱之爲「今」：

《粹》四四七：「丁亥卜，叀今庚寅彫艮。」——相距四日。

《佚》八八三：「癸未貞，叀今乙酉又丩卄於且乙五豕，茲用。」——相距三日。

在旬日之內的每一具體干支日都可以稱之爲「今」，「今庚寅」、「今乙酉」，意爲最近的一個「庚寅」，最近的一個「乙酉」。這是以「今日」爲起點，在第一輪的天干日之內，都可以稱之爲「今」。如以「丁亥」爲起點，則直至「丙申」都可以稱爲「今」，若是「丁酉」，則不能稱爲「今丁酉」，而祇能稱爲「來丁酉」了。

下列諸辭例可進一步說明問題：

《粹》六九二：「自今辛至於來辛又大雨。」——相距十一日。

《存》一·一四六七：「乙亥卜，大貞，來丁亥易日。」——相距十三日。

《續》一·四八·三：「丁丑卜，今來乙酉出於戉五牢」。

《甲》二四七六：「丁酉卜，何貞，今來辛丑方賁其彫」。

「今來乙酉」與「今來辛丑」，應分別包括兩個「乙酉」和兩個「辛丑」。即距「丁丑」八日之「今乙酉」和距「丁丑」六十八日之「來乙酉」；距「丁酉」五日之「今辛丑」和距「丁酉」六十五日之「來辛丑」。象這類的例子在卜辭是很多的。

卜辭還可以經常見到「今來戉受年」的記載：

《乙》九七九：「今來戉我受年。」

《合》一〇九：「今來戉我不其受年。」陳夢家先生以爲：「今來附於日名之前，義仍爲未來式」，「今來云云近乎最近的將來」，「今來歲」「當指最近的下季」（《綜述》一一九頁）。這種理解顯然是錯誤的。

「今來」包括「今」和「來」，即現在和將來。「今來戉」應該指「今戉」和「來戉」。

基於以上的分析，我們就比較容易理解下列的記載：

《前》七·二七·二：「戊辰卜，爭貞，來乙亥不雨」。

《續》三·一五、一：「丁酉殻貞，來乙巳王入於冥」。

可以肯定，「來乙亥」與「戊辰」相距不是八日，而是六十八日，「來乙巳」與「丁酉」不是相距九日，而是六十九日。否則，旬日之內既可稱「今」，又可稱「翌」，還可稱「來」，那麼「今」、「來」、「翌」將混淆莫辯，變成毫無意義的了。

在通常的情況下，當日稱爲「今」；從次日起，旬日之內稱爲「翌」；旬日之後，稱爲「來」。有時爲了强調本旬的某一特定干支日，該干支日也可以冠以「今」字，這是爲了與「來」相對而言的。

島邦男先生《綜類》曾搜集了旬日以外仍稱作「翌」的例子，現舉例如下：

《鐵》一九七·二：「乙卯……翌乙丑」——十一日

《鐵》一一九·四、「乙丑卜，翌丁酉……」——十十三日

《人》三四一：「丁卯卜今貞，翌己未……」——五十三日

《前》七·四·一：「乙亥卜，今貞，翌乙亥……」——六十一日

這些例子都比較特殊，限於卜辭的早期。絕大多數的卜辭稱「翌」都在旬日之內，主要還是一、二日之內。

《丙》一關於時日的記載比較明確，也比較完整，能給我們以啓示：

「癸丑卜，爭貞，自今至於丁巳，我戈留？王固曰：丁巳我毋其戈，於來甲子戈。旬又一日癸亥，車弗戈，之夕皇。甲子允戈。」

可以肯定，以「癸丑」爲基點（今），「丁巳」不能稱「來丁巳」，無疑也包括「甲寅」不能稱爲「來甲寅」。必須在下一個「癸」日之後，即「癸亥」日之後方可稱之爲「來」。

質言之，以「今」爲起點，在第一輪的天干之內，不得稱作「來」，而可以稱作「翌」。在强調本旬的情況下，有時也可以稱作「今」。

卜辭有「今戉受年」，也有「來戉受年」，所以「今來戉」是包括「今戉」和「來戉」。

卜辭有「今翌」：

《粹》八七七：「今翌受……」

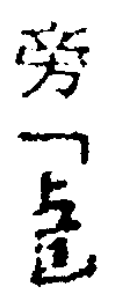
但卜辭從未見有「來翌」，而且「今」和「翌」是一個相對的時間概念，對於「今翌」是「最近的下季」之說，我們是表示懷疑的。《屯南》二一〇六「今來翌受禾」，僅此一見，難以說是指「今翌」和「來翌」而言。是否可能爲「今來戉」之誤？祇能存疑。

（原載《古文字研究》第十二輯，中華書局，一九八五年）

從恐龍化石看甲骨文

徐剛

一位潛心研究恐龍與中國文字學的年輕學者張開基，日前到台南市參觀恐龍世界大展後表示：由恐龍化石展品中與甲骨文的象形文字對比，可以確信衆所週知的中國人爲「龍的子孫」，「龍的傳人」，「龍族」。業已具備了充分鮮活而有力的科學根據。

這位年輕學者張開基，文化大學中文系畢業，曾任敎員，現專致於寫作及學術研究工作，他在參觀恐龍世界大展後說：他從八、九年前開始研究文字演進，偶然小篆中發現「龍」字的右半邊橫過來看很像是個大爬蟲「恐龍」的剪影，現在看過恐龍世界大展的恐龍模型及化石，可以肯定中國的「龍」，就是「恐龍」，其理由是：(1)小篆中的龍字偏旁「」，橫看和恐龍中的暴王龍十分肖似，這不是巧合，因爲在甲骨文中亦找到同樣的證據，而且小篆的發生至遲不會晚過二千年前的秦朝，甲骨文不會晚過三千餘年前的商朝，而恐龍的發現不過一百多年，何況正好是「龍」字。(2)在鐘鼎文中亦找出了一個「龍」，彷彿是「三角龍」或「厚角龍」的剪影，這在其他甲骨文、鐘鼎文、汗簡、古文奇字小篆中，也找出不少類似「恐龍」的字。(4)「龍」在文學中是被列入象形類的，而象形字的條件必定是「有形可象」。(5)「龍」的造形在戰國以前是獸形而不像蛇形，而我們現今所見到的繪畫及雕刻中的「龍」之所以像蛇，是經過長時期美化的結果。(6)國人認爲與龍有關的動物（或者龍的後代）有蛇、龜、蜥蜴及鱷魚，而這幾樣動物全是爬蟲類，和「恐龍」全是近親，古人從何得知如此精確的「動物分類學」呢？(7)鱷魚古稱「豬婆龍」，顯然是龍的一種，以它的形像去推測古代的「龍」，應該較像「恐龍」，比較不似傳說中的龍。(8)「龍」在中國人的觀念中，是能飛能游，也能陸地上生活的三棲動物，而「恐龍」正也包括了這三類不同生態。(9)歷史中記載有古代帝王因爲見到「龍」而更改年號的事（漢文帝改元黃龍），改年號非比尋常，若非皇帝親見或有相當可信的證據，豈會輕信，問題是當時見到的 是否以「活化石」出現 的恐龍。(10)英國尼斯湖中水怪的問題，經科學家以聲納探測，並紀錄繪圖後，已證實其中有「巨大的生物」存在，並推測可能是「恐龍類」的蛇頸龍或薄板龍，即使我國歷史只有五千年，難道不會出現此類「活化石」嗎？(11)有人在會稽山挖到了一大堆巨獸的骨骼，用一車都載不完，也不知其名，去請敎於孔子，孔子告訴他是「防風化」之骨，據史籍中記載：「防風化」是一條龍，禹時曾幫助治水，後因開會遲到，被禹所殺，而埋在會稽山，根據實物的證據，古人早已對「象」及「犀牛」有了解，陸上的巨獸，除了象和犀牛，還有什麼呢？顯然在古代要見龍、要比現在容易，而古人對龍的了解也比現在人多。(12)古人所說的龍，在形態上種類甚多，包括有龍、蛟、螭、鱷形龍、魚龍、蠶燭龍、蟲龍、鼉龍（周人更自稱「出自黿鼉」，認爲祖先是龍的一支），而龍的後代（龍生九子）又有贔屓、螭吻、蒲牢、狴犴、饕餮、蚣蝮、睚眦、狻猊、椒圖等，而山海怪牛也有「龍頭鳥身」（翼龍）「鳥頭龍身」（原角龍）等記載，但爲何到了現代反而只統一成了一種模樣造型了呢？(13)古人說：「魚龍變化」，認爲龍是魚所變，而根據現今科學家的研究，爬蟲類約恐龍原本是由生活在水（海）中的魚類逐漸演進而成爲兩棲類及爬蟲類，而適應了陸地上的生活，古人爲何能具有如此肯定接近事實的論斷呢？

因此，這位學者張開基認爲我們的老祖先見過以活化石存在的恐龍，或者恐龍的滅絕，並非現今推測的六千五百萬年前，而更爲晚近，而我們中國的歷史則比已知的更要早上數十數百倍。

（原載《中原文獻》第十七卷六期，一九八五年）

《英國所藏甲骨集》序

胡厚宣

殷墟甲骨文字，自從一八九九年被學者認識，迄今已經八十五年。先後作家將近五百人，專著和論文達三千餘種，甲骨學在今天的全世界，已經成爲一門重要的學科。

甲骨文的實物資料，八十五年來，共發現約十五萬片以上。迄今大半都已發表。在我們國內，大陸收藏的有二十五個省市自治區，四十個城市九十八個機關單位四十七位收藏家，共藏甲骨九萬七千六百十一片。台灣省收藏的有五個機關單位三位收藏家，共藏甲骨三萬零二百零四片。再加上香港地區的四個機關單位　藏甲骨八十九片，三項總合共藏甲骨十二萬七千九百零四片。這些材料，無論過去著錄過或未經著錄過的，只要是具有一定意義的甲骨，這次都已選錄在我們所編輯的《甲骨文合集》一書。

國外收藏的甲骨，近年以來，除了零碎發表的一些材料之外，其大宗甲骨，多有綜合整理予以出版的論著。在日本，有貝塚茂樹和伊藤道治兩教授編的《京都大學人文科學研究所藏甲骨文字》（一九五九、一九六〇、一九六八），增補版改稱《甲骨文字研究》（一九八〇）；松丸道雄教授編的《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》（一九八三）和東洋文庫古代史研究委員會編的《東洋文庫所藏甲骨文字》（一九七九）。在加拿大，有許進雄博士編的安大略博物館所藏《明義士收藏甲骨》（一九七二、一九七七）和《懷特氏等收藏甲骨集》（一九七九）。在美國有周鴻翔教授的《美國所藏甲骨錄》等書。這對我們編輯《甲骨文合集》，給予了極大的方便。

國外收藏的甲骨，除日本和加拿大之外，以英國所藏爲最多，而且蒐集較早，內容也比較重要。那是大約在甲骨文被認識的第四年即一九〇三年以後的幾年，有英國浸禮會駐我國山東青州（今益都縣）的宣教士庫壽齡和美國長老會駐我國山東濰縣的宣教士方法斂，所謂庫方二氏者在濰縣向一古董商人名叫李茹賓的大肆購買甲骨，先爲一人合購，後又各自分開。一九〇八年方法斂爲當時在天津的英國駐華總領事金璋購得甲骨一批，後歸英國劍橋大學圖書館。一九〇九年庫壽齡也以甲骨一批，售歸英國蘇格蘭博物院。一九一一年庫氏又以一批售給了英國不列顛博物院，今歸倫敦圖書館保存。

方氏蒐購甲骨，凡購得一批，就都畫其圖形，摹其文字。後來凡見到別人蒐集的甲骨，也都設法把它摹寫下來。十年之間，完成了一部摹寫本的專書名叫《甲骨卜辭》。方氏一九一四年去世，遺稿輾轉歸美國紐約大學白瑞華教授保存。白氏由方氏《甲骨卜辭》手稿中選印了三部書，其一九三五年出版的《庫方二氏藏甲骨卜辭》一書中的《皇家蘇格蘭博物院所藏》和《不列顛博物院所藏》兩部份及一九三九年出版的《金璋所藏甲骨卜辭》全書所收，即今英國所藏。

這三批甲骨材料，以蘇格蘭博物院所藏的一批，數量最多；原藏不列顛博物院現歸倫敦圖書館的一批骨片最大；原金璋舊藏現歸劍橋大學圖書館的一批內容最精。可惜幾十年來除了白瑞華所印方法斂早期摹寫本之外，一直再沒有經過整理。摹寫本再好，也難免有失真之處，而且《金璋所藏甲骨卜辭》一書，付印時還有些縮小，這在與別書拼合的時候，就不大方便。但是沒有辦法，在我們編輯《甲骨文合集》一書的

時候，只好使用這些摹本，在五期甲骨十二册之後，另把它收在第十三册中。

一九八二年，我中國社會科學院歷史研究所李學勤同志前往英國參加會議，順便全面調查了英國所藏的甲骨，並與倫敦大學東亞非洲學院協商，訂出重新整理英國所藏甲骨的合作計劃。一九八三年齊文心同志又前往英國，以七個月的時間，將英國所藏全部甲骨，略加甄别，擇优墨拓。這一方面補充了摹本材料之所未備，一方面也彌補了摹本臨寫失真、未摹反面以及印本縮小等等的缺陷問題。最後編輯為《英國所藏甲骨集》一書，付印出版，這無疑是對甲骨學研究的一大貢獻。

我常想關於甲骨文材料的著録，一般有三種情況，互有短長。一種是照片，如羅振玉的《殷虛書契菁華》（一九一四），郭沫若同志的《卜辭通纂》別録之二《日本所藏甲骨擇尤》（一九三三），梅原末治教授的《河南安陽遺寶》（一九四〇）等書。甲骨逼真，但文字常常看不清楚。一種是摹本，如明義士的《殷虛卜辭》（一九一七）和前舉方法斂的《庫方二氏藏甲骨卜辭》（一九三五）、《金璋所藏甲骨卜辭》（一九三九）等書。文字清楚，但摹寫容易失真。一種是拓本，這比較最好。但如劉鶚的《鐵雲藏龜》（一九〇三），姬佛陀的《戩壽堂所藏殷虛文字》（一九一七），葉玉森《鐵雲藏龜拾遺》（一九二五）等書，甲骨逼真的程度不如照片，文字清楚的程度不如摹本。只有照片拓本摹本三位一體，相互補充，那才是儘美儘善。

過去的著録書，有既有拓本又有照片者，如于省吾教授的《雙劍誃古器物圖録》（一九四〇），饒宗頤教授的《海外甲骨録遺》（一九六一），栨齋部份和松丸道雄教授的《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》（一九八三）等。有既有拓本又有摹本者，如明義士的《柏根氏舊藏甲骨文字》（一九三五），董作賓教授等的《殷虛文字外編》（一九五六）和貝塚茂樹教授等的《京都大學人文科學研究所藏甲骨文字》（一九五九，一九六〇）等書。

又如羅振玉《殷虛書契菁華》（一九一四），先印了照片，羅福成《傳古別録》第二集（一九二八），又印了拓本。又如董作賓教授《新獲卜辭寫本》（一九二八），先印了摹本，《殷虛文字甲編》（一九四八），又印了拓本。又如董作賓教授《殷虛文字乙編》（一九四八），先印了拓本，《殷虛文字乙編摹本示例》（一九六〇—一九六五），又印了摹本。

其既有照片拓本，又有摹本者，惟有伊藤道治教授的《故小川睦之輔氏藏甲骨文字》（一九六六），《大原美術館所藏甲骨文字》（一九六八），《藤井有鄰館所藏甲骨文字》（一九七一），《檜垣元吉氏藏甲骨文字》（一九七二），《關西大學考古資料室藏甲骨文字》（一九七七），《國立京都博物館藏甲骨文字》（一九八四），《黑川古文化研究所藏甲骨文字》（一九八四）等著作，真正作到了三位一體，可以相互參考補充，對甲骨文的研究甚為方便。

關於英國所藏的甲骨，前幾年，我們曾以曾惟一博士的協助，借到了劍橋大學圖書館所藏甲骨的照片，又從吳世昌教授處，借到了原不列顛博物院舊藏現歸倫敦圖書館的甲骨照片，準備編輯成書，以便學者可與已出版的摹本互相對照。但是還缺了蘇格蘭博物院所藏的部份，非常遺憾。幸虧這次齊文心同志借到了蘇格蘭博物院所藏那一部份甲骨的照片，正好可以一道編入書中，這樣與《英國所藏甲骨集》的拓本和《甲骨文合集》第十三册所收的摹本相配合，也來個三位一體，那就真是更好了。

《英國所藏甲骨集》編成，英國倫敦大學東亞非洲學院的艾蘭博士適來我國，她和學勤、文心兩同志一定要我寫一篇序，因略述所感，對於他們在甲骨學上這一重要的貢獻，敬致感謝與欽佩之忱。

一九八四年十二月五日

（原載《甲骨文與殷商史》第二輯，上海古籍出版社，一九八六年）

甲骨还乡之愿

欧阳可亮

安阳殷墟是商代甲骨文的故乡。甲骨文自1899被古文字学家王懿荣发现至今八十多年，学者书家之钻研者众。海内外共藏有殷墟出土的甲骨，据著名的甲骨学家胡厚宣先生统计，共为十五万四千六百零四片，遍布世界十三个国家和地区。至于研究甲骨文的国家和地区更多。

我旅日大半生，在大学教书四十余年，既已因脑出血，右半身偏瘫麻痹，成为残疾人而退休，就名誉教授职位。安居中，顽强地克服残疾，回到所学本行，终日研究以左手挥毫书写，享受甲骨文之乐。在古代文字的领域中，探求夏商殷古史文化之源流，其味无穷，而意义深远。美中不足者，因甲骨发现正当晚清国力最衰弱之时，十五万片甲骨犹如一部十五万页殷史，分成13国及数十地区收藏，谁也不能窥其全貌。况埋藏时发生断片残缺，出土时被愚人刮去字当刀伤药和安神剂用。天幸有王懿荣、刘铁云发现珍贵，端方大量购买，又被私人和外国收藏，有些狭窄学者和收藏家视同专利，不给人看，可谓先天不足，后天失调，无怪董作宾师生前慨叹：“甲骨显世，可望补上商史资料之不足，但前途暗淡，常受挫折。”更无怪北岛瑞峰友叹息说：“日本甲骨学会三百

会员，经费不足，好象是有，又如若无地存在着。”在此时有个爱好甲骨的傻学者在医中的残疾人，突接安阳殷墟笔会在1984年10月初次召开，喜出望外，告假出院，回国出席。说也奇怪，原本有脑出血后之脑痉挛的抽搐蜷曲而有口舌障碍，五年没上过讲台，根本不能讲话的人，到安阳殷墟笔会竟能口若悬河地在主席台前演讲半小时。若是没有录画录音，难叫东京人相信甲骨文能治病长寿，就是自己也不相信。于是提案甲骨出土90周年在安阳殷墟笔会召开“中国与收藏国及研究国各大学研究所国际甲骨大会”，透过国际和平文化交流会议，将甲骨资料集中整理，拼凑还原。若能由国家保证，使“甲骨还乡之愿”实现，共同研究出人类进化过程，及最初和最完整的文字所表现的文化。则不仅殷商古史文化（可）研究出来，且可上推夏禹少数陶文在夏墟之证实，于人类学也有贡献。

感谢安阳人民的热烈鼓掌，上项提案获得通过，“甲骨还乡之愿”有了希望，给我这残疾人以很大的鼓励，为这目标激发自己活下去，要有所作为人生才有意义。但四年后接待外宾学者云集安阳的地方还不够，应该在洹水南、殷墟上（《史记》记载楚霸王会见秦章邯受降台之处）建造“安阳殷墟笔会会馆”，以接待12国博物馆甲骨收藏家及数十国之甲骨研究家之用。会馆不必太豪华奢侈；但要有现代化之卫生设备及甲骨文化展示出土时之照片室。会馆建筑拟突出中国民族建筑特点，采用古建式，参照中国美术馆和其它现代会堂结构进行设计建筑，大小比照相州宾馆，而设备近代化。大约建此会馆约需人民币七百万元，约合日币七亿余元。我愿试一试，以自己残疾后的力量推动一下，1985年做好建筑完成后之鸟瞰图，将脑痉挛的右臂抽搐拘挛做根本治疗。1986年至1987年呼吁中日甲骨书法艺术界联合展览义卖集资，及通过中日文化财团集资解决，并在中国银行安阳分行设立“安阳殷墟笔会（会）馆筹备委员会’专户，以昭大信。这事我这残疾人在日本国立残疾人更生病院康复出院后，以率身作则，再捐出节余医疗费用，及个人收入除生活开支外，全部用以兴建会馆。即作化缘和尚，也非得青菜豆腐、淡饭白粥，甘于吃苦不可。还得任劳任怨，拒绝勋章、铜像等等，只要作个“安阳公民”就可以了。这事必须大公无私，而且完全处于一个海外华侨和友人的自愿，没有半分勉强。这是就任“安阳殷墟笔会会馆筹建委员会名誉会长”之时，首先要宣言说明的，名义只是为了便于作事。一有私心，这事就办不成了。“甲骨还乡之愿”不仅是中日朝的汉字国家之重要，且为世界人类从初文探源之重要。一面要以外汇订购安阳物产工艺品等，以备答礼，补充甲骨文字画雕刻龟甲之不足。有了这个任务，残疾人的身体反倒健康起来，这就是我意外的收获了。为此还要感谢安阳呢。

如果中国大陆、台湾、香港地区的书画雕刻工艺美术界人士齐心协力赞助“安阳殷墟笔会会馆之筹建及1989年国际甲骨大会”之事业，自愿将作品寄交：日本东京都三鹰市大泽2—9—12春秋学院，以我在日本作过甲骨文金文个展34年之经验来说，这事就容易得多，且有成功之把握了。因为我依靠群众，不是我独立奋斗了。同时我答谢各位书画艺术家以展出即卖，扬名国际，并且与日本、美国、加拿大、英国、瑞典、瑞士、法国、新加坡等友人一起展出，这是我这残疾人更生后，所最感谢的事。人必自立，而后援助必来，如果集金超过会馆所需，我愿为《安阳残疾人福利会》之用，人生不带来，死不带去，七旬残生，这点希望愿完成之。

我虽年已七旬，身又有残疾，但一定要为实现“甲骨还乡之愿”而顽强奋斗。夏天天气炎热，我每晚九时就寝，三时起来写甲骨文，不开空调，吟唱着：“进兮、进兮、进兮、进兮、进，黄沙万里，大梦犹未醒。精神一到，何事不可为！不屈不挠，养成坚忍心。死兮不退，好个壮男儿！为国为家，为我众苍生。”

我相信“甲骨还乡之愿”一定会实现。

（原载《殷都學刊》1986年第1期）

评介《小屯南地甲骨》

晁福林

《小屯南地甲骨》由中国社会科学院考古研究所编，1980年和1983年由中华书局出版。全书共1841页。上册刊布甲骨拓本5612片；下册包括释文、索引、摹本、钻凿形态等部分。

甲骨文字是我国古代文化史上值得自豪和骄傲的瑰宝之一。1973年在殷墟小屯南地所出土的四千多片甲骨，是解放后出土数量最多的一次。作者以较快的速度完成了繁重的整理工作，出版了《小屯南地甲骨》一书（文后简称《屯南》），为甲骨学与殷商史的研究提供了新的重要资料。

《屯南》不仅详细介绍了甲骨的出土情况，而且分析了地层堆积和不同地层出土的陶器的特征。考古发掘所探明的地层关系对于甲骨断代至关重要。《屯南》认真研究了探方剖面的土层情况，分析了探方与灰坑、灰坑与灰坑的打破关系，从而为判断出土陶器及甲骨的时代早晚提供了根据。《屯南》还相当细致地讨论了与甲骨一起出土的鬲、簋、盆、罐、豆等陶器在早、中、晚各期不同的形体和纹饰特征。在长篇前言中，作者将地层关系，出土陶器、甲骨刻辞进行了综合考察，这就为相关甲骨的断代提出了科学的证明。

《屯南》的另一个重大贡献在于它对甲骨钻凿形态的研究。这项研究是七十年代以来才逐渐引起人们重视的。《屯南》刊布了甲骨钻凿摹本图版一百多例，拓本图版三百二十多例，并将凡能看出钻凿形态的甲骨都做了统计。这样全面地刊布甲骨钻凿形态，在甲骨著录的历史上具有首创之功。通过对钻凿形态的研究，《屯南》首次提出甲骨上的凿（特别是弧形凿）系采用轮开槽的方法制成，还明确指出甲骨上的凿并非用凿子开凿而成，而是采用轮开槽以及用刀挖刻的方法制成的，所以，严格说起来并不能称其为“凿”。这是对殷代甲骨攻治方法的新认识。作者将凿分为六个类型进行详细讨论，并在释文部分尽量注明，为甲骨断代增添了一项重要佐证。作者还从钻凿形态方面讨论了自组午组卜辞、武乙文丁卜辞以及某些田猎卜辞的分期，得出了令人信服的结论，可以说这是作者对于钻凿形态研究成果的初步的成功应用。

在甲骨断代时，《屯南》虽然充分考虑到了地层关系，但并不拘泥。《屯南》所刊拓本不少是由不同墓葬、灰坑、探方所出土的残片缀合而成，并且有些地层关系又不完全一致。这种缀合是否可靠，缀合后如何断代，确是值得考虑的问题。如《屯南》4516片由T53(4A)：145片和H91：1+4片相缀合。T53属早期探方，H91属中期灰坑。有的研究者据此论定《屯南》4516片属文武丁卜辞。《屯南》经过细致分析发现T53被H91打破，所以早期卜甲落入了中期灰坑H91：1+4片原本是属于早期的。这种认真的分析在《屯南》考释中多有所见。

以前的甲骨著录索引和工具书多以《说文》部首为序，查找困难，很不适用。后来日本学者岛邦男编《殷虚卜辞综类》，改以甲骨文字本身的部首为序，突破了以前的模式。《屯南》在《综类》的基础上进行改善和提高，如𢆉，《综类》列入“大”字，又列入“牛”字，实误。《屯南》索引将其单列一部，虽然在小屯南地甲骨中仅有一字，但也是很有意义的，因为在其它著录中还有以𢆉为偏旁的不同字体十余个。《综类》共164部，《屯南》增至171部，还增加了人名、地名索引，为甲骨资料的使用提供了更多的方便。

由于这批甲骨在地下保存情况不好，所以，有些甲骨字迹模糊不清，除墨拓外，还必须有摹本才能释读。如《屯南》2320片载有左戍、中戍、右戍的名称，是研究殷代军制的重要的新材料，但墨拓却无法辨认。又如2328片载“翌日王其令右旅眔左旅𡆥见方𢦏，不雉众”，这是首次发现的众和旅相关连的材料，但墨拓亦模糊。作者不怕麻烦，将字迹不清的墨拓进行摹写，有些摹本还是根据现场发掘直观临摹而成，更属珍贵。《屯南》刊布摹本四百多片，大大便利了读者。

《屯南》释文详赡认真，精辟之释每有所见。如甲骨文[illegible]字，从水从玉，《屯南》2232片考释没有简单地楷为汪，而认为是沈字异构，并举古代文献中沈玉以祭记载加以说明，甚确。又如过去有人认为卜辞里的“大学”即学校，《屯南》60片考释正确指出它只是“一种建筑或场所，是举行祭祀之地”。甲骨文有𢓊字，在《屯南》中见于119片“𠂤叀𢓊用”。这个字，诸家无考，《屯南》指出即律字，“可能即《易·师·初六》‘师出以律’之律”。易卦与卜辞文义十分接近，证明《屯南》考释可信。

在考释一些重要的有争议的问题时，《屯南》不仅介绍学术界的研究成果，而且能够提出自己的看法。如关于“中宗”的记载，涉及到殷代礼制、称谓、继统等问题，历来为学者们注目。有人认为中宗指中丁；有的说指武丁；有的认为是“中宗祖乙”的省称，实即祖乙。《屯南》2281片考释从宗庙位置入手剖析，指出“所谓中宗，是指宗庙位置而言，即在某一群宗庙中，其庙居中”。这样从新的角度所做的分析，很能启迪人人深思这个问题。其它如《屯南》2359片考释论“后祖丁”、2525片论“百工”、1066片论“北(邶)方”、715片论“溼田”等，都提出了独到的见解，对于研究商王世系、方国地理、阶级和生产状况等问题都具有重要的学术价值。

作为一部大型学术专著，《屯南》还存在一些尚待改进之处。这主要是部分卜辞的考释缺少分期。如《屯南》3568片“生月壹狸”，这种内容的卜辞仅见于自组，而且从字体和文例上看，这片亦和自组卜辞相同，所以应断定其为自组卜辞而不必阙疑。又如《屯南》4361片“在…[illegible]…”，其后一字虽不识，但在以往所见的卜辞中均见于康丁时期的卜辞，从钻凿形态上看这片为长方型凿，属于IV型三式，而这正是康丁武乙时期的钻凿型式。根据这些理由应当断定它属康丁时期。《屯南》释文不仅缺略许多残辞的分期，而且有些记载数条卜辞的卜骨亦缺其分期，如660片有九条田猎卜辞，字体清晰，钻凿型式明确，断定其分期并不是很难做到的，然而在考释中其分期却付之阙如。

另外，《屯南》有些地方过分谨慎，以至于可释而未释。如4525片“王其田……叀又(有)狐，毕”，依田猎卜辞通例，“田”后当为地名。这个字半残，应当补齐为麦字，因为它从字体上看与康丁时的麦字是完全一致的。“麦”是康丁常去的田猎区，跟这条卜辞的文义是一致的。另外，有些考释似应再引申说明一下，如2892片“丙𤈦……大雨”考释云：“𤈦，从豕从火，为将豕置于火上，《说文》有燹字，𤈦殆燹之初文。”这个考释虽然正确，但是由于《说文》只简单训燹为“火也”，因此𤈦在卜辞中的意义并不能据此而明晰，所以应当再解释一下，指出2892片的𤈦为祈雨祭名，与卜辞习见的“烄雨”相似，只不过一以人为祭品，一以豕为祭品罢了。又如2953片“岁于大甲，甲辰五牢”，拓片上，两“甲”共一字，为甲骨卜辞里一字两用之例。这种情况应在考释中加以说明。以上这些情况，虽然多反映了作者的谨慎态度，但总觉遗憾。

（原载《考古》1986年第10期）

试说郭沫若《殷契余论》对甲骨学的贡献

谢济

1928至1937年郭老在日本进行古代史与古文字学的研究，有许多著作。他1933年辑在《古代铭刻汇考》的《殷契余论》（以下简称《余论》），就是比较重要的甲骨文研究论著。为了学习与研究郭著，本文试说《余论》对甲骨学的贡献。

一

《余论》对甲骨学研究的贡献　《余论》的《断片缀合八例》、《残辞互足二例》《缺刻横画二例》，都是关于甲骨学研究的论作。

甲骨缀合是甲骨整理与研究的重要内容。郭老在《卜辞通纂》缀合了多片，《余论》又缀合八例，这有不少是使用《殷虚书契续编》一书的材料，因为《续编》是在《通纂》以后出版的。

八例缀合了有关方国、征伐、畋游、巡行以及官名等内容的卜辞。如第二例，为三片所缀合。缀后有卜辞“甲午卜，宾，贞光其㞢（有）囚。二月。”“〔甲〕午卜，宾，贞光亡囚。〔王〕固曰：“㞢（有）……光……”。这二辞原分属于三片，各片都是残辞，缀而得两条各自都相当完整的卜辞。这是商王卜问“光”的祸福，“光”是臣属于商王朝的一个东方方国。

第三例，也是三片缀合，缀成有五条相当完整的卜辞。其中如“舆其𢦏虎方告于大甲。十一月。”“贞令望乘众二舆𢦏虎方。十一月。”这是商王命令其将领望乘及舆征伐虎方而告祭祖先。《余论》据周初《南宫中鼎》考定虎方属商朝、南国，地当在淮水上游。这是记载商王朝与南方方国关系的重要卜辞。其他各例还有在不同的干支日卜问“𠂤亡囚、宁”，“在泉”、“韦𠂤泉”以及“田亩”、“田麦”、“田盂”、“田龟”、“田享”等内容，缀合以后提供了对这些卜辞进行综合研究的有价值材料。

第八例为日本岩间氏藏大龟，有他龟残片杂入。《通纂》别录二已著录，并剔出他龟残片。《余论》再次著录，发现有一残片与《通纂》别录二“河井大龟”右下隅适相衔接，这更是证明剔出之残片是正确的。《通纂》以后，《殷契佚存》987号也著录过，但与《通纂》所缀略有出入。《佚存》多剔出一小片，有一小片的位置不同。《通纂》右上隅有一小片有残辞“丁卯□□□步□□亡□。”《佚存》缀在最下面靠中线的右边。右上隅与上一小片一起的另一小片有残辞“壬寅□□□田□□亡灾。”《佚存》剔出。《余论》晚于《佚存》出版，《余论》与《通纂》缀合一致。《甲骨文合集》36639号也著录此片，与《通纂》、《余论》一致。此片原大龟现藏旅顺博物馆，《合集》重新墨拓了原龟，那两小片正相接密合，可见《佚存》所缀有误。

《通纂》共缀合三十多片，《余论》“缀合八例”，《殷契粹编》又缀合一些。这说明，郭老的甲骨缀合取得了很大成就。早在1917年，王国维曾缀合了一片。此后，在长达十五、六年的时间里，无人缀合①。郭老在三十年代开始做的缀合工作，实开始了甲骨文大规模缀合的阶段。此后，曾毅公先生的《甲骨叕存》问世（1939年），以后又不断有新的缀合著录问世。

残辞互足二例　第一例为补《通纂》430，卜辞“癸卯卜，争，贞旬亡囚。甲辰大骤风，之夕皿乙巳、□…□五人。五月，在□。”缺三字。《余论》据《续编》5、321在“乙巳”下面补“疾”字，在“左”字下面补“𦎫”字。这样，互补后就只缺一字。《余论》说：“有人读为‘五月在’”。这是错误的，互补后可证“在”下为地名𦎫。

第二例以四残片互补，《前编》5、6、4仅存“……日丁卯……车马……”。《前编》7、5、3有两辞，均只有小半，其中一辞有车、马、祝等字。《续编》3、40、2也两辞，一辞仅存干支与贞人；一辞有祝、车、马、𡨦马等字。《前编》7、18、3有辞“……王固……祝𩠺在……㞢来嬉，八日庚……日晋。”《通纂》735有一长卜辞，与上面四片均有某些同文，《余论》参以互补。互补后四片均得以最大限度的补足。象仅几字的《前编》5、6、4补为“癸亥卜，殻，贞旬亡囚。王固日：有祟。五日丁卯，王狩敝，祝车马口，祝𩠺在车，𡨦马亦口，央亦㞢𢓊。”《前编》7、18、3，原只十三字，补为“癸亥卜，殻、贞旬亡囚。王固日：㞢祟。五日丁卯，王狩敝，祝车马口，祝𩠺在车，𡨦马亦口，央亦㞢𢓊。王固日：㞢祟，其㞢来嬉。八日庚午，允㞢来嬉自口，口口吉日晋。”补为60字的长辞（包括五个空格）。从此例可见残辞互足对于甲骨文研究有很大的意义。

我们知道，甲骨文绝大部分都不是原来的整龟整骨，而是许许多多的断残片辞了。知道残辞互足的原理，这就能在很大程度上扩大甲骨文研究的范围，注意运用残辞互足，又能发现更多的同文卜辞。象《余论》所作的第二例是很精采的互足例，《粹编》1189片又作了一更复杂的示例，原片只10字，且缺刻横画，经补足为29字的完整卜辞。残辞互足影响着后来的研究工作。董作宾《殷历谱》运用这一原理，补充了若干卜辞。如上编卷三的《铁》185、1约有半辞，为第一卜。《库方》1595为一整辞，为第二卜，反面“七日己未…庚申月㞢食。”《全璋》594反面记载月食，与《库方》1595同文，董补为第三卜。这样三片互足后，《铁》185、1补为全辞，又找出了第一、第二、第三卜的同文关系。

《余论》以前，学术界还不大懂得残辞互足的原理。如曾有人誉为继罗、王而起的叶玉森，他的《殷虚书契前编集释》有许多因不懂残辞互足而考释有误。《前编》4、6、8为“……伐下危……”。“……归田，九月……”。应属于两辞，这可以从已出的别的著录中知道，《集释》误为一辞。《前编》6、10、6为“癸亥……子冎……日亦……”应为右行。《集释》没有能补出“癸亥”的残辞，又误为左行。《前编》6、34、2的残辞应分属于三辞，这从别的著录中可以互足，《集释》误为一辞。《前编》4、46、2仅有“……王往…马……央……”。仿照互足例，可以据《菁》3补为商王率领臣属出外田猎、车马故障、王子坠车的完整卜辞。可惜《集释》作为互不相关的几个字处理了，至少应该知道这几个字属于一辞。可见残辞互足对于释读残辞的重要。

缺刻横画，这也是研究卜辞所必须了解的。《通纂》作过一些例子，比前人有很大前进。《余论》又作二例。第一例为《续编》3、13、1（《簠室》文字84重），有36字，属长辞。王襄补过（《簠室》考释），“然多未得当”。《余论》重新作补，为“乙丑王卜贞，今囚巫九备，余其尊遣告侯田，册叔方、羌方、羞方、庚方，余其从侯田占𢦏四丰方。”与王襄所补作比较，“今囚巫九备”王补为“今□□九□”，只补二字。这成语《前编》较多见，还见于《龟》。“侯田册叔方”，王为“侯□□□方”，空三字。“册”为征伐意，卜辞有“𠕁人方”（《京人》2947）、“𠕁盂方”（《粹编》1190），“册”，“𠕁”为一字。“叔方”为一方国，有（《甲》807）、“征”（《京人》2147）、“伐”（《前编》5、37、5）记载商王朝对其“𢦏”的。还有两字所补不同，一为王补为“南方”《余论》补为“庚方”。原字作仐形，南字基本作𡴭𡴭二形，上面为凵形。庚字早期上面为“V”作𫝀，中晚期上面基本为V ⱱ 作𫝀。此应为一专有方名，作为方位名的“南方不这样使用，且与该辞的几个方国专名不协调。此字补为庚字比南字合理。又一字王补为“伐”，《余论》补为“𢦏”，“𢦏”有伐意。原字作比形，𢦏字有作儿形，伐字作托找形，明显的一处是示戈的一横笔必及示人形的颈。此缺笔字左边不是人形，假如为人形那示戈一横笔及腰部，看来补为𢦏合理，补为伐不合理。

缺画第二例为《戬》46、14（《续》6、27、6重）。此片王国维、叶王森、董作宾补过，《余论》说：“然均有未尽”。《余论》补为“庚戌卜，頙，贞亚其往宫，往来亡灾。”“辛亥卜，頙，贞今日亚其往函。”王国维补为“庚子卜□贞亚其□往其亡灾。”“□亥卜□缺今日亚其缺……”②。与《余论》比较，戌补为子是错的，贞人頙两出与一个地名宫没有能补，一个地名函没有隶定。叶玉森第一辞为“庚戌卜，贞亚其缺往来亡灾”③。与《余论》比较，贞人頙与“往宫”没能补出。董作宾补第一辞④，贞人未补，“往宫”未补，“往来亡灾”的“往”未补。

《余论》是据《戬》39，1、《续编》6、16，5而补第二例的，此例同一贞人两出，为亏亏，不但缺横画，《余论》还是首次指出是甲骨文缺刻竖画之例。

胡厚宣先生评价《余论》关于缀合、残辞互足、缺画三篇的成就时说：“树立虽简而皆甚精确”⑤。胡先生是与《甲骨文例》进行了比较后说的，并对《甲骨文例》作为文例专著提出了贬义的评论。这些评论都是很精当的。

唐兰先生说：“夫甲骨之学，前有罗、王，后有郭、董”。唐先生在讲甲骨“四堂”成就时，说：“郭沫若发其辞例”。⑥象残辞互足、缺画均属辞例研究，辞例与缀合有一定关系，而且辞例研究也影响着缀合。郭老对甲骨文辞例研究做出了重要贡献，《余论》只不过是其中很小的一部分。但我们从这些例子中，完全可以窥见郭老研究功力的精深。

二

《余论》还对几个先妣称谓进行研究并考释了一些文字。

在《通纂》所作世系表的基础上，郭老在《殷契拾遗》又补了几个先妣庙号，使先妣庙号研究有了新发展，这是由于《续编》出版以后，有条件这样作了。他据《续编》1、12、5“仲丁奭妣己”，考定妣己为仲丁之配。这属周祭卜辞。罗振玉曾考定仲丁配妣癸⑦，又增妣己，实为二配。这一考定为后来学者所沿用。

他还据《续编》1、17、7“且辛奭妣甲”，考定祖辛有妣甲之配。后来又有“妣甲且辛奭”的材料（《南明》659，661），为郭说增加了新证。罗振玉曾考定祖辛配妣庚⑧，新增妣甲，实有二配。这一考定也为后来学者所沿用。

据《续编》1、17、7“四且丁奭妣庚”，（《簠室》帝系82重）⑨考定妣庚为祖丁之配（四祖丁为祖丁）。这也是周祭卜辞。又据《续编》1、35、1“且丁母妣甲”，参《通纂》136、《通纂》别录一新3知“母”“奭”意同，考定祖丁还有妣甲之配。罗振玉曾考定祖丁配妣己妣癸⑩，又新增二配。这一考定亦为后来多数学者沿用。

《申论芎甲》为重申芎甲的考释。《通纂》曾详细考定芎甲为商王沃甲，纠正了罗、王以来长期误为阳甲的错误。《余论》说：“余说一出，学者多所疑难。”仍多认为是阳甲。《余论》再次认定芎甲为沃甲的考释是正确的。

《余论》再次论述卜辞有一“通例”，即“甲日卜祭某甲而盇祭某甲时，二甲于先世中必相次，所祭者在后，所盇祭在前。”并据新出《续编》1、9、9，1、50、5，3、29、3，3、19、2等片祭某甲盇祭某甲的卜辞，排定为喙甲、羌甲、𢦏甲世次，与史书所记阳甲、沃甲、河亶甲相当，依据这样的排列，芎甲必为商王沃甲。

《通纂》118卜辞为“宾寅卜〔贞〕其酉又〔于〕芎甲、南庚、喙甲、〔般庚〕、小辛。”芎甲在南庚之上，南庚下又有喙甲，证明芎甲为沃甲。《余论》又重申了这片。

《通纂》“书后”附一片为“己丑卜，大，贞于五示告，丁，且乙、且丁、芎甲、且辛。”董作宾认为此芎甲为阳甲，郭老认为这片为第二期卜辞，由近祖及远祖的祭祀，丁为武丁，祖乙为小乙，芎甲在祖丁与祖辛之间，应为沃甲。《余论》又重申此

说。郭说是对的，董是错的。

罗、王考芌甲为羊甲，即商王阳甲，有很大影响。长期以来的甲骨文考释书、字（典）书，以及研究商史的书籍、论文多隶定为羊甲，很少数隶羌甲，又都认为是商王阳甲。

郭老为了回答学术界的责难，再次确认芌甲为沃甲的考证是正确的。羊、羌、阳古音固可通，但与商王的世次不符。郭说芌假为沃，芌甲为沃甲，解决了这一问题⑪。同时发现喙甲为阳甲，芌甲为沃甲的考证后来成为了定论。这两个商王名号的考定是他对卜辞世系研究的重要贡献。

《易日解》是考释天象的，易日的卜辞很多。孙诒让说为更日，意为占卜是否吉利，是否更换卜日⑫。王国维疑为祭名⑬。王襄说易日为祭日⑭。《余论》认为过去的考释不当，引用了九片甲骨说：“‘易日’与𠬝、雨、雾等同见于一片，或同卜于一辞，其为关于天象之事无疑……易乃晹之借字，《说文》‘晹，日覆云暂见也，从日易声’。则是‘易日’犹言阴日矣”。纠正了过去的讹误，作出了正确的解释。释“易日”为选择吉利的卜日与“易”为祭名说再无人采用了。《甲骨文编》（1965年版）说：“易日，易犹变也，犹今言变天”（9卷12页）。此说也有问题。

“易”在卜辞中至少有三种用法，即“易日“、“易贝朋”、“易齿”。“易”金文多假为“锡”，《说文》段注“经典多假锡为赐字，凡言锡予者赐之假借也。”卜辞“易多女㞢贝朋”（《通纂》469），“易贝二朋”（《南坊》8、81）的易假为锡，与金文用法同。“疾齿隹易”（《前编》4、4、2），“疾齿亡易”（《前编》6、32、1）的易训换，说为换牙⑮。天象的易假为晹，为云遮太阳的阴日，这是有影响的一说。

《余论》说：“卜雨、卜风、卜　、卜雾均有之，卜阴之日理应亦有。”如果易日训为变天，那么还没有人解释什么是卜辞占卜阴日者。天象的占卜没有阴天，这是不好解释的。研究殷商气象的学者，认为那时的气候比今日安阳湿润，那就应该比今天阴日多。请看下面几辞：

贞翌庚辰不雨，庚辰雾。铁242、1

辛丑卜，宾，翌壬寅启，壬寅雾。珠166

翌癸卯帝不令风，夕雾。乙2452

……翌壬寅易日，壬寅雾。续5、10、3

以上应均为同辞占卜两种天象，前三辞是雨、启、风与雾同辞占卜，问是雨（　风）呢、雾呢？第四辞是易日与雾同辞占卜，也应指两种天象，问阴日呢、雾呢？但如果解释为变天呢、雾呢？就会不大合理。

占卜若干日以后的天象均有确指，请看下面几辞：

癸亥卜，……辛未大风。（相隔9日）　殷缀78

丙申卜，……来乙巳雨。（隔11日）　乙6664

至来辛亡大雨。（这个辛日卜下个辛日隔11日）　粹编785

庚寅卜，……辛丑雾。（隔12日）　后下25、6

癸巳卜，……己巳大雨。（隔37日）　殷缀75

占卜翌日，来日天象多为相隔一二日、三五日，这几辞相隔更多日，而且还占卜一个月以后是否下雨者。下面几辞也应是确指。

己巳卜，……乙亥易日（相隔7日）　续存下732

乙丑卜，……乙亥易日（隔11日）　京人3091

乙亥来丁亥易日（隔13日）　续存上1476

辛卯来丁巳易日（隔27日）　六中274

如果训易日为更日就不能说是确指，第四辞是占卜近一个月以后的天象。凡是占卜易日的卜辞我们都不知道当日是什么天象，雨呢、晴呢、雾呢？更不知道占卜若干日以后要变为什么天象，象一个月以后可以想象要变多少次呢？下面两条几乎是同文卜辞：

乙未卜，翌丁酉酒伐易日，丁明雾，大食易〔日〕。续编6、11、3

丙申卜，翌丁酉酒伐启，丁明雾，

大食启、库方209

易日与启处于卜辞相同的地位，应是同样指为一种天象。天象的易与其他天象的字一样，应有许多用为名词，如果训“更”就全是动词，这也是不好解释的。

《释啚㐭》主要是辨正罗振玉等啚㐭不分而作。罗振玉、容庚释㐭为啚⑯，这两字形、音、义有别，啚为都鄙字。《余论》说：“…㐭为仓㐭之象形，金文从㐭之字多作㐭形，延至小篆遂形变为㐭，《说文》乃谓‘从入从回’”。

《余论》还指出罗振玉以㐭误为俗写之图字，是错误的。图字从啚从囗，金文图字在啚字外匡以囗，证明罗说为误。

甲骨文中的啚与㐭有别。《说文》“啚，啬也，从口从㐭。”金文《矢簋》、《散氏盘》图字从啚可证。甲骨文啚假为鄙，卜辞有东啚、西啚、古（故）啚，即此假字，意为东鄙、西鄙、故鄙。卜辞又有“夜焚㐭三”，㐭即仓廪。据学者研究，这是一次奴隶暴动的反抗行为，一夜烧掉了奴隶主的粮仓三座⑰。㐭字字形学者有说象今北方麦场上堆谷物所筑圆土仓形⑱，此说可取。㐭㐭还有释啚者。不过，《余论》所辨证的这二字为多数学者所接受。

《镘黾解》解释了多见的习惯用语“不玄冥”。说这习惯用语“言兆璺之鲜明也”后来杨向奎先生《释“不玄冥》⑲作了精确解释。杨先生说《镘黾解》指出这习惯用语说兆璺不昏眩、模糊，“虽通其义而不得其解”，因对“玄冥”两字解释有误。郭老在再版《余论》《镘黾解》眉批说：“杨向奎为‘不玄冥”，其说至确。盖玄乃镟之初文，黾读为冥。今存此旧释者，以示文字研究之进展。”

总之，‹余论›在甲骨学发展上是有很大贡献的，现在收入《郭沫若全集》考古编第一卷（《古代铭刻汇考续编》的《骨臼刻辞之一考察》《释七十》合收入本卷《殷契余论》，本文未评述此二编）。笔者的评述恐有不当之处，为了研究与继承郭老的学术遗产，今抛砖引玉，希望贤哲之士有深入论说。

---

①明义士：《表较新旧版殷墟书契前编并记所得之新材料》文内缀合少数片，载齐鲁大学《齐大季刊》2号，1933年。

②⑬王国维：《戬寿堂所藏殷墟文字》考释46页14片、9页10片。

③叶玉森：《殷契钩沈》10页。

④董作宾：《甲骨文断代研究例》，《庆祝蔡元培先生六十五岁论文集》上册418页.

⑤胡厚宣：《卜辞杂例》，《历史语言研究所集刊》8本3分册。

⑥唐兰：《天壤阁甲骨文存》序。

⑦⑧⑩罗振玉：《增订殷墟书契考释》上卷8页。

⑨王襄：《簠室殷契征文》帝系82片，无说。

⑪于省吾：《释羌甲》说：“沃乃羌字之形讹……羌字讹为芺，后人改为渼，自隶省后则通作沃矣。”此说有发展。载《双剑诊殷契骈枝》。

⑫孙诒让：《契文举例》上4页。

⑭同⑨典礼4片。

⑮杨树达：《耐林庼甲文说·卜辞求义》54页。

⑯罗振玉：同⑦中卷7页。

容庚：《殷契卜辞》262片。

⑰胡厚宣：《甲骨文所见殷代奴隶的反压迫斗争》，《考古学报》1976年1期.

⑱陈梦家：《殷墟卜辞综述》536页。

⑲杨向奎：《释“不玄冥”》，《历史研究》1955年1期

（原載《殷都學刊》1986年第2期）

刻苦钻研甲骨学，成功之路就在你的脚下！

——在安阳甲骨学会成立太会上的发言

王宇信

甲骨文是我们中华民族的优秀文化艺术珍品。充分利用甲骨文材料研究商代社会历史和文化，对继承和发扬我们中华民族的优良传统，建设社会主义精神文明，激发我们的民族自豪感，对广大人民群众进行爱国主义和历史唯物主义教育是很有意义的。

虽然甲骨文有着悠久的历史，但与金文、石刻文字等金石学的其它分支学科研究相比，甲骨学却是一个小兄弟。尽管八十七年来甲骨学研究取得了很大进展，但还有不少方面需要进一步深入研究和探索。此外，我们做为甲骨文“故乡”的十亿人口的泱泱大国，应对甲骨学研究领域的一系列重大学术问题拥有发言权，国外学者对我们寄托很大的希望。因此，开创甲骨学研究的新局面，把甲骨学研究水平推向更新的高度，是时代赋予我国甲骨界的使命。

但是，在全国人民对内搞活经济，对外实行开放政策，全心全意建设具有中国特色的社会主义现代化强国的今天，甲骨学研究远远不能适应时代的需要。这是因为其一，甲骨学研究队伍小。虽然有一批造诣很高的甲骨学家，度过了十年动乱的艰难岁月，但毕竟年事已高。近年，甲骨学界的一颗颗巨星，诸如唐兰、郭沫若、于省吾等前辈学者相继陨落。一些健在的老一辈学者，正抓紧时间整理旧作或培养硕士、博士研究生，再开拓新的领域，已是力不从心。况且，他们的学识和治学经验已是到了亟需抢救和继承的时候了。而一些中年学者，虽然他们日夜兼程，夺回了被浪费十年之久的宝贵时光，现已成为活跃在甲骨学研究前台的骨干力量，但人数不多。近年一批自学成才者和新毕业的研究生，给甲骨学研究队伍增添了新鲜血液并正在走向成功。一般说来，目前的甲骨学研究队伍比十年动乱前有所增加。但从建设社会主义精神文明的总任务和甲骨学研究发展的需要看来，这支研究队伍毕竟人数太少了；其次，就是这支一、二百人的甲骨学研究队伍，主要力量都放在了繁重的教学工作或甲骨资料的整理和公布方面。诸如《甲骨文合集》、《甲骨文合集释文》、《小屯南地甲骨》、《小屯南地甲骨考释》、《甲骨文字典》、《甲骨文合集综类》、《甲骨文合集选本》、《甲骨文字考释类编》等等大型资料书、工具书，就投入了不少的人力。虽然这些是有利甲骨学发展，有利于后世子孙的基础工作，但牵涉了不少甲骨学者的精力和时间，因而甲骨学研究领域的不少课题，还没有人研究或还没有深入、全面的研究。这种情况，是我们应当尽快改变的。

可喜的是，现在不少有志攀登甲骨学研究高峰的人（包括青年人和一些中年人），正在不怕困难，向这门号称“绝学”的深奥学问挑战。这些人是我们甲骨学研究队伍大有希望的后备力量并蕴育着无限的潜力。

甲骨学并不象人们想象的那么困难。只要是学习目的明确，方法对头，坚持数年，是不难攻克甲骨学难关的。我们的甲骨学泰斗郭沫若，在一九二七年大革命失败以后，旅居日本，为宣传马克思主义社会发展规律的学说，潜心研究中国古代史。他就是“想通过一些已识未识的甲骨文字的阐述，来了解殷代的生产方式、生产关系和意识形态”①，并为了“向搞旧学问的人挑战”②，决心研究甲骨文。他在一九二八年八月底在日本东京上野图书馆开始查阅罗振玉《殷墟书契》（即《前编》）一书，虽然他发现此书满目都是“毫无考释的一些拓片”，但并不气馁，而是产生了迫切想“读破它、利用它、打开它秘密”的信念，决心自此步入甲骨学的堂奥。九月初郭沫若又去东京的一家书店文求堂去访求有关的甲骨学入门书，见到了《殷墟书契考释》。但遗憾的是他买不起，又不能将书借出，只得望书兴叹。令人高兴的是，郭沫若从书店老板庆大郎处得知东洋文库有这类藏书，于是他在九月上旬通过新闻记者山上政义的帮助，并经过作家藤村成吉的介绍，借用山上政义在中国曾使用过的假名“林守仁”，与东洋文库乇任石田干之助取得了联系，在一、两个月内，“读完了库中所藏一切甲骨文字和金文的著作”。与此同时，他把有关中国考古发现的记载也“差不多都读了”，觉得“对于中国古代的认识莫得到了一个可以自信的把握”③。从此，郭沫若打开了甲骨学这一神秘殿堂的大门并升堂入室，写出了一系列甲骨学和商史研究的划时代著作。著名作家凤子曾与郭沫若一起旅居日本。有一天，凤子因事到郭沫若住处，看到他正在专心致志地研究甲骨文。凤子感到好奇，一面翻看着郭沫若的研究资料，一面为郭沫若这种刻苦钻研精神所感动，陷入了沉思之中。郭沫若连忙象捧出宝贝一样地把一些甲骨碎片让凤子看，并津津乐道地向凤子谈起了有关的文字记载和研究心得，引起了凤子的兴趣。他笑着对凤子说：“你有兴趣？如有兴趣，我包你学三个月就会辨认甲骨文！”④。当年郭沫若以自己一、二个月就攻下甲骨学难关的实践，要包凤子三个月就掌握甲骨文。

我们举郭沫若自学甲骨的例子，是为了向有志于甲骨学研究的朋友们说明：甲骨学并不象有的人所说的那么难学，那么玄而又玄。当然，当年的郭沫若有着深厚的国学基础和渊博的学识，以及他掌握马克思主义的科学方法论和具有聪颖过人的头脑，再加上他“抱着挑战的态度”——把科学研究与革命事业紧密地联系在一起，因此他能以超人的毅力，在一、二个月内便洞察了甲骨学的奥秘，而且独辟蹊径，屡创新说，著述等身。不仅他的朋友，就是反对他的人也不得不承认他在甲骨学研究领域所取得的巨大成就和卓越贡献⑤。郭鼎堂（沫若）与罗雪堂（振玉）、王观堂（国维）、董彦堂（作宾）一起，被称为甲骨学史上的“四堂”，成为甲骨学界的一代宗师。

我们在这里不谈那些经过大学考古专业的专门训练后，又考上了研究生，经过名家指点和自己的钻研，在甲骨学研究方面崭露头角的那些同志。就是那些没有机会上大学的人，只要是学习目的明确、方法对头，并能接触到必要的甲骨资料，通过自己的努力，也一定会取得事业上的成功。这方面的例子并不少见。目前，在全国各地，都有一批以“发扬中华民族的固有文化，学习并继承老一辈古文字学家的已有成就，争取成为古文字学的接班人”⑥为己任的青年人，在努力攀登甲骨学等古文字学的高峰。他们中有的身患残疾，但身残志坚，正如他自己所说：“别人是两脚往上登，我却必须用四肢爬”进古文字研究领域⑦。也有的人十七岁就挑起全家六口人的生活重担，曾拉过架子车、当过搬运工、卖青菜、卖冰棍，又在建筑部门干过壮工、瓦工、木工、电工、库工、看大门、材料员、文书和宣传干事等。虽然二十多年来历尽了坎坷和生活的磨难，但他利用业余时间坚持自学，终于“用勤奋和毅力叩开古文字奥秘的大门”，取得了显著的成绩。他深有体会地说：“一个人必须要有远大的理想和抱负，也就是古人所谓的‘立志’，再加上勤奋刻苦，持之以恒，任何科学难关都是可以攻克的。不想付出艰辛的劳动，却只想收获，这简直是一种梦想”⑧。上海青年古文字学社的一些年青人，有的是工人，有的是干部，有的是在校大学生。他（她）们除了平时完成工作或学习任务外，还业余坚持自学甲骨等古文字，并定期聚会，或交流、切磋学术，或访问古文字学家，还出版了发表自己习作的不定期油印刊物《古文字》，至一九八四年已出版了五期。经过几年的努力，他们中有的人考上了研究生，有的人在大学任教，有的人在博物馆、出版社或科学研究部门专门从事古文字的研究工作。其中有一位陈建敏，当过战士，工人，后来通过自学，有了一定的甲骨学基础，被上海社会科学院历史研究所破格录用为助理研究员，协助柯昌济先生做《甲编考释》等工作，并先后发表了《董作宾后期的甲骨学研究》（《中国史研究动态》，一九八一年，第八期）、《甲骨学研究的进展》（《社会科学》，一九八二年，第四期）、《论午组卜辞的称谓系统及其时代》（《全国商史学术讨论会论文集》）等论文⑨。

在我们国家，自学成才者并不是在孤军奋战，人民和社会在关注着他们并给他们提供了成长的条件。有的被派到有关单位深造，有的得到专家的指点和鼓励。著名史学家周谷城曾为《古文字》题写了刊头，寄托了老一辈学者对青年后辈的殷切期望。也有的学者不仅大声疾呼“组织一些古文字学者编著古文字各个分支的概论，如《甲骨概论》、《青铜器概论》、《战国文字概论》、《简牍概论》之类”的入门书，以便“培养较多的古文字人材”⑩，而且还身体力行，编著了《古文字学初阶》（中华书局，一九八五年出版）。此外，还有《甲骨文史话》（一九八〇年，文物出版社出版）、《殷墟甲骨文简述》（一九八〇年，文物出版社出版）、《殷墟甲骨文基础七讲》（连载于《殷都学刊》一九八五年第一、二、三、四期）等甲骨学入门书，为有志于甲骨学研究的人提供了自学入门向导。

甲骨学入门并不难，而且八十七年来甲骨学的发展和取得的成就，又为自学者较快取得成就提供了优越的条件。这主要表现在：一，现在收集研究资料要方便的多了，而过去看材料是十分不容易的。甲骨著录书，是我们研究的基础。而过去著录书出版较少，不少学者因受材料的局限，研究很为困难。孙诒让的《契文举例》，只接触一种书。罗振玉的《殷墟书契考释》，只接触到四种书。孙海波的《甲骨文编》（一九三四年初版本），只接触到八种书。陈梦家的《殷墟卜辞综述》，接触到四十多种书。岛邦男的《殷墟卜辞综类》，接触到六十多种书。而现在，已出版著录甲骨的专书和论文一二七种，远远超出了《综类》一书所收的范围。此外，过去不少甲骨著录由于出版较早，加之印数也少，因此要想收集齐备很不容易。而现在，只要有《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》、《怀特氏等收藏甲骨文集》，再加上前不久出版的《东京大学东洋文库所藏甲骨文集》，材料就基本齐备了，为甲骨学研究提供了纵横驰骋的广阔天地；其二，过去著录的甲骨，因限于条件，有一些拓本或照片印制不清，研究起来很是不便。现在，十五万片甲骨的藏家都已明瞭。不少著录都尽可能地换用了新的拓本，即使个别拓本仍然不清，也可根据线索找到原骨核校。因此，研究过程中的“拦路虎”愈来愈少了⑪；其三，一些大型的工具书、资料书日益增多。集一九六二年以前考释文字之大成的《甲骨文字集释》（十四卷）全书八册，已由李孝定编成，在一九六五年出版并几经重印。日本岛邦男《殷墟卜辞综类》将六十多种甲骨著录的卜辞逐条按一定的部首集中在一起，已于一九六七年出版，并在一九七一年、一九七七年几度增订出版，为研究时搜集资料提供了巨大方便。据悉，资料更全、更新的《甲骨文字典》、《甲骨文考释类编》、《甲骨文合集释文》、《甲骨文合集综类》等书也正在加紧编纂中；其四，八十七年来，甲骨学研究有了长足的进步，取得了颇为丰硕的研究成果。一些前辈学者的治学经验和他们所经历的道路，为我们提供了可贵的借鉴。因此我们今天研究甲骨学，是在前辈们奠定的坚实基础上前进的。正因为我们是以“它最前进的一线作为基点而再出发”⑬，自然就赢得了时间，延长了科研生命，向更新的领域进击。可以说，我们是站在前辈巨人的肩上前进，理应高屋建瓴，取得更大成绩。

江山代有才人出。今天研究甲骨学比前人有了更为优越的条件，我们应当百倍珍惜它。俗话说的好：“千里之行，始于足下”。只要是通过自己的刻苦努力，锲而不舍，一定会步入甲骨学的堂奥，成功之路就在你的脚下！

---

①郭沫若：《甲骨文字研究重印弁言》，《郭沫若全集》考古编第一卷，科学出版社，一九八二年出版。

②郭沫若：《金文丛考重印弁言》（一九五二年），人民出版社，一九五四年出版。

③参阅龚洛民、方仁念：《郭沫若年谱》上卷第一四九——一九五页，天津人民出版社，一九八二年出版。

④凤子：《雨中千叶——访郭老故居》，《光明日报》，一九八一年八月十六日。

⑤郭沫若在甲骨学研究领域所做出的卓越贡献，请参阅拙著《建国以来甲骨文研究》第七章的有关论述。

⑥《上海青年古文字学社社章》（草案），《古文字》，一九七九年，第一期（油印本）

⑦余长安：《他拄着双拐向上攀登》，《光明日报》，一九八三年，八月十八日。

⑧王慎行：《用勤奋和毅力叩开古文奥秘的大门》，《河北学刊》一九八五年，第六期。

⑨陈建敏同志与我通信多年，一九八四年“全国商史讨论会“才得以谋面。分手时曾瞩他节劳。时隔一年，忽闻建敏于一九八五年十二月三十日因病猝逝。闻后语噎，竟不能相信。翻检信札，见他十月六日来信，询问八六年殷商文化讨论会之事等，不觉潸然泪下。陈建敏值三十七岁盛年，正是甲骨学研究有所作为之时。但苍天不永，夺我才人，呜呼，痛哉！写此以寄对建敏的哀悼之情。他所历自学成才之路并取得成功，是值得我们学习的！

⑩李学勤：《古文字学术讨论会与古文字学的发展》，《中国史研究动态》，一九七九年，第三期。

⑪以上两点据胡厚宣师在河南安阳师专所做《研究甲骨文的大好形势》学术报告记录稿。

⑫郭沫若：《古代研究的自我批判》，《十批判书》，第五页，科学出版社，一九五六年。

（原載《甲骨學研究》第1輯，安陽甲骨學研究編輯部，1987年）

《甲骨学通论》绪论

王宇信

【**編者按**】王宇信先生《甲骨学通论》一书，共十六章，书后并有《甲骨学大事记》、《著录目》等四个附录和例图六十三页，全书四十二万字。周谷城题签，胡厚宣、李学勤二先生分别为该书写了序，即将由中国社会科学出版社出版。本刊现将该书第一章《绪论》发表。

第一节　什么是甲骨学

甲骨学是以古遗址出土供占卜用的有字龟甲和兽骨为研究对象的一门学问。这些有字龟甲和兽骨，主要为商朝后期（即公元前十四世纪至公元前十一世纪）的遗物；近年在山西、陕西、北京等西周遗址中，也有有字甲骨出土，扩大了甲骨学的研究范围。对此，我们将在本书下篇做专门论述。

这些供占卜记事用的有字龟甲和兽骨，就是我国文化宝库中的珍品——甲骨文。甲骨文自一八九九年被发现以后，迄今已积累了十五万片左右的资料①，为甲骨学的建立奠定了坚实的基础。

甲骨学是一门新兴的学问。由于八十七年来出土材料的不断增多和收集材料手段的逐渐科学化，通过国内、外一批造诣很深学者对文字的释读、卜法文例的探索、分期断代的确立和深入研究文字内容的社会历史和文化的考证，以及学科本身发展史的建立等等，甲骨学已成为一门有着严密规律和许多重大研究课题的一门新兴学科。

“衣带渐宽终不悔，为伊消得人憔悴”。不少优秀的甲骨学者，或筚路蓝缕、开拓榛莽，或发凡启例，凿破鸿濛，为甲骨学的建立耗尽了心血和付出了大量艰苦的、创造性的劳动。一批饮誉海内外甲骨学者的名字，将在甲骨学史和我国近代学术史上占有重要地位。他们不少震聋发聩的真知灼见和他们缜密的研究方法，也成为甲骨学领域值得继承和研究的宝贵财富，并将永远启迪后学，对开创甲骨学研究的新局面有着重大的意义。

古代占卜用龟甲和兽骨上的文字——甲骨文，是甲骨学研究的重要内容之一。因此，甲骨学属于传统的金石学范畴。所谓“金石学”；即“研究中国历代金石之名义、形式、制度、沿革；及其所刻文字图象之体例、作风；上自经史考订、文章义例、下至艺术鉴赏之学也”②。“金”即“吉金”　包括铜器上的铭文和器形，主要是青铜器上所铸铭文以及度量衡器、刻符、玺印、钱币、铜镜等上面的文字和图象等。“石”即“乐石”。包括古代石刻上的文字及造型，主要是碑碣、墓志，此外还有摩崖石刻、造像、经幢、柱础、石阙等等。我国传统金石学的形成，最早可追溯至西汉　到宋朝大盛，出现了用图象和拓本（或摹本）来表现古器物器形和古文字的金石图谱，是金石学正式形成时期。历元明两朝的中衰，至清朝出土的金石材料增多，研究又复兴盛。与此同时，研究的范围也愈来愈广，又涉及到陶

器、简牍、封泥等等，已远非“吉金”、“乐石”所能包容的了。特别是清朝末年甲骨文的出土，使金石学又增加了新内容③。

但是，甲骨文材料和传统的金石学研究材料——金石文字及其图象一样，是古代遗留下来的实物资料，是通过考古发掘手段取得的，特别是一九二八年殷墟科学发掘甲骨文以后。因此，甲骨学研究又成为隶属于近代田野考古学的一门分支学科.所谓考古学，“是根据古代人类活动遗留下来的实物来研究人类古代情况的一门科学”④。“如果依照现代的学科分类来说。实际上包括有铭刻学（Epigraphy）和考古学（Archaeology）两门学科。北宋金石学家吕大临在《考古图》的序文中说：‘观其器，诵其言，形容仿佛，以追三代之遗风，如见其人矣’。他把古器物的形制和铭刻文词二者区分得很清楚”⑤。

我国近代田野考古学的形成，是以一九二八年中国学者自己主持进行的殷墟大规模科学发掘为标志的。解放前从一九二八年至一九三七年先后在安阳殷墟进行的十五次大规模科学发掘工作，奠定了我国田野考古学的基础⑥。而发掘工作的缘起，就是为了科学收集甲骨文。田野考古学的发展，不仅获得了大量科学发掘的甲骨新资料，也促进了甲骨学研究的前进。因此　甲骨学与田野考古学有着密切的关系并成为隶属于考古学的一门分支学科。

应该在这里明确的是，甲骨文并不就是甲骨学。甲骨文只是商朝后期遗留下来的珍贵文物和史料，而它的科学价值，只有随着甲骨学研究的发展，才愈益为人们所认识。为什么这样说呢？由于甲骨文距今时代久远，古文献中也失去记载，所以几千年来深埋地下，鲜为人知。在学者认识和开始购藏甲骨文的一八九九年以前，安阳殷墟所“埋藏龟甲三十馀年已发现，不自今日始也”⑦。但不知其为何物，故被当做“龙骨”成批卖给药店或被填入枯井处埋掉，造成了巨大损失。直到甲骨文被发现的初期阶段，学者们对其内容和规律还是茫然无知的，只不过是做为秘不示人的“古董”珍藏，把玩而已；此外，甲骨文经过埋藏时期的断烂，发掘过程中的破损，辗转收藏过程中断裂等等，大部分都很碎小，被称为“断烂朝报”，要想利用很为困难。

而甲骨学，是以甲骨文为研究对象的专门学科，是甲骨文自身固有规律的系统化和科学的反映。正是由于甲骨学的不断发展，才使这些“断烂朝报”中所蕴藏的古代社会奥秘被学者们一一窥破。因此，我们决不能把甲骨文与甲骨学混为一谈。

第二节　甲骨学与其它学科的关系

一八九九年以来出土的十五万片甲骨文和历年殷墟发掘所得大量遗迹、遗物，为恢复商代社会面貌提供了珍贵的第一手资料。正如胡厚宣先生所指出的：

> 现在这十六万片甲骨，每片平均即以十个字计，已有一百六十万言。包括内容非常丰富。再加上大量的遗迹遗物的文化遗存，不但商史可据以研究，就是商以前和商以后的好多古史上的问题，也可以从这里探求获得解决⑧。

正是由于甲骨学者的努力和甲骨学的形成和发展，才使这十五万片甲骨文成为时代早晚明确、文句辞义贯通的科学研究第一手资料。甲骨学成为与汉语史、语言学和历史学、考古学和古代科学技术史等学科有着密切联系的一门重要学问……（本节以下略）

第三节　刻苦钻研甲骨学，成功之路就在你的脚下

甲骨文是我们中华民族的优秀文化艺术珍品，充分利用甲骨文材料研究商代社会历史文化，对继承和发扬我们中华民族的优良传统，建设社会主义精神文明，激发我们的民族自豪感，对广大人民群众进行爱国主义和历史唯物主义教育是很有意义的。

虽然甲骨文有悠久的历史，但与金文、石刻文字等金石学的其它分支学科研究相比，“资历”要年青的多了。尽管八十七年来甲骨学研究取得了很大进展，但还有不少方面需要进一步深入研究和探索。此外，我们做为甲骨文“故乡”的十亿人口的泱泱大国，应对甲骨学研究领域的一系列重大学术问题拥有发言权，国外学者对我们寄托很大希望。因此，开创甲骨学研究的新局面，把甲骨学研究水平提高到新的高度，是时代赋予我国甲骨学界的历史使命。

但是，在全国人民对内搞活经济，对外实行开放政策，全心全意建设具有中国特色的社会主义现代化强国的今天，甲骨学研究远远不能适应时代的需要。这是因为其一，甲骨学研究队伍小。虽然一批有造诣的甲骨学者，度过了十年动乱的艰难岁月，但毕竟年事已高。近年，甲骨学界的一颗颗巨星，诸如唐兰、郭沫若、于省吾等前辈学者相继陨落。一些健在的学者，正抓紧时间整理旧作或培养研究生，再开拓新的领域，已是力不从心。况且，他们的学识和治学经验已是亟需继承和抢救的时候了。而一些中年学者，虽然日夜兼程，夺回了被浪费十年之久的宝贵时光，他们现已成为活跃在甲骨学研究前台的骨干力量，但人数不多。近年一批自学成才者和新培养的研究生，给甲骨学研究队伍增添了新鲜活力并正在走向成功。一般说来，目前甲骨学的研究队伍比十年动乱前有所扩大。但从建设社会主义精神文明的总任务和甲骨学研究发展的需要看来，这支队伍毕竟人数太少了；其次，就是这支一〇〇人左右的甲骨学研究队伍，主要力量都放在了繁重的教学工作或甲骨资料的整理和公布方面。诸如《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》、《甲骨文字典》、《甲骨文合集综类》、《甲骨文考释类编》、《甲骨文合集考释》等等大型资料书和工具书，投入了不少的人力和时间。虽然这些是有利于甲骨学的发展，有利于子孙后世的基础工作，但牵涉了不少甲骨学者的精力，因而甲骨学研究领域的不少课题，还没有人研究或还没有深入、全面地研究。这种情况，是我们应当尽快改变的。

可喜的是，现在不少有志于攀登甲骨学研究高峰的青年人，正在不怕困难，向这门号称“绝学”的深奥学问挑战。他们是我们甲骨学研究队伍大有希望的后备力量并蕴育着无限的潜力。

甲骨学并不象人们想象的那么困难。只要是学习目的明确，方法对头，坚持数年，是不难攻克甲骨学难关的。

我们的甲骨学泰斗郭沫若，一九二七年大革命失败以后，旅居日本，为宣传社会发展规律学说，潜心研究中国古代史。他就是“想通过一些已识未识的甲骨文字的阐述，来了解殷代的生产方式、生产关系和意识形态”⑨，并为了“向搞旧学问的人挑战”⑩，决心研究甲骨文的。他一九二八年八月底在日本东京上野图书馆开始查阅罗振玉《殷墟书契》（即《前编》）一书，虽然他发现此书满目都是“毫无考释的一些拓片”，但并不气馁，而是产生了迫切想“读破它、利用它、打开它秘密”的信念，决心自此步入甲骨学堂奥。九月初郭沫若又去东京的文求堂书店访求有关甲骨入门书，见到《殷墟书契考释》。但遗憾的是他买不起，又不能将书借出，只得望书兴叹。令人高兴的是，郭沫若从书店主人庆大郎处得知：东洋文库有这类藏书，于是郭沫若在九月上旬通过新闻记者山上政义的帮助，并经过作家藤村成吉的介绍，借用山上政义在中国曾使用过的假名“林守仁”，与东洋文库主任石田干之助取得了联系，在一、两个月内，便“读完了库中所藏一切甲骨文字和金文的著作”。与此同时，他把有关中国考古发现的著作“差不多都读了”，觉得“对于中国古代的认识算得到了一个可以自信的把握”⑪。从此，郭沫若打开了甲骨学这一神秘殿堂的大门并升堂入室。他一九三〇年出版了《中国古代社会研究》，开辟了史学研究的新天地。他一系列的甲骨学著作，如《卜辞通纂》、《殷契粹编》、《甲骨文字研究》、《殷契馀论》等等，在甲骨学史上占有重要的地位；著名作家凤子曾与郭沫若一起旅居日本。有一天凤子因事到郭沫若住处⑫，看到他正专心致志地研究甲骨文。凤子感到好奇，一面翻看着郭沫若的研究资料，一面深为郭沫若这种刻苦钻研精神所感动，陷入了沉思之中。郭沫若连忙捧出一些甲骨碎片让凤子看，并向她滔滔不绝地谈起有关的文字记载和研究心得，引起凤子的兴趣。他笑着对凤子说：“你有兴趣？如有兴趣，我包你学三个月就会辨认甲骨文！”……当年郭沫若以自己一、两个月就掌握了甲骨文的实践，要包凤子三个月就学会甲骨文。

我们举郭沫若自学甲骨的例子，是为了向有志于甲骨学研究的青年朋友们说明，甲骨学并不象有些人说的那么难学，那么玄而又玄。当然，当年的郭沫若有着深厚的国学基础和渊博的学识，以及掌握了科学方法论和具有聪颖过人的头脑，再加上他“抱着挑战的态度”，因此他能以超人的毅力，在一、两个月内便洞察了甲骨学的奥秘，而且独辟蹊径，屡创新说，著述等身。郭沫若（鼎堂）与罗雪堂（振玉）、王观堂（国维）、董彦堂（作宾）等甲骨学家一起，被称为甲骨学史上的“四堂”，成为甲骨学界的一代宗师。

我们在这里不谈那些经过大学考古专业的系统训练后，又考上了研究生，经过名家指点和自己的钻研，在甲骨学研究方面已做出成绩的同志。就是那些没有机会上大学的人，只要学习目的明确，方法正确，有条件接触必要的甲骨资料，通过自己不懈的努力，也一定会取得事业上的成功。这方面的例子并不少见。目前，在全国各地，都有一批以“发扬中华民族的固有文化，学习并继承老一辈古文字学家的已有成就，争取成为古文字学的接班人”⑬为已任的青年人，在努力攀登甲骨学等古文字学的高峰。他们中有的身患残疾，但身残志坚。正如他自己所说的：“别人是两脚往上登，我却必须用四肢爬”进古文字学研究领域⑭；也有人二十多年来历尽了坎坷和生活的磨难，但他利用业馀时间自学，终于“用勤奋和毅力叩开古文字奥秘的大门”，取得了显著的成绩。他深深地体会到：“一个人必须要有远大的理想和抱负，也就是古人所谓的‘立志’，再加上勤奋刻苦，持之以恒，任何科学难关都是可以攻克的。不想付出艰辛的劳动，却只想收获，这简直是一种梦想”⑮；上海青年古文字学社的一些年青人，有的曾经是工人，或是干部，有的是在校大学生。他（她）们除了平时完成工作或学习任务外，还业余坚持自学甲骨等古文字，并定期聚会，或交流切磋学术，或访问古文字学家，还出版了发表自己习作的不定期油印刊物《古文字》，至一九八四年已印行了五期。经过几年的努力，他们中有的人考上了硕士、博士研究生，有的人在大学任教，有的人在博物馆、出版社或科学研究机构从事古文字的研究工作。其中有一位陈建敏，曾当过战士、工人，后来通过自学有了一定的甲骨学基础，被上海社会科学院历史研究所破格录用为助理研究员。先后发表了《董作宾后期的甲骨学研究》（《中国史研究动态》，一九八一年，第八期）、《甲骨学研究的进展》（《社会科学》，一九八二年，第四期），《论午组卜辞的称谓系统及其时代》（《全国商史学术讨论会论文集》，一九八五年二月）⑯等等。

在我们国家，自学成才者并不是在孤军奋战，人民和社会在关注着他们并给他们提供了成长的条件。有的被派到有关单位深造，有的得到专家的指点和鼓励。著名史学家周谷城曾为《古文字》题写了刊头，寄托了老一辈学者对青年后辈的殷切希望。也有的学者不仅大声疾呼“组织一些古文字学者编著古文字各个分支的概论，如《甲骨概论》、《青铜器概论》、《战国文字概论》、《简牍概论》之类”的入门书，以便“培养较多的古文字人材”⑰，而且还身体力行，编著了《古文字学初阶》（中华书局，一九八五年）。此外还有《殷墟甲骨文基础七讲》⑱，《殷墟甲骨文简述》⑲、《甲骨文史话》⑳等甲骨入门书和工具书，为有志于甲骨学研究的青年朋友提供了自学的入门响导。

甲骨学入门并不难，而且八十七年来甲骨学的发展和所取得的成就，又为自学者较快取得成就提供了优越的条件。这主要表现在：

一、现在收集研究材料要方便的多了。甲骨著录书，是我们研究的基础。而过去看材料是十分不容易的。主要是因为过去著录书出版较少，不少前辈学者因受材料的局限，研究也很为困难。孙诒让的《契文举例》，只接触一种书。罗振玉的《殷虚书契考释》，只接触四种书。孙海波的《甲骨文编》（一九三四年初版），只接触到八种书。陈梦家的《殷墟卜辞综述》，接触到四〇多种书。岛邦男的《殷墟卜辞综类》，接触到六〇多种书。而现在，共有各种著录甲骨的专书和论文一二七种以上，远远超过了《综类》一书所收的范围。此外，过去一些甲骨著录由于出版较早，加之印数较少，因此极难收集齐备。而今天，只要有《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》、《怀特氏等收藏甲骨文集》、《东京大学东洋文化研究所藏甲骨文字》等书，材料就基本齐备了，为甲骨学研究提供纵横驰骋的广阔天地；其二，过去著录的甲骨，因限于条件，有一些拓本（或照片）印制不清，研究很是不便。现在，十五万片甲骨的藏家都已清楚。不少著录都尽可能地换用了新的拓片。即使个别拓本不清，也可根据线索找到原骨核校。因而研究过程中的“拦路虎”愈来愈少了㉑；其三，一些大型的工具书出版日益增多。集一九六二年以前甲骨文字考释大成的《甲骨文字集释》（十四卷）全书八册，已由李孝定编成出版并几度重印。日本岛邦男《殷墟卜辞综类》将六十多种甲骨著录的卜辞逐条按一定的部首集中在一起，已于一九六七年出版，并在一九七一年、一九七七年几度增订出版，为研究时搜集资料提供了极大方便。据悉，更全更好的《甲骨文字典》、《甲骨文合集摹拓汇编》、《甲骨文字考释类编》等书正在抓紧编纂中；其四，八十七年来，甲骨学研究有了长足的进步，取得了颇为丰硕的研究成果。一些前辈学者的治学经验和他们所经历的道路，为我们提供了可贵的借鉴。因此我们今天研究甲骨学，是在前辈学者们奠定的坚实基础上前进的。自然也就赢得了时间，延长了宝贵的科研生命，向更新的领域进击。可以说，我们是站在前辈巨人的肩上，理应高屋建瓴，取得更大的成绩。

江山代有才人出。今天研究甲骨学比前人有了较为优越的条件，我们理应百倍珍惜它。俗话说的好：千里之行，始于足下。只要是通过自己的刻苦努力，锲而不舍，一定会步入甲骨学的堂奥。

成功之路就在你的脚下！

第四节　本书的宗旨

语言文字学家与历史考古学家研究甲骨学的侧重点是不同的。

语言文字学家研究甲骨学的侧重点主要在于甲骨文字的考释、文字产生的历史和语法结构、句子结构等文字学本身的问题。“它的内容既包括铭刻学的资料，也包括象许慎《说文解字》之类的并非铭刻的辗转抄下来的书本上的有关资料”㉒。因此，今日的语言文字学

家，既要精通传统古文字学形体、音韵、训诂等方面的知识和方法，也要对铭刻上的各种古文字材料进行研究。

而历史考古学家，则利用和吸收语言文字学家考释甲骨文字的成果，从历史考古学的角度，研究甲骨的占卜方法和契刻规律、文字的早晚变化以及文字内容所反映的不同时期的社会政治、经济、文化的发展和变化等等。就研究内容和范围说来，比语言文字学的研究要丰富和广阔的多。

我们这本《甲骨学通论》，就是从历史考古学的角度，根据我们从开始学习甲骨学，到进行研究的过程中，对一些问题的理解和体会，介绍一些必要的甲骨学基础知识和研究方法。希望使有志于甲骨学研究的读者，能够在阅读本书的基础上，再阅读书中所开列的基本甲骨书籍，熟悉并学会收集材料，以便独立地对甲骨学本身的一些问题以及殷商史，考古学等方面的问题进行研究工作。

与此同时，我们力图在本书中充分体现八十七年来甲骨学研究的成果，尽量将已经解决和正在解决的一些重大学术问题的来龙去脉叙述清楚，并附有新中国甲骨学论著目．希望能给甲骨学研究者也提供一些方便，适应多层次读者的需要。

此外，由于河南安阳殷墟甲骨文出土较早，积累的材料也非常丰富，故研究得也较为成熟。而西周甲骨的出土和研究，是建国以后的事情了。而且数量较少，研究还有待进一步深入㉓。因此传统的所谓“甲骨学”，一般是指殷墟甲骨文的研究而言。我们这本《甲骨学通论》，就是以殷墟甲骨文研究为主，即本书上篇的内容；而有关西周甲骨的研究和我们的一些看法，则在本书的下篇专门叙述。虽然限于材料和研究的不充分，内容没有殷墟甲骨文丰富，但西周甲骨在解放后的发现和研究，毕竟使甲骨学研究领域形成了一个新的分支学科今后的任务是使它进一步丰富和完善。

长江后浪推前浪。我们热诚地希望有志于甲骨学研究的朋友们，通过坚韧不拔的努力能够学有所成，成为在甲骨学研究领域有发言权的专门家。

---

①有关一八九九年以来殷墟甲骨文材料的发现，参见胡厚宣：《八十五年来甲骨文材料之再统计》，《史学月刊》 一九八四年 第五期；有关西周甲骨材料之统计，参见王宇信：《西周甲骨探论》，第一九至第二〇页，中国社会科学出版社，一九八四年四月出版。②朱剑心：《金石学》，第三页，文物出版社，一九八一年新一版。 ③关于我国传统金石学的发展历史，参阅朱剑心：《金石学》，第三四至六四页。 ④夏鼐：《什么是考古学》，《考古》，一九八四年，第十期。⑤夏鼐：《商周金文集成序言》，《考古》，一九八四年，第四期。⑥参阅夏鼐：《中国文明的起源》。第三页，文物出版社，一九八五年。⑦罗振常：《洹古访古游记》，宣统三年（一九一一年）二月二一日条记，蟫隐庐印行，一九三六年。 ⑧胡厚宣：《殷墟发掘》，第二页，学习生活出版社，一九五五年。胡先生当时统计甲骨资料共出土十六万片。 ⑨郭沫若：《甲骨文字研究重印弁言》，《郭沫若全集》（考古编第一卷），科学出版社。 ⑩郭沫若：《金文丛考重印弁言》（一九五二年），人民出版社，一九五四年。 ⑪龚济民、方仁念：《郭沫若年谱》（上卷），第一九四——一九五页，天津人民出版社。 ⑫凤子：《雨中千叶——访郭老故居》，《光明日报》，一九八一年，八月十六日。⑬《上海青年古文字学社社章》（草案）《古文字》，一九七九年，第一期。 ⑭余长安：《他拄着双拐向上攀登》，《光明日报》一九八三年，八月十八日。 ⑮王慎行：《用勤奋和毅力叩开古文字奥秘的大门》，《河北学刊》，一九八五年 第六期。 ⑯建敏同志与我通信多年，一九八四年十月“全国商史学术讨论会”方得谋面。时隔一年，忽闻建敏同志已于一九八五年十二月三十日因心脏病猝发病逝。闻后语噎，竟不能相信。建敏值三十七岁盛年，正是甲骨学研究大有作为之时。苍天不礼，夺我才人，鸣呼，痛哉！建敏所历成功之路，是值得青年同志们学习的！ ⑰李学勤：《古文字学术讨论会与古文字学的发展》，《中国史研究动态》，一九七九年，第三期。⑱仁言著，载《殷都学刊》，一九八五年，第一、二 三、四期。 ⑲孟世凯著，文物出版社，一九八〇年出版。⑳肖艾著，文物出版社，一九八〇年出版。 ㉑以上两点据胡厚宣师一九八五年十月在河南安阳所做《研究甲骨文的大好形势》学术报告记录。 ㉒夏鼐：《〈殷周金文集成〉前言》，《考古》，一九八四年，第五期。 ㉓王宇信：《西周甲骨探论》，第一篇，中国社会科学出版社，一九八四年。

（原載《殷都學刊》1987年第3期）

科学发掘甲骨文的最新成果

——评《小屯南地甲骨》

王宇信

1973年中国社会科学院考古研究所安阳发掘队在小屯南地发现了卜骨、卜甲7150片：其中卜骨7040片（内有刻辞的4761片），卜甲110片（内有刻辞的60余片），是建国以来出土甲骨最多的一批①。这批甲骨，不仅数量较多，而且内容丰富，包括祭祀、天象、田猎、旬夕、农业、征伐、王事等，为商代历史的研究提供了珍贵史料。更为重要的是，这批甲骨有可靠的出土地层依据，并常与陶器共存，对甲骨文的分期断代研究极有价值。正因为如此，小屯南地甲骨引起中、外学者的瞩目，亟盼早日公布，以推动甲骨学和商史的研究。而《小屯南地甲骨》（上、下册）一书的及时出版，满足了中、外学术界的这一渴望和期待。

《小屯南地甲骨》（以下简称《屯南》），由中国社会科学院考古研究所编纂，全书分上、下册：上册为图版，于1980年出版；下册为释文、索引及卜骨的钻凿形态等，于1983年出版，全书共著录甲骨4162片，1973年科学发掘所得有字甲骨4589片及1975—1977年在小屯一带零星采集所得甲骨23片已全部呈现给学术界。《屯南》上册有二个分册，书前有凡例、前言、图版号及拓本顺序号目录表、龟甲统计表、背文统计表（骨、龟）等项。书中著录的甲骨，按1973年出土时的单位，如灰坑（H）、房基（F）、墓葬（M）、探方（T）等为序纂集；而下册共有三个分册。第一分册为释文，书前有凡例，引书引文目录，正编为释文，书后有第一分册的勘误。第二分册为索引、摹本，包括索引凡例、部首、检字表、字词索引、隶定字词表、人名索引、地名索引、摹本号登记表及摹本图版等。第三分册为钻凿图版，书前有小屯南地甲骨钻凿形态（论文）、钻凿统计表、骨面钻凿统计表、钻凿摹本、拓本目录表及钻凿图版（包括摹本图版、拓本图版）等，最后是编者的后记。

《屯南》（上、下册）一书，和解放前殷墟十五次发掘所得甲骨的著录总集《殷墟文字甲编》、《殷墟文字乙编》（包括《乙编》的缀全总集《殷墟文字丙编》等书一样，也是一部著录科学发掘甲骨的资料总集。但本书的编纂与上述二书相比，又有以下几个特色：

一、《屯南》一书，按出土单位著录甲骨，这就在甲骨学史上第一次为我们提供了一批可与出土层位及有关遗物互相联系起来的甲骨材料，从而使甲骨文分期断代研究的考古学考察有了很大进展。早在1933年，董作宾先生在《甲骨文断代研究例》一文中就提出“坑位”是甲骨文分期断代的标准之一。但他所谓的“坑位”，并不是指出土甲骨的考古学层位关系，而是甲骨出土的大体方位——“区”。而《甲》、《乙》编虽然按甲骨出土顺序号著录科学发掘所得甲骨，但解放前安阳十五次大规模发掘的总报告迄今尚未发表，即使能据出土号将甲骨按出土单位集中，但此坑的层位关系及有关出土遗物也很难据公布的材料查考清楚。而《屯南》一书著录的甲骨，可以很方便地查考出土单位及该单位的科学地层，共出陶器等遗物，据以进行分期断代的深入研究。因而根据甲骨文本身的世系、称谓、贞人等标准判断的时代，才能真正得与科学地层的早、晚关系作“观其全体”的研究。特别是《屯南》（上册）第一分册的序言，全面论述了1973年小屯南地甲骨发掘整理的经过、甲骨出土情况、地层堆积与甲骨分期以及对某些甲骨的分期和一些问题。这对学术界争论不休的所谓“文武丁卜辞之谜”和所谓“历组”卜辞的时代等问题的讨论和深入，起了很大的推动和促进作用。特别是关于武乙、文丁卜辞的区分，较前人又有了新的进展。

二、《屯南》一书的释文和有关各种索引，为研究者提供了极大的方便。众所周知，甲骨学者多数是据著录书中的拓本（或摹本）进行甲骨学研究的。有不少重要材料，常因拓摹不清或印刷不精，往往关键的字模糊不辨，成了研究工作中的“拦路虎”。《甲编》一书，由于屈万里《甲编考释》一书的出版，从而使学者在拓本不清时，可据考释辨明不清之处。而《乙编》一书，虽然张秉权的《丙编考释》对每个缀合版都作了考释，使用时方便的多了。但《乙编》仍有不少未被缀合的甲骨模糊不清，特别是甲骨学者常为其反面不清所苦。此外，不仅训练有素的甲骨学者需要利用甲骨材料，而且多学科的学者也都在利用甲骨文资料，去发掘研究我国古代的文化珍品。他们在没有释文的情况下，利用甲骨文材料就更为困难了。而《屯南》一书图版印行才不过三年，释文就已告竣并出版发行了，这是非常迅速和及时的。特别是书中还编制了各种索引，极方便各个学科研究者的查考使用。显而易见，这就比《甲编考释》、《丙编考释》要略胜一筹了。我们应当感谢《屯南》一书编辑者所花费的巨大劳动。他们的劳动不仅有利于甲骨学研究，也有利于甲骨材料的多学科利用以及做为甲骨初学者的入门向导和标准教科书。

三、我们今天去古已远，甲骨的占卜和整治过程早已成了历史的遗迹。虽然不少前辈学者据出土实物对甲骨的钻、凿制作过程和工艺进行过研究，他们的一些看法似已成为不易之论。但1973年小屯南地甲骨出土后，《屯南》一书的作者在整理甲骨实物的过程中，对卜骨上钻凿的制作工艺及形制有了新的发现，从而比老一辈学者的有关论断前进了一大步。

甲骨上钻凿形态的观察、研究，是甲骨文分期断代的一个新途径。过去，学者们多注意甲骨文字的研究和社会历史内容的考证，很少有人注意甲骨背面的钻凿。因此，甲骨著录书一般只发表甲骨有卜辞部分，而将甲骨无字的钻凿部分略去了。只有郭若愚在钻凿未被人注意的情况下，于1953年出版的《殷契拾掇》（二编）上刊出了一些甲骨背面钻凿的拓本，并在该书的序中指出：“我觉得做学术工作是严肃的，精密的，因此亦必须是负责的，根本不能忽视一点现象，而且要立刻说明，以供大家研究”，但他没有对此作进一步系统研究。而全面系统研究甲骨上的钻凿形态并据此进行骨甲分期断代的，是1973年加拿

大许进雄的《卜骨上的钻凿形态》（台湾艺文印书馆）及1979年许进雄的《甲骨上钻凿形态的研究》(台湾艺文印书馆)。此后，甲骨上的钻凿形态考察才引起了甲骨学界的重视。国内也有人开始做这方面的研究，1981年发表了于秀卿等人的《甲骨的钻凿形态与分期断代研究》（《古文字研究》第六辑）的论文。而《屯南》一书，“把凡是能看出钻凿形状的甲骨都作了统计，根据形状进行类型的划分。然后将其中钻凿较完整而清晰的甲骨作了墨拓，有的并画了图”，集中发表在《屯南》（下）第三分册里，以供学术界进行研究，无疑将会促进甲骨文分期断代研究的深入。

特别是《屯南》（下册）第三分册的《小屯南地甲骨的钻凿形态》一文，是甲骨文发现八十七年来，关于钻凿制作工艺过程最全面、最系统，也是最科学的论述。此文将1973年小屯南地所出甲骨的凿型分为六型（有的型内又可分为若干式），论述了凿型变化与甲骨分期断代的关系，并具体地论证了“从凿的型式上看，自组和午组甲骨是具有较多的早期特点”的，这完全与从发掘地层、坑位及其它方面论述其为武丁时代是相符合的。而根据地层关系和卜辞内容对武乙、文丁卜辞的区分，也与从卜骨凿型方面进行分析的早晚是相合的。如此等等，此文也是目前国内学者关于钻凿形态与分期断代研究关系的最全面、系统的论述。

总之，《屯南》（上、下册）一书所著录的甲骨，其著录号与出土层位、钻凿、释文、有关索引等浑然一体，给不同需要和从各个角度查找所需材料进行研究的学者提供了极大方便。而将甲骨的凿钻拓本(及摹本)集中公布，并对凿、钻的制作工艺和钻凿形态与分期断代进行了卓有见地的研究等等，对甲骨学的发展作出了贡献。因此我们从《屯南》一书的上述种种特点可以看出，它比《甲编》、《乙编》二书前进了一大步。可以说，《屯南》（上、下册）一书，是著录科学发掘所得甲骨的一本最科学的著录书，我们竭诚地向广大学术界推荐它。

注释：

①中国科学院考古研究所：1973《安阳小屯南地发掘简报》，《考古》1975第1期。

作者工作单位：中国社会科学院历史研究所

（原載《人文雜志》1987年第3期）

談談孫詒讓的《契文舉例》

裘锡圭

在19世紀的最後兩三年，殷墟甲骨文始為世人所知（但是在19世紀末至20世紀初，學者們受古董商的蒙騙，或以為甲骨文出於湯陰，或以為出於衛輝。到1908年，羅振玉才弄清楚甲骨文的真正出土地是安陽殷墟）。1903年劉鶚從所藏甲骨中選拓千餘片，編為《鐵雲藏龜》出版。這是第一部公布甲骨文資料的書（下文簡稱為「藏龜」）。劉氏在序言裏根據他的研究把甲骨文定為「殷人刀筆文字」。在古文字學上有高度修養的孫詒讓，對這種新發現的古文字資料的重要性有明確的認識。他認為過去講銅器的人所定的商代器多難以確信，《藏龜》第一次為研究商代文字提供了可靠資料。他慶幸自己「衰年睹茲奇迹，愛玩不已」，花了兩個月時間仔細研讀《藏龜》，在此書出版的第二年——1904年，就寫出了全國第一部研究甲骨文的專著——《契文舉例》（參看此書自序。下文簡稱此書為「舉例」）。在孫氏於1905年寫成的古文字學名著《名原》一書中，也使用了很多甲骨文資料。可惜孫氏在1908年就去世了，沒有機會對甲骨文作進一步的研究。

《舉例》分兩卷十篇，共約五萬字。上卷包含「月日」「貞卜」「卜事」「鬼神」「卜人」「官氏」「方國」「典禮」等八篇，對殷墟甲骨卜辭的內容作了一些初步的研究。下卷包含「文字」與「雜例」兩篇。「文字」篇對於《藏龜》的甲骨單字的很大一部分逐個進行考釋，篇幅占全書的一半。在其他各篇中，孫氏也考釋了不少甲骨文字，其中有些字在「文字」篇中沒有提到。

《舉例》在孫氏生前沒有出版。1916年底，王國維在上海蟬隱廬舊書店購得此書稿本，寄給當時居住在日本的羅振玉，次年羅氏就將此稿編入《吉石盦叢書》石印出版。1927年蟬隱廬曾加翻印。1963年台北藝文印書館出版的《孫籀廎先生集》和1968年台北文華出版公司出版的《羅雪堂先生全集》都收入了此書。60至70年代間，白玉崢作《契文舉例校讀》，陸續發表在台北出版的古文字學刊物《中國文字》上（見合訂本8卷3601—3930頁、10卷4111—4954頁、12卷5755—6071頁）。《校讀》錄《舉例》全文，逐段加注。注中對全書所引甲骨卜辭一一加以核對，並根據孫氏之後的學者們的研究成果對有關的甲骨文字加以考釋，頗便初學者閱讀。但是白氏有時不加說明地據《藏龜》直接校改《舉例》原文中摹寫有誤的甲骨文字，以致影響讀者對孫氏原意的理解，這是閱讀時必須注意的。

孫氏寫《舉例》時，甲骨文研究的園地還是一片空白（劉鶚在《藏龜》序中所作的研究極其有限）。《藏龜》所收甲骨不多，印刷質量又很差，孫氏以此書為唯一根據進行開創性的研究工作，自然免不了有很多錯誤。因此羅振玉和王國維這兩位甲骨學的奠基者對《舉例》的評價很低。

羅振玉在1910年所寫的《殷商貞卜文字考》自序中說：「亡友孫仲容徵君詒讓亦考究其文字，以手稿見寄，惜亦未能洞析奧隱。」在1913年初所寫的《殷虛書契》自序中，羅氏在談到甲骨文發現後的研究情況時又說：「顧先後數年間，僅孫仲容徵君詒讓作《契文舉例》，此外無聞焉。仲容固深於倉、雅、周官之學者，然所為《舉例》則未能闡發宏旨。」由此可知孫詒讓生前曾把《舉例》稿本寄給羅氏，而羅氏對其內容很不滿意。這份稿本的內容跟後來王國維購得的稿本是否完全相同已不可知。

王國維在1916年底寫給羅振玉的一些信裏，曾幾次提到《舉例》。此年12月14日一札報告購得《舉例》稿本之事：

> 茲有一事堪告者，旁晚出至蟬隱（指蟬隱廬），見孫仲容比部《契文舉例》手稿，乃劉彝仲攜來者，以五元從蟬隱得之。書連序共九十六頁，每半頁十二行，行二十三字。其所釋之字雖多誤，考證亦不盡然，大路椎輪此為其始，其用心亦勤矣。（貝釋為貞，始於仲老，林博士——指日人林泰輔——與之暗合耳。）此書明年如接辦《學術叢編》，擬加刪節，錄其可存者為一卷印之，何如？想公知此稿尚存，當為欣喜。《王國維全集·書信》159—160頁，中華書局，1984年。發信日期為此書編者所定，下同。

同月20日一札又說：「惟其書（指《舉例》）實無可取，思欲選擇數條為一書，恐不成卷帙也。」（同上164頁）對《舉例》的評價較上札為低。這應是王氏翻閱了全書之後的意見。

大概羅氏在接到上舉第一札後，覆信表示要印行《舉例》，讓王氏把書寄往日本，所以王氏在12月28日一札中又有如下一段關於《舉例》的話：

> 孫仲頌（通「容」）《契文舉例》當即寄上。惟此書數近百頁，印費卻不少，而其書卻無可采，不如《古籀拾遺》遠甚。即欲摘其佳者，亦無從下手，因其是者與誤者嘗（通「常」）並在一條中也。上卷考殷人制度亦絕無條理，又多因所誤釋之字立說，遂覺全無是處。我輩因頌老而重其書，又以其為此學開山，更特別重之，然使為書費錢至數百金則殊不必，公一觀此書當與維同感也。同上166—167頁

羅氏在收到《舉例》稿本後，在《丙辰日記》12月11日（相當於1917年1月6日）下記道：「靜安（王國維之字）寄孫徵君《契文舉例》至……粗讀一過，得者十一，而失者十九。蓋此事之難，非徵君之疏也。」但是盡管羅氏對《舉例》的評價跟王氏差不多，他還是沒有接受王氏的勸阻，很快就將此稿全文印了出來。這固然由於他對學術具有高度負責精神，但是恐怕也有表明個人心迹的用意在內。羅氏和王氏跟《舉例》稿本的關係是很不相同的。王氏是局外人。羅氏在寫《殷商貞卜文字考》和《殷虛書契考釋》（1915年初版）這兩部甲骨學奠基之作前，看到過《舉例》的稿本。如果他不把王國維得到的稿本印出來，學術界就有可能懷疑他剽竊了孫氏的研究成果。

羅、王之後，隨着甲骨文研究的逐漸深入，學者們對《舉例》的評價，主要是對《舉例》考釋文字的成績的評價，反而有了提高。唐蘭在《天壤閣甲骨文存考釋》中指出，孫氏限於當時的客觀條件，考釋文字免不了有較多錯誤，「然頗有精到之說為羅王以後所不及者」；並感慨地說：「今人治卜辭，惟以羅說為宗，鮮有讀孫書者矣。」（見54片考釋）嚴一萍在發表於《中國文字》第15冊的一篇考釋甲骨文「品」字的文章裏也說：「（《契文舉例》）所釋之字，以今視之，錯誤雖多，然至今無可易者，觸比比皆是。或孫氏當時所釋不誤而未為後人采信者，若品之釋圍，一顯例耳。」（《中國文字》合訂本4卷1757頁）白玉崢作《校讀》，也很注意表揚孫氏的正確意見。

唐氏、嚴氏認為孫氏所釋不誤而後人沒有採用的具體例子，學者們不見得都能同意。但是他們的評價從總體上來看確是比較公允的。如果對《舉例》考釋文字的具體情況作一次比較全面的考察，就能清楚地認識到這一點。

《舉例》在考釋文字方面的錯誤的確很多。有些錯誤是相當嚴重的，例如釋「旬亡𡆥」為「它父卜」（上24下—25上。「父卜」二字襲《藏龜》序之誤），釋「獸」為「獲」而反以「獲」之初文「隻」為「奪」之省文（下42下—43上、下44下—45上），釋「之」和「祉」為「正」和「征」（下2、上11），釋「望」之初文為「馬」（下40上），釋「犬」為「牛」（下37上），釋「王」為「文」（上9下），釋「匕」（妣）為「人」（上23上，其中「人乙」又為「河」

之誤釋），釋「叏」爲「布苦」二字（下29上）等等。但是有些錯誤在甲骨文研究的初期，實在是難以避免的。例如孫氏誤釋「㞢」爲「之」（上17），「妫」爲「奴」（下29下），「㭬」爲「求」（下19下），羅振玉皆同誤（參看《甲骨文字集釋》——下文簡稱「集釋」——2061、3625、2733等頁），釋「㭬」爲「求」之說至今還有人信從（《集釋》即從此說，見2736—2738頁），則孫氏之誤固不足責。有些錯誤主要是由於資料不足而造成的。例如：羅振玉是指出甲骨、金文中地支字之「子」當讀爲「巳」的第一人，孫氏還不知道這一點，仍然誤以爲是「子丑」之「子」（上1下。甲骨、金文中「子丑」之「子」的寫法與《說文》「子」字籀文相似，子女之「子」用作地支字時讀爲「巳」）。但是羅氏是據殷墟甲骨上的干支表確定這一點的（參看《集釋》4360頁），如果孫氏能看到干支表，當然也會得出同樣的結論。不但如此，如果孫氏能看到較多的資料的話，就是上面提到的那種嚴重錯誤，大概多數也是可以得到避免的。

《舉例》中對文字的錯誤考釋固然很多，正確的也同樣很多。正如嚴一萍所指出的，「然至今無可易者，猶比比皆是」。大部分孫氏正確釋出的字，羅振玉在《殷虛書契考釋》中也都釋出來了。這些字絕大部分都是比較容易認識的，凡是對《說文》和金文都比較熟悉的學者，大概都能辨釋出來。不過，既然孫氏之書早於羅氏之書，與其像很多人那樣把認出這些字的功勞歸於羅氏，還不如把這種功勞歸於孫氏合理。

甲骨文借「鼎」爲「貞」。借作「貞」的「鼎」通常簡寫爲「貝」，是卜辭裏經常出現的一個關鍵字。《藏龜》序誤釋此字爲「問」。孫氏以爲「即『貝』之古文」，「當爲『貞』之省」（上6上）。他認爲這個字是「貝」之古文雖然錯誤，讀爲「貞」則是正確的（羅氏直接釋此字爲「貞」，參看《集釋》1104頁）。所以王國維在上面引過的12月14日致羅氏札中說：「貝釋爲貞，始於仲老。」這是孫氏比較重要的一個貢獻（但是《舉例》上6下所引《藏龜》45.2从「卜」的「貞」字，則是一般的「貝」字的誤摹。孫氏把泐痕錯當作了筆畫）。

更應該指出的是，《舉例》釋字勝過羅氏之處也並不少見。

有些字孫氏已經正確釋出，羅氏卻誤釋或無釋。例如：甲骨文中的「亘」「羌」「省」「叀」（限於作「𢆶」的一體）「㐭」等字，孫氏已經正確釋出（依次見上9上、38下、下8上、16下—17下、36下。下36下引《藏龜》251.3一辭作「㐭曰弗女刑」。「弗」上原是一個从「㐭」从「口」的字，孫氏誤認爲兩個字。但這並不影響孫氏已經認出「㐭」字這一點）。羅氏卻誤釋「亘」爲「㠯」（《集釋》3974頁。羅氏已認出从「亘」的「𧺆」「宣」「洹」等字，但卻不認識「亘」字，這是很奇怪的），「羌」爲「羊」（同上1316頁），「省」爲「相」（同上1199頁），「叀」爲「惠」（同上1419頁。羅氏跟孫氏一樣，已經認出从「叀」的「專」字，但卻不認識「叀」字，這也是很奇怪的），「㐭」爲「啚」（同上1877頁。羅氏誤釋「㐭」爲「啚」，可能是由於誤解了「有在南㐭」一類卜辭的意義）。孫氏釋爲「岳」的字（上20上），羅氏釋爲「羔」（《集釋》2916頁），大多數學者也信從孫說。又如「㱿」「周」「眔」「毌」等字，孫氏也已經正確釋出（依次見上7、32上、下23、33上。孫氏還指出古書中的「串」字就由「毌」字演變而成），羅氏則皆無釋（《殷虛書契考釋》增訂本引卜辭時把「㱿」隸定爲「殸」）。

有些字羅氏基本上也釋對了，至少並未完全釋錯，但是從文字學上看，孫氏所釋顯然更爲精確。例如：在甲骨文中，通常當「順」講的「若」這個詞，是用「叒」字（見《說文·六下·叒部》）的初文表示的。這個字加「口」的寫法（見金文，《說文》「叒」字籀文亦如此作），在古書裏跟見於《說文·一下·艸部》的訓「擇菜」的「若」字已混而不能分（也可以說古書中借从「艸」的「若」爲「叒」）。孫氏把甲骨文裏的這個字釋爲「叒」，讀爲「若」（上14），十分正確。羅氏把這個字直接釋作《艸部》的「若」，還批評《說文》說：「擇菜之誼非其朔矣」（《集釋》2031頁）。這顯然是不妥當的。金文常常借「才」爲「在」。孫氏疑甲骨文「中」字即「才」之異文，並疑甲骨文的有些「才」字也應讀爲「在」（下28下），十分正確。羅氏則把這個字直接釋爲「在」（《集釋》3991頁），抹殺了「才」「在」二字的區別。「复」與「復」音義皆近，但在《說文》裏是兩個字。孫氏把甲骨文的「𡕒」字釋爲「复」（上8上），羅氏則釋爲「復」（《集釋》1897頁）。陳邦懷《殷虛書契考釋小箋》已指出羅氏之非（同上1897—1898頁）。上舉這些例子可以說明孫氏的文字學水平高於羅氏。

過去，由於《舉例》沒有受到應有的重視，古文字學者在考釋羅氏未釋、誤釋或釋得不夠正確而孫氏卻早已正確釋出的那些甲骨文字的時候，往往絕口不提孫氏（有時可能是由於根本沒有注意到孫氏的有關考釋）。因此有些孫氏首先正確釋出的字，就被人們誤認爲由他人首先正確釋出了。例如《集釋》「乘」字條（1933—1935頁）漏引孫說，讀了這一條就會認爲甲骨文的「乘」字是王國維首先釋出來的。

《舉例》在考釋文字方面還有一些很有價值的意見，雖然一度「未爲後人采信」，但是隨着甲骨文研究的深入，其價值已經逐漸爲廣大學者所認識。例如「罕」字，孫氏認爲是「『禽』之省」（下41下—42上），羅氏則釋爲「畢」（《集釋》2555—2556）。羅說一度占有統治地位。唐蘭在《天壤閣甲骨文存考釋》中始批評羅說而闡發孫說，並指出這個字應是「禽」的初文而不是省文，對孫說作了修正（《集釋》2557—2559頁）。現在絕大多數學者已經接受了釋「禽」的說法。又如「𠃉」字，孫氏釋爲「佀」（似），讀爲「㠯」（以）（下33）。但是在很長的一個時期裏，一般學者都不信此說而信從釋「𦥑」、釋「氏」、釋「氐」等說（參看《集釋》3737—3732頁）。30年代末，李旦丘（即李亞農）在《鐵雲藏龜零拾》的考釋裏曾闡發孫說，並指出這個字實即「以」字而非「似」字，對孫說作了修正（《集釋》3741—3743頁）。60年代初，金祥恒在《中國文字》第8冊上發表《釋㠯》一文，也把這個字釋爲「㠯」（合訂本2卷881—894頁）。他們的意見在當時仍未受到應有的重視，但是近年來信從釋「以」之說的學者已經顯著增多，此說大概會成爲定論。此外，孫書中釋「𠁁」爲「兆」（上10下。唐蘭等說同，參看《集釋》3372—3374頁）、釋「𠙹」爲「由」（下34）、釋「𣪊」爲「𣪊」並讀爲「擇」（下25上）等說，雖然還很難斷定是否能成爲定論，但是至少比通行的釋「𠁁」爲「沚」（《集釋》3371、3375頁）、釋「𠙹」爲「古」（同上701—710）、釋「𣪊」爲「執」（同上3231—3234頁）等說更有道理（孫氏把與「皀」實爲一字的「𠤕」釋爲「食」，把「𣪊」和「𣪘」看作兩個字，則顯然是錯誤的，其說見《舉例》下24下）。

總之，《舉例》在釋字方面的貢獻應該說是相當大的。

在王國維所說的「考殷人制度」方面，《舉例》的確缺乏重要的貢獻。這主要是研究資料等方面的客觀條件所決定的。例如孫氏已經注意到甲骨卜辭中有不少跟殷先王相同的名號（上21上、22下—23上），如果他能知道甲骨出於殷都故墟，無疑也會跟羅振玉一樣得出卜辭爲殷王室之物的結論。此外還應指出，《舉例》上卷在考釋文字的內容之外，也並不是全無是處的。例如：「卜事」篇說甲骨卜辭有卜征、卜𡿧、卜雨等內容，表示吉凶之辭有「若」和「不若」（上14），雖然引證有一些錯誤，大體上還是正確的。「鬼神」篇說：

> 龜文……天神則有帝，地示則有方、岳，人鬼則田正及祖父母兄等皆是也。或爲祝其神而卜事之吉凶，或因祭其神而卜其牲、日之等。文意簡略，不能盡詳，要其爲有事於鬼神，則義固略可考也。　上18

對有關鬼神的卜辭的內容概括得相當好（但所謂「田正」是由於誤讀卜辭而臆造出來的）。「方國」篇關於商（上31下—32上）、周（上32上）、羌（上38下）的論述，「典禮」篇關於求年（上40下）、受年（上41上）和祭祀所用牲牢（上42上—43上）的論述，也都有正確的成分。

從以上所說的來看，應該承認《舉例》是甲骨文研究方面一部有重要價值的開創性著作。關於此書的評價，不但王國維說的「實無可取」「全無是處」明顯不合事實，就是羅振玉所說的「得者十一而失者十九」也是不夠公允的。考慮到孫氏寫書時在資料等方面所受的限制，他所作出的那些貢獻就更加值得後人珍視了。孫氏在古文字和古文獻方面的學力決不在羅王之下。如果孫氏在甲骨文研究方面能有羅王所具備的客觀條件，他所能作出的貢獻大概是不會比他們小的。

1988年7月爲「孫詒讓學術討論會」而作

編校追記

陳夢家《殷虛卜辭綜述》「文字」章對《契文舉例》有介紹（55—56頁），寫此文時失於參考，讀者可以參閱。

（原載《古文字論集》，中華書局，1992年）

殷商考古书评三篇

李学勤

《藁城台西商代遗址》

河北藁城台西商代遗址，是近年商代考古工作中最受重视的遗址之一。台西遗址经调查、钻探而得确认，时在一九六五年。《考古》复刊不久，曾连续发表有关台西的简报①，其间铁刃铜钺等发现迅速引起大家的注意。一九七三、七四两年，河北省博物馆和文物管理处组成台西考古队，在该遗址进行系统发掘，又有一系列收获，见于报导，并有不少研究讨论的文章。一九七七年有一本概说性的《藁城台西商代遗址》出版②，但篇幅较小。《藁城台西商代遗址》发掘报告在一九八五年六月问世③，全面反映了这处遗址的考古成果。

台西报告有两个突出的特点：

一个特点是，在详细整理分析材料的基础上，进行了多学科、多角度的研究。从报告可以看到，为了深入研究发掘所得材料，曾邀请许多方面的学者对有关材料作出专门的鉴定和论析，例如对遗址所出铁刃铜钺、铁渣、铁矿石、丝织品、麻布、兽骨、龟甲、植物特别是种仁、酵母、原始瓷片等，都作有科学鉴定，对陶文作有考释。遗址中某些特殊的现象和遗物，由专业学者提出见解，例如墓葬中盒内的石镰可能是医用砭镰，牛肋骨磨制的“匕”可能是纺织工具刀杼等。

另一个特点是，在充分翔实地报告发掘收获的同时，对若干学术问题提出作者自己的意见。发掘报告总是会包含作者的看法，但如何使观点不影响报告材料的客观全面，是一个重要的问题。台西报告在不少方面有独创的见解，大部分写进结语，还有一些虽穿插在报告正文内，但在行文上有明显划分，例如第64—67页叙述原始瓷器和印纹硬陶器，在描写结束后另加一段以表述作者意见。这样的处理方式是便于读者的。

台西发掘对商代历史文化研究的贡献，已为众所周知，用不着在这里多作介绍。遗址所反映的现象有好多地方发人深思，这里试拈取几点，略谈一二。

这处遗址的文化面貌有自己的特点，苏秉琦先生和邹衡同志在报告的序中业已论及，如陶器流行平底等，颇为显著。这一类特点由何而来，同河北中部或山西东部其他商代遗址有怎样关系，需要进一步考查。台西的青铜器也有一些特点，我们作过分析④。一个有趣的问题是北方民族的影响，M112所出羊首“匕”是明显的证据之一。这种“匕”见于河北东北部青龙抄道沟，也见于山西和陕西交界黄河两岸的绥德、石楼等地，在内蒙古亦有发现⑤，有鲜明的北方草原文化色彩，但其用途是什么，如何起源和传流，都还不很清楚。

同出于M112的铁刃铜钺，引起了关于我国用铁的历史，特别是陨铁器问题的热烈讨论。讨论正在继续深入，如一九八二年华觉明同志提出，从我国冶铁术历史发展的特点看，不能排除陨铁器制作、使用对冶铁术发生有某种影响的可能性⑥，这是很有意义的论点。这件铁刃铜钺形制、纹饰特殊，唐云明同志认为类似北方所出器物⑦，是正确的。看来对钺的研究还应继续下去。

台西遗址中还有可能来自其他方面的因素。例如发现有几何印纹硬陶106片，在遗址出土陶片中数居第三。过去一般认为印纹硬陶是长江下游地区的特色，这里的印纹硬陶，如报告所说，陶胎等不少方面和郑州二里岗的相似，可能为当地生产。就这种陶器的渊源而论，是否南方辗转而来的影响，是值得探索的问题。

报告中还有一些内容，一定会引起社会历史研究者的注意，墓葬的人殉即其一例。人殉多年来是学术界反复探讨的课题，近年有些论作更全面地考察文献，与考古材料相结合，得出了新的论点⑧。台西的人殉有些奇特现象，如殉葬者与墓主同处一椁，是非常罕见的，如报告所言，在商代考古中并无先例。M35墓主男性，五十余岁，殉葬者是约二十五岁女子，解释为妾婢，与《礼记·檀弓下》所载陈乾昔的遗言对比，是很恰当的。M85墓主男性，约二十五岁，殉葬人也是男性刚满二十，比主人年少，报告云可能是幸臣，也是合理的。M36墓主男性，近五十岁，殉葬者为年龄相仿的男子，更为奇异。很希望今后考古工作中发现同样的事例，揭开其中疑谜，对进一步研究我国古代的人殉会有裨益。

现代的考古学在我国建立，与商代甲骨的发现研究和殷墟发掘是分不开的。商代考古历史长，成绩大，使人们对孔子曾叹为文献不足征的商代有了相当的认识。不过各地发现的商代遗址固然不少，经过系统发掘的还不多。藁城台西这处遗址，两年发掘面积近一千九百平方米，便有这样丰富的成果，许多新现象，或已补充我们知识的空白，或能给予我们研究以启示。对发掘和整理报告的同志的缜密工作，应当表示感谢。这也说明，商代文化迄今还有很多奥蕴有待揭开，我们对商代的理解仍是有限的，这一点似乎应该牢记。

《天理大学附属天理参考馆甲骨文字》

日本天理大学附属天理参考馆收藏有很多中国文物，一九八五年冬我曾有机会参观⑨。最近天理大学、天理教道友社将该馆藏品编为图录《人、物、心》，第一期共五卷，与中国有关的有《汉代的铜器、陶器》、《画象砖》、《殷周的文物》、《甲骨文字》四卷。这里介绍的是其第五卷《甲骨文字》。

《甲骨文字》一书装为一函二册，函脊于《人、物、心》总标题下有《天理大学附属天理参考馆甲骨文字》书名两行，故本书引用时可简称为《天理》。书中开首有为《人、物、心》全书撰的序和前京都大学总长平泽兴氏的文章。名古屋大学的江村治树副教授作《殷代的社会与文化》一文，是《甲骨文字》的总论。下面有天理大学教授金关恕、天理参考馆学艺员近江昌司编的部分甲骨的彩色“图版”；全部甲骨的黑白照片和拓本，则由神户大学伊藤道治教授编为“资料图版”。这一册末了还有伊藤、金关、近江三氏关于甲骨的“座谈会”。伊藤道治教授所作释文，单成一册，所释甲骨都有摹本，除依原行款写定文字外，附有日语译文。这部《甲骨文字》共收录692片，释文选释文字较完整的236片。闻伊藤氏另撰有详释，将于三年后出版。

天理参考馆所藏甲骨共有七批：

一，堂野前种松旧藏，共40片，其中2片系伪刻，余38片，有35片曾经金祖同《殷契遗珠》著录。

二，共547片，其中2片系伪刻。箱盖上有“罗振玉所藏”签，二次战后归天理教第二代真柱中山正善收藏。有20片著录于《铁云藏龟》。

三，王国维旧藏，共250片。

四，共25片，有题“罗振玉旧藏”纸，本书收24片。

五，原共15片，已失去3片，本书收7片。

六，分装15片、18片二匣，匣的质地与上批的匣相同，可能来自一源。本书分别收11片、17片。

七，共40小片，本书收4片。

这部书印制精美，有彩色、黑白照片，和拓本、摹本相对照，可谓已尽著录之能事，加以释文，为读者提供了极大的方便。书中有许多重要材料，不能缕举，只选述几例，以见一斑。

《天理》006为右胛骨臼部，臼上刻“甲申，力示一屯（纯），小扫”，正面有“甲申卜亘贞，臭以人”等辞，属于宾组。骨臼署辞系记整治胛骨之事，此例与卜辞同日，治竣即卜 .是不多见的。辞中的人名力，也见于历组骨面署辞：

癸亥，力乞骨三。　　《拾掇》2,159

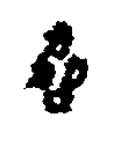
□□，力乞骨三。　　《甲编》788

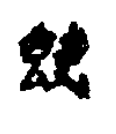
历组署辞中的人物，常见是咬（暂释）和则，另外还有黄、力、尸等⑩。则已见于宾组署辞，并有作为“贞人”的例子⑪，力也在署辞出现，是很有意思的。

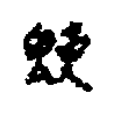
《天理》061是宾组胛骨，辞为：“……牛于苇。”“苇”字从“林”从“韦”，是罕见的地名。

《天理》318是出组胛骨，伊藤教授已指出其重要，并补足残辞。这是一片卜旬辞，附记周祭，现存癸丑、癸亥两旬，所列祀典是：

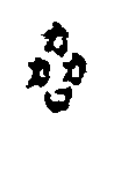
癸丑　在三月

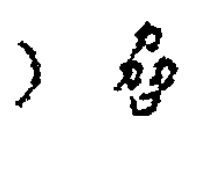
甲寅  阳甲

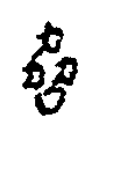
乙卯  小乙

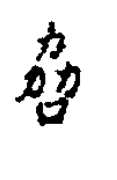
丁巳  父丁

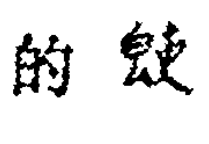
癸亥

乙丑  小乙

丁卯雀（？）  父丁

己巳  兄己

庚午  兄庚

它的时代自属祖甲。有趣的是癸丑旬未列出盘庚、小辛，而插入小乙、武丁的  。

《天理》484为无名组胛骨，辞云：“惠仲妇作害。〔惠〕妣辛〔作〕害⑫。”妣辛与仲妇对举，值得注意。

海内外收藏的殷墟甲骨，到近年绝大部分都已发表，所余已不很多。《天理大学附属天理参考馆甲骨文字》的出版，又增加了一种重要的甲骨著录，当为所有甲骨研究者所欢迎。

《赛克勒氏藏商代青铜礼器》

美国赛克勒医生（Arthur M.Sackler, M.D.）是著名的中国文物收藏家，他所藏的青铜器尤为丰富，现正由几位学者进行整理编纂，陆续印为图录。其第一部图录《赛克勒氏藏商代青铜礼器》⑬已于一九八七年出版，编者是现在普林斯顿大学美术与考古系的柏格莱（Robertw .Bagley）博士。

这是一部印制华美的大型图录，书共599页，著录104器。弁首有赛克勒博士所撰前言。导论分两部分，第一部分题为《商代青铜铸造业的起源和发展》，第二部分题为《商代的铸作方法》，从考古、美术史和科学技术等方面，详细地论述了商代的青铜器。图录依器种排列，分为斝、斝、爵、角、觚、尊、瓿、壶、卣、觥与动物形尊、罍⑭、方彝、鼎、方鼎和鬲、盂、簋、钟等部分。此外还有两个附录（一，元素成分；二，铅同位素比率）以及索引等等。

本书的特点，是对每件器物都作极详细的描述和讨论，特别是与型式相同或相似的其他标本联系对比。在铭文方面，除加考释外，也尽量搜集族氏相同或格式近似的材料，广泛比较研究。书中涉及的学术问题非常繁多，有不少值得重视的新见解。

书中青铜器好多是重要的，下面只能随意举出几个例子。

第24器角，鋬饰小牛首，鋬的两侧腹部合成牛面形饕餮纹，旁衬顾首夔纹，颇不多见。角铭见《三代》16，45，1，拓本可见饕餮纹的全貌

第32器觚，即《美集录465，饰饕餮纹，有“西单”铭文。此器圈足内壁有突起的扉棱，与美国辛格医生所藏一觚相同⑮。

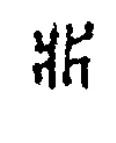
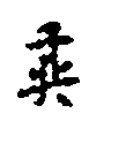
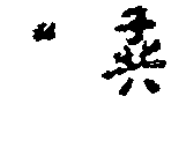
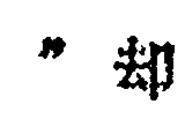
第43器圆尊，高43.8厘米，肩饰牛首，腹、足有三道扉棱，肩上夔纹和腹、足饕餮纹均较简化。如书中所指出，此尊应为南方所出。其圈足的饕餮纹很像湖南的大铙，是明显的证据。

第49器也是圆尊，即《美集录》410，腹至足有四道扉棱。其颈上蕉叶纹下半为饕餮，腹、足也饰饕餮纹，但蕉叶和腹上的饕餮口部是横通的，系一种少见的型式。一九六五年陕西长安大原村出土的乙卯尊花纹便是这样的，我们曾作讨论，并举出其他例证⑯。本书列举的类比材料更多，兼及玉器和象牙器。

第54器瓿，内底有“亚㠱”铭文。奇特的地方是内壁有相对的两个半环状钮，我曾在普林斯顿大学博物馆详作观察。钮的用意不明，怀疑是用以架挂一面筛子，借以滤酒，但没有积极的证据。

第64器卣，即《美集录》586，器内贮玉，与湖南宁乡发现的同例。这件卣中的玉管等，见本书373页彩色照片，殊堪研究。

第74器牺尊，高18.3厘米，形制、纹饰同一九八三年陕西洋县张村出土的一件（高19.2厘米）几乎无异。本书已把洋县所出补叙在书首部分。

第492器鼎，分档，饰饕餮纹，内壁铭“ ，父己”，但“”没有下半的“ ”“”却移在外壁与之相对的饕餮额上，是极为例外的现象。

第103器肄簋，旧称戊辰彝，我曾两次有机会观察。其第三行铭文第六字，拓本上每每多一短横痕迹，很象是“二”．看本书521页拓本和铭文照片，实是“一”字，足以释疑．过去学者以此器纪时为廿祀十月戊辰或十二月戊辰，都不切合，应当更正。这样，本器的武乙配妣戊 日，与已见黄组卜辞的廿祀各版，及另一件青铜器，均不相契合，不能属于同王，所以商末至少有三王有廿祀以上，这在商代年代学上至关重要。

赛克勒氏收藏还有很多珍品，希望其余部分，包括兵器等，都能早日辑成图录发表。

---

①河北省博物馆、文物管理处。《河北藁城县商代遗址和墓葬的调查》，《考古》1973年第1期。《河北藁城台西村的商代遗址》，《考古》1973年第5期。

②河北省博物馆、文管处台西考古队等：《藁城台西商代遗址》，文物出版社，1977年。

③河北省文物研究所：《藁城台西商代遗址》，文物出版扯，1985年。

④李学勤、唐云明：《藁城台西青铜器的分析》．《中原文物》1986年第1期。唐云明：《藁城台西青铜器的分析补记》．《殷都学刊》1987年第2期。

⑤田广金、郭素新：《鄂尔多斯式青铜器》，图一七，12，文物出版社，1986年。

⑥华觉明等：《陨铁、陨铁器和冶铁术的发生》，《中国冶铸史论集》，文物出版社，1986年。

⑦同④唐云明文。

⑧顾德融：《中国古代人殉、人牲者的身分探析》，《中国史研究》1982年第2期。《我国古代的人殉和殉节》，《中国史研究》1987年第2期。

⑨李学勤：《海外访古记》（四），《文博》1987年第3期。

⑩李学勤：《殷代地理简论》，第21—22页。

⑪同⑨（一），《文博》1986年第5期。

⑫“害”字从裘锡圭：《释蚩》，香港中文大学“国际中国古文字学研讨会”《古文字学论集》初编。

⑬Robert W. BagLey Shang Ritual Bronzes in the Arthur M. Sackler Collections，赛克勒基金会、哈佛大学赛克勒博物馆出版，哈佛大学出版社发行、1987年。

⑭书中器分列为时期不同的两部分。

⑮同⑨（二），《文博》1986年第6期。

⑯李学勤：《沣西发现的乙卯尊及其意义》，《文物》1986年第7期。

⑰《中国美术全集》工艺美术编4青铜器（上），九四。

（原载《殷都學刊》1988年第1期）

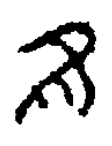
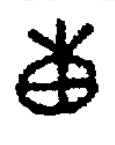
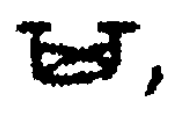
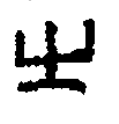
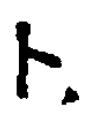
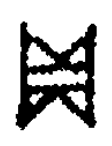
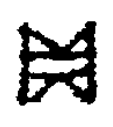
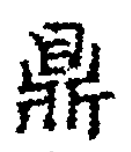
BOOK REVIEWS

Jean A. Lefeuvre. *Fa-kuo so-ts'ang chia-ku lu* 法國所藏甲骨錄 *Collections d'inscriptions oraculaires en France; Collections of Oracular Inscriptions in France.* Taipei: Ricci Institute, 1985. xvii + 402 pp. Variétés Sinologiques New Series, 70.

The first half of this book, the *Catalogue*, centers on the presentation of fifty-nine pieces of Shang oracular bones and shells, currently held in six institutions in France. A photograph of both the front and the back of each piece is given. The photographs are unusually well done, and the inscriptions are mostly clear and readable. A drawing of the inscription-bearing side, usually just the front but also the back of CF S14 and CF S51, is also given for each piece. The drawings are helpful, especially for those pieces where portions of the inscriptions are unclear, but they are sometimes initially confusing for pieces such as CF B6 where Lefeuvre omits spurious graphs without comment. Photographs of the reverses of all pieces provide particularly welcome evidence for studying the relationship of inscriptions to pits.

This sort of thoroughgoing presentation of oracular materials has been urged for years, and Lefeuvre is to be congratulated for the efforts he has made to present the oracular materials so comprehensively. He also occasionally gives drawings or rubbings from other publications; these are valuable in correcting previous errors (CF B2) and helpful in identifying possible sets of inscriptions, some of which happen to be in different collections (CF S5, CF B17). References are given for the pieces from this collection that have appeared in earlier collections, for pieces from other works that contain similar texts, and to the locations of the texts in Shima Kunio's *Inkyo bokuji sorui*. The height of each piece is also given in Chinese; e.g., 高 112公釐 , under the photo of each front.

The fifty-nine pieces are grouped according to institutional collections with chronological subdivisions arranged by subject matter. Each piece is identified by a code that tells where the piece is from and whether it is a shell or a bone: e.g., CF S1 HE S4-4 means that this is the first piece printed in this book, it is a shell, and it is from the collection of the Institut des hautes études chinoises where it has the collection number S4-4. Lefeuvre has ordered the subject matter according to his understanding of the three "preoccupations of people with an animist cast of mind" (p. xvii): the world of spirits, the world of influences in nature, and the world of human beings. A *Concordance Table* of these subdivisions is given on pages 5 to 18. The photographs and drawings of each piece are immediately followed in this section of the book by an unannotated translation of their oracular texts into *kaishu* characters, French, and English.

The second half of the work, *Commentaries*, is divided into three sections that present the Chinese, French, and English language versions of the author's comments. *Commentaries* begins with a discussion of the mentality of the Shang as an avenue to clearer understanding of their language. Lefeuvre then focuses on the interpretations he gives to six common, crucial Shang words: , , , ,  and  . There will be some disagreement among scholars of the Shang about several conclusions, especially that which equates  with  , but his comments are useful introductions to the study of each of these important function words.

The rest of his comments are given in his studies of the six individual collections. In each one Lefeuvre first discusses the history of the collection, and at several points he comes to conclusions about the interrelatedness of these and other collections and about the ultimate Xiaotun sources of the pieces. His conclusions about possible relationships of similar texts in different collections is a most useful contribution to understanding the overall oracle-bone corpus, and his detective work is helpful in tracing the diffusion of these materials from the Shang site.

The history of each collection is followed by comments about the texts on each piece. These are sometimes lengthy and involved, sometimes quite brief; but in all cases they are based on extensive scholarship. His use of phonetic reconstructions to study Shang words is a definite plus, although use of the superseded *Grammata Serica* is not. Serious students of the oracle inscriptions will probably want to create their own index of the oracle graphs in the book. There is an index of characters, but only the *kaishu* forms are given, a bit of a shortcoming given the various *kaishu* eqivalencies that have been suggested for many oracle graphs. The commentaries are followed by appendices giving the abbreviations of the collections and studies cited. There is an earlier *List of Abbreviations* on page viii.

Six of the thirty-three pieces that are published for the first time in this book give new and useful data (CF B15, CF B17, CF S18, CF B32, CF S33, and CF S43), but sixteen of the new pieces are small fragments that have texts of only one, two, or three of the most common graphs. The primary attractiveness of this volume lies in both its comprehensive presentation of the oracular pieces and its scholarly discussions. Students of the Shang language will find it stimulating, and future publishers of Shang oracle bones and shells would be well advised to emulate its publishing format.

STANLEY J. MICKEL
Wittenberg University
Springfield, Ohio 45501

W. Allyn Rickett. *Guanzi. Political, Economic, and Philosophical Essays from Early China: A Study and Translation.* Volume I: Chapters I, 1-XI, 34 and XX, 64-XXI, 65-66. Princeton Library of Asian Translations. Princeton: Princeton University Press, 1985. x + 484 pp.

Allyn Rickett's *Guanzi* is an exemplary work of scholarship, one that will be welcomed as a source of pleasure and edification by everyone working in the field of early Chinese studies. The publication of this long-awaited book is cause for celebration. In a brief preface, the author laments that it took him so long ("the time had come," he says, "either to finish it or forget it"); readers, on the other hand, are likely to feel that the delay is amply compensated for by the distillation of a career's worth of wisdom and the application of scholarship that is both cumulative and up-to-date.

This volume, which supersedes Rickett's previously published collection of twelve *Guanzi* chapters (*Kuan-tzu: A Repository of Early Chinese Thought*: Hong Kong University Press, 1965), is to be the first of three. A second volume will complete the translation, and a third will contain critical and analytical essays by Rickett and others on various aspects of the *Guanzi*. What we have here, then, is the first half of a translation that tells us what the *Guanzi* says; for a full assessment of what, in Rickett's view, it *means*, we will have to wait a while longer. Even so, this volume should have a substantial impact on today's understanding of early Chinese thought.

This volume contains translations of the first thirty-four chapters of the *Guanzi* (about half the entire text), plus three chapters from near the end of the work that are entitled "Explanations" of three earlier chapters (2, 4, and 7). Very sensibly, these explanatory chapters have been interleaved with those to which they refer, in the form of a sentence of text and a paragraph of commentary, and so on. Rickett is a cautious and conservative translator; he properly shows great respect for the text, emends it seldom, and explains his choices at every doubtful point. (Commendably, the editors of the Princeton Library of Asian Translations do not quail at large numbers of sometimes-technical notes, and they put them where they belong, at the bottom of each page.) In a broad sample comparison of original text with translation throughout the work, I found nothing that I would regard as a straight-out error and few instances where I would disagree with the translator's judgment.

In a lengthy introduction, Rickett gives a history of the text from its origins, through the adding and dropping of various chapters over the course of many centuries, to the establishment of the present twenty-four-*juan* text in the tenth or the eleventh century and its various editions thereafter. Recognizing, as scholars have for a very long time, that none of the text is likely to come from the brush of its putative eponymous author, he asks, "How did the name of Guan Zhong come to be associated with such mishmash?" (p. 8). Part of the answer may well be that traditions associated with Guan Zhong long endured in his state of Qi, there to be incorporated into, or at least influence the accretion of, a proto-*Guanzi* put together by the scholars of the Jixia Academy during the third century B.C.E. Such a work would also have incorporated materials from Zhou historical romance literature and essays by independent philosophers. Something like the proto-*Guanzi*, or a portion of it, was clearly (on the basis of the Mawangdui funerary library) in circulation in the Kingdom of Changsha early in the second century B.C.E. At midcentury, academicians at the court of Huai-nan possessed *Guanzi* materials also; this was no accident, for Liu An's royal think-tank was in many respects modeled on the Jixia Academy and may fairly be regarded as its successor. There were numerous intellectual links between Qi and Chu during the third and the second century B.C.E. Guan Zhong served in Qi but was a native of Chu; the connection was an old one.

By the time Liu Xiang edited the text around 26 B.C.E., the *Guanzi* contained material from a wide variety of sources, and Liu's edition was by no means the end of the story. The tangled history of the text is nicely diagrammed on page 37. Despite this, "there is a basic point of view pervading most of the text" (p. 17), and this consistency within diversity is the key to the importance of the *Guanzi* in early Chinese intellectual history. On the basis of Rickett's analysis, the *Guanzi* may be identified as a central work of the Huang-Lao School, and as such it represents the mainstream of Chinese thought of the late Warring States and early Han periods. The arts of Huang Di (*yin-yang*/Five Phases natural philosophy in the service of the state) and Laozi (Realist political theory) provided much of the basis of the great synthesis of Han orthodoxy. In its attitude toward the correct management of the people, the *Guanzi* is not very different from *Xunzi*; it is particularly informative on Realist positions on military matters and economics.

The *Guanzi* has been a somewhat neglected text. Students of early Chinese intellectual history have been wary of it because it has been surrounded by too many question marks. Does it preserve bits and scraps from the Spring and Autumn and early Warring States periods? Is it mostly an Eastern Han forgery? What was Liu Xiang's role? How can one use a text with any confidence when its date is so disputed? But if one accepts, as I think it is reasonable to do, Rickett's position that the *Guanzi* is on the whole a work of the Huang-Lao School, its importance soars, for it can thus be viewed as approximating what most statesmen (and most philosophers in the service of statesmen) thought during the crucial decades when China was transformed from a collection of warring states into an empire. On the basis of this volume, and its two forthcoming companions, the *Guanzi* is likely to figure heavily in revisions and refinements of our view of late Warring States and early Han history.

JOHN S. MAJOR

（原載《古代中國》第13卷，1988年）

中国殷商文化国际讨论会观感

〔日〕吉田笃志

马志冰 译　聂玉海 校

一九八七年九月十日至十六日，中国殷商文化国际讨论会在河南省安阳市的安阳宾馆召开。笔者有幸获此机会，陪同广岛大学名誉教授池田末利先生参加了这次盛会。对于笔者来说，虽对殷商文化兴趣浓厚，但并未深入进行过研究。因此，所见所闻顿感耳目一新。在此只能就自己的印象作一简述，不当之处在所难免，恳请读者不吝赐教。

与本次会议类似的全国规模的商史会议，亦即全国商史学术讨论会，已于一九八四年在安阳召开（迄此之前，在其它国家，也召开过关于殷商文化的国际会议。）。当时提交的六十篇论文，有三十五篇已收入《全国商史学术讨论会论文集》（《殷都学刊》编辑部一九八五年）。那次会议上，成立了殷商文化研究会筹备委员会，由中国社会科学院历史研究所胡厚宣教授担任主任，并决定今后将定期召开殷商文化会议。本次大会即继上次会议之后举行的一次国际规模的盛会。其筹备及召开，是以胡厚宣教授为中心，由中国社会科学院历史研究所王宇信、杨升南两位副教授承担的

本次会议的参加者，共有一百五十九（九十九）人。其中中国代表一百三十一（七十九）名、香港代表三（三）名、日本代表九（五）名、西德代表二（一）名、英国代表一（一）名、法国代表一名、美国代表十一（九）名、加拿大代表一（一）名（参加人数根据会议登记分发的代表名单统计；括弧内的数字，为提交论文数，是根据会议期间分发的代表论文目录及其顺序表统计的。），真可谓一次规模盛大的聚会。日本的与会代表共计九人，提交论文者，除上述池田先生外，还有神户大学教授（现关西外国语大学教授）伊藤道治、东京大学东洋文化研究所教授松丸道雄、正在中国社会科学院留学的京都大学人文科学研究所副教授小南一郎、日本大学高中教师石田千秋等；列席代表有伊藤教授夫人、东京大学东洋文化研究所助教（现东京国立博物馆东洋科中国考古室）谷丰信、正在北京大学考古学系留学的九州大学研究生院博士生铃木敦以及笔者四人。据说，还向关野雄、樋口隆康、白川静、林巳奈夫、佐藤武敏、尾形勇等先生发出过邀请。遗憾的是，他们因故未能到会。

本次大会的通用语言仍是汉语，配备有日语和英语翻译，但口头发言及质疑答辩几乎都用汉语进行。在日语的发言中，四川大学历史系教授常正光担任翻译。他是在徐中舒先生手下从事研究工作的一位颇有能力的学者，虽未到过日本，却在战前的东北地区学过日语。由于会议文件大都是中文本，所以笔者虽不擅长会话，也可参照文件把握发言内容。面对用汉语展开的讨论，自己痛感极有必要培养会话能力。

在第一天的讨论会开始之前，在殷墟迎接了全国人民代表大会常务委员会副委员长周谷城，进行了殷墟博物苑第一期工程的竣工典礼。接着　在复原的宫殿内，举行了讨论会的开幕式。胡厚宣先生致开幕词、周副委员长致祝词等后　外宾代表、哈佛大学人类学系教授兼系主任张光直和池田、伊藤两位先生也分别致词祝贺。然后，讨论会移至安阳宾馆进行。在分组讨论前，中国社会科学院历史研究所的张政烺、杨希枚二位教授与松丸氏，在全体会议上作了大会发言。

最先发言的杨希枚氏，以《从讳名同祖名制论商王庙号问题》为题，从古今众多民族的同名制和异名制方面，论述了商王庙号的同名异名现象实为一种极普通的命名现象，并不是什么不合逻辑的命名现象。关于商王庙号问题，从六十年代初，就是一个在各国学者间广泛争论的商史领域重要课题。这次回国后，承蒙杨氏惠赠《卅年来关于殷墟头骨及殷代民族种系的研究》（《中国古代史论丛》第八辑，福建人民出版社一九八三年），不胜感激。杨氏也是殷墟头骨研究的权威，曾发表过《河南安阳殷墟头骨的测量和形 态观察》（《中国东亚学术研究计划委员会年报》第五期，一九六六年）、《河南安阳殷墟墓葬中人体骨骼的整理和研究》（《中央研究院历史语言研究所集刊》第廿四本，一九七〇年）等论文。

接着发言的松丸氏的《再论殷墟卜辞中的田猎地问题》，是《关于殷墟卜辞中的田猎地——殷代国家结构研究》的续篇。他从殷墟卜辞中的田猎地进行考察，推论殷墟并不一定是殷都，从而期待中国学术界对于商邑位置问题展开争论。由于殷墟的大型建筑基址周围存在大量墓葬，因此也可以说，它是一个邻近都城的宗教区域，大型建筑应是祭祀的场所。

最后发言的张政烺氏，以《邲其卣的真伪问题》为题，就殷代铜器邲其卣三器铭文的真伪进行了论述，并在与池田、松丸二位的质疑答辩中，陈述了伪铭说的结论。关于该三器的真伪问题，学术界也有分歧意见。由于它是一个涉及殷周制度论的重要问题，我们期待着今后的探讨。至于卜辞的伪刻及金文的伪铭、伪器，日本的松丸氏等正在进行细致的研究。

从第二天起，分为商史、甲骨学和考古三个小组，分别进行讨论。笔者参加了甲骨学组，对另外二个小组讨论的详细内容不得而知，只能根据各分组讨论的发言者名单和分发的文件略知概要。选编的论文集即将发表会议的论文，因而在此仅列出主要的发言者及其题目．同时对各分组讨论中集中争论的中心问题予以简述，最后略谈一下印象较深的一些方面。

商史组（田昌五、李民主持）共有三十一篇文章，即山东大学历史研究所教授兼所长田昌五的《殷商文化渊源探索》、郑州大学殷商文化研究所教授兼所长李民的《论商代后期的都城》、中国社会科学院历史研究所刘起釪教授的《卜辞中的河与〈禹贡〉大伾》、同研究所的杨升南氏的《殷墟卜辞中的河》、同研究所助理研究员常玉芝女士的《说商代王位继承制》、常正光氏的《殷代的方术与五行思想基础》、东北师范大学历史系教授徐喜辰的《论伊尹的出身及其在汤伐桀中的作用》、安阳师范专科学校教授连波的《殷商音乐浅谈》、陕西师范大学历史系教授斯维至的《从亚箕秃铭文推论燕殷文化》、小南氏的《亳社考》、石田氏的《殷墟与洹水的关系》、加利福尼亚大学伯克利分校历史系教授兼美中交流协会主席吉德炜的《中国古代的吉日、庙号和登龙之心》、张光直氏的《商代的巫术》、德克萨斯州立大学历史系教授郑麒来的《商周食人现象之研究》等等。

田昌五氏曾出版大作《古代社会形态研究》（天津人民出版社一九八〇年）。最近，又主编《华夏文明》一（北京大学一九八八年），收录关于夏代文明的论文二十七篇，集中探讨了夏商史问题。李民氏有效地利用郑州大学的地利优势，开展郑州的商代文化研究。他曾于第三十三次国际东方学者会议（东方学会等共同举办，一九八八年五月一、二日于国立教

育会馆）期间来日，提交了《夏史研究展望》的报告；并于四月三十日，在东洋文库作了《郑州的商代文化》的讲演（五月六日　在大阪的泉屋博古馆，也作了同样的发言。）。李氏曾在因提出“层累地造成的古史观”而著称的顾颉刚的指导下，参与《尚书》的整理，并发表有《尚书与古史研究》(一九八一年)和《夏商史探索》（一九八五年）等专著。本次会议结束后，笔者陪同池田先生与伊藤夫妇，前往郑州大学，拜访了李氏。他带领我们游览了黄河岸滨。刘起釪氏是顾颉刚的弟子，最近著有《顾颉刚先生学述》（中华书局一九八六年）、《尚书源流及传本考》(辽宁大学出版社一九八七年)等专著。关于刘氏的学问，正如池田先生在《顾颉刚史学的后继者》上、中、下（《东方》八二一八四号，东方书店一九八八年）里所介绍的那样，可以毫不夸张地说，他是当代尚书研究的第一权威。本次会议之前，在北京逗留期间，我们曾得到他的多方关照。池田先生高度评价过常玉芝女士，会议期间有幸面见，其年轻真使人感到意外而惊讶。回国后，笔者又承蒙她惠赠《商代周祭制度》（中国社会科学出版社一九八七年），从中可以窥见常女士之才华。张光直氏是以《The Archaeology of Ancient CHina》Third ed　Yele University press，’77（量博满译《从考古学看中国古代》，雄山阁一九八〇年）及其他大量著作而著名的。现在，他刚进入五十岁的后半期，年富力强，已成为美国的中国古代史学界的权威之一。也许因为过于繁忙，他发完言后便匆匆回国了。

考古组（邹衡、李绍连主持）共有三十六篇文章，即北京大学考古系教授邹衡的《综述夏商四都之年代与性质》、河南省社会科学院考古研究所副教授李绍连的《商代农业生产者的身份初辨》、中国社会科学院考古研究所教授兼中国环境文化研究中心主任杨鸿勋的《殷墟都城与宫殿初探》、河南省文物研究所名誉所长、河南省对外文化交流协会理事安金槐的《关于郑州商城与偃师商城的早晚关系》、同研究所所长郝本性的《郑州出土商代人头骨饮器》、同研究所教授裴明相的《略谈郑州商代二里岗期的房屋建筑》、陕西省社会科学院考古研究所教授徐锡台的《陕北李家崖古城址及清绥地区出土商周时期青铜器族属问题的探讨》、西北大学历史系考古专业教授刘士莪的《西安老牛坡商墓中的殉人问题》、国家文物局教授刘启益的《文王时期铜器初探——早周文化探索之一》、香港中文大学中文研究所副研究员杨建芳的《论殷商文化所受非中原地区的影响》、海德堡大学德麦玲女士的《殷代车马与周时代其它社会御车的比较》等等。讨论内容分为三个议题：第一是商代社会的性质，第二是商文化与其它文化的关系，第三是关于郑州商城与偃师商城的问题。尤其第三个议题，是上次会议的遗留问题。由于二里头文化的分布区域约相当于传说中夏王朝全盛时期的地域，因此，考古学界往往把偃师县二里头看作是探索夏文化的重要对象。不过，在现阶段，把它们联系起来的有力证据尚未发现。据说，也有些学者认为，二里头文化即是夏王朝（夏文化）。然而，也有很多不同意见，还不能成为定论。同时，也还有一种说法认为，二里头遗址就是建立殷王朝的汤王所都之亳。《文物》一九八三年第三期，曾汇集发表过有关夏商文化的重要考古资料。

邹衡氏以郑州二里岗遗址为对象，撰有《试论郑州新发现的殷商文化遗址》（《中国考古学报》一九五六年第三期）的论文，并将其研究成果汇编为《夏商周考古学论文集》（文物出版社一九八〇年）。安金槐氏也撰有《郑州地区的古代遗存介绍》（《文物参考资料》一九五七年第八期）等大量论文。本次会议后，我陪池田先生、伊藤夫妇访问了郑州的河南省文物研究所。在安氏和郝所长的带领下，参观了二里岗遗址的遗物等。在商城工作站和城壁遗址等地，还请同行们作了热情的解说。虽然安氏年事已长，但仍以充沛的精力不断发表论著。另外，在郑州时，还访问了河南省博物馆的许顺湛馆长。他撰写过介绍郑州商代文化的《灿烂的郑州商代文化》（一九五七年），而且也出席了本次会议。徐锡台氏以陕西省的出土文物为研究对象，在我们访问西安的陕西考古研究所之际，他与池田先生等就周原甲骨交换了意见。为了考察二里头遗址的遗物，我同池田先生、伊藤夫妇一起，从郑州经登封，驱车六个半小时，前往偃师县文物博物馆。原来计划是从洛阳去的，由于正值旅游旺季，宾馆不好预约，才只好采用这样一个果断方案。途中，顺便在嵩山的中岳庙（始建于秦代的河南省最大的道教庙宇）和少林寺逗留了一下，结果未能去成二里头遗址，深感遗憾。

甲骨组（胡厚宣、李学勤主持）共有三十二篇文章，其中有中国社会科学院历史研究所胡厚宣氏的《甲骨文土方为夏民族考》、同研究所李学勤教授兼副所长的《论宾组胛骨的几种记事刻辞》、同研究所王宇信氏的《谈周原出土庙祭甲骨的族属及其来源》、北京大学中文系教授裘锡圭的《关于殷墟卜辞的命辞是否问句的研究》、北京大学考古系副教授高明的《商代陶文》、南开大学历史系教授王玉哲的《甲骨金文的朝与明字及其相关问题》、吉林大学古籍研究所教授姚孝遂的《〈殷墟甲骨刻辞类纂〉序》、山东大学历史系教授徐鸿修的《甲骨文声符通假字浅说》、武汉大学中文系教授夏录氏①的《殷商祭名小考》、上海博物馆名誉馆长沈之瑜的《“百淮”“正河”解》、陕西省文物局副教授陈全方的《陕西商代部分方国考》、香港中文大学中文研究所教授饶宗颐的《〈甲骨文通检〉前言》、池田先生的《卜辞中的上帝祭祀问题》、伊藤氏的《关于天理参考馆所藏第三期祭祀卜辞之若干片》、伦敦大学艾兰女士的《“亚”形在中国古代宇宙论中的意义》、斯坦福大学教授倪德卫的《〈小屯殷墟文字甲编〉二四一六新探》、哥伦比亚大学东洋学部副教授（现东京大学东洋文化研究所副教授）高岛谦一的《甲骨文中否定词的构词形态》等等。

讨论内容涉及许多方面　但兴趣多集中在陕西省岐山县凤雏村发掘的西周甲骨文、亦即所谓周原甲骨的问题上。已发表的涉及有字甲骨全片的文章，有陈全方氏的《陕西岐山凤雏村西周甲骨文概论》（《四川大学学报丛刊》第十辑《古文字研究论文集》，四川人民出版社一九八二年），林巳奈夫编的《古史春秋》第一号（朋友书店一九八四年）已转载其摹本与释文。关于周原甲骨的问题，一九八七年一月，在东京的读卖会馆，曾以《中国古文字与殷周文化——以甲骨文、金文为主题》为题，公开举办了讨论会，中国方面的李学勤、裘锡圭氏作了研究报告，内容涉及诸多方面。其中李氏分析了周原甲骨，“提出下列惊人的假说，认为有半数是①殷代末期，②在殷都（小屯），③由周人，④利用殷人的文字制作的，后被运至周原。因此，他主张周代继承了殷代的文字文化，殷周之间具有文化上的连续性”（松丸道雄《中国古文字与殷周文化——参加公开讨论会》，出版文摘第一一九九号，一九八七年。该讨论会的记录，预定由东方书店发行。）。对于李氏的假说　也有不同看法。就殷周间的文化关系而言，自王国维的《殷周制度论》（〈观堂集林》卷十）以降，即围绕着继承还是断绝的问题产生了种种议论。李氏主张继承的发言　势必对今后的论争产生巨大影响。据说本次会议后，曾安排要求者看看全部周原甲骨。遗憾的是，因时间关系，未能去到岐山。

胡厚宣氏以《殷墟发掘》（一九五五年）、《甲骨学商史论丛》初集、二集（一九四四、四五年）而著称，又致力于编辑迄今出土的全部甲骨的拓本集《甲骨文合集》全十三册（中华书局一九八二年），最近还主编了《甲骨文与殷商史》第一、二辑（上海古籍一九八三、八六年），堪称中国甲骨研究名副其实的第一权威。李学勤氏活跃于上述广泛领域，同时也是古文字学的权威之一，曾从事出土简帛的复原修复等工作。一九八五年十月至十二月来日期间，他在东方学会（东京）和木简学会（奈良）就中国考古学的现状发表了讲演。裘锡圭氏与李氏同为目前最引人注目的学者，两人年龄都已超过五十五岁。该组发言的一小时十五分钟，充满了热烈的气氛。发言之后，进行了专题讨论，内容是有关殷墟卜辞中命辞的语法解释。在上述的读卖会馆的报告里，“曾提议下述方法的有效性，即在研究小篆以前的古文字时，为了探讨字形的变迁过程，可以采用正体和俗体两个概念进行整理。针对传统的正体而言，俗体是在日常生活的场合中经常产生的，而且它还对正体本身产生影响。这样的话，便阐述了一个二元论的字形变迁观”（前引松丸氏报告）。目前，王宇信氏正钻研关于周原甲骨的问题，并于本次会议上发表了部分成果。他著有《建国以来甲骨文研究》（中国社会科学出版社一九八一年）一书。高明氏以《古文字类编》(中华书局一九八〇年)而著称。最近著有《中国古文字学通论》（文物出版社一九八八年）。姚孝遂氏有《小屯南地甲骨考释》（中华书局一九八五年），最近主编了《殷墟甲骨刻辞摹释总集）全二册（中华书局预订一九八八年)。饶宗颐氏撰有《殷代贞卜人物通考》（香港大学一九五九年）等很多著作尽管上了年纪，但他仍积极参加各种学会，极其繁忙。作为《人・物・心（5）甲骨文字》（天理大学、天理教道友社，一九八七年）的增补，伊藤氏对天理参考馆所藏的二三六片甲骨进行了考释。本次会议提交的论文，就是关于这个问题的。另外，最近他还著述了《中国古代国家的统治结构——两周封建制度与册命金文》（中央公论社一九八七年）的大作，《史学杂志》第九七编第五号《回顾与展望》对此刊登了详细的评论，可供参考。

池田先生提交的文章，是本次会议论文中部头最大的一篇。其内容如标题所示，是关于卜辞中的上帝祭祀问题。正象他把副题叫做《不享祭说的再次证实与商周宗教的基本区别点》一样，为了论证由宗教文化的区别而出现的商周之间民族文化的本质差异，文章极力反驳上帝祭祀说，阐述了不享祭说的正统性。由于这个问题非常重要，兹将目录详列于后，并借池田先生之语，略述其要点。

一、绪言——关于本问题的诸家之说
二、上帝祭祀说的评述
　（一）岛邦男说
　　（1）口神　（2）口祭　（3）外祭　（4）禘祀的祭神　（5）禘祀的目的
　　（6）禘祀的祭仪
　（二）赤冢忠说
　（三）其它诸说
　　（1）叶玉森　（2）郭沫若　（3）杨树达　（4）陈梦家　（5）胡厚宣
　　（6）丁　山　（7）张秉权　（8）姚孝遂　（9）屯南甲骨释文
　（四）二祀邲其卣铭的问题
　　（1）邲其卣三器铭真伪的论争
　　（2）既䌛于上帝的意义
三、上帝不享祭的原因——宗教民族学的考察
四、结语——商周宗教的基本区别点及其背景

从以上目录可以看出，对岛邦男说的反驳占最大篇幅。这是由于“岛说是极力推翻以往传统说法（不享祭说）的典型”，故须详细评论加以批判。岛说（《殷墟卜辞的研究》第一七七页以下，一九五八年）的观点提出：“（一）作为被祭神，口（丁）包括祖神和同音假借的帝；（二）后期所特有的‘某神口，其牢，丝用’形式的口，相当于禘祭，系以祖神配祀上帝；（三）与这种内祭相反，作为外祭，有史、示等五例；（四）宾帝卜辞和（五）禘祭卜辞是将祖神配祀上帝祭祀的；（六）祈雨、祈年也是向上帝举行的。”然而，“其根本性的谬误”有四点：“（一）基于滥用假借而导致的把口（丁）和帝等同看待；（二）主格的禘与作为祭名的禘即使通用，其本来意义亦有别，该说却将二者混同；（三）基于辞例中见不到的文字的间接论法而臆测的配祀说；（四）同简易的文献牵强附会”。其次，赤冢国古代的宗教与文化》一九七七年的《殷王朝的上帝祭礼的复原》第五二说（《中九一六一〇页）认为：“上帝享用殷王朝的祭礼，是在遇到战争时祈求上帝祐助和祈年的场合。”但是，该说“并未举出能够证实上帝祭祀的辞例。同时，对卜辞的释读，也往往独断和误解。因此，缺乏证据，难以置信”。其他诸说，“在现阶段已发现的卜辞范围内，尚难找到能够确切看作是上帝祭祀的辞例。所以，开始提到的行之已久的不享祭说，仍是无法推翻的”。此外，文章对有真伪争议的二祀邲其卣亦有论及：关于铭文“既䌛于上下帝”，“直接断定为对上帝的祭祀是有很多问题的。即使把二祀卣铭当作真铭，其解释也有待详考”。

关于上帝不享祭的原因，文章提出了这样的假说：“归根结底，上帝、帝的人格因素，就是不能彻底否定，也只是一种理论上的抽象的存在，因而对它举行的礼仪与祭祀岂不是阙如的吗？”最后，作为商周宗教的基本区别点及其背景，文章认为：“殷代卜辞的上帝、帝是不享用祭祀的，所以即使出现‘天’字，其至上神的可能性亦极微弱；与此相反，及至周代，天则不言而喻是作为至上神与上帝同时享用盛大祭祀的。因此，随着封建礼乐制度的完善，它便成为君王的特权。”这种宗教现象的不同，其根本原因是：“在地域方面，与殷文化的东方乃至东南性相反的周文化的西方乃至西北性；在经济方面，与殷末社会的农业主导性相反的先周部族的畜牧主导性。”“如果在这样的前提下考察商周宗教的不同的话，对照商末的祖神崇拜与周人的天神崇拜，这种不同可以归结为民族文化的本质性差异”。（《续释帝、天》，《中国古代宗教史研究》第五五页以下）。另据考古学家的观点（邹衡、徐锡台、胡谦盈），上述假说也已被考古学所证实。以上是池田先生发表的论点。文章不久将会问世，详细内容请参考原作。

本次会议期间，还参观考察了殷墟、朝歌(淇县)、羑里（汤阴县）等地。其中参观殷墟是在十二日进行的。宫殿区内复原的建筑物由杨鸿勋氏设计。他最近著有《建筑考古学论文集》（文物出版社一九八八年），是古代建筑学的权威之一。我们一边聆听他的说明，一边观看了妇好墓等。在宫殿区北面的东部，位于洹水西岸河湾处，有被编为H_1（简称一号灰坑）的殷墟早期小坑，五月份刚刚发掘，目前尚未回填。接着，代表们走访了小屯西头的安阳工作队，听取了队长、中国社会科学院考古研究所郑振香女士的介绍。在出土标本陈列室，整齐地摆放着青铜器与甲骨等；工作队院落的一角，还有车马坑　在王陵区参观了武官村祭祀坑，其上建有大厅，辟为展馆、坑已大多回填，只有四个敞开保留着，露出无首的人骨。该馆外有出土最大青铜器司母戊鼎的二六〇号大墓，自然亦已回填。据说，大鼎的实物收藏于上海博物馆的地下室。

参观朝歌与羑里是十五日。朝歌是殷末四代的帝都，也是周代的卫国，故保存有各种遗迹。淇县城的西北隅，有个称为摘心台的高台，是商纣王摘取比干心脏之处。登上此台，周

围一望无际。我们访问了淇县城东北九公里的古城村，参观了据说是纣王狩猎过的鹰犬城，并沿淇河南下，观看了纣王和妲己的墓。不过，这是不是实物值得怀疑。另外，战国时代卫国故城的城垣遗址尚残存一部分，可以饶有兴趣地进行参观。羑里是纣王幽禁文王（西伯昌）之处，仍保留着一片面积较大的版筑土台。但该土台上面，已成了幼儿园。②

十四日，举行各分组讨论情况的报告会。十六日，举行了国内代表全体会议和闭幕式。在闭幕式上，决定了八九年召开甲骨出土九十周年纪念大会。接着，安阳市副市长丁润明致祝辞，外宾代表致贺辞。最后，胡厚宣氏宣布会议闭幕。本次会议既有根据近年来发掘成果发表的意见，也有对以往长期争论问题发表的看法，二者很好地贯穿于会议之中。同时，中国的很多年轻研究者参加会议，也给我留下了很深的印象。我们期待，在今后召开的会议里，有更多的日本年轻研究者参加，与各国学者们热烈地展开讨论。

（译自《大仓山论集》第二十四辑，一九八八年十二月二十五日）

译者注：

① “夏录氏”原文作“夏录武”，误。

② 按该土台上，原为韩庄中学现已迁走，非幼儿园。此处据原文译出未改。

（原载《殷都學刊》1989年第3期）

李济《安阳》中译本序言

胡厚宣

安阳的殷墟发掘，自从1928年开始，到现在已经是六十个年头了。其工作是伟大的，成就是辉煌的。提到殷墟发掘，不能不提到解放前的中央研究院历史语言研究所考古组，提到史语所的考古组，就不能不提到考古组主任李济先生。

李济是国内外著名的考古学家。要论中国现代科学的考古发掘工作，他是一个开山的人。他在中国现代考古学的发展史上，在安阳殷墟发掘的考古工作上，卓越的功勋和成绩，永远值得我们怀念。

李济，字济之，1896年6月2日生于湖北省钟祥县故里，1979年8月1日因心脏病逝世于台湾省台北市台湾大学附属医院，终年84岁。

李济1918年清华学堂毕业后，即留学美国。1919年在克拉克大学获心理学学士学位。1920年获社会学硕士学位。后转入哈佛大学，1923年又获人类学博士学位。回国后先在南开大学任教，曾在河南新郑县作过一次考古调查。1925年，受聘清华大学国学研究所，又发掘了山西夏县西阴村的仰韶文化遗址。从此他的业绩，就由人类学转入了考古学。

1928年中央研究院成立，历史语言研究所开始发掘安阳殷墟。1929年史语所成立考古组，由李济任考古组主任，具体领导殷墟的发掘工作。

史语所考古组关于安阳殷墟的发掘，从1928年至1937年的十年间，共发掘15次。其中关于殷代帝王都城即小屯村的发掘12次，关于殷代王陵即西北冈的发掘3次。此外关于小屯村附近，殷墟范围内各遗址的发掘，还有12个地方。

这十年的殷墟发掘，在我国现代考古学上极为重要。它不但结合文献记载和小屯文化的层位关系，确定了这一带乃是商朝后期的自盘庚迁殷，至纣之灭，二百七十三年间的都城，而且还发现了殷王朝的宫殿遗址和帝王的大墓。殷墟发掘出土了华贵的青铜器、玉器、白陶和釉陶，精致的石、骨、象牙雕刻和美丽的猪牙、贝、蚌、松绿石镶嵌的器物。更重要的还发现两万多片甲骨文。大大地充实了殷代考古和历史文化的研究工作。

1937年抗日战争起，李济带领着考古组的人员和文物，经过了长途跋涉，从南京到长沙，经过桂林到昆明，最后由昆明又迁到了四川南溪的李庄。在长沙住了半年，在昆明住了三年，在李庄住了五年，抗战结束后，于1946年才又回到南京。

抗战期间，史语所考古组到处搬迁，在极为艰苦的条件下，室内的工作，集中在殷墟发掘遗物的整理和研究，也仍然还有一定的进展。

抗战结束后，1948年底，国民党政府将史语所迁往台湾。从此李济也就带领部分考古组的同仁，滞留在台湾工作。因为在台湾没有什么田野工作好作，于是就把主要精力都放在殷墟发掘的报告和研究工作上边。

总结李济一生，其所领导的考古组，除了一部分同仁，其所写专著编入史语所的专刊和单刊，其所写论文编入史语所的集刊和集刊外编之外，李济所总编辑的专刊有《安阳发掘报告》1至4期，1929至1933年出版；《中国考古学报》1至4册，1936至1949年出版。

李济总编辑的《中国考古报告集》，除了1934年出版的吴金鼎等著的《城子崖》之外，其他都集中在安阳殷墟发掘的报告和研究。其中《小屯》第一本，有石璋如著的《殷代建筑遗存》，1959年出版；《北组墓葬》，1970年出版；《中组墓葬》，1972年出版；《南组墓葬》，1974年出版；《乙区墓葬》，1976年出版；《丙区墓葬》，李济逝世后1980年出版；《甲骨坑层》，李济逝世后1985年出版。

《小屯》第二本，有董作宾的《殷墟文字甲编》，1948年出版；屈万里的《殷墟文字甲编考释》，1961年出版；董作宾的《殷墟文字乙编》上中下辑，1948至1953年出版；张秉权的《殷墟文字丙编》上中下辑，1957至1972年出版。

《小屯》第三本有李济著的《殷墟器物甲编》，1956年出版。

李济总编辑的《侯家庄》，有梁思永、高去寻著的《1001号大墓》，1962年出版；《1002号大墓》，1965年出版；《1003号大墓》，1967年出版；《1004号大墓》；1970年出版；《1217号大墓》，1968年出版；《1500号大墓》，1974年出版；《1550号大墓》，1967年出版。

李济总编辑的《中国考古报告集新编——古器物研究专刊》有李济、万家保著的《殷墟出土青铜觚形器之研究》，1964年出版；《殷墟出土青铜爵形器之研究》，1966年出版；《殷墟出土斝形器之研究》，1968年出版；《殷墟出土青铜鼎形器之研究》，1970年出版；《殷墟出土五十三件青铜容器之研究》，1972年出版。

由李济担任中国上古史编辑委员会主持人所编辑的《中国上古史待定稿》第一册《史前编》，1972年出版，其第二册《殷商编》，第三册《西周编之一》，第四册《西周编之二》，于李济逝世后，1985年出版。

至于李济个人的单篇著作，在他生前1977年曾出版《李济考古学论文集》上下两册，共收他代表性的论文36篇。同年又出版《感旧录》一册，共收录杂文16篇。

李济逝世后，他的遗作经过整理，专著和论文共有142种，其中属于考古学的86种，占全部著作的半数以上，多数属于殷墟考古的篇章。

在李济的专著十多种中，有必须特别提起的，就是他临终前最后出版的《安阳》一书，应该说是他所领导的安阳殷墟考古的一个总结性的回顾。

《安阳》一书，用英文写成，1977年美国西雅图华盛顿大学出版部出版发行。全书共分15章，前8章叙述安阳殷墟发掘的背景和经过，以及抗日战争前后有关殷墟发掘的科学研究。后7章叙述安阳殷墟发掘与中国古代历史的关系以及回首研究的初步成果。应当说，这是李济领导安阳殷墟考古几十年来的一个总结。

如第1章叙述甲骨文的发现，第2章叙述甲骨文的研究，第3章叙述由西方输入的田野工作的考古方法。这三章是叙述的安阳殷墟发掘的背景，由于这些条件，才导致了安阳殷墟的发掘。

第4章叙述早期的安阳殷墟发掘，从中央研究院历史语言研究所的成立，殷墟甲骨的调查，到史语所考古组1至9次的发掘经过。重点放在小屯村殷代的建筑基址的找寻。第5章叙述了侯家庄西北冈殷代王陵的发现和发掘。共发现王室的大墓10，和附属于大墓的小墓1221，初步解决殷人埋葬制度和杀人殉葬的事实，并发现了精美的青铜器、石玉雕刻及其他重要的文化遗物和遗存。第6章叙述抗日战争前最后三次的殷墟发掘工作。主要发现有车的殉埋和127坑的整坑甲骨，还弄清了杀人殉葬动物群和地面下和地面上建筑的规模等等。这些都是讲的15次安阳殷墟发掘的经过。

第7章叙述抗战期间，史语所由南京迁长沙，经桂林迁昆明，又从昆明迁四川南溪的李庄。殷墟发掘被迫停止。在搬迁期间，乃转入室内安阳研究的工作。李济整理小屯出土的陶器，梁思永整理侯家庄报告，董作宾作甲骨文和殷历谱的研究，吴定良研究安阳发掘出土殷代人头骨的资料。第8章叙述战后史语所迁台湾的研究工作。侯家庄的报告由高去寻补写，小屯基址与墓葬由石璋如编著，李济从事古器物的研究，甲骨文的研究，由屈万里和张秉权继续。这些都是讲的抗战期间和战后关于殷墟发掘遗物的研究工作。

第9章由史前遗迹及安阳殷墟发掘谈到中国古史传说的一些问题，如动植物的畜养和栽培，彩陶纹饰和毛笔，骨卜习惯的出现、盘庚迁殷及中国文字的起源。第10章叙述殷代建筑可分居住与储藏两类，作为居住的窖穴比较大，用于储藏的坑穴比较小。根据地面上夯土台基和柱础的位置，可以使地面上的建筑复原，有单层长排的大房屋，亦有双层的建筑，并有作祭坛用的台基。第11章叙述经济资源和器物，谈到了殷代的气候和农业，也谈到了陶、石、骨、铜等手工业品和贸易。第12章叙述殷代的装饰艺术，包括陶、骨、石、玉和青铜器上的雕刻的各种装饰艺术。第13章叙述殷代的世系、贞人和亲属关系，包括分期断代、称谓名谥、王位继承、联邦氏族等等。第14章叙述殷代的祖先和神祇的崇拜，包括四方山川之神和祖先的五种祭祀，及尞、沈、埋等祭祀方法。第15章叙述由安阳发掘的人头骨可分为五种，殷人已经混合复杂，还不能解决殷代人体质上的问题。这些就是叙述由安阳殷墟发掘谈到中国古代历史的问题及目前研究的初步结果。

就这样，李济在《安阳》一书的15章里，以他五十年来领导史语所考古组的身份，对安阳殷墟发掘的经过和研究，作了一个深入浅出简明扼要的综述。

正如美国罗杰士教授在本书序文中所说，有关安阳殷墟发掘对于中国商代史研究的贡献，李济博士是最有权威的，由他来为这段学术历史做次简述，也是最恰当不过的。

写到这里，不由得使我想起，在解放以前，我也曾在史语所考古组李济先生领导下，工作过一个时期。1934年7月我北京大学毕业后就到史语所考古组工作，先到安阳住过一年多，在梁思永先生带队下，先发掘同乐寨的三层文化，又主持西北冈1004号大墓的发掘。大墓中出土了大型豪华的牛鼎和鹿鼎，还发现了一层带把的青铜戈，一层成捆的青铜矛和一层各种兽头形的青铜盔，在当时曾轰动一时，引起了法国伯希和日本梅原末治的前来参观，并拍了电影。

回到南京，我作过殷墟一至九次发掘所得甲骨文字的释文。1936年，殷墟第十三次发掘，发现了127坑甲骨，连泥带土整个装箱运到南京，我作过将近半年127坑甲骨室内的发掘工作。全坑甲骨共达17096片，其整龟及接近整龟达320版，是甲骨文自从出土以来，空前未有之发现。抗战以后，我随史语所考古组从南京迁长沙，再迁昆明，在昆明住了三年，我仍然整理这一批甲骨文资料。

战争结束后，我从后方回到上海在复旦大学教书。为了教学参考的需要，1955年我写了一本《殷墟发掘》，由学习生活出版社出版，头版4000册，一售而空，出版社要再版，我因为要补充解放以后的发掘，须要增订，所以未允再印，一拖30年过去了。

我虽然也有一本《殷墟发掘》，但是李济先生的《安阳》自有它的特点。正如张光直先生在1978年《哈佛亚洲研究杂志》评介《安阳》一书时所说，“《安阳》既不是仅

有的也不是头一部介绍1928—1937年发掘概况的书。但这是安阳发掘的领导者本人所作的叙述，作者常被人们称为中国人类学的创始者，或中国考古学的元老。仅据这些理由，就应该说《安阳》是一本具有重大意义的书。"（中译文见《考古学参考资料》5，1982年）

此书原名《安阳发掘》，日本国分直一曾根据原稿本译为日文，于1982年日本新教育图书公司出版。李济英文本改为《安阳》，1977年美国西雅图华盛顿大学出版部出版。今聂玉海、苏秀菊夫妇据英文本《安阳》译为中文，又经杨锡璋同志校阅一过，这对于殷墟考古是非常有益的工作，特别是在今年举行殷墟发掘六十周年、明年举行殷墟甲骨文发现九十周年纪念活动时出版《安阳》中译本，尤其具有现实的意义。

玉海同志译书竟，行将付梓，乃征序于余，余因述李济先生生平及《安阳》一书在学术上之价值以归之，并望读者多赐教益为盼！

（原载《中原文物》1989年第1期）

ORACLE-BONE COLLECTIONS IN GREAT BRITAIN: A REVIEW ARTICLE

DAVID N. KEIGHTLEY

Some 26,700 oracle bones (representing eighteen percent of the total corpus of the approximately 155,000 oracle bones currently known) are estimated to repose in twelve foreign countries outside of China.[1] As Hu Hou-hsüan notes in the English version of his "Preface" to *Ying-kuo so-ts'ang chia-ku chi* 英國所藏甲骨集 (abbreviation, *Ying-ts'ang*)[2] — the work here under review — the largest non-Chinese collections, excluding those in Japan and Canada, are in Great Britain, mainly gathered by the collector-scholars Samuel Couling, Frank H. Chalfant, and Lionel C. Hopkins. Since the inscriptions were, in their origin, intensely Shang-centered and provincial, it is a satisfying irony of history that these documents are serving, as they have done almost from their discovery in 1899, to stimulate Sino-foreign scholarly cooperation.

This cooperation has been demonstrated in recent years by the participation of foreign scholars in a number of conferences held in China dealing with Shang culture and ancient inscriptions,[3] by the publication, in Chinese, of some of the foreigners' contributions at these conferences,[4] and by the publication, in English, of scholarly discussions among Chinese and American scholars.[5] The joint publication of *Ying-ts'ang*, by the Institute of History of the Chinese Academy of Social Sciences in Beijing and by the School of Oriental and African Studies of the University of London, exemplifies the degree to which such international cooperation in the realm of sinology — which has not, of course, been limited to Shang studies — has advanced.

The Nature of the Collection

Most of the inscriptions in *Ying-ts'ang* — those in the British Library, the Royal Scottish Museum,[6] and the Cambridge University Library — have long been available in the form of hand copies published in *Chin-chang* (cited by the editors as *Hopkins*)[7] and *K'u-fang* (cited as *Couling-Chalfant*).[8] Eight of the thirty-four oracle-bones in the Ashmolean Museum had also previously been published as photographs.[9] It was only in 1982 and 1983, however, that Li Hsüeh-ch in and Sarah Allan were able to survey all the inscriptions in Great Britain — from eleven private and public collections[10] — and that Ch'i Wen-hsin was able to make the rubbings, which must now be regarded as the preferred, though not necessarily the only, source for these texts.[11] From the 3,088 pieces which she examined in the eleven collections, she selected and made the 2,674 rubbings that appear in *Ying-ts'ang*. That 1,025 of these (38 percent) were previously unpublished suggests the importance of the collection on the grounds of content alone.[12]

Subject-Classification and Periodization

The rubbings of the 2,674 oracle bones in Volume 1 that form the body of *Ying-ts'ang* are preceded by eight color plates of five significant oracle-bones (including back and front views of three of them), by Hu Hou-hsüan's "Foreword," by the editors' "Introduction," by the rules of the nine *fan-li* 凡例 (here translated as "Editors' Notes") — these texts are all given in Chinese, at the front of part 1, and in English, at the back — and by an analytical Table of Contents that locates the inscriptions, which are arranged first by period and then by content (see below)

Following the model most recently employed by *Chia-ku-wen ho-chi* 甲骨文合集 (abbreviation, *Ho-chi*), the newly published *corpus inscriptionum* of the Shang,[13] the editors have classified the 2,674 rubbings in *Ying-ts'ang* into Tung Tso-pin's 董作賓 five periods.[14] They have then subdivided the inscriptions by divination topics — which are not always the same as those used in *Ho-chi* — such as "Ancestors," "Lords," "Diviner Names," "Royal Activities," and so on.[15] Again following the *Ho-chi* precedent, they have placed the Tui- 𠂤, Tzu- 子, and Wu- 午 diviner group inscriptions, whose date is in dispute, at the end of Period I (*Ying-ts'ang* 1757-1922).

---

[1] Hu Hou-hsüan 胡厚宣, "Pa-shih-wu nien lai chia-ku-wen ts'ai-liao chih tsai t'ung-chi" 八十五年來甲骨文材料之再統計, *Shih-hsüeh yüeh-k'an* 史學月刊 1984.5, 22. I am grateful to Sarah Allan, Hu Hou-hsüan, Jean A. Lefeuvre, Li Hsüeh-ch'in, Lin Yün, Stanley L. Mickel, Edward L. Shaughnessy, and Ken-ichi Takashima, for their helpful criticisms of an earlier draft of this review; its errors remain my own.

[2] *Ying-kuo so-ts'ang chia-ku chi; Oracle Bone Collections in Great Britain*. Chung-kuo she-hui k'e-hsüeh-yüan li-shih yen-chiu-so 中國社會科學院歷史研究所 and School of Oriental and African Studies, University of London. Li Hsüeh-Ch'in 李學勤, Ch'i Wen-hsin 齊文心, and Ai Lan 艾蘭 (Sarah Allan). Vol. 1, pts. 1 and 2. Pp. 524, 15. Peking: Chung-hua shu-chü, 1985. 350 RMB.

[3] I have in mind (1) the annual meetings of the Chinese Paleography Association; see, e.g., the reports in *Early China* 5 (1979-80), 113-118 (by Chou Hung-hsiang); 7 (1981-82), 114-118 (by Edward L. Shaughnessy); 8 (1982-83), 182-186 (by Chow Kwok Ching); (2) the international conferences held at An-yang in 1984 and 1987 (see, e.g., the report in *Early China News* 1.1 (January 1988), 1, 3-4, 19-18 (by Shaughnessy). One should also signal Chinese participation in conferences held in America; notable in this regard was (3) the International Conference on Shang Civilization held in Hawaii in 1982, which led to two publications: *Studies of Shang Archaeology*, ed. K.C. Chang (New Haven: Yale University Press, 1986) and *International Conference on Shang Civilization: Abstracts of the Papers Presented and a Summary of the Discussions* (*Early China* Supplement 1, 1986), prepared by Lothar Von Falkenhausen.

[4] See, e.g., the contributions by David S. Nivison (on the date of the Chou conquest of Shang) in *Ku-wen-tzu yen-chiu* 古文字研究 12 (1985), by Keightley (on the origins of orthodoxy historiography) and Shaughnessy (on Shang-Chou relations and the post-Wu Ting influence of the Shang royal house) in ibid. 13 (1986).

[5] E.g., the "Early China Forum" articles on the Chou-yuan oracle bones by Edward L. Shaughnessy, Wang Yuxin, Li Xueqin, and Fan Yuzhou in *Early China* 11-12 (1985-1987), 146-194.

[6] It is reassuring to have rubbings of the pieces in the Royal Scottish Museum included in *Ying-ts'ang*. When Paul Demieville visited the Museum in 1972, nobody could find or tell him what had become of the collection (J.A. Lefeuvre, "Les inscriptions des Shang sur carapaces de tortue et sur os," *T'oung Pao* 41 [1975], 50, n. 1).

[7] That the drawings of the *Chin-chang* inscriptions were originally reproduced in slightly reduced size made it rather difficult for scholars attempting to join them to pieces in other collections.

[8] For the abbreviations by which I refer to oracle-bone collections, see Keightley, *Sources of Shang History: The Oracle-Bone Inscriptions of Bronze Age China* (Berkeley: University of California Press, 1978), 229-231.

[9] Jao Tsung-i 饒宗頤, *Ou Mei Ya so chien chia-ku lu-ts'un* 歐美亞所見甲骨錄存 (n.p., 1970), nos. 28-35.

[10] A brief account of the history and number of bones in each collection is provided in the editors' "Introduction" (English version), pp. 5-8; the editors will presumably identify the source of each individual piece in volume 2. More useful at present is Ch'i Wen-hsin, "Kuan-yü Ying-ts'ang chia-ku cheng-li chung ti chi-ke wen-t'i" 關於英藏甲骨整理中的幾個問題, *Shih-hsüeh yüeh-k'an* 1986.3, 12-22, which gives the statistics for the pieces held and numbers of rubbings made, as well as some account of the detective work involved in tracking down unpublished inscriptions. I have not yet seen Li Hsüeh-ch'in, "Chi Ying-kuo shou-ts'ang ti Yin-hsü chia-ku" 記英國收藏的殷墟甲骨, to appear in *Chia-ku-wen yü Yin-Shang shih* 甲骨文與殷商史, ed. Hu Hou-hsüan, 3rd series.

[11] Hu Hou-hsüan provides an account of the way in which drawings, rubbings, and photographs have been used in various combinations in different oracle-bone collections. He expresses the hope that photographs of the British inscriptions can also eventually be published so that scholars may compare all three forms of reproduction for any particular bone (*Ying-ts'ang*, "Preface," 3-4). I gather, in fact, that the photographs will be published as *Ying-kuo so-ts'ang chia-ku wen-tzu ts'un-chen* 英國所藏甲骨文字存真 (conversation with Hu Hou-hsüan, 7 October 1988).

[12] I obtain these figures from Ch'i Wen-hsin, "Kuan-yü Ying-ts'ang," 14.

[13] Kuo Mo-jo 郭沫若, chief ed.; Hu Hou-hsüan, ed.-in-chief, *Chia-ku-wen ho-chi* (N.p.: Chung-hua shu-chü, 1978-1982) 13 vols. For my review of this fundamental new reference, see Keightley, "Sources of Shang History: Two Major Oracle-Bone Collections Published in the People's Republic of China," *Journal of the American Oriental Society* 110.1 (1990), in press.

Contents

Within any particular oracle-bone collection, every scholar will have his favorites of the moment; as with all historical assessment, importance is in the eye of the beholder. By any criterion, however, *Ying-ts'ang* is a particularly rich repository of materials. This is because, according to the periodization-cum-contents table (unnumbered p. 11; also provided as a pull-out page), some sixty-six percent of the collection's inscriptions (the first 1,756 pieces) may be dated to Tung Tso-pin's Period I, the period when the scope of Shang divination was broadest.[16] (The figure rises to seventy-two percent if one includes in this period the Tui-, Tzu-, and Wu-diviner group inscriptions whose date is in dispute [see previous paragraph].)[17]

So far as content is concerned, the original drawings in *Chin-chang* and *K'u-fang* had already reproduced materials of great historical value. The *Ying-ts'ang* editors refer, in their "Introduction," to some thirty-plus pieces in the collection, discussing such issues as the relationship between inscriptions on the border and on the fan of scapulas (*Ying-ts'ang* 353 = *Chin-chang* 699); a valuable lunar eclipse record (*Ying-ts'ang* 886 = *K'u-fang* 1595);[18] non-divinatory records of sacrifice (*Ying-ts'ang* 112 [= *K'u-fang* 1580], 1195, 1196);[19] some significant inscriptions from the Tzu (*Ying-ts'ang* 1891 = *K'u-fang* 1988) and Wu-diviner groups (*Ying-ts'ang* 1916); a correction that shows Fu Hao 婦好 did not attack the Ch'iang 羌 (*Ying-ts'ang* 150 = *K'u-fang* 310); corrected place names for the Jen-fang 人方 campaigns (*Ying-ts'ang* 2562[20] and 2565 = *Chin-chang* 544 and 583); full and partial forgeries; errors in the original drawings (see below); anomalous but authentic formulas; a discarded oracle-bone that had been reused, in their view, as an ornament (*Ying-ts'ang* 1873 = *K'u-fang* 420); and the inscription on a non-oracle bone (*Ying-ts'ang* 2673 = *Chin-chang* 88). They promise a fuller discussion of the much-disputed "family genealogy" inscription (*Ying-ts'ang* 2674 [color plates 7 and 8] = *K'u-fang* 1506), which they place as the last rubbing in the collection, outside their scheme of periodization.[21]

With regard to the content of the 1,025 oracle-bones that are published in *Ying-ts'ang* for the first time, Ch'i Wen-hsin has provided a useful account of their worth. She discusses, for example, inscriptions that involve: the issuing of orders, on a *ting* 丁 or on a *chia* 甲 day, to one Yi Yung 伊永 (*Ying-ts'ang* 2262); the names of statelets (*Ying-ts'ang* 130, 601, 749); numerous socket notations, which bear on the role of women (*fu* 婦) and *yi* 邑 and on ritual and scapulimantic procedures; and inscriptions that concern agriculture (*Ying-ts'ang* 821) and the hunt (*Ying-ts'ang* 2566), this last being the new bone with the most characters, forty-eight.[22] These newly published inscriptions are of great value.

Rejoinings and Fakes

Of the rejoining of oracle-bone pieces there is no end. On the basis of Chalfant's *Chin-chang* and *K'u-fang* drawings, Yen Yi-p'ing 嚴一萍 had already made sixty-plus rejoinings in his *Chui-hsin*, published in 1975. Ch'i Wen-hsin, in making the rubbings, was able to make four more.[23] The indefatigable Ts'ai Che-mao 蔡哲茂, maintaining his attentively critical eye from across the Taiwan Straits, has offered various minor criticisms of the *Ying-ts'ang* rejoinings;[24] he has also proposed an additional eighteen rejoinings involving *Ying-ts'ang* pieces and, mainly, pieces in *Ho-chi*.[25]

Ch'i Wen-hsin has also discussed the question of the fakes in the English collections, dividing them into two kinds: those carved on new bone and easy to detect, and those carved on old bone. Having directly examined the bones, she is able to comment with authority on the previous scholarship on the *K'u-fang* fakes that had been summarized by Ch'en Meng-chia 陳夢家, and to qualify some of his judgments.[26]

Worth of the Collection

The question naturally arises: was the effort involved in making rubbings of the 1,649 oracle bones that had already been published as drawings justified? The answer must be a resounding yes. Ch'i Wen-hsin provides a useful account of the way in which the original drawings have, in certain cases, led to erroneous interpretations. She identifies, with examples, five kinds of defects in Chalfant's *K'u-fang* drawings: (1) characters inscribed on the back of a bone (as in prognostications and marginal notations) were not drawn (114 characters missing, from 57 pieces); (2) socket notations were not drawn (1 case only); (3) characters were omitted (34 characters missing, from 18 pieces);[27] (4) characters were drawn wrongly (107 wrong characters, on 86 pieces); (5) and bones were inverted (four cases). Of particular importance is her discussion of *Ying-ts'ang* 2283 (= *Chin-chang* 209), which can now be read as ... *wang ch'i hu ch'i yin fa wei yü* ... 王其乎七尹伐衛于 ... , "... the king may call upon the seven Yin to attack Wei at ..."; as Ch'i notes, the seven Yin were presumably part of the Many Yin (*to-yin* 多尹).[28]

I can further illustrate the value of, and some of the cautions to be observed in using, the *Ying-ts'ang* rubbings by presenting the following the only reference on the rejoined bone fragments to the divinations'-position in the ritual calendar.[33]

---

[14] For an introduction to Tung's periodization, see Keightley, *Sources of Shang History*, 92-94. Li Hsüeh-ch'in, "Kuan-yü Ying-kuo so ts'ang chia-ku ti chi-chien shih" 關於英國所藏甲骨的幾件事, *Shu-p'in* 書品 1987.2, 15-16, explains that he employed Tung's old system because it has endured for fifty years and is in general use; he did not think it proper to impose his own system, still in dispute, involving two major traditions and nine groups, in a resource intended for the scholarly community as a whole.

[15] The *Ying-ts'ang* categories, for example, make no reference to *Ho-chi*'s "Slaves and Commoners" or "Slave-owner Lords."

[16] On the way in which the range of Shang divinatory concerns grew more restricted in the later periods, see Keightley, *Sources of Shang History*, 122; see also Keightley, "Shang Divination and Metaphysics," *Philosophy East and West* 38.4 (October 1988), 378-383.

[17] For an introduction to the disputes, see Edward L. Shaughnessy, "Recent Approaches to Oracle-Bone Periodization: A Review," *Early China* 8 (1982-83), 1-13; see too the discussions of periodization in Keightley, "Sources of Shang History."

[18] The character for *ch'i* 七 in the phrase *ch'i jih* 七日, "on the seventh day," is virtually invisible in the *Ying-ts'ang* rubbing; Chalfant's original drawing, here as in other cases, helps us read it.

[19] These records are important for they imply that systematic sacrifices, offered on the *kan* 干-day of the recipient's temple name, were being offered in the reign of Wu Ting, *before* the regular *divinatory* evidence for their existence appears in the reign of Tsu Chia 祖甲. For a pioneering discussion of the evidence, see Li Hsüeh-ch'in, "Lun Pin-tsu chia-ku ti chi-chung chi-shih k'e-tz'u" 論賓組甲骨的幾種記事刻辭, paper presented at the International Conference on China's Yin-Shang Culture, Anyang, 9-16 September 1987; among the inscriptions he cites in that paper — a version of which will be published in *Ying-ts'ang*, vol. 2 (see n. 37 below) — are *Ho-chi* 1262, 1263, 1770, 10410, and 12333.

[20] Correcting the "2525" of the English "Introduction," p. 10, line 16.

[21] The editors seem to disagree about the authenticity of this piece. Ch'i Wen-hsin ("Kuan-yü Ying-ts'ang," p. 19), as part of her larger discussion of fakes in the collection, argues, primarily on the basis of the derivative or unique graph forms and the careless and weak writing style, that the genealogy on *Ying-ts'ang* 2674 is a fake inscription added to a used oracle-bone. Li Hsüeh-ch'in, by contrast, believes it is genuine; see his talk, "A Discussion of a Shang Dynasty Genealogy Inscribed on a Scapula Formerly in the Chalfant Collection" (School of Oriental and African Studies, 2 February 1982), as reported in *Early China* 7 (1981-82), 119; see too his "Kuan-yü Ying-kuo so ts'ang," pp. 16-17. Allan's "On the Engraving of Oracle Bone Inscriptions," which will appear in *Ying-ts'ang*, Vol. 2 (see n. 37 below), concludes, on the basis of a microscopic study of groove depth, cleanness of groove edge, stroke order, and fissures in grooves, that the inscription is genuine; she tentatively dates it to the reign of Wu Ting. I find her contribution, which she has been kind enough to let me see in manuscript, impressive. My own examination of the bone on 28 September 1978 led me — though with no firm conviction — to a position close to that of Ch'i Wen-hsin; I noted, in particular, that the graphs lapse into a style that I associate with a number of evident fakes held in Paris collections (see Keightley, *Sources of Shang History*, 144, n. 40). In the light of Allan's more rigorously defined criteria, I would wish to reexamine the scapulas in both London and Paris.

[22] "Kuan-yü Ying-ts'ang," 14-15.

[23] "Kuan-yü Ying-ts'ang," 15-17, figs. 1-4.

[24] Ts'ai Che-mao, "Tu Ying-kuo so-ts'ang chia-ku-chi shang-pien" 讀英國所藏甲骨集上編, *Ta-lu tsa-chih* 大陸雜誌 74.5 (1987), 201. He notes that two of Ch'i Wen-hsin's four rejoinings had already been made: one (reproduced as *Ying-ts'ang* 2119) by Hsia Lu 夏渌, "Hsüeh-hsi ku-wen-tzu sui-chi erh-tse" 學習古文字隨記二則, *Ku-wen-tzu yen-chiu* 6 (1981), 178-179; the other by Po Yü-cheng 白玉崢, "Chia-ku chui-ho lu hsiao" 甲骨綴合錄小, *Chung-kuo wen-tzu* 3 (1981), 210, 228. To be fair to Ch'i Wen-hsin, however, Po had only provided an exploded rejoining of *K'u-fang* 1844 and *Chin-chang* 739; Ch'i, in her article, supplies the missing fragment, *K'u-fang* 1556. (*Chin-chang* 739 appears by itself, however, as *Ying-ts'ang* 1813; the *Ying-ts'ang* editors have not reproduced this rejoining in the plates.) Ts'ai (preferring the placement originally proposed by Tseng Yi-kung 曾毅公) also queries the way in which Ch'i has rejoined *Chin-chang* 535 and 477 to form *Ying-ts'ang* 593 (he illustrates the two possible rejoinings with his figs. 5 and 6 on p. 202 of "Tu Ying-kuo").

[25] One of these, involving *Ying-ts'ang* 2259 (*K'u-fang* 1768 = *Ho-chi* 41312) + *Ying-ts'ang* 2261 (*Chin-chang* 363 = *Ho-chi* 41312) is particularly important, because it provides additional evidence for the view that the ancestral title *chung-tsung* 中宗 could refer only to Tsu Yi 祖乙 and not to Tsu Ting 祖丁 ("Tu Ying-kuo," 201, 204, fig. 4). Ts'ai's discussion of this term should be read in conjunction with the *Shih-wen* 釋文 for no. 2281 in *Hsiao-t'un nan-ti chia-ku* 小屯南地甲骨, vol. 2, sect. 1 (Shanghai: Chung-hua shu-chü, 1983), pp. 996-997. (This collection, containing 4,589 rubbings, mainly of oracle bones excavated in 1973, is the second collection reviewed in Keightley, "Sources of Shang History." Ts'ai also notes that the accuracy and true scale of the *Ying-ts'ang* rubbings permitted him to retract a rejoining he had earlier proposed ("Tu Ying-kuo," 200).

[26] See Ch'en Meng-chia, *Yin-hsü pu-tz'u tsung-shu* 殷虛卜辭綜述 (Peking: K'e-hsüeh ch'u-pan she, 1956), 652-653. Ch'i Wen-hsin ("Kuan-yü Ying-ts'ang," 18-20) adds three more cases to Ch'en's list of bones that were total fakes, for example, and finds that seventeen of his total fakes are in fact only partial. She found far fewer fakes in *Chin-chang*: of the seven pieces marked "spurious" in the original book, she found four to be only partly so. Of four others she had originally suspected of being fake, three turned out to be partly so and one totally so.

[27] Chalfant, e.g., copied only the fake characters on *K'u-fang* 1531 (= *Ying-ts'ang* 2568) and omitted the nine genuine ones, which are important for the study of the Period II ritual cycle.

[28] "Kuan-yü Ying-ts'ang," 14-15, 20-21.

d) The drawing for the Tui-diviner group inscription, *K'u-fang* 1781, contains at least two errors. First, the crack-number on the right should be the same as the one on the left, "3" and not "2." This is clearly visible in the rubbing, *Ying-ts'ang* 1771. It is difficult, however, to use the rubbing to decipher the top left graph, drawn by Chalfant like a *pu* 卜; examination shows that it should be *kuei* 癸 (oracle-bone form ╳). The incompletely carved graph below it would thus be *hai* 亥, providing us with the cyclical date, *kuei-hai*. The transcription and commentary in Volume 2 will presumably clarify this and identify the five other bone fragments that can be joined to this one.[34]

I adduce these examples, both to confirm the worth of the collection and to demonstrate the truism that rubbings, even when excellently done, are not always a sufficient, though they are certainly a necessary, source. For all their potential faults, Chalfant's drawings (and their reprinted versions in volume 13 of *Ho-chi*) still have their important, supplementary uses. Indeed, Ch'i Wen-hsin calls attention to yet a further contribution the drawings make. Six pieces from *K'u-fang* and sixteen from *Chin-chang* have regrettably been lost; fragments of friable bone or shell have also broken off others, so that instances of anywhere from two (*K'u-fang* 328 = *Ying-ts'ang* 142) to five characters (*K'u-fang* 271 = *Ying-ts'ang* 863), once present in the original drawing, are now missing from the rubbing. Chalfant's drawings, accordingly, are the only record we are likely to have of these lost pieces and fragments.[35]

---

[33] See Ch'ü Wan-li's 屈萬里 commentary to *Chia-pien* 297; the rejoining is reproduced as *Chia-t'u* 016. Ch'ü gives the correct reading of "second moon" in his commentary and drawing. So does Tung Tso-pin, *Yin-li p'u*, pt. 2, ch. 2, "Ssu-p'u 祀譜 2," 6b.

[34] Chalfant's errors are reproduced by *Ho-chi* 40867. For an accurate transcription, and for the rejoinings, see Ch'ü Wan-li, "Pa Li Yen-chai hsien-sheng chui-ho ti liang pan 'yung hou t'un' niu-ku pu-tz'u" 跋李棪齋先生綴合的兩版'用侯屯'牛骨卜辭, *Ta-lu tsa-chih* 31.3 (1965), 2.

[35] "Kuan-yü Ying-ts'ang," 21-22. Some clarification may be needed in some of these cases. Ch'i, for example, claims that nineteen characters are missing from *Ying-ts'ang* 1015, originally *Chin-chang* 695; these are certainly the same bone, but both the drawing and the rubbing contain the same eight characters (plus some fractional characters). Nothing appears to have been lost and *Chin-chang* 695, at least as it appears in the published drawing, never had nineteen characters to lose. The matter will presumably be clarified when vol. 2 of *Ying-ts'ang* (see below) is published.

examples, drawn from my own work in 1978-1979 with the *K'u-fang* oracle bones held in the Cambridge University Library:

a) The drawing for *K'u-fang* 1616 provides three curious dots under the graph for *wang* 往, "to go." There is no justification for this on the original bone, as the rubbing, *Ying-ts'ang* 544, reveals.[29]

b) On *K'u-fang* 1649, Chalfant omitted three horizontal strokes from the last graph (which is, in fact, a *ho-wen* 合文 form, combining both "three" and "thousand") in the inscription, *cheng kung jen san-ch'ien* 貞共人三千, "divined: we raise/present three thousand men." Chalfant's misdrawing of the inscription thus seems to say, "raise one thousand men," and some scholars have so taken it.[30] *Ying-ts'ang* 558 reveals the error.[31]

c) A similar error, this time of calendrical significance, appears on *K'u-fang* 1661, where Chalfant's drawing gives the date for the bottom inscription as *tsai san yue* 在三月, "in the third moon." In this case, the rubbing, *Ying-ts'ang* 2503, does not resolve the matter, partly because the number "three" falls at the place where two scapula fragments have been rejoined. Direct inspection of the bone clearly reveals that the number should be "two," and the forthcoming *Ying-ts'ang* commentary volume (see below) will presumably make this clear. The commentary will presumably also tell us that the bone can be rejoined to *Chia-pien* 297.[32] That rejoining is important because the additional fragment contains the phrase *wang pa ssu* 王八祀, "the king's eighth sacrificial cycle,"

---

[29] Since the *Ho-chi* editors were not able to reprint the *Ying-ts'ang* rubbings in their basic corpus (referred to in n. 13 above), they had to be content with reproducing Chalfant's drawings, which, together with drawings from other collections, they placed in volume 13. It is necessary, accordingly to be aware that Chalfant's errors are preserved in *Ho-chi*. In this case, for example, the three erroneous dots are reproduced in *Ho-chi* 39621.

[30] E.g., Tung Tso-pin, *Yin-li p'u* 殷曆譜 (Nan-ch'i, Szechwan: Academia Sinica, 1945), pt. 2, ch. 9, 31b, no. 144; Chang Tsung-tung, *Der Kult der Shang-Dynastie im Spiegel der Orakelinschriften: Eine paläographische Studie zur Religion im archaischen China* (Wiesbaden: Harrassowitz, 1970), 104, no. 6.26; Paul L-M Serruys duplicates the mistake in his review of Chang's book, "The Language of the Shang Oracle Inscriptions," *T'oung Pao* 60.1-3 (1974): 70. *Ho-chi* 39861 reproduces the mistake.

[31] Ch'i Wen-hsin, "Kuan-yü Ying-ts'ang," 21, also refers to this case of misdrawing.

[32] *Ho-chi* 41704 fails to correct the erroneous "3" or to indicate the rejoining.

There is no doubt of the value of the entire *Ying-ts'ang* collection. A variety of scholarly issues has depended on the accuracy of Chalfant's drawings, which, as we have seen, had a certain number of limitations. Even though the general quality of the drawings was high,[36] so that there was usually no evident reason to challenge them directly, they had left the nagging suspicion, as all drawings must, that a rubbing might show something different. It is important that we now have these excellently executed rubbings available for reference.

Ying-ts'ang will become even more useful when the supporting materials are published in Volume 2, the text volume. This is to include: (1) Transcriptions; (2) Supplementary essays;[37] (3) Supplementary Charts;[38] (4) Additions and Corrections to Volume 1; (5) Drawings; (6) An index of oracle-bone characters and expressions; and (7) Supplementary black-and-white photographs, including microscopic photos of many characters.[39] *Ying-ts'ang*, Volume 2, promises to be a worthy successor to the rubbings of Volume 1. One looks forward to its appearance.

---

[36] The editors conclude, "Although examples ... in which the drawings are inaccurate or insufficient are countless, [Chalfant's drawings] are generally accurate representations of the original bones. In many cases in which the drawings have been suspected of inaccuracies, an examination proves that they are correct after all" ("Introduction," 10-11).

[37] The authors and their essays are (using the *p'in-yin* romanization they will employ): Li Xueqin, "On Some Bin-Diviner Group Record Inscriptions Engraved on Ox Scapulae"; Qi Wenxin, "The Case of Yi Yin and Huang Yin Being Two Persons"; Sarah Allan, "On the Engraving of Oracle-Bone Inscriptions" (see n. 21 above); and E.N. Arnold, "Identification of an Oracle Bone in Cambridge University Library."

[38] Twelve finding lists will permit scholars to move between the constituent collections, *Ho-chi*, and *Ying-ts'ang*.

[39] I am grateful to Sarah Allan for supplying this information (letter of 1 November 1988); see too, Li Hsüeh-ch'in, "Kuan-yü Ying-kuo," 17.

（原載《古代中國》第14卷，1989年）

甲骨学的科学总结和系统开拓

——评王宇信著《甲骨学通论》

宋　镇　豪

1989年中有四件大事令甲骨学界感到欣慰。一是在安阳殷墟召开了甲骨文发现九十周年国际纪念性学术会议；二是中国殷商文化学会正式批准成立，已有一大批国内会员，还有不少国际间知名学者成为通讯会员；三是立足全国、面向世界、力图反映甲骨文和殷商文化研究最新成果的《殷墟博物苑苑刊》创刊号发行问世；四是中国社会科学出版社出版了王宇信所著五十余万言的巨帙《甲骨学通论》。这本献给甲骨学九十周年的四份厚礼，都蕴含有王宇信的大量心血和创造性劳动，尤其是他本人的《甲骨学通论》，再次显示出他过人的精力和学识，同时也牢固确立了其饮誉海内外的甲骨学者地位。

承蒙王宇信的惠意，我有幸在《甲骨学通论》出版前细读了全部书稿，出版后又认真研读了一番。我认为此书的最大特色，在于科学地总结和系统地拓开了近九十年的甲骨学，为宏扬这门国际性显学指明了发展方向。

就本人所见，八十年代以来，国内学者先后出有六种甲骨学书籍，见仁见智，各具特点。如1980年文物出版社出版的湘潭大学萧艾所著《甲骨文史话》和中国社会科学院历史研究所孟世凯所著《殷墟甲骨文简述》，前者偏重掌故，后者偏重史料分析。1981年中国社会科学出版社出版的王宇信所著《建国以来甲骨文研究》，就建国三十年中国内甲骨学主要研究成果作了总括。1985年上海人民出版社出版的复旦大学吴浩坤、潘悠所著《中国甲骨学史》，较为详细介绍了甲骨学的基本知识。1986年黑龙江人民出版社出版的哈尔滨师范大学王明阁所著《甲骨学初论》，从释字、解辞、考史三方面阐述了作者有关认识。同年人民出版社出版的南京大学范毓周著《甲骨文》，简明介绍了甲骨文发现和研究的全过程。

毋庸讳言，这些著述在总结过去甲骨文研究的同时，如何从科学的高度揭示甲骨学的完整体系，包括给甲骨学以科学的定名，往往显得不够，甚至是很模糊的。如什么是甲骨学，《甲骨学初论》一书认为，“研究甲、骨，尤其是研究甲、骨上面的文字称之为甲骨学；”《甲骨文》一书也说，甲骨学是“以甲骨文为研究对象。”这种认识，基本上是受传统金石学的影响。马衡曾在《凡将斋金石丛稿》中说过，“金石者，往古人类之遗文，或一切有意识之作品，赖金石或其他物质以直接流传至于今日者，皆是也。以此种材料作客观的研究以贡献於史学者，谓之金石学，”他即视甲骨文为此类“有意识之作品”。然而所谓金石学有其历史的局限性，郭沫若就曾尖锐地指出，“旧式的金石学只是欧洲方面所说的记铭学（Epigraphy），那和‘学’都还有点距离”，“所谓‘学’，应该具有严密的实证的方法而构成为一个完整的体系。中国旧时的金石学，只是一些材料的杂揉，而且只是偏重文

字，……结果是逃不出一个骨董趣味的圈子”（《我与考古学》，《考古》1982年5期）。夏超雄也指出，传统金石学只是以非科学发掘的金石、古器物作为研究的主要对象，应用考证、鉴定的方法为证经补史服务，它并没有真正建立起堪称一门独立学科的体系（《关于考古学命名问题的讨论》，《考古与文物》1984年1期）。

但是，对于甲骨学来说，情况并非如此，这点在王宇信新著《甲骨学通论》有充分论述。他认为虽然甲骨学属于传统金石学范畴，却又隶属于近代田野考古学的一门分支学科，田野考古学的发展，不仅获得了大量科学发掘的甲骨新资料，也促进了甲骨学研究的前进。他指出，应该明确的是，甲骨文并不就是甲骨学，甲骨文只是商朝后期遗留下来的珍贵文物和史料，它的科学价值，只有随着甲骨学研究的发展，才愈益为人们所认识。由此不难看出，那种视甲骨学为金石学的一个分支，或谓研究甲骨文即是甲骨学，不啻在学术发展史的认识上有落伍之嫌，而且定名既欠严密又缺乏科学性。《通论》关于甲骨学的定义十分明确，“甲骨学是以甲骨文为研究对象的专门学科，是甲骨文自身固有规律系统的科学的反映。”这样的命名是站在科学的相当高度而作出的，也是首次对甲骨学的宏观认识。

甲骨学由于具有独特的研究对象和自身的规律而成为一门完整体系的学科，因此《通论》一书指出，仅仅移用金石学和考古学的有关知识进行甲骨学研究是远远不够的，大量科学发掘甲骨文的出土和近代田野考古学方法的引入，早已使甲骨学研究突破了传统金石学只重文字而不注意与文字同出的遗物遗迹的藩篱，研究的范围涉及到甲骨材料的集中和整理、分期分组和断代、卜法文例和契刻规律、文字的考释和文字的早晚变化以及文字内容所反映的殷商不同时期的社会政治、经济、文化的发展变化等等。此外还必须熟悉甲骨学的基本专业用语和基本甲骨学书籍，以及一大批国内外甲骨学者的主要业绩和其研究特点。对此，《通论》以丰富而翔实的内容，按章逐节作了提纲挈领的论述，从而科学地勾勒出甲骨学在研究发展中所逐渐形成的完整体系。

总结甲骨学研究的发展历程，胡厚宣师曾指出，甲骨文自三千四百年前埋入地下，至近世的发掘和研讨，按其性质，可分埋藏、破坏、药材、古董、金石、文字、史料、考古等八个时期，而1949年前的甲骨学五十年乃是由古董金石的研究，到古文字学的研究，到史料考古学的研究（《五十年甲骨学论著目》序）。后孟世凯提出了三阶段说，即1928年以前为甲骨文研究初期阶段，1928年冬至1949年是全面研究阶段，建国后是全面发展阶段。吴浩坤分法基本同孟说。王明阁则取陈梦家《殷虚卜辞综述》的说法，认为1899～1910年是第一阶段，1911～1927年是第二阶段，1929年直至现在是第三阶段。王宇信的《通论》则提出了四阶段说：（一）1899年甲骨文被发现、认识以前，经过了埋藏、破坏、药材三个时期，长达三千年左右，是为甲骨学的“先史”时期。这是出于寻根，重新认识甲骨学形成以前的历史。（二）1899～1928年是甲骨文的非科学发掘阶段和甲骨学的草创时期，甲骨文的流传、著录和研究，标志着甲骨文从学者书斋中的“古董时期”进入了“金石时期”，但甲骨学已初具规模。（三）1928年10月～1937年（包括1937～1949年殷墟科学发掘中止时期）是甲骨文的科学发掘阶段和甲骨学的发展时期，由于近代考古学的科学方法的引入，甲骨学研究突破了传统金石学和史料学的局限，进入全新阶段，成为成熟的学科。（四）1949年以来是甲骨学的深入研究时期，主要表现在甲骨文材料的集中整理和公布、分期断代的新进展、大批文字考释的新论著问世、各类专题史的微观研究和对商代社会性质发展的宏观探讨，以及国内国际间频繁的学术交流等方面，对于过去许多甲骨学家也相继作出了实事求是的正确评价。《通论》指出，在科学技术突飞猛进的今天，应把甲骨学的发展放在战略地位，加以认真研究探索，如将现代科学技术成果引进甲骨学研究领域，肯定会获得研究上新的飞跃。总结不在乎沉缅过去，老调重奏，而在于开拓将来，推动学术事业的发展。《通论》不囿于前贤成说，慎终追远，对甲骨学发展历程的总结，既有继承，更有推陈出新，正是着眼于系统性开拓未来甲骨学事业的。

王宇信《甲骨学通论》系统性拓展甲骨学的一大具体贡献，就是敏锐而及时地提出了西周甲骨学的命题。众所周知，今日的甲骨学，已不只限于殷墟甲骨文，尚包括了西周甲骨文，研究学者也不单单限为国内，在国际间每有其人，研究论题常为海内外学界众目所睽，呈方兴未艾之势。西周甲骨学的提出，固然与王宇信昔年所著《西周甲骨探论》（1984年）及一系列论作所获认识有关，也与他务实和学有所求的开拓性精神境界分不开。他认为，由于有殷墟甲骨研究的成熟经验，致使解放以来各地出土西周甲骨的研究少走不少弯路，很快经萌芽时期（1956年以前）、形成时期（1981年以前），而进入深入研究时期（1982年以来），成为甲骨学研究的新分支学科——西周甲骨学。特别是后阶段的研究，已从零碎材料向全面综合材料的方向进展，以前没有充分论证、研究的课题，正在逐步向专题研究的深度和广度方面拓开。

《通论》提出，今后西周甲骨学研究应从六个方面进行开拓：其一，科学地著录西周甲骨，作为研究的基础工作。其二，文字的考释需要进一步深入。其三，深化对西周甲骨的认识。其四，继续探索西周甲骨的分期和族属。其五，结合金文、考古材料和文献材料研究西周甲骨文和周初历史。其六，对西周甲骨文进行微雕史和书法史的探索。这里，一位执意追求甲骨学发展事业的拳拳学子之心，已卓然可鉴。

王宇信的《甲骨学通论》，附录中列“甲骨大事记”，以总结过去；列国内有关论著目，可便研究检索。而其书之出，不仅新增甲骨学文献宝库中一目，诚亦属之甲骨学史上一件大事。

（原载《中原文物》1989年第4期）

评《法国所藏甲骨录》

〔美〕吉德炜

(David N. Keightley)

《法国所藏甲骨录》，作者：雷焕章(Jean A. Lefeuvre)，1985年利氏学社出版（台北）。

页数：XVII + 402

这部甲骨集为在巴黎各处收藏的59片甲骨提供了完整的资料和全面的论述。①雷焕章将每一片甲骨都做了正反两面的照片、摹片、楷书译写、释文和详细的评注。正文由中、法、英三种文字组成。对照表可让人们了解到已发表的每一片甲骨现藏和著录的情况。首先按照博物院、图书馆和其它收藏单位的顺序排列，然后根据商王各统治时期的次序编排，对照表还表明了其中有33片甲骨是首次发表的。实际上，这33片中的大多数像另外26片龟甲碎片一样，看上去似乎意义不大，然而本书的文字部分对每片甲骨的出处、甲骨文字的内容以及针对特别有意义的字和短语所做的博学的有教益的评注，使巴黎的每一个博物馆确切地知道所藏甲骨的重要价值。59片甲骨包括单字200个左右，学者们只要根据一个字，便可通过设在书末的楷书字表所提供的线索，找到雷焕章的详细的注解。

从照片和摹片来看，尽管他们的大小与原骨不一致，但质量甚佳。在每张照片的下方还标明了甲骨长度的公分数。大体来讲照片所示甲骨都比原片大1.3倍。例如，前十片的照片和摹片，S_5约扩大1.16倍，B_8缩小0.14倍。（雷焕章采用了习惯的表示法，即S代表龟甲，B代表牛骨）。这种做法虽失去了真实感，但取得了清晰的和引人注目的效果。遗憾的是，这样做使得这批甲骨资料在拼合及根据字体大小来考虑分期等方面的作用降低了。

---

① 感谢雷焕章本人和高岛谦一，由于他们的建议，使我对评论的初稿进行了修改得以提高。

从释文来看，雷焕章将中、法、英三种译文的释文排在摹片后面，做为初步的评注。①譬如，现今中国的学者没有人把甲骨S_1第三条辞释成“萑刍”，并且像英、法学者所理解的那样，意即“监督割草的人”（或战士）。对于一些具体的内容和一些特殊字的解释在下编每片释文的评注中都做了详尽的讨论。

《法国》17（译者按：《法国》为《法国所藏甲骨录》的简称，下同。）是最近从季梅博物馆（Guimet Museum）新发现的一片重要甲骨。雷焕章对它的论述可以澄明这些评注的价值。B_{17}如雷焕章所述是右肩胛骨的一大部分，它与1913年发表的《前编》7.28.1的左肩胛骨相对称。②这片甲骨上面的文字涉及一名叫小司（?）的人，记述了他的迁险和身亡。雷焕章在此提供了有关这个问题的人名和其它甲骨文材料以及以往的学术研究成果等这样一大批有关的丰富的资料。还提出了B_{17}中值得注意的甲骨文字。但是他没有谈到李学勤1957年对“小司”甲骨主要内容的论述，而这对于了解商代如何择定死后庙号是十分重要的。③我提及此事并非要责备雷焕章，他对《法国》17和《安明》1297（=《合集》23709）④的论述使我们对这个问题的理解更趋完善。但是通过改变雷焕章所推断的祭祀卜辞的顺序，而根据李学勤的编排，可使学者们明确这些事件的始末日期。按照李的观点，卜胛上面的卜辞应依次从右往左读，而不是像雷焕章那样从左往右读。⑤尽管商代卜骨上面的文字的排列顺序不是一成不变的，但是按照李学勤的观点重新排列至少与一般的习惯一致。⑥重排还表明了雷焕章在340至341页中所做的关于祭祀的说明也应给予校正。像《法国》17这片甲骨，就足以证明这类材料发表的价值。就内容而言，其它有关的学术讨论也是很有意义的。对于一位学者来讲，甲骨除了提供了文字资料以外，还有其它多方面的价值⑦。

在释文中，我们还应注意雷焕章在289至第300页（译者按：中文在第119至127页）的讨论。在论述的开始，他列举了五个具有典型意义的甲骨文字，即：甶、叀、㞢或又、卜、鼎。其中有的字容易引起学者激烈的争论。他引用了一些同行学者的来信和文章，读者可以感受

---

① 罗塞达碑体例的书卷还能使读者鉴别出排印上的错误。“五”和“月”在第313页倒数11行对B2的评注中调换了位置，这在查阅同段中文（第136页）和法文（第213页）时很容易辨明。与此相同，三处对S43的楷书译写都有一个错字（第108、280、281页）只有184页上的那个字没有错。

（译者按：罗塞达碑是公元前二世纪初埃及祭司为国王树立的颂德碑。1799年在尼罗河口的罗塞达要塞被发现，上刻古埃及象形文、俗体文和希腊文三种文字。在此作者借指该书采用中、法、英三种文字。）

② 在引用甲骨集时，我尽可能使用吉德炜在《商代史料—中国青铜时代的甲骨刻辞》一书中的简称。见该书第220至231页的“书目提要A”。（伯克利，加里福尼亚大学1978年出版；平装本，1985年出版。）

③ 李学勤：《评陈梦家殷虚卜辞综述》，《考古学报》1957年第三期，第123页。我很感谢夏含夷提请我注意这篇文章。

④ 《合集》是对郭沫若主编，胡厚宣总编辑的《甲骨文合集》使用的简称，共十三卷。（中华书局1978—1982年出版）。对这部新资料的评论见吉德炜：《商代史料：出自中华人民共和国的两种主要甲骨集》，待刊于《美国东亚学会志。》

⑤ 根据“来丁亥”（24天）可以判断《法国》17第三条辞（见第61页）应被占卜在丙戌（23天）或更早。同样的结论也很可能适用于同片的第四条辞。李还将《法国》17的第一、二辞确定为己丑（26天），（雷焕章未确定日期）这说明，这事件的顺序可以调整为《法国》17·4、17·3、17·2、17·1（根据雷焕章所用编号）。

⑥ “左右胛骨上的刻辞，从左向右读或从右向左读的情况都是屡见不鲜的。”（见吉德炜：“商代史料》第51页，注123。其中也引用了特例。）雷焕章本人现在也同意重新调整读辞的顺序。（见他1988年9月29日来信）。他结合B10（译者按：中文第146页）讨论了左右肩胛骨对称的问题。表明在一对胛骨的中间有一条对称轴，卜辞应从外向中轴线方向读。他在第300页的评注（中文在第127页）中，关于如何正确识别残骨——根据骨脊和骨缘——上面的刻辞，应向右读或向左读，都是有启发性的。

⑦ 小司甲骨在任何关于商庙号的思考中都占有位置，例如，吉德炜：《中国古代的吉日、庙号和登龙之心》（1987年9月10日至16日在安阳召开的“中国殷商文化国际讨论会”提交稿。中文稿将在会议文集中发表）。

到他在就争论的实质进行再探讨。①他试图将语言学的译释和商代的宗教世界观结合起来，这是值得称许的。在一细致的有意义的讨论中，雷焕章赞成认为序辞“贞”是表示陈述的命辞，这比表示疑问更易使人接受。②他将该字隶定为“鼎”(而非“贞”)，释作“主持占仪”。③

最后，我要对雷焕章在甲骨集简称的选择上指出一些缺陷。这不是吹毛求疵，而是要鼓励一种一致的传统的方式。例如：《甲骨文合集》他简称为《甲合》，与习惯用法不同，大多数中国学者使用《合集》这一简称。他把自己的《法国所藏甲骨集》缩写成CF（即《法集》），我更趋向使用《法国》这一简称，因为它符合中文对甲骨集的标题所采用的两字简称的传统方法。如饶宗颐早期对巴黎甲骨所做的集录就简称为《巴黎》。可是本书将两种简称方式兼采并用。在中文里雷焕章自己在第389页所采用的简称大概是中国学者的习惯用法。我认为没有必要使用随着语种不同而变换的简称方式，实际上任何一本甲骨集的价值都不会因其名称不同而改变。雷焕章在本书中的学术贡献是很可观的，它表现在拼合的精确和学术评论的高度认真、严谨和明晰。这是一部所有从事甲骨文研究的学者都乐于收藏的著作。

〔原载《美国东亚学会志》(Journal of the American Oriental Society) 第109卷3期（1989）。标题为译者所加，对原文略有删节。李维　译〕

---

① 对雷焕章关于第一个字的讨论的评论，见高岛谦一《古代中国西藏语中的两个或一个系辞？甲骨刻辞中的‘隹’和‘叀’》待刊于《华裔学志》第38辑（Monumenta Serica 38）。

② 对于以命辞为陈述句的观点的介绍见吉德炜：《商代史料》第29页注7。越来越多的西方学者包括雷焕章自己（见295至300页，译者按：中文在第123至126页）、尼德卫（David S. Nivison）、司礼义（L—M.Serruys)、夏含夷（Edward L.Shaughnessy）和高岛谦一都反对命辞是疑问句的看法。裘锡圭《关于殷虚卜辞的命辞是否问句的考察》(刊《中国语文》1988年第一期）看来采取了相同的立场，本着谨慎的态度认为有些命辞是非疑问句，若将这类命辞的后面加问号而不是加句号，那将会犯更严重的错误。夏含夷译的裘文发表在《古代中国》(Early China)第十四辑，其中包括和其他学者的讨论。

③ 对特殊字有兴趣的读者还可以从高岛谦一的文中得到教益，见《甲骨文鼎的研究》刊《王力先生纪念论文集》第405至421页）香港联合出版社，1987）。

读《殷墟甲骨历劫记》

胡　厚　宣

殷墟甲骨文字，自1899年王懿荣首先辨认开始，迄今已经90年了。1989年9月中国殷商文化学会和安阳殷墟博物苑发起，在安阳举行“殷墟甲骨文发现90周年国际学术讨论会”。因而使我想起了曾在《人民日报》海外版上发表的王德恒同志所写的题为《殷墟甲骨历劫记》的那篇连续刊载的长文。

王德恒《殷墟甲骨历劫记》一文，刊1988年《人民日报》海外版，从6月21到7月9日，连续登载15天，共15节。长篇巨著，洋洋大观。文章认为从1898到1988，“殷墟甲骨走进学术界整整九十年”，这与我们所了解的有所不同；在文章里面，又提了我的名字，所以引起了我的兴趣。

我仔细读了一遍，觉得内容通俗，文笔流畅，但有些地方，却与事实不尽相符，愿提出来与王同志及读者共同讨论。

第一、王襄，孟定生并非在1898年就看到了甲骨。

《历劫记》一文第二节（6月22日）说“那年（1897年）……范寿轩带着一些古董又来找王襄了，闲聊时范寿轩说起了“龙骨’。……王襄……去找附近朋友孟定生……他听了‘龙骨’的情况，也十分感兴趣，‘我想这龙骨，可能就是古代的简册，是用龟甲兽骨刻制的’。”

又说“第二年（1898）十月间的一天，范寿轩仆仆风尘地赶到天津王家。……‘我这次就是给你送龙骨来了，请你屈驾到我下榻的西门外马家店去一趟，货在那里’。……王襄找来孟定生，两人相偕出西门到了马家店。范寿轩的大伙计李茹宾从一只小箱子里取出龙骨，王襄，孟定生接过几片仔细察看，只见骨版大小不一，多是乌龟腹甲，上面用刀刻着细小工整的文字。”

是《历劫记》以为潍县估人范寿轩来天津，向王襄谈起龙骨，在1897年。范寿轩带来龙骨，在1898年。

但据王襄自己的著作，则范寿轩谈起龙骨在1898年，带来龙骨在1899年，《历劫记》却把它提前了一年。

王襄《题易穞园殷契拓册》说，“范估售古物来余斋，座上讼言所见。乡人孟定生世叔闻之，意为古简，促其诣车访求，时则光绪戊戌冬十月也。竖年秋，携来求售，名之曰龟版。”（刊《河北博物院半月刊》85期，1935年。又收入《簠室题跋》卷二，现存天津市图书馆。）

又《簠室殷契》自序说，“世人知有殷契，自公元1898年始。潍友范寿轩售古器物来言，河南汤阴出骨版，中有文字，征询吾人，欲得之否？时有乡人孟定生共话，极怂恿其往购，且言欲得之。孟氏意，此骨版为古之简策也。翌年十月，范君来，告以得古骨版，期吾侪到彼寓所观览。彼寓西门外马家店。店甚简陋，……炕敷苇席，群坐其间，出所谓骨版者，……所见大小不一，……字出刀刻。”（刊《历史教学》1982年9期，原稿成于1955年，现存中国社会科学院历史研究所。）

又《题所录贞卜文册》说，“前清光绪己亥年，河南安阳县出贞卜文，是年秋，潍贾始携来乡求售。巨大之骨，计字定价，字偿一金。”（刊《河北博物院半月刊》32至33期，1933年。又收入《簠室题跋》卷一，现存天津市图书馆。）

又《亡弟雪民家传》说，“殷墟出契文之年，在清光绪戊戌。翌年，潍贾范寿轩携之来津，乡人孟定生马景含及余家兄弟见之，惊为千载瑰宝。”（见王巨儒《王襄年谱》上，刊《天津文史丛刊》第7期，1987年。又收入《纶阁文稿》卷二，现存天津市图书馆。）

又《题宝契小象》说，“惟昔己亥秋之季，潍贾创获甲骨文。至今小屯侯庄地，宗庙陵寝溯有殷。五十余年积发现，十六万版数纷纷。”（原稿成于1952年，收入《纶阁诗稿》卷二，现存天津市图书馆。）

是王襄本人，在他一系列的著作中，都以潍县贾人范寿轩来津讼言所见，是在光绪戊戌即1898年，而潍贾携骨求售，则在戊戌之翌年即1899年。这与《历劫记》所说，是完全不同的。

《历劫记》错把年代提前了一年，这并非小事。前几年，曾有人写文章，一反过去王懿荣开始辨认甲骨的学说，说“甲骨是天津人发现的”。（见1983年4月3日《天津日报》）如果真像《历劫记》说的那样，那就为“天津人发现”甲骨，提供了可靠的证据，可惜这一说法与事实并不相符，王襄孟定生在1898年，并没有看到甲骨。天津人最早发现甲骨的说法，也是靠不住的。

第二、甲骨卜辞字与字之间，并不曾嵌有过石绿。

《历劫记》第二节（6月22日）还说，“王襄掏出手巾轻轻拂去骨版上的尘土，禁不住‘咦’了一声，原来这块骨版在刀刻的字里行间还用珠墨填镀；在孟定生摩挲的另一块骨版上，字与字之间竟嵌着石绿，那是珍稀名贵的宝石啊！”

说“骨版在刀刻的字里行间，还用珠墨填镀”，这话是对的。

甲骨文字的涂饰，有朱有墨，还有深浅不同的赭色。早年甲骨学者像罗振玉、董作宾、容庚、闻宥等，都曾注意过这一问题。美人皮其来作《中国卜骨涂色之显微分析》一文，白瑞华作《卜骨中之颜料》一文，且对这一问题，作了专门的研究和讨论。我有《殷墟一二七坑甲骨文的发现和特点》一文（即将在《中国历史博物馆馆刊》中发表）其第五节《卜辞刻文之涂饰》，又专门对殷墟第1至9以及13次发掘所得甲骨卜辞中涂饰问题，作了专题的论述。

但说“另一块骨版上，字与字之间，嵌着石绿，”则与事实不符。“石绿”大概就是所谓“松绿石”，甲骨卜辞的刻划中有涂朱涂墨及各种深浅不志的赭色，但卜辞文字中绝无镶嵌松绿石者。说“字与字之间，嵌着石绿”，更是不对。字与字之间是空白，空白的骨头，怎么会镶嵌松绿石呢？

殷代骨刻文字，确有镶嵌松绿石者，据我们所知，仅限于骨版上之记事刻辞，如故宫博物院所藏之“宰丰骨刻辞”，(佚518)加拿大安大略博物馆所藏之“虎骨刻辞”，(最早发表于怀履光的《骨的文化》）及《殷契佚存》（1933）著录黄浚旧藏今不知所在的另一“宰丰骨刻辞”残片（佚426)及“壬午隻白兕”残片的记事刻辞而已。惟“宰丰骨刻辞”和“虎骨刻辞”所嵌松绿石，已经脱落，只留一点点痕迹。只有“壬午隻白兕”残片刻辞，其镶嵌松绿石之痕迹，还能清晰可见。

但卜辞文字刻划中，尚未见有嵌松绿石之例。而且“字与字之间”的空白地方，更未见有嵌松绿石者。

第三、王懿荣的甲骨并没有全部卖给了刘鹗。

《历劫记》第五节（6月25日）有一段文章说，“‘太好了’听了刘鹗的话，王翰甫如释重负，‘先父临终前千叮万嘱说，谁要是识得龙骨是个宝贝，便把龙骨转让给他。龙骨是先父心爱之物，我也不敢随便撒手，您见识不凡，又是我家恩人，这龙骨归了您，也算了却先父一桩心事’。说完，令人搬出装龙骨的箱子，把钥匙交给了刘鹗”。

这话也许是根据刘鹗的《铁云藏龟》（1903）的自序所说，“未几，义和拳乱起，文敏遂殉难。壬寅（1902年），其哲嗣翰甫观察售所藏，清公夙责，龟版最后出，计千余片，予悉得之。”

以为王懿荣殉难后，其甲骨全部归了刘鹗，其实不然。1961年6月11日上海《文汇报》，就登有这样的一条消息，“著名金石考古家王懿荣后代王福重将一批家藏刻辞甲骨献给国家”。我闻讯后，曾于6月20日亲去天津文化局、参观并摹写这一批甲骨，共计355片，片大字多，十九皆未见著录，现归天津市历史博物馆保存。

王福重系王懿荣幼子王崇焕字汉章之长女，即王懿荣之孙女，在天津从事教育工作，系全国政协委员。

闻王懿荣另一孙女，即王福重之妹王福庄也收藏有其祖父王懿荣旧藏的甲骨一批，约100片左右。王福庄人在美国，甲骨今不知所在。

但其中有两片，曾赠与其业师方豪。解放前，我在上海复旦大学，与方豪同事，曾借来加以墨拓。其拓本著录在郭若愚的《殷契拾掇》（1951）464及465，标题是《王懿荣旧藏甲骨文字》。其464片，又曾著录在胡厚宣的《甲骨续存》（1955）上编72、73、74。其465片，又曾著录在胡厚宣的《战后京津新获甲骨集》（1954）第2119片。

解放后，方豪去台湾，在1955年，也曾写过《王氏旧藏两胛骨补记》一文，刊《大陆杂志》10卷8期。

这些王懿荣旧藏的甲骨，就都没有归于刘鹗。

第四、方法敛和明义士都不会拓印甲骨。

《历劫记》第八节（6月30日）说，“后来库寿龄和方法敛把他们摹写拓印的一部分甲骨文出版了，题为《库方二氏藏甲骨卜辞》”。

事实上，《库方二氏藏甲骨卜辞》一书，是方法敛摹，白瑞华校印的。所谓“二氏藏”，是指两人所藏的甲骨。至于摹写，则是方法敛一人所为，不能说“库寿龄和方法敛把他们摹写”云云。还有说方法敛“摹写”是对的，说“拓印”就不对了。因为《库方二氏藏甲骨卜辞》一书，本来是方法敛所摹写的摹本，并不是拓片。

同样的问题，《历劫记》第十一节（7月5日）说，“至1928年左右，明义士总共收藏甲骨三万五千片，占当时总出土量的三分之一，他从中精选出二千三百六十九片拓印出版了”

事实上，明义士精选他所收藏的甲骨2369片予以出版的，是指《殷墟卜辞》一书，这书是1917年出版，并不是1928年。关于明义士收藏甲骨的数字，他自己在《殷墟卜辞》一书自序中说有50000片，现在找到下落的在加拿大安大略博物馆有5100片，在国内南京博物院有2369片，在故宫博物院有20364片，在山东博物馆的有3668片，国内外合共31500片。（看胡厚宣《关于刘体智、罗振玉、明义士三家旧藏甲骨现状的说明》一文，刊《殷都学刊》1985年3期，又刊《新华文摘》1985年5期）说他收藏有35000片，现在也与事实不符了。

还有明义士《殷墟卜辞》一书，也是手写的摹本，并不是“拓印”。明义士本人不会墨拓，许进雄代明义士整理编辑的《殷墟卜辞后编》（1972）一书的拓本。据明义士自己说，是请北京琉璃厂的技工代拓的。

第五、罗振玉并不曾派王国维等人去汤阴卫辉等地探访过甲骨。

（原載《中國史研究動態》1990年第11期）

《历劫记》第九节（7月1日）说，“罗振玉……向好友和学生王国维说道，龙骨出土在汤阴，他是听刘鹗说的，刘鹗是听古董商们说的。……‘这样吧，你和振常去一趟，有消息后写信告诉我’。王国维点头答应了，……王国维罗振常来信了，信中说，他们在汤阴县查访了二十多天，探了七八处上古废墟，龙骨的消息却一点儿也未探到。”

又说，“龟甲兽骨……出土地点是在河南卫辉，就是史书上记载的商朝都城朝歌附近。……罗振玉再次派人前往卫辉探查出土的确切地址。可是，一年过去了，派出的人又两手空空地回来。”

可是遍读罗氏之书，及罗氏后人关于罗氏生平的论著，从来就没有派人前往汤阴和卫辉去探查甲骨出土的事情。

罗振玉派人搜购甲骨的事情是有的，那是既从古董商人范兆庆处探知甲骨出土实在安阳小屯之后，才几次派人去安阳搜购甲骨的。一次是1910年他在八卷石印本《殷虚书契前编》自序说，“宣统庚戌（1910）夏，……顾是时所见甲与骨才数千，巾笥所藏，才七八百耳。好之既笃，不能自己，复遣厂友祝继先狄良臣大索于洹水之阳，先后所见，乃得二万枚，汰其腰作得尤异者三千余”。1913年四卷影印本《殷虚书契前编》自序说，“因遣山左及厂肆估人至中州，瘁吾力以购之，一岁所获，殆逾万。”一次是同书说，“（1911）复命弟子敬振常妇弟范恒斋兆昌至洹阳采掘之，所得又再倍焉。”此次采购，罗振常作有《洹洛访古游记》，（上海蟫隐庐石印本，1936年，又1987年河南人民出版社重印本）详记其事，共获甲骨13000余片。

但是就从来没有看到罗振玉派人去汤阴和卫辉访查甲骨出土的记载。只知道他曾几次为搜购甲骨派人去过安阳。至于王国维，不但没有去过汤阴和卫辉，而且连安阳也不曾去过。

第六、罗振玉询知甲骨出土地方，并非得自赵执斋的外室。

《历劫记》第十节（7月2日）考“罗振玉再勘龙骨源”，讲了这样的一个故事。他说，“罗振玉拿出三十两银子递给圃成，道‘赵执斋有个外室，住在西直门，她父母开了爿小杂货店。我着人打听清楚了，姓李，店的字号是惠仙老店。你去她店里买东西，想法套近乎，那姑娘会喜欢你的。你只要见机行事，把赵执斋收购龙骨的地点套问出来，我会重赏你的。’喔！原来罗振玉是想让自己勾引赵执斋的姨太太，这样，既然打探出甲骨出土地点的秘密，又给赵执斋戴了顶绿帽子，以报一箭之仇。圃成毕竟年轻，满脸绯红。罗振玉忙又苦苦相劝，圃成终于答应去试一试。几天之后，圃成回来报告说，‘让我打听出来了，赵执斋的龙骨全是从河南安阳小屯收来的’”。

这个故事很有趣，不知何所据而云然，我们想是完全靠不住的。

我们看罗振玉自己是怎么说的。他在1910年出版的《殷商贞卜文字考》一书（玉简斋石印本）说，“又从估人之来自中州者……并询知发现之地，乃在安阳县西五里之小屯，而非汤阴。”1915年又在《五十日梦痕录》一文（收入《雪堂丛刻》）说，‘龟甲骨潍县范姓估人始得之。亡友刘君铁云问所自出，则诡言得之汤阴。予访之数年，始知实出洹滨”。1916年又在《殷墟古器物图录》一书（收入《艺术丛编》，又单行本）序言中说，“光绪戊申，（1908）予既访知贞卜文字出土之地为洹滨之小屯，是语实得之山左估人范某”。

是罗振玉访知出甲骨之地在安阳小屯而不是在汤阴，实得之山东估人范兆庆字寿轩。并无让圃成从北京西直门赵执斋的外室那里询问之事。以罗振玉之为人，那样的事情，也是不可能的。

第七、罗振玉《殷墟书契考释》一书，并非王国维代作。

《历劫记》第十二节（7月6日）说。“王国维……他写的《殷墟书契考释》一书，……出版时，他感于罗振玉对他多年的栽培’便署以罗振玉之名”。又说，“在大云书库，《殷墟书契考释》主要是自己写的，署名却是罗振玉，因为要报答罗振玉的知遇之恩”。

事实上罗振玉《殷墟书契考释》一书。不过是王国维代为抄写，但决非代作。这些年来，经过陈梦家的《殷墟卜辞综述》，（1956）甘儒的《永丰乡人行年录》，（1980）张舜徽的《王国维与罗振玉在学术上的关系》，（收入《王国维学术研究论文集》1983）商承祚的《关于王国维先生之死》，（刊《晋阳学刊》1983年3期）罗福颐的《罗振玉的学术贡献》，（刊《中国语文研究》5期，1984）胡厚宣的《关于殷墟书契考释的写作问题》（刊《社会科学战线》1984年4期）等文的反复研究和讨论，早已不成为问题。

据陈梦家《殷墟卜辞综述》58页说，“1951年、我得到考释的原稿本，都是罗氏手写”。那还有什么可说的呢？

所以这件事，也就不必旧案重提了。

第八，郭沫若的《卜辞通纂》和《殷契粹编》，并非在上海大东书局出版。

《历劫记》第十三节（7月7日）说郭沫若，“1928年夏至1929年夏，他把所知所见的甲骨文，写成了《卜辞通纂》一书。通过李一氓奔走，历经数度周折，《卜辞通纂》和他以后编选的《殷契粹编》，终于由上海大东书局印行出版了”。

其实，郭沫若的《卜辞通纂》和《殷契粹编》，并不是完成于1928年夏至1929年夏。《卜辞通纂》写成于1933年2、3月，出版于1933年5月。《殷契粹编》1933年4月写成，1937年5月出版，也不是在上海大东书局出版，而是在日本文求堂书局出版的。写作和出版的经过，详见龚济民和方仁念合编的《郭沫若年谱》（天津人民出版社出版，1982年）和《郭沫若传》。（北京十月文艺出版社出版，1988年）日本田中壮吉编辑出版有《文求堂主人田中庆太郎》一书，（1987）书信来往，也可以看出当时郭书印刷出版的情形，而且郭沫若这两书的出版，也不是李一氓同志所介绍。

李一氓同志所介绍的，在上海大东书局出版的，乃是郭沫若所著的另外两书，即《甲骨文字研究》和《殷周青铜器铭文研究》。《郭沫若年谱》150页说，“全靠李一氓在上海多方交涉，沫若的《甲骨文字研究》和另一部书稿《殷周青铜器铭文研究》得以1931年5、6月间先后由大东书局据著者手迹影印发行。”便是指的这一件事。

据郭沫若自己所说，《甲骨文字研究》是1929年夏天在日本所写的。（见《甲骨文字研究》重印弁言）而《殷周青铜器铭文研究》乃写作于1930年7月（见《殷周青铜器铭文研究》重印弁言）。要说它们“写成于1928年夏至1929年夏，”也是不够确切的。

第九、董作宾胡厚宣并没有参加1936年的第13次殷墟发掘工作。

《历劫记》第十四节（7月8日）有一段写的很生动。说，“这时，发掘工地上又来了一位年轻人，叫胡厚宣。1936年6月10日，出现了甲骨学史上的一大奇迹。这天，日丽天晴，在董作宾指挥下，胡厚宣和民工一起挖开一座墓葬，年轻的胡厚宣冒险进洞，拂去灰土，只见一层一层，一排一排一摞一摞的龟甲整齐地堆放着，这显然是个存放甲骨的仓库啊！清理结果，这个编号为YH127号的灰坑共甲骨一万七千零九十六块，其中完整的龟甲就有三百多版。”

其实这一次发掘，我和董作宾先生并没有参加。是《历劫记》把它记错了。

1936年春季的发掘，是中央研究院历史语言研究所殷墟发掘团的殷墟第13次发掘。这次发掘的主持者是郭宝钧，工作人员是石璋如、李景聃、祁延霈、王湘、高去寻、尹焕章、潘悫，还有河南省参加工作的孙文青、共9人。就是没有我和董作宾。

1936年6月12日，的确是发现了一个YH127甲骨坑，发现人是王湘。等这坑甲骨就地装箱运到南京史语所，是我和董作宾先生，参加的室内清理工作，但我们都不曾参加在殷墟的田野发掘。

其详可以参见石璋如《殷墟最近之重要发现附论小屯地层》，（刊《中国考古学报》第二册，1947年）胡厚宣《殷墟发掘》，（上海学习生活出版社出版，1955年）李济《安阳》。（美国华盛顿大学出版，英文本，1977年）1988年7月我在长春中国古文字研究会十周年纪念会上，曾宣读《殷墟一二七坑甲骨文的发现和特点》一文，（即将在《中国历史博物馆馆刊》上发表）更是专论YH127坑甲骨文之事。

其次，127坑的甲骨，并不是出自墓葬。解放前后，殷墟发现大墓十几座，小墓几千座，墓中出土器物很多，但在墓葬中，就从来没有出土过甲骨。又发掘墓葬，皆从顶面掘起，并无“冒险进洞”之事。

还有127坑的甲骨，是胡乱丢下，并不是“一层一层一排一排一摞一摞的龟甲整齐地堆放着。”说它是“存放甲骨的仓库”，也有不妥。因为127坑的17096片甲骨中，虽然有完整和比较接近完整的300多版，但终以不能拼合的碎片居绝大多数，如果是“存放甲骨的仓库”，就都应该存放整版，仓库里怎么会存放那么多的碎片呢？

第十、殷墟第一次发掘，不是在“初春”，工作人员也不是“四个人”。

《历劫记》第十四节还说，“初春……小屯村来了四个人，…他们是国民党政府中央研究院的傅斯年、李济、董作宾和一位年轻人，……他们下决心留下来，让傅斯年先返院汇报。发掘工作开始了，……不久三个坑都出土了甲骨，他们迅速电告南京，傅斯年放心了。”

这段文字里面，有几处错误。首先是殷墟第一次发掘，并不在“初春”。当时董作宾先生在殷墟调查，是在1928年8月12日至14日，发掘是在1928年10月13日至30日，都是在秋季，而不是春天。（见董作宾《中华民国十七年十月试掘安阳小屯报告书》，刊《安阳发掘报告》第一册，1929年。）

其次当时去殷墟调查的是董作宾一人，作发掘工作的正式工作人员，也只有董作宾一人，不过另有河南省政府代表一人张锡晋，河南省教育厅代表一人郭宝钧，及临时测绘员一人李春昱，临时书记一人赵芝庭，临时事务员一人王湘。全部工作人员共六人。既不是“四个人”，也没有傅斯年和李济。（见同上文）

傅斯年先生当时人在上海，董作宾说，“时傅斯年先生旅居沪滨。余以书面措商，往返需时，……乃赴上海与傅先生会商。”（见同上文）李济先生尚未来中央研究院，他1929年才到中央研究院历史语言研究所来任考古组主任。（看胡厚宣《李济传》，收入《中国史学家评传》下册，1988年）

还有中央研究院历史语言研究所所址1928年在广州，1929年由广州迁北平，1933年由北平迁上海，1934年才由上海迁到南京。（见李济《傅孟真先生领导的历史语言研究所》收入所著《感旧录》1967年；又董作宾《国立中央研究院历史语言研究所略史》，收入《平庐文存补遗》，《董作宾先生全集》乙编第5册，1977年）1928年研究所还在广州，并不在南京。

再有就是研究所的全名叫“中央研究院历史语言研究所”，并不象《历劫记》第十五节所说的“中央研究院历史研究所”。

总之，王德恒同志《殷墟甲骨历劫记》是一篇以故事体裁编写的通俗论文，文笔生动活泼，读起来很能引人入胜。但仔细推敲，就有许多大大小小与事实不符的地方。姑举以上十条为例，以供同志们商讨。

我总觉得写通俗文章，也并不容易。必须深入才好浅出。如果只求通俗，不顾实际情况，那就不好。海外版《人民日报》是我们国家在国内外影响极大的报纸，发表论文，必须保证质量。我的想法，不知读者以为如何？

（原載《中原文物》1990年第3期）

批評と紹介

常玉芝著

商代周祭制度

池田末利

殷墟卜辞の特定時期に翌・祭・壹・劦・彡の五種祭祀が周期的に行われている事実が董作賓の『殷暦譜』（一九四五）によって首唱され、陳夢家『殷墟卜辞綜述』（一九五六）は更に検討を加えて、これを周祭とよんだ。一方、島邦男も別個にこの史実に気づき『祭祀卜辞の研究』（一九五三）—『殷墟卜辞研究』（一九五八）で祀譜を作成した。また、台湾の許進雄は『殷卜辞中五種祭祀的研究』（一九六八）でさらに精細な考察を加えた。四氏の説は史実の基本的認識では一致するが、祀序・祀譜など細部には差異がある。解放後、殷墟の発掘が続行されて夥しい遺物が発現し、内外未著録の甲骨もつぎつぎに公刊されて甲骨学も飛躍的に進歩した。本著はこのような雰囲気の中で董氏以来の研究を洗い直し、基本的原則を確立して類型や特徴を明らかにするとともに新たな祀序や祀譜を作成し、商末祭祀形態の特徴を明らかにした労作である。著者は北京大学歴史系考古学専業六六年の卒業で中国社会科学院歴史研究所八九年からの副教授。「説文武帝」（『古文字研究』第四輯一九八〇）等の精緻な論考から老大家を想像していたが、安陽で会ってみると五十未満の女性、主婦で二児の母親であることが判り、驚いた。本著は李学勤の序に続いて、

前言
第一章　周祭研究的歴史回顧
第二章　周祭卜辞的類型
　第一節　黄組周祭卜辞的類型和特徴
　第二節　出組周祭卜辞的類型和特徴
第三章　周祭中先王先妣的祭祀次序
　第一節　周祭卜辞的係聯特徴
　　一　黄組周祭卜辞的係聯特徴
　　二　出組周祭卜辞的係聯特徴
　第二節　先王的祭祀次序
　　一　黄組周祭卜辞反映的先王祭祀次序
　　二　出組周祭卜辞反映的先王祭祀次序
　第三節　先妣的祭祀次序
　　一　黄組周祭卜辞反映的先妣祭祀次序

二　出組周祭卜辞反映的先妣祭祀次序
第四節　先王與先妣祭祀的係聯
第五節　與各家所排祀序和『殷本紀』所載世次的比較
一　與各家所排的先王先妣祀序的分岐
二　與『殷本紀』先王世次的差異
第四章　周祭的祭祀周期
第一節　翌祀的祭祀周期
第二節　祭・壹・劦三祀的祭祀周期
第三節　彡祀的祭祀周期
第四節　三個祀組間的接続関係
第五節　五種祀典的祀首
第六節　周祭的祭祀周期
第七節　関於周祭祭祀周期的分岐
第五章　周祭祀譜的復原
第一節　「隹王幾祀」之「祀」的意義
第二節　関於商代的曆法
第三節　第一祭祀系統的祀譜
第四節　第二祭祀系統的祀譜
第五節　第三祭祀系統的祀譜
結束語
附録　祊祭卜辞時代的再辨析

論述は必らず辞例に徴して極めて実証的、董氏等四氏の説を批判して頗る合理的・秩序整然としているが、内容は制度の問題だけに複雑多岐、限られた紙数での紹介は困難である。

著者はまず董氏等四氏の周祭研究を回顧する。董氏に始まる五期分期法を非科学的として、貞人名による群別―某組分別法をとる陳氏の説に従う。以下の黄組は董氏の第五期、出組は第二期に該当する。董氏等の研究を概観した著者は、廿餘年の研究にはなお未解決の問題が多いが、周祭は商代の世系・礼制・宗法・暦法等の制度や卜辞の年代決定と関係が深いとする（前言・第一章）。以下、周祭制度が整備された黄組を先に、その萌芽的段階の出組を後に論を進めるが、基本資料は黄組三百六十五版、出組百四十版、銅器銘文若干條である。

黄組周祭には、(1)上甲から多后に及ぶ合祭型、(2)甲名先王の五祀を附記する卜旬型、(3)王賓先王祭祀型の三類型がある。その順序は、毎旬祭祀の開始に当り、その前旬末の癸日にこの旬間祭祀の吉凶を卜問して（1）、最初の甲日に祀る甲名先王と祀典名とを附記し（2）、某日、某王の賓祀を卜問する（3）のである。先妣の周祭は翌壹劦彡だけで祭（以下一般祭祀と区別して・をつける）を欠き、先王と異り(3)型だけである。出組周祭には翌（次日）の祭祀を卜問する類型が黄組よりも一つ多く四種類であるが、基本的には同じである。しかし、全般的にはまだ整っておらず、制度形成の萌芽的段階にある。著者の類型分類は従前の研究に見えず、その慧眼を示すものといえよう（第一節以上第二章）。ついで祀序の分析に入る。その方法は、同一版上数條の同一類型卜辞から王・妣受祭の前後関係が検出できるが、基本原版が少く、同一版上に二個以上の王・妣の祭祀を刻するものは多くなく、その中から同種の祀典を見出すのは困難であるが、同類型の係聯卜辞を求めるのは更に困難なので、前人同様、不同の類型や祀典卜辞を混合する方法を用いざるを得ないが、祀序・期日の一定は黄・出両組に例外はないので、許さるべきであろう。この前提のもとに、黄組では(2)(3)型から甲名先王祭祀の係聯を見出せるが、①同一版上の王・妣の祀典は同一で、不同の祀典は同一版には絶対に出現しない。②五種祀典の何れにおいても祀序は不変であり、③翌と彡とは単独に、祭壹劦の三祀は相互に重畳して行う。以上の特徴が認められる。出組では四類型のうち、合祭型を除く三類型は係聯情況が有するはずであるが、卜旬型には見られないので、翌日祭祀型・王賓型から見れば、黄組と全く同じ結論を得る。従前の祀序考察には資料の不足、反覆論証の欠如、多くの両組の混合考察が認められる。分組法によって、資料が多く内容も詳細な黄組を分析してから出組に及ぶべきである（第一節）。黄組の祀序について、(2)型は甲名王の祀序だけでなく、両甲名王間のそれをも示しているから、周祭が上甲から始まる規律により、前後両甲名王間を一段階、康丁までの廿五王を七段階に区切り、辞例に徴して係聯関係に基づきながら祀序を決定してゆく。董氏等が周祭を武乙・文丁または帝乙までも、そして十一旬また十二旬まで延長するのに対して、著者は康丁、十旬に止める点で大きく異なる。その理由は、三十以上の先王中で康丁だけが康祖丁と呼ばれているのは、黄組のある周祭卜辞時期において現存資料で見る限り、他の先王と係聯関係を有する最後の先王であることを示しているからである。著者の祀序を『史記』殷本紀の即位次序に比べると、報乙・報丙の二王を除く廿三王は一致するから、先に即位して王となった者が先に祀られ、後の者が後に祀られるのが周祭の原則で、文献所見のこの制度は商末すでに存在したと見る。ただ、大戊・雍己・中丁・小辛・小乙・武丁の六王の祀序は卜辞に欠くが、他の辞例と殷本紀とから決定できる。出組では、黄組に比べると係聯卜辞は少く、上甲から祖甲までの廿一王に限られるが、大甲・大戊などの黄組に欠ける係聯を補充できる。各王の祀序は黄組と完全に一致する。両組とも祀序は即位世次を基準とし、直系・傍系はもとより、嘗て太子であった者も祀られる（第二節）。先妣の周祭は黄組・出組ともに王賓型に見られるだけで、配偶先王の廟号を冠し、その即位世次に対応するのが原則である。黄組については、①示壬―大庚、②小甲―祖乙、③祖辛―武丁、④祖己―帝辛の四段階に分けるが、周祭に入る者は示壬配妣庚から康丁配妣辛までの十五先王の十九配偶に限る。本著全篇を通して著者は綴合に関する先人の誤りを辨正する例が多く、前節で曾毅公・厳一萍の誤合を指摘しているが、本節でも陳・許氏の誤りを正している。綴合の原則について、著者は骨版や卜辞の字体だけを見ないで、各種類型卜辞に内在する規律を具体的に掌握する――周祭では如何なる類型が同一版に出現可能か――ことが肝腎であるとする。当然といえば当然であるが、単なる卜辞の内容や字体からの類推によることが多い従前の綴合情況を思えば、この指摘はまことに的確である。また、辞例解説に関する先人の誤りを正すことは枚挙に遑ないが、例えば先妣の祀序関係を示す唯一版、安明 2854＋安明 2858 において、大庚配妣壬が壬子に、大戊配妣壬が壬申に劦日の祀を卜問されているが、同祀序であるべき出組の辞例、後上2.3＋後上2.7＋後上3.7で大戊配妣壬が大庚配妣壬の下一旬となっているのを見れば、壬子は壬戌の誤刻とすべく、黄組の前掲版によって中間一旬を卅七旬型周期中の空旬とする許氏の説を誤りとする。著者の鋭い見識を示すものである。また、祖乙には妣己・妣庚の二配があるが、董・島氏の祀序表に妣庚を置かないのは小乙配妣庚との混同である。というのは、武丁配妣辛と小乙配妣庚とは同一旬内に祀られるが、庚寅に祖乙配妣庚が、三旬後の辛酉に武丁配妣辛が祀られているから、庚寅受祭の妣庚は小乙でなく祖乙の配で祖乙配妣庚は第五旬に、小乙配妣庚は第八旬に祀られるという。こうした論証も著者の犀利を示すものである。出組の先妣周祭も示壬配妣庚から始まって祀序は黄組と一致するが、周祭卜辞は多く祖甲期に属して祖母輩の小乙配妣庚に止まり、母輩は祀らない。黄組で最後の康丁配妣辛を祀るのは康丁の孫の文丁期と考えられ、出組同様、祖母輩に止まっている。なお、先妣の祀序は即位の次序による配偶先王の祀序に従い、同一先王の諸配妣は死亡の先後に配列される（第三節）。つぎに、先王と先妣との祭祀は単独にではなく一系統内で行い、先王周祭の第十旬祭祀と先妣第九旬祭祀とを同一旬内で行うように、先王を一旬先に開始する。こうした先王・先妣を合せた第一旬から第十旬までの祀序系統表を作成するが、黄組では先王卅一、先妣廿、出組では先王廿九、先妣十五である。殷本紀によれば、中丁を除く受祭者は直系先王の配偶だけであるから、配偶受祭の先王は直系で、配偶非受祭先王は傍系に属する。この点から、小甲を直系とするのは本紀の誤り、配偶受祭の中丁は直系のはずである。先王は直系・傍系を通じて祀られる。直系先王の受祭配偶数に差異があるのは、正后先妣だけが受祭するからである。許氏はその子の如何を基準として（「母以子貴」の意）、中丁の二妣から戔甲をその子とするが、著者は子の即位でなく正后となったか否か、母の貴賤によって定められ、貴ければ嗣を得、賤しければ嗣を得ないと見て、商代すでに嫡庶貴賤の宗法制度の存在を認める（第四節）。祀序に関する董氏等四氏と著者との相違点はその一覧表によって一目瞭然である。すなわち、黄組では、

	先王	先妣	計	旬数	著者と相違する旬次					
董氏	33	24	57	12	第6旬	7	8	10	11	12
陳氏	34	22	56	12				10	11	12
島氏	33	25	58	11	6	7	8	9	11	
許氏	33	22	55	11					11	
著者	31	20	51	10						

となる。先王では四氏が武乙・文丁まで（陳氏は帝乙まで）入れるのに対して、著者は康丁に止める。先妣では四氏が武乙・文丁の配を入れるのに対して、著者は康丁配妣辛に止める。旬祀序内容の差異は第六旬から始まる。第六旬―第十旬までの董氏等四氏との相違について、いちいち辨駁を試みているが、詳しく紹介する餘裕はない。最も大きな差異は武乙以下を入れると否とにある。先王・先妣が周祭に属入する条件として著者は、①五祀典を受けるか、②受祭時にその他の王・妣と係聯関係を有するか、の二条を挙げる。武乙・文丁が単独に五祀を受ける辞例は存するが、同一版上に他の王・妣との係聯関係を示す辞例はなく、右の条件を具えていない。帝乙の祭祀を記す卜辞は未発現、他の王・妣との係聯を示す辞例も出現していない。商末帝辛時の四祀卬其卣銘文「文武帝乙」の乙を何王とするかについては四氏間に異論があるが、皆周祭祀譜に入れる。假に陳氏に従って帝乙としても単独の翌祀であって、他の王・妣との係聯関係は認められず周祭には属しない。武乙配妣戊は卜辞に見えず、肄簋に見えるが、董・陳・島氏が周祭に入れるのは根拠に乏しく、文丁配妣癸は卜辞・金文に見えず、四氏が周祭に入れるのは亦確証を欠く。これ等の王・妣を周祭祀譜に入れるのは、五種祀典を受ける王・妣は凡べて周祭に属するとの誤った既成観念によるもので、五種祀典は受けても周祭系統への属否は、その世系上の位置が係聯卜辞の王・妣の前に在って始めて可能で、その後に在る場

合は必ずしも属しないのである。この点から、係聯関係を有する周祭卜辞の最後の王は康丁、妣は康丁配妣辛である。その先王世次を殷本紀と比較すると、①報丁を報乙の前に置く本紀の誤りは、すでに王国維・郭沫若・董・陳氏の指摘する通りである。②外丙を太丁の後、太甲の前の即位とする本紀に対して、卜辞では太甲の後大庚の前であること、陳氏の詳論するところである。③本紀（三代世表・『漢書』古今人表同じ）に中壬・沃丁・廩辛の即位を記すが、周祭中にこの三人の受祭はない。即位しなかったのか、即位して王となったが、何かの理由で周祭の外に廃棄されたのであろう。④本紀によると、司馬遷は祖己を武丁の賢臣としたらしいが、卜辞には小王とし、祖甲は兄己と呼んでいるから武丁の子である。本紀に「太子太丁未立而卒」と記すが、太丁は第二旬に、祖己は第九旬に祀られているから、即位しなくとも太子として王位継承の約束ある者は祀られたらしい。そこで、祭祀上の位置のない中壬・沃丁は王位継承を確定されなかったようである（第五節以上第三章）。

ついで、著者は五祀典の各祀と五祀全部との一巡に要する時間すなわち周期の問題に入る。翌祀と彡祀とは最初と最後に単独に、祭壹劦の三祀はその中間に重畳して行われたことは前述の通りであるが、黄組の(2)卜旬型卜辞には各祀の実行時期を記し、甲名先王の祀序で周期中の旬序を示している。例えば、癸卯の日にその明日の甲辰に「工典」の祀りを、次旬の癸丑に明日甲寅の上甲の翌祀を卜問する（続存上 2652）のである。工典については諸説があるが、著者は貢典—祭祀の開始に当り「典冊を献ずる」とする于省吾の解をとる。上甲以後、大甲・小甲・戔甲・羌甲・陽甲・祖甲となるが、その間に第三・六旬は祀典を行わぬ空旬となるので、翌工典から翌祖甲まで十一旬を要する（第一節）。祭壹劦は一旬中に一種または二種・三種を重畳して同時に行う。一種の祀典に十一旬を要するが、壹は祭に、劦は壹に、それぞれ一旬後れるから、祭工典から劦祖甲まで十三旬を要する。ただ、壹祀の工典はまだ発現していない。このことによって島氏が劦にも工典なしとするのは誤りで、壹劦に工典が少いのは事実であるが、まだ発現していないのか、または二祀が祭と同時挙行であるために、祭工典は一旬をとるが他は祀典の管理者が省略したのであろう。この三祀典を十三旬に短縮するのは、各祀を単独に行えば卅三旬を要し、それに翌・彡の周期を加えれば一年の旬数を大きく超過するからである。祭壹劦組の祀典は頗る複雑であるが、各祀典には専任の管理人がいて責任を負っていたのであろう。しかし、祭祀の最終の大権が商王に帰属していたのはいうまでもない（第二節）。彡祀も十一旬を要した（第三節）、その間の接続には一定の聯係がある。すなわち、翌と祭壹劦とは緊密に連接して両祀組間に例外的にも一旬は置かぬ。一旬を置くとする陳氏の説は腹甲卜辞（綜述 21.8）の通例を破る誤読によるものであり、該片の十月は十二月の脱刻である。祭壹劦と彡との接続は劦祖甲の下旬が彡工典の一旬で、両組は緊密に連接しており、彡と翌とは彡祖甲の一旬と翌工典旬との間に一旬を隔てている。かく、三祀組は首尾相接し循環して断絶することはない。辞例の解読に基づく祀組間の接続に関する学者間の異論について、著者は詳細に検討して是非を正している（第四節）。五種祀典がどの祀典から始まったかについても、董・陳氏は彡、島氏は祭、許氏は翌と見解が異なるが、両組祀典間に截然たる分離があることから、著者は翌を祀首とする許氏の説が正しく、翌—劦—彡の順に卜問した二辞例の存在を示す。截然分離を祀首の条件としながら、時に前の祀典と分離しないことがある祭とする島氏をここでも痛烈に批判する（第五節）。以上の各祀組の周期・接続・祀首から、著者は周祭の周期を甲名先王の祀典によって示し、黄組では翌祀十一旬・祭壹劦祀十三旬、彡祀十一旬、それに周期間の空一旬を合せて卅六旬と定める。しかし、その正否をさらに辞例に徴すると、翌工典と上甲との間に空間があって十二旬となる例があり、祭壹劦が十四旬となることもあったりして卅七旬型が別に存在すると見る。つまり、黄組には二型があるのである。出組では翌・彡祀が各十旬、祭壹劦祀が十二旬で合せて卅二旬である。翌工典・祭工典を単独としない董氏の卅旬説は誤りである。黄組の二型存在の理由について、陳氏は卅六旬では太陽年三百六十五日に不足なので、卅七旬周期を設けて調整したものと見る。著者も陳氏説を一応認めるが、卅六旬—卅七旬と順次交代しているわけでもないから、ある時期内の便宜手段であろうとし、将来の豊富な資料の発現による祀譜の復原を期待する（第六節）。周祭周期表を通して認められる董氏等四氏との相違は、①祀組の次序、②祀組間の接続と先王・先妣の配置、の二点のほかに、③武乙・文丁・帝乙・武乙配妣戊・文丁配妣癸の受祭の有無がある。これ等の相違点について、著者は徹底的に検討して四氏の説を批判するが、特に③に関して董・陳・島氏が工典祀・祀組間接続・祀序配置の三原則にそれぞれ違反する点があることを指摘する。許氏も祀組の配置は三氏と異なるにしても、武乙やその配偶等を周祭系統に入れる点では、先に即位した王とその妣とが先に祀られる原則に違反するという。卅六・卅七の両旬型を認める点は島・許氏と一致するが、周期の祀序は異り、二氏の卅七旬周期の内容は成立し難いとする（第七節以上第四章）。

祀序と周期との基本問題を解明した著者は、さらに周祭の実施情況—祀譜を卜辞や全文に徴して復原する。祀譜の復原は董氏の『殷暦譜』に始まり、島・許氏も相継いで試みているが、祀序等にすでに指摘した欠陥が存する。祀譜復原のためには年月日・祀典・祀序を記した卜辞や銅器銘文が必要であるが、出組には王年を記した周祭卜辞は現在のところ未発現で復原の方法がない。黄組には「隹王幾祀」を末尾に記した例が見えるが何王かは記さず、またその例も多くはない。加えて商代暦法の具体的知見も限られているので、大体のことしか判らない。董・島・許氏は黄組祀譜を帝乙・帝辛二王期に限るが、実は三王期を包括しているとして、著者は三系統に分ける。「隹王幾祀」の祀の意義を時王祭祀の次数を示すとする島氏の見解は、それ以前に董氏が否定しており、許氏も董氏説をとる。『爾雅』釈天の年の意に解すべきである（第一節）。周祭の復原は祀序・祀首・周期など関聯規律のほかに精細な暦法を基礎とするが、詳細についての学者間の見解は一致していない。董氏の『殷暦譜』は戦国期の顓頊暦を基礎としていて、その欠陥はすでに常正光や陳氏の指摘するところ、信頼に値いしない。現在までの知見は、一種の陰陽合暦で一年を三百六十五日四分の一とし、年に大小があるが平年十二月、閏年十三月で最初は年終置閏、後に年間置閏、十九年七月置閏法は商末まだ萌芽の段階でしかなく、大月卅日、小月廿九日の相互配置、ただ小月の重複はあっても大月にはない。以上の程度にしか過ぎない（第二節）。以上の前提のもとに、著者はまず第一祭祀系統について、「隹王幾祀」を記す辞例から、卜旬の日干・祭名・月数などを祀序表に徴して祀典挙行の日を検出する。この方法によってまず隹王三祀譜を復原する。これに基づいて王二祀・王一祀が推遡可能なはずであるが、月の大小や置閏、年の卅六旬と卅七旬、といった問題が絡んで来るので簡単ではない。幸い王三祀・王二祀については辞例が存するので、これ等の条件を綜合的に矛盾なく解決できれば復原は可能である。王一祀の辞例はないので周期の類型、月份における特殊事情の有無などは一切不明ではあるが、毎月に三甲日があり、卅六旬型であれば、王二祀から推遡可能である。このようにして、著者は王四祀に関する辞例の董・陳氏の綴合を斥けるなど慎重な用意のもとに、十祀までを一応復原する。そのうち、五七八九祀が卅六旬型、二四六七が卅七旬型で周期の次数はほぼ相近く、卅七旬の設置目的が太陽年と太陰月との調整にあることを示している。実情に合わないが、現資料で見る限り九年閏月を置いていない。十九年七閏法をとる董氏は『左伝』にも見える失閏現象と見るが、卜辞資料の不足による暦法の不詳と解すべきである。ただ、五種祀典は厳密に実施されて記載の干支に誤りはなく、月数の配置も比較的適当で、復原は比較的信頼に値いするという（第三節）。第二祭祀系統の資料は極めて少いうえに不完全、復原は困難で大体の情況しか見出せない。著者は王二祀に関係ある前3・28・1と二祀邲其卣との彡祀から大甲の彡祀が甲寅であるのを検出するが、甲寅が正月の上旬か中・下旬かにより、卅六旬型、毎月三個の甲日として三種の祀譜が生ずる。王三祀譜については懐特（ホワイト）1915だけであるが、ここでも二祀の一譜と二譜とから両譜が生ずる。王四祀譜に関する直接資料はないが、二祀邲其卣と同期の四祀邲其卣が関接資料となる。後の祀譜から四祀が毎月三個甲日、卅七旬型周期が推知されて、三祀の両譜からまた両譜の作成が可能となる。四祀邲其卣から見ても、文武帝乙（帝乙）は周祭に属しない。四氏は無理に帝辛祀譜に入れるが、銘文と合わない。王二祀譜から王一祀譜が推遡される。王五祀・七祀の記録はない。六祀には二条見えるが詳細でなく、八祀には一条、九祀には三条、十祀には巤彝銘文を合せて四条があって祀譜の復原が可能、王四祀・九祀譜から五六七八祀譜を推索し得る。以上のうち、二三十祀が卅六旬型、四五六七八九祀が卅七旬型であるが、閏法の萌芽が認められる。この系統の祀譜は二祀・六祀邲其卣と連繫するが、この二器は四祀邲其卣と同期、四祀卣には文武帝乙が見えるから帝辛期に属する。とすれば、第二系統は帝辛期の祀譜であろうという（第四節）。ところが、以上二系統の何れにも属しない系統の祀譜が別に存在する。その資料は六祀の宰豊彫骨（佚 518）と、廿祀に属する①卅七旬型の宰椃角銘文と卜辞二版、②卅六旬型の卜辞一版、③卅六旬型の肄簋銘文とがある。この王六祀譜と王廿祀三祀譜とは前の第一・第二の何れにも属しない第三の祭祀系統に属する。今後の資料発現によってこの系統の存在がさらに確証されよう。宰豊雕骨を、董氏は帝乙・帝辛祀譜に入らぬことから祭名の誤記とし、島氏は偽作、許氏は待問とする。一九四九年、高去尋は董氏の祀譜を修正し、六祀邲其卣を偽作として祀譜から除去する。さすれば、雕骨刻辞の祀譜属入が可能となるが、六祀卣は偽作ではなく、逆に両祭祀系統に属入不可能な六祀譜存在の証料と著者は見る。ただ、高氏は雕骨刻辞を乙・辛期でなく祖甲期ではないかとし、七五年、厳一萍は文丁期とする。八一年、李学勤は黄組周祭記録を三分して三個の王期に分属するが、その中には文丁期の一組があるはずとする。近年、歴組卜辞の時期について学界に論争が起り、武・文期とする董氏を斥けて武丁晩期—祖甲期とする学者が多く、文丁卜辞の再検討は現下の重要問題である。李・厳氏がすでに黄組に文丁期の祭祀記録を認め、著者も王六祀・廿祀の若干記録によって黄組周祭に三系統

あることを明らかにした。とすれば、黄組中の文丁卜辞の存在を否定できない。数年来、著者は黄組中の「祊祭」卜辞の系統的整理から中に相当数の文丁卜辞の存在を見出したが、周祭卜辞の康丁（康祖丁）や五種祀典中の武乙の称謂から見ても同様とする。そこで、前に第二系統を帝辛期と見たのに対して、康祖丁祭祀の多数卜辞から見ると、比較的厳整な第一系統は文丁期に、第三系統は帝乙期にそれぞれ属するものと考えられるものの、確実な時期の帰属は今後の資料出現に挨つべきものとする。武乙・文丁が五種祀典は受けても周祭系統に属せぬ問題については、著者は商末祭祀制度の変遷から合理的解釈を加える。すなわち、商末になると宗法制度が発展した。祊祭卜辞のうち、武丁・祖甲・康丁・武乙・文丁の直系五先王に対する通例の祭祀のほかに、直近の武乙・文丁に対する「又乂」祀を伴う特殊形式の祭祀卜辞も多い。五種祀典を上甲—康丁に循環施行するほかに、二王に対しては別に単独祀典を挙行したのである。祊祭卜辞は一般に他の祀典卜辞と同版に刻せず、二王の五祀も他の王・妣五祀と同刻せず、祊祭と同刻する。このことは彼等の五祀と祊祭とが特殊であったことを示している。上甲—康丁に対する合祭と、武乙・文丁に対する単独祭祀とによって、①周期を卅六旬または卅七旬として一年の日数に相当するようにし、②周祭の厳密整斉を保持しつつ、同時に③近世直系先王に対する特殊祭祀制度の実施と符合させる。以上が、二王が五種祀典は受けても周祭系統に属しない原因であり、卜辞に見えぬ二王の配妣は勿論属しない（第五節以。上第五章）

結論として著者は、王国維は殷人の祖先祭祀に定制なしとしたが、董氏の五種祀典発見以来四十年の間に商代礼制の全貌が次第に認識せられ、その研究の進歩が甲骨文と商代史との研究を促進したとして、周祭研究から明確になった史実など六条を挙げる。その内容は前述の範囲に属するが、周祭・祊祭卜辞の断代から見て、異なる時代や同時代の類型を異にする卜辞には、それ自身の発展規律があるから、卜辞の時代研究は各種類型卜辞の時代から着手すべきものとする。最後に、商人の祭祀は複雑ではあるが厳密で、一定の祀譜により毎日・毎旬・毎月・毎年必らず行ったが、その目的は自己や、宗家の支配に対する鬼神の保佑を祈求することにあった。商末になると、王の祭祀支配は愈〻厳しくなり、宗教は商人の社会生活における絶対支配の地位を占めたとする（結束。語）

本著を通読して気づくことの第一は論述の態度である。周祭の研究は董氏以来、陳・許氏を経て漸次密度を濃くしているが、なお主観的側面を免れていない。著者は辞例の厳密な検討に立って類型を明確にした上で、周祭の範囲や祀序・祀譜・周期等の原則を確立し、この原則に基づいて諸説の是非を裁定する客観的方法をとり、綴合の誤りを正し、時には辞例の誤刻をも直す。第二は内容の創見である。係聯関係を有する周祭系統と五祀の単独祀典とを峻別して周祭の範囲を限定する。黄組では祭祀系統を三分して分析し、帝乙・帝辛以外に多くの文丁卜辞の包有を指摘する。ここから、商末では上甲以下に対する五種祀典と同時に、武乙・文丁の直系二王に対する祊祭等の単独祀典が平行して行われたとし、商末祖先祭祀の状況を見極める。皆、従前の研究に見られぬ著者の創獲である。ただ、周祭の基盤となる暦法には不明の点が多く、卜辞資料も多くない。今後の発掘と研究とに挨つところが多いが、周祭制度の研究としては今日、本著をもって一応の決定版と見得るであろう。

（一九八七年九月、北京、中国社会科学出版社、A5判、三四三頁）

（原載《東洋學報》第七十一卷第三、四號，日本東洋文庫，一九九〇年）

一部有特色的商周甲骨学专著

杨升南

《**甲骨学通论**》，王宇信著。32 开本，630 页。
中国社会科学出版社 1989 年 6 月出版。

我国的甲骨文是世界上最古的几种文字之一，也是古老华夏文明的重要标志。河南省安阳殷墟所出的商代甲骨文，发现于1899年，迄今已有90个年头。而西周甲骨的发现，也已有30多年了。甲骨文自发现以后，很快就引起国内外学人的注意，甲骨学现在已成为一门世界性的学科。90年来，甲骨学的著述如林。据初步统计，从事甲骨文的研究者有400多人，论著达5000多种。这么多的研究者，如此多的著述，加之众说纷纭，不仅对有志于学习甲骨文的年轻同志，就是专门从事甲骨学研究的人，都难于一一浏览。在甲骨学深入发展的今天，学习、研究甲骨文的人，迫切需要一部能涵括甲骨学全领域并熔众说为一炉的概论性著作。王宇信同志的新著《甲骨学通论》的出版，正好满足了学术界的这一愿望。

该书的最大特点是内容丰富，涵括了甲骨学的全部领域。甲骨学概论性的著作，在国内外已出版了近十种。但这些著作或是出版年代较早，已不能反映近期来甲骨学飞速发展的水平；或是失之简略，而不能概括此学科的全部领域。1977年在陕西周原大批出土西周甲骨之后，对西周甲骨的研究已成为甲骨学的一个重要的新分支学科。而有关西周甲骨学方面的论述，以前的论著中都不具有。

全书50多万字，分上下两篇，共16章。上篇讲殷墟甲骨学，下篇讲西周甲骨，最后一章《甲骨文与甲骨文书法》，则专门论述了甲骨文的书法艺术和如何学习研究甲骨书法篆刻。

在取材上，该书不仅注意国内大陆上各家的著述，对港台学者的研究成果亦特别留意采纳。而对国外学者的论著，也尽量加以反映。如在《重要甲骨著录及现藏》一章中，专列有“国外著录的甲骨及现藏”一节。对国外一批有贡献的甲骨学家，如日本的林泰辅、贝塚茂树、伊藤道治，加拿大的明义士、许进雄，美国的方法敛、白瑞华、吉德炜、周鸿翔等，在甲骨学领域的贡献和著作，都有恰当的评述。这就能使读者开阔眼界，对甲骨文在世界上的地位和研究状况有所了解。

该书的另一个特点是信息量大。书中对甲骨学领域内的一些基本问题，都做了介绍。对这些问题研究的历史、进程、现状以及各种不同的意见，都有清楚的交待。特别是对当前甲骨学界研究的一些热门课题，如甲骨文的分期断代、西周甲骨的族属等，详细地介绍并评述了讨论各方的见解，而作者自己的看法也在讨论中加以阐明。此外，对甲骨文的现藏情况和甲骨学方面的论著的评介，此书堪称最为详备。这对了解甲骨学当前研究的进展和今后研究的方向，重要课题，都是很有益的。书后的四个附录如《甲骨学大事记》、《甲骨著录及简称》、《新中国甲骨学论著目》、《西周甲骨论著目》等，对掌握甲骨学研究的全貌，十分有用。特别是两个《论著目》，若再配以胡厚宣先生所编《五十年甲骨学论著目》，就可得到一份90年甲骨学方面的论著总目。这给学习和研究甲骨文的人，提供了很大的方便。

该书的第三个特点是学术性强。关于它的学术价值，我们仅举下述三个方面为例：

(一)在对“甲骨学”这一学科的建设上，该书首先对其内涵和外延作了明确的界说。虽然人们讲了几十年的“甲骨学”，但以往并没有人对甲骨学下过定义。前几年，作者在撰写《中国大百科全书・考古卷》的“商代甲骨”的辞条中，曾第一次对甲骨学下了这样的定义：“以其(指殷墟出土的商代晚期王室占卜记事用的龟甲和兽骨)为研究对象的学科即称为甲骨学”。在本书中作者对这一定义又作了补充和完善：“甲骨学是以古遗址出土供占卜用的有字龟甲和兽骨为研究对象的一门学问”(第1页)，同时明确指出“甲骨文并不就是甲骨学”(第 3 页)。甲骨文是指刻、写在龟甲兽骨上的文字，所以甲骨学与甲骨文研究的对象是有区别的。甲骨文研究所侧重的是文字的考释、辞性辞义的辨析，语法结构，甲骨文中所蕴含的社会历史材料及与其他学科的关系等。因此书中对这些方面的内容，只在《绪论》中简洁地加以叙述而不作专章。本书根据甲骨学的定义，重点论述的则是甲骨的发现、研究过程、甲骨学本身的一些规律、著录、现藏及研究者等。这种区分无疑是恰当的。就如甲骨文的研究者言，以往所出同类著作，多略而不谈，见物不见人。而该书则设专章，从第一位甲骨文的发现者王懿荣起，到迄今健在的老一辈甲骨学家、正活跃于甲骨学领域的中青年研究者、他们的研究特点及在甲骨学上的贡献等，用简洁的语言勾画了出来。这些学者们研究甲骨的足迹及其贡献，也是构成甲骨学的重要内容，和甲骨文一样，成为人类的重要精神财富，是写甲骨学不可缺少的。作者的这种区分，以及全书章节所展示的甲骨学内容，纠正了长期把甲骨学与甲骨文缠绕在一起的混乱。这种区分，使甲骨学成为有独自研究的内容、对象和规律的一个专门学科。

(二)以求实的学风和科学的态度总结了90年甲骨学领域的研究成果，并由此提出今后的研究方向和课题。这种总结要求作者具有把握全局的能力和学术水平，以科学的态度，进行实事求是的分析、判断，然后加以别择。作者在本书中贯彻了这一原则。例如甲骨学发展史上涉及不少的人，有些人在政治上是反动的，但他们在甲骨学上的贡献又确是事实。作者对他们的贡献都如实地加以肯定。如关于甲骨文的发现者问题，书中就明确指出：“不能以王懿荣是‘当时在北京的大官僚 ，而不公正地对待他”，“更不能为了强调什么而认为甲骨的最早发现者是‘小屯农民’”：肯定了王懿荣第一个发现甲骨的功绩。又如对晚年投靠日本的罗振玉在甲骨学上的诸多贡献，也充分加以肯定，但又指出了他政治方面的反动性。对当代权威的意见，也不随声附和，敢于直呈己见。如在甲骨文的分期上，作者对董作宾的五期分法的科学性和实用性做了充分肯定，而对老师胡厚宣先生的“四期”说和陈梦家的“九期”分法，则认为仍是以董作宾先生“五期”说为基础的变通办法。这种唯物主义的求实学风，使本书具有较高的学术价值。

(三)该书所囊括的甲骨学领域的新成果，有不少是作者近年研究的心得。例如占卜的方法与过程，过去的研究者仅据《周礼》一书所记，探究了商代用龟占卜的程序。而对骨卜的情况，因古文献无记载，论者便不详其究竟。本书作者根据存在于少数民族中的“羊骨卜”情况，补充了已失传的我国古代骨卜之法。由于作者本人对甲骨学上的一系列问题有独到的研究，使该书成为当前甲骨学领域内具有较高学术水平的一部专著。

该书的第四个特点是在体例上深入浅出，能适应不同层次的需要。它所具有的学术价值，无疑对从事甲骨学研究的学者，是一部很有价值的参考书。而对于准备学习甲骨或初学甲骨的人，也是一

本很好的入门读物。王宇信同志是很注意甲骨学的普及工作的，他总是希望有更多一些的年轻朋友来学习甲骨，延续这门“绝学”。在本书的写作时，就考虑到初学者的需要，在《绪论》中对“本书的宗旨”作了如下的说明：

> 我们这本《甲骨学通论》，是以历史考古的角度，对从开始学习甲骨，到进行研究过程中的一些基本问题，介绍一些必要的甲骨学基础知识和基本研究方法（第19页）。

作者从这一宗旨出发，尽量做到深入浅出，把甲骨学上深奥难懂的问题、名词、术语通俗化。书中特别着意对甲骨学上基础知识的介绍，如甲骨的整治、甲骨的占卜程式，甲骨文字的契刻方法，甲骨文例，时代的区分，使用甲骨材料应注意的一些问题等。对每项基本知识的介绍都附有插图。读其文，观其图，读来明白易晓，极方便于初学。同时对甲骨学史上的轶闻趣事，也加以采入，由此更增加了本书的趣味和可读性。

（杨升南）

（原載《中國社會科學》1990年第4期）

《周原与周文化》评介

常 玉 芝

位于陕西省关中平原西部的周原，是周人的发祥地。据古书记载，周人在古公亶父时，因受戎狄所侵，被迫由邠迁到岐山之南的周原，在此立国建都，立国曰“周”，建立了早周都城岐邑，后经王季、文王两世；文王末年虽迁都于沣，但这里仍为畿内地，分封给周、召二公。考古发掘证明，周原及岐邑在整个西周历史上一直占有十分重要的地位。

为了探索周文化的渊源和研究西周历史，文物考古工作者自1949年以来对周原地区作过多次考古调查和发掘，取得了一些成绩；特别是1976年在国家文物局领导下成立了周原考古队，开始对周原进行大规模有计划、有目的地考古发掘，截止到1980年已取得了前所未有的成绩。这次发掘的参加者和主持者陈全方教授精心研究了出土的大量西周各类遗存，并结合过去周原出土的西周遗物，在以往研究成果的基础上，对早周和西周早期社会的政治、经济、军事、文化等各个方面进行了综合探讨，撰成了《周原与周文化》一书。此书是迄今为止对周原及其周文化进行全面综合研究的第一部学术著作，填补了这方面的空白，在周原与周文化研究史上是块重要的界碑。它的出版为今后的西周史研究开辟了新途径，具有颇高的学术价值。

《周原与周文化》取材宏富、完备、科学。它以1976年至1980年周原出土的大量实物资料为主干，兼搜集了解放前的流散文物和解放后调查清理出土的实物资料，并全面搜集、整理了有关文献资料。对所引资料大都列出详尽的考古发掘记录和实测数据，不少文物兼附有照片、拓本、摹本，有的还列出了图表。文字部分的插图有148幅，图表3幅；书后附图版120页共509幅，其中彩色照片4页17幅，黑白照片及拓本54页182幅，摹本53页301幅，其他各类附图9页9幅，文图并茂。

《周原与周文化》的结构除“绪论”和“后记”外，正文分上、下两编，共六章，十八万五千字。上编四章分别论述了周原的自然环境及其历史变迁，周原遗址的发掘，宏伟的西周宫室（宗庙）建筑，劳动人民的伟大创造；下编两章分别就周原出土的西周甲骨文和陶文进行了研究。全书结构严谨，脉络分明，内容广泛地涉及到考古学、历史学、文字学、建筑学、史地学等学科。

周原因周人的邑居而闻名于世。在“周原的自然环境及其历史变迁”中，作者首先介绍了周原的锦绣河山，接着分析了周人选择周原邑居的原因，然后考定了周原的地望和早周都城岐邑的地理位置、范围及其湮没过程。

作者认为周人所以选择周原邑居是因为：一，这里水源丰富，自然条件优越，适宜农耕、渔、猎等生产活动；二，周原的地势北依岐山，南临渭河，有利于抵御外敌的入侵。对于周原的地望和岐邑的地理位置及范围，自古以来史地学家说法不一，作者综合有关文献记载归纳出各有四说。然后根据考古资料和亲身参加对周原西周遗址、墓葬分布情况的调查发掘，证明周原的地望是：北至岐山，南临渭河，东到武功，西到凤翔、宝鸡县，周以后的史地学家对周原地望的推测皆误。又根据今岐山县京当、扶风县黄堆和法门三个地区交界处，方圆十五平方公里的范围内，周代文物遗迹分布异常密集的情况，断定这里就是早周都城岐邑的所在地，历来的各说中只有《汉书·地理志》等书的推测较为正确。以上考证解决了两个长期悬讼未决的问题。关于早周都城岐邑的湮没过程，古籍中没有详细记载。作者援引前人研究成果，并结合新发现的西周晚期青铜器铭文中，周人仍尊称岐邑为“周”，以区别于旧都镐京“宗周”，新营洛邑“成周”，说明岐邑在整个西周历史上一直占有非常重要的地位；又根据自西汉以来，岐邑出土的千余件青铜器，皆是商末周初至西周末年之物，至今尚未发现东周时器物来看，岐邑当与西周王朝相始终；再结合文献记载和出土的红烧土堆积，推测岐邑的失重和湮没当在周平王东迁洛邑之前后，因戎人入侵而毁于战火。这个考证补足了文献记载的不足。

对周原遗址的调查和科学发掘是解放后开始的，作者以十年为一个时间单位作了详细论述。五十年代主要是征集了一批青铜器，清理了一批墓葬，绘制了周墓分布图；发现了西周残瓦片等。六十年代初步摸清了西周遗址的分布和范围，绘制了周代遗址分布图；清理发掘了周墓八十三座和车马坑一座；出土了一批西周青铜器和其他器物。七十年代成绩最为卓著：1976年以前发掘了西周平民居住遗址；发现了三处青铜器窖藏，出土了一批重要器物，这批青铜器不少都铸有长篇铭文，内容丰富，有极重要的史料价值，而且时代从穆王到宣王时期，几乎每个王时期都有，补充了西周中晚期铜器断代标准器不足的缺陷。1976年周原考古队成立后，发掘了两处西周大型宫室建筑基址，制骨作坊遗址、窑址、平民居住遗址，100多座西周早、中、晚期的各类墓葬、车马坑，清理了五处西周青铜器窖藏；共出土了10万余件各类文物，其中包括17000多片西周甲骨（约三百多片刻有文字），150多件商周时期的精美青铜器（近百件铸有铭文），80多片刻有文字和符号的器物陶片和瓦片等。这些丰富的西周遗存就是本书研究西周历史文化的主要依据。

周原考古队发掘了岐山凤雏村、扶风召陈村两处西周大型宫室建筑基址，填补了古建筑史上的空白。作者详细论述了这两处建筑基址的平面布局，分析了它们的营造技术，探讨了它们的性质、年代和价值意义。

凤雏村的两组建筑基址以甲组最为典型，这是一座“四合院”式的群体建筑，座北朝南，作者详细介绍了它由南往北的布局：影壁、门道、左右门塾组成的门厅、中院、前堂、过廊、东西小院、后室、东西厢房等几部分，每部分建筑和院落之间，都以台阶或走道相通。召陈村发现西周建筑基址十五处，其中上层基址十三处，是一组大型建筑群。作者从凤雏村和召陈村两处建筑基址出土的建筑材料分析了它们的营造技术，其引人注目者有：一是早周已发明了瓦和土坯，突破了以往“秦砖汉瓦”的框框；二是墙体下部比上部厚，说明周人对墙体厚度的选择是按其实际用处决定的，否定了文献一律“墙厚三尺（周尺）”的记载；三是柱础规模宏大，一般在一米左右，坚固结实，经久耐用；四是房子地面、墙面均用“三合土”涂抹，光滑坚固如水泥。作者根据这两处建筑群的建筑质量、规模、形制与已发现的简陋窄小和土窑式的西周平民住房完全不同，推测它们当是宫室一类的建筑；又根据凤雏甲组建筑群有东西厢房和窖藏，并有大量卜甲、卜骨出土，与文献记载相印证，推测它是一座宗庙建筑。这个结论无疑是正确的。关于凤雏村甲组建筑群的时代，作者是通过对其出土物（西周甲骨文和西周器物）的时代和建筑技术水平的分析，又依据对该基址内残存木柱炭灰的化学测定，推测它建于西周早期，距今约3100多年，废于西周中期偏晚。从召陈村西周建筑群的总体规模、建筑物的体量和建筑技术都超过凤雏村甲组建筑群推测，它应建于西周中期。作者总结发掘这两处建筑基址的价值意义有三点：一是对系统解决西周宫室制度等方面的学术问题，提供了有力的实物证据；二是将我国“四合院”式的群体建筑史提前到了三千多年前的西周时代；三是对探索西周的历史文化和当时的阶级对立具有重要价值。

考古发掘证明，西周时期的农业、青铜工艺和其他手工业工艺如着色丝绸、漆器、原始瓷器、玉器、玻璃、金箔等都有了进一步发展，作者特辟“劳动人民的伟大创造”一章作了论述。由考古发现和文献记载可以看到，武王灭商后，周人的农业生产有了进一步提高：农作物品种增多，生产工具、水利设施、生产技术等方面都得到了改进。西周的青铜工艺更是巧夺天工，青铜器上的长篇铭文为研究西周的政治、经济、文化、军事、法律等各个方面提供了史书上没有的极其重要的文字资料，作者例举了大盂鼎、小盂鼎、曶鼎、毛公鼎、史墙盘等器铭文作了说明；西周的青铜器又是精美的工艺佳作，其造形和花纹蕴藏着极其丰富深刻的社会文化内容，作者以有刖刑奴隶守门形象的铜方鬲、疾壶、折觥等作为例证进行了描述。而出土的着色丝绸、漆器、原始瓷器、金箔等则是研究我国丝绸史、漆器工艺史、瓷器

史、冶金史等方面的重要资料。

西周甲骨文，过去在其他西周遗址中发现的极少，四个地点总共才发现了十多片。而周原出土的西周甲骨却多达17000多片，其中300多片刻有文字，是继殷墟甲骨文之后的又一次重大发现。作者就这批甲骨的钻凿形态、卜辞体例、字体特点及与商代甲骨的异同，卜辞时代，卜辞内容等作了全面细致的研究，提出了一系列独特的见解。

据研究，周原出土的西周卜甲普遍凿方孔，钻凿园孔的为数极少，卜骨则只钻园孔，未见凿方孔的现象；周原卜辞体例简短扼要，只有前辞、贞辞和占辞，以只有贞辞占多数，不少都没有验辞；卜辞的字体细小如粟，不易施拓，并且文字较商代已有省改。商代甲骨的钻凿没有方孔，只有椭园孔；卜辞体例有叙辞、命辞、占辞、验辞，很有规律；卜辞字体较大，便于拓印。

关于周原西周甲骨文的时代，作者根据卜辞内容和书体，考证出其上限起自周文王，下限到周穆王；大体可分为周初和西周早期两期，即周武王克商以前和克商以后。

周原西周甲骨文内容丰富，作者将其分成方国、山川、地名、官职、动物、天文历法、数学、八卦诸类进行详密考证。周原甲骨文记录早周和西周早期的古方国名称有十二个，作者逐一考察了它们的地望和与周人的关系。提出了不少有价值的见解，其中有两个见解特别引人注意：一个是通过周王到设在周原的商王宗庙中，去祭祀商王的卜辞，证明武王灭商前的周，确是商的附属国，宗主国在附属国建有宗庙，附属国也祭祀宗主国祖先；分析了那种认为祭祀商王的卜辞是商人卜辞，附属国不能祭祀宗主国祖先的观点是不能成立的，这一论点在学术界已产生了一定的影响。另一个是通过“伐蜀”、“克蜀”、“征巢”等卜辞，说明周初的军事力量已很强大，周人不但已打通了关中与巴蜀的通道，而且远征了位于今安徽省的巢国，证明文献中周文王“三分天下有其二”的说法是可信的。周原甲骨文记录的山川、地名有十三个，作者也逐一考察了它们的地望，并且分析了这批卜辞所反映的西周早期周人的军事行动、王室的渔、猎活动等情况。作者研究归纳了周原甲骨文所反映的周初历法内容，并与商代历法作了比较，指出周人把一个月分成近乎四个星期比商人分成三旬的作法前进了一步。作者还分析了周原甲骨上的八卦符号，认为八卦起源于由蓍草和算筹摆出来的数字象形，推测西周时已产生了算筹的记数制度和加减乘除四则运算法则。这种推测是很有道理的。

周原考古队在发掘西周建筑基址时，还发现了八十多片刻有文字和符号的器物陶片和瓦片，约100余字，这批陶文的出土填补了西周陶文的缺环。作者将这批陶文按出土地点和地层作了分类归纳，或墨拓或摹写一一予以公布。并分析这批陶文的性质是：有的是数字，如一、二、五、八、十等；有的是表示部位的，如左、中、右、上、下等。作者否定了认为陶器上的刻划符号还不是文字，只是记号的观点，从多方面阐述了它已属于文字范畴的理由。此外，还就周原陶文和商代陶文的性质、特点作了对比研究。

本书文字部分列有图表三个：1.《两千年来岐邑出土西周青铜器略目表》，2.《陕西周原西周甲骨文分类表》，3.《我国历年出土西周前陶文简目表》。第1个表记载了两千年来岐邑出土的西周青铜器的主要器名及件数、时代、出土时间和地点、现藏单位、著录情况等。第2个表对周原出土的西周甲骨文作了分类归纳，所列项目有：出土号、类别、卜辞内容、字数、年代、所反映的事类等；表下面还列出了49片字迹模糊，无法归类的甲骨的出土号，并且将其全部作成摹本在附录中公布。第8个表列出了西周前陶文的出土地点、出土时间、陶文内容、总字数、相对年代、著录情况、文化性质等。这三个表是迄今为止关于周原出土的西周青铜器、甲骨文和我国西周前陶文最完备的资料总汇，极便于读者检索和供进一步研究时参考。

作者在《后记》中，就该书定稿时未来得及收入的周原地区的考古材料，作了择要补记，其中有对研究周、楚关系有重要价值的铜簋铭文，有反映周人与北方少数民族戎人关系的“师同鼎”铭文，还公布了新拼合的三片卜甲等。足见作者对资料的重视和对科学研究认真负责的精神。

总之，本书确是一部有价值的科学论著，是从事考古学、历史学、古文字学、科学技术史研究的学者的必备书。

（原载《中國史研究動態》1990年第10期）

《甲骨文精萃选读》评介

育　水

殷墟甲骨文自1899年被发现至今已90年了，它为商代社会诸方面的研究提供了大量珍贵资料。谁要想研究中国古代文化，谁就必须从甲骨文中去发掘古代文化珍品，因此，引起了国内外许多学者和许多不同学科对它的重视。近年来，我国也出现了一股“甲骨热”。为了继承和弘扬华夏文明，一批青年人立志于甲骨学研究，但苦于不得门径，因此迫切需要一种便于入门的良师益友式的参考书，王宇信、杨升南、聂玉海主编的《甲骨文精萃选读》(《语文出版社》1989年版)就满足了这种迫切需要。

综观全书有以下几个突出特点：

首先，选片精。本书是以已出版的甲骨著录书《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》与《怀特氏等收藏甲骨文集》中选取692片编辑而成。众所周知，集大成式的甲骨著录书《甲骨文合集》是从国内外100多种收录甲骨文的书刊中精选41956号甲骨，约占殷墟出土的全部甲骨15万多片的1/4弱。而《小屯南地甲骨》有明确的地层、坑位关系。《怀特氏等收藏甲骨文集》中也有一些相当珍贵的材料。《选读》一书从上述著录书中选取其精萃，可谓是15万多片甲骨的精中之精华。30年代，郭沫若的《卜辞通纂》选的是当时出版的《铁云藏龟》、《殷虚书契前编》、《后编》、《殷虚书契菁华》等有限几本书中的精品，《殷契粹编》是刘体智收藏的28000片中选的精品。所以，《选读》一书在手可遍览90年来殷墟出土的甲骨文之精华。

其次，选片涉及的内容广泛全面。《选读》一书中所选甲骨文涉及内容广泛全面，如奴隶、平民、奴隶主贵族、官吏、军队、刑罚、监狱、战争、方域、贡纳、农业、畜牧、渔猎、手工业、商业、交通、天文、历法、气象、建筑、疾病、生育、鬼神崇拜、祭祀、吉凶梦幻、卜法、文字等。这样，为古文字学、文物考古、史学、农、林、牧、政法、医学、天文和书法等部门的工作者或研究者，提供了珍贵的资料。

第三，本书所选甲骨全部采用摹本，摹写准确、清晰度强。释文与甲骨文摹本上卜辞在位置相一致，极便对读。书前的长序把甲骨文的基本知识讲述得清清楚楚，要而不繁，为初学者铺砌了入门的阶梯。因此，本书不仅是一部非常有用的工具书，而且初学者可循此登堂入室，逐步开展自己的研究工作。

第四，书后附“笔画索引”和“选读各片来源表”，可从不同角度和不同需要去查找书中内容。还可以本书为索引，在有关书中迅速地查找到有关相近内容，为学界同仁的研究工作提供了极大便利。

总之，《选读》一书选片精、内容广泛、摹写准、释文准确，它反映了90年来甲骨学收录的最新读本，为甲骨文知识普及和甲骨学研究的开展，将起一定的促进作用。

无庸讳言，本书也有不足之处。这就是书中只有选片与释读，没有进一步对卜辞断句作出简明的考释，并将每条卜辞用现代汉语译出等，使初学者还感到不便。希望将来再版时，作者能从更广大的初学者层次考虑，补充上述内容，这将会更有益于国内外甲骨文初学者和研究者。

（原载《史學月刊》1990年第4期）

评《甲骨学通论》

李绍连

1899年发现的安阳殷墟甲骨文，不仅是我国最早有系统文字，也是世界最古老的文字之一。以甲骨文为主要研究对象的甲骨学，是由我国学者创立的一门独特的学科，可称为“国学”。可是90年来有关甲骨学的著录2000余种，却还没有一部较全面系统阐述甲骨学基础理论和代表当代甲骨学水平的专著。中国社会科学院历史研究所副研究员王宇信的《甲骨学通论》一书的出版，填补了这一空白。王宇信跟随导师、著名甲骨学家胡厚宣多年从事《甲骨文合集》巨著的编辑研究工作，著有《建国以来甲骨文研究》、《西周甲骨探论》两

本专著及有学术论文多种，是新中国培养出来的中年甲骨学工作者。最近由中国社会科学出版社出版的这部《甲骨学通论》，长达50余万字，内容十分丰富，“涵括了甲骨学的全领域”。它系统地全面总结了前人和今人研究的重要学术成果，并有作者多年独辟蹊径研究的见解。

这部《甲骨学通论》与其它概论性甲骨学著作相比，有几个鲜明的特色：

首先，它是国内第一部为甲骨学比较全面地系统地立论的著作。人们知道，甲骨文发现后的一个长时期内，只有少数学者拓荒启蒙，索隐举例，对甲骨文的研究基本上局限于一些文字的释读和探义，属于甲骨学的滥觞期。“甲骨学”一词是本世纪四十年代出现的。1945年胡厚宣曾写过《甲骨文绪论》一文，不过，当时的学者都致力于某一方面的研究，对甲骨学的基础理论研究，几乎无人问津，因而它是社会科学诸多学科中最鲜为人知的神秘学科。经过孙诒让、罗振玉、王国维、董作宾、郭沫若、于省吾、胡厚宣等一批著名学者的研究积累，特别是董作宾于1933年发表了《甲骨文断代研究例》长篇巨著，提出甲骨文“五期”分法和“十项标准”以后，才奠定了甲骨学方法论的科学基础。可惜无人对此作较为全面而系统的总结。近年出版的一些概论性著作，开始涉及甲骨学方法论的问题，可惜或过于简略或缺乏系统性。王宇信的《甲骨学通论》一书，不仅叙述了甲骨学的定义和研究对象，全面地介绍了甲骨学的基本规律和研究课题，还系统地总结了前人的治学经验，提出了甲骨学的科学方法论，诸如在甲骨的整治与占卜，甲骨文例分析和卜辞分期断代，甲骨卜辞的校重、辨伪、缀合等方法，以及如何利用甲骨文研究商史等方面，都在前人研究的基础上论述得比较详细和透彻。由此可以看到甲骨学已是一门举世瞩目的独立学科了。同时，由于此书深入浅出地阐明了甲骨学的基础知识和方法论，无疑揭开了它的神秘的外衣，为初学者指明了一条进入甲骨学殿堂的捷径。著名甲骨学者李学勤在该书的序言中曾强调说：“《甲骨学通论》一书的出版，肯定会把更多的新生力量引导到这个园地中来。”也就是说，此书出版的社会效果之一，是将造就更多的甲骨学者，并为其提供一本资料丰富的入门读本。

其次，近几年来出版了几部甲骨学综合性学术著作，诸如吴浩坤、潘悠的《中国甲骨学史》、王明阁的《甲骨学初论》和范毓周的《甲骨文》等书，从不同角度去阐述甲骨文研究历程和学术成就，都有较高程度的学术价值。然而，王宇信的《甲骨学通论》却是迄今出版的综合性学术著作中内容最丰富者。著名甲骨学家胡厚宣在为该书所作的序中指出，此书“从发现到研究，从卜法到书例，从断代到分期，从辨伪到缀合，从文字到历史等方面，无不全面论述。并论及近年周原新发现之西周甲骨，亦颇详赡，全书达五十余万字，煌煌巨制，真可谓‘后来居上’者矣！”由于此书充分体现了90年来甲骨文各方面的重要研究成果，其中包括港台地区外国学者的部分成果，使它成为甲骨学集大成的学术著作。这是该书又一特色。对于初学者，一册《甲骨学通论》在手，便可知甲骨学之要津。即使对有较高专业水平的学者亦不失为一本通览甲骨学全局的重要参考书，通读此书便可充分了解甲骨学当前研究的状况和存在问题，使自己更明确研究方向，以避免个人治学失之偏颇。而且此书后附录的甲骨学大事记和详备的论著目录，又是研究中索隐的良好工具。

第三，《甲骨学通论》对甲骨学的研究成果，坚持科学的严谨态度，对前人和今人的研究成果一样十分尊重，绝不任意褒贬，做到汲取精华，保留歧见。例如对甲骨文分期断代这个重要问题，存在着几种不同的学术观点，该书作者不是主观地择其善者而从之，或者是一概否定而自立新论，而是把董作宾、陈梦家、胡厚宣、李学勤等人歧见骈列，以两大章的长篇幅逐一讨论，比较其优劣，采撷众长，提出自家观点，使甲骨文的分期断代更符合科学性。当前有一些学术著作就相形见绌，无论对前人和今人的研究成果，不是求同存异，而是肆意褒贬，各取所需，这种态度是不可取的。在这种情况下，更觉得此部《甲骨学通论》在对待学术问题上充分发扬了百家争鸣和百花齐放的方针，从而使该书反映了当代甲骨学研究水平。

第四，甲骨学理所当然包括西周甲骨。殷商甲骨文和西周甲骨文既有密切的关系，又因时代不同而各具特色。西周甲骨的研究，迄今仍是甲骨学的一个新领域，涉足者寥寥无几。近几年出版的甲骨学概论一类的著作几乎亦无涉及。王宇信于1984年曾出版《西周甲骨探论》一书，今又在《甲骨学通论》下篇中将其精华部分加以移入，并专章论述周原出土商人廟祭甲骨，使该书作为通论更加具有特色。王宇信对周原出土的商人庙祭甲骨和西周甲骨分期有自己的见解，特别是他从王字字型变化和甲骨所载的史迹判别西周甲骨的不同时代，从而把西周甲骨三分为文王时期、武成康时期和昭穆时期。

此外，甲骨书法和契刻特点也是甲骨学的一个研究课题。近年来，我国书法界掀起一股“甲骨书法热”。为了使甲骨书法爱好者更准确地把握甲骨契刻和书法特点。《甲骨学通论》在末章专门谈论《甲骨文与甲骨书法》的问题。它将在一定程度上促进甲骨书法的发展，使甲骨学界以外的广大群众能够正确认识和欣赏甲骨文，这对于发扬这份祖国珍贵的文化遗产不无积极的意义。

（原載《中國史研究動態》1990年第7期）

评介新近出版的两部甲骨学巨著

王蕴智

近几十年里，从传统国学中又派生出一门新的学科——甲骨学，它研究的对象是我国目前所能见到的最早的古籍材料殷墟甲骨刻辞。这些刻辞内容丰富，数量极多，被誉为国之瑰宝。

由于甲骨学年轻，大量的资料整理与研究工作尚存在空白。国内专业人员有限且分散，不能将人力物力精中于有效的基础研究之中。不少学者常常不得已而只做些重复琐碎的资料性工作，影响了整个甲骨学的发展速度和深度。

及时地将大量分散的、有关甲骨学的研究成果加以系统的总结与整理，以适应专业人员深入研究的需要，利于更大范围的非古文字专业人员充分使用这批材料，成为甲骨学界亟待解决的问题。可喜的是，中华书局新近出版了两套甲骨学巨著：《殷墟甲骨刻辞摹释总集》（以下简称《总集》）和《殷墟甲骨刻辞类纂》（以下简称《类纂》），基本上满足了学术界的渴求。这两部书作为吉林大学古籍研究所的丛刊之五和之七，由著名古文字学家姚孝遂先生（主编）和肖丁先生（副主编）主持编纂。两部书近千万字，均为精装八开本珂罗版。《总集》分上下两册，首先于一九八八年二月出版发行，一九八九年一月，三巨册的《类纂》亦相继问世。这两本大书一出版，即赢得学术界的高度赞誉，受到海内外读者的青睐。

《总集》是一部兼顾古文字与非古文字专业人员使用的大型资料工具书，其编写体例大致可以分为两个内容。一是摹，即对现已著录的全部甲骨文资料进行分条摹写。在技术处理上既能精细不苟，忠实于原契，又能做到形体清晰，一目了然，这是一项最基本的文字整理工作。其次是释，即对原文加以释读。书中的每条摹写辞句下均附加释文，读者可以通过隶定文字直接了解文意，并可由此比照契文。《总集》的上册对《甲骨文合集》（以下简称《合集》）一至八册进行了摹释，下册除《合集》的九至十三册以外，还摹释有《小屯南地甲骨》、《英国所藏甲骨集》、《东京大学东洋文化研究所藏甲骨文字》和《怀特氏等所藏甲骨文集》，总计摹释甲骨刻辞52486片。本书在每条摹辞之上还一并注有原书著录号，以便于读者查索原片。

鉴于上述编纂特点，《总集》自然也就带有它独具的，在它以前任何一部甲骨学著录书所不能取代的成书特色，其可贵之处有三：

一、《总集》把卷帙浩繁的甲骨刻辞材料集中起来，尤其是汇集了如《合集》和《小屯南地甲骨》等大型著录书，为专业人员提供了较为完备的原始资料。他们若有《总集》在案，即可免去过多翻检与摹写资料之苦，必要的话，还可依据著录号核实原拓，使用起来甚为方便。此外，该书也为有关学科的人员解决了释读障碍，为不精甲骨文的同志能够充分利用原材料创造了条件。这样无疑将会拓宽甲骨学的研究领域，更大程度地开发甲骨刻辞的潜在价值。

二、资料的基础整理反映出实事求是、刻意求真的态度。《总集》的摹写部分是一个工程浩大、异常繁复艰苦的劳动过程，编者并没有简单、草率地从事其事。浏览全书即可发现，所有摹辞均端庄秀丽，峻挺如契，字有距、行有列，如出一人之书法，编纂者整齐的阵容及非凡的功力由此可见一斑。不但如此，深入细致的资料整理工作通过字里行间默默地透露出来。比如《合集》第十三册摹本中不少片子与《英国所藏甲骨集》重复，编者便根据后者的拓片在摹写中一一加以校订。原摹的乖误之处，《总集》则尽可能对照拓本补正。又如不少甲骨原片中本来就有误刻字、衍文或一字两用等现象，对此该书虽仍照摹原篆，但均在衍、误和一字两用字之右旁标出小三角符号，以提醒读者留意，并在释文部分予以更正。如《合集》第一册334片有“于庚宗于羌卯二十牛”一辞，其中第二个“于”字系记数字“十”之误刻，此可由333版同文辞例作参证，故摹写时在该字右注明三角符号，且于释文中正之。至于对原字形残泐或缺笔画之现象，编者也在摹篆时尽可能地加以补足。若原拓确有不清之处，则在摹篆之右加小问号。如《合集》第二册3101片有辞为“示子丁于母庚于帚……”，因后一“于”字下残缺，“帚”字隶定有疑，故于右旁加注问号，释文处也一并附加问号，以示存疑。

三、释读工作谨严认真，字形把握准确有据。吉大古文字学者向来有字形结构研究的优势，具备扎实的文字形体基本功训练，故在该书的编纂释读工作中，他们能够明察秋毫，充分发扬自己的长处。例如《甲骨文编》“兄”、“祝”字不分，而卜辞中从口从卩之字确为“祝”而非“兄”字，《总集》释文对此均作了正确隶定。又如卜辞中有“幺雨”、“幺用”等辞，实与“兹雨”、“兹用”之辞例无别。“幺”为“丝”之省形，借为“兹”，《总集》对此皆释作“兹”，是正确的。此外，《总集》还能够充分吸收现有的甲骨文考释成果，并根据自己的见识作出恰当的择断。如对于学术界的新释字形“畀”、“童”、“豹”、“必”、“翦”、“熊”、“智”等，均可在释文部分得以体现。

《类纂》是《总集》的副产品，然而却是一套用途广泛、实用价值甚高的综合工具书。它犹如古典文献整理研究中所作的“引得”，把甲骨文字形体与刻辞内容紧密结合起来，以字体带辞例，为甲骨刻辞资料的检索提供了极大的方便。六十年代，日本学者岛邦男博士曾花十年功夫编成《殷墟卜辞综类》（以下简称《综类》）一书，率先将甲骨文辞例用原篆摹出，按字头分类编排，并首创据基本字形编排索引的方法，倍受甲骨学界的推崇。只是因受甲骨文材料来源及甲骨学研究水平的时代限制，此书已不能适应当今甲骨学研究的需要。

《类纂》不但在编排体例上补苴《综类》，而且对《总集》所收原始材料又进行了深入地整理与研究，因此在材料的取舍与判断、字形的辨识与分合等技术问题上均达到了新的高度。《类纂》的问世已足以取代《综类》，其优处大致有四：

一、材料来源丰富，辞条分类精细。《类纂》的材料来源直接取自《总集》，其内容之丰，这本身就令人鼓舞。在此基础上，编者又对所录资料加以综合、排比、分类和取舍，分别将有关辞条罗列于单字之下。单字之下还可按常用语再分子目。这样虽说《类纂》之体例与《综类》相仿，但就材料的搜集与整理而言，二者已差别不小。如《综类》“食”字收辞四十七条，其中子目含“有食”、“大食”、“其他”等三类；而《类纂》则收辞六十条，其

中含“有食”、“大食”、“食日”、“其它”等四类子目。“雍”字下《综类》含辞四十二条，没有子目；《类纂》则收辞八十七，其中含子目有“雍刍”、“子雍”、“田雍”、“进雍”、“其它”等五类。

二、审定部首，把握基本形体。《类纂》效仿《综类》，也以部首系联单字，然《类纂》对部首的审定则后出转精，更趋合理。《综类》立部首一百六十四，在分部的标准上，尚有未贴切之处，而且其部首表的排列次序与书内的次序多有出入，在一定程度上还受《说文》部首排列的影响。《类纂》完全根据甲骨文形体结构的特征，将能够独立存在的基本形体立为部首，共分部一百四十九，对《综类》部首进行部分调整和删减。如取消变体分化字“旬”作为部首，而另立“云”部；又如将“臣”并入“目”部；“㠯”为“以”之简体，不符合立部标准，故并入“以”部。诸如此类，表现出编者对甲骨文形体的通谙和以形归部类的总体原则。

三、广搜字头，据形系联。《类纂》将散见于甲骨刻辞材料中的原篆在予以编号后一一罗列出来，按部首类别和一定的次序进行系联，共收字头三千五百四十七个（不包括合文）。在每一字头之下，该书往往又排出同字的诸种异体，这样，其字形总数实际上已超过四千。仅此一指标就堪称甲骨文字之集大成者。当然，在每一部首之下，所列字形亦较《综类》齐全，且可信度高。如《综类》之“允”字列入“人”部检索，而字形辞例却置于“人”部异处；“才”为“伐”之简体，本应放“伐”字下，却入“方”部；“巳”与“它”本为两字，却混淆不分。象这种错误，《类纂》均作了合理调整归类与释读，从而真正做到了以类相从。另外，《类纂》还对异字同形、文字分化等特殊现象作了必要处理。如“吕”和“雍”字初文甲文有时不分，编者便根据辞例而加以区别；“晶”、“星”本为一字，“星”乃“晶”之分化，为照顾部首归字，“晶”入日部，“星”入生部，而把“晶”的原篆隶作“晶”、“星”，并于索引处注明“晶”、“星”二字参见页码，妥当解决了文字形体的分合与类比。

四、摹释结合，检索方便。《类纂》正文除上述特点外，一仍《总集》之体例，包括摹与释两部分，释文之下还注明各辞条的甲骨文分期，不论是古文字专业人员与否，用起来都很便利。在全书之末，编者又特意作有部首、笔画和拼音三种检字索引，这对读者来说，也是一个不小的方便。在此之前，古文字工具书多使用笔画索引帮助检索，而古文字的某些形体常采用隶古定的办法、笔画多少不易统一，读者往往因索字而产生苦恼。《类纂》三种索引并举，寻检常用字拼音索引最为便当。凡知道古文字结构特征者，查部首索引也甚简便。如“新”字由“辛”和“斤”两部分合成，在“辛”或“斤”部字下均可检得。同样，其它合体字如“射”在“弓”或“矢”部，“启”在“户”、“口”或“又”部也能兼得。一旦可以确定字形笔画，则利用笔画索引也能达到目的。

《总集》和《类纂》的一举成功是编者数年来呕心沥血、辛勤耕耘的必然结果。当然，学术专著尤其是规模宏伟的巨著并非一定是尽善尽美、巧夺天工之物。《总集》和《类纂》的欠缺之处也在所难免。如《总集》和《类纂》收集了国内外出版的所有大型著录材料，却并未能把全部殷墟出土的甲骨刻辞材料包揽无遗。其中有些是出于个人收藏或没公开发表的，有的则是海外如法、美、澳、苏等国已发行的甲骨集而未加以录用的。尽管说索取这部分材料比较困难，然而最终未收入《总集》和《类纂》亦令人遗憾。另外，《总集》和《类纂》虽标明了《合集》所见辞句的著录号，但并未注明《合集》见于其它著录书的编号。这样就不便于读者核对《合集》以外的诸种甲骨专著。再者，由于时间紧张和条件所限，编者在摹写过程中未能及时核实重见于各种著录书中的拓片，这也是美中不足。因为重见的辞句有清有浊，只有互相比照诸原拓，摹释误差才能降到最低程度。在缺少参考系的前提下，势必会造成对某些漫漶不清之辞产生误摹的可能性。

在释读方面，个别字形的隶定也有疏漏之处。如《合集》18457和18458片有从斤断草之“折”字，《总集》释文误隶作从木从斤之“析”字；《合集》19682片有“贞惟…矢呼”一辞，《类纂》“矢呼”二字误隶作“天矢”。对于某些字形的考订，似也有可商之处。如《合集》846片“勿皋年于甫土”之“甫”，或应隶作“邦”字为妥；《合集》34102片“丁丑贞皋其㮚丁”之“㮚”，似可释为“即”字，表示饗祭之义。

此外，《总集》和《类纂》还存在编纂仓促失误之例，如“星”字条下遗漏有辞条，《合集》11500正、11501片内均有从晶生声之“星”字，而《类纂》未列入生部“星”字条下。又如在《类纂》拼音索引里，“Qi”音下有两个“靳”字，其中一个当隶蕲字，与“靳”同字；“sheg”音当作“shen”，与“申”、“身”等字音同；“辰”字见于p441，而索引处写作411，诸如此类，都是不该出现的疏忽。

（原载《古漢語研究》1990年第2期）

胡厚宣氏的商史研究—甲骨學商史論叢

（日）白川靜

上篇

這回，我的研究室得到了胡厚宣氏的《甲骨學商史論叢》（初集四冊二集二冊）・初集在四四年三月，二集在四五年三月，列為齊魯大學國學研究所專刊之一出版的，儘管刊行已經很久，可是一直未能傳到我國・當時，國都遷於重慶，重要的文化機關也幾乎集中蜀地，這部書在成都僅僅印了二百部・初集付印於四二年八月，一年半後才得以問世・由於該書常引見於戰後中國人的著作中・胡氏後來的若干新著也傳來，所以據以知之，但至今未聞該書傳入我國的消息・因此我的書說不定是首次得到的了。同時，由於十年之前祇裝訂二百部・所以今後已不容易獲得。總之，因書的稀少而把它的內容作一廣泛的介紹，不謂無義・故寫下此文・在我的書裡，尚有一些丁山氏的眉批。

著者胡厚宣氏，最初在中央研究院歷史語言研究所協助董作賓氏發掘和整理甲骨文・由於戰亂的不幸，一時流亡昆明，後至成都，任齊魯大學教授。《甲骨學商史論叢》在那時已脫稿，好像受到顧頡剛、錢賓四、郭鼎堂、商錫永、徐中舒、丁山和陳夢家各位名家的商討和推薦・「論文二十篇，都三四十萬言」（初集徐中舒序）的這部書，若說確立了胡氏作為卜辭研究家的牢固地位，似乎不過言。可以說，甲骨學自孫詒讓以其淵博學識創篳路藍縷之功，羅王董郭四家建其規模・如今羅王已故，董郭兩氏在研究中也處於困難很多的情況下，值此時際，胡氏在中共領導下成為甲骨學界所謂第一人者。所謂「堂堂堂堂，郭董羅王，觀堂沉淵雪堂化，彥堂入海鼎堂忙・……君不見胡君崛起四君後，丹甲青文彌復光，鳥籀遺體奚足數，史巫紛若不難詳……」（《戰後南北所見甲骨錄》，陳子展題詩），未必是溢美之辭。猶如徐中舒氏視王董胡三人為甲骨學的正系一樣（《論叢》序）。據胡氏自序說，他幾乎網羅了所有卜辭的材料，再者，胡氏親自揣摩過的甲骨也在七、八萬左右，自藏摹本也有一萬五千片以上（《五十年甲骨文發現的總結》，六二頁）。現在已知的甲骨文凡十六萬片，因此有一半已為胡氏所過目。在卜辭的學識上，如今要達到胡氏那樣，殊非易事。

胡氏的卜辭研究，是以利用自己整理的資料為主，加上過去著錄的，在實證方面是極具特色的。這部書的高亨敘認為，胡氏的學風大致有五端，一取徵甚詳，二立論不苟，三匡正舊說，四創獲新義，五證實古書・這五端確可反映胡氏的學風，全無一般史家通犯的標新立異和搜拾證漫論的弊病・不過這樣的學風同時也容易停在資料表面的處理上，這是未必可以否定的一般缺陷。當然兩全其美就象揚州鶴的故事・所以我的意思不是求全於一人，只是說說學風的傾向。

下面根據胡氏自編《五十年甲骨學論著目》，列出他的主要成果。

編著書

甲骨年表　一九三七年，董作賓共編・中央研究院歷史語言研究所單刊乙種之四

○甲骨學商史論叢初集　一九四二年八月付印，一九四四年出版・齊魯大學國學研究所專刊之一

總目：陳序（本書無）、徐中舒序、高亨序、繆鉞題辭（目次無）、自序、

殷代封建制度考、殷代婚姻家族宗法生育制度考、殷非奴隸社會論、殷代焚田說（以上第一冊）；殷代舌方考、殷代之天神崇拜、殷代年歲稱謂考、一甲十癸辨、甲骨文四方風名考證、論殷代五方觀念及中國稱謂之起源（以上第二冊）；卜辭下乙說、殷人疾病考、殷人占夢考、武丁時五種紀事刻辭考（以上第三冊）；殷代卜龜之來源、卜辭地名與古人居丘說、釋死、厦門大學所藏甲骨文字、讀曾毅公君殷虛書契續編校記、甲骨文發現之歷史及其材料之統計、引用甲骨文材料簡名表（以上第四冊）。

○甲骨學商史論叢二集　一九四五年三月．成都．齊魯大學國學研究所專刊之一。

總目：自序、卜辭中所見之殷代農業（以上上冊）；氣候變遷與殷代氣候之檢討、甲骨學緒論、甲骨學類目（以上下冊）。

○古代研究的史料問題　一九五〇年六月．上海商務印書館．正文八一頁。

○五十年代甲骨文發現的總結　一九五一年三月．上海商務印書館．正文八五頁。

○五十年甲骨學論著目　一九五二年一月，上海中華書局．正文二七三頁。

著錄考釋

甲骨六錄　一九四五年七月．成都齊魯大學國學研究所專刊之一．一冊。

戰後平津新獲甲骨集　一九四六年五月．同上．二冊。

戰後殷虛出土的新大龜七版　一九四七年二月．上海中央日報文物周刊廿二—卅一期。

○戰後寧滬新獲甲骨集　一九五一年四月．北京來薰閣書店．二冊。

○戰後南北所見甲骨集　一九五一年十一月．同上．三冊。

論文

殷商文化叢考　一九三三年六月．北京大學新夢一卷五．六期。

釋牢　一九三九年十月．中央研究院歷史語言研究所集刊八本二分。

○卜辭雜例　一九三九年十月．集刊八本三分。

釋兹用兹御　一九四〇年．集刊八本四分。

甲骨文所見殷代之天神　一九四一年十一月．成都齊魯大學責善半月刊二卷十六期。

甲骨文中之天象記錄　一九四一年十一月．同二卷十七期。

卜辭零簡　一九四一年十二月．同二卷十八期。

甲骨文四方風名考補證　丁聲樹共著．一九四二年二月．同二卷廿二期。

甲骨學概要　一九四三年一月．大學二卷一期。

關於殷代之氣候　呂炯共著．一九四四年，齊魯大學學史叢刊第一期。

論殷卜辭中關於雨雪之記載　一九四五年八月．學術與建設第一期。

○卜辭同文例　一九四七年九月．集刊第九本。

○卜辭記事文字史官簽名例　一九四八年一月　集刊第十二本。

總覽以上論著目，可知胡氏的研究精華幾乎盡收在論叢初集二集中。現在擇其重要內容作一介紹，同時附上若干私見（有○者為本研究室藏本）。

先談談胡氏論叢中有關政治、社會的《殷代封建制度考》、《殷非奴隸社會論》以及《殷代舌方考》三篇。

《殷代封建制度考》

這篇論文由一引言、二諸婦之封、三諸子之封、四功臣之封、五方國之封、六其他之侯白、七封建侯白對於殷王之義務、八五等爵之來源、九畿服說之成變、十結論組成。

一封建之制已通行於上古的夏殷之際的說法，除有《史記．陳杞世家》的「滕薛騶，夏殷周之間封也」外，還見有《五帝本紀》和夏殷周各本紀，但這些文獻的時代過晚，難以憑信為三代古史。近世王國維《殷周制度論》，舉出周制異於商的封建和廟數之制及同姓不婚三者，說這正是周所以綱紀天下的原因，認為其中的「君天子臣諸侯之制」即封建制，是從與宗法喪服之制相關聯的封建子弟中產生的，同時把這些說成是「周公制作之本意」，「欲知周公之聖，與周之所以王，必於是乎觀之矣」。本來文化和制度是經歷了長期的沿革而成立的，就很難說是某人的獨創或一代所固有。王氏所謂喪服和廟數之制，都不過是後世儒家的附會託古之談，猶如封建之制，遡其源，至少上及殷高宗武丁世，當然難以遽信是周公的獨創了。

二武丁時代為妃的諸婦受有封地食邑，有貞卜其地受年受黍年的。帚妌、姐、帚好都是武丁妃，妌位於河內平皋縣邢丘，好、姐兩地今不可考，它們大概既是姓又是地名。武丁之妃凡六十四位，失寵者不全在宮中，或封之某地，祭祀、征伐、往來出入，與親信的使臣無異。

三武丁的諸子也有分封，有貞卜子畫、子宋、子奠、子務（嫐）、子漁等人往來、乎命、受年等，可以認為都有所封。子奠還稱侯奠（林二．七．二）。

四還分封功臣，武丁時的猛將中有一位名沚戠，有許多貞卜其亡禍、往來、令以、征伐的辭例，常常從王或婦好征伐舌方和土方等。尚有望乘、侯虎，也多從事征伐，與沚戠鼎足而三，是捍衛王朝的武臣。沚地位於殷西或西北，與土方、舌方相接。所謂沚戠再冊，是稱冊受命之意，由於有謂白戠（天九〇）的，故他還被封為伯爵。武丁的使臣有雀，有貞卜其戋、死、行止、田獵、祭祀、叶王事、受年的辭例。由於有伐祭、亘、犬、戉、羌者，故其地位於殷的西方，大概是在山西汾水流域界休縣西南的雀鼠谷。也有稱侯雀（甲四四〇）、雀男（林二．二二．一二）者，前者為武丁時，後者為武乙文丁時，似乎最初為侯，後改封為男。另有亘、旨以及西吏、北吏、我吏等人，都勤勞王事，但旨方似乎在武乙時成為勁敵，有「乙酉卜，旨方來，告于父丁」（甲八一〇）的刻辭。帝辛時有攸侯喜，當王征夷方時，攸又是駐紮地。攸大概在鳴條，位於東夷，事見《孟子．離婁篇》。

五卜辭又有記分封方國者，武丁時井方與王室相往來，被稱為井白（善齋藏）。後為周所滅，其遺民和土地被分，可見周公𣪘、大克鼎、散氏盤等銘，故其地大概在散關以東，岐山以南的渭水南岸。虎方也是武丁時屢遭殷王征伐的方國，單稱虎（契四一六），又稱侯虎（菁七．一）。由於有與沚戠一起從事征伐的辭例（鄴下三五．二），故後來或受殷的分封而成將官。鬼方見《易》或《詩．大雅．蕩》，是靠近羌的方國。易與鬼方一地，後附於殷，當了易白，被動員去征伐東方的夷方。犬方初為殷敵國，後又從多子族勤勞王事，稱作犬侯，有貞卜其受年的辭例，由於有記伐周之例，故其地位於周的附近　大概古稱犬邱的右扶風槐里是其所在地。周是殷西北的勁敵，記征伐周的卜辭較多　但由於有言周侯，帚周者，故知周受過殷的封冊，通過婚姻。到帝乙帝辛時　屢次發動孟方夷方的征伐，但又有稱孟方白、夷方白者。

六還有一些別的爵號，若列出可用鉛字表示的一批，有武丁時的示侯、丁侯、示

侯、伊侯、先侯、斷侯、侯光、侯唐、侯專、侯告、雇白、歸白，祖庚祖甲時的攸白、武乙文丁時的敉侯，帝乙帝辛時的㠱侯、侯給等，凡三十九位侯白男。

七土地所有制的形態，或本屬國家的土地，經過王的分封，歸了封建侯白；或本為諸部族國家所有的土地，被王承認其領有，不論何種，封地都可看作諸侯的領地。卜辭「沚戠告曰，土方正於我東鄙，戈二邑，舌方亦侵我西鄙田」，「……妻安告曰，土方侵我田十人」，辭中的「我」都是告者，不是殷。可以認為，土地私有是儼然存在的。

封建諸侯對於殷王的義務，大致分為一防邊，二征伐，三進貢，四納稅，五服役。關於進貢，甲橋刻辭記貢龜者很多，另外侯家莊大墓出土的骨笄，上端刻有「㠱入二」，是知也為貢物。所謂告麥是把麥的豐稔來告於殷王，大概豐稔是納稅的基準。由於「辛丑卜㱿貞，帚妌乎黍於商」（續四．二六．一）中的商是王畿之地，故這條卜辭是帚妌為王率眾人服役於作黍，這可以解釋成諸侯在其國外有為殷王耕作之義務。

八殷的封爵為帚、子、侯、白、男、田六種。帚者王婦，子者王子。侯者射侯，伯者伯長，侯白者皆任征戰。男為耕作，田為種稻穀之象形，又皆與農耕相關。因為男、田同義，所以想是一字的演變，武乙文丁時寫作男，帝乙帝辛時則寫作田。侯、白也是同義，子宋可稱宋伯，子奠可稱侯奠。帝乙帝辛時所謂「多田」（與）多白」，是子帚之外的兩系諸侯。大盂鼎的「殷邊侯甸」，《尚書．君奭》的「小臣屏侯甸」亦同。侯白以軍事為初誼，男田以農耕為初誼，但兩者之間却沒有嚴格的區別，雀侯有田事，田某也可以有征役。至武乙文丁時，出現了三公多公等公的稱謂，但是公不過是對先祖的稱謂，是受祭的對象，而不是爵號。侯白子男未必為足稱，即使到春秋時代也還是如此。可以說，它們是古代國君的通稱，既非爵祿，也不表示等級。

九殷代畿服為侯田兩服，相當於上述的多田與多白。由於令彝云：「侯田男，舍四方命」，故周代除侯田外，大概又增設一個男。《尚書．顧命》則云：「庶邦殷侯田男衛」。至後世盛行五行思想，侯服甸服之外增有賓服要服荒服而成五服，又更演為六服、九服和九畿諸說，然則都不過是戰國末期的說法。

＊胡氏的這篇論文，達四十葉，是一萬八千言的長篇，引用卜辭也在四八九例以上。自卜辭之出，以其資料綜論古代封建制者，起自王國維《殷周制度論》，繼有傅斯年《論所謂五等爵》（集刊第二本一分）、董作賓氏《甲骨文斷代研究例》（慶祝蔡元培先生六十五歲論文集上冊），《五等爵在殷商》（集刊六本三分），以及郭沫若氏《金文所無考》（金文叢考）等，不過董氏的後一篇論文是根據胡氏整理的資料而成。胡氏此文是接觸大量甲骨文後，傾自己學識的力作，較過去的封建制論更為詳審，但還不能說沒有問題，若說的話，那麼現階段祇是把問題提出而已。如今無暇詳論，因此就談談一二私見，詳論還有待於他日。

在第二項，胡氏舉出的五十五國中有子帚的封國八，胡氏把這類子帚都說為武丁的婦子。把出現在卜辭中的子婦都看作武丁的婦子，是郭沫若（《骨臼刻辭之研究》、董作賓（《甲骨文斷代研究例》）兩氏以來從無異議的通說，胡氏的這部論叢也始終採納了該見解，但是其中恰恰有不合理處，因此我在《殷的王族和政治形態》（古代學三卷一號），提出它不是特定的王之婦子，它與別的親族稱謂一樣，是類別稱呼，同時還涉及到其政治形態的關係。雖然子某的封國後以該族的雄藩支配着殷的政治，但是婦的封國並非如胡氏所說，為失寵婦人領有，倒不如說原本就出自婦自家的領地。就象馬利諾斯基列舉的脫洛普利安特部族一樣，婚家要向酋長貢納土地，這不是一種聚族婚姻的形態嗎？因此帚妌因出自井方而嫁到殷室，嫁時從井接受封地，並非得到別的食邑。所謂「帚妌伐龍方」，說明其籍近西土，而不是表示她得到了靠近西土的封地。況且從別處得了封地，而只貞卜沐邑地的受年，或者象帚好那樣，只從自己的沐邑征募幾千眾，這不是不近情理的嗎？所謂失寵婦人封之某地的解釋，不能說是圓滿的。

在第四項，作為功臣之封列出了沚戠、雀、亘、旨、攸等，但他們裡面是否有出自殷王室的人呢，譬如雀大概即是王室所出，對於這些豪族，我將在他稿論之。如果比較甲骨文和金文，那麼旨方應釋召方。現在的甲骨文學者將召的繁文均釋召，而把武丁時的召毫無疑義地釋為旨。我認為，用繁文是在殷末以後，金文也據繁文。召方可稱西吏召（乙四五三六），即後來召公的方國，其地望即使考察其他的有關卜辭，也不會有什麼抵觸處。然而這也有待他日詳論。

已經如胡氏封建制論一文中在各個分節所述，如今史家作為問題提出的封建制的社會史定位，就完全不成其為問題了。然儘管具備豐富的資料和穩健的論斷，如果有慊他的說法，那麼首先這點大概是最大的原因。中國封建制的問題，在一部份想把社會發展階段公式化的論者之中，是甚感困惑的。如郭沫若先生，同時視殷周為奴隸制時代，而對於周代極其顯著的某種典型身份的階層制，却全然無視，事實上是沒有從正面深入對待周代封建制的問題，即使說這不可能明瞭殷周史也不算過言。由部族國家向大一統發展的過程中，把別的部族國家逐步置於自己屬下，其結果在政治方面逐漸採用封建制的形態，這是極為自然的發展。胡氏以分封和服屬來考察封建制的成立，據軍事和農耕來推測侯甸等爵號的來源，也成為研究周代封建制時的很好參考。胡氏此稿，儘管這方面的處理是有限的，也還有可議處，但是在資料上，他把殷代政治形態方面能够找到的卜辭種類，可說是一應搜集了。

《殷非奴隸社會論》

主張殷代社會是奴隸社會說的學者，多依據了對於奴臣僕妾等文字的解釋，但是從這些字義是不能證實奴隸社會說的。羅氏解釋的奴是個從女從力的嘉字，意思是生男孩。又如卽或婠字，王襄讀值，羅氏釋為僕豎，但它是墐即艱的借字。同樣釋為奴隸的臣字，實是官名。婐、妌、好、嬉都是人名，是武丁的配偶。妃也是人名，叫靈妃。妾與妻同義。僕字在卜辭僅一見，尚不能確知其義。俘是戰俘，古今通義，故不成為奴隸社會的證據。奴隸制問題，主要的考察點之一，乃是所謂奴隸是否從事農耕或戰爭。

卜辭有「奚小耤臣」，或謂之農奴。奚貢納龜、主持祭祀、出入征伐、戍衛邊防等，是參預內外大事的王的親信，其地位甚高。且小臣一職，若以卜辭金文言之，是位居王左右的高官。奚以小耤臣之職位居王左右，大概担任過農官要職。所謂「奚氏射」、「奚氏王臣」（氏即致），是射或王臣從奚執事，因此把他釋作農奴甚為無稽。

卜辭有「王黍」「帚妌黍」，這並非意味了王或帚妌直接從事農耕，如「戊寅卜㱿貞，王往氏眾黍於冏」（前五．二〇．二）、「乙巳卜㱿貞，王大令眾人曰，劦田，其受年。十一月」（前七．三〇．二）、「貞傳小臣令眾黍。一月」（前四．三〇．二），是王和小臣領導監督眾，使眾農耕。另外殷代從事軍事者，是在王、帚某、子

某、侯白、戉吏，將官等統率之下出動的師或旅，戰士稱為旅、人、衆、衆人等。就是說，殷代的軍事和農耕是由衆和衆人担負的。衆在《尚書・盤庚篇》凡十二見，從王把遷都一事諮詢於衆看，知衆是國家的主要成員，故他們是自由公民。因此衆的得喪是個重大的問題，卜辭有言「其喪衆」「不喪衆」的。《孟子》云：「鄰國之民，不加少，寡人之民，不加多」，是其意。

殷代不是奴隸社會，但固然存在着奴隸。卜辭中人祭之辭甚多，出、又、用、御、彳、酒等皆祭名，登、歲、伐等是用牲之法，而以伐的例子為最多。得知其數者達七百三十六人。伐字象以戈砍杀人頭之形，殷代銅戈銅斧上或金文中有同類的象形字。從殷墟發掘到的人頭葬和無頭葬，都是這種伐祭的遺迹，其中一部份人大概是戰俘，由於卜辭言獲羌、伐羌者最多，所以西北羌人也最多的被用作人牲。

一九三四—一九三五年，中央研究院發掘了侯家莊西北岡九座殷王陵，接着，一九三六—一九三七年，在小屯殷代宮室宗廟遺址附近發現了四百十六座墓葬，大多伴有殉葬者。這些必是人祭的遺迹，其無軀或無頭者，或是伐祭人牲。無論人祭人殉，從其殘酷程度推之，至少其中大部份是奴隸，它的來源是戰爭的俘虜。

一九三九年殷墟出土的「玉人頭」落入北平商人手中，高約一寸五分，徑圍約如拇指，頭頂髮紋歷然，呈圓狀，其樣子很象清人的辮髮，不同者只是清人的辮髮是從頸部編起，而它是從頭頂部編起，並且僅垂到頸部，沒有清人的長。中央研究院發掘所得的俑也有類似的情況，這相當於卜辭中象提辮髮之形的奚字。因為殷代的貴人都蓄髮施笄飾，此點從皇字之形也可證明，所以大概奴隸是以留短辮相區別吧。

殷代雖然存在奴隸，但是作為社會生產的主要階層的奴隸是不存在的，因此不能由此而論奴隸社會，農業也罷，軍事也罷，均以自由民担負的殷代社會，是絕然異於希臘和羅馬的奴隸社會的。

＊殷代奴隸社會說，以郭沫若《十批判書》（一九四五年），《奴隸制時代》（一九五二年）為主，近人編成的古史多據其說。吳澤《古代史》是其代表作，胡氏近年著有《古代研究的史料問題》（一九五〇年）一書，對之作了徹底的批判，也涉及到奴隸制的問題。胡氏的立場，與本論文全同，顯然，他的說法後來並沒有改變。

奴隸制論者列舉的少數文字，怎麼也不能證實奴隸制的存在，這是胡氏的立論。不過他在論述中舉了「奚小耤臣」，把奚與小耤臣當作同位語，以此推斷小耤臣的地位，然而，「奚小耤臣」不是同位語，它類似「子弓臣」（後下三二・二）、「子效臣」（鐵一七五・一）、「帝臣」（後上三〇・一二），是「奚之小耤臣」之義。如果是同位語，則似應按「小臣中」（前七・七・二）、「小臣妾」（粹一二七五）、「臣祉」（乙六九六）的語法言之。我想，奚或許是殷同族的雄族之一，這有待將來詳論。耤臣是農官，是派遣到王室所屬農耕地的邑去的官。從事農耕或征戰者是衆人，他們無疑是自由民。

胡氏就奴隸身份列舉了奚和羌，據遺物玉人和俑而注意到奚是有辮髮的奴隸，這是饒有興味的事實。羌字在二、三期以後也多從糸，不同樣是編辮髮者嗎？如果把所供用的人牲看作奴隸，那麼除了胡氏舉的奚、羌外，還有艮、夷、南，奚象躓踣的女子，有加伐形者，夷字也有在其首附加橫向的長髮之形，有關艮和南的辭例是相當多的。

關於侯家莊殷王陵和小屯許多小墓，特別是裡面的許多殺殉，是據郭氏《十批判書》和《奴隸制時代》漸知其梗概，在這之前，就是這本書大略所記述者。由於彼此間交通阻絕，十多年中如此令人瞠目的事實連個簡報也得不到，不能不為彼此的學術而感到遺憾。今年七月，我讀郭氏《奴隸制時代》，見到他主張把這些殺殉當成奴隸制的鐵證，我論述過它們怎麼也不成為奴隸制的鐵證，我認為它們是羌、南等異族犧牲的遺迹。那篇《殷代的殉葬和奴隸制》的論文已托交立命館大學人文科學研究所，預載研究所紀要第二輯。關於人牲說，中國有不同意見者，近來我國也有採納其說的，但是這類意見一碰上解釋出和伐、伐羌、伐南時，就幾乎無所適從了，甚至連一點相反的資料也提不出來。

殷代的奴隸制，誠如胡氏所說，須從農事和軍事兩方面為主進行考察。尤其是農業生產的狀況，是最重要之點，遺憾的是胡氏沒有深入論述。近我也考慮發表有關殷代奴隸制問題的論文，準備對這些問題作一考察。

𢀛方問題，雖然與殷的社會和政治沒有直接關係，但是包含着諸侯關係的問題，因此這裡介紹一下《殷代𢀛方考》。

《殷代𢀛方考》

一共由十三項組成。全文卅一葉，引用卜辭三二六條，附注一四三條。

一、關於𢀛字的解釋，孫詒讓釋昌，葉玉森釋苦，郭沫若釋呂，林義光釋鬼，陳夢家釋邛，唐蘭和柏根兩氏近陳釋。𢀛字從工無疑，但難說是邛笮的邛。

二、葉氏認為即《禹貢》「惟箘簬楛，三邦底貢」的楛。陳氏認為，「邛仲之孫伯戔盤」「邛君婦壺」等出於河內，故其地位於殷墟之西，相當於《春秋》的鞏地。不過從卜辭記來寇看，似嫌過近。又唐氏釋邛笮之邛，在四川邛縣，則未免太遠了，如此遙遠，要越過山川之險阻，頻頻來寇，似乎是不可能的。殷人的勢力在當時是否達到四川盆地，大有疑問。郭氏認為在河套附近，為獫狁的部族，辭多臆測，難以相信。言來嬉者每云「自西」，其報告或交戰者有沚戠、長、𠂤、戉，受到內侵的地名人名有𠂤、唐、沚戠、戉等。故考訂𢀛方的地望，有必要檢查它們的所在地。

沚與沁一音，應在沁水流域，即今山西南部和汾水以東一帶。長後作張，河東有西張、東張和張楊諸地。𠂤也見於金文，由於在有關卜辭中所出現的受侵地為鄭（陝西華州的鄭）、夾（河南的陝）、方（山西安邑的方山），因此它位於靠近陝、安邑、華州的地方。還有戉，位於故河北，即今山西平陸的東北。唐是故夏墟，相當於今山西蒲州以西及聞喜一帶。據以上事實，可見𢀛方更在其西，必於山西以西和陝西一帶。

𢀛恐怕就是共，《詩・長發》云：「小共大共」，《書序》謂「九共」，殆是。《小雅・巧言》云：「匪其止共，維王之邛」，《大雅・皇矣》云：「密人不恭，敢距大邦，侵阮徂共」，是言其事。共常與阮並稱，阮也在關內秦地，它們都在鄜州西。就是說，殷代𢀛方的活動範圍，約當今陝北一帶。

三、卜辭有貞卜𢀛方出、來、亦出、不亦出、大出、允出、允出來、出侄我、出乍囚、還等等。

四、又有貞卜征、撻伐、伐等內侵事者。

五、內侵的原因為二，或為帝不獲佑殷所致，或為黃尹壱我所致。

六、因此，殷人把此事禱告於祖神。祭祀的對象有王亥、岳、河、報乙、示壬、唐、乙（大乙）、大甲、祖乙、黃尹、好、受令、令等等。

七、殷人試圖反擊其內侵，卜辭有記殷王觀𢀛方出擊的「壬子卜穷貞，𢀛方出，王

雚・五月」（甲骨文外集一，董氏拓），此外，還有言望、乎、御、即、見的，等等。伐、正的辭例甚多，冊也有伐義，冊宰、冊及的意義都是殺牲。還有戔方、戈方、叟方等。伐舌方時 有言「帝受我又」，有言「我受舌方又」，說明了殷人的宗教觀念。

八、伐舌方時的所謂步伐不是用車騎，所謂逆伐是迎擊的意思。另外還有語意不明的循伐。

九、征伐的統帥為王，王子子弓，其他有多臣、師般、多宰（郭釋，未必是）、𠂤、𢀛等近臣，望乘、吏等將吏和沚𢦔、戉、雷、見等侯國也担任過。

十、不過，實際戰鬥者稱作衆，所謂登人三千、登人五千大概是聚集衆人的意思。

十一、征討之後，臣其俘酋而羈縻之，故卜辭有臣舌、臣舌方之語。

該文引用有關舌方的卜辭三二六例，其中記月份者僅二十例，紀年者一片也沒有。

＊這篇論文的主題是舌方的地望問題。考訂的方法，正如胡氏所嘗試的，除從有關卜辭出現的國族地名等方面作出苦思外別無它法。胡氏從受侵地鄭、夾、方和防禦者沚𢦔、長、𠂤、戉、唐等推定舌為共，認為在鄜州之西，但把舌釋為共是否適當，很難說。然而我也照胡氏一樣的方法認為，其地應在更東部的山西境內。這裡詳細考證不得不有所限制，但鄭在卜辭有謂「我鄭」（續五・三・一，叢地三一等），是作殷的直領地的，並且貢龜，因此擬為陝西華州的鄭是不妥的，又由於有「北鄭」（後下二四・一），故河的南北或有名鄭之地，大概河南的鄭州是其中之一。夾即郟鄏之郟，也許在今洛陽，不是其西的陝縣。沚大概是沁水，但沁陽屬河南，不能認為沚族進入了汾水的東邊。還有長，在今長治、長平一帶，約當今潞安地區，越過太行山，指呼之間，即抵安陽殷都的前衛。至於把長借為張，而在黃河彎道附近的廣鄉西北尋求其地的胡氏之說，不免有先入之嫌。戉或許在平陸附近。卜辭有𠂤與戉共同征伐者（續五・三・二），其他獲羌之例也很多，又如「癸巳卜，王其令五族戍𠂤」（粹一一四九），遇到危急時，王曾命令五族去戍衛𠂤，因此不會太遠。由此可見，把舌釋作共，遂定在陝西和甘肅境內，中間相距甚遙，衆卜辭記的那種頻繁而緊張的關係就不可理解，與河內方面常常受侵的事實也不相一致，因此胡氏的說法一時難以首肯。

共即《詩・大雅・皇矣》的「密人不恭，敢距大邦，侵阮徂共」的共，密在甘肅平涼，阮同在甘肅的涇川，詩進一步說密人深入陝西，侵犯了洛河上游的鄜。《皇矣》特別歌云：「王赫斯怒，爰整其旅，以按徂旅，以篤於周祜，以對於天下」，徂旅，《孟子》作徂莒。據此，則莒更位於共之東，但由於共的地域相當大，祜據了陝北一帶，故莒恐怕要跨過黃河抵至汾水流域了，我想，殷的勢力恐怕不會達到汾水流域。如果說殷的軍事力量分佈於汾水流域那麼就難以理解長、鄙諸要地屢次受侵的事。據史傳，周文王末年，周進入岐周之前擊犬戎，敗於山西黎城（長治之北），長驅侵入河內懷州的邘，轉而伐陝西鄠縣的崇侯，遂遷居於豐。我想，這恐怕因北方部族的侵掠，廹使居於山西中部的周南遷，轉而遠適陝西，防衛密人，敗共寇莒，不正是周人尚處山西的時候嗎？河汾之間的山地名呂梁，呂旅同音，大概古又稱莒。如果定舌方於這個位置，那麼有關卜辭中出現的國族的地望都可以得到比較合理的解答。另外，胡氏認為意不明的殘辭「于王曰，勻舌方矢」，要亦禱告舌方內侵之辭。與矢形同的字可見小屯甲編一九七六、三四二一、三七三六，乙編二二一一、三三七〇、三六二一、五二四五等片，內有言勿矢、乎矢者，因此是動詞的用法，或是誓約之意。又有執矢的字。居於河汾之間的舌方，叛服無常，大概每使殷人面對西方，疲於奔命。如果我對有關卜辭的推測成立，則比胡氏考定的陝北，不是更容易理解幾分嗎？

尚有與殷的政治形態問題相關的《武丁時五種記事刻辭考》和《殷代卜龜之來源》兩文，在此一併介紹。

《武丁時五種記事刻辭考》

這篇論文的篇幅是僅次於二集《卜辭中所見之殷代農業》的長篇，大半由資料組成。所謂五種，指甲橋、甲尾、背甲、骨臼和骨面各種刻辭，若再加上篇末的補例，則舉了甲橋二七九例，甲尾三八例，背甲十四例，骨臼一七七例，骨面二九例，按其形式和內容作了分類整理。對於這些刻辭的解釋，胡氏批判了諸家過去的說法，加以自己的考證。即認為，入是入貢入馬的入，意為入貢；來是來馬來羌的來，意為進貢；氏有提、挈諸說，也是致的意思，三者都是呈貢致送的意思。這些辭祇見於龜甲而不見於牛胛，因牛胛在北方很多，而龜甲祇能有待於南方貢來。貢龜者共四十八個，知其為人名者二十個，官名四個，地名國名十一個，未詳十三個，大抵是和王官或王關係密切的人，但未必盡出南方，也有東西方諸國的。不過關於這點，今在此不能詳論。貢龜的數目在一二三三四個以上，若增入尚未見的材料，其數想有進一步增加。

在「≡自某若干」的刻辭中，≡讀為取，取有捕義，≡也有許多說法，當以于省吾釋气而謂其意為訖 迄的說法為正，气字也有取義。採龜人六個，有行、㞢、帚井等人。「某示若干」的示有祭名、置、視、地示之示等說法，但似乎類於《月令》所謂「命大史釁祠龜策」之禮，是指卜用之前先把龜甲獸骨祭一下。祭龜人十六個，為帚某子某及其他近臣。還有祭骨人四十二個，也為王、后、帚某、子某、小臣及其他近臣担任。

匹字過去有矛、茅、包、屯或倒豕之形等說，但大概是個匹字（又有半骨之形的）。似應訓為片。簽署的史官名凡十八個。

＊因為甲橋、甲尾屬一類，骨臼、骨面屬一類，背甲兼有兩者的形式而屬另一類，所以這種刻辭實分三類為好。自董作賓《帚矛說》和郭沫若《骨臼刻辭之一考察》以來，這種刻辭是甲骨學的好題目，胡氏搜集了遠遠超過兩人的卜辭辭例寫下這篇長文。董氏後來又在《小屯乙編》自序中重新論述過該問題，提出屯字為對字說。今年八月，我向古代學協會遞交了一篇《殷的王族和政治的形態》的論文，載於古代學第三卷第一號，其中論述了多子多帚的問題，也涉及甲橋、骨臼刻辭。胡氏認為入、來、致幾乎同義，但我認為，在這類形式的刻辭中採用了不同的字，其字義大概也是不同的，因此我想入為入貢，來即賚，氏含有徵取的意思。貢龜的數目，董作賓沒有採納胡氏的統計法，而是按照有「壬申邑示三屯」者都算作同時的貢龜，把與它同文的四龜解釋為這六龜之中的四龜。我也贊成董氏的這種考訂法。記「我」來或氏的甲橋刻辭，在胡氏尚未收進這篇論文的《小屯乙編》上中兩輯的有關資料中，言來者五例，氏者四例，這四例是乙一〇五三、二六八四、二七〇二、三四三二，龜版上都刻有「我氏千」，它的龜類是同種的小形龜。其中乙一〇五三上有「帚井示卅」，乙二六八四上有「帚丙示百，𣪕」，乙三四三二上有「帚井示卅」，這些卅龜、卅龜和百龜，分別是被帚某祭的龜，都是「我氏千」之中的龜。這四例並不表示得了好幾次千龜。照胡氏的計算，大概要合四例而計為四千個，想必都當成不同時的龜了。不過，象董氏一樣把數目相等者全算為同時的龜，也十分冒險，同數的龜也有可能是若干次貢納的。例如乙一八九五、一九三八、四〇六八都記有「𡆥入二」，但龜種卻不同。又如記奠

「來十」的四例，龜的大小差異很大，就不能說是一批的貢物。胡氏的論述中雖然尚有其他的可議之點，但得到別的機會詳論了。胡氏的這篇論文，就刻辭作的研究來說是極為詳細的，事實上，在以此為階梯去看殷代政治支配的形態時，這種刻辭的資料價值能夠充分地發揮。這篇長文幾乎始終致力於資料的整理，但實際問題卻在於追踪貢龜人和王室間的關係，以及它的政治意義。

《殷代卜龜之來源》

在殷代遺址，在山東歷城縣城子崖、河南安陽的後岡和高井臺子及同樂寨、以及濬縣大賚店，都曾經掘到卜骨。殷族與以山東為中心的黑陶文化系的種族的所謂東夷大約有支裔關係，最初持有骨卜的習俗，但殷墟文化承黑陶文化，又在骨卜之上更增以龜卜。如果把過去出土的甲骨，以十片龜甲作一整甲，以五片牛骨作一全胛，去推測總數，那麼可得龜一六〇〇三個，牛胛骨一一八五八個。又據已著錄的卜辭得知用的牛牲至少不下於九三七四頭，大概其牛胛骨被用來占卜了。從卜辭可知龜來自南或西，想是從那裡致送來的。似乎殷的勢力範圍比以前認識的要更遥遠些。據漢以前的文獻記載，龜的產地有八例，其中七例在南方，一例在西方，都處於長江南北。即使在漢以後的方志記載裡，也數長江珠江流域產龜最多。秉志氏曾經論及卜龜來源的問題，他在區分卜龜種類時，把其中一類暫時命名為安陽田龜，後來卞美年給它取名為中國膠龜，確定它與南方的福建、廣東、廣西、海南和台灣產的龜是同種。另外據說第十三次發掘的一個大龜也是南方種。這麼說來，卜龜是以南方貢入者為主。見於甲橋等刻辭的龜數是一二三三四個，與上面估計數一六〇〇三個相差不甚大。在殷代，與南方之間的交通，李濟博士已經指出過，另外從出土的動物種類也得到了實證。可以想象得到，殷人是由於得了南方系的龜，導致移骨卜之風而為龜卜之風，當時殷的勢力波及於廣大的南方。附注還詳列了產龜的文獻，並有三附圖。

＊胡氏在計算貢龜數的方法上有問題，這在前面已經提到了。雖然龜以產於長江流域為多的說法可以首肯，但是據近代方志，不僅河南、山東，就連河北、山西也產龜。貢龜的國族大體上說是進貢當地出產者，若檢其產地，不如說以黃河系和淮水系流域的更多。龜的大致種類分為大中小以及稍長大者等等，據進貢者即可約略定其種類。如雀（乙編中凡一九見）以小龜居多，稀見大龜（乙二〇〇六、四五一〇），間有長大者（乙五三一八），畫（乙編中凡一九見）以大龜居多，間有小龜（乙七五四），稀見中龜（乙四五九四）。按龜的大小來說，每次的貢數是很不一樣的。家所謂武丁大龜，今產於馬來，儘管在古代可能是從南方傳去，但其它的多是黃河淮水系所產，這在某種程度上而言，是沒有包含江漢的龜的。從貢龜的國族名推測，那麼視殷的勢力在當時直抵長江流域的看法，似乎還是冒險的。盡管包括所謂安州六器在內的殷系彝器從孝感、嘉魚出土了，但也不成為殷的統治力量達到這裡的直接證據。胡氏劃定的殷勢力圈，不論在《殷代舌方考》，或在這篇論文，似乎都略大了些。我也考慮根據這種刻辭去設定殷的勢力圈，將來或有發表的機會。

下　篇

有關產業的論文，有《卜辭中所見之殷代農業》以及與它相關聯的氣象曆法問題諸篇。

《卜辭中所見之殷代農業》

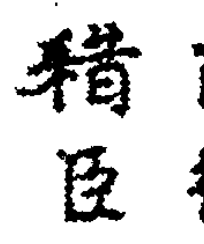
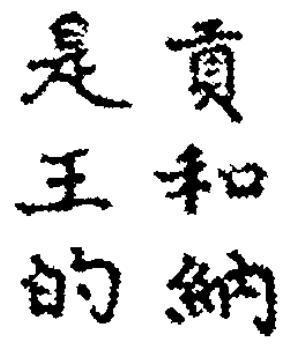
由一序言、二農業環境、三農業區域、四農業管理、五農業技術、六農業產品、七農業禮俗、八結論這八項組成。全文一四二葉，近十多萬字，是本論叢中的第一長篇，引用卜辭二〇一四片，附注二二八條。

一、論述殷代農業經濟的學者很多，程憬、萬國鼎、陶希聖、郭沫若、吳其昌等人都認為，殷代尚處在一種田漁牧畜兼粗耕的時代。但其作為證據引用的卜辭，漁是人名子漁或地名漁的誤解，牧也是地名所誤。郭氏又以為芻、牧、受年都是為了畜牧，但受年受黍年無疑是貞卜農耕的事。廩辛康丁以後，田獵卜辭很多，是出於遊樂而不是為了生產。儘管沒有找到施肥、灌溉的確證，但牛耕不見得不可能。從殷代青銅文化的程度之高看，那麼農耕已經盛行了。

二、卜辭中言帝令雨足年、足雨、大雨、多雨、祉雨、其雨等卜雨的辭例相當多，但記月份的很少。又有若干降雪的辭例，但多兼記雨雪，或者記朝夕降雪。好象視日中降雪為不祥。武丁、祖庚祖甲時稱十二月和一月之間的閏月為十三月，但在祖庚祖甲時有在一個月裡連續出現五癸六癸的。廩辛康丁以後不見十三月之名。帝乙帝辛時也有在五月份連用五癸的辭例。因置閏的目的是調節節氣，故四時的知識當已具備。卜雨的辭例通見於全年。氣候隨着時代而變遷。中央研究院曾把安陽出土的哺乳類骨骼送地質調查所研究，結果發現有南方森林地帶的竹鼠、南方的貘和腫面猪、長江流域的獐、類似菲律賓野水牛的聖水牛、印度象等等。象和貘大概是從南方跑去，但其它的似是生存於本地。這發現的結果說明，殷代安陽的氣候比現在溫暖。由於卜辭中除記有來象的刻辭外，又有記獲象的，所以應是土著象。同時還有射兕獲兕等辭例，大概兕也廣泛地分布在北方。所謂「今歲受年，十月二」，說明殷正十二月相當於今十二月和一月。如今中原這個時候不是收穫季節。設想當時中原的氣候，與現在的江蘇、湖南相似，大概很適合農業的發展。

殷人已經注意到日食和月食，記日食者二次，記月食者五次。也觀察星象，有包括星在內的鳥星、火、大星和大歲之名。歲也用作年歲之意。今歲來歲亦稱今春來春，並非四季之名。不過象唐蘭所說，是年歲的意思。所謂今秋來秋，意義也一樣。以年、春、秋稱農穀成熟之時，因此記今春者有三、四、五、十一和十二各月。在殷曆九月有連雨十八日的，又有終年降雨的，故知當時安陽是溫暖的。再從曆象學的發達程度看，可以得知農業已臻相當發達的階段。

三、卜辭有貞卜東西南北四方受年者，程憬、馬乘風諸人認為是占卜耕地之辭，但還是應看作四方受年的刻辭。四方的順序為東南西北或東北西南，是循太陽之轉向。因為視商為天下之中，故稱中商，說明五方觀念已經具備。至於受年，有記地名、子某和帚某者。所見地名中，戔位於陝西華縣附近，沚位於殷西北，雀位於殷西，𦎫是頻見於殷末的東方田獵地，宮也在東方。商指安陽，也單稱大邑。蜀，諸家雖釋作羌蜀的蜀，然應在山東泰安至汶上一帶。雪即孟子說的雪宮，位於臨淄東北。廩是廩邱，龍圍在汶水地區的龍鄉，其它如宿（安徽東平縣）、奄（山東曲阜）、盂（河南順德府）、羊（江蘇睢寧）、若（河南順德）、龐（河南南陽）、犬（陝西興平）、鄭（陝西華縣）、亘（河東）、帚姘（河南沁陽）等，都有貞卜受年者，可見殷的農業區域，西至陝西興平，東至江蘇睢寧、南至河南淅川，東北至山東臨淄，包含了黃河流域六省的地區。

四殷把失寵的王妃封之一地，王子子畫封於齊，子宋封於商邱，子鄭封於華縣，又分封了功臣沚䛓、望乘、侯虎、史官雀，貞人亘、攸侯喜；此外還冊封了井方（岐山之南）、方（冋）、旨方（殷西）、虎方（殷西）、鬼方（殷西）、易（接近羌）、犬方（犬邱）、周方（殷西北）等許多方國為侯白；別的稱侯、白、男的也很多。由於對殷王可自稱「我東鄙二邑」、「我西鄙田」等，故知其土地都屬封建諸侯所有。諸侯有邊防征伐、進貢和納稅、為王田耕作等義務。還設置別的農官，謂之小耤臣。因小耤臣的是王的重臣，故小耤臣決非一些人說的農奴。又有小臣也是王左右的要職。農官中又有稱某畯者，大概即詩的田畯。耕作是衆人的事，他們在有事時作為戰士從軍。其得喪因而也至為緊要，故有許多貞卜喪衆的卜辭。然而從《殷庚》的十二處衆字考察，衆是自由民而非奴隸。

五耤象執耒之形，用為動詞和名詞。還有從兩耒兩犬的[illegible]，是個地名。說不定有過以犬曳耒者。從力之字有男、劦。劦的本義是合祭，為祭名，但有象人劦田的辭例。從力者還有嘉（[illegible]）。力是耒形。另外，卜辭習見力、力牛，力象以犁起土之形，所謂力牛指犂黑的牛，即如今多生於長江之南的水牛。物是人名，又用為吉利之意。驚從馬，是驪的初文，意為黑馬。剝（字從禾）意為收穫，其字下或從土作劃，等等。力和耒，古代大概是同物。後世則有耜、枱、梩等名。一般認為，殷代農具僅限於木製品，但從青銅禮器和兵器的進步程度看，就不能孤立地認為祇有木製農具。牛耕的起源，有春秋時期說，又有戰國時期說，然而從黎指黑色是出於力牛的事實來看，那麼牛耕的方法必定很古。殷人已經掌握了利用牛馬的知識。還有用犬者這從字形可以得知，如今北方諸族猶見以犬曳車或橇的。

所謂殷人不知灌溉者是謬說。田字明明象田間劃有許多塊的阡陌之形，類似今之稻田。或據焚字認為殷人流行燒田法，但這是出於田獵，並非指火田耕作法。卜辭中還貞卜收穫之往否，有言省廩者。

六關於農作物，主要是黍（產於商龐等地）、䊮（稻也）、麥（来）、秕（稗）四種。酒被最廣泛地用於殷人的祭祀場合，主要由黍稻釀之。豐即醴，由稻米釀成，䊮是表示釀酒意義的文字。鬯是香酒，是在黑黍中加以香草製成，文獻中謂之秬鬯、鬱鬯。

七由於殷人認為降雨降熯是帝或祖靈為之，因此相關卜辭很多。又雨即侑雨，大采雨的大采是祭名。有重雨及其他一些表示求雨之字。祭儀用舞，即舞雩。舞字或從雨作䨵。所謂烄雨，是焚人以祭的求雨祭儀，象文獻中記發生旱情時以人為犧牲的許多例子一樣。以牛羊犬豕作犧牲者很頻繁。求雨的時間有一、二、三、九各月。還有貞卜見雲之去來、降雨的時日和方位，以及霾、若不若者。水過多成災，所以也占卜。今夕王寧、今夕自亡寧的辭例習見。還有言寧雨者，大概是止雨之意。貞卜來年、受年等收穫者，是以祖神祖王為對象。另有相當於《月令》嘗新的告秋刻辭。要而言之，殷代農業已經處於相當發達的階段，決非田獵牧畜或粗耕時代。

＊胡氏的這篇論文，搜羅了過去甲骨文著錄中有關農業的資料，可以說是豐富的。以殷代為畜牧時代的郭氏諸家的舊說，也曾一度影響過我國學者，但如今相信這種說去者恐怕不多了。我曾經在《殷的社會》（載一九四八年九月，立命館文學第六六號）一文中主張農耕社會說，但裡面沒有處理胡氏在這篇論文中提到的各種問題。胡氏這篇論文值得注意之點是氣候及犂耕灌溉等農耕技術的問題。這篇論文是一九三八年冬成稿的，一九四五年春，著者進一步寫了長達六十四葉的《氣候變遷與殷代氣候之檢討》一文。內容則分論了史前時代的氣候變遷、舊籍中所見的古代氣候和卜辭中所見的殷代氣候各項，末項列了「殷代農業」，更增以氣象關係和獸畜的辭例，强調了殷代氣候比今日溫暖。其文豐富，由於論旨相同，就不作介紹了。不過胡氏列舉的資料，是否確能論證古今氣象有很大變化，對此我頗感懷疑。動物的遷移等，還有土地開發或地形情況的變化等其他的原因，同時許多天象的記事不記月份，故季節的狀態幾乎未知確否。整個地說，卜雨的性質，與其說成記錄，莫如說以出於當時的要求和恐懼者為多。因此，貞卜霾、雪、颱風者諸項，倒不如視其氣象與今日差不多。且不論氣候隨着時代有多少變遷，即使在今日的狀態下，農業也是可能的，這樣就產生不了特異於古代的結論，所以我感到把氣候變化作為特筆來强調，似乎理由稍嫌不足。最近董作賓氏在小屯乙編自序中列舉了卜辭中一、二月有雨、霰，三月刮大風，四月卜雪的辭例，不認為安陽的氣候比今日溫暖，我想恐怕當是事實吧。

殷都安陽，把這裡定為軍事政治中心，但經濟根據地我認為倒不如說在商亳方面，即從河的南北向南方發展。胡氏在自己的農業關係的長篇論文中，幾乎沒有涉及邑制和鄙制。我認為，與其從農業經營，莫如以邑鄙為中心加以考察不是更妥切些嗎？卜辭習見相當數量的乍邑之辭，鄙中是包含着許多邑的。所謂「鄙三邑」即其意，有時，如「冊卅邑」（乙六九六），可以一度操縱許多邑。南鄙一語很多，大概反映了殷在南方經營過很多的農耕地。該方面的殷的直領地，殷亡後猶為周所經營。這些河南東部的土地，相當於後來周南的所在地，關於此點，我曾經在《兩周時代東南地域的政治和文學》（載一九五三年五月，立命館文學九六號）一稿論述過了，但關於它在殷代的經營情況，則準備在別稿論之。

對殷代農耕技術的考察，在出土遺物甚少的今天，困難似不小。犂耕問題自徐中舒氏在《耒耜考》一文提出後，尚未取得決定性的結論。耦耕和灌溉等等，也是饒有興味的問題。至於我，僅要指出，根據田和邑的字形，耕地為長方形，田字中的區劃很難說是水路。關於殷代的農耕，因為最近天野元之助博士《關於殷代產業的若干問題》（刊東方學報京都二三冊）和《中國原始國家的形成》（刊社會經濟史學一九卷一、二號），試作了研究和展望，故望能加參考。

胡氏還在《殷代焚田說》（初集）對火田耕作法試作過批判，認為焚田不是為了燒田，而是出於田獵的目的，其證據是「其焚，禽，癸卯允焚，隻兕十一豕十五……廿五」（十三次）。這一片今已著錄為《小屯乙編》二五〇七號。

趁介紹了農業關係的論文的機會，推荐一下有關曆法和居住的論文。

《一甲十癸辨》

對於董作賓、吳其昌兩氏主張的殷曆平年十二月、閏年十三月、大月三十日、小月二十九日的說法，劉朝陽、孫海波兩氏提出殷曆既無閏也無大小月，每月三十日，祇在有時加十日或廿日於某月，因此每旬的日次和干名比較固定，如果從朔日開始，則逢第十日就是癸，這就是一甲十癸說。董氏又在《殷曆中幾個重要問題》作過進一步論述。胡氏在自己的論文中針對劉、孫兩氏的意見舉出反證三例。不過胡氏對於殷曆的認識似乎未必與董吳兩氏相同。我認為，劉孫兩氏的意見，由於多數場合是建立在卜辭缺記月份的前提下，因此如果沒有特別的確證，就不能認為曆法如此地不穩定。

《甲骨文四方風名考證》

該文舉出善齋藏的一片刻辭：「東方曰析，鳳曰劦，南方曰夾，鳳曰光，西方曰韋，鳳曰彝，北方曰□，鳳曰役」，同時還注意到一些類似的卜辭，把它們與《山海經・大荒經》的「東方曰析，來風曰俊」，「南方曰因，乎夸風曰民」，「有人名曰石夷，來風曰韋」，「北方曰鵷，來之風曰狄」，以及《尚書・堯典》的「厥民析，鳥獸孳尾」，「厥民因，鳥獸希革」，「厥民夷，鳥獸毛毨」，「厥民隩，鳥獸氄毛」，作了比較。這是一篇論述其中關係的饒有興味的論文。《山海經》中有許多古代傳說，王國維已經注意過。並且，《堯典》等篇中含有古代神話也早為馬伯樂（H.Maspero）等人指出過，如果得到四方風名存在於武丁時期的確證，則在古文獻研究中增添了一個利用卜辭的實例，這可以說是有趣的收穫。

《殷代年歲稱謂考》

《爾雅》釋天》有「夏曰歲，商曰祀，周曰年，唐虞曰載」的年歲稱謂，在清以來的學者間產生了疑議異說，自卜辭出土後，至少可以說商祀周年之說不誤。事實上殷代的年歲稱謂有年、歲、祀、司、春、秋以及大事紀年諸例。春、秋不是四季之名祇不過是年歲之稱。以年、歲、春、秋紀年最多者為武丁時，祀、司和大事紀年的形式見帝乙帝辛時，武乙文丁時祇有一例記巳（巳即祀）者。

＊著者把大事紀年法產生的原因，歸之於「蓋殷末國勢漸弱，外患日亟，征伐之事，恒為國家之生死關頭，故以其事紀之」，但據心來遠者倒不如說以武丁時為多。用王的行為紀年，至少與殷末稱王為帝的性質一樣，不如說是強調王的神聖性的結果。「王固曰」的刻辭在初期大都刻於骨背，到後期則都與卜辭連刻，想與此相關吧。並且王卜貞形式的出現也一樣。祀是祭祀的意思，近有不同意祀為年歲的說法，以為五祀一周的三十七旬是一祀。其中，五祀的最初工冊，常常處在與年首恰相一致的情況下，但有二、三、五、六月肜祀例，又有十二月進行工冊者，因此不能認為其一周必是曆日上的一祀，由於依次祀一周的日數約需一年左右的時間，所以就象別的年歲稱謂一樣，從本義轉為年歲之稱了。大事紀年法被周初襲用，長期成為金文中的紀年法，這大概是一時的風尚使然吧。

《論五方觀念及中國稱謂之起源》

五方帝之說，為羅氏提出，遭到郭氏非議，尚未得出結論，但因卜辭除有東西南北外，又有中商，所以五方觀念成立的事實是毫無疑問的。帝五臣、帝五工臣和帝五工者也是由五方生出，所以五行說已濫觴於殷代。中商又是中國一名的起源，天邑、大邑之名也反映了這種觀念。

＊這雖是一篇短文，但把疑古派費了極大精力建立的學說，簡單地打破了。這是很有意思的。不過，與這篇論文同旨意的陳夢家《五行之起源》（燕京學報二四期）一文，發表於一九三八年，帝五臣等卜辭已經被引證過了。

《卜辭地名與古人居邱說》

卜辭地名近千個，可識者近五百個。其命名據農桑、工業、畜牧、林木、園囿、水產、鳥、地勢、水名等等而定。所謂方相當於周代的國。邑也是國。餗即後世的次字，指王舍止所在地。門是宮廟的名稱，彝是祭名，它們都與祭事有關係。東西南北或上下，是據方位來區別的名稱。山、泉、麓等，或是其地勢的名稱，京也是高邱之稱。所謂自某，大概指小阜。堆、垍、墩、隊、屯，都是同系語。還有丘、阜、土，都是丘的意思，丘又作虛。土即社，後世則有意識的築成壇壝，但本意是丘墟。還有所謂單，是築的墠、壇。古人的邑多位於高亢之地。在古籍中的地名、帝王名號和氏名裡，其證不乏。九州的州，大概還有丘陵之義。古人擇居丘陵，是因黃河流域潮濕的緣故，如洪水傳說中所見到的，大概在古代水患也是很多的，並且卜辭中有着大量貞卜洹河和其他水患的事。如今在殷墟附近的洹濱，有許多周長約數十丈，高一二丈的圍寨，圍繞土垣祇開一個寨門，裡面常有小廟。同樂寨即是其一，又有永安寨、豐安寨、夏寒寨。山東城子崖、河南大賚店的史前遺址也在城寨之上。因此古代的丘居，似乎為這種古城古寨所證明。

＊關於地名的起源，我認為不能象著者那樣簡單地考定，但現在不作研究。地名的考證在卜辭研究中既饒有興味，同時又是重要的工作，然困難不小。日本林泰輔博士早有考證，已被介紹到中國，有繼續探討者乃是好事。可以說，古人居丘說是個常識，問題很少，但把土和州釋為丘似乎失之勉強。邑不僅有作國名，又有作地名的卜辭例，不如看作農耕地或某種意義上的村落似更妥。卜辭記作邑者很多，大都作於鄙地。然而古寨遺址的報告應引起注意，除大規模的遺址外，有待於對一般氏族的生活居住遺址作出更充分的調查。即使在安陽，邑氏的居住遺址也是不清楚的，這恰恰成了研究中的障碍。

有關家族和親族制的論文有下面一篇。

《殷代婚姻家族宗法生育制度考》

這篇論文由一妻與多妻、家族與宗法、求生與產神、分娩與嘉否、子名與子子、大子與小王、子女與子孫和結論八項組成。

一、由於卜辭有多父、多妣之語，所以主張殷代為彭那魯耶群婚時代的說法一時得以大行，同時還出現了其他的對偶婚姻制的主張，因為它們都是根據了摩尔根的舊學說，所以對於象殷代那樣高度文明的社會就未必合適。殷的前期流行過一夫一妻制，後期則產生了一夫多妻制。就是說，根據卜辭，由示壬至大戊都是一祖一配偶，故大戊以前流行的是一夫一妻制。然而中丁以後就未必如此了，中丁有妣己、妣癸兩配偶，祖乙有妣己、妣庚兩配偶，祖辛有甲、庚兩妣，祖丁有甲、己、庚、辛、癸五妣，小乙除妣庚外，還見有甲、丙、丁、己、辛、壬、癸七妣，後七妣在武丁時都稱為母，是小乙的配偶。祖甲有戊、己兩妣，康丁有辛、己兩妣，武丁除戊、辛、癸三妣外，又有己、壬兩配，這兩配就是祖庚祖甲卜辭中所見的母己和母壬。不過，武丁的生婦名都稱為帚好、帚鼠等，見於卜辭者達六十四名以上，同時還有多帚之稱。武丁的配妃如此之多，因而其子也不少，卜辭中出現的子漁、子晝等人名計有五十三位，又有多子、多子族之稱。也許有人會怪帚子如此之多，但是如非洲的亞山蒂（Ashanti）族，王妃的數量以法律限制，規定在三千三百三十三人以內，又如盧安戈和烏干達國王，據說有嬪妃六七千人。且不論武丁時的多帚制與這些單純的多妻制有何不同，卻可以說一夫一妻和一夫多妻兩制當時並行過，多帚適與後世的姪娣媵妾相同。這表明，當時已經確立了強大的父權地位，它意味着殷代社會與周以後的社會沒有什麼不同之處。

二、一夫多妻制產生的重要原因，是出於所謂「重國廣嗣」的繼統上的要求和所謂「廣嗣重祖」的宗教上的要求。卜辭中有頻繁地按肜翌祭等五祀的順序進行祖祭的材料，隨着這種祖祭的發展，也擴大為多帚制，遠及武丁時，出現了六十四帚。這樣有了許多帚子，自然就生出嫡庶的區分，定出宗法的禮制。封建之制由此而生，因此這些都是周代宗法制度的先驅。王的一族稱王族，同時還有子族、多子族、三族和五族之語。《左傳》定公四年說的殷民六族和殷民七族，不是所謂氏族社會場合中的氏族，大概是所謂家族情形下的族。

宗法包含父系、族外婚和傳長子三義。或有以先妣特祭例懷疑殷代父系制者，但祖王特祭合祀例很多，相反既沒有先妣合祀例，同時卜子者又按生男為嘉，生女為不靜而對待的，等等，故說其為父系制是毫無疑問的。另外，王國維認為殷代女子不稱姓，同姓不婚乃周制所特有，可是帚妌、帚好是女子名，妌、好都是她們的姓，即國族之名。這是族外婚的證據。王氏又認為殷代流行兄終弟及之制，但是康丁後的殷末五王是父子相承，周初却有太伯避王位和周公稱王等事例。就是說，宗法不是周代特有的，在殷代已經萌芽，祇是到周代才逐漸確定下來。

卜辭中有以先公先世或祖王名相稱的河宗、唐宗、丁宗（祖丁廟）、岳宗、一宗上甲、中丁宗、祖乙宗、四祖丁宗、武乙宗、武祖乙宗、文武宗、中宗、右宗、北宗和西宗。這是殷代原本為一祖一廟的證據，殷墟的宮廟遺址也可以為證。祖庚祖甲以後，開始出現上甲至於多后的合祭，至廩辛康丁時，出現了大宗小宗之名。大宗是祀上甲以下的直系祖王即大示，小宗是祀上甲或大乙以下的旁系祖王即小示。有祀大示用牛和祀小示用羊的卜辭。大宗小宗之別，構成了後世宗法的雛型。

因為宗的本義是宗廟之稱，所以又可稱為上甲家、祖丁家、祖丁門、丁宗、丁門、中室，東室、南室、南門，所謂戊亞、乙門、父甲亞例同。至如儒家說的宗法制度，不論在周代的經籍中，還是在金文中，都不見其例證，這種學說的完成更在戰國末年新儒家興起以後，至於是否實施過尚是疑問，但宗法在殷代的後半期有其先導，周制是其演化而成。殷周之間，不存在王氏說的那種截然不同的區別。

一、作為殷人重嗣的例證，有求子求生的卜辭。求生的對象是高妣丙、妣庚等先妣，用酒儀或犧牲，周代的高媒相當於此，周代是祀上帝，但殷人是祀先妣。此外又有貞卜受生者，它與貞卜受年於求年之後相同。

四、武丁時，既有貞卜帚某出子者，又有貞卜帚某嘉娩者，還有貞卜育、娠、孕者。所謂嘉是生男，象「不嘉隹女」（珠五二六）是把生女視為不嘉。男尊女卑的風俗已經存在於這個時代了。

五、王的諸子長大後則稱子某，初生的幼子謂之「帚某子」。由於卜辭「御帚鼠子於妣己，允出龏」（續一．三九．四）言婦鼠子祀妣己，所以年齡不會很小，與周人生三月而命名者不同，這是應該注意之點。並且在「子帚某子」一類的卜辭中，前一個子是動詞，這是貞卜對於兒子的承認。古人有棄子之風，如周的后稷、齊的孟嘗君、楚的子文，都是被遺棄過的，假如卜之不祥，則棄而不養，此風殷代以來就固有。

六、卜辭中還出現大子和小王之名。所謂「貞御子弓大子，小宰，十月」（前四．一六．六）的子弓大子，是大子者子弓也。因為這種卜辭屬武丁時代，所以子弓大概是繼承武丁的祖庚。同時武丁、祖庚祖甲時代還出現小王之名，廩辛康丁時代有小王父己之名。所謂小王，大概還是繼統的大子。

七、卜辭有多子、多子女、孫、子孫、多子孫之語，金文中所見的「子孫其永寶」的子孫觀念，業已在卜辭中出現。總之，殷代的家族制，與其說和周代有截然不同點，倒不如說相似點很多，周代家族制當是殷制的演化。

＊胡氏這篇論文引用卜辭約三百三十片，附注二〇三條，是達三十五葉的長篇。論旨大率是穩妥的，對王國維的《殷周制度論》試作了適當的修正，在結論上既沒有異議，同時又看到了殷周文化的連續性，其考察的根本點，與我一向的立場也相一致。不過行論之間有一二疑問，附記於此以俟後考。

一、關於前面所述的多子和多帚，我認為子某是類別的稱謂，是子輩之名，不必限為武丁之子，金文中也有很多稱子某的。子、余、我等人占卜的子卜貞形式的卜辭，恐怕如貝塚茂樹說的，是屬於多子者的貞卜。具有與此相同式樣的卜辭，如有「戊子貞，帚巡又子」（乙四五〇四）、「貞帚巡又子」（前八．三．五，即粹一二四二）等，所以我想這些帚大概是子某的帚。帚的本義是子婦，《爾雅．釋親》云：「子之妻為婦」，弟妻也叫婦，所謂「婦有姑之辭」（《穀梁．文公三年》）者即是。一方面，象卜辭「王爽隹出壱」（鐵六．三）和「貞王妣」（甲三三三二），王妣是可以全稱王妣的，另一方面包括妣目在內，有稱以妣某的（甲三三五、甲三三二九、乙二一八、八七〇、二七三二、四九六八），某些人受到出祀，或者如「貞妣井弗壱王」，有貞卜妣井的鬼靈是否給王以壱禍，因此似乎有死後也得不到子名的妣。在論多帚之俗的一節中，胡氏舉了未開化民族的例子，但未開化族的後宮之女，與卜辭中受到尊崇的社會地位很高的帚某，是不能同日而語的。至於配偶之名，還采用過妻、母、女（疑母的缺筆）、妾（字的上部不從辛）等字。不過小乙的七母，武丁的兩母，是否果真是小乙、武丁之妃，不太清楚，在胡氏舉出的母某例中，均無「武丁奭妣戊」一類刻辭而明言屬之小乙、武丁。由於小乙的同輩中有象甲、般庚、小辛三王，在武丁的同輩中也有兄丁、兄戊兩兄，所以這些母某大概包含有以母輩相稱的小乙、武丁之外的同輩之妃。由此言之，則出現在祀典中的妣，以祖丁五妣為最多，武丁三妣，中丁和祖乙等不過兩妣，康丁以後可知者僅限為一妣而已。多帚之論似乎成了郭氏以來的通說，但我從殷代親屬稱謂的一般性質考慮，決然對於這種通說提出疑問。

二、胡氏推測，《左傳》定公四年說的殷民六族和七族的族，不是氏族的族，而是家族的意思。這種認識理所當然也適合對王族或三族、五族、子族、多子族等的解釋了，但關於這點也不是沒有疑問。《左傳》中殷民六族、七族與懷姓九宗對文，在魯初封時它們與別的重寶一起都作為賞賜品。原文特別在舉出氏名之後，有「使帥其宗氏，輯其分族，將其類醜，以法則周公，用即命於周」，顯然是說氏的規模，這裡的分族當然也包含了類醜一類的非血緣成份的要素，就不能按普通語義理解為家族。根據卜辭，子某也持有象子效臣（鐵一六四．一）子商臣（乙五一三〇反）之類的臣。還有象胡氏舉的貞卜受年的刻辭，尤其是子某的某，常常以國族名出現，同時他們或單獨前往征戰，考慮到這些方面，那麼其生活單位未必象家族那樣的小規模。因此我認為，儘管氏族內部的日常生活已經以家族為單位分化了，但是對於社會生活的單位來說，仍有氏族的成份，這不是構成了殷代社會的基礎麼？當然我的這種認識並沒有否定氏族內部家族因素的發展，從而又否定宗法的逐漸形成。基於家族因素的發展，氏族約束力的衰落，代之以宗法秩序的成立，這在祖祭系統中已經可以充分地看到，胡氏的論述在這個限度上是妥當的。

此外，關於多子指特定身份集團一事，貝塚茂樹有其說，再者，關於多子族，我的意見載於《殷的基礎社會》（立命館大學五十周年紀念論文集文學篇所收）。至於多子族內把大子當作大宗來祀一事，說明雖然殷族已具有宗法，但是仍舊保持着氏族集團的形態，這應該引起注意。

對三、四項沒有異議。

在第五項中，解釋「御帚鼠子於妣己，允出龏」一片刻辭，胡氏以為，「婦鼠子，祭於妣己，則其年齡不能太小，由此可以推測殷人命名之年，與周人子生三月乃命之

名者不同，為一大可注意之事」，這種解釋實不可解。該卜辭的意思是說，因為禍降到了婦鼠之子的身上，所以祭妣己以禦其禍，果然龏出現了，祓除疾病或咎禍原因的芒和龏的祭祀謂之禦，其供犧用㞢。另有記芒現形的例子，如「于父乙示，余見芒，在此」（前七·三三·一）。關於御祭，詳論又見拙作《殷的王族和政治的形態》（古代學第三卷第一號）。

在六項舉了大子、小王之稱，但沒有提到上子（後上八·七，後上八·八）、中子（簠人一〇）、王中子（寧三·一九四）、小子（錄七九四、錄七九五、乙三四二二、乙四五九〇）等。胡氏還以「貞，御子弓大子，小宰，十月」為證，說子弓可能是武丁的大子祖庚，但是卜辭的子弓和大子是作兩行刻，所以董氏認為中間缺了一字（集刊六本三分，四二五頁）。這條卜辭的大意是「御子弓於大子，是否用小宰，十月」，講的是貞卜祓除大子作祟的事。此大子恐怕是早夭的武丁子兄己，似乎常常降也作禍，到後來被當作小王而祀了。文獻中所見的孝己，是以遭遇不佳的王子相傳聞的

在第七項舉了多子、多子族、多子女、孫和多子孫作為重視子孫觀念的證據，但是同類的還有子族（鐵一四·二，甲二七三、乙三四一）、多生（甲三八〇）、衆子（寧一·五一〇）之屬。

以上舉了胡氏論證過程中的若干可議點，當然問題不盡於此。然而胡氏的整個立論，較好地闡明了當時王室的族生活。不過著者的意思雖然好象是想通過它們來強調父權家族的成立，但是即使從多子、衆子、多生、多子孫、多兄（南北·上海八五）、多父（庫九三）、王族、三族、五族等及其有關卜辭的內容考察，維持着類別稱呼的殷代社會也還多少殘存着一些氏族的形態，這不是近乎事實的嗎？

最後想提起幾篇涉及宗教觀念的短文。

《殷代之天神崇拜》

在古代以及未開化的社會中，天神崇拜很盛，卜辭裡也有其反映。帝以降雨、授年穀、降熯、保王、授祐、降若不若以至降禍而受到敬畏。王亥、上甲、河、岳也常降芒乍禍。但帝不成為求年求雨的直接對象，也不成為祖祭的對象。這是因為帝是至上神。武丁時有言下上若和下上不若者，帝乙帝辛時又有「上下受又」等恒語，還有言「上下受我又」者。武丁時的帝祭，是以帝禮祀先公。又如「下乙賓於帝」，是把祖王配祀於帝。因而先王也常降咎禍。帝有左右侍臣。謂之帝臣、帝五臣、帝五丰、帝五丰臣。丰大概是官、工之意。廩辛康丁時稱祖甲為帝甲，廩辛康丁也自稱為帝，帝乙帝辛時稱文武丁為文武帝，而帝特稱為上帝。至於日神，有賓日、既日、出納、御、㞢食之禮。把月食和虹當作災禍而感到恐懼。又舉行祭星，祭大星、火、鳥、歲星，火作為商星而特別受到殷人的崇敬。至於雲神，有二雲、四雲、六雲，是四方上下的神靈。風則有寧風之祭，用犬作犧牲。還帝祭四方，有方帝一語。

＊這篇論文凡二九葉，附注八七條。論述殷人祭天的風俗，有郭沫若《天的思想》和陳夢家《商代的神話與巫術》（燕京學報第二〇期）等文，我國有小島祐馬博士《支那古代的祭祀和禮樂》（古代支那研究）。胡氏這篇論文對於祭儀方面沒怎麼論及，此點有必要參考陳氏的論文。關於其與祖祭的許多不同點，我想今後似乎還應作些研究。我曾經撰有《帝的觀念》（一九四九年十月，立命館文學十五周年紀念號）一文，對夔和帝的祭祀試作過一番精神史的考察。胡氏在論述中對於把帝解釋為舜或嚳的說法作了批駁，認為帝並非祖神。又指出日中星鳥，殷人主火的風俗很古，它在卜辭中正有其徵。胡氏非難了我國新城新藏和飯島忠夫兩博士把歲星的知識列為春秋或戰國時代的說法，指出該種知識已見諸卜辭，這是應該注意之點。

《殷人疾病考》

疾病的種類有頭、眼、耳、口、牙、舌、喉、鼻、腹、足、趾、尿、產或小兒、婦人、傳染等病。患病者有王、王帚、王子以及王臣等，進行了貞卜。疾病的原因，被認為是諸神祖靈所降，為此舉行禱告和御祭。此外見於《左傳》中的蠱毒的說法也出現在卜辭中了。並且當時流行腳氣病，這可作為當地氣候潮濕的一個證據。但是胡氏作為腳氣病的例證，是「貞疾止，隹㞢芒」（林二·九·七）的疾趾。即使從其字形看也意味是足趾的趾，所以難以視之為腳氣。

《殷人占夢考》

把文獻中所見的古代的占夢、釋夢、夢影、夢人、夢因和夢禍分別作了論述，論及對夢的迷信和占夢的風習，涉及到後世的《素問》和《關尹子·五鑑》。

《釋死》

過去被釋為井、刑、囚、死等的[illegible]字，胡氏從丁山之說而釋為死，象人橫卧在亞室中的形態。此外又有象人跪拜在朽骨旁的[illegible]字，常釋為死，但其義不是死而是屍，當以楊樹達釋尸為正。

近來我國池田末利氏有《釋死》（中國學會報第二號）一文，把跪拜朽骨的[illegible]釋成髑髏崇拜之意的死字。我想如果這個囚形的[illegible]字能訓作死，那麼跪拜骨一形的[illegible]倒不如說意近陪葬的葬字，這不是常說的陪葬的習俗嗎？

論叢所收的幾篇有關甲骨學史的論文，略作介紹。它們被著者繼續增訂而集大成於《五十年甲骨文發現的總結》（一九五一年三月）和《五十年甲骨學論著目》（一九五二年一月），參考一下就更好，將來似乎還會另作整理。著者最近的見解，可見徹底批判吳澤《古代史》（一九四四年二月）的《古代研究的史料問題》（一九五〇年六月）一書，介紹於這裡的許多論旨，幾乎仍舊堅持着。因為戰後甲骨學的情況不太清楚，所以寓意於介紹中國學界，我把《五十年甲骨文發現的總結》在古代學第一卷第一號上試作了簡單的介紹。

《甲骨學商史論叢》（初集、二集）凡六册，是斯學空前的金字塔式論文集。如果把董氏的《甲骨文斷代研究例》作為甲骨學上劃一時代的論文，那麼，這部《甲骨學商史論叢》是繼其後的又一劃時代論著。可是最為遺憾的是，由於這部書的發行處於不幸的戰亂期間，所以長期未能傳入我國，可說是得不到寄給我國學界的機會。經過戰後八年的時間，我國多少又逐漸恢復了安定。一方面，代表中國學界輝煌成果的《小屯》甲乙編和《殷曆譜》已經得到，同時最近的業績也陸續不斷地傳來。我想，如今處在落後的境況下，說不定增加了這部《甲骨學商史論叢》，在資料方面，也許可以稍稍整齊我國甲骨學的新起點了。

在《甲骨學商史論叢》二集的下册，登出三集的預告。三集的上册題為《甲骨六録》，是中央大學、華西大學等甲骨文字六集和釋文及索引，它的下册，收進《殷代征伐考》、《殷代田獵考》、《殷代官名考》、《殷代之祖先崇拜》、《再論殷代之農業》、《再論殷代之天神崇拜》、《釋叶》、《釋告》、《卜辭雜例補》、《卜辭紀驗例》、《殷商文化之分析》、《殷虛發掘與商代文化》、《甲骨學類目補》等十

三篇論文，但是還未聽說付梓。不過相當於上卷的《甲骨文錄》一九四五年七月在成都以此作書名單行出版了。另外，在《五十年甲骨文發現的總結》的「引言」中，提到將出《甲骨學要論》一書，似乎這也沒有出版。對於著者來說，也許因爲這種既發表的東西很多，所以或想在三集總其大成吧。著者致力於學術活動，戰後已發表了甲骨文著錄三種和專著三種。恐怕這些被稱吾的業績也發表有期了。《甲骨學商史論叢》六冊的巍然巨帙，就著者而言，誠如高亨氏叙中所説，祇不過是「長江之濫觴，大輅之發軔」而已。

值介紹胡氏論文内容之際，我陸續寫進了二、三私見，這主要是我在研究上的備忘性意見，決非想在胡氏的論著中挑尋微瑕。也許將來有機會詳論，即使到那時，也還希望得到同學各方的指正，故敢留下附記。不言而喻，對於胡氏論文的内容未必是隨字逐句介紹，僅僅略取大意述之而已，因此有時有不相同的表現特色，說不定還有我理解上不太透徹的地方。並且胡氏的論文在駕馭大量資料上極具份量，而在這裡卻舍去了全部資料，祇叙述結論，就不免大損於原文的精采處。這點特别對於著者和讀者來說，正是非求諒解不可的。

（宋鎮豪譯自《立命館文學》第一〇二——一〇三號）

（原載《甲骨文與殷商史》第三輯，上海古籍出版社，一九九一年）

《商代周祭制度》评介

〔日〕池田末利　马志冰　译

《商代周祭制度》，常玉芝著，中国社会科学出版社1987年9月第1版。

在殷墟卜辞特定时期所见的周期性举行的翌、祭、壹、协、彡5种祭祀，是董作宾在《殷历谱》（1945年）中首次发现的。陈梦家在《殷墟卜辞综述》（1956年）中，进一步进行探讨，将5种祭祀名之为“周祭”。岛邦男也专门注意这一史实，在《祭祀卜辞的研究》（1953年）——《殷墟卜辞研究》（1958年）中作成了祀谱。台湾的许进雄则在《殷卜辞中五种祭祀的研究》（1968年）中，对这一问题做了更为精细的考察。他们四家对史实的基本看法是一致的，但在祀序、祀谱等具体内容方面却有一些分歧。解放后，继续进行殷墟发掘工作，出土了大批遗物，并陆续公布了一些国内外未曾著录的甲骨，从而使甲骨学发生了飞跃的进展。常玉芝所著《商代周祭制度》一书，就是在这样的环境气氛中，在重新考察董氏以来的研究状况，确立基本原则，辨明其类型与特征的同时，制定新的祀序和祀谱，探明商末祭祀形态特征的艰辛劳作的结晶。

本书由李学勤作序，全书共分5章（原文所引详细目录从略——译者）。作者在论述过程中，采用实证的方法，援引大量辞例，对董氏等4家的观点进行了评述，秩序井然，颇为合理。由于该书主要是探讨制度问题，相当复杂，且分歧甚多，故很难在有限的篇幅内予以详细介绍。

第一章回顾了董氏等4家进行周祭研究的历史。她认为，董氏所创立的五期分法是不科学的，因而同意陈氏之说，采用以贞人名划分组别的“某组”分类法。书中所说的“黄组”，相当于董氏所说的第五期；“出组”相当于第二期。作者指出，综观董氏以来20多年间的周祭研究状况，仍有很多问题并未彻底解决：周祭研究与探讨商代的世系、礼制、宗法、历法等制度，以及判定某些卜辞的时代等都关系极大。（参见前言与第一章）

在以下各章中，作者依次考察了周祭制度已较完备的黄组卜辞和周祭制度尚处萌芽阶段的出组卜辞。其基本材料为：黄组卜辞365版，出组卜辞140版，铜器铭文若干条。

黄组周祭卜辞有三种类型：①祭上甲及多后的合祭型；②附记甲名先王五祀的卜旬型；③王宾先王祭祀型。其祭祀程序是：当每一旬的祭祀即将开始举行之前，先在上一旬的末一日癸日，卜问此旬祭祀的吉凶（即①），并附记上此旬的头一日甲日所要祭的甲名先王与祀典之名（即②），还要卜问某日某王的宾祀是否顺利（即③）。周祭先妣所使用的祀典，只见到翌、壹、协、彡四种，缺少祭祀（以下皆加注“·”号，与一般祭祀相区别。）；所使用的卜辞类型与先王不同，只有③型一种。（参见第二章第一节）

出组周祭卜辞有4种类型，比黄组多一种卜问翌日（次日）祭祀的类型，其他则基本相同。不过，就整体方面而言，出组周祭制度尚不完备，还处于正在形成的萌芽阶段。作者关于几种类型的分类，为以前的研究中所未见，真可谓独具慧眼。（参见第二章第二节）

作者在第三章分析了周祭的祀序。其方法是从刻在同一版甲骨上的数条同一类型的周祭卜辞中，找出各个王、妣受祭的前后关系。可是，由于原版的基本材料较少，在同一版上刻有两个以上王、妣祭祀卜辞者亦不多，要从中找出同种祀典是相当困难的，而要从中找出同种类型的系联卜辞就更加困难了。因此，我们仍然不得不同前人一样，采用将不同类型不同祀典的卜辞混合起来进行考察的方法。不过，祀序即祭祀日期的固定不变在黄组和出组中都无例外，所以，这种混合的方法是有根据的。在这个前提下，从黄组周祭卜辞的②③两种类型中，都有甲名先王祭祀的系联关系可查。它具有以下几个特点：①在同一版上的王、妣，其受祭使用的祀典都是相同的，不同的祀典绝不在同一版上出现。②不管5种祀典的哪一种，祀序都是保持不变的。③翌祀与彡祀是分别单独举行的，祭、壹、协三祀则是相互交叉举行的。出组周祭卜祭的4种类型中，除了合祭型外，其他3种类型的卜辞都应有系联情况。但是，在卜旬型卜辞中，却未见到这种情况。因此，从翌日祭祀型和王宾型卜辞中来看，得出的结论与黄组周祭卜辞完全相同。以往考察祀序时，囿于材料的不足，又缺乏反复论证，大都将黄组和出组卜辞混合起来进行考察。我们则应根据分组法，先分析材料较多、内容较详细的黄组周祭卜辞，再兼及出组周祭卜辞。（参见第一节）

黄组周祭卜辞中的第2型卜辞，不仅表明了甲名王的祀序，而且也表明了两甲名王之间各旬的祀序。因此，按照周祭先王始于上甲的规律，以先后两个甲名王之间的祀序为一阶段，即可将康丁以前25王的祀序分为7个阶段，从卜辞材料中，根据系联关系，确定周祭先王的祀序。董氏等是把周祭先王排至武乙、文丁或者帝乙，将周祭祀序延长为11旬或者12旬。作者则不同，她认为，周祭先王应当止于康丁，周祭祀序应排至10旬。其原因是：在周祭30多个先王中，只有康丁被称为“康祖丁”。这表明，在目前所见到的黄组周祭卜辞的某个时期的现有材料中，康丁是最后一个与其他先王有系联关系的先王。将作者所列祀序与《史记·殷本纪》所载的先王的即位次序相对照，除报乙、报丙(1)二王外，其他23位先王的祭祀次序都与其即位次序一致。可见先即位为王者先被祭祀，后即位为王者后被祭祀，这是周祭的祭祀原则。见之于文献记载的这一祭祀制度，至迟在商代末期即已存在了。卜辞中缺少大戊、雍己、中丁、小辛、小乙、武丁六王的祀序，即可根据其他卜辞和《殷本纪》予以推定。出组周祭卜辞中的系联卜辞比黄组的要少，仅限于上甲至祖甲的21王。但是，它却可补充黄组中所缺的大甲、大戊等的系联。出组各王的祀序，与黄组完全一致。两组先王的祭祀次序，都是以其即位世次为准进行安排的。无论直系、旁系以及曾立为太子者，均被祭祀。（见第二节）

周祭先妣的卜辞，不论黄组或出组，只有一种王宾型。它是在其庙号前冠以所配先王的庙号，其祀序则与所配先王的即位世次相对应。这是周祭先妣的原则。黄组周祭先妣的祀序，分为4个阶段：①示壬至大庚间的先妣祀序；②小甲至祖乙间的先妣祀序；③祖辛至武丁间的先妣祀序；④祖己至帝辛间的先妣祀序。被列入周祭祀序的先妣，只有示壬之配妣庚至康丁之配妣辛共15个先王的19个配偶。通观全书，作者对前人卜辞缀合方面的错误进行辨正的事例是相当多的。在第二节，作者曾指出曾毅公与严一萍的拼合之误；在第三节，作者又纠正了陈氏、许氏的误合。作者认为，关于卜辞缀合的原则，不能只看骨版与卜辞的字体，还应该具体掌握各种类型卜辞的内在规律。如缀合周祭卜辞时，弄清什么类型的卜辞才会出现在同一版上，是首要的关键。回顾以往人们在缀合时，大都单纯根据卜辞的内容和字体进行类推的状况，作者的上述辨正实在是不无道理的。另一方面，作者更正前人错误地解释卜辞的事例，亦不胜枚举。譬如：唯一表示先妣的祀序关系的骨版《安明》2854＋《安明》2858，卜问了壬子日协祭大庚之配妣壬、壬申日协祭大戊之配妣壬的祭祀；但在应属同一祀序的出组卜辞《后·上》2·3＋《后·上》2·7＋《后·上》3·7(2)中，大戊之配妣壬是在大庚之配妣壬的下一旬被祭祀的；可见壬子日是壬戌日的误刻，许氏根据上引黄组骨版《安明》2854＋《安明》2858，认为大戊之配妣壬与大庚之配妣壬之间空的一旬是37旬型周期中增加的一个空旬，这是错误的。作者的这一见解，表现了敏锐的识见。再如：祖乙有妣己、妣庚两个配偶，但在董氏和岛氏的祀序表中，均无妣庚；这是他们把祖乙之配妣庚与小乙之配妣庚混淆了。作者指出，武丁之配妣辛是与小乙之配妣庚在同一旬内被祭祀的，祖乙之配妣庚是在庚寅日被祭祀的，武丁之配妣辛则是在三旬后的辛酉日被祭祀的。所以，庚寅日受祭的妣庚并非小乙之配妣，而是祖乙之配妣。祖乙之配妣是在第五旬被祭祀的，而小乙之配妣庚则是在第八旬被祭祀的。这一论证也体现了作者犀利的目光。出组周祭卜辞中先妣的祀序，也始自示壬之配妣庚，与黄组是一致的。但是，出组周祭卜辞多为祖甲时期的，其周祭先妣终于祖甲的祖母辈小乙之配妣庚，母辈是不被祭祀的。黄组周祭卜辞中，祭祀最后的康丁之配妣辛的卜辞，可能是康丁之孙文丁时期的卜辞。这与出组周祭卜辞相同，即周祭先妣也止于祖母辈。先妣的祀序，仍是以她们所配先王的即位次序所决定的祭祀为准安排的。同一先王的诸配妣，则根据死亡的先后安排祀序。（见第三节）

周祭中先王和先妣的祭祀，不是各自独立进行的，而是同在一个系统内进行的。先王的周祭先于先妣的周祭一旬开始，即周祭先王的第十旬祭祀是与周祭先妣的第九旬祭祀在同一旬内举行的。将这些先王、先妣合并排列，即可排出第一旬至第十旬的祀序系统表。其中黄组周祭先王31位，先妣20位，出组周祭先王29位，先妣15位。据《殷本纪》记载，除中丁外，受祭的先妣，都是直系先王的配偶。所以，有配偶被祭祀的先王是直系先王，无配偶被祭祀的先王则属旁系先王。据此，将小甲列为直系先王，实乃《殷本纪》之误失；而有配偶被祭祀的中丁，则应是直系先王。先王无论直系、旁系，都同样被祭祀。直系先王的配偶，受祭的数目并不一样。这是因为，只有立为正后的先妣，才在周祭中被祭祀。许氏以其子是否即位作为判断该先妣是否被祭祀的准则（即“母以子贵”之意），进而根据中丁有两个配偶被祭祀，认为戋甲也是中丁之子。作者则认为，直系先王的配偶是否被祭祀，不是决定于其子是否即位为王，而是决定于是否被立为正后。反之，王之子能否即位为王，却由其母地位的贵贱而定，母贵则得嗣，母贱则不得嗣。由此得知，商代已经存在嫡庶贵贱的宗法制度了。（见第四节）

通过黄组周祭卜辞的祀序统计表，可以看出董氏等4家与作者的分歧。（见表1）董氏等4家所排的受祭先王止于武乙、文丁（陈氏止于帝乙），先妣止于武乙、文丁之配妣，作者则止于康丁和康丁之配妣辛。旬序内容方面的分歧，是从第六旬开始的。对于与董氏等4家第六旬至第十旬的分歧，作者都逐一进行了辨驳。限于篇幅，此处不便详细介绍。其中最大的分歧，就在于武乙以下之王是否属于周祭系统。关于先王、先妣属于周祭系统的条件，作者列举了两个：①看其是否受五祀典；②看其是否受祭时与其他王、妣有系联关系。卜辞中有有武乙、文丁单独接受五祀的记录，但是，却没有在同一版上表示他们与其他王、妣存在系联关系的记录，因而不具备上述条件。我们既未发现记有祭祀帝乙的卜辞，也未见到表示帝乙与其他王、妣有系联关系的记录。至于商末帝辛时期的“四祀邲其卣”铭文“文武帝乙”

的“乙”究竟是谁，各家说法不一，但董氏等4家都将其排入周祭祀谱。即使按照陈氏的意见，把他看作帝乙，也只是单独的翌祭，不存在与其他王、妣的系联关系，故其不属于周祭系统。武乙之配妣戊一称，不见于卜辞，仅见于“静簋”铭文，董、陈、岛氏将她排入周祭系统是缺乏根据的。文丁之配妣癸，不见于卜辞和金文，董氏等四家说她属于周祭系统也缺少确切的证据。各家之所以将这些王、妣排入周祭系统，是因为他们基于一种既成的错误观念，即认为凡是受5种祀典祭祀的王、妣，都属于周祭系统。先王、先妣受5种祀典祭祀，是否属于周祭系统，要看他们的世系位置如何。世系位置处在有系联卜辞的王、妣之前的，就有可能属于周祭系统，处在其后的就不一定属于周祭系统。据此，周祭卜辞有系联关系的最后一个先王是康丁，最后一个先妣是康丁之配妣辛。将周祭卜辞中的先王世次与《殷本纪》中的先王世次进行比较，可以看出以下几点不同：①如王国维、郭沫若、董作宾、陈梦家所指出的那样，《殷本纪》将报丁排在报乙之前有误；②如陈梦家详细论述过的一样，《殷本纪》记外丙在太丁之后、太甲之前即位为王，卜辞则记外丙在太甲之后、大庚之前受祭；③《殷本纪》（《三代世表》、《汉书·古今人表》亦同）记载中壬、沃丁、廪辛曾即位为王，周祭中却未见有此三王受祭；这当是因为他们或者不曾即位为王，或者虽曾即位为王，但由于某种原因，被摒弃于周祭之外了；④据《殷本纪》记载，司马迁似将祖己视为武丁的贤臣，但卜辞则称其为“小王”，祖甲亦称其为“兄己”，故祖己应是武丁之子。《殷本纪》记有“太子太丁未立而卒”，太丁在第二旬被祭祀，祖己在第九旬被祭祀，可见即使未及即位但作为太子曾被确定继承王位者，也是被祭祀的。所以，在周祭中没有祭祀位置的中壬、沃丁，很可能是未被确定继承王位的。（见第五节）

在第四章，作者考察了5种祀典的每种祀典祭祀一轮所需的时间和5种祀典全部祭祀一轮所需的时间，即周祭的祭祀周期问题。如前所述，翌祀与彡祀为开始和最后单独举行，祭、壹、协三祀则在中间相叠举行。黄组周祭卜辞中，②型即卜旬型卜辞记有每种祀典的举行时间。甲名先王的祀序，则表示周期中的旬序。例如：癸卯日卜问第二天甲辰日举行“工典”的祭祀，下一旬的癸丑日卜问第二天甲寅日翌祭上甲。（《续存·上》2652）关于“工典”，各家解释不一。作者采纳了于省吾的解释，认为“工典”即“贡典”，亦即在祀典开始举行之前，“献其典册”之意。在上甲以后，分别为大甲、小甲、戋甲、羌甲、阳甲、祖甲，其间的第三、六旬不举行祀典，是为空旬。这样，从翌工典到翌祖甲，共需11旬。（见第一节）

祭、壹、协3种祀典，是在一旬内将一种或是两种、三种祀典相互交叠举行的。一种祀典需要11旬，壹祀比祭祀、协祀比壹祀分别错后一旬举行，那么，从祭工典到协祖甲，便共需13旬。不过，记有壹祀工典祭的卜辞，目前尚未发现。为此，岛氏曾认为，不仅壹祀无工典祭，而且协祀也无工典祭。这种看法是不正确的。因为壹祀工典祭和协祀工典祭的卜辞虽然确实很少，但是，这或许是由于有些卜辞尚未发现，或是由于壹祀、协祀是与祭祀同时举行的，除祭工典独占一旬举行而必须附记外，壹祀和协祀的记载都被祀典的管理者省略了。将这三种祀典的祭祀周期缩短为13旬，是因为如果单独进行每种祀典，整个祭祀周期就需要33旬，再加上翌祀和彡祀的祭祀周期，就会大大超过一年的旬数。祭、壹、协祀组的祀典颇为复杂，大概每种祀典都有专门的管理者负责。当然，最后总的祭祀大权无疑掌握在商王之手。（见第二节）

彡祀的祭祀周期也是11旬。（见第三节）

上述翌祀、彡祀与祭、壹、协祀三组祀典的祭祀活动，在形式上是互相独立地进行的，但彼此之间的接续却有一定的联系。也就是说，翌祀与祭、壹、协祀组是紧相连接的，二者之间并不另外再有一旬。陈氏认为其间另外还有一旬的观点，是由于违背了腹甲卜辞（《综述》21·8）的惯例而误读所造成的。该片的十月，是十二月的漏刻。祭、壹、协祀组与彡祀的接续关系为：协祭祖甲的下旬是彡祀工典的一旬，两组也是紧相连接的。而彡祀与祭祀两组不是紧相连接的，在彡祭祖甲的一旬与翌祀工典的一旬之间隔有一旬。因此，上述3个祀组之间是首尾相接、循环往复、连绵不断的关系。作者详细探讨了因卜辞释读问题而造成的学者们对于祀组之间接续关系的分歧意见，澄清了是非。（见第四节）

关于五种祀典哪种为祀首的问题，也存在几种不同的说法。董氏与陈氏主张彡为祀首说，岛氏主张祭为祀首说，许氏则主张翌为祀首说。作者认为，由于彡祀与翌祀两组祀典之间有相隔一旬而截然分离的现象，因而许氏的翌为祀首说是正确的。她还列举了两版以翌—→协—→彡的顺序进行卜问的卜辞。岛氏一方面主张以截然分离现象作为祀首的条件，另一方面又坚持以有时并不与前一祀组截然分离的祭为祀首，遭到作者的尖锐批判。（见第五节）

根据上述各祀组的祭祀周期、接续关系以及五祀典的祀首，作者排出了以甲名先王的祀序表示的周祭祭祀周期。在黄组周祭卜辞中，翌祀周期为十一旬，祭、壹、协祀周期为十三旬，彡祀周期为十一旬，加上周期之间的一个空旬，整个周祭祭祀周期为36旬。不过，也有的卜辞表明，在翌工典与上甲之间还有一个空旬，故翌祀周期或为12旬；而且祭、壹、协祀的周期，有时亦或为14旬。这样，周祭的祭祀周期就又存在37旬型的情况了。这说明，黄组周祭的祭祀周期有两种类型。在出组周祭卜辞中，翌祀与彡祀的祭祀周期均分别为10旬，祭、壹、协的祭祀周期为12旬，其整个周祭的祭祀周期为32旬。董氏认为，翌祀工典祭和祭祀工典祭均非单独一旬举行，故出组周祭的祭祀周期为30旬。这种看法是错误的。黄组周祭的祭祀周期之所以存在两种类型，陈氏认为，其原因是由于36旬不足一个太阳年365天，故设37旬型周期予以调整。作者也基本同意这种说法，并且指出，36旬型和37旬型两种周期，并非依次交替设置的，而很可能是在一定时期内所采取的变通手段。当然，要想具体弄清其详细情况，还有待于将来发现更丰富的材料，复原出更详尽的祀谱。（见第六节）

通观各家的周祭祭祀周期表，可以发现董氏等4家之间的不同点：①祀组的次序不尽相同；②各祀组之间的接续关系及先王、先妣的安排不尽相同；③武乙、文丁、帝乙和武乙之配妣戊、文丁之配妣癸受祭的有无不尽相同。作者认真分析这些不同意见，对各家的观点提出了批评，特别是指出了在对待③的认识上，董、陈、岛氏都存在着违反工典祭、各祀组间的接续关系和祀序排列3个原则的问题。许氏对祀组的安排，尽管与以上3家不同，但他认为武乙及其配偶等属于周祭系统，却违反了先即位为王者及其配偶先被祭祀的原则。在承认周祭的祭祀周期有36旬和37旬两种类型这一点上，作者与岛、许两家是一致的，但在一周期内祀序的安排方面，作者却与他们不完全一致。作者认为，岛、许两家对37旬型周期内容的安排是难以成立的。（见第七节）

明确了祀序、周期这些周祭中的基本问题后，作者开始在第五章根据卜辞和金文着手进行周祭祀谱的复原。这项工作肇始于董氏《殷历谱》，岛、许二位也相继作过复原。然而，正如作者在祀序等问题上即已指出过的那样，他们在祀谱方面也存在不少类似的错误。要复原祀谱，就必须依据那些记有年、月、日、祀典、祀序的甲骨卜辞和铜器铭文。但是，到目前为止，尚未发现出组周祭卜辞中有记载王年的，因而该祀谱是无法复原的。黄组周祭卜辞中，虽有末尾记载“隹王几祀”的卜辞，可是，却未记载是为何王，而且此类卜辞不多，加上我们至今对商代历法的具体内容知之有限，所以，对祀谱的复原也只能是一个大概。董、岛、许氏都认为，黄组祀谱只有帝乙、帝辛两王，实际包括3个王世。作者则把它分为3个系统。岛氏认为，“隹王几祀”的“祀”的意思，是指时王祭祀的次数。早在这种见解提出以前，董氏就对此提出过否定看法，许氏也同意董氏的看法。其实，“祀”应按《尔雅·释天》的解释，释作“年”义。（见第一节）

周祭祀谱的复原，除了要明确周祭的祀序、祀首、周期等有关规律外，还要以精确的历法为基础。但是，目前学者们对商代历法详细内容的看法并不一致。董氏的《殷历谱》，是以战国时期的颛顼历为基础的。常正光、陈梦家氏都已指出其谬误之处，因此，它是不可信的。目前，我们对殷历的认识还停留在下述水平上，即一般认为：殷历是一种阴阳合历；它将一年分为365日又1/4日；年有大小，平年12个月，闰年13个月；闰月最初置于年终，后来置于年中；19年7闰法在商末尚处于萌芽阶段；大月30日，小月29日，大小月相间安排，即使有小月重复，亦无大月重复。（见第二节）

在以上前提下，作者首先对第一祭祀系统进行了复原。她依据记有“隹王几祀”的卜辞，将卜旬的日干、祭名、月数等依次排成祀序表，从中找出举行祀典的日期。按照这个方法，先复原出隹王三祀的祀谱，再以此为基础，推求出王二祀、王一祀的祀谱。由于月有大小，并有闰月出现，一年又有36旬与37旬之分，故复原工作并非那么简单。不过，好在王三祀和王二祀都有卜辞可征，只要能够全面解决这些问题，使各种条件彼此没有矛盾，复原其祀谱是完全可能的。关于王一祀的卜辞没有见到，其祀谱的周期类型如何及月份有无特殊情况等，均不清楚。如按每月3个甲日，周期为36旬型，由王二祀祀谱上推，是能够复原王一祀祀谱的。以此类推，在批驳了董、陈二位对于王四祀卜辞的缀合错误等后，作者以慎重的态度，一直复原到王十祀祀谱。其中的五、七、八、九祀为36旬型，二、四、六、十祀为37旬型，两种类型的周期的次数大致相近。这说明，设置37旬型周期的目的，正是为了调整太阳年与太阴月的不符。至于九年不置闰月的情况，虽属反常，但目前所见材料确实如此。坚持19年7闰法之说的董氏认为，这是因为存在失闰现象。这种现象在《左传》中亦可见到，应该解释为：因卜辞的材料不足，历法内容不详。不过，由于5种祀典的祭祀是一种严密实施的制度，只要记载的干支日无误，并恰当安排卜辞所载的月数，复原的祀谱应是比较可信的。（见第三节）

第二祭祀系统的材料极少，而且很不完整，祀谱的复原比较困难，只能排出一个大概的情况。作者依据与王二祀有关的《前》3·28·1和“二祀邲其卣”中的彡祀，找出彡祭大甲的日期在甲寅日。将甲寅日分别置于正月的上、中、下三旬，暂定其祀谱为36旬型周期，每月有3个甲日，可分别排出3种祀谱。关于王三祀祀谱的记录，只有《怀特》1915一版刻辞。但是，可以由王二祀的一、二两谱，推出王三祀的两谱。王四祀祀谱的直接材料虽未见到，但“二祀邲其卣”和同期的“四祀邲其卣”却可作为其间接材料。根据下面的祀谱推知，王四祀每月有3个甲日，祀谱为37旬型周期。从“四祀邲其卣”可以看出，文武帝乙（即帝乙）不属于周祭系统，董氏等4家硬要将其排入帝辛祀谱是与铭文记录不符的。由王二祀祀谱，亦可上推出王一祀祀谱。关于王五祀、王七祀祀谱的记录，亦未见到。王六祀的记录虽有两条，但很不详细。王八祀的记录仅有一条，王九祀的记录有3条。王十祀的记录连同“肃彝”铭文，共有4条，复原其祀谱是完全可能的。借助王四祀、王九祀祀谱，即可推出王五祀、王六祀、王七祀、王八祀祀谱。在这些祀谱中，王二祀、王三祀、王十祀祀谱为36旬型周期，王四祀至王九祀祀谱为37旬型周期，并且闰法已有萌芽。第二祭祀系统的祀谱，与“二祀邲其卣”和“六祀邲其卣”有联系。这两件器物，与“四祀邲其卣”同期，而“四祀邲其卣”的铭文中，有“文武帝乙”的称谓，故其应属帝辛时期的器物。因此，第二祭祀系统的祀谱，应是帝辛时期的。（见第四节）

在上述两个祭祀系统以外，还单独存在着一种既不属于第一祭祀系统、也不属于第二祭祀系统的祀谱。其有关资料为：①37旬型的“辛椃角”铭文和两版卜辞；②36旬型的卜辞一版；③36旬型的“肆簋”铭文。这里的王六祀祀谱和王二十祀的3个祀谱，即不属于上述第一、二祭祀系统，而另属一种第三祭祀系统。随着今后新材料的发现，第三祭祀系统的存在将被进一步证实。由于“宰丰雕骨”刻辞所记载的祭祀不能排入帝乙、帝辛的祀谱，所以，董氏曾疑其祭名或有误记，岛氏亦怀疑其为伪作，许氏则附之待问。1949年，高去寻修正董氏所排的祀谱，把“六祀邲其卣”的铭文视为伪作，从祀谱中剔除出去，结果使雕骨刻辞记载的祭祀排入了祀谱。然而，“六祀邲其卣”的铭文并非伪作，不能从祀谱中去掉；相反，高氏去掉它正说明六祀谱不能排入以上两个祭祀系统。不过，高氏已认为，雕骨刻辞不是帝乙、帝辛时期的刻辞，而是祖甲时期的刻辞。1975年，严一萍提出，雕骨刻辞是文丁时期的。1981年，李学勤指出，黄组周祭记录分为3组，分属3个王世，其中有一组应属文丁时期。近年来，学术界掀起了关于历组卜辞年代问题的讨论，许多学者对董氏提出的武乙、文丁卜辞的时代问题发表了异议，认为它们应属武丁晚期至祖甲时期之物[8]。于是，重新探讨文丁卜辞，成为当前的重要课题。李学勤、严一萍曾经指出，黄组中有文丁时期的祭祀记录。作者也根据王六祀、王二十祀的记录证明，黄组周祭祀谱有三个系统。因此，黄组中存在文丁卜辞是不可否定的。多年来，作者系统整理黄组中的“彷祭”卜辞，发现其中存在相当数量的文丁卜辞。从周祭卜辞中对康丁（即康祖丁）的称谓及五种祀典中对武乙的称谓来看，也是如此。前面我们曾把第二祭祀系统作为帝辛时期的，从祭祀康祖丁的大量卜辞来看，比较严整的第一祭祀系统应属文丁时期，而第三祭祀系统则应属帝乙时间。当然，确切的年代归属，还有待于今后发现新材料来予以证明。武乙、文丁即使受5种祀典祭祀，也是不属于周祭系统的。作者从商末祭祀制度的变迁考察了这一问题，作出了合理的诠释，亦即到了商末，宗法制度有所发展，在“彷祭”卜辞中，除有对武丁、祖甲、康丁、武乙、文丁直系五先王进行例行祭祀者外，还有很多对武乙、文丁二王进行“又×”之类特殊祭祀者。除了以五种祀典对上甲至康丁进行循环往复的祭祀之外，也对武乙、文丁二王举行单独的祀典。“彷祭”卜辞一般不和其他祀典的卜辞同刻于一版，武乙、文丁二王的五祀也不与其他王、妣的五祀同刻于一版，但是，却和“彷祭”卜辞同刻于一版。这表明，二王的五祀与“彷祭”一样，是一种特殊的祭祀。根据对上甲至康丁的合祭和对武乙、文丁的单独祭祀，可以发现：将周期安排为36旬或37旬，①与一年的天数相符，②能不断保持周祭的严密整齐，③同时也符合对近世直系先王进行特殊祭祀的制度。这三点即是武乙、文丁虽受五种祀典的祭祀，却不属于周祭系统的原因。至于不见于卜辞的武乙、文丁二王之配妣不属于周祭系统，就更不待言了。（见第五节）

最后，作者在结束语中指出：王国维曾认为，殷人祭其祖先无定制。但自董氏发现5种

祀典以来的40年间，商代礼制的面貌已逐渐为人们所认识。这方面研究的不断深入，促进了甲骨文和商代史研究的发展。作者还列举出六条因周祭研究而得以明确的史实等，其内容如前所述，兹不重复。从周祭、祊祭卜辞的断代看，不同时代或同一时代的不同类型的卜辞，都是有其自身的发展规律的。研究卜辞的时代，应从各种类型的卜辞的时代入手。商人的祭祀是非常复杂的，也是相当严密的。他们遵循一定的祀谱，每日必祭，每旬必祭。每月必祭，每年必祭。其目的在于，祈求鬼神保佑自己及其宗室的统治。降至商末，商王对祭祀的控制越来越严，宗教在商人的社会生活中占据了绝对的统治地位。（见结束语）

通览全书，值得注意的第一点，是作者进行论述的态度。自董氏以来，历经陈、许等人，周祭研究不断深入，但是，始终未能避免主观片面性。作者严密考察卜辞，在明确划分出各种类型的基础上，确立了周祭的范围、祀序、祀谱、周期等原则。基于这些原则，作者以客观评价各家观点的方法，纠正了卜辞缀合的错误，并矫正了卜辞的误刻。

第二点是内容方面的创见。严格区别具有系联关系的周祭系统与单独的五祀祀典，严格限定周祭的范围，将黄组中的祭祀分为三个系统来进行分析，指出帝乙、帝辛之外还存在很多文丁卜辞，进而提出，在商代末期，对上甲以下诸先王的五种祀典，与对武乙、文丁直系二先王的祊祭等单独祀典，是同时并行的，从而真正认识了商末祖先祭祀的状况。凡此诸例，皆为以往研究所未见，系作者之独创。当然，作为周祭制度之基础的历法制度，目前尚有许多不明之处，而且卜辞材料亦较少，因而有赖于今后进一步发掘和研究的的问题还很多。不过，在今天来说，本书可以看作是周祭制度研究方面的里程碑。

〔译自《东洋学报》（《东洋文库和文纪要》）第71卷第3、4号（1990年3月）〕

译者注

（1）“报丙”原书（《商代周祭制度》）作“外丙”（第76页），今据日文译出未改。

（2）“3·7”原书（同上）作“3·4”（第93页），今据日文译出未改。

（3）“祖甲”原书（同上）作“祖庚”（第301页）、今据日文译出未改。

表1

	先王	先妣	合计	旬数	与作者有分歧的旬次						
董氏	33	24	57	12	第某旬	6	7	8	10	11	12
陈氏	34	22	56	12	同上				10	11	12
岛氏	33	25	58	11	同上	6	7	8	9	11	
许氏	33	22	55	11	同上					11	
作者	31	20	51	10							

（原載《殷都學刊》1991年第1期）

讀乙辛祀譜述見

丁驌

一、介紹與評論

董作賓殷曆譜上篇卷三祀與年，下篇卷二之三祀譜，乃治殷史者必用之資料。先生製此祀譜歷時十餘載。其初創之時，純係空中樓閣。全賴摸索探秘，方使一經緯萬端之資料，得而條理成章。終成三祀譜焉。後人或未知創業之艱，時或輕易評論得失，皆因不經一事，不知其難。未能通盤籌劃，顧於此而不知失之彼也。余讀此二卷亦不下數十次，又曾試綴新見卜辭，修訂正人方日譜等等，方知其中之精妙、細微之處，不妨爲讀者一述。

製譜之條件有三：㈠爲曆法與年曆譜。法指朔、閏、大小月、月建而言。年指王年之數目起訖。㈡爲卜辭金文之研究。其要在認識卜辭部位，契刻之先後，綴合部位之正確，文字解釋與增補之當否。㈢爲祀譜內容之安排問題，如祀首，空間或重疊等問題。前二者爲研究甲骨者所必具。最後一項乃祀譜切身問題。故容細說之。

五種祭祀董分爲三組即彡、翌與祭。彡、翌單獨舉行。翌則與𡧊、劦順序聯合舉行。彡爲鼓樂，翌爲羽舞，祭則以肉食，𡧊亦然。最後之劦乃合他種祀典總其大成，而祀事畢矣。（祀與年頁十六）故董以彡爲祀首。「先疏後密」也。如祭爲祀首，何以彡、翌必分立哉。疏密指離合，非輕、重也。

董稱五種祭祀各爲一係，以祀上甲日之干支名之。而以彡上甲前一旬「工典」之干支爲「統」，例如甲寅彡上甲，此爲甲寅系。彡前一旬爲甲辰，工典。故統爲甲辰統。是以祀譜之中彡祀，必先有工典，他祀系未必有之。雖卜辭未見，董亦列工典一旬，因視此爲一祀之首也。通乙辛二譜，翌祀有工典者少，祭有工典者約三分之一，並非皆有卜辭爲根據。此亦董先生斟酌資料而安排者，未有定規，亦不稱翌，祭之工典爲「統」。又因董所計一統所用之旬數爲三十六旬，故有時一曆年中可見二統。如帝辛十祀正月甲申統（工典）甲午彡上甲，彡爲甲午系。是年十二月甲午工典其酒彡，乃甲午統，故一年有二統也。雖然乙辛二世稱年爲祀，因其相差不遠耳。祖甲時五種祭祀只須三十旬，年不與祀相同，故祖甲世稱年，不稱祀也。此雖言之成理，然與事實，或有未合。詳見下文。

統、系等名詞亦爲便利綴入卜辭之用。實則可以簡化之如表一所列。此表實由祭祀先祖先妣之次序表（表二），以甲日爲代表，簡化而成者。

若由表二研究之，即知每一祀系至時王而止，當用若干旬。如祖甲之時彡、翌二祀系只用九旬。祭祀系用十一旬。加一彡工典，共用三十旬，帝乙之世，先祖祭及文丁，先妣及于康丁妣辛，故彡、翌各十一旬，祭有十三旬，加一彡工典得三十六旬。帝辛之世，董亦用三十六旬爲基礎。故其祀典之中，必無祀帝乙及其配偶。甚至武乙、妣戊、文丁、妣癸亦未在其中。不然絕對不止三十六旬。表三列各式計算之可能。最多時帝辛世可能有四十二旬。惟武乙妣戊，文丁妣癸之祀見於下編卷二祀表二，在第十四旬，亦見於祀表一之第十二旬。依此計當爲三十九旬。然則乙辛祀譜何以仍用三十六旬爲之？因董將每祀系之末一旬與下一祀系之首旬重疊。計彡、翌之間，翌、祭之間，祭劦末旬與彡工典均重疊（見殷曆譜下二祀譜見十一圖）共三旬，故得三十六旬而已。重疊之法可議。因譜中亦有並不重疊之例，故可議也。

祀統所在之日爲六甲日。若祖甲時用三十旬，乙辛世用三十六旬爲一週，則下一祀週將仍起原甲日，永遠如是。卜辭資料則六甲日具有。故知其系與系之間，或統與統之間，必有錯移一旬之實情。依數計凡旬數爲六數除後餘一者，即可得六甲日，如三十一旬、三十七旬、四十三旬等。祖甲之三十旬，乙辛之三十六旬，只須加一工典旬，或空一旬，即可調節。惟此仍有限制，即每統之甲日，必須依寅子戌申午辰寅子……之次序而輪流之，雖六甲皆有，亦嫌其呆板。故實用上可能視卜辭資料之需要而於一祀系之首尾斟酌移動以爲調節。如此似無規律可言。然皆不出三十九旬之基本需要也。董譜從未有在一祀系之間，空隔一旬者。只在祀系首尾爲之。

許進雄五種祭祀新觀念（中國文字三五期頁一至二）有其拼綴之七片碎甲，示妣系（庚子系）中在大庚妣壬與大戊妣壬之間多隔一旬。少一癸亥旬。許氏未言此空缺之旬之故，亦未言此空旬已在後祀武丁妣戊與祖甲妣戊合併補回。故仍是十三旬之劦祀。許

氏或即因此以爲武丁且甲之妣在同日祀（見其文之附表）。其實此龜各辭皆於𦉪日卜。卜而不吉即空，留待下旬。此可證𦉪日有典。而又必每次卜。如遇不能舉行之時，設法於後補之，確保每系若干旬數之不變。絕無先後二世之妣同日祭祀之情形。此七片中祖甲即稱祖甲，不是父甲。故必在四期以降。辭式又與乙辛世略異，疑爲父丁或帝乙初期之卜辭。

許文中又有翌爲祀首之說。祀雖五種，系則爲三，即彡、翌、祭三系壹𦉪併於祭。董以彡爲首。島邦男以祭爲首。各有千秋，均以董祀譜中之不規則現象爲病，思有以補正之。余以爲過分規則化，必不太合實際情況，不如從董之較自由方式，以實例視需要而變通之易於成事也。惟此三系孰爲祀首？余以爲許說似可從。翌爲祀首之證出董之祖甲祀譜。亦見之卜辭之分析（例二）

董祖甲祀譜於元年三月起彡，乃根據二年四月翌工典上溯而成。元年各祀並無卜辭。而二年、三年、六年皆有翌工典之卜辭。其酒彡工典僅見于其十一年。故翌之證據最早而完備。且祖甲初及位，三月即有完備之祀典創立，似嫌匆促。

帝乙元祀，帝辛元祀亦如祖甲・其祀之情況亦皆無卜辭爲根據。惟帝乙二祀四月起祀，辭曰：

「癸未王卜貞：酒，彡日，自上甲至于多后衣，亡壱。自畎在四月，隹王二祀。」

譜上四月甲申彡上甲。另一片爲：五月甲戌彡日戔甲。故衣衣之日亦即祀上甲之日。董於前一旬列「工典」只循例入之而已。雖然如此帝乙祀典起彡日則無可疑。帝辛祀譜密接帝乙祀譜，亦是由其二祀十二月起之彡上甲上推而得。此二世祭祀之事，皆起彡祀，均有卜辭爲證。故余以爲祖甲世至文丁皆以翌爲祀首。帝乙世以彡爲祀首。（例一）帝辛世五祀無所謂祀首。

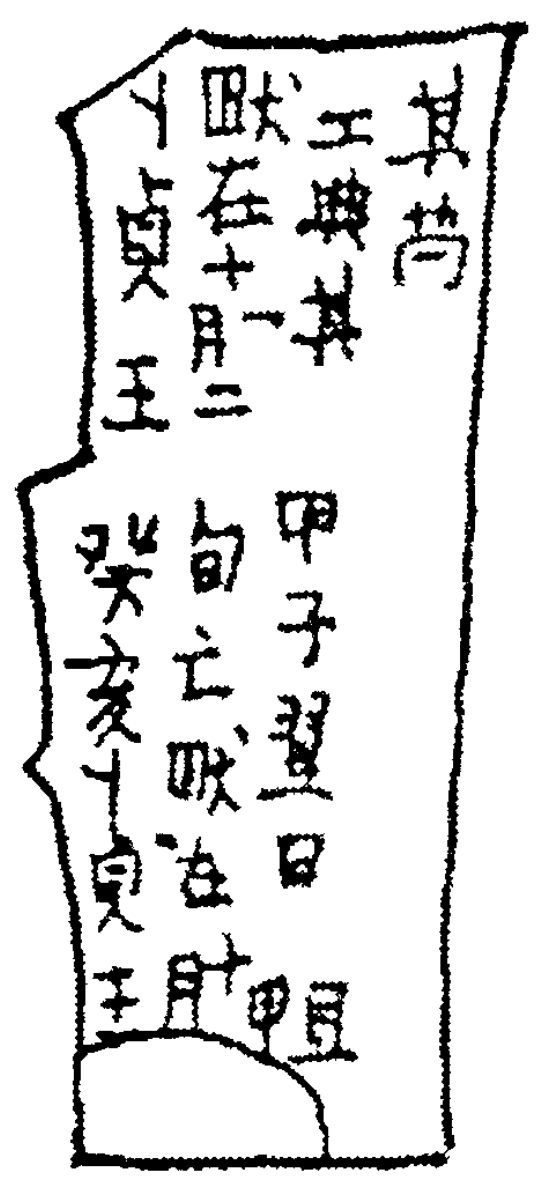
董譜根據自訂之原則，以爲祀首必獻典册。此點余有疑。蓋工典之日可能爲卜之日。即在祀上甲之前一日，非必一旬。如每統加一工典旬，似又未必。卜辭有憑據之工典旬不多，未必是缺失之故，只是有必要時，方供典册而已。如上舉帝乙二祀「癸未酒彡日自上甲。至于多后衣。」甲申即彡祀上甲。癸未先日卜。其意不外卜此祀彡系，由上甲起至多后之吉凶，可否而已。非大祀歷代祖先之謂。並無工典之事。即使必須供典册，亦只是在癸未日。並不在先一旬之癸酉。董于癸酉置工典，純係想必如是之舉。同年十一月癸酉王卜貞：甲戌祭上甲，並未有工典之言，乃循上癸未「至于多后衣」而祭祀如例而已。由此知「衣」即董所謂之統。而由此自上甲至于多后衣者乃一衣祭系統之始。而工典則在一系之前（參閱例一、二及圖一）。如此言之統者只爲我人便利計算祀某王妣所在之旬，不應用爲暗含祀首之義。衣祭方是此五種祭祀之總稱。宜其爲「殷祭」也，工典爲奉典册之祭祀。在翌前舉行者多，但不是五種祭祀必具之儀式。

例項目一　干支　王卜貞　酒（彡，翌，……）日，自上甲至于多后衣亡壱自畎
在某月　隹王某祀之用法例
（）內之字乃董先生所補者
辭多在帝乙之世。

祀	月	干支卜	內容	董譜	說明
乙二	四	癸未	酒彡日	甲申彡上甲	董置工典在前一旬。無據。
乙四	（五）	癸（卯）	（酒彡自上甲）	甲辰彡上甲	綴合誤。嚴改爲八月。董置工典於前。無據。
乙五	九	癸卯	酒翌日	甲辰翌上甲	未置工典
乙廿	二	癸亥	酒彡日	甲子彡上甲	有工典，在前一旬，無據。
辛二	十二	癸亥	酒彡日	甲辰彡上甲	有工典，在前一旬，董補之（十月）可從。

結論：無論酒翌或酒彡，皆於卜日自上甲至于多后，衣祭。次日彡或翌上甲並不於他旬工典。此卜日即爲工典之祭祀亦未可必。此例在帝乙世通用，入帝辛世，二祀後即不再行。

所有工典皆董所例置者。個別言之並無卜辭根據。董以彡爲祀首，故如此。廿祀之辭爲三月。當移至廿七祀。



圖一

例項目二　干支王卜貞或干支卜王旬亡畎在某月日（干支）工典（其苜，其𦉪，其祭，酒彡）
（）內之字乃董先生所補者

祀	月	干支卜	內容	董譜	評註說明
乙四	（十二）	癸未	（甲申工典其苜）	癸未工典。次旬祭上甲	乃卜七八九最下殘辭，次旬祭上甲有卜辭爲證。
乙五	正	（癸卯）	甲辰壹上甲 工典其𦉪		可見工典不必在前一旬，乃在祀上甲之前一日亦可。
乙六	正	癸卯	甲辰酒苜（祭）上甲	工典無根據。	
乙七	（五）	（癸卯）	（甲辰）工典（其酒）彡	癸卯工典，次旬彡上甲	此佚五四五。工典在𦉪且甲之下一旬。合帝乙例。但無據可言彡上甲必在工典下一文。
乙十三	八	癸未	工典其夅	甲申工典，甲午翌上甲	均有卜辭爲證。此出珠二四四，嚴移帝乙三祀。
乙廿	六	癸巳	工典其夅	詠貞甲午工典甲寅翌上甲。	工典旬在六月。董疑爲五月之誤。與彡祖甲同旬。

似不合。

乙廿一	（六）	（癸丑）	（甲寅工） 典其夅	癸丑六月工典 次旬甲戌翌上 甲。癸卯彡虎 甲癸亥彡祖甲	此續一·四·三殘辭。董據龜之位置補工典之旬日。未嘗不可爲癸酉工典次日翌上甲。此董之工典在彡虎甲與彡祖甲之間，亦奇。
辛四七	十（二）	甲子	翌日祖甲		此片可入帝乙四祀。
辛四七	十二	（癸酉）	（甲戌）工 典其（酒） 其莤（圖一）		翌且甲辭下殘作十月。董改爲十二月。工典辭爲十一月二。似爲閏十一月。

結論：

㈠工典其夅爲翌祭之工典無誤。

㈡工典不必在一祀系之首。帝辛世似無例可言。辛四十七祀之獨例，與乙四祀者似爲一事。只譜上所排閏月及祀系次序有問題。

㈢彡、翌、祭、壹、劦五祀皆有工典。至少壹、劦工典在祀祖先之前一日即可。

㈣翌工典多。似翌爲祀首之說較強。

例項目三

羽：毛羽之狀。祭祀之舞曰羽。于先期卜祭者亦曰羽。本爲舞名。借用爲時間之言，故常加日字於後，曰羽日。演變出翌、翌日，等文。卜辭卜旬，每於旬首，例爲「癸（支）卜，某貞，旬亡囚。其下可爲祭祀之辭。

粹一一三：「甲戌羽上甲，乙亥羽匚乙，丙子羽匚丙，（丁丑羽）匚丁，壬午羽示壬，癸未羽示癸……」此辭下歷（大乙）大丁，大甲至于大庚。郭又蛇足加一「沃丁」于其後。殷祀從來未見沃丁之祀，故曰蛇足也。此似爲一羽祀譜，而非卜辭。羽在當日。翌祭爲五種祀典之一。與壹、劦合於同時舉行。依次先後一旬。翌似爲祀首。辭曰：「于既酒父己，羽日，劦日，彡日。王廼步。」（南明六二九）此三期辭。于「既」者月終之日也。次日起羽祀，依次爲劦、彡。故言羽似爲祀首。又有：「乙未貞大卯其冓習？乙未貞大卯弜冓。羽日其興？」（後上二六・六）此四期辭于羽日大卯。亦似羽爲祀首。大卯者：大祭祖先也。可能即後之工典。此四期辭。

驌按：嚴兄以「二且丁」可當沃丁。（見中國文字新六期五七頁）。余從其說。惟小屯南地之骨先言毓且乙，繼言二且丁。二且丁恐是且丁。

二、嚴一萍計劃中之王年

嚴一萍於一九八五年即有修訂祀譜更動王年之稿。此稿乃余所校閱者。迄未出版。原稿似亦未覓得。稿名或爲「殷商年譜」，此不過見其在中國文字十一期中文中述及而已。余校稿時曾將其新訂王年抄存。計爲：

武乙　一二二六至一一九二，凡三十五年。

父丁　一一九一至一一七九，仍爲十三年，元年爲董乙十九祀。

帝乙　一一七八至一一五四，得二十五年，元年爲董辛三三祀。

帝辛　一一五三至一一一二，凡四十二年，元年爲董辛二二祀。嚴之十祀爲原三一祀。

如依此王年，則董之乙辛祀譜，必須另起格架，從頭做起。斷不能仍用原譜也。因祀譜工作繁重。余未能繼此計劃重修之，只能擇其原譜中主要根據而論列之。見下「說帝辛祀譜引用金文及記事刻辭」及「帝辛時代」二稿。

以年曆而言干支有週期性，故隔若干年，必又迴復。惟此年中閏月數目可能因「失閏」「補閏」而有異，故在某月中之癸旬，可能完全一致，亦可能移動一旬。亦可能下移一月。完全相同或下移一月，均易調整。差一旬則略費週章。亦有只差一日者，此又在大小月安排上有考慮者也。由一一七八至一一一二年間，嚴之年曆與董相當之年曆（如嚴之乙二祀即董之乙三三祀，二年曆完全相同）同者有十八年之多，下移一月者又佔三十八年，移一日者四年，不甚合者七年。依此參閱或可省功夫。嚴氏論祀譜工作特重曆譜之推算，大小月之安排，置閏之方式。以此爲格架。或則較勘卜辭、綴合、位置之當否以爲修潤曆譜之工具。或則反其道行之以曆補卜辭之誤失，故如有心人欲爲新曆譜，可從年曆入手，試之者再，或可得也。

余用董帝辛十祀（一一六五B.C.）征人方之譜比對嚴所擬之新王年。當爲一一四四是年曆譜與原十祀之譜大不相同。因原譜有閏九月，故由董曆譜中覓有閏九月或近似者，未有十分合拍之年。一一五四、一一三九兩年近似，惟皆不能有閏九月。由正人方譜中即知此曆年之條件甚嚴，有如下者：

(1)其年必有閏九月。姑無論其爲無中、無節，甚或純係補閏。

(2)每月三癸日。九月有酉、未、巳，閏九月有卯、丑、亥。如此更替，至少至翌年四月。

(3)十祀九月及十月有甲午日。十一月有甲子日，十二月有甲午日，正月有丁酉，此皆見卜辭。

(4)十二月既有甲午（在第三旬）十一祀正月有丁酉。二日辰相距不過三日。故十一祀正月朔，必須在乙未、丙申、丁酉三日。非此三日者不合。

通帝辛十祀以下至四十祀，董譜上只有嚴氏所主張之一一四四－三及余覓出之一一三九－八兩曆年可合正人方之日辰條件。二者均缺閏九月。於曆法無據。只可言失閏而補者。以一一四四年爲十祀，須將其十月改爲閏九月，移下年之正月爲十二月。新十一祀正月爲乙未朔。一一三九－八年則須將一一三九之八月改爲九月，故須將上一年之閏十二月改爲本年之正月癸酉朔，次年正月丁酉朔。以此一一三九年爲辛十祀，則帝辛只得三十七祀而已。帝辛譜中廿五祀以後，未見有紀年之卜辭或銘文，故王之確切年代數目，不可知也。

無論用何年，其祀譜則不可能有太大之更動。因十祀中有三辭爲據點：

(1)王隻白冢。十祀彡日王來征盂方白炎。

(2)甲午……王从侯喜正人方……在九月遘上甲壹，隹十祀。

(3)甲午在𣶃餗，十月又二，隹十祀彡日。

依辭，征盂方必須在正人方之前，故(1)辭雖無月份，其可能之位置在正、二、三、四月不能更遲。九月甲午壹上甲，如無特殊變化，祭上甲多在甲申。十月又二又值彡祀計之當在十二月末一旬也。

前二・四〇・七有辭云：「（癸）亥王卜貞旬亡𡆥在（）月。甲子酒。妹工典其（）。

（在）𠷎餗王正人方。」

此辭不可入祀譜。言「正人方」顯係出師之辭非還師之卜。必在是年之八九月。但如癸亥甲子工典。祭上甲當在甲戌，與上(2)辭甲午壹上甲之間空去甲申一旬。即因此故，董、陳及他說者皆以爲或在「二次正人方」中。今二次正人方爲十五祀，更不可合。此辭遂被擱置不論矣。余以爲董十祀祀譜當將彡、翌二祀上移一旬。取消彡工典。置此辭於八月工典其𦬸。時王出師在𠷎，中間一旬乃在途中，未行祭祀，故近至甲午告于大邑商時壹上甲也。其譜或當如下：

正月癸酉甲戌彡上甲　四月癸卯甲辰彡祖甲　癸丑十一旬止　癸亥空一旬

五月癸酉甲戌翌上甲　八月癸卯甲辰翌祖甲　癸丑十一旬止　時王在𠷎餗正人方。

八月癸亥甲子工典其𦬸　九月癸未甲申祭上甲　九月癸巳甲午壹上甲，王在大邑商。

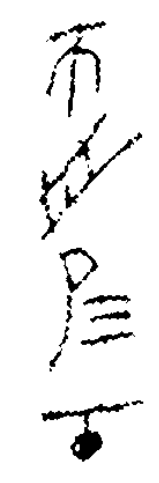
此與十一祀八月在𠷎，九月在𨛜，入于大邑商之日程符合。亦可見商邱爲大邑商。余雖如此補之，仍未盡合意。姑錄于此，以待異日研究也。

三、說帝辛祀譜引用之金器銘文及記事刻辭

董作賓帝辛祀譜引用金文八，以證祀譜之次序如所擬者。帝辛六祀有下列三辭。二爲金器銘文，一爲骨上刻辭。

金一　「癸巳王錫小臣邑貝十朋，用乍母亞癸隮彝，隹王六祀彡日，在四月。矣。」

（陶齋吉金三・三十二）

金二　「乙西商貝。王曰：母不戒。遘于武乙彡日。隹王六祀。四日 商豐。用乍父丁隮彝 。

骨三　「壬午王田于麥彔隻商戠冢。王賜宰封𡫀。小𤇯祝。在五月。隹王六祀，彡日。」（佚五一八背）（骨器）

上三辭皆辛六祀彡日之記僅第二辭乙西武乙彡日在譜上三月中旬。第三辭壬午隻冢之記，實已不在彡日。五月壬午譜上當翌中丁之旬。不合。第一辭帝辛譜癸巳在三月，不在四月，母亞癸若爲文丁妣癸則辭當帝乙祀方合。又第二辭有父丁。若是父丁，則辭爲帝乙世者。然帝乙六祀，三、四、五等月，皆非彡祀。不可入。

嚴一萍說第三辭爲文丁世。「王」字乃五期之字型。非文丁之字型。

余以爲三辭皆帝辛世者。周金器作者爲受賜之人，器則爲受賜者所鑄，用以紀念其先世。故恒有謝王、贊王之辭。此殷器銘文鑄器之對象似即王之父、母、兄輩。故「用乍母……」而不曰「用乍其母……」，亦無謝恩之辭。受賞之人如小臣邑，𡩜等殆是爲王作器之人。銘末署名，可能爲作器人之族徽。

嚴一萍祀譜帝乙六祀爲一一七三，九祀爲一一七〇。祀譜當從新改作。惟年曆亦難容，四月有壬午、乙酉，無癸巳。五月有癸巳又已過壬午。此三辭亦可分屬二王。如在一年則壬午必爲五月或閏五月。癸巳在閏四月或四月。固壬午癸巳干支先後緊接，所居月份則壬後癸先，勢必相間四旬也。

在董曆譜可合之年如下：（在一一五于B.C.以前）（各年均在嚴之帝乙世）

四月癸巳、癸卯、癸丑、五月癸亥、癸酉、癸未　一一六八、一一五八、一一五七。

有閏五月或乙酉在六月　一一七二、一一七一、一一六一。

有閏月四或五　一一七〇、一一六八、一一六〇（閏三月下移）。

如三辭不在一王世。金一金二必在帝乙世。骨栖刻辭在他王世。以帝辛世最宜。六祀五月壬午彡日條件甚嚴。嚴一萍帝辛六祀爲一一四八B.C.年曆譜正合，四月首旬癸巳、五月中旬癸酉。

如謂母癸未必爲文丁妣癸，父丁亦未必是文丁。則嚴之帝辛世尚有多年可入。此年份均在董之帝辛世。只原祀譜不可合耳。其年如下：

嚴祀	六	七	十七	廿二	廿八	卅八
B.C.	一一四八	一一四七	一一三七	一一三二	一一二六	一一一六

董祀　廿七　廿八　卅八　四十三（？）　四十九　五十九

董帝辛九祀有金文辭二，同文。出之一器。器蓋同銘。文曰：

金四　「丁巳王賜𡩜𠂤貝。在寒。用乍兄癸彝。在九月。隹王九祀，劦日。丙」

（歷代號識三・四七）

董雖入之帝辛九祀，注曰：「有劦祀，無丁巳。……爲兄癸作彝，其日或當爲癸巳歟？」董疑雖是，按祀譜亦不當在九月之癸巳。是司劦祀當劦大乙，大丁也。

如用嚴一萍之帝辛九祀，則在一一四五B.C.當董之辛三十祀，則九月亦無丁巳。但有癸巳。或是如董所言曰有誤刻。不然當視嚴之祀譜如何安插也。

如在帝乙之世。帝乙當有兄癸，乃文丁世之子癸。帝乙九祀在嚴譜當爲一一七〇B.C.與帝辛之五祀同。此年九月有癸巳。不然當覓九月丁巳之年矣。但因上金一金二骨三均有王年六祀。上下不易相容。

董辛十五祀有二辭：

金五　「丁巳王省夔京。王錫小臣艅夔貝。隹王來正人方。隹王十祀又五，彡日。」（殷文存上二六・七）

金六　「己酉戍鈴，隮𠙵于召。 舞九律。舞商貝一朋万𩰫用宔丁宗彝在九月隹王十祀劦日五。隹來東。」（歷代款識卷二）

此二辭可參閱余前文「二次正人方」。當時嚴一萍之新祀譜未作，故一依董所訂而說之，未有更張。由金六銘中之「丁宗」必是劦大丁後之己酉日。正人方實無二次。

董置金五于三月中旬內。正面則置於九月祭雍己之癸卯旬。則當爲劦大丁後之己酉。殆丁宋由大宗起。

嚴之辛十五祀在一一三九B.C.爲董帝辛三十六祀，亦皆可入。一一三九與一一六〇兩年曆相同也。

董辛二十祀有：

金七　「戊辰从師，錫綽啚卣賣貝。用作父乙寶彝。在十月隹王廿祀劦日遘于妣戊武乙奭。𢑱一。旅。」

譜辛廿祀十月癸卯甲辰劦且甲。則癸丑旬壹武乙、文丁二妣。若祀帝乙當置祭日。亦必需下一旬癸亥方劦武乙奭妣戊。戊辰適在此旬。由起點計此爲十四旬。若祀帝乙其劦日亦必同旬。故既爲父乙作寶器，亦祭于武乙之妣，帝辛之祖母也。

董之廿祀在嚴譜爲帝乙時。嚴之廿祀爲董之辛四十一祀。一一三四B.C.十月有癸卯、癸丑、癸亥可入。此父乙之稱不合帝乙，只合帝辛。

董辛二十五祀有：

金八　「庚申王在東閒。王格。宰椃从。賜貝五朋。用乍父丁障彝。在六月隹王廿祀翌又五。」（殷文存下二三·六）

董譜辛二十五祀六月甲辰朔翌祖甲。故次旬癸丑甲寅。十四日丁巳翌文武丁。十七日庚申作父丁器。譜次旬癸亥甲子祭上甲，未有根據。此祀有十一旬。無帝乙武乙妣戊文丁妣癸之旬。必誤。當刪去二十四祀十月彡工典之一旬，將彡上移一旬，又將祭上甲下移一旬。刪去二十五祀十月癸未彡工典之旬，可合。王賜貝于宰椃。非宰椃爲其父丁作器，乃爲王作器。董疑宰椃爲王叔輩也。父丁爲文丁。不然則父丁爲文丁，王乃帝乙也。

嚴帝乙二十五祀爲一一五四（董辛廿一祀）。嚴帝辛二十五祀爲一一二九。一一五四年六月丁酉朔。有庚申。一一二九年則無之。故余以爲當置此辭于帝乙時。宰椃仍是執事作器而已。稱父丁，文從字順也。

表一　祭祀日辰關係表

旬	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
工典	上甲		大甲	小甲		戔甲	羌甲	戻甲		祖甲	（武乙）	（帝乙）		（劦武乙妣戊）	（劦帝乙妣某）
辰	寅	子	戌	申	午	辰	寅	子	戌	申	(午)	(辰)	(寅)	(子)	(戌) 子
午	辰		子	戌		午	辰	寅		戌	(申)	(午)	(辰)	(寅)	(子)
申	午		寅	子		申	午	辰		子	(戌)	(申)	(午)	(辰)	(寅)
戌	申		辰	寅		戌	申	午		寅	(子)	(戌)	(申)	(午)	(辰)
子	戌		午	辰		子	戌	申		辰	(寅)	(子)	(戌)	(申)	(午)
寅	子		申	午		寅	子	戌		午	(辰)	(寅)	(子)	(戌)	(申)

表一釋　上甲與羌甲，小甲與且甲同支，距兩個月。上甲與小甲，大甲與戔甲，羌甲與且甲支爲對冲者。在下一月。括號中爲祭劦壹之位置。

表二　彡、翌（帝乙時十一旬）（帝辛時十二旬）工典一旬在彡前。翌與祭亦有之。祭、壹、劦無論乙辛皆必須十五旬。如祖妣分開計，則各爲十四旬。

	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	附注
一	上甲	匚乙	匚丙	匚丁					示壬	示癸	
二		大乙	（卜丙）	大丁			示壬妣庚		（中壬？）		
三	大甲 示癸妣甲		卜丙 大乙妣丙		大丁妣戊		大庚	大甲妣辛	大庚妣壬		無沃丁
四	小甲				大戊	雍己			大戊妣壬		無卜丙妣甲
五				中丁		中丁妣己			（外壬）	中丁妣癸	
六	戔甲	且乙				且乙妣己	且乙妣庚	.			無且辛匕壬
七	羌甲 且辛妣甲			且丁		且丁妣己	（南庚）	且丁妣辛		且丁妣癸	羌甲妣庚無祀 且辛妣庚可疑
八	陽甲				且丁妣戊	且丁妣己二	般庚 且丁妣庚	小辛			
九		小乙		武丁		且己	且庚 小乙妣庚	武丁妣辛		武丁妣癸	祖甲彡翌止此旬
十	祖甲			康丁	武丁妣戊						無廩辛
十一		武乙		文丁	且甲妣戊	劦小乙妣庚		康丁妣辛 劦武丁妣辛		劦武丁妣癸	帝乙彡翌止此旬 祖甲祭典止此旬
十二	劦祖甲	帝乙			武乙妣戊 劦武丁妣戊					文丁妣癸	
十三		劦武乙		劦文丁	劦且甲妣戊			劦康丁妣辛			此旬可入帝乙之配
十四		劦帝乙			劦武乙妣戊					劦文丁妣癸	帝辛祭典止此？
十五	如劦帝乙配某方有此旬										

表三　由表二計祭祀須用之句數

	彡工典	彡系	翌系	祭	合計	附注
祖甲時	1	9	9	11	30	
帝乙時	1	11	11	13	36	
	1	12	12	14	39	計入武乙妣戊文丁妣癸
帝辛時	1	11	11	13	36	
	1	12	12	14	39	計入武乙妣戊文丁妣癸
	1	12	12	15	42	

（原載《中國文字》新十四期，一九九一年）

骨甲学与商周史研究的新进展

——《甲骨学通论》评介

晁福林

商周史研究素以“文献不足征”而让历代学者慨叹。然而，自1899年开始的殷墟甲骨文的陆续发现却提供了十五万片（约一百五、六十万字）以上的丰富而直接的史料，这对于殷商史研究的价值可以说是不言自明的。除了殷墟甲骨以外，七十年代中期在陕西省周原地区又发现了成批的西周甲骨，连同历年各地所发现者，西周时期的有字甲骨已有三百多片。西周甲骨的发现引起了专家们的高度重视，因为它对周初历史研究有重要价值。史学大师王国维曾以孔子壁中书、赵宋古器、汲冢竹简等的发现对于学术研究的重大意义为例，指出：“古来新学问之起，大都由于新发现”[1]。甲骨文字的发现可以说是地下出土的资料推动学术研究的最辉煌的例证。从本世纪初年以来，通过一批造诣很深的学者的研究，甲骨文字的释读、卜辞文例、甲骨断代等重要问题已经初步解决，终于形成了一门有严密规律和特点的新兴学科——甲骨学。

近几年来，随着《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》等重要甲骨著录专著的出版，甲骨学的繁荣日趋繁荣，已经成为一门国际性的学问；它对于汉语史、语言学、考古学、古代科学技术史，特别是对于商周史研究的作用愈益重要。在这种形势下，中国社会科学出版社最近出版王宇信的先生所著《甲骨学通论》一书是非常及时而且有重要意义的。

自从殷墟甲骨发现以来，甲骨学研究日趋增多。据统计，相关的论著已有三千种之多。要想全面而深入地掌握甲骨学研究的信息，假若单靠阅读相关论著，那么不仅对一般读者，而且对于专家们，也都是极其困难的事情。因此，甲骨学研究的综论性质的著作也就历来为人们所重视。五十年代出版的陈梦家《殷墟卜辞综述》、岛邦果《殷墟卜辞研究》，七十年代出版的严一萍《甲骨学》，虽然都有不小的成绩，但毕竟问世已久，许多新出的材料（例如小屯南地甲骨，西周甲骨，和重要研究成果并未能包容进去。《甲骨学通论》一书全面系统地总结了九十年甲骨学研究的成果，经过精审的抉择而融汇诸家学说于一炉，其系统性和科学性都超越了前人的相关研究，胡厚宣先生在该书序言中称赞这本书“后来居上”，李学勤先生作序称赞该书“以更开阔的眼界，涵括了甲骨学的全部领域”。这些都是十分恰当的评价。具体而言，该书的特色至少还可以举出以下几点：

首先，注重阐述甲骨学的学术源流及其发展脉络，缕析甲骨学发展的阶段，从而科学地论证了甲骨学的基本规律。

《甲骨学通论》一书将甲骨文的发现分为四个阶段，即埋藏及破坏阶段，非科学发掘阶段、科学发掘阶段、深入研究阶段。与此相适应，甲骨学的发展也被分为四个时期，即“先史”时期，草创时期，发展时期和深入研究时期。通过作者对各个阶段、各个时期情况的叙述，一部系统而简明的甲骨学小史就呈现在了读者面前。作者的这个比较恰当的划分对于甲骨学的学术源流的阐述起到了提纲挈领的作用。

在科学研究中，无论是哪一种学科的研究者都必须对本学科的历史和现状有所了解。就甲骨学与商周史的研究来说，研究者都应该知晓哪些问题是前辈专家已经解决了的，哪些问题是前人说错了而又为后人所纠正了的，哪些问题是正在研讨而尚未定论的。郭沫若先生曾经说过：“卜辞研究是新兴的一种学问，它是时常在变迁着的。以前不认识的事物后来认识了，以前认识错了的后来改正了。我们要根据它作为社会史料，就应该采取‘迎头赶上’的办法，把它最前进的一线作为基点而再出发。目今有好些新史学家爱引用卜辞，而却没有追踪它的整个研究过程，故往往把错误了的仍然沿用，或甚至援引错误的旧说以攻击改正的新说，那是绝对得不到正确的结论的。”[2]要追踪相关课题的“整个研究过程”，了解其历史和现状，对于一般研究者来说，由于查找资料困难等原因，可以说是很不容易做到的。《甲骨学通论》一书的许多章、节都着眼于解决这方面的问题，以求对研究者提供尽量多的信息和帮助。例如，甲骨文中有一批比较特殊的卜辞，其笔划多纤细扁宽，其称谓，世系、贞人、事类等也与商王室卜辞不同。这类卜辞的时代和性质是甲骨学中的一个重要问题，也是一个难题。学者们对这个问题曾经进行过长期而热烈的讨论。有的认为它是文武丁时代的卜辞，有的认为是多子族与王族卜辞，有的认为是非王卜辞。陈梦家《殷墟卜辞综述》将这类卜辞进行分组研究，定其为武丁时代之物；《甲骨文合集》则将其分为甲、乙、丙三组集中著录在第一期卜辞之后。《甲骨学通论》详细追踪了诸家的研究过程，并且证之以当代考古发掘成果，使读者可以一目了然地清楚了甲骨分期断代的这个“谜团”的揭穿经过。对于诸如此类的问题，该书一般都做到了既有简明扼要的介绍，又有对关键问题的深入剖析，甚至不惜以较多的篇幅列举丰富资料和图表，论述重点，以求深中肯綮的效果。

甲骨学发展史上，一批著名学者之所以能够取得卓越成绩，其重要原因在于他们具有殚精竭虑而上下求索的顽强精神，正如罗振玉所说，甲骨文的研究，“譬如冥行长夜，乍睹晨星，既得微行，又蹈荆棘，积思若寻，雷霆不闻，操觚在手，寝馈成废”④。《甲骨学通论》对于前辈专家和当代学者在甲骨学研究方面的贡献进行了详细阐述和恰当评价，并且挖掘出许多很有价值的资料，从而大大丰富了甲骨学史的内容。该书所提到并做了一些介绍的中外学者多达一百几十人，其中以较多篇幅重点介绍的有早期甲骨购藏家王懿荣、王襄已刘鹗，为甲骨学奠基的罗振玉和王国维，为甲骨学与殷商史研究作出巨大成绩的董作宾、郭沫若、唐兰、于省吾、胡厚宣、陈梦家、李学勤、裘锡圭等。特别应当指出的是，该书不仅对著名专家的杰出贡献作了充分肯定，而且对于一般学者所进行的有价值的探索也进行了适当评述。例如，对于甲骨学发展具有极其重要意义的甲骨分期断代问题的基本解决，毫无疑问，这是得力于甲骨学大师董作宾于1933年所发表的《甲骨文断代研究例》这篇名作，《甲骨学通论》一书用“凿破鸿濛，把甲骨学商史研究推向一个新高峰”来赞誉它，是完全合适的。然而，该书并没有就此为止，而是尽力追踪解决甲骨分期断代问题的整个研究过程。作者指出，早在1917年左右，王国维、罗振玉就开了以“称谓”定卜辞时代的先河。王、罗两位大师曾将载有父甲、父庚、父辛的卜辞断定为武丁时所卜，将载有父丁、兄己、兄庚的几片甲骨定为祖甲时物③，这些精到见解对甲骨分期断代的研究是有启发的，其后在1928年，加拿大人明义士也曾经尝试依据卜辞中的“称谓”对甲骨文进行分期断代，并较早地注意到甲骨文“字体”变化对分期断代的影响。《甲骨学通论》一书既肯定了董作宾的杰出贡献，又指出了王国维、罗振玉、明义士等人的筚路蓝缕之功。作者在“本书的宗旨”一节中说该书意图在于“尽量将已经解决和正在解决的一些重大学术问题的来龙去脉叙述清楚”，纵观该书对与甲骨学和商周史的一些重大学术问题的缕析，可以说作者的目的是完全达到了的。作者的缕析中充满了实事求是之意，体现了恰如其分的慎重态度。这为今后学术史的研究提供了好的范例。

实事求是之意是撰著学术史，特别是当代学术史的关键所在。《甲骨学通论》一书对著名专家和普通研究者采取了一视同仁的态度，对著名专家的贡献进行肯定但不溢美，对普通研究者有价值的探索予以阐述而决不抹煞。例如，关于一批特殊卜辞（即陈梦家所概括的“子组”、“午组”等三组卜辞）的分期断代研究，董作宾原来曾一度把这批卜辞的一部分放在第一期，一部分放在第四期，可是他后来撰写《殷历谱》时却把这批卜辞全部归入文武丁时代。胡厚宣在为《甲骨续存》写序言时则将这类卜辞归入盘庚、小辛、小乙时代。董作宾、胡厚宣都是蜚声中外的甲骨学大师，胡老还是《甲骨学通论》作者的恩师，他们关于这批特殊卜辞分期断代的意见显然与现在国内外学术界公认的论断不合，但他们的意见在甲骨学发展史上是有意义的，所以作者还是在书中作了阐述。又如，殷墟甲骨文发现以后，周王朝是否有甲骨文，商朝覆灭之后是否由于“失国蠢卜”而使甲骨文不复存在和使用，这都是学者们注目的问题。最早对这个问题作出肯定回答的不是大师、名家，而是在甲骨学史上名不见经传的何天行。他早在1940年就认为周亦当有卜辞，并且是“从殷民族那里学去的”，他根据《诗经》、《水经注》等文献记载推测，“在陕西西安府附近曾有发现卜辞的可能”⑤。周原甲骨的发现，证明这个推测是很有眼光的。该书的下篇一开始就详细称引了何天行的论断，肯定了其意义。不以名气大小，而以学术源流作为抉择取舍的标准，这对于综论性质的著作和学术史的撰写应当是有普遍意义的。

其次，《甲骨学通论》一书立论审慎，该书所提出的许多具有创新性质的见解都持之有故，令人信服。

甲骨学与商周史的许多问题十分复杂，不宜匆忙做出结论。《甲骨学通论》在阐述这类问题时，一方面广征博引，详细介绍诸家之说，另一方面又能够提出自己的独到见解。例如，占西周甲骨绝大多数的周原甲骨的族属问题，这是注释这批甲骨内容的关键，学术界分歧较大。该书称引了王玉哲、徐锡台、陈全方、李学勤、徐中舒等学者的论断，缕析了几种不同的观点，即认为周原甲骨为商族之物、为周族之物或商周兼而可之等，指出在周原甲骨材料全部公布以后，学者们的意见渐趋一致，认为绝大部分应为周人所有，但还有几片涉及到商王宗庙名称和祭祀商人祖先的甲骨。为了弄清这类庙祭甲骨的族属和时代，作者先考察了商周时代的祭祀制度，其结论指出，周人不可能在周原为商王立庙并祭祀商先王，周文王也不可能进入殷都的商王宗庙参考祭典和占卜。然后，作者又逐片研讨了这些甲骨文字的内容和刻辞文字的书体风格。作者认为，这类庙祭甲骨不是周文王居殷时所卜，而是商王朝帝乙、帝辛时物，并推论这类甲骨出自周族入于商王朝的卜人之手（见该书409—436页）。作者对于西周甲骨研究有年，前此，他曾出版有《西周甲骨探论》一书，在《甲骨学通论》中，他又在以前研究的基础上进一步研

晚的。说到这里，不禁使我想到齐鲁书社出版的张培瑜先生所撰著的《中国先秦史历表》一书⑦。这部书以现代科学的精密推算为依据，排列出很长历史时代的年月干支，假若专家们能参照卜辞（特别是武丁卜辞）所记月份与干支，结合《中国先秦史历表》的推算结果，那么，就将会使甲骨分期断代研究进入到一个新的层次，李学勤先生所提出的卜辞排谱的课题和《甲骨学通论》一书所提及的武丁卜辞的再分期任务都将会有很大进展。甲骨断代的另一个重要课题是需要明确殷墟卜辞中究竟有没有武丁以前和帝乙以后的卜辞。常玉芝先生曾指出，《龟甲兽骨文字》第1．13·18片的第一条卜辞应为帝辛时所卜⑧，王宇信先生也指出，周原凤雏遗址的H11：1片为商人庙祭甲骨，“是确定无疑的帝辛时物”⑨。然而这毕竟只是一个开始，帝辛卜辞的发现及其区分，尚需要更系统地进行研究。此外，按照“王期”分层，祖庚和祖甲、廪辛和康丁、武乙和文丁皆是两位商王的时代为一期，随着今后的深入研究，似乎都应当再分期，力求做到把全部卜辞分在每一王世之下，这是一项困难的工作，也是一项很有意义的工作。

关于今后的西周甲骨学研究，《甲骨学通论》一书首先提出的是相关材料著录问题。现在所能见到的几种著录虽然都做了不少努力，但多不齐备，或虽较全而又都是摹本。各种摹本之间比例不一，使研究者难于比较另外，各种摹本对于一些文字的摹写不尽相同，特别是对于关键性质的文字摹写不一，更易造成考释的严重分歧。甲骨文字著录最理想的做法应当是将一块甲骨的照片、拓本、摹本三者一起著录。西周甲骨文字纤细，须经多倍放大之后方能辨认，所以不宜进行墨拓。然而，却可以考虑将放大比例一致的照相和摹本合编的办法。这项工作虽有一定困难，但并非不能做到。西周甲骨的大批出土已经十几年了，其材料的刊布和科学的著录工作却进展迟缓，这是令人焦虑的事情。该书指出：“编纂一部著录各地出土有字西周甲骨的总集，成了当务之急。”“这在当前不难办到。我们亟盼这样一部包括各地所出全部有字西周甲骨的科学著录书早日出版。”（该书第438页）这可以说是甲骨学与商周史研究者们的共同呼声。此外，作者提出的西周甲骨中的一类异形文字是八卦还是筮数的问题，对于西周甲骨性质的认识也是很重要的。作者所提出的关于西周甲骨钻凿形态、西周甲骨所反映的周初历史及商周关系、西周甲骨在微雕发展史和书法史上的地位等问题，对于学者们今后的相关研究也都具有重要参考价值。

除了以上几个主要特色之外，该书还作到了行文流畅，深入浅出，许多甲骨学和商周史的艰深而枯燥的学术课题，经作者娓娓而谈，往往达到引人入胜的效果。该书涉猎的范围相当广泛，不仅学术性强，而且兼具知识性和可读性。这些对于专家们和一般读者都是很有吸引力的。

最后，有一个问题想提出来和作者商榷，就是关于甲骨学综论性质的撰著如何和商周史研究相结合的问题。地下出土的文字资料，其大宗主要是甲骨文、金文、战国文字以及秦汉时期的竹简、木牍和帛书，每一种资料都应当而且十分需要有综论性的撰著出现。这类撰著和相关史学研究的结合程度应当具体情况具体分析。例如，战国文字无论是载书还是刻辞和玺印，它们所反映的战国历史状况毕竟有限，战国史研究主要还是靠古代文献资料，所以战国文字的综论就没有必要全面反映战国史研究动态及课题。然而，甲骨文的情况与战国文字很不相同。甲骨文字的内容涵盖了殷商史的各个方面，对周初历史也有不少反映。古代文献虽然也对殷商史实有所记载，但其数量远不能和甲骨文相比的。假若没有关于甲骨文的研讨，那么，可以说殷商史研究就根本不可能继续深入。《甲骨学通论》一书对于甲骨学的研讨所促进的商周史的发展虽然也多有提及，但显得比较零散。关于这方面的内容，该书作者在1981年出版的《建国以来甲骨文研究》一书中反映得较多一些，但已历时多年，新的成果仍需予以综论和评述。商周史大量的新的研究成果往往得助于甲骨学的发展。这些成果在甲骨文综论性质的著作中得以系统反映不仅不应当视为画蛇添足，而且是十分必要的。《甲骨学通论》再版的时候，希望能补充进去这方面的内容。对于这个建议，不知该书作者以为然否？

（以下接上栏）

讨了西周甲骨的特征，分期，族属等重要问题。他提出的许多新颖见解都凿凿有据，论证缜密，具有较高的学术价值。

我们还应当提到一个重要问题，是关于西周甲骨分期的研究。如果说殷墟甲骨研究首先需要凿破鸿蒙，判明甲骨的具体时代，然后才能够稽出商代信史的话，那么，西周甲骨研究也有凿破鸿蒙的问题必须解决，西周甲骨不象殷墟甲骨那样有世系、贞人、称谓等作为分期断代的可靠标准，同时，西周甲骨绝大多数集中出土于同一地层的两个窖穴，所以也很难从坑位和地层为标准进行分期。为了解决西周甲骨分期的难题，《甲骨学通论》提出西周甲骨中“王”字的变化是探索分期问题的一把钥匙。正如专家们所说，作者的这个发现是有启发意义的。西周甲骨中，“王”字不仅经常出现，而且富于形体变化。一般说来，这些有“王”字出现的甲骨，不仅字数较其它无“王”字出现的甲骨多，而且内容也较为重要。因此，作者从“王”的横向差异和纵向变化两个方面所进行的考察，就具有典型意义，从而也是可以作为西周甲骨分期线索的。作者将西周甲骨的“王”字分为四个类型，并考订了西周甲骨所载史迹，从而将其分为三个不同的时期，即文王时期，武王和成康时期，昭穆时期。作者所进行的较为复杂又很有意义的西周甲骨分期断代研究已经取得了重要成果，这是甲骨学研究的一个新进展。

又如，关于甲骨文发现年代的考证也反映了作者对于重要的学术问题孜孜以求其真的负责态度。殷墟甲骨虽然早就被人从地下挖出作为“龙骨”而售于中药店或碾为细末用作刀伤药，但那并不是真正的发现，殷墟甲骨的真正发现是指人们亲自鉴定甲骨实物，因目睹其上的文字而认识它的价值，并把它作为珍贵文物而搜集和研究。这个发现的年代，学术界本来认定是在1899年。可是近年有的学者提出应是1898年。甲骨文发现的年代是早一年还是晚一年，这对于殷商史和一般学科的研究来说，关系并不大。然而，对于甲骨学发展史来说就是一个相当重要的问题。作者在阐述这个问题时，并没有采取“三占从二”或弃旧取新的简单做法，也没有采取两说并列而让读者为难的做法，而是钩稽史料，认真分析，以求得出实事求是的结论。关于甲骨文发现年代的较早证据是1903年出版的《铁云藏龟》中罗振玉的序言以及刘鹗本人的自序，他们都认为甲骨文的发现和被购藏是在光绪己亥年（即1899年）。早期的甲骨购藏家王襄在1925年出版的《簠室殷契征》序中也说，“自清光绪己亥下迄民国纪元，此十四年间所出甲骨颇有收获”，与罗氏和刘氏说法相同，并且在1933年和1935年王襄又曾两次肯定，“光绪己亥年河南安阳县出贞卜文”，“人世知有殷契自此始”⑦。只是到了1982年，即甲骨文发现八十三年之后，王襄写于1955年的《簠室殷契》一文发表时，才改云甲骨文发现于1898年。《甲骨学通论》一书蒐集了大量材料，对甲骨文发现的年代问题进行考证，最后论定甲骨文的发现应从1899年王懿荣鉴定和购藏甲骨文开始。作者的考证解决了甲骨学史的一桩公案，其认真负责的态度是值得赞许的。

再次，《甲骨学 通论》不仅全面总结了九十年甲骨学研究的成果，系统而科学地论述了甲 学的基本规律和研究方法，而且对今后甲骨学的发展提出了中肯而重要的意见。这对于学者们的进一步研讨是有启发性的。

甲骨文分期断代问题历经学者研究，成绩斐然，可是也还有待于继续解决的重要问题。该书首先提到的就是武丁卜辞的再分期问题。武丁在位时间长达59年之久，迄今所发现的十五万片甲骨文字中，武丁时期占了一半以上。从理论上说，武丁卜辞应当是能够进行再分期的，特别是以贞人宾为核心的大量王室正统卜辞更应当是能够区别出其早

注　释

①王国维《最近二三十年中中国新发现之学问》载于《学衡》第四十五期（1925年）。

②郭沫若《十批判书》，科学出版社1956年版，第5页。

③罗振玉《〈殷墟书契考释〉序》，1915年。

④王国维《殷卜辞所见先公先王考》，见《观堂集林》第431页—434页。

⑤见何天行《陕西曾发现甲骨之推测》，载于《学术》第一辑，1940年（上海）。

⑥见王襄《题所录贞卜文册》，载于《河北博物院半月刊》（1933年）；《题易穞园殷契拓册》（1935年）。引文详见《甲骨学通论》第27—28页。

⑦张培瑜《中国先秦史历表》，齐鲁书社1987年版。

⑧常玉芝《说文武帝》，载于《古文字研究》第四辑，中华书局，1980年。

⑨见王宇信《甲骨学通论》，中国社会科学出版社，1989年版第213页。

（原载《考古與文物》1991年第2期）

《英国所藏甲骨集》书评

（美）吉德炜（David N. Keightley）

据统计，目前国外收集甲骨的数量大约为26700片，（在迄今所知全部的155,000片左右的甲骨中占18%）分散收藏在十二个国家。① 正如胡厚宣在《英国所藏甲骨集》（简称《英藏》）②《序》中指出的：国外收藏的甲骨，除日本和加拿大之外，以英国所藏为最多，主要是由收藏家兼学者库寿龄（Samuel Couling）、方法敛（Frank H. Chalfant）和金璋（Lionel C. Hopkins）收集的。这些刻辞仅来源于商的狭小范围，有讽刺意味的是，几乎从1899年这些文字资料被发现以来，一直激励着中外学者的合作。

这种合作表现在近年来国外学者多次参加在中国举行的有关商文化和古文字的学术会议③，一些与会的外国学者④的论文用中文发表，同时，中美两国学者间进行的学术讨论⑤用英文发表。北京中国社会科学院历史研究所和伦敦大学亚非学院联合出版了《英藏》，它表明了国际间汉学领域的合作更进一步加强，诚然，这种合作不仅仅限于商文化的研究。

本集的特点

《英藏》收录的大多数刻辞——像布列颠图书馆、皇家苏格兰博物馆⑥和剑桥大学图书馆所藏——过去人们在《金璋》⑦和《库方》⑧所发表的摹本中已见到了。亚士摩兰博物馆藏34片甲骨中的8片，先前曾用照片的形式发表过⑨。直到1982和1983年，李学勤和艾兰才

---

① 胡厚宣：《八十五年来甲骨文资料之再统计》，《史学月刊》1984年，5期，第22页。我很感谢艾兰、胡厚宣、雷焕章（Jean A. Lefeuvre）、李学勤、林沄、Stanley L. Mickel、夏含夷和高岛谦一，他们对书评初稿中的错误给予有益的指正。

② 《英国所藏甲骨集》，中国社会科学院历史研究所和伦敦大学亚非学院，李学勤、齐文心、艾兰合作，上编上、下册。页数：524、15，1988年中华书局（北京）出版。售价：人民币350元。

③ 我记得有（1）中国古文字学会年会，见《古代中国》（Early China）第五辑（1979—1980）113至118页周鸿翔的报导，第七辑（1981—1982）第114至118页夏含夷的报导，以及第八辑（1982—1983）第182至186页周国庆的报导。（2）1984和1987年在安阳召开的国际学术讨论会，见《‘古代中国’消息》夏含夷的报导。（1卷1期3至4页，18至19页，1988年1月出版）。大家还应当注意有中国人参加的在美国举行的会议，比较突出的是（8）1982年在夏威夷召开的有关商文明的国际会议，会后发表了两个刊物：《商代考古学研究》，由张光直编辑，（纽黑文，耶鲁大学出版社，1986年出版）。《商代文明国际会议：已发表的论文摘要和讨论概况》（《古代中国》增刊Ⅰ，1986年）由罗泰（Lothar Von Falkenhausen）整理。

④ 如尼德卫的来稿：《〈国语〉‘武王伐纣’天象辨伪》，刊《古文字研究》第十二辑，1985。吉德炜：《中国正史之渊源：商王占卜是否一贯正确?》，夏含夷：《早期商周关系及其对武丁以后商王室势力范围的意义》，刊《古文字研究》第十三辑。

⑤ 例如，《古代中国》第十一——十二辑（1985—1987），第146至194页，由夏含夷、王宇信、李学勤、范毓周等人在“古代中国论坛”中发表了关于周原甲骨的文章。

⑥ 《英藏》中包括了皇家苏格兰博物馆的藏品，对这批甲骨进行的施拓工作使人们放心了。当Paul Demieville在1972年访问该馆时，没有人能够找出这些甲骨或告诉他这批甲骨的情况。雷焕章《商朝的龟甲和牛骨刻辞》，《通报》1975年第41期第50页注①。

⑦ 《金璋》中的甲骨文摹片比原片稍有缩小，这使得学者们试图与其它甲骨进行拼合的工作十分困难。

⑧ 在“书目提要A”中，我提到了这些甲骨集。见吉德炜：《商代史料——中国青铜时代的甲骨刻辞》（伯克利，加里福尼亚大学出版，1978）。

⑨ 饶宗颐：《欧美亚所见甲骨录存》（出版地未详，1970），第28至35号。

得调查到包括十一个公私收藏单位的①英国全部刻辞，然后，齐文心又予以施拓。应当认为这是迄今为止最好的，（虽然未必是唯一的）原始材料的版本②。她从十一个收藏单位的3088片甲骨中筛选出2674片甲骨制成拓片，著录于《英藏》。有1025片（在《英藏》所收甲骨中约占38%）是以前没有发表过的，仅就内容看来，就足以表示该书的重要了③。

分类与分期

2674片甲骨的拓本，构成了《英藏》上编的主体内容。前面有包括五块重要甲骨的八幅彩色图版（其中三块甲骨有正反两面）。然后是胡厚宣的《序》，编者《前言》和九条《凡例》。这些内容全用中文发表。书的后面都有英译本。另外有一个内容明析表，可通过分期和分类查找甲骨片（详下）。

编者仿照最近出版的商代刻辞集成《甲骨文合集》（简称《合集》）④最新采用的形式，将《英藏》所收的2674片甲骨根据董作宾提出的五期分法⑤进行了时间先后的分期，然后对各期卜辞的内容进行具体的分类。在内容的分类上，与《合集》采用的形式不完全相同，如：“诸祖先”、“爵称”、“贞人及人名”以及“王事活动”等⑥。他们还按照《合集》的先例在第一期的后面安排了有分期争议的自、子、午组卜辞。

内容

对于任何一部有特色的甲骨集，学者都会有其兴趣所在，正如同对待一切历史评论，其重点取决于读者的眼光。然而，无论从哪个标准来衡量，《英藏》都是一部特别丰富的史料宝库，因为根据该书所附的分期分类表（未编页码部分的第11页，另有一个活页）就表明有66%的甲骨（最前面的1756片）属于董作宾划分的第一期，这期甲骨是商朝占卜范围最广泛的时期⑦。（如果将有争议的自、子、午组甲骨也纳入第一期，则第一期甲骨所占的百分比将达到72%。〔见上段〕）⑧

就内容而言，在《金璋》和《库方》所录的早期摹本中，已经发表了这一批具有重大历史价值的资料。《英藏》的编者们，在《前言》提到了该书的三十多片甲骨，讨论了一些问题，例如：卜骨侧边上的卜辞和骨扇上的卜辞之间的关系（《英藏》353＝《金璋》699）；一例很有价值的关于月蚀的记载（《英藏》886＝《库方》1595）⑨；非占卜的记祭祀刻辞

---

① 编者的《前言》（英文版）中，有每宗甲骨来源和数目的简要说明，见第5至8页。在下编，编者们可能标明每片甲骨的来源。在目前，更有用的是齐文心《关于英藏甲骨整理中的几个问题》，刊《史学月刊》1986年第8期，12至22页。她为我们提供了所藏甲骨的统计资料和拓片的数目，以及对未发表甲骨查访工作的说明。我尚未见到李学勤的《记英国收藏的殷墟甲骨》，将发表在胡厚宣主编的《甲骨文与殷商史》第三辑。

② 胡厚宣说明了在各种的甲骨文著录书中，曾采用不同的结合方式对摹本、拓本、照相加以运用，并希望英国所藏甲骨的照片最终出版。这样可使学者们对任何一块特殊的甲骨采用三种不同形式的复制品加以比较。我推测，实际上，照片将会以《英国所藏甲骨文字存真》的形式发表（1988年10月7日与胡厚宣的谈话）。

③ 我从齐文心的《关于英藏甲骨整理中的几个问题》中获得了这些数字。见《史学月刊》1986年第三期，第14页。

④ 《甲骨文合集》郭沫若主编，胡厚宣总编辑（1978—1982中华书局出版），共13本。我对这部基本的新参考书的评论，见吉德炜《商代史料：中华人民共和国出版的两种主要甲骨集》，《美国东亚学会志》第110卷1号（1990）。

⑤ 对董氏分期的介绍，见吉德炜《商代史料》第92—94页。李学勤《关于英国所藏甲骨的几件事》，《书品》1987年第2期，第15—17页。在文中阐明他使用了董氏的旧分期法，因为它已通行了五十年，现仍在广泛应用。他不想把尚处于争论中的个人意见强加给别人，包括两系九组的设想，以求大体上和大家取得方法上的一致。

⑥ 例如《英藏》的类目中没采用《合集》的“奴隶和平民”或“奴隶主贵族”。

⑦ 商代占卜涉及的范围，在后期变得有更多的局限性。见吉德炜《商代史料》第22页。又吉德炜《商代占卜与玄学》，刊《东方和西方的哲学》第38卷第4期（1988年10月），第378—383页。

⑧ 对这个争议的介绍，见夏含夷《最近关于甲骨文分期的探讨：一篇书评》，刊《古代中国》第八辑（1982—1983）第1—13页；又见吉德炜《商代史料》一书关于分期问题的讨论。

⑨ 该片“七日”一词中的“七”指第七天，在《英藏》拓本中看不清，方法敛的摹片可以帮助我们阅读。

（《英藏》112〔＝《库方》1580〕、1195、1196）①；一些子组（《英藏》1891＝《库方》1988）、午组（《英藏》1916）的重要卜辞；一处修正，表明了妇好没有伐过羌（《英藏》150＝《库方》310）；改正了有关人方战役的几处地名（《英藏》2562②、2565＝《金璋》544、583）；全部和部分的作伪；早期摹本的错误（详下）；不规则的却是可信的习用语；一例他们认为是利用废弃卜骨改造成的饰物（《英藏》1873＝《库方》420）；非卜用甲骨上的刻辞（《英藏》2673＝《金璋》88）。他们打算对颇有争议的《家谱刻辞》做更为充分的讨论（《英藏》2674〔彩色图版7、8〕＝《库方》1506），将其置于该书拓本的最后一片，放在分期表之外③。

关于首次发表的1025片甲骨的价值，齐文心做了有益的说明。她的讨论涉及到：例如，要向一个名叫伊永的人颁布命令，在丁日好还是在甲日好（《英藏》2262）；一些方国的名字（《英藏》130、601、749）；不少的骨臼刻辞表明了妇、邑的身份和占卜的礼仪以及卜骨的管理制度；一些刻辞涉及到农业（《英藏》821）和田猎（《英藏》2566），其后一版新发表的卜骨共有48字④，是新材料中文字最多的一片。这些新发表的刻辞都是极有价值的。

拼合和伪刻

甲骨的拼合工作是没有止境的。严一萍曾根据方法敛所摹写的《金璋》和《库方》两个摹本，完成了六十多片甲骨的拼合工作，在1975年发表於所著《甲骨缀合新编》。齐文心在施拓的过程中拼合了四版⑤。不倦的蔡哲茂，不断地以批评的眼光注视着国内大陆，他对《英藏》的拼合⑥提出了一些不同的意见；此外他又提出有十八片可以拼合的甲骨涉及到

---

① 这些记录很重要，由于它们暗示了依据被祭者的庙号干日的祭祀制度，于武丁在位时期已经出现，早于祖甲时期存在的系统周祭。率先对这种迹象进行讨论的文章，见李学勤《论宾组胛骨的几种记事刻辞》，《中国殷商文化国际讨论会》提交论文（会议于1987年9月9日——16日在安阳召开）。他在论文中引用的卜辞是《合集》1262、1263、1770、10410和12333。该文将在《英藏》下编发表。

② 纠正了《英藏》《前言》第10页第16行的“2525”号（英文版。中文版为第5页第31行。——译者按）。

③ 编者们对这一片的真实性持不同看法，齐文心（《关于英藏甲骨整理中的几个问题》第19页）作为全面讨论本集辨伪问题的一部分，认为，主要基于派生的或独特的字形和刻工粗疏软弱无力的字体，证明《英藏》2674片的的《家谱刻辞》是在旧的卜骨上面的伪造品。李学勤则认为是真品，见他的讲演：《关于方法敛旧藏商代胛骨家谱刻辞的讨论》（伦敦大学亚非学院1982年2月2日）在《古代中国》第七辑（1981—1982）第119页有报导。又见他的《关于英国所藏甲骨的几件事》第16—17页。艾兰《论甲骨文的契刻》将在《英藏》下编发表。她根据在显微镜下研究甲骨文刻道的深度、刻道边缘的光滑度、契刻顺序、刻道的裂缝等项，断定文字是真实的。她认为刻辞的时间可能在武丁时期。对于这一结论，我有幸在艾兰的原稿中看到，给我留下深刻的印象。我曾在1978年9月28日检查了这片甲骨，尽管不是很有把握，但这使我较倾向于齐文心的立场。我曾将这些字的风格和巴黎甲骨藏品中的许多明显伪刻联系起来（见吉德炜《商代史料》第144页注40），鉴于艾兰更为严密的解释评述，我希望能够再次验看伦敦和巴黎的甲骨。

④ 《关于英藏甲骨整理中的几个问题》第14—15页。

⑤ 同注①，第16—17页，图1—4。

⑥ 蔡哲茂《读英国所藏甲骨集上编》，刊《大陆杂志》第74卷第5期（1987）。他指出，齐文心所做的四个拼合中的两项是过去已做过的。一个是夏渌做（见《英藏》2119），发表於《学习古文字随记二则》，刊《古文字研究》第5辑（1981）第178—179页；另一是白玉峥做，发表在《甲骨缀合录小》，刊《中国文字》第三期（1981），第210、228页。事实上，公平地讲，白只给我们提供了两片不能直接的残甲的“遥缀”。这两片甲骨是《库方》1844和《金璋》739，在齐的文章中，她向我们展示了遗失的中间残片，即《库方》1556（《金璋》739即《英藏》1813。《英藏》的编者没有在图版中刊出这一拼合。）（译者按：拼合版将发表于《英藏》下编的《图版补正》。）蔡（更倾向于原来曾毅公所做的拼合）还对齐将《金璋》535和477拼合成《英藏》539的作法提出质疑。他在《读英国所藏甲骨集上编》第202页的图5、图6表现了这两种不同的拼合方式。（译者按：原拼合有误，经艾兰再次检验原骨，证明不能直接拼合，但属于一版，故做分开处理。见《英藏》下编《图版补正》。

《英藏》，而主要的是与《合集》的拼合①。

齐文心还讨论了英国所藏甲骨的伪刻问题，将其分做两类：一类是刻在新牛骨上的，很容易分辨；而另一类是在旧卜骨上面做伪。通过对原骨直接的观察，齐文心就陈梦家所总结的前人对《库方》伪片做出的研究成果，给予了权威性的评论，并且核实了他的一些看法②。

本集的价值

问题自然地发生了：将这些已发表过摹本的1649片甲骨制成拓片，这样做是否有道理？回答是完全肯定的。齐文心提供了有效的说明，表明由原来的摹本如何导致了许多错误的解释。她根据许多实例将方法敛的《库方》摹本存在的缺陷分成五类：（1）缺反面文字（如缺占辞和在边缘处的记事刻辞。有57片甲骨缺反面文字，共缺114字）。（2）缺骨臼文字（只有一例）；（3）漏字（共有18片漏掉34个字）；③（4）摹写错误（共有86片，摹错107个字）；（5）甲骨倒置（有4例）。特别重要的是她讨论了《英藏》2283（＝《金璋》209）。这片甲骨现应读作“……王其乎七尹伐衔于……”即“……王命令七个尹去攻击衔在……”按照齐的解释，这七个尹可能是多尹的一部分④。

出于个人的工作，1978—1979年我曾用过收藏在剑桥大学图书馆的《库方》原骨⑤。使我能够举出下面一些实例，进一步说明《英藏》拓本的价值及使用拓片时应引起注意之处。

一、《库方》摹本1616“往”字下边有三个奇怪的点，在原骨上没有，正像《英藏》拓本544所表现的那样⑥。

二、《库方》1649有“贞共人三千”，占卜：“我们征集三千人”。刻辞的最后一个字，方法敛遗漏了三个横画（事实上是“三”和“千”的合文）。方法敛漏摹的辞看来是说“征集一千人”。一些学者信以为真⑦，《英藏》558揭示了这一错误⑧。

三、《库方》1661有一个类似的错误，对历法至关重要，方法敛将最后一段辞的日期摹写成“在三月”。是否如此，《英藏》2503拓本未能解决问题，因为“三”字正好落在两片残骨的接缝上。检查原骨，则很清晰地显示出数字“二”。即将出版的《英藏》下编中的释文（详下），有可能使这个问题得到澄清。释文还可能告诉我们这片甲骨与《甲编》297可以拼合①。此项缀合是很重要的，因为拼上去的一块包含有“王八祀”一词，意思是“国王的第八个周祭”。在互相拼合的几片残骨上，仅此涉及各项卜辞在祀谱中的位置②。

---

① 其中一片涉及到《英藏》2259（《库方》1986＝《合集》41312）＋《英藏》2261（《金璋》363＝《合集》41320）尤其重要。因它为祖先名称“中宗”只指祖乙而非祖丁的观点提供了旁证。（《读英国所藏甲骨集上编》，第201、204页，图4）。关于这条辞的讨论，可见与之相关的《小屯南地甲骨》下册第1分册第2281片释文，（上海：中华书局，1983）第996—997页。（本集包括4589张拓片，绝大部分甲骨是1973年发掘的，这是吉德炜在《商代史料》中评论的第二部甲骨集。著文的全名及出处，见第21页注④。）蔡还说明，由于《英藏》拓片的精确和真实，使他删除了过去一例错误的拼合（《读英国所藏甲骨集上编》第200页）。

② 见陈梦家《殷虚卜辞综述》（北京：科学出版社，1956）第652—653页。齐文心（《关于英藏甲骨整理中的几个问题》第18—20页）对陈梦家的“全部伪刻甲骨表”补充了三种情况，例如，该表中有17片甲骨实际上是部分伪刻。她在《金璋》中只发现了很少的伪片，在她看来，原书中注明的7片全伪，有4片仅是部分作伪。对于另外原注“疑伪”的四片，经验证有三片是部分作伪，一个是全伪片。

③ 例如：方法敛在《库方》1531（＝《英藏》2568）中只摹写了一个假字，却忽略了九个真字，而这些真字对于研究第五期的周祭是很重要的。

④ 《关于英藏甲骨整理中的几个问题》，第14—15页、第20—21页。

⑤ 译者案：“剑桥大学图书馆”应是“不列颠图书馆”之误。下举《库方》1616、1649、1661、1781原属布列颠博物院藏品，1973年划归不列颠图书馆，以迄于今。（见《英藏》《前言》第3页）

⑥ 由于《合集》的编者们未能收入《英藏》的拓本，他们只能采用方法敛的摹片，和其它甲骨集的摹本一并编在《合集》第13册。因此必须认清的是，方法敛的错误仍遗留在《合集》中。例如，《合集》第39621片，重复了三个错误的小圆点。

⑦ 如：董作宾《殷历谱》（四川南溪，中央研究院1945）下编卷9，第31页下，第144片；张丛东《甲骨卜辞反映的商代祭仪：关于中国古代宗教的古文字研究》（威斯巴登：海拉索维兹，1970）第104页。司礼义（Paul L-M Serruys）给张做的书评中，重演了这个错误。见《商朝甲骨刻辞的语言》，《通报》第60期第1—3页（1974）。《合集》39861也重复了这一错误。

⑧ 齐文心《关于英藏甲骨整理中的几个问题》第21页也指出了这种类型的错误。

四、《库方》1781自组刻辞的摹本，至少有两处错误。首先，右边的卜序数字和左边的相同，都是“三”而不是“二”。这在《英藏》1771拓本上可以清楚地看到。事实上，用拓本解释上部左侧的笔画仍然是困难的。方法敛摹写的像个“卜”字，仔细观察表明应是“癸”（甲骨文的形状是✕），其下的残画应该是“亥”。这给我们提供了一个旬期“癸亥”。《英藏》下编的释文和注解中可能会交待清楚，并将证明另外的五块甲骨可以和它拼合。③

我提出的这些例子，既证实了该书的价值，又表明了一个不言而喻的道理；既使拓本是出色的，尽管它是不可缺少的原始资料，但往往不能尽善。虽然它们仍会存在缺陷，但是方法敛的摹本（重印版见《合集》第13册）仍有使用价值，可以互相补充。实际上齐文心已经提醒人们注意摹本的进一步贡献。《库方》中的6片，《金璋》中的16片，令人遗憾地遗失了，发脆的牛甲龟甲也支离破碎，致使摹本中尚存的内容，在拓本上消失了。最少的失去两个字（《库方》328＝《英藏》142），最多的缺少五个字（《库方》271＝《英藏》863）。方法敛的摹本成为我们得见这些甲骨残片的唯一记录。④

《英藏》全书的价值是勿庸置疑的。多种学术成果都曾依赖于方法敛摹本的准确度，但正如我们所看到的，他的摹本仍存在着相当程度的局限性。笼统看来，摹本的质量还是比较高的⑤，因此没有明显的理由去直接否定它们。但正像所有的摹本那样，它们留下了恼人的疑点，表现在拓本中可能有所不同。现在我们有了出色的拓本可供参考，这是重要的。

下编的辅助材料发表之后，《英藏》会变得更有意义。下编包括：（1）释文；（2）辅助性文章⑥；（3）辅助性表格⑦；（4）上编的补充和更正；（5）摹本；（6）甲骨文字、词索引；和（7）补充的黑白照片，包括一些文字在显微镜下的照片⑧。《英藏》下编肯定是上编有价值的续编。我们期待着它的出版。

〔原载《古代中国》（Early China）第14辑（1989）。　　马力威　译〕。

---

① 《合集》41704未能改正错误的“三”，或指出可拼合。

② 见屈万里《甲编》第297片考释；《甲编图版》16又加以拼合。屈在考释和摹写中都正确地读作“二月”。董作宾《殷历谱》下编卷二，《祀谱》二，第6页下，同此。

③ 《合集》40867重复了方法敛的错误。准确的释文和拼合，见屈万里《跋李棪斋先生缀合的两版‘用侯屯’牛骨卜辞》，《大陆杂志》第31卷第8期（1965）第2页。

④ 《关于英藏甲骨整理中的几个问题》第21—22页，其中有些情况需要说明。例如，齐文心认为《英藏》1015较《金璋》695残去了19个字。当然，它们原本是一块甲骨。但是摹片和拓本包括了38个相同的字（外加一些残字），看上去没有缺失。至少从已发表的《金璋》695摹本看去，没有缺少19个字。当《英藏》下编发表的时候，问题可能会得到澄清。（译者案：《关于英藏》一文第22页《英藏》1015、《金璋》695为错号，应改做《英藏》1016、《金璋》696。经再次验看，《英藏》1016因骨残，较《金璋》696少22个字，特此更正。并感谢吉德炜教授指出了这个错误）。

⑤ 编者们认为：尽管“摹本有误或不足的例子不胜枚举。不过《库方》、《金璋》摹本总的说来还是比较符合原物的，经过查对，有些受到怀疑的地方，摹本并没有错。”（译者案：此段引中文《前言》第6页。英文版在第10—11页。）

⑥ 作者和他们的文章是：李学勤《论宾组胛骨的几种记事刻辞》、齐文心《伊尹、黄尹为二人辨析》、艾兰《论甲骨文的契刻》和E.N.爱尔纳德《剑桥大学图书馆所藏一片卜甲的鉴定》。

⑦ 十二个对照表，可使学者参照使用《合集》和《英藏》这两部甲骨集。

⑧ 我很感谢艾兰向我提供了这个信息（1988年10月1日的来信）。又见李学勤《关于英国所藏甲骨的几件事》。

（原載《中國史研究動態》1991年第7期）

簡論甲骨文合集

白玉崢

壹、前言

甲骨之學，雖爲我國近百年來四大顯學之一，且於我國文化之傳承，古史之建設，以及人文之演進、科學之發展等情形至關緊要，然其有關資料之傳播，較諸其他三學，則顯爲稀疏。蓋自論定甲骨契辭爲殷商一代之實錄，迄今八十餘年來，其實物不僅散流全球各地，且無論公私所藏，咸以珍秘瑰寶視之，而扃於密室、窮窖、複壁、洞穴之中，鐵將軍日夜守護，戒閉謹嚴，至親良友亦多不之知，況乎外人。因之，欲研究我國古史、文化等之學者，不僅甲骨實物不易眼見，遑論親手摩索；即便實物之原始拓本，蒐羅亦非易致。私家所藏，或有製爲拓本，或有輯集拓本、影印成册，販售於市肆者，而其價格之昂貴，較之當年龍骨、刀尖藥時代之眞正甲骨實物，還要高出數十倍，甚或百倍者。殊非一般升斗小民所敢想望焉。或有勒腹以購之者，然展觀其所著錄，或僅影印拓本數十片，或僅數百片而已。雖然；若干求知欲較強、或愛護民族文化、歷史等之人士，寧願斷炊三日，不惜傾囊而購置者，但其書，散列各地之坊肆，雖欲輾轉購置，不僅資訊缺如，且山海阻隔，關卡森羅，殊非易致者也。即使有能力打通關節，而得到所購置之標的時，則事已累年矣。

甲骨文合集（簡稱合集）之出版，對衆多的古史、文化、甲骨學、古文字學之學者，與許多文化、歷史的愛護者，以及一般讀者言：無疑是個天大的絕佳消息。至其所集，據「商周制度考信」序云：「輯集八十年來甲骨資料之大成」。當必盡括已出版之甲骨資料而無遺。此後，凡研究我國文化、歷史、甲骨學、古文字學等之學者，手此一集，即可靜心展開研究工作，不必再爲尋求資料，奔波於各地之坊肆，領受朝奉那份眉眼傳情，甚或繼母之聲氣，或操勞於資訊之探索矣。

據胡厚宣先生所著「五十年甲骨學論著目」序謂：國內外公私所藏之甲骨材料，「總凡一九三宗，一六一九八九片。只短短的五十年發現的材料，竟有十六七萬片之多。」再據胡先生此一總計予以平均計算，每年約可發現新材料三二四〇片。後三十年新發現之材料，目前尚未見正確之統計，姑據前五十年每年平均之數字，以折半約略計算，三十年來最少當得四五〇〇〇片。再加五十年論著目胡先生之統計，八十年來當有二十萬零陸千九百八十九片之甲骨材料。輯聚偌多之甲骨材料爲一集，誠可謂：亙古僅此一書。即退一步說：合集之出版，雖謂集八十年來甲骨之大成，固未必能穀盡輯已行世之甲骨材料；保守點，仍以折半計之，當在十萬片以上。謂之空前之巨書，並無不當。前此、未能偏置各方歷年所出版之甲骨資料書者，置此一集，即可盡觀八十年來所出土之甲骨矣。設購置能力稍弱之讀者，只要肯下決心，可以運用質當、舉債，甚至以泉水充飢等之方法與手段，亦可輕易購置於案頭，而滿足求知之欲望。則合集之出版，該是一件值得大書之盛事；若能進入「金氏年鑑」而成世界之最，不僅編者先生爲完成此一巨書而驕傲，而目空師友。即置此巨書於案頭之讀者（無論眞讀或假讀），當亦快樂無比，因而絕食三天，以示慶祝此一巨書之出版。至其在文化、歷史等之貢獻與價值，則不能以升斗斤兩計之矣。

合集出版後，僕併力購一集，八開大本，厚厚的十三大册；如用重量計算，最少應在三十公斤上下，稱得上絕大的巨書矣。敬以萬分欣喜且非常興奮之心情，急切展觀此一曠世之巨書，然展觀之餘，却有股莫名的失望之感。蓋前十二册共輯集甲骨拓本三九四七七號（面背臼同號），後一册輯集甲骨摹寫本二四七九號；兩者總計，不過四一九五六號而已。較之胡先生於三十餘年前所統計之一六一九八九片，尚不足三之一之數。所謂「集八十年來甲骨之大成」云者，無乃是一句美麗的謊言，而有意矇人者耶！遂急忙回頭翻檢合集輯集之體例或說明，始恍然而知合集所輯集之資料，乃選輯一九七〇年代以前所出版之甲骨資料，並非將八十年來各地所出版之甲骨資料，悉數予以輯集者。不過，旣爲選輯而成册，何以名之爲合集，有待思索者。惟當宜知悉者，爲「選輯」之標準或原則爲何；綜其說明所言，可歸納爲如左之七事：

一、文句完整、及比較完整者選輯之。

二、文句雖殘，但其辭少見者選輯之。

三、殘缺過甚者不選。

四、後世僞刻者不選。

五、眞僞互見於一片者選輯之。

六、校汰重複，擇優選輯之。

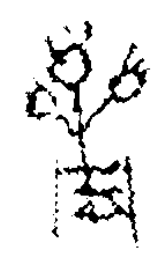
七、輯集綴合片：

  1. 輯集前人之綴合片。
  2. 補綴前人之綴合片。
  3. 新作綴合片。

據此標準選輯歷年之甲骨資料，雖未能有片必輯，而汰其糠粃，留其精華，要亦可稱爲善美之甲骨資料選輯，自有甲骨以來之大觀矣。奈何編者先生並未遵守此一善美之標準，致見於合集所選輯之三九四七七號拓本，未合此標準者，比比皆是。玆就展觀所見，略陳數例，藉觀其違牾所定標準之一般。

1. 鄴中片羽初集下四七・七、四七・九，殷契佚存五一八、五三二，殷虛文字乙編八八一八等五號，皆爲文句完整者。片羽之兩號，實物雖有殘缺，其所契之刻辭文句則皆完整，且兼備實物之正反面照相（四七・八）。佚存五一八號不僅實物、拓本、契辭三者皆完整無缺，且兼備正面花紋之拓本。五三二號實物雖有殘缺，契辭則完整，爲一較完整之卜骨。乙八八一八號爲一縱長二十三公分以上之完整腹甲，全版雖未滿佈契辭，而所契之八辭則皆文句完整。據合集所定選輯之標準，此五者極合標準，理當入選。不悉何故，竟不能受編者先生之青睞而入選於合集。或謂：片羽

之兩片及佚存之五一八均爲骨柶，而非甲骨卜辭，不爲選輯之列。然則，「懷特氏等收藏甲骨文集」之骨柶，何以選輯於合集（三七八四八）？于省吾所藏之骨簡，又爲何選輯於合集（三六四八一）？以及殷虛文字甲編之兩鹿頭骨刻辭（三六五三四、三七七四三），牛頭骨刻辭（三七三八九），京津、掇二、綜圖所著錄之人頭骨刻辭（三八七五八至三八七六四）等，又何以皆選輯於合集？編者先生何以獨厭增於片羽、佚存之骨柶呢？佚存五三二、乙八八一八，爲不折不扣之卜骨與卜甲，編者先生何以不選輯於合集？是否這幾根骨柶與骨甲開罪於編者先生？若非，則可證編者先生於拓本之選輯並無標準。強謂確有標準，其標準爲編者先生主觀之愛惡者見也。

2. 合集一〇六三九號之辭僅存五文，爲「甲寅☒貞王☒步☒」。契辭破爛，不能句讀，而其辭亦非罕見者。又若三五八〇號僅存「壬子卜」三文，二〇八七二號亦僅存「壬寅卜」三文，並皆爲屢見不鮮之序辭，了無選輯之價值，而編者先生則皆選輯於合集中。證合集之編者先生於甲骨契辭之認識與瞭解甚爲膚淺，否則、何以竟會認糠粃爲瑰寶？再若四七三八號殘存僅「」文，二〇八七七號僅存「庚」；八三六九號殘存「貞衆」，二〇九八〇號殘存「辛雨」，二二三三號殘存「六圉」。五者皆僅殘存一二文，既無甚意義，除與他片綴合外，亦無甚價值（合集之編者先生所選輯於合集之殘碎拓本，類此者觸處皆有，多不勝擧，玆僅列數例如上）；就一般常識言，類此之契辭或拓本，似宜解爲殘缺過甚者，當不在合集選輯標準之內；然合集之編者先生却大量予以選輯。不悉合集之編者先生，對殘缺過甚之辭，有那些新的見解或新的界說與定義。

3. 合集六一九六、一四六二七、二六八六八、二七二一六、三一六八〇、三二九九七、三四四三六、三八七六五等八號，均爲後世之僞刻仿造者，且前人皆已論及其僞，而合集之編者先生則均予選輯。不僅違牾其所定僞刻者不輯之標準，亦可證明合集之編者先生並無甲骨辨僞之學養與能力，遑問其他。

右述三事，乃就合集所定選輯拓本標準之前四者，略提數例，藉觀其違牾標準之一般。此下再就合集所定標準之後二者，仍提數例藉觀其違牾之情形。

貳、重複選輯拓本例

前此行世之許多甲骨資料書中，所著錄之拓本，彼此互爲重複，或本書自相重複者甚多，合集之編者先生知重複著錄拓本爲編輯之大弊，故合集之編輯，特明定刪汰重複拓本爲選輯標準之一，且大事廣告宣傳。若編者先生確能刪汰重複，誠是一件功德無量之善事。然展觀其所選輯之拓本，重複選輯者，雖非恒河之沙，要亦不能謂之少。證明所云汰重，僅止於空口白話，朦人朦己而已。實則，並未從事此一繁難而苦寂之工作。就此一端言：謂合集並無選輯標準或原則，並不厚誣其書也。

1. 九一一：一一六八二
2. 一七〇五：一七五四
3. 三二〇三：一五三八六
4. 三七〇一：一七八三六
5. 三七八六：一六四三三
6. 三八四八：四四五四
7. 四六五四：一二八七八正
8. 四八四五：二一四一二
9. 六〇三六：二八三七八
10. 六七八〇：八六一二
11. 八二〇〇：二一七六七
12. 八六八七：一八二五九
13. 八七一一：一五七五六
14. 九九三一：一八〇八二
15. 一〇三九九反：一三四七一
16. 一一三三四：一一三三五
17. 一一七七六：一二〇四一
18. 一二〇四四：一二四〇六
19. 一三三一二：一五一六二
20. 一五二二九：一五四二〇
21. 一五四〇五：一七五九三
22. 一五八〇〇：一六八〇三
23. 一六四〇三：一七六七七
24. 一六四二五：一七六三三
25. 一六八一二：一六八八一
26. 一七七七八：一七七八五
27. 一八二六一：一八九五四
28. 一八四二八：三一二六七
29. 一八六四七：二〇一八四
30. 二〇三九三：三三〇八九
31. 二〇三九四：三三〇八八
32. 二〇七九四：三一八八六
33. 二一三四一：二二五一〇
34. 二二七一五：二六四八六
35. 二三四九九：二三五一五
36. 二四一四七：二六七〇〇
37. 二四五三八：二九四七五
38. 二四五四一：二四七九九

39. 二五一二七：二五八〇二
40. 二六六六四：二六六六九
41. 二八二〇七：三四一六九
42. 二九六九三：三一一八一
43. 二九七六七：三一二〇〇
44. 三一三五六：三一三六五
45. 三一三六六：三一四〇六
46. 三一七六六：三五二七一
47. 三六五五五：三六五六七
48. 三六六三二：三六六三五
49. 三七七六七：三七七七〇

右简錄合集所選輯重複之拓本，總凡九八號；較其所輯近四萬號之拓本，爲數甚微，僅當千之一強。若與甲骨第一資料書之「鐵雲藏龜」重複著錄之情形相較，更是微不足道，無礙於合集之觀覽。但合集以「汰重」爲選輯拓本之標準，且大事廣告其汰重之特別價值，設有一片之重複，亦屬編者先生未能確實盡到汰重之責，況乎竟有近百號之重複歟？且有可言者：若一一三三五與一一三三四兩號之重複，合集中之編碼密接，而編者先生竟不能辨其重複，則編者先生辨識拓本之能力實在有限。又如二六六六四與二六六六九，一七七七八與一七七八五，三一三五六與三一三六五諸片，雖相間僅止三五個編碼，固宜不能辨其重複也。又遑論乎相間萬餘個編碼之：三二〇三與一五三八六，一八四二八與三一二六七，二〇三九三與三三〇八九等，諸編碼之重複耶？

綜觀右錄重複各拓本之情形，固由編者先生缺乏辨重之能力，另方面更顯示編者先生於甲骨學分期斷代之瞭解甚是平平，或僅止於道聽途說而已。姑不論其以文武丁時之辭，定爲武丁時期之當否，玆就右列之重複各片言：若四六五四與二二八七八正之重複，則將武丁時之辭再選輯二期者。八二〇〇與二一七六七，一八六四七與二〇一八四等，均以武丁時之辭再選輯爲武丁時之附。一八四二八與三一二六七，則爲武丁時之辭再選輯於三期。二〇七九四與三一八八六，爲武丁時之附再選輯於三期。二四五三八與二九四七五，爲二期再選輯於三期。二八二〇七與三四一六九，三一七六六與三五二七一，皆爲三期而再選輯於武乙者。檢合集之編例，大體以分期爲經，辭意性質爲緯，必如上述之重複選輯，則分期斷代在合集中並無意義。故二期祖甲時之辭（一六〇四八）定爲武丁之時，實在是件平常希鬆之事。

秀堂夫子曾有「評甲骨文合集」、「再評」、「三評」等文及甚多之論述（見中國文字新刊）已論其重複選輯及分期斷代之不當，此不一一逐錄，請參閱。

叁、誤認拓本例

甲骨拓本性質之辨認，說來簡單容易，龜甲之拓本（無論腹背）必異於肩胛骨。不過，此僅是一點無甚用途之小常識而已；若眞的要從許多爛甲殘骨之碎片拓本中，辨認何者爲骨，部居何處；何者爲甲，爲腹爲背，部居何處，則非易爲者矣。其於甲骨之生態，部位之異同，製爲拓本後彼此之差異，以及拓本製作之良窳，影響拓本辨認之情形等，若無深切之認識與瞭解，不易爲功。即使具備此種辨識能力，亦因個人於甲骨學之素養及認識拓本經驗之差異，所運用之結果亦不盡相同。合集之編者先生，於此等處之素養似嫌不足，故展觀合集所輯之拓本，編者先生誤認者頗有所見。玆擇錄數例，藉供合集之讀者參考。

1. 一〇八八：按：合集所定之反面拓本，實爲另一腹甲之正面拓本。所定非是。

2. 三一九五：同右。

3. 四七五五：按：所定正面拓本，爲佚存六八八（六束二八）之正面拓本，不誤；惟將其背面拓本遺棄，另以佚存六八九（六淸二八，外編三一五）之背面拓本當之，並將正面拓本遺棄。而以不同實物之正反兩拓本，併爲一件實物之兩拓本，則殊爲非是。

4. 四九六〇：按：合集所定之反面拓本，實爲肩胛骨之骨臼拓本。所定殊非。

5. 一〇二三三：按：合集所定之反面拓本，實爲另一卜骨之正面拓本。所定非是。

6. 一二二〇七：按：合集所定之反面拓本，實爲另一背甲之拓本，所定非是。

7. 一五五四七：按：編者先生認正面拓本爲反面，反面拓本爲正面。殊誤。

8. 一六〇四八：按：編者先生認定右上甲之正面拓本爲反面。非是。餘請參閱重複例及綴合例。

9. 一八四六四：同7.。

10. 一九九五七：按：所誤雖與前同，惟此乃合集之編者先生既不能訂正商承祚之正反誤植，只有從其誤。然不能訂正之咎，宜由合集之編者先生負之。

11. 二五四八一：同1.。

12. 三二四六一：同7.。

13. 三三〇二五：同右。

肆、錯誤綴合及當予綴合不能綴合例

甲骨碎片之綴合，似易而難，雖難亦易，要在綴合工作之施爲者，對甲骨學造詣程度之高低而定。若合集者，其所選輯之綴合片，或編者先生自行施作之綴合片，是者有限，而誤綴錯合者雖未鱗次節比，要亦爲數甚多。且將不少的綴合素材當予綴合，編者先生却不能施予綴合，竟將絕佳之綴合成果，失之瞬眼者，隨處可見。甚且前人之正確綴合不予選輯，却偏偏選輯一些錯誤綴合者。證明編者先生於綴合甲骨之學養，與夫認識非常淺薄，無怪所輯之綴合片違牾其所定之標準也。略舉數例藉明其概。

一、誤綴錯合例

1. 五〇五：按：所綴合之兩片，非同甲之折裂者。蓋經綴合後，盾紋既不密合，契辭亦不能句讀也。（圖一）

2.一五八〇：按：所綴合之兩片，部位倒植。甲片爲腹甲右甲橋之下半，位置居右。乙片爲左甲橋之下半，位置在左。所遙綴者殊非。（圖二）

3.一六六八：按：所綴合之兩片，上片爲腹甲之左上甲部分，爲祭祀之辭。下片腹甲中甲之中央部分。且二者之書體殊異，非同甲之折裂。（圖三）

4.三一七一：按：此綴合亦爲部位倒置。甲片爲腹甲之右首甲，乙片爲左首甲。正反皆倒置。（圖四）

5.三四三八：按：所綴合之兩片非同甲之折裂。設將二者各皆還原爲完整之腹甲，則爲不同大小之兩腹甲。故兩片不能綴合。（圖五）

6.八二一九：按：此綴合亦爲部位倒置者。惟兩片非同甲之折裂，不能綴合。（圖六）

7.九六一〇：按：所綴合之兩片，上片爲腹甲右上甲，下片爲左前甲近邊緣處者。設二者確爲同腹甲之裂碎，亦僅能施作遙相綴合，不能密接綴合。（圖七）

8.一〇三〇〇：按：所綴合之兩片，左片爲龜背甲，右片爲下腹甲，兩者不可綴合。（圖八）

9.一七一九五：按：此綴合亦爲部位倒植。左片爲腹甲之右上甲，右片爲左上甲。（圖九）

10.二二一三〇：按：合集之編者先生以乙八七二三密接綴合於右，部位雖是，但契辭不能密合。非同甲之折裂者，不能綴合。又以乙八八五三遙綴於右上。非是。檢乙八八五三爲右下腹甲右上之殘碎者，不僅部位誤植，亦非同甲之裂碎者。不能綴合。（圖十）

11.二二二五九：按：合集之編者先生，以乙八八八八片遙綴於左甲橋之位置。設將八八八八片還原爲完整之腹甲，版面較小。兩甲大小不同，不可綴合。（圖十一）

12.二二二六一：按：所綴合之兩片，上片爲腹甲之右上甲，下片爲左前甲近甲橋處之殘餘。設二者確爲同腹甲之折裂，亦僅止於遙相綴合，不能密接。（圖十二）

13.二二二七七：按：合集之編者先生於本片之綴合，是者誤者皆備，茲分述於後。其一、右片與中片非同甲之折裂，不能綴合。其二、中片與左片亦非同甲之折，不能綴合。其三、中片下端所綴合之另片，是。其四、左片所綴合之三小片，亦是。（圖十三）

14.二三七三二：按：合集所綴合之三片，上下兩片兆圻均右向，契辭右行。經與中片綴合，契辭不能通讀。非同骨之折，不能綴合。（圖十四）

15.二四三五九：按：所綴合之兩片，可能爲同骨之折裂者，但僅能遙綴，不可密合。蓋卜兆序數有間也。（圖十五）

16.二七六二〇：按：此爲曾毅公所作之錯誤綴合，而爲合集之編者先生選輯於合集者。其一、兩片爲同組卜骨之兩骨所殘餘。其二、兩片書體稍有殊異，契辭重複。其三、兩片接合處不能密合。（圖十六）

17.二九五五五：按：所綴合之兩片，上片爲右骨近骨臼處者，下片爲左骨左邊緣之中央，不能綴合。（圖十七）

18.三二一六〇：按：綴合處兩片之殘字不能密合，契辭不能通讀。不能綴合。（圖十八）

19.三二一九八：按：甲骨綴合新編訂譌篇已論其綴合之非，此不贅錄。請參閱。（圖十九）

20.三二九一五：按：綴合後之契辭不合辭例。（圖二十）

21.三三〇〇六：按：此爲郭沫若於殷契粹編中所作之錯誤綴合，而爲合集之編者先生所選輯者；其綴合之非，前人多已論之。其綴合所以爲非者：蓋一片爲兆圻左向，卜辭右行，爲右骨之右邊緣。一片爲兆圻右向，卜辭左行，爲左骨之左邊緣。兩者不能綴合。（圖二十一）

22.三三一〇七：按：所綴合之兩片，上片爲右骨近骨臼處者，兆序爲一。下片爲右骨右邊緣之中央部分，兆序爲二。可能爲同組卜骨之殘片，不能施作綴合。（圖二十二）

23.三三四三〇：按：所綴合之三片，上中兩片爲田狩之辭，可以綴合。中下兩片之接合處不能密合，且下片爲祭祀之辭，非同骨之折，不能綴合。（圖二十三）

24.三三八三八：按：秀堂夫子所作「甲骨學」、及「甲骨綴合新編」訂譌篇，僕作「路論甲骨綴合」，均曾論述其綴合之非，此不贅述，請參閱。（圖二十四）

25.三四三三六：按：上片爲胛骨之右邊緣，其辭右行，二辭皆曰「弜又」。下片爲胛骨之中央近左之部份，其辭下行，辭曰「知其四牛」及「□貞」。二者不能綴合。（圖二十五）

26.三六二五五：按：所綴合之兩片，上片爲腹甲，下片爲背甲，不能綴合，至爲明顯。（圖二十六）

27.三八三一五：按：所綴合之三片，上片爲左背甲之第二肋甲，中下兩片爲左背甲之第五六兩肋甲。設爲同背甲之折裂，亦不可作密接之綴合；況乎三者皆非同背甲之折碎者。（圖二十七）

28.三八五二七：按：所綴合之兩片，左片爲左背甲第二肋甲左半，近邊甲處之下半，及第三肋骨之上半。右片爲左背甲第二肋甲右半近脊甲處之殘。設爲同背甲之折裂者，亦不能作密接之綴合。（圖二十八）

29.三八五六七：按：所綴合之兩片，上片爲右背甲第三肋甲，下片爲左背甲第六肋甲，設兩片爲同背甲之折裂者，亦僅止於遙相綴合。（圖二十九）

綜觀右錄諸例，合集之編者先生所選輯或自作之綴合片，其所以有如右學之諸多錯誤者，肇因於合集之編者先生，不識甲骨拓本之部位，亦不識甲與骨、腹甲與背甲之差異。故其所選輯或自作之綴合片，致有部位倒植等、誤認拓本性質等情形之發生，導使綴合錯誤。茲擇其錯誤之尤者數例，藉觀其概。

二、當予綴合而不能施予綴合例

1.一〇三四加九一〇三

2.二六七七加冬一二一

3.五一一五加八三〇一

4.五二三六加五二四五

5. 五二三九加五二四三
6. 五七三二加五七三四
7. 六七三〇正白加一八三七七正白
8. 六一三七加六一四七
9. 六三八四加六三八七
10. 六三九三加六三九六
11. 六四五九加六四六五
12. 六五一八加六五一九
13. 六八二七加一六八三〇
14. 七四九三加京津二一七四
15. 七四九四加七四九五
16. 七五一九加七五二四
17. 七九六二加一七九四七
18. 八三四五加八三四六
19. 八六一二加文錄六一二
20. 九〇三七加九〇三八
21. 一一五四五加一六六八五
22. 一三八四一加二九四一六
23. 一五四一五加一五四二〇
24. 一六〇四八正反加二三二八一
25. 一六七二一加一六七二五加一六七五二
26. 一六七八二加一六八五八
27. 一六八八一加一六九〇四
28. 一七二六四加一七四二〇
29. 二〇一八〇加二〇一八一
30. 二〇一九七加二〇三一五
31. 二一四七五加三一八八六
32. 二二二〇八加二二二一〇
33. 二二二五二加二二二五三
34. 二二二六七加二二二七〇
35. 二二六七三加二三五二四
36. 二三〇一二加二六八六四
37. 二三〇七六加二三〇八八
38. 二四〇九六加二六〇八三
39. 二四二四八加二四三七七加二四四七八
40. 二四二七二加二四二七五
41. 二六六二八加二六六三〇
42. 二八二四〇加三二六一二
43. 二八九四五加二九一三九
44. 二八九五〇加二九〇二五
45. 二九〇三四加二九一二五
46. 二九九五七加三〇九五九
47. 三〇二四六加三〇二五八
48. 三〇五五三加文錄三八一
49. 三一四一五加三一四二八
50. 三一四二五加三一四三三
51. 三三二一四加三三二一六加三三三六九〇
52. 三四一六五加三四二七四
53. 三七九〇四加三八一一〇加存一・二七四二

合集編者先生所選輯之甲骨拓本，其應當施予綴合，而不能施予綴合者，僅就展觀所見，略舉數例於右。其間，若合集六五一八加六五一九等五個綴合版，編碼密接，五七三二加五七三四等四個綴合版，僅相間一個編碼，六三八四加六三八七等四個綴合版,僅相隔兩個編碼，五二三九加五二四三等兩個綴合版，僅相隔三個編碼，一五四一五加一五四二〇，及六四五九加六四六五兩綴合版，各僅相間四及五個編碼。似此十七版之綴合，就一般情形言：編者先生只須一眼望去，即可判定其可以施作密接之綴合。然而編者先生却因無此識力，遂將絶佳之上好綴合素材失之眉睫，殊爲可惜之事。至其間距數百或數千，乃至萬餘個編碼者，當不能望其施予綴合矣。至與京津、文錄、續存諸書所著拓本之綴合者，據前述片羽、佚存等所著錄之骨柶、乙編所著錄之整腹甲均被編者先生遺棄之情形推勘，此等碎片，當在遺棄之例。

合集一六〇四八反加二三二八一綴合片，前者被編者先生認定爲武丁時之辭，後者則認定爲二期者，如今、二者却可以密接綴合爲一片。又若二一四七五加三一八八六，兩者相隔萬餘個編碼，可說相距遙遠，故編者先生認定前者爲第一期之附，後者認定爲第三期之辭，今者、兩片却可以密接綴合爲一片。凡此、再再證明：編者先生於甲骨分期斷代之能力有限，應當確確實實虛心的用力學習一番纔是。

合集六七三〇加一八三七七，兩者雖相距遙遠，分期並不錯誤。於今、則可以施爲密接之綴合版。又若一三八四一加二九四一六，及二八二四〇加三二六一二兩綴合片，姑不論其分期如何，而此二綴合版皆爲郭若愚於其所著「殷契粹編綴合例的勘誤及補充」一文中，早經綴合爲一版者，且早於一九七〇年代之前，而編者先生則皆視而不見，不予選輯於合集。凡此者，均可確證編者先生不願接受前人之正確綴合，而將自作之錯綴誤合輯入合集也。抑又證明：合集之編者先生於合集之編輯，既無宗旨原則，亦無選輯之標準。僅僅是胡亂的剪貼一些拓本而已。

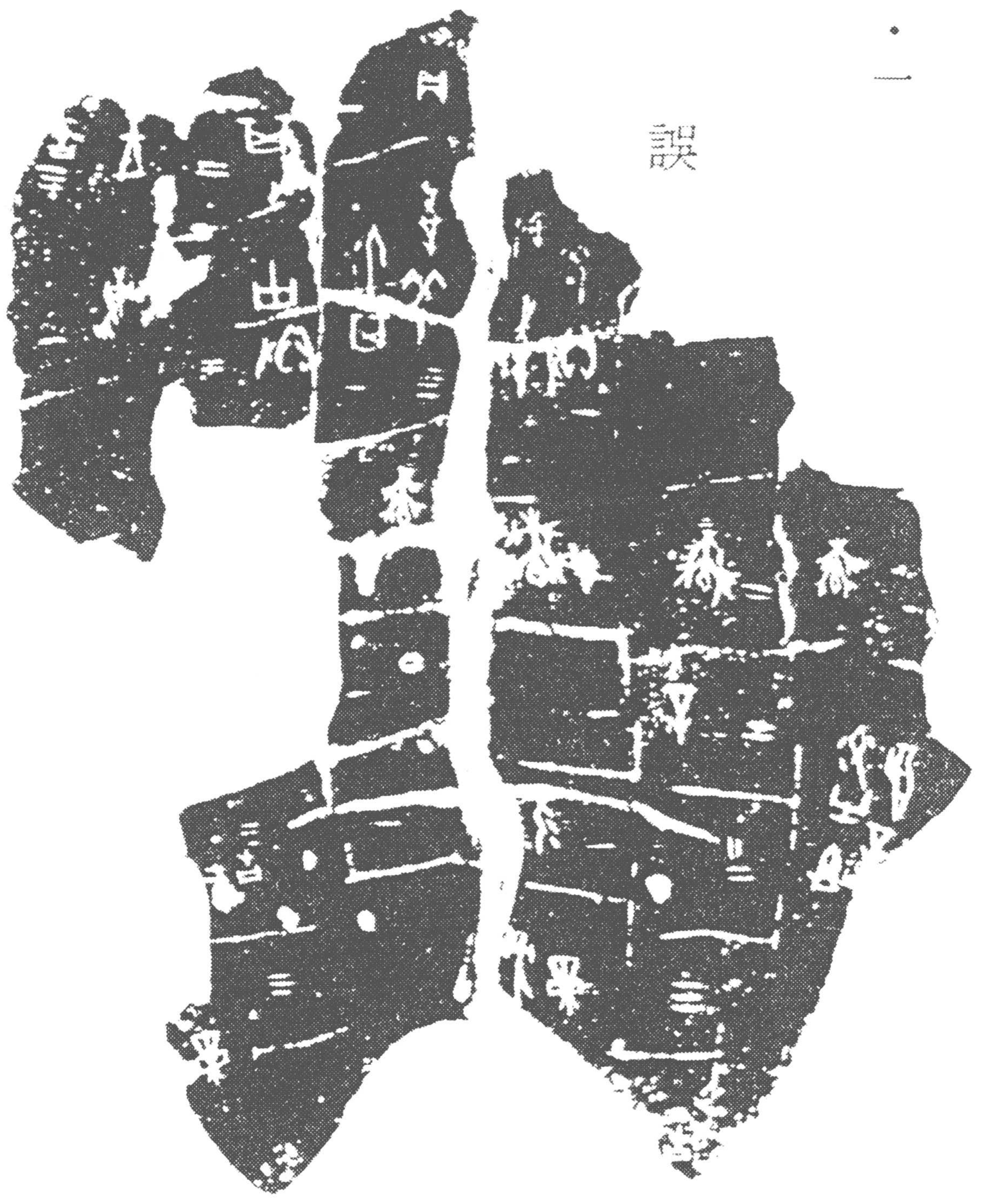
伍、後語

右列類例，乃就僕展觀合集所見，隨手札記者，今茲簡錄數例，藉供合集之讀者參考，惟尚有可言者：即一八五六九號，雖僅殘存一文，而編者先生亦予選輯，奈何竟將其倒植著錄於編中。此可證明編者先生對甲骨文字認識之程度，實在不置一評。　秀堂夫子曾予三評，眞是浪費精神與筆墨。

七十五、七、九、清籀於楓林風雨盦

圖一・一

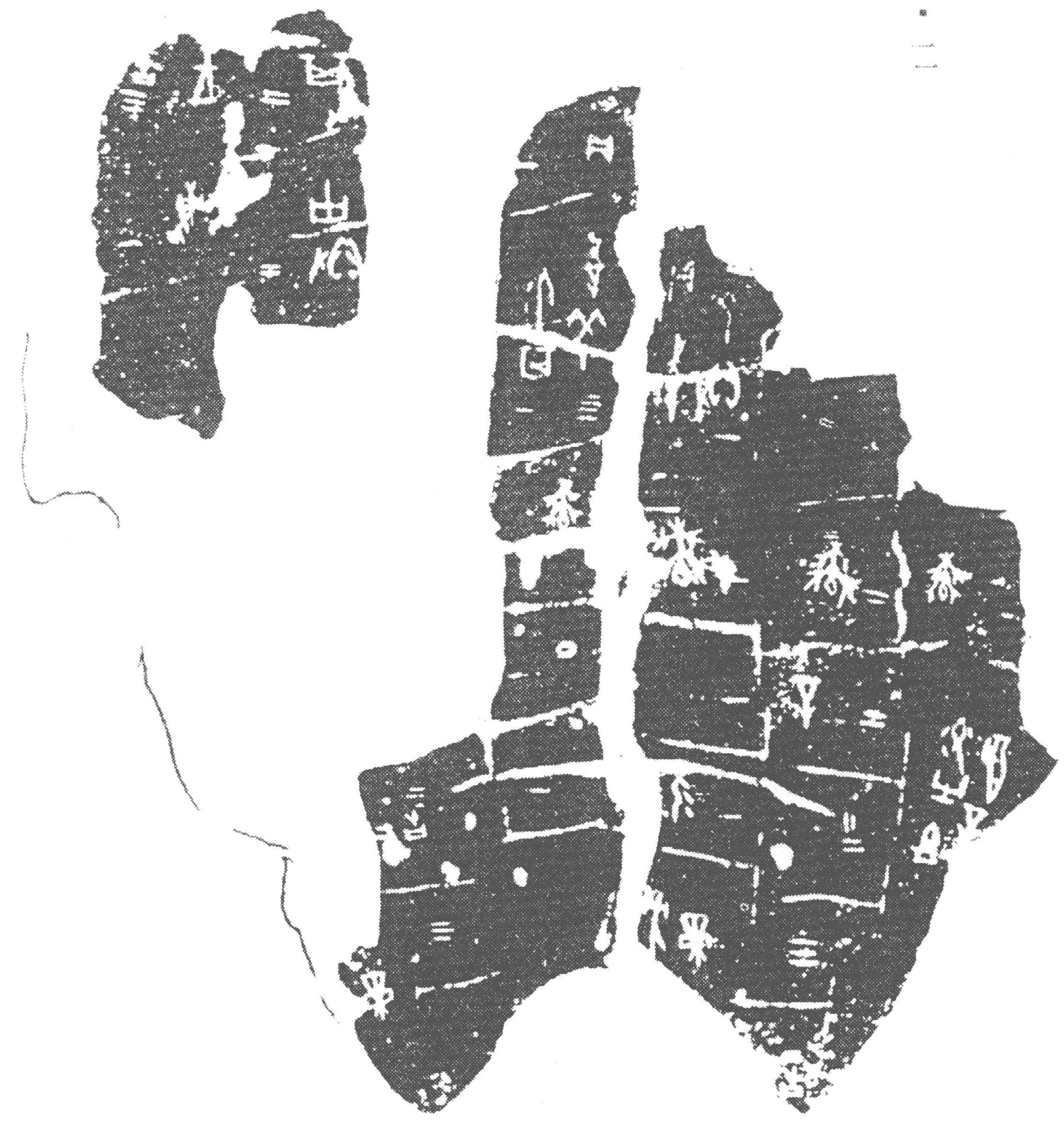
誤



505 正

圖一・二

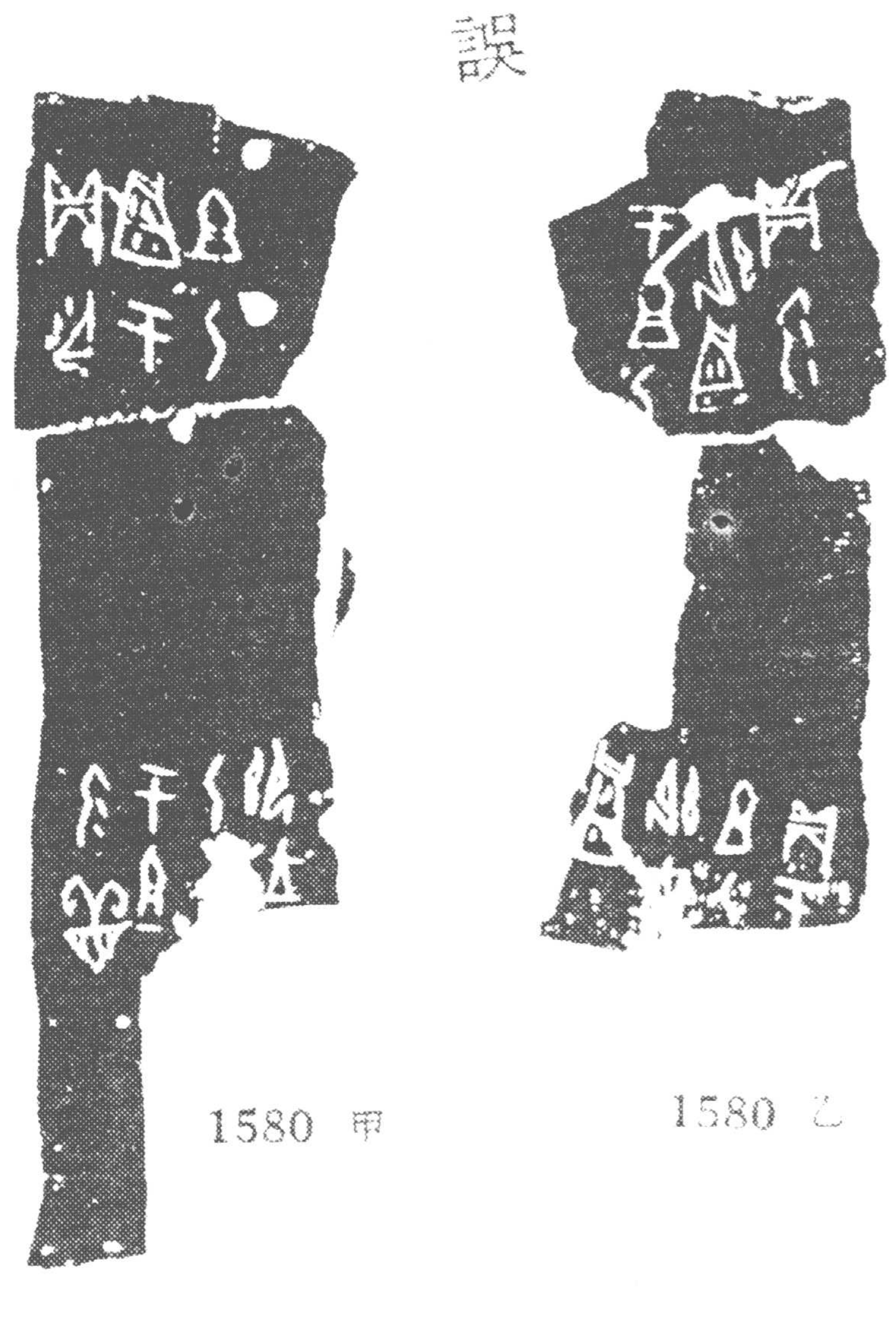
正



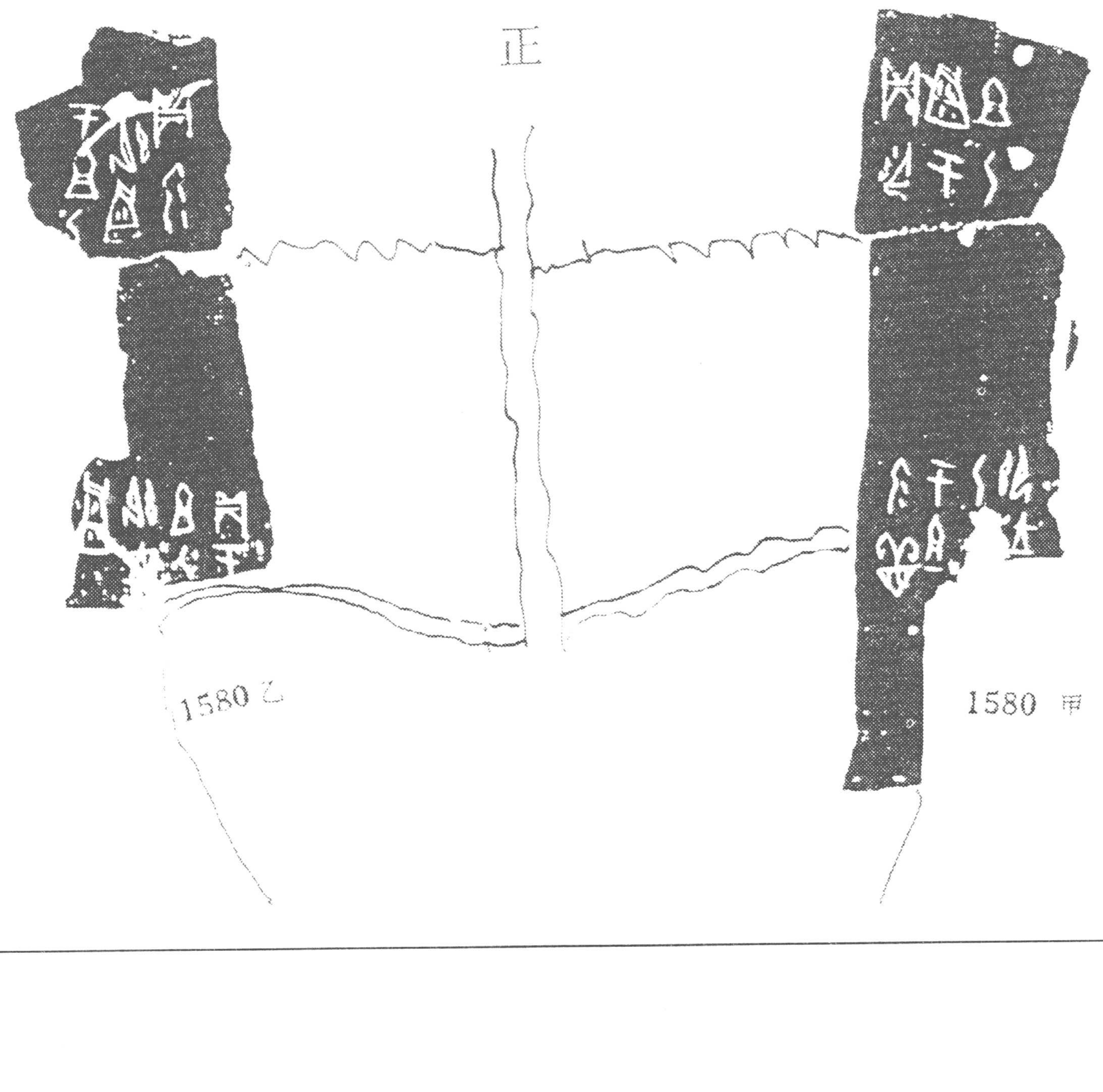
505 正

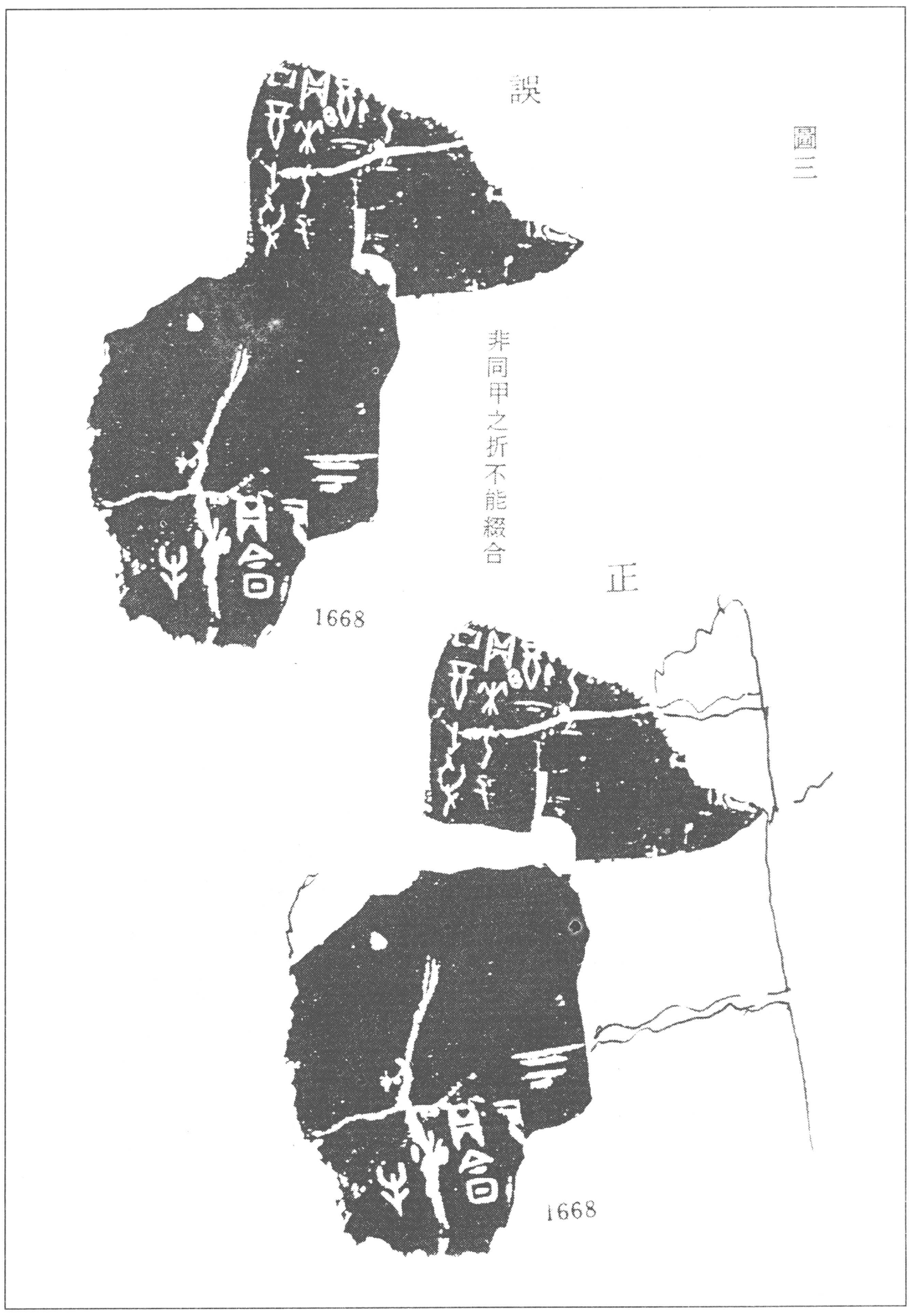
圖二

誤


1580 甲
1580 乙

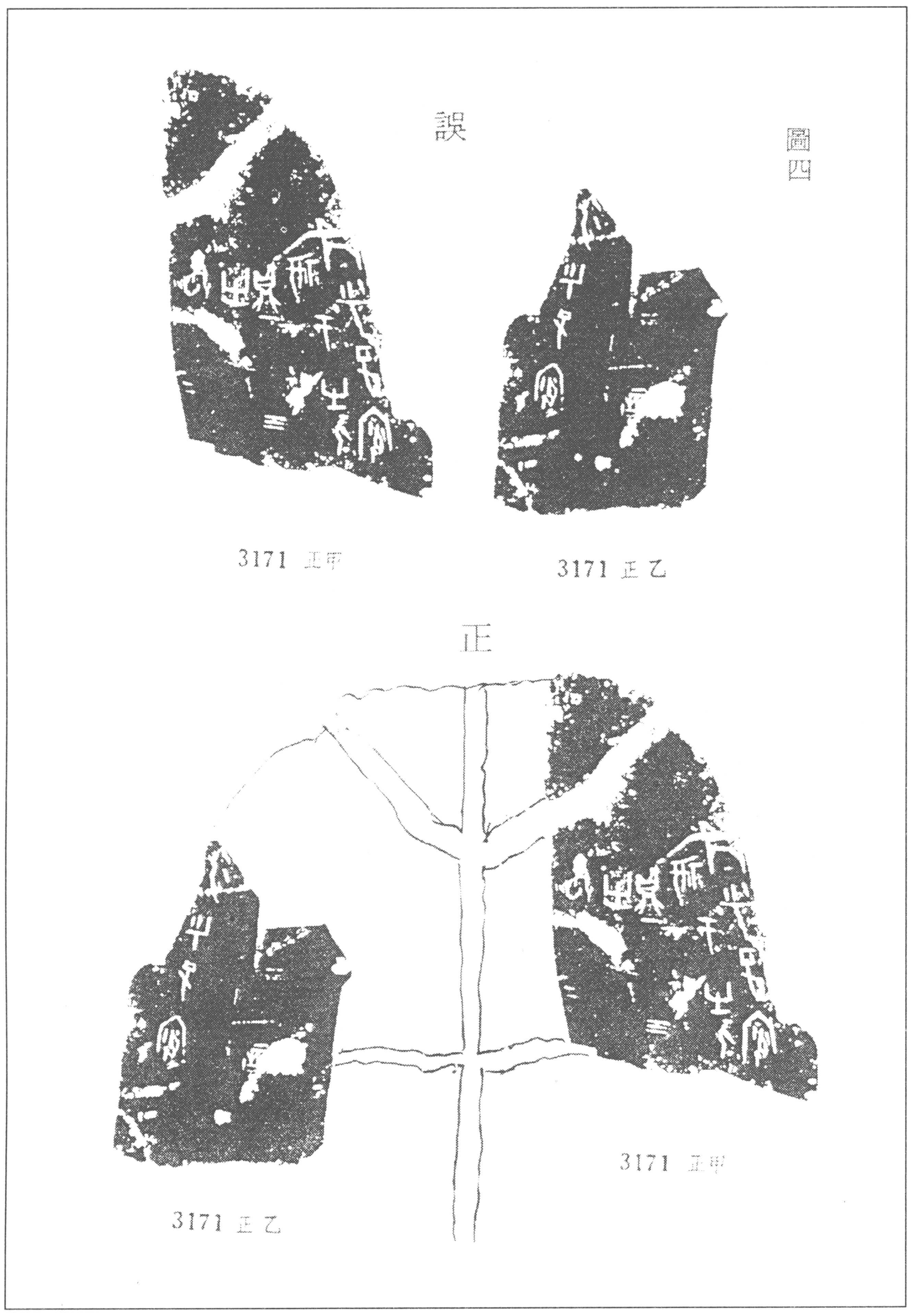
正


1580 乙
1580 甲

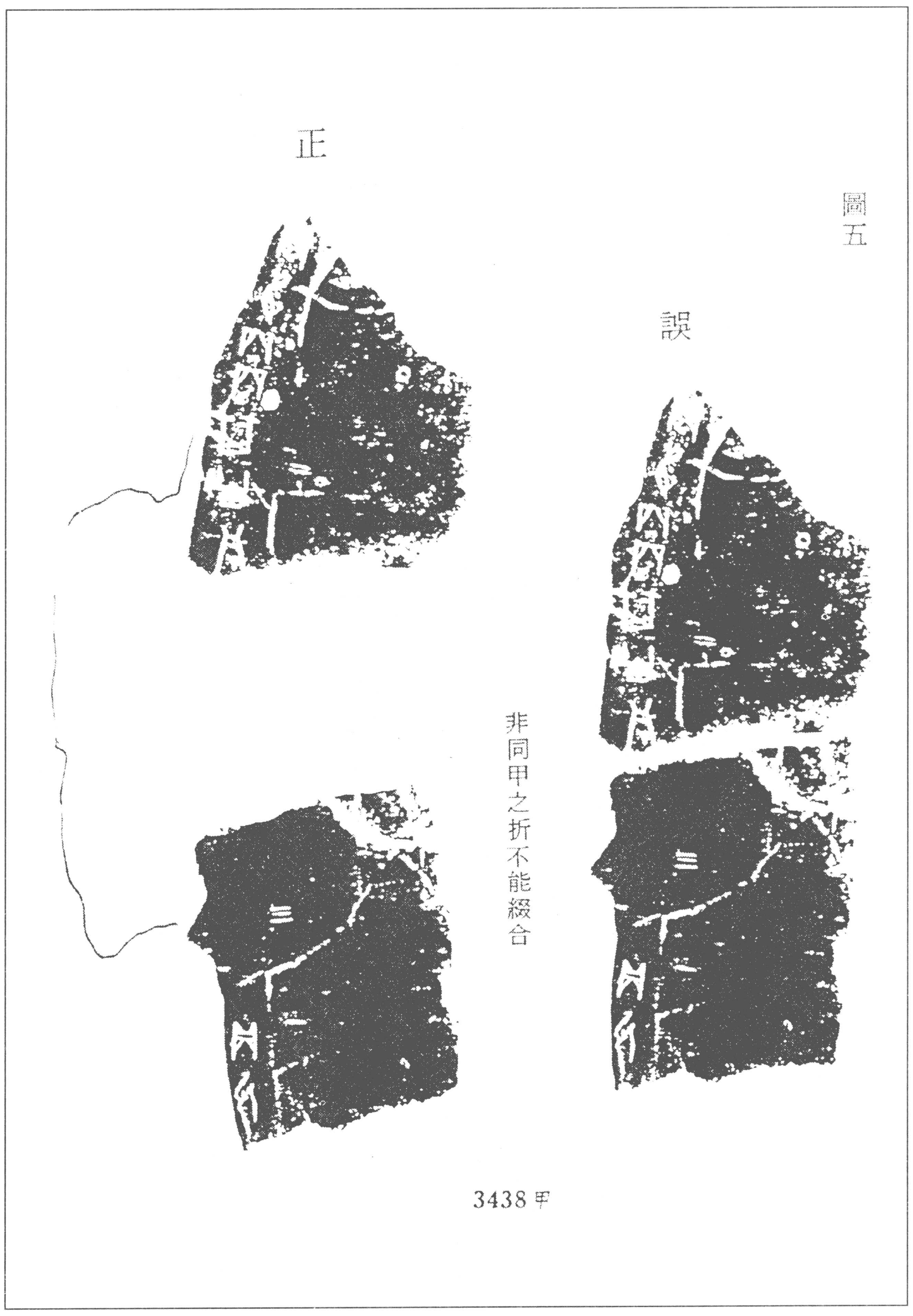

圖三

非同甲之折不能綴合

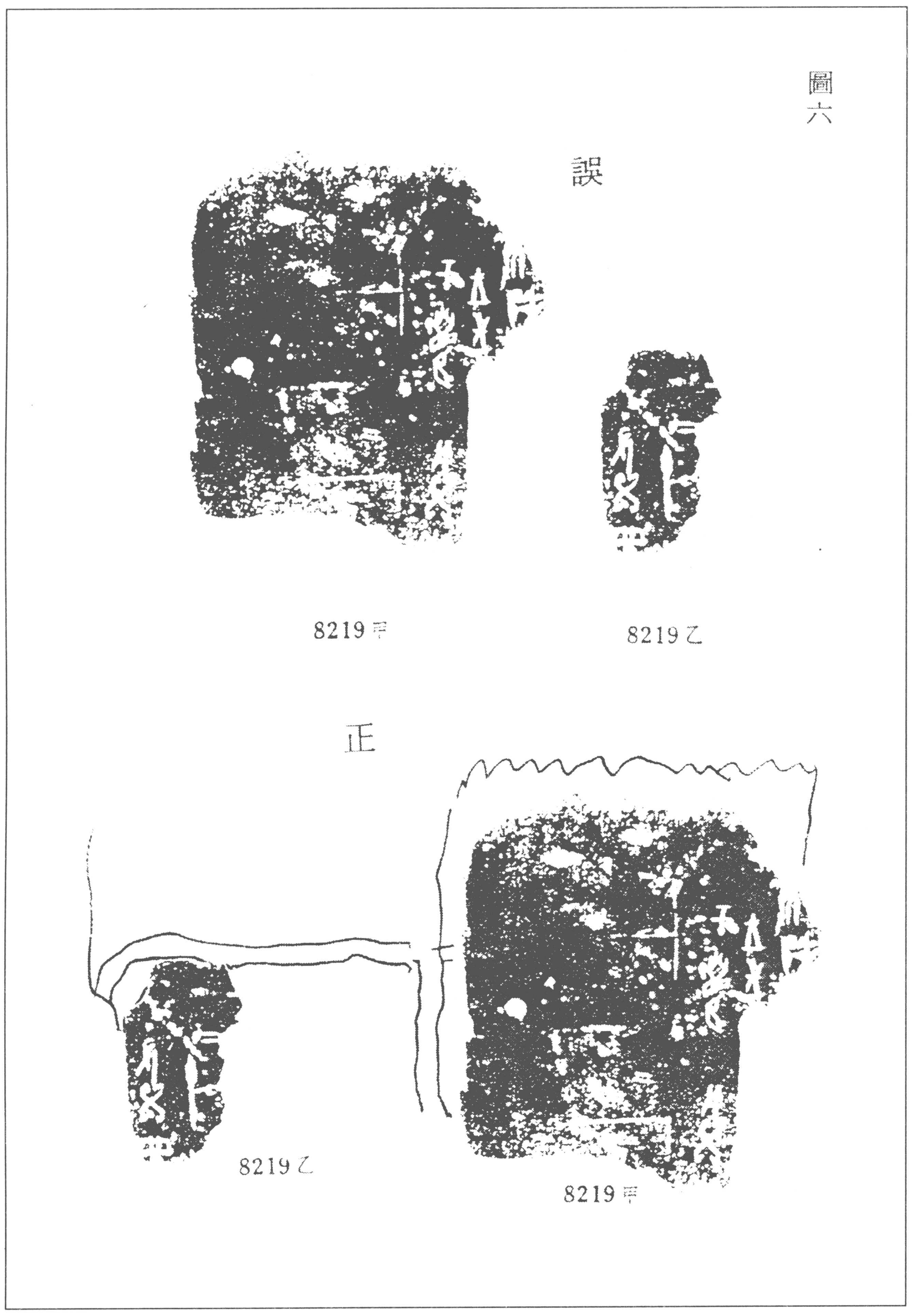
誤
1668
正
1668


圖四

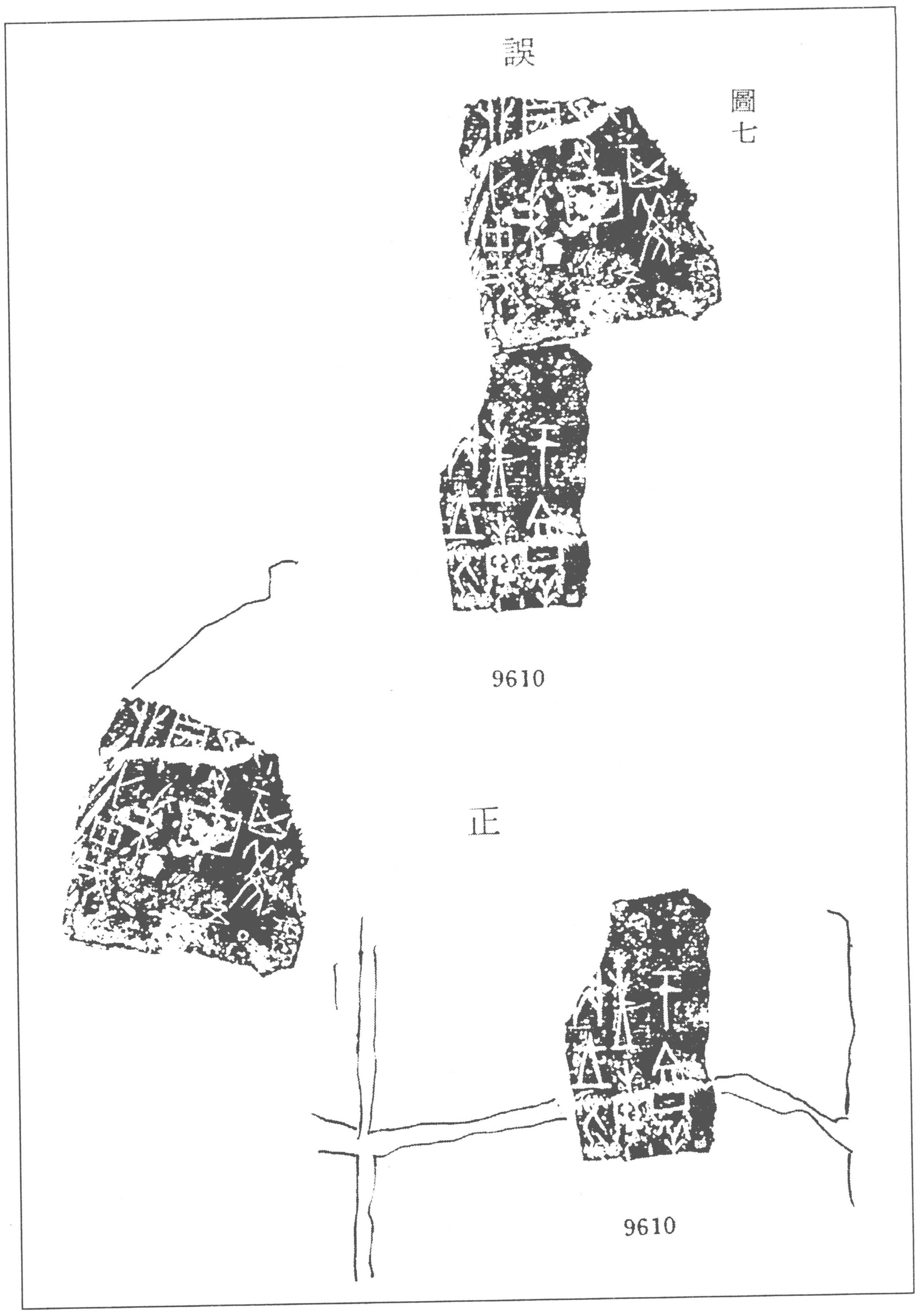
誤
3171 正甲
3171 正乙
正
3171 正乙
3171 正甲

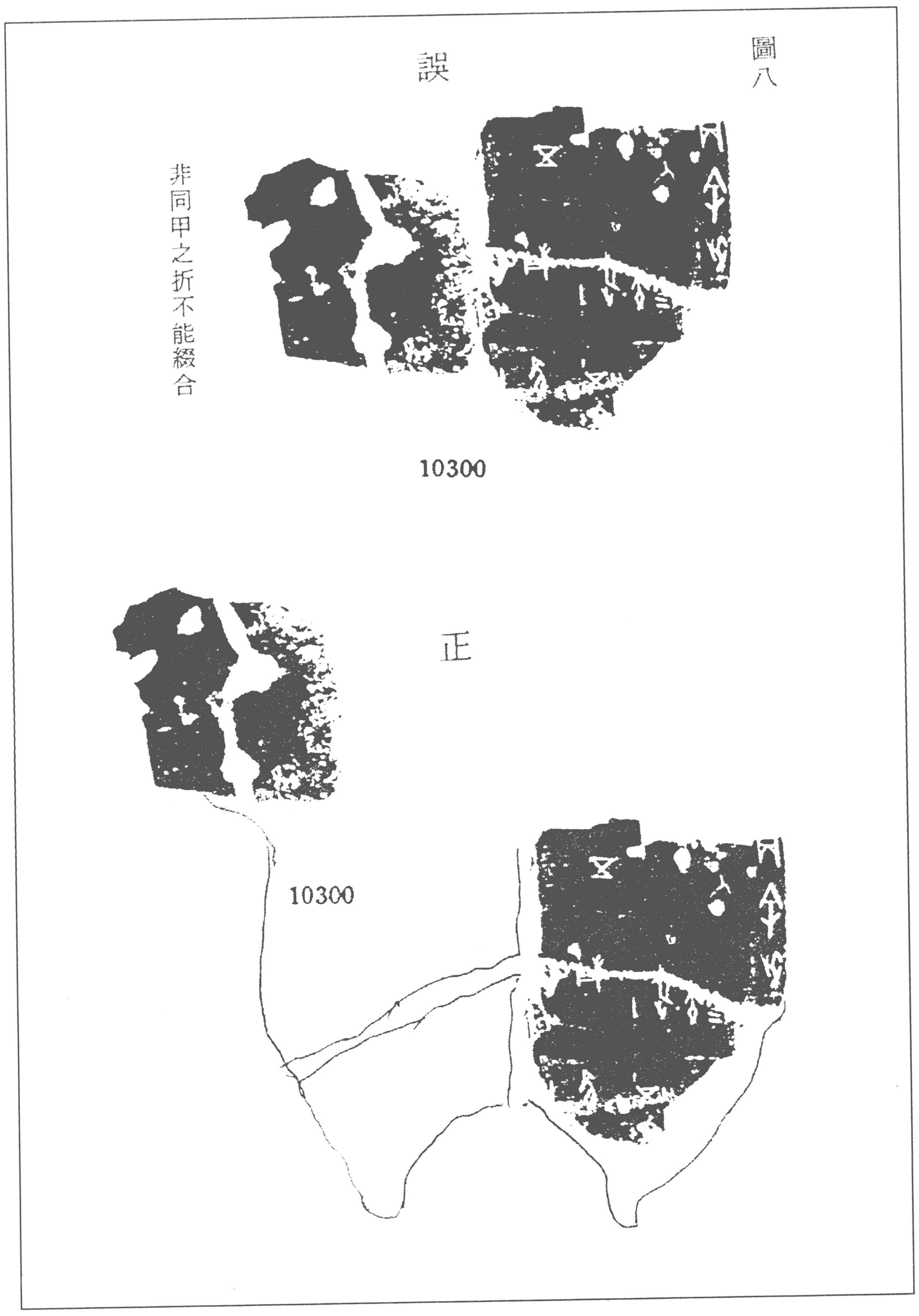

圖五

非同甲之折不能綴合

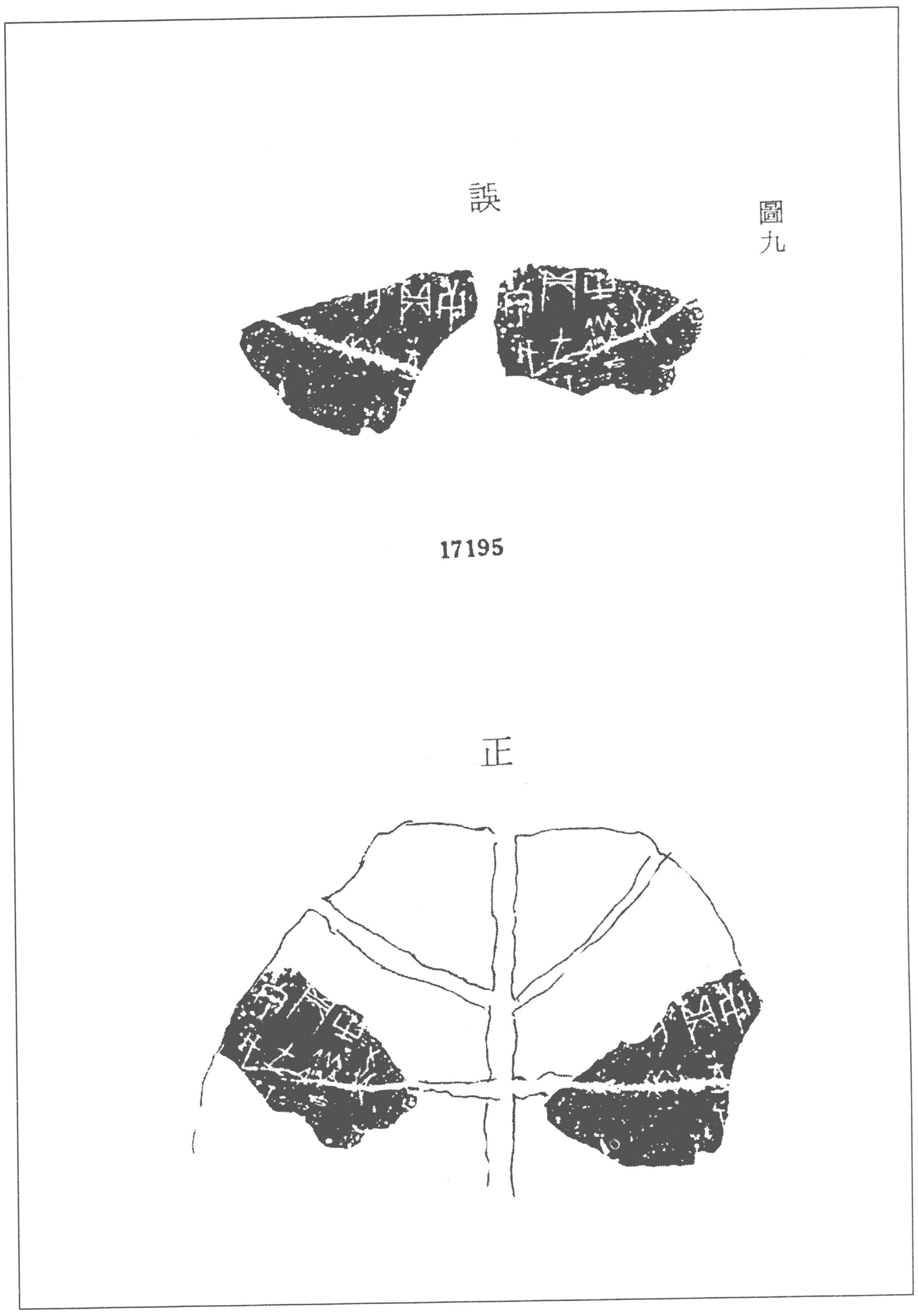

圖六

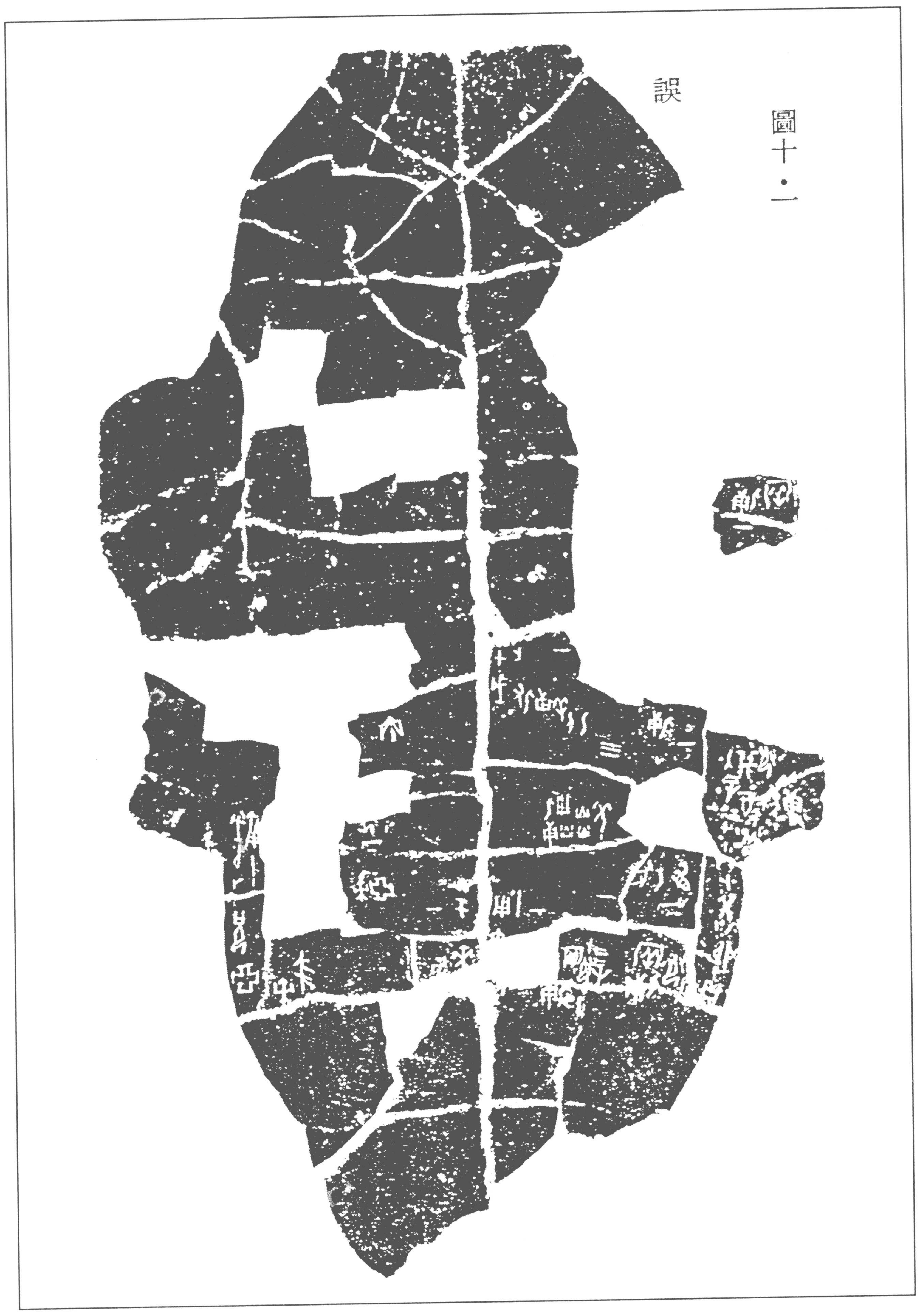
誤
8219 甲
8219 乙
正
8219 乙
8219 甲


圖七
誤
9610
正
9610

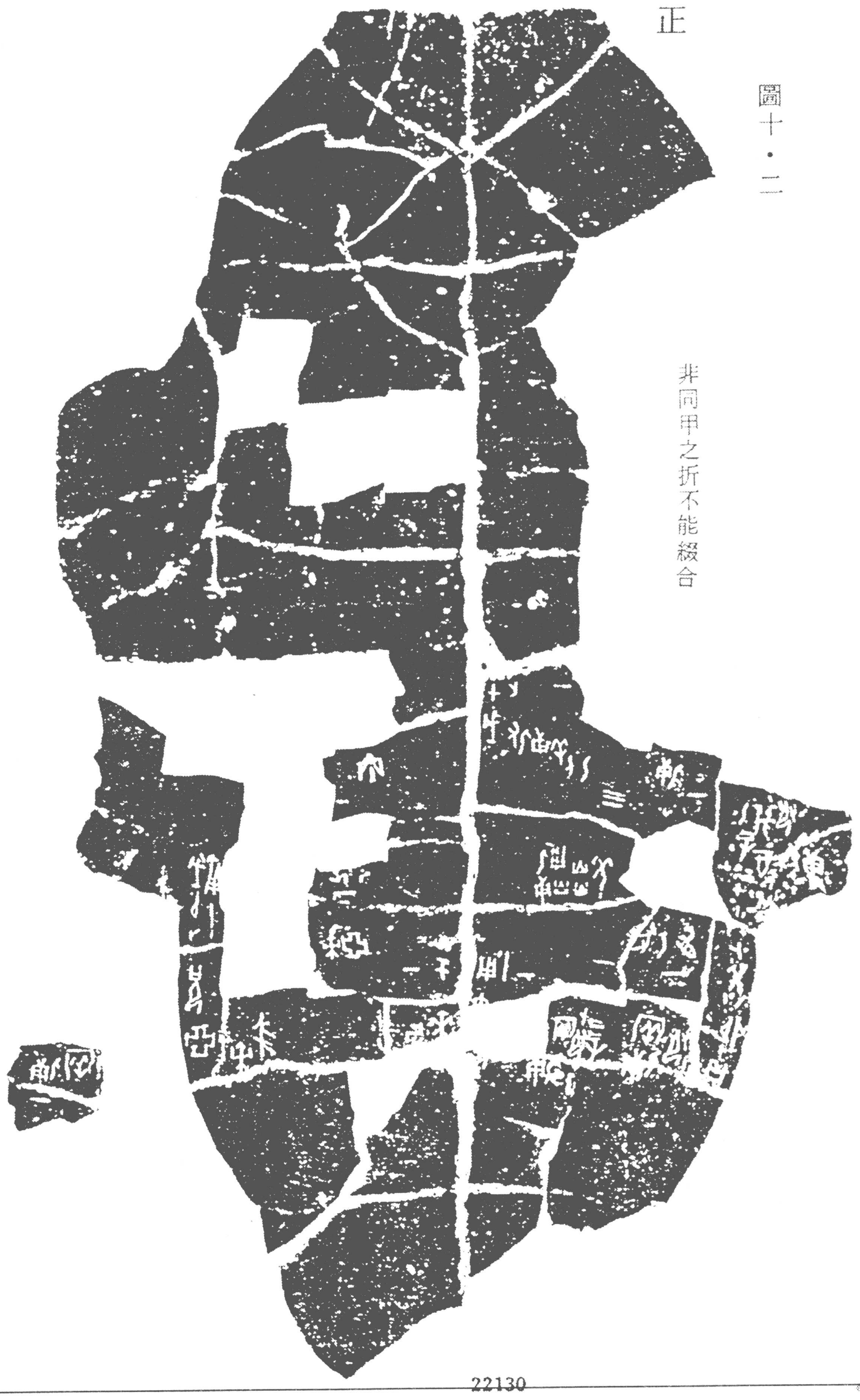

圖八

非同甲之折不能綴合
誤
10300
正
10300


圖九


圖十・一

正

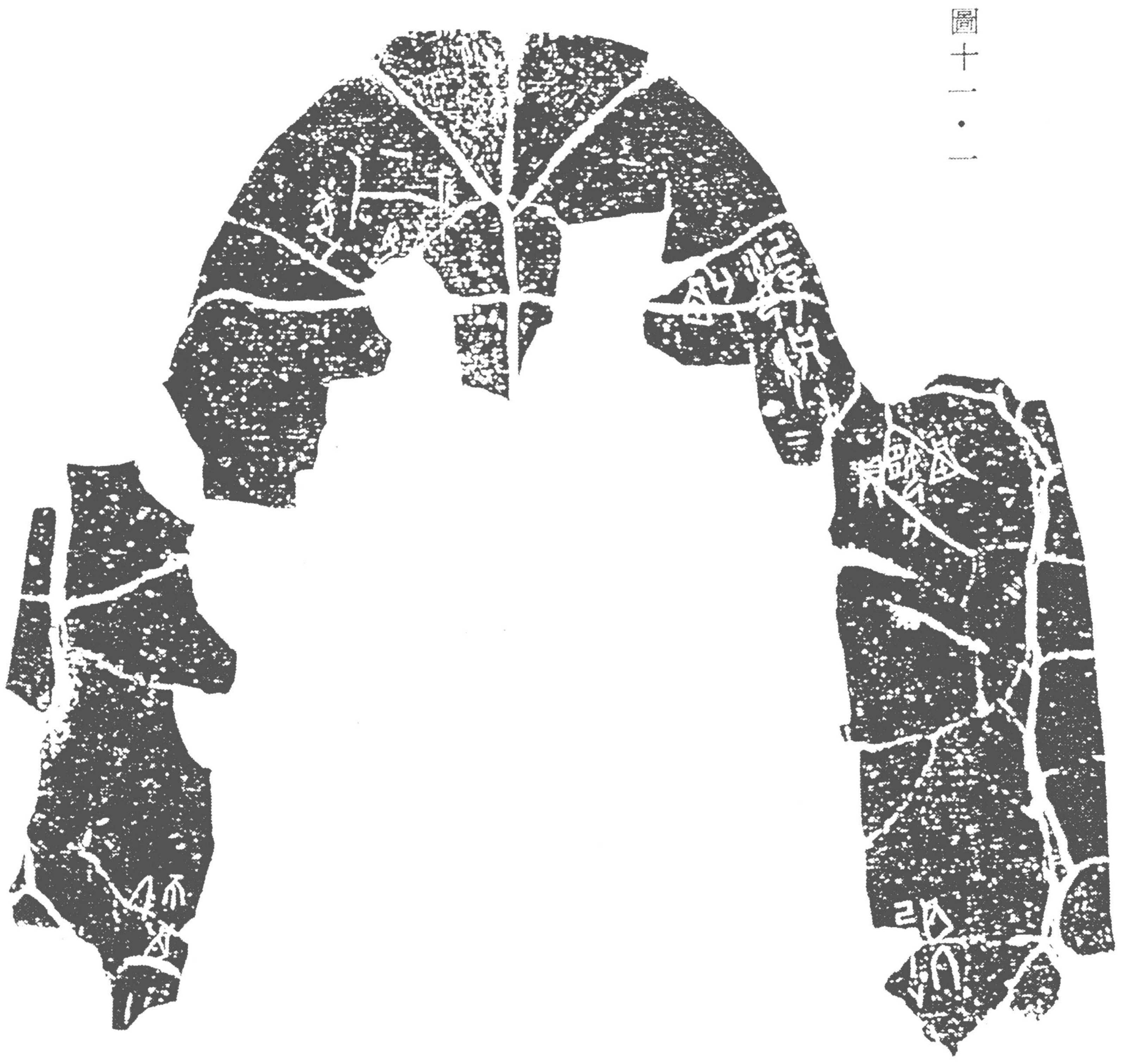


圖十・二

非同甲之折不能綴合

22130

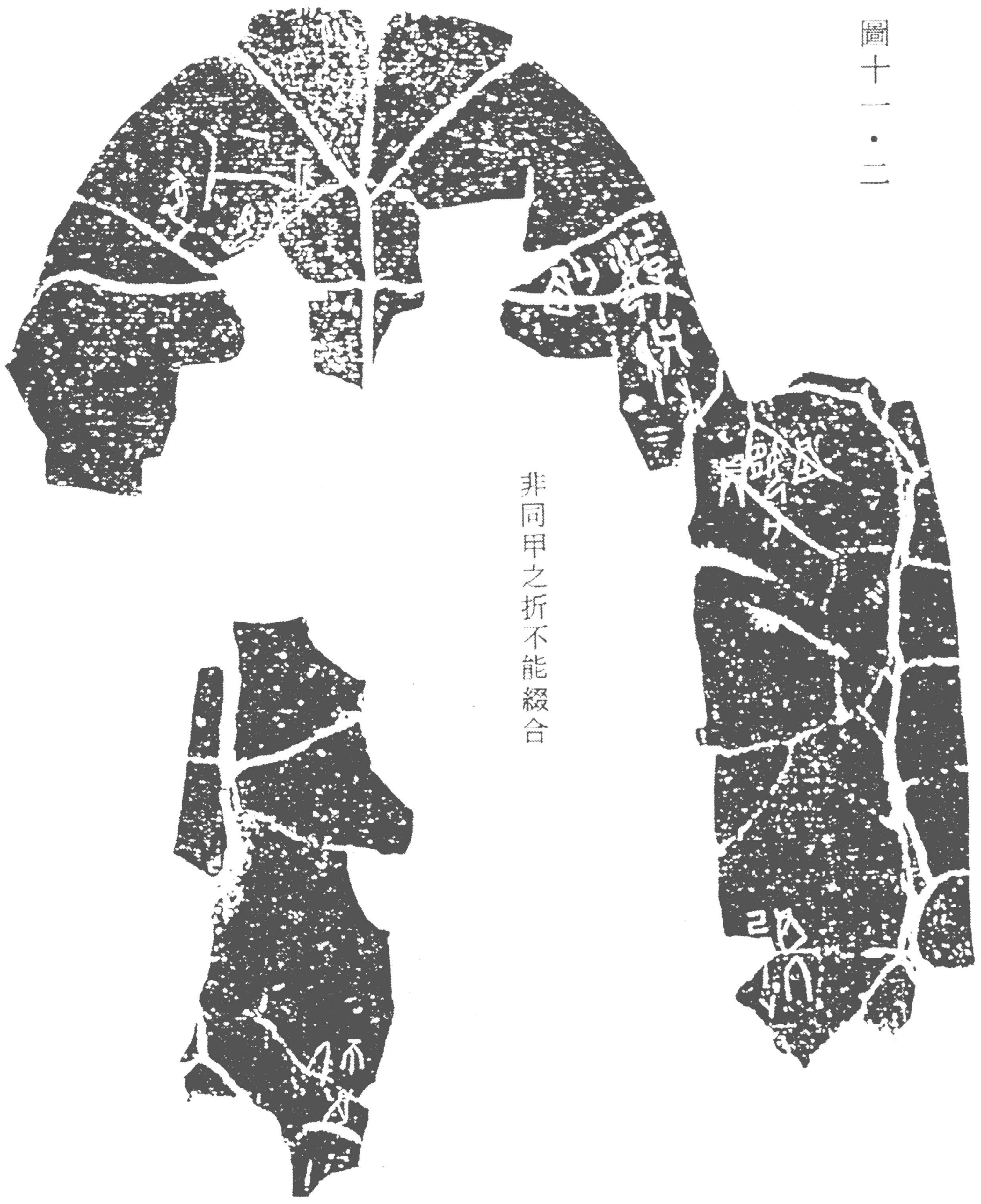
誤



圖十一・一

22259

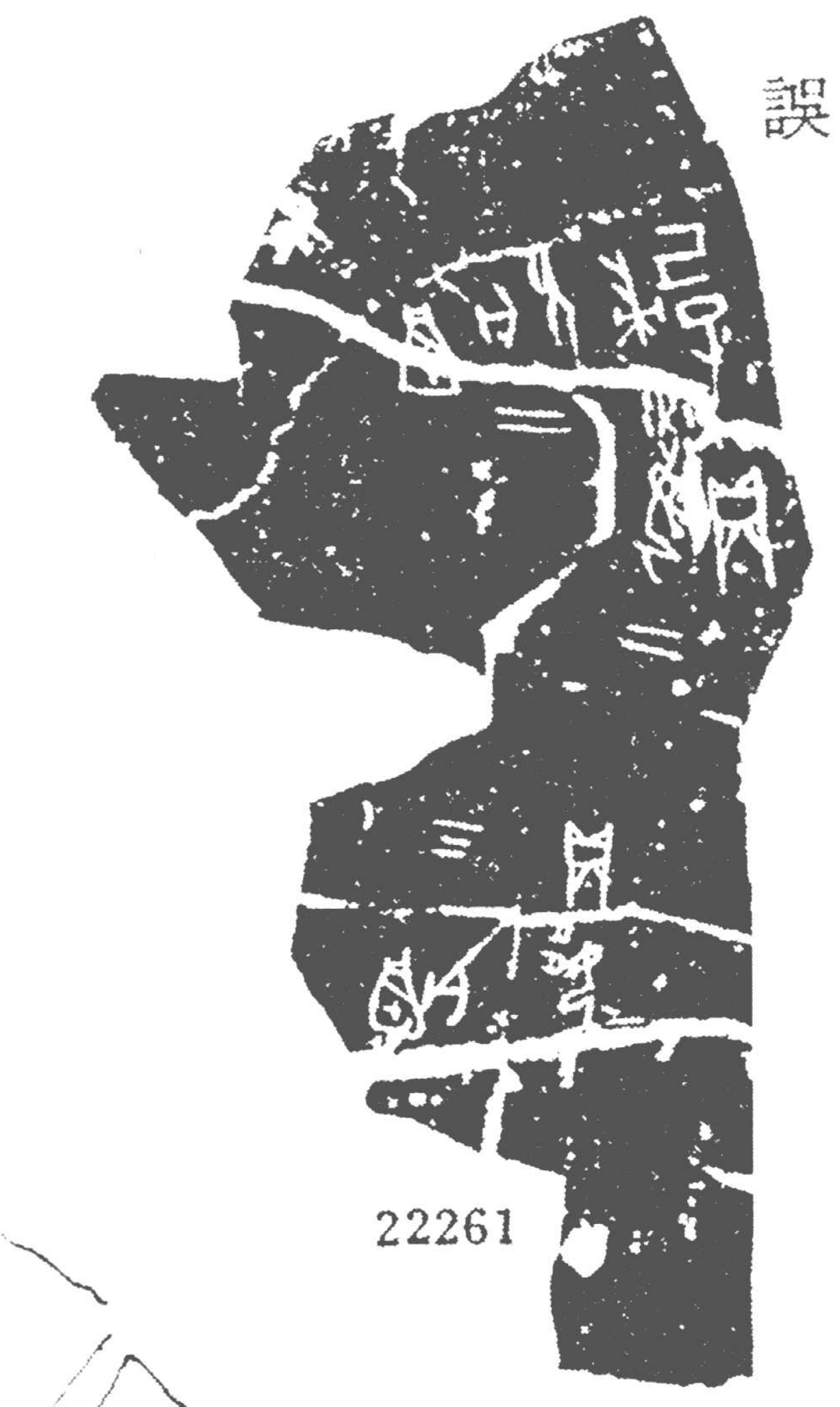
正



圖十一・二

非同甲之折不能綴合

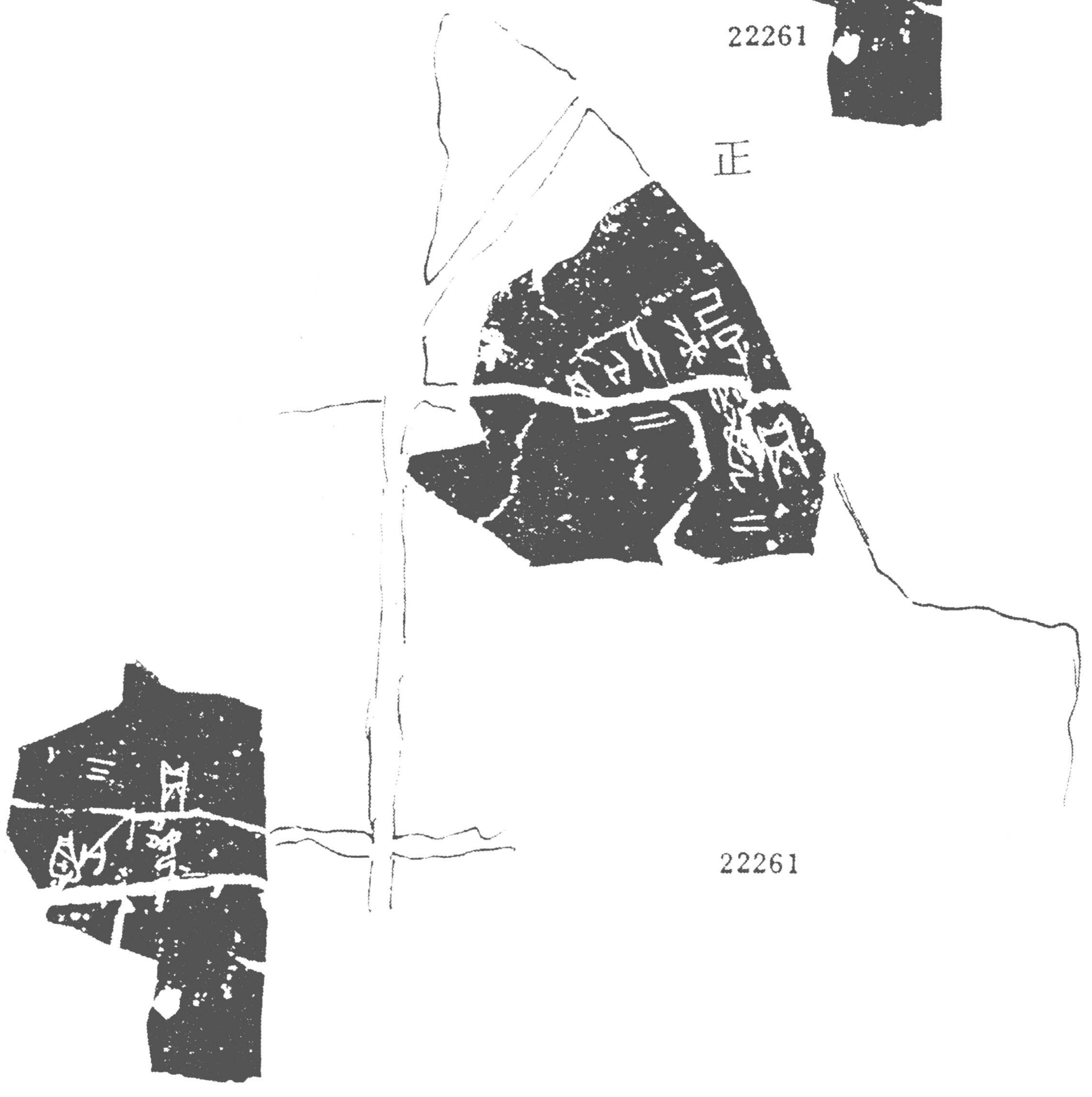
誤



圖十二

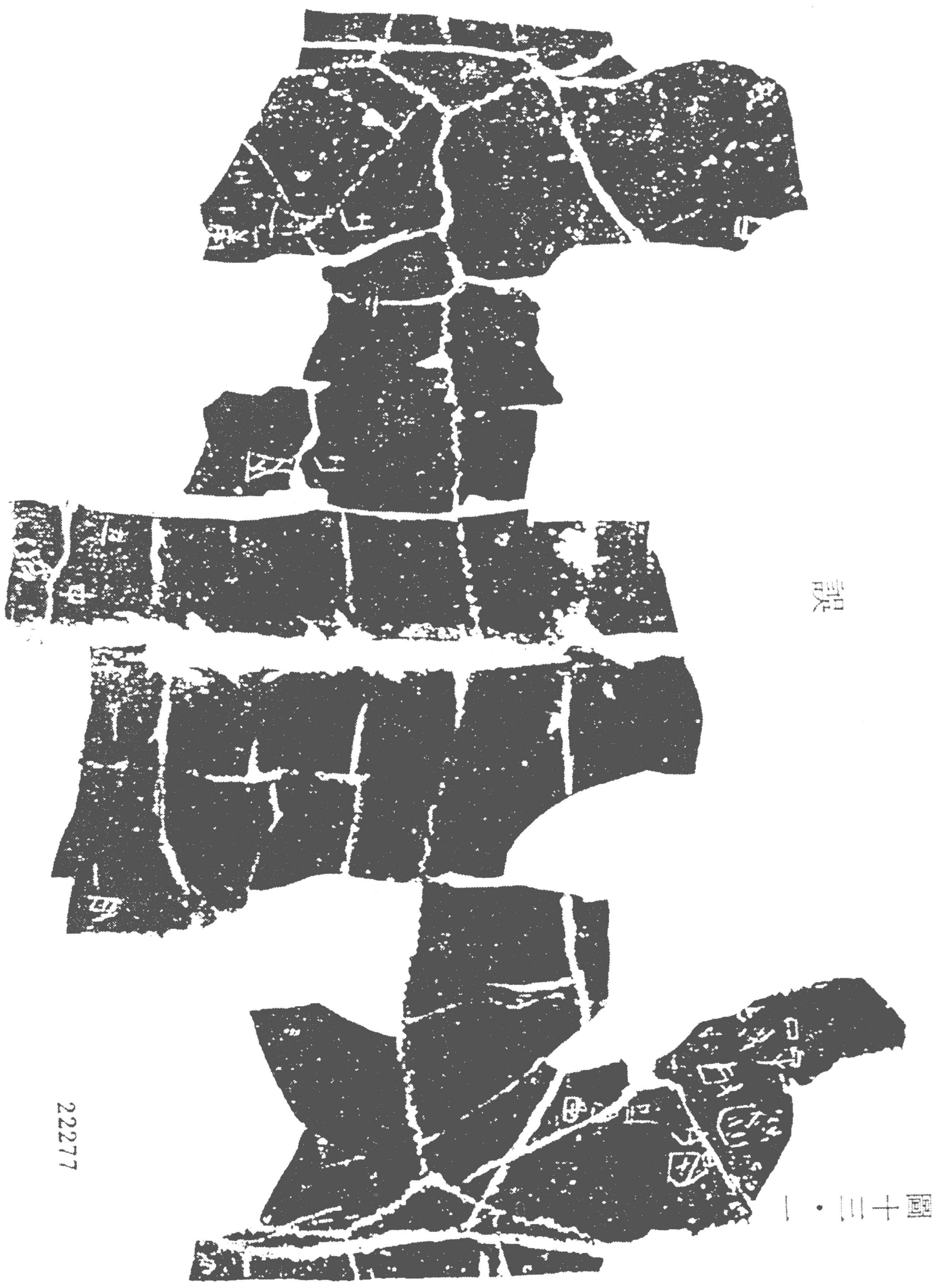
22261

正



22261

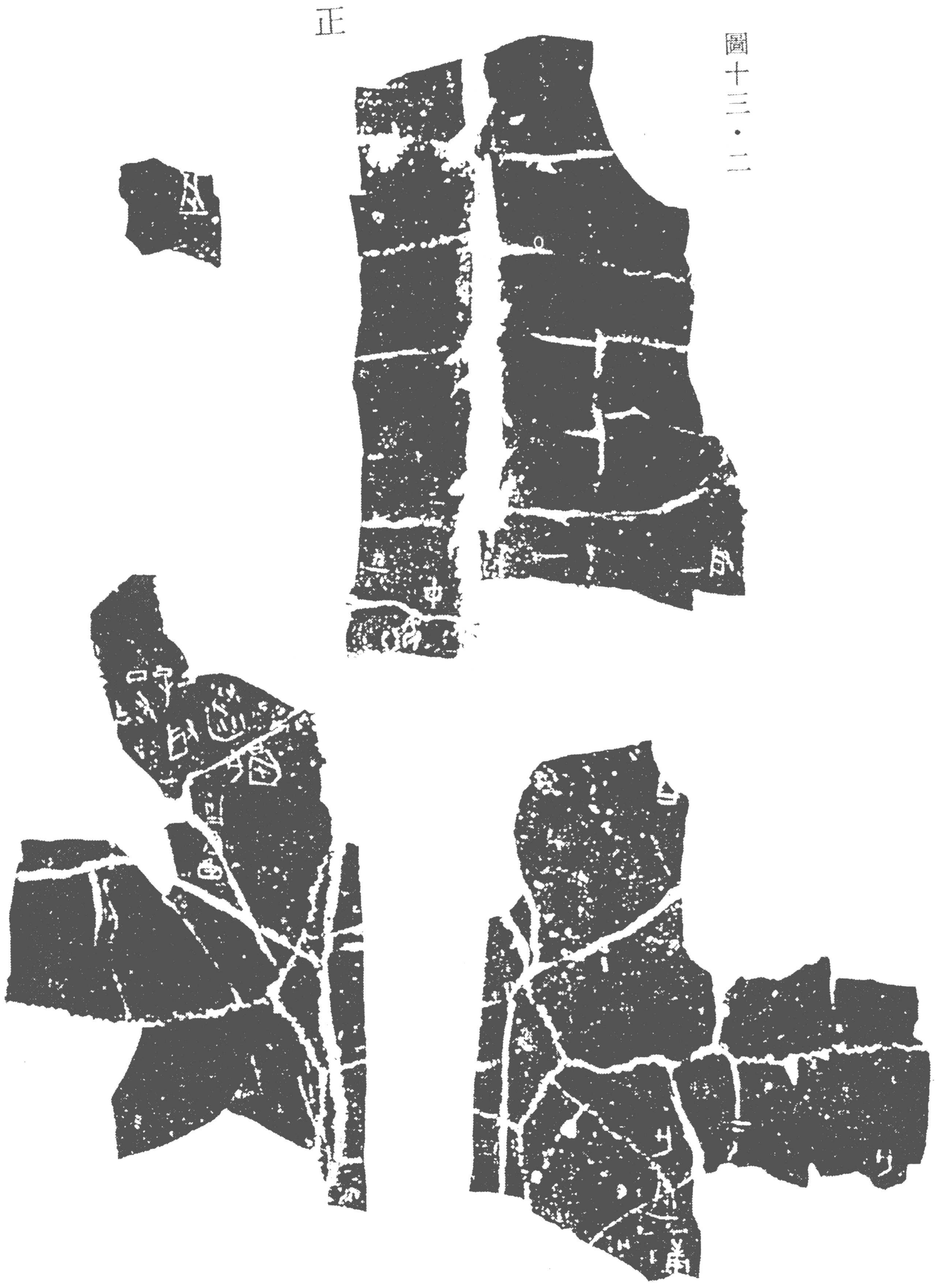
誤



圖十三·一

22277

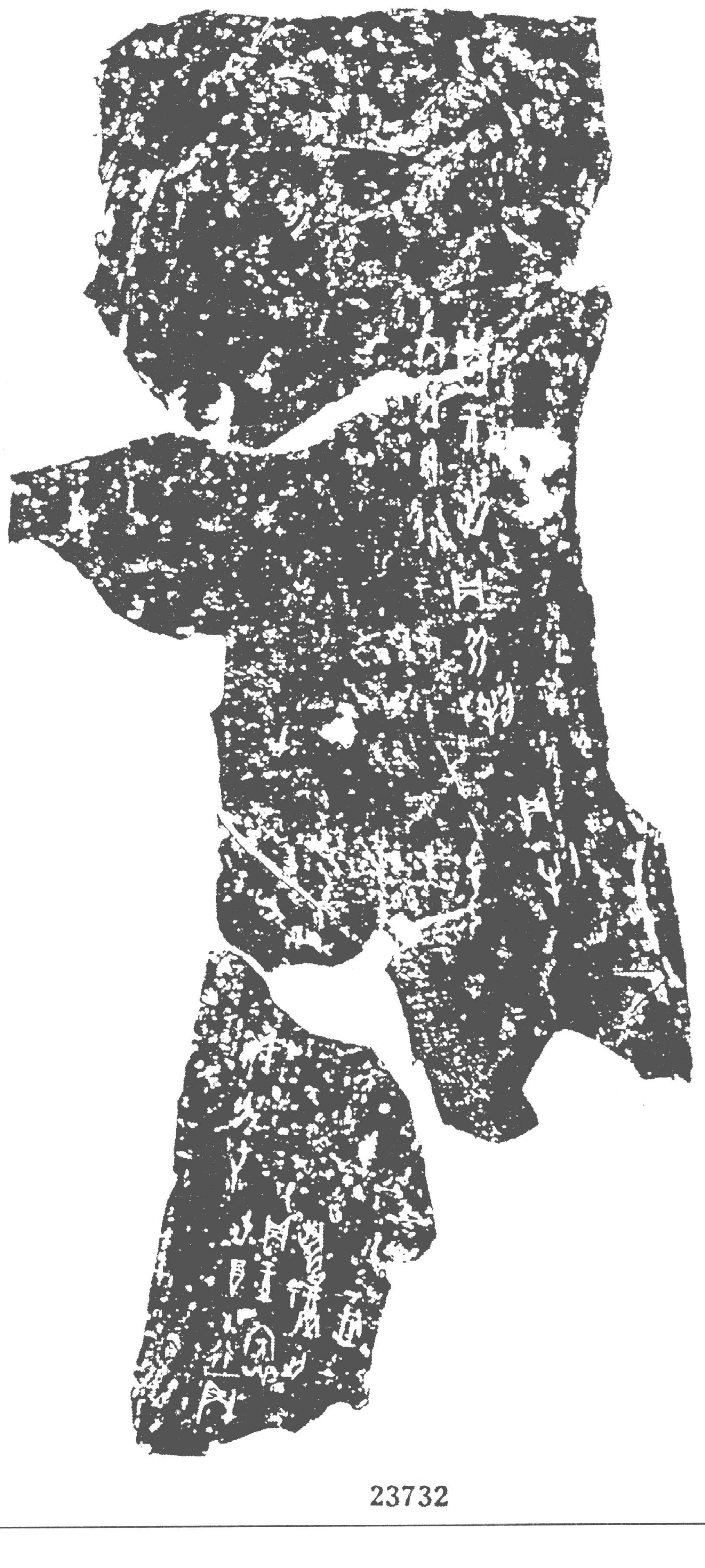
正



圖十三·二

22277

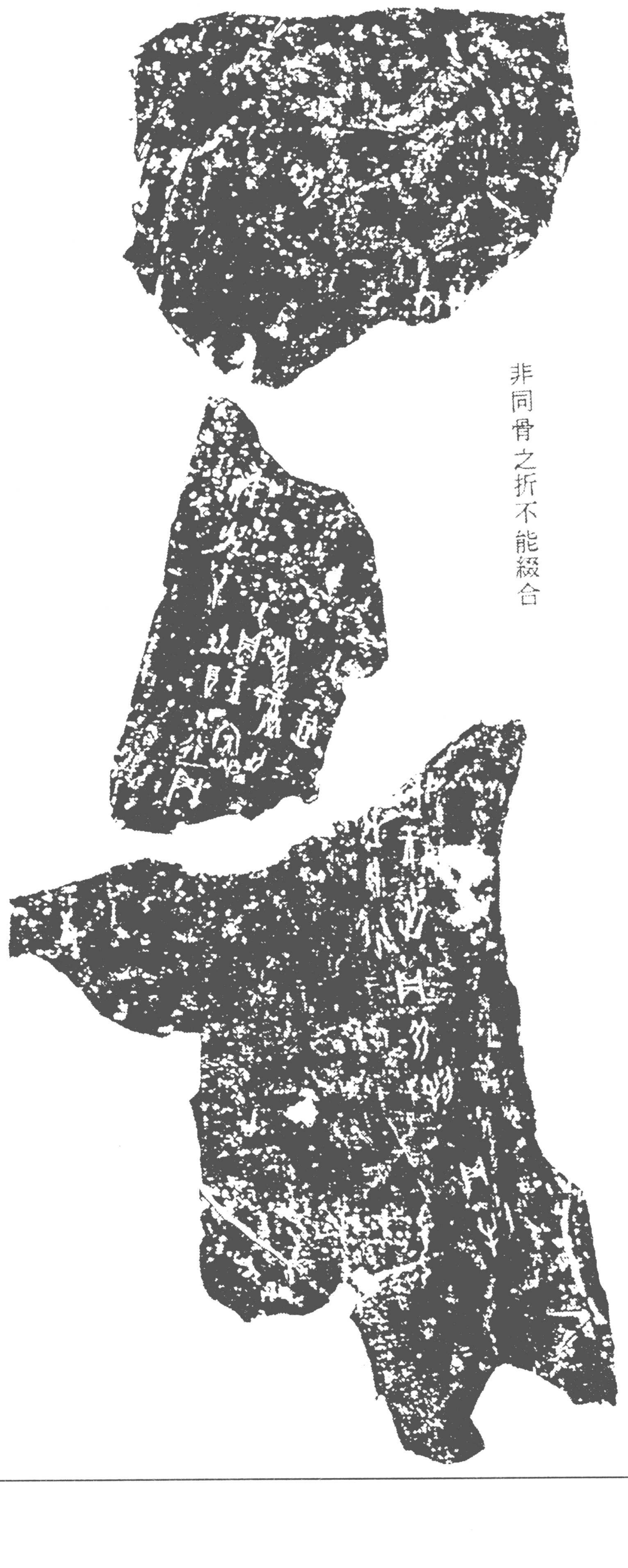
誤



圖十四·一

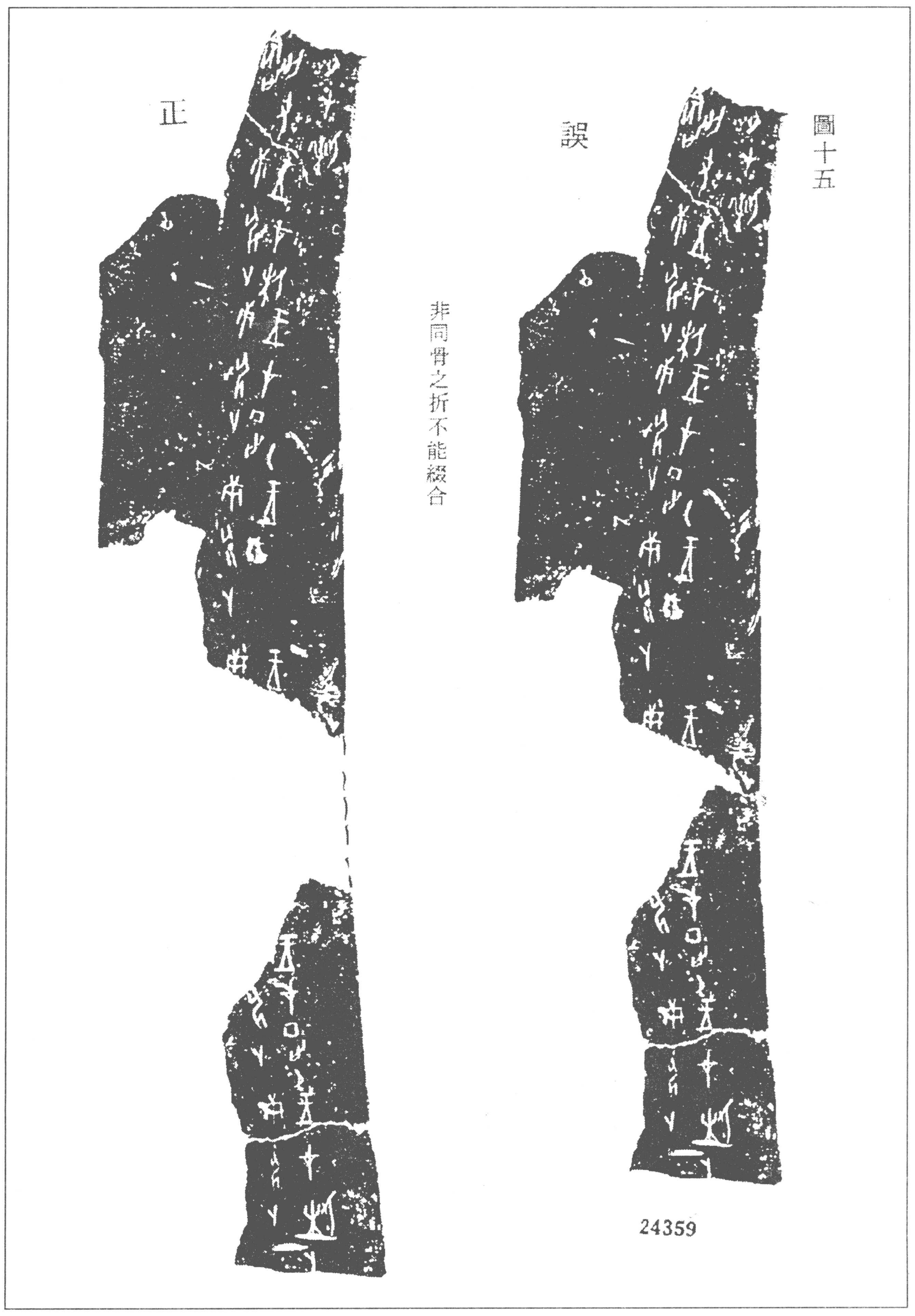
23732

正



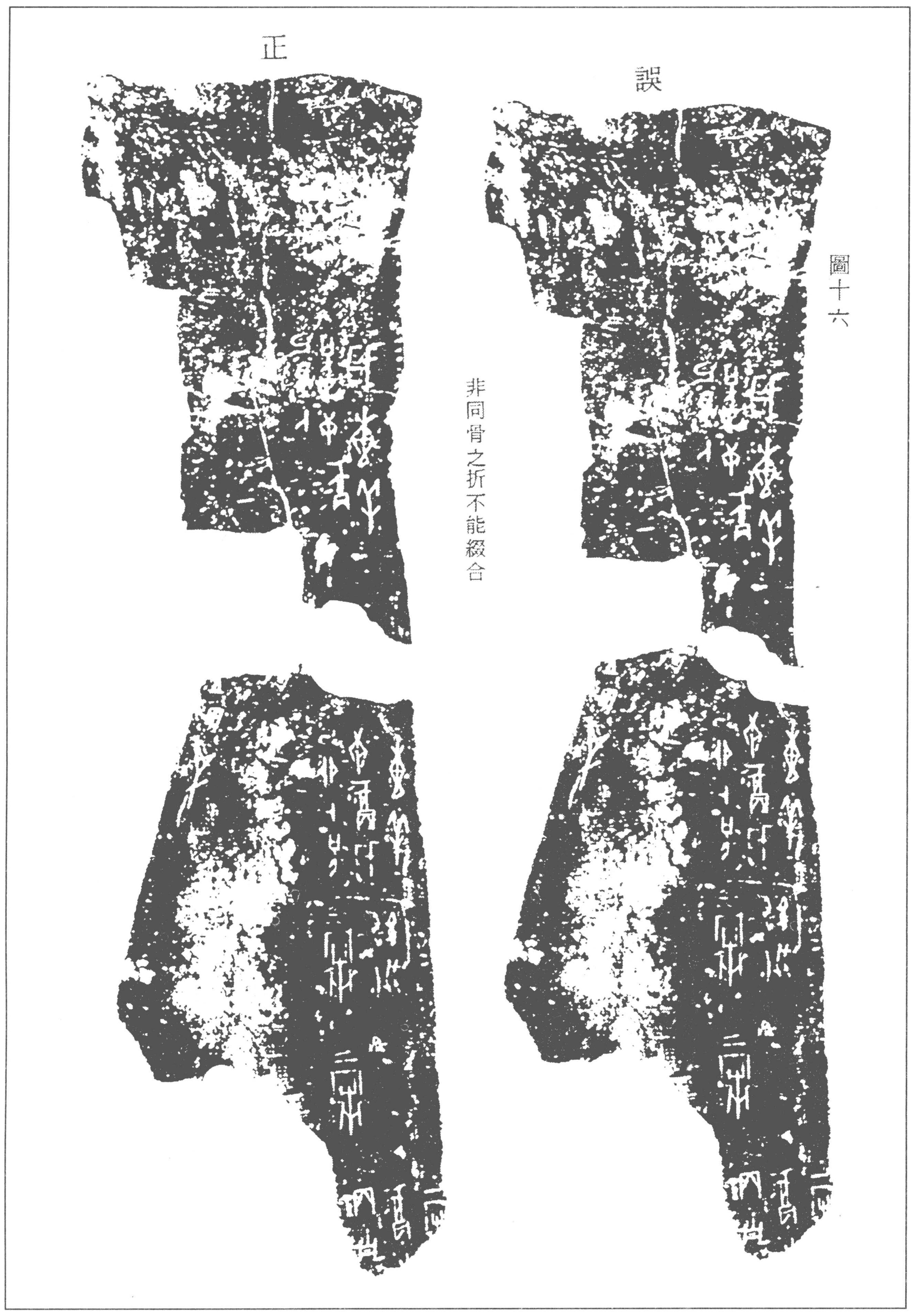
圖十四·二

非同骨之折不能綴合



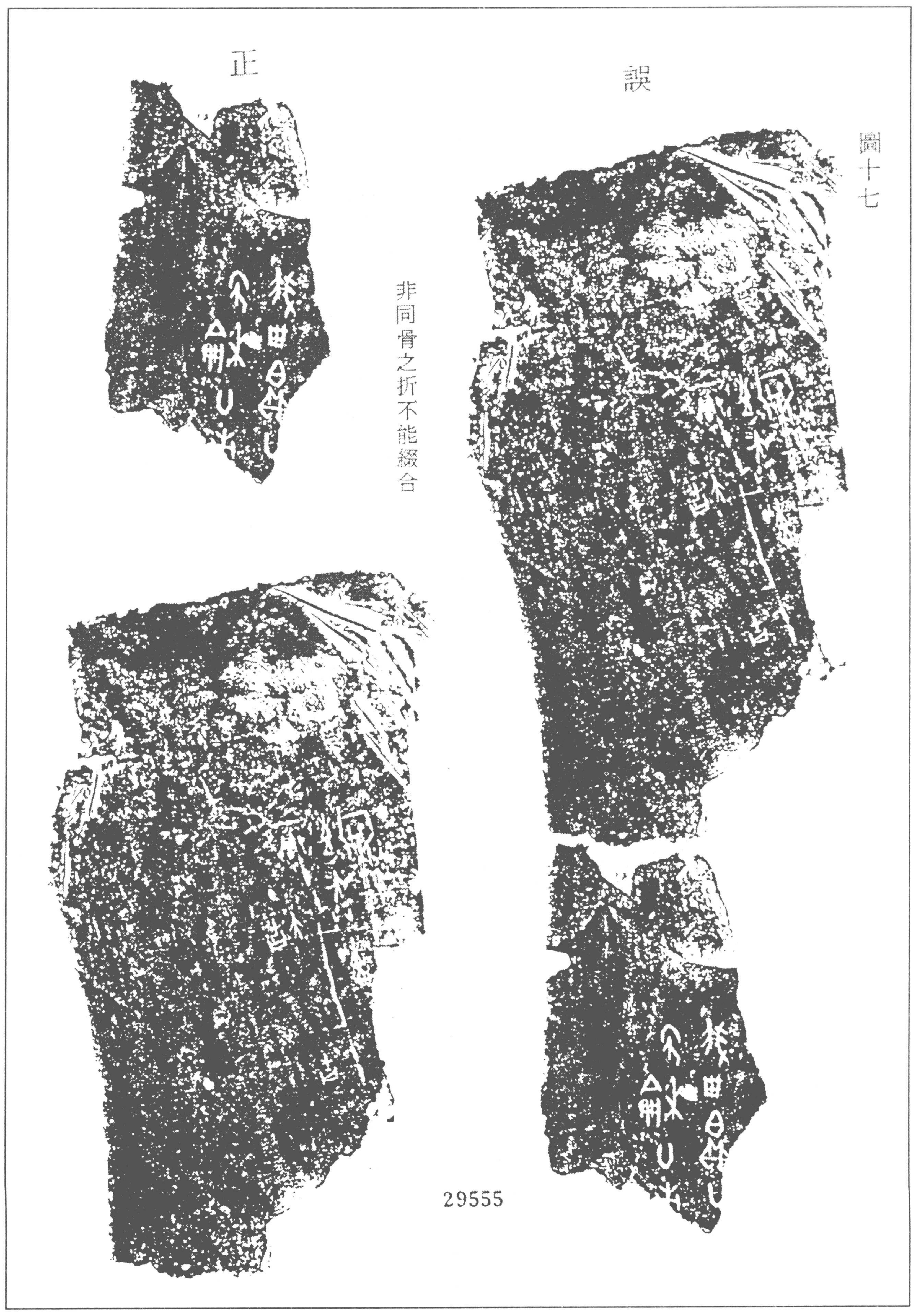
圖十五

非同骨之折不能綴合



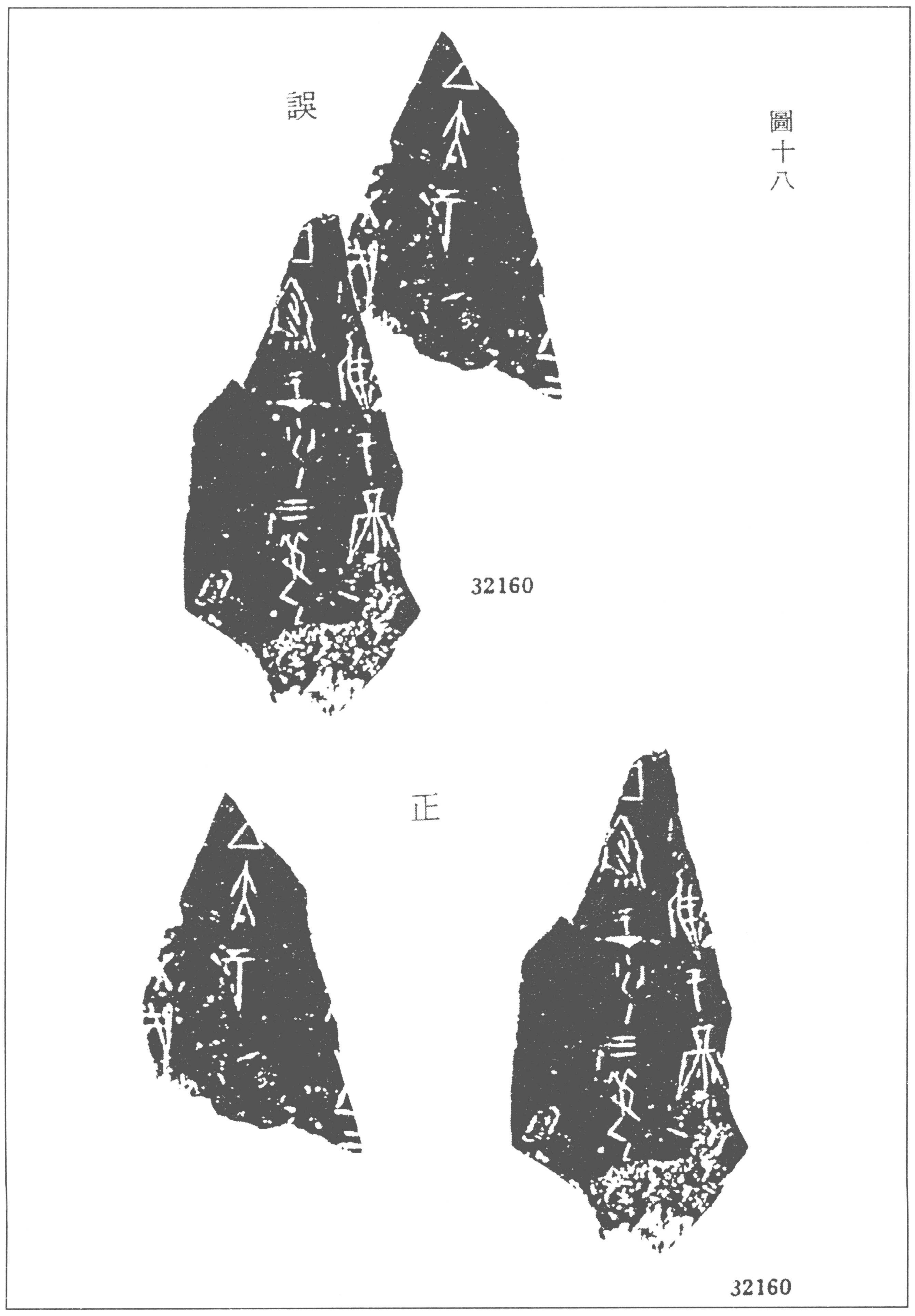
圖十六

非同骨之折不能綴合

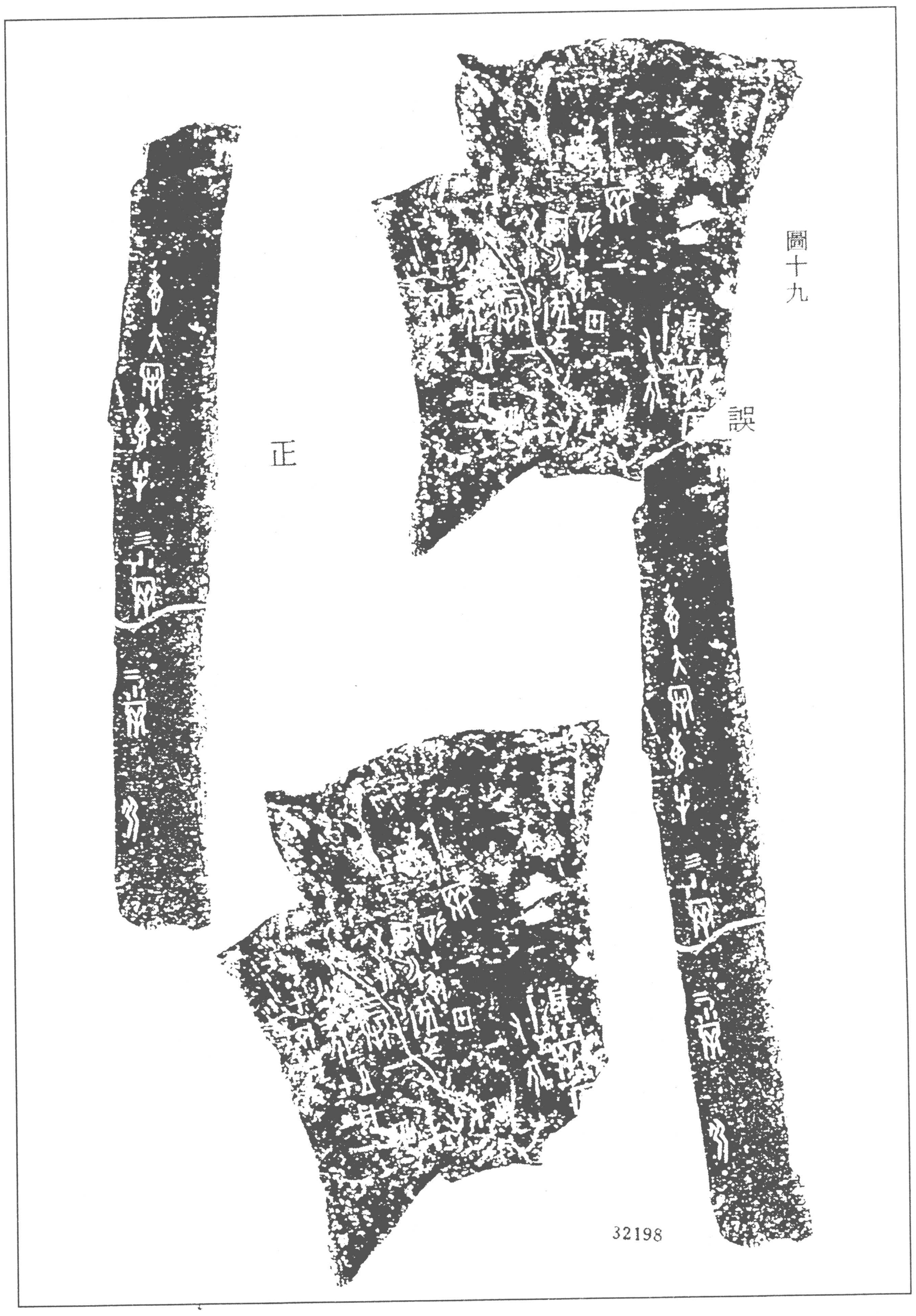


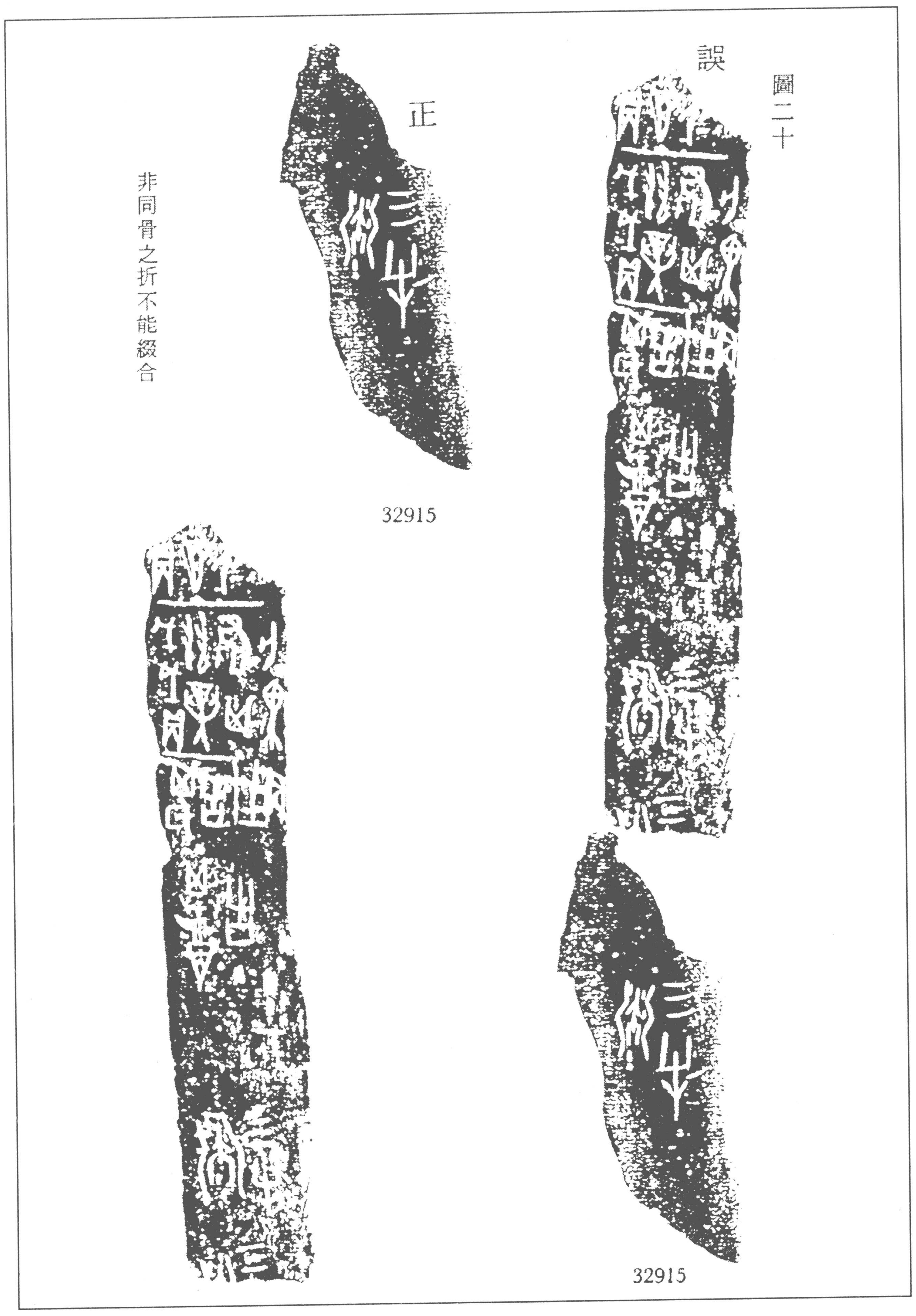
圖十七

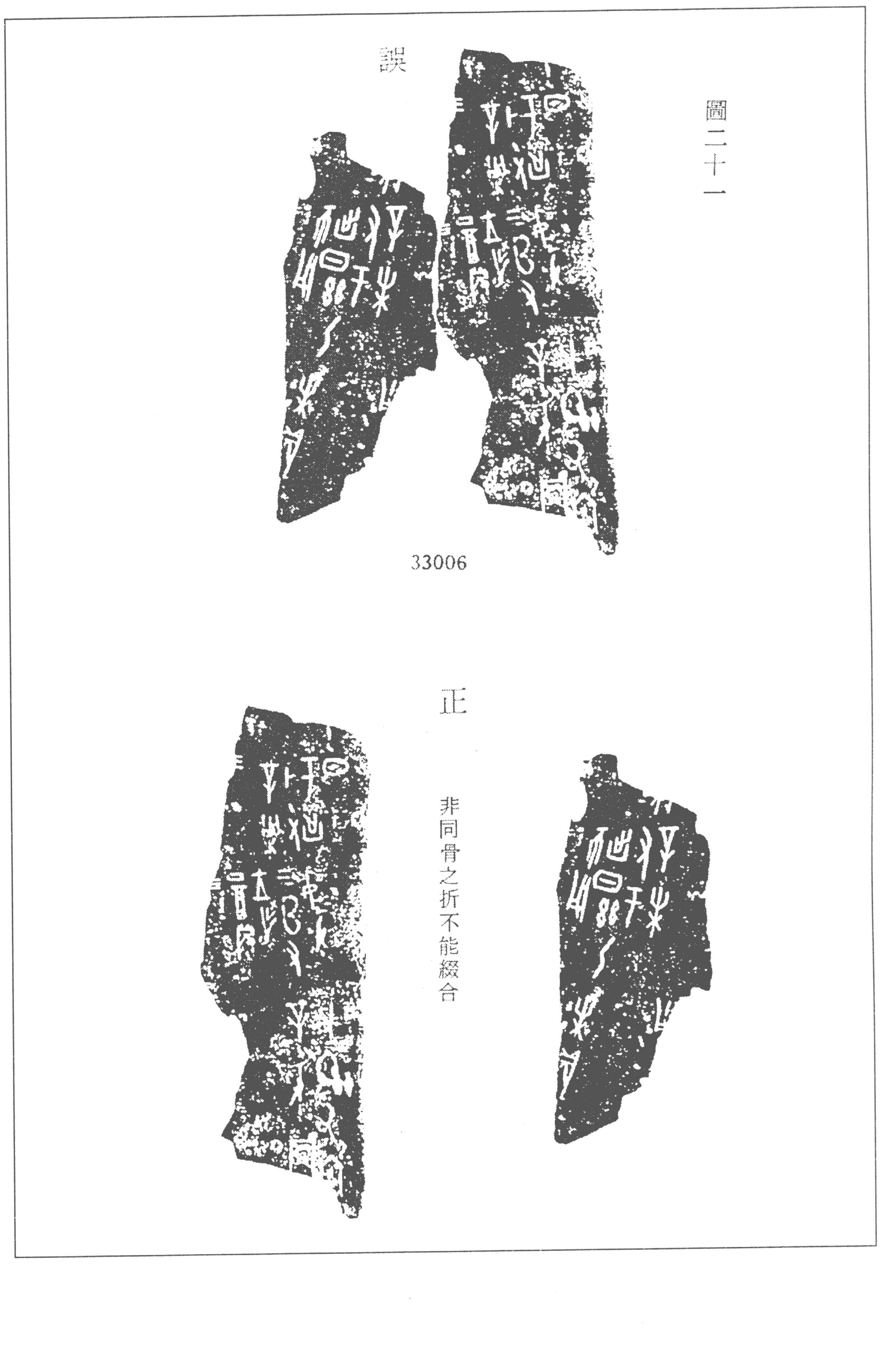
非同骨之折不能綴合


誤
32160
正
32160

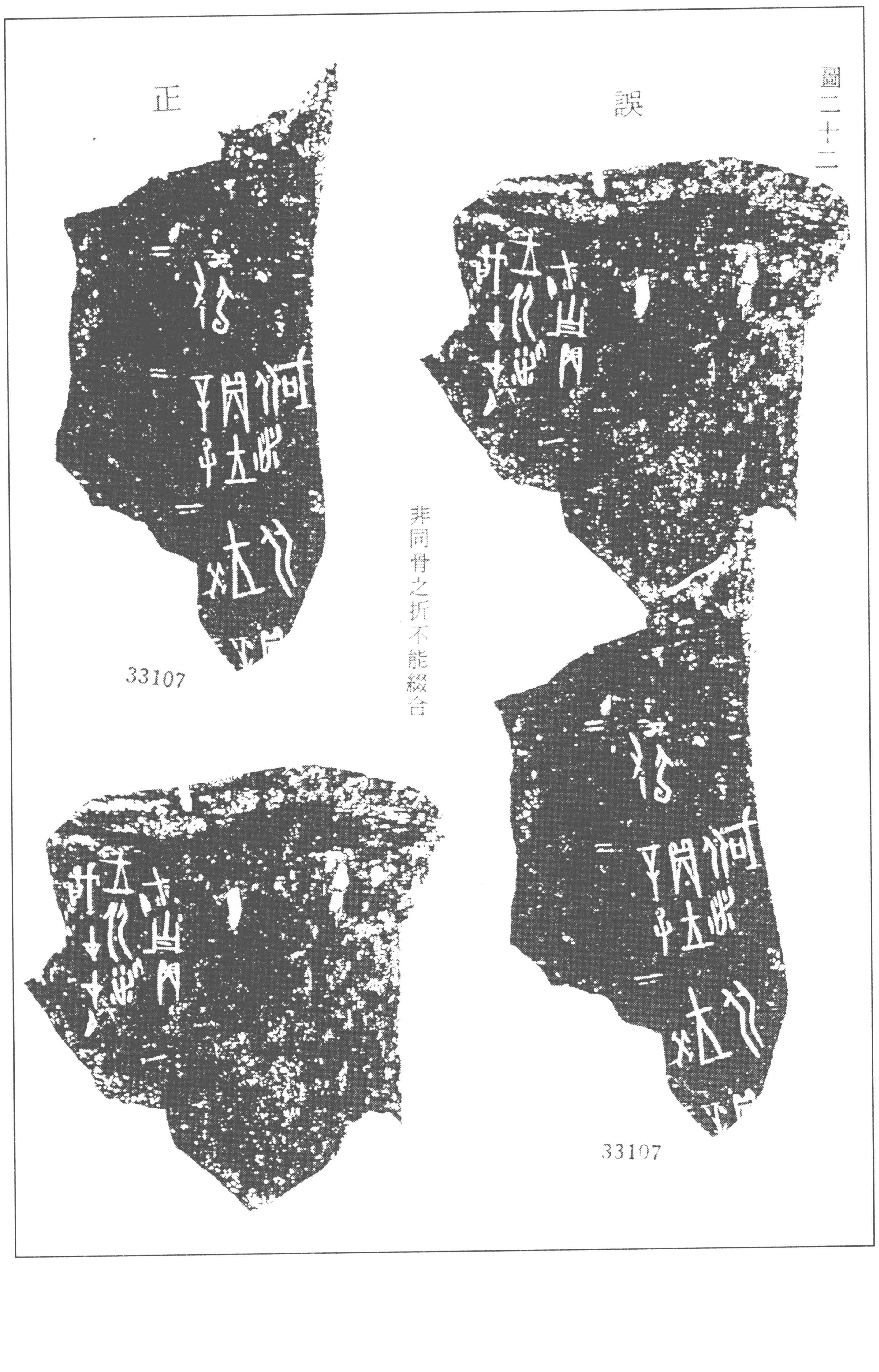
圖十八

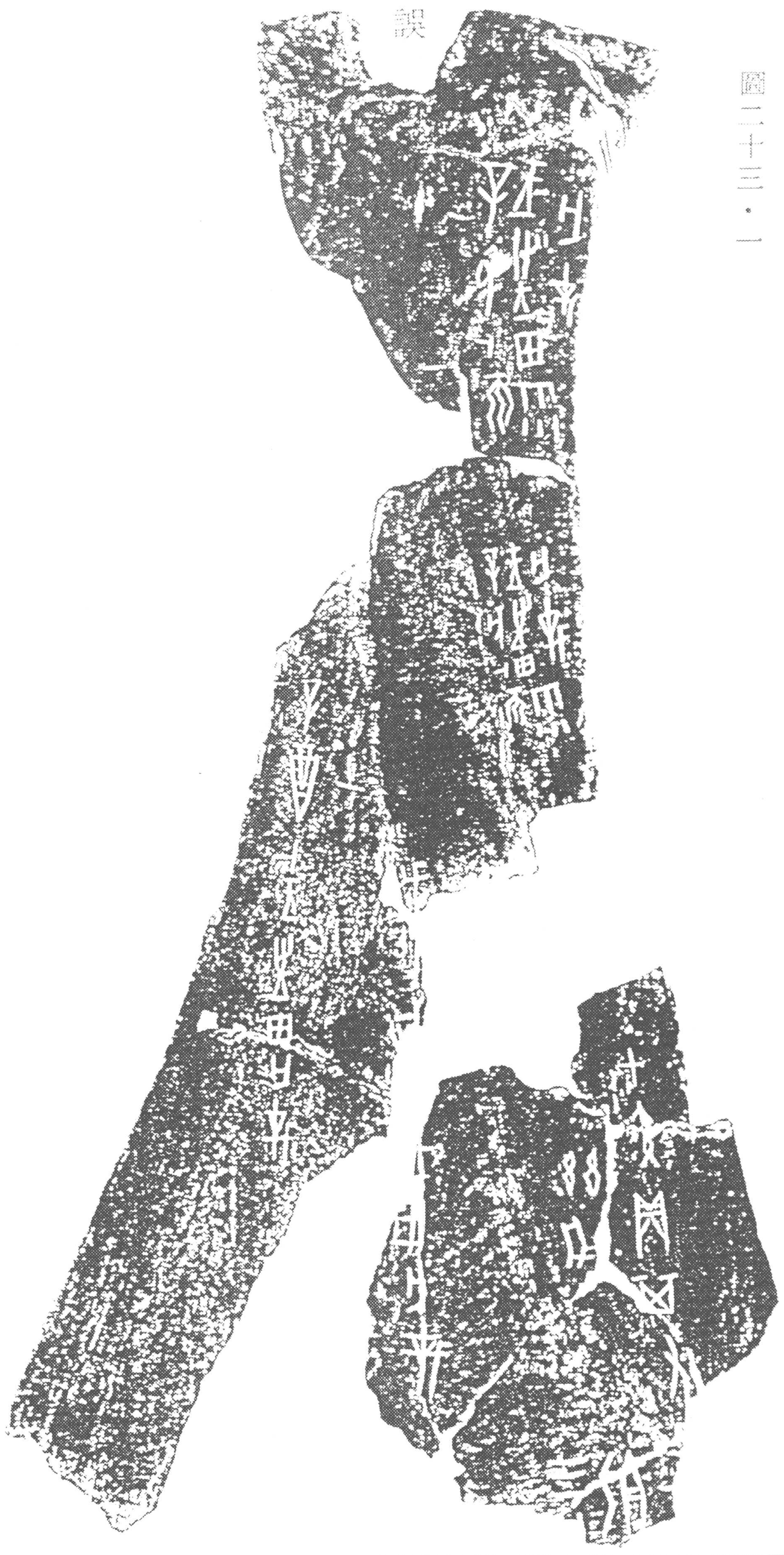

圖十九


圖二十
正
誤
32915
32915
非同骨之折不能綴合


圖二十一

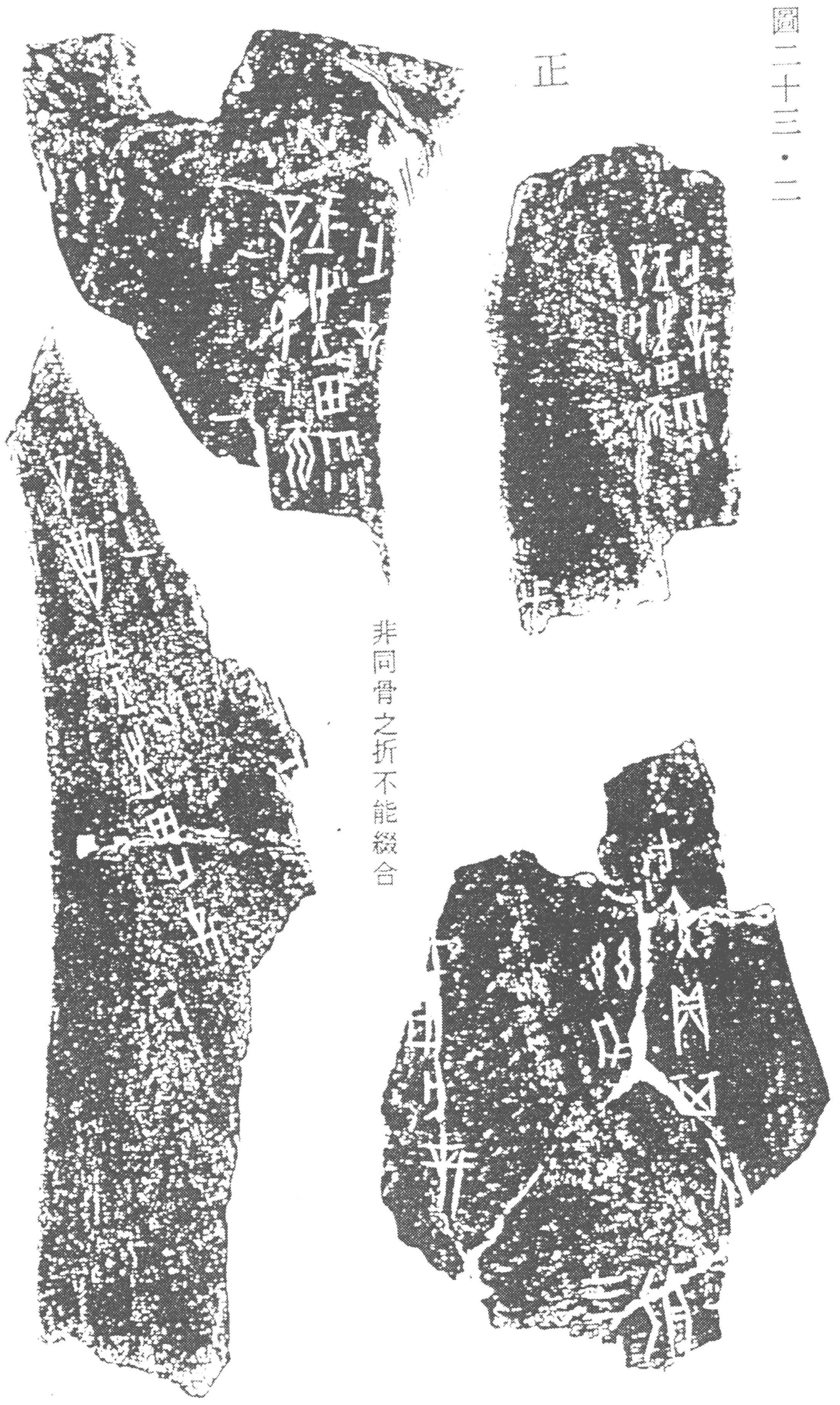
非同骨之折不能綴合


圖二十二
正
誤
33107
33107
非同骨之折不能綴合



誤

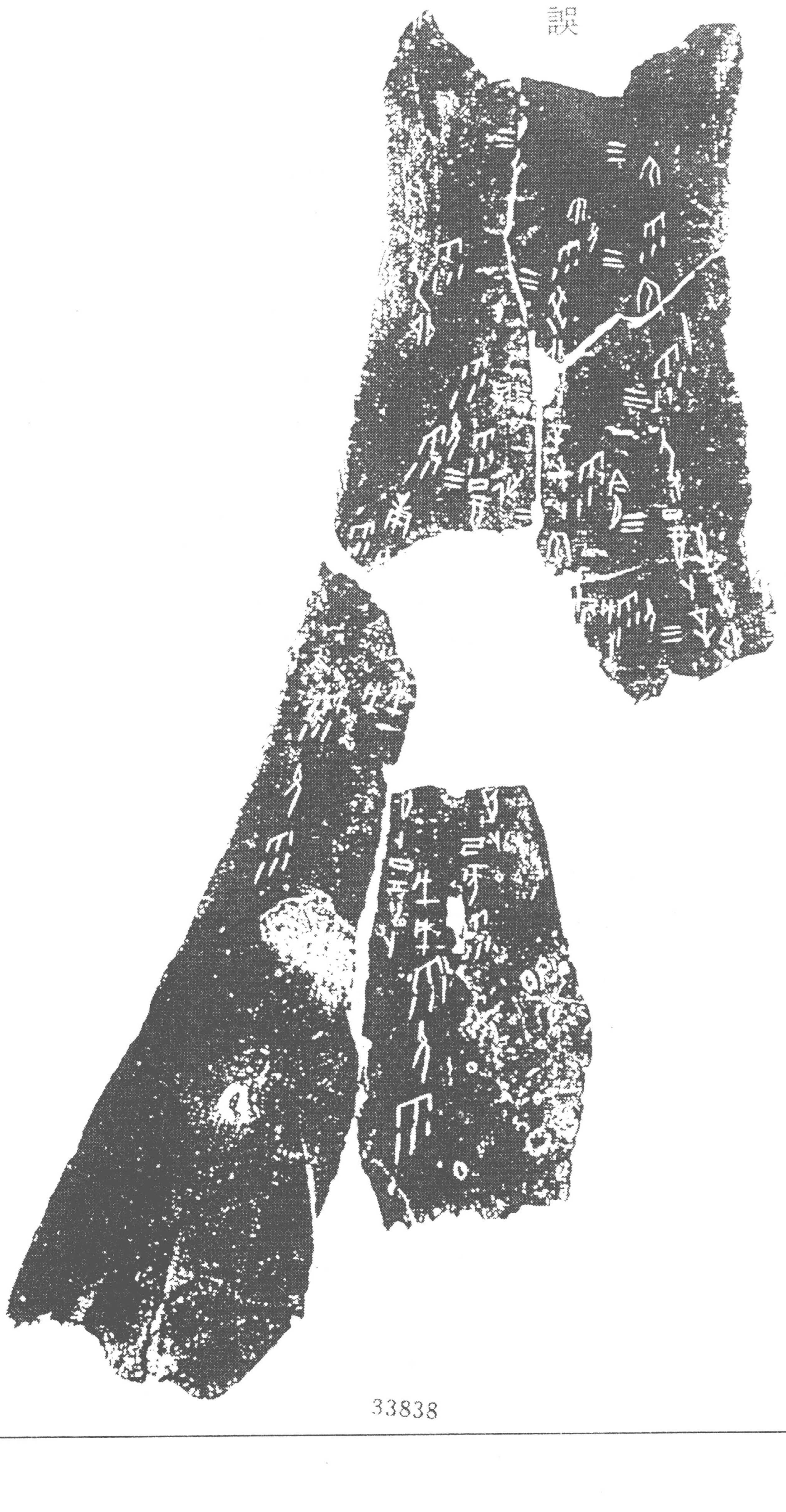
圖二十三・一



正

圖二十三・二

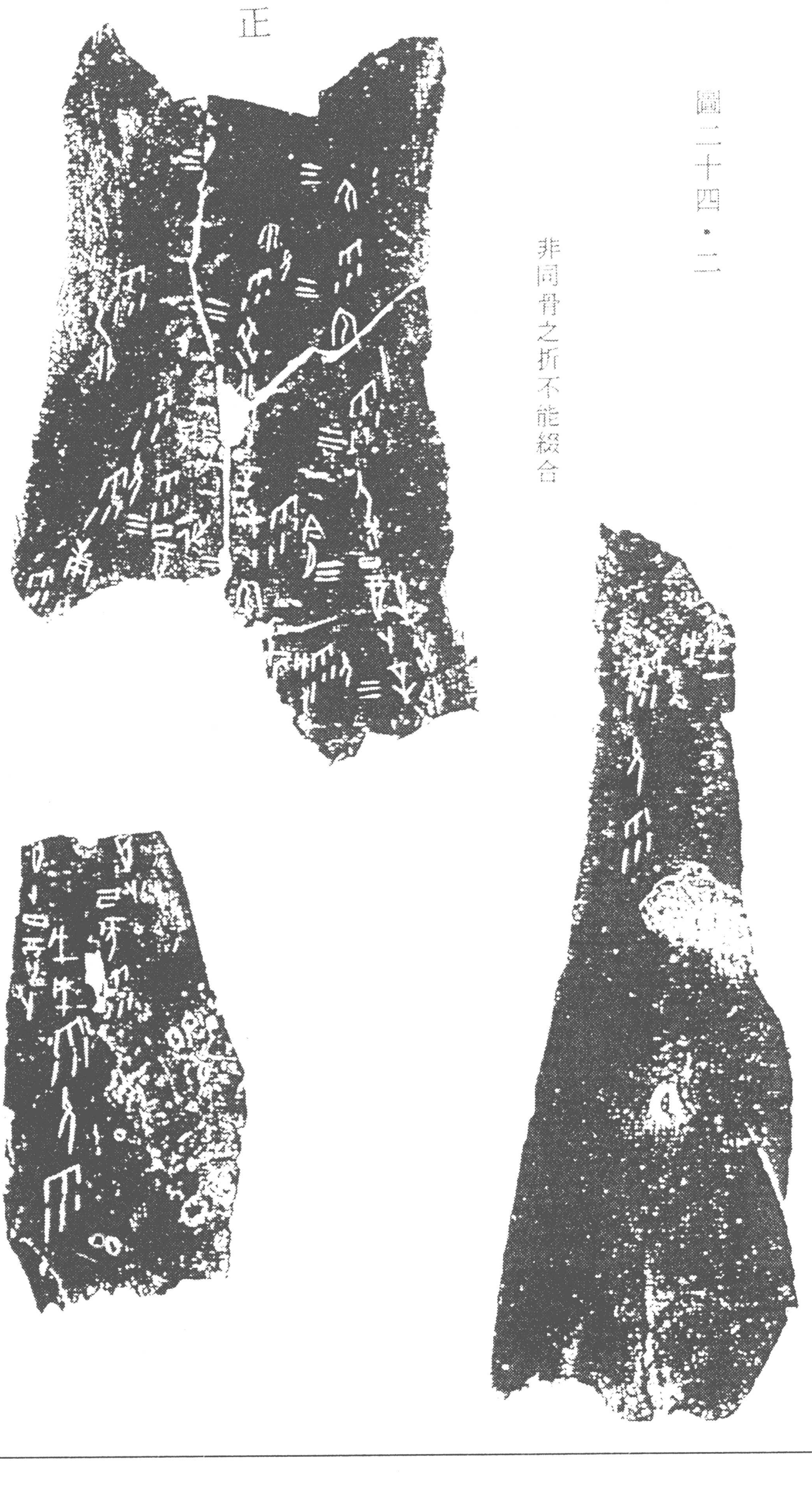
非同骨之折不能綴合



誤

圖二十四・一

33838



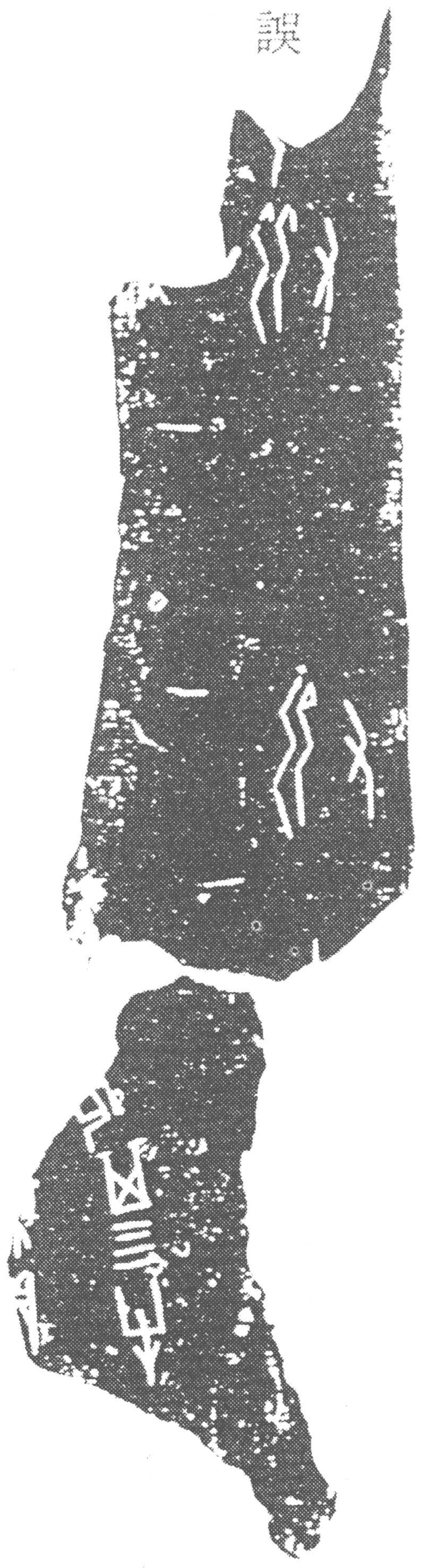
正

圖二十四・二

非同骨之折不能綴合

圖二十五

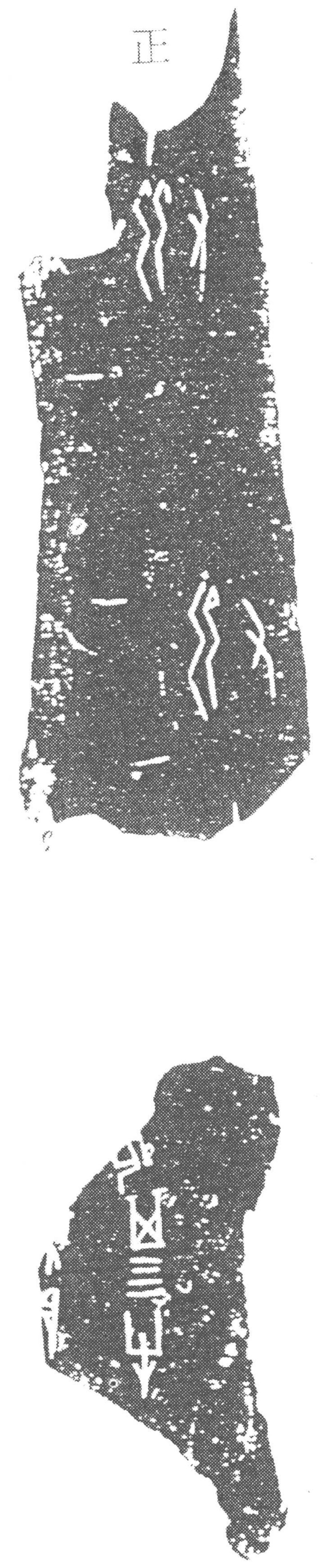
誤



34336

非同骨之折不能綴合

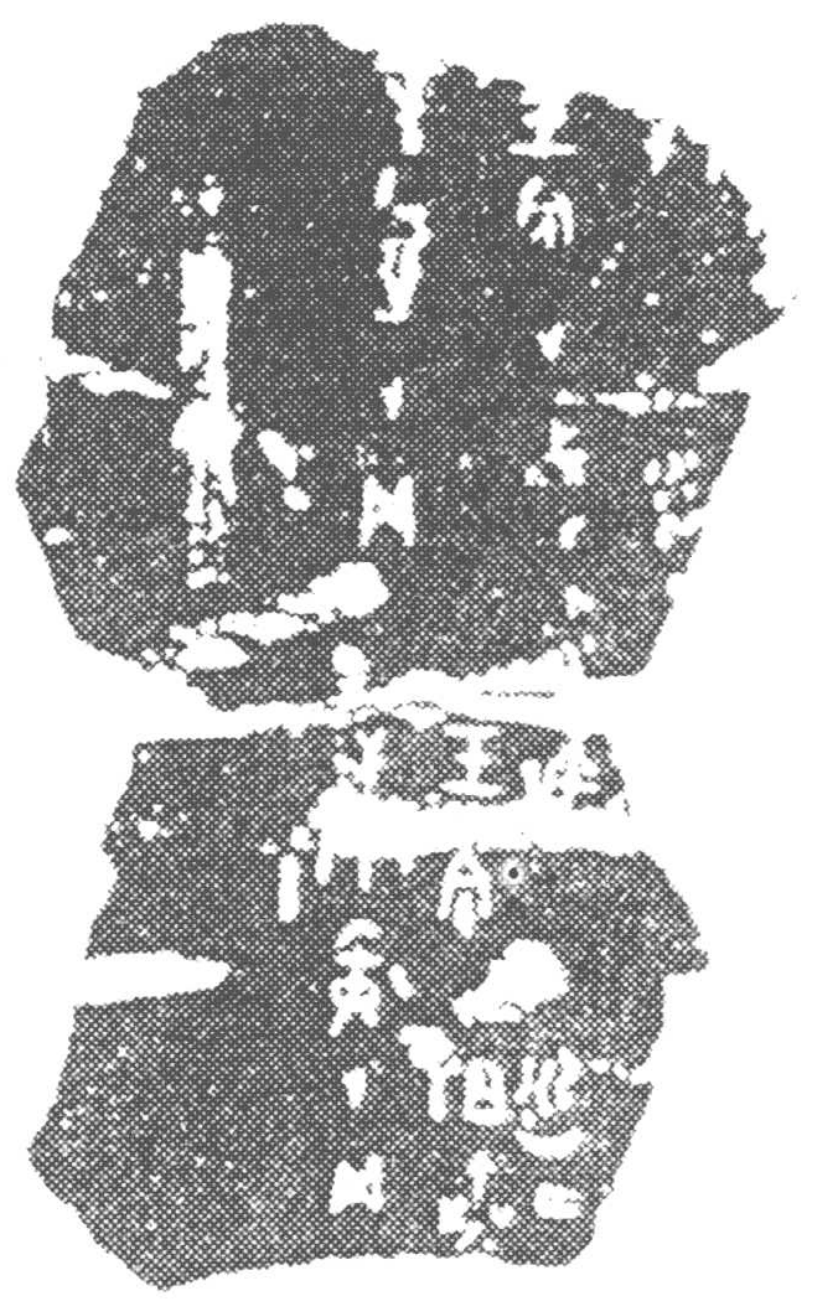
正



34336

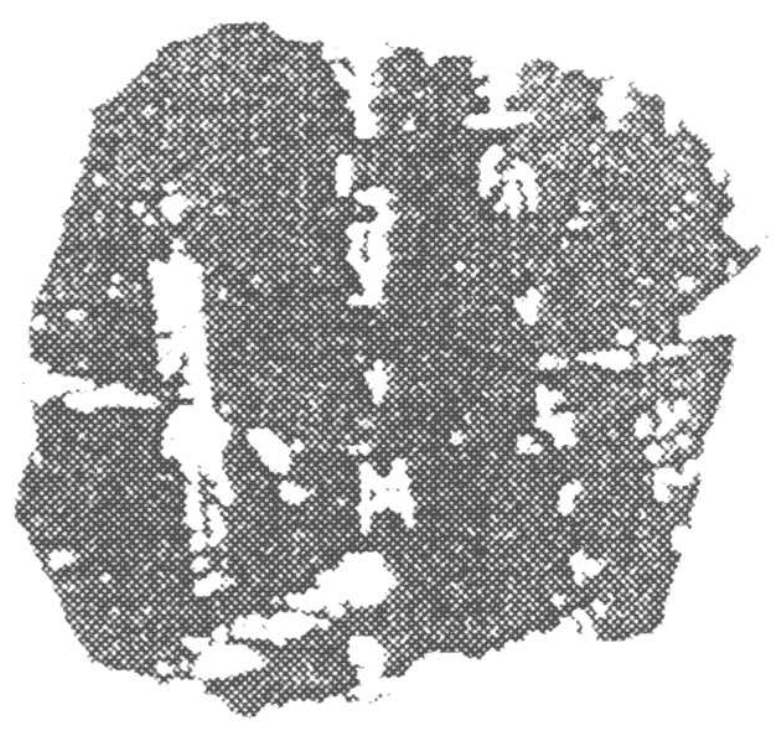
圖二十六

誤

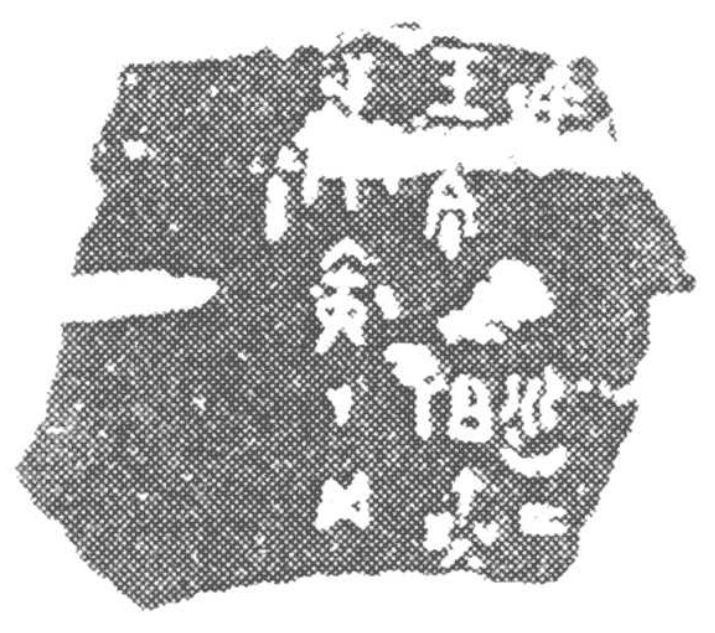


36255

正

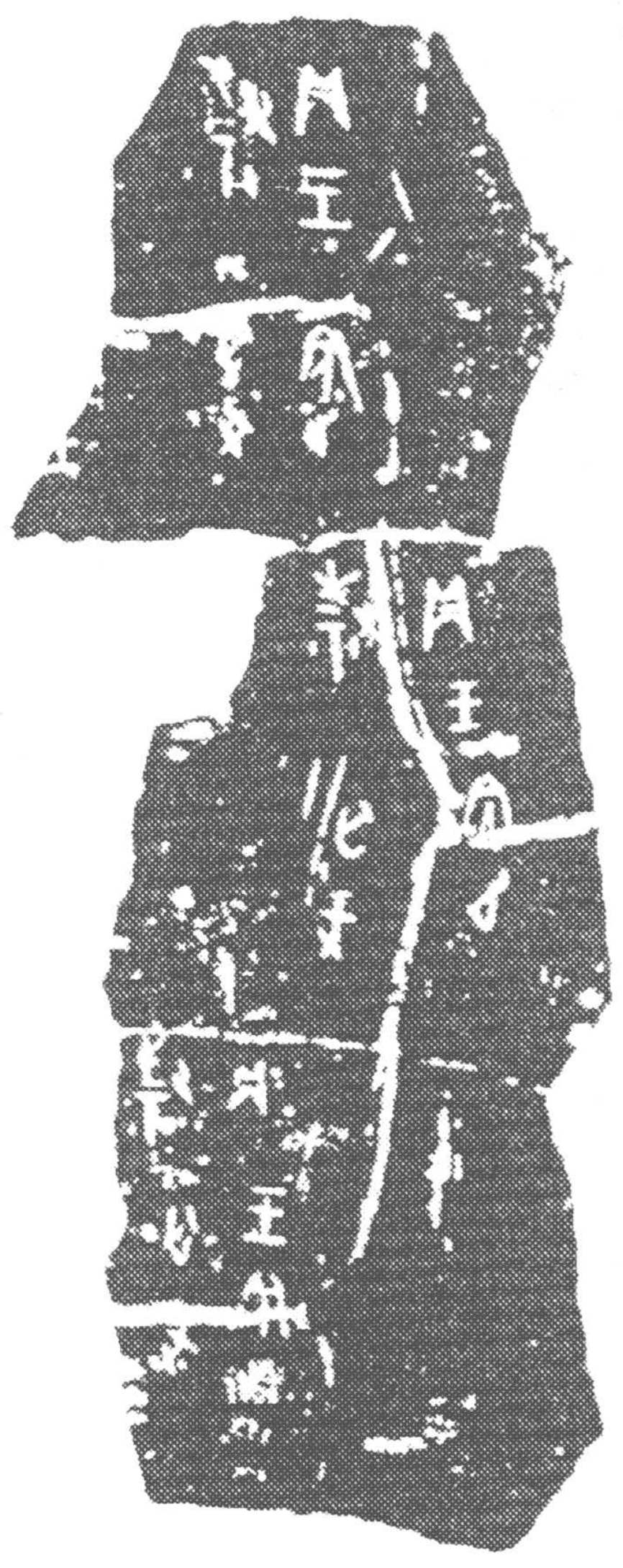


非同甲之折不能綴合



圖二十七

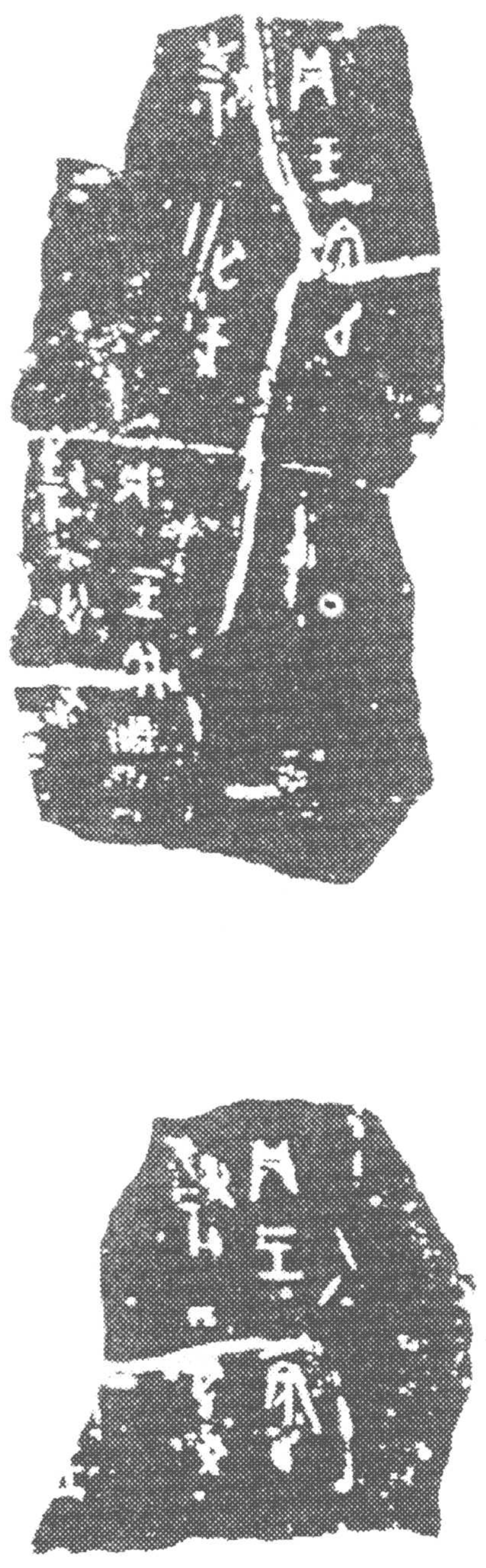
誤



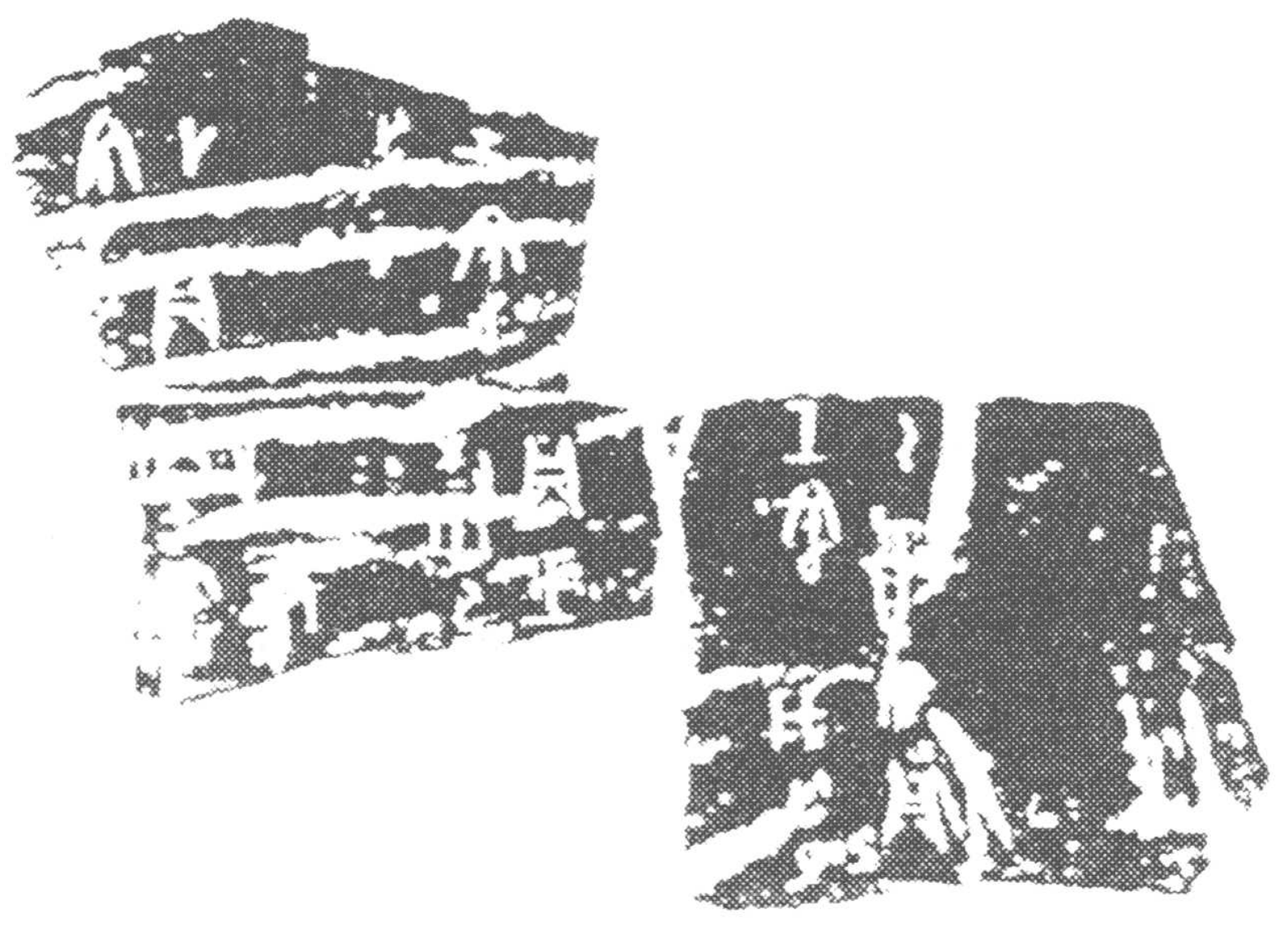
38315

非同甲之折不能綴合

正

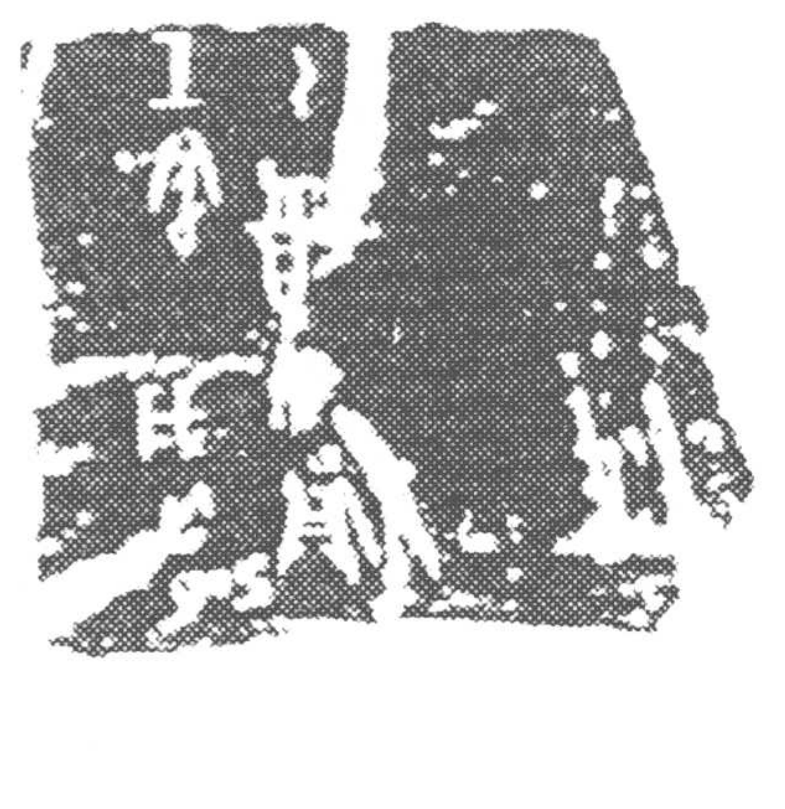


圖二十八

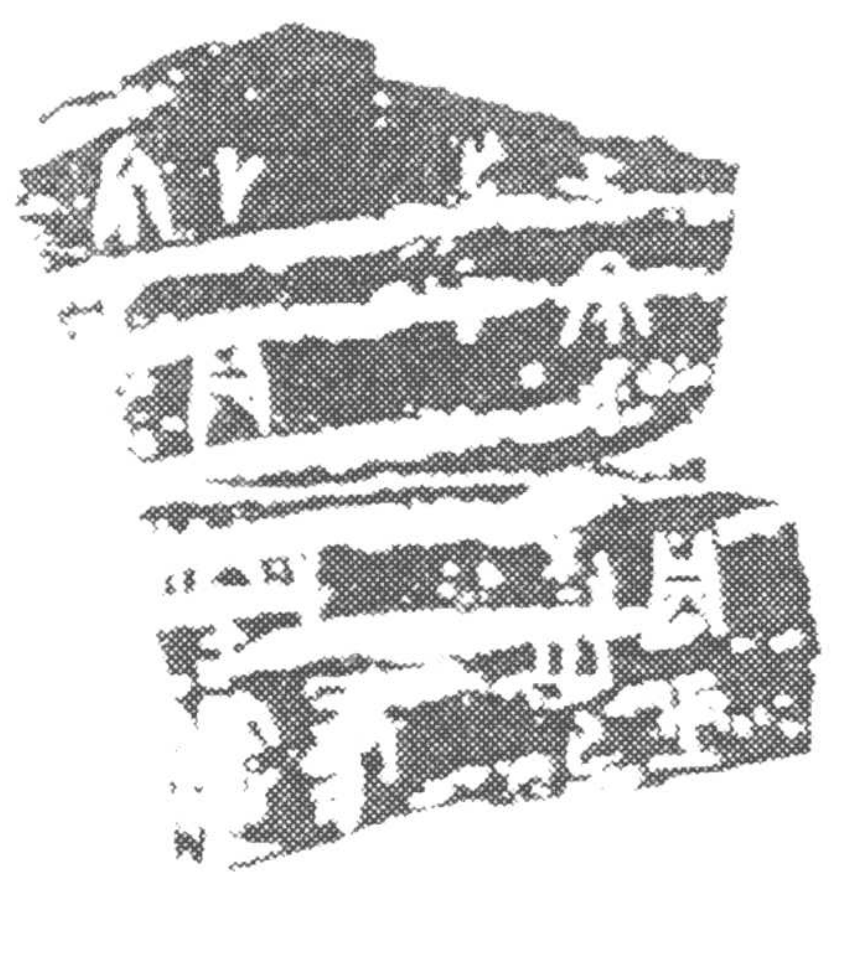


38527

正



非同甲之折不能綴合



《商周研究之批判》驳议

玄　峰

黄奇逸先生的大作《商周研究之批判》一文（以下简称《批判》）刊载于《四川大学学报》（哲学社会科学版）1990年4期。作者在文章结语中写道：“我们虽然好象建立了一个甲骨学的新体系，其实，我们破坏得多，建设相对地来说要少一些。”然而，遗憾的是，拜读《批判》之后，我们感受：它对于以往商周研究的丰硕成果既未能“破坏得多”，对黄先生所谓的“甲骨学新体系”也谈不上有什么“建立”和“建设”。《批判》一文中需驳议的问题不少。现仅选择其明显而比较重要的几点，分别辨正于下。

一、驳“商周王者谥号为祭名考”

《批判》的第四章是：“商周王者谥号为祭名考”。作者认为，商代及西周各王的“谥号全都是后人祭祀他们时所用的法定祭名”，“美谥与恶谥的分野，在于祀典的隆重卟否”。这是《批判》一文的重要论点．黄先生不惜以全文2／5的篇幅来维护它。但事与愿违，无论从文献记载，还是就《批判》一文的论证来说，黄先生的意见尽管很新，但却是不可信的。

谥号，本来不是一个以此大作文章问题。人们对谥号的由来、目的和作用的看法一直是无异议的。比如，成书于战国时代的《汲冢周书·谥法解》说：“维周公旦、太公望开嗣王业，攻于牧野之中，终葬，乃制谥叙法。谥者，行之迹也。号者，功之表也。车服，位之彰也。是以大行受大名，细行受小名。行出于己，名生于人。”晋孔晁注：“名谓号谥。”又如，《史记·秦始皇本纪》记载说：“秦初并天下，……制曰：‘朕闻太古有号毋谥，中古有号，死而以行为谥。如此，则子议父，臣议君也，甚无谓，朕弗取焉，自今已来，除谥法。　”班固也说：“谥者，何也？谥之为言引也。引烈行之迹也，所以进劝成德，使上务节也。”‘臣当受谥于君。大夫老，归死有谥，何？谥也，别尊卑、彰有德也。”（《白虎通德论·谥篇》）之后，人们一直奉行这样的原则来拟定谥号。综合上引3书的记载可以得出下述结论：早自战国秦汉起，2000余年以来，人们对谥号是清楚的，无异议的。所谓谥号就是在君王、士大夫死后，人们根据他生前的道德、功业而拟定的一个称号，其目的和意义在于表彰死者的德行、功烈或谴责死者的无道，从而劝勉后人努力为善。

人们确定谥号的具体实例说明了上述结论的可信性。秦汉而后的例子，如陶渊明、王国维等人谥号的确定我们就不详述了。现举先秦史书所载的最早的二例来验证上述结论。

1、楚共王谥号。《左传·襄公十三年》云：“楚子疾，告大夫曰：‘不谷不德，少主社稷。生十年而丧先君，未及师保之教训而应受多福，是以不德，……以辱社稷，为大夫忧，其弘多矣。若以大夫之灵，获保首领以殁于地，唯是春秋窀穸之事、所以从先君于祢庙者，请为“灵”若“厉”。大夫择焉。　’莫对。及五命，乃许。秋，楚共王卒。子囊谋谥。大夫曰：‘君有命矣。　’子囊曰：‘君命以共，若之何毁之？赫赫楚国，而君临之，抚有蛮夷，奄征南海，以属诸夏，而知其过，可不谓共乎？请谥之“共”。　’大夫从之。”杨伯峻注：谥号之起约在西周中叶以后。灵或厉皆恶谥。”杜《注》：“欲受恶谥以归先君也。乱而不损曰灵，戮杀不辜曰厉。”由此看出，楚共王的谥号“共”，是由子囊等大夫依据楚共王生前的功业、德行议定的。这不正是“死而以行为谥”、“谥者，行之迹也”及“臣议君”的实证吗？

2、公叔文子的谥号。公叔文子系卫献公之孙，名拔。文为谥号。《礼记·檀公下》载：“公叔文子卒，其子成请谥于君，曰：‘日月有时，将葬矣。请所以易其名者。　’君曰：‘昔者，卫国凶饥，夫子为粥与国之饥者，是不亦惠乎？昔者，卫国有难，夫子以其死卫寡人，不亦贞乎？夫子听卫国之政，修其班制以与四邻交，卫国之社稷不辱，不亦文乎？故谓夫子“贞惠文子”。　’”由此可知，文只是公叔文子谥号“贞惠文子”的简称。而卫侯之所以赐与他这一美好的谥号是因为他生前救饥、保君和长于辞令。这不正说明“臣受谥于君”，君给臣谥是“别尊卑，彰有德”的正确吗？

要之，无论从先秦两汉时人们对谥号的定义而言，还是就当时人们确定谥号的实例来说，我们都可以得出这样结论：从谥号出现之日起，它的实质就是人们依据死者生前的功业品德而拟定的一个称号，其目的在于褒扬死者的功德业绩或揭露他的不道，从而劝勉后人为善。然而，令人不解的是，黄先生把这些史料统统一笔抹杀，说什么“我们对《逸周书·谥法解》作了通篇的检查，此篇中对谥号的解释只讲了引申义，而没有讲出谥号的真义。《谥法解》的成书年代可能较晚，乃至它对殷、西周古王谥号出自祭名一无所知。”作者进而提出：“谥号全都是后人祭祀他们时所用的法定祭名。”这真令人大吃一惊。我们不禁要反问：如下文所论，谥号源于西周末叶以后，难道说《谥法解》的成书年代战国较黄先生的大作更晚吗？难道说制定谥号的时人倒不知他们为什么这样做或怎样做，而生活于2000余年后、已不在拟定谥号的时代的黄先生果真洞察到了谥号的真谛吗？正象今天的文件最能说明当今的情况一样，也只有先秦等史籍中有关谥号的史料最能说明什么是谥号。黄先生简单抹杀这些珍贵史料，提出“谥号出自祭名”，“谥号全都是后人祭祀他们时所用的法定祭名”等，只能被人们视为无根之木、无源之水。

黄先生谈论的对象是不存在的。尽管人们还不能明确指出谥号出现的绝对年代，但是，谥号之起不会早于西周末则可谓已成定论。郭沫若先生在《金文丛考·谥法之起源》中对这一问题作了深入探讨。在《谥法之起源》一文中，郭老依据《献侯鼎》、《宗周钟》及《匡卣》等西周青铜器铭文证成王之“成”、昭王之“昭”、穆王之“穆”、恭王之“恭”和懿王之“懿”都是西周天子生前的美称而非谥号，凡是具备历史常识的人都会承认，这些铜器铭文是无可怀疑的第一手资料。由此我们可以得出这样的结论：谥号的起源晚于西周，西周以前谥号制度没有形成。因此，我们可以说，尽管黄先生在《批判》中费了很大力气“对商、西周两朝王者的谥号进行了全面的查检”，但是，作者的努力全然是捕风捉影，毫无意义，令人难以置信。

黄先生认定谥号是后人祭祀死者的“法定祭名”，那么，应举出这样的实证：假定汉字A是某王的谥号，那么作者须证明A是一种祭礼，而该祭礼只用于祭祀该王或谥号同为A的其他人。只有这样，才能使作者的观点自圆其说。然而，《批判》一文虽然不惮辞费对商代、西周的46位王者（笔者按：商代的上甲、报乙等是先公而不是先王）的“谥号”作了所谓的“查检”，然而，黄先生却举不出一个这样的实证！多令人伤感、遗憾！比如，在论证报乙的谥号“报”是后人祭祀他的法定祭名时，黄先生没有列出“报”祭报乙的例子，作者引以为证的是“匚”祭上甲、父丁的《库》1213及《佚》175两版卜辞。“匚”字是否释“报”尚无定论。我们退一步说，即使它就是“报”字，在卜辞中是一种祭名，可是作者没有以它祭祀报乙的例子，只有祭祀“谥号”不是“报”的先公先王的例证，作者怎么能由此证明：报乙的谥号是报，因为它是后人对它的法定祭祀呢？让人不解的是，黄先生不管不问这些逻辑矛盾，由此便说“报”是报乙的谥号，且是对他举行的法定祭名！并进而宣称：“殷、西周古王谥号出自于祭名”。这就使人们陷于困惑之中。

基于“谥号出于祭名”这一前提，黄先生还推论说：“美谥与恶谥的分野，在于祀典的隆重与否”。既然“谥号出于祭名”这一提法根本不成立，那么后者便失去了立论的基础，自然便是不攻而破了。

二、驳卜辞中贞人应是祭名说

在董作宾先生研究出卜辞的断代标准以前，甲骨文的分期断代是不可想象的事，273年的晚商甲骨文乃混沌一团，经纬不分。但是，10项断代标准确立后，殷墟出土的甲骨才有了具体的归属，笼统的殷卜辞才一跃成为某一帝王时代的直接史料。这对于甲骨学的深入研究无疑起了巨大的推动作用。在董先生的10项断代标准中，世系、称谓、贞人、字形是比较重要和常用的。尤其是贞人一项。

贞人说是董作宾在1929年殷墟第三次科学发掘时，受到大连坑南段长方形坑内发现的大龟四版的启示，经过仔细比较和研究后得出卜辞中贞上一字应为贞人名这一论断的。他说：“贞上一字如为地名则必有在字，如‘在向贞　’，‘在潢贞　’，只言‘某某卜某贞’者，决非地名。又四版全为卜旬之辞，若为卜贞事类．或职官之名，应全版一致，今卜旬之版，贞上一字不同者六，则非事与官可知。又可知其决为卜问命龟之人．有时此人名甚似官名，则因古人多有以官为名者。又卜辞多‘某某卜王贞　’及‘王卜贞　’之例，可知贞卜命龟之辞，有时王亲为之，有时使史臣为之，其为书贞卜的人名，则无足疑。”（详见董作宾的《大龟四版考释》一文）

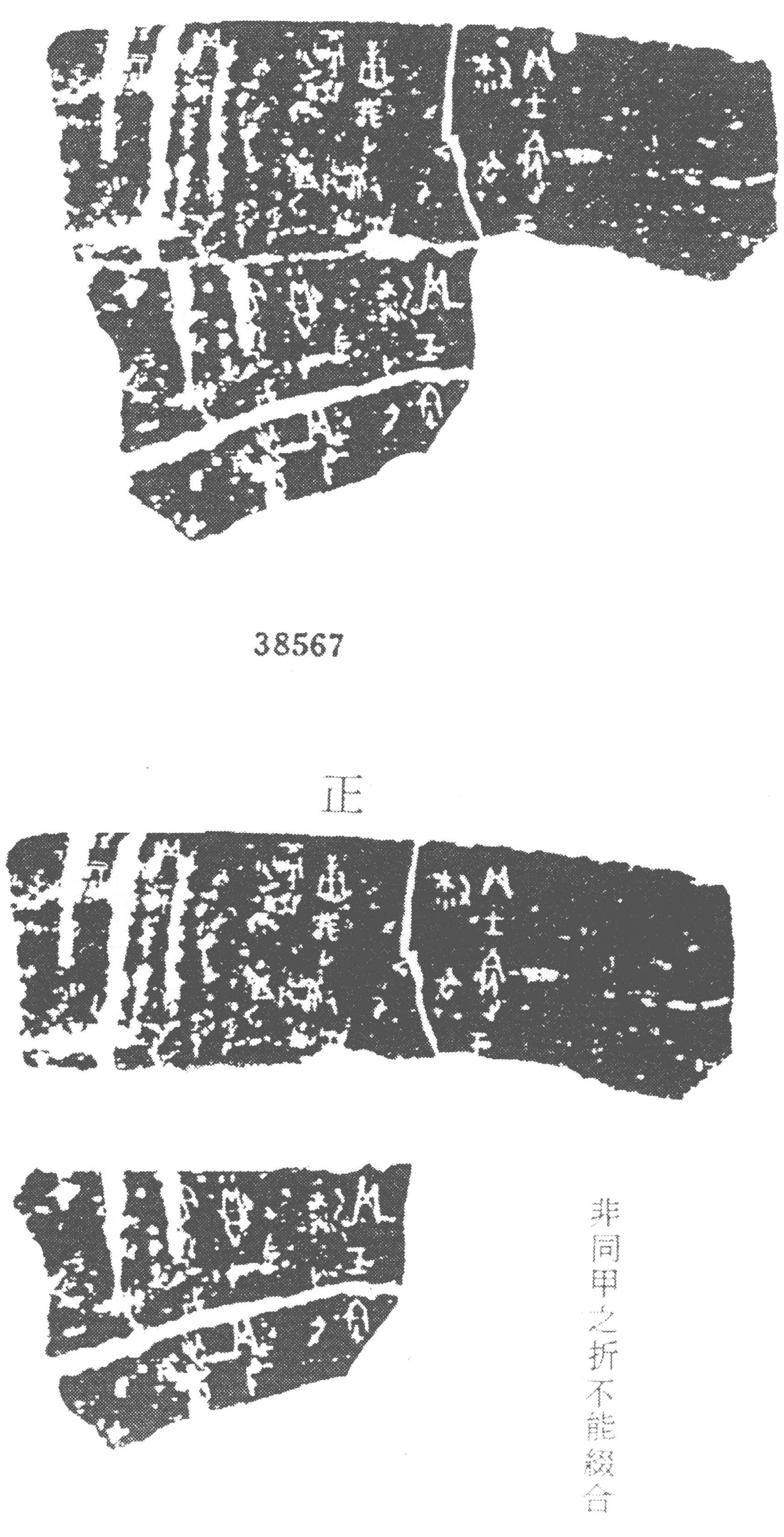
董氏并未停滞于此，1933年发表了《甲骨文断代研究例》一文，把卜辞的断代标准总结为10项。这样人们就可以根据卜辞中的世系，称谓以及卜辞出土坑位和其书体字样的特征和变化，互相比较与参照．几位一体地来判断甲骨文的时代。因此，董氏的断代标准是科学的和实用的。

但是，黄先生对10项断代标准提出了怀疑，认为贞人说的提出是“凭一种直觉，而没有拿出让我们信服的铁证”，“我们认为卜与贞字之间的那个字绝不可能是贞人，而是祭名”请注意，黄先生在这里说的是“那个字”，可是他引用的卜辞例却是：癸巳卜，…文武帝乙宗贞。（H11.1）：丁未贞，叀今夕酒御在父丁宗卜。（摭续64）二辞中．贞与卜之间的字竟有六七个以上，而并非一个字。这么多的字，董作宾没有说是贞人名，任何有甲骨学常识的人也不会说它们是贞人名。再者卜辞中的“……贞……卜”与“……卜……贞”并不一样。而黄先生却引用这种例子来为自己的理论论证，还大加反问“这些卜辞贞与卜字间的部分，都在讲祭祀的事情，怎么会是贞人呢”？自己对自己错误的假设大加诘问．而没有

圖二十九

誤

正



38567

38567

非同甲之折不能綴合

（原載《中國文字》新十四期，一九九一年）

注意到董作宾先生提出贞人说是依据"某某卜某贞"这种辞例的。

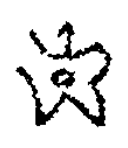
还使我们奇怪的是，黄先生在反驳卜辞贞人说时，本应把有贞人的辞例拿出来进行讨论和研究，就事论事。可是我们看《批判》一文中引用的卜辞却皆非"某某卜某贞"的例子，而是把只要是有同贞人名字一样的字的卜辞拿出来进行论说，其结果就可想而知了。比如对贞人"大"进行研究，按照黄先生的方法，只要是卜辞中有"大"一字的，如 王大令众人曰协田"和燎祭大丁卜辞中的"大"，都可以成为贞人为祭名说的论据，如此，贞人当然就不会是贞人了。请看《批判》文中第五章里对"王、自、兄"贞人的研究所用的甲骨卜辞例。

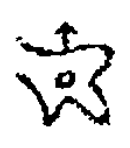
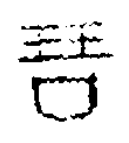
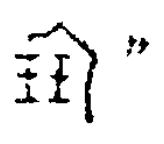
卜辞中的"王"，在各期中的字形不一，但都从大从一，大是一个四肢作最大限度伸展以表示一个特殊庞大的人体，上下一横表示天与地。王字正象一个顶天立地的大人形象。在古代社会，由于生产力水平低下，许多事情在很大程度上需要人自身的力量。所以各民族或各部落的首领一般都是身材魁梧，膂力超人的人。这样才能服众，才倍受众人的尊崇和畏惧，才能发号施令，建功立威。如"文王十尺，汤九尺"，（《孟子·告子》）这种情况在世界范围内也不例外。王字的解释历来有多种，但这样解释最直接，更接近王字本意，也符合历史事实。然而，黄先生却别出心裁地说它是一种器物，虽也承认王"或是人形"，但从《批判》文中可以看出主要是把它当作器物看待了。在大量的甲骨卜辞中，信手拈来几条都可证明王是商王的专称。如《丙》86、87是田猎卜辞，辞曰：

王获麋？不其获？允获四。
贞：擒麋？贞：弗其擒麋？
王获兕？王弗其获兕？
获不？允获麋四百五十一。

这几条辞是反复贞问商王田猎能否获取麋和兕，结果收获甚丰。辞中获作人手捉鸟状，可知获意为捕捉之意。其中"王"指商王也是十分明显的。如果按黄先生的解释"王"是祭名，那么"王获麋"作何解释？验辞"允获麋四百五十一"又怎么解释？再举一例即"王大令众人曰：协田"，如果按黄先生的"王"是器物为祭名说，那么器物也能讲话，命令众人吗？就说"大"也是祭名，那么辞中的"曰"作何解释？是谁"令众人曰"呢？所以按黄先生的理论去理解此辞则万难通顺。本辞明明是商王下的令，命令对象是"众人"，是一集合对象，而非一人，故用副词"大"以显示命令的庄重性和广泛性。鉴此，《批判》文中所引的《南明》432"王大御于……"应同"王大令……"一样，是商王主持或直接御祭先祖的记载，否则就不知谁是这次祭祀活动的主人了。

《批判》一文中引用了大量的甲骨卜辞，但是我们看到黄先生为了需要，往往对卜辞进行肢解或断章取义，或混淆两个不同意义的字削足以适履。如《铁》241.3片，原文本是：

戊子卜，𡆥贞，唐……
戊辰卜，韦贞，子禽……。

可是黄先生为了证明辞中的为沃丁的合文，而置此字后面的"子禽"二字于不顾，硬是与"唐"对照起来。又"兄"字，在卜辞中它有三意：一是贞人名，二是作"兄弟"之兄，三是借用作"祝"。这是甲骨学者都明白的事。卜辞中的"兄"作何讲要具体分析，而不能机械套用。黄先生为了证明王非商王专称而是器物，是祭名，就把"王王、、"等字拿出来作论据，这怎么会使人信服呢？照这样，中国的文字中任何一个都不能含有另一字的部分和全体了。何况这些字还需分期，如果是一、四期的，则非王字，王字是作太形的。而"王王"与王字根本不同，王字没有作王形的。由此可见，黄先生的这种方法本身就是错误的、约定的、机械的，是难以立住脚的。

在10项断代标准中，贞人是其中一项，上面我们粗略地指出了黄先生"贞人为祭名说"错误原因所在，即研究方法的错误。何况从王国维开始，人们判断出的商王世系已同《殷本纪》等文献所载的商王世系对照和呼应起来了，拿断代标准去重新检验也是正确的，这大概不会是偶然的巧合吧？在10项标准中，还有称谓的不同，坑位的不同，还有书例、字体的特征。把甲骨文分为五期，是几项标准互相参照使用后的结果。至于黄先生认为"旧体系中已证明贞人与刻辞者非一人，依刻辞者字迹，又怎能对贞人分组断代呢"？这是黄先生误以为10项标准是分开单独运用的，实际上是互相结合综合判断的。在此还需要纠正一下，我们是从字体上去判断卜辞所属时代和那一期的，而不是对贞人分组断代。

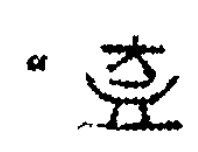
三、驳《批判》一文的研究方法

《批判》一文中很多不当的结论与作者的非科学研究方法有很大关系。黄先生研究方法的非科学性主要表现在下面3点：

1、对待史料的虚无主义态度。这在原文的第四章（商周王者谥号为祭名考）中表现得最为突出。如前文所论，《汲冢周书》、《春秋左氏传》、《国语》、《史记》及《白虎通德论》等古籍清楚地记载着：谥号是依据死者生前的功业、德行而拟定的一个称号。千百年来这都不成问题。但黄先生仅凭"可能成书较晚"这样一句话便说，这些书对于谥号是"一无所知"。黄先生就是这样，没有科学分析便把当时的史料统统抹杀了。

2、文章没有逻辑性。任何科学都是应用逻辑。文章只有逻辑性强才能科学地说明问题。分析《批判》就可看出，该文的逻辑异常混乱。

首先，《批判》一文的概念不清。举例来说，祭名、祭法和祭品，虽然都和祭祀有关，但它们绝不是3个相同的概念。也就是说，祭名和祭法不一定相同，如祭祀的祭名是彡，祭法为打鼓作乐以祭神灵；祭品和祭法不一定是一致的，如祭品为牛，祭法可以为沉，也可以为燎；而祭品和祭名也不一定相同，如祭品可以为羊，而祭名也许是卯等。总之，在研究祭祀时，一定得把祭名、祭法与祭品分清楚。只有这样，人们才能确切了解一种祭祀。可是，黄先生却笼而统之地把三者都认作了祭名。正如作者所承认的那样："在我们草草的研究中，祭名、祭法、祭品没有分清楚。"这就造成了研究中的概念混乱。作者以此为基础的论证也因之矛盾百出。

其次，没有具体地分析能说明问题的实例。毛泽东同志指出："对每一个问题要根据详细的材料加以具体的分析，然后引出理论性的结论来。"（《整顿党的作风》，《毛泽东选集》第三卷816～817页）可见，历史研究的重要特点是具体分析法——从具体的事实分析中得出结论。通观黄文，它欠缺的正是这点。比如，论证"谥号出于祭名"时竟举不出一个有力的例子（详见上文）。再比如，黄先生否认"太"是王字，他并不是从偏旁分析或字体结构着手，见到卜辞中有""字，便惊呼"把天子放在鼎镬中烹煮""由此观之，太绝不是王字"，那么，请问黄先生：口指人的嘴，我们能否因为"鸣"字便推测鸟也有人口呢？

3、使用材料时穿凿附会，断章取义。这样的例子在《批判》一文中举不胜举。现举一例。如示字，《说文》云："示：天垂象，见吉凶，所以示人也。从二，三垂，日月星也，观乎天文以察时变。示，神事也。"（段注：言天悬象著明以示人，圣人因以神道设教。）这与祭祀毫无关系。黄先生却据此说"在典籍中，示字也有祭祀之意"。这是穿凿附会，断章取义。

上面我们对《批判》一文中的3个具体问题和黄先生的研究方法进行了驳议。限于篇幅，无法详细展开我们的意见，只好粗略地作了某些申论。但是我们必须看到，《批判》中还有许多问题都是不妥的，如黄先生认为卜辞中的方国地理应属虚构之说，"旧体系中诸问题的商榷"中的观点等等。黄先生主观笼统地把甲骨卜辞都看作是祭祀方面的事情，都是卜问用什么祭品、什么祭礼来进行祭祀。那么，这些祭祀都是为什么事情，什么问题进行祭祀呢？我们看到卜辞中祭祀卜问的内容十分广泛和丰富，为征伐之事、耕种之事、生育之事等，是为了这些关乎国计民生的大事，而非黄先生所讲的那种只为祭祀本身而祭祀的论点。自1899年以来随着国内外专家学者的不断努力，"甲骨学"已成为一门蔚为壮观的国际性显学。人们通过十数万片的甲骨资料，逐步揭开了3000年前的商代面纱，露出了它的本来面目。这是广大甲骨学者日积月累，辛辛苦苦劳动的结果。但是，如果按黄先生的研究结论来看这些丰硕成果，那么，广大学者们都在进行错误的研究，已经被考古成果和古老的文献所证实的成果则毫无价值。所幸的是，甲骨学商史研究正在日益深入，当然，愈深则愈难，但是，我们相信有这么多的专家，又有这么好的条件，许多以前未能解决的问题能够解决。那到时，我们将看到甲骨学的辉煌。

（原载《殷都学刊》1991年第3期）

評《殷墟甲骨刻辭類纂》(上)

裘錫圭

姚孝遂、肖丁二位先生主編的《殷墟甲骨刻辭類纂》三大册（下文簡稱"類纂"），已在不久前由中華書局出版。

《類纂》是研究殷墟甲骨刻辭的工具書。它的體例基本上沿襲島邦男的《殷墟卜辭綜類》（下文簡稱"綜類"）。爲什麽在已有《綜類》的情況下還要編《類纂》的原因，姚孝遂先生在《類纂》的序言裏講得很清楚。他說：

> 從事甲骨刻辭研究，自60年代以來，《殷墟卜辭綜類》一直是最主要的常用工具書之一。二十多年過去了，由於陸續出土和著録了一些新的原始資料，同時也積累了大量的有關研究成果，很顯然，《殷墟卜辭綜類》已難以適應目前研究工作的需要了。尤其是《甲骨文合集》出版之後，原始資料相對地比較集中，而《殷墟卜辭綜類》只有舊的著録號，無法與之相配合，根本没有用武之地。
>
> 《綜類》還有一個最大的缺陷，就是只有原篆而没有隸釋。如果不認識甲骨文字，就無法利用這部工具書。
>
> 甲骨刻辭所記載的内容非常廣泛，涉及到殷商文化的所有各個方面。而隨着現代各個學科的發展，需要利用甲骨刻辭的各學科學者越來越多。……《綜類》這部書是無法解決這個需求矛盾的。《綜類》也曾在字頭下注明相對應的《說文》所見之字，但完全是依據李孝定《甲骨文字集釋》，現在看起來，其見解很多是過時了，判斷失當，不足爲據。

針對《綜類》的上述缺陷，姚先生組織吉林大學歷史系研究古文字的幾位中青年學者，集中力量，相當快地編出了這部能够反映甲骨學當前發展水平，並爲所收刻辭全部配上了釋文的《類纂》。

《類纂》所根據的甲骨著録書，是《甲骨文合集》（下文簡稱爲"合集"或"合"）以及在《合集》編成後陸續出版的《懷特氏等收藏甲骨文集》（下文簡稱爲"懷"）、《小屯南地甲骨》（下文簡稱爲"屯"）和

《英國所藏甲骨集》（下文簡稱爲“英”）。凡是《综類》未及收入的新資料，《類纂》大體上都已按所規定的體例加以收録。所以在《類纂》裏可以看到一些不見於《综類》的新字頭，如1144號“晝”、1162號“霸”（原字無“雨”頭）、2473號“截”、2513號“童”等。在二書共有的字條裏，《類纂》所收的辭條一般也都明顯多於《综類》。例如《综類》“律”字條只收一條卜辭（326・2。圓點前爲頁碼，後爲欄次），《類纂》“律”字條增收至5條（878下。數字表示頁碼，“上”或“下”表示上欄或下欄）。我們再來看看爲商史研究者所關心的“衆”的情況。《综類》把从二“人”和从三“人”的“衆”分成兩個字條。前者收辭8條，後者收辭61條（25・1——3。从三“人”的“衆”字條內，《鐵》233・1前後兩見，只算一條），再加上見於其他字條的“參照”辭條85條（參照辭條裏有3條重見於“衆”字條，“雉”字條的“雉衆”分條和“喪”字條的“喪衆”分條裏收有“雉人”和“喪人”之辭共7條，都除去不計），共爲154條。《類纂》“衆”字條收辭134條（69上——71上。《合》7重出，只算一條），加上參見的“喪衆”之辭25條（520上。“喪”字條“喪衆”分條裏有“喪人”之辭7條和誤入的“从喪”一辭，都除去不計）“奴衆”之辭7條（362下）、“雉衆”之辭36條（666上——677上。“衆”字條漏注參看“雉”字條），共爲204條，比《综録》多48條。這類例子比比皆是，爲節省篇幅不多舉了。總之，《類纂》收録的資料要比《综類》豐富得多。

《综類》在辨認文字、摹録刻辭等方面有很多錯誤。《综類》有誤之處，《類纂》多數不誤。姚孝遂先生早在發表於《古文字研究》第3輯的《〈殷墟卜辭综類〉簡評》裏，就已經指出了《综類》的不少錯誤。在《類纂》序言裏，他又指出了《综類》誤列和混同字頭的一些例子（6、7、9等頁。在這裏附帶説一件事。序言6頁提到的“父庚庸”合文，是嚴一萍首先認出來的，有關文章發表在《中國文字》第13册。我在發表於《古文字研究》第3輯的《甲骨文字考釋》一文的《甲骨文中重文和合文重複偏旁的省略》篇裏考釋了這一合文。由於當時尚未讀到嚴文，未能指出嚴氏首識此文之功，以致姚先生誤以爲是我“始發其覆”，這是我感到非常抱歉的）。下面我們再舉幾個《综類》有誤而《類纂》不誤的例子。

《综類》把《乙》2661（即《合》697正）的从“戈”从“虎”之字誤認爲从“壬”从“虎”，列爲字頭（225・3）。《類纂》没有這個錯誤的字頭，有關卜辭已收入“虢”字條（637上）。《综類》把《乙》1263（已拼入《丙》436，即《合》1821正）的兩條對貞卜辭中从“耳”从二“虫”之字的“虫”旁誤認作“口”旁，把那兩條卜辭收入了“聽”字條（114・2）。《類纂》已立此字爲687號字頭，那兩條卜辭的文字也比《综類》録得全。《综類》把《甲》3913（即《合》28011）一辭的从“”从“魚”之字誤拆成兩個字，把那條卜辭收入了“魚”字條（239・4）。《類纂》已立此字爲1826號字頭，那條卜辭的文字也比《综類》録得全（677下。那條卜辭末尾的“王受又又”四字，受地位限制轉到辭的另一側契刻，爲《综類》所忽略）。《综類》把《南》明684（即《合》31023）的从“門”从“攴”之字誤拆成兩個字（245・2“攴”字條、285・4“門”字條），《類纂》已立此字爲2177號字頭（793上。字條中並增收《屯》3004一例）。《综類》“日”字條“正日”分條所收《佚》826（即《合》26786）一例，本作“之日”，《综類》摹録有誤（160・4），《類纂》已把此例收入“日”字條“之日”分條（427上。但《類纂》没有摹釋此辭中的“卜”“出”“今”等殘字）。《综類》把見于《菁》3（即《合》137正）的、象人在有水之皿中的字，誤摹爲从“水”从“皿”的“益”字（385・4），《類纂》不誤（1024下）。《综類》“唯”字條所收《戩》42・12（即《合》4724）、《甲》3112（即《合》10514）、《前》8・5・3（即《合》21384）三例，實爲“鳴”字（231・3），《類纂》已把它們收入“鳴”字條（671下）。這類例子爲數很多，限于篇幅也不能多舉了。

在釋字方面，《類纂》吸收了大量新的研究成果，從總體上看，其水平要比僅以《甲骨文字集釋》爲依據的《综類》高得多。讀者只要把兩書稍加對比就可看出，這裏也不想多説了。但是有一點應該提一下。書中有些字的釋法，我還没有在别處見到過，應是编者的創見。其中有些意見是很好的，如釋2480號字頭爲“刃”便是一例。《甲骨文编》把《前》4・51・1（即《合》27866）的字釋爲“刀”，《甲骨文字集釋》從之。島邦男根據辭例看出這個字就是卜辭中常見的祭名的反寫（《综類》501・3字條中已收入《前》4・51・1一辭），没有接受《集釋》的意見，這是很正確的。但是島氏尚未認出甲骨文中真正的“刃”字。是在“刀”上加上象徵刃部的綫條而成的字，把它釋爲“刃”十分合理。

《類纂》對《综類》的部首作了一些調整，序言5至6頁對此有所説明。這些調整大都是合理的。在檢索方面，《類纂》除沿用《综類》的那些辦法外，還增加了“拼音檢索”，爲讀者提供了更多的方便。

《類纂》的定價相當高，但出版之後銷行得很快，説明它確是甲骨學者和其他需要使用殷墟甲骨刻辭的研究者所急需的一部工具書。

《類纂》的编纂工作很繁重，需要處理的問題極爲瑣細，成書時間又比較短促，不可避免地會有一些缺陷和可商榷之處。下面對取材範圍、釋字、刻辭的摹録釋讀、字頭的確定以及字頭和辭條的编排等方面的問題提出一些意見，供编者和讀者參考。錯誤和片面之處，希望能得到指正。

1.關於取材範圍　《综類》幾乎可以説是以编者當時所能搜集到的殷墟甲骨刻辭的全部著録書（包括著録甲骨的單篇文章）作爲取材範圍的，《類纂》的取材範圍則限於上面舉過的《合集》等四部書。《合集》的凡例規定，對已著録的殷墟甲骨刻辭，除“文句一般、常見而又殘缺過甚者”外，全部加以收録（參看《合集》第一册的“编輯凡例”）。《類纂》编者不再顧及那些在《合集》编成前出版的甲骨著録書，本來是無可非議的。但是《合集》收録甲骨間有遺漏，《類纂》過分依靠《合集》，必然影響所收資料的完整性。例如：《殷墟古器物圖録》13頁著録的武丁時代大卜骨，有“气令我吏步伐𢀛方”、“戊陟戊學求”等重要卜辭；《掇續》77是歷組卜辭中極爲罕見的用龜甲占卜之例，刻有祭“小母辛”（或釋“母辛”）的卜辭；《殷墟卜辭後编》2524、2546（即《南》明613、102）是歷組卜辭中有“小母庚”（或釋“母庚”）之稱的僅有的兩例，2524還有關於祭父乙和“又伐甲子犬延以羌”的卜辭；《存》1・1937有“叀酒”一辭，是已著録甲骨刻辭中用“　”字的唯一一例；這些甲骨《合集》都没有收入，《類纂》當然也就跟着失收了。《類纂》序言曾提到“”是“莫”的異體（10頁），可是在《類纂》裏卻根本查不到這個字。

《類纂》的“凡例”有如下兩條規定：

偽刻及習刻一律删除不録。

《合集》第13册摹本不予收録。

不録偽刻當然是對的，不録習刻和摹本則可商榷。

《合集》第13册所收摹本有很多跟《英》所收的拓本相重，還有一些跟《合集》本身所收的拓本相重，但是迄今尚無拓本發表的仍然相當多，有些從内容上看還很重要，一律不收顯然是不妥當的，拿前面提到過的關於“衆”的卜辭來説，《類纂》由于不收摹本，就少收了見於《合》39478、39479、39480（此片上殘文跟《合》80的殘文正好相同，但二者並非一版）、39481（即《寧》3・4°）、49011、41454和41455（即《南》上101）的七條卜辭。其中，《合》40911一辭貞“令並衆衛（或釋“防”）”是迄今所見的唯一一條説令衆“衛”的卜辭。《合》39481、41454比較重要。不收這些卜辭顯然是不合適的。

判斷一片殷墟甲骨或一條刻辭是不是習刻，並不一定很容易。例如：《合》32834是一片字體草率的歷組卜骨（由《鄴》3・39・3、3・39・11、3・43・1等綴合而成），骨上刻着好多條卜辭。除中間下方一條殘辭外，各辭之旁都可以看到卜兆，兆的上方都刻有序數“二”。《類纂》编者大概由于字體整飭的《合》32835跟它基本上同文，卜兆又同序數，就把它定成了習刻（爲编《類纂》作準備的《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》——下文簡稱“摹釋”——在所摹的《合》32834各辭下方，都没有寫釋文，只注了“習刻”二字），其刻辭全都摒而不録。其實《合》32834是正規卜骨而非習刻的可能性非常大。即使確是習刻，由於所刻之辭内容重要（有關於命大史、小史等人製舟等事的卜辭），並且有好幾條是《合》32835所没有的，棄而不録也十分可惜。爲研究者着想，習刻還是收入書中爲好，至少那些成辭的習刻是應該收録的。

由於存在上面提到的那些原因，有些《综類》已經收録的、有研究價值的刻辭，在《類纂》裏卻找不到（上面所説的那些《類纂》未收的卜辭，除關於“衆”的《合》39478、39479、38480、40911、41454五辭和《合》32834上的部分卜辭外，《综類》都已收入）。這恐怕不能認爲是合理的現象。

2.關於釋字　前面已經説過，《類纂》在釋字方面做得相當好。但是這方面也還有一些可商之處。有些地方似乎過於謹慎。如251號字頭一般都釋爲“疾”，1082號字頭一般都釋爲“棄”，似乎並無可疑之處，但《類纂》卻闕疑而不釋。有些地方似乎過於保守。如2624號字頭，于豪亮先生在70年代發表文章釋爲“引”字（《説“引”字》，《考古》1977年5期），近年來已經得到多數學者同意，新版《金文编》和新近出版的徐中舒先生主编的《甲骨文字典》都已採用，《類纂》則仍釋爲“弘”。又如3282號字頭，由於60年代在寶鷄發現的何尊上的“爾”字的寫法跟它很相似，近年來已有不少人把它釋作“爾”（參看《甲骨文字典》357頁），《類纂》仍釋爲“束”。

《類纂》的主编和编輯幾乎都是于省吾先生的學生，在釋字方面採用于先生的説法比較多一些。這是可以理解的。但偶爾也有應從于説而不從的情況。如2051號字頭是一個从“宀”从“聽”之初文的字，于先生釋爲“庭”（《甲骨文字釋林》83——87頁），爲很多學者所信從，《類纂》卻反而採用了釋“廳”之説。于先生明知此字从“聽”聲，卻不把它釋爲“廳”，無疑是有他的道理的。一般認爲“廳”的名稱來自“聽事”，其出現不會早於漢代（參看《辭源》“廳”字）。我們如果不能證明“廳”的名稱在商周時代就已出現，便没有理由否定釋“庭”之説。

《類纂》釋字偶爾還有自相矛盾之處。例如：1187號字頭已釋爲从“雨”“妻”聲之字（字見《説文》），33號字頭的寫法跟1187號字頭第二體下部相同，一般認爲是“妻”的異體，《類纂》卻闕疑而不釋。《類纂》把很多指犬人（管理商王田獵之事的官）的“犬”字改釋爲“虎”，這是不妥當的。而且同樣是關於比犬師（“師”爲犬人之名）之事的卜辭，《合》27915等五條的“犬”釋爲“虎”，收入“虎”字條（635下），《屯》2618一條則仍釋爲“犬”，收入“犬”字條（610上）；同樣是關於比成犬（“成”爲地名）之事的卜辭，《合》27915一條的“犬”釋爲“虎”，收入“虎”字條（636下），《合》27914等三條則仍釋爲“犬”，收入“犬”字條，並專爲它們立了“成犬”分條（606上）。這也是自相矛盾的。後面討論確定字頭方面的問題時，還要談到一些釋字錯誤的例子。

《類纂》有時在一個字頭下列了兩種相互排斥的隸釋。在這種情況下，通常辭條釋文是採用列在前面的那種隸釋方法的。如22號字頭下列“以”和“氏”兩種隸釋，辭條釋文一律釋“以”（22上——29下）。這説明編者是主張或傾向於前一種隸釋方法的。但是有時辭條釋文卻用後一種隸釋方法。如836號字頭下列“㚔”（疑是“𡴘”之誤，“羌”字條46上所列部分辭條釋文對此字是如此隸定的）和“往”兩種隸釋，字條中所收各辭的釋文，除末一例依原樣摹出外，都釋此字爲“往”（318下——319上）。有時辭條釋文甚至還雜用兩種隸釋方法。例如：3187號字頭下列“𣝗”和“橐”兩種隸釋，字條中所收各辭有的釋“𣝗”，有的釋“櫜”，還有少量辭條釋“束”（1232上），使人感到無所適從。字頭下最好不要列相互排斥的隸釋。如果要列，應分明主次，如22號字頭下的隸釋可作“以（一釋氏）”。辭條釋文採用的隸釋方法更應統一，這一點後面還將談到。

3.關於刻辭的摹録釋讀　殷墟甲骨多殘碎，發表的拓本又往往不够清晰，摹録釋讀甲骨刻辭的人，誰也免不了犯錯誤。《類纂》編者要處理數以萬計的辭條，而且作爲主要根據的《合集》又包含着很多翻印自其他著録書的資料，他們在摹録釋讀刻辭時出些差錯，是毫不足怪的，應該得到諒解。下面本着精益求精的精神，指出一些這方面的問題。《類纂》所收辭條的摹文和釋文都取自《摹釋》，改動不多。所以《類纂》摹録釋讀刻辭方面的問題大都是《摹釋》造成的。由于二書的編者完全相同，我們在指出問題時，一般就只提《類纂》而不提《摹釋》了。

《類纂》有時把有缺文的卜辭誤録成完整的卜辭。例如：609下所録《合》31097一辭作“戊子貞王衣入犬無災”，實際上“戊子”、“貞王”和“衣入”之後都有缺文。904上所録《合》28139一辭作“王其叀𢦏”，實際上“王”“叀”“𢦏”三字之前都有缺文，“𢦏”上當缺“亡”（無）字。編者由於不知有缺文，把“𢦏”當作地名，以致誤列此辭於“𢦏”字條的“𢦏方”分條之中。有時又把完整的卜辭誤録成有缺文的卜辭。如11上、1027下等處所録的《合》28030一辭作“弜益成……受匕……”，實際上此辭下方刻有區分相鄰卜辭的界線，顯然是一條並無缺文的卜辭。附帶説一下，《合》28030即《粹》1198，郭沫若把此辭末尾一字釋爲“人”，應該是正確的。編者大概是由于把“人”字手臂形上的一道泐痕當作了筆畫而把它釋作“匕”的。《類纂》偶爾還有未將辭條的文字録全的情況。如《合》5708正面一辭，《類纂》多次加以引録。除485下、1065上所録爲全文外，213上、482下、747上、874下、875上、1115下、1201下等處所録都没有辭末“至于”以下十二字，875上在辭的末尾加了省略號，其他各處都没有加。加省略號也不解決問題，因爲讀者會認爲卜辭原來就殘缺。

《類纂》引録行款比較特殊的刻辭時，間有失誤。例如：《合》35673有如下一條刻辭：“乙丑，寢弜易[illegible]在寞，遣祖乙翌日，在八月。”原辭刻至“遣”字之後，受地位限制，轉到辭的上方再刻“祖乙”以下七字。《類纂》把此辭録爲“……日在八月乙丑寢……祖乙翌弜易……在寞……”（758上、773上、1016下、1297上），文不成義。《合》30757（即《甲》3915）有如下一辭：“甲子卜狄貞：王其杸（此字不識，姑從董作賓隸定）舟，叀丁。”此辭本是由右向左行的，受地位限制，“舟叀丁”三字轉到辭的右方契刻。《合》30757是侯家莊所出大龜七版之一，董作賓在《安陽侯家莊出土之甲骨文字》一文中，對上引卜辭已作了正確的釋讀（《董作賓先生全集》2·738頁）。編者没有注意董文，把此辭分成兩截。前截末一字在拓本上很不清楚，被誤摹成“亲”，列爲1455號字頭（521下）。後半截被讀作“叀丁舟”，同片上跟此辭有對貞關係的一條卜辭的殘文被讀作“叀乙舟”，都被當成了完整的卜辭（1214上）。

把兩條卜辭誤合成一條的情況，偶爾也能看到。2659號“益”字條所録的《合》15826“貞勿小益二牛用”，就是一個例子（1027下　2659號的字形像以一個器皿中的液體注入另一器皿，是否“益”字有待研究，今姑從《類纂》釋作“益”）。《合》15826本有三條卜辭　中間一辭是“貞勿益二牛”，刻作兩行，“貞勿”在左，“益二牛”在右。下方緊挨着這條卜辭，有一條只有三個字的卜辭，也刻作兩行。左邊一行是未刻横畫、斜畫的兩個字，上一字只刻了兩道相距頗遠的平行的豎畫，下一字只刻了一道居中的豎畫（也許下面還有筆畫，由于甲骨殘缺無法確定）。右邊一行只有一個“用”字。《類纂》把下一辭左行的三道豎畫看作“小”字，把上下兩辭當作一條卜辭來讀，所以就摹釋成“貞勿小益二牛用”了（《合》15826即《明義士收藏甲骨》1113，請參閲許進雄釋文，見《明義士收藏甲骨釋文篇》86頁）。

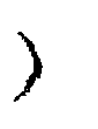
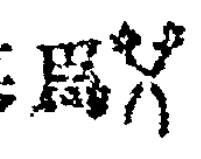
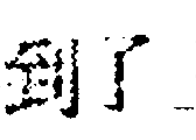
《類纂》有時摹脱了刻辭中的某個字或某個字的一部分。例如：《合》21037（即《乙》64）有如下一辭：“戊戌卜貞：丁疾（字形屬上文講釋字問題時提到過的251號字頭）目，不喪明。”《類纂》摹脱了“疾”字（205下、440下、520下。《甲骨文編》330頁“疾”字條收有《乙》64的“疾”字）。《合》5597一辭中有“小衆人臣”這個很重要的官職名，《類纂》摹脱了“小”字（71上、228下）。《合》13135的一條殘辭有一個在“亦”上加三點而成的字，疑是“小亦（夜）”合文。這個“小”也被摹脱了（93下）。即使它不是“小亦”合文，摹録時也不應該丟掉那三點。《合》19983“乙未卜”一辭、《合》22258“辛卯卜”一辭、《合》19978“……亥（《類纂》誤摹作“寅”）乎……”一辭和《懷》1566“庚戌卜”一辭，都有在“女”形兩側加小點而成的“小母”合文（關於這種“小母”合文參看《甲骨文字典》序言3頁）。它們的小點也都被摹脱了　分別見170上、173下、658下、1468上。《合》22258的“女”形也被摹誤）。見於《合》37504（即《前》2·7·5）的2454號字頭，上从“我”，下本从“亐”，後者横畫上的兩點也被摹脱（955下。《綜類》356·3摹此字不誤，其字條中還收有《續》3·27·5——即《合》36754——一例，爲《類纂》所漏收）。《合》9472正面所刻的一對對貞卜辭中有𤰔字，《類纂》忽略了它的上端，把它摹成了“田”字（見82下“大”字條“大田”分條。張政烺先生在《卜辭裒田及其相關諸問題》一文中釋上引之字爲“畎”，見《考古學報》1973年1期102頁。依張説，此字當列爲獨立的字頭。我懷疑此字是“甫”的異體，詳拙文《甲骨文中所見的商代農業》，見《農史研究》第8集33——34頁）。卜辭中常以“既”與“迺”（乃）前後相呼應。《合》32714（即《南》明629）和32624（即《甲》608）都有一條先言“既”後言“迺”的卜辭。由於兩個“既”字的右旁的上端在《合集》中都印得不够清楚，《類纂》把它們都摹成了“即”（138下、529上。《綜類》51·4摹録了上面所説的那兩條卜辭，“既”皆不誤，但有其他錯誤）。《合》28074（即《掇》2·29）和《屯》658也都有一條先言“既”後言“迺”的卜辭。二辭皆殘，兩個“既”字正好都缺右旁上端，《類纂》把它們也都摹釋爲“即”（138下、139上。《綜類》50·4摹録前一辭、《屯》的《釋文》釋後一辭的時候，也都誤以此字爲“即”）。

《類纂》有時把一個字誤拆成兩個字。例如：五期卜辭裏有一個地名，寫作上从“即”下从“燎”，有時還在左邊加上“水”旁（參看《綜類》205·4、《甲骨文字集釋》1987、3385頁。王國維釋爲“楖”）。這個地名不加“水”旁的寫法見《合》36844（即《前》2·17·4）和36989（即《掇續》50）。在《類纂》裏，前一例被拆成“即告”二字（138下“告”是“燎”的誤摹），後一例被拆成“即燎”二字（139上），因此這個本來應該列爲字頭的字就消失了（加“水”旁的那個字，《類纂》列爲1528號字頭）。《合》32461反面（即“寧”1·46）有“……子臭歲叀牝”一辭，子臭當是被祭者名。《類纂》把“臭”拆成“自犬”二字，“子”也被當作干支字而釋作“巳”（609下。《綜類》117·2摹録此辭不誤）。《合》26898和《屯》880都有一個从“衆”从“春”的字，這個字也被誤拆成兩個字。在摹録《合》26898的三條卜辭時，這個字的兩個偏旁分別摹入了前後兩行，搞亂了這幾條卜辭原來的字序（71上、1036上。後者未收《合》26898。《合》26898即《鄴》3·43·6+3·46·7，《綜類》25·3等處摹録此版卜辭時犯了同樣的錯誤）。由於這個字被拆開，還失去了一個本應列出的字頭。《合》27973有一個本應歸屬2659號字頭的字（《類纂》釋“益”，詳上文）。它的右側的某些筆畫由于拓印得不是十分清楚而被忽略，其餘部分被誤拆成兩個字，釋爲“下盟”（397上、1023上。《合》27973即《明義士收藏甲骨》2113，請參閲許進雄釋文）。

《類纂》把上面所説的《合》27973那條卜辭摹釋爲“其樂羌方其下盟人羌方……”。但原辭“其樂羌方”後並無“其”字。這是摹録時衍字的一個例子。

《類纂》偶有誤合二字爲一字的情況。如《合》42（即《存》2·598）的“白（伯）𦆖”二字，被誤摹成左旁爲三角形和倒“矢”形、右旁爲“尹”的一個字，並且列爲973號字頭（359下。《存》2·598摹本亦誤合此二字爲一字）。把一個字的一部分跟相鄰的一個字誤合在一起的情況，有時也能看到。如《合》20838（即《菁》10·7）的“方才（在）甫”被誤摹成“方至田”，“甫”的上端跟其上的“才”被合在一起認成“至”字（802上）。2556號“效”字條把《合》3096“寅尹”合文中的“尹”誤摹爲“支”，因此把這一合文誤釋爲“效”（982上。“寅尹”合文列爲2554號字頭，見980上。所謂“寅尹”其實是“黄尹”的另一種寫法，詳拙文《説卜辭的焚巫尪與作土龍》，載胡厚宣先生主編的《甲骨

文與殷商史》）。這跟誤合二字爲一字的情況相似。同一字條又把《合》3096“黄尹”合文中的“尹”誤摹爲“攴”，把它跟左邊一行帶有泐痕的“人”字合在一起摹釋爲“效”字（982上）。這跟把一個字的一部分跟相鄰的字誤合在一起的情況相似。

下面再舉一些其他情況的誤摹現象。2659號“益”字條録有《合》8253一辭，辭中“貞”字後的一個不可識的殘字的上部被誤摹成“卜”字（1027下）。38號字條把《合》24233（即《京》3328）的字誤摹爲，並且列爲38號字頭的一種形體（31上。《綜類》11·1所摹不誤）。2316號“伲”字條把《合》5708正（即《存》1·66）的“伲”字的“尼”旁下部誤摹成方塊形（875上。方塊形的底邊實爲泐痕）。《續甲骨文編》和《甲骨文字集釋》對這片甲骨上的這個字也是這樣摹寫的，《綜類》324·1所摹則不誤。姚孝遂先生在《〈殷墟卜辭綜類〉簡評》中曾指出過這一點。《類纂》重複《續甲骨文編》等的錯誤，是有點不應該的。1946號字條所録《合》19529正（即《乙》3596）一例，其下部原作“人”形，《類纂》誤摹作“卩”形（716下）。如認爲從“人”形者是從“卩”形的1946號的異體而把它收入此字條，當然是可以的。但不能把“人”形摹成“卩”形，而且應該把這個異體列爲1946號字頭的一種形體（《綜類》將从“人”形者與从“卩”形者分爲兩個字頭，前者見12·3）。2558號“侯”字條把《合》3332（即《乙》4645）一辭摹釋爲“貞呼比壬侯”，但在“壬”字旁打了個問號，表示所摹可能不確（985上）。這個字確實摹錯了。這其實是一個上从倒“戈”下从“虎”頭的字，就是前面提到過的从“戈”从“虎”之字的簡寫（《綜類》367·1把這個字摹成“𢦏”字，亦誤）。上引那條卜辭跟本書637上“虩”字條所録《合》697正面一辭是同文卜辭。409號字頭只見於《合》14238，本作，就是949號“毄”字的異體，其主要特點是把“殳”旁横過來挪到了上方。“殳”頭作方形，跟949號字條所録《合》201正面一例（357下）相同。《類纂》把這個字摹成兩個偏旁左右並列的字，當作一個獨立的字頭收在“卩”部裏（167上），是不妥當的。414號字頭“兇”也有問題。“兇”字條只收《合》27279一條卜辭。此辭本應釋爲：“祖丁舌，又𢀛，王受祐”。“又𢀛”之語卜辭屢見，本書1096下收了十多例。由於《合》27279“𢀛”字的下部有些模糊，《類纂》把它摹成了“兇”字（167上）。《合》37714（即《林》2·26·12）“湄日不遘雨”的“湄”字，其右旁所从的“目”形寫得比較怪。《類纂》把這個字的右旁誤摹成上从“辰”下从“口”，把這個字列爲1355號字頭（499上。《綜類》105·3録《林》2·26·12不誤）。《合》7928反（即《前》6·13·2）一辭中的地名“宫”，所从的方塊形的横畫左端稍有些出頭。《類纂》把它誤摹成从“宀”从“多”之字，列爲2098號字頭（772上。《綜類》269·4把《前》6·13·2一辭收在“宫”字條内，是正確的）。《合》27816一辭中“舟”上一字應屬1407號字頭（我們在上文中曾從董作賓把這種形體的字隸定爲“校”），由于它的像張開兩臂形的右旁寫得比較草率，《類纂》把它摹釋成从“犬”从“未”之字，列爲1596號字頭（661下）。上面提到的幾個由于誤摹而産生的字頭，都是應該取消的。

前面曾經提到過，有些應該列爲字頭的字，由于被誤摹而未能列爲字頭。有個別這樣的字，是出現在只見於《摹釋》而不見於《類纂》的殘辭裏的。如《合》31254有一個像以手持耒的字，大概就是“耒”字（劉釗同志認爲是“楷”的簡體，見其提交給紀念甲骨文發現90周年學術討論會的《甲骨文字考釋十篇》）。此字本應列爲字頭，由於《摹釋》把它誤摹爲“先”字，《類纂》未能收入。

《類纂》有時没有把《綜類》已摹出的字摹出來。例如：在上面提到過的2659號“益”字條所録的《合》8253（即《前》6·43·1）一辭裏，一方面“貞”字後的殘字被誤認成“卜”字，另一方面“益”字上那個《綜類》（384·4）已經摹出的“于”字却没有摹出來（1027下）。《合》23150（即《鄴》2·40·1）一辭的末三字“今虘酒”，《綜類》引録時都已摹出（164·2），《類纂》引録時却没有摹出“虘”字（1424下）。

《類纂》中的誤摹、缺摹現象，顯然跟摹録時所根據的往往不是原著録書所印的拓本或照片，而是《合集》中的翻印本有關；此外跟没有充分利用《綜類》也有關係。

評《殷墟甲骨刻辭類纂》

（下）

裘錫圭

4.關於字頭的確定以及字頭和辭條的編排　《類纂》序言指出，“將某些同一文字的不同形體歸併在統一的字頭之下。同時，將形體相近似，但肯定不是同一的文字，分離開來”，是編者的重要任務（7頁）。我們所説的“字頭的確定”就是指這件事而言的。《類纂》編者在這件事上下了很大工夫，取得了相當不錯的成績。但是正如序言所指出的，“要想分合得準確而恰當，難度是相當大的”（7頁）。恐怕誰也無法把這項工作做得很完美。下面在這方面提一些意見。

《類纂》中有些分立的字頭似應合併。例如：1498號字頭從辭例看跟1858號字頭“𢻱”（一般釋“蚑”）應該是一個字。其左旁是周圍加點的、倒寫的“虫”，只不過像虫頭的筆畫寫得偏上了一些。《類纂》把它當作未識字收在“禾”部内，是不妥當的（529上。此字條所收的後三例，《綜類》194·1從《甲骨文字集釋》釋爲“𥝌”，亦誤）。這兩個字頭宜合併。2689號字頭從辭例看跟621號字頭應該是一字異體，宜合併。《綜類》就是這樣處理的（《綜類》105·4所引的《前》6·5·6，即《類纂》1035下2689號字條所引的《合》2628）。2140號字頭從辭例看跟2141號字頭應該是一個字，宜合併。《綜類》就是這樣處理的（278下）。303號字頭跟302號字頭第一體不但形近，而且見於同文卜辭的同一位置上（116上302號字條所引的《合》33190，跟303號字條所引的33189同文），前者比302號字頭第二體更有資格跟後者合併爲一個字頭。407號字頭跟361號字頭第一體不但形近，而且都用作北方風名（見167上407號字條所引的《合》14295、160上361號字條所引的《合》14294）。前者比361號字頭的第二、第三體更有資格跟後者合併爲一個字頭。《類纂》把它們分成兩個字頭，中隔四十餘號，是不合適的。《類纂》根據字形从三點或四點分立“小”“少”兩個字頭，恐怕也有問題。“小臣”“小甲”等詞的“小”既可寫作三點，也可寫作四點。這是大家都知道的。這兩種寫法之間似乎並不存在什麽重要區別。凡《類纂》釋爲“少”的字，改釋爲“小”都講得通。《類纂》把“雨小”一律釋爲“雨小”（1298上），把“雨少”一律釋爲“雨少”（1299）。其實它們所表示的顯然是同樣的詞語，强加區别是不合適的。

從《類纂》的凡例和序言來看，凡一字的異體一般都應該歸併在一個字頭下，只給一個編號。可是一方面有些差别很大的異體的確按這個原則歸併成了一個字頭；另一方面卻爲有些差異並不那麽大的異體分别立了編號不同的字頭，如“毓”分爲86、87、461三號（544號很可能也是“毓”的異體），“天”分爲198、201兩號，“妹”分爲437、462兩號，“妻”分爲439、440兩號，“毌”分爲2406、2407兩號等，不勝枚舉。這是不够合理的。有時候，同一個字的同一種形體也竟然有兩個字頭。例如：“逆”字从“彳”的一體既跟“逆”字的其他形體一起列爲270號字頭（113），又單獨列爲2328號字頭（876上）。“宎”字有248號（111上）和2119號（773上）兩個字頭，形體並無區别。附帶説一下，《合》34069（即《京》4345）的“宎”字由於“夭”旁被誤摹成不可識之字，另列爲2109號字頭（772上。《綜類》277·3亦誤摹此字）。“宎”字从“𡗜”的異體被摹釋爲从“宀”从“吴”之字，列爲2120號字頭（773上。《甲骨文編》已誤以此字爲从“吴”，見324頁）。此外，“宎”還有一個从“宀”从“大”的譌體，見於《合》31907和36389，《類纂》既没有把它收入“宎”字條，也没有把它單列爲字頭（《合》36389一辭，189上“訊”字條已摹録；《合》31907一辭，《類纂》未收。以上所説的“宎”字的各種異體，都是陳夢家釋出來的，見《殷虚卜辭綜述》471——472頁）。所以如果想通過《類纂》去研究“宎”字，那是會失望的。

爲一個字立兩個或更多的字頭的現象，大概有很多是由於疏忽而造成的。有時編者在發現問題後採取了補救措施。例如：“宔”字分見於758—759和771下兩處，“字形總表”給的字頭編號，兩處都是2043。从“女”从“卩”之字有494號、564號兩個字頭，“字形總表”在每個字頭下都用括號注出另一個字頭的編號。不過對這類現象，多數没有採取補救措施。此外，那些把一個字的異體列爲前後相次的兩個字頭的情況，如上面舉過的“妻”、“毌”等例，似乎不會是由於疏忽而造成的，不知編者有何用意。應該承認，有時候兩個或更多的字頭雖然已被釋成同一個字，但是實際上還存在着並非一字的可能性。對這些字頭不加合併並給予不同的編號是合理的，不過最好對那種並無充分把握的隸釋加上疑問號一類標誌。

同一個字的辭條被分編在不同的字頭下，而且有時還離得很遠，這對於讀者是很不方便的。好在書末有筆畫和拼音兩種檢索表，這方面的問題一般可以通過它們得到解決。

《類纂》也有把某些形體歸併爲一個字頭而根據不足的情況。例如：604號字頭列出四種形體，最後一體的字形跟其他各體很不一樣，而且只見於《合》28041的一條殘辭（206下），用法並不清楚，恐怕是應該爲它另立字頭的。2924號字頭"中"的第二體作"中"。序言已經指出甲骨文"史"字有省"又"作"中"之例（8頁）。"中"字條所收的用"中"字之辭，從文義上看没有一條能够肯定是用它表示"中"的意思的。相反，如《合》10035的"朕中"（1123下），顯然可以釋作"朕史（事）"。所以"中"恐怕還是從"中"這個字頭分出去，跟"史"合爲一個字頭，或是獨立成爲一個字頭爲好。

《類纂》編者原則上不主張把並非一字異體但有通用關係的字歸併爲一個字頭。序言説："有些簡化字和繁化字，形體不同，也應該同字。……至於有些看來是簡化字而實際是通假字者，則不能視爲同字。如卬——午是通假字，不是簡化字。"（10頁）可是實際上，假借爲"禦"的"午"字卻跟"卬""御"等字合併成了351號字頭（143下——155下）。226號字頭包括"舞"字和从"雨"从"舞"之字（97下——100上。"舞"其實應該釋"無"，"無"是"舞"的初文），這兩個字恐怕也不宜看作一字的異體而應該看作通用字。2833號字頭"剛"包括一個从"牛"从"剛"的字（1099下——1100下），這個字恐怕也不能看作"剛"的異體。在卜辭裏，从"牛"从"剛"之字幾乎都用作地名，它是否跟"剛"有通用關係都難以斷定。

在《類纂》裏還能看到由於認錯了字，而在爲某個字頭設立的字條裏收録了不應屬於這個字頭的字例的現象。前面講釋字問題時曾指出，《類纂》把某些"犬"字誤釋爲"虎"，把用這些"犬"字的卜辭收入了"虎"字條，就是一個例子。下面再舉一些這方面的例子。642號字頭是从"网"从"目"之字，但是字條内所收的《合》10207正面一例（225上），雖然下端稍有殘缺，仍可看出是一個从"网"从"疋"之字，應改屬2842號字條；同條所收的《合》10731至10733三例（225上），"网"下所从顯非"目"字，疑是"虎"頭，應另立字頭（2839號从"网"从"角"之字疑本不从"角"，可能就是這個字。參看《綜類》409·3）。1956號"袁"字條所收的《合》33033至34722九例（879），都不从"又"而从人或亻，應改屬1957號字條。2648號字頭像人在有水之皿中，但是字條内所收的《合》22950、23046、23502和25162四例都不从"人"而从"必"（1025上。我們所説的"必"，《類纂》一般釋作"弋"），應改屬2664號字條。1168號"虎"字條所收的《合》11003一例（636上），"虎"頭上有"屮"，應改屬1671號字條。336號"即"字條所收的《屯》917二例作既（139上），"卩"旁背對皀旁，表示已經吃完飯。《屯》的釋文把它們釋爲"既"（907頁），十分正確。《屯》917"辛巳卜"一辭説"于既湔酒乇"，"既"與"酒"正相呼應，也可證釋"既"是正確的（《屯》未釋"酒"字）。所以《屯》917二例應改屬338號"既"字條。719號"曰"字條所收的《合》36481正（即小臣牆刻辭）一例作"甘"字形（247上），應改屬718號"甘"字條。如認爲"曰"字也有這種寫法，就應該把它列爲"曰"這個字頭的一體。附帶説一下，《類纂》没有把應列出的字頭異體列出來的情況時有所見。如79號"衆"字條收入了从二"人"的"衆"，可是並没有把它作爲字頭異體列出來。

現在我們來談字頭編排方面的問題。即使字頭的確定和部首的設立都是正確的，怎樣把字頭合理地分歸各部並排列得有條理，也還是需要反覆考慮的問題。

在歸部方面，《綜類》的有些不合理的做法爲《類纂》所沿襲。例如：7號字頭顯然是从"弓"的，卻歸入了"人"部。从"网"之字一般都歸入"网"部，但是从"网"从"目"的642號字頭卻歸入了"目"部。2487號"昏"字本可順理成章地歸入"日"部，卻歸入了"刀"部。我們實在看不出"昏"的上部跟"刀"有什麽密切關係。有些字的歸部，《類纂》不同於《綜類》，但也並不是都比《綜類》合理。例如：3474號字頭顯然像一種人形，《綜類》歸入"人"部，《類纂》卻歸入"其他"部。從字形上看，36號與32號字頭的關係，跟760號與34號字頭的關係相類。這幾個字頭《綜類》都歸入"人"部，《類纂》則把其中的760號字頭歸入了"口"部。如果這樣做是合理的話，36號字頭便也應該歸入"口"部。《綜類》把"交""黄"等字歸入"矢"部而不歸入"大"部，這是不合理的。《類纂》移"交"字入"大"部是對的（一般所謂"交"字其實多應釋爲"黄"，參看上文已引過的拙文《説卜辭的焚巫尪與作土龍》），可是"黄""效"等字仍留在"矢"部，不免自相矛盾。

《類纂》對用作親屬稱謂但不是加在天干廟號上的"且""匕""父""母""兄""子"諸字的歸部，處理得有些亂。這種"且"字"父"字全都收在"先王先妣稱謂"部分的"且"字條（1433下——1434上）和"父母兄子稱謂"部分的"父"字條裏（1464上——1465上）。由于"且"和"父"没有明確的非親屬稱謂的用法，在"且"部裏反而没有"且"這個字頭，在"又"部裏也没有"父"這個字頭。上面所説的那種"匕"字大部分收在"先王先妣稱謂"部分的"妣"字條裏（1447下——1448下），但也有不少收在"人"部的"匕"字條裏（10下——11下，見"匕"字條"其他"分條）。上面所説的那種"母"字和"子"字全都收在"女"部的"女"字條、"母"字條（167下——172下）和"子"部的"子"字條裏（196下——203下）。上面所説的那種"兄"字絶大部分收在"父母兄子稱謂"部分的"兄"字條裏（1472下——1473上），可是"人"部另有只收了三條卜辭的"兄"字條，其中兩條是意義不明的殘辭，完整的一條也是把"兄"用作親屬稱謂的（35上）。"多"字條説"多兄"參看35和112頁"兄"字條（1271上。筆畫檢索表裏"兄"也有35和112兩個頁碼）。實際上112頁根本没有"兄"字條，35頁的"兄"字條也没有"多兄"之辭，這種卜辭都收在"父母兄子稱謂"部分的"兄"字條裏。筆畫和拼音兩個檢索表基本上不管收在"先王先妣稱謂"和"父母兄子稱謂"部分裏的字（拼音檢索表收了個"祖"字）。這更增加了讀者尋找跟上述那些字有關的辭條的麻煩。《類纂》對上述那些字的處理辦法，大體上是沿襲《綜類》的。在區分"人""匕"方面，《類纂》有改進，但有的地方似乎比《綜類》更亂。

排列同部字頭的原則，應該是形體越相近，位置也越相近。在這方面，《類纂》也有可以改進之處。如21號似可移至15號之後（《綜類》是這樣排的），39號似可移至32號之後（《綜類》是這樣排的），286號似可移至226號之後，421號似可移至363號之後。爲節省篇幅不多舉例了。

下面談辭條編排方面的問題。

編入各字條裏的辭條是否齊全而無遺漏，大概是使用《類纂》的人所最關心的一件事。《類纂》凡例規定虚詞和常見辭例一般加以節録，但是不在節録之列的字條往往也没有把應該編入的辭條收全。在由于取材範圍的限制和誤釋誤摹等原因而引起的漏收現象之外，還存在着一些完全由于疏忽而造成的漏收現象。例如：前面講辭條的文字没有録全的問題時所舉的《合》5708正（即《存》1·66）一辭提到了兩個"侯"，但是"侯"字條卻没有收入這條卜辭（《綜類》366·2"侯"字條已收入）。已收入"印"字"犬"字等條的《合》21053（即《乙》383）一辭，有一個屬251號字頭（一般釋"疾"）的字（159下、608下），可是251號字條卻没有收入這條卜辭（《綜類》40·2"疾"字條已收入此辭，但所録有脱字，字序也有誤。《類纂》"印"字"犬"字等條録此辭不誤）。已收入"去"字和"束"字條的《合》5129（即《前》1·52·5）一辭有地名"甘"（91上、997上），可是"甘"字條卻没有收入這條卜辭（《綜類》118·1"甘"字條已收入）。《屯》3015有"彈益（字形屬2660號字頭，姑從《類纂》釋"益"），其每"一辭，這條卜辭不但"每"字條没有收，就連2660號"益"字條也没有收。前面講摹脱筆畫的問題時，曾附帶指出2454號字條漏收《合》36754一辭，也是一個例子。這類由於疏忽而造成漏收的例子恐怕不會太少。

誤釋誤摹同時造成漏收辭條和誤收辭條的現象。例如由於有些卜辭裏的"犬"字被誤釋爲"虎"，一方面"犬"字條漏收了這些卜辭，另一方面"虎"字條又誤收了這些卜辭。請參閲上文有關部分。

爲了節省書的篇幅，《綜類》和《類纂》都採取了有關字條間辭條參見的辦法。這是很有必要的。我們覺得《類纂》利用這種辦法還不够充分。例如：殷墟卜辭中屢見"去束"之語。提到"去束"的卜辭，《類纂》的"去"字條和"束"字條都同樣加以摹録（91、997上）。其實只要其中一個字條加以摹録，另一字條注明參見，就可以了。《綜類》基本上是這樣做的（372·3）。又如《綜類》"才"字條列了160個參見項（498·1——4），《類纂》"才"字條卻連一項也没有列（1299下）。

《綜類》爲了使字條内所收的辭條以類相從，眉目清楚，採取了立分條的辦法，即把字條内在内容上關係密切（通常是共有某一詞語）的辭條排在一起加上標題。《類纂》也襲用了這一辦法，但是立分條的標準似欠明確。例如一方面在"大"字條裏立了僅收一條卜辭的"大行""大商""大匚""大狐"等分條（82下），另一方面如"雉"字條有提到"雉衆"的卜辭36條，卻仍然没有爲它們立分條（666上——667上。"衆"字條忘了説"雉衆"參見"雉"字條，可能與此有關。《綜類》236·1—2有"雉衆"分條）。又如"母"字、"父"字和"兄"字條内分别有"多母"、"多父"和"多兄"分條（172上、1464上、1472下）；"妣"字條有19條提到"多妣"的卜辭（1447下——1448下。"人"部"匕"字條11下還有兩條卜辭提到"多妣"），數量比"多母""多父""多兄"各分條所收的卜辭都要多，可是卻没有立"多妣"分條（《綜類》544·3有"多妣"分條）。總的來看，《類纂》中應立分條而未立的情況，比不應立而立的情況常見得多。《類纂》一般按著録書中甲骨片的順序號來編排各字條中所收的辭條。按照這種辦法，通常不可能把共有某一詞語的辭條都集中在一起。唯一的補救辦法就是多立分條。

對於分條來説也有漏收和誤收辭條的問題。例如："犬"字條有"犬侯"分條，可是《合》6813提到"犬侯"的一條卜辭卻没有收入這一分條而收入了"其他"分條（608上）。"衆"字條有"衆田"分條，收了"大

令衆人曰劦田”等卜辭（70上），可是《合》9“曰衆人……尊田”一辭却没有收入這一分條而收入了“其他”分條（70下）。“虎”字條“虎師”分條收了七條卜辭，後五辭都有“虎師”這一人名（實當釋“犬師”，詳上文），前兩辭的“師”字位於“虎”字之前，是貞人名，所卜問之事爲“虎”是否“㞢”，顯然應該收入後面的“虎㞢”分條（635下。列於“虎師”分條之首的《合》21386一辭，似應讀爲“癸亥卜，師：令今月虎允𡆥”，《類纂》的讀法疑有誤）。前面曾經說過，“喪”字條的“喪衆”分條中誤收了《合》2 009“从喪”一辭。這個分條中還有七條“喪人”之辭，其實是應該爲它們另立“喪人”分條的。附帶說一下，“人”字條有“喪人”分條（3上），只收六條卜辭，缺了“喪衆”條所收的《合》32286“其喪人”一辭。如果在“喪”字條内立“喪人”分條，“人”字條取消“喪人”分條而注明參看“喪”字條，不但能節省些篇幅，而且還能避免《合》32286一辭的漏收。

總之，在字頭和辭條的編排方面，改進的餘地還是很大的。

5. 其他問題　在《類纂》裏，辭條的釋文跟字頭的隸釋不符合以及不同辭條的釋文對同一個字的釋法不統一的現象很常見。例如：1589號字頭釋爲“𡉚”，讀爲“遡”；可是字條中所收的八條卜辭的釋文，只有兩條把這個字釋爲“𢪋”，其他各條有釋爲“往”或“狂”的，也有隸定爲“𨁋”的（661上）。3194號字頭下列“𥹸”“𦃇”兩種隸定方法，可是字條中所收辭條的釋文卻有好幾條把這個字釋爲“敉”，大多數釋文隸定爲“𦃇”，有一條加以臨摹（但誤“尹”爲“支”），隸定爲“𥹸”的一條也没有（1233上）。2554號字頭釋爲“寅尹”合文，可是字條中所收的兩條卜辭的釋文卻都把這個合文釋作“效”字（980上）。33號字頭没有隸釋，可是字條中所收辭條的釋文卻有兩條把這個字釋爲“妻”（31下）。上文在講字頭隸釋問題時曾提到，3187號字條内所收辭條的釋文，對字頭有“𣝗”“橐”“束”三種釋法（1232上），也是這方面的一個例子。

前面已經說過，《類纂》所收辭條的摹文和釋文都取自《摹釋》。《摹釋》的釋文是由好幾位編輯分頭做的，對同一個字往往有不同的處理辦法。由於編定《類纂》時未能全面地加以校改，加以統一，就造成了上述那種現象。

有時，出現在不同字條内的同一條卜辭的釋文，彼此也有出入。如《合》17230正面一辭的末二字，112下、966上都釋作“宊刖”，904上則釋作“家削”。作“家削”的是《摹釋》中的釋文的原樣，是錯誤的。112下、966上所録釋文經過校改，但996上所録釋文卻漏了過去，因此就出現了矛盾。

釋文跟摹文不符合的情況也能看到。例如：見於170上、960上和999下的《合》19983一辭，摹文的序辭本應釋爲“乙未卜”，所録釋文卻作“丙申卜”。1214上收録的《合》30757的兩條卜辭，摹文本應釋爲“叀丁舟”“叀乙舟”，所録釋文卻作“貞丁舟”“貞乙舟”。

同一字條中所收的辭條，偶有相重者。例如：“少”字條所收的《合》20398的五條卜辭，跟《屯》4513＋4518的五條卜辭相重（1299上）。二者是同一版卜甲的拓本。“衆”字條“令衆”分條中，《合》7一辭重出，而且相重的兩條辭是緊挨着的（69下）。“喪”字條中，《合》29009“从喪”一辭既收在“地名”分條内（517下），又誤收在“喪衆”分條内（520上）。“田”字條中，《屯》1460“……王叀多田……”一辭既收在“多田”分條内（802下），又收在“王田”分條内（810上）。如認爲此辭中的“田”是職名，就只能把它收入“多田”分條。如認爲此辭中的“田”指田狩，就只能把它收入“王田”分條。同時收入兩個分條是不合適的。

《類纂》甄別僞刻很嚴格，但也有極個別的失誤。1460號“李”字條只收了《英》1013一辭（521下）。《英》1013是一片所刻文字真僞相雜的甲骨，“李”字條所收的是此片左部的僞刻。所以“李”這個字頭應該取消。

最後，把我們在“字形總表”裏發現的幾處抄寫上的問題，在這裏附帶說一下。4頁7欄584號字頭第二行的隸釋“俘”應移至第一行的隸釋“孚”之下。5頁1欄622號字頭的隸釋，其上端不應作眉形而應作“䒑”形（見於正文219下的此字的隸釋也有這個問題）。8頁5欄1143號字頭的隸釋“督”的下部應改爲“日”（見於正文433上的此字的隸釋也有這個問題）。14頁3欄1978、1979二字頭的隸釋應互易。

《類纂》無疑會成爲今後一個時期裏殷墟甲骨刻辭研究方面最重要的一部工具書。從上面所說的情況來看，我們如果能把《類纂》跟《綜類》對照着使用，並隨時注意跟原始資料進行核對，一定能收到較好的效果。

1989年12月8日夜

（原載《書品》第1、2期，中華書局，1991年）

读《法国所藏甲骨录》

陈炜湛

1956年9月，饶宗颐先生游巴黎，得观巴黎大学中国学院、策努斯奇博物院、归默博物院所藏甲骨文，剔去伪品，摹录以归，著为«巴黎所见甲骨录»（以下简称«巴黎»），于同年12月在香港出版。海内学术界遂知法国亦藏有我殷虚遗物。但饶氏所录仅有26片，且系摹本，读者尚不能了解法国藏甲全貌，不能不说是一个遗憾。

1984年8月，在中国古文字研究会第五届年会上，胡厚宣先生发表了题为«八十五年来甲骨文材料之再统计»一文，全面记述海内外公私藏家收藏甲骨文的情况，其中谈到：“法国收藏甲骨的，有四个单位，54片：法国国家图书馆28片，归默博物馆13片，策努斯奇博物馆9片，巴黎大学中国学院4片；一个私人收藏家10片：甘茂道10片；公私合计64片。”① 所记甲骨较饶书所录增一倍。但胡先生此文主要是数字的统计，不及具体内容，读者仍难知其详。

在«巴黎»问世三十年之后，由利氏学社雷焕章编著的«法国所藏甲骨录»（以下简称«法录»）一巨册于1985年12月在中国台北出版，在台北、巴黎、香港三地同时发行。«法录»的出版当然不会降低«巴黎»的存在价值，但确可弥补后者之不足或缺陷，因为它首次全面、完整地公布了法国所藏的甲骨文，为中外学术界提供了一份珍贵的研究资料。

本书所录甲骨共59片，为四个公家单位、两位私人收藏家所收藏：1. 巴黎大学中国学术研究院（即饶书所称中国学院）13片；2. 季梅（即饶书所称归默）博物院8片；3. 池努奇（即饶书所称策努斯奇）博物院10片；4. 雅克博先生1片；5. 戴迪野先生1片；6. 法国国立图书馆26片。与胡氏所录颇多出入。其中中国学术研究院实藏15片，二片伪刻，乃得13片；国立图书馆实藏28片，一片无字，一片伪刻，故收录26片。

59片甲骨中，除饶氏摹录的26片（中国学术研究院13片；季梅博物院4片；池努奇博物院9片）外，均为首次发表。每片甲骨，皆以照片与摹本两种形式著录，而且甲骨背面不论有字与否一概附列其照片，以资研究。

就已发表过的26片甲骨看，以«法录»与«巴黎»相校，可证饶氏当年对照实物用毛笔所作摹本总体而言是相当精审可信的，只是偶有疏忽。如«巴黎»8（«法录»B4）左下角遗摹“不玄黽”及序数字“二”，易日之“易”照片作𠃓，饶摹作𠄏，显误。«巴黎»24无背面，据«法录»S14，则知其背面尚有“戈入二百”之记载。诚如编著者所云：“当岛邦男归并这类‘（某人）入’之刻辞时，并未发现有‘戈入……’之文例，本刻辞显示了‘戈’与商王关系友好，因此相当重要。”（见该书释文，第151页。）

在首次发表的33片甲骨中，有一部分是残碎小片（如S 44—59这十六片即属此类），仅存一至三字，于甲骨缀合或有其价值，就刻辞本身内容而言则似价值不大；但这首次发表的甲骨，有不少确实堪称精品，学术价值很高。兹就笔者所见，参以编者所述，略举数例，以飨读者同道。

例一，«法录»B 17。此为季梅博物院藏品，饶氏当年所未见，是最近从博物院的仓库中发现的。这是块相当大的牛肩胛骨，其刻辞与«前编»7.28.1同文，皆残，可据以互补。据«前编»可知此片之贞人为大，乃祖庚时所卜；据此片，«前编»有两条卜辞得以补足：

□□卜，大贞：来丁亥𢀛，丁，三十羌卯？

□□卜，大贞：乍丧，小𢦔冬(終)？八月。

例二，«法录»S 18。此亦季梅博物院所藏，龟腹甲，饶氏未见，是第三期(廪辛)贞人卯的贞旬卜辞，计有十八条，完整者十二条，有一条附记月名，曰：“癸巳卜，卯贞：旬亡祸？在六月。”此为贞人卯卜旬最多的一次记录。十八条贞旬卜辞，以一月三旬计，前后历时六个月，始终由一人负责贞问。这样的例子，在已刊的第三期卜辞中实属少见。据介绍，此甲在该院仓库中发现时，已碎为十四小块，幸得齐斯田·戴迪野先生悉心缀合，恢复原貌。

例三，«法录»B32。此为牛右胛骨后骨缘之一块，乃武丁刻辞，是巴黎私人收藏家雅克博先生的藏品。这是关于从望乘抑从沚䤋及供牛事的占卜，虽较常见，但此片系简省式，仍较重要。其辞如下：

王勿从望乘？

贞：乎供帚（妇）牛？

王叀沚䤋从？

从望乘？

令望乘？

例四，«法录»S33。此为武丁时之龟腹甲，巴黎古物鉴定家戴迪野先生所藏，与«甲编»166同文，辞曰：“贞：𢦏其囚？”作为人名的𢦏，前此仅«甲编»一见，该片拓本作𢦏，中有一斜笔，屈万里氏认为此斜笔并非原有，而是刮痕。今得戴氏藏甲，该字无中间一横，证明屈氏判断正确。

例五，«法录»S34。此系国立图书馆藏甲，有辞称：“今辛……亦二宰。”“亦二宰”之语卜辞罕见（类此者仅得一例，即«粹»1000“大食其亦用九牛”），至为可贵。

例六，«法录»S43。此亦国立图书馆藏甲，辞曰：“癸卯卜，出贞：令鸣氏(致)多方……七〔月〕。”以鸣为人名，多见于武丁卜辞，如«续存»1·616，«簠室·人名»70，«京津»2220诸片言“乎鸣从戉”，«前编»5·46·5称“令鸣眔方”等即是。«法录»此片有贞人出，可知为祖庚卜辞。据此，«金璋»590“贞令鸣氏多方□”，殆亦祖庚时物。此外，«前编»5·46·4及«金璋»732亦有人名“鸣”，与此当系同一人。

作为一部著录并考释甲骨文的专著，本书最大的特点在于它以中、英、法三种文字著录并考释甲骨文，于各国读者极为方便。这在甲骨学史上实属首创。已往的著作，编著者很少能为他国读者着想，也

很少能为自己的著作传播至其他各国着想，或心有余而力不足，或有其力而无此心。能用两种文字撰写的，已属罕见，就笔者所见，仅许进雄先生《甲骨上钻凿形态的研究》（1979年3月，艺文印书馆出版）一书而已。《法录》编纂者考虑到：“在甲骨学界，中英文是最重要的沟通媒介，但由于本著录甲骨实物的收藏地在巴黎，故亦加上法文考释。”（见该书《序》）诚为卓识，值得称道。

本书对甲骨的介绍、考释，颇为详尽。在每一家藏品的释文之前，均有“藏片来源”一节文字，尽可能描述有关甲骨的流传情况。对于来历不明的甲骨，编者直言不讳。如对季梅博物院收藏的第三部分甲骨（四块，即B15，B17，S18，S19），介绍说：“这四块甲骨来源不详，它们送进博物院时未作任何记录，因此究竟属博物院自购或为他人赠送，不得而知。”至于释文部分，为了“帮助读者了解刻辞之意义”，也尽可能详尽。虽说“过分艰深之学术性注解，不予列入”，但对有争议的考释，“本著录除表示立场外，并说明理由。”而且，在考释具体甲骨之前，编著者还首先就甲骨文中隹、叀或叀、其、㞢或又、卜、鼎（贞）这些常用字加以考释。这些考释，集中反映了七十年代以来一些西方学者对甲骨文字的见解，虽然在中国学者看来未必正确，未必能接受，但毕竟“可为学者们提供另一沟通之机会”，很有参考价值。

综上所述，《法录》一书很有特色，值得称道之处很多，它无疑是对甲骨学的一个贡献。诚然，遗憾或缺陷也是有的。本书的照片虽较精良，颇便观赏，但从研究的角度看，终不如拓本清晰易辨。所附摹本，与原刻风貌气韵有较大距离，尚逊于《巴黎》。而且，本书著录的照片及摹本均经放大，这在编者是一番好意，于读者却造成了研究的不便，至少是容易引起错觉，不利于缀合。这也许是编者所始料不及的。

其次，本书考释甲骨文字，多属就字论字、据形释义，很少顾及甲骨文字与后世文字的历史联系，很少顾及中国传统语言学的已有成果。这样，就难免陷于自相矛盾的境地而不自知。如本书根据吉德炜、高岛谦一、舒莱等人之说，力主卜辞之命辞非疑问句，极力反对卜辞之“贞”有“卜问”义。其理由是：“秦汉前之典籍无以贞表‘卜问’之用法，金文也难找到贞字可做上述之用法者。”看来作者很重视书证。准此以求，则考释其他字，说某字具有某种用法，理应在“秦汉前之典籍”及金文中找到这种用法以相印证才是。可是，本书对若干甲骨文字的考释，并未遵守这一准则。如说“卜”与“贞（鼎）”：“‘卜’即表示以火占时连续的形式动作，‘鼎’则代表祖先或神明之前所举行的整个祭仪。……则‘某㓝’，或可释为某主礼占仪，而序辞中之‘甲子王卜㓝’，则意为：‘甲子日王以火占卜，并主礼占仪。’”试问秦汉前的典籍及金文中能找到这样的用法吗？又如说“其”：“甲骨文中，㠯表一内装祭品之容器。㠯由原先表示祭物之意转变成因该祭仪而引起的祖先或神明之介入。”“其字增强了‘惋惜’之意味。”显然，其字的“容器”用法，增强“惋惜”意味的用法在秦汉前的典籍里也是找不到的。类此者尚多，不枚举。

在解释卜辞方面，本书对有关参考资料均能详细核对，态度是严肃认真的。然亦偶有疏漏，例如：（1）对S23，著录与编译部分释作“㱿鼎/于𥝌黍受年”，英文译为：“At𥝌, for the millet, one will recieve a（good）harvest。”释文部分遗释“受”字，又谓“卜辞内容是关于黍之收成。”按此辞当读为“㱿贞：于𥝌黍，受年？”“黍”为系动词，此类用法卜辞屡见。义为从事耕种黍类作物的农业生产，编者似视为名词，失之。（2）本书第124页，引《甲编》1180：“王其省田鼎”，认为“‘鼎’似指田猎地名”，“如同在提到‘王省田’之其他文例一样，狩猎地名通常在‘田’字之前或之后。而本刻辞之‘鼎’字正接在‘田’字之后，故极可能指狩猎地名。”按此说似是而非。卜辞“王省田”的文例并不复杂，仅作“王省某（地名）田”或王叀某（地名）田省”。地名均在田字之前而无在其后者。“鼎”若是地名，应当说“王其省鼎田”，此为通例。按诸原片，“省”、“鼎”下均有缺文，虽“田鼎”相连，“鼎”亦未必是地名。屈万里氏《甲编》考释谓“鼎字于此，未详何义”，较为谨慎。

据介绍，《法录》乃利氏学社整个发表计划之第一部分，编著者的另一部书《比、荷、西德、瑞士所藏甲骨录》（Collection of Oracular Inscriptions in Belgium, Holland, West Germany, Switzerland）亦已编定，这将是对甲骨学的又一贡献。我们热切地期待早日读到此书，以便全面了解西欧各国收藏的甲骨。相信中国读者必将象欢迎《法录》一样欢迎这部著作并认真拜读的。

附《巴黎》与《法录》对照表（S代表甲，B代表骨）

巴黎	法录	巴黎	法录
1	S5	14	S23
2	S1	15	B27
3	S7	16	B25
4	S12	17	B29
5	B9	18	B31
6	B6	19	B24
7	B2	20	B30
8	B4	21	B28
9	B3	22	B26
10	B8	23	S16
11	B11	24	S14
12	B10	25	B21
13	B13	26	B20

---

① 此文刊于《史学月刊》1984年第5期。

作者单位：中山大学中文系
责任编辑：陶原珂

（原载《學術研究》1991年第2期）

评《殷虚卜辞综述》

裘锡圭

中华书局最近重印了陈梦家先生的《殷虚卜辞综述》。《综述》在1954年底写成，1956年出版，问世已有30余年，但是迄今尚未出现能够取代它的著作。

《综述》是总结前人、当代学者和作者自己关于殷虚卜辞的研究成果的一部大型著作。对殷虚甲骨文的发现和研究过程、占卜的方法、卜辞和其他甲骨刻辞的体例、商代文字的性质、卜辞的语法、甲骨断代问题以及卜辞中关于历法天象、方国地理、政治制度、祭祀制度、亲属关系、农业田渔、建筑交通、宗教思想、社会性质等方面的内容和有关问题，此书几乎都有相当详尽的论述。由于涉及的问题很多，有些问题还相当复杂，作者从事的总结工作是很难做得十全十美的。作者在“校后附记”中说此书“对诸家之说，抉择取舍之处未必尽当；而我自己立说往往游移不定”。这是符合实际的，并非故作谦虚之言。但是总的来看，作者的抉择取舍大体上还是得当的。他自己的创见也有不少是有价值的。应该承认《综述》在很多方面都反映了此书出版时殷虚卜辞研究已经达到的最高水平。在《综述》出版以后的30多年里，陆续发表了很多殷虚卜辞的新资料和新的研究成果，这些都是《综述》著作时所不及见的。但是这些年来并没有人按照《综述》的规模，重新做总结殷虚卜辞研究成果的工作。在已有的关于殷虚卜辞的通论性著作里，没有一部能在广度和深度上跟《综述》相比。所以《综述》至今仍是甲骨学的初学者所必读的入门书和研究者所必备的参考书。

我们想择要介绍一下陈氏在《综述》中提出来的有价值的意见（包括某些在写《综述》以前已经在他的论文中发表过的意见），然后再指出《综述》存在的问题，供阅读和使用此书者参考。不过由于篇幅的限制，对随着时间的推移而产生的知识老化方面的问题就不准备涉及了。

先介绍我们认为有价值的一些意见。

第一章（“总论”）的内容比较庞杂，但是提供的知识对于初学者大都是很有用的。陈氏在此章中纠正了一些在当时很流行的错误说法。例如在13至15页批评了董作宾认为卜辞一般先写后刻的说法，在15至16页批评了董作宾认为贞人就是书写卜辞的人的说法（金祖同早在30年代就指出“契刻卜辞之人不必即是卜人”，见《殷契遗珠·发凡》，但未为一般人所注意）。12页指出甲骨背面的“钻”大多数是挖出来的而不是用钻子钻出来的，这一点董作宾等人似乎也没有注意到。

陈氏在大学里教过文字学，对汉字的性质有深刻的理解，所以第二章（“文字”）不乏精彩的意见。他认为象形、假借和形声是古汉字的三种基本类型（77—79页）。这比唐兰先生的象形、象意、形声三书说合理得多。此章第二节中对《甲骨文编》等书的批评以及对王襄考释甲骨文字的成绩的表扬，也都是公允的。

第三章（“文法”）错误较多，但是总的来看，也已经达到了当

时研究卜辞语法的最高水平。除了比较一般的论述之外，此章中还包含了不少很值得注意的意见。例如指出卜辞中“我”跟“余”的区别在于“‘我’是集合的名词……就是‘我们’”，而且“我”可用于领格，“余”则不能(96 页)；“叀”跟“隹”(唯)的用法并不完全相同(102 页)；“之日”“之夕”的意思“并非‘此日’‘此夕’而是表示过去的‘是日’‘是夕’”(114—115 页)；“介词组之所以移前移后，是有意义的，凡是特别着重的卜问的，往往从后移向前”(124 页)；“领位与名词之间加一‘之’字”的现象不见于卜辞，“到春秋金文才出现”(94 页)等等。127 至 128 页对“不”跟“弗”的区别的论述也很有水平。103 页指出《佚》896“王吉兹卜”一句用“吉”为动词，在此之前还没有人指出过卜辞中有这种意动用法。此外，第七章中提到“卜辞近称的纪时之前加虚字‘叀’，远称者加虚字‘于’”(227 页)，这也是前人没有注意到的语法现象。

陈氏在甲骨断代研究方面有很大的贡献。在修改先已发表的《甲骨断代学》四篇而成的第四、第五两章(“断代上”与“下”)里，有很多有价值的意见。

李学勤同志在《评陈梦家殷虚卜辞综述》一文里指出：“卜辞的分类与断代是两个不同的步骤，我们应先根据字体、字形等特征分卜辞为若干类，然后分别判定各类所属时代。”他认为“综述所谓康丁卜辞，便是用一个断代上的名称代替分类上的名称”(《考古学报》1957 年 3 期 124 页。以下引作“李文”)。这些意见是很有道理的。不过，陈氏虽然没有十分明确地认识到分类与断代是两个不同的步骤；至少在研究武丁时代卜辞的断代问题的时候，实际上已经在这样做了。

从表面上看，陈氏所说的卜人组跟董作宾所说的贞人集团似乎没有什么重大区别。但是实际上，他们二位研究甲骨断代的方法是很不相同的。陈氏认为在字体等方面各具特点的不同卜人组的卜辞可以属于同一时代，如宾组、𠂤组、子组、午组都属于武丁时代。这实际上就是把卜辞的分类和断代分成两步来进行，研究方法比董氏科学得多。陈氏分类的标准侧重于卜人，这当然是不足之处。不过，他所分出的午组的两个卜人，实际上是不能系联的。他自己说，他“所以称它们为午组者，一则它们字体自成一系，不与宾、𠂤、子三组相同；二则其称谓也自成一系”(162 页)。可见他对应该先按字体等标准来给卜辞分类这一点，并非毫无认识。午组卜辞的“午”实际上并不是卜人名(参看李文 125—126 页)，但是这并不影响午组的成立，因为陈氏本来就不是根据卜人系联而是根据字体和内容把午组分出来的。陈氏对著名的 YH127 坑的甲骨进行了比较细致的研究，指出这坑卜甲有“大宗的宾组和较少的子组、午组”卜辞，此外“还余了几小群不能连系的卜辞”，并分析了它们在字体和内容上的特点(165—166 页)。这也反映出他是重视按字体等标准给卜辞分类的。他所以把董氏的第三期卜辞分为廪辛卜辞和康丁卜辞两类，也是由于看到了二者可以根据字体、内容和出土地点等区分开来(142—145，193—197 页)。把二者分开并没有错，问题出在分类以后的断代这一步上。陈氏没有注意到这两类卜辞至少有一部分是同时的证据(参看李文 124—125 页)，主要根据“兄辛”称谓的有无就把二者分别定为康丁卜辞和廪辛卜辞。这确实是不妥当的(从分类的角度看，所谓康丁卜辞虽然跟所谓廪辛卜辞明显属于不同的类，但是跟某些同类型而不同时代的卜辞却难以区分。这也是一个问题)。总之，陈氏在甲骨断代的研究中，实际上已经在相当大的范围里使用了先分类后断代的方法。这在甲骨断代研究史上是具有重要意义的。

陈氏分出的𠂤组卜辞和子组卜辞，大体上分别相当于日本学者贝塚茂树分出的王族卜辞和多子族卜辞。他反对董作宾把这两组卜辞归属于文武丁时代的意见，认为它们都属于武丁时代。这跟贝塚茂树也是一致的(贝塚之说发表在前，参看李文 126 页)。至于分出午组卜辞并断定其属于武丁时代，则是陈氏一人的创见。陈氏创立的宾组、𠂤组、子组、午组、出组、何组等名称，在近年来关于甲骨断代的讨论中已经被广泛采用。𠂤组、子组、午组属于武丁时代的意见，也已经为绝大多数甲骨学者所接受(但是陈氏强调𠂤组、子组属于武丁晚期，恐怕不一定正确。第一章 33 页怀疑午组的“父丁”或有指祖丁的可能，也是缺乏根据的)。此外，陈氏对出组卜人的分群的研究(第五章第五节)、何组卜人分早晚期的研究(第五章第七节)，以及关于坑位、字体、称谓等在断代研究中的作用的一些讨论，也都是很有意义的。

从第七到第十八章，对殷墟卜辞所反映的商代历史和文化的各个方面，作了颇为全面的论述。不但是研究殷墟卜辞的人，就是研究商代历史和文化的人，也应该给予足够的重视。

陈氏在第十一章里对殷墟卜辞中比较复杂的一个问题，即周祭制度问题，进行了比较深入的研究。以今天的水平来衡量，他的研究自然有很多问题；但是跟周祭研究的开创者董作宾相比，则是有进步的。在编排祀谱方面，陈氏对董氏排在第六、七、八三旬受祭的先妣有较大的更动，这些更动都是正确的(387、390 页。参看常玉芝《商代周祭制度》119—124 页)。陈氏考定第五期周祭卜辞中的“祖丁”并不是指小乙之父祖丁，而是指武丁的(427 页)。这是一个比较重要的发现。他能对董氏祀谱作出纠正，与此有重要关系。

考释文字不是陈氏的专长，但是他在这方面也并不是毫无重要贡献的。

卜辞中对成汤有“大乙”“唐”(汤)“成”等不同称呼。“成”字所从的“丁”的写法与“口”相近，因此长期以来被误释为“咸”。陈氏通过对有关的祭祀先王的卜辞的对比研究，释出了“成”字(411—412 页)。卜辞称下一个月为生月，由于古书中没有生月的说法，这种“生”字长期以来被误释为跟它形近的“之”字。陈氏通过对记“生月”“兹月”等时间词的卜辞的综合研究，纠正了误释，指出了“生月”的正确意义(117—118 页)。陈氏在第二章讲考释文字的方法时指出，“为求发明新字而释字”，往往不能取得成绩；“从研究某一问题而涉及甲骨文”，却“常常有较好的结果”(67 页)。他对“成”字、“生”字的考释可以看作这种说法的例证。

卜辞中屡见的“𦉪”字长期以来被视为“蜀”的初文。陈氏根据卜辞中从“兮”从“旬”的一个字也可以写成从“兮”从“𦉪”的现象，释此字为“旬”(眴)，并认为这个字用作地名时相当于后世的“荀”(295 页)。这个意见我认为也是正确的。子组卜辞屡于癸日卜问“至𦉪亡囚”(参看《殷墟卜辞综类》106 页)，“𦉪”应读为“旬”，可以与陈说互证。(编按：蒙友人蔡哲茂先生告知，日本学者林巳奈夫早已指出这一点。)可惜此说至今尚未为多数人所接受，根据卜辞“𦉪”字来谈四川古代史的人仍然很多。此外，陈氏指出见于《后》下 22・16 的上从“自”下从“丙”之字是卜辞仅见的边字”(516 页)，又指出卜辞中上从倒“止”下从“人”的字可能就是“咎”字(569 页)，大概也都是正确的。

除以上所指出者外，《综述》中还有一些值得注意的意见。例如陈氏把《粹》488的“□宗三示”补为“中宗三示”，认为“可能指中宗且乙、且辛、且丁三示”（415页），从陈氏所不及见的《屯南》2281有“中宗且丁”之称来看，他的推测说不定是正确的。限于篇幅，不能多举这类例子了。

附带说一下，本书第二十章（“附录”）中的“甲骨著录简表”，把甲骨资料发表的情况介绍得既全面又简明，对于初学者和研究者都很有用，读者不应忽视。可惜关于近30多年来甲骨资料发表的情况，还没有类似的简表可供参考。

下面谈谈《综述》存在的问题。

陈氏是一位很聪明也很勤奋的学者，可是学风却不够谨严。因此书中一方面有不少好意见，一方面又有很多不确切、不成熟或明显错误的说法和意见。限于篇幅，这里只能举少数例子。

44页讲非卜辞的甲骨刻辞时，把《乙》4856的“帚妥子曰啚”一辞列为“家谱”。此辞跟同版的“壬辰子卜贞：帚□子曰𢦏”一辞左右相对，都刻在有序数“二”的卜兆旁，显然是卜辞而不是家谱。

45页把“大示歨”鱼佩和“凶侯”玉戈列为“书辞”的玉器，其实两器的文字都是刻的。

142页说“康、武、文没有卜人”，只有“武乙卜旬之辞有卜人历数见”。其实历贞之辞并不完全限于卜旬之辞，《京津》4387“己亥历贞：三族王其令追召方及于□”便是一例。

148页说殷墟第三次发掘所得的𠂤组卜骨都是习刻。这是没有根据的。

151页说“宾组卜辞凡称几日者以所卜之日为第一日，𠂤组以所卜之次日为第一日计算”。其实𠂤组也有不少从所卜之日起算的例子，宾组也有少量从所卜之次日起算的例子，见黄天树同志的博士论文《殷墟王卜辞的分类与断代》的附录一《关于卜辞的计日法》。

262页认为“二田噩、盂”等称“田”之地，都是猎田而非农田。其实卜辞中的“噩田、盂田”等地显然是有农田的（参看李学勤《殷代地理简论》23—24页）。陈氏所引的“二田噩、盂”出自《粹》968的一条卜辞，全文为“皆雩二田噩、盂，有大雨”，是卜问求雨之事的。这条卜辞就可以证明噩、盂二地有农田。如果完全是猎田，何必为之求雨呢？

372页说：“祖辛、沃甲同世同有为直系的资格，但是祖辛之子（引者按：指祖丁）先沃甲之子（指南庚）为王，所以祖辛先已立为直系，沃甲遂被淘汰而为旁系。”其实，沃甲不能立为直系，显然是由于在南庚之后即位的，不是南庚之子而是祖丁之子阳甲，跟所谓“祖辛先已立为直系”无关。如果阳甲是南庚之子，沃甲和南庚当然就成为直系了。

395页引《哲庵》65“二月甲子祭大甲”“十月甲子羽日阳甲”等辞，认为“二月至十月之间当有一闰月，如此十个月三十一旬三百零一日而皆有甲子”。按：如果二月甲子至十月甲子间没有闰月，首尾只有241天。要凑满301天，中间需要有两个闰月，一个闰月是不够的。但是在这样短的时间内竟有两个闰月，也是难以想象的。陈氏的推论显然错误（参看许进雄《殷卜辞中五种祭祀的研究》110页）。

405页说殷人庙号所用天干“乃是致祭的次序，而此次序是依了世次、长幼、及位先后、死亡先后，顺着天干排下去的”。这种说法不合事实，李文已有批评（见123页），请参阅。

第十八章（“身分”）里有不少不妥当的说法，李文也已有批评（见119—120页），请参阅。

“文法”一章中不妥当的说法尤其多。例如：86至87页以判断吉凶的占辞为问句。87页把由命辞和验辞组成的“雨不雨”“雨不”一类卜辞看作反复问句（参看拙文《关于殷墟卜辞的命辞是否问句的考察》，《中国语文》1988年1期7—12页）。96至97页竟把公认应读为“有”或“又”的“㞢”看作“有代替名词的作用”，说它“可能是第三人称”。99和130至131页把一般看作连谓结构或兼语式的“乎（呼）多臣伐邛方”“令戉来归”一类句子中的“多臣伐邛方”“戉来归”等，整个当做“呼”“令”等动词的“宾词”。100页把一般认为是祭名的“𠦪”定为“用牲类”动词。102页认为用否定词的句子只有“在两种条件下才可以先置宾词：即（1）只有在有否定词‘不’之句中，（2）只有在有人称代词‘我’的句中”。其实卜辞中有“不余渊”（前6·59·6）、“勿余凷”（丙523）等语，陈氏所说与事实不合。陈氏在103页还举出“我不受年”一类句子，作为“虽俱备‘不’‘我’的条件而不先置其宾词”之例。可见他所说的宾语前置的第二个条件里的“我”是泛指的，并不限于用作宾语的“我”。似乎他并不知道宾语是否前置跟主语是不是“我”根本无关。126页说“一个‘动词组’，若是有否定词，则它一定在最前，不定词与肯定词介乎否定词与动词之间”。这也与事实不合。卜辞中“允不雨”之语屡见（参看《殷墟卜辞综类》488—489页“允雨”部分），肯定词“允”就放在否定词“不”前面。

《综述》中有些不妥当或明显错误的说法，反映了陈氏的传统文字学和古音学修养的不足。例如：92页说甲骨文“鄙”字是形声字。甲骨文“鄙”字作“啚”，此字见于《说文》，自古以来都认为是会意字。255页说“蒙或冡是山顶”。《尔雅·释山》：“山顶，冢”。陈氏显然错把“冡”跟“冢”当作一个字了。《综述》中“冢”常被印作“冡”（32页8行、12行、41页4行、375页倒10行、376页2行、583页8行。31页又屡次把“汲冢”印成“汲冡”）。这大概不是印刷之误而是原稿之误。310页说“涅、湶古音相同”。上古音“涅”属质部，“湶”属月部，并不相同。320—321页说卜辞的“四戈”即“四国”。上古音“戈”属歌部，“国”属职部，无由相通（陈氏对所引的关于四戈的卜辞的理解也有问题，参看李文121页）。339页认为王亥即契，并说“契从丰声，古音与‘亥’相同”。“契”是溪母字，其韵上古属祭部。“亥”是匣母字，其韵上古属之部。二字之音不但不同，而且距离颇大。343页说“昏、冥二字古音是相同的”。“昏”是晓母字，其韵上古属文部。“冥”是明母字，其韵上古属耕部。二字并不同音。366页认为卜辞中的“旨千”即古书中的“迟任”，“‘旨’从尸从口，‘千’即说文卷八‘𡈼，善也’之𡈼而省去下划者”。所谓《说文》训“善”的“𡈼”应写作下横较长的“𡈼”，即“廷”字声旁，跟“任”字所从的“壬”不是一个字。“旨”也不是从“尸”的。470页说“‘省’‘升’古音同”。上古音“省”属耕部，“升”属蒸部，并不相同。526页说：“禾和谷，古音发声与主要元音皆相同，惟谷是收-k的入声字。崔述《稷穄辨》说‘河北自漳以西舌强能发入声，以东舌弱（《综述》原脱“弱”字）不能读入声’。是漳以东入声之谷即漳以西的禾。”“禾”是匣母字，其韵上古属歌部。“谷”是见母字，其韵上古属屋部。二字“古音发声与主要元音”都不相同。而且崔述所说，根据的是后世情况，怎能引

来论证商代语音呢？536页说“檣古当从爿(庄)得声”，575页还把“三啬云”的“啬”读作“墙”，又转成“祥”。按：“檣”“啬”之音跟“墙”毫不相干。不能因为某些省声字把“墙”省作“啬”，就认为“啬”有“墙”音。

陈氏在《综述》里考释了不少甲骨文里的字，除前面举过的“成”“生”等字外，所释多数不可信，李文已举出一些例子(见122页讲天象用字一节)，请参阅。《综述》所引卜辞的释文还往往将就印刷铅字，把有些难印的字写作与之形近的无关的字，这也是违反文字学原则的(参看李文127页)。

错认卜辞里的字、读错或理解错卜辞或其中词语等情况，在《综述》里极为常见。上文已稍有涉及，这里再举些例子。

先举错认卜辞里的字的例子。93页引了两条以地支“亥”为日名的卜辞，“亥”都是“万”的误释。95页引《乙》5404“朕臣鸣”，“臣”是“耳”的误释。同页末行所引的《甲》3933一辞的释文中的两个“女”(汝)，实际上都是从“女”之字的偏旁，应与其上一字并为一字。121页引《乙》5582“雀及子禺……”一辞，以“及”为连词。从原著录书看，“雀”下一字有些象“尸”，断非“及”字。卜辞中尚未发现用作连词的“及”。158页引《乙》7781“乙毋保黍年”，“毋”本作“弗”，这大概是笔误。165页引《乙》1704“戊申卜，𡈼生五妣于妣于父丁”，“于妣于父丁”是“于乙于父己”的误释。230页引《鄴三》445“癸于旦仍伐𢦏𣎵，雉人”。原辞“仍”本作“迺”(乃)；“𣎵”本作“不”，当属下读。284页引“贞令多马方射于北”一辞，所注出处作“《甲》”而无片号。疑所引即《甲》3473，原辞作“贞令多马衛于北”，“方射”似是“衛”的误释。305页引《甲》2700“……〔天〕邑商望人〔方〕……”，当是“……〔告于大〕邑商，亡〔徉才畋〕……”的误释。322页引《铁》213·3“弗其𢦏卌邑”，“卌”为地名“卤”的误释。

“断代”章所引卜人名有不少是误认的。例如：176页所引《续》5·31·8的卜人名“凵”，其实是“殻”的下部残文(参看李文125页)。181页所引的《粹》1239的卜人名“己”，其实就是“亘”(参看岛邦男《殷墟卜辞研究》中译本8页)。《粹编考释》误释此字为“己”，陈氏也跟着错了。183页所引的《乙》749的卜人名“𠁾”，其实就是“永”(参看李文125页)。184页讲武丁卜人时所引的《甲》3399的“名”，其实就是193页讲廪辛卜人时所引的见于《佚》406等片的“冎”。193页讲祖甲卜人时所引的《库》1062(拓本见《美国》90)的“夰”，其实就是陈氏隶定为“兵”的、常见的出组卜人名。

“断代”等章所引的先人称谓也有不少是误认的。例如：160页子组称谓“父庚”条所注出处为《乙》370。《乙缀》393已将此片与《乙》393缀合，其上并无“父庚”称谓，但有“庚午卜䄃析……”一辞。陈氏大概把“卜”下一字的右旁误认为“父”，把“庚午”的“庚”误认为称谓中的天干了(从字体看，陈氏把这一片归入子组也是错的)。163页午组称谓“母丁”条所注出处为《乙》3478和5394。这两片都并无“母丁”。《乙》3478“丙午卜”一辞有“受丁”。《乙》5394“壬戌卜”一辞中有“……见邑……”之文。“受”和“见”的外形有些像“母”，“邑”字上部与“丁”同形。陈氏大概是因此而误释的。165页所举午组称谓有《乙》5162的“外戊”。这跟163页所举的“司戊”其实是同一个称谓。司戊之“司”不从“口”，《乙》5162的“司”字是反写的，所以就被陈氏误认为“卜”(外)了。425页所举“武文卜辞”称“小丁”诸例中有《粹》502。此版本无“小丁”，陈氏大概把“小牢”残文误认为“小丁”了(《粹编考释》不误)。这类例子举不胜举。

下面再举读错或理解错卜辞或其中词语的例子。

100页引《粹》1187“侯告伐尸方”，把“告”看作动词。卜辞中屡见人名“侯告”，《综述》328页所列举的侯、伯之中就有此人。《粹》1187的“侯告”无疑也是人名。230页引《甲》404“旦其攸𪊨，迺各日又正”，认为此辞以“旦与各日为对”，把“各日”读为“落日”。按：“各日”指祭祀时的一种仪式，也可以说成“各于日”(参看拙文《释柲》，《古文字研究》3辑21页)。陈说不可信。276页说卜辞方国名“亘”或作“王亘(前7·35·2)”，以与古书所见地名“王垣”比附。《前》7·35·2原辞是“☐乍(作)王亘于西”，“王亘”当指一种建筑，并非方国名或地名。283页把卜辞中屡见的动宾词组“御方”(意为“抵御方国”)错误地解释为方国名。《前》5·11·7有“贞：冓于下御方”一辞。“冓”是人名。《合》4888等也有命冓御方之辞。“下”当指抵御敌人时所处的方位，他辞或言“〔于〕上御方”(合6801)可证。283页引《前》5·11·7，漏释“下”字，作“贞冓于御方”，“御方”就像是方国名了(《综述》引用卜辞时往往漏释字，如274页引《乙》6684“己酉卜鬼方易亡囚”，误作“己酉卜鬼方祸”。其例甚多)。477页列举卜辞所见宫室之名，有所谓“从宫”，引《明续》749“王入从宫”为证。按：此辞之“宫”为地名，“王入从宫”犹言“王从宫入”，跟宫室毫无关系。

《续》3·31·1有如下一条晚期记事刻辞：“乙丑，寑(寝)弜易(锡)㔾，才(在)寘，遘且(祖)乙翼日，才八月。”“且乙”以下七字因刻不下移至此辞的上方。472页引此辞时误释为“才八月乙丑寘且乙弜易……才寑彝”，读法大误，文不成义。同页所引《续》3·31·5原作：“乙丑，王讯㔾，才宎(寘)。”“讯”下二字也被误释为“父甲”。上引两辞是同时的刻辞，所记之事密切相关。由此可知在商代晚期某年八月乙丑，正值对祖乙举行翼日祭的日子，商王在侧室讯问了㔾族俘虏或名㔾的罪人，讯问后就把他或他们赏赐给了任寝官的弜当奴隶。这是研究商代社会的重要史料，可是从陈氏的释文根本看不出来。陈氏把这两条记事刻辞看作卜辞，也是不正确的。

494页引《续》1·39·4“☐亥御帚鼠不子于匕己”，认为“御不子即祓除不子”。按：《续》1·39·4原有两辞，下方一辞为“御帚鼠子于匕己……”，上方一残辞为“☒亥☒不☒雨”。陈氏误把这两条卜辞当作一条卜辞释读了(这两条卜辞都分三行，陈氏没有管最右一行，大概认为是另一条卜辞的残文)。533页引《乙》3212(即《合》13505正)“旃眔殸苗耤于始，受㞢年”。按：“旃眔殸”与“苗耤于始受年”原为两辞，陈氏误当作一辞释读，并在“年”字上臆增“㞢”字。此片之“苗”应为人名。陈氏既误合两辞为一，遂以“苗”为动词，并有“所谓耤应指锄地。卜辞所谓‘苗耤’亦是先苗而后耤”的误说。

505页引了《乙》5393和《哲庵》199两片上记臣属“来王”的卜辞。其实在原辞中“来”“王”二字都不相连，李文127页已经指出，请参阅。五期卜辞中的“文武帝”本指文武丁，陈氏却认为是指帝乙(421—422页)。他对引作此说证据的那些卜辞也有误释文字和理解错误之处，请参阅李文127页和常玉芝同志的《说文武帝》一文(《古文字研究》4辑)。

上述这类例子也是举不胜举的。

《综述》在给所引卜辞分期、分组方面也有不少错误。限于篇

幅，只能举少数例子。374 页在所引《粹》112 一辞后注“庚甲卜辞”，其实此辞字体显然是属于陈氏所谓“武文卜辞”的。286 页引了武丁卜辞中提到“黎方”的卜辞四条，第四条（《佚》865）从字体看也应是所谓“武文卜辞”（附带说一下，所引第一条《库》1875“令”下一字本作“刀”上加圆圈之形，与所谓“黎方”无关。第二条《前》4·36·2 的“方”字是“王”字残文的误释）。《综述》引作子组卜辞的，实际上往往并不属于子组。例如陈氏认为“B119 和 YH006 两坑是𠂤组和子组的混合”（158 页），但是他在 149 页举出来的 B119 坑的子组卜辞《乙》131、139 和 YH006 坑的子组卜辞《乙》373、393，实际上都不能归入子组。他认为这些卜辞里的“余”都是卜人名，也是缺乏根据的。

由于陈氏的疏忽大意，《综述》中还出现了不少前后自相矛盾的情况。例如：“文法”章“单位词”节 94 页说“鬯的单位是卣和斗”。同章“数词”节 111 页举单位词与数的结合之例，有《续》1·40·5“鬯二升一卣”一条。94 页所说的“斗”跟此条的“升”，显然是同一字的异释。“庙号”章 471 页讲宗庙名称时也引了《续》1·40·5，释文作“其稱新鬯二升，一卣”，并解释说“‘其登新鬯二升一卣’者，谓登新鬯一卣于二升（庙），二升并非量名”，说法跟“文法”章完全不同。依此说，卜辞里表示鬯的单位的词，就只有“卣”而没有“斗”或“升”了（按：把“二升”看作宗庙名是对的，但是“升”字究竟能否这样释，还有待研究）。又如：91 页说“卜辞里没有语助词”，128 页却说“武丁晚期的𠂤组卜辞中，偶有在句末安置语气词的”，132 页对卜辞语法作总结时也说“句尾亦偶有少数的语气词”。110 页讲数词时说“殷代数词组中只有一个连词”，122 页讲连词时却举出了《乙》764“昆一百㞢九（当释‘九十’）㞢九”这个连用两个连词的数词组的例子。150 至 151 页讲武丁卜辞中“贞”字的各种写法，所列“式十”作尖耳形，所举之例中“《甲》2907 扶卜”是𠂤组卜辞，但是下文却说“𠂤组贞字只作方耳的（式四）”。382 页举了很多“康丁卜辞”等称先妣为奭之例，487 页却说先妣称奭“仅限于祖庚（应是“祖甲”的笔误）和乙辛的周祭卜辞”。四祀邲其卣铭文在《综述》中屡次引用（陈氏释“邲”的左旁为“弋”），422 页明斥董作宾释此铭“文武帝乙”为“文武丁帝乙”之非，但 374 页引用时却照抄董的释文。《后》上 27·7“且辛一牛，且甲一牛，且丁一牛”一辞，377 页引用时定为“庚甲卜辞”，409 页又将它定为武丁卜辞（按：定为武丁卜辞是对的）。《前》1·38·4 一辞，488、489 两页都引用了。489 页释为“庚子卜王，囝、匕甲、后匕癸”，488 页则将“后”字隶定为从“尸”从“子”。两条释文在相邻的两页上左右相对，但同一个字却有两种释法。490 页说“祖庚卜辞中的‘后匕癸’在匕甲（祖辛配）之后”，也是根据此辞的。488 页说此辞“匕甲为上甲之配”，跟 490 页的说法也互相矛盾。529 至 530 页说“卜辞所记所登的谷品”有来、禾（528 页认为与黍有别，可能是梁）、米、鬯四种，而 531 页将卜辞登祭与《月令》登尝作比较时，所举的卜辞登祭所用谷品却变成了米、黍、来、鬯四种。李文也举出过《综述》释字前后矛盾之例（128 页），可以参阅。

《综述》中没有校出来的由于书写、印刷等原因而造成的错误也非常多。上文已经涉及到一些，这里再举少量例子。

先举甲骨著录片号和其他关于出处的错误的例子。142 页 10 行的“830”当作“840”（143 页 3 行引此片不误）。147 页 15 行“乙 3047＋3048”的“乙”当作“甲”。149 页 8 行“甲 2014＋3020”的“2014”当作“3014”。150 页 12 行“3045＋3047”的“3045”当作“3048”。260 页 13 行的“157”当作“657”。276 页倒 12 行的“7·35·2”当作“7·38·2”。461 页倒 12 行的“485”当作“488”（415 页倒 9 行引此片不误）。605 页 8 行“587”当作“589”。606 页 10 行“1331”当作“1231”。607 页 14 行“戉其丧人”后脱片号，当作“林 2·18·20”。610 页 2 行“1748”当作“1745”。41 页倒 6 行“考古：4”的“4”当作“5”。45 页 3 行“本书图版参拾”的“参拾”当作“拾参”（同一行中列于此出处前的《文物参考资料》的出处应删，其图并非鼈甲）。

再举其他的文字错误的例子。8 页 7 行“卡美年”的“卡”当作“卞”。29 页 14 行“而”与“胛骨”间脱一“猪”字。32 页倒 8 至倒 7 行“去于武乙”之“武”当作“帝”。34 页倒 10 行“武乙”当作“帝乙”。36 页倒 10 行“此”下空二字，当作“第一”。68 页倒 3 行“追縱”当作“追蹤”。87 页 16 行“不雨”当作“其雨”。97 页 9 行“方”当作“：”。102 页倒 4 行“邛才”当作“邛方”。105 页 12 行注明上一行“臣”字词性的“状”字当作“名”。122 页倒 12 行“示㞢”当作“示壬”。130 页倒 7 行前序数“3”应移至上一行前，倒 6 行前序数应移至倒 7 行前。144 页 11 行“七块”当作“六块”。147 页 8 行所举𠂤组同于宾组的称谓中的最后一个“伊尹”，当为衍文（𠂤组、宾组都无“伊尹”之称）。155 页倒 2 行“𠂤组以及以其……”显然有误。158 页 8 行前序数“56”当作“36”。212 页倒 6 行“（3）”当作“（1）”。288 页倒 3 行“春夏季”当作“春夏冬”。252 页 11 行、262 页 15 行的“僘”当作“敞”。264 页倒 11 行“过度”当作“过渡”。306 页倒 5 行“文方”当作“人方”。340 页倒 8 行“如伊尹之称尹”句的后一“尹”字当作“伊”。375 页 16 行、376 页 2 行的“纂”当作“篡”。389 页 17 行“文丁”当作“康丁”。392 页倒 9 行“第十二旬”当作“第十一旬”。394 页倒 9 行“‘㱿’在‘雚’之前”句中第一、第三二字当互易。395 页倒 2 行“彡𦐂相叠”的“𦐂”当作“羽”。508 页 9 行“多亚、亚”当作“多马、亚”。附带说一下，363 页 3 行引《天问》“夫何恶之媵，有莘之妇”句，标点有误，逗号应移到“媵”字之前。

陈氏行文比较随便，修改的工夫大概下得不多。前面指出过的前后自相矛盾的现象便是证据。综观全书，既有不少写得比较拖沓的段落，也有不少写得过于浓缩的段落；还有少数段落甚至辞不达意，读起来非常费劲（225—226 页讲“岁”和所谓“禾季”“麦季”的一段，是比较典型的例子）。这也是本书的一个缺点，而且对于初学者来说是很严重的一个缺点。

总之，《综述》既是一本好书，又是一本充满错误和问题的书。读者对此应有充分的思想准备。由于书中所引的卜辞的释文和甲骨著录片号的错误太多（本文中所指出的这类错误，大概只占全部同类错误的几十分之一），如果想使用此书中的卜辞资料，一定要尽可能核对原著录书，千万不要随便照抄。

（原載《文史叢稿》，上海遠東出版社，1996年）

殷墟甲骨刻辭摹釋總集序

姚孝遂

殷墟甲骨刻辭，是迄今為止我們所能見到的我國最早的古籍。經過將近九十年來廣大學者的研究整理，基本上可以通讀。《甲骨文合集》的出版，使得零雜分散的甲骨文資料，能夠匯集一齊，為進一步的整理研究工作提供了便利的條件。

甲骨刻辭的整理研究工作始於孫詒讓的《契文舉例》，成就雖然有限，然而篳路藍縷之功是不可沒的。羅振玉　王國維以後，甲骨刻辭逐漸能得到通讀。隨着科學的考古發掘工作的開展，現代甲骨學體系的建立，我們對甲骨刻辭整個的從形式到內容，就有了進一步的認識。

作為一種文字符號，甲骨文計有將近四千個不同的符號形體。我們現在能夠真正辨識的，或者說能夠與後世的文字形體找出其發展聯繫的，約一千個字左右。還不到其總數的三分之一。但是，其餘的三千多個我們現在還不能完全辨識的文字形體，絕大多數是人名、地名等等專有名詞，這對於我們通讀甲骨刻辭的內容，影響還不算太大。

從商代的甲骨文，周代的青銅器銘文，戰國秦漢的帛書、簡牘，魏晉的碑刻，直至現代通行的楷書，都是一脈相承的　儘管存在着形體上的發展變化，但還是能夠尋繹出彼此之間的聯繫。

所謂古籍，就是古代的文字記載。不同的時代，其古籍可以表現為不同的形式，包括不同的書寫形式和不同的用以書寫的材料。

商代的古籍，主要是刻在龜甲、獸骨，甚至是人頭骨上的，有少數的墨書和朱書。周代的古籍主要是鑄刻在青銅器上的。戰國秦漢的古籍主要是書寫在縑帛或竹木簡牘上的。當然還有石刻文字，而石刻文字在商代就已經有了。至於我們現在所見到的書籍形式，不過是宋以後印刷術的興起纔開始出現的。

各個不同時代的古籍，由於其用以書寫的文字符號的發展變化，歷之既久　一般人就難以辨識，通讀和理解。這就需要有專門的能辨識古文字的人來加以整理和研究，使這些古代的文字記載能夠長期地流傳下去。在古代，這是史官的專門職責。我國商周時代，就已經有了這樣的史官。

就目前已知的材料來看，成體系的、能夠全面地、完善地記錄語言的文字符號的，最早的是甲骨文。在此以前，如仰韶文化的或大汶口文化的文字符號，我們迄今只發現一些簡單的刻劃符號或圖形符號。像這類文字符號，尚處於非常原始階段，還沒有和語言非常緊密地結合起來，尚不能勝任記錄語言的任務。

殷人有典有冊，這些典冊保存在《尚書》中的有《盤庚》三篇。很顯然，《盤庚》三篇不可能是商代原有的形式，是經過後人整理的。毫無疑問，這是經過西周的史官的整理而流傳下來的。可惜的是，有關史書缺乏有關西周史官整理商代典籍的詳細記載。

據《左傳》昭公十二年記載，楚左史倚相「是能讀《三墳》、《五典》、《八索》、《九丘》」。倚相是我們現在所能知道的，歷史上最早的一個能通曉古代文字，釋讀古代典籍的人。「左史」就是史官的一種。

孔子曾經歎惜商、周之禮不足徵，原因在於「文獻不足故也。足則吾能徵之矣」。他既然誇下了這個海口，可見他是能夠辨識和通讀商周古籍的。事實上孔子曾經系統地整理過古代典籍，史書曾說他「刪詩書，定禮樂」。孔子是歷史上所已知的全面而系統地整理古籍的第一個著名學者。

司馬遷出身於史官世家，繼其父司馬談之業作《史記》，就是基於他廣泛地涉獵了金匱石室諸古籍，並加以整理和釋讀。我們今天所見到的《史記》一書，所引證的古籍與傳本就有所出入。《易》、《禮》、《詩》、《書》、《春秋》，各家所受不一。從中可以看出，古籍是經過多家的整理釋讀，並且是存在着大同小異的。

西漢時對於戰國以來所流傳的古籍，一般人已不能通其讀。孔子壁中書就曾經伏生、孔安國加以釋讀和整理。當時有許多著名的學者，由於能辨識古文，在這方面作過重大的貢獻。張敞、揚雄、司馬相如等等，就是其中的佼佼者。

劉向、劉歆父子，以其畢生的精力，校中秘藏書，取得了卓越的成就。所謂「校中秘藏書」，其重要內容，就是對古籍的整理和釋讀，以今文讀古文。雖然後世對劉歆出於政治動機，竄改過某些古籍，有所非議，但是，不能因此而抹殺其整理古籍的巨大功績。

及至東漢，甚至對班固的《漢書》一般人已不能通其讀，還得有賴於其妹班昭加以傳授。賈逵、爰禮、許慎、馬融等都是通曉古文字的著名學者，都是費盡了畢生精力從事古籍整理的工作。我們今天還能夠讀到一些先秦的典籍，應該感謝上述所有這些學者的辛勤努力。

東漢蔡邕的熹平石經，以及魏正始三體石經，更是整理和釋讀古籍的寶貴成果。尤其是正始三體石經，以古今文字對照的形式，為保存一定的古籍原始面貌，有利於後世對古籍作出更進一步的深入研究方面，對資料的原始性和可靠性，更是有着特殊的貢獻。

晉太康中汲冢出土的竹簡，經過荀勖、束皙等人的整理和釋讀，得以部份保存下來。可惜的是，現在僅能見到《穆天子傳》，其餘均已散佚。

魏晉而後，隋唐以來，文字經過隸變，成為楷書的統一形式，所有典籍一般說來，已不存在文字上的差異。古籍整理的工作，相對地說來就要容易一些。

宋代金石學的興起，直至清乾嘉以來，考據之學盛極一時，古籍整理工作又開闢了一個新的領域。對兩周的青銅器銘刻這一古籍形式展開了全面而深入的整理和研究，並且取得了豐碩的成果。

清代末葉，殷墟甲骨文字的出土，更進一步將古籍的整理上推到商代的典籍。並且在此基礎之上，逐漸形成了以語言文字學為核心的，結合歷史學、考古學、社會人類學交相滲透的現代古文字學這一新興的學科。

甲骨文字是通行於商代的文字，它的形體結構與後世通行的文字存在着明顯的區別。其刻辭一般都很簡短。主要是通過卜辭的形式以反映當時人們廣泛的社會活動，有着非常豐富的歷史內容。其中也有的不是卜辭的形式，而是直接記載人們社會活動的所謂「記事刻辭」。也有干支表和家譜的所謂「表譜刻辭」。

所有這些，都是商代的典冊，是我們據以研究探討商代社會歷史的非常寶貴的原始資料。

然而遺憾的是，由於甲骨文字祇是極少數的人能夠辨識，這些原始資料的利用就受到很大的局限。

雖然很多學者曾經作過一些釋讀工作，但這些研究成果都比較零散，搜集起來在現在的條件下，已經是非常困難。何況近年來甲骨學發展得很快，早期的研究成果已難於適應現代深入研究的需要。再加上學者認識上存在着較大的分歧，若非專門的學者，就很難作出恰當的取捨。而廣大的歷史學、語言文字學、考古學等等有關學科的科學工作者，隨着研究工作的進一步深入，又迫切需要利用這批原始資料。這樣就存在着一個亟待解決的矛盾，形勢要求古文字學的專門工作者為其它各有關學科提供能夠充分利用的，較為完整和全面的甲骨文字資料。作為古文字的專業工作者，這是義不容辭的職責。

《甲骨文合集》（簡稱《合集》）的出版，加上《小屯南地甲骨》（簡稱《屯南》或《屯》）所收一九七二年以後出土的甲骨刻辭，以及《英國所藏甲骨集》（簡稱《英》）、《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》（簡稱《東》）、和《懷特氏等所藏甲骨文集》（簡稱《懷》），大體上殷墟甲骨刻辭原始資料已經齊備。釋文和考釋工作就提到日程上來了。

我們編寫組全體同志，作為古文字的專業工作者，大家都有一個共同的願望，為促進甲骨文字的研究工作，並為甲骨文字資料能得到更為廣泛的利用，做一些我們力所能及的工作。我們的打算是：在一九九零年以前，陸續完成《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》、《殷墟甲骨刻辭類纂》、《甲骨文考釋類編》、《甲骨文選》等四部著作。這四部書是一個完整的系列，可以相互補充。

《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》（簡稱《摹釋》）雖是一個初步的，卻是基本的整理和釋讀工作。包括目前已經著錄的全部甲骨刻辭資料，即《甲骨文合集》、《小屯南地甲骨》、《英國所藏甲骨集》、《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》和《懷特氏等所藏甲骨文集》。要想購置全部上述資料，不是一般人力所能及的。而《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》更屬非賣品，國內不易見到。承松丸道雄先生厚意相贈，謹此深致謝意。

有了《摹釋》之後，有關學科的專業工作者就有了能夠充分利用甲骨刻辭的條件。

甲骨刻辭資料零碎而浩繁，即使解決了釋讀上的困難，要想從五萬餘片原始資料中尋繹出所需用的有關資料，還不是那麼容易的。

《殷墟甲骨刻辭類纂》主要就是想解決檢索資料方面的困難。過去大家所利用的有關工具書是島邦男的《殷墟卜辭綜類》，這是花費了島邦男氏畢生精力，具有創新精神和獨到見解的有很高實用價值的

專著。可是在目前看來，這部書有兩點不足。一是衹有「摹」而沒有「釋」，不懂甲骨文的人無法加以利用。一是現在資料增加了很多，尤其是《合集》出版後，舊有的著錄號已不能適應目前的需要。基於上述，必須重新編纂一部新的有關的工具書。

限於體例，我們在《摹釋》中不可能申述我們釋讀的依據和見解，而歷來文字考釋的分歧意見也有待於加以總結和提高。我們將在《甲骨文考釋類編》中解決這一問題。這部書是思泊師在世時主編的。我們作為他的學生，將全力以赴地完成他的遺願。

至於史實的探索，辭例的詮解，分期分組的確定，我們將在《甲骨文選》中充分表達我們的見解。

我們的具體目標是：

一、通過這一系列工作，對甲骨刻辭資料進行全面而系統的整理，總結原有的研究成果，促進現有研究水平的進一步提高。

二將甲骨學的研究成果推廣到其它各有關學科，以便歷史學、考古學、社會人類學、語言文字學等學科能充分利用甲骨刻辭這一寶貴資料。

三探索整理研究我國古代典籍文獻的新途徑，新方法和新方向。

在《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》這部書中，我們的具體作法是：

一 關於資料的處理

我們所收錄的資料包括

《甲骨文合集》四一九五六片
《小屯南地甲骨》四五八九片加上附錄二三片、補錄一四片，共四六二六片。
《英國所藏甲骨集》二六七四片。
《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》一三一五片。
《懷特氏等所藏甲骨文集》一九一五片。

總計五二四八六片。

實際上《合集》本身有少數是重複或可以綴合的；《合集》與《英》、《東》有大量是重複的。總數大約為五萬片左右。

《合集》第十三冊為摹本，其中大量與《英》重複，這些《合集》摹本我們根據《英》的拓本在摹寫時進行了校訂。《合集》的摹本大多數是來源於《庫》和《金》的摹本。原摹寫多有誤，我們儘可能地對照拓本加以補正。

例如

《合集》三九九一八「余勿呼禦方」，「方」字誤摹作「𠀉」，多出一筆，即不成辭。今據《英》六二〇拓本改正作「方」。

又《合集》三九九〇八貞人名誤摹作「呂」，今據《英》六二六改正作「四」。

但與此同時，我們也十分重視摹本的參考價值。無論是庫壽齡還是金璋，都曾親自接觸到原甲骨片。這些原片在長期保管的過程中有的略有殘損，有的字跡變得模糊，我們就可以據摹本以補拓本之不足。如《英》六一三拓本「乙未卜，殼貞，大甲呼王敦衍，十月」。「甲」字僅殘存作「一」。《合集》三九九二五摹作「大十」是正確的。《合集》三九九二四與此同文亦可證。但三九九二四摹「辜」作「缶」亦誤。

二 有關釋讀的若干說明

我們採取摹本與釋文相對照的形式，儘可能地吸收現有的研究成果，根據我們自己的判斷作出恰當的抉擇。限於體例，不能作任何注釋或說明。

1.凡通假字，逕書借字，不書本字。如干支字「早」逕隸作「巳」。「𡆥𡥆」逕作「娩嘉」，而不作「冥劫」。但地名則作「冥」。「𠂤」逕作「婦」，而不作「帚」。「品」、「㞢」、「㐅」依照辭例分別隸作「㞢」「有」「祐」、「侑」、「又」、「右」。「畢」於動詞作「擒」，於人名則作「單」。「𢀛」逕讀作「推」，但於人名則作「敚」。「𩃬」逕讀作「霧」而不作「𩃬」。「隹」、「叀」逕讀作「唯」、「惟」。如此等等。

2、所有合文，依原篆摹錄。但隸釋則分書。如「𤘘」、「𤚩」均讀作「三牛」、「四牛」。「十」、「九」分別讀作「七十」、「九十」。「𤘘」讀作「勿牛」而不讀作「物」或「物」。但「牝」、「牡」、「𤘍」、「𤛔」等，我們認為亦屬合文，然而隸釋分書反而徒增困擾，故隸釋亦合書，此亦不得已的變通辦法。

3、凡一字兩用者，如大家所熟知的「大甲申」、「大乙未」之類，均讀作「大甲甲申」、「大乙乙未」。《合集》一七四一七「于二父己父庚吉」，「二父己」讀作「二父父己」。我曾經說過，卜辭一字兩用僅限於干支字，現在看起來，祖妣之類的稱謂字亦有一字兩用之例。

4、凡確知為異體字者，均隸釋為統一之形體。如「𦍌」、「𦍋」、「𦍋」均作「羌」，「𡿧」、「𡿧」均作「俘」，「田」、「𤰔」、「𤰔」均作「上甲」。其它如「㪅」、「衛」、「賓」等等，亦如此之類。

5、凡已確知後世文字已混同為一，而在甲骨文區分甚嚴者，則在形體上保存其區分。如「牝牡」與「𤛔牡」、「𪊽牡」；「豭」與「猳」；「牢」與「𡧛」之類。

6、凡已確知原刻有誤者，均在釋文中加以改正。如《合集》一五八一六「丁酉卜，來丁來酢王」，「丁來」顯然是「丁未」之誤刻。又如《屯南》八六六「癸午」顯然是「甲午」之誤刻。又《合集》三七六五一「戌戌」顯然是「戊戌」之誤刻。原篆均照摹，而在隸釋中加以糾正。

7、凡字形有殘泐或缺刻橫畫者，在摹錄時儘可能加以補足。

8、凡辭中個別形體倒書如𨒪、𡨄、步之類，摹寫存其原式。隸釋則作「侯」、「室」、「婦」。而骨面刻辭有全辭均倒書者，如「矣乞寅骨三」之類，摹寫時均逕作正書。

9、甲骨有削去舊有文字，重新加以契刻者。此類情況《屯南》較多，有的時候削治未盡，原有文字猶依稀可辨。在一般情況下，均略而不錄。

《合集》一七八七〇原有一「𢊁」字，後又在此字上刻一「高」字，兩字相重疊。原著錄於《南南》二、一五九，系摹本。如將此重疊之兩個字形摹在一起，則不成字。拓本可以分辨其層次，今分別加以摹錄。「囚」字下層似有一「牛」字，不甚清晰，從略。

我們釋讀總的原則是　科學性是首要的。在此基礎上我們強調其通俗性。目的在於使甲骨學界以外的各有關學科都有可能利用這一珍貴資料。與此同時，我們也有一定的靈活性。上述的各種體例並不是在任何情況下都一成不變的。例如：甲骨文中「凶」、「𡇍」、「𡇒」、「𡆧」、「𦥑」、「𦥒」是各有專指的，但我們均依通假的原則一律釋作「陷」。而人名的「子𦥑」則不能作「陷」，衹能隸作「𦥑」。「沈」字或從「牛」、或從「羊」，或從「牢」，在當時是有區別的，隸釋衹能統一作「沈」。「埋」字也是如此。同時，「埋」字也不書作「薶」、或「霾」，我們認為既然以今字代古字，作「埋」就更徹底一些。但是，作「沈」而不作「沉」，則是為了避免誤解。不能執着一端，這就是我們在隸釋過程中不能不具有一定靈活性的原因。

三、分期問題

甲骨學界對於甲骨刻辭的分期研究日趨深入和嚴密。傳統的五期分法尚有缺陷。所謂祖庚、祖甲的第二期刻辭，實際上有的是可以區分的。而大多數祖庚刻辭與第一期的武丁刻辭又是難以嚴格區分的。刻辭中帶有明確稱謂的終究是少數。在通常情況下我們所賴以分期的依據是字體及貞人組。有些貞人按五期分法就存在跨期的現象。字體的靈活性亦較大，康、武、文在缺乏稱謂的情況下有時就難以區分。所謂「歷組」刻辭，實際上僅有「歷」一人，不能成「組」。而且帶有貞人「歷」的刻辭為數很少，大多數是依據字體來加以判斷。字體的特徵可以上延，也可以下延，學者們對「歷組」刻辭的範圍，在認識上也有出入。而「歷組」究竟歸屬於哪一個時代，分歧更大。所有這一些，都需要用大量的篇幅進行詳細的論證。我們將在《甲骨文選》中闡明我們的意見。在《摹釋》及《類纂》中，我們衹是按原書的分期，這並不表明我們同意其分期的標準。

四、關於兆辭的處理

一條完整的刻辭，包括有「前辭」、「貞辭」、「驗辭」。而大多數刻辭並不具備這些完整的形式，多有所省略。而「兆辭」的性質，則是貞人對卜兆所作的附加記錄。「茲用」、「不用」、「不告黽」、「二告」、「小告」等均屬於「兆辭」之類。實際上「兆序」也屬於「兆辭」的範圍。有時「茲用」也列入完整的刻辭之內，多在驗辭之前。對於這種情況，我們則不視之為「兆辭」。「兆序」，包括所謂「成套刻辭」的序號，我們一概不錄。可以歸附的「兆辭」，我們均列入該辭條之下，空一格以示區別。不能歸附的均單列。

五、關於僞刻、習刻

僞刻和習刻在一般的情況下是可以區分的。《甲》、《乙》、《屯南》均為科學發掘出土，不存在僞刻，祗有習刻。傳世甲骨，則多有僞刻。早期僞作，容易予以判定。隨着辨僞研究工作的深入，稍晚的僞刻甲骨，則易於亂真。這是由於早期作僞者對甲骨刻辭本身的規律特徵缺乏認識，祗是胡亂地拼湊一些文字形體，於其行款格式，形體結構，辭語組合均舛午乖戾，一目瞭然。稍晚僞刻，則多據真辭為藍本，依樣畫葫蘆。此類僞刻，如果單純依靠摹本是難以判斷的。

《合集》第十三冊摹本，有大量僞刻或部分僞刻。對於僞刻，我們採取較為嚴格和謹慎的態度。

《合集》三九八九六與三九八九七可綴合，即《庫》一五九七和一五五四。現在《英》五八七有綴合之拓本，可以確定其為僞刻。書法拙劣，很多字的形體結構已失去原貌。乃據《合集》三九九八五正，即《英》五八八而僞作。島邦男對此類僞刻，在當時就無從分辨而收入《殷墟卜辭綜類》。

《合集》拓本極個別亦有僞刻。如一二四一即是。其「唐」字誤書作「曾」，且出現「大己」，為卜辭所無。僞刻無疑。

凡僞刻、部分僞刻、習刻均加注明。《類纂》不予收錄。

六、關於重出及綴合

《合集》間有前後重複者。甲骨零散，校重是一件不容易的工作。偶有發現，立即刪去。全面的校重工作，留待《類纂》的編寫時進行。綴合是一種專門性的研究工作，難度更大。我們不準備在這方面花費太多的精力。偶爾有所綴合，均加注明。

參加本書編寫的，除由我和肖丁分任主編、副主編外，編輯的具體分工是：

何琳儀　《合集》第六冊、第十一冊
吳振武　《合集》第一冊、第九冊
黃錫全　《合集》第三冊、第八冊
曾錦炎　《合集》第五冊、第七冊及《東》和《懷》
湯餘惠　《合集》第二冊、第十二冊
劉　釗　《合集》第四冊、第十冊及《屯》

《合集》第十三冊及《英》由何琳儀、吳振武、黃錫全、湯餘惠共同擔任。

隸釋的鈔錄工作由王少華擔任。

本書在編寫過程中，得到全國高等院校古籍整理研究工作委員會的基金資助，同時還得到中華書局、浙江省博物館、武漢大學、九江市博物館等單位的大力支持。在此，我們對上述單位表示深切的謝意。

一九八六年六月姚孝遂識於杭州之文瀾閣

（原載《古文字研究》第十九輯，中華書局，一九九二年）

《甲骨文與書法藝術》序

饒宗頤

香港中文大學中國文化研究所

門人黃君孕祺以其論文《甲骨文與書法藝術》授梓，殺青既竟，喜而爲之序曰：甲骨學之興，及今已逾九十年。其始以資料散布四方，學者忙於蒐討、著錄，提供未寓目之新資料；其出土實物，小屯及南地、周原，次第整理問世。又以著眼於分期、斷代諸問題之董理，浪費許多時間，近年方有《合集》、《摹釋》、《類纂》諸書，取得第一步之總結。

談到書法，一向囿於董氏五期之說，以雄偉、謹飭、頹靡、勁峭、嚴整作爲各期個別特徵。實則五種風格，每一時期均有之，強立畛域，不免刻舟之誚。過去依據貞人以立斷代標準，目前已知貞人稱謂原多爲地名，論據昭彰，不得視作人名。故有主張斷代須觀其大體者，實則仍以字體爲主要依據。故對書法問題，作深入之研究，尤爲當務之急。黃君此作，其重要性益可知矣。

曩者，余曾倡分人分名研究法。黃君採用分名理論，舉扶與勹二名，作爲研究對象。分析結果，說明同一名之下，書風實殊多變，不泥於一格。君提出四種範式、八種書風，可備一說。扶之書體，即八者具備。其他方、爭名下，大量刻辭，間有小字者，余曾略舉一二，以見其凡。可惜君書僅揭二名爲例，未能遍及其他人物。他日更事研討，所得必不止於此。然所得結論，已打破以前呆板之分期框架，覓得另一出路。

君書由歷史觀點轉入藝術角度，於書契工具、形構結體、筆意風神，無不詳細探究，諸多創獲，所造倍蓰於前人；而論地域風格，更爲過去所未措意者，尤爲突出。余一向以爲由於鍥刻物體之不同，其書體亦因之顯示差異。若鹿角刻辭，極近金文結體，初看頗似武丁書風，賴其記明祀文武丁，得知爲晚期之物，但迥非如第五期之嚴整，故知純由書體以斷代，亦非易事。由殷墟到周原，字體丕變，潦草欹側，怪譎奇肆，不受約束，已脫離整龜骨板形體規律之限制，大小任意刻劃，形成契文行押、書、草書一路。我在周原博物館顯微鏡配備之下目覩長骨條一板，長行密字，纖細刻鍥中尚見行氣之神采飛越，洵爲書契極品。當日書手造詣之高，出乎想像之外，良不可及。是時占卜之制已衰，而契刻者可不著意，迅手肆筆，彌見功力之深。周原細字非眼力所能辨，鍥書奏刀，遊縱變化發其胸中之奇，已忘工具之運用，心行而已。冀

《甲骨卜辞》序言

（美国）白瑞华著　苏秀菊译

这本书中收录是甲骨是库寿龄（Samuel Couling，英国人——译者注）、方法敛（Frank Herring Chalfant，美国人——译者注）收集的。他们于*1904——1908*年在山东潍县从古董商手中购买，方法敛曾简略的用数字予以编排。当时他们并不知道这些甲骨出自商朝后期都城遗址，河南安阳小屯附近的殷墟。方法敛的器物图附于此，还有他的*670*块哺乳动物骨片摹拟图，*1016*片甲骨及一个鹿角，共*1687*片。这些甲骨分藏于在4个博物院：英国两个，美国两个，书中逐条列记此事。不论藏在哪个博物院，全部收集均用C表示。

此外，库、方二人还宣称以同样的渠道从商贩手中还购买了许多有字甲骨，但现在得知其中不少是赝品。所以，这些所谓“护身符”此书未收录，因此在数字上留下空缺。这里刊载的是安阳殷墟出土的甲骨文的典型代表。这些刻字的，特别是大块的刻字甲骨和鹿角，是他们从古董商那里购买的全部甲骨，经谨慎的选取。对每片甲骨我不能逐一详述。我亦没有看到科亚尔・斯科蒂什和卡内基的收集，仅在3年前粗略的看了看其他部分，当时根本没有想到后来有机会编辑出版。这样审慎分辨编辑需用几年的时间，而方法敛的图等待多年未出版。

方法敛为西方人士中辩认与利用甲骨文研究中国古文字之第一人，他在专著《中国原始文字》中向西方介绍研究成果，书中第4部分即在殷墟发现的甲骨文。此文作为卡内基博物院研究的一项目，于*1906*年在匹兹堡发表，比*1903*年在上海出版的中国第一部甲骨文著作《铁云藏龟》晚3年。

此后，方法敛开始研究甲骨文，在他任牧师时，只要时间允许，他就倾心研究甲骨文。*1911*年在青岛遭不幸事故，遂半身瘫痪。直到*1914*年1月*23*日去世仍未中断对甲骨文的研究。撰写了大部头的著作《甲骨文》。他的朋友贝托尔德・劳弗（Berthold Laufer）积极周旋此书的出版，而卡内基博物院的主任W・J霍兰（W.J.Holland）拟定了在英国出版此书的计划。在8年的准备工作中一直与他通信的金璋（一译霍布金斯，Lionel C Hopkins），也多方鼓励他。此计划因*1914*年欧洲战争（指第一次世界大战）的爆发被迫搁置。书稿在菲尔德博物院放置*20*年，一直由劳弗保管到*1934*年去世。尔后由我保管。直到现在书稿的大部分并不过时，我先选库、方二氏收集的*132*件器物图出版。

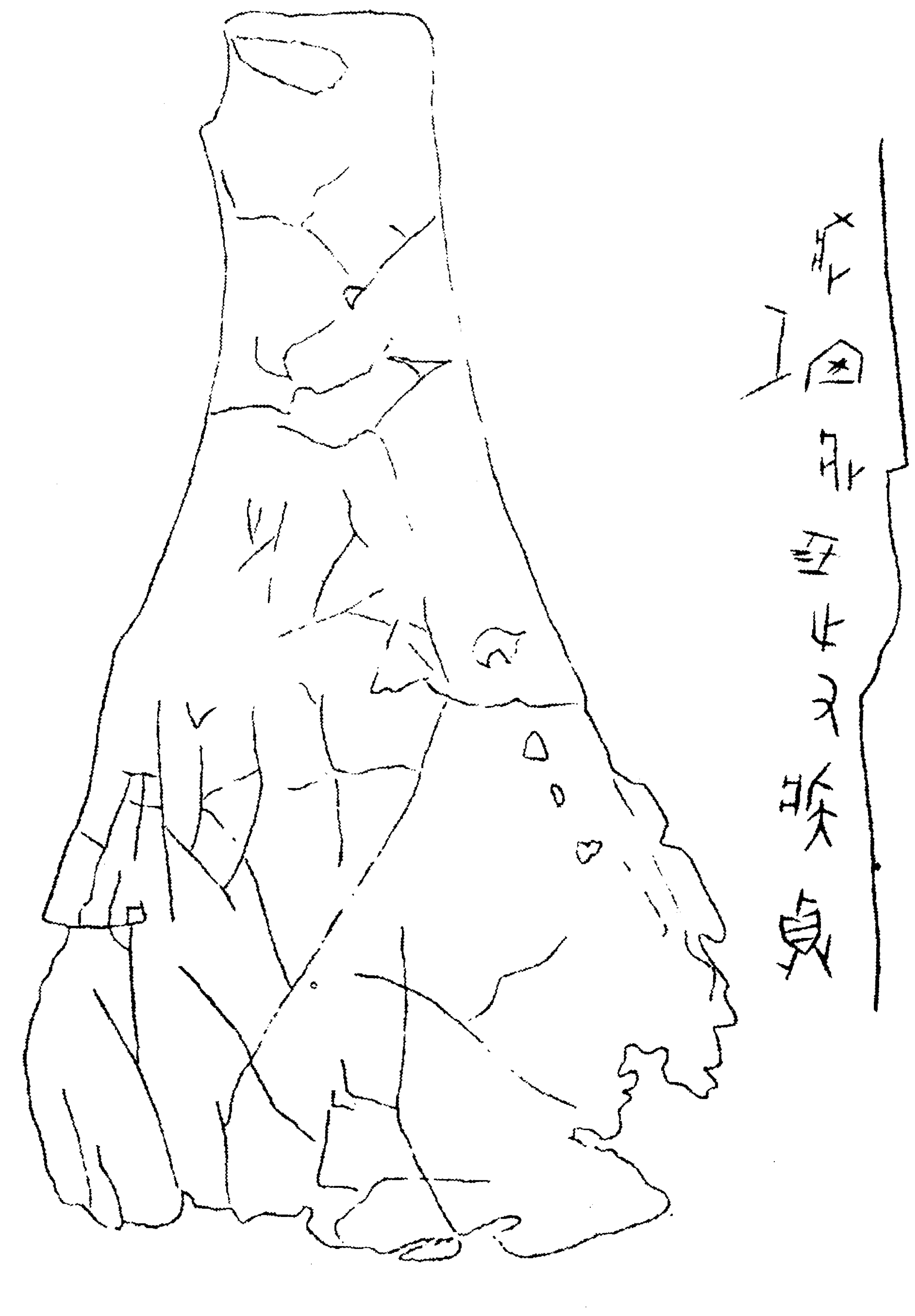
我感谢方法敛和爱德华・方法敛（Edward N. Chalfant）把书稿委托于我出版。承蒙使中国古文字在西方汉学界传播的金璋的鼓励。卡内基博物院继续支持这一工作，阿维尼奥弗（A・Arinoff）主任和尤金尼亚・姆斯卡拉（Eugenia Mccalla）先生大力帮助。罗杰・豪森（Roger Howson）和珍妮特・博加斯德（Janet Bogardus）协助妥善保管此文稿。王云五为适应其主要目的，从事这集子的出版，使这些国外的收集有益于从事殷商史研究的中国学者。

*1935*年*11*月4日于上海

说明：此序言英文稿是美国加州大学伯克利分校吉德炜教授复印惠赐，在此表示感谢）

（原載《殷都學刊》1992年第1期）

賢論篆有草篆，隸有草隸，余謂周原契文，應是草契，誰曰不宜！書道有碑學、有帖學，當再增一路曰契學，可以君書導夫先路。周原之物一豁心眼，聞近時洹水復有新獲，塗轍更當大啓，謹拭目以俟之。春秋以後，契龜已成强弩之末，惟山西洪洞有卜骨疾貞之文，書風尤奇詭可喜，往日陳君煒湛以摹本見詒，今附於末，以供治契之參考云。



1954 年洪洞出土卜骨摹本　原骨長 40.5 厘米，寬 6.9 — 20.8 厘米

（原載《中國語文通訊》第19期，1992年）

中国夏商文化国际学术研讨会开幕词

胡厚宣

在我发言以前，首先想到我们中国殷商文化学会的顾问徐中舒教授和商承祚教授，不幸于今年1月和5月先后逝世，无任痛悼，为了表示对他们深切的怀念，建议全体起立，默哀一分钟。

朋友们，同志们，我们国家自从执行改革开放的政策，十几年来，学术界空前活跃，百花争艳，非常繁荣。这次会议是我们中国殷商文化学会和河南省洛阳市几个单位共同发起，现在单就与夏商历史文化有关的学会而言，就大有可观。

首先是中国古文字研究会1978年11月在长春成立，1978、1979、1980、1981、1984、1986、1988、1990，在长春、广州、成都、太原、西安、长岛、太仓等地共开了8次大会，每次出席人数从51人到148人，论文从33篇到123篇，现在《古文字研究》已经出到第17辑。

中国考古学会1979年4月在西安成立。1979、1980、1981、1983、1985、1986、1989，在西安、武汉、杭州、郑州、北京、沈阳、长沙等地，共开了7次大会，出席人数从106人到128人，论文从70篇到128篇，论文集已经出到第六集。《考古学年鉴》从1984年已经出到1989年。从9月14日起正在内蒙古召开第八次大会。

中国先秦史学会1982年5月在成都成立，1982、1984、1986、1989，在成都、开封、长春、淮阳、郑州等地，共开了4次大会，出席人数从100人到148人，论文从100篇到106篇。《先秦史研究动态》已经出到第18期。从11月11日起即将在上海、无锡召开第五届大会。

中国殷商文化学会成立较晚，1984年10月在安阳成立了筹备会，1987年9月又在安阳正式成立了中国殷商文化学会。几年之间，仅在安阳这个殷墟所在地甲骨文的故乡就一连开了4次会议。

1984年10月在安阳召开了全国商史学术讨论会，出席108人，论文60篇，会后出版有《全国商史学术讨论会论文集》。

1987年9月在安阳召开了中国殷商文化国际学术讨论会，出席135人，内有外国学者29人，论文109篇，会后出版有《殷墟博物苑苑刊》。

1988年10月在安阳又召开了纪念殷墟科学发掘60周年学术座谈会，出席40人，论文6篇。

1989年9月在安阳召开了殷墟甲骨文发现90周年国际学术讨论会，出席107人，内有外国学者14人，台湾学者1人，论文69篇。会后在《中原文物》出版有《殷墟甲骨文发现90周年国际学术讨论会专辑》。

关于夏商文化历史和中国古文字的研究，也是国际间非常重视的学科。除了在国内举行的学术会议常有一些外国及港台学者参加之外，在国外也常举行一些会议。

1982年9月在美国夏威夷东西中心曾举行商代文明国际讨论会，出席50人，国内学者有10人参加，论文32篇，会后出有论文集。

1983年9月在香港中文大学曾举行国际中国古文字研讨会，出席33人，我们国内学者有12人参加，论文37篇，会后也出有《古文字论集》。

1990年5月在美国洛杉矶加州大学曾举行夏文化国际研讨会，出席30余人，我们国内学者有7人参加。

这些会议，各国学者，相互了解，相互交流，在夏商历史文化和古文字的研究方面起了极大推动作用。

从1950年至今，甲骨学殷商史的研究，曾经盛极一时，近10多年来，由于国际学人的相互交往，由于《甲骨文合集》和《小屯南地甲骨》及其他国内外大部头著作的不断出版，研究工作，更加深入了一步。关于甲骨学商史的论著，前曾有人统计3000余种，也有人统计5000余种，最近看到上海古籍出版社的出书预告，有一部《甲骨文与商史论著目》，达320页，66万字，盛况空前。

随着郑州二里冈遗址和偃师二里头遗址的发现，早商文化和夏文化，特别是有关夏代历史文化的研究，又成为考古学和历史学科的热门。除了分刊在《文物》《考古》《考古学报》《考古与文物》《中原文物》《历史研究》《中国史研究》《史学月刊》等期刊的论文之外，像《夏商周考古论文集》，《夏文化论文集》，《华夏文明》，《夏史论丛》，《夏史初探》，《夏商史稿》等类的专著，也不一而足。有人编辑建国以来有关夏史夏文化的论著，到1983年为止，就有422种之多，根据《中国历史学年鉴》，除了专书之外，单是专讲夏史的论文从1978～1987年，有123篇。最近听说一位外国学者，搜集国内外关于夏代历史文化的论著目录逾1000种，其盛况更是可以想见。

1987年9月在安阳召开的中国殷商文化国际学术讨论会，除了大会发言之外，小组讨论共分三组，一是殷墟甲骨组，讨论的问题是：甲骨文的卜法和文例；甲骨文的方国和地理；甲骨文的田猎卜辞；甲骨文是否问句的问题；甲骨文字的考释；周原甲骨的族属问题。

二是殷商考古组，讨论的问题是：商代的建筑技术；商代的车马问题；商王朝文化与周围文化的关系；商代的城市与王都；商代的经济；传世商代铜器的真伪问题。

三是殷商历史组，讨论的问题是，商族的起源；商王继承制度与庙号问题；商代的社会性质与社会制度；商代的天文历法与年代；商代的都城问题，商代的思想意识等等。

1990年5月在美国洛杉矶召开的夏文化国际讨论会，讨论的问题：夏代的历史；夏商年代；夏代考古；先夏、夏、及先商文化、夏代的漆器、玉器和铜器，各个方面也都包括了诸多问题。详见《中国史研究动态》1990年第8期和《人文杂志》1991年第4期的有关报导。

总之，这些年来，学术界非常繁荣，尤其夏商历史文化的研究，已经取得了很大的进展，极有利于我们国内外的专家学者，在今天欢聚一堂，开展这样一个对于夏商文化的研讨大会。今天到会的专家学者，南自广东、北至黑龙江、西到四川，东到山东，尤其令我们欢欣鼓舞的是今天有几位从台湾、香港来的专家，还有从英国、加拿大、美国、日本、意大利等国前来的专家学者，对所有这些国内外的专家学者，我们谨致以崇高的敬礼和热烈的欢迎。

这次大会希望专家们畅所欲言，积极讨论，互相切磋、互相琢磨、互相启发、互相促进，把夏商历史文化的研究工作推向一个更新的高峰。

最后预祝大会开得圆满成功，并祝朋友们身体健康，精神愉快！

（原載《殷都學刊》1992年第1期）

關於《小屯南地甲骨》的讨论

——答蕭楠同志

裘锡圭

《書品》1989年第2期發表了蕭楠同志《關於〈小屯南地甲骨〉之體例及其相關問題——答裘锡圭同志》一文，對我在《書品》1987年第3期上發表的《讀〈小屯南地甲骨〉》作了反批評。讀後覺得他們的有些批評是我應該接受的，但是大部分意見却是有問題的，下面分項加以說明。爲節省篇幅把蕭楠同志的文章簡稱爲“蕭文”，我的文章簡稱爲“拙文”。

我應該接受的批評有三點。

1.拙文指責《屯南》前言把不是賓组的卜辭作爲賓组的例子舉出來，但是對真正的賓组卜辭却不加指出；並懷疑“這樣做是不是有什么隱衷”（5—6頁）。蕭文承認把《屯南》4575定爲賓组卜辭“確是欠妥”，但是指出在《屯南》前言中完全没有必要提到非典型地層所出的賓组卜辭，這樣做“決没有什麼隱衷”（19頁）。他們的意見顯然是正確的。我指責他們不應對真正的賓组卜辭不加指出是没有道理的，任意懷疑這裏面“有什麼隱衷”更是十分錯誤的。

2.蕭文批評我未見拼接原物就懷疑1411和3053兩片的綴合，“未免太主觀”，我也接受。既然没有充分把握，就不應該隨便提出懷疑。不過拙文只說“有一些可疑”（8頁），蕭文却說我“斷言”他們“有錯”，並且在“有錯”二字上加了引號（25頁）。這是不够嚴肅的。

3.蕭文批評我在指出了《屯南》的一些技術性錯誤之後，還說“我們没有注意到的技術性錯誤恐怕要比已經注意到的多得多”，是不嚴肅的，“你既然還没有注意到，怎麼就知道‘没有注意到的’要比‘已經注意到的’多得多呢？”（25頁）。這個批評我也接受。我在那裏其實只應該指出，我還没能把《屯南》全書一個字一個字地讀一遍，因此不能爲它作一個全面的勘誤表，而只能舉出我注意所及的一些例子。

下面對蕭文中我所不能同意的那些意見分別加以討論。

1.蕭文認爲《屯南》已經“以地層爲依據”“確立了所谓‘歷组’卜辭爲武乙、文丁卜辭”（18頁）。如果蕭文所說的是事實，不但拙文對《屯南》的不少批評根本不應提出，而且所有主張歷组卜辭屬於武丁祖庚時期的學者的論證，就都是不顧事實的癡人說夢了。可是事實恐怕跟他們所說的有距離。

蕭楠同志由於我“對田野考古發掘和考古報告編寫體例、程序不明”（蕭文16頁），在文章裏用了不少篇幅來說明他們“嚴格地按照田野報告的整理方法整理小屯南地甲骨”的過程，想以此來證明他們對歷组卜辭時代的看法不容懷疑（同上17—18頁）。他們的工作究竟嚴格到什麼程度，只有在詳細的發掘報告發表之後别人才能看得清楚，目前無法加以討論。但是有一點必須指出。弄清楚跟小屯南地甲骨有關的層位現象是一回事，根據整理出來的層位

現象對有關甲骨的時代下判斷是另一回事。前一件事做得正確，並不意味着後一件事也必然做得正確。認爲《屯南》還沒有“確立”歷组卜辭爲武乙文丁卜辭的人，除了我這樣的考古學的門外漢，還有被公認的考古學者。我想這些學者總不至於也“對田野考古發掘和考古報告編寫之體例、程序不明”吧。

爲了討論的需要，不得不先花些篇幅介紹一下蕭楠同志斷定歷组卜辭爲武乙文丁卜辭的地層根據。《屯南》前言指出1973年小屯南地出甲骨的地層與灰坑可分早、中、晚三期，“早期大約相當於大司空村一期”，“中期約相當於大司空村三期”，“晚期約相當於大司空村四期上半葉”（17頁）。其中，中期又可分爲時代較早的中期一组和較晚的中期二组（19頁）。“早期地層與灰坑出自组卜辭、午组卜辭”（17頁）。“中期地層及灰坑所出卜辭除少量的武丁卜辭外，其餘的大多數卜辭”可“分爲三類”。第一類是所謂“康丁卜辭”。第二類是有大量“父丁”稱謂的一種卜辭。第三類是主要稱謂爲“父乙”的一種卜辭，但是此次所出“只751（H23：104）一片有父乙稱謂”（20—21頁）。前言所說的第一類卜辭相當於李學勤同志所说的無名组卜辭。第二和第三類卜辭相當於李學勤同志所說的歷组卜辭。其中，第二類大致相當於林澐同志所說的歷组二類，第三類大致相當於林澐同志所說的歷组一類（見林澐《小屯南地發掘與殷墟甲骨斷代》，《古文字研究》9輯130—131頁。以下簡稱此文爲“林文”。歷组卜辭內部應據字體而不應據稱謂分類。林文已指出有一些有父乙稱謂的歷组卜辭，其字體顯然屬於歷组二類。李學勤同志在提交中國古文字研究會第六届年會的論文《殷墟甲骨分期的兩系說》中又指出，《屯南》前言據字體列爲典型父乙類卜辭的《屯南》4103，從其“正召方”的內容看却顯然跟某些有父丁稱謂的歷组二類卜辭同時。可見據稱謂是分不清兩類歷组卜辭的。不過在歷组卜辭裏，父丁稱謂基本上只見於歷组二類，則是事實）。《屯南》前言指出，第一類、第二類卜辭既出於中期一组，也出於中期二组的灰坑與地層。第三類卜辭則只出於中期二组的灰坑與地層。“一组灰坑與地層的時代要早於二组，故第一、二類卜辭的時代要早於第三類卜辭”。“第三類卜辭晚於第一類卜辭，即在時代上晚於康丁，其本身又有父乙稱謂，此稱謂與文獻所載文丁父武乙正相符合，故第三類卜辭只能是文丁卜辭。第二類卜辭在地層上與康丁卜辭共存，早于文丁卜辭……其本身又有父丁稱謂，與文獻記載武乙父康丁正相符合，所以應爲武乙卜辭。”（21頁）以上就是蕭楠同志據以斷定歷组卜辭爲武乙文丁卜辭的主要地層根據。

下面根據上文已經引過的林文，並結合自己的一些看法，說明一下爲什麽不能承認《屯南》提供的層位現象已經“確立了所谓‘歷组’卜辭爲武乙、文丁卜辭”。由於我對考古學是外行，也许會把林文的意見理解錯，我自己的意見出錯的可能性更大。不當之處歡迎蕭楠及其他同志提出批評。

林文说：“我覺得蕭楠同志所堅持的地層根據，並非不容置疑。第一，單就這次發掘來說，出土的有字甲骨號稱五千，但是在比中期二组要早的堆積中，共計才出了71片。其中早期堆積的四個灰坑和兩個探方地層中出17片，中期一组堆積的七個灰坑和一個探方地層中出54片。這個數字和中期二组堆積以後的各單位中所出的甲骨實在不成比例。因此，根據這次發掘的層位現象來判定各類甲骨的年代，只能說某類甲骨出於早期堆積一定是早的，如說某類甲骨不出於早期堆積就一定是晚的，就很不保險。在這次發掘中，連典型賓组卜辭都不出於早期和中期一组堆積，却出於中期二组（H47的屯南2113）及晚期（H57的屯南2390）堆積中，如果根據這種現象來論證典型賓组卜辭中的父乙也是指武乙而將其定爲文丁卜辭，難道是可信的嗎？”（132頁）對這段話需要作一些補充。林澐同志當時是根據《屯南》前言發表的資料作統計的。蕭楠同志在發表於《古文字研究》第9輯的《再論武乙、文丁卜辭》一文中，又舉出了一個屬於中期一组的灰坑—H92（176页表二）。此坑共出有字甲骨三片。前言所舉屬於中期一组的七個灰坑和一個標方地層中所出甲骨的總數，林文統計爲54片，據我的統計則是53片，加上H92坑的三片，共爲56片。這是目前我們所能知道的1973年小屯南地發掘中在中期一组堆積中發現的有字甲骨的總數。H92所出的《屯南》2663屬賓组。所以在這次發掘中，賓组卜辭有一片出中期一组坑，一片出中期二组坑，一片出晚期坑。另一片賓组卜辭，即《屯南》2779出自H118。由於已發表的發掘資料不全，此坑確切時代不明，但不屬於早期則是肯定的，不然《屯南》前言在舉出早期堆積所出的賓组卜辭時就不會以實非賓组卜辭的《屯南》4575來充數了。前言曾指出，1973年的屯南發掘中只“有個別灰坑出有近似大司空村二期的陶片，但數量很少，且不出刻辭甲骨”（22頁）。由此看來，《屯南》2779只可能出自相當於大司空村三期或四期的中期或晚期堆積。總之，林文關於賓组卜辭出土層位情況的說法需要稍作修正，但是這次發掘中賓组卜辭只出自較晚地層這一點則仍是事實。我們所作的這些補充，對上引林文的主旨並無影響。大家知道，歷组一類卜辭的數量比歷组二類和無名组卜辭都少得多。根據中期一组堆積所出的區區56片甲骨中有無名组和歷组二類卜辭而沒有歷组一類卜辭這一點，就斷定後者的時代晚於前者，顯然是缺乏足够的说服力的。

林文接着又说：“第二，這次小屯南地發掘區中，沒有遇到相當於大司空村二期的地層和单位。……自從解放以後把殷墟地層劃分爲大司空村一至四期以來，在大司空村一期堆積層中明確出土的甲骨也就只有這次發掘的17片。至於《1958—1959年殷墟發掘簡報》所報道的大司空村出的那片卜骨，在原報告定爲大司空村一期，據鄭振香同志告知……應定爲大司空村二期。……而大司空村三期前半期堆積中出土的甲骨，也就只有這次小屯南地所得的54片（引者按：應爲56片，詳上文）。總之，解放以來在大司空村三期前半及更早的堆積中一共只出72片（引者按：應爲74片）有字甲骨，而大司空村二期堆積中究竟能出什麽樣的甲骨，尚待解決。在這種情況下，由於這次小屯南地發掘所獲的‘自歷間组’和‘歷组一類’卜辭，都是和其他類别的卜辭混出於中期二组及更晚的堆積之中，就很難說它們一定不是從更早的地層中被翻移到晚期地層和灰坑中的再生堆積。所以單就這次發掘中‘自歷間组’和‘歷组一類’只見於中期二组以上的堆積就認爲其‘父乙’稱谓不可能是武丁之稱小乙而一定是文丁之稱武乙，是缺乏说服力的。”（132—133頁）。這一意見也是有道理的。需要補充的一點是，按照我的看法，在1973年屯南發掘中，中期一组堆積中實際上已經出了自歷間组卜辭。《屯南》前言（19頁）劃入中期一组的H99所出的《屯南》2692，《屯南》釋文定其時代爲武丁。從這一片的書法以及“子”（巳）“未”“不”等字形和卜辭的格式來看，完全可以把它歸入自歷間组。自歷間组、歷组一類、歷组二類這三種卜辭之間有明顯的先後繼承關係（參看林文131、133—134頁）。中期一组堆積既然出了自歷間组和歷组二類卜辭，按理说也完全有可能出歷组一類卜辭。出自另一個中期一组灰坑H72的《屯南》2530只殘存兩個字，组别難定，但是其中的“庚”字的寫法顯然跟歷组一類的常見寫法相合。這是很值得注意的。我相信在將來的屯南發掘中，中期一组堆積一定會出歷组一類卜辭。

蕭楠同志在上文已經引過的《再論武乙、文丁卜辭》一文中（以下簡稱此文爲“再論”），又爲他們的觀點提出了一些地層方面的證據。他們“檢查了解放前殷墟出甲骨的地層關係”（177頁），指出以下兩點：1.村北的乙组基址“大致都是庚、甲至廪、康時期的建築”，基址“下壓的均是賓组、自组、出组等卜辭。假如‘歷组’卜辭是武丁晚期至祖庚時代的卜辭，那爲什麽在這些基址下一片‘歷组’卜辭也不出現呢？村南、村北近在咫尺，又同是王室的卜辭，爲什麽‘歷组’不會進入村北呢？況且，村北是出‘歷组’卜辭的，經正式發掘的大連坑（如《甲》2667）、E52（如《甲》3649）、YH258（如《乙》9064）、YH354（如《乙》9089）等都出‘歷组’卜辭。事實證明：村北是出‘歷组’卜辭的，只不過沒有出在這些基址下罷了。這正說明‘歷组’卜辭要晚於這些基址的時代”（180頁）。2.從解放前所發掘的“小屯部分甲骨坑位卜辭共存情况”來看，“在第一、二、三類（即廪、康以前）的甲骨坑中（引者按：《再論》舉出的這三類坑全都在村北），沒有發現‘歷组’卜辭同賓组、自组、出组、何组卜辭共存。只是在第四類的坑位中（引者按：《再論》舉出的這類坑全都在村中、村南），才有自组同‘歷组’卜辭共存。然而，該類坑位的時代是晚的，自组同‘歷组’發生共存，是早期卜辭進入晚期地層所發生的正常現象……”（184頁）。最後，蕭楠同志總結解放前後發掘所得情况，得出了“在廪康以前的地層和坑位中，沒有發現‘歷组’卜辭”的結論，認爲這是證明歷组卜辭是武乙文丁卜辭的有力證據（184—185頁）。

我認爲蕭楠同志提出的新證據比原來的那些證據更缺乏说服力。凡是研究殷墟甲骨分類分期問題的人都知道，賓组、出组、何组和黄组卜辭主要出在村北，歷组和無名组卜辭主要出在村中村南。這是誰也否認不了的事實。歷组卜辭雖然偶爾也出在村北，但數量極少，就是極力想證明村北也出歷组卜辭的蕭楠同志也只找出了四片。村北出土的甲骨的總量已超過十萬片。十萬跟四是太不成比例了。在這種情况下，怎麽能由於歷组卜辭沒有出在村北的乙组基址下，或是沒有在村北的所谓一、二、三類甲骨坑中“同賓组、自组、出组、何组卜辭共存”，就斷定它是晚期卜辭呢？

還有一個問題也必須指出，要斷定“在廪康以前的地層和坑位中沒有發現‘歷组’卜辭”，按理必須證明村北分别出《甲》2667、3649、《乙》9064、9089這四片歷组卜骨的四個坑，也都是晚于廪、康時代的堆積。但是蕭楠同志並沒有這樣做。我們可以來看一下這四個坑的情况。《甲》2667是第三次發掘時出自“大連東”坑的（石璋如《殷虛文字甲編的五種分析》，台北史語所集刊53本3分419頁。以下簡稱此文爲“分析”）。此坑還出黄组卜辭，沒有問題屬於晚期。《甲》3649是第五次發掘時出自E52坑的，此坑只出了這一片甲骨（同上427頁。本文所说的“甲骨”一般指有字甲骨）。石璋如在《分析》中說：“E39，E52，在E區的東部，相去較近，與甲二基址有關，他們雖然是一坑出甲，一坑出骨，但同是第四期的東西。”（430頁）E39出《甲》3575、3576兩片卜甲，字體近於自组，3576上還有自组、賓组常見的稱谓“兄丁”，它們顯然是屬於武丁時代的。石氏襲用董作賓的分期法，所以把這兩片卜甲和《甲》3649那片歷组卜骨都說成“第四期的東西”。石氏在《殷虛建築遺存》裏把E52跟E16都列爲甲二基址的“傍窨”（320頁）。E16是第四次發掘中發現的一個著名的甲骨坑，其時代不晚於祖庚祖甲。蕭楠同志也说E16坑“就發掘的地層和陶器看是較早的，相當於殷墟文化二期”（《再論》183頁）。從跟E52關係比較密切的E39和E16的情况來看，E52的時代是有可能早於廪辛康丁的。當然，由于我們沒有掌握具體的地層情况和同出器物等資料，還無法肯定這一點。但是如果要想斷定它的時代晚於廪辛康丁，那就更缺乏根據了。除非先肯定歷组卜辭是武乙文丁卜辭，而這一點正是蕭楠同志想根據層位現象來證實的。《乙》9089是第十五次發掘時出自YH354坑的。此坑只出了這一片甲骨（見董作賓《乙編》自序所附登記號與坑位對照表）。《殷虛建築遺存》把這個坑列爲丙一基址的四個“傍窨”之一（322頁）。其他三個“傍窨”是出近於自组的《乙》9023的H362、出午组的《乙》9036和9037的H448、出近於自组的《乙》9094的H367。這三個坑所出的都是早期的卜辭，其時代都有可能屬於較早的時期，所以H354也不是沒有屬於較早時期的可能的，至少我們還沒有證據斷定它的時代晚于廪辛康丁。《乙》9064是第十五次發掘時出自YH258坑的，這個坑也只出這一片甲骨。關於這個坑的時代，我們還沒有找到可供討論的資料。其實，即使村北出歷组卜辭的四個坑全都屬於晚期，也不能排除歷组卜辭並非晚期卜辭的可能性。主要出於村北的賓组卜辭，其時代屬於早期是决无問題的。可是1973年屯南發掘中所獲的四片賓组甲骨却全都出自較晚的地層。這就很好地说明了這一點。總之，村北發掘所得的情况是不能證明歷组卜辭屬於晚期的。

那麽解放前村中村南發掘所得的情况是否能證明這一點呢？我們可以看一下《再論》在這方面所作的具體論證。《再論》在“解放前小屯部分甲骨坑位卜辭共存情况簡表”中列出了村中村南出歷组卜辭（包括一類、二類，表中稱爲武乙文丁卜辭）的四個坑，稱之爲第四類坑（182頁）。其中，F27只出歷组卜辭，F24還出無名组卜辭（表中稱爲康丁卜辭），F31和37還出自组和無名组卜辭。《再論》在討論這些坑的時代時说：“第四類中的各坑，都是第一次發掘的，由于缺乏經驗，故發掘的資料缺乏科學的坑位、層位關係依據。該類中的各坑，地處小屯村中和村南，與73年屯南發掘之地相鄰，且坑中卜辭共存情况也與《屯南》大致相類，故73年發掘的情况可以供參考。例如F35，出有三片武乙卜辭（歷组父丁類，因該坑只出一種卜辭，故表三未列入），並同時出有陶器，與小屯南地中期坑所出相近，估計其時代也大致相同。至於表中的F24、F27、F31、F37，其上限不得早于文丁時代，或與小屯南地中期二组的時代相當。”（183—184頁）原來這些坑並無科學的發掘資料，其時代主要是參考73年發掘所得的情况推定的。爲什麽F24等四個坑的時代，“其上限不得早于文丁時代，或與小屯南地中期二组的時代相當”呢？難道僅僅由於73年屯南發掘所得的少量出自中期一组堆積的甲骨中沒有歷组一類卜辭，就能斷定第一次發掘中出這種卜辭的坑也都必然不屬於中期一组嗎？如果是由於認爲“歷组父乙類”卜辭是文丁卜辭而如此斷定時代的話，就更不合理了。蕭楠同志不是說他們是“以地層爲依據”“確立了所谓‘歷组’卜辭爲武乙、文丁卜辭”的嗎？“歷组父乙類”卜辭是文丁卜辭這件事正需要地層方面的證據來證明，怎麽能反過來用作確定坑位時代的根據呢？很明顯，解放前村中村南發掘所得的情况，也不能爲蕭楠同志提供什麽有份量的論據。

如果撇開其時代尚難斷定的一些出歷组卜辭的坑位不管，僅僅根據目前已知的那些層位現象推斷歷组卜辭是武乙文丁卜辭，的確是可以自圓其说的。這並不意味着已經“確立”歷组卜辭爲武乙文丁卜辭。因爲正如上引林文所指出的，對這些層位現象是可以作出不同解釋的。如果進一步對歷组卜辭以及與之有密切關係的自歷間组和無名组等類卜辭的字體、内容作綜合的考察，並注意到歷组卜辭跟賓组、出组卜辭同卜一事和歷组卜辭跟賓组刻辭或出组卜辭同見於一版卜骨等現象，就可以斷定歷组卜辭是武丁晚期至祖庚時代的卜辭，而不是武乙文丁卜辭了。關於這些问題，在李學勤、林澐等同志和我的有關文章裏已經有不少論述，這裏就不多談了。正如蕭文所说，蕭楠同志跟我們的“學術觀點存在着原則的分歧”（例如我們認爲歷组卜辭跟賓组刻辭或出组卜辭同見一版说明它們的時代相同，蕭楠同志則認爲一塊卜骨使用以後可以貯存起來在幾代之後重新使用。參看李學勤《論小屯南地出土的一版特

殊胛骨》，載《上海博物館集刊》第四期）。所以我根本没有想到過要通過我的論證來説服蕭楠同志。我講了上面這许多話，主要目的是想對關心歷组卜辭時代問題的一般讀者説明，蕭楠同志認爲他們已經“以地層爲依據”“確立了所謂‘歷组’卜辭爲武乙、文丁卜辭”的说法，是跟事實有距離的，歷组卜辭的時代仍然是一個尚待解决的問題。我在《讀〈小屯南地甲骨〉》一文裹提到歷组卜辭時代的問題，也是出於這一目的。我認爲把這些情况告訴《小屯南地甲骨》的讀者，是很有必要的，寫書評的人有責任這樣做。而蕭文却認爲我這樣做“欠妥”，“不利於學術的發展”（18頁）。可見我們之間不但在學術觀點上“存在着原則的分歧”。就是在對書評的作用的看法上也存在着深刻的分歧。

還有一點需要在這裏説一下。不同意蕭楠同志關於歷组卜辭時代的意見，並不意味着我們輕視層位現象在甲骨分期上的作用。由於兩派意見相持不下，歷组卜辭的時代問題最終還是要靠層位現象來解决的。如果將來在小屯村中村南相當於大司空村二期的堆積中發現了歷组卜辭，武丁祖庚時代说就會得到公認。反之，如果將來在這種堆積中發現了大量甲骨卜辭，可是偏偏没有歷组卜辭，並且在小屯南地中期一组的堆積中繼續發現的歷组卜辭仍都屬於歷组二類，武乙文丁時代説就會得到公認。我們希望這樣的一天能很快到來。

2. 蕭文對我關於屯南所出賓组卜辭的層位的一段話的批評，其方法是有問題的。

拙文説：“所以根據現有资料來看，在1973年的屯南發掘中，真正的賓组卜辭並非出於早期地層與灰坑，而是出於晚於中期一组的地層與灰坑的。”（5—6頁）蕭楠同志引這一句時略去了“所以根據現有资料來看，在1973年的屯南發掘中”這些起限制作用的話。他們首先斷定“這一結論是錯誤的”，然後指出拙文提到的出賓组卜辭的四個坑裹有兩個坑（H92、H118）在《屯南》前言中没有涉及，我“在還有二個坑時代不明的情况下就作出了上述結論，顯然是輕率的”；接着又指出早期卜辭進入晚期地層是常見的現象，還舉出了解放前村北發掘中賓组卜辭出於較早地層的一些例子，最後下結語説：“所以，賓组卜辭出於較早地層，是早已被證明了的事情，裘锡圭同志怎麽會不知道而另立‘新論’呢。”（蕭文19頁）没有讀過拙文的人，讀了蕭文的批評之後，大概都會認爲我不知道賓组卜辭曾出於較早地層的事實，主張所有的賓组卜辭都出於較晚的地層。

其實我所説的明明只限於73年屯南發掘的範圍，絲毫没有全部賓组卜辭都出於較晚地層的意思。蕭楠同志是掌握73年屯南發掘的全部资料的。你們如果拿得出這次發掘中賓组卜辭出於較早地層的可靠實例就拿出來好了，爲什麽在批評别人“在還有二個坑時代不明的情况下”就作出結論太過輕率的時候，仍然不願意使這兩個坑的時代“明”起來，却要去扯解放前村北發掘的情况，並在引我的話的時候略去“在1973年的屯南發掘中”這個起限制作用的短语，至少在客觀上造成我對全部賓组卜辭的出土情况“另立‘新論’”的假象呢？這種批評方法恐怕不能認爲是正常的。蕭楠同志以早期卜辭進入晚期地層是常見現象這一點來反駁我，也出乎我的意外。林澐同志和我所以要指出73年屯南發掘中賓组卜辭出於較晚地層，不就是爲了説明時代較早的卜辭可以在較晚的地層中發現嗎？

我在上文中已經對73年屯南出賓组卜辭的四個坑的情况作過了討論。由於蕭楠同志在《再論》中已説明H92屬於中期一组，我原來所説的、這次發掘中真正的賓组卜辭“出於晚於中期一组的地層與灰坑”那句話，應該改爲“出於中期以後（包括中期）的地層與灰坑”。如果蕭楠同志僅就這一點说我“輕率”，我是接受的（我寫拙文時，《再論》已發表）。但是根據現有资料看，在73年的屯南發掘中，賓组卜辭並未出於較早的地層與灰坑，而只出於相當於大司空村三期以及更晚的地層與灰坑，則是事實。還有，H118坑的時代雖然尚未發表，但是根據蕭楠同志已經説過的關於這次發掘中甲骨出土情况的話，是可以肯定它不屬於較早的時期的。這在前面已經詳細说過了。

3. 蕭楠同志在“關於武乙、文丁卜辭”一節中说：“我們曾一再聲明過，‘歷组’卜辭提法欠妥：第一、真正署貞人‘歷’的卜辭很少……第二、貞人只‘歷’一個，一個何能構成爲‘组’？”（20頁）我認爲他們對歷组卜辭提法的批評有拘泥字面意義的毛病。

李學勤等同志討論殷墟卜辭分期問題時所说的“组”，跟一般所謂“貞人组”已經有所不同了，例如所謂無名组卜辭就根本不記貞人名。不少人認爲午组卜辭不記貞人，被有些人看作貞人名的“午”應該讀爲祭名“禦”，但是他們仍然使用“午组卜辭”這個名稱。因爲這個名稱指的是哪一類卜辭，研究甲骨文的人都明白。如果屏棄這個名稱，在討論跟這類卜辭有關的問題的時候，就需要爲它另定一個大家不熟悉的名稱，那顯然會造成不方便。“歷组卜辭”這個名稱的情况跟“午组卜辭”有些相似。如果你不承認“歷组卜辭”所指的那些卜辭具有區别於他组卜辭的共同特點，當然可以反對這個名稱；如果承認這一點，並且自己又提不出更合適的名稱，就没有必要指責别人提出和使用這個名稱了。我早就说過，我認爲歷组卜辭中的“歷”可能並不是貞人名（《古文字研究》6輯317頁注一），但是我仍然使用“歷组卜辭”這個名稱。就是“曾一再聲明過‘歷组’卜辭提法欠妥”的蕭楠同志，不是也時常在使用這個名稱嗎？他們在文章裏提到“歷组”時一般都加上引號，大概是想以此表示，他們是由於要跟使用這個名稱的人討論問題，才不得不違心地使用它的。實際上，使用這個名稱的必要性是大家都明白的。蕭楠同志在《再論》中说，“我們所稱的武乙、文丁卜辭，有的同志稱作‘歷组’卜辭”（155頁）。那麽能不能用他們的“武乙文丁卜辭”來取代“歷组卜辭”呢？顯然不能。且不说歷组卜辭的時代尚有争議，即使已經斷定歷组卜辭屬於武乙文丁時代，由於還存在歷组卜辭之外的武乙文丁時代卜辭，也不能把“歷组卜辭”跟“武乙文丁卜辭”等同起來。蕭楠同志在《再論》中説了上引那句話之後，接着又説：“爲了在討論中交换意見準確，本文内所稱的武乙卜辭均屬‘歷组’父丁類……所稱的文丁卜辭，則屬‘歷组’父乙類。”（155頁）這不是正好说明，爲了準確地討論問題，“歷组卜辭”的提法其實是十分必要的嗎？對於“歷组卜辭”所指的那類卜辭來説，這個名稱要比所謂“武乙文丁卜辭”妥當得多。

4. 蕭楠同志在甲骨鑽鑿形態問題上對我的批評，是完全無法接受的。

大家知道，在甲骨分期方面，鑽鑿形態只是一種供參考的次要標準。如果根據甲骨分期的主要標準已能肯定A類和B類卜辭的時代先後，當然就没有必要再去争論A類和B類的甲骨鑽鑿形態的時代先後了。但是歷组卜辭是一種其時代尚有争議的卜辭，客觀地從形態學的角度去研究這種卜辭的鑽鑿跟自组、無名组、黄组等類卜辭的鑽鑿之間的關係，顯然並非没有必要。當然，如果《屯南》僅僅對甲骨鑽鑿形態作客觀的描述和分類，拙文作爲一篇書評，原也没有必要涉及鑽鑿時代先後的問題。可是情况又並非如此。例如從形態上看，所謂“文丁卜骨中常見的Ⅵ1鑿”原無晚於所謂“康丁、武乙的Ⅳ型鑿”的證據，可是《屯南》“從時間的聯繫上考查”，也就是從所謂“康丁、武乙”卜辭（大體相當於無名组和歷组二類卜辭）早於所謂“文丁”卜辭（大體相當於歷组一類卜辭）的信念出發，就斷定“文丁卜骨的Ⅵ1鑿，當在康丁、武乙的Ⅳ型鑿之後，而不是Ⅳ型鑿之前”。還说：“總之，從卜骨鑿之形態，並結合地層關係、卜辭内容等方面進行分析，我們認爲，將此兩類卜辭（引者按：指歷组卜辭中的所謂“父丁類”和“父乙類”）定爲武乙、文丁時代是適宜的。”（《屯南》1518頁）。在這種情况下，既然我們並不承認《屯南》已經“以地層爲依據”“確立了所謂‘歷组’卜辭爲武乙、文丁卜辭”，當然就要從形態學角度提出鑽鑿時代先後的問題來了。

蕭楠同志對我所排列的《屯南》甲骨鑽鑿形態發展順序，從形態學角度提不出任何實質性的批評意見。他們對付我的法寶就是所謂“地層關係”。蕭文説：“我們在《屯南·鑽鑿》中，始終是以地層關係爲依據，對鑽鑿形態作客觀的統計、分析，而不是按主觀意識去作人爲的排定。裘锡圭同志的‘撇開其他因素’，尤其是撇開地層因素，只是根據鑿的形態來决定甲骨時代的先後，恰恰是一種主觀的排定，這在田野考古學中是不能允许的。”（22頁）又说：“裘锡圭同志在排定《小屯南地甲骨》鑽鑿變化順序的時候，追求的是一種‘直綫圖象’，看起來好像很有‘規律’，而實際上這種‘規律’用地層一檢驗就化爲烏有。這種‘規律’又有什麽實際價值呢？”（23頁）這兩段話正好反映了他們自己的主觀態度。

我們在前面已經说過，弄清楚跟小屯南地甲骨有關的層位現象，跟根據整理出來的層位現象對有關甲骨的時代下判斷是兩回事。蕭楠同志在《屯南》中指出的層位現象，並不是非要導致他們對歷组卜辭時代所作的結論不可的。蕭楠同志在没有對林澐等同志就有關的層位現象提出的不同解釋作出令人信服的批駁的情况下，就不准别人不同意歷组卜辭是武乙文丁卜辭的結論而去另作探索。他們認爲，進行這種探索，就是“撇開地層因素”，就是違背考古學原則，不管結果如何都只能遭到“化爲烏有”的命運。這難道是進行學術討論的應有態度嗎？

蕭文還批評我说：“帝乙、帝辛時期卜骨，《屯南》只統計了6片，我們没有作什麽結論。可裘锡圭同志就作出了‘C组與D组没有同型的鑿’的結論。這是不謹慎的，因爲《屯南》没有，不等於整個殷墟甲骨没有。”（22—23頁）我們知道，73年屯南出土的所謂“帝乙帝辛時期卜骨”（即拙文所说的D组，實爲介於無名组與黄组間的卜骨），“可以統計鑽鑿之片數”一共只有六片（見《屯南》1513頁表六）。這六片的鑽鑿全部屬於Ⅴ型，這顯然不是偶然現象。拙文討論的是《屯南》甲骨的鑽鑿形態，所以没有提到别的甲骨的情况。《屯南》之外已發表的、屬於黄组（即一般所谓第五期）的卜骨鑽鑿形態，一般也都屬於Ⅴ型。《屯南》就指出：“第二類卜辭（引者按：即拙文所说的D组、此書他處所说的“帝乙早期”或“帝乙帝辛”卜辭）的V_3鑿以及V_2鑿中長度在2釐米以下的，常見於已確認的有五期字體的卜辭，如《懷特》B1886、1902、1905等。”（1521頁）许進雄在《甲骨上鑽鑿形態的研究》一書中對“有第五期書體的卜骨”的鑿形的描寫（見11頁），也跟《屯南》對Ⅴ型鑿的描寫（見1500頁）相合。林文還指出跟73年屯南出土的所謂“帝乙帝辛時期卜骨”同類的《明續》2625、2627的鑿形，也跟一般黄組卜骨的鑿形相似（137頁）。但到目前爲止，還没有人發表過這類卜骨和黄组卜骨上的鑿形，跟歷组（即拙文討論鑽鑿時所説的C組）卜骨上的鑿形同型的例子。在這種情况下，我們完全有理由说“C组與D组没有同型的鑿”。“《屯南》没有，不等於整個殷墟甲骨没有”這種不舉實證隨便说说的話，是無法認真對待的。

5. 蕭楠同志認爲拙文所指出的《屯南》釋文中的失誤，“不少是值得商榷的”（23頁）。現在就來看看他們提出來的那些問題。有些目前争論不出究竟的問題（如我認爲《屯南》4177片上的令——蕭文誤作“午”——應屬上方殘辭，他們則認爲應屬下方一辭，“爲貞人名無疑”）以及不涉及實質性是非的問題（如我認爲《屯南》釋文没有釋出不少可釋的殘字是一個缺點，他們則認爲我是在“苛求”，是在“殘字斷文上做‘文章’”），這裏就略而不論了。

A. 拙文指出《屯南》把見於2539片的左作“鹿”右作“射”的字“逕釋爲從‘鹿’‘射’聲的‘麝’，是不妥當的”（10頁）。蕭文说：“‘麝’應爲射鹿人之專稱，故我們的隸定並無大錯。自然，我們也希望裘锡圭同志作出更好的隸定來。”（24頁）這個“麝”究竟是不是“射鹿人之專稱”，還需要研究。但是在這個字並非從“鹿”“射”聲的“麝”字這一點上，我們的意見看來已經一致了。《屯南》2539片釋文對“麝”字毫無說明，很多讀者，尤其是初學者，無疑會認爲這就是見於一般字典的“麝”字。我指出這樣寫釋文不妥當，又有什麽不對呢？至於説到隸定方法，只要按這個字的原形把“鹿”和“射”寫成左右並列，就可以免除誤會。《屯南》釋文是手寫影印的，這樣做毫無困難。

B. 拙文指出《屯南》395片釋文把“戌”字殘文誤釋爲“甲”，但是我在寫稿時把395錯寫成了3953（10頁）。我應爲這一疏忽向蕭楠同志和讀者們道歉。這片卜骨上的“戌”字，上部已殘去，由於豎劃下端的短横位置稍高，就被誤釋成了“甲”字。至於3953片，誠如蕭文所説，既無甲字也無戌字。

C. 拙文说：“2276（1）的釋文將‘父甲’誤釋爲‘大甲’（此或是抄寫之誤）。”（10頁）蕭文反駁说：“我們查閲原骨，確爲‘大甲’，而不是‘父甲’。我們所作的摹本也是‘大甲’。如果裘锡圭同志當時能看一下摹本，就不至於提出這一問題了。”（24頁）我在寫拙文時的確没有查閲2276片的摹本，不然就不會说“此或是抄寫之誤”了。但是在看了摹本以後，我仍然不相信原文會是“大甲”。《屯南》2276（1）的全文如下（有争議的那個字以△代替）：

己未卜：祖丁大升，王其延△甲〼

“△甲”爲合文。蕭楠同志把此片時代定爲康丁（《屯南》996頁），十分正確。康丁的祭祀卜辭往往同時提到祖丁和父甲（參看《殷墟卜辭綜類》530頁第三欄《南·明》588以下五條）。上引卜辭有一條同文殘辭，見於《合》27363（即《南·明》588、《殷墟卜辭後編》2231）：

〼祖丁大升，王其延父甲〼

“延”字下正爲“父甲”二字合文。所以從辭例上看，《屯南》2276（1）的“△甲”没有問題應該是“父甲”。那麽有没有可能是刻卜辭的人把“父甲”錯刻成了“大甲”呢？也不可能。從《屯南》374頁所載的2276號拓片來看，“甲”字右側上方的一道豎劃，跟“甲”字豎劃上部挨得相當近，這只能是“父”字的左豎，而不可能是“大”字的中豎。而且這道豎劃的上部兩側既無象正立人形兩臂的筆劃的痕迹，下部左側也没有象左腿的筆劃的痕迹，其非“大”字中豎是非常明顯的。所以我雖然不像蕭楠同志那樣有接觸原骨的方便，仍敢斷定他們把“父甲”誤釋成了“大甲”。摹本中的“大甲”當然也是“父甲”的誤摹。《屯南》爲之作摹本的，一般都是文字有不清晰之處的甲骨，2276號摹本在“大甲”合文外加了虚綫方框，说明這正是不清晰的字，至少在考釋者看來是不清晰的字。蕭文说：“我們查閲原骨，確爲‘大甲’，而不是‘父甲’”。似乎原骨上的“大”字很清楚。這也是有一些奇怪的。由於這個例子，我對《屯南》2283（2）的“己丑”下一字是否“立”字的問題（參看蕭文24頁），只能暫時抱存疑的態度。

D. 拙文説：“2061片釋文中的‘裉’字，原來並不从‘哀’（‘衣’中間是一個圓圈，而不是

“口”字），這種隸定也容易引起誤會（這個字實當釋‘遠’，看《古文字研究》12輯87頁）。”（10頁）蕭文反駁說，甲骨文字“如何隸定，考釋，是學術問題，大家可以討論，可以百家争鸣，没有必要强求一家跟另一家走。……况且，裘文列舉自己所釋之字，是在《屯南·釋文》發表之後，我們也無法採納。”（24頁）拙文提出“袁”字的問題，並不是爲了强求别人採納我的考釋，而是由於《屯南》對這個字的隸定容易引起誤會。圓圈形（實即“圓”的初文）跟“口”字不同，从“衣”从圓圈形的字跟“袁”不是一個字，恐怕不能算作可以百家争鸣的學術問題。

我想蕭楠同志所以會對拙文在釋文方面所作的批評有較大反感，就跟他們認爲拙文不應該提到歷组卜辭時代問題一樣，也是由於他們對書評的作用的看法跟我有分歧。我認爲書評主要不是爲書的作者，而是爲書的讀者寫的。如有可能，書的優點、缺点以及書中涉及的有争議的重要問題，都應該在書評中比較充分地反映出來。這樣才能對讀者真正有所幫助。蕭楠同志似乎認爲書評是針對書的作者寫的，指出缺點就是跟作者過不去，所以對拙文才會有“苛求”（24頁）、“在這些殘字斷文上做文章”（23頁）等指責。我跟蕭楠同志之間並没有，也不可能有什麼個人恩怨，有的只是學術見解的不同。希望蕭楠同志不要因爲我的書評而産生誤解。這次的答復如有不妥和错誤之處，歡迎蕭楠同志再提出批評。

1989年10月17日夜寫畢

附记：此文在1989年10月交給《書品》編輯部，由於《書品》負責人不願發表，我於1991年6月將此稿要回，所以拖延到現在才發表。文章内容絲毫未作更改。

（原載《漢字文化》1992年第1期）

它们是假借字吗？

——《甲骨文字典》读后

尚久孝

徐中舒先生主编的《甲骨文字典》，既是甲骨文初学者的良师，也是甲骨学研究者的益友。

由于甲骨学目前尚存有许多问题有待深入研究与探索，《甲骨文字典》(以下简称《字典》)当然也难免有值得商榷之处。这里想先就《字典》卷一“一”部“从五至九，则利用假借字”的说法，提出一点个人拙见。笔者以为五至九与一至四同样都是表示数目的指事字，而不是假借字。

首先，文字学家们对五至九几个数字的析形、释义以及所借，众说纷纭，莫衷一是，暴露出假借之说难以成立。

下边略举几家对“五”的说解以证之：

许慎《说文》：“五，五行也。从=，阴阳在天地间交午也。”

王筠《文字蒙求》：“五，以X为正，河图五数居中，洪范五为皇极，故其字象交午之状，四通八达之意也。”

约斋《字源》：“五象路途交叉处。”

丁山《数名古谊》”“五之本义为当收绳器，引申为交午。”

《字典》：“甲骨文子午之午作8，本以束丝之交午，会意为午，借为地支之午。束丝表示交午之全形，具体之交午在束丝中部之二斜画相交作x形，故甲骨文借用为数词之五，或牾逆之牾。”

上述，阴阳五行之说自属荒诞，河图洪范之谈亦为不经。或云假借，或云引申；收绳器、路途交叉处及束丝中部二斜画相交的析形、释义、所借各异，皆随己意以度，牵强附会、*10*人*10*说百人百见乃势之所必然。

下边略举几家对“六”的说解以证之：

《说文》：“易之数，阴变于六，正于八，从入八。”

《字源》：“这字表出隆然高起的意思，就是陆地的陆的最初写法。至于纪数的六字，那又是个络字的象形……。”

《字典》：“介（六）象两壁架有一极两宇之棚舍正视形，此为田野中临时寄居之处，其结构简易，暴露于野，即古之所谓庐。《说文·广部》：‘庐，寄也。秋冬去，春夏居’庐六古音近，故介得借为数词六。”

还有人释“六”说：“本象人行走迟缓，即僇之初文，借为数词六。”

上述，许慎以《易》说字，前文已论；据篆体六的字形分析为“从入八”，必错无疑（他未见过甲骨文的“六”字字形）。至于所借，或陆，或络，或庐、或僇，其说不一，令人何从？

下边略举几家对“七”的说解以证之：

《说文》：“七，阳之正也。从一，微阴从中邪出也。”

丁山《数名古谊》认为“十”（古文的七字）本象当中切断形，自借为数专名不得不加刀于七以为切断专字。

徐中舒《字典》引用了上边丁山《数名古谊》中的观点后说：“按其说可从。”

唐兰，认为甲、十同字，借甲声为七。

还有人认为㔾（七的篆体）象草木初生屈下直上贯一而出，与屯同义。认为㔾是“萋”之初文，金、甲文的十字象草木出土形，一为地，丨为苗，借为七。

上述，许慎据篆体字形㔾来析形、释义仍是必错无疑。至于所借，或“切”，或“甲”或“萋”何者为是，令人茫然。

下边略举各家对“八”的说解以证之：

《说文》：“八，别也。象分别相背之形。”

《字典》：“甲骨文乃以二画相背，分向张开，以表示分别之义。卜辞中借用为纪数之词。”

蒋伯潜《文字学纂要》：“八，本是‘臂’的原始字。”

左安民《汉字例话》：“八，就是分的意思。……八字当分讲的本义后来完全消失了，当数字用的八，那是同音假借的问题，在词义上没有任何联系。”并就甲、金文的八，析形为“表示一个东西被分成两半的样子”；又就篆文析形为“好象两个人背靠背的样子。”

周大璞《训诂学要略》：“八，象剥物之形，假借为记数符号。”

上述，八的本义有别、分、分别或臂等。八的字形分析，或曰“二画相背”，或曰“象剥物之形”，或曰“象分别相背之形”。特别是《汉字例话》对“八”的字形分析自相矛盾：析甲、金文字形为“表示一个东西被分成两半的样子”，析篆文字形时又说“好象两个人背靠背的样子”。同一个“八”字，忽而象人，忽而象物，如何得以自圆其说？实则篆体八本直承甲、金文字形而来，只不过是经过一番加工美化而变形罢了。

下边略举几家对“九”的说解以证之：

《说文》：“阳之变也。象其屈曲究尽之形。”

于省吾《骈三》：“九字象虫形之上屈其尾。”

丁山《古谊未校记》：“九本肘字，象臂节形。……臂节可屈可伸，故有纠屈意。”（蒋伯潜《文字学纂要》的观点同此）

唐兰《中国文字学》：“九字就是从象龙蛇的字借用了。”

《字典》：“象曲钩之形。钩字古作句。……罗振玉云其状正象圆环，下有物如蛇状，故句得借为九……。”

上述，许慎仍是以《易》说释字，于数字的研究风马牛。余家分析字形，或曰“象臂节形”，或曰“象虫形”，或曰“象龙蛇形”，或曰“象曲钩之形”。至于所借，则或“肘”，或“臂”，或“句”。这析形、释义及所借，真可谓仁者见仁，智者见智。

从五至九各家析形、释义以及所借之所以各异，原因就在于把本为积画或错画成字的指事字误视成了象形字。视指事为象形，所见必大相径庭；视本字为借字，必强作解人，不误何待？于省吾于《骈三》中曾误析“九”为虫的象形，后在《甲骨文字释林》中认为“九”等数字实为指事字（于氏未加论证），订正了错误。这是现身说法的一个实例。又，许慎对二十、三十的说解都是对的。可惜他未能由此悟出“十”以下等数字本为指事字的道理，却死抱着象形字不放，说：“十，数之具也。一为东西，丨为南北，则四方中央备矣。”后问他“东西”何在？“四方中央备”吗？他必陷于捉襟见肘的尴尬境地，许慎未见甲骨文，我们不能苛求古人。但今人也有将“五”释为中央和四方的（见英人艾兰在其《谈殷代宇宙观和占卜》一文，载于《殷墟博物苑苑刊》创刊号），这是不足为训的，因是推衍罗马尼亚学者米西亚·爱利德关于古代宇宙论里中心的意义的理论来探索“五”的本义的。

其次，汉字数字的创造特为古老，恐无先字需从借后字产生而来之理。

汉字的数字，出现极早，不妨以“五”字为例加以证之：

五、*3000*年前的甲骨文有×（五）字（属殷商晚期文字）；早于甲骨文的郑州二里冈出土的陶文有×字；被视为夏文化的二里头陶文以及近于虞夏的龙山文化陶文都有×字；早于二里头的良渚文化陶文有×字；早于良渚文化的马家窖文化陶文及青海乐都柳湾陶文都有×字；早于马家窑文化，距今*6000*年前的仰韶文化陶文有×字；甘肃西宁县周家寨出土的仰韶期骨契也有×字。数字“五”的造成竟溯及到新石器时代。

上例是证汉字数字产生之早，诚如于省吾《释林》中所言：“我国古文字，当自纪数字开始，纪数字乃古文字中之原始字　”故数字既产生于先，何需借后字形成？

还有一个问题必得在这里加以论述：原始氏族社会晚期出现的刻划符是不是文字？文字学界或认为是文字，或认为不是文字。笔者认为是文字。前文中我所列举的从甲骨文上溯及仰韶文化陶符这*3000*多年间出现在不同历史时期、不同地域的同一数字的字形何其相似乃尔！是偶合吗？不，文字发展之一脉相承显而易见。当然这些陶符远不如甲骨文那样发达，但文字的发展总是由少到多，由不成熟到成熟，由不成体系到成体系的。

又次，有语言事实为证是构成假借的一个重要条件，而说五至九为借字恰是无语言事为证。

一般说，假借一定要具备与字义无关、音同或音近及有语言事实为证这3个条件。以前文论及的数字“九”为例，或认为是借“肘”为九，或认为是借“句”为九。如果只就“与字义无关”这一条件说，则假借成立，因借字九与本字肘或句在意义上无关。王筠说：“凡与本义不符者，皆假借也。”但假借不止这一个条件，即或就这一个条件，还有与字义有关者也可构成假借的情况。如果单从“音同或音近”这一条件言，假借也成立，因古音九、句二字皆属“见”纽，韵部“幽”、“侯”旁转；九、肘二字皆为“幽”部。但也有音不同可构成假借的情况。且九到底是从“句”借来，抑或是从“肘”借来？音同或音近虽是假借条件之一，但不能反过来说凡是音同或音近的字都是假借字。音同或音近的汉字是很多的。“一音之转”说已为人们所批评。那么有没有语言事实来证明“九”是从句、肘二字借来的呢？目前尚未见到。《字典》在说解“九”的条目中，“释义”栏中只有“数名”这一个义项及甲骨卜辞用例，而无借“肘”或“句”的本字字形表示数目“九”的甲骨卜辞用例。《字典》在说解“肘”的条目中，“释义”栏中只有“臂上也”与“疑为方国名”这两个义项及甲骨卜辞用例，未见用“肘”的字形借以表示数字“九”的甲骨卜辞用例。《字典》在说解“句”的条目中　“释义”栏中只有“义不明”这一个义项，而无借用“句”的字形来表示数字“九”的甲骨卜辞用例；“解字”栏中也无一言涉及得借“句”为“九”的内容。我们只在《字典》说解“五”的条目中，见到除“数词”义项外，还有“牾，相背也，祭名”一义项及两条甲骨卜辞用例，而无借“牾”的字形表示数字“五”的甲骨卜辞用例。如果说，这个释义准确无误的话，那也是借“五”的字形表示“牾”，五是本字。且《字典》在说解“午”（“牾”的本字）字时，仅有“用为地支之一”一个义项，而无“交午”的义项及甲骨卜辞用例。至于五、牾可以相互为借则是后世古文献的事，如“羔羊之皮，素丝五纰。”

（《诗·羔羊》）陈奂传疏：“五，当读为交午之午。纶，本作佗，佗，加也。五佗犹交加……。此为借五为午之例。又如“若杀其神，则以牡……午贯象齿而沉。”（《周礼·秋官·壶涿氏》）此为借午为五之例。上述所论，阐明了假借的成立应具备3个条件，其中有语言事实为证这个条件最为重要。《字典》在说解五至九各字的“释义”栏中都有“数词”的义辞及甲骨卜辞用例，这倒正表明它们是由来已久的地道的表示数目的指事字，而不是假借字。

最后，一些古老民族创造数字的规律可做为汉字古数字非为借字的旁证。

世界上各古老民族由于生产、生活的需要，经常要与数目打交道，故都很早地，人同此心、心同此理地以积画或错画的方式创造出数字来。

埃及上古数字，从一至九均按竖画多少为准，到十才变为 ∩ ，九个积画字，一个错画字。与古汉字相较，则汉字数字造成之高明处可见——汉字数字从五开始即摆脱积画而就错画（有人认为甲骨文有亖，有人非之）。我认为从积画到错画，是数字造字法的一个了不起的飞跃。数字的应用少则百千，多则亿万，如全以积画为之，则既繁难费时，又易混误。在一幅记载印第安族酋长武功“传记”的记事图画中。在图的右侧10个横积画表示远征的次数，在图的下方23个斜积画表示酋长带领的人数。这些积画当然不是什么文字，但已知用积画表示数目要比实画人形表示数目简明得多（原图左侧画了10个人形，表示酋长俘敌10人，其中4个无头人形表示已破杀）。不过，这些不成文字的表示数目的积画，对成为文字的数字，或许有点渊源关系和启迪。古罗马的数字，从1～12分别作Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ．Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻ。其中，从1～4，为积画成字，与汉字古数字相较，只不过是横竖之别罢了。从5～12，则是以Ⅴ（五）、Ⅹ（十）字体为基本的核心的错画与积画的结合体。在Ⅴ这个错画字的右侧附上一个积画字Ⅰ（一）即为六、附上个积画字Ⅱ（二）即为七、附上个积画字Ⅲ（三）即为八。在Ⅹ（十）的左侧附上个Ⅰ，即为九；在Ⅹ的右侧附上个Ⅱ，即为十一、附上个Ⅱ，即为十二。据笔者的分析理解：在基本的核心的形体之左侧附上积画数字，意味为减，在基本的核心的形体之右侧附上积画数字，意味着加。罗马数字5～12这种错画与积画相结合的字体与汉字古数字中的错画字相较，高明于汉字，颇有规律可寻。可见，埃及上古数字也好，罗马数字也好，都是积画或错画而成的字，不是假借字（阿拉伯数也不外是由直画、曲画或直、曲画交错、组合而成）。即使时至“庶业其繁”、文字发达的今天，人们在记录选票数目时，还以积画方式为之。以今溯古，以积画或错画造数字无足怪异，无需去借它字来造数字之理明矣。

（原載《殷都學刊》1992年第3期）

《甲骨文字字释总览》介绍

胡厚宣

松丸道雄（Matsumaru Michio），日本学者，1934年生，东京大学文学部东洋史学科毕业，现任东京大学东洋文化研究所教授，日本甲骨学会会长、《甲骨学》杂志主编。主要著作有：《甲骨文字》奎星会出版部1959、《西周青铜器及其国家》东京大学出版会1980、《中国文明的成立》讲谈社1985、《东京大学东洋文化研究所藏甲骨文字》东京大学出版会1983等书。

高嶋谦一（Ken-ichi Takashima），加拿大籍日裔学者，1939年生，美国西雅图华盛顿大学语言学博士，曾受教于语言学家李方桂院士和司礼义（L—M Serruys）院士。现任加拿大不列颠哥伦比亚大学亚洲研究学系教授，主要著作有：《殷虚文字丙编通检》（历史语言研究所专刊之八十五）1985。

两位所主编的《甲骨文字字释总览》一书，是一部很重要的著作，它收书1600种，包括中、日、英、德、法、俄、朝文，超出李孝定《甲骨文字集释》所收文件达八倍之多，现已付印，明年三月即可出版，兹将其所撰的提要发表，并乐于介绍。

1992、2、3

（原載《中國史研究動態》1992年第6期）

《甲骨文字字释总览》概要

松丸道雄　高嶋谦一

多年来，东京大学东洋文化研究所制定了研究殷周时代史的一系列计划、进行了种种研究。本书的编著便是其中之一。自甲骨文发现以来，专家学者对甲骨文字进行了很多考释。这些考释日积月累、数量浩瀚、而要从其中寻找某一甲骨文字，便十分困难。故此，能够建立起一个便利的检索系统是十分必要的。而这正是这项计划的目的所在。

1986年，以松丸道雄为主任的专题研究组成立。成员包括高嶋谦一、丰田久、高山节也、持井康孝、武者章，另外、还有池泽优和竹内康浩（姓名顺序以年龄排列）也承担了很多工作。

高嶋谦一原执教于加拿大不列颠哥伦比亚大学，于1988年9月至1990年8月之间到日本，正式任职于东京大学东洋文化研究所，其目的之一即是为了推进这项计划的实施。两年之间、高嶋承担了本研究的中心工作，沈建华、铃木敦、益山隆（姓名顺序以年龄排列）等也给予这项工作以很大的协助。

1990年，完成收录各家考释约28，500张卡片。紧接着便转入出版阶段，现在、一校已经印出、预计于1993年3月正式出版，本书为十六开本800余页，由东京大学出版会出版发行。

众所周知，从发现殷代甲骨文至今业已九十余年，据称有字甲骨已达十五万片之多。近年来，供研究的原始资料拓本，临摹本也不断问世，以中国、日本为中心、以古文字学的研究为基础，广及考古学、历史学、文化人类学、宗教学、语言学等各个领域，均有研究论文和专著在世界各国出版，并且日趋众多。除了中文和日文之外，同时还见于英文、德文、法文、俄文及朝鲜文，尤以英文为最。目前，可以毫不夸张地说，甚至连专家学者亦难尽悉上述之研究。

就有关甲骨文字释的编著而言，目前仅有的是李孝定的《甲骨文字集释》（共十五卷）其对象为一九六二年以前收录的字释，收录的文献数目亦不到二百种、况且尚未包括日本及其他国家的研究成果。一九六二年以后，有关研究持续不断，截止一九八八年底，仅我们所目睹的文献已远远超过二千种，然而，其中相当部分与字释无甚关连，这正是编者酝酿此书的原委，我们从大约一千六百种文献中摘录了字释及有关的学术参考资料。

我们认为，要从多于《集释》八倍的文献中，像李孝定那样编制正文的全部引录或摘录，以及检索系统几乎是不可能的。尽管如此，对世界各国的研究者来讲，为了避免重复研究、充分利用和发展前人的成果，谁都希望得到有关何人、何时、何处有何种研究成果出版等资料。可以说，本书便是针对这种需要而编写的。

在本书一览表的各页中，我们先记入了由中国科学院考古研究所编辑、由孙海波原著的《甲骨文编修定本》里所采用的甲骨文字编号和卷页数，然后是岛邦男氏《殷墟卜辞综类》中的文字号码（近期修订版将出版），文字将按甲骨文编编号的次序排列，全部可以从甲骨原字索引检索。而对上述两部著作中都未收入的字，采用岛氏发明的部首索引以便索阅。

其次，我们列出了甲骨文字原字及“异体字”、在其后附上了字释，并在后面“参考”一栏中简单显示了上述提及的“何人、何时、何处做了何事”中的“何事”之概要。最后，在“出典”一栏中，我们提供了有关“何人、何时、何处”的资料。在“何处”项目栏里，我们备有卷页数、有时还加附拓本号码。其用意在于使读者在阅读该文献之时或之后、能比较、尽悉各家之说，“＊”记号为李孝定氏《甲骨文字集释》的省略符号。

至于文献目录，我们只要浏览一下便会一目了然。

回想起来，为了此书的编著我们花费了无可估量的时间，呕心沥血，历经六个春秋。投入这项工作的经费，即使不包括出版费用，仍然是一个巨大的数额。劳作之艰辛比之完成一部研究著作亦是有过之而无不及！

（原載《中國史研究動態》1992年第6期）

哲学史研究方面来讲，不能不说是一个较大的突破。过去学术界有一种观点颇为流行，至今仍有广泛影响，认为阴阳符号是男女生殖器的象征；《综述》的刊世，这种神秘的解释应该在学术界加以澄清了。阴阳符号乃是数字简化的结果，我们的祖先在几千年前就用数的组合去认识自然界和人类社会的各种现象，这种数已非简单的数字，它已赋予了哲学的意义，正如物质这一概念并非指物质现象一样，这种尝试在哲学史上是一种很伟大的创造。《周易》正是在数字卦画的基础上不断抽象总结出的一部哲学名著，给予中国哲学以深远的影响；然而它与数的关系，几千年来却无人能够对此做出具体合理的解释，《综述》作者能够道破真的，其意义是不言自喻的。

周原甲骨文发现以前，人们对文武时期历史的认识还是很模糊的。《综述》利用甲骨文、文献和考古资料，探讨周人由臣服于商到取而代之的全部历史过程。在政治上，周人一方面采取和亲政策，很早的时候就与商王朝有姻亲关系，如殷墟武丁时期卜辞说：“贞，帚(妇)周。”(乙 8849)，后来王季娶了商贵族挚国之女，文王又娶商属莘国之女，这是《诗·大雅·大明》记载下来的和亲资料。周于和亲之外，还在周都建立宗庙，祭祀商之先王，如周原卜辞就有祭祀成唐(汤)、大甲、大戊、祖乙、武丁、文丁、帝乙的记载，还有一条彤祭商王的资料，这些珍贵文献实为前所未见，无怪乎学者有分歧的意见，有人将它作为这批甲骨属于商人的一条证据。实则不然，恰恰显示了周王政策的高明所在，也反映了先周确曾是商朝的一个属国。

但周人另一方面却在不断兼并商属小国，扩大自己的力量，周原甲骨文中有不少关于四出征战的记录，如“征巢”、“伐蜀”、“往密”、“伐𫞩(胡)侯”、“入鬼使”、“楚子来，告(部)父后哉”、“唯衣(殷)奚子来降”等等，有的能与文献互相参证，有的则补充了文献记载的不足。周文王时许多诸侯叛殷归周，《论语·泰伯》说，周“三分天下有其二，以服事殷”。这是当时历史状况的真实反映。

先周文化特点如何？原来亦不得而知。《综述》运用地下出土的最新实物资料，认为先周文化在发展的后期吸收了商文化的优秀成果，如宫殿建筑、铸铜制王工艺等；周原甲骨文也与殷墟甲骨文属于同一种文字，许多词句都能在殷墟甲骨文中找到相同或相似的例证，这反映了先周文化吸收商文化的一面。但周原甲骨文中也有许多独有的词汇，如“克衣(殷)”、“不左(佐)于受(纣)”、“毕公”、“虫白”、“大保”、“楚子来”、“祠自蒿于丰”、“既魄”等，在此不一一枚举。周原卜辞有些篇章能够完整地叙述一个历史事件，与《尚书》中的文例相似，殷墟甲骨文却没有达到这样的水平。周人除因袭商人以旬和干支记时外，发明了月象记时法和岁中置闰法。置闰可以解决阴阳历之间的时间差额问题，使阴历年长度与阳历相合，也就是使阴历符合自然季节的变化，以利于农业生产，古人说得很明白，“闰以正时，时以作事，事以厚生，生民之道于是乎在矣。”(《左传》文公六年)；先周时期周人岁中置闰，比殷人的岁末置闰法更加灵活适用，随时调节阴历与自然季节不相符合的矛盾，因此《综述》认为先周时期周人对自然季节已有相当丰富的知识，可能有了二十四节气的概念。从以上情况来看，周人在吸收商文化的同时，又有许多创新，正如孔子所说：“周因于殷礼，所损益可知也。”先周晚期文化至少可与商文化并驾齐驱。

周人何时进入阶级社会，原来也不清楚，周原卜辞中有五等爵制的“公、侯、伯、子”四个爵名。作者因而认为周人已分成若干等级，至少在周文王时已进入阶级社会。

从以上可以看出，《综述》具有重要学术价值。但也有某些不足，主要是本书对甲骨文的解释尚有逻辑不严密之处，如 H11：27 号卜甲“□邗洛”，作者释“洛”为陕西境内的洛水，我们认为它是否与 H11：102 号卜甲“见工于洛”一样，都是关于营建洛邑的记载？在《岐山凤雏村与扶风齐家村甲骨文时代表》中作者将这两条资料并列，均属武王至周公摄政时期，似乎作为同一事件处理，倘如此，则前后自相矛盾了。这点小疵并无损于《综述》的价值。

著名考古学家石兴邦先生为《综述》作序言说，这本书“是目前这门学问的集大成者了”。这个评价是允当的，读者查阅此书，定会受益非浅。

(原載《人文雜志》1992年第5期)

介绍一本甲骨学新著

——《周原甲骨文综述》读后

黄尚明

西北大学文博学院

1977 年至 1979 年，周原先后出土带字甲骨二百九十余片，引起了国内外学术界的广泛关注，这是继殷墟甲骨文以后的又一重大发现。学者纷纷发表文章和论著，对这批甲骨文提出了许多深刻的见解，诸如族属、分期、释读等等问题，可谓仁者见仁，智者见智。作为亲自发掘这批资料的徐锡台先生用了近十年时间，潜心研究，著成《周原甲骨文综述》一书(三秦出版社 1991 年版，以下简称《综述》)，在诸多方面，都有自己独到的见解。

《综述》主要分两大部分：第一部分释读了所有的甲骨刻辞，第二部分则分别论述了这批甲骨文所涉及的问题。

准确释读这批甲骨文是研究工作的基础。《综述》一开始，即对二百九十余片甲骨文逐一释读，每片卜辞都配有摹本和照片。作者在释读文字和疏通文意方面用功甚深，见解新颖，如释“虫白”为崇伯、“替白”为林白；十一号窖穴八十三号卜辞“曰今秋楚子来告父后哉”，论者一般释为“楚子来告”，而作者则断句为“曰今秋楚子来，告(部)父后哉”，文意显得更加丰富。

周原甲骨文出土伊始，有人认为它属于商人的作品，作者从甲骨的整治钻凿方法、字体特点、卜辞内容等方面进行综合分析，以确凿的论据断定这批甲骨文全部是周人留下的遗物。

论及周原甲骨文的断代问题，学者们的看法并不统一，为了解决这一悬而未决的难题，作者用了较多的篇幅。首先研究字体的演化规律，将周原甲骨文的所有单字同殷墟各期甲骨文金文、西周早中期金文进行详细对比，列成《周原甲骨文字型对照表》附于书后；其次，结合文献，对卜辞所涉及的重大历史事件进行准确的理解；最后对与甲骨文共存的遗物特别是陶器进行科学断代。通过系统研究，作者认为这批甲骨文可分为两期，第一期为王季晚期至周文王中期，第二期为周文王晚期至周公摄政时期。

作者还首次成功地破译了数字卦画。宋代学者已试图解释这类图形符号，如薛尚功曾释《中鼎》上的符号为“赫赫”。当代著名学者也作出各种解释：郭沫若先生认为是“族徽”；唐兰先生在研究安阳和张家坡出土铜器上的这类符号后，认为这是已经遗失的中国古代文字，后来在西周金文中构成族徽。周原卜甲中又出现了这样的符号，将作何解释？作者并未因袭旧说，而是另辟蹊径，将古文字学与民族学结合起来研究，试图从民族学中寻求答案。解放前，凉山彝族地区流行一种所谓的“雷夫孜”占卜法，实际上是一种数卜法，每三个奇偶数构成一卦，以判断战争、械斗(打冤家)、婚丧嫁娶等事的成败或吉凶。这就给了作者一个很大的启示，图形符号是否就是这类数卜卦画呢？有了这一思路，再去观察图形符号，原来图形符号都是一个个奇偶数字，这些数字排列在一起，构成了数字卦画，于是千年之谜终于被解开了。作者进而推演这些卦画符号，发现这些卦画符号与《周易》六十四卦有一定联系，可以解决易卦阴阳符号的起源问题，他详细地分析了由数字卦画到今本《周易》阴阳符号的演变过程。就目前所知，数字卦画出现于新石器时代晚期崧泽遗址，由一、二、三、亖(四)、×(五)、∧(六)等几个数字构成。至商末周初，去掉了二、三、亖这些容易混淆的数字，代之以十(七)、八、九。进入战国时期，进一步简化，取消×(五)、十(七)两个数字，只剩一、∧、八、九，且一、∧使用频率最高，所以到了西汉初年，只剩下一、∧两个数字，∧垂直可分成一 一，遂成为今本《周易》的阴阳符号。这一发现，至关重要，一是纠正了阴阳符号起源的错误观点，二是今本《周易》的成书时代也有了可寻的线索，今本《周易》可能定形于西汉初年。从

讀「殷虛書契考釋」感想

高安澤

殷虛書契考釋一書，乃羅振玉撰，臺灣藝文印書館印行。羅氏在本書序文中云：「感莊生吾生有涯之言，乃發憤鍵戶者四十餘日，遂成考釋六萬餘言，既竟爰書其端曰，予讀詩書及周秦之間諸子，太史公書，其記述殷事者蓋寥寥焉。孔子學二代之禮而曰，杞宋不徵。殷商文獻之無徵二千年前則已然矣！吾儕生三千年後，乃欲根據遺文補苴往籍，譬若觀海無津涯。」羅氏浙江人，曾於民國初年，賃屋居住在安陽縣小屯村附近，親臨洹河兩岸研究甲骨文數年，所以能以四十餘日撰此名著，誠可敬佩。

一、羅振玉小傳

羅振玉，字叔蘊，又字叔言，初號雪堂，又號貞松，浙江上虞人，民前四十六年生，民國二十九年卒，享年七十五歲。羅氏畢生殫力治學，著作等身，尤以甲骨文字之考訂，厥功甚偉。著有殷虛書契考釋、流沙墜簡考釋、石鼓文考釋、殷商貞卜文字考、再續寰宇訪碑錄、讀碑小箋、古器物識小錄、名交錄、鏡話、俑盧日札等。（摘錄自臺灣商務書館印之「中國人名大辭典續編民國之部」。）

二、安陽縣爲商朝首都之一

考釋云：「商自成湯至於盤庚，凡五遷都。武乙立，復去亳徙河北，其地當洹水之陰，今安陽縣西五里之小屯，即其虛矣，方志以爲河亶甲城者是也。」

根據安陽縣志民國二十二年及七十一年影印本一一〇頁，盤庚復都此，曰殷云：「汲郡古文，盤庚即位，自奄遷于北冢，曰殷。」又云：「元和郡縣志，相州禹貢冀州之域，又爲殷盤庚所都，曰殷墟。項羽與章邯盟于洹水南，即殷墟也。」又云：「史記項羽傳，期洹水南殷墟上。集解，讚曰：洹水在今安陽縣北，去朝歌殷墟一百五十里；然則此殷墟非朝歌也。」又云：「竹書紀年，盤庚自奄遷於北冢，曰殷墟，南去鄴四十里，是舊都城；西南三十里，有洹水；南岸三里，有安陽城；西有城，名殷墟，所謂北冢也。」考釋所云之「亳」，即河南商丘和安徽亳縣附近，亦稱爲南亳，因此安陽古時稱爲北亳或殷亳。安陽縣志內所云「奄」，安陽文獻第二期圖中註爲山東曲阜。又云「朝歌」即淇縣，「鄴」即臨漳縣。由以上資料顯示商朝自河亶甲至盤庚曾兩度建都於安陽縣小屯村。

河亶甲爲商朝之皇帝，依照湯王（大乙）建國起，經太甲、沃丁、大庚、小甲、雍己、大戊、仲丁、外壬至河亶甲（名整，外壬弟，在位九年。）以下爲祖乙、祖辛、沃甲、祖丁、南庚、陽甲、般庚、小辛、小乙、武丁、祖庚、祖甲、庫辛、庚丁、武乙、太丁、帝乙、至紂，計二十八王。（見安陽縣志一七四七頁至一七四八頁，另一七四九頁有世系圖。又臺灣鼎文書局印行之「殷墟卜辭研究」七十七頁有圖二）。

安陽縣志一〇九頁地理志云：「尚書序，河亶甲居相。」又云：「汲郡古文，河亶甲元年庚申，王即位，自囂（今鞏縣，見安陽文獻第二期三十七頁圖。）遷於相。」又云：「亶甲子，圯（河水所毀）於相，遷於耿。」耿即邢也，見上圖，即今之武陟縣。又云：「汲郡古文，盤庚即位，自奄（曲阜）遷于北冢（安陽縣小屯村），曰殷。」又云：「案竹書紀年云，自盤庚徙殷，至紂之滅，七百七十三年，更不徙都。」考釋云：「武乙立，復去亳徙河北。」此河北當爲朝歌（淇縣），因武乙至紂，僅有四帝。如此證明安陽縣，初爲河亶甲建都城，後盤庚再建爲首都，盤庚在位二十八年，加上先

前河亶甲九年，安陽縣在商朝時爲首都，最少有三十七年。

三、甲骨文已有天干地支王名后名

中國人常言牛年生或虎年生，牛爲丑年，虎爲寅年。又常以天干地支記年月日，如甲子年，如乙丑日等。甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸爲十個天干。子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥爲十二地支。羅氏考釋，商帝和后妃中有父甲、母甲、兄甲，有妣乙、父乙，有妣丁、父丁、母丁、兄丁，有祖戊、父戊、母戊、兄戊，有高妣己、妣己、父己、母己，有高妣庚、父庚、母庚、兄庚，有父辛、母辛、兄辛，有妣壬、母壬、兄壬，有母癸、兄癸等，此爲天干。又如父寅、祖卯、父卯、妣戌王亥等，此皆爲地支。

四、甲骨文中已有今日常用之字

根據羅氏殷虛書契考釋，甲骨文中數字：已有一到十，且有廿卅，還有四十及百千萬等。天干和地支，除上節王名后名外，全部地支如子、丑……辰、巳、未、申、酉……均出現。天像：如日月、朝暮、雨雪電等。地理：如京邑、邦鄙、田土、川泉谷洲、宮室、家宅等。神祉：如宗祖、巫祝、福祿禎祥等。家屬：父母、夫妻、兄妹、兒女等。走獸：如牛羊犬豕兔鹿馬象，狼虎兕熊。飛禽：如燕、雞、雉、鳳。植物：如米麥禾黍，桑粟樹木森林等。器物：如壺尊鼎盤，玉貝衣裘，矢彈戈矛舟車等。行爲：如出入、正反、言問、見告、相合、名利、沐浴、洗澡、逐逃、農牧、陟降、步徙、武門、德義等。雖然都是單字出現，不像以上我歸納成詞，但是單字比此處所記尚多百倍。

五、甲骨文中之辭句

根據羅氏所云約分九類：(1)庚甲卜貞王賓盤庚翌自亡、」「甲辰卜貞王賓甲肜日亡。」「丙午卜行完日丁未祭于中丁亡它。」(2)告：「貞于庚告。」「丁卯貞三來乙亥告自甲。」「庚子卜賓翌辛丑之告麥、」(3)享：「甲辰卜王貞于戌申享。」「癸亥卜王方其享大邑。」(4)出入：「丙子卜貞方其大出七月。」「甲午卜賓貞王往出。」「貝王八月入于商。」「乙丑卜貞王步亡災。」「庚寅卜在齊次王等往來亡災。」(5)田獵：「丙戌卜王不其獲鹿、」「貞乎口逐馬獲。」「己未卜貞逐豕獲。」「貞光獲羊。」「貞乎子漁之于且乙。」「癸未卜丁亥漁。」(6)征伐：「甲申卜賓貞征。」「貞戊允其伐。」「伐土方受之又。」(7)年：貞于王亥求年。」「貞受黍年。」「辛未貞受年。」(8)風雨：「己亥卜貞今日不風。」「甲辰卜丙午雨。」「今十三月雨。」(9)雜卜：「貞不佳。」「貞亡得。」「丁丑卜貞王今月寧。」「庚戌卜貞帝其降艱。」以上僅摘錄部份以證明商朝甲骨文中已有辭句而已，詳細考察，需要進一步研究。

六、甲骨文中之禮制

商朝之禮制，在甲骨文中發現有以下五項：(1)時期方面：一月爲正月，亦稱一月。有閏年，則稱其末月爲十三月。(2)建國方面：王畿曰京師，亦曰大邑。另有大室、南室、血室、祠堂、皿宮、東寢、龍囿等。(3)祭名：有宗、禘、烝、肜日、肜月、祭、酒、龔、品、衣等。(4)禮之數：有一到十，但是中間無四、七、八數字。十以上有十五、二十、三十、三十三、三十七、四十、止於一百。(5)官制：有卿事、大史、方、小臣、暨、埽臣等。以上禮制，至今尚有書刊運用。

七、卜貞之方法

凡是卜貞，必運用龜甲和獸骨。用龜甲僅採其腹，而棄其背甲，或云背甲太厚，不易占卜。用龜甲專卜祭祀，如卜貞其他事，皆用獸骨。卜田獵時專用獸之脛骨，卜疆理征伐之事多用獸之胛骨。

卜貞之方法，是先把甲與骨削平滑，然後用鑿，或用鑽，或既鑽又鑿。鑿之痕跡爲橢圓形，鑽之痕跡爲正圓形，既鑽又鑿之痕跡，外爲圓形內爲橢圓形。

上列鑿或鑽通稱之契，既已契後就要用灼。灼於契處，以致於坼。灼於裡，則坼見於表，先以直坼，再用歧坼，此即所謂之兆。然後觀吉凶，並刻辭於兆側，以記卜貞之事，此即殷商卜貞之方法。

結語

觀殷墟書契，商王河亶甲，首先在安陽縣境內建河亶甲城；既而盤庚，又再於此地建都，且今文尚書，盤庚有上中下三篇文字記載；清光緒至民國初年，小屯村又有甲骨文及宮室基址和墓穴出土。以上種種，足證安陽縣實具地靈之優勝。今吾生爲安陽縣之民，應均能爲國之人傑。希吾鄉民，長者敎子，壯者勉己，少者學聖求賢，以光吾之故土。

（原載《中原文獻》第二十四卷第三期，一九九二年）

《孟定生殷契》序

王　襄（遗稿）

1957 年六月丁酉

昔潍友范寿轩来天津，携有河南安阳所出之殷契，同仁等以为人间未见之奇，遂奔走相告，咸至范君寓所，时前清光绪已亥（1899年）冬十月也。襄迩时读书家塾，闻之为好奇之念所鼓动，遂前去。孟定生世叔广慧与余有同情，不约会亦前去，至则见范，询其所谓殷契果何似，范乃侃侃而谈，论此物物色之匪易，且言发掘地主之居奇，及千方百计始购得此些许之骨片。比出其所得，朽敝之骨与砂尘杂。然一拭拂，砂去字显。字之秀丽多姿，雄健无匹，的为三古法书。观玩之下，惊喜过望，念之有余兴焉。问其值，巨大之骨，每字一金，坚不稍贬。余与定老皆寒酸，闻其高价，皆爽然若失。自叹窭人子见此瑰宝，力不能得，祇有深惜而已。襄则取块小之龟甲一包，论其定值，携之归，不虚所见云尔。定老则流连不忍舍去。后闻之云，此次购得巨大之边条与凹形之骨数十片，费去数十百金。定老固非雄于资者，何得此项巨金。盖其叔志青先生继埙，时官武昌盐法道，适寄旅费至，欲其游湖北，故挹彼注兹，以成其大愿，所谓千载一时也。翌年庚子，清朝与列强构衅，国难作。襄始避地他乡，殷契之学遂置，不复讲求，而定老于此时，抚其所得，成书一卷。及难平，出以相示，襄假之照录一通，是为襄临各家殷契之第一本。当是时，殷契之发见，将及三年，尚未有著书立说，以倡此学者。今则契学大昌，讲字学者，由许书之六书，以通其形声义者有人。讲史学者，由帝系、后妃、名人、贞史、祀典、武功、婚礼、历法、天时、地理、文化、农事诸门，以集新史材者有人。讲文章者，由卜辞义法，以窥探殷代之文学者有人，可谓契学盛极时期，不患文献无征矣。忆昔年妨（访）定老于于室，适为人作书，见其几案之上，殷契与汉碑杂陈。知君研究求殷契有素，于㱿、宾、亘、韦诸史之笔法，运用于汉隶之间，宜汉隶之独步一时，为流辈所倾倒。所收殷契文字之精者，如“壬子卜，亘贞，至于丙辰雨”，下有纪贞之次第于兆圻文旁，由一至九，每三字列一排，于九之侧，书“上告”，在当时固推为仅有。至今视之，仍属难遇之品。宜定志捐巨金收之，绝不顾惜也。定老身后所藏，尽以售诸肆。此四百余片殷契，李鹤年（注）得之。继鹤年拙于生事，又售诸文化部。定老所藏殷契之经历如此。然吾乡藏殷契者固以定老为创始一人，今鹤年欲以未售之殷契，尽数拓墨，付印以广流传。襄喜其书有成，而定老当年收购之艰，

---

① 贺麟：《儒家思想的新开展》。

②⑤梁漱溟：《东西文化及其哲学》第 199 页，第 214 页。

③ 汪东林：《梁漱溟答问录》。《人物》1986 年第 5 期。

④ 参见冯友兰：《三松堂全集》第 1 卷，第 229—230 页。

⑥ 熊十力：《十力语要》第 2 卷，第 83 页。

⑦⑩《新儒家的精神方向》第 10—11、55 页。

⑧ 《中国文化之精神价值》第 491 页。

⑨ 张之洞：《劝学篇》下篇，会通。

⑪⑫⑬杜维明：《儒家第三期发展的前景问题》，参见罗义俊编著《评新儒家》。

⑭ 牟宗三：《道德的理想主义》第 15 页。

（作者单位：河北大学历史系、哲学系）

终不能埋没不彰也，故乐为序之。

注：李鹤年，天津市著名书法家，是孟老的弟子，也是王襄的弟子。

附记：

本篇系先严王襄遗稿。叙述孟定生购藏甲骨的经过梗概。孟定生名广慧，是甲骨最早发现者之一，但近代出版的册子，很多对孟老发现甲骨情况不明，或略去不谈，这是不对的。有的还谈王廉生煎药，中有龙骨一味，发现上面有字。还说药购自珠市口同仁堂等，其实珠市口没有同仁堂，而王氏住在东四的锡拉胡同，附近大药店不少，何必跑到前门外去买药呢？（1983年光明日报已有李先登文章，说明此事了）

关于甲骨发现事，先严过去与王廉生哲嗣崇烈兄弟论及此事，也说：潍县范寿轩售甲骨，其父花用一大笔银子买下的。并且王襄在《簠室殷契》中记：“孟氏与襄皆寒士，各就力所能得者收之而已。所余之骨板，据云，尽售诸王廉生，得价三千金。”并没有说吃药发现的事。何况彼时药铺收购龙骨，遇有上面有刻痕者不收的。如有，则必须刮去干净，而甲骨质地坚硬，薄脆易碎，不易刮去。再者药铺所售之龙骨，必须用药杵打碎，方能出售入药的，但一剂药里能有多少龙骨，而那块龙骨正巧上面有字，却偏偏被王廉生发现？龙骨入药已千百年了，其间却没有一位病患者或护理人士发现刻痕的龙骨呢？其实王廉生吃药发现甲骨的说法最初见于民国初年天津出版的《华北新闻》，附刊上载有汐翁所写的一篇二三百字文章有此说。后就传引此文，以为所本了。这段茶余饭后地消闲文字，本是游戏笔墨，而后人竟以此“报刊补白”文字大作文章，我们说这是不严肃的。河南殷墟陈列馆，把王廉生吃药发现甲骨的事，竟也陈列出来！这就更以讹传讹了。

原来孟老听范寿轩谈及“有许多是长条的”形状，以为是古竹简了，不是汲冢发现过古竹简吗？后来见到实物，开始也不敢定为甲骨，见许多长条状甲骨，上有纹络，字迹古秀，真以为是古竹简。庚子年间，不少人忙于避战乱。孟老他收藏中的一块甲骨掉在书架后面的地上，翌年出之，看见上面有锈痕斑驳，有作铜绿色的，才知道这真是三代古物，非常珍惜。随后，他辨识上边的文字，如风、雨、夕、干支诸字，虽未著录成书，但也可看出他当时的卓识了。同时这对王襄也是很大的启示和鼓励。其间还有一件事，值得我们记录的。就是范寿轩拿出的甲骨中有完整的龟的上半部分，即全龟腹甲的上半部分，当时范索价过高，他们只是看了看，但都爱不释手。而孟老并未曾忘怀。不久，王廉生哲嗣汉甫来津，孟老求他写信介绍孟老去京谒王廉生，得再看这片龟甲。当时王很奇怪，问他何以知道在王手中藏有此半甲。孟老将在天津见到，索价过高的原委说了，故得到王廉生的应允而得见此半龟，当时孟老释出48字。后据甲骨文字专家陈梦家在《卜辞综述》中记此事。并说，应是52字。由此也可见孟老对甲骨的醉心情况了，这也说明孟王二氏发见甲骨在先，而王廉生在后了。

孟老生于清同治八年（1869），是我叔祖的弟子。卒于民国三十年，享年73岁。是天津享有盛名的书法家。与华世奎、严修、赵元礼同誉为津门“四大书法家”。写汉隶、宗《曹全碑》，行草拟李北海、王梦楼笔意，颇有独到处，或融会殷契文字的核要而贯通的吧。

王翁如

（原載《歷史教學》1993年第9期）

在"学习江泽民同志关于语言文字工作谈话座谈会"上的讲话

胡厚宣（中国社会科学院历史所研究员）

多谢各位专家，昨天晚上接到徐德江的电话，说有这么一个会议让我出席，会议主要是学习江泽民总书记的指示，内容是三点：第一点，汉字简化原则不变；第二点，海峡两岸繁简并存；第三点，就是书法繁简听便。是不是这样三句话？听了这三点，我非常拥护，我觉得这三点指示非常及时。

我这次到台湾去四个礼拜。台湾有八个高等学校、两个学术研究机关约我。过去我到过日本，到过美国，到过加拿大，到过苏联，没象这次这样感到亲切。到台湾以后，所有接触的人，从来没有感觉到你是从共产党统治的地方来的，我是国民党统治的地方，没有这个界限。觉得像一家人一样，感到非常亲切。这是我内心的话，是我深切的感触。到台湾跟到别的国家去情况很不同，海峡两岸人心是一致的。

下面我谈谈我接触的学校，大概有的讲一次，有的讲两次，有的一次讲了以后第二次还有一个座谈。我一共大概讲了几十次，座谈了好几次。我接触到的人谈文字、音韵、训诂、甲骨文、金文、战国文字等这一系列的文字，都没有牵涉到简体字的问题。我认为如果要在台湾贯彻简体字是非常困难的。因此，我感到江泽民总书记的这个指示非常及时。

还有，我非常同意刚才这位教授讲的这话：要识繁。繁体字不能不认识，大家举的例子很多，我过去也谈过这个问题。今天我举个具体的例子。我去台湾时印名片，是临时拿去印的。我现在还留了一个标本在这儿。我是中国社会科学院历史研究所研究员。这个“歷”字他印错了。“歷”字简体字下边是从力量的“力”，正体字、繁体字从“止”。这个名片印成了“曆”字，下边加的是“日”字，真使我哭笑不得。我到台湾怎么拿给人家？结果只好让我的孩子一个一个地改，这太可笑了。这个印刷所是个大印刷所，不是街上摆摊的。就是街上摆摊的，你难道歷史的“歷”都不认识吗？所以说需要识繁。在我们这个范围之内，招研究生、博士论文答辩，如果不认识繁体字，不能读书，不能写繁体字的论文，就不能及格，不能得博士学位。我上回提了这么一个问题。所以，刚才这位教授讲的是非常符合我的意见的。又比如白话文也是一样，“无可奈何花落去，似曾相识燕归来”，你翻成白语文，你怎么翻译呀！“采菊东篱下，悠然见南山”……翻成白话文怎么翻呀！二十四史、《资治通鉴》都翻成白话文不容易。标点我就说不容易。顾颉刚先生从早年就标点《史记》，后来标点二十四史，又标点《史记》。苏联一位专家翻译《史记》，他到历史所待了四个月。我们发现顾颉刚先生标点的《史记》里头有多少多少是有问题的。读《史记》，能读；读《汉书》，能读；你标点就不见得。你要翻成白话文，可不容易呀！刚才这位教授谈到教学的经验、青年人的问题讲得非常中肯，我非常同意。所以，我觉得江总书记的指示非常及时，非常重要。

补充发言：

我刚从台湾回来，我的体会是除了繁简问题之外，人家中央研究院历史语言研究所一切都现代化。他们用红外线研究古文字，研究甲骨文，研究汉简的文字。台南有个成功大学成立了甲骨文字研究室，只有一个人，黄教授。他用车把我接到台南，我在那儿住了两夜，开了两整天的会。黄教授有一个计划：他要把世界上所有的甲骨文都输入他的电脑，作一个世界的甲骨集成。这个孤军作战的黄教授是个中年人，不是老年人。他有这么大的计划是因为他有现代化的工具。我现在跟我们比较一下，我们的甲骨合集编辑组经过层层领导的批示，最近成立了中国社会科学院甲骨学殷商史研究中心。我们原来十五个人，现在十二个人。有最近提升的四位研究员，另外还有八位副研究员。都是四、五十岁，五、六十岁的老专家了。大家都能写书，都能写文章。但是我们条件太差了。跟台湾一比，人家现代化，我们手工操作。我们连间办公的房子都没有，我们只有先秦研究室一个办公房，四个桌子拼在一起，开会都坐不下，我们这个中心怎么“中心”呢？所以，我们一要跟国外取得联系，二要现代化。我们有材料，有人。光大陆的甲骨有九万七千六百一十一片，北京市有十一个单位有七万多片甲骨，大陆上人多材料多。台湾人少材料少。但是人家现代化。我们海峡两岸要结合起来，要共同促进弘扬我们祖国的文化。现在时间是生命，是重要的。要抓紧时间，不要在繁简字的问题上纠缠。如哪个招牌还是繁体字，乱用了繁体字等等。不要在这些地方纠缠，应该把咱们的汉字文化研究向前推进一步，应该向这个现代化发展。招牌是个小问题。这是我这次到台湾的一个深切体会。

（原載《漢字文化》1993年第1期）

读《甲骨文所见商代的服饰》

——与杜勇先生商榷

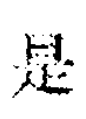
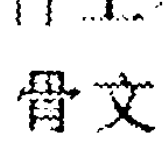
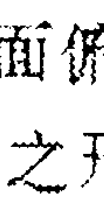
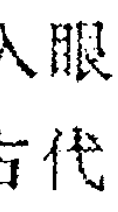
朱 桢

《中原文物》1990年第3期发表了杜勇先生的《甲骨文所见商代的服饰》一文。一口气读完，受益匪浅。再三研读后，又觉得文章有些疑问，现斗胆提出自己的看法，与杜先生商榷。

一、关于“衣”

杜文以不小的篇幅谈论了“体衣”：“商代体衣的基本形制”、“商代体衣的主要衣料”。对于后者，无可指责；而对于前者，尤其是其中的占主要篇幅的“上衣”的形制的论述，却大有讨论的必要。

杜文云：“甲骨文中已有‘衣’字，但是作祭名和地名用的，联系从衣的其他字来看，甲骨文‘衣’具有衣服之本义应是没有疑义的。”接着列举了甲骨文中的“初”、“依”、“裘”三字字形，“更说明衣之本义的存在是确定无疑的事实”。据我粗浅的甲骨学知识，简直不知“甲骨文衣具有衣服之本义”一句所言为何。试分析之，似乎可能造成两种歧义：一是甲骨文“衣”字在甲骨卜辞中尚保留着“衣服”这一本义，即用作本义；二是甲骨文“衣”字形所反映的是“衣服”这种事物的形状，虽然甲骨卜辞中已用非本义，但从“衣”字字形可知“衣”字曾有过“衣服”这种含义。如果是第一种可能，那么就与“甲骨文已有‘衣’字，但是作祭名和地名用的”相矛盾；如果是第二种可能，则根本没有这种表述的必要。甲骨文“衣”字是有其本义（衣服——确切地说是上衣）的，这确实是“确定无疑的”。如果一定要从甲骨文考证“衣”字之本义，也应从“衣”字字形本身去考证，而不应通过“从衣的其他字来看”其本义。通过“从衣的其他字来看”“衣”字的本义，不仅本末倒置，迂回牵强，而且极不合逻辑，因而站不住脚。

关于“衣”的本义，《说文解字》云：“衣，依也。上曰衣，下曰裳，象覆二人之形。”许慎虽说明古代人上衣下裳这一历史事实，但其于字形、字义的说解均为不当，尤其字形分析，“象覆二人之形”，一件衣服哪有覆盖二人之理？段玉裁注曰：“覆二人则贵贱皆覆。”亦是牵强附会，更不知所云何意。近人罗振玉先生据许、段未见之甲骨文字形而说解为“盖象襟衽左右掩覆之形”，观点近是，但也并非杜文所誉之“中肯”。我以为，甲骨文“衣”字：（甲三三七）、（佚九四）、（粹八五）、（甲一一九0）等形，象形，象古代的上衣，上装之形。这种象形属于甲骨文象形中那种以点代全的概括式象形，即整个字象一件上衣的俯视图。一件上衣从上面俯视，最入眼的是领口而已，甲骨文“衣”字之形正象古代上衣领口之象形，上面的∧象后领，本应是圆弧形，但为了甲骨文方笔、折笔刻写方便的特点已经变形；下面的々或ㄨ象前领及领下襟衽交覆之形，古人穿衣少用对襟系扣，而多是两襟或左或右交掩，称右衽、左衽。“衣”之古文字之形，正反映了这一历史事实，虽然甲骨文中“衣”字之用法已非造字本义，商代衣式或较“衣”字所象之物时代已有发展，但商代玉石

的活动，但甲骨文字本身所象的不一定是甲骨文时代的东西，甲骨文中的某些象形字、会意字所反映的当是商代以前或商代前期的事物的情状，也很有可能商代已离所象之物的时代久远，商代的事物已非文字所象之形。文字的相对稳定性决定了它往往落后于事物的发展。因此，不能单凭甲骨文字字形论断商代事物之如何、之有无。从这个角度来说，杜文径指甲骨文“衣”字字形反映了商代的衣式，也有些贸然。与此类似的错误我们平时所见甚多，不只杜文一家。所幸的是商代考古中出土的玉石人俑的服饰表明了商代人衣服装束还保留着、流行着“衣”字所象之物时代的风貌，如此贸言，也不算大误。只是作者运用甲骨文时，肯定未考虑到这一点，如杜文中还有“甲骨文止作ｙ、步作ｙ或作㳄，即是殷商时期人们每多赤足露止，行于通衢的真实写照”这样类似的错误，即是明证。

二、关于“衣饰”

杜文题目为“甲骨文所见商代的服饰”，而“服饰”是个复合概念，即有服有饰，而本文所谈的只有衣，即服，而未谈及饰。杜文云：“就服饰（除开其附属饰件）所护人体部位而言，大体可分为体衣、头衣、足衣三大部分。”整个文章也是仅就这些有关衣的问题而论。作者此句话也造成了歧义：一是服饰仅指衣，故除开一般所理解的附属饰件；二是服饰包括服和饰，但在此“除开其附属饰件”即饰而只谈服（衣）。如果是第一义，那么作者未能理解“服饰”一词的真正含义，这种可能性不大；但如果是第二义，即作者理解“服饰”包括服和饰两方面的内容，那么，作者何以又在这篇论商代服饰的文章中“除开其附属的饰件”（即饰）而只谈衣呢？所以，从第二义上去理解，此文题目，或者说文章结构有问题，要么文章题目改为只谈商代的衣而删去“饰”字，要么在文章中另加“饰”方面的内容。关于这一问题，也不只杜文一家独有，翻检所有研究服饰史尤其是先秦服饰史的著作或文章，都有这一通病。虽名之曰“服饰”，却只谈服而放弃饰。我认为，商代服饰的发展进化，早已脱离了纯粹作为蔽肤遮体的衣服的原始阶段，而走向亦服亦饰，有服有饰的真正意义上的服饰文化的阶段。虽然商代的亦服亦饰，即衣服本身具有美化作用、装饰效果，衣服的制作已突出了饰的成分，但商代的饰又应是一个独立于衣服而存在、与衣相配套的一个系统，是研究服饰不可忽视的一个方面。商代考古中出土的大量的、精美的穿着饰物以及与饰有关的遗物，如各种质料的头饰（笄）、颈饰（贝、串珠）、腕饰（镯形物）、佩饰（缀于衣角和束带的各种小型器物）以及铜镜、梳子等梳洗化妆用品，不仅证实了商代服与饰两方面内容的完整与不可分割，也为构建完整意义上的商代服饰文化提供了材料上的保证。惜哉，这一方面的材料未受到学者们的重视，致使服饰研究名不副实。

值得肯定的是，杜文题目虽是“从甲骨文看商代的服饰”，但并没有仅仅从甲骨文一个途径去展示商代服饰（衣）的状况，而是综合了不少的文献、考古资料去证实，这是难能可贵的。但仍不免过分倚重了甲骨文的作用，以甲骨文字形论断商代事物之如何、之有无，而不是以甲骨卜辞所表现的内容去论断商代的事实。因此违犯了甲骨文的应用规则。这正是此文的不足之处。

（原載《中原文物》1993年第3期）

人俑的衣饰证明了商代人还保留着流行着左右交衽的服饰风尚。如此从古文字字形构造探讨其本义，虽不敢断言观点就一定正确，但是肯定要比“从衣的其他字来看”“衣”字之本义方法要对头些。

杜文云：“衣字在甲骨文中从一期到五期始终有三种最基本的写法：（1）仌（《合集》35482）；（2）介（《合集》37555）；（3）令（《合集》36547）。这三种写法我们不能简单地用甲骨文字形的不确定性来解释。作为象形字，我以为“衣”字正好是商代人们所着上衣领襟形式的客观摹写。罗振玉认为，甲文衣字‘盖象襟衽左右掩覆之形’，这个看法是很中肯的。这里我唯一需要作点小补充的是，甲文‘衣’所反映的商代领襟式是三种而不只是左右掩覆两种。”“第一种，甲文仌所反映的交领右衽式……”“第二种，甲文介所反映的直领对襟式……”“第三种，甲骨文令所反映的交领左衽式……”在说解这三种衣式时，作者分别举以相应的文献，考古材料以为辅证。

我认为，这种论断，这种方法是不正确的。甲骨文中“衣”字的写法有很多种形构，其实不止这三种。而这三种所谓“基本的写法”也不能反映商代领襟三种形式，更不可能象杜文说的那样“正是商代人们所着上衣领襟形式的客观摹写。”因为我们知道，甲骨文不是万能的，它受内容、书法以及它本身性质只是文字而非图画等因素的限制，虽然其中有不少象形的成分，但它不可能、也没有必要全面地、准确地反映或摹写出事物的各种形态、各种形式。如“山”字没有必要也不可能反映天下所有山的形式，“水”字亦然。它们作为文字，作为象形字，字形只反映这一类事物的大体特征、一般形态。“日”字甲骨文作日为变成方形太阳（为契刻方便）没有拘泥太阳的形状而勾画成圆形，“月”字作（或）为月缺形指代月亮，也没有把月亮变化的每种形式都反映出来等。以前有个日本纺织史专家考证甲骨文“蚕”字时，曾把“蚕”字的不同异体字形看作是蚕的不同种类在文字上反映，哪些反映了家养蚕，哪些了反映了野生白眼蚕。现在看来，有些可笑。杜文将甲骨文“衣”字的异体构形也看成是商代多种衣式的反映，正与此同。我认为，甲骨文“衣”字反映古代常见的一种衣式——交衽，但并不反映具体哪种交衽衣式。其所以有令、仌两形也并不是刻辞者有意表现当时左、右衽交覆两种衣式，而是甲骨文书写的对称性所决定的。甲骨文字的对称性，不仅表现在大多数甲骨文字具有对称美，如“贞”字鬥、“在”字ｙ等，而且一些不对称的字也有一个对称性表现法，即字势在左者可右之，字势在右者可左之，如“人”字可作？，也可作丬；“卜”字可作卜，也可作ト，（但只有两字例外，这就是“左ｙ”、“右ｙ”二字。详见拙文《浅说甲骨文书法艺术》，载《殷都学刊》1989年4期。）故而，“衣”字可作仌，也可作令。所以说，仅从甲骨文字看衣式之不同，虽有“衣”的两种字势之形（仌令）同左、右衽的巧合（纯属偶然巧合），但不了解甲骨文本身的规律、性质，这种思路是错误的。甲骨文“衣”字的左、右势写法不能反映商代左右衽衣式的事实。至于杜文所举“衣”字的第二种写法，能否反映商代直领对襟衣式，也成问题，除上举甲骨文字不反映事物的具体特征的理由外，杜文摹写的字形也是错误的。查《甲骨文合集》37555，此字作仌形而非杜文所摹之介形。此字是五期字，字体刻写粗糙，不仅下面笔画未接，而且上面也未接，已不是能反映出象形字特点的典型字体了。如果非要把它作为一种衣式的象形而指为对襟式的反映，那么字之上部的断裂也应指为后领的断裂。那么这是一种什么样的衣式呢？显然杜文所举“衣”字两形与左右衽纯属巧合，一形为非典型字体且摹写有误。所以说，认为甲骨文“衣”字字形反映了商代三种不同的衣襟形式的看法是不能成立的。

关于甲骨文的应用，还应注意的是：甲骨卜辞的内容反映的是甲骨文时代（商代后期）

内容宏富的《卜辞通纂》

马如森

《卜辞通纂》郭沫若撰著于*1933*年1月，5月在日本出版。今年是这部在甲骨学研究做出巨大贡献的著作出版*60*周年，特撰此文，以资纪念。

甲骨文研究自*1903*年我国第一部甲骨文著录——刘鹗的《铁云藏龟》问世以来，相继有*1904*年我国第一部甲骨文考释著作——孙诒让的《契文举例》问世。在此之后的著录著作还有罗振玉的《殷虚书契前编》、《殷虚书契后编》、《殷虚书契菁华》和王国维的《戬寿堂所藏殷虚文字》；考释著作有罗振玉的《殷商贞卜文字考》、《殷虚书契考释》、《增订殷虚书契考释》。还有王国维的《戬寿堂所藏殷虚文字考释》、《殷卜辞中所见先公先王考》及《续考》、《殷周制度论》。王襄的《簠室殷契类纂》等。这些甲骨学研究著作的发表、出版为《卜辞通纂》提供了重要的资料来源。

《卜辞通纂》的资料来源，郭老精选于两部分甲骨拓片，也有少量的照片。一是：选录于国内已见著录的有《铁云藏龟》、《铁云藏龟之馀》、《殷虚书契前编》、《殷虚书契菁华》、《殷虚书契后编》、《戬寿堂所藏殷虚文字》、《龟甲兽骨文字》。还有少数私家收藏的甲骨，计有*800*片。这是全书的主体。其中选取于《殷虚书契前编》的就有*443*片和《殷虚书契后编》*195*片，二者占全书的半数以上。二是：选录于日本私家所藏的甲骨，分别编入“别录一”和“别录二”。其中“别录一”除前中央研究院藏大龟四版而外，所收新获卜辞和日本何遂氏藏甲骨*38*片，计*42*片；“别录二”所收日本岩间氏等私家和东洋文库所藏甲骨*87*片。全书有部分拓片或照片不清晰者，后附“新附摹本”。这样《卜辞通纂》所收录甲骨拓片及照片共有*929*片。关于这些资料的来源见《卜辞通纂》拓片照片来源统计表。

这部著作的资料来源是多方面的，卜辞内容丰富，在甲骨学发展史上贡献显著，今略述以下几点：

一、给殷墟卜辞以科学的分类

甲骨学研究一项十分重要的内容，就是给殷墟卜辞以科学的分类。商代占卜的事项是十分广泛的，它反映了上自天文，下至地理，从社会的政治体制到经济结构，殷墟卜辞都有所记载。自*1915*年到*1933*年近*20*年的甲骨学研究中，各家对卜辞的分类均有不同的见解。*1915*年罗振玉在《殷虚书契考释》中分为9类；*1925*年王襄在《簠室殷契征文》中分为*12*类；*1930*年董作宾在《商代龟卜之推测》中分为*12*类。唯独郭老在《卜辞通纂》中分为8类。这8类是：干支，数字，世系，天象，食货，征伐、畋游、杂纂。从殷墟卜辞的实际情况来看，郭

中国南方青铜器暨殷商文明国际研讨会开幕词

胡厚宣

各位领导、各位国内外的专家学者、女士们、先生们、朋友们：

“中国南方青铜器暨殷商文明国际研讨会”现在开幕了，首先请允许我代表中国殷商文化学会，对于大会的召开，致以热烈的祝贺！对于江西省各级领导，对于省文化厅，省文物局，省博物馆，省文物考古研究所，省文物商店的大力支持与协作，表示衷心的感谢！对于国内外部分专家学者在参加了郑州的会议后，又辛辛苦苦莅临南昌来参加这次会议，表示亲切的问候，并致以崇高的敬意！

中国殷商文化学会，从1984年以后，迄今一共开了六次会议。第一次是1984年10月在安阳举行的“全国商史学术讨论会”，第二次是1987年9月在安阳举行的“中国殷商文化国际学术讨论会”，第三次是1988年10月在安阳举行的“纪念殷墟科学发掘60周年座谈会”，第四次是1989年9月在安阳举行的“殷墟甲骨文发现90周年国际学术讨论会”，第五次是1991年9月在洛阳举行的“夏商文化国际学术研讨会”，第六次是1993年8月刚刚在郑州举行的“郑州商城与殷商文明国际研讨会”。

这六次会议都是在河南举行的。但是这些年来，考古工作普遍开展，殷商文化遍及全国各地，除了河南安阳、郑州、洛阳、偃师之外，重要的象山东益都的苏阜屯，河北藁城的台西村，四川广汉的三星堆，陕西西安的老牛坡，湖北黄陂的盘龙城，湖南宁乡、石门和湘、资、源、澧流域的各个窑藏和遗址，以及山西、辽宁、内蒙、甚至江苏、浙江、安徽等处，此外还有很多地方，都有重要的殷商文化发现。今天特别要提出的就是江西新干大型商墓以及瑞昌古铜遗址的发现，更是惊人。在来江西之前，我们看到报上的报导，大墓出土的青铜器、玉器、陶器1900余件，其中青铜器486件，玉器150件，陶器356件，大部分都是极重要的文物。在洛阳会上，我们曾看过录像，真是精美，这次来到南昌，将亲眼观看新干大墓实际情况和出土器物的精品并开会进行研讨，一大批高水平的论文，读之真是令人兴奋。

参加这次会议的专家学者特别多，尤其包括不少外国和港台地区的学人，增强友谊，相互交流，共同把殷商文化的研究，推向一个更高的峰顶。我们表示非常欢迎。

还有一件事，就是天公作美，郑州本是热都，这次在郑州开会，气候凉爽，比北京还舒适。我过去在庐山休过假，七月份上山过南昌，气候42度，九月份下山过南昌，还是42度，这次八月开会，在七、九月之间，秋风清朗，气候宜人。真是出乎我们意料之外，所以我认为这次会议一定会开的很好，因为除了省领导和博物馆、文物考古研究所对我们提供极为优越条件之外，气候也帮了我们的忙。

最后预祝大会开得圆满成功，并祝专家学者们身体健康、精神愉快！

谢谢！

1993.8.19

（原載《殷都學刊》1994年第1期）

老的分类要比前次学者的分类更有科学性、概括性。而且为后世甲骨刻辞的分类研究，提供了一项重要的、可以借鉴的科学标准。因为郭老“把卜辞按照社会物质生活，经济基础到上层建筑来统一作有机安排的，成一新的系统，每一类又加以总结性的考释，读者可以明了社会生活在某一方面的发展情况，合计八类小结，不啻成了一部简明的商代史。”①这样看来在此以后的卜辞分类的研究中，如胡厚宣先生于1954年《战后京津新获甲骨集》中分为24类；陈梦家先生于1956年《殷虚卜辞综述》中分为6类。均可以看出郭老的分类是这些分类的基础。就是甲骨文集大成的《甲骨文合集》分为4大类：阶级和国家、社会生产、科学文化、其它。细分的22小类也只不过是把这4大类的内容详尽具体化，这也都是在郭老科学分类的范围之中。从这个意义上来讲，郭老在他的甲骨学研究的初创时期的1933年，就已经创立了甲骨学的新体系。《卜辞通纂》就成为新体系的奠基作。

二、考证殷商世系，为甲骨断代研究做出了新证

王国维依据《后》上8·14片与《戬》1·10片首次缀合，写出他的名作《殷卜辞中所见先公先王考》及《续考》，把甲骨文研究用于史学。验证了商代先公报乙、报丙、报丁的正确位次。纠正了《史记·殷本纪》所载报丁、报乙、报丙为次的错误。董作宾在《甲骨文断代研究例》中，相继自上甲至武乙诸世进行了研究。除此之外，郭老又针对戋甲、羌甲、喙甲进一步研究。他明确了戋甲为河亶甲、羌甲（芍甲）为沃甲，喙甲为阳甲。

应当着重说明的是郭老对“喙甲”的研究。在《卜辞通纂》第109至118片都有对“喙甲”的记载。罗振玉也没有做出解释。经过郭老的研究，展示他卓识的见解，根据第118片的论证，郭老得出结论说：

“以上十片（指109～118片—笔者）均有喙甲，乃殷王名。罗振玉未识。云‘或省甲字，［象］（原文是篆书，此处隶定代用，以下同——笔者）或增口，殆是一人。’（殷释上十一）余谓［象］乃象字，或增口者乃从口象声之字，盖像字之别构也。象像与阳同部，则象甲若喙甲即阳甲矣。证以此片、喙甲在南庚之次，小辛之上，考之史记，南庚与小辛之间为阳甲盘庚，此喙甲正自阳甲，小辛之上所缺一帝名则盘庚也。”②

郭老选用325片甲骨，对商代世系做了全面地考证，认为卜辞所见之殷之先公先王与典籍所见者大抵一致的结论。从而看出甲骨文又给典籍以物证。在世系研究中郭老还列出了一个基本完整的自商代远古帝喾至殷商后期的文丁先公先王先妣世系图。这是在甲骨断代学研究中最早的商代世系表。

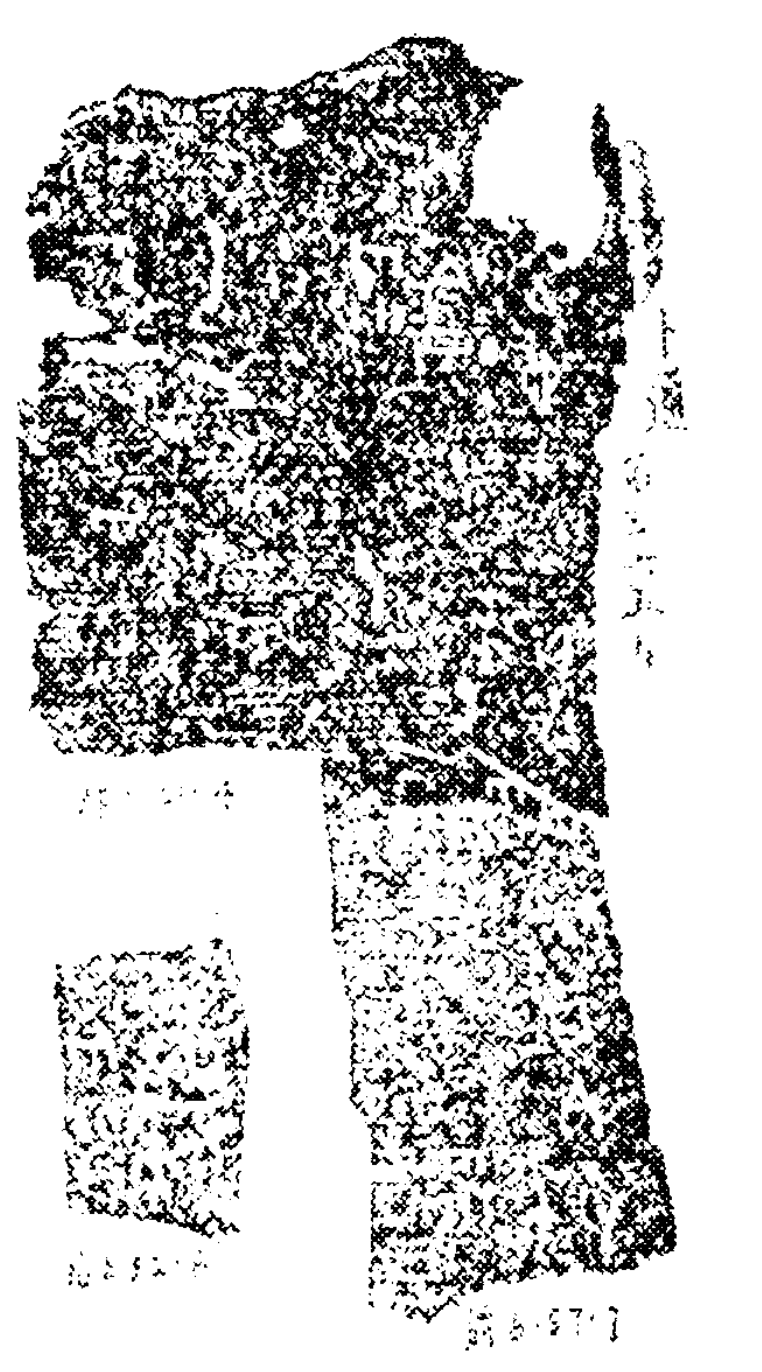
三、为甲骨缀合开创了新路，把甲骨学研究引向深入

甲骨学研究必须有准确的卜辞辞例为先决条件，在取得充分的甲骨刻辞的内容的同时，对于残辞断片来说，缀合又是一项极为重要的先行工作。如上述王国维仅将《后》上8·14与《戬》1·10片缀合成一片，把甲骨学研究引向史学研究。郭老在《卜辞通纂》中第2片将《殷虚书契前编》3·7·3与同书的3·5·2片缀合，第53片将《前编》1·21·4与《殷虚书契后编》的上25·4片缀合，第5片将《前编》3·4·3与《龟甲兽骨文字》的1·1·8片缀合，第778片将《前编》4·34·1与《铁云藏龟》的226·2片缀合，第794片将《殷虚书契菁华》9·3与同书的9·4片缀合，等等。这样的缀合就有34片之多。

《卜辞通纂》拓片照片来源统计表

分类 著录名称	卜辞通纂									别录	
	干支	数字	世系	天象	食货	征伐	畋游	杂纂	小计	别一	别二
	一	二	三	四	五	六	七	八			
铁云藏龟		1	7	6		9		3	26		
殷虚书契前编	7	14	148	37	21	78	108	30	443		
殷虚书契菁华			1	4		2	2	2	11		
铁云藏龟之馀			1	1					2		
殷虚书契后编	1	10	103	19	8	27	15	12	195		
戬寿堂所藏殷虚文字			10	2	3	4			19		
龟甲兽骨文字		2	32	1	1	14	10	2	62		
容庚氏所藏		1	1						2		
日本私家所藏			12	4	4	3	1		24		
马衡氏所藏			3		1		1		5		
前中央研究院所藏						3			3		
340—347仍旧片			8						8		
大龟四版										4	
新获卜辞										22	
何遂氏所藏										16	
日本所藏择优片											87
小计	8	28	326	74	38	140	137	49	800	42 129	87
全书总计	929										

此后，曾毅公先生对甲骨缀合作出很大贡献，他的缀合著作也有一定的代表性。1939年他编的《甲骨缀存》一书，共有75片、《卜辞通纂》缀合片全部被收入此书。曾先生在1950年编的《甲骨缀合编》就有396片。看来甲骨缀合工作在郭老缀合的基础上，又有了很大的发展。



郭老的缀合工作是经过详细观察之后，又作了人们难以想象的过细工作。缀合的原则之一，就是片与片之间合缝秘合，文例一致。郭老在第375片一肩胛骨上部的缀合片，缀合得十分巧妙。此片记载了四方“来雨”的内容。这片缀合片来自三部著录著作。即《林》1·21·4、《前》6·57·7、《后》上32·6。而《后》上32·6片骨版甚残不与相拼的两片相接，其骨版之间的空隙相当大。但从辞例来看“其自南来雨”，与相拼合的两片“其自西来雨”、“其自北来雨”、“其自东来雨”的内容完全相同。而它们的书体也是一致的。（见左图）

此片视之为四期卜辞，郭老在解决缀合难片的处理上为我们做出了先例。由于此片缀合，使我们了解了殷人有四方观念的完整材料，为甲骨学研究增添了新的内容。

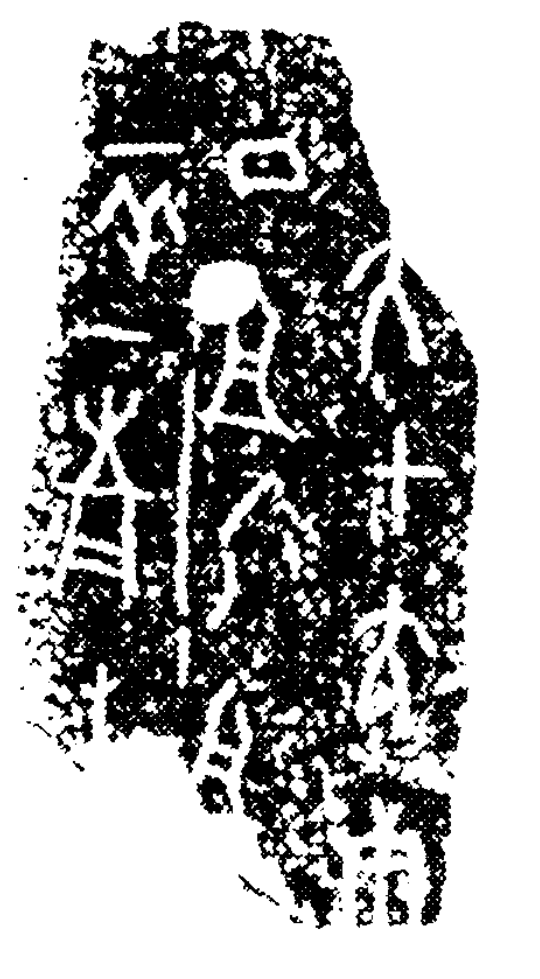
四、纠正罗王之误，增加卜辞文例的准确性

1917年王国维的甲骨文研究成果显著，在中国近代科学史上曾经轰动一时；罗振玉在1910年出版了《增订殷虚书契考释》，使得甲骨文字的考释工作前进了一大步。特别是罗振玉在《增考》中指出了孙诒让《契文举例》在文字考释方法上或对文字解释上的不少错误。1927年前后罗、王的甲骨学研究产生很大影响，是甲骨学界一时的权威人物。董作宾先生在1933年发表具有划时代学术意义的《甲骨文断代研究例》，也很少指出罗、王的错误。

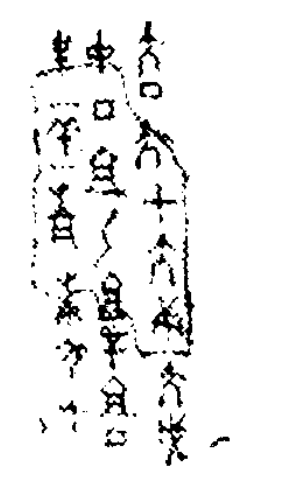
郭老充分肯定“罗振玉的功劳即在为我们提供了无数真实的史料……”是应该“大书特书”的。（《卜辞中的古代社会》）对王国维予以高度评价，说他是“新史学的开山”。（《十批判书》）同时在《卜辞通纂》中多处指出罗、王在研究卜辞文例或文字考释方面的错误。例如指出罗振玉的有：

《卜辞通纂》（以下略）第16片，“五十的合文”，罗释“十五”之误；第96片，指出“兄庚即祖庚，祖乙乃小祖乙也。罗误为河亶甲之子祖乙，谓祖乙之配有二，曰妣己、曰妣庚，非是。”；第136片，“兴”字，罗释“与”，郭老指出“余谓乃兴字之省。”；第435片，“妫字罗释奴，亦不确。”；第797片，有一“萠”字，罗振玉、王国维均释“朝”。郭老说“余案当以释萠为是。”可见类似这样之误还有多处，不做详述。

郭老指出王国维在残辞补释上的错误。《殷虚书契后编》卷上5·1片记有商先王世系一辞：“大甲，大庚，□丁，祖乙，祖□，一羊一南，▨”。（见下页图）此片王国维在《殷卜辞中所见先公先王续考》、《商先王世数》中对它进行了补释。在补释之前说：“案殷人祭祀中有特祭，其所自出之先王而非所自出之先王不与者，前考所举求祖乙（小乙），祖丁（武丁），祖甲，康祖丁（庚丁），武乙，衣，其一例也。今检卜辞中又有一断片（指后上5·1—笔者），其文曰‘（上缺）大甲，大庚（中缺），丁祖乙祖（中缺），一羊一南’此片虽残缺，然于大甲，大庚之间不数沃丁，中丁（中字直笔尚存），祖乙之间不数外壬，河亶甲，而一世之中仅举一帝。盖亦与前所举者同例，其上下所缺得以意补之如左”：（见左图）王国维在补释之后接着说：“由此观之，则此片当为盘庚，小辛，小乙三帝时之物。自大丁至祖丁，皆其所自出之先王，以《殷本纪》《世数》次之，并以行款求之，其文当如是也。”③



后上5.1



王国维补释

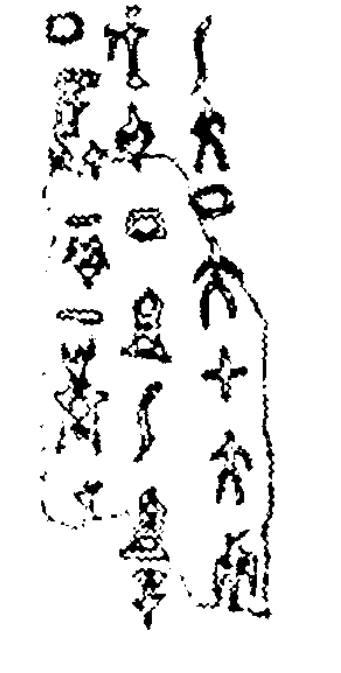
王国维这样补释，看来似乎有道理，其实是不对的。郭老针对他的补释，指出有两点错误：

一是：从甲骨文字形书写规则看，与王释字形不符和王氏所指商先王特祭自相矛盾。郭老指出说：“今案王之见解极犀利，然其所补则颇不自然，牛字中画过偏右，南庚庚字首太长，甲骨文中无是书法，举与首行大庚，庚字相交，即可知其难安也。王以X甲为羊甲，其实乃芍甲即沃甲。又阳甲乃祖丁之子，南庚为其从祖父，今以之承于南庚，于所说‘特祭其所自出之先王’，尤自相矛盾”。④

二是：王氏补释，辞条的祭品位置不对。郭老认为，本辞条按照卜辞辞例来看，在祭祀先王时，祭品位置不应当出现在被祭祀对象的中间。王国维所释此条卜辞，在祭祀对象祖丁、南庚之间，出现祭品“牛一，羊一”的辞例，是不对的。郭老说：“王盖困于‘一羊一南’之不得其解而为此牵强之补足耳。”⑤

郭老正确的补释是这样的。他接着指出：

“余谓‘一南’与‘一羊’为对文，同是献于祖之物，前第159片‘屮于祖辛八南’又‘九南干祖辛’，其例正也。余今采王之说而略略修正之如次”。（见左图）⑥郭老的补释又论证说：“末一字不明。考卜辞文例，凡于所祭者之后系以祭品，则当为辞之终，疑是‘在某月’或‘在某（地名）’之缺文也。知此为辞之终，则知大戊当在次行之上，而不当在首行之下。（王国维释在“首行之下”——笔者）因而首行补以大乙、大丁，三行补以祖丁、喙甲，遂十分自然，而使王说亦得其条贯矣。”⑦



郭沫若补释

郭老对此片的正确补释，在残辞补释中是一大创举。它的意义在于为甲骨断代研究做出了贡献。

郭老于1928年2月去日本，1937年回国。在这10年中他为了探索中国革命的道路，开始了对中国古代社会的研究工作。在甲骨学研究领域里，自罗振玉、王国维以后，郭老是我国把马列主义运用在考古学、甲骨学和历史学研究之中的第一人。正如他自己所说：“不掌握着马克思列宁主义的方法是得不到正确结论的。”（《奴隶制时代》）这一时期他取材于甲骨文研究的著作先后有《卜辞中的古代社会》、《甲骨文字研究》、《殷契馀论》和《殷契粹编》。

《卜辞通纂》是其中之一，这部著作，不但在我国早期的甲骨学研究中是一部不可多得的巨著，就是在今后的甲骨学研究、史学研究中也将永远放射着光辉异采。

---

①彭静中：《中国甲骨学研究的里程碑》，《郭沫若研究论丛》第二辑第188页。②④⑤⑥⑦《卜辞通纂》第31页、第48页。③《观堂集林》卷九，第19页。

（原載《殷都學刊》1993年第2期）

郑州商城与殷商文明国际研讨会开幕词

胡厚宣

各位领导、各位来宾、各位专家学者、朋友们：

中国殷商文化学会，如果从1984年10月在安阳举行的全国商史学术讨论会，算是第一次会议的话，那么，第二次会议是1987年9月在安阳举行的中国殷商文化国际学术讨论会，第三次会议是1988年10月在安阳举行的纪念殷墟科学发掘60周年学术座谈会，第四次会议是1989年9月在安阳举行的殷墟甲骨文发现90周年国际学术讨论会，第五次会议是1991年在洛阳举行的夏商文化国际学术研讨会，这次在郑州举行的郑州商城与殷商文明国际研讨会，就应该是第六次会议了。

这次会议，承河南省和郑州市各级领导，郑州大学，省社科院，省博物馆，省文物所，特别是市社联的大力支持与协作，使我们非常感激！就殷商文化来说，洛阳偃师是早期，安阳殷墟是晚期，郑州则正是中坚，郑州商城，规模如此浩大，考古发掘如此辉煌、真是了不起，这正是我们这次会议要研究讨论的问题，具有极为重要的学术意义！

回想1949年12月我曾编过一本《五十年甲骨学论著目》1952年中华书局出版，1983年重印，收录1899至1949计50年间出版的甲骨学论著包括专书论文共867种。其中属于甲骨文字的共223种，属于商史部分的最多，包括文学、历史、地理、帝王、礼制、社会、经济、文化宗教、风俗、历象等项，共264种。在当时还认为这一新兴的学科，乃是“近代中国学术史上，一件惊人的盛事。”

可是最近濮茅左所编《甲骨学与商史论著目录》，1991年12月在上海古籍出版社出版。收录1898至1987，近90年间出版的甲骨学商史的专著论文，一厚本561页，原书没有编号和索引，又有不少重复和错收的条目，但总的说来，种数还是很丰富的。我花了两天的时间，粗略的数了一遍，共有8665种。在甲骨文发现50年之后的38年（1987－1949＝38）之间，就出版有论著7798种（8665－867＝7798），为前50年的九倍多。甲骨文字部分771种（994－223＝771），为前50年的三倍多。商史部分3889种（4153－264＝3889），为前50年的14倍，38年出版的论著比前50年出版的论著，增多了多少倍，这说明自1950年以来，学术界还是非常活跃，空前繁荣的。

尤其是这些年来，好多学术会议，都邀请外宾参加，增强友谊，相互交流，知无不言，言无不尽，畅所欲言，共同提高，已经取得了一次又一次的可喜的成果、我们这次会议，也是一样，我想一定会取得更为卓越的成就！

关于殷商文化的范围，日益扩大，考古发现，逐渐增多，

（轉下頁）

（接上頁）

今年在郑州开会之后，接着又在南昌开会。这样的会议，在适当的时候，还可考虑在山东、河北、湖北、湖南、陕西、四川等地举行。目的是好把殷商历史文化的研究，推向一个新的高峰。

明年1994年是中国殷商文化学会筹备成立的十周年，又是殷墟甲骨文发现95周年，我们建议是否可以考虑在哪一个城市再开这样一次国际性的学术会议，希望各位专家学者共同商议，撰写论文，踊跃参加。

最后预祝大会开的圆满成功，并祝各位身体健康，精神愉快！谢谢！

（原載《殷都學刊》1993年第4期）

殷墟文化研究的力作

——译著《安阳》评介

刘学顺

《安阳——殷商古都发现、发掘、复原记》，李济著，苏秀菊、聂玉海译，中国社会科学出版社1990年出版。

1977年，美国华盛顿大学出版部出版了李济先生的英文版学术专著《安阳》，15年后，费尽几多心血，历经多少周折，苏秀菊、聂玉海二位先生据之译出的《安阳——殷商古都发现、发掘、复原记》终于面世了。这部译著有胡厚宣先生所作李济《安阳》中译本序言和译者的话、李济的序言、华盛顿大学艺术院米勒德·B·罗杰斯的前言、15章正文、注释和参考文献等7部分。获此书拜读后，颇有耳目一新之感。深深地被译著中的众多创见特识所吸引，爱不释手，深感苏、聂二位先生完成了一项极有意义的工作。而且译著的问世于殷墟文化研究具有重要意义，值得向学界同仁竭力推荐。

第一，译著向人们介绍了50年来史语所在殷墟考古、殷墟文化研究方面取得的成绩，其中许多创见对大陆的殷墟文化研究很有启发。原著者李济先生享誉海内外。他是“工作方法现代化的、兴趣广泛的、超越历史时代的中国第一个考古学家”（译著47页），是中国现代科学考古发掘方面“一个开山的人”（胡厚宣之序言）。李济先生与安阳结有不解之缘。1929年史语所成立考古组，他任考古组主任，领导殷墟的发掘工作。抗日战争、解放战争及迁居台湾后，他一直领导殷墟的研究工作。他一生研究殷墟长达50年。其间，李济先生作出了举世瞩目的卓越成绩。他临终前最后出版的《安阳》一书正是他所领导的50年殷墟考古及殷墟文化研究工作的一个总结，多有独到的卓识。这在译著中得到说明。下面仅举2个简单的例证。

译著的前3章叙述殷墟科学发掘的背景。第一章：甲骨文：最初的发现及学者们的首次接触。第二章：早期研究阶段：甲骨文的搜集、考释和初步研究。第三章：田野方法：20世纪初期西方的地质学家、古生物学家和考古学家在中国演示的田野方法。这三章提出了与一般意见不大相同的殷墟发掘缘由。一般认为，导致殷墟发掘的原因极明白、简单：1928年，罗振玉等人说安阳埋藏的甲骨珍品已全被发现，再进一步搜集是徒劳而无益的，而这种企图也是愚蠢的；为查明殷墟是否还有一些甲骨值得发掘，或是否真象罗振玉及其同伙说的那样甲骨已被挖尽，傅斯年才选派董作宾赴安阳调查，因之导致了举世闻名的殷墟科学发掘。但实情并非如此简单。译著的前3章经过深刻全面地分析得出结论：殷墟科学发掘的根本动因来自社会上的根本变革。首先，辛亥革命不仅使社会的政治经济等出现变革，它还改变了知识分子的世界观，使他们突破了旧的治学思想、传统方法，让“把人类劳动分为‘劳心’与‘劳力’的孔孟思想和必读物‘四书’一起‘随风去’了”，认识到“‘田野方法’也是一种学习手段”（译著27页）。其次，20世纪初期，葛利普、安特生等著名西方学者在中国典范地展示了田野方法，唤起了中国学者掌握这种新方法的热潮。再加上甲骨文的探寻，诸多因素汇合在一起，遂导致了殷墟科学发掘。显然，译著的分析要深入透彻得多，它准确表述

了李济先生对这一问题的深邃见解。

第四章：安阳有计划发掘的初期。第五章：王陵：王陵的发现及有组织的发掘。第六章：第二次世界大战前在小屯的最后三次田野发掘。这3章详尽介绍了15次殷墟科学发掘的情况、重大发现，内有许多资料，于殷墟考古极其重要。

第七章：战时继续研究安阳发现物所取得的成果，直至第十五章：关于殷商人群体质人类学的评述，准确、多方面地介绍了史语所的巨大成绩，创获迭见。举1小例：为什么现今15万片甲骨文中确认不了盘庚、小辛、小乙3王的卜辞？学界众说不一，都难惬人意。李济先生提出：这是因为契刻书写工具发生了重大变革的结果。中国人曾流行以毛笔书写，商代早、中期也是如此，这有墨水写字卜骨的发现可以作证。及至武丁，由于技术工具的改进，契刻文字的方法被官方采用。于是从武丁开始出现了甲骨文（译著128页）。这虽难说已是定论，但起码相当合乎情理，给人很大启发。许多更重要的、更精辟的观点我们不可能于此一一列举。要想全面了解，还得仔细阅读译著。要之，译著介绍了50年台湾史学工作者在殷墟文化研究方面取得的重大成果，对我们的殷墟文化研究有重要的参考价值。

第二，译者的语言虽素朴无华，但极其顺畅，可读性很强。这是著者、译者双方辛勤耕耘的硕果。就原著作者而言，李济先生一生从事、领导殷墟的研究工作长达50年。他在这方面作出了世人共仰的辉煌贡献。《安阳》一书可视为先生一生工作成绩的总结；又由于先生的特殊地位，众所公认，它也是50年间史语所在殷墟文化研究上取得成就的总结。这决定了此书不同于别的研究著作的一个极鲜明特色：它具有浓郁的自传体色彩。其行文的思维极其宽阔，绝没有局限于所谓“原始材料”的枯燥乏味的征引。这是因为，著者本身对实际情况非常熟悉，因而能灵活自然地运用材料并为人所信服。再者，他与史语所里同仁的关系很和睦，倍受他们尊敬，各抒己见，坦诚交流。所以他对同事的研究成绩了如指掌。在需要时，著者尽管没有征引他们论著的原文，但娓娓道来，更能准确地反映他们的研究成果。因此，总的看来，著者的语言虽貌似很宽泛，但它恰恰道出了研究工作者的心声，很全面而深刻地反映了人们独到而精僻的研究成果。可以说，著者为译著语言的顺畅古朴奠定了良好的基础。就译者来说，他们也付出了辛勤劳动，有不可忽视的作用。译者长期生活在安阳。殷墟在史学界、考古界的特有魅力自然对他们产生很大影响，吸引他们投身于殷墟文化研究中去。经过几十年如一日的不懈努力，他们都已是殷墟文化研究的行伍中的一员。自1984年全国商史学术讨论会召开以来，历届国际商史学术讨论会和殷商文化节都融有他们的心血。他们对殷墟文化既有深厚的情感，又有全面的了解。这是他们能与李济先生产生共鸣的基础，也是他们能深切了解《安阳》价值及意义的关键所在。再加上译者长期从事教学工作，练就了讲话、写文章准确精炼、流畅生动的过硬本领。这使他们能成功地体现出原著的文风，并为之增色。由于著者、译者的默契合作，才能使译者以其独有的风彩呈现给学界，可称学术译著的上品。

第三，开创了学术译著的新体例。不管是何种原因，英文版《安阳》有个别明显失误。对此，译著随文注出。据笔者统计，这样的注释总计4处，分别见译著的第6页第1行，第25页第1行，第52页倒数9～8行和第79页最后1行。这样做很有意义。因为对“原书中个别明显的失误之处，我们依据其它材料予以改正，并用括号加以注明”（见译者的话），既无损于原著的本来面目，又能避免引起思想上不必要的混乱。这种体例值得效仿。

金无足赤，译著自也有白璧之暇：译著未全部注出原著的明显失误。 （轉下頁）

（接上頁）

如译著第50页第14行：“在广泛讨论了几年后，立法院在1930年6月终于通过了这个保护法。”文中的“几年后”应是“几月后”之误。因这里提到的古物保护法于1929年末提出，在1930年6月通过，实经数月讨论，不足一年。又如译著第122页第3行：“上面的引文（笔者注：指《盘庚》的一段文字），约写于公元前2000年末”。这样，著者把《盘庚》篇的时代定在了公元前的2000年。这显属措辞不当。

译著虽未一一注明原著的失误，但这无关宏旨，因为人们都能判断是非。就译著以朴素顺畅的语言介绍了50年间史语所的丰硕成绩而言，就其新体例而论，《安阳——殷商古都发现、发掘、复原记》必将对殷墟文化研究产生很大的积极影响，无愧对殷墟文化研究的力作，值得所有同仁置诸案头，随时参阅。

（原載《殷都學刊》1993年第2期）

中国传统文化溯源之作

——读《中国古代龟卜文化》

罗翊重

中国传统文化之源，人们一向公认是《易经》。但随着《易》学研究的不断深入，有人已意识到需要追溯《易经》之源。

《传统文化溯源——中国古代龟卜文化》，刘玉建著，广西师范大学出版社1992年4月出版，正适应了当今的这种需要：专门探讨中国传统文化之源的源头、该书第一次全面而系统地阐发了与《周易》有密切联系而又大大早于《周易》的龟卜文化，而且也填补了国内系统研究中国古代龟卜文化及其演变史的空白。

龟卜，对中国古代尤其是夏、商、周三代的政治、经济、文化，产生了广泛而深刻的影响。预知吉凶祸福而趋利避害，这是人类的需要。占卜活动对原始先民，特别是对夏、商、周奴隶制社会的统治者，是至关重要的，因为龟卜是他们借以巩固“天命神权”的有效工具。一部龟卜文化史，可以说就是中国古代奴隶制社会兴衰史的缩影。全书贯穿这一中心思想。

由于龟卜文化是上古的先民文化，其商周以前文献不足、地下资料也寥寥无几，而古代传说又扑朔迷离如同云雾一般，因此对龟卜起源的真实探讨，并不是一项轻松的研究。商周出土文物多有发掘，其后祖先留给后人的文献资料，也愈来愈多，因此对龟卜的了解也愈来愈清晰、愈来愈真实可靠。基于此，作者采取古文献记载和地下考古资料皆不偏废的态度，在充分占有和理解现有涉及龟卜文化的考古和文献资料的基础上，运用历史唯物论的观点，来阐发中国古代龟卜文化及其发展史。有考古资料时，以文物和文献相互映照，阐发科学的观点，在没有考古依据时（特别是商周以前），则以文献记载及合理推测相互结合，提出自己平实公允的见解，多发前人之所未发，并期待着将来考古新发现加以验证。作者的治卜态度是实事求是而严谨的。确实，对于那些商周之前已近消失踪迹的远古文化，又无他书借鉴，作者的开拓之作只能采取这种在文献和出土文物相互映证相互启迪基础上的合理推测这一综合治理的方法了。

夏商周都是奴隶制社会，其经济、政治和文化背景有不少相同之处。作者认为在此基础上卜法也应有许多一致之处，其龟卜文化的演变是“商周卜法来源于夏代，夏代卜法是后世比较完善的商周卜法的雏形”，（81页）基于此，作者充分运用了广泛翔实的文献和考古资料，各有测重地阐发了整个龟卜文化的方方面面。这种结构处理，使全书内容紧凑，各专题阐述详尽而没有重复之感。作者对为何选龟为最佳占卜物，龟在三代之所以由兴至盛而衰的阶级本质（天命神权观及其对龟卜的垄断），龟卜活动的整个技术程序（取龟、攻龟、钻凿龟、命龟、灼龟、占龟、书契龟及龟甲的贮藏等）及因之占卜机构和卜官的设置，卜筮关系（卜筮并行、卜重于筮），还有春秋时期丰富的卜例分析及其占卜种类，以及至战国时龟卜衰亡的社会根源等等，都作了详尽具体的介绍和分析。行文融学术性与通俗性为一体，使人读后对整个龟卜文化，有了全面系统的了解.

第一，对为何取龟为最佳占卜物，有言之成理的理由。“人类居住的地球上，有着无穷无尽的动物、植物及无机物，为什么先民单单把龟看成是最为理想的占卜物呢？”（2页）作者认为这是龟卜研究中不可回避的一个基本问题。“避凶趋吉，这是人类的天性”，这种天性促使先民不断发明探索他们自以为可以实现避凶趋吉的方法。世界上的不同民族，其先民的占卜方法真是五花八门、数不胜数。仅汉民族而言，骨卜、龟卜、蓍筮这3种占法同为三代所推崇。但何者最佳？何者次之？当然是最能上传“天意”、“神意”，下达“人意”，沟通天地人关系的“媒介物”了。而龟，它不仅具有引起先民崇拜的基本因素（提供肉食），还具有其他动植物所望尘莫及的特征：在先民看来，龟在所有动物当中，最善于传达上帝的意旨，因为龟“寿蔽天地”、“明于上古”，“问吉凶于龟者，以其历岁久矣”（《淮南子·说林训》）。“河出图，洛出书，圣人则之”（《易·系辞》）之说，就是龙马神龟能以其身上的自然花纹传达天帝意旨这种动物崇拜的反映。另外，龟有天地人之象：龟脊甲酷似“天圆”（椭圆），其纹象“天文”，龟腹甲酷似“地方”（长方），其纹象“九州”，而龟四肢，就象支撑天盖的四根柱子，这与古代神话女娲补天的传说和“天圆地方”的原始观念完全吻合。而“在我国原始社会父系氏族公社时期，对生殖器尤其是男性生殖器的崇拜，达到了极为鼎盛的时期”（37页），因此龟头之象，理所当然是“人象”了。而蓍草，在先民看来，是植物当中寿命最长者，“蓍百年而神，以其长久故能辨吉凶也”（《礼记·曲礼上》孔颖达疏），因其长寿，也被先民选为《易》筮的占卜物。无论龟卜还是蓍筮，都是一种由人向天、地、鬼神询问吉凶祸福的迷信活动。对天道、地道、人道的变化，龟能直接体现出此3者之象，而《易》筮则只能以卦象的6爻来间接体现天（五、六爻）、人（三、四爻）、地（一、二爻）3个要素。龟的这种天地人之象，决定了它能被选为占卜物并被长期视为最佳占卜物。

第二，透过资料和文物，作者从理性上把握和阐发了三代龟卜的演化史。作者第一次对龟卜文化的研究提出了分期问题，认为“它产生于原始社会后期，历经三皇五帝进入阶级社会，盛行于商代及西周，普及于春秋时期，战国以后开始走向衰亡”（427页）。历史进入奴隶社会，原始宗教逐渐演化发展为适合于最高统治者需要的天命神权的宗教世界观。夏王朝离原始公社制社会不远，“夏之为政之道，尊重四时，政教之命使人劝事乐功也”，“夏道尊命，事鬼敬神而远之”。（89页）随着奴隶制经济、政治、文化的发展，继夏之后，商王朝崇尚上帝祖先神灵，“殷人尊神，率民以事神”，对上帝、祖先，可谓虔诚之至。商王不但用以欺人，而且自欺，后者甚至远胜于前者。至周代，由于周人对殷革夏命，周革殷命这些无可否认史实的认识，还有人的作用日益受到重视等因素的影响，如周公“皇天无亲，唯德是辅”、“民之所欲，天必从之”等思想，使“天命神权”的宗教迷信发生动摇，周王朝对上帝祖先神灵的迷信程度，远不及巫教风靡的商代。为巩固政权，周王朝只继承发展了天命神权欺人的一方面，而逐渐抛弃了商王朝那种愚昧自欺的一面。西周对天命的怀疑，导至其强调“尊礼尚施，事鬼敬神而远之”，于是制定种种礼仪规范人们的行为，以维护其统

治。春秋时期的孔子，对此心神往之。由此，商代那种政教合一的体制，在周代实已发生动摇并逐渐趋于解体。其天命宗教迷信及其龟卜，在周代国家政治、经济生活中的作用，就显得不如商代那样处于绝对崇拜和鼎盛时期。这从商周出土的大量卜甲中，都可得到无庸置疑的证实。

第三，春秋时期龟卜的大普及及其衰亡史，对现代人仍富有启发和教育意义。春秋时期，礼坏乐崩，这是旧有奴隶制和新兴封建制并存和斗争的时代。此时龟卜不再为天子所专有，各诸侯国乃至大夫、家臣皆用龟卜。这是一个龟卜大普及的时代，同时也是龟卜之欺人和自欺被日益广泛揭露的时代。作者用大量翔实的卜例分析，说明春秋特别是其晚期，龟卜的普及导致人们对其欺骗性的本质有了足够清醒的认识。这个时代，各国间相互征伐兼并，大量君臣易位的事实，已将龟卜和天命神权的欺骗性淋漓尽致地暴露无遗。人为贵，神为轻，“吉凶由人”，“祸福无门，惟人所召”，“国将兴，听于民，将亡，听于神，神，……依人而行”，“夫民，神之主也。是以圣王先成民而后致力于神”，此种论调，彼彼皆是（*390*页），“怨天”、“骂天”蔚然成风：“昊天不佣！”、“昊天不惠！”、“昊天不平！”。（《诗经·小雅》）在这种时代精神背景下，天命神权和龟卜的命运可想而知了。至战国，群雄并起，随着奴隶制的崩溃，封建制的确立，诸子百家兴起，龟卜文化的衰亡是历史之必然。在三代，与龟卜相较，蓍筮与龟卜并行但处于从属地位。《易经》的卦爻辞与龟卜的卜辞在本质上是一样的。按理说，龟卜衰亡，蓍筮也该衰亡。但龟卜的三代卜法（分别是《玉兆》、《瓦兆》、《原兆》）与蓍筮的三代筮法（分别是《连山》、《归藏》、《周易》）又有区别。如仅存的《易经》卦象与龟虽都具天地人之象，但《易经》的阴阳卦爻内所蕴含的辩证义理和象数关系，却是龟卜兆象所不具备的。在春秋的社会大变动时期，处于变革时代思想阵地前沿的卜官身上，必然会反映出很多朴素的辩证法思想。如著明的晋国卜官史墨就认为“社稷无常奉，君臣无常位，自古以然”，他提出“物生有两”及“倍贰”的著名辩证法思想。又如卜偃说：“君以为易，其难也将至矣。君以为难，其易也将至矣”，史伯认为，“和实生物，同则不继”。这都是这一时期卜官认识和理解现实历史辩证法的自觉反映。基于此，不少有名望的卜官在卜筮吉凶时，其用功之力并不在于看龟甲上的裂纹如何，也不在于看卦象之爻变如何，然后对应卜辞爻辞推断吉凶，而是自觉地依据道性事理的辩证分析及其事理的发展趋势，得出吉凶的可能，然后再假托或结合兆象卦象加以附会（*349*页）。他们“借身为卜官的方便，通过占卜而阐发自己的政见、思想等。在很大程度上，龟卜成为不少进步开明的卜官藉以推行其治国安邦的建议与措施的手段。”（*386*页）由于这种“功夫在诗外”的“卜筮”准确率高，他们常常成为“顾问于君王或权臣左右的近臣，颇受当权者的宠爱”（*387*页）这说明，春秋末期，高明的卜筮之官（他们对社会均有比较深刻的认识）实际上是以自然之道和人情事理为基础作预测的，并以此为据来解释或说明卜筮之辞的。这再一次暴露了卜筮这一宗教迷信的本质及其毫无理性的欺骗性。（*349*页）

总之，《中国古代龟卜文化》一书，对人们认识整个龟卜文化的兴衰史及其卜筮的虚伪本质，并从中领悟出真正科学的唯物辩证预测和推占方法，将富有启发意义和教育意义。

（原載《殷都學刊》1993年第4期）

孙晓野著《古文字及古文字学论文集》序

胡厚宣

1934年，我从北京大学毕业，进入南京中央研究院历史语言研究所，先参加安阳殷墟发掘，后在南京所里整理研究殷墟出土之甲骨文字，一切生活工作，尚称顺利正常。

1937年，忽然发生“七七事变”，抗日战争开始，仓卒间随机关从南京迁长沙，半年后，又从长沙经衡阳迁桂林，没有多久，又从桂林经柳州、南宁、龙州，绕道越南迁昆明。在昆明三年，当史语所由昆明再迁南溪之际，我乃应顾颉刚先生之邀，从昆明往成都，在顾先生任主任的齐鲁大学国学研究所任研究员，并在大学部教课，生活才又安定下来。

1943年，高晋生（亨）先生来齐鲁大学，任中国文学系主任，我亦任中国历史社会系主任，文史相投，我们聚谈甚为欢洽，正所谓“以倾盖之新知，若班荆之旧友”。我著《甲骨学商史论丛》一书，晋生特为制一长序，颇承嘉勉，至深感激！晋生尝谓余言，“吉林有孙晓野（常叙）博闻强记，学问踏实”，晓野之名，闻之久矣。

1945年，抗战胜利，日本投降，我复员东归，在上海复旦大学任教。1954年，承东北师范大学之邀，为研究生及年轻教师讲演。我自上海来长春，始与晓野先生初次见面，当时晓野先生方任东北师大中文系主任，温文尔雅，一见有如故交。又悉他早在1926至1929年间，曾在吉林省立第一师范，从高晋生先生学习，又在1934至1937年间，曾向罗振玉先生问业，“幼承庭训，长从大师”，所以他才精于语言文字和甲骨金文之学。

自后我多次前往长春，或向吉林省博物馆访问甲骨，或往吉林大学参加博士生的论文答辩，或参加中国古文字学研讨会议，或与侯外庐同志同去东北征询对于《中国史稿》的意见和问题。每次到长春，都能与晓野先生晤谈，甚为畅快！他每有著作出版，都承惠赠，读之受益良多。我们《甲骨文合集》的编辑，也得到他的帮助，尤为感激！

1989年岁末，东北师大马如森同志驾临寒舍，带有晓野先生《古文字论集》，拟送中华书局出版，并附晓野致我手书，说，“弟思平生交游，惟吾兄最亲，倘赐一序，则幸甚矣”。承晓野信任，所不敢辞。惟马上出版，尚有困难，遂又暂时搁止。最近有信来，说即可付印，我乃提起笔来，写此序文。

按论集共收论文20篇，内容可分三类，一为关于殷墟甲骨文的研究，二为关于周秦金文的考释，三为关于语言文字学的研究，可以说都是很精美的著作。

我现在要特别谈一谈的是，关于论集第二篇《释冒母》一文，《释冃为冒补证》之二，《从殷虚出土实物证冃为冒》一节，那个出青铜胄的1004墓，正是我所发掘。

我大学毕业进入史语所，分配在考古组，首先去安阳发掘殷墟，先发掘同乐寨的小屯、龙山与仰韶的三层文化，然后就在梁思永先生的领导下，去侯家庄西北冈发掘殷代的 （轉下頁）

（接上頁）王陵，我分工就是发掘1004墓。

1004号大墓，从1934年秋到1935年春，几乎发掘了将近一年，才算完毕。大墓略呈长方形，平面面积约320平方公尺，四个墓道，地面下13公尺到底，已达水面。墓室已被盗掘一空，但在南墓道与墓室相接处，发现有未经扰动的大铜长方鼎一对，一牛鼎，一鹿鼎，又玉磬一组，计三件。在南墓道口边，又发现带木柄的铜戈一层，成捆的铜矛一层，还有一层就是铜胄，我们当时叫铜盔，一层大约有200多个，约分六七种。释冃为冒，以铜胄为证，非常正确，极为稳妥。在我读之，不由得想起六十年前发掘时欢乐的情形来，尤其感到亲切！

其他各篇，创发之处亦多，足见著者艰苦卓绝的功力，好学深思之士，幸观览焉！

1993、11、28

拙序寄长春东北师范大学孙晓野先生，当即得到他的回信，略谓：

得君弁言在首，陡令拙作生辉，敬谢，

敬谢！

序言谓“释冃为冒，以铜胄为证，非常正确。”并谓“在我读之，不由得想起六十年前发掘时欢乐情形来，尤其感到亲切”，非亲身经历之人，无此感慨。

信是1993年12月19日所写。不久年终，又接到他的新年贺卡，非常热情。1994年1月17日我和振宇等人同去台北中研院史语所参加“海峡两岸考古学与历史学学术交流研讨会”，2月1日回到家中，不幸得见讣告，孙晓野先生已于1月23日凌晨1时20分在长春逝世，享年86岁。甚为吃惊，非常痛悼。

孙先生吉林人，是著名古文字学家，东北师范大学中文系教授，生前长年任中文系主任，又曾任省政协委员，省文史馆馆长。一生勤勉，治学谨严，博学多才，造诣殊深，不幸逝世，是我国学术界重大损失。

谨以此文，作为对于好友的怀思和纪念。

厚宣追记

1994、4、20

（原載《殷都學刊》1994年第3期）

读《古文字与殷周文明》

宋镇豪

中国社会科学院历史研究所

王慎行先生在我辈同道学子中素以清苦志凝见称，1984年8月中国古文字研究会第五届年会在西安召开，有幸相见。现在，捧读到他的大著《古文字与殷周文明》，拭摩这部装帧精良、厚达366页的巨帙，揽涉卷中的博通文蕴，深感可喜可庆，并为他的丰硕成果由衷祝贺。

王慎行的这部论著，年前由陕西人民教育出版社出版，全书凡39万余言，集多年研究所得共20篇，是一部集其大成的论文集汇编。但篇散而不杂，以古文字的社会运操环境为起点，紧紧围绕商周历史文化在中国文明发展流程中应处何种地位及实际面貌如何而展开，内容臻入甲骨文、金文考释、彝铭通释、名物典章制度诂训、社会形态、礼俗生活、思想意识、重要历史人物角色析论、建筑工艺、冶铸工业、战国币制等研究领域，篇次以时代为序，涵盖面大而视角颇宽泛。此书以其敦运匠心、有机组合而融会一气，有区分又有内在联系。

这部书的优点甚多，特色在于矜慎而不务空疏，严于考索，在吸收前人或当代研究成果时却又敢于破除迷信，不为成说束缚，自辟课题，别开研讨领地，新意新说随处可见。

一是不停留在表层研究或已得之见上，而是善作纵深把握和系统提炼。如书中领首的三篇古文字研究，除释出一批甲骨文、金文的单字外，又进而从古文字形体演变入手，对义近和形近偏旁的通用、混用现象试作整理归纳，由博返约，总结出“义近偏旁通用”和“形近偏旁混用”两大带规律性的“例”，这不仅于古文字学本身，且于转入历史文化背景的引伸探索，都是可以游刃有余的。作者不避难题，又能矜持“阙疑”的审慎态度，对于不能定论的，不强为解人去遽下结论，如论“欠”字，指出“在卜辞中语残而词义不明，实难确知其字义，姑存以待考”，这较之那种望文生义的“破译”，无疑是一种严肃和纯正的学风。又如《乙卯尊铭文通释译论》一文，对该器的定名、黄瓒的连读，在不掠时贤指点之美的基础上，又返归观验原器，作细细辨别，结合文献经传，再深入揭出瓒的名物，实即玉柄铜勺，是古代行祼礼、祭祀先王、宴享宾客时所用挹鬯之具，还系统董理出后世对这种名物有“祼圭”、“鬯圭”、“瑒圭”、“王鬯”、“祼玉”、“玉瓒”、“圭瓒”、“璋瓒”等种种异名。这种纵深考察，说明了作者爬梳典章、穷源竟委的做学问认真劲。

二是不为无本之说，重实证考据，勾沉索颐，抉奥阐微。试看《卜辞所见羌人考》一文，通过大量史料的综合排比分析，得出羌与羌方乃广狭义之别，羌是殷人泛指西边异族人，羌方则专指其域一方国，位于晋南，又分北羌与马羌两个部落。殷人在商初常用羌俘作人牲，以后又用于辅助生产、杂役，遂转化成奴隶。这比过去纯出古代社会形态模式而笼统勾勒羌人为奴隶诸说，显得细微可信得多。另外，作者曾因协助西安市文物管理局筹办赴日金石拓片展览，故有接触不少新材料之机，如乙卯尊、吕服余盘等器，都亲经目染，对前器，追记出工匠误剔掉两字的原笔划形状，殊属可贵；於后器，诚如李学勤先生代序中指出的，“作者从花纹装饰、铭文字体、铭文用语、铭文形式等四个方面，推定盘为西周中期之器，自属发而中的。”作者除直接汲取实物资料外，又广征博引经、史、子、集、刊物、地下出土文字资料，乃至考古、调查资料，不难看出，经作者筛理选粹，虽引录出的熟悉史料，也能给人一种读来耳目一新的感觉，建立在宏富而翔实的资料基础上的历史研究，论说审慎而能发以往所未及。且看关及礼俗生活的《论周代的饮食观》，作者综合了文献种种记述，提出注重和讲究饮食，是周代文明最敏锐的象征，其饮食结构上的对等形式，食物种类与适宜器具间的关系，常反映有阴阳五行观念。这一对中国古代人文现象的阐发，确令人感到饶有兴味。

三是史识稳健而内兼机敏，表明作者有较好的学养和视界，分析概括能力有独到之处。如《论西周的孝道观》一篇，虽是学界热题，却不落常臼，通过孝道观念的形成与衍进等一系列纷杂历史表象的透析，指出西周孝

观念有奉养父母、祭享先人、继承遗志、敬奉夫君、勤于政事等表现形态，其特点可归纳为孝慈的相辅相成、孝友的合二而一、孝德的相对统一、孝与宗教的结合、孝与宗法的联系、孝的对象之广泛与孝的称名之多样等七大方面，由此得出作者的总体评估："孝道构成了西周社会意识形态和伦理观念的基本纲领，它既是天人合一宗教思想的道德支柱，也是宗法制度在伦理观念上的表现。"同样，《殷周社祭考》也是老题新做，过去有生殖器崇拜说、高禖神说、地母神说、束木标识说、图腾说、宇宙轴说、丛林崇拜说、巫术场所说、原始圣地说、邦社说等等，作者认为殷周社神是由原始土地崇拜发展为封土为社或筑土为社主，而祭法之原始性、社神之方域性以及祀典之二元性，则是殷商时代社祭的主要特点，但至两周时代，社神人格化而转化为五位之神，社祭亦等级化，有王社、国社、里社、穷社等，社神分大小尊卑，社坛别穷富贵贱，社的神性趋于社会化。作者正是机敏地把握住历史发展的复杂性，以较开阔的理论视界，做出动态和静态相结合的处理。

再如书中两篇历史人物角色析论，也是纳入历史的大场进行实事求是的再认识。一篇论殷纣，指出旧谓纣为暴君的焚炙忠良、嗜血成性、滥杀无辜等罪状均不足据，不应因亡国之君而增其罪，倒是其唯妇言是从与沉湎酒色，导致远贤臣、亲小人、用舍失宜、民罹其殃、同盟背叛、因果相应，才是其亡国之所在。另一篇论周公，认为旧说称成王年幼而有周公称王，实难信从。成王年幼说乃本之《周书》所称"孺子"一名，然古代视嫡长子为后者、非嫡长而拟用之继位者、业已成年而居丧未满三年者、亲之少之者等，均可称之为"孺子"，不必非指在襁褓中者，由金文可证，成王即位已当成年，时值天下未定，成王又在居丧期间，礼当冢宰摄政，周公既为大宰，总摄行政，以佐治邦国，自是常事。这类史识独到而信其所当信、疑其所当疑的言必由史的考索，对学界是大有裨补的。

四是不拘限于传统历史学研究范畴，积极采纳其他学科的有用思路，以深入认识商周物质文明。如书中《商代穴居考》、《商代宫室建筑考》，从建筑史角度，具体考察了"穷苦覆穴"筑法、宫室建筑的屋顶形制、墙体构造、门窗式样、室内布局、宫殿组群格局，并据有关甲骨文字形推测商代已有高台起屋、亭阁和城门亭楼之制。《商代建筑技术考》一文，则简述了夯土、版筑、木架结构、日影定向、以水测平及建筑程序等一系列土木工程技术史问题。书中还收入两篇讨论战国经济史专题论文，一篇从兵器题铭谈秦国冶铸业的分布设置及监管制度，指出秦中央一级主管机构是"少府"，下属办事机构为"诏事"，地方郡县一级管理机构为"武库"；兵器监造者，中央一级是相邦，地方一级是郡守，下分工师、工大人、丞、造几个从业人员等次。另一篇就战国币制的形制、种类、铸地、流通及价值等作了勾勒。由此亦可见作者学识的博通。

综观全书，揽涉广泛，见解新颖，虽艰涩处亦每以淡笔烘衬，给人不少启示。书中一篇谈卜辞书法，以稳与险、疏与密、蹙与展论其结体，正恰可借喻是书特点。慎行志凝於学问，以清苦为乐道，故此书见解独到，成一家之言，故特撰文介绍是书。

（原载《人文雜志》1994年第3期）

评《夏商社会生活史》

朱凤瀚

七十年代末以来，在国内改革开放大潮流的推动下，史学界在研究领域与研究方法上也出现了新局面，而社会史特别是社会生活史在更高层次上的复兴是其中一个非常引人注目的现象。这一现象反映了国内史学界对加强社会生活史的研究之重要意义是有共识的，即只有从多层次、多角度去揭示历史上社会生活的丰富多采的表现形式，才能更真实地认识历史之本来面目，史学研究也才能"由'骨骼'进而增益'血肉'"（引自杜正胜《什么是新社会史》，《新史学》卷三期四），达到有形有色、立体化、科学化。作为社会生活史复兴之具体表现是近年来此方面著作的涌现，以综合性的专著而言，即有西北大学秦汉史研究室几位先生合著之《秦汉社会文明》（1985年）、南开大学冯尔康与常建华二先生的《清人社会生活》（1990年）。此外尚有为数甚多的专题性的书籍与论文发表。但是，相比其它历史时代的社会生活史研究来说，有关中国上古社会生活史的研究相对薄弱，著作亦较少，其主要原因当是因为有关的文献史料非常缺乏，必须从各种先秦古文字与田野考古资料中去领悟、钩沉，这对于研究者的素质来说自然要有较高的要求。使我们非常高兴的是，宋镇豪先生的《夏商社会生活史》一书已于94年9月面世（中国社会科学出版社），这部有很高学术水平的专著不仅改变了上述先秦社会生活史研究方面的薄弱状况，而且对整个中国古代社会生活史的研究在理论上与研究方法上的提高都有借鉴意义。

这部著作的特点与成功之处，似可以概括为以下四点：

第一，本书结构谨严、完整，论述精细。社会生活史因必然涉及生活的诸多层面，林林总总，故结构不易安排，容易写散。本书鉴于此，在结构上作了精心安排。全书共设八章，又按内容系连为四大系列：首章自为一系，论环境、居宅与邑聚，构画了整个社会生活史的自然人文背景与活动场所，为全书作了环境之铺垫；二、三、四章分论人口、婚姻、交通，合为第二系列。这是从客观上探讨社会生活主体的自身发展状况与社会组成关系的特定表现形式，并说明社会生活主体活动地域空间与联系方式，从而从时间、空间上展示了社会组成关系及其演化。五、六两章并为第三系列，论饮食与服饰，这又是从物化的社会生活角度来论述社会生活主体之最基本的物质生活水准与其所表现的文明程度。最后七、八两章论医疗保健与宗教，夏商人对疾病原因的认识与其医疗手段和当时的宗教观念二者之间有极密切的关系，虽各有不同的物质依托方式，或依作者所言"内概积极与消极两分的社会调节功能"，但书中将此二章总归为第四系列还是非常得当的。

由以上概括可见，本书的八章四系从宏观至微观，从物质至精神，基本上囊括了夏商社会生活的方方面面，有机有序，缤纷而不零杂。此虽是本书篇章结构，但同时也体现了作者对社会生活史研究范畴之科学的构拟，这显然为今后建立更加科学的社会生活史研究构架与本学科理论的升华具有一定的启发意义。

鉴于夏商历史的特殊背景，书中在上述篇章的具体内涵上亦作了精心构思与特别细致的研究，所论有不少是以前治上古史者所未言或言之甚粗疏者。例如：首章讲邑聚，先分商邑为四大类：其一，王都；其二，方国之都；其三，诸侯或臣属贵显领地；其四，王朝、诸侯臣属邑、方国所下领之小邑聚，继而又分别探讨了王畿，诸侯臣属所领小邑聚之分布状态，从而说明了商王朝所控制的行政区划网络，这样就使当时社会生活赖以展开的政治地理环境得以明朗。在此基础上，作者又进一步细析邑的形态，描绘了当时邑的构成（不同等级居民的居住区、墓地、道路、农田、牧场、山林川泽的分布），与不同等级的宅落形态，通过这样层层研考、构勒，即给读者展示了一幅当时人们在邑落中生活的真实而又形象的画面。商代邑聚的研究以往虽多有学者从事，但从社会生活史角度作如此精细的研究，在本书以前尚未有过。

结构之完整、有机，加之论述之精细、深入，使本书内涵显得非常充实，是一本讲上古历史的专著。能使读者爱读，感到生动、丰满，已足见本书之成功。

充分地运用多学科交叉的研究方法是本书的第二个特点。运用多种学科的知识、理论、手段作史学研究是当代中国历史学研究的一种新趋势。对于先秦史学研究来说，由于文献史料的缺乏，而有关的史料又涉及多种学科，所以这种多学科交叉的研究方法即不仅是应该提倡的，而且已是取得高水平成果所必需的了。本书作者熟谙先秦文献典籍，在甲骨文、金文等先秦古文字方面研究有素，对田野考古学及民族学、文化人类学等学科的理论、方法亦均较熟悉，故能非常自如地将这几种学科的知识有机地联系起来去论述夏商社会生活史研究中的一些重要问题，有许多创获。例如本书第二章对夏商人口问题的论述即是运用多学科交叉方法的典型。关于夏商人口，文献中可鬻记载甚少，即使是田野考古，由于其研究范畴的限制，也不可能在这个问题上有很直接的资料，所以研究这一问题即有相当大的难度。现在已出的古代人口学著作在夏商人口问题上均所言不多，作者面对这一难题，采取了以下研究手段，即以甲骨文、金文、考古资料检验文献记载，去伪存真，同时充分运用计量手法科学利用考古资料，再与古文字资料相联系，交相启迪，相互印证，从而实现了研究上的突破。比如在论夏初、商初人口时，先依据《左传》、《战国策》等资料与有关考古资料计算出邑落单位建筑平均占地面积数，得出古代城邑人口密度指数（每户约占160平方米），继而以此指数与考古发掘所取得的二十七座夏商之际古城面积资料相联系，计算出当时中等城邑之平均人口数（约1500人上下），最后再以此数字为据，参照文献所记夏初、商初"国"（族落方国）数，得出夏初人口约二百七十万，商初四百至四百五十万之结论。又如在计算晚商人口总数时，作者分析甲骨文中"登人"之经常性数字，以之与考古发掘的墓葬资料所反映的战士在人口中所占比例（约五分之一）相联系，计算出当时族落或地缘组织之平均人口数（约为八千余人），再以此数字乘以甲骨、金文所反映出来的族落、地缘组织总数，从而得出这一部分人口总数。特别是作者还在推测了夏商人口总数基础上，进一步运用了现代人口统计学的知识，计算了夏商时期人口平均增长率。在王邑人口自然构成研究中还多次运用了体质人类学、生物学的研究成果与理论，总结出夏、商时期人口再生产属于高出生率、高死亡率和低自然增长率的"两高一低"类型。

上述有关夏商人口方面的研究成果，多发前人所未发，无疑是作者对社会生活史及中国人口史研究的新贡献。仅由上举例子也可知，本书不仅在人口问题的研究上即运用了古文献学、考古学及古文字学、人口学、体质人类学、生物学及社会学等多种学科的专门知识及其理论。在本书的其他篇章，例如婚姻、饮食、服饰诸章，莫不如是，正是由于普遍采用了这种多学科交叉的科学研究方法，才能在夏商社会生活史中一些难度很大的专门课题研究上取得令人瞩目的新成果。

本书第三个特点，是注重将社会生活史的研究引向更深层次，透过社会生活诸表象考察在其后面起支配作用的社会结构与政治根源，探寻纷纭的社会生活变化的内在规律。在本书中这一特点体现得非常明显，这使本书读起来决无平铺直叙之感，而是多有发人深思之论。例如本书首章论商代王邑，细析偃师商城、郑州商城、安阳殷墟三座商城之建制与平面区划，由此更进一步论述了三座城邑之布局、住居空间与居民的等级结构之相互关系及其所反映出来的居民组织状态。指出偃师商城与郑州商城均有较严密的分片分等级的居住体系，郑州商城一般民居各自与小面积墓地相属，大致维持了以族氏或家族为单位的分析聚居状态；安阳殷墟分片系的等级居住体系更得到全面深化，王邑内是邑中有邑，小邑内居室分三个等次，分属于工官与上层自由平民、下层族众、工奴及奴仆。像这样，由商代城邑布局的演变而具体论及等级结构及其在居住空间差别上的反映，在本书以前还很少有学者涉及，本书所论对促进商代社会结构乃至早期国家形态研究之深入均有重要意义。又如第三章论婚姻形态与婚制，在说明商代权贵实行多妻制后，进而指出此种制度之深刻的社会原因与政治原因实在于"重国广嗣"，即通过多妻加强与各方之间的有机联络。而卜辞所见"氏女"之原因亦在于族氏方国以嫁送子女与商王朝用结姻亲的方式稳固双方的政治关系。而从另一个角度观之，上述政治婚姻也具有"冲击着血缘封闭地域组织的空间"的作用，这些见解显然是非常深刻的，其认识高度超出了以往有关商代婚姻的论著。

像上举这种由社会生活之现象及相关制度探寻其根源的论述，在书中还可以举出多例。如这些例子所揭示的那样，所有社会生活现象后面皆有深刻的社会结构与政治结构之根源，而对进入文明阶段的社会生活史的研究只有作此种深层次的探考，才可能对诸种社会生活之表象加深理解，也才可能有更真切的、更全面的描述。社会生活史与社会形态史、政治史等正是在这一意义上达到融和与相互贯通的。因此本书在作深层次研究方面所作的努力对于古代社会史研究之深化是有非常重要促进作用的。

最后还要谈到本书的第四个特点，即在甲骨学商史方面尤有所创获。作者精通甲骨文，故在围绕社会生活史之主题广徵博引甲骨刻辞资料时同时亦就对一些有关甲骨学及商史方面的重要问题作了新研，并提出了一些甚有价值的新见解。如第二章论婚姻时，用相当的篇幅分析甲骨刻辞中所见诸妇身份，总结"妇某"之命名规律，强调妇名一般受之于夫族，以领地封邑之名命之，由此即可解释卜辞所见作为王配之"妇某"何以会有土地、田产。又如同章分析"子某"命名，指出子名非纯私名，乃"以其受封的各自土田相命名，由此构成分宗立族的家族标志"这种见解是非常深刻的，第四章论交通，认为骑马术在马车发明之前，卜辞"多马"、"多马卫"、"多马亚"等，属于骑兵之大小头目。商代有无骑兵？卜辞中与"马"有关的兵种是车马还是骑兵？学者多据西周、春秋时期尚无骑兵之记载而倾向于车兵，本书所提出的新见解相信会引起学界之兴趣。又卜辞常见的"王命某以某立于某地"，过去学者多不甚理解其意，鲜有人论之，本书第五

章第五节提出,此是言“商王在朝中选择任立于某地地方官的合适人选”,“立”有禄位任官之义,亦是新说。本书第八章第四节专论占卜制度,尤值得重视,卜辞习见为一事而同日同时反复卜问,又见异日异时之因袭占卜,作者指出后者即卜辞所称之“习卜”。“习卜”有其特殊原因,也可能是由于前卜不太理想,“与王意愿有违,唯其事又势在必行,故再三占卜,以求保持人神之间的深入沟通,从而达到人的意愿与神的意志的统一性。”这一论断有助于解决甲骨学研究中一个难题,因为过去学者们对商王究竟在多大程度上听从占卜之结果,即占卜是否有绝对支配王的行为之能力这一问题疑惑不决。本书上述对“习卜”背景之论述正解释了商王是如何既在形式上服从于占卜而又能以现实的精神处理王政的。作者的这一见解,实际上不仅是甲骨学商史研究之新贡献,而且对古代政治思想史、政治制度史的研究都有十分重要的意义。

总之,《夏商社会生活史》在学术上的创获甚多,以上从四个方面所作评介,仅是笔者体会到的本书之部分精华。夏、商史代远年湮,今后对夏商社会历史面貌作更深入的研究,不仅要对现有文献、古文字、考古发掘资料加深认识,而且在很大程度上依赖于田野考古新发现,特别是夏代社会历史的研究更寄希望于探寻“夏文化”的考古工作。谨祝愿作者在本书已建立起来的科学架构基础上,不断地吸收学术上的新信息、新资料,在古代社会生活史的研究中取得更丰硕的成果。

(原載《中國史研究》1995年第3期)

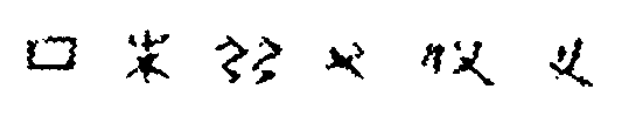
对《商周研究之批判》的商榷

刘　奉　光

《四川大学学报》1990 年第 4 期所载《商周研究之批判》一文基本上突破了前人对甲骨学的研究成果,这是学术革命的信号弹,值得纪念。但文中有许多问题尚需继续研究和批判,本文仅择其有感者略陈拙见,以续学术革命之声气。

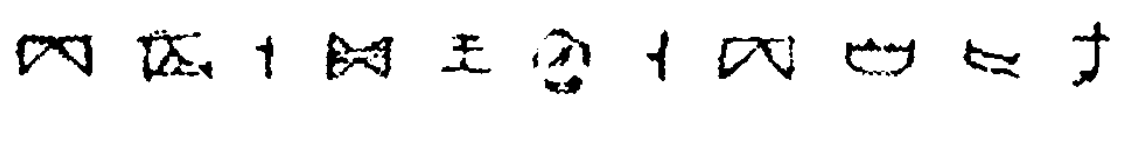
一、卜辞内容并非“只卜问了祭祀”

我将《商周研究之批判》一文简称为《批判》。《批判》一文认为“现在出土的甲骨,其内容只卜问了祭祀”,“甲骨前的干支,过去认为是卜问的日期,而我们认为应该是卜问的将举行的祭祀之期”。



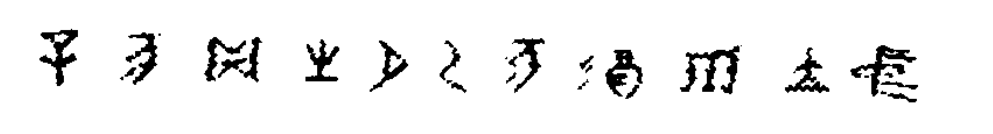
宁一·二三三

此句《批判》认为是“卜问丁未那天的合祭”,我们却释为:丁未这天卜问,勿侑祭妣父、父?



粹一七九

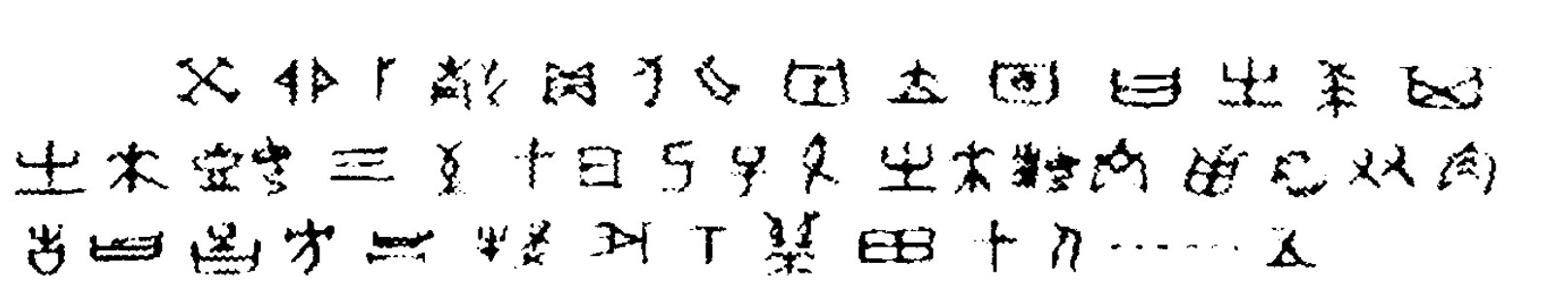
《批判》认为此句“是周祭卜辞,这些干支均与先祖庙号的天干相合,证明了这些干支应是将来的致祭日。”我们译为:丙辰这天卜问,王宾祭外丙祉,无忧吗?



粹三九八

《批判》认为此句“有两个以上的干支。这种卜辞是卜问两天或从第一个干支日到第二个干支日中数天的祭祀”。我们译为:辛亥日卜问,之月乙亥酒系立中?之通这,辛亥到乙亥二十四天,故称这月;乙亥日将祭酒升旗。系本旂。

《批判》只解释了一些短句卜辞,未解释一些长简名句,如:



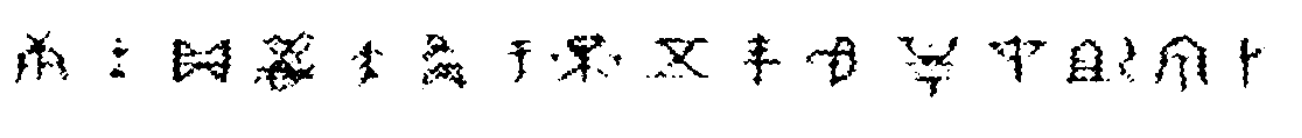
菁二

我们译为:癸卯日占卜,贞人叔识记,旬无祸?王占断曰:“有祟。其有来妡①?”乞至七日己巳允有来妡自西,长友角告曰:“工方出,侵我示[illegible]田,七十人……五。

此简表明并非只占卜祭祀,也并非在不知道日期的某一天,为即将在某癸卯日进行的祰祭占问日期与祀法。“乞至七日”标明确是在癸卯日卜,第七日己巳便应验了。而且在每一甲的末日占问下一甲十天的安全,这是常理,卜辞中的“癸日卜,旬无祸”多见,是例卜,根本用不着每每为这种占卜再提前“卜其日与牲”。《批判》所引据的《周礼·春官》郑玄注“祭祀先卜者,卜其日与牲”,并没有限定每祭皆先卜,倘或随机而祭,何能先卜?至于殷契丰富的卜问内容如征战、田猎、生育、疾病、天气、丰收等,已是学者公认的历史常识,所有大简皆可作证,无庸赘述。“只卜问了祭祀”的卜辞诚然存在,但不能以偏概全。

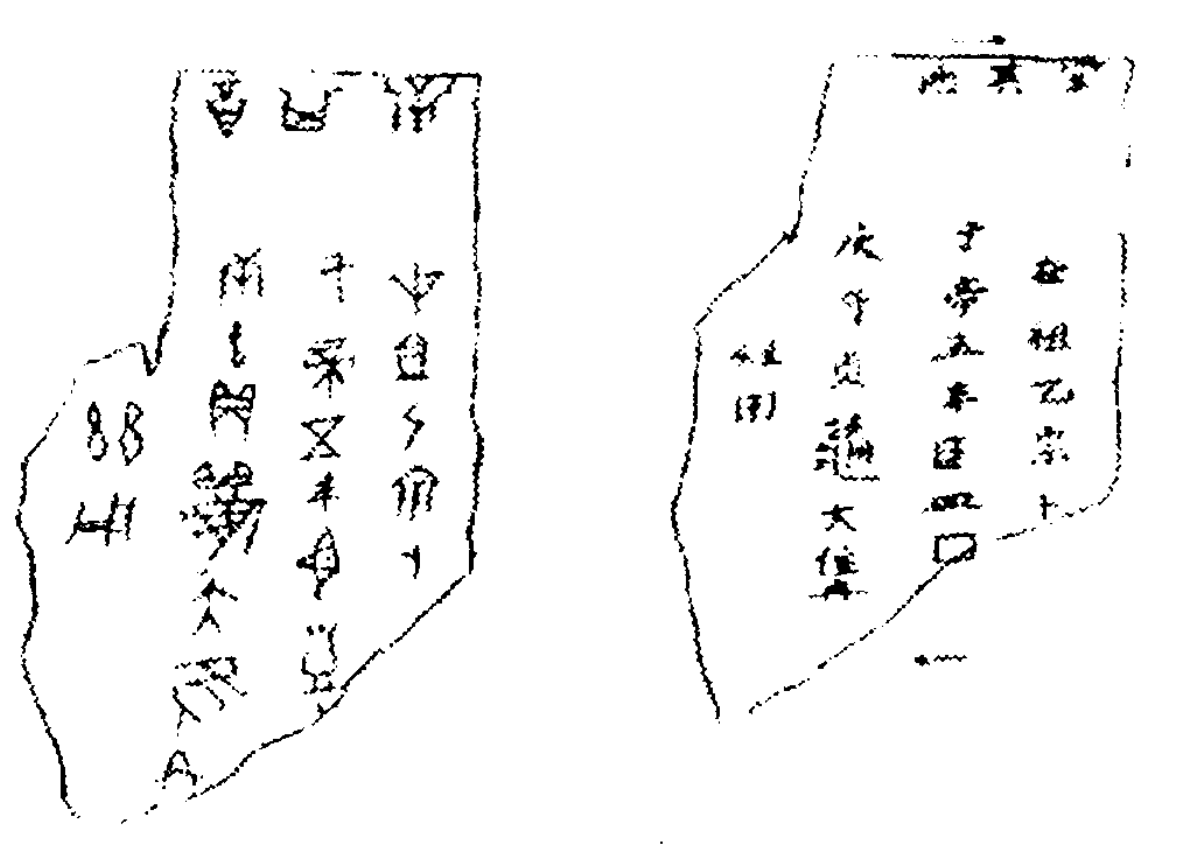
二、贞人并非都是祭名

《批判》最显要的论点是“卜辞中卜字与贞字之间的文字应是祭名而不是贞人”,其例有四同式,皆如其例:



粹十二

《批判》说:“这些卜辞贞与卜字间的部分,都在讲祭祀的事情,怎么会是贞人呢?”今摹原片如下:

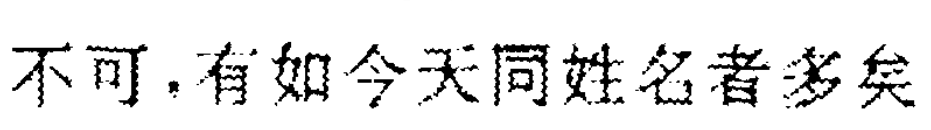


我们的读向与其相反:

在祖乙宗卜于帝,五丰(邦)臣皿(寧)(乎)?庚午贞:迄大[illegible]。兹用。

我们解释为:在祖乙的宗庙里卜问上帝,五邦臣宁乎?庚午日识记:秋季行大[illegible]之礼,选用此卜。丰邦为唇音一声之转②,皿通寧,即宁,兹用乃记事落款,言决用此卜。至此则《批判》先贞后卜的句式不复成立。且根据《批判》的观点,卜字贞字之间的八个字都是祭名是讲不通的。

《批判》认为“所谓贞人应是祭名”,但其最有力的一条证据却自相矛盾:



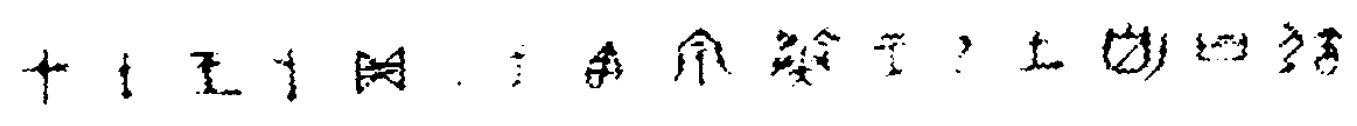
H十一:1版

难道“帝乙宗”也是祭名吗?我们认为古人的句式同今天类似,千变万化,卜贞之间既可言贞人,又可言祀法,又可言地点。上例可解释为贞人彝文在帝乙宗庙中贞卜,也可解为用彝文合祭在帝乙宗庙中贞卜。贞人记事存档,总要写时间、地点、人物。为契刻省力,多用单字代号,贞人設是名、姓、家传代号均无不可,有如今天同姓名者多矣。姓名之字同时可解为祀法或它义也是可能的。总之不能用一刀切的简单方法去臆想三千年前的旧事。古今文字语言一脉相承,世态人情万变不离其宗,古史并不神秘,揆古度今,顺情合理即可,无须穷加比索;因为比索所据,往往是模糊不清的。比如《批判》否定了贞人说,以至连王贞、王占曰、王受又、王其田也否定了,认为大、太、主是人形,王是礼祭之物。试问古代最要紧的王字怎么写,在哪里?怎样解释这些话:

贞,侑于王亘?	铁一九九·三
贞,勿侑于王亘?	后上七·八
其告于高祖王亥三牛?	掇一　四四五
贞,勿直(于)王昊三牢?	通三三三

王亘、王亥、王昊是殷人先王,载于经史,怎么能是礼祭之物呢?

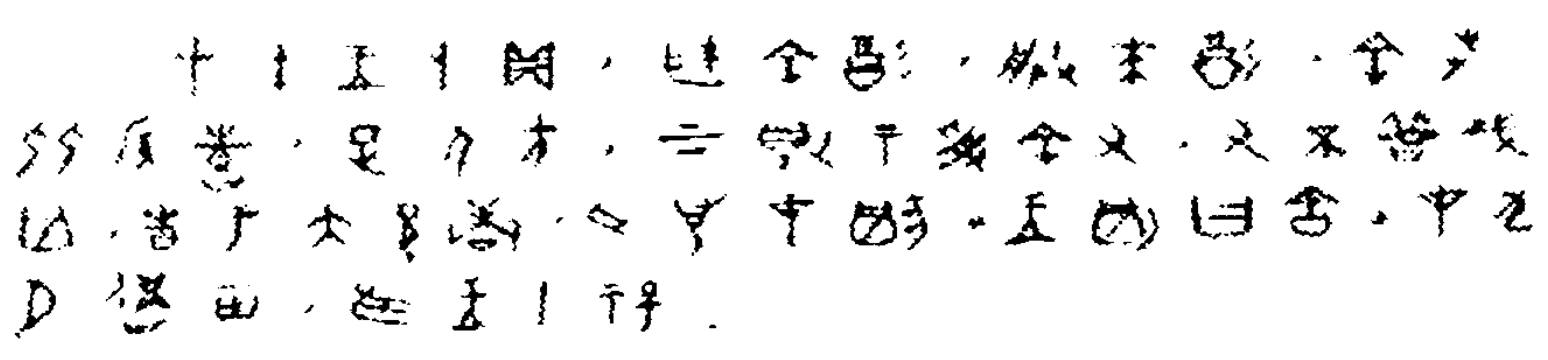
《卜辞通纂》五九二片上段为:



我们解为:

甲午王卜贞,于西宗奏示?王占曰:弘吉。

同简下段近乎一段优美的韵文:



我们解为:甲午王卜贞,作余酒,朕祈酒,余步从侯喜,征夷方,上下得示受余佑,又不欢再卜,告于大邑商。无它灾祸?王占曰:吉。在九月,遘上甲,佳王十祀。

我们对这两段的理解是:首先王占卜当日在西宗庙奏乐祭祀可否,王占断为大吉;于是王就祈祷歌唱:“我作酒,我祈酒,我带领侯喜,征夷方,上下敬祖我受佑,不佑还再卜,告于大邑商”。此时灼卜已成,王问:“无它灾祸?”王占曰:“吉。”下面记录时间,为十祀九月,求告于上甲微。

卜辞中得通德,欢(歡)通还,在通灾。因为是王自卜,所以屡称余称朕。如果这样顺理成章,那么《批判》所谓无王占卜之说、无贞人说便不能成立。贞人不但有,而且可两人同贞。《尚书·洪范》:“三人占,则从二人之言”,有卜辞为证:

丁丑卜,竹、争贞,命大致翌臣,子冎凷于……

前二·三七·七

《尚书》洛诰篇也提到了二人共贞:“视予卜休,恒吉,我二人共贞”,且有卜辞为证:

癸未卜,争[illegible]贞,旬亡祸?

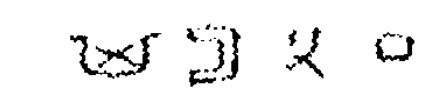
粹一四二四

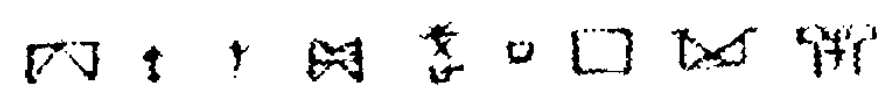
三、商周王者谥号不“为祭名”

《批判》把商周王者的谥号都解释成祭名,这不困难,正象今天的人名可解释成各种意义一样;但若总揽殷王世系表,就会发现,直系宗子帝王的谥号多称大、祖,很有规律;旁系庶出帝王的谥号则杂乱无章。这就标明周王谥号的结构决不能简单地定为“法定祭名加王称,殷王谥号的结构 也不能确定为“法定祭名加忌日名”。我们也逐一讨论。

1. **上甲**　商汤追谥先祖，以所能记忆的六世先祖微为开端，位居最上，故称上甲，甲文刻作亩，指示其方位，是其证。《续存》一七八六片"自上甲六示"又是一证。并非上为祭名。

2. **报乙、报丙、报丁**　报古音通父，上古无轻唇音父，只有重唇音报，父读为报，如伏羲氏写为庖羲氏一理，故甲文中的《史记》书为报乙、报丙、报丁，应读为父乙、父丙、父丁。之所以写为匚，是由于古人挖窑洞而居，称之为府，写为侧视象形匚，转韵通方、祊、房；正视象形则为方形□，读为方、祊；匚□又假借为父，故有、田。府中之祀即为报，故报又是祀法，即以人牲为祭，故有了报仇、复仇的引申语。由此推论，田应读父甲，亩才读为上甲。最初盛物均挖土为匚，故有府库、地府之语。为装修砌石之匚，故一并读为报、府、父、祊。有甲文印证：

 其报父丁　　　佚一七五



丙午卜贞，武丁祊其牢？

续一·二五·八

3. **示壬、示癸**　示在甲文中有等形，郭沫若先生释为男性生殖器之象形，由此推断可与且通，亦可读为祖，祖主音近，方音多有相通者，故《史记》书示壬、示癸为主壬、主癸。主即祖即示。示有多义，也包括祭祀，故"示一牛"之类刻辞多见，但不足以证明殷王谥号"为祭名"。

4. **大乙、大丁、大甲、大庚、大戊**　此五帝皆为直系帝王，他们的亲生子孙历代传为主家治国的商王殷帝。他们在王族内为宗子或宗主，故称太称大。甲文刻为，隶定为大，《史记》书为太，皆极崇敬之意。子谥其父，亦宜称大。此一条证明殷王谥号不"为祭名"最为有力。

5. **祖乙、祖丁、祖辛、祖甲**　此四帝亦为直系帝王，谥称祖与谥称大同理，与报、示之称雷同，并非"为祭名"。

6. **武丁、武乙**　此帝者虽为直系帝王，但因一生尚武，功绩各具，故谥武。《史记·殷本纪》言武乙射天，虽不比武丁强盛，但亦显赫。

7. **其它帝王**　尤其是旁系帝王，则谥号杂乱无章，文献不足，不必穷究其源，但未必都是"法定祭名"。《批判》称外壬、外丙的谥号为卜祭，其猜想主要是"卜是卜龟、卜骨之祭的简称。古人总认为先祖在冥世也象生前一样生活，故一样需要卜甲、卜骨"，难道此二帝冥世只需要卜甲卜骨吗？难道殷帝三十一人仅此二帝需要卜甲卜骨吗？我们认为给旁系帝王谥封的人都不是其亲生子，他们为争夺帝位或许都有些仇恨，故谥号不必尽雅，有，郭沫若先生释为狗，附会为沃甲，其它人多释羌；有、，释为羌、羌，附会为阳甲。不必如批判所言，都是祭法。如果长年叫殷先王只吃狗或大象，神灵会乏味的。倒不如直观浅议，卜、巫、沃、外音近相通，这些王子未即帝位时干过卜巫贞人之类官，颇有道术，死后便谥为卜丙、卜壬、巫丁、巫甲，为避讳低贱，故改称外丙、外壬、沃丁、沃甲。

四、殷代地理不"属虚构"

《批判》把征（）、夷（）、方（）全都说成是祭法，因而不存在征夷方的事。岂不知古代的文字比现在有更宽满的内容，由于文字少，刻写难，无统一规范，人们往往把好多事情用一个简单的字代替，如，可以代手、侑、佑等多种意思，这时的文字尚介乎表意文字和表音文字之间，甲骨文出土的文字五千左右，而现在的汉字六万有余，以现在的用字习惯去评估三千年前的征人方是不科学的。

《批判》否定征人方历程表的理由是：

怎么会以深山野岭作为战争结束地点？

出发地点都不在京师。

四百公里的路程用了四个月。

征人方是在猎区里团团转。

其实这是没有道理的责难。军事行动变化莫测，随机而行，完全可能团团转。交通工具落后，因粮于敌，回避天气季节，且战且走等原因，四百公里的路程完全可能走四个月。殷王讨伐多借诸侯之力，出发地点很可能不在京师。追歼逃敌，常常以深山野岭作为战争结束地点。甲文对征战的记载明明白白，岂容否定：

王征人方，在亳。　　　金五八四

王来征人方，在攸。　　　甲缀一八九

征人方在。　　　前二·六·六

征人方在　　　墟后二七二九

征人方在　　　京五五五二

这些"征人方"不知怎样才能解释为祭名祭法之类事。

五、甲骨学研究方法论

《批判》之所以得出一个错误的理论体系，又能自圆其说，是因为采用了"演绎考证法"。

演绎一词原出自朱熹《中庸章句序》："更互演绎，作为此书"，意思是推演阐发。引入西方逻辑学后，便有了"演绎推理"，由一般性的原理推演出特殊性的结论。比如：宗法思想贯穿于中国古代史，殷商史属于中国古代史，所以殷商史始终体现了宗法思想。

用演绎推理进行考证的方法就是演绎考证法。它的基本程序是：

1. 树立一条公理或已被确证的定理为依据。

2. 用各种方法说明想证明的事物符合上述公理、定理的限定条件。

3. 由此推演出想证明的事物具有符合公理的性质。

《批判》总的思路在开头一段说得很清楚："我们查阅了大量的各时代的殷墟发掘报告，证实安阳殷墟没有发现过大片的宫殿遗址，更没有王都所必备的城垣，而只有大型的贵族陵墓与成千上万的祭坑。我们却认为安阳殷墟只能是殷商时代的陵区和祭祀场所，所以这里出土的甲骨只卜问祭祀。"

由此，《批判》推解演绎出下述观点：

"商周王者谥号均是祭名"。

"所谓贞人基本上都用于祭祀先祖之中，是为祭名"。

"甲骨前面的干支，过去认为是问卜时的日期，而我们认为应该是卜问的将举行的祭祀之期。"

这似乎说得过去，但若仔细推敲，就会发现其依据——殷墟只有墓葬和祭坑——是站不住的。考古发掘尚在初级阶段，谁能保证将来没有新的发现呢？况且现在已有人在力驳殷墟非殷都的论点（杨宝成1990年第4期《殷都学刊》《殷墟为殷都辨》）。杨文根据殷墟有城墙遗址、《史记》和《古本竹书纪年》有记载及殷墟发掘60年来举世瞩目的学术成果认为：殷墟是盘庚至帝辛时期的都城是不容置疑的。

其次，即使只有陵墓祭坑，也不能断定"这里出土的甲骨只卜问祭祀"。刘兴林在《殷都学刊》1990年第1期上刊《殷墟墓上建筑及其相关问题》认为："祭祀墓主的场所具有后世寝、堂的双重功用"，这就更不可能"只卜问祭祀"。

这样《批判》所有论点借助于演绎逻辑推出来的必然性就不存在了，还要靠一一实证，而偶然性的实证成立并不能确立论点。

这样的"演绎考证法"也有其特点：

1. 立足于有限的材料和经验，构想一个蓝图，树立一个定理，作为考证的依据。

2. 根据不可靠的依据推出错误的结论。

3. 利用错误的结论去解释各种现象，避难就易，讲不通就简化规类，比如将甲文内容一概解释为祭祀则无所不通。又将丰富绚丽的大千世界简单划一，把纵横散乱的殷商社会规范化，比如把千年的谥号统统定为"祭名十忌日"。

传统的考据法是"归纳考证法"。

西方有些哲学家认为归纳推理是从个别的、经验的知识中得到一般理论知识的唯一科学方法。这倒未必正确，但有史学研究以来，人们惯用的是归纳推理和归纳考证法。

归纳推理的方式有：

1. 由全部事例中归纳总结出普遍性的规律，这是可靠的结论。

2. 从部分事例中找出共性，认定这就是普遍的规律。这是或然的、不绝对可靠的结论，但有一定的实用价值。史学研究中常用这种方法。

3. 从部分事例中找出共性，然后再从全部事例中按科学规律挑选部分事例验证共性，然后得出可靠的结论。数学归纳法就是一种。

考古学中的归纳考证法具体表现为：由许多成功的解释，由许多人的共同感觉，归纳总结出规律，然后根据规律去研究新领域。这也是反复"大胆假设、小心求证"的过程。这或许就是《批判》所指责的"约定主义"。

我建议采用直观归纳法研究历史。

以直观直觉指导归纳考证就是直观归纳考证法。其程序是：

1. 重视第一印象，努力调动直观直觉，或者说第六感官、潜意识、灵感，迅速作出判断或假设，然后在一定数量的同类事例中验证判断或假设。如果失败就重新立论验证，直至验证无误。

2. 将结论升华为普遍原理去解释有关现象，投入试用，在应用中反复验证改进理论。

这不是唯心史观。因为直观直觉的来源仍然是客观实际，和我们长时间的实践经验。医生看病大致是这样的。

几千年的历史在无限的时空中不过是一个小段落，我们和祖先都生活在这个小段落中。

个性、物性的变化是缓慢的，语言、文字、风俗、信仰、气候、生态、地理一脉相承，以今拟古，将自心揣人心，直观直觉往往有很大的科学性。甲骨学的产生即源于这种直观直觉。

从信息学的角度讲，古代的信息并没有消失，除了保存于典籍、文物、遗址之外，还存在于人类的遗传密码中，体现为潜意识，也存在于广大的时空中，随时会影响人类。近年来，多种书报刊报导了许多怪异现象，如旧时的音像再现，"灵魂转世"等，这很可能是古代信息在特定物理、化学、生态条件下的特殊反映。总有一天，人类能破译这些密码，能用科学手段看到过去所发生的一切，也能预测未来的大趋势。

因此，只要平心静气地观察研究材料，排除一切干扰，包括门派之见和主题限定，直观直觉地品味历史，便有可能得出正确的构想，然后再根据直观归纳考证法进行研究，便有可能得出正确的结论。我说的直观直觉，当然包含着对唯物史观的深刻理解和真诚信赖，也必须有丰富的经验和大量的实证材料作基础。

这种直观归纳考证法也存在于《批判》的形成中。《批判》提出了许多值得继续探讨的问题，如妇好墓问题，族徽问题、干支起源问题，断代质疑问题，小屯遗址问题等，材料和观点都令人刮目。这很可能与不自觉的直观归纳考证的研究方法有关。愿史学工作者不拘门派体系，用科学的研究方法求得正确一致的见解。

凡例：

宁——战后宁沪新获甲骨集	胡厚宣
粹——殷契粹编	郭沫若
菁——殷墟书契菁华	罗振玉
H——周原甲骨文字	
铁——铁云藏龟	刘　鹗
后——殷墟书契后编	罗振玉
掇——殷契拾掇	郭若愚
通——卜辞通纂	郭沫若
佚——殷契佚存	商承祚
续——殷墟书契续编	罗振玉
甲缀——甲骨文字缀合	李学勤等
前——殷墟书契前编	罗振玉
墟后——殷墟书契后编	罗振玉
京——京都大学人文科学研究所藏甲骨文字	贝塚茂树
金——金璋所藏甲骨卜辞	方法敛

注释：

① ，隶定妓，孙诒让疑娸、；罗振玉，释，谓即豈字；郭沫若释，读为戚或咎。愚以为甲文未见奸字，、干同声，豈（鼓）奸一声之转，犹国家一声之转，类古居间音形声，古音通而假借，故甲文以代奸。《小尔雅·广言》：奸，犯也。《左传·襄14》：臣敢奸之。《左传·成16》：奸时以动。来奸即来犯。

② 丰，罗振玉释玉，郭沫若释为小篆丰字，读为介，释为丰。愚以为丰为轻唇音，《小尔雅·广言》丰，豐也。邦为重唇音，上古无轻唇唯重唇，故丰读为邦、帮、蚌，且可通假。故五丰臣为五邦臣，即东西南北中五方之臣。祭似祭燎大鸟以监控五方。

作者单位：曲阜师范大学科研处

（原載《社會科學戰綫》1995年第6期）

一部充满探索精神和开拓性的著作

——读宋镇豪《夏商社会生活史》

王宇信

中国社会科学出版社最近推出的《夏商社会生活史》,是一部时间跨度大,一直上溯至原始社会;涉及范围广,论及上古先民在不同阶段的环境与居宅及聚邑、人口、婚姻、交通、饮食与服饰、医疗保健、宗教信仰等社会生活的各个方面。在史学界相当长时间把注意力集中在社会政治、经济、文化,即所谓"三大板块"研究的情况下,这部资料翔实,对夏商社会生活进行了全方位探索的新著出版,使人耳目一新,并将对社会生活史研究的开展起到推动作用。要言之,下述几个特点,将使本书对今后的研究产生相当的影响:

1. 全面反映了我国考古学和古文字研究的最新成果。近年出版的有关原始社会和文明起源、夏商史方面的专著,虽然凤毛麟角,但它们是古文献与考古资料相结合重要成果。无庸讳言,对考古学和古文字资料的利用,学术界则各有侧重。史学家多着眼于所论证的"三大板块",而考古学家则把较多的精力研究类型学与分期、各文化的区系划分等方面。因此,成百上千考古遗址为我们保存的鲜活珍贵的古代社会生活各方面的信息,再一次被埋没在考古报告或简报的字里行间而受到冷落。宋镇豪则别开蹊径,对此进行爬梳整理,钩深索赜,展开了以"夏商社会氛围总观"、"社会构成运作"、"物质生活形态和生活方式"以及"社会精神生活"为核心的古代社会生活各个方面的探索,从而把《夏商社会生活史》建立在坚实可靠的基础上,从宏观上描绘出一幅上古先民社会生活的多彩画笔;此外,书中还具体而微,不时以考古、古文字资料为据,使后世文献中所追述的古代社会生活"史影"得到了令人信服的佐证。诸如甲骨文中多在二月嫁女,恰与《大戴礼记·夏小正》所述相合,并进而推断其与"仲春之月,令会男女"的古俗有关。商代以二月的某个丁日为娶婚吉日,从而证明了《仪礼·少牢馈食礼》"来日丁亥……以某妃配某氏"的古制以丁亥日为娶婚吉期当由来尚矣。而"殷以生日名子"的成说,通过甲骨文考证,应修订为"生子之后不久而命以私名",则更合乎当时的实际。《礼记·明堂位》"殷以疏勺",由发现的商代"漏柶"、"漏匕"而使其谜团得以解开。至于《内则》和《曲礼上》所述古人进食尚右之制,在陶寺龙山大墓人架随葬的木勺放置右边和左俎右豆的现象找到了源流。此外,还发现了《仪礼》有关特牲馈食和少牢馈食两种食礼,当滥觞在甲骨文中。周原出土冠顶刻"巫"字的蚌雕人头象,不仅形象地再现了甲骨文中的巫者,藁城商代墓中三块卜骨与漆匣内装医疗用具"石砭镰"同出正是这 45 岁男性为商代巫医的绝好例证。《尚书·尧典》所记"宅嵎夷曰旸谷,寅宾出日",与《屯南》2232 记观日出于湡地竟完全相合。如此等等,这样精彩的发现所在皆有,就不一一列举了。因而《夏商社会生活史》以文献与地下出土材料互证的"二重证据",使书中的不少立论坚实可信。因此可以说,《夏商社会生活史》一书,使不少被埋没的珍贵社会生活史资料重放光彩。该书不仅全面反映了我国考古学和甲骨学研究的最新成果,并堪称是对我国考古学有关社会生活史资料的一次"再发掘"和科学整理的总结性著作。

2、对夏商社会生活进行了全方位的成功探索。文明的起源和夏史的重建,是随着近年新石器时代考古区系研究的深入和二里头文化发掘的展开而逐步提到日程上的;甲骨学与殷商考古研究虽然取得很大进展,但系统而全面的商殷史专著尚在蕴酿之中。可以想见,做为"新学问"的夏商社会生活史,更是一个有待开辟的全新领域。而《夏商社会生活史》,则对不少的课题进行了全新的探索并取得了成功。本书在第一章里,把商代的"邑"区划为王邑、方国邑、诸侯臣属邑和其它邑聚等不同层次,是很有意义的工作。而有关作息起居习俗,则把商代各段时间称名,与日月运行的观察知识、社会生产实践、居住生活习俗和宗教活动等相联系,因而不少考证颇有见地;第二章人口和第四章交通,则是夏商史研究的全新课题。本书利用了人口学研究成果,依"复利公式"计算出夏商人口平均年增长率为 0.10—0.2%,竟与我国二千年封建社会人口年平均增长率为 0.10%基本相吻合。还通过商代王都的死亡率、经济抚养比的计算、研究,得出了"当时高出生率、高死亡率和低自然增长率的人口再生产特征"的科学论断。而对殷商时期路守据点、旅舍的建立和驿传之制的论述,则较前人大大前进了一步。"舟制"的研究,则更富新意;第五章饮食中,详尽分析和研究了八十七座商墓中随葬觚爵的套数,得出了八大等类的不同。这不仅使我们进一步认识商奴隶制国家"器中藏礼"的严格等级制度,而且对考古学者在发掘工作中判明商代墓主的身分也颇有启发意义;第六章有关服饰的研究中,则通过对三十二例商代人雕塑象的排比和整理,创造性的发现了可分为十种形态的等级服饰制度;第七章医疗保健,则对前辈学者有关殷人疾病的考证多有补苴和有所深化,指出商代"并没有拘泥于人体外表肌体的了解",而是进一步"对内部组织结构也有探索"了,清涧李家崖晚商石雕骷髅体人象,就是最早一例具有解剖学意义的标本。如此等等。

3、论证周密严谨,通过横向的比较和纵向的分析,使上古先民社会生活的阶段性和继承性得到了科学的再现。这在《夏商社会生活史》探讨纷纭复杂的社会生活八个不同方面的章节中,得到了充分的体现。就以"史前的居宅"为例,比较了黄河中上游地区、长江流域及以南地区、华北沿海区和中原地区居宅形式的不同,论证了自然环境的差异与居宅形式的多样性有着密切的关系,并为夏商居住形态的变迁奠定了基础。而夏商时期,宫室与家室对立,正是贵族与下层平民、奴隶居住形态两极分化的反映。夏商的宫殿、宗庙,是奴隶主统治阶级"定其人神所居"的处所。作者将上古居地的发展、变化,立体式地呈现出来。可以说,这一别有特色的论证方法,也大大加强了《夏商社会生活史》的研究广度和深度。

总之,《夏商社会生活史》,资料宏富,论证严密科学,是一部充满探索精神和开拓性的著作。我向广大读者推荐这部新书。

(原载《中原文物》1995年第3期)

评《古文字与殷周文明》

李　西　兴

殷周时代是中国古代文明的第一个昌盛时期,然而由于文献缺佚,只有藉助考古资料,特别是甲骨卜辞和铜器铭文,并与先秦文献相互参证,才能深入考索上古三代历史文化与中华五千年文明之渊源,所以古文字学被誉为打开殷周历史文化宝库的一把钥匙。陕西人民教育出版社出版的《古文字与殷周文明》(1992 年 12 月版,以下简称《文明》)一书,集王慎行十余年间所撰刊的论文 20 篇,展现出他从研究古文字入手,进而探索殷周历史文化所取得的丰硕成就。综观全书,可窥见作者扎实的考据功力和一丝不苟、严谨求实的治学态度。

《文明》把所汇集的论文,以专题研究的形式分类,将总结归纳古文字的形体通转规律和释读方法作为探索殷周历史的突破口,对中国传统文化和古代文明之渊源,进行了微观与宏观的立体研究,揭示出灿烂辉煌的殷周文明成就。

《文明》一书用古文字将研究殷周文明的各个专题串联起来,可分为相互联系的四大部类。第一类包括《古文字义近偏旁通用例》、《古文字形近偏旁混用例》、《从人形古文字零释》、《卜辞书法的结体与布局初探》四个专题。作者运用图表阐义和论证推理相结合的方法,从研究古文字的形体演变着手,对义近和形近的偏旁通用混用现象,整理归纳,由博返约,总结出一些规律性的"例",用之考释旧所不识、误识或不知其构形由来的一些从人形的古文字,并以此为示范,充实了古文字研究的方法论。继而从字体结构与布局上对甲骨文的书法艺术作了深入细致的探讨。这组专题凝聚着作者研究古文字的精辟见解,实乃作者跨进殷周文明殿堂之初阶。第二类包括《乙卯尊铭文通释译论》、《卜辞所见羌人考》、《商代穴居考》、《商代宫室建筑考》、《商代建筑技术考》、《纣为暴君说献疑》六个专题。通过考释商末彝铭而论及殷商的父权家族形态,通过征引殷墟卜辞以考索商代羌人的社会地位和身分,以及殷人的居住情况和建筑技术。特别是运用辨伪的方法剖析文献记载,详尽地论证了纣之恶迹多系后人附会,还历史人物之真面目,足见笔者治学功底之深厚。第三类包括《殷周社祭考》、《吕服余盘铭考释及其相关问题》、《周公摄政称王质疑》、《论西周的孝道观》、《论周代的饮食观》、《西周史若干问题研究综述》等八个专题。首先探讨跨越殷周时空界线的社祭——即崇拜土地这一自然神祇的方式,作为殷周历史文化之过渡而跨入西周时代,再从考释青铜器铭文入手,以考古资料与先秦典籍相互证发,揭示出贯通周代文明社会的传统思想、意识形态、道德纲领和宗教观念之广阔内涵。第四类虽仅有《从兵器铭刻看战国时代秦之冶铸手工业》和《战国货币概述》两个专题,但却以地下出土的战国文字为依据,对兵器冶铸与货币流通作宏观论述,提纲携领地重现了战国时代的物质文明。

《文明》以微观考证和宏观论述相结合的方式,对涉及殷周历史的各类相关专题作了系统深入的研究,旨在弘扬传统文化之精萃,振奋中华民族之精神。正如李学勤先生在《序》中所提到的:"所有这些内涵,都环绕着古代文明的研究这个中心。"作者正是以殷、周、战国的时代序列为经,以内在联系的历史文化专题为纬,以古文字为梭,缜密地交织成一部系统研究古文字与殷周文明的专著。

作者治学涉猎面较宽,于古文字学、先秦史学、古文献学、古音韵训诂学、考古学、民族学、历史地理以及书法理论均下过较深的工夫,故研究领域颇为广泛。综观《文明》全书,就古文字学而言,从殷墟卜辞、商周彝铭乃至战国文字、秦代小篆,无不博通,故于汉字的源流及其演变了若指掌,尤对古文字偏旁和《说文》部首有独到的见解。以古代文明而论,上自殷、周,下迄春秋战国,举凡当时之文字书法、思想文化、社会生活、政治经济、典章制度、民族渊源、宗教祭祀、风情习俗、建筑科技乃至衣食住行,均能达到探赜索隐的境界。李学勤先生在《序》中对作者的学识评价道:"他的学术论作,凡在刊物上发表的,我大多读过,对其功力造诣有深刻印象";"作者对古文字研究的种种方法都已熟悉,运用自如";"慎行同志的知识广泛,能够从不同角度进行综合研究。此种研究方法,正是需要提倡的";"这本书所收论文,都能体现作者的博通。"征之是书,李先生的奖勉绝非溢美之辞。

作者对清代乾嘉学派的朴学考据和王国维氏所倡导的"二重证据法"之精髓有较为深刻的领会,故能以考古资料与先秦文献互证,微观考证与宏观论述相结合来治古史。本书研究殷周铜器铭文的《乙卯尊铭文通释译论》、《吕服余盘铭考释及其相关问题》诸文均系朴学考据之佳构;《商代穴居考》、《商代宫室建筑考》、《殷周社祭考》、《论西周的孝道观》诸文通过考古发掘资料及甲骨、金文与古文献相互参证,则属运用"二重证据法"治史之力作。他在考据论述中常能独辟蹊径,不囿旧说,勇于创新,成一家之言。尤在古文字的研究中,对东汉许慎的文字学权威著作《说文解字》部首的辨形、释义,多所匡正。考索殷周古文字时,每释一字,皆能作到于形有征、于音有考、于义有解,故颇多创获。很多见解精辟,新意纷呈。《文明》除了对学术界的热门

研究课题进行探讨外，还把视线投诸殷周文明史中较为冷辟的领域。《卜辞书法的结体与布局初探》，填补了甲骨文发现八十余年来人鲜问津的古文字书法研究领域之空白，故李学勤先生《序》谓："尤以关于文字结体的'稳与险'、'疏与密'、'蹙与展'的讨论，发前人所未发。"《纣为暴君说献疑》系以殷周的可靠史料《今文尚书》，驳斥战国秦汉及晚近以来的旧说，论据充分，对清儒崔述《商考信录》以来，史学前辈在纣恶有附会之说的基础上，据理为暴君殷纣翻案。《殷周社祭考》、《论西周的考道观》、《论周代的饮食观》诸专题对殷周时代的意识形态、道德准则、饮食文化，均从历史哲学的不同角度作了开拓性的研究，颇有理论深度，填补了先秦思想文化史中的空白。

王慎行先生数十年如一日，不畏劳苦，安贫乐道，博览群书，勤于抄录。在研究古文字与殷周文明的过程中，对卷帙浩繁的先秦古文献、地下出土的古文字和文物考古资料，进行比勘考证，补缺佚、订讹误、明脱衍，深入发掘其内在的史料价值。加之作者治学严谨，不发空泛之论，言必有征。所阐发的观点和得出的结论均建立在翔实可靠的史料基础上，故较客观公允，具有令人凭信的说服力。正因为作者对有关的古文字资料作过全面的耙梳、归类和考订，故能在《卜辞所见羌人考》、《商代穴居考》、《殷周社祭考》、《论西周的孝道观》、《从兵器铭刻看战国时代秦之冶铸手工业》诸专题研究中，广征博引，驾驭自如。《纣为暴君说献疑》、《周公摄政称王质疑》，则属研究先秦古文献资料的专题，这两篇文章熔辨伪、考据、治史于一炉，故能钩玄索隐，左右逢源。《商代建筑技术考》、《战国货币概述》系运用考古发掘资料与文献资料合璧以构筑殷周物质文明殿堂之作。《古文字义近偏旁通用例》、《古文字形近偏旁混用例》、《商代宫室建筑考》等专题，图表穿插，琳琅斑斓，充分发挥了古文字与考古发掘资料的形象作用，将形象思维与逻辑思维融为一体。书末附录"本书征引、参考书目"七百余种，分类精细，资料系统，兼考版本源流，实为作者留意版本目录学之心得，也是治古文字与殷周史之入门阶梯。

作者继承了乾嘉学派的考据朴学，并脱出繁复考证之藩篱，毫无饾饤琐屑、支离破碎之弊，故能在整理、考订资料的基础上，致力于历史规律的探索，以达到融会贯通，举一反三。《文明》所收的许多论文都体现出作者微观与宏观合璧的综合研究心得。

作者没有念过大学，所取得的学术成就，全凭之刻苦自学。他自幼奋发砥砺，步入文物历史研究之殿堂后，曾受业于著名古文字学家于省吾先生门下，奠定了成大器之坚实根柢。李学勤先生《序》云："慎行同志学习的环境尤其困难，他是在没有时间时挤出时间，没有条件处创造条件。希望读者从他的这本书里，不仅看到他研究的成绩，也能窥见他奋斗的精神。""慎行同志是(全国)自学成才的典型。《河北学刊》1985 年第 6 期所载《用勤奋和毅力叩开古文字奥秘的大门》(收入书末《代跋》——引者注)一文，反映了他努力奋斗以至有成的经过，以我所知，确系文实相副，并无夸大溢美之处。"作者青年时代，家境贫寒，曾考取大学竟无力深造，遂利用工余时间发奋苦读。他为了积累古文字学方面的资料，曾手抄过郭沫若的《甲骨文字研究》、《卜辞通纂》、《殷契粹编》、《两周金文辞大系考释》、孙海波的《甲骨文编》、杨树达的《积微居金文说》、陈梦家的《西周铜器断代》等十余部古文字学专著，计五百余万字。他还在精读古文字考释的大量论著和浏览历年学术期刊的过程中，积累了四千余张资料卡片，作了一百多万字的带有研究性质的读书札记和表格。由于作者有如此札实的根柢和基本功，故能撰刊数十篇很有价值的学术论著。

学无止境。至今，作者辄以青年时代之坎坷逆境为动力，正如他在是书《代跋》中所感慨道："愈贫寒而自修不已，处逆境而学志弥坚。因生性好学敏求，在学海生涯中，对于任何一门学问，诸如金石书法和文学创作，抑或古文字与先秦史，一旦接触即好之深而爱之切，终日沉湎其中，如迷如醉如痴，经年不辍，无不艰苦既久而后得之。自学的甘苦，蕴涵在永无止境的追求之中。"常叹慎行先生不仅是自学成才之模范，也可使从事历史和古文字学研究的具有大学生、研究生学历者藉以自励。无学历者尚能在古文字和先秦史这艰巨的学科领域里取得如此可观的成就，那么有学历者，假使不奋发治学，岂不愧对母校的培育、导师的教诲吗？

(原载《中國史研究》1995年第3期)

批評と紹介

宋鎮豪著

夏商社会生活史

宇都木章

本書の出版説明によると、中国社会科学院歴史研究所は、一九八七年以来、社会科学基金の補助を受けて、「中国古代社会生活史」全十巻を刊行することになったという。その全十巻の内容は、(1)夏商、(2)西周、(3)春秋戦国、(4)秦漢、(5)魏晋南北朝、(6)隋唐、(7)宋遼金、(8)元、(9)明、(10)清となっている。本書はその第一巻に当るものである。

著者の宋鎮豪氏は、歴史研究所において、胡厚宣氏・李学勤氏らの薫陶を受けた、第一線の古代史研究者である。研究誌『中国史研究』の編集に加わり、また『中国歴史学年鑑』『中国考古学年鑑』において、毎年、商代史部分について健筆を揮っておられる。そういう点から、学界の動向や新らしい史料に関して、最も詳しく且つ広範な知識を有する人物である。本書の著者として最適であろう。また氏は新らしく『中国全史』中の『中国春秋戦国習俗史』（人大出版、一九九四年七月）をも出版された。

氏

本書の〝生活史〟は、中国の伝統的な社会習慣風俗の研究分野で、本来は広い意味の〝礼〟の世界に属するものであった。従来から『儀礼』を中心とする〝礼〟の研究や『詩』『易』などについての古典研究の中において、生活関係の様々な成果があった。特に一九二〇年以降の社会史論争に対する反省として、具体的歴史的資料の収集の中で、社会生活史への試みが行われ、尚秉和「歴代社会風俗事物考」（一九三七年）や瞿兌（宣穎）「中国社会史料叢鈔」甲・乙・丙（一九三七年）など、かなり網羅的な解説も行われた。残念ながらこれらは文献的史料に終始しており、それ以後、急速に展開された考古学的資料を用い得る段階には到っていなかった。

戦後、考古学の発展によって、中国古代の生活資料は膨大な量になったのであるが、中国社会・政治の状況や歴史研究の論争主導型もあって、社会生活史が注目されるようになるのは、一九八〇年代後半ごろからである。

従って本書は、最近の考古学的資料と、それに基いた研究をふまえて、今まで積み上げられて来た成果の上に、総まとめを行うと同時に、これからの諸問題にも新提示をしたものである。

これに対し、我国では林巳奈夫篇『漢代の文物』[1]の大著が出版され、中国古代生活文化史の綜合的研究が行われて、注目された。

この書は文献や資料を丁寧に網羅したものであるが、林氏はその後、より一般的解説書として『中国古代の生活史』[2]や『中国文明の誕生』[3]などを著している。

さて、本書のいう〝夏商〟時代の範囲というのは、前二二世紀から前十一世紀初めまでで、その中、夏時代とは前二二世紀から前十七世紀晩年までの約五百余年である。この時代を代表とする文化としては、いわゆる中原西部とする〝二里頭類型文化〟と、晋南地区の〝東下馮類型二里頭文化〟が中心に挙げられる。

これに対し、商時代は前十七世紀晩期から前十一世紀初期までの五百余年である。前十七世紀は夏時代と商時代が併存しているが、しかし商文化地区は夏文化より東方方面に発展しており、冀南・豫北平原及び魯中・南部（今の河北中・南部、河南東部、山東西部）と考えられている。この商文化地区は、いわゆる山東竜山文化が発展して来た地域であり、特に注目されるようになった、城子崖、辺線王、丁公など山東西部竜山文化の巨大な城址が含まれている。商時代後期の殷墟期になると、その勢力範囲は益々拡大され、河南・河北・山東を中心に、北は遼寧、西は陝西、南は湖南に及んだのである（参考。宋新潮『殷商文化区域研究』、一九九一年）。

著者は新石器時代から商末期までの、これらの範囲の遺跡や遺物に関し、必要な資料をかなり詳しく利用している。

本書の内容は、第一章環境・居宅・邑聚。第二章人口。第三章婚姻。第四章交通。第五章飲食。第六章服飾。第七章医療保健。第八章宗教信仰。という八分類にまとめ、時に新石器時代文化に言及しながら、夏商期の社会状況、物質生活から精神生活に及ぶまで、広範囲に詳細な説明に努めている。しかしここに取り挙げられる具体的問題は、各地域の相違、各時期の社会の性質など、理解に難かしい点が多い。これを越えて、さらに一般的にこれに歴史的意味付けを行おうとすれば、大きな知識が必要となるだけではなく、かなり無理を承知の上で解説を行わなければならない。敢てこうした問題に取り組み、又新らしい意見を示されたことには敬意を表する。

第一章第一節環境。夏文化代表遺址の王城崗、東下馮・偃師二里頭は、川辺丘陵地帯に住する、新石器時代以来の伝統と共通性をもっていると考えられるが、しかし文献に

よるならば、夏都については屢々変遷したと記録されている。この問題について、著者はその一原因として、張光直氏の意見（『中国青銅時代』二集、一九八二年刊）を採用し、「夏都分布と銅錫礦分布」とが一致していると論じ、同時にまた夏都は基本的に「偃師地域中心に移動した」という傾向を指摘する。それは遷都が支配貴族層のみの移動であったからだろうという。これに対し商時代には治水技術が進んで、河辺聚落が広まったとともに、商王室の勢力が強くなり、周辺異族に対する支配範囲も広まった。

従って商都の変遷についても、文献は数々の場所を挙げているが、その遷都の性格は、夏の遷都と比べてみれば、遥かに四方地域への開拓のための意味を持つようになるのであるという。

この点から、著者は夏遷都は内向型であるのに比して、商遷都は外向型だと考えている。

本章第二節の「居宅と邑聚」にはかなり詳しい解説が行われている。新石器時代に、一般的に行われていた半地下式住宅は、新石器後半の竜山文化期には、すでに土台を築造した建物が知られているが、二里頭文化期にはさらに大型宮室建造物群が作られるようになる。著者はこれを文献中の〟夏后氏の世室〟すなわち〟明堂〟に当るものと判断した(13)。

商時代になると、都邑の規模は一層拡大され、偃師尸郷商城や鄭州商城などには、巨大な城壁がめぐらせられ、都城の政治的、軍事的に重要な機能が生まれるようになった。もし商城の歴史的意味を、このように理解するならば、商代後半期の首都殷墟に、城墻が存在しないことは、どの様に考えねばならないか。困難な問題になる。例えば林氏（前掲『中国文明の誕生』）は「（殷墟の）城壁は将来発見されるかも知れない」とか「周の古い都でも城壁の発見されていない都は幾つも挙げることができる」と言って、都城の意味を放棄している。これに対し著者は、この時期の商の王畿の地域が安定し、国力が充実していたので、防壁を必要としなかったという。然らば何故、社会の充実安定をもたらしたかと考え、その理由として、王邑内の聚族が相対的に独立を保持し、一定地域を占めて所属邑となり、王室に対し政治的社会的に安定するようになったという。例えば〟殷民七族〟（定公四年左伝）などと呼ばれた族共同体を指すものだろうという。これは王畿内小邑の住居址の状況からも窺うことが出来る。すなわち(1)一組み合わせの地上建造物の貴族層、(2)地下住居の中・下層族員、(3)地下穴居の卑賤奴僕層という三階層をなす住居状況をうかがえる聚落が発見されているという。

一方いわゆる〟方国〟と思われる地方の諸都邑の遺址には、多様の規模が見られるが、しかし共通した点は、支配者集団が宮室、祭祀神殿及び墓地をもち、その基礎社会には族的組織の邑があった。その住居形式からみて、族内には貧富が生じ、身分秩序が作られていた。しかしこれら方国にとって、城墻の有無は決定的要素ではないという。

小邑集落遺址においては、小型住宅や公共墓地があり、族集団を形成しているが、しかし安全防禦の点は不十分であり、外敵に侵害され易かつたので、恐らくこれら小邑は周辺の軍事・政治的国邑（大邑）に依附したのだろうと推測している。

本章の第三節は建築造営に関する儀式の問題が中心である。夏商建築儀式は規範化、系統化が行われ、階層的に礼が一般化された。商代後半期の建築の礼は〟相地之宜〟〟卜宅〟〟択令土官〟〟正位〟〟奠基〟〟安門〟〟落成〟〟遷宅〟など繁縟な儀式が行われ、人間を含めて多量の犠牲が供せられ、それによって王権の強化をも、もたらしたであろうという。当時の祭儀における人間犠牲の特性については、かつて黄盛章氏も詳しく論じたのであるが(15)、著者は商代の奠基儀式などでは、一般的に犬犠牲が用いられることに注目し、それは「東方地域から起こった伝統であり、山東省寿光県辺線王竜山期城址の塡土中にも犬奠基があった」からだと言っている点は興味がある。

本章第四節は「仕事と休息の日常習慣」として、特に商代の一日の時間区分を中心に、貴族の住居や装飾、席・籠・照明などを説明している。氏の得意とする甲文解釈など興味深い。例えば〟机〟は人が跪坐持燭する姿で、夜の時間に当たり、また〟[illegible]〟は主人と侍者の二人を示す〟住〟の字で、真夜の時間に当たるという。

これら生活リズムで定められた時間と、後の一定時間の制定との関係もまたさらに考慮されなければならないだろう。

第二章人口は、人口統計の問題を主として取り扱っている。甲文中の〟登〟は、人を徴し、人口登記冊（〟冊〟）を行ったという。これは商後半期から人口統計が制度化されるようになったものと考え、それが『周礼』秋官、司民「掌登万民之数、自生歯以上、皆書于版」に反映すると言っている。

さらに諸邑の遺跡発掘から夏商期の毎戸平均は160㎡位と推定し、また『後漢書』郡国志の中の商初期は〟三千余国〟、周初期に〟千七百七十三国〟という数を、一定の基準として承認し、結局商初期人口を四百万～四百五十万人位とし、また夏初人口も二百四十万～二百七十万人と推定している。その上で、甲文金文中の地方集団（方国）が、七百以上発見されていることと、甲文中のその登人平均八千二百人を基準にしていることとを勘案すると、総計五百七十五万人位となる。そこで氏は商代晩期になると、この方国人口と、増大した商都の人口とを加えると、約七百八十万口位になるだろうと考えている。

この時期の人口は重要な問題だが、甚だ困難である。著者は人口推定を新研究のテーマとしており、すでに『夏商人口初探』（「歴史研究」一九九二年四月）においてこの議論を展開している。私がこの論を批評する力は無いが、しかし古代文献を根拠にし、考古学的資料を組合せて、推定を形成し、さらに甲文や金文を用いてもう一方の根拠を作るということは、大変な努力であるとは思うが、或はモザイク的な数値ができ上って来る可能性がある。従ってこのモザイク的な方法については、当然反対する考えもあるであろう。

第三章婚姻。この研究には原始社会論、民俗論や神話伝承を利用するのが常であるが、中国古代研究では、甲文・金文を以て、貴族社会の婚制を重要なテーマとしている。ここでは李学勤氏(16)の論を中心にして整理が行われ、かつ商王室と方国との関係について、婚制がその政治的意味を有している点を証している。要するに著者は「商王族は、代々婚姻関係を有する各諸部族、或は諸家族集団を維持して、これを国家組織の基盤にしていた」、王朝と方国との通婚関係は、すでに羈縻関係を形成していたのであり、それが国家統治の重要な手段となっているのである」と考えているのである。著者は主としてこの立場から、〟娶〟〟嫁〟の意味や、儀礼制〟名子〟〟命氏〟の制度を論じている（〟分宗立族〟論）。

第四章交通。夏時代では東方（河北・山東・蘇北）が最も重要な交渉であったが、商時代になると、交渉範囲の南は長江以南、西は甘粛・内蒙古、北は遼寧へと発展し、ここにいわゆる〟四方〟観念が形成されたという。こうして商代晩期の交通は、㈠東南行―徐・淮路方面の〟人方〟との交通、㈡東北行―盧竜・遼寧路、㈢東行――益都・蒲姑路、㈣西北行――〟𠂤方〟・〟土方〟路、㈤西行―渭水・周邑路、㈥南行――湖北・湖南・江西、という六道が主要なものであったという。

交通の幹道（王道）の安全と防禦のために〟柴陮〟と呼ばれる木柵があり、また交通路には〟羈〟という駐在の場所が作られ、貴族の食・宿に供せられたという。注目したい点は〟逆〟と呼ばれる一種の駅伝制である。この問題には于省吾氏の研究が挙げられている(17)。

私が最も興味をいだいた論は、本章最後に論じた〟騎馬〟の節である。一般常識から言えば、戦国時代以前まで、貴族の乗りものは馬車や戦車とされていた。貴族墓から出土する馬車は普通〟独輪車〟（一車二馬制）である。しかし著者は敢えて、当時から〟騎乗〟があったことを指摘している。伝承によれば（『世本』）、〟乗馬〟は夏代にもあったと言い、周代になれば、広く社会生活中で行われたと考えている。殷墟の墓からも単騎、騎兵、戦馬と思われるものがあり「商王朝の一般の家臣も騎馬を用いていた」と断じている。騎射を以て戦国以後の乗馬とする通説は再検討せねばならないだろう。

第五章飲食。諸遺跡中の穀物や食器・炊器・酒器及びそれに伴う諸道具の解説である。しかし社会史的テーマから見ると、やはり身分秩序のシンボルとなる〟礼器〟の研究に興味がひかれる。

そこではまず夏文化の代表として挙げられた、二里頭遺址の第二期から、第四期の礼器の変遷を解説する。すなわち、第二期には食器・炊器が多数であるが、同時に九割の貴族墓中に酒器（爵・觚・盉など）が見出されること。第三期になると、食器・炊器が減り、その代り爵と盉の一般的組合せの酒器が多くなって来ること。またこの時期にはかなりの数の青銅器（爵・盉）が出土していることを指摘し、最後の第四期になると、礼器組合せが両極分化し、庶民小墓では食器と炊器に限られてくるのに対し、貴族墓は青銅器を伴うものが多く、爵と斝或は鼎・斝・觚が組合せになる。なお別に食器と酒器を併存させるものもあるが、これは一般貴族或は上層平民だろうと推定している。

商代の礼器では爵・觚といった酒器が圧倒的に多い。著者によると、王邑地域では「飲酒の習慣が平民の下層に至るまで深く浸透」するようになった。文献中でもこのことは記録されている。商代後期すなわち殷墟期になると、礼器制度はより明瞭になり、殷墟前期に「觚・爵と鼎・斝」という組合せがあったが、殷墟後期には「一觚・爵と鼎・簋」という組合せに転化していったという。この段階で重要になる〟簋〟は、もともと商代前期に南方地域に起った器で、鼎と簋の組合せは「長江中流に流行し」、後になって殷墟の礼器制度に影響したものであろうと考えている。〟簋〟を持つ文化の本源について、詳しい解説が望まれる。

礼器制度を中心については、社会身分の等級とか、饗宴、楽舞など興味ある説明も多い。

第六章服飾。商代の服飾の地域について次の如く分類している。

(1)北方及び西北方の方国貴族は金の装飾を好み、特に西北方地区では金耳飾が流行し、また鳥・獣・魚など玉佩飾品などを有する。殷墟墓にみられる玉佩飾品はこれと共通なものがある。

(2)東方地区の方国貴族墓、例えば蘇埠屯大墓などに出土

する服飾は商王邑のものと一致性が強い。

(3)南方（長江）地域の服飾には、かなり土着的な性格がみられる。

しかしこれらの分類はあくまで相対的で、文化交流によって、各地域の特性と共にまた文化共通性も多い。

服飾資料として注目されるのは人物彫像である。神像とか異族像とか或は奴僕像や貴族像とか様々の議論がされているが、その中の坐像について著者は跪坐像と蹲居像に対しては、商代の日常生活の習慣と考え、ただ特殊な姿態の箕踞像だけは貴族の尊大な形だろうと推測している。

第七章医療保健。疾病の知識及び巫医の記録と病理、薬理を考えたもの。

第八章宗教信仰。上帝以下諸神を王権の支配拡大という意味から考えている。第二節の日神崇拝中の″十日神話″について、東南系の善神系統と西部地域の悪神系統とに分け、夏代の日神崇拝は西部地方のものであるが、商代では「日神の性格が善悪兼具の中立性」とし、これを東西文化融合型だろうという。商文化の性格を暗示したものと言えよう。

なお殷墟の宮殿址として知られる甲組、乙組・丙組の三大遺址については″乙組基址″は″東宗″（左祖）、″丙組基址″は″西宗″（右社）に当るものだろうという。

以上、雑然と本書の一部の紹介を行ったが、本書の内容は当然ながら、数限り無く諸事項が取り上げられている。従って、ここに紹介した事項は、私的興味によったものに過ぎない。しかしそれによって、著者が社会生活史と言う時に、漫然と生活上の事柄を解説したのではなく、常に地域文化の特色と、また相互の文化交渉という、いわば横の流れから考察すると共に、政治的社会的理解を試みようとした、いわば縦の流れを重視していることが分るだろう。それが本書を一つの古代文化史論をもつものとしている。その論がすっきりと理解される所も多くあるが、しかし異論が提出される所も多くなるだろう。これが本書の問題提起の意味とも言えるだろう。

なお文献、特に″礼″に関係ある史料は、思想的整理や政治的理想論が多い故に、或は古来の伝えを含んでいるとしても、現実的には一面性が多いであろう。著者もそれを利用する場合には、卜辞・考古などでその証明に努めておられる。しかし私的関心からすれば、考古学や甲文学からの生活史の立場から、文献や礼制を批判し、問題を提示して頂き度いものである。これは本書の枠外の要求かも知れないが、将来の課題として考慮をお願いしたい。

（中国社会科学出版社、一九九四年九月、頁五三四、図六一）

註

（1）一九七六年、京都人文科学研究所刊。

（2）一九九二年、吉川弘文館刊。

（3）一九九五年、吉川弘文館刊。

（4）『周礼』考工記、匠人。

（5）『中国古代的人牲人殉』（一九九〇年、文物出版刊）。

（6）「論″婦好″墓的年代及有関問題」（『文物』一九七七年、十一期）。

（7）「殷代的交通工具和駅伝制度」（『東北人民大学人文科学学報』一九五五年、二期）。

（原載《東洋學報》第七十七卷一、二號，一九九五年）

踏破铁鞋无觅处

——祝方辉博士整理明义士《甲骨研究》出版

王宇信

摘要 《甲骨研究》乃加拿大人明义士执教于齐鲁大学时的讲义。解放前曾有少量印刷，许多人看它不到。现齐鲁书社重新出版，为了解早年甲骨文出土和流传情况提供了可信的资料，特别是它反映了1928年殷墟科学发掘前的甲骨学水平。其中对1899年——1928年这一阶段甲骨文研究水平的分期有科学的意义。

关键词 明义士 甲骨研究 记述 出土与流传 水平 整理出版

中图分类号 K221

著名甲骨学家、加拿大人明义士，1933年石印出版的《甲骨研究》，是他执教齐鲁大学时的讲义。此书由于印量小和未公开发行，因此存世很少，早已成为个别图书馆或不多学者秘不示人的“孤本”。虽然此书为甲骨学界所熟知，但多数学人却无缘寓目，成为“踏破铁鞋无觅处”的憾事。

山东大学方辉博士，在赴加拿大讲学期间，从现居渥太华的明义士之子、前加拿大驻华大使明明德先生处求得《甲骨研究》的底本，并获允加以整理，由齐鲁书社于1996年2月出版发行，从而使广大读者对这部渴望已久的《甲骨研究》得来全不费工夫。因此，方辉博士整理出版明义士《甲骨研究》的成功，实在是一件值得祝贺的喜事。

早在1910年，时值25岁的明义士奉加拿大长老会之命，来中国豫北地区传教，后专驻河南安阳。他对中国古代文化极其倾慕，在传教之暇，潜心搜集和研究殷墟出土的甲骨文、铜器和玉器等古代文化珍品。他最初收购甲骨，被当地人以假充真而受骗上当之事，是甲骨学界所熟知的佚事。但难能可贵的是，他面对一堆腐臭发霉的假甲骨并不气馁，而是不断比较、分析、总结，终于成为甲骨辨伪的行家里手和搜求甲骨的大家。他的著录书《殷虚卜辞》（1917年）、《柏根氏旧藏甲骨文字》（1935年）等和《表校新旧版〈殷虚书契前编〉并记所得之新材料》（1933年）等书，在甲骨学史上占有重要的地位。不宁唯是，他还为外国学者的著作，诸如方法敛、白瑞华的《甲骨卜辞七集》（1938年）、《金璋所藏甲骨卜辞》（1939）年进行过鉴定真伪片的工作。明义士通过刻苦自学，终于成为一位学识渊博的甲骨学家，1932年受聘山东齐鲁大学文学院考古学教授，1937年抗日爆发后回归加拿大，任职于安大略皇家博物馆远东部。1942年他完成《商戈》的论文，获多伦多大学博士学位，1957年病逝于多伦多。

明义士《甲骨研究》一书出版之所以值得祝贺，首先，就在于此书记述早年甲骨文出土和流传情况较为可信并历来为学者所重视。众所周知，早年甲骨的收藏大家，多为身居京师的达官贵人。他们的藏品，多通过古董商之手购得，而鲜有人亲赴安阳考察。而其中的个别人，如罗振玉，曾派其弟罗振常等人去殷墟实地收购甲骨等。但罗氏踏访小屯殷墟，已是1915年的事情了。而明义士，自1910年来华传教，直至1932年受聘齐鲁大学以前，除了1917年至1920年去法国、1928年回加拿大度假、1929年春秋两度参加耶路撒冷地区的考古发掘工作等短期离开安阳外，这二十多年大部分时间是在安阳度过的，与罗振玉走马观花式的考察殷墟大不相同。正因为如此，他才有可能“获得甲骨出土与流传的最新信息”（明明德《甲骨研究》序二）。明义士多年在安阳滞留，“因‘身临其境’而了如指掌，故所著《甲骨研究》记载最为准确、详赡和具有权威性”（《甲骨学通论》，第40页）。明义士有关甲骨文发现情况的记载和早年甲骨收藏家刘鹗、罗振玉、王襄等人在公开出版著录中的记述相印证，甲骨文于1899年为王懿荣首先发现，是无可置疑的事。

其次，自1899年甲骨文发现，至1933年《甲骨研究》石印出版，已历时30年。而本书主要反映了1928年殷墟科学发掘以前的甲骨早期阶段的水平。我们从全书的章目就可看出这一点。即：第一章甲骨之定义，第二章甲骨发现小史，第三章收买甲骨者，（第四章缺列），第五章甲骨片数，第六章出版品，（“第七章”三字为后加，而无章题），第八章商代帝系。《甲骨研究》，既谈到甲骨的用途及整治、卜法，也谈到了甲骨文的内容和价值，并详列了甲骨文的出土、收藏、著录和研究的情况。特别是第八章商代帝系，先以王国维论商先王为准，再以帝名、《殷本纪》、《三代世表》、《古今人表》、卜辞等项列表对照，然后明义士将商远祖、先公、先王名及有关卜辞列出，加以考证。本章全面反映了当时学者对甲骨文中商王王名的研究水平。因此可以说，《甲骨研究》是一部甲骨学早期阶段（30多年）研究的总结，它和董作宾的《甲骨学五十年》、《甲骨学六十年》等著作一样，推动和指导了下一阶段的研究工作，是研究甲骨学发展史的重要著作。

其三，《甲骨研究》一书，在总结1899年至1928年前这一阶段的研究工作时，很显然是将这30多年分为前后两个阶段的。书中谈甲骨文的“收买者”时，以罗振玉以前的收藏家为“前段”，而罗振玉及罗振玉以后的收藏家为“后段”；在介绍甲骨学研究的“出版品”时，前一段自《铁云藏龟》（1903年）为始，而后一段则以罗振玉的《前编》（1912年）等书出版为标志。在1928年以前的甲骨文“非科学发掘时期”，正是罗振玉的收藏、研究，推动了研究的发展，实现了从前段向后段的前进。因此可以说，罗振玉和王国维及其弟子的甲骨学研究——罗王之学，是1928年以前甲骨学研究的高峰。因此。《甲骨研究》以罗振玉做为当年甲骨学研究发展前段和后段的分水岭，是非常公允和科学的。

遗憾的是，《甲骨研究》这次整理出版时一仍其旧，没有在正文前列出全书的章目。虽然原书底本缺列一些章目，给整理者造成困难，但补全全部章目还是可以做到的。首先，我们从全书看，是一气呵成的整体，并无遗漏整章文字的迹象；其次，我们从作者将30多年的甲骨学研究分为前、后两段看，也可在相关内容处将章节断开，应属遗漏章序和章题的性质；其三，基于上述二点理由，我们就可以具体在书中相应部分补齐章序和章题了。在本书“第三章收买甲骨者”部分，自“以上所提甲骨，与刘氏从王氏所得都是最初出土”（第15页）以上的内容，与其下“此后，罗振玉收集甲骨……”（第16页）以后的内容，明显为30年的“前段”和“后段”的不同。因此，所缺的第四章序、题可补在这二段文字中间，应补上“第四章后一段收买甲骨者”即可。原书底本在“第六章出版品”中，即第32页“以上为甲骨材料出版品之初段落……”和“《殷虚书契前编》八卷……”两个段落之间，有用钢笔标出“第七章”三字而无章题。虽然如此，却表明从“第六章”分出之“第七章”是以甲骨学研究的“前段”和“后段”为据的。这不仅为

（转下页）

（接上页）　我们从第三章中再分出一个“第四章”提供了参据，而且还可依此例，将“第七章”的章题补足为“后一段出版品”。因此，根据我们以上的分析，《甲骨研究》的目次应是：第一章甲骨之定义，第二章甲骨发现小史，第三章收买甲骨者，第四章后一段收买甲骨者，第五章甲骨片数，第六章出版品，第七章后一段出版品，第八章商代帝系。

总之，方辉博士“上穷碧落”，不远万里地从异国将濒成绝本的明义士《甲骨研究》底本求回，并加以整理出版，满足了甲骨学界一睹为快的愿望和甲骨学史研究的亟需，是值得祝贺的好事。《甲骨研究》的得以正式出版，就和当年孙诒让1904年写成的《契文举例》，直到1913年原稿在上海被王国维发现后，才得以出版的故事有异曲同工之处。我们相信，明义士《甲骨研究》这部为学者多年关注的重要著作的出版，一定会“洛阳纸贵”并很快售罄。因此，在再版的时候，将章目补齐，会使此书更为完整和系统。

（原载《殷都學刊》1997年第4期）

近年日本新出版的几部重要甲骨学著作

王宇信

摘要　甲骨文发现近百年来，各方面研究都取得了巨大成就。日本学者在其中也作出了很大贡献，近年面世的《甲骨文字字释综览》、《中国古代文化研究》、《关于中岛玉振旧藏甲骨片》等著作就是证明。本文详细介绍了这三部著作，恰当地评价了这些新著在殷商文化研究中的重要作用和其具有的学术意义。

关键词　甲骨　综览　集大成　祭祀　语法　著录

中图分类号　K221

近百年甲骨学研究取得的辉煌成就，是几代中国学者和外国学者共同努力的结果。而日本学者对殷墟甲骨文的研究，更是倾注了极大的热情。不少老一辈的日本学者老当益壮，笔耕不辍，推出了他们总结性的巨著。而年青一代的学者，也不断以他们富有新意的论文而崭露头角，反映了日本甲骨学商史研究的繁荣。近年面世的《甲骨文字字释综览》（松丸道雄、高岛谦一）、《中国古代文化研究》（英文版，伊藤道治、高岛谦一）、《关于中岛玉振旧藏甲骨片》（荒木日吕子）等书，是日本学者在甲骨文字研究、甲骨文与商史研究和甲骨文著录等方面的最新成果，必将引起甲骨学界的重视。

承蒙日本朋友们的慷慨，笔者自1995年以来有幸先睹上述大著。拜读以后，颇受教益。现把这几部新著略作介绍，以飨关心甲骨学发展的同行朋友们。

一、甲骨文字考释的集大成著作

松丸道雄和高岛谦一教授的大著《甲骨文字字释综览》（日本东京大学出版），是一部集近百年来甲骨文字考释之大成的巨作。

我们之所以这样说，是因为甲骨文字的考释，乃甲骨学研究的基础工作。1899年甲骨文被王懿荣鉴定、购藏以后，1903年《铁云藏龟》问世，就有学者开始了甲骨文字考释工作，这就是1904年孙诒让撰写的《契文举例》。但毕竟去甲骨文之古已远，再加上材料的局限，学者们对甲骨文字的识读存有很大难度。直到罗振玉1911年《殷虚书契》出版时学术界还是处于“书既出，群苦其不可读也”（《后编》序，1916年）的状况。由于罗振玉、王国维、王襄、叶玉森、商承祚、郭沫若等前辈学者的努力，甲骨文字逐渐被破释，甲骨文字研究走过了它“识文字，断句读”的阶段。

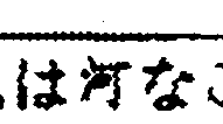
郭沫若曾深有体会地说：“卜辞研究是新兴的一种学问，它是时常在变迁着的。以前不认识的事物后来认识了，以前认错了的后来改正了。我们要根据它们作为社会史料，就应采取‘迎头赶上’的办法，把它最前进的一线作为基点而再出发。”（《郭沫若全集》（历史编）第2卷，第7—8页）甲骨文字的考释也是如此，随着新材料的增多和研究方法的日趋臻密，一些释错了的字渐被改正，而一些众说纷纭的字日趋一致。虽然如此，仍有一些字需做进一步研究，才能成为定论。也还有不少的字，需要做出考释。这就需要学者全面掌握前人的研究成果，既可从中受到启示和教益，又可避免重复性劳动，从而在此基础上前进一步，得出更为科学和合理的解释。

应该说，1933年叶玉森出版的《殷虚书契前编集释》，应就是一部反映当时学者关于甲骨文字考释成果的汇释性著作。此书以《殷虚书契》所收拓本为纲，按片、按字列举前人成说及叶氏自己的研究心得而成，但还不是按一定序列部居文字的专门字书；而同年出版的朱芳圃编纂的《甲骨学文字编》（十四卷），则是专门的字书了。该书按《说文》顺序部居甲骨文字，并在摹写的甲骨文字下标有出处，其后列有各家对此甲骨字的考释，反映了甲骨学研究草创时期的文字考释成果和水平。此后，由于殷墟科学发掘所得甲骨的增多和研究的加强，甲骨文字考释的论文和专著有了较大的增长。1965年台湾李孝定教授编纂出版的《甲骨文字集释》，总结了甲骨文发现六十多年来文字考释的成果。此书在国内外行用颇广，推动了甲骨文字研究的发展。

在当前，学者凭个人之力，想要全面掌握海内外的甲骨文字研究成果是很困难的。松丸、高岛二位教授的《甲骨文字字释综览》，就满足了学术界的这一要求。此书全面收集了1988年以前，中国、日本和西方甲骨学者近500多人所撰述的有关甲骨文字考释的论述，几近1600多种，并按文字将有关考释著作列于其后，供学者研究时检索。

《甲骨文字字释综览》书前有松丸道雄教授的“序”和全书的“凡例”；本书的主要部分为“字释综览”。“综览”按《甲骨文编》的收字顺序部居甲骨文字，共十九篇。其中第一篇至第十四篇为单字，第十五篇为合文。第十六篇、第十七篇为《甲骨文编》未释字，第十八篇为《甲骨文编》所无字，第十九篇为《甲骨文编》和《殷虚卜辞综类》所无字；另有“文献目录”、“字释索引”、“《甲骨文编》内相关番号检索表”、“《殷墟卜辞综类》《甲骨文编》检索表”、“后记”等项。松丸、高岛二教授精心编制的这部730多页的甲骨文字煌煌巨典，有下述几个特色：

首先，该书全面反映了甲骨文字考释的来龙去脉和研究成果，是九十多年来文字研究发展的轨迹。“字释综览”所列各个栏目就说明了这一点：“《文编》字号”栏、“《综类》部首及字栏号”、“甲骨文字（原篆）”栏、“字释”栏、“参考（即说解）”栏、“出典（即有关学者论著）”栏等六项。我们不妨以该书所列第八字“下”为例说明之：

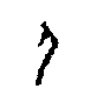
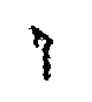
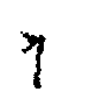
文编	综类	甲骨文字	字释	参　考	出　典
0008	014—002		下		罗振玉 1915：2·13b ＊1·0035
1·3			下	地の诸祇の总称	赤塚 1964·101
			下		李孝定 ＊1·0035
			下	先王或は河などを指す	伊藤 1975：35—36，50
			下		白川 1976：12—13
			下		姚孝遂 1983：96
			下		林沄 1986：21
			下		裘锡圭 1988a：105—106

我们从表上“出典”栏所列作者姓名及著作年月，就可看出学者自1915年罗振玉出版的《殷墟书契考释》第二卷13页对“下”字进行说解起，直到1988年裘锡圭在《文字学概要》第105—106页的有关“下”字说解。而＊号者，即为《甲骨文字集释》第一卷所收第35页“下”字的集释。《综览》所列其它甲骨文字均依此表之例，就不再一一介绍了。总之，《综览》一书关于甲骨文字的“参考”及“出典”，全面反映了九十年甲骨文字研究的成果和由表及里的发展轨迹。

其二，《综览》的第十六、十七篇，所收为《甲骨文编》所未释字。第十八篇，是《甲骨文编》所未收字，但见于《殷墟卜辞综类》。第十九篇，则是《甲骨文编》和《殷墟卜辞综类》所没有收录的甲骨文字。我们可以看到，《综览》第十六、十七篇的有关甲骨文字的“字释”、“参考”、“出典”，将学者们近年对《甲骨文编》做为“附录”而无说解一批文字的研究成果列入。而十八篇、十九篇，将《甲骨文编》和《殷墟卜辞综类》所失收的甲骨文字，也按“《综类》（或《综类》部首）”、“甲骨文字”（或“论者摹本”）、“字释”、“参考”、“出典”等栏目加以系统整理并纳入，反映了自1965年《甲骨文编》出版以后，学者们在甲骨文字考释方面所做的努力和研究的进一步深入。虽然其中还有不少未成定论并有待进一步考证的字，但毕竟为学者们今后的研究提供了信息和有益的启示，将推动文字考释的前进。

其三，《甲骨文字字释综览》一书的“字释综览”500多页，几占全书三分之二以上的篇幅，其所列文字的“字释”、“参考”、“出典”，是九十年来甲骨文研究的集大成之作。不仅如此，《综览》书后的几个附录，诸如“文献目录”、“《综类》《甲骨文编》检索表”等，将《甲骨文编》、《殷墟卜辞综类》及《甲骨文字集释》等几部有影响的大型工具书与《甲骨文字字释综览》融为一体并互相参照，相得益彰。可以毫不夸大地说，《综览》也集了几部此前出版的大型甲骨文文字字书之大成。本书的“文献目录”，按姓氏笔划（另有英文字母顺序）排名，把近五百名甲骨学者近一千六百种中、英文著作再按年排列于每位作者之后。我们从“字释综览”的“出典”栏所列的人名及著作年代，就可在“文献目录”中查到有关著作的篇名。而从“出典”栏内标明的《甲骨文字集释》卷数及页数，读者可查找《集释》所收各家对此字的论说，这就使《集释》成为《综览》“参考文献”的有机组成部分了。

本书的“《综类》《甲骨文编》检索表”，依据即将再版的《综类》一书的“部首番号”，把该部出现的甲骨文字再编以字号列次，其后再列《文编》所见与此字相关字的字号。如

001		（《综类》部首番号一览）	
—001		1	0064、0986、1009、1024、1048、1058、4280、5541
—002		5	1024
……	……	……	……
（《综类》人部下之字号）	（甲骨原篆）	（《综类》所现页号）	（《文编》字号）

这个“检索表”说明，《综类》001人字部下的第—001字是 字，有关人字的卜辞可在《综类》第1页查到，而与“人”字有关的字，为《甲骨文编》0064号……5541号等；而《综类》第—002字为 ，在此书第5页可查到与“匕”有关的卜辞。而与“匕”有关的文字，《文编》所编字号为1024。如此等等，《综类》的卜辞辞条，就与《文编》的甲骨文字对应起来了。此外，前文所举“字释综览”表中之“下”字，第0008为《文编》字号，其1·3为一卷三页。014为《综类》所排“下”字的部首号，该部的—002号字即为“下”字。《字释》也是将《文编》与《综类》互相参照的。

正因为《综览》一书集几部大型工具书之大成，所以学者研究文字时，既可知前人考释成果，又可将此文字在各条卜辞出现的位置和作用查明，从而得出正确的取舍和发现并思考问题，进而做更为深入的研究。

总而言之，《综览》一书把《文编》、《综类》、《集释》等书有机地融为一体，是一部集近百年来甲骨文字研究之大成的力作。

编纂大型的甲骨文字字书，首先遇到的最重要问题是辑字的体例。近百年来编纂甲骨字书，多是按《说文》体例类次甲骨文字，如《甲骨文编》等书即是。但日本学者岛邦男氏摆脱《说文》体系，另立自然分类法，依类部居甲骨文字，也产生了很大的影响。前些时日姚孝遂、肖丁主编的《殷墟甲骨刻辞类纂》和1996年于省吾主编的《甲骨文字诂林》，也是按“自然分类法”部居甲骨文字的。应该说，《说文解字》是研究古文字的经典著作，自汉代以来就对文字学研究有着深刻影响。《综览》一书仍以《说文解字》体例部居甲骨文字，说明不仅在中国，而且《说文》的体例也为外国学者所熟悉和接受。

应该说，自然分类法，由于甲骨文字的原始性和多变性，分类部居文字往往见仁见智，再加上学者对自然分类法较为陌生，学者部居文字的随意性也在所难免。因此，甲骨学者在使用《综类》等用自然分类法部居文字的著作时，往往不得其要领，多数人主要还是借助“索引”，查找想检索的内容。因此，自然分类法还存在着进一步改进和规范化的问题。而松丸、高岛二位教授之所以依然据《说文》体系部居甲骨文字，其重要原因恐怕也就在这里。实践表明，还是以被国内外学术界所熟悉的《说文解字》的体例统驭甲骨文字为好。

《综览》一书编制的大量索引，为使用者提供了极大的方便。但是，既然本书以《说文》体例为据统驭甲骨文字，就应做一份各卷的总目录，起到画龙点睛的作用。遗憾的是，作者在花费巨大精力编制各种索引的时候，却忽略了《字释综览》总目录这一较为容易完成的工作。

瑕不掩瑜，《综览》是近百年来甲骨文字学研究的总结性和集大成的著作，为近百年的甲骨学史增添了辉煌，并将对新的一百年甲骨文字研究的发展起到巨大的推动作用！

二、商代宗教祭祀和语言学研究的新成果

伊藤道治、高岛谦一教授最近在日本出版的《中国古代文化研究》（上、下卷，英文版），是近年海内外出版的关于商代宗教祭祀和语言学研究的一部重要著作。

“国之大事，在祀与戎”。商周奴隶主统治阶级为了巩固自己的统治，把宗教祭祀和战争做为国家的头等大事。这在殷墟甲骨文中得到了充分的反映。自1899年甲骨文发现起，就有很多学者致力于宗教祭祀及其规律、宗教祭祀与商朝社会政治关系等课题的研究和探索，发表了很多精到的论述并有不少专著出版。其中较为重要的，有董作宾1945年出版的《殷历谱》，他发现了商末对先王、先妣的祭祀存在严密的规律，即五种祀典的周祭系统，并由此恢复商代历谱，从而把宗教祭祀的研究推向一个高峰。1956年，陈梦家《殷墟卜辞综述》第十七章专论“宗教”，则反映了甲骨文发现六十年来学者对商代宗教祭祀的研究成果。而1975年台湾鼎文书局温天河、李寿林译日本岛邦男《殷墟卜辞研究》（原书1969年日本出版），在全面清理甲骨文有关宗教祭祀材料的基础上，写成“第一篇殷室的祭祀”，并从“对先王先妣的五祀”、“禘祀”、“外祭”、“祭仪”等几个方面展开论述。他把商代的宗教祭祀分为内祭和外祭，“内祭”在商王宗庙举行，包括按五种祀典依例依序祭祀先王先妣的周祭和尊祀父王而及于五世先王的禘祀。而“外祭”是在宗庙以外，诸如祭上帝、自然神、高祖神、先臣神等，行祭目的在于祈求农业丰收和战争受佑。由于内祭和外祭的对象和目的不同，祭祀仪式和祭名也不一样。因此他用专章论述了内祭的“五祀的祭仪”、“王宾卜辞的祭仪”、“其它的祭仪”和“外祭的祭仪”等。这是一部资料翔实，立论精到而全面系统研究商代宗教祭祀的著作，受到了国内外学术界的重视。此外，加拿大著名甲骨学家许进雄《殷卜辞中五种祭祀的研究》（1968年）和中国甲骨学家常玉芝《商代周祭制度》（1987年）二书，则是关于商王室周祭研究的专著。如此等等，大量的论文和全面系统的专著，使十五万片甲骨中支离破碎的宗教祭祀材料得以理出条贯，是甲骨学商史研究所取得的重要成就之一。而今年日本老一辈甲骨学家伊藤道治和高岛谦一新出版的《中国古代文化研究》，则把商代宗教祭祀的研究又向前推进了一步。

《中国古代文化研究》上、下两卷，第一卷第一部分为伊藤所撰“宗教与社会”，第二部分为高岛所撰“语言与古文字”；本书第二卷专为一册，全卷为以上二部分的注释，主要有一卷第一部分、第二部分的图表、第一部分各章和第二部分各章的注释。此外，还列有参考文献及简称、所引甲骨著录及简称、所引次要论著、全书重要文字索引等项。

“宗教与社会”共分四章。第一章殷代先祖神祗观念的演变，通过对至上神的本质、自然神与先祖神的威力、先祖神本质的演变、王权与占卜等几个方面的考察，得出在第一期至上神是上帝，其下为先祖神和作用与自然现象相关的其它神灵。自二期以后，先祖神逐渐获得越来越大的力量，对其祭祀也进一步系统化。在第三期和第四期，人们已普遍接受先祖神庇佑并赐福佑于后人的观点，将神灵（非先祖本身）并入先祖世系的意愿也变得很强烈。到了甲骨文第五期，先祖神庙已经定型，对其举行系统的祭祀也已牢固地确立。同时，伊藤先生还指出，在第四、五期，王位传子制已成为事实，族长的权威也加强了。从第一期至第五期，殷人宗教祭祀逐渐奉先祖神灵为神，对他们的祭祀愈益重要。与这一趋势的加强，商王一王族的首领的权力也进一步确立了，商王的王权也日益神圣；第二章殷王朝宗教的政治意义，涉及了自然神与先公的起源、贞人的故土、国王的本质等方面。伊藤指出了商朝卜人的原方国部族与商王朝有着不同的关系，或对商王朝叛服无常，表明商王朝的影响是有一定限度的。商王朝与一些方国部落是松散的联盟，有些是靠自然神的祭祀结盟的。当联盟的纽带松驰时，商王朝就会很快分裂，成为不统一的国家。因此，甲骨文的记载表明，商王直接控制的地区相当小，有关田猎区的材料就说明了这一点。虽然从安阳到沁阳的田猎区在商王的直接控制之下，但对田猎区周围地区的控制并不牢固。商王经历这些地区不用“田”字，而是使用与武力征服疆土有关的“𢦏”字。这种征服不仅仅局限于当地的民众，也应包括征服当地信奉的神灵；第三章先祖祭祀与卜人组中，讨论了先祖祭祀与卜人组、先祖祭祀的演变、卜人组和先祖神、兄终弟及的政治意义等几个问题。伊藤道治教授指出，殷王朝先祖祭祀中，以即位为王的男系最受重视。而对先祖的祭祀有新派和旧派的不同，每当王位继承兄终弟及时，就会出现旧派向新派的转变。这种转变，是构成商王室家族间习俗不同的反映。第四期武乙、文丁二王是父死子继，五期的帝乙、帝辛也是父死子继。但伊藤教授发现，四、五期卜辞不仅有新、旧派之别，而且字的结构和书法也不尽相同。应该说，从一期至五期这种演变在稳步发展，特别是五期中的“干支＋贞”型卜辞，与一期卜辞很相似。虽然还未发现说明这种变化的直接材料，但有学者推测在帝乙即位时，与文丁不同的一股殷王室势力变得较强，因而使帝乙即位出现一些麻烦。

通过本章的分析，伊藤教授发现了殷王室构成的复杂性。王族、子族、右族等及铭文中多种“族徽”，都说明了这一点。但他指出，由于王子和兄弟的繁多并由他们控制不同的族系，恰恰又是殷王室的致命弱点。正是周人实行的封建宗法制度消除了这些弊病，王室结构划一，王位继承也有了定制，有助于周王与同族人维持较为密切的关系。因此，宗法制是人为调整血缘关系的措施，晚商的宗教祭祀及实行的传子制，应是西周宗法分封制的过渡形态。

第四章为伊藤教授撰述的“宗教与社会”部分的“总结论”。伊藤教授得出了商代外祭（以自然神崇拜为中心）和内祭（对先王的祭祀）有着不同的社会意义的论断。外祭植根于王朝的扩张，在征服其他部族时起重要作用。而内祭先祖，特别是“五祀”以即位的先王为基础并强调直系，它是内向的。随着商代先祖祭祀的日趋重要，因而产生了外祭日益附属于王室祭祀体系的趋势。这正与商末殷王室权力日益加强的趋势相一致，是商代早、中期文化政治发展的结果。

伊藤教授还强调，商人对先王的祭祀不同于同时对一般先祖的祭祀，这是王权渐被神化所决定的。先王可被称为“帝”（殷代至上神的称号），献头之祭当举行先王或与之地位相近者，表明他们与其它方国部族首领有着不同的宗教地位。而现实国王拥有的最高宗教地位，也进一步加强了他们的政治权力。

伊藤教授对商代“宗教与社会”的研究，还有很多精辟的论述，我们就不再一一介绍了。使我们受到启示和鼓舞的是，伊藤先生明确指出了第一期占有重要地位的至上神上帝的祭祀，逐渐演变为第五期对先祖神系统祭祀确立的趋势。而以往关于宗教祭祀的研究，却很难明了一期至五期的变化和发展，多是具体、孤立地考察各种宗教祭祀活动的祭名和祭仪及所祭及的对象。而伊藤教授“宗教与社会”，则从宏观上考察了各期宗教祭祀的特点及发展变化，这就比前人的研究大大前进和深入了一步；不宁唯是，伊藤还把这一变化和发展与商代社会政治的发展紧密联系起来，即商代外祭日趋附属于王室祭祀体系，是商末王室权力日益加强的反映，从而使商代宗教祭祀的研究扩大了视野，并推向更深层次的考察。因此，伊藤教授的“宗教与社会”，是近年商代宗教祭祀研究的最重要成果，不仅对日本和西方学者，而且对中国学者的商代宗教研究，也有很大的参考价值。

《中国古代文化研究》第一卷的第二部分为高岛谦一所撰“语言与古文字”。高岛教授以多年致力于甲骨文的语言学研究而为中国学术界所熟知，该书反映了他的最新研究成果。第二部分是从下述章节展开讨论的：第一章“句法与语义学”，讨论了“从属结构与虚词‘其’”、“名词词组的结构”、“强调动词词组”、“数量补语的分析”等。第二章为“词法与语源”，分析了“㞢和又”、“鼎字研究”、“否定词词法”、“名词化与派生名词”等方面。第三章为“连词研究的问题”，研究是从“音韵问题（隹、叀的分析）”、“词法问题”等方面进行的，并专对甲骨文“隹”和“叀”的用法和古文字字义进行了分析。《语言与古文字》，对甲骨文的语言结构进行较为系统的考察和分析。

众所周知，自甲骨文出土以后，学者们多把精力用于文字的考释和利用甲骨文材料再建商史、甲骨学自身规律等方面的研究上。而专对甲骨文进行语言学考察的学者则不多。这方面较为系统的著作，主要有管燮初《殷墟甲骨刻辞语法研究》（1953年）和陈梦家《殷墟卜辞综述》第三章文法等（1956年）。虽然也还有别的学者时或发表语法研究的论文，但语言学研究一直处于较为薄弱的状况。前不久，张玉金《甲骨文虚词词典》（1994年）出版，表明甲骨文语言学研究有了加强。而高岛谦一教授的“语言与古文字”，不仅是近年从语言学方面研究甲骨文语法规模最宏伟（正文英文印刷面323页）的著作，而且论题也较为广博和系统，堪称近百年来甲骨文语言学研究的最重要成果。高岛教授的不少论述，将对甲骨学人大有启发，将推动和促进殷墟甲骨文的语言学考察。

承蒙刘学顺博士于赴美研究前夕，在百忙中为我述及《中国古代文化研究》大著的要点，使我得以认识这部著作在近百年甲骨学史上的重要地位。我在这里把这部著作的要点向广大同行们介绍，以期与同好共同分享这一甲骨学苑最重要收获的喜悦。肯定地说，伊藤、高岛二位教授的《中国古代文化研究》，将把商代宗教祭祀和语言学的研究引向更为深入的新阶段。因此我也希望，国内有识者能组织力量将此书早日翻译出版，以使更多的中国学者能从中受到启发和教益。

三、传世甲骨材料的“再发掘”

甲骨文自1899年被发现以后，有相当数量流往国外，其中以日本所藏甲骨原片为最多。据胡厚宣先生统计，日本收有甲骨12443片，分别为31家大学或研究单位、博物馆及31处私人所藏。

自1921年日本第一部公布甲骨文1023片的专书《龟甲兽骨文字》由林泰辅编成以后，不断有专书著录各家所藏甲骨文。较为著名的大书有贝塚茂树《京都大学人文科学研究所藏甲骨文字》（图版篇，1959年）、松丸道雄《东京大学东洋文化研究所藏甲骨文字》（图版篇，1983年）、伊藤道治《天理大学附属天理参考馆藏甲骨文字》（1987年）等，再加上《东洋文库所藏甲骨文字》（1979年），可以说，日本较为大宗的甲骨基本公布出来了。但日本学者对小批量的甲骨也在孜孜搜求并不断公布，如青木木兔哉《书道博物馆藏甲骨文字》（《甲骨学》六、十号）、松丸道雄《日本散见甲骨文字搜汇》（《甲骨学》五、七、八、九、十、十二。中译本载《古文字研究》第三辑）、伊藤道治《故小川睦之辅氏藏甲骨文字》（《东方学报》三七期，1968年）、《太原美术馆所藏甲骨文字》（《仓敷考古馆研究集报》四号，1968年）、《藤井友邻馆所藏甲骨文字》（《东方学报》四二期，1971年）、《桧恒元吉氏藏甲骨文字》（《神户大学文学部纪要》，1972年）、《关西大学考古资料室藏甲骨文字》（《史泉》五一号，1977年）等。伊藤道治教授上述五文集为《日本所见甲骨录》，附于朋友书店重印郭沫若《卜辞通纂》（1977年）书后。可以说，日本学者为甲骨材料的公布，做出了很大努力，基本上将公、私所藏甲骨材料全部公布完毕。

尽管如此，学者们并没有停止这方面的工作，继续执着地把过去未著录过的甲骨“再发掘”出来。荒木日吕子先生《关于中岛玉振旧藏甲骨片》（创荣出版，1996年）一书，就是著录日本新发现甲骨材料的著作。该书由以下几个部分组成：一、经纬。二、内容（《珠》未收有字甲骨、缀合甲骨等。）三、甲骨片的性格。四、释文。五、图版（拓本、照片、摹本）。后记。本书共著录中岛氏藏骨（《殷契遗珠》未收者）28片。此外，还有将《遗珠》与中岛氏藏骨中未发表过的有字甲骨和无字甲骨缀合所得24版。另有部分为伪刻、部分为甲骨文的甲骨4片等，总计编为56号。

中岛玉振（原名竦，号蠔叟、蠔山）是日本汉学家，也是日本私人收藏甲骨较多的学者之一。郭沫若早年寓居日本编纂《卜辞通纂》时，曾见过他所藏的这批甲骨。郭沫若在《通·别二》记：“一日往访，出示所藏甲骨凡二百片。云先年购置于北平。展示，乃知曩所据山内孝卿氏拓本，其原骨具在此中，爰选其八片影存之，以示拓本之有据也”，将八片以拓本收入《卜辞通纂》。后来，中岛玉振曾将所藏甲骨收入《书契渊源》（共5贴，15册），1934—1937年由文求堂出版，但此书流传不广。金祖同1939年出版的《殷契遗珠》，收入中岛氏所藏甲骨127片，从而使更多的学者得以使用这批重要材料。中岛玉振氏所藏甲骨，现已为山崎忠氏所有。早在1940年6月左右，山崎忠氏陪同其父溪琴氏访问中岛氏，因溪琴氏与中岛氏有较深的交往，故中岛玉振以所藏甲骨馈赠之。山琦忠氏将这批赠品携回家中，并予以妥善保存至今。据这批甲骨的整理者荒木日吕子先生说，郭沫若当年所见的中岛氏“凡二百片”甲骨，由于辗转搬运和破损，现共有229片。而《遗珠》所收127片中，《珠》716、732两片之原骨已不复存在。

中岛氏这批甲骨，以一、二、五期为多。荒木先生在“甲骨片的性格”中推断，当为甲骨文发现的早期阶段的出土品，其出土地当为

小屯村北洹滨，即“由第一区出土的”，“可能是1920年间带到了日本的盗掘品”。

《关于中岛玉振旧藏甲骨片》所收甲骨，多数片形较小，字数不多。其中以B_{1a}片形较大，此为左胛骨的骨柄部分，其下部骨扇部分残去。骨上部近臼处刻有“乙亥卜，扶，㞢侯蔡方骨告”，内容较为重要，作者并对此片作有专门的考释；本书的缀合甲骨包括两个方面的内容，其一，将《珠》与未著录中岛氏有字甲骨相缀者。如《珠》779＋有字甲骨，即为本书B_{31a}片，使“贞〔王〕从沚貳”辞的兆序和兆记得到了补足。《珠》759＋有字甲骨为本书B_{35a}，这就使《珠》759“辛卯𫳅”辞之后，还补足了“其𫳅”之问。《珠》797＋有字甲骨，为本书S_{32}，这就使《珠》797“□午……今载……〔望〕……”的残“望”字补齐了目下的人形。《珠》731＋有字甲骨，为本书的B_{48}，不仅使《珠》731“……𫳅……牛”残辞成为“其牢又一牛”全辞，而且还增加了一条“□牢又一牛”。《珠》712＋有字甲骨为本书B_{47}，使《珠》712“〔贞〕王”残辞补苴为“贞王□𢼄□□”。B_{29a}为《通》别＝7·2＋有字甲骨，从而使“庚子卜，亘，贞勿曰之令𢀛……”辞补苴为“贞勿曰之令𢀛不若”；其二，将《珠》与中岛氏未著有字甲骨及无字甲骨缀合，如B_{46}为《珠》714＋中岛氏有字甲骨＋无字甲骨（3块）而成，不仅使《珠》714“贞亡尤”相对应的残辞“十月”得以补苴，为“贞亡尤。十月”，而且使破碎的左胛骨上部得以复原。如此等等。

《关于中岛玉振旧藏甲骨片》，不仅使一批出土后又被“埋没”的甲骨资料重新“发掘”出来供学者使用，而且此书将甲骨拓本、照片和摹本三位一体，使之互相参证，这就避免了拓本易模糊，摹本易失真的缺陷。甲骨的正、反面原大照片，得以使研究者增强对原骨的全面观察和对钻凿形态及甲骨的整治有直接的认识。这是符合董作宾等一再倡导的拓本、摹本、照片“三位一体”著录甲骨的方向的。

荒木日吕子先生《关于中岛玉振旧藏甲骨片》的出版，又给我们若干新的启示。这就是一，我们还应对已经公布的公私藏家的传世甲骨进行一番彻底的清理，仍有希望把较为重要的材料“再发掘”出来供学者研究之用，荒木先生大著的出版就说明了这一点。其二，《关于中岛玉振旧藏甲骨片》，在彻底清理原骨的基础上，又把没有公布过的残碎有字甲骨和无字甲骨与刊布的甲骨相缀合，这不仅使原片的文字内容有了增加，而且使原骨也更为完整，对甲骨的保护和复原也大有好处。应该说，甲骨文自出土以后，不少公私藏家的甲骨在辗转过程中自然破损，使原来就很支离的珍贵文物更加破碎。因此，荒木先生所做缀合有字、无字甲骨的细心工作并有所收获，将对公私藏家清理、保护和复原所藏甲骨的工作有所推动。其三，早年同一地点所出甲骨，往往由于挖掘和售卖批量的不同，分属于不同藏家。日本著名私人收藏家河井荃庐甲骨972片、田中求堂甲骨341片（两家甲骨现藏东京大学东洋文化研究所）、中村不折甲骨600片（现藏书道博物馆）、堂野前种松甲骨40片（现藏天理参考馆）、三井源右卫门甲骨161片（现藏东洋文库）等，多为一、二、五期之物，与中岛玉振氏所藏甲骨当为小屯村北洹滨同地出土。因此荒木日吕子先生根据对中岛氏甲骨缀合的经验，认为上述各家所藏的“甲骨片的缀合起来也有其可能性”，是很有见地的。如果有识者能创造条件，对上述各家甲骨加以统盘清理，不仅会在内容方面有所收获，而且对这些历经百年沧桑的珍贵文物本身的保护，也同样是很有意义的工作。

中国有句尽人皆知的俗话，叫做“好戏还在后头”。就在甲骨文发现一百周年（1999年）的前夕，日本学者推出了上述三部重要著作，而中国学者也推出了《甲骨文字诂林》等煌煌巨作，甲骨学苑的丰收景象令人鼓舞。我们相信，通过海内外甲骨学者的努力，一定会有更多的总结性著作，把甲骨学研究推向它新一百年的辉煌！

（原載《殷都學刊》1997年第1期）

書　評

李　旭　昇*

夏含夷（Edward L. Shaughnessy）

《溫故知新錄——商周文化史管見》

臺北：稻禾出版社，民國86年，221頁

夏含夷（Edward Shaughnessy）氏是美國人，史丹佛大學博士，現爲芝加哥大學東亞系副教授，曾任知名學報*Early China*的主編，專攻中國先秦文化史研究。夏氏二十歲開始系統地學習中國語言和歷史，至今25年，發表了許多高水準的學術論文，引論有據，學博思精，往往見人所未見，發人所未發，能提出許多和我國學者不同的見解。現在又把這些文章集結出版，方便學者後進，這是非常有意義的事。

本書內容以中國古文化史爲主，包含甲骨文、金文、尙書、易經、竹書紀年、歷史、考古等方面，其篇目及重點如下：

一、早期商周關係及其對武丁以後殷商王室勢力範圍的意義

二、試論周原卜辭「⊕」字兼論周代貞卜之性質

三、釋御方

四、中國車馬的起源及其歷史意義

五、也談武王的卒年——兼論《今本竹書紀年》的真僞

六、《竹書紀年》與周武王克商的年代

七、周公居東新說——兼論〈詔誥〉、〈君奭〉著作背景和意旨

八、簡論《保卣》的作者問題

九、西周之衰微

十、從駒父盨蓋銘文談周王朝與南淮夷的關係

十一、測定多友鼎的年代

十二、此鼎銘文與西周晚期年代考

十三、周易筮法原無「之卦」考

十四、周易乾卦六龍新解

十五、說乾專直，坤翕闢象意

在〈早期商周關係及其對武丁以後殷商王室勢力範圍的意義〉一篇中，夏氏修正了中國學者對商周關係的看法。他先以卜辭中的同辭關係證明先周的活動範圍是在今山西省西部，即舊說的河東地區。其次以較新的卜辭斷代成果，以爲卜辭第一期應再依𠂤組、賓組、𣎵組分出先後，根據這樣分期卜辭的內容看出早期的商周關係基本上是處於敵對狀態，即在武丁早期，相當於「𠂤賓間組」，周有時受商軍的征伐，有時受他國的壓迫；到了武丁末期，亦即標準「賓組卜辭」的時候，商周關係卜辭既豐富又清楚，周不但爲商的服屬國，並且其關係相當親密和穩定。但是，武丁死後，兒子祖庚不能很好地繼承父之霸業，並且𢀛方開始侵略，河東地區和商斷絕來往，周又變成商的敵國，這時甲骨文中不再見到任何關係。這大概是古公亶父生存的時候，他在𢀛方（大約即是《史記》〈周本紀〉的薰育）的逼迫下，離開了河東，踰梁山，遷於岐山下。

在〈試論周原卜辭「⊕」字兼論周代貞卜之性質〉一篇中，夏氏以爲周原卜辭的「⊕」字（以下用「囟」字代表，相當於後世文獻中的「思」）應該有「願」的意思，他並且舉了《詩經》〈魯頌〉的「思無邪」、《左傳》、《國語》、《儀禮》和《湖北天星觀楚簡》中占卜文辭的「尙」字句爲證。說明這種句式表達的不是問句，而是祈使句，即「希望」如何的意思。在本書的《序》中，他並且把這個意思和卜辭的「貞卜句」也解釋成祈使句，而不是傳統所說的疑問句。

在〈釋御方〉一篇中，夏氏從甲骨文、西周金文、西周典籍用法、文字字形音義、和四種古文字研究考據方法，證明甲骨文中的「御方」一詞不是甲骨學者一向以爲的「方國之名」，而是「追禦邊方地區的人」。「御」是動詞，有「博獲而囚禁仇敵」的意思。

在〈中國車馬的起源及其歷史意義〉一篇中，夏氏從考古發現的種種遺跡證明殷墟發現的中國馬車是大約在西元前1200年從中亞傳入的。據卜辭，商代末年馬車尚未起到重大的軍事作用，數目也很有限。周人則可能比商人更早學會熟練地使用馬車，所以在牧野之戰打敗商人。

在〈也談武王的卒年——兼論《今本竹書紀年》的真僞〉一篇中，夏氏評論有關武王克商後二年崩或六年崩的這兩種說法，以爲後二年崩是正確的。而《今本竹書紀年》記武王12年克商、17年崩，似乎與後六年崩的說法相同，學者多以《今本竹書紀年》爲明人僞造的，因此後六年崩的錯誤當然也可以旁證《今本竹書紀年》之不可信。但是，夏氏很聰明地指出，這其實是晉代學者在整理《竹書紀年》時的一次錯簡。《今本竹書紀年》載武王12年伐殷，14年武王有疾之後，武王應該就去世了，其後應該緊接著記載「命世子誦於東宮；冬十有二月，王陟，年五十四」。但是因爲中間錯了一根簡「十五年，肅愼氏來賓；初狩方岳；誥於沬邑；冬，遷九鼎於洛；十六年，箕子來朝；秋，王師滅蒲姑；十七年」，所以世子誦的即位年代也就錯成了武王17年。如果把這根錯簡擺回去，那麼《今本竹書紀年》所載武王卒年其實和《尙書》〈金縢〉、《史記》、《淮南子》、《管子》、《逸周書》〈作雒解〉的正確說法是完全一致的。因此傳統對《今本竹書紀年》是明人僞作的說法，實有重新檢討的必要。

在〈《竹書紀年》與周武王克商的年代〉一篇中，夏氏以歷史語言證據和年代學證據推定武王克商年應該是西元1045年，而西晉時代《今本竹書紀年》的整理者因爲混淆了「文王稱王七年卒」和「文王受命九年卒」，因而把《今本竹書紀年》武王克商前11年的記載竄改了。去除這些竄改，經過復原後，《今本竹書紀年》基本上還是和戰國中葉墓本出土時的本真相去不遠。

在〈周公居東新說——兼論〈詔誥〉、〈君奭〉著作背景和意旨〉一篇中，夏氏以爲在周開國之初，武王早卒、成王年幼，幸虧周公平定了管蔡之亂，鞏固了周王朝，攝政了七年，並未稱王。其後成王年事漸長，靠著召公促使周公還政於王，周公於是居東——即《禽簋》中的「楚」、也就是傳統

---

* 作者係國立臺灣師範大學國文系教授

文獻《墨子》〈耕柱〉上的「商蓋」。三年之後，周公老於豐——也就是不見於文獻，但見於《𪰇方鼎》中的「豐」。成王11年，周公病歿於豐。

在〈簡論《保卣》的作者問題〉一文中，夏氏詳細地考釋了《保卣》的銘文，提出了很多和中國學者不同的見解，把本銘解釋爲「在乙卯這一天，王命令大保召公奭逮捕了叛周的殷東五個諸侯。大保蔑曆祉，並且賞賜祉六品。」祉應該是已經臣服於周的商人，因此本器應該改稱爲「祉卣」。

在〈西周之衰微〉一篇中，夏氏從出土文物討論西周在穆王的時候已經衰微了，西周早期有銘銅器在廣大的地區大量的出土，但是到了穆王時期，出土銅器的地區忽然地縮小了；在《㦰簋》中，戎㝬入侵到周朝東都畿輔之內的𩀅林；在《彔㦰卣》中，淮夷敢伐內國，入侵到今河南許昌附近。這和《後漢書》〈東夷傳〉所說的「徐夷僭號，乃率九夷以代宗周，西至河上。穆畏其方熾，乃分東方諸侯，命徐偃王主之」可以互相印證，表示這時周的控制疆域已經相應地縮小，這是西周王朝衰微的具體反映。

在〈從駒父盨蓋銘文談周王朝與南淮夷的關係〉一篇中，夏氏強調看銅器銘文，不應只看銘文中說的部分，尤其應該看銘文所沒有說的部分。從二十二篇「周伐東夷南夷銘文」所說的部分來看，幾乎每篇都宣揚周師的勝利，但是在《駒父盨》中，周宣王命令駒父獻給南淮夷兩種貢物，以籠絡當時周王所不能制服的南淮夷。他把「駒父……見南淮夷厥取厥服」解釋爲「駒父貢獻給南淮夷『取』和『服』等兩種貢物」。由此可見周王朝也有打不過南淮夷而採用交換禮物，以求媾和的時刻。

在〈測定多友鼎的年代〉一篇中，夏氏以曆法和《逸周書》〈世俘解〉推斷《多友鼎》爲宣王12年10月16日所作，而多友則是周宣王的同母弟弟。

在〈此鼎銘文與西周晚期年代考〉一篇中，夏氏採用了倪德偉（David S.Nivison）「西周一個王可以有兩種不同的年曆」的主張，並比對了許多銅器上的干支年分，最後在提出周宣王在位期間有兩種不同的年曆（西元前827，825年）的前提下，斷定《此鼎》是在周宣王17年，即西元前809年做成的。

在〈《周易》筮法原無「之卦」考〉一篇中，夏氏贊成劉炫的說法，以爲「在《左傳》做成時代，因爲『初九』、『六二』等指定一個卦之某爻的用語恐怕仍未開始使用，所以就用『卦^{1}之卦^2』這樣專用的用語以指定一個卦的某一爻」，而現在所有的變卦法可能是戰國中晚期的產品。依這種解釋，和《左傳》的記載都可以相吻合。

在〈《周易》乾卦六龍新解〉一篇中，夏氏採信聞一多的說法，並再加深入詮釋，以爲《易經》〈乾卦〉六爻辭的「龍」，其實是中國古代天文學上的「東方蒼龍」，而不是實際人間找不到的活生生的龍。《初九》「潛龍」指冬天，《九二》「見龍」指春分，《九五》「飛龍」指夏天，《上九》「亢龍」指秋天。

在〈說乾專直，坤翕闢象意〉一篇中，夏氏以爲《易・繫辭上傳》第六章的「夫乾，其靜也專，其動也直」指男性生殖器安靜未激前其形彎曲（專，摶也），激動欲交之時，其形乃直立；而「夫坤，其靜也翕，其動也闢」指女性生殖器安靜未激之時其外陰部翕合，激動欲交之時其外陰部乃開闢。並指出這其實是中國古人早就理解到的說法。

以上十五篇文章，所牽涉到的學問非常廣泛，以一個外國學者能夠熟悉到這個地步，實在令人難以置信。而他的文章所探觸到的深度，所提出來的新解，在在都令人欽佩。學者也許不盡同意他的論點，但是不得不承認，這是一部非常值得研究中國古代文化史的人研讀的參考書。

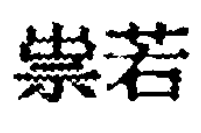
當然，做爲一個外國人，夏氏有些地方的看法一定和中國不同。有些文字的理解、運用，也還有一些隔閡，以下是我見到的一些例子：

最常見的應該是古文字隸定問題。因爲古文字一直到今天都還是一門發展中的學問，也就是說：有很多古文字的解釋還沒有百分之百的確定。某些字，早期是這麼說的，但是有新資料出來之後，舊說很可能就被推翻了，連帶地，建立在舊說上的解釋也都跟著要改。在本書中，夏氏自己就有一個很好的例子，因爲他把周原甲骨的「⊕」字隸定爲「囟」，也就是後來文獻中的「思」，因而對周代貞卜的性質提出了和中國學者不同的看法。再推展出去，使得他對殷商卜辭的看法也跟著改變了。當然，這是本書的重大成就之一。反過來說，本書因爲隸定不同而產生文章重大改變的情況，目前是還沒有看到。目前看到的只是一些枝節的小問題，例如：

19頁3行　【31】戊戌卜貞𢦏方其氐方（《京》1306）　案：「氐」當隸定爲「以」。

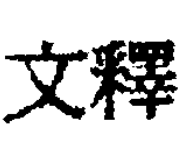
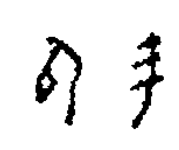
19頁14行　【35】丁巳卜𠯑貞周氏嫀（《乙》7312）　案：「𠯑」當釋爲「古」，而下條的「𠙵」就不能釋爲「古」了。

19頁25行　【41】己卯卜㐱貞令多子族比犬侯璞古王事五用（《續》5.2.2.）　案：「古」字本作「𠙵」，或釋「甾」、或釋「叶」，舊或亦釋「古」，但甲骨文「古」字作「𠯑」，與「𠙵」形不同。

71頁表一・1.癸巳卜，㱿貞：旬亡𡆥王固曰：乃𢆶亦㞢祟若。甲午王往逐兕；小臣古車馬硪𩢍王車，子央亦墜。（《菁華》1:IB）　案：「祟」當釋「求」。

73頁4行〈毛公鼎〉銘文：「朱鞃鄭靳，虎幎熏裏右戹」，當作「朱䩛𠥦(鞃)靳、虎冟熏裏、右戹」。

87頁，注39「之夕豆甲子」，「豆」字當釋「皿」。145頁3行「弋卩其卣」當作「𠨧其卣」。

全文釋字不太統一，例如同一「」字，在19頁3行　「【31】戊戌卜貞方其氐方（《京》1306）」句中釋爲「氐」，但是在71頁表一・11「車不其」句中又不作隸定，僅寫原形。

至於全書某些體例，因爲本書是由很多已經發表過的文章集結而成的，所以不同時期的體例不一樣。例如：引用甲骨文的方式，在第85頁注33有很好的辦法：

> 在本文引用甲骨文集錄書名簡稱之後，另用羅馬數字及漢語拼音的縮寫形式來代表該片卜辭的時代及所屬貞人集團。圓點前面的羅馬數字相當於董作賓氏所劃定的五期（例如：I代表董氏的第一期，也就是武丁時代）；圓點後的縮寫字母代表貞人集團（或曰組織），詳見下表：
>
> | | | | |
> |---|---|---|---|
> | B | 代表賓組卜辭 | D | 代表𠂤（Dui）組卜辭 |
> | L | 代表歷組卜辭 | C | 代表出組卜辭 |
> | He | 代表何組卜辭 | WM | 代表無名組卜辭 |
> | H | 代表黃組卜辭 | D－B | 代表𠂤賓組卜辭 |
> | D－L | 代表𠂤歷間組卜辭 | | |
>
> 因爲董氏的每一期都可包含兩類或兩類以上的卜辭，而且屬於同一貞人集團的卜辭又可延申到兩個時期，所以用這種既給出董氏分期，同時又標出其所屬貞人集團的「雙重注釋法」無疑是比較確切的。

這種方式是非常理想的，但是夏氏在本書中並沒有全部這麼做。

引用書目有時並沒有依照大家的習慣，例如胡厚宣的《戰後京津新獲甲骨錄》，一般簡稱《京津》，但是本書稱《平津》，不知所據爲何？

根據舊本隸定有誤，如118頁據〈金〉584作「才呇」、「才䳔」，今據英2524，實爲「才商」、「才 」。

也許由於國籍的關係，作者有些詞的使用和中國學者的習慣還是有些距離，例如第39頁第9行第3、4字的「團覽」、第10行末二字的「覽禁」，我們不太能確定是什麼意思。

當然，這些枝枝節節的小問題，並不影響夏氏本書的重要成就。已往的漢學家大都精通中文，能以中文寫作，以中語交談。但是其後的漢學家在語文方面的能力顯然是比較弱了。夏氏本書除了內容的成就外，在語文方面的駕馭自如也是外國漢學家的一個重要里程碑。

（原載《漢學研究》第15卷2期，1997年）

近年出版之甲骨資料簡介

白玉崢

第一節　甲骨文合集

集錄甲骨資料最爲夥頤者，就現時情形言：首推商周甲骨文總集。但商周甲骨文總集之前十三冊，乃採自甲骨文合集所選錄者。甲骨文合集第一冊出版於民國六十八年，自後，陸續出版十二冊，全書八開大本，共爲十三冊。前十二冊爲拓本之選輯，共著錄 39476（面背臼同號）號，第十三冊爲寫本之選輯，共著錄 2480（同前）號。總凡選錄 41956 號。其例言曰：

1. 全書共編為十三冊，前十二冊為拓本，第十三冊為摹本。凡在編成之後，發現和蒐集到的資料將另編為《補遺》。
2. 資料來源有下列三個方面：
   (1)已著錄甲骨文資料：即從1903年問世的第一部甲骨著錄《鐵雲藏龜》起，直至七十年代末所出版的中外甲骨著錄（《小屯南地甲骨》一書只收錄了它出版前已經發表過的若干片）；同時包括一些甲骨文研究論著中所發表的資料。
   (2)甲骨拓本：公私各家收藏的各種甲骨拓本（其中有彼此重見者）。
   (3)甲骨新拓本：全國博物館（院）、圖書館、研究機關、大學、中學等共九十五個單位和少數私人收藏甲骨的墨拓。
3. 所選各種著錄和拓本的材料，均經校出重片再從其中選出較完整、清晰者入錄，凡有實物可見即重行墨拓，凡有較好的拓本者即加以換用。舊著錄中的摹本，亦據上述要求，盡力換用拓本。凡此種種，將在《材料來源表》中注明。
4. 凡甲骨各片原為一版之折者，本書均盡力加以綴合。其中，間有前人綴合，但局部遺漏而加以增補者，亦有與其他綴合著作同時進行、不謀而合者。凡本書所綴合及吸收前人成果者，均在《材料來源表》之有關綴合部分予以說明。
5. 凡甲骨各片，按其部位，刻辭內容等項判斷其應為一版之折，但現有各片不能直接綴合者，本書仍分開排列，但編為一號，各片之下分別加甲、乙、丙、丁等字樣。
6. 選錄資料的標準是：凡甲骨刻辭，文句完整或比較完整，以及文句雖有殘缺但內容較為少見者，則一律選錄；凡文句一般、常見而又殘缺過甚者，則不予選錄。據此標準，本書共收錄甲骨文 41956 片。
7. 所收錄的全部資料均分期、分類進行編排，先分期，每期中再分出若干大類和小類。
8. 分期，係採用通常「五期」斷代法，各冊的期別如下：
   第一至第六冊　第一期　武丁
   第七冊　附第一期　武丁
   第八冊　第二期　祖庚祖甲
   第九冊至第十冊前半　第三期　廩辛康丁
   第十冊後半至第十一冊　第四期　武丁文丁
   第十二冊　第五期　帝乙帝辛
   第十三冊　第一期至第五期　摹本
9. 第七冊之附第一期，係指字體、文例比較自有特色，學者間對此斷代意見分歧較多的一批甲骨文，暫附於第一期（武丁）後；並吸取學者分析研究的成果，內分甲、乙、丙三組，在乙、丙兩組內，又依其內容的差異各分兩組，即乙（一）、乙（二）、丙（一）、丙（二）等；每組之內再各自分類。此乃處理這批材料的一種辦法，並非斷代的定論。
10. 分類係依據甲骨刻辭的辭義，判斷其為某類的內容而進行區分的。對刻辭的解釋，一般採用普通的說法，有的從一家之言，有的則是在編輯過程中集體研討所形成的看法。
11. 對於一版多辭、分別占卜數種事類的甲骨，則依據其中具有較重要內容的一辭而將此版歸於某類。其餘各辭之應屬類別，則將在「釋文」和有關索引部分予以說明。
12. 分類中涉及到的一些具體問題的處理擇要說明如下：
    甲骨文的「宗」字有用作宗法觀念者，但其本誼系指神主所在的宗廟，故本書將殘辭「宗」字同「宮」「室」「寢」「亩」「門」等一起入於「建築」類。將大量占卜未來吉凶的「卜旬」「卜夕」刻辭，一般歸入「吉凶禍福」類。其中有記明月份，可供研究商代曆法參考者，則歸入「曆法」類。
    「祭祀」類所收各片系只存祭名而殘缺其餘內容者，一般按不同的祭名分別集中排列。而第二、五期出現規律性的祭祀形式，本書對此類卜辭則另按其固有規律排列，以便於人們繼續深入研究之用。
    「文字」類多系殘辭，其內容包括生字奇字、習用成語、數字、行款特例、習刻、朱書、墨書等等。
    「其他」一大類，實際為雜類，主要是辭義難明或為各類所不能包括者。其與「文字」類有某些相似，但大別之，則是此類並非都系殘辭和不認識的生字奇字者。
    「同文卜辭」（亦即所謂「成套」卜辭）中的各片，均按兆數字從小至大排列，以體現各版原來占卜時的順序。
    全版文字均為偽刻者，本書一概不錄；一版中有真有偽者，仍按原樣收錄在「釋文」中加以說明。圖版資料編號，一律用阿拉伯數字統一標注，即1至41956號，一以貫之，以便引用。
    凡一甲的正面，反面，一骨的正面、反面、臼面均刻有文字而收錄者，編為一號，並分別註明正、反、臼字樣。凡反面有文字而正面無文字者，則只收錄反面，作一號處理，不再註「反」字；骨臼有刻辭而正、反面而無文字者，亦只收錄「臼面」，作一號處理，不再註「臼」字。
    所收每片甲骨，將逐片、逐辭作出釋文，另行編纂成《甲骨文合集釋文》。

第二節　商周甲骨文總集

商周甲骨文總集，出版於中華民國七十三年八月，八開大本，總凡六八二百餘頁，精裝爲十六冊。其「輯印緣起」曰：

> 甲骨之出土，距今已八十五年；第一部甲骨書「鐵雲藏龜」之問世，亦已八十年。在此八十年間，公私繼續以甲骨公佈者，約有六七十種之多。然而尚無一書可以包括全部甲骨，能去偽去複而為之流傳者。十年前，余輯「甲骨集成」，有志以藏家為綱，整理全部甲骨，書已編就若干冊，而僅出版一冊，即告停頓。蓋以一人照顧困難，終虧一簣。最近大陸上以國家之力，完成「甲骨文合集」一書，計分十三大冊，五二四一頁，共收甲骨41956片；號稱包括全部甲骨，實際尚有遺漏。此書創議於二十年前，中間經過十年擱置，直至去年底，始全部印完。於籀讀甲骨文合集之餘，曾作書評三篇，論其得失，聊盡評介之責。今十三冊已全部讀畢，對全書之缺點，思有以彌補之，乃有重印之想。所以有此計劃者，基於下列幾點原因：
>
> 1. 甲骨文合集之定價太高，非一般私人研究者所能購置。

骨文，以及一九七七年在陝西周原出土的西周甲骨文資料的彙編。

二、本書共分十六冊冊，前十二冊為甲骨文合集之拓本，十三冊為甲骨文合集之摹本，十四、十五及十六之前半為小屯南地甲骨文拓本；十六冊後半為小屯甲骨拾遺拓本及周原甲骨摹本。

三、甲骨文合集之資料來源有下列三方面：

1. 已著錄甲骨文材料：即從1903年問世的第一部甲骨著錄「鐵雲藏龜」起，直至七七年代末所出版的中外甲骨著錄書（「小屯南地甲骨」一書，只收錄了它出版前已經發表的若干片），同時包括一些甲骨文研究論著中所發表的資料。
2. 甲骨拓本：公私各家收藏的各種甲骨拓本（其中有彼此重見者）。
3. 甲骨新拓本：全國二十五個省、市中的博物館（院）、圖書館、研究機關、大學、中學等共計九十五個單位和少數私人收藏甲骨的墨拓。

四、甲骨文合集選錄資料之原則如下：

1. 本書選用各種著錄和拓本的材料，均經校出重片，再從其中選出較完整、清晰者入錄；極少數拓片，在數種著錄裏各有長處者，則分別擇優，按原部位加以「補合」。舊著錄中的拓本，凡有實物可見即新行墨拓，凡有較好的拓本者即加以換用。舊著錄中的摹本，亦據上述要求，盡力換用拓本。凡此種種，將在「材料來源表」中注明。
2. 凡甲骨各片原為一版之折者，本書均盡力加以綴合。其中，間有前人綴合，但局部遺漏而加以增補者，亦有與其他綴合著作同時進行，不謀而合者。凡本書所綴合及吸收前人成果者，均在「材料來源表」之有關綴合部分予以說明。

2. 自由中國學人根本無法見到此書，如欲普及甲骨研究，則完整之甲骨總集，勢不能缺，如以「合集」為基礎，而重加編輯，乃有其必要。
3. 「合集」所輯材料未全，約有二千餘片甲骨未經收入。
4. 小屯南地甲骨，僅有已發表之幾片收入，未能全部包括。
5. 「合集」號稱以「綴合」多為其特色，然而可綴合者尚多，而已綴合未經採錄者尤多。
6. 同文異版之甲骨，分散放置。
7. 周原甲骨，未能包括。

為彌補上述缺點，爰擬輯印「商周甲骨文總集」一書，在「甲骨文合集」之基礎上，增補未收之甲骨，成為目前最完整之甲骨全書，其要點為：

1. 改正「甲骨文合集」之缺點者：
   (1)以完好之新拓片，替換殘缺不全之舊拓片。
   (2)調整同文異版之甲骨，使聚歸一處。
   (3)改正「合集」綴合之錯誤。
   (4)增補新綴合約三百餘片。
2. 增加「合集」未收入甲骨約二千餘片。
3. 輯入小屯南甲骨4612片。
4. 輯入周原甲骨292片。
5. 附錄：小屯及小屯南地、周原甲骨之出土位置，及周原甲骨之原物放大照片及鑽鑿形態等。

尤其值得鄭重聲明者，本書之分期，依據董作賓先生之斷代標準，故將「甲骨文合集」第一期所附之甲骨，恢復為武乙文武丁時代，此為重輯「商周甲骨文總集」之最大目的。

又其凡例曰：

一、商周甲骨文總集為集合清光緒二十五年（1899）以來，八十多年間出土於河南省安陽「殷墟」的商代甲

六、甲骨文合集之綴合時有錯誤，如發見錯誤時，即以原編之號數分為「1」「2」以資區別。如屬同一版所折，則仍如合集例以「甲」「乙」分別之。

七、合集之拓本，有自相重覆者，拓本與摹本及小屯南地拓本，摹本與拾遺之拓本，亦有重複處，均不復一一註明。其綴合所未能查到之片，亦可能重複，讀者如有發現請將合集之號碼補上。

八、甲骨文合集之分期，係採用董彥堂先生的「五期」斷代法，各冊的期別如下：

第一期	武丁	第一至第六冊
附第一期	武丁	第七冊
第二期	祖庚、祖甲	第八冊
第三期	廩辛、康丁	第九冊至第十冊前半
第四期	武乙、文丁	第十冊後半至第十一冊
第五期	帝乙、帝辛	第十二冊
第一期至第五期摹本		第十三冊

今將第七冊武丁時期附，恢復為四期，其中「丙一」為武乙時，「甲」「乙一」「乙二」「丙二」為文武丁時，改置於十一冊。原第八冊改為第七冊，九、十、十一均各移前一冊。

九、甲骨文合集對於部份資料感覺有問題者，作如下之處理：

1. 期與期之間存在一種過渡的現象，如第二期貞人「出」的卜辭，間或呈現第一期的特點。對此，本書則根據主要的斷代標準而歸入第二期。
2. 第三、四期之間亦有彼此糾葛之處。本書在近人分期研究的基礎上，進一步將這兩期的全部資料均分別劃歸各期之內。其中有稱謂內容者，分期可無問題；而對無稱謂者，則多據字體區分，亦可能有不準確之處。

十、小屯南地甲骨之編輯方式，是以出土為主，本書一依原狀，不再分期。其原則如左：

3. 凡甲骨各片，按其部位、刻辭內容等項判斷其應為一版之折，但現有各版又不能直接綴合者，本書仍分開排列，但編為一號，各片之下分別加甲、乙、丙、丁等字樣。
4. 本書所收錄的拓本，除個別的因輾轉所得外來縮影膠捲，且無比例尺，難以按實物原大翻印者外，其餘一律按甲骨實物原大製版印刷。
5. 本書選錄資料的標準是：凡甲骨刻辭，文句完整或比較完整，以及文句雖有殘缺，但內容較為少見者，則一律選錄：凡文句一般常見而又殘缺過甚者，則不予選錄。據此標準，本書共收錄甲骨文41956片。
6. 凡甲骨著錄的拓本或未著錄的實物，其全版文字均為偽刻者，本書一概不錄；一版中有真有偽者，仍按原樣收錄；在「釋文」中加以說明。
7. 本書圖版的資料編號，一律用阿拉伯數字統一標注，即1至41956號，一以貫之，以便引用。
8. 凡一甲的正面、反面，一骨的正面、反面、臼面均刻有文字而收錄者，編為一號，並分別註明正、反、臼字樣。凡面有文字而正面無文字者，則只收錄反面，作一號處理，不再註「反」字；骨臼有刻辭有正，反面無文字者，亦只錄臼面，作一號處理，不再註「臼」字。

五、甲骨文合集對於綴合亦頗盡力，然綴合非一人一時之事，留心者自能時時發見。編者更在序中提及拙作甲骨綴合新編及綴合新編補兩書，而實際並未參考，致兩書中所有新綴合均未加採用。爰特一一核對，連同新綴合者，一併補入，即用合集之編號相加；如有一片未能查到合集編號者，即以原片之書號相加。如綴合之兩片均未能查到時，即不予錄用。

1. 小屯南地甲骨拓片圖版是依灰坑（H）、房基址（F）、墓葬（M）、探方（T）為序而排列的。而同一單位中，基本上依照原編號的順序排列，有時為了版面美觀，稍有調整。凡是此次發掘之有字甲骨，不論大小和字數之多寡，一概收入。每張拓片下方有兩個號：下為本書順序號，上為甲骨出土時的原編號。若一片甲骨，正、反、側三面都有刻辭，則有三個不同的順序號。
2. 甲骨的原編號是甲骨出土時編的。在出土過程中是先畫圖、編號，再依次取下。因而，發掘現場所編之號包括了無字甲骨。所以，這裏發表的不少灰坑的甲骨，原編號不是緊密相連的。例如：圖版七，是灰坑H2的6、8、9、11號，所缺的7、10就是無字甲骨。
3. 原編號中的「＋」號，表示某片與某片的綴合。例如：H1：16+H2：264+447表示灰坑H1的16號和灰坑H2的264、447號綴合。
4. 在探方出土的甲骨原編號中，括弧內的數字表示該片出土的層次。如T55(3)：( )中的(3)表示探方T55的第3層。
5. 本書拓片的放置是以甲骨的形狀為依據，所以在有些拓片中會出現文字倒置的現象。例如2302（H57：60反）是按牛胛骨的形狀放，故「庚午」二字倒置。

十一、小屯南地甲骨拾遺為合集未收之甲骨，亦按五期區分，所輯資料將於「材料來源表」中，另行發表。

十二、周原甲骨係根據周原考古隊所發表者。另加統一編號。統一編號之上為原編號。

十三、商周甲骨文總集對於甲骨文合集之斷代分期，除將武乙文武丁時代自「武丁時期附」移後至第四期外，其餘個別之斷代，如八月乙酉月食與癸未月食兩版，按照月食時間，均應移入祖庚時期，茲者不再調整，仍依合集所編列為武丁時。其餘各期，有類似情形時，亦仍依舊。

十四、小屯南地甲骨，仍依原編體例不再分期。

按：商周甲骨文總集除集錄之拓本及寫本，並另輯錄其他流傳之拓本及寫本，已見編輯緣起及凡例等之說明，此不贅錄。共計輯錄拓本 46056（面背臼同號）號，寫本二七八一（同上）號，總凡 48837 號。爲現時輯錄甲骨資料最爲豐贍之巨書。

第三節　近年出版之甲骨資料

一、中央圖書館所藏甲骨文字：

余祥恆氏摹寫編輯，分前後兩次刊登於民國五十五年六月及十月，出版之中國文字季刊十九及二十期，共摹錄甲骨寫本 648 片。前無序言或凡例，後無跋文或後記。其編錄方法，略據彥堂先生斷代例之分期，惟甲骨混合編錄。緣未發行單刊、且刊登於期刊，又緣片碎辭殘，且爲寫本，故流傳甚稀。

二、冬飲廬藏甲骨文字：

本篇出版於民國五十六年六月。原刊於中央研究院歷史言言研究所集刊第三十七本下冊（未刊單行本），著錄甲骨實物拓本660版，面背同號。共計著錄拓本 811片。後附周法高、張秉權二氏跋文各一篇。

檢冬飲此批藏契，初見錄於胡厚宣氏所編南北集之「無想山房舊藏甲骨文字」，著錄寫本 509 號，其中重複一號（400即381之重複），實際著錄508號。周氏跋文謂：此508號中，背面寫本爲42號，胡書所收，「實際上不會超過468片」。今詳予對校二者，無想著錄背面寫本五十六號，若據實物爲說：則爲四五二版。若就拓本言：冬飲所錄較無想多出303片，就實物言多出208版。惟無想所錄，卻有十七寫本未見於冬飲。周文作十六片，或爲計數之誤？而張氏之跋文則未能訂正其誤。且謂：「此十六片之原物，在讓與史語所之前似已遺失。所以沒有拓本」。檢此未見冬飲之十七寫本，就寫本所顯示徵候推察，宜爲十五版實物之寫本。若然，現時所能見到王氏之藏契，應爲675版。又周氏跋文謂：「兩面有字者凡134片」。今據冬飲所錄拓本，詳核其同號，得背面拓本151片，當亦爲周文計數之誤。

周氏跋文曾據無想詳予冬飲校核，且列表對照兩者之編號，並予冬飲中校出重見於殷契佚存者6片。張氏跋文效尤周氏，再據冬飲校核無想，亦列表對照二者之編號，惟所列之對照表，其中錯誤者約有十餘處。另亦校出重見於佚存者3片，惜亦有兩片對照錯誤。

拙作殷契佚存考釋，以之對校冬飲，再校出4片之重複。併同周、張二氏之校重，則冬飲所錄重見於佚存者凡得13片矣。茲將拙之校重列下。藉供參稽。

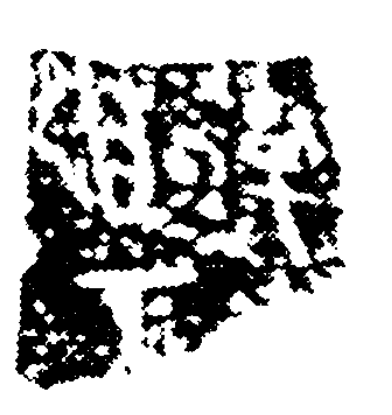
1. 佚577：冬12：無想241。
2. 佚580：冬5：無想497。
3. 佚831：冬508：無想322。
4. 佚858：冬351：無想138。

察冬508與無想322，所著錄之拓本與寫本，均僅存契刻文字部份，據其拓本或寫本皆不易辨認其爲骨爲甲，亦不易判知其在實物中所當部位，殊不利於綴合之施作。惟佚存所著錄之拓本較爲完正。據佚存所錄拓本顯示之情形，可以判知其爲腹甲右首甲之殘餘，並可推知此腹甲較小，自首至尾約爲15公分左右。茲將三者之拓本，寫本附後，藉便參閱。

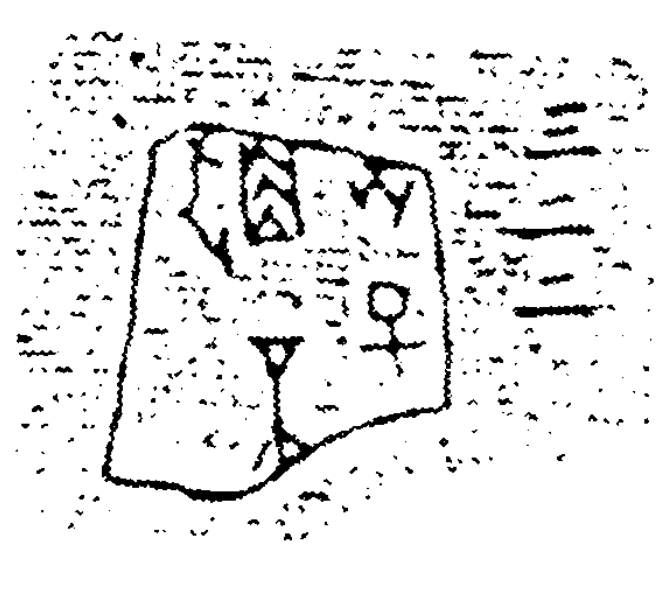
張氏跋文謂：「我認爲最可貴的，莫過於475片的反面，即胡氏摹本107片，有著『燙㞢　　』的記載，這已經可以確切地證明　是當時被祭的祖先之一」。

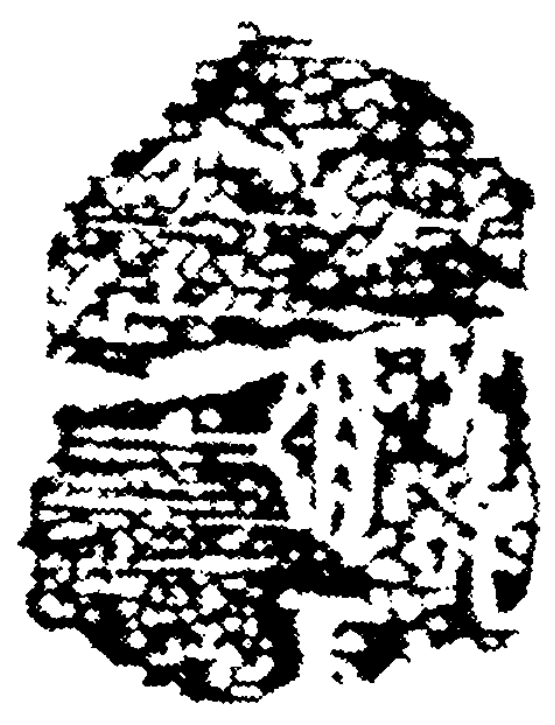
察張氏此說，就其辭意推勘，似爲認定　爲今字之妣。若然，則所釋似嫌不辭。蓋見於契辭者，皆作「燙于　」及「㞢于　」，決無作「燙㞢　」者。此其一。現時傳世之契辭，更無「　　」之辭，乙3596片雖有「　　」之文，但　與　應爲不同之二文，猶契文　與　之異。此其二。　字爲妣爲人，張氏未說。然無論「　妣」或「　人」之辭，傳世之甲骨卜辭中無之。若有，則僅見於張氏此說，別無他例。此其三。凡祭祀先王、先妣等之卜辭，並無燙、㞢同辭併用、疊用之例。蓋緣燙與㞢爲兩種不同之祭祀儀式。此其四。緣斯、該片應爲二辭之殘餘，猶如鐵 167. 4 之卜旬辭（附圖二）契文舉例認其爲一辭之「錯互畫」。事過七十年之後，有人作甲骨文選讀教授學生，解說爲「倒畫之例」，用知冬飲475 片之辭似宜解爲：

1. 「燙□　」。島邦綜類正如此作 254頁。
2. 「㞢□妣□」，或「㞢□人□」。



508





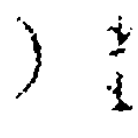
八三一

三、明義士殷虛卜辭續編

許進雄編輯。民國五十九年加拿大出版。其編輯、略據彥堂先生斷代例之分期，各期甲骨分列、卜甲居前、卜骨殿後。甲與骨各據卜辭之性質類聚之，編錄頗有統緒，共錄拓本3176品。書前錄許氏英文序言，書後附錄許氏於本書之綴合寫本42版。惟此綴合見於甲骨綴合新編訂僞者凡7版，其正確綴合得35版。其各期編錄之情形爲：

第一期：甲、1107號。骨、61號。合骨合計：1167號。
第二期：甲、453號，骨 24號。甲骨合計：477號。

殷契粹編等書，拼敓者四十二片，摹錄於後，可見其用力之勤，工夫之深矣。

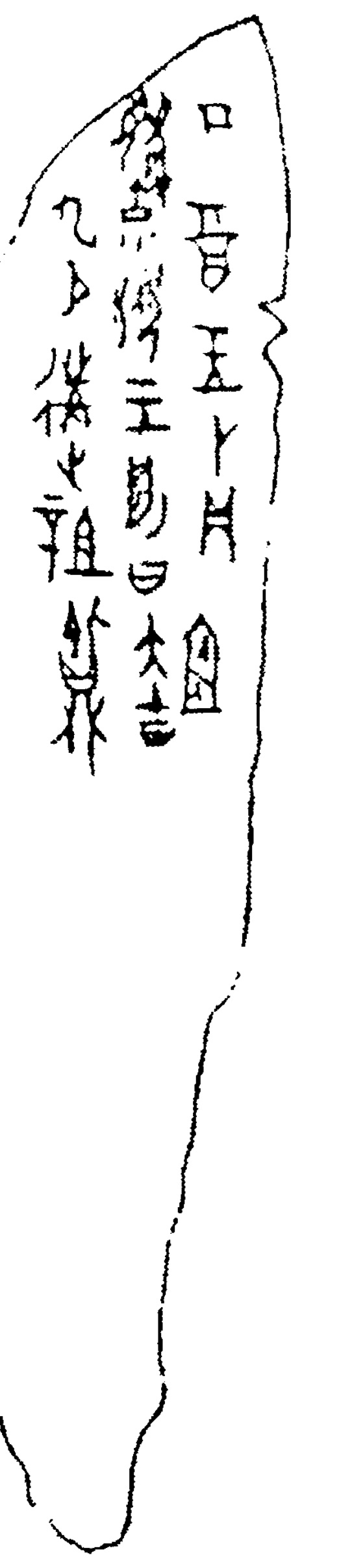
三千一百七十六片，多係斷簡，無一完整者，以字數論，有一片多至百餘者，少則一二字。大多為小片，其中有不少罕見之新字，從未見過者，如 （S115） （S4880） （S622） （S854） （S895） （B1737） （B1742） （B2290） （B2344） （B2388） （B2680）（B2727）等，屢見不尠。如B11236片：

己丑卜，貞：今夕区下？

其反面：

東夷出曰 （伐） ，余𢦏。

東夷之名古籍金文屢見：如宗周鐘「叚子迺遣閒來逆邵王，南夷東夷具見。廿有六邦」。小臣謎殷「叡東夷大反，白懋父㠯殷八師征東夷。」疐鼎「王令趞戩東反夷」。禮記曲記下「其在東夷北狄西戎南蠻，雖大日子。」雜記「孔子曰少連大連，善居喪，三日不怠，三月不解，期悲哀，三年憂，東夷之子也」，左傳襄公廿九年「杞，夏餘也，而即東夷。」昭公十一年「紂克東夷而隕其身」。孟子離婁下「舜生于諸馮，遷於負夏，卒于鳴條，東夷之人也。」管子小匡「東夷西戎南蠻北狄中諸侯國，莫不賓服」。史記五帝紀「殛鯀於羽山，以變東夷。」後漢書有東夷列傳謂「武乙衰敝，東夷寖盛」，又「管蔡畔周，乃招誘夷狄，周公征之，遂定東夷。」惟甲骨卜辭僅此一見，考其由來，殆亦遠矣。



B 3176

B3178片：

第三期：甲、24號，骨、590號。甲骨合計：614號。
第四期：甲、48號，骨、524號。甲骨合計：572號。
第五期：甲、336號，骨、9號。甲骨合計：345號。

右五期共錄甲、1968號，骨、1208號。

金恆祥先生殷虛甲骨新書介紹曰：

> 加拿大明義士子宜（James Mellon Menzies）收藏甲骨之富，不獨稱於外人，就以吾國而言，亦無與匹敵。我國私人收藏者，除羅叔言之外，劉體智藏有二萬八千餘，部份選錄拓印於殷契粹編一千五百九十五片，其餘未見刊印。明義士收藏之五萬片，曾於民國六年三月（一九一七）從中選擇二千三百六十九片，影摹付梓，名曰殷虛卜辭（Oracle Records from the Waste of Yin）雖影摹逼真，難免筆劃粗細影響其體勢不易分期，不若拓印遠矣。
>
> 明義士所藏五萬片，原物下落不詳，其一部份約七千五百餘片為加拿大皇家安大略博物館所收藏，金櫃久藏，乏人董理，適有本校碩士班畢業生許進雄君，篤好甲骨，猶如杜癖，三年前受安大略博物館之請，負笈遠遊，整理該館收藏之甲骨，先以墨拓，再行分期，編印成書，於一九七二年由加拿大安大略博物館出版，為近年來甲骨卜辭之新資料。以百磅銅版紙影印，印刷清楚精美。
>
> 是書卜辭，依照董彥堂先生所創之斷代法分為五期，第一期為武丁及其前世之物，第二期為祖庚祖甲，第三期為廩辛康丁，第四期為武乙文武丁，為五期為帝乙帝辛。每期又分龜和骨，並照卜辭內容，分屬祭祀、求年、氣象、卜夕、卜旬、田游、方國征伐、疾病等類編次，有條不紊。全書共三千一百七十六片。附拼敓七片，與其他甲骨卜辭七集，殷虛文字甲編、戰後京津新獲甲骨集、殷虛書契續編、殷契佚存、京都大學人文科學研究所藏甲骨文字、庫方二氏甲骨卜辭、殷虛書契後編、殷虛卜辭、戰後南北所見甲骨錄、戰後寧滬新獲甲骨集、

四、明義士殷虛卜辭後編

許進雄編，民國六十一年三月台北藝文印書館出版，編輯情形與前同。著錄甲骨拓本2805（面背臼同號）。書前錄編者的話中英文各乙篇，並附錄由明續對照南明、及由南明對照明續編號各乙表。八開大本精裝爲上下兩冊。其分期編錄之情形爲：

第一期：甲1554號，骨382號，共計1936號。
第二期：甲95號，骨114號，共計209號。
第三期：甲18號，骨179號，共計197號。
第四期：甲82號，骨241號，共計303號。
第五期：甲57號，骨93號 ，共計140號。

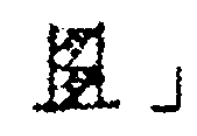
右五期共計甲1806號，骨999號。總凡2805號。

據胡厚宣氏戰後南北所見甲骨錄序例謂：明氏後編原初共拓製五份，明氏自留一份，其餘分贈馬衡、商承祚、容庚、曾毅公各一份。容氏一份後歸于省吾，又轉歸清大，又轉歸北大。曾氏一份後改贈多倫多大學圖書館。亦或謂：明氏原只拓製四份，多大並未受藏此份拓本，安大略博物館的藏本，是明氏歿後纔收到。館藏原爲九大冊，每頁一片，前六冊爲龜甲，後三冊爲胛骨。共 2819片，七片可與所藏他片綴合，兩片已被撕去，二片僞刻，三片契辭無法辨認；故入錄者實爲2805片。又或謂：南明的寫本，是胡氏摹自商承祚和余省吾所藏之拓本，皆屬胛骨，沒有龜甲。可能因龜甲不易拓製，故僅爲胛骨。則安大略所藏者或是唯一之全本，而此本可能是明氏自藏之拓本。

北美考釋謂：

> 明義士遠在一九一七年，手摹前期所藏甲骨2369片出版，命名為殷墟卜辭；後二十年，復手拓續藏2900片，為殷墟卜辭後編，稿本五十乙冊分作九函，今存R．O．M．圖書館（胡厚宣五十年甲骨文發現的總結頁57著錄為2700

丁酉王卜貞， 毓母乙，王
固曰大吉，□九月遘且辛 。

其中「」「毓」「母乙」諸字，拓印雖甚清晰，但原物經久埋藏，因而字跡漫漶，不易辨認。茲懸推而釋之，恐有錯誤。待後補正。「（在）九月遘且辛䵼」。依照卜辭文例如：

才十月遘大丁羽。	甲2416
十二月遘示癸祭。	前12.6
才九月冓示癸 。	金124
才四月冓示癸肜。	綴21
才正月遘小甲肜夕。	明61
才九月遘報上甲 。	前4.18.1 + 3.27.6
才九月遘報上甲𡨦五牛。	後上183　通590

其羽、祭、 、肜、𡨦，皆祭名，則此䵼亦為祭名無疑，王國維曾云：

> 古器物銘多云：「作䵼鼎」「作䵼彝」亦有單言「䵼」者，如潘祖蔭所藏二器，其一銘曰「斿婦䵼」，一曰「魯內小臣床生作䵼」其器則皆鼎也。是䵼為鼎彝之名，今按䵼字於金文，或從匕肉，從爿從鼎，或從肉從爿從鼎，或但從匕肉從爿，殷虛卜辭，則或從匕肉從鼎，或從爿從鼎，當即詩小雅或肆或將周頌「我將我享」之將字，匕肉於鼎，有進奉之義，故引申而為進奉，應公鼎云「用夙夕䵼」曆鼎「其用夕䵼亯」，皆以「䵼亯」並言，與周頌同，凡匕肉必於鼎，故鼎亦得䵼名，非鼎之外，別有一種名䵼者（甲骨學文編）。

䵼祭之禮制如何，不若卜辭五種祭祀之羽、 、 、肜、祭有規律可尋也。

茲舉二例，一以考史，一以徵禮，其餘可供考文辨制，必有在也，惟好之者，經心研讀耳。

> 片，蓋未見原著致誤）。予嘗過訪明義士夫人，詢以明氏平生收藏聚散之經過。據謂殷墟卜辭所收實物尚存南京坎拿大大使館（據胡厚宣云，此批甲骨2348片已于1951年歸南京博物館，見1951南博旬刊37期）；至殷墟卜辭後所收藏2700片實物，則留在山東，瘞之土中。明氏伉儷在一九三八年回坎拿大時，攜回其後期所得甲骨1750片，擬續施椎拓為殷墟卜辭三編；惜志未成而遽于1957年3月謝世。明氏畢生致力甲骨之學，搜羅傳布之餘，於時賢著作，手自點校，用力甚勤；歿後遺書存R．O．M．圖書館中，可覆勘也。予嘗商得明氏後人同意，如他日有機緣再來，將為之整理發表。

校：明義士氏藏槊究爲若干，可能除其本人外，他人皆不能知其確數。就現時所刊行之明氏三書計之，殷虛卜辭著錄寫本2369片，續編著錄拓本3176片，後編著錄拓本2805片，三者合計，爲8350片，北美考釋謂：後編2900片，三編1750片。後編所錄較北美所言少95片，差誤不算太大。續（或三）編則較北美溢增1426片，差誤頗大。則北美所言者甚爲不確。

五、輔仁大學所藏甲骨文字

輔仁大學所藏甲骨文字，最初見錄於四十年十二月北平來薰閣出版，胡厚宣所編之「戰後南北所見甲骨集・輔仁大學所藏甲骨文字」，共摹錄寫本107片。其拓本則見於民國六十二年十二月所出版之中國文字第五十期，並附金祥恆氏輔仁大學所藏甲骨文字後言乙篇。金氏說曰：

> 輔仁大學所藏甲骨文字拓本一百零九幀，為明義士所藏。現藏加拿大多倫多安達黎奧博物館（Royal Antorio Museum of Asiatic Arts, Canada），由許進雄君見寄，並承安達黎奧博物館慨允公之於世，供好之者研究，可感殊深。
>
> 輔仁大學所藏甲骨文字，亦見於胡厚宣戰後南北所見甲骨錄。其序云：
>
>> 輔仁大學所藏甲骨229片，抗戰期間在北京購得。一九四五年，承周燕孫教授以拓本見假，使摹錄一過。除鄴中片羽三集已著錄者外，得片107。
>
> 今較胡氏107片，溢出2片。次第編排，為便讀者計，悉照胡君，甲骨雜陳，不予分列。摹本文字脫誤，一目瞭然。言其來原，輔仁大學於抗戰期間購自北京坊間，原為明義士之故物。明義士收購甲骨，一有所得，輒即椎榻，此即明義士收藏甲骨之一部分。輔大所藏甲骨229片，除107片外，尚有122片，亦為明義士故物，著錄於鄴中片羽三集。鄴中片羽三集共214片，其中一骨為正反兩面（3.47.7與3.47.10）實為113片，黃濬刊於民國三十一年。時逢中日戰爭，明義士於二十七年遄返加拿大，甲骨未及攜帶，留於淪陷區，如何流入市估，蓋不詳焉。陳夢家卜辭綜述「出土甲骨的統計」：
>
> 北京師範大學承輔仁大學收藏320片，鄴中片羽三集著錄120片。陳氏所言輔大藏甲320片，較胡氏所見多91片。鄴中片羽三集213，加胡氏摹本107，與陳氏所言320相符。惟陳氏所言「著錄120片」是否由胡氏所見229，除去摹本107而言，亦不得其詳。輔大所藏甲骨摹本與鄴中片羽三集重出者凡三：
>
> （一）輔大第三片與鄴中片羽三集三十五頁第四片重。
>
> （二）輔大第十三片與鄴中片羽三集四十六頁第十二片重。
>
> （三）輔大第十五片與鄴中片羽三集三十四頁第五片重，惟鄴中羽為殘片，少「貞：羽丁亥勿㞢于且丁」。
>
> 由是言，輔大藏甲實為307，加明義士所藏輔大甲骨文字拓本所益出二片，為309。北京師範大學收存輔大藏甲究為多少，今亦不得詳焉，茲據見於載籍如是而已矣。爰識於此，以求教於博雅君子。

校：金氏謂，輔大與鄴三重複著錄三拓本。審其所校未確，頗有疏漏。除金氏所校三重片，若：

輔大 27 重見鄴三 3.37.6。
輔大 65 重見鄴三 3.45.12。

合金氏所校，輔大與鄴三重複著錄者得5片。

胡氏摹寫南輔107號，其中3與4，5與6，17與18，19與22等8號，皆爲龜腹甲面與背之寫本，1與2，27與28等4號，皆爲牛胛骨面與背之寫本，7與8兩號則爲牛胛骨面與臼之寫本。此14號寫本就實物言，宜爲腹甲4片，胛骨3片。則南輔所錄，就實物言：僅得百片。金氏所刊拓本，雖較南輔益增5號，但其111、112爲同一胛骨之面背兩拓本。據此、輔大藏槊見於流傳者爲104版。胡氏謂大藏槊229片。就上述拓本言：尚缺少125片。若益以鄴三所錄之213片，總凡317片，則又益出88片。然則、胡氏所謂之229片，未必正確？

檢鄴三著錄甲骨拓本215片，其中34.10爲42.10之重複，47.7爲47.10之背拓，則鄴三所錄實物爲213片。又其36.1、36.3、36.6、44.1等四片，疑其爲後世之僞造，若將其刪除。鄴三所錄爲209片，再加輔仁104片，計共313片。陳夢家謂：北師大承輔大收藏甲骨320片，兩相核算，尚缺少7片。若將疑僞之4片計入，仍有3片之差。是陳氏之說，亦未必正確。

今考：輔仁及鄴三所錄拓本，各皆有自相及相互綴合之拓本，證知其來源爲一。茲分別迻寫其綴合各片於左。至二書與其他資料書之綴合，茲不贅錄。

一、輔仁拓本自相綴合者：
　輔仁 49 加 52　　圖一
二、鄴三拓本自相綴合者：
　1. 42.8 加 45.7　　圖二
　2. 43.6 加 46.7　　圖三
　3. 45.13 加 48.3　　圖四
三、輔仁鄴三拓本相互綴合者：
　1.輔仁 39 加 鄴三 39.2 加鄴三 39.3 加鄴三 39.11 加鄴三 43.11　　圖五

據上錄之綴合，兩書所著錄 317 拓本，刪去已綴合之九拓本、及疑僞之四拓本，則二書所著錄之實物拓本，得 304 片。

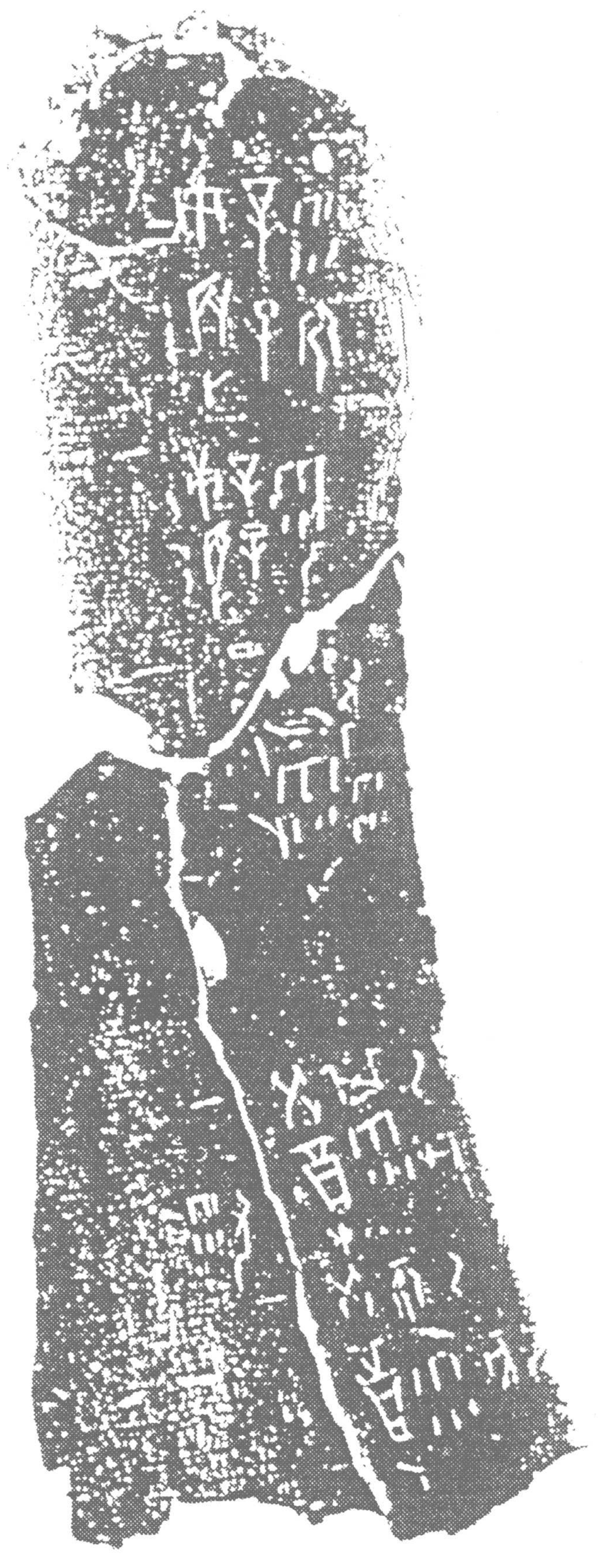
輔大所藏百版甲骨，就其實物性質言：3 與 4，5 與 6，9、10、11、12、15、17 與 18，19 與 22、20、23、25、29、32、33、34、35、36、40、42 等 20 版爲龜甲，餘 80 版爲牛胛骨。若就分期言：1 與 2，3 與 4，5 與 6，7 與 8，9、13、14、15、16、17 與 18，19 與 22，20、21、23、24、25、26、27、28、29、31、35、36、105、107等 24 版爲第一期武丁時。10、11、12、32、34、40、42、43、44、53、57、68、83、84、106 等 15 版爲第二期。33、38、45、49、50、52、55、56、70、71、75、81、82、85、87、88、90、91、92、94、95、96、103 等 23 版爲第三期。餘 38 版爲第四期。獨缺第五期。至拓本所益增之 4 版，僅 108 爲一期腹甲，餘均爲胛骨。110 爲第一期，109 爲第三期。111 與 112 爲習槊，111 且爲倒置所槊。

胡氏所輯南輔寫本，持與拓本互斠，頗有差誤者，茲將差異各版編號迻寫於下：1、6、7、8、11、12、13、15、18、19、22、25、32、37 等片。至其詳細之差誤情形，另文明之。

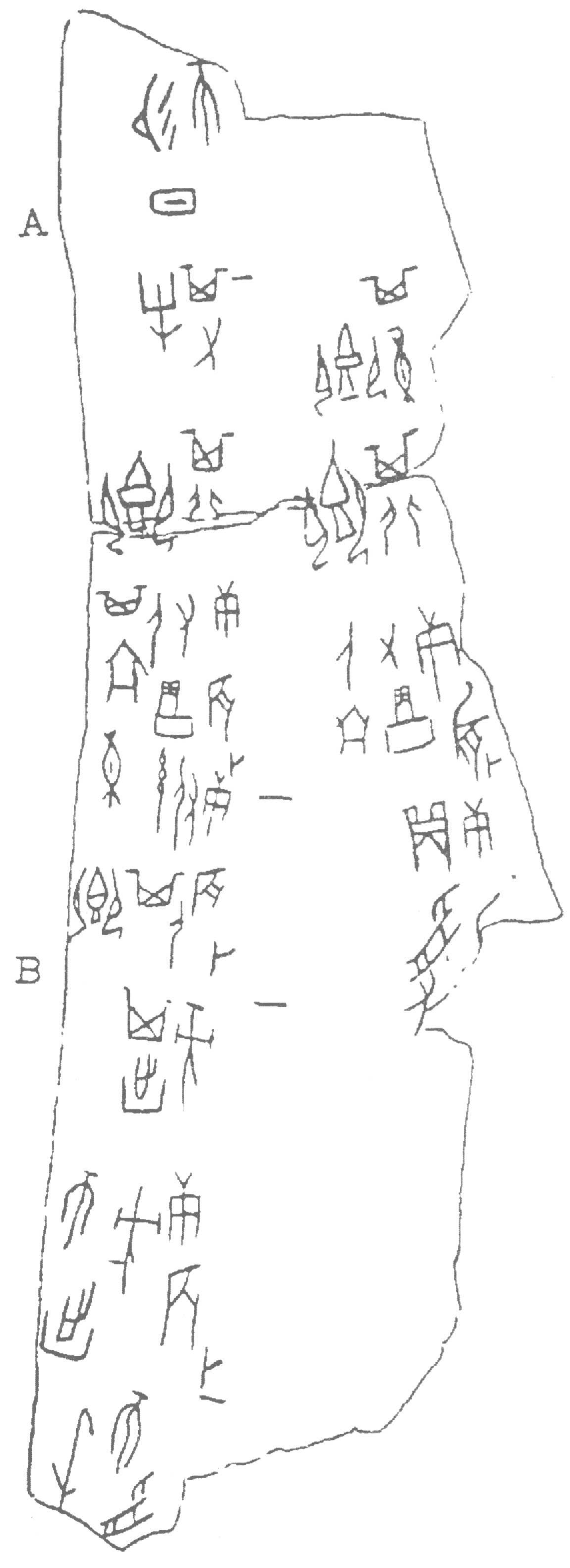
六、美國甲骨錄：

周鴻翔編輯。民國六十五年美國出版，共著拓本700（面背各占一號）。據收藏者英文名稱首字字母順序編錄。甲骨不分，惟以英文 S 表注爲龜甲，B 爲牛胛骨。共集錄十一機構之收藏，其情形：

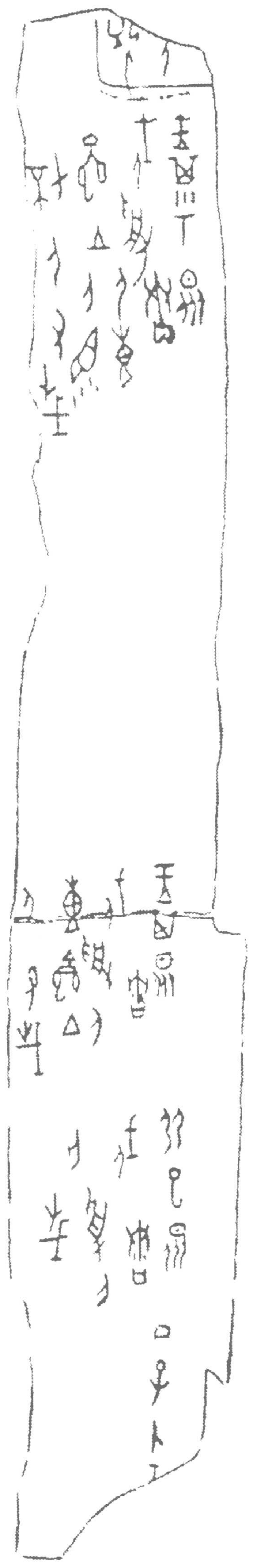
1. 卡內基博物館413號，當所錄百之59。
2. 哥倫比亞大學67號，當所錄百之9.5強。



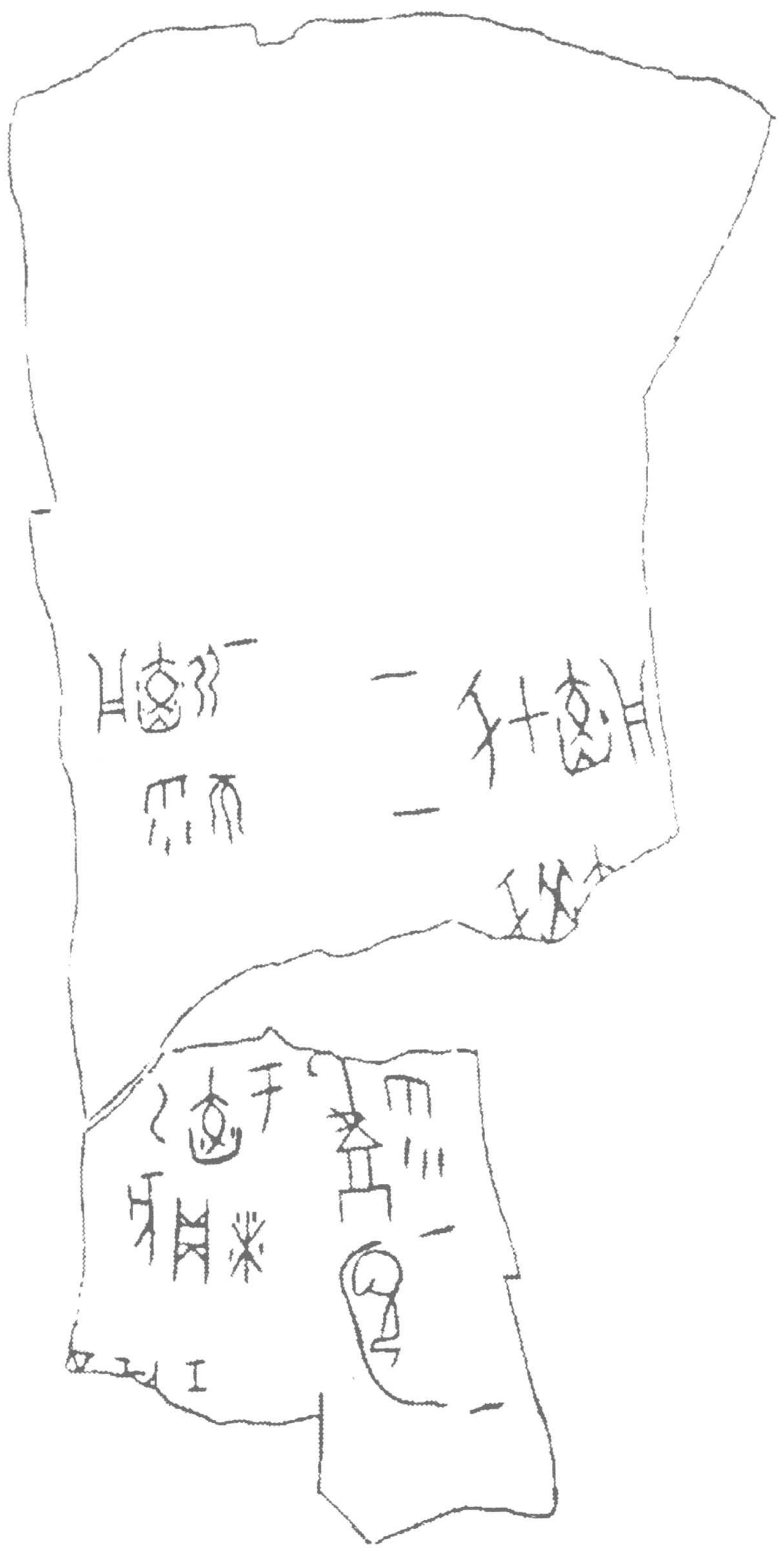
圖一



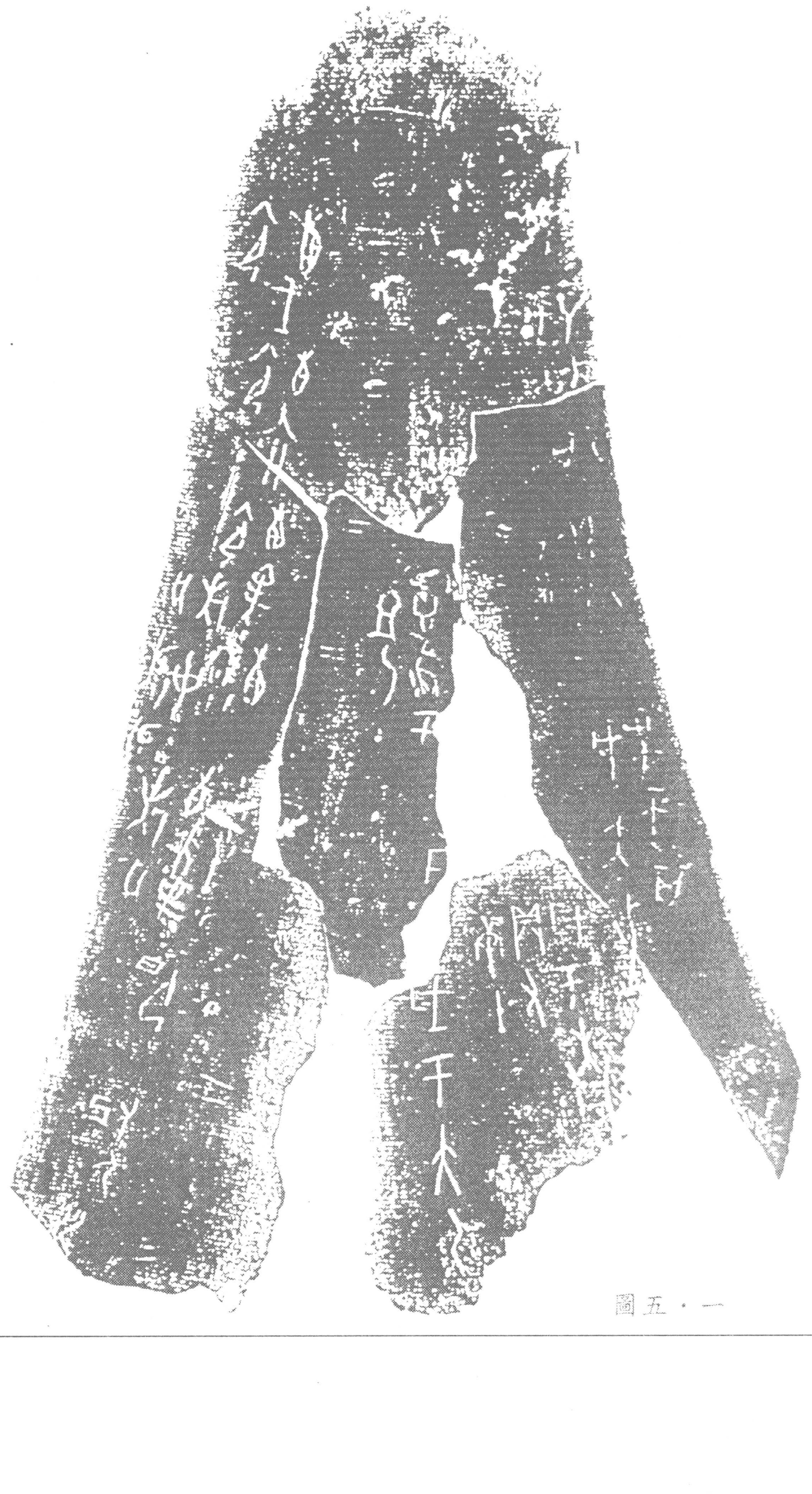
圖二



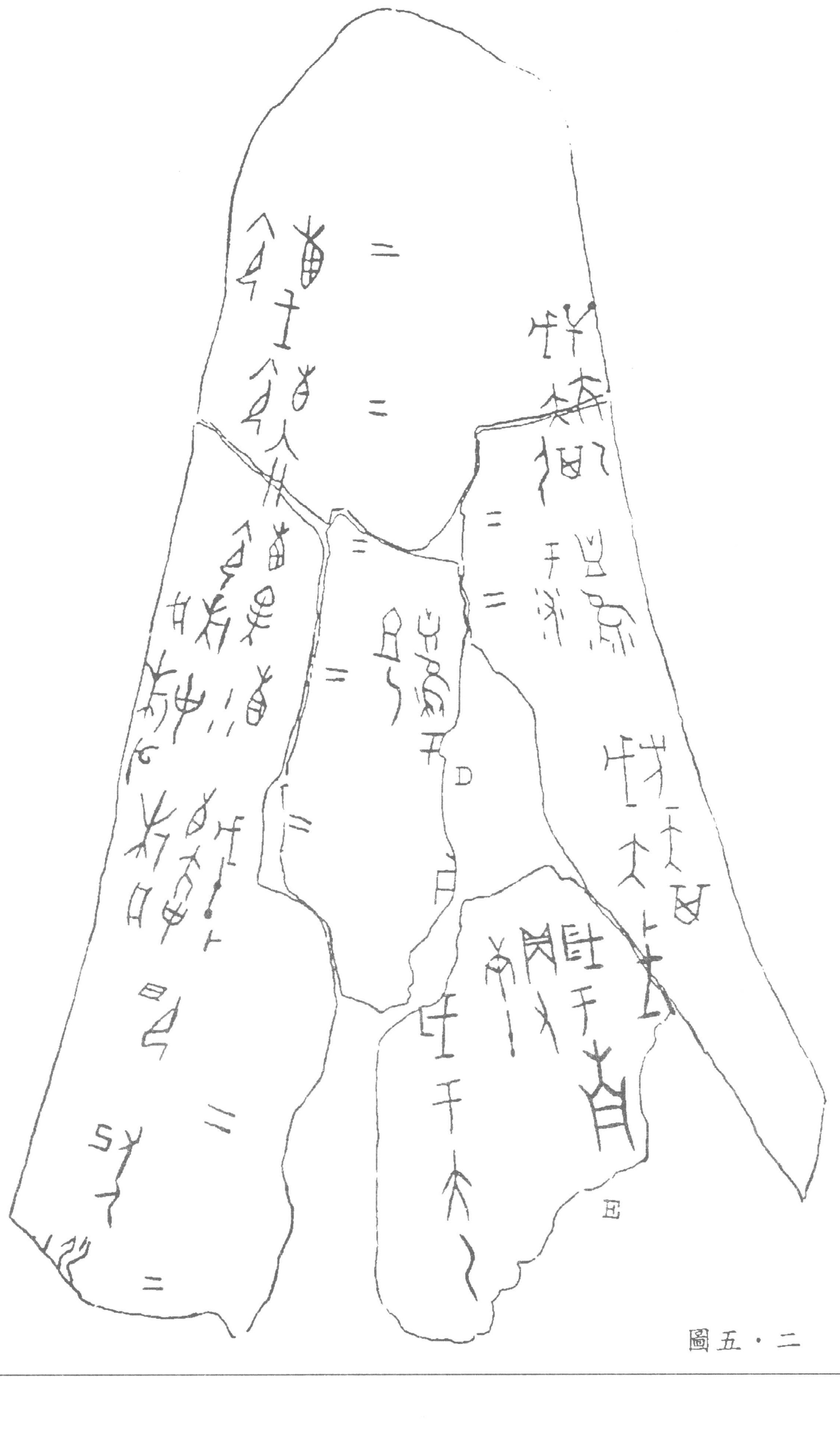
圖三



圖四



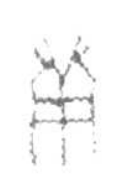
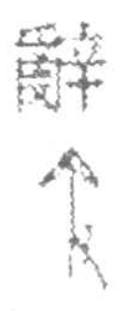
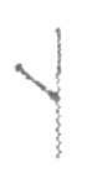
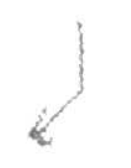
圖五・一



圖五・二

> 發表之校記，謂此批甲骨原摹本，曾請郭沫若鑒定，郭氏認為973與944兩片全偽，971;976;977;978與983五片半偽。予驗之實物，郭說殆未盡然也。
>
> 予於一九六三年，徵得該館 Dr. James L. Swauger 同意，將碎片三十二綴合復原，析為十二片；其後二年，再由周鴻翔博士覆勘，認為不誤，并以拓本見惠，即此文所選錄者也。去年，Dr. James L. Swauger 知予方從事於選錄海外精品，特趕製照片五十幀寄香港備用，盛意足感；惟複製圖版，則拓本較清晰，故未全用影本，附此致歉。

校：卡內基博物館所藏甲骨，彥堂先生曾於民國二十九年「方法歛博士對於甲骨之貢獻」一文中，曾有僞刻品之詳細校訂。認其全僞者爲 971、973、977、978、982、994、1080、1082 等八號。北美所見甲骨選粹考釋認定973、978、1080、1082 等四號爲全僞。據北美考釋：郭沫若認定973、994（校：994宜爲993，北美考釋誤書）等二號。審三家所定爲全僞者，僅973號。其餘董、李兩家定其爲全僞者，爲978、1080、1082等三號，董郭兩家定爲僞刻者僅994號。至其半僞者，彥堂先生認其976、983、1226等三號爲半僞。北美考釋認其971、976、977、983、994、1226等六號爲半僞。北美謂：郭定971、976、977、978、983等五號爲半僞。綜觀三家所定：976、983 等二號，三家皆定其半僞。1226號董李兩家定其爲半僞。971、977等二號李郭兩家定其爲半僞。

察971號、李郭定爲半僞，彥堂先生定爲全僞。審此片美國甲骨錄未予著，就方法歛氏之寫本（附圖六）觀察，李郭可能認上端併列之六字爲真實之卜辭？故而認其爲半僞者。今詳其字及辭，庚字作 ，寅字作 ，卜字作 。庚、寅二字殷契，五期之干支字無如此結體者。核其寫本所顯示胛骨之情形，此骨宜爲右骨，槧辭宜爲左行。序辭之卜字、例與卜兆相應，而其辭則呈  形，卜字不與兆相相應。準此數事，其爲後世之僞刻殆無可疑。至其下所見之情形，其爲僞刻，更無可疑。則李郭定其爲半僞，應爲非是。

3. 富瑞兒博物館 1號。
4. 哈佛大學60號，當所錄百之8.5強。
5. 國會圖書館4號。
6. 紐約大主教博物館11號。
7. 歷史博物館 2 號。
8. 自然博物館 6 號。
9. 普林斯頓大學120號，當所錄百之 17 強。
10. 納爾森博物館12號。
11. M. H. de 楊格紀念館 4 號。

書前著錄編者所撰英文長文，敘述各收藏機構、藏品來源及若干甲骨藏品之個別特殊情形等。並附錄本書所錄拓本編號與收藏者收藏編號，及收藏編號與本書編號二對照表。茲將各重要收藏者之情形分述於左：

1、卡內基博物館：

卡內基博物館所收藏之甲骨，初見錄於庫方二氏藏甲骨卜辭，自971至1048號，共著寫本438號（面背同號）。其間，1031及1318兩號重複，著錄寫本實爲440號，雜陳若干後世之僞刻品，北美所見甲骨選粹考釋云：

> 匹茲堡卡內基博物館 Carnegie Museum, Pittsburgh 所藏甲骨438片（胡厚宣五十年甲骨文發現的總結頁五十七著錄謂475片已有方法歛摹本，誤。），著錄於庫方二氏甲骨卜辭（一九三五年上海版）；由編號971至1171為骨片，1172至1408為甲片。學者非不知其所藏，多屬佳品，然以未見拓本或影本，故於引用之際，多所顧慮。予嘗三讀斯藏，認方氏摹錄，極為忠實；偶有偽刻羼入真品之中（為971;976;977;983;994及1226），仍不損原片價值也。其全屬贗品者不過寥寥四片而已（為973;978;1080及1082）。據一九三五年十二月白瑞華（Roswell S. Britton）在日本東京

2. 哥倫比亞大學：

美國甲骨錄著錄哥倫比亞大學圖書館藏甲骨67拓本（自 414至480號），含背面拓本一，爲66版實物。乃施密士氏歿後所贈予者。施氏收藏此數十版甲骨之情形，北美甲骨選粹考釋謂：

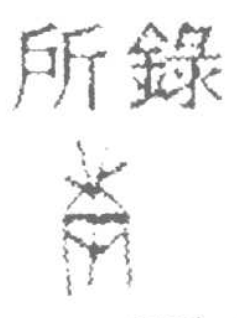
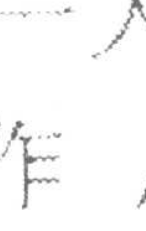
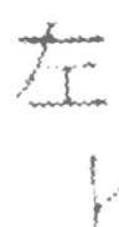
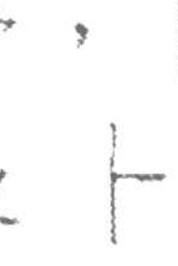
> 哥倫比亞大學圖書館所藏八十片，其中六十二片，見商承祚殷契佚存（第255至316片，美國施氏）；乃燕京大學教授 J. Smith 於一九三二年間，在北京搜購者。據古烈芝教授 Professor L. Carrington Goodrich 語予：當中央研究院第三次發掘小屯工作尚未完成之際，約在一九二九年冬至一九三一年間，河南省政府繼續發掘，所得不少，具見孫海波甲骨文錄。在此期間，主持發掘機構曾失去甲骨百餘片，在當地警局有存案可稽；而盜賣者運至北京暗售於西方人士。J. Smith 之藏，多可與小屯第三次出土之品相互發明。予仔細覆勘，不惟 J. Smith 之藏，確有跡象可尋，即英國葉慈教授同時所得之三十五片（後歸予，今尚在寒齋），亦當同屬於此一批盜賣之物。此文選錄之片，去年友人唐德剛博士曾用英文介紹於哥倫比亞大學圖書館館刊，然解釋簡略，照片模糊；故重為考證，并附骨之反面、以資參考。

校：哥倫比亞大學所藏甲骨，其拓本初見錄於殷契佚存，共著錄63（面背同號）號拓本，較美國甲骨錄所錄少三版實物，惟拓本之拓製美國爲優。另463、471、478、479、480等五號佚存未錄。北美考釋謂哥大收藏甲骨八十版,今兩書所錄，尚缺十四版，則哥大所藏尚未完全著錄。

余作殷契佚存校釋，曾就施氏拓本與甲編所著錄殷虛第三次發掘所得甲骨之拓本略作綴合，並采擷他書所著施氏拓本之綴合版，得左列之九版，其中四版爲拙所綴合，一版爲補綴新綴之遺漏。

寫本977號（圖七）、北美、美國均未著錄。惟北美考釋及郭氏定其爲半僞。察寫本情形，李郭可能認其下之併列三行六字爲殷世之卜辭？故定其爲半僞者，若然、則其所定亦非。蓋此六字不能句讀成詞，因之，亦無辭義可尋，且其書體遲頓，爲後世之僞刻，殆無可疑。

寫本987（圖八）、郭定爲半僞。觀乎寫本所現示之情形，凡稍具甲骨學常識者，一眼望去即可判定其全爲後世之僞造。況乎彥堂先生已定其爲全僞者矣。

寫本982（圖九）、其拓本著錄爲北美33號，美國7號。觀二書所錄拓本，美國著錄者較爲清晰，易於判斷其僞。察其庚字作 ，與寫本971之書體毫無軒輊，宜爲同一人之僞刻，據此庚字，已可判定其爲後世之僞刻。再就其卜字作  觀察，字類三期，然就拓本觀之，其實物宜爲左胛骨，卜兆兆圻應爲右向，觀拓本右下之裂痕，顯示其卜兆作  及  形。據契辭通例，卜辭序辭干支卜之卜字結體，卜字之橫劃與兆圻之方向相應，而此則相違。凡此二者，當可證明其爲後世之僞刻，彥堂先生前已定其爲僞矣。

美國甲骨錄著錄卡內基博物館所藏甲骨拓本413（面背分編）號，其編錄序列，悉準寫本，先骨後甲。錄胛骨177號，龜甲236號，其間含背拓 6 號，爲10、46、67、118、175、355，就實物言：爲407版。除寫本之全僞片外，尚未見於美錄之寫本若1060、1095、1102、1103、1104、1137、1144、1151、1156、1163、1164、1192、1209、1226等十四片。其所錄拓本自相綴合甚多，此不再贅。至其與他拓本綴合者，若81號，新綴613曾於上端再綴合庫1781（英國1771），拙據新綴之綴合，再綴合燕37於其中（附圖十）。又若139號，新綴則與庫1103（美錄未收）綴合爲一版（附圖十一）。則卡內基博物館所藏甲骨，其有竢於綴合者頗多。

3. 哈佛大學皮博地博物館 Peabldy Museum 所藏，據該館紀錄，碎甲817片，碎骨48片；乃 Langdon Warner 氏，於一九一四年四月十三日，在小屯購自村人者；每片字數不過五六字，少則一二字而已。予於一九六四年，為之整理，除偽片及無字骨外，現存真品七百片。其中有較為成器者十四片，是日本古董商人 Mr. Yamanaka 捐贈 Fogg Museum，而 Fogg Museum 永久寄存於 Peabldy Museum 者。此文所選錄四片，皆 Yamanaka 舊藏也。

校：北美所錄哈佛大學皮博地博物館藏契之六骨，已見錄於美國甲骨錄，其在美錄之編號爲 483、486、488、493、496、497。所錄拓本，均較美國甲骨錄所著錄者爲差。

5. 國會圖書館：

美國甲骨錄著錄國會圖書館所藏甲骨爲四個拓本，一骨三甲，皆爲碎小之殘片，不能成辭，若 545 號僅存一二殘字之半或少半，無法據其殘存筆畫推勘其究爲何字之殘。若能與他書之拓本綴合，或可句讀。

6. 紐約大主教博物館：

美國甲骨錄著大主教博物館所藏甲骨十一片實物之拓本，九甲二骨。其中 549 號爲左甲橋上半之殘，可能與甲骨綴合新編 699 號綴合版爲同腹甲之殘裂者，但不能密接綴合。

7. 歷史暨工藝博物館

美國甲骨錄著錄歷史暨工藝博物館藏甲骨兩片，均爲龜甲，殘片碎小，不能成辭。

---

1. 美國414加甲2799　　新綴 14A
　美國415加甲2799　　新綴 15B
2. 美國416加甲2803　　新綴 128
3. 美國418加甲2282　　新綴 107
4. 美國423加443加450加461加甲1663加甲2067
　　　　校：甲編兩片，爲拙據新綴 481 版重予增補者
5. 美國425加甲2554加甲2828　　白玉崢綴合
6. 美國430加新綴119（甲2513加甲2529）　　白玉崢綴合
7. 美國438加甲1660　　白玉崢綴合
8. 美國442加甲2442　　新綴 318
9. 美國453加甲2878A　　白玉崢綴合
　美國453加甲2878B　　白玉崢綴合

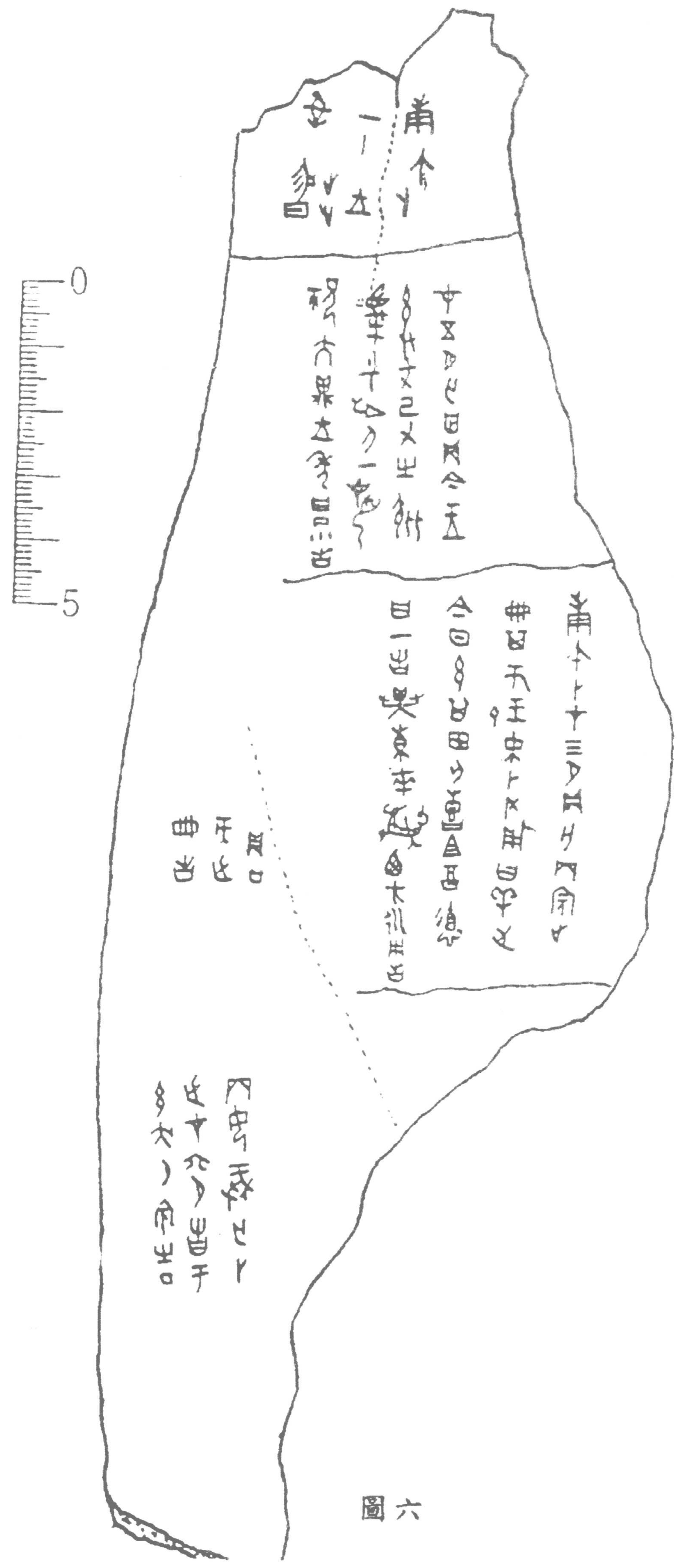
觀右錄九綴合版之情形，似可說明施氏所藏此批之甲骨，與殷虛第三次發掘所得者，關係至爲密切。其或爲同根所生者歟？

3. 傅瑞兒博物館

美國甲骨錄著錄傅瑞兒博物館所藏碎甲一片，僅殘存三文，不能句讀，近似平列之三文爲：申、卜、至，而首尾二文，尤其末一文，乃就其殘餘之筆劃，就筆勢所推察者，正確與否？未敢必。惟此拓本他書尚未見著錄，設專家持與其拓本綴合殘辭，當可增益其學術及研究價値。

4. 哈佛大學

美國甲骨錄著錄哈佛大學皮博地博物館，及福各博物館所藏甲骨拓本六十（面背分列）號，除背面拓本 507、514、522、524、538 等六號，就實物言：爲五十五版，甲與骨混合編號。北美所見甲骨選粹考釋謂：



圖六

---

8. 自然博物館

美國甲骨錄著錄自然博物館藏甲骨拓本六號，其中 560、562 兩號爲腹甲之背面拓本。就實物言：所藏爲二甲二骨。

校：自然博物館即庫方二氏所藏甲骨卜辭所稱之飛爾德博物館。庫方著錄寫本四號，其 2178 號爲腹甲之正反兩面，今見錄爲美國 559、560 兩號，庫書之其餘三號，彥堂先生曾判定其均爲後世之僞刻。

9. 普林斯頓大學：

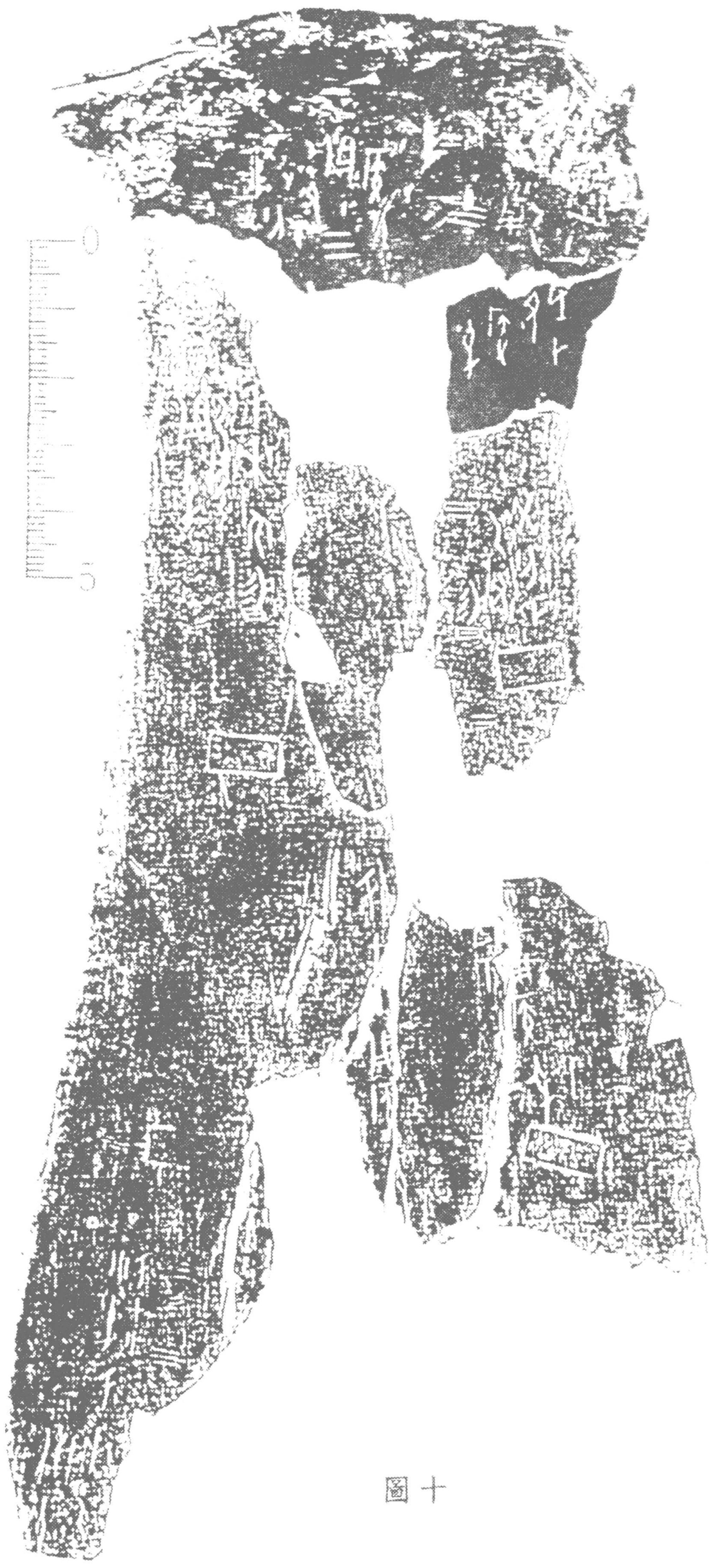
美國甲骨錄著錄普林斯頓大學圖書館藏甲骨，共爲 120 號拓本（自 565 至 684 號），其中 567、571、573、586 等四號爲前號之背面拓本，則美國甲骨錄所著錄者，就實物言：宜爲 116 版。至其編錄之情形，大體言：664 號（含）以前均爲龜甲，645 號以下則甲骨雜陳。

校：普林斯頓大學所藏甲骨，初見於甲骨卜辭七集之普大甲骨文字，爲方法歛氏據實物所摹寫者。共著錄 119（面背同號），其中 76、77、118 等三號爲後世之僞造，應予刪除，則所錄真品爲 116 版。又 5 與 32 兩號，未錄背面，應據美錄拓本補入。美錄編錄之序列，大致與七集之序列同，惟美錄自 638 至 644 之序與七集稍異。

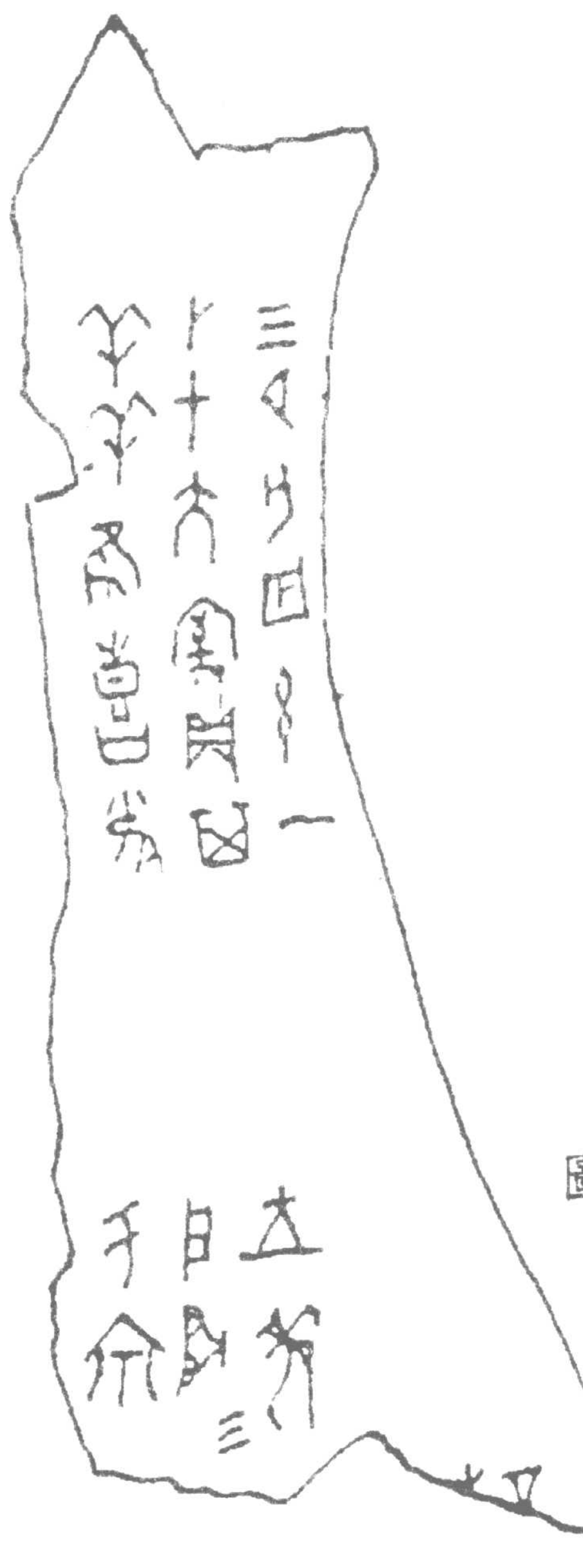
10. 納爾森博物館：

美國甲骨錄著錄納爾森博物館藏契十二拓本，亦爲十二版實物，均屬肩胛骨。其中十一版爲近骨臼處之胛骨，一版爲胛骨左緣之殘餘。拓本之拓製尚佳。

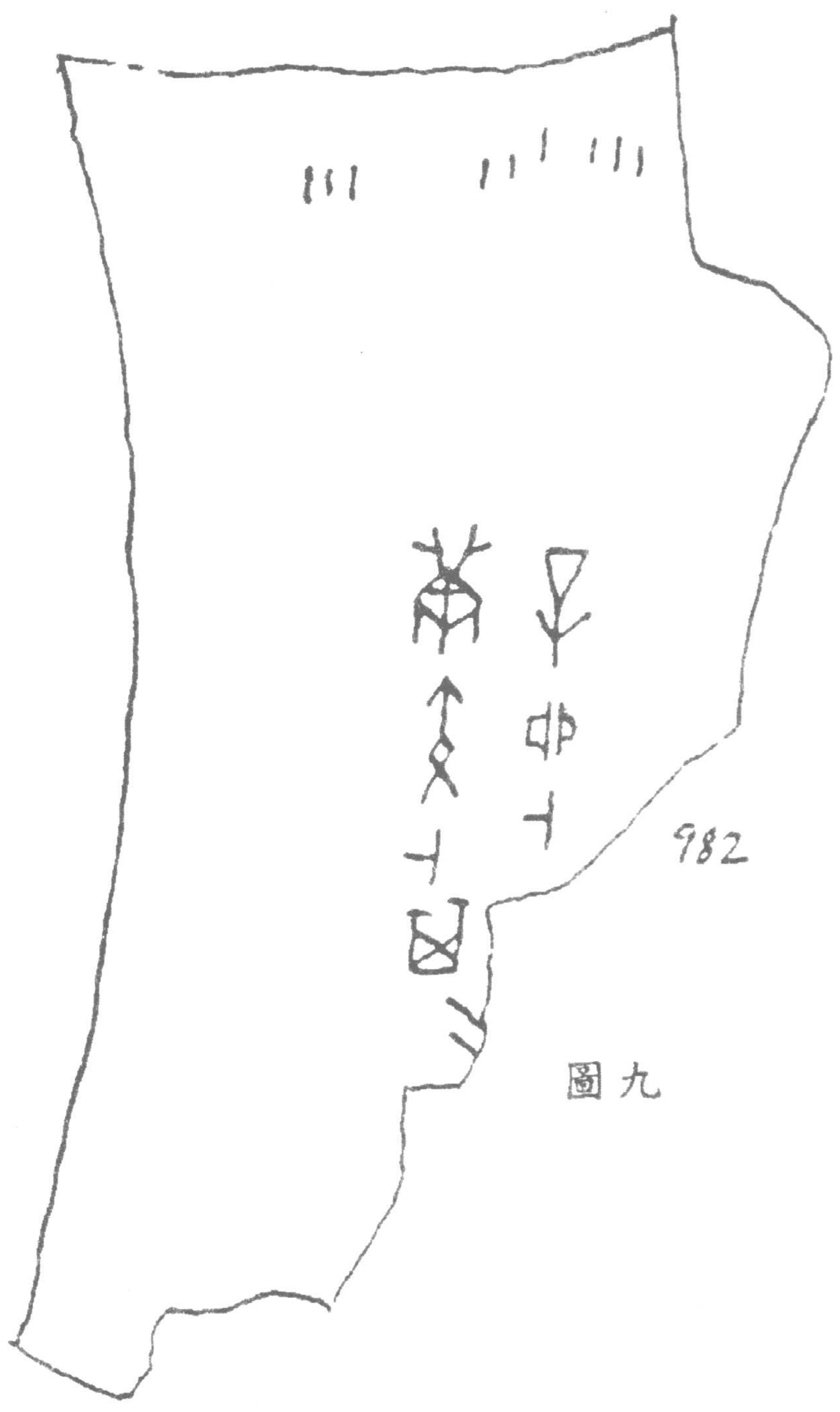
校：納爾森博物館此十二版藏契，初見於民國五十五年出版之中國文字第二十二期至二十九期之考釋及寫本。再見於民國六十一年三月出版之專冊，著錄此十二版胛骨之實物照片及寫本。



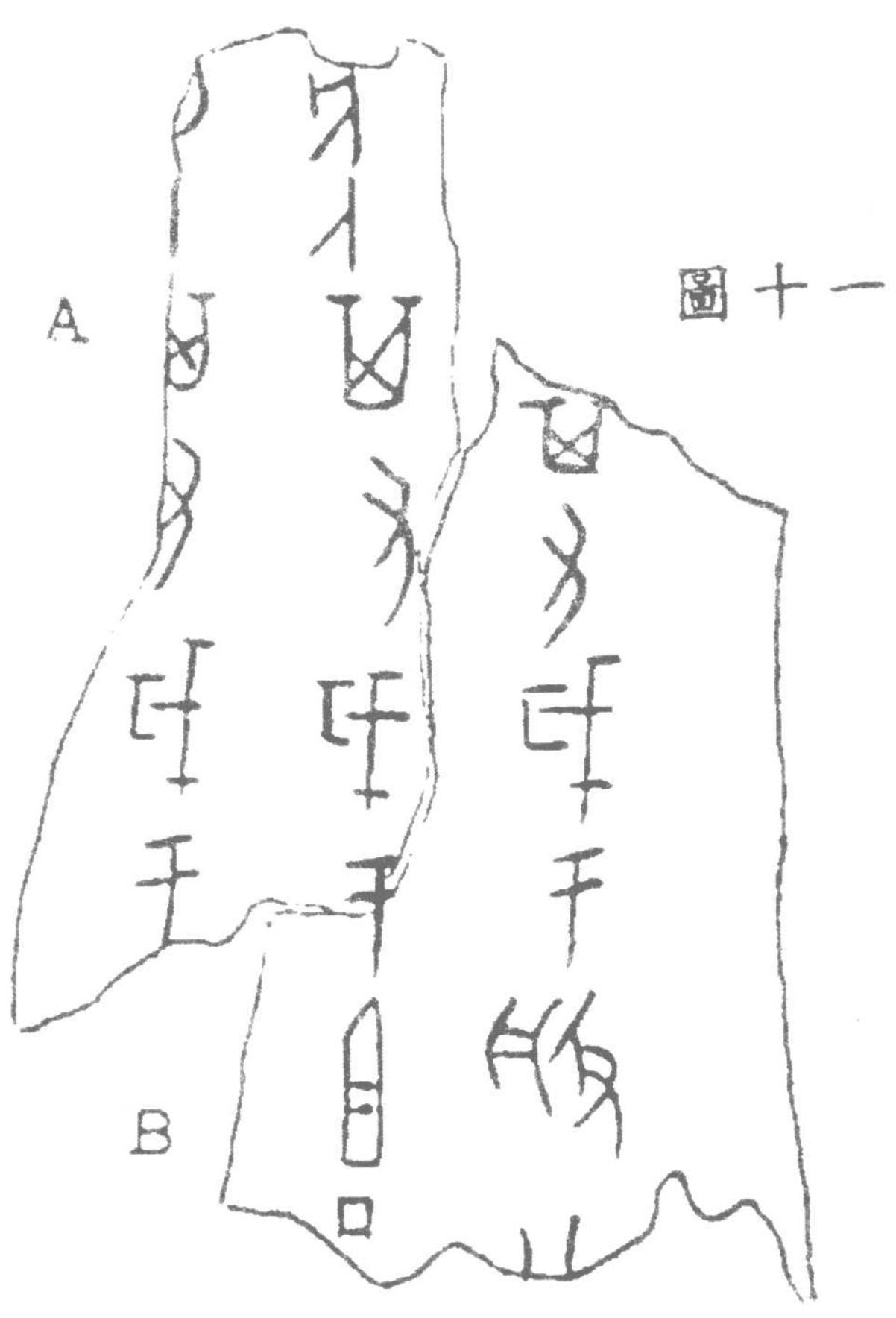
圖十



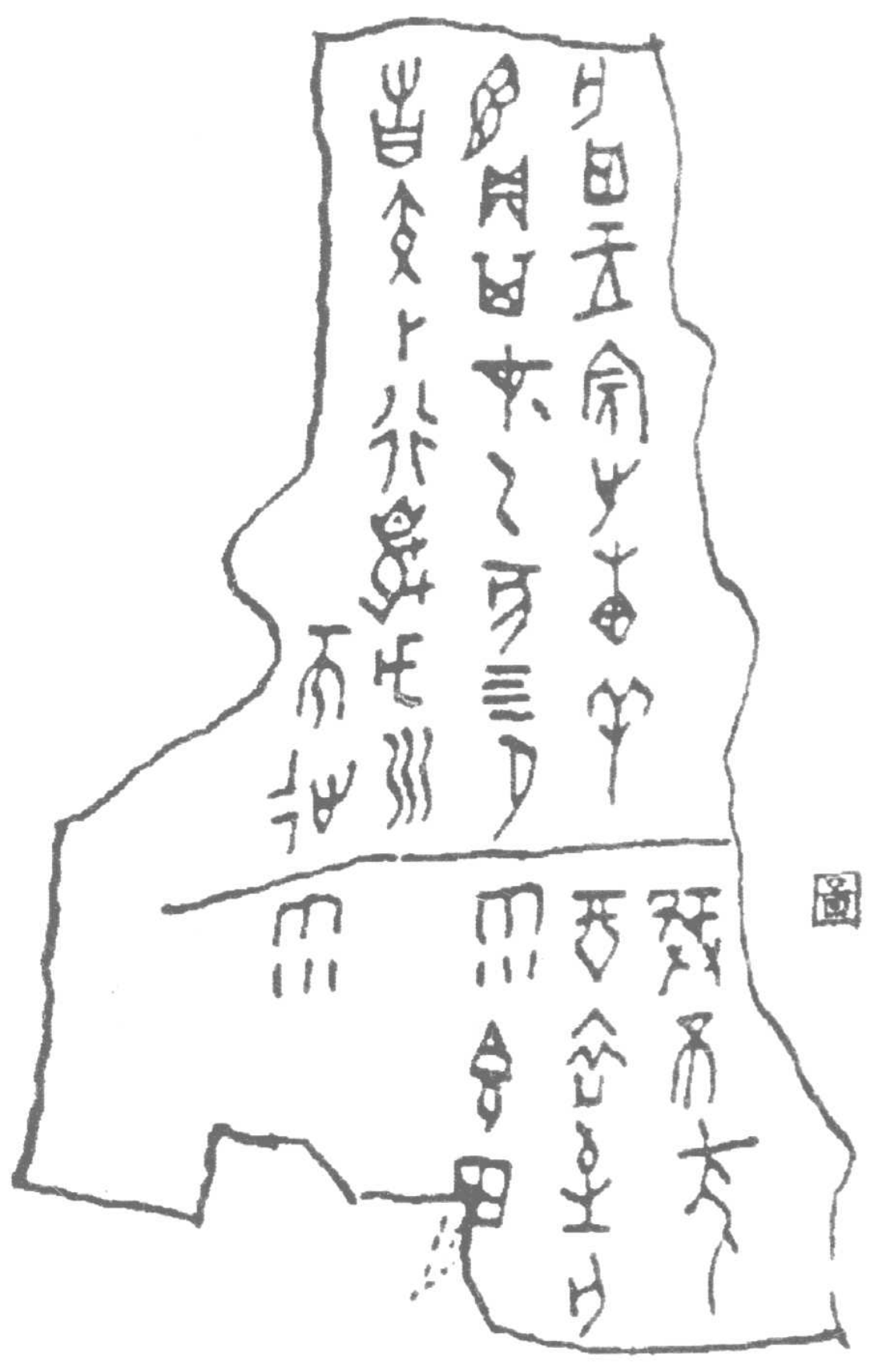
圖七



圖九



圖十一



圖八

1508、1627、1633、1887 等十六號爲空號，實際著錄卜甲 1466 號，北美考釋謂：經其整理後，真品數爲 2764 品，與本書著錄對校，則懷氏所藏尚有 865 品未予著錄。

茲將本書分期著錄之情形分述於左：

第一期：甲 893 版，骨 114 版。共計 1007 版。
第二期：甲 234 版，骨 47 版。共計 281 版。
第三期：甲 68 版，骨 114 版。共計 182 版。
第四期：甲 69 版，骨 126 版。共計 195 版。
第五期：甲 202 版，骨 32 版。共計 234 版。

八、瓠廬謝氏殷虛遺文

民國六十八年九月日本汲古書院出版 ，松丸道雄解題。著錄正面拓本 550 片，反面拓本 24 片，總凡 574 片。正反同頁，甲骨混合編錄，每頁一版。既未分期亦未斷代，約略多屬一、三及武乙時之辭。多爲殘辭碎片，惟拓本之拓製頗清晰完正，有利於綴合之施作。首片胛骨拓本，爲後世之僞刻。松丸解題謂：

1. 重錄於京津者 82 片，重錄於存二者 38 片，兩書所錄互重者 5 片。
2. 僞刻一片，可能爲僞刻者 104、160、209、421、486、526 等 6 片。疑似僞刻者爲 19、27、29、45、157、196、218、343、344、345、428、516、522 共 13 片。三者合計爲 20 片，約當所錄百之 3.6 強。

校：松丸解題謂，所謂瓠廬謝氏，推定爲謝國楨號剛主，河南安陽人，原籍江蘇武進，清大研究院卒業，曾任北平圖書館金石部主任等職。

秀堂夫子曾作專文，考定瓠廬謝氏實爲謝伯殳氏別號瓠廬，浙江餘姚人。據胡厚宣先生寄　秀堂先生簡稱：「謝伯殳，浙江餘人，金石家，收藏甲骨六百片，抗戰期間曾墨拓若干份，各裝一

今美錄著錄其拓本，若集影本、寫本、拓本三者並觀，真乃讀契之一大快事。惜所見者僅此。其他所見僅爲零星之寫本及拓本，影本則最爲稀有，即有，亦嫌不夠清晰，況乎未附寫本，無從知其辭義，因而亦減少其價值。

據考釋，美錄 685 應有背拓，但美錄未予著錄。

11. M. H. de 楊格紀念館：

美國甲骨錄著錄 M. H. de 楊格紀念館藏胛骨四拓本，實物亦爲四版。五期一版，一期三版。

七、懷特二氏所藏甲骨文字

許進雄編輯，民國六十五年加拿大出版。共著錄甲骨拓本 1899（面背臼同號）片。書前著錄編者序言，圖後爲釋文，書後附編者所作之綴合版及拓製欠清諸片之寫本共四十八版。另附甲骨背面鑽鑿圖一七二幅。編輯方法與明續同，頗有統緒。北美所見甲骨選粹考釋謂：

> 1. 坎拿大 R.O.M 所藏懷履光（Bishop W. C. White）舊物二九九九片，自一九四五年懷氏出版中國古代骨的文化（Bone Culture of Ancient China），著錄26片之後，漸為甲骨學者所注意。予於一九六三年十月訪多倫多，小住至歲除，始將懷氏收藏，檢視完畢。懷氏編號方法為骨類自0001至1000號，甲類自1001號至2999號。予剔出贗品151片及無字骨84片，別為一項，而於真品2764片，則為之排比分類，重新編號，庋之庫中。

校：本書著錄卜甲拓本 1474 號，卜骨 441號，甲骨合計，總凡 1915 號（面背臼同號）。其間，51、738、1041、1146、1199、1249、1254、1271、1278、1461、1485、1490、

百八冊，以書籍形式在富晉社出售，弟曾購得一部。原骨後在上海、漢口等富晉社出售。今小部份歸華東師大，大部份歸北平故宮，日本松丸教授認謝氏爲謝興善、謝國楨、謝國珍，其實，皆非是」云云。

九、東京大學東洋文化研究所甲骨文字

松丸道雄編輯，民國七十二年三月東京大學出版。著錄甲骨拓本1356（面背及臼同號）號。以收藏者爲經、分期分類爲緯。集錄三家之舊藏而成冊者。各家之情形爲：

1. 河井荃廬氏舊藏 986 號，約當全書所著錄百之 70.32 強。
2. 田中救堂氏舊藏 368 號。
3. 三浦淸吾氏舊藏 2 號。

校：河井河氏之藏品，其拓本大多已著錄於龜甲獸骨文字及殷契遺珠。田中氏之藏品，其拓本多著錄於殷契遺珠，亦見於鐵雲藏龜。至其編輯之法，雖采分期，但未舍棄其所謂多子族之說，辭例之分類亦嫌瑣細。

十、小屯南地甲骨：

小屯南地甲骨爲中國科學院考古研究所，就小屯南地發掘所得之甲骨拓本編輯者，分裝爲上下兩冊，上冊爲圖版，下冊爲釋文與索引，及鑽鑿情形等。出版於民國七十二年十月，共著錄拓本 4612 號。其上冊圖版之凡例云：

> 一、本書是《小屯南地甲骨》上冊，由前言、拓片、目錄表、龜甲統計表、背文統計表組成。圖版一～八二二（1-4589號）是一九七三年小屯南地出土之甲骨，八二三～八三二（附1-10）是一九七一年冬小屯西地出土的卜骨，八三三～八三四（附11-23）是一九七五～一九七七年在小屯村一帶零星採集的甲骨。
>
> 二、本書除1028（H24:297）、1427（H24:774）、1453（H24:803）、2011（H24:1417）、2732（H103:62）、4163（T31:61）、4187（T31:90）、4194（T31:97）八片是朱書，這裡發表的是照片外，其餘全部都是拓片。
>
> 三、小屯南地甲骨拓片圖版是依灰坑（H）、房基址（F）、墓葬（M）、探方（T）為序而排列的。在同一單位中，基本上依照原編號的順序排列，有時為了版面美觀，稍有調整。凡是此次發掘之有字甲骨，不論大小和字數之多寡，一概收入。每張拓片下方有兩個號：下為本書順序號，上為甲骨出土時的原編號。若一片甲骨，正、反、側三面都有刻辭，則有三個不同的順序號。
>
> 四、甲骨的原編號是甲骨出土時編的。在出土過程中是先畫圖、編號，再依次取下。因而，發掘現場所編之號包括了無字甲骨。所以，這裡發表的不少灰坑的甲骨，原編號不是緊密相連的。例如：圖版七，是灰坑H2的6、8、9、11號，所缺的7、10就是無字甲骨。
>
> 五、原編號中的「+」號，表示某片與某片的綴合。例如：H1:16+H2:264+477表示灰坑H1的16號和灰坑H2的264、477號綴合。
>
> 六、在探方出土的甲骨原編號中，括弧內的數字表示該片出土的層次。如T55(3):8中的(3)表示探方T55的第3層。
>
> 七、本書拓片的放置是以甲骨的形狀為依據，所以在有些拓片中會出現文字的倒置的現象。例如2302（H57:60反）是按牛胛骨的形狀放，故「庚午」二字倒置。

下冊釋文凡例云：

> 一、本書是將《小屯南地甲骨》上冊所著錄的甲骨，依原書之次序逐片釋文。後面的補1-16（10片），也是一九七三年小屯南地出土之甲骨，因此冊未收，在此一併釋文。
>
> 二、釋文中，缺一字用□表示：不能確知所缺之字數者，用⧄表示：殘缺或字跡不清者，在該字外加□。
>
> 三、凡字跡不清的甲骨，一般均有摹本，摹本號是指本冊所編的摹本順序號，其圖版見本冊第二分冊。
>
> 四、各片中所見的甲骨鑽、鑿型式等，可參閱本冊第三分冊《小屯南地甲骨鑽鑿形態》一文及有關鑽鑿圖版和統計表。
>
> 五、本書多數的甲骨，均標出時代；部份不易分期之甲骨，暫時存疑，不予區分。甲骨的分期，基本依王劃分。分為武丁、廩辛、康丁、武乙、文丁、帝乙、帝辛；有些作康丁－武乙、武乙－文丁、帝乙－帝辛者，則表示該版大概屬於這一時期，但目前還難以確定屬於何王。

又索引凡例云：

> 一、本索引包括兩部份，即字、詞索引和人名、地名索引。
>
> 二、字、詞索引分部首、檢字表、索引正文，隸定字、詞表四部份。
>
> ※部首共計一百七十一個，每個部首左下角之數字是指該部首在檢字表中的頁數，每個部首右下角之數字是指該部首在索引正文中的頁數。
>
> ※檢字表是按部首順序，分別列出《屯南》一書中的全部單字（干支及少數最常用字除外）；不能按部首歸類的，另列雜索引文字一項，字下的數字是指該字在索引正文中的頁數。
>
> ※索引正文也按部首分類，分別列出《屯南》一書中所見之單字及部份詞組。凡能隸定之字或詞，都填入原形下面一欄；不能隸定的，則只寫出原形，凡重見者，皆注出見某字。正文最後列有稱謂與數字兩項。每項下所列數字皆指《屯南》上冊的順序號。
>
> ※隸定字、詞表，以字的筆畫多少為序，以正體字為準。字、詞下面的數字是指該字、詞在索引正文中的頁數。
>
> 三、人名索引包括人名、侯名、尹名。單個人名或異代同名者，基本上以時代早晚為序。
>
> 四、地名索引包括地名、方名。基本上以時代早晚為序。

姚孝遂、蕭丁合著之小屯南地甲骨考釋，於民國七十四年八月，北平中華書局出版，列爲吉林大學古籍研究所叢刊之一。其自序云：

> 考釋采取分類的形式，打亂了原順序，這是為了便於問題的討論。而同一刻辭，又可以說明不同的問題，這就不可避免地出現重複。我們認為這種重複還是必要的。
>
> 對於釋文的處理，我們力求其全，但對於僅有兆序一、二、三……等數詞之類，均從略。
>
> 對於習刻的部分，專章加以討論。我們認為辨識習刻的文字，意義不大，一般的情況下，習刻的釋文亦從略。有個別的釋文與已發表的釋文小有出入。見仁見智，各抒己見，我們認為還是可以的。

校：小屯南地甲骨考釋，其方法甚善，蓋先將南地出土甲骨之卜辭，作綜合考釋，再襯以每片契辭之釋文。其綜合考釋：一曰先公。二曰先王，此段再用大小示、及自高祖、囲、至武乙。並附伊尹。三曰先妣。四曰神祇。五曰人牲、物牲。六曰方國。七曰人物、職官。八曰眾。九曰天象。十曰田獵。十一曰習契。

小屯南地甲骨拓本發表後，若干學者曾先後發表將及百篇之論著，及數十版之綴合。茲不贅錄。

十一、英國甲骨集

李學勤、齊文心、艾蘭合編，民國七十四年中國社會科學院出版。著錄拓本 2674（面背臼同號）號。書前附錄彩色照片七幀（含家譜正反）。以分期爲經，辭類爲緯，另將所謂之𠂤組、子組、午組者列爲第一期附。家譜未分期，著於書末，編爲 2674 號。甲骨混合編錄。所錄，大多見於庫方及金璋二書之寫本，真僞互見。其凡例云：

> 一、本書圖版包括英國現藏的全部甲骨文資料。凡有一字以上盡可能選入。全書共著錄 2674 片。
>
> 二、圖版編排次第，先分期再分類。
>
> 三、分期采用五期分法：第一期為武丁時期；第二期為祖庚、祖甲時期；第三期為廩辛、康丁時期；第四期為武乙、文丁時期；第五期為帝乙、帝辛時期。對於字體特殊，時代有爭議的那一部分甲骨文，歸為𠂤組、子組、午組，根據多數學者認為其時代在武丁前後的說法，附在第一期之後。對於缺少稱謂、貞人等主要劃分時代依據的，則主要根據字體分期。
>
> 四、每期之下根據甲骨刻辭的社會歷史內容分為若干類。一版有多項刻辭的，只根據其中主要的一項歸類。若要全面地查找某類內容，可檢閱本書下編索引。
>
> 五、凡甲骨正、反兩面有字者，編為一號，注明「正」、「反」。凡胛骨正、反、臼三面有字者，亦編為一號，注明「正」、「反」、「臼」。僅一面有字者，編為一號，不再注明「正」或「反」或「臼」。
>
> 六、本書圖版除2291、2472、2475三號為照外，均為拓本，照片和拓本的大小與甲骨實物相同。

分类	第一期		第二期		第三期		第四期		第五期	
	页码	片号	页码	片号	页码	片号	页码	片号	页码	片号
一、祖、父、妣、母、兄、子、帝	一—三九	一—一八三	三六三—三七三	一九二二—一九七六	四一七—四二〇	二二五九—二二七四	四四三—四四七	二三九八—二四一三	四六九—四七七	二五〇二—二五一二
二、侯、伯	三九—四三	一八四—一九九	三七三	一九七七—一九七八						
三、贞人及人（或国族）名	四三—八五	二〇〇—四三二	三七三—三七六	一九七九—二〇〇〇	四二〇—四二一	二二七五—二二八二	四四七—四四九	二四一四—二四一八		
四、王事活动	八五—一〇〇	四三三—五一〇	三七七—三八一	二〇〇一—二〇三一	四二一	二二八三	四四九	二四一九—二四二〇		
五、职官、刑罚	一〇〇—一〇四	五一一—五四二	三八一	二〇三二—二〇三三			四五〇	二四二一—二四二三	四七七	二五一三
六、战争	一〇四—一四八	五四三—七一五	三八一—三八三	二〇三四—二〇四〇	四二一	二二八四—二二八五	四五〇—四五一	二四二四—二四二五	四七七—四七九	二五一四—二五一八
七、地理	一五〇—一五七	七一六—七五四					四五一	二四二六—二四二七	四七九—四八二	二五一九—二五三八
八、贡纳	一五七—一六五	七五五—七八七								
九、农业	一六六—一七九	七八八—八三一			四二二	二二八六—二二八八	四五二—四五三	二四二八—二四三〇		
一〇、田猎	一七九—一八六	八三二—八六五	三八三—三八四	二〇四一—二〇四六	四二二—四三〇	二二八九—二三二七	四五三—四五四	二四三一—二四三五	四八三—四九一	二五三九—二五六七
一一、畜牧	一八七—一八八	八六六—八八四	三八四	二〇四七—二〇四九	四三〇—四三一	二三二八—二三三三	四五四	二四三六		
一二、天文、历法	一八九—二〇四	八八五—九九五	三八五—三八六	二〇五〇—二〇五九	四三一	二三三四—二三三五			四九三—五〇二	二五六八—二五八七
一三、气象	二〇四—二一三	九九六—一一〇四	三八六—三八八	二〇六〇—二〇八〇	四三一—四三三	二三三六—二三四五	四五四—四五五	二四三七—二四四二	五〇二—五〇四	二五八八—二五九三
一四、建筑	二一三—二一六	一一〇五—一一一六	三八九	二〇八一—二〇八四	四三三	二三四六				
一五、生育、疾病	二一七—二二〇	一一一七—一一二三	三八九	二〇八五						
一六、上帝、先公和其它神祇	二二一—二五〇	一一二四—一一九三	三九〇	二〇八六—二〇八九	四三三	二三四七—二三四九	四五六—四五七	二四四三—二四五一		
一七、祭祀	二五一—二七四	一一九四—一三〇一	三九〇—四〇四	二〇九〇—二一八六	四三四—四三八	二三五〇—二三七三	四五七—四六二	二四五二—二四七八	五〇四—五〇六	二五九四—二六一一
一八、卜法	二七四—三〇八	一三〇二—一五四四	四〇四—四〇五	二一八七—二一九六	四三八—四三九	二三七四—二三八二	四六三	二四七九—二四八二	五〇六	二六一二—二六一四
一九、吉凶梦幻	三〇八—三一九	一五四五—一六二二	四〇五—四一四	二一九七—二二五〇	四三九—四四一	二三八三—二三九六	四六四—四六八	二四八三—二四九八	五〇七—五一二	二六一五—二六七一
二〇、其它	三二〇—三三五	一六二三—一七五六	四一五	二二五一—二二五八	四四一	二三九七	四六八	二四九九—二五〇一	五一二	二六七二—二六七三

分组	第一期附	
	页码	片号
𠂤组	三三五—三五五	一七五七—一八九〇
子组	三五六—三六〇	一八九一—一九一五
午组	三六一	一九一六—一九二一

家谱刻辞	
页码	片号
五一三—五一四	二六七四

> 七、凡屬一骨之折可合者，盡量拼合，已有成果拼合者，將在下編著錄表注明。
>
> 八、本書所著各片甲骨的來源，在下編來源表說明。凡以前發表過照相或摹本的，見下編著錄表。
>
> 九、全部文字為偽刻的甲骨中本書不收。有部分偽刻的甲骨，照原樣收錄，其偽刻部分在釋文說明。真偽尚有爭議的《家譜刻辭》，錄於本書圖版之末。

其分期分類之情形見上頁附表：

十二、法國甲骨錄：

雷煥章編輯，民國七十四年十二月光啓社出版。著錄六家公私立機構收藏甲骨照片五十九號，各照片下附寫本及考釋。其情形爲：

1. 中國學術院：卜甲五、卜骨八，共十三號。其中一期九號，二五期各二號。
2. 季梅博物館：卜甲四、卜骨四，共八號。其中一五期各三號，二三期各一號。
3. 赤努奇博物館：卜甲一、卜骨九，共十號。其中一期兩號，三期八號。
4. 雅克博藏骨一·一期。
5. 戴地野藏甲一·一期。
6. 國立圖書館：卜甲二十六。一期九號，二期十號。

右六家合計：一期二十五號，二期二十號，三期九號，五期五號。凡卜甲三七、卜骨二二。

十三、天理大學天理參考館藏甲骨文字

天理大學天理教道友社論，伊藤道治釋文，民國七十六年二月出版。著錄甲骨 692（面背臼同號）號，拓本照相並具。另摘要作釋文及寫本，以分期爲經，辭類爲緯，甲骨混合編錄。書前著錄實物采照二十四幅。拓本製作清晰完整，利於綴合之施作。其著錄情形爲：

第一期：335 號，補遺 31 號，共 363 號。
第二期：94 號，補遺 10 號，共 104 號。
第三、四期：155 號，補遺 5 號，共 160 號。
第四期：21 號。
第五期：24 號，補遺 17 號，共 41 號。

右第一期含所謂之𠂤、子組之辭。

十四、蘇德美日所見甲骨集

本集爲胡厚宣氏之甲骨寫本，出版於民國七十七年三月。主要寫錄如左之四宗：

(一)、蘇聯愛米塔什博物館所藏甲骨文字選：寫錄正面七十九片，背面一片，共八十片。
(二)、德國西柏林民俗博物館所藏甲骨文字：寫錄正面四二二片，背面二十七片，骨臼八片，共四五七片。
(三)、美國所見甲骨補錄：寫錄正面二十四片，背面與骨臼各一片，共二十六片。
(四)、日本天理大學參考館所藏甲骨文字選：寫錄正面五十一片，背面二片，骨臼一片，共五十四片。

右四宗總凡寫錄實物正面五七六片，背面三十一片，骨臼十片，共計六一七片。另附錄德國私人藏骨（拓本與照片），及香港大會堂美術館藏骨（拓本）各一片。舊金山亞州藝術博物館藏骨（照片）四片。三者共計六片。茲將其情形依序分述於下：

(一)、愛米塔什博物館藏甲骨：胡氏序謂：是大戰前布那柯夫所蒐集者，共一九九片。這批材料數十年來曾未著錄過，今選錄七十九片，腹甲十五片，背甲二片，餘均爲牛胛骨。第一期十

爲補錄。胡序並定第一片爲武丁以前之物，因此，特著錄該片拓本以明之。惟詳察拓本所現示之情形，宜爲腹甲左右兩後甲（左半殘佚）之殘餘。就其卜兆、契辭，契辭與卜兆之關係，行款、句讀、辭義、文字結體、契刻等情形綜合推勘，疑第四期文武丁時，習契者所爲之習作（見附圖），殊非武丁以前之物，亦非文武丁時期之卜辭。

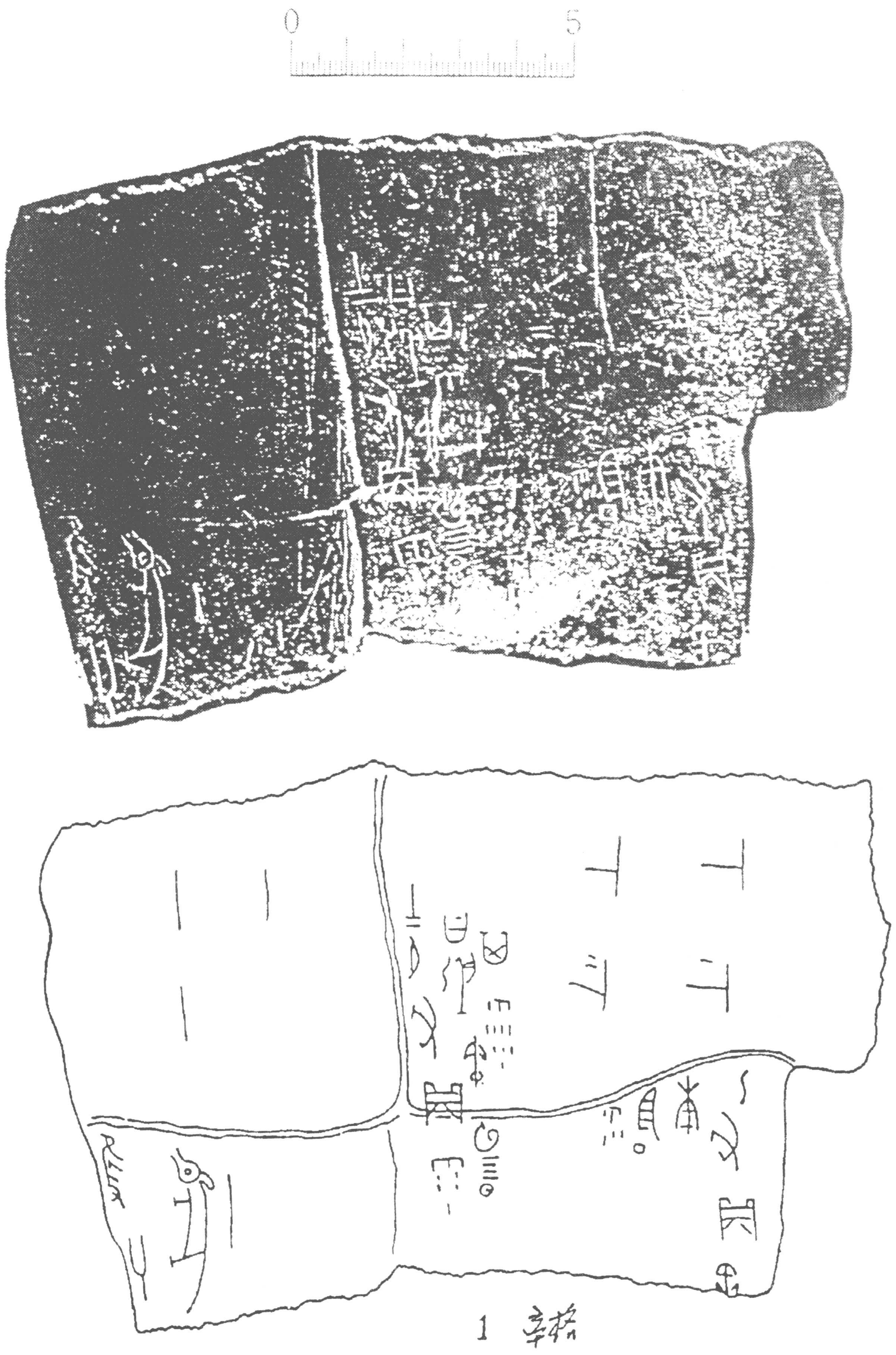
(四)、日本天理參考館甲骨：胡氏寫錄五十一片，並定一至三十二號爲第一期，三十三至四十二號爲第二期，四十三至五十一號爲第三、四期。校：天理參考所藏甲骨，其拓本及實物黑白照片，與若干彩色照片及摹本，早於胡氏此集之前（民國七十六年二月、西元一九八七）出版，拙曾據胡氏寫本詳與拓本對校，得兩者甚多之差異並作成「評胡寫天理參考館藏甲骨」一文論述之，此不贅錄，茲就兩者編列之序次、列表對照，藉備參稽。

胡	拓本	胡	拓本	胡	拓本	胡	拓本
1	184	2	255	3AC	6AC	4	53
5	28AB	6	34AC	7	54	8	17
9AB	45AB	10	43AB	11AB	44AB	12	147
13	179	14	59	15	196	16	219
17	254	18	138	19	159	20	305
21	304	22	169	23	152	24	149
25	145	26	120	27	95	28	81
29	82	30	74	31	169AB	32	28
33		34		35		36	333
37	330	38	220	39	319	40	327
41	328	42	393	43	462	44	464
45	432	46	469	47	481	48	479
49	520	50	605	51	552		

注1. 胡寫33至35三號拓本未見。

注2. 胡寫34號見彩圖二頁三片。胡謂：此片為王國維氏之舊藏。

注3. 據拓本：胡寫5、10、31三號未寫背面，6號未寫骨臼。



1

（原載《中國文字》新23期，1997年）

二片，第二期四十三片，第三、四期二十三片，第五期一片。其中一部分曾選入甲骨文合集第十三冊云云。惟胡氏未予說明選入若干片，及其編號之情形。茲據胡氏寫本與合集略爲對校，得二十七片，約當百之三十四強，錄之如下：

俄	合集	俄	合集	俄	合集
1AB	39548AB	2	40518	4	39779
13	40928	17	39590	20	41193
30	41166	31	41163	32	41197
35	41207	36	41170	39	41061
40	41072	41	41239	42	42143
43	41240	44	41246	45	41251
46	41255	60	41316	66	41040
68	41530	70	41572	72	41497
73	41658	77	41666	78	41664

(二)、西柏林民俗博物館藏甲骨：據胡氏序謂：爲德國人威爾次於一九〇九（清宣統元年）購自青島。原爲七一一片，已不全，現存四百多片。甲骨文字合集曾選錄照片一一二片。胡氏並據寫本與合集選錄之照片對校，製爲對照表，詳注彼此之差異情形。檢此一一二片胡氏定爲第一期七十三片，第二期七片，第三期十二片，第四期十一片，第五期九片。餘一一三至四二二號，胡氏定爲第一期一一三至二四一號，第二期二四二至二五〇號，第三期二五一至二四六號，第四期二四七至三八九號，第五期三九〇至四二二號。察胡氏所記分期之編號似有錯誤，若第三期之編號必然錯誤。然則、第三期之編碼似爲二五一至三四六，第四期爲三四七至三八九號歟？若然，則第一期爲一二九片，第二期爲九片，第三期爲九十六片，第四期爲四十三片，第五期爲三十三片，共計爲三一〇片。

(三)、美國所見甲骨：據胡氏序謂：共寫錄公私九家藏契凡二十四片，皆爲周鴻翔氏「美國甲骨錄」未能著錄者，所以題名

胡氏書後追記云：「最近天理參考館藏品第五卷甲館文字一書出版，我書此卷本可取消，惟書稿已經製版，存之聊備泥爪。

(五)、附錄：

1. 德國私人藏骨：據本書目錄所記，胡氏曾爲此骨寫過考釋，所考之情形如何，緣未見其文，不敢置喙。惟就所刊照片及拓本觀察，其所顯示之情形，頗疑爲後人之僞造。蓋所契殘辭五條，皆呈直瀉而下之契刻，有違卜辭書契之通例。此其一。五辭皆不能句讀達意。此其二。中間一辭之動物字，呈橫式書契，違忤動物字契刻之通例。此其三。書體稚弱板滯，了無殷契之神韻。此其四。無卜兆及紀兆數字與術語之痕跡。此其五。緣斯，疑其爲後人之僞造。

2. 舊金山亞洲博物館藏骨：據所錄照片觀察，其第二片疑爲後世之僞造，蓋既無卜兆之痕跡，亦無紀兆之數字與術語。此其一。序辭之卜字作「丨」形，兆圻左向，契辭左行，呈順兆之態，有違契辭之通例。此其二。所契之辭除序辭，餘皆呈不成行款之單字，且作重複零散之契刻，不能籀讀成辭。此其三。書體呆滯之乏神。此其四。故疑其爲後世之僞刻。

又其第四片，緣攝影技術差池，加以印刷，用紙等欠精，致使右半之契辭呈漆黑一片，無法辨認其所契爲何，茲置而不論。

十五、比荷西德瑞士所藏甲骨

校：此書名見於法國甲骨錄附著之廣告，迄今（民國八十二年七月）未見出版，不悉原因。

甲骨文研究的歷史現狀與未來展望

范毓周

甲骨文是中國商、周時期用於紀錄占卜活動內容的古代文字。它是目前已發現的中國古代文字體系中比較完整、時代最早的一種。從某種意義上講甲骨文就是我們今天所使用的漢字的鼻祖和前身。

甲骨文又是一批彌足珍貴的歷史資料，它眞實地紀錄著中華民族的早期歷史進程，有力地證明了中國不愧爲世界上文明發達最早的國家之一。毫無疑問，甲骨文和古代埃及的紙草文書、巴比倫的泥版文字以及美洲印第安人的瑪雅文字一樣，是整個人類的文化瑰寶，在世界文明發展史上具有極其重要的地位。

有關甲骨文的研究，如從上個世紀末的最初發現起算，迄今已有九十多年的發展歷史。目前，甲骨文研究幾乎在各個分支領域中都在醞釀著驚人的突破。爲了有助於甲骨文研究的進一步發展，當前對它的既往歷史作一回顧，分析一下它的現狀，並就它的未來發展進行展望是十分必要的。

一

早在六十多年前，甲骨文研究的重要奠基者之一王國維曾經指出：“古來新學問之起，大都由於新發現。”(1)甲骨文研究作爲一門新學問，它的興起，正是以殷墟甲骨文的新發現爲其發軔的。

關於甲骨文的最初發現年代和最早的鑒定與購藏，本來是並無疑義的，但在最近，學者間產生過一些不同意見。

甲骨文的最早發現者，應當說是清末河南安陽西北郊小屯村的村民。他們早在學者開始接觸甲骨文之前的二、三十年前，就在翻耕土地時發現了甲骨，其中有不少是刻有甲骨文的。不過，他們並不知道這些甲骨的眞價值，在相當長的時間裡，一直被當作中藥材中的“龍骨”賣給藥店或藥販。

甲骨文被學者最初發現的年代，一般認爲是在清末光緒二十五年（公元1899年）。關於這一點，羅振玉早在1903年爲《鐵雲藏龜》一書作序時已指出(2)，隨後，董作賓(3)、胡厚宣(4)、陳夢家(5)等人也都以1899年作爲甲骨文的最初發現年代。但在最近，由於王襄1955年所寫《簠室殷契》的發表，在學術界引起新的爭論。王襄在這篇遺著中指出：“世人知有殷契，自一八九八年始（即光緒二十四年）”(6)。一些學者遂據以提出甲骨文的最初發現年代應爲1898年的新看法(7)。其實，這種新的看法是並不可靠的。王襄的這一說法是和他以前歷來的說法相矛盾的。例如，王襄早在1933年曾經明確講過：“前清光緒己亥年（案即公元1899年），河南安陽縣出貞卜文。是年秋，濰賈始攜來鄉求售”(8)。又在1935年再次談到：“翌年（案即戊戌之翌年，即1899年）秋，攜來求售，名之曰龜版。人世知有殷墟自此始”(9)。可見，王氏後來的說法是不足憑信的。因此，甲骨文的最初爲學者發現的年代仍應維持著原來的說法，是在1899年。

關於誰是最先對甲骨文的鑒定、購藏者，學者間也曾有過不同看法。例如，董作賓早在1930年，就曾認爲端方是甲骨文的發現者(10)。還有學者認爲最初發現甲骨文的是劉鶚(11)。關於端方，陳夢家曾經根據《洹洛訪古記》、《甲骨研究》諸書所記和所藏甲骨中僞片甚多，明確指出：“我們以爲端方收藏甲骨當在王（案即王懿榮）、劉（案即劉鶚）之後”(12)。至於劉鶚，陳夢家依據《抱殘守缺齋日記》推斷也較王懿榮爲晚，認爲“一九〇一年後劉氏自己有收藏”(13)。因此，最早對甲骨文作出鑒定和購藏的，仍應依照劉鶚(14)、羅振玉(15)等人的說法，是山東福山人王懿榮。不過，還應補充的是，根據胡厚宣先生的研究，在王懿榮對甲骨文進行鑒定和購藏的同時，開始接觸並注意搜求甲骨文的學者還有天津的孟定生和王襄(16)，只是他們“皆困於財力，未能博收”(17)。在1899年接觸甲骨文後，“僅於所見十百數中獲得一、二”(18)。

就在中國學者開始接觸和搜集甲骨文之後不久，一些旅居中國的西方傳教士也對甲骨文開始注意並進行搜集。首先是1903年美國長老會駐山東濰縣傳教士方法斂（Frant H. Chalfant）和英國浸禮會駐山東青州傳教士庫壽齡（Samuel Couling）在山東濰縣合夥從古董商人手中買到許多甲骨，並把其中的400多片轉賣給了英國人在上海所辦的亞洲文會博物館，另有79片賣給了英、美教會在濟南所辦的廣智院。此後，方法斂和庫壽齡陸續購到許多甲骨。甲骨文從此開始流散國外。1946年春，方法斂從其所藏甲骨中選取119片，轉賣給美國普林斯頓大學。這批最早由兩位西方學者搜集並流散國外的甲骨文資料，後由白瑞華（Roswell S. Britton）部分著錄在《甲骨卜辭相片》和《殷墟甲骨拓片》兩書中，後來又由方法斂發表在他的《甲骨卜辭七集》中(19)。

自1899年王懿榮對甲骨文進行鑒定並開始搜集甲骨文後，甲骨文的學術價值漸爲學者所重視。除王懿榮外，王襄、孟定生、劉鶚、羅振玉等人均開始積極搜求甲骨。其中羅振玉還直接派人到安陽實地調查並坐地收購，因而所獲最多。據我的老師胡厚宣教授統計，截止1928年中央研究院歷史語言研究所開始殷墟科學發掘前，各家搜集甲骨約近十萬片，其間中國學者購得甲骨的大致情況爲：

王懿榮購得：約1,500片；

王襄、孟定生購得：約4,500片；

劉鶚購得：約5,000片；

羅振玉購得：約40,000片；

國內其他收藏家所得：約4,000片(20)。

外國人中，除了庫壽齡、方法斂外，德國人威爾茨（Wirts）於1909年在青島購得711片(21)，衛禮賢（R. Wilhelm）也在青島購得甲骨72片(22)，前者所得現藏西柏林柏林民俗博物館，後者所得除1片轉贈法蘭克福中國學院外，均歸瑞士巴騷民俗博物館(23)。日本人中，最早搜求甲骨文的爲林泰輔，他於1905年由東京文求堂買得10片，以後又陸續買到600片，並於1918年親赴安陽作實地調查。繼林泰輔之後先後購藏甲骨文的還有河井荃廬、中村不折、堂野前種松、中島蠔叟、田中救堂、三井源右衛門等人，總共購得甲骨文約15,0 00片左右(24)。

外國人中購藏甲骨文最多的是加拿大人明義士（Jemes mellon Meuzies），他以在安陽作長老會牧師之便，親至小屯一帶調查購求，前後共得三、四萬片(25)。

甲骨文作爲重要學術研究資料進行著錄和刊布是自1903劉鶚《鐵雲藏龜》一書的出版開始的。繼劉鶚之後，羅振玉先後編集刊行了《殷墟書契前編》（1912年）、《殷墟書契菁華》（1914年）、《鐵雲藏龜之餘》（1915年）、《殷墟書契後編》（1916年）和《殷墟古器物圖錄》（1916年）；明義士編集了《殷墟卜辭》（1917年）；王國維以姬佛陀名義編印了《戩壽堂所藏殷墟文字》（1921年）；日本人林泰輔編印了《龜甲獸骨文字》（1921年）；王襄編印了《簠室殷契徵文》（1925年）；葉玉森編印了《鐵雲藏龜拾遺》（1925年）；羅福成編輯出版了《博古別錄》第二集。總共出版了12種著錄書，發表了9,919片甲骨文資料。雖然從數量上看只佔當時各家所藏骨甲的十分之一左右，但比較重要的材料都已公布，對於學者開展甲骨文研究，提供了極大的方便(26)。

《鐵雲藏龜》的出版，引起了學者研究甲骨文的興趣。1904年，孫詒讓據以寫出了第一部甲骨文研究專著《契文舉例》。此後，羅振玉、王國維、葉玉森、陳邦懷、余永梁、王襄、陳邦福、容庚、商承祚 胡光煒、丁山、程憬等人都相繼寫作、出版了一批甲骨文研究專著。截止1928年殷墟發掘工作開始前，除了上述諸人外，還有林義光、柯昌濟、馬衡、聞宥、張鳳、蕭炳實、徐嘉瑞、何定生、胡韞玉、張世祿、黃仲琴、容肇祖、抗父、邁五等人。外國學者則有法國人沙畹（E. Chavannes）、英國人金章（L.C. Hopkins）、庫壽齡、銀格蘭姆(J.Ingram）、加拿大人明義士、德國人穆勒（H. Mulier）、勃漢第（Anna Bernhardi）、日本人林泰輔、富岡謙藏、內藤虎次郎、后藤朝太郎、石濱敬次郎、高田忠周、小島祐馬、丹羽正義、飯島忠夫和無關等。總起來講，在甲骨文發現後的最初三十年間，從事甲骨文研究而有論著的中外學者共有五十多人，共發表、出版各類論著、專書和論文118種(27)。在這些學者中，用力最勤、成就最大的當推羅振玉和王國維。

羅振玉除了積極從事搜求和編印甲骨文著錄書外，憑他的識力，分別於1910年和1914年先後作《殷商貞卜文字考》、《殷墟書契考釋》兩書，使甲骨文中的文字基本可以識讀。1927年，羅振玉印行他的《殷墟書契考釋》的增訂本，經其考定的帝王名諱23個、先妣名16個、人名90個、地名230個、文字560個、可識文字已達千字以上(28)，其奠基之功是不可沒的。王國維是一代學術宗師，在哲學、戲曲、音律、文學諸方面都有極高的學術成就。他在甲骨文研究的許多領域都卓有建樹，除了對於商周禮制都邑地理多有闡證外，還先後著有《殷卜辭中所見先公先王考》及其《續考》，把甲骨文中出現的商王先祖名單及受祭次序同《史記·殷本紀》中所載的商代先公先王廟號、世系進行對照研究，證明了《史記·殷本紀》中的商世系，除個別地方“乃違事實”之外，大體全與甲骨文資料相吻合；同時指出，根據甲骨文資料反過來證明《史記》、《世本》、《山海經》、《竹書紀年》、《楚辭·天問》諸書中有關商代的記載，並非絕無根據的傳說(29)。有關甲骨文的研究，至羅振玉、王國維，才眞正進入和歷史文獻相結合的史料研究階段，成爲一門具有極高學術地位的專門之學，難怪在相當長的時期內，人們把甲骨文研究之學稱爲“羅、王之學”。

隨著甲骨文的廣泛流傳和深入研究，人們逐漸認識了甲骨文的重要學術價值，搜求甲骨文的學者越來越多，小屯農民爲了賣錢便到處亂挖，殷墟遺址和甲骨文本身都面臨毀滅的厄運。爲了挽救甲骨文和殷墟文化遺址，1928年的秋天，中央研究院歷史語言研究所建立伊始便立即派董作賓等人去河南安陽進行調查和試掘，開始了利用現代考古技術進行科學田野工作的殷墟發掘。

從1928年10月到1937年6月，中央研究院歷史語言研究所先後在殷墟進行了15次發掘工作。在這短短的十年間，除了1934年10月至1935年底的三次發掘工作因洹河北岸的侯家莊西北崗王陵區未見甲骨文出土外，其餘12次發掘全有甲骨文出土。尤其是1936年3月開始的第十三次發掘，僅在YH127坑一個灰坑中，就發現了17000多片，可以復原爲完整的和比較完整的龜甲300多版，創造了甲骨文發掘以來的奇跡。總十五次殷墟發掘，共出土有字甲骨文近30000片，是整個發掘工作中收獲最大的一項(30)。這些經過科學紀錄的甲骨文資料，先後著錄在《殷墟文字甲編》(31)和《殷墟文字乙編》(32)中，其中YH127坑出土的甲骨文資料經復原拼綴，著錄爲《殷墟文字丙編》一書(33)。

在殷墟發掘的間隙，河南博物館也於1929年10月和1930年2月在殷墟進行過兩次發掘，共發現有字甲骨3,650片，由關百益選拓800片，編爲《殷墟文字存眞》一書，孫海波也選拓出930片，編印出《甲骨文錄》一書(34)。

抗日戰爭爆發後，殷墟發掘工作被迫停止，但在1938年和1940年至1941年間，日本慶應義塾大學、東方文化研究所和東京帝國大學考古教室曾先後在安陽作過3次發掘(35)。

殷墟發掘工作對於甲骨文研究產生了巨大影響，尤其是一些參加殷墟發掘的學者由田野工作跨入甲骨文研究行列，給傳統的研究方式注入了新的生機，使甲骨文研究從原有的文字考釋和歷史考證階段進入到依靠現代科學方法和手段進行全面研究的新階段。在促成甲骨文研究這一根本性的變化的諸多因素中，董作賓所創立的分期斷代學說無疑是最重要的。

殷墟出土的甲骨文被學者發現後，雖在不太長的時間裡就被確認爲商代晚期的文化遺物；但是商代晚期自盤庚遷殷至帝辛滅亡共約273年，歷經八代十二王，甲骨文經歷這麼長時間的發展，顯然應有早晚或先後的不同。能否根據甲骨文的內在規律將它們分出不同時期或階段，已經成爲甲骨文研究進一步發展需要解決的重要課題。早在董作賓之前，雖有一些學者，例如王國維、羅振玉等人已試圖從商王世系和稱謂的角度，對於這一問題試作探討(36)，但眞正比較深入有系統的研究則是從事董作賓開始的。

1928年10月，董作賓在進行第一次殷墟發掘工作中，發現了三個不同區域出土的甲骨文字“各自成爲一組，各有特異之點”，受到啓發，便“時時刻刻在苦思冥索，要找出一個可以判別卜辭時代的方法”(37)。1929年12月第三次殷墟發掘中發現“大龜四版”後，董作賓據以撰寫了《大龜四版考釋》一文，提出了著名的“貞人說”(38)，使甲骨文分期斷代研究有可能鑿破鴻蒙，發生了根本變化。1933年，董作賓發表了十萬餘言的劃時代名篇《甲骨文斷代研究例》，在原來的基礎上系統提出了依據十項標準把全部甲骨文資料劃分爲五個時期的分期斷代理論。其十項標準爲：

一、世系，二、稱謂，三、貞人，四、坑位，五、方國，六、人物，七、事類，八、文法，九、字形，十、書體。

他所劃分的五個時期是：

第一期：武丁及其以前（盤庚、小辛、小乙、武丁，二世四王）；

第二期：祖庚、祖甲（一世二王）；

第三期：廩辛、康丁（一世二王）；

第四期：武乙、文丁（二世二王）；

第五期：帝乙、帝辛（二世二王）(39)。

董作賓所創立的這一分期斷代理論與方法，雖然還有需要補充和修正的地方，但基本上爲後來的甲骨文分期斷代研究建立了一個大體可以遵循的科學體系，直到今天仍然是討論甲骨文分期斷代問題的基礎。郭沫若在日本接到《甲骨文斷代研究例》的三校稿本以後，“驚佩其卓識”，認爲“如是有系統之綜合研究，實自甲骨文出土以來所未有”。極力讚賞“董氏之貢獻誠非淺鮮”(40)，應當說是頗爲中肯的。

郭沫若和甲骨文發生接觸是在由於政治原因東渡日本以後。他在1929年，運用歷史唯物主義觀點系統分析了包括甲骨文在內的古代歷史資料，撰寫了《中國古代社會研究》一書，其中《卜辭中之古代社會》一章，是以甲骨文資料爲主，專門討論商代社會的，曾在國內外引起較大反響。1931年，郭沫若又出版了專著《甲骨文字研究》，1933年又印行《古代銘刻匯考》，同時根據已出版的甲骨文著錄書和國內外私家收藏，精選分類編出《卜辭通纂》一書，書中並附詳盡考釋。1934年，郭沫若出版《古代銘刻匯考續編》一書，其中討論甲骨文的論文有三篇；1937年又從劉體智所藏甲骨文資料中精選拓印，編爲《殷契粹編》一書，並有考釋。從1929年到1937年，郭沫若在日本流亡生活中編寫出六、七種研究甲骨文的論著，在當時的學者中，成就是極其突出的。因此，學術界曾把他（號鼎堂）和羅振玉（號雪堂）、王國維（號觀堂）、董作賓（號彥堂）並稱爲甲骨文研究方面作出巨大貢獻的所謂“四堂”。

“四堂”之外，對於甲骨文研究用力最勤成就最大的，當推參加過殷墟發掘工作的胡厚宣師。胡厚宣師是一位以畢生精力從事甲骨文研究的學者。他曾親身參加過殷墟發掘，並親手整理過殷墟第一至九次發掘出土甲骨文資料的總集《殷墟文字甲編》的3000多片甲骨文，並作過釋文，而且參加了第十三次發掘出土的YH127坑出土甲骨文17,000多片的實物整理工作，因此，他能充分利用殷墟歷次出土的甲骨文資料，結合考古資料和文獻資料，對商代社會進行全面系統的研究。他在甲骨文研究的各個領域中均有建樹。例如，他曾先後解決了商代卜龜的來源，記事刻辭的類別與意義、商代的農業生產與氣象問題、商代的宗法與封建制度、商代的疾病狀況等一系列甲骨學與商代史的重要問題，有關“四方風名”的考證和“一甲十癸”的考辨更爲學者所稱道(41)。截至四十年代末，胡厚宣師先後發表和印行的甲骨學學術論著至少有54種之多，因此被中外學者譽爲繼羅振玉、王國維、董作賓、郭沫若之後對甲骨學作出巨大貢獻的一代宗師，日本學者則稱頌他是“中國甲骨學研究的第一人”(42)。

與此同時，還有不少學者也都發表出版了重要論著。例如，羅、王的弟子商承祚編印了《殷墟文字類編》，開創了將甲骨文依《說文解字》部首分門別類輯錄成類編爲專書的先例；後來他又考釋了《福氏所藏甲骨文字》和《殷契佚存》諸著錄書。又如，遼寧海城人于省吾於治理經學、小學之餘，專門研究甲骨文字的形義，先後印行了《雙劍誃 殷契駢枝》初集、二集、三集，其中不少論證頗有創獲。再如，浙江秀水人唐蘭，除了編印、考釋《天壤閣甲骨文存》外，先後撰寫了《殷墟文字記》、《殷墟文字研究》多種，並在《古文字學導論》一書中，對甲骨文的識讀、考釋理論與方法提出了系統的意見。另外，河南潢川人孫海波師輯錄諸家勝說，將已識和未識全部甲骨文單字摹寫編次，編印了一部比較完整的甲骨文字典《甲骨文編》；湖南醴陵人朱芳圃師，則先後出版《甲骨學文字編》和《甲骨學商史編》。此外，吳其昌著有《殷卜辭所見先公先王三續考》、丁山撰寫《中國古代宗教與神話考》，張政烺師作《奭字解》，陳邦福著《殷契辨疑》，胡光煒作《甲骨文例》，周傳儒著《甲骨文字與殷商制度》，陳直著《殷契賸義》，徐中舒作《耒耜考》，余永梁著《殷墟文字考》等。這些著作不僅內容豐富，而且見解新穎，影響廣泛，在甲骨學發展史上都曾產生過積極的影響和作用。

總之，從1928年殷墟發掘開始到四十年代末，據胡厚宣先生的統計，從事甲骨文研究的中外學者已近300人，著錄和刊布甲骨文資料40,000多片，共發表、出版各類有關甲骨學與商代歷史文化研究論文和著作800多種，取得了相當可觀的成就。

二

五十年代以來，甲骨文的發現與研究較前都有長足的進步，尤其是最近十數年間，甲骨學在各個領域都取得令人矚目的成就，並在一些重大問題上醞釀著突破。

1950年春，停頓了十數年的殷墟發掘恢復後，即在小屯村西的四盤磨村西地SPH探坑離地三米的SPH小坑內，發現了一塊橫刻著三行包括有由數字組成的文字的卜骨(44)。這些由數字組成的文字曾被學者稱爲甲骨文中的異形文字，經張政烺師研究爲筮卦名(45)。四盤磨西地甲骨文的發現，使人們對殷墟甲骨文出土範圍的認識更爲開闊，發現以往認爲只有小屯村及其周圍才出甲骨文的看法是並不妥當的。這一認識在隨後的發掘中曾經再次得到證實。例如，1958年至1959年的殷墟發掘中，在小屯村東北洹河對岸的大司空村即又發現兩塊帶字卜骨，其中一片是在灰坑H114中發現的，是一塊整治粗糙、臼角未經切除的卜骨，其正面刻有“辛貞在衣”四字，另一片則刻有“文貞”二字(46)。

在小屯村及其周圍，也陸續出土有新的甲骨文資料。例如，1955年秋，考古工作者曾在小屯村的灰坑H1中，發現一片刻有“丁卯。癸亥卜，王其入商，叀乙丑王弗每？弘吉”的牛胛骨(47)。1971年12月，小屯村西1號探溝也發現21塊完整的卜骨，其中有10塊刻有文字(48)。關於這批甲骨文的時代問題，學者間曾經有過較大爭論，在甲骨文分期斷代研究方面具有一定的學術價值(49)。

五十年代以來，考古工作者已在殷墟進行了 20多次發掘，目前仍在繼續進行。其中，對於甲骨文研究最有意義的是1973年小屯南地發掘中發現的一批甲骨文共4,829片，所刻內容極其豐富，幾乎廣泛涉及到祭祀、天象、田獵、戰爭、農業生產、王事活動的各方面，是研究商代社會歷史文化又一批彌足珍貴的重要史料。小屯南地發現的這批甲骨，除一小部分爲董作賓所劃定的第一期和第五期卜辭外，其中尤以第四期武乙時代卜辭爲多，康丁、文丁時期的卜辭也佔相當大的比例。董作賓原來劃定的三、四期卜辭，在學者間引起爭論最多，這批甲骨由於絕大多數都有可靠地層關係，並且大多都有陶器共出，因而對於進一步深入研究甲骨文的分期斷代問題具有極高的學術價値。這批珍貴的甲骨文資料，經過整理，全部著錄公布在《小屯南地甲骨》一書中(50)。

1991年9月殷墟花園莊東100餘米處的一個灰坑中又出土一批甲骨，從已清理的三分之二部分中已取出卜用甲骨856片，其中刻有甲骨文的有170片，刻有甲骨卜

辭的完整龜甲即有90多版，其時代爲一期，是繼1973年小屯南地甲骨發現之後的又一重大發現(51)。

五十年代以來，傳世的甲骨文藏品多被博物館、圖書館、高等學校和研究單位陸續徵集、購藏起來。例如，早期出土後歸劉鶚、羅振玉和哈同夫人所藏的甲骨文，幾經輾轉，最後都收歸上海博物館、浙江博物館、山東博物館、旅順博物館、遼寧省博物館、吉林省博物館、北京圖書館、吉林大學、東北師範大學、故宮博物館和南京大學等單位(52)。上海的大收藏家劉體智將自己珍藏多年的28,000多片甲骨文藏品捐贈文化部，後轉歸北京圖書館收藏。最早的甲骨文收藏家王襄，也將自己五十多年搜集到的藏品捐獻給天津文化局，現歸天津歷史博物館。目前，國內的甲骨文傳世藏品，除了極少數尚在私人手中外，絕大多數均已收歸到九十多個博物館、圖書館、高等學校和研究單位(53)。這不僅使過去零散的珍貴文物相對集中起來，得到妥善保管，同時給研究人員從事研究帶來極大的方便。

在甲骨文資料的調查、搜集和著錄、公布方面，貢獻最大的是胡厚宣師。他自1951年起陸續編集出版了《戰後寧滬新獲甲骨集》、《戰後南北所見甲骨錄》（上、下）、《戰後京津所獲甲骨集》、《甲骨續存》（上、下）等甲骨文著錄書，將他在抗日戰爭結束後所搜集到的重要甲骨資料和當時他所能接觸到的公私藏品全部公諸於世，總共著錄了13,814片，約占國內外全部甲骨文現存藏品的十分之一弱，其中大部分都是第一次著錄的新資料。在著錄體例上，胡厚宣師也突破了以往已出版的各類著錄書的局限，採用了分期分類的編排方法。他把董作賓五期分法中的三、四期合爲一期，能分則分，不能細分則合，把全部甲骨文材料分成四期，然後在每期甲骨材料中再依內容性質分爲若干門類。甲骨材料經他這樣編排後，不僅眉目清晰，而且科學性極强，因而獲得學術界的一致好評，國外不少學者在編纂甲骨文著錄書時，紛紛仿效這一體例。

除了胡厚宣師外，還有一些學者也都先後編印了一些甲骨文著錄專書。其中比較重要的有：郭若愚的《殷契拾綴》（1951年）、《殷契拾綴二編》（1953年）、董作賓和嚴一萍合編的《殷虛文字外編》（1956年）、饒宗頤的《日本所見甲骨錄》（1956年）、《巴黎所見甲骨錄》（1956年）、《海外甲骨錄遺》（1957－1958年）、貝塚茂樹的《京都大學人文科學研究所藏甲骨文字》（1959年）、許進雄的《明義士收藏甲骨文集》、《殷墟卜辭後編》（1972年）、周鴻翔的《美國所藏甲骨錄》（1976年）、渡道兼庸的《東洋文庫所藏甲骨文字》（1979年）、許進雄的《懷特氏等收藏甲骨文集》（1979年）、松丸道雄的《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》（1983年），雷煥章的《法國所藏甲骨錄》（1985年）、《德瑞荷比所藏一些甲骨錄》（1997年）和李學勤、齊文心、艾蘭合編的《英國所藏甲骨集》（1986年）。

尤其值得注意的是，1978年以來，由郭沫若任編委會主任，胡厚宣主持編輯工作、中國社會科學院歷史研究所先秦史研究室研究人員參加編輯的大型甲骨文著錄書《甲骨文合集》編訖陸續出版，《甲骨文合集》前後編集20年，編輯人員先後走訪40個城市，對95個收藏單位和44個私人收藏家的90,000多片甲骨進行鑒別，精選和拓印，然後匯合八十多年來海內外公私藏家手中的甲骨文傳世拓本、照片和摹本，進行系統的選片、辨僞、去重、綴合和分期、分類工作，匯爲一書，總共著錄甲骨文精品41,956片，系由國內外現藏150,000餘片甲骨中精選出來，“凡甲骨刻辭完全和比較完全的文句（包括省略句）以及辭句雖有殘缺而內容較爲少見者，一律選錄”(54)，凡是具有一定學術價值的甲骨文資料，大體上已被收錄。至1982年12月13日十三冊圖版全部出齊，使學術界有了一部可資利用的集大成的甲骨文資料總集。它的出版，既是八十多年來甲骨文資料的系統總結，也是甲骨文研究開始向更高水平發展的重要基礎，在整個甲骨學發展史上是一座重要的里程碑。

1980年，中國社會科學院考古研究所又將1973年小屯南地出土的全部甲骨文資料整理編爲《小屯南地甲骨》一書正式出版，成爲繼《殷墟文字甲編》和《殷墟文字乙編》之後又一部經過科學發掘甲骨文的大型資料書。《小屯南地甲骨》所收資料全部來自科學發掘，不僅材料豐富，而且在編排上完全按照原有坑位地層關係系統編排，並在每片編號後都注明坑位和地層，爲學者們結合考古學資料更科學地研究甲骨學的有關問題提供了極大的方便。

總之，《甲骨文合集》和《小屯南地甲骨》兩書出版後，配上《英國所藏甲骨集》《懷特氏等收藏甲骨文集》和《東京大學東洋文化研究所藏甲骨文字》等書，現有的甲骨文資料已經大體齊備，使學者不再爲搜求材料而感到困惑了。

五十年代以來，有相當數量的甲骨學者致力於甲骨文綴合是甲骨文研究的基礎性工作之一，一些散在各處的甲骨文殘片一經綴合在一起，辭義豁然開朗，每每會有重大發現。例如，王國維於1917年由於綴合了《戩》1.10與《後》上8.14，遂發現卜辭中上甲至示癸的世次與《史記·殷本紀》所記不合，訂正了《史記》之誤(55)。1937年郭沫若在《殷契粹編》中復又綴合三片甲骨,進一步證實王說確定不移(56)。因此，學者對於甲骨文的綴合工作極爲重視。例如，郭沫若在其《卜辭通纂》中綴合30多片，在其《古代銘刻匯考》一書中綴合斷片八例。此外曾毅公於1939年出版了《甲骨綴存》專書，刊出綴合甲骨文75片，1945年董作賓在其名著《殷曆譜》中也曾綴合多片甲骨。

大規模的甲骨文綴合工作是五十年代以後開始的。1950年，曾毅公出版《甲骨綴合編》，收錄綴合甲骨文資料496片，廣泛取材於《鐵》、《前》、《菁》、《龜》、《簠》、《戩》、《通》、《甲》等已出版的30多種著錄書，是他多年辛勤工作的結晶。

《殷墟文字甲編》和《殷墟文字乙編》所著錄的甲骨文資料，雖然都是殷墟發掘所得，但它們出土之後屢經周折，尤其是抗日戰爭爆發後輾轉搬運，其中多數原來比較完整的甲骨都已破碎成爲失掉原來聯繫的碎片，給研究工作帶來極大困難。爲了使這些失去聯繫的碎片重新會合，郭若愚曾經精心拼接，綴合出324片。隨後，曾毅公、李學勤又在這一基礎上進一步拼合，增加了158片，並於1955年匯合三家綴合結果，印爲《殷墟文字綴合》一書，收錄綴合甲骨482片(57)。

另一位對甲骨文綴合工作做出巨大貢獻的學者是張秉權，他用了二十多年的時間和全副精力，利用台灣中央研究院歷史語言研究所藏YH127坑出土甲骨文資料進行拼接綴合，復原出較完整的和較大的龜甲300多片，並對每片內容詳加考釋，編爲《殷墟文字丙編》於1957年至1972年在台灣印刷出版(58)。台灣的另一位著名學者屈萬里則對《殷墟文字甲編》進行了進一步拼接綴合工作。他除了糾正《殷墟文字綴合》中誤拼的一些錯誤外，又新綴合了106片甲骨。這些成果都收錄在他於1961年出版的《殷墟文字甲編考釋》一書中(59)。原在台灣後旅居美國的嚴一萍也於1975年編印《甲骨綴合新編》一書，全書共十冊，總共收錄已綴合的甲骨文資料700多片(60)。其中，專有一冊《甲骨綴合訂僞》，專門訂正前人誤拼錯綴的甲骨文資料。此外，他又於1976年編印了《甲骨綴合新編補》(61)。

在甲骨文資料綴合方面成就最大的當推《甲骨文合集》，這項工作主要是桂瓊英做出的，根據胡厚宣師的統計，《甲骨文合集》一書“總計拼合不下兩千餘片，單《殷墟文字》甲、乙兩編，就拼合了一千版以上”(62)。

值得注意的是，甲骨文綴合工作近年又有異軍突起，這就是利用電子計算機進行綴合甲骨碎片的試驗。隨著電子計算機進入到現代社會中來，1973年國外開始有人嘗試利用電子計算機對甲骨碎片進行拼合。1974年中國學者也開始進行這方面的試驗。根據童恩正等人的報告，他們對殷墟第三次發掘中大連坑出的263片與殷墟第四次發掘中E16坑中出土的154片甲骨按時代、字跡、骨版、碎片、卜辭、邊緣等特徵譯寫數據，編定程序，進行自動綴合試驗，其成功率雖僅達40%左右(63)，但它畢竟開創了將現代技術應用於甲骨文研究的先例，是甲骨文研究通向現代化的可喜先聲。

辨僞工作也是甲骨文研究的基礎工作之一。甲骨文被發現後，隨著學者的積極購藏和廣泛流傳，其價值日漸昂貴。商人爲牟利，便請人刻製假的甲骨文以冒充眞品，經過轉售而廣泛流傳。甲骨文的僞品種類繁多，有的是甲骨本身及其上面的文字全僞，明義士早年收買的甲骨文就有這樣的僞品，不少都是用新鮮牛骨泡製後刻上文字的假貨。還有以殷墟出土的無字甲骨刻上假字，或用眞的甲骨文爲底本進行僞刻仿造，或在甲骨上眞的甲骨文字數較少者旁邊加刻一些假的甲骨文。過去安陽城內有一位藍葆光，就是專爲古董商刻製甲骨文僞品的能手(64)，他所刻製的僞品曾欺騙過不少學者。前不久，我在倫敦大學和劍橋大學兩地講學時，就曾在大英博物館、大英圖書館和劍橋大學圖書館所藏庫壽齡、方法斂早年藏品中看到不少這樣的僞品。這些甲骨文僞品曾經混入過不少甲骨文著錄書中，例如：《鐵雲藏龜》(65)、《龜甲獸骨文字》(66)、《鄴中片羽初集》(67)等書中均不乏僞片。

收錄僞片最多的是《庫方二氏所藏甲骨卜辭》一書，郭沫若、胡光煒、董作賓、陳夢家、容庚等都曾先後對其中的僞刻部分有所辨正。其中，學者間意見分歧最大的是其中的第1056片，即著名的“兒氏家譜”。雖然從1930年到1947年，經過18年的論辯，大多數學者已經論定其爲僞片(68)，但至五十年代中期，仍有學者論證其非僞作。例如，陳夢家依據該片舊拓本和《契》209、《乙》4856等片爲證，論定此片不僞(69)。李學勤也認爲此片不僞，並把它與《契》209並列爲武丁時代契刻的家譜(70)。于省吾也以此片爲眞品，也認爲確爲“商代的世系譜牒”(71)。胡厚宣師則力排眾議，論定此片必爲僞品(72)，齊文心在整理英國所藏甲骨時，也就目驗所得印象和該片的疑點指出其爲僞品(73)。我在倫敦時承大英博物館東方部主任羅森夫人（Mrs. Jessica Rawson）和大英圖書館的伍德女士（Ms. Francis Wood）惠予方便，將陳放在大英博物館中的《庫》1506和大英圖書館所藏與之相關的全部甲骨文資料調出，一一詳細觀察比較，在劍橋大學講學時又蒙倫敦大學的艾蘭教授（Prof Sarah Allan）陪同、承劍橋大學圖書館遠東部中文藏書主任艾超世先生（Mr. Charles Aylmer）惠予方便，仔細觀察了該館藏品。經過觀察與比較，我也認爲此片必爲僞品無疑。此外，胡厚宣師還曾重新論定臨淄孫文瀾氏舊藏全部不但不是僞品，而且多爲精品(74)。王宇信也對已發表的部分西德、瑞士所藏甲骨文資料的眞僞問題進行考辨(75)。上述這些辨僞工作，對於有效地利用甲骨文資料無疑都是具有重要意義的。

在甲骨文字考釋方面，五十年代以來取得一系列可喜成就。一些學者先後出版了一些甲骨文字考釋專著。例如，楊樹達曾於1954年出版過《積微居甲文說・卜辭瑣記》、《耐林廎甲文說・卜辭求義》兩書;朱芳圃師於1966年出版了《殷周文字釋叢》一書，收錄了他在甲骨文考釋方面的不少成果。于省吾於1980年則將其歷年來已發表和未發表的有關甲骨文考釋成果匯爲一編，印爲《甲骨文字釋林》一書。還有不少學者爲了深入探討卜辭內容，更好地發揮甲骨文資料的珍貴史料價值，在甲骨文考釋方面，發表大量論文。在甲骨文資料證史、補史方面，胡厚宣師成就卓著，連續發表了《殷代農作施肥說》(76)、《釋殷代求年于四方和四方風的祭祀》(77)、《說貴田》(78)、《殷卜辭中的上帝和王帝》（上）、（下）(79)、《殷代農作施肥說補證》(80)、《甲骨文商族鳥圖騰的遺跡》(81)、《殷代的蠶桑和絲織》(82)、《殷代的刖刑》(83)、《甲骨文所見殷代奴隸的反壓迫鬪爭》(84)、《甲骨文所見商族鳥圖騰的新證據》(85)、《說我王》(86)、《殷代的冰雹》(87)、《再論殷代農作施肥的問題》(88)、《重論“余一人”問題》(89)、《論殷人治療疾病之方法》(90)、《殷代的史爲武官說》(91)等一系列重要論文。此外，丁山在商代的氏族制度、宗教與神話傳說方面(92)，于省吾在商代社會性質、農業墾植和驛傳交通方面(93)，李學勤、陳夢家對商代歷史地理方面(94)，張政烺在商代氏族組織和農田開墾方面(95)，裘錫圭在商代刑法、宗法制度和職官方面(96)，林澐在商代冶鑄和多子族方面(97)、董作賓、趙卻民、張培瑜、嚴一萍、吉德煒（David N. Keightley）、范毓周在商代的月食方面(98)，王宇信對商代的馬政(99)、齊文心在商代的監獄和封國君長稱謂方面(100)、宋鎭豪在商代的計時制度方面(101)、常玉芝對於祭祀制度(102)林小安、范毓周對於商代軍事史(103)晁福林對於商王名號(104)、鄭慧生在商代貴婦社會地位方面(105)等均發表了一系列研究文章(106)。這些論文都是根據甲骨文資料所作的探討和研究的成果，均在一定程度上補充、訂正了文獻記載的缺憾和訛誤，爲商史研究提供了可靠的結論和意見。

五十年代以來，還相繼湧現出一批試圖對甲骨文研究做出總結、進行綜述和介紹性質的著作。例如，胡厚宣先後編印了《五十年甲骨論著目》、《五十年甲骨文發現的總結》兩書；1956年陳夢家用了兩年多的時間撰寫了《殷墟卜辭綜述》出版；1978年嚴一萍編印了《甲骨學》；與此同時，美國伯克萊加州大學的吉德煒於1978年出版了英文的《商史史料一中國青銅時代的甲骨文刻辭》；1979年王宇信出版了《建國以來甲骨文研究》；1980年孟世凱出版了《殷墟甲骨文簡述》；1985年吳浩坤、潘悠出版了《中國甲骨學史》，1986年范毓周出版了《甲骨文》。這些綜述和介紹性的書籍的出版，對於普及甲骨文知識、推動甲骨文研究，都曾起到了推動作用。

甲骨文分期斷代研究，是五十年代以來，尤其是最近數十年來取得成就最大的一個領域。早在五十年代初期，陳夢家就曾連續發表《甲骨斷代學（甲篇）》(108)、《甲骨斷代與坑位一甲骨斷代學（丁篇）》(109)《殷代卜人篇一甲骨斷代學（丙篇）》(110)和《商王廟號考一甲骨斷代學（乙篇）》(111)等一系列論文。李學勤於1958年發表《帝乙時代的非王卜辭》(112)，首次提出“非王卜辭”的概念，並對這類卜辭的時代問題提出新的斷代意見。與此同時，日本學者貝塚茂樹、伊藤道治對董作賓、陳夢家等人的分期斷代學說進行了詳盡的考察與討論(113)。另有日本學者島邦男則對董作賓的貞人斷代說進行了系統的驗證研究，提出了一系列補充與修改意見(114)。香港學者饒宗頤，也對貞人問題進行了全面研究，出版了《殷代貞卜人物通考》一書(115)。七十年代初期，加拿大的華裔學者許進雄，從鑽鑿形態角度研究甲骨文斷代理論，發表《鑽鑿對卜辭斷代的重要性》(116)並出版《甲骨上的鑽鑿形態》一書。1973年小屯南地甲骨出土後，學者們又對　組、午組、歷組等卜辭進行了斷代研究，蕭楠(117)、李學勤(118)、裘錫圭(119)、林澐(120)、張永山、羅琨(121)、謝濟(122)等人先後展開了討論。尤其是關於歷組卜辭時代的爭論，李學勤提出這類卜辭應爲武丁晚期至祖庚時期的甲骨文後，經過裘錫圭、林沄等人的進一步論證，已經成爲一種令人信服的學說。雖然目前學術界對於這些問題看法尙不完全一致，但總的來講，已衝破了傳統觀點，使甲骨文分期斷代研究進入了一個嶄新的發展階段。

近些年國際漢學界對于甲骨文命辭的性質展開了討論。1984年，中美兩國學者在安陽殷墟筆會就此展開爭論，胡厚宣、李學勤、裘錫圭、范毓周等中國學者與美國學者吉德煒（David N. Keightley）夏含夷（Edward L. Shaughnessy）等各執一說，未能獲得一致認識，後來又在美國漢學雜誌EarlyChina上展開筆談，范毓周、饒宗頤、吉德煒、雷煥章（Jean A. Lefeuvre），李學勤、夏含夷、王宇信等就裘錫圭和倪德衛（David Nairison）的文章展開討論，將這一問題的對流推向深入(123)。

三

除了殷墟之外，五十年代以來，中國境內的不少地方還曾發現過一些商代和西周時期的甲骨文。這些新的發現開闊了人們的視野，豐富了學者們對於甲骨文的認識。

河南鄭州的二里崗，是一處商代中期的文化遺址，其時代早於殷墟文化並與之相銜接。1952年秋天，中國科學院考古研究所興辦的考古訓練班在當地發掘時曾發現卜用獸骨375片・卜用龜甲11片，但均無文字。隨後河南文物工作隊在這處遺址發現了3片帶字甲骨。其中一片牛肋骨上刻有練習契刻的十個字，是1953年4月在被翻動的地面上發現的，文字與殷墟出土的甲骨文大體相似，可能和殷墟甲骨文屬於同一時期。另外一片是1953年9月在CIT30探溝內發現的，爲一片呈扁圓狀的牛肱骨骨片，出土於離地面大約半米左右的地層中。其一面平底，一面凸，凸起的一面刻有一個“㞢”字，第3片是1954年4月發掘時發現的，上面也刻有一字(124)。

1954年，山西洪趙縣坊堆村的周代遺址中也發現了有字甲骨，人們開始認識到甲骨文並不限於商代。洪趙坊堆發現的有字甲骨僅1片骨的背面臼部被削去三分之一，靠近臼處有鑽窩16個，呈不規則排列數行，其正面相當於背面鑽窩處有經過灼燒後顯出的卜兆，兆旁刻有八個文字。對於這片卜骨的時代，學者間曾有不同看法，現在一般認爲應屬西周初期(125)。

繼上述發現後不久，1956年1月，陝西文管會又在西周京畿腹地的長安豐鎬遺址範圍內的張家坡，發現了西周的有字甲骨。這一塊肩甲骨的柄部，背面靠邊處有三個鑽窩，鑽窩有極細的鑿孔，正面相當於鑽鑿處均有卜兆，卜兆附近刻有極細的兩行文字，一豎行，一橫行。隨後又在同一地區發現一塊獸類肢骨，其上部相當於鑽孔的正面，也刻也字劃極細的文字。據統計，陝西長安張家坡遺址先後共發現3片有字甲骨，共刻有30字(126)。

1975年，北京昌平白浮村周初燕國墓地也出土了兩批甲骨。其中一批出土於十座墓葬的人骨左上方，共10片，全是卜甲碎片，有腹甲也有背甲。其中刻有文字的共2片，分別刻有“貞”、“不止”等字。另一批出土於一座墓葬的椁室右側中部，約100多片，均爲卜甲殘片、腹甲、背甲兼有；其中刻有文字的共3片，一片刻有“其祀”二字，一片刻有“其尙上下韋馭”等字・另一片刻有“史告”等字。這一遺址共出土有字甲骨5片，共有13個字(127)。

以上幾處周代甲骨的發現，使人們對於甲骨文的認識大爲改觀。人們看到，不僅在西周的京畿地區有甲骨文出土，而且在晉、燕等封國也有甲骨文發現。能否發現更多的甲骨文？1977年春天，陝西周原的考古工作對此作了肯定的回答。考古工作者在陝西岐山鳳雛西周宮殿建築基礎進行發掘時，在其西廂房2號房基內的窖穴H11和H31內發現卜用甲骨17,275片，其中卜骨16,371片，卜甲678片，經過清洗整理後，共發現有字甲骨289片，總共刻有903字，其中合文字共12個(128)。

周原的這批甲骨發現後，很快就引起學者的注意和重視，有關周原甲骨的討論和研究從各個角度迅速展開。徐錫台曾就這批甲骨文中出現的人名、官名、方國名、地名和時代問題提出看法(129)；李學勤、王宇信也對其時代和有關文字問題進行了研究(130)；范毓周則結合殷墟甲骨文和文獻資料對滅商以前商、周之間的關係進行了探討(131)；王玉哲對其來源問題作了討論和研究(132)。與此同時，一些外國學者也先後撰文參加了討論。例如，吉德煒（Davia N. Keightley）(133)夏含夷（Edward L. Shanghnessy）(134)等人也都發表了專門研究的文章。美國漢學雜志《古代中國》（Farly China）還專門邀請吉德煒、夏含夷、李學勤、王宇信、范毓周等人就周原甲骨文研究中的有關問題展開了討論(135)。此外，台灣的嚴一萍也對周原甲骨進行了探討(136)。

正當岐山鳳雛村出土的周原甲骨引起人們極大興趣的時候，周原的另一處遺址扶風齊家村，也於1979年9月發現和采集到卜用甲骨22片，其中有字甲骨6片，共刻文字102字。尤爲重要的是，這裡出土的一塊較爲完整的龜腹甲，僅缺甲尾和甲橋部分，背面有方形齒孔35個，正面刻有卜辭4條23字，均在卜兆附近(137)。這片龜腹甲的發現，彌補了過去由於出土的有字龜甲一般均很碎小，對其特徵的觀察受較大局限的不足，同時也開闊了人們對於周原甲骨原有面貌的認識。

總之，五十年代以來，在殷墟以外，各地相繼發現了許多重要的甲骨文新資料，共發現有字甲骨307片，共有甲骨文1,080字。這些甲骨文的發現不僅爲商周歷史的研究增添了新的可信史料，而且還促進甲骨學產生了一個以周原甲骨爲中心的西周甲骨文研究的重要分支領域。

四

甲骨文研究，如從1899年學者最初發現和鑒定算起，迄今已經九十多年了。在這九十多年間，由於中外學者分途並進、共同努力，甲骨文研究在各個分支領域中均已取得豐碩的成果。從甲骨文研究爲其研究對象的甲骨學，已經成爲當代考古學和中國古文字學中一個發展較快的重要分支，逐步形成一個比較成熟的獨立學科。根據甲骨學近年來的發展趨勢，可以預見，甲骨文研究的未來發展前途是非常廣闊的。

根據目前不完全統計，殷墟歷年出土現收藏於公私機關、個人的甲骨文資料，至少約在150000片以上，各種書刊著錄甲骨文的專書和論著已達180種以上，中外

學者中先後從事於甲骨文研究的有400多人，共發表和出版有關甲骨文資料和研究文獻5000餘種（篇），既代表著甲骨文研究已經取得的巨大成就，同時也給甲骨學的進一步發展提出一系列新的問題和任務。

首先，從甲骨文的資料整理方面來看，隨著《甲骨文合集》和《小屯南地甲骨》等重要甲骨文資料書的出版，我們所能見到的甲骨文資料的範圍將大大超越前人。如何充分利用這樣豐富的資料，是每個從事甲骨研究的學者都在考慮的問題。目前，不少學者都已感到需要在已公布的甲骨文資料的基礎之上，再做進一步全面徹底的系統整理工作。尤其是在整理中需要按照材料中的內在聯繫，將甲骨文資料進行系統的、有規律的編排，從中找出一些內在規律，這對於深入研究甲骨文本身的一些問題，將會產生不可估量的作用與影響。與此同時，還應編纂一部便於檢索的甲骨文類典。在這方面，雖然過去已有日本學者島邦男編纂過《殷墟卜辭綜類》一書，但已遠遠趕不上甲骨文研究工作的需要。新編的這種工具書應當具有類典的性質，無論從材料的取用範圍，還是從使用的方便上，都應超過島邦男的《殷墟卜辭綜類》。只有這樣，才能起到促進甲骨文研究進一步發展的作用。令人可喜的是，由蕭丁、姚孝遂主編的《殷墟甲骨刻辭類纂》已由中華書局於1989年出版(138)，所收資料基本涵蓋了《合集》、《屯南》、《懷特》、『英藏》等主要甲骨文資料書，使用較爲方便。可以相信，它的出版對甲骨文研究將會產生積極的推動作用。

其次，安陽殷墟還需要進一步進行帶有明確科學目的的發掘工作。同時，考古工作者還需要結合自己有的資料，把凡是經過科學發掘的甲骨文，依照出土坑位和共存文化遺物，整理爲成套的科學資料，以便海內外甲骨學者和考古學者共同合作，把目前的甲骨文研究提高到一個更高的水平上來。

甲骨文本身的通讀方面，識字問題仍然是需要學者再作努力的重要研究領域。九十多年來，甲骨文考釋工作雖已取得巨大成就，但就目前情況來看，在甲骨文出現的近4000個字中，可以識讀者不過1500多個，其中眞正比較可靠的還不足1000個。這種情況顯然表明，甲骨文的文字識讀仍是比較薄弱的環節，甲骨文中還有大量未獲解讀的文字有待於學者們運用更加科學的方法進一步研究。爲了有助於吸收前人考釋文字的學術成果，李孝定曾經編纂過《甲骨文字集釋》一書(139)，近來吉林大學一批學者也在編纂一部大型工具書《甲骨文字考釋類編》。這些工具書的編集，對於今後甲骨文文字考釋工作的進一步發展，將會起到積極的推動作用。

甲骨文的分期斷代問題，一直是甲骨學的一個比較重要的領域。近年來這一領域中的討論日漸深入，許多學者先後對“非王卜辭”和“歷組卜辭”等問題進行了充分研究，得出了可喜的新結論。對董作賓原定爲一期的卜辭，近年也有學者在作進一步分期的研究(140)。此外，不少學者都在試圖從以貞人爲分期斷代主要標準的傳統看法之外，尋求解決分期斷代的新手段和新途徑。這些研究目前都還處於方興未艾的階段，今後肯定會有新的重要突破出現(141)。在關於殷墟出土甲骨文的上、下限問題上，也有學者在試圖找出線索。學者們普遍感到，今後有必要進一步加强以上各個方面的研究，同時還需要在前人研究的基礎上，對甲骨文分期斷代理論進行系統的通盤整理，撰寫出更高水平的甲骨文分期斷代研究專著。這是今後甲骨文研究進一步發展必須解決的重要課題。

在利用甲骨文資料研究商代歷史文化方面，也有許多需要解決的問題。例如，過去雖然已有很多學者對商代晚期的社會性質、階級關係，國家結構、土地制度等問題作過研究和討論，但所得結論目前還有不少問題，遠遠還不能被視爲定論。此外，商代晚期的對外戰爭和軍事制度，以及與之相關的商代疆域、歷史地理等方面，目前的研究也還不夠充分，還需要進一步加强。

在有關商代的科技文化等方面，必有許多重要課題需要進一步深入研究。例如，甲骨文中有關日、月食的紀錄，雖已有不少人進行過研究，但隨著甲骨文研究水平的提高和天文計算工作的進步，還需進一步討論和推定。又如，甲骨文中的“日又戠”紀錄，究竟是指日食而言，還是關於太陽黑子活動的記載，也是有待於再作許多問題探討、需要解決，諸如置閏、合朔、月建、兩分兩至的有無等，都需要學者再作進一步探討。

古代氣候變遷，一直是學術界十分關心的問題，商代晚期中國黃河流域的氣候狀況是研究這一問題的重要內容。早在三十多年前，甲骨學者雖曾就此問題發表過一系列文章，曾經得出一些重要結論。但在最近一段時間內，有關這一方面的研究比較冷寂，今後也有必要進一步加强。

甲骨文中有關農業生產活動和農作物栽培技術的記載，是非常豐富的。過去在這方面已有不少重要研究成果，今後有必要作全面的綜合研究，寫出有一定水平的專著。此外，關於商代的酒類釀造、蠶桑紡織、醫藥衛生、動物與植物利用等方面的研究，也有待於進一步展開。

在利用現代化手段推進甲骨文研究方面，1987年12月，由范毓周設計並主持完成的“計算機甲骨文信息處理系統”研製成功並通過專家鑒定(142)，爲甲骨文研究的計算機處理化提供了基本工具。今後還需要在此基礎上需要開發一條列應用軟體，把有關這一方面的工作推進到一個更高水平的發展階段。

總之，甲骨文研究有著極爲廣闊的發展前景，有一系列的重要課題有待學者進一步開掘研究與探討。可以預期，隨著甲骨文研究在各個分支領域不斷取得重要成就和大突破，甲骨文研究必將會有一個飛躍性的發展。甲骨學作爲一門舉世矚目的國際性學科，必將吸引更多的中外學者投身到它的各個領域的研究中來，在不久的未來會有更加長足的進步。

〔附記〕

這篇舊稿寫於數年前，1995年12月應江蘇省甲骨文學會之邀作爲成立學會會議報告文件付印，現再應甲骨文學會王理事長學勤先生之邀，在該學會甲骨文論文集中發表。由於時間匆促，許多新的內容未及補入，有關科技和甲骨文書法、篆刻藝術方面的情況和台灣學者的研究進展均暫付闕如。凡此，且俟以後有機會時再作增補。對於王理事長的盛情相邀表示由衷的謝忱。

1997年 7 月作者於南京大學寓所

附　　註

＊這篇論文是筆者1988年赴英、美、法、德、比利時、荷蘭等國講學時的講稿之一，係在1984年在河南大學歷史系爲研究生和青年教師授課的講稿基礎上精簡而成。今據1988年5月20日筆者在西德海德堡大學（Universtat Heidelberg）爲西德全國漢學家所作報告整理寫定並作相應增訂。原報告標題爲："The Research of Oracle-Bone Inscriptions: Its Development in the Past, at Present and in the Future"。

(1)王國維：《最近二三十年中國新發現之學問》，《學衡》第四十五期，1925年。
(2)載《鐵雲藏龜》，抱殘守缺齋石印，1903年。
(3)董作賓：《甲骨年表》，《歷史語言研究所集刊》二本三分，1930年。
(4)胡厚宣：《五十年甲骨文發現的總結》，頁20－35，商務印書館，1951年。
　又《殷墟發掘》，頁11－13，學習生活出版社，1955年。
(5)陳夢家：《殷墟卜辭綜述》，頁1－3，科學出版社，1956年。
(6)王　襄：《簠室殷契》，《歷史教學》，1982年，第9期。
(7)王翁如：《＜簠室殷契＞跋》，《歷史教學》，1982年，第9期，
　又李先登：《也談甲骨文的發現》，《光明日報》1983年11月15日。
(8)王　襄：《題所錄貞卜文冊》，《河北博物院期刊》第32、33期，1933年。
(9)王　襄：《題易穭園殷契拓冊》，《河北博物院半月刊》，第85期，1935年。
(10)董作賓：《甲骨年表》，《歷史語言研究所集刊》二本二分，1930年。
(11)汐　翁：《龜甲文》，《華北日報華北畫刊》，第89期，1931年。
(12)(13)陳夢家：《殷墟卜辭綜述》，頁651，647，科學出版社1956年。
(14)劉　鶚：《鐵雲藏龜》自序，抱殘守缺齋石印，1913年。
(15)羅振玉：《＜鐵雲藏龜＞序》。
(16)胡厚宣：《五十年甲骨文發現的總結》，頁20－22，商務印書館，1951年。
　又：《殷墟發掘》，頁14－15，學習生活出版社，1955年。
(17)王　襄：《題易穭園殷契拓冊》，《河北博物院半月刊》第85期，1935年。
(18)王　襄：《簠室殷契》，《歷史教學》1982年第9期。
(19)胡厚宣：《五十年甲骨文發現的總結》，頁24－26，商務印書館，1951年。
　又《殷墟發掘》，頁26－31，學習生活出版社，1955年。
(20)胡厚宣：《殷墟發掘》，頁36，學習生活出版社，1955年。

(21)(22)胡厚宣：《蘇德美日所見甲骨集》，頁19，四川辭書出版社，1988年。

(23)胡厚宣：《蘇德美日所見甲骨集》，頁19，四川辭書出版社，1988年。

(24)(25)胡厚宣：《殷墟發掘》，頁26－36，學習生活出版社，1955年。

(26)胡厚宣：《殷墟發掘》，頁36－37，學習生活出版社，1955年。

(27)胡厚宣：《殷墟發掘》，頁37－41，學習生活出版社，1955年。

(28)羅振玉：《殷墟書契考釋（增訂本）》，東方學會石印，1927年。

(29)王國維：《殷卜辭中所見先公先王考》及《續考》，載《觀堂集林》卷九，頁409－450，中華書局，1957年。

(30)關於殷墟第十五次發掘和出土甲骨文的情況，詳見胡厚宣：《殷墟發掘》，頁51－114，學習生活出版社，1955年；又《五十年甲骨文發現的總結》，頁36－46，商務印書館，1951年。

(31)《殷墟文字甲編》所收甲骨文資料爲殷墟第 1 至 9 次發掘所得共6513片，該書係由其中選出字甲2476片、字骨1399片，墨拓影印，由商務印書館1948年 4 月印行。

(32)《殷墟文字乙編》所收甲骨文資料爲殷墟第13至15次發掘所得，共18,405片，該書係由其中選拓出9,105片（包括正反）墨拓本，分編爲上、中、下三輯，上輯、中輯分於1948年10月、1949年 3 月由商務書館影印。

(33)《殷墟文字丙編》分編爲上、中、下三輯共 6 冊，由中央研究院歷史語言研究所自1957年至1972年出版。

(34)(35)胡厚宣：《殷墟發掘》，頁113－114，117－118，學習生活出版社，1955年。

(36)王國維1917年發表的《殷卜辭所見先公先王考》及《續考》中即已以世系和稱謂定甲骨文年代，並注爲《羅參事說》，見《觀堂集林》卷九，頁431－437，441－447，中華書局，1959年，又明義士於1928年也曾嘗試以在世系和稱謂對甲骨文進行分期斷代，詳見《<殷墟卜辭後編>序》，李學勤：《小屯南地甲骨 與甲骨分期》附錄，《文物》1981年 5 期。

(37)董作賓：《<殷墟文字甲編>自序》，《殷墟文字甲編》，商務印書館，1948年。

(38)董作賓：《大龜四版考釋》，《安陽發掘報告》第 3 期，1931年。

(39)董作賓：《甲骨文斷代研究例》，刊於《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》，中央研究院歷史語言研究所，1933年。

(40)郭沫若：《<卜辭通纂>後記》，《卜辭通纂》，文求堂印行，1933年。

(41)胡厚宣：《甲骨學商史論叢》初集，二集，齊魯大學國學研究所，1944、1945年。

(42)松丸道雄：《日本現存の四殷墟甲骨》，《朝日新聞》夕版，1981年 8 月21日。

(43)參看胡厚宣：《五十年甲骨學論著目》，中華書局，1952年。

(44)郭寶鈞：《一九五〇年春殷墟發掘報告》，《中國考古學報》第五冊，1951年。

(45)張政烺：《殷墟甲骨文中所見的一種筮卦》，《文史》第24輯，中華書局，1985年。

(46)中國科學院考古研究所安陽發掘隊：《一九五八年－一九五九年殷墟發掘簡報》，《考古》，1961年 2 期。

(47)河南省文化局文物工作隊第一隊：《一九五五年安陽小屯殷墟的發掘》，《考古學報》，1958年 3 期。

(48)郭沫若：《安陽新出土的牛胛骨及其刻辭》，《考古》，1972年 3 期。

(49)參見(45)及裘錫圭：《讀<安陽新出土的牛胛骨及其刻辭>》，《考古》1972年 5 期。

(50)參看中國社會科學院考古研究所：《小屯南地甲骨》，上冊，中華書局，1980年。

(51)《殷墟花園莊發現早期甲骨坑》，《中國文物報》，1991年12月22日。

(52)嚴强、度偉：《甲骨入藏山東記》，《文物天地》，1986年 1 期；胡厚宣：《甲骨入藏山東補記》，《文物天地》，1986年 3 期；胡厚宣：《殷墟發掘》，頁17－18，24，學習生活出版社，1955年，陳夢家：《殷墟卜辭綜述》，頁670，科學出版社，1956年。

(53)胡厚宣：《八十五年來甲骨文資料之再統計》，《史學月刊》，1984年 5 期。

(54)《<甲骨文合集>編輯凡例》，《甲骨文合集》第 1 冊，中華書局，1982年。

(55)王國維：《殷卜辭所見先公先王續考》，頁438－440，《觀堂集林》卷 9 ，中華書局，1959年。

(56)郭沫若：《殷契粹編考釋》第113片，1937年。

(57)詳見郭若愚、曾毅公、李學勤《殷墟文字綴合》、科學出版社1955年。

(58)詳見張秉權《殷墟文字丙編》上、中、下輯，中央研究院歷史語言研究所，1957－1972年。

(59)屈萬里：《殷墟文字甲編考釋》（附圖），中央研究歷史語言研究所，1961年。

(60)嚴一萍：《甲骨綴合新編》，藝文印書館，1975年。

(61)嚴一萍：《甲骨綴合新編補》，藝文印書館，1976年。

(62)胡厚宣：《<甲骨文合集>序》、《甲骨文合集》第 1 冊，頁 3 ，中華書局·1982年。

(63)童恩正、張陛楷、陳景春：《關於使用電子計算機綴合商代卜甲碎片的初步報告》，《考古》，1977年 3 期。

(64)董作賓：《民國十七年十月試掘安陽小屯報告書》曾詳言之，《安陽發掘報告》第一期，1927年。

(65)《鐵》57·1, 84·1, 130·1, 256·1, 等皆爲僞品。

(66)《龜》2·28·12, 2·29·12, 2·29·16等皆爲僞品。

(67)《鄴初》26·1, 31·6, 37·6, 37·8等皆爲僞品。

(68)胡厚宣：《甲骨文<家譜刻辭>眞僞問題再商榷》，《古文字研究》第四輯，中華書局，1980年。

(69)陳夢家：《殷墟卜辭綜述》，頁652及499，科學出版社1956年。

(70)李學勤：《論殷代的親族制度》，《文史哲》，1957年11期。

(71)于省吾：《略論甲骨文“自上甲六示”的廟號以及我國成文歷史的開始》，《社會科學戰線》，1978年，創刊號。

(72)胡厚宣：《臨淄孫氏舊藏甲骨文字考辨》，《文物》1973年，9 期。

(73)齊文心：《關於英藏甲骨整理中心幾個問題》，《史學月刊》1986年 3 期。

(74)胡厚宣：《臨淄孫氏舊藏甲骨文字考辨》，《文物》，1973年 9 期。

(75)王宇信：《<西德、瑞士藏我國殷墟出土的甲骨文>考辨》，《人文雜志》，1981年 3 期。

(76)《歷史研究》，1955年 1 期。

(77)《復旦學報》，1956年 1 期。

(78)《歷史研究》，1957年 7 期。

(79)《歷史研究》，1959年9、10期。

(80)《文物》，1963年 5 期。

(81)《歷史論叢》第 1 輯，中華書局1964年。

(82)《文物》，1972年12期。

(83)《考古》，1973年 2 期。

(84)《考古學報》，1973年 1 期。

(85)《文物》，1979年 2 期。

(86)《古文字研究》第 1 輯，中華書局，1979年。

(87)《史學月刊》，1980年 3 期。

(88)《社會科學戰線》，1981年 1 期。

(89)《古文字研究》第 6 輯，中華書局，1981年。又載《古文字研究論文集》，（《四川大學學報叢刊》第10輯），1982年。

(90)《中原文物》，1984年 4 期。

(91)《全國商史學術討論會論文集》（《殷都學刊》增刊）1985年。

(92)丁 山：《甲骨文所見氏族及制度》，科學出版社，1956年；《中國古代家教與神話考》，龍門聯合書局，1961年。

(93)于省吾：《從甲骨文看商代社會性質》·《東北人民大學人文科學學報》，1957年 2 、3 期合刊。《從甲骨文看商代的農田墾殖》、《考古》，1972年 5 期，《甲骨文字釋林》頁272－280，中華書局，1979年。

(94)李學勤：《殷代地理簡論》，科學出版社1959年，陳夢家：《殷墟卜辭綜述》頁，科學出版社1956年。

(95)張政烺：《古代中國的十進制氏族組織》、《歷史教學》2 卷3.4期，1951年；《卜辭農田相關問題》，《考古學報》1973年 1 期。

(96)裘錫圭：《甲骨文中所見的商代五刑－並釋刖剢二字》，《考古》1961年 2 期，《關於商代的宗教組織和貴族、平民兩個階級的研究》，《文史》第178輯，中華書局，1983年；《甲骨文卜辭中所見的“田”、“牧”、“衛”等職官的研究》，《文史》第19輯。

(97)林 沄：《商代卜辭中的冶鑄史料》，《考古》1975年 5 期；《從武丁時代的幾種“子卜辭”，試論商代家族形態》，《古文字研究》第 1 輯，中華書避1979年。

(98)董作賓：《卜辭中八月乙酉月食考》，《大陸雜志》特刊，第 1 輯，趙卻民：《甲骨文中的日月食》詳見《南京大學學報》（天文學）1963年第 1 期，張培瑜：《甲骨文日月食紀事的整理研究》，《天文學報》，《天文學報第16卷 2 期，嚴一萍：《八月乙酉月食腹甲的拼合與考證的經過》，《大陸雜志》9 卷 1 期，David N,Keightley: Sources of Shang History: The Qracle-Bone Inscription of Bronge Age China, Appendix 4,P.74, University of California Prese Berkeley, 1978；拙著：《甲骨文月食紀事刻辭考辨》，《甲骨文與殷商史》第 2 輯，上海古籍出版社，1986年。

(99)王宇信：《商代的馬和養馬業》，《中國史研究》，1980年 1 期。
(100)齊文心：《殷代的奴隸監獄和奴隸暴動—兼甲骨文“圉”、“戎”二字用法的分析》，《中國史研究》，1979年 1 期，《關於商代稱王的封國君長的探討》、《中國文化研究集刊》二。
(101)宋鎮豪：《試論殷代的記時制度》、《全國商史學術討論會論文集》1985年。
(102)林玉芝：《說文武帝—兼略述商末祭祀制度的變化》，《古文字研究》第 4 輯 1980年，又《關於周祭中武乙文丁等的祀序問題》，《甲骨文與殷商史》，1983年。
(103)林小安：《殷武丁臣屬征伐與行祭考》，《甲骨文與殷商史》第 2 輯，1986年；拙著：《殷代武丁時期的戰爭》，《甲骨文與殷商史》第 3 輯，1991年。
(104)晁福林：《殷墟卜辭中的商王名號與商代王權》，《歷史研究》，1986年第 5 期。
(105)鄭慧生：《卜辭中貴婦的社會地考述》，《歷史研究》，1981年第 6 期。
(107)由於篇幅所限，在此僅舉其要，其餘時賢大著恕不一、一徧舉。
(108)《燕京學報》第40期，1951年 6 月。
(109)中國考古學報》第 5 冊，1951年。
(110)《考古學報》第 6 冊（第 1 、2 合刊）1955年12月。
(111)《考古學報》第 8 冊，1954年。
(112)《考古學報》1958年第 1 期。
(113)貝塚茂樹、伊藤道治：《甲骨文斷代研究法的再檢討》，《東方學報》（京都）第23冊，1953年。
(114)島邦男：《貞人補正》，日本《甲骨學》第4.5合冊。
(115)香港大學出版社，1959年。
(116)《中國文字》第37冊，1971年 9 月。
(117)蕭　楠：《安陽小屯南地發現的　組卜甲”—兼論　組卜辭”的時代及其相關問題》，《考古》1976年 4 期，又《略論“午組卜辭”》，《考古》，1979年 6 期；《論武乙、文丁卜辭》，《故字研究》，第 3 輯，中華書局1950年。
(118)李學勤：《關於　組卜辭的一些問題》，《古文字研究》第 3 輯，《論婦好墓的年代及有關問題》，《文物》1977年11期，《小屯南地甲骨與甲骨分期》，《文物》1981年 5 期。

(119)裘錫圭：《論“歷組卜辭”的時代》，《古文字研究》第 6 輯，中華書局，1984年。
(120)林　澐：《小屯南地發掘與殷墟甲骨斷代》，《古文字研究》第 9 輯，中華書局，1984年
(121)張永山、羅玨：《論歷組卜辭的時代》，《古文字研究》第 3 輯。
(122)謝　濟：《武丁時另種類卜辭分期研究》，《古文字研究》第 6 輯；又《試論歷組卜辭的分期》，《甲骨探史錄》，三聯書店，1982年。
(123)The Early China Forum, Early China, Vol.14, 1989。
(124)安金槐：《一年來鄭州市的文物調查發掘工作》，《文物參考資料》1954年 4 期；河南省文化局文物工作隊：《鄭州二里崗》科學出版社，1959年。
(125)暢文齋、顧鐵符：《山西洪趙縣坊堆村出土的卜骨》，《文物參考資料》，1956年 7 期。
(126)《長安張家坡西周遺址的重要發現》，《文物參考資料》，1956年 3 期，又《灃西發掘報告》頁111，文物出版社，1963年。
(127)《北京地區的又一重要考古收穫》，《考古》，1976年 4 期。
(128)《陝西岐山鳳雛村發現周初甲骨文》，《文物》1979年10期。
(129)徐錫台：《周原出土的甲骨文所見人名、官名、國名、地名淺釋》，《古文字研究》第一輯，中華書局，1979年；又《周原卜辭十篇選釋與斷代》，《古文字研究》第 6 輯，1981年。
(130)李學勤、王宇信：《周原卜辭選釋》，《古文字研究》第 4 輯，1986年；又李學勤《周甲骨的幾點研究》，《文物》1981年 9 期。
(131)拙著：《試論滅商以前的商周關係》，《史學月刊》1981年 1 期。
(132)《陝西周原所出甲骨文的來源度探》，《社會科學戰線》，1982年 1 期。
(133)Oracle-Bone Inscriptions From the Homeland of the Chou, Paper Presemted to the 190th meeting of the American Oriental Society, San Francisco, 16 April 1980。
(134)《早期商周關係及其對武丁以後殷商王室勢力範圍的意義》，殷墟筆會論文，1984年10月，復印件。
(135)The Early China Forum, Early China, Vol. 11-12, 1985-87。
(136)《周原甲骨》，《中國文字》新 1 號，1980年 3 月。
(137)《扶風縣齊家村西周甲骨文發掘簡報》，《文物》1981年 9 期。

(138)中華書局，1989年出版。
(139)《中央研究院歷史語言研究所專刊》，五十，1975年。
(140)拙　著：《關於一期卜辭時期劃分的幾個問題》，《殷代武丁時期的戰爭》附錄，中國社會科學院研究生院，1981年。又Fan Yuzhou, Some Comments on Zhovyuan Oracle-Bone in scriptions: A Response to Edward L. Shaughnessy, Eanly China, Vol. 11-12, 1985-1987。
(141)最近，上海古籍出版社又於1996年出版了李學勤、彭裕商合著《殷墟甲骨文分期研究》》。
(142)見《南京日報》、《人民日報（海外版）》1987年12月28日的報導。

（原載《甲骨文論文集》第2輯，臺中甲骨文學會，1998年）

甲骨文發現一百周年學術研討會紀要

季旭昇

由敎育部顧問室委辦、中華發展基金管理委員會贊助、國立臺灣師範大學國文學系主辦、中央研究院歷史語言研究所協辦的「甲骨文發現一百周年學術研討會」在八十七年五月十日順利召開，經過三天的研討，在五月十二日圓滿閉幕。以下是研討會相關的報告及記要。

甲骨文的發現，一般舊說是在淸光緒二十五年（歲在己亥，西元一八九九年），這個說法最早是由劉鶚在一九〇三年出版的《鐵雲藏龜・自序》中說的：「龜版己亥歲出土在河南湯陰縣屬之牖里城。」羅振玉在一九一〇年出版的《殷商貞卜文字考・自序》中也說：「光緒己亥，予聞河南之湯陰發現古龜甲獸骨。」但事實上不是這麼簡單，劉、羅二人這時連甲骨眞正的出土地都還不知道，所以一八九九年只能說是他們知道甲骨的年代，而不是甲骨眞正被發現的年代。事實上，甲骨在一八九九年以前很早就已經有發現了（石璋如院士在開幕致詞中也提到了這一點），小屯村一帶隋唐時就有掘墓葬時發現甲骨，但是不被人注意，往往又塡了回去。到了淸末也常有農民在種田時挖出甲骨，但都隨手棄置或塡井（參董作賓先生《甲骨學六十年》第十八頁，藝文印書館）。一九三一年汐翁在北京《華北日報・華北畫刊》第八十九期刊登的《龜甲文》中說甲骨文出土於一八九八年；一九三五年王襄在《河北博物院半月刊》第八十五期《題易穞園殷契拓册》中說甲骨文是在光緒戊戌（一八九八年）冬十月由古董商告訴孟定生（廣慧）和王襄，孟定生「意爲古簡」，「翌年秋，攜來求售，名之曰龜版。人世知有殷契自此始。」（參孟世凱《殷墟甲骨文簡述》、吳浩坤・潘悠《中國甲骨學史》、李先登《孟廣慧舊藏甲骨選介》——登在《古文字研究》第八輯）。由此看來，甲骨文是在那一年被發現的，學術上還頗不易斷定，但是一八九八年也是可信的說法之一。我們選在一九九八年召開甲骨文發現一百周年學術研討會，並不代表我們認定這是唯一的正確說法，主要原因其實是大陸在一九九九年要召開甲骨文發現一百周年學術研討會，我們不希望兩岸在同一年召開這個盛會，讓甲骨學者趕場或爲難，因此決定提前一年舉辦。一方面有歷史考證的依據，一方面也可以把十九世紀末興起的新顯學——甲骨文的熱度炒高些。中國人過生日是算虛歲的，如果不贊成甲骨文是發現於一八九八年的學者，不妨把這場一百周年盛會當作是傳統的過虛歲生日。

大會於五月十日在中央研究院活動中心第一會議室開幕，由史語所杜正勝所長和師大文學院賴明德院長共同主持。李遠哲院長曾說過甲骨文是我國學者有希望拿到諾貝爾獎學科，可惜李院長這一天早有安排，所以由副院長代表致辭，師大方面由副校長簡茂發代表校長致辭，並由石璋如院士報告甲骨文發現的軼聞。隨後展開研討會，前兩天在中研院舉行，第三天在師大舉行，研討會後並舉行一場座談會，由提論文的學者與會師生共同討論。閉幕典禮由師大國文系蔡宗陽主任和史語所林素淸主任共同主持。

大會全部發表論文二十一篇，除了日本學者伊藤道治先生未能到會，鄭振香先生、吳振武先生文到人未到之外，其餘學者都順利到會發表討論，二十一篇論文的作者、題目如下：

裘錫圭：甲骨文中的見與視（雷煥章先生特約討論）
鍾柏生：歷史語言研究所購甲骨文選釋(二)（周鴻翔先生特約討論）
夏含夷：殷墟卜辭的微細斷代法——以武丁時代的一次戰役爲例（朱歧祥先生特約討論）
許進雄：第三期兆側刻辭（夏含夷先生特約討論）
雷煥章：「不」和「弗」兩個不同種類的否定詞與甲骨文中的「賓」（裘錫圭先生特約討論）
周鴻翔：十進制及干支起源（張建葆先生特約討論）
蔡哲茂：論《尚書・無逸》「其在祖甲，不義惟王」（汪濤先生特約討論）
陳昭容：關於「甲骨文被動式」研究的檢討（魏培泉先生特約討論）
季旭昇：說朱（許錟輝先生特約討論）
汪　濤：甲骨學在歐美——一九〇〇～一九五〇（雷煥章先生特約討論）
朱歧祥：說羌——評估甲骨文的羌是夏遺民說（王明珂先生特約討論）
李宗焜：甲骨文字編撰芻議（季旭昇先生特約討論）
彭邦炯：書契缺刻筆畫再探討（李宗焜先生特約討論）
劉一曼：殷墟花園莊東地甲骨坑的發現及主要收穫（石璋如先生特約討論）
楊升南：從「鹵小臣」說到武丁北征的齊目的（王仲孚先生特約討論）
鄭杰祥：殷墟卜辭所記商代都邑的探討（鍾柏生先生特約討論）
黃天樹：午組卜辭研究（蔡哲茂先生特約討論）
陳偉武：《甲骨文字詁林》補遺（李宗焜先生特約討論）
鄭振香：甲骨文斷代研究對殷墟考古的意義
吳振武：「戈」字的形音義——爲紀念殷墟甲骨文發現一百週年而作

十一日下午大會先安排參觀史語所藏甲骨，然後由成大敎授沈寶春、成大圖書館蔡文遂館長、資訊組王元興主任展示成大完成的「《甲骨文全文檢索與影像處理系統》第一階段工程」，這個工程把《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》全文輸入電腦，做成檢索，研究者可以在網路上輕輕鬆鬆地檢索到所要的甲骨文例；此外，成大也把《甲骨文合集》全部輸入電腦，影像密度爲300-400DPI，實際效果相當理想。這個資料庫的網址是：//WWW.LIB.NCKU.EDU.TW。

三天的會議在與會學者熱烈的討論之中，圓滿地閉幕，爲甲骨文發現一百周年劃下了一個美好的句點。大會在開會期間發了成册的會前論文，在會後將會把學者的修正稿重新整理，正式出版。

（原載《中國歷史學會會訊》第六十二期，一九九八年）

“甲骨文发现一百周年学术研讨会”在台湾师大和史语所召开

杨升南

1899年(清光绪25年)，王懿荣辨认出刻在龟甲和兽骨上的符号是我国古代的一种文字，这一年因而被多数学者认定为甲骨文发现的一年。按照我国传统的计算积年有虚、实二法的习惯，以虚数计，今年，即1998年正是甲骨文发现进入100年。为此，台湾师范大学国文系发起主办，由史语所协办，召开了“甲骨文发现一百周年学术研讨会”。此次会议于1998年5月10日至12日在台湾中研院活动中心和台湾师大举行。

参加这次会议的学者近40人，(参加听会的有百人以上)，除台湾学者外，有大陆学者9人，美国2人，英国、加拿大、法国学者各1人。5月10日上午举行开幕式，由台湾师大文学院院长赖明德教授和史语所所长杜正胜研究员主持。台湾师大副校长简茂发教授、中研院副院长杨国枢教授、史语所著名考古学家石璋如教授发表了讲话，接着报告论文。会议收到学术论文22篇，有三位提交论文的学者因故未能到会，在会上宣读的论文有19篇。这些论文，按其内容可分为以下几个方面：

一，关于文字的考释。甲骨文中的单字，据学者们的统计约有5千个。百年来学者们在考释甲骨文字上已作出了相当大的成就。但是迄今能认出的字而为学界所共识的，还不足2千。就是早已被认为已经认出的字，也不一定就认准了，所以释字仍是甲骨文研究中极为重要的一环。这次会议上有关甲骨文字考释的论文有六篇，即裘锡圭的《甲骨文中的见与视》、钟柏生《历史语言研究所购甲骨文选释(二)》、周鸿翔《十进制及干支起源》、季旭昇的《说朱》、吴振武的《“𢦏”字的形音义——为纪念殷墟甲骨文发现一百周年而作》、王恩田的《说师字》等，吴振武、王恩田二位先生因故未到会，故未能在会上宣读。甲骨文中有以横目从人的一个字，所从的“人”有两种形状：一为立人，一为跪跽形的人。过去将这两种字体均认为是一字的异形而释为“见”字。裘锡圭据郭店竹简《老子》简中，上从目，下部为立人的字是“视”字，与简文中上从目下作跪跽人的“见”字有别，因而认为甲骨文中常见的从目从立人的一字应为“视”字。甲骨文中有“视𢀛方”(《合集》6169)、“视戎”(《合集》6742)应为战前视察敌情，还有“视𠂤师”(《合集》17055)等)，意为视察军队。裘氏这一考释得到与会学者的赞同。1947—1948年间史语所购进的一批甲骨共199片，有字的194片，这批甲骨一直收藏在库房中未予整理。1997年香港第三届国际古文字会上钟柏生选释了5片，是第一次公布。此次钟氏又从中选释了字数较多、内容可取的二十七片，公诸同好。这批甲骨内容重要，如第三片上的“侯豹”名，为首见，第7、10片上的“攸子禽”与“禽”名、第20片上“共(供)王臣”，以及狩猎、祭祀等重要内容，具有相当价值。钟文对每片甲骨作了释文，对其内容进行了研究。季旭昇先生对甲骨文中的“朱”字的本义进行了新的解说，文中将以往学者对“朱”字的七种说法加以一一分析比较，认为诸说皆对此字的“构形初义还没有探讨清楚”，因而有再探讨的必要。季氏认为“朱”字不是一个指示字，应是一个假借字，“它可能是由‘束’字假借，后来渐渐分化而成的一个字”。这是文字发展中的一种形的分化现象。注意古文字中形的分化现象，对考释古文字十分有益。周鸿翔的《十进制及干支起源》文中，认为十进制，十天干及十二地支，“皆起源于人体表达”的通讯方法，类似聋哑人所用的手语。吴振武对甲骨文中以往释为‘𢦏’的字，作了重新考证，认为应读为“杀”字。王恩田对“师”字的形、音、义进行再考察，因吴、王二氏未能到会，文章未能在大会上宣读。

与甲骨文字研究相关的还有李宗焜的《甲骨文字编刍议》和陈伟武的《〈甲骨文字诂林〉补遗》两文。李宗焜是北京大学裘锡圭先生的博士生，现在台湾中研院史语所工作。《甲骨文字编》是他的博士论文题目。李氏认为甲骨文发现以来所出“字集书”当推孙海波的《甲骨文编》最为完备。但此书因出版时间早(1934年初版，1965年改订)，新出资料未予收入，且《甲骨文编》本身在字的分合问题上有不少不当之处，在摹写上有失真的地方，近出《甲骨文字典》和《新编甲骨文字典》同样存在不足，故有据新出资料，重新编一部关于甲骨文字形的工具书。这本书作者采用岛邦男的自然分类法而不用传统的《说文》部首，摹写尽量保持原形，并使用电脑手段，作一部能替代《甲骨文编》的新型字集书。对这一工作，与会学者皆认为是一件好事，但对分类检索，有的学者认为不应抛弃《说文》部首，仍应以《说文》分部为好。陈伟武的文章对《甲骨文字诂林》这部书的成就作了充分肯定后，指出存在的不足也应引起重视。陈文指出《诂林》一书的不足有三个方面：一是“未录先有之说”。一字的考释有先后诸家之说，《诂林》或不录诸家之说，仅有编者按语；或不录前出之说而仅录后出之说；一人有前后不同之说则仅录一说。二，“未录较为重要之说”，即对一些较为重要的观点未录，如“俎”字，商承祚谓“象操刀割肉也”未录，而仅录王襄之误释；出字，郭沫若谓“殷人于日之出入，均有祭”的重要说法未录，等等。三，“未录编者自家成果”。如“众”，于省吾在1957年初指出身份不是奴隶，《诂林》未录，只录晚出的赵锡元、陈福林、裘锡圭、姚孝遂等人的说法，又如“莫”字，编者之一的王贵民已有说，《诂林》只录严一萍一说。这些未录之说，据姚孝遂在该书《序》中说有两种情况，一是“对于那些缺乏依据，但凭揣测、毫无参考价值者，一概弃而不录”；一是“见闻有限，有一些卓越的见解我们漏收也是难免的。”陈文认为他所举那些未录之说，“相信大部分是失录之说”，故称其文为《补遗》。

彭邦炯的《书契缺刻笔划再探讨》，收集了甲骨文中230多字次的缺刻笔划例，进行比较研究，认为甲骨书契存在自身的笔顺特点，并不是无任何惯例的东一画西一画拼凑而无章法，从同一字缺刻不同部位的现象推测：缺刻横直笔画是由于在书契时有“先直后横”的习惯；缺刻上下笔画是由于在书契时有“从上往下”的习惯；缺刻左右笔画，是存在有书契时“从左往右”的习惯。那种认为商时契刻甲骨文字时笔顺无章法之说，是不成立的。

二是关于对甲骨文的语法研究，这方面的论文有陈昭容的《关于“甲骨文被动式”研究的检讨》，雷焕章的《“不”和“弗”两个不同种类的否定词与甲骨文中的“宾”》，许进雄的《第三期兆侧刻辞》等文。陈文对甲骨文中被动式句的存在与否进行了再次讨论，指出甲骨文中“确实存在一些‘于’字式被动句，这些‘于’字结构常跟动词‘若’‘左’结合形成被动句，说明福祸的来源。”但是她认为卜辞中“于”字式被动句并不多，与“于”字结合而形成的被动词也十分有限，被动式在甲骨文时期是刚处在发轫时期。甲骨卜辞的“宾动”不能表示被动。而“见”字式，“为”字式被动句则是不存在的。对有的研究者认为甲骨卜辞中已经存在多种形式的被动式句子，进行了重新分析。雷焕章神父的文中，对“勿”和“弜”、“弗”和“不”两组否定词与“宾”字的两种字体(即从“止”与不从“止”)的关系作了进一步探讨。文中指出以往所说否定词弗置于有止的宾字之前，宾为及物动词；否定词不置于无止的宾字之前，宾字则成为不及物动词。雷氏从大量的卜辞例证分析后指出，甲骨文中并不存在这种区分。无论有无从止之“宾”，否定词“勿”或“弜”置于其前，表示一种禁止；否定词“弗”或“不”置于其前，只表示不要之否定。许进雄的文中，主要讨论“卜辞命辞是否问句”这个问题。许文分两部份：一是卜辞是问卜行为；二，答案的提示。肯定贞卜是问卜行为，问卜就要求有答案。第三期以后的兆侧刻辞大吉、弘吉、吉、不吉就是对问卜的答案提示。从而证明卜辞命辞应为问句。

三，关于甲骨卜辞的断代研究。郑振香《甲骨文断代研究对殷墟考古的意义》一文，从她多年从事殷墟考古发掘的实践中，认识到甲骨文的断代研究推动了对殷墟遗址的分期研究；反之，殷墟遗址的分期研究又证实甲骨文分期研究的可靠性。所以甲骨文的分期研究要注意与考古学相结合，注意甲骨的出土地点、层位和共存其他遗物的关系。黄天树的《午组卜辞研究》是对午组卜辞全面研究的论文，文中分三个部分：一，午组卜辞特征；二，午组卜辞的内容；三，午组卜辞的时代。实际是落笔于时代的考察，他从午组卜辞中的主要称谓、人名、占卜事项、坑位、钻凿形态、卜骨修整、文例等综合考察，得出“午组卜辞”的时代“上限可早及武丁早、中之交”，其下限“可延至武丁晚期之初”的结论。

夏含夷的《殷墟卜辞微细断代法——以武丁时代的一次战役为例》文中，提出了一个对殷墟甲骨断代的新方案——“微细断代法”。此法是以殷历以三十日大月和二十九日小月轮流排列为前提，利用甲骨文中有干支、记月相关的卜辞，确定此月的朔日范围(假设干支为月首日，则朔日不得超过此干支的前一干支；假设为月末日，则此月朔日的干支不得超过其前的第30个干支)。如果同版上有多条卜辞，记有不同的干支及月份，又假定此同版卜辞是在同年内所占卜，从每一条卜辞的干支和月份推出此月的朔日干支范围，据大小月三十、二十九日相间排列的规律，由此月的朔日干支范围可推出一个此年正月的朔日干支范围。由同一版上有多条记有干支、月份的卜辞，就可推出多个正月朔日干支范围。在多个朔日干支范围中，有一个或两个干支都包含在此版所有卜辞的干支范围内，则这一个或两个干支，就是此年正月的朔日干支。确定了某年的朔日干支，再查董作宾的《中国年历总谱》或张培瑜的《中国先秦史历表》就可以确定此卜辞的绝对年代。他利用此法，对《合集》11485片上的5条记月卜辞(此片记月份有1月、5月、8月各一辞，2月2条辞)推出这一年的正月朔日是乙巳日。从董作宾及张培瑜的历表中，查出在武丁在位的大致年代范围内，乙巳为正月朔日的年份为公元前1217、1212、1186、1181。又上举《合集》11485版上有“三日乙酉夕月有食”且记月为8月。据推算，在公元前1181年安阳曾出现一次月食。由此确定此片甲骨卜辞的绝对年代可能在公元前1181年。

同一版上有多条卜辞干支、月份皆全的毕竟不多。若能确定某些记日记月的卜辞都属于一年之内，也可以得出该年正月朔日的干支，从而得出该年的绝对年代。夏氏以武丁时对𢀛国(一般释为亩)的战争为例，系联了十一片甲骨，推出此年正月朔日为甲午，并推定前一年有闰月。武丁在位期间，以甲午为正月朔日的年份有公元前1215、1210、1179三个，他认为这次战争发生在前1211至1210年的可能性最大。

夏氏这个“微细断代法”在对甲骨断代研究、对商代甲骨时期诸王的年代研究上都有着重要意义，具有独创性。但这一方法必须在如下三个前提下方能成立：(1)我国的干支记日从商代甲骨时代起迄于今，是连续不断的，中间无间断过；(2)商代的历法必须是大月30日，小月29日的有规律地交替组成；(3)武丁在位年代的大致范围确定。因为正月朔日干支每隔三年或者三十一年之后会重复出现。另外他把“亩”和“𢀛”两字认作是同一方国名的不同写法，也是值得考虑的。虽然有一些不确定的因素，但夏氏提出的“微细断代法”仍应引起我们的重视。

四，有关甲骨文地理和商史研究。关于甲骨文地理研究，有郑杰祥的《殷墟卜辞所记商代都邑的探讨》一文。甲骨中有亳、嚣、相、井(邢)、商等地名，郑氏皆认为是指商朝建国后所迁都城之地。文中认为亳是汤时都城，其地即今河南郑州商城，嚣即嚣，亦即隞，为仲丁所迁，其地在今郑州市西北二十公里处的小双桥，相为河亶甲所迁，其地在今河南省内黄县，井即邢，为祖乙所迁之都，其地在今河北省邢台市，商为盘庚所迁，地在今河南安阳小屯村，今淇县朝歌为纣时之都，也称为商。卜辞中出现的“大邑商”、“天邑商”则是对安阳小屯旧都的尊称。王仲孚《汤亳地望与历史教学——殷商史尚待解决的问题之一》一文中说，据古文献记载汤都之亳有四说：杜亳(今陕西长安县)、西亳(河南偃师)、北亳(山东曹县)、南亳(谷熟)。近代学者的研究主张又不相一致。王国维主张在今山东曹县，董作宾认为在今安徽省亳县，陈梦家则认为在商丘之南，今谷熟县西南的高辛集，岑仲勉以河南内黄为汤亳，徐旭生认为偃师二里头文化遗址为汤都之亳，邹衡又主郑州为汤亳。这些不同的主张皆言之有据，写文章各说各的可以，教师在课堂上教学生总得采一说方能正确传达历史知识，望能加强合作、统一认识，以利教学。历史上存在不同见解的问题很多，这只是其中之一，这些问题都迫切需要解决。

朱歧祥的《说羌——评估甲骨文中的羌是夏遗民说》一文，认为甲骨文中被商人屡次征讨、其人被大量用为祭祀牺牲的羌，是夏族人。妇好墓中出土的头上有两鸡角的裸体玉人，就是羌字象形，是作为奴隶殉墓的象征。商王朝对羌人如此特别、长期的仇恨，是为了防备夏人的复国之患。杨升南的《从“卤小臣”说到武丁对西北征伐的经济目的》一文，从考释甲骨文卤字入手，辨识出卤字，其字义是指盐卤。甲骨文中有“卤小臣”，是商王室主管盐务的一位大臣，可知商时盐业已有相当规模。盐有海盐与池盐。池盐的重要产地在今山西省西部及陕西省东北部地带，而山西地区又是重要的铜矿产地。武丁时期用兵最激烈、战争最久的是对亘方、邛方、土方、基方、羌方等。这些方国的地望，都在今山西及陕西省东北部地区，所以武丁朝对西北征讨的重要目的是获取和保护盐、铜资源。

另外，刘一曼的《殷墟花园庄东地甲骨坑的发现及主要收获》一文，介绍了1991年秋天在安阳殷墟花园庄东地H3一坑甲骨的出土情况、甲骨时代、内容和学术价值。此坑共出甲骨1583片，有刻字甲骨579片。材料大多是龟甲，骨仅25片，龟甲中完整的多，达755片，是1932年发掘出的H127坑甲骨后最为完整的一坑甲骨埋藏。这批甲骨的时代为武丁期，多属子组卜辞。此坑甲骨的发现，对甲骨文的分期研究和商代态宗族形态研究都具有非常重要的学术价值。刘氏的报告由著名考古学家石璋如先生作特约讨论人，石先生高度评价了这次新发现，与会学者亦十分感兴趣，希望能早日整理公布面市，供学者研究。

汪涛的《甲骨学在欧美—1990～1950年》一文，介绍了甲骨文发现的第一个50年间，欧美学者的甲骨文研究情况，是近年来第一次较为系统地介绍了西方学者研究甲骨文的论文，使人大开眼界。汪氏拟准备继写1950年代以后西方学者的甲骨学研究状况。西方学者接触和研究甲骨文的时间并不晚，他们在资料搜集、文字考释、甲骨内容的研究上都做出了自己的贡献，说明甲骨学从一开始就是一门国际性的学问。但西方学者的研究也存在很多不足之处，他们所取得的一些成就，是直接或间接地得到中国学者的帮助，或是与中国学者有所交流而取得。这说明西方学者“甲骨学的下一步前景仍然是中西学界的密切合作与直接对话”。

会议期间，会议组织者还安排参观了史语所的部分甲骨陈列，观看了沈宝春、王元兴两位先生演示的、由成功大学黄竞新先生作的《甲骨文全文检索与影像处理系统》的第一阶段工程。所谓第一阶段工程是指检索系统目前只作了《甲骨文合集》一部书，其他还未作完。这个检索系统分文字和图象两部分。文字方面是将《甲骨文合集》41956片甲骨文上的文字，作出释文（释文用姚孝遂等的《摹释》本）逐字逐条输入。图象是把《合集》图版扫描进电脑。检索时可十分方便地检索出《合集》中的任何一个字出现的频率和全部相关卜辞。并可将其打印出来提供需要者。图象有黑白和反白两种，并可作局部的截取放大、360度的方向旋转。若对某片甲骨的释文有怀疑，需查图象，亦十分方便地调出，使用起来十分方便。此工程完成，将大大方便研究者，推动甲骨文的研究。

5月12日上午会议移师到台湾师大召开。此日下午专门安排了一段时间，让论文报告者与听众对话，可以提论文中的问题，也可以提甲骨文与商史方面的其他问题，会场十分活跃。提问者希望甲骨文资料尽量早地公布，特别是对1991年殷墟花园庄东地的甲骨以及《甲骨文合集》的释文、来源表，望能尽快与读者见面，甲骨学界都企盼着。另外资料要汇集，用现代化手段处理甲骨资料已刻不容缓，望能加强海内外合作。法国雷焕章神父提出，全世界研究甲骨的人不多，又十分分散，往往是消息不通，应加强信息沟通，进行合作，希望利用这次会议的机会，有一个单位出面组织一个国际性的甲骨文研究机构，以便交流研究成果。这一倡议，得到与会学者的热烈赞同。会上推举这次会议的主办单位台湾师大国文系承办此事。台湾史语所、大陆学者以及欧美的学者皆表示支持师大国文系。师大文学院院长兼国文系主任赖明德教授，当即表示愿意承担此事，获得与会者热烈掌声。

接着进行了简短的闭幕式，史语所语言室主任林素清研究员和师大国文系主任赖明德教授先后致辞，他（她）们对这次会议的成功作了充分肯定，并提出要加强甲骨文的研究、投入物力、人力。赖明德院长在致辞中，对甲骨文的价值作了充分肯定，他说：“甲骨文是我们中华民族祖先最突出的贡献，是我们民族傲视世界其他民族的伟大成就。我们要在21世纪开拓甲骨文研究的新局面。”

会议期间，有的学者还题联赋诗祝贺此次会议召开。台北的张兰坡先生题一联云：

兰芷暗香，无色无形传大雅。坡堤三彩，有情有义具诚心。

台湾甲骨学会负责人之一王学勤先生赋诗一首云：

殷墟发掘百年周，学术交流遍五洲。天下专家同切磋，世间学者共筹谋。深研文字探原奥，广究史痕试秘幽。意见互通成大道，思维豁达建嘉猷。

（原載《中國史研究動態》1998年第9期）

《甲骨文字編》芻議

中研院史語所　李宗焜

一、已出版甲骨字彙書述評

甲骨學中可以研究的課題很多，字形學就是其中的一個要項。因爲「識字」是一切研究的根本，必須先對文字有正確的認識，才能對史料做出正確的判斷。因此匯集甲骨的字形加以分析、歸納、考訂，便成爲甲骨研究中一個很重要的課題。

當然我們不可能單憑甲骨文「字典」去研究甲骨文，就好像不可能單憑英文字典去認識英美文化一樣。但不可否認的，英文字典是我們讀英文時不可或缺的工具，同樣的，一部匯集甲骨文字形的字典，也是甲骨文研究者必備的參考書，因此甲骨發現百年來，收集甲骨字形的字彙書，可說不斷有推陳出新之作。即使早期的甲骨著錄書，偶而也有在書後附「字表」的[1]。可見字形的研究很早就引起學者的重視。

著錄書所附的「字表」，不論多麼完備，畢竟只限於該書的內容，其不能滿足學者的需求是必然的。只有集合各種著錄書的拓片加以摹寫、研析、考訂而成的文編，才能符合學者的需要。這方面的工作，從羅振玉開始，「羅振玉增訂本《考釋》奠定了初期審釋文字的基礎，同時也成爲後來字彙的基礎」[2]，羅氏之後，陸續有學者努力於斯，而其代表作則是孫海波的《甲骨文編》。陳夢家曾說：「就編制與摹寫而論，孫書較勝。」[3]我們在比較過各種字彙書之後，完全同意陳氏的說法。

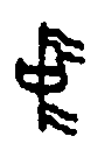
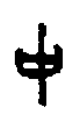
《文編》的初編本出版於1934年，1965年9月又出版了「改訂本」，「改訂本」的「編輯序言」說：

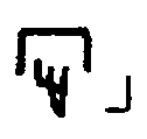
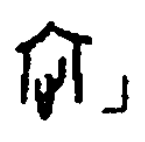
> 改訂本較之一九三四年的初編本，有著很大的不同；在材料上比較完備，在考訂上采納了許多新的研究成果。

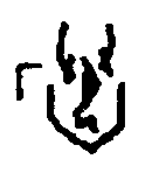
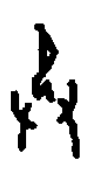
可見「改訂本」「在內容上和體例上已大加改訂和增益」[4]，這就是後來我們使用的本子。這個「改訂本」至今已印行超過一萬冊，在甲骨論著中可以算是「天文數字」了，由此也可以看出此書影響之大。

但《甲骨文編》仍存在著不少問題，我們試舉幾個簡單的例子加以說明：

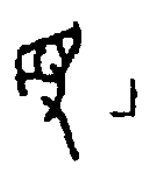
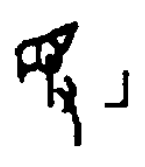
首先是分合的問題：編製文編，處理字的分合是無可逃避的，也是最繁瑣、吃重的工作。陳夢家曾說：「根據上述的字彙[5]來統計甲骨文認識的與不認識的字是有困難的」，困難的原因之一就是字彙中往往「將應該分別爲數字的併爲一字，將應該定爲一字的分爲數字。」[6]之所以會有這種情形發生，正可以說明定字形之分合並不是一件容易的事，絕不是任意的將一些字形重新排列組合而已。而分合的恰當與否，有些是見仁見智的，有些則是有明顯的是非，我們試舉幾個《文編》中分合不當的例子來說明。首先是《文編》合爲一字，實際應該分開的，如：

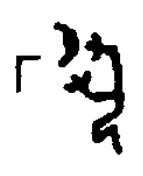
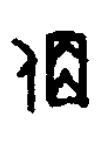
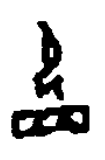
38號把「」和「」混合爲一，以爲都是「中」字，但這兩個字形前者一般用爲左中右的「中」，後者一般用爲「仲」，其實是有區別的，應該分開。

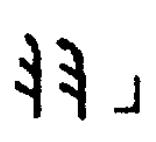
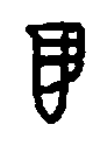
186號的「」和「」；

289號的「」和「」；

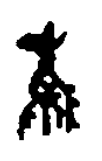
......

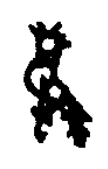
462號的「」和「」都應該分開。

848號「夙」字下所列的「」、「」、「」爲不同的三個字，更是不爭的事實。

487號的「」儘管學者有不同的考釋[7]，但它和「」不會是一個字。

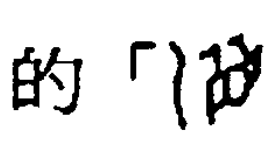
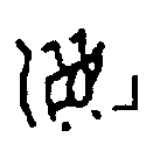
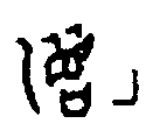
521號「鳥」字，頗闌入「雞」字初文，如所引：

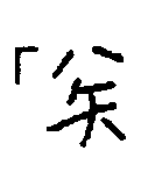
《前》7.23.2

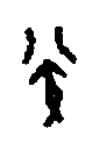
《掇》2.59

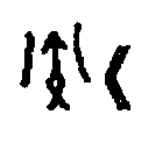
二形，都應該從「鳥」字中分出。

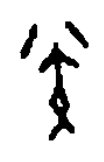
相反的，有些《文編》分列的字，其實是可以合併的，如：

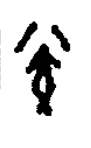
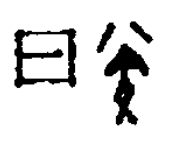
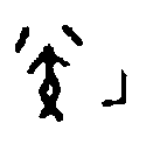
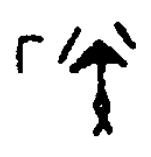
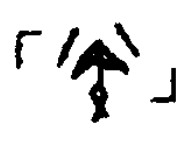
1290號的「」、「」和1315號的「」，辭例全同，應爲一字。

71號「」下列：

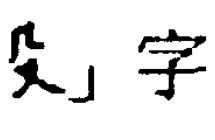
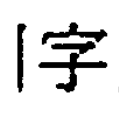
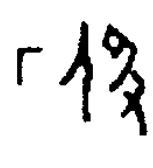
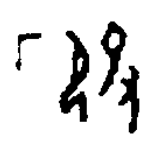
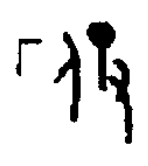
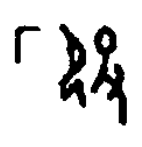
《前》6.58.3；

《粹》1321，地名；

《乙》5804

三個字形，其中《乙》5804一辭云：「癸巳□自才王」。另有一條字體完全一樣，內容亦基本相同的卜辭「☐曰自才王」，見於《乙》5520。無疑的《乙》5804的「」和《乙》5520的「」必定是一個字[8]。但《文編》卻把《乙》5520的「」字另外編在〈附錄〉裏的3090號[9]。

當然，字的分或合並不都像上面所舉例的那樣單純，有些情況是很複雜的。如：

407號「」字條下所引字形有「」、「」二種，其中「」之一形應自407號分出，而407號的其它字形又可與5887號的「」合併。自407號分出的「」字，見於《掇》2.158（即《合》14294）辭云：

---

[1] 如《天壤閣甲骨文存》，拓片後附「檢字」，雖名爲「檢字」，但有異體，有文例，實際已完全是「文編」的規模了。《龜甲獸骨文字》則在每卷之後附有「抄釋」，雖然不列拓片號，也沒有文例，但仍臚列了「異體」。

[2] 參見陳夢家《殷虛卜辭綜述》第二章，第二節〈甲骨字彙的編製及其內容〉，p.61。

[3] 同註2，p.62。

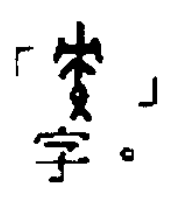
[4] 見改訂本《甲骨文編》「內容提要」。

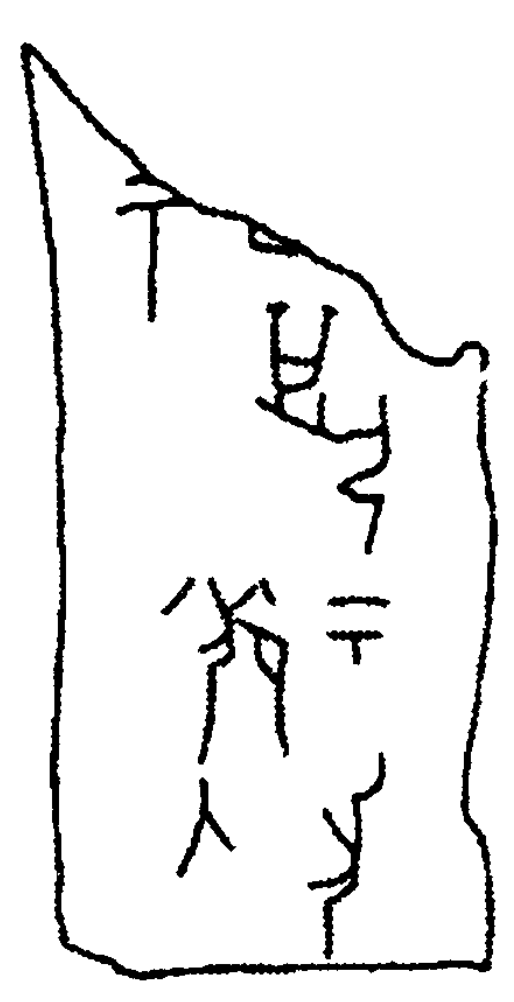
[5] 指羅振玉《殷虛書契考釋》等六種，參見註2，p.61-62。

[6] 同註2，p.62。

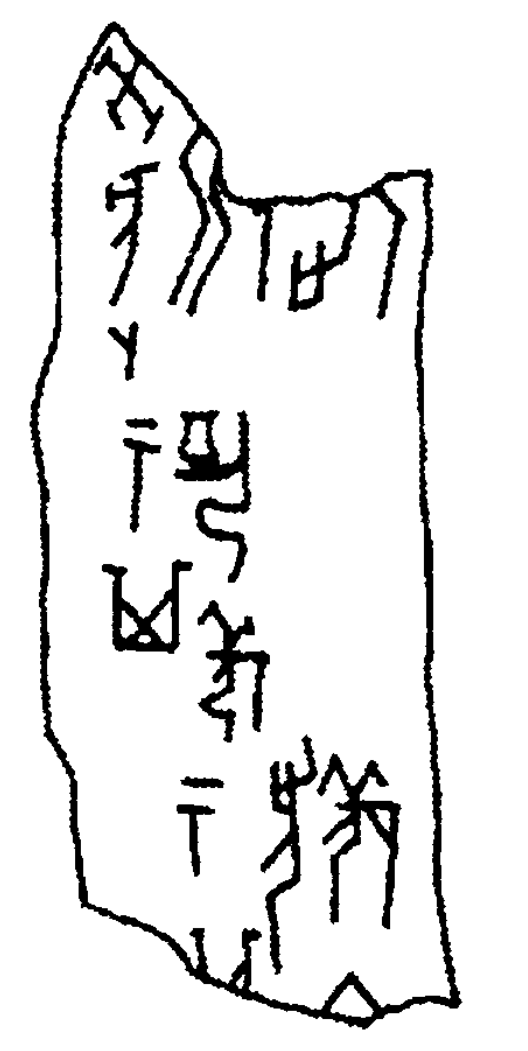
[7] 諸說見《甲骨文字集釋》939頁。

[8] 《殷合》295已把《乙》5804和《乙》5520拼合起來，是正確的。

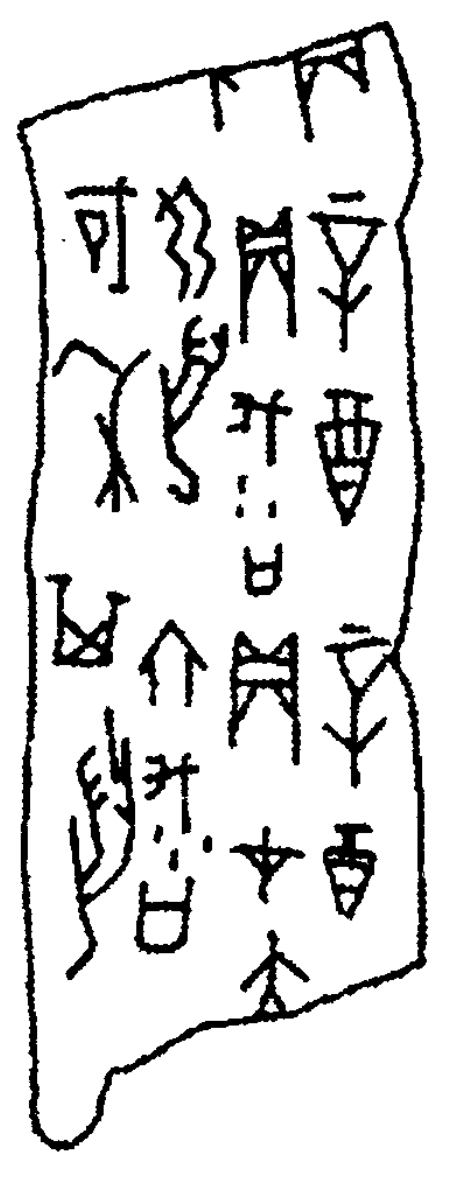
[9] 《文編》3090號所引見於《乙》1730（即《合》860正甲）的「」，摹錄恐有問題。從《合》860正乙（即《乙》1715）的遙綴看，此字應是「柬」字。



粹536



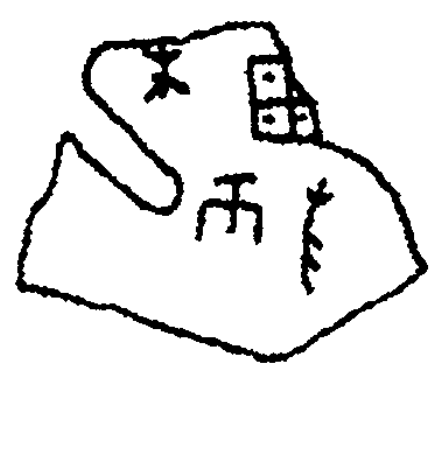
粹464



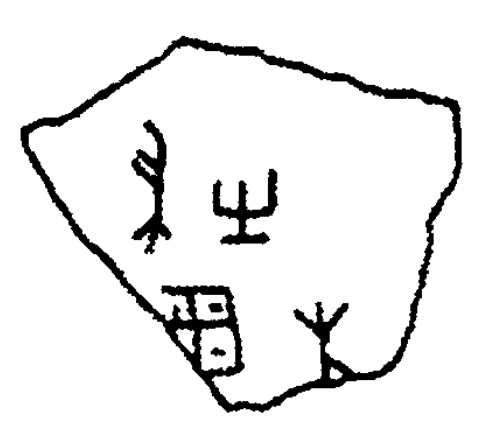
合34399

此外，因爲摹寫或釋字錯誤而誤增的字爲數甚多，我在撰寫博士論文時，曾花費一年的時間對《殷墟甲骨刻辭類纂》和《甲骨文編》的字頭逐一加以核對，發現這種因誤摹或誤釋而誤增的字，在《類纂》和《文編》中都爲數不少，後來針對《類纂》誤增的字寫了〈《殷墟甲骨刻辭類纂》删正〉一文[10]，指出類纂誤增的字頭146個。《甲骨文編》誤增的字數更多，尤其〈附錄〉中有相當多的字都是本文中已有之字的誤摹。如：

3045號「」見《鄴初》下46.15，此片在原書中倒置，倒轉過來看則明顯是「」（帚）字[11]，應該併入981號。

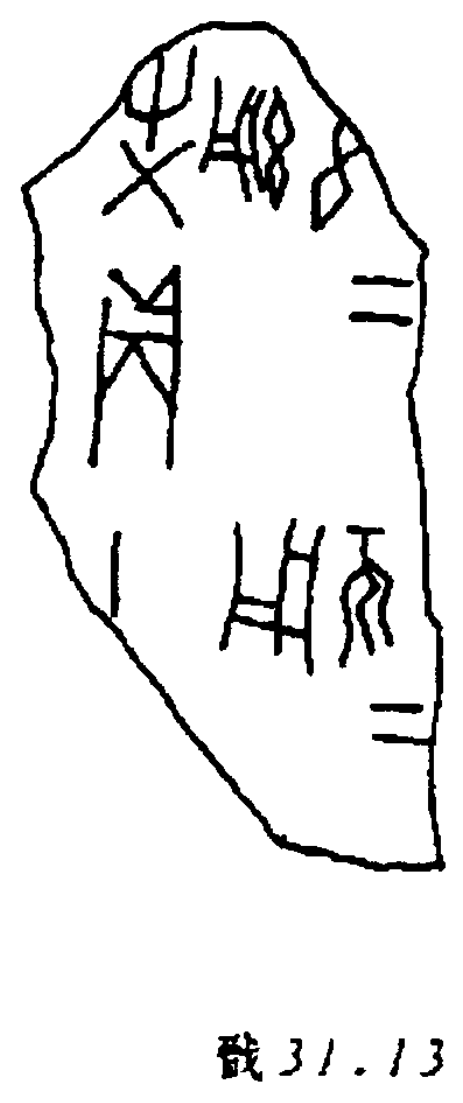


鄴初下46.15

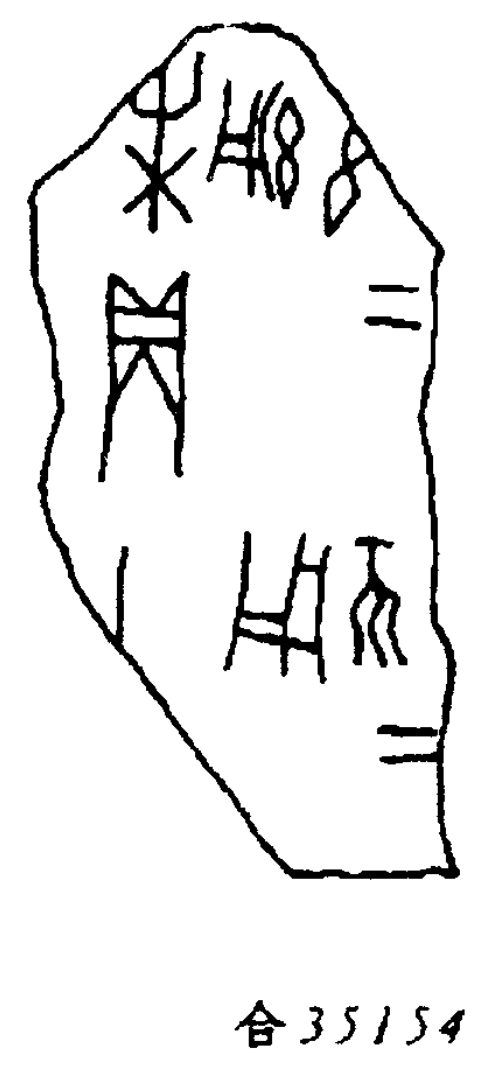


合2816

3052號「」字，見《戩》31.13，此版字體屬於歷組卜辭，歷組卜辭的前辭主要作「干支卜」或「干支貞」[12]，則此版貞上一字應是「地支」，從其筆劃看，只能是「未」字。今按：此版即《合》35154，《合》的拓片比《戩》清楚，該字即作「」足可證明。



戩31.13



合35154

3247號「」，見《殷契卜辭》253（即《合》1663），此字細看作「」，即賓組卜辭常見的貞人「爭」。《文編》〈附錄〉中這類的誤增字還有很多，這裏所舉的只是幾個例子而已。

在「正文」中這一類的誤增字也不少。如：

153號「」，見《林》1.29.20(《合》38717)。

此字《文編》釋「」，云「從三止，《說文》所無。」辭云：

貞：王〔賓〕〔亡〕尤。

對照《合》38715：

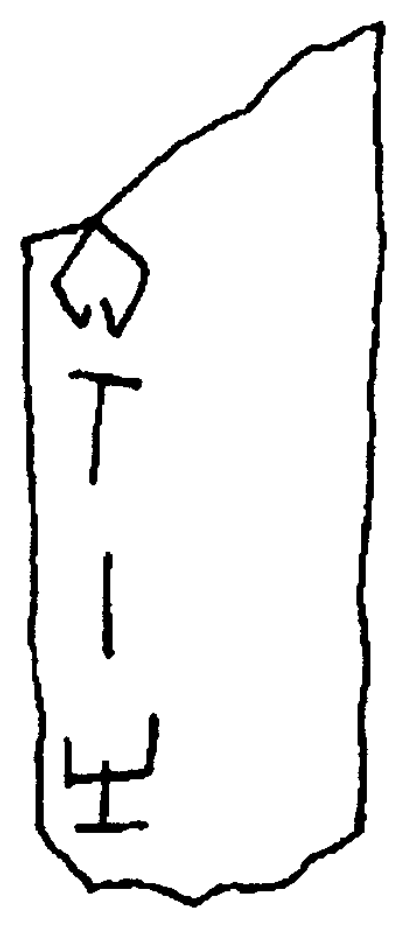
辛酉卜，貞：王賓品亡尤。

來看，以及「品」經常作爲祭祀動詞的情況[13]，可斷定「」絕是「品」字無疑。此字拓片作「」，《文編》所摹亦有問題。

有些字表面上看起來無可疑，實際卻是靠不住的。如：

25號「」，釋「」，見《林》1.2.7(《合》17583)。

該字處於左上殘斷處，「」當爲「」之殘。「」常用爲人名，「示」之辭例亦不只一見[14]，可以斷定「」實際上是「」字殘斷的下半和「示」的誤合。



合17583

還有一種情況，著錄在不同書上的同一片甲骨，被摹爲不同的字形且編爲不同的字號，如：

5359號「」，見《續》3.36.7。

5687號「」，見《簠游》15。

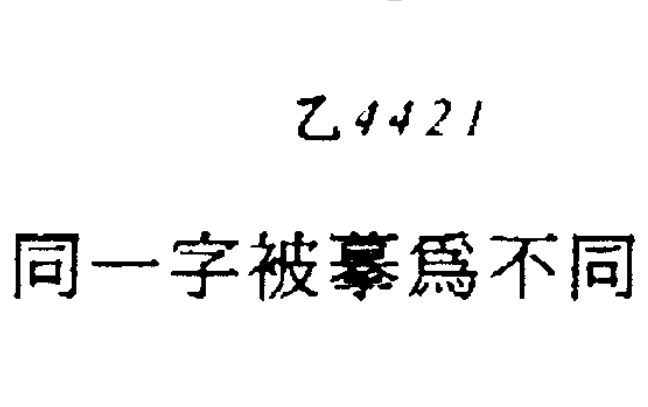
其實這兩書所著錄的是同一片，即《合》8251正。

有時同一個著錄號的甲骨，也被摹爲不同的字形且編爲不同的字號，如：

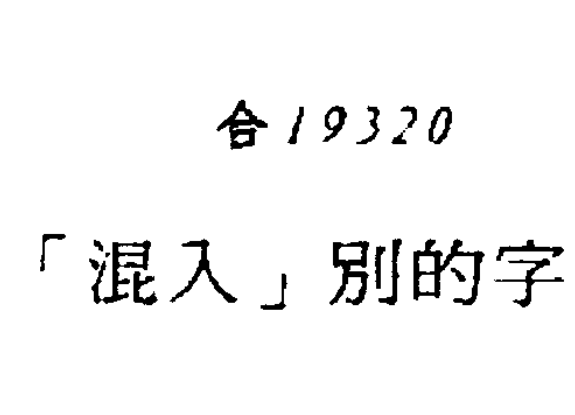
5544號「」，見《乙》4421反。

5642號「」、「」，見《乙》4421反。

二號所據爲同片，5642號第一形爲《乙》4421左邊之字，第二形爲右邊之字。第二形即爲和5544號同一字的不同摹寫。按此疑爲「」(出)字之倒刻或《乙》圖版之誤倒。《乙》4421即《合》19320，《合》已將圖版轉正。



乙4421



合19320

有時同一片的同一字被摹爲不同的字形，其中一形「混入」別的字號下。如：

〔北方曰〕勹風曰。

與4500號，見於《乙》4876（《合集》拼入14295號）的「」字，無疑應爲一字。該辭云：

貞帝于北方曰夗，風曰。

此外「」與3372號的「」疑亦可合爲一字。

346號「䫻」字下摹錄二形：

《粹》536

《拾》11.14

今按346號所引《粹》之字可與3485號合：

《存》下782

《存》下783

又可與3490號合：

《粹》464。

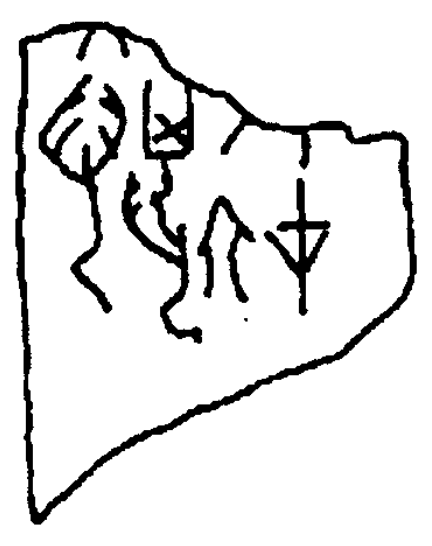
見於《粹》536的「」，郭沫若釋爲「䫻」謂「䫻字金文習見，與其通」；見於《粹》464的「」，郭沫若釋爲「𠵼」。其實這二版的卜辭頗爲相似，「」、「」應爲同字，郭氏卻分釋爲不同之字。

346號的「」雖然可與3485號、3490號相合，但與同爲346號的「」卻不是一個字。「」葉玉森亦釋「䫻」，以爲「象揚箕」。今按「」應爲「其丮」二字，與見於《粹編》諸字無涉，應自346號移去。《合》34399（《後》2.20.13）辭云：

辛酉貞才大六其丮。

辛酉貞弜丮𢦏禾。

「其丮」二字距離較遠，與「弜丮」義正相反，足證所謂「象揚箕」的「」爲「其丮」二字之誤合。



拾11.14

---

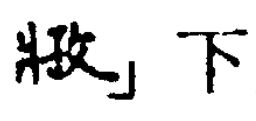
[10] 《大陸誌》94卷6期，1997.6。

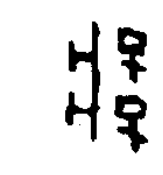
[11] 此片即《合集》2816號，已轉正。

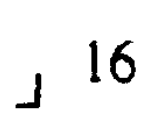
[12] 見黃天樹《殷墟王卜辭的分類與斷代》，第七章，文津出版社，民國80年11月。

[13] 參見《類纂》279頁。

[14] 參見《類纂》1190頁。

440號「」下所錄的最後一形：

《乙》8605[15]

此字又重見於863號之下，但字形摹爲「」[16]。

從以上的評述，可以發現《甲骨文編》的問題還是很多的。但不可否認的，《文編》所收資料，在當時而言是相當完備的，摹寫雖然不免有錯，但一般而言是比較逼真的。

與孫海波《甲骨文編》性質相似的，則有金祥恆先生的《續甲骨文編》[17]。金先生自序其著述之緣由云：

> 字彙之編輯，……民國二十三年孫海波之《甲骨文編》，亦其選也。孫書本爲補正其師商承祚之《殷虛文字類編》而作。上距商書僅十一年，而所補正者已甚多。今日上距孫書已二十五年，此二十五年中，古文字之學日益進步，甲骨之出土者亦日益增多。則繼孫書而有作，亦事之宜也。

由這一段自序文字看來，《續編》所續的是《甲骨文編》民國二十三年(1934)的初編本。《續編》出版於民國四十八年(1959)，實際上比1965年出版的《文編》改訂本還要早了六年；兩本書都是在初編本的《甲骨文編》上增補、校訂的，在當時「老死不相往來」的時局中，兩岸學者不約而同的做了同一件事。

就改訂本《甲骨文編》與《續甲骨文編》所附的「書目」來看，二書所根據的材料大致相同。最主要的差別是：《續編》不收摹本，其「編輯凡例」說：

> 本編摹寫之字，以拓片覆印爲準。寫本如(中略)等書，雖摹寫清晰，究不如原物拓片之可信，故不予收錄。

因此《續編》的書目上就沒有摹寫本。此外，《文編》所用的書爲《續編》所無的只有下列五種：

1.殷契卜辭　容庚
2.柏根氏舊藏甲骨文字　明義士
3.甲骨文零拾　陳邦懷
4.河南安陽遺寶　梅原末治
5.京都大學人文科學研究所藏甲骨文字　貝塚茂樹

其中《京都》一書與《續編》同年出版，《續編》不及引用是很合理的。不過《續編》引用的《東方學報》第二十三冊，其中拓片即《京都》之部份。

《續編》所用之書爲《文編》所無者，則有下列五種：

1.傳古別錄第二集
2.書道全集
3.殷虛文字外編
4.北京大學藏甲初稿
5.凡將齋所藏甲骨文字

以上資料之出入，僅就其「書目」而言，其彼此之間拓片的可能重複或交集，暫時都不考慮。

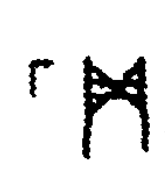
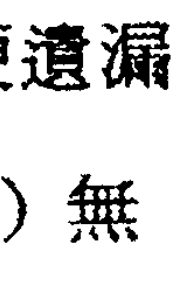
近年還有兩本「字典」出版，一是徐中舒主編的《甲骨文字典》[18]，一是劉興隆著的《新編甲骨文字典》[19]。這兩本書的出版時代比《文編》晚了二、三十年，但後出未必轉精，且雖都標榜「均據諸書所著錄拓本之原形摹寫」[20]，但其所收字形，恐怕並不是「摹」，而是「臨」，甚至是「自運」，實際遠不如《文編》接近原拓形神，而所錄字形亦甚簡略，並不能取代《文編》的作用。

《甲骨文字典》的〈序言〉裏說：

> 《甲骨文編》所彙字形重複龐雜，或有摹寫失誤，識字不當之處。而字彙龐雜，未加分期歸類也是不便使用的。

因此，處理的辦法是

> 在蒐集字形方面是統覽每一字全部字形基礎上精選有代表性的字形，按斷代標準分列于各時期之下，以便了解各個時期文字字形演變的特徵，從而全面深入掌握字形。

「摹寫失誤、識字不當」恐怕是任何文字編都無法完全避免的。而「字形重複龐雜」正是文字編資料豐富的表現，問題是如何加以整理，使其不致雜亂無章。《甲骨文字典》用「斷代」的方式加以組織，不失爲好方法，但其「精選」字形的結果，便遺漏了許多寶貴的資料。如貞字下（350頁）無「」形，受字下（456頁）無「」形，這些字形都是斷代分期上的重要判準，可見這種「精選」的方式，作爲「字典」而言，未必就是一種「改良」。

除了字形的收錄比較簡略外，對於卜辭的收錄也很簡單。把字形分期、釋義並附相關卜辭，設想很周到，但各方面都很粗略。

綜上所述，可知《甲骨文編》雖然出版較早，但以字彙書的性質而論，孫氏茲編仍爲個中翹楚。但孫編仍存在不少缺點已如上述，因此著手編製一部能反映當前甲骨研究水平，且又能切合甲骨學者需要的新甲骨文編，實在是刻不容緩的事。

二、關於《甲骨文字編》

從上文的評述，可知《甲骨文編》仍是目前收錄甲骨字形最完備的一本書，但《文編》存在的問題已如上述，且《文編》出版至今已超過三十年，三十年來甲骨材料續有出土或公佈，如《英國所藏甲骨集》、《小屯南地甲骨》等，都是孫氏所不及見的；三十年來學者的研究、發明也累積出可觀的成績，都有待加以吸收、展現，很明顯的《甲骨文編》已不能滿足當今學者的需求，因此重新編撰一部《甲骨文字編》，可謂此其時矣。

理想的字彙書應該是怎樣的面貌？陳夢家曾勾勒出一個「草圖」，他在評述于省吾《契文例》稿本時說：

> 于氏稿本羅列材料之富，遠勝上述五書[21]，分析較細而客觀，其長處係每字之下博引卜辭。……他的稿本，凡可隸定者就古文字形隸定之，亦往往有眉批和簡短札記。但是每字之下的卜辭並未分時代別其先後，並未依用法分別詞類，還是一種需待整理補充的材料。他的這種作法，和我們理想的《甲骨刻辭字彙》很相接近，所以雖並未成書，我們認爲是最好的一種字彙編製的草圖。[22]

陳夢家理想中的字彙書，看起來不像是《甲骨文編》一類的產物，反而接近後來出版的《殷墟甲骨刻辭類纂》。我們理想中的字彙書，是將每字之可隸定者加以隸定，並儘可能的臚列異體，且用最新的斷代知識將異體加以組織歸類。我們的具體做法是：

（一）摹錄字形

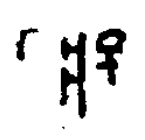
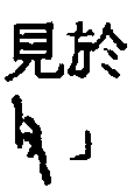
要真實的展現字形的原貌，掃描或照相應是最科學的方法，但是照相在資料的排比或再運用上有其局限[23]，而掃描則很難克服甲骨文字筆劃纖細以及拓片不是都那麼黑白分明的困難。

如果採取拓片直接掃貼，固然是「忠實」，但很難做到「清楚」；如果掃描之後再經反白處理，雖然會比拓片清楚，但「忠實」的程度卻比摹寫還不如，因爲摹寫是緊貼在拓片上面描，而反白之後的修飾卻很難確保筆劃不失真。更大的問題是：反白之後的字，其未修飾之前，多半如同麻臉，修一個字形所需的時間非常可觀，花上大量的時間，其效果卻又不理想，恐不是一個好辦法。

試用了幾種方法後，我們決定採用摹寫和掃描並用的辦法。一般情況採用描圖紙摹寫，再逐一用掃描機掃描存成電腦檔。這樣做有一個好處，

---

[15] 《文編》誤爲「甲 8605」。本字號倒數第二形「甲 8595」，甲亦爲乙之誤。

[16] 863 號下收錄二形。另外一形爲見於京津 2085(合 3194 正)的「」，此字右下殘破，似尚有一豎劃，或有可能此字亦從「」。

[17] 此書出版於民國 48 年。民國 79 年收入《金祥恆先生全集》第五、六冊。藝文印書館印行。

[18] 四川辭書出版社，1989年。

[19] 國際文化出版公司，1993年。

[20] 見《甲骨文字典》凡例。《新編甲骨文字典》的「凡例」中也有類似的話。

[21] 指羅振玉《殷虛書契考釋》等，參《殷虛卜辭綜述》p.61-62。

[22] 參《殷虛卜辭綜述》p.61-62。

[23] 如用照相剪貼，則文字的調整、調動都很困難，且照相也有可能造成字體大小的變化或邊角地帶的變形。近聞有「數位相機」，能起到什麼樣的作用有待進一步了解。

即沒有臨寫甚至自運的失真，而且由電腦建檔，可以避免過去使用剪貼或抄寫不便於編輯、調整等再加工的缺點。至於只出現一次或出現的次數極少而又殘斷的字，我們仍加以摹寫，並在殘斷處加上虛線以爲區別。如果只出現一次而又殘泐且不清楚，描摹都有困難的字，則採原形掃描的方式呈現，由讀者自行判讀。

對於字形的選擇，我們比較傾向於「求全」，所謂「求全」是指把甲骨的所有單字呈現出來，所以對上述只出現一次的殘損字，也不輕言放棄；至於常見的字，其結體和筆勢沒有明顯差別的，我們也不以堆垛爲能事。

摹寫的對象則包括已經出版的所有著錄書，包括：

甲骨文合集
英國所藏甲骨集
小屯南地甲骨
懷特氏等收藏甲骨集

以上四種是目前較重要且所收拓片彼此不重複或較少重複的著錄書，《類纂》所根據的就是這四種書[24]。此後出版的著錄書主要有：

殷虛文字乙編補遺(中研院史語所)
中島玉振舊藏甲骨片(創榮)
德瑞荷比所藏一些甲骨錄(利氏學社)
天理參考館藏甲骨文字(天理教道友社)

此外，還有尚未出版但已拓製完成的本所購藏甲骨[25]，都在收錄的範圍。也希望花園莊出土的甲骨拓片能早日發表，使本書內容得更充實。

摹寫的字形必附上著錄號，以便於使用者核驗。過去所有的文字編所標明的都是舊著錄的號碼，這在當時是不得不如此的做法，且所謂的「舊著錄」也是相對而言的，我們所謂的舊，在當時人而言可能是最新的。

---

[24] 《類纂》的底本其實是《殷墟甲骨刻辭摹釋總集》，《摹釋總集》所摹釋的還有《東京大學東洋文化研究所所藏甲骨文字》，但因該書的拓片「基本上《合集》均已著錄，故摒而不錄」(見《類纂》姚序)。

[25] 據鍾柏生先生稱，這批甲骨有少量新字。

《甲骨文合集》出版後，可說將舊著錄囊括殆盡[26]，是一部甲骨拓片的集大成之作，學者取讀容易，在舊著錄極不易得的今天，我們從《合集》所摹錄的字形，一般都標示《合集》的號碼。不過《合集》的拓片有很多不如舊著錄清楚[27]，凡遇《合集》拓片不清而舊著錄清楚者，則從舊著錄摹寫，同時標上《合集》和舊著錄的號碼。

（二）字形編排

甲骨文字中，一字多形的現象是普遍存在的。字彙書所收錄的字形，如果只是臚列而不排比，則易流於「重複龐雜」，因此我們打算用分期分類的方式將字形系統化，一來避免異體字太多時顯得雜亂無章，二來可以看出文字的流變及各期文字的特色。

至於「合文」，大抵是兩個或兩個以上單字的組合，「合文」本身並不是一個單字，我們打算依照《甲骨文編》等的做法，釐爲專卷處理，但仍以分期分類的方式排比。

（三）字形的歸部

「部首」是《說文解字》的發明，但這種「部首」施用於甲骨文，其局限性是很大的。姚孝遂先生在《類纂》「序」上說：

> 這種部首的劃分，延續使用了將近兩千年。《說文解字》的研究對象主要是小篆，同時也包括一部份古文、籀文，這些文字形體的時代屬於戰國秦漢。五百四十部的使用，無疑是一個偉大的創舉。但同時也不容否認，五百四十部有其很大的局限性。
>
> 任何偉大的創舉，都不可避免地具有不完備性和不成熟性。適用於小篆的分部，不一定能適用於早期的殷商甲骨文、西周青銅器銘文，或者是晚期的隸楷書體。何況即使就五百四十部本身來說，有許多也是不盡合理的。

---

[26] 當然還有一些遺漏的。

[27] 參見拙作《殷墟甲骨文字表》p.369，北京大學博士論文，1995。

我們姑且不論這五百四十部是否合理，但要拿甲骨文字去遷就從小篆分析出來的部首，其左支右絀是很明顯的。島邦男早就意識到這一點，所以他的《殷墟卜辭綜類》就以甲骨文字爲對象「創作了獨立的部首」[28]，我們認爲就甲骨文字而言，這項「創作」也是一個「偉大的創舉」。

截至目前爲止，幾乎所有的文字編，都是按照說文的部次編排的，這種編排方式有其方便的地方，也可以讓使用者易於跟別種文字編相參驗。如「長」字《說文》在第九卷，則只要翻開各種文字編的第九卷，前後稍一翻查即可找到「長」字互相參證，這是使用說文編排方式的一大優點。對於份量不多的古文字材料，本身自無自創一套部首的必要，則沿用《說文》也是一種權宜的辦法。

但是古文字材料中，能夠跟《說文》完全聯繫的字畢竟不多。反之，更多的說文所無之字，有相當比例連歸到說文那個部首下都有困難，即使願意削足適履亦不可得。這一類的字和無法隸定的字，一般都歸入「附錄」，因爲數甚多，故「附錄」往往極爲龐雜。如果一個字不見於《說文》，且亦不見於文編之「正文」，在「附錄」的茫茫「字海」中，要尋找該字，常有「兩處茫茫皆不見」的無奈。因此，以古文字材料本身爲對象，分析出自己適用的部首是很明智的。

《殷墟卜辭綜類》從甲骨文字中分析出164個部首，《殷墟甲骨刻辭類纂》也沿用這些部首，只做了局部的調整。我們的《甲骨文字編》也採用這個辦法，這可以說是不得不爾的趨勢。我們也視字形的實際情況，對部首做了小部分必要的調整。

（四）關於隸定

一個字而有好幾種不同的考釋，這在甲骨文研究中是常見的。考慮到《類纂》有辭例可以參考，我們一般採用《類纂》的隸定，但也不是完全依從《類纂》，同時也參酌學者的研究成果做必要的修改。至於各家的不

---

[28]《殷墟卜辭綜類》凡例「關於部首」。

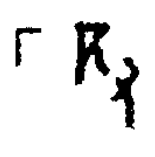
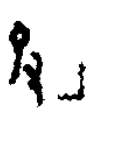
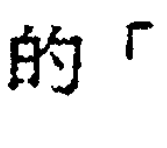
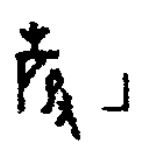
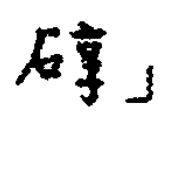
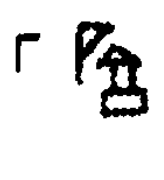
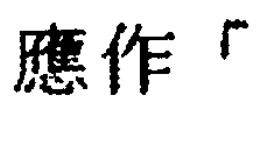
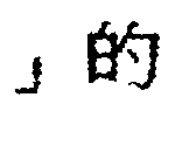
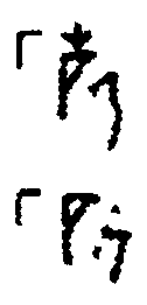
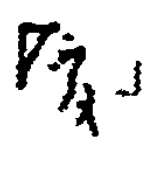
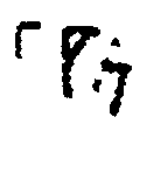
同考釋，松丸道雄和高島謙一二氏所編的《甲骨文字考釋綜覽》[29]。足資參考，本《文字編》在這方面無意求全。

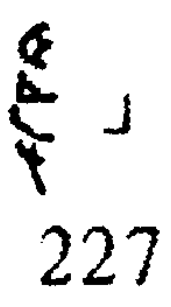
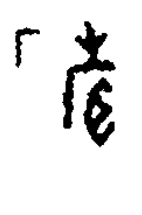
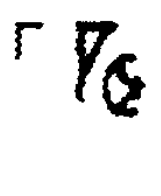
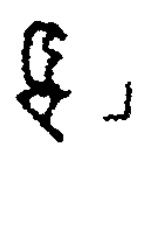
（五）文字的分合

姚孝遂先生在《類纂》「序」上，曾提到文字的分合問題：

> 我們的任務之一，就是將某些同一文字的不同形體歸併在統一的字頭之下。同時，將形體相近似，但肯定不是同一的文字，分離開來。這些都有可能與傳統觀念發生衝突。要想分合得準確而恰當，難度是相當大的，我們必須慎重將事。

從我們處理文字分合的經驗中，的確深刻體驗到這個「任務」的「難度」。甲骨文字的分合，並不是簡單的把一些字重新加以排列組合即可竟事，而是必須有相當的根據。即使「慎重將事」也未必能完全做到「準確而恰當」。事實上，《類纂》對分合的處理，也有一些不盡合理的地方，後來出版的《甲骨文字詁林》[30]曾做了一些修正，但《詁林》中的分合可以進一步討論的地方還是不少。

姚孝遂先生主編的《甲骨文字詁林》曾把《類纂》編爲2270號的「」、2272號的「」、2280號的「」和2277號的「」（磬）合爲一字。拙文〈釋磬聲〉[31]則進一步考訂《類纂》2275號釋爲「」的「」字應作「」，即「磬京」合文；《類纂》2283號釋爲「」的「」也是「磬」字。此外《合集》21050的「」、《合集》9339的「」都是磬字。

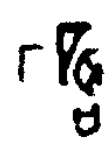
拙文第二節則印證《合集》20082號的「」是聲字之說，並考訂《類纂》2282號的「」、2267號的「」字、2273號的「」與2281號的

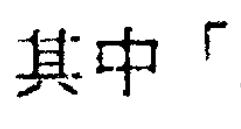
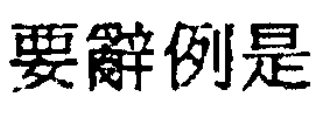
---

[29] 東京大學東洋文化研究所發行，1993.3。

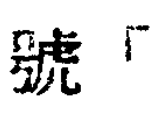
[30] 北京中華書局出版，1996。

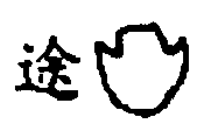
[31] 《第三屆國際中國古文字學研討會論文集》，p.205-210，香港中文大學，1997.10。

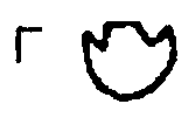
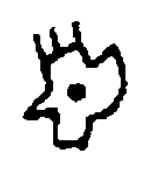
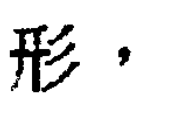
「」都是聲字。可惜這一節經《論文集》編輯剪貼之後，有一大段內容張冠李戴，終至全文無法通讀。

這裏再舉一個可以合併的字例。《類纂》1086號「首」字下列兩個字形，其中「」的主要辭例是「」（《類纂》釋「途首」），例如：

甲戌卜，㱿貞：翌乙亥，王途首無囚。　　　　《合》6032正

《類纂》3425號「」字頭下引一卜辭云：

己丑卜，古貞：王途無𡆥。　　　　《合》916正

辭例與1086號的「途首」一樣，我們認爲「」也是「首」字。「」是側面象形，「」是正面象形。

上面所舉只是分合問題的幾個例子而已，同類的問題還有很多。處理文字分合時，把原先認爲一個字的異體分爲二或更多個字，固然增加了一個或更多個單字；相反的，把幾個未識的字合爲一個字，其結果不只是「合併」而已，實際上等於考釋了幾個原先未識的字。

（六）關於索引

把甲骨資料「輸入」固然是一件大工程，但如果無法「輸出」，則輸入的資料即很難利用。我們希望《文字編》的檢索方式至少有部首、拼音、筆劃三種。這三種方法又以「部首」最全面，因爲甲骨文字有許多無法隸定，更不可能有讀音；有些可以隸定的字，又往往因各家考釋不同而有異，都增加拼音和筆劃檢索的困難。以「部首」而言，我們希望做到「部首交集」的方式，即可以同時點選幾個符合條件的部首，這樣必然可以省去許多在檢索欄「虛苦勞神」的時間，尤其碰到字彙很多的部首時(如「又」部)，更須要利用這種方式來縮小檢索的範圍。這個工作技術上的問題，有待和資訊工程師進一步研究。

（七）文字編的展望

過去的文編，不論是用照相或摹寫，最後完稿時都是用剪貼的，這樣的「成品」，再利用的可能性很受限制。在科學昌明，電腦技術日新月異的今天，我們並不以編出一部《文字編》爲滿足，還希望經掃描而用電腦存檔的字形可以再利用、再加工。我們進一步的工作是要利用已經建檔的字形庫，建立起甲骨文全文檢索的系統，並解決有關甲骨學的論著需大量人工墳字的麻煩。希望《甲骨文字編》的完成，能爲甲骨文字的電腦化作出積極的貢獻。

（原載《甲骨文發現一百周年學術研討會論文集》，
臺灣師大國文學系，中研院史語所，1998年）

再读胡厚宣先生《五种记事刻辞考》

尚秀妍

摘要　甲骨刻辞的非卜辞中，有一种记载卜用甲骨的来源和有关整治、收存情况的记事刻辞，胡厚宣先生写于1944年的文章《武丁时五种记事刻辞考》，对此进行了详尽的归纳研究。此后50年，甲骨学有了很大的发展，文章的某些看法和文字的释读今天看来也有不妥之处，本文将就这些问题对胡先生的文章进行一些补充和修正。

关键词　胡厚宣　甲骨刻辞　记事刻辞　某入若干　某示若干　干支　史官

甲骨刻辞，绝大部分是占卜刻辞，除此之外，还有为数不少的非卜辞，它们在体例、内容和行款上都表现出与卜辞不同的性质。这些非卜辞从材料上又可以分为刻在跟占卜无关的骨上的刻辞和刻在卜用甲骨上的刻辞两种，在后一种非卜辞中，有一种地位特殊，内容记载卜用甲骨的来源和有关整治、收存情况的记事刻辞非常引人注目，胡厚宣先生在1944年写了名为《武丁时五种记事刻辞考》的文章，对这些记事刻辞进行了比较详尽的归纳研究，其结论至今仍被引用。

文章首先指出，甲骨卜辞本身之中，也常常包含若干记事文字，如验辞，刻于卜用甲骨上的甲子表，祭祀表以及武丁时甲骨有记宜于义京之事者，龟版中刻于骨桥边际，无钻灼卜兆，和同版其它卜辞不相联属的偶然附刻的记事文字，还有武乙文丁时甲骨有记夨几屯几之事者，等等，接着胡文指出“除此之外，武丁时甲骨文又有所谓甲桥刻辞，甲尾刻辞，背甲刻辞，骨臼刻辞，骨面刻辞等五种刻辞者，亦皆记事文字。”之所以是记事文字，是因为“甲骨中有有卜兆而无卜辞者，绝无有卜辞而无所属之卜兆者，五种刻辞无一例有其所属之卜兆，必为一种卜辞以外之记事文字可知矣。”胡文又按内容把这些刻辞分为两类，一类是“某来若干”，“某入若干”，“某氏若干”或“三自某若干”，另一类是“某示若干”，此外，“尚有一附加之部分，记日期，地域及史官签名。”胡文把五种记事刻辞分别按这两类进行了介绍。

甲桥背面多写刻一种简单的记事文字，是为甲桥刻辞，有第一类“某来若干”，“某入若干”，“某氏若干”或“自某”，“三自某”，“自某若干”，“某取若干”，有“某入若干”者便无“三自某若干”，反之亦然，二者不共存，是定例。第二类有“某示若干”，附加部分有日期、地名，史官签名，也有的甲桥上第一类“某入若干”，与第二类“某示若干”共存。

腹甲正面右尾刻辞为尾右甲刻辞，只有第一类“某入(若干)”，“某来(若干)”，不见“三自某若干”和第二类“某示若干”以及附加部分，“可能地方有限，恐与卜辞相混。”

背甲背面近锯缝之边缘上的刻辞为背甲刻辞，有第一类“某入若干”，“某来若干”或“自某若干([illegible])”，第二类有“某示若干([illegible])”，附加部分有日期，地名和史官签名，第一类和第二类有共存例。

锯成半圆形的骨臼中的刻辞称为骨臼刻辞。第一类中没有“某入若干”，只有“三自某若干[illegible]”一种形式，第二类为“某示若干[illegible]，某示若干[illegible]又一[illegible]或丿”，有附加部分日期和史官签名的特多，史官签名中又有两个史官共同签名的。

骨面刻辞如刻于正面，则常在骨面宽薄一端之最下方，如刻于反面，则常靠近边缘，也是利用偏僻地方，刻与卜辞不相干的另一事。第一类中没有“某入若干”，只有“三自某若干[illegible]”一种形式，第二类为“某示若干([illegible])”，第一，第二类有并存例。

胡文所讲的五种记事刻辞，现在一般统称为署辞，胡文说在五种记事刻辞上有的还有附加部分 即日期和史官签名等，如果 把那些单独的史官签名和干支日期也算作独立的署辞的话，那么署辞中的甲尾刻辞还应包括尾左甲刻辞，如胡先生另文《卜辞记事文字史官签名例》(以下简称《签名例》)中附图30史官签名“狄”，以及腹甲反面甲尾刻辞，如《签名例》中附图27—29史官签名缶，㱿，背甲刻辞还应该加上背甲正面顶端刻辞，如《签名例》附图16—26史官签名㱿，犬。

在对五种记事刻辞内容的解释上，胡文也提出了很好的意见。如说“若以有无‘某入若干’分，则甲桥，甲尾，背甲三种龟甲刻辞为一类(有)，骨臼，骨面等胛骨刻辞为一类(无)”，“某入若干”之“入”与《尧典》“九江入锡大龟”，《左传》僖公十五年“乘小驷，郑入也”相同，为他动词，而有进贡之意，“某来若干”的“来”也是他动词，是“进贡”的意思。“某入若干”的形式“必谓某国或某人呈贡某种物件也”，因刻于龟甲上，则此物必为龟甲无疑，卜辞中又常言“(来自南)以龟”，则“某入若干”一类龟甲刻辞，是记贡龟之事的，殷代北方多牛，卜用牛骨可以自给，无需他求，故牛骨刻辞不见“某入若干”一类记载，卜龟皆南方所贡，北方不产，故于龟甲之上，随记其来源，大抵贡龟之人，非殷王之官，即与殷王关系密切之人，龟之产地虽在殷的南方，但贡龟之地，则不限于南方。胡文又说“三自某若干”之“三”应释“乞”，读为“取”。这种形式龟甲，牛骨刻辞都有，所以“知殷人于龟甲，牛骨皆有采集之事”；[illegible]，胡文释为“匹”，“若干匹即若干对，惟牛骨刻辞及背甲刻辞以对计算，郭沫若释[illegible]为冎，读骨，可从。丿为片之古文。”这些意见都有其合理的成分。

胡文发表至今已有50年，50年间，甲骨学有了很大发展，以今天关于署辞的知识来看，胡文便有许多可修正之处。胡文说：“此种记事刻辞，乃武丁时所特有之风气，祖庚，祖甲以后绝不见。”据现有材料看，这种说法是不确切的。除了属于武丁时期的宾组甲骨中有大量署辞外，𠂤组、历组(胡先生定为第四期武乙、文丁时)以及武丁以后的出组、何组、无名组、无名黄组、黄组甲骨中也有为数不少的署辞，只是武丁以后的署辞形式更为简略，多只有干支日期或史官签名而已(关于史官签名，胡先生另有《签名例》一文加以叙述，可能胡先生并没有把这些单独的签名看作是与五种记事刻辞性质相同的一种刻辞)。下面我们分别举些例子。

除胡先生已举过的尾右甲刻辞外，未举出的还有：

丁丑[illegible]入七，　　　　《合》20646·骨面

历组刻辞，传统定为武乙、文丁时期，我们采取新的说法，定为武丁晚年到祖庚时期。胡文曾提到“武乙，文丁时甲骨有记夨几屯几之事者，亦皆不得为卜辞也”，但并没有列入五种记事刻辞中，《小屯南地甲骨·前言》中说：“武乙、文丁的记事刻辞，都是骨面刻辞，刻辞形式主要是‘干支 夨三屯口’(□为数字)，少数是‘夨三屯口’，有时在‘夨三’与‘屯若干’之间插入一个[illegible]字或夨字，最完整的形式是‘乙未，夨三屯 六，自[illegible](3028)”。历组的这种骨面刻辞属于胡文五种记事刻辞第一类中的“三自某若干”一种形式是没有疑问的。我们可以举些例子：

己巳 夨三[illegible]屯三　　　　《合》35166

壬辰 夨三屯三[illegible]　　　　《合》35174　倒刻

甲辰 三屯十屯　丙寅尸 三 屯　一自□　　　　《合》35211

丁酉 夨三夨屯三　　　　《屯》700

历组骨面刻辞中也有单独的史官签名，如：

中　　　　《合》32921

有的反面有干支，如：

辛亥　　　　《屯》849

出组背甲反面有史官签名，如：

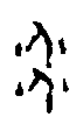
[illegible]　　　　《合》22855反

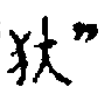
出组骨背上也有史官签名及干支日期，如：

旅　《合》23126反　　口　《合》24063反　　彭　《合》23241反

己酉史[illegible](?)示　《合》24432反

何组骨背也有史官签名，如：

彭　《甲编》2695　合 31358 反

至于何组正面左右甲尾上的签名“”更为多见。参胡先生《签名例》附图 30—37 所举。

关于无名组的记事刻辞，《小屯南地甲骨·前言》说：“康丁时期也有记事刻辞，但形式简单，只记干支，一般都刻在牛胛骨反面下部边缘，刻在左边缘的大都倒刻，刻在右边缘的，都是正刻。”如：

己酉　《屯南》2714　己未　《屯南》2719
甲寅　《屯南》2728　辛酉　《屯南》4559

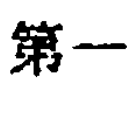
无名黄间类也有干支骨面刻辞，如：

乙亥　《屯南》2307　庚午　《屯南》2302

黄组也有干支骨面刻辞，如：

癸未　《屯南》2264

我们认为，署辞是记载卜用甲骨的获取、修治和收存手续的档案。胡文五种记事刻辞的第一类“某入若干”，“＝自某若干”大致相当于获取手续，第二类“某示若干”大致相当于修治手续，附加部分的史官签名相当于收存手续，关于这一点下文将有详述。我们注意到第一类中的“某入若干”形式多不附干支日期，“＝自某若干”形式多附干支，第二类“某示若干”常附干支并附史官签名，也就是说这些干支可以表示王室官员采集甲骨的日期，修治甲骨的日期或收存甲骨的日期。出组（含出组）以后，署辞形式简化，只记史官签名和干支，或二者分别单刻，无名组和黄组的那些单独刻的“干支”和何组单独刻的签名可能是记甲骨收存的日期和官员。

在署辞中某些字的释读上，胡文也有不少可商榷之处。如第一类中的“某若干”胡文释为“某氏若干”，“氏”读为“致”这是采取于省吾先生的说法，现在一般认为：就是“以”字，象人手提一物，其本义大概是提挈、携带这一类意思，“致送”是从这一本义引申出来的意义。“＝自某若干”的“＝”胡文也采取于先生的说法，“应释乞，读为取。取，乞义通。又‘＝自某若干’又有作‘某取若干’者亦可证‘＝’之必有取义……乞龟即取龟之义，犹言采龟也。”我们觉得“乞”不如仍按传统训释为“求”，意思为“搜集”。甲骨文中“乞”训“乞求”也是很常见的。“乞自某若干”又有作“某取若干”的，“求”和“取”正是一对意义相关的动词，如成语“予取予求”。

胡文说：“若以是否以“ ”记数分，则骨臼，骨面，龟背甲为一类，甲桥，甲尾为一类”，“ ”释为“匹”，“若干匹”即若干对。骨臼、骨面刻辞都是牛胛骨刻辞，牛胛骨和龟背甲都是成对的。按“ ”字不应释为“匹”，于省吾先生释为“屯”，是很对的。“屯”，文献中作“纯”，《仪礼·乡射礼》：“二算为纯……一算为奇”。“纯”是集体量词，一纯就是两个，也就是一对。“若干屯又一丿”的“丿”，或作“乀”，至今尚无确释，胡文认为就是“片”的古文，最近李家浩老师撰文，认为可能是《说文》卷十二的“亅”或“乀”字，读为“一算 为奇”的“奇”，“亅”，“乀”的读音跟“奇”的两个读音上古分别相近。“奇”为个体量词，跟集体量词“纯”正相对应。

陈梦家说：“（五种记事）刻辞的通例，最先是‘入者’或‘被乞者’，其次是‘示者’，最后是‘签署者’……在命龟之前，有一些卜官管理卜事，大致分为三种，有经手进入甲骨的‘入者’‘乞者’，有整治甲骨的‘示者’，有经管甲骨的‘签署者’，这些卜官又兼为命龟的卜人，尤其是签署者多为卜人，但也有专作‘签署者’，而不作卜人的。”也就是说，署辞是对正式占卜之前的甲骨的获取、修治、收存等三道主要手续的记载。对第二道手续的中心动词“示”字，学者们有不同的说法。胡文认为“某示若干”是记载祭祀龟骨，“大约殷人既得龟甲牛骨之后，在卜用之时，须先经过一种祭典。”我们不太同意这种说法，因为如果“示”是祭祀龟骨，应该与正式占卜在时间上是前后紧接的，那么位于“某示若干”之后的史官签名在时间上如何安排呢？《合》116 反甲桥刻辞：“我以千，妇井示卅，争”，合 838 反甲桥刻辞：“我以千，妇井示卅，宾”，“我”送来的这一千只龟，妇井为什么要分数次祭祀呢？如果说妇井分数次负责修治，然后交付不同的官员收存备用，就显得合理多了。陈梦家以为“示”是对龟骨的钻凿，“‘某示’之‘某’大约即系凿钻的人；‘帚某示’之例最多，或许多由‘妇’担任的”。我们也不同意这种说法。观察卜用甲骨的钻凿情况，可以看出钻凿是根据占卜的具体情况而因事制宜的，即使同样大小的龟甲或胛骨，其钻凿的位置和数目也经常是不相同的，这表明钻凿和占卜在时间上相距很近。如果钻凿是在交付收存之前由妇某等成批进行，为什么她（他）不把它们做得一致些呢？做具体的修治、钻凿、契刻工作的是手工工人，他们的名字不会被刻在卜用甲骨上，刻在甲骨上的只能是某项工作的主持人或负责人，“妇某”等的工作大概是负责指导、督查龟骨的剥剖锯错磨平等事。另有一种说法把“示”读为当“看”讲的“视”，

（转下页）

（接上页）

认为视，从见示声，示，视古书有通用的例子。我们查验古书，“视”的基本意义有两个，一个是“看”，一个是“给人看”，“让人看”，在表示第二个意义时，“视”和“示”通用，但“示”只有“给人看”、“让人看”、“让人看”的意义而没有“看”的意义，大概“视”在表示“给人看”，“让人看”的意义时，有时用假借字“示”，有时则不用假借字。《周礼·大卜》“眡高”，郑玄注：“视高，以龟骨高者可灼处示宗伯也。”“眡”，“视”为一字异体，表示的是“给人看”、“让人看”，的那个意义，即可以用假借字“示”表示的那个意义。“某示若干”的“示”与此相类，可以解释为“指示”，“示若干”意思大概是指导、督查对若干龟骨的修治。

李学勤先生指出，宾组卜骨中有些上面有与祭祀有关的记事刻辞，它们刻于胛骨正面边缘部分或扇部一角，或在胛骨反面有臼角的一侧外缘靠下的部位，都位于胛骨不施钻凿的部分，也是卜辞以外的一种特殊的记事文字，并揣想这些有记事刻辞的胛骨就是辞中所用牛的骨胳，这些刻辞，仍是说明卜骨来源的记载。如果此说不误，可以算作对胡先生五种记事刻辞内容的一个扩充。

参考书目：陈梦家：《殷虚卜辞综述》。李学勤：《论宾组胛骨的几种记事刻辞》。于省吾：《甲骨文字释林》。裘锡圭：《说“以”》。李家浩：《仰天湖楚简十三号考释》。《小屯南地甲骨·前言》。郭振录：《“干支”记事刻辞及其相关问题》。胡厚宣：《卜辞记事文字史官签名例》。

（原載《殷都學刊》1998年第3期）

读《甲骨文字典》兼论甲骨文工具书之编纂

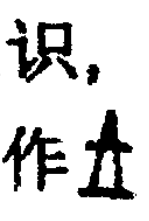
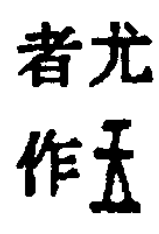
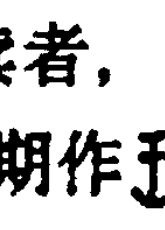
——为纪念徐中舒先生百年诞辰而作

陈炜湛

徐中舒先生主编之《甲骨文字典》由四川辞书出版社出版于 1988 年，迄今已达 10 年。在此书出版之前，甲骨文方面的字书先后有《簠室殷契类纂》、《殷虚文字类编》、《甲骨学文字编》、《续甲骨文编》、《甲骨文字集释》以及《殷墟卜辞综类》等书面世，其中流传较广、影响较大者当推 1965 年中华书局出版之《甲骨文编》修订本（以下简称《文编》）。此书出版后，10 年间复有《殷墟甲骨刻辞类纂》、《甲骨文字字释综览》、《甲骨文字诂林》三书问世。综观近百年甲骨学史，上述诸书出版于不同时代与地区，可谓各具特点，各有其用，且各自反映了编著之时学术界的研究成果，于初学者或专业研究人员均有参考价值。但严格说起来，平心而论，真正堪称“字典”者，百年之中却唯此一部《甲骨文字典》（以下简称《字典》）。

《字典》面世不久，承徐老错爱，赐赠一部，深感荣幸。粗粗翻阅，便觉此煌煌巨著，委实不同凡响，远胜前出诸书。只缘牵于他务，一直未能细读，而只限于一般的查检之用。今年系徐老百年诞辰，乃怀着虔敬之情，穷二月之力拜读《字典》全书一过，间与他书相校，获益良多，感受亦至深。

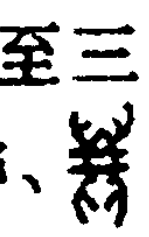
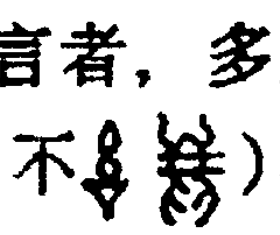
诚如徐老《序言》所言，《字典》是以《甲骨文编》、《甲骨文字集释》二书之长为借鉴，采择近年古文字研究及考古发掘之新成果而编纂的。“在搜集字形方面是统览每一字全部字形基础上精选有代表性的字形，按断代标准分列于各期之下”，“在文字考释方面是博采众家之长……或择善而从，或参以己见修订补充，务求内容切实稳妥，表达明确精炼。”是以表现在字形方面，《字典》对《文编》、《甲骨文字集释》二书“有所是正”；在考释文字方面，《字典》“尽量吸取诸家考释之精华而有所创新”。前者如释小（及小母、小甲、小祖乙），后者如释且（祖）、释帅（㠯）。此外，编纂者研究古文字的心得，“经过反复研讨之后”编进《字典》，如释弁。这是极为谦逊的“自评”，但《字典》之优胜远不止此，其于甲骨学之贡献亦远不止此。愚意《字典》之优胜与贡献至少有下列五端。

一曰创新体例。较诸前出同类书籍，《字典》最突出之处便在于开创了新的体例。表面看，《字典》仍按《说文》次序编排，每字之首仍冠以《说文》篆文，似乎一仍旧贯，其实大不然。《字典》对所收录的每个甲骨文字，不论识与不识，是否见于《说文》，均分字形、解字、释义三部分予以处理。对每个字都有所交代。就“字形”而言，它不是简单地罗列重文，而是选取典型字形按时代先后排列，做到了少而精。而且对字形的断代分期，也极谨慎，均据通常的五期断代法进行，将“历组卜辞”包括在武乙、文丁时期内。阅读《字典》，读者第一个“开卷”之“益”便是对甲骨文字断代观念、发展变化观念的深刻认识，于初学者尤其有益。《字典》告诉读者，同一个字不同时字形往往不同，像王字，一期作，二期作，三、四期作 ，五期作，其发展轨迹十分清楚。这是此前没有一部字书做到过的。就“解字”而言，不论是博取众家之长抑或别立新说，都能做到要言不烦，明确精炼，尽管若干字的解释不无可商之处，但从总体看，确如上引徐老自评，是“切实稳妥”的。即如卷一“王”下〈解字〉曰：

> 象刃部下向之斧形，以主刑杀之斧钺象征王者之权威。

大家知道，关于王字的解释，颇多歧异，徐老早年亦曾撰有专文《士王皇三字之探原》（1934 年，《历史语言研究所集刊》四本四分），谓象人端拱而坐之形。今取新说解之，寥寥 20 余字便将众说纷纭之“王”讲清楚了。又如卷五“殸”下〈解字〉曰：

> 从殳从 南，南为乐器， 所以击之。 正象鼓乐之形，与《说文》篆文形同。《说文》：“殸，从上击下也”，即为鼓 之意。

亦仅 50 余字，言简意赅。卷内〈解字〉长逾二百乃至三百言者，多属征引诸家之说且予评论，或申述编者一家之言者，如释皃（弁）、圣、彝、（不）、自、亥等，但为数较少。再就“释义”而论，《字典》对入录的甲骨文字均“以解字所定之义训为据，参考卜辞实际用例、分列义项，举出卜辞辞例且加隶定说解之”（引自《凡例》），更是创举。如“天”下列四项：一、人之顶颠也；二、大也；三、地名、方国名；四、人名。再如“自”下〈释义〉列三项：一、鼻也；二、己也；三、由也、从也。每一义项之下各摹录卜辞原文为证，且附释文。如此录辞以释义，将该字之本义（义不明者当然不在此列）与其在卜辞中之实际含义相合或相异的状况描述清楚，引导读者从句子或词组中理解该字在甲骨刻辞中的用法与实际意义，这对各类读者均有大益。它对专事甲骨文学习与研究者的启迪、帮助是不言而喻的。对于从事古代汉语、汉语语法史词汇史教学和研究的读者来说，《字典》无异给他们提供了一份丰富而准确的商代语料。《字典》“释义”部分容或尚有疏漏之处（详下文），卜辞释文亦未必人皆赞同，但它所展示的语言实际却是无可争议的，它对古文字学、语言学乃至史学的贡献是十分明显的。

《字典》体例方面的创新还在于：互见，编目。所谓互见，是指“凡一字在《说文》中作数字或有数用者，则以重见某卷某部为互见参考之用”；而“同一偏旁相从有较多之字形者，则于该部之外附录有关各字简目及所属卷数部首，以便参照”。如卷二口部后列 132 形从口而归入他部者，卷四目部后列 24 形从目而归入他部者，卷八人部后列 74 形从人而列入他部者，等等，便于读者查找。所谓编目，是将所有入典之甲骨文字及其异体以卷次先后为序编为总目录，置于卷首，极便观览与检索。此目录洋洋大观，无异一册甲骨文异体字表，可收以简驭繁之效。这也是以往各种古文字字书所未曾有过的。

二曰增释新字。将《字典》与《文编》及《续甲骨文编》、《甲骨文字集释》等书稍作比较即可发现，《字典》增释了许多新字，而且绝大多数是确凿可靠的，仍有可商者只占少数。如卷一，《字典》与《文编》所释相同者有一、元、天、吏、上……等共 38 字，新释者计有祉、祡、祰、祠、社、祸、袂、瑛、珏、兹、薪、莽、葬 13 字，约当已识字之四分之一，

若除去重见于他部者则净增 7 字，约当已识字之八分之一。又如卷二，《字典》与《文编》所释相同者有小、少、八、分、介、公、余……等共 70 字，《字典》新释者有曾、呼、启、㕣、吅、前、徒、进（進）、徙、还（還）、迟（遲）、避、后（後）、衛（率）、[illegible]、[illegible]、踉、疋、[illegible]、嗣，计 20 字，略少于已识字之四分之一。其余各卷新释之字，卷三有器、舌、善、曼、減、役等 15 字，卷四有瞚、皆、婴、雉、离、殺等 23 字，卷五有簋、典、嘉、养、饮、良、墉等 22 字，卷六有柳、榆、索、贯等 19 字，卷七有朝、稷、稻、香、宦等 23 字；卷八有保、仲、咎、身、屎等 20 字，卷九有包、山、岳、庶、而等 15 字，卷十有戾、狼、狐、夷等 19 字，卷十一有湔、衍、冬、雪、燕等 19 字，卷十二有乳、聝、妻、娶等 23 字，卷十三有绝、编、亟、基等 14 字，卷十四有勺、斗、娩等 8 字。《字典》全书较《文编》增释者共有 253 字。这是仅就见于《说文》者而言。按《文编》正编收字 1723 个，见于《说文》者 941 个，是《字典》增释者实已超过四分之一，近数十年间诸家考释甲骨文之成果，大体上已备于此。

须加说明的是，上述《字典》“新释”字是专就《文编》而言的。其中实际上也包括了对某些字的改释和若干旧说的恢复。如，罗振玉释朝，谓“此朝暮之朝字，日已出茻中而月犹未没，是朝也”（《殷虚书契考释》卷中）。唐兰、董作宾等从之。王襄、商先生释萌，《续甲骨文编》、《文编》亦皆释萌。今《字典》复取罗说，乃于卷一删萌而于卷七增朝，甚是。再如，《甲骨文编》从商先生释阱，谓“象穿地陷兽之形”，《文编》隶定为，次于丹字后，谓“从䖒从丹，《说文》所无，人名”。今《字典》复释阱，次之于井字后，举《续》四·五·五“阱麋于斿”一辞以证其穿地陷兽之义。再如，郭沫若著《卜辞通纂》时即释香，《续甲骨文编》从之而《文编》入诸附录（编号为 3193），今《字典》从郭说释香，且说曰：“从黍从口，象盛黍稷于器之形，以见馨香之意。所从之口为盛黍稷之器。”较郭说更可信。又如，或作，《甲骨文编》释殇与矩，商先生序文指出实为一字，《文编》改释为矩，云“从矢，从巳，《说文》所无。”其实释殇本不误（《续甲骨文编》从之），《字典》乃恢复之，而以“从矢从尸，象以矢加人以会伤人之义”释之，且举《乙》七〇〇“帝弗殇唐邑”之辞以证之。凡此均可见编纂者眼光之独到处。

三曰纠误匡谬。以《字典》与《文编》相校，还可发现，前者胜于后者之处，不仅在于增释大量新字，还在于前者纠正了后者不少错误，包括释字、说义、摹写等方面的错误，且根据对甲骨文一字多形现象的研究进一步归并异体字。《文编》中若干字形不见于《字典》相应卷次，除有部分是由于改释他字外，其主要原因便在乎此：《字典》未再沿谬习讹也。下面试举数例以明之：

例（一）《文编》卷一“祖”下原收二形，前者引自《铁》四八·四，原拓实作，乃祖辛合文，孙氏误摹。后者引自《拾》一·一四，孙氏注曰：“沮丁，卜辞用沮为祖。重见沮下。”卷十一复列此形于“沮”下。按作者实小祖乙合文（姚孝遂说），非独字。《字典》“祖”下仅列诸形而不录二形，卷十一删沮字。

例（二）《文编》卷七“宙”下录形，直认甶为由，显误。《字典》删宙，而附此形于宀部后，谓“从宀从甶（西），《说文》所无。”类此者颇多。

例（三）《文编》卷八“仁”下录（《前》二·一九·一），文革期间中山大学哲学系某教授曾据此批孔，谓甲骨文即有仁字云云，先师容庚先生当即指出，此乃残片上之残字，不足为据，亦决非仁字。今按此字首录于先师商承祚先生之《殷虚文字类编》，殆一时失察所致，岂料以讹传讹，竟逾半个世纪。《字典》删之，至确。

例（四）《文编》卷八“服”下引（《林》一·二四·五），似视所从之为舟，殊无据。字实不识。《字典》删去服字而附此形于卷三又部后，云：“从从（当作），所会意不明。”

例（五）《文编》卷十一“滋”下录（《后》二·四〇·一六），实乃之误摹，《字典》删去滋字而附此形于卷五皿部后，谓“从在中，疑为鼎，所会意不明。”

例（六）《文编》卷十有奚字，卷十二复列从女之㜎，又列从双爪之婴，谓“从奚从臼，《说文》所无。或释奚。”按古文字从大从女每可通，从爪与从臼意亦每同，婴下所列四形，实乃奚之别构。《字典》奚下即将㜎婴并入，〈解字〉曰：“象以手牵揾罪隶发辫之形，其罪隶形作等，皆为头上有编发之人形。”

此外，卷五仓下增列形，删卷七之而并入卷六之南，卷八伐下增等形，卷十光下增从女之，易下增等形，卷十一合于沈，合于雩，合霁于，卷十二归于释乍（作）等等，亦均属异体字之归并，反映了新的研究成果。

四曰风格独特。众所周知，徐老研究古文字，很重视考古和民俗等方面资料的运用。他在《怎样考释古文字》一文中说道：“……因此考释古文字，一个字讲清楚了，还要联系一系列相关的字，考察其相互关系。同时还要深入了解古人的生产、生活情况，根据考古资料、民俗学、社会学及历史记载的原始民族的情况和现在一些文化落后的民族的生活情况来探索古代文字发生时期的社会生产力和生产关系。根据这些东西，探索每个字的字源和语源。这样考释古文字，才有根据，也才比较正确，而不是凭空悬想，望文生义。”（《出土文献研究》，文化部文物事业管理局古文献研究室编，文物出版社 1985 年 6 月第一版，第二一四页）徐老这一学术主张在《字典》中得到了充分的体现，成为《字典》独特的学术风格。如对甲骨文丙、出、各、穴、复、良、京、亯、阜、陟、降、丘等字的解释，便均与古人穴居或半穴居有关，对告、舌、言、令等字的解释则与古代铃铎有关。卷内堪称一家之言者颇多，虽未必尽是，但可信者较多是肯定的，由这些一家之言汇合而成的学术风格也是极为鲜明的。

可贵的是，在形成或保持《字典》学术风格的同时，编纂者们对自孙诒让、罗振玉、王国维以来的诸家之说依然采取实事求是的态度，不持门户之见。考释甲骨文字之说，不论新旧，凡有可取者均予采录。虽因体例所限，博取众家之长者，一般不注明出处，初学者不易判断其取自何人之说，但对读者而言，一部工具书能做到这样，便觉得很好了。这一点，上文已有论及，兹不赘。

五曰书字精美。《字典》正文凡千有六百十三页，卷首序言 8 页，凡例 2 页，皆以毛笔正楷精心书写，一丝不苟。尤其是正文的解字与释义部分，楷书固属工整，所书甲骨卜辞亦清新自然，富有气韵。《字典》但署编纂者名而不及书者名，然阅读《字典》，无异欣赏书家作品，受到艺术的薰陶。（目录、检字、引用书目以钢笔书字，比之正文，相去甚远，是为美中不足处。）综观 70 年代以来出版的各类古文字工具书，姑不论其内容，就书写形式言，亦多不能望《字典》之项背也。

上述五端，仅其荦荦大者。凡认真读过《字典》全书者，相信会有同感。《字典》确为迄今所见最切实用、适应面最广的甲骨文工具书。倘要我向初学者或其他专业人士推荐学习甲骨文的工具书，自当首推此书。那么，《字典》是否已十全十美，无可批评？当然不是。掩卷细思，《字典》仍不无遗憾处，仍不能尽废前出诸书。

不录合文，是遗憾之一。合文为古文字之特殊结构形式，甲骨文中使用尤为频繁，《字典》理应有所体现，以便初学。《文编》于相关字之下录其与他字合文之形式，如开卷首页一字下便列有一人、一羌、一牛、一羊、一牢、一豕、一月等 18 个合文，分别注明见合文某页；复于正编之后附以《甲骨文编合文》，收录 371 例，甚便研习者。此实《文编》之长，宜加吸取者。

不编附录，乃遗憾之二。自罗振玉编印《殷虚书契待问编》，商先生《殷虚文字类编》附有待问编以来，许多古文字字书都将不识之字编为待问或附录，提供读者进一步研究。将各个时期所编的待问或附录略作比较，即可明了古文字研究的进展及尚待努力的领域，于学者颇为方便。《文编》将不能辨认的字或尚有争议者，依其偏旁所从分类，编为附录上，又将校改时从正编和附录中抽出来的字及补收的新字，编为附录下。《续甲骨文编》将《说文》所无之字以其所属部首附之于后，尚未考释之字无法分析其偏旁者另辑一卷作为待问编。现《字典》不编附录而将未识之字不论其结构之可否分析，皆附于各部之后，不免显得芜杂。特别是有相当一部分字“字形结构不明”，“所象形不明”、“字形所象不明”，亦即不知所从者隶属各部之后，便见牵强，终觉不妥。此类文字不如集中于附录以便研究，正编也少见累赘。

未能充分利用海外刊布之甲骨资料，为遗憾之三。70 年代至 80 年代初，在《字典》着手编纂之前以及编纂期间，海外陆续出版了不少著录甲骨文的书籍，计有《欧美亚所见甲骨录存》（饶宗颐，1970）、《北美所见甲骨选粹考释》（李棪，1970）、《殷虚卜辞后编》（明义士著，许进雄编辑，1992）、《明义士收藏甲骨》（许进雄，1972）、《美国所藏甲骨录》（周鸿翔，1976）、《怀特氏等收藏甲骨文集》（许进雄，1979）、《东京大学东洋文化研究所藏甲骨文字》（松丸道雄，1983）、《法国所藏甲骨录》（雷焕章，1985）等书，以拓本或照片著录甲骨一万余片。此外，李学勤等所著《英国所见甲骨集》出版于 1985 年，著录甲骨 2600 余片。这些原材料的发表，对于编写《字典》，诸如选摹字形，摹录卜辞文句等等无疑是极为有利的。尤其是美、英两国所藏甲骨，其拓本绝大多数足可取代美国人方法敛当年所作摹本。可能是由于客观方面的原因，上述重要甲骨资料竟未能为《字典》编纂者所利用，在《字典》中了无反映，不免令人惋惜。如《怀特》八三八有，从宀从，便未见于前出诸书。

解字、释义尚有不尽如人意处，则属遗憾之四。就解字言，前后不一致的现象偶有所见。如卷二“單”下曰：

> 此字初形应象捕兽之干，作形，后于两歧之端缚石块而成形，更于歧下缚以绳索，使之牢固，遂成形，此即《说文》单字篆文所本。本为狩猎之具，故狩，兽之初文从作。又用为武器。参见卷三干部干字说解。

又卷三“干”下则云：

> 《说文》：“干，犯也，从反入从一。”按干应为先民狩猎之工具，其初形为，后在其两端傅（缚）以尖锐之石片而成形，复于两歧之缚重块而成，遂孳乳为單。甲骨文无独立之形，但（狩）字从此。狩又作，故知为一字之异形。金文干字作（毛公鼎），应即之讹。重见卷二吅部单字。

二说互见，前后相隔一卷，但解释颇不一致：两歧之端缚的石块还是石片？歧下缚的是绳索还是重块？不免令读者疑惑。就释义言，缺释义项现象则并不罕见。如卷四“隹”，〈解字〉谓“甲骨文象鸟形，隹鸟本为一字”，甚是；然〈释义〉仅谓“用为语词之唯，典籍作惟、维”，而不及其本义。其实隹有用其本义之例。《合》37513 言“获隹百四十八”，《合》48102 言“［获］隹百二十二”，“获隹二百十二”便是。是为缺释本义。又如卷八“先”，〈释义〉列义项四而不及人名、地名；卷十“大”，列义项九而不言其乃二期贞人名，是为缺释假借义。解字与释义方面的不尽如人意，还有一些是涉及学术观点的差异，读者甲满意之处可能正是读者乙觉得需商榷之处，可略而不论。

此外，《字典》无音序索引，书写精美而不注意用字规范（屡见已淘汰之异体字），多处笔误未能校改，也可说是小小的遗憾。

综上所述，《字典》虽是迄今令人最感满意之甲骨文字书，但离“理想”二字仍有一定距离，尚有进一步修订（或改编）之余地。

按古文字学的发展规律而论，各类权威性的字典（字书）是古文字研究成果——主要是识字方面成果的阶段性总结，具有里程碑的性质。《字典》可说是本世纪末叶甲骨学史上的一块里程碑。可以预见的是，随着研究的深入，将有一批新字被考释出来，现有的许多有争议的字会被论定，再隔若干年，到下世纪初叶，必然会有新的里程碑出现。我衷心希望，这新的里程碑，便是《字典》的第二版！现在来具体讨论如何编纂此“第二版”《字典》，不仅为时尚早，且有越俎代庖之嫌。作为读者，只想结合本文所论，提几条建议，供编纂者们参考。

一、基本上保持现有体例。关于甲骨文字典的编纂，我曾主张，“必须依照甲骨文本身的形体特点，归纳整理出相应的部首，而后根据各部之间形体或意义上的关系加以系联编排。”（《甲骨文简论》，1987 年 5 月，上海古籍出版社第一版第 32 页）当时主要是因为《说文》分部不合理，检字繁难不便，故认为岛邦男《殷墟卜辞综类》的尝试“是可贵的，有益的”。现在看来，此说并不恰当，应该放弃。编纂甲骨文（及其他古文字）字典之类工具书，仍以《说文》部首为序编次为佳。《说文》固有繁难处，殊不知依“形体特点”归纳出来的部首，其多寡因人而异，据以编次，检索更为繁难。凡治古文字者视《说文》为桥梁与钥匙，必先熟习之。古文字之工具书若皆以《说文》次序编排，则熟悉《说文》便可收一通百通之效，虽欠科学，但方便，易用。科学性强者未必合用，而所谓“科学性”亦因人因时而异，难求一致。对非专业工作者而言，古文字工具书如何编排，“科学”或“不科学”其实都无所谓，关键是要有按汉语拼音方案编的音序索引和依汉字笔画多寡为序编的笔画索引。

解字，释义，互见，亦一如《字典》。在释义的同时，还应注意区别词性，注明所从属的词类。所收之字，凡可确知音读者，亦宜加以注明，或沿用中古的反切，或采用拼音方案

注音，或二者兼用，皆无不可。

二、字虽不识但其偏旁结构清晰，可确知其属某部者，附于各部之后，称“《说文》所无”，或仿大徐本《说文》之例，称“新附”。

三、字不识且难以确定偏旁结构者另编一卷，称附录或待问。

四、合文除附见于相关文字之下外，另编一卷并录卜辞以证之。

五、全书以毛笔工楷缮写。

感谢徐老及徐老领导下的编纂者们，他们以8年之辛勤劳动，为学术界，为广大读者编纂了堪称里程碑的巨著《甲骨文字典》。

希望有志于斯学者，希望徐老的学术传人们，宏扬徐老的学术风格和治学精神，再接再厉，在《字典》基础上增删修订，广泛吸纳新的研究成果，使之臻于完善，以飨读者，以慰徐老在天之灵。

1998年5月作于广州

（原載《徐中舒先生百年誕辰紀念文集》，巴蜀書社，1998年）

就《殷墟甲骨刻辞摹释总集》浅议甲骨文的释文诸问题

何疾足

一

释文，把刻在甲骨上的文字和它们构成的句式，释译成现代汉字和古代语言，使之在一定层次上有更多的人能读出（不一定都能懂得）甲骨文的词句来。毫无疑问，这当然会使这批珍贵而古奥的原始文字资料得到广泛的利用，可以说，促使甲骨文在社会的使用功能上得到一次解放。因此，甲骨刻辞的释文是相当重要的工作，在甲骨学领域里占有不可忽视的地位。

释文和考释不同，考释是就甲骨刻辞的一字或一词追本索源，考证出后来的什么汉字，需要钩沉索隐，连篇累牍，构成专篇、专著；也有顺着甲骨著录的原片次序，在释文之外取其难字加以考证解释，从《殷虚书契考释》直到《小屯南地甲骨考释》等均是。

释文是在考释的基础上进行的，初看起来，释文似乎仅仅是一次通俗化的事情。然而事实远非如此。第一，释文是总结考释成果的工作。考证文字无异是披荆斩棘、开辟草莱，前代学者费尽毕生心血，时而出现石破天惊，成为“一字师”。释文固然要吸取这些正确的有定论的成果。也有不少文字，花了不少气力，吸引了许多学者，冥思苦索，而至今仍是聚讼纷纭，莫衷一是。但是释文如何隶定，不能回避，这就需要抉择，要求深入了解，反复比较，从而用较高的见识，决定正确或比较正确的取舍。所以，这一点可说释文是高度的概括，要求超越个别的考释，不见得比考释轻易多少。第二，释文要体现甲骨学的成果。因为释文不光是“对译”汉字，而是要解释句读，作到文从字顺。有些考证，对一个字的解释也许头头是道，却不一定能符合它在文句中的原意。而释文则要尽量作到全面、贴切，避免顾此失彼，前矛后盾的现象。而且释文不仅仅是停留在句读上面，还要解决卜辞的章法问题。正如古书上的“章句”，一版甲骨上的数条直到十数条的卜辞，它们之间的先后次序，对贞的关联，正反面的连接，兆序、兆辞的所属，等等，都有内在规律、因果关系，是一个整体，是有“章法”的。但这种“章法”由于当时的占卜习俗或方法的殊异，甲骨本身的残断，往往表现出“杂乱无章”。释文在这一点上难度就更大，不是一般的文字考释所能解决。这就要求认真吸取前人的甲骨学成果，掌握有关商代占卜程序、方法和刻辞的基本知识，还原其本来面目，并以之传播给读者和使用者。第三，不同资料的补正和残辞的认读和互补，也是释文所要承担的任务。甲骨在流传过程中，出现传拓、摹录和照相的不同版本，它们互有长短优劣，文字有正误，释文要加以勘校，取长补短，以归于正。尤其是碎片残辞在现有的资料中占了很大的比重，有的是一辞之残，有的是几辞的残文存留在一片上。作为理想的释文，对前者除残缺过甚的以外，一般应当补足；对后者则当把几辞分开来，分别予以补足（或加以空格标记）。这是因为绝大部分的卜辞往往反复出现，形成一定的句式，只有个别事类词句的不同，所以可进行。残辞互补。这方面，前人已经做出了范例。这里当然要求释文作者熟悉甲骨学、熟悉卜辞，成竹在胸，则能触类旁通。否则，仅是就字释字，不能体现出完整辞句；或者对几条辞句误分误合，不知所云，都是释文的大忌。

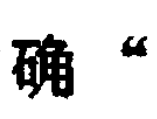
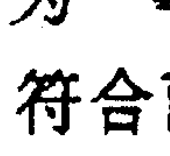
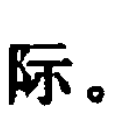
上述只是对一般已有考释的文字和一般常见的卜辞而言，至于未经考释或未得大部分人认可的文字的释文和比较特别的辞句、残损过甚的卜辞，则当别论而不应苛求。

释文也还涉及到分期断代问题，涉及甲骨的缀合及其正误问题。不过，所依据的是已经作过整理的著录，这些就比较次要的了。

总之，释文毕竟是一项艰巨的工作，它既关系到古文字学，也关系到甲骨学，尤其是后者；它既要具有通俗性，也更具有科学性，这样的释文，不光是普通读者（初学和其他各学科取材者）、也是专业学者都需要的。

二

《殷墟甲骨刻辞摹释总集》（姚孝遂主编、肖丁副主编，中华书局1988年出版），是当今一部大型的释文书籍。它以集甲骨著录大成的《甲骨文合集》和最新成果《小屯南地甲骨》以及新问世的《英国所藏甲骨集》三书为底本，依次并依照各书原编号，逐版和逐条刻辞，加以摹录和释文。上栏摹写甲骨文原形，下栏对应释出现行汉字，极便于对照认读，弥补了历来著录书有释文而无摹录和只有摹录而无释文如《殷虚卜辞综类》的不足。可以这样概括：资料全，形式新，使用方便，雅俗共赏。它的贡献，正如本书《序言》说的：“为促进甲骨文字的研究工作，并为甲骨文字资料能得到更为广泛的利用。”

我们读了《摹释总集》（以下简称《摹释》）之后，觉得它还有许多长处。诸如：摹写的甲骨文原字，基本上体现出各期、各组的字体风格；隶定文字的确“尽可能地吸收现有的研究成果”，根据“自己的判断作出恰当的抉择”，显著的是把“”一律释定为“以”字，把有些“史”字释为“事”，“㞢史”为“有事”，“邙史”为“御事”，“衩”为“禣”等，不囿于前人成说，符合商代文字的原义和语言实际。“乍大田”的“田”认定不是“”字，澄清人云亦云之误。《合集》的29783有一“”字，从上下文义而释作“斧”，也该是正确的，可能为“王”字的释义提供新证。这只是随便举几个例子。

《摹释》还用拓本对照摹本纠正误字，又用摹本补正拓本因原物残损导致的漏字、漏笔，作得颇为细致，也是值得提倡的作法。

《摹释》所定的科学性与通俗性相结合的原则，也是正确的，具体到释文中，照顾一定的灵活性，即把一字的多种异构一律隶定为较通用的一字，也是合适的。

总之，《摹释》的优点和成功之处很多，都应为甲骨学界所肯定和重视，为利用此项成果的社会各学科尤其是初学者所欢迎。

三

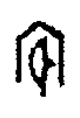
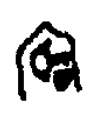
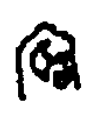
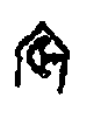
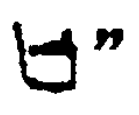
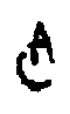
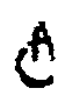
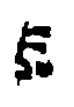
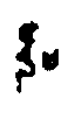
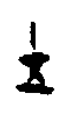
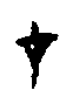
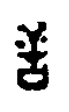
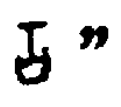
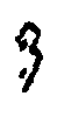
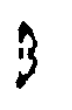
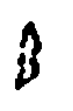
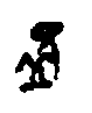
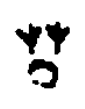
当然，由于这样一部大型的书，又是在短期内集聚众手克臻完成，不可避免地也存在一些缺点、错误。其中，有些是出于疏忽，有些是认识和理解的问题。这里，我们就自己的看法分项提出来，一是与作者商榷，有些问题牵涉到甲骨学上的是非，即如何把释文作得正确，符合要求；一是列出一些明显的错误和缺失，提请使用者的注意，引用时有的需要查对，以免用错资料。在这些问题中，我们举的例证较多，是为了尽量反映得全面一些，但远不是勘误。我们倒是想建议，有人能作一次全面的校勘工作，使《摹释》更好地发挥它应有的作用。

四

释录定的问题。这里主要是指原字字形摹与释的错误，不是指该字的含义，当然也牵涉到对常见的或重要的字、词的认读。

1. 误认

因误认而致错误隶定者，见之于《甲骨文合集》片号的，如：

8089：，释为“庭”，当为“宜”。而
23296：，当是“庭”而误为“宜”；而
27124：，当是宜即“庭”，又摹为，下漏“”旁。
8459反：“雀入十在…”常见的甲桥刻辞，“雀”误为“佳”。
9017：“臣”误为“”。“臣”决非“”字，二字区别明显。
9275：“豚”误为“豕”。
9360：，误为。
9401：，误为“”（在）本为“五十”的合文。
9511：，误为“告”。
12386：“麦来”误为“其来”。
12937：“翌”误为“明”。
22529：“旨”误为“”。
22715：“大甲”误为“妣甲”，“小甲”误为“麦甲”。
22834：“畐”误为“酒”。
28143：，误为“”释作“弹”。而
8442：，又误释为“ ”。
27883：廗，释为“陷”，此字从丹与从井有别；而
39687：“子麋”释为“子陷”，亦误。
28037：，释为“须”，与原形不符。
28126：鼓，释为“莫”，与混为一字。

个别的也有摹误而释文正确者：

36330：摹误"甲"，而释文纠正为"壬"。

2. 文字的误合、误分

误合者，如：

8837 反：丁巳帚井，把"口早"二字误合为"韋"字。

27966："祖乙"二字误合为"即"字。

28047："于之"二字误合为"武"字。

29695："叔贝"二字误合为贸"字。

31318："九月"二字误合为"弘"字，并插入另一全辞中。

误分之例：

9225：，明显是一人名，误分为"今毕"二字。

27444：，误分为"木丁"二字。

27890：，误分为"自鱼"二字，28237 亦然。

27973：，误分为"下盟"二字。字当为（铸）字之残。

33136：，误分为"石亨"二字，而 34137 同一字又释为"碠"。

35343：，误分为"帚"二字。""是著名的词组，对探讨"众人"的身份极有价值。这样误分，就改变了原义。这个字的结构有时松散，但有重见字对照，决不是两字。

36318：，误释为"蒸禾"二字。

40761：，误析为"獻龟"二字。

3. 常见字的释读问题

有几个常见字的释读，也存在不妥当或可商榷之处："王固曰"一律释为"王𡆥曰"，是不妥当的。固与𡆥，在卜辞中出现很多，用义有别。尽管对它们的读音，各家解释不一，但比较一致地认为：固相当占字，𡆥即后来的祸字。因此"王𡆥曰"不论从字义或从字形来看，都是不通的。

，释为蕉，是有根据的。但把（28799）字也释为蕉，就不一定妥当。字应该是"焚"字的一种写法，尽管蕉与焚的意义相近，但是不能相等，形、音的区别都大。焚字的出现应当很早，甲骨文已有很多，若把它们都看作蕉字，那就意味着甲骨文还没有焚字，后世的焚字渊源无着，这是说不过去的。

此外，"亡"字直接译为"無"字，固然通俗，没有违背定例。不过也是有得有失，亡字作为"無"、"没有"的意思，是用了相当长的时间，读者在先秦乃至秦汉的古书里会经常碰到；而甲骨文中的"無"原形是舞字，而今用"無"释"亡"，对"無"为"舞"又缺乏交代，使读者反而认不出这两字的渊源。我们以为"亡"可以照原形释出，或在几例中交代它的意义即可。第一次出现时，在"亡"后用括号注以"無"字。

29092：，释为"朝"，而与相混。

29356：，释为，无据。

30188：叀戊，误释为"东方"。

30553：屮，误为"片"释"子"。

31688：，误为"亥"。

31930：此，误为"延"。

32217：又伐，误为"乙卯"。

35395：又伐，误为"有戌"。

32344：㞢，误为"壬"。

35354：美犅，误为"羌贞"。

36337：，误为"孽"。

36528：方，误为"庚方"。

36679：，误为"壹"。

36756：西，误为"卤"。

39499：酉，误为"奠"。

40392：鼓，误释为"惟"。

这些例子，都是发生在所据原片字迹清楚的场合下而致误的。还有一些因字迹不甚清晰或残缺太多而误释的，以及不甚常见的字、词有误释的不在此列。至于迄今无确释的文字，所隶定为见仁见智者，亦当别论。

这类错误，出现在干支字和一些简笔字上更为普遍，如：甲误为壬，丁误为己，己误为二、误为丁，戊误为河，申误为戌，壬误为午、误为于、误为王；寅误为丑，卯误为丑，辰误为戌，午误为子，辛误为乙，申误为戌，戌误为亥等。乎误为于，于误为甲，人误为允，允误为人，在误为于，我误为戊，岁误为十，劦误为彡，夕（祭名）误为月（无月的祭名），（贞人）误为卜，等等。

有些是摹写正确而释文错误的：

27069：大吉，释文误为"大甲"。

28148 反：亡𡆥，释文误为"之日"。

28155：五䨘，释文误为"王䨘"。

30000：石，释文误为"辛"。

32616：桒惟（三辞）释文误为"桒贞"。

32814：白或，释文误为"今或"。

32996：辰，释文误为"内"。

32999：辰，释文误为"从"。

34069：于东介，释文误为"于东䨘"。

35917 至35919 三辞：

癸酉，释文误为"惟酉"。

36667：贞王，释文误为"贞来"。

36809：癸（四辞），释文全误为"贞"。

36974：乎方，释文误为"乎伐"。

五

误读文句的问题。这里是指对卜辞的句子和词组误读，而出现的误认、误分、误合原文的词句，往往出现在一般常见的通例场合，可能反映了编者对甲骨文例的注意或了解不够。

1. 误读成语

8084：告众，此例多见，字迹清楚，而释为"告从"。

8837 反："丁巳帚井"，前已提出"丁巳"误合为"韋"字。按这是一种记事刻辞，"干支婦某示若干屯"已成定例。误合之后，去掉了干支，人名"婦某"变成"某婦某"，就违反了常例。

39609 反："甲寅帚……"误释为"甲寅卜…"，违例致误同上，这类记事刻辞不可能出现"卜"字。

8925："婦其亡孕"，某人得或不得，这是常语。释文误合另一辞"子"字，为"婦其亡孕子"，违反辞例。

26925："二方白"误释为"三人白"。卜辞有"人方白"，没有"人白"的词组。

30003："馭𦬪""亡雨"，是两个常见的词，释文误合为"馭𦬪亡雨"一辞。

30259："宁风伊奭一小牢"而误为"宁风伊大一小牢"，一字之差，使"伊奭"变成"伊大"。若以"伊"为"伊尹"的简称（有此例），而"大一小牢"更为不辞。

32983："犬自"，是一种田猎的武装，多见。而释为"虎自"。又见 32984。

33180："夕至豆亘方"，文从字顺，而释为"夕生亘方"，就不成句了。

33309："方帝"误为"允帝"。"方帝"一词多见。

35778："登禾"误为"蒸婦"。卜辞常见登（蒸）黍、登稷，而未见"蒸婦"一词。

39993："王叀今六月入商"，这是多见的句式，而误释"六月"为"夕"。

35859 至 36157 号之间，是五期的一种祭祀卜辞，在祖先名之下有一"口"字，或释"丁"、或释"祊"，如"祖丁口其牢"、"康祖丁口其牢"、"文武丁宗口其牢"，释文对"口"字都漏释。这无异于抹去了这一祭祀形式。而在 36035："武乙口其牢"却又误释为"武乙丁丁牢"，造成左右失据了。

2. 文句的误合、误分

误合如：

9339："壬子卜斫以孜户隻"，是一卜辞；"罕入"是甲尾刻辞。释文把二者合为一辞。

9340："……至五月"，为卜辞；"〔〕入"为甲尾刻辞。释文误合为一辞。

9550：释作"贞乎追其黍"，显然也是两辞的混合。

9982：释作"…亐贞王入受黍年"，把另一辞的"王入"掺合进来。这样的卜辞既没出现过，而且行款也不顺。

27313：骨片三辞，自下而上，各辞右行，而把下部两辞合为一辞。并一律按左行释读。

27368：骨条残存四辞和兆辞"吉"，自下而上。《摹释》把最下第一辞"叀丁…兹用"和其上的第二辞"丁卯卜其万于父甲"，合并为"丁卯卜其惟丁亥于父甲兹用…"也不合卜辞用语。"万"非"亥"字。

27453：把（2）（3）两辞混合为"兄惟今其三牢旦彭正王受祐"，卜辞无此句式。

30350：把召祭三个祖先的卜辞误合为一辞云："于小乙召于祖丁召于…"，就不成为卜辞句式。

31884：应为（1）"盂田亡灾"。（2）"庚寅竹示"。释文误合为："庚寅竹亡灾"。文句虽通顺，然而变两事为一事，辞义便面目全非。

35633：是两辞（1）"在，遘……弜易反…乙丑䨘…"（2）"祖乙翌日，在八月。"释文误合为："…日在八月乙丑䨘…祖乙翌弜易…在…"，文句更难以卒读了。

35965：本为两辞：（1）"…叀酉…迨……弗每。"（2）"乙亥王其吉。"而误合为"…壅…迨乙亥…王其…弘吉。"有些文字便没有释出。

36420：本为两辞：（1）"…卜，贞其又姬于高母辛…"。（2）…癸鼓小臣，其人又正，王受〔又又〕。"误合为"癸…卜…小臣其人有正…不…其…辛"一辞，失去了重要内容。

至于误分之例：

7822："贞于辛酉㞢"，这是常见的省略式卜辞，释文却分为："辛酉贞"和"…㞢"…于…"等几词，强为割裂。

8994："贞龟不其南以"，卜辞完整通顺，字迹清晰，字距均匀，行款明白。原版也无界划。释文却将它分为两句："不其南"和"贞龟以"，不能连成句意，为学者引用作商王室卜龟多来自南方的重要例证，也就失去了。

28184："河史"应是一辞，释文分为两辞："寻史"和"河…"。

35369："甲子〔卜〕，〔贞王〕宾……〔伐〕三人、卯[]〔牢〕"，本应为一句，释文分为：（1）"甲子…"（2）"…三人…"。

35816："丁巳王卜，〔贞〕王宾自武丁至于武乙衣，亡尤"，本明显是一句。释文分为：（1）"丁亥卜…宾…丁至于…衣…無尤。"（2）"…自…自…武…"两辞，词句支离，不能卒读。又将"丁巳"误改为"丁亥"。

35851："…翌日…于武丁……〔受〕又又"，本应是一句，释文为：（1）"…有…"，（2）"…于武丁…日"。

36608：原文应为："……卜，在[]贞王今……猷，王……舊。"释文分为两辞：（1）"…在…今…王…舊…"，（2）"…贞…猷。"

39495：原文应为："〔长友〕唐告曰：舌〔方𢀛我奠入〕于苋亦𢦔〔酉〕……〔戊申〕亦有来自西……"。释文分作两辞：（1）"申亦有来告自西…于苋亦𢦔…"（2）…曰舌方。"

这一类错误主要是对卜辞句式、文例了解不够所致。后面几例文句较长，本来是一期和五期常见的文例；而最后一例，有别的同文残辞，可供对照互补。由于全面了解不够，造成诸多割裂，削弱了资料的价值。

3. 颠倒词句

7886：“南奠不其〔受年〕”。也是屡见的卜辞，摹释为“…不其…南奠。”

30776：应为“…賁…卯…又又”，摹释为：“…又又…卯…賁”。也是行款读反，因为“又又”常在卜辞之末，不会出在卜辞之前。

35435：“〔在〕桑，〔贞〕…亡猒。王……征这从…东，遣上甲……”摹释为：“…东遣上甲…征…从…無猒王…桑…”。也显然是行款读反。

35488：“〔癸丑〕卜，贞〔王〕宾示癸［］〔亡尤〕。”摹释为：“…午卜，贞…宾示癸…”这里释文，词句虽没有颠倒，却没作应有的填补。按祭示癸必在癸日，干支绝无“癸午”，所以“卜”前的“午”字不当。

36517：原辞应为：“…其征盂方。叀……受又，不曹𢦏…〔王〕固曰吉。在十月，王九〔祀〕。”这是五期常见的句式。摹释却为：“…囚曰吉，在十月王…受祐不曹𢦏…其征盂方惟…。”也是行款读反，以致辞句颠倒。

六

甲骨刻辞（主要是卜辞）的章法问题。一整块龟腹甲、一整块牛胛骨上刻有数条乃至十数条卜辞的先后次序，如何释读，这个问题比较重要。目前存在的疑难也比较多。前人已作了不少研究，但只是局部的行款、文例上说出了一些定例，还没进行通盘的研究和缺乏规律性的论述。我们可以依据的是：他们释读的一些范例，如干支顺序和事类的对贞及其全辞与省略句的先后。因此，我们现在要释读全版多释，一般也只能依此探寻。因为这是最基本的前提，例如干支顺序乃是当时占卜者按时间顺序进行的，不是后人可以随便改动的。至于前人列举例证时发生错误，从而引出的某些定例不符合实际，我们则应当从实际出发，予以纠正，不能一误再误。

《摹释》在这个方面，有正确的部分，而出现的错误、给读者留下的疑问也比较多。

全版各部位刻辞的先后问题。对此，我们以为还是按干支顺序为妥；同时亦照顾不同的事类，而事类之间仍然可依干支顺序加以衔接。《摹释》有少数是按这一方法（如27042、27146等），大部分并非如此，似乎无论甲、骨，绝大多数均按部位的先下后上顺序进行，这就造成干支次序的逆向或错乱，不符合占卜次序和事类之间的逻辑顺序。

《合集》7772片，完整龟腹甲（只残左首甲一辞）正面17辞，反面2辞。干支最早为丙午，下为庚戌、辛亥，甲寅、乙卯，再转至甲子一旬中的辛未。事类是丙午日卜“[illegible]”（意义不明），部位在右首甲；接着占卜“王入”、“王勿入”于商，共六辞（三组对贞），是在丙午日卜翌日庚戌，和庚戌本日占卜，庚戌日又占卜翌日辛亥的“王入”、“王勿入”，它们分别在后甲至前甲的右、左（对贞）；然后是尾甲的二辞“王㞢匚”对贞，因同部位的反面为“庚戌卜，争”，当是这二辞的前辞；接着是乙卯日占卜“王入不[illegible]”、“其[illegible]”的两组对贞，部位在前甲中部从下至上两排，其前辞当是同部位的反面“甲寅卜，争”，最后是转至甲子起数的“今辛未王夕步”的两辞，部位在前甲的最上部右、左；末二辞占卜“王复”、“王勿复”，虽无干支，从事类看，应为最终的贞问。部位在中甲圈内。

因此，这一版各辞的顺序，应以干支先后为序，其在龟甲各部位的次序，是先首甲、次后甲、尾甲，再回到前甲和中甲。其中虽然有先下后上的方式，同时亦有先上后下的方式，特别是开始一二辞对贞（左首甲残一辞）是从甲首为起点的。

这里，顺便提出：正、反面相接的卜辞形式，释文一概没作表示，也影响到卜辞的释读顺序和辞意的衔接。

董作宾的《大龟四版考释》，归纳贞卜次序之一是“先下后上”。这并非普遍规律，不能绝对化。他所释的四版，第一和第三版，分别是从前甲和后甲开始的；而第二版更有可能是从上部开始的（他推算的干支次序有误）。

有许多整版全辞，对贞清楚，干支先后关系也很清楚，明显是先上后下。7942，大龟甲三组对贞：上部丁巳卜“王出于敦”和“王勿出于敦”对贞，中部占问“今丁巳出”和“勿往”对贞，下部占问“于庚申出于敦”和“勿于庚申出”对贞。丁巳之后三天是庚申，先上后下，先丁巳后庚申，毫无扞格。而《摹释》却先下后上，逆着干支释读。显然不妥。很难设想占卜者先问庚申日“出于敦”，然后再在三天之前丁巳日来占问本日是否“王出于敦”这种逻辑顺序。而且上部右辞是全辞，往下都省略前辞，按理也应先全后略，而今先省略句，后全辞，也是令人难以理解的。9504片，大龟多辞，依照干支次序，亦应为：先从首甲甲午起，次是前甲丙申的一组对贞，然后是后左甲的丙午，后右甲的丙辰。《摹释》则一概按先下后上的定例释读，致使本来的辞序和干支顺序发生了错乱。

9520，一完整龟甲，全版六辞，三组对贞，首甲至前甲是甲辰日的两组对贞，尾甲是乙卯日的一组对贞，甲辰—乙卯，干支相接。《摹释》从下向上释读，先乙卯再逆向甲辰。9521直至9525，是五版完整龟腹甲同事五卜的“成套卜辞”，《摹释》也就同一错误。全版四组对贞，两事相间，首甲右边先出全辞，干支戊戌，辞序亦当从此辞开始。《摹释》则一概从尾甲的无干支的省略卜辞起读。这一类的释读比较普遍，往往造成干支次序错乱，全辞到省略句的次序逆倒，也就是造成当时占卜程序的不顺。其原因都是由于固守“先下后上”的定例。类似的错误常见，如9472龟甲全版七组对贞，只有左首甲有“丁未卜……”全辞，《摹释》亦按先下后上，错误尤其明显。

8984为全龟甲，计有十组对贞，甲的首、尾干支均为癸亥，其他为戊辰—己巳—庚午日干相接。这版当从癸亥起卜，再转至甲子旬的戊辰……。而《摹释》则将癸亥置于最后。这样庚子至癸亥相距53日，太远。这是癸日起，卜下旬的例子。

当然，我们也不能说“先上后下”就是定例，有些确是“先下后上”的例子，如9741，大龟对贞，先丁未日卜在尾甲，前、后甲卜辞的前辞在同部位的反面为“戊申卜，争”，首甲卜辞的干支为癸丑。按干支次序是先尾甲，后首甲。9783（正），两组对贞，甲寅日在前甲边，乙卯日在首甲，亦是先下后上。虽然如此，但这决非定例。

这些实例说明，无论是“先下后上”还是“先上后下”，都不是定例。目前释读全版刻辞的顺序，所依据的还是占卜的时序即干支顺序。前人释读卜辞提出一些有关的见解，也是根据干支顺序而来的，今天也只能从这一实际出发。

同理，在局部版面上的多辞，不能窥其全豹，辞序更难掌握，也只有按照现存的卜辞干支顺序来释读。这方面，《摹释》表现出一些随意性。10048，是龟腹甲后部的断片，上面存有七辞，三排，都是卜祭的内容，除下排一辞过残外，都比较完全。按干支顺序应是：己卯—壬午—甲申—乙酉—丁亥—戊子—壬辰，日期也基本相连而小有间隔，按部位基本上是从上排到中排，从左至右衔接（己卯、丁亥二辞的所在部位不顺）。《摹释》的释读辞序则为：壬午—甲申—戊子—壬辰—丁亥—乙酉—己卯，即不按干支顺序，也没有依照某种部位顺序。

33309，龟腹甲后、尾部，在这个局部里所存留的七辞，干支顺序应为庚寅—辛卯—壬辰—丁酉—戊戌，最左边是丙辰，基本衔接，部位是先下后上。《摹释》却又按部位的先上后下为序，以致干支次序错乱，占卜顺序和辞气都不协调。35957龟甲所存的卜辞，上排一辞干支为丁卯，下排三辞从左至右干支为庚寅，甲午，己亥，当从此顺序。《摹释》的次序则为庚寅、己亥、甲午、丁卯，完全错乱。

七

上面说了卜甲的辞序认读问题。现在且说卜骨：

1. 一般辞序

卜骨的外缘（即骨条）辞序，常见是从下而上，但同样有自上而下的形式。其原因是先自下而上，当继续进行占卜，上部没有空地，不能再往上行时，于是转而向下。我们今天所见的这种下行的辞序，就是这部分残简。区分这两种情况，也是以干支顺序为依据。而《摹释》则一律从下往上释读，有时就形成干支逆反。如：

7807，占卜“王入”的事类，干支从上至下为庚辰—壬午—甲申—乙酉，顺次衔接，而《摹释》依然从下往上释读，干支逆反。

9620，占卜“告麦”之事，上部［己］亥贞“翌庚子告麦”，往下即是庚子日又卜问“辛丑有告麦”，己亥、庚子、辛丑相接。《摹释》先庚子，再己亥，显然逆倒。

32125，骨版三辞，亦自上而下甲寅—乙卯，而《摹释》仍依自下而上，先乙卯，后甲寅。

2. 骨面辞序

这里虽然情形比较复杂，但也只能从干支次序看出占卜的程序而决定辞序。

一种是骨扇横列数条直行的卜辞，如：

7780正，从右至左横列直行数辞，各辞的干支为戊寅—辛巳—甲申的顺序，《摹释》亦按此顺序，是正确的。而对于：

7781和7782两版同文的卜辞，则生出了参差。7781是从右至左横列直行各辞，其干支次序为甲戌—乙亥——己卯，释读正确。同文的7782与上版排列正相对应，则从左至右，干支次序相同，《摹释》不知这对应关系，仍然从右至左释读，则为己卯—乙亥—甲戌，干支完全逆反了。7803亦同此误。7779三辞也是从左至右，［］子、［］子、［］丑的干支顺序，而《摹释》却先中、次右，再左，把两个［］子的干支分在两边，违反了占卜顺序。

10111，骨面自左至右横列数条直行的卜辞，左边残损剩下一辞丁酉占卜祭大示，为一类；顺着向右三辞占卜“求禾自上甲至于多后”为一类，干支从左至右为癸亥—甲子—己巳。从事类的划分和干支的顺序，都应如此释读，而《摹释》却以甲子—己巳—丁酉—癸亥为序，显然不妥。

一种是骨扇多辞，有的纵横陈列，有的参差错落；有的各一干支，有的则几个相同的干支。如何处理辞序，情况比较复杂。这里，我们认为只要细心推求，仍然有些规律可寻。

33025，骨面五辞，均占卜“今夕亡囚”。分置三行，第一行二辞，第二行二辞，第三行（最下）一辞。这里仍应以最早出现的干支癸丑为起点，它在第一行之右，然后再下至第三行一辞的己未，即癸丑的下一旬甲寅旬的第六天，接着是第二行左面一辞的庚申，再是其右面一辞的辛酉，最后回至第一行左面一辞的壬戌。其干支次序为癸丑—己未—庚申—辛酉—壬戌。就是上一旬的癸日起至下旬的四天相次。《摹释》仍按先下而上、再先上而下之例，干支不能衔接。

33838，骨扇卜雨十多辞，排列错落不齐。但按干支次序，基本上是自下而上的形式。只是有一些横列辞和四个丁酉日占卜，似有所杂乱。依干支顺序应为丁酉—辛丑—癸卯—庚［戌］—癸丑，为两旬内的占卜。癸丑最末，也在骨的最上部。其中有些干支并非卜日而是占卜下雨的时间。同一干支的几辞都应该同列（如丁酉），是分别占卜从这日起的往下哪一天下雨。《摹释》基本从下而上释读，但错乱较多，其次序为丁酉—戊戌（非卜日）—庚［］—乙巳（非卜日）—癸丑—丁酉—辛丑—癸卯—丁酉。

至于同版一直行上的几条卜辞，无论自上而下，或自下而上，左行者一律左行，右行者一律右行，毫无例外，而《摹释》却有变乱，如：

27313，骨版三辞均右行，如前所述。《摹释》对此均作左行读。

30173，一共七辞，均为右行，《摹释》对最后（上）一辞却作左行读。

这都是自乱其例。

3. 相间刻辞的释读问题

相间刻辞是在骨条上多辞分卜两种以上的事类，各事类相间出现。读法，一是按原刻顺序，自下而上逐条释读，仍是相间存在；一是按事类归纳，把同一事类的几条卜辞集在一起，而加上序号。《摹释》两法交替使用，没有统一。如：

7859（正）九辞，其中七辞，分三组事类，“佳某（人）令”三辞，“乍兹邑囚”二辞，某“妇”事二辞。这是按事类归纳；

9958（正）亦按事类归纳。但如：

8724的五辞两组事类，则又按原刻顺序释读；

9599的六辞三组事类，亦按原刻顺序释读。很不一致。还有，如：

10043的九辞三组事类，《摹释》对下部按事类、上部则按刻辞顺序释读，同版出现两种读法，明显不妥。这反映了：一方面没有定下原则；一方面可能认读原辞不够明确。这辞本是占问“受[illegible]年”四辞，“令[illegible]疾归”三辞，“㞢㞢于匕［庚］”二辞，从下至上逐辞相间。

相间刻辞这两种释读方法，都不算错误。不过推求一下，还应当以事类集中标以序号的方法为妥当。相间刻辞实际上相当于龟甲上的对贞卜辞，设如一块全甲上不同事类的三组对贞，横看是同一事类两两相对；若将全甲纵分为二，每一纵行即形同骨条上的相间刻辞。但我们释读对贞卜辞时，毫无疑问不能把一组对贞分开，而对相间刻辞也应该按对贞卜辞一样释读。

八

释文的缺漏问题。缺漏，是释文的一大忌，无论是使原刻缺字还是缺句，都会减损甲骨文这一珍贵资料的实用价值。缺漏问题的发生，有时是因文字残损过甚、漫漶不清；有时则是由于疏忽、失误，这种情况就更为严重。一个好的释文，不仅避免已有的文字缺漏，而且能作到残词互补，能够依据已知的文例，把残损不可属读的文字填补起来，从而提高资料的价值。

《摹释》缺漏问题，虽然不能说很普遍，但初步发现也不在少数。其情况是：

1. 缺漏完整的句子

已发现漏释完整卜辞者，有：

1276：“我受年”。

8808：“王㞢壱”。

9529：“使人于𡚬”。

12354：“贞㞢于妣己”。

13925：“贞𠈇侯乎宅［］”。

22723：“在正月”。

27808：“翌日［］王其［又］于祖…”。

28344：“弜罶觳”。

29856：“至于二𠧟，于之若”。

29916：“中日其雨”。

32173：“丙辰卜，于来丙寅高妣…”。

35050：“癸巳卜，贞旬亡𡆥”。

35530：“［癸］亥王卜，贞［旬亡］𡆥，王𠧞［曰］：［吉］。在正月，甲［子祭］戔甲𠬪［小甲］”。

35582：“祭𠊊甲𡨄……”。

35957：“祖辛奭妣甲”。

36199：三辞漏释两辞。

36345：“令[illegible]册二十”。

36389：“乙丑王讯父甲𡧊”。（只释“父甲”一词）

36499：“王征人方”。

36974：“乙卯王卜，贞其乎方叀今岁若，在六月。”，“驭𡉭”。

2. 缺漏字、词

其中有些字、词少见而被人研究过，有些字、词在文辞中占着重要地位。缺漏之后，等于使这一种资料在甲骨文中消失，或使这一卜辞丧失了它本来的意义。这里缺漏者，如：

3183 反：“周入…”的“入”字。“周入”周人向商王室贡纳，反映商与周族的早期关系，这类纪事刻辞并不多见。

3972：“臣𣲡…𦫳”，甲尾刻辞。“臣𣲡”一名也不多见。

8085：“斲宗”。

8092：“[illegible]”。

8141 反：“[illegible]”。这个字已有人考释为“息”字，河南罗山后李商墓出土青铜器铭文出现了这个字，被认为是古息国的所在，在甲骨文中可能只此一例，显得十分珍贵。

22850：“燮”。

27002：“甲寅卜𢀛”。

27020：“甲寅卜”。

27023：“惟兹”。

29972：“不易日”。

30002：“[illegible]𥥈”。

33126：“在丂”共三辞都在句末者。

35356：“[illegible]”、“[illegible]”字。

35477：“史（事）”。原文“燎事”一词少见而重要。

36181：“〔令〕”“西𢼸”“从多”“若”。原辞为“贞〔令〕𩇯[illegible]盂方，西𢼸典西田［］妥余一人从多田甾正，［］又自上下于若。”是一条重要资料，缺漏之后，句子不连贯，使人无从索解。

36300：“姬”。原辞为“…王宾妣庚，姬”，已有学者研究，认为是对女祖先以女奴为祭牲，资料重要，不能忽视这一个字。

36337：“…[illegible]…[illegible]丁…”。

36481：“而人”。这是著名的小臣𤚕从征的纪事刻辞，“而人”为被征伐的一种国族，此辞经常被人引用，不应缺漏。

36775：“[illegible]”。此词也是有关用奴婢为牺牲者，亦有学者考证。

3. 缺漏一些人名、祖先名等

这些名词虽然常见，但在一定的卜辞中却有其自己的位置，缺漏之后，也使整条卜辞失去意义。如：

1662：“小乙”。

2661：“妇好”。

8411：“方”。（本为“巴方”）

22827：“龙”。

27963：“父甲”。

29813：“大乙”。

35444：“报丙”。（原辞为“王［宾］报丙𠬪日”。）

35555：“外丙”。

35568：“大庚”。

35574：“小甲”。“戔甲”。

35576：“𠬪小甲”。

35702：“羌甲”。

35749：“祖甲”。

36225：“中丁”。

36262：“妣己”。

这些祖、妣名，多出现在祭祀尤其是周祭卜辞中，研究周祭是不可缺少的依据，一经缺漏，就无所凭依，其重要性是不言而喻的。像这一类卜辞，凡字迹清楚，结构部位比较固定，不仅不应缺漏，而且有些残缺的，还可以给予补足。而《摹释》极少注意及此，如前引 35530 的周祭卜辞，残缺文字并不多，完全可以补足。但不仅没有补足，连现存的辞句都无端漏失。再如：

35893 亦：周祭卜辞，“王固〔曰〕”之后“甲子”当接“工典其酒彡”，可据以补足，但《摹释》将“甲子”插入另一辞“𠬪祖甲”之前，便造成错乱。

在这一类卜辞中，还有摹全而释文缺漏的情况如：35601、35602：摹为“大戊𠬪日亡尤”，而释文都漏去“𠬪日”祭名；35618：摹为“雍己𠬪日亡尤”，而释文亦漏去“𠬪日”祭名。

在《合集》第十二册的第五期卜辞中，有相当一部分是周祭卜辞，其中有不少残辞可依周祭定例推出本有的文字，如能做到这一点，对哪一个层次的读者，无疑都会受到益处。《摹释》似乎有一条定例，不作任何补空的工作，作为释文来说，这是否合适，也是可以研讨的。

九

关于兆序、兆辞的处理问题。兆序反映占卜一事的次数；兆辞的用意目前还没有得到确解，但它们是说明这次占卜的某种性质和卜兆的情状，大致不误。作为完整的释文，两者都不可缺释。《摹释》明言不释兆序，对于一般读者来说，这样作，可以理解。而对于甲骨学的专业，兆序决不是可有可无。并且，寻求兆序及其归属，可以对一版多辞的区分以及它们之间的关系，有个全面的了解，避免窜句、疏漏的错误发生。对于兆辞的看法和处理，《摹释》中出现一种方法，是把同版上没有契刻卜辞的“小告”“二告”为一类，“不玄冥”（我们的认释）为一类，分别集中在一起（如 8812）。这也是值得商榷的。从所有版面的情况看，兆辞多半是记在一辞之后，即在兆序之旁或末尾，而且只记一种或二种或三种，每种也只能出现一次，即记上“小告”，或“小告”“二告”，或“小告”“二告”“不玄冥”，不会对这一占卜同时记上几个“小告”“二告”或“不玄冥”。而今把几个“小告”“二告”或“不玄冥”都重叠在一起，就不能知道哪一个兆辞属于哪一次占卜的，也就使读者不清楚兆辞的作用、兆辞与卜辞（或兆序）的关系。

十

此外，《摹释》还出现了一些窜辞、窜号和重复摹释的情况。窜辞，把此句的文字窜入彼句中去；窜号，属于本号的卜辞，误入它前一号或后一号中；重复摹释，本来只此一辞而摹释为完全相同的两辞。

我们提出这些释文的问题，无非是想引起甲骨学界和读者们注意，了解释文工作并非轻而易举，一蹴而就。要知道其中的艰难困苦，认识释文与考释疏证、与甲骨学、与䌷绎史料等等，一样重要。而这一点，往往被人们所忽视。释文中遇到的很多甲骨学问题，有的已经前人研究，或有定论，或尚无定论，均须正确吸取成果；而有的问题，还没有研究，远没有穷尽，均须我们不断的探索。《摹释》作出的正面或反面的经验，都对我们有益。它启发我们思考，它所引起的这些问题，值得我们借鉴，使之认真对待今后的释文工作，避免重蹈覆辙

本文所提出的许多问题，也不敢说我们的看法都完全正确。尤其是其中涉及的一些带规律性的东西，还处于探讨之中。我们只是基于上述的认识，提出来以就正于《殷墟甲骨刻辞摹释总集》的编者和甲骨学家以及读者们。

（原载《胡厚宣先生纪念文集》，科學出版社，1998年）

中国古文字学の最前線

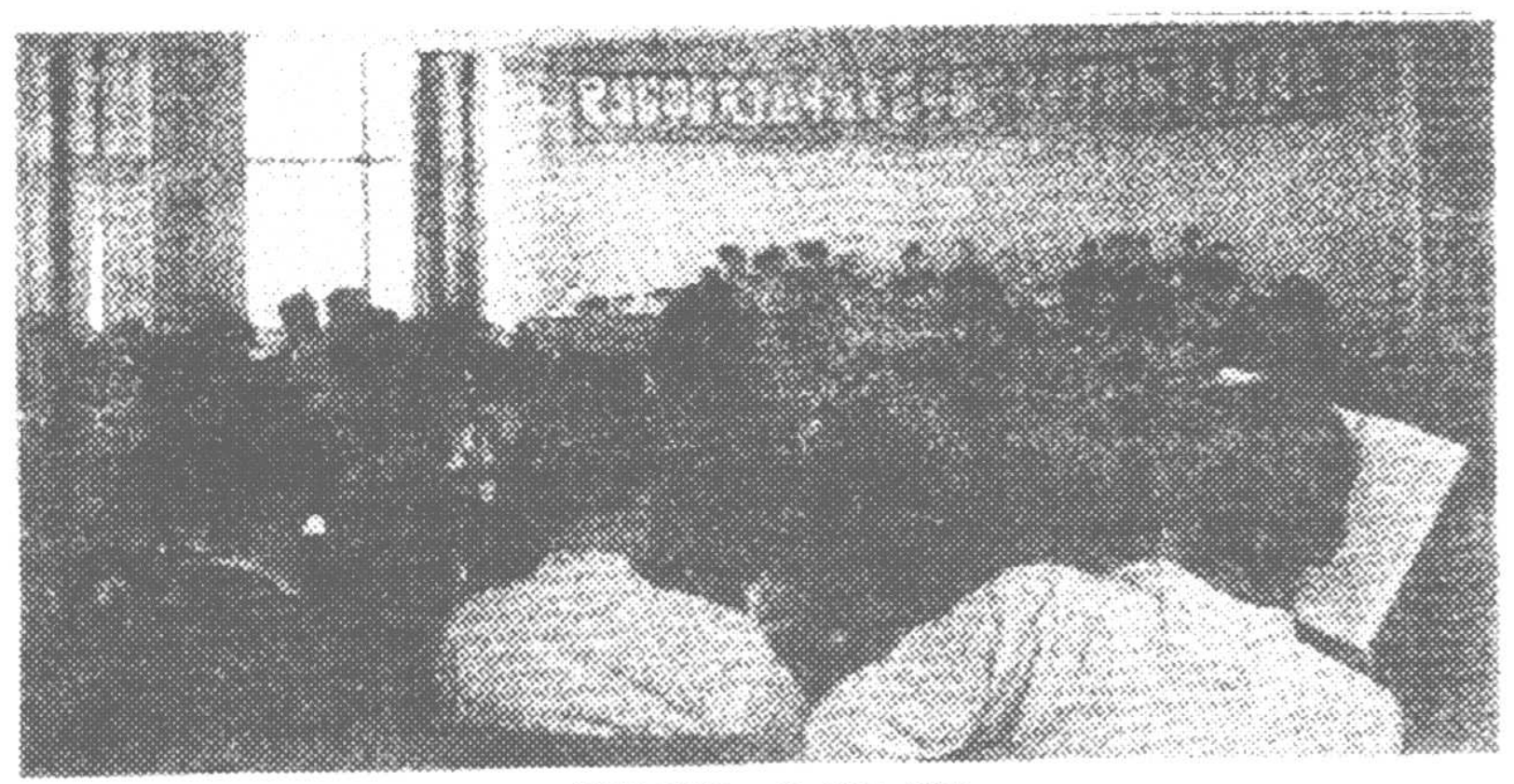
成家徹郎

徐中舒生誕100年記念 国際学術討論会開く

中国の著名な古文字研究者・徐中舒氏（一九九一年没）の生誕百年を記念して、十月十五日から十八日まで、同氏が数十年にわたって後進を指導した四川省成都の四川大学で「中国古文字学国際学術討論会」が開催された。これに招かれて参加し、小論を発表したので、この国際討論会について簡単に報告したい。

中国でいま精力的に研究活動を続けている古文字研究者がそろってこれに参加したので、内容はとても充実し、まさに古文字学の最前線ここにあり、といった感じであった。ここで発表論文のいくつかを簡単に紹介し、その〝最前線〟の一端を知っていただきたいと思う。

なお、徐氏の代表的研究を二冊にまとめた『徐中舒歴史論文選輯』（上下、中華書局）が今回の学術討論会に合わせて出版されたことも、ご報告しておきたい。


開幕式風景

発表・討論風景

研究発表は二つの形式で行われた。その一つは全体会議における発表で、もう一つは、分科会における発表と討論という形式であった。分科会は、「中国古文字学」と「中国古代史」と「徐中舒先生の業績と思い出」の三部に分かれて行われた。私は「中国古文字学」の部に参加したので、他の部の状況については不明である。日本人は、私のほかにもう一人、東京大学の大西克也氏が参加した。

以下、「中国古文字学」の部で発表されたたくさんの優れた研究の中から、特に興味深いものをいくつか選んで簡単に紹介する。

◇

◆蔡哲茂「甲骨文に見える同文卜辞を利用する研究法」

卜辞には類型的な文型が非常に多い。いくつかの甲骨それぞれに見える卜辞の文型および内容が互いによく似ている場合、これらを対照比較して未釈文字を解読したり、誤刻を発見することができる。こういう研究は従来から行われていて珍しくない。

ところが蔡氏は今回、この方法で偽作を発見した。面白い例なので紹介する。卜辞を偽作する方法はいくつかあるが、その一つとして、殷墟から出土した、字が刻されていない甲骨（字が刻された甲骨より、字のない方がずっと多い）に、本物の卜辞を見ながらそれを真似て刻する方法が行われた。この種の方法は偽造者が熟練していると、真偽を見分けるのはなかなか容易でない。ただ、もし、本物とそれを真似て刻したもの（書道でいえば、手本とそれを臨書したもの、という関係に相当する）を見つけて対照比較すれば、その状況を見破ることができる。

松丸道雄氏は以前、この方法によって甲骨拓本集『謝氏瓠廬殷墟遺文』に収録された第一番目の拓本の中の卜辞が偽刻であることを指摘した。ところが、松丸氏が指摘したのはその拓本の右半に見える卜辞だけだった。しかし今回、蔡氏はその左半に見える卜辞についても、その偽作者が手本とした本物が台北国立中央図書館蔵のものであることを発見し、『謝氏瓠廬殷墟遺文』第一甲骨の左半の卜辞も偽刻であることを証明したのである。

◆常耀華「子組卜辞の材料に関する問題」

甲骨文の「子組」とは、貝塚茂樹氏がかつて発見した「多子族」と同じ概念の卜辞である。常氏は近年、「子組」甲骨文について精力的に研究を続けている。

甲骨文を分類する仕事は董作賓氏から始まり、これまでたくさんの人が試みた。しかし、分類という作業はなかなかやっかいである。というのは、何を基準にするかで、分類結果が大きく異なるからである。常氏は「子組」を分類する際に「字体」を主要基準として用いた。そしてかなり厳格に「子組」の特徴を規定した。

しかし、「字体」に対する判断はどうしても主観的見方が介入するから、あまり厳格に規定しても意味がない、というのが私の立場である。常氏は彼なりの基準で「子組」甲骨四二七片を選び出し、一覧表にして示した。「子組」卜辞の性格を追求することは、甲骨文全体がいくつかのグループに分類が可能である、という状況がいったい何を意味するのかという問題を解決するために、有力な方法のひとつである。この方面を研究する際に、常氏のこの「子組」表が役立つことは間違いないだろう。

◆李朝遠「晋侯蘇鐘の刻字銘文と西周時代鉄器の問題」

上海博物館に、一九九二年に香港の古美術商から購入した編鐘一四点が展示されている。これらの編鐘は盗掘によって香港に転売されたものであるが、みな山西省曲沃県の西周時代晋侯墓から出土したものと断定された。盗掘によって出土したものなのに、なぜ出土地が判明したか。その理由は非常に特殊な状況のせいである。

これらの編鐘にはみな銘文が記されてある。これらの銘文によって西周時代晋侯が鋳造したものであることが分かる。この銘文は編鐘を鋳造する際に同時につくられたものではなく、編鐘ができた後に、鋭利な刃物で刻したものである。

先年、私も上海博物館を見学した際にこの銘文を注意深く観察したが、銘文は確かに堅い刃物でていねいで刻したものに違いないと確信した。この銘文が特殊だという理由は次の二点である。

まず、西周時代の青銅器で刻字による銘文は従来発見されていなかったこと。もう一つは、青銅器にこれだけきれいに刻字できたということは、鉄製の堅い刃物が存在したと考えざるを得ない。ところが従来の常識では、中国でこの時代にこういう鉄器はまだ存在しないはずであった。

だからこの編鐘の銘文は非常に珍しい例である。

ところが、これらと同種の銘文を持つ編鐘二個が山西省曲沃県の西周時代晋侯墓から考古学的発掘によって発見されたのである。しかも、それらの銘文も内容的に上海博物館所蔵のものとつながっている。また編鐘は合計一六個になるが、この数も当時の編鐘の制度と一致する。よってこれらは、みな同一の晋侯墓から出土したものであることが確定した。

ところで、これらの編鐘の銘文を刻する際に使用した鉄製の刃物についてであるが、李朝遠氏は中国でこれまで発見された鉄器および鉄器によって作られたと考えられる遺物を整理して詳しく考察し、以下のような結論に達した。

この編鐘の時代（李氏は厲王のものとする。およそ紀元前九世紀）にはまだ、鉱石から精錬して鉄器を作る技術に達していなかった。この銘文を刻する時に用いた刃物は隕鉄（宇宙から地上に落下した鉄）を利用して作ったものである。鉱石から鉄を精錬して利用する方法はおよそ紀元前五世紀に始まったという。李氏のこの結論は妥当だと思う。

書道界唯一の本格総合年鑑
年鑑 書道'98
定価一二、六〇〇円
萱原書房刊

◆劉雨「殷周青銅器に見える図像文字」

殷代周代の青銅器銘文には、一見、絵のように見える「文字」がある。単独で記されている場合もあるし、長い銘文のおわりに記されている場合もある。劉雨氏はこれを〝特殊銘刻〟と呼んでいる。

私は図像文字と呼ぶのが妥当ではないかと考える。この図像文字は古くから金文研究社の注目を集めていたが、これまでいろいろな解釈が出されている。たとえば、〝族徽〟とか、あるいは〝家族標記〟とか、あるいは〝特殊集団のしるし〟など。

青銅器の銘文は青銅器を鋳造する時に同時に作られる。だから字形や線の太さも自由自在で、筆で書く時のような制約を受けないから、絵のように見える図像文字を描くこともできた。一方、甲骨文は刀で線を刻して字を作るから、筆画や字形の面で制約が多い。そこでたとえば、同じ字を書くにしても、いま述べた事情によって、甲骨文と金文ではたがいに相当異なった字形字体になる場合がある。

劉氏はこういう現象に着目して、一見絵のように見える図像文字をよく分析し、これらそれぞれに対応する文字を甲骨文の中から見つけだした。そしてそれらの文字が甲骨文の中でどのように用いられているか調べてみたところ、これらの大部分は地名あるいは人名や部族名の意味で用いられていることが分かった。

従来、図像文字だけを見て、なかなかその意味が分からなかった。しかし劉氏が甲骨文を利用する研究法を採用して、これらはそれぞれの部族名を意味するも字が当時の美的センスによって、絵のように変形されたものであることを解明したのである。

◆丁孟「青銅器必其卣に対するX線による観察の分析報告」

商代晩期に作られた青銅器に「必其卣」と呼ばれるものが三器ある。これら三器は故宮博物院に所蔵されているが、それぞれの銘文にもとづいて「二祀必其卣」「四祀必其卣」「六祀必其卣」と呼ばれている。これらの内、「二祀」と「四祀」それぞれには青銅器本体の外側器底に数十字の銘文が記されている。ところがこれらの銘文に対しては早くから真偽論争が展開されてきた。たとえば、白川静氏は全然疑っていないが、松丸道雄氏はこれら器底の銘文は偽造であると考えている。

そこで丁孟氏はこれら二器に対して銘文の内容について検討するとともに、X線撮影を利用して肉眼では見えない内部構造を検査した。まずX線による検査であるが、これによっても偽造を思わせるようなところは全く見いだせなかった。また、銘文の内容は商王朝の祭祀を記しているが、この記録は甲骨学研究者が復元した当時の祭祀サイクルとよく合致する。最初に祭祀サイクルを発表した人は董作賓氏で一九四五年のことである。ところがこれらの青銅器はそれ以前に発見されていたから、こういう銘文を偽造することは不可能である。

以上の理由によって、丁孟氏は偽造説を否定している。しかし同氏はまだこれを最終結論とはしておらず、最後にこうしめくくっている。

「今回の研究では、故宮博物院に優秀な器械が整っていなかった上、時間的にも制約があって、我々の研究はまだ初歩的段階にすぎない。いま故宮博物院では、X線によってもっと精密に検査できる優秀な器械をそろえる準備をしている。我々は今後こういう設備を利用して青銅器の各部分を細かく検査し、研究をいっそう深めるつもりである。

◆大西克也「楚国竹簡に対する文法的研究」

大西氏は古代漢語の研究者である。ところが、従来は古代漢語の研究というと文献だけに頼る研究者が多かった。しかし大西氏は、むしろ出土文字資料を研究対象の中心にすえて、古代漢語の文法や音韻学を活用して、竹簡などを解読するという新しいタイプの研究者である。

今回もこの手法によって包山、江陵九店、荊門市郭店などから出土した楚国竹簡を研究し、先人の解釈の誤りを正し、新しい解釈を示した。

◆成家徹郎「甲骨文〝冈〟の釈字と意味―冈は鼎字の略体形・貞字の初形は〔卜十鼎〕」

私の発表は、卜辞にひんぱんに出てくる〝冈〟字についてであり、この字は一般に貞字に釈されている。しかし私は、まず出土文字資料などを使ってこの釈字は全く誤解から生じたものであり、本来、鼎字の略体形であることを論証し、さらに、周族甲骨文に現れる「卜十鼎」の字形が貞字の最初の字形であることを示した。

そうすると、この従来貞字に釈されてきたところの「鼎」字の意味について、あらためて考える必要がある。私は、これは「當」の意味だと考える。卜辞では「担當する」いい換えれば、「主宰する」の意味である。當字の最も古い字形は、今のところ睡虎地秦簡に現れる。ところが、これ以前は「當」に相当する字として「堂」が使われたこともある。もっとも古くは「鼎」字が使われていたのである。

（なりけ・てつろう＝古文字研究家）

（原載日本《書道美術新聞》一九九八年十二月十四日）

读《殷契粹编》札记

张永山

30年代郭沫若流亡日本期间，为着中国的未来，积极探索中国古代社会的特点和发展规律，寻求把普遍真理与中国历史实际相结合的途径。由于商周文献史料匮乏，而且多经后代篡改，不是理想的构筑古代社会的史料。所以，一开始他就着眼于出土文献，把甲骨文和金文视作古人遗留下来的最真实的史料，有计划、有重点地进行整理和研究，以期达到揭示中国古代社会奥秘的目的。尽管当时他接触到的资料有限，对新的研究成果了解也不及时，但凭着他深厚的文献功底、广博的知识和正确的指导思想，短短几年间，在甲骨文方面先后就有《甲骨文字研究》、《卜辞通纂》和《殷契粹编》三本专著问世。前者是通过对甲骨文字的考释，阐述“殷代的生产方式、生产关系和意识形态。”①后两者则是检选史料价值大的甲骨进行分类考释，把殷代社会生产、社会生活、政治制度和思想文化诸多方面的认识分别在有关考释中加以阐发，为研究商代社会状况奠定了基础。这三部书在30年代享誉学术界，至今仍是利用甲骨文研究商代史最简便易懂的出土文献集，同时也是学习甲骨文最好的入门向导。正因为如此，这三部书在甲骨学发展史上的地位十分重要，它们的问世开辟了一个研究甲骨的新时代，即以辩证唯物主义和历史唯物主义观点看待甲骨文，真正把它纳入了史学的领域。

郭沫若在甲骨学上取得的成就有目共睹，不论文字考释，还是新史料的开掘，或重要史实的订证，都为一代代学子所仰慕，并引导他们步入甲骨文与殷商史的学术殿堂。不过，今天我们也应该看到，五十余年来甲骨资料的激增，研究者视野的开阔和几代人的连续努力，在文字考释、文辞解读、卜辞内容诠释、社会史探讨等方面都有长足的进步。特别是近年来《甲骨文合集》的出版，不仅资料齐全，而且还有许多缀合大版面世，《甲骨缀合新编》又有所补充②，这就使过去那些断残的甲骨可以通读，或成为价值更高的史料，《殷契粹编》许多断片的拼合或改缀就是极好的范例（详下文）。要更好地继承和发扬这份遗产的学术价值，促进学术繁荣，充分发挥它在振兴中华方面的社会效益，有必要在新的条件下对某些具体考证进行审定和补充。在这方面曾有人作过《“殷契粹编”校读》③，提出过很好的意见。因为仅是“节录”，可能有些意见还未公诸于世。由于工作需要，我们在读《殷契粹编》时对照现有的研究成果，记下点滴认识，把它整理出来④，希望能有助于《粹编》今后在甲骨学领域更好、更准确地起到应有的作用。别人已专门作过订正的，这里不再罗列。

《粹》8

此片可与本书276片缀合。原释文分别为“…于夒受禾。……母，三小宰”；“□子贞：桒……　……小辛……”。缀合后应改作：“□子贞：桒于夒受禾。　□□媙小母，三小宰。”这里的字是跪跽女子手举武器的形象。武器上下两侧近内部带有齿牙，分明是戚的象形写法，该字甲骨文写作等形（《屯南》1501、3572、4545），故跪跽女人手举戚的形象当隶定作媙。

《粹》31

考释云：“‘使人于𠂤’当是以人为牲。”非也。卜辞有“使人于我”（《合集》5525⑤）、“使人于沚”（5530）、“使人于𡚸”（5532正）、“使人于𡆥”（5540）、“使人于眉”（6568正）等，介词“于”后均为地名，故“使人于某”的刻辞都是派人去某地执行使命，与“以人为牲”无关。

《粹》79

此版有一条“其大邗王自上甲盟，用白豭九，下示……”卜辞，它与《屯南》2707完整的两条刻辞和《合集》32330一辞相同，只是占卜日期有别，命辞均作“其大邗王自上甲盟，用白豭九，三示牛。”《屯南》的二辞载明“在大乙宗卜”和“在祖乙宗卜”，《合集》的一辞则是“在父丁宗卜”。这些宗庙都供奉着在商王国历史上起过重要作用的先王神主，表明在这些宗庙举行的祭祀活动不仅相当隆重，而且还隐含着某种尚待揭示的历史真谛。

《粹》83

该片与第137片缀合，残辞得以补足，全辞为“甲戌卜，尹，贞：王宾上甲亡𡆥。”

《粹》91

释文原作“贞上甲五牢。吏”。这里的“吏”或应隶定为“事”。因为他辞有“叀上甲事，遘彡”（27051），“其遘上甲事，彡”（27052），“先彡大乙事，又正”（27106），“□大乙事，其征大丁……”（27126），“□□卜，大乙事……祝”（27127），“甲申卜，贞：祖乙事，其……”（27203），“祖丁事，至二……”（27292），“甲申卜，小乙事，其征……”（27355），“戊戌卜，祖丁事，其征妣辛、妣癸……”（26367），“𠂤甲事，其征般庚、小辛，王受又”（《屯南》738），“壬辰卜，妣辛事，其征妣癸，叀小宰”（《屯南》323）等，很明显，这些卜辞中的“事”当为祭名。对比《粹》91片释文“贞上甲五牢。吏（事）”，显然是残辞，“贞、五”之上缺文，而“贞上甲”和“事”又在一竖行，参照《屯南》323之辞，释文似应改作“……贞：上甲事……五牢。”

《粹》109

释文中“力（吕）”本作丆，与通常释作“力”的乂（22099）字构形迥异，区别在于斜画的位置有上下之分。在卜辞中的用法两者也迥然不同，前者乃指用牲之法，如“丆𧴪小母用”（22238）、“丆羊”（22239）、“丆于祖乙三牛”（1076正甲），后者多表示妇女的某种行为，如“帚石乂”、“妾乂”、“孃乂”（22099）、“帚嫖乂”（22370）等。于省吾对这两个字分别有详细的考证，他说：“甲骨文力字作乂，劦𠂤男劫等字从之，绝无从丆者。丆与乂分明是两个字。丆或𠯑𧧑所从之丆，乃乇之初文。”进而推论它的字义，指出“乇字孳乳为舌、括，均应读为矺”，在“典籍中通作磔，是就割裂祭牲的肢体言之。”（《甲骨文字释林·释乇、舌、括》⑥）而“甲骨文力和从力从劦之字都是由耒形演化而来”（《释林·释𪏽》，所以本片的的丆字应改释乇。

又，辞中的字作者后来又有新的认识，《安阳新出土的牛胛骨及其刻辞》中提出所从的“才真是‘鑪之初文’。”（《郭沫若全集》考古编一）本书第934的“𩵦”之正是“鑪之初文”。

《粹》112

缀合片“大庚七”之后的“米”隶定作釆，非是。40多年前已有人著文《米为小甲合文说》⑦，现在又有许多学者进一步论证，该字确是小甲合文，已成定论。

《粹》120

郭老提出“侑三匚母豕”的“‘母’殆谓三匚之配”。傅学苓先生依据“贞𡧊于王亥母豕”（685）之辞指出，“母豕”犹孟子言“母彘”。其说可从。不过也有人主张“𡧊于王亥母豕”是祭祀王亥之配⑧。罗琨对这种观点有驳议，她释“母”为“女”，先分析“侑于王亥妾”与“侑于王亥四十牛”（672）对贞之辞，论定“‘王亥妾’不是一个词组，包括了祭祀对象和祭牲。”进而考证“‘𡧊于王亥女、豕’当与‘册于妣庚𠬝、新南’、‘侑于妣己𠬝、垂’同例，女亦为献祭的牺牲。”⑨故“王亥母”绝不是王亥之配，这就更证实“三匚母”之“母”亦不可能是“三匚之配”。

《粹》135

释文中的“子马”之“子”原作，其字在《屯南》1078、4178、4287亦作此形，文辞也相同，均为“集马自大乙”。实际上该字头上的为横书手形，与爪相通，《类纂》释孚，与他辞“贞：我用”（903正）的张网扑获之物相符。它与卜辞中的俘（）字仅是繁简之分，正如金文中的俘有时也写作孚（师寰簋）一样。准此，“子马”当改释“孚马”。

《粹》136

“贞：于大乙左伐”之“左”当为“又”，假为侑。左、右异字同形现象在卜辞中甚多，如“ㄓ雨”，“牢又一牛”，“ㄓ羌”，“王受ㄓ”等，分别假借为有、又、侑、祐等字。有人总结卜辞中的“丆又二字只共ㄓ形而不共形”⑩。

《粹》140

本片与第285片非“一骨之折”，140骨缘在左，285骨缘在右，二者不能缀合。从《合集》30991“弜翌日禕”得知，“于翌日禕，遒桒，又（侑）大乙王受又（祐）”当为全辞。

《粹》144

“𢦏𢀛方”之“𢦏”原作形，它与作形的“有𢦏”、“亡𢦏”之“𢦏”应区分开来。四十多年前有人根据“𢀛方”（《乙》4069）同见一辞，把两个字分别隶定为𢦏和𢦏⑪。张政烺先生从𥁰鼎铭文尃与𢦏都以作声符推断，“𢦏从戈中声”，与金文𢧵、𢦏音同，“也读为搏”。在卜辞中这个战争动词后面或“有宾词”或“省略宾词”，它还往往与另一个战争动词𦎫连用，即“𦎫和𢦏是征伐过程中的两个步骤，𦎫是前奏，𢦏是结果。”⑫那么“𢦏𢀛方”应改释“𢦏𢀛方”。本书1071、1075、1077、1088、1120、1122、1181、1195、1288等释文中的𢦏均应改作𢦏。

《粹》154

本版两片不能缀合，上片的骨缘在左，下片的骨缘在右，切不应将下片的骨缘接在上片骨的下端中部。《甲骨学》图三一已作为一骨之折而不能缀合片处理⑬，其上的卜辞自然也应作相应的调整，即作为两条卜辞来对待。

《粹》173

“咸”字本作，从戌从丁。陈梦家释此字为“成”，他说：“卜辞口耳之口作‘ㅂ’，丙丁之丁作“口”，两者是有分别的。咸戊之‘咸’从戌从口，成汤之‘成’从戌从丁。”⑭其实不然，卜辞既有从戌从丁的咸，也有从戌从口的咸，如“㞢于咸”（1243、1377），“㞢ㄓ自咸”（1380、1381），“𡧊于咸”（1385正），“于上甲、咸、大丁”（1242）等“咸”字均从戌从口，且不是指“咸戊”而言，可见卜辞中“咸”字戌从口与从丁并无严格区别。胡厚宣先生考证：“咸在上甲和大丁之间，则其必为大乙汤无疑”，又说“疑咸者当为汤之名”⑮。释“成”者也主张“成与先王所处的地位跟大乙、唐所处的完全一致”，“由此可知大乙、成、唐并是一人，即汤。”⑯至此可以断定该片大丁之前的“咸”为大乙（汤）无疑。把“咸”认定为大乙（汤）于文献有征，《礼纪·缁衣》有“惟尹躬及汤，咸有壹德。”《集解》云：“此《书·咸有一德》伊尹告大甲之言也。”又《尚书·酒诰》“自成汤咸至于帝乙”。已故顾颉刚先生认为这个“咸”是人名⑰，再与《多士》“自成汤至于帝乙”的句型对比，“咸”作为成汤的另一名称是有道理的⑱。

又，“𢀛”前的残文是“来”字。参照《合集》248正，6947正的命辞，本片“咸”上缺文当为“上甲”合文，故全辞应是：贞：〔来〕用自$\boxed{上}\boxed{甲}$、咸、大丁、〔大〕庚、下乙。

《粹》176

本片上接307片，下接《录》268，从而使“丁未”条卜辞成为完整的全辞：丁未卜，尹，贞：王宾大丁，彡亡尤。

《粹》185

两条卜辞的贞人“行”误释为“旅”。

《粹》194

郭说“又于十立伊又九”是“又于伊十立又九”之倒文，正确。同文卜辞见《合集》32787，于省吾依据《尚书·君奭》推断“十立又九，是指商代统治阶级的历世功臣而言。”在甲骨文中“把先世功臣排列为十又九位，加入祀典，而以伊尹为首，故有‘又（侑）于伊十又九立（位）’的占卜。”⑲这样的解释对于深入理解和开掘本条卜辞在研究商代史方面的价值，值得重视。

《粹》195

“又岁于伊西”之下缺释“示”字。“西”的全形本为龟类动物，可能原拓片残存龟头部分，作者隶定为“西”。张政烺先生将此类相关的卜辞进行比较，释其为𪓐。他考证卜辞中的“自上甲元示”和“二示”相当于大示和它示，他辞又有“用自上甲”和“于𪓐示用”对贞，正好说明“𪓐示和元示相当”。伊，指伊尹。这样“伊𪓐示”，很可能就“是伊尹加商代的𪓐示”⑳。

《粹》221、222

这两版不是一骨之折，但222片可与《京人》2997相拼（即《合集》34121），从而得到两版同文卜辞。张政烺先生认为这里的“自上甲廿示”相当于“自上甲元示”，“二示”不是指示壬、示癸，而是他辞的“它示”㉑。

“四戈”之，书中释文不统一，有的画作原形（221、222、755），有的隶定作目（1124）或以（1178），无解说，也未将和释为一字，后者隶定为目（1160）。反映出作者对这两个字的认识还不统一。最初释为挈（《甲骨文字研究·释挈》，认为有“提挈之义”（《通纂》120），后又在《中国古代社会研究》第三篇补注中提出释挈不确。从本

书将此字作原形或隶定为目、以看出，作者逐渐趋向正确释读。王贵民总结前人对和二字的研究成果，比较早期和晚期字在卜辞中的应用，发现“两者用法与字义”完全一致，又从字形、字音上追根溯源，得出和“都有‘’音”，“同出一源”，“俱在上古韵的之部，同为三等、开口、上声、可见二者是一字之分衍。”这两个字同释为目即以，得到学者共识。

《粹》230

本版即《合集》33066，原拓片较为清晰，“祖乙”的“乙”字上尚有“小”字，与《合集》32599 一样，均当释作“小祖乙”或“祖小乙”。

另一条卜辞释文“今月令方商”之“方”本作，它是历组卜辞“伐”字的简体。该字仅以侧面人形颈部的一横画代表戈，如“王令竝商”（33065），“今月令”（33067），“王令于东光”（33068）等，均是侧面人形颈部横一画。这个字若与“伐”字不从简的卜辞比较就一目了然，如同期卜辞有“伐受又（祐）”（33116），“竝伐”（33119）等“伐”作形。与在卜辞中处于相同的语法位置，都是动词，其使动者又相同，故必为伐字无疑。本书 249 片的亦是“伐”字的省形。

《粹》232

，应释豐。裘锡圭在《甲骨文中几种乐器名称》㉒一文中订正《说文》对此字的“解释是错误的”，认为该字“应该分析为从‘’从‘珏’，与“豆’无关。它所从的‘’跟‘鼓”的初文‘壴’十分相似。”由此“断定‘豐’本是一种鼓的名称”，并以《佚存》241 片正反面豐、对举加以证实。这里的“新豐”和“舊豐”是指新器还是旧器。本书 237、540 的“乍豊”和 1323 的“豊”均应改释“豐”。

《粹》237

此版上端接《明续》2321 成为一版大牛骨刻辞（见《合集》32113）。

作者认为此版的“自祖乙至毓”之“毓”，“当是后祖乙之省”。持相同意见的还有《甲编考释》作者㉓。偏查卜辞，找不到支持这种结论的材料，相反，倒为另一种见解提供有力的证据。首先，毓与多毓往往与三个先公先王发生关系，如“自上甲衣至于毓”（22647），“自上甲衣至于多毓”（22648）；“自大乙至毓”（《怀特》13691），“〔自〕大乙至〔多〕毓”（22736）；“自祖乙至毓”（30286），“自祖乙至多毓”（32548）。显然，这些卜辞的“毓”和“多毓”的内涵应当一致，否则只将“祖乙至毓”的毓当作“后祖乙之省”，那上甲、大乙之后的毓又是那位先王之省呢！所以“毓”和“多毓”一样，当是指其后的先王而言。其次，本片三条卜辞分别为：“又岁于祖乙”，“于父丁又岁”，“自祖乙至毓”。他辞言“𠦪自祖乙至父丁”（32031）可知，这里的“自祖乙至毓”当包括父丁在内，故“毓”在此当指祖乙至于其后之先王。

《粹》256

据《合集》27259，“𢀛其征羌甲，王受又”可知，本片“征”上的二字当为“𢀛其”。

《粹》257

，象刖足之刑，非陵字。裘锡圭考证：“这个字所从的或，并不是（阜）的简体，而是锯子的简化形象”，“又作，乃是由刀、锯同类，所以也可以在（刀）上加象征锯齿的横画来表示锯子”。因而该字“所象的显然是锯断人足之形，后来的刖、䟣、㓶、跸诸字，都应该是从它演化出来的。”㉔

《粹》260

，唐兰释而㉕，于省吾补充指出“而”在甲骨文中作方国名，地名和俘虏名等㉖。

《粹》263、264

𦱤原作，当释莫或暮。卜辞有“又父己叀彫”（27396），“又父己叀彫”（27397）。这是两条同文卜辞，“莫”字一个从口，一个从日，均是莫字。

《粹》279

本片上端接 310 片，使被分为上下两处的一条卜辞得以完整，其辞为：“己卯卜，行，贞：王宾兄己，畲亡尤。”

《粹》281

𡨦，郭老在《通纂》615 考释中谓：“𡨦以他辞例之，当是贞字之异，从宀耶声。”于省吾在《释林·释耶𡨦》中谓“当是贞字之异”不妥，认为“耶为听闻或听治之听”，而“𡨦为廷或庭之初文，有时亦省作耶。”故卜辞中的“才𡨦”、“奏于𡨦”、“于耶枋”、“口小乙于𡨦”等，均是“宗庙太室之廣廷”。

《粹》282

𢊁字原形为。金文中这个字郭老释𢊁，并说“当是从凡庚声之字”㉗。前引裘氏《甲骨文中几种乐器名称》释此字为“庸”，考证它“是从‘庚’‘用’声的形声字”。声符“ ”读“同”，继之论证“卜辞所说的庸当即商周铜器里一般人称为大铙的那种乐器”，也就是文献中的镛。该片卜辞里的“作美庸用”，大概与《礼记》作钟鼓同意，是指作乐而言的。第 494、518、539、835 等片的𢊁也应释为庸。

《粹》286

本片上端接 314 片，相接处缀出完整卜辞“于祖丁𠦪。”

《粹》307

该版下端接 176 和《录》286，拼成纵向龟版的右半边（见《合集》22723），使分属于上下两片的“丁未卜，尹，贞：王宾大丁，彡亡尤”得以完整。

《粹》317

本版上端与《京人》B1811 相接，拼出一条全辞：“叀入自父庚，夕彫王受又又。”

《粹》340

这里的母己，陈梦家据本书 322 片“己日卜祭父庚的配偶”，提出“母己疑是祖庚的配偶”㉘。可备一说。

《粹》400

“六旬又希”之六作∧形。卜辞六与下往往同文而异字，如“下乙”作，此处的“六旬”似合书形，作状，还可以释作“下旬又希”，于文义更合理。

《粹》415

作者推断“𩰫当是人名”，曾以为是“娥皇”名称。卜辞中常见有“磬京”（318）、“芑京”（《屯南》108）、（8046）、（5976）、（8067）等，或独体，或合文。从“乎帚姘圃于磬京”（8035）、“王往于京”（6477）、“见帚好才”（8042）等可知，某京皆为地名或场所名称。又，卜辞有娥字，是神祇名（738、10130）等，与𩰫无涉。所以𩰫当与上述合文的某京一样，亦应为地名或场所名。陈梦家以为“卜辞的義京即宋地的義臺”㉙之说，有待进一步考证。

“辞下系以左、中、右等字样”，后来郭老在《安阳新出牛胛骨及其刻辞·追记》中引胡厚宣先生说：“甲骨中有所谓牛胛骨《组𩰫刻辞》者，今发现共九例。末署三左三中三右，皆以左中右为一组。”（见《郭沫若全集》考古编一）。

本书的 412 片“□午圄𩰫考十人二”之考原作形，当是尸（夷）字。

《粹》425

这块龟版左下方与《甲编》264 和《合集》20100 缀合，从而得到两条全辞，分别是：“丁未卜，，㞢咸戊。丁未卜，，㞢𡆥戊。”

《粹》429

此片的字的下半部可辨，从示从巳，当是“祀”字，非“示丁”。

《粹》431

“司”字原形作，当释祭。

《粹》433

“𥝢”的原形为，类似的形体有、等形，陈梦家隶定作𥝢，说它相当于《说文》的𪎭，而“卜辞之𥝢是动词，当指作造酒𪎭”㉚。裘锡圭也释𥝢，但根据这个字的形体表示杀禾之义的特征，认为它是一个“从禾，从丂，丂亦声”的字。丂本身“是㐅的初文”，进而提出“𥝢的本义当是刈禾”。把这种解释运用到卜辞中，“王往立（涖）𥝢黍”，“王往立（（涖）𥝢”，正是指“王亲往涖临收刈黍子或其他作物之事的意思”㉛。不过，就此版卜辞而言，裘氏把“卜”字下的“弜𡗜”二字删除，主张在这条卜辞中“𥝢也都可以当刈禾讲”，似乎还有待进一步论证。

《粹》440

本片末条卜辞释文“于甲彫伐”有误，“于”字之前尚有“丁亥贞”三字，“甲”字之后还有“午”字，故该条卜辞的全文为：“丁亥贞：甲〔午〕彫伐。”

另一条卜辞的“弜苜”之苜，郭老在本书的 47、48 片隶定为。近年张政烺先生对此字有专门考证，他说：“郭老调非羊字，是也，其他意见则非。”赞同孙诒让“此当为苜字”的说法，进一步阐释“苜盖读为眛，眛日即眛，是日光不明之义”。又“苜和蔑读音相同，义又相近，卜辞中的苜字可读为蔑”，“都不是好字眼”，所以卜辞中苜多与否定词“不”、“勿”、“弜”连用，成为“否定的否定而产生积极的意思”㉜。对苜字有了这样的认识，“弜苜彫伐”的文义就明白了。

《粹》516

“卜”字非人名，是另一种序辞的正常叙述形式，卜辞中多见。

《粹》517

“雈”是舊字的误释，拓片上尚可见到“隹”尾下的形残画。

《粹》518

根据卜辞中的“益𧯛”、“奏𧯛”，丁山推测“𧯛”与音乐有关㉝。裘锡圭更具体地论证“𧯛”是一种乐器，认为“卜辞里的大多数‘𧯛’字似乎应该读为‘鞀’。‘鞀’字异体作‘鞉’、‘𪔛’等形。《商颂·那》说‘置我鞉鼓’，卜辞说‘置鞀’，二者若合符节。”他还解释这条卜辞“鞀庸在”说：“疑是在地奏鞀与镛的意思。”㉞

郭老说“衩殆衮之异文”，“读为祈求之求”。衩的原形是，裘氏考证（妾）、、、袁都是一个字，“前二者是‘袁’的表意初文，后二者是‘袁’字加注声旁的形式”，其本义与穿衣有关㉟。

又，当释肉，其形正与手持肉的祭字所从之相同，仅是横竖之别而已。

《粹》597

《屯南》2328、2350 残辞有“左旅、右旅”之称，军官以“右戍、中戍、左戍”为名（《屯南》2320），还有“马左右中人三百”（5825），反映出商代军事组织“三三制”的编制特点，因而这里的“王作三自，右中左”视作军事编制更为合理。

《粹》652

“𦎫”作为时间名词，它的时限作者疑“为明晨或晨刻之意。”陈梦家据“中日至𦎫兮𣅳”、“昃至𦎫不雨”（《甲编》547），“𦎫兮至昏不雨”（本书 715～717）等辞分析，“郭（𦎫）与兮是郭兮之省。郭兮既在昃昏之间，应相当于初昏与夕。”㊱

《粹》665

本版缀合有误，丁片的骨缘不应接在乙丙二片相拼的骨缝处，当把丁戊二片向左移与乙片骨缘相衔接。

《粹》720

本片与本书 889 左右对接，后者又下接 1220 片。郭老考释“‘不𫄙雨’者，犹它辞言‘不征雨’，雨不延绵也。”于省吾则谓“𫄙字应读作葺，𫄙与葺并谐耳声，故通用。”又云“细毛谓之葺，故细雨亦可谓之葺。甲骨文之不𫄙雨，谓雨不葺细也。”㊲其意贴切。

《粹》722

“𤵣”字原形为，像人卧榻揉腹之状，故应隶定作疛或疚。

《粹》795

“盄”字本作形。该字上部与第 525 片的同，当释盄。于省吾谓此字“是从皿卣声的形声字”，而“《说文》讹作盄，读盄为调，训调雨为调和之雨。”㊳

《粹》835

“匕攴𢊁”应释为“钕庸”，裘氏在《甲骨文中的几种乐器名称》的注文里说：“甲骨文往往省‘乍’为‘匕’，如《前》4.27.3‘匕册’即‘作册’。”通观全辞，既然贞问“作庸”不会遇到大风，想来不应是为在宫殿内奏乐进行的占卜，很可能与户外铸造“庸”有关。

本片和前面 779 片的“𠊳”字何种含义，虽然一时还难以确切把握，但根据卜辞有“作𠊳”（27796，30266，《怀》1460）和于某地之𠊳（30269，30275，《屯南》2636），有人推测“𠊳似是性质跟后世的行宫相类的一种建筑。宰𠊳、盂𠊳是建筑在宰地、盂地的𠊳。”㊴

《粹》845

“祁”字原作，是一个从卩，丄声的形声字。裘锡圭释丄为必（即柲），故该字当是《说文·卩部》的𠨘，“从卩，必声。”这个字在三、四期卜辞里“用作表示时间关系的介词的”，“读为‘比’”，“大概也都应该当‘及’、‘至’或‘临近’讲。”㊵本版正是三期的卜辞，“𠨘至来庚”的辞义，确是介词及、至或临近的意思。

《粹》854，856

“示希”之希本作[illegible]，它与856片的[illegible]应是一字。这个字张政烺先生释它，认为“单笔道的它示和双笔道的它示应当相同”，“皆是直系先王（大示）以外的先王，即过去甲骨学家所称‘旁系先王’。”㊶

又，856片可与《明》518互补，足成其全辞为：“贞桒年于河。贞于它示桒年。”

《粹》877

拓片“渔”上部“子”字头无“口”形，是否是“子”甚可疑。“亳”字也与[illegible]构形不同，无下方乇形，似象[illegible]（京）字。第796片的残字亳亦应是京字之误。

《粹》880

与《摭》100缀合，得到与“贞帚姘不其受年”相间的刻辞“受年”二字，以及补足“贞今日雨”的全辞。

《粹》887、908

这两版的“受黍禾”和“登禾”之黍与禾原形为[illegible]，非黍与禾。《释林·释黍𪗉來》隶定作来。罗琨对此字有详细考证，她说：“禾首来身周围不加点的秾字，过去多释为黍或禾”，“《粹》887释为‘受黍禾’……908片中，又被释为‘登禾’。实际上它不能释黍，因为从字形上看，与黍字区别很明显，既无散穗，又无水旁，而与同期往来之来形近；它更不能释禾，不仅字形有别，而且据卜辞文例，卜年和登尝的卜辞均用作物种名，而不用类名，没有‘受禾年’或‘登禾’之说。所以该字只能根据它的“来身”，释为区别于黍、禾的甲骨文秾字。”㊷

《粹》909

原释文将这一版卜辞列为一条，实际上是两条，“癸巳贞：王其登米……”为一条，“乙未……”是另一条的残辞。

《粹》919

本书多版甲骨有“弜”字，作者均释“弜”，正确。但本版的“弜食”第一字也应释“弜”，只是笔画的弯曲较大。在第4版考释中郭老曾言：“弜字习见，义未能明。”裘锡圭在《说“弜”》㊸一文中认为前人考订“弜”是否定词是很重要的发现，又进一步指出卜辞中四个主要否定词，“‘另’和‘弜’的用法很相似，‘不’和‘弗’的用法也比较接近”，但两组之间“的用法则有明显区别”。他说前一组“表示意愿”，“可以翻成‘不要……’”；后一组“表示可能性和事实的”，“往往可以翻成‘不会……’。”这种区分体现出古人遣词造句语气的变化，对于研究汉语史很有意义。

《粹》933

参照本书1072、1080（甲）肩胛骨刻辞的兆序有紧邻命辞和占辞的特点，此片胛骨“牛”字左下方的“一”字当为兆序，不表示用牲的数量。

《粹》945

[illegible][illegible]二字的主体部分都从中，故不能将此二字隶定为“𣗥㵄”，前者保持原形，后者可写作[illegible]。

又，“其”不当与“𡆥”字连读，应用……连接。

《粹》946

第二条辞的“令”下有“[illegible]”形残画，结合他辞言“令[illegible]星田”（22、9474、9475）等文例，知“令”下一字当为“[illegible]”的残文，故“令田”二字之间当补以［[illegible]］字。

《粹》955

“陨𢿌”二字学者多隶定为“阝𢻱”。裘锡圭在《甲骨文字考释（八篇）》中，从卜辞文例分析“‘𢿌’通常用作‘𢻱’字异体，但最初可能是作为‘𢻱’、‘䍃’（麓）二字的合文使用的。”又从字形上论证说：“‘𢻱’跟‘芟’同意，本义应该是芟除草木”，而“𢻱”与“散”同音，训为“杀”，故“‘𢿌’跟‘杀’显然是音义皆近的同源词”，并说这个字“是‘𢻱’的繁体。字形从“鹿’（鹿），大概跟𢻱除草木之事往往在山麓进行有关。”㊹

《粹》957

“杏”，于省吾释为沓，与𢓊同为地名㊺。裘氏对此字又有进一步论述，他说：“甲骨文的[illegible]旁，在较晚的古文字里往往变作[illegible]、[illegible]等形”，引征《说文》、六国古文和汉印文字证之无不相合，得出“甲骨文的杏字就是沓的初文。”这个字在卜辞里用作地名，春秋时“卫侯会公于沓”的沓当在卫地，“卜辞之沓疑即此地”㊻。

《粹》968

郭老云“虘当即𧇡字”，“假为𧇡，言于𧇡中行雩祭也。”于省吾在《释林》中则将虘视作以“卢为音符的形声字”，义训为“并列”，因而这条卜辞“是说并用雩祭于丧、盂二田，则有大雨。”㊼

《粹》984

释文“吕”字的原形为“[illegible]”，当与本书700片的“[illegible]”和1029的“[illegible]”为一字。郭老在前面隶定作“[illegible]”，注“旦”、无说。《释杯·释旦》云：“[illegible]即旦之初文”。金文旦字多作[illegible]，“古文虚框与填实同，甲骨文旦字下不填实者，锲刻之便也；其上从日或无点者，文省也。”又说“‘旦湍（昧）至昏不雨’，旦昧指天将明时言之。”

《粹》985

依据卜辞常规，一条卜辞不能从下向上绕着读，故此片释文应改作两条：“丁丑卜，戊王叀……▨𩀰田，亡𢦔。”

《粹》988

“大吉”在“辛亥”条卜辞之旁，应是它的兆辞，故当列于“弗每”之后。

《粹》991

此版及以下两版的“田㚇”之㚇与他辞言“王其田于盂”（29084）、“王其田𣏌”（28934）等一样，也是地名，而与作动词的“田省”之省词性不同。

《粹》1000

第一辞“坓九”之下的“又”间隔较大，不像是同一条卜辞的文字。我们知道在十进位制内，数字“九”本身不应出现与小于“九”的数字用“又”连接，所以“坓九”下的“又”字必为另一条卜辞的残文。

《粹》1023

兆辞“弘吉”当属“于盂亡𢦔”的，下面的“吉”则是已残去刻辞的兆辞。

《粹》1027

“𠭯”即“典”字，甲骨文从“[illegible]”与从“[illegible]”往往无别。“珙册”原作[illegible]形，当为一字，由《屯南》253片该字横书作“[illegible]”可知。这种现象在卜辞中多见。

《粹》1028

此版可与《甲编》506拼合，相接处出现一条“壬午卜，王其迍于向，亡𢦔”的完整田猎卜辞。

《粹》1031

“彶（遂）”的原形为[illegible]，与田猎卜辞“迖”作[illegible]形者差别不大，仅是止在上和在下之别，且两者的文例也相同，此片作“王[illegible]〔于〕𧇡，往来亡灾。”他辞亦有“王[illegible]于𧇡，往来亡灾”（《英藏》2556）均为田猎动词，应是同字异构。

《粹》1034

本片释文的“栔”字，《通纂》429有考释，“[illegible]字”应“当是枼，葉之初文，象木之枝头著葉。”现在大多数学者释果，从罗振玉之说，商承祚、于省吾等均释果，于氏并举卜辞“王果令”和“弜果令”为例，发现“果字作虚词用，应训为能。”㊽

《粹》1039

“丁巳于萌”之萌本作[illegible]，与《合集》11740的“于[illegible]”似为一字，而甲骨文从[illegible]从[illegible]往往通用，后者于省吾释春㊾。

《粹》1050

本辞的“卜”和“往”下皆有缺文，释文当改为：“辛酉卜，□、贞：王往▨。”

《粹》1064

“帚”下缺文当补“贞”字，这是子组卜辞的文例特征。

《粹》1068

“告”字是本条卜辞的兆辞，不应与“商”连读，二者之间加句号、空格来表示。

《粹》1074

[illegible]，于省吾曾释氐，读为底，训致㊿。后来在《释林》中未再专论。近年研究甲骨的学者提出新的解释，王贵民同志在《‘㠯’非耜形新探》一文中指出：“㠯字在甲骨文第三期出现作[illegible]，它是第一期的‘[illegible]’字简化来的。”又从《说文》和古文献中证明“‘以’字有提挈、致送、使用之义”，“读如‘似’字音”等(51)。在这条卜辞中[illegible]字正是这种意义，所以当释为“以”。

又，“𡴘（择）”字原形为[illegible]，其基本构形[illegible]字《释林》释幸，“象施手于腕的械形”，为“𣟼的本字”。而𡴘（执）字更象将两手𣟼于器械中，形象地表现出“以𣟼𣟼俘虏或罪人的两腕”的形态，所以此字释执(52)。

《粹》1084

“受又”二字模糊，当加〔 〕号。又，陈梦家谓“下上弗若”的“‘上’指上帝神明先祖，‘下’或指地祇，《周礼·小宗伯》‘祷祀于上下神示’，《论语·述而》引诔曰‘祷尔於上下神祇’。”(53)

《粹》1090

“从”应改释“比”。屈万里曾将有关战争卜辞中的[illegible]释作“比”，提出此字并非是“二人相从”，而是从二匕(54)。林沄对这一见解又作了进一步阐述，指出从、比二字的字形有别，用法也不同，“在‘比某伐某方’这类卜辞中，‘比’字均从匕，不从人。相反地，‘从雨’一词中的‘从’字，均从人，不从匕；‘从东’、‘从西’、‘从南’、‘从北’等词中的‘从’也均从人，不从匕。”又结合文献理出“比”字在卜辞中应“是亲密联合之义”。这一重要发现导致重新认识商王国在诸方国中的地位，至少可以“证明商王在军事行动中和其他方国有联盟关系”(55)。以下凡有关战争卜辞中的“从”字均应改释“比”。

《粹》1107

“𦥑”与“受”不应连读，“受”字下还留有残字的笔画，所以二字之间应以……连接。

《粹》1124

“旨”字从刀从口，最好隶定作召。以下诸片的“旨”字均应改作召。

《粹》1135

此片“芍”下尚有“不”字等，据胡厚宣先生补充残文后全辞为：“甲午卜，韋，贞往芍不〔其得〕。”其中的“往”字与“往来”之往字形不同，本作[illegible]，他辞还有作[illegible]（509、510），[illegible]（513、514），[illegible]（511）等形者。这个字在卜辞中往往与得字相呼应，如“贞往羌得”（507），“贞往羌不其得”（508）。胡先生考证该字是“从止从立，与往字从止从王不同。止有向前之义，立与位同，象人本来安居其位，因受逼迫而出走，其义当为逃亡。”(56)对此，也有人提出疑义，认为“‘往羌得’只能是卜问前往羌地是否能有所虏获。”(57)单纯把[illegible]理解为“往来”之往，用在下列卜辞上就难以圆通，如：“[illegible]𢆶[illegible]自爻，圉。”（138）“卅臣㞢[illegible]自寞，得。”（本书262）这两条卜辞的“[illegible]𢆶”和“卅臣”因为在“爻”和“寞”地的行动，招致了“圉”和“得”，即被拘禁和逮捕，当然不是“𢆶”和“臣”前往“爻”和“寞”地去自投罗网。又如：“幸[illegible]𢆶自[illegible]。”（136）“吴幸[illegible]。”（846）“乎自般取[illegible]自𦥑。”（839）很明显，“幸”和“取”都是动词，施加的对象为“[illegible]𢆶”和“[illegible]”，而不是“[illegible]”自行采取的行动。“[illegible]𢆶”表示[illegible]者的种类，由此看出“[illegible]”已成为具有这种行为者的代称。这一点由“刖[illegible]不〔死〕”（861）看得尤为明白，“刖（刓）”指断足之刑、“[illegible]”是受刑人。从以上卜辞得知，[illegible]是羌、𢆶、州臣等采取的一种与奴隶主愿望相违背的自觉行动，所以奴隶主要对[illegible]者进行追捕和拘禁，甚至断足，因而把这种威胁到他们利益的行为者称作[illegible]。故而简单地用“往来”之往涵盖[illegible]的涵义是不确切的，还是胡先生的解释较为合理。

《粹》1138

根据卜辞残文互补的方法，该片释文应改作：“甲寅〔卜，□，贞〕：方其［大］出。十月。甲寅〔卜，□，贞：方〕不大〔出〕。”

《粹》1148

“人犬”之人作[illegible]形，据前1090片引林沄之说当释“匕”，而非“从”字。有人认为“匕”是一种狩猎方法(58)。卜辞中除“匕犬”之外(59)，还有“匕兕”（28411），“匕𢀛”（29354，《屯南》2290，2298）等，因而这种狩猎方法还有待进一步研究，方能了解其具体形式。

《粹》1160

“遊尸”的原形是“[illegible]”，于省吾释二字为“𢓊人”。于云：“𢓊字从彳卓声。卓即卓”，并举金文[illegible]、[illegible]等字证之。又说“甲骨文𢓊字从[illegible]，下从子，上象子之头顶有某种标识之形，故有高义。𢓊当即金文趠鼎之[illegible]，从彳从走一也。”因而该条卜辞中的“‘其曰𢓊人㠯’，即其曰遠人已，意谓其去人遠已。”

于氏还认为“妾即接之本字”，其言“毋妾㠯当系对某物而言，谓毋接索已，与上辞

遠人已之义适相符。”(60)结合此辞之上的“戍𢦏”一类卫疆土的占卜，很可能“毋𡟰已”是指敌人的搔扰武装人员而言的。

《粹》1162

其中有条卜辞郭老考释云：“𠭰多方小子小臣其𢼄𢦔”当为一辞，𢼄即教。”而“𢦔殆戒之省。据此可知殷时隣国，多遣子弟遊学于殷也。”这一论断数十年来曾被学者视作重要的殷代文化史料加以征引。胡厚宣先生发现“旧释为‘多方小子小臣’，后来用原骨重拓，看出小子实为𡴀字。今案乎𠭰多方𡴀小臣者，乃呼唤使用多方的𡴀小臣以祭祀。𡴀小臣连称，知𡴀者或亦为异族的奴隶之名。”(61)审《合集》28008号的𡴀字上指之笔，两侧确无小点，绝非“小子”合文。那么“殷时隣国，多遣子弟遊学于殷”的结论，就要用新的史料来证明了。又𡴀字今多释为屯，用为纯，见《释林·释屯、𠀠》。

《粹》1163

郭老正确指出“𢆉即小篆㚔字”，又说“执㚔必音同”，并主张该字“是鍼之初，鍼執同纽，而音为对转。”《释林》作者力主“㚔即箴的本字”，参见前1074片。

《粹》1164

“沚或（国）”之或本作𢦒形，从戈从口，一般隶定为或。该字在本辞中为沚族首领的私名，从三、四期卜辞单称或得到证明，如“令或不省”（32877），“令或归若”（32880），“叀今日令或”、“于庚令或”（《屯南》935）等都是“沚或”的省称。武丁期卜辞沚族首领的国族名和私名连称与单称并存，如“王比沚戓伐𢀛方”（93反）和“王比戓伐𢀛”（6474）等是指商王联合沚族首领戓征伐𢀛方。同期卜辞还有只称族名的“乎害比沚伐𢧀”（6937），或称“沚方”（《屯南》4090）。这些例证都说明，卜辞中私名不仅与国族名密切相关，而且人名、族名、国名，乃至地名有时互相借用，反映出当时独立的个人与族不可分离的关系。

又，𢦏字所从之甶，在甲骨文中多借作西，如“伐西土”、“西土受年”（7082、9742），“西方曰彝风”、“西单”（14294、11501）等，西字均作甶形，与“由”字无涉。也有人把“甶”释作甾(62)，故该字隶定作𢧀欠妥。

《粹》1171

考释中所引《库方》310片即《英藏》150拓片，所谓“乎伐芍”之“芍”，乃是“方”字残文。该字残存笔画尚有“扌”字的左半边。

《粹》1172、1173

这两版的𦨶和𣪠，郭老认为“是般字，前辞读为畔，后辞读为返。”似乎与字形不合，且甲骨文已有般字作𣪠。陈炜湛释盪，他说该字是“会意字，其义为盪舟”。引申义为“推盪、动盪”。在这里“方盪于东”，是说“方骚扰于东部”；“王盪见”即王“盪于见地”(63)。

《粹》1177

“𢦏西𠂤（师）”三字原作“𢦏𣎵”状，前者为𢦏的异体，只是戈上的丫朝下而已。后者是一个字的两部分，如“王翌壬戍𢦏𣎵”，“𠀠𣎵，𢦏”（33082、33083）等皆作左右构形，从未见上下排列形式，所以𣎵必为一字无疑。这个字在卜辞中只作名词用，为地名或国族名。

《粹》1181

“虞”字本是由三个字符组成，上部“隹”字头，中间是一张捕鸟的网，下面的正面人形作举网状，故该字最好隶作𡙁或𡙁。

又，𢦏字当与上面1164片的𢦏是一字，只是本版的𢦏左半边的“西”旁略有简化，二者的构形完全一样。

《粹》1184、1185、1186

这三版“尸方”之尸均作𠃌形，与1187片人形尸（𡰯）字迥然不同。相反，却与“召方”之召上部所从的𠃌形相近（3301至33031）。所以𠃌似应释刀，或许是召字的省体，两字均以刀为声符，而且还可由商王亲自率军“征召方”（33022至33025反）和“征刀方”（33034）的辞例见其端倪。

又，𢎗应释弜。

《粹》1207

“不辰（震）”之辰拓片分明作𧠓形，显然是见字。在这条卜辞里“见”为动词，杨树达曰：“见疑当读为献”(64)。

《粹》1221

“王𢑚坚田”的𢑚字在此应为人名，《屯南》499的“坚田”卜辞云：“王令𢑚坚田”，而且字体风格与此版完全相同，当为同时所卜，故本条卜辞的正确释读为：“己巳王〔令〕𢑚坚田于□。”

“坚田”之坚在甲骨文中很不统一，学者公认它是一字多形。近年对“坚田”含义的探讨远胜于前，先是于省吾释“坚”为“圣”，说它是“垦字初文”，故“坚田即垦田”(65)；继之张政烺先生对“坚田”作系统论述，释“坚”为“裒”，考证其字义是“聚土壤”，而“裒田是抨治田，是造新田”并与周人的治田方法相比较，寻出卜辞裒田的详细过程，提出“裒田是开荒，大约分三个阶段，须要三年完成，即周人所谓菑、畬、新田。菑才耕，畬火种，最后作疆畎，聚埒亩，成为新田。”(66)裘锡圭在《甲骨文中所见的商代农业》一文里，赞同饶宗颐先生读该字为壅的主张，因为这个字有“从‘用’声”的，故“释作‘壅’为宜”。但他“把壅田解释为去高填洼，平整土地和修筑田垄”等过程(67)。各家对“坚田”的理解还有差异，看来这一问题的解决有待深入探讨。

此版与1223、1544和《屯南》499的字体风格和卜辞内容一致，很可能是一骨之折。

《粹》1222

本版释文“王令多芍坚田”曾被众多研究者争相引用，认为这是殷代使用奴隶从事农业生产的铁证。其实是误读“𢆶”为“羌”所致。张政烺先生对此有正确释读：“□□贞：王令多〔尹于〕羊（𢆶）裒田。”（参见1221片引张文）崑崙对这条卜辞“𢆶”字所作的摹释，恢复了拓本上该字的原貌(68)。这些有益于深入研究“坚田”的意见值得重视，至少不应再把这个已辨认清楚的字说成是“羌”了。

《粹》1223

“刖”字应改作“㓷”，以别于锯断人足的“刖刑”之刖。

《粹》1230

“儿方”之儿原作𠔁形，今人多释“巴”，或保持原形。“㞢”下有“又”字，故“受㞢”之后当加一“又”字，成为“受㞢又”。

《粹》1239

贞人“己”似为“亘”字的误刻。甲骨文己字一般结体为上下的长方形，中间的横画必与竖画相连。此版的“己”字却近扁体，而且竖画不与中横画相连，这正是亘字的特征，只是该字的竖笔未直通上横画而已，何况以“己”为贞人名者仅此孤证。

又，郭老在该条卜辞释文“盂”字下注有“?”，看来他对释“盂”有犹疑。盂的原形作𥁰，当与𥁰为一字，均以⊥（必）为声符，只是前者省去皿形的圈足部分。《释“柲”》作者认为此字即是《说文》皿部的𥁕字(69)。

《粹》1240

此片为标准子组卜辞，叙辞通常作“干支卜，子，贞”的形式。这里的“乙巳”之巳可能代表巳和子两个字（子、巳同形），属于甲骨文“不加重文符号的省略，直接让一个字顶同样的两个字。”(70)

又，“𡗝”字原形为𣎵，其下木形是木的省略。这在甲骨文中是经常的现象，如𣐤又作𡉀，𣏟又作𣏟，𣏟等。所以该字应隶定作𣐩。

《粹》1241

郭老考释云：“‘𨚔帚𠬝’者言禦婦以俘也。”李学勤先生最近提出这类“‘𠬝’是语末助词”，在卜辞中若把它看作是“俘获一类意义，句子就不可通了。”有时“‘𠬝’还可以和另一个助词‘執’结合起来。这种卜辞是把正反两问并于一辞之中，正问用助词‘𠬝’，反问用助词‘執’。”他认为“只要把‘𠬝’、‘執’读为语末助词，就言通字顺。”(71)尽管这一新见解目前还未得到学术界的公认，但这种实事求是的探索精神，对于今后深入研究甲骨文与殷商史是很有益的。

《粹》1255

“卜子”之卜非人名，由本片的“兹三卜亡若”和1256片的“其用三卜”可知。“三卜”是占卜的习惯次数，而本片连续三次占卜，正与“兹三卜亡若”相合，证明这里的“卜”字确系占卜之卜无疑。

《粹》1256

“卜”字上面的“三”误释为“四”，是因为“三”和“卜”之间有一骨花所致。

又，“𠦪”本作𠦪，《释林·释非𠦪》作者考证它是“非字初文”。1262片的𠦪为“非之孳乳字”。

《粹》1273

“𠆤侯”之下不应与其上面的“于来月至”接读，当属两条卜辞。因为“𠆤侯”二字已在卜骨断裂边缘，显然已成残辞，故原释文当改为“己卯卜，𠆤侯…　…于来月至。”

《粹》1278

“𨚔”字原形为𨚔，裘氏在《释“柲”》中释为𨚔，读如比，在卜辞里“当及、至或临近讲。”这里的“𨚔各日”当解释为临近日出时。

《粹》1290

卜辞中有以“多马”（5711、5712、5715）和“多亚”（5677、21705、30296）命名的武官称谓，又有“马亚”（26899、28011、30439）和“多马亚”（564，5708，5709）之称，基于此，陈梦家主张“多马亚”应读作“多马、亚”，为多马、多亚官名的连称(72)。若这一判断可信，本片的“贞多马亚，其㞢𡆥”应改为：“贞：多马、亚其㞢𡆥。”

《粹》1291

干支的第二字本为“申”，误释作“甲”。

《粹》1359

甲乙两片虽是一骨之折，但不能缀合，乙片的左边是骨缘，不可与甲片胛骨中间衔接，它应是大胛骨左下方折断的一块卜骨，故“己卯”条刻辞应当改为：“己卯〔卜，行〕，贞：〔今夕〕亡𡆥。”乙片刻辞当为：“□□卜，行，〔贞〕：今夕〔亡〕𡆥。”

《粹》1404

本版的甲片为龟腹甲，乙片为背甲，显然不应缀合在一起。释文自然也应分开，乙片的释文当改为：“□□卜，贞〔王今〕夕〔亡〕𡆥。…王…　庚申〔卜，贞〕：王今〔夕亡𡆥〕。”

《粹》1574

“登黍”之黍原形为𥝌。该字没黍字散穗的特点，裘氏只把它“看作‘黍’字的异体’(73)。另外一些学者认为不是黍字，陈梦家隶定“𥝌”，指出它“与黍之作𥝌者不同”，“可能是粱字”，“或是粟”(74)；于省吾则考证它是“从禾从齐”的“𪗉字的初文”(75)。各家对这个字的认识虽然意见分歧，但对字形的看法也有一致的地方，即它是禾身无散穗的特征。由此看来，在未取得一致意见的情况下，以隶定作𥝌为好。

《粹》1587

“二”为兆序，不是命辞部分的文字，故下面的“…”应删除。

《粹》1590

“𡗜”原形为𡗜，齐文心在《释羁》(76)一文中隶定作至，自然是把𡗜看作至字倒书。他辞有“弜至三羁”（28157），“贞至□羁”（28161）中的至均为正书，故本片的“𡗜”必为至字倒书无疑。

郭老对本版和1589版的𦋺字无说，齐氏考证卜辞中的𦋺字即文献之羁，“本意为勒马工具”，“引伸为束缚不前，暂停寄止的意思”，进而演化成商代驿站的名称。这一发现对研究商代交通史及其有关问题产生积极影响。

注　释

①郭沫若：《甲骨文研究·重印弁言》，1952年。

②1976年台北艺文印书馆出版。

③(58)姚孝遂：《“殷契粹编”校读（节录）》，《古文字研究》13辑。

④下面整理的《读“殷契粹编”札记》吸收了傅学苓先生的一些意见，现征得先生的同意发表，谨此致谢。

⑤以下括号内引用《合集》材料，仅记片号，不再出现《合集》简称。

⑥下面《甲骨文字释林》简称《释林》。

⑦方静若：《米为小甲合文说》，载上海中央日报文物周刊，1948年9月9日。

⑧⑲㉘㉛㊳㊺㊼㊽㊾(52)(60)(74)参见《释林》192页、204页、144页、13页、119页、152页、370页、406页、1页、293页、92页、242页。

⑨罗琨：《殷墟卜辞中的高祖与商人的传说时代》，《全国商史学术讨论会论文集》（殷都学刊增刊），1985年。

⑩陈炜湛：《甲骨文异字同形说》，《古文字研究》6辑。

⑪管燮初：《殷虚甲骨刻辞的语法研究》，中国科学院出版，1953年。

⑫张政烺：《释𢦏》，《古文字研究》6辑。

⑬1978年台北艺文印书馆出版。

⑭⑯⑳㉙㉚(56)(53)(72)(74)参见陈梦家：《殷墟卜辞综述》411页、412页、450页、266页、539页、231页、568页、508页、528页、529页。

⑮胡厚宣：《殷卜辞中的上帝和王帝》（下），《历史研究》1959年10期。

⑰顾颉刚：《“酒诰”校释译论》，《文史》33辑。
⑱岛邦男：《祭祀卜辞の研究》1953年。
⑳㉑㊶张政烺：《释它示——论卜辞中没有蚕神》，《古文字研究》1辑。
㉒㉔㉛㉞㉟㊴㊵㊸㊹㊻(67)(69)(70)(73)裘锡圭：《古文字论集》（中华书局，1992年）的199—201页、210页、35页、203页、4页、1页、19页、117页、172页、42页、181页、18页、142页、155页。
㉓屈万里：《殷虚文字甲编考释》3588片。
㉕唐兰：《天壤阁甲骨文存》下册58页。
㉗郭沫若：《两周金文辞大系图录考释》考2。
㉜张政烺：《殷契曾字说》，《古文字研究》10辑。
㉝丁山：《商周史料考证》181页，中华书局，1988年。
㊷罗琨：《甲骨文来字辨析》，《中原文物》1990年3期。
㊿于省吾：《双剑誃殷契骈枝·释氏》。
(51)王贵民：《“㠯”非耜形新辨》，《中原文物》1983年3期。
(54)屈万里：《甲骨文从、比二字辨》，《史语所集刊》13本。
(55)林沄：《甲骨文中的商代方国联盟》，《古文字研究》6辑。
(56)胡厚宣：《甲骨文所见殷代奴隶的反抗斗争》，《考古学报》1976年1期。
(57)姚孝遂：《商代俘虏》，《古文字研究》1辑。
(59)《殷墟甲骨刻辞类纂》10页。
(61)胡厚宣：《中国奴隶社会的人殉和人祭》，《文物》，1974年第8期。
(62)唐兰：《论四方之名》，《考古社刊》四期（1936年）。
(63)陈炜湛：《释甲骨文“娶”、“嫷”二字》，《语言文字研究专集》（中华文史论丛），1986年。
(64)杨树达：《卜辞求义》37页，上海古籍1986年。
(65)于省吾：《从甲骨文看商代的农田垦殖》，《考古》1972年4期。
(66)张政烺：《卜辞裒田及其相关问题》，《考古学报》1973年1期。
(68)崑崙：《殷墟卜辞有用羌於农业生产的记载吗》，《甲骨文与殷商史》，上海古籍出版社，1983年。
(71)李学勤：《关于自组卜辞的一些问题》，《古文字研究》3辑。
(76)齐文心：《释羁——对商代驿站的探讨》，《中原文物》，1990年3期。

（原載《胡厚宣先生紀念文集》，科學出版社，1998年）

河南大学与中国甲骨学研究*

朱绍侯

1899年，安阳的甲骨文首次为学者发现，认定为商代有价值的简册。从此开始了对甲骨文的收购与商文化研究，甲骨学也开始建立起来。

但是，由于满清政府以及后来的北洋政府的腐败，他们不关心这些稀世珍宝的挖掘与收藏，任其自流，形成农户乱挖、商人私售的混乱局面。甲骨或一版折而为几数，或整版整骨被盗不知下落。更有市井之徒，苟营小利，私刻作伪，一时假骨假字，充斥甲骨市场，鱼龙混杂，真伪莫辨。

看到这样混乱局面，文人学者无不为祖国的文化宝藏担心，所以在1928年10月前中央研究院在广州成立，第一件事就是决定开展对殷墟甲骨文的科学发掘。而主持这一发掘的，则是曾在河南大学工作过的董作宾先生。

董作宾先生，字彦堂，河南南阳市人，1922年秋，考入北京大学研究所国学门为研究生，1925年毕业，到福州协和大学任副教授。1926年回到河南大学（当时为中州大学）任文科教授，教授语言学、史学两门课程。教学之余，常在《文科季刊》、《文艺》、《孤兴》等校刊上发表文章，受到了考古学界的重视。1928年，被聘为北平历史研究所研究员，不久即受命考察殷墟，得出了“甲骨挖掘之确犹未尽”的结论。由于董先生这一结论的提出，才导致中央研究院作出科学发掘殷墟的决定，于是，才有了一至十五次的殷墟科学发掘。

殷墟十五次发掘，其规模是巨大的，时间是漫长的，手段是科学的，挖掘出来的文物也是丰富的。可以说十五次发掘，为中国甲骨学的发展，奠定了雄厚的基础。

在这十五次发掘中，一、五、九次，都由董作宾先生主持，其他许多次，也有董作宾参加。可以说十五次发掘中，大多灌注着董先生的心血与汗水。

而更值得大书特书的是，1931年，董先生在《大龟四版考释》一文中，首次提出以“贞人”来区别甲骨年代的学说，1933年的《甲骨文断代研究例》，更全面地论证了甲骨文断代学说。可以毫不夸张地说，董先生实为中国甲骨学断代工程的发起人、设计师。正因为他在断代学上的贡献，得到甲骨学界的承认，才与罗振玉、王国维、郭沫若并列为甲骨四堂。唐兰先生说：“卜辞研究，自雪堂导夫先路，观堂继以考史，彦堂区其时代，鼎堂发其辞例，固已极一时之盛！”

董先生在着力于殷墟发掘和甲骨学研究的同时，还异常关心母校的学科建设。河南大学在三十年代就开设有甲骨学课程，也是董先生首倡并亲自扶持的结果。今天，当我们回忆起董先生这些学术业绩与贡献的时候，作为河南大学师生，更加对其神往、尊敬。

主持并参加殷墟发掘的另一位河南大学教授，是郭宝钧先生。

郭宝钧，字子衡，河南省南阳县人。1922年北师大国文系毕业，1928年，以河南省教育厅代表的身份参加安阳殷墟第一次发掘，其后多次发掘，先生都亲自参加，并主持第八次、十三次发掘，由于先生考古知识丰富，能把地下挖掘情况与历史文献结合，所以对古代礼器制度的发展变化有着独到的研究，是他首先提出古代列鼎而食的“列鼎”，使我们对上古礼制的具体内容有了深刻的了解，其所著《山彪镇与琉璃阁》、《中国青铜器时代》、《商周青铜器群综合研究》等著，更是研究先秦史的必读之书。

郭先生于1945—1948年，受聘担任河南大学教授，在我校辛勤耕耘三载，解放后调任中国科学院考古研究所研究员，才离开我校。

参加殷墟发掘的另一学者石璋如，是我校1932年文史系毕业的学生，河南偃师人。他最早参加的是第五次殷墟发掘，工作的地区是第五区与新干区。此后历次发掘，他都无不参与。第十五次发掘，更是他亲自主持。可以说，他的大半生时间，都是和殷墟发掘相始终的。

由于多次亲自参加发掘，石先生已经成了一部殷墟发掘的“活档案”。他的煌煌巨著《小屯第一本·遗址的发现与发掘》一编又一编的连续出版，使他成了一位著作等身的甲骨学者。书中详论的殷墟地层、建筑、基址、墓葬，是当年殷墟发掘情况的再现，是发掘资料全面的科学整理。

参加殷墟发掘的又一学者刘燿（尹达），也是我校1932年的毕业生。刘字照林，尹达是他参加革命后的用名。河南省滑县人。尹达在第五次殷墟发掘中，就参加了后岗遗址的发掘。其后，八至十二次发掘他都全部参加，此外还参加其它遗址多处的发掘。他的主要学术成果，就是否定安特生在新石器时代分期问题上的不正确观点，提出了仰韶、龙山、小屯文化的历史发展序列，至今仍为考古学界所尊奉。1938年，尹达奔赴延安，投身革命，此后即致力于马克思主义的史学研究，他的专著《新石器时代》，已成为先秦史学界的权威著作。

以《殷周文字释丛》而驰名的朱芳圃教授，湖南醴陵人。1931年来河南大学任教，当时学校设甲骨文课，朱先生即来担此任。《甲骨学文字编》、《甲骨学商史编》就是他在这个阶段为学生编写的讲义。后来朱先生也曾离开我校，但1939年即重返河大，从此一直随校颠沛，历抗日战争、解放战争始终以河大为家，鞠躬尽瘁，死而后已。

朱先生不仅是一位商文化专家，也是一位古音韵专家。他的论文《释𠈃》、《潘来音韵》、《照穿神审禅古读考》等论文，都在学术界产生了不小的影响。集中体现朱先生文字、音韵学成就的学术著作，是他晚年成书的《殷周文字释丛》。该书释字181个，新考出的59个，其余为纠正旧说别创新解之阐述。此书写作经年，朱先生在战争年代随校转迁，行李可以丢失殆尽，但总是手捧书稿，不离左右。终于能够保存全璧，最后出版问世。在商文化的研究中留下了深远的影响。

孙海波教授，河南省潢川县人。1931年在北师大研究院，师从容庚先生研究甲骨文字。1935年出版《甲骨文编》，以其取材广泛、摹写逼真受到学术界的称赞。容庚先生曾说：“此书之用，不仅备形体之异同，且可为各书之通检，由字形而探求字义，得藉此以为梯阶”。1965年《甲骨文编》又出了修订本。这次修订，征引甲骨材料已由原来的八种扩大到四十种，考订文字也吸收了许多新的成果，所释文字也增至1723个。甲骨文中已识、未识之字已大体录尽。但是由于众所周知的原因，此书署名考古研究所编，实际编者还是孙先生（只在《凡例》中说明）。

修业于河南大学的商文化研究学者还有安金槐、李民、范毓周等人。

安金槐先生，河南省文物研究所所长、研究员、中国殷商文化研究会顾问，1948年毕业于河大历史系，长期从事中原地区的考古发掘工作，以主编《中国考古》一书而享誉学术界。李民先生，郑州大学殷商文化研究所所长，1959年毕业于河南大学历史系，以《殷商社会生活史》、《夏商史探索》等著作而斐声中外。范毓周同志，南京大学历史系古代史教研室主任，1978年，曾在河大历史系学习，长期从事甲骨卜辞研究。他所主持的甲骨文电脑处理系统，堪称甲骨学史上的一次革命。

文革结束后，孙、朱两先生相继去世，河南大学甲骨学后继乏人。学校一面积极引进人才，一面努力培养后进。不几年，辛勤工作已初见成效。李璠教授出版了他的专著《殷周考古论著》，郑慧生教授也出版了《古代天文历法研究》、《中国文字的发展》，王蕴智同志也出版了他的《殷周古文同源分化现象探索》。这些著作，已经在丰富着甲骨学的内容，引起了学者的一定注意。目前，他们仍在努力探索，为甲骨学的发展作出新的贡献。学校也在大力培养青年人才，为建设一个甲骨学研究基地而奋斗。

〔作者朱绍侯，1926年生，河南大学教授。〕

（原載《史學月刊》1999年第1期）

---

* 本文原系朱绍侯教授在河南大学85周年校庆商文化研讨会上的发言，由朱下生记录整理。

阿马萨里·安东尼奥博士《中国古代文明》读后

仁言

《中国古代文明》（修订本）是一部重要的甲骨学商史研究著作。这是一位意大利学者研究甲骨文商史的专著，已由中国社会文献出版社出版。本书以甲骨文和中国古代文献资料为依据，提出了不少富有启迪的问题。不仅如此，还将甲骨文中所反映的商代文明与《圣经》中所反映的中东文明相比较，从而在研究方法上别开蹊径，对甲骨文商史研究的深入，将起到推动作用。

首先，作者在书中对于“上帝”的论述突破了学术界传统的看法。作者认为“上帝”不只是一个住在遥远的天国的帝，而是真正的“宇宙的中心”，“上帝和人类同住”。“上帝的意旨和行为，乃是社会生活的根本准则，是君主们以及大臣、官僚们和谐地、团结一致管理的前提”（P66）等等。因而指出，不能把宇宙分成地上、天上和阴间三个截然不同的世界。因此，“甲骨文中的宗教恰恰不能被看作是萨满教的表现。”这是因为“在寻找神示的活动中，国王及其助手和臣子们并不试图同地下的世界发生关系，不试图同天上的世界发生关系，而是同一个遥远的世界相联系（那个世界仍在地上）。在那里，上帝这个神住在他的园圃中的一棵极高极高的树上，那里也住着人们的先祖们的亡魂”（P140）。

迄至目前，国内外学者一般都认为商代上帝主宰人间和天上的一切，而宇宙是分为天神、地祇和人间“三个世界”的。不少学者认为，甲骨文中的宗教是萨满教的反映。而《中国古代文明》所提出的关于“上帝”的与传统说法完全不同的意见，对学者们是很有启发的，将促使关于商代宗教研究的深入。

其次，作者力图用甲骨文中字群，分析商代社会的结构（即“组别”），是前人没有进行过的。他认为商代“在四方的土地上，居住着不同的社会群组，这要归于一种和平共生共存的体制”（P124），不同意“从卜辞上猜测出中国上古历史主要是军事征战和抢掠奴隶的行为”（P126）的意见。虽然作者从字形分析商代社会人的组别时，证据显得薄弱些，但从这种新角度的探索还可以进一步深入下去。

其三，作者用历史比较的方法研究商代历史，从而使我们的研究扩大了眼界。早在30年代，郭沫若在《释支干》中，曾将地支与巴比伦的古代文明联系起来，但此后很少有人将商史与世界其他文明进行比较研究。而本书将商代的婚姻制度与《圣经》中人类祖先的婚姻相比较，发现“两者之间具有惊人的相似之处”（P18）。而甲骨文中的“上帝”和人类同住，“如同《圣经》的传说，和人民一起住在一顶帐蓬里，或后来住在耶路撒冷的寺庙中”（P47）。“中国的祖先与上帝之间的关系，就象亚伯来罕与全能的神、摩西与耶和华、耶酥与天父的关系一样。在某些方面中国传说可以认为是与《圣经》传统并行的”（P65）。这些，对甲骨文商史深入研究都很有启发。

特别是作者以“公元前一千年来中东文献对中国这个遥远的世界的见解”为题，专章分析了有关中国古代文明与两河文明的关系，诸如《以赛亚书》的预言中有关中国的历史地域因素；《约伯记》中全能的神之名的文字同甲骨文中关于上帝的名字的平行关系；巴兰姆的宗教活动同商代占卜的相似之处；《创世纪》中的洪水泛滥。……这就使我们的甲骨文商史研究不再局限于黄河，而推动我们放眼中东的“两河”。

经过认真的比较研究后，作者不仅认为商代文明与两河文明有着密切关系，而且进一步溯本求源，指出：“可以肯定，中国与中东的史前人类的本源都与一块天堂式的土地相联系，这土地使人联想起我们认识的非洲及其热带森林”（P218）。殊途而同归，这是很有见地的看法。

《中国古代文明》一书，是近年意、中文化交流的重要研究成果。如果说，明朝时意中文化交流的先驱者利玛窦，主要是为了在中国传教而宣讲《圣经》并传授一些西方科学知识的话，而今天阿马萨里博士则是为了认识中国古代文明而研究《圣经》。虽然都是意大利人，并都熟知《圣经》，但目的和方法不一样，所以成绩也就不同。可以毫不夸大地说，阿马萨里的《中国古代文明》一书，是把《圣经》从“圣殿”里请出来，做为研究古代文明的第一手资料，从而发现了商王朝时期的黄河文明与两河文明的某些关系，这就比利玛窦对《圣经》“照本宣科”要大大前进了一步。可以肯定，本书在意中文化交流史上将占有一定地位。

总之，《中国古代文明》内容深刻，催人思考并扩大了人们的视野。每一位研究甲骨文殷商史的学者，都值得认真一读！

（原載《殷都學刊》1999年第1期）

韩国出版的《通过文化解释的汉字》评介

（韩国）金富贤

汉字是韩语里面不可缺少的。韩国用汉字的历史有 2000 多年，韩语里面一半以上是“汉字语”。汉字语是可以用韩语来写的，可是不懂汉字的话，不容易解释，只能了解语感上的模糊的概念。其实这些问题不能一概而论。

《通过文化解释的汉字》1997 年 12 月在韩国东方媒体出版社出版，是随着最近在韩国再次日益增强的汉字的重要性而出版的介绍汉字原意的书。

作者是河永三。他曾是在台湾政治大学读过中国文字学的研究生，现在是韩国东义大学的助教授。他的主要论文有《汉代石刻文字的异体字和通假字研究》等，译著有《古文字初阶》、《中国汉字学史》等。

该书的主要目的是为改正韩国一些学者有关汉字的误解，指出一些汉字解释书的错误。比如说“母亲抱着孩子的‘好’字，被误解为男女是不可分离的好关系”等等。

作者提出了解释汉字的基本原则：

第一，按照能够确认的最早的汉字字形。

第二，从确定最早本义的例子开始推论派生出来的意义。

第三，不要个别字的单独解释，而应与同一类创造字的一起分析。

该书第一目标是解释日常生活中使用的汉字的字源。所以从甲骨文开始寻找适当的解释。

另外，通过文化解释汉字了解古代中国文化的特点。比如说通过“羊和美”，“女和姓”的关系进一步理解历史和文化。

该书的内容分为 10 个部分：

一、神话

福和古代的祭祀

“福”是两只手捧着酒瓶的样子，后来表示两手的部分被省略了。把酒献给祖先祈求幸福。这样就产生了“福”这个字。

二、从狩猎到耕田

陷阱和打猎法

“陷阱”是掉下去和陷阱的组合。陷阱的原意和现在的意思不同，“陷”是人的脚掉在坑里的样子，“阱”是动物掉在坑里的样子。后来两个字组合为“陷阱”，还有“不能克服的困难”的意思。

三、从母系社会到父系社会

妻和妾

“妻”是女人跪着弄头发的样子。按照中国古代的习俗，女人到 15 岁就把头发盘起来了，这是一种成人仪式。从这时候开始可以嫁给别人，“妻子”的意思是从这儿派生出来的。

“妾”是“辛”和“女”的组合。“辛”是墨刑时用的刀，意思是“累”或“痛苦”。妾是判过墨刑的低贱的人或奴隶的意思。

四、从部落到国家

国家和战争

“国”是被包围着的样子和战士拿着武器守门的样子的组合，意思是拿武器保卫城。后来又加上象征土地的“一”，成了“或”，“或”的原意是“国家”。可是“或”用在副词之后，为了明确的表示“国家”的意思，加上了“囗”，就成了“国”。“国”字的结构是双重的城。

从“国”字的结构上看，国跟武器有关，这里的武器意味着“征伐”。反映这个意思的汉字有“围”和“正”。“卫”是保卫城的样子，可是该字后来假借用于“皮”的意思。为了确定原意，加上了“囗”字。“正”的原意是“征伐”，这个字也是后来假借用于“正当”的意思。为了确定原意，加上了“彳”，成了“征”字。

五、生命的循环

从出生到教育

有新生命体的意思的字有“包、孕、身”等。这些字大体上意味着“怀孕”、“包”是还不完整的胎儿的样子，“孕”是有完整的胎儿的样子，而“身”是怀孕女人的大肚子的形象化。

有关养孩子的字有“乳、保”。“乳”是母亲抱着孩子喂奶的样子。“保”是母亲背着孩子的样子，也有保护的意思，这就是母亲照顾孩子的样子。

有关教育孩子的字有“学、教”。“学”字是在家教孩子打结的样子，这就是“结绳”。结绳是文字以前的记忆的一种手段。“教”是拿着戒尺教孩子打结的样子。

六、哲学与伦理

恭敬

“恭”字是从“共”派生出来的。“共”有给神上供的意思，上供时得有恭敬的心理。所以共加“心”，就是“恭”。

七、科学的开始

数字和禁忌

在韩国不吉利的数字是“四”，因为“四”和“死”的发音一样。在医院很少用“四层”，公共汽车没有 4 和 44 路。

在中国禁忌的数字有“七”。因为“七”和“切”有关；中国古代定于“七月份”砍罪人的头。还有死人的第七、十四、二十一……天的时候祭祀，四十九(7×7)天举行盛大的祭祀等。

八、美学的想象力

羊和美

“羊”是形象羊角部分，而“美”是羊和人展开四肢的正面形象的组合，表现原始社会人穿羊皮跳舞的样子。人穿羊皮就是美丽的打扮。

九、饮食文化

鱼和鲜

鱼在中国因为它的多产力，象征“富裕”、“丰富”、“幸福”。现在在中国贺年卡等上面也可以看到“鲤鱼”，还有“年年有余(鱼)”等。因为汉语中“鱼”和“余”的发音一样。

“鲜”是“鱼”和“羊”的组合。“羊”表示鱼和羊一样好吃。“鲜”就是好吃的鱼，新鲜的鱼。

十、时间与方向

旦和昏

“旦”是太阳出来时，阳光反射的样子，表示古代太阳出来的时间，就是早晨。

“昏”是太阳落山的样子，表示晚上。

该书的内容丰富多彩。由于篇幅所限，上述仅是该书简要内容的介绍。

该书在编辑上颇具特点，即通过大量形象的插图、字形等来解释那些对韩国人来说比较头疼的汉字，从而加深了对汉字的理解。

可以说这是一本引人入胜的好书，对韩国人了解汉字的原意很有意义，与此同时，对韩国人认识和了解中国古代的文化和历史也很有价值。

（原载《殷都學刊》1999年第1期）

『甲骨文字典』における採字方法の検討

鈴木　敦

『字典』⑴は，斯界で初めての本格的な字書である。「序言」2～3頁によれば，同書は字義の整理においては『集釋』の，字形の整理においては『文編』二書⑵の長所を踏まえ，かつ不備を補うことを企圖して編纂されたという。

このうち字形の整理に關しては，『文編』三書の抱える問題點を列擧⑶した上で，『字典』においては「字形の蒐集に當たっては各文字の全ての字形を總覽した上で代表的な字形を精選し，時期區分の基準に照らして各時期ごとに示すことで時期差に伴う字形變遷の特徴を理解できるように」⑷するとしている。

筆者はこれまで，現行の最もスタンダードな甲骨文字字形表たる『文編』に關する檢討を行ってきた⑸。その中で『字典』の字形表部分についても若干言及したが，それは「スタンタードな字形というより寧ろ特殊な字形を意識的に選んで收載しているかの如く見える。」⑹という，漠然とした印象に止まった。しかし同時にその印象は，上記の『字典』の企圖とは對極に位置する性格のものでもあった。

本稿では，「冓」字を例に『字典』の字形表部分に具體的な檢討を加えることとする。

まず，「冓」字資料の現状を把握しておく。先の檢討では『合集』第１巻～第12巻所收の39,476片を母集團とし，「冓」字を合計702例檢出している。このうち「偏旁＋細分」レベルでの「完形」資料は558例，「偏旁のみ」レベルでの「完形」資料は586例であった⑺。具體的データを表１－Ａ・Ｂに示す⑻。

表１「冓」字の資料状況

１－Ａ「偏旁＋細分」レベル

型	族	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	合　計
A110	0(0.0)	77 (78.6)	22 (71.0)	74 (26.0)	3(3.7)	0(0.0)	176
A111	9(100.0)	19 (19.4)	1(3.2)	98 (34.4)	8(9.8)	0(0.0)	135
A112	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(0.7)	0(0.0)	0(0.0)	2
A120	0(0.0)	0(0.0)	3(9.7)	2(0.7)	43 (52.4)	0(0.0)	48
A121	0(0.0)	2(2.0)	0(0.0)	5(1.8)	26 (31.7)	0(0.0)	33
A210	0(0.0)	0(0 0)	0(0.0)	3(1.1)	1(1.2)	0(0.0)	4
A999	0(0.0)	0(0.0)	3(9.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3
B110	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	7(2.5)	0(0.0)	0(0.0)	7
B111	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.1)	0(0.0)	0(0.0)	3
C110	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	10(3.5)	0(0.0)	0(0.0)	11
C111	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.4)	0(0.0)	0(0.0)	1
C112	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(0.4)	0(0.0)	0(0.0)	1
C312	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(7.5)	4
D110	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	17(6.0)	1(1.2)	1(1.9)	19
D111	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	54 (18.9)	0(0.0)	0(0.0)	54
D112	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	8(2.8)	0(0.0)	4(7.5)	12
D120	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1
D312	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	44 (83.0)	44
合　計	9(100.0)	98(100.0)	31(100.0)	285(100.3)	82(100.0)	53 (99.9)	558

１－Ｂ「偏旁のみ」レベル

型	族	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	計
A	10(100.0)	103(100.0)	26(83.9)	188 (63.1)	80(97.6)	0(0.0)	407
A210	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(1.0)	1(1.2)	0(0.0)	4
A999	0(0.0)	0(0.0)	3(9.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	3
B	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	10(3.4)	0(0.0)	0(0.0)	10
C	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	12(4.0)	0(0.0)	4(6.5)	17
D	0(0.0)	0(0.0)	1(3.2)	85(28.5)	1(1.2)	58(93.5)	145
計	10(100.0)	103(100.0)	31(100.0)	298(100.0)	82(100.0)	62(100.0)	586

凡　例

「型」欄

Ａ：「冓」　Ｂ：「冓＋止」　Ｃ：「冓＋彳」　Ｄ：「冓＋辵」

第一位：輪郭線（冓）

１＝上下對置（冓）・２＝左右對置（冓）・３＝輪郭・交線結合（X）・９＝魚形（冓）

＊魚形は三桁表現に馴染まない爲，第二・三位も無條件に「９」とする。

第二位：交線（冓）

１＝∧・２＝X

第三位：横線（冓）の本數

各セル

数値　：資料の實數

（　）：各期における占有率

網掛け：表３に対応するセル

次に既刊の主な字形表，竝びにこれに準ずる性格を有する書物について，文字域「冓」の内容を整理する。

『字典』以外で，甲骨文字資料全體を視野に收めて文字域を設定している主な書物としては，『文編』三書・『集釋』・『綜類』・『類纂』の六書が擧げられる。

『文編』三書は字形表である。『集釋』は字形表が主目的ではないものの，各文字域冒頭に示された字例には字形表としての意圖が看取される。『綜類』・『類纂』は當該文字を含む卜辭を全て收載する方針を採っており，前四書と同等に論ずることはできない。本稿では，各文字域の冒頭に見出し字として提示された字形の選擇に，編者の採字方法が一定程度反映されているとの解釋に基づいて検討を加える。

前四書は『說文』の見出し字に従って文字域を設定している。このため「冓」字は卷二と卷四に分散して收められているが，各編者は兩者を合して一つの文字域と考えていると判斷される(9)。一方『說文』に據らない後二書では，完全に一つの文字域とされている。

『字典』竝びに上記六書の文字域「冓」を構成する字形及び例數を，『字典』・『文編』三書・『集釋』については收載字例に基づき，『綜類』・『類纂』については見出し字に基づき，表２に整理する(10)。

表２　文字域「冓」を構成する字形及び例數

型	字典	舊文編	續文編	文編	集釋	綜類	類纂
A110	0	33	37	21	12	0	1
A111	1	8	19	5	5	0	0
A112	0	0	0	0	0	0	0
A120	0	1	0	0	1	1	0
A121	1	0	6	0	0	0	0
A122	0	0	1	0	0	0	0
A210	1	3	0	5	0	0	0
A999	0	1	0	2	3	0	0
B110	0	0	2	2	1	1	1
B111	0	1	0	3	1	0	0
C110	2	0	4	7	1	0	0
C111	0	1	0	1	0	1	1
C112	0	0	0	0	0	0	0
C312	0	0	0	0	0	0	0
D110	2	4	14	10	1	0	0
D111	0	4	14	7	2	0	1
D112	0	2	2	4	2	0	0
D120	0	1	0	1	1	0	0
D121	0	0	0	0	0	1	0
D310	0	2	0	0	0	0	0
D311	0	2	1	1	1	0	0
D312	0	19	0	6	6	0	0
その他	0	0	3	1	0	0	0
合　計	7	82	109	87	37	4	4

表２から，文字域「冓」の内容は『字典』以外の六書においては基本的に一致していると判斷される。即ち，大枠としてＡ標準型・Ｂ型・Ｃ型・Ｄ型の４字形からなる。一方，Ａ特殊型(11)竝びに三桁の數字で表現されるより細かな差異の扱いに關しては，各書の間でかなりのばらつきが見受けられる(12)。編集方針竝びに資料の母集團が一樣ではないため單純な比較はできないが，文字域「冓」への採字に當たって，編者の意識が網羅的に働いていたのは，各書とも「偏旁のみ」のレベルまでと考えられる。

次に，『字典』の現状を整理する。當該字例の字形を表１に準じて分類整理し，表３に示す。

表３　『字典』文字域「冓」における採字状況

字例No.	出　典	分　期	型	占有率１	占有率２
1	存01.1943　(33928)	1期（4期）	A210（A210）	0.0（－）	0.0（－）
2	存01.1943　(28017)	2期（3期）	A111（A111）	3.2（3M）	83.9（1）
3	粹0712　(28701)	3期（3期）	C110（C110－L）	3.5（4）	4.0（3）
4	存01.1944　(28745)	3期（3期）	C110（C110）	3.5（4）	4.0（3）
5	後02.13.05　(27979)	3期（3期）	D110（D111）	6.0（3）	28.5（2）
6	寧01.85　(33930)	4期（4期）	A121（AX121）	31.7（2）	97.6（1）
7	續01.08.06　(35497)	5期（5期）	D110（D112）	1.9（3M）	93.5（1）

凡　例

「出典」欄

『字典』の出典表記。當該片の合集番號を（　）で付記する。

「分期」欄

『字典』の時期表記。當該片の表１における時期判斷を（　）で付記する。

「型」欄

『字典』の摹本に基づく分類。當該文字の拓本に基づく分類を（　）で付記する。

「占有率１」欄

『字典』の分期・摹本に基づき，當該字形の表１－Ａにおける型・分期の占有率を
「偏旁＋細分」のレベルで算出して％表記。當該時期における占有率の順位を（　）に付記する。
「－」は「字例なし」,「M」は「字例があるものの中で最下位」を示す。

「占有率２」欄

『字典』の分期・摹本に基づき、當該字形の表１－Ｂにおける型・分期の占有率を
「偏旁のみ」のレベルで算出して％表記。當該時期における占有率の順位を（　）に付記する。
「－」は「字例なし」を示す。

前述の「序言」によれば，『字典』はその字形表部分において「各文字の全ての字形を總覽した上で代表的な字形を精選し，時期ことに示す」という。その具體的な手だては，「凡例」の第１項～第３項に示されている。要約すれば，

①：拓本からの採字を主とし，罕見の字が摹本の形でしか知られない場合に限り，摹本からも採字する。原字が不鮮明で摹寫できないものは採字しない。　（第１項）
②：典型的な字形のものを主として採字する。　（第２項）
③：五期區分に従って提示する。　（第３項）
④：提示方法に王朝卜辭・族卜辭の別は反映させない。　（第３項）

というものである。

まず①であるが，字例６に問題がある。表１によれば，第４期・A121型の「完形」資料は26例検出されている。摹本から採字する必要性は認められない(13)。

次に②・③についてまとめて述べる。凡例に従えば，五期區分に従って各期の典型的な字形が提示されることになる。

字例１は，占有率が１・２共に0.0%である。當該字形（A210型）は表１では計558例中僅か４例しか檢出されておらず，本稿ではA特殊型に分類しているものである。これまでの分析では，A210型の４例中，字例１は第４期に・その他の３例は第３期に分類してきた。分期判斷の相違がこのような極端なズレの原因であるが，假に『字典』の判斷に従って字例１を第１期に分類したとしても，占有率は約１％で第１期中最下位である。一方第１期にはA110型（占有率約80%）という，「序言」の表現を借りれば「有代表性的字形」が存在している。『字典』が，第１期の字例として擧げているのは字例１だけであり，この採字は適正を欠くと言わざるをえない。

字例２の占有率１は3.2%であり，第２期中最下位である。第２期においても「有代表性的字形」はA110型（占有率約70%）であり，當該時期唯一の字例としてA111型を擧げるのは不適切である。字形分類のレベルを「偏旁のみ」まで落とした占有率２において初めて，83.9%で第１位となり「適切な採字」と言える。なお，字例２は表１においては第３期に分類されており，字例１同様，分期判斷に問題がある。

字例３及び４はミラーリバースになっているが，共にC110型に分類される。この採字法は，『文編』三書の問題點として「所彙字形重複龐雜」を擧げ「精選有代表性的字形」を目指す(14)姿勢とは合致しない。字例３について，「型」欄の（　）内において「L」を付しているのは，拓本では明確に「手」の表現が認められるためである。同型の字例を２例採字しているかに見えるのは，或いは當初「手」の表現を認めて異なる字形と判斷し，摹寫～收載段階で摹本に狂いが生じたためかも知れない。そうであれば「同型２例」の不合理は免れるが，同時に序言で指摘している『文編』三書の「摹寫失誤」(15)を，自らも犯していることになる。さらに，「手」を伴う「冓」字は字例３が全資料中唯一の例であり，「特殊な字形」の採字例ということになろう(16)。これらの問題を全て捨象しても，C110型の第３期における占有率は3.5%で第５位に止まり，採字の適正には依然として疑問が存する。この状況は，占有率２においても變わらない。

字例５(17)は拓本では明確に横線が認められD111型と判斷されるが，『字典』の摹本はD110型に作られており，「摹寫失誤」の例である。D110型の第３期における占有率は6.0%であり，第３位以上から大きく離れて第４位である。占有率２においては約30%を占めて第２位に浮上するが，第３期の字例の約60%を占める「A型」を欠く状況に變わりはない。

第３期は，「冓」字の字形のバリエーションが最も多様になる時期である(18)。『字典』がこの時期にのみ複數の字例を提示していること自體は，妥當な處置と言える。しかしその内容は適切とは言い難い。

字例６の占有率は31.7%であり，第４期中約50%を占めるA120型から大きく離れて，第２位である。占有率２において初めて「適切な採字」と言える。

字例７の占有率は1.9%であり，第５期中最下位である。第５期にはD312型（占有率約80%）という「有代表性的字形」が存在しており，字例７の採字は著しく適正を欠くと言わざるをえない。占有率２において初めて「適切な採字」と言える。

注意すべきは，字例１～７の中にB型の例が一つも含まれていないことである。B型の字例は總計僅か10例に過ぎないが，「冓」字の一連の「字形演變」の流れの中に位置しており，その「特徴」を把握する上で不可欠である。資料數の少なさにも拘わらず，B型を「有代表性的字形」とすることに異論はないであろう。『字典』同様「偏旁のみ」レベルでの字形認識に立つ表２所掲の六書において，B型の字例を提示していないものは皆無であった。

A999型の扱いについても付言しておく。同型は僅か３例しか檢出されておらず，「字形演變」の主流からも外れており，字例の提示が無いことも一面では理解できる。しかし，『字典』は「冓」字の解字部分において「象兩魚相遇之形，以會遭遇之意」と述べており，これはA999型を指すものと判斷される。現状では解字に見合った字形が提示されていないことになり，甚だ不都合である(19)。B型同様，資料數とは別の面で「代表性」を有する字形であり，何らかの方策を講じて採字すべきであろう。

總じて言えば，前記②・③の趣旨は，「偏旁＋細分」のレベルにおいては到底實現されているとは言い難い。字形認識を「偏旁のみ」のレベルまで落として，漸く部分的に實現されていると言えるに止まる。

次に④である。族卜辭と王朝卜辭とは，しばしば字形のあり方を異にする(20)。族卜辭は資料の母集團が小さいため，どの文字域においても資料數が少なくなることは想像に難くない。しかし，甲骨文字の字形の全體像を見通す爲のツールたる字形表においては，その特殊性故に不可欠な存在と言えよう。資料數に拘わらず，族卜辭についても網羅的に扱うことが必要である。『字典』は網羅的な收載を行わないのみならず，個別的な收載に當たって王朝卜辭と區別することもしない方針を採る。このような收載方法は，場合によっては却って混亂を招く原因となろう。

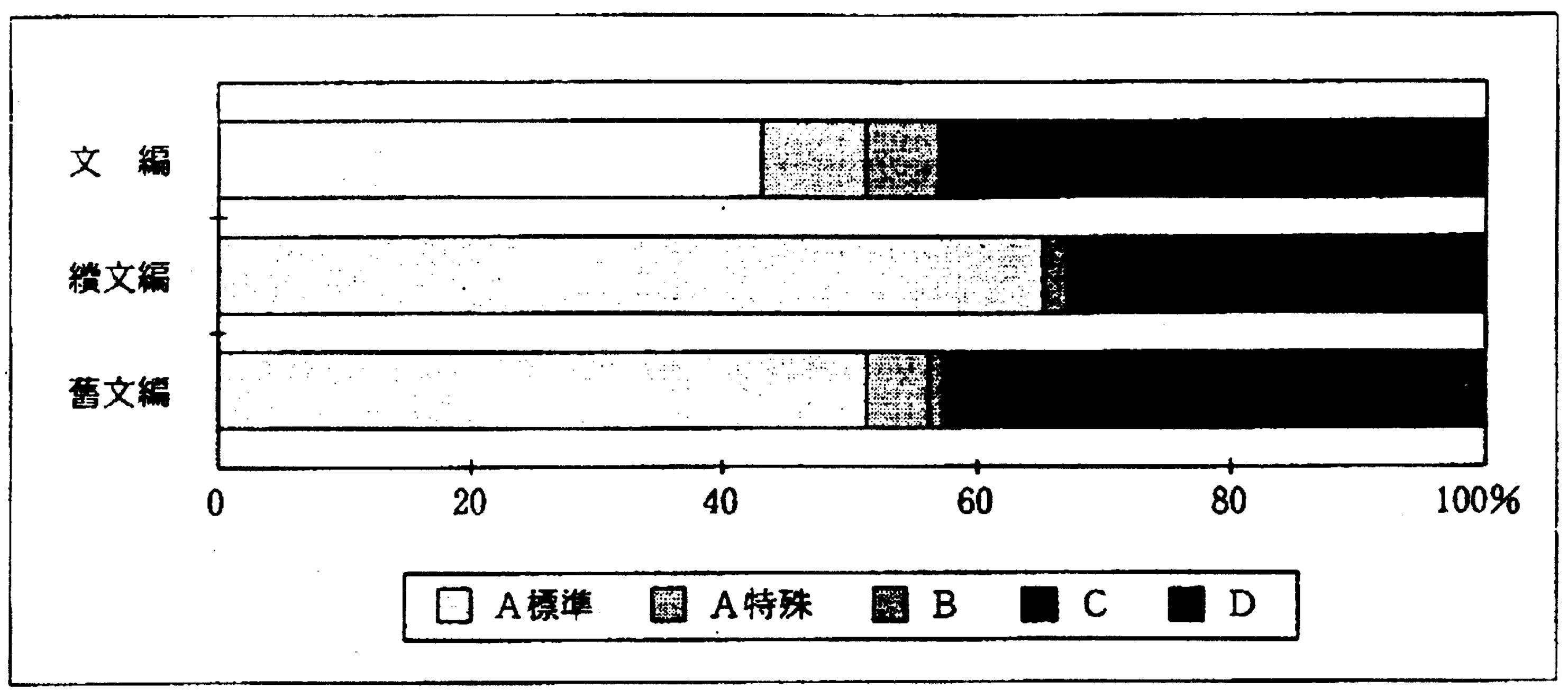
最後に，『文編』三書・『字典』並びに拙稿④以來の一連の分析結果を比較する。

『文編』三書は「偏旁のみ」のレベルで「冓」字の字形を認識している。また「時期の別」・「王朝卜辭／族卜辭の別」という概念は盛り込まれていない。『文編』三書の文字域「冓」に示された字例を，「偏旁のみ」のレベルで分類し，表４及びグラフ１に示す(21)。

表４『文編』三書における文字域「冓」の状況

型	A標準	B特殊	B	C	D	計
文　編	37	7	5	8	29	86
續文編	69	0	2	4	31	106
舊文編	42	4	1	1	34	82

グラフ１『文編』三書における文字域「冓」の状況

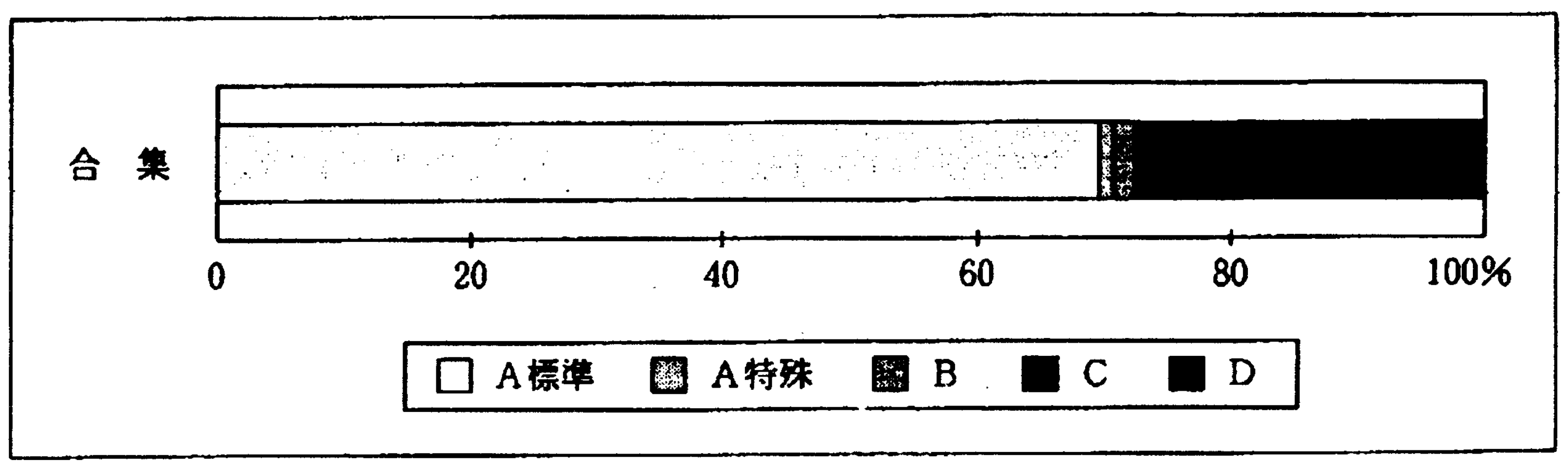


同様に，『合集』を母集團とする「偏旁のみ」のレベルでの「完形」資料586例について，「時期の別」・「王朝卜辭／族卜辭の別」という概念を排除して分類し，表５及びグラフ２に示す。

表５『合集』における文字域「冓」の状況（『文編』三書準據）

型	A標準	B特殊	B	C	D	計
合　集	407	7	10	17	145	586

グラフ２『合集』における文字域「冓」の状況（『文編』三書準據）

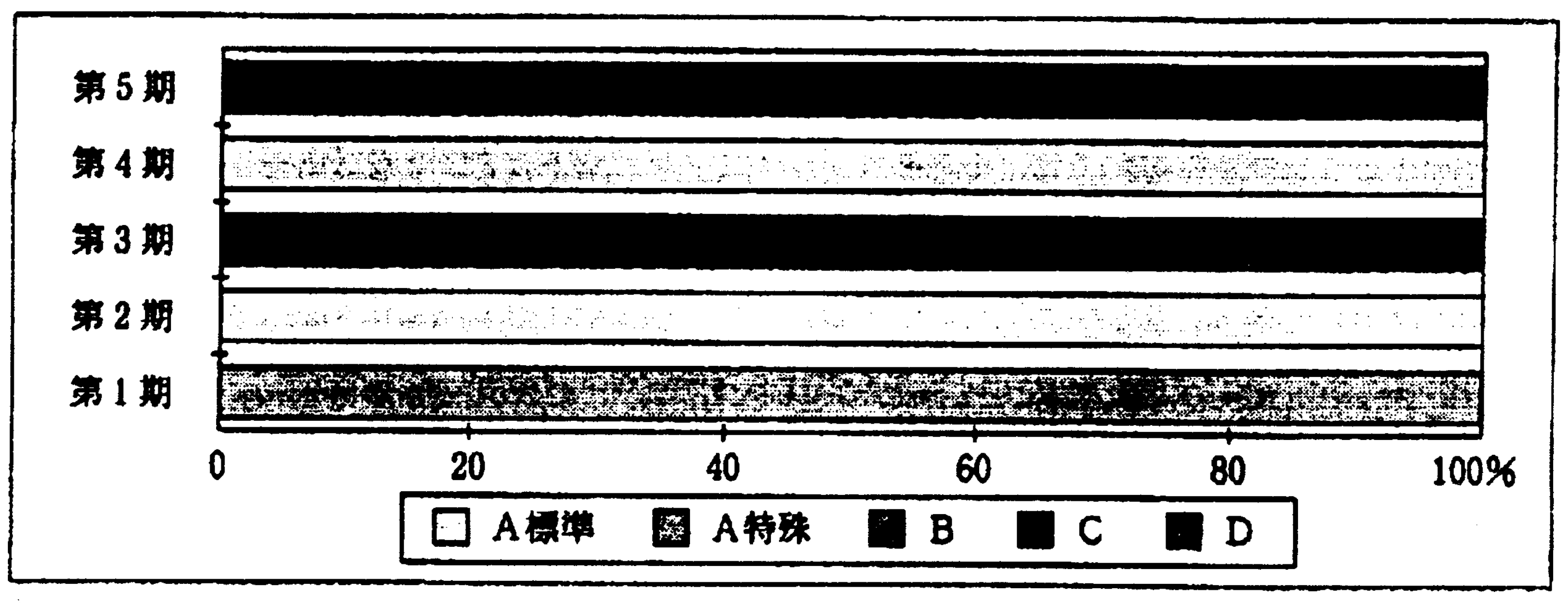


『字典』の字形表部分も，「冓」字の字形認識は「偏旁のみ」のレベルまでと判斷される。「時期の別」については明確に打ち出しているが，「王朝卜辭／族卜辭の別」という概念は依然として盛り込まれていない。『字典』の文字域「冓」に示された字例を，「偏旁＋時期」のレベルで分類し，表６及びグラフ３に示す。

表６『字典』における文字域「冓」の状況

型	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	計
A 標 準	0	1	0	1	0	2
A 特 殊	1	0	0	0	0	1
B	0	0	0	0	0	0
C	0	0	2	0	0	2
D	0	0	1	0	1	2
計	1	1	3	1	1	7

グラフ３『字典』における文字域「冓」の状況

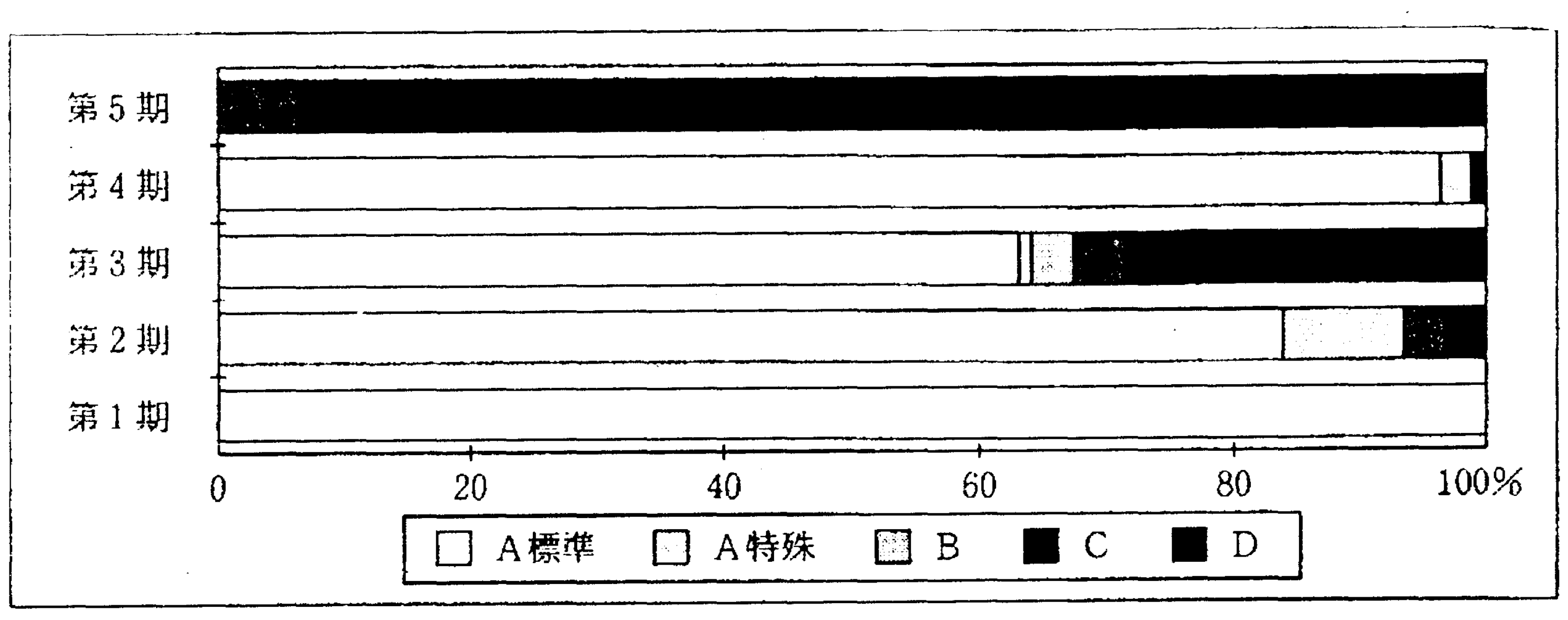


同様に，『合集』を母集團とする「偏旁のみ」のレベルでの「完形」資料586例を，「王朝卜辭／族卜辭の別」という概念を排除して分類し，表７及びグラフ４に示す(22)。

表７『合集』における文字域「冓」の状況（『字典』準據）

型	第１期	第２期	第３期	第４期	第５期	計
A 標 準	113	26	188	80	0	407
A 特 殊	0	3	3	1	0	7
B	0	0	10	0	0	10
C	0	1	12	0	4	17
D	0	1	85	1	58	145
計	113	31	298	82	62	586

グラフ４『合集』における文字域「蕢」の状況（『字典』準據）



グラフ２において占有率の低いＡ特殊型～Ｄ型の比率が，グラフ１においては概して大きめになっているが，全體としては比較的似寄りのイメージになろう。その中では『續文編』が，Ａ特殊型を含まない點を除いて非常によく似たあり方を示している。一方，『文編』はＡ特殊型以下の比率が實勢よりもかなり大きくなっている。

グラフ３とグラフ４においては，それぞれからイメージされる「蕢」字の「各個時期文字字形演變的特徴」像が大きく乖離している。『字典』は，『文編』三書の不備を補うとして「時期の別」の概念を盛り込んでおり，その點は進歩として高く評價される。しかし，イメージされる文字域「蕢」の「字形演變」像の隔たりの大きさにおいて，『字典』は寧ろ『文編』三書の水準から後退しているといえる。

最大の原因は，同じく「不備を補う」手だてとして掲げた「字形精選」の方法にあると思われる。『文編』三書の採字方法を「重複厖雜」として，「字形精選」を目指したこと自體は正當である。しかし文字域「蕢」における採字方法を見る限り，「字形精選」に當たってセリエーションが意識されていた樣子は見受けられない。多數の字例を「重複」しつつ「厖雜」に採字したとされる『文編』三書においては，その採字數の多さ故に一定程度調整され克服されていた字例選擇上の問題點が，收載字例を「精選」した『字典』においては直接前面に出てきてしまったと言えよう。

字形認識のレベルにも問題がある。字例檢討の項で述べたように「偏旁のみ」レベルにおいては妥當な採字も，「偏旁＋細分」レベルにおいては適正を欠くものが多かった。一方，字形表を繙くに當たっての利用者の意識は「偏旁のみ」レベルに止まるものであろうか。否えは「否」であろう。本稿のグラフ４と拙稿⑤のグラフ３を比較すれば，同一資料を對象としながら字形認識レベルの差異に起因する「字形演變」像の相違は明らかである。

以上，「蕢」字を例に『字典』の字形表部分に具體的檢討を加えてきた。一文字域に限定した檢討という制限付きではあるが，現状では『字典』の企圖が達成されているとは言い難い。より踏み込んだ字形認識に立ち，個々の字形についてセリエーションを把握し，それを「字形精選」作業に反映させることが求められよう。

注

1：以下，主な文獻は略號で記す。正式名稱は，本稿末尾の「本稿所引文獻略號表」を參照されたい。また各書が引く著錄の名稱表記は，それぞれの書物の略號に從う。

2：以下，『舊文編』・『續文編』・『文編』を總稱して「『文編』三書」と呼ぶ。

3：２頁に「所彙字形重複厖雜，或有摹寫失誤，識字不當之處，而字彙雜陳，未加分期歸類也是不便使用的」とある。

4：２頁に「在蒐集字形方面是統覽每一字全部字形基礎上精選有代表性的字形，按斷代標準分列于各時期之下，以便了解各個時期文字字形演變的特徵，從而全面深入掌握字形」とある。

5：拙稿①～⑥。

6：拙稿①・注23。

7：拙稿④，同⑤。

8：各型の定義は，表の下に略記する。詳細は拙稿④を參照されたい。なおA210型・A999型は，表現上Ａ型に屬しているが極めて特殊な字形であり，本稿において他のＡ型と一括して扱うには無理がある。以下，この２型を總稱して「Ａ特殊型」とし，その他のＡ型（「Ａ標準型」）と區別する。

9：拙稿⑤・注13。當該箇所で言及しているのは『文編』についてのみであるが，『舊文編』では「凡例」の第５項，『續文編』では「編集凡例」の第９項，『集釋』では「凡例」の第11項に，それぞれ同樣の方法に據ることが明記されている。

10：字形の分類方法は表１に準ずる。各編者の意圖を歸納的に把握することが目的であるので，その字形把握が正確か否かを問わず，各書の摹寫に基づいて分類する。

11：『續文編』はＡ特殊型を，『綜類』はＡ特殊型中のA999型を文字域「蕢」に含めていない。『綜類』はＡ特殊型中のA210型を，『類纂』はＡ特殊型を見出し字に掲げていないが，辭例の列擧部分には收めている。

12：この他に，「その他」として本稿の檢討對象から除外せざるをえなかった字例が４例存在する。４例の內譯は，『續文編』が乙4375・佚164・京04.10.02，『文編』が佚164である。このうち佚164は兩書に共通であり，かつ京04.10.02と同一資料の重載であるので，實質的には２例である。

乙4375は上半部が「足」に作られている。筆者の知る限り全くの孤例であり，該字も小片上に「其～」と記されているのみで，「蕢」字と斷定することはできない。

佚164の扱いに關しては，拙稿④・注２を參照されたい。

13：表３「型」欄において，『字典』摹本による判斷はA121・『合集』拓本からの判斷はAX121となっている。この點に關しては拙稿⑥・2-1-2を參照されたい。

14：同，注３。

15：同，注３。

16：字例３に關しては，拙稿⑥・3-1-1を參照されたい。

17：後02.13.05には「蕢」字が２例刻され，拓本から共にD111型に分類される。『字典』の摹本は，第２辭中の文字に基づくものと判斷される。

18：拙稿⑤。

19：『字典』魚部の末尾（1257頁）には，A999型の字例が提示され「釋蕢，卷四蕢部」と付記されている。『字典』の通例に從えば，本稿の檢討對象である「蕢」字の項に當該字例が提示される筈である。當該箇所にA999型の字例が提示されていないのは，作業上のミスの可能性が高い。

當該字例は第２期に屬する。ところで第１期・第２期の字例として提示された字例１・字例２は，分期判斷に問題があった。併せて想像するに，本來第１期・第２期には別の字例が收載される筈だったのではなかろうか。それが何らかの理由で上記A999型の字例共々脱落してしまい，本來第３期・第４期の字例として準備されていた字例１・字例２が誤って現在の位置に置かれてしまった，と見るのは考えすぎであろうか。

20：「蕢」字もまたその一例である。拙稿⑤。

21：佚164を檢討對象から除外し，合計86字について整理する。注12參照。

22：『字典』が第１期及び第２期の字例として掲げている資料が，時期區分において問題を有することは既に述べた。表６と７，グラフ３と４で同一資料が異なる時期に分類されることになるが，敢えて對策は講じていない。

<本稿所引文獻略號表>

舊文編：孫海波『甲骨文編』哈佛燕京學社・1934年
續文編：金祥恆『續甲骨文編』芸文印書館・1959年
文編　：中國社會科學院考古研究所『甲骨文編』中華書局・1965年
集釋　：李孝定『甲骨文字集釋』中央研究院歷史語言研究所・1965年
綜類　：島邦男『殷墟卜辭綜類』大安・1967年
合集　：郭沫若『甲骨文合集』中華書局・1978－1983年
類纂　：姚孝遂『殷墟甲骨刻字類纂』中華書局・1989年
字典　：徐中舒『甲骨文字典』四川辭書出版社・1989年
拙稿①：「甲骨文字における“文字域”の設定――『甲骨文編』の檢討を通じて――」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』創刊號・1997年
拙稿②：「『甲骨文編』札記」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第２號・1997年

拙稿③：「『甲骨文編』における大文字域の現狀」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第３號・1998年
拙稿④：「甲骨文『蕢』字諸字形の分析」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第４號・1998年
拙稿⑤：「甲骨文字におけるセリエーション把握」『論集　中國古代の文字と文化』編集委員會編『論集　中國古代の文字と文化』汲古書院・1999年
拙稿⑥：「『甲骨文編』における採字方法の檢討」『茨城大學五浦美術文化研究所紀要　五浦論叢』第５號・1998年

（原載《茨城大學人文學部紀要》第5號，1999年）

『甲骨文編』における採字方法の検討

鈴木敦

『文編』[1]は、現行の最もスタンダードな甲骨文字字形表である。本書は各文字域ごとに多數存在する文字例の中から、その一部を選擇的に採字收載する方針を採っている。選擇の基準は、同書の編集凡例・第一項〜第四項の記載及び現状からの歸納によって知ることができるが、既に指摘したように實際には樣々な問題を含でいる[2]。これらの問題について、本稿では「冓」字を例に、より詳細な檢討を行う[3]。

『文編』の文字域「冓」における採字状況を、表一に示す。

表一「文編」文字域「冓」における採字状況

凡例

1「No.」欄

本稿における資料番號である。本文中では「 」で圍んで示す。

2「文編」欄〜「著録卷葉」欄

『文編』の體裁に準據する。

「著録」欄・「著録卷葉」欄において、『文編』と著録との間に齟齬[4]がある場合、然るべき出典を發見し得たものについてはそのデータを、發見し得なかったものについては「?」を、それぞれ[ ]で圍んで併記する。

3「合集番號」欄〜「細分」欄

拙稿④・表一の體裁に準據する。

「偏旁」欄・「細分」欄は、『文編』模寫に基づく判斷を記す[5]。拓本資料に基づく判斷がこれと異なる場合には、[ ]で圍んで併記する。

4「補記」欄

拙稿④・表一・「備考」欄より、本稿に必要な内容を轉記する。

「合集番號」欄〜「補記」欄に關わる諸概念については、拙稿④・⑤を參照されたい。

5「類例」欄

『合集』第一卷〜第一二卷所收の三九、四七六片中より檢出された「完形」[6]の當該字例について、まず總數を記し、次いで當該時期の例數を( )に圍んで併記する[7]。「偏旁」欄・「細分」欄において、別途拓本資料に基づく判斷が示されている場合には、それに對應する數字を[ ]で圍んで併記する。

6「問題」欄

各字例が抱える問題を、性質ごとに分類して三桁の數字で略記する。この數字は、表一に續く記述の見出し番號に對應している。例えば表一・備考欄に「111」とした問題については、「1-1-1出典表記」の項で記している。

No	文編	著録	著録卷葉	合集番號	分期	偏旁	細分	補記	類例	問題
01	0169	甲	0522	28038	3	D	110[111]		19(17) [54(54)]	121
02	0169	甲	0706	30080	3	D	111		54(54)	-
03	0169	甲	0871	30084	3	D	112		12(8)	231,232
04	0169	甲	1415	30151	3	D	110		19(17)	121
05	0169	甲	2193	30101	3	D	110	$	19(17)	-
06	0169	甲	2416	36511	5	D	112	L	12(4)	-
07	0169	甲	2491	26907正	3	D[C]	110	L	19(1) [11(10)]	121,221,251
08	0169	甲	2601	27683	3	D	110	$	19(17)	-
09	0169	拾	06.14	28335	3	D	111		54(54)	-
10	0169	拾	07.09	30234	3	D	111		54(54)	221,231,232
11	0169	前	01.02.06	22644	2	D	120	L	1(1)	-
12	0169	前	02.28.08	37787	5	D	312		44(44)	-
13	0169	前	02.29.06	37671	5	D	312		44(44)	221
14	0169	前	02.30.06	38186	5	D	311[312]		0(0) [44(44)]	121
15	0169	前	02.35.02	37742	5	D	312		44(44)	-
16	0169	後	01.18.02	36530	5	D	312		44(44)	221
17	0169	後	02.06.07	26909	3	D	110	L	19(17)	121
18	0169	佚[?]	0071 [?]	?	-	D	111		54(--)	111
19	0169	佚	0901	28973	3	D	111		54(54)	-
20	0169	粹	0108	27050	3	D	112		12(8)	-
21	0169	粹	0831	30246	3	D	112		12(8)	-
22	0169	寧滬	01.99	29142	3	D	111		54(54)	211
23	0169	師友	01.132	27047	3	D	110		19(17)	211
24	0169	師友	02.236	36203	5	D	111[112]		54(0) [12(4)]	211,212
25	0169	珠	0115	37669	5	D	312		44(44)	-
26	0169	業二	02.37.09	38172	5	D	312		44(44)	-
27	0169	誠	0498	30100	3	D	110	$	19(17)	-
28	0169	明藏	0519	32381	4	D	110		19(1)	211
29	0169	京都	1950	30143	3	D	110		19(17)	-
30	0169	甲	1258	-	3	C	110		11(10)	121
31	0169	甲	2187	-	3	C	110		11(10)	-
32	0169	鐵[?]	048.02 [?]	?	-	C	111		1(--)	111

No	文編	著録	著録卷葉	合集番號	分期	偏旁	細分	補記	類例	問題
33	0169	京津	4810	27840	3	C	110	$	11(10)	121
34	0169	京津	4811	-	3	C	110	$	11(10)	-
35	0169	甲	1604	28491	3	C[CX]	110	X	11(10)	231
36	0169	粹	0712	28701	3	C	110	L	11(10)	311
37	0169	存	01.1944	28745	3	C	110		11(10)	-
38	0169	甲	1190	28881	3	B	110		7(7)	-
39	0169	甲	2409	30922	3	B	110		7(7)	-
40	0169	後	01.14.08	29234	3	B	111		3(3)	-
41	0169	粹	0101	27051	3	B	111		3(3)	-
42	0169	師友	01.170	-	-	B	111		3(--)	211
43	0169	粹	0728	30531	3	A	110	$	176(74)	-
44	0526	鐵	012.02	18813	1	A	110		176(77)	-
45	0526	鐵	074.03	24878	2	A	110		176(22)	221
46	0526	鐵	077.01	17681正	1	A	110		176(77)	-
47	0526	拾	08.11	19547	1	A	111[XXX]	G	135(19) [---(--)]	221
48	0526	前	01.40.05	23354	2	A	999		3(3)	231,232
49	0526	前	04.03.08	20837	1ZD	A[AX]	111	X	135(9)	121,231
50	0526	前	04.51.01	27866	3	A	110	##	176(74)	241
51	0526	前[?]	05.43.01[?]	?	-	A	110		176(--)	111
52	0526	後	01.26.06	34083	4	A	120[121]		48(43) [33(26)]	121
53	0526	後	01.31.01	07897	1	A	110		176(77)	-
54	0526	林	01.20.08	30566	3	A	110	$$	176(74)	-
55	0526	林	01.20.12	29718	3	A	210		4(3)	-
56	0526	林	01.16.22 [02.16.22]	27830	3	A	111[110]	#	135(98) [176(74)]	111,121
57	0526	綴	17.13	28539	3	A	110		176(74)	-
58	0526	綴	41.01	03813	1	A	111		135(19)	221
59	0526	甲	0381	32002	4	A	110		176(3)	-
60	0526	甲	0750	32141	4	A	120		48(43)	-
61	0526	甲	1361	30089	3	A	110	$	176(74)	-
62	0526	甲	2408	31883	3	A	110		176(74)	251
63	0526	甲	2596	30090	3	A	110		176(74)	-
64	0526	甲	2764	27382	3	A	110		176(74)	131
65	0526	粹	0080	32142	4	A	121		33(26)	-

No	文編	著録	著録卷葉	合集番號	分期	偏旁	細分	補記	類例	問題
66	0526	粹	0097	22617	2	A	110	$	176(22)	-
67	0526	粹	0174	32462	4	A[AX]	121	X$	33(26)	231
68	0526	粹	0511(甲)	23671	2	A	999		3(3)	241
69	0526	粹	0733	32499	4	A	121	L	33(26)	121
70	0526	佚	0048	30528	3	A	110		176(74)	241
71	0526	佚	0048	30528	3	A	110		176(74)	241
72	0526	佚	0164	-	-	-	---		---(--)	-
73	0526	佚	0391	26868	2	A	120	L	48(3)	-
74	0526	存	01.1739	30087	3	A	210		4(3)	-
75	0526	存	01.1741	33928	4	A	210		4(1)	-
76	0526	存	01.1745	33931	4	A	121		33(26)	-
77	0526	燕	0500	12733	1	A[AX]	110	X	176(77)	231,232
78	0526	燕	0504	30559	3	A[AX]	110	X	176(74)	231,232
79	0526	燕	0651	05250	1	A	110		176(77)	131
80	0526	寧滬	01.85	33930	4	A[AX]	121	X	33(26)	211,231
81	0526	明藏	0433	27153	3	A	110		176(74)	211,212
82	0526	明藏	0522	27076	3	A	121		33(5)	211
83	0526	師友	01.120 [01.121]	41593	-	A	120		48(--)	111,211
84	0526	掇二	291	-	1	A	111		135(19)	231,232
85	0526	河	0761	-	?	A	120	L	48(--)	-
86	0526	京津	4814	-	3	A	110		176(74)	-
87	0526	京都	0178	-	4	A	210		4(1)	-

0 表一を通覧して看取される問題

表一は、單純に『文編』の掲載順序に從っている。本稿の主題からはややずれるが、まずこの表を通覽して看取される問題點について記しておく。

0-1-1 文字發展の方向

『文編』は『說文』の見出し字に從って文字域を配列している。文字域「冓」に關しては、甲骨文字のD.T.[8]の結果に對應する『說文』の見出し字が偶々二種類存在した。このため文字域内小分類Dに對應する「遘」が巻二・0169に、同じくAに對應する「冓」が巻四・0526に獨立することとなった。『文編』編者は、D.T.に對應しない文字域内小分類B及びCをM.C.T.によって0169に集めて大文字域を形成させると共に、0169と0526が本來同一の文字域であることを明示するべく、0169内に第四の文字域内小分類として前記Aの字例一例を掲げている。その結果、文字域「冓」を構成する文字域内小分類はD→Aの順に配列されることとなった。これは「冓」字の字形變遷の方向とは反對の序列である。[9] 一方、例えば0033（「王」字）のように字形變遷の方向に沿った形で配列している文字域もある。『文編』における文字域内小分類の配列から、文字發展の方向を看取することは不可能である。

0-2-1 字例配列の方針

「細分」欄内の無秩序な配列からは、「偏旁」を超えるレベルでの字形把握に基づく字例提示の序列化という意識は見出せない。また、著録に對して「刊行年順」或いは「資料價値」といった何らかの序列化を行い、それに沿って字例を配列している様子も認められない。文字域内小分類内における字例の配列には、一定の方針を見出すことができない。[10]

0-3-1 時期の別・王朝卜辭／非王朝卜辭の別

『文編』にこの二つの概念が欠落していることは、拙稿①以降繰り返し指摘して來たが、このことは表一・「分期」欄内の無秩序な配列からも一見して明らかである。

1 『文編』編集作業上の問題

1-1-1 出典表記

『文編』の文字域「冓」に收載された計八七例中、『文編』と著録の間に齟齬があるケースが五例（[18]・[32]・[52]・[56]・[83]）存在した。

このうち[32]と[51]は、『文編』の前身である『舊文編』にも同一出典かつ極めてよく似た模寫で收載されている。また、[56]は『舊文編』では02・16・22・と、然るべき出典での表記がなされている。一方、兩者の模寫は極めてよく似ており、かつ1-2-1に記すように、どちらも拓本から看取される字形とは異なっている。

これに限らず、『舊文編』と『文編』の間には編集過程での密接な關係を示すケースが散見する。例えば『文編』0865及び2262においては、『文編』本來の略稱では『鐵』と記されるべき所に、同書の『舊文編』における略稱である『藏』が記されている。『文編』と著録との齟齬を考えるに當たっては、『舊文編』との關わりも視野に入れておく必要があろう。

1-2-1 摹本

著録の拓と『文編』の摹本との間に、模寫の巧拙というレベルを超えた差異が認められるケースが、一二例（[01]・[07]・[14]・[17]・[24]・[30]・[33]・[49]・[52]・[54]・[56]・[69]）存在する。[12]

[01]・[14]・[24]・[52]・[54]・[56]の六例には、「細分」レベルでの字形判斷を狂わせる程のズレが存在する。いずれも、拓本ではははっきりと認められる「横線」を見落としたことに起因しており、[24]については著録編者の、[13] その他の四例については『文編』編者の意識の一端が窺えよう。[14]

また、字形判斷こそ辛うじて狂わなかったものの、[49]にもかなり大きなズレが認められる。『文編』の文字域「冓」に收められた唯一の族卜辭であるが、前述したように、もとより『文編』の體裁には王朝卜辭／族卜辭の別は意識されていない。注目すべきは1-1-1において指摘した『舊文編』との關係である。兩者の模寫は極めてよく似ており、かつ拓本から看取される字形とは大きく異なっている。

1-3-1 天地

摹本の天地が逆轉してしまったケースが、二例（[64]・[79]）存在する。模寫自體は正確になされており、かつ共に同一甲骨片上に複數の文字が刻されていることから、摹本作成時に天地を誤ったとは考えにくい。恐らく『文編』收載時に生じたミスであろう。

2 『文編』編集方針に關する問題

2-1-1 摹本著録からの採字

編集凡例の第一項には、「本編收字、以實物照像及拓本覆印爲主、至摹本中有罕見之字、亦酌爲收録。」とある。摹本からの採字は、他に例が乏しいケースでの特殊例外的存在ということになるが、『文編』の文字域「冓」には摹本からの採字が九例含まれ、その比率は一割に達している。

資料番號と表一の類例總數を、字形ごとに列記する。

A一一〇型	[81]	一〇六例	A一二〇型	[83]	四六例
A一一一型	[80][82]	一三三例	B一一一型	[42]	三例
D一一〇型	[23][28]	一九例	D一一一型	[22][24]	五四例

『文編』と『合集』とでは採字の母集團が完全には一致しておらず、[15] 單純な比較はできない。しかし、このズレを勘案してもなお「罕見之字」とするに足るのはB一一一型のみ、若しくはせいぜいD一一〇型を加えるに止まろう。從って、摹本著録にも拘わらず採字する必然性があるのは僅か3例に過ぎない。必然性が認められない他の六例の中でも、「冓」字の最も典型的な字形たるA一一〇型の例である[81]、並びに『文編』が採字對象としている『續』の01・04・04に同一片の鮮明な拓が示されている[24]は、とりわけ不適切な採字と言わねばならない。

2-1-2 著録編纂時の齟齬

『文編』編者による摹本著録からの模寫が正確であっても、そもそも摹本著録編纂時の模寫に問題があり、『合集』の拓との間に齟齬を生じているケースも見受けられる。

[24]は、著録及び『文編』ではD一一一型に模寫されているが、『續』及び『合集』の拓には二本の横線が鮮明に認められ、「細分」欄の判斷にズレが生じてしまっている。

字形レベルでの齟齬は生じないものの、書體を考える上では資料たり得ないケースも多い。前記2-1-1に示した一〇例の中では、[81]がその最たるものである。

なお[80]には、著録及び『文編』の摹本と『合集』の拓との間で、「冓」字の欠損狀況に差異が認められる。即ち、前二者は「冓」部分はほぼ完全でその直下にエッジが迫っていのに對し、後者では「冓」部分の下半がエッジにかかって欠失している。甲骨片の大きさ及び輪郭から見て、著録への收載後に當該甲骨片の一部が失われ『合集』の拓と差異を生じたケースであり、著録編纂時の模寫には問題が無かったと思われる。

2-2-1 不鮮明な拓からの採字

編集凡例の第二項には、「所收各字、均依原文摹録。凡印本漫滅無法臨摹的字、皆不入録、以免謬誤。」とある。これによれば、採字對象となる字例は「謬誤」の恐れのない筆畫鮮明なものになるはずである。

「原文」の狀態は版本によって、さらに嚴密には個々の本によって異なるものである。從って、『文編』編者と筆者とでは目にした「原文」の狀態に微妙な差異があるに違いない。本稿では、そのような差異を勘案してもなお「原文不鮮明」と斷じうる程に狀態の惡いケースのみを抽出した。當該字例は計七例である。

2-1-1同様、資料番號と表一の類例總數を、字形ごとに列記する。

A一一〇型	[45]	一〇六例	A一一一型	[47][58]	一三三例
D一一〇型	[07]	一九例	D一一一型	[10]	五四例
D一一二型	[13][16]	四四例			

このうち[07]は、類例の少ないD一一〇型の中でも特殊な存在である。習字骨からの採字の是非はひとまず措き、特殊なるが故に不鮮明でも採字したということであれば、その限りにおいては妥當な判斷であろう。但し筆者には「止」部分は認められず、『文編』編者とは偏旁の判斷を異にしている。

他の六例は、類例の數で上位に位置する字形ばかりである。

[47]の拓は『拾』・『合集』共に極めて不鮮明であり、拓からは「細分」欄の判斷を下すことができなかった。A一一一型は字例數第二位であり、このような「原文」から採字する必然性は認められない。或いは出典表記の方に問題があり、『文編』編者が採字對象とした字例は別字であったのかも知れない。

[45]は、『鐵』の拓と『合集』の拓とで極端に印象が異なり、かつどちらも大變不鮮明なものである。拙稿④は『合集』の拓に基づいており、辛うじて「冓」字A一一〇型との判斷を下したが、『鐵』の拓は別字とも見なしうる狀態である。A一一〇型の字例數は「冓」字中最多であり、當該資料からの採字の必然性は認められない。或いは[47]同樣、出典表記に問題があるのかも知れない。

前記七例の中で、不鮮明な拓にも拘わらず採字する必然性が認められるのは、[07]一例のみ、それも「習字骨の扱いは要検討」という保留條件付きでのことである。

2-3-1 殘字からの採字

本稿では、字形の一部を欠く或いは欠く可能性がある字例を[16]「殘字」と稱する。[17] 當該字例は一〇例含まれ、その比率は一割を超える。2-1-1同様、資料番號と表一の類例總數を、字形ごとに列記する。

A一一〇型	[77][78]	一〇六例	A一一一型	[49][84]	一三三例
A一一一型	[67][80]	一三三例	A九九九型	[48]	三例
C一一〇型	[35]	二例	D一一一型	[10]	五四例
D一一二型	[03]	三例			

このうち[48]は、類例が極めて少ないA九九九型の中で最も字形が明確な例であり、欠損部分もごく僅かである。字形の一部を欠くとはいえ、採字は妥當と判斷される。同様に[03]も、D一一二型の類例が少ないという狀況下ではやむを得ぬ採字と見ることもできよう。

一方、C一一〇型は類例が少ないものの[35]は別の字形の可能性があり、妥當な採字とは言い難い。その他の七例は類例も多く、當該資料からの採字に必然性はない。中でも[49]・[67]・[77]・[78]・[80]の五例は、別の字形である可能性もはらんでおり、とりわけ不適切な採字と言えよう。

前記一〇例の中で、殘字にも拘わらず採字する必然性が認められるのは、僅か二例に止まる。

2-3-2 殘字に對する補筆

前述の殘字のうち、字形の一部を確實に欠いているものは六例である。殘字の收載に當たって欠損部分を補筆するか否か、『文編』には一貫した方針が認められない。[18] 文字域「冓」に關しては、[03]・[10]・[48]・[84]においては補筆され、[77]・[78]においては補筆されていない。補筆の有無に關する情報が提示されていないため、[77]・[78]は「筆畫が完全な、特殊な字形」との誤解を與えかねない。

2-4-1 同版からの複數例採字

編集凡例の第三項には、「凡一字而同版數見的、除字體特異者外、餘均版録一字、不再標注每版所見的數。」とある。『文編』の文字域「冓」における同一版からの複數例採字としては、[70]と[71]のペアが唯一の存在である。編集凡例に從えば[70]・[71]は「字體」が特異なものということになるが、兩者間に大きな差異は認められず、かつ共にA一一〇型という最も類例の多い字形である。判斷對象を

書體レベルまで擴大しても、該字について同版上から複數例採字する必然性は認められない。

一方、[50]は一例しか採字されていないが、同版上に該字は二例存在している。兩者は、筆者の分析では「⺕」と「⺕⺕」で區別され、かつA一一〇型の中にあって特殊な書體と認識されている。⑲[68]もまた同版上に該字が二例存在しており、極めて特殊な字形である。⑳編集凡例の第三項に從うならば、これらのケースこそ複數例採字に相應しいと思われる。

2-5-1　習刻の扱い

[07]・[62]は習字骨であり、資料としての性格を異にする。習字骨を採字對象に加えること自體が検討を要する問題であるが、最低限習字骨からの採字である旨を明記する必要があろう。

3　文字域設定に關する問題

3-1-1　文字域内小分類の設定

[36]は、C型（「冓十彳」）に「手」を加えた特殊な字形である。著録の拓は鮮明であり、殘字の可能性も無い。「冓十彳」部分の字形だけに注目すれば「冓字・C型」と見て何等問題はなく、用法も「其冓雨」という習見のものである。一方、[36]と同一の字形は『合集』第一巻～第一二巻を通じて皆無である。

『文編』はこれを正確に模寫し、文字域内小分類Cに列している。筆者もまた躊躇しつつ「C一一〇L」即ち「C一一〇型で、字形に亂れが目立つもの」と位置付けてきた。㉑しかしながら全く別の構成要素「手」を含む以上、孤例とはいえ嚴密には独立の文字域内小分類を立てるべきケースであろう。㉒

以上、「冓」字を例に『文編』の採字方法に検討を加えてきた。本稿における検討は一文字域に限定したものではあるが、『文編』が掲げる採字方針と実際の採字との間に多々齟齬が生じていることを具體的に示すことができたと考える。「新・甲骨文字字形表」を構想する上での教訓としたい。

註

(1) 以下、主な文獻は略號で記す。このうち、甲骨著録については『文編』に準據する。その他の文獻については、本稿末尾の「本稿所引文獻略號表」を參照されたい。

(2) 拙稿①。

(3) 編集凡例の第四項に關わる問題については拙稿②一二三頁以下において、セリエーションに關わる問題については拙稿⑤六頁以下において、既に述べている。併せて參照されたい。

(4) 『文編』と著録の間の齟齬に對する筆者の姿勢に關しては、拙稿②・注四。

(5) 拙稿⑤、六頁。

(6) 「完形」の定義については、拙稿④、注六。

(7) 拙稿⑤、表一。

(8) D.T.並びにM.C.T.に關しては、拙稿①二一四頁並びに注一四。

(9) 拙稿⑤、グラフ一。

(10) 先に拙稿③において、『文編』の大文字域の全てについて現状を整理したが、そのあり方に疑問を抱くケースが多々存在した。文字域の設定及び提示にまつわる諸問題に關しては、後日改めて詳述したい。

(11) 同、注一〇。

(12) この一二例中、著録の拓と『合集』の拓を比較可能な一一例においては、兩者の間に字形認識を異にさせるほどの差異は見出せなかった。

(13) [24]については、2-1-1に記す。

(14) 拙稿⑤一〇頁及び注二〇。なお、「偏旁」レベルでの判斷にズレを生じた[07]については、2-5-1に記す。

(15) 拙稿⑤、注一八。

(16) 拙稿④、一～二頁、同一四頁。

(17) 定義の比較によって明らかなように、ここに示す「殘」と注六における「完形」とは、單純に「集合－補集合」をなす概念ではない。

(18) 拙稿①、二二一頁～二二二頁。

(19) 拙稿⑤、六頁。

(20) 同、注一九。

(21) 拙稿④、二頁、及び表一。

(22) 同、注一〇。

＜本稿所引文獻略號表＞

『舊文編』：孫海波『甲骨文編』哈佛燕京學社、一九三四年。

『文　編』：中國社會科學院考古研究所『甲骨文編』中華書局、一九六五年。

『合　集』：郭沫若『甲骨文合集』中華書局、一九七八－一九八二年。

「拙稿①」：「甲骨文字における〝文字域〟の設定－『甲骨文編』の検討を通じて－」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』創刊號、一九九七年。

「拙稿②」：「『甲骨文編』札記」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第二號、一九九七年。

「拙稿③」：「『甲骨文編』における大文字域の現状」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第三號、一九九八年。

「拙稿④」：「甲骨文『冓』字諸字形の分析」『茨城大學人文學部紀要　コミュニケーション學科論集』第四號、一九九八年。

「拙稿⑤」：「甲骨文字におけるセリエーション把握」『論集　中國古代の文字と文化』編集委員會『論集　中國古代の文字と文化』汲古書院、一九九九年。

（すずき　あつし／本学人文学部講師）

（原載《茨城大學五浦美術文化研究所紀要》第五號，一九九九年）

《甲骨文合集》的反顾与《甲骨文合集补编》的编纂

彭邦炯　　马季凡

提要：《甲骨文合集》出版以后，深受国内外学者重视和好评，被誉为甲骨学史上“继往开来的里程碑式著作”。但它同时也存在着漏收、重复、选片不当、漏缀、误缀、吸收前人成果不够等问题。已经完成和即将出版的《甲骨文合集补编》针对这些问题做了必要的增补、整理、正误工作，并配有《合集》所无的《释文》、《材料来源表》等附录和索引。这对下一世纪的甲骨学、考古学和历史学发展将起到积极的推动作用。

一、《甲骨文合集》的编纂与评价

甲骨文发现后四年，即1903年（清光绪29年），刘鹗将他所收藏的1 000余片甲骨墨拓石印成书。于是，第一部甲骨文字著录书《铁云藏龟》问世。从此，作为一种重要的学术研究资料，开始公开流传，使广大学者能够据以进行研究和探讨。甲骨学作为一门新的学科的时代，也从此开始了。从那以后，随着这门新学科的出现和研究的发展需要，甲骨文资料的收集刊布受到广泛重视，甲骨文字著录书刊相继问世。到本世纪70年代末，海内外出版的甲骨文字著录书刊已达百余种，刊布甲骨材料达8万多片（包括拓本、摹本和照片），除去其中的伪品、重片，估计也有7万片左右，约占这一时期全部出土甲骨的70%左右。另外30%左右的甲骨仍然分散于海内外公私藏家之手，未能刊布出来供学界研究利用。已经刊布的甲骨资料，也因当时印量少又极为分散，收集起来也十分困难。这样，不仅给甲骨学这门学科本身的发展，也对古文字学、历史学、考古学等的深入发展与研究，带来很多不便和困难。

1956年，国家制订12年科学远景规划，整理编纂甲骨文资料的计划被列为重点大项。1959年，一部正式名为《甲骨文合集》（以下简称《合集》），由当时的中国科学院院长郭沫若亲自任主编、甲骨商史专家胡厚宣教授任总编辑的大型学术性资料编纂工作正式开始。当时的中国科学院历史研究所（今属中国社会科学院）先秦史研究室的一批年轻学者，在胡厚宣先生的亲自率领和指导下，先后于1959年至1960年、1963年和1965年、1973年至1974年，多次分赴全国25个省市自治区的30多个城市寻访；从100余个单位和私家那里收求墨拓甲骨资料①，为《合集》的编辑出版做了大量工作。

可以说，整个《合集》工作，是在“特殊的年代里，旷日持久，屡作屡辍，花了近20年时间”②才完成的。前后直接参加工作的人员达20多人，有同志戏称参与其事为入了“地狱”。通过他们的艰苦努力和辛勤劳动，终于在1978年至1982年间，使这一浩大的工程得以完成，全书图版13巨册，由中华书局出版面世。

《合集》是按郭沫若的要求，“尽可能集中丰富的资料，经过科学地整理和编纂”的“一部比较完整的学术性资料的汇编”③。它的完成，不仅对我国古代社会的政治、军事、经济、文化、科学和艺术等诸方面的深入研究，起到了重大的推动作用，也是中国学者对世界文化事业的发展做出的一项杰出贡献，丰富了人类文化的宝库。该书出版后，深受海内外学者的重视和好评，被学术界广泛誉为甲骨学史上“继往开来”的“里程碑式的著作”，“不仅为国家赢得了荣誉，也为甲骨学这一世界性学科的研究进一步发展奠定了基础”④。也正因为如此，该书曾获得多项国家和院部级大奖⑤，肯定了它的价值和贡献。

但是，这并不是说《合集》是十全十美的。我们认为，在整个编纂工作和出版方面，就存在某些憾事和应引为教训的地方。比如，全书13巨册图版于1982年出毕以后，它的《释文》、《材料来源表》及有关《索引》久久没有出版，至今已拖了17年。由于这部分工作没有及时跟上，致使编纂者难以发现图版中的某些问题和错误。当然也无法通过作《释文》及相关附表予以纠正和弥补。这就给海内外学者查检利用此书带来了不便。为此，海内外学人反应特别强烈，大家翘首以盼，希望早日见到这套大型学术资料汇编的相关部分⑥。另外，对于已出版的13巨册图版本身，也有国内外学者撰文评点⑦，指出了某些缺点和错误。作为前《合集》编纂的参加者和新的《甲骨文

---

① 参见胡厚宣《甲骨文合集・序言》。

② 参见尹达《甲骨文合集・前言》。

③ 参见尹达《甲骨文合集・前言》。

④ 王宇信：《甲骨学通论》，中国社会科学出版社1989年版，第285页；赵诚：《〈甲骨文合集〉评介》，《光明日报》1983年1月31日。

⑤ 参见《北京晚报》1983年2月19日；《人民日报》1987年10月10日。

⑥ 据了解《甲骨文合集》的《释文》、《来源表》等年内将出版。

⑦ 海内外的主要评论文章有：严一萍《评〈甲骨文合集〉》三篇，分别见于台北出版的《中国文字》1980年新一、二、三期；白玉峥《简论〈甲骨文合集〉》，刊《中国文字》新14期；晁福林《评〈甲骨文合集〉》，刊《中国史研究》1985年第2期。其他论著中零星提及者从略。

合集补编》（以下简称《补编》）的编纂工作人员，我们应冷静地听取各方面的意见，认真进行自查和反思，从过去的编纂工作和出版中吸取有益的经验教训，为尽力编好《甲骨文合集》的《补编》提供借鉴。

二、《合集》的自检与不足

出于编纂《甲骨文合集补编》的需要，我们认真总结了《合集》编辑工作的经验教训，查找了《合集》中存在的主要问题。我们认为：除了前所论及的编纂工作中留下的憾事——只出版了图版而缺《释文》、《来源表》等外，就图版本身而言，主要存在着以下几个方面需要注意和弥补的问题。

1. 漏收与选片中的问题

根据原《合集》的选片标准去衡量全书所收的甲骨，可以说是基本相符的。但也有一些该收而未收、不该收而收录的。该收未收主要指漏收，即已选定要用，因工作过程中的疏漏或别的原因被漏掉了。查《合集》原始选片记录，不少漏收都是已选中而上版时漏掉的。如《乙》3299、3300（前为正，后为反）、4504、4810、8818 等，都是完整或残缺不多的大龟甲。它们上面不仅刻有多条重要完整卜辞，而且有的还做了与他片缀合的工作①。其他如《龟》2.2.81、《甲释》22、《京》4706、4707 等；特别是有名的《宰丰骨》和类似的《邺》初下 4.78、4.79 各片，《佚》532 的大骨以及从未著录过的“伐舌方”的一片大胛骨的正、反、臼都漏掉了。

《合集》收录了不少正反面有字的甲骨，是很有意义的工作。但也有录其一面，而将同骨有字的另一面漏掉了的情况。仅以《甲》、《乙》两书为例，至少有 30 多片有正而无反。如《合集》3825，只收录《乙》3774，它的反面 3775 虽有重要刻辞亦未收。

甲骨的传拓著录过程中，不只有重复，而且同一甲骨多次转卖更换藏家，时间一久不免有破损，于是出现同一甲骨先刊布时比较完好，后来则可能破裂为数块（片），或残缺了某部分的情况。这样再传拓刊出的，自然不如先期的完好。另外，过去有的传拓者只注重文字，或为省事不拓全骨，只拓有字部分；也有的著录书编者在刊印时把无字的部分剪去，如此等等。对于上述各种情况，《合集》编者除了校出重片外，更应选取同一甲骨最完整清晰的拓本。事实上，原编者已在这方面做了大量工作，但也存在一些疏忽欠精当之处。例如《合集》35485、35709 就没有采用《文捃》的 489、1512 两片最完整清晰的同骨拓片。《合集》5369、6993 分别录用了《龟》1.2.3 和 1.4.5 两

---

① 如收入《补编》6925 的《乙》4810 可与《北图》5251、5257 相缀、惜缀好待收的原片已丢失。本文下面所举或未举及的，我们基本上都补入了《补编》，读者在《补编释文》和《资料来源表》中可见其详情，为省篇幅，文中只举其重要例证说明之。

片被剪去了无字部分的拓片，而我们从《合集》选过的拓本中找到了完整清晰的原骨拓片。《合集》3705 选用了《诚斋》396 与 440 两片不完整的缀合片，而且没收反面；经查过去选用过的《历藏》拓本中，不仅有完整拓片，而且反面有字也没有选用。类似选片不精当之处，经我们初步查对出的，至少有百余片①。

2. 缀合的问题

甲骨缀合，前人已经做了不少工作，编为专书的有《甲骨缀存》、《甲骨缀合编》、《殷墟文字缀合》、《殷墟文字丙编》、《甲骨缀合新编》等，都是对甲骨学和殷商史资料的重大贡献。《合集》编者“在前人工作的基础上，在这一方面，也作了相当多的细致的工作，总计拼合（即缀合）近两千版。单《甲》、《乙》、《丙》就拼合了上千版”②。这确实是一项了不起的成绩，但也存在一些漏缀、误缀和吸收前人缀合成果不够等问题。

《合集》出版后，海内外学者发表了不少缀合成果，其中大都与《合集》有关③。从各家先后缀合的成果看，由于相互信息不通，各自闭门造车，因而有些是互相重复的，也有一些是可以商榷的，但成果却十分可观。

甲骨缀合看似容易实际难。缀者必须非常熟悉甲骨，方能把失散于数万片中的“兄弟姊妹”找到一块团聚；特别是分散较远和尚未收入《合集》的就更难了。所以，原《合集》里还有上千片可缀而未缀的并不足怪。但是，“兄弟姊妹”毗邻或相距不远的，则不应忽略。如《合集》5234 与 5243（相隔 8 片）、5732 与 5734（相隔 1 片）、6384 与 6387（相隔 2 片）、6459 与 6465（相隔 5 片）、6518 与 6519（紧邻）、15415 与 15420（相隔 4 片）、24233 与 24236（相隔 2 片）、24272 与 24275（相隔 2 片）、25572 与 25575（相隔 2 片）、25724 与 257269（相隔 1 片）、26274 与 26277、26286 与 26289（两组都只隔 2 片），等等。这些应该说是可以避免的。

至于误缀或缀合欠妥的也有一些。如原《合集》505、3438、22259、22277、23732、34336、36255 等，我们认为是不能缀合的。《合集》10300 则是将背甲与腹甲当成了一骨之折加以缀合了。《合集》7604、9610、22261、29555、32160、33107 等，则是不能密合而使密合为一版的。《合集》27620 将原曾毅公的误缀收录了。《合集》33198、33838 两版，严一萍等学者有过订正④，而《合集》也未纠正。《合集》33006 原为《粹编》所缀，前人已指出其中之不当，而《合集》未予纠正就原样收录了。《合集》1580、1668、3171、8219、17159 等，则是放错了部位的缀合。《合集》33430 由三片缀合而成，上、中两片可以缀合，下部一片则不能与之相缀。

---

① 参见《合集补编资料来源索引总表》。

② 胡厚宣：《甲骨文合集·序言》。

③ 我们共收集到缀合成果总计约 800 多版，缀合《合集》中1 700余片。参见《合集补编缀合表》。

④ 见严一萍的《甲骨学》和《甲骨缀合新编》，白玉峥的《略论甲骨缀合》。

《合集》中还有他人早有缀合而不收，仍用其未缀之各片的情况。最明显者是《安明》中的一部分甲骨，《安明释文》后附的一些缀合片不用，而把书中未缀合的各片分别加以收录。类似情况还可举出若干，这里就从略了①。

3. 去重与分期的问题

甲骨著录书所收材料彼此重见和自重是比较常见的。《合集》的编者已做了大量的对重去重工作，成绩有目共睹。但也还有再减免重片的可能，特别像下面这些自相重复的各片，更是可以减少或避免的。如原《合集》11334 与 11335 重，两片紧邻；36632 与 36635 重，相隔两片；37767 与 37770 重，相隔两片；26664 与 26669 重，相隔四片；17778 与 17785 重，相隔六片；31356 与 31365 重，相隔八片，等等。这些相距不过数片的自重，我们以为当是比较容易发现的②。

至于分期的问题，甲骨学界本来就有分歧。《合集》采用五期分法③，我们以此去衡量原《合集》，也存在着问题。这方面最明显的表现就是把同期之骨分在了不同时期，而且造成自重。如原《合集》3257 与 23548，前在一期，后在二期，两片自重；3260 与 32554，前在一期，后在二期，两片自重；18495 与 31140，前在一期，后在三期，两片自重；21475 与 31886，前放自组，后放三期，两片自重；22421 与 41475 前放午组，后放四期，两片自重；31197 与 35313，前分入三期，后分入四期，两片自重，等等。《合集》还有可缀合的两片，由于分期之误而被分开了。如《合集》16048 与 23281 就是这种情况④。我们对《甲骨文合集》进行一些清理，除了从中总结经验教训，以编好《甲骨文合集补编》，实现前辈学者的遗愿外，作为原《合集》编纂工作参加者，也当有责任对海内外学者的批评有个交待，以享学人。

---

① 如《安明释文》附 1 号，为《安明》133、237、340 三片之缀合，《合集》不收此成果，而分别收录编为《合集》5733、15388、13563 分放三处。又如《合集》13841 与 29416、28240 与 32612 四片，郭若愚在《殷契粹编缀合例的勘误及补充》一文中已经有缀合也未用。再如《合集》7223，《甲释》有较完整的缀合片，而且附有它的反面，也没有采用，而用了未缀合的原片，等等。

② 《合集》中还有三片相重的，如《合集》22638、24873、40929，22715、26486、40937，最后一片为摹本。这种拓本与摹本相重的情况，《合集》中还有，如《合集》20478（拓）与 40839（摹）、3290（拓）与 41534（摹）等，类似相互自重问题大约有 500 多片。

③ 《合集》采用的分期为五期：一、武丁期，二、祖庚、祖甲期，三、廪辛、康丁期，四、武乙、文丁期，五、帝乙、帝辛期。另外把所谓“非王卜辞”的自、子、午三组附于武丁期之后。

④ 《合集》16048 与 23281 两片为一骨之折被分别入了一期和二期。类似情况还可举出一些，如《合集》2100 应属二期，入了一期；8681、8988 两片，从字体看与自组 20489、20184 完全一致，应放入同期自组；39577 放摹本一期，从辞例看，它和四期有关卜辞十分一致，可见当入四期，等等，不赘举。

三、《甲骨文合集补编》的提出和上马

《甲骨文合集补编》（以下简称《补编》）编纂工作是郭沫若为主编、胡厚宣任总编辑的《甲骨文合集》工作的继续，是继《合集》之后的又一令海内外学人高度关注的大型学术资料整理汇编工程。早在《合集》编成后，当时的历史研究所所长尹达先生就说过：“甲骨文散见于国内外，不可能一次收集齐全，况且还会陆续发现新资料”，“书出之后，还可以根据新获资料编出《续编》”①。

据学者们的估计，《合集》出版前的 80 年间，大约出土甲骨 11 万多片，已刊出约 8 万片左右。若除去重复著录片和伪片，估计实际刊出在 7 万片左右。因为《合集》并非有骨必录，见片就收，而是按一定标准选用的，所以，最后编入《合集》的只有 41956 片；除去自重和可以缀合合并的，也就 4 万片左右。约当 80 年间著录过的半数多，还有相当数量的著录片没有收进《合集》。无怪乎《合集》出版后，国内外一些学者反应“漏收”了许多重要资料。这其中确实有因工作过程中的问题而遗漏的，我们在前面已经论及，但更多的是按当时定下的标准和当时客观条件所限② 而未能收录入《合集》。

在漏收甲骨中，有不少重要资料，是研究古文字和古史不可多得的第一手资料，有的非常珍贵；特别是历史所在编《合集》过程中，陆续从海内外公私藏家处收集的大批甲骨实物、拓片和尚未刊布过的珍贵拓本。由于“特殊年代”“屡作屡辍”，以及频繁地转移搬迁等原因，还有相当一部分材料束之高阁，尚未来得及选编入《合集》。这部分材料，在《补编》中，统称为《历拓》和《历藏》③。

《合集》编成和出版以后，近 20 年来，国内外又有上万片的甲骨资料和许多缀合成果陆续发表。这批材料是一般研究者很难见到和收集起来的。所有这些未收入《合集》的甲骨资料，学术研究价值都很高，非常珍贵，很需要收集起来，加以整理研究，去重辨伪，汇编成《甲骨文合集》的“续编”，把前辈学者的设想与愿望变成现实，也为后来的研究者留下一些方便，以利于这门学科的发展。

1993 年，以胡厚宣先生为主任的中国社会科学院甲骨文与殷商史研究中心成立后，就把编纂《甲骨文合集补编》（曾叫《续编》或《补遗》）作为自己的一项主要科研任务。不幸的是，胡先生因病去世，这一计划被搁置了起来。1995 年，中国社会科学院历史研究所准备纪念甲骨文发现 100 周年，提出了“甲骨学百年”的课题，并被列为社科“九五”规划重点项目。该项目的一个重要组成部分就是编纂《甲骨文合集

---

① 参见尹达《甲骨文合集·前言》。

② 改革开放前，我国与海外交流有限，一些资料难以收集。

③ 《历拓》主要是我所收藏的实物拓片和一部分从全国各地拓回的拓片，《历藏》主要是编《合集》时收集的未公开发表的拓本。

补编》，以增收《合集》未收入的新见材料，并弥补《合集》工作中的某些缺憾。于是才又重新将此项目提出来，并决定由时任先秦史室研究员、甲骨商史研究中心副主任的彭邦炯主持这一工作。同时商派先秦史助理研究员马季凡同志协助工作，成立了《甲骨文合集补编》编纂工作组。

1996年初，我与马季凡两人开始了先期工作。一面收集近20年来海内外学者的有关研究动态和成果，一面着手清理因反复搬迁后堆放在本所的有关资料，并提出初步编纂方案和工作计划。同时约请原《合集》组的退休专家谢济副研究员参加编辑工作。同年4、5月间，经过有关专家对课题进行可行性论证后，报请中国社会科学院科研局，正式成为社科“九五”规划重点项目“甲骨学一百年”的一个重要研究课题，并得到社会科学研究基金4万元赞助，使这项计划得以启动和进行。

根据初期的设想，《补编》除尽可能把《合集》未收录的重要资料加以收录外，还要将《合集》编成后近20年来海内外的有关材料尽可能收录进去。同时注意尽量不与原《合集》片重和排除《补编》自重。原估计《补编》可收录7 000片左右。在工作过程中，由于又从所内外发现了大量的资料，特别是编《合集》时期收集而未来得及整理选用的拓本和甲骨拓片，于是，又对原计划和设想作了调整。决定从实际出发，对已著录过的材料，除了补收原《合集》漏掉的重要资料外，主要收录分散于海内外难以见到的著录书刊上的材料和从未刊登过的材料。现在提供给读者的这部《甲骨文合集补编》，除了近些年国内相继出版的《小屯南地甲骨》、《英国所藏甲骨集》与《甲骨续存补编》三部著录书没有纳入外，基本上囊括了近20年来海内外陆续著录的甲骨资料和缀合成果，以及80年代前原《合集》选剩下的所有著录书刊上的重要资料。以上材料，经我们反复查对，去重、辨伪与缀合以后，最终编入《补编》的为13 450片，比初期的计划增加了一倍左右。

《补编》的编纂思想和体例仍同于《合集》，名为“合集”，实际上还是一个大“选集”。尤其是并没有收录前面举及的《屯南》、《英藏》和《续补》。对于小批量和零散甲骨，也不是见片就收。其中无字和内容一般而常见、残缺过甚又著录过的，一般都不再选用。我们的考虑是：前三部大书资料比较集中，相继出版后，国内外发行面也较广，很容易得到，无需再收录翻印。至于其他已发表过的残片和无字者，研究价值不大，又占篇幅，只好割爱。在我们看来，以后的研究者，除将来新出土的甲骨外，只要有了《甲骨文合集》、《甲骨文合集补编》，加上《小屯南地甲骨》、《英国所藏甲骨集》和《甲骨续存补编》五部书，资料也就基本齐备了。毫无疑问，这将给以后的有关研究者，节省许多收集甲骨资料的时间和精力。

四、《补编》的主要工作

《补编》是针对《合集》工作的不足与缺憾而作，主要做了下列几个方面的工作。

第一，增补了《合集》拟选用而遗漏了的重要资料。如《殷墟文字乙编》中被漏的重要甲骨4504、4810、8818等片，都是完整或比较完整的大龟，刻辞内容十分丰富，我们分别收为《补编》的6822、6925和6829；《佚》518正反，《邺》初下47.8正反、47.9正反，这里有名贵的《宰丰骨》和类似的大花骨，内容不仅有商王田猎的较完整的记录，而且有时王的年月日可考。这次补收后分别编为《补编》11299正反、11300正反和11301正反一些补收的重要资料还可以举出很多，兹从略①。

第二，整理和抢救了在编《合集》过程中从海内外收集来的一批尚未来得及整理的甲骨资料。它们被长期束之高阁，有的已霉变虫蛀，照片已经发黄。读者从即将与图版同出的《合集补编资料来源索引总表》中可以见到，其中大约近半数，都是从这批材料中精心甄选出来的②。而这些又是从未著录过的很有研究价值的宝贵资料。

第三，完善了《合集》中一些原本有正、反、臼，或原本完整的甲骨拓片而缺其一部分的材料。比如，原《合集》的3705号，原只用了《诚斋》396加440的正面，刻辞不清晰。我们在《历藏》中查找出了原骨的正、反面拓片，并将《合集》的这片也换成拓片，收为《补编》的1639正反。《乙》7655片，原《合集》已选用，但它的反面《乙》7656却没有收录，上面还有“若下乙”三字；我们这次补收了反面，并与正面配放在一起，编为《补编》4579正反。原《合集》5420、23157，用了残缺不全的翻印拓片；我们分别换用《文捃》1239和1302完整的拓片，编为《补编》6314和7003号。这种情况不下数十片。

第四，原《合集》收录的拓印本，有的被缩小了，或用了字迹不清的，或是用的照片和摹本。我们尽可能地寻出较理想的拓片予以更换。如原《合集》中的13949片，是用的缩小的照片。我们从《历拓》材料中找到了它的原骨拓片，还有反面③，这次一并编为《补编》的4031正反。原《合集》15859片，既非原大拓本，又字迹模糊，我们从《历拓》材料中找到了从开封博物馆拓回的字迹清晰的原拓予以更换后，编为《补编》4483号。原《合集》的3145、26765都是非原大的照片，我们分别找到了《怀》990和1268予以更换，编为《补编》的6390和7047。再如《补编》的10958，在《合集》41704为摹本，我们用《甲》297和《英藏》2503的缀合（即《甲释》16）片予以更换了，等等。类似情况读者将在《补编释文》按语及《来源表》的“备注栏”中见到，此不赘举。

第五，《补编》吸收海内外学者的研究成果，对原《合集》中的1 500多片进行了缀

---

① 以下各项，为省篇幅只略举一二例证以明之。详细情况请参见《合集补编》的《资料来源表》和相关《释文》按语。

② 《合集补编资料来源索引总表》中的《历拓》、《历藏》便是其中的主要部分。

③ 此片是编《合集》时收集到的，拓片边上注明有“原骨藏山东大学”字样。

合，共收录缀合成果近700版①。同时，还纠正了一些误缀与错缀。如《补编》所收4476甲、乙两片的遥缀，原《合集》16048号当做了“正、反”。这种缀合与纠误的工作，使原来残缺的甲骨更为完善、正确，刻辞的意义也更为明白，内容更为充实丰富。

第六，50年代以来，安阳殷墟以外的一些考古遗址中，相继发现了一些零星有字甲骨。特别是1977年，更在陕西岐山周原的西周早期遗址发现了一批有字甲骨，很有意义和价值。为方便有关学者的研究，《补编》特将王宇信、杨升南根据不同摹本整理编辑的《殷墟以外遗址出土甲骨》316片作为附录纳入其中②。这些材料，比起上万片殷墟甲骨来说，数量可谓微不足道。但它打破了从前讲甲骨只讲殷墟甲骨的旧观念，拓宽了甲骨研究的范围。使《甲骨文合集补编》更完备充实，方便了广大研究者。

第七，原《合集》出版后，因为《释文》、《材料来源表》等配套工作没能及时出版，影响了有关资料的检索利用与研究工作。我们这次同时将《补编》的《释文》、《来源表》、《缀合表》等索引和附录一并推出。同时，通过《释文》、《来源表》等工作，还可以弥补《补编》图版中的不足与错误。

现在，整个《补编》终于完成，并将由中国语文出版社以8开6巨册奉现给读者。它与原来的《合集》互为表里，相得益彰，构成了不可分割的姊妹篇。它是对1899年甲骨文发现以来百年间的出土甲骨资料进行全面、系统和科学整理的又一个成果。“可以说为甲骨的搜集汇合工作画了一个圆满的句号”，“有了《甲骨文合集》与《甲骨文合集补编》，甲骨学的研究已具备非常良好的材料条件”③。这对下一世纪的甲骨学、考古学、历史学的进一步发展必将起到积极的推动作用。

最后需要说明的是：《补编》虽然是在借鉴了《合集》的编纂经验教训，分析和检讨了《合集》的长处与不足的基础上编成的，但预想与最终效果往往不见得完全一致。虽然我们主观上都尽力克服困难，努力做好每个环节的工作，然而由于工作中的考虑不周和疏漏，《补编》中仍会存在某些缺点和错误，希望得到海内外学者的批评指正。

〔作者彭邦炯，1938年生，研究员；马季凡，1960年生，助理研究员。中国社会科学院历史研究所〕

---

① 详见《合集补编缀合表》。

② 国家重点科研项目《夏商周断代工程》已有专人将西周甲骨重新整理放大照相，照片大都十分清晰，胜过以往任何摹本，并将正式出版照片与摹本的对照本。

③ 李学勤：《甲骨文合集补编·序言》。

（原載《歷史研究》1999年第5期）

讀《關於中島玉振舊藏甲骨》

政大中文系博士生 魏慈德

《關於中島玉振舊藏甲骨》（註一）一書，荒木日呂子女士著，平成八年（一九九六）日本東京都創榮出版社出版。內容主要在介紹中島玉振氏所收藏的至今未被著錄的甲骨片。

全書計七〇頁，銅版紙印刷，分爲「經緯」、「內容」、「甲骨片の性格」、「釋文」、「圖版」五大部分。第一部分「經緯」：介紹甲骨文出土的概況及中島氏所藏甲骨的來源與流傳。第二部分「內容」：介紹《殷契遺珠》所收甲骨中可以再作綴合的甲骨片及綴合的方式。第三部分「甲骨片の性格」是將中島氏所藏的甲骨加以分期後，與日本其它甲骨收藏家所藏的甲骨比較，指出中島所藏當是一九二〇年代的盜掘品。第四部分爲釋文，作者先將《殷契遺珠》所未收的甲骨隸定，次而將所綴合的甲骨及認定是僞加刻的甲骨刻辭加以隸定。文末更附了B21及B26兩組甲骨的考釋（詳下文）。最後一部分爲圖版，每一片著錄的甲骨都包括拓片、照片和摹本。

關於中島玉振氏所藏的甲骨，最早提及的是郭沫若在《卜辭通纂》〈別二〉「日本所藏甲骨擇尤」中「中島氏所藏甲骨」下所說到的一段話（註二）：

> 中島蠔山翁日本有數之漢學家也。精於小學，一日往訪，出示所藏甲骨凡二百片，云先年購置於北平。展示，乃知曩所據山內孝卿氏拓本，其原骨具在此中，爰選其八影存之，以示拓本之有據也。

而關於中島氏甲骨的來源，本書的作者荒木女士則提出了可能是透過當時東京文求堂書店老闆田中慶太郎之手而購得的說法（註三）。

而這兩百片甲骨，有一部分後來被著錄在金祖同所編的《殷契遺珠》中，於民國二十八年出版。書中「中島蠔叟氏藏」部分，編號七〇七至八三三號甲骨，就是當初中島氏所藏的甲骨。而如何取得中島氏的拓片，金祖同在《殷契遺珠》的〈發凡〉中說到：

> 中島蠔叟氏，日本漢學家也。邃于小學，著有《書契淵源》，于文字孳乳之例，多發前人所未發，予以田中氏之介，得拓其所藏甲骨凡一二七片，自第七〇七片至八三三片。

這裏所說的田中氏，當也是指田中慶太郎而言。而早先郭沫若說的二百片甲骨，金祖同只拓了一二七片，其餘沒有拓到的甲骨，荒木女士就在《關於中島玉振舊藏甲骨》一書中作了詳細的介紹。不僅如此，荒木女士又把她在整理原屬中島氏的甲骨時，發現可以綴合的甲骨也在本書中發表，所以復原及著錄中島氏所藏甲骨的原貌可以說

是本書的價值之一。

中島氏的甲骨，後來歸到了山崎忠氏手上，這一段經過荒木女士在此書中描述的很清楚，她說：

> 現在中島玉振所藏的甲骨片歸山崎忠氏所有，山崎忠氏的父親山崎溪琴氏是書法家，爲西川春洞氏的高足。山崎溪琴氏從慶應義塾理財學部畢業後，曾到中國去游學。昭和初年期間，從宮島八大學習漢字。一九三三年（昭和八年）五月，謙慎書道會成立，擔任審查顧問，任教於慶應義塾，並主持慶應惜字會（書道）。文字學的造詣也很深，和文字學者中島氏有很深厚的交情。據其子山崎忠氏表示，其父溪琴氏曾在工作上幫助過中島氏。這裏所說的工作可能是指《書契淵源》的編纂工作。一九四〇年六月中島氏去世，享年八十歲。在這之前不久，山崎忠氏曾伴隨其父至中島家訪問，那時中島氏把他所藏的甲骨，當作禮物送給父親溪琴氏，當時還是中學生的山崎忠氏，用包袱布把甲骨很小心的包好並且帶回家。從此之後，中島氏所藏的甲骨在山崎家中被保存下來，溪琴氏在一九四五年十二月去世，享年六十三歲。（筆者譯）

在《關於中島玉振舊藏甲骨》的後記中，荒木女士也說到了她從一九八九年的春天起，利用每週五的下午和週六的時間通車到山崎家拍照作拓片和綴合的經過。而在當時荒木女士看到的甲骨計有二二九片，郭沫若曾在《卜辭通纂》中說到中島氏的甲骨凡二百片，這其中的差異，荒木女士推論是在太平洋戰爭時搬動而造成的破損（註四），而這二二九片中，《殷契遺珠》收了一二七片，但《殷契遺珠》所收的七一六、七三二片的甲骨未能見到。

二二九片的甲骨，經過綴合後得一六八片。這二二九片如果和《殷契遺珠》所收的甲骨作比較，則《殷契遺珠》所未收的有一〇四片。荒木女士把中島氏所有的甲骨分成三大類，一類是有字甲骨，一類是無字甲骨，另一類是僞刻甲骨。二二九片中有字甲骨計有一七四片，無字甲骨有四十八片，僞刻甲骨有七片，在有字的一七四片甲骨中，《殷契遺珠》收了一二五片，這一二五片中有三片後來斷裂了，所以《殷契遺珠》未收的實有四十六片。二二九片的甲骨經過綴合後剩下一六八片，這其中的綴合方式又有下列幾種：

一、珠與珠的綴合

荒木女士利用實物綴合了已經著錄於《殷契遺珠》的七九〇和八一四號，以及《殷契遺珠》（以下簡稱《遺珠》）的七八〇和七七六號，前者依《關於中島玉振舊藏甲骨》（以下簡稱《中島》）一書定爲B二九號，後者定爲B三四號。珠七九〇即是《卜辭通纂》〈別二〉Ⅶ的第二片，此片合集未收，L二九綴合後出現「日廿」二字，辭例爲「庚子卜，亘貞：勿曰之令麑（兔？）。不若」（圖一）。B三四的綴合中，珠七八〇即合七五八三，綴合後全辭爲「☒叀王往伐舌方☒，☒王气令阜☒」（圖2）此辭的同文例可見合七五八三「☒王往伐☒，王气令☒」所以依「王」字上的殘字筆劃，當可再補一「叀」（惟）字，原書將後辭誤釋作「土三令」。

二、珠十珠十無字甲骨

這一部分的綴合是荒木女士利用未曾著錄的無字甲骨再加上已著錄於《遺珠》的甲骨互相綴合而成，這種綴合又可以分爲二類，一是即使不加綴無字甲骨，仍然能將分離的《遺珠》甲骨片綴合者，類似上舉一類的情形；另一種則是若不加綴無字甲骨，分離的《遺珠》甲骨片就只能遙綴者。前一類的綴合有B三〇，後一類的綴合有B四二。B三〇爲珠七二六加珠八〇七加未著錄的無字甲Y七九、Y二〇二（圖三）；B四二爲珠八二七加珠八二九加未著錄的無字甲Y二二八（圖四）。

三、珠十無字甲骨

這一類的綴合是荒木女士利用未著錄的無字甲加上《遺珠》中的甲骨拼綴成，這一類綴合的貢獻較小，通常要利用實物才能綴合。計有B三三、B三八、B三九、B四〇、B四一、B四五、B四九、B五〇、B五一，共九組。其中B三八即珠七五七，此片在《遺珠》中僅只拓正片，《中島》則補上了反面，多出一條卜辭，爲「叀王不□」，與正面的卜辭對貞（圖五）。又從拓片上看不出序數「二」，但從照片上就可以很清楚的看出。B五一組的綴合，持井康孝也曾綴過，其乃將珠七三八與《續存》上二五八六（合三六八六六）、《明續》三一七〇（合三六八四七）進行綴合，收錄於《甲骨綴合新編》中（註五）（圖六），今可以再補上荒木女士所綴（圖七）。

四、珠十珠未收有字甲骨

這一類的綴合是將《遺珠》所未收的有字甲骨和《遺珠》所收的甲骨片作綴合，計有B三一、S三二、B三五、B三七、B四三、S四七、S四八、B五二，共八組。B三一組綴合後多了「二告」及序數「一」（圖八），S三二組綴合後補全了「望」字（圖九），B三五綴合後出現「其⿱业牛」兩字（圖一〇），B三七組綴合後多了「一九」字（圖一一），B四三組綴合後多了「二告」及序數「二」和「三」（圖一二），S四七組綴合後多了「叙」字（圖一三），S四八組綴合後多了「牢」「牛」「其又一」，全辭爲「□牢又一牛。其牢又一牛。其□又一□」及序數「二」（圖一四）。B五二組綴合後多了「一」字（圖一五）。

五、珠十珠未收有字甲骨十無字甲骨

這一類的綴合即是前第三項和四項的合併，中島女士共綴合了兩組，分別爲B四四和B四六組，B四四組爲珠八一九加上Y一四七加上Y二一五加上Y二〇〇，B四六組爲珠七一四加上Y七八加上Y九四加上Y二〇四加上Y二〇九，其中B四四組綴合後僅多出一個序數「三」字，貢獻不大（圖一六），而B四六組的綴合則是更正了原《遺珠》七一四上的綴合，珠七一四在金祖同見到中島氏的甲骨時就已分離爲兩片，所以此片在《中島》中的號碼被定爲Y一和Y四兩個號碼，但早期將較小的一片骨片綴於較大一片的下方，而到《中島》時已被移置於左下方（圖一七），今合集三三七三二仍沿用《遺珠》的錯誤綴合。其次，有字甲骨的綴合則多出了「貞亡尤」一辭。

六、珠十珠十未收有字甲骨十無字甲骨

這一類的綴合也可以說是第一項和第五項的合併，此類綴合僅有一組，即B三六組，這一組爲珠七九五綴上珠七七五加上Y六八再加上Y七五和Y八一，其中珠七七五和珠七九五若無透過Y六八、Y七五、Y八一的綴合，就只能遙綴，綴合後多出了「貞入」兩字，使得珠七九五的「勿」字可以連上讀而成「貞勿入」（圖一八）。

而在《遺珠》未收有字甲骨中，值得注意的有以下幾片：

B一：「乙亥卜扶夕侯咎方𡆥告」，《中島》將此釋爲「乙亥卜，扶肉侯蔡方骨告」。扶爲師組卜人，師組卜辭前辭常作「干支卜」或「干支卜某」，此辭即是一例子，而「D」字當釋爲「夕」。扶卜辭中月、夕二字時常同形，如合二〇一一五「丁亥卜，扶D士二D」。又以夕爲時間詞，放在句前的辭例有合一九七九八「庚戌卜，扶夕侑盤庚伐卯牛」，而肉字常作「D」、「D」，二者有二筆和三筆寫成的不同。「尗」即「求」，在此讀爲「咎」。「𡆥告」即是「繇告」，即由卜兆得知的意思（圖一九）。

B二a「𡍮于北」（圖二〇），「𡍮」這種祭祀常行於四方，如合七二一一正「𢦏于西南帝介卯。勿𢦏西南」、「貞于南。勿𢦏于南。貞𢦏于西北。勿𢦏于西北。𢦏于東。勿𢦏于東」（合一四三九五正）。

S六a「庚辰我貞：于𠦝」（圖二一）。「我」貞人爲子組卜辭貞人，其辭較少見。

S九a「𠦝」（圖二二），《中島》釋作「箕」。此字《類纂》作「基」，爲方國名，通常作「基方」，爲𣪕組和內組卜辭中常見的方國名。

B一一「旬」（圖二三），《中島》釋作「旬」。此字不確定是否爲「旬」，因僅此一字，又「旬」通常作「旬」，亦見作「旬」者（謝八三），此字卻將上一短劃刻成二斜筆。

B二六a「己巳卜貞，王□往來亡□。□□曰吉，在六□」。其中的往來兩字寫法較特殊作「𡳿來」，爲黃組卜辭（圖二四）。荒木女士以周原甲骨的往字作「𡳿」（H31:3）與此字的結構近似來作比較。

其次，書中S七a的照片放置顛倒。

而在甲骨分期方面，荒木女士曾將中島氏的一六八片甲骨分爲第一期九六片，第二期二三片，第四期二片，第五期三十片。若我們只依據貞人和事類兩項斷代標準來分的話，可以將有貞人、事類的五十六片大致分爲：師組貞人卜辭（扶）一片，子組貞人卜辭（我）一片，賓組貞人卜辭（𣪕、賓、爭、韋、㗊、永）及有基方、舌方、𢓊及兆辭「不𢆶黽」的卜辭三十五片，出組貞人卜辭（旅、行、卜、中）一〇片，及「田」作「𤰔」及有「往來無災」的黃組卜辭九片（註六）。荒木女士曾根據松丸道雄先生《論日本收藏的殷墟出土甲骨》（註七）一文所言，河井、田中、三井氏所藏的甲骨以第一、二、五期者居多，推測中島氏的甲骨和以上諸家所收的甲骨都是同一地區出土，爲一九二〇年代賣到日本來的盜掘品，因此，各家的甲骨可能可以互相綴合，這種推論是很有道理的（註八）。

最後，我們來看一下荒木女士所認爲的僞刻甲骨和追加刻甲骨。荒木女士在〈內容〉中統計「追加刻甲骨」有四片，「僞刻甲骨」有七片，僞刻甲骨荒木女士並沒有列出，而只列出四片追加刻甲骨，分別是S五三（圖二五）、B五四（圖二六）、B五五（圖二七）、B五六（圖二八）。S五三辭中除「勿隹王卿」外，皆是僞刻，其同文例可見合五二四一。B五四除「貞勿𡕥于岳」外，皆是僞刻，同文例見合一〇〇七九，B五五、B五六除兆辭二告、三告外餘皆爲僞刻。

綜上所言本書的價值可以歸結爲以下三點：

㈠著錄未曾著錄的甲骨

在此書中荒木女士把中島氏所藏未經錄的甲骨加以發表，使研究者有機會見到中島氏藏的所有甲骨，以補當初郭沫若之憾和金祖同的不足，且有些甲骨片著錄在《遺珠》時僅有正面，《中島》一書則補足反面，如珠七五七，《遺珠》只拓了正面，而背面尚有字，《遺珠》卻未拓出，今則可從《中島》的B二八b又得出「叀王不☒」一條卜辭。而在《遺珠》中作者完全不拓無字的反面甲，如此對於研究甲骨鑽鑿的學者使有遺珠之憾，而在此書中荒木女士對於無字的背甲也給予著錄，如此便有助於學者們的研究，如本書中的B二九b、B三一b、B三五b、B三七b、B四二b、B四四b、B四六b、B四九b、B五二b，都是《遺珠》所未拓的背甲。這其中B四六的無字背甲值得我們注意，荒木女士在B四六組中更正了原來《遺珠》上的綴合，這個綴合是否正確從正面看不太出來，若我們從反面來看，可以發現鑽鑿的痕跡相連，故可以斷定荒木的綴合是正確的（圖二九），這不得不令我們更加的重視反面背甲的著錄。而未經著錄的甲骨如B一一扶卜辭，B一一的「旬」，B二六的黃卜辭都是值得注意的。

㈡影本、拓本、摹本三位一體的著錄方式

影本、拓本和摹本並出，是著錄甲骨最佳的方式，因爲影本受限於甲骨表面的弧度和取光的角度不同有時不能將甲骨上的每一個字拍很清楚，這時拓本便優於影本，但是有些太細太淺的刻痕拓本又拓不出，這時摹本便可補其不足，但是對於字上是否有塗朱的痕跡，便只能根據影本，所以三位一體的著錄方式才是最佳的著錄方式。如本書中若無影本，有些背甲的鑽鑿形態便不容易看清楚，如B四六的綴合，影本背甲的鑿痕顯然提供了有利的證據，其次，B四六組中透過影本我們還看到了拓本拓不出的序數「二」，而在荒木女士認爲追加刻辭的S五三影本中，我們更看到了原刻和追加刻文字深淺的不同，這些都是本書體例上優於其它甲骨著錄書籍的地方。

㈢甲骨綴合的貢獻

荒木女士在本書中共綴合了廿四組甲骨，對於重建中島氏甲骨的原貌可以說居功厥偉，尤其B四六組的綴合，不僅更正了《遺珠》上的誤綴，也等於更正了將《遺珠》

照錄的《合集》的錯誤。而其對《遺珠》與《遺珠》甲骨片的綴合，貢獻亦大。其次，如B二九、B三〇、B三四、B四六都是很值得注意的綴合。在此，將《中島》、《遺珠》的對照表及《遺珠》「中島蠔叟氏藏」可綴合者與《合集》的對照表附誌於後。

1.《中島》與《遺珠》的對照表

《中島》	《遺珠》	備註
B29	珠 790+ 珠 814	珠+珠
B30	珠 726+ 珠 807+Y79+Y202	珠+珠+無字甲
B31	珠 779+Y135	珠+未收有字甲
B32	珠 797+Y142	珠+未收有字甲
B33	珠 778+Y198	珠+無字甲
B34	珠 780+ 珠 776	珠+珠
B35	珠 795+Y76	珠+未收有字甲
B36	珠 795+ 珠 775+Y68+Y75+Y81	珠+珠+未收有字甲+無字甲
B37	珠 800+Y58	珠+未收有字甲
B38	珠 757+Y56+Y6	珠+無字甲
B39	珠 741+Y199	珠+無字甲
B40	珠 781+Y195+Y74+Y85+Y196	珠+無字甲
B41	珠 767+Y225	珠+無字甲
B42	珠 872+ 珠 829+Y228	珠+珠+無字甲
B43	珠 722+Y72+Y70	珠+未收有字甲
B44	珠 819+Y147+Y215+Y200	珠+未收有字甲+無字甲
B45	珠 825+Y51	珠+無字甲
B46	珠 714+Y78+Y94+Y204+Y209	珠+未收有字甲+無字甲
B47	珠 712+Y137	珠+未收有字甲
B48	珠 731+Y140	珠+未收有字甲
B49	珠 744+Y205+Y84	珠+無字甲
B50	珠 747+Y113	珠+無字甲
B51	珠 738+Y114	珠+無字甲
B52	珠 749+Y92	珠+未收有字甲

2.《遺珠》「中島蠔叟氏藏」可綴合者與《合集》的對照表

《遺珠》	《合集》	綴合者	《中島》	與之綴合片
珠 707	6156 正（部分）	嚴一萍		鄴初 28.3、佚 379（6156 正部分）（《甲骨綴合新編》536 組）
珠 712		荒木	S47	
珠 714	23732	荒木	B46	33117
珠 722 正背	15960 正反	荒木	B43	
珠 726	8932	荒木	B30	珠 807
珠 731		荒木	S48	
珠 737	5105	蔡哲茂		珠 301(3604)
珠 738	36887	荒木、持井	B51	36847、36866（《甲骨綴合新編》598 組
珠 741		荒木	B39	
珠 744	39158	荒木	B49	
珠 747		荒木	B50	
珠 749		荒木	B52	
珠 757	5070	荒木	B38	
珠 759	10780	荒木	B35	
珠 766		蔡哲茂		12125
珠 767		荒木	B41	
珠 775	4269	荒木	B36	
珠 776		荒木	B34	
珠 778		荒木	B33	
珠 779		荒木	B31	
珠 780	7583	荒木	B34	
珠 781	7277	荒木	B40	
珠 790		荒木	B29	
珠 795		荒木	B36	
珠 797		荒木	S32	
珠 800	3846	荒木	B37	
珠 807	18046	荒木	B30	
珠 814		荒木	B29	
珠 819	17752	荒木	B44	
珠 825	17770	荒木	B45	
珠 827		荒木	B42	
珠 829		荒木	B42	

註釋

註一：《關於中島玉振舊藏甲骨》一書原名爲《中島玉振舊藏の甲骨片について》。

註二：郭沫若《卜辭通纂》—付日本所見甲骨錄（伊藤道治），京都朋友書店，一九七七年七月，頁五七八。

註三：田中慶太郎氏爲當時東京文求堂書店老闆，曾幫助郭沫若印《卜辭通纂》一書，且中島氏的《書契淵源》一書亦爲文求堂出版，加上林泰輔、河井荃廬、三井源右衛門氏的甲骨均是透過田中氏之手而購入，所以作者荒木女士作這樣的推測。又在蔡哲茂先生〈日本後藤朝太氏藏的甲骨文字〉中也說到了東京本鄉文求堂曾在中國購得了百枚甲骨，後帶到日本販賣，《龜甲獸骨文字》的作者林泰輔博士，便曾向文求堂買了十枚甲骨一事。《大陸雜誌》七八卷一期。

註四：關於中島氏的甲骨有破碎的問題，早在郭沫若參觀中島氏的甲骨時就已經看到，郭沫若在〈別二〉的考釋中講到「四、五兩片（即珠七〇七、珠七三三），原骨已破碎，均經膠合者也」。

註五：見嚴一萍《甲骨綴合新編》第五九八組。

註六：扶卜辭見B一，我卜辭見S六，𠂤卜辭見珠七四四、珠七八七、珠八〇八、珠八〇九、珠八一三、珠八一六，賓卜辭見珠七三二、珠七四〇、珠七五八，爭卜辭見珠七三三、珠七九〇、珠八一一、B三，韋卜辭見珠七八一、珠八〇〇，咼卜辭見珠七二二，永卜辭見珠七三九，基方卜辭見B九，舌方卜辭見珠七〇七、珠七七六，祉𠂤卜辭見珠七七九，不𡚱的卜辭見珠七六六、珠七九三、珠八一八、珠八一九、珠八二〇、珠八二一、珠八二三、珠八二四、珠八二五、珠八二六、B一三、B一六、B一七、B一八。旅卜辭見珠七五〇、B一九，行卜辭見珠七一四、珠七八六、B二三卜卜辭見珠七二五、珠七五四，中卜辭見珠七二六、珠七四一、珠七八八。「旬亡𡆥」的卜辭見珠七四三、珠七四四、珠七四五、珠七四六、珠七四七、珠七四九、珠七五一、珠七五二，往來亡災的卜辭見B二六。

註七：松丸道雄先生〈日本蒐儲の殷墟出土甲骨について〉《東洋文化研究所紀要》第八六冊，第四頁一九八一年。

註八：我們從珠三〇一（河井荃廬藏）可以和珠七三七（中島玉振藏）綴合，就可知此推論不誤，又從珠七六六可以和林 1.2.11（合一二四二五）綴合，知中島氏的甲骨還可以和林泰輔氏所藏的甲骨綴合。其綴合見蔡哲茂先生〈甲骨新綴合三十三片及其考釋〉第二八組。《中國學研究》第十輯，韓國淑明女子大學校創校九十周年紀念—國際甲骨學學術研討會論文集—一九九六年八月。

圖 1

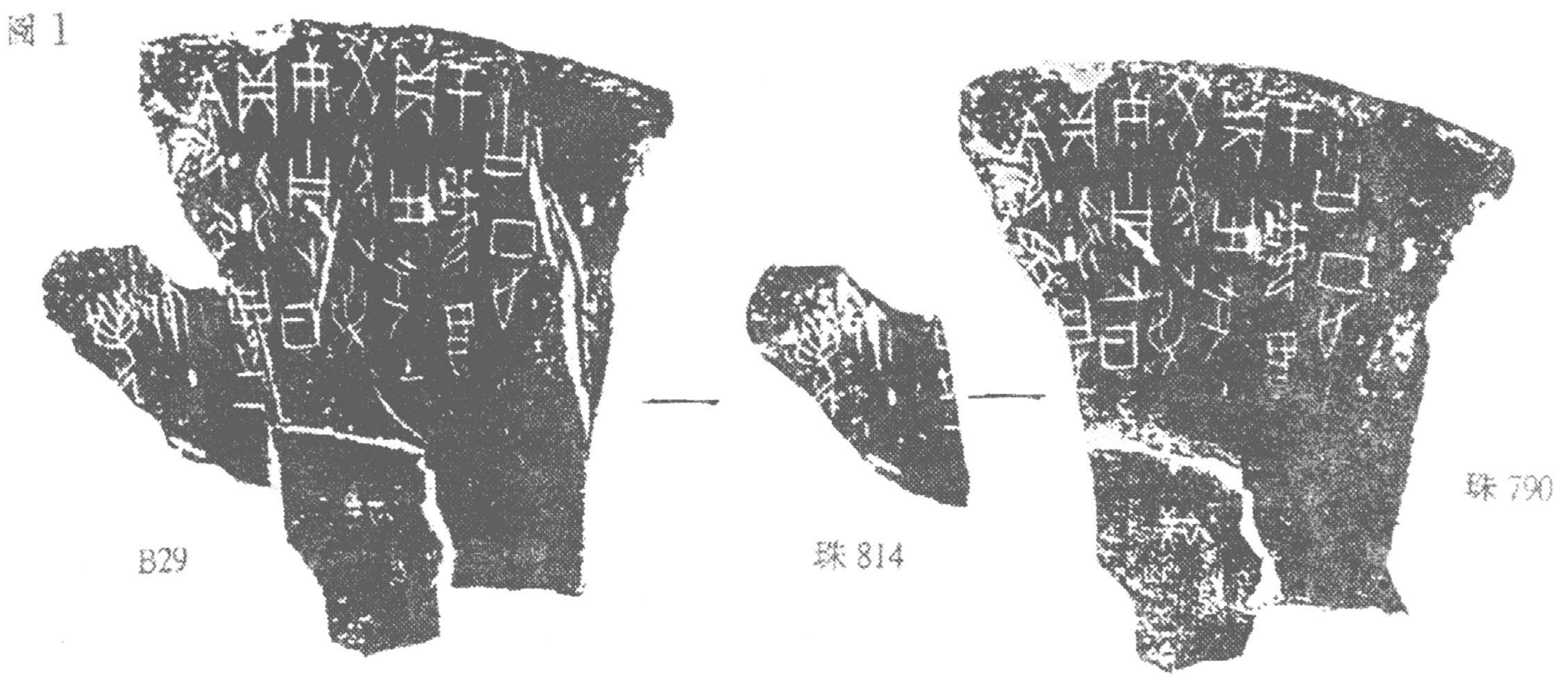


圖 2

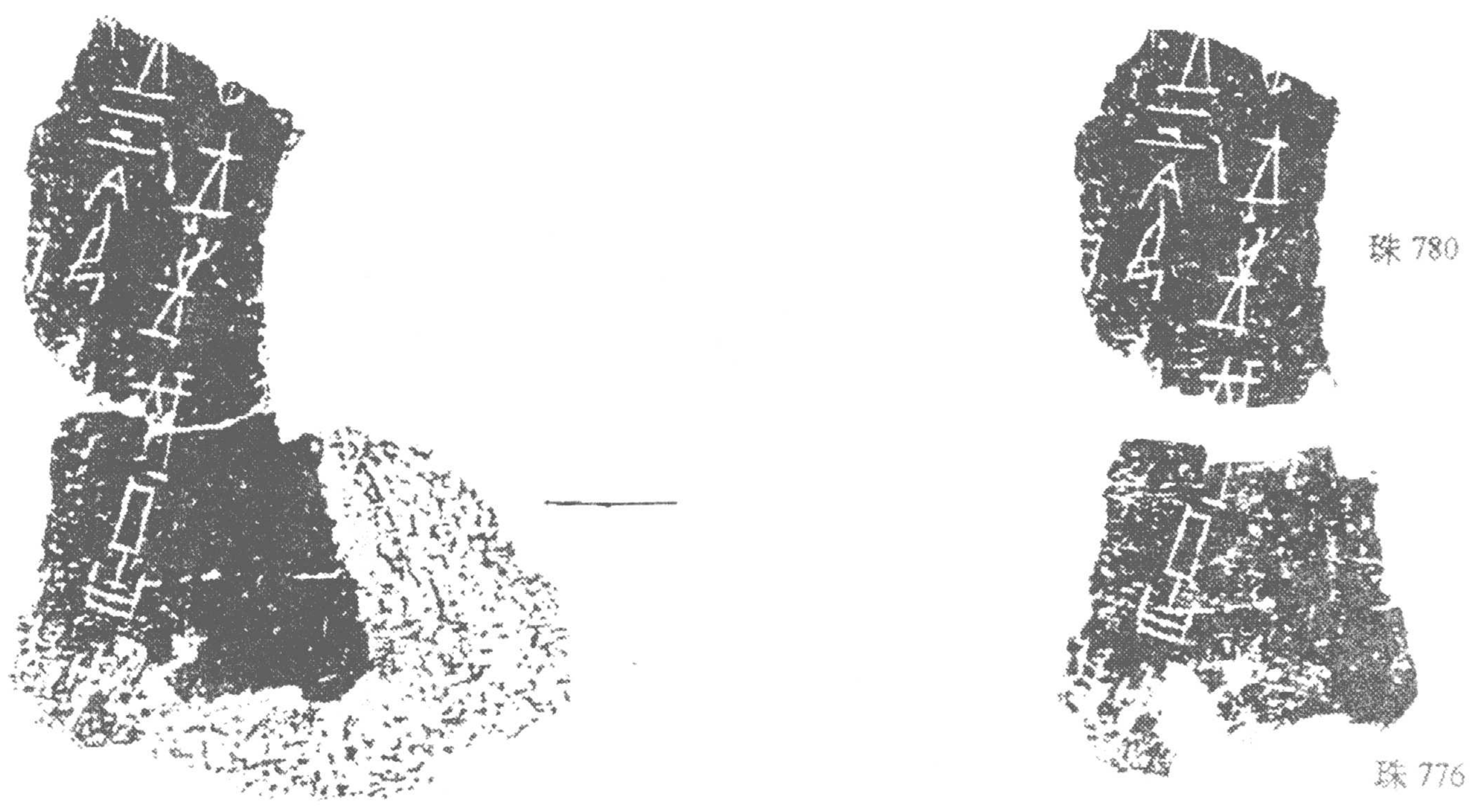


圖 4

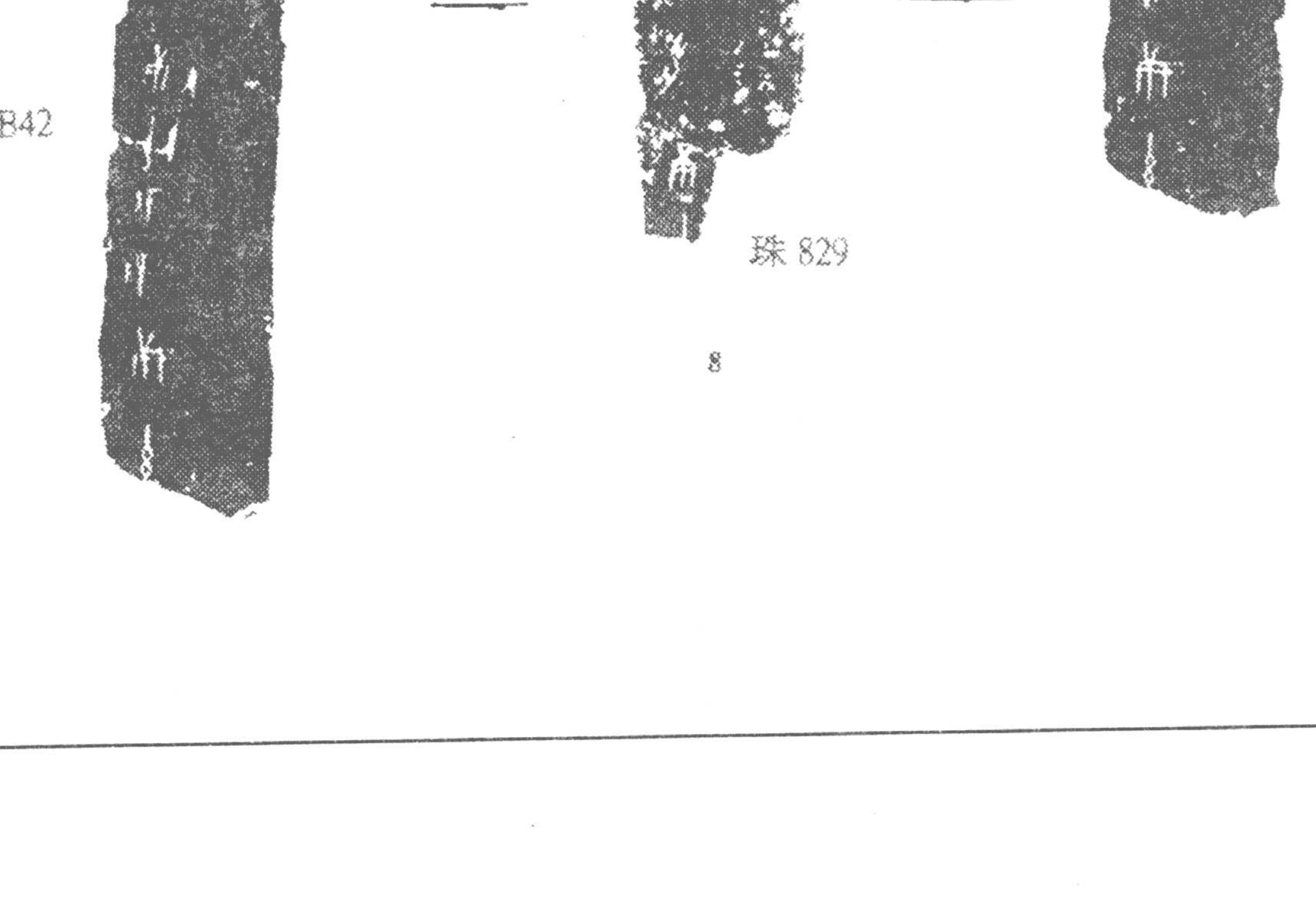


圖 3

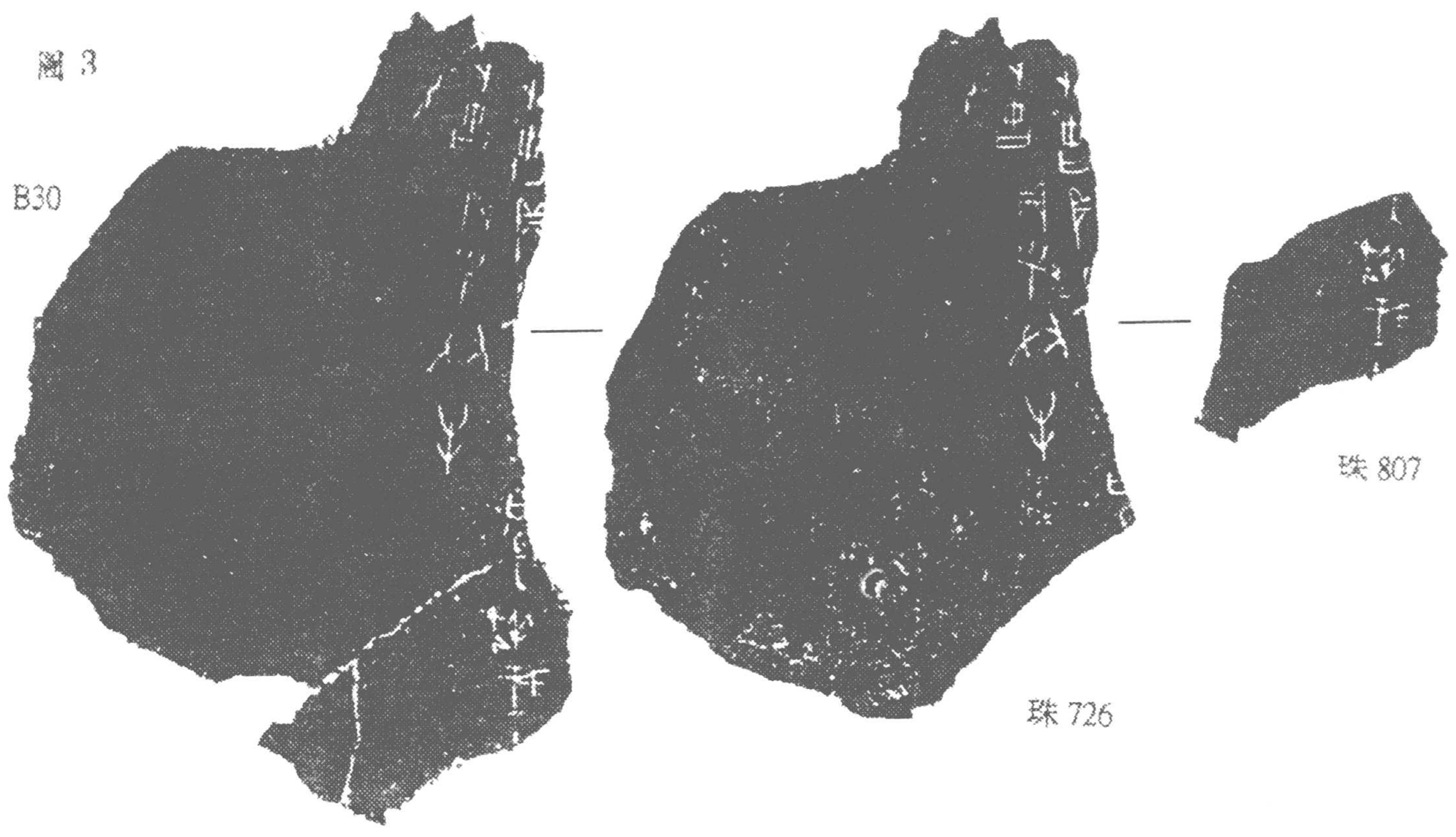


圖 8

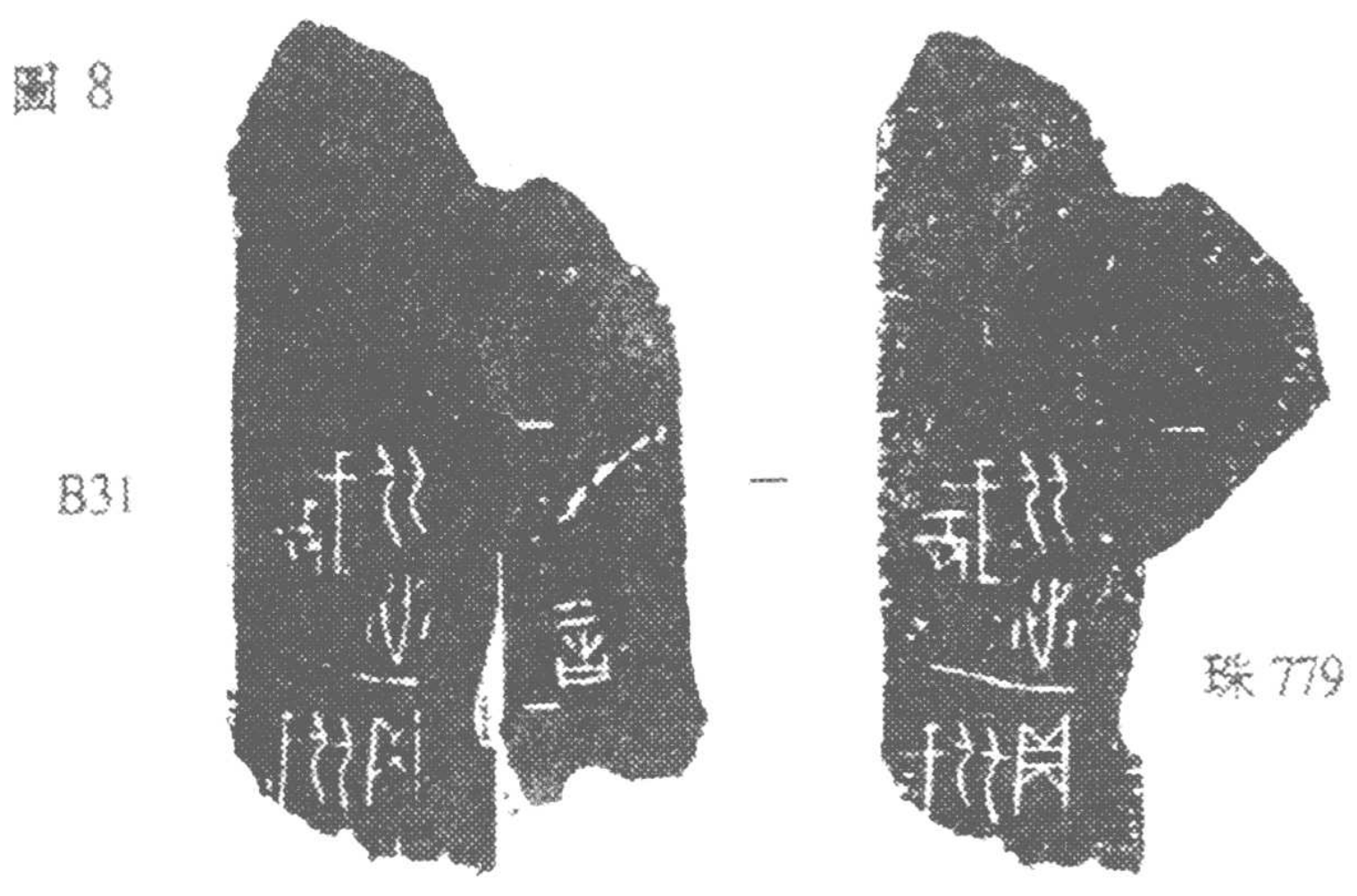


圖 9

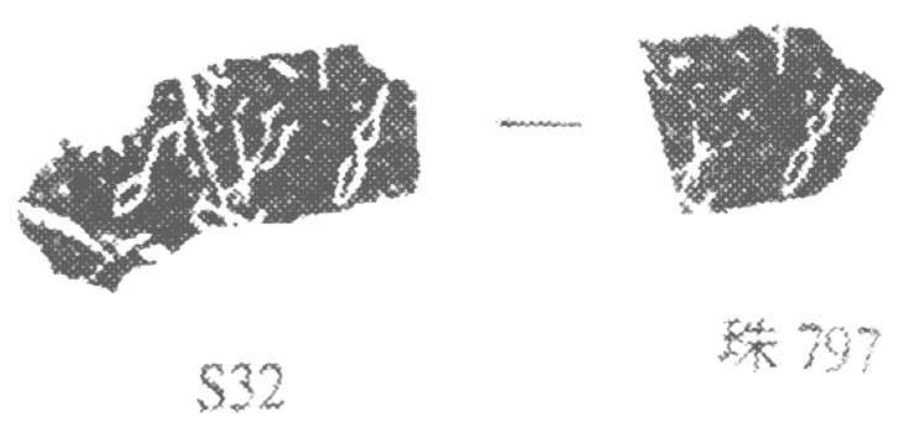


圖 10

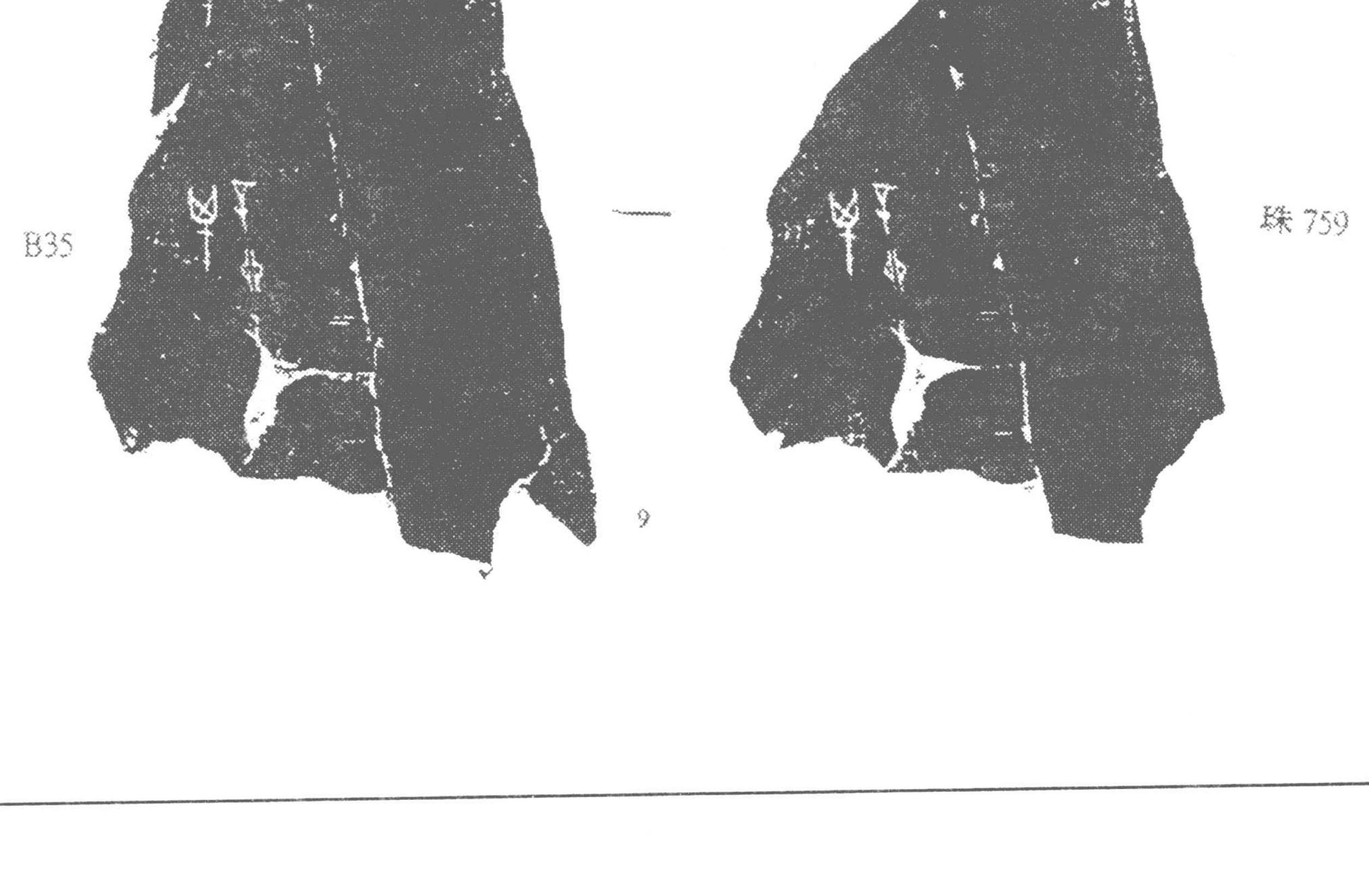


圖 5

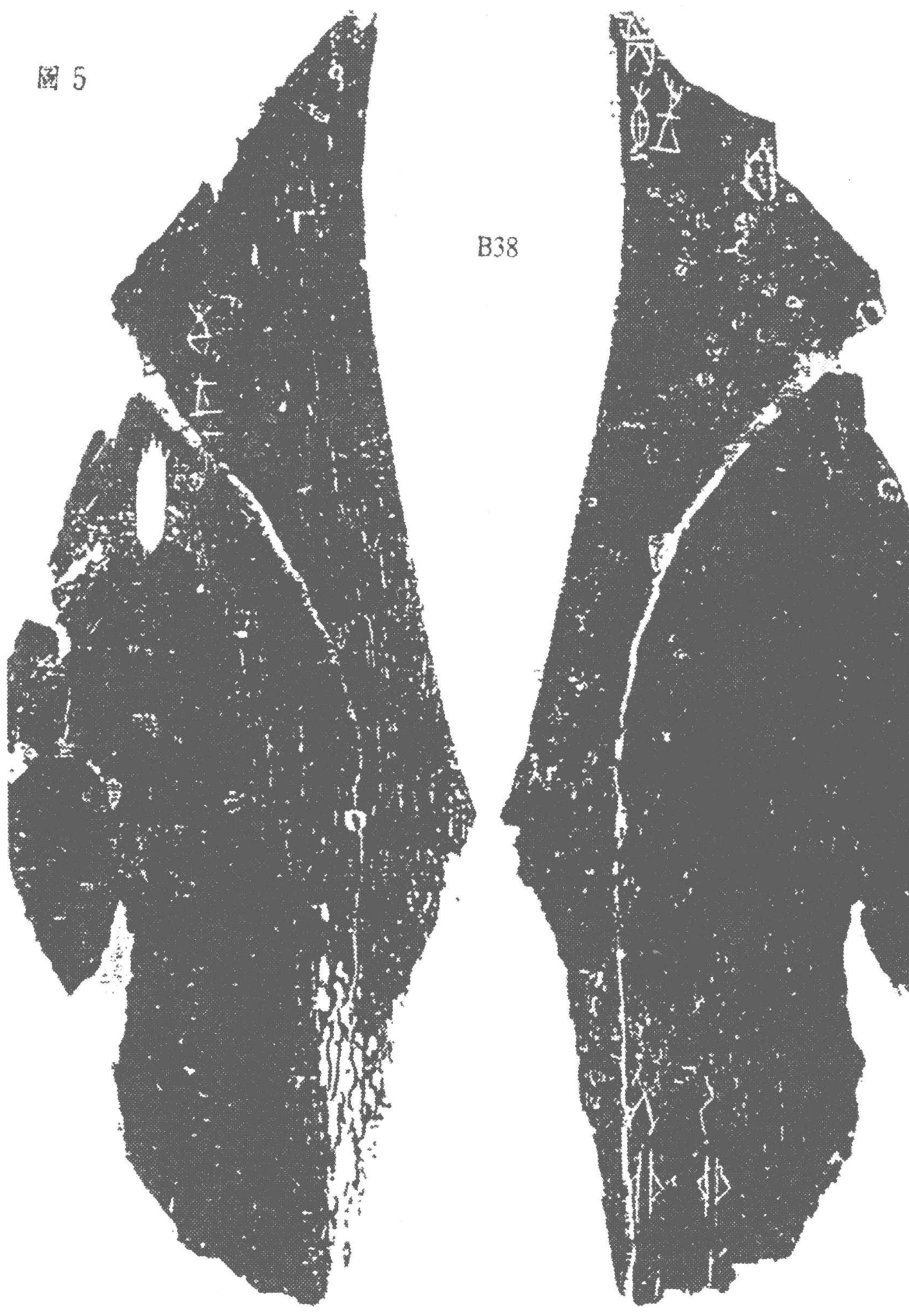


圖 11

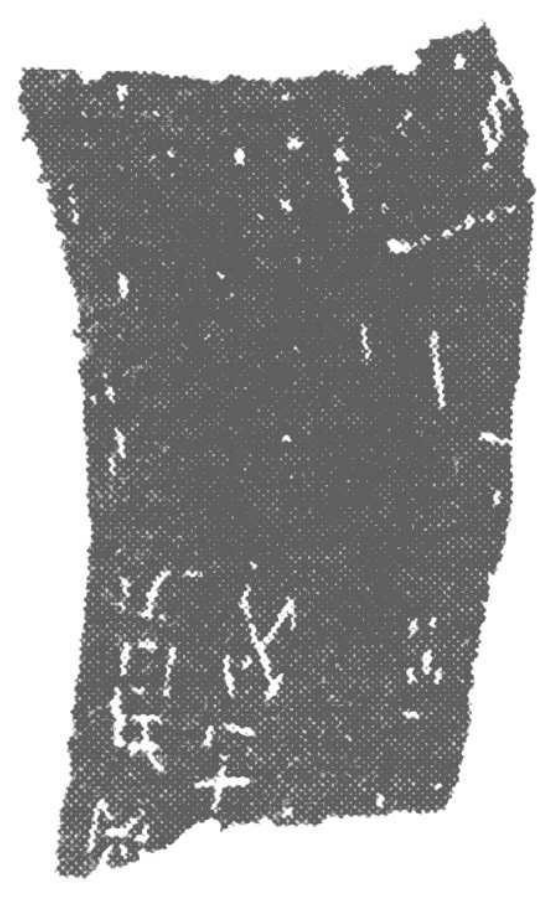


圖 13

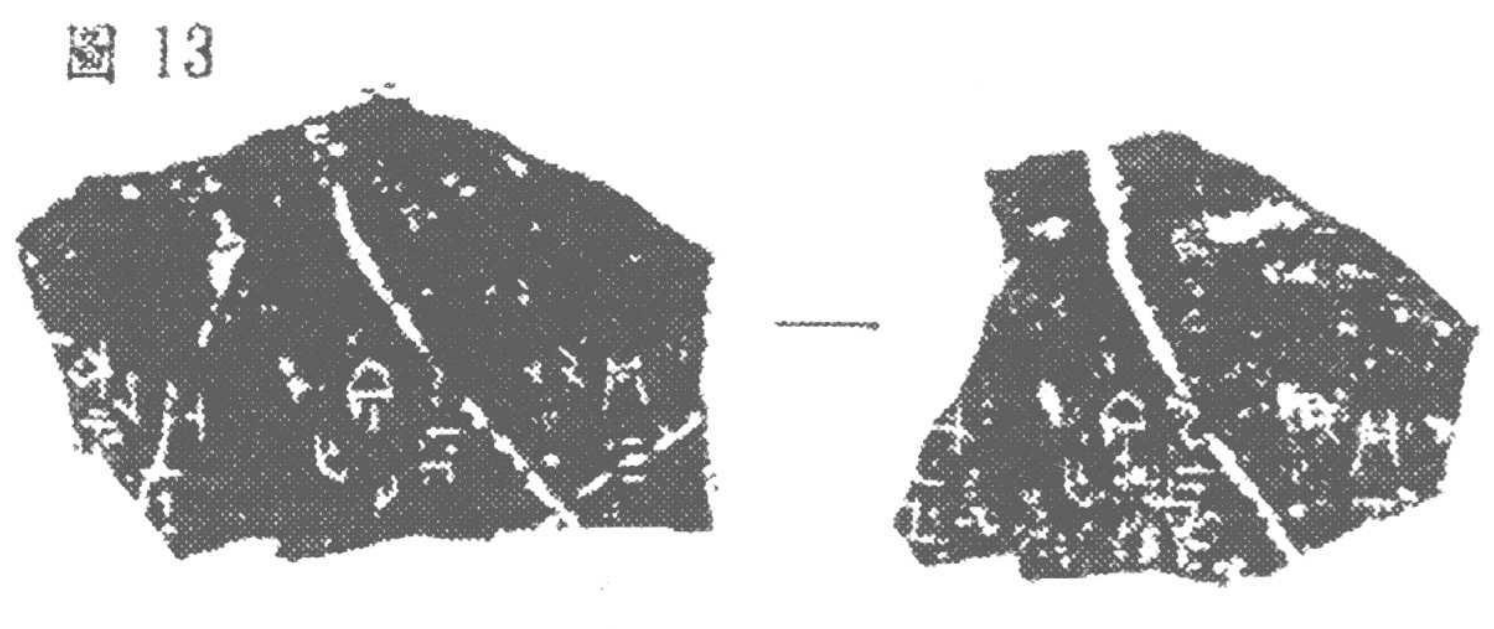
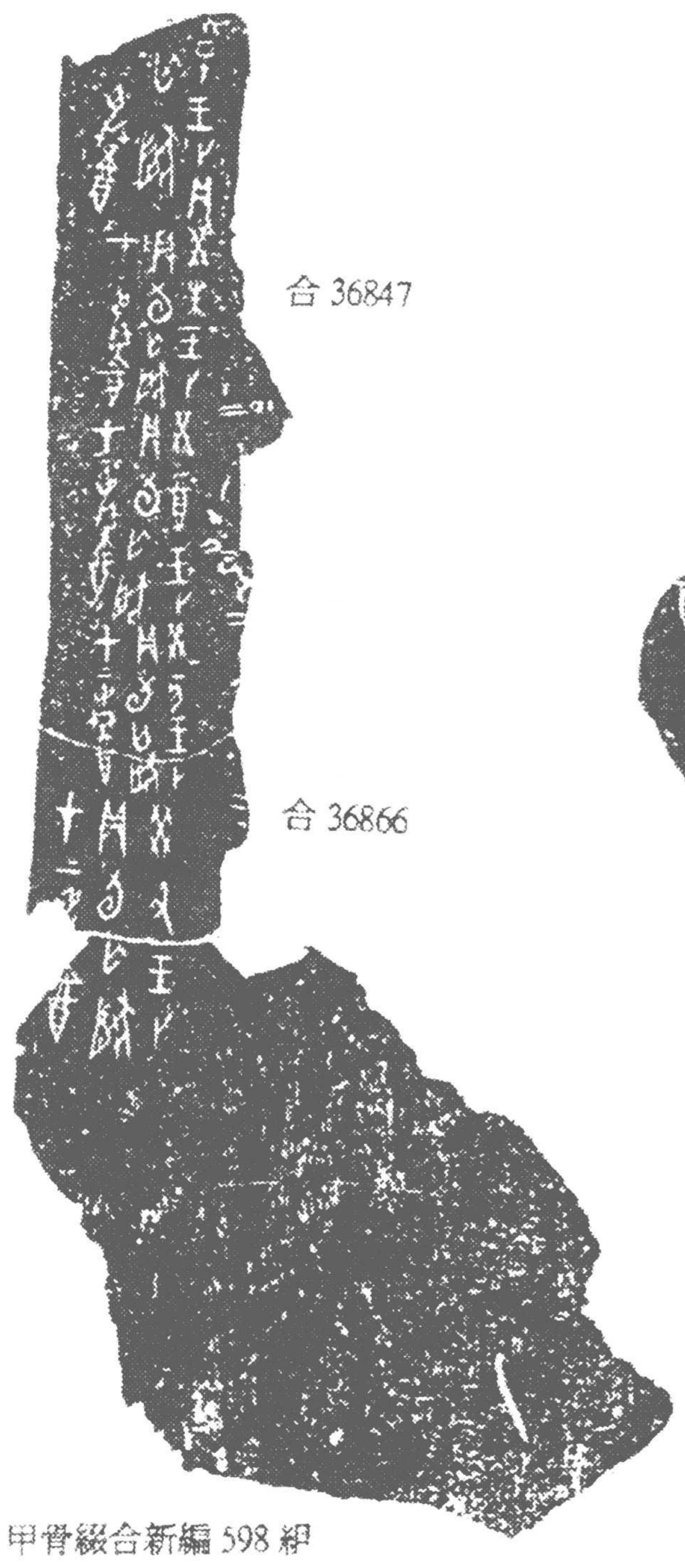


圖 6


合 36847
合 36866

甲骨綴合新編 598 組

圖 7

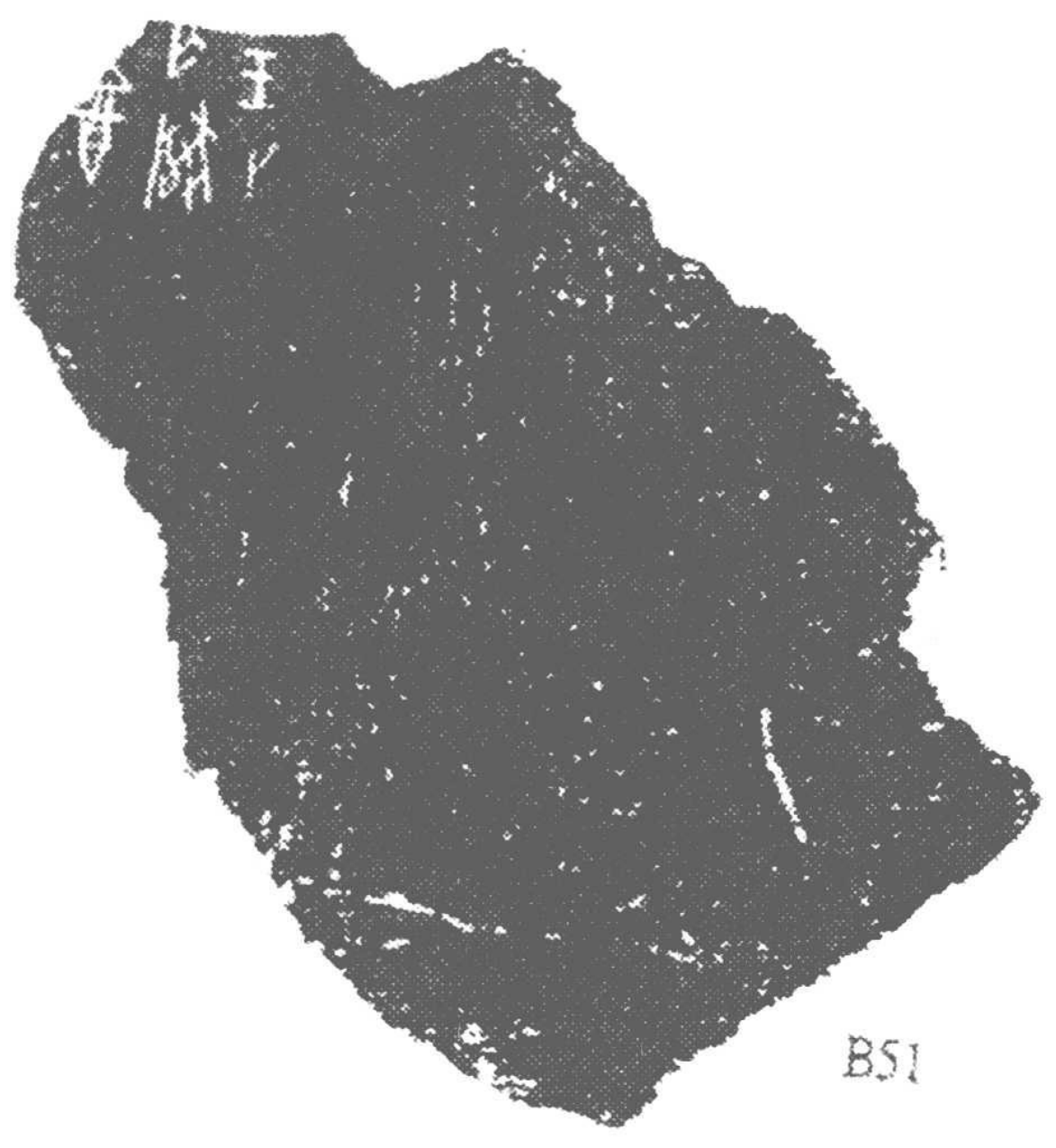


圖 18

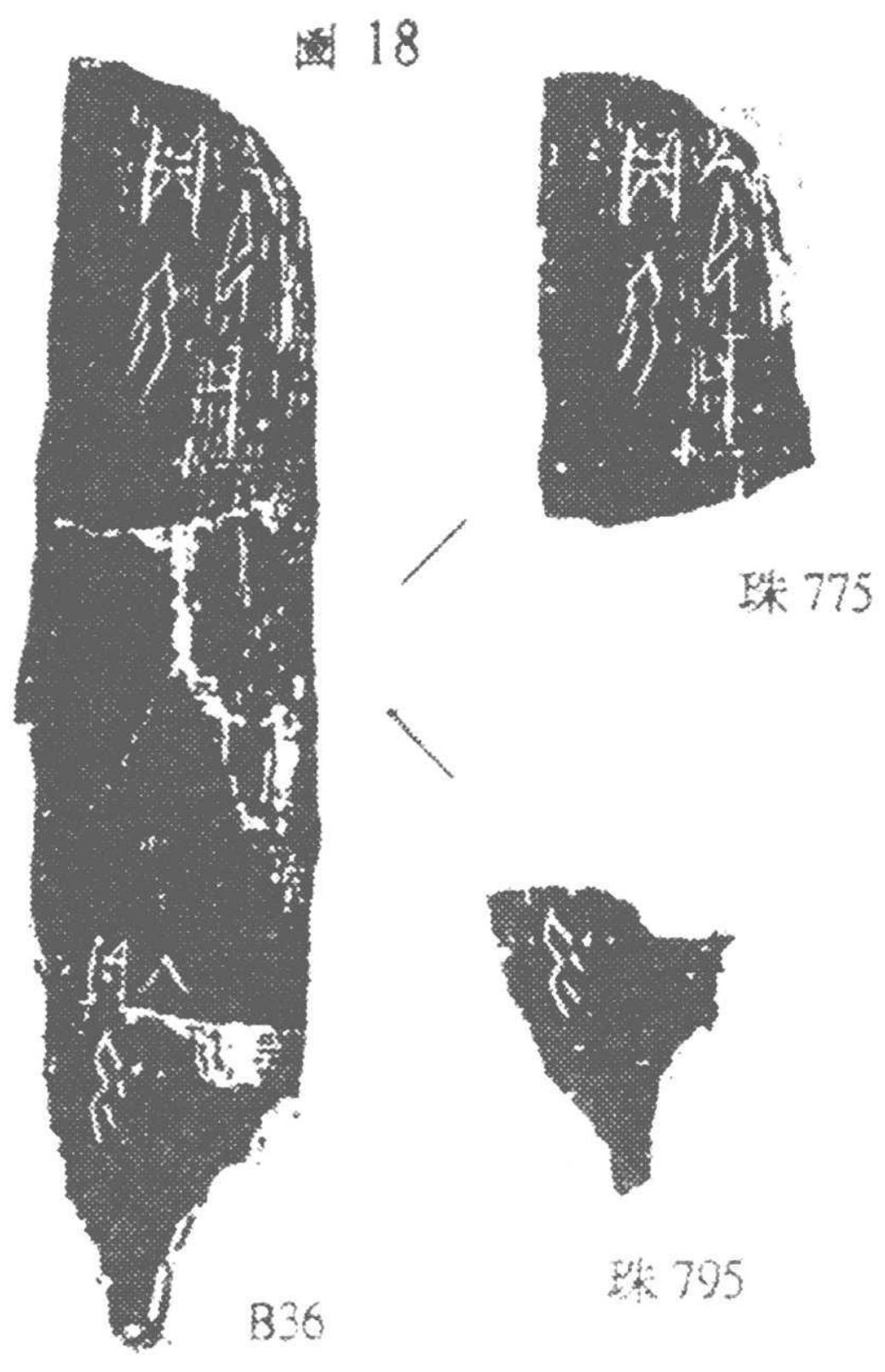

珠 775
B36
珠 795

圖 14

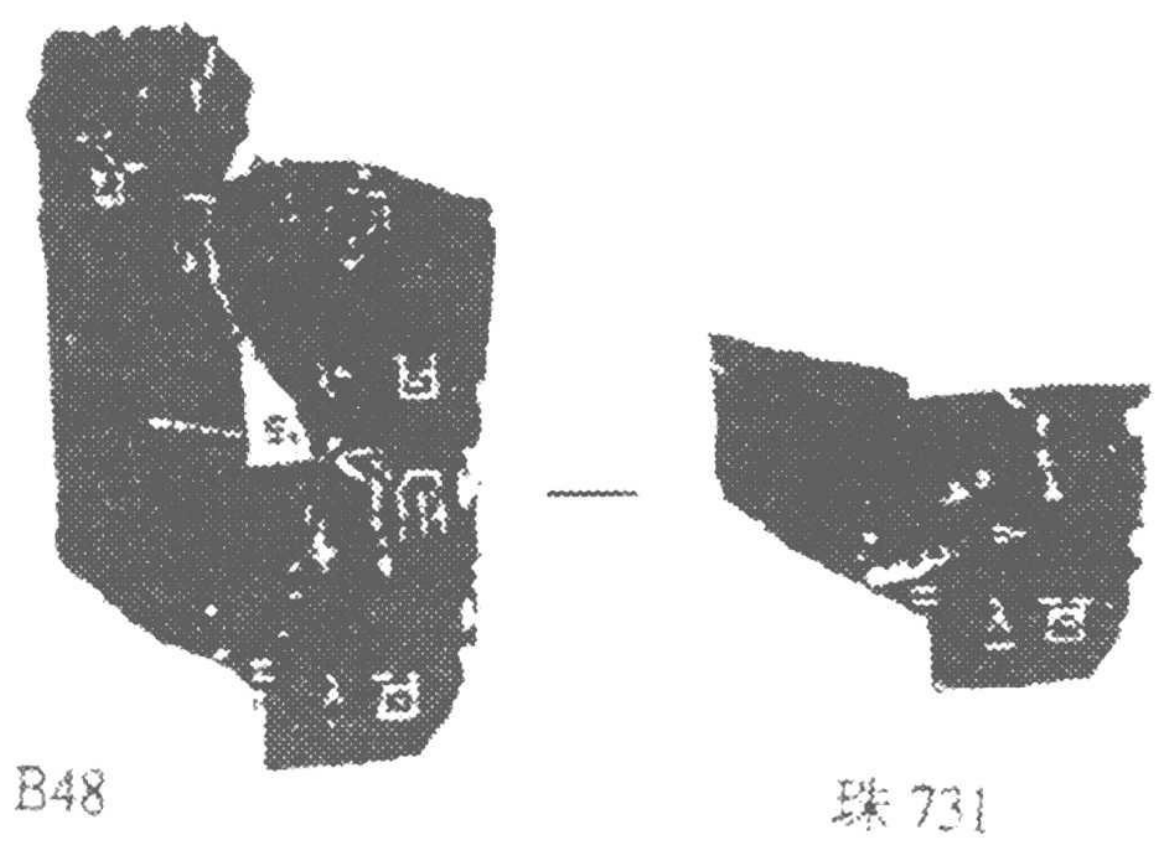


圖 12

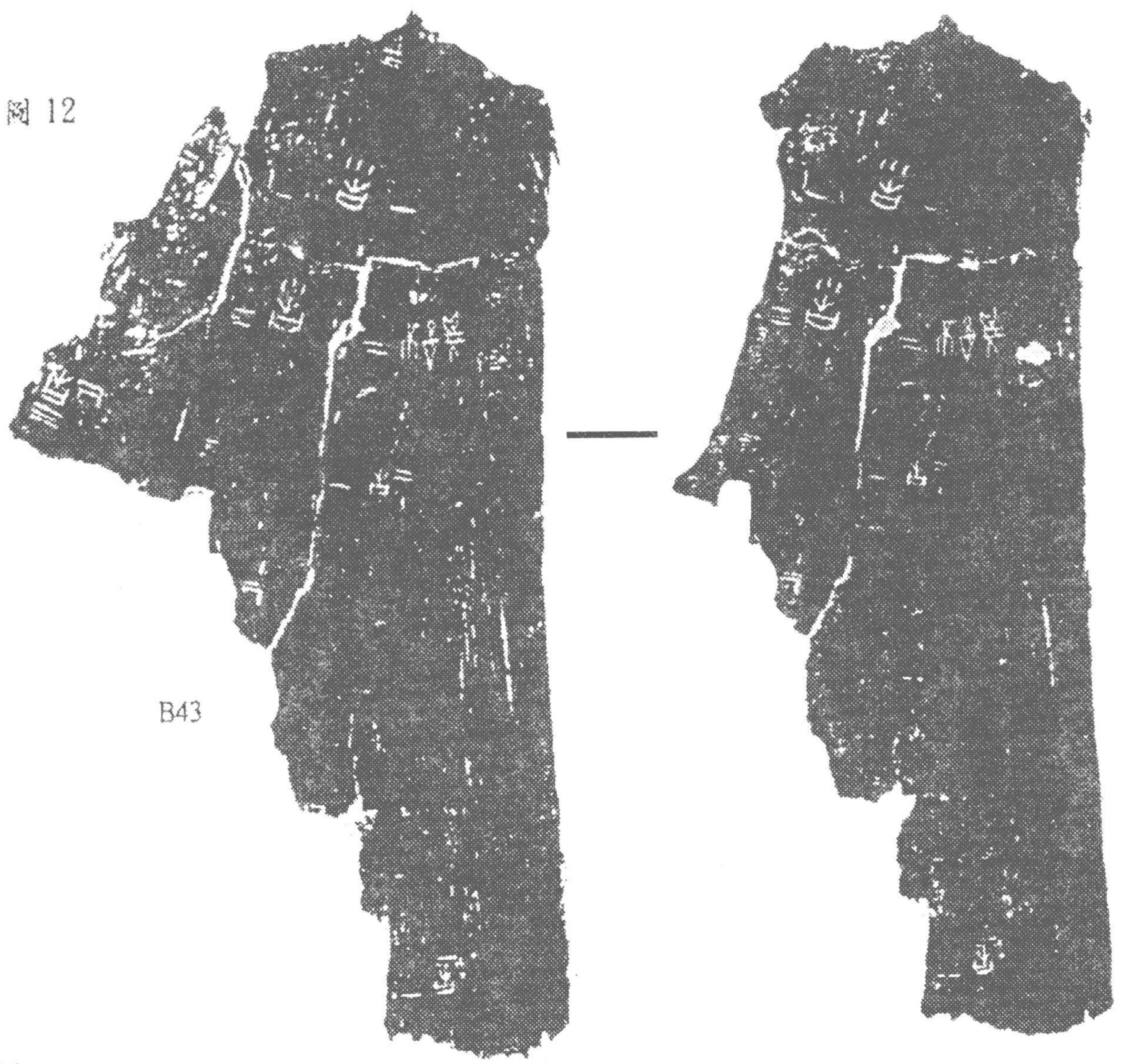


圖 15

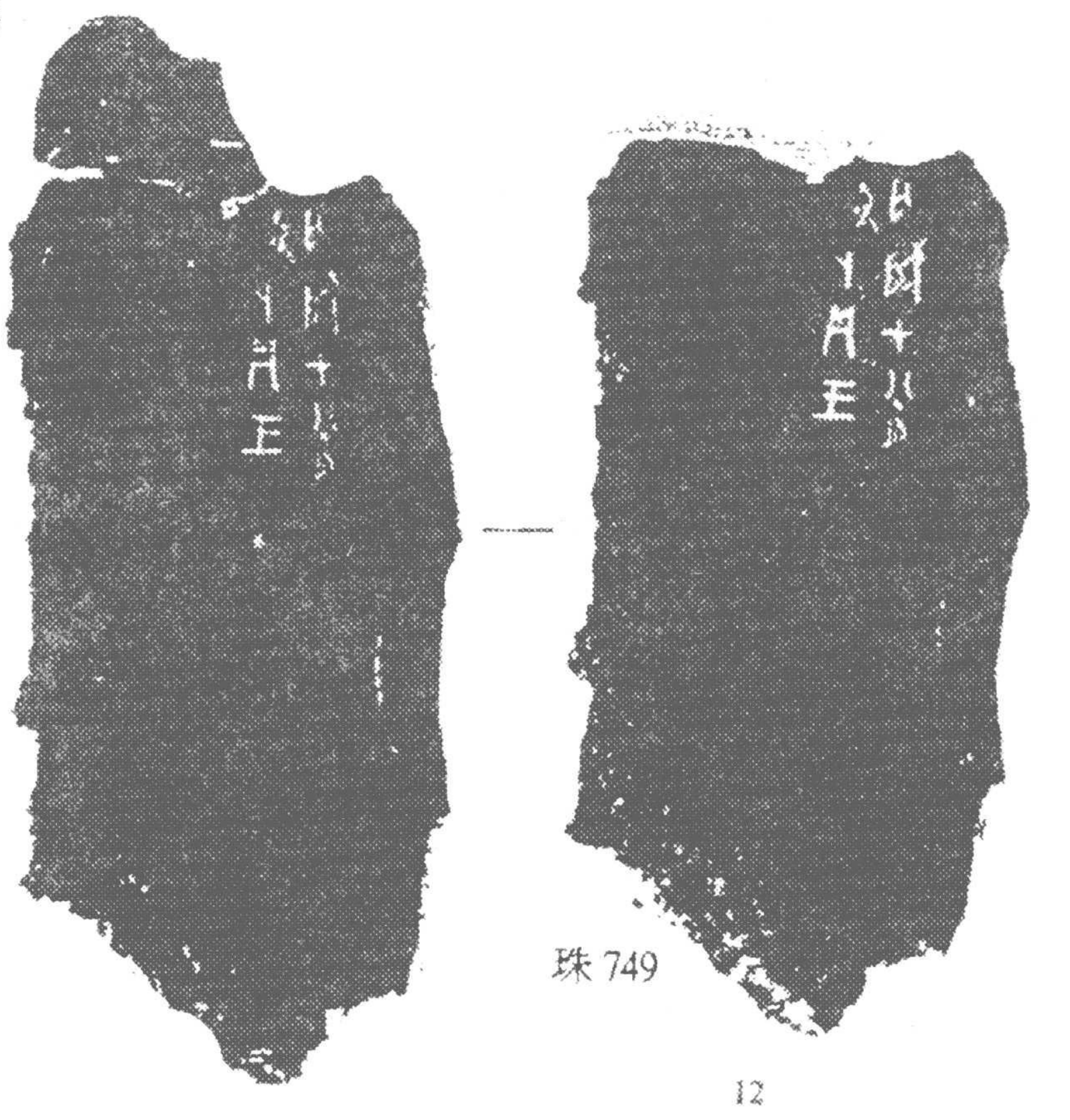


圖 20

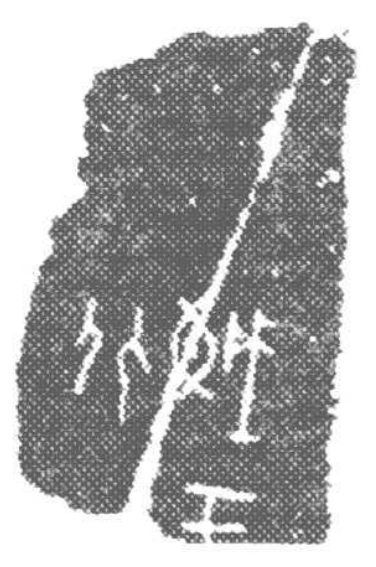


圖 21

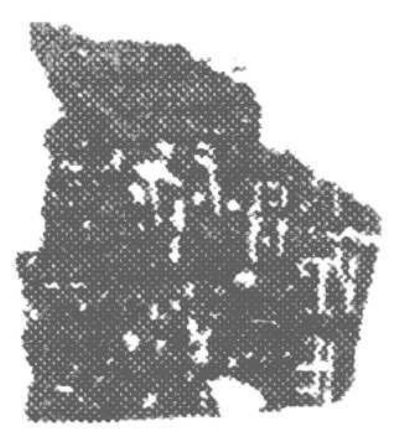


圖 16

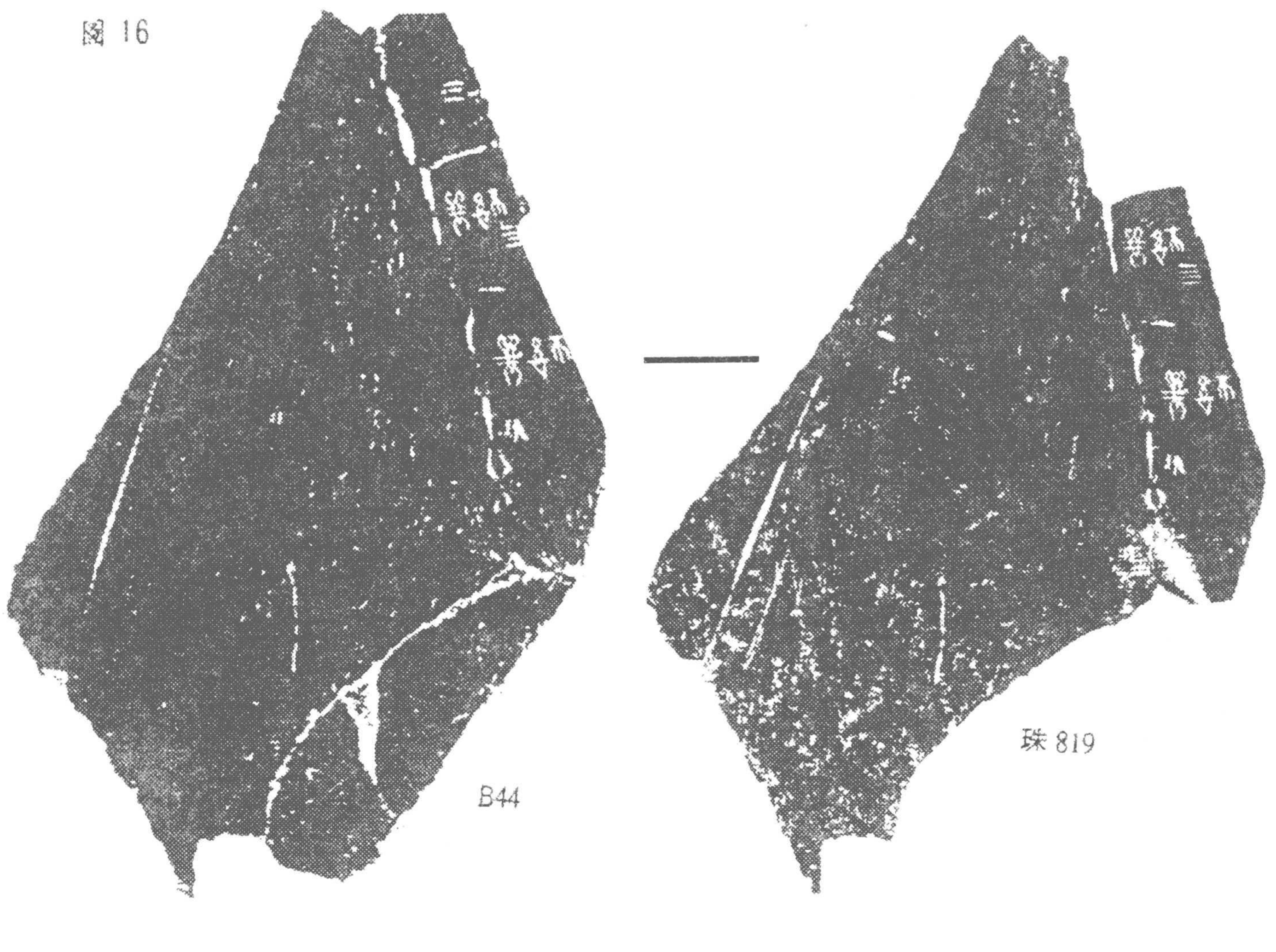


圖 22

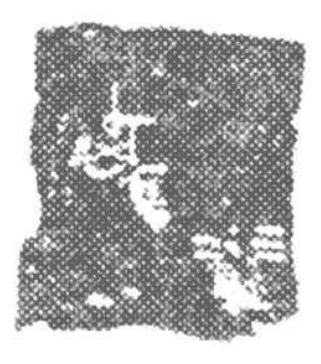


圖 23

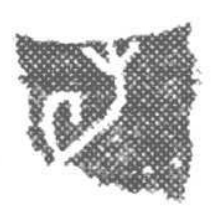


圖 24

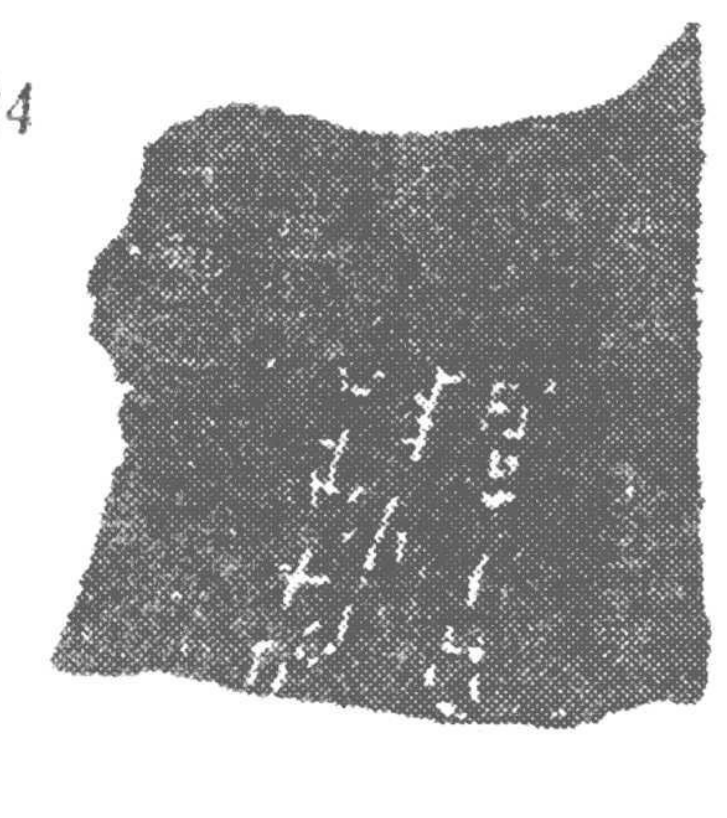


圖 25

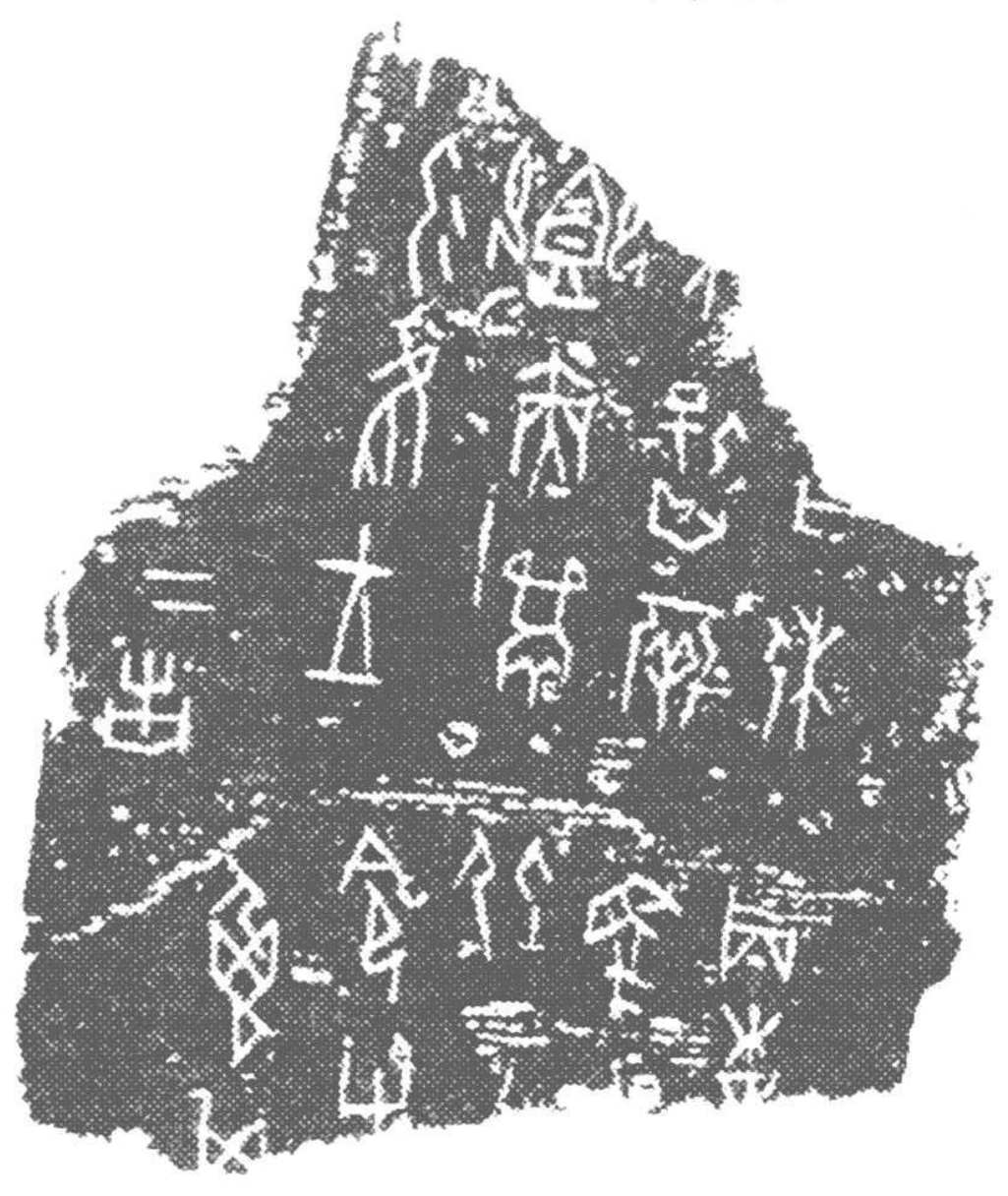
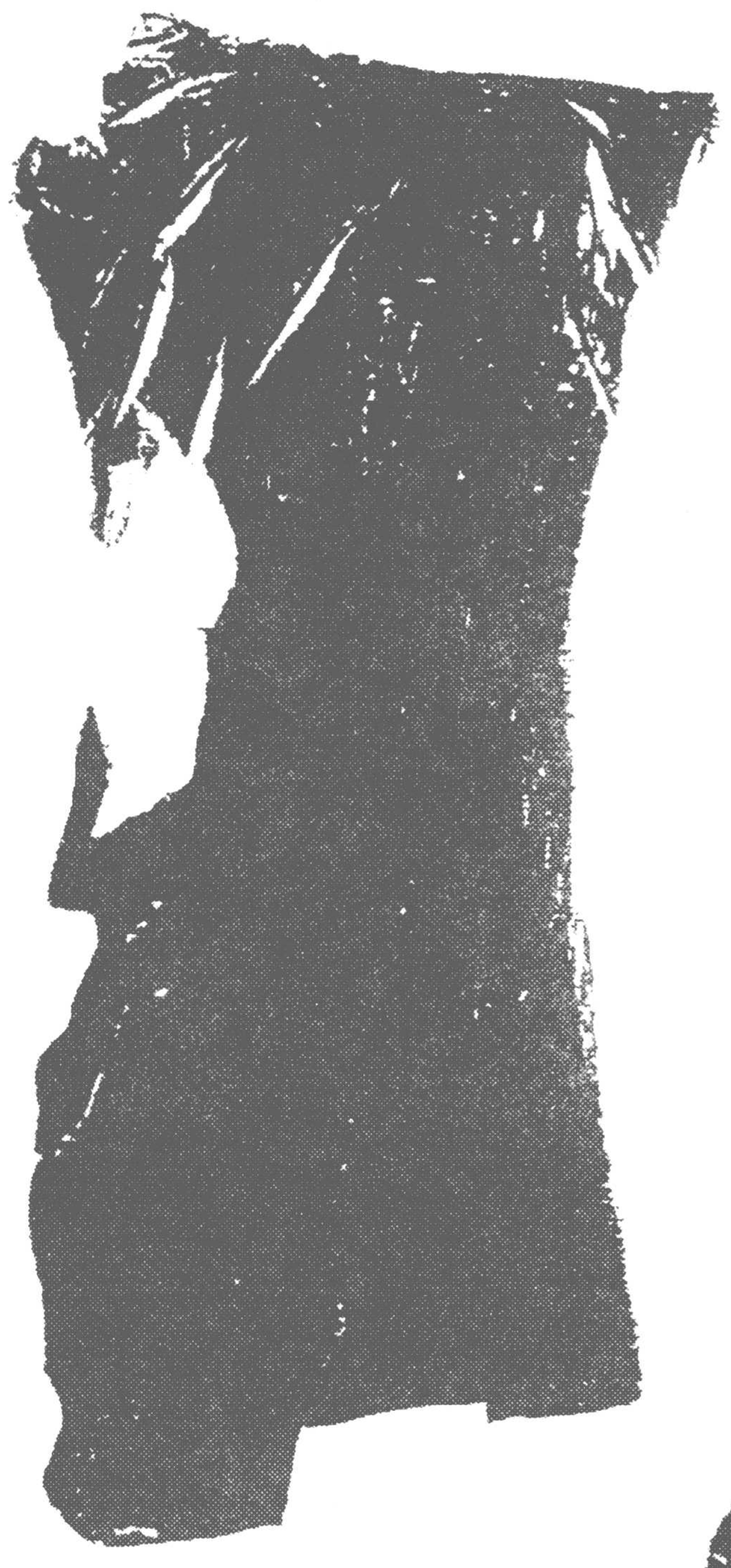
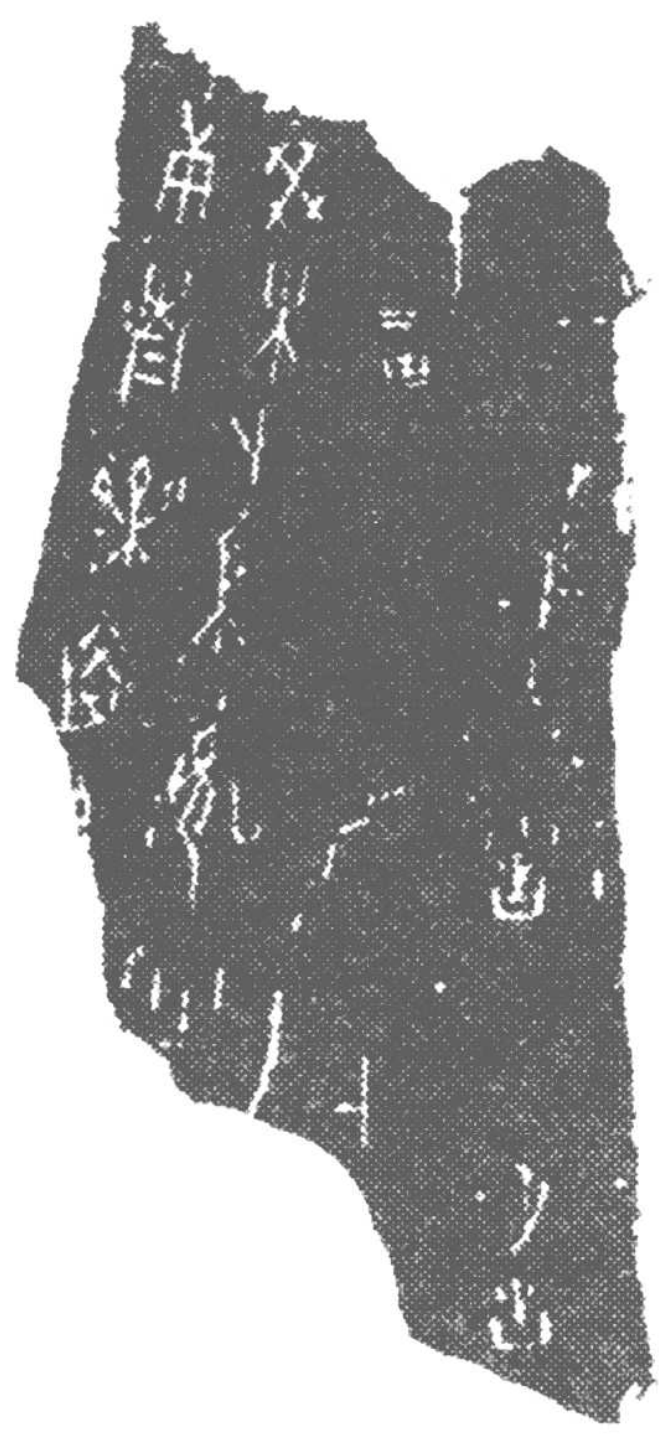


圖 19



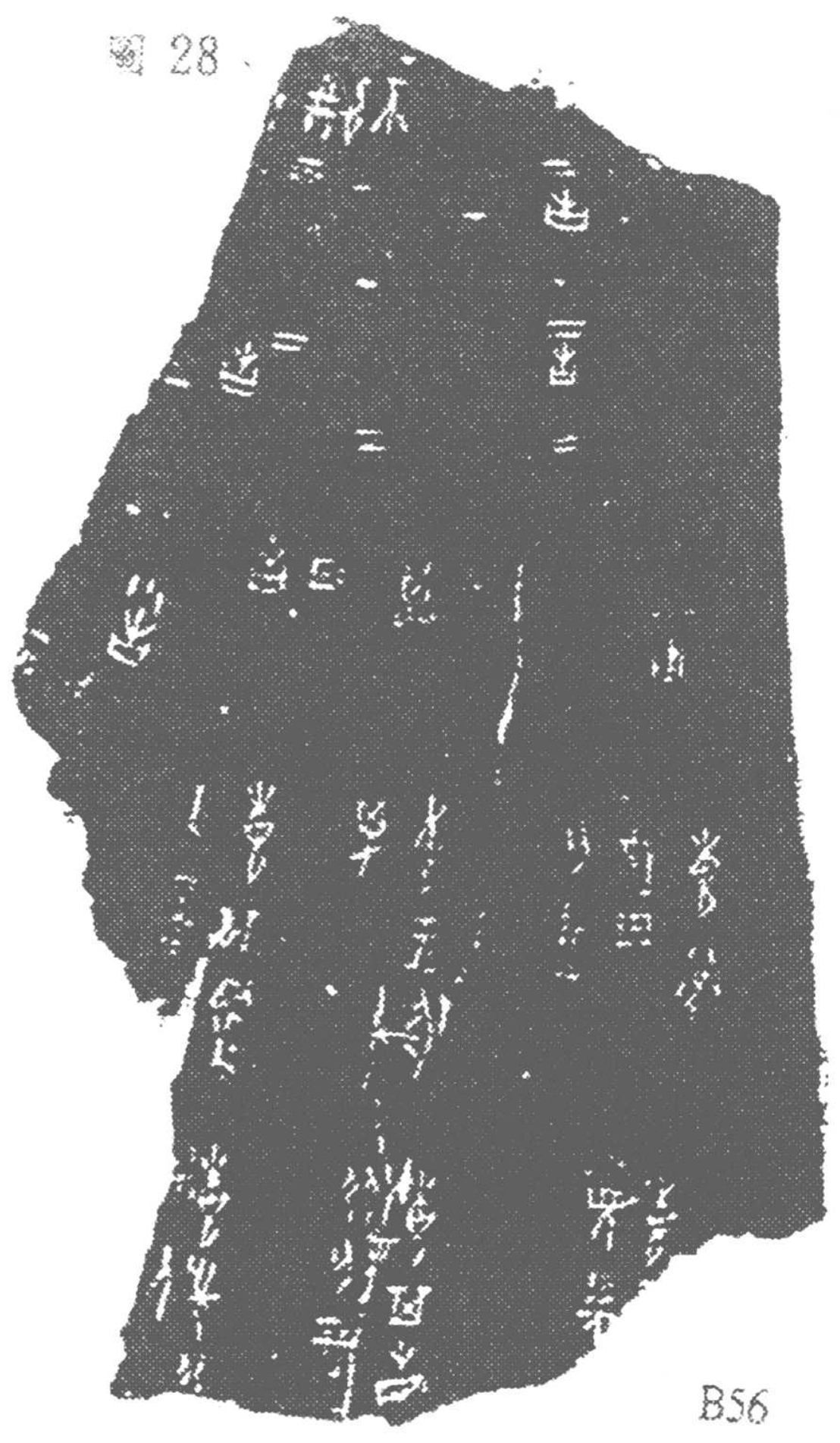
B1

圖 27



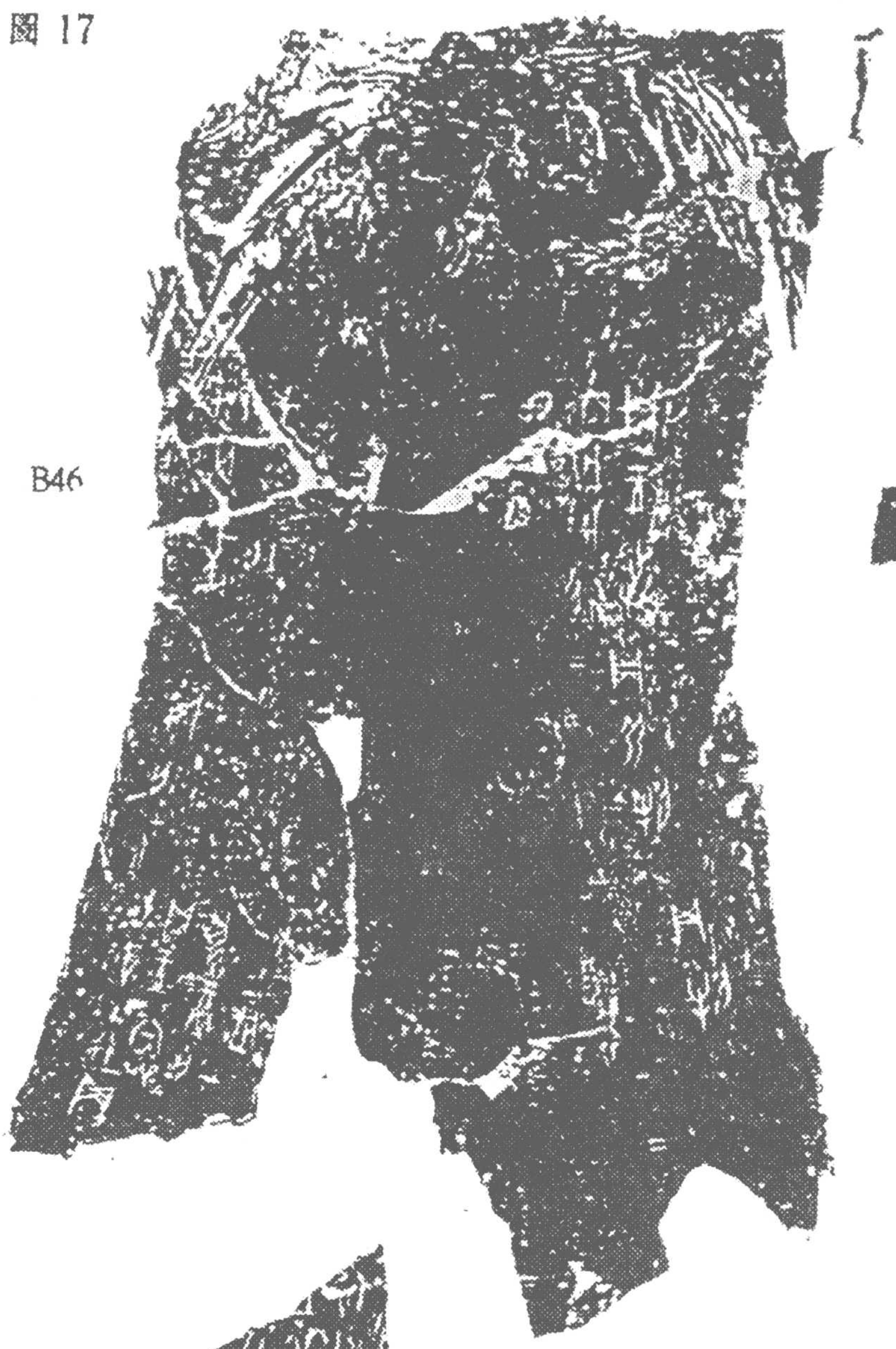
B55

圖 28

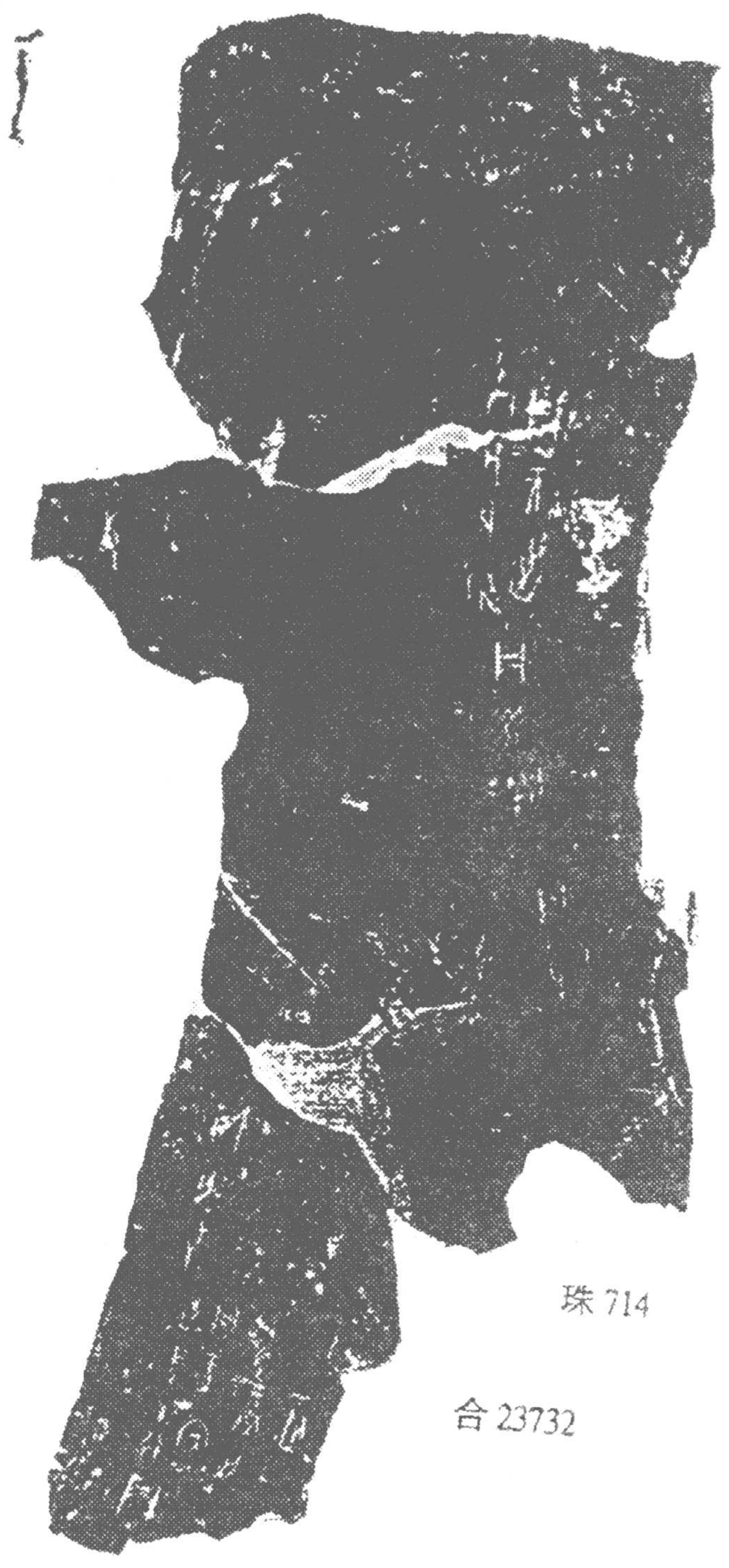


B56

圖 17



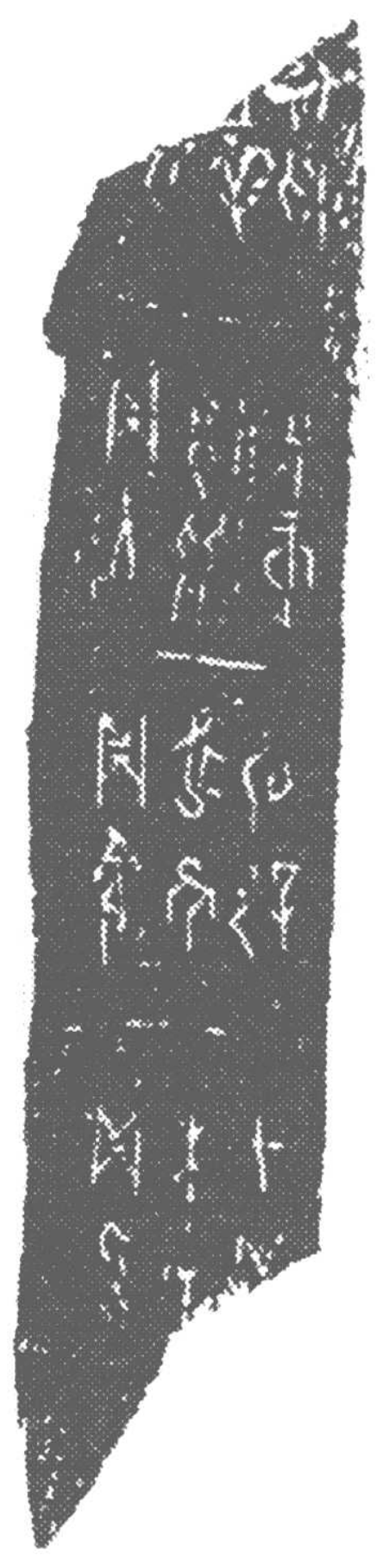
B46



珠 714

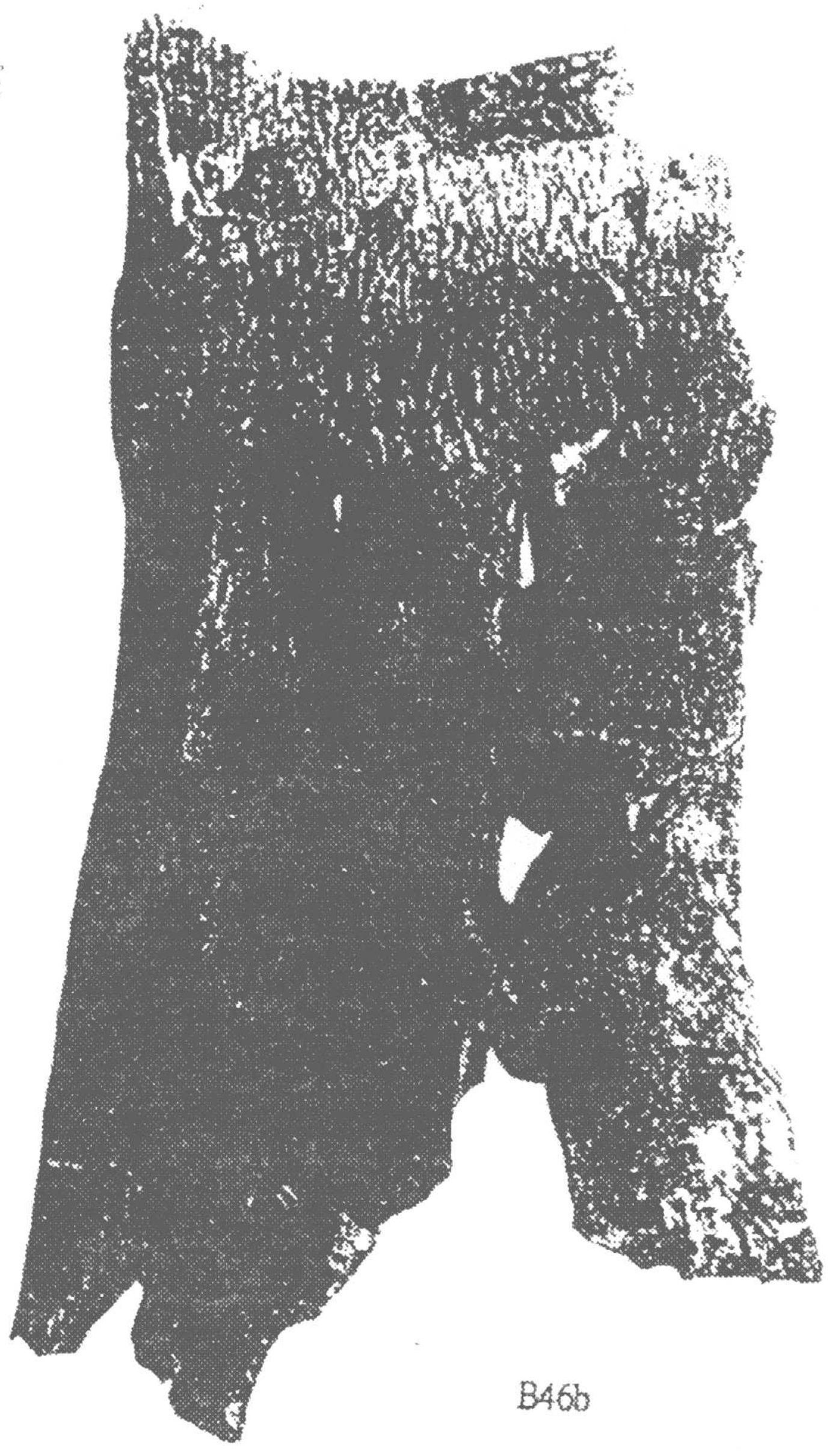
合 23732

圖 26



B34

圖 29



B46b

（原載《大陸雜志》第九十八卷五期，一九九九年）

特別鳴謝

《甲骨文獻集成》一書，記録了百年來幾代甲骨學者的研究進程，凝聚着他們創造性勞動的結晶。這是中華民族的一份最寶貴的財富，亦是世界文化寶庫中最爲珍貴的瑰寶。集結這些成果，是功在當代、澤被后世的功德事業，是重大的文化積累之舉措！

此書出版之際，我們緬懷甲骨學先賢們在甲骨學草創時的開拓之功；我們對在甲骨學發展時期作出卓越貢獻的學者表示敬意；我們對至今堅持在甲骨學領域中默默努力的學者表示敬意！對百年來收藏、保存、出版珍稀甲骨學資料和成果的機構深表感謝；特別是要對那些無償爲本書提供甲骨學研究成果的學者及其后人，表示我們的謝意！没有他們的無私奉獻和鼎力相助，就不可能有《甲骨文獻集成》的順利問世。僅此鳴謝！特別值得一提的是，本書從編纂到出版，一直得到社會有識之士及有文化情結的社會團體傾力相助，是他們强有力的推動，保證了本書順利問世。我們對他們表示深深的謝意！

中國社會科學院歷史研究所
中國社會科學院考古研究所
中國歷史博物館
中國錢幣博物館
河南省社會科學院考古研究所
浙江省博物館
濰坊市博物館
鄭州大學
河南大學
安陽師範學院

遼寧師範大學
西南師範大學
中山大學
臺灣中央研究院歷史語言研究所
臺灣甲骨學會
中華書局
中國社會科學出版社
黑龍江教育出版社
學林出版社

三秦出版社
廣西教育出版社
四川人民出版社
貴州人民出版社
中州古籍出版社
吉林文史出版社
臺灣藝文印書館
臺灣文津出版社
臺灣商務印書館
臺灣學生書局
臺北光啓出版社

四川天元文化産業有限公司
四川新形象藝術設計有限公司
成都華智科技實業有限公司
四川新華彩印廠
成都華宇電子制印有限公司

《甲骨文獻集成》工作委員會
二〇〇一年四月于成都

主　編：宋鎮豪　段志洪
統　籌：陳建華　蔡忠民　唐德風
責任編輯：莊　劍
特約編審：李定凱
裝幀設計：文小牛

圖書在版編目（CIP）數據

甲骨文獻集成/宋鎮豪，段志洪主編．一成都：
四川大學出版社，2001.4
ISBN 7-5614-2057-9

Ⅰ甲… Ⅱ.①宋…②段… Ⅲ.甲骨文-文獻-研究 Ⅳ.K877.1

中國版本圖書館CIP數據核字(2001)第20884號

◇中國古文字大系◇

甲骨文獻集成

出版發行：四川大學出版社
開　本：八開（380mm×260mm）
印　刷：四川新華彩印廠
電腦製作：成都華宇電子製印有限公司
版　次：二〇〇一年四月第一版第一次印刷
書　號：ISBN 7-5614-2057-9/K・220
定　價：（人民幣）五萬六仟圓

本書大陸中文版限中國大陸地區發行壹佰伍拾套

中國古文字大系·甲骨文獻集成

ISBN 7-5614-2057-9
9 787561 420577 >